續國歌大觀

歌集

木村正辭 監修
井上賴圀 松下大三郎 編纂

中文館發兌

例言

一本書は、國歌大觀正編と同樣、古歌の一句に由りて其の出典を求むるに便ずるものにして、歌集、索引の二部より成る。

一歌集部は私集及び歌合を取り、六家集、三十六歌仙家集、諸家集、私撰集、歌合の五門に收む。歌數、長短雜體を合せて總て四萬一千餘首なり。

一和泉式部集は第二版よりの增補にして、記載の位置を時代順にせず特に之を卷末に置けるは、索引番號を初版と同一ならしめたるなり。本版亦之に倣ふ。但し歌集部目次に在りては之を諸家集中に置きて書目の檢索に便ず。

一各歌の數字番號は卷首より卷末に至るまで單一なる通し番號を用ゐたり。これ書目の單純なる正編と異にして、書名の順序に煩さるゝことなく直に其の歌の所在を求め得る必要あるを以てなり。その番號數字は五字の多きに亙るが故に、各歌の頭には略して終の二字をのみ記し、別に各歌の欄外に其の段の最初の歌の番號の全數字を記せり。

一索引部は歌句を五十音順に排列し、且つ各句の下に歌集部と符合する番號を記入せるものなり。但し正編より稍略式に從ひ、短歌に在つては第一句と第四句とを取り、旋頭歌は之に第五句を加へ、長歌に在つては凡べての五字の句及び末句の前の七字の句を取り、今様に在つては凡べての七字の句を取れり。而して同一の句五つ以上ある時は其の句の次行に「|」を以て其の句を代表せしめ「|」の下に其の次の句を記し、以て徒に一々歌集部を繙くの煩を輕減せり。

一今左に索引の方法を例示す。

「鳴立つ澤の」の詠の全歌作者、出典を求む。索引「し」を引くに「しきたつさはの 七四 毛」とあり。歌集を繙き欄外の標記「七四—七五」に由つて其の頁に「(七四)毛」を求むるれば

五七 心無き身にも哀は知られけり鳴立つ澤の秋の夕ぐれ

とあるを知り、同時に山家集所載にて西行の詠なるを知る。

平家物語小督の條に「小鹿なく此の山里と詠じけむ嵯峨のあたりの秋の頃」とある引歌の本歌を求む。索引「を」を引くに「をしかなく」とありて下に番號無

く、次に「――このやまさとの　二五八〇二」とあり、歌集部欄外の標記番號「二五九四――二五八二」の處に「(二五八)〇二」を求むる時は

嵯峨にまかりて鹿の鳴くを聞きてよめる

二〇小鹿なく此の山里のさがなれば悲しかりけり秋の夕暮

とあるを知り、且つ基俊集所載同人の歌なるを知る。

昭和六年二月五日

編者識

續國歌大觀歌集目次

六家集

長秋詠藻（俊成）　一
秋篠月清集（良經）　一五
拾玉集（慈鎮）　三六
山家和歌集（西行）　一〇〇
拾遺愚草（定家）　一二四
拾遺愚草員外（定家）　一六五
壬二集（家隆）　一七九

歌仙家集

柿本集　二一七
躬恒集　二二〇
素性法師集　二二五
猿丸太夫集　二二六
家持集　二二七
業平集　二三〇
兼輔集　二三三
敦忠集　二三四
公忠集　二三五
齋宮集　二三七
敏行集　二三八
宗于集　二四〇
清正集　二四一
興風集　二四二
是則集　二四五
小大君集　二四七
能宣集　二四九
兼盛集　二五一
貫之集　二五六
伊勢集　二六六

諸家集

赤人集　二七五
遍昭集　二七八
源順集　二七九
元輔集　二八四
朝忠集　二九〇
高光集　二九一
友則集　二九二
小町集　二九三
忠岑集　二九五
賴基集　二九六
源重之集　二九七
信明集　三〇一
元眞集　三〇三
仲文集　三〇八
忠見集　三一〇
中務集　三一三
大江千里集　三一七
元良親王御集　三一九
清愼公集（實賴）　三二三
西宮左大臣御集（高明）　三二六
海人手子良（師氏）　三二七
御堂關白集（道長）　三二八
本院侍從集　三二九
清少納言集　三三〇
和泉式部集　六二四
紫式部集　三三一
伊勢大輔集　三三四
曾丹集（曾禰好忠）　三三七
實方朝臣集　三四四
前大納言公任卿集　三四八
祭主輔親卿集　三五〇
藤原長能集　三五五
馬內侍集　三五八
惠慶法師集　三七三
安法法師集　三七五
小馬命婦集　三七八
爲賴朝臣集　三七九
閑院左大將朝光卿集　三八一
藤原義孝集　三八四
權中納言定賴卿集　三八六
大貳三位集　三八七
辨乳母集　三九四
出羽辨集　三九六
祐子內親王家紀伊集　三九九
源賢法眼集　四〇一
大納言經信卿集　四〇一
津守國基集　四〇四
讃岐入道集（藤原頼綱）　四〇七
藤原基俊家集　四〇九
左京大夫顯輔卿集　四一四
清輔朝臣集　四一七
故刑部卿集（平忠盛）　四二五
寂然法師集　四二五
北院御室御集（守覺）　四二七
式子內親王集　四二九
待賢門院堀川集　四三一
權中納言俊忠卿集　四三五
中納言雅隆卿集　四三六
成通卿集　四三七
登蓮法師集　四三九
相如集　四三九
從三位頼政卿集　四四一
二條院讃岐集　四三四
小侍從集（待賢侍從）　四三六
按納言集（長方）　四三九
忠度集　四四二
前大納言實國卿集　四四四
入道大納言資實卿集　四四五
鴨長明集　四四六
惟宗廣言集　四四八
源師光集　四四七
金槐和歌集（源實朝）　四四一
源有房朝臣集　四四二
菅原隆祐朝臣集　四四四
藤原在良朝臣集　四四八
俊成卿女集　四四八
隆好法師集　四四二
慶運法印集　四四七
基景集（太田道灌）　四五〇

私撰集

古今和歌六帖　五〇三

歌合

寬平御時后宮歌合　五六一
亭子院歌合　五六四
天德四年內裏歌合　五六六
高陽院七番歌合　五七〇
千五番歌合　五七三
六百番歌合　六一七

——目次終——

續國歌大觀 歌集

長秋詠藻

長秋詠藻上

久安の頃崇德院に百首の歌召しゝ時たてまつりし歌

春歌二十首

一春來ぬと空(そら)に著きは春日山嶺の旭のけしき也けり
二霞立ち雪も消ぬや三吉野の御垣が原に若菜摘みてむ
三梅が枝にまづ咲花ぞ春の色を身に占初むる始也ける
四我が廬を宿とはしめよ鶯の古巢は春の雲につけてき
五冬枯の裾野の原をやきしより早蕨あさり雉子鳴く也
六哀にも思ひ立つ哉歸る鳥流石に見ゆる春のけしきを
七ながめする緑の空もかき曇り徒然まさる春雨ぞふる
八紫の根はふよこ野のつぼ菫き袖に摘まむ色も睦まし
九山櫻咲くより空にあくがるゝ人の心やみねのしら雲
一〇いか計り花をば春も惜むらむ且は我身の限と思ひて
一一つらき哉などて櫻の長閑なる春の心に散はざるらむ
一二散る花の惜しさを暫し知せばや心がへせよ春の山風
一三味氣なき何迚花の惜からむ我身は春のよそなる物を
一四櫻花思ふ餘りに散るとの憂きをぞ風におほせつる哉
一五吹く風の心と散らす花ならば梢に殘す春もあれかし
一六道遠く何たづぬらむ山櫻おもへば此の花ならなくに
一七櫻花待つと惜むとする程に思ひもあへず過す春かな
一八櫻花麓の小田の苗代はたねよりさきに花ぞ散りける
一九丈夫は同じ麓をかへしつゝ春の山田においにける哉
二〇行末の霞の袖を引止めて綻るばかりや恨みかけまし

夏歌十首

二一夏くれば衣更して山賤のうつぎ垣根も白がさねなり
二二千早振かもの社の葵草かざす今日にもなりにける哉
二三さらぬだに臥す程もなき夏の夜を待れても鳴郭公哉
二四郭公鳴き行く方にそへてやる心幾度こゑを聞くらむ
二五五月こそなれが時なれ郭公いつを迄とか聲惜むらむ
二六夏もなほ哀はふかし橘の花散るさとに家居せしより
二七五月雨はたく藻の煙打しめり潮たれ増る須磨の浦人
二八庭の面の苔路のうへに唐錦しとねにしける常夏の花
二九小舟さし手折りて袖に移しみむ蓮の立葉の露の白玉
三〇いつとても惜くやは非ぬ年月を御祓に捨る夏の暮哉

秋歌二十首

三一八重葎さし籠りにし蓬生に爭でか秋の分て來つらむ
三二荻の葉も契ありてや秋風の訪づれ初むる妻となる覽
三三七夕の舟路はさしも遠からじなど一年に一渡りする
三四水盡つき植し山田にひたはへて又袖濡す秋は來にけり
三五何事も思ひすつれば秋は尚野邊の錦の茹くもある哉
三六終夜妻とふ鹿の胸分にあばしまはぎの花散りにけり
三七身の憂も誰かはつらき淺茅生に怨ても鳴く虫の聲哉
三八夕されば野邊の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里
三九露繁き花の枝毎に宿りけり野原や月のすみかなる覽
四〇石ばしる水の白玉かず見えて清瀧川にすめる月かな
四一月よりも秋は空社哀なれ晴ずばすまむかひ無らまし
四二月の秋數多經ぬれど思ほえず今宵計の空のけしきは
四三いかにして袖に光の宿る覽雲居の月は隔てゝし身を

その時暫く爲二地下一故

四四秋の月も又もあひ見む我が心盡しなはてそ更科の山
四五月も日も別ぬ物を秋來れば夜を長しとも誰定めけむ
四六夢さめむ後の世迄の思出に語るばかりも澄める月哉
四七此の世には見るべくも非ぬ光哉月も佛の誓ならずば
四八山川のみづの水上尋ねきて星かとぞ見る白菊のはな
四九元結の霜置添へて行秋はつらき物から惜くもある哉

冬歌十首

五〇いつしかと冬の徽に立田川紅葉とちませうす氷せり
五一礒ならむ嶺の板屋に音はして洩らぬ時雨は木葉也鬼
五二風さやぐさよの寢覺の寂きに班れ霜よりたづさはに鳴
五三月清み千鳥鳴くなり沖つ風吹飯の浦の明けがたの空
五四月冴ゆる氷の上にあられ降り心くだくる玉川のさと
五五空にみつ愁の雲の重なりて冬の雪とも積るなりけり
五六雪ふれば道絶えにけり吉野山花をぞ人の尋ねし物を
五七冬の夜の月と雪とを見る程に花の時さへ面影に立つ
五八小野山や燒く炭竈にこり埋むつま木と共に積る年哉
五九行年を惜めば身にぞ止るかと思入てや今日を過まし

戀歌二十首

六〇思ふより頓て心の移りぬる戀は色なる物にぞ有ける
六一散らば散れ岩瀨の杜の風に傳へやせまし思ふ言の葉
六二年經れど人の心はつれなくて涙は色の變りぬるかな
六三味氣なや思へばつらき契哉戀は此世に燃るのみかは
六四深くしも思はぬ程の思ひだに煙の底と成るなる物を
六五おく山の岩垣沼のうきぬなは深き戀路に何亂れけむ
六六人心浮田の社に引くしめの斯てやまむとす覽
六七涙川袖のみわたに漲返りやる方もなき物をこそ思へ
六八露結ぶまの〻梢のすが枕かはしてもなど袖濡すらむ
六九戀をのみ飾磨の市に立つ民の絕ぬ思に身をや替てむ
七〇いかにせむ靈のさかてを打返し恨ても尚倦すも有哉
七一忘草つみにこしかど住吉の岸にしもこそ袖は濡れけれ
七二思侘び見し儘はさて置きて戀せざりけり折ぞ戀しき
七三いか計り我を思はぬ我心わが爲つらき人を戀ふらむ
七四人をのみ何恨けむ憂きを尚こふる心もつれなかりけり
七五戀しきに憂もつらきも忘られて心なき身に成にける哉

七七厭ふべきこは幻の世中をあな淺ましの戀のすさびや
八七しき忍ぶ床だに堪ぬ枕にも戀は朽せぬ物にぞ有ける
九七始なき昔思ふぞ哀なるいつより戀にむすばゝれけむ
第二首第八足

雜歌二十首

神祇二首

○八幾返り波の白木綿懸つらむ神さびにけり住の江の松
一八思ふこと三輪の社に祈りみむ杉は尋ぬる印のみかは

釋敎五首

華嚴

二八旭さす高根の花は匂へども麓の人は知らずぞ有ける

方等

三八聞初めし鹿の苑にはとかへて色々になる四方の紅葉

般若

四八雲も皆空しとゝくに空晴て月ばかりこそ滑増りけれ

法華

五八遙にも匂ひはるかな法の花後の五百年なは盛りなり

大經

六八惜む哉月の御顏も影消えて鶴の林にけぶり絕えけむ

無常二首

七八世の中を思ひ列ねて詠むれば虛しき空に消ゆる白雲
八八常にすむ鷲のみ山の月だにも思知れとぞ雲隱れける

離別一首

九八曉は聞きて出でつる別路をやがて暮すは涙なりけり

羈旅五首

○九浦づたふ磯の苫やのかち枕聞きも習はぬ波の音かな
一九遙なるあしやの沖の浮寢にも夢路は近き都なりけり
二九しはつ山楢の下葉を折敷きて今宵はさねむ都戀しも
三九我が思ふ人に見せばや諸ともに隅田川原の夕暮の空
四九住馴れしすみかも常の栖かは旅を旅とも何思ふらむ

慶賀歌二首

五九君が代は斧の柄くちし山人の千度歸らむ時も變らじ
六九誠にや松は十返花咲くと君にぞ人の問はむとすらむ

物名二首

霞 柳 櫻

七九花の色の飽すみゆれば歸らめや洛の宿にいざ暮してむ

月 鈴蟲 紅葉

八九峯續き山邊はなれず住む鹿も道たどるなり秋の夕暮

短歌一首

九九左き島や　やまと島根の　風として　吹き傳へたる
言の葉は　神の御代より　かは竹の　よゝに流れて
絕せねば　今もはこやの　尋ぬれば　枝も鳴らさず
靜けきに　むかしの跡を　峰の木ずゑも
懸しより　四つの海にも　波立たず　和歌のうら人
數そひて　藻汐のけぶり　立ち增り　行く末までの
しまの外にも　聞ゆなる　これを思へば
例しとぞ　あふくま川は　みわたに懸る
君が代に　嬉しきを　みよ迄あはぬ
埋れ木の　なづめる言葉　から人の　思へばかなし
變らざりける　身の程を　いかにまけける
嘆きにも　春日やま　松が枝の　云にもたらぬ
末なれや　峰のつゞきの　懸てだに　いつゝの品に
下枝にて　北のふぢなみ　こされつゝ　よもぎの門に
年ふかく　した行く水に　經にしより
とをとせ三も　さし籠りて　みちのしば草
老果てゝ　こと遠く　秋は我が身の　上とのみ
春のひかりは　訪ふ人もなき　如何とも
つゆけき袖を　槇の戸に　月かげを
なほあり明の　詠めても　おほ空の
思ふこゝろは　まつとがほに　虛しき名をぞ
まつことがほに　自づから　殘さむことも
詠めても　殘さむことも　綾なくに　津の國の
難波のことも　津の國の　刈捨てゝ　蘆のしをれの
成にしを　蘆のしをれの　荒びにのみぞ
立ち返り　きし打つ波の　立ち返り
入江の藻くづ　入江の藻くづ　かゝるみとの
掻つめて　信夫もぢずり　掻つめて
亂れつゝ　陸奥の　亂れつゝ
忍ぶばかりの　節やなからむ

○山川の瀨々の泡消ざらば知られむ末の名こそ惜けれ

反歌

堀河院の御時の百首の題を述懷によせて詠みける歌保延六年の頃のことゝかや

春歌

立春

一○去年も偕暮にきと思へば春立と聞より兼て物ぞ悲き

子日

二○春日野の松の古枝の悲きは子日にあへど引人も無し

霞

三○いつしかと春は霞の越て行く音羽の山や我身なる覽

鶯

四○花咲かぬ宿の梢はなか〳〵に春とな告げそ鶯のこゑ

若菜

五○澤に生る若菜ならねど徒に年を積むにも袖は濡けり

殘雪

六○春知らぬ越路の雪も我計り　袂きに消せぬ物は思はじ

梅

七○數ならぬ袖には占じ梅の花此世に止る妻ともぞなる

柳

八○春雨に玉ぬく柳かせ吹けば一方ならで靡ぞこぼるゝ

早蕨

九○歎かめやおぞろの道の早蕨　跡を尋ぬる折しありなば

櫻

○一埋木となり果てぬれど山櫻惜む心はくちずもある哉

春雨

一一春に逢はぬ身を知雨の降込めて昔の門の跡や絕なむ

春駒

一二かばかりと今は我身を水のえに何とて駒の立廻る覽

歸雁

一三雲の上に行通ひても音をぞ鳴く花咲時に逢はぬ雁音

喚子鳥

一四絕ぬだにあらましかばと思人戀しさ添ふる喚子鳥哉

苗代

一五侘ぬ共ひきはありかじ山水の有に任せむ小田の苗代

菫菜

一六菫咲く淺茅が原に分けきても唯ひと道に物ぞ悲しき

杜若

一七世を厭ふ宿には植ゑじ杜若思ひ立つ道かこひ顏なる

藤

一八播磨潟藤江の浦にみつ汐の辛くて世にも沈みつる哉

款冬

一九身のうさに重て物を思へとや移ろひぬらし山吹の花

三月盡

二○世の中を歎く涙は盡きもせで春は限となりにける哉

夏歌

更衣

一二花の色は今日脫更ついつか又苔の衣にならむとす覽

卯花

二二山賤の垣ほあたりに宿るかな世を卯の花の盛なる頃

葵

神山にひき殘さるゝ葵草時にあはでも過しつるかな
郭公
身のうさは問ふべき人も訪はぬ世に哀に來鳴く鵙哉
菖蒲
けふは又菖蒲の根さへかけ添へて亂ぞ增る袖の白玉
早苗
早苗をば懸し我身よ奥手とも思はゝ賴あらまし物を
照射
丈夫は鹿まつとのあればこそ繁き歎に堪へ忍ぶらめ
五月雨
五月雨にまやの軒端の雨濕き餘なるまで濡るゝ袖哉
花橘
思ひきや花橘に斯ばかり憂身ながらにあらむ物とは
螢
聞の内も螢飛びかふ物思へば床のさ莚朽やしぬらむ
蚊遣火
白雨の灑きて過ぐる蚊遣火の煙りはてぬる我が心哉
蓮
濁にもしまぬ蓮の身也せば沈む共世を歎かざらまし
氷室
埋れて消ぬ氷室の例にや世に長らへばなかむとす覽
泉
我といへば涼しき水の流さへ岩間に咽ぶ音きかす也
六月祓
思ふ事皆盡きねとて御禊する川瀨の波も袖濡しけり
秋歌
立秋
秋きぬと聞より袖に露ぞおく今年も半過ぬと思へば
七夕
何事を我なげくらむ星合の空を見るにもみつ涙かな
萩
見るからに袖ぞ露けき世の中を鶉鳴く野の秋萩の花
女郎花
身のうさにえぞなづさはぬ女郎花花の名をさへ惜と思へば
薄
浮世には門させりとや思ふ覽出がてにする篠の小薄
刈萱
萩原や繁みにまじる刈萱の下葉が露に萎れはてぬる
闇
藤袴あらしたちぬる色よりも碎けて物は我ぞ悲しき
荻
我袖は荻の上葉の何なれや戰めくからに露こぼる覽
初雁
歸りては又來る雁よ言とはむ己が常世も斯や住憂き
鹿
世の中よ道こそなけれ思入る山の奥にも鹿ぞ鳴なる
露
栞する檜の葉柴に散露のはら〳〵と社音は泣れけれ
霧
夕まぐれ霧立渡る鳥部山そこはかとなく物ぞ悲しき
槿
妍てこそ消ゆとも消えめ露の間もあな羨まし槿の花
駒迎
東路や引も休めぬ駒の足の稍なづみける身に社有けれ
月
慰むと誰か云けむ詠むれば月こそ物は悲しかりけれ
擣衣
長き夜に衣擣つなる槌の音のやむ時もなく物を思よ
蟲
さりともと思ふ心も蟲の音も弱り果てぬる秋の暮哉
菊
憂身には餘なるまで見ゆる哉匂みちたる宿の八重菊
紅葉
嵐吹く峰の紅葉の日にそへて脆くなり行く我が涙哉
九月盡
うき身故何かは秋もとまるべき理なくも惜みける哉
冬歌
初冬
冬されは野原もいとゞ霜枯れて物寂しくも成增る哉
時雨
時雨るもよそにや人の思ふ覽憂には袖の物にぞ有ける
霜
昔人の霜となれとや露の身を草の末葉に結び置けむ
霰
さゆる夜におつればこほる涙こそ枕の本の霰也けれ
雪
杣山や梢におもる雪折れに堪へぬ嘆きの身を碎く哉
蘆
身の憂に折臥ぬれば亂蘆の世をば難波の何か怨みむ
千鳥
行方なくあくがれぬ共濱千鳥止らむ跡を誰か忍ばむ
氷
春日山いかに流れし谷河の末を氷のとぢ果てぬらむ
水鳥
水の上に爭でか鴛の浮ぶ覽陸にだに社身は沈みけれ
網代
身を寄む方社無れ宇治河の網代を見てや日を送らまし
神樂
つく〳〵と寢覺て聞けば里神樂詫言がましき世にけれ
鷹狩
狩暮しあはする鷹の岑越に行く末知らぬ程ぞ悲しき
炭竈
煙立つ小野の炭竈我なれや歎を積みて下にゆらむ
爐火
山賤の樞差合せ埋む火のあるとも無て世をも經る哉
除夜
さり共と思し程の年だにも暮るゝは易き空無りしを
戀
初戀
洩しては袖や萎れむ數ならぬ身を耻かしの杜の雫は
忍戀
愛にのみ沈む三稜のくり返し下に亂れて已ぬべき哉
不レ逢戀
恨すや君にのみかは大方の世にも逢ふてふとし無れば
初逢戀
逢見ても夢かとのみぞ迷らゝ嬉しきとは現ならじと
後朝戀
暮にしも契ざりせば世中に待事無てやみぞしなまし
遇不レ逢戀
物思に重ねし袖は更に又返してさへは歎くべしやは
旅戀
世の中はうき節繁し篠原や旅にしあれば妹夢にみゆ
思
胸にせく煙は高く立つ物を我身は人のしもに成ぬる

片思
七憂身をは我だに厭ふいとへ共そをだに同心と思はむ
恨
八とにかくに身には恨の積々ちて面を拜む方ぞ覺えぬ
雜歌
曉
一あかつきとつげの枕を敧て丶聞くも悲しき鐘の音哉
松
二うかりけり昔の末の松山に波こせじとやは思置きけむ
竹
三いかにせむ賤が園生の奥の竹かき疊る共世中ぞかし
苔
四岩たゝむ山の片その苔むしろ長なへにも物思ふかな
鶴
五年だにも若の浦わのたづならば雲ゐを見つゝ慰てまし
山
六憂身をば我心さへふり捨て丶山のあなたに宿求む也
河
七最上川瀧々に堰る丶稻舟の暫しぞだに思ましかば
野
八露けさは我身のさがぞ小倉山麓の野邊の秋ならね共
關
九世中は關戸にふせる逆も木のもかれ果ぬる身にぞ有ける（二本歌）
橋
一〇年經とも宇治の橋守我ならば哀と思ふ人もあらまし
海路
一一磯際れま梶しげぬき漕ぐ舟の早く浮世を離てしがな
旅
一二天離部の長路に日數經て落ふれぬべき身をいかにせむ
別
一三思ふ人なしと思ひし世中にこは又いかに惜しき別ぞ
山家
一四谷川も枕の本に聞くほどに頓て寢覺の床ぞうきぬる
田家
一五世の中は秋の山田の庵なれや畦の通路忙しかるらむ
懷舊
一六我心あれ行く宿となりにけり昔を忍ぶ草のまもなし
夢
一七うき夢は名殘迄こそ悲しけれ此世の後も尙や歎かむ
無常
一八石をうつ光の內によそふなる此身の程を何歎くらむ
述懷
一九四方の海を視の水に盡す共我思ふ事は書もやられじ
祝
二〇うき身也かけて思はじ中々にいふ限なき君が千年は

長秋詠藻中

春歌

家に十首歌人々詠せける時立春の歌とて讀める
一年のうちに春立ちぬとや吉野山霞かゝれる峰の白雪
正月朔日の頃大原に詣づとて松原の霞めるを
二春霞立ちにけらしな小鹽山小松が原の瀧みどりなる
右大將實定卿の許に十首の歌詠むとて贈られし
題の中遠村の霞といふ心を
三朝戸あけて伏見の里に眺むれば霞に咽ぶ宇治の川波
故女院（上西門院）白河の押小路殿にて彼岸の御念佛あり
し七日の程人々毎日會せむとて歌詠みし中に霞
中霞といふ心を
四何となく物哀にも見ゆるかな霞やたびの心なるらむ
刑部卿頼輔朝臣歌合すとて歌加ふべき由云ひし
かばよみて贈りし五首の中、歸雁
五聞く人ぞ涙は落つる歸るかり鳴きて行くなる曙の空
崇德院近衛殿に御幸ありし日遠尋山花といふ
心をよませ給ひし時詠める
六面影に花の姿をすき立てゝいくへ越えきぬ峯の白雲
山家にて望山待花と云ふことを此彼詠みしに
七山櫻咲やらぬ間は暮とに待たでぞ見ける春の夜の月
大炊御門右大臣まだ納言に物せられし時三條の
對の前に櫻盛りなるとて會せられし時
八君が住む宿の梢の花盛けしきことなる雲ぞ立ちける
其の後幾何の年も隔てず皇太后宮后に立ち給ひし
時わざと此の歌の喜云はれたりき
保元四年の春內裏の御會に花有二喜色一といふと
を詠ませ給ひし時
九重に匂をそふる櫻花いく千代春に逢はむとすらむ
同じ春內裏の御會に禁庭の柳垂といふ心を
一〇春來れば玉の砌をはらひけり柳の糸や伴のみやつこ
家の十首の歌の中に花
一一み吉野の花の盛を今日見れば越の白嶺に春風ぞ吹く
三月朔日頃日吉に詣で丶歸るに法成寺の花面し
ろかりしかば參りて金堂前花の散る下に佇みて
二古りにける昔を知らば櫻花ちりの末をも哀とは見よ
歌好む者共法勝寺に會して十首の歌よみし時花
の歌とて詠める
三花に飽で遂に消なば山櫻あたりを去ぬ霞とならむ
左大將實定の十首の題のうち花留客と云ふとを
四尋ね來る人は都を忘るなとねにかへり行く山櫻かな
故女院彼岸御念佛の會の中關路落花と云ふ心を
五足柄の山の手向に祈れどもぬさとちりかふ花櫻かな
同じ會の中の橋邊
六八橋に翠の糸をくりかけてくもでにまがふ玉柳かな
西行西住などいふ人共詣で來て對花思西と
いふ心をよみしに
七散花を惜むにつけて春風の吹やる方に眺めをぞする
田家鶯、彼岸の御念佛會の中
八ますらをが秋のしねを松垣にまだ春深き鳥の聲哉
三月盡日法印靜憲が許より贈りたりし
九花は皆四方の嵐に誘はれて獨や春のけふは行くらむ
返し
一〇惜しと思ふ人の心し後れねば獨しもやは春の歸らむ
夏歌
十首の歌の中に、更衣
一一いつしかも更つる花の袂哉時に移るは習ひなれども
夏の初によめる
一二時鳥暫しな待たじ歸りにし春の名殘の忘れもぞする
樹蔭の卯花と云ふ心を
一三身を知れば哀とぞ思ふ照日疎き岩陰山に咲ける卯花
暮見二卯花一といふ心を
一四柴人の歸るみたにの追風に波よせまさる岸の卯の花
花橘を人々よみけるに
一五誰かまた花橘に思ひ出でむ我も昔のひとゝなりなば
伏見にて相知れる僧の承送經に詩歌供養すとて
近聞二郭公一といふ心をよみしに

六二哀にもともに伏見の里に來て語らひあかす郭公かな
左大將の許に會すとて歌くはふべき由有りしかば詠みて贈りし三首の中、時鳥
七二我心いかにせよとて郭公くもまの月の影に鳴くらむ
家の十首のうちに、郭公
八二さやかにも鳴き渡る哉郭公なれや皐月の光なるらむ
はやく常磐にて百首の歌よみける中に、曉時鳥
九二忍びづまおき行く空に郭公名殘多くも鳴き渡るかな
法住寺殿にて院の御供花の時の會に雨方聞二郭公一といふことを
〇三時鳥ふたむら山を等ぬれば峰を隔てゝ鳴き交すなり
同じ御供花の時旅宿五月雨といふ心を
一四梅雨をきそのみ坂を越侘びて獨路に柴の庵をぞさす
左大將の會に贈りし中の、五月雨
二四梅雨は蘆の八重葺ふきそへて空の氣色も隱なかり鳧
榮德院の御會の時六月朔日更戀二時鳥一といふ心
を詠ませ給ひし時
三四尋ね見むまぼろしもがな郭公行方も知らぬ六月の空
賴輔朝臣の歌合の歌、納涼
四四夏の日を厭ひて來つる奥山に秋も過ぎたる松の風哉
榮德院にて泉邊納涼といふ心を
五四水の面に夏の日數を擾遣ればまだき袂に秋風ぞ吹く
秋歌
初秋の歌とて詠みける
六四草も木も色づく秋の初風は吹初るより身にぞ浸ける
保延の御時內裏の御會に七夕の心を詠める
七四七夕はうら珍しく思ふらむこよひは雲の衣かへさで
賴輔朝臣の歌合のうち、七夕
八四七夕の絕えぬ契をそへむとや羽根をならぶる鵲の橋
遠鄕萩といふ心を
九四此里のま萩にすれる衣手をほさで都の人に見せばや
二條院の御時東三條におはしますほど應製五首の
中、風動二野花一
〇四君が代は遠里小野の秋萩も散さぬ程の風ぞ吹きける
鹿聲何方
一五吹き迷ふ嵐にたぐふ鹿の音は一方ならず袖濡しけり
左大將の十首の題の中夜泊聞鹿といふ心を
二五やよいかに蟲明の松の風に又遙に鹿の聲おくるなり
八月十五夜榮德院の御會
三五世に知らぬよはの空哉秋毎に牙ゆるは月の習なれ共
法勝寺の十首の中の月二首
四五月清み都の秋を見わたせば千里にしける氷なりけり
五五いかなれば沈み乍らに年を經て代々の雲ゐの月を見覽
二條院の御時也爲四代之侍臣侍在二雲客之列一故
左大將十首の題の中、江上月
六五思出でよ神代もみきや天の原空も一つに住の江の月
前馬助教賴住吉の御社にて歌合すとて當世の歌
よみどもに歌すゝめ侍りし時三首の中、社頭月
七五心なき心もなほぞつきはつる月さへすめる住吉の濱
家に月の五首の歌よみし時、山居月
八五住侘びて身を隱すべき山里に餘り隈なきよはの月哉
田家月
九五丈夫は鳴子も曳ず寢にけらし月に山田の庵は守せて
家の十首の歌の中に月
〇六世を愛しと何思ひけむ秋毎に月は心に任せてぞ見る
老の後の月を見てよめる
一六眺むれば六十の秋も覺えけり昔をさへや月はみす覽
九月十三夜榮德院にて月照二菊花一と云ふ心を詠
ませ給ひし時
二六常よりも隈なき空の氣色哉月も此花見るにや有る覽
擣衣何方と云ふことをよみける
三六擣つ音はよその枕に響來て衣は誰になれむとすらむ
二條院の御時內裏の五首の中紅葉出簷といふ
心を
四六山姫や岩垣躑躅たはるらむ紅葉襲ねの袖の見えつる
西山に住みける比暮見二落葉一といふ心を
五六木のもとに今唯暫し來ざりせば誠に夜の錦ならまし
院の九月御供花の時の會に鹿聲何方といふことを
六六鳴く鹿は峯か麓かとこの山たびの枕に聲おくるなり
殘菊夾路
七六匂ひ來る山下水をとめ行けばま袖に菊の露ぞ移ろふ
九月盡日榮德院にて山路秋過といふ心を詠ませ
給ひしに
八六山路をば送し月も有る物をすてゝも暮るゝ秋の空哉
家の十首の會の中、九月盡
九六暮れはつる夕の空を詠むれば雲こそ秋の名殘也けれ

冬歌
十月朔日時雨しける日
〇七早曉に降添ふ今朝の時雨哉雲もまだひぬ秋の名殘に
海路時雨といふことを
一七袖ぬらす小島が磯の泊かな松風さむみ時雨ふるなり
敦賴が住吉の歌合の三首の中、旅宿時雨
二七哀にも夜半に過ぐなる時雨哉汝もや旅の空に出つゝ
嘉應二年十月法住寺殿の殿上の歌合に關路落葉
といふ心を
三七色々の木の葉に道も埋れて名をさへたどる白河の關
賴輔朝臣の歌合に贈りし中、落葉
四七降音も袖の濡るも變らぬを木葉時雨と誰かわきけむ
法住寺殿の殿上の歌合の中、水鳥近馴
五七君が代をのどかなりとや水鳥も玉の砌に翼しくらむ
左大將の十首の題の中、曉天千鳥
六七すまの關有明の空に鳴く千鳥傾ぶく月は汝も悲しや
關中雪、おなじ題の中
七七降初めて友まつ雪は待附けつ宿こそ最ど跡絕にけれ
保延の御時二條內裏におはしましゝ時雪庭樹花
といふことを詠ませ給ひし時
八七百敷やみ垣の松も雪ふれば千代の印の花ぞ咲きける
法勝寺の十首の會の雪
九七燻立つ小野の炭竈雪積て富士の高ねの心ちこそすれ
師走の十日餘り雪いといたう降りたる旦左大將
新大納言と聞えし時贈りし
〇八今朝は若君もや訪ふと眺れどまだ跡もなき庭の雪哉
返し
一八今ぞきく心は跡もなかりけり雪かき分けて思遣れ共
同じ日大宮權大夫經盛卿まだ彼の宮のすけと云
ひし時近き程に住みけるより贈れりし
二八雪ふれば憂身ぞ最ど思しる踏分て訪ふ人しなければ
返し
三八降果る憂身は雪ぞ哀なる今日しも人の訪につけても
家の十首の會の中、雪
四八積れ唯道は絕ゆとも山里に日をふる雪を友と頼まむ
鳥羽院北殿におはしましゝ比氷閉二水聲一と云ふ
心を殿上の人々よみしに（關路落葉の次）
五八冬くれば水と水の名を換て岩もる聲をなど忍ぶらむ

歳暮雪といふことを詠みける
六暮れ果て丶越路を歸る新玉の年ふりこめよ雪の白山
十首の會の中、歳暮
七中々に昔は今日も惜しかりき年や歸ると今はまつ哉
賀歌
鳥羽院田中殿におはしまし丶比八條院姫宮と申し丶時彼御方にて竹遐年友といふ題を講せられし時よめる
八九我友と君が御稧の呉竹は千世に幾世の影をそふらむ
故右大臣大炊御門の家に渡り初めて詩歌講せられし時鶴契二遐年一といふことを
九七君が植る松に住む鶴幾千代は長閑き宿に馴むとす覧
仁和三年正月のことにやありけむ攝政閑院にて始めて詩歌講ありし時對レ松爭レ齢といふことを
〇八植ゑて見る君が齢は限なし千たび花咲けやどの若松
同じ人宇治にて河水久澄といふ題を講せらるべしとて或る人の詠ませし時人に代りて
一八水上に千年すめとや定めけむ八十うぢ川の絶ぬ流は
又人に代りて
二九千早振宇治の橋守言とはむ幾世すむべき水の流れぞ
これはいだゝりけるなるべし
家の十首の中、祝
三八君が代は普くそゝぐ春雨の數ぞ千年の數となるべき
仁和元年の大嘗會の悠紀方の歌よみて奉るべきよし宣旨有りしかばさき〳〵つねは儒者などつかうまつるをいかゝと辭し申すを尚よみて奉るべきよし御氣色有るよし行事辨俊經朝臣度々しめし送りしかばよみて奉りし歌
悠紀方　近江國
風俗歌十首
稻舂歌　坂田郡
三八近江路や坂田の稻を刈積て道ある御代の初にぞつく
神樂歌　長岑山
三七萬代を祈りぞかくる長岑の山の榊をさねこじにして
辰日參入音聲　鏡山
六八嬉しくも鏡の山を立て置きて曇なきよの影を見る哉
同日樂破　余吾海
七八四方の海も風靜にぞなりぬらし塵治れるよごの浦波
同日樂急　眞木村
六七暮れ果て丶越路を歸る新玉の年ふりこめよ雪の白山
十首の會の中、歳暮
七七中々に昔は今日も惜しかりき年や歸ると今はまつ哉
賀歌
鳥羽院田中殿におはしまし丶比八條院姫宮と申し丶時彼御方にて竹遐年友といふ題を講せられし時よめる
八七我友と君が御稧の呉竹は千世に幾世の影をそふらむ
故右大臣大炊御門の家に渡り初めて詩歌講せられし時鶴契二遐年一といふことを
九七君が植る松に住む鶴幾千代は長閑き宿に馴むとす覧
仁和三年正月のことにやありけむ攝政閑院にて始めて詩歌講ありし時對レ松爭レ齢といふことを
〇八植ゑて見る君が齢は限なし千たび花咲けやどの若松
同じ人宇治にて河水久澄といふ題を講せらるべしとて或る人の詠ませし時人に代りて
一八水上に千年すめとや定めけむ八十うぢ川の絶ぬ流は
又人に代りて
二九千早振宇治の橋守言とはむ幾世すむべき水の流れぞ
これはいだゝりけるなるべし
家の十首の中、祝
三八君が代は普くそゝぐ春雨の數ぞ千年の數となるべき
仁和元年の大嘗會の悠紀方の歌よみて奉るべきよし宣旨有りしかばさき〳〵つねは儒者などつかうまつるをいかゝと辭し申すを尚よみて奉るべきよし御氣色有るよし行事辨俊經朝臣度々しめし送りしかばよみて奉りし歌
悠紀方　近江國
風俗歌十首
稻舂歌　坂田郡
三八近江路や坂田の稻を刈積て道ある御代の初にぞつく
神樂歌　長岑山
三七萬代を祈りぞかくる長岑の山の榊をさねこじにして
辰日參入音聲　鏡山
六八嬉しくも鏡の山を立て置きて曇なきよの影を見る哉
同日樂破　余吾海
七八四方の海も風靜にぞなりぬらし塵治れるよごの浦波
同日樂急　眞木村
八八君が代はちへのなみぢも隈もなく作重ねよ眞木の村人
同日退出音聲　音高山
九八吹く風は枝も鳴さで萬代とよばふ聲のみ音たかの山
巳日參入音聲　石根山
〇九行く末を思ふも久し君が代はいはねの山の峯の若松
同日樂破　安河
一九安川に群居て遊ぶ眞鶴も長閑なる世を見する也けり
同日樂急　木綿園
二九ゆふ園の日影の蔓かざしもて樂しくも有るか豊明に
同日退出音聲　高御倉山
三九動なき高御倉山祈置きつ治めむ御代は神のまに〳〵
同悠紀方御屏風六帖和歌十八首（別紙にあり）
甲帖正二月
小松崎　子日有二遊客一眺二望湖海一
四九子日して小松が崎を今日見れば杳に千代の影ぞ浮べる
龜岳　有下採二若菜一女人上
五九少女子も君が爲とや龜岳に萬代かねて若菜摘むらむ
梅原山　梅花多開敷
六九春の日の光は際もなけれどもまづ花咲くは梅原の山
乙帖三四月
櫻山　櫻花盛開松樹交レ枝
七九松がえに枝さしかはす櫻山花も千年の春やにほはむ
山吹崎　欺冬臨二岸水一
八九水の色に花の匂も一つにて八千代ぞすまむ山吹の崎
大瀧山　卯花墻開山脚民家多
九九布さらす鹽の里のかすそへて卯の花咲ける大瀧の山
丙帖五六月
長澤池　端午日人採二菖蒲一
〇〇長澤の池の菖蒲を尋てぞ千代の例にひくべかりける
吉田郷　植田之所多
一〇堰く水も吉田の里に植る田は兼て年經む影う見えける
玉蔭井　水邊水蔭有二納涼之人一
二〇岩間もる玉蔭の井の涼しきに千年の秋を松風ぞ吹く
丁帖七八月
高宮郷　七夕有二引絲之家一所
三〇七夕に今朝ひく絲も長かれど君をぞ祈るたか宮の里
志賀浦　月浮二水上一人見所
三〇照る月も光をそへて見ゆる哉玉よせ返す志賀の浦波
玉野原　秋花開敷
三一靈繁き玉野の原の萩ざかり風も長閑に見ゆる秋かな
戊帖九十月
吉水鄉　多二人家一菊花臨レ水
四九幾ちよの秋かすむべき菊の花匂をうつすよし水の里
大藏山　山脚民家多積レ稻之所
五〇數しらず秋の刈穗を積てこそ大藏山の名には負けれ
松賀江岸　松樹茂盛邊山有二紅葉一
六〇紅葉ばを樂む時雨は降來れど綠ぞ增る松が枝の岸
己帖十一十二月
千坂浦　千鳥群飛行客見所
七〇幾千年越葉ゆかむ御代なれや千坂の浦に千鳥鳴くも
勢多橋　白雪積敷人馬過所
八〇東路や日次の貢絕えじとて雪ふみ分くる勢多の長橋
吉身村
九一君が代は吉身の村の民も皆春をまつとや急ぎ立らむ
仁安元年十一月三日詠進之
戀歌
保延の御時幾見戀と云ふ心を詠ませ給ひし時
一一谷深み岩片かくれ行く水の影ばかり見て袖濡せとや
同院の御會に思不言戀と云ふことを
二一我が戀は浪こす磯の濱楸沈み果つれど知る人もなし
又曉戀と云ふことを詠ませ給ひし時
三一逢でのみ伏見の里に立つ鳴の羽數におつる我が涙哉
未二對面一戀と云ふことを詠みける
四一人知れぬ心や兼てなれぬらむあらましとの傳ぞ立つ
月の五首の歌よみし中に月前戀と云ふことを
五一戀しさの眺むる空に滿ぬれば月も心の內にこそすめ
顯輔卿の家に歌合すとて歌加ふべきよし云ひ遣したりしかば詠みて贈りし中、後朝戀
六一心をば留めてこそは歸りつれ怪しや何の暮をまつ覧
秋の比さがの山のかたに遊びけるに行きくらしてほの見ける女の許に履文遣しけれど返事もせざりければ遣しける
八一うかりける秋の山路を踏初て後の世迄も惑ふべき哉
つれなくのみ見えける女に遣しける
九一好さらば後の世までに頼めおけつらさに堪ぬ身共哉なれ

返し定家の母と新古今にあり

○二頼めおかむ只さ計を契にて浮世の中の夢になしてよ
逢ひ難くて逢うたりける女に

一つらさにも落ちし涙の今は唯おし只管に戀しかる覽
いかなるあしたにか人に遣しける

二いかにせむいかにかせましいかに寢て起つる今朝の名殘なる覽
返し

二いかに寢し夢の名殘ぞと怪き迄には我ぞ暁る
又女に遣しける

三戀しとも言はゞ愚に成ぬべし心をみする言の葉もがな
返し

三戀してふ偽いかにつらからむ心を見する言の葉無ば
忍ぶることありて暫し言はざりける女に又文遣すとて

四怨ても戀しき方や増る覽つらさは弱る物にぞ有ける
春の比忍ぶことある女の許に遣しける

七思ひ餘り其方の空を眺むれば霞を分けて春雨ぞふる
又雨のふりける日人に遣しける

八思遣れ降ぬ空だにある物を今日の霖雨の袖の氣色を
返し

九歎つゝ日をふる宿は春雨も袖より外の物にやは見る
怨むることありける女に遣しける

一〇唐土の人迄遠く尋ねばやか計りつらき中はありやと
返し

一一尋ね見よ類ひもあらば慰めむか計りつらき中の契を
人の許にこまかに書きて遣りける文の奥に

一二何となく落る涙に任すればそことも見えぬ筆の跡哉
返し

一三見れば先そこはかとなく洗來て涙落ちそふ筆の跡哉
忍びて物いひける女のことさまになりぬべしと聞くことありける比遣しける

一四人知れぬ入江の浪に潮垂ていかなる空の煙とか見む
忍びたる所にいきたりけるに人目しげく夜もむげに明けぬべかりけるをとかく構へて歸りてつとめて遣しける

一五包み餘り袖の涙にせきかねて顯れぬとも覺えつる哉
返し

一六せきかぬる涙也せば小夜衣袖にのみやは包果つべき
忍びけることありて逢ひ難かりける女の許に夜ふけていきたりけるに今夜はびんなき由云ひければ曉近くなるまで門の外にありて侍りける朝になほ文遣したりける返しに女

一七歸しは如何ありけむ我身だに靜心なく明しつる夜を
返し

一八歸さは夢路かとのみ辿り來て今朝とふに紕現もしれ
忍びて物いふ女の住所少し近き所に日比ありけるを又遠く罷りなむとての日みづから言はすなりぬることなど言ひ遣りたる文のうらに女の書きつけたりける

一九問ひはつる心細さに我世さへ今日を限と成ぬべき哉
返し

二〇戀侘る命は知らぬ命あらば問ふ言葉のいつか絶べき
故女院の彼岸の御念佛の時の會白河の押小路殿にて文をたかふる戀と云ふ心を

一一これや誰有りしやそれと思ふにも心を亂る筆の跡哉
戀隣女

二二知るらめや宿の梢を吹き交す風につけても思ふ心を
隱名戀

二三蜑のかるみるめを波に紛へつゝ名草の濱を尋侘ぬる
人におほする戀

二四眞柴こる賤の妻木と名告らせて我が人知れぬ思にぞたく
閑居增戀

二五思ひやれ春の朝の雨のうちに軒に爭ふ袖のけしきを
會後戀

二六いかにしてかげ絶ぬ覽諸共に井手の玉水掬びし物を
以上六首彼岸の御念佛の時の會也

忍ぶることありける女に遣しける

二七戀しさも忘るばかりの憂きとに弱るは袖の涙也けり
をとこいかにぞなりける女に遣しける

二八慰めて暫し待ちみよ先の世に結置きける契もぞある
四月朔日比雨のふりける夜忍びて人に物言ひて後びんなくて過さければ五月雨の頃遣しける

二九袖ぬれし其夜の雨の名殘より頃て晴せぬ五月雨の空
法勝寺の十首の會の中、戀

○三よと共に絶えずも落つる涙かな人は哀もかけぬ袂に
左大將の家に會すとて歌加ふべき由有し時戀歌

二一戀せずば人は心もなからまし物の哀も是よりぞ知る
同じ人の十首の題のうち、戀二首

寄二催馬樂一戀

二二逢てのみ歸る野原の露なれどかふるは惜き萩が花摺
寄二源氏名一戀

二三恨みてもなほたのむ哉澤標深き江にゐる印と思へば
二條院の御時思出齋女に戀といふことを高倉の內裏の御會

二四昔見し野中の水に尋ね來て更に袖をも濡しつるかな
一院の法住寺殿の五月の御供花のときの會契後隱名戀といふことを

二五頼めこし野邊の道芝夏深し孰くなる覽もすの草ぐき
同院の九月の御供花の時遠人を戀ふと云ふ心を

二六同じ世にいきの松さは聞き乍ら心盡しの中ぞ悲しき
家の十首の會のうち、戀

二七難波江の蘆の古根は我なれや戀路にひて年の經ぬ覽
賴輔朝臣の歌合によみて贈りし五首の中、忍戀

二八いかにして知るべなく共尋見む信夫の山の奥の通路
法住寺殿の殿上の歌合の時隔ノ期變ノ約戀といふことを

二九思ひきや槇の端書掻つめて百夜も同じ圓寢せむとは

長秋詠藻下

雜歌

保延元年のことなるべし七月九日故人（院中納言）の忌日に鳥部野の墓所の堂に參りて懺法にあひて夜更けて歸るに草の露しげかりければ

三〇分け來つる袖の雫か鳥べ野のなく〳〵歸る道芝の露
保延五年ばかりのとにや母の服なりし年法輪寺に暫し籠りたりける時より嵐の痛く吹きければ

三一浮世には今は嵐の山風にこれやなれ行く始なるらむ
日比籠りて出づる日籠りたる僧の庵室の障子にかきつけゝる

三二草の庵に心は止ついつか又頓て我身も住さむとす覽
同じ比西山なる所に籠りゐたるに正月司召など過て雪のふりたる朝人の訪らひたる返事の序に

[五]思ひやれ春の光も照しこぬみ山の里の雪のふかさを
永治元年にや御譲位近くなりての比霜月十餘日
面白かりしに土御門内裏の南殿の御前にあげが
たまでありてよめる
[六]忘れじよ忘るなどだに云てまし雲ゐの月の心有せば
其時春宮昇殿未レ被レ聽故[二]
又の年こもりゐたりけるに新嘗會の日皇后宮の
御方に侍りける親しき人につかはしける
[七]珍しき日影をみても思はずや霜枯はつる草の緑りを
崇徳院より御草子かきて進らせよとて給はりし
書きて奉るとてつゝみ紙に
[八]歎ならぬ名をのみと社思しか斯る跡さへ世にや殘らむ
御返りごと女房の手にて
[九]水莖の跡計りしていかなれば書流す覽人はみえこぬ
四品に叙してのち崇徳院の御方の還昇はまだ申
さゝりし比百首の歌部類して奉るべきよし仰せ
られたりし次でに奉りし
[一〇]雲ゐよりなれし山路を今更に霞隔てゝなげく春かな
御返りごとはなくて還昇仰せ下されしをそ仰せ下
されたりける敎長卿奉レ書也
前左衛門佐基俊と云ひし人に古今の本をかりて
返すとて
[一一]君なくばいかにしてかは晴けまし古今の鬘束なさを
返し　基俊の君
[一二]かきたむる古今の言の葉を殘さず君に傳へつるかな
左京のかみ顯輔卿撰集承りたるとて歌尋ねて侍
りしにまづ故中納言の歌をつかはすとて
[一三]木の本に朽果ぬべき悲さよ古りにし言の葉を散す哉
返し　顯輔卿
[一四]家の風吹傳へずば木の本にあたら紅葉の朽や果まし
故左の大臣の仁和寺の御大寺の堂に上西門院前
齋院と申しゝ時の女房あまたわたりて歌ども詠
み設かれたりけるを後に見出でゝ其の返事せよ
と大炊御門右大臣[源大納言]のありしかば書きそへつ
ゝ遣しける歌ども
[一五]おく霜も君が爲にと心してさかり久しきやどの白菊
返し
[一六]千代迄も匂はむ宿の菊なれば心長くを人も來て見よ
又女房の
[一七]花は枯れ紅葉散ぬる折しもぞ雪見まほしき冬の山里
返し
[一八]折につけ哀をそふる山里は雪ふる儘を思ひおこせよ
又
[一九]風寒み紅葉殘らぬ木の本に花見し春は劣らざりけり
返し
[二〇]花の春紅葉の秋に非ぬまも唯には見えぬ木の本ぞ是
又
[二一]水の上の月に心のしみぬれば疾氷りつゝえ社歸らね
かへし
[二二]冬の池に影を止ても澄まば社月に浸ける心とも見め
又
[二三]曇なく磨ける宿の池水はちりもまよはぬ鏡とぞ見る
かへし
[二四]うれしくも池の鏡を研き置きて人の心の程を見る哉
又
[二五]見る人の立つ空もなき宿なれば汀の蓼も住馴にけり
かへし
[二六]よと共にみ馴はせまし水鳥の立空もなき宿と思はゝ
又
[二七]此やさは常に住なる月ならむ鷲のみ山に入時もなき
返し
[二八]見る人の心も常に澄ぬれば入る時もなし山の端の月
近衛院の御時四位の後昇殿ゆりて初めて御物忌
に籠れる夜近衛殿の遣水に月宿りたるを見て土
御門の内裏のみかは水思ひ出でられてよみける
[二九]古の雲ゐの月はそれながら宿りし水のかげぞ變れる
近衛院かくれおはしまして御葬送の又の日近衛
殿に參りたるに日のおましの御さうぞくもあら
ためて佛などかけ奉りたるを見ておぼえける
[三〇]登りにし夜はの煙の悲しきは雲の上さへ變る也けり
鳥羽院かくれおはしまして諒闇なりし秋鳥羽の
北殿に故女院おはしますころ庭の前栽いとおもし
ろき中に蘭の殊に萎れて見ゆるを折りて人に贈
りける
[三一]なべてよの色とは見れど藤袴分けて露けき宿にも有哉
故女院霜月の二十三日かくれさせ給ひて後御遣
誠にて御舍利をば高野の御山になむ納め奉りし
を師走の四日にや彼の御山につかせ給ひし日雪
のいみじく降りし朝に侍從大納言[兼通]入道ふ御
山につかせ給ふらむことなど消息ありし返事の
次でにつかはしける
[三二]後れゐて思遣る社悲けれ高野の山のけふのみゆきを
かへし　入道大納言
[三三]悲しさは云盡すべき方ぞなき我心にて人を知らなむ
同じ十日比押小路殿にて御かうなどまだしきほ
ど久我の内のおはいまうち君[源大納言雅通]と聞
えし時物語などして日數の過ぐるにつけて夢の
心ちのみすることなど云ひて又の日彼の大納言
の許よりおくられし
[三四]定めなきこのよの夢の儚さを言ひ合せても慰めし哉
かへし
[三五]悲しさの慰めがたき心には云合せても夢かとぞ思ふ
御三七日のそふくの人々など數多參りたりしに
御かう果つるほどにたゝう紙にかきつけて云ひ
たりし　清輔朝臣
[三六]人なみにあらぬ袂は變らねど涙は色になりにける哉
かへしいでにければ夕かたぞつかはしける
[三七]墨染にあらぬ袖だに變るなり深き涙の程をしらなむ
年も返りて御忌日に御誦經の使にていづとて親
隆の卿のもとにいひ置きける
[三八]墨染の袖をつらねて慰めし日數にさへも別れぬる哉
返し　親隆卿
[三九]日數さへ過ぎ別れぬと思ふにも堪れぬ物は涙也けり
前中納言師仲卿下野國より歸京して後配所にし
て詠みたりける歌どもとて見せに遣したりしを
返すとて添へてつかはしける
[四〇]いか計り露繁ければ東路の言の葉にさへ袖のぬる覽
返し　師仲卿
[四一]思遣れむろの八島に潮たれて煙になれし袖の氣色を
西行法師高野に籠りゐて侍りしが撰集の樣なる
物すなりと聞きて歌かき集めたる物おくりて包
紙にかきたりし　西行法師
[四二]花ならぬ言の葉なれど自ら色もやあると君拾はなむ
返し

一世を捨て入にし道の言の葉ぞ哀も深き色は見えける

釋教歌

廉治のころほひ待賢門院の中納言の君法華經二十八品の歌結縁のため人々に詠ませて題を送りて侍りしかば詠みて贈りし歌

序品　廣度諸衆生　其數無有量

二渡すべき數も限らぬ橋柱いかにたてける誓なる覽

方便品　深著於五欲　如聚牛愛尾

三高砂の尾上の櫻みし毎に思へばうとし色にめでける

譬喩品　其中衆生　悉是吾子

四孤と何嘆きけむ世の中に斯る御法の有りけるものを

信解品　無上寶聚　不求自得

五遥ひける心に晴る丶月影にもとめぬ玉や袖に映りし

藥草喩品　無有彼此　愛憎之心

六春雨は此面彼面の草も木もわかず緑に染むる也けり

授記品　於未來世　成得成佛

七如何計嬉かり劒さらでだに來む世のとは知ま欲きに

化城喩品　以大慈悲身　度苦惱衆生

八世の中の苦しき道は轉れびの力車のはこぶなりけり

弟子品　世雄於長夜　常愍見數化

九長夜も尚借のみや過ぐさまし哀と見つ丶數ざりせば

人記品　壽命無有量　以愍衆生故

一〇限なき命となるもなべてよの物の哀を知れる也けり

法師品　新見濕土泥　決定知近水

一一武藏野の堀棄の井も有る物を嬉く水の近づきにける

寶塔品　若曾持者　我即歡喜

一二卷々をかざれるひもの玉ゆらもたもてば佛喜び給ふ

提婆品　採薪及菓蓏　隨時恭敬與

一三薪こり峯の木實を求めてぞえ難き法は聞き始める

勸持品　我不愛身命　但惜無上道

一四數ならば惜く〻やあらまし惜からぬ憂身ぞ聞けば嬉かりける

安樂行品　深入禪定　見十方佛

一五靜かなる庵を占て入りぬれば一方ならぬ光をぞ見る

涌出品　從地而涌出

一六池水の底より出づる蓮葉の爭で濁にしますなりけむ

壽量品　現有滅不滅

一七かりそめに夜はの煙と昇りしや鷲の高ねに歸る白雲

分別功德品　若座若經行　除睡常攝心

一八息ず常に心を治めつ丶いつか浮世のねぶり覺むべき

隨喜功德品　最後第五十　聞一偈隨喜

一九谷川の流の末をくむ人も聞くはいかゝは驗有りける

法師功德品　又如淨明鏡　悉見諸色像

二〇濁なく清き心に研かれて身こそますみの鏡なりけれ

常不輕品　而打擲之　避走遠住

二一其かみの荒きたぶさの杖に赴遂に懸りて導かれけれ

神力品　於我滅度後　應受持斯經　是人於佛道

決定無有疑

二二この法をこの頃保つこれぞその佛の道に定めたる人

囑累品　今以附囑汝等

二三哀けふ御法のするを聞くとも讓り置きける驗也けり

藥王品　即往安樂世界

二四賴むかな露の命の消ゆる時蓮の上にうつし置くなる

妙音品　及衆難處　皆能救濟

二五荒き海嚴しき山の中なれど妙なる聲は隔てざりけり

普門品　弘誓深如海

二六誓ひける心のやがて海なれば人を渡すも煩ひもなし

陀羅尼品　乃至夢中　亦後真悟

二七現には更にも云すぬば玉の夢の中にも離れやはする

嚴王品　又如一眼之　龜值浮木孔

二八我や此浮木に逢る龜ならむ甲はふれ共法は知らぬを

勸發品　即往兜率天上

二九遙なるその曉を待たずとも空の氣色はみつべかり鳧

無量義經　船師大船師

三〇護は生死の岸に解き捨て丶解脫の風に舟よそひせよ

普賢經　乘斯如霜露　悉日能消除

三一露霜と結べる罪の悔しさを思ひとくこそ旭なりけれ

心經

三二春の花秋の紅葉の散るも見よ色は空しき物にぞ有ける

阿彌陀經

三三法の御名きえなむ後の末迄も彌陀の教ぞ尚殘るべき

放女院より極樂の六時の讃の繪にかゝれたるを其の心どもの歌をかゝるべきに歌なき所共のなほ多かる詠み添へて奉れと仰せられしかば詠みて奉りし所々の歌

六時讃

晨朝

朝に定より出づる程鴈に天の樂を聞く

三四仄なる雲のあなたの笛の音も聞けば佛の御法也けり

黃金瑠璃の庭に出で丶人々ともに花を採る

三五未明露けき玉を折るほどは玉しく庭に玉ぞ散りける

次に被加を蒙りて十方諸佛供養せむ虛空界を飛び過ぎて歡喜の國をさして往かむ

三六手折つる花の露だにまだ干ぬに雲の幾重を過てきぬ覽

彼に至ては寶の地を步みて進み行けば香像白香像

此等の大士に值遇す

三七春のくる方をさしつる徵にやこち吹く風に花の散覽

日中時

他方界より還りては次に飮食經行す

三八遙かなる佛の御國めぐりても時の程にぞ立歸りける

飮食畢ては座より起て經行せむ七重寶樹の風には一實想の理を調へ八功德池の浪には無生滅の義を唱ふ

三九影清き七への植木移りきて瑠璃のとばそも花かとぞ見る

四〇おり立て世をすぐせとや池水の淺さ深さも心なる覽

或は宮殿樓閣に上りて他方界を見む

四一曇なき玉の臺に登りてぞ香なる世のことも見えける

日沒時

金色世界の文殊師利菩薩ともに來至す

四二たらちめの來ますけしきに此國も更に光は增る也鳧

或國界悉白銀光さかりにて普賢大士來至す

四三白妙に月か雪かと見えつるは西をさしける光也けり

或國界悉無數大雲遍滿す聞けば地藏大薩埵摩訶

開出家の形とて今又爰に來至す

四四夕暮の哀立ちそふ雲間より家を出でたる姿をぞ見る

此舍離城に住せりし維摩居士來至す

四五古は靜けき室にゆか立て丶住みし人にも逢見つる哉

時に大衆法を聞きて彌歡喜瞻仰せむ即時に自然に無數妙花散覆す

四六色々に空より花ぞちり紛ふ此をや法の雨と云ふらむ

四七今ぞ是入る日を見ても思來し彌陀の御國の夕暮の空

初夜時

見佛聞法事畢て本の坊に歸るべし或は金の花の中金色淨土の如く也或は瑠璃の閣の上淨瑠璃淨土のごとくなり

一四八 歸り來る玉の臺も花のうちも光はおなじ住かも也けり
牛夜
夜の境靜にて漸く中夜に至る程三五の人々共に出て金繩界道歩みつゝ衆寶國土の境界の寂靜安樂なるを見光も聲も靜にて臺の界に異ならず
一四九 深きよの光も聲も靜にて月のみ顔をさやかにぞ見る
後夜
曉到て浪の聲金のきしに寄するがほど欲〻曙する風の音玉の簾をすぐるあひだ多し
一五〇 古へのをのへの鐘に似たるかなきしう浪の曉の聲
一五一 明方は池の蓮にひらくればたまの簾に風かをるなり
見佛聞法緣なくば此地を踏者難〻有
一五二 佛を見法を聞べき身ならずば斯る汀を爭で踏まゝし
人の弔二品經供養しける時序品の心を
一五三 殘りなく照す光に尋ぬれば昔のともくもらざりけり
又ある所の一品經に方便品の其知惠門難解難入の心をよめる
一五四 入り難く悟り難しと聞く門を開くは花の御法也けり
譬喻品の號曰花光如來の心を
一五五 行末の花の光の名をきくに兼てぞ春にあふ心ちする
一五六 今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子の心をよめる
一五七 子を思ふ道こそ聞けば嬉しけれ心の闇も悟晴るなり
道因法師 壽量品 妙覺寺にして一品經の供養して八講を行ふとて以佛敎文出三界苦と云ふ文を人々によませし時よみける
一五八 谷川や三の峽にや沈まゝし山路の月の遥らざりせば
妙覺寺の八講のはての日聽聞に女車のさまにて罷りて講はつるほどに車より見出しける歌
一五九 和歌の浦波に年ふる諸人も法の浮木に今日も逢ぬる
妙音品の心也其の日とかれし也
道因が住吉の社の歌合の時一品經人々にすゝめて歌加ふべきよしいひ侍りしかば信解品をかきて奉りて周流諸國五十餘年の心をよみける
一六〇 美し磯路の浪に萎れてもかひある浦に廻りあひけむ
又或所の一品經の供養に法師品の 寂寞無人聲
讀誦此經典 我爾時爲現 清淨光明身
一六一 訪ふ人の跡なき柴の庵にもさしくる月の光をぞ待つ
或る法師の一品經すゝめし時法師品に歌加ふべきよし云ひしかば慇懃生故生於惡世廣演此經の心をよみける
一六二 是ぞ此憂世の爲と生れきて斯は御法をとくと社聞け
又人の許に一品經供養せし時提婆品の心を
一六三 袖の上の玉の光のほどもなく南の空の月とすむらむ
勤持品 我等聞記 心安具足
一六四 かくばかり心はれける月影を姨捨山と何おもひけむ
安樂行品 若於夢中 但見妙事
一六五 樣々に妙なる花ぞ散りまがふ法を保てる春の夜の夢
壽量品 常在靈鷲山
一六六 末の世は雲の遥に隔つとも照さゝらめや山の端の月
同品 爲度衆生故 方便現涅槃の心をよめる
一六七 花の散り紅葉流るゝ山河も人を渡さむ爲とこそ聞け
法師功德品の是人有所思惟籌量言說皆是佛法の心をよめる
一六八 二つなき道に心のすみぬれば思ふと皆法とこそ聞け

神社歌

三品に叙してのち初めて諸社の奉幣使に參りたるに賀茂の使にあたりて下の御社より夜更けて上の御社に參る程むかし若くて百度詣などしけるを久しく參らで河原の有樣もはやく見しには變りたる心ちするも思ふこと多くてよみける
一六九 昔わが祈りし道はあらねども此は嬉しな賀茂の河波
住吉の社の歌合に述懷の歌とてよめる
一七〇 徒らにふりぬる身をも住吉の松はさりとも哀知る覽
其の後廣田の社に御うらやみあるよしの夢の告げ有りとて同じく歌合すゝめし時よみて加へし
三首の中、社頭雪
一七一 潔よき光にまがふちりなれやおまへの濱に積る白雪
述懷
一七二 千早振神に手向る言の葉は來む世の道の知べともなれ
賀茂の神主しげやす彼の社に歌合といふこと人々に勸めてよませ侍りし三首の歌
霞
一七三 そまくたし霞たなびく春來れば雪げの水も磐谷す也
花
一七四 身に占しそのかみ山の櫻花雪降ぬれば疑らざり晃
述懷 雨雲の後

一七五 立歸り捨てし身にも祈る哉子を思ふ道は神も知る覽
僕集の樣なることしける時ふるき人の歌どもの哀なるなどを見てよめる
一七六 行く末は我をもしのぶ人やあらむ昔を思ふ心習ひに
安元二年にや九月二十日比より心ち例ならず覺えて二十七八日限になりにければさまかへむとする程皇太后宮大夫辨し申すよしなど左大將の許に消息つかはす次でに副へける歌
一七七 昔より秋の暮をば惜みしに今年は我ぞ先だちぬべき
大將かへし
一七八 霧はれぬ心ありとも止りねて尙此秋も惜めとぞ思ふ
遁世の後にぞありける
其の度希有にいきとまりにける年の暮に人の消息したる返事の次でに
一七九 身に積る年の暮こそ哀なれ苔の袖をも忘れざりけり
又の年の秋九月十餘日の月殊に隈なく見えけるに
一八〇 思きや別れし秋に廻合ひて又も此よの月を見むとは

右大臣家百首

立春
一八一 天の戸の明る氣色も長閑にて雲ゐより社春は立けれ
一八二 逢坂に今朝は來にけり春霞よはにや立ちし白河の關
一八三 今日こいへば唐土迄も行く春を都にのみと思ける哉
一八四 鶯のゐる池の水のとけ行くは己が羽ぶきや春の初風
一八五 年暮れし涙の氷杜解けに鳧苔の袖にも春や立つらむ

鶯
一八六 いつしかとたかきに移れ春日山谷の古巢を出づる鶯
一八七 山深み霞のそこの鶯に春をあさしと聞くぞあやしき
一八八 雪間よりよそに聞くこそ哀なれあさくら山の鶯の聲
一八九 春來ても谷に殘れる鶯はうらみたる音に聲ぞ聞ゆる
一九〇 惜しきかな誰か聞くらむ陸奥のしのぶの奥の鶯の聲

初戀
一九一 驗あれと祝ひそ初むる玉箒とる手ばかりの契也とも
一九二 何せむに踏初つらむ山路の苦しかるべき岩の氣色を
一九三 戀草に萎れ初めぬる袂哉露霜おかむほどぞ知らゝ
一九四 照射する端山が裾の下露やいるより袖は斯萎らむ
一九五 知らめや君をみ嶽の初いもひ心のしめり今日懸つとは
一九六 人とはゞ袖をぞ露と云つべし涙の色をいかに答へむ

九九身のうさの涙に馴ぬ袖ならばいかに云てか戀を包まむ
七九袖は見ゆ枕にもまだ知せねば遣る方もなき我が涙哉
八九散すなよ篠のは草の假にても露懸るべき袖の上かは
九九如何にせむ室の八島に宿もがな戀の煙を空に紛へむ

花

〇一雲の上の春こそ更に忘られね花は數にも思出でじを
一九今は我吉野の山の花を社宿の物とは見るべかりけれ
二九雲の波岩こす瀧と見ゆる哉名に流れたる白河のはな
三〇照月も雲のよそにぞ行きめぐる花ぞ此世の光也ける
四〇吉野山花や散るらむ天の河雲のつゝみをくづす白浪

初逢戀

五〇怨侘び命堪ずばいかにして今日と頼むる暮を待まし
六〇さり共とたのむの雁を頼來て入さの里に今日を入ぬる
七〇これも今深きえにとを思知れ淀の若菰假寢なりとも
八〇頼ますば飾磨の褐の色を見よ逢初て社深くなるなれ
九〇解き返し井手の下帶行き廻り逢瀬うれしき玉川の水

子規

一〇待つとしも今はなけれど郭公馴し心の空にもある哉
一一待つ程も聞くにもいかゝ郭公心を盡す妻となるらむ
一二むかし思よ草の庵のよるの雨に涙なそへそやま時鳥
一三雨そゝぐはな立花よ風過ぎてやま郭公雲に鳴くらむ
一四郭公鳴くやと思へば聞かぬ夜もさ月の空は哀なる哉

後朝戀

一五曉の別を知て悔しくも逢はぬつらさを怨みけるかな
一六逢坂を越えてしもこそ中々にしがの浦波袖に乾かね
一七別れつる涙の程をくらべばやいづる袂とどまる枕と
一八となせ川岩間にたゝむ筏士や浪に濡ても暮を待つ覽
一九忘るなよ世々の契をすがはらや伏見の里の有明の空

五月雨

一〇降初て幾日になりぬ鈴鹿河やそせも知らぬ梅雨の空
一一梅雨はみなそこの橘名に負ひて浪社渡れ人は通はず
一二下草は葉末ばかりになりにけり浮田の森の梅雨の比
一三いかなれや雲間も見えぬ梅雨に晒添ふらむ布引の瀧
一四梅雨は高ねの雲のうちにして長きぞふじの煙也ける

過不逢戀

一五よと共に傍にのみ立ち乍ら又見えじとはなど思ふ覽
一六よそならば偖も止なむうき物は馴てもつらき契也鳧
一七遠分の程こそあらめ難波舟沖に出ても潤合はじとや
一八ねに立ていさは戀む笛竹の一よの節も逢ならぬかは
一九淺ましやいかに掬びし山の井の又もあひ見契也けむ

月

〇二月は秋秋は月なる時なれや空も光を添て見ゆらむ
一二眺むれば雲は浪路に消盡きて明石の沖にすめる月哉
一三我庵はをば捨山のふもとかはなぐさめ難き秋の月影
一四數ならぬ光を空に見せ顏に月にやどかす袖の露かな
一五世の中を背きて見れど秋の月同じ空にぞ猶廻りける

祝

一六明けき雲の上をは萬代と天つやしろも照しますらむ
一七百千度浦島の子は歸る共はこやの山は常磐なるべし
一八いく千代と契りおきけむ春日山枝さし交す寮の松原
一九千とせとも中々さゝじ三笠山松吹く風に聲聞ゆなり
二〇榊葉を小鹽の山に挿添へて祝ひし千代や君が代の爲

草花

二一秋はまづ都の西を尋ぬれば嵯峨野の花ぞ咲始めける
二二露にふし風に靡くも女郎花秋の妻とは見する也けり
二三最斯や袖は萎れし野べに出て昔も秋の花は見しかど
二四小萩咲く野べをぞ人の栖にて鹿は宿にや鳴かむとす覽
二五可惜しや露けき野べに立つ鹿の上毛に移る萩が花摺

旅

二六見るまゝに慰めぬべき海山も都の外は物ぞかなしき
二七日數行く草の枕を數ふれば露おきそふるさよの中山
二八清見潟浪路さやけき月を見て頃て心や時をもるべき
二九難波人蘆火焚屋に一人ねてすゝろに袖の潮たるゝ哉

紅葉

三〇染め渡す楢を見てぞ山里は秋深くなる日を數へける
三一雲となり雨となりてや立田姫秋の紅葉の色をそむ覽
三二心とや紅葉はすらむ立田山松は時雨にぬれぬ物かは
三三秋深み青葉の山も紅葉鬼名をば時雨に染じと思ふに
三四春は花秋は紅葉となぞや此よもの山べよ人誘ふらむ

述懐

三五偖ぐ昔の末を歎きこし家を出てぞとふべかりける
三六醒て思ふ過ぎにし方は古の六十の夢を見るなり鳧
三七今も尚心の關ははれぬ哉思ひすてゝし此のよなれ共
三八春日野のをどろの道の埋水すゑだに神のしるし願せ
三九枯々に成來し蔭の末なれどまた下枝とは思ざりしを

雪

〇六空晴てちり來る雪は久方の月の桂の花にや有らむ
〇七卷もくのたまきの宮には尚しかじ皆しろたへのみよしの〻山
〇八紫の庭の雪には尚しかじ皆しろたへのみよしの〻山
〇九白妙のいさごまきしく天の河月の都のみ雪なるらし
一〇訪ふ人もさらてもあらじ山里に深くも道を埋む雪哉

神祇

一一神垣やいすゝの河の宮柱幾千代すめと立て始めけむ
一二其かみに祈りし末は忘れじを哀はかけよ賀茂の河波
一三秋の暮民の家をば出でしかど尚春の日の頼まる〻哉
一四敷波に頼みをかけし住の江の松とや今は思ひすつ覽
一五なべて世を照す日吉の神なれば遍く人も頼む也けり

歲暮

一六暮果つる年は我身に積る也冬の行らむ方ぞ知られぬ
一七暮れて行く冬は北にや歸るらむ尚越路には雪積る也
一八引止むる方社なけれ行年は紀の關守が弓ならなくに
一九哀なりよに數ならぬ老の身を尚尋ねても積る年かな
二〇老いぬとて又もあはむと行年に涙の玉を手向つる哉

釋敎

法華經　第七卷提婆品

方便品　無量無數劫　聞是法亦難
壽量品　出釋氏宮去　伽耶城不遠
普門品　受其環珞分作二分

二一哀とやともに光を照しけむ二つに分けし玉の飾りを

勸發品　從東方來所經諸國普皆震動雨寶蓮花

二二更にまた花ぞふりしく鷲の山法のむしろの夕暮の空

千五百番歌合之百首　寂ノ沙彌釋阿

春二十首

二三八重霞やそ島かけて立ちにけり千代の初の春の曙
二四鶯も千代をや契る年を經て變らぬ聲に春を告らむ
二五春きぬとみ垣が原は霞め共雲さゆるみ吉野の山
二六春毎の子日の松の千代は皆我が君が代の例也けり
二七袖の香に梅は變らず薫りけり春は昔の春ならね共

春はなほ柳がえだも限りなし緑の絲に露のしら玉
詠め侘ぬ誰かは訪はむ山里の花待比の春雨のうち
いくとせの春に心を盡しきぬ哀と思へみ吉野の花
白妙にゆふ懸てけり榊葉に櫻咲きそふ天のかぐ山
譬へてもいはむ方なし山櫻霞に薫る春のあけぼの
君が代に春の櫻も見ける身を谷に朽ぬと何思けむ
今ぞ我吉野の山に身を捨む春より後を訪人もがな
白山や尚雪深き越路には歸る雁にや春をしるらむ
御狩せし交野の冬やつからむ春の山路に雉子鳴也
春暮ぬ今や咲らむかはづ鳴く神なび川の山吹の花
惜むとて春は止らぬ物故に卯月の空は厭ふとやみむ

夏十五首

衣社かふとも更へめ春の色に染し心はいつか移らむ
卯の花のかきねの露に宿り來て春忘れよと夕月夜哉
夏も尚心はつきぬ紫陽花のよひらの露に月も澄けり
忍び妻待つにぞ似たる郭公語らふ聲はなれぬ物ゆゑ
郭公五月の雲にちぎり置きて人の心を空になすらむ
夏の夜の長くもあらば郭公今一聲も待たましものを
よそへても昔は今はかひもなし花橘の袖の香もがな
橘にあやめの枕かをる夜ぞ昔を忍ぶかぎりなりける
早苗月五月雨初むる初とやよもの山雲疊り行くらむ
梅雨は沼の浮草岩越えてかはづの床もぬや絶ぬらむ
梅雨はすまの鹽屋も空どもて煙計りぞ雲に添ける
大夫やは山わくらむともしける螢に紛ふ夕闇の空
大井川繰さし行く鵜飼舟幾瀬に夏のよを明すらむ
山の井を掬て夏は暮ぬべし秋や立なむ志賀の浦波
鳴瀧や西の河瀬に御禊せむ岩こす波も秋や近きと

秋二十首

沙路より秋や立らむ明方は聲變るなりすまの波風
風の音を荻の葉のみと聞來しを蔦の裏にも秋は見え鳧
七夕の倦かぬ名殘の袖よりや秋は露けき比となる覽
夕月夜木の間もり來る宵の間は心盡しの初也けり
夏の野は草の茂みのさゆり葉も秋は露にや萎れ果覽

朝露に儚くうつす月草も秋の形見の色となるらむ
波に洗ふ唐錦とも見ゆるかな野島が崎の秋萩の花
名社あらめ見も懐かし女郎花枝さへ花の色に匂て
色に出す人の袖には露かくる君はうけらの花にや有覽
關守は打も寢ぬとも徒に歸る戀路はかひなかり鳧
紫の色をば殘せふちばかま露は嵐に碎けちるとも
年も經ぬ宇治の橋守君ならば哀も今は懸まし物を
花も露もいかに心を碎けて秋に野分の吹始けむ
堰ぢ侘びぬ逢瀬もしらぬ涙河片しく袖や井手の棚
しめおきて今やと思ふ秋山の蓬が本に松蟲の鳴く
堰幾年に馴にし床のふりぬらむつげの枕も苺生に鳧
荒渡る秋の庭こそ哀なれまして消えなむ露の夕暮
秋の夜は光を殊にそへよとや月の都に定置きけむ
秋の月晝とは見えて冴え寒し雪と思ふは庭の白露
人とはいかに語らむ秋の山松の嵐に有あけの月
月はこれ哀を人につくさせて西に終にはさそふ也鳧
故郷に獨も月を見つるかな姨捨山をなに思ひけむ
衣うつ音社あやな賴まるれ夜の枕のさゆる霜夜は
立田姫立田の山は我なぞや紅葉も殊に思ひ染めけむ
賴めおく形見やあらむ歸る雁心を遣て惜むけふ哉

冬十五首

おき明す秋の別の袖の露霜こそ結べ冬やきぬらむ
染捨てゝ立田姫もや神無月風に任せて散る紅葉哉
植置きて秋の形見と見る菊の冬の色こそ尚優りけれ
山廻る時雨は頓て過ぬれど木葉にぬるゝ袖の上哉
初瀬山夜深き鐘に驚けば旅寢の床も霜ぞさえける
霜さゆる枯野の草の原に來て涙ぞ頓て氷る也けり
むら雲の時雨し空はそれ乍ら冴ゆる嵐に霰ふる也
夕暮は己が燒くとや炭がまの煙にきほふ大原の里
敷忍び夜はの枕は冴つれど今朝は嬉しき庭の初雪
雪よ是雲さへ氷る冬の雨の空に結べる名に社有けれ
澄月も千里の外は氷りけり雪の旦ぞ限りだになし
さゆる夜は汐ひの波も氷けり玉ぞ碎くる床のさ蓆
埋火のあたりに近き轉寢は春の花社夢に見えけれ
千鳥鳴繪島が崎を繪にかいば友呼聲や聞えざるべき
けふ毎に今日や限と思へ共又も今年に逢にける哉

祝五首

神風や御裳濯河の細れ石も君が御代にぞ岩と成べき
君が代は幾千年にか葵草變らぬ色に神もまもらむ
君が經む千代の例と小松原小鹽の山も祝初けむ
君が代を日吉の神に祈置けば千年の數や志賀の浦波
柱吉の松も涼しく思ふらし君が千年の和歌の浦風

戀十五首

尋入る道もしられぬしのぶ山軈計りこそ栞也けれ
哀なり轉寢にのみ見し夢の長き思に結ばゝれなむ
色に出す人の袖には露かくる君はうけらの花にや有覽
關守は打も寢ぬとも徒に歸る戀路はかひなかり鳧
年も經ぬ宇治の橋守君ならば哀も今は懸まし物を
堰ぢ侘びぬ逢瀬もしらぬ涙河片しく袖や井手の棚
幾年に馴にし床のふりぬらむつげの枕も苺生に鳧
陸奥の荒野の牧の駒だにもとれればとられて馴行物を
綾なしや戀すてふ名は立田川袖をぞくゝる紅の波
思出よ忘やしぬる若狹ぢや後世の山と契りし物を
夢にだに逢瀬ありやと待べきに枕のみうく涙川哉
現には思絶行く逢事をいかに見えつる夢路なる覽
云通ふ道だに絶えぬ逢事の長良の橋はさ社朽なめ
昔見し人のみ今は戀しきを又逢まじきとぞ悲しき
逢事は交野の里の笹の庵しのに露散る夜はの床哉

雜十首

夜を重ね寂しき床にすが枕幾度鐘の聲を聞くらむ
押照や濱の南の松原も幾きの千代を君にそふらむ
色替ぬ御垣の内の呉竹も君が御代にぞ千代は知覽
和歌浦の風にたづさふ友鶴の君が千年に逢ぞ嬉しき
四海治れる世は晉にきく龜の甲を山も波ぞよせ來む
昔し聞のべの岩やそ哀なる嵐の底を夢に見えけむ
掛ていへば厭ひもす覽春日山さりとて如何願さるべき
吉野河岩こす浪を詠むれば絶せぬ水の心をぞ知る
落ちたぎつ瀧つしらいの流は積れ共變らぬ物は神つ白波
いかにして憂身乍に君が代の千代の初の今日に逢覽
崇德院讃州にしてかくれさせ給ひて後御供なりける人の邊より傳へられて斯るとなむありしとて折紙に御宸筆なりける物を傳へ贈られしなり

古へ の須磨の浦には藻鹽たれ
その言の葉は聞しかど
鳴き渡る岩うつなみの
沈み果てぬる名を止て
年つきも目も合で
思ひしとけば
稱ならで
激しさに
露の身の

蜑のなはたき
身の類ひには
おもはぬ外の
われ舟の
板ぶきの
前の世に
つくれる罪の）
なるとは
あらしの風の
糸すゝき
末にかゝる
そのくれ竹の
儚きとめ難く
見えしかば

よを籠て　思ひ立ちにし　麻ごろも　袖もわが身も
朽ぬれど　流石にむかし　忘れねば　くもゐの月を
もて遊び　やまぢの菊を　誰かまた　時につけつゝ
圍ゐして　春あきおほく　過にしを　今は千とせを
隔て來て　初がりがねも　言づてず　馴れにし方は
音も絶ぬ　本のこゝろし　變らずは　とにつけつゝ
君はなほ　言葉のいづみ　湧らめど　見しは斯だに
汲て知る　人もまれにや　更にもいはず
悲しきは　成ぬらむ　とをたちにし　むかしの跡に
習ひてや　から國の　かつ身の程を
深きうきめに　ねも絶ぬ　胸のはちす葉
厭へども　こゝろの水し　淺ければ　たゞる〳〵も
いつしかと　ひらけむとは　難けれど　一たびなども
嗜きよを　いづべき道と　入ぬれば　玉をつらぬる
いふ人を　拾ぬひかりに　誘はれて　ちぎり同じき
木の下に　花ふりしかむ　時にあはゞ　染蕾きし
身と成て　むなしき色は　言の葉ごとも
ひる返し　なさむ迄　あひ語らはむ
まことをのみ　思ふこゝろを　知るや知らずや
夢のうちになれこし契朽もせでさめむ旦に逢ともがな

宮におはしませ（仙）し時かやうの道にもつかうまつりし人は多かりしをとりわきおぼしめし出しけむこともいと悲しくて人知れず御返事をかきておたきのへんになむ遣らせける

須磨浦や　人もなほ　今を見るには
藻鹽たれけむ　なほ淺し　哀れうき身の
うき波の　うき例しには　悲しきは
思ふにつけて　荒れにし宿の
其かみを　みなしご草と　ふるすに殘る
壁に生る　成しより　年經しを
葦たづの　はじめて君が
澤べにのみぞ　たつのみ顔に
御代に社　踏み通ひ　過ぐさず見ゝし
雲のかけはし　空しくは
近づきて　連なりて　花のはるより
あづさ弓　時　鳥　待つ曉も　月を見るにも
まどひし末に　ふり積む雪の　あした迄
時につけつゝ　九重に　物思ふことも
秋の夜の　慰さめし　出しだに
月を見るにも　九の重を　はこやの山に
あした迄　脱替へて　袖のこほりは
物思ふことも　いかに有し　天の羽ごろも
出しだに　いかに吹にし　やまぢの菊を
はこやの山に　移りしも　手折つゝ
袖のこほりは　忘れしを　いかに吹にし
過るよはひも　山しろの　はつ秋の
あらし也けむ　忘れしを　日影くれ
もりのまつ風　鳥羽田の面に

悲しみて　ゆふべの空と　なりし時　人のこゝろも
推なべて　野べのかや原　亂れつゝ　迷ひしほどは
むば玉の　夢うつゝとも　わかざりき　更にもいはず
わたの原　むなしき船を　漕き離れ　波路はるかに
隔てつゝ　聞きし別れの　悲しきは　たどへむ方も
無に似て　螢のかるゝよ　もしほ草　掻てもやらむ
方もなく　むなしき空に　仰げども　こゝろ計りは
嶺のくもにも　まつしけむ何唯かたみとは
まよひけむ何　大和みことの　言の葉を　見れば涙も
留め置し　玉のこゑ〳〵　連なりて　錦いろ〳〵
もろ共に　古へも　今行くすゑも
たち混り　移りゆく　しきしまの道
かゝる頼ひは　しきしまの道
さても年つき　立ち返り　夜な〳〵稀に
誘はるゝ　有しかど　花のもとにも
月のまへには　昔おぼえ　嘆きつゝ
君を思ふ　いつも變らぬ
只とことはに　しづめるとは　昔したちけむ
埋れ木の　とのねを　立てし道と
をにはせむ　遁れつゝ　こゝろ一つの
空しさは　こゝろ一つの　露は
あゆむ草はに　ことばの　淺茅がしたに
自づから　袖ぬれて　時もあれど
溜るゝせより　かつ消て　さりとも稀に
かつ消て　哀れしるべき　人もなし
立ち返る　思ひしを　つひに千里の
波もやあると　つひに千里の
秋のみそらに　旅のみゆかに
外にして　月かくれ　原にもこえし
露けぬと　吹く風の　あひ見むとは
夕べより　今はかなき　夢の中に
泣々も　今はかなき　契あらで
後の世にだに　はちすの池に
生れあはゞ　この道に　心をひかむ
むかしも今も　おなじみ國に
もろ人は　この言の葉を　おなじみ國に
さそはざらめや　えむとして

さきたゝむ人は互に尋見よ蓮の上にさとりひらけむ

八月十五夜月蝕ありし年右少將こまひきの引わけにすけの參るまじとて殿下より催されしかば參れとて月現じたりと申しゝかばあたりとりてなむと申しゝたる程曉歸りたるつとめて駒ゐて來たりと申すをあれぞあけなる駒なりしかば

（歌略）

攝政内大臣うせ給ひて後おもひながらへ申さゞりし程に四月五日とく法印の御もとよりは絶えて少將入道寂蓮にて故内大臣幷に二位中將の御

歌どもを遣したりしにつけて御返事申す次でに

（仁和寺）いかにいひかに問むと歎く間に心も盡て春も過にき

又内府の御歌のごとおぼしくて

（後京極）ちりにける花の詞を今日見ても春の別は尚ぞ悲しき

其の後に三日ありて法印の御もとより言の葉思ひの程になほえ仰せられず法印返事おはせらるべきよし仰せらるればとてつかはしける

別にし名殘の春はくれぬれど長き恨は盡せざりける

又内府の御返事とおぼしくて

浮世かな詞の花を殘しつゝ身をば嵐の物となしつる

今の攝政左大臣殿あら〳〵とて（後鳥羽）皇嘉門院かくれさせ給ひてその御思ひとは承りながらたのみし老いたる人の思にてかきこもりたりけるかの

大い殿よりおほせのよし

間へかしなよの墨染は變れ共我のみ深きぜにいかにと

其の頃まだ諒闇なりし頃なるべし御返事

墨染の袖はいかにと思ふにも同涙にくれてこそふれ

侍從の許に權中將公衡卿補任をかされたりけるが定頼の中納言の手跡とて反古のうらにかきたるうらの本御なか故御子古大納言の御手跡の消息にて月日の下に權大納言長家とかゝれたる名をみ出でゝ物に書きつけて返しける

古の跡はさしても忍ぶべしわが其家と見るぞ悲しき

年頃もちながら知らざりけるなどありつゝ返事

公衡中將

世々を經て偕のみ過し言の葉の今梢にぞ色を染ける

歌合と云ふことする人々勝負定むることをこなたかなたよりふれ遣すことのみあるをとかうかつさひ申しながらいなゝひ難きは覺えぬかたながら誓ひたりとてせめことになりにしを圓位聖にと云ふは昔より申し交すものなりしをわがみみつめたる歌どもを三十六番につかひて伊勢の太神宮に奉らむするなりとてこれを勝負しるしてと強ひて申しゝかばおろ〳〵かきつけて遣はしける歌合のはしに聖人かきつけたる歌

（藤浪）藤浪を御裳濯河に堰入れて百枝の松に懸れとぞ思ふ

返事に歌合のおくにかきつけゝる

（藤浪）藤浪も御裳濯河の末なれば下枝もかけよ松の百枝に

藤原ももとは大中臣なりし故にや
又おくの歌
[九]契殿し契の上にそへおかむ和歌の浦わの蜑の藻塩木
[九]この道の悟り難きを思ふにも蓮開けばまづ尋ね見よ
返し二首後日に送る　圓位上人
[九]和歌浦に汐木飾れる契をぞかけりたくまの跡にぞ有ける
[九]悟得て心の花し開けなば尋ねぬさきに色ぞそむべき
少將成家の朝臣賀茂の祭の使せし時出立は右の
おとゝの六條堀河なりき權大納言定家卿どをら
ひ渡りて舞人の座の二献の勸盃といふことなど
せられて後又の日これより昨日のしたくことご
と宜しかりしこといでたちの石大臣家なかにて
御座當時ゐられて事行はれきありがたき例なり
なざいはれて侍りし返事の次でに遣はし侍りし
[八]かけなびく玉の臺の筵にも澄み給ひてぞ光そひにし
立ち歸りて返事
[九]いざやその光迄とは知らね共思ふ心は色に見えけむ
又返事
昔の故もしのばれて袖の涙も色ぞ增れる
[一〇]さらにまた權中納言公衡朝臣もいでたちの所にとぶらひ來
て舞人の初獻初盃などせられしことゞもよろこ
び申さむとせし程に祭の日北のちんにて御覽あ
りけるを少し雨ふりたりけることなむといひて
少將の許よりいはれたりける　中　將
[一〇]昨日しも調す雨の氣色にて時にゐふひは昔とぞ思ふ
とぞ令二返報一ける　少　將
[一〇]村雨も時にゐふひの印とは君がとふにぞ思知りぬる
法性寺座主[一四]百首の歌をよみて人々にもすゝめ
らるべしと聞えしを入道雨社百首といふ物よま
むとすなりおなじくばこれにぐして我がよめる
をもぐして日吉にも進らせよとて侍りしをよみ
かふるとは思ひ侍りしかども人々にぐし申すべ
しとも思ひ給へず給ひ[一四]て詠むこともありがた
しと申したりしをなほなど勸め遣して消息の奥
に　印
[一〇]いかでかは君が光をそへざらむ神に手向の百草の花
返し

[一〇]手向べき心計りは有ながら花に並ぶる言の葉ぞなき
左少將が中將になりて侍りしにつね家の三位の
許より
[一〇]日にそへて花咲く宿の榊かなはねの林に枝を連ねて
返し
[一〇]今朝やしる花咲增れと思ふ哉三笠の山に枝は連ねつ
文治五年十一月七日雪いとたかくふりたりしつ
とめて菩提院權中將公衡消息あり
[一〇]冬籠り跡かき絕ていとゞしく雪の內にぞ薪つみける
返し
[一〇]冬ごもり薪つむ共山里は雪よりやがて花ぞ咲くべき
かく聞えたりし後師走のつごもり追難の次でに
三位せられしかば三日すごしてこれより
[一〇]雪のうちにこえしも著く梅枝に早晩花の開けぬる哉
三位中將
[一〇]今ぞ知る雪より花は咲くと云し其言の葉に驗有ごは
文治六年正月三日主上御元服なり同じ十一日は
殿下女御の御入內なりきその料の御屛風十二帖
の歌三十六首いるべきを人々各よみて奉るべき
よしさきの年の霜月頃より仰せられしかばよみ
て奉りし歌
正月
小朝拜列り立つ所
一九重や玉しく庭にむらさきの袖を連ぬる千代の初春
子日 小松原山野に霞立ち渡りたる所、住吉の松
あり
二かすみしく春の光に見渡せば千年はしるし住吉の松
二月[一一]
花中鶯ある所人の家あり
三谷を出て高きに移る鶯は花さへ闇のあかすなりけり
人の家並に野べに梅の花咲きたる所
[一一]野べにさく梅の匂も絕えぬれば宿の花こそ主也けれ
三月
澤邊春駒あり
[一一]春駒の野澤になるゝ氣色にて蘆の若葉の程はゞる
山野井に人の家に櫻の花咲きたる所霞立ちたり
[一一]峰の雲野べの霞も薰り合て春に結べる宿とこそなれ
人家の庭に藤の花盛りに咲きたり山吹もあり

（散文見）
四月
更衣、人の家に卯の花のかきねあり
七白妙に今日立着たる夏衣千代に變らぬ色こそ有けれ
賀茂の社に葵つけたる人參りたる所
[一一]神代よりいかに契て御誕ひく今日は葵を翳し初らむ
早苗植ゑたる所
[一一]數知ず田子の多くも見ゆる哉千町の早苗これば也鬼
五月
人の家、雲ゐに時鳥あり
[一一]雲ゐにてよはに語ふ鵑千年聞くともあかじとぞ思ふ
あやめ刈りたる所、人の家にふきたる所もあり
[一一]絕えずひく淀野の里の菖蒲草尙萬代もねは留むらむ
人の家の庭に撫子咲きたる所
[一一]宿からに盛久しき常夏は千代の秋にも逢むとやする
六月
山井の邊に人々納涼したり又人の家もあり
[一一]立止る程だに涼し山の井に住らむ里の人をしぞ思ふ
野べの杜の夏草しげき所
[一一]夏深き野べのさゆりば風過ぎて秋は覺ゆる森の蔭哉
河邊に六月はらへしたる所
[一一]君がため今日の祓にいづみ川萬代すめと祈りつる哉
七月
山野井に人の家秋風吹きたる所、荻もあり
[一一]松風を裾野の荻の傳へきて千年の秋と宿に告ぐなり
野の花さかりに開けて人々あつまり見る又刈り
取る所もあり
[一一]諸人のちぐさの花の時にあへる心々を野べに見る哉
春日山に鹿あり
[一一]春日山萬代呼ぶ松風に鹿も秋をば知るにや有らむ
八月
人の家池の上に人々翫月所
[一一]池水にのどけき月を映しても心はれたる宿のもり人
あふ坂の關に駒むかへ
[一一]君が世にあふ坂山のせき水も影靜かなるもち月の駒
田の中に人の家ある所
[一一]秋の田の五百代田より家居して千束や食稻積まむとす覽
九月
ある山の中菊盛に開けたる所、仙人これを見る

二三仙人のをる袖匂ふ菊の露打拂ふにも千代は經ぬべし
山野幷に人の家に紅葉さかりにして人々翫ぶ所
三三尋ね見る麓の里の紅葉にこれより深き奥ぞ知らるゝ
海のほとりに霧立ち渡りたる所
三五須磨の關秋の日數をやらじとや心を込て霧立にけり
十月
海べに千鳥あり海士人の汐やくもあり
三八四方の海邊の鹽屋も數そひて補わの千鳥千代呼ふ也
網代に人あつまりたる所に紅葉あり
三九絶ず住む八十宇治河の網代木に幾世紅葉の錦顯く覽
江澤の邊に寒蘆しげりたる所、つるあり
四三難波潟蘆べの冬のけしきにて靡らぬ物はつるの毛衣
十一月
五節の舞の所
四八少女子が雲の通路空晴れて豊のあかりも光そへけり
賀茂の臨時の祭上の御社の社頭のけしき
四九月さゆるみたらし川に影見えて氷にすれる山藍の袖
野べに鷹がりしける所
五〇またもなほ人に見せばや御狩する交野の原の雪の曙
十二月
内侍所神樂のけしき
一理りや天の岩戸も明けぬらむ雲ゐの庭の朝くらの聲
山野の樹竹に雪つもりたる所、人の家あり
二冬籠り野山しめたる氣色まで花の春ともなせる雪哉
年の暮に山より妻木こりて出でたる所
三ひきつれて山路に松のこゆる哉春の迎へに急ぐ也鳧
泥繪の御屏風に和歌二首夏の樹陰に納涼したる所
四若が代の四方の山べも繁ければ木蔭涼しく清水汲鳧
池の水雪つもり水鳥あり
五冬くれば池の鏡に氷居てみがきそへたる千代の影哉
かくて人々同じ數に三十六首泥繪二首よみて奉られたりけるをみな給はせてよろしからむ歌どもにしるしつけて奉るべきよし侍りしかばしるして奉りて後又左のおとゞの御もとにもつかはしたりければしるしつけ奉られたりけるを又殿にて定められたるとぞこれよりは自らの歌はむげにやはとて且一首ぞしるしつけて奉りしかに定められけるにか七首を御屏風にぞかゝれける左のおとゞの歌の數も同じ數なりけり歌奉りける人々殿下左右のおとゞ左大將殿季經卿隆信朝臣左少將定家朝臣入道以上八人なり
少將またいとゞ歳わかし若き者の數にいれられることは事の外のことなれども若きものなればよしなるにや三首ぞ入りたりけるされど初の小朝拜の歌いりたるなむ面目なりと承りし七首入りけるはこのてんあひたるともなり其のうちいと思はすに入るまじき歌こそ入りにけれ屏風の歌久しく絶えたるを上東門院の御入内に長保の例にて此の度おこされけるなるべしかたは大納言忠親卿左大將殿中務少輔伊經となむかきける此の道めづらしき手にておろ〳〵しるし侍るなり
圓位ひじり歌どもを伊勢の内宮の歌合とて判うけ侍りし後又同じき外宮の歌合にて思ふ心あり新少將にかならず判してとてとかきければしるしつけて侍りけることに其年文治河内のひろかはと云ふ山寺にて頗ふことありと聞きて急きつかはしたりしかば限なく喜びつかはして後すこしよろしとて年のはての頃京にのぼりてと申しし程に二月十六日なむかくれ侍りける彼の上人先年にさくらの歌おほくよみけんに
同じくは花のもとにて春死なむその二月の望月の比かくよみたりしをかしく見給ひしことにつひに二月十六日望の日をはり遂げけること哀に有りがたく覺えてかきつけゝる
七顧ぬきし花の本にて終りけり蓮の上も違はざらなむ

秋篠月清集

秋篠月清集一

花月百首
花五十首

八昔誰かゝる櫻の種をうゑて吉野を春の山となしけむ
九谷川の打出づる浪に見し花の峰の梢になりにける哉
一〇尋ねてぞ花と知りぬる初瀬山霞の奥に見えし白くも
一一花なれや山の高ねの雲居より春のみおとす瀧の白糸
一二立田山折々見する錦かなもみぢし嶺に花咲きにけり
一三かづらきの嶺の白雲かをるなり高間の山の花盛かも
一四比良の山は近江の海の近ければ浪と花との見ゆる哉
一五更に又麓の浪もかをるなり花の香おろす志賀の山風
一六秋はまだ鹿のね告げじ高砂のをのへの程に櫻一むら
一七明け渡る外山の梢ほの〴〵と霞ぞかをる宇治の春風
一八世の中よさくらに咲ける花なくば春と云ふ頃も遽莫
一九九重の花の盛になりぬれば雲ぞ雲居のしるし也ける
二〇立ちよれば御階の櫻盛也幾代の春のみゆきなるらむ
二一我が宿を花に任せて此頃は頼めぬ人の下待たれつゝ
二二眺めくらす宿の櫻の花盛庭の木かげに旅寢をぞする
二三誰となく待たるゝ人を誘へかし宿の櫻をすぐる春風
二四都人いかなる宿を尋ぬらむぬし故花は匂ふものかは
二五今日こすば庭にや跡の厭れむとへかし人の花の盛を
二六窓の内に時々花のかをり來て庭の梢に風すさむなり
二七何となく春の心に誘はれぬ今日白川の花のもとまで
二八今日も又去年栞せし山に來て契らるゝ花のかげ哉
二九我が厭ふ春の山守思知れ折らすば風の殘すべきかは
三〇かすみゆく宿の梢ぞ哀なるまだ見ぬ山の花の通ひぢ
三一はる〳〵と我が住む方は霞にて宿かる花を拂ふ山風
三二あはれなる花の木蔭の旅寢かな嶺の霞の衣かさねて
三三村鳥の下枝に馴るゝ氣近さに花に宿かる程を知らるゝ
三四待侘ぬ更に人をや尋ねまし花故とてぞ來つる山路を
三五散らぬ間に今一度と契るかな今日諸共に花見つる人
三六厭ふべき同じ山路に分來ても花故をしくなる此世哉
三七栞せで吉野の花や尋ねましやがてと思ふ心ありせば
三八花盛吉野のみねや雪の山法もとめしよ道はかはれど
三九鷲の山御法のにはに散る花を吉野の嶺の嵐にぞ見る
四〇執くにもさこそは花を惜め共思入りたるみ吉野の山
四一花宿る櫻が枝は旅なれや風たちぬれば根に歸るらむ
四二散る花も世を浮雲となりにけり虚しき空を寫す池水
四三色も香も此世におはぬ物ぞとて暫も花をとめぬ春風
四四はなも皆うき世の色と眺むれば折哀なる風の音かな
四五吹く風や空に知らする吉野山雲にあまぎる花の白雪
四六高砂の松に浦風通ふなり尾上の花のあたりなるらむ

七浦風に花や散るらむ志賀の山たかねも沖も同じ小波
八雲と見し深山の花は散りにけり吉野の瀧の末の白波
九高ねより谷の梢に散りきつゝ嶺に歸らぬ櫻なりけり
〇山風のたにゝ櫻をさそひきてなほ岩たゝく雪の下水
一風よりも過ぐる日數のつらき哉いつかは散し春の初花
二明方の深山のはるの風さびて心ぐだけと散る櫻かな
三花ちれば頓て人めも枯れはつる深山の里の春の暮哉
四庭に散る花は雨にぞしをれける梢に風を恨みつゝて
五ちる花を苗代水に誘ひ來て山田のかはづ鼕薫るなり
六ちらじ深山がくれの遲櫻またゝくがれむ春の暮方
七高砂の尾上の花に春くれて殘りし松の葉えゆくかな

月五十首

八三日月の秋ほのめかす夕幕は心に荻の風ぞこたふる
九大方に身にしむ風も秋の夜は月故とのみ成にける哉
〇春夏の空に哀を殘しける月を秋にてこよひ見るかな
一さらぬだに更くるは惜き秋夜の月より西に殘る白雲
二鹿も侘び蟲も恨むる所とて鳴けきのべに月ぞ宿かる
三月影の殘る隈なき野原かな蔦のうらまで見する秋風
四照る月に哀を添へて鳴雁の落つる涙はよその袖まで
五里とよむ音も靜になりはてゝさ夜更け方にすめる月影
六雲きゆる千里の外に空さえて月よりうづむ秋の白雪
七清見潟遙に沖の空はれて浪より月のさえのぼるかな
八潮風の興謝のうら松おとさえて月影よする沖つ白波
九哀いかに心ある海士のなかるらむ月影震む鹽竈の浦
〇なるみがた荒磯浪の音はして沖の岩こす月の影かな
一しあけの瀨戸の潮干の明方に浪の月影遠ざかる也
二思ひやる心にかすむ海山も一つになせる月の影かな
三廣澤の池におほくの年ふりてなほ月のこる曉のそら
四猿澤の玉藻の水に月さえて池に昔のかげぞうつれる
五我が宿は姨捨山に住みかへつ都の跡ゝ月やもるらむ
六更科の月やは我をさそひ來し誰がすむとぞ宿の哀は
七月宿る野路の旅寢の笹枕いつ忘るべき夜はの氣色ぞ
八今宵誰すゝの篠屋に夢さめて吉野の月に袖濡すらむ
九篠深き野中の庵に宿かりて露まどろまずみつる月哉
〇あたらしや門田の稻葉ふく風に月影ちらす露の白玉
一月だにも慰めがたき秋の夜の心も知らぬ松の風かな
二寂しさや思ひよわると月見れば心の底ぞ秋深くなる
三奥山に浮世離れて住む人の心しらるゝ夜はの月かな

三獨ぬる閨の板間に風ふれてさむしろ照す秋の夜の月
四誰きなむ今宵の月は見るやとて遙が下の道を分つゝ
五照る月も見る人からの哀哉我身一つの今宵ならねど
六よもの海波も一つにすむ月の影偲ぶかゐ君が御代哉
七雲の上遙に照す月影を秋のみやにて見るぞうれしき
八獨寢の夜寒になれる月見れば時しもあれや衣うつ聲
九濁る世も尚すむ影ぞ賴もしき流たえせぬ御裳濯の月
一〇朝日さす春日の嶽の空はれて其名殘なる秋の夜の月
一一さらしなを心のうちに尋ぬれば都の月も哀添ひけり
一二待つ人も覺えぬ物を槇の戸に嵐や叩く月を見よとて
一三秋ぞかし今宵ばかりの寢覺かは心つくすな有明の月

五浮世とはいつもさ社は思へ共心のたけを月に知ぬる
六かき曇る心は厭ふな夜半の月なにゆゑ落る秋の涙ぞ
七中々に月の隈なき秋の夜はながめに浮ぶ五月雨の空
八厭ふ身も後の今宵と待れけり又こむ秋は月も眺めじ
九浮世厭ふ心の闇のしるべかな我が思ふ方に有明の月
〇横雲の嵐にまよふ山の端に影定まらぬしのゝめの月
一紅葉ばの散るに晴行く住ひ哉月疎かりし深山隱れも
二谷ふかき葎が下の埋水それにも月のひまもとめけり
三叢雲のしぐれて過ぐる梢より嵐にはるゝ山の端の月
四さよ深き嵐の音に山さびて木の間の月の影の寒けさ
五有明になりゆく月を詠めても秋の名殘を打歎へつゝ
六長月の有明の月の明方を誰まつ人のながめ侘ぶらむ
七秋の色のはては枯野と成ぬれど月は霜こそ光也けれ

二夜百首

霞五首

ひきかへて四方の梢も霞むなり今日より春の曙の空
おぼろなる空に哀をかさぬれば霞も月の光なりけり
山里のそともの岡のほどなきを遙に見する朝霞かな
み吉野のおくに住むなる山人の春の衣は霞なりけり
藻鹽燒く浦の煙と見る程にやがてかすめる須磨の關

梅五首

さればこそ宿の梅がえ春立て思しとぞ人の待たるゝ
我宿は梅にゆづりて立出でむ花の主は人や問ふとて
此頃は梅をばおのが匂ひにて通ひてしるき春の山風
軒ちかき梅の梢に風すぎて匂ひにさむる春の夜の夢

歸雁五首

六容といへばいつしか北に歸雁越路の冬を送る也けり
七雨はれて風に隨ふ雲間より我もありとや歸る雁がね
八唯今ぞ歸ると告げて行く雁を心に送る春のあけぼの
九朝ぼらけ人の涙も落ちぬべし時しも歸る雁がねの空
一〇忘るなよたのむの澤を立つ雁も稻葉の風の秋の夕暮

無射五首

一足引の山の雫に立濡れぬ鹿まちかかす夏の夜すがら
二照射するは山茂山里遠み火串もつきぬ明けぬ此夜は
三照射しに出ぬる跡の賤のめは獨や今宵めを合すらむ
四後世を此世に見るぞ哀なる己が火串を待つに附ても
五秋の野に妻とふ鹿を聞せばや照射する身は情なく共

納涼五首

六日をさふる松より西の朝涼愛には暮ぞ待れざりける
七奥山に夏をば遠くはなれ來て秋の水すむ谷の聲かな
八一重なる蟬の羽衣厭ふまでまだき秋ある夏の夜の月
九古鄕の板井の清水年をへて夏のみ人のすみかなる哉
一〇影深き外面のならの夕涼み一木がもとに秋風ぞ吹く

霧五首

一一誰が宿に深き哀を知りぬらむ千里は同じ霧の内にて
一二跡たえてもとより深き山里の霧にしづめる秋の夕暮
一三秋のきり冬の煙となりにけりまだ炭やかぬ大原の里
一四音づれし木の葉散りぬるはては又霧の籬を拂ふ山風
一五霧深き明石の沖に漕行くを島隱れぬと誰ながむらむ

擣衣五首

一六昔より白き衣をうつなれど聲には色のありける物を
一七山賤の谷のすみかに日は暮れて雲の底より衣うつ也
一八衣うつ折しもつらき鐘の音の紛ゝ方とならぬ物故
一九夜もすがら月にしてうつ唐衣空まですめる槌の音哉
二〇槌の音はみねの嵐にひゞき來て松の梢も衣うつなり

鹿五首

二一野か山か遙に遠き鹿の音を秋の寢覺に聞き明しつゝ
二二嶽深き籬の野べをかき分けて我に宿かるさを鹿の聲
二三紅葉ふく嵐につけて聞ゆなり林の奥のさを鹿のこゑ
二四稻葉吹く門田の風に埋もれて仄に鹿の聲たゞふなり
二五秋の夜はをの〳〵篠原風さえて月影わたるさを鹿の聲

時雨五首

二六片山に入日の影はさしながらしぐる共なき冬の夕暮
二七物おもふ寢覺の床のむら時雨袖より外もかくや雫は

○九程もなく過つる時雨いかにして月に宿貸名殘とむ覽
一〇過ぎ來ぬる嵐にたぐふ村時雨竹のさ枝に聲は殘りて
一一昨日けふ都の時雨風さむしこれや越路のはつ雪の空

氷五首

一二志賀のうら楫にかよふ松風は氷に殘るさゝなみの聲
一三大井川せゞの岩波音たえて井せきの水に風凍るなり
一四けさ見れば池には氷閉もなし偖水鳥の夜枯しけるを
一五山深き水のみなかみ凍るらし清瀧川の音のともしき
一六難波がた入江のあしは霜がれて氷にゆる舟の通路

寄雲戀

一七知らぬ山の雲を遙に尋ねつゝ昔は人にあひける物を
一八今宵とて入日の空を眺めわび雲の迎へを待たぬ儚さ
一九量なき戀の煙やこれならむ空に滿ちたる五月雨の雲
二〇戀死む身ぞと云しを忘すば此方の空の雲をだに見よ
二一曉の風に別るゝ橫雲をおき行く袖のたぐひとぞ見る

寄山戀

二二三吉野の山より深き物やあると心に問へば心也けり
二三知るや君末の松山こす波に尙も越えたる袖の氣色を
二四なほ通へうつの山べの現には絕えにし中の夢路計を
二五袴捨の山は心のうちなれや頼めぬ夜はの月を眺めて
二六消え難き下の思はなき物を富士も淺間も煙たてども

寄川戀

二七昔思ふすみだ川原に鳥も居ば我も昔のと問はでやは
二八いかにせむ身を宇治川の網代木に心をよする人の有かは
二九廣瀨川袖つくばかり淺きこそ絕え〳〵結ぶ契也けれ
三〇石ばしる水やはうとき貴船川玉ちるばかり物思ふ頃
三一飛鳥川瀨となる末もある物を袖には淵の朽果つる迄

寄松戀

三二友と見よ鳴尾に立てる一つ松夜々我も偕過ぐる身ぞ
三三枝繁き松の隙より洩る月の僅にだにも逢見てしがな
三四前世にいかなる種を結びけむうしとも今は岩代の松
三五來ぬ人をまつに恨むる夕風に友思ふ鶴の聲ぞ悲しき
三六浪かくる綸島に生ふる濱松の朽ちぬ歎に濡らす袖哉

寄竹戀

三七君故に虎伏す野べに身を捨てむ竹の林の跡を尋ねて
三八あふ人もなき類ひ哉山伏のすゞわけ侘ぶる峯の通路
三九我が友と頼みし人は音もせで籬の竹の風のこゑのみ
四〇一節竹のよ深き音こそ哀なれ又類ひなき我身と思へば
四一戀に惑ふ心の闇にくらき哉竹のは山の霧のうちかは

禁中五首

四二紫の庭の春風のどかにて花にかすめる雲のうへかな
四三春をへて盛久しき藤のはな大宮人のかざしなりけり
四四萩の戸の花の下なるみかは水千年の秋の影ぞ映れる
四五冬の朝衛士の燈を立つる屋のあたりは薄き九重の雪
四六春も秋も葉替ぬ竹は昔より常磐なるべき君が御影に

神祇五首

四七御裳濯のひろき流に照す日の普き影は四方の海まで
四八石清水すむも濁るも世中の人の心をくむにぞ有ける
四九我が祈る心の末を知れとてや袂にとほき賀茂の川風
五〇契あれや春日の嶺の松にしも懸り初めける北の藤波
五一住吉の岸に生ひける松よりも猶おく深き秋風のこゑ

佛寺五首

五二長き夜に朝日まつまの心こそたかのゝ奥に有明の月
五三雲にふす人の心ぞ知られぬる今日を初瀨の奥の山本
五四難波江や蘆のあとに年くれぬ月日の入るを思遣りて
五五絕えすたく香の煙や積るらむ雲の林に風かをるなり
五六浪にたぐふ鐘の音こそ哀なれ夕ざひしき志賀の山寺

山家五首

五七山里に心の奥の淺くてはすむべくもなき所なりけり
五八自から便りに聞けば都には我が住む谷を知人もなし
五九奥の谷に煙もたゝば我宿を猶淺しとや住うかれなむ
六〇山深み人疎かりし友猿のともとなりぬる身の行方哉
六一心ありし都の友も山人となりて思へば岩木なりけり

海路五首

六二明石より浦傳ひゆく友なれや須磨にも同月を見る哉
六三播磨潟をりよき今朝の船路かな浦の松風聲弱るなり
六四秋の夜の哀も深き磯寢かな苫もる雨の音ばかりして
六五鴎うかぶ波ぢ遙に漕ぎ出でぬよそめ計やおきの友舟
六六哀なり雲に連なる波の上に知らぬ船路を風に任せて

建久元年十二月十五日月蝕於內裏直廬詠之亥一點始之丑終詠六十首同十九日戌終重始之子剋終百首篇抒兩夜之外不詠之雖一首不經風情者也

十題百首

天象十首

六七空さえし去年の景色も打解けて朝日ぞ春の始也ける
六八ひさかたの雲居に見えし伊駒山春は霞の籬なりけり
六九昨日けふ千里の空も一つにて軒端に曇る五月雨の宿
七〇秋よ又夢路はよそに成にけりよ渡る月の影に任せて
七一はるゝ夜の星の光に類ひ來て同じ空よりおける白露
七二かくてこそ誠に秋は寂しけれ霧閉ぢてけり人の通路
七三秋は猶吹き過ぎにける風迄も心の空に餘るものかは
七四天の川氷をむすぶ岩波のくだけて散るは霰なりけり
七五長き夜の人の心におく霜のふかさを鐘の驚かすなり
七六春の花あきの月にも殘りける心のはては雪の夕くれ

地儀十首

七七吉野山空しく峯に跡とぢて憂世を聞かぬ風の音かな
七八高砂の浦の松をも隔て來て友こそなけれ八重の汐風
七九白波の跡をばよそに思はせて潛き離れ行く志賀の曙
八〇大井川朝げの煙はる〳〵とくだす筏の遠ざかり行く
八一舊にける昆陽の池水み錆ゐて蘆間も月の影ぞ乏しき
八二踏馴れし伏見の田の畦傳ひ苗代水にとだえしに鳧
八三哀いかに旅行袖の成ぬらむ木の下わくる宮城野の原
八四秋は皆千々に物思ふ頃ぞかし信太の森のみかは
八五分けくらす木曾の梯たえ〳〵に行末ふかき嶺の白雲
八六足柄の關路こえ行くしのゝめに一むら霞む浮島が原

居所十首

八七百敷や玉のうてなに照る月の光をえたる秋のみやひと
八八天の下樂しき御代は煙立つ民の竈のけしきなりけり
八九我思ふ人だに住まば陸奥のえびすの里も疎き物かは
九〇疎らなる不破の關屋の板廂久しくなりぬ雨も溜らで
九一古郷はあさぢが末になりはてゝ月に殘れる人の面影
九二つれもなき人やは待ちし山里は軒の下草道もなき迄
九三山風の穗波を寄する夕暮に袖こそ濡るれ山田もる庵
九四我宿は野路の笹原かき分けて打ぬる下にたえぬ白露
九五夕なぎに波間の小島顯れてあまの伏屋を照す藻潮火
九六山伏の岩屋の洞に年ふりて苦にかさぬる墨染のそで

草部十首

九七難波潟まだうら若き蘆葉をいつかは舟の分侘なまし
九八さよ衣こは世に知らぬ匂かなあやめを結ぶ夢の枕に
九九秋の夜に竹打戰ぐ風の音よ花有とても厭はざらまし
一〇〇此の暮に音すべかりし人は來で蓬が袖に秋風ぞ吹く
一〇一移し植うる庭の小萩の露零もとの野原の秋や戀しき
一〇二女郎花靡き伏す野の眞葛原したの恨は風ぞ知らむ
一〇三古郷は風のすみかとなりにけり人やは拂ふ庭の荻原

八繰返しゆく秋風にそなれきて色も變らぬ青つゝら哉
九谷川の岩根の菊や咲きぬらむ流れぬ波の岸に縣れる
七繁き野は蟲の音ながら霜がれて昔のすゝき今も一本

木部十首

八春は皆同じ櫻となりはてゝ雲こそなけれみ吉野の山
八梅が香を忍の露に留めても軒端の風は猶うかるべし
九行く人のまづ立ちとまる柳かげ春の川風もと拂ふ也
一行末に我が袖の香や殘るべき手づから植えし軒の橘
二月清みしぐれぬ夜はの寢覺にも窓うつ物は庭の松風
三楢の葉にそよや秋風戰ぐ也忘られたりし人のつらさを
四片岡の正木の下葉色づきぬ山のおくには霰降るころ
五尋ねこむ人しらぬ迄なりぬべし軒端を茂る嶺の杉村
六山寺の奥の通路來て見れば嶺のしきみは本つ葉も無
七色かへぬ白玉椿老いにけり幾よの霜の積き重ねけむ

鳥部十首

八花の色をおのが鳴く音の匂にて風におちくる鶯の聲
九ほゝゑむ心を染むる一聲は秋の露に殘るなりけり
一〇秋の夜の月に待出づる初雁の霞みて過ぐる春の古郷
一一秋なればと計り見まし我宿の異垣の野邊は鶉伏す迄
一二霜野には今こそすらし小鷹狩山の繁みに雀かたよる
一三巢を戀ふる心よいかに燕かへる野中の秋のゆふぐれ
一四風寒し友なし千鳥こよひなけ我も磯寢に衣かたしく
一五鴨居る汀の風にゆられきて鴛の浮巢は旅寢してけり
一六明けぬなり山田の澤にふす鳴の羽おと催す友の一聲
一七朝な〳〵雪のみ山に鳴く鳥の聲に驚く人のなきかな

獸部十首

一八山がつの柴野に放つ春駒はひらきてけりな草の下道
一九たゞへ來る松の嵐やすごむらむ尾上に歸るさを鹿の聲
一〇夜の雨の打も寢られぬ奥山に心しらるゝ猿のみ叫び
一一主知らぬ岡べの里を來て問へば答ぬ先に犬ぞ咎むる
一二古郷の軒のひはだに草あれてあはれ狐のふし所かな
一三あら熊の棲みける谷を隣にて都に遠き柴のいほかな
一四這のべに過ぎける牛の跡みれば心の罪は類ひあり鳧
一五驚かぬ伏猪の床の眠覺さらでも夢に過ぐる此の世を
一六世中に虎狼はなにならず人の口こそなほまさりけれ
一七後世に彌陀のりさうを冠らずばあな淺ましの月の鼠や

蟲十首

一八我宿の春の花園見る度に飛びかふ蝶の人なれにけり
一九風吹けば池の萍かたよれど下に蛙の音を絶えぬかな
一〇夏の夜は枕を渡る蚊の聲の儘にだにも社寢られぬね
一一大方の草葉のつゆに風過きて螢ばかりの影ぞ殘れる
一二皆人は蟬の羽衣ぬぎすてゝ秋は今なる日ぐらしの聲
一三露そむる野べの錦の色々を機織る蟲のしたり顏なる
一四ひとり居て有明思ふ夕闇にまた松蟲の聲もありけり
一五秋たけぬ衣手寒しきり〳〵す今いく夜かは床近き聲
一六軒端より籬の草にかたかけて風を限のさゝがにの糸
一七古郷の板間にかゝる蟋蟀の漏りける雨を知せ顏なる

神祇十首

一二君を祈る時しもあれや神風の身に浸渡る伊勢の濱荻
一九月のすむ秋の最中の石清水こよひぞ神の光なりける
一〇昨日かも絶ぬ御誕を御手洗に雲居の使けふ立添ふ
一一稻荷山嶺の杉むら風ふりて神さびわたるしでの音哉
一二浮世にも露懸るべき我身かは三笠の森の陰に隱れて
一三宮居せし年もつもりの補さびて神代覺ゆる松の風哉
一四賴むべき日吉の影の昔くは闇路の末も照さいらめや
一五神垣のおまへのはまの濱風に波もうちそふ里神樂哉

釋敎十首

一六八雲たつ出雲八重垣今日迄も昔の跡は隔てざりけり
一七稀になる跡を尋ねし熊野山みし昔より賴みそめてき

地獄

一八燃る火も閉る水も消えずして幾代迄はぬ長き夜の闇

餓鬼

一九身を賣る餓の心に墮兼ねて子を思ふ道ぞ忘果てぬる

畜生

一〇水に住み雲居にかける心にも憂世の網は如何悲しき

修羅

一一浪立ちし心のみちの末は又苦しき海の底に住むかな

人

一二夢の世に月日儚く明暮て又は得難き身をいかにせむ

天

一三玉かけしあとには露を骸きかへて色衰ふる天の羽衣

聲聞

一四巢もなく空しき道に消なまし鷲のみ山の法に逢すば

緣覺

一五奥山に獨りうき世は悟りにき常なき色を風に任せて

菩薩

一六秋の月望は一夜の隔てにてかつ〳〵影ぞ殘る隈なき

佛

一七晴かりし雲は宛らはれつきて又上もなくすめる月哉

歌合百首

元日宴

一八新玉の年を雲居に迎ふとてけふ諸人に御酒賜ふなり

餘寒

一九空は猶霞みもやらず風さえて雪げに曇る春の夜の月

春水

一〇木の間より日影や春を洩すらむ松の岩根の水の白波

若草

一一雪きゆる枯野の下の淺緑こぞの草葉や根に返るらむ

賭弓

一二今日はわれ君のみ前にとる文のさして片寄る梓弓哉

野遊

一三都人宿を霞のよそに見て昨日もけふも野邊に暮しつ

雉

一四武藏野に雉子も妻や籠るらむ今日の煙の下になく也

雲雀

一五片岡の霞も深き木隱れに朝日待つまの雲雀なくなり

遊絲

一六面影に千里をかけて見するかな春の光に遊ぶ絲ゆふ

春曙

一七見ぬ世まで思ひ殘さぬ詠より昔に霞む春のあけぼの

遲日

一八秋ならば月待つ事の憂からまし櫻にくらす春の山里

志賀山越

一九遠かたやまだ見ぬ嶺は霞にて猶花おもふ志賀の山越

三月三日

二〇散る花を今日のまと居の光にて波間にめぐる春の盃

蛙

二一雨そゝぐ池の浮草風こえて波とつゆとに蛙なくなり

殘春

二二吉野山花のふるさと跡たえて空しき枝に春風ぞ吹く

新樹

二三花は散ぬいかに云てか人待む月だにもらぬ庭の梢に

夏草

二四夏草のもとも拂はぬ古郷に露より上を風かよふなり

賀茂祭

雲居より立つる使に葵草幾とせかけつ賀茂の川なみ

鵜河

大井川なほ山陰に鵜飼舟厭ひかねたる夜半の月かな

夏夜

うたゝねの夢よりさきに明けぬなり山郭公一聲の空

夏衣

かさねても涼しかりけり夏衣うすき袂にやどる月影

扇

手にならす夏の扇と思へども唯秋風のすみか也けり

夕顔

○片山の垣根の日影ほの見えて露にぞうつる花の夕顔

晩立

入日さす外山の雲ははれにけり嵐にすぐる夕立の空

蟬

○鳴く蟬のはにおく露に秋かけて木蔭涼しき夕暮の聲

殘暑

うちよする波より秋の龍田川さても忘れぬ柳蔭かな

乞巧

星合の空の光となるものは雲居の庭に照すともし火

稻妻

はかなしや荒れたる宿の轉寢に稻妻かよふ手枕の露

鶉

獨ぬる蘆のまろやの下露に床をならべて鶉鳴くなり

野分

昨日迄蓬にとぢし柴の戸も野分にはるゝ岡のべの里

秋雨

降り暮す小萩が本の庭の雨を今宵は秋の上にきく哉

秋夕

物思はでかゝる露やは袖におく詠めて見なす秋の夕暮

秋田

○山遠き門田のすゑは霧はれて穩なみに沈む有明の月

鴫

一波よする澤の蘆邊をふしわびて風に立つ也鴫の羽掻

廣澤池眺望

心には見ぬ昔こそうかびけれ月にながむる廣澤の池

蔦

うつの山こえし昔の跡ふりて蔦の枯葉に秋風ぞ吹く

柞

柞はら雫も色やかはるらむ森の下ぐさ秋ふけにけり

九月九日

雲の上に待來し今日の白菊は人の詞の花にぞ有ける

秋霜

霜結ぶ秋の末葉の小篠原風には露のこぼれしものを

暮秋

龍田姫いまはの頃の秋風にしぐれを急ぐ人の袖かな

落葉

散果てむ木葉の色を殘しても色こそなけれ嶺の松風

殘菊

様々の花をば菊に分けとめて垣根に知らぬ霜枯の頃

枯野

○見し秋を何に殘さむ草の原一つに變る野邊の景色に

冬

風さむみ今日も冬の古郷は吉野の山の雪げなりけり

野行幸

芹川の波も昔に立ち返りみゆきたえせぬ嵯峨の山陰

冬朝

雲深き峯の朝げのいかならむ槇の戸しらむ雪の光に

寒松

清水もる谷の戸ぼそも閉ぢはてゝ氷を叩く嶺の松風

椎柴

山里の寂しさおもふ煙ゆゑたえ〴〵立てる嶺の椎柴

衾

さゆる夜に鴛の衾を重ねきて袖の氷を拂ひかねつゝ

佛名

一とせの儚き夢は覺めぬらむ三世の佛の鐘の響きに

初戀

知らざりし我戀草や茂るらむ昨日はかゝる袖の露かは

忍戀

もらすなよ雲居る嶺の初時雨木の葉は下に色變る共

聞戀

○谷ふかみ遙に人をきくの露觸れぬ袂よ何しをるらむ

見戀

○忘れずよほの〴〵人を三島江の黄昏なりし葦の迷に

尋戀

たどりつる道に今宵は更けにけり杉の梢に有明の月

祈戀

○幾夜われ波にしをれて貴船川袖に玉ちる物思ふらむ

契戀

○いけらばと誓ふ其日も猶こすば邊りの雲を我と眺よ

待戀

○逢生の末葉の露の消え返り猶此世にと待たむ物かは

逢戀

○唐衣かさぬる契くちすしていく夜の露を打拂ふらむ

別戀

○忘れじの契をたのむ別かな空ゆく月の末をかぞへて

顯戀

○袖の波胸の煙は誰も見よ君がうき名の立つぞ悲しき

稀戀

○有し夜の袖の移香消果てゝ又あふ迄の形見だになし

絶戀

○休らひに出にし人の通路を古き野原と今日は見る哉

恨戀

一波ぞよる偖もみるめは無物を恨馴れたる志賀の里人

舊戀

末迄といひし計に淺茅原宿も我身も朽ちやはてなむ

曉戀

月やそれほの見し人の面影を忍びかへせば有明の空

朝戀

獨寢の袖の名殘の朝じめり日影に消えぬ露も有けり

晝戀

物思へば隙行く駒も忘られて暮す涙をまづ抑ふらむ

夕戀

君もまた夕やわきて詠むらむ忘れず拂ふ荻の風かな

夜戀

見し人のねぐたれ髪の面影に涙かきやるさ夜の手枕

老戀

君故に厭ふも悲し鐘の聲頓て我が世も更けにし物を

幼戀

行末の深きえにとぞ契りつるまだ結ばれぬ淀の若菰

遠戀

○戀しとは便につけて云やりき年は還りぬ人は歸らず

近戀

葦垣の上吹きこゆる夕風に通ふもつらき荻の音かな

旅戀
二枕にもあとにも露の玉ちりて獨起き居るさ夜の中山
寄レ月戀
三袖の上になるゝも人の形見かは我と宿せる秋夜の月
寄レ雲戀
二君がりとうきぬる心迷ふらむ雲はいくへぞ空の通路
寄レ風戀
五いつも聞く物とや人の思ふらむこぬ夕暮の松風の聲
寄レ雨戀
六深き夜の軒の雫を數へても猶あまりある袖の雨かな
寄レ煙戀
七忍びかね心の空に立つ煙見せばや不盡の嶺に紛へて
寄レ山戀
八末の松まつ夜幾度すぎぬらむ山こす波を袖に任せて
寄レ海戀
九奥謝の海の沖つ潮風浦に吹けまつ也鳧と人に聞せむ
寄レ川戀
一〇吉野川早き流をせく岩のつれなき中に身を碎くらむ
寄レ關戀
一古郷にみし面影も宿りけり不破の關屋の板間もる月
寄レ橋戀
二戀渡るよはのさ筵波かけてかくや待けむ宇治の橋姫
寄レ草戀
三人待ちし庭の淺茅生茂りあひて心にならす道芝の露
寄レ木戀
四思兼ね打ぬる宵も有なまし吹きだにすさめ庭の松風
寄レ鳥戀
五時しもあれ空飛ぶ鳥の一聲も思方よりきてや鳴く覽
寄レ獸戀
六此頃の心の底をよそに見ば鹿なく野べの秋の夕ぐれ
寄レ蟲戀
七つらからむ中社あらめ萩原や下松虫の聲をだにとへ
寄レ笛戀
八笛竹の聲の限を盡しても猶うきふしや世々に殘らむ
寄レ琴戀
九君故も悲しきとのねは立てつ子を思鶴に通ふのみかは
寄レ繪戀
〇增鏡うつしかへけむ委故かげ絕えはてし契をぞ知る
寄レ衣戀
一打解けて誰に衣を重ねらむまろが丸寢も夜深き物を
寄レ寢戀
二人待つとあれゆく閨のさ莚に拂はぬ塵をはらふ秋風
寄二遊女一戀
三誰となく寄せては返る波枕うきたる舟の跡も留めず
寄二傀儡一戀
四一夜のみやどかる人の契とて露むすびおく草枕かな
寄二海人一戀
五潮風の吹きこすあまの苫廂したに思のくゆる頃かな
寄二樵夫一戀
六戀路をば風やはさそふ朝夕に谷の柴舟行き歸れども
寄二商人一戀
七年ふかき入江の秋の月みても別をしまぬ人や悲しき

治承題百首

立春
八鐘のおとの春をつぐなる曙にまづうち拂ふ霜の狹筵
九窓のゆき池の氷も消えすして袖に知られぬ春の初風
〇三吉野は山も霞て白雪の降りにし里に春は來にけり
一あさみどり松にかすみは龍田山森の雫や氷とくらむ
二こほりゐし水の白波いは越えて清瀧川に春風ぞ吹く

鶯
三春の色に都の空もかすみぬと鶯さそへ山おろしの風
四鶯の凍りし涙こほらずばあらぬ露もや花におくらむ
五鶯の聲にほひくる松風は軒端の梅に吹かぬばかりぞ
六九重や雲居の庭の竹のうちに曉ふかきうぐひすの聲
七深草や鶉の床はあとたえて春の里とふうぐひすの聲

花
八かすむより深山に消ゆる松のゆき櫻にうつる春の曙
九三芳野は花の外さへはなれや嶺たつ山の嶺の白雲
〇のこりける都の春の光かな昔がたりの志賀の花ぞの
一山陰や花の雪散る明ぼのゝ木の間の月に誰を尋ねむ
二花はみな霞の底に移ろひて雲に色づくをはつせの山

郭公
三郭公我をば歎にとはずとも今年になりぬこぞの古聲
四うちも寢ず待つ夜更行く時鳥軒に傾く月に鳴くなり
五郭公鳴く音や袖にかよふらむ露おもりぬる蟬の羽衣
六たちばなの花ちる里の庭の面にやま時鳥昔をぞとふ
七郭公聲絕えく〳〵に消果つる雲路もつらき水無月の空

五月雨
八五月雨は雲と波とを軒端にて煙も立てぬ須磨の浦人
九五月雨の降にし里は道絕えて庭のさゆりは波の下草
〇さみだれに柴の庵は傾きて軒の雫のおとぞみじかき
一花にとひ月に尋ねし跡もなし雲こす嶺の五月雨の空
二五月雨の雲をへだてゝ行く月の光はもらで軒の玉水

月
三秋風に木の間の月はもりそめて光をむすぶ袖の白玉
四薄霧の籠にしづむ山の端に光はなれてのぼる月かげ
五清見がた浪の千里に雲きえて岩しく袖による月影
六山深み苦の筵に旅寢して霜にさえたる月を見るかな
七槇の戸のさゝで有明に成行を幾夜の月と訪人もなし

草花
八荻原や末こす風のほに出でゝ下葉よりも忍び兼ける
九風はらふ朝のとこの露の上に枕ならぶる女郎花かな
〇茂き野となりゆく庭の萱が下に已れ亂るゝ蟲の聲々
一まのゝ浦の入江は霧の中にして尾花が末に殘る白浪
二とけてねぬ鹿の音ちかし小萩原露吹き結ぶみ山嵐に

紅葉
三龍田姫いくへの山を行廻り松の外をば染め渡すらむ
四しぐれつる外山の雲は晴に晃夕日に染る嶺の紅葉ば
五秋風の龍田山よりながれ來て紅葉の川をくゝる白浪
六山人の木の下道は絕えぬらむ軒端の正木紅葉散る也
七朽にけり森の落葉に霜消えて變りし色の又變りぬる

雪
八しぐれこし雲を高嶺に吹きためて風に雪ちる冬の曙
九山ざとの雲の梢にながめつる松さへ今朝は雪の埋木
〇庵さす甲斐の白根の旅枕夜すがら雪を拂ひかねつゝ
一雪の夜の光におなじみねの月雲にぞかはる更科の里
二楚杖ゆふ葛城山のいかならむ都も雪のまなく時なし

歲暮
三春をまつ花の匂も鳥の音も暫しこもれる山の奥かな
四山川の氷も知らぬ年波の流るゝ影はよどむ日ぞなき
五春の爲いそぐ心もうち倦びぬ今年のはての入相の鐘
六磯の上ふる野の小篠霜をへて一夜ばかりに殘る年哉
七雪げだに暫しな晴れそ嶺の雲あすの霞は立變るとも

初戀

八山の端に思へばかはる月もなし唯儚ぞ今宵そひぬる
九足引の山の雲のかけてだに習はぬ袖に立添らしつゝ
〇初時雨ふる深山べの下紅葉したに心の色かはりぬる
一深き江に今日たてそむる澪標涙にくちむ印だにせよ
二難波人仄にあし火たき初めて恨に堪へぬ煙たてつる

忍戀

三忍ぶるにまけぬる人や思ふらむ打忘れては歎く氣色を
四人とはゝいかゝ云てか詠めまし君が邊りの夕暮の空
五人めみぬ岩の中にも分入りて思ふ程にや袖絞らまし
六思乘ね庭の小萩を折敷きて色なる露を袖にまがへむ
七後もうし忍ぶに堪ぬ身とならむ其煙をも雲に覆めよ

初逢戀

〇夢か猶たゝ思ひ寢に見しことの床も枕も面變りせで
九呉竹の葉末の霜のおき明し幾夜過して臥初めぬらむ
一有明も暫しやすらへ今こむの人まち得たる長月の末
一消えはてぬ後の契を重ねずば今夜ばかりや袖の移香
二絞りこし袖もやほさむ白露の奥手の稻はかりね計に

後朝戀

三又もこむ秋をたのむの雁だにも鳴きてぞ歸る春の曙
四暮を待つ空もくもらじ横雲の立別れぬる今朝の嵐に
五休ひに笹分くる朝の袖の露ゆふ附鳥のとはゝ答へむ
六立ち出でゝ心と消ゆる曙に霧のまよひの月ぞ友なる
七今はとて涙の海に楫をたえ沖をわづらふ今朝の舟人

遇不ゝ會戀

八忘るなよとばかりいひて別れにし其曉や限なるらむ
九影とめぬ床のさ筵露おきて契らぬ月は今も夜がれす
〇一島羽玉の夜の契は絕にしを夢路にかゝる命なりけり
一見し人の歸らぬ宿はあともなし唯朝夕の葛のうら風
二うつろひし心のはなに春くれて人も梢に秋風ぞ吹く

祝

三四方の海久しくすめる春に逢て遙が島の宿も思はじ
四古鄕に千世へて歸る鷹鶴や變らぬ君が御代に逢らむ
五代々の春秋の宮人をりかざせ雲居の庭にはぎの盛を
六松風を竹の籬に隔てゝも千年に千世のつゝく宿かな
七末までと八十氏人は祈りけりふるき流の絕えぬ川波

旅

八出しより荒れまく思ふ故鄕に園もる月を誰と見らむ
九三島江に一夜かりしく亂屋の露もや今朝は思置く覽
〇浦傳ふ袖に吹きこす潮風のなれてとまらぬ波枕かな
一あけがたのさ夜の中山露おちて枕の面に月を見る哉
二宮城野の木の下草に宿かりて鹿鳴く床に秋風ぞふく

述懷

三世中はくだりはてぬといふ事や偶々人の誠なるらむ
四誰も皆植てだに見よ忘草世に故鄕はげにぞ住み憂き
五埋れぬ後の名さへやとめざらむ倣事無て此世暮なば
六憂世かなひとり岩屋の奥に住む苔の袂も猶萎るなり
七いか計り覺めて思はゝうかりなむ夢の迷に猶迷ぬる

神祇

八鈴鹿川八十瀨白波分け過て神路の山の春を見しかな
九濁る世もなほすめとてや石清水流に月の光とむらむ
〇かも山の靈の柴のうす綠こゝろの色も神さびにけり
一春日山森のした道ふみ分けて幾度なれぬさを鹿の聲
二もしほ草掻くすさむ和歌の浦に哀をかけよ住吉の神

釋敎　五波羅蜜

檀波羅密

三恨むなよ月と花とを眺めても惜む心を思ひ捨てゝき

尸羅波羅密

四此法はうけて保てる玉なれば長き夜照す寶なりけり

羼提波羅密

五胸の火も涙の露も今は唯もらさで下に思ひけちつゝ

毘梨耶波羅密

六朝夕に三世の佛につかふれば心をあらふ山川のみづ

禪波羅密

七心をばこゝろの底に納めおきて塵も動かぬ床の上哉

秋篠月清集二

南海漁夫百首

春十五首

八四方の海風も長閑に成ぬなり波の幾重に春の立らむ
九春日野の若菜は袖にたまれ共猶ふる雪を打拂ひつゝ
〇唐崎や春のさゝ波うちとけて霞をながす志賀の山風
一難波津に咲くや昔の梅のはな今も春なる浦風ぞ吹く
二春の色は花ともいはじ霞よりこぼれて匂ふ鶯のこゑ
三春風に柳や岸をはらふらむ波にかたよる池のをし鳥
三澤に住たづの心もあくがれぬ春は雲路の打霞みつゝ
四春は唯おぼろ月夜と見るべきを雪に隈なき越の白山
五今はとて山とび越ゆる雁がねの涙露けき花の上かな
六初瀨山をのへの鐘のあけがたに花より白む横雲の空
七又もこむ花に暮せる故鄕の木の間の月に風薰るなり
八面影に紅葉のあきの龍田山ながるゝ花も錦なりけり
九薰るなり芳野の瀧の雲の波其の水上を花のみをにて
〇見るまゝに花も霞もなかりけり春を送るは嶺の春風
一春やいま相坂こえて歸るらむ木綿附鳥の一聲ぞする

夏十首

二山の端も霞の衣なれ〳〵て一夜の風に立ち渡るなり
三夏の夜も關はあやなし橘をながめぬ空に風薰るなり
四卯の花をおのが月夜と思ひけむ聲も盛らぬ郭公かな
五雨はるゝ軒の雫に影見えて蔦蒲にすがる夏の夜の月
六名殘まで暫し聞けとや郭公松の嵐に鳴きて過ぐなり
七故鄕の庭のさゆりば玉ちりて螢とびかふ夏の夕ぐれ
八杉ふかきかた山陰の下涼みよそにぞ過ぐる夕立の空
九柚川の岩間すゞしき暮ごとに筏の床を誰ならすらむ
〇柞原しぐれぬ程の秋なれや夕凉し日ぐらしのこゑ
一今日暮ぬ秋は一夜と吹風に鹿の音ならす小野の篠原

秋十五首

二袖に散る秋の上葉の朝露に涙ならはす秋のはつかせ
三暮れかゝる空しき空の秋を見て覺えず溜る袖の露哉
四秋の色やいま一しほの露ならむ深き思の染みし袂に
五かた山の靈の稻葉するさわぎ月よりおつる嶺の秋風
六外山より鹿の音おくる秋風にこたへて落る秋の下露
七露宿す蓬を庭のあるじにてよる〳〵蟲の音信ぞする
八はるかなる常世離れて鳴く雁の雲の衣に秋風ぞ吹く
九松に吹くみ山の嵐いかならむ竹うちそよぐ窓の夕暮
〇寂さに人は影せず成行けど月やはすまぬ淺茅生の宿
一長き夜の月は遙に更けにけり板まに影のさし變る迄
二須磨の浦のとま屋も知らぬ夕霧に絕々照す螢の漁火
三下草は秋にもたへず片岡のつれなき松に時雨もる頃
四三吉野の花は雲にもまがひしを獨色づく嶺の紅葉ば
五まのゝ浦波間の月を氷にてをばなが末にのこる秋風
六深草の鶉の床を今日よりやいとゞ空しき秋のふる里

冬十首

七月宿す露のよすがに秋くれて頓みし庭は枯野也けり

猪名野山道のさゝ原埋もれて落葉が上に嵐をぞ聞く
もりかはる軒端の月に雲すぎて時雨を殘す庭の春風
消返り岩間にまよふ水の泡のしばし宿かる薄氷かな
今宵たれ眞菅片敷き明すらむそがの川原に鴛鳴くも
枕にも袖にも涙つらゝ居てむすばぬ夢をとふ嵐かな
篭ゆく井せきの水や凍るらむひとり音する嵐山かな
山人の袖に馴たる松の風雪げになればいとゞ烈しき
浮雲を嶺に嵐の吹きためて月の名殘を雪と見るかな
限ありて春明方になる年を宮も蘆屋も急ぐくらしつ

戀十五首

大方に眺めし暮の空乍らいつよりかくは思初めけむ
それも猶風のしるべはある物を跡なき浪の舟の通路
鴎鳥の隱れも果ぬさゝれ水下に通はむ道だにもがな
槇の戸もさゝで更けゆく轉寢の袖にぞ通ふ道芝の露
誰が爲ぞ契らぬ夜半を臥わびて眺果てつる有明の月
聞べしと待たぬ物故萩の葉に夜々露のおき明すらむ
今こむの宵々ごとに眺むれば月やはおそき長月の末
朽ちぬべき袖の雫を絞りても馴にし月や影離れなむ
曉の嵐にむせぶ鳥の音に我もなきてぞ起き別れにし
秋の田のかりねのはても白露に影みし程や宵の稻妻
尋ぬべき海山とだに頼まねばげに戀路こそ別也けれ
思ほえず今や藻に住虫の名も人を恨のねに返りつゝ
其かみに絕なましかば注繩の斯引はへて物は思はじ
見し人の袖に浮にし我魂の頓て空しき身とや成なむ
戀死なむ我世の果に似たる哉かひなく迷ふ夕暮の雲

羈旅十首

もろ共に出でし空こそ忘られね都の山の有明のつき
菅原や伏見に結ぶさゝ枕一夜の露もしぼりかねぬる
岩がうへの苔の狹筵露けきにあらぬ衣をしける白雲
まだ知らぬ山より山に移り來ぬ跡なき雲の跡を尋て
袂こそ潮くむ海士の友ならめ同じ藻屑の煙立ちつる
又人の結捨てつる野べの草讀ぶ枕と見るかひぞなき
忘られず都の夢や遂るらむ月は雲居を宇都の山ごえ
高砂の松も別や惜むらむ明けゆくなみに嵐たつなり
清見がたひとり岩屋の秋の夜に月も嵐も堪ぞ悲しき
古鄕に主やいづくと人とはゞあづまの方を夕暮の空

山家十首

三吉野の槇立山に宿は有ど花見がてらの音信もなし
折々の深山を出る鳥の聲眺めわびぬと人に告げこせ
山深み遠おく袖に影見えて木の間わけゆく有明の月
山かげや友を尋ねし跡ふりてたゞ古への雪の夜の月
己れだに絕えず昔せよ松の風花も紅葉も見れば一時
つま木をる便りに見れば片岡の松の絕間に霞む故鄕
志めてけり朝げの煙たちそめて鄰となれる杉の庵哉
心をぞうきたる物と恨みつる頼む山路もまよふ白雲
この里は雲の八重立つ峯なれや麓にしづむ鳥の一聲
待つ人の知べ計の栖せば歸果つべき身とや知られむ

述懷十五首

君が代にいでむ朝日を思ふかないすゞ川原の春の曙
あきらかに昔の跡を照さなむ今も雲居の月ならば月
神を崇め法を廣むる世ならなむ偖社暫し國を治めゝ
はかなくも花の盛を思哉浮世の風はやすむ間もなし
偖もさはすまば住むべき世中の人の心の濁果てぬる
思解けば此世はよしや露霜を結びきえける行末の夢
我乍ら心のはてを知らぬ哉捨て難き世の又厭はしき
人の世は思へばなべてあだしのゝ遂が本の一つ白露
大方に夢を此世と見てしがな驚かぬこそ現なりけれ
山寺の曉がたの鐘の音にながき隈をさましてしがな
月のすむ都は昔惡ひ出でぬ幾世か暗き道をめぐらむ
心こそ浮世の外の宿なれどすむこと難き我身也けり
和歌の浦の契も深し藻汐草沈まむよゝを救へとぞ思

西洞隱士百首

春

冬のゆめの驚きはつる曙に春の現のまづ見ゆるかな
誰にとて春の心を筑波山このもかのもに風渡るなり
はれやらぬ軒ばの梅や咲ぬらむ雪に色づく春の山里
とけにけりこほりし池の春の水又袖ひちて結ぶ計に
鶯の鳴きにし日より山里の雪間の草も春めきにけり
霞がれし春の狹原うちそよぎ裾野に殘る去年の秋風
歸る雁雲のいづこになりぬらむ常世のかたの春の曙
霞とも雲ともわかぬ夕暮に知られぬ程の春雨ぞ降る
谷川の岩ねかたしく靑柳のうちたれ髮をあらふ白浪
花に似ぬ身の浮雲のいかなれや春をばよそに三吉野の山
色にそむ心の果を思ふにも花に見るこそ憂身也けれ

山深み花より花に移りきて雲のあなたの雲を見る哉
三吉野の花の影にて暮れはてぬ朧月夜の道や惑はむ
花はなみまき立つ山は末の松風こそ越ゆれ雲の通路
今年またいかに心を碎けとて花さきぬれば春の山風
心あてにながめし山の櫻花うつろふまゝに殘る白雲
狩人の入野の露を命にて散りかふ花に雉子鳴くなり
主もなき霞の袖をよそに見て松浦のおきを出る舟人
悔しくぞ月と花とになれにける三月の空の有明の頃
行てみむと思ひし程に津の國の難波の春も今日暮ぬ也

夏

花のいろの面影に立つ夏衣ころも經ずす春ぞ戀しき
卯の花は雲にも疎き月なれば波ぞ立ちそふ玉川の里
橘の花ちるさとにみるゆめは打ち驚くも昔なりけり
ほとゝぎす外山を渡る一聲の名殘を聞けば嶺の松風
菅原や伏見の暮の寂しきに絕ず里とふほとゝぎす哉
山里の卯の花くたす五月雨に垣根をこゆる山川の水
軒の雨枕の露も今日は唯同じ菖蒲のねをかくるかな
梅雨の雲間待出でゝ眺むれば傾きにける夏の夜の月
池の上の菱の浮葉もわかぬまで一つに茂る庭の蓬生
夕立の名殘の雲を吹く風に鳥羽田の早苗末驚ぐなり
麥ともに知らぬ螢の己のみ燃ゆる思はみさを也けり
志賀の海士の袖吹返す山下風にまだき秋立つ鴈の湖
夏深き入江の蓮吹きにけり波にうたひて過ぐる舟人
亂れ葦の露の玉ゆら船とめてほの三島江に涼む頃哉
外は夏あたりの水は秋にしてうちは冬なる氷室山哉
時鳥おのが皐月の暮れしよりかへる雲路に離恨也
今日迄は色に出でじと篠薄末葉に秋の露はおけども
秋風はなほ下草にかくれて森の空蟬聲ぞすゞしき
早き瀨の歸らぬ水に御禊して行年波の半ばをぞ知る

秋

榊ふく風より秋の龍田山下葉に露やもらしそむらむ
七夕にかせる衣の朝じめり別の露を干しや初めつる
渡の原いつも變らぬ波の上に其色となく見ゆる秋哉
秋といへば裙野に馴す敏鷹のすゞろに人を戀渡る哉
昔たれ誰がすみかとも白菅のまの〻萩原秋は忘れず
蜩の鳴く山陰は暮れはて〻虫の音になる秋のした露
秋風の紫くだく草むらに時うしなへる袖ぞつゆけき

よしのやま麓の野邊の秋の色に忘れやしなむ春の曙
三吉野の里は荒にし秋の野に誰をたのむの初雁の聲
古郷は軒端の荻を詫言にて寢ぬ夜の床に秋風ぞ吹く
山陰や眺め暮せる霧の中を槇の葉わけてとふ嵐かな
さを鹿の獨妻とふ奥山にこたへぬよりもつらき松風
白雲の夕ゐる山ぞなかりける月を迎ふる四方の嵐に
清見潟むら雲はるゝ夕風に關もる波をいづる月かげ
久方の月を宮人誰が爲に此の世の秋を契りおくらむ
衣うつ袖にくだくる白露の散るもかなしき秋の故郷
霜さゆる刈田のはらに居る鳥のすみか空しき冬の曙
若草のつまもあらはに霜枯て誰に忍ばむ武藏野の原
神無月木の葉吹きおろす明方の嶺の嵐に殘る月かげ
秋の色は已が木蔭に殘りけり四方の嵐を松に殘して
照す日を掩へる雲の晴きこそ憂身にはれぬ時雨也けれ
しぐれこし外山も今は霰ふり正木の葛散やはてぬる
住吉の松の下枝を洗ふ波こほらぬ聲ぞいとゞ寒けき
明石潟浦こぐからに友千鳥朝霧がくれ聲かはすなり
風をいたみ波に漂ふ鴛鳥の浮巢ながらに氷居にけり
難波がた蘆のしをれ葉氷とち月さへ寒しをしの一聲
山人のくむ谷川の朝ぼらけ叩く氷もかつむすびつゝ
山下風の吹きそふ儘に雪落ちて軒端の外に靡く白雲
我宿の薄おしなみ降る雪に籬の野べの道ぞ絶えぬる
旅人のみの代衣うち拂ひ吹雪をわたる雲のかけはし
此頃の小野の里人いとまなみ炭やく煙山にたなびく
霜八度おきにけらしな神垣や氷室の山にとれる柳葉
一年を眺めはてつる山の端に雪消えなばと花や待つ覽
窓のうちに暗ちかき灯の今年のかげは殘るともなし

雜

敷島や大和言の葉尋ぬれば神の御代より出雲八重垣
玉津島たえぬ流を汲む袖に昔をかけよ和歌の浦なみ
風の音も神さび增る久方の天のかぐ山幾代へぬらむ
浪さわぐ蟲明のせとのかち枕都にきかぬ濱風ぞ吹く
山深き雲の衣をかたしきて千里の道に秋かせぞ吹く
今朝みつる雲のあなたの山風に月をば出て獨かも寢む
はるかなる沖ゆく舟の數見えて波より白む須磨の曙
山の端は有か無かの浪の上に月を待つる八重の潮風
今こむと頼めやはせし時鳥ふけぬる夜はを何恨むる覽
たちばなの花ちる里の夕暮にわすれそめぬる春の曙
五月雨に雲間待出でゝもる月は軒の菖蒲に曇る也鳧
郭公今いくよをか契るらむおのが皐月の有明のころ
いさり火の昔の光ほのの見えて蘆屋の里にとぶ螢かな
玉鉾の道の行く手のすさびにも契ぞ結ぶ山の井の水
我妹子が宿のさゆりの花薗長き日暮しかけて涼まむ
富士の山きゆれば頓て降雪の一日も夏になる空ぞなき
小山田の昨日の早苗取も敢ず頓てや秋の風も立なむ
秋近きけしきの森に鳴く蟬の涙の露や下葉染むらむ
御禊川波のしらゆふ秋かけて早くぞ過ぐる六月の空
明日よりは志賀の花園稀にだに誰かは訪む春の故郷

夏

夏衣といふばかりにや足引の山も霞の衣かふらむ
春の色も遠ざかる也菅原や伏見に見ゆる小泊瀬の山
郭公忍び〳〵に來鳴くなり卯の花月夜ほの見ゆる頃
今こむと頼めやはせし時鳥ふけぬる夜はを何恨むる覽
たちばなの花ちる里の夕暮にわすれそめぬる春の曙
五月雨に雲間待出でゝもる月は軒の菖蒲に曇る也鳧
郭公今いくよをか契るらむおのが皐月の有明のころ
いさり火の昔の光ほのの見えて蘆屋の里にとぶ螢かな
玉鉾の道の行く手のすさびにも契ぞ結ぶ山の井の水
我妹子が宿のさゆりの花薗長き日暮しかけて涼まむ
富士の山きゆれば頓て降雪の一日も夏になる空ぞなき
小山田の昨日の早苗取も敢ず頓てや秋の風も立なむ
秋近きけしきの森に鳴く蟬の涙の露や下葉染むらむ
御禊川波のしらゆふ秋かけて早くぞ過ぐる六月の空

秋

風の音に今日より秋の龍田姫身にしむ色を爭て染覽
七夕の待ちこし秋は夜寒にて雲にかさぬる天の羽衣
荻の葉に吹くは嵐の秋なるを待ける夜半の棹鹿の聲
蘆の穗向の風の片よりに秋をぞ見する眞野の浦波
押しなべて思ひし事の數々になほ色まさる秋の夕暮
こ萩咲く山のゆふかげ雨すぎて名殘の露に蜩ぞ鳴く
藻に住まぬ野原の蟲も我からと長き夜すがら露に鳴也
とこ世出でし旅の衣や初雁のつばさに懸る峰の白雲
秋の田の稻葉の露の玉ゆらも假寢さびしき山陰の庵
山本のあけのそぼ舟はの〳〵と漕出る沖は霧罩て鳧
天つ風みがきてわたる久方の月の都に玉や散るらむ
更科の山のたかねに月さえて麓の雪は千里にぞしく
辛崎やにほてる沖に雲きえて月の氷に秋かぜぞ吹く
月ろばといひし計の人はこで横の戸たゝく庭の松風
三日月の有明の空に變る迄秋の幾夜を眺めきぬらむ
ぬしや誰いづくの秋に旅寢して殘る里人衣うつらむ
きり〳〵す鳴くや霜夜のさ筵に衣片敷獨かもねむ
龍田川ちらぬ紅葉のかげ見えて紅越ゆる瀬々の白波
忘るなよ秋は稻葉の山の端に又こむころを松の下風
今年みる我が元結の初霜に三十餘の秋のふけぬる

冬

一明方の枕の上に冬はきて殘るともなき秋のともし火
二樟鹿も分こぬ野べの古郷に本荒のこ萩枯まくも惜し
三山下風に人やは庭を楢柴の暫しもふれば道もなき迄
四村時雨すぐれば晴るゝ高嶺より嵐に出る冬の夜の月
五雁の葉は深山もさやに打そよぎ凍れる霜を吹く嵐哉
六風を痛み漂ふ池の薄もさそふ水なくつらゝにけり
七吉野川たきつ白波こほりゐて岩ねにおつる嶺の松風
八朝石洗須磨も一つに空さえて月に千鳥も浦傳ふなり
九片敷の袖の氷も結ばれ解けて寢ぬ夜の夢ぞ短かき
十かきくらす嶺の吹雪に炭竈の煙の末ぞ結ばれ行く
十一夜とや春を待つらむ年月は今日呉竹の雪の下をれ

戀

一戀をのみ須磨の蜑人藻潮垂れ干敢ぬ袖の果を知ばや
二吉野川岩もる水の湧き返り色こそ見えね下燒きつゝ
三伊勢島や潮干に拾ふ偶々も手にとる程の行方知せよ
四楫を絶え由良の湊による船の便も知らぬ沖つしほ風
五せき返す袖に時雨や餘るらむ人も梢に秋ぞ見えぬる
六我かくて寢ぬ夜の果を詠む共誰かは知らむ有明の頃
七しかすがに馴こし人の袖のかの其かと計いつ殘り劍
八稀にこし頃だにつらき松風を幾夜ともなき寢覺にぞ聞
九是は皆空しきとぞと計は契るにつけて思ひ知りにき
十いはざりき今こむ迄の空の雲月日隔てゝ物思へとは

羇旅

一昨日まで雲のあなたにみし山の岩根に今宵衣片敷く
二散り積る森の落葉を掻つめて木の下乍ら煙立てつる
三雲は閨月は灯かくしても明かせばあくるさ夜の中山
四深み岩しく袖に玉ちりて寢覺ならはす瀧の音かな
五雲かゝる山の梯踏分けて入りにし路は苔生ひにけり
六武藏野に結べる草の緑りとや一夜の枕露なれにけり
七うき枕風の寄邊も白波のうちぬる宵は夢をだに見す

山家

一白雲の八重たつ山を深しとも覺えぬ迄に住馴にけり
二栞せで獨分けこし奥山に誰まつかせの庭に吹くらむ
三山深み岩しく袖に玉ちりて寢覺ならはす瀧の音かな
四雲かゝる山の梯踏分けて入りにし路は苔生ひにけり
五忘れじの人だにとはぬ山路哉櫻は雪に降り變れども

鳥

一渡の原沖のこじまの松風に鵜の居る岩をあらふ白波
二遠方や岸の柳にゐる鷺のみのげなみよる川風ぞ吹く
三惜き哉人もてかけぬ敏鷹のと歸る山に頃も經にけり
四夕まぐれ木高き森に住む鳩の獨り友よぶ聲ぞ悲しき
五筵田のいつぬき川のさき波に群居るたづの萬代の聲

祝

一玉椿二度色は變るともはこやの山の御代はつきせじ
二曇なき雲居の末ぞ遙なる空行く月日はてを知らねば
三呉竹の園より移る春の宮氣ても千代の色は見えにき
四若葉さす玉のうつ木の枝毎に幾代の光磨きそふらむ
五敗島や大和島根も神代より君が爲とや固めおきけむ

院第三度百首

春

一おしなべて今朝は霞の敷島や大和諸人春を知るらし
二落ちたぎつ岩間打出づる泊瀬川初春風や氷とくらむ
三吉野山雪ちる里もしかすがに槇の葉白き春風ぞ吹く
四時しもあれ春の七日の初子日若菜摘野に松をひく哉
五鶯のはね白妙に降るゆきを打拂ふにも梅の香ぞする
六妻戀る雉子なく野の下萠したに燃えても春を知る哉
七野も山も同じ緑に染めてけり霞より降るこのめ春雨
八わたの原雲にかりがね波に舟かすみてかへる春の曙
九津の國の難波の春の朝ぼらけ霞も波も梟を知らばや
十更科やをばすて山の薄霞かすめる月に秋ぞのこれる
十一山櫻いまか咲くらむ陽炎のもゆる春べに降れる白雪
十二誰を今日待つとはなくて山陰や花の雫に立ぞ濡ぬる
十三春風は花と松とに吹替て散るも散ぬも身にしみぬは
十四草鴨の下の氷はとけにしを上毛に花の雪ぞ降りしく
十五櫻花うつろはむとや山の端の海紅に今朝はかすめる
十六明果てば戀しかるべき名殘哉花の影もる可惜夜の月
十七うち眺め春の三月の短夜を寢もせで獨あかす頃かな
十八初瀬山花に春風ふきはてゝ雲なき峯にかりあけの月
十九花散て木の本疎くなるまゝに遠ざかりゆく袖の移香
二十手に掬ぶ石井の水の飽でのみ春に別るゝ志賀の山越

夏

一三島江や茂り果ぬる蘆の根の一夜は春を隔て來に鳧
二鶯のひとりかへれるおく山に心あるべきおそ櫻かな
三有明のつれなく見えし月は出ぬ山郭公待つ夜乍らに
四三島江や茂り果ぬる蘆の根の一夜は春を隔て來に鳧
五千度打つ砧の音を數へてもよを長月の程ぞ知らるゝ
六裾野ゆく衣に摺れる月草の移り易くも過ぐる秋かな
七秋風にはし鷹ならす片岡の柴の下草いろづきにけり
八秋は猶葛の裏風恨みてもとばず枯れにし人ぞ戀しき
九露の袖霜のさ筵さきしのぶ方こそなけれ淺茅生の宿
十寢がてに庵もる田子の假枕よはに奥手の露ぞ隙なき
一吾の上に嵐吹きしく唐錦たゝまくをしき森の蔭かな
二答ふべき荻の葉風も霜枯れて誰にとはまし秋の別路

冬

一風の音も早晩寒き槇の戸に今朝より馴るゝ埋火の本
二篠原や忍びに秋の置きし露凍りなはてそ忘れ形見に
三夕暮の一むら雲の山廻りしぐれはつれば軒ばもる月
四霜埋む刈田の木葉踏みしだき群居る雁も秋を戀らし
五難波潟ひかりを月の滿つ潮に葦べの千鳥浦傳ふなり
六時しもあれ花ちる里の軒の雨に己が皐月の鳥の一聲
七飛ぶとりの飛鳥の里の郭公昔の聲になほや鳴くらむ
八鵠の雲のかけはしほどやなき夏の夜渡る山の端の月
九眞葛原玉まく數やまさるらむ葉におく露に螢飛ぶ也
十水鏡江の菱の浮葉にかくろへて蛙鳴くなり夕立の空
十一鹽をこそ掬ぶとせしか獨ぬる我常夏は露も拂はず
十二山ひめの瀧の白糸くりためて織るてふ布は夏衣かも
十三松風のはらふ汀のはちす葉に清き玉ゐるなつの夕暮
十四蜩の鳴く音に風を吹きそへて夕日涼しき岡のべの松
十五荻原や聲もほに出ぬさを鹿の深く夏野に戰ぐなる哉
十六織女の天の川原に戀せじと秋を迎ふる御禊すらしも

秋

一深草の露のよすがを契にて里をばかれず秋は來に鳧
二大方の夕はさぞと思へども我がために吹く荻の上風
三白露も色そめあへぬ龍田山まだ青葉にて秋風ぞ吹く
四旅びとの入野の尾花手枕に結びかはせる女郎花かな
五さを鹿の鳴初しより宮城野の萩の下露置ぬ日ぞなき
六蘆草葉にあらぬ我が袖の露を尋ねていかで鳴くらむ
七常世にていづれの秋か月は見し都忘れぬ初雁のこゑ
八物思へとする業ならし木間より落たる月に槇鹿の聲
九古郷はわれまつ風をあるじにて月に宿かる更科の山
十秋なればとて社濡す袖の上を物や思ふと月は訪ひ鳧
一蟲の音はならの落葉に埋もれて霧の籬に急雨ぞふる
二かち人の道をぞおもふ山科の木幡のみねの秋の夕霧
三千度打つ砧の音を數へてもよを長月の程ぞ知らるゝ
四裾野ゆく衣に摺れる月草の移り易くも過ぐる秋かな
五秋風にはし鷹ならす片岡の柴の下草いろづきにけり
六秋は猶葛の裏風恨みてもとばず枯れにし人ぞ戀しき
七露の袖霜のさ筵さきしのぶ方こそなけれ淺茅生の宿
八寢がてに庵もる田子の假枕よはに奥手の露ぞ隙なき
九吾の上に嵐吹きしく唐錦たゝまくをしき森の蔭かな
十答ふべき荻の葉風も霜枯れて誰にとはまし秋の別路

冬

一風の音も早晩寒き槇の戸に今朝より馴るゝ埋火の本
二篠原や忍びに秋の置きし露凍りなはてそ忘れ形見に
三夕暮の一むら雲の山廻りしぐれはつれば軒ばもる月
四霜埋む刈田の木葉踏みしだき群居る雁も秋を戀らし
五難波潟ひかりを月の滿つ潮に葦べの千鳥浦傳ふなり

十霜の上に己が翅をかたしきて友なき鴛のさ夜深き聲
九網代もる宇治の里人如何計いざよふ波に月を見る鷺
〇朝日さす氷のうへのうす煙まだ晴れやらぬ淀の川岸
一御室山峯の槇原のつれなきをしをる嵐に霰降るなり
二山里はいくへか雪の積るらむ軒端にかゝる松の下折
三嵐吹く空に亂るゝ雪の夜に氷ぞむすぶ夢はむすばず
四鴛の海や釣するあまの衣手に雪の花ちる志賀の山風
五雲はるゝ雪のひかりや白妙の衣ほすてふ天のかぐ山
六柚くだす丹生の川波あと絶えぬ汀のこほり峯の白雪
七月よめば早くも年の行く水に數かきとむる柵ぞなき

祝

八ぬれてほす玉串のはの露霜に天照る光幾世へぬらむ
九君が代に法の流をせきとめて昔の波や立ち返るらむ
〇久かたの空の限もなき世かなみつの光のすまむ限は
一ゐる鹽の山を幾重に重ねてもげに我國は動なき世を
二人の心を何定めなく思けむ君が千年のありける物を

戀

三知せばや戀を駿河の田子の浦恨に浪の立ぬ日はなし
四うち忍びいはせの山も谷隱れ水の心をくむ人ぞなき
五我戀はまだ知る人も白すげのまゝ萩原露もらす哉
六荒磯の波寄せかくる岩根松云ねどには顯れぬべし
七よそながらかけてぞ思ふ玉かづら葛城山の峯の白雲
八下萠の名にやは立てむ難波なる蘆火焚屋に燻る煙を
九木隱れの身は空蟬の唐衣ころもへにけり忍び〳〵に
〇行き通ふ夢の中にも紛るやと打ちぬる程の心休めよ
一繰返し頼めても猶あふ事の片糸をやは玉の緒にせむ
二暮しつる日はすがの根の背枕交しても猶盡ぬよは哉
三身にそへし其俤も消えなゝむ夢なりけりと忘る計に
四廻り合む限はいつと知らね共月な隔てそよその浮雲
五我涙もとめて袖に宿れ月さりとて人の影は見えねど
六我とこそ眺め馴にし山の端にそれも形見の有明の月
七歎かずよ今はた同じ名取川せゝの埋木朽果てぬとも

雜

八皆人の世にふる道ぞ哀なる思ひいるゝも思入れぬも
九かり人も哀知れかし嶺の鹿野べの雉子のおのが聲々
〇船の内波の下にぞ老にける蜑のまわざも暇なの世や
一岩がねの凝敷く嶺を踏鳴し薪こる男のいかゞ苦しき
二春の田に心を作る民もがなおり立てのみ世をぞ厭はむ
三我心その色としは染めねども花や紅葉を眺め來に鳧
四月日のみ爲す事無て明暮ば悔しかるべき身の行方哉

冬

五押返し物を思ふは苦しきに知ず顏にて世をや過まし
六浮沈み來む世は偖もいかにぞと心に問て答へ兼ぬる
七君に斯逢ぬる身社嬉しけれ名やは朽せむ世々の末迄

老若歌合五十首

春

八今朝よりは都の空もかすみぬと櫻に告げよ春の初風
九古の子日の御幸跡しあればふりぬる松や君を待らむ
〇冬枯の梢にのこる去年の雪ことしの花の初なりけり
一霞よりつゝみかねたる梅が枝の朧月夜に誰誘ふらむ
二葛城や高間の山の雲間より空にぞ霞むうぐひすの聲
三明石潟かすみて歸る雁がねも島隱れ行く春の明ぼの
四梓弓おしてはるさめ小山田に苗代水も今やひくらむ
五いつまでか雲を雲とも詠めけむ霞別花鏡く三吉野の山
六風ふけば己が雪よりおのが雪を散して見する山櫻哉
七花の色は彌生の空に移ろひて月ぞつれなき有明の山

夏

八昨日まで霞みしものを津の國の難波あたりの夏の曙
九里人の卯花かこふ山かげに月とゆきとの昔をぞとふ
〇郭公なく夜はいはず鳴かぬ夜も詠めぞ明す軒の立花
一五月山雨にあめそふ夕風に雲よりしたを過ぐる白雲
二長閑に袖のあやめを片敷きて枕も夢も結ぶともなし
三鵜飼舟下す戸無瀬の水馴棹さしも程なく明るよは哉
四尋ねきてこゝには夏も嵐山木隱れてこそ秋は有けれ
五螢とぶ野澤にしげる蘆の根の夜な〳〵下に通ふ秋風
六郭公なくねも稀になる儘にやゝ影すゝし山の端の月
七床夏の花も玉ゐる夕暮を知らでや鹿の秋を待つらむ

秋

八秋を秋と思ひ入りても詠めつる雲の旗手の夕暮の空
九鶉なく野べのしのやに一夜ねて秋ならはす萩の下露
〇白露の賴めか置きし人はこで霧の眞垣に松蟲のこゑ
一誰が秋の寢覺とはむど分かず共唯我爲のさを鹿の聲
二露の上に雁の涙も置きてみむ暫しな吹きそ荻の上風
三雲は皆拂ひはてたる秋風を松に殘して月を見るかな
四狹筵に獨寢待のよはの月しきしのぶべき秋の空かは
五月のこる古鄕人のあさぢふに忘れず秋の衣うつなり
六見渡せば松に紅葉をこきまぜて山こそ秋の錦也けれ
七草も木もおのが色々改めて霜になりゆく長月のすゑ

冬

八秋風にあへず散りにし楢柴の空しき枝に時雨ふる也
九臥馴れし蘆の丸屋も霜枯てうちもあらはに宿る月哉
〇嵐吹く梢に波のおとはして松の下水うすごほりせり
一水上や絶え〳〵こほる岩間より清たき川に殘る白波
二月ぞすむ誰かは愛に紀の國や吹上の千鳥獨なくなり
三まきの戸を朝げの袖に風さえて初雪おつる嶺の白雲
四朝妻やをちの外山に出る日の氷をみがく志賀の唐崎
五山人のたきすさみたる椎柴の跡さへしめる雪の夕暮
六呉竹の葉末にすがる白雪も夜頃へぬれば氷とぞなる
七吉野山花より雪に詠めきて雪より花も近づきにけり

雜

八我國は天照神の末なれば日の本としも云にぞ有ける
九昔より三國つたはる法の水流れてすめる四の海かな
〇民もみな君に心をつくば山しげき惠の雨うるふ世に
一此頃は關の戸さゝず成果て道ある世にぞ立返るべき
二かゝる世に契ありてぞ逢坂の小川の末は君に任せむ
三世中はあるに任せて過ぐす哉答へぬ空を打眺めつゝ
四知るや君星を戴く年ふりて我世の月も影たけにけり
五幾年の花と月とになれ〳〵て心の色を人に見すらむ
六世々をへて君が御代をや松の風殘るかひある住吉の岸
七和歌浦の葦邊のたづのさし乍千歳を顯て遊ぶ頃哉

句題五十首

初春待ㇾ花

八春來てもつれなき花の冬籠待たじと思へば峯の白雪

山路尋ㇾ花

九花を見て去年の栞は跡もなし雪にぞ紛ふ三吉野の山

山花未ㇾ遍

〇花もまだ咲かぬ方には山川の打出る波を春の物にて

朝見ㇾ花

一ほの〴〵と花は外山に顯れて雪に霞の明け離れゆく

遠村花

二尋ねばや誰が住む里の一村ぞぬし思ほゆる花の奥哉

故鄕花

三かはらじな志賀の都のしかすがに今も昔の春の花園

田家花

四なれ〳〵て門田の澤に立つ雁の涙の露は花に落ち鳧

古寺花
〇遥れすむ小泊瀬山の苔の袖花の上にや雲に臥すらむ
花似レ雪
〇吉野山このめも春の雪消えて又ふる度は櫻なりけり
河邊花
〇鈴鹿川波と花との道すがら八十瀬を分けし春は忘す
深山花
〇かへり見る山は遥にかさなりて麓の花も八重の白雲
暮山花
〇深山出て花の鏡となる月は木間わくるや曇るなる覽
古溪花
〇しもとゆふ葛城山の谷風に花の雪さへまなく散る也
關路花
一逢坂の關ふみならすかち人の渡れどぬれぬ花の白波
羇中花
二旅寢する花の下風たち別れ稻葉の山の松ぞかひなき
湖上花
三雲のなみ煙の浪やちる花の霞にしづむにほの水うみ
橋下花
四東路の佐野の舟橋しら波の上にぞかよふ花の散る頃
花下送レ日
五故郷のあれまく誰か惜む覽我が世へぬべき花の蔭哉
庭前落花
六春雨の我身世にふる詠めより淺茅が庭に花も移りぬ
暮春惜レ花
七佐保姫の霞の袖の花の香も名殘はつきぬ春の暮かな
初秋月
八秋は來ぬ露は袂に置初ぬ木間の月の洩らぬよぞなき
月前草花
九古郷の木荒の小萩咲しより夜な〳〵庭の月ぞ移ろふ
雨後月
〇二深き夜のはしに滴る秋の雨の音絶ぬれば軒端もる月
松間月
一松蔭のまやの餘りにさし入りて椙に月は傾きにけり
山家月
二月見ばといひし計の人はこで槇の戸たゝく庭の松風
月前竹風
三獨かも月は待ちいでゝ呉竹の長々し夜を秋風ぞ吹く
野徑月
四行末は空も一つのむさし野に草の原より出づる月影
澤邊月
五月影の忘れずやどる忘れみづ野澤に誰か秋を契りし
月前聞レ雁
六こし路より千里の雲を隔てきて都の月にはつ雁の聲
浦邊月
七假枕月をあきつの衣手に立寄る波もうらぶれにけり
月照二瀧水一
八山人の衣なるらし白妙の月にさらせる布ひきのたき
杜間月
九ふりにける龍田の森は神寂て木の本照す秋の夜の月
月前秋風
〇その色と思ひ分けとや秋風の心盡しの月に吹くらむ
江上月
一旅人を送りし秋のあとなれや入江の波にひたす月影
月前蟲
二誰となく人松蟲を知べにてさそふか野べに獨ゆく月
月前聞レ鹿
三さを鹿もをのゝ草臥臥倦て月夜よしとや妻を戀らむ
旅泊月
四忘るなよ出でし君のよはの月清見が關に廻り逢ふ迄
月前草露
五秋夜はませもる露の儚さも月の夜すからならぬ物かは
菊籬月
六月のすむ空にまれなる星の色を籬に殘す白菊のはな
暮秋曉月
七秋は今末野にならすはし鷹の戀しかるべき有明の月
寄レ雲戀
八移りゆく人の心は白雲のたえてつれなき契なりけり
寄レ風戀
九行き通ふ風のつてにも馴ぬれば吹來ぬ宵は戀しき物を
寄レ雨戀
〇忘られて我が身時雨の古郷にいはゞや物を軒の玉水
寄レ草戀
一休らひに頼めて出でし跡しあれば猶待物を庭の蓬生
寄レ木戀
二誰秋の心木葉に枯に朗待とし聞かば世々もへぬべし
寄レ島戀
三深き江に思ふ心はみがくれて通ふばかりの鴛の下路
寄レ嵐戀
四秋はてゝ深山烈く吹く嵐あらじ今はのなげの言の葉
寄レ舟戀
五波高き蟲明の瀬戸に行く船のよるべ知せよ沖の潮風
寄レ琴戀
六戀侘びてなくねも通ふ琴の音に凍れる水の下結つゝ
寄レ衣戀
七我戀は大和にはあらぬ唐藍の八しほの衣深く染てき

秋篠月清集三

春部

春立つ日雪の降りければ

八吉野山なほしら雪のふる里は去年とやいはむ春の曙
春のはじめに
九年〳〵れし雲居の雪げ晴初めて絶え〳〵青き東雲の空
〇動きなき山の岩根は答へねど春をぞ告ぐる雪の下水
一此頃は谷の杉むら雪きえて霞も知らぬ春のやまかせ
二千里までけしきにこむる霞にも獨春なきこしの白山
鶯
三雪はのこり花も匂はぬ山里にひとり春なる鶯のこゑ
殘雪
四逢坂の杉の木蔭に宿かりて關路にとまる去年の白雪
春の歌よみける中に
五春やとき軒ばの梅に雪さえて今日迄花の枝に殘れる
院の十首の歌合、若草
六春風の吹にし日よりみ吉野の雪まの草ぞ色增り行く
同じ歌合に落花を
七可惜夜の詠めし花に風吹けば月を殘して晴るゝ白雲
院の選歌合の十首の中、霞隔二遠樹一
八詠めこし沖つ波まの濱楸ひさしく見せぬはる霞かな
同じ歌合に羇中花
九今日もまた櫻に宿をかり衣着つゝなれ行く春の山風
同じ御會に、松間鶯
〇雪折の松を春風吹くからにまづ打ち解くる鶯のこゑ

同じ御會に、朝若菜

一六都人けふの爲にとしめし野に朝露拂ひ若菜をぞ摘む

同じ御會の三首、春風不分遠

一七押なべて民の草葉も打靡き君が御代には春風ぞ吹く

梅花薫曉袖

一八折袖の露の詫言に影見れば有明の月も梅の香ぞする

曉霞隔春山

一九重ぬべき霞の袖もたゞ一重いかにやどらむ山の夕陰

建仁三年春　上皇大内の花御覽じけるに散りたる花を御手箱の蓋に入て給ける　御製

二〇今日だにも庭を盛とみつる花消すば有とも雪かとも見よ

御返し

二一誘はれぬ人の爲とや殘りけむ明日より先の花の白雪

大原に罷て花見侍りけるに日の暮れにければ

二二花にあかぬ名殘を思ふ春の日の心も知らぬ鐘の音哉

家の歌合に曉霞を

二三岩戸あけし神代も今の心地して仄に霞む天のかぐ山

池岸梅花

二四春の池の汀の梅の咲きしより紅くゝるさゝ波ぞ立つ

朝花

二五朝嵐に峯立つ雲の晴れぬれば花をぞ花と三吉野の山

山花

二六都には霞のよそにながむらむ今日見る峯の花の白雲

春の歌とて

二七程もなく枯野の原を燒しより春の若草萠え變るなり

二八霧おつる臨月夜に窓をあけて衣手さむき春風ぞ吹く

二九霜さえて打出づる波やこたふらむ霞める山の曉の鐘

三〇殘ぬる夜の程なき夢と知られぬる春の櫻に殘る灯火

歸雁

三一眺むれば霞める空の浮雲と一つになりぬ歸る雁がね

春の歌よみける中に

三二紫の庭も長閑にかすむ日の光ともなふうぐひすの聲

三三里わかず眺めし秋の月よりも深山の花の人しをる覽

三四あしの屋のなだの鹽燒暇あれや磯山櫻かざす海士人

三五ふるさとぞ霞みはてぬる高圓の尾上の宮の春の曙

初瀬山春

三六はつせ山花に浮世や殘るらむ庵哀なる春の木のもと

內裏の直廬に侍りける頃大乘院座主無動寺より

申しおくれりける

三七都には彌生のそらの花盛しるや深山はまだ雪のうち

返し

三八知らざりつ今日九重の花を見て猶白雪の深き山とは

同じ頃又山より

三九見せばやな志賀の唐崎麗なる長柄の山の春の景色を

返し

四〇我思ふ心や行て霞むらむ志賀のあたりの春の景色は

花盛に大內におはしましける頃公衡卿の許より

女房の中へ

四一風の音は長閑けれ共日數へて花や雲居の雪とふる覽

返し女房に代りて

四二此春は君を待ける花なれば散で日數をふるとも知ずや

同じ頃南殿の花を折りて人の許へ遣しける

四三宮びとのかざす雲居の櫻花この一枝は君がためとて

前齋院大炊御門におはしましける頃女房の中より八重櫻につけて

四四古郷の春を忘れぬ八重櫻これや見し世に變らざる覽

返し

四五八重櫻折知る人の微せば見し世の春に爭であはまし

宇治平等院にて一切經の會の後朝の會に

四六法の水八十宇治川に堰止めて花の友にや春を待けむ

同じ日當座の會に依花留客といふ心を

四七春ごとの花の契に馴々て風よりかれむ頃をしぞ思ふ

またの日中宮の女房ども船に乘りて公卿殿上人

など物の音ならして遊びけるにはてつかたに人々、舟中見花といふことを詠みけるに

四八龍ゆく舟路は花になりはてゝ波に波そふやま嵐の風

當世の女房の歌よみどもに百首の歌よませて披講せしついでに五首の歌詠みける中に春の心を

四九あたら夜の霞み行さへ惜しき哉花と月との明方の山

花の歌よみける中に

五〇櫻さく比良の山風ふく儘に花になりゆく志賀の浦波

五一はれくもり峯定まらぬ白雲は風に天ぎる櫻なりけり

五二深山路や散敷く花をふまじとて松の下ゆく谷の岩橋

五三散り紛ふ櫻を風の吹きよせて深き浪たつ勝間田の池

喚子鳥を舍利講の次でに

五四時しもあれ我答へよと呼子鳥傾ぶく月の西の雲居に

春の暮に

五五山里の人もこゝろに春くれて淺茅が末に花は移りぬ

五六古巢うづむ雲の主となりぬらむ馴れし都を出づる鶯

三月盡

五七驚かす入相の鐘に眺むれば今日まで霞む小泊瀬の山

夏部

更衣

五八佐保姫に馴し衣を脫きかへて戀しかるべき春の袖哉

五九花の袖かへまく惜しき今日なれや山郭公聲は遲きに

夏の歌よみける中に

六〇片岡のはなも殘らぬ梢より綠かさなる松のしたしば

卯花

六一自から心に秋もありぬべし卯の花月夜うち眺めつゝ

海暮卯花

六二眺めつる月よりつきは出でにけり卯花山の夕暮の空

曉更橘

六三たち花の匂にさそふいにしへの面影になる有明の月

橘を

六四風薫る軒の立花年ふりてしのぶの露を袖にかけつる

院の選歌合の十首の中、雨後郭公

六五五月雨を厭ふとなしに郭公人に待たれて月を待ける

松下晩涼

六六蟬の羽に混く夕露の木がくれて秋を宿せる庭の松風

院にて人九の影供ありしに、海邊夏月

六七夏の夜を明石のせとの浪の上に月吹き返す磯の松風

同じ御會の次での當座の御會に、竹風夜清

六八呉竹の起臥し風にそなれきて夜な〳〵秋と驚かす也

山家五月雨

六九軒近きまきの楯に居る雲の重なるまゝに五月雨の空

院の十首の歌合に、菖蒲を

七〇今日といへば袖も枕も萬浦草かけてぞ結ぶ長き契を

郭公

七一をちかへり軒端にきなけ郭公はな橘に雨そゝぐなり

院の城南寺の御會に、雨中郭公

七二早苗とる鳥羽田の面に雨をえて折はへ來鳴く郭公哉

野亭水涼

七三野中なる松の木蔭に堰入れてぬるき清水の庭に涼き

家の歌合に、暮郭公

九郭公月とともにや出でぬらむ外山の峯の夕暮のこゑ
郭公
〇二忍びねぞ色はもりける郭公卯花やまの露にしをれて
一足引の山ほとゝぎす來鳴く也待つる宿の夕暮の空
二聞く人の袖に譲りて郭公なく音に落つる涙やはある
三分きて鳴け物思ふ宿の郭公ねに類ふべき心ある身ぞ
海上郭公
二尋ぬべき方こそなけれ郭公行方も知らぬ波に鳴く也
五首の題の中に、夏の心を
五打ちしめり菖蒲ぞかをる郭公鳴くや皐月の雨の夕暮
早苗
六梅雨に取らぬ早苗の流るゝをせく柵堰て植ゑ也けれ
古池菖蒲
七浮草は野邊も一つの緑にてあやめぞ池の句なりける
菖蒲を
八隠れぬに今日引殘す菖蒲草いつかと知で朽や果なむ
五月五日中宮大夫の許よりあやめの長根を贈れりける返事に
九君を思ふ心の底の深さにや斯る菖蒲の根を宿しけむ
返し　中宮大夫
〇思ふらむ心の底は君よりも深き菖蒲に引き增りけり
五月雨の歌とて
一空は雲庭は波こす五月雨に詠めも絶えぬ人も通はす
鳥羽殿にて五首の歌講せられける中に城外納涼
二山城の鳥羽田の早苗取も敢ず末こす風に秋ぞ仄めく
池上見ル月
三池にすむ光を見よと思ひけり木の下くらき庭の月影
家々納涼
四大方の夏なき年となりやせむ又此の里に清水せく也
關路晩涼
五暫しこそ小川の清水むすびつれ月も宿りぬ相坂の關
六龍田川岸の柳の下かげに夏なきなみを風のよするなり
七夏は猶くれもおそくや思ふらむ杣山川をおろす筏士
雨後夏月
八夕立の風に別れて行く雲におくれて昇る山の端の月
船中夏月
九夏の夜をやがて明石の楫枕波に傾ぶく月をしぞ思ふ

夏月
一〇夏の夜は雲のいづくに宿る共わが面影に月は殘さむ
一一月影に涼み明せる夏の夜はたゞ一時の秋ぞありける
蚊遣火
一二すさまじなる難波わたりの煙哉蘆火焚屋に蚊火立つる頃
螢
一三風そよぐ檜の木蔭の夕涼み涼しくもゆる螢なりけり
一四懸ひわたる宵の螢もかげ消えぬ軒ばに白き月の初に
一五音に立てゝ告ぬ計ぞ螢こそ秋は近しと色にみせけれ
螢火秋近
一六ゆく螢象て雲路や思ふらむ雁鳴きぬべき風の景色に
院にて影供に、草野秋近
一七宮城野の露をよすがに立つ鹿は己鳴きてや秋を待らむ
水路夏月
一八高瀬舟棹も取敢ず明くる夜にさきだつ月の跡の白波
雨後聞ル蟬
一九村雨の跡こそ見えね山の蟬なけども未だ紅葉せぬ頃
影供の次でに、夏月を當座
二〇大空は霞も霧もたなびかて木蔭ばかりに曇る月かな
二一此寫は富士の白雪消えそめて獨や月の峯にすむらむ
秋部
立秋
二二下草に露置きそへて秋の來るけしきの森に蝉ぞ鳴く
二三くる方は西と聞けど共今日の日の出るより秋は立けれ
水邊立秋
二四松蔭や夏なき年の清水にもげに秋風は今日ぞ立ける
秋の始に
二五淺茅原秋風立ちぬ是ぞこの眺めなれにし小野の古郷
二六己れのみ岩に碎くる波の音に我もありとや磯の松風
二七露の下に道あり迷や秋はこし葎の庭に月のみぞすむ
二八色變る露のみ袖に散りやせむ峯の秋風木の葉青くて
二九梢ふく風の響きに秋はあれどまだ色わかぬ嶺の椎柴
院の選歌合の十首の内山家秋月を
三〇時しもあれ古郷人は音もせで深山の月に秋風ぞ吹く
湖上曉霧
三一志賀の浦の漣白む霧の内にほのぼの出づる沖の淺舟
院の八月十五夜の選歌合に十首の歌に月多秋友
三二月ならで誰かは知む君が代に秋の今宵の幾廻りとも

月前松風
三三秋の夜の光も聲も一つにて月のかつらに松風ぞ吹く
月下擣衣
三四里は荒て月やもらぬと恨みても疎き茅生に衣打らむ
關路秋月
三五立返り煙な立てそ須磨の蜑の潮くむ袖に月ぞ宿れる
湖上月明
三六逢坂の山越えはて、眺むれば鴛てる月は千里也けり
古寺殘月
三七鐘の音に初瀬の檜原尋來て分くる木の間に有明の月
深山曉月
三八深からぬ外山の庵の寐覺だに嘯な樹間の月は寂しき
野月眺涼
三九秋の野の籬に露置すゝの庵はすゝろに月も濡るゝ顏なる
田家見ル月
〇七秋の雲しくゝとは見れど稻莚伏見の里は月のみぞすむ
河月閉ル氷
一是もまた神代は知らず龍田川月の氷に水くゝるなり
同じ夜の當座の御會に、月前雁
二雁がねも雲の衣を凝ひけり己が羽風にすめる夜の月
院の十首の歌合に、浦月
三月かげや波をむすばぬうす氷敷津の浦によする舟人
山風
四打しぐれ四方の木葉は色づきて深山の嵐秋を吹くも
院にて和歌所始之後初度之會、歌合に初秋曉露
五秋の來て幾日もあらぬ萩原や曉つゆの袖に馴れぬる
關路秋風
六人すまぬ不破の關屋の板廂あれにし後はたゞ秋の風
（關屋月鹿　後葉集此詞歌ここには載ず）
七忘れずよかりねに月を宮城野の枕に近きさを鹿の聲
故郷虫
八高圓の尾上の宮の秋はぎを誰きて見よと松蟲のこゑ
院の影供の歌合に、江月聞ル雁
九夜を重ね玉えにおる、雁の聲蘆間の月に立空やなき
夜風似ル雨
一〇宮城野の木のした風のはらふ夜は音も零も村雨の空
同じ夜の當座の御會に、山家擣衣
一一古郷を夢にだに見む山賤の夜はのさ衣打も寢なゝむ

同じ影供に、月前秋風
二八行返り月と松とに吹く嵐はれての雲に露ぞこぼるゝ
水路秋月
三八久方の天の川より歸るらしくだすうき木を送る月影
關路曉霧
四八忘るなよ霧の迷に一夜ねて關こき出づる須磨の友舟
院にて八月十五夜の當座御會に秋月の和歌五首
五八六八嵐ふき村雲迷ふ夕より出でやらぬ月も見る心地する
六八七八聞捨てゝぬる夜も一よ有なまし庭の松風月に吹すば
七八のち見むと行末遠く契る哉今宵はふけぬ秋の夜の月
八八露といへば必す月ぞ宿りけるそれ故おかぬ雁の涙も
九八昨日迄秋の半ばと待ちし夜は唯今宵ぞとすめる月哉
八幡若宮の歌合院より侍けるに六首之内初秋風
〇九八幡山にしに嵐の秋吹けば川なみ白き淀のあけぼの
野徑月
一九遠近の限も知らぬ野べの月行きつくはてや峰の白雲
故郷霧
二九大和にも敷島の宮しきしのぶ昔をいとゞ霧や隔てむ
海邊雁
三九白雲に翅をれし雁がねの下ゐる磯も波やひまなき
宇治の御所にて院の御會に、山風
四九末遠き朝日の山の嶺に生ふる松には風も常磐也けり
水月
五九今宵しも八十宇治川に澄む月を長柄の橋の上に見哉
野路
六九都より分けくる人の稀みれば露深草の人を知らるゝ
八月十五夜の五首五辻殿の初度の御會に松間月
七九今よりは愛に千年を松蔭にすまむ月とは知や知すや
野邊月
八九この里は北野の原の近ければ隈なき月の頼もしき哉
田家月
九九寢がてに幾夜を積てみたや守苦も願はの月に臥す覽
驛旅月
〇〇都には月の雲居にながむらむ千里の山の岩のかけ道
名所月
〇一今宵ならで外に見し度は曇なきやき航月はすまの浦波
八月十五夜歌、月、同じ當座の會に
〇二行秋も今や半ばに過ぎぬらむ月にねぬ夜の鐘の一聲
家の撰歌合に、山月
〇三足引の山の高嶺は久かたの月の都のふもとなりけり
野風
〇四袖の露斯れとてやは占し野にすゝの後屋を拂ふ秋風
秋の夕暮に
〇五何故と思ひもわかぬ秋かなむなしき空の秋の夕ぐれ
〇六秋の色を心にそめて後ぞ思ふ露も時雨も人の爲とは
〇七秋といへば夕暮毎の詠めゆゑ其の故もなき物思かな
〇八袖の上は唯此頃の露おきて世をば恨みず秋ぞ悲しき
〇九見もしらぬ昔の人の心まで嵐にこもる夕ぐれのくも
古郷秋
一〇來ぬ人をうらむる宿の夕暮に思ひすつれど荻の上風
一一秋風に荻のはすさむ夕まぐれ誰が住捨てし宿の籬ぞ
一二出ていにし人は歸らで葛の葉の風に恨むる古郷の秋
一三眺めわび誰いでにけむ古郷の秋を殘せる荻のうは風
一四露の袖霜の狹筵いかならむ淺茅かたしく小野の古里
秋の歌よみける中に
一五みよし野を秋の春にて眺むれば曙よりも夕暮のそら
一六春こそは朧ほのごとに眺めしか又この頃の霞霧の空
一七露深しと計見つる淺茅原くるれば蟲の聲もみちぬる
一八庭深き籬の野べの蟲の音を月と風との下に聞くかな
一九村雨は程なく過ぎて日ぐらしの鳴く山陰に萩の下露
二〇草深き野べは一つに見しかども思ひわくべき花盛哉
二一野中なる葦の丸屋に誰住みて鶉の床の友となるらむ
二二打靡く入江の尾花ほの見えて夕波まがふまの〳〵浦風
庭草露滋
二三置く露を拂はで見れば淺茅原玉しく庭と成にける哉
蟲聲非一
二四樣々の淺茅が原の蟲の音を哀一つに聞きぞなしつる
田家秋
二五風の音は蘆の丸屋に時雨來て葺ぬ雲しく秋の小山田
風破二曉夢一
二六見る夢は深山嵐に絕果てゝ月は軒端の嶺にかゝりぬ
萩
二七古郷の庭の小萩の花盛鹿なけどてや野邊になりにし
女郎花
二八風ふけば玉ちる野邊に折ふして枕露けき女郎花哉
鹿
二九秋の風尾上の松に言とへば人はこたへずさを鹿の聲
三〇武藏野のしの〳〵小薄寒き夜に妻も籠らぬを鹿鳴く也
初雁
三一秋も來ぬ風も涼しく成ぬとや寒き越路を出る雁がね
三二初雁の涙おちそふ萩のうへに下露よりも色ぞ有ける
水風
三三清水せく松の下風吹き迷ひ波にぞ浮ぶ日ぐらしの聲
三四うちなびく岩もる小菅玉ちりて嵐もおつる山川の水
名所を四季によせて詠みける中に、宮城野秋
三五宮城野の木の下露を片敷て袖に小萩の形見をや見む
須磨關月
三六須磨の關ふけゆく波のうき枕伴ふ月ぞ浦づたひゆく
月前草花
三七晴るゝ夜におのが下露數見せて月にぞ宿る庭の萩原
月照二窓竹一
三八呉竹は窓うつ雨の聲ながら曇らぬ月のもり明すかな
林中曉月
三九諸共に嶺の木の間を分け行けば袖に溜らぬ有明の月
連夜見レ月
四〇曇らばと頼む夢路も忘られて幾夜の窓に月を見る覽
詠レ月五首、未レ出月
一首やすらひに山越えやらぬ長月のつき待暮す袖の白露
初昇月
二山陰の水に光もみちぬらむ蜂をはなるゝ秋の夜の月
停午月
三秋の夜もふけぬる程は殘りけり暫し急ぐな月の行末
漸傾月
四立果てゝ眺むる方ぞ變りぬる寢ぬ夜の月の影に任て
入後月
五猶憂きは曇らぬ名のみ殘る夜の月はとまらぬ曉の山
山月
六山ふかみ都を雲のよそに見て誰ながむらむ更科の月
山居月
七山深みげに通路や絕にけむさらずば月に音信もがな
八今宵かも心の空に待し秋は山の端にだに雲のなき哉
九類ひなき光に色うそひなまし今宵の月を昔と見たらば
返し

晴初めてまたたなびかぬ雲迄も思し儘の山の端の月
君と見むその面影をやどしても袖哀なる我が宿の月
内大臣のこと侍りける頃無動寺の法印のもとへ遣しける
とへかしな影を並べて昔見し人なき庭の月はいかにと
返し　後二三首本文に書入れ後補歌群に入る
古の影なき宿にすむ月は心をやりてとよと知らずや
月のくまなかりける夜ながめかして
袖の上に宿かす露の溜らずば唯雲居なる秋の夜の月
すむ月よ幾里人の袖の上に光を分けて宿りきつらむ
物思ふ我かはあやな秋の月尋ねて袖の露にすむらむ
身やはうき空やはつらき秋の月いかに眺て袖濡す覽
今年とて秋やは變る月影にならはぬ程の心そひぬる
見る月は山より山に移り來ぬ寢ぬ夜のはての曉の空
いかなりける時にか
思出でゝ泣く〳〵月に尋ずば待てと契し中や絶なむ
月の歌よみける中に
春は猶心あてにぞ花は見し雪もまがはぬ三吉野の月
泡雪を春の光に見しよりも雲間の月の庭のむらぎえ
それも猶心のはてはありぬべし月見ぬ秋の鹽竈の浦
廣澤の池の水草を吹きよせて風より晴るゝ波の月影
手に汲み山井の水にすまし共あかで別るゝ東雲の月
へにけりな今年も春を三吉野の今更科に秋ふくる迄
一二三を句の上にするて秋の歌よみける
一むらの昔の薄思ひ出でゝしげき野分る秋の夕ぐれ
二もとの杉の梢は初時雨ふる川のべに色もかはらず
三日月の有明の空に變る迄槇の戸さゝぬ秋のよな〳〵
四の海風靜かなる波の上に曇なき世の月を見るかな
五月山照射に洩れしさを鹿の秋は思に身をしをる覽
六月の空に厭ひし空蟬の今は秋なる音をや鳴くらむ
七夕の秋の七日に知られにき忍兼ぬべき空の景色は
八重しげる葎の門に夕霧のかさねてとづる秋の山里
九重や長き夜すがらもる水の音さへ寒きには初霜
十返りの花咲松も朽に鳧朝顏のみやはかなかるべき
秋の夜に
契置かぬ中こそあらめ秋の夜の長き思を問人もがな
くらき夜の窓うつ雨に驚けば軒端の松に秋風ぞ吹く
聞き明す松の嵐の聲なくば時雨ぬ隣や夢路ならまし

物思ふ千夜を一夜も限あれば窓より西に月は廻りぬ
秋の歌よみける中に
秋ぞかし草にも木にも露見えて月に鹿なく有明の山
木のもとに積る木の葉をかきつめて露暖むる秋の盃
秋と云へばなべて草木も萎れ鳧我袖のみと思ける哉
曉の鳴の羽音は時雨にてすゞの篠屋に月ぞもりくる
野分を
草も木も野分にたへぬ夕暮に裾野の色の露ぞ碎くる
霧
時しらぬ山さへ時を知りに鳧富士の煙を霧に紛へて
山里はひとり音する松風をながめやるにも秋の夕霧
座主無動寺に侍りけるに遣しける
君が住む山の奥をも見つるかな長き夜頃の夢の通路
世のうきをよそに聞くなる山の奥に猶鹿なかば同秋風
年へにしわが立つ柚の杉村に幾秋風の君をとふらむ
哀いかに志賀の秋霧ほの〴〵と浦ごく舟の跡眺むる覽
傳へくる跡はつきせじ岩が根の動くとなき寺の印は
返し　座主
ふみ見ても我が思をも思ひしる忍ぶ日頃の夢の通路
鹿は鳴けど世の憂事をよそに聞く山の奥にはあらぬ秋風
風ならで君がとふこそ嬉しけれ我立つ柚の杉の印に
幸崎や秋の朝霧ほの〴〵と島なき舟の跡をしぞ思ふ
岩がねや君が緣の君なくば動かぬ寺も跡無らまし
九月九日作文しける時中宮大夫詩を送るべき由
かねていへりけるを其の日になりて賜はせざり
ければ後朝に遣しける
白菊の眞垣寂しく見えし哉君が言葉の花をよそにて
返し　中宮大夫
白きくの花もてやつす言の葉は中々なりや君が雜に
さて十三夜にこそ詩を送らめと侍りければ
さりともな其夜の月の曇らずば詞の露を磨かさらめや
返し　中宮大夫
磨くべき詞の露の置かば社其夜の月の影も待たれめ
又
磨き侍おく詞の露のもりこずば其夜の月ぞ梅雨の空
返しにつけて詩を送るとて　中宮大夫
大方の今宵の月は隈なきに言葉の露に五月雨ぞ降る
返し

言の葉は空に知らるゝ光にて今宵の月は磨かれに鳧
終夜擣衣
衣うつ哀は夜はの物なれや月入りぬれば聲たゆむ也
擣衣
かへるべき越の旅人待ちかねて都の月に衣擣つなり
時雨を聞きて
大方の哀に過ぐる村時雨聞きわく袖に色は見ゆらむ
菊
山川の末の流もにほふなり谷の白菊咲きにけらしも
紅葉
龍田山松のあなたの薄もみぢ時雨おくある秋の色哉
庭霜
古郷の栁はぬ庭に跡とぢて木の葉や霜の下に朽なむ
燕子樓中霜月夜秋來只爲一人長と云ふ心を
獨のみ月と霜とに起居つゝ愁て我世も更やしにけむ
秋の暮に
宿さびて庭に木の葉の積るより人まつ蟲も聲弱る也
月影は有明がたに弱りきて烈しくなりぬやま嵐の風
霜結ぶ秋の末にもなりぬれば裾野の草も風傷むなり
長月の末葉の野べはうらがれて草の原より變る色哉
九月盡
眞葛原秋かへりぬる夕ぐれは風こそ人の心なりけれ

冬部
冬のはじめに
遙かなる峯の雲間の梢まで寂しき色の冬は來にけり
木の葉散て後にぞ思ふ奥山の松には風も常盤也けり
流れよる谷の岩間の紅葉ばに小川の水の末ぞ焦るゝ
板間もる月は夜々影消てまやの軒端に木葉をぞ聞く
院の遷歌合の十首の內、嵐吹三寒草一
木の葉散て後は空しき外山より枯野の草に嵐おつ也
雪似二白雲一
峯の雪もさらに驚の心地して雲をかさぬる越の白山
院の十首の歌合の內、曉雪
夜もすがら重なる雲の絕間より月を迎ふる峯の白雪
水鳥
さゆる夜に群居る鳥の音なれや氷の上に波を聞く哉
院の影供に、寒野冬月
行く年を飛火の野守出でゝ見よ今幾日迄冬の夜の月

又影供に、山家朝雪
二打拂ひ今朝だに人のとひこにし軒端の杉の雪の下折
家の會に、野徑雪深
七白雲も一つに迄て武藏野の雪より遠は山の端もなし
千鳥聲遠
八遠方の浦人今や寢覺してさわたる千鳥近く聞くらむ
行路雪
九玉鉾の道ゆく袖の白妙にそれとも見えず置ける朝霜
遠山雪
一〇行きて見ば今日も暮れなむ足引の山の端白き雪の曙
行路朝雪
一一行人の跡にぞ雪は知られける月より後の山の端の月
遠近千鳥
一二遠方や友よび捨てゝ立つ千鳥後るゝ聲ぞ空に殘れる
家の還歌合の十首の内、庭雪
一三ふる雪に離かたしく呉竹の庭のふしどは下凍りつゝ
家の歌合に、寒樹変v松
一四しぐれこし色や緑に返るらむ木葉晴れのく松の嵐に
池水半氷
一五池水をいかに嵐の吹分けて凍れる程の凍らざるらむ
山家夜霜
一六草結ぶよはの戸ざしの枯しより内も顯はに置ける霜哉
關路雪朝
一七鈴鹿山せきの戸あくる東雲になほ道たゆる峯の白雪
水鳥知v寒
一八鴛鳥の波に任する浮巢だに馴れぬ汀にわきてよる覺
旅泊千鳥
一九已だにも問ひこなむよ千鳥須磨の浮寢に物や思ふと
霧中曉嵐
二〇嵐吹く露のかごとも數そひては山の裾に宿りわびぬる
湖上冬月
二一志賀の浦の汀ばかりは氷にて鳴てる月をよする白波
墟邊懷舊
二二下にのみ忍ぶ昔のかひなきや搔き顯さぬ夜はの埋火
寄二歲暮一戀
二三忘れずば逢よ夜を待たむ淚川流るゝ年の末を數へて
家の會に河氷を
二四かつこほる浪や嵐に碎くらむ清瀧川のあかつきの聲
吉野山寒月
二五一年を詠めはてつる吉野山むなしき枝に月ぞ殘れる
伏見里雪
二六里わかぬ雪のうちにく曾原や伏見の暮は猶ぞ寂しき
雪の朝座主のもとへ遣しける
二七雪の跡惜からぬ迄なりにけり君待つ宿の庭を詠めて
返し　座主
二八我宿は人を分てぞ跡を惜むしづしも雪を厭けるにぞ
雪の朝三位入道の許へ遣しける
二九分來べき人なき宿の庭の雪にわれ跡つけて君を訪哉
三〇君が住む松の扉の雪の朝猶降りゆかむ末をこそ思へ
返し　入道釋阿
三一君がとふ跡つけそむる初雪を積む覽末も賴まるゝ哉
三二ふりはてゝ雪消えぬ共君が代を松の扉は猶尋ねみよ
田家時雨
三三をしねつむ山田の庵は秋過て袖を時雨にほさぬ頃哉
山家冬月
三四山嵐の氣色ばかりや冬ならむ都なりせば秋の夜の月
十月ばかりに宇治にて
三五秋の色の今は殘らぬ梢より山風おつる宇治の川なみ
三六草枕まだ音づれのなきまゝに浪におどろく古郷の夢
三七霜さゆる杉の板間のめも合ず誰まつ袖に月凍るらむ
三八よもすがら凍れる露を光にて庭の木の葉に宿る月影
冬の歌の中に
三九霜凍る眞菅が下に閉ぢてけりそがの河原の水の白波
四〇幾度か寢覺しつらむ袖の露凍れるよはの明し難さに
四一掃ふべき袖こそなけれ世中の貧き民の塞きよな〳〵
閑居聞v霰
四二さゆる夜の槇の板屋の獨寢に心くだけて霰降るなり
山水始氷
四三吉野川瀧の水上こほるらし今朝よわりゆく岩波の聲
池氷曉結
四四明方の浪間の月やさえぬらむそれより凍る廣澤の池
池氷似v鏡
四五年をへて影見る池の凍れるや昔をうつす鏡なるらむ
網代眺望
四六浪の上に心のするのかすむかな網代に宿る宇治の曙
氷
四七波よする志賀の辛崎氷ゐて沖は汀となりにけるかな
千鳥
四八照る月の影にまかせてさ夜千鳥傾く方に浦傳ふなり
水鳥
四九山川のつらゝの床にすむ鴛の己が羽ぶきにそふ嵐哉
樵夫
五〇花と見るつま木の雪の僞を負ひてぞ歸る冬の山人
深草里人
五一深草や鶉もすまぬ枯野にて跡なき里をうづむしら雪
野亭深雪
五二野中なる廬の丸屋に秋すぎて傾く軒に雪おもるなり
山家雪
五三憂かりけるまた山深き宿もあらば人をもとはむ雪の曙
五四雪をれの嶺の椎柴拾ふとてあと見せそむる冬の山里
社頭雪
五五三笠山昔の月を思ひ出でゝふりさけ見れば嶺の白雪
雪中遠望
五六雪白き四方の山邊を今朝みれば春の三吉野秋の更科
雪ふりけるに定家朝臣が許へ遣しける
五七難面くば君もや訪と思つる今朝の雪にも遂にまけぬる
返し
五八我宿の庭の跡にも難面くてとはむ心の深さをぞ知る
山里にて雪の朝に詠める
五九都にはしぐれし程とおもふよりまづ此の里は雪の曙
冬の歌よみける中に
六〇重ねても人まつ庭の氣色かな雪に宿れる冬の夜の月
六一下折の竹の響きに散る雪を拂ふとすれど袖ぞ寒けき
六二寂しさはいつもながめの物なれど雲間の嶺の雪の曙
六三行く年の流るゝ影は早けれど折しも聞くか谷川の水
歲暮雪
六四世の中は春の隣になりぬれど垣根のほかも同じ白雪
六五雪つもる木末に雲は隔つれど花に近づく三吉野の山
歲暮
六六明けぬより春の霞も立やせむ今宵はさすな白川の關
家の還歌合に、多述懷
六七世に住めば早くも年の暮るゝ哉心の水はかつ凍れ共
院於二春日御社一歌合三首の内、落葉を
六八鹿のたつ森の木蔭の唐錦ふきしく風は神のまに〳〵

北野の宮の歌合、時雨

九八村雲に後れ先だつ夜はの月知らず時雨の幾廻りとも

秋篠月清集四

祝部

女御入内の月次の御屏風の歌

第一帖

小朝拝列立所

〇九立初むる雲居の春は諸人の袖を連ぬる庭に見えけり

野邊の小松原に子日する所

一〇〇春日野の小松に雪を引添へてかつ〳〵千世の花咲に鳧

一〇一山野に霞立ちわたりたる所、住吉の松もあり

一〇二詠めやる遠里をのは仄かにて霞にのこる松の風かな

第二帖

花竹の間に鶯ある所、人の家もあり

一〇三春の日の長閑にかすむ楢よりうちとけそむる鶯の聲

春日祭社頭儀

一〇四幾春の今日のまつりを三笠山みねの朝日の末も遥に

人の家幷に野邊に梅の花さきたる所

一〇五梅の花匂ふ野べにて今日くれぬ宿の楢を誰尋ぬらむ

第三帖

澤邊春駒

一〇六霜枯れし原の〳〵澤のあさ緑駒も心はるにそめけり

山野幷に人家、櫻花盛に又咲きたる所、霞もあり

一〇七おしなべて雲に際なき花盛いづくも同じ三吉野の山

人の家の庭に藤盛に花咲きたる所山に木もあり

一〇八萬代の春知りそむる藤の花宿は雲居にみする也けり

第四帖

人の家に更衣したる所、卯の花垣もあり

一〇九今日よりは千代は重ねむ始とてまづ一重なる夏衣哉

賀茂社祭神館儀式葵つけたる人の參詣したる所

一一〇今日みれば賀茂の御誕に葵草人の髪にも懸てける哉

早苗植ゑたる所

一一一早苗とる田子の心は知られ共戰きし秋の風ぞ待る〳〵

第五帖

雲間郭公鳴き渡る所、人の家あり

一一二思ひ知れ有明がたの郭公こそは誰もあかぬ名殘は

菖蒲かりたる所、人の家に菖きたる所もあり

一一三風吹けばよはの枕にかはすなり軒の菖蒲の同じ匂を

人の家の庭に鞠蹴きたる所

一一四ませの内に君が種まく常夏の花の盛を見るぞ嬉しき

第六帖

山井の邊に人々納涼したる所、泉あり

一一五山かげや出る清水のさゝ波に秋をよすなる楢の下風

野邊の杜の間に夏草茂る所

一一六涼みにと分け入る道は夏深し据野につゞく杜の下草

河邊に六月祓したる所

一一七夏の日を兼て御祓にすつる哉あすこそ秋の初と思に

第七帖

山野幷に人の家秋風吹きたる所、狭あり

一一八夕されば野山の景色いかならむ秋風立ちぬ庭の荻原

野の花さかりに咲きて人々集りたる所また掘り取る所もあり

一一九秋の野の千草の色を我宿に心よりこそ移し初めつれ

山野幷林間鹿有所

一二〇春日山松の嵐に聲そへて鹿も千年のあきとつぐなり

第八帖

人家池邊人々翫月所

一雲はるゝみ空や池に映るらむ水底よりも月は出けり

相坂の關に駒迎に行きむかふ所、清水あり

二東よりけふ相坂の關越えて都に出づるもち月のこま

田の中に人の家ある所

三山田もる下賤が庵に音づれて稻葉にやどる秋の夕風

第九帖

山の中に菊さかりに開きたる邊に仙人有る所

四君が代に匂ふ山路の白菊は幾度露のぬれてほすらむ

山野幷に人の家に紅葉盛りにしたる所、人々こ

れを翫ぶ

五秋霧の晴行く儘に色みえて風も木葉をそむる也けり

海邊に霧たちたる所

六ほのか〳〵と明石の浦を見渡せば霧の絶間に沖つ白波

第十帖

海邊に千鳥ある所、海士人の鹽屋有り

七友千鳥沖の小島にうつるなり岸の松風夜寒なるらし

網代に人集りたる所、落葉あり

八紅葉ばを都の人の心迄日をへてよする瀬々の網代木

江澤の邊蓼蘆茂りたる所、鵜もあり

九難波潟あしは枯葉になりにけり霜を重ぬる鶴の毛衣

第十一帖

五節參入所

一〇さよ更けて豐の明のもろ人の少女むかふる雲の通路

賀茂臨時祭上社社頭儀式

一一御手洗の川邊にさよは更に鳧立舞ふ袖に霜冴ゆる迄

野邊に鷹狩したる所

一二今日暮ぬ明日も狩來む交野原枯野の下に雉子鳴く也

第十二帖

内侍所御神樂

一三雲の上に神も心やはれぬらむ月さゆる夜の赤星の聲

山野の竹樹などに雪ふり積みたむ所、人家あり

一四詠めやる心の道も迷りけり千里の外の雪のあけぼの

一五千世經べき松さへ山を出に鳧春を營む賤に引かれて

泥繪御屏風

夏　樹蔭納涼

一六夏草の風にみだるゝ夕暮は秋のみ深き大あらきの森

冬　池上氷

一七池水にさゆる光をたよりにて氷は月の結ぶなりけり

院にて入道釋阿に九十賀給はせける屏風の歌に

春帖

霞

一八春霞しのに衣を織りはへて幾日ほすらむ天のかぐ山

若草

一九三吉野は草のはつかに淺緑高嶺の深雪今朝や消らむ

花

一二〇老らくの今日こむ道は殘さなむ散かひ曇る花の白雪

夏帖

郭公

一二一翁しをる入や頼めし郭公三輪の檜原に來つゝ鳴くも

五月雨

一二二を山田に引注繩の打はへて朽ちやしぬらむ梅雨の頃

納涼

[二]紀の國や吹上の濱による浪の寄邊涼しき磯枕かな
秋帖
秋野
[三]さを鹿の入野の秋の下露に誰つま籠めて草結ぶらむ
月
[三]此頃は秋つしま人ときを得て君が光の月を見るかな
紅葉
[三]山越ゆる雁の翅に霜おきて四方の梢は色づきにけり
冬帖
千鳥
[七]濱千鳥跡ふみつけよいもが紐ゆふは河原の忘形見に
氷
[八]初瀬女の白木綿花はおちもこず氷にせける山川の水
雪
[九]ふりにける友とやこれを眺むらん雪積りにし越の白山
今上の一品宮生れさせたまひての七夜人々盃とりて詠みける
[一〇]光そふ雲居の月をみかさ山千代の始は今年のみかは
中宮の初度の御會に、月契二秋久一
[一一]萬代の月をば秋の光にて絶えぬ契はくもゐにぞ見ろ
庭梅久芳
[一二]我袖に軒端の梅の香をとめよ花は幾代も春ぞ匂はむ
渡二新所一之後初度之會に、松延二齡友一
[一三]千代までと契る心や遥ふらむ松に答ふる風の香づれ
大臣の後の初度の會に、松不レ改レ色
[一四]春くれば今一しほの緑こそ變らぬ松の變るなりけれ
春日山を祝によせて詠みける
[一五]曇なき千代の光は春日山松より出づる朝日なりけり
祝の歌とて詠みける
[一六]其も猶千代の限の有ければ松だに知らぬ君が御代哉
[一七]霜や度置けど變らぬ松も猶君が御代にや生ひ替るべき
[一八]深山より松の葉分けて出る月千代に變らぬ光也けり
[一九]千代やちよ年波こゆる末の松朽ち變る共君は常磐に
[二〇]自ら治まれる世や聞ゆらむはかなくすさむ山人の歌
[二一]神風や御裳濯川の流こそ月日と共にすむべかりけれ
院於鳥羽殿初度の御會に、池上松風
[二二]傳へこし深き流の池水になほ千代までと松風ぞ吹く
院の還歌合に、寄二神祇一祝
[二三]君が代のしるしとこれを宮川の岸の杉村色も變らず
院の十番の歌合、神祇
[二四]神風や御裳濯川にちぎりおきし流の末ぞ北の蔭なみ
同じ庭の松
[二五]庭の石も岩と成べき君が代に生添ふ松の種ぞ籠れる
院の影供に、松邊千鳥
[二六]高砂の松を友とし鳴く千鳥君が八千代の聲や添らむ
家の歌合に、春祝
[二七]春日山都の南しかぞ思ふ北の藤なみはるに逢へとは
院の御會に、初春祝
[二八]春と云へば八重たつ霞重ねても幾萬代を空にこむ覽
和歌所おかれて初度の御會に、松月夜深
[二九]松風に今日より秋を契り置て月に住べき和歌の浦人
城南寺にて祈レ雨御會に、社頭祝
○[三〇]民の戸も神の惠にうるふらし都の南みやゐせしより
京極殿の初度の御會に、松有二春色一
[三一]一枝なべて木芽も春の淺緑松にぞ千代の色は見えける
戀部
高陽院の初度の御會に戀の歌よみけるに
[三二]氷ゐる志賀の浦吹く春風の打解けてだに人を戀ばや
[三三]白雲のた靡く空に吹く風の思ひたえなむ果ぞ悲しき
[三四]君が邊り分てと思時しもあれそこはかとなき夕暮の空
契二暮秋一戀
[三五]秋は惜し契は待たるとにかくに心にかゝる暮の空哉
北野の宮の歌合に、久戀
[三六]石上ふるの神杉ふりぬれど色には出ですぎも時雨も
構二他人一戀
[三七]知れても厭れぬべき身ならずばなをさへ人に包むべしやは
嵐前戀レ人
[三八]獨ぬるよはの衣を吹き返しさても嵐は見せぬ夢かな
聞二虫聲一增戀
[三九]獨寐の枕に蟲は宿りけりおのが聲より露をおかせて
[四〇]晝夜思戀
[四一]晝は夜よるは晝なる思かな涙にくらし床に起きゐて
月前戀
[四二]君に我深くなりにし其の日より袖に親しき月の影哉
舟裏戀
[四三]浮舟の便も知らぬ波路にも見し俤のたゝぬ日ぞなき
戀恥二傍輩一
[四四]とふ人は忍ぶ中とや思ふらむ答へ兼たる袖の氣色を
三島江戀
[四五]高瀬舟はのみしま江に漕返り葦間の道の猶や障らむ
後朝戀
[四六]曉の霧の迷に立ち別れ消えぬる身とも知せてしがな
五首の歌被レ講し中に戀を
[四七]吹く風も物や思ふと問ひがほに打眺むれば松の一聲
戀の歌よみける中に
[四八]よせ返る荒磯浪のしき波に間なく時なくぬるゝ袖哉
[四九]涙せく袖に思やあまるらむ眺むる空も色かはるまで
[五〇]夕暮の雲の旗手の空にのみ浮きて物思ふ果を知らばや
[五一]とめこかし君松風のかひなくば物思ふ宿の花の折々
[五二]落たぎつ川瀬の波の岩越て壞敢ぬ袖の果を知らはや
[五三]忍ぶと思はざる覽難波女のすくも焚火も下ぞ焦るゝ
[五四]それはなほ夢の名殘もながめけり雨の夕も雪の朝も
[五五]山の井にむすびもはてぬ契哉あかぬ雫にかつ消る泡
水無瀬殿にて九月十三夜戀の十五首の歌合に、春戀
[五六]鶯のこほれる涙解けぬれど猶わが袖の結ぼゝれつゝ
夏戀
[五七]草深き夏野分行さを鹿の音を社たてね露ぞこぼるゝ
秋戀
[五八]せく袖に涙の色やあまるらむ詠むる儘の萩の上の露
冬戀
[五九]もり明す水の白玉岩こえてたゆむも知らぬ袖の上哉
夕
[六〇]何故と思も入らぬ夕だに待ち出でし物を山の端の月
羇中戀
[六一]うつの山うつゝ悲しき道たえて夢に都の人は忘れず
山家戀
[六二]山がつの麻のさ衣梭を荒みあはで月日や杉ふける庵
故郷戀
[六三]するがでと契りてとはぬ故郷に昔語の松かぜぞ吹く

旅泊
七九待てしも頼めぬ磯の假枕蟲明の波の寢ぬ夜間ぬる
關路戀
八九我戀や此よを關と鈴鹿山すゞろに袖のかくは萎れし
海邊戀
九九打忍れ藻に棲蟲はよそにして須磨の餘りに恨衆つる
河邊戀
一〇〇泊瀨川井手こす波の岩の上に己れ碎けて人ぞ戀しき
寄レ雨戀
一〇一こぬ人を待夜乍らの軒の雨に月をよそにて侘つゝ寢む
寄レ風戀
一〇二荻原やよそに聞來し秋の風物思ふ暮は我が身一つに
院の選歌合に、遇不レ會戀
一〇三暫し社こぬ夜許多と數へても猶山の端の月を待しか
院の影供の歌合に忍戀を
一〇四泊瀨川なびく玉藻の下亂れ苦しや心みがくれてのみ
同じ影供の當座に、月前戀
一〇五わくらばに待ちつる宵も更に鳧さゃは契し山の端の月
同し影供に、依レ忍增戀
一〇六せきかへす袖の下水したにのみ咽ぶ思の遣方ぞなき
同じ影供、旅曉戀
一〇七わくらばの風のつてにも知せばや思をすまの曉の夢
和歌所の初度の影供に、初戀
一〇八須磨の海士の藻汐の煙忽にむせぶ思をとふ人のなき
久戀
一〇九難波人いかなる江にか朽果む逢事波に身を盡しつゝ
家の選歌合に、夏戀
一一〇空蟬の鳴音やよそに森の露ほし敢ぬ袖を人のとふ迄
家の會に、變レ契絕戀
一一一引かへてあだし心の末の松待夜の果は波ぞ起しぬる
宇治にて院の御會の五首の中、夜戀
一一二待ちわびぬ今宵もさてや山階の木幡の峯の遠の白雲
北野の宮の歌合、忍戀
一一三もらしわび氷り纏へる谷川の汲人なしに行惱みつゝ

羇旅部
旅の歌よみける中に
一一四筏淀むせゃの岩間の波の音に幾夜馴たる浮寢なる覽
一一五隔て行く都の山の白雲を幾重になるど誰に問はまし
一一六草結ぶ野原の露の深き哉誰があかしけるよはの枕ぞ
一一七網手引く竹の下みち霧こめて舟路にまよふ淀の川岸
一一八水あをき麓の入江霧はれて山路秋なる雲のかけはし
一一九茂りあふ蔦も楓も跡ぞなきうつの山邊は道細くして
一二〇明方になるや白露數そひぬかりの庵の葦のすだれに
一二一友なくて草葉に宿る秋の野に螢ばかりやよはの燈火
一二二有明のつきせざりける詠かないく浦傳ひ心すましつ
一二三隔てゆく雲と波とを幾重とも知らぬ泊りの夢の遙路
一二四あふ人もなき夢路より言づけて現悲しきうつの山越
一二五馴にけり一夜宿かす里の蜑の今朝の別も袖萎れつゝ
一二六昨日けふ野にも山にも結びおく草の枕やつゆの古郷
一二七國かはる堺幾度越えすぎて多くの民に面馴れぬらむ
一二八浪枕一夜ばかりに馴れそめて別もやらぬ須磨の浦人
物へまかりけるに天の川原といふ所を過ぎ侍るとて
一二九昔きく天の河原に尋ねきて跡なき水を詠むばかりぞ
公卿勅使に伊勢へくだりける道にて
一三〇相坂の山越えはてゝ眺むれば霞につゞく志賀の浦波
一三一遙なる三上の嶽をめにかけて幾瀨渡りぬやすの川浪
海路眺望
一三二忘るなよ今はの月をかたみにて浪に別るゝ沖の遠舟
海路秋
一三三行く舟の跡の白波きえ盡きてうす霧のこる須磨の曙
家の選歌合に、秋旅
一三四松島や秋風寒き磯寂かな海士の刈藻をひじき物にて
院の宇治の御會の五首、秋旅
一三五橘姫の我をば待たぬさ筵によその旅寢の袖の秋かぜ
院より八幡若宮にて歌合有し六首の中羇中戀を
一三六古郷を命あらばと松浦潟かへる人をし夕なみのそら
院の影供の次でに當座、月前旅を
一三七忘れじと契りて出でし面影は見ゆらむ物を古郷の月
院にて當座に旅の心を
一三八都人そのことづてはとだえして雲ふみつたふ山の梯

雜部
五行を詠める、木
一三九年へたる檜原の柚の久しきにたつきの音の仄なる哉
火
一四〇思ふべし薪の上に燃ゆる火は世の理を明すなりけり
土
一四一押なべて天下なる物は皆土を本として有りとこそ聞け
金
一四二こむ世まで永き寶となるものは佛と磨く金なりけり
水
一四三清くすむ水の心の空しきにされば宿る月の影かな
東
一四四月も日もまづ出初むる方なれば朝夕人の打眺めつゝ
西
一四五秋風も入日の空もかねの音も哀は西に限るなりけり
南
一四六玉づさを待つらむ里の秋風に遙にむかふはつ雁の聲
北
一四七其方しも冬の景色の烈しとや閉たる戸をも叩く風哉
中
一四八昔より都しめたる此里はたゞ我が國のもなか也けり
青
一四九波あらふ岩根の苔の色までも松の木蔭を篤す也けり
黃
一五〇秋の日の光の前に暎く菊の枯野の色にまがひぬる哉
赤
一五一赤ねさす峯の入日の影そへて千入そめたる岩躑躅哉
白
一五二霜うつむ賀茂の川原に鳴く千鳥氷に宿る月や寒けき
黑
一五三雲ふかき深山のさとの夕閒に蘚もとむる猿鳴くなり
曉覩レ佛
一五四横雲の消えにし空におもふかな悟はれにし月の光を
夕聞レ經
一五五入相の鐘の音こそ頼ふなれ是とて法の聲ならぬかは
夜尋レ僧
一五六ふけぬれば露と共にや宿らまし岩屋の洞の苔の筵に
曉
一五七惜しきかな入方近き曉のまだ閨深き此の世と思へば
山家の心を
一五八獨きは深山の春に暮せとや今日まで人のとはぬ櫻を
一五九山かげや軒端の苔の下朽ちてかはらの上に松ぞ傾く
一六〇山里に枯れにし草は春の夢一夜に秋の風ぞおどろく
一六一月見ばといひしばかりの人はこず蓬が上に露滋き庭

二六世のうさのねをや飜えなむ山川の嬉しく水の誘ふ洴
二五栞せで入りにし山のかひぞなき絶えず都に通ふ心は
二四かりそめの浮世出でたる草の庵に殘る心は古郷の夢
二三吉野も春の人めは枯なくに花なき谷の奥を尋ねむ
二二麓までおなじ篠原あともなし深山のいほの露の下道
二一いか計り夢の世あだに思らむ深山の庵のよはの嵐に
二〇待つ人のなきに懸れる我が身哉物思ふ秋の入相の空
一九瀧の音松の響きの寂しきにつれなくあかす岩枕かな
一八獨こそ思ひ入りにし奥山に鹿も鳴くなり峯の松かせ
一七足引の山陰ならす夕まぐれ木葉色づく日ぐらしの聲
一六をはり思ふ住ひ悲しき山陰に玉ゆらかゝる朝顔の露
院より八幡若宮の歌合六首之内、山家松
一五住みすてゝ人は跡なき岩の戸に今も松風庭掃ふなり
院より春日の社にて歌合三首之内、松風
一四露しぐれ袖にもらすな三笠山くも吹き拂へ嶺の松風
夢中述懐
一三轉寢のはかなき夢の中にだに千々の思の有ける物を
一二誠にも世の理を知る人はともおろかに厭ふべきかは
述懐
一一世のうきは人の心の憂きぞかし獨をすまむ都也とも
一〇淵も瀬もひまなくかはる飛鳥川人の心の水や流るゝ
九はらはでや軒ばの草に任せまし古きを忍ぶ心茂りて
八染置きし憂世の色を捨てやらで猶花思ふ三吉野の山
七舊むより散るべき色の物なれや嵐に花は宿る也けり
六をり〳〵の心にそめて年も經ぬ秋毎の月春ごとの花
五長き夜の更行く月を眺めても近づく關を知人ぞなき
四照すらむ月日の光曇らすば空を頼みて世をや過まし
皇太后宮大夫入道が許へせうそこして侍りし返事にかくいひ遣したりける
三秋の時すてゝし谷の埋木を嬉しくもとふ松の風かな
返し
二君をとふかひなき頃の松の風我しも花をよそに聞哉
前大僧正の許より
一世中を思ひつらぬる枕には涙の玉のせくかたぞなき
〇徒に逢が露と身をなして消えなむ後の名こそ惜けれ
返し
九世中に猶立廻る袖だにも思ひ入るれば露ぞこぼるゝ
八君ももし逢が露と身をなさば頓てや消えむ法の燈火

天王寺にて
七西思ふ心有てぞ津の國の難波わたりは見べかりける
院にて三體の歌を召しけるに
高歌
春
六春霞あづまよりこそ立にけれ淺間の嶽は雪げ乍らに
夏
五松立てる與謝の湊の夕すゝみ今も吹かなむ沖つ潮風
痩歌
秋
四荻原やよはに秋風つゆ吹けばあらぬ玉ちる床の狹筵
冬
三山里はまきの葉凌ぎ霰ふり堰入れし水の音信もせぬ
艶歌
二戀
忘れなむ中々またじ待つとても出にし跡は庭の蓬生
旅
一夢にだに逢夜稀なる都人ねられぬ月に遠ざかりつゝ
瀧水を詠める
〇天の川ながれや峯にかよふらむ白雲おつる瀧の水上
和羽林次將大原之作
九有明の月まつ山の麓にてうき世の闇は思ひ知りこき
舍利講の次で、思を
八さま〴〵の人の思の末やいかに同じ煙の空に霞める
八月十五夜前座主の許より
七やよや月去年又今や一昨年も今宵の空は掻曇りしを
六いかなれば晴行く空の月を見て我心のみ雲かゝる覽
返し
五三年まで曇りし月も晴れねれば猶光そふ空を待つ哉
四今宵とて晴行く月のかひぞなき君が心の雲隱れせば
宜秋門院御樣變らせ給ひて次の日摩主の許より
三家を出て今は嬉しき道芝によそには露の猶や置らむ
二入る人のしるべよそなる心より眞の道に蔦のうら風
返し
一よそにして濡す袖こそはかなけれ是ぞ誠の道芝の露
〇しるべせぬそのよの道の行末になほ立返れ蔦の裏風
院にて當座の御會に松を
九住吉の神やまことに言の葉を君につたへし松風の聲

一時の色は綠になほしかじ龍田のもみぢ三吉野の花
一悔しくぞ月に吹く夜の松風を宿の物とも眺來にける
哀傷部
嵯峨故內府の墓所にて懷舊の心をよみて座主
二山里は袖の紅葉の色ぞこき昔をこふる秋のなみだに
返し
一よそに思ふ我袂には猶しかじ君が時雨の色は見ね共
年頃のちぎりはかなくなりて後その墓所に行きて詠める
一稀に來て昔の跡を尋ぬれば知らぬ松にも風咽ぶなり
一並べこしよはの枕も夢なれや苔の下にぞ果は朽ぬる
權中納言道家の母失せ給ひて後おなじ頃三位入道の許より
一限なき思の程の夢の內は驚かさじとなげきこしかな
返し
一見し夢に頓て紛れぬ我身社とはるゝ今日も先悲けれ
無常部
前內相府幽靈一辭二東閣之月一永化二北邙之煙一以來去文治第四之春忽入二我夢一以呈二詩句一今建久第三之春又入二人夢一和語波只傷二永夕之別一是也集二開曉之詞一實知二娑婆之喜一漸積二泉壤之眠一自驚者歟愛依二心緣之難一抑奉レ答二夢幽思一而已
一見し夢の春の別の悲しきは永き眠の覺むと聞くまで
八月十五夜山の法印の許へ遣しける
一とへかしな影を並て昔見し人も無世の月はいかにと
返し
一古の影なき宿にすむ月は心をやりてとふと知らすや
西行法師みまかりにける次のとし定家朝臣の許へ遣しける
一去年のけふ花の本にて露消し人の名殘の果ぞ悲しき
返し
一花のもとの雫に消えし春は來て袖に昔にふりまさる人
定家朝臣が母の中陰三月盡にあたりけるに遣しける
一春霞かすみし空のなごりさへ今日を限の別なりけり
返し
別れにし身の夕暮に雲消てなべての春は恨果てゝき
觀性法橋うせて後彼の西山の往生院にて如法經

かゝむこて詣り入り侍りけるに　前大僧正慈圓
[二三]人のいふ秋のあはれは主もなきこの山寺の夕暮の空
返し
[二四]主ありし昔の秋は見し物を荒れたる宿と聞くぞ悲しき
世のはかなきことを思ひて
[二五]消果てし幾代の人の跡ならむ空になびく雲も霞も
[二六]後の世はあす共知らぬ夢の内を現がほにて明暮す哉
[二七]鳥部山おほくの人の煙立ち消えゆく末は一つしら雲
神祇部
伊勢にて
[二八]神風や御裳濯川のそのかみに契りしとの末を遠ふな
[二九]露磨く玉串のはの玉ゆらも懸し頼みの忘れやはする
述懐の中に
[三〇]伊勢島や潮干も知ず袖濡て生るかひ無世にもふる哉
春のはじめに
[三一]今日といへば春のしるしを宮川の岸の杉村色變る也
[三二]新玉の年や神代にかへるらむ御裳濯川の春のはつ風
神祇の歌よみける中に
[三三]和〻る光にしるし春の日の惠みに花は咲く世なり鳧
[三四]三笠山我世を松の蔭に居てよそに過ぐさむ梅雨の頃
[三五]頼もしな佐保の川風神さびて汀の衛八千代とぞ鳴く
日吉七社　本地
大宮　釋迦
[三六]いにしへの鶴の林に散る花の匂をよする志賀の浦風
二宮　藥師
[三七]朝日さすそなた　空の光こそ山陰照すあかし也けれ
聖眞子　阿彌陀
[三八]道をかへて此(世に跡を垂るゝかな終迎へむ紫の雲
八王子　千手
[三九]枯れはつる梢に花も咲きぬべし神の惠の春の初かぜ
客人　十一面
[四〇]こゝに又光を分けてやどすかな越の白嶺や雪の故郷
十禪師　地藏
[四一]このもとにうき世を照す光こそ暗き道にも有明の月
三宮　普賢
[四二]皆人に途にしたがふ誓よりもまねく匂ふ法の花かな
院の春日社の歌合に、曉月を
[四三]天の戸を押し明方の雲間より神代の月の影ぞ殘れる
釋教部
舍利講の次でに十如是を相す
[四四]朝毎に鏡の上に見る影の空しかりける世に宿るかな
性
[四五]榛々に生れきにける世々も皆同じ月こそ胸に澄けれ
體
[四六]春の夜の燈に消えて月かげの殘る姿も世を照しけり
力
[四七]ふり積る雪に撓まぬ松が枝の心強くも春を待つかな
作
[四八]日をへつゝ巢がく笹蟹一筋に營み暮す果を知らばや
因
[四九]一種しあれば佛の身共成ぬべし岩にも松は生ひける物を
緣
[五〇]岸に到る風の知べを思ふ哉苦しき海に舟よそひして
果
[五一]秋深く成果てにける深山哉花見し枝に木の葉色づく
報
[五二]過來ける世々にや罪を重ねけむ報悲しき昨日今日哉
[五三]末の露もとの雫を一つぞと思果てゝも袖は濡れけり
内秘菩薩行
[五四]獨のみ苦しき海を渡るとや底を悟らぬ人は見るらむ
舍利講を
[五五]願はくは心の月をあらはして靈の御山の跡を照さむ
同じ講のはてに花を
[五六]草木まで心あるべし法のには花たてまつる春の山風
[五七]嘯子鳥うき世の人をさそひ出でよ入於深山思惟儀遠
立秋
[五八]西を思ふ心の最ど涼しきはそなたより吹く秋の初風
[五九]吹き返す衣のうらの秋風に今日しも玉をかくる白露
旅　[六〇]七月十五日
[六一]旅の世に迷ふ諸人今宵こそ出でし都の月を見るらめ
川　[六二]人秋之
[六三]濁る江に法のながれの道を得て人をぞ渡す白川の里
池
[六四]遂に我が願ふすみかは極樂の八功德池の蓮なりけり
舍利講の次でに蓮を
[六五]この世より蓮の糸に結ばゝれ西に心のひく我が身哉

拾玉集

拾玉集卷第一

百首和歌
花十首
[六六]山高み嶺の櫻の散るときは麓のさとに雪ぞふりける
[六七]押なべて風の咎にも云なさじ心に花の散にも有る寃
[六八]山櫻咲きなむのちは春霞梢をよきてへだてましかば
[六九]盛なる花を二たび見つる哉散りしく庭とちらぬ梢と
[七〇]山櫻みるにつけてぞ惜るゝ花なき里にいき住ひせむ
[七一]人毎にとひて聞かばや櫻花散るを惜ぬ心ありやと
[七二]花故に故郷人に逢見てはまた來む春を契りけるかな
[七三]春くれば櫻待すとあくがれてとまらの山べに日を暮す哉
[七四]咲き咲ず散につけても苦しきは花莊御代の例也けれ
郭公十首
[七五]來鳴くやと卯花垣はしたれどもまだ音もせず山郭公
[七六]郭公初音を聞くや山賤のあやしき身にもとり所なる
[七七]時鳥まだ里なれぬ忍び音を聞くらむ人の心いかにぞ
[七八]なか〳〵に何か語らふ時鳥もの忘れたき夜はの一聲
[七九]郭公一聲にこそ尋ねつれ名殘なしまて何かうらみむ
[八〇]ふり積る雪とや見まし卯花を山郭公來鳴かざりせば
[八一]山里に家居しすれば郭公待つも待ぬも同じ音ぞ聞く
[八二]郭公はな橘になく聲は思ひなしにやなつかしきかな
[八三]五月雨の隱しなければ郭公竝とう山をさして鳴く也
[八四]諸共に語らひおきて郭公死出の山路の知べにもせむ
月十首
[八五]大井川すむ月影のいるを見て小倉山とや云初めけむ
[八六]こやの池に映れる月の光あれば蘆の下葉の露も隱れず

八八中々にいたくなさえそ秋の月見れば涙に曇る由なし
八九山のはを何か厭はむ清見潟浪間に月は入りける物を
九〇何となく物ぞ悲しき詠むればあな味氣なの月の光や
九一山里に我は年頃住みぬればさし入る月の主がほなる
九二中々にもりくる月の爽けきは暗き木蔭にはゆる也鳧
九三秋の月冴行くよはの哀れさを何に喩へて人に語らむ
九四宿もあれ主もなければ月のみぞ澄も變らぬ廣澤の池
九五清見潟月すむよはは富士のねの絕ぬ雪を心してたて

雪十首

九六今朝見れば庭もはだれに雪降て冬めきに鳧鴈の山里
九七雪深み人も問來ぬ先に來て道ふみ初めつみ山べの里
九八雪ふれば其とも見えず稻荷山靡くなるらむ杉の村立
九九淺ましや雪踏分けし深山路の栞を見れば梢なりけり
一〇〇志賀の浦の汀る氣色の異るは比良の高嶺に雪や降覽
一〇一汀々えて雪降敷けば筵田のいつぬき川を先氷りける
一〇二靡くより降來ると社見えわかね風に隨ふ雪の氣色は

戀小舟苫引き懸て漕ぎつけよ濱風寒み雪もよこ入
一〇三天の戸はまだ明ぬ間に靡くより降出つらむ庭の白雪
一〇四新玉の年は我が身に積れども消え行く物は庭の白雪

戀十首

一〇五厭るゝ我身の咎は咎ならで人のつらさのつらくも有哉
一〇六君を我戀初しより名に愛て逢坂山は行かぬ日ぞなき
一〇七夢にだに逢見むとを祈るかなよるの衣を返すゝ〳〵も
一〇八厭ふとも思初めてし紅のやしほの色は如何かへさむ
一〇九笹蟹のいとはしとだに聞えねば勉手に物を思かひなし
一一〇濡衣をきると聞く社嬉しけれ變らぬ袖を厭つらさに
一一一強ちに何厭ふらむ前の世の報にてこそ戀しかるらめ
一一二命こそ戀する人の限なれ逢てふとを何と知らねば
一一三つれなさを恨もはてじ逢初て後は思の增りもぞする

同じ世にあるかひもなき身なれども命計は哀なる哉

旅十首

一一四津の國の蘆のしのやに泊る夜は難波のとも哀なる哉
一一五露しげき秋の野原を朝立てば思はぬ袖の萩が花すり
一一六さらぬだに草の枕は露けきに涙すゝむる蟲の聲ごゑ
一一七眺むればそことも見えず春霞都の方は立ちな隔てそ
一一八波のよる磯の苫やに旅寐してさし非ぬ袖を濡しつる哉
一一九偖くも都の方ぞ戀ひらるゝ我を思出る人はあらじな
一二〇我のみと何思ふらむ草の庵月も宿をばかりける物を
一二一沖つ風けあしけれ共濟出ぬと都の人にいかで知せむ
一二二草枕かへす衣におく露をうらの玉とや人の見るらむ
一二三あだなりと何か思はむ草枕靡くか終の住かなるべき

祝十首

一二四磯の上ふりにし人に言問はむ君が齡のたぐひ有やと
一二五君が代を何に譬へむたづのゐる濱の眞砂も數ならぬ哉
一二六たまさかに花咲桃の君が代になるてふとは千度百度
一二七住吉の松の千年と君が代と孰久しき神に問はゝや
一二八かめ山も嶺よりいづる月影は君が齡を照すなりけり
一二九濁るらむ川瀨の水も君が代にすむべき數の限なき哉
一三〇いつしかと春の初めに鶯の君が千年をもゝ色となく
一三一君が代は限なしとて有りぬべし例へていへば尙愚也
一三二蘆鶴の雲の上よりおり居るを齡を君に讓るとぞ聞く
一三三雙葉なる松は千代經物ぞとも君が見たてゝ語るにぞ知る

述懷十首

一三四徒らに明し暮して高砂のまつともなき身を如何せむ
一三五後世のとをしぞ思ふ數ならず鳴海の浦の波の立居に
一三六堪しつゝ果はいかにか成べきと思續けてね社泣るれ
一三七何事も思ひもわかで世中を明ぬ暮ぬとすごしつる哉
一三八おしなべて浮世の中を恨なかは我身一つの歎也けり
一三九程もなき露の世にだに住侘ぬ消なむ後の身をいかにせむ
一四〇いかにせむ過る月日は止られば思でもなく年の經ぬべき
一四一世の中を心高くは思へども人とひとしきとのなき哉
一四二數ならぬ我身の程を知ぬれば人をもえ社恨ざりけれ
一四三入日さす西に心をかへる身は暮行く年も惜からぬ哉

無常十首

一四四露むすぶ蓬が原を見渡して思ひとくこそ哀なりけれ
一四五傳くて過る此世を夢ぞとはさめて後こそ思ひ合せめ
一四六今日知ぬ憂世の中の例には何か我身の成むとす覽
一四七世中は河瀨に見ゆる泡の消えみ消えすみ過る傳なさ
一四八名計りは夢現とてかはれども傳きとは違はざりけり
一四九水の面に映れる月の譬ひにて有か無かの世にも有哉
一五〇程もなく哀き世の例かな積ると見れば消ゆる淡雪
一五一跡もなく消行く舟の見ゆる哉過ぬるとは是に譬へむ
一五二朝顏の傳き物といひ置きてそれに先だつ人や何なる
一五三昨日見し人も傳く成にけり夜の間に散か花に紛はで

釋教十首

一五四罪人は法の御舟の徵りせば苦しき海を渡らましやは
一五五賴もしな佛の道に入とは憂身なれ共もれずとぞ聞く
一五六傳しや親を親とも知ずしてこはいかにして立歸る覽
一五七假の屋に暫し宿れと教へしは心ありける道しるべ哉
一五八螢小舟法の心をしりぬればむつの渡りも辿られぬ哉
一五九蓮葉に法に反きし人だにも遂に佛に成るとこそ聞け
一六〇鷲の山すむ月影を見ぬとはみの浮雲の蔽ふなりけり
一六一誰も皆佛の道に入るとの定まりぬると聞くぞ嬉しき
一六二思きや我がもりたてし嗣兒の誠の道の知べせむとは
一六三罪もなき草の葉に置露なれば消行とや程なかるべき

當初爲二練習一始所レ詠之百首也未レ入二其境一左道之

百首和歌

述懷

一六四三年まで御法の花を捧げつゝ九品をもねがひつる哉
一六五諸共にすむらむ物を年を經て結ぶかあかの水の心を
一六六いつとなく動かぬ君に仕ても心は四方にあくがれに鳧
一六七蓮乳根も又垂乳めも失果てゝ賴む蔭なき歎をぞする
一六八孤の類ひ多かる世なれども只我のみと思ひしられて
一六九春霞かすみこめたる山里のはれぬ心を人しるらめや
一七〇朝夕に心盡しの歎して我が身のうさを思ひしりぬる
一七一大方は世をも人をも恨じな憂身の程ぞ知らぬ物なる
一七二位山また見ぬ嶺も願れず榮行くもなき身と思へば
一七三とに斯にせむ方もなき我身哉一方ならぬ歎のみして
一七四死なばやと云ぞ傳き後世も賴有るべき我身ならぬに
一七五長らへば難波のとの善惡も思知らずと人や見るべく
一七六子日する野べの小松の雙葉より曳ても長き身をいかにせむ
一七七後の世も此世も共に沈みつゝ幾返まで廻り來にけむ
一七八よしさらば心の儘に成ゝむ心のほかに心なければ
一七九數ならぬ身のうき雲を吹き佛へ我を思はむ心谷の風
一八〇あくがるゝ心に身をば任す共昔の跡をいかゞ尋ねむ
一八一世中はとても斯ても有ぬべしと云し人の心をぞしる
一八二諸共に伴ふ人のあらばこそいひ合せつゝ慰めにせむ
一八三何故に思ひそむとはあらずとも衣は墨の色に任せむ
一八四兼てより深き山べの獨ゐ寂しかるべき氣色をぞ思ふ
一八五身のうさを愁めつべきともがな思ふ人れで明し暮さむ
一八六入相の鐘の聲を聞くからに我心さへつきにけるかな
一八七世を渡る我身のさまは弱れど倒れぬ物は心也けり
一八八世中に面もなくて隱れなば恨ばかりやなほ殘るべき

一我が心過ぎにし方を忍ぶらし思出れば打泣かれつゝ
二夜を重ねやよや〳〵と語へどかひ甲斐無れ山のはの月
三説置ける法を頼まぬ身也せば斯る心の起らましやは
四我願ふ心の花し開きなば佛のみにやならむとすらむ
五物思ふ頼は又もあらしほの鹽の八百會神や知るらむ
六つかへつる神はいかにか思ふべきよその人めは遮莫
七思ひては絶すもやあらむ住馴れし峰の松風谷の川音
八忍ぶべき人もあらしの山寺にはかなく止る我が心哉
九淺緑春吹く風に誘はれて花と共にや散りうせぬべき
一〇後の世を深く思ふをよそにては心淺しと人や譏らむ
一一憂身にはしゃまをだにえ赴せね思餘れば獨言たれて
一二ともすれば過ぎにしゾ忍ばるゝ今行末に思比べて
一三今はさは思出もなき昔をや思暮してはてむとすらむ
一四思侘び侘しやとのみ云るゝはこや數ならぬ人の言葉
一五おしかへし深く思へば我厭ふ花の都もかりの宿りぞ
一六恨あれば物思ふとの苦しさは後世とても此に儕らじ
一七斯計せむ方もなき有樣をさしもやはとやよそに見覽
一八ふじ川になどや今日迄身を投ぬ有にかひなき世とは知々
一九人數に入らばやとのみ思つる心に似ぬは我身也けり
二〇數ならず鳴戸の浦の浦人は波の夜晝物をこそおもへ
二一大空の思はむとも耻かしな差仰ぎつゝ斯てすぐさば
二二思ふすぢいと斯ばかり多かれば心は常に打亂れつゝ
二三身にも似ぬ身に成なむと思こそ心にも非ぬ心也けれ
二四數ならぬ身とは思ひし數ふれば物思數の有ける物を
二五かき暮し晴れぬ思の隙なさに雨雫ともなかれける哉
二六みな人に心のそこを見せたれば深き恩を憐みやせむ
二七歎かずば心もなきに成ぬべし思へば苦しこはいかにせむ
二八憂事はよそに見だに苦しきを身の上にては如何堪べき
二九差離れ三笠の山を出しより身を知雨に濡ぬ間ぞなき
三〇年ふれど人數ならぬ身の耻をすゝき清めよ雪の下水
三一斯しつゝふくる我世に驚て長き夢をも覺してしかな
三二後世にそむる心をよそにてはあらぬ色にや思做す覽
三三我身にて身の歎をぞ慰むるうき身の程を思知りつゝ
三四ともすれば變る氣色を見咎めて言とふ人の情だになし
三五いかにせむ思出よと云置て立離るべき人だにもなし
三六忍ては何にかはせむ行末も頼有るべき我身ならねば
三七春秋の花や紅葉に事寄て忍ばれぬべき我身ともがな
三八荒磯海の浦吹風に非ねどもやむ時もなく物を社思へ

三九石見潟云にかひなき世中のつらに堪ぬ身とや成なむ
四〇我身をば何にか今は喩べき長柄の橋もとふりにけり
四一春山に世を驚のこゑなくば友なきねをや獨なかまし
四二戀しとも誰かは云むと思にも只つく〳〵と音社泣れ
四三さぞといはゝ誠にさぞとあどうすてなやゝと云人だにも無
四四さりとては唯つ方なき身にしあれば只過たぬ世をぞ恨る
四五身の憂さを思ひ宥むるかひもなく盛出でぬる我涙哉
四六明暮は西に心をかくる哉月日の入るをうち詠めつゝ
四七此世にて來む世のとを歎すば何を待べき儚さぞこは
四八法の池に流れも入らではかなくも心の水の滯るらむ
四九思ひ立つその道芝の露にそふ泪はいろに顯れやせむ
五〇戀すべき我身ならねば等閑に心の止る妻だにもなし
五一數ならで惑出なむ舟路には憂のみるめや優しかるべき
五二えびすこそ物の哀は知と聞けいざ陸奥の奥へ行なむ
五三何故に思入ぬる山路ぞと問ふ人あらばいかゞ答へむ
五四憂身にはさらの住ひも由なしや只さ暫りに明し暮さむ
五五人毎に打戯ぶれし氣色にも見えけむ物を今の氣色は
五六何となく有ますとと思しを順て誠の道になりぬる
五七我頼む日吉の影は奥山の柴の戸迄もさゝざらめやは
五八あさくらの返す〳〵も祈る哉神の惠を頼む身なれば
五九うしとのみ思て社は出ぬとも尚故郷や戀しかるべき
六〇諸共に哀いつ迄なづさひて斯る浮世に住まむとす覽
六一何事を待つにか今は斯るべき憂身は藤の末葉なれ共
六二忘るなと大宮人に頼おかむたちもぞ歸る花の都へ
六三山深く身を隱してむ行末に悔しきとやあらむとす覽
六四自ら惜む人もやありぬべきと思ひなすこそ愚也けれ
六五いつとなく心に澄る月のみや憂身離れぬ友と成べき
六六命あらば尚故郷に歸り來て馴にし友の心をも見む
六七かりそめの別と人や思ふらむやがて眞のくさの枕を
六八都にて詠めしとの變らずと月ばかりをや思出づべき
六九奥山に猶籠りなむ後はさはすがるまじくや友と成べき
七〇とに斯に哀智もなき身乍らも流石に物を思取りぬる
七一數ならぬ身にし成なば仕つる神も佛もなをやるべき
七二山川にかき流しつるうたかたを傳きとの例とは見よ
七三人知れぬ歎の本に積りぬる此言の葉を散さずもがな
七四身の上と思做しつゝ誰も皆哀なるべき筆すさみかな

千日の山ごもりのこゝろおもふことはたゝ諸佛の本

懷なれば心もすみておぼえしことを書きつけしかば百首になりにけりそのかみのことにて無下に左道之

百首和歌　堀川院題

春二十首

立春

七五春たつといふばかりにも霞むなり吉野の山の曙の空

子日

七六春來ては子日の松に頼ひつゝ憂身も人に引れましかば

霞

七七春霞印の杉をこめつればそことも見えず三輪の山本

鶯

七八千年ふる千年の松の枝にゐて百色となく百千鳥かな

若菜

七九改まる春にしなれば人毎に年も若菜も摘にぞ有ける

殘雪

八〇越路にはいつも消せぬ雪なれば冬の形見と見人も有じ

梅

八一匂なくに手折る袂の移香や散行く梅の形見なるべき

柳

八二春雨に降りかゝれども綠なる柳の眉は亂れざりけり

早蕨

八三武藏野の草葉にまじる早蕨をげに紫の塵かとぞ見る

櫻

八四花に倦で遂に此世を背きなば吉野の山を栖にはせむ

春雨

八五さは姫は睦月にくだる雨にてや春の色をば染始むる覽

春駒

八六望月のみまきにあるゝ春駒は秋の半や人にひかれむ

歸鴈

八七時しもあれ鴈歸る也こし方に花に優れる花や咲らむ

呼子鳥

八八呼子鳥霞の關に聲すなり過ぎ行く人を立ち止れとや

苗代

八九苗代の種まく賤はかねてより秋の盛や先づ覽ゆらむ

菖菜

九〇數ならであれ行く宿に獨ゐて心すみれの花を見る哉

杜若
一八おしなべて澤邊に茂る杜若何を隔つる名には立らむ
藤
二八松は岸庭は水かと見ゆるかな藤なみかゝる宿の袂は
歎冬
三八花毎に散る習ひこそ悲しけれ又山吹も惜むかひなし
暮春
三八諸人の惜むに止る今日ならば春にてのみや年の暮まし
夏十五首
更衣
五八櫻色のひとへを尚も懐かしみ夏の衣にやがてする哉
卯花
六八卯花の波か雪かとおぼ一八鳥さ見えしとは櫻のみかは
葵
七八我宿のこすゑをはやす葵こそ賀茂の社の惠なりけれ
郭公
八八斯計り待つかひ有て郭公里なれぬ間の知べにもせよ
菖蒲
九八あやめ草ふくべき隙も見えぬ哉葱茂れる宿の軒端は
早苗
一〇九早苗とる安のわたりの片嵐去年の刈田は寂しかり鳧
照射
一九さを鹿の聲立て鳴秋ならばいかに照射の哀ならまし
五月雨
二九梅雨の日をふる儘に水馴川水馴し瀬々も面變りつゝ
橘
三九我宿に花橘を植ゑ置かむなからむ跡の忘れがたみに
蚊遣火
四九夕されや立出て涼むかひぞなき蚊遣火燻る賤が垣ねは
螢
五九夏ふかみ螢とびかふ宵の間は秋の哀になる心ちして
氷室
六九すべらきの長閑き御代の徴とて夏も氷の消せざる覽
泉
七九眞清水の岩間を洩る音聞けば掬ばぬ先に涼しかり鳧
蓬
八九我廬ふ蓬の上にゐる見ればあだなる露も羨まれけり
荒和祓

誓より命のぶてふ例とてなごしの祓せぬひとぞなき
秋二十首
立秋
〇〇とことはに秋の心になれる身は風の音にも驚かぬ哉
七夕
一〇ひこ星の妻迎舟けふこそは天の川風こき出でぬらむ
萩
二〇住吉の遠里をのにきて見れば眞萩が枝に花咲にけり
女郎花
三〇世を捨つる我曇染の袖ふれてをるも優しき女郎花哉
荻
四〇侘人の宿には荻をうゑおかじ風吹く度に哀そひけり
薄
五〇を薄に吹く秋風は行く人を招きとめよと思しもせじ
刈萱
六〇強ちになに亂るらむ刈萱のわきても風の吹かぬ物故
蘭
七〇年をへて秋の野毎に匂へども着る人もなきふぢ袴哉
雁
八〇こし方を思ひ列ぬる時しもあれ折知顔に雁の鳴らむ
鹿
九〇鹿の音を心にしめて聞く人や秋の哀を殊にしるらむ
露
一〇一草木まで秋の哀を忍べばや野にも山にも露こぼる覽
霧
一霧隱れ裾野の鹿の鳴くなべに外面の荻も音計りして
駒迎
二東路や秋の半にひく駒はみな望月の影にや有るらむ
月
三限もなく冴行く月を見る程や身の浮雲の晴増るらむ
槿
四儚さを思はむ宿の垣ねにはたゝ槿を植うべかりけり
搗衣
五秋の夜を寐覺て聞けば菅原や伏見の里に衣うつなり
蟲
六蓬生に蟲うちわぶる曉は我が夜床まで露けかりけり
菊
七いとせめて移ふ色の惜しき哉菊より後の花し無れば
紅葉

八紅葉する秋しもなれば音に聞青葉の山も名のみ也鳧
暮秋
九幾秋もわかれぬ年はなき物を習はず顔に何惜むらむ
冬十五首
初冬
一〇散り殘る秋の紅葉をけふは又我物顔に冬の見るらむ
時雨
一一山里の庭の木葉にふる時雨散ぬる色を尚や染むらむ
霜
一二霜冴て衣手寒し尾上にはうつ人もなき鐘やなるらむ
霰
一三しなが鳥猪名の笹原分行けば拂ひもあへず降る霰哉
雪
一四庭の雪に我跡附て出でつるを訪はれに鳧と人や見覽
千鳥
一五さよの浦千鳥しばなく夕されば我哀なる松の風哉
寒蘆
一六津の國の難波わたりを來て見れば茂し蘆も霜枯に鳧
氷
一七廣澤の池に氷はみちにけり何にかやどる冬の夜の月
水鳥
一八水鳥のすだく音こそ聞ゆなれ浮寐の床や氷らざる覽
網代
一九年をへて瀬々の網代に寄るひをな哀とや見る宇治の橋姫
神樂
二〇曉の星のほどにや古へのあまの岩戸をあけ初めけむ
鷹狩
二一狩衣朝たつ野べにいか計りうら悲しくも雉子鳴らむ
炭竈
二二冬くればやく炭がまの煙故よそにもしるし大原の里
爐火
二三終夜わが枕なる埋火のしたに燻るをよそにやは見る
歲暮
二四春秋に別しよりも行年の身に止るこそ悲しかりけれ
戀十首
初戀
二五君に今日知せ初めつる徴にややがて涙の色に出らむ
忍戀

[13]嬉しさにあらぬ物ゆゑ忍ぶとて涙を袖に包みつる哉
初逢戀
[14]隙もなく落つる涙の積りては逢そめ川と成にける哉
不ㇾ逢戀
[15]身に換て思ひとは知らる共偖戀しさはかひや無らむ
片戀
[16]強ちに厭ふをしひて戀る哉片思とは是にや有るらむ
後朝戀
[17]○從ふと見えつる今朝の面影を暮待つ程の慰めにせむ
遇不ㇾ會戀
[18]一驅て後變る氣色に戀死なば逢に替つる名をや留めむ
旅戀
[19]二草枕まどろむ夢に君を見て寢驅ぬとこと思ひける哉
思
[20]三汲てしる人や無らむわたつ海の千尋の底の深き思を
恨
[21]四藥鹽やく磯べの蜑に非ねども恨みて年の積りぬる哉
雜二十首
曉
[22]五すむ月の山のは近くなるまゝに物哀れなる有明の空
松
[23]六宮ゐして年を津守の浦なれば神さびにけり住吉の松
竹
[24]七唐人の友に賴みし呉竹を我もまがきに添へて見る哉
鶴
[25]八蘆たづは晴たる空に遊べども千年の雪は消せざり鳧
山
[26]九憂身迄樂しかるべき萬世と呼ばふ三笠の山の峽かは
河
[27]一〇葵草叙にさせる其日こそ賀茂の川原は優しかりけれ
野
[28]一一露結ぶ淺茅が原に風過ぎて哀はかなき野べの暮かな
關
[29]一二東路を遙に來つるかひありて都の人にあふ坂のせき
橋
[30]一三世を渡る橋をもいかゝ造べき心工もなき身と思へば
海路
[31]一四漕出でゝ果なき海を見渡せば先だつ舟の雲に消ぬる

旅
[32]一五都をも遠かりぬと思ふより最と山路ぞ苦しかりける
別
[33]一六旅衣つひにそぼちむ折々は別れし袖を思ひおこせよ
山家
[34]一七物毎にものゝ哀をすゝむるは片山里の住ひなりけり
田家
[35]一八なるこひく賤が門田の村雀囀傳ひして立ち騒ぐなり
夢
[36]一九長き夜の夢のうちにて見る夢は儚き中に儚かりけり
懷舊
○20同じくば思出ある我身にて過にし方を忍ばましかば
無常
[37]二一儚なしや今日も暮ぬと云々て夜はの煙と何か昇らむ
釋教
[38]二二鷲の山五つの雲の晴れてこそ渡間の月も顯れにけれ
祝
[39]二三さゝれ石に苔のむすまで座せと君をぞ祝ふ今も昔も
述懷
[40]二四墨染の袖をぞ絞る垂乳根のゝらましかばと思續けて

百首和歌
春二十四首
[41]二五さほ山に霞の衣縣てけり春のきぬとや人の見るらむ
[42]二六山深み月日の數を數へずば春立今日を爭でしらまし
[43]二七山深み都のかたは霞めども氷もとけず鳥も來鳴かず
[44]二八朝霞我より先にたなびきて子日の松も見えぬ野べ哉
[45]二九谷深み岩本小芹摘みに出てそをだに春の徴と思はむ
[46]三〇今よりは宿のまがきに竹うゑて鶯の時さだめむ
[47]三一いつしかと霞みにけりな鶯は谷の古巢を今や出らむ
[48]三二梅の花匂ぬ匂も惜しからず佛の爲にをるにしなれば
[49]三三野べ毎にもゆる蕨の煙こそ四方の山べの霞なるらめ
[50]三四衆てより見に物うき巖哉をられじとてや手を握るらむ
[51]三五春毎に四方の山べに咲く花を宛ら宿に移してしがな
[52]三六苦人の吉野の山と急ぐかないづくも同じ櫻なれども
[53]三七浦ならぬ長柄の山の小波は散交ふ花のよそめ也けり
[54]三八吉野山尋入にし其かみは花見むとしも思はざりしを
[55]三九花の色に心を染めて常磐なる身の歎をば忘れぬる哉
[56]四〇柴の戸に匂ふ櫻を見ても先吉野の山の峰をしぞ思ふ

[57]四一何事も思ひ捨てたる山里に忘るよしなく匂ふ花かな
[58]四二暇ぬれば七日も待たで互ぞ散な哀あだなる花の上哉
[59]四三なべて吹く風の氣色も唯ならじ花の梢を渡る折には
[60]四四櫻花惜み乍も木の本にちりかゝるこそ待つぞ劇なき
[61]四五春深み吉野の里を來て見れば花の八重雲ぬ宿ぞなき
[62]四六淺ましや散行花を惜む間に櫓も摘まずあかもくまれず
[63]四七こし方を思ひつらぬる夕暮に山飛越えて歸る雁がね
[64]四八を山田の苗代水をまかすやなかき春日の賤が慰み

夏十五首
[65]四九今日とても何かは替む常とはに只一重なる墨染の袖
[66]五〇郭公さ夜ふけがたの一聲は夢に聞つる心ちこそすれ
[67]五一數ならぬ身の浮雲の類哉晴るゝ間もなき五月雨の空
[68]五二澤田川槇のつき橋うきぬれば人も渡らず五月雨の比
[69]五三五月雨の日をふる儘に眞菰生る沼の岩垣隱れ行めり
[70]五四世を背く宿には葺かし萬浦草心のどまる妻となり鳧
[71]五五住侘ぶる山里からす郭公おなじなくねも哀そひけり
[72]五六五月雨の降りしひ空も哀也はと吹く秋の風ならね共
[73]五七身のうさを數に社され五月雨の軒の菖蒲に傳ふ雫を
[74]五八橘の匂はぬ宿にすむ人はなにをつまにて昔戀ふらむ
[75]五九露の世のつひの思と見ゆる哉蓬がもとにもゆる螢は
[76]六〇年を經て物かくしぬ螢かな思の程を色に見せつゝ
[77]六一下燃の思は誰も劣らねど色に出づるは螢なりけり
[78]六二我宿を訪ふべき人もなき物を叩くはよはの水鷄也鳧
[79]六三外面なる梧の木蔭に隱ろひてまだき秋めく夕月夜哉

秋二十三首
[80]六四哀てふ秋立ちぬれば物思ふ袂にぞまづ露はこぼるゝ
[81]六五機女の稀に逢ふ夜の呉竹は絕えぬ契ぞ常磐なりける
[82]六六七夕のけさの涙はまたるらむ紅葉の橋に色や紛はむ
[83]七〇いはれ野に尋來れば女郎花口なし色ぞ哀なりける
[84]八〇ほに出て招く尾花や秋の野に人まつ蟲の使なるらむ
[85]九〇秋の野の荻の上葉に風吹てこぼれにけりな萩の下露
[86]一〇身にしみて秋の心を勸むるは荻に音なふ野べの夕風
[87]一一女郎花艶く樣もめに立たず花の袂をぬげる身なれば
[88]一二袖にゐる涙の露をたよりにて袂にやどる秋の夜の月
[89]一三糸薄吹きな亂りそ野べの風機をる蟲に任せてを見む
[90]一四心あらむ都の人にかたらばや片山里の秋のあはれを
[91]一五年をへて影も變らず澄月は浮世の中と知るや知すや
[92]一六女郎花なまめく野べの思草尾花が本に茂りぬるかな

七身のうさや月の光に類ふらむ秋の心ぞ空に知らるゝ
八暫しだに慰む方や無らまし月も憂身を厭はましかば
九聞く人の心ぞたへぬすが原や伏見の暮のさを鹿の聲
一〇よを重ね妻よぶ鹿はいか計小野の草臥露けかるらむ
一一春夏は何か心をなぐさめて秋しも鹿の聲をたつらむ
一二秋は只嘯や悲しき宜しこそ鹿も聲をば惜まざるらむ
一三今よりは宿をそ野べに移すべき野を移すには鹿の鳴ぬに
一四秋山の紅葉は露や染めつらむ時雨は冬の物と社聞け
一五山里の竹のかけひのほそ水に心して散れ峯の紅葉ば
一六行く秋を惜む袂の夕露やあすはわりなく袖に殘らむ

冬八首

一七何方へ廻り行くらむ初時雨柴の編戸を今ぞ過ぐなる
一八紅葉の散果てぬれば槇のやに降時雨社紛れざりけれ
一九さほ山の柞の杜の木の本は散を見る社怪しかりけれ
二〇寂しさを何に譬へむ世を捨つる吉野の奥の冬の夕暮
二一冬の夜は籬の竹に吹く風の度々夢をおどろかすかな
二二汝のみぞ絶えず音すと思ひつる筧の水も氷しにけり
二三雪解の雫の音の絶えぬるはよはの嵐に垂氷しぬらむ
二四天くだる神の御前に庭火たく煙は雲の心ちこそすれ

雜十六首

二五鳥の音に鐘の音さへ打添ひて明くるは著き東雲の空
二六旅寝するゑ島がさきの磯枕波に立ちそふ我が涙かな
二七日にそへて數ならぬ身の慰めは過にし方を忍ぶ計ぞ
二八住怳て濁れる世をぞ厭ふかと人數ならぬ人に問ばや
二九かねてより思ふも悲し獨ゐてうち眺むべき夕暮の空
三〇あしかりし身社變らね皆人は難波のとも昔ならぬに
三一斯しつゝ明ぬ暮ぬと長へてまつとは何味氣なの世や
三二花咲かぬ歎に沈む行末は何の身にかはならむとす覽
三三高き山深き谷こそ哀なれさならぬ人は音づれもせず
三四庭もせにおつる木實にめがれすな峰の檜原に猿鳴也
三五慘しな山かたつきて住むべきを何と浮世に留る心ぞ
三六浮世には何に返らむ大海の片ゆく波の立もいでなば
三七草結ぶ枕ぞおかぬ岡のべの蟲の音ゆゑに落つる涙に
三八岩ねふみ重なる山を數へつゝ辿かりゆく都をぞ思ふ
三九自ら心をすます時もあらじ寂しきことをなれぬ類ひは
四〇頼べき方こそなけれ風渡る扉押開く花が末の露計だに

戀十四首

四一我が心慰めかねつわぎも子が姨捨山の月ならねども
四二我戀は人知れぬまの菖蒲草君が心にひくと聞かばや
四三忍ぶとて逢と難き戀なればよその人をも恨べきかは
四四待じとはいつか知べき一筋に心の裏は逢むとのみぞ
四五いかなれば涙の雨はかゝれども燃る思の煙らざる覽
四六かくしつゝ戀の涙に沈む身は後世とても浮びもせじ
四七おのづから見えつる君が情こそ戀の病の藥なりけれ
四八さしも斯厭ふ心のつらければ逢見てきやと云散さまし
四九苦しさは劣らじ物をあながちに厭ふ心も戀ふる心も
五〇今は唯つらき思はさて置つ逢ふ嬉しさを我に教へよ
五一いかにせむ見ゆる思を遂にさは心の中にけちて已ぬる
五二さしも斯袖に隙なく晉露の言の葉毎に懸らぬぞうき
五三妹は山憂身は空の雲なれや思懸かれば打時雨れつゝ
五四忍歎き逢はぬ夜數の積る哉幾度ばかり夢に見つらむ

不レ爲二百首之義一自然所レ詠之拙歌等取集書レ之滿二百首一也

日吉百首和歌

春二十首

五五東より日を數へてや春はこし今朝しも霞む音羽山哉
五六妹せ山霞の袖を引懸ていはでや見する春のきぬとは
五七ふじのねの雪げの雲を吹のけて霞にかふる春の初風
五八霞しく松浦の沖に漕き出でゝ唐土までの春を見る哉
五九心なきひとに見せばや霞しくたかつの宮のはるの曙
六〇くれ竹を宿の籬にうゑつれば鳴く鶯も友となりけり
六一夕まぐれ雉たつ澤にゑぐ摘めば春の哀に袖ぞ濡ぬる
六二梅の花匂ふ垣ねを尋ぬればそなたの風ぞ知べ也ける
六三山里は春こそ人は待たれけれ梅の立枝に宿を任せて
六四影うつす柳の絲をたよりにて波のあやおる立田川哉
六五昔見し人の煙や吉野山花にまがへるくもとなるらむ
六六吉野山もと住む人に尋ぬればねたくも花の主顏なる
六七吉野山浮世を厭ふ神かとは花見ぬ人やいひ初めけむ
六八味氣なや花に心のあらばこそ惜む思の程も知れめ
六九花の色をこむとも何か恨みまし風を隔つる霞也せば
七〇歸る雁雲ゐはるかになりぬれど霞に殘る聲のもろ聲
七一定なく行返るにぞ知られぬる鏡くも同じ假の宿とは
七二故郷は庭もまがきもあれ行けば心どゝまるつばくら哉
七三山吹の移ろふ水にみがくれてゐでの蛙の聲恨むなり
七四君に逢て厭ひし鳥の聲す也春に別るゝよはの寢覺に
七五櫻色に衣をたゝばぬきかへし山郭公鳴きてとがめよ
七六武隈のまつかひもなく郭公二聲とだに鳴かで過ぐ覽
七七郭公來鳴かぬをりは橘の梢にこゑはあるこゝちして
七八賤男が今日は早苗に紛るとも庵もる秋は心すむべし
七九五月雨はさのゝ入江に水こえて出ぬ尾花や瀧の浮草
八〇五月雨の晴れぬみ空を眺めつる秋にふるは涙也けり
八一見る月の草も搖がぬ日盛りに暑さぞしげる蟬の諸聲
八二山陰や岩もる清水音さえて夏の外なる日ぐらしの聲
八三夕されば外面にたてる楢の木のうれ吹風も空や涼き
八四夏祓更け行く空を眺れば頓て身にしむさほの川風

秋二十首

八五いかにとよ殘多かる哀かな今朝吹き過ぎぬ秋の初風
八六織女はかへす衣の袖朽ちて今宵は何をひき襲ぬらむ
八七小萩原上には露の玉ちりて下には蟲の聲みだるなり
八八秋の野の花には主もなき物を誰が園ひける露の色ぞ
八九夕まぐれ難波わたりを行雁や蘆手の上にかける玉章
九〇高砂の尾上を戀ふる鹿の音は松吹く風の句なりけり
九一都出て又歸らじの栖には鹿鳴く野べを占べかりけり
九二逢坂は月の關とぞなりにける東の駒も今宵こそ引け
九三月影のくもる夜もなく見ゆる哉千里の氷幾へ重ねつ
九四照る月の光とともに流れきて音さへすめる山川の水
九五月影の澄なき秋の程計り夜舟こぐらむ聲とならばや
九六山の端は天の川瀬の島なれや月のみ舟の漕隱れぬる
九七住吉の松吹く風も神さびて夜渡る月の影たけにけり
九八月影の入りぬる跡を思ふかなまよはむ闇の行末の空
九九月を見てすめる心の行末は同じ西にぞ廻り逢ふべき
一〇〇衣うつ砧の音の身にしみて哀は物の深くなるかな
一〇一野べの蟲尾上の鹿よ汝は又秋の哀を何ゆゑか知る
一〇二立田山深くなりぬる秋の色は峰の紅葉に顯れにけり
一〇三世の中を思も入らぬ人にさへ心をつくる秋の山里
一〇四行く秋の今はかぎりの夕暮にいと心なき秋の風かな

冬十首

一〇五寂しさを棹ばかりに殘し置て庭の木の葉を拂ふ谷風
一〇六時雨をも木葉とのみや思はまし槇の板やの疎ならずば
一〇七村時雨槇の板やに訪づるゝ絶間をつぐは木の葉也鳧
一〇八怳人の宿を時雨は過ぎぬれど尚ふり止まぬ袖の上哉
一〇九神無月時雨は過ぬ竹の葉にはげしき音や霰なるらむ
一一〇宿もなし今朝怳しらに越來つる荒地の山の雪の夕暮

二降る雪に浦の松かぜ埋れて磯うつ波の音のみぞする
三木枯の蓬が杣に月さえてよわりし蟲の聲ぞさびしき
四沖つ波をり哀なる千鳥哉うち悲しさを思ひ知れとや
五獨ゐてうち眺むれば年月の暮れ行く空に鐘聞ゆなり

戀十首

六紅に千しほそめつる色よりも深きは戀の涙なりけり
七我戀は龜の上なる山なれや名をば聞け共見ともなし
八人知れず逢見ぬ先の俤をあらぬ樣にや思ひつくらむ
九思寐の夢は儚き物なれど見つる名殘は嬉しかり鳧
十思出る戀路にすゝむ俤はかへさを知らぬ知べ也けり
十一脫置かむ我が後世の人も見よ泪に曇る袖のけしきを
十二人はうし慰めつべき方もなしこはいかにして長へよとぞ
十三是をだに君が情と思ひなむあらましとも誰か繰りぞ
十四人つなぐ浮世の中の綱や何戀にまとはる心なりけり
十五かねて思へ限知られぬ恨哉幾後の世か報い果つべき

述懷五首

十六世の中に草の庵は多かれど露のうき身ぞおき所なき
十七朝夕に野山にかゝる心哉つひの住かや我身なるらむ
十八深み寂しき宿の主とは成おほせたる身にしも有哉
十九年經れど春のよそなる身にしあれば心は何も秋の夕暮
二十世を厭ふ心の深くなるまゝに過る月日を打數へつゝ

無常五首

廿一火の車けふは我門やり過て哀いづちに廻り行くらむ
廿二朝附日さすや岡べの草の葉に縋れる露をよそにやはみる
廿三闇路には誰かはそはむ死出の山只獨社越むとすらめ
廿四況て思へ彳ば西に生るとも死なむ別は悲しかるべき
廿五いへば愛し死ぬる別の遁れぬを思も入れぬ世の習こそ

雜二十首

廿六立初し八雲の色やいかならむ心にしめぬ人のなき哉
廿七かくばかり浮世に猛き武士の慰む程の言の葉もなし
廿八君が代は澤邊のたづのゐる跡の千尋の底に成果る迄
廿九聞渡る長柄の橋の古をほの見しまへと思はましかば
三十秋風に我が故郷を來て見れば暫し止れと鶉鳴くなり
卅一月影のさすかと見れば柴の戸に明くと告也鳴の羽掻
卅二旅の世に又旅ねして草枕夢のうちにも夢を見るかな
卅三東路や山踏み越ゆる旅寢には夢は都を隔てざりけり
卅四夕おきに都遙に眺むれば心のはてもなきしほぢかな
卅五夕まぐれ唯獨ゐて眺むればあはれ過ぎたる庭の松風
卅六さらぬだに心細きをさゝがにの軒に糸引く夕暮の空
卅七わが心つきはてぬとや庵さす姨捨山のいりあひの空
卅八吉野山思入る共かひも有じ浮世の外の住かならねば
卅九跡絶る岩の懸路の奥の庵や世の憂目見ぬ住ひなる覽
四十秋ざのみ眺めし夜はの月影は心の空にすみける物を
四一連の上の露を長閑に眺ればかけこし玉も顯れぬべし
四二皆人の心のたねの生立ちて佛のみをば結ぶなりけり
四三故郷の鶴の林に入る月のわくる光はかゞやくにぞすむ
四四神がきや願をみつの濱風に心すゞしきしでの音かな
四五泡沫のはかなく結ぶ山川を神の心にまかせつるかな

御裳濯百首　二見

春二十首

四六今日も尚霞る空に雪散りて花の春をも知らせ顏なる
四七吉野山入にし道も遙かれ岩ねの松になほ子日せむ
四八東にはたえぬ煙を便りにてむろの島や先霞むらむ
四九霞はつげて出らむみ山べを春のよそにも思ひける哉
五十かつ〳〵も若菜つめとや片岡の朝の原の雪の村消え
五一色見れば分れぬ物を春の夜の關こそ梅の匂なりけれ
五二立田川波もてあそぶ青柳のうち亂れ髪をけづる春風
五三更級や姨捨山の夜はよりは吉野の奥の春のあけぼの
五四み吉野の吉野の山の山よりも春ぞ心に色は見えける
五五吉野山あだに眺むる花よりも偖く散るは涙なりけり
五六花咲かぬ山はよそにも著き哉いつかは懸る峰の白雲
五七柴の戸に匂はむ花は遙眞眺めてけりな恨めしのみや
五八吉野山尚しも奥に花咲かば又あくがるゝ身とや成なむ
五九よし野山春の梢をながむれば風にぞ消ゆる花の白雪
六十春もまた霞をわくる聲すなり越路の秋は歸る雁がね
六一玉章のうらひき返す程なれや霞とびわけ歸る雁がね

夏十首

六二ぬしからに春も寂しき山里と思ひも知らぬ呼子鳥哉
六三藤の花匂ふ盛は田子の浦による白波の色もなつかし
六四山吹の散るを待間の程計をらでを見せよやでの川波
六五日にそへて霞晴行ふじのねは煙ぞ春の名殘なるべき

夏十首

六六春夏をへだつる宿のうつぎ垣咲かぬ方には鶯ぞなく
六七宮ゐせし昔にかゝる心かなそのかみ山の葵ならねど
六八郭公いかで聞まし忍音をたらしの岡に尋ねざりせば
六九梅雨に軒の菖蒲も萎るめり浮寢をかくる袂のみかは
七十郭公なく一聲に明くる夜を物思ふ身はなほ殘しつゝ
七一夏蟲の思のみかは暮行けばゐでの蛙も聲たてつなり
七二宿さびて夏も人めは枯にけりなに茂るらむ庭の村草
七三風の音も秋に先つ心ちして鹿なきぬべき野べの夕風
七四山深み岸の小萩も咲にけり今日や名越の祓するらむ

秋二十首

七五夕まぐれ秋と覺ゆる風の音に思も敢ず露ぞこぼるゝ
七六山里に鹿鳴く秋の初つゆは袂よりこそおき初めけれ
七七月を見る心のやがて嬉しきは閨路の末を思ふ也けり
七八唐國の空も一つに見ゆる迄あしやの沖にすめる月影
七九さえ渡る月の光にふる雪は晴行くまゝに積る也けり
八十恨めしやか計誘ふ月を見ていかに心の變らざるらむ
八一月かげに衣しでうつ音さえて鹿鳴きかはす秋の山里
八二衣うつ音に知れとや秋の夜の深きあはれも深草の里
八三片岡のかやが茂みに鳴く蟲の聲に亂るゝ我が心かな
八四はかなさを思ひもしらで長らふる人の心や朝顏の花
八五粟津野の尾花が末にほの見えて霧立渡る勢田の長橋
八六漏塵やく煙も霧もうづもれぬ須磨の關やの秋の夕暮
八七東雲や關の岩かど霧とぢて鳥の聲にも尚明けぬかな
八八秋の野のすゝの篠屋の夕暮も尚身におはぬ住ひ也鳧
八九白菊の花はいかなる宿なれば移ふ色のまづ待るらむ
九十日にへて色變行く秋山の行方思ふも味氣なの世や
九一紅葉散る賤機山のさを鹿は錦をきてや妻を戀ふらむ
九二小萩原露漲々になりにけり戀しかるべき庭の面かな
九三夕まぐれ弱り果てぬる蟲の音に急き時雨る我が涙哉

（第十九首百首之内二首重出）

冬十首

九四宿占しかひも有哉初時雨庭の木の葉に訪づれて行く
九五立田山梢にすぎて見ゆるかな麓の里の庭のあはれさ
九六しながが鳥ゐなの旅寢のさゝ枕哀に迫る夢路なりけり
九七山里の木葉踏分けとふ人もなかりし庭に雪は積りぬ
九八勝間田の池に浮寢の床絶てよそにぞ過ぐる鴨の村鳥
九九鹿の音に哀をいかで殘しけむ開明しけるさよ千鳥哉
百み山べの心細さの眺せりやく炭竈のけぶりばかりを
百一寢覺するよはの埋火かきのけて問ふ灰占も憂身也鳧
百二朝倉の聲ばかりをば返せども昔は遠きしめのうち哉
百三終夜みよの佛の名を聞けば現も覺むる心ちこそすれ

戀十首

二奥山の谷の埋木苔むしてしる人もなき戀にくちぬる
五我戀は難波堀江の蘆のねの水隱れてのみ年をふる哉
六絶えぬ哉逢はぬ歎をこりつみて思にくゆる宿の煙は
七獨寢の夢路の空の袖の雨は覺めてぞ最ど降增りける
八涙川我もしづみぬ猿澤の池の玉もよそにおもはじ
九自ら睡む夢に妹を見て寢てゝ覺めても物をこそ思へ
〇戀路には浮世を出る門出とも思もわかで入にし物を
一世を厭ふ心を頓て誘ひ來て戀を嬉しき物と知りぬる
二我妹子に限りしもせじ大方の戀とは人の情なりけり
三夕まぐれ露をば袖の物にして我立つ草に秋風ぞ吹く

述懷五首

四みこそあらめ我心なる心さへ人數ならで長へにける
五思入る心の末を尋ぬとて暫し浮世にめぐるばかりぞ
六せめて倘浮世に止る身とならば心の內に宿は定めむ
七大空の眺をだにもせざりけり身を知雨の雲に紛ひて
八古へにかへす心のたどるかな弘めし法の道と思へば

無常五首

九鳥邊山よはの煙の立つ度に人の思やいとゞ添ふらむ
〇永き世の夢の別と思へども又此世にはあはむ物かは
一皆人の知べもなくて行道に尙惑ぬる身をいかにせむ
二惑ぬる昨日もけふも見し人の夢に成行く永きよの空
三儚なさにいかで堪へまし是ぞ此世の理と思爲さばや

雜二十首

四人は皆哀も知らで止みなまし秋の夕暮春のあけぼの
五寢覺して物思ふ宿の有明に月影わくる鴫のはねがき
六浮寢して都へ歸る浦風になさけをかくる波の音かな
七待て暫しわりなく通ふ心かな見ぬ唐土の山の奥まで
八我身こそ隱しかねぬる葛城や奥なる谷も浮世也鳧
九草の庵を厭ひても又如何せむ露の命のかゝる限りは
〇迷ひなむ木々の梢のうきぞとは打見度に涙おちして
一入る月よ隱れな果てそ世の中をいとふ心は有明の空
二朝夕に梢にすだく村鳥の手狗ひになるゝみ山邊の里
三庵さす片山岸のみゝづくもいかゞ聞きなす峰の松風
四山深みなか〳〵友となりにけりさ夜ふけ方の鳥の聲
五柴ぐりの色づく秋の山風に梢をちらぬ木の葉猿かな
六いかにせむ友社なけれ山の犬聲怖しきよはの寢覺に
七松が枝に枕定むるかもじゝのよそ目あだなる我庵哉
八谷川の音に月すむみ山べはそれさへさゆる磨鳳の聲
九人住むや熊棲む山の谷に來て其に馴ぬる身ぞ哀なる
〇此世うし虎伏野べはまだ知らすいざや疎らの谷の栖へ
一後の世も樂しかるべき鳥なれや三の寶を聲に任せて
二津の國の蘆毛の駒に法の跡は我思入る道にぞ有ける
三憂身をば神にぞ祈る神風や伊勢の濱荻波にくたすな

此一首御奥書歟二十首之外也

人並に我言の葉を散らさばやいすゝ川原の秋の夕暮
依二圓位挙人勸進一文治四年秋詠レ之爲二大神宮法樂一也云々只結緣也

厭離百首

四季五十首　文治三年十一月晦日三體之和謌之和謌作始也

春

五ながきよの夢見はてゝむ大ぞらや心にねがふ春の曙
六つひになほ思ひ入るべき山のはを哀れ隔つる夕霞哉
七世中も厭ふ我が身もおしなべて皆鶯の音こそ聞ゆれ
八梅の花手折りて瓶にさす春はありか優しき墨染の袖
九住侘びてあらぬ筋には亂るとも春は忘れじ青柳の糸
〇木の本を住かにはせむ偖くも散行く花に心つきけり
一色にそむ心そむれば山櫻咲も待たれず散るも惜まず
二はかなしやゝがて散りぬる花故に思は殘る春の山里
三久かたの月もあはれと照すらむ風に音なき花の匂を
四春の花櫻が枝に宿かりていかに程なくねに歸るらむ
五唯思へ風待程の露の身は何かは花をよそに見るらむ
六我も又もとの都へ歸らばや越路の方へ雁も行くなり
七世の中を厭ふ思も早蕨ももゆる迺は目に見えばこそ
八春の田の打任ても世に住まば又罪をさへ作べきかは
九野べやけば冬の命をのがれ來て今は限と雉子鳴く也

夏

〇花の色ぞよそになりぬる夏衣ひとへに今は墨染の袖
一世を厭ふ軒ばに薰る萬葉草今年計りや妻は見るべき
二世中にあな卯花と見ゆる哉いつ迄とてか垣根占らむ
三いつ迄か斯も思はむ郭公鳴ぬをまつと鳴くを嬉しと
四ほとゝぎす花橘の枝にゐて昔の人のうへかたるらむ
五偖しや今日は早苗と急つゝ秋待附けむ身とや成なむ
六時わかぬ心の空の五月雨も草の庵にはれざらめやは
七賤の男も照射に向ふ鹿を見て物の哀や思ひ知るらむ
八身を棄る火取蟲こそ哀なれなど後の世を斯は思はぬ
九澤水にすだく螢の光だに尙あるまじき闇路なりけり

秋

〇世の中の憂きをも知らで長らふる人驚かす秋の初風
九心なき人に心をつけとてや秋と云比の世には有らむ
二津の國の蘆毛の駒に法の跡は我思入る道にぞ有ける
三憂身をば神にぞ祈る神風や伊勢の濱荻波にくたすな
一後の世も樂しかるべき鳥なれや三の寶を聲に任せて

二思ふ人絆とならぬ身の爲は苦しくもなき山路也けり
三こはいかに又こはいかにとに斯に唯悲しきは心也晃
大朝夕に頭の火をもはらふ哉浮世のことを思ひけつて
七知らずとよ水の眞蓋を假世に濟す袂は雫しもせじ
八深き江に番はぬ鷺と成ぬれば行へも知ず蘆のねぞ鳴
九木本に頼む陰とは我を見よ信太の杜の千枝ならず共
〇いはけなき其かみ山に別にし我垂乳女の道を知ばや
一たらちめを戀ふる袂の夕露は別れし人の名殘也けり
二法の道知べはすとも老の身の杖とならずば憎む也鳧
三山深く入行く人の別をば嬉しと見るぞ惜むなりける
四世を背く心の友となる身赴我物からに嬉しかりけれ
五導入る誠の道を知らぬ間は雲ゐの鴿にのる由もがな
六雲雀あがる春の山田に拾ひおく罪の報を思ふ悲しさ
七悲しとよ心の闇にくらされて出でし都の月を詠めぬ
八世々をへてもとの都を尋ぬとも三の界に迷ひぬる哉
九いつか我苦しき海に沈行く人皆すくふ網をおろさむ
〇睡みて又驚くは夢路よりやがて夢ぢに傳ふなりけり
一聞くとても驚く人もなき物を明暮鐘を何とうつらむ
二逢生にいつかおくべき露の身は今日の夕暮あすの曙
三末の露本の雫をよそに見て浦傳する海士ぞはかなき
四阿彌陀佛と十度唱へて睡まむ頓て誠の夢ともぞなる
五出る息の入を待たぬは我なれや歸らぬ道に思ひ入ぬる
六人さそふ峰の嵐の耳なれて驚かれぬは夢路なりけり
七暗きより暗く成なば如何せむやよ待て暫し山端の月
八闇路には過る月日を徒に眺めし社は悔しかるべき
九夢の世は罪を罪とも知らね共報いは有りむ折や思合せむ
〇世と共にあるかひもなき身にしあれば世を捨てこそはかなけれ
一納置千々の金も身にそひて黄なる肌とならば社あらめ
二位山さかゆく峰にのぼるとて誠の道をよそに見る哉
三春の日の長き命と見し人も峰の櫻にたぐひぬるかな
四紅葉ばの散るは理り色かへぬ松の下葉も浮世也けり
五世を渡る心の蘆は難くとも隨行く駒の味氣なの世や
六渡川我れ沈むともいかにして人を助くる舟裝ひせむ
七鳥邊野に送りて歸る人も皆死出の山路のつひの友哉
八山櫻我が手にたをる家苞も古里人はいかなくや見む
九先ちて落つる涙やつひに行く空しき野邊の道芝の露
〇とび鴉とくとくやせむ袋より我身の枝も怖しき哉
一心有て折につけては世を厭ふ人たにもなき此世さぞみる
二阿彌陀佛やあらましとは深江に其言の葉は沈ぬる哉
三津の國の蘆の八重葺隣もなく唱て過よ南無阿彌陀佛
同前一首御奥書歟五十首之外也
四思ひあへず心ぞ感ふ終になほ別の道の別れなれども
僧晴眞擬二草庵一同行者一也偏有二思事一先蟄二居大
原別所一其剩飄吟百首之詠予不レ堪二感情一則時和二
件詠一耳

拾玉集 卷第二

楚忽第一 賸百首　　讀人不知

春之部

立春

五朝まだき春の霞は今日立ちぬ暮れにし年や岡の古里
六子日しにいざ諸人よ春日野へ待こし物を春のけふをば
霞
六八重霞春をばよそに見すれ共哀を能む三吉野の山
鶯
七鶯の出でぬる聲を聞き初めて舊巢にぞ見る春の面影
若菜
八遮莫春の野ざはの若菜ゆゑ心を人につまれぬるかな
殘雪
九消え殘る垣ねの雪の隙毎に春をしみする日影草かな
梅
〇咲きぬれば大宮人も打むれぬ梅こそ春の匂なりけれ
柳
一霞しく春の川風うちはへてのどかになびく青柳の糸
早蕨
二早蕨の折にしなれば賤の女が春手にかくる野べの夕暮
櫻
三散りまがふ花に心の結ほれて思亂るゝ志賀の山ごえ
春雨
四春かさは雨うちそゝぐ山里に物思ふ人のわたる夕暮
春駒
五水くもりに角ぐむ蘆をはむ駒の影逆さまになれる此世か
歸雁
六雁がねよ名殘をいかで忍ばまし花無き山の別也せば
鴬子鳥
七暁めする心を知るか鴬子鳥おのが栖の山はいづくぞ
苗代
八哀なり山田のしづは苗代の水にのみこそ心ひくらめ
菖蒲
九菖だに匂はざりせば故郷の庭の淺茅の枯葉ばかりを
杜若
〇紫の色にそにほふ杜若ゆかりの池もなつかしきかな
藤
一紫の雲にぞまがふ藤の花つひの迎へを松にかゝりて
款冬
二春深み井手の河風長閑にてちらでぞなびく山吹の花
三月盡
三くれなゐに霞の袖のなりてけり春の別の暮がたの空
夏
更衣
四餝なくに春は過ぬる衣手に厭ひし風の立ぞわりなき
卯花
五三輪の山身を卯花の垣古て世をすさみくる徴もせず
葵
六年を經て賀茂の御誕に葵草かけてぞ思ふ御代の契を
時鳥
七郭公聞きつゝや思ふ五月雨の雲の外なるよはの一聲
菖蒲
八萬濃草軒の雫は隙なきをいかなる沼に根を殘すらむ
早苗
九堰も敢ず谷の小川も流めり山田の早苗採るに任せて
照射
〇照射する賤が行への哀さも思ひしらする五月闇かな
五月雨
一梅雨はいかにせよとて山里の軒ばぞ雲の絶間也ける
橘
二橘の花散る里のすまひかな我もさこそは昔語るよすが
蚊遣火
三涼しさか涼しからぬか蚊遣火の煙吹卷く野べの夕風
螢
四よそにかく見るも儚し夏蟲の思ひ計の身に餘るかは

氷室
六九皇の長閑き御代の氷室山あたりまでこそ涼しかりけれ
泉
七九吉野山もとの住ひも涼しきに重ねてぞせく山川の水
蓮
八九池水にめでたく咲ける蓮かなことも愚に心かくらむ
荒和祓
九九みそぎする立田川原の河風にまたき秋立つ夕暮の空
秋
立秋
一〇〇今日よりは如何はすべき世中に秋の哀の無らましかば
七夕
一〇一織女の待ちこし程の哀をば今宵一夜に盡しはつらむ
萩
一〇二賤の男が麻の衣の花摺は萩のなをれの物にぞ有ける
女郎花
一〇三をみなへし花の匂に秋立ちて情おほかる野べの夕暮
荻
一〇四思寝に結ぶ夢路の荻の音はさめても同じ哀なりけり
薄
一〇五わきてしもなにびくらむ花薄風の哀は己のみかは
刈萱
一〇六主あれど野となりにける雁哉尾花が下に鶉鳴くなり
蘭
一〇七秋の野に誰が為とてか染置きし主ほしげなる蘭かな
雁
一〇八花をこそ振捨しかど雁がねの月をば愛づる心有けり
鹿
一〇九鹿の音をおくる嵐にしぐれけり山の奥なる秋の哀は
露
一一〇佗人の秋の夕の跡より野原の露をおくにぞ有りける
霧
一一一思へ唯とほつ嶺の里の哀まで一つにこむる霧の夕を
一一二朝顔の日影待つ間のはかなさも浮世の花と同じ句を
駒迎
一一三いかにして駒にちぎりを結びけむ秋の半の望月の空
月

一一四秋の月遥き影をながめてぞ千島のえぞも哀知るらむ
擣衣
一一五これにしも賤が衣の槌の音に秋の哀の籠るべしやは
蟲
一一六なれにしも劣らぬものを我が宿を蓬が柚の蟲の主よ
菊
一一七浮世哉齢のべても何かせむ汲まずば汲まず菊の下水
紅葉
一一八柞原色づき初むる梢よりかねてぞ思ふ秋のなごりを
九月盡
一一九今宵唯露におくちぬ我袖よ時雨にとても乾べきかは
冬
初冬
一二〇寂しさよ秋は過ぎぬといひがほに皆山里は冬の夕暮
時雨
一二一晴れば袖こそかねて時雨めれ云計りなき空の氣色に
霜
一二二草枕むすぶ袂に霜さえて尾上のかねの音ぞ身にしむ
霰
一二三秋風を人に知らせて荻の葉の枯れにし上に霰ふる也
雪
一二四降閉ぢて庭に跡絶えにけれ雪にぞ見ゆる人の情は
寒蘆
一二五心あてに眺め行くかな難波潟雪の花咲く蘆の枯葉を
千鳥
一二六なにはがた夕波千鳥心せよあはれは松の蔭に籠りぬ
氷
一二七結びおく氷も水も一つぞと思解けどもなは憂身かな
水鳥
一二八寝覺する心の底のわりなきに答へても鳴く妻の聲哉
網代
一二九網代もる賤の心もさえぬらむ宇治の川風波に宿りて
神樂
一三〇神垣やしで吹く風に誘はれて雲ゐになびく朝倉の聲
鷹狩
一三一思ひあへず袖にぬれぬる狩衣交野のみのゝ暮方の空
炭竈
一三二をの山も大はら山も炭がまの煙はおなじ哀なりけり

爐火
一三三人知るや夜はの埋火下燃て空しく暮るゝ年の行へを
歳暮
一三四諸人の身に止りぬる年月の別れぬさへぞ尚惜まるゝ
戀
初戀
一三五茂合はむ筋をも知らず數種の宿の籬に芽ぐみ初ぬる
忍戀
一三六我が戀は忍の岡に秋暮れて穂に出でやらぬ篠のを薄
初逢戀
一三七盡しこし心に籠て知られにき逢見る迄の契ありとは
不レ會戀
一三八等木のよそにのみやはと思つゝ清き伏屋に身を任す覽
後朝戀
一三九歸るさをあらましとにせしよりも尚類なき横雲の空
逢不レ過戀
一四〇偖もいかに逢見ぬ先を厭しはよそ耻しきかたは也鳧
旅戀
一四一時しもあれすみだがはらの郭公昔の人の心知れとや
思
一四二我が思煙をみする世也せば虚しき空にみち耻はせめ
片思
一四三是もこれ心づからに思ふかなおもはぬ人を思よ思よ
恨
一四四夕まぐれ玉まく葛に風たちて恨みにかゝる露の命か
暮
曉
一四五寂しとよやこゑの鳥の聲さえて月も傾ぶく有明の空
松
一四六住吉の神さびわたる松風も聞く人からの哀なりけり
竹
一四七雪降らで冴たる夜はの風の音は籬の竹の物にぞ有ける
鶴
一四八童たづの汐ひに餘る諸聲に棄がれにける海士小舟哉
苔
一四九岩のきる苔の衣の寂しきも春の色をば忘れざりけり
山
一五〇世の中を心高くもいとふかなふじの煙を身の思にて

河
一五ながむれば廣き心も有りぬべしみもすそ川の春の曙
野
二五深きかな玉ちる秋の暮よりも春の燒野の跡の哀れは
關
三五旅寢する不破の關やの板廂時雨する夜の哀知れとや
橋
四五かつしかや昔のまゝのつぎ橋を忘れず渡る春霞かな
海路
五五藻鹽草しきつの浦に船とめて暫しよ聞かむ磯の松風
旅
六五雲隱る都の空を眺めつゝ今日ぞ越えぬるさやの中山
別
七五獨さへ涙すゝむるたよりかな別れしほどの袖の面影
山家
八五岡のべの里のあるじを尋ぬれば人は答へず山嵐の風
田家
九五賤の男はなどや語ぬ小山田の庵もる夜はに止る哀を
儀雷
〇六世の中を今はの心つくからに過にし方ぞいとゞ戀しき
夢
一六思ひとけ夢のうちなる現こそ現の中の夢には有けれ
無常
二六昔人の知り顏にして知らぬ哉必ず死ぬる別ありとも
述懷
三六こはいかに返々もふしぎ也暫もふべき此世とやなる
祝
四六君を祝ふ心の底を尋ぬれば貧しき民をなづる也けり
都遠からぬ山寺に効きごありけり學問などもしつべしとておやの師につけたりけるなり倶舍などもいとようよみけり蚤つかた若き僧達聚りて遊びけるに今の世の歌よみたちの百首とて詠み合ひけるをことの外にのどまりて聞きければ僧達歌よみてむやといさむるを聞きて題書きたる物や侍るといひけるしきとざま隔たく覺えて堀川院の百首を取り出でゝ取らせたりけるをとりて我がゐたる方にたて籠りにけり次の日もさしいでざりければいかになど云ひける程に第三日午の時ばかり此の百首を幼きやうなる手にて書きつけて堂の廣廂のかたに要文うちふぐしてたて置りけり僧ども集りてよみ扇りければ房主も聞きて皆なきにけりさてしもあらじこれがやうに人々に詠ませて末の世の物語にもせばや大人だにかやうの百首はいと有り難きとなりなど云ひけるを聞きて詠まむなど申す人々數多出で來にけりとなむ十二月十一日の申の時ばかり十三日の午の時ばかりまでにそれもひきつゞけ苦もなくひまゝ〳〵にぞ詠み果てたりける古く人のよみたりけるかなど申し合ひければ住吉大明神の悟まれかぶらむとぞ誓言立てける世の末なれどかゝることもある物かな〳〵さて此の百首の名をば早卒露膽の百首と名づけてぞ披露し侍りける

詠百首和歌
（春廿首）

元日立春
五六年の内は霞む山べも見わたさじき春立今日ぞ春は來にける
乘待二子日一
六六君がへむ千代の例と思ひよりまつは久しき子日也けり
霞隔二行舟一
七六八重櫻かすみ沖こぐ舟を隔てゝや波路の宿の遙慣らむ
雪中聞レ鶯
八六鶯の聲は隱れず梅が枝に天ぎる雪はなべてふれども
獨摘二若菜一
九六若菜摘野澤に宿る影をのみまだ戀ならぬ友と見る哉
梅有二遠遙一
〇七梅の花越路の枝にちる雪は咲き遲れたる匂なりけり
門前垂柳
一七我がとを尋ても見よ春のくるしるしの杉は青柳の糸
早蕨未レ遍
二七村むらにかゝる霞を煙にてところ〴〵にもゆる早蕨
櫻花盛開
三七芳野山峰の白雪深きかな花の盛りに成りぞしぬらむ
遙見二春駒一
四七難波江の汀をあさる駒ながら蘆手にみなす蟹の釣舟
曉天歸雁
五七こしの山雪げの雲も晴れのきて綠を分くる雁の諸聲
晩喚子鳥
六七夕まぐれ宿とふ人もなき物を心にくゝも喚子鳥かな
蛙鳴二苗代一
七七春の田の苗代水をまかすればすだく蛙の聲ぞ流るゝ
故鄉桃花
八七故鄉はかきねの桃の花のみや昔の春を忘れざるらむ
杜若浮レ水
九七杜若影も隱れず見ゆる哉水をばえこそ隔てざりけれ
杜間蕫菜
〇八なつかしく匂ふ蕫の色はえて澤みどりなる森の下草
款冬傍レ岸
一八來ても見よゐでの河岸水たえて波に後れぬ山吹の花
樵路躑躅
二八山人の爪木に咲ける岩躑躅心ありてや手折くしつる
藤花初綻
三八咲きそめて松にかゝれる藤波は幾多かる匂なりけり
惜レ春似レ友
四八情ありて東の方へ別れにし人にたがはぬ春の暮かな

夏
貴賤更衣
五八賤のをが麻の衣の袖までも夏來にけりと思ひ顏なる
卯花繞レ籬
六八卯花の垣ねをこめて咲ぬれば夏に入ぬる宿と社見れ
水鷄何方
七八さよふけて宿も定めず叩く也人には非じ水鷄鳴く也
郭公數聲
八八卯にかへて待ちける宿と知顏に聲も惜まぬ郭公かな
沼邊菖蒲
九八年をへて引人絕ず見ゆる哉ありすの沼に生る菖蒲は
關中早苗
〇九小山田に流るゝ水を堰止て今日の早苗は雨に任せむ
蘆橘遍レ砌
一九軒近き花たちばなの夕風に荻吹く秋の暮はものかは
久愛二關麥一
二九撫子のめがれぬ色にぬく露を朝な夕なに打拂ひつゝ
螢火透レ簾
三九軒近くまがよ螢のすき影にげに玉垂のみ簾かけて見む
深更鶉川

[九九]大井川更行く夜はの鵜飼舟是も世渡る道にぞ有ける
夜々照射
[九九]夜を重ね絶せず見ゆる照射哉鹿すむ山の此面彼面に
馬上聞ㇾ蟬
[九八]何となく駒に任せて行道を事あり顔に蟬ぞ鳴くなる
近見ニ池邊一
[九七]心すむ池のみぎはの蓮こそ濁にしまぬ色も見えけれ
泉爲ニ夏栖一
[九六]山陰の岩井の水に宿しめて夏をよそにも過しつる哉
家々夏祓
[九五]疾くにか荒ぶる神は宿るらむ今日祓せぬ宿し無れば
秋
風音秋使
[九四]荻の葉に告つる風は何なれや秋の袂に秋ぞ來にける
庚申七夕
[九三]今年社待えてかひも無るらめ今日は寢ぬ夜の星合の空
荻散ニ溪邊一
[九二]野べうつす宿の籬に風吹けば下行く水に萩が花すり
女郎花攀ㇾ墻
[九一]女郎花本は垣ねに隔つれど來は一つに尚なりにけり
刈萱亂ㇾ雜
[九〇]かるかやの茂る籬に風過ぎて心みだるゝ秋の夕ぐれ
蘭香薰ㇾ枕
[八九]蘭草の枕に匂ふなり誰れぬぎおけるありかなるらむ
荻聲驚ㇾ眠
[八八]夜もすがら物思ふ宿の獨ねに夢だに見せぬ荻の音哉
薄妨ニ往友一
[八七]花薄招けば野べに留るこそ人さへ風に靡くなりけれ
寢覺聞ㇾ鹿
[八六]山里の哀いかにと人とはゞ寢覺の鹿の聲をかたらむ
雲間初雁
[八五]つれてこし友はいくらぞ初雁の雲間を分る聲聞ゆ也
淺茅露重
[八四]白露の宿となりぬる淺茅生も人の住かの行へ也けり
霧中聞ㇾ鶴
[八三]夕霧のへだてぬ宿の垣ねだに鶴の聲は寂しきものを
隣家橘花
[八二]傳さを今日までよそに聞きつるや宿より外の橘の花

夜半駒迎
[八一]ひく駒の影こそ見えねあふ坂の中空にすむ月の光に
湖上翫ㇾ月
[八〇]志賀の浦や浮寢の床に夢さめて長柄の山に月傾きぬ
擣衣聲幽
[七九]槌の音を誘ふ風だにある物をいかなる里に衣擣らむ
蟲聲非ㇾ一
[七八]色々に身にしむ野邊の蟲の音は千種の花に譬ふ也鳧
菊花色々
[七七]秋深み移ろひ果てぬ白菊に心の色を添へて見るかな
雨後紅葉
[七六]紅葉には時雨過ぬる濡色に染てけりとは見ゆる也鳧
每ㇾ人憎ㇾ秋
[七五]皆人の袖に露こそかゝりぬれさこそは秋の暮方の空
多
閑居初冬
[七四]蔭と見し籬の草も多がれて物の哀ぞ身にはそひける
庭草帶ㇾ霜
[七三]故郷の庭の淺茅に霜おりて眺じとても寂しからずや
草庵聞ㇾ霰
[七二]目もあはぬ草の庵にいとゞしく霰ふる也小野の山里
雪朝眺望
[七一]詠めやる心にあとはつきにけりあしやの里の雪の曙
寒潭滿ㇾ江
[七〇]難波江の水の面なるやへ葺は蘆の枯葉の積る也けり
古渡千鳥
[六九]昔思ふ淀のわたりの友千鳥通ひなれたる聲聞ゆなり
氷閉ニ瀧水一
[六八]浮る夜の深き氷に閉られて音羽の瀧も名のみ也けり
水鳥駭ㇾ筏
[六七]筏おろす清瀧川のをし鴛は心ならずや床をたつらむ
綱代群遊
[六六]さ夜更て綱代になるゝ諸人も心すめとや宇治の川風
禁中神樂
[六五]雲のうへのをみの衣に籍さえて星歌ふなり明方の空
廬狩歸路
[六四]御狩野よ朝たつ音は急がれてかへさ物うき夕暮の空
遠近炭竈

炭竈のあたりの空を眺むれば外の煙も匂ひ來にけり
爐火忘ㇾ冬
[六三]埋火のあたりをぬるみ思寢に夢に見えぬる花櫻かな
五節舞姫
[六二]少女子が姿もよそになりにけり曙明に影さゝぬ身は
除夜佛名
[六一]靜にぞ三世の佛の御名を聞く今夜限りの今年なれ共
戀
老後初戀
[六〇]敏鷹の戀てふとをよそに見し老の波こそ立歸りけれ
忍尋ㇾ緣戀
[五九]人知れず尋てぞ行く妹せ川戀渡るべき橋は有りやと
馴不ㇾ逢戀
[五八]鴛鳥の逢瀨もしらぬ河に來て人め計はみなるなる哉
俄初逢戀
[五七]思ひきや心も空になる神の俄に人にあひ初めむとは
歸無ㇾ書戀
[五六]歸るさに又立歸る玉章の君に初めて書き絶えにけり
絶互悔戀
[五五]諸共に大かた通ふ心かな絶えしつらさも悔ゆる情も
城外聞戀
[五四]故郷に片しく袖も露けきを今宵孰處の旅寢なるらむ
等思ニ兩人一
[五三]こゝうへの妹と心を隙もなき夜枯るゝ今宵身には夜枯で
尋常片思
[五二]どことはに心かよはぬ濱に來て鮑の貝を拾ふ悲しさ
人傳ㇾ恨戀
[五一]恨むとは風の傳にぞ知れぬる葛の葉茂き野べの夕暮
雜
曉見ニ漁舟一
[五〇]島かけて沖のつり舟かすむなり明石のうらの春の曙
澗底古松
[四九]谷深みいくら千年の殘るらむ松の木立の神さびに鳧
窓前栽ㇾ竹
[四八]千代ふべき宿の籬に植つれば竹もや君を友と見らむ
苔爲ニ石衣一
[四七]山川のながれ久しき谷かげに苔の衣をきぬ岩ぞなき
仙洞鶴多

九をのへえの朽し磵や是ならむ群居る鶴の主あけになる
遊レ山催レ興
○古野山花や紅葉の折々はならすかひある岩の蔭かな
白鷺立レ汀
一凄き哉賀茂の川原の河風に身毛氣れて驚たてるめり
野亭聞レ鐘
二庵さす野邊吹く風に村消えて尾上の鐘の聲ぞ物うき
夜過二關路一
三足柄の關をよるさへ越ゆる哉空行く月に駒を任せて
行客休レ橋
四橋の上に又くる人も止りけり元より休む友に引れて
海路日暮
五湊川今日の泊りをめにかけて夕日にいそぐ沖の友舟
羇中風吟
六さらぬだに都戀しき旅の庵を身にしみ渡る松の風哉
遣唐使餞
七君ゆゑにしのぐ波路を立ち歸り見ぬ唐土の物語せよ
山家送レ年
八山里はあはれなりけり獨ゐて今幾年かとしを送らむ
田家老翁
九こぞよりも老にける哉苗代の水に映れる知らぬ翁は
就圓祝レ君
○三笠山松の村立端をなみさらでぞしるき君が千年は
夢語二故人一
一古の人に逢見る通路はまどろむ夢の裡にぞ有りける
深觀二無常一
二目の前に變り行くめる世中の心の底に留りぬるかな
山寺懷舊
三おもひ出る心驚けき山寺のひじりの跡に秋風ぞ吹く
聞レ法述レ懷
四法の門に心を入て思ふ哉唯浮世をばいづべかりけり
文治三年十一月二十一日詠レ之
自二九條殿一給レ題與二寂蓮禪門一相共風吟頗不レ宜レ
詠歟
一日百首　十題　但二時一題　之
花
五まだ曉かぬ花の梢を眺むれば枝にまどゐる春の山風
六たどり來て花とは知らぬ山櫻よそめは尚や峯の白雪
七年玄へてさのみは如何郭公尋ても聞く折もあれかし
郭公
八秋の夜の月を愛にて詠めてや明石の浦と云初めけむ
九春はうつりきぬよし野の山は花の都か
我宿は花に讓りて立出でぬ尋ぬる人をよそに歟へて
十春をへて心を花につくば山櫻ならでは繁らさりけむ
一身の程も心もおはす人なみに唯花咲けばしがの山越
二春來れば櫻が枝に風ちりてはなの波こす末のまつ山
三散たれば小波寄する心ちして風も嬉しき志賀の花園
四あかで散る花より後の白雲は花よりも尚嬉しかり鬼
五散も尚ねに歸行く花なれば又くる春も春にぞ有ける
六浮世思ふ我が類ひかな郭公さ月待つ間の卯の花の上
七郭公軒ばに落る聲の色は秋風よりも身にぞしみぬる
八わが君のおもひ出はこれ郭公はな橘の枝に鳴かせて
九雲とづる棹ながめて郭公聞かで聞きつるたい今の空
○深山木のふかき緑に雲消えて聲もはれたる時鳥かな
一をちかへり軒ばにを鳴け郭公聲逕るべき秋風もなし
二ながむべし軒の菖蒲に雨落ちて郭公なく夕暮のそら
三人毎にとひて聞かばや郭公同じ聲をば如何聞きなす
四汝が名をもての田長と聞しより遂の友迄頼むとをしれ
月
五秋の夜の月を愛にて詠めてや明石の浦と云初めけむ
六いかでかはなぐさめか寢む更級や嫗捨山の有明の空
七詠れば心もさらぬ秋の月己がみ空の晴るへのみかは
八類ありや哀も深きみ山べに木の間の月を見る心こそ
九秋野のすゝの篠やの獨寢にもり來る月の無らましかば
○月影の哀をそへぬ夜はならば唯や聞ましさを鹿の聲
一銚くにか月は宿りぬ然はあれど影を磨くは玉井の水
二吉野川岩にせかれて散る玉を磨くは月の光なりけり
三月影のさゆる光をながむれば草をうづまぬ庭の白雪
四廣澤の池の波間に月さえてむかしにかへる有明の月
雪
五ひらの山に雪げの雲は見ゆれ共都の空は時雨のみして
六何となく物哀れなり山里の庭のあさぢの今朝の初雪
七庭の雪に跡の附ぬに思ふ哉人知れぬ身も嬉しかり鬼
八雪積るときはの森の下紅葉忘れぬべきか花も紅葉も
九春秋のをりの哀を洩ぐし來て深くなりぬる雪の山里
○みわの山銚くに今宵宿らましるしを埋む雪の夕暮
一雪積る深山の里に思ふ哉今日迄消えぬ身の儚なよ
二冬の雪ふり荒みたる空こそは眺はいつも哀なれども
三冬深しみ山も深し雪ふかしすめる心はなほ幾くのみ
四降雪のかつ〳〵花と散來れば春の隣を兼て知れとや
戀
五人しれぬ思ふ思はかひもなし戀初て社戀しともせめ
六ふじのねも淺間の山も自らたえ〳〵にこそ煙立なれ
七君故に今よりは知れ逢初て其色よりも深くなるとは
八歸るさは袰れぞまさる道芝の露に袂の露をそへつゝ
九夜をこめて鴛鴦かへさの道すがら心休むる有明の月
○君故にいとゝぞ思ふ身の程はかねても暫し心なれ共
一春くれば花のありかを眺めても思出るは君が言のみ
二郭公鳴きてかたらふ夏の庭もながく思ひは秋の心に
三君戀ぬ人に問はゝや其もなほ月は涙に雲かゝるやと
四我が戀る君だにこば庭の雪に幾らの跡も只つかばつけ
松
五千年まで葉かへぬ松の緑をば君が心の色とたとへむ
六吹きそめし神代もいかに住吉の松の嵐の夕ぐれの空
七武陵の松に心を並べてぞみきとは人に語るべらなる
八ゑに書きて今唐土の人に見せむ靈渡れるこやの松原
九我身こそ鳴尾に立てる一松よくも惡しくも又類なし
○あかぬ哉明くれ"見れど玉橋筒二見の浦の松の村立
一はやはれよ松の奥こそゆかしけれ霧立渡る天の橋立
二靈の子も千代へぬ"しと思らむ蔭に隱るゝ松が浦島
三をしほ山小松がはらの淺緑春の色をば神のめぐみに
四千代ふ共解てや止まむ結つる身の憂ことは岩代の松
竹
五冬來れど寂しくもなし霜や度置け共枯ぬ竹の友にて
六浮世いでゝしむる庵には片岡の一村竹ぞ便なりける
七夕まぐれふしにくげなる竹にしも暇あらそふ村雀哉
八燈火はうてなのうへに消えなくに竹にも殘せ鶯の聲
九戰ふるみ山の里に小夜ふけて外面の竹に風荒むなり
○衣をば竹のさ枝に懸置きて虎に身投し人をしぞ思ふ
一身のうさに人の友をば離れきぬ籬の竹よ我を厭ふな
二河竹の起臥思ふとやなにいかで浮世に立はなれなむ
三ゆられこし其唐土の笛竹の身を吹程の身を思はゝや
四梓弓春にも逢まの竹のあな床しやと見ゆる此世は
山家

三山里の哀はおほきものなれど鹿つま戀ふる秋の夕暮
三山里は哀れ憂身の栖哉ひらくる人もけしきかはりて
七都にて住みし心は山里に思ひまきるゝ時よりもなき
八身のほどを思ひ知りにし其日より深き哀は大原の里
九山里はなくも寂き色にして花も紅葉も見かひぞなき
一〇み山べの葎が下の蟲の音にうちぬる袖の重り行く哉
一一物毎にたゝ思ひやれ物思ふ人のながめはみ山べの里
一二わび人の心の空にこたふなり尾上のかたの松風の音
一三心なき人をばよせじ山のべの庵は中々主きらふなり
一四奥までは心もいかゝ及ぶべきしばし籠のみ吉野の山

海路

一五眺めやる心さへこそ晴れやらね霞こめたる淡路島山
一六須磨の蜑の焚藻の煙絶々にうら寂しくも見え紛ふ哉
一七浮寝する夜はのなごろの程更てよさの浦松風恨む也
一八漕出でゝ今は沖にもなりぬらむ庭の松風聲弱るなり
一九兼て知りぬあなしの風を思ふより心筑紫の波路也とは
二〇遥小舟沖つ島々傳ひつゝたゞ哀ともつみて行くかな
二一舟人の心にもあらぬ別には幾たび袖に波をかくらむ
二二波の音や松の嵐に宿る覺なべて身にしむ須磨の夕暮
二三後の世は沈まむことも思はずや遙に浮ぶ海士の釣舟
二四同じくば唐土舟に乘りて行かむ波路の果に心盡して

述懐

二五何事を思ふ人ぞと人間はゞ答へぬ先に袖ぞぬるべき
二六何事も思ひ透らぬ身なれども心計りは留らざりけり
二七世中をいとふといはむ人毎に我心をば比べてしがな
二八身ばかりはさすが浮世に廻れども心は山に有明の月
二九松の門の跡を思はぬ身なりせば誠に家を出まし物を
三〇人毎にみな極樂を願へども我が心にはなほ深くのみ
三一此度を限にはせむと思よ哉身もうけ難く法もえ難し
三二三笠山蔭を頼ぬ身也せば身をしる雨にぬれや果まし
三三暫しだに晴るゝ心や無らまし日吉の影の照さゞりせば
三四願くは終亂れぬ身となりて十度唱へむ南無阿彌陀佛

隆圓梨詠二百首於一日二之由來語仍誡企二風吟一之間午終又末始歟右筆則西一點書付了

建久元年四月八日詠レ之也

三五住吉の神も新に御覽せよ三時にたらでちる言の葉を
三六唐國に七歩せし類ひとや三時にたらで散らす言の葉

宇治山百首

春

立春

谷川の底より春や立ちぬらむ氷の下に岩たゝくなり
年をへて千代の緑ひさ松を誰か子日と云初めけむ

霞

しほがまの浦の煙のうは霞深き哀ぞ立ちそひにける

鶯

あはれなる身山ぢの曙に鳴きおはせたる鶯のこゑ

若菜

野べに出てゑぐ摘む澤の淺緑春めきに鳧鷖が氣色に

殘雪

春の月木の間もるかと眺むれば垣根の雪の殘る村消

梅

山里の梅の匂をとめ行けば駒の氣色も泥まざりけり

柳

風吹けば立田川原の波の綾を柳の糸のおるとこそ見れ

早蕨

春をへて片岡山の早蕨は折しれとてやもえ初めけむ

櫻

我宿の庭の物とか眺めしを花も憂身も厭はましかば

春雨

待てとはむ物思なき人をすゑて春雨晴れぬ山里の暮

春駒

東路の奥のまきなるあら駒をなつくる物は春の若草

歸雁

己が秋の月を思ひて雁がねは並ぶる春の花に別るゝ

喚子鳥

喚子鳥聞きわくともなけれども眺めに止る夕暮の空

苗代

一八山里の外面の小田の平せ町あらしめはへて種蒔に鳧

菫菜

二〇古里の春を忘れぬつぼ菫むかしの袖の名殘とを見よ

杜若

二一旅人を絶えず三河のやつ橋のくも手隔つる杜若かな

藤

二二築ゆるべき末に遙けき千年ふる松の梢にかゝる藤波

款冬

二三立田川岸の山吹咲きにけりしばしなをりそ水の白波

三月盡

二四我物といかなる人の惜らむ春は憂身の外よりぞ行く

夏

更衣

二五花の色に我袂をば染めざりき衣更うき今日と思はじ

卯花

二六垣ねなす卯花に見えばかり絶間に晒せる作りの布

二七夏の月光は秋に紛ふてほとゝぎす鳴く明ぼのは春

氣色

二八東路や野澤のかつみ今日針菖蒲の名をも假てける哉

早苗

二九小山田のをしれの苗の取々に見ゆる植ゑ女の姿なる哉

照射

三〇よそにても思分くかな照射する夏野の草の深き哀を

五月雨

三一心はれぬ類ともせむよしさらば曇れ梅雨の空

蘆橘

三二昔おもふたよりなりけり立花の花咲く宿の軒の葱は

蚤

三三終夜われこそは見れ飛ぶ蚤字治のを川のまつの梢を

蚊遣火

三四賤の男が垣根にたつる蚊遣火に涼み煩ふ夕まぐれ哉

蓮

三五驚の山八歳の法をいかにして此花にしも喩置きけむ

氷室

三六夏も尚氷室と共にゐるをしの涼しく見ゆる谷の山陰

泉

三七谷かげやいは間の水に夏過ぎて今は秋なる峯の松風

六月祓

三八月を見る身の浮雲も六月の祓にはるゝ秋のみぞ來る

秋

立秋

三九何となく心のすみて覺ゆるは是にもたりぬ秋の徴は

七夕

三〇織女の待つとか今日の思より秋のあはれは夕暮の空
萩
三一我が物と移す計りの袖もがなけふ宮城野の萩が花摺
女郎花
三二女郎花いかなる花の妻ぞと見ざらむ人の我に問へかし
海
三三花薄夏野の鹿をまねきとりて我が物とする夕暮の聲
刈萱
三四みだれたる籬の萱が下折に宿のあるじの心をぞ知る
蘭
三五藤袴我が旅衣幾日へて園をたよりにぬしとなるらむ
荻
三六音せずば誰か忍ばむ吹過ぐる風こそ荻の情なりけれ
雁
三七夕月夜ほのめく秋の黄昏に初雁がねの聲なかりせば
鹿
三八さを鹿の聲せぬ宿に住む人の秋の哀を爭でしるらむ
露
三九野べ毎にこぼるゝ秋の夕露を宛ら袖の物となしつる
霧
四〇醒れよそに思ひやりけむ山里の哀につゞく霧の梢を
槿
四一花よりもはかなき身こそ槿の花に見らるゝ朝顔の花
駒
四二月影に今日逢坂と見ゆるかな駒にひかるゝ雲の上人
月
四三秋の月曇らぬとは習ひなり心はれては誰か見るらむ
搗衣
四四衣うつ哀はこゝに止らじな槌の音をば風にゆづりて
蟲
四五有衆ねて後はと頼む山里の垣ねにも又蟲のわぶなる
菊
四六山川に移ふ菊のいかならし流汲みけむ人に問はゞや
紅葉
四七かはらずな風を厭ふも吉野山秋の櫻は紅葉なりけり
九月盡
四八さてもいかに秋の哀に慰むか心にも又こよひ別れぬ
冬

初冬
四九今日よりは冬に成ぬとつげに來て柴の戸叩く風の風
時雨
五〇晴曇り山廻りする絶間にも尚時雨るゝは涙なりけり
霜
五一草枕露に霜をばおきかへてかはく間もなき旅衣かな
霰
五二笠のうへに霰たばしる旅人は互によその哀をぞしる
雪
五三草も木も同花こそ咲にけれおい〳〵雪のよそめも皃
千鳥
五四月影によさの浦波ふけ行けば松の風さへ千鳥鳴くも
寒蘆
五五深き江に茂りし物を難波潟かれては聞きし蘆の浦風
氷
五六波の音は夜はの氷にとぢられて梢に殘る志賀の浦風
水鳥
五七須磨の浦見渡す沖にゐる鴨は人の哀の浮ぶなりけり
網代
五八風さゆる宇治の網代の夕波は物の哀をまづ寄する哉
神樂
五九庭火たく煙は空に曇れ共尚さやかなるあかほしの聲
鷹狩
六〇御狩する片岡山の村柴にふるべかりけり今日の霰は
炭竈
六一ながめやる人の思は大原や芹生の奥のまきの炭がま
爐火
六二終夜は火ひの下にも消ぬ火や忍べど絶ぬ思なるらむ
歳暮
六三厭兼ね頭の上に積る雪の幾へになりて消えむとす覽

戀
初戀
六四いつしかとおつる涙を時雨にて紅葉始むる衣手の森
忍戀
六五今はたゞ袖の涙を色に出て物や思ふと人に問はれむ
不レ逢戀
六六よしさらば後の世と唯契置け其に命を頼てかへてむ
初逢戀
六七人知るや下裳の紐をとき初て君と契を結ぶ夜はとは
後朝戀
六八明けぬとて歸り初めけむ古に變る例を今朝は殘さむ
會不レ逢戀
六九戀をのみ飾磨のかちの逢初て歸べしとは思ざりしを
旅戀
七〇離れ來し日數幾らに成ぬらむ眺めに暮るゝ旅の空哉
思
七一まだ知らぬ人の情を冬にしてかゝる世もなき思草哉
片思
七二ひたぶるに厭ふ君とは知乍ら思ふ心のつきせぬや何
恨
七三戀衣ぬるゝ袂をおもひかへすことは恨の限なりけり
雜
曉
七四東雲や八聲の鳥の聲すなり關の鎖しも今や明くらむ
松
七五住吉のうらの梢に吹きそめて波にもやどす松の秋風
竹
七六友となる憂身厭はぬ竹なれば皆斯の君と仰ぐ也けり
苔
七七みぞわかぬ深き山べの山人はころもの苔か苔の衣か
鶴
七八長世の己が千年も夢なれや吹飯の浦に鶴のねぶれる
山
七九世中に山てふ山は多かれど山とはひえの御山をぞ云
河
八〇四方の川は淀の流に落合ひて一つ渡りに成にける哉
野
八一春も夏も冬も眺はせしか共野べのふしきの秋の夕暮
關
八二あふ坂の山路も雪にとぢられて關に關ある冬の夕暮
橋
八三朽ちにける長柄の橋の跡に來て見ぬ昔まで行く心哉
海路
八四行きとまる心つくしの哀れさは蘆屋の里の松の夕風
旅
八五東路のくさの枕のあはれをば人にもいはじ有明の月

別

九五思ひ寝の旅の夜床に夢さめて二度人に別れぬるかな

山家

○九我が宿を人に見せばや山里の住ひは同じ住ひなれ共田家

一〇夕風の稲葉の露のこぼるゝを庵もる袖に移しつる哉

懐旧

二〇昨日今日身のうきことを歎くさへ又行末の思出かな

夢

二一大方に過行くことは夢なるを驚く人のなきぞ悲しき

無常

二二今日迄はよその枕に眺めきぬ朝おく露も夜はの煙も

述懐

二三世中をすて出ぬこそ悲しけれ思知れるも思知らぬも

祝

二四君が代に兼て栽ゑける住吉の松吹く風は末も遙けし

少人相語云可〻詠二吟十ケ百首一仍始自二建久元年五月十二日一各以二風吟一大遣丸雖レ不レ堪二頭質一極被二駈入一畢同二十八日一令レ詠畢號二之字治山百首一爲レ勅二山家之等輩一也

勅句百首　一時之口ずさび

春三十首

二五春くれば深山の里の谷の戸も軒の鎖も今朝ぞ明ぬる

二六歎へつる今日の子の日の朝霞小松が枝に霎きにけり

二七春と知れば四方の梢も霞たつ山のかひある曙のそら

二八都よりはや來ても見よ山ざとに鶯來ぬる梅の立枝を

二九賤の女が年と共にもつむ物は春の七日の若菜也けり

三〇雪消えぬ三輪の山べに尋來て春の徴にさゞひぬる哉

三一袖に移る梅の匂にわきもこが心の内に風や吹くらむ

三二春をへて身はよそ乍ら青柳の厭ふべき世に心亂れぬ

三三東路や焼きすさみたる春の野に早蕨あさる雉子鳴也

三四山里のゆふべの空を眺むれば心もくもる今日の春雨

三五櫻花匂はぬ山はなけれ共み吉野とのみ人のいふらむ

三六難波潟澪べの駒のなづむにも尚荒行くは心なりけり

三七吉野山はなの梢をかへるかり心えにくき心なりけり

三八山川に冬の嵐やのこるらむ苗代水にとゞこほりぬる

三九山里のながめに暮る〻夕暮に聲哀れなる喚子鳥かな

四〇桃の花その紅のあまりには彌生の空を色になすらむ

四一年をへて呉藤波のいかなれば松の梢に懸り初めけむ

四二今更にかへりすめとや葦つむ我が古里の春の夕暮

四三年を經て知られむ程の人もがなでの山吹散果ぬ共

四四なか〳〵に物の哀を知りはてむ人には見せじ春の曙

四五嫌子なくかた岡山の曙に草の戸ざしを問ふ人もがな

四六春の野に揚る雲雀の心をば空にもえこそ量ざりけれ

四七なつかしき春の野澤の杜若色に色ある夕ぐれかな

四八吉野山よしとや人の泥むらむ岩踏躓咲く岩のかけ道

四九君が代は春に春ある時ながら八千代こめたる玉椿哉

五〇さほ姫の柳の糸を染懸けて花の綾おる春は來にけり

五一山里に山梨の花咲きにけり野べの宿ともならぬ物故

五二水の面に飛び交ふ春の燕巣たてむとも思ひ遣られて

五三心すむ水のうき草なびきつゝ蛙なくなりぬでの夕暮

五四花の色を心のうちに染めきても涙に霞む春の暮かな

夏二十首

五五夏衣かふとはすれど墨染の色は薄くもならぬ也けり

五六山里に卯の花垣ねしめおきて闇に眺めむ夏の夜の月

五七年を經て心にかゝる葵草いかでか神も惠まざるべき

五八雲かゝるまぢの梢に雨落ちて山郭公鳴きて過ぐなり

五九宿わかぬさ月の今日の妻なれば賤が庵にも菖蒲葺也

六〇早苗とる山田のくろの夕暮に急ぐ植ゑ女を哀とぞ見る

六一我が宿に花橘の散りぬとも昔の袖をなにかわすれむ

六二日數ふる眞野の入江の梅雨に河をば沖と見する浮草

六三大井川星こそ渡にうかびぬれ螢とびかふ夕闇のそら

六四山里は明けてあけぬる槇の戸を唯にて叩く水鶏也鳧

六五照射する外山隠れの夏草を分くる火串の行末の野に

六六楢には蟬の諸聲ひぐき來て暑さを添ふるみな月の空

六七賤のをが煙を立る蚊遣火にそなた知らする夏の夕暮

六八我妹子が物語する夕暮は扇の風のうつ草かにこそ

六九中々にはらはでを見む夕ぐれ露に色ある常夏の花

七〇紫陽花の花に心の移る哉秋の野原を待ちもえなくに

七一我宿の池の蓮にそむ心いつかは色にいでむとすらむ

七二友誘ふを野の山べの氷山この涼しさは夏かあらぬか

七三夏深み袖に哀はかつ見ゆるむすぶ泉に秋をむかへて

七四たて並ぶいくらのしでの川風に秋をも忘る夏祓かな

秋三十首

七五秋きぬと驚く風を尋ればめに爽かなる荻のうへ葉ぞ

七六待えたる七夕つめに言とはむまだ乾かずや天の羽衣

七七宮城野を尋來たれば秋萩の花は誠にこゝにこゝにさゝめす

七八秋の野を分行く人は一かたに女郎花とや心ひくらむ

七九まねきけり秋の野原を吹過ぐる風に色ある花薄かな

八〇刈萱の亂れて物を思ふかな野原の風を袖にまかせて

八一聞つとも荻の上風吹過きて又誰が宿の妻となるらむ

八二秋の野にほに見え渡る蘭しがらむ鹿や主となるらむ

八三夕風に秋の心にさそはせて鶉鳴くなり野べの夕ぐれ

八四秋の田の穂末を渡る風を見て我が心さへ靡きぬる哉

八五いかにとよ鳴も立なり夕ぐれ哀も知らぬ我心さへ

八六秋くれば秋のまかきの秋風に秋の心ぞ秋につくなる

八七哀をばいかなる物と思はまし尾上の鹿の聲無りせば

八八○世中はさこそは何もはかなけれ其中にしも朝顔の花

八九柴の戸にとひ來る人はなけれども梢にたえぬ蝉の聲

九〇初雁の聲によへて見つる哉げに書きつむる君が玉章

九一大方の野べの白露なかりせば類も知らぬ秋ならまし

九二此里もさぞながむらむ霧こめて我眺めやる遠の里人

九三覺めて聞く心ぞいとゞ哀れなる衣うつなり夢の枕に

九四逢坂の關の清水にうつりきて影にかげある望月の駒

九五秋の月誰もさこそは詠むらめと思ふ心の類なきかな

九六いとゞ薄機おる蟲の聲すなり吹きなみだりそ荻の上風

九七蓬生のつゆに逢ふなる蟋蟀我が泪をや友と見るらむ

九八○世中はふるにかひなき物なれば野べの鈴蟲聲恨むも

九九雲さわぐ空だのめにやこりざらむ夕暮毎に松蟲の聲

一〇〇電の光はさこそほどなけれそれよりもなほ人の命は

一〇一袖ならす秋の時雨の降來つゝ本より置る露に副ふ覽

一〇二移ひて後はなか〳〵白菊の花に遁るゝ花とこそ見れ

一〇三たつた山かへる思ぞ忘れぬる紅葉の色に心をそめつゝ

一〇四露のなど我が袖にしも限るらむ人毎にある秋の哀を

冬二十首

一〇五神無月散るもみぢ葉の哀をぞ空に知らるゝ木枯の風

一〇六山里は時雨る空の村雲に涙をさへもまかせつるかな

一〇七押なべて野にも山にもおく霜の深さを告る鐘の聲哉

一〇八○冬がれの音高砂の尾上より颪ふるなりねなのさゝ原

一〇九外はいさ訪來る人も跡たえて我が宿にのみ積る白雪

一一〇萎れ萱の亂伏したる難波江に冬の哀は見えける物を

一一一さ夜更て千鳥鳴也とぎくまに浦わの松に風も吹くも

一一二冬籠る谷の小川につらゝゐて寂しさ深きみ山べの里

一一三世中に從ふかひもなき身こそ浮寢の鴨の心をば知れ

終夜宇治の河風聲き來てひをに浪こす瀬々の網代木
置鶴のすむなる濱を來て見れば幾よに成ぬ雪の毛衣
巡りつる少女の姿爪にて覺束なみの夜はのあかりや
諸人はいかに見るらむ少女子の袖に雪ある冬の姿を
○敏鵰のをぶさの薄聲に社かりばの野の哀をばしれ
かへしても尚返しても哀とや神は聞くらむ朝倉の聲
終夜佛の御名を聞くからに覺めてうれしき夢の轉寢
春は又山よりいづと見ゆる哉松きる賤の歸る景色に
何事も昔語になりはてゝ宿にも身にもつもる年かな
炭がまの煙を空に眺むればよそのあはれも大原の里

建久元年六月二十六日自二未初一至二未終一如法一時間詠レ之仍可レ謂二一時之百首一其間猶與二人有一聞二諷事一矣抑此百首者實羽林勘進レ之後大德相共詠レ之其後送二題於隆阿闍梨許一レ仍阿闍二十六日午終來語則右筆終二篇於一時一畢一首五句之內勒句也所謂

春三十

はるくれば　けふの子日の　かすみたつ　ゆき消えぬ
鶯きぬる　若菜なりけり　ゆき消えぬ
梅のにほひに　あをやぎの　早蕨あさる
今日の春さめ　さくらばな　さはべの駒の
かへるかり　なはしろ水の　よぶ子鳥かな
もゝのはな　咲く藤なみの　すみれつむ
春のあけぼの　きゝす鳴く　岩つゝじ咲く
玉つばきかな　山なしのはな　春のくれかな
つばくらめ　蛙鳴くなる

夏二十

なつごろも　卯の花かきね　あふひぐさ
山ほとゝぎす　菖蒲ふくなり　蟇とびかふ
花たちばなの　さみだれに　蟇のもろこゑ
水鶏なりけり　ともしする　とこなつの花
蚊やり火に　あふぎの風の　ひむろやま
あちさゐの　池のはちすに
むすぶ泉に　夏はひかな

秋三十

あききぬと　織女つめに　あきはぎの
女郎花ぞや　花ずゝきかな　かるかやの
ふぢばかま　鶉鳴くなり
ひぐらしの聲　あきの田の　鳴もたつなり
あきかせに　尾上のしかの　あさがほの花
はつかりの　野べのしら露　きりこめて
衣うつなり　きり〳〵す　もちづきの駒
あきのつき　野べのすゞ蟲　はたおる蟲の
いなづまの　秋のしぐれの　まつむしの聲
紅葉のいろに　秋のわかれを　しらきくの

冬二十

かみなつき　しぐるゝ空の　おくしもの
霰ふるなり　つもるしら雪　しをれあしの
千鳥鳴くなり　つらゝゐて　うき寢の鴫の
瀟々の網代木　あしたづの　少女のすがた
をとめごの　狩ばのを野の　あさくらの聲
すみがま　佛の御名を　うづみ火に
松きるしづの　つもる年かな
一時之條住吉大明神御知見結構羽林五時之間詠レ之云々

拾玉集卷第三

賦二百字一百首　一時書レ之

春二十首

あさがすみ　淺緑春の霞はあふ坂の關路よりこそ立ちはじめけれ
さもこそは春になりぬと知顏に霞の衣きぬ山ぞなき
霞しく春の野はらの曙よあはれは秋の夕べのみかは
すみだ川都の方を眺むれば鳥もいづくは霞のみして
見渡せば汐路を越ゆる霞哉浪と松との音ばかりして

うめのはな　うべしこそ都の人も尋ねけれ梅かをるなり春の山里
とめに見えぬ色をば知らじ春の夜の闇なき物は匂也鬼
軒近き梅の在かを君にしめて獨ふせやと人に云れし
春の花いとひいとはぬ風なれや梅には匂散るは櫻に
何事も思ひ捨てゝしみ山べに殘るは梅の匂なりけり

たまやなぎ　立田川柳の眉をかくをりは水の鏡やたよりなるらむ
まて暫し見にくる人を青柳の糸の本には絶ず留のむ
山里のそともの外の玉柳よそのしるしと成ぬべき哉
なにとなく見る心こそむすばれ柳の糸を亂す春風
君が代の例にひかむ青柳の糸は何れの春かたゆべき

かきつばた　勝間田の池にはいかに杜若水なしとても匂ざらむ
來て見れば我が故郷はあれ果てゝ獨殘れる杜若かな
津の國のこやの池なる杜若角ぐむ蘆の花かとぞ見る
春ふかみいけの汀の杜若夏のへだてと人や見るらむ
尋ねこし淺香の沼の杜若色ばかりこそ深く見えけれ

夏十五首

ほとゝぎす　ほのかなる忍び音もがな郭公まだ夏淺き卯の花の空
友もなしたゞ汝のみぞ郭公語らひ過ぐるみ山べの里
時しもあれ心をすます黄昏に名のりて過ぐる時鳥哉
聞く人のあかぬ心に郭公なごりにはあかぬ心か山郭公

とこなつ　一年ふれど色も變らぬ常夏の花を見る社嬉しかりけれ
心にぞいとゞ哀に思ほゆれ我が撫子の露重げなる
なべてならぬ物と社見れ我宿のまぢかく植る常夏の花
露を今朝拂はでぞ見る常夏の色に光をそふる玉とて
はなたちばな　春過ぎて梅も櫻もなごりなしはな橘の匂はざりせば
なべて吹く風をおもへば橘の梢にとまる匂なりけり
散りぬれど昔を戀る身にしあれば香をば袂に殘す橘
はかなしや昔語りになれる世はみな橘の匂なりけり
何ごとを思ふ宿とは知らねどもはな橘の軒に匂へる

秋二十首

をみなへし　思ふとなかりし物を女郎花さく野を過て今日の心は
見る人を同じ心になす物は野べになまめく女郎花哉
何事に露こぼるらむ女郎花花も思のあるにやある覽
へにけりな四十の秋は女郎花色に染めてし心變らで
鹿の立野もせに見ゆる女郎花夕より妻は己が鳴ぬかは
なすゝき

○六遙々と野原を行けば花薄とまらぬ人をまねき暮しつ
○七鳴く蟲の聲にとまるを尾薄の招きえたると思顔なる
○八すがる鳴く野べの夕暮哀なり尾花が末に風を任せて
○九過果ぬいかに尾花の恨らむ歸さにはよも招きしもせじ
○〇霧罩てそことも見えず粟津野のすゑの薄靡くなる覽
ふちばかま
一故郷に歸り來てこそ蘭ぬしなき色をあはれには見れ
二散果て今は色なき蘭誰かは野べに來ても見るべき
三花の色はちぐさなれども紫のゆかりうれしき蘭かな
四かねてより待ちしもしるく蘭秋の野毎に綻びにけり
五ませの内に移し植るてし蘭色なつかしく匂ふ暮かな
はじもみぢ
六はかなさを思知るべき妻なれや色づき初る衣手の森
七知るらめや我が園生なる櫨紅葉其色よりも深き思を
八物毎に秋の哀はありしかど心に染むは木葉なりけり
九道のべを時雨と共に廻行けば我心さへ紅葉しにけり
一〇散とは春の花にも習ひにきされど紅葉は色勝りけり
冬十五首
はつゆき
一晴れ曇る時雨の空のさだめ哉されば今朝の初雪
二津の國の遠里を野の萩がえに雪の花咲冬は來にけり
三行やらで眺つる哉近江路や愛には降らぬひらのみ雪を
四昨日こそ落る木葉を眺めしか今朝又雪の空に散らむ
をのゝすみがま
五大方はさこそは冬の寂しけれ思知らぬや小野の炭竈
六軒近く煙をたつる炭がまを我がものと見る大原の里
七後世にまたすかるべき思をも思知らするまきの炭竈
八すごきかなやく炭竈に立つ煙心細さを空に見せつゝ
九見渡せば冬の山べの霞むかなこや炭竈の煙なるらむ
一〇かきくらす心ぞはれぬ大原やゝく炭竈の煙のみかは
一一まき繁き深山の奥の炭竈にかよひて過ぐる賤が心よ
うつみ火
一二うしとのみ身を思知る轉寢の友とぞ頼む夜はの埋火
一三罪も嘸消せざるらむ埋火も灰の下には絕せざりけり
一四身の思人の思と埋火の下にくゆるといづれまされる
一五人知るや夜はの埋火下もえてながき思にくゆる心を
戀十五首
おもかけに
一六思をばいかで知らせむ姿こそ其俤にあらはれぬとも
一七物思ふ人の俤あらはれて夢ならずとも妹は見るらむ
一八すがる鳴く野べの夕暮哀なり尾花が末に風を任せて
一九過果ぬいかに尾花の恨らむ歸さにはよも招きしもせじ
二〇霧罩てそことも見えず粟津野のすゑの薄靡くなる覽
ふちばかま
二一故郷に歸り來てこそ蘭ぬしなき色をあはれには見れ
二二散果て今は色なき蘭誰かは野べに來ても見るべき
二三花の色はちぐさなれども紫のゆかりうれしき蘭かな
二四かねてより待ちしもしるく蘭秋の野毎に綻びにけり
二五ませの内に移し植るてし蘭色なつかしく匂ふ暮かな
はじもみぢ
二六はかなさを思知るべき妻なれや色づき初る衣手の森
二七知るらめや我が園生なる櫨紅葉其色よりも深き思を
二八物毎に秋の哀はありしかど心に染むは木葉なりけり
二九道のべを時雨と共に廻行けば我心さへ紅葉しにけり
三〇散とは春の花にも習ひにきされど紅葉は色勝りけり
冬十五首
はつゆき
三一晴れ曇る時雨の空のさだめ哉されば今朝の初雪
三二津の國の遠里を野の萩がえに雪の花咲冬は來にけり
三三行やらで眺つる哉近江路や愛には降らぬひらのみ雪を
三四昨日こそ落る木葉を眺めしか今朝又雪の空に散らむ
をのゝすみがま
三五大方はさこそは冬の寂しけれ思知らぬや小野の炭竈
三六軒近く煙をたつる炭がまを我がものと見る大原の里
三七後世にまたすかるべき思をも思知らするまきの炭竈
三八すごきかなやく炭竈に立つ煙心細さを空に見せつゝ
三九見渡せば冬の山べの霞むかなこや炭竈の煙なるらむ
四〇かきくらす心ぞはれぬ大原やゝく炭竈の煙のみかは
四一まき繁き深山の奥の炭竈にかよひて過ぐる賤が心よ
うつみ火
四二うしとのみ身を思知る轉寢の友とぞ頼む夜はの埋火
四三罪も嘸消せざるらむ埋火も灰の下には絕せざりけり
四四身の思人の思と埋火の下にくゆるといづれまされる
四五人知るや夜はの埋火下もえてながき思にくゆる心を
戀十五首
おもかけに
四六思をばいかで知らせむ姿こそ其俤にあらはれぬとも
四七物思ふ人の俤あらはれて夢ならずとも妹は見るらむ
四八すがる鳴く野べの夕暮哀なり尾花が末に風を任せて
四九過果ぬいかに尾花の恨らむ歸さにはよも招きしもせじ
五〇霧罩てそことも見えず粟津野のすゑの薄靡くなる覽
ふちばかま
五一故郷に歸り來てこそ蘭ぬしなき色をあはれには見れ
五二散果て今は色なき蘭誰かは野べに來ても見るべき
五三花の色はちぐさなれども紫のゆかりうれしき蘭かな
五四かねてより待ちしもしるく蘭秋の野毎に綻びにけり
五五ませの内に移し植るてし蘭色なつかしく匂ふ暮かな
はじもみぢ
五六はかなさを思知るべき妻なれや色づき初る衣手の森
五七知るらめや我が園生なる櫨紅葉其色よりも深き思を
五八物毎に秋の哀はありしかど心に染むは木葉なりけり
五九道のべを時雨と共に廻行けば我心さへ紅葉しにけり
六〇散とは春の花にも習ひにきされど紅葉は色勝りけり
冬十五首
はつゆき
六一晴れ曇る時雨の空のさだめ哉されば今朝の初雪
六二津の國の遠里を野の萩がえに雪の花咲冬は來にけり
六三行やらで眺つる哉近江路や愛には降らぬひらのみ雪を
六四昨日こそ落る木葉を眺めしか今朝又雪の空に散らむ
をのゝすみがま
六五大方はさこそは冬の寂しけれ思知らぬや小野の炭竈
六六軒近く煙をたつる炭がまを我がものと見る大原の里
六七後世にまたすかるべき思をも思知らするまきの炭竈
六八すごきかなやく炭竈に立つ煙心細さを空に見せつゝ
六九見渡せば冬の山べの霞むかなこや炭竈の煙なるらむ
七〇かきくらす心ぞはれぬ大原やゝく炭竈の煙のみかは
七一まき繁き深山の奥の炭竈にかよひて過ぐる賤が心よ
うつみ火
七二うしとのみ身を思知る轉寢の友とぞ頼む夜はの埋火
七三罪も嘸消せざるらむ埋火も灰の下には絕せざりけり
七四身の思人の思と埋火の下にくゆるといづれまされる
七五人知るや夜はの埋火下もえてながき思にくゆる心を
戀十五首
おもかけに
七六思をばいかで知らせむ姿こそ其俤にあらはれぬとも
七七物思ふ人の俤あらはれて夢ならずとも妹は見るらむ
七八すがる鳴く野べの夕暮哀なり尾花が末に風を任せて
七九過果ぬいかに尾花の恨らむ歸さにはよも招きしもせじ
八〇霧罩てそことも見えず粟津野のすゑの薄靡くなる覽
ふちばかま
八一故郷に歸り來てこそ蘭ぬしなき色をあはれには見れ
八二散果て今は色なき蘭誰かは野べに來ても見るべき
八三花の色はちぐさなれども紫のゆかりうれしき蘭かな
八四かねてより待ちしもしるく蘭秋の野毎に綻びにけり
八五ませの内に移し植るてし蘭色なつかしく匂ふ暮かな
はじもみぢ
八六はかなさを思知るべき妻なれや色づき初る衣手の森
八七知るらめや我が園生なる櫨紅葉其色よりも深き思を
八八物毎に秋の哀はありしかど心に染むは木葉なりけり
八九道のべを時雨と共に廻行けば我心さへ紅葉しにけり
九〇散とは春の花にも習ひにきされど紅葉は色勝りけり
冬十五首
はつゆき
九一晴れ曇る時雨の空のさだめ哉されば今朝の初雪
九二津の國の遠里を野の萩がえに雪の花咲冬は來にけり
九三行やらで眺つる哉近江路や愛には降らぬひらのみ雪を
九四昨日こそ落る木葉を眺めしか今朝又雪の空に散らむ
をのゝすみがま
九五大方はさこそは冬の寂しけれ思知らぬや小野の炭竈
九六軒近く煙をたつる炭がまを我がものと見る大原の里
九七後世にまたすかるべき思をも思知らするまきの炭竈
九八すごきかなやく炭竈に立つ煙心細さを空に見せつゝ
九九見渡せば冬の山べの霞むかなこや炭竈の煙なるらむ
一〇〇かきくらす心ぞはれぬ大原やゝく炭竈の煙のみかは
一〇一まき繁き深山の奥の炭竈にかよひて過ぐる賤が心よ
うつみ火
一〇二うしとのみ身を思知る轉寢の友とぞ頼む夜はの埋火
一〇三罪も嘸消せざるらむ埋火も灰の下には絕せざりけり
一〇四身の思人の思と埋火の下にくゆるといづれまされる
一〇五人知るや夜はの埋火下もえてながき思にくゆる心を
戀十五首
おもかけに
一〇六思をばいかで知らせむ姿こそ其俤にあらはれぬとも
一〇七物思ふ人の俤あらはれて夢ならずとも妹は見るらむ
一〇八すがる鳴く野べの夕暮哀なり尾花が末に風を任せて
一〇九過果ぬいかに尾花の恨らむ歸さにはよも招きしもせじ
一一〇霧罩てそことも見えず粟津野のすゑの薄靡くなる覽
ふちばかま
一一一故郷に歸り來てこそ蘭ぬしなき色をあはれには見れ
一一二散果て今は色なき蘭誰かは野べに來ても見るべき
一一三花の色はちぐさなれども紫のゆかりうれしき蘭かな
一一四かねてより待ちしもしるく蘭秋の野毎に綻びにけり
一一五ませの内に移し植るてし蘭色なつかしく匂ふ暮かな
はじもみぢ
一一六はかなさを思知るべき妻なれや色づき初る衣手の森
一一七知るらめや我が園生なる櫨紅葉其色よりも深き思を
一一八物毎に秋の哀はありしかど心に染むは木葉なりけり
一一九道のべを時雨と共に廻行けば我心さへ紅葉しにけり
一二〇散とは春の花にも習ひにきされど紅葉は色勝りけり
冬十五首
はつゆき
一二一晴れ曇る時雨の空のさだめ哉されば今朝の初雪
一二二津の國の遠里を野の萩がえに雪の花咲冬は來にけり
一二三行やらで眺つる哉近江路や愛には降らぬひらのみ雪を
一二四昨日こそ落る木葉を眺めしか今朝又雪の空に散らむ
をのゝすみがま
一二五大方はさこそは冬の寂しけれ思知らぬや小野の炭竈
一二六軒近く煙をたつる炭がまを我がものと見る大原の里
一二七後世にまたすかるべき思をも思知らするまきの炭竈
一二八すごきかなやく炭竈に立つ煙心細さを空に見せつゝ
一二九見渡せば冬の山べの霞むかなこや炭竈の煙なるらむ
一三〇かきくらす心ぞはれぬ大原やゝく炭竈の煙のみかは
一三一まき繁き深山の奥の炭竈にかよひて過ぐる賤が心よ
うつみ火
一三二うしとのみ身を思知る轉寢の友とぞ頼む夜はの埋火
一三三罪も嘸消せざるらむ埋火も灰の下には絕せざりけり
一三四身の思人の思と埋火の下にくゆるといづれまされる
一三五人知るや夜はの埋火下もえてながき思にくゆる心を
戀十五首
おもかけに
一三六思をばいかで知らせむ姿こそ其俤にあらはれぬとも
一三七物思ふ人の俤あらはれて夢ならずとも妹は見るらむ
一三八すがる鳴く野べの夕暮哀なり尾花が末に風を任せて
一三九過果ぬいかに尾花の恨らむ歸さにはよも招きしもせじ
一四〇霧罩てそことも見えず粟津野のすゑの薄靡くなる覽
ふちばかま
一四一故郷に歸り來てこそ蘭ぬしなき色をあはれには見れ
一四二散果て今は色なき蘭誰かは野べに來ても見るべき
一四三花の色はちぐさなれども紫のゆかりうれしき蘭かな
一四四かねてより待ちしもしるく蘭秋の野毎に綻びにけり
一四五ませの内に移し植るてし蘭色なつかしく匂ふ暮かな
はじもみぢ
一四六はかなさを思知るべき妻なれや色づき初る衣手の森
一四七知るらめや我が園生なる櫨紅葉其色よりも深き思を
一四八物毎に秋の哀はありしかど心に染むは木葉なりけり
一四九道のべを時雨と共に廻行けば我心さへ紅葉しにけり
一五〇散とは春の花にも習ひにきされど紅葉は色勝りけり
冬十五首
はつゆき
一五一晴れ曇る時雨の空のさだめ哉されば今朝の初雪
一五二津の國の遠里を野の萩がえに雪の花咲冬は來にけり
一五三行やらで眺つる哉近江路や愛には降らぬひらのみ雪を
一五四昨日こそ落る木葉を眺めしか今朝又雪の空に散らむ
をのゝすみがま
一五五大方はさこそは冬の寂しけれ思知らぬや小野の炭竈
一五六軒近く煙をたつる炭がまを我がものと見る大原の里
一五七後世にまたすかるべき思をも思知らするまきの炭竈
一五八すごきかなやく炭竈に立つ煙心細さを空に見せつゝ
一五九見渡せば冬の山べの霞むかなこや炭竈の煙なるらむ
一六〇かきくらす心ぞはれぬ大原やゝく炭竈の煙のみかは
一六一まき繁き深山の奥の炭竈にかよひて過ぐる賤が心よ
うつみ火
一六二うしとのみ身を思知る轉寢の友とぞ頼む夜はの埋火
一六三罪も嘸消せざるらむ埋火も灰の下には絕せざりけり
一六四身の思人の思と埋火の下にくゆるといづれまされる
一六五人知るや夜はの埋火下もえてながき思にくゆる心を
戀十五首
おもかけに
一六六思をばいかで知らせむ姿こそ其俤にあらはれぬとも
一六七物思ふ人の俤あらはれて夢ならずとも妹は見るらむ
一六八すがる鳴く野べの夕暮哀なり尾花が末に風を任せて
一六九過果ぬいかに尾花の恨らむ歸さにはよも招きしもせじ
一七〇霧罩てそことも見えず粟津野のすゑの薄靡くなる覽
ふちばかま
一七一故郷に歸り來てこそ蘭ぬしなき色をあはれには見れ
一七二散果て今は色なき蘭誰かは野べに來ても見るべき
一七三花の色はちぐさなれども紫のゆかりうれしき蘭かな
一七四かねてより待ちしもしるく蘭秋の野毎に綻びにけり
一七五ませの内に移し植るてし蘭色なつかしく匂ふ暮かな
はじもみぢ
一七六はかなさを思知るべき妻なれや色づき初る衣手の森
一七七知るらめや我が園生なる櫨紅葉其色よりも深き思を
一七八物毎に秋の哀はありしかど心に染むは木葉なりけり
一七九道のべを時雨と共に廻行けば我心さへ紅葉しにけり
一八〇散とは春の花にも習ひにきされど紅葉は色勝りけり
冬十五首
はつゆき
一八一晴れ曇る時雨の空のさだめ哉されば今朝の初雪
一八二津の國の遠里を野の萩がえに雪の花咲冬は來にけり
一八三行やらで眺つる哉近江路や愛には降らぬひらのみ雪を
一八四昨日こそ落る木葉を眺めしか今朝又雪の空に散らむ
をのゝすみがま
一八五大方はさこそは冬の寂しけれ思知らぬや小野の炭竈
一八六軒近く煙をたつる炭がまを我がものと見る大原の里
一八七後世にまたすかるべき思をも思知らするまきの炭竈
一八八すごきかなやく炭竈に立つ煙心細さを空に見せつゝ
一八九見渡せば冬の山べの霞むかなこや炭竈の煙なるらむ
一九〇かきくらす心ぞはれぬ大原やゝく炭竈の煙のみかは
一九一まき繁き深山の奥の炭竈にかよひて過ぐる賤が心よ
うつみ火
一九二うしとのみ身を思知る轉寢の友とぞ頼む夜はの埋火
一九三罪も嘸消せざるらむ埋火も灰の下には絕せざりけり
一九四身の思人の思と埋火の下にくゆるといづれまされる
一九五人知るや夜はの埋火下もえてながき思にくゆる心を
戀十五首
おもかけに
一九六思をばいかで知らせむ姿こそ其俤にあらはれぬとも
一九七物思ふ人の俤あらはれて夢ならずとも妹は見るらむ
一九八すがる鳴く野べの夕暮哀なり尾花が末に風を任せて
一九九過果ぬいかに尾花の恨らむ歸さにはよも招きしもせじ
二〇〇霧罩てそことも見えず粟津野のすゑの薄靡くなる覽
ふちばかま
二〇一故郷に歸り來てこそ蘭ぬしなき色をあはれには見れ
二〇二散果て今は色なき蘭誰かは野べに來ても見るべき
二〇三花の色はちぐさなれども紫のゆかりうれしき蘭かな
二〇四かねてより待ちしもしるく蘭秋の野毎に綻びにけり
二〇五ませの内に移し植るてし蘭色なつかしく匂ふ暮かな
はじもみぢ
二〇六はかなさを思知るべき妻なれや色づき初る衣手の森
二〇七知るらめや我が園生なる櫨紅葉其色よりも深き思を
二〇八物毎に秋の哀はありしかど心に染むは木葉なりけり
二〇九道のべを時雨と共に廻行けば我心さへ紅葉しにけり
二一〇散とは春の花にも習ひにきされど紅葉は色勝りけり
冬十五首
はつゆき
二一一晴れ曇る時雨の空のさだめ哉されば今朝の初雪
二一二津の國の遠里を野の萩がえに雪の花咲冬は來にけり
二一三行やらで眺つる哉近江路や愛には降らぬひらのみ雪を
二一四昨日こそ落る木葉を眺めしか今朝又雪の空に散らむ
をのゝすみがま
二一五大方はさこそは冬の寂しけれ思知らぬや小野の炭竈
二一六軒近く煙をたつる炭がまを我がものと見る大原の里
二一七後世にまたすかるべき思をも思知らするまきの炭竈
二一八すごきかなやく炭竈に立つ煙心細さを空に見せつゝ
二一九見渡せば冬の山べの霞むかなこや炭竈の煙なるらむ
二二〇かきくらす心ぞはれぬ大原やゝく炭竈の煙のみかは
二二一まき繁き深山の奥の炭竈にかよひて過ぐる賤が心よ
うつみ火
二二二うしとのみ身を思知る轉寢の友とぞ頼む夜はの埋火
二二三罪も嘸消せざるらむ埋火も灰の下には絕せざりけり
二二四身の思人の思と埋火の下にくゆるといづれまされる
二二五人知るや夜はの埋火下もえてながき思にくゆる心を
戀十五首
おもかけに
二二六思をばいかで知らせむ姿こそ其俤にあらはれぬとも
二二七物思ふ人の俤あらはれて夢ならずとも妹は見るらむ
二二八すがる鳴く野べの夕暮哀なり尾花が末に風を任せて
二二九過果ぬいかに尾花の恨らむ歸さにはよも招きしもせじ
二三〇霧罩てそことも見えず粟津野のすゑの薄靡くなる覽
ふちばかま
二三一故郷に歸り來てこそ蘭ぬしなき色をあはれには見れ
二三二散果て今は色なき蘭誰かは野べに來ても見るべき
二三三花の色はちぐさなれども紫のゆかりうれしき蘭かな
二三四かねてより待ちしもしるく蘭秋の野毎に綻びにけり
二三五ませの内に移し植るてし蘭色なつかしく匂ふ暮かな
はじもみぢ
二三六はかなさを思知るべき妻なれや色づき初る衣手の森
二三七知るらめや我が園生なる櫨紅葉其色よりも深き思を
二三八物毎に秋の哀はありしかど心に染むは木葉なりけり
二三九道のべを時雨と共に廻行けば我心さへ紅葉しにけり
二四〇散とは春の花にも習ひにきされど紅葉は色勝りけり
冬十五首
はつゆき
二四一晴れ曇る時雨の空のさだめ哉されば今朝の初雪
二四二津の國の遠里を野の萩がえに雪の花咲冬は來にけり
二四三行やらで眺つる哉近江路や愛には降らぬひらのみ雪を
二四四昨日こそ落る木葉を眺めしか今朝又雪の空に散らむ
をのゝすみがま
二四五大方はさこそは冬の寂しけれ思知らぬや小野の炭竈
二四六軒近く煙をたつる炭がまを我がものと見る大原の里
二四七後世にまたすかるべき思をも思知らするまきの炭竈
二四八すごきかなやく炭竈に立つ煙心細さを空に見せつゝ
二四九見渡せば冬の山べの霞むかなこや炭竈の煙なるらむ
二五〇かきくらす心ぞはれぬ大原やゝく炭竈の煙のみかは
二五一まき繁き深山の奥の炭竈にかよひて過ぐる賤が心よ
うつみ火
二五二うしとのみ身を思知る轉寢の友とぞ頼む夜はの埋火
二五三罪も嘸消せざるらむ埋火も灰の下には絕せざりけり
二五四身の思人の思と埋火の下にくゆるといづれまされる
二五五人知るや夜はの埋火下もえてながき思にくゆる心を
戀十五首
おもかけに
二五六思をばいかで知らせむ姿こそ其俤にあらはれぬとも
二五七物思ふ人の俤あらはれて夢ならずとも妹は見るらむ
二五八すがる鳴く野べの夕暮哀なり尾花が末に風を任せて
二五九過果ぬいかに尾花の恨らむ歸さにはよも招きしもせじ
二六〇霧罩てそことも見えず粟津野のすゑの薄靡くなる覽
ふちばかま
二六一故郷に歸り來てこそ蘭ぬしなき色をあはれには見れ
二六二散果て今は色なき蘭誰かは野べに來ても見るべき
二六三花の色はちぐさなれども紫のゆかりうれしき蘭かな
二六四かねてより待ちしもしるく蘭秋の野毎に綻びにけり
二六五ませの内に移し植るてし蘭色なつかしく匂ふ暮かな
はじもみぢ
二六六はかなさを思知るべき妻なれや色づき初る衣手の森
二六七知るらめや我が園生なる櫨紅葉其色よりも深き思を
二六八物毎に秋の哀はありしかど心に染むは木葉なりけり
二六九道のべを時雨と共に廻行けば我心さへ紅葉しにけり
二七〇散とは春の花にも習ひにきされど紅葉は色勝りけり
冬十五首
はつゆき
二七一晴れ曇る時雨の空のさだめ哉されば今朝の初雪
二七二津の國の遠里を野の萩がえに雪の花咲冬は來にけり
二七三行やらで眺つる哉近江路や愛には降らぬひらのみ雪を
二七四昨日こそ落る木葉を眺めしか今朝又雪の空に散らむ
をのゝすみがま
二七五大方はさこそは冬の寂しけれ思知らぬや小野の炭竈
二七六軒近く煙をたつる炭がまを我がものと見る大原の里
二七七後世にまたすかるべき思をも思知らするまきの炭竈
二七八すごきかなやく炭竈に立つ煙心細さを空に見せつゝ
二七九見渡せば冬の山べの霞むかなこや炭竈の煙なるらむ
二八〇かきくらす心ぞはれぬ大原やゝく炭竈の煙のみかは
二八一まき繁き深山の奥の炭竈にかよひて過ぐる賤が心よ
うつみ火
二八二うしとのみ身を思知る轉寢の友とぞ頼む夜はの埋火
二八三罪も嘸消せざるらむ埋火も灰の下には絕せざりけり
二八四身の思人の思と埋火の下にくゆるといづれまされる
二八五人知るや夜はの埋火下もえてながき思にくゆる心を
戀十五首
おもかけに
二八六思をばいかで知らせむ姿こそ其俤にあらはれぬとも
二八七物思ふ人の俤あらはれて夢ならずとも妹は見るらむ
二八八すがる鳴く野べの夕暮哀なり尾花が末に風を任せて
二八九過果ぬいかに尾花の恨らむ歸さにはよも招きしもせじ
二九〇霧罩てそことも見えず粟津野のすゑの薄靡くなる覽
ふちばかま
二九一故郷に歸り來てこそ蘭ぬしなき色をあはれには見れ
二九二散果て今は色なき蘭誰かは野べに來ても見るべき
二九三花の色はちぐさなれども紫のゆかりうれしき蘭かな
二九四かねてより待ちしもしるく蘭秋の野毎に綻びにけり
二九五ませの内に移し植るてし蘭色なつかしく匂ふ暮かな
はじもみぢ
二九六はかなさを思知るべき妻なれや色づき初る衣手の森
二九七知るらめや我が園生なる櫨紅葉其色よりも深き思を
二九八物毎に秋の哀はありしかど心に染むは木葉なりけり
二九九道のべを時雨と共に廻行けば我心さへ紅葉しにけり
三〇〇散とは春の花にも習ひにきされど紅葉は色勝りけり
冬十五首
はつゆき
三〇一晴れ曇る時雨の空のさだめ哉されば今朝の初雪
三〇二津の國の遠里を野の萩がえに雪の花咲冬は來にけり
三〇三行やらで眺つる哉近江路や愛には降らぬひらのみ雪を
三〇四昨日こそ落る木葉を眺めしか今朝又雪の空に散らむ
をのゝすみがま
三〇五大方はさこそは冬の寂しけれ思知らぬや小野の炭竈
三〇六軒近く煙をたつる炭がまを我がものと見る大原の里
三〇七後世にまたすかるべき思をも思知らするまきの炭竈
三〇八すごきかなやく炭竈に立つ煙心細さを空に見せつゝ
三〇九見渡せば冬の山べの霞むかなこや炭竈の煙なるらむ
三一〇かきくらす心ぞはれぬ大原やゝく炭竈の煙のみかは
三一一まき繁き深山の奥の炭竈にかよひて過ぐる賤が心よ
うつみ火
三一二うしとのみ身を思知る轉寢の友とぞ頼む夜はの埋火
三一三罪も嘸消せざるらむ埋火も灰の下には絕せざりけり
三一四身の思人の思と埋火の下にくゆるといづれまされる
三一五人知るや夜はの埋火下もえてながき思にくゆる心を
戀十五首
おもかけに
三一六思をばいかで知らせむ姿こそ其俤にあらはれぬとも
三一七物思ふ人の俤あらはれて夢ならずとも妹は見るらむ
三一八すがる鳴く野べの夕暮哀なり尾花が末に風を任せて
三一九過果ぬいかに尾花の恨らむ歸さにはよも招きしもせじ
三二〇霧罩てそことも見えず粟津野のすゑの薄靡くなる覽
ふちばかま
三二一故郷に歸り來てこそ蘭ぬしなき色をあはれには見れ
三二二散果て今は色なき蘭誰かは野べに來ても見るべき
三二三花の色はちぐさなれども紫のゆかりうれしき蘭かな
三二四かねてより待ちしもしるく蘭秋の野毎に綻びにけり
三二五ませの内に移し植るてし蘭色なつかしく匂ふ暮かな
はじもみぢ
三二六はかなさを思知るべき妻なれや色づき初る衣手の森
三二七知るらめや我が園生なる櫨紅葉其色よりも深き思を
三二八物毎に秋の哀はありしかど心に染むは木葉なりけり
三二九道のべを時雨と共に廻行けば我心さへ紅葉しにけり
三三〇散とは春の花にも習ひにきされど紅葉は色勝りけり
冬十五首
はつゆき
三三一晴れ曇る時雨の空のさだめ哉されば今朝の初雪
三三二津の國の遠里を野の萩がえに雪の花咲冬は來にけり
三三三行やらで眺つる哉近江路や愛には降らぬひらのみ雪を
三三四昨日こそ落る木葉を眺めしか今朝又雪の空に散らむ
をのゝすみがま
三三五大方はさこそは冬の寂しけれ思知らぬや小野の炭竈
三三六軒近く煙をたつる炭がまを我がものと見る大原の里
三三七後世にまたすかるべき思をも思知らするまきの炭竈
三三八すごきかなやく炭竈に立つ煙心細さを空に見せつゝ
三三九見渡せば冬の山べの霞むかなこや炭竈の煙なるらむ
三四〇かきくらす心ぞはれぬ大原やゝく炭竈の煙のみかは
三四一まき繁き深山の奥の炭竈にかよひて過ぐる賤が心よ
うつみ火
三四二うしとのみ身を思知る轉寢の友とぞ頼む夜はの埋火
三四三罪も嘸消せざるらむ埋火も灰の下には絕せざりけり
三四四身の思人の思と埋火の下にくゆるといづれまされる
三四五人知るや夜はの埋火下もえてながき思にくゆる心を
戀十五首
おもかけに
三四六思をばいかで知らせむ姿こそ其俤にあらはれぬとも
三四七物思ふ人の俤あらはれて夢ならずとも妹は見るらむ
三四八すがる鳴く野べの夕暮哀なり尾花が末に風を任せて
三四九過果ぬいかに尾花の恨らむ歸さにはよも招きしもせじ
三五〇霧罩てそことも見えず粟津野のすゑの薄靡くなる覽
ふちばかま
三五一故郷に歸り來てこそ蘭ぬしなき色をあはれには見れ
三五二散果て今は色なき蘭誰かは野べに來ても見るべき
三五三花の色はちぐさなれども紫のゆかりうれしき蘭かな
三五四かねてより待ちしもしるく蘭秋の野毎に綻びにけり
三五五ませの内に移し植るてし蘭色なつかしく匂ふ暮かな
はじもみぢ
三五六はかなさを思知るべき妻なれや色づき初る衣手の森
三五七知るらめや我が園生なる櫨紅葉其色よりも深き思を
三五八物毎に秋の哀はありしかど心に染むは木葉なりけり
三五九道のべを時雨と共に廻行けば我心さへ紅葉しにけり
三六〇散とは春の花にも習ひにきされど紅葉は色勝りけり
冬十五首
はつゆき
三六一晴れ曇る時雨の空のさだめ哉されば今朝の初雪
三六二津の國の遠里を野の萩がえに雪の花咲冬は來にけり
三六三行やらで眺つる哉近江路や愛には降らぬひらのみ雪を
三六四昨日こそ落る木葉を眺めしか今朝又雪の空に散らむ
をのゝすみがま
三六五大方はさこそは冬の寂しけれ思知らぬや小野の炭竈
三六六軒近く煙をたつる炭がまを我がものと見る大原の里
三六七後世にまたすかるべき思をも思知らするまきの炭竈
三六八すごきかなやく炭竈に立つ煙心細さを空に見せつゝ
三六九見渡せば冬の山べの霞むかなこや炭竈の煙なるらむ
三七〇かきくらす心ぞはれぬ大原やゝく炭竈の煙のみかは
三七一まき繁き深山の奥の炭竈にかよひて過ぐる賤が心よ
うつみ火
三七二うしとのみ身を思知る轉寢の友とぞ頼む夜はの埋火
三七三罪も嘸消せざるらむ埋火も灰の下には絕せざりけり
三七四身の思人の思と埋火の下にくゆるといづれまされる
三七五人知るや夜はの埋火下もえてながき思にくゆる心を
戀十五首
おもかけに
三七六思をばいかで知らせむ姿こそ其俤にあらはれぬとも
三七七物思ふ人の俤あらはれて夢ならずとも妹は見るらむ
三七八すがる鳴く野べの夕暮哀なり尾花が末に風を任せて
三七九過果ぬいかに尾花の恨らむ歸さにはよも招きしもせじ
三八〇霧罩てそことも見えず粟津野のすゑの薄靡くなる覽
ふちばかま
三八一故郷に歸り來てこそ蘭ぬしなき色をあはれには見れ
三八二散果て今は色なき蘭誰かは野べに來ても見るべき
三八三花の色はちぐさなれども紫のゆかりうれしき蘭かな
三八四かねてより待ちしもしるく蘭秋の野毎に綻びにけり
三八五ませの内に移し植るてし蘭色なつかしく匂ふ暮かな
はじもみぢ
三八六はかなさを思知るべき妻なれや色づき初る衣手の森
三八七知るらめや我が園生なる櫨紅葉其色よりも深き思を
三八八物毎に秋の哀はありしかど心に染むは木葉なりけり
三八九道のべを時雨と共に廻行けば我心さへ紅葉しにけり
三九〇散とは春の花にも習ひにきされど紅葉は色勝りけり
冬十五首
はつゆき
三九一晴れ曇る時雨の空のさだめ哉されば今朝の初雪
三九二津の國の遠里を野の萩がえに雪の花咲冬は來にけり
三九三行やらで眺つる哉近江路や愛には降らぬひらのみ雪を
三九四昨日こそ落る木葉を眺めしか今朝又雪の空に散らむ
をのゝすみがま
三九五大方はさこそは冬の寂しけれ思知らぬや小野の炭竈
三九六軒近く煙をたつる炭がまを我がものと見る大原の里
三九七後世にまたすかるべき思をも思知らするまきの炭竈
三九八すごきかなやく炭竈に立つ煙心細さを空に見せつゝ
三九九見渡せば冬の山べの霞むかなこや炭竈の煙なるらむ
四〇〇かきくらす心ぞはれぬ大原やゝく炭竈の煙のみかは
四〇一まき繁き深山の奥の炭竈にかよひて過ぐる賤が心よ
うつみ火
四〇二うしとのみ身を思知る轉寢の友とぞ頼む夜はの埋火
四〇三罪も嘸消せざるらむ埋火も灰の下には絕せざりけり
四〇四身の思人の思と埋火の下にくゆるといづれまされる
四〇五人知るや夜はの埋火下もえてながき思にくゆる心を
戀十五首
おもかけに
四〇六思をばいかで知らせむ姿こそ其俤にあらはれぬとも
四〇七物思ふ人の俤あらはれて夢ならずとも妹は見るらむ
四〇八すがる鳴く野べの夕暮哀なり尾花が末に風を任せて
四〇九過果ぬいかに尾花の恨らむ歸さにはよも招きしもせじ
四一〇霧罩てそことも見えず粟津野のすゑの薄靡くなる覽
ふちばかま
四一一故郷に歸り來てこそ蘭ぬしなき色をあはれには見れ
四一二散果て今は色なき蘭誰かは野べに來ても見るべき
四一三花の色はちぐさなれども紫のゆかりうれしき蘭かな
四一四かねてより待ちしもしるく蘭秋の野毎に綻びにけり
四一五ませの内に移し植るてし蘭色なつかしく匂ふ暮かな
はじもみぢ
四一六はかなさを思知るべき妻なれや色づき初る衣手の森
四一七知るらめや我が園生なる櫨紅葉其色よりも深き思を
四一八物毎に秋の哀はありしかど心に染むは木葉なりけり
四一九道のべを時雨と共に廻行けば我心さへ紅葉しにけり
四二〇散とは春の花にも習ひにきされど紅葉は色勝りけり
冬十五首
はつゆき
四二一晴れ曇る時雨の空のさだめ哉されば今朝の初雪
四二二津の國の遠里を野の萩がえに雪の花咲冬は來にけり
四二三行やらで眺つる哉近江路や愛には降らぬひらのみ雪を
四二四昨日こそ落る木葉を眺めしか今朝又雪の空に散らむ
をのゝすみがま
四二五大方はさこそは冬の寂しけれ思知らぬや小野の炭竈
四二六軒近く煙をたつる炭がまを我がものと見る大原の里
四二七後世にまたすかるべき思をも思知らするまきの炭竈
四二八すごきかなやく炭竈に立つ煙心細さを空に見せつゝ
四二九見渡せば冬の山べの霞むかなこや炭竈の煙なるらむ
四三〇かきくらす心ぞはれぬ大原やゝく炭竈の煙のみかは
四三一まき繁き深山の奥の炭竈にかよひて過ぐる賤が心よ
うつみ火
四三二うしとのみ身を思知る轉寢の友とぞ頼む夜はの埋火
四三三罪も嘸消せざるらむ埋火も灰の下には絕せざりけり
四三四身の思人の思と埋火の下にくゆるといづれまされる
四三五人知るや夜はの埋火下もえてながき思にくゆる心を
戀十五首
おもかけに
四三六思をばいかで知らせむ姿こそ其俤にあらはれぬとも
四三七物思ふ人の俤あらはれて夢ならずとも妹は見るらむ
四三八すがる鳴く野べの夕暮哀なり尾花が末に風を任せて
四三九過果ぬいかに尾花の恨らむ歸さにはよも招きしもせじ
四四〇霧罩てそことも見えず粟津野のすゑの薄靡くなる覽
ふちばかま
四四一故郷に歸り來てこそ蘭ぬしなき色をあはれには見れ
四四二散果て今は色なき蘭誰かは野べに來ても見るべき
四四三花の色はちぐさなれども紫のゆかりうれしき蘭かな
四四四かねてより待ちしもしるく蘭秋の野毎に綻びにけり
四四五ませの内に移し植るてし蘭色なつかしく匂ふ暮かな
はじもみぢ
四四六はかなさを思知るべき妻なれや色づき初る衣手の森
四四七知るらめや我が園生なる櫨紅葉其色よりも深き思を
四四八物毎に秋の哀はありしかど心に染むは木葉なりけり
四四九道のべを時雨と共に廻行けば我心さへ紅葉しにけり
四五〇散とは春の花にも習ひにきされど紅葉は色勝りけり
冬十五首
はつゆき
四五一晴れ曇る時雨の空のさだめ哉されば今朝の初雪
四五二津の國の遠里を野の萩がえに雪の花咲冬は來にけり
四五三行やらで眺つる哉近江路や愛には降らぬひらのみ雪を
四五四昨日こそ落る木葉を眺めしか今朝又雪の空に散らむ
をのゝすみがま
四五五大方はさこそは冬の寂しけれ思知らぬや小野の炭竈
四五六軒近く煙をたつる炭がまを我がものと見る大原の里
四五七後世にまたすかるべき思をも思知らするまきの炭竈
四五八すごきかなやく炭竈に立つ煙心細さを空に見せつゝ
四五九見

六花の色や尚濃からまし匂ふ枝に山郭公据て見たらば
七故郷と思ひしかども花故に歸住む身となりぬべき哉
八よしの山花にかさなる花なれや櫻が枝にかゝる白雲
九あくがれて多くの花を見しか共尚山里の色は育けり
〇身のうさに思よそへて眺むれどのかぬは花の情也鳧
一花ゆゑに問ひ來る人の別まで思へば悲し春の山かせ
二雲に紛ふ高嶺の花の俤は散らで心にかゝるなりけり
三花に吹く春のやま風にほひ來て心まよはす曙のそら
四汀にもあらぬ櫻の枝にさへさゝ波よする志賀の山風
五風わたる楢も道も春ながら雪のみ分くる志賀の山越
六風を痛み山こぐ我は舟なれや花の白波分て來つれば
七山櫻をしまぬ人もありぬべし風の心を我になしつゝ
八松風に眺めし秋は花散に厭ふべしとは思はざりしを
九み吉野の花の梢に誘はれてあだに散り來る春の山風
〇庵の上に幾重錦をふきつらむ花散る春の小初瀬の山
一花の散る吉野の奥の寒き哉空に知らるゝ雪と見る迄
二櫻花をしみ殘ねたる夕されは涙も風に散る心ちして
三山高み雲に紛へて見る花の散るは晴ぬる心ち社すれ
四山里の峯の白雲ちりぬれば花見る人も又晴れにけり
五峯の花散りかゝれるを便にて流れぬ影をながす山水
六可惜しやえぞが千島の春の花詠る人もなくて散なむ
七み吉野の外山の花は散りにけり奥の梢や盛なるらむ
八うつろへど人の心の花は尚見えぬ色に慰みもなし
九斯計りえ難き物を月よりも花こそ世をば思知りけれ
〇心あれや惜まれてこそ花は散れ哀憂世の風を痛まぬ
一かねて思ふとは宛ちたがふ世に此と計りを背く花哉
二花はちりぬ又來む花は遙也折につけたる慰めやなに
三さらでだに散れば空しき花の色に染し心を思返しつ
四思ふべし今年計と詠め來て四十の春の花になれぬる
五散る花の故郷とこそ成にけれ我が住む宿の春の暮方

月五十首

六三日月の仄めき初むる垣ねより頃て秋なる空の通路
七待得たる影は物かは夜はの月出る氣色の山のはの空
八如やらぬ月をぞ思ふ待得ても頃て泪に曇るべければ
九すむ月に思ひしまゝの心哉秋と賴みし影を待ちえて
〇尋ね來て見るもかひある廣澤の池こそ月の光也けれ
一逢坂に駒ひく夜はの月影を秋のみ空の關とこそ見れ
二曇るとて今日のみ空を眺すば名をえたる夜のかひ

三秋の夜をなに長月と思ひけむ今宵の月に明くる東雲
四秋の夜はよも更科と思ひしに姨捨山に雲のかゝれる
五秋の夜の月のあたりの村雲を拂ふとすれば荻の上風
六をり知れる秋の野原の花はみな月の光の匂なりけり
七さを鹿も今宵は聲や立てざらむ月の光の雪に埋れて
八蟲の音を月と共にぞ詠めつる野原の露を袖に任せて
九誰となく心に人の待たるゝや詠むる月の誘ふなる覽
〇墨れ月詠むる人や立入るといらずば空も心ありなむ
一うちしぐれ晴行く空を眺むれば月の桂も色增りけり
二月影の身にしむ音となるものは光を分くる峯の松風
三詠めこし心は花のなごりにて月に春ある三吉野の山
四庵さす野路も山路も月さえてをりよき旅の草枕かな
五み山べは木蔭も暗し浪路こそ遙に月は冴え增りけれ
六清見潟月の光のさえねれば浪の上にも霜はおきけり
七憂身には詠むるかひもなかり鳧心に曇る秋の夜の月
八我が涙こは何事ぞ秋の夜の闇なき空に闇を敷かせて
九奉も秋も思分れぬ深き山に住むなる人も月は見らむ
〇思ひ入る心の末に月さえて深き色ある山のおくかな
一思ひ入りて詠むる夜はの月かげは都の空も嫉捨の山
二墨なく月はさりとも照すらむもの思ふ身の行末の秋
三誇人の心のうちにすむ月の外とや思ふ秋のみそらを
四曇りこし心の空も晴れぬべし浮世を誘ふ月を詠めて
五歸りいで、後の闇路を照さなむ心に宿る山の端の月
六いつかわれ都の外の月を見て思ひしとを思ひ合せむ
七我宿に餘な冴そ夜はの月思ふとある身とは知らずや
八見る人の心よりすむ月なれば更行く儘に冴增りけり
九はりま潟磯うつ波は耳なれて傾ぶく月に夢を殘しつ
〇月かげの流るゝ天の川水によどむばかりの櫂もがな
一野べしむるすゝの篠屋に鳴立て窓に傾く月を見る哉
二浮世思ふ柴の庵の隙をあらみ誘ふか月の西に傾ぶく
三有明の月の行方を詠めてぞ野寺の鐘は聞べかりける
四月を待つ宵の袂のまゝよりもなほ露深き東雲のそら
五月よりもなほすみまさる心かな猶癡ざめの秋の有明
六月かげに哀をそふる鹿の音にまた哀そふ鐘の音かな
七冴えわたる月に心のかよふかな濱名の橋の有明の空
八入りぬれど涙の露に影とめて月はたもとに有明の空
九山の端にあかで入りぬる月影は松の嵐に殘る也けり
〇年をへて月や哀と思らむ詠むる人の變り行くをば

一木のもとに月も光を和げて神さびわたる峯の秋かせ
二三笠山ながむる月は行く末の秋も遙けしあきの宮人
三萬代の秋の例と見ゆるかなみもすそ川に澄める月影

詠百首和歌　常座百首

學生安成

いかばかり暮行く秋を惜むらむ月の盛の別なりせば

春

霞　五首

四いつしかと春立つ空を見渡せば山のかひある朝霞哉
五霞たつみ山の里の梢をば思込めてぞ見るべかりける
六ながめやる心の末をせくものは霞に殘るあはぢ島山
七吉野山花咲きたらば厭はまし霞を今日の詠にはして
八物思ふ心のうちの霞む哉それより外の春はなき身に

梅　五首

九梅の花かねて心にそむとや匂はぬ先の色となるらむ
一〇梅の花咲かねど色は見るものを俤なきは匂なりけり
一一色も香も宿にはおはぬ物なれや賤が垣ねに匂ふ梅が枝
一二山里の梅の主や誰ならむ立枝ばかりをよそに讓りて
一三梅の花ながめぬ人の袖までも情をかくる春の山かせ

歸雁　五首

一四歸雁花を見捨る程なれば何につけてかやよ暫しとも
一五こし方は我も戀しき物なれば心あるべし歸る雁がね
一六秋は又我が都へと來る雁を越路の人はいかゞ詠むる
一七行返り宿も定めぬ雁がねも春と秋とは思ひわくめり
一八かりがねの歸る哀はとまりけり志賀の山べの春の曙

夏

照射　五首

一九夏山に秋の哀を先だて、色に見するは黒射なりけり
二〇照射する賤が心もいかでかは鹿哀とは思はざるべき
二一我もする照射なれ共よそに見る火串の影は流石心に
二二照射する外山が原の夏草をいかなる賤の思ふならむ
二三外山なる照射の影を見ても先南無阿彌陀佛深き的には

納涼　五首

二四夏の月の秋よりも尚嬉しきは涼みかねつゝ待出る程
二五夏もなくて過ぬるかとぞ思ぬる立田河原の柳蔭には
二六いかにとよ板ゐの水を掬ぶとて夏の心は解にける哉
二七山河の岩うつ音を聞くなべに心涼しきひぐらしの聲

九八涼みつる楢の木陰の夕風のほに出ぬ荻に音を立つる

秋

霧　五首

九〇霧深しそれも詠めぬ心には秋の哀もこもらざりけり

九一眺めやる秋の山べの朝霧は宿の雌に暮れかゝるほど

九二秋霧も心あらなむ煙ゆゑ人に知らるゝむろの八島は

九三立こむる霧はいづこも變らねど哀深きは三吉野の谷

九四晴れやらぬ心のすゑも哀なりながむる宿の朝霧の空

鹿　五首

九五哀知る秋になりぬと思ふより先待るゝはさを鹿の聲

九六山里のさを鹿の音の無りせば心なき身と成果なまし

九七秋の鹿われも〳〵と妻戀ひむその涙をばよその秋に

九八我厭ふ此世の中の思ひいでは鹿の鳴音に袖を任せじ

九九山ざとのたゞ獨寢に夢覺めて鹿も鳴くなり庭の松風

擣衣　五首

一〇〇衣擣音にも色のあれば衽只よそに聞く身には有らめ

一衣うつとほぢの里の槌の音に寢覺の人や袖濡すらむ

二衣うつ音を誘はぬ風だにも秋ふく色はうたゝねの夢

三衣うつ賤が詠めのいかなれば槌の音まで哀なるらむ

四衣さを風にまかする寢覺には衣も擣たで哀うつなり

冬

時雨　五首

五戀ひもせず物も思はぬ袖の上に涙を流す初時雨かな

六槇のやの時雨る音を閨袖に木の葉のみには限ざり鳧

七我宿に時雨來にけり山の端に一村曇る雲とみたれば

八夕暮の空のけしきを見る人や時雨ぬ先に袖濡すらむ

九村時雨庭の木の葉に音はして人の心をそめて過なり

氷　五首

一〇我が里の池さへ冬や知ぬらむ今朝は汀に氷しにけり

一凍り行く氷をやがて汀にてしたしく返る志賀の浦波

二水鳥の床はいかにぞ冴る夜は靡れの池か氷ざるべき

三世の中の人のつらゝを思ふには我が心まで滯りけり

四とけやらぬ枕の下の氷柱にも通ふ心の色や見るらむ

（待夜もあさくらのやのうす氷いかなるかさけむとすらむ　前大納言家多）

戀

寄雲戀　五首

五村雲の絕間に出る星までも思よそへて見るとはたゞ

六君故に詠むる空の曇るかなやがて涙の雨とふりつゝ

七つらかりし宿の軒端に雲とちば哀なるべき身の煙哉

八雲驚ぐ夕の空を君はよも我がたぐひとは詠ざらむ

九戀ひ死なむ後を思ふも哀なりながむる空の行末の雲

寄山戀　五首

一〇思入て後にぞ思ふ吉野山うかりし人も嬉しかりけり

一猶戀む起の白根に消ぬ雪の折しらぬ名は世に殘す共

二我戀はかさなる山を越えね共隔てゝ年の積りぬる哉

三頼むべし唐土舟の面かげをうつしとゞむる山川の水

四其のなかに頼むこゝろの深きかな南の山の月の明王

山家　五首

五心よりみ山の里に移り來て暫しになれば尚厭はれぬ

六厭ひある心の底のすみぬれば吉野の奥も尚淺きかな

七さてはさは浮世出でたる山陰に轉て心の尚殘るらむ

八しめてけり片岡山の杉の庵に時ぎき立つは朝煙のみ

九都にも尚山里は有りぬべし心と身との一つなりせば

海路

一〇心ありて物語せむ海人もがな舟こぎとめむ松が浦島

一波の上に一つに見ゆる雲までは及びつきぬる我心哉

二思ひやれ波にまかする心をば磯の松風沖に吹かせて

三幾度か夢より夢にうつるらむあしやの沖の舟の通路

四見人の心盡しに和歌の浦をかきぞ留むるもじの關守

建久元年十二月十五六兩夜之間左將軍於二內裏一直盧一伸定羽林令レ詠二百首一云〻並五時之間被レ終其篇畢其後雖レ給二題歌一未之比　御修法勤行之間無二寸暇一不レ似二安成一故障然而於二幕內一大略越年而之間至二正月二十二日一猶御祈等雖レ不レ被二結願一乘二急要一令レ參二大炊殿一之時不レ堪二議責一不レ能二獻止一慈以二右筆一自二申半一至二酉半一四季五十首詠進退出翌日自二辰終一至二午始一戀雜五十首令二詠進一並二時餘也於二今度一落定歟尤爲レ恐爲レ耻而已

學生安成記レ之

十題十首和歌

天象　十首

月、日、星、霞、雷、霧、時雨、雪、雲、風

一和ぐる光にあまる影なれやいすゞ河原の秋の夜の月

二幾返り浮世にあへる身と成りぬ朝日遙にまつ關の空

三中々にやみなるべしと思ひけり秋の七日の星合の空

四いかでわれ昔を近く思はまし春の霞を詠めざりせば

五鳴神の雲のかよひぢ閉ぢはてゝ雨に雨そふ夕立の空

六とにかくに身にしむ物は神垣やひえの山風水の川波

七數ならぬみ屑も捨てず照すこそ塵に交はる光也けれ

佛寺　五首

八我國にかゝる寺こそ又なけれ高きみ山に殘る御法よ

九中にすむ月の光は玉櫛笥明る方よりさすとこそ聞け

一〇とまりゐむ鷲のみ山の月影の光を移す峯のつゞきに

一一頼むべし唐土舟の面かげをうつしとゞむる山川の水

一二其のなかに頼むこゝろの深きかな南の山の月の明王

山家　五首

一三心よりみ山の里に移り來て暫しになれば尚厭はれぬ

一四厭ひある心の底のすみぬれば吉野の奥も尚淺きかな

一五さてはさは浮世出でたる山陰に轉て心の尚殘るらむ

一六しめてけり片岡山の杉の庵に時ぎき立つは朝煙のみ

一七都にも尚山里は有りぬべし心と身との一つなりせば

海路

一八心ありて物語せむ海人もがな舟こぎとめむ松が浦島

一九波の上に一つに見ゆる雲までは及びつきぬる我心哉

二〇思ひやれ波にまかする心をば磯の松風沖に吹かせて

二一幾度か夢より夢にうつるらむあしやの沖の舟の通路

二二見人の心盡しに和歌の浦をかきぞ留むるもじの關守

七夕まぐれ山をも野をも霧こめて心の外の哀をぞ見る
七宵の間はもらぬ木の葉に袖ぬれて時雨に成ぬ曉の空
二雪の下をくゞる萱屋の夕煙心ぼそさはなほぞ埋れぬ
三よそはいかに高ねに住ふひなれや雲をば雲と思慣ぬる
四春も秋もすゝむ夕も木枯も哀は風にかぎるなりけり

地儀

山、海、湖、浦、島、河、橋、池、野、園

五末を汲め我が山川の水上に御法の淵は有りと知すや
六沙路まで哀も深き此世かなむなしき舟も波に沈みぬ
七昔思ふながらの山の寢覺には袂につゝく志賀の浦波
八ながむれば心の上もうす煙身を鹽竈の恨めしの世や
九かきとめて物の哀を見るならば松島の浦の蜑の釣舟
一〇なにとなく心の底ぞ浮きにけるかもの河原の春の曙
一一まだふりぬ憂身をつれて思ふかな長柄の橋の古の跡
一二廣澤の池の昔を思ふとて月をながむと人に見えぬる
一三誰も聞け秋の哀は野べなれや鹿鳴立てゝ虫もわぶ也
一四春と冬と逢坂山の關路には霞よりこそ雪も散けれ

居所

禁中、都、山家、田家、深山、旅宿、旅泊、關屋、網代、山科

一五ことはには春の心やさかゆらむ藤壺にすむ秋の宮人
一六大かたの都のやどの殿づくり年もかぎらじ行末の空
一七山里は心ばかりは移りゐて何とか迷ふ憂身なるらむ
一八唯今はいざ賤のをにかはりゐむ山田の庵の秋の夕暮
一九つひに我が願ふ住かはみ吉野の奥なる谷の山陰の庵
二〇東路やよるは都にかへるかな旅寢の庵に衣かへして
二一深しほ草しきつの浪を枕にて心ばそきは苦の下ぶし
二二是迄は物の哀も知らざりつ須磨の關屋の旅寢嬉しな
二三待待ても末哀なる網代かなひをも昔の友ならぬかは
二四哀也これも世渡る庵ぞかし其山科のうてくらめまで

草

竹、蘭、菖蒲、蓬、萩、茅、忍草、思草、忘草

二五友と見る籬の竹に風吹けば我が心さへ靡くなりけり
二六思ふとむなしからざる都より春日の山にかゝる藤波
二七郭公哭く片山岸の岩角に夕日の色は見るべかりけり
二八雨はれぬ夏の夕風かをり來て軒端涼しき菖蒲草かな
二九つひにさは蓬が本の露の身と思ひ果ればやがて涙の
三〇心して聽ふべかりける荻をしも宿の物とて偖も夕風

三一へにけりな淺茅が末の夕露を心にかけて身は四十迄
三二茂るべし心にものを忍草うき身の宿の軒端ばかりに
三三思草茂れるとしもなけれども心あるべきませの内哉
三四いないはじ此世の人の門毎に植うべき物は忘草かな

木

住吉松、三輪槇、吉野櫻、をふの浦梨、御室柳、龍田川柳、奥山眞木、あだちの眞弓、みなのふし原

檀

三五波にふけ霞の春のあさみどり風も色あるすみ吉の松
三六古のしるしと見るも哀なり色もかはらぬ三輪の杉村
三七三吉野の吉野の山の櫻花浮世に老いて急ぎちるらむ
三八偖もさはいかに成ぬる身なる覺思ぞ分ぬ苧生の浦梨
三九みむろ山榊にかゝる木綿しでは秋の月かげ冬の白雪
四〇それもなつ憂身の影と頼むこと龍田河原の柳計りか
四一奥山の槇の棺を軒に見て哀いつさは住まむとすらむ
四二昨日かも都の花を見し物をあだちのま弓紅葉しに鳧
四三戰ふるゐなのふし原風こえて衣手寒し道のべの冬
四四植て鳧よもの山べの秋の色を田末に草るはじもの紅葉

鳥

鶯、喚子鳥、郭公、水鶏、雁、鶉、鴫、千鳥、雉、鶏

四五深き山に鳥も今はの頃はまた更に待たるゝ鶯のこゑ
四六契りおく人とや我を喚子鳥おぼえぬものを黄昏の空
四七郭公たのむる妹と成に鳧更たればとてぬる夜無れば
四八まだきゝぬ槇の板戸を叩哉我ぞ水鶏と名告なるべし
四九鳴く雁よ己が涙をかきすてゝ人の袴めぬ袖の上かは
五〇故郷は鶉鳴く野と成ぬれどなほ跡殘る庭のませがき
五一物思ふ心のかすや知りぬらむ此の曉の鳴の羽ねがき
五二よさの浦獨うき寢のかたち枕唯我がための友千鳥かな
五三難波潟蘆間の蜑の一つがひ思ひ絕えたるみ吉野の山
五四何となく涙落ちそふ寢覺かなゆふつけ鳥の曉のこゑ

獣

獅子、象、羊、虎、熊、馬、猿、犬、猪、鹿

五五位山浮世に社は降る共獅子の座にゐる身とも成なむ
五六如法きやうかく道場の曉に日象天を見ぬはみぬかは
五七極樂へまだ我が心行きつかず羊の歩しばしとゞまれ
五八其心ありもしぬべき我身かはなど此國に虎の無らむ
五九思ひとりて熊に宿かる山伏の心の底は涼しかるらむ
六〇東路やいくその山を越えぬらむ野原篠原駒に任せて

三山深みかつ〳〵ぬる〳〵袂かな峯のひばらの猿の里聲
三一詠れば哀もさ夜も更けにけり賤が萱屋の犬の聲まで
三二これも夢尚睡まであり〳〵ぬべし臥猪の床に身を任す共
三三鹿の音を山の奥よりさそひ來て籬の秋につたふ秋風

蟲

蝶、蛙、日暮、松蟲、鈴蟲、蚤、蛸、蜘蛛、蝙蝠、紙蟲

三四もし人の夢や現にあらはれて籬の花の蝶と見ゆらむ
三五晴れにけり稻葉の綠雨過きて山田のくろに蛙鳴く也
三六夕立の程ばかりこそ絕間にて晴るればやがて蜩の聲
三七寂しとよ岸のこ萩はうら枯ていざよふ月を松蟲の聲
三八憂身かなふりぬる上に尚ふりぬ鈴鹿の山の鈴蟲の聲
三九蟋蟀蓬の宿に秋暮れて哀れをよそのものとなしつゝ
四〇糸薄萩の錦に植ゑませてはた織る蟲の聲を聞くかな
四一笹蟹のいと哀なる此世かな軒端の宿をよそに思はじ
四二蝙蝠は夜も戸たてぬ古寺に內外もなく飛びまがふ也
四三いかにせむ御法の塵を拂にもしみの敎や尚殘るらむ

釋敎　十波羅密

四四檀、戒、忍、進、禪、惠、方、願、力、智
四五今は我山のは近き月をだに惜むまじとぞ思知りぬる
四六北南たもつ心は淺くともさづくる法は深しとを知れ
四七忍びづまの忍びなれにし心こそやがて異の心なりけれ
四八嬉しくも佛に近くなれにける心に悟る身とぞ成ぬる
四九目を閉ぢて息を斂ふる心には御法計りの殘る也けり
五〇ひえの山雪の窓うつ物やなに見殘す法も嵐なりけり
五一品々の人の心を思ふとてさま〴〵になる我が心かな
五二いつか我幾らの誓現して道より道に知べをもせむ
五三うきながら心たわまで長へぬ法の驗を賴むしるしに
五四是ぞさは憂身を頓て佛ぞと心えつべき心ちこそすれ

神祇

日吉、貴船、住吉、稻荷、鹿島、大原野、春日、賀茂、八幡、伊勢

五五三世までに結びおきける契かな哀とおもへ七の御社
五六貴船川たぎつ白波袖に見て乾きて歸る春を待つかな
五七思ふことつもりの浦の藻鹽草いくら茂りぬ住吉の神
五八ちりとなる光に見せよいなり山すぎの庵のさとの際
五九めぐり逢ふ始終の行へかなかしまの宮にかよふ心は
六〇をしは山松に千年を宿しおきて末も遙き宮の內哉
六一忍びこし昔を今に三笠山のぞかけるべき天の下かな

二六 迄でに吹くかもの川風さ夜更けて心に籠る朱の玉垣
二七 石清水流久しき天皇の千代のみかげは神のまに〳〵
二八 神風や御裳濯川の末の波昔の瀬にも立ちかへるかな

秋日詣二住吉社一 詠二百首和歌

雑五十首

二九 法の如く蓮の糸をくりしかど尚みだれじな住吉の神
三〇 法のはな散りし筵にのぞみてや光をましゝ住吉の神
三一 石川のつかの昔を尋ねしをあはれとや見し住吉の神
三二 とにかくに昔をすくふおほ網に哀をかけよ住吉の神
三三 心ざし深きあまりに尋ねきぬあはれと思へ住吉の神
三四 さてもさぞ思ふ心の末やなに行くへを守れ住吉の神
三五 世中の深き哀を知りながらよそぢに過ぎぬ住吉の神
三六 さのみやはとぞともなく世にもへむ哀いざゝは住吉の神
三七 世中の世中にてもあるならば悔しかるべき住吉の神
三八 松風にまかする舟を極楽のきしまでおくれ住吉の神
三九 神もげに今は浮世を厭ふらし住吉の名を改むるまで
四〇 風も斯いかで此世を厭はでは今日迄もさは住吉の松
四一 斯計り住侘ぶる世は住吉の神計りにぞ祈るべらなる
四二 我も人も唯心をぞ厭ふべき大かたの世は住吉のみや
四三 浮世をも尚住吉と思ふらむ人の心はげにもはかなき
四四 さらでだに尚頼むべき住吉に古里いとふ我が心こそ
四五 住吉と思ふべき理を知り乍らいかに此世を捨る心ぞ
四六 年ふれど色も變らぬ袂かないつかうき身は住吉の神
四七 我が袖を涙にのみやくたすべき憑をかけよ住吉の神
四八 厭ふべし倩長へば住の江のまつと迚は世の憂目のみ
四九 よそぢまで愛への緒には繋れぬまて我許せ住吉の神
五〇 住吉のきし方知らぬ身なりせば今行末も頼れやせむ
五一 夢の世をさましで住まむ行末に思ひ合せよ住吉の神
五二 人も見よ神も憐れめ住の江に底の心を浮べつるかな
五三 住の江の深きながめの夕かな心の底を神は知るらむ
五四 さてもなほ尚我思ふとは住吉の松風くらで三吉野の山
五五 浦風を松の梢に吹きとめて袖をもわする住の江の春
五六 住の江とながらの橋の舊き跡と心にたぐへ通ふ秋風
五七 住吉の海に傾く夕づくひ憂身の影も哀れいつまで
五八 住吉の松の嵐に通ふなり阿波のなるとの浪の音まで
五九 住よしの浦のうきねの寝覚には松風たゝむ沖つ白波
六〇 梢より沖つしほ風わたらずば音には聞かじ住吉の神
六一 住吉の松の葉越に見るべきは遠ざかり行く沖の釣舟
六二 燈ゆゑ鹽屋とよそに思ふらし蚊遣火立つる住吉の里
六三 暑さをば松の嵐に納めおきて秋を浮ぶる住の江の池

秋

六四 風も嘯心盡しに來る秋を住のえとのみ待とりてさは
六五 おきつ風あはれはいかに住吉の松の梢と荻の上葉と
六六 吹くからに浪の哀のうちそふはげに住吉の松の秋風
六七 思入れて松吹風を聞くとならば唯住の江の秋の夕暮
六八 住の江のしまの村荻露もなし智しな吹きそ松の浦風
六九 住吉のいがきの本の蟲の音よ己が聲にも松風のある
七〇 住吉のしきつの浦の夕されに鹿の音渡す武庫の山風
七一 おしなべて皆住吉の松の中に秋をこめたる鳶の色哉
七二 暮の秋住の江どの〳〵池に來て浪間の月に心すましつ
七三 住吉の遠里小野の萩が枝もうら枯れ渡る秋の寂しさ

冬

七四 住よしの庭も梢も霜がれて冬こそ松の色はありけれ
七五 木葉にも紛れぬ物は住の江の時雨にたぐふ庭の松風
七六 住吉の松の梢の時雨すば葉かへぬ色もかひや無らむ
七七 初雪の松のこずゑに散るほどは心あらなむ住吉の風
七八 さ夜千鳥こゑ心せよ住の江の風の哀を松にまかせむ
七九 住吉の松風通ふ濱千鳥ながめにあまる聲こゆるなり
八〇 こはいかに霜冴る夜の鷲の聲を住の江に聞く冬の曙
八一 住吉の冬の朝の霰こそいがきのうちに玉はしきけれ
八二 住吉のこずゑの雪の下縁風よりもなほむき色かな
八三 住吉は齢つもりの浦なれば神は年をや惜まざるらむ

述懐

八四 新るべし昔にかへる我が國をさて長らへむ住吉の神
八五 深き風松の梢に吹かずとも此の世みだすな住吉の神
八六 我が思ふ心はあれどとはなし唯住吉の神のまに〳〵
八七 四の海に立つ白波を住吉のお前の鹽に納めてしがな
八八 亂れゆく世にこそ頼め唐土を我が國になす住吉の神
八九 うとけかれ三笠の山の藤波をかけても祈る住吉の松
九〇 いかでわれ人の心を住吉と思はむ國に身を宿さまし
九一 露の身の消えむ夕をまづしらむ返す〳〵も住吉の神
九二 住吉にいくかもあらぬ今日のまに匂ふ涙は百草の露
九三 もしは草しきつの浪に朽ちぬとも哀は殘せ住吉の神

俊成入道此の百首を見てよめる

九四 神もいかに心にそめて照けむ御法の後の言の葉の色

返しに

六六法の末を今こそ神も照らめ君が副つる言の葉を見て
建久三年凉秋九月點二定開之山寺一放二清淨之道場一
半行半座之勤如レ說修レ之無二一無三之教如レ法書レ之
則捧二持一部妙典一遙往詣二四天王寺一於二彼靈地一忽
經二再宿一然間或備二十箇種之供養一或唱二一晝夜之
念佛一翌日之朝底露之餘即詣二上宮太子之古墳一漂
疑二下化衆生之態地一次過二難波之海浦一到二住吉之
社壇一報賽已了瞻望忽催于レ時雲海眇花嵐日蕭索不
レ堪二感情一聊遙裁懷一短略未レ過二一日一和言已滿二
百首一其詞雖レ區恣置二住吉之詞一其心雖レ淺又願二滅
罪之心一丹誠無二二乏一應豊空廾二退憶一古今未レ聞二蹤
跡一仍雖レ恐二藻思之拙一竊納二褒詞之中一古松若有レ
情言葉定無朽者歟
我立杣門人三部傳法阿闍梨某記レ之

左大將家六百番歌合百首

春

元日宴

もゝしきや春を迎ふる酒盃に君が千年の影ぞ映れる　左　後京極

名殘には春の袂もさえにけり霞よりちる雪の氣色に　左　有家朝臣

春くれば氷をはらふ谷風の音にぞつゝく山川のみづ　左　後京極

○若草

鶯啼し去年の枯葉の殘るまに其とも見えぬ春の若草　左　季經卿

賭射

梓弓春几重にちる雪を今日たつひまの袖に見るかな　左　顯昭

野遊

是ぞ此春の野べよと見ゆる哉大宮人の打群れて行く　左　後京極

雉

鳴きてたつ雉子の宿を尋ぬれば裾野の原の柴の下草　左　定家朝臣

雲雀

春深き野べの霞の下風に吹かれてあがる夕雲雀かな　左　季經卿

遊絲

空に知れ春の軒端に遊ぶ絲の思筋なき身の行方をば　左　後京極

春曙

思ひ出では同じ詠めにかへるまで心にのこれ春の曙　左　顯昭

遲日

雲の上につるの諧聲訪ひれて哀のどけき春の空かな　左　季經卿

志賀山越

道もせに花の白雪ふりとぢて冬にぞ返る志賀の山越　左　定家

三月三日

酒盃のながれと共に匂ふらしけふの花吹く春の山風　左　定家

蛙

まだ採らぬ早苗の末葉隈くめりすだく蛙の聲の譽に　左　後京極

殘春

山の端に匂ひし花の雲きえて春の日數は有あけの月　左　季經卿

夏

新樹

顯れむ秋をも知らぬ楓かな常磐の色を暫しぬすみて　左　後京極

夏草

夏草の中を露けみ分る野は我が故郷の垣ねなりけり　左　顯昭

賀茂祭

昔より齋の宮に吹きそめて今日は凉しき賀茂の河風　左　定家

鵜川

筏飼舟あはれとぞ見る武夫のやそうぢ川の夕闇の空　左　定家

夏夜

夏の夜の歡にも入れじ郭公聞かぬさきにぞ明る東雲　左　顯昭

夏衣

夏衣ひとへなれども中々に暑さぞまさる裏と成ける　左　後京極

扇

夕まぐれならす扇の風にこそかつ〳〵秋は立始けれ　左　兼宗

夕顏

賤のをが片岡しめて住む宿をもてなす物は夕顏の花　左　顯昭

晩立

これもやと人里とほき片山に夕立すごす杉のむら立　左　定家

蟬

茂りあふ青き紅葉の夕凉み暑さは蟬の聲にゆづりぬ　左　女　房

秋

殘暑

秋淺き日影に夏は殘れども暮るゝまがきは荻の上風　左　女　房

乞巧奠

七夕は雲の上より雲の上に心をかけて嬉しかるらむ　左　兼　宗

稻妻

山の端に殘れる雲の絕間より鳥羽田の面に通ふ稻妻　左　有　家

鶉

移植ゑし萩が離の荒行くをまことの野べになす鶉哉　左　定　家

野分

顯き行く尾花が末に浪こえて眞野の野分に續く凉風　左　定　家

秋雨

日にそへて秋の凉しさ傳ふ哉時雨はまだし夕暮の雨　左　女　房

秋夕

偖もさは如何はすべき身のうさを思果れど秋の夕暮　左　定　家

秋田

わきてなど庵もる釉の萎る穉稻葉に限る秋の風かは　左　定　家

鳴

旅まくら夜はの哀れも百はがき鳴立つ野べの曉の空　左　兼　宗

廣澤池眺望

更級も明石もこゝにさそひ來て月の光はひろ澤の池　左　顯　昭

鳫

傘をへて苔に埋るゝ古寺の軒に秋あるつたの色かな　左　季　經

柞

山めぐる時雨の宿か柞原我が物顏に色の見ゆらむ　左　女　房

九月九日

今日と云へば八重咲菊を九重に重ねし跡も顯れに鳧　左　季　經

秋霜

紅葉は已が染たる色ぞかしよそげに置る今朝の霜哉　左　女　房

暮秋

哀なる身のたぐひとも思ひこし秋も今はの夕暮の空　左　顯　昭

冬

落葉

時雨つる峰の村雲晴のきて風よりふるは木葉也けり　左　定　家

殘菊

花もかく雪のませまで見る菊の匂は袖に又殘さなむ　左　兼　宗

枯野

秋の色の移ふ野べを來て見れば哀は枯ぬ物にぞ有ける　左　季　經

雪

風渡る花のあたりの春雨は冬の空にも有りける物を　左　有　家

野行幸

敏慮も逢ふを嬉しと思らむ絕にし野べの今日の行幸に　左　兼　宗

冬朝

軒の內に雀の聲はなるれども人こそ訪ね今朝の白雪　左　女　房

寒松

三槇には夜はのしら雪積るらし音よわり行く峯の松風　左　季　經
四槇柴の暫しと思ひし世中の四十の冬に成にけるかな　左　顯　昭　述懐
五徒らに明る夜をのみ重ぬれば猶ふすまの床ぞ寂しき
六佛名　左　女　房
七唱へつる佛の御名は朝日にてやがて消行く一年の罪
懺　初懺　左　女　房
八今朝までも斯る思はなき物を哀あやしき我が涙かな　述懐　左　定　家
九我とはど思ふに斯る涙こそ抑ふる袖の下になりぬれ　閑懺　左　有　家
一〇鹿のねも嵐に頼ふ鐘の音も聞よりこそは袖は濡しか　見懺　左　衆　宗
一一見ればげに中々にとて疎くとも倚儀の離るべきかは　尋懺　左　女　房
一二心こそ行くへも知らね三輪の山杉の梢の夕暮のそら　新懺　左　顯　昭
一三思かねそのこゝろの本に木綿懸て懺こそ渡れ三川の橋　契懺　左　定　家
一四只たのめ誓へば人の偽を重ねてこそは又も恨みむ　待懺　左　顯　昭
一五青の鐘を聞過ぐすだに苦しきに鳥の音を鳴袖の上哉　過懺　左　定　家
一六逢見てはまつと思ひし言の葉に心の露の倚重きかな　別懺　左　季　經
一七暫しなる今朝の別にみつるかな心がゝりの行末の夢　顯懺　左　有　家
一八よしさらば逢て重ぬる濡衣の恨に朽る妻も有らむ　稀懺　左　顯　昭
一九絶えはてぬ情の山に雲消えてはるゝ心や星合のそら　絶懺　左　顯　昭
二〇さしも我が絶す忍し中にしも渡して鳧なくめの岩橋　恨懺　左　有　家
二一ものおもふ心の秋の夕まぐれ眞葛が原に風渡るなり　舊懺　左　有　家

一二懺ひそめし心はいつぞいそのかみ都の奥の夕暮の空　曉懺　左　定　家
二二曉の涙やせめてたぐふらむ袖におちくる鐘の音かな　朝懺　左　定　家
二三いざ命おもひは夜はにつきはてぬ夕も待たじ秋の暮　晝懺　左　季　經
二四かたおかぬいもが心の日影かな中空にのみ物思して　夕懺　左　定　家
二五暗の哀ばかりは忍べども今日をばいでず春の夕ぐれ　夜懺　左　女　房
二六見せばやな夜床に積る塵をのみ有ましとに拂氣色を　老懺　左　衆　宗
二七懺初めし心の色につむ年は我が黒髪に顯はれにけり　幼懺　左　季　經
二八くらべこし振分髪も其かみもつひの思や倚通ひけむ　遠懺　左　女　房
二九遥なるいく草枕結びてかその下紐のとけむとすらむ　近懺　左　季　經
三〇句ひ來る梢ばかりをなさはにて主は遠き宿の梅がえ　旅懺　左　定　家
三一東路の夜はのねざめを語らなむ都の山にかゝる月影　寄月懺　左　定　家
三二恩にも思ひやるかな君ももし獨や今夜月を見るらむ　寄雲懺　左　衆　宗
三三懺〔ねざめ〕夜はの煙の雲とならば君が宿にはひきて時雨む　寄風懺　左　女　房
三四心あらば吹かすもあらなむ宵々に人待宿の庭の松風　寄雨懺　左　女　房
三五雲どづる宿の軒ばの夕ながめ懺より餘る雨の音かは　寄煙懺　左　定　家
三六よしさらば逢て重ぬる濡衣の恨に朽る妻も有らむ　寄鹽竈や〻浦の煙を風に見てなびかぬ人の心をぞ思ふ　寄松懺　左　季　經
三七絶えはてぬ情の山に雲消えてはるゝ心や星合のそら　吉野山懺の餘りに思入りぬ中々さらば人やとふとて　寄海懺　左　定　家
三八さしも我が絶す忍し中にしも渡して鳧なくめの岩橋　渡つ海の浪のあなたに人はすむ心あらなむ風の通路　寄河懺　左　顯　昭
三九ものおもふ心の秋の夕まぐれ眞葛が原に風渡るなり　涙川逢瀬も知らぬ澪標たけこす程になりにけるかな　寄關懺　左　女　房

四〇人懺ふる我が晩よと思ひけり須磨の關やの有明の月　寄橋懺　左　有　家
四一本も倚長柄の橋は造てむつれなき懺は跡だにもなし　寄草懺　左　定　家
四二眺めする心のねより生初めて軒の葱は茂るなるべし　寄木懺　左　衆　宗
四三人懺ふる宿の櫻に風吹けば花も泪になりにけるかな　寄鳥懺　左　有　家
四四風ひぬる夜はの袂に風ふけて泪の川に千鳥鳴くなり　寄獸懺　左　女　房
四五暮れかゝる裾野の露に鹿鳴て人待つ袖に泪そふなり　寄魚懺　左　季　經
四六露ふかきあはれを思へきり〳〵す枕の下の秋の夕暮　寄笛懺　左　有　家
四七移夜よそに聞きつる笛の音の片しく袖に移りぬる哉　寄琴懺　左　有　家
四八聞かじ唯つれなき人の琴の音に厭ず通ふ松の風をば　寄繪懺　左　顯　昭
四九如何にせむ繪にかく妹にあらねども瞋少き人心かな　寄衣懺　左　有　家
五〇ぬる人の夢は幾度覺めぬらむ返すかひなきさよ衣哉　寄席懺　左　衆　宗
五一懺侘びぬむなしき床のさ席に幾夜經良庭覺しつらむ　寄遊女懺　左　有　家
五二其人とわきて待つらむ妻よりも哀は深き浪の上かな　寄傀儡懺　左　衆　宗
五三立宿る一夜計りの契だにさて長らふる人もある世を　寄海人懺　左　有　家
五四しほたるゝ袖に哀の深きより心にうかぶ海士の釣舟　寄樵夫懺　左　衆　宗
五五賤の男よ思は我もこりぬべし己苦しき木ならね懺　寄商人懺　左　衆　宗
五六見し人の舟の昔をおもふにも恨はふかき泊なりけり

拾玉集巻第四

詠二百首和歌一　左　南海漁父　右　北山樵客

春十五首

山深み怪しく霞む梢かな我が通路に春やきぬらむ

若水をたが板井にか汲初て今朝年波の立を見るらむ

右一首校本在二之十五首之外也

年をへて春に立添ふ朝霞幾よの冬を隔てきぬらむ

香羽山今朝の霞をかき分けて心ぞかよふ白河の関

たつた川柳のまゆに見ゆるかな芳野の山の花の傾

武蔵野に春の氣色も知られ鳧垣ねに芽ぐむ草の緑に

焼きすさむ旦の原は草立て春雨はれぬ岡のべの里

花はまだし心は空に淺みどり春めく頃の白川の里

梅が香を己が匂になしはてゝ垣ねを傳ふ春の山風

三吉野の花の盛を思ひやる心は空に幾かすみしつ

空も海も一つに霞む波路哉海士の釣舟歸る雁がね

中々に花咲かずともありぬべし芳野の山の春の曙

を鹿なく秋の有明の哀まで霞にこもる春の夜の月

花は散りぬ春の驚こゑ深く一むら竹に霞かゝれり

花の色はむぐらが庭に移ろひて心に殘る故郷の春

聽くば野くれ山くれ尋見む春は吾妻へ歸るとぞ聞

夏十首

卯花の青葉の上に風見えて苔に波こす玉川のさと

富浦葺忍の軒を拂ふなよ宿に生ひたる草の名ぞかし

故郷の軒のたち花雨なれて寂しくかをる夕暮の空

曇る夜の月に曾へむ郭公鳴かではれぬる梅雨の空

夏の夜の窓は水鶏に任てむ叩くとすれば明くる東雲

夕立の烈しかりつる名殘哉晴行く野べに殘る雨水

賤のをが更行く闇の門涼好もしからぬ圍居也けり

夏たけて尚尋ぬれば郭公老曾の杜の下に鳴くなり

手に掬ぶ音羽の瀧に夏寂て涼しくなりぬ杜の下風

夏深きみねの松がえ風こえて月かげ涼し有明の山

秋十五首

風の香は鳥羽田の面に先ちぬ淀の渡りに秋やきぬ覽

其も着けふこそ主の身にはしめ心より吹秋の初風

風やあらぬ月もやあらぬ物思ふ我身一つの秋の夕暮

人わかぬ荻の上風吹きぬ也山かげならす秋の夕暮

荻の音もまぬく尾花も松風も一つ哀の傳ふ也けり

深草は秋は由なき栖かな鶉の床にそでならしつる

栗津野の尾花が下に吹きこめて風は渡こす山嵐哉

梢まできぬたの音の誘ひ來て衣うつなり庭の松風

月は秋と思ひふりにし空乍ら今更科に驚かれぬる

雨灑ぐその雲ながらこめてけり柞の杜の霧の夕暮

秋を秋と思知りぬる心より深く成行く身の愁かな

紅葉のはる〳〵梢に風消えて鹿聲すさむ秋の暮かな

秋の色の深くなり行く限哉露すむ庭のまその夕暮

秋の野の鳧の聲社驚るなれうら枯にたる萩に時雨て

秋の歸る道はいづくぞ立田山紅葉散り行く梢也けり

冬十首

時雨くる雲の氣色を眺むれば心も散で物の寂しさ

やよ時雨物思ふ袖の徴せば木葉の後に何を染まし

初瀬山霜に答ふる鐘の音をもろくも誘ふ風の音哉

庭の松雛の竹を曇にて風に月すむ夜はのさやけさ

月も出ぬ浦風通ふ高砂の松に答へて千鳥鳴くなり

今朝見れば雪も津守の浦なれや濱松が枝の波に包まで

岡の秋月影冴よはかなて尾上の雪に鹿や鳴らむ

ふる雪にかもの河原を見渡せば糺の竹も下折に鳧

珍しき千年の春の徴には三輪の里にも松やきる覽

一歳を送り迎ふる夢路よりかへればやがて春の曙

戀十五首

思寢の夢を片しく床までも猶恨めしき鐘の音かな

さりともと頼めて社は貴船川偖しも袖の濡増る覽

鳴果てばいざ洩しても逢坂の關に鳥鳴山のぬの水

難波潟蘆の枯葉に風通へ深き江よりぞほには出なむ

いかにせむ忍の山を越兼て歸る路には又迷ひぬる

等閑に誰が引き植ゑし篠薄秋よりのちも露深きにて

みをたゝば驚く程の袂哉信太の森の露のあけばの

氣色せばさも非ぬ樣に云做つ散なばいかに我言葉よ

徒に心にかなふ泪哉待ちとる袖をしぼり侘びつゝ

強て戀る我れが心の雛面を思へば人の恨むべきかは

今は唯空だのめにもこりねとや待かね山の峯の椎柴

玉章の跡だになしと詠めつる夕の空に鴈鳴き渡る

戀といふ心はよもに通へ共一筋に社身をば戀なれ

我袖を猶も時雨に濡せとや詠むる軒にまがふ叢雲

今朝と云へば嗚も心やすみぬ覽詠めて歸る有明の月

人こふる心あるべき我が身哉涙をつゝめ墨染の袖

（十六首校本在二之二首之後一）

羇旅十首

雨はれぬ旅のやかたに日數經て都戀しき浮雲の空

楫まくら夢路はかなく驚けばふけひの浦の曉の空

都へと思立つよりこゆるぎの急ぐ日數も猶積る哉

都へと思立つよりこゆるぎの急ぐ日數も猶積る哉

歸りこば重なる山の嶺毎にとまる心を栞にはせむ

詠めつる空行く月の行末に思も出でようつの山寺

都思ふ夢だに見えぬ浮寢哉幾夜になりぬ苦の下臥

草枕涙かきあへぬ寢覺哉鳴の羽音に夢をのこして

何となく思ひ續けて眺むれば哀に疊る旅の空かな

一夜見し人の情は立ちかへり心に宿る青はかの里

通ひ馴てあづまも近し足柄の關路遙に思ひしか共

山家十首

山里に獨詠めて思ふかな世に住む人の心づよさを

物にふれて情ぞ多き山里は心有てぞ住むべかりける

山里に訪來る人の言ぐさは此の住ひこそ羨しけれ

三吉野のまき立山に宿占て思ひしとぞ斯る住ひは

嵐へ忍ぶ人やなからむ山里は物の哀の栖なりけり

此頃はもと住む人や厭ふらむ都にかへる大原の里

情ありて花の盛に訪ふ人は風にぞかゝる〳〵春の山里

ひとり聞く秋にさきだつ松風に蜩鳴きぬ夏の山里

小萩原花に鹿鳴野べの色を垣ねにぞ見る秋の山里

朝夕に柴折りくぶる煙さへなほぞ寂しき冬の山里

述懐十五首

君も聞け是ぞ懐を述ぶるこ法を弘めて人を助けむ

古風を爭て御山に吹せまし葛の裏葉の返す〳〵も

哀にも袖赴ぬるれ手に掬ぶ御法の水の末を思ふに

徒に過ぎにしとや歎かれむ受け難き身の夕暮の空

昨日見し人はいかにと驚けど猶長きよの夢ぞ有ける

押返し思知る哉世の中に長ふること憂身なりけれ

位山峰には近く上りぬ猶こえすとも立歸りなむ

一方に思取りにし心には尚背かるゝ身をいかにせむ

世を厭ふ思の攻て餘るよに睡ぞまれぬる夢の有明

何故に此世を深く厭ふぞと人の問へかし易く答へむ

いかにして今迄世には有明のつきせぬ物を厭ふ心は

（六）いか計嬉かりなむきねが鈴の振捨て行道をせかすば
（六）我たのむ七の社のゆふ榊かけても六の道に返すな
（七）立ち返る昔の秋をうれしとや神も三笠の山のはの月
百番　左勝
（八）和歌浦の契も深し藻鹽草沈まむよゝを捨じとぞ思ふ
（九）山河の流に契るうたかたは幾代をふとも何か沈まむ
述懐　左勝

（一〇）神風や御裳濯川のそのかみに契りしとの末を違ふな
（一一）神風まで思ひつゞくる涙より心にしげる伊勢の濱荻
（一二）夫和歌者非二鼓舷鼓棹之歌一非二採薪採芝之歌一只遊二心四序一放二思於萬里一之業也而今南海有二一漁夫一北山有二一樵客一居雖レ隔二山海一契猶レ倩二芝蘭一因茲隨レ分輯二百番之篇什一其終得二一首之贈答一左依二風波月浦之冷一表以二心有之妙焉一右依二松嶺竹溪之寂一抽以二意根之森然一是則內仰二住吉之靈睦一外憤二人丸之遺塵一之故也若有二披閱之客一宜レ決二優劣之詞一而已
建久五年仲秋記レ之

詠二百首和歌一

北山樵客

立春
（一三）いかにせむ年のこなたに年暮れて春より宵に春の曙
（一四）吉野山初春風の今朝はまづ櫻が枝をいかゞとよらむ
（一五）淺みどり春は霞にたつ田山よはにや年も獨行くらむ
（一六）末の松年なみこゆる山の端のかすめばやがて春の曙
（一七）哀にも春の憂身のよを作ら老の波より年は越えにき

鶯
（一八）鶯の明ぼのかけて鳴くなべに梅と竹とに春風ぞ吹く
（一九）鶯の谷よりいづる羽おとにや鏡の氷とけはじむらむ
（二〇）卯の花を出し山路の雪と見て歸り煩ふうぐひすの聲
（二一）都には鳥も今はのほどぞかしいざ鶯の古巢たづねむ
（二二）暮しかねつ憂身の末を思ふ空に猶鶯と鳥の鳴くなる

花
（二三）雲ははな花は雲とぞ今日過ぎぬ高ぬ遙けし春の夕暮
（二四）曉めやる雲の梢に風ふけて花咲きそふ小初瀬の山
（二五）花さけば春風いとふ木のもとに雲へ厭く櫻狩かな
（二六）春はけふ今幾日かは殘るらむ花見るとては庭を詠て

（二七）尋ぬべき跡こそなけれ吉野山花よりおくに峰の白雲

郭公
（二八）ひとり聞く心の底を知らばやつひにと思ふ山郭公
（二九）郭公傾く月に過ぎぬなりこゑより西に聲をのみして
（三〇）住みけりな思ひも入らぬ夏山の梢知らする郭公かな
（三一）有明の月待つとてや郭公夜深き空に鳴きて過ぐらむ
（三二）郭公もりの梢の見わたしに中やどしむる杜の一むら

五月雨
（三三）浮世ゆゑ晴れぬ思や雲ならぬ心にやどる五月雨の空
（三四）夏草も深くぞ春に歸りぬる五月雨越ゆる眞野の入江は
（三五）山里はおし違へたる住ひなれば心そはるゝ梅雨の比
（三六）中々に秋は盛りぬ月影にならべつべきは五月雨の空
（三七）山里の雪には跡も厭はれき間へかし人の五月雨の比

月
（三八）詠めつる心もすまで入ぬれば月より外の月をまつ哉
（三九）思入らぬ人には露やおかざらむ我袖にのみ宿る月影
（四〇）はつせ山月の光にあまり行く心をせむる鐘の音かな
（四一）浦風に波の帆かくる月の舟今宵あかしや泊なるらむ
（四二）待つ人の心の鳥や鳴きぬらむ雲に宿かる月を詠めて

（四三）秋のよにあかで暮れ行く夕暮に風心ある荻の上かな
（四四）移植し元の野べにぞ歸行く荒れて嬉しきませの內哉
（四五）古里の一むら薄たれかうゑしあるじ戀しき蟲の聲哉
（四六）野べ占る雌は野べの內なれば霧の此方に花を見る哉
（四七）鹿も蟲も暮て哀とそふ野べに萩こそよるの錦也けれ

紅葉
（四八）訪ふ人に峯の紅葉の紅をおろして見せば靡れ社せめ
（四九）思ふ哉紅葉散敷く庭のなど我が獨居の山田間にしも
（五〇）大井川波の外なる紅葉ばやたゝ見殘せる錦なるらむ
（五一）雲のはなに鳴きしも忘られぬ紅葉の下にさを鹿の聲
（五二）秋も暮て紅葉も散りぬ山里にどまるは物の哀也けり

雪
（五三）一村の屋に今は木の葉の音絶えて雪に成行く山風の風
（五四）春近き己が村芝ふりとおて雪より下に雉子鳴くなり
（五五）外山には時雨にぬゝ搦り手の峯には雪を拂佗ぶ覽
（五六）暮れて猶跡なき雪に分佗びぬ野寺の鐘よ音は孰くぞ
（五七）ふりしきて查こそ夜に返りぬれ千里の雪に出る月影

歲暮

（五八）年の明て浮世の夢の醒べくば暮る共聞を歎かざらまし
（五九）今日ぞ思ふ年は我身に止る物を春秋とてもけに別かは
（六〇）今夜より春の門松立隱せ積ればつらき年にちかはむ
（六一）年の暮て我世もふけぬ山のはに隱れな果そ有明の月
（六二）身にとまる年をも人は送りけり願はれぬべし法の道

初戀
（六三）戀やせしながめは同じ詠にて昨日にかはる夕暮の空
（六四）我が戀は心づくしに行く舟のけふ澪ぎ初むる淀の曉
（六五）君が宿の荻の上葉のいかならむ今日吹初る戀の初風
（六六）詠つる月は板間にもりそめて心の宿ぞ荒れ初めぬる
（六七）有るかなきか心の末ぞ哀なる二日の月に雲の懸れる

忍戀
（六八）今暫し我戀路にもかくしてむ尚厭はれぬ末も耻かし
（六九）いかにせむ人めに懸る戀草の蒔てし種は作る世もなき
（七〇）御法こそ忍中にも嬉しけれなむみだ佛もて隱しつゝ
（七一）さを鹿の夏野の草に隱ろへてまだ聲立ぬ戀もする哉
（七二）獨だに包むけしきを恨みせば互に物は思はざらまし

初逢戀
（七三）命をば逢ふにかへむと習ひてき頓て今夜や別なる覽
（七四）慰めし日頃の夢もうとからず重ぬる袖や猶返るまし
（七五）今宵猶心騒ぎせられつる積めぬをこそ待ちし習に
（七六）見し夢のやがて眞に成ぬれば長らへ行む末も賴もし
（七七）嬉しさを今夜つゝまむ粗めとや袖は泪に朽殘るらむ

後朝戀
（七八）獨のみぬれし袂も乾き敢ず重ねて袖を今朝絞りつゝ
（七九）思べし定なき世はありぬとて歸る習ひも嬉しかり鳧
（八〇）歸るさの月ぞ悲しき睡まで頓て有明を詠めしよりも
（八一）今朝ぞ思ふ歸る別の程を知て待ける宵の身社つらけれ
（八二）現こそ今朝は中々かなしけれ歸る恨は夢にまさりき

逢不レ逢戀
（八三）更にまた越えて歸らぬ逢坂や人の思の關となるらむ
（八四）暫しこそ忘れ形見の移香も夜頃になれば遠ざかる覽
（八五）契あれば又めぐりけり月影を宿すにつけて袖の白露
（八六）幻の慰めだにも有りなまし別れの野べの別なりせば
（八七）我が戀は庭の村萩うら枯れて人をも身をも秋の夕暮

祝
（八八）君が代を松の緑に曉れば椙にかすむ行く末のそら
（八九）はま椿幾たび色を改めてなほ君が代の春を待つらむ

八驚の山もとの命をあらはして爭ふ程の君が御代かな
九君が代の久しき言の音に通ひ千代關ふなり庭の松風
〇君が代は清見が關にちり閉て富士の高ねに波越る迄

旅

一覺めて思へ旅ねの床に見る夢は都の宿の現なりけり
二明けぬるか波の上なる横雲は山のはよりも立增り見
三東路やいくへ都を隔つらむかさなる山のみねの白雲
四うつの山契りし月も出でぬれば昔に越て哀をぞ知る
五月もとはぬ草の枕のうたゝねは夢ぞ傾く有明のそら

述懷

六此世くるし今は昔に吹返す休む程こそ山おろしの風
七鈴鹿川浮世の波に袖ぬれて振捨てぬべき我身也けり
八打返し思ひ定むる恨かなどかゝる世に生れ逢けむ
九淺きと摩訶退こゝろぞ起りぬる眞俗一諦末のよの春
〇人は知らじ誠の道を思ふとて誠の道なよそに見るとは

神祇

一御雲濃や五十瀨川なみ立ちかくれ神風おつる春の曙
二世中よ言葉に出てば石清水心の底にすむをたのみて
三思きや賀茂の川なみ忽にかわきし袖にかけむ物とは
四押なべて日吉の影は曇らぬに涙あやしき昨日今日哉
五片そぎの行合はぬまも荒ぬべし此世な捨そ住吉の神

釋教

佛部

六今は止に光も有じ望月とかきるになれは一きはの空

蓮花部

七詠められ同じ蓮のめぐりあるきりしの蓮胸に開きて

寶部

八かれぞかし三十の上に二そへて寶の中に寶をぞ見る

金剛部

九賴もしな浮世の中のやぶれ屋に獨くだけぬ法の里人

羯磨部

〇如何にして我悟らまし諸人の御法の庭を飾る氣色を
一密の矢を高間の弓に差はげて顯密の的に引外しつる

後成入道見二此百首一奥和

二尚たのむ高間の弓を放ちける手もとに響く密嚴の音

承久三年十二月擬作

三人ならば月なしともや厭まし寢待の宵の山のはの空

詠二百首和歌一

春十五首

今日不レ知誰計會、春風春水一時來

志賀の浦や解る氷の春風に今朝を今日とはいつか告鵜

春風先發苑中花、櫻杏桃李次第開

四春をへて花咲く春の春風に咲く櫻あれば散る梅の花
五白片落梅浮二溯水一

六雪を潛る谷の小川に春ぞかし垣ねの梅の散ける物を

黄梢新柳出二城牆一

七春の宿のつゝく垣ねを見渡せば楢にさらす青柳の糸

春來無レ伴閑遊少

八淺緑春のながめも宿さびて獨くれぬる山の端のそら
九鶯聲誘引來二花下一

一〇うちかへし鶯誘ふ身とならむ今宵は花の下に宿りて

逐レ處花皆好、隨レ年貌自衰

一一春をへてまどなる花の色ぞこき我元結の霜は消ねど

遙見二人家一花便レ入、不レ論二貴賤與一親疎一

一二花を宿の主と賴む春なれば見に來る友を嫌ふ物かは

花下忘レ歸因二美景一

一三春の山に霞の袖を片敷きて幾日になりぬ花の下ぶし

落花不レ語空辭レ樹、流水無レ心自入レ池

一四花だにも心活やいかならむ庭に立つ波春の木のもと

花落城中地、春深江上天

一五夕霞深くなり行く住の江の都の花をおもひやるかな

背レ燈共憐深夜月、踏レ花同惜少年春

一六有明のつきに背くる灯の影にうつろふ花を見るかな

歳時春日少、世界苦人多

一七暮れて行く春は霞の色ながら怪しく濡るゝ人の袖哉

一八惜めどもとまらぬ今日は吉野山梢にひとり殘る春風

厭レ風風不レ定、風起花蕭索

一九山櫻風になりゆく梢より絶え〳〵おつる瀧のしら糸

夏十首

二〇微風吹二秋衣一不レ寒復不レ熱

二一夏の風に成行ふの衣手の身にしみの色ぞ身には染ける

殘暑素思蟬、新葉陰涼多

二二鶯は夏のはつ音をそめかへてしげき梢に歸る頃かな

盧橘子低山雨重

一九香をとめて昔をしのぶ袖なれやはなの橘にすがる山水

池晩蓮芳謝、窓秋竹意深

二〇風にほふ池の蓮に夏たけて夕ぐれ竹の色ぞすゞしき

風生レ竹夜窓間臥、月照レ松時臺上行

二一松風に竹の葉におく露落ちて片敷く袖に月を見る哉

青苔地上消二殘雨一、綠樹陰前逈晩涼一

二二苔の上にはれ行く雨の岩陰に風こそ過ぐれ夕暮の空

可是禪房無二熱到一、但能心靜即身涼

二三心をやみ法の水にあらふらむ獨涼しき松の戸ざしに

暑月貧家何所有、客來唯贈二北窓風一

二四夏をとふ人や哀れに來ても見む空しく拂ふ窓の北風

薰颯風雨天、蟬聲暮啾々

二五臭穢あやにくにふる夕立にぬれ〳〵晴るゝ蟬の聲哉

夏臥二北窓風一、枕席如レ涼秋一

二六小夜ふけて窓をしめくる轉寢の枕涼しき庭の松かぜ

秋十五首

夜來風雨後、秋氣嫗然新

二七山のはに雨そば降て風ぞ行く是より秋の色や見ゆ覽

閨扇先辭レ手、生衣不レ着レ身

二八唐衣扇は袖のよそながらうら珍らしき風を待つかな

大底四時心惣苦、就中斷腸是秋天

一〇あだに思ふ愁へは秋の空ながら雲に心や靡き行らむ

八月九月正長夜、千聲萬聲無二了時一

二〇槌の音よいくらになりぬ衣うつ長月の夜の有明の空

相思夕上松臺立、蚕思蟬聲滿レ耳秋

二一蚕よる松風にこゑわびて明くるより又ひぐらしの聲

遲々蟲鼓初長夜、耿々星河欲レ曙天

二二鐘の音を夢覺めて聞や秋ならむ袖にま近き天の河波

殘影燈閉レ牖、斜光月穿レ牖

二三秋の夜はかべに灯消えやらで共に傾く月ぞかなしき

黄茅岡頭秋日晩、青竹嶺下寒月低

二四宿しむるかた岡山のあさじ原露に傾く月を見るかな

月團雲樹外、螢飛二砌宇間一

二五秋の雨に月さへ曇る軒ばより星ともいはじ螢なる覽

曉レ日暮山青欲々、浸レ天秋水白淫々

二六秋の水は秋の空にぞなりにける白き波間に映る山影

塞鴻飛急覺二秋盡一、隣鷄鳴遲知二夜永一

二七如何にせむとよはに待る、鳥の音を急がぬ秋と思ましかば

前頭更有二蕭條物一、老菊殘蘭雨三叢

○秋の霜に移ろひ行くは關きて見る人も枯がれにして
不レ堪紅葉青苔地、又是涼風暮雨天
一宿ぞいづれ空のけしきに苦むして秋暮方の松風の聲
葉聲落如レ雨、月色白似レ雪
二終夜月に霜おく槇のやに降るか木葉も袖ぬらすらむ
萬物秋霜能懷レ色
三秋の色を冬の物にはなさじて今日より先に霜の置ける
冬十首
十月江南天氣好、可レ憐冬景似二春花一
四今日を冬と却て告る春の色はいかなる江より思初鴈
寒流帶レ月滑如レ鏡
五月故ぞ月は皎鏡と成にける木の葉隱れを拂ふ波間に
策々窓戸前、又聞新雪下
六槇の戸を押明け方の空さえて庭白妙に雪ふりにけり
爐火欲レ消燈欲レ盡、夜長相對百憂生
七消えぬるかほのめく夜はの灯にたえぬ思は鳴の羽掻
唯有二飢寒菊一、新開籬落間
八白菊の霜に移ろふませの内に今は今年の花も思はず
南窓背レ燈坐、風雹晴紛々
九思ひやれ風は雹の音散りて篠引きむすぶいほの燈火
寂寥窮村夜、殘雁雪中聲
○岡のべの杉の木のまに雪深み跡なき雁の雲に殘れる
望レ春春未レ到、可レ在二海門東一
一道のくや春ぇつ島の浦霞しばし勿來の關路にぞ見る
雪滿終南又欲レ春
二嶺續き春に先だつ春の色や消せぬ雪を空にけつらむ
香火一爐燈一盞、白頭夜禮佛名經
三つもり行く頭の雪も消えやせむ三世の佛を拜む光に
戀五首
夜深方獨臥、誰爲拂二牀塵一
四見せばやな塵も拂はぬ枕より夢のたえぬる片敷の袖
夕殿螢飛思消然、孤燈挑盡未レ能レ眠
五君故にうちも寢ぬ夜の床の上に思を見する夏蟲の影
行宮見レ月傷レ心色
六いかにせむ慰むやとて見る月の頓て涙に曇べしやは
夜雨聞レ猿斷腸聲
七木の本の雨に鳴なる猴よりも我袖の上の露ぞ悲しき
舊枕古衾誰與共

九いかにせむ重ねし袖を片敷きて涙にくちは枕也けり
山家五首
從レ今便是家山月、試問清光知不レ知
九秋の月は曇なければ知りぬらむ我が住庵の行末の空
始知天造空閑境、不レ爲二忙人一留二貴人一
○思ずよ我のみぞ住む山里に世を行く人も立止れとは
闇有花時錦帳下、廬山雨夜草庵中
一草の庵の雨に袂をぬらすかな心より出し都こひしも
人間榮耀因緣淺、林下幽閑氣味深
二山陰や秋の木のもと色深み淺くも花を思ひけるかな
何時辭二塵網一、此地來掩關
三いつよりか住べき山の庵ならむかつ〳〵止る我心哉
舊里　時國家五首
前庭後苑傷心中、只是春風秋月知
四ありし世の宿の氣色をとふ物は秋の夜の月庭の松風
蒼苔黃葉地、日暮旋風多
五紅葉ばを夕行く風に任すれば苦むす庭は打時雨つゝ
挿レ柳作二高林一、種レ桃成二老樹一
六引植ゑし木々の梢に年たけて宿も主も老いにける哉
閑日一思レ舊、舊遊如二目前一
七ながめわぶる軒の葱に露おちて昔をかへす夕暮の空
黃壤誰知レ我、白頭獨憶レ君、唯將二老年淚一、一灑二故人文一
八かきとむる昔の人の言の葉を老の涙にそめて見る哉
閑居十首
但有二雙松當一砌下一、更無二一事到二心中一
九庭の松よおのが梢の風ならで心の宿をとふ物ぞなき
山林太寂寞、朝閑苦二喧煩一、唯茲群同門、喬靜得二中間一
○いづくにも心や行かす成ぬらむ只我宿を我宿にして
偶得二幽閑境一、遂忘二塵俗心一、始知二眞隱者一、不二必在一山林一
一柴の庵に住みえて後ぞ思知るいづくも同じ夕暮の空
更無二俗物當一人眼一、但有二泉聲洗二我心一
二嬉しくも詠むる空はむなしくて心を洗ふ山の井の水
盡日座復臥、不レ離二一室中一、中心本無レ繫、亦與
出二門同一
三獨のみ草の戸ざしに明暮て萬はふ松をよそに見る哉

外願二世間比一、內脫二塗中縁一、進不レ厭二朝市一、退不レ
戀二人寰一
四身の外に我身ありとや人は見む心になきは心也けり
深閉二竹間扉一、靜掃二松下地一、獨嘯晩風前、何人知二
此意一
五夕されの詠めを人や知らざらむ竹の編戸に庭の松風
頽然環堵容、蘿蕙爲二巾帶一、自得二此道一來、身窮
心甚泰
六苦の帶に秋の山本夕まぐれなか〳〵今は物も思はず
心足即爲レ富、身閑仍當レ貴、富貴在二此中一、何必
居二高位一
七谷かげや心の匂袖にみちぬ高ねの花の色もよしなし
看レ雪尋レ花歎二風月一、洛陽城裏七年閑
八思ふべしすみかや心花と月と都に見ても七年は經ぬ
述懷十首
置二心世事外一、無レ憂必無レ喜
欲レ留二年少一得二富貴一、富貴不レ來年少去
○心には猶いかゝとも岩代の松計りにや年のつもらむ
春去有二來日一、我老無二少時一
一濱ゆふや年を重ぬるみ熊野の恨は老の殘りなりけり
我有二一言一君記取、世間自取二苦人多
二取てもつ我言の葉を手向れば神も哀と照さゝらめや
從二道人生一都是夢、夢中歡笑亦勝レ愁
三現にもあるか心の有顏に夢に夢みる身とは知らずや
生死尙復愁、其餘安足レ言
四消ぬるかきえぬにも又身をなして富士の煙か春の曙
身心一无レ繫、浩々如二虛舟一
五渡つ海や繫がぬ舟の島隱れ吹くともいはじ沖つ汐風
委二形老少外一、忘二復死生間一
六思解くに形なければ心なし人てふ名をも汚しつる哉
我若未レ忘レ世、雖レ閑心亦忙、世若未レ忘レ我、雖レ
退身難レ厭、我今異二於是一、身世変相忘
七世をも厭ふ又浮世にも厭れて止る心のなきぞ嬉しき
人生无二幾何一、必寄二天地間一、心有二千載憂一、身無二
一日閑一
八眺むれば天つみ空に風たちてたゞ何事も夕暮のそら
無常十首

親愛自零落、存者仍別離
我がたぐひ今は洛に行く舟の又別るゝに潮垂にけり
逝者不二重廻一、存者難二久留一
○此世には二たびあはぬ別路に留る人のなきぞ悲しき
往事眇茫都似レ夢、舊遊零落半歸レ泉
思出づる昔は夢の轉寢に友なき袖のぬれぬ日ぞなき
秋風滿レ袂淚、泉下故人多
わたり川ふかくも思ふ夕ぐれの袖の涙に秋風ぞ吹く
原上新墳委二一身一、城中舊宅有二何人一
苔の下に空しく朽ちむ心にも戀ふ故郷に誰忍ぶらむ
生去死來都是幻、幻人哀樂繫二何情一
生き死ぬるならひはすべて幻の花見る宿に山嵐の風
早世身如二風裏燈一、暮年髮作二鏡中絲一
燈す火に風こそ渡れ增鏡空しき影の身を如何にせむ
幻世春來夢、浮世水上漚
とにかくに浮世を春の夢ぞとも水の哀に思知れとや
耳裏數聞二故人死一、眼前唯覺二少年多一
見るも聞も逸茅に組る夕露にあな慘なやと嵐吹くも也
古墓何代レ人、不レ知姓與レ名、化作道傍土、年々春草生
埋れぬ名をだに聞かぬ苔の上に幾度草の生ひ變る覽

法門五首

追二想當時事一、何殊二昨夜中一、自二我學一心法一、萬緣成二一空一
野も山も皆大空に成にけり如何なる道に心行くらむ
廻二念發一弘願一、顧此現在身、但受二過去報一、不レ待二將來因一
○結ばじと忍ぶ契の行方かな過ぎにし方を思解くにも
誓以二知惠水一、永洗二煩惱塵一
語べき御法の水のかひもあらば迷ふ塵をもすゝがざらめや
由來生老死三病長相隨、除却无二生忍一、人間无二藥治一
悟り行く聖の位それならで三つの病を誰かのぞまむ
此身何足レ戀、萬刼煩惱根、此身何足レ厭、一聚二虛空塵一
身を寄て戀ひじ厭はじ花櫻浮寢よりこそ思初めけれ
唐國や詞の風の吹來れば寄せてぞ返すわかの浦波
樂天者文殊之化身矣、嘗レ和二彼讀一和歌者神國之風俗也須レ遵二此早懷一、因茲忽翫二百句之玉章一、愁綴二百首之拙什一、法樂是北野社所願彼南無之誠定穢二今生世俗文字一之業爲二當來讀佛法輪之緣一者歟

逃二顚之一往再往一、以詠二蜜之淺略深秘一、旨和歌百首盧二法樂于日吉一覺二二世於一時一而已　老僧

○嵐の山有明の月は廻り來て我が立つ袖の麓にぞすむ
世中の人の心を思ふ空にはかに月の雲かくれ行く
昔聞く三輪のひばらに春霞たなびく末はひえの山本
山路深くうき身の末を辿り行けば雲に爭ふ嶺の松風
色增る松社見ゆれ君を祈る春の日吉の山のかひより
愛に背く心の花を厭ふより世にも嵐ぞ最ど待たるゝ
さりともと照す日吉を賴む哉疊らす思ふ心ばかりに
よそへ行く思ひの風の海吹けば心のうちに立つ涙哉
哀にも六十は春を迎へきぬおくらむ年の數ぞ悲しき
いきて尙友なき闇に迷ふ哉誰が爲月の曇らざるらむ
思はざりき命ながらの山と又度々法の花を見むとは
我心奥まで我れが知べせよ我が行道は我のみぞ知る
吉野山そもむつまじき詠かな花まつ峯にかゝる白雲
心ある人も嵐の吹く夜にはたゞなきことも浮雲の空
雲もなしいざよふ空を松風の吹から出る山のはの月
誠とも人は思はで誠なるはたゞしなばやの思也けり
春の花を折知らぬなや止るらむ歸るは雁の習なれ共
何とかく背く心の深からむ此世に社は生れたる身の
やみふけて驚する雁の翅より吹捨てゝ行く狹の上風
深知れ人の有をぞ世とは云ふ背くは人の世も有じかし
音羽山深き霞を分け入ればおほつの宮に春の花ぞの
我心隱さじ（げざし）ばやと思へ共見る人もなし知人もなし
明けぬるか橫雲うづむ朝霧を拂ひもやらぬ松風の聲
我が心隱さばやとぞ思へども皆人も知る皆誰も見る
春のなみ打出の濱のはま風の花吹く山を志賀の山越
身計はなきになしては過ぐれ共偕もうせぬは心也鬼
櫻がり雨はふりこで雪ぞ散る花見る空は霞なりけり
厭ひはつ心の儘の身なりせばいづく栖と知人もなし
散積る庭の紅葉に霜さえてあかきは月の光なりけり
世を歎く心の中を引明て見せたらばと思人だにもがな
春深き野路立ちこむる夕霞つゝみ殘せる鐘の音かな
嬉悲我思ふとを誰に云てさはさかとだに人に知れむ
月の前に時雨過ぎぬる天雲を拂ふならひは秋の山風
人もかく生れたる身の嬉しさを徒になす我が心かな
芳野山春吹く風を花と見て秋待露の身のはかなさよ
此身をば水に映れる月影の浮ぶとや云む沈とや云む
夕まぐれ鴫立つ澤の忘水思ひづとも袖ぞぬれなむ
過るべき道は道に有物を知らばやとだに人の思はぬ
深草の里に鶉の夕まぐれふさで果べき秋のよはかは
人ならば恨もすべしいかにせむ我をすかすは我心也
なか〳〵に空に思ぞつきにける何事もなき秋の夕暮
神よいかにうしや北野の馬場ゆふ塲の外なる人の心は
哀なり門もなき庵のませの內にこゝ人ゝぬく薄一本
歎くとよ人の心は佛だに思ひ兼てぞ捨てたまひにし
吹迷風に木葉の何としてあられぬ世にも尙あくる覽
我命いつ迄とだに知られなば殘るべなく世をば捨てむ
五月雨に山郭公こゑぬれて軒の菖蒲の色になくなり
愚也只けふ〳〵と思へかし知も知らぬも今幾日かは
木枯の雲さへ拂ふ冬の夜も風より月の出でける物を
吹拂へ何となき塵の身におくを家を出にし山嵐の風
聞く人も老曾の杜のほとゝぎす名殘露けき六月の聲
胸の月を心ばかりに磨き來て我も光を見ぬぞ悲しき
年暮るよはに小指を折さして只なやらむ音社泣れ
昔なれし友は宛も夢のよを獨殘りて見るぞかひなき
とひし人も水鷄に殘す名殘哉跡深き山の槇の板戸に
儚しや見しよの人の殘居て物語するも有ば社あらめ
秋に靡ふ我袖の上の初時雨たが住む宿に廻り行らむ
神も見よ佛も照せ人知れず法の爲とて今日迄はへぬ
いかにせむ人も拂はぬ夏の池の菱とも物の思取られぬ
朝夕に袖に隱して結ぶ手の憂世の綱を解ざらめやは
うせやらぬ心は尙も高せ舟さしも憂身と思しかども
いかにして罪の薪を樵果て我智惠の火に燒盡さまし
吹ぬるか待人は來で月は出ぬねぬ夜の數や鳴の羽掻
護摩の火の灰なき灰に種蒔つ蒔つる種は薄き物かは
鐘の音を友と賴みて幾夜かも寢ぬは習の小初瀨の山
今は世も惑ひすてゝし六の道に歸らじ物を五相成身

七四必ずよよはの煙と身をばなせ以字燒字の法の報いに
八四頼めとや昔聖の立つ柚にたえにし小野の又音のする
九四途難き法に近江の山高み三度消えける身を如何せむ
一〇四歸り來て見るぞ悲しき諸人の柴舟繋ぐ法のみかさを
一一休み來て頼む心有なまし法の坂行く山路なりせば
一二疏深く思ひ出べき友もがなあらざらむ世の跡の情に
一三有を厭ひ無を忍ぶは習也さて戀られば身赴つらけれ
一四頼むぞよ跡へむ竹の園の中に我後の世を思ひ忘るな
一五契證かし契ねばとて忘べくは只忘られて報をも見む
一六まはりこし餘波は末も久しかれはこやの山の松の村立
一七心ざし君に深くて年たけぬ又生れてもまたや祈らむ
一八手向にも折から神や靡くらむしでに風まく夕闇の空
一九參る人のまろねの跡を殘す霜は神の心にかけの玉垣
〇六思はなむ思へば袖に露深しそよ春日野のさを鹿の聲
一六頼む神よいますかいかにみ山べの深き梢に猿鳴く也
二六頼むぞよその幸崎に立つ波のたえず心にかゝる計を
三六法の道奥の知るべと頼む哉尋ねよりぬる心つかひを
四六法にあひて世に有り難き悟あり心に云て人に語らじ
五六誡には神ぞ佛の道しるべあとをたるとは何故か云ふ

旋頭歌

六六古のみ山の寺にむす苔をうちはらふにぞ昔にかへる
心ちのみする

混本歌

七六うき物と我が心をば思ひ知りぬ知るかひはなし君を
久しくまもれ

春冠 きみをひさしくまもれ

八六きにけらし見てしもみまく思山聖の跡もさ社住けれ

折句 ひえのみや

九六人毎にえて嬉しきは法の花みよの佛の宿のものとて

物名 はしとの

〇七秋の心習はじとのみ思よ宿に暫しなつげそ荻の上風

誹諧

一七月も日も爽かにこそ照すめれいとけ穢きひとの心を

二七人心神に通はいまの竹の緑まむ方を燿めて見よかし

長歌

三七やよ川に ながるゝ水の 哀れにも 立つ春は 君が代を 祈るこゝろに あさ瀬しら波 青やぎの 御垣もり いとも長き 物しることは あきの蟲 かれ行く聲も 春の池の 氷とけ行く 千早ぶる 神もいづちか 軒端なる 鳴る神の ゆふべの露の 挑げよと 晴遣らぬ 道しばも 秋の色に うちしぐれつゝ

四七神よ如何に心にもあらぬ山風に又消ぬべき法の燈火

五七百草の花と思ひでたてまつる七ます中のとをの聖に
かた山寺にこもりゐてはたゝ二諦の道理より外に
思ひつゝくることもなし其の道理を歌によまむと
思ひけるなるべしさてしも又かやうなれば未だ日
吉に百首など詠みて奉ることのなかりければにや
三度治山寄心於山王數年興敬容身於敬門今
生知縁深來世能引導

于時建暦二年壬申秋九月草之 老僧記

刼初在梵王刼末屬釋尊漢家者孔子我朝
者神宮三國之言雖異片州之和字攝他者歟
道理之一揆在中心始終之一念簡下愚忝受
一諾神之苗裔懇彰百首心於風情而已

神祇月 風 雨 曉 朝 野 海 池
川 田 鳥 松 夕 夜 山 旅 戀
祝 山家草 花 杜 述懐釋教

右各寄四季合百首也

詠百首和歌

良山老僧慈鎮

神祇

六七頼むぞよ天照神の春の日に契りし末は何かくもらむ
七七頼むぞよ頼もしき哉春の日に契りし末の曇なければ
八七年をへて卯月のいみをさして社ふに妻を契置れ
九七年をへて頼めば賀茂の河波やかけて嬉しき諸葛かな
〇八神路山つみ六月のゆふ襷かけて久しき君が御代かな
一八石清水やぞして見よと誓ひける神の光や秋の夜の月

二八日吉には冬の光をさしそへて遙にちぎる雪の上ひと

月

三八昔人月やあらぬと云ひしよの涙にかすむ有明のそら
四八夏のよの夜のまをだにも慰めよ嫉捨山の山のはの月
五八海の果は有ける物を秋の夜の月を明石の浦に詠めて
六八我心木の葉隠れもなき物をさやかに照せ冬の夜の月
七八冬の夜の月は梢にくまもなし庭の落葉に霜を重ねて

風

八八つれもなき人の夜枯に習へかし花に待るゝ春の山風
九八厭はでぞ心のどかに眺めつる花ちりて後の春の山風
〇九圓居して暑さを厭ふ夏山の木の下風にしく物ぞなき
一九いつも吹く風とは風も思ふなよ荻の上葉に秋の夕暮
二九涙よりかつ〳〵袖に露ちりて時しもしるき秋の初風
三九木葉落て染べき色もなしとてや時雨の雲を返す松風

雨

四九青柳の糸に玉ぬく春雨の雲になり行く夕がすみかな
五九梅のはな靄のくもの春雨にぬれてぞにほふ夕暮の空
六九身のうさをこまかに思ふ夕暮に袖の上迄春雨ぞふる
七九五月雨はみつのみまきの水越えて堤の上に淀の川舟
八九秋の雨の野分になれば眞葛原恨むる風ぞ最ど烈しき
九九所せき夏の餘波の秋の雨のはれ行く雲の末ぞ涼しき
〇〇木の葉落て梢寂しき冬の山を空しく過ぐる夕時雨哉
一〇覺束な雪こそ冬の雨なれや時雨は秋の物ならぬかは
二〇寒からでふり來るとは無物を氷る雨をや雪と云らむ

曉

三〇おぼろなる月は入りぬる峯に又花に光の有明のやま
四〇夏の夜はまだ宵ながら明けぬとや木綿附鳥の曉の聲
五〇夢を殘す我が袖の上に露深し秋の有明の月宿れとや
六〇夜もすがら擬重に成りぬふる雪に松風よわる曉の空

朝

七〇春立ておくる朝に君が代を樂しといはぬ人は有じな
八〇月をだに詠る程もなき儘に明てぞ夏はぬる夜也ける
九〇よはの蟲の聲を見るも哀なり朝露はらふ庭の小萩に
〇一明けぬるか梢によはの雪とおて園の軒ばに雀鳴く也

野

一一春の立つ朝の原の霞より野べも山べも色づきにけり
二一夕立に夏野の草の露重み靡まつ鹿もぬれて行くらむ
三一東路や旅行く駒も分わびぬ刈る人なしみ野べの夏草

一誰にとはむ秋の野もせに置露は鹿と蟲との鳴涙かは

二主やたれ霜に枯行く野べの草に雪待頃の岡のべの里

三野べに續く冬の山本下過て群ゐる鳥もゐる空ぞなき

海

四ほの〴〵と霞の袖の紅にくゐるは白き和歌の浦なみ

五今ぞ知る行へに迷ふ渡つ海の果なきはては霞也けり

六波の上に霞を分て舟ぞ行くやゝ山風の吹にまかせて

七夏の夜は短きものを天雲の波にはなれて苦の下ぶし

八吹き廻る嶺やの煙あだに消えて秋風早しせの濱荻

九冴きぬる冬の潮風北吹きてあはの鳴門の音ぞ烈しき

十冬の波に涙つゝくる浮寢かな夜寒の友は蜑の藻汐火

池

一一水ならぬ人の心もとけぬべし池にのどけき春の初風

一二池にさきて濁らぬ花に打返しそむは色なき心也けり

一三寺ふりて池の蓮の花ざかりそまぬ色にもそむ心かな

一四池に咲く花は濁りにしまねども心よ色に深くそむ哉

一五如何にせむ人の心にみくさゐて月は昔の廣澤のいけ

一六冬のくる池は汀に草かれて鴨こそ獨あを羽なりけれ

一七哀にも鳴きてぞ通ふよはの蟲池の氷柱の隙を尋ねて

一八冬の池の月の氷をわかぬ夜は嬉しく蟲の水馴ぬる哉

河

一九春雨に綠の糸をそめかくる立田がはらのたまのを柳

二〇玄づのをようちに鵜河の筏舟てらす光や行末のやみ

二一秋深き我が友舟や淺川いく田の森の木の葉なるらむ

二二身にぞしむ駒うち渡す諸人の山藍の袖にかもの川風

二三網手繩苦しき海をよそに見てうき世を渡す淀の川舟

田

二四春の田にゐでの苗代水ひきて蛙の聲に任せつるかな

二五植て皃まだ早苗なるうれ葉より細かに騒ぐ風ぞ涼き

二六早苗取り手玉もゆらに見渡せば菅の小笠の靡行らむ

二七露ながら稻葉に續く袂かな風もろきよの庵の寢覺に

二八鳴子ひく賤が門田のむら雀たちもに物を思ふ頃かな

二九をしね刈山田のくろの檜原より殘る嵐の音ぞ寂しき

鳥

三〇鶯は花のたもとにかくろへて人の袖まで涙かすらむ

三一時鳥なは如何せむ行きやらで山路に暮すよはの一聲

三二哀れにも雁の涙ぞ袖に落つる月は有明の小夜の枕に

三三獨聞く須磨の關屋の小夜千鳥涙の跡ぞ袖にかわかぬ

松

三四春來れば今一入と聞く松の色こそ千代の例なりけれ

三五春風に打出る波のこすなべに花咲きぬらし末の松山

三六峯の松いろはさながら夏木立風のみ獨おのが聲なり

三七おのが色を宿す梢は夏の山霜より後を松とこそ見れ

三八さぞなげに住吉の松に秋の風我涙をぞ打添へて聞く

三九色々の木葉に変る松がえは紅葉ぬさへぞ紅葉也ける

四〇哀なりし秋の形見の庭の面を拂へばひとり庭の松風

夕

四一夕霞そめて色こき山櫻よのまの風をあすいかにせむ

四二月もいざ花には倦すいかにせむ霞こめたる春の夕暮

四三夏山の木の下蔭の夕涼月待ちいでばいづちかもせむ

四四大方にめぐりあふ日の行へかは物思ふ宿の秋の夕暮

四五秋の山を眺る宿の槇の戸に人な入りそと月は出らむ

四六憂身かも嵐に早き木の葉かな心にもあらぬ夕暮の空

夜

四七春の夜の現の夢に濡し初てまだひぬ袖の色ぞ悲しき

四八吉野山夢にも花を見る人や春は寂しと云ひ初めけむ

四九跡ふかき彌生の夢の行末に今日はなぐさむ春の宮人

五〇夏の夜の有明の月の山のはに一こゑをしも郭公かな

五一夏の夜は暮ぬと云に明に鳥啼ぬか臥すかと思紛れに

五二物思へば長き夜とても寢ぬ物をねぬとや思萩の上風

五三牙る夜の枕に消ぬ埋火のおこすにおこる世を祈る哉

山

五四折からや月は霞のよそにして花に夜深き三吉野の山

五五龍なる志賀の里にやながむらむ我が山のはの春の曙

五六夏の山紅葉せぬ木の木葉落て萎〳〵色に道埋れけり

五七白樫の落る木葉も袭れつゝ夏も埋る〳〵山路をぞ行く

五八さを鹿の立田の山の紅葉ばや己が涙の色もなからむ

五九三室山多の山もと神さびて庭の木の葉にみねの松風

旅

六〇波に行く心の果やこれならむ春の湊の春のあけぼの

六一見つるかな春の湊にうきねして霞にもる〳〵波の初花

六二夏刈の草のまろやの旅衣かへす夢路にたつ空ぞなき

六三夏かりの草の枕は名のみしてねぬ夜の數は有明の月

六四夏の野の萩の初花をりしかむ臥猪の床に枕ならべて

六五急ぐ舟を爰には寄せじ播磨潟暁くも月は明石なれ共

六六霰ふる不破の關屋の板廂時雨るよはの袖もまだひず

六七折からや月は霞のよそにして花に夜深き三吉野の山

六八龍なる志賀の里にやながむらむ我が山のはの春の曙

六九夏の山紅葉せぬ木の木葉落て萎〳〵色に道埋れけり

七〇白樫の落る木葉も袭れつゝ夏も埋る〳〵山路をぞ行く

七一さを鹿の立田の山の紅葉ばや己が涙の色もなからむ

七二三室山多の山もと神さびて庭の木の葉にみねの松風

旅

七三波に行く心の果やこれならむ春の湊の春のあけぼの

七四見つるかな春の湊にうきねして霞にもる〳〵波の初花

七五夏刈の草のまろやの旅衣かへす夢路にたつ空ぞなき

七六夏かりの草の枕は名のみしてねぬ夜の數は有明の月

七七夏の野の萩の初花をりしかむ臥猪の床に枕ならべて

七八急ぐ舟を爰には寄せじ播磨潟暁くも月は明石なれ共

七九霰ふる不破の關屋の板廂時雨るよはの袖もまだひず

八〇東路やみな冬がれになりはて〳〵寂しき旅の草枕かな

八一旅のそらに月見るよはの思こそ秋の心の限なりけれ

戀

八二春の夢を正しと聞けば唐衣裏に涙をかけぬ夜ぞなき

八三水鶏とはかつ知り乍ら嬉しきや人待宿の習なるらむ

八四待つ程もなき宵ながら明に逸思はぬ中は夏ぞ嬉しき

八五最ごし戀する人にむすばれて涙に濁る山の井の水

八六荻の葉にたまらぬ露は秋の風獨かわかぬ我が袂かな

八七頃は秋獨ぬる夜の鐘の音をいづちかさそふ庭の松風

八八さらぬだに身にしむ秋の初風に置敢ぬ露や我袖の上

八九神無月散さぬ人の言の葉を幾入そむる時雨なるらむ

祝

九〇年をへて子日に契る松の葉の哀色こき君が御代かな

九一行末もつきせぬ御代も年をへて祝ふは春の初也けり

九二長きねを君が袂に菖蒲草契る五日のいつか戀ふべき

九三君が代の長月毎に見る菊の八重の數社八千代也けれ

九四雲上の豊の明を幾らとも限らぬ御代を見るぞ嬉しき

九五雪の中に最ど色こき松の葉の千年を契る君が御代哉

山家

九六われ住まむ昔乍らの花の枝をりに近江の志賀の山里

九七山里をとひ來る人に我もならむ靭くも花ぞ主也ける

九八夏山の岩井の水をむすぶ手に亂れぬ物は心なりけり

九九鹿も鳴すまだ紅葉せぬ木の下の涼しきのやみ山べの里

一〇〇山里よ唯秋と云ふ名ばかりに眺めし色の皆變り行く

一〇一山里はふり行く儘に寂しきをあらはす物は庭の白雪

一〇二折〳〵を詠め過きにし山里に雪うち散りて殘る松風

草

一〇三知り難き春のこ草の習かな年を積ても若菜と云らむ

一〇四眞菰刈みつのみ牧の賤の男はほし濡て敢ぬ袖ぞ短き

一〇五夏の雨に庭のさゆりば玉散て涼しくはるゝ夕暮の空

一〇六秋風は宵の枕の萩の葉にふけてぞいねしけさは朝露

一〇七花薄なびくにつけて招くてふ風こそ草の心なりけれ

一〇八折につけて思そかふる冬と云へば枯るそ草の茂る也ける

花

一〇九春の山に花は待つやと問ふ人の袖に色ある朝霞かな

一一〇よしの山夢にも花をながむれば心の奥にかゝる白雲

一一一春の月有明の空は忘られて花に夜ふかき三吉野の山

一一二我が心むかしにかへる知るべかな花橘にすぐる夕風

一おほしたてゝかき撫子の花盛つゆの色こき朝姿かな
二紅の八しほの色の深見草卯のはな垣の庭に見るかな
三昔すみし人の涙や露ならむ世をうぢ山の秋の花ぞの
　杜
四白菊ののこりも花の名なれども雪の梢や三吉野の山
五返る年を春の霞やたなびきて老曾の杜に立止るらむ
六夏社あれ常磐の森も時雨せば梢のよそに名なや殘さむ
七紅葉ゆく梢の色やたぐふらむ柞のもりの秋の下ぐさ
八ひえの山は冬社最と寂しけれ雪の色なる鷲の杜より
九霜雪を頂く年に成ぬれば人を見るだにはづかしの森
　述懐
十春の日の長き眠に驚かで夢路に暮す身をいかにせむ
十一覺めじたゞはな橘の匂ふ窓に昔戀しき夢の入りぬる
十二夏の夜はみじかと思ふ心よりも尚思ひ敢ず明る東雲
十三よそならぬ心を社は短けれ夏の夜とのみ思ひける哉
十四秋やとき身の憂事や誘ふらむ思知ればぞ世は厭しき
十五如何にせむ獨昔を戀ひかねて老の枕に年のくれぬる
十六誰に問はむふればぞ雪も積るこゝは何故に消殘る身ぞ
　釋教
十七いかにせむその望月ぞ曇りぬる鶴の林のよはの煙に
十八嬉しくも卯月の七日あくる日や此世に佛生れ給ひし
十九立柚やなむあみだ佛の聲引くは西に誘ふ秋のよの月
二十三世の佛三千數御名を聲にて〻此一年の罪ぞ消ぬる
二一なが〻れくる玉の泉のかげなれや霜おく月の有明の空
二二昔より法の光をみがくかなおく霜つきの有明のころ
此のおほやまとの國は天てるおほむ神の御國なれば奉るべきことわり極まれり又歌と云ひて三十一字のことぐさ出で來たるはこの國の言葉なりこれにてよろづのことを云ひあらはして昔今のことわざとせり春秋の花と月と夏冬の雨とめぐり行く空のけしきまゐり來たる野べの色あるひは深きあはれをもよほすたよりなりあるひは淺きまことを契れる中だちなればこれに寄せて道のことわりをあらはしこれを詠めて神佛のめぐみをはかるなるべしされば傳敎大師は我が立つ杣に冥加を祈り慈覺大師は月日のすぐるにて老を知らせたまふめりよりて折々此のことわざをつかうまつりしを勅撰の集に度々選び入れられたれば海山のなさけをもみねば谷のあはれをも又春の花秋のもみぢ葉ちるにつけて心を動かし空の月山の嵐は夏のすみか冬のねやまでも人の少なき心を催すかた多ければ思をこれに寄せて志をおほむ神に手向け奉りなむ願はくは此の淺き狂言綺語にて深き讃佛乘轉法輪の道へかへし入れ給へとなり

賀茂大明神者本地難ゞ測觀二眞俗之道理於レ心一垂二迹惟新訪二利生之神威於レ冥和歌者我朝之風俗也吟詠者雅意之所レ作也今染二三諦之色於意識一忽著二三業之悟於法樂狂言又狂言此聲是觀音實語此意者又神慮如レ此之早懷豈背二于聖意一故爾云

詠二百首和歌一

春二十首

二三春たちて賀茂の河原の霞むより心の色も顯れにけり
二四谷の戸をたゝきし冬のあらしより鶯さそふ春の初風
二五春と云へばけふの子日を松のえに霞の袖の懸らぬぞなき
二六新ひ初むる民の竈の朝げより年も長閑に霞たなびく
二七今日ぞかし齊はこべら芹摘てはや七草のお物參らむ
二八片岡や霞みこめたる呉竹におぼつかなみの鶯の音や
二九梅が枝に花かさてこそ手折つれよしなや雪の袖濡す寵
三〇春きても見よかし人の山里にがら莊居る梅の立枝を
三一梅が枝に櫻がえだをさしませて花より花につたふ鶯
三二山櫻瀧のしら糸亂れつゝ雪かともいふ雲かとも見る
三三鴬照や櫻谷より落ちたぎつ波も花さく宇治の網代木
三四越暮す花の吹雪の春の山に祭りてなせそ志賀の里人
三五春風に花の錦をたちきてや我が故郷へ歸るかりがね
三六花ざかり歸る雁をやよぶ子鳥朧月夜に聲あかすなり
三七花のえに掛て飽そふ鞠の音のなづまぬ程に雨注ぐ也
三八片岡のしだり柳のうは霞綰にかく物は是かあらぬか
三九春の駒の月毛のをがみ白妙に花ちる野べに櫻狩せむ
四〇田子の浦に藤咲きぬらしいそね松梢そめ行く紫の波
四一殿作りせくやり水の岩陰に白き色こき庭やなきかな
四二谷かけて岩ね寂しき奥山におそく櫻を見る人やたれ

夏十五首

四三夏きても暑さまさらぬ衣手に掬ぶ影ある御手洗の水
四四衣手に心をかへて思ふかな春ばかりなる我が袂かは
四五山路ふむつゝ木ぐるをに言問ひて人傳に聞く郭公哉
四六若楓青きひとへに紅のはかまと見ゆる岩つゝじかな
四七いざ住まむ夏の木立の木の本に芝苔み行く岡のべの里
四八此頃はいせに知る人訪づれてたより色ある花柑子哉
四九夏木立庭の野すぢの石の上にみちて色こき深見草哉
五〇野澤潟雨やゝはれて露重みふくによそなる花菖蒲哉
五一ならよりも聞ゆる瓜を大和路や爭で持つ夫に少し許さむ
五二梅雨の晴るればとても頼れず出遣ぬ雲は尚山のはに
五三夕立の雲よりいづる月影ぞかわかぬ庭に氷をぞしく
五四夕立の露より雲や返るらむ雨をぞ招く庭のさゆりば
五五賤のめも大道あづゝに夕涼みふる帷子の足洗ひして
五六秋近き梢に蟬の聲過ぎて松風はやみ日ぐらしぞ鳴く
五七夏はつる今日の禊の菅抜をこえてや秋の風は立らむ

秋二十首

五八身に占て手向る人のゆふしでに答へてぞ聞秋の初風
五九今日よりは風に色ある衣手に人の心のうらを見る哉
六〇夏の萩の裾野になびく匂より秋に成り行く峯の松風
六一納殿のくるゝの妻戸押明けて今日七夕にかす物や何
六二秋の花の露になづまぬ濡れ色に光を添る山のはの月
六三尾上よりさわぎ渡る女郎花尾花通ふか風の招くか
六四士壁に窓ぬり殘す庵までもすさめず宿る秋の夜の月
六五秋の月の影や冴くと訪行けば答へてすめる廣澤の池
六六秋の雨に月の盛も忘られて清見が關を行く空ぞなき
六七清見潟月に隈なき秋の夜は風こそふじの煙なりけれ
六八秋と云ば名をえたる夜もえぬ夜はも月に幾度月を見覽
六九明石より月影おくる浦風はみなと河原の秋の松ばら
七〇末晴ぬ水まさ雲にもる月を空しく雨のよはや思はむ
七一誰か見む秋ふく上のうら風に月影くだく濱の眞砂を
七二浮雲をはらふ音こそ嬉しけれ月をねまちの峯の松風
七三納殿のくるゝの妻戸押明けて今日七夕にかす物や何
七四秋の花の露になづまぬ濡れ色に光を添る山のはの月
七五尾上よりさわぎ渡る女郎花尾花通ふか風の招くか
七六士壁に窓ぬり殘す庵までもすさめず宿る秋の夜の月
七七秋の月の影や冴くと訪行けば答へてすめる廣澤の池
七八秋の雨に月の盛も忘られて清見が關を行く空ぞなき
七九清見潟月に隈なき秋の夜は風こそふじの煙なりけれ
八〇秋と云ば名をえたる夜もえぬ夜はも月に幾度月を見覽
八一明石より月影おくる浦風はみなと河原の秋の松ばら
八二末晴ぬ水まさ雲にもる月を空しく雨のよはや思はむ
八三誰か見む秋ふく上のうら風に月影くだく濱の眞砂を
八四浮雲をはらふ音こそ嬉しけれ月をねまちの峯の松風
八五納殿のくるゝの妻戸押明けて今日七夕にかす物や何
八六柴の垣かゝるほろゝの紅を哀れ楓のみにならさばや
八七夢さむる砧のおとや秋の夜の涙にしめす衣なるらむ
八八呉竹にいさゝか風の音づれてふくる枕に木葉ちる也
八九風早み鶏ふす野の夕暮に梢も知らぬ木の葉をぞ見る
九〇涙かも秋の哀のかへるこゝ露のかたみやたが袖の上
九一秋にけふ別るゝ空に月を見ばや見ぬも中々嬉かり鳧

冬十五首

九二冬かけふたゝすの宮の呉竹に賀茂のみ山の山風の風
九三秋はいぬと日數計に知られけり俄に風の吹變るらむ
九四梢こそ寂しけれども紅葉散て冬のきたるは錦也けり

九九今は冬か覚束なやと思ふ空に槙の葉分くる初時雨哉
九九冬のませに菊こそは咲けなつかしみ下紫の色も珍し
七九椚の葉のもみぢぬからに散積る奥山寺の道ぞ悲しき
八七初雪の降すさみたる雲間より拝むかひある新月の影
九九冬の氷て食むに物なき牛の子の痩行く里の寒しさ
〇〇それも如何に冬の山本荒行けば村行く小鳥寂かる覚
一〇池にすむ鴨の上毛も月冴て拂はぬ霜や夜寒なるらむ
二〇大原の炭を載く賤の女ははゝきばかりや情なるらむ
三〇いざよひに一重ふりしく庭の雪深きは月の光也けり
四〇堅き炭を掻埋む火の消なくに霜に任せて明くる東雲
五〇松と竹と花はまだ見す冬の今朝氷れる雪の消遣らぬ哉
六〇三世迄の佛唱ふる野伏たち春の御まりに參る人かは
七〇黒髪に年を重ねて置霜の雪に成行く身を如何にせむ

雜三十首　寿四三首多

八〇雙葉より心にかくる葵草かさねてすゝぐ和歌の浦風
九〇君が代は濱の眞砂を一つづゝ千年の數に取り垂す迄
一〇偽の舌のさきこそ悲しけれ糺の宮はおはしまさぬ哉
一一月も星もさやかに照すかひやなき此世の人の上の空言
一二こし方を皆悟れどもかひぞなき今くる道に迷ふ心は
一三にかくに心につかむ言の葉は時雨に任す朱の玉垣
一四我戀よさしも乾かぬ袂哉あるは遂はむと云し人かは
一五それもいさ爪に藍しむ言の葉のしいし取違く俤妻よ
一六山里に住得て住や是ならむ其人だにもなき世也けり
一七思知る心の椥をよもに引きて老の寝覚の亂行くかな
一八物の恥を思知る人はさに斯に心と身とぞ世に有難き
一九貧きは誰が咎なれや物を持たぬ人にのみ赴取せたき身の
二〇有らせばやと思人のみ失果てあらざれかしと思人のみ
二一昨日今日袖を離れて散る露は昔におつる涙なりけり
二二をり〳〵に厭ふ物から情あるは花さそふ風月に浮雲
二三善惡を思知る人ぞ難波潟てもかくても世に有難き
二四東路や幾度ふじの草枕むすぶ日數をかぞへわぶらむ
二五如何にして二つの山に家ゐせむ春はみ吉野秋は嬉峙
二六東路や毛深き馬に沓懸て我むかはきも溺れがちなる
二七麻手はすはつきの枝にゐる鵐の靜ならばや賤が庵迄
二八何となくかよふ覚もあはれなり片岡山の庵の垣ねに
二九思ひくまの人は中々なき物を哀に犬の主を知るらむ
三〇み牧より草おふ馬の口のこを見るも悲しき世の習哉
三一紺槿のゑ紺の淺きをさに乾てなにとよくほかや此世なる覚

三二町くだりよろぼひ行てよを見れば物の理皆知られ鬼
三三淀大津迄り迎ふる年のはて唯道心の道にぞありける

三四擔持つさうぎの入れこ町足駄よを行道の物と肚みれ
三五誰ならむ目をしものごひて立てる人一つ世渡る道のほまりに
三六有か無かあな儚なやの例哉反古やく灰の風に吹れて
三七古の三のみ室ぞしのばるゝ十五大寺の跡を見るにも
三八これやさは高野の山に住む心關伽振る鈴の夕暮の聲
三九ひえの山賢義や近く成ぬらむよはに冴たる問答の聲
四〇人を見るも我身を見もこはいかに南無あみだ佛〳〵

吾大菩薩者釋尊彌陀一如之和光神宮八幡同體之本源也以二和語一和二經文一以二信心一信二尊神一如在之禮讃法而滿足本有之法樂愛而奉行大神之擁護道理勿レ違二于道一小量之懇念求願皆背二于願一於二戯法華百句之要文詞花十ケ之風月今以二麁言一深轉二法輪一雖レ似二狂言一又通二實道一故妙經八軸之中二十八品之內取二百句一爲二百題一其詞云

詠二百首和歌一

序品

如是我聞

四一我聞くと傳ふる人の徹りせば爭で佛の法を知らまし
四二佛には終に成べき身にしあれば法の花をも我聞くとして
四三我聞きし鷲のみ山の言の葉は鶴の林の後にこそ有れ
四四石清水は今いふ人の言の葉のさながら浮ぶ流也けり

照于東方

四五昔をもさやかにぞ見る出る日に迎ふ光の曇なければ

入於深山

四六芳野山奥の栖かを尋ねつゝ佛の道はこれよりぞ知る

悉捨王位

四七法の爲と思になればすべらぎの跡をだに肚あだに捨しか

其後當作佛號名曰彌勒

四八鷲の山入りゆく月の跡に又出べき御名を聞ぞ嬉しき

我見燈明佛

四九燈火の光をさして答へすば御法の花は誰か待ち見む

方便品

五〇佛たち悟れる宿のかどなれば惑ふ我らは入り難き哉

諸法實相

五一津の國の難波のことも賊とは便りの門の道よりぞ知る

止止不須說

五二やめ〳〵と止めし門も終に尚こふに依てし君が言の葉

禮佛而退

五三上慢の限なりけり驚の山五千の人のさをたちしこと

其御法心に入らで出にしはえぬを得たりと思人のみ

出現於世

五四今ぞ知野べに咲べき蓮葉を照さむとてや山の端の月

開佛知見

五五世に出で〳〵佛の道をひく人は元の心の通るなりけり

唯有一乘法

五六いづ方も殘さず行きて尋ぬとも花は御法の花計こそ

如我昔所願

五七かつしかや涙の道にぞ渡しける昔思ひしまゝの継橋

常自寂滅相

五八昔より心長閑に行く舟は惑ひしなみの末をしぞ思ふ

乃至以一花

五九憶しけれど一枝折らむ櫻花さてぞ佛の種と成るべき

若有聞是法

六〇こえてみな佛の道に入るなみは此法を聞く末の松山

知法常無性

六一難波潟深き江よりぞ流れける眞を知るぞ水ぐきの跡

世間相常住

六二改まることも清による波をかけて顯す君が御代かな

聞是法亦難

六三法の道にあふ嬉しさを岩踟蹰片枝も色に出にける哉

譬喩品

必當得作佛

六四高き嶺に先だつ人を見からに我も行べき跡を知る哉

猶如火宅

六五年ふりて朽行く宿に燃る火は悟らぬ程の栖なりけり

六六惑ひ行く浮世の中に燃る火を古里とのみ思ひける哉

等一大車

六七うしやさは斯る車を有と知て乘ばやさだに思ざりける

悉是君子

六八敷置く御法を見もかひぞなき我垂乳根は驚のみ山に

諸苦所因

六九心から越え行く道の苦しきは峯の花迄思ふなりけり

信解品
無上寶聚
一七思知れかみなき程の寶さへ求めてうるは誰故ぞさは
二七沖つ波思ひもよらぬ磯ね松かゝる寶の花の咲きける
三七時しもあれば求めぬ人もきてぞ見る柳櫻の春の錦を
淨佛國土
四七我が心人の爲迄餘り行けば清くも國のなりにける哉
五七あだの花心をしめて眺むれば佛のやどにとものみ奴
止宿草庵
六七草の庵に假初臥しをする迄も我垂乳根の名殘也けり
七七如何にして都の外の草の庵に暫しも止る身と成に劍
報佛之恩
八七況て如何に浮世に廻る人の親の報をたにも報盡さぬ
以佛道聲
九七松風の聲を傳ふる秋の葉もそれ故にこそ人に知られ
〇八松風の聲を傳ふる言の葉も鹿の苑にや靡き初めけむ
藥草喩品
現世安穩
一八後世も嬉かるべき道なれば今日行空も長閑かりける
二八吹く風も枝を鳴さぬ行末は散らぬ花をや宿に眺めむ
普皆平等
三八けふの空に昔く濕ぐ雨の色は皆人ごとに心にぞしむ
汝等所行是菩薩道
四八志賀の浦に春見し花の色乍ら露も變らぬ鷲のみ山路
授記品
無有魔事
五八事をさふる物こそなけれ偖も若し有らば宛ら法の里人
心尚懷憂苦
六八悟り行く人はふたりに成にけり羨しきに濡るゝ袖哉
化城喩品
觀彼久遠
七八する墨のいふ計なき古も今日かきつくる心ち社すれ
從冥入於冥
八八類むべし闇より闇に移るとも影に彰ふ月も出なむ
願以此功德普及於一切
九八おこなひの果に唱ふる言草をうるけ袖や天の羽衣
以是本因緣今說法華經
〇九見ぬ昔はるかにむすぶ岩代の松も契も今やとくらむ

權化作此城
一九かりそめの宿とこそ聞け旅の空ながむる末は紫の雲
二九法の道に今日かりそめに草枕結びし末の宿ぞ嬉しき
五百弟子品
內秘菩薩行
三九山のはの月にぞ乘し暫しこそ野べ行鹿にかくる小車
其不在此會汝當爲宣說
四九法の花散れ共失ぬ物なれば今日見ぬ人に尚も傳へよ
不覺內衣裏
五九袒の上の露の迷をうち返し衣のうらの玉を見るかな
人記品
我願旣滿
六九我が願滿ちて嬉しきまとのかな誰も望のかなふ席に
法師品
法華最第一
七九思きや八百萬世の法の中に勝れて匂ふ花を見むとは
八九春の山秋の野原を詠めすて、庭に蓮の花を見るかな
九九三度まで移し替てし大空に數かぎりなき光をぞ見る
柔和忍辱衣
〇〇墨染の袖をとはゞや法の師に其ぞ眞の信夫もぢすり
寂寞無人聲
一〇草の庵に聲も心も澄ぬらし人はかげせぬ光をぞ見る
寶塔品
有七寶塔
二〇目もあやに雲ゐにぞ見る古の聖の住みし宿の氣色を
移諸天人置於他土
三〇かへり來て見るらむ物を鷲の山天の羽衣うつす袂を
四〇移替し鷲の山べのみ空よりいかなる月の澄昇りけむ
皆在虛空
五〇天の原思ひかゝらぬ雲の上も眞の道の宿となりぬる
諸寶樹下
六〇木の本や寶のとばそ明く方に數限りなき光をぞ見る
七〇世々をへて木の本毎に散花は久しく匂ふ例なりけり
擔負乾草
八〇法の爲例ふるはよな猛き火に枯たる草のやけぬのみかは
是名持戒
九〇一つ法を暫し保てば十の罪も濟さぬ人に成にける哉
提婆品

皆因提婆達多
一〇有りし昔われ導きし柚人を今日は仇とや人の見らむ
又聞成菩提
二〇君も佛われも佛になるならば苦む人は皆のがれなむ
三〇渡つ海や月はすまぬと聞からに同じ光は尙山のはに
四〇誰か知らむ我身を人に云顯て寄來る波の底の深さを
龍女成佛
五〇玉故に出ぬと見えし海の月やがて南にさし昇るかな
六〇渡つみや願て南にさす光玉をうけしに兼て見えにき
勸持品
何故憂色
七〇芭蕉葉やいかなる風を傷むらむ秋の心ぞ色に出ぬる
我不愛身命
八〇諸人の命にかふる法なれば弘むるかひの無らざらめや
九〇法の爲惜まぬ命つきせずばうき世の中に唯忍びてむ
安樂行品
在於閑所
一一嬉しくも心しづかのすみかには誠と知るも又誠かは
二一法の爲安く行べき道や誰處人もとひ來ぬ山べの里
不可得聞
三一見ず聞ず況て手に取とは有じ今日我得たる法の寶を
四一見ず聞かぬ法の潮合の國に來て心を引や和歌の浦人
常有是好夢
五一思ふべし我現こそ悲しけれ御法の宿とみる夢ぞその
涌出品
我常遊諸國
六一庭の面にかゝる光は又ぞ見ぬ遊殘せる國はなけれど
七一孰くにも思ぞよらぬ木の本の下より立ちし花の白波
父少而子老
八一打ちがふ親子ながらの姿こそ昔を悟る端となりけれ
九一垂乳根を和歌の浦わと見し儘や子は又老の波を懸ける
壽量品
無有生死
二〇打返し誠を照す目の前に死ぬるも見えず生るゝも無
一二吉野山奥に心のすみぬれば散花もなく咲く枝もなし
常在靈鷲山
二二闇のよるも晝をもわかず鷲の山いつも長閑に有明の月
壽命無數劫

一是ぞ誠佛の道に入りしよりえてし命はつくる物かは
如醫善方便
二げにぞ悟る病にえたる藥より知らぬ印は哀なりけり
三風に惱む眞葛が原の朝日影のどけき方の便り也けり
得入無上道
四み山路や惑ひ惑はず行き行ず思知ることそ知べ也けれ
五惑ふ人の心のゆくに從ふや上なき道の知べなるらむ
分別功德品
清淨之果報
六浮世をば出でゝし上に登り行く清き山路の限なき哉
不久詣道場
七急ぎ行く宿しかはらぬ道なれや五の品の四つの誠を
隨喜功德品
如是展轉教
八傳ひ行く五十の末の流まで御法の水を汲みて知る哉
法師功德品
父母所生眼
九蜜の刈るみるめにかゝる藻屑迄清き光の障る物かは
唯獨自明了
Cよそに知らぬ人のけしきは遮莫獨心の月を見るかな
皆與實相不相違背
一何事も誠の法に顯れてたがはずと知るぞ限なりける
二悟行く心の水に染ぬれば如何なる色も浮ぶ物かは
是人持此經
三嬉しきは終にすむべきみ山路の草も搖がぬ法の秋風
不輕品
我深敬汝等
四二十餘り五つのもじに顯れて佛の種は隱れざりけり
避走遠住
五うてばにぐ逃ても拜む心より人を輕めぬ名をぞ留る
神力品
現大神力
六十までの神の力と聞く御法げにぞ佛のしるし也ける
即是道場
七此の國のなにはの浦の大寺の額の銘こそ誠なりけれ
於我滅度後應受持斯經
八法の花に佛の種を結ぶこと疑ふまじと聞くぞ嬉しき
囑累品
如世尊勅

一九三度撫て契し君の勳なれば今日迄誰もその示教利喜
各還本土
二〇諸人の返る光は消えはてゝ其木の本や寂しかりけり
多寶佛塔還可如故
二一大空に轡し宿の戸ぼそをば明けし跡や又もさしけむ
藥王品
而自燃身
二二燈してし其身も元に返りにき返るも燈す報ならずや
最爲第一
二三蓮こそ清き花には勝れたれ星の中には月ぞさやけき
二四星の中にさやけき月の光よりさしてぞ著き十の譽は
如渡得船
二五渡し守なからましかば湊川苦しき海も此よりぞ知る
二六綱手なは苦しき海をよそに見て浮世を渡す淀の川舟
於此命終即往安樂世界
二七我妹子も教ふるまゝに行へば終嬉しき道とこそ聞け
二八夕月夜さすや岡べに露きえて西に開くる女郎花かな
廣宣流布
二九嬉しくも廣く降りしく法の雨の潤ふ國に生れける哉
Oo雪の山のみ法なるらし年をへて廣く降敷く末ぞ嬉き
一一法の花ちらぬ宿こそなかりけれ鷲の高ねの山嵐の風
病即消滅
二二法の風に秋の霧さへ晴のきて凋む花なきませの中哉
妙音品
乘寶蓮華
二三鷲の山あまた蓮の開けしを驚きながら知る人ぞなき
二四不鼓自鳴
二五鷲の山妙なる聲のゆかりには風吹かねども峯の松風
觀音品
便得離欲
二六ねにおふる罪と聞しも君が爲離るとするも嬉かり鳧
二七常に思ふ心の儘によしなやと重ねしつまは思返しつ
二八さよ衣うらにも夢を悟るかな重ねし妻を思ひ返しつ
以種々形遊諸國土
二九三十餘三の誓の嬉しきはさま〴〵になる姿なりけり
三〇さま〴〵の心づくしに行く舟や返る姿にあふの松原
施無畏者
Oo長なき道に導く光こそ我が名にたてゝ人にしらるれ
心念不空過
一一頼みてもなほ頼むかな思ふ空しく過ぎぬ人の誓を
陀羅尼品
無諸衰惱
一二衰ふる愁へやいづく法の道に拂ひぞすつる天の羽衣
一三うれしきは花に風なき吉野山月はくもらぬ更科の里
羅刹女等
一四我妹子もけ疎き樣に思ひしよ深く御法の花を詠めて
一五十の名を法の席に聞きしよりげに懷しき妹が言の葉
嚴王品
願毋放我等出家作沙門
一六金乳根を導かむとてたらちめに請し暇の末ぞ嬉しき
善知識者
一七如何にせまし惡き道をも善方へ教る人の無らましかば
一八人の來て導く野べに出ぬれば麻の中なる蓬をぞ見る
勸發品
成就曰法
一九嬉しくも佛の御子の緣りとて八歲の法を二度ぞ聞く
Oo法の名を佛のみこに仕ふとて四の心に結び入れ鳧
皆是普賢威神之力
二〇霜を拂ふ主となれる力にや又なき法の花を見るらむ
作禮而去
二一なれ〳〵て涙の雨や曇るらむ歸る空なき鷲のみ山路
二二如何ばかり露けかりけむ鷲の山苔の筵の跡の暮がた
二三八年まで苔の席になれ〳〵て露分わぶる鷲のみ山路

以二暮秋初冬之候一入二二諦一如之觀一忽泳二四五之拙歌一法樂三所之權現一利二他而思觀一自念而朝市之春花勿レ萎二于風關仙洞一都鄙之秋風莫レ憚二於佛法王法一依二此倭國之風俗一欲レ彰二淨土之月輪一矣

夫當肚者得二名於春日末代之天一悲二光於秋心濁世之月一和歌者是神國之風俗也有レ便二于法樂一短者亦人間之吹盧也無レ恐二于披陳一歷二四序一號二成意一書二一心一號二詠懷一若感二應道交一者蓋納受歟謹敍其詞云

花　夏月　鹿　落葉　法文
春　夏　秋　冬　雜

花
二四よそに見て慰みやせむ山櫻まだしき程の峯のしら雪

うれしくも花をたづぬる峯ごとにみな白雲の春の曙
三吉野の雲は霞にうづもれぬ哀に花の匂はざりせば
何事も思捨てゝし柴の戸によしなや花の尚匂ふらむ
春くれば花の白波たつ田山こすゑにはまだ瀧の白波
花のちる長柄の山の木の本に立つ白波は志賀の浦風
花櫻ちるはならひと思へども尚いとはしき春の山風
山の奥にわれ獨見る遅櫻いとゞたぐひもなき匂かな
花は春はるは花としの山青葉櫻にわれ惜みて
花故に人にとはるゝ山里は過ぎ行く春の別のみかは

夏月

卯の花の色にさしそふ夕づく夜道行く末も有明の空
澄む月はのきの菖蒲に影おちて有明の空に鳴く蛬公
なつかしや花橘のかをる香を窓に眺むる夜はの月影
夏の夜の松風きよき月影を惜むとすれば明くる東雲
夏木立繁き山べにすむ月のもりくる影に涼む頃かな
夕立の洗て過ぐるみ空より出づる隈なき夏の夜の月
月影の清見が關の夏の夜は波を數ふる程だにもなし
諏訪の海に夏の氷をしく物は秋耻かしき夜はの月影
夏の夜は待つも惜むも影清き月に涼しき山の井の水
電の影かあらぬか夏の夜の寢まちの月の有明のそら

鹿

さを鹿の擊ぞ身にしむ春日山秋まちえたる夕暮の空
三笠山さして物こそ悲しけれ浮世の秋のさを鹿の聲
旅衣つまとふ鹿の夕ごゑに袖しをれぬるくさ枕かな
秋は然鹿の音無ば如何にせまし獨寢覺のみ山べの里
石上ふる野の小篠踏しだき鹿こそは鳴け三輪の山本
鹿の音に野寺の鐘をうちそへてあるか心の秋の夕暮
杉の庵に夢結び行く窓ふりて初瀬の峯に小鹿鳴く也
苔原やふしみに結ぶよるの夢を殘すぞ鹿の曉のこゑ
春日野に鹿の音たつる夕まぐれ神にぞ祈る秋の心を
さし昇る月に答へて鳴く鹿に我も三笠の山のはの月

落葉

木葉ちる立田の里の槇のやに音せぬ風は時雨也けり
時雨をば時雨と聞けど木葉ちる槇の板やに風弱る也
色變てちるは習の木の葉にも思知らるゝ浮世也けり
秋の葉の冬の嵐に頽はすば風も紅葉もかひ無らまし
風の行く梢の色はそれながらたゝ一筋に散る涙かな
嵐吹く空に木葉の消やらで憂身に告ぐる頃ぞ悲しき

神無月いくたの杜の秋の葉に松かせ過ぐる夕暮の空
山里の道は木の葉に埋もれて梢くまなき月を見る哉
村雲や梢にかゝる夕しぐれ庭の落葉に音ぞさびしき
紅をおろす嵐と聞くほどに庭の錦をまたたゝむなり

法文

法の庭に普き門を立てゝより誰も入べき道と知にき
一朶のあだなる花のみは何ぞ捧ぐる人の胸に止りぬ
我山のかひある道に身を入て頼む悟も何にやは非ぬ
八日にそへて我が立つ柚の山川に法の水こそ心細けれ
故郷にのこる御法をまもる神は唯心こそ心なるらめ

朝附日さすや高ねの山路より通ふ野べに出る鹿の音
押なべて空しき空にすむ月の又宿る夜を願む物かは
いふとはみな眞なる御法こそげには佛の御法也けれ
殘る人は誠の道になけれども宛ら殘ることぞ悲しき
淺ましや數限なきちり山を幾ら超えこし塁とか見る

春

春たつと聞より霞む空なれば花かと見えて雪も散見
春霞た靡く野べの小松原いつも子日の心ちこそすれ
花と竹とつゞく梢の山里にうぐひすさそふ春の山風
佐保姫の柳の眉に糸そめて花の綾おる頃は來にけり
春の來て梅さく宿のなさけかな月影かをる有明の空
雲雀ぬる春の田面のうは霞八重になりゆく夕暮の空
殘のめは春雨そゝぐ苗代に蛙の聲をまかせてぞ行く
春の心ある軒の絲ゆふ窓曇て浮世の夢ぞいとゞ亂るゝ
四方の海を千年までや神も見む松の梢にかゝる藤波
山吹よ井手の川波立ち返り春のかたみに暫し留まれ

夏

今日よりは霞の袖に立かへて夏こそ着たれ蟬の羽衣
深見草八重の匂の窓のうちにぬれて色こき夕立の空
夏草をわけて誰かは尋ね來む山里さびし五月雨の頃
菖蒲草人に引るゝかひぞなき殘るねもなき沼の岩垣
五月雨の雲間になのる郭公花たちばなに暫し休らへ
槇の戸を夏しも叩く水鷄哉明る程なき夜はと知すや
なでしこの花に朝露うちはらひ暫し涼しき六月の空
水無月の有明の空に吹く風や荻の上葉に移り行らむ
芝の上にむれゐる人の夕涼み秋懐かしく風渡るなり
嬉しくもつみ水無月の今宵かな千年の命のぶる蔽に

秋

荻の葉に待ちしも著き音なれや驚かれぬる秋の初風
秋くればなべて野もせに露繁し我袖の上は頃も定す
涙ならで我袖の上に露ぞおく秋女郎花折るとせしまに
栗津野の尾花につゞく小波を吹きな亂りそ山風の風
深草の露けき野べに庵ふりて籬のくれに鶉鳴くなり
衆てより雲にしぐれて秋の色の變る景色は空に見え鳧
秋風を荻の上葉に聞かぬ宿は秋に露や散ずも有らむ
いかにして同じ緑の返る覽松には露のおかぬ物かは
日にそへて時雨の雲に成行くや秋のみ空の限なる覽
秋のかへる空のけしきぞ哀なる梢の色は庭に萎れて

冬

早晩と我が袖の上に初時雨秋見し色の名殘なれとや
秋の花の獨殘れる菊のませも移ろふ色になるぞ悲き
池に來て見なるゝ蒼の聲す也月影氷る冬の夜な〳〵
衙なく須磨の關屋の夕波に袖萎れ行くよはぞ悲しき
冬の闇の雪げの空の絶間より清くぞもるゝ星の光は
いか計越路に雪の積るらむ土につき行く庭の松が枝
哀にも頭の雪の見ゆるかな我身に積る年の行くへは
いつよりぞ年の暮行く夕暮の尾上の鐘の音ぞ悲しき
身の上に送り迎ふる年波を掛ても人の悟らぬぞうき
山の奥に小指を折て數ふればあすより春も廻來に鬼

雜

あふ夢も叶はぬ夢も現にて思解く方もなき世也けり
旅の空にたぐひなき物は夜はの月波の枕に草の枕に
身に纏ふ秋の夕霧さく晴れよ晴れて果つべき我御法かは
夜を重ね西に誘ふ月影よいつ諸共に入らむとすらむ
世中を二たび三度歎けどてやがて涙の多く落ちぬる
我も我人も人なる世なれども我もなき哉人もなき哉
世の中を悟る心のゆく方を達はぬ道は神ぞ知るらむ
又頼む方こそなけれ世中よ頼めば神に任せてぞ見る
藤の花昔に匂ふ春日山松にぞかゝるうき世なれども
佐保川の波間に浮ぶ泡を今日掻流すえにこそ有けれ

拾玉集　巻第五

寂蓮入道嵯峨に住み侍りける比秋の風ことの外にて裳のひはだも肯吹きみだりて侍りしとて

[八]我庵は都の戌亥住侘びぬ浮世のさがと思ひなせども
返しに
[八]道をへて世をうぢ山と云し人の跡に跡そふ君と社見れ
[七]昔人は秋の心に成にけり吹き過ぎにける風の景色に
文治五年九月寂蓮入道の許へ無動寺より遣はすなり
[八]思ひ知りて思おこする人もがなみ山の秋に返る心を
[八]鈴蟲の聲も山べに聞ゆ也いかになるべき我身なる覽
[七]大たけの峯ふく風に霧はれて鏡の山に月ぞくもらぬ
[九]自から雛の野べをかき分て鹿すむ宿をとふ人もがな
[二]きく袖の露の深さもある物を外山の裾に鹿鳴なり
[九]もる月は關の板まに影ふけて我世の秋を思ひ明しつ
[二]鹿の音を送る長柄の山風を稻葉に聞くや志賀の里人
[五]初時雨人もきて見ぬ山陰に夜の錦をおり初めてけり
[六]かき曇り山廻りする村時雨物の哀をそめて過ぎけり
[七]法の水の淺く成行く末の世を思へば悲しひえの山寺
返し　寂蓮
[八]心こそ及ばぬ山の奥なれど秋の哀はかへりつくまで
[九]鈴蟲も世にふる道を厭へや野べをば捨て山に鳴らむ
[一〇]山のはも又習なき大嶽にさ社は月の隈なかるらむ
[一〇]嵐山木の葉ふりしく麓より鹿すむ宿を思ひこそやれ
[二]を鹿なく同じ外山の裾なれど聞分く袖ぞ露添ふ
[九]詠めつゝ頼みし月も影ふけぬ我世の秋は今幾夜かも
[一〇]鹿の音を稻葉の風に傳ても世を怨みたる志賀の里人
[一〇]かきくらす物の哀は山廻り時雨をそむる心なるらむ
[一〇]君がすむ宿の紅葉は月影のくまなき夜の錦なるらむ
[七]法の水深き流も絶えなまし堰入れて山の影に住すば
堂跡御修造をおもふなるべし
先度吹き過ぎにける風のかへし
[八]秋の葉に秋の心をそよとだに思ふに過ぐる風の音哉
文治五年十一月五日の夜大雪降る其の朝殿下より給はる御詠
[一〇]雪ならぬ春の吉野の花は尚さゆる句を見せぬ也けり
前庭之櫻樹白雪積レ枝粧似二春花一猶添二寒色一仍所二詠吟一也欲レ給二高和一而已　御判
作レ恐无二左右一進二愚和一
[一]いつしかと春を知べき宿なれば雪にも花の匂有けり
其春如二思食一入内立后被レ遂二世間の美談也けり

[一]誰とかは見にくる人を谷べき花こそ宿の主とは聞け
同じ十七日又雪深く積てありしあした公衡の中將の許より
[一]思遣れ道さへ絶ていとゞしく雪の底にも沈む心を
其の頃身のしづみぬるを歎きける頃にてかくよめるなるべし
[二]年の内に春に逢べき宿なれば嘸ても雪の花と見ゆ覽
年の内にもよろこびはありなむと思ふことありてかく云へるなるべし果して三位中將になりにけり
同じ十三日除目のありしに定家侍從少將になりぬと聞きて悦ふべかりしを又いはで此の雪を便にて申しやりし
[三]三笠山さかゆく君が道に又花さきそふる今朝の白雪
返し
[一]思ひやれ雪に花咲く三笠山ならぶ榊をちらす朝日は
兄弟雙顯繼光花希傍外候又無闕加任已餘〻身恐候此兩事面目忭悦之至無〻物〻取〻喩候之處重預二御歌一候之間已增二萬代之眉目一候者也
同じ朝に又寂蓮入道の許へ申遣す初の雪にも訪れざりしことを思ひてなむ
[六]詠わびけふさへ更に待わびぬ二度雪に跡つけしとや
返し　寂蓮
[七]幾度も跡をばつけし山人のまた上もなき雪と見る迄
天に口なし和歌をもて云ふべし況ふ心と思ひてかくいへるなるべしやさしくこそ
同じ雪の朝靜賢法印の房に自〻院雪山の雪をめされてうへの雪などをかき落しつゝ進らせけるを見て誰ともなき文を投げ入れたりけるをあけて見れば
[八]消行くを惜む宿だにある物を拂てけりな雪のうは書
かくかきたりけり其の文を隣の實命がしわざと思ひて此の文は疑なく三位房の所爲也とこそ覺え候へ誰かはうへの雪をとりなどしつるをば此隣人ならでは見侍るべきとて返しの歌をよみそへて圓圀梨が許へおこせたりしを見れば
[九]拂ふともよも消えやらじ年をへて我が頂に積る白雪
[二]庭の雪に跡踏附けて惜むやと君が栖をいざ行て見むかく書きたりけるまことにやさしくこそ

其の文は圓圀梨の妹の女房右京の大夫のしわざなりけりされど知らぬよしにて異にあやしく誰人のしわざにかぬしを尋ねて傳へ侍らむと云ひて後夕暮になりて又靜賢の許より三位がしわざは惡しく心得侍りにけり大夫殿のにて侍りけるものをと語ると聞きて實承ることいと侍りて述懷することなむ侍るとてかくいひつかはす
[二]中々に顯れてこそ思知れほさじとしつる雪のぬれ衣
この返事に袖書して消息してはべりしを見れば
昨日寒苦遍〻身忘二他事一之處被二不慮歌札一勵二遊邊心灰一聞重賜二三品禪門一述懷彌開二愁眉一乾與志尤切欲〻罷不〻能
[二]水鳥のあとのしわざに顯れて面白くなる雪のぬれ衣
靜賢法文
世の末にはかやうなる僧もいと有りがたし
信西入道が子どもは一人もあだなるは見えぬ中にも圓位上人宮川歌合定家侍從判して奥に歌よみたりけるを上人和歌起請の後なれどこれは伊勢御神の御事思ひ企てしことの一つ名殘にあらむを非〻可二默止一とてかくしたりければそれは其の文を傳へ遣したりし返事に定家申したりし
[二]八雲たつ神代久しく隔たれど尚我が道は絶せざり鬼立ち返り返しに申しやる
[二]知られにき五十鈴川原に玉敷て絶せぬ道を研べしとはその判の奥書に久しく拾遺にて年へぬるうらみなどをほのめかしたりしに其後三十日にだにも足らずやありけむに程なく少將になりたればひとへに御神の恵と思ひけり上人も判を見てこの恵に必ず思ふこと叶ふべしなど語りしに詞もあらはになりにけり上人願念叶二神慮一かと覺ゆること多かる中にこれもあらたにこそ
寂蓮入道昔思ふいけにはゐ(居)も朽ち果てゝ枯野につゝく蘆の浦風と古池寒蘆によみたりと語りしあしたに雪ふりしかば詠みて遣す
[二]昨日聞し枯野の風を身に占て今日の心は雪に埋れぬ
返し　寂蓮
[二]哀知る心を雪にむすばずば枯野の末に色を見ましや
文治六年女御の入内はて〻左大將候はれしかば

雲のふりたるあした御修法結願していづとてかたりし歌正月十四日になむ

一三笠山雪が心の雪見ればさしてうれしき千代の初春

二吹返す昔の風にいつしかと影願くべき君とこそ見れ

返し　左大将

三笠山雪ふりにける跡なれば心の春の末もたのもし

家の風傳ふる宿のあたりをば影願くべき道と社思へ

文治六年二月十六日未の時圓位上人入滅臨終などまことにめでたく存生にふるまひ思はれたりしに更にたがはず世の末に有りがたきよしなむ申し合ひける其の後よみおきたりし歌ども思ひつゞけて寂蓮入道の許へ申し傳へし

一君知るや其如月と云ひ置きて嗣におくる人の後の世

二風に靡くふじの煙に類ひにし人の行方は空に知れて

三千早振神に手向くる榊葉草援集めつゝ見るぞ悲しき

これは願はくは花のもとにて我死なむ其きさらきの望月のころとよみ置きてそれにたがはぬことを世にも哀れがりけり又風に靡く富士の煙の空に消えて行くへも知らぬ我が思かなも此の二三年の程によみたりこれぞ我が第一の自讃歌と申しゝことを思ふなるべし又諸社十二卷の歌合太神宮にまゐらせむと營みしをうけ取りて沙汰し侍りき外宮のは一筆にかきて既に見せ申してき內宮のは時の手習どもに書かせむとて料紙などを沙汰することを思ひてかく三首はよめるなり

四朝夕に思ひのみやる瑞垣の久しくとはぬもろ心かな

五山川に沈みしことは浮びぬるを偖も尚すむ我が心哉

六諸共に眺むべかりし此春の花も今はの頃にも有かな

返し　蓮

七君はよし久しく思へ瑞垣の昔とならむ身の行方まで

此間所勞大事にて皆も御返事え申さず水がきばかりを所勞遠慮に寄せて申し候ふとてかくなむ

後日に所勞のび〳〵に令和進ごとて五首送之

八深よくさぞすみぬらむ山川に沈むと見えて浮ぶ心は

九思餘り身にしむ風も如何せむ花も今はの頃と成なば

〇云おきし心もしなじ圓かなる位の山にすめる月影

一類なく富士の煙を思ひしに心もいかに空しかるらむ

二伊勢の海に擾集めてぞ藻鹽草終亂れぬえには成ける

文治六年三月五日實命召されぬと聞きて左大將の御許より

三この內を遂に出ぬる葦たづはこれぞ實の命なりける

御返り事に

四千代ふべき君なれば社鶴の子の是ぞ實の命とも知れ

龍り居る事などゝゝのへ申す序に

五憂はよくよきは又うき此世哉尚有ぬべき道に迷ひて

六既に消る法の燈火挑げずば尚うかるべき闇と社見れ

御返事給ふ

七今更におもひ知るこそ愍なれたゞ何事も定なき世を

八大嶽の峯さわがしく吹風をしづめずばいざ法の燈火

隆寛阿闍梨一日百首よみたるとて見せしかばやがてよまむと思ひて文治六年四月八日午四點末の初ばかりに筆をとりてやがて云ひつけし程に申の終酉の初の程に百首かき果てたりし只二時などの程にや題十首なり其の百首のことを別當入道惟方光臨したりしに語りしかば見よと申すを奉じて我もよまむ數日によまむとて三十餘日によみたるとのたまへし遠慮の十首略してたゞ一首よみて九十一首にてたびたりし其の一首の歌に云ふ

（缺）

其の返事に

九中々にもゝに九つたらぬこそ千尋に餘る情なりけれ

十首づゝのをり歌をよみて口にまかせて申したりき

郭公の題の返事ばかりあればかきつく

一思へどもいはての杜の郭公昔に似たる聲になれてば

我が歌ども忘れれば書かす

文治六年寂蓮入道思ふことありて出雲の大社へ詣でゝ歸りて後文やりたりし返事にかく申したり

一昔思ふ八雲の空にたつものは色をわくべき君が面影

返事

二さまりゐる心に常にかゝりしは八雲の空に出でし俤

同じ人小瘡の所勞ありと聞きてとぶらひたりし返事に

三宮城野の木の下露はわけね共三笠と申ことの繁けむ

返し

一戀こそは君が爲にはみ笠守雨に增れる露をはよせじ

其の後同じ人の許へ薪つかはすとて

二君がため年ふりにける片岡の山路に拾ふ薪とを知れ

これは彼の入道よみたる歌どもの有るを思ひてよめるなり

返し　寂蓮

三錦木の千へかも言の數ならで立ちたる筋は是ぞ見えたる

我が道の御なさけを思ふなるべし又そへたる歌

四宇治川の石間をわけて泡の舞ひ亂るらむ影ぞ悲しき

歌人舞人候ふよしか

雙輪寺の前大僧正の許に在りけるをさなき者ども白川坊の留守の間來たりけりと聞きて大僧正の御許へ申したりし

五山櫻主となるべき身ならねどよその句は尚ぞ床しき

返し　大僧正

六散殘る深山隱れの花なれど見にくる人もなきぞ悲き

文治六年に公衡の中將祈請成就之後遣二卷數一返事之次皆水精念珠弘法大師三鈷等送り給ふ包める海葉に書きつけて侍る歌

七さりともと思ひ〳〵て祈けむ心の根より花ぞ咲初む

西王母桃花始めて開き候ふに向後彌其憑候歟

返事に申しつかはす

一祈つる心のねより咲花は頓てかひある身とぞ成べき

祈念之間彙日有二夢想告一果以叙三位中將一也

建久元年九月に靜賢法印の許よりなくなりたるそばに花の咲きたる枝を折りて歌をつけて人のつかはしたるとておこせたるを見れば

二是を見よ菊より外に此頃は花なしと云ふ人はあり共

返しめかしうて遣す

三花もみも同じ匂の枝を見て猶の蓮のまことをぞ知る

その次の日櫻の花のめでたく咲きたりしを折りて又これより遣す

四野分せし秋の紅葉の一枝に折りたがへたる花櫻かな

返し　靜賢

五紅葉ばに折りたがへたる櫻花霧は霞と見え渡りつゝ

建久元年十一月十九日東大寺棟上御幸二法皇先十七日已剋令レ着二宇治平等院一給二淨衣一御幸第二度例也殿下十五日夕先立令レ入給御所小川

也本堂の北廂を爲二院御所一御装束如レ例御堂所々修理等傍增二先例一是破壞之條當時之故也殿下御供に左少將定家朝臣令レ參同十八日早旦十首詠送之物忌之間沈二思利歌一甚無骨然而爲二其道之人一不レ忘二其時之景氣一不二默止一之條好上之至也尤有レ興殿下十七日御幸御詠之後十八日巳刻南都御下向御幸春日詣之義也前駈衣冠隨身毛車を被レ用左大將同被レ參明旦十九日先參二御社一自レ其東大寺棟上御幸に可レ令レ參給一件十首詠云

六六哀とも唯に云てか山城の宇治のわたりの明る夜の空

七六鳴初むる鳥の初音におきゐれば唯宇治山の有明の月

八六河浪の響きにたるも慣ぬ身の頃さへつらき山嵐の風

九六衣うつ音は都のものにもあれ嵐はうときねやの手枕

一七今ぞ聞靜まる夜はに言問てふくれば近きうぢの河波

二七風は皆よもの梢を傳ひ來て暗き聲にも色ぞ見えける

三七杉の屋の行合はぬまより置霜の結ばぬ夢も月に成ぬる

四七假初と思ひし程に身に馴れて忘らるまじき柴の庵哉

五七今宵また春日の里に宿からば昔忍ぶやとぞともなく

六七此の里は君も旅ねと思よりとはれぬ方を先ぞ忘れぬ

唯今殿下御出ひしめきし折節ひまもなかりしかど人の道をすさむるになりぬべしまだ返り事せずば本意なかるべければやがて筆をとりて返しに申し遣す十首

九七宇治に來て唯には云て山城の思ひけるこそ哀よの空

七月影はおりゐの山に傾きて鳥のそらねも有明のそら

八音すべき木葉おちぬる山風を浪に隱さぬうぢの川霧

九七宇治山の嵐に頼ふつちの音を人の衣と思ふうたゐね

〇八草枕ならはぬ夢の枕にはさこそ聞くらめ宇治の川浪

一八暗き夜に紅葉の枝を吹く音は風に色ある心ち社すれ

二八杉の屋の合ぬ杉まの霜はいさ結ばぬ夢の月をしぞ思

三八假初と君は見るらむ我が宿の庵哀なる宇治の山かげ

四八諸人の今宵宿かる春日野の草の緑りの身のどこそ

五八昔よりこの里人と思ふ身を旅寢の夢に何たぐふらむ

此の歌のことを定家の朝臣申したりけるとて又左大將よみて遣したる

六八あたら夜を我もたゐには山城の世を宇治山の古の跡

喜撰餘流

七八鳥の音の哀をかくる袖のうへに月も色ある宇治の曙

八八秋の色の今はのこらぬ梢より山風おつる宇治の川波

九八拾つ人もたぐふ嵐も疎き世に砧の音を馴れし物とて

〇九草枕まだ音づれのなきまゐに波におどろく故郷の夢

一七紅葉吹く峯の嵐のくらき世に面影似たる袖の色かな

二九霜冴る杉の板屋のめも合ずさこそは袖に月氷るらめ

三九此の寺の昔の跡をおもふにも心すみぬる宇治の山陰

四九奈良の都春日の里に我行かば知る由すべき人のなきこそ

五九大方は心なき身と思へども此里にてはとふべき物を

其の後雪ふりたりける夙めて誰ともなくて左大將十首の歌をよみて定家朝臣の許にさしおかせられたりければ誰ならむと怪みて哀さにこそとて夕になりて返しして進せたりけるとなむ

大將殿の十首

〇〇今年さへ花より雪に成に鳧何ともなくて山里にのみ

一〇見せばやなこほれる露に影止て庭の木葉に宿る月影

二〇柴の戸の嵐に塘ぬ荒間より冴えたる月に床を任せて

三〇跡もなき庭は枯野の景色にて心のうちを霜埋むなり

四〇冬枯にみねの梢をなしはてゝたゐ秋ながら有明の月

五〇風寒み庭のやり水こほりゐて松に殘れる岩波のこる

六〇寂しさよたゐ我が友と頼みこし竹の葉分の冬の山風

七〇都にはしぐれしほどと思ふよりまづ此の里は冬の曙

八〇初雪と君は見るらむ里になかめなれたる唯今の空

九〇法を思ふ心の末を分止めむ君に殘せる身の行へより

いかに怪しく思し召すらむ大原より尼が申すなり

定家の朝臣の十首

一〇言とはで契りし道も絶にけり櫻の雪に降りかはる迄

二〇露こぼる木葉の下に跡とぢて月や山路の色埋むらむ

三〇山嵐の峯の彼方に知べしてなるらむ床の月は我みて

四〇思へたゐ心の道も落つるかとかさなる露の明方の空

五〇待ちもしき梢の空の冬枯にひとり有明は都なりけり

一いかならむ結ぶ氷柱に冬深て外山の聲は四方の松風

二山里のうき世隔たる住ひには雜の竹も友となりけり

三積るらむ雪やはよそに雲晴く霰時雨に睡ろまぬ夜は

四初雪も身はふりまさる心ちして冬哀れなる唯今の空

五頼むかな通ふ心し絶えせずばわくらむ法の末の契を

まことに心えぬことどもにて候へども京より法師が申し上げ候ふよしびんぎを伺ひてひろう候ふべ

しあなかしこ〳〵

かゝることこそ有れとて此の歌どもとり出でゝ見せさせ給ひしかば詠みて奉る歌

六〇何となくあまた一年うつり來て積る哀は唯雪にのみ

七〇引かへて寂しさ磨く野べの月氷らぬ露に宿りし物を

八〇閨の上を夜はの嵐に任すれば哀に月を誘ひ來にけり

九〇月影のむすぶ契のかれぬ野は心の道の淺茅なりけり

〇一木枯にかたぶく峯をはらはせてたゐ月影は冬の有明

一一山川のおのが流にこほりゐて松の梢に岩たゝくなり

二一呉竹は冬の狹とぞ成にけるさこそは吹きし秋の夕風

三一都にはなほ時雨とや眺むらむ初雪ふりぬみ山べの里

四一昨日けふ都の空のいかならむ今もふりぬる冬の夕暮

五一おもひとく御法のすゑの身の末は雪のみ山の雪の曙

これはしつはらには入道法師のやさしき御事どもを承りてきうけうすとかやをしゝ也ならなわらはせおはしましそ

西山決橋かくれて後三位の中將の許へこまかに物申しなむとせしにあれより歌よまれたり

六一色深き其言の葉を見ても又袖の上のみ打しぐれつゝ

返しに申しやる

七一別れにし人の名殘の言の葉ぞ袖の時雨の色と成ける

建久二年右少辨資實に山本の莊を給へたるよし聞きておほぢの日野の民部卿入道の許より慶ぶよし申すとて一絶をつかはしたるを見れば

書レ所レ懷呈二子孫一　老沙彌如之

孫枝子葉誇二愚日一　枯木自然如レ遇レ春

水菽徒令宜二詠謝一　後榮不レ識七旬身

これを見て和してつかはすとて

八一木の本の春に逢なる春なれば老木に花も咲ざらめやは

こぶしの花の咲しくとく出で來たるを靜賢法印が許へつかはすとて

九一み吉野の山の櫻に非ずとて此初花は待たずや有らむ

返し　靜賢

〇二給はれるこぶしの花に合すれば梅も櫻も何ならぬ哉

千手といふ稚兒の外へ行きなむとすと聞きて其のことなんど尋ねにつかはすとて

一二つひにさは流止るか山川の底計こそ聞かまほしけれ

三月六日山にありしに雪ふりたりしかば左大將

の御許へ
二三都にはやよひの空の花盛知るやみ山はなほ雪のちる
幕下御返事
二四知らざりつ今日九重の花を見て尚白雪の深き山とは
建久二年五月の比隆寛阿闍梨の許より十首の詠
おくれりける
二五露の身は思へば束の間なれども宿す計の草村もなし
二六朝夕の煙をよその眺めにて哀いつまで明しくらさむ
二七何事も有るが上には有物をなきが爲にはなき世也鳧
二八そゝや此年へぬる身は耳垂て見と見る人は後生の角
二九今もまた君より外にと思へども弱る心の底ぞ悲しき
三〇おのづから眞を知れる人迄も世に從ふを世の習にて
三一かきくらし心しぐれて幾返り袂に秋の色を見すらむ
三二大方は人の憂にもなし果てゝ我が身に積る前世の罪
三三底清き岩間の水をむすびても心にごらぬ山陰もがな
三四押こめて喩ふべき身を思ふには芳野の奥も尚淺き哉
返事にいひやる
三五露の身を宿す草葉はおほかるを所を嫌ふ野べの夕暮
三六盛もせず去年のながめの夕煙いつ身の上に有明の空
三七尚思へ思は同じ思ぞと有るにつけても無きに附ても
三八耳垂を年へぬる身と思ふとも角ぐむ草も後の世の夢
三九諸共に君より外と頼めども報まだ見ぬ此世なりけり
四〇我はまだ思ひもわかぬ思かな世に從ふを世の習とも
四一前世の罪の報を思ひ知る心ばかりやうきがなぐさみ
四二物思ふ心の秋に成ぬれば雫でか袖もみぢざるべき
四三そのとよたゝ願ふことこれ計かり心濁らぬ山陰の庵
四四過にけり都の内に住ながら吉野の奥を淺しとはいさ
別遣二一首一
四五今日迄は數多の道に惑へ共行きつく末やげにも山陰
雪のふれりける曉月いと隈なかりしによめる歌
を左將軍へ奉る
四六月は秋あきは月とぞ思ひしを雪ふかゝらぬ冬の有明
御返し
四七雪ならぬ闇にも秋は知られけり誠にひるの唯今の月
左の本幕下一條へけふ參らむなど申したりしか
ばいひつかはしたりき
四八大方も君を待つる今日ぞかし時しもあれや庭の白雪
返事

四九今日は否憂身の跡をつけじとぞいとも長き庭の白雪
建久二年九月如法經かきて天王寺太子の御墓な
どに詣でゝ其の次でに住吉に詣でゝ八月一日住
の江殿にて百首よみてたてまつりみな住吉住の
江の詞をおけり歸りて尋常の料に左大將殿にか
ゝせ奉りて實殿にこめむとする間に草本を後成
入道見て點どもあはせ奥にかきつけたる
入道釋阿
五〇神もいかに心に染て照しけむ御法の後も言の葉の色
返し
五一法の末を今こそ神も照すらめ君が添つる言の葉を見て
同じ十月に初雪ふれる朝山へのぼると聞きて同
じき人の許より消息したりける次にかくなむ
入道釋阿
五二都だに初雪ふりぬ山のおく冬の奥をも思ひやるかな
かへしに
五三冬の奥を厭はぬ宿の初雪は心の底に消えぬとを知れ
同じ十一月晦日山の座主事仰せらせたりし時住
吉の百首のことなど思ひ合すて後成入道の許
より雪の降りたる朝にかくいへる、十二月九日
五四峯の雪心の底を聞きし時山の主とはかねて知りにき
猶々同時御慶旁重疊之條更々非二申限一候とて又
五五日吉のや杉の印と更にいはずをり哀れなる住吉の松
返しに
五六いざや雪頭の上にうつす迄山の主とも思ふべき身か
五七今こそは思ひ合すれ日吉のや杉のしるしも住吉の夢
同じ閏十二月二十八日甚しき雪の朝公衡卿の許
より
五八知らじかし早曉雪を分れども心の通ふ跡は見えねば
返し
五九あとつかぬ心づかひの通路は知る人ぞ知るゆきの曙
同じ朝に詠二十首一左將軍の御許へ奉る此間法皇
の御惱頗る大事に聞ゆる比なり
六〇跡はをし訪では如何庭の雪よ危まれたる昨日今日哉
六一雪に赴かつ〳〵見つれ君が宿の三笠の山の花の盛を
六二降閉ぬさらでもさ赴柴の戸は過行く跡をよそに厭て
六三都人はみな越路にぞなりにける人のあとなき雪の曙
六四今朝見ればよもの山べは花盛朝日の風の散すべき迄
六五見せばやな淡路の島のけさの雪を宛移す池のあたりを
六六宿ごとに降りつむ雪の眺かな深き心を庭にまかせて
六七人の宿の眺はいかに今朝の雪に哀憂身は心さへなき
六八かき曇りふり來る雪に此頃の世の歎まで空に見る哉
六九花よ月かすめすこしの遂になほ雪の朝も遠慮也けり
返し　幕下
七〇我は尚雪の跡をぞ思ひつる情あるべき今日と見乍ら
七一雪にだに花の盛りの三笠山眞の春はいかばかりかは
七二柴の戸の雪の通路いかに又ふらでもよそに厭けむ跡
七三此花は嵐の香を埋めども峯の朝にちらむとやする
七四一とせは冬の奥にもなりにけり都にふかき雪の白山
七五外に又何たとふらむ池水の朝にかすむ雪のなか島
七六たゝ春の隣ならでは宿ごとにおもひのこさぬ雪の曙
七七人はいさ我住む宿の雪の中は心にとはゞ思知りなむ
七八今朝は又雪げの空も霧はれて頼あるべき世の歎かな
七九いな遠慮人だにもなし雪の歎深き心は密宗といはむ
八〇我琴出京之朝少生等管絃なんどして歸りて後申
しつかはしたりし
八一風渡る軒ばの松の聲きにも調べし琴の餘波をぞ思ふ
八二合せつゝ遙ぬ鐘の聲々にうちつけなりし我が心哉
かへしども申すよしにて
八三引とめて嬉しとぞ思ふ君にさ遠坂山の調べは
琴の御返事
八四いざ知ず松風吹かぬ宿ならば我琴の音は思出でじを
方磬の御返事
八五うちつけに思ひけるこそ怪しけれ各なりし鐘の聲も
圓位上人の十二卷の歌合の瀧糸の下卷書きて遣
すとて　大納言實家
八六心ざし深きに堪へず水莖の淺くも見えぬ哀かけなむ
返し
八七心ざし深く染めける水莖は御裳濯川の浪にまかせつ
建久三年正月無動寺より同じ大將軍の御許へ申

す 宥陽之初上春候自深山幽谷報花洛尊閣詞云

覚せばやな神も佛も君にのみ恵あるべき春の景色を
覚せばやな都の宿の初には似ぬ物からの春の景色を
覚せばやな鶯出る谷の戸に我が門占むる春の景色を
覚せばやな遙には詠むらめ山の霞の春の景色を
覚せばやな吾妻の里の遙かに詠むる峯の春の景色を
覚せばやな谷の氷はまだ乍ら我住む山の春の景色を
覚せばやな雪の梢の昨日けふ春(ハル)なる思はする春の景色を
覚せばやな積りし雪は消果て小鳥木傳ふ春の景色を
覚せばやな志賀の辛崎霞なる長柄の山の春の景色を
覚せばやな峯の朝日のうら〳〵と君打頼春の景色を

忽披二一紙之佳什一如レ對二四明之勝趣一不レ堪二情感一(カンニ)以答和而已(ノミ)(ヲ)歌苑取レ章(ヲ)

我が思ふ神も佛も恵みあらば心ぞいとゞ春の景色に
我が思ふ君がすみかの面影は松たつ門の春の景色に
我が思ふ鶯いかに初音なく谷のとばその春の景色に
我が思ふ山の高ねに迫る哉いづくも霞む春の景色に
我が思ふ心をそへて詠むべし吾妻に積く春の景色に
我が思ふ契を水にむすばせて都ははやく春の景色に
我が思ふ櫻はまだし雪消えぬ山をぞ思ふ春の景色に
我が思ふ心も雪にとけぬれば鳥もさ祉は春の景色に
我が思ふ心や行て霞らむ志賀の辛崎春の景色に
我が思ふ日吉の影もうら〳〵と君故照せ春の景色に

法皇かくれおはしまして後静賢法印が許へ申しつかはす

見るが上に驚かれぬる限哉はこやの山の春の夜の夢

返し　静賢

思へ唯はこやの山の山人の花ちりはつる春の悲しき

法華堂、御幸の夜よめる

鳥邊山煙の下に見つるかな一方ならぬ人のなげきを

建久三年八月靱性法橋の舊跡の西山往生院に龍りて如法經かくとて歌あまた詠みて人々の許へ遣すなかに殿下へ申す

山寺の秋は昔にかはらねど主なきいろは心にぞくむ

御返事

山寺の主なき色は聞く人のよその胸だに苦しき物を

幕下の御許へ申し遣す

人のいふ秋のあはれは主もなき此の山寺の夕暮の空

御返事

主ありし昔の秋は見し物を荒れたる寺に聞くぞ悲き

往年斗藪忽浮レ心今日嗣華綱銘レ肝者歟

菩提院三品羽林の許へつかはす

尋ね來る我が袂には露おちて昔のむとに秋風ぞ吹く

返し

詠むらむ昔の跡を思ふにはよその袂も露はおきけり

静賢法印之許へつかはす

法のはなのこる匂におく露は昔をこふる涙なりけり

返し

法の花ふかき契を結ばずば涙の露もかゝらざらまし

建久四年正月に七佛藥師法とて內裏に候ひしに雪のあしたに寶修法印の許より

九重の玉の臺の磨けるを今朝ふる雪やなほ清むらむ

返し

雲の上に今日のみ雪を見ざりせば世にふるかひなからまし

建久四年九月十三夜に左將軍幕下に參る

君に問はむ長月の夜の月や是曇らぬ空に秋を收めて

今宵かも心の底に侍しは秋は山のはにだに雲の無哉

人知らじ君計こそ思ふらめ今宵の月を今宵なりとは

月をのみ思出にする憂身かな今年もこそも嫉給の山

頼なき光に色も添ひなまし今宵の月を君と見たらば

御返事

とふ人につけて心の色を見む思籠めたる秋の夜の月

晴初めてまだ朧かぬ雲迄も思しよゝの山のはの月

君ぞ知る今宵の月は今宵迄誰かはとのみ詠つる身を

年もへぬ我がおもひ知れ秋の月なほ行末も嫉給の山

君と見む其面影を宿しても袖あはれなる我が宿の月

おなじ秋の暮に　定家少將

初霜よなれのみ時はわき顔に人は數へぬ秋の暮かは

三十餘り二年へぬる秋の霜まことに袖の下とほる迄

ふけまさる我が世の嵐弱るらし袖まで脆き秋の暮哉

見し人のなき數まさる秋の暮別馴れたる心ち祉せね

霞までとはれし人はまがひにき空しき秋の暮の白雲

明暮れて是も昔になりぬべし我のみ元の秋と惜めど

とはぬ人なれつる秋の露あらじ跡確なる庭の淺茅生

願はゝ思の末も風寒く谷のとばそも秋やいぬらむ

まださめすよしなき夢の枕かな心の秋を秋に合せて

小山田の露の假いほの宿りかな君を願まむ稻妻の後

返事に

暮の秋を數へて知はかひもなし徹有けり三輪の初霜

下とほる袖まで君も思ひ知れよそ重なる霜の袂を

我が秋のふくれば冬の山風つよく身にしむ山風の空

人の世の霜に時雨を染かへて別馴れたる心ち祉すれ

藤衣そめむ春のかすみよりさてしも秋の暮の白露

思ひ出づる昨日の秋は昔にてこの頃思ふ行く末の春

我が袖はけさこそ最ど哀なれ秋に後るゝ庭を詠めて

君はさは思知らでや辿らむ願ふ栖ぞ秋のとまりよ

獨のみ夜も明やらぬ秋の夢のさはまだ覺ぬ君も有哉

秋も冬も眺ばかりは君をのみ頼むの雁の月に任せて

建久四年に人の許よりなにざかうをつけてつかはしたりければ

思ひける程は遠に留む共今は在りかも何にかはせむ

返し

今よりも盡じとぞ思ふ匂には尚も在かを添る也けり

建久四年十月八日朝初雪のことの外に降りたりしに日吉の行幸近かるべきにてありしに左大將殿より

冬來ては幾夜もあらぬ與竹の霜かと見れば初雪の空

霰雲をやがて嵐の吹きためて時雨をうづむ初雪の空

月みつるよはの心は消にけり雲やとつらき初雪の空

厭ふべき日影は軒に忘られて雨うらめしき初雪の空

ひえの山いつより風の凍りけむ都はけさぞ初雪の空

詠むべきそのかみ近し志賀の山暫しは思へ初雪の空

こゝながら山路思ふぞ哀なる君にわくべき初雪の空

乘てより日吉の影も添ぬらむ行幸につらき初雪の空

大方もいつかは君を思はざる雲明けそむる初雪の空

御返事に

與竹の夜も明け方に詠むれば霜よりあつき初雪の庭

梢ふく木の葉も風も音たえて時雨にかふる初雪の庭

神無月いくかもあらぬ夕づく夜光につゝく初雪の庭

雨かくは中々に唯ふらであれな旭を待たぬ初雪の庭

大たけも日ごろは白く見えざりき都も今ぞ初雪の庭

志賀の山籠を廻るしろ髪ねかつ〳〵見する初雪の庭

深山路をわくる心は淺けれどよそには深き初雪の庭

一九思遣る山の奥こそ知られぬれいつしか深き初雪の庭
○八神もいかに黙て嬉しと思ふらむみ雪積べき初雪の庭
一思へどもかくとも我は岩代の松もかひある初雪の庭
建久四年後成入道の許へ情思禪門長二此道一欲レ
貽二十首贈答於後代一よし申し遣すとて十月下旬
有明の月いつよりもめでたかりしを詠めて風情
あまた出で來たればかつは空しくはいかゝとて
遣す
二八夜を重ね西へと急ぐ月影を打詠めてはなむみだ佛
二八霜かるゝ籬の薄秋にかへて同じみ空の月を見るかな
二八秋の月の殘る袂に月さえて庭の小萩は本つ葉もなし
二八紅葉ふく風の便りに月おちて霜にうらある庭の面哉
二八音づるゝたのむの雁も聲なれて哀を返す冬の夜の月
二八冬ぞかし糸ゆふ遊ぶ春の空の面影までにすめる月影
二八我が物と千里の氷げにしきて冬こそ月の栖なりけれ
二八神無月木の下蔭もなき空を有明さまに詠め入りぬる
○九疎からぬ色をかさねて詠むれば月影うづむ雪の有明
一九我がよふけて詠むと君や思ふらむ尚長夜は有明の月
返し　　後成入道
二九夜を重ね西に傾く月を見て幾返りかはなむみだ佛
二九霜枯の淺茅が庭は荒果てぬ同じみ空の月はすめども
二九秋過て霜おき増る苺の袖に月宿らずば如何に我せむ
二九聞にさへ涙ぞこぼる木葉落て霜にうらある庭の月影
二九いつまでとたのむの雁を思ふにも泪連る冬の夜の月
二七浮かれ遊ぶ糸ゆふ迄も哀也又やは春の空を見るべき
二八こほりしく千里の月を詠めても冬ぞ泪の限なりける
二九思ひやれ木の葉もすてゝちる庭を獨詠めて有明の月
○○冬の月も幾返りかは見つれ共尚身にしむは雪の有明
一○思へ唯八十の秋を詠め過ぎて今までかくて有明の月
忽預二十首嘉作一候之條此道面目何事過レ之候哉と
て殊に悦びたりき有レ興有レ感〳〵
建久四年十一月中旬ことに月限なかりしに筝琵
琶方磬など打ちてたゞもあそびしによみたり
し
二○月も冬木の葉も今は嵐より松のみ獨ことしらぶなり
二○月のうらは氷らぬ池に氷柱ゐて晴たる空も霰しに鳧
同じき年左大將殿のうばの尼上うせられたりし
比雪のふりたりし朝に語りし東山光明院に長家
はありき北政所は九條殿より通ひておはします
と聞きて
○今朝は最ど庭の雪にもとよせて深き命を思閉づらむ
○思ふらむ心のすゑも命なりゆきにぞふかき山里の色
返し　　左大將殿
○思ひとく心の末も道たえてなほ夢ふかし雪の明ぼの
○せきかぬる心は君がやどに見よ朝日の軒の雪の衣手
建久五年に大理黄光基長として最愛無雙の子息あ
りけり侍從になしたりけれど我に似ぬことなれ
ば少納言になされてなむありき其の後八月に煩
ふこと久しからずしてはかなくなりにき黄光卿
別當も右衛門督も辭しはらひて日野に籠り居た
りしかばとぶらひなどして後八月も過ぎて九月
の中旬の比にもなりにき十五日念佛などはて〳〵
まどろみたりし曉に此の歎を重ねてとぶらふよ
しの夢を思ひかけず見て寤覺哀にて二首の歌を
よみたればこれを默止すこと本意なかるべくて
日野へ消息して侍りき其比右中辨棟範も頓死し
たり又内大臣の子の大夫も家にて殺されたりと
て世にも沙汰すめり又作範僧都もはかなくなり
などして無常の悲いつよりも思ひ知られたりか
くはあれど驚く人もなし恩愛の涙も程のふるま
まにはかなく事なればかくよめるなり
○いかばかりよその枕の夢までも思合せて袖濡すらむ
○驚くやうつゝと思ひし歎きさへ夢になり行く曉の空
返事に袖がきなどしていひたり披きて見れば涼
秋八月暗然消レ魂以來纏綿隨二嵐之夕一梧桐落雨之
曉只拭二零涙一從及二窮秋一多年不レ離レ傍一日無レ
不レ見而三秋欲レ過再覩二長絶一而逃二枕上之抄夢一
悉期二形外之和語一披而伺レ之涙不レ異二峴山之碑一
仍忘二後咄一慈詠二短歌一而已　　兼　光
○悲しさの思の空に滿ぬれば通ひもすらん夢よその夢路に
芳髮喪翁篇索綿二裕里一其本懷在二彼内一擧而彼已
歸二黄壤一僕獨明二紅涙一更無二一事之可一レ期猶垂二
五旬一之殘顏耻欲之餘聊述二鄙懷一而已
一浮世をば何事に又言つけて骨きもやらぬ我身なる覺
建久六年に前右大將頻朝卿東大寺供養にあはむ
とて三月四日入洛の後地頭何かの沙汰して五月
まで在京之間内裏にて對面したりき又六波羅の
家にてもありつゝ契など淺からず其の後又遣し
たりしかば殊に物のたとへに人の心の我が身な
らねばと歌にも申したり又かゝる手にて御返事
こそなにはのことも覺ゆれなど申したりしか
ば返事に消息の中に何となきやうに書きませて
申し遣したりし
二歸びじと思ひ餘の印をば草には非でよしとこそ見れ
返事　　前幕下
二覺束な馥と見えける難波潟習はざりけむ恨をぞする
其の翌日自レ彼又申し遣したるを見れば
二逢見てし後はいかこの海よりも深しや人を思ふ心は
返し
二頼むとを深しといはゞ渡つ海も却て淺く成ぬべき哉
副へて遣す歌
二思ふと否みちのくのえぞ云はぬ壺の碑かき盡さねば
立歸り又返事に
二陸奥のいはでは忍ぶはえぞ知らぬかき盡してよ壺の碑
凡此人如レ此贈答之人尤希有歟羊僧始爲二對揚一尤
爲二珍事一〳〵
又鎌倉へ歸り下りなむとすると聞きて京に住ま
はれむこそ世のためにもよからめと申す序に
二東路の方に勿來の關の名は君を都にすめとなりけり
返し
二都には君に逢坂近ければなこその關は遠しとを知れ
歌のよき由語りしかば此の歌をそへたり
○梅雨の絶間勝なる雲のあひな空褒をする人にぞ有ける
此の返しに申し遣す
二君故に心晴たる身にしあれば空ぼめならぬ空褒ぞする
二なほもなほ君に逢坂遠くより關のしみづぞ心涼しき
又かへし
二くる〳〵と千代迄君に逢坂の久しくすまむ關の清水も
又やう〳〵のことども語りしかば
二言の葉を見れば心も浮島のはらたつまじと云は眞か
かへし　　幕下
二腹たゝぬ誠駿河の身にしあれば心清見が關守に問へ
又幕下の許より
二夏引の糸五月雨て結ぼゝれ逢見し人に離れえぞせぬ

三日下向はのびたりとあれば返事に
七夏引のいと離れえぬ契にて三日月過ぎば秋の夜迄も
又あれより
八秋夜の望月の駒引く迄は都にいかゞさのみすむべき
かへし
九なほも唯都にをすめもち月の駒に心をげに勇むまで
又あれより
〇三夏の夜はたゞ一聲に鄰公明石の浦にほのめきぬらむ
返しに
一人なみに頼みかくとや郭公明石の浦に思ひよりける
副歌
二吾妻こそ君が栖と思ひしに和歌の浦にも立馴にける
かやうの文わが女のなかに君のいかなる名かたゝむなど申し遣しけるによせて又
三君故はあやしき妻のなだつとも恨はあらじ墨染の袖
返し
四千代迄も又や千代まで和歌の浦かく住吉な都近くて
五墨染といふ迄知りぬ衣かは清き名ぞたつ陸奥までも
又あれより
六偽の言の葉茂き世にしあれば思ふと云も眞ならめや
七頼むれば頼れじとは思はねど思ふも知す思ぬもみず
返しに
八偽に習ひけるこそ怪しけれ頼む中にはよそに思ふを
九嬉しくも厭はざるらむ心より人の思ふは思知らなむ
此の返事を見て立ち返りはしたなき口答のねたく思ふとあれば其の返事に
〇四君に馴て外心なき妻なればうら返りたる妬さなる覽
又たちかへり返事
一み馴たる袂も袖も夏衣うらなきとは知らざらめやは
又袭る日にあれより來たりしことをことに思ひ
出づるとて
二夏衣たちきたりしは墨染の一重にけさも人ぞ戀しき
又かへしに
三君を思ふ心はけさに限らぬを薄く戀ひける夏衣かな
あれよりいはぬ日のありしかばこれより
四見せばやな君が玉章取出てとはぬ絶間は忍ぶ氣色を
五神も聞け尚朝倉の返しても嬉しきとは君になれぬる
かへし

六忘れじと結びしものを玉章のかき亂れたる我心をば
七返してもふかき物をや朝倉の庭火の下におもふ心は
又あれよりそへたる歌
八偽の君が宿には吹かざらむ身にしむ物はあすを松風
かへし又立ちかへり
九松風の香せぬ折は忘るゝか憂身とならで驚かさばや
副歌
〇偽は色にも見えず風吹かす心ぞしみて人はこひしき
六月十七日に今日能らむする日の朝にあれより
一いかに斯過避きにける月日ぞやけさ東雲の明る久しさ
かへし
二時の間も逢ふを待間の慰めに此玉章を見るぞ嬉しき
副へて遣す
三逢ふとを頓てと思ふ心には遙かなるべき今日の道哉
さてやがて行き向ひて心閑に闕して翌日朝にけ
さのみあれよりのみあれば十八日ごとに三千遍
の拜みをするよし語りきゆゝしき勤なりたゞひ
なきことなり
四花の本月のもとには非ね共君に逢ても立うかりしを
五君が代は類ひも有じ今日とに三十勤むる末を思ふに
六三笠山さして頼まば石清水きよき流の末もすみなむ
返し　幕　下
七夏の池の掬ぶ泉にあらぬ身は何故人の立うかりける
八墨染のよそ人までも三六日みそぢの勤め頼もしき哉
九朝日さす三笠の山は石清水今ゆく末ぞ遙かなりける
〇石清水頼をかくる人は皆久しく世にはすむと社きけ
一清かりし源なれば石清水すゑ遙々とすみぞましける
後二首の返事又申しつかはす
二石清水よそも頼もし況て如何に君は久く住まむとす覽
三代々ふとも我も濁らじ石清水その源を頼む身なれば
これより物申すことある次でに
四君故は侘しきこともあるまじと思し程に蟲の音を鳴く
幕　下
五秋近く成もて行けば蟲の音も勇む聲々有かとぞ聞く
九月盡日自二天王寺一遣二右幕下之許一和歌也
六さりとも思ざりせば秋と共に心盡しに返らまし身の
七年たけて生田の杜に返る秋を眺め煩ふ身とは知すや
八戀思ふ我袖の上にくる時雨いかに染行く浮世なる覽
承久六年十二月二十日より寒の御祈を奉りて侍

りしに第五日に大雪ふり侍りたりし次の朝に定家の朝臣かくなむ申し遣して侍りし　定家

九庭の秋こするゝの春に驚けば君にぞなびく越のしら山

〇豊なる年のしるしを今日とへば一つみ山の谷の白雪

一降初めて嶺によりし夕風に夏の氷室を風やとぢけむ

二尋ても山は今日こそ見べけれちゝの岩ねの雲の月影

三みづうみは雪げの雲に見えじかし霞を包む峯の朝立

四誰わきて神の心をとけぬらむとつの濱ぢの雪の一條

五ふむ跡も本より庭のすみかぞかしいかゞ眺むる白川の里

六いつよりも心とゞめよ庭のあと今日ぞ誠の君が白雪

七榊葉やあまてる神のゆふ襷かけてさえつる庭の白雪

八和ぐる光をおなじ雪に見てかよふ心ぞ空にくもらぬ

返事

九限りあれば冬の徴に降り積る雪故にこそ春秋も見れ

〇〇流れくる雪の水上尋ぬれば誰かはしらぬ北の山もと

一氷室さへ嬉しくなりぬすべらぎの君に契を結ぶ餘に

二尋ても野べは今日こそ見べけれ千里の氷月に通ひて

三冴に鳧雪げの雲に外れつゝ越路を見する志賀の辛崎

四君と我と共に分てやとけぬ覚とつの神路の雪の二條

五君がかくたづぬる跡ぞ哀なる雪のすみかの白川の里

六嬉しくも聖の跡を今日踏つ君がみゆきを我物と見て

七木綿襷かけて祈しかひなれやひえのみ山に積る白雪

これよりそへて申し遣し侍りし

八くる春をこゝぞや云むと思今日君とぞ見つる雪の通路

返事　定家

九〇君が夢春を導く白雪をこゝとはいはじ花のかよひち

同じ年後成入道成家の朝臣中將になさむこと殿に申せとて

一敷島や道を尋ねば三笠山なかの跡しも隔てやはせむ

返事不覚悟出家入道之後如此餘執無答之由也方今播思二四明之風景一忽遁二十首之題詞一不レ顧レ容レ嘲寄二禪居一而已　門下槐樹

一君がすむ山の奥をも見つる哉長き夜頃の夢の通ひぢ

二風につけ月に任てあくがるゝ心の果は君があたりに

三世のうきをよそに聞なる山の奥に尚鹿なかば同秋風

一四年へぬる我が立つ柚の杉村に懸秋風の君をとふらむ

五まだ見ねば知らず長柄の山なれど楢の秋に通ふ面影

一哀れいかに志賀の朝霧仄々と浦漕ぐ舟の跡眺むらむ

七悟り設空しき色を君見よと木の葉降布く比良の山風

八世中の覺束なさに迷ひぬと君につげよ山のはの月

九研くなる玉の光のかひあらば君がみ山の道は疊らじ

〇〇傳へ來る跡はつゝませじ岩がねの動くとなき寺の徴に

御返事

一ふみ見ても我が思をも思ひ知る忍ぶ日頃の戀の通路

二月に吹く峯の松風晴ひ來て我が眺をば君につぐらむ

三鹿はなけど世の憂事をよそに聞く山の奥には非ぬ秋風

四風ならで君がとふこそ嬉しけれ我が立柚の杉の徴に

五きく柚に志賀の津かけくらしながらの山の秋の楢は

六辛崎や秋の朝霧仄々としまなき舟の跡をしぞ思ふ

七君がとふ言の葉風の徴せば空しき色の散を見ましや

八諸共に秋の月にぞ契りおかむ世にふる道の末の有明

九岩がねよ君が縁りの君なくば動かぬ寺も跡無らまし

右一首法橋

閑吟　漢字素不レ知隔二四龍於坐禪之床一和語自得レ聞二六義於止觀之窓一而已　禪林朽木

一君知るや山路はるかの夕にも心使のかよふしげさに

二峯の月覺晴れ行く志賀の浦の雲の千里に今宵いく村

三勤さなき寺の砌に跡とゞていつか開かむ君まつの門

四哀哉檜原杉原風さびてましらも鳥もかしましきさへ

建久七年十二月二十六日　つゝめて內大臣どの

御返事

一深き神に感ふ心ぞ無りける頼む日吉の影をまつとて

二年の暮て神より神に移る哉いつか出べき我寮の日は

三世の人の宛暗き中にあて我春の日をきりともとのみ

四我頼む日吉の影は君故に最ど闇無くならむとやする

五今日來むと頼めし君を待程に跡惜まずと雪や怨みむ

御返事

六跡惜む雪の恨を思ふとて今日こぬ人となりにける哉

元久二年正月十三日長房卿有二問答之次一世間有漏之法數个篇目賜答之次消息上に檢付け遣はす歌也

一〇世の中よこはいかにせむとに斯に思ふも苦し春の曙

一一思ふ道にまづ先だつぞ哀なる涙よ何の知べなるらむ

御返事

二九十に滿ぬる年の春の花こゝの品にぞ匂ふべらなる

三人のとふのゝ野澤の春の草は生ひて嬉き心ち社すれ

四何か惑ふ本の雫も末の露も常なき道も知べとを知れ

五露置て涙こぼるゝ袖の上に疊らぬ月の宿らざらめや

悲二露命之終於他一思二雲客之首於自一是皆世上之常途也勿レ憚二貴下之前途一歌　御判

承元二年二月二十三日愚狀之次進二御所一詠二一首一

六都には似ぬかいかにさみ山べの春の景色を人のとへかし

勅答

七山里はうきが慰むとこそあれ問はぬならひは契二今之一

八終に尚契し庵に年もへむ待たれてこしは人ならね共

九山陰やとはるゝ人もとふ人も昔も今も夢かうつゝか

一〇驚かぬ都の中の言の葉を思ひ知れとや山のおくまで

一一人知れぬ春の夢路に感ひても現の袖やなほ萎るらむ

進二盧橘歌一

二祈りえて嬉しき雨のぬれ色に匂をそふる軒のたち花

追啓　神祇冠者師光奉レ勅殊爲二祝言一

熊染二老筆一候之間書樣さへ見苦しく候私御寮隆無二其憚一候猶可レ被二書改一候也重恐々謹言

百首御歌始自二御參詣之日一二个日之間披講之神道山之風御裳濯之水千秋之色萬歳之拜自然計會如レ有二答贈一候仍不レ耐二感仰一各述二鄙懐一候隆不及二披露一內內書進之私經二委覽一可レ被二改直一候也恐々謹言

三月十七日　　內宮禰宜氏良上

越後律師御房

春日拾二五十鈴河吉橋良山御百首一神感有レ瑞忽詠二三首和歌一　一綱宜正四位上荒木田神主氏良

一道といへば君が心に敷島や深き行くへは五十鈴河波

二知せばや願をみつの長かしは靡くに見ゆる神風の空

神宮之中禮奠之間爲二永例一有二長柏一謂二之三角柏一件柏者志摩國吉津島堺土員島內在二山中一生木上也吉津島風土記曰昔行基菩薩請二南天竺婆羅門僧正天竺僧佛提一殖二三角柏一爲二太神宮御園一天平九年十二月十七日致二御祭之勤一也其後傳教大師弘法大師慈覺大師續以修行之各以法樂之

四首の御詠歌

一厭ふべしと浮世の中を知りぬるや是ぞ眞の心也ける
二世中の憂ひ思へばつらからぬさりすば人の厭ましやは
三著き物を知らずとよそに思ふなよ人を導く人の挙動
四しるきものをとみのを川の流にて人を導く底の心は
五春たちてまことの道に向ふらむその行末や法の花園
六行末にひらくる法の花園はたゞ我が君の匂なりけり

連々下給候御敎書不可二四度解一無事

七通ひ行く其難波津の藻鹽草掻もますなよ人のみ爲に
八煙とは成もやすき寛藻鹽草人のみるめにかきは交へず
九蓮の上に露の憂身も君が爲磨かれぬべき心も社すれ
（会津藩公式文）
一〇蓮葉に君が爲おく露なれば磨かれてこそ我も宿らめ

九品愚詠叶二御意一候返々爲レ悦之至無二申限一候相構早々繪堂可二拝見一候此御歌御詠こそ打置がたく覺え候へ御札をばまもりにし候ふべく候抑繪堂龍入事候は可二沙汰進一之由昨日令レ申候無事不審候

恐々謹言

公　經

雨中御札折から銘二心肝一候

一〇いはじたゞ頼む心の幾重とも今日天雲の色に任せて
一一荻の葉の唯あらましの風にだに如何計なる露とかは知

毎事心餘り詞短し思ふ様にも不レ被レ申候只可レ有二御察一候

抑百首名所の様めづらしく候ふ歟其の所と定めて候はむは今少し興候ひぬと覺え候障子の歌のちして而白く候ひなむいかやうにも左對相國などに申合はし可レ申候御徒然のためには第一の事に候ふ歟琵琶まめやかに〳〵ゆゝしく候ひき眞實これ程候ふべしとも不レ覺候ひしに珍しく曲の殊勝にひかれて候ひしやらむ不レ可レ說候ひき　子を申候てかきて候ひけむ人にあつらへて握翫候はいや毎事難二一二一候不宣恐惶謹言

寶　氏　上

四月九日

九月七日故殿の小松谷葬所にて五部大乘經供養と聞きて法眼のさうぞく送り奉る次でに前の攝政（近衛尚嗣）の御もとへ

一二思ひやる心ぞ晴れぬ足引のやまの霧の秋の夕くれ
一三昔人いづこ殘りのしるしとて六の道をば今や出らむ

一四ちりもゐし清き手向を哀とてそなたに厭く神風の聲
　權禰宜正四位上荒木田神主成定
一五神垣や百枝の松に契りおく言の葉ごとに惠あるべし
一六敷島や滿來る汐の大淀やみるめもかすむ海士の釣舟
一七榊葉のさしてぞ祈る思ふとならずは非じ五十鈴川波
　權禰宜正四位上荒木田神主滿良
一八七十に騒る浪汐の濱荻の朽葉の身にもかゝぬ言の葉
一九神風もさぞ忍ぶらむ幾春も匂おこせよ志賀の花ぞの
（一首六人撰）
　權禰宜從四位上荒木田神主元延
二〇色そめて幾しほ深し難波津や今日神垣に匂ふこの花
二一哀みのためしはそれぞ神路山見ゆらむ物を面影の空
二二神垣や己が常磐になりぬらむ今日の手向を松風の聲
　權禰宜從四位下荒木田神主成延
二三手向まで詞の花に色そへてさくらの宮も惠あるらし
二四吹き送る手向の風のとわりに靡くも嬉しいせの濱荻
二五賴むらむ心の空は限もあらじ照せ神路の山のはの月
　權禰宜正五位下荒木田神主延季
二六月影のさやしも神路の山べには住かひなれや今日の圍居は
二七例ぞと今日の手向に色添へて朝日もうつる神垣の空
二八神路山君が手向を松が枝に重ねて靡く雲のしらゆふ
法二樂百首拙作一之間三首六輩之祝言三角長柏天
神威不レ能レ欲レ罷呈二一首一答和者也
二九百草の言の葉に吹く神風に三つの柏の音ぞうれしき
三〇今ぞ聞く願をみつの長柏この言の葉の色になるとは
貞應二年五月十八日法皇かくれ給ひてさみだれ
ける朝前相國公經公の許へ遣はしたれば返しかくなむ
三一傷しや傷からぬも如何にせむ思ひ知れとや梅雨の空
三二我が袖の外に思や餘るらむ空さへぬるゝ五月雨の頃
三三憂身をばなきに做ても人のため詠られぬる行末の空
三四詠めても憂身のまよふ世中を君にさゝらむ行末の空
三五偖もさはいかに鳴門の浦ならむ其も治まる風も有世に
三六治らむ風の宿りの知ぬ身はよそに鳴門の浪ぞ激しき
三七神も聞け吾妻の駒の脚を早みいかなる道に松風の音
三八世中は吾妻の駒の脚を早み立返るべき世とは知すや
三九深く思へ思すてゝも憑なり世を導くは御法ならずや
一四契置く君が御法にひかれてぞ思捨べき此世にもふる

二八天つ星の光にかなふ世の中を思すてよと神は思はじ
二九天つ星の光は更に變らねば變れる世をも神に任せむ
三〇結ほる心のをこそ悲しけれ思しとかばとけ易き身の
三一玉のをは結ばれてのみ止みなまし斯しも君が思解かずば
三二春の日を宿す光は石清水すむべき御代を尚賴むかな
三三春の日の光にすまむ石清水永らへて社世をば賴まめ
三四世をすてぬ夏の日吉を仰ぐより天照神ぞ空に嬉しき
三五明き夏の日吉と仰ぐ身は曇らぬ御代に逢ざらめやは
三六賴むぞようき身の年の七十を唯君のみや哀とは見む
三七歟へても君が御年の七十に思ふ思のかずやまさらむ
　左金吾あづまに思ひ立つこと侍りて北斗曼陀羅
つかはすとて返事をばいへと申すと聞きていひ
遣しける
三八初春の嬉き御代に逢坂の關路より行く君をしぞ思ふ
三九東路や遙にこそは思ひやれたなびく山のいく霞まで
四〇世を護る神も佛も君を社そなたの空に待つも遂るも
四一春の月を同じ空にや詠むらむたかしの山の雲の遙に
四二波につゝく霞の色やいかならむ濱名の橋の松の梢に
四三とに斯に跡ある道を賴む哉駒に任する野べも山べも
四四春の雁やこの玉章の跡を見て歸らむ程は慰みもせよ
四五北の星や吾妻の旅に出る人を祈る光は空に見ゆらむ
四六いはじ唯云はゝ愚になりなゝむ通ふ心の底を賴みて
　旅行程遠投二赤心於斜日之霞一山路跡深入二雁札於
　蓮峯之雲一志之所レ之欲レ罷不レ能之故也正月八日記之
一〇雲のうへを思ふ心はふる雪の深き庭にも消返りつゝ
二〇雲の上に通はざらめや雪消て跡ある庭に立返りなば
三〇迷行けば遙に照せ山のはの月よ慣こし睦び忘るな（歟）
四〇いかにせむと思ける社愚なれ宮も蓑屋もあれば有世に
　新古今集被レ終二其篇一是萬春之佳遊也感悦之餘
　聊遙二早懐一而已
五〇昔今の新になれる和歌の浦は波を治むる徴なりけり
六〇嬉しくも春の彌生の花の頃ちる言の葉は末ぞ遙けき
　愚老拙歌甚多混入候ヿ恐與悦已計會候歟
七〇山川のあだに思ひし淀の消えぬ歟こそ怪しとは聞け
　剩被レ行二其宴一候了我國之風俗尤可レ謂二遁境一者
　歟
八〇敗島や大和ことわざ君が代に新になれる惠をぞ知る
九〇重ね置く浦の濱ゆふいせの海や神代の神や嬉しやと見む

二跡ふりて神さび渡る小松原けふや身にしむ秋の谷風
二尋ね來て寂しき色や身にはしむ昔の跡にのこる秋風
三君よ如何衣の裏にかけし玉を思返さで見ぬぞ悲しき
四山すげは人の籍とも枯ぬ物をいかに植けむ谷の陰草
五斧の音をいかに聞做す柚ならむ伐ぬも知人の爲
抑其後倩返々加案候に彼御出家之後書絶不レ令二參仕一こはいかなる次第に候哉不レ可レ參之由被二仰上一には不レ及左右の事にて罷過ぎ候へども倩加案候に何かも今は入り候まじき次第に候ふ戀慕の思ひも難レ休候へば只今二推參一ばやと思給候何に候如レ此内々にも不二申合一ふと參り上るも上々方難レ謝候へば内々令レ申候也可レ有二御計一候ふ歟達て歌とかやは如レ此之時遣す心事に候ふ歟
六思兼ぬる眞の道の淺茅原かれば最ど露のこぼるゝ
慈鎭
○つく〳〵と身を知る雨の袖の玉願ふ道の飾となれ
一秋はつと聞初めしより霜枯れて春もめぐまぬ谷の陰草
二から枝なればぞはゆる峯の松たつきの音に絶間有すな
斧音今に不レ止之尤可レ勝之　御判
出家之由兼不レ告之由令レ申たりしかば遣す
三家を出て家に止れる君なれば道の知べを尋ねざる覽
沙彌連經
三出ながら倚古里にとまる身は君をぞ頼む道知べせよ
隆寛阿闍梨父の資隆入道におくれて山里に兄弟あまた集りゐて追善すと聞きて遣す歌
四故郷にのこれる杉の紅を染むるしぐれは涙なりけり
五一列に飛ぶ雁がねの諸聲に子を思ふ道に惑はさるる覽
返し　隆寛
六神無月涙しぐるゝ古里はそめしにも非ぬ衣をぞきる
七立ち昇る煙絶えにし大空に雁のよばふるよはの諸聲
公衡中將の許より
八爭ぞ知る其言の葉に唉花は雪のうちより徹ありける
返事に
○言の葉にやがて花咲く徹をば雪の中より誰も知る哉
歎く事ありて遣しける
何故に消殘りける身なるらむ哀かひなき袖の露かな
侍從定家の許より定長入道の物語を聞きたるとて

立つ柚や月の雲ゐにやどしむる心をみがく峯の秋風
返しに
比良の山月の雲ゐに宿はあれど心の谷の岩陰にのみ
山にて詠じたりし歌を副へ遣す
返し　定家
み山木は嵐の聲を時雨にて殘れる月や色まさるらむ
峯の月谷の岩戸もまだわかず唯世を厭ふ道をのみ見て
殿の大納言殿彼十首歌本歌再寂蓮和可二御覽一之由被レ示仍持參之令レ進訖其後又和遣其詞云遣二懷四明幽趣一奉レ和三十首之佳什一　志賀都遺民
知られぬは見ぬ山ぢ迄思遣る心や秋の空につきけむ
浮世哉いかにならまし鈴蟲の賴む山路に聲たてつも
大たけの高ねに見ゆる秋の月宿の物とや君は眺むる
我も知る心は行きて見る宿に籬の野べを分けぬ計ぞ
さを鹿の夜深き聲におく露を獨外山の袖に知るらむ
長き夜の更行く月を詠めても近づく闇を知人ぞなき
志賀の里の稻葉に風は傳來て長柄の山を越る鹿の音
木の葉分け歸りし山の初時雨聞分く袖に色や見ゆ覽
法の水心にふかくせき入れて昔にかへす比良の山風
我立柚之中幽二居谿之洞一有二靈山院一忍二驚嶺一隱欣二彼惠心之素懷一皇二此愚老之丹棘一攄二戀慕於雙涙一裁二至孝於竹篇一唯志之所レ之更忘二人之嘲一而已
驚の山昔の跡に尋ね來て住まばやと思ふ我が心かな
驚の山入りにし月の跡の山に惑はぬ人のなきぞ悲き
驚の山音にのみ聞きし嶺なるを移す聖の跡の有ける
驚の山ふかき心におもひやれば今日も昔も有明の月
驚の山我が山にうつる月影を鶴の林に何をしみけむ
驚の山佛の道の一つなるに我が思ふ人を敎入れつる
驚の山なき人まどふ法の道の音羽の露を打拂ひつゝ
驚の山曇りし影を思ひ出でゝ我が立柚の月を見る哉
驚の山絶にし道を踏分けて訪來べき人と誰か知けむ
驚の山退凡下乘の牽都婆まで跡ある跡を見るぞ嬉き
昔惠心僧都遙移二慈父在世之儀一近開二寶聖園繞之圖一今靈山院是也我公大和尚忝就二此膝絶之地一敬報二彼諸靈之恩一御願雖レ似二新興隆猶依レ舊濟度以二有緣一爲レ先和益及無緣一爲レ本盛於貴哉大哉抑有二十首花篇一金玉顏聲聞不レ堪二情感一跪以奉レ和矣
戒心谷愚老權律師隆寛
住まばやと思はぬだにもたづね入る契は深き鷲の山風
影殘す月のみかほの寂しきにくもふき拂ふ鷲の山風
うつしおきし人の心を知る人の心すゝしき鷲の山風
三度まで我が立つ柚に立返り行方知らるゝ鷲の山風
思ひいるゝきみが心にすむ月の光をみがく鷲の山風
荒果てゝかせきが庭と見えぬべき草の中より鷲の山風
あなたふと有緣無緣のもろびとの心の塵に鷲の山風
始めおく御法の聲に打ち添へて年を限らぬ鷲の山風
今こそは思合はすれ君が爲に移しおきける鷲の山風
かきつけし言葉は苔に埋れて深きそばに鷲の山風
尋ね入る鷲のみ山の下露にすまばぞ月の影も宿らむ
月入りし鷲のみ山の跡の關に迷はぬ人も有ける物を
移しおく鷲のみ山の深き跡も御法の道を知る人の爲
此の頃や鷲のみ山の月影も我が立つ柚に光さすらむ
常にすむ鷲のみ山の月なれば心に移す人ぞ知りける
今日ぞ思鷲のみ山の月かげの横川の水にうつる印も
敎入るゝ鷲のみ山の一つ水我思ふ人に限らすもがな
跡あらじ鷲のみ山の法の道おどろの露を君拂はずば
常にすむ鷲のみ山の月なれば訪來る人を照ざらめや
二つある鷲のみ山のそとばこそ一つ御法の印也けれ
和歌贈答消息
春の暮月々之三朝は天神曲水宴御作序作歟不レ略二其句一朝詠被二書入一候とこそ承り候へ如レ此事非二我有一候へどもめでたき中々は被二庶幾一候間今朝園の桃の色の濃く候もとに立ちて覺え候へば
三千年になるてふ桃の花盛君もろ共に見るぞ嬉しき
志之所レ之申狀尾籠候哉恐々謹言
三月三日
諸共に君に千年を契りおきて思ひひらくる桃の花園
只今如レ此申さばやと思ひ候ひつるに此仰こそ眞實に嬉しく候へ中々に候へば委曲止候了恐々謹言
乃刻
蒿蒲草軒にけふ見る夕ぐれに匂ふ雫は五月雨のそら
蓬屋にも誰か思ひよりて候ひつるに今日の菖蒲をもて誰でふき候ひつる程にやがて五月雨もそぼふ

り候につけてかくこそ思ひ給ひ候へ如何〳〵

五月五日

被二芳札一及二感涙一候了人はをりふしを知るこそ世に候ひにても候へ

八時しもあれ軒の菖蒲の黄昏に雨にも名のる郭公かな

難二獣止一候之間申状見苦候〳〵謹拝

則時

七夕の夜申さで候はむも無二本意一こそ候へ御詠歌など尤可レ候日ぞかし

九七夕にぬぎてかしつる唐衣露おく袖を今朝返すらし

後朝の心殊に思ひやるべきよし思ひ給へ候如何如何謹言

七月七日

一〇露の袖を返す名残の夢なれや契りまさしき星合の空

如レ此事不レ堪二無極一候身のつねにおき出されまゐらせて見苦しきことをのみ申し候こそ難レ堪候へ恐惶謹言

即剋

一一長月は今日こゝぬかの白菊を君が宿には最ど眺むる

今年菊のませ盛りに候こそかへすゞ〳〵うちすて難く候へ秋の夜も明し難く候に此間御會候はゝや如何〳〵

九月九日

一二謹共に眺てしがなませの中に花咲菊のけふの名残を

此仰返す〴〵悦び思ひ給へ候とかく仔細候まじ十三夜にかならず人々を伴ひ申候て可二遊啓一候也穴賢〳〵努力〳〵

乃時

一三身にとまる年をも人は送る也春を迎ふる心ならひに

一四降り積る雪をこえ行く年波に色をあらはす末の松山

歳暮難二獣止一候へば二首詠進候早可レ承二御返事一候畏恐戦謹言

十二月二十八日

一五来る春を迎ふる人の習より爭でか年を送らざるべき

一六雪のうちにいと色こき深緑ふゝきや波の末の松山

一七數ふれば我身に止る年波を返ると人の云初めけむ

此はしにもをはきとひかへさせたまし物を

一八積む年の夢をば誰も見る物を猶ねばや返ると云らむ

おきのりかへすは歌の道にはかくやすらむものを

今様

花

一九春のやよひの　明ぼのに　四方の山べを　見渡せば

花ざかりかも　しら雲の　懸らぬ峯こそ　無りけれ

郭公

二〇花たちばなも　匂ふなり　軒のあやめも　薫るなり

夕ぐれさまの　五月雨に　山ほとゝぎす　名告して

月

二一秋のはじめに　成ぬれば　今年の半ばは　過にけり

我が世更行く　月かげの　傾く見るこそ　哀れなれ

雪

二二冬の夜さむの　朝ばらけ　契りし山路に　雪ふかし

こゝろの跡は　つかね共　思ひやるこそ　哀れなれ

それ大和詞と云ふは我が國のことわざとして盛んなるものなり五七五七七にて五つの句あり五大五行を表するなるべし眞俗これを離れたるものなし眞諦には五大を離れたるものなし佛身非情草木に至る俗諦に又五行を離れたることなし天地より海山に及ぶこれによりて大やまと日高見の世には豊葦原をうち拂ひて開け初めしより神々のおほん詞を傳へ來れる此の外に更にさきとする詞あるべからずたゞし印度漢朝の詞の文字又いるがせならずして其のあとより佛の道をもさゝることなれど唐國には梵字を用ゐることなし孔子のをしへ作文の道いみじけれど大和ごとを離れて其の心を覺らずいかなれば此の國の人の漢字を知らずとてかろく思へる神の御代の神々神功皇后よりさきの十五代の君の御事を未だからの文字傳はりこざりしかばとて恐に申すべしやは此のことわりを思ふに聊かもからの文字に疎しとて此の國の人は歌の道を次に思ふべからず唯其の國々の風俗なり更に勝劣なかるべし限あれば眞言の梵語こそ佛の御口より出たる詞なれば佛道におもむかむ人は本意とも知るべけれ漢字にも假名つくる時は四十七言を出づることなし梵語は却りて近く大和詞に同じといへり土器と云ふものありこれをかはらけといふも弓をばみたらしと云ふ皆かやうのと數多あり天竺に云ふ梵語と同じとこそは申すめれ我が國のことわざなれば唯歌の道にて佛道をも成りぬべし又國をも治めしらるゝとなり此の道理に迷ひつゝ和歌といひつれば淺香山の山の井よりも淺く夏の楴の蝉の衣よりも薄く思へりこれはことわりにも背きまことにも違ふことにて侍るぞかしこれ若しひが思にて侍らば其の由をつぶさに承らばや抑そめいろの山の四方に四つの國あり其の中には南瞻部洲にて佛の出で給ふ國なり此の洲には天竺を始として様々の國多かり皆其の詞かはれるなるべし佛此の國ばかりに出で給ひてすべて内外の淨土より始めて二十五有の有様を教へ給ふされば惠心院の源信僧都も之をとりなしつゝ書き置けるなるべし愛に煩惱にそめたる濁世を厭ひ離れて菩提を悟る淨土を願ひ求めよと教へ給ふ諸教の中に四教五時の眼にて侍るを願はせり斯りける國にしも生れて侍ることこそ誠に嬉しく侍れ其の菩提をばいかにしてか悟るべき其の濁世をば如何にしてかは又離るべき釋迦佛本時所化の菩薩の老としして地より出で給ひし有様を宣ふには志樂於靜處捨大衆惜閙とこそは侍るめれさればまことしく其の理りを思ふ人の深き色に染める花の都の塵に交はりて阿私仙に仕へし秋の木の實を忘れたるはなし佛法をひろめ給ひし大師達の跡の我が立柚に眞加を新りしも高野の山へ入定と聞ゆるもさてのみこそは侍りけれ悲しきかなや佛法するになるまゝに其の跡は皆戰ひの庭となりて巣には鉾光を爭ひむつかしき相論をのみ好みて天聽を憚かすことになるとぞかし家を出でながらみな俗塵に交はりて心をそらす心をそめざることよかるまゝには法師の道に更に二途の道をなして道世の聖と云ふもの出で來たり暫しはたふとしと聞きこしかどもいまは又聖と云ふものは皆さま惡しきものなりかゝるまゝには却りて道もなき心ちし侍れどさりとてはとて此の至れるまことにせめ出されて深き山に入りつゝ佛道を思惟し侍る中に初に申しつる理りに任せて大和歌のことを思ふに戀の歌とてよめることこそ眞に浮世を離れぬためしには皆思ひなれたることにて侍るめれと思ひ擧げてされば是に寄せてこそは厭離の心を教へ欣求の心をも顯さむとて百歌に數へた

していそぢに使ひ侍りぬ若し歌の道を申すまゝに思さむ人は憚關を捨つとも思ひなし靜處をねがふとも思ひなし佛道へ入るとも思ひなし煩惱を離るとも思ひなして此のさいうに心を留めておとりまさりをなむつけられ侍れかし立田川の紅葉ならねば錦と御目にとまり難く吉野山の櫻ならねば雲かと心にかゝり難しまかはあれど我が國の言の葉よ佛の道へ入らむと志し侍ることみつのみまきの深き江より起りてとは田の秋の稻に納まり侍らむ連枝の契にもまさり比翼の緣よりも深かるべしとこそは神も佛も照し給ふらめと覺え侍りてなむ

事の序を悅びて申し出で侍るなり立田の紅葉吉野の花のことを申すとて思ひ出で侍りにけり和歌の人々こそこれをも目にはたて侍らむすらめ序に申し行はれもせよかしとてなむふるかりし者のかたることありき和歌の會の座は披講の後なごりもなきやうに侍るなりそれに講師讀師本座にのかれて後彼の古今の序に眞之が書きて侍る秋の夕立田川に流るゝ紅葉は御門の御目に錦と見え春の朝よし野の山の櫻は人丸が心に雲かとなむ覺えけるを朗詠に聲々合せつゝ二三反ばかりして其の座を起つがめでたきことにて侍るなり此の詞を朗詠にする音曲ならひ傳へ侍ると申しゝ人のありしに今々と思ひて云傳へずなりにしぃをしう侍りたゝし今も心えたらむ人は易く其の音曲などは興し立てられぬべしと語り侍りき此のことのいみじう覺え侍るなり新古今の具に興し立てられて末の世にとゞめ侍らばや

前和歌所寄人桑門慈鎭

五十首和歌

老若歌合

春十首

君が代の春の例は住吉の松にかゝれる霞なりけり

鶯の初音の松をひく野べに春を重ねてたつ霞かな

神風や懸ても春に成にけり浪に角ぐむいせの濱荻

朝霞梅が匂を袖にしめてたなびく山に春風ぞ吹く

今日迄は厭はしからぬ景色哉花まつ空に春の山風

人の住大和は花の國なれやみ吉野の山を初瀨の山

末の松山も霞の絕間より花の波こす春は來にけり

面影や花より後も殘るらむめがれぬ物は心也けり

己が浪に同末葉ぞ萎れぬる藤咲く田子の怨めしの身や

初瀨山眺めぞ兼てつきぬべき春の別の鐘を殘して

夏十首

隔つなる卯の花がきのこなたにて鶯しのぶ郭公かな

郭公御誕のしめに引籠めて外に濟さぬ聲を聞ばや

五月雨に行きて尋れむ勝間田の池もや今は沖つ白波

詠めをば照る日の影や隔つらむ春秋もなき夏姿哉

結ぶ手に影亂れ行く山の井の飽でも月の傾きにけり

庵さす野澤の夏の夕涼みもの所せき秋にぞ有ける

夕されば野中の松のしたかげに秋風さそふ蜩のこゑ

秋十首

秋はきぬ七日はまだし七夕の朝引絲の臥しや侘らむ

三日月の仄めく空に秋を籠て漫に渡る山のはの雲

秋毎に濡れて重ぬる袂かな月さゆる夜の雁の涙に

夕されば鶉に馴てしむる野の夜はの思は鴫の羽掻

引かへて今宵の月は見ゆる哉山立出づる駒の繰りに

秋をへて月を眺る身となれり五十の闇を何歎むむ

聲立て鳴くと云ふ鹿に言問む秋や悲しき妻や戀しき

玉章のかき合せたる調べかな雁の琴ぢに過ぐる松風

秋風は荻の上葉に立そめて木葉の色に吹變りぬる

哀にも袖より外は音もせず秋くゝ日の宵の時雨は

冬十首

唐錦のこる梢のはつ雪は白地になれる心ちこそすれ

神無月槇の板屋の轉寢は時雨せぬ夜も木葉ちる也

あけば先木葉に袖を比ぶべし夜はの時雨よ夜はの涙よ

同じ影を庭と池とにさし替て霜も氷も冬の夜の月

世中のはれ行く空にふる霜のうき身計ぞ置所なき

今朝は又重て冬を見つる哉枯野の上に降れる白雪

鹿の音を浮寢の夢の聲に替て我も生田のをの〳〵草臥

千鳥鳴くさほの河原に霧晴て友惑はさぬ有明の月

君をのみ思ふ心は大原や世にすみ竈の煙にも見よ

椎柴のしばし憂身の世に住みて打眺むれば年の暮ぬる

雜十首

四方の海の治れる世の徵哉なぎたる朝のあまの釣舟

和歌の浦の蘆間にたづの聲す也昔の汐やさしてきぬ覽

須磨の關夢を通さぬ波の音を思ふ寄らで宿を借ける

海山と物のあはれを思ふには磯も高根もたゞ松の風

心すと限りなりけりそのかみふるき都の有明の月

思事をなど問人のなかる覽仰げば空に月ぞやすけき

花ならで唯柴の戸をさして思ふ心の奥もみ吉野の山

君が代に逢さか山を越え行かばせきたる身ともなりぬべし

花と月と思ひ渡して行く心是も悟の端となるらむ

神のさす木のもと涼し朝夕に君が願をみつのはま風

左方 權大納言忠良 前大僧正慈圓 定家朝臣

家隆朝臣 寂蓮

右方 女房 左大臣

今度撰二定十人一被レ召二五十首一、叡感已過分也、忙悅不レ少〳〵

我立柚老比丘慈鎭爲二後日一記之

以二暮秋初冬之候一入二一諦一如之觀一忽詠二四五之拙歌一法樂三所之權現一利二他思觀一自而念朝市之春花勿レ萎二于鳳闕仙洞一都鄙之秋風莫レ攪二於佛法王法一依レ此倭國之風俗彰二淨土之月輪一矣

正法金剛

男山に通ふ契は春日野や聞けば身にしむさを鹿の聲

思事をかくともいはじ水莖の跡かき流す神に任せて

色に出る我言の葉を忍兼て散すも風の名こそ惜けれ

いかにせむ稻葉の風の片靡き眞葛にうつる秋の夕暮

なれ〳〵て夢路にだにも男山よも長月の末の秋かせ

秋よ今はやみに別をいかにせむ心ぼそきは有明の月

秋と冬と行きあふ坂の關守は露の袖に霜やおくらむ

物思へば秋習はしの露の袖にはさで時雨に洗よ頃哉

己が色の紅葉ぬ秋は暮果てゝ染めます雪を松風の音

そもれども散らぬ袂に時雨きてなほ色深き神無月哉

時雨かも松に嵐の槇の屋に木の葉もあらぬ木葉散也

風やしぐるともなき空ながら雲まに月のもり變る覽

霜に朽つる庭の木の葉の色迄も却て神の惠をぞ待つ

此世には惑ふ心に道ぞなき空行く風も松にこそ吹け

いかにせまし淀の川波掛まくも畏き神の誓ならでは

嬉しくも昔の道にかへるらし秋のみやびと春の宮人

祈る哉こやの山の秋の霧晴れぬる後に又曇るなよ

身にぞしむ我後世の月の雲を拂へと契る和歌の浦風

七理を誡の道に入るゝより身は無物に世をいかにせむ
二七眞ならで又思ふとは無物を知らぬ人をば何か怨みむ
承久元年十月朔之比爲二八幡宮法樂一詠レ之

拾玉集卷第六

四季雜各二十首都合百首

詠二百首和歌一

春二十首

三七立初むるけふの今年の霞より昨日の去年の隔也けり
三八何となく古里人は待たれけり春に成ぬるみ吉野の山
三九我が心春は霞にあくがれて思ひ懸らぬ山のはぞなき
四〇秋かぜは秋霧をこそはらひしか春風うづむ春霞かな
四一ふるさとの梅の縫やこれならむ霞のうちに霧のこゑ
四二鶯は花の縁りの音也待つとてもなく散とてもなく
四三花杉よ吉野の山は三輪の山春のしるしは立優るらむ
四四よし野山雲の岩ねの花盛り風ようおつる瀧のしら糸
四五春をよそに愛へて過る宿なれや櫻が枝に秋風ぞ吹く
四六吉野山まよふ心の跡なれや花のかけぢに風渡るなり
四七尋入りしことぞくやしき吉野山花に風まつ夕暮の空
四八花ならで雲こそなけれ夕霞深きや春の雨のかよひぢ
四九花故に春を哀と思ふ身をこりよとばかり今日の山風
五〇薫り來る花の春風身にしめて山こえ暮す志賀の里人
五一あかで散る春の櫻を見ては又秋の心のありける物を
五二限あれば梢ばかりは拂ふらむ庭をば風も朝清めすな
五三涙をや霞の袖にかしつらむよるに別れて歸る雁がね
五四秋をいざ波に霞の色さえて春のみなとに有明のつき
五五山里の花もちりぬる梢より霞をおくるくれの春かぜ
五六春を惜む心を夏の知る計りあすも匂へと春に契らむ

夏二十首

五七散果てゝ花の影なき木の本にたつことやすき夏衣哉
五八我が宿の卯の花垣の花盛り空さりげなき夕月よかな
五九卯の花を垣ねに殘る雪と見て幣うちとけぬ郭公かな
六〇待つ宿とおもひ知りける郭公曉ふかきよはの一こゑ
六一郭公鳴きすてゝ行く聲の跡に心をさそふ松の風かな
六二ませの內に秋暎く花は二葉にて色を重ぬる深見草哉
六三大方に夜の明るをや待ならむさゝぬ板戸を叩く水鶏は
六四あやめ草けふ故郷を來て見れば蓬ぞ軒の便なりける
六五橘の花のしづくに袖ぬれて雨なつかしき五月雨の空
六六五月雨の降荒みぬる小山田に我もく〳〵と採る早苗哉
六七春も秋もこゝにはしかじ夏刈の草のまろ屋の雨の夕暮
六八五月雨の空になり行く夏の夜の月影しのぶ郭公かな
六九分けならす人なき宿の夏草に待つとては秋の白露
七〇河社あそぶ心のすゞしきやかつ〳〵神の惠なるらむ
七一狹にふく秋をも待たぬ夕かな松風むすぶ山の井の陰
七二夏ふかき梢に色はかはらねど露は秋なる森のした草
七三雲迷ふ夕に秋をこめながら風もほに出ぬ荻の上かな
七四夕まぐれ野澤に夏をわすれ水げに秋近くとぶ螢かな
七五郭公鳴く一こゑの夜はなれば秋にはよひの有明の月
七六夏果る今日の祓へのすがぎぬを超てや秋に成むとすらん

秋二十首

七七あすを秋と待つる今宵睡ろまで野寺の鐘を風に聞哉
七八七夕の心やそらに晴れぬらむ雲の衣に秋のはつかぜ
七九名を得たる秋のみ空は曇るなよ春社花の濡衣はきれ
八〇夢かとよ歎く程にはれにけり雲の衣をかへす月かげ
八一秋の野を分行くまゝに夕されば月にぞ移る萩が花櫛
八二秋といへば錦を掛くる萩が枝にたゝむは野べの嵐也鳧
八三野べ每に花の袂のしをるれば露にぞ見ゆる秋の哀は
八四庵さす野べの旅ねのかなしきは荻に夕風萩に朝つゆ
八五詠むれば數かぎりなき哀かな鳴たつ澤の有明のつき
八六わびぬれば我が宿のみと思ふかな人の雜も荻の夕風
八七宿は荒て身社野守に成ぬれど月を鏡と見るぞ嬉しき
八八いかにせむ伏見の里の有明にたのむの雁の月に鳴也
八九賤の女が秋風しのぶ松がねに衣しでうつ夕暮のそら
九〇和歌の浦の沖つ白波をりからや哀をよする秋の松風
九一夜はにたく鹿火やの煙立添ひて朝霧深し小山田の原
九二長月も幾有明に成ぬらむ淺茅の霜のいとゞさびゆく
九三秋の別哀れ悲しき垣ねかな音せし荻も霜にうづみぬ
九四秋の爲かひなき月の契かな歸る空には影たにもなし
九五我が物と詠め〳〵て秋のなど月に誓ひて立歸るらむ
九六我が物と月を詠めて秋のなど關に迷ひて立歸るらむ

冬二十首

九七慣のやに秋も暮ぬる夜はの夢を早晩殘す初時雨哉
九八枯れはてぬ荻の上葉の風の音に又たち歸る秋の夕暮
九九霜さゆる山田のくろのむら薄歸る人無しに殘る比哉
一〇〇神無月おのれさびしき梢かな庭に嵐の聲をゆづりて
一〇一時雨をもうらやましとや我が涙吹拂ふ山おろしの風
一〇二月を思ふ秋の名殘の夕暮に木蔭吹拂ふ山おろしの風
一〇三谷風に庭の朽葉をはらはせて玉しく物は霰なりけり
一〇四詠侘びぬ立田の里の神無月木の葉踏分とふ人もがな
一〇五限なき枯野にみつる初雪に秋の哀のうつりはてぬる
一〇六初瀨山霜夜の鐘のあかつきよ嵐も寒し夢ものこりぬ
一〇七こやの池の己が蘆間につゞみぬて枯葉の霜に鶯なく
一〇八難波がた松の嵐に雲消えて月の氷にをしぞ立つなる
一〇九松たてるよさの浮寢の悲しきは風より底に千鳥鳴也
一一〇濱千鳥とわたる聲をうちそへて浪に傾ぶく有明の月
一一一冬枯の梢にあたる山風の又吹くたびに雪のあまぎる
一一二紅葉故郷ひし風はそれながら音こそなけれ雪の木枯
一一三冬さむみ都にくもるよひの雨は四方の山べの雪の曙
一一四炭竈の煙は風にうち靡きはれぬ雪げの雲につゞきぬ
一一五關を照す誓の末もあらはれて庭火は神の光なりけり
一一六いつも聞く鐘とや人の思らむ今年暮ぬと告る聲をも

雜二十首

一一七春日山幾千年をか待つならむ梢のふちに春を數へて
一一八君が代の限知られぬ例には海と雲とのはてを尋ねむ
一一九昔思ふたかつの宮の跡ふりて難波の蘆にかよふ松風
一二〇都思ふ心に身こそ誓ぬれこえて月見るうつの山のは
一二一浦づたふ旅の哀は松島や小島のあまの釉ばかりかは
一二二草枕かりねの夢に入るものは出でし都の有明のつき
一二三人はなし峯に松風里に月古めえてすめる山の奥かな
一二四曉のましらの聲に袖ぬれぬ庵のまがきは檜原杉はら
一二五ながむれば霞る月にはてぞなき春と秋との波の通路
一二六秋風にふじの煙の靡き行くを待とる雲の空に消ぬる
一二七空に月風に花をや詠めけむ飽ぬ別に身をくだくらむ
一二八世の中の現の關に見る夢に驚く程は寢てか覺めてか
一二九思ふべき我後世は有か無か無れば社は此世にはすめ
一三〇生ける日の浮世の波に漂て苦しき海の舟をしぞ思ふ
一三一今はたゞ唐國人に身をなさむ棄つる命は心ならねば
一三二打絶て世に住身には無けれ共有ぬ筋にもいみぞ悲き
一三三又しなき罪の報をしつる哉生きて斯る世に生れける
一三四身のうさを和歌の浦わに詠むれば心に浮ぶ住吉の松

七我も疎ら有ましかばと見し人を忍ぶとすれば最ど添行く
七今は我れ心の月も出ぬらむ五十の關も稍ふけにけり

秀歌百首　十二月二日賜レ題同八日成レ草但一往謬歌歟返々可二琢磨一者

春
立春　子日　霞　餘寒　春水　霜
若菜　殘雪　若草　梅　柳　蕨
櫻　春雨　春駒　歸雁　春曙　苗代
菫菜　杜若　藤花　款冬　殘春　三月盡
夏
更衣　卯花　葵　郭公　菖蒲　早苗
夏草　照射　五月雨　廬橘　蛍　蟬
鵜川　夏夜　夏衣　晩立　蚊遣火　蓮
氷室　泉　荒和祓
秋
立秋　七夕　萩　女郎花　薄　刈萱
關　荻　稻妻　雁　鹿　蟲
露　霧　機花　駒迎　月　擣衣
菊　紅葉　葬秋　九月盡
冬
初冬　時雨　落葉　霜　枯野　霰
雪　寒蘆　千鳥　氷　水鳥
網代　鷹狩　炭竈　爐火　佛名　歲暮
除夜

此題戀雜無レ之不審此百首御詠題相違之仔細共有レ之十月二日被レ召二百首一不レ可レ交二他歌一皆悉可レ為二秀歌一者

作者十五人

御製
內大臣　前太政大臣　右大臣
大宮大納言　前大僧正　前大納言
侍從宰相　左衛門督　大宮宰相中將
泉宗朝臣　雅經朝臣
春二十首　家長　秀能

春といへば霞とともに靡きて空にぞしるき雲の上人
のどけかれ今は氷柱も打とけて春立浪に志賀の浦風
靡きて我が手にぞとる姫小松霞に契る子日ならなむ
とけぬらむ雪も氷も夕霞わきてのどけき春の山かせ
片岡の雉がたつきにしばしゐて谷よりつたふ鶯の聲
しか共に摘てこそ知れ春日野の若菜は神の惠なれども
人ぞ知らぬ垣ねの小草雪消えて春めく色の物哀さを
雖波潟角ぐみやらぬ蘆の根を洗ふ浪まに春風ぞ吹く
春雨の雲となり行く霞かなはるゝもやがて淺緑なる
秋よりも霞に曇る月影の花の木のまを漏ぞさやけき
み吉野や花の盛の峯をしもよそに越行く春の雁がね
み吉野は庭も梢も花盛遲きもときもげにとこそ見れ
賤男が春のを繰て打解よ花こそふゝけ志賀の山越
誰に云む木の本占てみ吉野の花に儚きよの寢覺を
春の山の風や哀に思ふらむ別るゝ花に年へぬる身を
田子の浦の岸の藤波色深み松のしづ枝におつる春風
山吹よ春の彌生に散果てね卯月の花の浪にをらるな
皆人よ春の苗代水ならでおなじ心にゆくものぞなき
春社あらめ花見し人も歸なば如何はすべきみ吉野の山
別行く春の形見を春に問へば葉替ぬ松の色社はそよ

夏十五首

立ちとまる春の隔の霞こそ夏の籬と今日なりにけれ
音羽山卯の花がきにおそ櫻春と夏とやあふ坂のせき
玉川の里と聞しやこれならむ月影晒す八重の卯の花
もろ共に賀茂と日吉と葵草おなじ卯月の鬘をぞとる
淀のわたり夜深き空の郭公みなせ河原の雲路をぞ行く
郭公夏夜ふけ行く一こゑに涼しく明くる東雲のそら
五月雨の空なつかしき軒のあやめの薫る雫に
葛城や夏は裾野の草しげる外山の庵の五月雨のころ
ことわりや忘れがたみの匂とて古へさそふ橘のそで
思兼ねせめて嬉しき水鶏かな餘り入こぬ槇の板戸に
浮世哉此罪をだに雪がなむ宇治は鵜河の世に社有けれ
おほ寺の池の蓮の花盛りはこぶ心に手向けてぞ見る
とに斯に見程もなき夜はの月は夏の有明に酉の山下
夏を遠て秋の分來る道なれや淺茅が原の今朝の白露
あすを秋と思ふ禊の河風にかねてこぼるゝ袖の露哉

秋二十首

心して吹けともいはじ夏はまづかへぬ秩の秋の初風
今日やさは生田の川の浪の上に秋と覺ゆる色の立來る
七夕のなみだに露をおきそめて枕の下に秋風ぞ吹く
早晩と稻葉に秋や立ちぬらむ穗末に風の音ぞ露けき
女郎花秩は荻のねたる色ほかになおきそ野べの白露
風の音よ理りなれや荻の葉に吹き結びける秋の契は
雀ゆる鳴子の綱を引も敢ず稻葉の露の袖にこぼるゝ
こしかたを忍ぶ秩の夕露や初かりがねの涙なるらむ
終夜とばたの面にゐる鴨のこゑにかたむく有明の月
秋をしむる鹿の立ずは小萩原朝ゆく道に錦をぞふむ
秋の庭に物悗しくて住む人の同じ音になく蟲の聲哉
萩が枝に契置きける露なれや花に任せて色變るまで
一月はかな明石の浦も更級もたゞ見る人の心にぞすむ
山の端を何か厭はむ夜はの月人の心にいらぬ物かは
探草やうづらの床の朝つゆの秩にうつる秋の夕ぐれ
聞くたびに袖にうちそふ涙かな秋住吉の松の浦かせ
夜はに越えし昔の跡や立田山梢に秋の焦れ行くらむ
晴れて霜曇れば時雨秋の空色に出るは木葉なりけり
秋も今は吹飯の浦の松風にたづ鳴くよはの有明の月
秋の暮るゝよりよそに袖ぬれて盡せず落る我涙哉

冬十五首

秋の色の飽で枯行く梢より打時雨つゝ冬は來にけり
思分きて誰眺むらむ秋の尚歸りも敢へぬ冬の景色を
秋の尚歸も遣ぬませの裡をいかにと問へば八重の白菊
中々にしぐるべき空の村雲を運ぶ嵐にぬるゝ袖かな
木枯の風になり行く山里の庭の紅葉を人にみせばや
木葉吹くむこの山風立ちぬらし蘆やの沖に蜑の釣舟
秋の色は皆枯々に成果て眞葛に風の吹くかひぞなき
紅葉ばに秋よりかねて村時雨今は嵐に任せてぞ見る
かち枕冬いかにせむよさの海の沖つ嵐の松に吹く聲
冬の月をまてとなるべしすみ行く時雨の雲に峯の松風
神無月秋の姿の殘る野べを慕ひてすめる夜はの月影
淺川獨うき寢のとも千鳥しばしも浪に立つ空ぞなき
冴ゆる夜の月の氷にゐる鴫は上毛の霜も光なりけり
さゝ繁き被ふる野にいつか又檜原の雪を三輪の山下
暮ぬれば我身に留る年をなど歸ると人の云初めけむ

戀十首

逢迄は身の憂からと忍べ共情をだにも聞でやめとや
我いとふ人の心とおもはいやつゝむ袂にちがふ涙を
忍ぶぞと獨のみ云言草の誰がすむ宿の軒におふらむ
好さらば今はしのばじ偲ばずば哀縁りの人のとへかし
暮るゝよりくる人を待つ宵のまは靜心なき賤の苧環

空たのめ今は恨めし君故と心にすむはふくる夜の月
君と我行きあふ坂の道もあらば騅方よりか秋の初風
厭へ唯何か怨みむ今は我が憂身を知るも情にもせむ
我が戀は春とやいはむいつもいな唯大空の秋の夕暮
頼め尚誰にも云ひし言の葉も止る契の無らざらめや

羇旅十首

身計りは野ぢも山路も遮莫心はうはの空よりぞ行く
旅馴て唾ろむ程になる宵を思寝とこそ夢も知りけれ
大方の浮世の道を引きかけて悟るばかりの旅の空哉
かぢ枕いつと清に小夜ふけて夢よりぞたつ袖の涙は
かぢ枕いつと清の友千鳥しば鳴くころに明くる東雲
駒の跡を青行く草葉數へつゝおくも落るも露と涙と
松がねを枕とたのむ住吉の梢しぐるゝ小夜の浦かぜ
旅枕鳴のはねがき掻も敢ず幾ら落ちぬる涙なるらむ
おほかたの露にみだるゝ涙かな旅の哀は袂のみかは
旅に出て物の哀ぞ知られける此を誠の道になさばや
思ひあへず涙しぐるゝ旅の空いくたの里の秋の夕暮

山家

花も栽ず人もとひこぬ住か哉春なき深山べの里
山の井の流をとめて人ぞとふ水こそ夏の主なりけれ
山里に住む心ちする寝覺哉時しもあれやさを鹿の聲
山ざとよ時雨は霧露は霜ふかくなり行く庭の雪かな
哀なる人の住かを人にとへばをはつ瀬山の入相の空
誰に見せむ槇の下葉の朝露に濡てまだひす墨染の袖
山里よ怪しきまでの契哉暫し行かねば戀しかるらむ
掬ぶ手にきえぬ思や山の井の流にすだく螢なるらむ
年も長ぬ身の有様もなきに成ぬ憂山里をよそに見よとや
人や云し我や尋ねし初瀬山住かにしめて物思へとは
大原の里と聞つゝ尋入ればまだ道ながら袖萎れけり

厭離歌百首

流轉比丘往生上

厭ひても尚離るべき世中にとめて求むる我が心かな
願ひても尚求むべき後世を知らでも知らぬ我心かな
憂世かな吉野の花に春の風しぐるゝ空に秋の夜の月
おもふかなくるしき海に渡し守深きやみちに法の灯
戀々ひて逢夜の夢を現とも知られ顔なる鐘の聲かな
妹が宿の誠の道の奥ならば斯しも人は惑はざらまし
我が心こは孰方へ誘ふらむ闇かでをねなむ荻の上風

夜もすがら暮ふ心を照さなむ西に傾ぶく山のはの月
山風に迷ふ木葉を眺めても染むる心の歸らぬぞなき
春の雁の花の都の空を行くに類ふ心のなど無るらむ
秋の空は月すめてや雲はなき人の心の懸らましかば
うきながらあるか心の都出で、柴ひき園ふ西の山本
越て行く心を人に知らればや尚奥深き峯のあなたを
故郷を出で、後こそ思ひ知れあな哀の世の習をも
いかにせむ我立柮を離れ來て求むる道の末ぞ遙けき
尋ね來る心のうちを知りがほに聖の跡に月の隈なき
厭ひ出て都片しく槇の屋に夢だに見ぬ村時雨かな
故郷を出で、後こそ思ひ知れあな哀の世の習をも
いかにせむ我立柮を離れ來て求むる道の末ぞ遙けき
尋ね來る心のうちを知りがほに聖の跡に月の隈なき
厭ひ出て都片しく槇の屋に夢だに見ぬ村時雨かな
うれしくも我が思ひたつ深山路の深き梢に有明の月
浮世出る宿の嵐にちる紅葉その色深き心ちこそすれ
徒らに今日も過ぬと告る鐘に答へておつる我涙かな
都にて眺めし色はなかりけり槇立つ山の夕暮のそら
我が庵よ幾重の山の奥ならむ聞きも習はぬ鳥の聲哉
後の世を思ひつゞくる涙には心の月の曇らざりけり
哀にも檜原かきわけすも庵に今は友とやましら鳴く鷺
雪の山の鳥のよそにも思ふなよ結ばで結ぶ草の戸鎖を
山吹は我が谷陰にある物を井手の河波立ちな歸りそ
紫の雲まつやどの西の山かゝれる藤の色ぞかなしき
今日こそは夢とさとりし山櫻都の花に思ひあはすれ
今宵こそ我故郷に見し月のいらで澄ける心をも知れ
草の庵に衣返さで寢ぬる身は現を夢と知るぞ嬉しき
打返し重ねし袖を思ふには惑さへぞ嬉しかりける
野にかゝり山にかゝりて思知れ都に住みし心習ひを
み吉野の奥賴もしき住ひかな外山の庵に鐘聞ゆなり
ひえの山をひえの山の深き色も浮世の外の徽ならや
愚かなる高野の山に有明の月をもよそに何思ふらむ
鼻の君までならぬ御子の德は難波のとを思知れとや
浮世かないとふ心は大原やおぼろの清水心にぞすむ
初瀬山鐘の音さへすが原や伏見の夢はまだ夜深きに
故郷を離れ越路の奥の峯に諸行無常と消ぬ身ぞうき
紅葉せぬ松の門には入乍ら心色ある身をいかにせむ
眞知らば何か我世を厭べき厭はで行かむ鷲のみ山路
世中を卯月の山の峡なれや待ぬに來鳴死での田長は
あるにして心に深く結べばや濁ざるらむ山の井の水
雪深し心も深し山深しとひくる人のなきぞうれしき

今は我都の春をいとひ出で、み山の秋にすむ心かな
うれしくも春の櫻の色をすて、夏の蓮にそむ心かな
柴の庵に時雨は草葉かりにてもなに故郷を思出らむ
鐘の音を誘ふ嵐を聞くからに散し心ぞ散すなりぬる
罪深き海に嵐を思はでは沈むとや知る浮ぶとや知る
花をねに返すは風のならひなり我が庵過ぐる山嵐哉
遠ざかる心嬉しき山路かな春はあづまに秋は筑紫に
冬むすび夏さへ消えぬ氷こそ心の水にうかぶ月かげ
籐て思へば夜はの時雨の山廻り終にはいづち雪の曙
君が代を久しかれとは祈れ共憂身に松の色は思はで
なはたのめ賴む心ぞふかき山思をすつる思知るなり
我山のなれる様社哀なれ厭へとなして懸らましかば
跡ぞかし暫しな入りそ夜はの月深き契を志賀の辛崎
夢ぞかし思儘なる身也共嬉しかるべき此世とや知る
色にそむ心をおもへとりべ山夜はの煙は何か悲しき
夜はの露に人こそ袖を濡す共消て嬉しき我身也せば
今は又世にすむ人に厭はれて心の底の嬉しきやなに
我を厭ふ都の人を見る度に濃き墨染の袖ぞぬれぬる
いかにせむ佛の教さとる身の悟らぬ人の同じ闇なる
都より袖うちぬれて歸る人は心にくゝも懐しきかな
覺束な我山をさへ世に做て尚厭ふとや神は見るらむ
斯計り厭へとなれる世中に暫し住ける身社つらけれ
里の犬の尚深山べに慕ひ來るを心の奥に思ひ放つつ
嬉しくも占し山べに宿ふりて馴すと聞し鹿ぞ馴ぬる
惑ふ道の涙しられし袖の色を悟る袂に絞りかへつゝ
打返し裏になりてや小夜衣襲ねじ袖の玉を知るらむ
難波津に今は春べと眺れば西に開けて咲くや木の花
家を出で、家を出ぬに成にけり眞の道に眞なき身は
なにはづや深き昔もあしがきのま近き物を轉法輪所
夢さめて心も空に詠れば我が世もふけぬ月も傾ぶく
さぞなげに老に傾ぶく月日とて惜むか人の朝夕の空
浮世をば離れて思ふ心にもなほ慎しき我が山路かな

五五片岡に松もかひある朝日影出れば消ゆる淺茅生の露
六六悟りなばつひの友とや都出て我入る山に月も入らむ
一六浮世思ふ人の心やあま小舟海に嵐のたえぬ日ぞなき
二六さみだれにやま郭公待たじとは迷に廻る心なるべし
三六植ゑてけり我後世の形草身を捨てゝ住む宿の垣ねに
四六寶とて仇なる物を積置くや我に知られぬ命なるらむ
五六あさましや佛の道に入る人の何を心に思ひますらむ
六六世中に有るは有ずと悟れて世に在程の世に生ればや
七六皆人はゆく底を知られなば深山にも尚住でありなむ
八六斯て猶積りし罪を雪がずば浮世出たる名をや汚さむ
九六徒らに涙は袖に餘れどもたへぬ心は行くかたもなし
〇七春の火に心の野べをやくからに言の葉絶る春雨の空
一七影をかへて助くる神の驗あらば遂に佛の道知べせよ
二七何どこは思ふもいふも道ぞなき此庵までは誰誘けむ
三七六十まで人も知られぬ心かな隱さぬ物を山のはの月
四七心こそ思ひし程になりにけれ故郷とても今は厭はじ
五七何となき口すさび迄契ける佛の御名は南無阿彌陀佛
六七篤の山山のあなたも知られにき入ても月の面變すな
七七なのむぞよ鷲山海會釋迦大師誰故とてか世に出給ふ
康元三年十月十四日明月心隆頓右禿ノ筆詠二二十八首一經二一宿一翌日十五日之朝念佛之終數日之安樂推同者也

百首句題
春部

雪中早春

一八雪は深く春は淺きや一年に二年込るしるしなるらむ
二八時あれば今日立つ春の霞こそ雪の上にも顯きにけれ

水郷朝霞

三八朝まだき淀のわたりの渡し守霞のそこに舟通ふなり
四八ほの〴〵と通ふ小舟を立こめて霞によする淀の川波

野外晩霞

五八夕霞片岡のへをつゝめどもなほこぼるゝは盛のこる
六八岡上若菜
七八此春は衣笠岡に芹つみて神に手向くる若菜ともせむ

竹籬聞ノ鶯

八八我が友と頼む籬の竹のうちに嬉しく來啼く百千鳥哉

谷底殘雪

九八春來ても幾日になりぬ音もせで雪深かりし谷の川水
一九谷陰や深く積りし名殘には春の雪とも覺えざりけり

河邊古柳

二九詠むれば立田川原のふし柳なれも老木の春ぞ悲しき

戸前梅花

三九槇の戸を鎖でぬる夜の梅が香に人こぬ園は慰みやせむ

夜風告ノ梅

四九心ありて夜はに吹來る風なれや闇は綾なき梅の匂に

田家春雨

五九賤のをがかへす山田に嬉しきは時に時しる雨の夕暮
六九春の田にかへす〳〵も嬉しきは時しる雨の夕暮の空

杜間花稀

七九珍らしや信太の杜の千枝の隙に一木櫻の花を見る哉

舊宅花殘

八九住捨てし舊き籬の庭にしもかゝる匂の花を植ゑける

嶺上望ノ花

九九山高み散りなばいかに花盛雲と見つるは櫻なりけり
一〇見る人の絶えずもあるかな山高み櫻の枝に瀧の白糸

行路見ノ花（兼緣）

二〇橘下落花（兼緣）

旅宿歸雁

三〇かりがねの聲なつかしみ都へと歸る旅寢のはるの曙

浦邊春月

四〇月影の明石の浦の春の夜は霞も暫し晴れやしぬらむ

近砌款冬

五〇山吹のあかぬ匂をたどるとてゐでの河波立や歸らむ

遠岸紫藤

六〇藤咲かばながむる西の山のはに松にかゝれる紫の雲

三月盡

七〇行く春を惜む涙にたぐへとや霞は晴るゝ夕ぐれの雨

夏

薄暮卯花

八〇夕づく日さすや岡べの卯花の色より傳ふ月を見る哉

久待二郭公一

九〇待侘びて日數へにけり郭公今は山路に行きて尋ねむ

故郷郭公

一〇郭公高津の宮に呉はとゞあやしきまでの聲の色かな

船中郭公

二〇郭公なき出づる山の麓行く舟におち來る聲聞ゆなり

扈橘薰ノ窓

三〇昔へて思ひ出でゝぞなぐさむる花だに花の軒の匂に

雨後早苗

四〇並べ行く菅の小笠に雨ふれば採もかひある我早苗哉

澤邊菖蒲

五〇人の宿の軒に宿かる菖蒲草いつか澤邊を朝立てこし

山家夏月

六〇詠むれば明る程なき槇の戸を叩くは水鶏なすは月影

隣蚊遣火

七〇夕されば續く垣ねの蚊遣火を我宿ともやよそに見覽

庭五月雨

八〇梅雨は日をふる儘に水こえてほらぬ池にも鳴く蛙哉

遠近鵜川

一一字治川の瀬々の網代に鵜飼舟哀とや見るまきの島人

涸邊螢多

二一粟津野の尾花よ風にちりやらで鳴てる露は螢也けり

朝折二蘭麥一

三一朝な〳〵ませの內なる撫子を惜くもあらず手向つゝ哉

樹蔭流水

四一我が門に植ゑしもしるし柳蔭いさゝ川に夕涼み見む

野草秋近

五一初花は野べの小萩に唉初めぬ今幾日有りて荻の上風

秋

田家初秋

六一ほに出づる門田の稻葉けさ見れば早晩重き秋の白露

七夕後朝

七一忘るなよ天の河瀨に歸る浪又こむ今朝を思ふ遙けさ

閑居栽ノ萩

八一萩を栽て袖の類ひの露を見むさのみや獨濡てほすべき

晩女郎花

九一女郎花誰に契を結ぶらむ暮るゝまがきに色ぞ殊なる

野徑荻風

一二荻の葉よ籬もおなじ秋風の旅の野原は色ぞ添ひける

晩更初雁

二二玉章をかけて越路の初かりの聲ばかり聞く曉のそら

遙聞二鹿聲一

三二さを鹿の妻戀ふ野べは靡くぞと片岡返る宿に聞く哉

庭草露滋

[三]人とはで野と成にける庭の面を露に任する秋ぞ悲き
閨路露深
[三]沖つ風稍吹く影に誘はれて須磨の關屋に晴れぬ朝霧
橘花薫レ垣
[三]暮れ行かばもとの雛に返るらしたゝ一時ぞ朝顔の花
底泊待レ月
[六]我思ふ明石の浦の浮ねをや却りて波に月は待つらむ
月照二山居一
[七]山にすめと教し月は無れ共出るも入るも我に做つゝ
月滿二海上一
[八]出るより入る迄波の上にして山のはもなき月を見哉
古渡望レ月
[九]今宵をば秋の最中と算つゝ佐野のわたりの月を見哉
瀧邊殘月
[一〇]布引の瀧に光をのこしてや影きえやらぬ有明のつき
野亭擣衣
[一一]いかにせも隣の寺の暁が庵に鐘より外に衣うつなり
蟲聲隨レ風
[一二]雜か聞く遠里小野の萩が枝に風にみだるゝ蟲の聲々
紅葉未レ遍
[一三]龍田山霜も時雨もふる物を今年は秋の色ぞつれなき
河邊紅葉
[一四]たつた姫神に手向る錦をば御裳濯川に洗ふなりけり
秋暮菊殘
[一五]うつろひて殘る色こそ哀なれ秋のかたみの白菊の花
冬
初冬時雨
[一六]昨日まで露と覺えし我袖の今朝は時雨に成にける哉
落葉埋レ石
[一七]山陰や苔に埋るゝ石の上に木の葉定めぬ風渡るなり
朝野寒草
[一八]朝まだきまだ霜きえぬ淺茅原冬野の草は末ぞ悲しき
椎柴霜深
[一九]椎柴をつま木になしてこる賤が歸る袂に消えぬ朝霜
竹間聞レ霰
[二〇]風はやみ庭には玉をしく霰竹のさ枝に音ぞはげしき
原上初雪
[二一]色變るひえの高嶺の雲をみれば初雪降りぬ眞野の萱原
樵路雪深
[二二]山人の跡絶ぬべき雪の中に伐りおく枝ぞ尚遥らるゝ
雪中待レ人
[二三]都人まつは待ぬに成ぬべしこはいかにせむ雪の夕暮
池上冬月
[二四]月かげのおなじ光やをしがもの上毛の霜も池の氷も
岸邊寒蘆
[二五]住吉の岸片凍る蘆の葉は枯れて色ある心ちこそすれ
浦邊千鳥
[二六]淡路島千鳥しばなく朝ぼらけ殘れる月の影ぞ寂しき
江水初氷
[二七]住の江に松の秋風吹きこめて遂には凍る嵐とぞなる
鷹狩風寒
[二八]御狩野の雪になり行く風の音に歸る心の恨めしき哉
深夜水鳥
[二九]夢さめてをしの聲聞く池水や冬の宿には情なるらむ
古寺歲暮
[三〇]如何に聞きいかに思はむ初瀬山今年は今日の入相の鐘
戀
初祈請戀
[三一]哀にもこひこそ人の祈るとは今日や初て神も知らむ
忍經レ年戀
[三二]忍ぶれば色には出ず我戀はさて幾年の月日なるらむ
契違レ約戀
[三三]我戀はいとゞぞ曇る空だのめ空に知るべき人の心を
馴不レ逢戀
[三四]馴々て中々なると思はじと思さへこそ苦しかりけれ
待夜深戀
[三五]鐘の音を逢見て後も厭はゝや空しく深る夜はの悲き
邂逅過戀
[三六]逢見ても又待つ程の久しさはたまさか山に鳴く郭公
後朝隱戀
[三七]いかにとよ契置べき歸るさに頼ても人の立忍ぶらむ
憚レ人絶戀
[三八]いかにせむ互につらき中ならで人め計に絶果てねとや
顯後悔戀
[三九]顯はれて悔しかるべき中ならば忍果ても慰めなまし
隔二遠路一戀

[四〇]いかにせむ都遥に詠むればしのぶもぢすり心亂れて
傳レ人怨戀
[四一]中々に怨みじ今は人づては思ふ計りは語らざるらむ
[四二]人知れず思ふ心の行くかたは眞葛が原の風に任せつ
遇隱名戀
[四三]音羽山音ばかりにて過ぎねとや誰こて人に逢坂の關
被レ厭隱戀
[四四]芹摘し昔の水に袖ぬれて乾く隙なき身をいかにせむ
被レ忘後戀
[四五]忘らるゝ身をいかにせむ思しは此より戀の限也けり
互有レ恨戀
[四六]諸共に恨み〳〵ていざさらば其戀路より思ひ歸らむ
雜
晩更多燈
[四七]消え遺らで壁にほのめく燈に霜よの鐘を起出ぞ聞く
暮山松風
[四八]出でやらぬ月に心や通ふらむ暮れ行く山の峯の松風
雨中雜竹
[四九]哀れにも葉末こまかにさわぐなり雛の竹の雨の夕暮
巖苔埋レ路
[五〇]哀にもかよふ人なき山べかな苔に埋るゝ岩のかけ路
浦鶴鳴レ月
[五一]誰か聞く月の出汐の和歌の浦に蘆べ露けきたづの諸聲
霧中山路
[五二]旅の空の哀いづくと人とはゞ唯暮かゝる山路也けり
野外旅宿
[五三]野べの露に草の枕を朝立てば袖に留るは涙なりけり
海路眺望
[五四]歸る雁の霞にかける玉章を濱名の橋に詠めつるかな
山家流水
[五五]何となくたより嬉しき山河を麓の里にせき流すかな
山家鳥馴
[五六]山ざとにさしも住みける古は衣に巢くふ鳥も有けり
深夜夢覺
[五七]鐘の音よ今は昔を思ひねの夢の枕に聞くぞかなしき
田家懷舊
[五八]此のほどは昔の君の跡ぞかしとば田の里の秋の夕暮
朝觀二無常一
[五九]今朝は最ど露ぞこぼるゝ鳥べ山よはの煙は有明の月

薄暮逃懐

八幕かゝる空に物思ふ人は皆身の浮雲に風ぞのどけき

社頭祝言

一八嬉しくも佛の道と君が代と守る日吉の影ぞくもらぬ

略秘贈答和歌百首

二八音羽山ふかき霞をわけ入れば大津の宮ぞ春の花ぞの

二八春來ればうちでの濱風に長柄の山を志賀の山越

八花に倦で花を哀と思ひきぬ散習ひきて我になしつゝ

四八月に倦で寢待の空を待からに來む世の關を思ゐゝ哉

八吉野山そもむつましき詠かな花待つ峰にかゝる白雲

八浮雲をいとふ心もうれしきは月待つ山の峰の松風

八郭公まつに來鳴かぬ聲なれば常磐の杜に聞くともなし

八我は又まつに嬉しき命とて老曾の森に鳴ともなし

九五月雨の雲より出づる郭公はれたる物はなが聲の色

一九今ぞ見る雲立騒ぐ秋の空は風より月のいでける物を

二九つひに思ふ心の末の悲しきは月見る西の山のはの雲

三九後の世に迷はじ今は夕闇の空さりげなく出る月影

九染ておろす峯の紅葉の紅を散より外の物とやは見る

四九出よ月浮世に住まぬ山のはを心の外の雲とやは見る

五九諸共に鹿こそは鳴け暮の秋の紅葉ちる山の末の嵐に

九むら柴にきらす立つなり　櫻狩花ちる野べの春の曙

九よしさらば涙に疎き身也せば袖には月の宿ざらまし

九行ふに眞の言をならはずば心に月の宿らざらまし

〇散りつもる庭の紅葉に霜さえて曉は月の光なりけり

一月影に雪かき分て見る梅の白きにも尚そむ心かな

二月影の嵐になびく有明にうちあはせたる鐘の音かな

三偽と思知りぬる槇の戸にさし合せたる鳥の聲かな

四色深きつたはふ跡の露しげみ心ぼそきはうつの山道

五都出でゝ入る日の末は山もなし思ひ盡せぬ浪の上哉

六世の中の人の心を思ふ空の雲かきわくる山のはの月

七違はずよ浮世の人の擧動は時雨るゝ秋の山のはの雲

八山里に露置萩の濡色を見よかし人のとひだにもこぬ

九秋の野を移せばませに露深し鳴ぬ鹿さへ聞心ちして

一〇秋ふくる木の葉の色に待つ時雨一廻りせば山の下風

一一思へたゞあだなる物は人の命　野分の風に萩の上露

一二ふしみ山鹿の音おろす夕嵐に稻葉が末に鶉なくなり

一三柴の戸の垣ねの軒の程狹み　割なくあさる鴫の羽掻

一神無月雲にあはれを吹きそへて楢にあまる夕嵐かな

二古野山花に哀を思なれぬ色づく野べに春風の吹く

一木枯にちらぬ紅葉の楢よりわかちてぬらす夕時雨哉

二山嵐の風には堪ぬ芭蕉葉を垣ねに賴む宿ぞ物うき

一初瀬山霜深き夜の寢覺には怪しく鐘の音ぞつきせぬ

二追風にほに任せつゝ行舟の泊定めず恨めしの身や

一いつよりも音ぞ身にしむ老にける年の暮行入相の鐘

二春の來て明行くよさの年波を幾へ重ねむ磯の松風

一よそに聞く戀の病を尋ぬればやがて我身の心也けり

二げにやさぞ返さで死なむとぞうき色社替れ染る衣を

一我のみと尋入る山の谷陰に誰ぞも庵の跡のありける

二昔たれ住みける山の奥ならむ思ふも悲し苔の通路

一山陰や繁き檜原に木隱れて花と月とも疎くなりぬる

二谷陰や岩の岩ねに庵閉ぢて疎きは嘸な親しきにさへ

一秋の夜の寢覺夜深き夢さめて殘らぬ物は心なりけり

二春日野の寺立込むる夕霞つゝみ殘せる鐘の音かな

一訪人もいまは嵐ぞ叩くらむ人知れぬ山の草の戸鎖を

二誰か來て哀といはむ葛城やと山にだにも訪人はなし

一手向かも折から神も恵むらむ四手に風吹く有明の空

二參る人のまろねの跡を殘す霜は神の心に赤の玉垣

一思はなむ思へば袖に露深しそよ春日野のさを鹿の聲

二賴む神よ在すかいかに有明の秋の梢にましら鳴く也

一法の水に深き心は山の井のむすぶ雫も濁らざるらむ

二今は我淺き心を忘水いつ堀かねの井筒ならなむ

一朝夕に袖に返して結ぶ手の浮世の綱を解ざらめやは

二思入る無常に直の法音のいでぬ栖を問ざらめやは

一みを分けて鶴の林を出でしより龜井に映る有明の月

二入月の入るは淡路の島隱れ　人を導く道と知らずや

一暗きより暗かるべしと思ひ知る心ばかりは照せ月影

二聞けよ人障の雲の晴ぬより尚出る月は心にぞすむ

一三惡の家には何かかくるべき出でにし物を五相成身

二必ずよ夜はの煙と身をばなせ以字燒字の法の報に

一我命いつ迄とだに知果てば殘るとなく世をば捨てむ

二愚也唯今日〳〵と思ふべし知るも知ぬも今幾日かは

一我が身より浮世の人ぞ恨めしき一心になど生れけむ

二憂が中に憂らぬ人も有物を押なべてとは思ざらなむ

一心をば我が後世に顯さむ法の爲とて今日までは經ぬ

一押さげて人やりならぬ心哉かへせばあだに浮雲の空

二思へども又思へども思へども心の外にうき物はなし

一心あれば心なしとぞ思知る嬉しき物は心なりけり

二何ごとは背く心の深からむ此世にこそは生たる身の

一生來て厭へと社は教しか知らざりけりな法の心を

二情より人の心をしのぶこそ又なさけある心なりけれ

一聞けよ君誠に心ある人は情なき名を立つゝ知らすや

二憂もうしつらきもつらしとに斯に心ある身に何生けむ

一心なき花も紅葉も野も山も春と秋とを知らぬ物かは

二いかにせむと常に心を惱む哉厭ふも頓て厭しき世を

一厭惱む心の主に言問む有難き世にあられざるらむ

二後世を思忘れて世にすまば此世計りに樂しかりなむ

一後世を知る心こそ樂しきを苦しと云はいとゆふの空

二我心隱さじはやと思へ共見る人もなし知る者もなし

一我心隱さばやとは思へども皆人も知る皆誰も見る

二思はじと思ふに適ふ心ならば斯しも世をば厭ざらまし

一いかにせむ思べきことを思寄らで悔きとに馴ける身を

二吹迷ふ風に木の葉の何となく叶はぬとに身を歎らむ

一身計をなきになしては過ぐれ共偕もうせはぬ心也是

二いかにせむ人も拂ぬ夏の池の菱とも物の思取れぬ

一いかにこは心も尚も高瀨舟さしも憂身と思しかども

二如何にせむと思ふも叶身也せば兢く栖と知人も有じ

一世中を厭ふ心のあらましに死なでも人に別ぬる哉

二我が心奥まで我が知べせよ我が行道は我のみぞ知る

一人心つらしと思人なれど　人をぞ恃む人のつらがり

二前の世を思知るよりなく涙今我が袖に乾くまもなし

一後世は今宵かあすかなく涙思ふ計りに尚ぞ溜りぬ

二神よいかにうしや北野の馬ばゆふ埀の外なる人の心は

一歎くなよ人の心は佛だに思兼ねてぞ捨て給ひにし

二つひにさは背墅の立つ柚をたえにし物の又音のする

一逢難き法に近江の山高み三度きえゆる身を如何にせむ

二守りこし名殘は末も久しかれはこやの山の松の村立

一いかで尚鴿すむ洞に生れても無らむ世迄君を守らむ

以上百首は大略併詠次に乍二百首一入二撰集之程許一奉レ納二神居一畢具在二別草一

詠二百首和歌一　以二古今一爲二其題目一

慈鎭

春二十首

年のうちに春は來にけり一年を
こぞとやいはむ今年とやいはむ
[四八]雪の中に春は來にけり吉野山雪とや云む霞とや云む
袖ひぢてむすびし水の氷れるを
はる立つ今日のかぜやとくらむ
[五八]春風の結ぶ氷を吹解けば更にや今日は袖もひぢなむ
春霞たてるやいづこみよし野の
よし野のやまにゆきはふりつゝ
[六八]春霞たてるは都さてもなほ山の奥には雪やふるらむ
霞たち木のめもはるの雪ふれば
はな無きさともはなぞ散りける
[七八]のわ雪の花なき里に嬉しきは木のめも春の夕暮の空
春やとき花や遲きと聞きわかむ
うぐひすだにも鳴かずもある哉
[八八]春はとし霞かへれる木末より花ぞおそきと鶯の鳴く
あづさ弓おして春雨ふ降りぬ
あすさへふらばわか菜摘みてむ
[九八]春雨のふるから小野の梓弓おして今こそ若菜摘てめ
遠近のたづきも知らぬ山なかに
おぼつかなくもよぶ子どりかな
[一九]呼子鳥嬉しくもあるか遠近のたづきも惑ふ山の夕暮
うぐひすの笠にぬふてふ梅の花
折りてかざゝむおいかくるやと
[二九]春毎にかざゝで年ぞ積りぬる我が老かくせ梅の花笠
世の中にたえて櫻のなかりせば
はるのこゝろはのどけからまし
[三九]春の心のどけしとても何かせむ絶て櫻の無世也せば
櫻花咲きにけらしなあしびきの
やまのかひより見ゆるしらくも
[四九]櫻花まだ見ぬさきも三吉野の山のかひある峯の白雲
花の色は霞にこめて見せずとも
香をだにぬすめはるのやまかぜ
[五九]香をだに思ひし花の霞より色をもおくる春の山風
花の木も今は堀栽ゑじ春立てば
うつらふいろにひとならひけり
[六九]堀栽て見るは嬉しき花の木の移ふにこそ習侘びぬれ
春の色の至り至らぬ里はあらじ
咲ける咲かざるはなの見ゆらむ

[七九]春風の至り至ぬ木々ぞなき咲るが散れば咲ざるも散る
三輪山をしかもかくすかはる霞
ひとに知られぬはなや咲くらむ
[八九]人知れぬ花を霞にたづぬれば已よそなる三輪山の杉
咲花は千種ながらにあだなれど
たれかはるをうらみ出でたる
[九九]惜め共留らぬ花のゆかりとて恨果つべき春の上かは
木傳へばおのが羽風にちる花を
たれにおほせてこゝら鳴くらむ
[一〇]こゝら鳴鳥の妬くや思らむ惜むに留る花ならなくに
駒なめていざ見にゆかむ故郷は
ゆきとのみこそはなは散るらめ
[一一]故郷の花の白雲見にゆかむいざ駒なめて志賀の山越
吹く風と谷の水としなかりせば
みやまがくれのはなを見ましや
[一二]奥までは尋ぬ花を見せがほに風に流るゝ山川の水
我が宿に咲ける藤波立ちかへり
過ぎがてにのみひとの見るらむ
[一三]立返り見れ共あかぬ藤波はすぐる心に懸るなりけり
けふのみと春を思はぬ時だにも
立つことやすきはなのかげかは
[一四]暮れぬとて花の下にし宿かれば日數計ぞ春に別るゝ

夏十五首

わが宿の池の藤なみ咲きにけり
[一五]夏に咲く池の藤波色に出でゝ山郭公鳴くを待つかな
花ちれる水のまに〳〵とめ來れば
[一六]とめ來れど春なき山の梢より今は厭はぬ風渡るなり
郭公ながなく里のあまたあれば
[一七]いく里を語らひすてゝ郭公我が宿の初音鳴くらむ
今朝來なきいまだたびなる郭公
[一八]夜半に聞く山郭公なのるなり旅のやどかせ橘のえだ
おとはやま今朝こえ來れば郭公
[一九]郭公あふ坂こえて尋ぬれば今ぞ音羽の山になくなる
おもひいづるときは山の郭公
[二〇]紅のふり出でゝぞ鳴く郭公紅葉の山にあらぬ物ゆゑ
聲はして涙は見えぬほとゝぎす
[二一]郭公涙は汝に聲は我にたがひにかして幾代へぬらむ
やよやまてやま郭公ことづてむ

[二二]やよやいかに山郭公我誘へ住侘る身の尚つれなきに
五月雨にものおもひをれば郭公
[二三]さみだれに物思ふ宿は郭公鳴く一聲もなほぞ夜深き
夜やくらきみちやまどへる郭公
[二四]夜や暗き道や惑ふと問ふべきに山郭公鳴かで明ぬる
やどりせしはな橘も枯れなくに
[二五]郭公來鳴かぬ宿の橘はたゞ枯れねとぞ思ふべらなる
去年のなつ鳴きふるしてし郭公
[二六]宿も宿なく聲も聲郭公身のふりぬるや今年なるらむ
さみだれの空も心にほとゝぎす
[二七]郭公空もとゞろに鳴く頃はよた雨ふる釉の上かな
はちす葉の濁りにしまぬ心もて
[二八]鮎の身を玉ともなさむ蓮葉の濁にしまぬ我が心より
夏と秋と行きかふそらの通路は
[二九]夏衣かたへ涼しくなりぬなり夜や更ぬらむ行合の空

秋二十首

秋きぬと目にはさやかに見えねども
[三〇]風の音に驚くのみか荻の葉の清かに靡く秋は來にけり
こよひこむ人にはあはじ七夕の
[三一]今宵來む人にを逢はむ七夕の絶ぬ契に逢むと思へば
我が爲に來る秋にしもあらなくに
[三二]思ふべし我身一の秋ぞかし誰かかくしも月を詠めむ
久方の月のかつらもあきはなほ
[三三]秋のさかり曇らぬ空や久方の月の桂の紅葉なるらむ
秋風に初かりがねぞきこゆなる
[三四]頃もうじ初雁がねの玉章にかき敢へぬ物は涙也けり
山里は秋こそことにわびしけれ
[三五]鳴く鹿の聲にめざめて忍ぶ哉見果てぬ夢の秋の面影
秋はぎの下葉色づくいまよりや
[三六]小萩原ねぬ夜の露や深からむ獨りある人の秋の栖は
主知らぬ香こそ匂へれ秋の野に
[三七]藤袴花にぬしとふ夕ぐれにこたふる風や萩の上ぞと
みどりなる一つ草とぞ春は見し
[三八]哀にもおなじ緑の春草のこゝろ〳〵に色かはりゆく
里は荒て人はふりにし宿なれや
[三九]古郷のぬしの涙やおきつらむ庭もまがきも秋の白露
草も木も色かはれどもわたつ海の
[四〇]わたつ海の秋なき波の花に尚霜おく物は夜はの月影

紅葉せぬときはの山は吹く風の
(三)霧はれぬ倉橋山の秋風は音にや月を聞きわたるらむ
我門のわさ田も未刈りあげねば
(一)我門のわさ田假廬の草の庵に夢路移ろふ神なびの森
白露の色はひとつをいかにして
(二)露の染めて色々になす紅葉の又色々に露をそむらむ
秋の夜の露をば露とおきながら
(三)露は野べわが夕暮の袖を又かりの涙の染めて過ぬる
霜のたて露のぬきこそ弱からし
(四)脆く見し霜と露との經緯は風の織りたる錦なりけり
手はやふる神代も知らず龍田川
(五)龍田川紅のもみぢにおきかけて唐紅の下とよむとは
見る人もなくて散りぬる奥山の
(六)もみぢ葉を夜の錦になす物はまだ見ぬ山の嵐也けり
夕づく夜をぐらの山に鳴く鹿の
(七)秋はいぬと小倉の山に鳴鹿の聲の内にや時雨初らむ
道芝は尋ねも行かむもみぢ葉を
(八)紅葉を幣と手向けて行秋を惜み留めぬや神なびの森

冬十五首

龍田山にしきおりかくかみな月
(九)錦おる賤はた山の初時雨げに經緯となりにけるかな
山里は冬ぞさびしさまさりける
(一〇)宿さびて人めも草もかれぬれば袖にぞ殘る秋の白露
おほぞらの月の光しきよければ
(一一)秋の夜の影見し水の薄氷月にこたふる冬は來にけり
夕されば衣手さむしみよし野の
(一二)あけば見よ四方の山べの雪の色は衣手寒し東雲の空
この川にもみぢ流るおく山の
(一三)奥山の雪げの水に流れ出でゝ秋と冬とを見する紅葉
ふるさとは吉野の山し近ければ
(一四)吉野山峯の白雪いかならし麓の里もふらぬ日はなし
しら雪の所もわかずふりしけば
(一五)岩に咲雪の花こそ哀なれ春も見ざりき秋も見ざりき
うらもちかく降り來る雪は白浪の
(一六)白浪のこえて返ると見えつるや雪に風吹く末の松山
朝ぼらけ有明の月と見るまでに
(一七)同雪のよそめも鳥初瀬山花と見つるも月と見つるも
梅のはなそれとも見えず久方の
(一八)白雪のなべてふれれば梅の花冬咲色はかひ無りけり
雪ふれば木毎に花ぞ咲きにける
(一九)梅が枝の匂うれしきたゝちかな木ごとに花の雪の曙
我が待たぬ年は來ぬれど冬草の
(二〇)冬草の枯ぬと何か思べき花の春には人も訪ひ譯てむ
雪ふりて年の暮れぬる時にこそ
(一)色かへぬ冬の緑を見よとてや遂にもみぢぬ松の白雪
昨日といひ今日と暮して飛鳥川
(二)飛鳥川流れてけふも暮ぬれば春に逢瀬は今宵也けり
行く年のをしくもある哉ます鏡
(三)年のあけて影いかならむます鏡今宵一よに面變して

祝五首

君が代は千代に八千代に細石の
(四)さゞれ石の苔蒸巌となりて又雲縣る迄君ぞ見るべき
しほの山さしでの磯にすむ千鳥
(五)君が代にさし出での磯の友衛やちよの聲を聞ぞ嬉き
斯しつゝとにも斯にも長らへて
(六)斯計り深き心の報には君が八千代にあはざらめやは
ふして思ひおきて數ふる萬世は
(七)千早振神ぞ知るらむ我が君をねても覺めても祈心は
萬世をまつにぞ君をいはひつる
(八)長へてかひ有るとをまつなれや君が千年の影に隱れて

戀十五首

郭公なくやさつきのあやめぐさ
(九)五月雨の軒ばになるゝ郭公なくや五月の涙なりけり
我が戀は空しき空にみちぬらし
(一〇)我が戀は行く方もなき眺より空しき空に秋風ぞ吹く
あふことの絶にしよる波なれば
(一一)戀をすまの恨みて歸る風の音を逢と浪に聞ぞ悲しき
人知れぬ我がかよひぢの關守は
(一二)通行く夢路にすうる關守は打もねぬ夜の我身也けり
君や來む我や行かむの十六夜に
(一三)槇の戸を鎖でぞ明る君はこず我や行むの休ひのまに
今こむといひしばかりに長月の
(一四)有明にこや長月の空だのめ待出る月のかき曇るまで
いにしへになほたち返る心かな
(一五)いかにとよ戀しきことを由なやと思得つれば物忘せで
月やあらぬ春や昔のはるならぬ
(一六)愁むる時こそなけれ月やあらぬ秋や昔の秋の上かせ
花がたみめ並ぶ人の數多あれば
(一七)罪知らば報を思へ花がたみめならぶ人は獨ならぬを
あひにあひて物思ふ頃の我が袖に
(一八)我が袖に宿る習の悲しきはぬるゝ顔なる夜はの月影
秋ならでおく白露はねざめする
(一九)寢覺する我手枕の秋の露は春もおき見いつもおき鳧
曉のしぎのはねがきもゝはがき
(二〇)とにかくにうき數かくや我ならむ楯の端雪鳴の羽掻
色見えでうつろふ物は世の中の
(一)顯はれて移ろふ色のしるければ人の心の花を見る哉
流れては妹背の山の中におつる
(二)我が涙吉野の川のよしさらば妹背の山の中に流れよ
風吹けばおきつしら浪たつた山
(三)龍田山夜はにや君が獨とれし夜の夢の行方をぞ知る

雜十首

ほのぼのと明石のうらの朝霧に
(四)明石がだ船の昔に言とへば島がくれ行くあとの白浪
いそのかみふるからを野の故柏
(五)君が代にふるから小野の故柏本に返るや我身なる覽
世の中にふりぬる物は津の國の
(六)笛にける長柄の橋に跡もなし我老の末は懸らすもがな
櫻あさのをふの下草老いぬれば
(七)情あらば人もすさめよ櫻あさのをふの下草老出ぬ共
押照るや難波のみつにやく鹽の
(八)盧たてる難波のみつに燒鹽の煙れて物を思ずもがな
老らくのこむと知せば門さして
(九)君が代の盡ぬ千年の友ならむ老の便になしと答へて
われ見ても久しくなりぬ住吉の
(一〇)君が代に久しくにほへ住吉の松のちぎりし百草の花
なにはがた汐みちくらしあま衣
(一)誰か聞く難波の汐のみつなべに田簑の島の鶴の諸聲
かりのくる峯の朝霧はれすのみ
(二)雁のくる峯の松風身にしみて思盡させぬ世の行へ哉
山水の音にのみ聞くもゝしきを
(三)朝夕に見てもなづさふ山水の早くも君に仕へつる哉

拾玉集巻第七

詠二暮春一和歌

一八散殘る花の木の間の有明に長月の夜の月を見るかな
二吉野山見にこし花はちりはて〻歸る空には有明の月
三おしなべて皆浮雲の旅の空よにも嵐の拂ふをぞ待つ
四世を厭ふ心ばかりはありた川岩に碎けて住みぞ煩ふ
五我もさぞ宮も藁屋も水の面に映れる月の影と社見れ
六旅の宿假初臥に見る夢のさむるをぞ待つ長き夜の空
七今よりは法の道より尋行む虛しき空は過ぐか住むかは
八うき人も皆我が子とぞ云人や佛なき世の佛なるらむ
九うきながら我こそは知れ昔より契たがへぬ人の心を
一〇過ぐを知れば我も知られぬ是も皆哀昔の契ならめや
一一惑ふ人のそしる詞に從はゝ悟る心のかひやなからむ
一二思ふとて心の水にうつるらし空に知らする昱の光は
一三法の水を今日かき流す難波江に月かげさむし秋の曉
一四嬉しさを包習ひし袖に又其身に餘る今日とこそ見れ
一五無跡にあらましかばの心をも移す計の人だにもがな

春野

一六淺緑木芽も春の野べの草に昨日もけふも雨は降きぬ
一七打群れて若菜つみつる春の野の緑を分て雉子鳴なり

霞

一八春霞よもの山べにたなびきて花待比になりにける哉

花

一九三吉野の花に霧けき涙かな鳴きてや雁の立歸るらむ

郭公

二〇卯の花の垣ねばかりの月影に山郭公そらになくなり

五月雨

二一早苗とる手玉もゆらに五月雨て心に水を任せつる哉

秋野

二二袖の露はらひもあへぬ夕かな鶉鳴く野のをきの上風

月

二三君がため長月の夜のうれしきは九そぢまで有明の空

紅葉

二四山おろしの紅葉の錦敷庭にさしくる物は夜はの月影
二五山陰に一むらのこせから錦立田の里の秋の木がらし

千鳥

二六あはぢ島とわたる千鳥心せよしほ風はやし須磨の暁
二七沖つ風吹上のうらの濱千鳥たつ白波の花かとぞ見る
二八風さゆるさほの川原の川千鳥空行く月に聲交すなり

雪

二九さらぬだに待べき人もなき宿に深く成行く庭の白雪
三〇庭の雪をよきて通はむ道もがな跡なしからで人に問れむ

氷

三一鴛鳥の己が浮巣もとぢられて池の水柱に鳴明すらむ
三二重ねてや汀の氷結ぶらむよせてかへらぬ滋賀の浦波

雪中子日

三三小松原花咲に鼠子日する今日こそ雪は降べかりけれ
三四小松原緑の上に花咲きてけふは子日の行幸なりけり

尋〻花宿〻山

三五花を思ふ心ぞ深き吉野山おくの岩ねに宿をかるとて
三六草むすぶ深山がくれに宿からむ花を尋ぬる夕暮の空

夕探二蔦蒲一

三七蔦蒲とる賤のすが笠ならぶめり淺香の沼の雨の夕暮
三八心さへ萎れやしぬる賤のをは蔦蒲になづむ雨の夕暮

獨聞二時鳥一

三九心ありてしばし語らへ郭公たゞ獨聞く宿と知らすや
四〇郭公ひとり心に待ちとりぬ外山の裾におつる初音を

始見二草花一

四一待かねて心の內に任せつる庭の小萩は色に出でけり
四二ほに出て招く尾花も見えなくに紕とき初る女郎花哉

旅泊曉月

四三浮寢する浪路はるかに月さえて心やおよぶ有明の空

葉飛渡〻水

四四立田川紅葉の舟のこわたるをまかする楫や木枯の風

深夜千鳥

四五きよ千鳥更行く聲を聞くなべに折しも歸る袖の浦波
四六諸聲に千鳥鳴也須磨の蜑の更くる我よを思知れとや

忍戀年戀

四七忍びつゝ年もつもりの濱楸かくる涙に顯はれやせむ
四八あらぬ色に我黒髪の成行くを涙ならねば人ぞ怪めぬ

植〻竹爲〻友

四九窓近く葉がへぬ竹を植置て友なき宿と人に云はれじ
五〇風の音も雜の竹に訪づれてよるさへ友と成にける哉

已上十首一法師等の題よみたべと申しかば詠みてたびつ後にとり返してき又十首詠二加縄素歌合一

十題一伝不審歟

五一薄暮卯花
五二嫉捨の山も尋ねじ卯花の垣ねよりこそ月は出でけれ

曉更盧橘

五三昔思ふ夜も明方の橘は物のあはれのにほひなりけり

古池蔦蒲

五四津の國の池の蘆間に引代てけふの菖蒲や小屋の八重葺

遠山郭公

五五山高み名殘はいかに郭公鳴くも跡なき聲のがよひぢ

風前夏草

五六秋ならば身にしむ色や濃らましまだしき秋の野べの夕風

雨後夏月

五七夏の空を洗ひて過ぐる夕立は秋始しとや山のはの月

所々照射

五八鹿はいかに靜心なく思らむ燈す照射は野にも山にも

家々納涼

五九末に又結びとめける我が門のいさゝを川に通ふ秋風

蟬聲夏深

六〇おく露はおのが泪か鳴くせみの聲も老會の杜の下草

螢火秋近

六一秋の夜のながき思の隣かな螢みだるゝ沼のまぢかき

又人にかはりて

卯花

六二うれしくも卯の花垣根しめてけり夕べ恠む有明の頃

盧橘

六三うつゝには花橘のにほひ來て夢もかひある曉のころ

蔦蒲

六四み草ゐる池に蔦蒲の年も老ぬ庭は蓬が杣となるまで

時鳥

六五郭公ほのかなりつる一聲の名殘になるゝ深山べの里

夏月

六六夕立のはれぬる空の光そと思はぬほどの秋の夜の月

夏草

六七行末をしのぶ心にながむれば夏野の草に秋風ぞ吹く

照射

六八心有て燈さぬ賤も有なまし鹿聲立つる秋の夜ならば

納涼

六九宿からやすゐむ心もかざるらむ岩井に清水庭に松風

蟬聲夏深
二山里の梢の蟬に風こえて峯よりかよふひぐらしの聲
　　篝火秋近
三螢こそ秋の夜を知るしるべなれ星の光を峰に殘して
　　獻二南海漁父一秋十首　北山樵客
四昨日今日曇る空社つらからね望月は過ぎ長月はこす
五空は一つ山にも茂る野分哉檜原に風の吹き替るまで
六蟲もなかず野べの氣色に雲閉て哀は秋の雨に移りぬ
七杉しるや深山の秋の物憂きに其〻あらぬか風の夕暮
八とへかしと思ふ人だにもたぬ庵に鹿立馴る秋の夕暮
九霧こめて庵隣もいつしはとたどれば宮にあかの通路
一〇思ひやれ住みかは志賀の山の峰されば袖に漣の聲
一一心から大津の里の夕けぶり秋の霞にながめわびつゝ
一二風さわぐまくずが原の夕ぐれを都に知らぬ秋の山陰
一三夕ながめいつより荻に傳ふ風心言葉を吹きけたれぬる
　　續素歌合十首　番左將軍御歌
一四禁庭殘菊
一五此冬はげに藤つぼの菊の上に昔の色を呈げてや見む
　　田家時雨
一六杉たてる秋の山田の故郷を寂しく過ぐる初時雨かな
一七深山落葉
一八庵深き嶺のもみぢに音たえて庭にぞのこる木枯の風
一九野徑寒草
二〇寂さになるゝ心に眺行けば色なき野べぞ色は有ける
二一海邊千鳥
二二あはぢ島千鳥とわたる曉に松かぜ聞かむ住吉のうら
二三潮上水鳥
二四鳥を分てあさ妻舟も過ぬれば同じみをにぞ又歸入る
二五旅宿初雪
二六誰か又朝立ちやらで詠むらむすみ田川原の初雪の空
二七故郷冬月
二八故郷の園もる月をあるじにて秋吹きかへす庭の松風
二九古渡寒水
三〇舟とむる氷も知らじ梓弓おして矢走の今朝の渡りは
　　山家歲暮
三一今年又なほ鶯かで明けぬべし浮世はなれぬ山里の夢
　　大納言殿密々會の時尋出にかはりて雪の十首
　　禁庭雪

三二九重の花にのみやは心あらむ今朝の雪にも朝清めすな
　　故郷雪
三三雪の跡を眠べかりし故郷を更にきて見る人と成ぬる
　　山家雪
三四山の家の軒の筧のうす氷とけても雪の下となりぬる
　　野亭雪
三五籍枯の秋のなごりを隣にてさながら野べは庭の白雪
　　社頭雪
三六梢まで一つに埋む雪よりもしるしに惑ふ三輪の山本
　　古寺雪
三七あれはてゝ年ふる寺の軒の跡を苔より外に埋む白雪
　　雪中戀
三八人戀ぬ人の心のいかならむたゞ有り難き雪の空かな
　　雪中述懷
三九雪も尚暫しは花に紛ふめり降かひなきは憂身也けり
　　雪中遠望
四〇雪はいかに外面の岡の岸をさへ遙の越の山に見す覽
　　雪中旅行
四一過ぎ來つる方にも尚や迷ふべき駒に跡なき雪の夕暮
　　春
　　志賀浦
四二舟かよふ浦より見るぞ哀なる志賀の霞の山陰のいほ
　　泊瀨山
四三春ふかき花の梢に風おちて雪吹き拂ふ小泊瀨の山〔嵐カ〕
　　夏
　　立田川
四四たつた川いくしのしでに波こえて秋風通ふ夕暮の空
　　秋
　　宮城野
四五宮城野の秋の奥こそ知られぬれ萩の哀を露に殘して
　　須磨關
四六打よする波に有明の月さえて秋や悲しき須磨の關守
　　冬
　　深草里
四七冬枯はいとゞ物こそ寂しけれ現になれし深草のさと
　　祝
　　春日山
四八春日山種蒔置きしすべらぎの千世の惠を待つと白菊

戀
四九三島江の蘆の枯葉に吹きとめつ心さびしき人の夕風
　　旅
五〇清見潟月に心ののりしよりよは哀なる舟のかよひぢ
　　述懷
　　浮田森
五一春も夏も思ふことある身にぞしむ心浮田の森の秋風
　　已上十首依二左將軍命一詠レ之　建久二年十月三日左將軍御會歌合五首詠レ之
　　寄暮思レ秋
五二人の知る秋の外なる秋なれや雲に色ある夕暮の空
　　連夜時雨
五三冬枯の梢の下の村時雨ひとり夜がれぬ槇の宿かな
　　行路多風
五四草は枯れ梢は遠き道のべに風を見するは戀也けり
　　山水初氷
五五社げに寒けかりつる宵ぞかし今朝山川の音の物うき
　　網代眺望
五六見すもあらず波に錦を立混ぜて網代を過る風の水上
　　詠二秋月一和歌五首　慈鎭
五七あまの原空ざえとこそおもひしに袖の涙に氷る月影
五八來ても見よ同じみ空の月なれど秋は明石の有明の空
五九野べの鹿よ月に契れる己が聲にあやにく曇る我涙哉
六〇盡ぬ物は過ぐる千年の秋の今夜曇らぬ月の光也けり
六一過〔行カ〕が爲笹に占ける月夜よし夜よしと云は誰か答へむ
六二打歎き寢ぬとや人の思らむ深行く月の友となる身を
六三夜な〳〵の人の思を思ひ知むろのやしまの曙の空
六四我が思今は空にもみちぬらむ煙はふじの雲に讓りて
六五宿も荒て人の來ぬ床に置露を求めて宿る月も有けり
六六眺め侘ぶる空に思の夕煙やく鹽竈のうらめしの身や
六七我戀はつひに心の行へとや賴めし庵に今は待つらむ
六八君が爲物思へとていける身の住はぬ袖の色を見せばや
六九松の葉も濃くさへならぬ物ぞかし我戀の色を何に譬へむ
七〇我が戀は夕の空に吹く嵐つひにしぐれぬ袖の上かは
七一空賴め絶て幾世に成ぬらむ戀せよとても生たる身は
七二覺てしも何にかはせむ思寢の夢に絶ぬる哀ともがな

一遂にさは執ち消べき身なる寛枯野の露を袖に殘して
二睡ろまで夢も空しき鳥の音を獨厭はむことぞ悲しき
三夢にだに倚なかりける契かな幾夜衣を返しかぬらむ
四入月の影さへつらき山の井の淺くは袖の濡る物かは
五夢なれやさのみはいかに纔の音の絶ぬ枕に明る東雲
　春山朝
六よし野山待ちしは春の朝ぼらけ霞の色につゝむ初花
一春の來て花もかすみも曙の空に色あるみよし野の山
　夕早苗
二早苗にも春の苗代せきしより五月になりぬ雨の夕暮
三植はへ殘る伏見の小田の夕早苗いつしか靡く秋の初風
四梅雨は少し晴間の夕早苗採るもかひある賤が小山田
　行路秋
五月は秋と思ひ出つゝ旅の空を行暮す袂に松風の吹く
六秋行きて聞けば鹿の音來る物は萩に白露山のはの月
　曉時雨
七槇の屋を野中にしめて待時雨夢より後に訪れて行く
八夢覺て又濡果てぬ袖の上に絞れとばかりふる時雨哉
　松經レ年
九君に契る心の色はもみぢせすこや住吉に年へたる松
〇雪のうちに宿き綠を顯はして幾世に成りぬ住吉の松
　左將軍女房の人に百首よませて披講に五首の會
　ありけるを安成に代りて
　春
一春ぞかし去年もおろかに過し來て花に驚く白川の里
　夏
二夕立の露吹き拂ふ松風に夏さへ晴るゝ小野の山かげ
　秋
三身にとまる思を狹の上葉にて此ころ悲し夕ぐれの空
　冬
四寂しさの限りは雪にふりこめつ立田の里の鹿の通路
　戀
五打返しあまる思になぐさめて戀に宿かる我が涙かな
　　詠二五首和歌一　　加法師丸上
　春
六雁がねは霞のそこにおとづれて春かあらぬか曙の空
七春ぞかしこともおろかに詠め來て花に慇く白川の里
八春も知らぬ我山里の夕霞色とはよその人や見るらむ

　夏
九時鳥なのりて過る尾上よりはなれて落る聲の色かな
〇夕立の露吹きはらふ松風もなほとゞろせき夏の山陰
　秋　ヒテ秋之心ヲ詠
一身にとまる思を狹の上葉にてこの比かなし夕暮の空
　冬
二寂しさの限は雪にふりとめつたつたの里の鹿の通路
　戀
三打返しあまる思になぐさめて戀に宿かる我が涙かな
　春山朝
四昨日迄まだしき花も咲果て今朝身にしむは春の山風
五よし野山花まつ春の曙の心のいろをかすみにぞ見る
六春の今朝花には厭ふ山風の霞を分てのどかにも行く
　夕早苗
七早苗とらぬ麻の衣の夕濕り袂りてぞ見る田子の裳裾を
八秋遠き烏羽田の面の夕早苗頓ては末に風の見ゆらむ
九頓てさは伏見の小田の夕早苗葉末の風の秋の色なる
　行路秋
〇糸瀕より合せたる山路かなさを鹿の音に蟲の聲ごゑ
一草枕鹿に契を結びおきて野にも山にも秋ぞかなしき
　曉時雨
二夢覺むる野中の庵の槇の屋にわく方もなき初時雨哉
　松經レ年
三住吉の松を久しと數ふれば過る千年の末もありけり
　　詠二五首和歌一　　前大僧正御判
　春夜
四春の夢の覺むる涙の袖の上に月や非ぬと問人もなし
　夏曉
五夏の月に有明の山は淡路島住吉の松に風ぞすゞしき
　秋朝
六萩が枝に朝行く鹿も心せよ夜はの白露ほさで眺めむ
　冬夕
七大はらや誰すみがまの夕煙心ぼそくて年もへぬらむ
　戀
八ことゝはに惑ふ習を習とて戀こそ人の此世なりけれ
九我世更て春の夢路を行末の現も知らぬ身を如何せむ
〇如何にせむ夢にも花を思ひねの覺むる枕に春の山風
　關路花

一風立ちし秋より冬に年越えて今日は花見る白川の關
　海上望
二さす汐の星の光のみだるゝや難波の蘆の螢なるらむ
　野宿月
三野べの草を結ぶ光なよそに見て月は雲路に止る物かは
　川邊雪
四降る雪の下に汀や氷るらむ香さへほそき賀茂の川波
　暮山戀
五夕まぐれ月待空の山のはを今夜たのめて誰詠むらむ
　　詠二五首和歌一
　春夜
六いかにせむ秋社駒し夜はの床に春さへ多く露の置らむ
七たとふべき心ぞいとゞ曇り行く長柄の橋の跡の霞に
八志賀の浦の波よりかすむ曙に山吹おろす春の初風
九志賀の海人の心や空に消えぬらむ波より霞む春の曙
〇難波江の蘆の枯葉の春風に秋見し露の袖にこぼるゝ
　　詠二百首和歌一　仙洞御歌合次元　慈鎭
　水鄉春望
一霞吹く松風いそぐ波の上にはまなの橋を誰作りけむ
二四方の海や霞のどけき松が浦の春の淺に春風ぞ吹く
三淺綠澤べに移す春の色はみつのみ牧の眞菰なりけり
四志賀の浦や長柄の山の春風に待とる波に花咲にけり
五住吉の松に霞の色そめて春のみなとに春かせぞ吹く
六難波がた霞のどけきあけぼのに春風よする沖つ白波
七よさの海の霞に消えて行く雁の遲るゝ列や螢の釣舟
八春の色を誰をさめけむ伊勢の海二見の浦の曙のそら
九曙は春なりけりな難波がた汀のあしもなほ一かすみ
〇春と見る霞なりけり鏡山こしに波立つ志賀の明ぼの
一春風に波の花てそ咲きにけれ大津の宮の春の明ぼの
二尋ねきてなづさふ田子の浦風に袂をあらふ春の藤波
三如何にせむ朧月夜の有明もいなのみなとの春の松風
四波にかへて霞の袖をかづく海人の心そらなる春の曙
　山路秋行
五袖にまた木の葉横ぎる風かなれぬ山路の秋の夕暮
六足曳の山立ならす鹿の音は我が行道の知べなりけり
七秋の風を松に任せて鳴く鹿は我行道の知べなりけり
八立田山秋行く人の袖をみよ木々の梢も時雨なりけり
九心さへ時雨れてぞ行く立田山木の葉横ぎる秋の嵐に

〇六木の葉ちる山路分來て悲しきは秋を泊瀬の入相の聲
一九月影の出べき嶺の鹿の音は我が行道の知べなりけり
二〇秋霧の晴れ荒みたる尾上より袖に紅葉をかす嵐かな
二一旅衣露はすひまもあらしかなれぬ山路の秋の夕暮
二二志賀の浦や長柄の山の春風をまつ船波に花咲にけり
二三暮ぬとも月待出て尚行かむ雲こそなけれ山のはの空
二四心さへ時雨てぞ行く立田山木の葉よこさる秋の嵐に
二五住吉の松に霞の色そめて春のみなとに春かぜぞ吹く
二六袖にまた木の葉よこさる嵐かな立田の里の秋の通路
詠三首和歌一　大僧正慈鎮
春風不レ分レ處
二七惜景ねて花なき里を詠むればいづくも同じ春の山風
梅花薫二曉袖一
二八思寢の夢も明やらぬ袖の上に梅より過て風の落來る
曉霞隔二旅山一
二九あれや尚明けてこゆべき嶺ならむ霞を透る遠の白雲
三〇手折つゝ我もかへるの山のはに霞に宿を曙なる
三一旅衣ぬれてかたしく山のはに霞の袖に色のこりける
詠三三首和歌一
遠島朝霞
三二はるかなる波路の春の曙にしばし霞の島がくれ行く
隣家夜梅
三三春のみや主も綾なし梅の花咲ぬ宿にも香やは漏るゝ
三四梅の花咲ぬ宿にも月はすむ色をも香をも風ぞ嬉しき
三五人とはぬ山路の雪も村消えて春の暮にぞ跡は有ける
三六來る人もなくて年ふる山ざとに春の跡つく雪の村消
山家殘雪
三七山かげや過ぐる日數に村消えて春の跡つく庭の白雪
三八山陰や春をも知ぬ庭の雪を去年とや云む殘とや云む
海上霞
一月を見し秋かあらぬか霞しく春のみなとの有明の空
二押なべて霞にけりな難波潟今朝のなごろは音許して
三見渡せば沖つ波間の舟ながら押こめてける朝霞かな
四波の音も霞のそこにしづむなりあやしや里の春の曙
山路花
五山櫻匂ひをとめて尋ねきぬ散りなむ道を栞にはして
六昔より花に契をむすび來て春のみこそは志賀の山里
所レ神戀
七打返しうけすばいかに古も戀せじとこそしける襖を
八ねぎ返るい嶋きの中の丸寢より良とも見よ我夜床迄
草野秋近
九萩が枝の露の色こそたゝならね夏野の草の秋の夕暮
一〇鹿の音を隣にしむる萩が枝の露に色ある野べの夕暮
水路夏月
一一月にのる波の夜はこそ短けれ詠めてくだす淀の川舟
一二月影のさすに任せて行舟は天の川瀬や泊りなるらむ
雨後聞レ蟬
一三夕立の雲より出づる夏の日を待ちとる物は蟬の諸聲
一四晴ぬるか杜の下枝の雨隱れまだひぬ露に蟬の鳴く也
詠三三首和歌一
曉聞二郭公一
一五ほの〴〵とまだ倉橋の五月雨に山隱れ行く郭公かな
一六郭公有明の月にかへて聞かむ五月の雲にもる〳〵一聲
一七尋ねつるかひも有馬の郭公月と旅寢の空に鳴くなり
松風暮涼
一八山かげやなれて岩根に夕涼み松にぞ夏も秋風は吹く
一九山かげやむすぶ岩ねの水のおも秋の波立つ松の夕暮
遇不レ逢戀
二〇誰に問て慰めましの詠めより重ねし袖の淵て答ふる
二一枯果る現社あらめいかにせむ人も木草も夢に成行く
詠三三首和歌一
社頭祝言
二二行末の流もつきじ過ぐる代は苗代水を神にまかせて
雨中時鳥
二三時鳥ぬれて鳴く音ぞなつかしき句も雨も立花のころ
野亭水涼
二四おかねども扇も露もわすれ水野澤の庭の夏の夕ぐれ
詠三三首和歌一
初秋風
二五初秋の風とは何ぞ萩の葉を籬に思ふ人ぞ知るらむ
山家暮
二六住みしかや函の山下朝づく日よそに成行く夕暮の空
社頭雜
二七大堰川松のお山の靜行ば神さよる身の影ぞうつれる
詠三三首和歌一
月前雁
二八玉章の月に契や結ふらむ數さへ夜はの秋のかりがね
月前旅
二九清見潟波に數へぬ旅寢にも今夜の月に今夜をぞ知る
月前戀
三〇雲ならぬ涙も拂へ秋の風今夜ばかりの月をだに見む
五月二十四日消範奉レ書給三首題一來二十八日於
三一日吉郷一在歌合一可レ被レ發二遣勅使一之
寄レ月祝
三二君が代の雲吹き拂ふ松風に住吉の浦の月を見るかな
寄レ旅戀
三三誰にとはむ波か涙か藻鹽草數津の夜はに袖の萎るゝ
三四よしさらば綱手を出でしより旅ねに宿る我が心かな
三五夢の裡にさらぬだにとや答ふらむ旅寢に宿る我心哉
三六草枕我が思ひ寢のおなじ夢を都の床に誰か見るらむ
寄二山雜一
三七いかにせむ我が立柚の古に吹き替り行く風の音かな
三八法の火を君挑げずは如何にせむ我が立柚の夕方の空
三九君が代に月待ち出でゝ誰か見む我が立柚の夕關の空
已上三首合點同二十六日遣之其外擬作也
詠三三首和歌一
月前秋風
四〇月影の出でつる峰の松の嵐ふくれば野べに荻の上風
四一秋といへば月を弄ぶ嵐かな待出る山の峰の木の間に
水路秋月
四二影清き月は波間にいづみ川秋の十日の今日みかの原
曉月鹿聲
四三月影にあかで有明の山のはや秋鳴鹿の立どなるらむ
詠三三首和歌一　信　光
秋日易レ暮
四四程もなく今日も暮ぬと云ふとや誠に秋の哀なるらむ
四五萩桔梗
四六萩うつ砧のおとは曉の鐘のあはれにつゞきぬるかな
四七搖つ人は替りやしぬる唐衣よすがら袖に我が涙かな
毎月過戀
四八七夕の年の契の哀さを月になしてもつきせぬやなぞ
古寺秋風
四九思入し吉野のたけの夕暮に外にならはぬ秋風ぞ吹く
月前曉雁

八五有明の暁の涙にくもる月はさゆる心の限りなりける
蟲聲增戀
九五松蟲よ物思ふ袖の露になけ尚こりずまの類にをせむ
〇六來ぬ人を待ちつる宿の淺茅生に露置添ふる蟲の聲哉
詠二三首和歌一
落葉
一六三笠山時雨せぬ夜の木葉にはもらぬ袂も濡增りけり
曉月
二六風に殘るさほの川原の川霧の上にくまなき有明の月
松風
三六音のみぞ時雨なりける高砂の尾上の松にすぐる木枯
四六松風に吹かずもあらなむ初瀨山鐘より後の窓の有明
詠二三首和歌一　前大僧正慈鎭
寒夜冬月
五六詠むべし霜に枯れ行く武藏野の露の名殘に宿る月影
六六宮城野や霜や度おく萩の上に枯れぬは月の光也けり
七六花の露を枯野の霜に結かへて同じ野べにも澄る月哉
八六野べの月露に宿りし影を又淺茅が霜におき重ぬらむ
山家暮嵐
九六冬かいな木の葉こずゑに嵐山ふもとの里の松の夕風
〇七葛城や外山の裾の夕嵐すいの篠屋に木の葉吹くなり
一七今朝ならば叩く嵐に明てまし誰かは今は我柴の戸を
初戀
二七我戀は仄めき初むる夕づく夜曇らで見せば有明の空
三七芽ぐみいづる我戀草の春雨は袂よりこそ降增りけれ
左大將の亭にて三首の歌俄に人々よみければ
朝見二初雪一
四七夜の內は明くと見えつる初雪をげに明て社又雪と見れ
夕聞二時雨一
五七かき曇る心のそこに雲とぢて時雨をうづむ夕暮の空
晝夜思戀
六七待宵と別るゝ今朝と暮は待て空しき夜はと晝の思と
社頭冬月
七七一夜とて年古にけり松が枝に霜置添ふる冬の夜の月
古池寒草
八七蘆も尙霜がれてこそ猿澤の池に生たる草と見えけれ
聞レ詞增戀
九七言の葉に色を添つる氣色哉いとゞ涙の時雨せよとや
北野の會、已上三首靜憲法印に代りて

詠二三首和歌一
社頭松
〇八石清水神の心のすみしより影を並べてたてる松かな
一八皆人の賴む八幡の松山は君が千年のためしなりけり
二八はる〳〵と君が千年をまつ山に萬代よばふ身山かな
月前雪
三八降積る雪に重ねて眺むれば明けても消えぬ庭の月影
四八冬の月の眞にふれる雪の上に冴たる影を何に譬へむ
旅宿嵐
五八野べ寒し荻が上葉を片敷きて過る嵐を旅寢にぞ聞く
六八哀なるたつ田の里の旅寢かな峯の嵐の庭の木の葉を
七八故郷の荻はゞの枯葉に待ちとりて峯の嵐の音を聞く哉
詠二三首和歌一　桑門慈鎭
曉尋二千鳥一
八八友千鳥月に鳴くやと尋ぬればさほの川原の有明の浪
山家知レ春
九八山ざとは春のとなりとなるまゝに梅も匂もまれなく
海邊歲暮
〇九今日寄せて明日立返る年波は和歌の浦わに懸る也皃
山居春曙
一九吉野山花はまだしと日は暮れて松のこずゑに春の曙
二九吉野山月はおぼろの有明に雲よりしらむ峯の花ぞの
三九みよし野の山のかひある庵かな花咲く峯のはるの曙
四九いかにせむ姨捨山の春の雲よ花なりけりなはるの曙
五九山深みうつろふ花を峯に見て春のあはれは曙のそら
水鄕秋夕
六九難波江やたが庵ならむ蘆の葉の垣根に旅く秋の夕暮
七九粟津野の尾花が末に日はくれて波より移る秋の夕暮
八九住江に折から秋の夕づく夜こゝに聞けとや松風の聲
九九松島やをじまの海人になれてだに情は深き秋の夕暮
〇〇難波江や夕の空に秋はきて又秋ゆゑに夕ぐれのそら
一〇思はずよ長柄の山の初時雨しか行く人の袂までとは
二〇秋ふかき長柄の山に霧はれて志賀の浦わの夕暮の空
羇中眺望
三〇我がこゝろ心もあらず東路や雲なき空にふじの煙の
四〇旅の空幾への雲を越ぬらむ重なる山の峰にとはゝや
五〇清見潟波に風立つ秋のよも心のうちをぜく物ぞなき
六〇東路やふじに煙を見るからに旅の思ひは心にぞ立つ

七〇昨日こえ明日もこゆべき峯を皆一つに罩る朝霧の空
八〇ふじのねは一結して立煙に馬引とめて見る空ぞなき
九〇玄なの路や月待つ比の轉寢に雲こそなけれ姨捨の山
〇一月の入長柄の山をめにかけて今夜は過む野路の篠原
一一もしは草しきつの浦に入る月の有明の空は淡路島山
詠二妙經法師功德品悉見三千界文一和歌
前大僧正慈鎭
二一御法故身の浮雲や晴ぬらむよもの空にも四方の月影
副詠、處々六月祓
三一さもこそは川の瀨毎に河祓へ井堰にも又波の音ぬき
毎日納涼
四一涼むかな昨日もけふも一昨日も坂井の清水野澤松蔭
上人勸進講四十八願之席同詠三首和歌一
西山隱士
彌陀四十八願　第六昭週見梅樂衆生之德也
五一ながめかはす四方の淨土の光かな我極樂の望月の空
月
六一七十の山のはに社にけれ西へのみ行く夜はの月影
無常
七一はかなしや我が袖の上に置露は皆人毎の袂なりけり
八一袂毎に置ずや有ぬ夜はの露我袖の上に遁るべきかは
夏日舍利講演次同詠二十如法文一和歌
前僧正慈鎭
九一如是相を見ぞ悲き拘尸那城雙樹に分し佛舍利かさは
〇二性如是のくちぬ惠ぞ賴もしき佛の種は此身也けり
〇三是體如は東大寺なる廬遮那佛げにあか金の大佛哉
二如是力に世をおこさばや音に聞く大誓健那又は民長
三作如是に憂身も尙ぞ賴しきなすと無きなす事にして
四是因如に衣字の茂を思ふかな荻なき宿に秋の夕ぐれ
五如是緣に哀れ佛種も何よりか名殘初けむ今日の舍利講
六是報如の女この理り十にして盧しき空に秋の夜の月
七是本末究竟等にも奉くれて梢の花の根にかへりぬる
八如是相を見るぞ悲しき二月や細かにわけし望月の影
九作如是こそ砌久しき御法なれ常磐かきはに殿作して
如是相　春
〇三吉野山雲か花かとながめけむ心はおなじ心なりけり
性如是　夏
一三夏の池に本より種のあれば社濁にそめぬ花も咲らめ

鉢如是 秋
二月を待つ虚しき空のくれぬ間の心惑はす女郎花かな
如是力 冬
三梅が枝は土につく迄降雪に松の梢はたるまざりけり
文治六年二月九日西山報恩講々具足菩薩行
四辺りこし誠の道をすぎなれて今こそみつれ望月の影
霞中閑居
五立とむる春の光の霞こそすゝの篠屋の通ひなりけれ
待二契約一戀
六待ち出づる今夜の月は宵ながら心のうちは有明の空
其の夜の當座
後會、契二花時一
七又來むと契る便やなからまし花待比の圓居ならずば
尋二所緣一戀
八武藏野の草の縁りを尋ぬとも先我袖に露のこぼるゝ
柳爲二寺墻一
九老めおきし野毎の墻は朽果てゝ殘る柳を頼む計りぞ
隔レ谷戀
一〇通來る谷の小川に袖ぬれてかひなき峯に幾夜明しつ
暮中待レ花
一一まだ咲かぬ山路の花に日數へて我行里の梢いかにぞ
同三月九日報恩講
皆已成二佛道一
一二様々に浮世の花は匂へども同じ佛の身とぞなるべき
毎山花盛
一三春は唯四方の山べの名を變て皆み吉野と云べかり鳧
夜半喚子鳥
一四獨寢の枕うごかす喚子鳥かねよりさきに夢殘せとや
當座十首
依レ花忘レ行
一五春每に花に心の入りぬれば家を出にしかひ無りけり
遙望二藤花一
一六眺めやる高ねの藤の花盛り心にかゝる雲かとぞ見る
款冬変レ路
一七山吹を分行く人の衣手や春のかたみの露のうはすり
鄰鶏留レ人
一八紅のよそめの衣ぬぎかへて鄰鶏啼野に日を暮しつる
旅泊春暮
一九深川浮寢の夢に見てしがないづくか春の泊なるらむ
一所戀
二〇玉章の通ふ便りをまつ人は中々戀のひまもあるらむ
老後無常
二一思へ唯かみに霜なき人だにも消行くとの哀れ浮世を
山家述懷
二二誰かしる浮世を捨て柴の戸を頼て出しと思ふ身ぞとは
不殺生戒
二三誰も皆我身をつみて思ふべし命は惜しき物と知すや
社頭遇レ友
二四今よりも頼めぬ人に逢瀬をば尚御手洗の川と尋ねむ
同三月二十四日靜房報恩講
舍利廣流布
二五末世の亀井迄すむ影にてぞ廣く布きける光とは知る
落花滿レ谷
二六風わたる峯の梢は消えはてゝ谷にぞつもる花の白雪
建久二年十二月二十日報恩舍利講行ふとて種々
の法樂ある中にわが
聽二報恩舍利講一述レ懷
二七押なべて報あるべき善をば今日の席に招くとをしれ
別題、山家冬月
二八月影は秋に變らぬ色ながら庭の木の葉につゝく松風
同年修二報恩講一之次和歌
皆已成佛道
二九法の花散にし人はさらずとも今は佛の身とぞ成らむ
荒庭秋月
三〇昔人跡は寂しき法の庭に月とともにや影をさすらむ
同八年二月報恩講に
鷲
三一賤がすむ片岡山のなさけかな一村竹にうつる一こゑ
山
三二我山を待ぬ身ならば差越えて谷嶺迄も行かまし物を
是諸經之王
三三此法の二そぢ餘り三の品十のたとへに現はれにける
同年報恩會我願既滿文を
月
三四我が心月の光の誘はずば到らぬ隈もあらましものを
聞二報恩講會一詠二勸持品一和歌　前大僧正慈鎭
三五法に匂ふ花をいざなふ諸人は我都にも限らざるべし
山家懷舊
三六古を忍ばむとての住みかかは靜なる庵の峯の松かぜ
報恩會詠二二首和歌　御　判
五百品
三七驚の山爰になくとも導けと契りし人は又ぞすむなる
山家祝言
三八色かへぬ松おふる山に庵しめて君が千年を祈給ふに
舍利報恩會聽二講法師功德品一和歌　老僧御判
三九五種の法のしわざの花の色の映る鏡を見る人ぞなき
別詠、歲暮述懷
四〇年波は我が袖よりぞ越えて行く殘る憂身の末の松山
歲暮報恩會聽二講隨喜功德品一和歌　老病僧御判
四一其もいな命の末の道ぞよき老の悟はさもあらばあれ
佛前述懷
四二是ぞしは頼む佛の御前より思ひたゝし行くや心の
歲暮舍利報恩會聽二講常不輕菩薩品一和歌
四三春の田をまつ苗代に沈む身の同じ流は浮みぬるかな
社頭述懷
四四頼む神にみるかと問むうき哉と思果つれば落る涙を
歲暮舍利報恩會聽二講分別品一和歌　御　判
四五法の家のまさしきむねの砌より流れて通る山川の水
四六年をへて暮行年はうもれぢも埋ぬ名はまだ止りつゝ
窮冬良辰之作於二當社十禪師窓前一勤二行舍利報
恩會一之次聽二講常不輕菩薩品一和歌　老僧慈鎭
四七春の田は鞏れて社は苗も蒔け佛の道も其よりぞ行く
社頭述懷
四八打歎き詠むる空に頼む袖の我が願ざる事を照さゝらめや
四九嬉しくも七ます神の十の色御國のわざを手向つる哉
文治六年二月二十八日山王講
無上寶聚不求因得
五〇迷ひ來て思もよらぬ深山べにやがて眞の道の有ける
山花始開
一唉初むる峯の櫻のよそながら歎の花も開かましかば
問聞增戀
二心から妹が情を聞きそへつ問ず語りを人はせましや

建久元年九月十三夜 九條殿にて二題百首の次で
に當座の會に
雨後十三夜
長月の今宵の空を汚さじと時雨るゝ雲の思知りけり
月前契二秋後一
誰も又今宵の月を忘るなよ秋のみ空に廻り逢ふまで
たのめおく人の情を哀とも冬こそは見め秋の夜の月
夜半思立戀
嬉しくも鐘より先に夢覺めて頼めし夜はの思出ぬる
同月廿二日歌合之次有二當座之歌合會一
夜憶二紅葉一
袂にも夜の錦は有る物をねやまのよそに時雨過なり
此歌後成入道に被レ番勝畢
時雨ゆゑ袖に色ある寢覺かな山廻りする梢のみかは
暮秋曉戀
歸るさに飽ぬばかりを情にて秋の別を思はざりせば
此歌持
くれて行く秋の哀の有明はつきせぬ戀の限なりけり
同二十四日又參二殿下一有レ會
秋日易レ暮
程もなく今日も暮ぬと云ふとや眞に秋の哀なるらむ
此歌被レ番二御歌一勝
終夜擣衣
衣うつきぬたの音は曉のかねの哀につゝきぬるかな
每月過戀
七夕の年の契の哀さを月になしてもつきせぬやなに
建久二年庚申の夜、喜色有レ花
淺緑春の色ある梢かな待ちえてにほふ花のほかまで
山路殘雪
谷川の岩本苔の春の雪をちらぬ山路の菊とこそ見れ
水畔
梅の花匂も池にうつればや波吹く風も尚かをるらむ
被二制二主君一戀
我君に從ふともよなきげに妹が情のなきまばかりぞ
籠二關路一
月影の清見が關に聞く物をいでば立ちのけ浦の夕霧
羈中會戀
草枕いそぐいく野に今宵又君故ならで結ぶべきかは
水邊述懷
人知れず心と友にすむ庵や我もありとや山の井の水
已上三首故大納言の當座の會
短冊
立春
年こゆる山のかひより眺むれば春と共にも立つ霞哉
三輪の山杉の梢をこめつれば霞ぞ春のしるし也ける
霞
春霞ふじの煙に宿かりて幾への山をへだて來つらむ
鶯
あかざりし花のこずゑは青葉にて鶯おくる暮の春風
歸雁
三吉野の花に別や惜むらむ鳴きてぞ歸る春の雁がね
花
花ざかり霜も時雨も露もなし獨つらきは春の山かせ
遠近見レ花
此のころはみな白川の花盛まことにはよも峯の白雲
吉野山ふもとは花の匂にてながむる末は峯の白くも
花下遇レ友
春うれし契らぬ人も櫻さく交野のみのゝ花の夕ぐれ
藤花
波は藤藤は波にぞかゝりける田子の浦わの春の暮方
雨無阿彌陀心ぞいとゞ靜かなる松より外に藤の夕色
旅宿暮春
東路や旅の篠屋にけふ暮ぬいざさは頓て春を逕らむ
更衣
四十餘り衣ばかりを脫き更へて心は同じ卯の花の里
九重に匂ひし花の色ながらうれしき白髮かな
花の色を惜む心はそれながら更へて嬉しき藤衣かな
卯花
此ころは櫻が枝に雲はれて卯の花垣に月を見るかな
郭公
花はちりぬ月はまだしきなつ衣慰めえたる郭公かな
五月雨の雲に色ある梢かな山ほとゝぎす一聲のそら
明けぬとて月は高嶺に入りぬらむ聲をば殘せ山郭公
ほの〴〵とまだ倉橋の五月雨に山隱れ行く郭公かな
菖蒲
あやめ草沼の岩根の長き根に心ひきをも鳴く蛙かな
橘
五月雨の雲は梢にはれのきてはな橘に風そゝぐなり
いにしへを忍ぶみぎりの諸人の袖よりつたふ橘の風
古をしのぶみぎりのたちばなは匂も露も袖の夕かせ
野徑晚立
宮城野の萩に宿かる夕立に錦をきても雨にぬる〳〵
夕立や雨もふる野の末に見て急ぐ頼みは三輪の杉村
蓮
ながむべし池に蓮の花ざかり濁にそまぬ我が心かな
幾宵か西に心の通ふらしはすのうは葉の露の夕ぐれ
盤照二古鄕一
古のおもかげみだす盤かな高津の宮の松のこずゑに
湖上盤火
盤こぶ志賀の大わた關ふかく海人なき浦に藍の漁火
松風暮涼
夕まぐれむすぶ岩井に袖ひちて松の梢は夏も秋かせ
松をはらふ野守の夏の夕風に鐘の音さへ秋の聲なる
松風忘レ扇
宿すゝし扇は秋の夕まぐれ夏かあらぬか庭の松かせ
六月祓
去年の今日のあすより後の一年の罪なき月の祓也是
立秋
風の音の變初ぬる今日はまづ萩の上葉に秋や立らむ
鹿は今幾かありてか聲たてむ夏野の萩に秋の夕ぐれ
小萩原まづ咲く花に露ちりて夏野の草の秋の夕ぐれ
野露
秋の野べに秋の白露置初めて袖にしたしき秋の夕暮
野べにおく千年の秋の初露に潤ひぬらむ君が代の民
森露
吹ぬなり潘てぞ人の身にもしむ信太の森の露の下風
七夕
七夕はまつらむ物を夕月よあまの川原の有明のころ
蟲
秋の野の小萱が下の蟲の音に心亂れぬ人はあらじな
旅宿蟲聲
庵さす野べの小萩が蟲の音に乾くまもなき旅衣かな
いつよりも秋は旅こそ哀なれ野路も山路も蟲の色々
月

四秋の夜はたがひにすめる詠めかな心は月に月は心に
五飛鳥川定なき世をいとはねば淵にも瀬にも宿る月影
六秋の月由なし今は雲に入れ汝し滑すば我も世に在じ
七月にのみ心を添ふる我身哉曇れば最ど世の厭はしき
八照さなむ法のむしろの秋の月けふ諸人の行末のやみ
九今宵社云ねど秋と知られぬれ月より前の山のはの空
一世々をへて法の筵を照さなむ秋の限りぞ秋の夜の月
二月ゆゑは憂身ぞいとゞ厭はしき涙曇らで誰詠むらむ
三月も今宵昔をそへて見ゆるかな山の高嶺の法の筵に
四秋といへば月より月に移る世の心の果ては有明の空
五悟行く雲は高嶺にはれにけり長閑に照せ秋の夜の月
六月影にいざよふ波を數れば君が千年の行へ知らすも
七秋の空の清くなり行く月影に氷をあらふ宇治の川波
林中暁月
八み空とて槇立つ山に木隠れぬ月さへよそに有明の空
深山見レ月
九月影は峯の檜原にかたぶきぬ熊を友にて有明のそら
暁天聞レ鹿
〇山の家は有明の空に鹿鳴きてつきせぬ物は哀也けり
檐簷厭レ夕
一夕影をいとふ花かと心みむしばしなくれそ朝顔の花
秋旅
二動きなき君が行幸に馴々れて旅心ちせぬ宇治の山哉
三萩の下に今夜枕を並べつる鹿は旅とも思はざらむ
九月盡
四いかにせむ今日を限の秋の露を物思ふ我が袖に懸つる
五あすは倚梢の秋や忍ばれむ庭の木葉に時雨ふるとも
六闇路より秋の心に迷ひけむ人の愁も今日やつきなむ
時雨
七神無月山めぐりするわび人の袂にかよふ村雲のそら
八枯果つる木の葉の庭に音はして梢寂しき村時雨かな
九打時雨寂しき色に成にけりいざとよ秋の鹿鳴すとも
河邊千鳥
〇いかにせむさほの川原の霧の間に我友衡鳴て立ぬる
一友千鳥さほの川原に鳴く夜はに聲打そふる嶺の松風
二川千鳥思兼ねたる冬ぞかし浮世も悲し孰ち行かまし
三思兼ねいづち行まし小夜千鳥川瀬の波に聲も寒けし
炭竈
四厭ひ果てゝはや山里の炭竈よその煙より思立つらむ
雪
五三吉野の奥ゆかしくも思ふかな外山は淺き初雪の庭
六あらゝかに心を風の誘ふかな雪まだおちぬ雪の夕暮
社頭雪
七降雪にたゞすの竹も折れふして氷に返る賀茂の川波
八埋れ行く森の下風神さびて雪に色なきあけの玉がき
九深く頼む神のいがきに積るらし浮世の後を思ふ白雪
野亭深雪
〇積る雪の少し高きや人の庭道こそなけれ煙だにたて
一積雪の障る梢もなき野べの宿の庭にぞ深きをば知る
歳暮
二年の明て浮世の夢の覺べくば暮る共闇を歎ざらまし
三年の明て覺べき夢を待つとして暮行く闇を厭ふ也皃
久忍戀
四包めども倚年月の重なれば物や思ふと又問はれぬる
五我戀は忍の種をまきそめて坂間に草の生ひかはる哉
近不レ逢戀
六思ひ分かず小屋の蘆垣隔をなみ逢はぬ恨と近き情と
台在隠戀 前元
七歸なむ又來る人を待夢を正しく見ては世にも如何は
契二來世一戀
八諸共に戀しなばこそ後世を契るかひある中と思はめ
遇無レ實戀
九逢うて逢はぬ戀とはなにぞ唐衣重ぬる夜はの恨也皃
見レ夢増戀
〇打返し逢ふと見つるを現にて覺むる思を夢となさばや
夜戀
一夜はの秋幾度計り寐覺しつと語らば社は夢も見べき
二君が代の久しきに寄せて慰めむ夜はの長き心強きゝ
遇不レ逢戀
三恨みじやあひてかひなき我袖を此度事で泣重ぬらむ
四重ねても今一しほの色ぞこき心ばかりにぬるゝ袂は
思
五思ひより通ふ雫のいか計り苦しき海の波となるらむ
六思ならぬと社無れ世中は憂に堪たる身こそつらけれ
七誰故に秋さへ月のよそならむ涙ならでは曇る空かは
八詠むれば晴れず時雨るゝ袂哉月より落つる我涙かは
戀
九戀と云心の人に無かりせばあるかひも有じ秋の夕暮
〇とに斯に由なき道に入にけり逢ぬ恨とあふ嬉しさと
暁嵐に鐘の音過ぎて
一夢はいかに嵐に鐘の音過きて誰あみだ佛の聲聞ゆ也
寄二海水一朝
二思知る浮寝の床の朝霧にたが行舟のよそになるらむ
三ほの〴〵と波に離るゝ朝霧にまぜて吹こす磯の松風
寄レ山暮
四山深き我庵よりや知るべせむたぐひに迷ふ秋の夕暮
五松風に雲うちなびく夕暮の空に物おもふ秋の山ざと
六秋の山によそなる松の梢より袂にかへる夕時雨かな
山風
七君が代を幾千年とか調ぶらむ松より傳ふ宇治の山風
八君が爲め心ばかりを散すかな紅葉まだしき秋の山風
野
九野べはいつも哀なれども秋は倚花の千種に露の色々
一近江路や野路の篠原夕行けば志賀より歸る小波の風
二野を見るに倚あまり行く心かな秋より外の秋の夕暮
三法の庭を鹿鳴野べの外かはと思へば今日も秋の夕暮
關
四行末は法の關ともなりぬべし今日の筵にあふ坂の山
川
五哀れなり我が山川の岩波を心にかけて幾世かもへむ
瀧
六堰入るとも心もあらじ音羽川世の浮ふしの瀧の白糸
山家
七さむしろや倚大原にしくはなしつゝく聖の跡も哀に
松
八哀とや思ひ出づらむ住吉の松たのみこし藤の末葉を
苔
一山川の物うき音は岩が根に拂はぬ苔を潜るなりけり
二山川の音なきほどに袖ぬれて苔より苦につたふ白波
三昔人埋れぬ名を嬉しとや苔の下にも今日は見るらむ
鶏
四忍びかね袂をしぼる限りかな人こぬ宿の鳥の八聲に
暁更鶏

二和歌の浦に月影送る有明に蘆べのたづの聲ぞ悲しき
三籠の内におのが毛衣霜さえて子を思ふつるの曉の聲

雜

四思ひくまの人は中々なき物を哀に犬の主を知るかな

友

五唯二人頼むかひある中ならば先だつ雲を見ぬ由もがな
六花や月を獨ながめぬ情には雪にぞ深く思ひ知りぬる

神祇

七立ちかへる世と思はゝや神風や御裳濯川の末の白波

旅

八東路や清見が關の月の夜を數へてこそは思立ちしか
九露ともに結ぶとすれば草まくら夢もねざめも曉の空
一〇自からたのむ屋さへ疊りつゝ闇には旅の空ぞ悲しき
一一さみだれて苔の下伏袖深し入れねよ鳥の一聲のそら

旅宿曉思

一二草枕秋の心にまどろめば覺むる夢路も春のあけぼの
一三都にも月はかはらぬ有明のくさの枕に露ぞこぼるゝ

別

一四古の別を忍ぶ法の庭もいく度あかで暮れかゝるらむ

無常

一五五十餘り別し人を數へ來て殘る憂身も殘るべきかは

述懷

一六世中にいと心えゝ見ゆる哉神も佛も知るや知らずや
一七さすがなほ愚に誰を包むかな恥かしからぬ人の心を
一八我が心神と佛と思はえて此世の人のよそになりぬる
一九心なき心にだにも厭はるゝ身はいかにして長へぬ覽
一〇今年計り惜しき命の故やなに花の春より月の秋まで
一一自ら賊の道に入りし身をかへる心のなきぞかしこき
一二今日たのむ神も佛も誠あらば絶えずも通へ法の席に
一三おろかなる心なれども思ふことは往生淨土臨終正念
一四思ひ入れて詠むる春の曙は眞如の理にも通ふ也けり

雨中述懷

一五曇る夜の空吹き拂へ神風や雨なつかしき袖も由なく
一六軒の雨になり行く袖の雫かな心の雲や空にみつらむ
一七大方もうき身はいかになれる世ぞ窓打雨も物語せよ
一八袖に移る雫ばかりやはるらむ都もおなじ雨の夕暮
一九大空に友なき友とひぢぬらむ雲よりも又涙落ちけり
二〇なれもうき此世をおもふ涙かも窓うつ雨よ物語せよ

一いかにせむ詠むる空もかきくもり軒の雫よ袖の涙よ
二袖の上にふるか涙と諸共に窓うつ雨に物がたりせむ
三今は唯憂身浮世に有りかねて窓うつ雨よ友と成ぬる
四語るべき人だにもがな暗き雨の窓打聲に覺むるよの夢

懷舊

五長らへば思ひ出でよと思ひけり昔情の人のふるまひ
六我友と賴みし人はうせ果てゝ忍ぶ昔ぞいとゞ戀しき

管絃

七古をとふ聲のねを哀れとや奉ひきそふる庭の松かぜ

釋敎

八さても〳〵殘る塵の嬉しきは慾のみ山に出でし月影

出現於世

九月影の出でずばいかに詠めまし我が闇深き庭の蓮を

垂是寶車

一〇今ぞ知る今日の車に法の道は門より外に有ける物を

不求自得

一一舟の内に老にし人を思ふにも求て社は尚えざりしか

等雨法雨

一二それも露昔き法の雨なればいるあぢしまの森の下草

無有麤事

一三目に見えず怪しと思ふ頼まで今日の御法を守べき哉

化城喩品

一四是もなほ心にとまる旅人のかりのやどりの後の通路

化作大城郭

一五思ふなよ浮世の中を出果て宿りおくにも宿は有けり

露著內衣裏

一六今はわれ思ひ返して唐衣かけける裏の玉を見るかな

內秘菩薩行

一七それも尚到らぬ隈は無かりけり心の內に月を隱して

寶塔品見二如來

一八眺れか日眺れか月と詠むれば驚の高嶺のみ空也けり

皆見龍女

一九見るもうし南の海のいろくづの五の雲の晴る氣色を

我不愛身命

二〇身を捨て御法を思ふ人ならば死なむ後にも今日を忘な

又夢作國王

二一御法ゆゑ夢に成りにし天皇は覺むる現も又夢のほど

分別功德品

二二法の宿のまさしき胸の砌より流れてとほる山川の水
二三泉川ことしも今はみかの原三笠の山の春ぞまちかき
二四長しと云ふ命の數は身にしめて人の外行く峯の松風
二五一年を幾たび夢に三熊野の浦の濱ゆふ重ねきぬらむ

定增壽命

二六千年まで萬代までと定まりて松に十廻花の咲くまで
二七月波を御法の川に懸てこそよみかなへつれ定增壽命

祝

二八君が代に千年比べをせさせばや長井の浦の松と鶴とに

和尙御詠類聚事

度々御百首嘉曆之比類聚已訖今所レ殘懷紙舊草自然擬作諸人賜答等也重集之仰二聊子丸一令レ清二書之一先爭云始レ之後經二十九年一其間天下變革世上騷亂幾許哉而今異俗書籍曾不二紛散一令玉篇什重終二書寫一偏是誰法天台之冥助祖師和尙之擁護也不レ堪二欣悅一聊述二由致一于時貞和二年五月二十三日吉水末流尊圓親王記

藻鹽草尙書添へて和歌の浦に殘れる玉も拾盡しつ

聊子丸書追之時雙紙裏紙に書付歌

古の和歌の浦わの藻鹽草しらで書置く跡や殘らむ

此拾玉集者申二請竹內門跡御本一書寫之處不審繁多也仍申二出冷門御本一再三比校而正二烏焉之誤一尤可レ爲二證本一者也

文祿第第林鵞峯判

丹山隱士芝旨　在判

山家和歌集

山家和歌集上

春

立春の朝よみける

一九年くれぬ春來べしとは思寢に正しく見えて通ふ初夢

八山の端の霞む景色に著きかな今朝よりやさは春の曙
一八春立つと思ひも敢ぬ朝戸出にいつしか霞む音羽山哉
二八立かはる春を知れとも見せ顔に年を隔つる霞也けり
三八解け初むる初若水の氣色にて春立とのくまれぬる哉
四八門毎に立つる小松に翳されて宿ふ宿に春は來に鳧
　元日子の日にて侍りけるに
五八子日してたてたる松に植添へむ千代重ぬべき年の印に
　山里に春たつといふことを
六八山里は霞渡れる氣色にて空にや春の立つを知るらむ
七八難波わたりに年越に侍けるに春立心をよみける
八八いつしかも春來に鳧と津の國の難波の浦を霞罩たり
　春になりける方違へに志賀の里へ罷りける人に
　具して罷りけるに逢坂山の霞みたりけるを見て
　題しらず
九八わきて今日逢坂山の霞めるは立後れたる春や越らむ
　春來てなほ雪
一九霞め共春をばよその空に見て解けむともなき雪の下水
二九春知れと谷の下水もりぞ來る岩間の氷ひま絶にけり
三九霞まずば何をか春と思はましまだ雪消ぬ三吉野の山
　海邊の霞といふことを
四九藻鹽やく浦のあたりは立ちのかで煙あらそふ春霞哉
　同じ心を伊勢に二見といふ所にて
五九波こすと二見の松の見えつるは梢に懸る霞なりけり
　子日
六九春毎に野べの小松を引人は幾らの千代をふべきなる覽
七九子日する人に霞は先立ちて小松が原をたなびきに鳧
八九子日しに霞たなびく野べに出で、初鶯の聲を聞く哉
　若菜に初子の合たりければ人の許へ申遣しける
九九若菜つむ今日に初子の合ぬれば松にや人の心ひく覽
　雪中若菜
一〇今日は唯思も寄で歸りなむ雪つむ野べの若菜也けり
　若菜
二〇春日野は年の內には雪積て春は若菜の生ふる也けり
　雨中若菜
三〇春雨のふる野の若菜生ぬしれ〳〵摘まむ筐手ぬきれ
　若菜に寄せてふるきを思ふといふことを
四〇若菜つむ野べの霞ぞおほれなる昔を遠く隔つと思へば
　老人の若菜といへることを
一〇卯杖つき七草に社出にけれ年を重ねて摘める若菜は
　寄若菜遠懷といふことを
二〇若菜生る春の野守に我なりて浮世を人に摘知せばや
　鶯によせて思を述べけるに
三〇うき身にて聞くも惜しきは鶯の霞にむせぶ曙のこゑ
　關中鶯といふことを
四〇鶯のこゑぞ霞にもれて來る人めともしき春の山ざと
　雨中鶯
五〇鶯のはるさめ〳〵となきゐたる竹の雫や涙なるらむ
　すみける谷に鶯の聲せずなりにければ
六〇古巢疎く谷の鶯成果ては我や代りて鳴かむとすらむ
七〇鶯は谷の古巢をいでぬとも我行方をば忘れざらなむ
八〇鶯は我を巢守に頼みてや谷のほかへは出で、ゆく覽
九〇春の程は我住む庵の友になりて古巢ないでそ谷の鶯
　きゝすを
一一もえ出る若菜あさると聞ゆなり雉子なく野の春の曙
二一生ひかはる春の若草待侘びて原の枯野に雉子鳴く也
三一片岡に芝移りして鳴く雉子立羽音とて高からぬかは
四一春霞跳ち立出で、行にけむ雉子住む野を燒てける哉
　梅を
五一香にぞ先心占盡く梅の花色はあだにも散ぬべければ
　山里の梅といふことを
六一香をとめむ人を社まて山里の垣ねの梅の散らぬ限は
七一心せむ賤が垣ほの梅はあやな由なく過る人留めけり
八一此春は賤が垣ほにふれわびて梅が香とめむ人親まむ
　嵯峨に住みけるに道をへだて、坊の侍りけるよ
　り梅の風に散りけるを
九一主いかに風渡るとて厭ふらむよそに嬉しき梅の匂を
　庵の前なりける梅を見て詠める
一二梅が香を山懷に吹きためていり來む人にしめよ春風
　伊勢のにしふく山と申す所に侍りけるに庵の梅
　かうばしく匂ひけるを
二二柴の庵に夜る〳〵梅の匂來て優しき方も有る住ひ哉
　梅に鶯の鳴きけるを
三二梅が香にたぐへて聞けば鶯の聲なつかしき春の山里
四二作り置きし梅の衾に鶯は身にしむ梅の香や移すらむ
　旅のとまりの梅

五二ひとりぬる草の枕の移香はかきねの梅の匂なりけり
　ふるき砌の梅
六二何となく軒壞かしき梅故に住みけむ人の心をぞ知る
　山里の春雨といふ事を大原にて人々詠みけるに
七二春雨の軒垂籠むるつれ〳〵に人に知られぬ人の栖か
　霞中歸雁といふことを
八二何となく覺束なきは天のはら霞に消えて歸る雁がね
九二雁がねは歸るみちにやさぞふらむ越の中山霞隔て、
　歸雁
一三玉章の端書かとも見ゆるかな飛後れつ、歸る雁がね
　山家呼子鳥
二三山里に誰を又こは呼子鳥稠のみこそすまむと思ふに
　苗代
三三苗代の水を霞はた廉きてうちひの上にかくる也けり
　霞に月の曇れるを見て
四三雲なくて朧なりとも見ゆる哉霞かゝれる春の夜の月
　山里の柳
五三山がつの片岡かけてしむる庵の境に立てる玉の小柳
六三柳風にみだる
七三見渡せば佐保の川原に繰掛けて風によらる、青柳の糸
　雨中柳
八三中々に風のおすにぞ亂れける雨に濡れたる青柳の糸
　水邊柳
九三みなそこに深き綠の色見えて風になみよる河柳かな
一四待〻花忘〻他といふことを
二四待つにより散ぬ心を山櫻さきなば花の思知らなむ
三四獨り山の花を尋ぬといふことを
四四誰かまた花を尋ねて吉野山苦ふみ分くる岩傳ふらむ
　花を待つ心を
五四今更に春を忘る、花も有じ安く待つ、今日も暮さむ
六四覺束ないづれの山の嶺よりか待る、花の咲始むらむ
　花の歌あまた詠みけるに
一四空に出て眺くともなく尋れば雪とは花の見ゆる也鳧
二四雪とちし谷の古巢を思ひ出で、花にむつる、鶯の聲
三四吉野山雲をばかりに尋入りて心にかけし花を見る哉
四四思ひやる心や花にゆかざらむ霞こめたる三吉野の山
五四押なべて花の盛になりにけり山の端毎にかゝる白雲
六四紛ふ色に花咲きぬれば吉野山春は晴れせぬ峯の白雲

七四七
七吉野山峰の花を見し日より心は身にも添はず成にき
八四あくがるゝ心はさても山櫻散なむ後や身に返るべき
九四花見れば其謂れとは無けれども心の内ぞ苦かりける
〇五白川の梢を見てぞなぐさむる吉野の山にかよふ心を
一五引替て花見る春は夜はなく月見る秋は晝も無らなむ
二五花ちらで月は曇らぬ世也せば物を思ぬ我身ならまし
三五類なき花をし枝に咲かすれば櫻に並ぶ木ぞ無りける
四五身を分けて見ぬ峰なくつくさばや萬の山の花の盛を
五五櫻咲四方の山べを霞るまに長閑に花を見ぬ心ちする
六五花に染む心の爭で殘りけむ捨果てゝきと思ふ我身に
七五白川の春の峰のうぐひすは花の言葉を聞く心ちする
八五願はくは花の下にて春死なむその二月の望月のころ
九五佛には櫻のはなを奉れ我がのちの世を人とぶらはゞ
〇六何とかや世に有難き名をえたる花は嘸櫻に勝りしもせじ
一六山ざくら霞の衣あつくきてこの春だにも風包まなむ
二六思遣る高嶺ぬ雲の花ならば散ぬ七日は晴じとぞ思ふ
三六長閑なる心をさへに遇しつゝ花故にこそ春を待しか
四六かざこしの嶺の續きに咲花はいつ盛ともなくや散らむ
五六習ありて風誘ふとも山櫻尋ぬる我を待ちつけて散れ
六六裾野やく煙ぞ春はよし野山花をへだつる霞なりける
七六今よりは花見む人に傳置かむ世を遁つゝ山に住まむと
八六花見にと群つゝ人のくるのみぞ可惜櫻の咎には有ける
九六花もちり人も來ざらむ折は又山の峡にて長閑なるべし
　かき絶えことはすなりにける人の花見に山里へまうで來たりと聞きて詠みける
〇七年をへて同じ梢と匂へども花こそ人に飽れざりけれ
　花の下にて月を見てよみける
一七雲に紛ふ花の下にて眺むれば朧に月は見ゆる也けり
　春の明ぼの花見けるに鶯の鳴きければ
二七花の色やこゑにそむらむ鶯のなく音ことなる春の曙
　春は花を友といふことをせか院のさい院にて人々詠みけるに
三七自ら花なき年の春もらば何につけてか日を暮さまし
　老見花といふことを
四七老づとに何をかせまし此春の花待附けぬ我身也せば
　老木の櫻の所々に咲きたるを見て
五七わきて見む老木は花も哀なりいま幾度か春に逢べき

七五六
六木の本は見る人しげし櫻花よそに眺めて我は惜まむ
　山寺の花さかりなりけるに昔を思ひ出でゝ
七六吉野山はき路傳ひに尋ね入りて花見し春は一昔かも
　修行し侍るに花おもしろかりける所にて
八六眺るに花の名立の身ならば木の本にてや春を暮さむ
　熊野にまゐりけるに八上の王子の花おもしろかりければ社にかきつけゝる
九六待來つるやかみの櫻咲にけり荒く風すなみすの山風
　せか院の花盛なりける頃俊忠がいひ送りける
〇七自から來る人あらば諸共にながめまほしき山櫻かなかへし
一七眺むてふ數に入べき身也せば君が宿にて春はへなまし
　上西門院の女房法勝寺の花見られけるに雨のふりて暮れにければ歸られにけり又の日兵衛の局のもとへ花の御幸ひ出でさせ給ふらむと覺えてかくなむ申さまほしかりしとて遣しける
二七見る人に花も昔を思ひ出て戀しかるべし雨に萎るゝかへし
三七古を忍ぶる雨と誰か見む花もその世の友しなければ
　若き人々ばかりなむ老いにける身は風の煩しきに厭はるゝ事にてとありけるなむ優しくきこえける
四七濡る共と蔭を賴みて思けむ人の跡ふむ今日にも有哉
　世をのがれて東山に侍る頃白川の花盛に人さそひければまかり歸りけるに昔思ひ出でゝ
五七散るを見て歸る心や櫻花昔にかはるしるしなるらむ
　山路落花
六七散初むる花の初雪降ぬれば踏分けまうき志賀の山越
　落花の歌あまた詠みけるに
七七勅とかやくだす帝の在せかしさらば恐て花ぞ散らぬ
八七浪もなく風を治めし白川の君の折もや花は散りけむ
九七いかでわれ此世の外の思出に風を厭はで花を眺めむ
〇八年をへて待ちもをらむと山櫻心を春は盡すなりけり
一八吉野山谷へ霰霽く白雲は峯の櫻の散るにやあるらむ
二八山嵐の木の本埋む花の雪は岩井にうくも氷とぞ見る
三八春風の花の吹雪に埋れて行きもやられぬ志賀の山道

七五七
四八立まがふ嶺の雲をば拂ふとも花を散さぬ嵐なりせば
五八吉野山花ふきぐして峰越る嵐は雲とよそに見ゆらむ
六八惜まれぬ身だにも世には有物をあな生憎の花の心や
七八浮世には留めおかじと春風の散すは花を惜む也けり
八八諸共に我をもぐして散りね花浮世を厭ふ心ある身ぞ
九八思へ唯花のなからむ木の本に何を陰にて我身住なむ
〇九眺むとて花にも痛く馴ぬればちる別社悲しかりけれ
一九惜めばと思ひげもなくあだに散る花は心ぞ賢かりける
二九梢ふく風の心はいかゞせむしたがふ花の恨めしき哉
三九爭でかは散らでありとも思べき暫しと慕ふ情知れ花
四〇木のもとの花に今宵は埋れてあかぬ梢を思ひ明さむ
五〇木のもとの旅寢をすれば吉野山花の衾を着する春風
六〇雪と見て影に櫻のみだるれば花の笠着る春の夜の月
七〇散る花を惜む心や留まりて又來む春の誰になるべき
八〇春深み枝も動かで散花は風の咎にはあらぬなるべし
九〇あながちに庭をさへ吹く嵐哉さこそ心に花を任せめ
一〇あだに散るさこそ梢の花ならめ少しは殘せ春の山風
二〇心得つたや一筋に今よりは花を惜まで風をいとはむ
三〇吉野山櫻に紛ふ白雲の散なむ後ははれずもあらなむ
四〇花と見ば流石情を懸ましを雲とて風の拂ふなるべし
五〇風誘ふ花の行方は知らねども惜む心は身に止りけり
六〇花盛梢を誘ふ風ならでのどかに散らむ春はあらばや
　庭の花波に似たりといふことを詠みける
七〇風あらみ梢の花の流れ來て庭になみ立つ白河のさと
　白川の花庭おもしろかりけるを見て
八〇あだにちる梢の花を眺むれば庭には消ぬ雪ぞ積れる
　高野に籠りたりける頃草の庵に花の散りつみければ
九〇散花の庵の上を吹くならば風いるまじく廻り圍はむ
　夢中落花といふことを前齋院にて人々よみけるに
一〇春風の花をちらすと見る夢は覺ても胸の騷ぐ也けり
　風の前の落花といふことを
二〇山櫻枝きる風のなごりなく花を宛らわがものにする
　雨中落花
三〇梢うつ雨に萎れて散る花のをしき心を何にたとへむ
　遠山殘花
四〇吉野山一むら見ゆる白雲は咲き後れたる櫻なるべし
　花の歌十五首よみけるに

二吉野山人に心をつけがほに花よりさきにかゝる白雲
三山寒み花咲くべくもなかりけり餘りて尋來に鳧
四かた計り霞むと花を思ふより空また心物になるらむ
五霞束な谷は櫻のいかならむ峯にはいまだかけぬ白雲
六花と聞くは誰もさこそは嬉しけれ思ひ沈めぬ我心哉
七初花の開け初むる梢よりそばえて風の渡るなるかな
八霞束な春は心の花にのみ孰れの年かうかれそめけむ
九いざ今年散れと櫻を語らはむ中々さらば風や惜むと
一〇風ふくと枝を離ておつまじく花とちつけよ青柳の糸
一一吹く風のなべて梢にあたる哉かばかり人の惜む櫻を
一二何とかくあだなる花の色をしも心に深く染め始けむ
一三同じ身の珍しからず惜めばや花も戀らず咲きば散らむ
一四峯にちる花は谷なる木にぞ咲く猶く厭はじ春の山風
一五山嵐に亂れて花の散けるを岩離れたる瀧と見たれば
一六花もちり人も都へ歸りなば山寂しくやならむとす覽
　散りて後花を思ふといふことを
一七青葉さへ見れば心の止る哉散にし花の名殘と思へば
　　堇
一八跡絶て淺茅茂れる庭の面にたれ分入りて堇摘みけむ
一九誰ならむ荒田のくろに堇つむ人は心のわりなかりけり
　さわらび
二〇等閑に燒捨し野の早蕨は折人なくてはぞろとやなる
　かきつばた
二一沼水に茂る眞菰のわかれぬを咲き隔てたる燕子花哉
　山路のつゝじ
二二這傳ひをらで躑躅を手にぞとる扳しき山の取所には
　つゝじ山のひかりたりといふことを
二三躑躅さく山の岩陰夕ばえて小倉はよその名のみ也鬼
　やまぶき
二四岸近みうゑけむ人ぞ恨めしき波にをらるゝ山吹の花
二五山吹の花さく里に成ぬれば爰にも井手と思ほゆる哉
　蛙
二六眞菅生ふる山田に水を任すれば嬉し顏にもなく蛙哉
二七水鏡ゐて月も宿らぬ濁江に我すまむとて蛙なくなり
　春のうちに郭公を聞くといふことを
二八嬉しとも思ひぞわかぬ郭公春きくとの習ひなければ
　伊勢にまかりたりけるにみつを申す所にて海邊
　の春の暮といふことを神主ども詠みけるに
二九過る春潮のみつより舟出して波の花をや先にたつ覽
　三月一日たらで暮れけるに詠みける
三〇春故にせめても物を思へとやみそかにだにもたらで暮ぬる
　三月のつごもりに
三一今日のみと思へば長き春の日も程なく暮るゝ心地哉すれ
三二行く春をとゞめかねぬる夕暮は曙よりも哀なりけり
　夏
三三限あれば衣ばかりを脱きかへて心は花を暮ふ也けり
　夏の歌よみけるに
三四草もげる道かりあけて山里に花見し人の心をぞ見る
　水邊卯花
三五龍田川岸の雜を見わたせば井堰の波にまがふ卯の花
三六山川の波にまがへる卯花を立返りてや人はをるらむ
　夜卯花
三七紛ふべき月なき頃の卯花は夜さへ晒す布かとぞ見る
　社頭卯花
三八神垣のあたりに咲も便あれや木綿懸たりと見ゆる卯花
　無言なりける頃郭公の初聲を聞きて
三九時鳥人に語らぬ折にしも初音きく社かひなかりけれ
　不レ尋聞二子規一といふことを賀茂の社にて人々
　よみけるに
四〇時鳥卯月の忌にぬこもるを思知りても來なくなる哉
　夕暮郭公といふことを
四一ことなるゝ黄昏時の郭公聞かす顏にて又なのらせむ
　時鳥
四二我が宿にはな橘を植ゑてこそ山郭公待つべかりけれ
四三尋ぬれば聞き難きかと時鳥今宵ばかりは待ち試みむ
四四時鳥まつ心のみつくさせて聲をば惜む五月なりけり
　人に代りて
四五まつ人の心を知らば郭公賴もしくてや夜を明さまし
　時鳥をまちて明けぬといふことを
四六時鳥なかで明けぬとつげ顏にまたれぬ鳥の音ぞ聞ゆる
四七時鳥きかであけぬる夏の夜の浦島の子は誠なりけり
　時鳥の歌五首よみけるに
四八郭公きかぬ物故まよはまし花を尋ねぬ山路なりせば
四九きゝおくる心をぐして郭公高間の山の峯越えぬなり
五〇きゝつとは初音迄かと思ひしにきゝふされぬ時鳥哉
五一大堰川小倉の山の郭公ゐせきに聲のとまらましかば
五二郭公その後越えむ山路にも語らぬ聲は殘らざらなむ
　時鳥を
五三時鳥きくをりにこそ夏山の青葉は花に劣らざりけれ
五四時鳥思ひもわかぬ一聲を聞きつといかゝ人に語らむ
五五時鳥いかばかりなる契にて心つくさで人の聞くらむ
五六語らひし其夜の聲は時鳥いかなるよにも忘れむ物か
五七時鳥はな橘にほふとも身をうの花の垣根するな
　雨の中に郭公を待つといふことを詠みけるに
五八時鳥忍ぶ卯月も過ぎにしをなほ聲をしむ五月雨の空
　雨中時鳥
五九五月雨の晴間も見えぬ雲路より山郭公なきて過ぐ也
　山寺の時鳥といふことを人々よみけるに
六〇郭公きゝにとてしも籠らねど初瀨の山は便ありけり
六一五月雨の晦日に山里にまかりて立歸りにけるを時
　鳥もすげなく聞き捨て歸りし事など人の申し遣
　はしける返りごとに
六二時鳥名殘あらせて歸りしが聞捨つるにも成にける哉
　題しらず
六三空晴て沼の水嵩を落さずば菖蒲もふかぬ五月なるべし
　さることありて人の申し遣しける返り事に五日
六四折にふれて人に我身や引れまし筑摩の沼の菖蒲也せば
　高野に中院と申す所に菖蒲ふきたる坊の侍りけ
　るに櫻の散りけるが珍らしく覺えて詠みける
六五櫻ちる宿に重なる菖蒲をば花菖蒲とや云べかるらむ
六六散花を今日の菖蒲のねに懸て藥玉ともや云可るらむ
　五月五日山寺へ人の今日いる物なればとてさう
　ぶを遣したりける返り事に
六七西にのみ心ぞかゝる菖蒲草この世は假の宿と思へば
六八皆人の心のうきは菖蒲草にしに思のひかぬなりけり
六九五月雨の軒の雫に玉かけて宿をかざれる菖蒲草かな
　五月雨
七〇水溝ふ入江の眞菰刈兼てむなてにすつる五月雨の頃
七一五月雨に水増るらし宇治橋や蜘手にかゝる波の白糸
七二こゝ笹しく古里小野の道の跡を又澤になす五月雨の頃
七三つく〳〵と軒の雫を眺めつゝ日をのみ暮す梅雨の頃
（此歌は本有五月雨は昔ぐく前の歌詠みわけし格因の道理もしるべし）
七四東屋のを萱が軒の糸水に玉ぬきかくるさみだれの頃
七五梅雨に小田の早苗やいかならむ畦のうき土洗こされて

[九八]梅雨の頃にしなれば荒小田に人に任せぬ水足らひ鳧
　或所にて梅雨の歌十五首よみ侍りし人に代りて
[九九]五月雨にほす隙なくて藻鹽草煙もたてぬ浦の海士人
[一〇〇]梅雨はいさゝ小川の橋もなし跳くともなくみをに流て
[一〇一]水無瀬川をちの通路水みちて舟渡りする五月雨の頃
[一〇二]ひろ瀬川渡りの沖の澪標水かさそふらし五月雨の頃
[一〇三]早瀬川綱手の岸を沖に見てのぼり煩ふさみだれの頃
[一〇四]水分る難波堀江の微りせばいかにかせまし梅雨の頃
[一〇五]舟とめし湊の蘆間棹たえて心行きみむ五月雨のころ
[一〇六]水底に敷かれに鳧な五月雨て水の眞菰を刈にきたれば
[一〇七]梅雨のをやむ晴間の無らめや水の笠ほせ眞菰刈り舟
[一〇八]梅雨にさゝ舟橋うきぬれば乗てぞ人はさし渡る覽
[一〇九]五月雨の晴ぬ日數のふる澁に沼の眞菰は水隱れに鳧
[一一〇]水無と聞きてふりにし勝間田の池改むる五月雨の頃
[一一一]梅雨は行べき道のあてもなしを笹が原も浮に流れて
[一一二]五月雨は山田のあぜの澁枕數を重ねて落つる也けり
[一一三]河わたの淀みにとまる流木の浮橋わたす五月雨の頃
[一一四]思はすに御づり憎き小川かな五月の雨に水增りつゝ
　隣の泉
[一一五]風をのみ花なき宿はまち〳〵て泉の末を又むすぶ哉
　水邊納涼といふことを北白川にて詠みける
[一一六]水の音に暑さ忘るゝ圓居かな楢の木蔭のたゝまうき哉
　深山水鷄
[一一七]柚人の暮にやどかる心ちして庵を叩く水雞なりけり
　題しらず
[一一八]夏山のゆふ下風の涼しさに楢の木蔭のたゝまうき哉
　撫子
[一一九]盛分て折れば露こそこぼれけれ淺茅に混る撫子の花
　雨中撫子といふことを
[一二〇]露重み園の撫子いかならむあら〳〵見えつる夕立の空
　夏野の草をよみける
[一二一]みま草に原の小薄しがふとて臥どあせぬと鹿思ふ覽
　旅行草深といふことを
[一二二]旅人の分る夏野の草茂み葉末にすげの小笠はづれて
　行路夏といふことを
[一二三]雲雀揚る大野の茅原夏來れば涼む木陰を顧てぞ行く
　ともし
[一二四]照射する火串の松も替なくに鹿目合せで明す夏の夜
　題しらず
[一二五]夏の夜は篠の小竹の節近みそよや程なく明る也けり
[一二六]夏の夜の月見るとや無る覽蚊遣火たつる賤の伏屋は
　海邊夏月
[一二七]露のぼる蘆の若葉に月さえて秋を爭ふ難波江のうら
　泉にむかひて月を見るといふことを
[一二八]掬び上ぐる泉にすめる月影は手にもとられぬ鏡也鳧
[一二九]掬ふ手に涼しき影を添ふる哉清水に宿る夏の夜の月
　夏の月の歌よみけるに
[一三〇]夏の夜も小笹が原に霜ぞおく月の光のさえし渡れば
[一三一]山川の岩にせかれてちる波を霰とぞ見る夏の夜の月
　池上夏月といふことを
[一三二]影冴て月しも殊に澄ぬれば夏の池にも氷柱ゐにけり
　蓮池に滿てりといふ事を
[一三三]おのづから月宿るべき蔭もなく池に蓮の花咲きに鳧
　雨中夏月
[一三四]夕立の晴れば月ぞ宿りける玉ゆりすうる蓮の浮葉に
　涼風如レ秋
[一三五]まだきより身にしむ風の氣色哉秋先つるみ山べの里
　松風如レ秋といふことを北白川なる所にて人々
　よみしに又水聲秋ありといふ事をかさねけるに
[一三六]松風の音のみ何か石走る水にも秋は有りけるものを
　山家待レ秋といふことを
[一三七]山里は外面の眞葛葉を繁みうら吹き返す秋を待つ哉
　六月祓
[一三八]御禊して幣とり流す河の瀬に頓て秋めく風ぞ涼しさ

秋

　山里のはじめの秋といふことを
[一三九]さま〴〵の哀をこめて楢ふく風に秋知るみ山べの里
　山居のはじめの秋といふことを
[一四〇]秋たつと人は告ねど知られ鳧み山の裾の風の氣色に
　常磐の里にて初秋月といふことを人々よみけるに
[一四一]秋立つと思ふに空も唯ならでわれて光をわけむ新月
　初秋の頃鳴尾と申す所にて松風の音を聞きて
[一四二]常よりも秋に鳴尾の松風はわきて身にしむ心ち社すれ
　七夕
[一四三]急ぎ起て庭の小草の露ふまむ優しき數に人や思ふと
[一四四]暮ぬめり今日待附て織女は嬉しきにもや露こぼる覽
[一四五]天河けふの七日は長きよの例にも引く忌もしつべし
[一四六]舟よする天の川べの夕暮は涼しき風や吹き渡るらむ
[一四七]待つけて嬉しかるらむ織女の心の內ぞ空に知らるゝ
　蜘のいかきたるを見て
[一四八]さゝがにのくもでにかけて引糸や今日織女に鵲の橋
　草花道を遮るといふことを
[一四九]夕露を拂へば袖に玉消えて道わけかぬる小野の萩原
　野徑秋風
[一五〇]末葉吹く風は野もせに渡る共荒くはわけじ萩の下露
　草花時を得たりといふことを
[一五一]糸薄ぬはれて鹿のふす野べに綻びやすきふぢ袴かな
　行路草花
[一五二]折て行袖にも露ぞこぼれける萩の葉茂き野べの細道
　露中草花
[一五三]ほに出るみ山がすそのむら薄にこめてかこふ秋霧
　終日野の花を見るといふことを
[一五四]亂咲く野べの萩原分暮れて露にも袖を染めてける哉
　萩野に滿てり
[一五五]咲そはむ所の野べにあらばやは萩より外の花も見べく
　萩野の家にみてりといふことを
[一五六]分て出る庭しも頓て野べなれば萩の盛を我物に見る
　野萩似レ錦といふことを
[一五七]今日ぞ知る其江に洗ふ唐錦萩さく野べに有ける物を
　草花を詠みける
[一五八]繰りゆく芝の下草おはれ出て招くや誰を慕ふなる覽
　滿道にあたりて茂しといふことを
[一五九]花薄心あてにぞ分てゆくほの見し路の跡しなければ
　古簾刈萱
[一六〇]籬あれて薄ならねど苅萱も茂き野べとは成ける物を
　女郎花
[一六一]女郎花わけつゝ袖と思はゝや同露にも濡ると知れゝば
[一六二]女郎花色めく野べにふれ拂ふ袂に露やこぼれ懸ると
　草花露重
[一六三]今朝見れば露の絕るに折伏して起も上らぬ女郎花哉
[一六四]大方の野べの露には萎るれど我涙なきをみなへし哉
　女郎花帶レ露といふことを
[一六五]花の枝に露の白玉ぬきかけて折る袖ぬらす女郎花哉
[一六六]折らより袖ぞ濡ける女郎花露結ばれて立てる氣色に

水邊女郎花といふことを

六池の面に影をさやかに映しもて水鏡見る女郎花かな

六たぐひなき花の姿を女郎花池の鏡にうつしてぞ見る

女郎花水に近しといふことを

七女郎花池のさ波に枝ひぢて物思ふ袖のぬるゝ顏なる

萩

八思ふにも過ぎて哀に聞ゆるは萩の葉みだる秋の夕風

八押なべて木草の末の原までも靡きて秋の哀見えける

萩の風露を拂ふ

七を鹿ふす萩さく野べの夕露を暫しもためぬ萩の上風

隣の夕の萩の風

一七あたりまで哀しれともいひ顏に萩の音する秋の夕風

秋の歌よみける中に

二七吹渡る風も哀をひとしめていづくもすごき秋の夕暮

三七覺束な秋はいかなる故のあればすゝろに物の悲かる覽

四七何事をいかに思ふとなけれども袂かわかぬ秋の夕暮

五七何となく物悲しくぞ見え渡る鳥羽田の面の秋の夕暮

野の家の秋の夜

六七寢覺めつゝ長き夜哉といはれ野に幾秋迄も我身へぬ覽

秋の歌に露をよむとて

七七大方の露には何のなるならむ袂におくは涙なりけり

山里に人々まかりて秋の歌よみけるに

八七山里の外面の岡の高き木にそいぶがましき秋の蟬哉

人々秋の歌十首よみけるに

九七玉にぬく露はこぼれて武藏野の草の葉結ぶ秋の初風

〇八ほに出て穗のを薄招く野にたはれて立てる女郎花哉

一八花を社野べの物とは見にきつれ暮れば蟲の音をも聞鳧

二八荻の葉を吹きすぎてゆく風の音に心亂るゝ秋の夕暮

三八晴れやらぬみ山の霧の絕々に仄かに鹿の聲聞ゆなり

四八かねてより梢の色を思ふ哉しぐれ始むるみ山べの里

五八鹿の音を垣根に込て聞くのみか月もすみ鳧秋の山里

六八庵にもる月の影こそ寂しけれ山田のひたの音計して

七八わづかなる庭の小草の白露をもとめて宿る秋の夜の月

八八何とかく心をさへは盡すらむ我歎にて暮るゝ秋かは

月

九八秋の夜の空に出づてふ名のみして影仄なる夕月夜哉

〇九天の原月たけ昇る雲路をばわけても風の吹拂はなむ

一九嬉しとや待つ人毎に思ふらむ山の端出る秋の夜の月

二九中々に心つくすも苦しきに曇らば入りね秋の夜の月

三九如何計嬉しからまし秋の夜の月澄よはに雲徹りせば

四九播磨潟灘のみ沖に漕出でゝあたり思はぬ月を眺むる

五九月すみてなきたる海の面かな雲の波さへ立も懸らで

六九いざよはで出るは月の嬉しくて入山の端はつらき也鳧

七九水の面に宿る月さへ入ぬるは波の底にも山やある覽

八九暮はるゝ心やゆくと山の端に暫しな入そ秋の夜の月

九九明る迄宵より空に雲無てまだこそ斯る月見ざりけれ

〇〇あさぢ原葉末の露の玉ごとに光つらぬる秋の夜の月

一〇秋の夜の月を雪かと眺むれば露も霰の心ちこそすれ

閑に月を待つといふことを

二〇月ならでさし入影もなき儘にくるゝ嬉しき秋の山里

海邊月

三〇清見潟月すむよはの浮雲はふじの高嶺の煙なりけり

池上月といふことを

四〇水錆ぬ池の面の清ければ宿れる月もめやすかり鳧

同じ心を遍昭寺にて人々よみけるに

五〇やどしもつ月の光の大澤はいかにいつとも廣澤の池

六〇池にすむ月に懸れる浮雲は拂ひ殘せる水錆なりけり

月池の氷に似たりといふことを

七〇水なくて氷りぞしたる勝間田の池改むる秋の夜の月

名所の月といふことを

八〇清見がた沖の岩こす白波に光をかはす秋の夜のつき

九〇なべてなき所の名をや惜む覽明石は分て月のさやけき

海邊明月

一一難波がた月の光に浦さえて波のおもてに氷をぞしく

月前に遠く望むといふことを

二一隈もなき月の光に誘はれていく雲居まで行く心そも

終夜月を見る

三一誰來なむ月の光に誘れてと思ふによはの明にける哉

八月十五夜

四一山の端を出る宵より著き哉今宵知らする秋の夜の月

五一歎へねど今宵の月のけしきにて秋の半を空に知る哉

六一天河名に流れたるかひ有て今宵の月は殊にすみけり

七一さやかなる影にて著し秋の月とよに餘れる五日也鳧

八一うちつけに又來む秋の今宵まで月故をしくなる命哉

九一秋は唯今宵一夜の名也けり同じ雲居に月は澄めども

〇二思せぬ十五の年も有物を今宵の月のかゝらましかば

くもれる十五夜を

一二〇月見れば影なく雲に包れて今夜ならずば闇に見えまし

月の歌あまたよみけるに

二二入りぬとや東に人は惜むらむ都にいづる山の端の月

三二待出でゝ隈なき宵の月見れば雲ぞ心にまづ懸りける

四二秋風や天つ雲居を拂ふらむ更行く儘に月のさやけさ

五二疎くとて哀ならずは無けれ共荒たる宿ぞ月は寂しき

六二蓬わけて荒たる宿の月見れば昔すみけむ人ぞ戀しき

七二身にしみて哀知する風よりも月にぞ秋の色は見えける

八二蟲の音も枯行く野べの草の原に哀を添てすめる月影

九二人も見ぬ由なき山の末迄に澄らむ月の影をこそ思へ

〇三木の間漏有明の月を詠むれば寂しさ添ふる嶺の松風

一三いかにせむ影をば袖に宿せ共心のすめば月の曇るを

二三悔しくも賤の伏屋と貶めて月の洩るをも知で過ける

三三荒れわたる草の庵にもる月を袖に移して眺めつる哉

四三月を見て心うかれし古への秋にも更に廻りあひぬる

五三何事も變りのみゆく世中に同じ影にてすめる月かな

六三終夜月こそ袖にやどりけれ昔の秋をおもひいづれば

七三眺むれば外の影こそ床しけれ變らじ物を秋の夜の月

八三行方なく月に心の澄々て果はいかにかならむとす覽

九三月影のかたぶく山を詠めつゝ惜むしるしや有明の空

〇四詠むるも誠しからぬ心ちしてよに餘りたる月の影哉

一四行末の月をば知ず過來つる秋まだ斯る影はなかりき

二四まことゝも誰か思はむ獨見て後に今宵の月を語らば

三四月の爲晝と思ふがかひなきに暫し曇りて夜を知せよ

四四あまの原朝日山より出ればや月の光の晝にまがへる

五四有明の月の頃にも成ぬれば秋は夜なき心ちこそすれ

六四中々に時々雲のかゝるこそ月をもてなす限なりけれ

七四雲晴るゝ嵐の音は松にあれや月も綠の色にはえつゝ

八四定なく雜やなくらむ秋の夜は月の光を思ひまがへて

九四誰も皆ことわりとこそ定むらめ晝を爭ふ秋の夜の月

〇五影さえて誠に月のあかきには心も空に浮れてぞ澄む

一五隈もなき月の面に飛ぶ雁の影を雲かと思ひけるかな

二五眺むれば否や心の苦しきにいたくな澄そ秋の夜の月

三五雲も見ゆ風も更れば荒くなる長閑なりつる月の光を

四五諸共に影を並ぶる人もあれや月のもりくる笹の庵に

五五中々に曇ると見えて瞬る夜の月は光の添ふ心ちする

六五浮雲の月の面に懸れども早く過ぐるは嬉しかりけり

過やらで月近くゆく浮雲の漂ふ見れば侘しかりけり
脈へども道に雲の打ちりて月のあたりを離れざり晃
雲はらふ嵐に月のみがゝれて光えてすむ秋の空かな
くまもなき月の光を眺むれば先づ続捨の山ぞ戀しき
月さゆる羽石の瀬戸に風吹けば氷の上にたゝむ白波
天の原同じ岩戸を出づれども光ことなる秋の夜の月
限なく名殘をしきは秋の夜の月にともなふ曙のそら

九月十三夜

今宵はと所えがほにすむ月の光もてなす菊のしら露
雲消し秋の半の空よりも月は今宵ぞ名におへりける

後九月つきを翫ぶといふことを

月見れば秋加れる年は又あかぬ心も添ふにぞ有ける

月瀧を照すといふことを

雲消ゆる那智の高嶺に月たけて光をぬける瀧の白糸
久しく月を待つといふことを
出でながら雲に隠るゝ月影を重ねて待つや二村の山
雲間に月を待つといふことを
秋の月誘よふ山の端のみかは雲の絶間も待れやはせぬ

月前薄

惜むよの月にならひて有明の入らぬを招く花薄かな

花薄月の光にまがはまし深きまそほの色にそめすは

月前萩

七月すむと萩植ざらむ宿ならば哀少き秋にやあらまし

月照二野花一といふことを

月なくば暮れば宿りへ歸らまし野べには花の盛也共

月前野花

花の色を影に移せば秋の夜の月ぞ野守の鏡なりける

月前草花

月の色を花に重ねて女郎花上雲の下に露をかけたる
宵のまの露に萎れて女郎花有明の月の影にたはる丶

月前女郎花

庭さゆる月也けりな女郎花霜に逢ぬる花と見たれば

月前蟲

月のすむ淺茅にすだく蟲露のおくにや秋を知るらむ
露ながらこぼさで折らむ月影に一萩が枝の松蟲の聲

深夜聞レ蟲

我世とや更け行く月を思ふらむ聲もやすめぬ蟲かな
田家月

夕露の玉しく小田のいな筵かへす穂末に月ぞ宿れる

月前鹿

頼なき心ちこそすれ秋の夜の月すむ嶺のさを鹿の聲

月前紅葉

樹間もる有明の月のさやけきに紅葉を添て眺つる哉
霧月を隔つといふことを
立田山月すむ嶺のかひぞなき麓に霧の晴れぬ限りは

月前に古を懐ふ

古を何に附てか思出でむ月さへ變る世ならましかば

月に寄せて懐を述べける

世中の憂をも知らで澄月の影は我身の心地こそすれ
世中は曇果ぬる月なれやさりともと見し影も待れず
脈ふ世も月澄秋に成ぬれば長らへずばと思ふなる哉
さらぬだに浮れて物を思ふ身の心を誘ふ秋の夜の月
捨ていにし浮世に月の澄であれなさらば心の止らさらまし
強ちに山にのみすむ心かな誰かは月の入るを惜まぬ

春日に參りたりけるに常よりも月明く哀なりければ

ふりさけし人の心ぞ知れける今宵三笠の山を眺めて
月寺のほとりに叩らかなり
晝と見る月に明るを知らましや時つく鐘の音微せば
人々住吉にまゐりて月を翫びけるに
片そぎの行合ぬ間より漏月や歩て御祓の霜に置らむ
波にやどる月を打にゆりよせて鏡にかくる住吉の岸

旅まかりけるにとまりて

あかすのみ都にて見し影よりも旅こそ月は哀也けれ
見しまゝに姿も影も變らねば月ぞ都の形見なりける

旅宿の月を思ふといふことを

月は猶夜な〳〵毎に宿るべし我が結びおく草の庵に

月前に友に逢ふといふことを

嬉しきは君に逢べき契ありて月に心の誘はれにけり
心ざすことありて安藝の一宮へ詣でけるに高富の浦と申す所に風に吹きとめられて程經けり苦
萓きたる庵より月のもるを見て
波の音を心にかけて明すかな苫もる月の影を友にて
詣でつきて月いとあかくて哀に覺えければ詠みける
諸共に旅なる空に月も出てすめばや影の哀なるらむ

旅宿の月といへるを詠める

あはれ知る人みたらばと思ふ哉旅寢の床に宿る月影

月宿る同じうきねの波にしも袖絞るべき契ありけり

都にて月を哀と思ひしは歡より外のすさびなりけり

船中初雁

沖かけて八重の汐路を行舟は仄かにぞきく初雁の聲
朝に初雁をきく
横雲の風にわかるゝ東雲に山飛びこゆる初雁のこゑ

夜に入りて雁を聞く

鴉羽にかく玉づさの心ちして雁なきわたる夕闇の空

雁聲遠近

白雲を翅にかけて行く雁の門田の面の友したふなり

霧中雁

玉章の續きは見えで雁音の聲社霧にけたれざりけれ

霧上雁

空色の此方をうらに立霧のおもてに雁のかくる玉章

霧

鶉鳴く折にしなれば霧こめてあはれ寂しき深草の里

霧行客を隔つ

名殘多み睦言つきて歸りゆく人をば霧も立隔てけり

山家霧

立ちこむる霧の下にも埋れて心はれせぬみ山べの里
よをこめて竹の編戸に立霧の晴ば頓てや明むとすらむ

鹿

しだり咲く萩の古枝に風騒てすがひ〳〵にを鹿鳴也
萩がえの露ためず吹く秋風にを鹿なく也宮城野の原
終夜つま戀ひかねて鳴く鹿の涙や野べの露となるらむ
さらぬだに秋は物のみ悲しきを淚催すさを鹿のこゑ
山風に鹿の音類ふ夕暮を物悲しとはいふにや有らむ
鹿もわぶ空の氣色も時雨めり悲かれともなれる秋哉
何となく住まほしくぞ思ほゆる鹿の音絶ぬ秋の山里
小倉の麓に住侍りけるに鹿の鳴きけるを聞きて
を鹿なく小倉の山のすそ近みたゞ獨すむわが心かな

曉の鹿

夜を殘す寐覺に聞ぞ哀なる夢野の鹿もかくや鳴きけむ
夕ぐれに鹿を聞く
篠原や霧にまがひて鳴く鹿の聲かすかなる秋の夕暮
幽居に鹿を聞く

二隣あるはたの假屋に明す夜は鹿哀なる物にぞ有ける
田庵の鹿
五小山田の庵近く鳴く鹿の音に驚かされて驚かすかな
人を尋ねて小野にまかりけるに鹿の鳴きければ
六鹿の音を聞くに附ても住人の心知らるゝ小野の山里
獨聞二擣衣一
七獨寝の夜寒になるに襲ねばや誰が爲に擣つ衣なる覽
隔レ里擣レ衣
八さ夜衣いづこの里にうつつならむ遠く聞ゆる槌の音哉
年頃申されたる人の伏見に住むと聞きて尋ねまかりたりけるに庭の道も見えず繁りて蟲なきければ
九分て入る袖に哀をかけよとて露けき庭に蟲さへぞ鳴
蟲の歌よみ侍りけるに
一〇夕されや玉動く露のこざゝふに聲まづならす蓼かな
一一秋風にほす名波よる苅萱の下葉に蟲の聲みだるなり
一二蓼鳴なる野べはよそなるを思はぬ袖に露ぞこぼるゝ
一三秋風の更行く野べの蟲の音のはしたなき迄濡る袖哉
一四蟲の音をよそに思て明さねば袂も露は野べに變らじ
一五野べに鳴蟲もや物は悲しきと答ましかば訪て聞まし
一六秋の夜に聲も惜まず鳴蟲をつゆ睡らず聞き明す哉
一七秋の夜を獨や鳴きて明さまし伴ふ蟲の聲なかりせば
一八秋の野の尾花が袖に招かせていかなる人を松蟲の聲
一九よもすがら袂に蟲の音をかけてはらひ煩ふ袖の白露
二〇獨寝の寐覺の床のさ筵に涙もよほすきり〳〵すかな
二一蓼夜寒になるをつげかほに枕のもとに來つゝ鳴く也
二二蟲の音を弱り行かと聞からに心に秋の日數をぞふる
二三秋深み弱るは蟲の聲のみか聞我とても此身やは有る
二四蟲の音にさのみぬるべき袂かは怪しや心物思ふらし
二五物思ふねざめとぶらふ蓼人よりもげに露けかるらむ
獨聞レ蟲
二六獨寝の友にはならで蓼なく音をきけばもの思ひそふ
故郷蟲
二七草深み分入てとふ人もあれやふりゆく宿の鈴蟲の聲
雨中蟲
二八壁に生ふる小草にわぶる蓼しぐるゝ庭の露厭ふらし
田家に蟲を聞く
二九小萩さく山田のくろの蟲の音に庵もる人や袖濡す覽
夕の道の蟲といふことを
三〇うちぐする人なき道の夕されは聲たて送る轡蟲かな
田家秋夕
三一詠むれば袖にも露ぞこぼれける外面の小田の秋の夕暮
三二吹過ぐる風さへ殊に身にぞしむ山田の庵の秋の夕暮
京極太政大臣中納言と申しける折菊をおびたゞしき程にしたてゝ鳥羽院にまゐらせ給ひたりける鳥羽の南殿のひがし面のつぼに所なきほどに植ゑさせ給ひけり公重の少將人々すゝめて菊もてなさせけるにくはゝるべき由あれば
三三君が住む宿の坪には菊ぞかざる仙の宮と云べかる覽
菊
三四幾秋に我逢ぬらむ長月のこゝぬかに摘む八重の白菊
三五秋深み雙ぶ花なき菊なれば所を霜の置けとこそ思へ
月前菊
三六ませなくば何を印に思はまし月もまかよふ白菊の花
秋物へまかりける道にて
三七心なき身にも哀は知られけり鳴たつ澤の秋の夕ぐれ
嵯峨に住みける頃隣の坊に申すべきことありてまかりけるに道もなく葎の茂りければ
三八立寄りて隣とふべき垣に添て隨なくはへる八重葎哉
題しらず
三九いつゝりか紅葉の色は染べきと時雨に曇る空に問ばや
紅葉未レ遍といふことを
四〇糸鹿山時雨に色を染させてかつ〳〵織れる錦也けり
山家紅葉
四一染てけり紅葉の色の紅をしぐると見えしみ山べの里
秋の末に松蟲のなくを聞きて
四二さらぬだに聲弱りにし松蟲の秋の末には聞も別れず
四三限あれば枯行く野べは如何せむ蟲の音殘せ秋の山里
寂蓮高野に詣でゝ深き山の紅葉といふことを詠みける
四四様〴〵に錦ありけるみ山哉花見し嶺を時雨染めつゝ
紅葉色深しといふことを
四五限あれば如何は色も勝るべきを飽ず時雨る小倉山哉
四六紅葉の散で時雨の日數へばいか計なる色かあらまし
霧中紅葉
四七錦はる秋の梢を見せぬかな隔つる霧の宿をつくりて
賤しかりける家に蔦の紅葉面白かりけるを見て
四八思はずよ由ある賤の栖かな蔦の紅葉を軒に這はせて
寄二紅葉一戀
四九我涙しぐれの雨にたぐへばや紅葉の色の袖に紛へる
あづまへまかりけるにしのぶの奥に侍りける社の紅葉を
五〇常磐なる松の緑も神さびて紅葉ぞ秋はあけの玉がき
草花野路落葉
五一紅葉ちる野原を分て行く人は花ならぬ迄錦きるべし
秋の末に法輪に籠りて詠める
五二大堰川井堰に淀む水の色に秋深くなる程ぞ知らるゝ
五三小倉山ふもとに秋の色はあれや梢の錦風にたゝれて
五四わが物と秋の梢を思ふかな小倉の里に家居せしより
五五山ざとは秋の末にぞ思ひ知る悲しかりけり木枯の風
五六暮れはつる秋の形見に暫し見む紅葉散すな木枯の風
五七秋くるゝ月なみわかぬ山賤の心うらやむ今日の夕暮
終夜秋を惜む
五八惜めども鐘の音さへ變る哉霜にや露の結びかふらむ
冬
長樂寺にて夜紅葉を思ふといふ事を人々よみけるに
五九終夜をしげなく吹く嵐哉わざと時雨の染むる紅葉を
六〇神無月木の葉の落つる度毎に心かるゝみ山べの里
題しらず
六一寐覺する人の心を侘しめて時雨るゝ音は悲しかり鳧
十月のはじめつかた山里にまかりたりけるに蓼の聲の僅にしければ詠みける
六二霜うづむむぐらが下の蓼あるかなきかに聲聞ゆなり
山家落葉
六三道もなし宿は木葉に埋もれぬまだきせさする冬籠哉
六四時雨かと寐覺の床に聞ゆるは嵐に堪ぬ木の葉也けり
曉落葉
六五木葉ちれば月に心ぞあくがるゝみ山際に住まむと思に
水上落葉
六六立田姫そめし梢の散る折はくれなゐあらふ山川の水
落葉
六七嵐掃く庭の落葉の惜しき哉眞の塵になりぬと思へば
月前落葉

八山嵐の月に木の葉を吹きかけて光に紛ふ影を見る哉
瀧上落葉
九木枯に峯の紅葉やたぐふらむ村濃に見ゆる瀧の白糸
山家時雨
一〇宿かこふ柞の柴の色をさへ暮ひてそむる初時雨かな
閑中時雨といふことを
一一自ら音する人もなかりけり山廻りする時雨ならでは
時雨の歌よみけるに
一二東屋の餘にもふる時雨かな誰かは知らぬ神無月とは
落葉網代にといへる
一三紅葉よる網代の布の色染てひをくるさは見ゆる也鳧
山家枯草といふことを鳧雅僧都の坊にて人々よみけるに
一四かきこやし淀野の薄霜枯れて寂しさ増る柴の庵かな
野のわたりの枯れたる草といふことを雙林寺にてよみけるに
一五様々に花さきたりと見し野べの同じ色にも霜枯にけり
枯野の草をよめる
一六分け兼し袖に露をばとめ置て霜に朽ぬる眞野の萩原
一七霜かつく枯野の草は寂しきにいづくは人の心とむ覽
一八霜がれて晩く碎くる荻の葉を荒く吹くなる風の音哉
冬の歌よみけるに
一九難波江の入江の蘆に霜さえて浦風寒き朝ぼらけかな
二〇たま襷けし花のかつらも衰へて霜を頂く女郎花かな
二一山櫻はつ雪降ればさきにけり吉野は里に冬籠れども
二二寂しさにたへたる人の又もあれな庵雙べむ冬の山里
水邊寒草
二三霜に逢て色改むる蘆のほの寂しく見ゆる難波江の浦
山里の冬といふことを人々よみけるに
二四玉まきし垣ねの眞葛霜がれて寂しく見ゆる冬の山里
寒夜旅宿
二五旅寢する草の枕に霜さえて有明の月の影ぞ待たるゝ
山家冬月
二六多枯のすさまじげなる山里に月のすむこそ哀也けれ
二七月出る峰の木の葉も散はてゝ麓の里は嬉しかるらむ
月枯れたる草を照す
二八花におく露に宿りし影よりも枯野の月は哀なりけり
二九こほりしく沼の蘆原風さえて月も光ぞ寂しかりける
閑なる夜の冬の月
三〇霜垣ゆる庭の木葉を踏分て月は見るやと訪人もがな
庭上冬月といふことを
三一さゆと見えて冬深くなる月影は水なき庭に氷をぞしく
鷹狩
三二合せたる木ゐの敏鷹をきとゝし犬飼ひ人の聲頻る也
雪中鷹狩
三三掻昏す雪に雉子は見えね共羽音に鈴を類へてぞやる
三四ふる雪に鳥立も見えず埋れてとり所なき御狩野の原
夜初雪
三五月出る軒にもあらぬ山の端の白むも著し夜はの白雪
庭雪似レ月
三六木間漏月の影とも見ゆる哉はだらに降れる庭の白雪
雪の朝靈山と申す所にて眺望を人々よみけるに
三七たけ昇る朝日の影のさす儘に都の雪は消えみ消すみ
枯野に雪の降りたるを
三八枯果つる萱が上葉に降雪は更に尾花の心ちこそすれ
雪の歌よみけるに
三九有乳山さかしく下る谷もなくかじきの道を造る白雪
四〇弛みつゝ檜のはやもつけなくに積りに鳧な越の白雪
雪道を埋む
四一降る雪にしをりし柴も埋もれて思はぬ山に冬籠する
秋の頃高野へ參るべきよし賴めて參らざりける
人の許へ雪ふりて後申し遣しける
四二雪深く埋みてけりな君くやと紅葉の錦志きし山路を
雪朝待レ人といふことを
四三我宿に庭より外の道もがな訪來む人の跡つけて見む
雪に庵うづもれてせむかたなく而白かりけり今
も來たらばとよみけむことを思ひ出でゝ見ける
ほどに鹿の分けて通りけるを見て
四四人こばと思ひて雪を見る程に鹿跡つくるとも有けり
雪朝會レ友といふことを
四五跡とむる駒の行方は遙莫嬉しく君にゆきも逢ひぬる
雪埋レ竹といふことを
四六雪うづむ園の呉竹をれふして堀もとむるむら雀かな
賀茂の臨時の祭かへり立の御神樂土御門内裏にて侍りけるに竹の坪に雪の降りたりけるを見て
四七裏返す小忌の衣と見ゆる哉竹のうら葉にふれる白雪
社頭雪
四八玉垣はあけもみどりも埋もれて雪面白き松のをの山
雪の歌どもよみけるに
四九何となく暮るゝ雫の音までも山べは雪ぞ哀なりける
五〇雪ふれば野路も山路も埋れて遠近しらぬ旅の空かな
五一青根山苔の筵の上にして雪はしとねの心ちこそすれ
五二卯の花の心ちこそすれ山里の垣ねの柴を埋むしら雪
五三折ならぬめぐりの垣の卯花を嬉しく雪の咲せつる哉
五四間へな君夕暮になる庭の雪を跡なきよりは哀ならまし
舟中霰
五五せと渡る棚なし小舟心せよ霰飛るゝしまきよこぎる
深山霰
五六杣人のまきの假屋の下ぶしに音する物は霰なりけり
櫻の木に霰のたばしるを見て
五七唯は落ちで枝を傳へる霰哉蒂める花の散る心ちして
月前炭竈といへることを
五八限あらむ雲こそあらめ炭竈の煙に月にの煤けぬる哉
千鳥
五九淡路潟磯わの千鳥聲しげしせとの汐風さえ増る夜は
六〇淡路潟瀬戸の汐干の夕暮に須磨より通ふ千鳥なく也
六一さゆれども心安くぞ聞き明す川瀬の千鳥友ぐして鳧
六二霜さえて汀更行く浦風を思ひ知りげに鳴く千鳥かな
六三やせ渡る湊の風に月ふけて汐干るかたに千鳥鳴く也
題しらず
六四千鳥なく繪島の浦にすむ月を波に映して見る今宵哉
氷留二山水一
六五岩間せく木の葉わけこし山水を露洩さぬは氷也けり
瀧上氷
六六水上に水や氷をむすぶらむ繰るとも見えぬ瀧の白糸
氷筏をとづいふことを
六七氷わる筏の棹のたゆければ持や越さまし保都の山越
冬の歌十首よみけるに
六八花もかれ紅葉も散らぬ山里は寂しさを又訪人もがな
六九獨すむかた山かげの友なれや嵐にはるゝ冬の夜の月
七〇津の國の蘆の丸屋の寂しさは多社わきて訪べかりけれ
七一冴る夜はよその空にぞ慈もなく凍に鳧な見陽の池水
七二よもすがら嵐の山に風さえて大堰の淀に氷をぞしく
七三冴え渡る浦風いかに寒からむ千鳥むれゐる夕崎の浦

[一]山里はしぐれし頃の寂しきに霰の音は彌まさりけり
[二]風冴て寄すれば頓て氷りつゝ返る波なき志賀の唐崎
[三]吉野山麓に降らぬ雪ならば花かと見てや尋入らまし
[四]宿毎に寂しからじと勿むべし煙こめたる小野の山里
題しらず
[五]山櫻思ひよそへて眺むれば木毎の花は雪まさりけり
仁和寺の御室にて山家閑居見ゝ雪といふことを
詠ませ給ひけるに
[六]降り積る雪　友にて春迄は日を送るべきみ山べの里
[七]訪人も初雪をこそ分けこしか道閉てけり深山べの里
山居雪といふことを
[八]年の内はとふ人更にあらじかし雪も山路も深き栖を
世を遁れて鞍馬の奥に侍りけるに筧の凍りて水
までこざりけるに春になるまではかく侍るなり
と申しけるを聞きて詠める
[九]わりなしや凍る筧の水故に思捨てゝし春の待たる
陸奥國にて年の暮によめる
[一〇]常よりも心細くぞ思はゆる旅の空にて年の暮れぬる
山家歳暮
[一一]新らしき柴の編戸を立ち替て年のあくるを待渡る哉
東山にて人々年の暮に懐を述べけるに
[一二]年暮し其營みは忘られてあらぬ樣なる急ぎをぞする
年の暮にあがたより都なる人のもとへ申し遣し
ける
[一三]押なべて同じ月日の過行けば都もかくや年は暮ぬる
[一四]山ざとに家ゐをせずば見ましやは紅ふかき秋の梢を
歳暮に人のもとへ遣しける
[一五]自らいはぬを慕ふ人やあると休らふ程に年の暮ぬる
常なき事をよせて
[一六]いつか我昔の人といはるべき重なる年を送り迎へて
戀
名を聞きて尋ぬる戀
[一七]逢はざらむ事をば知らす帯木の伏屋と聞て尋行く哉
[一八]自ゝ門歸戀
立て初めて歸る心は錦木の千束まつべき心ち社すれ
[一九]涙顯戀
覚束ないかにも人の呉織あやむる迄に濡るゝ袖かな

夢會戀
[二〇]中々に夢に嬉しき逢ふことは現に物を思ふなりけり
[二一]逢ふことを夢也けりと思分く心の今朝は恨めしきかな
[二二]逢と見るとを限の夢路にて覺むる別の無らましかば
[二三]夢とのみ思做さるゝ現こそ逢見る事のかひ無りけれ
後朝
[二四]今朝よりぞ人の心はつらからで明離れ行く空を恨る
[二五]逢事を忍ばざりせば道芝の露より先に起てこましや
後朝時鳥
[二六]さらぬだに歸りやられぬ東雲にそへて語らふ時鳥哉
後朝花橘
[二七]重ねては濃からまほしき移香を花橘に今朝類へつゝ
後朝霧
[二八]休はむ大方の夜は明ぬとも關とかこへる霧に籠りて
歸るあしたの時雨
[二九]と附けて今朝の別は休はむ時雨をさへや袖に懸べき
逢ひてもはぬ戀
[三〇]つらく共逢はすば何の習にか身の程知す人を恨みむ
[三一]さらば唯さらでぞ人の止なまし偖後も又さもや非じと
恨
[三二]もらさじと袖にあまるを包まゝし情を忍ぶ涙也せば
二たび絶ゆる戀
[三三]唐衣たち離れにし慥ならば重ねて物は思はざらまし
寄ゝ絲戀
[三四]賤の女が操くる絲に譲り置て思ふに違ふ戀もする哉
寄ゝ梅戀
[三五]折らばやと何思はまし梅の花珍しからぬ匂なりせば
[三六]行摺りに一枝折し梅が香の深くも袖にしみにける哉
寄ゝ花戀
[三七]つれもなき人に見せばや櫻ばな風に從ふ心よわさを
一花を見る心はよそに隔りて身につきたるは君が面影
寄二殘花一戀
[三八]葉隠れに散留れる花のみぞ忍ひし人に逢ふ心ちする
寄二歸雁一戀
[三九]つれもなく絶にし人を雁音の歸る心と思はましかば
寄二草花一戀
[四〇]朽て唯萎ればよしや我袖も萩の下枝の露によそへて
寄ゝ鹿戀
[四一]妻戀ひて人め包まぬ鹿の音を美む袖のみさをなる哉
寄二刈萱一戀
[四二]一方に亂るともなき我が戀や風定まらぬ野べの刈萱
寄ゝ霧戀
[四三]夕霧の隔てなくこそ思つれ隠れて君があはぬ也けり
寄二紅葉一戀
[四四]我涙時雨の雨にたぐへばや紅葉の色の袖にまがへる
寄二落葉一戀
[四五]朝毎に塵を收むる風の音はよをへてかゝる人の心か
寄ゝ氷戀
[四六]春を待諏訪の渡りも有物をいつを限にすべき氷柱ぞ
寄二水鳥一戀
[四七]我袖の涙かゝるとぬれてあれな羨しきは池のをし鳥
賀茂の方にさゝきと申す里に冬深く侍りけるに
人々まうで來て山里の戀といふことを
[四八]筧にも君がつらゝや結ぶらむ心細くも絶えぬなる哉
商人に文をつくる戀といふことを
[四九]思ひかね市の中には人多みゆかり尋ねてつくる玉章
海路戀
[五〇]波のしくゝとをも何か厭はむ君が逢ふべき道と思はゝ
（此歌は古今集戀歌の中に見えたり但し第三句は「人多みゆかり尋ねて」とあり）
九月ふたつありける年閏月を忌む戀といふこと
を人々よみけるに
[五一]長月の餘りにつらき心にて忌むとは人の云にや有寛
御ゐれの頃賀茂にまゐりたりけるにさうじには
いかる戀といふ事を人々よみけるに
[五二]とづくる御誓の程をすぐしても猶や卯月の心なるべき
同じ社にて神に祈る戀といふことを神主ども詠
みけるに
[五三]天降神の驗の有りなしをつれなき人の行方にて見む
月
[五四]月待と云做されつる宵の間の心の色の袖に見えぬる
[五五]知ざりき雲居のよそに見し月の影を袂に宿すべしとは
[五六]哀とも見る人あらば思はなむ月のおもてに宿す心を
一月見ればいでやと世のみ思ほえてもたり憎くもなる心哉
[五七]面張の月に外れて見し影の優しかりしはいつか忘む
[五八]面影の忘らるまじき別かな名殘を人のつきに留めて
[五九]秋の夜の月や涙を喞つ覽雲なき影をもてやつすとて

一天の原さゆるみ空は晴ながら涙ぞ月の隈になるらむ
二物思ふ心のたけぞ知られぬる夜々月を詠めあかして
三月を見る心の節をとがにして便がほに濡るゝ袖哉
四思出づる事はいつもと云ながら月には堪ぬ心也けり
五足曳の山のあなたに君すまば入る共月を惜まざらまし
六歎けとて月やは物を思はするかこち顔なる我涙かな
七君にいかで月に爭ふ程計めぐりあひつゝ影を並べむ
八白妙の衣かさぬる月かげのさゆる眞袖にかゝる白露
九忍寝の涙たゝふる袖の裏になづます宿る秋の夜の月
一〇物思ふ袖にも月は宿りけり濁らですめる水ならね共
一一戀しさを催す月の影なればこぼれかゝりて卿つ涙か
一二よしさらば涙の池に身をなして心の儘に月を宿さむ
一三打絶えて歎く涙に我袖のくちなばなどか月を宿さむ
一四よゝふとも忘形見の思ひ出は袂に月の宿るばかりぞ
一五涙故隈なき月ぞ曇ぬる天のはら〳〵ねのみなかれて
一六生憎にしるくも月の宿るかな夜に紛れてと思ふ袂に
一七面かげに君が姿を見つるより餘に月の曇りぬるかな
一八終夜月を見がほにもてなして心の關に迷ふころかな
一九秋の月物思ふ人の爲とてや影に哀をそへて出づらむ
二〇隔てたる人の心の隈により月を清かに見ぬが悲しさ
二一涙故常は曇れる月なればながれぬ折ぞ晴間なりける
二二隈もなき折しも人を思出でゝ心と月をやつしつる哉
二三物思ふ心の隈をのこひすてゝ曇らぬ月を見由もがな
二四戀しさや思ひよわると詠ればいとゞ心をくだく月哉
二五ともすれば月澄空にあくがるゝ心の果を知由もがな
二六眺むるに慰むとはなけれども月を友にてあかす頃哉
二七物思ひて眺むる頃の月の色にいか計なる哀そふらむ
二八天雲のわりなき隙をもる月の影計だに逢見てしがな
二九秋の月信太の杜の千枝よりも繁き歎や隈になるらむ
三〇思知る人有明のよなりせば盡せず身をば恨ざらまし

戀

一敷ならぬ心の谷に倣果てじ知せて社は身をも恨めめ
二打向ふ其あらましの面影を誠になして見る由もがな
三山賤のあら野を占て住そむる片便りなる戀もする哉
四常磐山椎の下柴刈すてむ隠れて思ふかひのなきかと
五歎くとも知らばや人の自から哀を思ふ事もあるべき
六何となく流石に惜しき命哉ありへば人や思知るとて
七何故か今日まで物を思はまし命に替て逢瀬なりせば
八怪めつゝ人知るとても如何せむ忍果べき袂ならねば
九涙川深く流るゝみをならば淺き人めに包まざらまし
一〇暫しこそ人目つゝみにせかれけれ果は涙や鳴瀧の川
一一物思ひは袖に流るゝ涙川いかなるみをに逢瀬有なむ
一二うき度になど〳〵人を思へ共叶はで年の積りぬる哉
一三中々になれぬ思ひの儘ならば恨計や身につもらまし
一四何せむに難面かしを恨む逢ずば斯る思せましや
一五むかはしは我が歎きの報にて誰ゆゑ君が物を思はむ
一六身のうさの思ひ知らるゝ理に抑へられぬは涙也けり
一七日をふれば袂の雨の足そひて晴るべくもなき我心哉
一八かきくらす涙の雨の足しげみ盛に物の歎かしきかな
一九物思へどかゝらぬ人もある物を哀なりける身の契哉
二〇岩代の松風きけば物をおもふ人も心は結ばれけり
二一等閑の情は人のあるものをたゆるは常の習なれども
二二何とこは數まへられぬ身の程に人を恨むる心有けむ
二三憂き節をまづ思知る涙哉さのみこそはと鬼もれども
二四様々に思ひ亂るゝ心をば君が許にぞつかねあつむる
二五物思へばちゝに心ぞ碎けぬる信太の森の枝ならね共
一一七斯る身に生し立けむ垂乳根の親さへつらき戀もする哉
一一八髪束な何の報のかへり來て心せたむる仇となるらむ
一一九かき亂る心やすめの言草は哀れ〳〵と嘆くばかりぞ
一二〇身を知れば人の咎とは思はぬに恨顔にもぬる袖哉
一二一中々になるゝつらさに比ぶれば疎き恨はみさを也鳧
一二二人はうし歎は露も慰まずこはさはいかにすべき心ぞ
一二三日に添へて恨みはいとゞ大海の豐かなりける我涙哉
一二四さる事のある也けりと思出でゝ忍心を忍べとぞ思ふ
一二五今ぞ知る思出でよと契りしは忘れむとての情也けり
一二六難波潟波のみいとゞ數そひて恨の隙や袖のかわかむ
一二七心ざしの有てのみやは人をとふ情はなしと思ふ計ぞ
一二八中々に思知るてふ言の葉はとはぬに過て恨めしき哉
一二九などか我事の外なる歎せでみさをなる身に生ざりけむ
一三〇汲みて知る人もありけむ自から堀兼の井の底の心を
一三一煙立つ富士の思の爭ひてよたけき戀を駿河へぞ行く
一三二涙川さかまくみをのそこ深み漲りあへぬ我が心かな
一三三せむと口に立てる潮の大淀みよどむとゝひもなき涙哉
一三四磯のまに波荒げなる折々はうらみを被く里のあま人
一三五東路やあひの中山程狹み心の奥の見えばこそあらめ
一三六いつとなく思に燃る我身哉淺間の煙しめるよもなく
一三七播磨路や心のすまに關すゑて爭で我身の戀を留めむ
一三八哀てふ情に戀の慰まばとふ言の葉やうれしからまし
一三九物思ひはまだ夕暮の儘なるに明ぬと告るしば鳥の聲
一四〇夢をなど夜頃頼まで過來けむさらで逢べき君ならなくに
一四一さはと云て衣返して打臥せど目の合はゝやは夢も見べき
一四二戀らるゝうき名を人に立じとて忍ぶわりなき我袂哉
一四三何せむに難面かしを恨む逢ずば斯る思せましや
一四四むかはしは我が歎きの報にて誰ゆゑ君が物を思はむ
一四五身のうさの思ひ知らるゝ理に抑へられぬは涙也けり
一四六日をふれば袂の雨の足そひて晴るべくもなき我心哉
一四七かきくらす涙の雨の足しげみ盛に物の歎かしきかな
一四八物思へどかゝらぬ人もある物を哀なりける身の契哉
一四九岩代の松風きけば物をおもふ人も心は結ばれけり
一五〇等閑の情は人のあるものをたゆるは常の習なれども
一五一何とこは數まへられぬ身の程に人を恨むる心有けむ
一五二憂き節をまづ思知る涙哉さのみこそはと鬼もれども
一五三様々に思ひ亂るゝ心をば君が許にぞつかねあつむる
一五四物思へばちゝに心ぞ碎けぬる信太の森の枝ならね共
一五五斯る身に生し立けむ垂乳根の親さへつらき戀もする哉
一五六髪束な何の報のかへり來て心せたむる仇となるらむ
一五七かき亂る心やすめの言草は哀れ〳〵と嘆くばかりぞ
一五八身を知れば人の咎とは思はぬに恨顔にもぬる袖哉
一五九中々になるゝつらさに比ぶれば疎き恨はみさを也鳧
一六〇人はうし歎は露も慰まずこはさはいかにすべき心ぞ
一六一日に添へて恨みはいとゞ大海の豐かなりける我涙哉
一六二さる事のある也けりと思出でゝ忍心を忍べとぞ思ふ
一六三今ぞ知る思出でよと契りしは忘れむとての情也けり
一六四難波潟波のみいとゞ數そひて恨の隙や袖のかわかむ
一六五心ざしの有てのみやは人をとふ情はなしと思ふ計ぞ
一六六中々に思知るてふ言の葉はとはぬに過て恨めしき哉
一六七などか我事の外なる歎せでみさをなる身に生ざりけむ
一六八汲みて知る人もありけむ自から堀兼の井の底の心を
一六九煙立つ富士の思の爭ひてよたけき戀を駿河へぞ行く
一七〇涙川さかまくみをのそこ深み漲りあへぬ我が心かな
一七一せむと口に立てる潮の大淀みよどむとゝひもなき涙哉
一七二磯のまに波荒げなる折々はうらみを被く里のあま人
一七三東路やあひの中山程狹み心の奥の見えばこそあらめ
一七四いつとなく思に燃る我身哉淺間の煙しめるよもなく

山家和歌集下

雜

題しらず

一つく〳〵と物を思ふに打そへてをり哀なる鐘の音哉
二情有し昔のみ猶忍ばれて長らへまうき世にもある哉
三軒近き花たちばなに袖しめて昔をしのぶ涙つゝまず
四何事も昔をきくは情ありて放あるさまに忍ばるゝ哉
五我宿は山のあなたにある物を何と浮世を知らぬ心ぞ
六曇なき鏡の上にゐる塵をめにたてゝ見る世と思ばや
七長らへむと思心ぞ露もなき厭ふにたにもたらぬ憂身は
八思出づる過にし方を耻しみ有るに物うき此世也鳧
九世につかふべかりける人の籠り居たりける許へ遣しける
一〇世の中にすまぬもよしや秋の月濁れる水の湛ふ盆に
一一世の中は五日さうぶを人の遣したりける返事に
一二世の憂にひかるゝ人は菖蒲草心のねなき心ち社すれ
一三世のうきを昔語になしはてゝはな橘に思ひ出でばや
一四世にあらじと思ひける頃東山にて人々霞によせて懐をのべけるに

六空になる心は春の霞にて世にあらじとも思ひ立つ哉
同じ心をよみける
七世を厭名をだにもとは留置て數ならぬ身の思出にせむ
いにしへごろ東山にあみだ房と申しける上人の
庵室にまかりて見けるにあはれとおぼえて詠み
ける
八柴の庵と聞くは賤き名なれ共よに好もしき住ひ也晁
世を遁れける折ゆかりなりける人の許へいひ贈
りける
九世中を背き果ぬと云おかむ思知るべき人はなくともな
はるかなる所にこもりて都なりける人のもとへ
月の頃遣しける
〇月のみや上の空なる形見にて思ひもいでば心通はむ
世をのがれて伊勢のかたへまかりけるに鈴鹿山
にて
一鈴鹿山浮世をよそに振捨ていかに成ゆく我身なる覽
述懐
二何事にとまる心の有ければ更にしも又世の厭はしき
侍従大納言成道のもとへ後の世の事おどろかし
申したりける返りごとに
三驚す君によりてぞ長き夜の久しき夢は覺べかりける
かへし
四驚かぬ心なりせば世中を夢ぞと語るかひなからまし
中院の右大臣出家思ひ立つよし語り給ひけるに
月のいとあかくよもすがら哀にて明けにければ
歸りけり其の後其の夜の名殘おほかりし由いひ
送り給ふとて
五夜もすがら月を眺めて契り置し其睦言に闇は晴にし
かへし
六すむと見し心の月し顯れば此世も闇は晴ざらめやは
爲業ときはに堂供養しけるに世をのがれて山寺
に住み侍りける親しき人々まうで來たりと聞き
ていひ遣しける
七古へに變らぬ君が姿こそ今日は常盤の形見なるらめ
返し
八色かへで獨殘れる常磐木はいつを待とか人は見る覽
ある人さまかへて仁和寺の奥なる所に住むと聞
きてまかりて尋ねければあからさまに京にと聞
きて歸りにけり其の後人遣はしてかくなむ參り
たりしと申したる返りごとに
九立寄りて柴の煙のあはれさをいかゞ思ひし冬の山里
返し
〇山里に心はふかくすみながら柴の煙の立ち返りにし
此の歌もそへられたりける
一惜からぬ身を捨やらでふる程に長き闇にや又迷なむ
返し
二世をすてぬ心の中に闇こめて迷はむとは君一人かは
親しき人々あまたありければ同じ心に誰も御覽
せよと遣したりける返りごとに又
三なべて皆晴ぬ闇の悲しさを君知べせよ光見ゆやと
又返し
四思ふ共いかにしてかは知べせむ教る道に入らば社あらめ
後の世の事むげに思はずしもなしと見えける人
の許へいひ遣しける
五世中に心あり明の人は皆かくて闇には迷はぬものを
返し
六世をそむく心計は有明のつきせぬ闇は君にはるけむ
ある所の女房世をのがれて西山に住むと聞きて
尋ねければ住み荒らしたるさまして人の影もせ
ざりけりあたりの人にかくと申しおきたりける
を聞きていひ送りける
七潮馴し苫屋も荒てうき波に寄方もなき蜑と知らずや
かへし
八苦の屋に波立寄らぬ氣色にて餘り住うき程は見え鳧
待賢門院の中納言の局世をそむきて小倉山の麓
に住み侍りける頃まかりたりけるにことがら
ことに幽に哀なりけり風のけしきさへ殊に悲し
かりければかきつけゝる
九山おろす嵐の音の烈しきをいつならひける君が栖ぞ
哀なるすみかをとひにまかりたりけるに此の歌
を見て書きつけゝる　同院兵衛局
〇浮世をば嵐の風にさそはれて家を出ぬる栖とぞ見る
小倉をすてゝ高野の麓にあまのと申す山に住ま
れけり同じ院の帥の局都の外のすみかとひ申さ
ではいかゞとてわけおはしたりけるありがたく
なむ歸るさに粉川へ參られけるに御山より出で
あひたりけるをしるべせよとありければ具し申
して粉川へ參りたりけりかゝるついでは今はあ
るまじきことなり吹上見むこといふ事具せられた
りける人々申し出でゝ吹上へおはしけり道より
大雨風ふきて興なくなりにけりさりとてはとて
吹上に行きつきたりけれども見所なきやうにて
社に腰かきすゑて思ふにも似ざりけり能因が苗
代水にせきくだせと詠みていひ傳へられたる物
をと思ひて社に書きつけゝる
一天降る名を吹上の神ならば雲晴れのきて光あらはせ
二苗代にせきくだされし天川とむる も神の心なるべし
かく書きたりければやがて西の風吹きかはりて忽
ちに雲はれてうら〳〵と日なりにけり末の代なれ
ど心ざしいたりぬる事にはしるしあらたなる事を
人々申しつゝ信おこして吹上和歌の浦思ふやうに
見て歸られにけり
待賢門院の女房堀川の局のもとよりいひ遣られ
ける
三此世にて語ひ置かむ郭公死出の山路の知べともなれ
かへし
四時鳥泣々こそは語らはめ死出の山路に君しかゝらば
天王寺にまゐりけるに雨のふりければ江口と申
す所に宿をかりけるに貸さゝりければ
五世の中を厭ふまでこそ難からめ假の宿りを惜む君哉
かへし
六家を出る人としきけば假の宿に心とむなと思ふ計ぞ
ある人世をのがれて北山寺にこもりゐたりと聞
きて尋ねまかりたりけるに月あかゝりければ
七世を捨て谷底に住む人見よと嶺の木の間を出る月影
ある宮ばらにつけつかへ侍りける女房世をそむ
きて都はなれて遠くまからむと思ひ立ちて參ら
せけるに代りて
八悔しくも由なく君に馴染めて厭ふ都の忍ばれぬべき
題しらず
九さらぬだに世のはかなさを思ふ身に鴛鴦渡る曙の空
〇鳥部野を心の内に分行けばいまきの露に袖ぞほつる
一いつのよに長き眠の夢覺て驚く事のあらむとすらむ
二世の中を夢と見る〳〵はかなくも猶驚かぬ我心かな

三五なき人もあるを思ふに世中は眠の中の夢とこそ知れ
三六きし方の見し夜の夢に變ねば今も現の心ちやはする
三七事となく今日暮ぬめり明日も又變らず社は隙過る影
三八越ぬれば又も此世に歸こぬ死出の山社悲しかりけれ
三九儚しやあだに命の露消て野べに我身の送りおかれむ
四〇露の玉消れば又も置く物を頼みもなきは我身也けり
四一あれはとて頼れぬ哉明日は又昨日と今日は云べければ
四二○秋の色は枯野乍らもある物を世の儚さや淺茅生の露
四三一年月を爭て我身に送けむ昨日の人も今日はなき世に
四四范蠡が長男の心を
四五捨てやらで命ををふる人は皆千々の金をもて返る也
四六曉無常を
四七つきはてしその入相の程なさをこの曉に思知りぬる
四八霞に寄せてつれなきことを
四九なき人を霞める空に紛ふるは道を隔つる心なるべし
五〇花の散りたりけるにならびて咲きはじめける櫻
を見て
五一散ると見れば又咲花の匂にも後れ先だつ例ありけり
五二月前述懷
五三月を見て親れの年の秋までか此夜に我が契あるらむ
五四七月十五日あかしけるに舟岡と申す所にて
五五爭で我今宵の月を身に添て死出の山路の人を照さむ
五六物心ほそう哀なる折しも庵の枕ちかう蟲の音聞
えければ
五七その折の遙が本の枕にもかくこそ蟲の音には睦れめ
鳥部山にてとかくのとしける煙の中より分けて
出つる月かげ（かはれにうきわれかは）
（或傳古本有鳥邊山にしのたかねのすゑたちいでてかはれにうきわれかは）
諸行無常の心を
五八儚くて行きにし方を思ふにも今もここそは朝顏の露
五九同行にて侍りける上人例ならぬこと大事に侍り
けるに月のあかくて哀なるを見ける
六〇諸共に眺めくて秋の月ひとりにならむとぞ悲しき
六一待賢門院かくれさせおはしましにける御跡に人
々又の年の御はてまでさぶらはれけるに南おも
ての花ちりける頃堀川の房の許へ申し贈りける
六二尊ぬ共風の傳にも聞かじかし花と散にし君が行方を
かへし
六三吹風の行方知する物ならば花と散にも後れざらまし

近衛院の御墓に人に具して參りたりける夜露の
深かりければ
六四磨かれし玉の栖を露深き野べに移して見るぞ悲しき
一院かくれさせおはしましてやがて御所へ渡し
まゐらせける夜高野より出合ひて參りたりける
いと悲しかりけり此の後おはしますべき所御覽
じはじめけるそのかみの御供に右大臣さねよし
大納言と申しける侍らはれけり忍ばせおはしま
すことにて又人さぶらはざりけり其のをりの御
供にさぶらひけることの思ひ出でられて折しも
今宵に參りあひたる昔今のこと思ひつゞけられ
て詠みける
六五今宵こそ思知らるれ淺からぬ君に契のある身也けり
納め進らせける所へ渡しまゐらせるに
六六道變るみゆき悲しき今宵哉限の度と見るにつけても
納めまゐらせて後御ともにさぶらはれ人々たとへ
む方なく悲しながら限あることなりければ歸られ
にけり
はじめたるとありて明日まで侍らひて詠める
六七とはいやと思寄てぞ歎かまし昔乍らの我身也せば
右大將さんよし父のふくのうちに母なくなりぬ
と聞きて高野よりとぶらひ申しける
六八重ねきる藤の衣を便りにて心の色をそめよとぞ思ふ
かへし
六九藤衣かさぬる色は深けれど淺き心のしまぬばかりぞ
同じ歎きし侍りける人の許へ
七〇君が爲秋は世のうき折なれや去年も今年も物を思て
かへし
七一○晴やらぬ去年の時雨の上に又かき曇さるゝ山廻り哉
母なくなりて山寺に籠り居たりける人を程へて
思ひ出でゝ人のとひたりければ代りて
七二思出づる情を人の同じくば其折とへな嬉しからまし
ゆかりありける人はかなくなりにけるとかくの
わさに鳥部山へまかりて歸るに
七三限なく悲しかりけり鳥部山なきをおくりて歸る心は
父のはかなくなりにける卒塔婆を見て歸りける
人に
七四亡き跡をそと計見て歸るらむ人の心を思ひこそやれ

親かくれ頼みたりける堺失せなどして歎しける
人の又ほどなくむすめにさへおくれけりと聞き
てとぶらひけるに
七五此度はさゝ〳〵見けむ夢よりも覺ずや物は悲かる覽
五十日のはてつかたに二條院の御墓に御佛供養
しける人に具して參りたりけるに月あかくて哀
なりければ
七六今宵君死出の山路の月を見て雲の上をや思出づらむ
御跡に三河内侍侍ひけるに九月十三夜人にかは
りて
七七隱れにし君がみ影の戀しさに月に向てねをやなく覽
かへし　内侍
七八わが君の光かくれし夕より闇にぞ迷ふ月はすめども
寄紅葉懷舊といふことを法金剛院にて詠み
けるに
七九古へを戀ふる涙の色に似て袂に散るは紅葉なりけり
故郷逍懷といふことをときはの家にて爲業よ
みけるにまかりあひて
八〇繁き野を幾一村に分けなして更に昔を忍びかへさむ
十月中の十日ごろ法金剛院の紅葉見けるに上西
門院おはします由聞きて待賢門院の御とき思ひ
出でられて兵衛殿の局にさし置かせける
八一○紅葉見て君が袂やしぐるらむ昔の秋の色をしたひて
かへし
八二色深き梢を見ても時雨つゝ舊にし事を戀ぬ日ぞなき
周防内侍我さへ軒のと書きつけゝる
古郷にて人々懷をのべけるに
八三古へはついゐし宿もある物を何をか忍ぶ印にはせむ
みちの國にまかりたりけるに野中に常よりもと
覺しき塚のみえけるを人にとひければ中將の御
はかと申すはこれがことなりと申しければ中將
とは誰が事ぞと又問ひければ實方の御事なりと
申しけるいと悲しかりけりさらぬだに物哀にお
ぼえけるに霜枯の薄ほの〴〵見え渡りて後にか
たらむ詞なきやうにおぼえて
八四朽もせぬ其名計を留めおきて枯野の薄形見にぞみる
ゆかりなくなりて住みうかれにける古郷へ歸り
ゐける人の許へ

九七住みすてしその古郷を改めて昔に歸る心ちもやする
親に後れて歎きける人を五十日過ぐるまでとはざりければ問ふべき人のとはぬとを怪みて人に尋ぬと聞きてかく思ひて今まで申さりつゝよし申して遣しける人に代りて
九九なべて皆君が惰をとふ數に思做されぬ言の葉もがな
ゆかりにつけて物を思ひける人のもとよりなどがとはざらむと恨み遣したりける返り事に
一〇〇哀とも心に思ふ程計いはれぬべくばとひもこそせめ
はかなくなりて年へにける人の文を物の中より見出でゝむすめに侍りける人のもとへ見せに遣すとて
一〇一涙をやしのばむ人は流すべき哀に見ゆる水莖のあと
同行に侍りける上人をはりよく思ふさまなりと聞きて申し贈りける　寂　然
一〇二亂れすと終きくこそ嬉しけれさても別は慰まねどもかへし
一〇三此世にて又あふまじき悲しさに勝めし人ぞ心亂れし
とかくのわざ果てゝ跡のことゞもひろひて高野へ參りて歸りたりけるに　寂　然
一〇四いるさには拾ふ形見も殘りけり歸る山路の友は涙か
返事
一〇五爭でとも思分かでぞ過にける夢に山路を行心ちして
侍從大納言入道はかなくなりてよひ曉につとめする僧おの〳〵歸りける日申しおくりける
一〇六ゆき散らむ今日の別を思にも更に歎は添ふ心ちするかへし
一〇七伏沈む身には心のあらばこそ更に歎もそふ心ちせめ
此の歌も返しの外に具せられたりける
一〇八類なき昔の人の形見には君をのみこそ頼みましけれかへし
一〇九古の形見になると聞くからにいとゞ露けき墨染の袖
同じ日のりつなが許へ遣しける
一一〇亡跡も今日迄は猶名殘あるを明日や別を添て忍ばむかへし
一一一思へたゞ今日の別の悲しさに委をかへてしのぶ心を
やがて其の日さま變へて後此の返事かく申したりけりいと哀なり

同じさまに世をのがれて大原にすみ侍りける妹うとのはかなくなりにける哀とぶらひけるに
一一二如何計君思はまし道に入らで頼もしからぬ別也せばかへし
一一三頼しき道には入て行しかど我身をつめば如何とぞ思
院の二位の局身まかりける跡に十の歌人々よみけるに
一一四流れゆく水に玉なす泡沫の哀あだなるこの世也けり
一一五消ぬめる本の雫を思ふにも誰かは末の露の身ならぬ
一一六送りおきて歸りし道の朝露を袖にうつすは涙也けり
一一七舟岡の裾野のつかの數へて昔の人に君をなしつる
一一八非ぬよの別はげにぞ憂りける淺茅が原を見に附ても
一一九後世をとへと契し言の葉や忘らるまじき形見なる覽
一二〇後れゐて涙にしづむ古郷を玉のかげにも哀とや見る
一二一跡を訪道にや君は入ぬらむ苦しき死出の山へ懸らで
一二二名殘さへ程なく過ぬ悲きに七日の數を重ねすもがな
一二三跡しのぶ人にさへ又別るべき其日をかねて知る涙哉
跡の事ども果てゝ散々になりにけるにしげのりながのりなど涙流して今日にさへ又と申しける
程に南面の櫻に鶯の鳴けるを聞きて詠みける
一二四櫻花ちり〳〵になる木のもとに名殘をしむ鶯の聲
かへし　少將ながのり
一二五散花は又來む春も咲きぬべし別はいつか廻り逢べき
同日くれけるまゝに雨のかきくらし降りければ
一二六哀知る空も心のありければ涙に雨をそふるなりけり
かへし　院少納言局
一二七哀しる空にはあらじ侘人の涙ぞ今日は雨とふるらむ
行ちりて又の朝遣しける
一二八今朝はいかに思の色の增る覽昨日にまへも又別れつゝ
かへし　少將ながのり
一二九君にさへ立別つゝ今日よりぞ戀む方はげに無りける
兄の入道想空はかなくなりけるをとはざりければいひ遣しける　寂　然
一三〇とへかしな別の袖に露しげき蓬がもとの心ばそさを
一三一待わびぬ後れ先だつ哀をも君ならでさは誰か問べき
一三二別にし人の二たび跡を見ば慢みやせましとはぬ心を
一三三いかゝせむ跡の哀はとはず共別れし人の行方尋ねよ
一三四中々にとはぬは深き方もあらむ心淺くも恨みつる哉

一三五分入て蓬が露をこぼさじと思ふも人をとふに非ずや
一三六よそに思ふ別なれば誰をかは身より外には訪べかりけり
一三七隔てなき法の言葉にたよりえて蓮の露に哀かくらむ
一三八なき人を忍ぶ思の慰まば跡をも千度とひこそはせめ
一三九御法をば詞無れどとくと聞けば深き哀は云で社思へ
これは具して遣しける
一四〇露深き野べになりゆく故郷は思遣るにも袖萎れけり
無常の歌あまた詠みける中に
一四一軌くにか眠り〳〵て倒れふさむと思ふ悲き道芝の露
一四二驚かむと思心のあらばやは長きねぶりの夢も覺べく
一四三風荒き磯にかゝれる蜑人は繫がぬ舟の心ちこそすれ
一四四大波に引れ出たる心ちして助け舟なき沖にゆらるゝ
一四五なき跡を誰と知らねど鳥部山おの〳〵悲き塚の夕暮
一四六波高き世をこぎ〳〵て人はみな舟岡山を泊にぞする
一四七死にてふさむ苔の筵を思ふより兼て知るゝ岩陰の露
一四八露と消えば蓮臺野に送りおけねかふ心を名に顯さむ
那智に籠りて瀧に入堂し侍りけるに此の上に一二の瀧おはしますそれへまゐるなりと申す住僧の侍りけるに具して參りけり花や咲きぬらむと尋ねまほしかりける折ふしにて便ある心ちして分けまゐりたり二の瀧のもとへ參りつきたり如意輪の瀧となむ申すと聞きて拜みければまことにすこし打ち傾ぶきたるやうに流れくだりてたふとく覺えけり花山院の御庵室の跡の侍りける前に年ふりたる櫻の木の侍りけるを見てすみかとすればとよませ給ひけむと思ひ出でられて
一四九木の本に住けむ跡を見つる哉那智の高嶺の花を尋て
同じ行に侍りける上人月の頃天王寺にこもりたりと聞きていひ遣しける
一五〇飛びいかに西に傾ぶく月影を常よりもげに君慕らむ
堀河の局仁和寺に住み侍りけるに參るべきよし申したりけれどもまゐることありて程經にけり
月の頃前を過ぎけるを聞きていひ送られける
一五一西へ行く知べと頼む月影の空願め社ひなかりけれかへし
一五二さしいらで雲路をよきし月影は待ぬ心や空にみえけむ
寂超入道讃讃すと聞きて遣しける

九弘むらむ法には逢ぬ身也共名を聞数に入ざらめやは
かへし
一〇傳へきく流なりとも法の水汲人からや深くなるらむ
さだのぶ入道観音寺に堂つくりに結縁すべきよし申し遣すとて　観音寺入道生光
一一寺つくるこの我谷につちうめよ君計こそ山も崩さめ
かへし
一二山崩す其ちからねは難くとも心工みをそへ社はせめ
阿闍梨勝命千人あつめて法華經結縁せさせけるにまゐりて又の日遣しける
一三遠りし昔に誘もかはらじと思ひ知られし法の庭かな
人にかはりてこれも遣しける
一四古へにもれけむ事の悲しさは昨日の庭に心ゆきにき
六波羅太政入道持經者千人あつめて津の國和田
と申す所にて供養侍りけるやがて其ついでに萬
燈會しけり夜更くるまゝに灯の消えけるをおの
〳〵ともしつぎけるを見て
一五消ぬべき法の光の燈火を挑ぐる和田のみさき也けり
天王寺へまゐりて龜井の水を見てよめる
一六淺からぬ契の程ぞくまれぬる龜井の水に影映しつゝ
心ざす事ありて扇を佛に進らせけるに新院より
給ひけるに女房承りてつゝみ紙に書きつけられ
ける
一七ありがたき法に扇の風ならば心の塵を拂ふとぞ思ふ
御かへし奉りける
一八塵ばかり疑よ心なからなむ法を仰きて頼むとならば
心性さだまらずと云ふことを題にて人々よみけ
るに
一九紫雀立荒野におふる姫百合の何につくともなき心哉
懺悔業障といふことを
二〇惑つゝ過ける方の悔しさに泣々身をば今日は恨むる
過ゝ敷待二龍花一といふことを
二一朝日まつ程は闇にて迷はまし有明の月の影無りせば
寄二藤花一述レ懐
二二西をまつ心に藤をかけてこそその紫の雲をおもはめ
見レ月思レ西といふことを
二三山の端に隠るゝ月を詠むれば我も心の西に入るかな
曉念佛といふことを

二四夢覺むる鐘の響に打添へて十度の御名を唱へつる哉
易往無人の文を
二五西へ行く月をやよそに思ふ心に入らぬ人の爲には
人命不レ停速レ於二山水一の文の心を
二六山川の激る水のおと聞けばせむる命ぞ思ひ知らるゝ
菩薩心論に乃至身命而不惓惜文を
二七あだならぬ頓て悟に歸りけり人の爲にもすつる命は
疏文に心自悟心自證心
二八惑ひきて悟り得べくもなかりつる心を知るは心也鳧
觀心
二九關はれて心の空にすむ月は西の山邊や近くなるらむ
序品
三〇散りまがふ花の匂をさきだてゝ光を法の筵にぞしく
三一花の香を連なる軒に吹しめて悟れと風の散す也けり
方便品、深著於五欲の文を
三二こりもせず浮世の闇に迷ふ哉身を思はぬは心也けり
譬喩品
三三法知らぬ人をぞにはうしと見る三の車に心懸ねば
はかなくなりける人の跡に五十日のうちに一品
經供養しけるに、化城喩品
三四休むべき宿をば思へ中空の旅も何かは苦しかるべき
五百弟子品
三五自から清き心に磨かれて玉ときかくる法を知るかな
提婆品
三六是やさは年積る迄こりつめし法にあふごの薪なる覽
三七いかにして聞事の斯易からむあだに思て得つる法かは
三八潔き玉を心に磨き出でゝいははけなき身に悟をぞ得し
觀持品
三九天雲のはるゝみ空の月影にうらみなくさむ捨山の山
（此歌は左右有いかにしてよみしにて置りけむ思ひわくべし）
壽量品
四〇驚の山月をいりぬと見る人は暗きに迷ふ心なりけり
四一悟り得し心の月の顯れて驚の高嶺にすむにぞ有ける
亡き人の跡に一品經供養しけるに壽量品を人に
代りて
四二雲はるゝ驚の御山の月影を心すみてや君ながむらむ
一心欲見佛の文を人々よみけるに
四三驚の山誰かは月を見ざるべき心に懸る雲しなければ
神力品於我滅度後の文を
四四行末の爲に留めぬ法ならば何か我身に頼みあらまし
普賢品
四五散敷きし花の匂の名殘多み立たまうかりし法の庭哉
心經
四六何事も空しき法の心にて罪ある身とはつゆも思はず
無上菩薩の心をよみける
四七驚の山上くらからぬ嶺なればあたりを拂ふ有明の月
和光同塵は結緣のはじめといふことを詠みける
に
四八いかなれば塵に交りてます神に仕ふる人は清まはる覽
六道の歌よみけるに、地獄
四九罪人の滅る世もなく燃る火の薪とならむとぞ悲しき
餓鬼
五〇朝夕の子を養ひにすと聞けばくに勝れても悲かる覽
畜生
五一神樂歌に草取飼ふは痛けれど猶其駒になる事はうし
修羅
五二よしなしな爭ふ事をたてにして怒をのみも結ぶ心は
人
五三有難き人になりけるかひありて悟求むる心あらなむ
天
五四雲の上の樂とてもかひぞなき借しも頓て住し果ねば
心に思ひけることを
五五濁りたる心の水のすくなきに何かは月の影宿るべき
五六いかでわれ清く曇らぬ身となりて心の月の影を磨かむ
五七道なく終に行べき道をさは知では如何過べかりける
五八愚なる心にのみや任すべき師となる事もあるなる物を
五九野にたてる枝なき木にも劣り鳧後世知らぬ人の心は
五首述懐
六〇身のうさな思知らでや已なまし背く習のなき世也せば
六一執くにか身を隠さまし厭ても浮世に深き山無りせば
六二身のうさの隠れがにせむ山里は心有てぞ住可りける
六三あはれ知る涙の露ぞこぼれける草の庵をむすぶ契は
六四浮れ出る心は身にも叶ねばいかも也てもいかにかはせむ
高野より京なる人の許へいひ遣しける
六五住むとは所からぞと云ながら高野は物の哀なるべき
仁和寺の宮にて道心逐レ年深と云ふことをよま

せ給ひけるに

六〇淺く出し心の水や落ふらむすみゆく儘に深くなる哉

閑中曉心といふことを同じ夜

七〇嵐のみ時々窓に音づれて明けぬる空の名殘をぞ思ふ

殊の外にあれ寒かりけるころ宮法印萬野にこもらせ給ひて此ほどの寒さはいかゝするとて小袖給はせたりける又の朝申しける

八〇今宵こそ憐みあつき心もし嵐の音をよそに聞きつれ

御歸より笙の岩屋へまゐりたりけるにもらぬ岩やもとありけむ折おもひ出でられて

九〇露もらぬ岩屋も袖は濡鳧と聞すばいかに怪からまし

小笹のとまりと申す所にて露のしげかりければ

一〇分け來つるを笹の露にそぼち〳〵ほしぞ煩ふ墨染の袖

阿闍梨兼堅世を遁れて高野にすみ侍りけりあからさまに仁和寺に出で〳〵歸りもまゐらぬことにて懈緩になりぬと聞きていひ遣しける

一一袈裟の色やわか紫に染てける苔の袂を思ひかへして

秋頃風わづらひける人を訪ひたりける返り事に

一二消ぬべき露の命も君がとふ言葉に杜起き居られれかへし

一三吹過る風しやみなば賴もしき秋の野もせの露の白玉

院の小侍從例ならぬこと大事にふし沈みて年月經にけりと聞きて訪ひにまかりたりけるにこの程すこし宜しき由申して人にも聞かせぬ和琴の手ひき鳴らしけるを聞きて

一四琴のねに涙を添て流す哉たえなましかばと思ふ哀にかへし

一五聽くべきとも無身を今日迄何に懸れる玉の緒ならむ

風わづらひて山寺へかへり入りけるに人々訪ひてよろしくなりぬと申し侍りけるに各心ざしを思ひ知りて

一六定なし風煩はぬ折だにも又來むことを賴むべき世に

一七あだに散る木葉につけて思ふ哉風誘ふめる露の命を

一八我なくばこの里人や秋深き露を袂にかけてしのばむ

一九さま〴〵に哀おほかる別かな心を君が宿にとゞめて

二〇歸れども人の情に嘉はれて心は身にも添すなりぬる

かへしども有りける聞き及ばねば書かず

新院歌集めさせおはしますと聞きて常磐にためたゞが歌の侍りけるを書き集めて進らせける大

寂超長門入道

原より見せに遣すとて

二一木の本に散言葉を掻く程に頓ても袖のそぼちぬる哉

かへし

二二年ふれど朽ちぬ常磐の言の葉をさぞ忍ぶらむ大原の里

寂超ためたゞが歌にわがうたかき具し又おとうとの寂然が歌などとりぐして新院へまゐらせけるを人とりつたへまゐらせけると聞きて兄に侍りける返事がもとより

二三家の風傳ふ計はなけれ共などか散さぬなげの言の葉かへし

二四家の風むねと吹べき木の本は今散なむと思ふ言の葉

新院百首の歌めしけるに奉るとて右大將さんよしのもとより見せに遣したりける返し申すとて

二五家の風吹傳へけるかひありてちる言の葉の珍しき哉

かへし

二六家の風吹傳ふ共和歌の浦にかひある言の葉にて社知れ題しらず

二七木枯に木葉の落つる山里は涙さへこそ脆くなりけれ

二八嶺わたる嵐はげしき山里にそへてきこゆる瀧川の水

二九訪人も思絶えたる山里の寂しさなくば住憂からまし

三〇曉の嵐にたぐふ鐘の音を心のそこにこたへてぞ聞く

三一待れつる入相の鐘の音す也明日もや有ば聞かむとすらむ

三二松風の音衰なる山里にさびしさそふるひぐらしの聲

三三谷の間に獨ぞ松は立てりける我のみ友はなきと思へば

三四入日さす山のあなたは知ね共心をぞ遣て送り置つる

三五何となく汲む度にすむ心かな岩井の水に影映しつゝ

三六水の音は寂しき庵の友なれや峰の嵐のたえま〴〵に

三七嵐ふく峯の木の間をわけ來つる谷の清水に宿る月影

三八鶯ふす刈田のひつぢ思ひ出でゝ仄に照す三日月の影

三九濁るべき岩井の水に非ね共汲まば宿れる月や懸がむ

四〇獨すむ庵に月のさしこずば何か山べの友とならまし

四一尋來てとふ人もなき宿に木間の月の影ぞさし入る

四二柴の庵は住憂き事もあらましを伴ふ月の影無りせば

四三影消ては山の月は洩りもこす谷は梢の雪と見えつゝ

四四雲に唯今宵の月を任せてむ厭ふとてしも晴れぬ物故

四五月を見る外もさこそは厭ふらめ雲唯こゝの空に漂ゝ

四六晴間なく雲こそ空に滿にけれ月見るとは思斷えなむ

四七濡るれ共雨も懸の嬉しさはいりこむ月を思也けり

四八分入りて誰かは人の尋ぬべき岩陰草のしげる山路を

四九山里は谷の筧のたえ〴〵に水こひ鳥の聲きこゆなり

五〇蕃はねど映れる影を友として蓑すみけりな山川の水

五一連りて風に亂れてなく雁のしぐろに聲の聞ゆなる哉

五二はれがたき山路の雲に埋れて苔の袂は霧朽ちにけり

五三つゝらはふは山は下も茂ければ住人いかにこ暗かる覽

五四熊のすむ苔の岩山恐ろしみうべ也けりな人も通はず

五五音もせで岩間たばしる霰こそ蓬の宿の友になりけれ

五六霰にぞ物めかしくは聞えける枯たる檜の柴の落葉は

五七柴園ふ庵の内は旅立ちてすぼる風も止らざりけり

五八谷風は戸を吹あけて入るものを何と嵐の窓叩くらむ

五九春淺みすゞのま垣に風さえてまだ雪きえぬ信樂の里

六〇みを淀む天の河岸波懸て月をば見るやさくさみの神

六一光をば曇らぬ月ぞ磨きける稻葉にかゝる朝日子の玉

六二弊余野の萩が絕間のひま〴〵に子の手拍の花咲に鳧

六三衣手にうつりし花の色なれや袖ほころぶる萩が花摺

六四を笹原葉末の露の玉に似てはしなき山を行心ちする

六五正木わる飛驒の工や出でぬらむ村雨すぎぬ笠取の山

六六河合やまきの裾山石たてる柚人いかに涼しかるらむ

六七柚くたすまくにが奥の河上にたつきうべしこけ浪よる

六八雪解るしみゝにしだく辛崎の道行きにくき足柄の山

六九ね渡しに印の竿や立てつ覽こびきまちつる越の中山

七〇雲鳥やしこの山路は偖措てあふちが原の寂しからねば

七一蔑ゆく舟人いかに寒からむくま山だけをおろす嵐に

七二をり懸くる波の立かと見ゆる哉洲崎にきゐる鷺の村鳥

七三わづらはで月には夜も通ひけり隣へ傳ふあせの細道

七四荒にける澤田のあぜにくら生ひて秋待べくも鳴渡る哉

七五傳ひ來る筧をたえず任すれば山田は水も思はざり鳧

七六身にしみし荻の音には變れども柴ふく風も哀也けり

七七小芹つむ澤の氷のひまたえて春めきそむる櫻井の里

七八來る春は嶺の霞をさきだて谷の筧を傳ふなりけり

七九春になる櫻の枝は何となく花なけれども睦まじき哉

八〇空はるゝ雲なり鳧な吉野山花もて渡る風と見たれば

八一さらにまた霞にくるゝ山路かな花をたづぬる春の曙

八二雲も懸れ花とを春は見て過ぎむ孰の山もわだに思で

八三雲かゝる山とは我も思ひでよ花故馴し睦び忘れず

八四山ふかみ霞こめたる柴の庵にことゝふものは谷の鶯

五六過ぎてゆく羽風寒し鴛のなづさひけりな梅の立枝を
六七鴛は田舎の谷の巣なれ共だみたる聲はなかぬ也けり
六八鴛の聲に悟を得べきかは聞く嬉しさもはかなかり鳧
六九山もなき海の面になびきて波の花にもまがふ白雲
七〇同しくば月のをり咲け山櫻花見る折の絕間あらせじ
七一ふる畑のそばたつ木にを居る鳩の友呼聲の凄き夕暮
七二浪につきて磯わに在す荒神は鑓踏きねを待にや有覽
七三潮風に伊勢の濱荻ふせばまづ穗末に波の改むるかな
七四荒磯の波にそ馴てはふ松はみさごのゐるぞ便也ける
七五補近みかれたる松の梢には波の音をや風は借るらむ
七六淡路島せとのなごろは高く共此潮わたに押渡らばや
七七潮路ゆくかこみのともろ心せよ又渦早きせと渡る也
七八磯にをる浪の喰しく見ゆる哉沖になごろや高く行覽
七九荒東な艫吹おろしの風さきに淺妻舟はあひやしぬらむ
八〇くれ舟に淺妻渡り今朝なよせを艫吹の嶽に雪しまく也
八一近江路や野ぢの旅人急がなむ野洲が原さて遠からぬかは
八二錦をば生野へ越る唐櫃に收めて秋は行くにが有る覽
八三里人の大幣小幣立てなめてむなかた結ふ野べに成覽
八四いたけもるゐまが時に成に鳧えぞが千島を煙單たり
八五武夫の鳴すさびは夥しあけどのしさりかもの入くび
八六ひつのくの奥床しくぞ思はゆる壺の碑文そとの濱風
八七朝歸るかりねうなこの村鳥は原のを萱に聲やしぬ覽
八八すがるふすこぐれが下の葛巻をふき裏返す秋の初風
八九諸聲にもりかきみかぞ聞ゆなる云合てや妻を戀らむ
九〇萱さくよこ野の茅花生ぬれば思ひ〳〵に人通ふなり
九一紅の色なり乍ら夢の穗の辛しや人のめにもたてぬは
九二蓬生はさることなれや庭の面に島扇のなぞ繁るらむ
九三刈殘すみつの眞薦に曙ろひて影もちがほに鳴蛙かな
九四柳はら河風ふかぬ影ならば暑くや蟬の聲にならまし
九五根生ひて涼めとなれる蔭なれや波打岸に風渡りつゝ
九六月の夜みさびすゑじと思ひしに緣にもしく池の浮草
九七思事みあれのしめに引鈴の協はすばよも成じとぞ思ふ
九八み薦野の濱木綿生ふえ浦さびて人並々に年ぞ重なる
九九石上ふるき栖へ分け入れば庭の淺茅に露ぞこぼるゝ
一〇〇遠くさすひたの面にひく潮は沈む心ぞ悲しかりける
一〇一ませにさく花に睦れて飛ぶ蝶の羨しきも惨かりけり
一〇二移り行色をば知らず言葉の名さへあだなる露草の花
一〇三風吹けばあだに成ゆく芭蕉葉のあれば身をも賴べきか
一〇四古郷の蓬は宿のなになれば荒行く庭にまづ繁るらむ
一〇五故郷は見しよにもなくあせに鳧騒ち昔の人行にけむ
一〇六しぐれかは山廻りする心哉いつ迄とのみ打萎れつゝ
一〇七はら〳〵と落る涙ぞ哀なるたまらず物の悲かるべし
一〇八何となく芹と聞くこそ哀なれ摘けむ人の心知られて
一〇九山人と吉野のおくに知べせよ花も尋ねむまた思あり
一一〇俺人の涙に似たる櫻かな風身にしめば先こぼれつゝ
一一一吉野山頃て出でじと思ふ身を花散なばと人や侍らむ
一一二人も來ず心もちらで山里は花を見るにも便ありけり
一一三風の音に物思ふ我が色そめて身にしみ渡る秋の夕暮
一一四我なれや風を煩ふ篠竹はおきふしものゝ心ぼそくて
一一五來むよにも斯る月をし見るべくは命を惜む人なからまし
一一六此世にて眺めなれぬ月なれば迷はむ闇も照さゝらめや
八月つきの頃夜ふけて北白川へまかりけるよし
ある樣なる家の侍りけるに琴の音のしければ立ちとまりて聞きけり折哀に秋風樂でしかくなりけり庭を見入れければ淺茅の露に月のやどれるしき哀なり垣にそひたる荻の風身にしむらむと覺えて申し入れてとはりけり
一一七秋風の殊に身にしむ今宵哉月さへすめる宿の景色に
一一八泉のぬしかくれて跡傳へたる人の許にまかりて泉に向ひてふるきを思ふといふことを人々よみけるに
一一九すむ人の心くまるゝ泉かな昔をいかに思ひ出づらむ
一二〇友にあひて昔を戀ふるといふことを
一二一今よりは昔語は心せむあやしきまでに袖しをれけり
秋の末に寂然高野にまゐりて暮の秋によせて懷を述べけるに
一二二驅來にし都も疎くなり果てゝ悲しさ添ふる秋の暮哉
一二三あひ知りたりける人のみちのくにへまかりけるに別の歌よむとて
一二四君いなば月待つとても詠やらむ吾妻の方の夕暮の空
大原に良選が住みける所に人々まりて述懷の歌よみてつま戸に書きつけゝる
一二五大原やまだ炭竈も習はずと云けむ人を今あらせばや
一二六大覺寺の瀧殿の石ども閑院にうつされて跡もなくなりたりと聞きて見にまかりけるに赤染がいまにかゝりとよみけむ折思ひ出られて哀と覺えければ詠みける
一二七今だにもかゝりと云し瀧つ瀨の其折までは昔也けり
深夜水聲といふことを高野にて人々よみけるに
一二八れつる窓の嵐の聲とめて遲くると告ぐる水の音哉
一二九竹風驚レ夢
一三〇玉みがく露ぞ枕に散りかゝる夢おどろかす竹の嵐に
山寺の夕暮といふことを人々よみ侍りけるに
一三一寒おろす松の嵐のおとに又ひゞきを添ふる入相の鐘
夕暮山路
一三二夕されや檜原の嶺を越行けばすごく聞ゆる山鳩の聲
海邊重二旅宿一といへることを
一三三波近き磯の松が根枕にてうら悲しきは今宵のみかは
一三四俊惠天王寺にこもりて人々ぐして住吉にまゐりて歌よみけるに具して
一三五住吉の松が根あらふ波の音を梢にかくる沖つしら浪
寂然高野に詣でゝ立ち歸りて大原より遣しける
一三六隔てこしその年月もあるものを名殘多かる嶺の朝霧かへし
一三七嘉はれし名殘をこそは眺めつれ立歸りにし嶺の朝霧
常よりも道たどらるゝ程に雪深かりける頃高野へまゐると聞きて中宮大夫の許よりいつか都へは出づべきかゝる雪にはいかにと申したりければ返り事に
一三八雪わけて深き山路に籠りなば年返りてや君に逢べきかへし　時忠卿
一三九分てゆく山路の雪は深く共とく立歸れ年にたぐへて
山ごもりして侍りけるに年をこめて春になりぬと聞けるからに霞わたりて山河の景日頃にも似ず聞えければ
一四〇霞めども年の內とは分ぬまに春を告なる山川の水
年の內に春立ちて雨の降りければ
一四一春としも猶思はれぬ心かな雨ふる年の心ちのみして
野に人あまた侍りけるを何する人ぞと聞きければ菜つむものなりと答へけるに年のうちに立ちかはる春のしるしの若菜かさはと思ひて
一四二年はやも月並かけて越に鳧宜摘けらしゑぐのわか立
春立つ日よみける
一四三何となく春に成ぬときく日より心に懸るみ吉野の山

正月元日雨ふりけるに

五いつしかも初春雨ぞ降にける野べの若菜も生やしぬ覺

七山深くすみ侍りけるに春立ちぬと聞きて

八山路こそ雪の下水とけざらめ都の空は春めきぬらむ

九深山不レ知レ春といふことを

雪わけてとやまが谷の鶯は籠のさとに春やつぐらむ

嵯峨にまかりたりけるに雪ふかゝりけるを見おきて出でしことなど申し遣すとて

一〇覺束な春の日數のふる儘に嵯峨野の雪は消やしぬ覺

かへし　靜忍法師

一一立歸り君やとひくと待程にまだ消やらず野べの泡雪

鳴き絶えたりける谷に鶯のしければ

一二思ひ出でゝ古巢に歸る鶯は旅の塒や住みうかるらむ

春の月あかゝりけるに花まだしき櫻の枝を風のゆるがしけるを見て

一三月見れば風に櫻の枝なべて花かと告る心ちこそすれ

國々廻りまはりて春歸りて吉野の方へまからむとしけるに人の此の程はいづくにか跡とむべきと申しければ

一四花を見し昔の心改めて吉野のさとに住まむとぞ思ふ

みやたてと申しけるはした物の年高くなりて檜かへなどしてゆかりにつきて吉野に住み侍りけり思ひかけぬやうなれども供養をのべむ料にとてくだ物を高野の御山へ遣したりけるに花と申すくだ物侍りけるを見て申し遣しける

一五とり樋に花の菓物積て鬼吉野の人のみやたてにしてかへし　みやたて

一六心ざし深く運べるみやたてを悟開けむ花にたぐへて

櫻に並びて立てりける柳に花の散りかゝりけるを見て

一七吹き亂る風に靡くと見し程は花ぞむすべる青柳の糸

寂然紅葉のさかりに高野に詣でゝ出でにける又の年の花のをりに申し遣しける

一八紅葉見し高野の嶺の花盛賴めし人の待たるゝやなぞかへし　寂然

一九共に見し嶺の紅葉のかひなれや花の折にも思出ける

夏熊野へ參りけるに岩田と申す所に涼みて下向しける人につけて京へ聞し行に侍りける上人の許へ遣しける

二〇松が根の岩田の岸の夕涼み君があれなと思ほゆる哉

葛城を尋ね侍りける折にもあらぬ紅葉の見えけるを何ぞと問ひければ正木なりと申すを聞きて

二一葛城や正木のいろは秋に似てよその梢の緑なるかな

天王寺へまゐりたりけるに松に藤の居たりけるを月のひかりに見て

二二庭よりも藤なる松の梢にぞ雪はつもれる夏の夜の月

高野より出でたりけるに覺堅阿闍梨きかぬさまなりければ菊を遣すとて

二三汲てなど心通はいとはざらむいでたる物を菊の下水かへし

二四谷深く住むかと思ひてとはぬまに慕を結ぶ菊の下水

旅にまかりけるに入相を聞きて

二五思へ唯暮ぬと聞きし鐘の音は都にてだに悲しき物を

秋遠く修行し侍りける程にほど經ける所より侍從大納言成通のもとへ遣しける

二六嵐ふく峯の木の葉に伴ひて孰ちうかるゝ心なるらむかへし

二七何となく落る木葉も吹風に散行方は知られやはせぬ

宮の法印高野にこもらせ給ひておぼろげにては出でじと思ふに修行せまほしき由語らせ給ひけり千日はてゝ御歩に參らせ給ひていひ遣はしける

二八あくがれし心を道の知べにて雲に伴ふ身とぞ成ぬるかへし

二九山端に月澄むまじと知られにき心の空になると見しより

年頃申しなれたりける人に遠く修行する由申してまかりたりける名殘多くて立ちけるに紅葉のしたりけるを見せまほしくて侍ひつるかひなくいかにと申しければ木の本に立よりて詠みける

三〇心をば深き紅葉の色に染て別て行くやちるになる覺

駿河の國久能の山寺にて月を見てよみける

三一涙のみ搔昏さるゝ旅なれやまやかに見よと月はすめ共

題知らず

三二身にもしみ物荒げなる氣色さへ哀をせむる風の音哉

三三いかでかは香に心のすまざらむ草木も靡く嵐也けり

三四松風はいつも常磐に身にしめどわきて寂き夕暮の空

遠く修行に思ひ立ち侍りけるに遠行別といふことを人々まできてよみ侍りしに

三五程ふれば同じ都の內だにも覺束なさは問まほしきに

年久しく相賴みたりける同行にはなれて遠く修行して歸らずもやと思ひけるに何となく哀にて詠みける

三六定なし幾年君になれ〳〵て別を今日は思ふなるらむ

年頃きゝわたりける人に初めて對面申して歸る朝に

三七別る共馴るゝ思を重ねまし過にし方の今宵なりせば

修行して伊勢にまかりたりけるに月の頃都思ひ出でられて詠みける

三八都にも旅なる月の影をこそ同じ雲居の空に見るらめ

そのかみ心ざし仕うまつりけるならひに世を遁れて後も賀茂に參りけり年高くなりて四國の方修行しけるに又歸り參らぬ事もやとて仁和二年十月十日の夜參りて幣まゐらせけり內へもまゐらぬ事なればたなうの社に取りつきて參らせ給へとて心ざしけるに木の間の月ほの〴〵と常よりも神さび哀に覺えて詠みける

三九長まるしでに涙のかゝるかな又いつかはと思ふ心に

播磨の書寫へまゐるとて野中の清水を見ける事

ひとむかしになりける年へて後修行すとて通りけるに同じさまにて殘らざりければ

四〇昔見し野中の清水變らねば我が影をもや思出づらむ

天王寺へまゐりけるに變野など申すわたり過ぎて見はるかされたる所の侍りけるを問ひければ天の川と申すを聞きて宿からむといひけむこと思ひ出されて詠みける

四一あくがれし天の河原と聞からに昔の波の袖に懸れる

四國のかたへ具してまかりたりける同行の都へ歸りけるに

四二歸りゆく人の心を思ふにも離れがたきは都なりけり

ひとり見おきて歸りまかりなむずるこそ哀にいつか都へはかへるべきなど申しければ

四三柴の庵の暫し都へ歸らじと思はむだにも哀なるべし

旅の歌よみけるに

九草枕たびなるそでに置く露を都の人や夢に見るらむ
一〇聞えつる都隔つる山さへに果は霞に消えにけるかな
一一わたの原遥に波を隔て來て都にいでし月を見るかな
一二わたの原波にも月は隠れけり都の山を何いとひけむ
西の國のかたへ修行してまかり侍るとてみつ野と申す所に具しならひたる同行の侍りけるに親しきもの〳〵例ならぬこと侍るとて具せざりければ
一三山城のみつのみ草に繁がれて駒物憂げに見ゆる旅哉
大峯のしんせんと申す所にて月を見て詠みける
一四深き山に澄ける月を見ざりせば思出もなき我身ならまし
一五嶺の上も同じ月こそ照すらめ所からなる哀なるべし
一六月すめば谷に澄そ雲は沈むめる嶺吹拂ふ嵐に敷れてをばすての嶺と申す所の見渡されて思ひなしにや月ことに見えければ
一七嫗捨は信濃ならねど眺くにも月澄嶺の名に社有けれ
小池と申すすくにて
一八いかゝして榊の隣を求めえて小池に今宵月の澄らむ
笹のすくにて
一九庵さす草の枕にどもなひてきゝの露にも宿る月かな
へいちと申すすくにて月を見けるに榊の露の秋にかゝりければ
二〇木末なる月も哀を思ふべし光にぐして露のこぼるゝ
あづまやと申す所にて時雨の後月を見て
二一神無月時雨はるれば東屋の嶺にぞ月はむねと澄ける
二二神無月谷に雲はしぐるめる月すむ嶺は秋に變らで
ふるやと申すすくにて
二三神無月時雨ふるやにすむ月は曇らぬ影も頼まれぬ哉
平等院の名かゝれたる卒塔婆に紅葉の散りかゝりけるを見て花より外のことありけむ人ぞかしとあはれに覺えて詠みける
二四哀とも花見し嶺に名を止て紅葉ぞ今日は共に散ける
ちぐさの嶽にて
二五分てゆく色のみならず榊さへちくさの嶽は心そみ鳧
ありの門渡と申す所にて
二六さゝふかみきりこすくきを朝立て靡く煩ふ蟻の門渡
行者かへり稚兒のとまりにつゝきたるすくなり
春の山伏ばびやうぶだてと申す所をたひらかにすぎむことをかたく思ひて行者ちごのとまりにても思ひ煩ふなるべし
二七昇風にや心を立て思ひけむ行者は歸りちごは止りぬ
三重の瀧をがみけるにことにたふとく覺えて三業の罪もすゝがるゝ心ちしければ
二八身に積る詞の罪も洗はれて心すみぬる三かさねの瀧
轉法輪の嶽と申す所にて釋迦の說法の座の石と申す所を拜みて
二九愛こそは法說れたる所よときく悟をもえつる今日哉
修行して遠くまかりけるをり人の思ひ隔てたるやうなることの侍りければ
三〇好さらば幾重ともなく山越て頓ても人に隔てられなむ
思はずなる事思ひたつよし聞えける人のもとへ
高野よりいひ遣しける
三一栞せでなほ山深く分入らむうきときかぬ所ありやと
三二なほ湯にまかりたりけるに具したりける人九月晦日にさきへ上りければ遣しける人にかはりて
三三秋はくれ君は都へかへりなば哀なるべき旅の空かなかへし
大宮の女房加賀
三四君を置て立出る空の霧けさは秋さへ暮る旅の悲しさ
鹽湯いで〳〵京へ歸りまうで來て古郷の花薄がれにける哀なりけり急ぎ歸りし人のもとへ又かはりて
三五露おきし庭の小萩も枯にけり疾ち都に秋とまるらむ
おなじ人
かへし
三六暮ふ秋は露も止らぬ都へとなどて急ぎし舟出なる覽
みちのくにへ修行してまかりけるに白川の關にとまりて所からにや常よりも月おもしろく哀にて能因が秋風ぞふくと申しけむ折いつなりけむと思ひ出でられて名殘おほく覺えければ關屋の柱に書きつけゝる
三七白河の關屋を月のもる影は人の心をとむるなりけり
さきにいりてしのぶと申すわたりあらぬよのこと覺えて哀なり都出でし日數思ひつゞけゝれば露と共にと侍ることの跡だるまで來にける
心ひとつに思ひ知られて詠みける
三八都出でゝ逢坂こえしをりまでは心かすめし白河の關
武隈の松は昔になりたりけれども跡をだにとて見にまかりて詠みける
三九枯にける松なき宿の武隈はみきと云てもかひ無らまし
ふりたる棚橋を紅葉のうづみたりけるわたりにくゝてやすらはれて人に尋ねければおもはくのほしと申すはこれなりと申しけるを聞きて
四〇ふまゝうき紅葉の錦散敷て人も通はぬおもはくの橋
信夫の里よりおくに二日ばかりいりてあり
下野の國にて柴の煙を見て詠みける
四一都近き小野大原をおもひいづる柴の煙の哀なるかな
名取河を渡りけるに岸の紅葉の影を見て
四二名取川岸の紅葉のうつる影は同じ錦を底にさへ敷く
十月十二日平泉にまかりつきたりけるに雪ふり嵐はげしく殊の外にあれたりけりいつしか衣河見まほしくてまかりむかひて見けり河の岸につきて衣河の城ともまはしたる事がらやうかはりて物を見る心ちしけり汀こほりてとり分きさびければ
四三取分きて心もしみて冴ぞ渡る衣河見にきたる今日しも
又の年の三月に出羽の國にこえてたきの山と申す山寺に侍りける櫻の常よりも薄紅の色こき花にて並み立てりけるを寺の人々も見興じければ
四四たぐひなき思ひいでぞの櫻かな薄紅の花のにほひは
同じ旅にて
四五風あらき柴の庵は常よりも寢覺ぞ物は悲しかりける
明石に人を待ちて日數へにけるに
四六何となく都の方ときく空は睦しくてぞ詠められける
新院讃岐におはしましけるに便につけて女房の許より
四七水莖のかき流すべき方ぞなき心の中は汲て知らなむ
かへし
四八程遠みかよふ心のゆくばかり猶かきながせ水莖の跡
又女房遣しける
四九最どしく憂きに附ても頼む哉契りし道の知べ違ふな
五〇斯りける涙に沈む身のうさを君ならで又誰か浮べむ
かへし
五一願ひらむ知べもいさや一つ世の別にだにも迷ふ心は
（底本左注「遠く修行すること」）
遠く修行することありけるに菩薩院の前齋宮にまゐりたりけるに人々別の歌つかうまつりける

に
[六]さりとも[七]と猶逢事を頼む哉死出の山路を越ぬ別は[八]
同じ折坪の櫻の散りにけるを見てかくなむ覺え侍ると申しける
[七]この春は君に別の惜しき哉花の行方は思ひわすれてかへしせよと承りて扇に書きてさし出でける　女房六角局
[八]君かいなむ形見にすべき櫻さへ名殘有せず風誘ふ也
西國へ修行してまかりける折小島と申す所に八幡のいはれ給ひたりけるにこもりたりけり年へて又その社を見けるに松どものふる木になりたりけるを見て
[九]昔見し松は老木に成にけり我年へたる程も知られて
山里にまかりて侍りけるに竹の風の荻にまがひて聞えければ
[一〇]竹の音も荻吹く風の少きに加へて聞けば優しかり鳧
世をのがれて嵯峨に住みける人の許にまかりて
後世のこと怠らず勤むべきよし申して歸りけるに竹の柱を立てたりけるを見て
[一一]よゝふ共竹の柱の一筋に立てたる節は變らざらなむ
題しらず
[一二]哀たゝ草の庵の寂しきは風よりほかにとふ人ぞなき
[一三]哀也より〳〵知らぬ野の末にかせきを友に馴る栖は
高野にこもりたる人を京より何事か又いつか出づべきと申したるよし聞きてその人に代りて
[一四]山水のいつ出べしと思はねば心細くて住むと知すや
松の絶間より僅に月のかげろひて見えけるを見て
[一五]影うすみ松の絶間をもりきつゝ心細くや三日月の空
松の木の間より僅に月のかげろひけるを見て[一六]
月をいたゞきて道を行くといふ事を
[一七]くみてこそ心すゞしめ賤の女が頂く水にやどる月影
木蔭の納涼といふことを人々よみけるに
[一八]今日も又松の風吹間へゆかむ昨日涼みし友に逢やと
入日の影かくれけるまゝに月の窓にさし入りければ
[一九]さしきつる窓の入日を改めて光をかふる夕月夜かな
月蝕を題にて歌よみけるに
[二〇]忌むと云て影に當らぬ今宵しもられて月見る名や立ぬ覽
寂然入道大原に住みけるに遣しける
[二一]大原は比良の高嶺の近ければ雪降る程を思ひ社やれ
かへし
[二二]思へ唯都にてだに袖さえし比良の高嶺の雪の景色は
高野の奥の院の橋の上にて月あかゝりければもろともに眺めかしてその頃西住上人京へ出でにけり其の夜の月忘れがたくて又同じ橋の月の頃住上人の許へいひ遣しける
[二三]事となく君戀ひ渡る橋の上に爭ふものは月の影のみ
かへし　西住上人
[二四]思ひやる心は見えで橋の上に爭ひけりな月の影のみ
忍西入道西山の麓に住みけるに秋の花いかに面白からむとゆかしうと申し遣しける返り事にいろ〳〵の花を折りあつめて
[二五]鹿の音や心なられば止る覽さらでは野べを皆見する哉
かへし
[二六]鹿の立野べの錦の切り端は殘り多かる心ちこそすれ
人あまたして一人に隱してあらぬやうにいひなしけることの侍りけるを聞きて詠める
[二七]一筋に爭で柚木のそろひけむ僞りつくる心たくみに
陰陽頭に侍りけるものにある所のはした物もの申しけりいと思ふやうにもなかりければ六月晦日に遣しけるに代りて
[二八]我が爲につらき心を六月の手づから順て被すてなむ
ゆかりありける人の新院の勘當なりけるを許し給ふべきよし申し入れたりける御返事に
[二九]最上川綱手ひくとも稻舟のしばしが程は碇おろさむ
御返り事奉りけり
[三〇]強くひく綱手と見せよ最上川その稻舟の碇をさめて
かく申したりければ許し給ひてけり
屏風の繪を人々よみけるに海のきはに幼き賤しきものゝある所を
[三一]磯菜つむ海士の早少女心せよ沖ふく風に波高くなる
同じ繪にとまの内に人の寢驚きたる所に
[三二]磯による浪に心のあらはれて寢覺勝なる苫屋形かな
庚申の夜申配りて歌よみけるに古今後撰拾遺これを梅櫻山吹によせたる題をとりて詠みける
古今、梅によす
[三三]紅の色こき梅を折る人の袖には深き香やとまるらむ
後撰、櫻によす
[三四]春風のふきおこせむに櫻花となり苦しくぬしや思はむ
拾遺、山吹によす
[三五]山吹の花咲井手の里こそはやしうゐたりと思ざらなむ
祝
[三六]隙もなく降りくる雨の脚よりも數限なき君が御代哉
[三七]千代ふべき物を宛ら集むとも君が齡を知らむ物かは
[三八]苦埋むゆるがぬ岩の深き根は君が千歳を固めたるべし
[三九]祥立て雲居にたづの鳴すなり君が千歳や空に見ゆ覽
[四〇]澤べより巢だち始むる鶴の子は松の枝にや移そむ覽
[四一]大海の潮干て山に成なる迄に君は變らぬ君にましませ
[四二]君が代の例に何を思はまし變らぬ松の色なかりせば
[四三]君が代は天つ空なる星なれや數も知られぬ心ちのみして
[四四]光さす三笠のやまの朝日こそげに萬代の例なりけれ
[四五]萬代のためしにひかむ龜山の裾野の原に茂る小松を
[四六]數かくる波に下枝の色染て神さびまさる住の江の松
[四七]若葉さすひら野の松は更に又枝に八千代の數をそふらむ
[四八]竹の色も君が緑に染られて幾代ともなく久かるべし
うまごまうけて悦びける人のもとへいひ遣しける
[四九]千代ふべき二葉の松の生先を見る人いかに嬉かる覽
五葉の下に二葉なる小松どもの侍りけるを子日にあたりける日をりびつに引きそへて遣すとて
[五〇]君が爲ごえよの子日しつる哉度々千代をふべき印に
たいの松ひきそへて此の松の思ふ事申すべくなむとて
子日する野べの我こそ主なるを御用なしとて引人のなき
世につかへぬべきやうなるゆかりあまたありける人のさもなかりける事を思ひて清水に年越にこもりたりけるに遣しける
[五一]此の春は枝々毎に栄ゆべし枯たる木だに花は咲くめり
これも具して
[五二]あはれびの深き誓に頼もしき清き流の底くまれつゝ
八條院の宮と申しけるをり白河殿にて蟲合せられけるに松かはりて蟲入れてとり出しける物に水に月のうつりたるよしをつくりて其の心を詠

みける
[八]行末の名にや流れむ常よりも月すみわたる白川の水
[丙]に貝合せむとせさせ給ひけるに人に代りて
[八]風たゝで波を治むる浦々に小貝をむれて拾ふ也けり
[九]難波潟潮干に群て出でたゝひ白洲の崎の小貝拾ひに
[八]風ふけば花さく波のをるたびに櫻貝よる三島江の浦
[七]波洗ふころもの浦の袖貝を汀に風のたゝみおくかな
[八]波かくる吹上の濱の雙璽貝風もぞおろす磯に拾はむ
[八]汐染むるますほの小貝拾ふとて色の濱とは云にや有覽
[九]渡寄する竹の泊のすゞめ貝嬉しき世にも逢にける哉
[一]波よする白良の濱のからす貝拾ひ易くも思ほゆる哉
[二九]かひありな君が御袖に厳はれて心に合ぬ事しなき世は
入道寂然大原に住侍りけるに高野より遣しける
[八]山深みさこそあらめと聞えつゝ音哀れなる谷川の水
[九]山深み槇の葉わくる月影は烈しき物のすごき也けり
[九]山深み窓の徒然とふ物は色つきそむるはじの立枝ぞ
[九]山深み苔の筵のうへに居て何心なく鳴くましらかな
[七]山深み岩に漏る水とめむかつ〳〵おつる檜拾ふほど
[九]山深みけ近き鳥のおとはせで物恐しきふくろふの聲
[九]山深みこぐらき嶺の梢よりもの〳〵しくも渡る嵐か
[〇]山深みほたきるなりと聞えつゝ所にきはふ斧の音哉
[一]山深み馴るかせきのけ近さに世に遠かる程ぞ知らゝゝ

寂然

[二]哀さはかうやと君も思ひ知れ秋くれがたの大原の里
[三]獨り住む廬の清水ともとては月をぞすます大原の里
[四]炭がまのたなびく煙ひとすぢに心ぼそきは大原の里
[五]何となく露ぞこぼるゝ秋の田のひた引鳴す大原の里
[七]水の音は枕に落つる心ちして寝覺がちなる大原の里
[一〇]あだに吹く草の庵のあはれより袖に露おく大原の里
[九]山風に峯のさゝ栗はら〳〵と庭におちしく大原の里
[一〇]丈夫が爪木にあけびさし添て暮るれば歸る大原の里
[一]蔭はゞ門は木の葉に埋もれて人もさし來ぬ大原の里
[二]諸ともに秋も山路も深ければしかぞ悲しき大原の里

神樂に星を

[三]ふけて出る み山も峯の明星は月待えたる心ちこそすれ

承和元年六月一日院熊野へまゐらせ給ひけるついでに住吉に御幸ありけり修行しめぐりて三日の社に詣でたりけるに住の江あたらしくしたてたりけるを見て後三條院の御幸神も思ひいで給ふらむと覺えて詠める

寂然

[四]絕たりし君が御幸を待ちつけて神いか計嬉しかる覽
松の下枝を洗ひけむ浪古にかはらずやと覺えて
[五]古への松の下枝を洗ひけむ波を心にかけてこそ見れ
齋院おはしまさぬ頃にて祭のかへさもなかりければ紫野をとほるとて
[六]紫の色なき頃の野べなれや片まつりにてかけぬ葵は
北まつりの頃賀茂に參りたりけるにをり嬉しくて待たるゝ程に使參りたりはし殿につきてついふし拜まるゝまではさるとにて舞人のけしきふるまひ見し世の事とも覺えず東遊に琴うつ陪從もなかりけりさこそ末の世ならめ神いかに見給ふらむと耻かしきこゝちして詠み侍りける
[七]神の代も變りに鬼と見ゆる哉其事業の有ずなりにて
[八]御手洗の流はいつも變らぬを末にしなれば淺ましの世や
伊勢にまかりたりけるに太神宮に參りて詠みける
[九]磯葉に心をかけむ木綿しでゝ思へば神も佛なりけり
齋院おりさせ給ひて本院の前を過ぎけるに人のうちへいりければゆかしう覺えて具して見まはりけるにかくやありけむとおぼれに覺えておりておはしまします所へ宣旨の局の許へ申し遣しける
[一〇]君すまぬ御内はあれて有栖川いむ甲斐をも寫しつる哉

かへし

[一]思きやいやこし人の傳にして馴し御内を聞かむ物とは
伊勢に齋王おはしまさで年へにけり齋宮木だちばかりさかと見えてついがきもなきやうになりたりけるを見て
[二]いつか又齋宮のいつかれてしめの御内に塵を拂はむ
世の中に大事出で來て新院あらぬさまにならせおはしましてかしこおろして仁和寺の北院におはしましけるに參りて源賢阿闍梨出でゝあひたり
月あかくてよみける

俊成

[三]斯るよに影も變らず澄月を見る我身さへ恨めしき哉
讃岐へおはしまして後歌どいふことのよにいと聞えざりければ寂然が許へいひ遣しける
[四]言の葉の情絕にし折節に有あふ身こそ悲しかりけれ

かへし

寂然

[五]敷島や絕えぬる道に泣々も君とのみこそ跡を忍ばめ
讃岐にて御心引きかへて後の世の事御つとめ隙なくせさせおはしますと聞きて女房の許へ申しける、此の文をかきて
若人不瞋打　以何修忍辱
[六]世の中を背く便やなからましうき折節に君が逢すば
これもついでに具して進らせける
[七]淺ましやいかなる故の報にて斯る事しも有世なる覽
[八]長へて遂に住べき都かは此世はよしやとても斯ても
[九]幻の夢を現に見る人はめもあはせでやよを明すらむ

かくて後人の參りけるに

[〇]其日より落つる涙を形見にて思忘るゝ時のまぞなき

かへし

女房

[一]めの前に變り果にし世のうきに涙を君も流しける哉
[二]松山の涙は海に深くなりて蓬の池に入れよとぞ思ふ
[三]波の立つ心の水を沈めつゝ唉かむ蓬を今は待つかな
老人述懷といふことを人々詠みけるに
[四]山深み杖にすがりて入る人の心の底のはづかしき哉
左京大夫俊成歌集めらるゝと聞きて歌遣すとて
[五]花ならぬ言葉なれど自ら色もやあると君拾はなむ

かへし

俊成

[六]世を捨て入にし道の言の葉ぞ哀も深き色は見えける

戀百十首

[七]思餘りいひ出でゝこそ池水の深き心の色は知られめ
[八]無き名社飾磨の市に立にけれまだ逢初ぬ戀する物を
[九]包めども涙の色にあらはれて忍ぶ思は袖よりぞちる
[〇]割無しや我も人めを包むまに强てもいはぬ心盡しは
[一]中々に忍ぶ氣色や著からむかゝる思に習ひなき身は
[二]氣色をば怪めて人の咎む共打任せては云じとぞ思ふ
[三]心には忍ぶと思ふかひもなくしるきは戀の涙也けり
[四]色に出でいつより物は思ふぞと問人あらば如何答へむ
[五]逢事の無て已ぬる物ならば今見よ世にも有やはつると
[六]憂身とて忍ばゞ戀の忍ばれて人の名立に成も社すれ
[七]みさをなる涙也せば唐衣懸ても人に知られましやは
[八]歎き餘り筆のすさびに盡せ共思ふ計はかゝれざり鬼

九我が歎く心の内の苦しきを何と譬へて君に知られむ
一〇今は唯忍ぶ心ぞつゝまれぬ歎かば人や思ひ知るとて
一一心には深くしめ共梅の花をらぬ匂はかひなかり鳧
一二さかとよと爪に人を見つれ共覚ぬは夢の心ち社すれ
一三消返り暮まつ袖ぞ袂れぬるおきつる人は露ならね共
一四いかにせむ其梅雨の名殘より咽てをやまぬ袖の雫を
一五さる程の契は何に有ながらゆかぬ心の苦しきやなぞ
一六今はさは覚ぬを夢に倣果て人に語らでやみれとを思ふ
一七折人の手には溜らで梅の花誰が移香にならひとす覧
一八轉寐の夢を厭ひし床の上の今朝いか計起うかるらむ
一九引かへて嬉しかる覧心にもうかりし事を忘ざらなむ
二〇織女はあふを嬉しと思ふらむ我は別のうき今宵かな
二一同くば咲初しより占おきて人に折られぬ花と思はむ
二二朝露にぬれにし袖をほす程にやがて夕だつわが涙哉
二三待乗て夢に見ゆやと睡らめば寐覚すゝむる荻の上風
二四つゝめども人知る戀や大堰川ゐせきの隈を潜る白波
二五逢ふまでの命もがなと思ひしは悔しかりける我心哉
二六今よりはあはで物をば思とも後愛人に身をば任せじ
二七いつかはと答へむ事の妬き哉思も知らず恨聞かせよ
二八袖の上の人め知られし折まではみさを也ける我涙哉
二九生憎に人めも知らぬ涙かな墻へぬ心に忍ぶかひなく
三〇荻の音は物思我に何なればこぼるゝ露に袖の萎るゝ
三一草茂み澤にぬはれてふす鳴のいかによそたつ人の心ぞ
三二哀とてひとの心の情あれな歎ならぬにはよらぬ情を
三三いかにせむ憂名をよゝに立て果て思も知らぬ人の心を
三四忘られむ事を重ねて思ひにきなど驚かす涙なるらむ
三五問れぬもとはぬ心の難面さも憂は變らぬ心ち社すれ
三六つらからむ人故身をば恨みじと思しか共叶はざり鳧
三七今更に何かは人も尤むべき初めてぬるゝ袂ならねば
三八わりなしな袖に歎きのみつ儘に命をのみも厭ふ心は
三九色深き涙の河のみなかみは人をわすれぬ心なりけり
四〇待乗て獨は伏せど敷妙の枕ならぶるあらましぞする
四一つとへかしな情は人の身の爲を憂物とても心やはある
四二言の葉の霜枯にしに思ひにき露の情も懸らましかば
四三夜もすがら恨を袖にたゝふれば枕に波の音ぞ聞ゆる
四四長らへて人の誠を見るべきに戀に命のたへむ物かは
四五頼め置し其云ひ事もあだに成し波越ぬべき末の松山
四六河の瀬によに消ぬべき泡沫の命をなぞや君が頼むる

四七假初におく露とこそ思ひしか秋にあひぬる我が袂哉
四八自からありへばとこそ思ひつれ頼なくなる我が命哉
四九身をも厭ひ人のつらさも歎れて思ひ歎ある頃にも有哉
五〇菅の根の長く物をば思はじと手向し神に祈りし物を
五一打解けて睡まばやは唐衣よな〳〵返すかひも有べき
五二我つらき事をやなさむ自から人めを思ふ心ありやと
五三言間へばもて離れたる景色哉麗らかなれや人の心の
五四物思ふ袖に歎きのたけ見えて忍ぶ知らぬは涙也けり
五五草の葉にあらぬ袂に物おもへば袖に露おく秋の夕暮
五六あふとのなき病にて戀死なば流石に人や哀と思はむ
五七いかにぞや云遣りたりし方もなく物を思て過る頃哉
五八我計物思ふ人や又もあると唐土までも尋ねてしがな
五九君に我いか計なる契ありてまなくも物を思初めけむ
六〇さらぬだに本の思の絶ぬまに歎きを人の添る也けり
六一我のみぞ我心をばいとほしむ偖む人のなきに附ても
六二恨じと思ふ我さへつらき哉とはで過ぬる心強さを
六三いつとなき思はふじの煙にて起きふす床や浮島が原
六四これもみな昔の事と云ながらなど物思ふ契なりけひ
六五などか我つらき人故物を思ふ契をしもは結び置けむ
六六紅にあらぬ袂の濃き色はこがれて物を思ふなみだか
六七せき兼てさはとて流す瀧つ瀬にわく白玉は涙也けり
六八歎かじと包みし頃は涙だに打任せたる心ちやはせし
六九眺こそ憂身の褄と成果て〳〵夕暮ならぬ折もわかれね
七〇今はわれ戀せむ人を訪らはむよに憂事と思知られぬ
七一思へ共思ふかひ社無りけれ思ひも知らぬ人を思へば
七二あやひねるさゝめごと袈裟にきし涙の雨を凌ぎがてらに
七三なぞも斯事新しく人のとふ我物思ひはふりにし物を
七四しなばやな何思ふらむ後世も戀はよに憂事と社きけ
七五割無しやいつを思の果にして月日を送る我身なる覧
七六いとほしや更に心の幼びて魂切れらるゝ戀もする哉
七七君慕ふ心のうちはちごめきて涙もろにもなる我身哉
七八懐かしき君が心の色を宇で露も散らさで袖に包まむ
七九幾程も長らふまじき世中に物を思はでふる由もがな
八〇いつか我塵つむ床を拂拳て寐むと願む人を待べき
八一よたけたつ袖にたゞへて忍ぶかな袂の瀧に落る涙を
八二憂きにより遂に朽ぬる我袖を心づくしに何忍びけむ
八三心から心にものを思はせて身を責むる我身なりけり
八四獨着て我身に纏ふ唐衣しほ〳〵とこそなき濡されて

八五云立て恨みばいかにつらからむ思へばうしや人の心は
八六歎かるゝ心の中の苦しさを人の知らばや君に語らむ
八七人知れぬ涙に暗ぶ夕暮はびき被きてぞ打臥されける
八八思ひきや斯る戀路に入初てよく方もなき歎せむとは
八九危さに人めぞ常によかれける岩の門ふむほきのかけ道
九〇知ざりき身に餘りたる歎して隙なく袖を絞るべしとは
九一吹風に露も溜らぬ葛の葉の裏返しとは君をこそ思へ
九二我からと義に住慣の名にしあへば人をば更に恨やはする
九三空しくてやみぬべき哉空蟬の此身からにて思ふ歎は
九四包め共袖より外にこぼれ出で〳〵後めたきは涙也けり
九五我が涙疑はれぬる心かな故なく袖のしをるべきかは
九六さる事の有べきかはと忍れて心いつ迄みさをなる覧
九七とりのくし思もかけぬ露拂ひあなくしたかの我心哉
九八君にそむ心の色の深さには匂も更に見えぬなりけり
九九さもこそは人め思はず成果てめあな様憎の袖の紫色や
一〇〇且すゝぐ澤の小芹の根を白み清けに物を思はする哉
一〇一いか様に思縺けて恨みまし偏につらき君ならなくに
一〇二恨ても慰めてまし中々につらくて人の逢はぬと思へば
一〇三打たえで君に逢人いかなれや我身も同世に社はふれ
一〇四とに斯に厭まほしき世なれ共君が住むにも引れぬる哉
一〇五何事に附てか世をば厭まし憂かりし人ぞ今は嬉しき
一〇六逢と見し其夜の夢の覚であれな長き眠はうかるべけれど
此の歌題も又人にかはりたることいもあり
ぞ書かす此の歌ども山里なる人の語るにしたがひて書きたるなりされば
ひがことどもやむかし今のことゝ取りあつめたれば時をりふしたがひたることども
一〇七岑毎に玉の髄せし玉章のたゞひは又もありける物を
かへし
一〇八よしさらば光なくとも玉と云て詞の塵は君磨かなむ
一〇九讃岐にまうで〳〵松山と申す所に院おはしましけむ御跡尋ねければ
一一〇松山の波に流れてこし舟のやがて空しく成にける哉
一一一松山の波の景色は變らじをかたなく君は成ましに鬼
白峯と申す所に御墓の侍りけるにまゐりて
一一二よしや君昔の玉の床とても斯らむ後は何にかはせむ
同じ國に大師のおはしましける御あたりの山に

庵むすびて住みけるに月いとあかくて海の方くもりなく見え侍りければ

二五重りなき山にて海の月見れば島ぞ氷の絶間なりける

住みけるまゝに庵いとあはれに覺えて

三六今よりは厭はじ命あればこそ斯る住ひの哀をも知れ

庵の前に松の立てりけるを見て

四七久にへて我後の世をとへよ松跡慕ふべき人もなき身ぞ

五八愛を又我住憂くてうかれなば松は獨にならむとす覽

雪のふりにけるに

六九松の下は雪ふる折の色なれや皆白妙に見ゆる山路に

七〇雪積て木もわかず咲花なれば常磐の松も見えぬ也鳧

八一花と見る梢の雪に月さえて聲へむ方もなき心ちする

九二紛ふ色は梅とのみ見て過行に雪の花には香ぞ無りける

一〇折しもあれ嬉く雪の埋む哉來籠りなむと思ふ山路を

一一中々に谷の細道うづめ雪ありとて人の通ふべきかは

二二谷の庵に玉の簾をかけましや結ぶ垂氷の軒を閉すば

花進らせける折しも折敷に殿の降り懸りければ

二三まきみ殿あかの折敷に緑無くば何に殿の玉とまらまし

大師の生れさせ給ひたる所とてめぐり玉まはして其の玉るしの松の立てりけるを見て

二四哀なり同じ野山に立てる木のかゝる印の契ありけり

二五岩にせくあか井の水の割なきは心すめとも宿る月哉

曼陀羅寺の行道どころへ昇るはよの大事にて手をたてたるやうなり大師の御經かきてうづませおはしましたる山の嶺なり坊の卒塔婆一丈ばかりなる塘つきて立てられたりそれへ日毎に昇らせおはしまして行道しおはしましけると申し傳へたりめぐり行道すべきやうに塘も二重につきまはされたり昇る程のあやふさことに大事なり

構へてはひまはりつきて

二六廻り合はむ事の契ぞ頼もしき嚴しき山の誓見るにも

やがてそれが上は大師の御師に逢ひ參らせさせおはしましたる嶺なりわかはいしさと其の山をば申すなりその邊の人はわかいしどぞ申しならひたる山文字をばすて、申さず又筆の山とも名づけたり遠くて見れば筆に似てまろ〳〵と山の嶺のさきの尖りたるやうなるを申しならはしたるなめり行道どころより構へてかきつきのぼりて嶺にまゐりたれば師にあはせおはしましたる所のしるしに塔を立ておはしましたりけり塔の石するはかりなく大きなり高野の大塔ばかりなりける塔の跡と見ゆ苔は深く埋みたれども石おほきにしてあらはに見ゆ筆の山とまうす名につきて

二七峯の山に攀き登ても見つる哉苔の下なる岩の景色を

二八善通寺の大師の御影にはそばにさしあげて大師の御師かきぐせられたりき大師の御手などもおはしましき四の門の額少々われて大方はたがはすして侍りき末にこそいかゞなりけむすらむと覺束なく覺え侍りしか

備前國に小島と申す島にわたりたりけるにあみと申す物をとる所は各われ〳〵しめて長き竿に袋をつけて立て渡すなり其の竿の立て始めをば一の竿とぞ名づけたる中に年たかきあま人のたてそむるなりたつるとて申すなる詞き、侍りしこそ涙こぼれて申すばかりなく覺えて詠みけるひゝしぶかはと申す方へまかりて四國の方へ渡らむとしけるに風あしくてほどへけりしぶ川の浦田と申す所に幼なき者どものあまた物を拾ひけるをとひければつみと申す物拾ふなりと申しけるを聞きて

二九立て初るあみとる浦の初竿は罪の中にも勝れたる哉

三〇おり立て浦田に拾ふ蜃の子はつみより罪を習ふ也鳧

三一まなべよりしはくへ通ふ商人は罪を檀にて渡る也鳧

三二同くば蠣をそきて乾しもすべき蛤よりは名も便あり

牛窓のせとに海人の出でいりてさだえと申す物をとりて舟に入れぐしけるを見て

三三さだえ住むせとの岩壺求出て急きし蜃の氣色なる哉

沖なる岩につきて蜃どもの飽とりける所にて

三四岩の根に片おもむきも浪うきて飽をかづく蜃の村君

題しらず

三五小鯛ひく網のうけ縄より廻りうきし業ある鹽崎の浦

三六霞しく波の初花をりかけてさくら鯛つる沖の海人舟

三七蜃人のいそしく歸るひじき物は小にじ蛤唐菜したゝみ

三八磯菜つまむと思ふるわかふのりみるめきはまひしき心太

伊勢の答志と申す島には小石の白のかぎり侍る濱にて黒は一つもまじらずむかひて菅島と申すは黒かぎり侍るなり

三九菅島や答志の小石わけかへて黒白ませようらの濱風

四〇鷲島の小石の白を高浪の答志の濱にうちよせてける

四一からすさぎの濱の小石と思ふ哉白も交らぬ菅島の黒

四二あはせばや鷲を島と葬をうたば答志菅島くろ白の濱

伊勢の二見の浦にさるやうなる女の童どものあつまりてわざとの事と覺しく蛤をとりあつめけるをいふかひなき海士人こそあらめうたてきことなりと申しければ貝合せに哀より人の申させ給ひたればえりつゝとるなりと申しけるに

四三今ぞ知る二見の浦の蛤を貝あはせとて拵ふなりけり

石子へ渡りたりけるに井貝と申す蛤にあこやの旨と侍るなりそれをとりたるからを高くつみおきたりけるを見て

四四あこやとる井貝の殻を積み置て寶の跡を見する也鳧

沖のかたより風の悪しきとて艤と申すいを釣りける船どもの歸りけるを見て

四五いらこ崎に鰹釣り舟並び浮てはかちの浪に浮びてぞよる

二つありける鰹のいらこ渡りすると申しけるが一つの鰹はとゞまりて木の末にかゝりて侍ると申しけるを聞きて

四六すだかわたるいらこが崎を疑ひて猶きにかゝる山蔦哉

四七敏鷹のすゐろかさてもふるさせて据たる人の有難の世や

宇治川を下りける舟のかなつきと申すものをもて鯉の下るをつきけるを見て

四八宇治川の早瀬落舞ふれよ舟の滑きにちがふ鯉の村まけ

四九小はえ集ふ沼の入江の簗の下は人つけにかゞ節にや有けむ

五〇しら縄に小鮎引れて下る瀬にもち設けたる米の敷網

五一見るも憂きは鵜縄に逃ぐるいろくづを遥からだにも網

五二秋風に鱸つり舟走るめりうのひとはしの名殘惜ひて

新宮より伊勢の方へまかりけるにみきしまにふ

れの沙汰しける浦人の黒き髪は一筋もなかりけるを呼びよせて

三九年へたる浦の蜑人言とはむ浪を潜きて幾世すぎにき

四九黒髪は過ると見えし白波を潜き果たる身には知る蜑

小鳥どもの歌よみける中に

五〇五一囀せずば色こくなると思はまし柳のめはむ鶯の林の白鳥

五二六桃園の花に紛へるてうその群立折はちる心ちする

七ならび居て友を離れぬこがらめの塒に頼む椎の下枝

月の夜賀茂にまゐりて詠み侍りける

八九月のすむ御祖河原に霜さえて千鳥とほたつ聲聞ゆ也

熊野へ參りけるに七越の嶺の月を見て詠みける

九立ち昇る月のあたりに雲消えて光かさぬる七越の峯

讃岐國へ罷りてみのつと申す津につきて月のあかくてひゃのでも通はぬ程に遠く見え渡りたりけるに水鳥のひゃのでにつきて飛び渡りけるを

〇〇志き渡す月の氷を疑ひてひゃのでまはるあちの村鳥

一爭で我心の雲にちりすべき見るかひ有て月を眺めむ

二眺居りて月の影にぞ世をば見る住もすまぬも也鳧さは

三雲晴て身に愁なき人のみぞさやかに月の影は見べき

四さのみやは袂に影を宿すべきよわし心に月な眺めそ

五月に耻てさし出でられぬ心哉眺むる袖に影の宿れば

六心をば見る人ごとに苦しめて何かは月のとり所なる

七露けさは憂身の袖の癖なるを月見咎におほせつる哉

八眺めきて月いか計り忍ばれむ此世し雲の外に成なば

九いつか我このよの空を隔たらむ哀をとつきを思ひて

一〇露もありつ返すん〳〵も思出でゝ獨ぞ見つる朝顔の花

一ひときれば都を捨て出づれども廻りて花を木曾の桜

二捨たれど隱て住ぬ人になれば猶世に有に似たる也鳧

三世中をすてゝ捨てえぬ心ちして都離れぬ我が身也鳧

四捨し折の心を更に改めて見るよの人に別れはてなむ

五思へ心人のあらばや世にも恥ぢむさはとてやはと勇む計ぞ

六呉竹の節繁からぬよも世せば斯の君はとてさし出なまし

七惡善を思分く社苦しけれ唯あらるれば有れける身を

八深く入るは月故としも無物を浮世忍ばむ三吉野の山

嵯峨野の見し世にも變りてあらぬやうになりて

人いなむとしたりけるを見て

一一此里や嵯峨の御狩の跡ならむ野山も果はあせ變り鳧

大覺寺の金剛が立てたる石を見て

一二庭の岩に目立つる人も無ちましかどある様に建し置ねば

瀧のわたりの木立あらぬことになりて松ばかり並み立ちたりけるを見て

一三流れ見し岸の木立もあせ果て松のみ社は昔なるらめ

龍門にまゐるとて

一四瀬を早み宮瀧河を渡りゆけば心の底のすむ心ちする

一五思ひ出て誰かは止て分も來む入る山道の露の深きを

一六呉竹の今幾よかは起臥して庵の窓をあげおろすべき

一七其筋にいりなば心何しかも人め思ひて世に包むらむ

一八綠なる松にかさなる白雪は柳の衣を山におはへる

一九盛ならぬ木もなく花の咲にけり思へば雪を分る山道

二〇波と見ゆる雪を分てぞ濳渡る木曾の梯底も見えねば

二一みなつるは澤の氷の鏡にて千年の影をもてやなす覽

二二澤も解す摘めど筐に留らでめにも溜らぬるぐの草括

一君がすむ岸の岩より出る水の絶ぬ末をぞ人も汲ける

二たしろ見ゆる池の堤の嵩添へて滿ふる水や春夜の爲

三庭に流す清水の末を堰きとめて門田養ふ頃にも有哉

四伏見過ぬ岡の屋に猶留まらじ日野迄ゆきて駒試みむ

五秋の色は風ぞ野もせに敷渡す時雨は音を袂にぞ聞く

六しぐれそむる花園山に秋くれて錦の色も改むるかな

伊勢のいそのへちの錦の島に磯わの紅葉の散りけるを

七浪にしく紅葉の色を洗ふ故に錦の島と云にや有らむ

陸奥國に平泉に向ひて多波志のねと申す山の侍るにこと木は少なきやうに櫻のかぎり見えて花の咲きたるを見て詠める

八聞もせずたはしね山の櫻花吉野の外に斯るべしとは

九奥に猶人見ぬ花の散らぬあれや尋ねを入らむ山郭公

一〇つ花ぬく北野の茅原あせゆけば心華ぞ生ひ變りける

例ならぬ人の大事なりけるが四月に梨の花の咲きたりけるを見て梨のほしき由を願ひけるにもしやと人に尋ねければ枯れたるかしはに包みたる梨を唯一つ遣はしてこればかりなど申したる返りごとに

一一花の折柏に包む信濃梨は一つなれ共ありの實と見ゆ

讃岐の位におはしましけるをり御幸の鈴のろうを聞きて詠みける

一二舊にける君が御幸の鈴のろうはいかなるよにも絶ず聞えむ

日のいる鼓の如し

一三波のうつ音を鼓に紛ふれば入日の影の打てゆらる

題しらず

一四山ざとの人も稍の松がうれにあはれに來ゐる郭公哉

一五ならべける心はわれか郭公君待ちえたるよひの枕に

一六筑紫にはらかと申すいをのつりをば十月一日におろすなり之はすに引きあげて京へは上せ侍るそのつりの綱遙に遠くひき渡してとほる船のその綱にふたりぬるをば卿ちかゝりてかうけがましく申してむつかしく侍るなりその心を詠める

一七腹赤つる大わた崎のうけ綱に心懸つゝ過むとぞ思ふ

一八伊勢島やいるゝつきてすまう波にけこ覺ゆるいりえの蜑

一九磯菜摘て波懸られて過にける鰐の住ける大磯の根を

百首

花十首

二〇吉野山花の散にし木の本にとめし心は我をまつらむ

二一吉野山高根の櫻咲きそめばかゝらむものか花の薄雲

二二人は皆吉野の山へ入りぬめり都の花に我はとまらむ

二三尋入る人には見ぜじ山櫻われとを花に逢はむと思へば

二四山櫻咲きぬと聞きて見にゆかむ人を爭ふ心とゞめて

二五山ざくら程なく見ゆる匂かな曇を人に待たれ〳〵て

二六花の雪の庭に積るに跡つけじ門なき宿と云散させて

二七詠めつるあしたの雨の庭の面に花の雪しく春の夕暮

二八吉野山ふもとの瀧にながす花や峯に積りし雪の下水

二九根に返る花を送りて吉野山夏の境に入りて出でぬる

郭公十首

三〇なかむ聲や散ぬる花の名殘なる頃て待たるゝ郭公哉

三一春くれて聲に花さく郭公たづぬるともまつも變ぬ

三二聞かで待つ人思ひ知れ時鳥聞ても人は猶ぞ待つめる

三三所から聞き難きかと郭公里を變ても待たむとぞ思ふ

三四初聲を聞きての後はとゞぎす待も心の頼もしき哉

三五五月雨のはれま尋ねて郭公雲居につたふ聲聞ゆなり

三六郭公なべて聞くには似ざりけり深き山邊の曉のこゑ

三七よるの床を鳴うかされむ時鳥物思ふ袖をとひに來ばば

三八時鳥月のかたぶく山の端にいでつる聲の返りいる哉

月十首

三九伊勢島や月の光のさびが浦は明石には似ぬ影ぞ澄ける

七池水にそこ清くすむ月影は波に氷をしきわたすかな
七月を見て明石の浦を出る舟は波の夜とや思はざる覧
七離れたる白良の濱の沖の石をくだかで洗ふ月の白波
三思解けば千里の影も數ならず到らぬ隈も月は有せじ
七大方の秋をば月につゝませてふき綻ばす風の音かな
三何事か此世に經たる思出をとへかし人に月を敎へむ
六思知るをよには隈なき影ならず我めに曇る月の光は
七浮世とも思ひとほさじ押返し月のすみける久方の空
九月の夜や友とを成て眺くにも人知らざらむ栖數へよ

雪十首

九信樂の柚のおほぢは止めてよ初雪ふりぬ弐庫の山人
八急がずば雪に我身やとゞめられて山邊の里に春を待まし
八哀れ知りて誰かわけこむ山里の雪ふり埋む庭の夕暮
二湊川苫に雪ふく友船はむやひつゝこそ夜を明しけれ
八筏士の浪の沈むと見えつるは雪を積つゝくだす也鳧
八溜りをる楫の雪の春ならば山里いかにもてなれまし
八大原は芹生を雪の道にあけてよもには人も通はざり鳧
八晴れやらで二村山に立雲は比良の吹雪の名殘也けり
八雪凌ぐ庵のつまをさし添て跡とめてこむ人を留めむ
八悔しくも雪のみ山へ分入らで麓にのみも年を積けり

戀十首

八古き妹が園に植たる唐棣誰なづさへと生し立つらむ
九紅のよそなる色は知られねばふくにこそ先染始けれ
九樣々の歎きを身には積置きていつ濕るべき思なる覧
九君をいかに細かに結へる繁目ゆひ立も離れず並つゝみむ
三戀す共みさをに人に云ればや身に從はぬ心やはある
四思出でよ三津の濱松よそたつる志賀の浦波立たむ袂を
九疎くなる人は心のかはるとも我とは人に心おかれじ
九月をうしと眺め乍らも思ふ哉其夜計の影とやは見し
七我は唯かへさでを着むさ夜衣きてねしとを思出つゝ
八川風に千鳥なくらむ冬の夜はわが思にて有ける物を

述懷十首　一首不入

九いざさらば塵思ふも程も有じはこやが嶺の春に瞰れて
〇山深く心は棄て逍りてき身こそ憂世を出やらねども
〇月に爭で昔の事を語らせて影に添ひつゝ立も離れむ
二〇憂世とし思はでも身の過に鳧月の影にもなづさはりつゝ
三〇雲につきて浮れのみ行心をば山に懸てをとめむとぞ思
四〇捨て後は紛れし方は覺ぬを心のみをばよにあらせける

五〇塵つかで歪める道を直く倣て行々人をよにつかむとや
六〇はどしまむと思ひも見えぬよにしあれば末にき社は大幣の空
七〇舊にける心こそ猶哀なれ及ばぬ身にも世を思はするか
（此歌百首有讀多山はこゝにせず詞書の心とは聞てふにしかにをさめつるかなと云事）

無常十首

八〇儚しな千年思ひし昔をも夢のうちにて過にける世は
九〇笹蟹の糸に貫く露の玉を懸て飾れる世にこそ有けれ
〇一現をもうつゝと更に思はねば夢をも夢と何か思はむ
一さらぬ事も跡方なきを分てなど露をあだにも云も置けむ
二燈火のかゝげ力もなくなりてとまる光をまつ我身哉
二水ひたる池に潤ほふ滴りを命に頼むいろくづやたれ
二汀近く引寄せらるゝ大網にいくせの物の命こもれり
五うら〳〵と死なむするなと思解けば心の噸てさぞと答る
六云捨てゝ後の行方を思果てば偖さはいかに浦島の箱
七世中になくなる人を聞く度に思は知るを悲なる身に

神祇十首

神樂二首

八めづらしな朝倉山の雲のより暮ひ出でたる赤星の影
九名殘いかに返〳〵も惜からむ其駒にたつ神樂舍人は

賀茂二首

〇御手洗に分れ濯ぎて宮人のまてに捧げてみと開く也
一長月の力合せに勝ちにける我が片岡をつよく頼みて

男山二首

二今日の駒はみつのさかふを負て社歩を遠に懸て通らめ

放生會

三御輿をさの聲さき立てゝ下ります音畏まる神の宮人

熊野二首

四み熊野の空しき事は有じかしむしたれ板の運ぶ歩みは
五新たなる熊野詣の驗をば氷のこりにうべきなりけり

御裳濯二首

六初春を隈なく照す影を見て月に先知るみもすその岸
七御裳濯の岸の岩根によをこめて固めたてたる宮柱哉

釋敎十首

きりきわうの夢の中に三首

八感ひてし心を誰も忘つゝひかへらるなる事のうき哉
九ひき〳〵にわがそてつると思ける人の心やせばまくの衣
〇末の世の人の心を磨くべき玉をも塵にませてける哉

無量義經三首

一悟廣き此法をまづ說置きて二つなしとはいひ窮め鳧
二山櫻つぼみ始むる花のえに春をばこめて霞む也けり
三身につきて燃る思の消ましや涼き風の煽がざりせば

千手經三首

三花迄はみに似ざるべし朽果て枝も無木の根をな枯しそ
三誓有て願はむ國へ行べくば西の言葉にふさねたる哉
三樣々にたな心なる誓をばなもの言葉にふさねたる哉

又一首この心を

楊梅の春の句はへんきちの功德なり　紫蘭の秋の色は普賢菩薩の眞相なり

七野べの色も春の句も押なべて心そめたる悟にぞなる

雜十首

八三澤の面にふせたるたづの一聲に驚かされて千鳥鳴也
九友に成て同じ湊を出る舟の行方も知らず濟別れぬる
〇濁おつる吉野の奥の宮川の昔を見けむ跡したはしや
一我園の岡邊に立てる一松を友さみつゝも老にける哉
二樣々の哀ありつる山里を人につたへて秋の暮れける
三山賤の住みぬと見ゆるわたり哉冬にあせ行靜原の里
四山里の心の夢に惑ひをれば吹きしらまかす風の音哉
五月をこそ眺めば心うかれ出め闇なる空に漂ふやなぞ
六波高き蘆屋の沖を歸る船の事無て世を過むとぞ思ふ
七笹蟹のいと世を斯て過にけり人の人なる手にも係らで

拾遺愚草

拾遺愚草上

百首歌

初學　二見月殘上大夫
閑居　早率二首　花月
十題　歌合　院判者　内裏
同千五百番　内大臣家後鳥羽二度
院當座百首　關白左大臣家貞永元
已上千五百首

初學百首　養和元年四月

詠二百首和歌一　　侍從

春二十首

八出る日の同光に四方の海の波にも今日や春は立らむ
九朝霞隔つるからに春めくは外山や冬のとまりなる竈
一〇鶯の初音を松に誘れて遙けき野べに千代も經ぬべし
一一雪の中に爭て折らまし鶯の聲こそ梅の知べなりけれ
一二梅の花榕をなべて吹く風に空さへ匂ふ春のあけぼの
一三中々によもに匂へる梅の花尋ぞわぶるよはの木の本
一四春雨のはれゆく空に風吹けば雲と共にも歸る雁がね
一五春雨のしく〳〵降ればいな筵庭に亂るゝ青柳のいと
一六吉野山たかき櫻の咲きそめて色たちまさる峯の白雲
一七花故に春は浮世ぞ惜まるゝ同じ山路に踏み迷へども
一八古の人に見せばや櫻ばな誰もさこそは思ひおきけめ
一九卯花による光をてらさせて月にかはらぬ玉川の里
二〇ほとゝぎし移香ならぬ橘にまづ戀ひらるゝ郭公哉
二一橘の花ちる扉にあらねども吹くには薫る蒿蒲草かな
二二五月闇くらぶの山の郭公仄かなる音に似る物ぞなき
二三過ぎぬるを恨みは果てじ郭公鳴行く方に人も待らむ
二四五月雨に今日も暮ぬる飛鳥川最ど淵瀬や變り果つ覽
二五五月雨に水なみ増る眞菰草短くてのみ明くる夏の夜
二六柚川や浮寢に馴るゝ筏士は夏の暮こそ涼しかるらめ
二七夏の日の入る山道をしるべにて松の梢に秋風ぞ吹く

秋二十首

二八押なべて變る色をばおき乍ら秋を知らする荻の上風
二九恨をやたちそへつらむ七夕の明くれば歸る雲の衣に
三〇風吹けば枝もとをゝに置露の散るさへ惜き秋萩の花
三一女郎花露ぞこぼるゝ起臥に契りそめてし風や色なる
三二露深き萩の下葉に月さえてをじか鳴くなり秋の山里
三三月影を葎の門にさし添て秋こそ來たれ訪ふ人はなし
三四天の原おもへば變る色もなし秋こそ月の光なりけれ
三五秋の夜のかゝみと見ゆる月影は昔の空を寫す也けり
三六浮雲のはるれば曇る涙かな月みるまゝの物悲しさに
三七露の身は假の宿りに消えぬ共今宵の月の影は忘れじ
三八心こそ唐迄もあくがるれ月は見ぬ世の知べならねど
三九臥す床を照す月にや類へけむ千里の外をはかる心は
四〇鹽竈の浦の波かせ月さえて松こそ雪の絕間なりけれ
四一秋の夜は雲路を分る雁がねの跡方もなく物ぞ悲しき
四二身にかへて秋や悲しき蓼虫な〳〵聲を惜まざるらむ
四三露乍ら折や置まし菊の花霜に枯れては見る程もなし
四四咲きまさる位の山の菊の花濃き紫にいろぞうつろふ
四五紅葉せぬ常磐の山に宿もがな忘て秋をよそに暮さむ
四六紅葉は移る計に染めて鳧昨日の色を身に占めしかど
四七響きくる入相の鐘も音絕ぬけふ秋風はつき果ぬとて

冬十首

四八晴曇る空にぞ冬も知初むる時雨は峰の紅葉のみかは
四九冬きては一夜ふた夜を玉笹の葉分の霜の所せきまで
五〇敷知らず茂るみ山の青つゝら冬の來るには顯れに鳧
五一時雨るも音は變ぬ板間より木葉は月の洩にぞ有ける
五二池水に宿りてさへぞ惜まるゝをしの浮寢に曇る月影
五三友千鳥なぐさの濱のなみ風に空さへまさる有明の月
五四音たえず霰降りおく笹の葉の拂はぬ袖を何濡すらむ
五五踏分くる道とも知らぬ雪の中に煙も絕ゆる冬の山里
五六花を待ち月を惜むと過しきて雪にぞ積る年は知るゝ
五七氷柱居る筧の水は絕ぬれど惜むに年のとまらざる覽

戀二十首

五八いかにせむ袖の柵かけそむる心の中を知る人ぞなき
五九是やさは空にみつなる戀ならむ思立つより燻る煙よ
六〇袖の上は左も右も朽果てゝ戀は忍ばむ方なかりけり
六一唐土の吉野の山の夢にだにまだ見ぬ戀に惑ひぬる哉
六二如何にしていかに知せむとも斯も如何なべての言のはぞかし
六三日にそへて益田の池の包兼ね云出づるとても濡るゝ袖哉
六四須磨の浦のあまりも燃ゆる思哉潮やく煙人は靡かで
六五梓弓まゆみ槻弓つきもせず思ひ入れ共靡く世もなし
六六千束まで立つる錦木徒にあはで朽なむ名こそ惜けれ
六七傷くて過る此世と思ひしは賴めぬ程の日數なりけり
六八さよ衣別るゝ袖にとゞめおきて心ぞ果は羨まれぬる
六九君が爲命をさへも惜すば更につらさを歎かざらまし
七〇結びけむ昔ぞつらき下紐の一夜とけゝるなかの契を
七一憂しとても誰にかとはむ難面て變る心をさらば歎へよ
七二つらきさへ君が爲にぞ歎かるゝ報に斯る戀も社すれ
七三諸共にねなの笹原道たえて唯吹く風の音に聞けとや
七四思出でよ末の松山末迄も波こさじとは契らざりきや
七五戀渡るさのゝ船橋影絕て人やりならぬ音をのみぞ鳴
七六いかにせむ憂に附てもつらきにも思已べき心社せね

雜二十首

神祇

七七春日山谷の藤波立ち返り花さく春に逢ふよしもがな
七八思のみ大原のべに年へぬるまづ事叶へ神のしるしに

釋敎

法師品

七九流れきて近づく水にしるき哉まづ開くべき胸の蓮葉

壽量品

八〇浮世には愁への雲の繁ければ人の心に月ぞかくるゝ

神力品

八一定めける佛の道を知べにて今は浮世に惑はずもがな

藥王品

八二身に占て書置く法の花の色の深き淺きは知人もなし

勸發品

八三消果つる花の御法の末に社定め置ける身とも知ぬれ

無常

八四詠めても定めなき世の悲しきは時雨に曇る有明の空
八五水の上に思做す社はかなけれ頓て消ぬを泡と見乍ら

別

八六別れても心へだつな旅衣いくへ重なる山路なりとも

旅

八七つく〳〵と寢覺て聞けば浪枕まださよ深き松風の聲
八八行きかへる夢路を賴む宵毎にいや遠ざかる都悲しも
八九立つ度に心ぼそしや藻汐やく煙はたびの庵ならねど
九〇行返り旅の空には音をぞ鳴雲居の雁をよそに見しかど
九一旅の空嫉捨山の月かげよ住みなれてだに慰みやせし

祝

三君が代は峰に朝日のさしながら照す光の數を數へよ
四我が君の御代と答へむ世中に千歳や何と人も尋ねば
物名
さしくし　ひかげ
五神山に幾代へぬ覽榊葉の久しくしめを結掛けてける
はんぴ　したがさね
六菅枕思はむ人はかくも非じたがさねぬ夜に塵積る覽
半僧字不レ可レ然初學已披露雖レ不レ可二直改一後學可レ存
とここはにひとすむとこは　如レ此可レ詠
述懷
七三笠山いかに尋ねむ白雲の蹤にし跡は絕果てにけり
二見浦百首　文治二年四位上人勸二進之一
詠二百首和歌一
侍從
春二十首
八吉野山霞める空を今朝みれば年は一夜の隔てなり鳧
九道たゆる山の梯雪きえて春のくるにも跡は見えけり
十何となく心ぞとまる山の端に今年見初る三日月の影
一春來ぬとかすむけしきをしるべにて稻に導ふ鶯の聲
二雪消えて若菜摘む野を罩てしも霞の爭で春をみす覽
三枯果てし草のとざしのはかなさも霞に曇る春の山里
四風かをるをちの山路の梅の花色に見するは谷の下水
五梅の花した行く水の影見れば匂は袖にまづ移りけり
六朝なきに行きかふ舟の景色まで春を浮ぶる波の上哉
七をちこちの四方の梢は櫻にて春風かをる三吉野の山
八青柳の葛城やその花ざかり雲に錦をたちぞかさぬる
九今もこれ過ぎても春の面影は花みる道のはなの色々
十嵐やは咲くより散す櫻花すぐるつらさは日數也けり
一惜まじよ櫻計の花もなし散るべき爲の色にも有らむ
二石走瀧こそ今日もいとはるれ散ても暫花は見ましを
三巽こにて風をも恨まし吉野の奥も花は散る也
四さだきより花を見捨て行雁や却て春の泊りをば知る
五花の散る行へをだにも隔てつゝ霞の外にすぐる春哉
六小山田の水の流を知べにて堰入るゝなべに鳴く蛙哉
七暮ぬなりあすも春とは賴まぬに猶殘りけり鳥の一聲

夏十首
八散りね唯あな卯花や咲からに春を隔つる垣ね也けり
九なべて世に待でた見ばや臙さらばつらさに聲やたつると
〇蔦蕭草かをる軒端の夕風に聞くこゝちする時鳥かな
一恨めしや待たれ〳〵て時鳥それかあらぬか村雨の空
二五月雨の雲のあなたを行く月のあはれ殘せと薰る橘
三夏ふかき櫻が下に水せきて心のほどを風に見えぬる
四猶暫し僭やは明けむ夏の夜の岩越す波に月は宿りて
五大堰河をちの梢の青葉より心にみゆる秋のいろ〳〵
六つゝきたつ蟬の諸聲はるかにて梢に見えぬ檜の下蔭
七夏ぞ知る山井のしみづ尋ねきて同じ木蔭に結ぶ契は
秋二十首
八夕まぐれ秋の景色になる儘に袖より露は置ける物を
九忘れつる昔を見つる夢をまた猶おどろかす荻の上風
〇これもこれ浮世の色を氷氣なく秋の野原の花の上露
一秋のきて風のみたちし空をだに訪人はなき宿の夕霧
二見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮
三秋といへば人の心に宿りきて待つに違はぬ月の影哉
四いづるより照る月影の清見潟空さへ凍る波の上かな
五厭はじよ月にたなびく浮雲も秋の景色は空に見え鳧
六眺めじと思ひし物を淺茅生に風吹く宿の秋の夜の月
七秋のみぞ更行く月に詠めして同じ浮世は思ひ知れ共
八有明の光のみかは秋の夜の月はこの世に猶殘りけり
九暮れてゆく形見に殘る月にさへあらぬ光を添る秋哉
〇夕闇になりぬと思へば長月のつき待つ儘に惜き秋哉
一大方の秋の景色は暮れはてゝたゞ山の端の有明の月
二初雁の雲居の聲ははるかにて明けがた近き天の河霧
三山賤の身の爲にうつ衣ゆゑ秋の哀れを手にまかす覽
四そこはかと心にそめぬ下草も枯るれば弱る蟲の聲々
五移ろはむ籬の菊は咲きそめてまづ色變る淺茅原かな
六神なびの御室の山のいかならむ時雨もて行秋の暮哉
七唯今の野原をおのが物とみて心強くもかへる秋かな
冬十首
八神無月方も定めず散る紅葉けふこそ秋の形見共みめ
九冬きては入江の葦の夜を重ね霜おきそふる鴛の毛衣
〇霜さゆる朝のはらの冬枯に一花さける大和なでしこ
一時雨つるまやの軒端の程なきに頓てさし入月の影哉
二晴れ曇る同じ眺めの賴みだに時雨にたゆる遠の里人
三物毎に哀殘らぬみ山かな落つる木葉もかるゝ草葉も
四朝夕の音は時雨のならしばにいつ降變る霰なるらむ
五寂しげの深きみ山の松原や峯にも雪は積りて
六跡絶て雪も幾夜か降ぬらむ斧のえ朽ちし岩のかけ道
七惜みつゝ暮ぬる年を兼てより今幾度と知よなりせば
戀十首
八世中よ高き賤しきなぞへなくなど有そめし思なる覽
九思ふとは見ゆらむ物を自から知れかし宵の夢計だに
〇此世より焦るゝ戀にかつ燃えて猶疎まれぬ心也けり
一戀々て思ひし程はえぞなれぬ唯時のまのあふ名計は
二天の原空行月の光かは手にとるからに雲のよそなる
三君と云ば落る涙に昏されて戀もつらしとわく方もなし
四戀つよし心づからも歎く也こは誰が添し面影ぞさは
五咲氣なくつらき嵐の聲もうしなど夕暮に待習ひけむ
六玄か計契りし中も變りける此世に人を賴みけるかな
七常陸帶か言も最ど練れて戀こそ道の果なかりけれ
述懷五首
八見しは皆昔さかはる夢の內に驚かれぬは心なりけり
九自ら有ばある世に長らへて惜むと人に見えぬべき哉
〇見るもうし思も苦し數ならでなど古を忍びそめけむ
一ありはてぬ命をさぞと知り乍偖くも世を明暮す哉
二月のいり秋の暮るゝを惜みても西には分きて慕心ぞ
無常五首
三幻よ夢ともいはじ世中はかくてきゝみる儚なさぞ是
四おしなべて世はかりそめの草枕結ぶ袂に消ゆる白露
五世中はたゞ影宿す墻荒見るもありとも賴むべきかは
六明日はこむ待てとふ道も人世の永き別にならぬ物かは
七人しれぬ人の心のかれ言も變れば哀此世也けり
雜
神祇五首
八さやかなる月日の影にあたりても天照神を賴む計ぞ
九中々にさしてはいはじ三笠山思ふ心は神も知るらむ
〇聞く毎に賴む心ぞすみまさる賀茂の社の御手洗の聲
一うきとも慰む道のしるべとや世を住吉と天降るらむ
二いかならむ三輪の山本年ふりて過行く秋の暮方の空
曉
三東雲よ四方の草葉も萎る迄いかに契りて露の置く覽
夕

四三そこはかと見えぬ山路の夕煙立にぞ人の栖とも知る
　夜
五二昔思ふ寝覺の空に過きゝけむ行方も知らぬ月の光の
　山家
六三山深き竹の編戸に風さえて幾夜絶ぬる夢路なるらむ
　田家
七三鳴のたつ秋の山田のかり枕誰がするとぞ心ならでは
　山
八四明けぬとも猶面影に立田山戀しかるべきよはの空哉
　河
九三よそにても袖社濡るれ水馴棹猶さし返す宇治の川長
　別
〇四忘るなよ宿る袂は變るともかたみに絞るよはの月影
　旅
一四月よする浦わの波を籬にてまづ袖ぬらす峯の松かせ
二四故郷を隔てぬ峯の詠にも越えにし雲ぞ關はするがける
三四磨きおく玉の栖も袖ぬれて露と消ぬる野べぞ悲しき
　楊貴妃
四四仄かなる煙はたゞふ程もなし馴し雲居に立返れども
　王昭君
五四寫す共曇りあらじと頼みこし鏡の影のまづつらき哉
　上陽人
六四知らざりき塵も拂はぬ床の上に獨齡の積るべしとは
　陵園妾
七四馴れ來にし空の光のこひしさに獨しをるゝ菊の上露
　皇后宮大夫百首　文治三年春詠二百首一之
　詠二百首和歌一
　侍從
　春十五首
八四諸人の袖をつらぬる紫の庭にや春も立ちはそむらむ
九四春きぬと霞は色にみすれども年をこむるは梅の初花
〇五峯の松谷のふる巢に雪消えて朝日とともに出づる鶯
一五梅の花匂の色はなけれども霞める儘を行方とぞ見る
二五色まさる松の緑の一入に春の日かすの深さぞ知る
三五あさみどり露ぬき亂る春雨に下さへひかる玉柳かな
四五秋霧を分けし雁がね立歸り霞に消ゆるあけぼの、空
五五著からむ是ぞそれとはいはず共花の都の春の景色は
六五白雲とまがふ櫻に誘はれて心ぞかゝる山のはごとに
七五霞とも花とも分かず菅原や伏見の里の春のあけぼの
八五雪と散る比良の高嶺の櫻花なほ吹き返せ志賀の浦風
九五いかにして靜心なく散花ののどけき春の花と見ゆ覽
〇六九重の雲の上とは櫻花ちりしく春の名にこそ有けれ
一六古りにける庭の苔ぢに春暮て行方も知らぬ花の白雪
二六梓弓入日を爭て引とめむさてもやおしてく春の歸ると
　夏十首
三六いつしかと今日ぬく袖よ花の色の移れば變る心也鳧
四六あたらしや賤が垣根を假そめに隔つ計の八重の卯花
五六空もそら鳴かでもやまし夕暮をさも怪さする時鳥哉
六六名殘だに暫しな明けそ郭公なきつるよはの空の浮雲
七六五月雨のをやまぬ空ぞ藻鹽やく浦の苫屋の晴間也ける
八六庭たづみ垣ほもたへぬ五月雨は槇の戸口に蛙なく也
九六紫陽花の下葉にすだく螢をば宵火の數の添かとぞみる
〇七紅の露に朝日をうつしもてあたりまで照る撫子の花
一七波風のこゑにも夏は忘れ草日かずをぞ積む住吉の濱
二七御祓河からぬ淺茅の末をさへ皆一かたに風ぞ靡かす
　秋十五首
三七秋の色をしらせそむとや三日月の光を磨く萩の下露
四七忘れ水たえま〳〵の影みれば村濃にうつる萩が花摺
五七夕されば過ぎにし秋の哀さへ更に身にしむ荻の上風
六七袖はさぞ秋は心に露やおく風につけてもまづ碎く覽
七七尋ぬれば花の露のみこぼれつゝ野風に類ふ松蟲の聲
八七小波や志賀の浦路の朝霧にまほにも見えぬ沖の友舟
九七我のみと聲にも鹿のたつる哉月は光に見せぬ秋かは
〇八待ち惜む隙こそなけれ秋風の雲ふき紛ふよはの月影
一八いかにせむさらで浮世は憩まず頼みし月も涙おち晃
二八戸無瀬河玉ちる瀬々の月を見て心ぞ秋に移り果ぬる
三八山の端に名殘とゞめぬ影よりも人頼めなる有明の月
四八秋ふかき岸の白菊風ふけば匂は空の物にぞありける
五八寂しさはおき添へてけり萩のえの秋の末葉に迷ふ初霜
六八色々に紅葉をそむる衣手も秋の暮行つまと見ゆらむ
七八暮て行く秋も山路の見えぬ迄散交ひ曇れ峯の紅葉ば
　冬十首
八八定なき時雨の雲の絶間哉さてや紅葉の薄く濃からむ
九八冬きては野べの假寢の草枕暮れば霜やまづ結ぶらむ
〇九旅寢する夢路はたえぬ須磨の關かよふ千鳥の曉の聲
一九ふり敝し木葉の庭にいつなれて霰待取る夢を作らむ
二九日かげ草曇りなきよの例とや曇の明に羇しそめけむ
三九神垣や霜おく〳〵にうちしめり月影やどる山藍の袖
四九降る雪に偕もとまらぬ御狩野を花の衣のまづ歸る覽
五九積りける雪の深さも知らざりつ槇の戸明くる曙の空
六九遠方やはるけき道に雪積り待つ夜重なる宇治の橋姫
七九年の內に偕く變る事もみな暮ぬる今日ぞ驚かれぬる
　忍戀十首
八九我戀よ君にもはては忍びけり何を始と思ひそめけむ
九九落標忍ぶ涙のみこもりに此世をかくて朽や果てなむ
〇〇いかならむ節にさぞ共知せましだれも立ぬよはの笛竹
一〇言づてむ人の心も危きにふみだにも見ぬ朝むつの橋
二〇袖の上にきもせき返す涙哉人の名をさへ朽たし果じと
三〇おり立て影をも見ばや渡川沈まむそこの同じ深さを
四〇顯れむその錦木は遮莫君がためてふ名をし立てすば
五〇葦垣の人め隔なきまぢかさを分けて傳ふる幻もがな
六〇亂れじと斯て絶なむ玉の緒よ長き恨のいつか覺べき
七〇戀ひわびぬ心の奥の忍山露も時雨もいろに見せじと
　逢不レ遇戀十首
八〇明ぬとて別れし空に優りけりつらき恨の返る戀路は
九〇年月は己が樣々積るとも忘るべしとは契りやはせし
〇一長くしも結ばざりける契故なに揚卷のより合にけむ
一一書き流す唯その筆の跡ながら變る心の程は見えけり
二一よと共に忍ぶ歎きの慰めは忘らるゝ名の絶ぬ計りや
三一猶ぞうき此世に聞きし言の葉は變るも元の契と思ば
四一うきを猶慕ふ心の弱らぬや絶ゆる契の賴みなるらし
五一忘れぬやさは忘れける我心夢になせとぞ云て別れし
六一移る也好偕さらば長へよまのみだなる君が名をもし
七一旅の空知らぬ假寢の立別れ朝の雲のかたみだになし
　寄二名所一戀十首
八一霞しく吉野の山の櫻ばなあかぬ心はかゝりそめにき
九一いはでのみ年ふる戀を鈴鹿川八十瀨の波ぞ袖に掛る
〇二いつかこの月日を杉の徵とて我待つ人を三輪の山本
一二清見潟關もる波に言問はむ我より過ぐる思ありやと
二二波こさむ袖とは兼て思ひにき末の松山尋ね見しより
三二鹽竈のうらみに馴れて立つ煙からき思はわれ獨のみ
四二尋ね見よより更科の月ならば慰めかぬる心しるやと
五二いかで猶我手にかけて掬びみむ唯飛鳥井の影計だに

六涙やはもみぢ葉流す龍田川たぎるとすれば變る色哉
七布引の瀧よりほかにぬき亂るまなく玉ちる床の上哉

雜戀十首

一程もなき同命を捨果てゝ君にかへつる憂身ともがな
二夜々は身も浮ぬべし蘆邊より滿來る潮のまさる思に
三さもこそは湊は袖の上ならめ君に心のまづ騷ぐらむ
四君のみと分きても今はつらからず斯る物思ふ世をぞ恨る
五時のまの袖の中にも紛るやと通ふ心に身を頼へばや
六恨つと聞きだに果じ待れずば唯明ぬ間の命ともがな
七戀しさの增る歎は夢ならでそれとだに見ぬ闇の現に
八須彌の壁の袖に吹越す潮風の鳴とはすれど手にも溜らず
九見て過ぎよ猶朝顏の露の間に暫しもとめむ飽ぬ光を
一〇あひ見ても猶ゆくへなき思かな命や戀の限なるらむ

旅戀五首

一一戀侘ぬ花ちる峯に宿からむ重ねし袖やさても紛ふと
一二夏山や行手に掬ぶ清水にもあかで別れし故郷をのみ
一三草枕散る紅葉の隙もがな馴來し方をよそにだに見む
一四假にゆふ庵も雪に埋もれて尋ねぞわぶるもすの草葺
一五忘れずばや松風寒き波の上に今日忍べとも契らぬ物を

寄法文戀五首

一六人天交接兩得相見
一七人の世も空もあひ見む時にもや君が心は猶隔つべき
一八我不愛身命
一九味氣なやかみなき道を惜むかは命を捨む戀の山べに
二〇又如淨明鏡
二一法にすむ心に身をも磨かばや倩も戀き影や見ゆると
二二如渡得船
二三君を置て待も久しき渡し舟のうらむ人の契なれとや
二四又如一眼之龜值浮木孔
二五譬ふなる波路の龜の浮木かは逢でも幾代萎れきぬ覽

閑居百首　文治三年冬奥・越中侍從・脉之

二六今日は又天つ社の榊葉も春の日影をさしやそふらむ
二七今よりの景色に春はこめてけり霞みもはてぬ曙の空
二八霞どなきつる鳥や春きぬと芽ぐむ若菜も人に知する
二九降り積る色よりほかの匂もて雪をば梅の埋む也けり

三〇色みえて春にうつろふ心かな闇はあやなき梅の匂に
三一雪きゆるかた山陰のあを緑岩ねの苔も春は見せけり
三二契りおけ玉まく葛に風吹かば恨みも果じ歸る雁がね
三三春雨よ木の葉亂れし村時雨それも紛るゝ方は有けり
三四年ふれど心の春はよそながら眺めなれぬる曙のそら
三五暫しとて出でこし庭も荒れにけり蓬の枯葉葉變りに
三六山里の籬の春の程なきに厭ばかりやをりは知るらむ
三七月影の哀をつくす春の夜に殘り多くもかすむ空かな
三八春のきて逢見むことは命ぞと思ひし花を惜みつる哉
三九面白く櫻さきける此世かなさもこそ月の空にすむ共
四〇咲くと見し花の梢はほのかにて霞ぞにほふ夕暮の空
四一雲の上の霞にこむる櫻花また立並ぶいろを見ぬかな
四二尋ねばやしのぶの奥の櫻花風に知られぬ色や殘ると
四三散花を三世の佛に祈りても限る日數の止らましかば
四四花咲かぬ我が深山木の徒然と幾歲過ぎぬ御代の春風
四五物ごとに色はかはらで惜まるゝ春は心の別なりけり

夏十五首

四六春夏の己がきぬ〳〵脫ぎかへて重ねし袖は猶惜む哉
四七五月闇空やは薰る年をへて軒の菖蒲の風のまぎれに
四八山里の軒ばの梢くも消えて餘りな閉ぢそ五月雨の空
四九然り迚今日やは名のる郭公まつ春暮て恨めしの世や
五〇何となく過にし春ぞ暮はるゝ藤鵑蜀唉く山のほと道
五一いかにせむひのくま川の時鳥唯一聲の影もとまらず
五二橘に風吹きかをり曇る日をすさびに名のる時鳥かな
五三故郷は庭も籬も苔むして花たちばなの花ぞ散りける
五四打も寢ず暮れば急ぐ鵜飼舟沈まぬよりや苦しかる覽
五五いかならむ茂みが底に照射して鹿待侘る程の久しさ
五六百敷の玉のみぎりのみかは水まがふ螢も光添へはり
五七八重葎茂る眞垣の下露に萎れも果てぬなでしこの花
五八影よき池の蓮に風過ぎてあはれ涼しき夕間ぐれ哉
五九松風のひゝきも色も一つにて綠に落つる谷川のみづ
六〇夏深き野べを籬にこめおきて霧間の露の色を待つ哉

秋二十首

六一吹く風に軒端の荻は聲立てつ秋より外に訪人はなし
六二草の原をざゝが末も露深しおのが樣々秋たちぬとて
六三蟲の音にはかなき露の結ぼゝれ所も分ぬ秋の夕暮
六四夜を重ね身にしみ增る嵐かな松の梢に秋やすぐらむ
六五秋ふかき木々の梢に宿かりて都に通ふ山おろしの風

六六仄々と我が住む方ば霧こめて葦屋の里に秋風ぞ吹く
六七秋きぬと手馴し初めし敏鷹も末野に鈴の聲ならす也
六八鶉なく夕の空をなごりにて野となりにけり深草の里
六九夢にだに妻には逢はぬさを鹿の思ひたえぬる曙の聲
七〇まどろむと思ひもはてぬ夢路より現に告る初雁の聲
七一殿なさは待こそ秋の夜の月より後の慰めもがな
七二久方の雲居を拂ふ木枯にうたてもすめるよはの月哉
七三行方なき空に心の通ふかな月すむ秋の雲のかけはし
七四色かはるあさぢが末の白露になほ影やどす有明の月
七五我が思ふ人住む宿の薄紅葉霧の絕間に見てや過なむ
七六移ろひぬ心のはなは白菊の霜おく色をかつ恨みても
七七龍田山紅葉踏分け尋ぬれば木綿附鳥の聲のみぞする
七八三吉野も花見し春の景色かはしぐるゝ秋の夕暮の空
七九咏氣なく心に秋は止りぬて眺むる野邊の霜枯ぬらむ
八〇行秋の時雨も果ぬ夕まぐれ何に分くべき形見なる覽

冬十五首

八一垢なしつゝ今年も暮ぬと思より先歎かるゝ冬は來にけり
八二今よりは馴れの里に宿からむ木葉時雨ぬ山陰もなし
八三風吹けば嘯て晴のく浮雲の又いづ方に打しぐるらむ
八四山里は分入る袖の上をだに拂ひも敢ず散る木葉かな
八五をの山や燒炭竈の煙にぞ冬立ちぬとは空に見えける
八六霰ふる賤がさゝやよそよ迄に一夜計の夢をやは見る
八七寂しさは霜こそ雪にまさりけれ峯のこずゑの曙の空
八八霜ふかき澤邊の草に鳴くつるの聲も恨むる明暮の空
八九萎ましと時を忘れぬ初霜に我が待つとぞ月日ふれども
九〇いかにせむ雪さへ今朝は降に晃笹分し野の秋の通路
九一山深き槙の葉凌ぐ雪を見て暫しは住まむ人とはす共
九二浦風やとはに波こす濱松のねに顯れて鳴く千鳥かな
九三ふる袖の山藍の色も年積て身も萎れぬる心も耐すれ
九四身に積る年をば雪の色にみてかげそふ暮ぞ物は悲き
九五春秋のあかぬ名殘をとりそへて宛ら惜き年の暮かな

戀十首

九六淺ましや空しき空にゆふしめの懸ても如何人は恨みむ
九七類ふべき宝の八島をそれとだに知せぬ空の八重霞哉
九八さ計に心の程を見せ初めし便もつらき歎をぞする
九九忘られぬ人を孰こと尋ても馴し詫言のある世也せば
一〇〇憂くつらき人をも身をも好知じ唯時のまの逢事もがな
一〇一いかにせむ逢夜を增る思にて又それならぬ慰めは無

[二]今ぞ知るあかぬ別の涙川身をなげはつる戀の淵とも
[三]敷妙の枕流るゝ床の上にせきとめがたく人ぞ戀しき
[四]歸るさの物とや人の眺むらむ待つ夜半らの有明の月
[五]契らすよ心に秋は龍田川わたる紅葉の中たえむとは

逃懐五首

[六]群れて居し同じ渚の友つるに我身一つのなど後る覽
[七]超す波の殘りを拾ふ濱の石の十とて後も三年過しつ
[八]押なべて及ぬ枝の花ならばよそに三笠の山もうからじ
[九]影清き雲居の月を眺めつゝ偖もへぬべき此世計りを
[一〇]是も又思ふに違ふ心かな捨てすば憂を歎くべきかは

雜十五首

[一一]賴むかな春日の山の峯つゝき影ものどけき松の村立
[一二]跡たえて其方と賴む道もなし南の岸の知べならでは
[一三]知るばかり難き御法の末に逢て哀此世とまづ思ふ哉
[一四]花の春紅葉の秋とあくがれて心の果や世にはとまらむ
[一五]世中を思ひのきはの忍草幾世の宿もあれかはてなむ
[一六]鶯のゐる池の汀に松ふりて都のほかの心ちこそすれ
[一七]行きかはる時につけては自から哀を見する山の影哉
[一八]瀧のおと峯の嵐も一つにて內あらはなる柴の垣かな
[一九]里びたる犬の聲にぞ聞えつる竹より奥の人の家居は
[二〇]菊枯れて飛交ふ蝶の見えぬ哉咲き散る花や哀なりけむ
[二一]遯るなみの幾重に委れけむ天の川原の秋のはつかせ
[二二]黒髪はまじりし雪の色ながら心の色は變りやはする
[二三]草枯れの野原の駒もうらぶれて知らぬ境のなが月の空
[二四]傳に聞く契も悲し相思ふ楫のをしのよな〳〵のこゑ
[二五]いか計深き心の底をみていく田の川に身の沈みけむ

奉レ和二無動寺法印早率露膽百首一　文治二年春

詠三百首和歌一

侍従

春二十首

立春

[二六]年くれし哀を空のいろながらいかにみすらむ春の曙
[二七]何故に初子の今日の小松原春のまどゐを契初めけむ
[二八]たち隱すよそめは春の霞にて雪にぞこもる奥の山里
[二九]鶯の宿しめそむる呉竹にまだふしなれぬわかね鳴也
若菜
[三〇]いざ今日はあすの春雨待す共野澤の若菜みても歸む

殘雪

[三一]踏みしだくおどろが下にしみ入て埋れ變る春の雪哉

梅

[三二]こぞもこれ春の匂になりにけり梅さく宿の明暮の空

柳

[三三]遲くとき綠の糸にしるきかな春くるかたの岸の青柳

早蕨

[三四]岩注ぐ清水も春の聲たてゝうちや出でつる谷の早蕨

花

[三五]いかいせむ雲居の櫻馴々て憂身をさそと思果つとも

春雨

[三六]春の夜を窓うつ雨に臥侘びて我のみ鳥の聲を待つ哉

春駒

[三七]遠方や花にいばえて行く駒の聲も春なるながき日暮

歸雁

[三八]春深み越路に雁のかへる山なこそ霞に隱れざりけれ

喚子鳥

[三九]思ひたつ道の知べか喚子鳥深き山べに入さそふなり

苗代

[四〇]來馴たる駒に任せむ苗代の水にやまちは引かへて鳧

[四一]春雨のふるのゝ道の壺菫つみてをゆかむ袖は濡とも

杜若

[四二]關路こえ都戀しき八橋にいとゞ隔つるかきつばた哉

藤

[四三]思ふから猶疎まれぬ藤の花突くより春のくるゝ習に

款冬

[四四]散すなよ井手の柵せき返しいはぬ色なる山吹の花

暮春

[四五]春知らぬ憂身一つにとまりけり暮ぬる暮を惜む數は

夏十五首

更衣

[四六]いかにせむ一重に變る袖の上に重ねて惜き花の別を

卯花

[四七]秋冬の哀知らする卯花よ月にも似たり雪かとも見ゆ

葵

[四八]年をへて神も御覽の葵草懸てかゝらむ身とは祈らず

郭公

[四九]東屋のひさし恨めし郭公まつよひ過ぐる村雨のこゑ

菖蒲

[五〇]春立し年も五月の今日きぬと曇らぬ空に菖蒲ふく也

早苗

[五一]とる苗の早く月日は過にけり戰きし風の音も程なく

照射

[五二]夏衣龍田の山にともしすと幾夜重ねて袖ぬらすらむ

五月雨

[五三]玉鉾の道ゆく人の言傳も絶えて程ふる五月雨のそら

橘

[五四]故郷は花たちばなに詠めして見ぬ行末ぞ果は悲しき

螢

[五五]打靡く川ぞひ柳吹く風にまづみだるゝは螢なりけり

蚊遣火

[五六]人はすむとばかり見ゆる蚊遣火の煙を賴む遠の柴垣

蓮

[五七]この世にも此世の物と見えぬかな蓮の露に宿る月影

氷室

[五八]氷室山任せし水の冴ぬれば夏のせかるゝ影にぞ有ける

泉

[五九]山陰の岩根の清水たちよれば心のうちを人や汲らむ

荒和祓

[六〇]御祓して年を半と數ふれば秋よりさきに物ぞ悲しき

秋二十首

立秋

[六一]御室山けふより秋の龍田姫號れの木々の下葉染むる覽

七夕

[六二]七夕のあかぬ別の涙にやあき白露のおきはじめけむ

萩

[六三]唉に鳧野べ分初るよそめより蟲の音みする秋萩の花

女郎花

[六四]女郎花靡く氣色や秋風の分きて身にしむ色となる覽

尊

[六五]忍山榊野のすゝきいかばかり秋の盛を思ひわぶらむ

刈萱

[六六]尋ぬれば庭の刈萱跡もなく人や古にし荒果てゝけり

蘭

八ふち袴あらぬ草葉も薫るまで夕露しめる野べの秋風
　狭
九こぼれぬる露をば袖に宿し置て荻の葉結ぶ秋の夕風
　雁
一九草がれの朝の原に風すぎてさえゆく空に初雁のなく
　鹿
二〇鹿の音は傳ふる遠の哀にて宿の景色は我のみや見む
　露
二一歸るさはしぼる袂の露添て分つる野べに夜は更に鳧
　霧
二二秋深く霧たつまゝの曙は思ふそなたの空をだに見す
　槿
二三されば𪜈そとはじと思ひし故郷は咲ける槿露も宛ら
　駒迎
二四立續くきりはらの駒越れども音は隠れぬ關の岩かど
　月
二五秋きても秋をくれぬと知せても幾度月の心づくしに
　擣衣
二六忍ばじよ哀はなれがあはれかは秋を擣きに擣つ唐衣
　蟲
二七恨めしやよしなき蟲の聲にさへ人待侘ぶる秋の夕暮
　菊
三〇又もあらじ花より後の面影に咲くさへ惜き庭の村菊
　紅葉
一そよや又山の端毎に時雨して四方の梢は色變るなり
　九月盡
二〇咏氣なし浮世は同じ世中ぞ秋は限と夜はふけぬとも
冬十五首
　初冬
三〇搔昏す木葉は道も無物をいかに分てか冬の來つらむ
　時雨
四〇月はさえ音は木葉にならはせて忍びに過る村時雨哉
　霜
五〇はがへせぬ竹さへ色の見えぬ迄夜毎に霜を置渡す覽
　雪
六〇降初めし空は雪げに成果てぬ人をも待たじ冬の山里
　霰
七〇霰ふり日さへあれゆく横のやの心も知らぬ山風かな

寒蘆
八〇篠江の蘆の下葉の浮沈み散失せぬ世の珠寶なの身や
　千鳥
九〇淡路島千鳥と渡る聲毎にいふかひもなく物ぞ悲しき
　氷
一〇解ぬ上に重ねて凍る谷水に洗る夜頃の數ぞみえける
　水鳥
一一羽かはす君の上毛の霜深く消えぬ契を見るぞ悲しき
　網代
一二如何する網代にひをの衣々は風さへ早き宇治の川瀬を
　神樂
一三立ち返る山藍の袖に霜さえて曉ふかきあさくらの聲
　鷹狩
一四かり衣はらふ袂の重るまで交野の原に雪は降りきぬ
　炭竈
一五炭竈のあたりをぬるみ立昇る煙や春はまづ霞むらむ
　爐火
一六明方の灰の下なる埋み火の殘りすくなく暮るゝ年哉
　歳暮
一七年暮ぬ變らぬ今日の空毎に憂を重ぬる心ちのみして
戀十首
　初戀
一八これも又契なるらむと計に思ひそめつる身を惜む哉
　忍戀
一九思寢の夢にもいたく馴ぬれば忍びも敢ず物ぞ悲しき
　不レ逢戀
二〇名取河いかにせむ共まだ知ず思へば人を恨みける哉
　初逢戀
二一逢ひ見てもいへば悲しき契かな現も同じ春の夜の夢
　後朝戀
二二別れつる程もなく〳〵惑はれて頼めぬ暮を猶急ぐ哉
　逢不レ遇戀
二三つらからず我心にも知られにき馴ても馴ぬ歎せむとは
　旅戀
二四誰故ささゝぬ旅寢の庵だに都の方はながめしものを
　思
二五先だゝば人も哀れをかけて見よ思に消えむ空の浮雲
　片戀

二六よしさらば哀な壓そ忍侘び身を耻捨め君が名は惜し
　恨
二七身を知ば恨じと思ふ世中をありふるまゝの心弱さに
雜二十首
　曉
二八憂かりける物思頃の曉は人をも訪む此の世ならでも
　松
二九松風の梢の色はつれなくて絕えず落つるは涙也けり
　竹
三〇呉竹のわが友は皆ならへども光よそなるはの林かな
　若
一一奥山の岩根の苔のよゝ共に色も變らぬ歎をぞする
　鶴
一二垂乳根の心を知れば和歌の浦や夜深き鶴の聲ぞ悲き
　山
一三まだ知ぬ山の彼方に宿古て浮世隔つる雲かとも見む
　川
一四はつせ川浮ぶ水泡の消返り程なき世をも猶歎くかな
　野
一五身の果は此世計と知りてだに儚かるべき野べの煙を
　關
一六比べばや清見が關による波も物思ふ袖に立や優ると
　橋
一七身のうさはくめぢの橋も渡ねど末も通らぬ道惑ける
　海路
一八思ふ人あらば急がむ舟出して蟲明の瀨戸は猶荒く共
　旅
一九都とて絞らぬ袖も習はぬを何を旅寢の露と分くらむ
　別
二〇歸るさを契る別を惜むにも遂の哀は知りぬべき世を
　山家
二一山里を今は限と尋ねども一かたならぬ道やまどはむ
　田家
二二いかにせむ奥手の鳴子引返し猶驚かぬかり初の世を
　懷舊
二三面影はたゞ眼の前の心ちして昔と忍ぶ浮世なりけり
　夢
二四ぬば玉の夢は現に增りけり此世に覺むる枕かはらで

無常
五且見つゝ猶捨果ぬ身也けりいつかは限あすや後の世
述懐
六思ふとてかひなき世をば如何せむ心は殘れ無身也共
祝
七思遣る心はきはもなかり皃千歳もあかぬ君が代の爲
重奉レ和二早率百首一　文治五年三月
詠二百首和歌一
壽二十首
立春
八吉野山霞まぬ方の谷水も打出づる波に春は立つなり
于レ時
九子日する野べの小松のひき〳〵に羨しくも春に逢哉
霞
〇一尋ねきて秋みし山の面影にあはれ立ちそふ春霞かな
鶯
一二春やとき谷の鶯うちはぶき今日白雪のふるすいつ也
若菜
二三諸共に出でこし人の形見哉色も變らぬ野べの若菜は
殘雪
三四心にもあらぬ別の名殘かは消えても惜しき春の雪哉
梅
四五春の夜は月の桂もにほふらむ光に梅の色はまがひぬ
柳
五六植ゑおきし昔を人に見せがほに遙に靡く青柳のいと
早蕨
六七厳折る同じ山路の行きすりに春のみやすむ岩の本哉
花
七八今日こすば庭にや春の殘らまし梢うつろふ花の下風
春雨
八九春も又かれし人めに待侘ぬ草葉は茂る雨につけても
春駒
九一引かへつ蔦の葉めぐむ難波潟浦わの空も駒の氣色も
歸雁
〇二これにみつ越路の秋もいかならむ吉野の春を歸雁音
喚子鳥
一三曇る夜の月の影のみ仄かにて行く方知らぬ喚子鳥哉
苗代

二四思ふこそ遥す〳〵も寂しけれ荒田の面の今日の春雨
菫
三五菫つむ花染衣露をおもみかへりてうつる月草のいろ
杜若
四六ふりにけり誰か汀の杜若なれのみ春の色ふかくして
藤
五七行く春をうら紫の藤の花歸る便りにそめやすつらむ
款冬
六八過ぎて行く袖に匂ふ山吹に心をさへも分くる道哉
暮春
七九春のけふ過行く山に棄して心づからの形見とも見む
夏十五首
更衣
八一脱更ふる蟬の羽衣袖ぬれて春の名殘を忍び音ぞなく
卯花
九二板廂久しくとはぬ山里もなみまに見ゆる卯花のころ
葵
〇三天河おふさも聞かぬ物故に年にあふひと何契りけむ
郭公
一四郭公世になきものと思ふとも眺めやせまし夏の夕暮
菖蒲
二五風吹けば夢の枕にあはすなりしげき菖蒲の軒の匂を
早苗
三六種蒔し室の早わせ生に皃おり立田子の雨もしみ〳〵き
照射
四七ともしする繁みがそこの摺衣袖の惹も露やおくらむ
五月雨
五八訪でこし蓬が門のいかならむ空さへ閉る五月雨の頃
盧橘
六九夜もすがら花たちばなを吹く風の別れ顔なる曉の袖
螢
七一夏むしの光ぞそよぐ難波潟あしの葉分に過ぐる浦風
蚊遣火
八二蚊遣火の煙の跡や草枕たちなむ野べの形見なるべき
蓮
九三朝夕に我が思ふ方の知べせよ暮るれば向ふ蓮葉の露
氷室
〇四厭ひつる衣手かるし氷室山夕の後の木々のしたかせ

泉
一五夜晝と人はこの頃尋ねきて夏に知られぬ宿のまし水
荒和祓
二六御禊すと暫し人なす麻の葉も思へば同じ假初の世を
立秋二十首
三七今日といへば梢に秋の風立ちて下の歎きも色變る也
七夕
四八秋風やいかゞ身にしむ天の河君まつ宵の轉寢のとこ
萩
五九散らばちれ露分行かむ萩原や濡ての後の花の形見に
女郎花
六一東雲に別れし袖の露の色をよしなく見する女郎花哉
薄
七二人もとへあれなむ後の蟲の音も植置く薄秋し絶すば
刈萱
八三朝まだき千草の花も偕おきつ玉ぬく野べの刈萱の露
蘭
九四霧の間に一枝をらむふぢ袴あかぬ匂や袖にうつると
荻
〇五荻の葉に吹立風の音なひよをよ秋ぞかし思ひつると
雁
一六霧ふかき外山の峯を眺めてもまつ程すぎぬ初雁の聲
鹿
二七侘人の我が宿からの松風になげき加はるさを鹿の聲
露
三八終夜山の雫に立ちぬれて花のうはぎは露もかわかず
霧
四九下咽ぶ宇治の川なみ霧こめて遠方人の眺めわぶらむ
檣
五一朝顔よなき顔となく移ろはむ人の心の花もかばかり
駒迎
六二數へこし秋の半を今宵ぞとさやかに見する望月の駒
月
七三月きよみ四方の大空くも消えて千里の秋を埋む白雪
擣衣
八四とけてねぬ伏見の里は名のみして誰深き夜に衣打覽
蟲

九九松蟲の聲だにつらき夜な〳〵を果は梢に風颯るなり
菊
〇〇一筋に頼みしもせず春雨に植てし菊の花を見むとは
紅葉
一〇龍田山やまの通路おしなべて紅葉を分くる秋の暮哉
九月盡
二〇おくれじと契らぬ秋の別ゆゑ理なくもしをる袖かな
冬十五首
初冬
三〇秋のみか風も心もとゞまらず皆しもがれの冬の山里
時雨
四〇返り見る梢に雲のかゝる哉いでつる里や今しぐるゝ覽
霜
五〇おきそめて惜みし菊の色を又返すもつらき冬の霜哉
霰
六〇霰ふる志賀の山路に風こえて峯に吹きまく浦の小波
雪
七〇秋ながら猶眺めつる庭の面の枯葉も見えず積る雪哉
寒蘆
八〇聲はせで波よる蘆のほ末かな潮干の潟に風や吹らむ
千鳥
九〇長き夜を思ひ明石の浦風に鳴く音を添ふる友千鳥哉
氷
一〇大井河波を井堰に吹きとめて凍るは風の結ぶ也けり
水鳥
一よそへても見せばや人に鴛鴦の驚ぐ入江の底の思を
網代
二夜をへては見るも儚き網代木に越のみ空の月を待覽
神樂
三香を止し榊の聲にさよ更けて身に泌はつる赤星の空
鷹狩
四とまるなよ狩場の小野の摺衣雪の亂れに空はきる共
炭竈
五をの山や見るだに寂し朝夕にたれ炭竈の煙立つらむ
爐火
六埋み火の光も灰につきはてゝ寂しく響く鐘の音かな
歲暮
七長らふる命ばかりのか言にて數多過ぎぬる年の暮哉

戀十首
初戀
八一後の世を懸てや戀む木綿襷それ共分かぬ風の紛れに
忍戀
九一思ふとは君に隔てゝさよ衣なれぬ獸きに年を重なる
不レ逢戀
一〇逢見ての後の心を先知ればつれなしとだにえこそ恨ね
初逢戀
二何とこの見る共分かぬ幻によその獸きの千重增る覽
後朝戀
三いかにせむ夢より外に見し夢の戀に戀ます今朝の涙を
逢不レ遇戀
四自ら人も時の間思ひ出でばそれを此世の思出にせむ
旅戀
五旅寢する荒き濱べの波の音にいとゞ立添ふ人の面影
思
六いかばかり深き壑の底ならむ月日と共につもる思の
片戀
七宵々は忘れてぬらむ夢にだになることを見えよ通ふ魂
恨
八君よりも世よりも辛き契こそ身をかへつ共恨殘らめ
雜二十首
曉
一九怨めしや別の道にちぎりおきてなべて露おく曉の空
松
二〇草の庵の友とはいつか聞きなさむ心の中に松風の聲
竹
二一ほどき分かぬ籬の竹の色にしも秋の哀の深く見ゆらむ
苔
二二馴れこしは昨日と思ふ人の跡も苔踏分けて道迷る也
鶴
二三人とはで砌あれにし庭の面に聞くも寂しき鶴の一聲
山
二四いかにせむ其ゝ浮世と厭出ば吉野の山もなき身也晃
川
二五色はみなむなしき物を龍田川もみぢ流るゝ秋も一時
野
二六何となく見るより物の悲しきは野中の庵の夕暮の空

關
二七苦びさしものゝ哀の關すゑて涙はとめぬ須磨の浦風
橋
二八夜をこめて朝たつ霧の隙々に絕々見ゆる勢多の長橋
海路
二九待ちえたる日よりを路の賴みにて遙に出る波の上哉
旅
三〇露茂きさゝやの中山なか〳〵に忘れて過る都ともがな
別
三一暮れてゆく春の霞を猶こめて隔つる遠に立や別れむ
山家
三二家居して又か計も知らざりきみ山の里の木枯のこる
田家
三三起伏しに音ぞなかれける霜厄る刈田の庵の鳴の羽掻
懷舊
三四心うし戀し悲しと忍ぶとて二たびみゆる昔なき世よ
夢
三五轉寢に草ひき結ぶこともなしはかなの春の夢の枕や
無常
三六いつ我も筆のすさびは止りぬて又亡人の跡と云れむ
述懷
三七惜まれぬうきに瑞へたる身ならずば哀過にし昔語を
祝
三八天津空月日の影も靜にて千代は雲居に君ぞかぞへむ

花月百首　建久元年秋左大將家
詠三百首和歌一

權少將

花五十首
三九櫻花さきにし日より吉野山そらも一つにかをる白雲
四〇足引の山のはごとに咲く花の匂にかすむ春の明ぼの
四一花盛外山の春のからにしき霞の立つもなをしき頃かな
四二霞立つ嶺の櫻のあさぼらけくれなゐくゝる天の川波
四三櫻花ちらぬ梢に風ふれて照る日も薰る志賀の山ごえ
四四花の後八重たつ雲に空ぢて春に埋める三吉野の底
四五遙莫はなよりほかの詠めには霞にくらす三吉野の春
四六あくがれし雪と月との色とめて梢にかをる春の山風
四七吉野山霞吹きこす谷風の散らぬ櫻のいろさへふらむ
四八ふりきぬる雨も雫も匂ひけり花よりはなに移る山道

長き日に遊ぶいとゆふ静にて空にぞ見ゆる花の盛は
百敷やたましく庭の櫻ばなてらす朝日の光そひけり
○翫しもて暮す春日の長閑きに千代も經ぬべき花の蔭哉
○宮人の袖にまがへる櫻花にほひもとめよ春の形見に
手折りもて行きかふ人の景色まで花の匂は都也けり
こきまぜる柳の糸も結ばゝれ亂れてにほふ花櫻かな
雲の中雪の下なる春の色を誰わが宿の上と見るらむ
明果てず夜の間の花に言とへば山の端白く雲ぞ鏤く
○槇の戸は軒端の花のかげなれば床も枕も春の明ぼの
いかばかり後も忘れぬ妻ならむ櫻に馴るゝ宿の夕暮
めがれせず最ど櫻ぞ惜まるゝうち〻紛れぬ春の山里
久重葎閉ける宿のかひもなし故郷訪ぬ花にし有ねば
○竹の垣松の柱は苔むせど花のあるじぞ春さそひける
花のふち櫻のそこと尋ぬれば岩もる水の聲ぞ變らぬ
枝かはす松のみありし梢まで雲と波とに迯る春かな
空は雪庭をば月の光とていづくに花のありか尋ねむ
花の香はかをる計を行方とて風よりつらき夕闇の空
思ひ入るゆくへは花の上にして苦に宿かる春の轉寢
過がてに惜まじ物を櫻花歸る夜の間に風もこそ吹け
散り紛ふ木の本乍らまどろめば櫻に結ぶ春の夜の夢
まだ馴れぬ花の匂に旅寢して木立床しき春の夜の闇
玉ばこの便にみつる櫻花又はいづれの春かあふべき
○山櫻いかなる花の契にてかばかり人の思ひ初めけむ
時社あれさらでは斯る匂かは櫻もいかに春を待けむ
櫻ばな手折りもやらぬ一枝に梢にのこる心をぞ知る
山櫻心の色をたれ見てむ幾代の花のそこにやどらば
後もうし昔もつらし櫻花うつろふ空の春のやまかせ
梢より外なる花の面影にありしつらさの似たる風哉
何となく恨みなれたる夕かな彌生の空の花の散る頃
暮れぬとて花ちる嶺の春の空猶やどからむ一夜計も
春風の波こす空になりにけり花のみぎはの岸の濱松
山隱れ風のしるべに見る花をやがて誘ふは谷川の水
○卯櫻まで共いはじ散ぬとて思增すべき花しなければ
いかにして風のつらさを忘れなむ櫻に有ね櫻尋ねて
櫻花おもふものからうとまれぬ慰めはてぬ春の契に
侘びつゝは花を恨むる春もがな風の行方に心迷はで
花を思ふ心に宿るまくすく原秋にるかへす風の音かな
散りぬとてなど櫻を恨けむ散ずは見まし今日の庭かは

跡たえし汀の庭に春くれて苔もや花の下に朽ちぬる
吹く風も散るも惜むも年ふれど理知らぬ花の上かな

月五十首

秋はきぬ月は木の間にもりそめて置所なき袖の露哉
さえのぼる月の光にことそひて秋の色なる星合の空
○是ぞこの待たれし秋の夕よりまづ雲はれて出る月影
○數ふれば秋來て後の月の色を臨めかしくも絞る袖哉
○秋といへば空すむ月を契おきて光まちとる萩の下露
○峯のあらし浦の波風雪さえてみな白妙の秋の夜の月
月清み寢られぬ夜しも唐土の雲の夢迄見る心ちする
今よりは梢の秋は深くとも月出る峯は風のまに〳〵
露時雨下葉殘らぬ山なれば月も夜をへてもり增り覺
山のはの思はむ事も耻かしく月より外の秋は眺めじ
味氣なく物思人の袖の上に有明の月の夜を重ねては
長月の有明の月の時雨ゆゑ明日の紅葉の色も怨めし

十題百首　建久二年冬左大將家

詠二百首倭歌一

權少將

天部十首

久方の雲居遙に出る日の景色もしるき春は來にけり
○すべらぎの普き御代を空に見て星の宿りの影も動す
天河年の渡りの秋かけてさやかになりぬ夏の夜の關
はかなしと見る程もなし稻妻の光にさむる轉寢の夢
答へじないつと變らぬ風の音に馴し昔の行方とぶ鷹
見す知らぬ埋れぬ名の跡や誰たなびき渡る夕暮の空
今日暮ぬあすさへ降らむ雨に社思む人の心をも見め
この日頃さえつる風に雲こりて霰こぼるゝ冬の夕暮
掻くらす軒端の空に數みえて眺めも敢ず落つる白雪

地部十首

跡もなし苦むす谷の奥の道幾代へぬらむ三吉野の山
渡つ海に寄せては返るしき波の始も果も知人ぞなき
打つ波のまなく時なき玉柏偶々見ればあかぬ色かも
湧返るいはせの波に秋すぎて紅葉になりぬ宇治の河風
慈のゐる蘆のかれまの雪氷冬こそ池のさかり也けれ
若菜つむ遠のさはへの淺みどり霞の外の春の色かな
秋はたゞ入江ばかりの夕かは月まつ空の眞野の浦波
月のさす關屋の陰の程なきに一夜は明ぬ須磨の旅風

袖の上枕の下に宿りきていくとせ馴れぬ秋の夜の月
さらしなは昔の月のひかりかはたゞ秋風ぞ嫉拾の山
四方の空一つ光に磨かれてならぶ物なき秋の夜の月
衣うつ響きに月のかげ更けて道行く人の音も聞えす
影さえて照す越路の山人は月にや秋を忘れはつらむ
あくがるゝ心はきはもなき物を山の端近き月の影哉
忘れじよ月も哀と思ひ出でよ我が身の後の行末の秋
かとりとて月の心もまだ知す思へば疎き秋の寢覺を
峯のあらし浦の波風雪さえてみな白妙の秋の夜の月
月清み寢られぬ夜しも唐土の雲の夢迄見る心ちする
今よりは梢の秋は深くとも月出る峯は風のまに〳〵
露時雨下葉殘らぬ山なれば月も夜をへてもり增り覺
山のはの思はむ事も耻かしく月より外の秋は眺めじ
味氣なく物思人の袖の上に有明の月の夜を重ねては
長月の有明の月の時雨ゆゑ明日の紅葉の色も怨めし

十題百首　建久二年冬左大將家

詠二百首倭歌一

權少將

天部十首

久方の雲居遙に出る日の景色もしるき春は來にけり
○すべらぎの普き御代を空に見て星の宿りの影も動す
天河年の渡りの秋かけてさやかになりぬ夏の夜の關
はかなしと見る程もなし稻妻の光にさむる轉寢の夢
答へじないつと變らぬ風の音に馴し昔の行方とぶ鷹
見す知らぬ埋れぬ名の跡や誰たなびき渡る夕暮の空
今日暮ぬあすさへ降らむ雨に社思む人の心をも見め
この日頃さえつる風に雲こりて霰こぼるゝ冬の夕暮
掻くらす軒端の空に數みえて眺めも敢ず落つる白雪

地部十首

跡もなし苦むす谷の奥の道幾代へぬらむ三吉野の山
渡つ海に寄せては返るしき波の始も果も知人ぞなき
打つ波のまなく時なき玉柏偶々見ればあかぬ色かも
湧返るいはせの波に秋すぎて紅葉になりぬ宇治の河風
慈のゐる蘆のかれまの雪氷冬こそ池のさかり也けれ
若菜つむ遠のさはへの淺みどり霞の外の春の色かな
秋はたゞ入江ばかりの夕かは月まつ空の眞野の浦波
月のさす關屋の陰の程なきに一夜は明ぬ須磨の旅風

六ゑるべなきをだえの橋に行迷ひ又今更の物や思はむ
七語るこもか計人や知らざらむ宮城の野べの夕暮の色

居所十首

百敷やもる白玉の明方にまだしもくらき鐘の聲かな
九隈もなき衛士のたく火の影添て月に馴たる秋の宮人
七秋津島治むるかどのごとくに傳ふる北の藤波の影
七宿ごとに心ぞ見ゆるまどゐする花の都のやよひ如月
七村濱植ゑけむ跡もふりにけり雲居を近くまもる栖に
三見馴れぬる四年をいかに忍らむ限る縣の立別るとて
四旅枕いくたび夢のさめぬらむ思閑石のむまや〳〵と
五柴の戸よ今は限としめすとも露けかるべき山の影哉
六露霜のおくての山田かりねして袖ほし侘る庵のさ筵
七出でゝこし道の笹原茂りあひて誰眺むらむ故郷の月

草十首

八年の内は今日のみ時に葵草翳す御誕をかけて待らし
九神代より契ありてや山藍も摺れる衣の色となるらむ
〇さやかなる雲居にかざす日蔭草豊の明の光ませとや
一道もせにしげる蓬生打靡き人かげもせぬ秋風ぞ吹く
二霜結ぶ尾花がもとの思草きえなむ後や色に出づべき
三あれにけり軒の下草葉をしげみ昔しのぶの末の白露
四我も思ふ浦の濱ゆふ幾重かは重ねて人をかつ頼め共
五櫻麻のをふの下露下にのみ分けて朽ちぬる夜々の袖
六道芝や交る萱生の己れのみ打吹く風に亂れてぞみる
七流れても思瀬による若芹のねに顯れて戀むとやみし

木十首

八草も木も一つに落る霜の内に葉替ぬ松の色ぞ殘れる
九石上ふるの神杉ふりぬとも常磐かきはの影は變らじ
〇まきもくや檜原の茂み掻分て昔の跡を尋ねてぞみる
一今日みれば弓きる程に成にけり植し岡べの槻の片枝
二旅まくら椎の下葉を折りかけて袖も庵もひとつ夕露
三月もいざ槇のはふかき山の影雨ぞ傳ふる雫をもみし
四鏡山みがきそへたる玉椿影もくもらぬ春のそらかな
五夕まぐれ風吹き荒む桐の葉にそよ今更の秋に有ねど
六衣ぐれゆく櫨の立枝に風こえて心いろづく秋の山里
七楢より冬の山かせ拂ふらしもとつ葉のこる楢の葉柏

鳥十首

八忍山こだちの奥にかふ鷲のその羽計や人に知らゝ
九梓弓末の原野に引するてとかへる鷹を今日ぞ合する

〇風立ちてさはへにかける隼の早くも秋の景色なる哉
一枯野やく煙のしたに立つ雉子朝ぶ思や猶まさるらむ
二夕立のくもまの日影はれそめて山の此方を渡る白鷺
三鳴子ひく田の面の風に靡きつゝなみよる暮の村雀哉
四深草のさとの夕風かよひきて伏見の小野に鶉なく也
五さらぬだに霜枯果る草の葉を先打拂ふにはたゝき哉
六人訪ぬ冬の山路の淺さよ垣根のそばにしとゞをりぬて
七つばくらめ哀に見ける例かなかはる契は習なる世に

獣十首

八いつしかと春の景色に引替て雲居の庭に出るあを馬
九霜深く逕る別の小事にあやなくつらき牛のおとかな
〇おち曇る木葉も幾重積る麓伏猪のかるも掻も拂はで
一露をまつうのけのいかに萎る麓月の桂の影を頼みて
二山里は人の通へる跡もなし宿もる犬の聲ばかりして
三花盛むなしき山に鳴くさるの心知らゝ春の夜の月
四思ふには後れも物か荒熊の住むてふ山の誓し也とも
五つか古き狐のかれる色よりもふかき惑ひに染る心よ
六程もなく暮ゝ日影にねをぞ鳴く羊の歩聞に付ても
七高山のみね踏鳴らす虎の子の登らむ道の末ぞ遙けき

蟲十首

八苗代にかつ散る花の色乍らすだく蛙の聲ぞなかるゝ
九夜もすがらまがふ螢の光きへわかれは惜き東雲の空
〇今朝見れば野分の後の雨はれて玉ぞ殘れる笹蟹の糸
一人ならば恨もせまし園の花かれば枯るゝ蝶の心よ
二深山ふく風の響きになりにけり木末にならふ蜩の聲
三わきかぬる夢の契に似たるかな夕の空にまがふ陽炎
四草ふかき賤が伏屋の蚊柱に馴ぬ厭ふ物から
五憂て世をふるやの軒に住蜂の流石に馴ぬ厭ふ物から
六春雨のふりにし里を來てみれば枕の塵にすがる簑蟲
七自ら打置く文も月日へてあくればしみの栖とぞなる

神祇十首

八照すらむ神路の山の朝日影天つ雲居を長閑なれとは
九かしまのや檜原杉原常磐なる君が榮は神のまに〳〵
〇春日山みねの松原吹く風の雲居にたかき萬代のこゑ
一榊さすをしほの野べの姫小松かはす千年の末ぞ久しき
二かも山や幾らの人を瑞垣の久しき世より哀かくらむ
三賴もしな曉ちぎる月影のかねてすむらむ三吉野の嶽
四面影に思ふもさびし埋もれぬほかだに月の雪の白山

五雲かゝる那智の山陰いかならむ霎激しき長き夜の闇
六和歌浦の波に心はよすと聞く我をば知るや住吉の松
七やはらぐる光さやかに照し見よ賴む日吉の七の御社

釋教十首

獻喜地

八嬉しさの涙も更に留まらず長き浮世の關をいづとて

無垢地

九潔くみがく心しくもらねば玉しく四方の境をぞ見る

明地

〇明らけき朝日の影にあたご山雪も氷もきえぞ碎くる

燄惠地

一冬枯のおどろの古枝燃つきて吹かふ風に花ぞ散敷く

難勝地

二天津風さはりし雲は吹きとぢつ少女の姿花に匂ひて

現前地

三すみまさる池の心に顯れて金のきしに波ぞよせける

遠行地

四障なく遠路を渡す橋なればおち破るてふ類だに見ず

不動地

五己がじゝ守る姿の身に添て動かぬ道の固めとぞなる

善惠地

六最りなき花の諸人靡來て勝るかざりのかひぞ有ける

法雲地

七大空の法のくもゐにすむ月の限も知らぬ光をぞ見る

歌合百首　建久四年秋　三手綱遠少年擧事依別儀被被召此歌

詠二百首和歌一

春

權少將

元日宴

春くれば星の位に影見えて雲居のはしに出る手弱女

餘寒

霞み敢ず猶ふる雪に空閉て春物深きうづみ火のもと

春氷

氷かしみづの白波立ちかへり春風しるき池の面かな

若草

一遲くとくおのが樣々咲く花の一つかたはの春の若草

賭射

二百敷やいでひく庭の梓ゆみ昔にかへる春にあふかな

野遊
[二]春人の春の心の通ひ来て馴れぬる野べの花の影かな
旅
[三]立さりの馴るゝ野原も霞つゝ子を思ふ道や春惑らむ
雲雀
[四]末とほき若葉のしばふ打靡き雲雀鳴く野の春の夕暮
遊絲
[五]繰り返し春の絲ゆふ幾世へて同じ緑の空に見ゆらむ
春曙
[六]霞かは花うぐひすに閉ぢられて春にこもれる宿の曙
遲日
[七]眺侘ぶぬ光長閑に霞む日に花さく山は西を分かねど
志賀山越
[八]袖のゆき空ふく風も一つにて花に匂へる志賀の山越
三月三日
[九]から人のあとを傳ふる盃の波に従ふ今日も来にけり
蛙
[一〇]ほのかなる枯野の末の荒小田に蛙も春の暮恨むなり
殘春
[一一]木のもとは日數ばかりを匂にて花も殘らぬ春の故郷
夏
新樹
[一二]影ひたす水さへ色を緑なる四方の梢の同じわかばに
夏草
[一三]夏山の草葉の丈ぞ知られぬる春みし小松人し引ねば
賀茂祭
[一四]雲の上を出る使のもろ葛向ふ日影にかざす今日かな
鵜川
[一五]遠近に眺めやかはす鵜飼舟やみを光のかゞり火の影
夏夜
[一六]夏の夜はなるゝ清水のうき枕むすぶ程なき轉疑の夢
夏衣
[一七]尋ね入る檜の葉陰の重なりてさてしも輕き夏衣かな
扇
[一八]風通ふ扇に秋のさそはれてもつれなれぬる床の月影
夕顏
[一九]暮れそめて草の葉靡く風のまに垣根涼しき夕顏の花
晩立
[二〇]風わたる軒の下草うちしをれ涼しくにほふ夕立の空
嶂
[二一]嵐吹く梢はるかに鳴く嶂の秋を近しと空につぐなる
秋
殘暑
[二二]秋きても猶夕風を松が根に夏を忘れし影ぞたちうき
乞巧奠
[二三]秋毎に絶えぬ星合のさよ更けて光ならぶる庭の燈火
稻妻
[二四]影宿す程なき袖の露の上に馴れてもうとき宵の稻妻
鶉
[二五]月ぞすむ里はまことに荒れにけり鶉の床を拂ふ秋風
野分
[二六]狄の葉に變りし風の秋の聲やがて野分の露碎くなり
秋雨
[二七]行方なき秋の思ぞせかれぬる村雨靡く雲のをちかた
秋夕
[二八]秋よ唯跳捨てゝも出でなまし此里をのみ夕と思はゝ
秋田
[二九]幾代とも宿はこたへず門田吹く稻葉の風の秋の音信
鳴
[三〇]からころも裾野の庵の旅枕袖より鳴の立つ心ちする
廣澤池眺望
[三一]すみきける跡は光に殘れども月こそふりぬ廣澤の池
鶴
[三二]蘆の屋の綿はふ軒の村時雨音こそ立てね色は隱れず
柞
[三三]時わかぬ波さへ色に泉川はゝそのもりに風吹くらし
九月九日
[三四]靦ひおきてなほ長月と契る哉今日つむ菊の末の白露
秋霜
[三五]解て寢ぬ夢路も霜に結ばゝれまづ知る秋の片敷の袖
暮秋
[三六]有明の名ばかり秋の月影に弱り果てたる蟲の聲かな
冬
落葉
[三七]かつ惜む眺めもうつる庭の色よ何を梢の冬に殘さむ
殘菊
[三八]白菊の散らぬは殘る色がほに春は風をも恨みける哉
枯野
[三九]夢かさは野べの千草の面影はほの〴〵なびく薄計や
野行幸
[四〇]かり衣おごろの道も立ち歸り打散る深雪野風寒けし
炭
[四一]この山の峯の村雲ふきまよひ横の葉傳ひ霎ふりきぬ
冬朝
[四二]一年を眺めつくせる朝戸出に薄雪氷る寂しさのはて
寒松
[四三]顯れて又冬こもる雪の内にさもとし深き松の色かな
椎柴
[四四]椎柴は冬こそ人に知られけれこととふ霰のこす木枯
衾
[四五]ひきかくる閨の衾の隔てにも誓きは變る蟲の音かな
佛名
[四六]河竹の靡く葉風も年くれて三世の佛の御名を聞く哉
戀
初戀
[四七]靡かじな蜑の藻汐火たきそめて煙は空に燻りわぶ共
忍戀
[四八]こほりゐるみるめ渚の類ひかは上せく袖の下の小波
聞戀
[四九]唐土の見ず知ぬ世の人計名にのみ聞てやみねとや思
見戀
[五〇]憂しつらし淺香の沼の草の名よ假にも深きえには結ばで
尋戀
[五一]面影は敎へし宿にさきだちて答へぬ風の松に吹く聲
祈戀
[五二]年もへぬ祈る契は初瀨山をのへの鐘のよその夕ぐれ
契戀
[五三]あぢきなし誰も儚き命にて頼めば今日の暮を頼めよ
待戀
[五四]風つらき本荒の一萩袖にみて更行くよはに重る白露
遇戀
[五五]たふまじき明日より後の心ち哉馴て悲しき思添なば
別戀
[五六]かはれ唯別るゝ道の野べの露命にむかふ物も思はじ

顯戀
㊀好さらば今は忍ばで戀死なむ思ふにまけし名にだにもたて
稀戀
九〇年ぞふる見る夜々も重らで我も無名か夢かとぞ思ふ
絶戀
一〇心さへ又よそ人になりはてばなにか名殘の夢の通路
怨戀
一非ざらむ後の世迄を恨みても其面影をえこそ疎まね
寄レ煙戀
二限なきしたの思の行方とて燃えむ煙の果や見ゆべき
寄レ山戀
八足引の山路の秋になる袖はうつろふ人の嵐なりけり
寄レ河戀
九いつかさは又も逢瀬を松浦潟この河上に家はすむ共
寄レ海戀
一〇とはざかる人の心は海原のおき行く舟のあとの白波
寄レ關戀
一一身に堪ぬ思を須磨の關すゑて人に心をなど恨むらむ
寄レ橋戀
一二人ごゝろ緒絶の橋に立ち歸り木葉ふりしく秋の通路
寄レ草戀
一三いはざりき我身ふる屋の忍草思遠へて種を蒔けとは
寄レ木戀
一四戀死なば苦むすつかにかへりて元の契の朽や果なむ
寄レ鳥戀
一五鴨のゐる入江の波を心にてむねと袖とに騒ぐ戀かな
寄レ獸戀
一六美まず臥猪の床は安くとも歎くもかたみ寢ぬも契を
寄レ蟲戀
一七忘れじのちぎりうらむる故郷の心も知らぬ蚊蟲の聲
寄レ笛戀
一八笛竹のたゞ一ふしを契にて世々の恨を殘せとや思ふ
寄レ琴戀
一九昔聞君が手馴の琴ならば夢に知れて音をも立てまし
寄レ繪戀
二〇主や誰見ぬ世の事を寫しおく筆のすさびに浮ぶ面影
寄レ衣戀
二一戀ひそめし思の妻の色ぞこれ身にしむ春の花の衣手
寄レ席戀
二二忘れずば馴れし袖もや凍る覺寢ぬ夜の床の霜の狹莚
寄二遊女一戀
二三心通ふ往來の舟の眺めにもさしてか計り物は思はじ
寄二傀儡一戀
二四一夜かす野上の里の草まくら結びすてける人の契を
寄二海人一戀
二五袖ぞ今はを島の蜑も漁せむほさぬ類ひに思ひける哉
寄二樵夫一戀
二六山深み歎きこるをのおのれのみ苦しく惑ふ戀の道哉
寄二商人一戀
二七辰の市や日を待賤の其ならば明日知ぬ身に替て逢まし

正治二年八月八日追給レ題同廿五日詠二進之一

秋日侍二
太上皇仙洞一同詠二百首應製和歌一

從四位上行左近衛權少將源朝臣定家

春二十首

二八春來ぬと今朝三吉野の朝明昨日は霞む峯の雪かは
二九新玉の年の明くるを待ちけらし今日谷の戸を出る鶯
三〇春の色を飛火の野守尋ぬれど二葉の若菜雪も消敢す
三一諸人の花いろ衣たちかさね都ぞしるき春きたりとは
三二打渡す遠方人はこたへねど匂ぞ名のる野べの梅が枝
三三梅の花にほひをうつす袖の上に軒もる月の影ぞ爭ふ
三四花の香の霞める月にあくがれて夢も定かに見えぬ頃哉
三五百千鳥囀や昔のそれならで我が身ふりゆく春雨の空
三六有明の月影のこる山のはを空になしても立つ霞かな
三七思ひたつ山の幾重も白雲にはね打交はし歸る雁がね
三八吉野山雲に心のかゝるより花の頃とは空にしるしも
三九いつも見し松の色かは初瀬山櫻にもるゝ春の一しほ
四〇白雲の春はかさねて龍田山をぐらの峯に花匂ふらむ
四一高砂のまつと都にことづてよをのへの櫻いま盛なり
四二花の色をそれとぞ思ふをとめこが袖ふる山の春の曙
四三春のおる花の錦のたてぬきに亂れて遊ぶ空の絲ゆふ
四四自らそこ共知らぬ月は見つ暮なばなけの花を頼みて
四五櫻花散敷く春の時しもあれ返す山田を恨みてぞゆく
四六春も惜し花を知べに宿からむゆかりの色の藤の下蔭
四七忍ばじよ我振捨てゝ行く春の名殘やすらふ雨の夕暮

夏十五首

四八脫替へて形見とまらぬ夏衣さてしも花の面影ぞたつ
四九菅の根や日影もながくなるまゝに結ぶ計に茂る夏草
五〇卯花の垣根もたわに置る露散ずも有なむ玉にぬく迄
五一諸葛草のゆかりにあらねどもかけて待たるゝ郭公哉
五二葛蒲ふく軒の立花風吹けば昔にならふ今日の袖の香
五三いかばかり深山淑しと恨むらむ里なれはつる郭公哉
五四郭公しばしやすらへ菅原やふしみの里の村雨のそら
五五郭公なにをよすがに賴めとて花橘の散りはてぬらむ

九誰が袖を花橘にゆづりけむ宿は幾世と昔づれもせで
七我古し玉江の葦のよをへては刈ねど見えぬ梅雨の空
八夏草の露分衣はしもあへず假寝ながらにあくる東雲
九片糸を夜々峯に燈す火に合すは鹿の身をもかへしを
〇荻の葉も忍び〳〵に聲立てゝまだき露けき嵯の羽衣
一夏か秋かとへど白玉岩根より離れて落つる瀧川の水
二今はとて有明の影の槙の戸にさすがに惜き六月の雲

秋二十首

三今日こそは秋も初瀬の山風に涼しく響く鐘の音かな
四白露に袖も草葉も委れつゝ月影ならず秋は來にけり
五秋といへば夕の景色引替へてまた弓張の月ぞ寂しき
六いくかへり馴れても悲し狹原や末こす風の秋の夕暮
七物思はいかにせよとて秋夜に斯る風しも吹始けむ
八唐衣かりほの床の露寒み萩の錦をかさねてぞきる
九秋萩の散行く小野の朝露はこぼるゝ袖も色ぞ移ろふ
〇秋の野に涙は見えぬ鹿の音はわくるを萱の露をかくなむ
一思ふ人そなたの風にとはね共まづ袖ふるゝ初雁の聲
二夕より秋とはかねて眺れど月におどろく空の色哉
三秋をへてくもる涙のます鏡きよき月夜も疑はれつゝ
四思ふこと枕も知らじ秋の夜の千々に碎くる月の盛は
五催すも慰むもたい心から眺むる月をなどかこつらむ
六寂しさも秋にはしかじ歎つゝ寢られぬ月に明す狹筵
七秋の夜の天の戸わたる月影におきそふ霜の明方の空
八染果つる時雨を今は松蟲のなく〳〵惜む野べの色々
九白妙の衣しでうつ響きより質迷ふ霜の色にいづらむ
〇思敢へず秋な急ぎそさを鹿の妻とふ山の小田の初雁
一秋暮て我が身時雨と故郷の庭は紅葉の跡だにもなし
二明日よりは秋も嵐の音羽山形見となしに散る木葉哉

冬十五首

三手向してかひ社なけれ神無月紅葉は幣と散紛へども
四山廻り猶しぐるなり秋にだに挽ひかねし槙の下葉を
五裏がれし淺茅は朽ぬ一年の末葉の霜の冬の夜な〳〵
六冬はまだあさはの野らに置霜の雪より深き東雲の道
七よしさらば四方の風吹拂へ人は曇ぬ月をだに見む
八音づれし正木の蔦散りはて、外山も今は霰をぞ聞く
九山賤の朝げのこやに焚柴の暫しと見れば暮るゝ空哉
一〇冬の夜の結ばぬ夢に夙わびて渡る小川は氷にけり
一庭の松はらふ嵐におく霜を上毛にわぶるをしの獨寢
二雁をまた夜深き風に松島やをじまの千鳥聲恨むらむ
三詠めやる衣手さむく降る雪に夕關知らぬ山の端の月
四駒とめて袖打拂ふ影もなし佐野のわたりの雪の夕暮
五白妙にたなびく雲を吹きませて雪に天ぎる峰の松風
六庭の面に消ずは非ねど花と見る雪は春迄次て降なむ
七幾返り春をばよそに迎へつゝ送る年のみ身に積る覽

戀十首

八久方の天照神のゆふ葛かけて幾世を戀ひわたるらむ
九松がねを磯邊の波のうつたへに顯れぬべき袖の上哉
〇哀とも人は岩田のおのれのみ秋の紅葉を涙にぞかる
一忍ぶかは曲て逢にも身をかへつ難面き戀の慰ぞなき
二わくらばに賴むる暮の入相は變らぬ鐘の音ぞ寂しき
三曉はわかるゝ袖をとひがほに山した風も露凍るなり
四待人のこぬ夜の影に面馴れて山の端出る月も恨めし
五憂はうくつらきはつらしと計も人め覺えて人を戀ばや
六誰故に月を哀といひかねて鳥の音おそきさ夜の手枕
七見せばやな待とせしまの我宿を猶難面さは事問ず共

旅五首

八草枕ゆふ露拂ふ笹の葉のみ山もそよに幾夜しをれぬ
九波の上の月を都の友として明石の瀨戸を出づる舟人
〇妹と我と入さの山は名のみして月をぞ慕ふ有明の空
一駒なづむ磐城の山を越侘て人もこゝみの濱にかも寢む
二都おもふ涙のつまと鳴海潟月にわれとふ秋のしほ風

山家五首

三露霜の小倉の山に家居してほさでも袖の朽ぬべき哉
四秋の日に都をいそぐ賤の女の歸るほどなき大原の里
五波の音に宇治の里人よるさへや寢ても危き夢の浮橋
六柴の戸の跡見ゆ計り栞せよ忘れぬ人の假にもぞとふ
七庭の面は鹿の伏所と荒果てゝよゝふりに鳧竹編る垣

鳥五首

八宿に鳴く八聲の鳥は知らじかし置てかひなき曉の露
九手馴つゝ末野を賴む敏鷹の君が御代にぞ逢むと思し
〇君が代に霞を分し鳳鶴の更にさはべのねをや鳴べき
一いかにせむ列亂れにし雁がねの立ども知ぬ秋の心を
二我君に阿武隈川のさよ千鳥かき留めつる跡ぞ嬉しき

祝五首

三萬代と常磐かきはに賴む哉はこやの山の君の御影を
四天つ空けしきも著し秋の月長閑なるべき雲の上とは
五我が君の光ぞ添はむ春の色照らす朝日の千代の行末
六男山さしそふ松の枝毎に神も千年をいはひ初むらむ
七秋津島四方の民の戸治まりていく萬代も君ぞ保たむ

千五百番歌合是也　建仁元年七月進
平出無先例如此可書由内府被披露仍題二時儀一

夏日侍二

太上皇仙洞一同詠二百首應　製和歌一

正四位下行左近衛權少將兼安藝權介臣藤原朝臣定家上

春二十首

四春霞昨日をこぞのしるしとや軒ばの山も遠ざかる覽
九春といへば花やは遲き吉野山消えあへぬ雪の霞む曙
〇山のはに霞ばかりを急げども春にはなれぬ空の色哉
一山里は谷の鶯うち羽ぶき雪よりいづるこぞのふる聲
二消なくに又や深山を埋むらむ若菜摘野も淡雪ぞふる
三谷風の吹上に咲ける梅の花あまつ空なる雲や匂はむ
四里わかぬ月をば色に紛へつゝ四方の嵐に匂ふ梅が枝
五春や非ぬ宿を詫言に立出づれど眺こも同霞む夜の月
六東屋のこやの假寢の音筵しば〳〵ほさぬ春雨ぞ降る
七待ちわびぬ心づくしの春霞花のいざよふ山の端の空
八櫻花さきぬやいまだ白雲の遙にかをる小初瀨のやま
九雲の波霞の波にまがへつゝ吉野の花の奥を見ぬかな
〇知るしらぬ分かぬ霞の絕間より主あらはに薰る花哉
一あかざりし霞の衣たちこめて袖のなかなる花の面影
二櫻花移ろふ春を許多へて身さへふりぬる淺茅生の宿
三櫻色の庭の春風跡もなしとはゞぞ人の雪とだに見む
四花の香も風こそ四方に誘ふらめ心も知らぬ故郷の春
五こまらぬは櫻計を色にいでゝちりの迷にくるゝ春哉
六吉野川たきつ岩波せきもあへず早く過行く花の頃哉
七今日のみと強ても折じ藤の花暇惜る夏の色ならねかは

夏十五首

八郭公まつに心のうつるより袖にとまらぬ春の色かな
九待つとせし人の爲とは眺めねど茂る夏草道もなき迄
〇時しらぬ里は玉川いつとてか夏の垣ねをうづむ白雪
一葵草かりねの野べに郭公あかつきかけて誰を訪らむ
二なほざりに山郭公なきすてゝ我しもとまる森の下蔭
三夕暮は鳴く音そらなる郭公心の通ふやどや知るらむ
四待たれつゝ年に稀なる郭公五月ばかりの聲な惜みそ
五今日はいとゞ同じ緣に埋れて草の庵も菖蒲ふくなり

六天川やそせも知ぬ五月雨に思ふも深き雲のみをかな
七袖の香を花たちばなに驚けば空に有明の月ぞ殘れる
八久方の中なる川の鵜飼舟いかに契りて闇をまつらむ
九七夏衣龍田河原を來て見れば篠にをりはへ波ぞ乾しける
〇八夏の月はまだ宵のまと詠つゝぬるや河べの東雲の空
一山の陰おぼめく里にひぐらしの聲頼まるゝ夕顏の花
二誰が御祓同じ淺茅のゆふ懸てまづ打解く賀茂の河風

秋二十首

三今朝よりは風を便の知べにて跡なき波も秋や立らむ
四水ぐきの岡のくす原ふきかへし衣手うすき秋の初風
五夕暮はなのゝ篠原忍ばれぬ秋來にけりと鶉鳴くなり
六松の葉のいつ共分ぬ影にしもいかなる色と變る秋風
七露を重み人は待ちえぬ庭の面に風こそ拂へ本荒の萩
八荻原や植て悔しき秋風は吹くをすさびに誰か明さむ
九さを鹿の鳴く音の限つくしてもいかゞ心に秋の夕暮
〇秋來ぬと袖に知らるゝ夕露に頓て本間の月ぞ宿かる
一松蟲の聲をとひゆく秋の野に露尋ぬける月の影かな
二思入れぬ人の過行く野山にも秋は秋なる月や澄らむ
三高砂の尾上の鹿の聲たてし風よりかはる月の影かな
四心のみ唐土までもうかれつゝ夢路に遠き月の頃かな
五紅葉する月の桂にさそはれて下の歎きも色ぞ移ろふ
六幾秋を千々に碎けて過ぬらむ我身一つを月に歎へて
七秋とだに忘れむと思ふ月影をさも生憎に打つ衣かな
八獨ぬる山鳥の尾のしだりをに霜おきまよふ床の月影
九いかにせむきほふ木葉の木枯に絶ず物思ふ長月の空
〇さを鹿の伏すや草村うら枯て下も顯はに秋風ぞ吹く
一岩代の野中さえゆく松風にむすびそへつる秋の初霜
二冬はたゞ飛鳥の里の旅枕おきてやいなむ秋の白つゆ

冬十五首

三秋くれし紅葉の色を重ねても衣かへうき今日の空哉
四冬來ぬと時雨の音に驚けばめにも爽かに晴るゝ樹下
五殘る色も嵐の山の神無月井堰の浪におろすもみぢ葉
六枯れはつる草の雜は顯れて岩もる水をうづむ紅葉ば
七萎れば露のかたみに置く霜もなほ嵐ふく庭の蓬生
八花薄草の袂も朽ちはてぬ馴れて別れし秋を戀ふとて
九しぐれこし岸の松蔭つれもなくすむ鴛鳥の池の通路
〇槇の屋に時雨あはれは夜枯せで凍る筧の音信ぞなき
一これやさは秋の形見の浦ならむ變らぬ色を沖の月影
二浦風にやく潮煙吹きまよひたなびく山の冬ぞ寂しき
三鳴く千鳥袖の湊をとひこかし唐土舟もよるの寢覺に
四事ぞともなくて今年も杉の戸のあけて驚く初雪の空
五片敷の床のさ筵こほる夜にふりかしくらむ峯の白雪
六雪深き眞野の萱原あと絶えてまだこと遠し春の面影
七宿毎に春の霞をまつぞとてや年をこめては急き立らむ

祝五首

八天地と限なかれと誓ひおきし神のみことぞ我君の爲
九さゞれこじの榊に懸し鏡にぞ君が常磐の影は見えける
〇我が道を守らば君をまもるらむ齡はゆづれ住吉の松
一萬代の春秋きみになづさはむ花と月との末ぞ久しき
二四方の海も煙にきほふ濱廂久しき千代に君ぞ榮えむ

戀十五首

三逢ふとの稀なる色や顯れむもり出でそむる袖の涙に
四誰か又物思ふとは歎へおきし枕一つを知る人にして
五戀しきの侘びていざふ宵々に行ては歸る道の笹原
六片糸のあふことはなしに玉の緒も絶えぬ計ぞ思亂るゝ
七消えわびぬ移ろふ人の秋の色に身を木枯の森の白露
八夢なれや小野の篠原假初に露分けし袖は今も濡れて
九尋見るつらき心の奥の海よ潮干の潟の云かひもなし
〇人心かよふたゞちの絶えしより恨みぞ渡る夢の浮橋
一面影はなれし年らの身に添てあらぬ心の誰契るらむ
二思ひ出よ誰が後朝の曉も我がまた忍ぶ月を見るらし
三忘れねよ是は限ぞとばかりの人傳ならぬ思出もうし
四はては唯海士の刈藻を宿りにて枕定むる宵々ぞなき
五かれぬるはさぞな例と詠めても慰まなくに霜の下草
六時つ風吹飯の浦にあかひて誰爲にかは身をも惜みし
一駒止めしひのくま河の水清み夜渡月の影のみぞみる
二空に吹く同じ風こそ聲たつれ峯の松が枝あら磯の波
三朝夕はたのむとなしに大空の空しき雲を打眺つゝ
四磯馴松しづ枝やためし己のみ變らぬ色に波の越らむ
五幾世へぬかざしをりけむ古に三輪の檜原の苔の通路
六駒止めしひのくま河の水清み夜渡月の影のみぞみる
七空に吹く同じ風こそ聲たつれ峯の松が枝あら磯の波
八朝夕はたのむとなしに大空の空しき雲を打眺つゝ
九磯馴松しづ枝やためし己のみ變らぬ色に波の越らむ
〇幾世へぬかざしをりけむ古に三輪の檜原の苔の通路
一駒止めしひのくま河の水清み夜渡月の影のみぞみる
二空に吹く同じ風こそ聲たつれ峯の松が枝あら磯の波
三朝夕はたのむとなしに大空の空しき雲を打眺つゝ
四磯馴松しづ枝やためし己のみ變らぬ色に波の越らむ
五年ふれば霜夜の闇に鳴鶴をいつ返袖のよそに聞けむ
六往に可惜命をせめきけむ長らへてこそ今日に逢ぬれ
七和歌浦にかひなき藻屑掻つめて身さへ朽ぬと思ける哉

内大臣家百首　建保三年九月十三夜講
詠二百首和歌一

參議

春十五首

早春

八霞もまだ出でやらぬ春の雲今年とも云す山風ぞ吹く

九淡雪の今も降敷く常磐の影は見えけむ

〇春來れば野べに先咲く花のえを知べに來ぬる鶯の音

一霰すてふ波もてゆへる山やそれ霞吹とけ須磨の浦風

二知る知ぬ逢坂山のかひもなし霞に掛る關のよそめは

三誰爲ぞまだ朝霜のけぬが上に袖振はへて若菜摘らむ

四袖ふれし宿のかたみの梅が枝に殘る匂に春を荒すな

五久方の月やは匂ふ梅のはな空ゆく影を色にまがへて

六暮れぬなり山本遠き鐘の音に峯飛越えて歸る雁がね

七ふりはつる身に社またね梅花植置く宿の春な忘れそ

八霞たつ山のやまぢ言づてよ幾日過ぎての花の盛と

九鳥の聲かすみの色をしるべにて面影匂ふ春の山ぶみ

〇插頭をる花の色香に移ろひて今日の今宵に飽ぬ諸人

一消えず共明日は雪とや櫻花暮行く空をいかに止めむ

二春はたゞ霞むばかりの山の端に曉かけて月出づる頃

夏十首

三衰をもまたにやらぬ花の香の山も仄に殘る三日月

夏草
[一]百合ばに交る夏草茂合ひて知れぬ世にぞ朽ぬと思し
初郭公
[二]山の端の朝げの雲に郭公まだ里馴れぬこぞの古こゑ
嶺郭公
[三]よそにのみ聞きか悩まむ郭公高間の山の雲の遠かた
杜郭公
[四]ほと〳〵きす聲あらはるゝ衣手の森の雫を涙にやかる
池菖蒲
[五]五月きぬ軒の菖蒲の影添へて待しいつかと匂ふ池水
山五月雨
[六]峯續き雲の直路に窓とぢてとはれむ物か五月雨の空
故郷橘
[七]たち花の袖の香ばかり昔にて移りにけりな古き都は
澤螢
[八]芹摘し澤邊の螢已れ又あらはに燃ゆと誰に見すらむ
樹蔭納涼
[九]泊瀬野やゆつきが下に隱ろへて人に知れぬ秋風ぞ吹く
秋十五首
初秋
[一〇]味氣なくさも非ぬ人の寢覺迄物思ひそむる秋の初風
行路萩
[一一]秋萩の行手の錦これもまた幣とり敢ぬ手向にぞおる
山家蟲
[一二]松蟲の聲もかひなし宿ながらたづねば草の露の山風
夕萩
[一三]人心いかに萎れと萩の葉の秋の夕にぞよきそめけむ
谷鹿
[一四]さを鹿の朝ゆく谷のたま葛面影さらす妻やとふらむ
原鹿
[一五]みかのはら國の都の山こえて昔やとほきさを鹿の聲
島月
[一六]秋は又濡こし袖の合に合ひて小島の蜑ぞ月に馴ける
江月
[一七]明す夜は入江の月の影ばかり漕出でし舟の跡の浮波
浦月
[一八]久方の月のひかりの白妙にしきつの浦のなみの秋風
橋月
[一九]遙かなる嶺の梯廻り合ひて程は雲居の月ぞさやけき
河月
[二〇]光さす玉島川の月きよみ少女のころも袖さへぞてる
曉擣衣
[二一]長き夜をつれなく殘る月の色に已もやまず衣うつ也
遠村紅葉
[二二]山本の紅葉の主うとけれど露も時雨も程は見えけり
古寺紅葉
[二三]そばだつる枕におつる鐘の音も紅葉を出る峯の古寺
暮秋
[二四]朝な〳〵あへず散敷く葛の葉に置添ふ霜の秋ぞ少き
冬十首
田家時雨
[二五]刈殘す田面の雲も村々に時雨て晴るゝ冬はきにけり
野徑霜
[二六]朝霜の花野の薄起きて行く遠かた人の袖かとぞ見ゆ
水鄉寒蘆
[二七]冬の日の短き草はうらがれて波の苫屋に風ぞ騷らぬ
寒夜千鳥
[二八]浦千鳥潟も定めず戀ひてなくつま吹風の夜ぞ久しき
湖氷
[二九]鏡山よわたる月も磨かれて明くれぞ凍る志賀の浦波
林雪
[三〇]林あれて秋の情も人とはず紅葉をたきしあとの白雲
濱雪
[三一]おほとものみつの濱風吹拂へ松とも見えじ埋む白雪
岡雪
[三二]今朝は又跡かきたゆる水莖の岡の館の雪のふりはも
深更霰
[三三]明方もまたとほ山の木枯に霰ふきませ靡くむらくも
歲暮
[三四]行年よ今さへ遠り迫ふてふ心長さをいかに見るらむ
戀二十五首　寄名所一戀
[三五]夜と共に吹上の濱の潮風に靡く眞砂のくだけてぞ思
[三六]暮〳〵夜は衡士の焚火を其とみな室の八島も都なりけ
[三七]住の江の松の妬くや寄波のよるとは歎く夢をだに見で
[三八]甲斐が根に木葉吹敷く秋風も心の色をえやは傳ふる
[三九]龍田山ゆふ付鳥のおりはへて我が衣手に時雨ふる頃
[四〇]我が袖に空しき波はかけそめつ契も知らぬ床の浦風
[四一]知られじな霞の下に焦れつゝ君に伊吹のさしも忍と
[四二]葦の屋に螢や紛ふ海士やたく思も戀も夜は燃えつゝ
[四三]白玉の緒絶の橋の名もつらし碎けて落つる袖の涙に
[四四]今よりの行きゝも知らぬ逢坂に哀歎きの關を据つる
[四五]玉櫛げ明れば夢の二見潟ふたりや袖の浪に朽ちなむ
[四六]顯れて袖の上ゆく名取川今はわが身にせく方もなし
[四七]思出づる後の心にくらぶ山よそなる花の色は色かは
[四八]いかにせむ浦の初島はつかなる現の後は夢をだに見ず
[四九]頼めおきしのちせの山の一言や戀を祈の命なりけむ
[五〇]尋ねは思ひし三輪の山ぞかし忘れね元のつらき佛
[五一]里の名を身に知る中の契ゆゑ枕に越ゆる宇治の川波
[五二]休らひに出けむ方も白鳥のとは山松のねにのみぞ鳴
[五三]知べせよ蟲明の瀨戸の松の風ほか行波の知らぬ別に
[五四]形見社あだの大野の萩の露移ふ色は云ふかひもなし
[五五]袖の浦假に宿りし月草の濡れての後を猶やたのまむ
[五六]忘貝それも思の種たえず人を見ぬめの恨みてぞぬる
[五七]命だにあらば逢瀨を松浦川歸らぬ波も澁めとぞ思ふ
[五八]槇の葉の深きをすての山に生る苔の下迄猶や恨みむ
[五九]忘られぬまゝの繼橋思寢に通ひし方は夢に見えつゝ

雜二十五首
旅五首　春、夏、秋、冬、曉
[六〇]時のまも人を心にねくらさで霞にまじる春の山もと
[六一]山路行く雲のいづこの旅枕ふす程もなき月ぞ明行く
[六二]草の庵やくるゝ夜毎の秋風に誘はれ渡る旅の露けさ
[六三]しきたへの衣手かれで幾日へぬ草を冬野の夕暮の空
[六四]面影にあらぬ昔もたちそひて猶東雲ぞ旅はかなしき
逃懷五首　山、河、海、里、關
[六五]暮るゝ明くと思し月日杉の庵の山路難面く年はへに鳧
[六六]消えせぬは哀幾世の思川むなしく越えし瀨々の浮波
[六七]海渡る浦こぐ舟の徒にいそぢを過きてぬれし波かな
[六八]荒まくや伏見里のいでがてに憂を知でや今日に逢ぬる
[六九]今はまた關の藤波絶すとも國に報いむ爲をこそ思へ
祝五首　天、日、月、扇、鏡
[七〇]曇なき翠の空を仰ぎても君が八千代をまづ祈るかな
[七一]三笠山杉の木間を出る日のさして千歳の色は見ゆ鏡

三三秋の月ひさしきやどに影なびく籬の竹は萬世やへむ
三四曇なき千代の數々あらはれて光さしそへ星の宿りに
三五山人の齡を君のためしにて千とせの坂にかゝる白雲
神祇五首　伊勢、石清水、賀茂、春日、住吉
三六身を知れば祈るには有で賴こし五十鈴川波哀かけ給
三七石清水月には今も契りおかむ三度かげ見し秋の半を
三八〇圓神も見よ賀茂の川波行き歸り仕ふる道にわけぬ心を
三九一圓祈置きしいかなる末に春日山すてゝ久き跡殘りけむ
四〇二圓かた計我は傳へしわが道の絶えやはてぬる住吉の神
釋教五首　大日、釋迦、阿彌陀、藥師、觸知
四一三圓天津空光を分つ四つの身に何の草木もるゝ物かは
四二四圓如月のなかばの空をかたみにて春の都を出でし月影
四三五圓九重の花の臺をさだめずば煙の下やすみかならまし
四四六圓十あまり二つの誓清くしてみがける玉の光をぞ知る
四五七圓花匂ふよつの大空遠からで曉またぬ逢ふこともがな
内裏百首　名所依レ未レ被レ行二中殿宴一、雖レ爲二密儀一
初冬同詠二百首和歌一
參議藤原定家
春二十首
音羽河
四六八圓音羽河雪げの波も岩越えて關の此方に春は來にけり
玉島河
四七九圓梅が香やまづうつるらむ影きよき玉島河の花の鏡に
高砂
一〇それながら春は雲居に高砂の霞の上の松のひとしほ
春日野
一一若菜つむ飛火の野守春日野に今日降雪のあすや待覽
三輪山
一二いか樣に待とも誰か三輪の山人に知られぬ宿の霞は
葛木山
一三青柳の葛城山のながき日は空もみどりに遊ぶ絲ゆふ
手向山
一四立つ嵐いづれの神に手向山花の錦のかたもさだめず
伊勢海
一五伊勢の海玉よる波に櫻貝かひある浦の春のいろかな
志賀海
一六小波や志賀の花園かすむ日のあかぬ匂に浦風ぞ吹く
三島
一七三島江の波に棹さすたをやめの春の衣の色ぞ移ろふ
鹽竈浦
一八鹽竈やうらみて渡る雁がねを催しがほに返る波かな
宇津山
一九宇都の山わが行先も程とほき蔦の若葉に春雨ぞ降る
葦屋里
二〇葦のやの我が住む方の遲櫻ほのかに霞む歸るさの空
吹上濱
二一今日ぞ見る爵しの波の花の上に厭はぬ風の吹上の濱
湯等三崎
二二花鳥の匂ひも聲も遙なるみさきの春の日ぐらし
忍山
二三岩つゝじいはでやそむる忍山心の奥の色をたづねて
水無瀨川
二四春の色を幾萬代かみなせ川かすみのほかの苔の綠に
大淀浦
二五つらからぬ松もこぶかく大淀の霞ばかりに懸る浦波
田籠浦
二六田子の浦の波も一つに立つ雲の色わかれ行く春の曙
末松山
二七梓弓するの松山はるはたゝ今日までかすむ波の夕暮
夏十首
大井河
二八大井川變らぬ井堰おのれさへ夏來にけりと衣はす也
篠田社
二九道のべの日影の强くなる儘にならす篠田の森の下蔭
猪名野
三〇短夜のあなの笹原假初に明せば明けぬ宿はなくとも
御裳濯河
三一月宿る御裳濯河の鄭公秋の幾夜も飽かずやあらまし
伊香保沼
三二唐衣經る伊香保の沼水に今日は玉ぬく菖浦をぞひく
天香久山
三三五月雨は天の香久山空とぢて雲ぞかゝれる嶺の眞榊
大江山
三四夕すゝみ大江の山の玉葛秋をかけたる露ぞこぼるゝ
難波江
三五おしてるや難波堀江にしく玉の夜の光は螢なりけり
美豆御牧
三六わたりする遠方人の袖かとやみつ野に白き夕顏の花
松浦山
三七蟬の羽の衣に秋を松浦潟ひれふる山の暮ぞすゞしき
秋二十首
泊瀨山
三八泊瀨女のならす夕の山風も秋にはたへぬしづの苧環
立田山
三九心あての思の色も立田山今朝しもそめし木々の白露
須磨浦
四〇旅衣まだひとへなる夕霧に煙吹きやる須磨の浦かぜ
宮城野
四一秋に逢て身を知る雨と下露と孰れか勝る宮城野の原
水莖岡
四二水莖の岡の眞葛をあまの住む里の知べと秋風ぞ吹く
小倉山
四三小倉山秋の哀や殘らまし鹿の妻のつれなからずば
宇治川
四四河波も待つよひ過ぎば遠ざかれ八十氏人の秋の枕に
常磐杜
四五初雁の來鳴く常磐の森の露そめぬ雫も秋は見えけり
三室山
四六三室山時雨もやらぬ雲の色のおのれ移ろふ秋の夕暮
高圓野
四七大空にかゝれる月も高圓の野べに隱なき草の上の露
伊駒山
四八伊駒山嵐も秋の色にふく手ぞめの絲のよりぞ悲しき
生田池
四九しぐれゆく生田の森の木枯に池のみくさも色變る頃
淨見關
五〇きよみ潟ひまゆく駒も影うすし秋なき波の秋の夕暮
武藏野
五一誰が方に夜なく雁のねにたてゝ涙移ろふ武藏野の原
伊吹山
五二秋をやく色にぞ見ゆる伊吹山もえて久しき下の思も
佐良之奈里
五三はるかなる月の都に契ありて秋の夜すがら更科の里
白河關

[九]白河の關の關守勇むともしぐるゝ秋の色はとまらじ
野島崎
[一〇]面影は日も夕暮に立ちそひて野島によする秋の浦波
明石浦
[九]燈火のあかしの沖の友舟も行くかたたどる秋の夕暮
阿武隈川
[七]立曇る阿武隈川の霧のまに秋をばやらぬ關も据けむ
冬十首
清瀧川
[八]音紛ふ木葉時雨をこきまぜて岩瀬に染むる清瀧の波
小鹽山
[九]朝霜もしらゆふかけて大原や小鹽の山に神まつる頃
住吉浦
[〇]淡路島むかひの雲のむら時雨染めも及ばぬ住吉の松
交野
[一]狩人のかたのゝ深雪打拂ひ豐の明にあはむとやする
田養島
[二]起明す霜ぞ重なる旅衣たみのゝ島はきてもかひなし
有乳山
[三]有乳山みねの木枯さきだてゝ雪の行くてに落る白雪
浮島原
[四]富士のねにめなれし雪の積りきて己時知る浮島が原
安達原
[五]そなたより霞やしたに急ぐらむ安達の眞弓春は隣と
因幡山
[六]昨日かも秋の田のもに露おきし稻葉の山も松の白雪
鏡山
[七]鏡山うつれるなみの影ながら空さへこほる有明の月
戀二十首
伏見里
[八]笘竹の伏見の里は名のみして馴れのよにか音をも立べき
霞浦
[九]春霞かすみの浦を行舟のよそにも見えぬ人を戀つゝ
石瀨社
[一〇]神なびの石瀨の杜の云ず共知れかし下に積る松葉を
筑波山
一あしほ山止ず心は筑波ねのそがひにだにもみらくなき頃
袖浦
一袖の浦たまらぬ玉の碎けつゝ寄せても遠く返る波哉
益田池
[二]人心いとゐます田の池水に上は繁れる名を恨みつゝ
高師濱
[三]あだ浪の高師の濱の磯馴松馴すば懸て我れ戀めやも
阿波手杜
[四]片糸のあだの玉の緒より懸てあはでの杜に露消ねとや
志賀須加渡
[五]秋風に鳴音を立るしかすがの渡りし波に劣る袖かは
濱名橋
[六]東路や濱名の橋にひく駒もきぞ待ちわたる逢坂の關
磯間浦
[七]梓弓いそまの浦に引く網のめにかけ乍ら逢はぬ戀哉
守山
[八]終夜夢さへ人め守山はうちぬるなかの賴みやはする
佐野布奈橋
[九]言づてよ佐野の舟橋遙なるよその思にこがれ渡ると
安積沼
[一〇]いかにせむ安積の沼に生ときく草葉に付て落る涙を
松島
[一一]更くる夜を心一つに恨みつゝ人松島の海士の藻汐火
緒絕橋
[一二]琴の音も歎き加はる契とて緒絕の橋に中も絕えにき
三熊野浦
[一三]時のまのよはの衣の濱ゆふや歎き添ふべき三熊野の浦
鳴海浦
[一四]そ人に鳴海の浦の八重霞忘れずとても隔てはてゝき
二見浦
[一五]二見がた伊勢の濱荻敷妙の衣手かれて夢もむすばず
名取川
[一六]名取川心にくたす埋木のとわり知らぬ袖のしがらみ
雜二十首
芳野川
[一七]芳野川いはと柏を越す波の常磐かきはに我君の御代
鈴鹿川
[一八]鈴鹿川やそ瀨踏渡るみてぐらを君が世長き千代の長月
不盡山
[一九]天のはらふじの柴山暫くも煙たえせす雪もけなくに
逢山
[二〇]いかばかり深き中とて逢山重なる雪をとへと待らむ
海橋立
[二一]むば玉の夜わたる月のすむ里はげに久方の天の橋立
明日香川
[二二]細れ石は巖となりて飛鳥川淵瀨の聲を聞かぬ御代哉
鳥羽
[二三]末遠きとばたの南古しより幾世の花に深雪ふるらむ
辰市
[二四]敷島の道に我名は辰の市やいざまだ知らぬ倭言の葉
吹飯浦
[二五]絞す波に我世吹飯の恨みきて打ぬる夢も此頃ぞ見る
布引瀧
[二六]布引の瀧に袂を爭ひて我が年なみのいづれたかけむ
長柄橋
[二七]遮莫名のみながらの橋柱朽ちずば今の人もしのばじ
玉河里
[二八]てづくりやさらす垣根の朝露を貫きとめぬ玉川の里
麻生浦
[二九]何故か底のみるめも麻生の浦に逢事梨の名には立覽
佐夜中山
[三〇]關の戸を誘ひし人は出やらで有明の月のさやの中山
嵯峨野
[三一]結び置し秋の嵯峨野の庵より床は草葉の露に馴つゝ
角太川
[三二]水莖のあとかき流す角太川言傳やらむ人もとひこす
志加麻市
[三三]晴れぬまにまづ朝霧を立て籠て飾磨の市に出る里人
若浦
[三四]寄りくべき方も渚の藻汐草かき盡してし和歌の浦波
相坂關
[三五]君に猶相坂山もかひぞなき杉の古葉に色し見えねば
御津濱松
[三六]待ちこひし昔は今も忍ばれて形見久しきみつの濱松

春日同詠二百首應製和歌一
參議從三位行治部卿兼侍從伊豫權守臣藤原朝臣定家上
春二十首

春霞立つや外山の朝より咲あへぬ花を雪とやは見る
朝日さす春日の小野の白からまだ顯はるゝ雪の下草
○葦垣のまぢかき冬の雪ながらひらけぬ梅に鶯ぞ鳴く
梅の花匂ふや孰こ雲かゝる深山の松は雪もけなくに
むば玉の夜の間の風の朝戸出に思に過て匂ふ梅が枝
くるとあくとめがれぬ花に鶯の鳴て移ふ聲な敷へそ
あら玉のこけの緑に春かけて山の雫も時は知りけり
淺みどり霞たなびく山賤のころも春雨色にいでつゝ
あをによし奈良の都の玉柳色にも著く春はきにけり
嶺の雪とくらむ雨のつれ〴〵と山べ催す花の下ひも
昨日けふ山のかひより白雲の龍田の櫻今か咲くらむ
三吉野の吉野は花の宿ぞかし偖もふりせず匂ふ山哉
○櫻花さきぬる頃は山ながらいしま行くてふ水の白波
百ちどり囀る春の數々に幾世の花のみもふりぬらむ
花の色に一春さけよ歸るかり今年越路の空頼めして
眺めつゝ霞める月はあけはてぬ花の匂も里わかぬ頃
山の端をわきて詠むる春の夜に花の縁りの有明の月
散花の難面く見えし名殘とて暮るゝも惜く霞む山陰
色紛ふ野べの藤波袖かけて御狩の人の插頭折るらし
とはいやな花なき里に住人も春は今日とや猶詠む覽

夏十五首

春のいろに囀の羽衣ぬぎかへて初聲おそき郭公かな
忍ばるゝ常磐の山の岩躑躅春の形見の數ならねども
○物ごとに時雨の分きし松の色を一つに染る夏の雨哉
○郭公たびなる今朝の初聲にまづ里見えよ軒のたち花
徒に雲ゐる山の松の葉の時ぞともなき五月雨のそら
萱浦草ふくや五月の長き日に暫しをやまぬ軒の玉水
○郭公心づくしの山の端を待たぬに出るいざよひの月
秋立む稻葉の風を急ぐとてみしまに交る田子の衣手
あたらしや鵜川の薄さしはへて厭ふ河瀬の有明の月
さゆり葉の知られぬ戀も有物を身より餘て行く螢哉
裝へてのかひ社なけれ待人はこすの常夏花に咲共
夏衣かざりの浦のうたゝ寝に波のよる〳〵通ふ秋風
○木の間もる垣根に薄き三日月の影顯はるゝ夕顔の花
○夕立の雲ふく風の時のまに露はしはつる小野の篠原
飛鳥川ゆくせの波に御祓して早くぞ年の半過きぬる

秋二十首

さらぬだに仇に散るてふ櫻朝の露も溜らぬ秋の初風

七夕の手だまもゆらに織る機の折しも習ふ蟲の聲哉
我が宿は萩の白露跡もなし誰かはとはむ野べの古道
大方につもれば人のとに計に眺めし月も袖やぬれけむ
哀のみいや年のはに色增る月と露との野べのさゝ原
秋の月川音すみて明す夜に遠かた人の誰をとふらむ
袖の上に思ひいれじと忍べども絶ず宿かる月の影哉
○東屋の軒の程なき板廂いたくも月になれにけるかな
まどろまで眺むる月の明方に寢覺やすらむ衣うつ也
おきて行く誰が通路の朝露ぞ草の袂も絞るばかりに
さを鹿の棚む萩も時過て枯行くをのを恨みてぞ鳴く
ひきむすぶかりほの庵も秋くれて嵐に弱き松蟲の聲
秋の色のめにさやかなる古郷に鳴て鶉の誰忍ぶらむ
愚かなる露や草葉にぬく玉を今はせき敢ぬ初時雨哉
雁がねの涙の露の玉ながらぬきも定めずおる錦かな
守山の時雨の秋を見てしがな心づからや紅葉はつると
契ありて移ろはむとや白菊の紅葉の下の花に咲けむ
○長月の紅葉の山の夕時雨はるゝ日影も雪はそめけり
○泉川日も夕暮のこま錦かたえ落ちゆく秋のもみぢ葉
○木葉もて風のかけたる柵にさても淀まぬあきの暮哉

冬十五首

○木枯のもりの梢のあさな〳〵名に顯るゝ神無月かな
風寒みみほの浦べを漕舟に山の木葉のきほひ顔なる
止らじな四方の時雨の古郷と成にし檜の霜の朽葉は
鵠の羽がひの山のやま風の拂ひもあへぬ霜の上の月
鴛鳥は玉もの宿もかれなくに賴みし蘆ぞ青葉交らぬ
冬草を結ぶもあだに明す夜の枕も知らず霰ふるなり
色見えぬ冬の嵐の山風に松のかれ葉ぞ雨とふりぬる
○檜柴の枯行く煙子影をのみ立やかりはの己が在かを
濱松の寢られぬ浪の苦やかた猶聲ぞふるさよ千鳥哉
身を焚るすみのやすきを愁へにて氷を急ぐ嵐の衣手
雜波濱もとより紛ふ亂れ葦のほ末もなみ初雪ぞふる
明けぬとて出つる人の跡もなし唯時の間に積る白雪
明けぬとてはるゝを誰ばかりとや詠むらむ雪の朝の岩の陰道
最ごしく降添ふ雪に谷深み知られぬ松の埋れぬらむ
向ひゆく六十の坂の近ければ哀も雪も身に積りつゝ

戀十五首

今日ぞ思いかなる月日ふじの根の峯に煙め立始けむ
昨日けふ雲の旅手を詠むとて見もせぬ人の思やは知
○初雁のとわたる風の便にもあらぬ思を誰につたへむ

睡まぬ霜おくよはの百羽掻羽かく鳴の碎けてぞなく
終夜月にうれへてねをぞなく哀にむかふ物思ふとて
大方につもれば人のとに計に眺めし月も袖やぬれけむ
くるゝ夜は面影見えて玉葛ならぬ戀する我ぞ悲しき
袖の上も戀ぞ積りて淵となる人をば峯のよその瀧つせ
いかにとて向ひの岡に刈草の束の間にだに露の影みむ
いかにせむ波こす袖に散る玉の數にも非ぬ賤の苧環
夢といへば彌儚なる春の夜に惑ふ直路はみても賴むる
石はしる瀧ある花の夏にてさそはゝつらし春の山風
わくらばに通ふ心のかひもなし賴む吉野の翳し計は
ねに立つるかけの垂尾の誰故か亂れて物は思初てし
秋の野に尾花刈葺く宿よりも袖ほし侘る今朝の朝露
下紐の結手もたゆきかひもなし忘る草を君や附けむ

雜十五首

明けぬとて木綿附鳥の聲すなり誰か別の袖濡すらむ
詠する今日も入相の鐘の音に過行方を身に數へつゝ
山里は猶寂しとぞ立ち返る明くれば急ぐ心やすまで
よそにのみ深山の杉のつれもなく元の心は非ず成つゝ
それも疎し心慰む海山は身の寄邊とも思ひならはで
心からいきうしと云て歸る共いさめぬ關を出ぞ煩ふ
かきやれば煙立添ふ藻鹽草あまのすさびに都戀つゝ
浪まくら濱風白くやどる月袖の別のかたみがはなる
人も分かず山路時雨れて行く雲を伴ふ峯の袖の雫は
玉鉾や旅ゆく人はなべて見よ國榮えたる秋津島かな
君が代の天のうるひは廣けれどそ恵の身に餘ぬる
いかにして朽にし谷の木の本に道有御代の春を待剣
紫の色こき迄は知らざりき御代のはじめの天の羽衣
和歌の浦に鳴て古にし霜のつる此頃見えぬ心休めて
祈りおきし我が故郷の三笠山君のしるべを猶思ふ哉

先撰二二百首之懇歌一有二結番事一仍可レ謂二拾其遺文一養和元年企二百首之初學一建保四年書二三卷之家集一彼是之間再居二拾遺之官一敢爲二此草名一

建保四年三月十八日書之

參議治部卿兼侍從藤　判

關白左大臣家百首　　貞永元年四月

詠二百首和歌一

櫂中納言定家

霞

知らざりき山より高き齡迄春の霞の立つを見むとは
三吉野は春の霞の立所にて消えぬに消ゆる峯の白雪

○一いつしかと都の野べは霞つゝ若菜摘べき春は來にけり
○二尋ぬともあひ見む物か春來てはふかき霞の浦の初島
○三幾春の霞の下に埋もれておどろの道の跡をとふらむ

櫻

○四千早ぶる神代の櫻何ゆゑに吉野の山を宿としめけむ
○五櫻花待ち出る春の中をだに戀る日多くなど匂ふらむ
○六尋ね見る花の所も變りけり身は徒になかめせしまに
○七雲の上近き衛りにたちなれし御階の花の影ぞ戀しき
○八庭のおもは柳櫻をこきまぜむ春の錦の數ならすとも

暮春

○九霞まざるわが新玉の年ふれば有しよりげに惜き春哉
○十雪とふる花こそ幣のかざでして暮ふ路なき春の歸さ
○十一匂ふより春は暮行く山吹の花こそ花の中につらけれ
○十二散る花の雲の林もあれはて、今は幾日の春も殘らじ
○十三忘られぬ彌生の空の恨みより春の別ぞ秋にまされる

郭公

○十四誰しかも初音聞くらむ郭公待たぬ山路に心つくさで
○十五時鳥己が五月をつれもなく猶こそ惜む年もありけれ
○十六山かづら明けゆく雲に郭公出る初音も峯わかるなり
○十七袖の香の花にやどかれ郭公いまも戀しき昔と思はゝ

五月雨

○十八抜も敢すこぼるゝ玉の緒は絶ぬ梅雨初る軒の菖蒲に
○十九五月雨の日數も雲も重れば見らく少き四方の山のは
○二十五月雨の雲のまぎれに中絶えて續きも見えぬ雲の梯
○二十一三輪の山五月の空の隙なきに檜原の聲ぞ雨を添なる
○二十二玉鉾や通ふたいちも川と見て渡らぬ中の五月雨の頃

早秋

○二十三暮れ難き春の菅の根引替て明る夜遲き秋は來にけり
○二十四秋來ぬと荻の葉風は名乘なり人こそとはね黄昏の空
○二十五風の音のなほ色まさる夕かな今年も知らぬ秋の心を
○二十六昨日けふ朝け計の秋風にさそはれわたる木々の白露
○二十七手馴つる閨の扇をおきしより床も枕も露零れつゝ

月

○二十八時わかす空ゆく月の秋の夜をいかに契りて光添らむ
○二十九昔思ふ袖に寝るゝ軒端よりありし長柄の秋の夜の月
○三十長き夜の月を袂に宿しつゝ忘れぬことを誰に語らむ
○三一下荻もおき臥待の月の色に身を吹きしをる床の秋風
○三二秋の月たまきはるよの七十に餘りて物は今ぞ悲しき

紅葉

○三三山姫の濃きも薄きもなべなく一に染ぬ四方の紅葉
○三四山人のうたひて歸る夕より錦をいそぐ峯のもみぢ葉
○三五時雨つゝ袖だに干ぬ秋の日にまこゝみ室の山は染らめ
○三六龍田山神のみけしに手向くとや暮行秋の錦おるらむ
○三七今はとて紅葉に限る秋の色をさぞ共なしに拂ふ木枯

氷

○三八氷ゐておき中河の絶えしより通ひし鴛の跡を見ぬ哉
○三九せだえしてみなわ分るゝ涙川底も顯はに氷どぢつゝ
○四十冬の夜の長き限は知れにき寝なくに明る袖の水柱に
○四一袖の上渡る小川を閉ぢはて、空吹く風もこほる月影
○四二氷のみ結ぶさ山の池水にみくりも春の明くる待らし

雪

○四三老らくは雪の中にぞ思知る訪人もなし行く人もなし
○四四徒に松の雪こそつもるらめ我が踏み分けし曙のやま
○四五石上ふる野は雪の名なりけり積る日數を空に任せて
○四六夢かとも里の名のみや殘覽雪も跡なき小野の淺茅生
○四七誰計山路を分て訪ひくらむまだ夜は深き雪の景色に

忍戀

○四八口なしの色の八入に戀そめし下の思やいはで果なむ
○四九水藍の人づてならぬ跡もだに思ふ心はかきも流さず
○五十植ゑ茂る垣根隱れのを笹原知られぬ戀は憂節もなし
○五一白露のおくとは歎くと計も夢の直路やことゝ通ふらむ

異浦にころや鹽木の名に立てよ燃て隱れぬ煙也とも

不レ遇戀

○五二より戀てまたてに馴ぬ玉の緒の片糸乍ら絶や果なむ
○五三夜な〳〵の月も涙に曇にき影だに見せぬ人を戀とて
○五四名取川心のとはむ言の葉も知らぬ逢瀬は渡り兼つゝ
○五五螢の刈るよそのみるめを恨にて夜は袂に懸る波かは

我戀よ何にかゝれる命とてあはぬ月日の空に過らむ

後朝戀

○五六今のまの我身に限る鳥のねを誰憂物と返りそめけむ
○五七起侘ぬ長き夜あかぬ黒髪の袖にこぼるゝ露亂れつゝ
○五八關もりの心も知らぬ別には必ず頼むこのくれもなし
○五九朝露のおくを待間の程をだに見果ぬ夢を何に譬へむ

始より逢ふは別と聞きながら曉知らで人を戀ひける

逢不レ遇戀

○六十命とて逢ひみむとも頼まれず移る心の花のさかりは
○六一はるかなる人の心のもろこしは嘸ぐ濱に言傳もなし
○六二儚しな夢にゆめ見し陽炎のそれも絶えぬる中の契は
○六三海とのみ荒ぬる床の良わが身さへ浮てと誰に傳へむ
○六四色かはるみの、中山秋こえて又遠ざかる逢坂のせき

怨戀

○六五己のみ天の逆手をうつたへに降敷木葉跡だにもなし
○六六明けぬなり己が心のあたら夜は昔結ばぬ契知られで
○六七思ふ共戀ふ共何のかひがぬよ横をりふせる山を隔て
○六八憤し夜の月計こそ身には添へ濡れてもぬるゝ袖に宿て
○六九道のべの人ごと茂き思草霜のふりはも朽ぞはてぬる

旅

○七十都出で、朝立つ山の手向より露おき止ぬ秋風ぞ吹く
○七一夕日影さすや岡べの玉笹を一夜の宿と頼みてぞかる
○七二故郷にとまる面影立ちそひて旅には戀の道ぞ離れぬ
○七三慰ますいづれの山も住みなれし宿綫捨の月の旅寢は
○七四ふしなれぬ濱松がねの岩枕そでうち濡らし返る浮波

山家

○七五なほしばし雲ある谷を立返り都の月にいづる山みち
○七六松風のおとに住みけむ山人のもとの心は猶や慕はむ
○七七月に吹く嵐ばかりや迎へけむ南の山の霜のふるみち
○七八谷ごしの眞柴の軒の夕煙よそめ計はすみうからじや
○七九とこなる、山下露のおきふしに袖の雫は都にも似ず

眺望

○八十百敷のとのへを出る宵々は待たぬに向ふ山の端の月
○八一吹拂ふ紅葉のうへの霧はれて峯たしかなる嵐山かな
○八二泉川ゆき〳〵の舟はこき過ぎて柞の杜に秋やすらふ
○八三津の國のこや唉く花と今も見る伊駒の山の雪の村消
○八四雲のゆく堅田の沖やしぐるらむ稻影しめる蜑の漁火

述懷

○八五神風や御裳濯川に祈りおきし心の底や濁らざりけむ
○八六其かみの我乘言にかけざりし身の程過ぐる老の波哉
○八七待得つる古枝の藤の春の日に榊の花を並べてぞ見る
○八八はからずよ世に有明の月に出で二度急ぐ鳥の初聲
○八九垂乳根の及ばず遠き跡過ぎて道を極むる和歌の浦人

親

○九十君を祈る今日の貴き神樂も絶ぬる世は樂しきをつめ
○九一箱雪の白髪迄は仕へきぬ君の八千代を祝ひおくとて

四代々ふとも變らぬ竹の伏て思ひ起てぞ祈る君の齡を
大君が代を幾萬世と數へても何にたとへむあかぬ心は
七久にふる三室の山の榊葉ぞ月日は行けど色も變らぬ

拾遺愚草中

韻歌百二十八首　建久七年春
仁和寺宮五十首　建久九年冬
院五十首　建仁元年冬
同句題五十首　同年十一月
女御入內御屏風歌　建久元年正月廿八日
入道皇太后宮大夫九十賀算屏風歌　建仁元年八月十二日
最勝四天王院名所御障子歌　同年二年閏十二月
院二十首　同年二年十二月
後仁和寺宮花鳥十二首
仁和寺宮五十首　承久元年
權大納言家三十首
女御入內御屏風歌　寛喜元年十一月

韻歌
百二十八首和歌　建久七年九月十八日內大臣家九人会
春

八いつしかと出る朝日を三笠山今日より春の峯の松風
九霞みぬる昨日ぞ年は吳竹の一夜ばかりの明ぼの〳〵空
〇武藏野の霞も知らず降る雪にまだ若草の妻や籠れる
一去年もさぞ唯轉寢の手枕にはかなく歸る春の夜の夢
二谷深くまだ春知らぬ雪のうちに一條ふめる山人の蹤
三子日する野べの形見に世に殘れ植置庭の今日の姫松
四日はおそし心はいざや時わかで春か秋かの入相の鐘
五白雲か消敢ぬ雪か春のきて霞みしまゝの三吉野の峰
六難波潟あけゆく月のほの〳〵と霞ぞ浮ぶ波の入江に
七深き夜を花と月とに明しつゝよそにぞ消ゆる春の釭
八荒れはてゝ春の色なき故郷にうらやむ鳥ぞ翅雙ぶる
九風通ふ花のかゝみはくもりつゝ春をぞわたる庭の砥
〇散る花に汀のほかのかげそひて春しも月は廣澤の池
一春よたゞ露の玉ゆらながめして慰む花の色は移りぬ
二朝露の知らぬ玉の緒あり顏に萩うるおかむ春の雜に
三あはれいかに霞も花も馴れ〳〵て空しく谷に歸る鶯

夏

四春の草の又夏草に變るまで今と契りし日こそ遲けれ
五見る毎に猶珍らしき翫し哉神代かけたる今日の葵に
六夏山のかはかみ清き水の色の一つに青き野べの道芝
七春もいぬ花も古にし人にして又見ぬ宿に松ぞ遺れる
八夕まぐれねにゆく鳥打群れて眺れの山の嶺に飛らむ
九夏の夜はげにこそあかね山の井の雫に結ぶ月の暉も
〇東雲のゆふわけごりの鳴く聲に初めて薄き嶂の羽衣
一岩井くむ松に待たるゝ秋風に眞葛恨みは我も歸らむ
二行きなやむ牛の歩みに立つ塵の風さへ暑き夏の小車
三立昇る南のはてに雲はあれど照る日くまなき頃の虛
四夏の夜は月ぞ近き風すらむ伏屋の軒のまやの餘に
五池水に末打ち騷ぐ浮草はまづ夕風の吹きや初めつる
六大井川夏ごにさす假やかた幾年かぬるくたす粹を
七山陰は結ばぬ袖も風ぞ吹く岩せく水におつるしら珠
八跡ふかき我が立つ柚に杉ふりて眺め涼しきにほの湖
九折しもあれ雲の眺くに入月の空さへ惜しき東雲の途

秋

〇八重葎秋の分入る風の色を我さきにこそ鹿は啼なる
一今よりは契りし月を友として幾秋なれぬ山の棲かに
二だび人の袖ふきかへす秋かぜに夕日さびしき峯の柿
三爪木こる道ふみならす山人もこの夕霧や猶迷ふらむ
四色わかぬ秋の煙のさびしきは宿より遠の宿にたく柴
五秋夜はつむと云草のかひもなし松さへつらき住吉の涯
六山水の絕えゆく音をきてとへば積る嵐の色ぞ埋める
七よしさらば伴果てよ秋の月苔の岩屋に世は乖くとも
八かげをまた明すも月のそふるかな大方秋の頃の哀に
九色に出でゝ秋の梢ぞうつりゆくむかひの嶺の浮ぶ盃
〇昔だになほふる里の秋の月しらす光のいく廻りとも
一思ふとも今は殘らじ秋の色よ峯ふく風に木葉擂ぬ
二かり人の袖こそうたて萎れぬれ露ふか草の里の鶉に
三衣うつひゝきぞ風を慕ひくるこすゑは遠き月の隣に
四おく霜にむかひはてぬる野原かな露の光も花み句も
五萬世と契れる月のかげなれば惜までくらす秋の宮人

冬

六遠山のこなたの空の村時雨くもれば〳〵る頃の浮雲
七家ゐする外山が裾の神無月明ぬ暮ぬと時雨をぞ聞く
八木葉散る板間の月の曇すば變る時雨をいかに分まし

九月やそれすこし秋あるまがき哉深き霜夜の菊の薫に
〇寂しとよ邊迷ふ霜の夕間暮を萱のこやの野邊の一村
一物おもはぬ人のきけかし山里の水れる池に獨なく鴛
二敏鷹のかへる白斑に霜おきて已れ寂しき小野の篠原
三旦見つゝ我世は知らぬ儚さよ今年も暮ぬ今日も昏を
四行く年のさのみ過行く果よさは眺れか一つ返る川瀨
五雲さえて嶺の初雪ふりぬれば有明の外に月ぞ殘れる
六山深き雪やいかにと思ひ出づる情計の世こそ難けれ
七最どしく山井の柚や凍るらむ歸る川風身に寒うして
八雪埋み氷と閉ぶをしがものかげと頼める池の眞菅を
九炭竈や小野の里人朝夕は山路をやくとゆき遲りつゝ
〇搔くらす都の雪も日數へぬ今朝いかならむ越の白山
一思ふとて云かひもなき大空に据ばや年の越ぬ關とて

戀

二胸の內よ知れかし今も比べ見よ淺間の山は絕ぬ烟を
三知べして馴るゝ心のかひぞなき君を思ひの積る年々
四變りゆく袖の色こそ悲しけれ音を鳴果てよ秋の空蟬
五今はみな思ひつくばの山嵐よ繁き歎と吹きも傳へよ
六形見かは知べにも非ず君戀ひて唯つく〳〵と向ふ雫
七誰故とたえぬとだにも白雲のよそにや頓て思消なむ
八面影は龍田の山のはつ紅葉色に染めてし胸ぞ焦るゝ
九おくるより歎ぞいとゞ數增る空しき日のみ積る朝は
〇露時雨さてだに人に色見せよ眺めし儘の末の淺茅に
一寄みばや暫も影を宿すやと手に結ばるゝ水の泡とも
二自ら春過きばとも賴むらむ雲に告げたる鳥の古巢は
三玉鉾の行手の道もすぎわびぬ思ふあたりの宿の梢は
四亂れ草の下の戀路よ幾世へぬ年ふるたづの獨なく皐
五人心霜のかれはの里ふりてやがて跡なしもとの蒿に
六最どしく絕えぬ歎きは末の松我より越る波の高さに
七いか樣にせきかとゞめむ色變る人の木葉の末の白濤

述懷

八年月は昨日計の心ちして見なれし友のなきぞ多かる
九いかにせむ果なき人は世にもなし止らぬ駒の影に過めり
〇苦の下に移さぬ名をば殘す其はかなの道や敷島の歌
一彼岸にこのたび渡せ法の舟うまれて死ぬる故郷の河
二三笠山麓ばかりを尋ねてもあらまし思ふ道の遐けさ
三難波潟いかなる葦か積置し世々に其身の跡ならぬ家
四なぐさめは秋にかぎらぬ空の月春より後も面影の花

二さても憂し今年も春を迎へつゝ詠め詠めむ果の霞よ
三いつかさは浮世の夢を覺すべき我が思山の嶺に嵐に
七念がばや思ふによらぬ契あらば住でもやまむ草の庵を
八誰も聞け鳴音に立るかりの世に行ては還る北と南と
九遂に又いかに憂名の留らむ心一つの世をば慙づれど
一〇三代をへて星をいたゞく年ふりて枕に落る秋の初霜
一一いかにせむ深山の月は暮へども猶思ひおく露の古郷
一二様々に春のながめぞ哀なる西の山のはかすむ夕陽に
一三いかで猶まどひし閨を諦めむこのをち方を照す光に

山家

一四麓にやみね立つ雲とながむらむ我が曙におはぬ櫻を
一五山ふかみ人は昔の宿ふりて月よりさきに軒ぞ傾ぶく
一六心から聞く心ちせぬ住ひかな閨よりおろす松風の聲
一七瀧の音に嵐吹きそふ明方はならはずがほに夢ぞ驚く
一八うきよりは住よかりと計よ跡なき霜に杉立てる庭
一九年へぬる宿立出づる椎が本寄り居し石も苔青うして
二〇分けのぼる庵の篠原假初に言とふ袖も露は零ちつゝ
二一いく年ぞ見し柴の戸は人すまで石井の水にしげる萍
二二我が宿の光としめて分け入れば月影白し深山べの秋
二三影たえて山もや主は忍ぶらむ昔寢き入れし水の流に
二四山ざとの門田吹きこす夕風に假庵の上ももにほふ秋萩
二五立ちかへり山路かなしき夕かな今は限の宿を求めて
二六我ぞ有ぬ雪は昔に似たれども誰かは訪はむ冬の山陰
二七いざゝらば尋ね登りて關すゑむ唯此上ぞ月の入る峯
二八自から知らぬあるじも殘しけり宿もる杉の本の心は
二九嵐吹く月のあるじは我ひとり花こそ宿と人も尋ぬれ

旅

三〇面影のひかふる方にかへりみる都の山は月纖うして
三一いとゞしく家路隔つる夕霧に海士の藻汐火煙立添ふ
三二古里の空さへあらぬ心ちかな程なき床のを萱葺く窓
三三旅衣そで吹く風やよふらむ別れて出でし宿の簾に
三四立濡るゝ日數につけて面馴れぬ嶺なる雲も谷の氷も
三五出でゝこし春は冬野に變る迄もとの契を猶や憑まむ
三六荻をあめる小屋の假寢の唯一夜風に待たるゝ宵の燈
三七過行くと人の聲する宿もなし入江の波に月のみぞ澄
三八頼む哉其名も知らぬ深山木に知人えたる松と杉とを
三九明くるより故郷とほき旅枕こゝろぞやがて浦島の圖
四〇有つゝと待れしもせぬ岡の陰一夜の宿にを萱をぞ葺

一七黒かりし我駒の毛の變るまで登りぞなづむ峯の巖に
一八山を越え海を詠むる旅の道ものゝ哀はをしぞ凡たる
一九もろともに廻あひたるたび枕なみだぞそゝぐ春の盃
二〇人のくに夜は長月の露霜に身さへ朽ちにし床の艸に
二一こし方も行先も見ぬ波の上の風を頼にとばす舟の帆

仁和寺宮五十首　慶久五年夏

詠二五十首和歌一

左近衛權少將藤原定家

春十二首

二二いつしかと外山の霞たち返り今日あらたまる春の曙
二三若菜つむ都の野邊に打群れて花かとぞ見る峯の白雪
二四鶯は鳴けどもいまだ故里の雪の下ぐさ春をやは知る
二五大空は梅の匂にかすみつゝ曇りもはてぬ春の夜の月
二六道のべに誰植置きて古りにけむ殘れる柳春を忘れず
二七霜まよふ空にしをれし雁がねの歸る翅に春雨ぞ降る
二八面影にこひつゝ待ちし櫻花咲けば立そふ嶺の白雲
二九春をへて雪と降りにし花なれど猶みよし野の曙の空
三〇櫻花うつりにけりなと計を歎きもあへず積る春かな
三一春の夜の夢の浮橋とだえして峯にわかるゝ横雲の空
三二年ふとも忘れむものか神風やみもすそ川の春の夕暮
三三行春よ別るゝ方も白雲の跡の空をそれとだに見む

夏七首

三四隔てつる今日立更ふる夏衣ほしもまだへぬ花の名殘を
三五誰が爲のなくや五月の夕とて山郭公なほ待たるらむ
三六山のはに月も待ち出でぬ夜を重ね猶雲昇る梅雨の空
三七夕暮はいづれの雲の名殘とてはな橘に風の吹くらむ
三八夕立の杉の下かげ風そよぎ夏をばよそに三輪の山本
三九打靡き茂みが下のさ百合ばの知られぬ程に通ふ秋風
四〇松蔭や岸による波よるばかり暫しぞすゞむ住吉の濱

秋十二首

四一敷妙の枕にのみぞ知られけるまだ東雲の秋のはつ風
四二秋きぬと誰が言の葉か告初めし思ふ立田の山の下露
四三哀又今日も暮れぬと詠めする雲の旗手に秋風ぞ吹く
四四里は荒て時ぞともなき庭の面も本荒の小萩秋は見え見
四五秋風にわびて玉ちる袖の上を我とひがほに宿る月哉
四六年ふれば涙のいたく曇りつゝ月さへ朽る心ち社すれ
四七今よりは我月影とちぎりおかむ野原の庵の行末の秋
四八誰も聞くさぞな習の秋の夜と云ても悲しさを鹿の聲
四九秋風に戰ぐ田の面のいねがてにまつ明方の初雁の聲
五〇露冴て寢ぬ夜の月や積るらむ非ぬ淺茅の今朝の色哉
五一獨さくむなしきはしに雨落ちて我こし道を埋む木枯
五二年毎のつらさと思へど疎まれず唯今日あすの秋の夕暮

冬七首

五三けさよりに思へば思へ共絶すこき嵐四方の木葉は
五四霜埋む小野の篠原忍ぶとて暫しもおかぬ秋の形見を
五五神無月うちぬる夢も現にも木葉しぐれぞ道は絶つゝ
五六蘆鴨の容邊の汀つらゝゐてうきねをうつす沖の月影
五七玉鉾のみち白妙に降る雪をみがきて出る朝日影かな
五八そなれ松梢くだくる雪折に岩うちやまぬ波の寂しさ
五九新玉の年の幾とせ暮れぬらむおもふ思の面變りせで

雜十二首

祝二首

六一君が代はたかの〻山に澄月の待つらむ空に光添まで
六二動きなき君が御宝の山水に幾千代のりの末を結ばむ

述懷三首

六三明日知ぬ今日の命のくる〻間に此世をのみも先歎哉
六四か計と恨みすてつる憂身ほど生れむ後の猶難きかな
六五立返り思ふこそ猶悲しけれ名は殘るなる苦の行方に

閑居二首

六六わくらばに訪れし人も昔にて其より庭の跡は絶にき
六七殘る松かはる木葉の色ならで過る月日も知らぬ宿哉

旅三首

六八旅衣きなれの山の峯の雲かさなるよはを慕ふ夢かな
六九言とへよ思ひ興津の濱千鳥なく〳〵出でし跡の月影
七〇面影の身にそふ宿に我待つと惜まぬ草や霜枯ぬらむ

眺望二首

七一かへり見る雲よりしたの故郷にかすむ梢は春の若草
七二渡の原波と空とは一つにて入日を受る山の端もなし

院五十首　建仁元年春

春日應二　太上皇製一和歌五十首

正四位下行左近衛權少將兼安藝權介臣藤原朝臣定家上

春

七三鴎の海や今日より春に逢坂の山も霞みて浦風ぞ吹く
七四白妙の袖かとぞ思ふ我がなづむ御垣の原の梅の初花
七五霞むより雪さそひ吹く風に外山もにほふ春の明ぼの

九心おてに分くとも分かじ梅の花散交ふ里の春の淡雪
〇梓弓磯邊の小松春ごいへば變らぬ色も色まさりけり
一一百千鳥聲も長閑に霞む日に花とはしるし四方の白雲
二二千代迄の大宮人のかざしとや雲居の櫻匂ひそめけむ
三三春がすみ重なる山をたづぬとも都にしかじ花の錦は
四四春やいかに月も有明にかすみつゝ梢の花は庭の白雪
五五年の內の二月やよひ程もなく馴れてもなれぬ花の俤

夏

六六櫻色の袖も一重にかはる迄移りにけりな過る月日は
七七春暮れて幾日もあらぬを山風に葉末片より靡く下草
八八神祭る卯月待出て唉花の枝もとをゝに懸くる白木綿
九九遙なる初音は夢かほとゝぎす雲の直路は現ならねど
〇四五月雨の月はつれなき深山より獨も出づる時鳥かな
一一こゝわりや打伏す程も夏の夜は木綿付鳥の曉のこゑ
二二夏の日を道ゆきつもれ稻むしろなびく柳に涼む川風
三三影やどす水のしら波立返り結べどあかぬ夏の夜の月
四四山廻りそれかとぞ思ふ下紅葉うち散る暮の夕立の空
五五夏はつる扇に露も置きそめて御禊涼しき賀茂の川風

秋

六六秋風よそよや荻の葉答ふとも忘れね心我身やすめて
七七夕月夜入野の尾花ほの〳〵と風にぞ傳ふさを鹿の聲
八八玉櫛げ二見の浦の秋の月明まくつらきあたら夜の空
九九秋の夜は月の桂も山の端も嵐にはれて雲もまがはず
〇〇秋をへて昔は遠き大空に我が身ひとつのもとの月影
一一露おつる楢の葉あらく吹く風や涙あらそふ秋の夕暮
二二初雁のたよりも過ぐる秋風に言ひかねて衣うつ聲
三三たをやめの袖か紅葉かあすか風徒に吹く霧の違かた
四四山姫のぬさの追風吹き重ね千尋の海に秋のもみぢ葉
五五物毎に忘れがたみの別かなそなだに後と暮るゝ秋哉

冬

六六月日のみ杉の葉しぐれ吹く嵐冬にも成ぬ色は變らで
七七神無月しぐれて來ゑ鵲のはねに霜おきさゆる夜の袖
八八冬がれて青葉も見えぬ村薄風のならひは打靡きつゝ
九九みゆきふりつむ山よりむら雲靡き吹く風に霰よこさる冬の夕暮
〇〇さえ通る風の上なる夕月よあたる光に霜ぞ散りくる
一一大淀の松に夜ふくる波風を恨みてかへる友千鳥かな
二二眺めつゝ夜渡る月におく霜の過ぎて跡なき一年の空
三三神さびていはふ御室の年ふりて猶ゆふ縣る松の白雪

四四春知らぬたぐひをとへば三笠山この頃深き雪の埋木
五五日も暮ぬ今年も今日に成に鳥雲を雪に眺めなしつゝ

雜

六六久方の天てる月日長閑なる君の御影を賴むばかりぞ
七七秋津島そとまで波はしづかにて昔に歸る大和言の葉
八八仰げどもこたへぬ空の青緑空しくはてぬ行末もがな
九九我友とみ垣の竹も哀知れ世々までなれぬ色も變らで
〇〇歎かずもあらざりし身の其かみを羨む計沈みぬる哉
一一身を知れば人をも世をも恨ねど朽にし袖の乾日ぞなき
二二十年餘り三年はふりぬ夜の霜置迷ふ袖に春を隔てゝ
三三我が賴む心の底をてらし見よ御裳濯川にやどる月影
四四春日野や下萌えわぶる思草きみの惠を空に待つかな
五五曇りなき日吉の宮のゆふ襷返る思のいつかはるべき

院句題五十首　建仁元年十一月
冬日同詠二五十首應製和歌一
正四位下行（下脫本歟）

初春待レ花

六七春霞かすみそめぬる外山よりやがて立添ふ花の面影
山路尋レ花
七七三吉野の花も云なしの空めかと分入る峯に匂ふ白雲
山花未レ遍
八七山陰は猶待ちわびぬ櫻花いたりいたらぬ春を恨みて
朝見レ花
九七數々に唉き添ふ花の色なれや峯の朝げの八重の白雲
遠村花
〇八誰か住む野原の末の夕がすみ立迷はせる花の木の本
故郷花
一八飛鳥川かはらぬ春の色ながら都の花ぞいつ匂ひけむ
田家花
二八春をへて門田にしむる苗代に花の鏡の影ぞかはらぬ
古寺花
三八散らすなよ笠置の山の櫻花おほふ計の袖ならすとも
花似レ雪
四八三吉野の春の日數や積るらむ枝もとをゝの花の白雲
河邊花
五八鈴鹿河八十瀨の波の春の色は降しく花の淵と社なれ
深山花
六八山伏の入もきて見ぬ苔のそであたら櫻を打拂ひつゝ

暮山花

七八誰とまた雲の旗手に吹きまよふ嵐の峯の花を恨みむ
古溪花
八八山人のあとなき谷の夕霞こたへぬ花に匂ふはるかせ
關路花
九八櫻色によもの山風そめてけり衣の關の春のあけぼの
暮中花
〇八思ふひと心隔てぬかひもあらじ櫻の雲の八重の遠方
湖上花
一九さゝ波や櫻吹返す浦風を釣する海士の袖かとぞ見る
橋下花
二九跡もなき山路の櫻振はへてとはれぬしるき谷の柴橋
花下送レ日
三九木のもとに待ちし櫻を惜むまで思へば遠き故郷の空
庭上落花
四九春の色と消えすば今朝も見る計少し梢に花の殘らで
暮春惜レ花
五九いかにせむ春もいくかの櫻花かたも定めぬ風の匂を
初秋月
六九露やおく宿かりそむる秋の月まだ一重なる轉寢の袖
月前草花
七九宮城野に風まちわぶる萩のえの露を數へて宿る月影
雨後月
八九かき曇りわびつゝ寢にし夜頃だに眺し空に月ぞ晴行く
松間月
九九秋の露も唯我が爲や岡べなる松の葉分けの月の衣手
山家月
〇〇自ら身を宇治山に宿かればさも非ぬ空の月も澄けり
月前竹風
一〇臥わびて月にこがるゝ道のべの垣根の竹を拂ふ秋風
野徑月
二〇廻合はむ空ゆく月の行末もまだ遙かなる武藏野の原
澤邊月
三〇入しれぬ蘆間に月の影とめて入江の澤に秋風ぞ吹く
月前聞レ雁
四〇白妙の月も夜さむに風さえて誰に衣をかりの一こゑ
浦邊月
五〇波風の月よせかへる秋の夜を獨明石の恨みてぞぬる

月照二滝水一

〇八秋の月袖に馴れにし影ながら濡るゝ顔なる布引の滝

杜間月

〇七露に映る月より秋の色に出て常磐の杜の影ぞかひなき

月前秋風

〇六吹きはらふとこの山風狹庭に衣手うすし秋の月かげ

江上月　忘却父詠難二見苦一力不レ及

〇九住の江の松が根洗ふ白波の懸てよるとも見えぬ月影

月前蟲

〇一夜の風冴行く月に誰が秋の頃もをりはへ蟲の侘らむ

月前鹿

一秋の野に笹分る庵の鹿のねに幾夜露けき月を見つらむ

旅泊月

二蟲明のまつと知らせよ袖の上に絞りし儘の波の月影

月前草露

三一草の原月の行方に置く露をやがて消えねと吹く嵐哉

菊雜月

四一白菊の雜の月のいろばかりうつろひ殘る秋のはつ霜

暮秋曉月

五一今いくか秋も嵐の横雲にいづれはしらむ山の端の月

寄レ雲戀

六一知られじな千入の木葉焦る共時雨る雲に色し見えれば

寄レ風戀

七一いかにせむ人も頼めぬ呉竹の末葉ふきこす秋風の聲

寄レ雨戀

八一雨そゝき程ふる軒の板廂久しや人目もるとせしまに

寄レ草戀

九一今はとて忘るゝ程や茂りにし我が住む里は軒の下草

寄レ木戀

〇二せく袖にせゝの埋木顯れて又こす波に朽やはてなむ

寄レ鳥戀

〇二かりにだにとはれぬ里の秋風に我身鶉の床は荒にき

寄レ嵐戀

二二わびはつる我が思寢の夢破　へ契しられて吹く嵐哉

寄レ船戀

三二來ぬ人を盡せぬ波に松浦舟夜とは月の影をのみ見む

寄レ琴戀

四二形見ぞと頼みしとのかひもなく憂中の緒の絕や果なむ

寄レ衣戀

五二みし影よさてや山藍の摺衣御禊かひなき御手洗の波

女御入内御屏風歌　文治五年十二月

月次御屏風十二帖和歌

左近衞權少將定家

正月小朝拜列立の所

六二霞しく春のはじめの庭の面にまづ立渡る雲のうへ人

野邊の小松原に子日する所

七二小松原春の日影に引つれて千代の氣色を空に見る哉

山野に霞たちわたる所、住吉の松もあり

八二春霞いまゆく末をおしこめて思ふもとほき住吉の松

二月春日祭社頭儀

九二三笠山さしけける使今日くれば杉間に見ゆる袖の色々

花の中に鶯ある所、人の家あり

〇三里わかぬ春の光を知りがほに宿をたづねて來ゐる鶯

人の家ならびに野邊に梅の花咲きたる所

一三遠近の句は色に知られけりまきの戸過ぐる梅の下風

三月澤邊春駒

二三春深く澤邊の眞菰萠ねれば立ちも離れずあさる駒哉

三三諸人の心にかをる花盛のどけき御代も色に見えけり

人の家の庭に藤さかりにひらけたる所

四三春の日の光てります庭の面に昔にかへる宿の藤なみ

四月人の家に更衣したる所、卯花垣もあり

五三今日毎に一重に更ふる夏衣なほ幾年を重ねてかきむ

賀茂の下の御社の神館の邊葵附けたる人參る所

六三千早振かもの瑞垣年をへて幾世の今日に葵なるらむ

早苗うゑたる所

七三天の下氣色もしるくとる苗は水を心にまづぞ任する

五月人の家の雲間に郭公ある所

八三幾里の人に待たれて郭公やどの梢にこゑならすらむ

菖蒲かりたる所、又人の家に葺きたる所もあり

九三菖蒲草長き契をねにそへて千世の五月と祝ふ今日哉

人の家の庭に撫子咲きたる所

〇四種まきて蔓だにすゑぬ常夏の花の盛は君のみぞみむ

六月山井の邊に人々納涼したる所、人の家あり

一四永き日に春秋富る宿やこれ結べば夏も知らぬ眞清水

野邊の杜の間に夏草しげる所

二四分け行けば夏の深さぞ知られける杜の下草末も遙に

河邊に六月祓したる所

三四御禊してむすぶ川波とし/\ふとも幾世すむべき水の流ぞ

七月小野弁に人の家に秋風吹きたる所、荻あり

四四照る月の光添ふべき秋來ぬと聞くも涼しき荻の上風

野の花盛に開きて人々集りたる所

五四押なべて花に心は入にけり野べの千草を分くる諸人

春日野に鹿あるところ

六四春日山朝日まつ間の曙にしかもかひある秋とつぐ也

八月人家地邊に人々翫月所

七四天津風みがく雲居に照る月の光をうつすやどの池月

會坂關駒迎に行き向ふ所

八四せき水の影もさやかに見ゆる哉濁なき世の望月の駒

田の中に人の家ある所

九四秋深き山田の鳴子おしなべて治れる世の例にぞ引く

九月山の中に菊さかりに咲きたる邊に仙人ある所

〇五限なき山路の菊の影なれば露もや千世を契置くらむ

山野弁に人の家紅葉さかりなるを人々翫ぶ所

一五移し植うる花も紅葉も折毎に尋ぬる人の心をぞみる

海の邊に霧たちたる所

二五立ちまさる浦わの月に長月の日數計をあらはにぞ見る

十月海の邊に千鳥ある所、海人の鹽屋あり

三五君が代を八千代と告る小夜千鳥島の外まで聲聞ゆ也

網代に人集りたる所

四五此頃は瀨々の網代に日をへつゝ言問人の絕る間ぞなき

江澤邊に寒嵐しげれる所、鶴あり

五五行末も幾代の霜かおきそへむ蘆間に見ゆる鶴の毛衣

十二月五節參入のところ

六五白妙の羽衣つらねきてをとめ待ちとる雲の通路

賀茂臨時祭社頭儀式、上御社

七五ふる袖は御手洗川に影冴て空にぞ澄るそとはまの聲

野邊に鷹狩したる所

八五急ぎ立つ日なみのみかり雪深し交野の小野の冬の曙

十二月内侍所御神樂儀式

九五空さえてまた霜ふかき明がたに赤星こたふ雲の上人

山野樹竹雪ふりつみたる所、人の家あり

〇六呉竹も松の末葉もをれふして千代を籠たる雪の中哉

歲暮に下人等自レ山松切りて出でたる所

一民も皆君が八千代を松が枝に數とりそむる年の暮哉
泥繪御屏風和歌、
夏樹陰納涼
二六涼みにと道は木の間に踏馴れて夏をぞ過る杜の下蔭
參池邊氷
二七宿からばよをへて凍る池水は重む千代の影ぞ見えける
入道皇太后宮大夫九十賀算屏風歌
屏風歌十二首　建仁三年九月撰進
左近權中將藤原定家
春　霞　若菜花　夏　郭公梅雨納涼
秋　秋野月　紅葉　冬　千鳥氷　雪
二八花山の跡を尋ぬる雪のいろに年ふる道の光をぞ見る
最勝四天王院名所御障子歌
名所御障子和歌
正四位行左近衞權中將藤原朝臣定家
春日野
二九春日野に咲や梅枝雪間より今日は春べと若菜摘つゝ
芳野山
三〇三芳野は花にうつろふ山なれば春さへみ雪故郷の空
三輪山
三一今日こずば三輪の檜原の郭公行手の聲を誰か聞まし
龍田山
三二龍田山よもの木末の色ながら鹿の音さそふ秋の川風
泊瀨山
三三を初瀨や峯の常盤木吹きしをり嵐にくもる雪の山本
難波浦
三四春の色は今日こそみつの浦若み蘆の若葉を洗ふ白波
住吉濱
三五白菊の匂ひし秋もわすれ草おふてふきしの春の浦風
葦屋里
三六葦の屋の假寢の床のふしのまに短く明くる夏の夜々
布引瀧
三七布引の瀧のしらいと夏くれば絕ずぞ人の山路尋ぬる
生田杜
三八秋とだに吹きあへぬ風に色變る生田の杜の露の下草
若浦
三九夜の鶴なく音ふりにし秋の霜猶ぞほさぬ和歌の浦人
吹上浦　續ノ
四〇潮風の吹上の雪に誘はれて波の花にぞ春はさきだつ
交野

七七風を傷み交野のとだち慕はれて忍ぶ枯葉に霰ふる也
水無瀨川
八七此里に老せぬ千代は水無瀨川堰入るゝ庭の菊の下水
須磨浦
九七須磨の蜑の馴にし袖も潮垂れぬ關吹越ゆる秋の浦風
明石浦
一〇八明石がたいざ遠近も白露の岡べの里のなみの月かげ
志加麻市
一一八君が代は誰も飾磨の市しるく年ある民の天つ空かな
松浦山
一二八たらちめやまた唐土に松浦舟今年も暮れぬ心盡しに
因幡山
一三八これもまた忘れじものを立返り稻葉の山の秋の夕暮
高砂
一四八高砂の松はつれなき尾上より己れ秋しるさを鹿の聲
野中清水
一五八玉鉾の道のなつぐさ末遠み野中の清水しばし影みむ
海橋立
一六八踏も見ぬ生野のよそに歸る雁霞む波間の松と傳へむ
宇治川
一七八網代木や波の霧間に袖さえて八十氏人は今か訪らむ
大井川
一八八大井川まれの行幸に年へぬる紅葉の舟路跡は有けり
鳥羽
一九八諸人も千代の御影に宿占てとはに逢ひ見む松の秋風
伏見里
二〇八伏見山つまとふ鹿の涙をやかりほの庵の秋の上の露
泉川
二一泉川かは波清くさす棹のうたかた夏を己れけちつゝ
小鹽山
二二春にあふ小鹽の小松數々にまさる緑のすゑぞ久しき
會坂關
二三今はとて驚さそふ花のかに逢坂山のまづかすむらむ
志賀浦
二四志賀浦や水も幾重あるたづの霜の上毛に雪は降つゝ
鈴鹿山
二五秋は來て露は紛ふと鈴鹿山ふる紅葉ばに袖ぞ移ろふ
二見浦
二六增鏡ふたみの浦にみがゝれて神風きよき夏の夜の月
大淀浦

一〇三七　一〇三七

七七大淀の浦に刈ほすみるめだに霞に絕えて歸る雁がね
鳴海浦
八七鳴海潟ゆきのころもで吹返す浦風おもく殘る月かげ
濱名橋
九七霧はるゝ濱名の橋の絕え〴〵に顯れ渡る松のしき波
宇津山
一〇七うつの山移る計の峯の色はわきて時雨や思初めけむ
佐良之奈里
一一嵐ふく山の月かげ秋ながらよもさらしなの里の白雪
富士山
一二郭公鳴や五月もまだ知ぬ雪はふじのねいつと分らむ
淨見關
一三清見潟袖にも波の月を見て片へもまたぬ風ぞ涼しき
武藏野
一四武藏野の緑りの色も訪侘びぬ見ながら霞む春の若草
白川關
一五暮ると明くと人を心に送らさで雪にも成ぬ白川の關
阿武隈川　老媼忘却兩度詠之左道
一六思ひかね妻とふ千鳥風寒み阿武隈川の名をや尋ぬる
安達原
一七時雨ゆく安達の原の海霧にまだ染み果ぬ秋ぞ籠れる
宮城野
一八移敢へぬ花の千草に亂れつゝ風の上なる宮城野の露
安積沼
一九踏みしだく安積の沼の夏草にかつ亂れそふ惣もち摺
鹽竈浦
一一霞とも花ともいはじ春の影いづこはあれど鹽竈の浦
建曆二年十二月院より召されし廿首
冬日同詠三十首ノ應ノ製和歌
從三位行侍從臣藤原朝臣定家上
春十首
一春日山みねの朝日の春のいろに谷の鶯今やいづらし
二櫻あさの廬生の浦風はる吹けば霞を分くる波の初花
三我ぞあらぬうぐひすさそふ花の香は今も昔の春の曙
四雲路ゆく雁の羽風もにほふらむ梅さく山の有明の空
五淺緑玉ぬきみだる青柳のえだもとをゝに春雨ぞふる
六新玉の年に稀なる人までで櫻にかこつ春もすくなし
七賴むべき花の主も道たえぬ更にやとはむ春の山ざと
八三吉野や瀧津河うち春のかせ神代もきかぬ花ぞ漲る
九幾返り三月の空を恨むらむ谷には春の身を忘れつゝ

〇二色に出て移ろふ春をとまれ共えやは云べき山吹の花

戀五首

二自からみるめの浦に立つ煙風を知べの道もはかなし

三草の原露をぞ袖に宿しつる明けて影みぬ月の行方に

四泣く涙やしほの衣それながら馴すば何の色か忍ばむ

五秋の色に偕も枯なで蔦邊こぐ棚無小舟我ぞつれなき

六契置し末の原野のもと柏それとも知らじよその霜枯

雜五首

七跡たれて誓を仰ぐ神も皆身のとわりに頼みかねつゝ

八久方の雲の懸橋いつよまで獨なげきの杤てやみぬる

九思ふと空しき夢の中空に絕ともたゆなうつき玉のを

一〇日影さす少女の姿我も見き老すば今日の千代の始に

一一臥て思ひ起きてぞ祈る長閑なる萬代照せ雲の上の月

後仁和寺宮月次の花鳥の歌のあにかゝるべきことゝあるを古き歌かすのまゝにありがたくは今詠みても奉るべき由仰せられしかば

詠二花鳥一倭歌 各十二首 參議藤原

正月 柳

一二打靡き春くる風の色なれや日をへて染むる青柳の糸

二月 櫻

一三かざし折る道ゆき人の袂まで櫻ににほふ二月のそら

三月 藤

一四行春の形見とや咲く藤の花そをだに後の色の縁りに

四月 卯花

一五白妙の衣ほすてふ夏のきて垣根もたわに咲ける卯花

五月 盧橘

一六郭公なくや五月の宿がほにかならず匂ふ軒のたち花

六月 常夏

一七大かたの日かげに厭ふ水無月の空さへ惜き常夏の花

七月 女郎花

一八秋ならで誰もあひみぬ女郎花契りやおきし星合の空

八月 鹿鳴草

一九秋たけぬいかなる色と吹く風に頓て移ろふ本荒の萩

九月 薄

二〇花薄草の袂の露はさを捨てゝ暮れゆく秋のつれなさ

十月 殘菊

二一神無月霜夜の菊の匂はすば秋の形見に何をおかまし

十一月 枇杷

二二冬のびは木葉殘さぬ霜の色を葉替ぬ枝の色ぞ紛ふる

十二月 早梅

二三色埋む垣根の雪の頃ながら年のこなたに匂ふ梅が枝

鳥

正月 鶯

二四春來ては幾日もあらぬ朝戸出に鳴きわたる窓のむら竹

二月 雉

二五狩人の霞にたどる春の日を妻とふきじの聲に立らむ

三月 雲雀

二六菫咲く雲雀の床に宿かりて野を懐しみくらす春かな

四月 時鳥

二七郭公しのぶの里にさとなれきまだ卯花の五月まつ頃

五月 水鶏

二八眞木の戸をたゝく水鶏の曙に人やあやめの軒の移香

六月 鵜

二九短夜の鵜川にのぼる篝火のはやく過行く水無月の空

七月 鵲

三〇長き夜にはねを並ぶる契とて秋まちわたる鵲のはし

八月 初鴈

三一晩めつゝ秋の半も杉の戸にまつほどしるき初鴈の聲

九月 鶉

三二人めさへいとゞ深草かれぬとや冬まつ霜に鶉鳴くらん

十月 鶴

三三夕日影群たるたづはさし乍ら時雨の雲ぞ山廻りする

十一月 千鳥

三四千鳥なくかもの川瀬のよはの月一つに磨く山藍の袖

十二月 水鳥

三五ながめする池の水に降る雪の重なる年をしの毛衣

仁和寺宮五十首

民部卿藤原定家

詠二五十首和歌一

春十二首

初春

三六春の色と頼むまでやは詠めつるいふ計なる山の霞を

雪中鶯

三七松の葉は今もみゆきの故郷に春あらはるゝ鶯のこゑ

橋邊霞

三八影たえて下ゆく水もかすみけり滝名の橋の春の夕暮

行路梅

三九玉鉾のゆくてばかりを梅の花うたて匂の人慕ふらむ

春月

四〇山のはも霞のほかの花のかに此頃ふかき十六夜の月

岸柳

四一遠くときいづれの色に契るらむ花待つ頃の岸の青柳

旅春雨

四二旅衣こやもかくれぬ蘆の葉の程なき床に春雨ぞふる

遠歸雁

四三いく霞行く野の末は白雲のたなびく空に歸る雁がね

山花

四四足引の山櫻戸をまれにあけて花こそ主誰を待つらむ

關花

四五櫻花たが世の若木ふりはてゝ須磨の關屋の跡埋む覽

庭花

四六跡たえてとはれぬ庭の苔の色も忘る計に花ぞ散しく

河款冬

四七山吹の花にせかるゝ思川なみの千入は下に染めつゝ

夏七首

社卯花

四八御幣とる三輪のはふりや植置しゆふしで白くかくる卯花

里時鳥

四九郭公たれ偲ぶとか大荒木の古りにし里を今も訪らむ

早苗多

五〇植ゑくらす緑の早苗里毎に民の草葉の數も見えけり

岡時鳥

五一まだ知ぬ岡べの宿の郭公よその初音に聞きか惱まむ

夜盧橘

五二橘のはな散る里の夕月夜そらに知られぬ影や殘らむ

籬麥

五三麥の穎む籬のたわむまで夜のまの露のぬける白玉

江蛍

五四澪き歸る棚無小舟同じ江にもえて螢の知べがほなる

秋十二首

早秋

五五天の河わたせの波に風立ちてやゝほど近き鵲のはし

萩露

五六分てよも天飛鴈のおきもせじ宿からふるき萩の朝露

萩風

五七今よりの夕暮かこつ下萩をうちつけに吹く秋の初風

尋二蟲聲一

五八松蟲のなくかた遠く咲く花の色々惜き露やこぼれむ

山家月

九十月ならで誰柮山の影ばかり深き柴屋の秋をとはまし
野徑月
九一武藏野は露置く程の遠ければ月を衣にきぬ人ぞなき
船中月
〇八知ざりき秋の汐路を澤舟はいか計なる月を見るとも
曉鹿
一八長き夜にあかすや月を慕ふらむ峯ゆく鹿の有明の聲
河霧
二八飛鳥川淵瀨も知らぬ秋の霧何に深めて人へこふらむ
擣衣遠
三八秋風にさそはれきゝて擣つ衣及ばぬ里の程ぞ聞ゆる
夕紅葉
四八龍田姫雲の旗手にかけておる秋の衣はぬきも定めず
殘菊句
五八置きそめて幾代つもれる匂ともいさ白菊の夜の下露
冬七首
朝時雨
六八秋過て猶恨めしき朝ぼらけ空行く雲も打しぐれつゝ
竹霜
七八いつの世迄馴てふりぬる川竹の又下陰に霜ぞ置添ふ
池水鳥
八八鴛鳥の下のかよひも絶えぬらむ殘る波なき池の氷に
島千鳥
九八濱廂なげのかたみか友千鳥と渡り過ぐる沖の小島に
松雪
〇九下たえず梢をれふす夜な〳〵に松こそ埋め嶺の白雪
湖雪
一九鴈のうみや汀の外の草木までみるめ渚の雪の月かげ
惜二歲暮一
二九思遣れ流石に物のとばかりも恨みぬふしに積る年々
戀六首
寄レ雲戀
三九伊駒山いさむる嶺にゐる雲の浮て思の消る日もなし
寄レ露戀
四九道のべの仇なる露を置とめて行手にけたぬ戀ぞ悲き
寄レ烟戀
五九いかにせむ蜑の藻汐火絶ずたつ煙に嗣ぐ浦風もなし
寄レ草戀
六九末までと誰か契りし秋の霜むかしがたりの庭の下草

寄レ鳥戀
七九逢坂の往來に立つる鳥の音のなく〳〵惜き曉ぞうき
寄レ枕戀
八九思ひ出づる契のほども短夜の春の枕に夢はさめにき
雜六首
曉述懷
九九自ら又有明の月を見てすむともなしの憂にたへける
閑中燈
〇〇つく〳〵と明行く窓の灯のあり〳〵と計り訪人もなし
山旅
一〇分てなど我しも堪ぬ露けさぞ山路は誰も旅人ぞゆく
海旅
二〇明くる夜のゆふ付鳥に立別れ浦波とほく出づる舟人
野旅
三〇野べの露移りに鳧な狩衣秋の下葉を分くとせしまに
寄レ松祝
四〇大方の松の千年はふりぬとも人の誠は君ぞかぞへむ
權大納言家三十首
詠三十首和歌
民部卿
早春霞
五〇立初めて今日や幾日の朝ぼらけ霞もなれぬ春のさ衣
澤春草
六〇いつの日か色には出む夜の鶴なくや澤べの雪の下草
曉梅
七〇まきの戸の夜わたる梅の移香もあかぬ別の有明の影
花滿レ山
八〇花盛空にしられぬ白雲はたなびき殘す山のはもなし
江上暮春
九〇堀江こぐ霞の小舟行きなやみ同じ春をも暮ふ頃かな
溪卯花
一〇歸るさの夕は北に吹く風の波たてそふる岸の卯の花
野郭公
一一宮城野の木の下露に時鳥ぬれてや來つる涙かるとて
雨後鵜川
一二鵜飼舟むらさめ過ぐる篝火にくもまの星の影ぞ爭ふ
月前荻
一三荻の葉も心盡しの聲たてつ秋はきにける月の知べに
夕蟲
一四つれ〳〵と秋の日逈る黃昏にとふ人わかぬ松蟲の聲

海邊鹿
一五秋の鹿の我身こす波吹風に妻を見ぬめの恨てぞなく
閑庭薄
一六招くとて草の袂のかひも有じとはれぬ里の古き籬は
名所擣衣
一七久方の桂の里のさよ衣をりはへ月のいろにうつなり
朝寒蘆
一八朝霜のいかに置きける蘆の葉の一夜の節に色變る寒
深夜千鳥
一九己なけ急ぐ關路のさよ衛鳥の空寢も聲立てぬ間に
故郷雪
二〇三吉野は稀のと絕の雲まとて昨日の雪の消る日も無
閨レ聲戀
二一云へばえに抑ふる袖も朽果ぬ玉の小琴の秋の調べに
稀戀
二二待渡る逢ふをうらやむ天の川その程しらぬ年の契に
增戀
二三色わかぬ閨の現の一言に袖の千入はいとゞ染みつゝ
怨戀
二四かけてだに又いかさまに石見潟なほ波高き秋の潮風
被レ忘戀
二五身を捨てゝ人の命を惜む共ありし契の覺えやはせむ
旅行
二六返り見るその面影は立添ひて行けば隔たる峯の白雲
旅宿
二七山陰や嵐の庵のさゝ枕ふしまち過ぎて月もとひこず
旅泊
二八澤寄せてとまるとまりの松風を知る人顏に急ぐ暮哉
山家松
二九忍ばれむ物ともなしに小倉山軒端の松ぞ馴て久しき
山家橘
三〇竹の戸の谷の芝橋改めて猶世をわたる道じたふらし
山家若
三一知られじな岩の下かげ宿深き苔の亂れて物思ふとも
寄二神祇一祝
三二春日山峯の木の間の月なれば左みぎにぞ神も護らむ
寄レ水懷レ舊
三三せく袖も返らぬ波の花の影うきを形見の春ぞ悲しき
寄レ雲述レ懷
三四なべて世の情許さぬ春の雲頼みし道は隔てはてゝき

寛喜元年十一月女御入内御屏風和歌
月次御屏風十二帖倭歌　　定家

正月
元日
五二宿ごとに都は春の始とて松にぞ君の千代いはふなる
若菜
六三飛火野はまだふる年の雪間より芽ぐむ若菜ぞ春急きける
霞
七三春のきる袂ゆたかに立つ霞めぐみ普き四方の山のは
二月
梅
八三野も山も同じ雪とは紛へども春は木毎に匂ふ梅が枝
柳
九三波のよる柳の糸の打はへて幾千代ふべき宿とかは知
網
〇四曵く網の霞を結ぶ春風に波のかざしの花ぞ咲きそふ
三月
櫻
一四山櫻はなの下紐ときしあればさながら匂ふ春の衣手
款冬
二四谷川の春も千しほの色そめてふかき彌生の山吹の花
藤
三四紫の雲のしるしの花なれば立つ日も同じ岩の藤なみ
四月
更衣
四四諸人の袖も一重に押なべて夏衣みゆれ今日來りとは
葵
五四久方の鬢にかくる葵草そらのひかりに幾代なるらむ
早苗
六四小山田の宰の早わさ取敢ずそよや稻葉の頃やまつ覽
五月
菖蒲
七四いつかとぞ待し沼江の菖蒲草けふ社長き例にはひけ
時鳥
八四郭公おのが常盤の森の影同じ五月のころもかはらず
床夏
九四咲きまさるいや初花の日をへつゝ籬に餘る大和撫子
六月
山井
〇五尋ねても夏に知られぬ栖かな森の下風山の井のみづ
納涼
一五風渡る濱松が枝の手向草靡くにつけて夏や過ぎぬる
六月祓
二五夏衣おりはへてほす川波を御禊に添る瀨々のゆふしで
七月
秋風
三五沖つなみ朝氣すゞしき秋風も秋の千歳ぞ空に聞ゆる
野花
四五もろ人の心いるらし埒弓ひくまの野べの秋萩のはな
蟲
五五山里のこや松蟲の聲までも草村ごとに千代祈るなり
八月
鹿
六五草も木も色の千草におりかくる野山の錦鹿ぞ立ける
月
七五理の光さしそへよはの月あきらけき世のあきの半に
初雁
八五秋霧の立つやと待ちし越路より今日は都の初鴈の聲
九月
菊
九五老をせく菊の下水手に掬ぶ此里人ぞ千代も住むべき
田家
〇六民の戸の天つ空なる秋の日にほすやたしれの數も限ず
紅葉
一六立田姫てぞめの露の紅に神代もきかぬ峰のいろかな
十月
水鳥
二六池にすむ鴛の毛衣夜を重ねあかすみなるゝ水の白波
千鳥
三六淡路潟ゆきゝの舟の友がほに通ひなれたる浦千鳥哉
網代
四六網代木や波のよる〳〵照る月に積る木葉の數も隱す
十一月
鶴
五六浦に住たづの上にと置霜は千代ふる色ぞ兼て見ける
鷹狩
六六いはせ野や鳥踏たてゝ箏鷹の楯もゆらに雪は降つゝ
炭竈
七六國とめる民の煙のほど見えて雲間の山にかすむ炭竈
十二月
氷
八六鴛の海や氷をてらす冬の月波にますみの鏡をぞしく
雪
九六三吉野の深雪降しく里からは時しも分かぬ有明の空
歲暮
〇七足引の山路に深き柴の戸も春のとなりは猶や忘れぬ

泥繪御屏風
石清水臨時祭
一七散りもせじ衣にすれるさゝ竹の大宮人のかざす櫻は
重陽宴
二七九重のとのへも匂ふ菊のえに言ばの露も光そへつゝ

拾遺愚草下

春

建久五年夏左大將家歌合　春二首之中、志賀浦
三七氷とく春のはつ風たちぬらし霞にかへる志賀の浦波
建仁元年正月七日院に年始の歌講せられ侍りし日、初春祝
四七春毎の鴫の羽色の駒なれど今日をぞ引む千代の例に
松間鶯
五七松の葉も春はわけとや夕附日さすや岡べに來居る鶯
朝若菜
六七霞たちこのめ春雨昨日迄ふる野の若菜けさは摘む覽
承久元年七月內裏の歌合十首之內、野徑霞
七七春日野のかすみの衣山風に惹もぢずり亂れてぞ行く
正治二年九月院の初度の歌合に若草十首の內
八七うち靡き春のみ空も緑にて風に知らるゝ野邊の水草
雪間若菜といふことを
九七いつしかと飛火の若菜打群て摘む共未雪もけなくに
老後閑居つれ〳〵のあまりとぶらひきたる人々の歌よみ侍りしに、初春鶯
〇八新玉の年のはつこゑうちはぶき朝げの空に來居る鶯
霞中梅
一八ひとしかし立枝は梅の見えずとも匂を籠て立霞かは
湖邊梅花

二八今日ぞとふ志賀津の海士の住里を鶯誘ふ花の知べに
　旅宿早春
二九枕とて草のはつかに結べども夢も短き春のうたゝ寝
　三宮より十五首の歌めされし春の歌の中に
三〇飛鳥川とほき梅が枝にほふ夜は徒にやは春風の吹く
　建保四年潤六月内裏の歌合に春の歌十首の中
三一知る知らず分きては待ず梅花匂ふ春べの可惜夜の月
　土御門内大臣の家の歌合侍者ノ臨幸春歌題六首之
　中、梅香留レ袖
三二梅の花ありとや袖の匂ひゆる宿にとまるは鶯のこゑ
　翠柳誰家
三三打靡き春の宿りや是ならむ外面の柳ぬしは知らねど
　内裏歌合に、水邊柳
三四春の日に岸の青柳うちなびき長き世ちぎる瀬の白糸
　同題家會
三五染めかくるはなだの原の玉柳下行く水も光そへつゝ
　江上霞人丸歌仙会
三六春霞かすめる空のなには江に心ある人や心見ゆらむ
　建保二年二月内裏の詩歌合、野外霞
三七立ちなれし飛火の野守おのれさへ霞にたどる春の曙
三八松の雪消えぬや孰こ春の色に都の野べは霞み行く頃
　建仁元年三月盡日歌合、霞隔二遠樹一
三九滿つ潮に隠れぬ磯の松の葉も見らく少く霞む春かな
　驛中見レ花
四〇かり衣たちうき花のかげに來て行末くらす春の旅人
　内裏の詩歌合、山居春曙二首中
四一外山とてよそにも見えし春のきる衣片敷ねての朝げは
　内裏歌合、夜歸雁
四二つれもなく霞める月の深き夜に數さへ見えず歸る雁音
　海邊歸雁
四三里の海士の鹽焼衣立別れなれしも知らぬ春の雁がね
　賀茂社の歌合御幸日曉歸雁
四四花の香も霞みて暮ふ有明をつれなく見えて歸る雁音
　暮山花
四五誰が春の雲の詠に暮れぬらむ霞かる花の峯の木の本
　攝政殿にて歌を詩にあはせらるべしとて同じ題
　を二首よませられし（建歌合ニこの句の初花添ニ山氣色一）
○○春の花くもの匂に泊瀬山かはらぬ色ぞ空にうつろふ
一玉すだれ同じ緑もたをやめの染むる衣にかをる春風
　正治二年三月左大臣家の歌合、曉霞
二初瀬山かたぶく月もほの〴〵と霞にもるゝ鐘の音哉
　朝花
三世のつねの雲とは見えず山櫻今朝や昔の夢の面かげ
　建保三年五月歌合御製所春山朝
四このねぬる朝げの山の春風は霞を分て花の香ぞする
　建仁二年三月三躰どかや仰せられて召れし春歌
五花ざかり霞の衣ほころびて峯しろたへの天のかぐ山
　秀能が人々に詠ませ侍りし五首の中、花歌
六大方のまがはぬ雲もかをるらむ櫻の山の春の明ぼの
　三宮十五首の中
七百千鳥なくや二月つ〳〵どこのめ春雨降暮しつゝ
八三吉野は春の匂に埋もれて霞のひまも花ぞふりしく
　建久五年夏左大將の家の歌合、泊瀬山
九鐘の音も花のかをりになりはてぬを泊瀬山の春の曙
　同じ六年二月同し家の五首、春の歌
一〇山の端はかすみはてたる東雲の移ろふ花に殘る月影
　花のさかりに大宮大納言のもとより
一一數ならぬ宿に櫻の折々はとへかし人の春のかたみに
　返し
一二大方の春に知られぬ習ゆゑ賴む櫻も折りや過ぐさむ
　殷富門院皇后宮と申し時參りて侍りしに權亮
　大輔などさぶらひて夕花といふことを詠みしに
一三爪木こり歸る山路の櫻花あたら句を行く手にや見る
　建久七年三月關白殿宇治にて山花留レ客といふ
　ことを當座
一四春きての花のあるじにとひ馴て古郷うとき袖の移香
一五尋ぬとて雙ぶる舟の衣手に花も更にや春を知るらむ
一六春をへて御幸になるゝ花の影舊行身をも哀とや思ふ
　建保五年四月十四日院にて庚申五首、春夜
一七山のはの月まつ空の句ふより花にそむくる春の燈火
　建保元年内裏の詩歌合、山中花夕
一八しぐれせし色はにはねず唐錦たつたの峯の春の夕風
一九櫻狩かすみの下に今日くれぬ一夜やどかせ春の山人
　建保二年内裏の詩歌合、河上花
二〇花の色のをられぬ水にさす棹の雫も匂ふ宇治の河長
二一名取川春の日數はあらはれて花にぞ沈む瀬々の埋木
　内裏の歌合、朝落花
二二庭もせに移ろふ頃の櫻ばな朝わびしき數ますりつゝ
　同じ詩歌合、山居春曙二首之中
二三名もしるし嶺の嵐も雪とふる山櫻戸にあけぼのゝ空
　建保四年潤六月内裏の歌合、春十首之内
二四散る花は雪とのみこそふる里を心の儘に風ぞ涼しき
　正治二年九月十首の歌合、落花
二五我が來つる跡だに見えず櫻花散のまがひの春の山風
　院に詩歌合とて召されし元久二年六月水郷春望
二六宮木もり渚の霞になびきて昔もとほき志賀の花ぞの
二七網代木に櫻こきまぜ行春のいざよふ波をえやは留むる
　承久元年七月内裏の歌合、深山花
二八山人もすまでいくよの石のとこ霞に花は猶匂ひつゝ
　暮春雨
二九鶯の歸る古巣やたどるらむ雲にあまねき春雨のそら
　左大臣殿より八重櫻たまふとて承元三年三月
三〇徒に見る人もなき八重櫻宿から春やよそに過ぎなむ
　御かへし
三一八重櫻やどの盛の近ければ此の春の日ぞ光そふらむ
　同三月八日内より忍びて召されし三首の中野花
三二斯しつゝ散すば千代も櫻咲野べの幾日に春の過らむ
　海霞
三三浦に立つ藻汐の煙暮ふらし霧みすてたる春の行手を
　河上花
三四みなの川峯より落つる櫻花匂の淵をえやはせかるゝ
　老後仁和寺宮忍びて仰せられし五首、野外花
三五吹紛ふ櫻色こき春風に野なる草木のわかれやはする
　庭上花
三六月草の色ならなくに移し植ゑてあだに移ろふ花櫻哉
　閑中花
三七我身世にふるともなしに詠して幾春風に花の散らむ
　權大納言家の五首の中、關路花百首三年
三八山櫻はなの關もる逢坂は行くも歸るも別れかねつゝ
　土御門内大臣の家の歌合、水邊鶯閨寄大春
三九龍田川岩根のつゝじかげ見えてなほ水くゝる春の紅
　故郷款冬

○山吹の答へぬ色に露おちて里の昔はとふかひもなし
雨中藤花
一強て猶袖ぬらせとや藤の花春は幾日の雨に咲くらむ
山家暮春
二散る花に谷の柴橋跡たえて今より春をおきや渡らむ
三位中將公衡卿の家にて、旅宿三月盡
三庵さす端山が峰の夕霞たえてつれなく過ぐる春かな
夏
春後思レ花
四忘られぬ彌生の空を慕ふとて青葉に匂ふ花の香も無
郭公初聲
五待つほどや流石にしるき時鳥ことし忘れぬ雲の遠方
土御門内大臣宰相中將に侍りし時五首の歌よませられ侍りし中に、卯花
六夕月夜いりぬる影もとまりけり卯花さける白川の關
承元二年祭使神館にとまりたる朝に贈り侍りし
七思ひやる假寢の野邊の葵草君を心にかくる今日かな
かへし　使少將忠明朝臣
八葵草假ねの野邊の哀をもたれ言の葉に顯て問はまし
建保三年五月和歌所の歌合、夕早苗
九新玉の年有る御代の秋顯て取や早苗に今日も暮つゝ
建久六年二月左大將の家の五首、夏
一〇荒れはてゝも人は惜まぬ故郷の夕風慕ふ軒のたちばな
建久六年民部卿經房卿の家の歌合に、初郭公
一一變らすも待出でつるかな郭公月に仄めく去年の古聲
三宮より十五首の歌めされし夏の歌
一二とへかしな霞も霧もたなびかぬあやめの曙の空
一三時過ぎず語らひ盡せ郭公たが五月雨の空おぼれせで
院の北面にて講ぜられし二首、菖蒲
一四手馴れつゝ涼む岩井の菖蒲草今日は枕に又や結ばむ
郭公
一五待ちあかすさ夜の中山なか〳〵に一聲つらき郭公哉
建仁元年三月盡日の歌合、雨後時鳥
一六五月雨の名殘の月もほの〴〵と里馴れやらぬ郭公哉
正治二年二月左大臣の家の歌合、夕時鳥
一七郭公黄昏時の雲間よりわれ名のりてぞ宿いとふなる
五月雨朝
一八玉水の軒もしづくの菖蒲草さみだれ乍ら明る朝日そ
庭夏草
一九揚卷の跡だに絶ゆる庭もせにおのれ結べと茂る夏草
建仁二年三月六首めされし、夏の歌
二〇五月雨のふるの神杉過ぎがてに木高く名のる郭公哉
承元二年祭使神館にとまりたる朝に贈り侍りし
二一誰が爲に濡れつゝ強て郭公ふるとも雨の山路分く覽
秀能の五首の歌の中、郭公
二二戀すとや汝も伊吹の郭公顯はにもゆと見ゆる山路に
建保四年潤六月內裏の歌合、十首之中、夏
二三郭公たが東雲を音に立てゝ山の雫にはねしぼるらむ
承久元年七月內裏の歌合、曉郭公
二四郭公いづるあるじの山蔦いざや里人かけて待つらし
水邊草
二五假寢せし玉江の蘆にみがくれて秋の隣の風の涼しき
建保五年四月十四日庚申の五首、夏曉
二六鳴ぬ也木綿附鳥の枝垂尾の己にも似ぬよはの短かさ
建保二年六月和歌所にて當座に、田家夏月
二七門田吹穗向の風のよる〳〵は月ぞ稻葉の秋を借ける
水風晚涼
二八下くゝる水より通ふ風の音に秋にもあらぬ秋の夕暮
建久五年の夏左大將の家の歌合、立田川夏
二九夕暮は山風すゞしたつた川みどりの影をくゞる白波
名所夏月
三〇影清き菜摘の川と秋かけてしらゆふ花を照す夜の月
山納涼
三一夏の日のさすも知ぬ三笠山松のみ影ぞます影もなき
櫓大納言の家、海上蚤
三二滿つ潮に入りぬる磯をゆく蚤己が思は隱れざりけり
建仁二年六月みなせ殿の釣殿に出でさせ給ふとて六首の題をたまはりて御製にあはせられ侍りしなかに、川上夏月
三三高瀨舟くだす横川の水馴棹とり敢ず明るころの月影
海邊見レ蚤
三四須磨の浦藻汐の烟とぶ蚤假寢の夢路わぶとつげこせ
山家松風
三五松影や外山をこむる垣根より夏のこなたに通ふ秋風
建仁元年三月盡日の歌合、松下晚涼
三六この暮をなつとは誰か岩井くむ松かげ拂ふ山嵐の風
攝政殿の詩歌合、水邊涼レ自レ秋
三七雪とのみ落る白泡に夏きえて秋をも越ゆる瀧の岩波
三八夏衣秋だにたゝぬ神無月井せきの波のいそぐ時雨に
建保四年潤六月內裏歌合、夏
三九夏はつる御祓に近き川かげに岩波高くかゝる白木綿
秋
松尾の歌合に、初秋風　題三字
〇四〇あら玉の今年もなかばいたづらに涙數そふ荻の上風
建久五年夏左大將の家の歌合、秋宮城野
一一秋きぬる荻吹風のそよ更に暫しもためぬ宮城野の原
阪磨關
二二世やはうき秋やは過る須磨の關浦風こゆる袖の白波
建保三年七夕內裏の七首
二三天の河水かげ草の打靡き玉のかつらも露こぼるらむ
二四天の河古きわたりも移ろひて月の桂ぞ色に出でゆく
二五天の河かはらの波の秋風に雲の衣をたつやとぞまつ
二六天の河手玉もゆらに織る機の永き契はいつか絶せむ
二七天の河紅葉のはしの色に見よ秋たつ袖の暮を待つ程
二八天の河あれにし床を今日ばかり打拂ふ袖の哀れ幾年
二九天のがは明くる岩とも情知れ秋の七日の年の一夜を
建久六年二月左大將の家の五首、秋
〇三〇秋といへど木葉もしらぬ初風に我のみ腋き袖の白玉
閑中草花
三一跡絶て風だに訪ぬ萩のえに身を知露は消る日も無し
元久元年七月宇治御幸、山風
三二かへり見る裾野の草は片よりに限なき秋の山嵐の風
正治二年九月院の初夏の歌合、山嵐
三三秋の嵐一葉も惜め御室山ゆるす時雨の染め盡すまで
建保元年內裏の詩歌合、野外秋望
三四村雨の玉ぬきとめぬ秋風にいく野か磨く萩の上の露
三五詠めつゝ草の袂は移ろひぬかりの涙もをちのしの原
同じ四年潤八月內裏の歌合、秋
三六等閑の小野の淺茅に置く露も草葉にあまる秋の夕暮
承久元年內裏の歌合、秋夕露
三七夕ぐれの草の庵の秋の袖ならはぬ人や袭れても見む
建永元年七月和歌所の歌合、朝草花
三八朝な〳〵下葉催す萩のえにかりの涙ぞ色に出でゆく
海邊月

九藻汐くむ袖の月影自からよそにあかさぬ須磨の浦人
建久八年秋の歌あまた詠みける中に
〇〇眺めつゝ思ひしとの數々にむなしき空の秋のよの月
秀能が詠ませ侍りし月の歌
一〇秋といへば月のたゞいちを吹く風の雲嫉捨の久方の山
攝政殿の詩歌合、月明風又冷
二〇雲たえて後さへ月を吹く嵐こぬよ恨むる床な拂ひそ
三〇狹筵に初霜さそひ吹く風を色にさえゆくねやの月影
正治二年九月院に初度の歌合、浦月
四淡路島月の影もてゆふ樓かけてかざせる須磨の浦波
建仁元年八月十五夜の歌合、月多秋友
五〇千代ふべき玉の砌の秋の月かはす光の末ぞひさしき
月前松風
六夕より雲はまよはぬ月かげに松をぞはらふ峯の木枯
月前擣衣
七〇秋風に夜寒の衣うちわびぬ更けゆく月のをちの山本
海邊秋月
八〇月にふす伊勢の濱荻今宵もや荒き磯邊の秋を忍ばむ
湖上月明
九〇さゝ波やちりも曇らすみがゝれて鏡の山を出る月影
古寺殘月
一〇初瀨山ゆづきが下に照る月の明るも知らぬ有明の影
深山曉月
一一鳥の音も聞えぬ山の山人は傾く月をあけぬとや知る
野月露深
一二起明す野邊の假庵の袖の露おのが栖と月ぞさえゆく
田家見レ月
一三さを鹿の妻とふを田に霜おきて月影寒し岡のべの宿
河月似レ氷
一四澄渡る月影きよみ水無瀨川むすばぬ水を氷とぞ見る
建保三年八月十五夜內裏、月前竹風
一五月きよみ玉の砌の呉竹に千代をならせる秋風ぞ吹く
月前擣衣
一六月にうつ民の衣も宿ごとに國榮えたる御代ぞ聞ゆる
月前眺望
一七際もなき田面計にしく雲のちりも紛はぬ秋の夜の月
建永元年七月十三日和歌所の當座、湖邊月
一八さゝ波や鴈の浦かせ夢たえて夜わたる月に秋の舟人
元久元年七月宇治の御幸、水月
一九鴈の海や曇ひて凍る秋の月みがく波間をくだす柴舟
正治二年左大臣の家の歌合、山月
二〇待つとは心の秋に絕ぬれど猶山のはに月は出でけり
建暦三年後の九月內裏の歌合、深山月
二一白柏の露おく山も道しあれば枝にも葉にも月ぞ伴ふ
建久七年九月十三夜內大臣の家、未レ出月
二二秋の空月ぞ今宵とはらふなり光さきだつ峯の松かせ
初昇月
二三さし昇る三笠の山の峯からに又類なくさやかなる月
停午月
二四秋の月なかばの空のなかばにて光の上に光添ひけり
漸傾月
二五物ごとに秋の哀は數そひて空ゆく月の西にすくなき
入後月
二六月はさぞ雪だに殘る頃ならばそれとも見まし嶺の曙
內裏にて、禁庭月
二七忘れずよ御階の霜の長き夜に馴し乍らの雲の上の月
建久二年法皇栖霞寺におはしましゝ時駒牽のひきわけの使に參るとて
二八嵯峨の山千代の古道あとたえて又露わくる望月の駒
九月十三夜內裏にて、山路月
二九山風は月のさ衣拂へどもおもらぬ雪は木葉こそふれ
三〇玉鉾の道もさりあへぬ春の花それかと紛ふ山の月影
建保二年九月十三夜內裏、月前風
三一菅の根や長月の夜のつきかげを遙に渡る野邊の秋風
建保六年八月十三日內裏中殿宴
秋夜侍レ宴同詠二池月久明一應レ製和歌
參議正三位行民部卿兼伊勢權守臣藤原朝臣定家上
三二幾千代ぞ袖ふる山の瑞垣も及ばぬ池にすめる月かげ
神主重保賀茂の社の歌合とて詠ませ侍りしに月
元暦元年九月　侍　從
三三しのべとや知らぬ昔の秋をへて同じ形見に殘る月影
霧
三四晴曇り山の岩根に立つ霧をなづる衣の袖かとぞ見る
野宿月、權大納言の家眞座
三五夕露の庵は月をあるじにて宿りおくるゝ野邊の旅人
建久五年八月十五夜左大將の家、見レ月思レ旅
三六待程を語らぬ月に卿つ共知らでやぬらむ荒き濱べに
對レ月問レ昔
三七忘すや始も知らぬよはたゞの月歸らぬ秋の數はふりつゝ
月契二深月一
三八月も又しか習ふ迄馴れよとや數添ふ秋の空を賴めて
元久元年五辻殿に御わたりの後始めて講せらる
序　通具卿　讀師　太政大臣　應レ製　臣上
松間月
三九木間より月も千年の色に出でゝ君が代契る庭の若松
野邊月
四〇三吉野は雪ふる峯の近ければ秋よりうづむ月の下草
田家月
四一眺めつゝ問れず久に秋の田のほの上照す月の幾夜を
羈旅月
四二草枕みやこを遠みいたづらにゆきゝの月の宿る白露
名所月
四三里わかず唐土までの月はあれど秋の半の鹽竈のうら
同夜當座
八月十五夜詠二翫レ月一應レ製和歌
正四位下行左近衛權中將兼讃岐介臣藤原朝臣定家上
四四萬代は今宵ぞはじめ宿の月半の秋の名はふりぬとも
建仁元年三月盡の歌合、湖上秋霧
四五さゝ波やにほの湖の明方に霧がくれゆく沖のつり舟
建保四年潤六月內裏の歌合、秋
四六をじか鳴くは山の影の深ければ風待つまの月ぞ少き
建暦三年後の九月內裏の歌合、寒野蟲
四七行秋の裾野の木の葉朝な〳〵そむれば弱る蟲の聲々
建保三年五月和歌所の歌合、行路秋
四八打渡す遠方のべの白露に四方の草木の色かはるころ
建永元年七月十三日和歌の當座、行路風
四九玉鉾や行手の野べの淺茅まで移ろふ袖の秋のはつ風
正治二年二月左大臣の家の歌合
五〇唐衣すそ野のまくず吹返しうらみて過ぐる秋の夕風
文久元年七月宇治の御幸、野露
五一山城のくせの原野のしの薄玉ぬきあへぬ風のしら露
建仁二年三月の六首、秋の歌
五二霜迷ふ小田の假庵のさ筵に月とも分ずいねがての空

建暦三年九月十三夜内裏の歌合、江上月

三三難波江に咲くやこの花白妙に秋なき波をてらす月影

暮山松

三四秋はいぬ夕日隠れの峯の松四方の木葉の後も逢見む

元久二年夏院の詩歌合、山路秋行

三五都にもいまや衣をうつのやま夕霜はらふ蔦のした道

三六夕附日木の間のかげも初雁のなくや雲居の峯の懸橋

建仁三年和歌所の歌合、海邊雁

三七行雁の誰が秋風とうれぶらむ波も防がぬ磯の苫屋に

三宮より十五首の歌めされし秋の歌

三八飛雁の涙も最どそばち鳧笹分けし野べの萩の上の露

三九久方の月のかつらの下紅葉宿かる袖ぞ色にいでゆく

〇六涙のみ木葉時雨と降果てゝ憂身を秋の云かひもなし

建久六年秋の頃大將殿にて末の句十を書き出して詠むべき由侍りしに當座

一〇妻るべき四方の草木も押なべて今日よりつらき嵐の上風

二〇取ればけぬ分くれば凉る枝乍らよし宮城野の萩の下露

二一こし方はみな面影に浮びきぬ行末てらす秋の夜の月

二二いさ越えじ思へば遠き故郷をかさなる山の秋の夕霧

二三更けまさる人の松風暗きよに山影つらきさを鹿の聲

二四風なびく薄のすゑは露ふかし此頃こそは初雁のこゑ

二五昔かな哀いく代ときてとへば宿もる風に鶉鳴くなり

二六河風によわたる月の寒ければ八十氏人も衣掻つなり

二七三十餘みしをばなきと數へつゝ秋のみ同じ夕暮の空

〇八獨寢のさならぬ床も袖ぬれぬ別れなれたる曉のそら

同じ頃左大將殿にて五首の歌、秋色

二九染めてけり月の桂の末葉まで移ろふ頃の野邊の秋風

秋聲

三〇さえ渡る霜にむかひて擣つ衣幾年秋の聲をつぐらむ

秋香

三一形見かな暮行く秋を恨みつゝ今日つむ袖に匂ふ白菊

秋情

三二雨露に木の葉を何の哀とてなき心地する心わくらむ

秋戀

三三夏かりける山鳥の尾の獨寢よ秋や契し長き夜にとも

同じ七年の秋内大臣殿にて文字をかみに置きて廿首の歌の中に秋十

三四を篠原程なき末の露落ちて一夜ばかりに秋風ぞ吹く

三五嵐に吹く風に答ふる下もみぢ一葉の音に秋ぞ聞ゆる

三六鳴く蟬も秋の響きの聲たてゝ色にみ山の宿の紅葉ば

三七隔てゆく霧も日數も深ければ忘れやしぬる遠き都も

三八數妙の袂忘れて見る月の數ふばかりの夜な〳〵の影

三九ふりに見年々なれし月を見て思ひし事の更に悲しき

四〇散ぬれば戀しき物を秋萩の今日の盛をとはゞ問かし

四一早瀬川みなわ逆巻き行く波のとまらぬ秋を何惜むらむ

四二雁がねの雲行く羽に置霜の寒き夜頃に時雨さへ降る

四三松島のあまの衣手秋暮ていつかはほさむ露も時雨も

内裏の秋十五首の歌合、秋風

四四治まれる民の草ばを見せがほに靡く田面の秋の初風

秋露

四五袖濡す信夫もぢずり誰が爲に亂れて脆き宮城野の露

秋月

四六いつはとは分かぬ常磐の山人も空に驚く月の影かな

秋雨

四七花ぞめの衣の色もさだまらず野分になびく秋の村雨

秋花

四八旅衣ひもとく花のいろ〳〵に遠里小野のあたら朝霧

秋雁

四九此の頃の雁の涙のはつしほに色わきそむる峰の松風

秋虫

五〇あるじから思ひ絶えにし蓬生に昔もよほす松蟲の聲

秋鹿

五一朝な〳〵木の葉移ろひ鳴く鹿の理しるき秋の山かげ

秋水

五二秋風のかげ吹拂ふ谷の戸に思ふもきよくすめる山水

秋霜

五三秋の色に殘る形見の霜をだにけかし草葉其も止らず

秋戀

五四山水に老せぬ千代をせきとめて己れ移ろふ白菊の花

秋旅

五五故郷はとほ山どりの尾上より霜おく鐘の長き夜の空

秋戀

五六下咽ぶ藻汐の烟こがるとて秋やは見ゆる人は恨めし

秋思

五七老が世はあはれ裾野の草がれに夜の思のながき月の空

秋雜

〇八渡つ海や秋なきはなの波風も身にしむ頃の吹上の濱

仁和寺宮より忍びてめされし秋の題十首

承久二年八月、秋雨

一〇秋の色身をしる雨の行〳〵雲に伊駒の山も面變りして

秋花

二〇この暮の秋風すゞし唐衣ひもとく花に露こぼれつゝ

秋田

三〇眺め敢ぬ想向の風の片よりに田面吹越す嶺の紅葉ば

秋霜

四〇世やはうき霜より霜に結ばゝ老曾の社の元の朽葉は

秋祝

五〇露時雨もるに雜面き秋山の松社君の御代はみえける

秋戀

六〇初雁の遠ちもよほす秋風に馴れてま近き中ぞ枯行く

秋夢

七〇風騒ぐ萩の葉よくと浮て見し夢の直路ぞいや儚なくる

秋旅

八〇波かくるそでしの浦の秋の月宿かる僅に先や被らむ

秋恨

九〇心もてよゝの昔やならひけむ秋風急ぐ岡のくずはに

秋雜

一〇知られじな泣々明す長き夜も澤邊のたづの秋の心は

内裏の秋十首

一一夏はてゝぬるや川邊の東雲に袖吹きかふる秋の初風

一二おのづから幾代の人の詠むらむ天の川原の星合の空

一三忘れじな秋の白露しきたへのかり庵の床に殘る月影

一四宿れ共濡さぬ袖の我からに馴れて久しき秋の夜の月

一五聲立てゝ誰松風の己れのみたゆまぬ月に衣うつらむ

一六待たれつる月も遙に鳴く鶴の聲あげ難き長き夜の霜

一七幾返り梅をば菊に眺めつゝ霜より霜の袖しぼるらむ

一八身を隔て年の幾年なげきして思ひとぢめし秋の涙ぞ

一九立田山ゆふ付鳥のなく聲にあらぬ時雨の色ぞ聞ゆる

二〇山姫の形見に染る紅葉を袖にこき入るゝ四方の秋風

建保二年みなせ殿にて講せられし秋の十首の歌

應製　臣上

二一藻汐くむ蜑の苫屋の知べかは恨みてだ吹く秋の初風

二二淺茅生の小野の笹原うちなびき遠方人に秋風ぞ吹く

二三大方の秋置露や玉はなす身ながら朽し袖はほしてき

二四幾秋をたへて命のながらへて涙曇らぬ月にあふらむ

五宮城野は本荒の萩の繁ければ玉ぬき止ぬ秋風ぞ吹て
六夕附日むかひの山の薄紅葉まだき久しき秋の色かな
七高砂のほかにも秋はある物を我が夕暮と鹿はなく也
八川波のくゝるも見えぬ紅をいかに散れとか峯の木枯
九たまきはる我身時雨とふり行ば最と月日も惜き秋哉
〇霧のたて山の錦を織りはへて鳴音も弱る野邊の松虫
　承久元年七月内裏の歌合、聞擣衣
一情なく吹く秋風ぞ敷ふらむ來ぬ夜の床に衣うてとは
　庭紅葉
二守山も木の下迄ぞしぐるなる我が袖殘せ軒の紅葉ば
　聞二擣衣一といふことを人々詠み侍りしに
三萩の葉のつけふるしてふ秋風を又しも更に衣うつ也
　依レ月思レ秋
四徒に積れば人の長き夜も月みてあかす秋ぞすくなき
　承久元年九月日吉の歌合とて内よりの仰せごと
　深夜秋月
五大方の嵐も雲もすみはてゝ空のなかなる秋の夜の月
　遠山曉霧
六仄かなる鐘の響に霧こめて其方の山は明けぬ共見ず
　暮天聞レ雁
七雁音の鳴きてもいはむ方ぞなき昔のつらの今の夕暮
　紅葉添レ雨
八降りまさる涙も雨もそぼちつゝ袖の色なる秋の山哉
　建保五年四月十四日庚申の五首、秋朝
九小倉山時雨る頃の朝な〳〵昨日は薄き四方の紅葉ば
　承元三年九月新羅社歌合とて人の詠せ侍し紅葉
〇露霜のしたてる錦龍田姫わかるゝ袖も移るばかりに
　内裏にて朝見二紅葉一
一もみぢ葉の猶色増る朝日山よのまの霜の心をぞ知る
　建保二年九月十三夜内裏、暮山紅葉
二時雨つゝ袖ぬれきつる山人の歸る庵はあらぬ紅葉ば
　對レ菊惜レ秋
三いかにせむ菊の初霜結ばゝれ空に移ろふ秋の日數を
　紅葉見レ秋
四立田川をられぬ水の紅に流れてはやき秋のかげかな
　九月十三夜侍レ宴詠二三首一、秋山月
五笹枕み山もさやに照る月の千代もふ計り影の寂しき

　秋野月
六久方の天つ空ゆく月かげをおのれしめ野の秋の白露
　秋庭月
七雲の上を照さむ秋も知らざりき故へし庭の道の月影
　右大臣の家の六首の歌合、夜深待レ月
八夜を重ねたゆまず久に眺する山の端遠き月を戀つゝ
　故郷紅葉
九移ろひし昔の花の都とて殘るにしきの色ぞしぐるゝ
　河邊擣衣
〇こはた川こは誰が爲の唐衣ころも久しき槌の音かな
　元暦元年宰相中將兼通朝臣五首之内、擣衣
一呼え増る擣きを添てうつ衣重なる夜はに秋や暮るらむ

　冬

　正治二年每月歌めされし時、初冬
二此頃の冬の日數の春ならば谷の雪げにうぐひすの聲
　時雨
三山廻り時雨や遠に移るらむ雲間待ちあへぬ袖の月影
　承元四年十月家長朝臣日吉社にて講ずべき由申
　しゝ歌、故郷時雨
四叢雲や風に任せて飛ぶ鳥の飛鳥の里は打しぐれつゝ
　時雨知レ時　私家
五偽のなき世也けり神無月たが誠よりしぐれ初めけむ
　寒草幾殘
六吹く風の宿す木の葉の下ばかり霜置果てぬ庭の冬草
　建保二年の内裏の三首、時雨
七山の井の雫も影も染果てゝ明かすは何の猶しぐるらむ
　水鳥
八池にすむ有明の月の明る夜を己が名著く浮寢にぞ鳴く
　寒草
九霜か雪か尾花に交り咲く花の殘りし色も昔ばかりに
　正治二年十月一日院の御會當座、枯野朝
〇朝霜の色にへだつる思草消えずばうとし武藏野の原
　建仁元年三月盡日の歌合、嵐吹二寒草一
一淺茅生やのこる葉末の冬の霜おき所なく吹く嵐かな
　建保四年潤六月の内裏の歌合、冬の歌
二好さらば形見も霜に朽果てね今はあだなる秋の白菊
　三宮の十五首、冬の歌
三神無月暮易き日の色なれば霜の下葉に風もたまらず

四信樂の外山の霰ふりすさび荒れ行く頃の雲の色かな
　正治元年十一月七日二條殿新宮歌合、紅葉殘レ梢
五冬も深くしぐれし色を惜みもて初雪まれぬ嶺の一村
　寒夜埋火
六埋み火の消えぬ光を賴めどもなほ霜さゆる床のさ筵
　文治三年冬侍從公仲よませ侍りし冬の十首
七故郷のしのぶの露も霜深く眺めし軒に冬はきにけり
八宿からぞ都のうちも寂しさは人めかれにし庭の月影
九霜がるゝ峯が柚のかれまより雪げに似たる冬の若草
〇雲かゝる峯より遠の時雨ゆゑ麓のさとをくらす木枯
一かこたじよ冬の深山の夕暮はさぞな嵐の聲ならす共
二苦深き岩やの床の村時雨よそに聞かばや有て憂世を
三浦風の吹上の松のうれ越て天ぎる雪を波かとぞみる
四永らへむ命も知らぬ冬の夜の雪と月とをわが獨見る
五空閉て又この暮のいかならむ日頃の雪に跡は絶にき
六又暮れぬすぐれば夢の心ちして哀はかなく積る年哉
　つかさ離れて後つく〴〵と籠り居たるに霜月丑
　の日と聞きし夜になりて大き大臣のふみ給へる
七月のゆく雲の通路かはれども少女の姿忘れしもせず
　昔のこと書きくづし思ひ出づる折節いとゞあは
　れまさりて
八少女子の忘れぬ姿世々舊て我が見し空の月ぞ遙けき
　建久六年二月左大將の家の五首、冬
九霜の上の朝げの煙たえ〴〵に寂しさなびく遠近の宿
　正治元年左大臣の家の冬十首の歌合、寒樹交レ松
〇冬きてもまだ一入の色なれや紅葉にのこる峯の松原
　池水半氷
一池の面は氷やはてむ閉添ふる夜頃の數を又し重ねば
　山家夜霜
二夢路迄人めはかれぬ草枕おき明す霜に結ぼゝれつゝ
　關路雪朝
三雪のもる須磨の關屋の板廂明けゆく月も光とめけり
　水鳥知レ主
四見なれては是も名殘や鴛鴦の汝だに宿の主はわき兒
　旅泊千鳥
五澄寄するとまり寂しき潮風に又夢さまし千鳥鳴くも
　湖上冬月
六月に出る堅田の海士の釣舟は氷か波か定めかねつゝ

建久五年左大將の家にて、合、深草雪
一六雪をれの竹の下道跡もなし荒れにし後の深草のさと
文治五年十二月後京極攝政大納言の時雪の十首
の歌、禁庭雪
一七さえのぼる御階の櫻雪降りて春秋みする雪の上の月
故郷雪
一八山人のひかり尋ねし跡やこれ深雪さえたる志賀の曙
山家雪
一九待つ人の麓の道は絶えぬらむ軒ばの杉に雪おもる也
野亭雪
二〇雪の内はなべて一つに成に鳧枯野の色も賴む垣根も
社頭雪
二一春日山多くの年の雪ふりて春の朝日は神も待つらむ
古寺雪
二二移しける月のみ顔は光り合て軒の荒れ間に積る白雪
雪中懸人
二三掻くらす夕の雪にせき閉ぢて心や道に通ひわぶらむ
雪中述懷
二四霞まざる年に哀の積るかな我夜ふけゆく雪を詠めて
雪中遠望
二五降り紛ふ雪を隔てゝ出でつれど雲間に消る蟹の釣舟
雪中旅行
二六打拂ひ宿かりわびぬ雪折の木々の下道おも變りして
建保五年庚申、冬夕
二七降り暮す吉野の深雪幾日とも春の近きは知らぬ里哉
母の思にて籠り居たりし冬雪の朝に大將屋より
二八三吉野や姨捨山の春秋もひとつにかすむ雪の明ぼの
二九霜枯の籬の野べの今朝の雪ぞほき心を庭に見ゆらむ
三〇此の里は待つべき人の跡もなし庭の白雪道拂ふとも
三一思へども君を尊ねぬ雪の夜に猶はづかしき山陰の跡
三二詠めする我袖ならぬ草も木も萎れ果ぬる今朝の雪哉
御返事
三三面影のそれかと見えし春秋も消えてわするゝ雪の曙
三四昔いま心に殘す跡もなし枯野のゆきの庭のひとむら
三五我が宿の雪は幾重と春やみむ荒れにし後の蓬生の影
三六思ふてふたいき計を我身にて雪に隔たる山陰もがな
三七袖の上は四方の木葉に萎れ合て獨ともなき雪の下哉
正治二年二月左大臣の家の歌合、冬遠懷

三八雪をれの竹の下道跡もなし荒れにし後の深草のさと
文治五年十二月後京極攝政大納言の時雪の十首
の歌、禁庭雪
三九さえのぼる御階の櫻雪降りて春秋みする雪の上の月
故郷雪
四〇山人のひかり尋ねし跡やこれ深雪さえたる志賀の曙
山家雪
四一待つ人の麓の道は絶えぬらむ軒ばの杉に雪おもる也
野亭雪
四二雪の内はなべて一つに成に鳧枯野の色も賴む垣根も
社頭雪
四三春日山多くの年の雪ふりて春の朝日は神も待つらむ
古寺雪
四四移しける月のみ顔は光り合て軒の荒れ間に積る白雪
雪中懸人
四五掻くらす夕の雪にせき閉ぢて心や道に通ひわぶらむ
雪中述懷
四六霞まざる年に哀の積るかな我夜ふけゆく雪を詠めて
雪中遠望
四七降り紛ふ雪を隔てゝ出でつれど雲間に消る蟹の釣舟
雪中旅行
四八打拂ひ宿かりわびぬ雪折の木々の下道おも變りして
建保五年庚申、冬夕
四九降り暮す吉野の深雪幾日とも春の近きは知らぬ里哉
母の思にて籠り居たりし冬雪の朝に大將屋より
五〇三吉野や姨捨山の春秋もひとつにかすむ雪の明ぼの
五一霜枯の籬の野べの今朝の雪ぞほき心を庭に見ゆらむ
五二此の里は待つべき人の跡もなし庭の白雪道拂ふとも
五三思へども君を尊ねぬ雪の夜に猶はづかしき山陰の跡
五四詠めする我袖ならぬ草も木も萎れ果ぬる今朝の雪哉
御返事
五五面影のそれかと見えし春秋も消えてわするゝ雪の曙
五六昔いま心に殘す跡もなし枯野のゆきの庭のひとむら
五七我が宿の雪は幾重と春やみむ荒れにし後の蓬生の影
五八思ふてふたいき計を我身にて雪に隔たる山陰もがな
五九袖の上は四方の木葉に萎れ合て獨ともなき雪の下哉
正治二年二月左大臣の家の歌合、冬遠懷

六〇徒に今年も暮ぬとばかりに冬は歎きの添ふ心地する
山野落葉といふ事を　私家
六一御狩のゝとだちを埋む楢柴に猶ふりまさる山の木枯
松竹霜
六二庭の松籬の竹に置く霜の下あらはなる千代の色かな
報恩會の次でに、歲暮述懷
六三思ひやれ枕につもる霜雪の六十に近き春のとなりは
同じ會、山家懷舊
六四思入る深山に深き槇の戸の明暮れ忍ぶ人はふりにき
同じ會、歲暮　承久三年
六五盡きもせぬ憂き思出は數添ひて變果つなる年の暮哉

賀

建保二年九月十四日和歌所、月契二千秋一
六六君が代の月と秋とのあり數に置や草木の四方の白露
建仁元年鳥羽殿にてはじめて歌講ぜられ御遊な
ど侍りし夜、池上松風
六七池水に千代の緑を契るらし聲すみわたる峯の松かぜ
建永元年八月十五夜鳥羽殿御舟に遊びありし夜
歌人みぎはにさぶらひて
六八秋の池の月に澄なる琴の音を今より千代の例にもひけ
正治二年二月左大臣の家の歌合
六九松風の聲さへ春の匂にて花も千とせを契るやどかな
建久五年左大將の家の歌合、祝二春日山一
七〇春日山みねの朝日を待つ程の空ものどけき萬代の聲
建仁元年三月盡の歌合、神祇祝
七一跡垂し四方の社も君に社守るかひある千代を習はめ
正治二年九月の歌合の十首、神祇
七二君をまもる天照神の驗あれば光さしそふ秋の夜の月
庭松
七三枝かはす玉の砌の松の風いく千代君に契りそふらむ
建仁三年十一月入道殿の和歌所にて九十賀給はる
りたまひし時
七四君にけふ十年の數を讓りおきて九返りの萬代やへむ
承久二年住吉の歌合
七五我君の常磐の影は秋もらじ月の桂の千代に逢ふ共
仁和寺宮にて、寄二松祝一
七六此里は側邊の松葉もる月のいつ共分ぬ千代ぞ見えける

建保三年五月の歌合、松經レ年
手向草露も幾世か契りおきし濱松が枝の色も變らず
一條の家にて初めて栽レ松といふ題を人々よみ侍りしに
七十の隣をしむる宿にそへて千代の始は松や傚はむ
夕松風
松に吹く風の緑に靡そへて千代の色なる入相のかね
建暦二年豊の御禊二たびとりおこなはれし次の日　中將雅經朝臣
君待て二度すめる川水に千代そふ豊の御禊をぞ見し
返し
君が代の千代に千代そふ御禊して再澄める賀茂の川水
皇后宮權亮公衡の朝臣色ゆるされてとも未だ知らざりしに御禊の行幸に菊の下がさねきられたりしを見て次の日
白菊の根は一本の色なれど移ろふ程は猶ぞ身にしむ
返し
頼ふなる名を思ふにも白菊の移ふ色はげにぞ身にしむ
少將になりたる慶びに同じ中將身に恨ありて籠り居られたりし頃三日をすぐして
嬉しさをとはで過つる日數にも思ふ心の色や見ゆ覽
返し
嬉しさをとはれぬ程の日數故分くる心も色や見ゆ覽
爲家元服したる後ほどもなく從上の加階したる慶びに　雅經の中將
袖の内に思馴れても嬉しさの此春いかに身に餘る覽
返し
袖せばく育む身にも餘る迄此春にあふ御代ぞ嬉しき
同じ中將の子を歩き初に遣したる手本の包紙に
跡ならべおもふ思も通りつゝ君にかひある敷島の道
返し
敷島の道しる君に傚ひおきつ末通るべき跡に任せて
年頃のぞみかなはで辭し申す三位に猶叙すべき由仰せごと侍りしかば侍從を一たびにと申してゆるされたりしに　同　中將
嬉しさは昔包みし袖よりも猶たち返る今日や異なる
返し
嬉しさは昔の袖の名にかけて今日身にあまる榮の色
同じ日　宮　内　卿
嬉しさは昨日や君が摘菊のとへとや猶も今日を待覽
返し
今日ぞげに花もかひある菊の色の濃き紫の秋を待見
とは申しかも沈みぬる事をのみ歎き侍りしに思ひよらざりし參議の闕に多くの上﨟をこえてなりて侍りしかば　宮　内　卿
臥て思ひ起ても身にや餘覽今宵の春の袖のせばきに
返し
嬉しさを誰もなべての言葉を今日の我身に加何答へむ
水無瀬殿にあたらしく瀧をおとされいしたてられて後まゐりてあしたに清範の朝臣のもとへ地形勝絶の由申しゝ中に
ありへけむ元の千年にふりもせで我君契る峯の若松
春日野やまもる深山の徴とて都の西も鹿ぞすみける
君が代に堰入るゝ庭を行水の岩こす數は千代も見えけり
院御所六月庚申扇合のよしにて左方の扇にかゝるべき歌三條の宮より召され侍るよし清範の朝臣申しゝかば奉りし
治れる御代に扇の風なれば四方の草葉も先ぞ靡かむ
二條の中將近衛づかさにて年たけぬる由述懐の百首に多くよみて程なく右兵衛督になりて旦に
柏木は今日や若葉の春にあふ君がみかげの繁き恵に
返し　右兵衛督
春の雨のふりぬと何か思ひけむ恵みに茂き森の柏木
祖父中納言の春日の行幸の賞をつのりて正三位したる朝に
神もまた君が爲とや春日山深きみゆきの跡殘しけむ
返し
埋れしおどろの道を尋てぞ古き御幸の跡もとひけむ
宮内卿のぞみ申さぬ三位ゆるされたるあしたに
君が代に昔いかなる契ありて各々かゝる春に逢らむ
返し
人はいさ馴もやすらむ君が代に獨ぞ春に逢心地する
右兵衛督の子の少將のよろこびに
三笠山わか葉の松にいか計あめの恵の深さをかみる
返し
年の内に春の日影やさしつ覽三笠の山の恵をぞみる

日吉の禰宜親成の七十賀に人々歌つかはしゝ時
百年に三十年たらぬ岩根松千代を待らし色も變らず
同じ八十賀に
百とせは八十の坂に近けれど神の恵の千代ぞ遙けき
元久三年正月高陽院殿　題
臨レ製　遥花春久
新玉の年の千年の春の色をかねて三笠の花に待つ戀
戀
建仁二年六月水無瀬殿の釣殿に出でさせ給ひて
戀に六首の歌を給はりて御製にあはせられ侍りし中樞の三首、初戀
春やときと計聞きし雲の初音を我と今日やながめむ
忍戀
夏草の交る茂みに消えね露おきそめて人の色も社見れ
久戀
我が中は浮田の御注繩懸かへて幾度朽ぬ森の下葉も
同じ年九月十三夜水無瀬殿の戀の十五首の歌合に、春戀
忘れぬや花に立ち迷ふ春霞それかとばかり見えし曙
夏戀
郭公空に傳へよ戀侘びて鳴くや五月の高濱分かすと
秋戀
今宵しも月やはあらぬ大方の秋は習ひを人ぞ難面き
久戀
床の霜まくらの氷きえわびぬ結びもおかぬ人の契に
曉戀
面影も待つ夜空しき別にてつれなく見ゆる有明の月
暮戀
眺めつゝ又はと思ふ雲の色を誰夕暮と君たのむらむ
羇中戀
君ならぬ木葉もつらし旅衣拂ひも敢ず露こぼれつゝ
山家戀
風吹けばさも非ぬ峯の松もうし戀せぬ人は都にをすめ
故郷戀
つれなさを待つとせしまの春の草枯ぬ心の故里の霜
旅泊戀
忘れぬは波路の月に愁へつゝ身を牛窓にとまる舟人
關路戀

須磨の浦や波に面影立添ひて調吹き起る風ぞ寒しき
海邊戀
別のみを島の蜜の袖濡て又はみるめをいつか刈べき
河邊戀
名取川流ればつらし朽ちはつる袖の例の瀬々の埋木
寄ㇾ雨戀
行方なき宿はと問へば涙のみ佐野のわたりの村雨の空
寄ㇾ風戀
白妙の袖の別に露おちて身にしむいろの秋風ぞふく
建久五年夏左大將の家の歌合、戀、三島江
移りにき我が心から三島江のいりえの月のあかぬ俤
建仁元年三月盡の歌合、過不ㇾ會戀
人心はどには雲居の月ばかり忘れぬそでの涙とふらむ
正治二年二月左大臣の家の歌合、夏戀
寄ㇾ雲は執こと惜まれし月をながしと戀つゝぞぬる
宇治の御幸、夜戀　元久元年七月
待つ人の山路の月も遠ければ里の名つらき片敷の床
建仁二年三月六首の中、戀
頼む世の木の間の月に移ろひぬ心の秋の色を恨みて
過不ㇾ會戀　承久調四月四日和歌所
とひかしこ又同じ夜の月を見てかゝる命に殘る契を
承元四年九月稚田宮の歌合、寄ㇾ月戀
宿りこし袂は夢かと計にあらばあふ夜のよその月影
三宮の十五首、戀歌
露時雨下草かけても山の色數ならぬ袖を見せばや
大方は忘れはつとも忘るなよ有明の月のありし一言
ならふなと我も諫めし轉寢を猶物思ふ折はこひつゝ
建保五年四月　庚申　久戀
戀死なぬ身の憚りぞ年へぬるあらば逢夜の心強さに
建永元年七月和歌所、被ㇾ忘戀　雜部
翔ふ共知らじな心かはらやに我のみけたぬ下の煙は
建暦三年三月内裏の戀歌　三首
宿りせぬ倉都の山を恨みつゝはかなの春の夢の枕や
契のみいとゞかりはの檜柴はたへぬ思の色ぞ増れる
影をだに逢瀬に結べ思川浮ぶ水泡のけなばけぬとも
建暦三年九月十三夜内裏の歌合、旅宿戀
留めおきし袖の中にや玉櫛笥二見の浦は夢も結ばず
建保四年閏六月内裏の歌合、戀
逢ふとはしのぶの衣良なる色に亂れそめけむ
こぬ人を松帆の浦の夕凪に燒や藻汐の身も焦れつゝ
九月十三夜内裏、寄ㇾ海戀
人心浮波たつる由良の戸の明ぬ暮ぬと音をのみぞ鳴く
建保四年内にて、寄ㇾ道戀
年なる身をつくしてのかひもなし短き蘆の一夜計は
正治元年冬左大臣の家の冬十首歌合、契歳暮戀
新玉の年のくれ待つ大空は曇るばかりの慰めもなし
住吉歌合、旅宿戀
宿りせし假庵の萩の露計消えなで袖の色に戀ひつゝ
戀不ㇾ離ㇾ身といふ心を
心をばつらきものとて別れにし代々の俤何暮ふらむ
仁和寺宮の花の五首、寄ㇾ花戀
花のごと人の心の常ならば移ろふ後も影は見てまし
建久七年内大臣殿にて文字をかみにおきて廿首
の歌よみしに戀の五首、片思
神なびの三室の山の山風の傳にもとはぬ人ぞ戀しき
魂の入りにし袖の匂ゆゑもあらぬ花の色ぞ戀しき
奥も見ぬしのぶの山に道とへば我涙のみ先にたつ哉
藻汐たれ須磨の浦波立馴れし人の袂や斯は濡れけむ
飛驒工打つ墨縄を心にて猶とにかくに君をこそ思へ
中納言長方卿五首の歌よませたりし中に絶久戀
それとだに忘れやすらむ今更に通ふ心は夢に見ゆ共
建久六年二月左大將の家の五首、戀
思癡は誰が心にて見えねども夢にぞ最ど浮れ果ぬる
建保左大臣の家の六首の歌合、行路見戀
露ぞおく井手の下帶さ計も結ばぬ野邊の草の緑りに
山家夕戀
涙せく宿もは山にかくろひて願はに戀る夕暮ぞなき
承久二年八月土御門院より忍びて召されし、夜
長增戀
秋の夜の鳥の初音は雌面くてなく〳〵見えし夢ぞ短き
寄ㇾ名所ㇾ戀　私家
清舟の風に任する眞帆にだにもこゝ數へぬ阿武の松原
忍待戀
小鹽山千代の緑の名なだにも其とはいはぬ暮ぞ久しき
寄ㇾ釣戀
いとゞ又あまる思は燃えつきぬ袖の雲見えても
隔ㇾ遠路ㇾ戀
尋ぬとも重なる關に月こえてあるを限の道や惑はむ
慕山戀　權大納言家
空蟬のは山渡り來る夕日影薄くや人と音をのみぞ鳴く
貞永元年七月大殿の歌合の戀の十首、寄ㇾ衣戀
秋草の露分衣おきもせず寢もせぬ袖は干す隙もなし
寄ㇾ鏡戀
行く水の花の鏡の影も憂しあだなる色の移り易きは
寄ㇾ弓戀
狩人の引や弓末の夜さへやたゆまぬ關のもるに惑はむ
寄ㇾ玉戀
緒を絶えしかざしの玉と見ゆ計君に碎くる袖の白露
寄ㇾ枕戀
忘れずよ三年の後の新枕定むばかりの月日なりとも
寄ㇾ帶戀
いかにせむ上は雖面き下帶の別れし道に廻逢はずば
寄ㇾ絲戀
夏引のいとしも馴れし面影は絶て短き後ぞ悲しき
寄ㇾ筵戀
あづさ野の露の假寢の萱筵見ゆ覺消てしき忍ぶとは
寄ㇾ舟戀
白妙の袖のうら波よる〳〵は唐土舟や漕ぎ渡るらむ
寄ㇾ網戀
人心あだなる名のみ立つ鳴の網の行手になど懸る覽
はじめて人に
限なくまだ見ぬ人の戀しきは昔や深く契りおきけむ
移りにし心の色に亂れつゝ獨しのぶの頃もへにけり
眺もなき波行く舟にあらねども風を知べに物思ふ頃
世々經てつらき契に逢初めて深き思の色ぞかひなき
歎くとも戀ふともあはむ道やなき君篤城の峰の白雲
あだしのゝ若葉の草に置露の袖に溜らぬ物を社思へ
搦返り落れば凍る瀧つ瀬の下に碎けて幾世へぬらむ
神無月の頃まどろまであかして
戀しさの頼ひもあらじ神無月ねぬ夜の月の有明の影
つゝむ事ありける人の春頃とほく別れけるに
今日やさは隔て果つる春霞晴ぬ思はいつとわかねど
春物越しに逢ひたる人の梅の花をちらせて入りけ

る又の年おなじ所にて
心からあくがれそめし花の香になほもの思ふ春の曙
又
我のみや後も忍ばむ梅のはな匂ふ軒ばの春の夜の月
影計り見て歸ける道にて火のある由人のいふに
戀ひ〳〵て逢ともなしに燃增る胸の煙や空に見ゆ覽
となることなき女の心たかく思ひあがりてつれ
なかりければ
さても猶折らてはやまじ久方の月の桂の花と見る共
宮仕へしける女の局にて尋ぬるに隱れければ鏡
の蓋をとり隱して返さいりける後その女ある人
の許に定まりぬにければその蓋を返しやるとて
增鏡ふたり契りし兼言のあはでや頓てかけ離れなむ
返し
身こそかくかけ離る共增鏡二人見し世の夢は忘れず
秋の暮をもろともに惜みあかして里へ出でにけ
る人に出でぬ人に傳へて
いかにせむ捨てし秋を慕ふとても惜からず惜き別を
恨めしや今日しもかふる衣手に入にし玉の道惑らむ
返し
忘れねよ慕ひて暮し秋よりもあだに立名は惜き別を
愚かなる涙も見えぬ袖の上に留めし玉と誰か賴まむ
或所なる人を我に憚る由を聞て　三位中將
君ならで通ふ人なき宵々を寢ぬ關守に啊たざらなむ
返し
逢坂は君が往來と聞しよりまだ見ぬ山に踏も通はず
心變りにける人に
あらはれて霜より後の色ながら流石に枯ぬ白菊の花
變るいろを誰朝露にかこちても中の契ぞつき草の花
文つたふる人騷ぐ事ありてかき絕えて
踏迷ふ道もかりばの己れのみ戀は增れる歎をぞする
返し
御狩野のかりそめ人を椙柴に我ぞ踏見し道は悔しき
かきりなく忍びて人に知らせざりける人に
一味氣なく何と身にそふ面影ぞ其とも見えぬ關の現に
返し
僞の誰が面かげか身に添はむ夢にまさらぬ關の現は
有明の曉よりは憂かりけり星のまぎれの宵の別れは

いかにせむ流石夜な〳〵水馴棹雫に濁る宇治の川長
舟よする思もあらじ宵のまの別は星のまぎれ也とも
浮船の何の契に水馴棹あだなる袖をくたしそめけむ
忍ぶとも戀ふとも知ぬ難面さに我のみ幾夜歎てかれむ
忍ばれず戀すは何を契るとか憂に添へたる歎をもせむ
せき侘ぬ今はた同じ名取川顯はれ果てぬ瀨々の埋木
名取川行手の波に顯はれて淺くぞ見えむ瀨々の埋木
思遣れ里の知べもとひかねて我身の方にくゆる煙を
とひかぬる里の知べに中絕て今や跡なき煙なるらむ
その人のもとより返事に
何かとふ思ひも最ど末の松わか波ならぬ波もこゆ也
返し
越え越えず心をかくる波もなし人の思ぞするの松山
戀の歌よみける中に
時の間もいかに心を慰めて又逢ふまでの契待ちみむ
かきやりしその黑髮の筋毎に打臥す程は面影ぞ立つ
別れての思を嘯と知り乍誰かは解きしよはの下帶
きて馴れし匂を色に移しもて絞るにをしき花染の袖
　遠き所にゆき別れにし人に
心をば其方の雲にたぐへても猶戀しさの遣方ぞなき
あな戀し吹きかふ風も言傳てよ思ひ侘ぬる暮の詠を
思出づる心ぞやがてつきはつる契りし空の入相の鐘
人めもり隔つる道を思ふより頓ても胸にとづる關哉
誰もこの哀短き玉の緒に亂れてものを思はすもがな
掬びおく名のみ流るゝ渡川わかでも懸む波とやは見し
自から哀とかけむ一ことも誰かはつてむ八重の白雲
今日迄は人もわすれず計も現に知らぬ中ぞ悲しき
契置し音を賴みに忍ぶとも同じ風だに吹すや有らむ
つゝむ事ありて文やることもせぬ人の手習した
るを人づてにみて
うら〳〵に唯搔捨つる藻汐草みるより最ど立つ煙哉
人の持ちたる扇にうつの山べの現にもと書きた
るを見て
さぞ歎く戀を駿河のうつの山現の夢の又見えねば
自からそれと計をよそに見て胸にせかるゝ水莖の跡
久しくかき絕えなる人に
いかゞせむありし別を限にて此の世計の心かはらば
限あらむ命も更に長らへじ是よりまさる月日隔てば

澪標いま身にかへて沈みけむ同じ難波の浦の波かは
涙せく空しき床のうき枕くちはてぬ間の逢事もがな
戀しさを思ひ鎭めむ方ぞなき逢見し程に更る夜毎は
よしさらば同じ涙に紅の色に戀ひむ人は知るとも
山端に待たれて出る月影の傳に見えしよはの戀しさ
等閑に賴めし程も過さはてば何にかくべき命なる覽
いか樣に戀も歎きも慰めむ此世乍らの非ぬ世もがな
あす知らぬ世の儚さを思にも馴ぬ日數ぞ最ど悲しき
儚しな夢に通はむ夜な〳〵を形見にそれと思做す共
おのづから人も涙やしるからむ袖より餘る轉寢の夢
面影の身に添ふ袖の匂ゆゑたゞその色にしむ心かな
思出づる春の衣の形見迄いはぬ色にぞ千入染めてし
身に代て人を思で戀みばや無きになしても逢夜有やと
待つらむと契しことを忘れずば誰と眺めて日を暮す覽
かくしらば緒絕の橋の踏迷ひ渡らで唯に有まし物を
惜からぬ命も今は長らへて同じ世をだに別すもがな

雜
旅
伊勢勅使の御ともにて鈴鹿の關こえしに山中の
　　櫻さかりなりし下にて
えぞ過きぬ是や鈴鹿の關ならむ振すて難き花の影哉
　宇治の御幸に、秋旅
我が庵は峯の笹原しかぞかる月にはなるな秋の夕露
　建曆三年八月內裏の歌合、山曉月
やどれ月ころもで重し旅枕立つやのちせの山の雫に
河朝霧
朝ぼらけいざよふ波も霧籠て里訪ひ兼ぬる槇の島人
　建仁元年秋和歌所の歌合、羇中暮
立迷ふ雲の旅手の空ごとに煙を宿のしるべにぞとふ
山家松
つれ〳〵と松に碎くる山風も里から人の心をや知る
　正治元年冬左大臣の家の十首の歌合、羇中晚嵐
いづこにか今宵は宿をかり衣ひも夕ぐれの峰の嵐に
　同じ二年二月同じ家の歌合、秋旅
忘れなむまつとなつげそ中々に稻葉の山の峰の秋風
　建仁二年三月六日、旅
袖に吹けさぞな旅寢の夢もみじ思よ方より通よ浦風
　建永元年の秋和歌所、暮山雲　當座

跡たえてとはれぬ山を誰が御幣さの空になびく白雲

建保右大臣の家の歌合、羇中禁風

馴れぬ世の旅寝惱まず松風にこの里人や夢結ぶらむ

攝政殿の詩歌合、羇中眺望

○秋の日のうすき衣に風立ちて行く人またぬ遠の白雲

假庵や誰く穗向のかたよりに戀しき方の秋風ぞ吹く

建仁元年十二月八幡の歌合、旅宿嵐

故郷にさらば吹きこせ嶺の嵐假寢の山の夢は覺ぬと

母のおもひに侍りし年の暮に比叡の山へ登りて中堂に籠りて侍りし春のはじめもわれずかつ降る雪に跡絶えたりし朝入道殿山の覺束なさなどこまかに書きつけ給ひて奥に

子を思ふ心や雪に迷ふらむ山の奥のみ夢に見えつゝ

三たび拜み一度たてしをのゝ音を今聞く計思遣る哉

御返事

うちも寢ず嵐のうへの旅ながら都の夢にかはる心は

舞の音を立てし晉もいさぎよく雪に冴たる杉の下陰

建久七年內大臣殿にて文字をかみに置きて廿首の歌よみし中に、たびのみち

谷の水嶺たつ雲を越えくれてまつ夕の松の秋かぜ

日數ゆく山と海との詠めにて春より秋にかはる月影

軒に生る草の名かけし宿の月荒行く風や形見添ふ覽

都とて雲の立居に忍べども山の幾重を隔てきぬらむ

契りきな是を名殘の月の頃慰む夢も絶えてみじとは

松尾の歌合、山家夕

身におひて住べき山の夕暮を習はぬ旅と何急ぐらむ

內裏歌合、山夕風

鐘の音を松に吹きしく追風に妻木やおもき歸る山人

野曉月

打拂ひ笹分くる野べの數々に露あらはるゝ有明の月

內より召されし歌、羇中

そこはかと見えぬ山路に言とへば今宵も疎し白雲の宿

旅泊

槇まくら誰と都を忍ばまし契りし月の袖に見えずば

水無瀨殿の山の上の御所つくられて後參りて池など見めぐりてまかり出づとて清範朝臣の許へ

面影に瀧沙の煙立ちそひて行くかたつらき夕霞かな

見ても飽ぬ春の山べに振すてゝ花の都ぞ旅心地する

思ひやる月こそ水に宿るらめ枕むすばぬ歸るさの道

建久五年夏左大將殿の歌合、述懷、浮田社

○君はひけ身こそ浮田の森のしめ唯一すぢに賴む心を

述懷三首、建永元年の秋和歌所

君が代に逢ずば何を玉の緒の長くと迄は惜まれし身を

我ぞ見し御代の始の秋の月年はへに鬼元の身にして

思置く露のよすがの忍草君をぞ賴む身は消えねども

承元二年少將具親朝臣八幡にて講ずべき由申しかば詠みて送り侍りし

せく袖は唐紅の時雨にて身のふりはつる秋ぞ悲しき

松風に涙ぞきほふまじりなむ昔がたりの峯の月かげ

同じ四年九月粟田宮の歌合、寄ゝ海朝

和歌浦や風たつ朝の澤標朽ちねかひなき名のみ殘らで

寄ゝ山暮

思兼ねわが夕暮の秋の日に三笠の山はさし離れにき

同じ頃歌あまた詠みける中に

なきかげの親の諫めは背きにき子を思ふ道の心弱さに

承元二年五月住吉の歌合、寄ゝ山雜

行末の跡まで悲し三笠山道ある御代に道まどひつゝ

松尾の歌合、社頭雜

○神垣や我身の方はつれなくて秋にぞ敢ぬ葛のうら風

建曆三年潤九月內裏の歌合、寄ゝ風雜

飛鳥川今はふるとも吹く風の身は徒らの秋ぞ悲しき

三宮の十五首雜の歌

天地も哀れ知るとは古への誰がいつはりぞ敷島の道

つれなくて今も幾世の霜かへむ朽にし後の谷の埋木

承元のころほひ內より古今を給はりて書きて參らせし奥に

例なき代々の埋木朽果てゝ又うき跡の猶や殘らむ

照る光近き守りは名のみして人の霜にや思消えなむ

古き歌を書きいだして仁和寺宮に參らすとて

年深き時雨のふるは書ぞ置君に殘さぬ色やみゆると

承久三年內より召されし述懷の歌

神かけて祈りし道の埋れ水むすびも果ぬ影や絶なむ

爲家元服したる春加階申すとて兵庫頭家長につけ侍りし

子を思ふ深き涙の色に出でゝあけの衣の一入もがな

許さるべき由御氣色侍ければ返事　家長

道を思ふ心の色の深ければこの一入も君ぞうむべき

京官除目のついでに下臈參議おほく納言に昇進あるべき由聞えしに正三位を申すとて清範朝臣につげ侍りし

○雪の內の元の松だに色增れ傍への木々は花も咲くも

人のよろこびはなくて加階ゆるされ侍りにき

建久六年正月敘位にともに加階したるあしたに　左衞門督隆房卿

一夜竹に木傳ふ鳥の枝うつり嬉しき節も共にこそ知れ

返し

百千鳥木傳ふ竹のよの程も共にふみみし節ぞ嬉しき

四位して後臨時の祭の日起中侍從舞人にて內をいでし程に

立返り猶ぞ戀しき連ねこし今日のみつ野の山藍の袖

返し次の日

山藍の袍も果ぬる色ながら列ねし袖の名殘ばかりを

小侍從に縁りある人の迎へに遣したれば罷るに言づけやするとて申しゝかば其人の腕に書附けし

恨ばや世に厭ならぬ憂目をば分きて訪べき人も訪ずと

返し　小侍從

待てど斯とはれぬ我を打歸し恨むるに耐ぬ添ひけれ

西行上人みもすその歌合と申して判ずべき由申しゝをいふかひなく若かりし時にてたび〳〵かへさひ申しゝをあながちに申しをしふる故侍りしかば書きつけて遣すとて

山水の深かれとてもかきやらず君か契をむかふ計ぞ

返し　上人

結びながす末を心に譬ふれば深く見ゆるを山川の水

又

神路山松の梢にかゝる藤の花の笑ゑを思ひこそやれ

又返し

○神路山君が心の色を見む下葉のふちに花しひらけば

と申し送り侍りし頃少將になりてあくる年思ふ故ありて望み申さゝりし四位して侍りき水無瀨殿にさぶらひしに大僧正の長歌を詠みてたてまつられたる返事唯今つかうまつるべき由仰せごと侍りしかばやがて書きつけ侍りし

○惜もいかにわしの深山の月のかげ　鶴のはやしに

へにける年を數ふれば　二ちとせをも

過果てゝ後のいつしの百とせに　入にけるこそ

悲しけれあはれ御法の水の泡の　消えゆく頃に

成ぬれば其にこゝろを澄してぞ　わが山かはに

沈みゆく　心あらそふ　法のしば　われも〳〵と　振捨て〳〵　獨り出でにし
青やぎの　最ところせく　亂れきて　花ももみぢも　古きながれに
散行けば　木すゑ跡なき　みね〳〵の　道にまどひて　濁れる世にも
過ぎ作ら　獨りこゝろを　留むるに　かひも清の　底澄みて
志賀の浦　跡たれましゝ　日吉のや　神のめぐみを　濁りなし
頼めども　人のねがひを　みつ川の　ながれも淺く　ぬなほ山の端を　行き廻り
成ぬべし　峯のひじりの　住かさへ　苔のしたにぞ　空しくて　空吹くかせを
埋れ行く　うち拂ふべき　人もがな　あな卯の花の　秋の木すゑを　仰きても
世の中や　春のゆめぢは　空しくて　秋の木すゑを　立ち返り
思ふより　冬のゆきをも　誰かとふ　かくてや今は　行く末と
跡絶えむ　と思ふからに　呉はとり　あやしき夜の　口吉のみかげ
我が思ひ　消えぬ計りを　頼みきて　猶さりともと　君をいのらむ
思ひつゝ　暫しみやこに　休らひて　のこる御法の　千代を重ねて
花の香に　強てこゝろを　つくづ山　繁きなげきの　松が枝を
ねを尋ね　沈むむかしの　珠をとひ　数ふこゝろは　和歌浦や
深くして　動め行くこそ　哀れなれ　み山のかねを　いまも玉藻を
慣づくと　我が君が世を　思ふにも　峯のまつかぜ　摑つめて
長閑にて　千代に千歳を　添ふる程　法のむしろの　例しもなみに
花のいろ　野にも山にも　休むべき　人をわたさむ　我が道までも
橋として　暫しこゝろを　我立ちし　遂にはいかゞ　絶せずば
あすか川　明日より後や　柚のたつ木の　言の葉ごとの
攀きより　我立ちし　くもらぬ空に　色〳〵に

立歸べき　晴のきて　反歌

さりともと思ふ心ぞ猶深き絶えて絶えゆく山川の水

返し

あめつち共に　限りなき　天つひつぎを　降りまさる我が世の嵐弱るらし袖まで朽ぬ秋の暮哉
神もろともに　守れとて　我が立つ柚と　見し人のなき数増る秋の暮別れ馴たる心地こそすれ
むかしの人の　占てける　みねの杉むら　八重のしら雲　霞までとはれし人は憑ひにきむなしき秋の暮の白雲
色かへず　隔つとも　御法のはなも　明暮れて是も昔になりぬべし我のみ元の秋と惜めど
詠めやる　隣にて　思ひ置し　すゑばの露も　とはぬ人馴れつる秋の露跡たしかなる庭の淺茅生
みやこの春を　乱れつゝ　元のこゝろの　元の下とはぬ人馴れつる秋の露跡たしかなる庭の淺茅生
劣るべき　にほひ物と　鳴香を立つる　顧はるゝ思の末も風寒く谷のとぼそも秋やいぬらむ
定めなき　かやが下葉に　くれ竹に　まだきめすよしなき夢の枕かな心の秋を秋に合せて
其ならぬ　うきふし繁き　跡絶えぬべき　小山田の鹿のかり庵の宿りかな君を頼まむ稻妻の後
うぐひすの　古巣はくもに　荒しつゝ　御かへし
谷がくれ　こりつむ歎き　強てむかしに　数へて知ればかひもなく徹有ける庭の初霜
歸されぬ　椎しばの　君はみかさの　暮の秋を
鳶のうらはに　愚むとも　照日のよゝに　下とほる袖にて君を思ひ知れ四十かさなる霜の袂を
雲居のそらに　変りつゝ　我が秋の更れば冬の山おろし強く身にしむ暁の空
山ふかみ　人の世の露に時雨を染更へて別れ馴たる心地こそすれ
藤衣そめむ春の霞よりさてしも秋の暮のしらつゆ
思ひ出づる昨日の秋は昔にてこの頃おもふ行末の春
我が宿は今朝こそ哀なれ秋に後るゝ庭を眺めて
君はさは思ひ知らでやたどるらむ願ふ栖ぞ秋の隣も
獨のみ夜も明やらぬ秋の夢さはまだきめぬ君も有鬼
秋も冬も眺め計は君をのみたのむの雁を月に任せて
言の葉に結ぶ契は見えねども頼めとゝいふ岩代の松
同じ口女院大輔に
留まらぬ秋の別の数々に見馴れし人のなきぞ多かる

返し

つくづくと獨眺めて思出づる心の中を君も知りけり

同じ年の雪のあした後京極大將殿より

白妙の外山の雪を眺めてもまづ色おもふ君が袖かな
人の世は思ひなれたる別れにて朝日にむかふ雪の曙
いかに君思ひやるらむ苔の下を幾重山路の雪埋ひらむ
まださめぬ昨日の夢の袖の上に絶ず掬べる雪の下水
猶殘れあけゆく空の雪の色此の世の外の後の詠めに

御返し

衣手に果なき涙まづくれて變る外山の雪をだに見ず
雪積るふりゆく方ぞ哀なる思ひ馴れたる別なれども
同じ世に馴れし袂は隔たりて雪つむ苔の下ぞ親しき
去年は見ぬ昨日の夢の数そひて枕に假たる軒の雪哉
心もて此世の外を遠くして岩屋の奥の雪をみぬかな

建久元年二月十六日西行上人身まかりにけるをはり亂れざりけるよし聞きて三位中將のもとへ

二月の頃はたがはぬ空なれど聞えむ雲の行方悲しな

上人先年詠云

願はくは花の下にて春死なむその二月の望月の頃

今年十六日望日也

かへし

紫の色と聞くにぞ慰むる消えけむ雲は悲しけれども

後京極殿攝政殿にいかに夢の心地せし御事のあくる日宮内卿とぶらひ遣したりし返事の次でに

昨日までかげと頼みし櫻ばな一夜の夢のはるの山風

かへし

悲さの昨日の夢にくらぶれば移ろふ花も今日の山風

その後日數へて又あれより

櫻花こぶとも知らじ陽炎の燃る春日になく〳〵ぞふる

春の夜のおぼろ月夜も朧氣の夢ども見えぬ花の面影

泣涙このめもかれし春の夢に濡るゝ袂は君も變らじ

臥して戀ひ起ても惑ふ春の夢いつか思のさめむとす覽

思ひやる苔の下こそ悲しけれ霞の谷の春のゆふぐれ

仰ぎみし雁の霞に消えしより空しく暮るゝ春の空哉

假初の宿に堰入れし池水に山も映りて影を戀ふらし

いつ迄か誰も生田の森の露消にし跡を戀つゝもへむ

たまきはる命は誰もなき物を忘れね心思ひかへして

消えぬべし見れば涙の流つ瀬に泡沫人の跡を戀つゝ

返し

戀ひわぶる花の姿は陽炎の燃えし煙を胸にたきつゝ

せきも敢ぬ涙のとかく曇れ月霞したしき空と頼まむ

紅の涙ふり出でし春雨に嵐身を知るそでのたぐひは

夢ならで逢夜も今は白露の起くとは別れねとは待れて

埋もれぬ玉の聲のみとまりゐて霊棲ねたる苔の下哉

霞みにし憂物からの春の空暮るれば悲し其も形見に

山の色は堰入し水に映る共戀しき影をいつか見べき

春の夢の限りに聞きし夕より生田の森の秋も恨めし

世々ふ共忘れし心たまきはるあだの命に身社變らめ

今は唯我が身一つの思川うたかた消えてたぎつ白波

同じころ人のとぶらへし返し

道變る煙の果に立初めて夢ならねばぞ明け暮すらむ

見しもうき變らぬ夢を且きけど我心には例だになし

三笠山仰ぎし道も頼まれず世のことわりに惑ふ心は

見ぬ人も知らぬも涙斯る世に馴て背かぬ袖の難面さ

面影はまだ限ともたどられずいとしも人の賤の緒環

世の中は憂きに扇のあきはてぬ何の別の忘れ形見ぞ

先立てゝ忍ぶべしとは知らざりき思へ思の外の涙を

朝露にぬれての後の世も知らず衣に染ぬ色ぞ悲しき

同じ年の夏頃の事にや人に

我が染る秋の色の隣もがな其より深き言の葉も見む

無ば世に忍れむとは見し人ぞ後るゝ身社思ふには似ね

明暮も覺えぬ月日隔たりてそれかの雲の空も頼ます

思きや待ちし彌生の花の色に花橘のよすがばかりと

あだに見し花の如やは常ならぬ憂春風は廻り逢ふ共

夜の鶴の心のいかに止りけむ衣の色に誰もなくねを

思ひかね猶名殘を尋ねつゝ其世にも似ぬ宿をみし哉

疑ひて植し梢は青葉にて人めは庭のよそにかれにき

口をさして急ぎし池の花の舟水草の中に浮世也けり

思川あはれ浮世のまさうつゝいか計なる涙とか知る

又の年三月七日賀茂に御幸侍りしつぎの日大僧

正十首の御歌の返し

うき乍ら昨日は其も忍ばれきまだ知ざりし去年の曙

今朝は最ど涙ぞ袖に降增る昨日も過ぬ去年も昔と

後れては安く過ける月日哉慕ひし道はゆく方もなし

大方は只明けぬ夜の心地して知ず今年の昨日今日共

忘れぬ命の限歎きしてつらきはもとの情なりけり

遠ざかる月日のうさを算ても面影のみぞ最ど近き

賴まれぬ夢てふ物の憂世には戀しき人のえやは見ねける

憂かりける彌生の花の契哉散るをや人は習ひなれ共

神に猶君をいのりし榊葉のかげにも見えし玉葛かな

いはへども我爲齢ぞこぼれそふ藤の盛を松ぞ偺行く

建永元年七月和歌所の當座、寄風懐舊

月日へて秋の木葉を吹く風に彌生の夢ぞ最ど偺行く

雨中無常

よそふれば重ねて脆き末の露身を知る袖の上の村雨

六條三位家衡卿人の後れて歎くとて申し遣りし

とぶむてふ棚もがな別路のあきの涙を何にせくらむ

鳴き渡る夜寒の風のいなからむ常世離れし雁の翼に

返し

とく袖も長々こそは明しつれ空しき床の秋の此の頃

とくとはれても常世離れし雁音の秋の別は悲しかりけり

承元四年三月七日左大將殿へ

後れじと慕ひし月日うき乍ら今日も難面く廻合つゝ

大將殿

返し

霞みにし今日の月日を陽てゝも猶面影の立ぞ離れぬ

入道寂蓮身罷りぬと聞きて雅經の少將のもとへ

たまきはる世の理もたどられず猶恨めしき住吉の神

返し

限あれば恨みても又いかゞせむ斯る憂世に住吉の神

承久元年六月故女院御忌日蓮華心院に參りて思

ひ出づる事ども多くて參られたりし女房の中に

老らくのつらき別れは數そひて昔見し世の人の少き

憎むべき人は短き玉の緒に憂き身一つの長き夜の夢

今日毎に草葉の露を踏分けて跡なき君の跡ぞ悲しき

今よりの今日こむ人を數へつゝ是や名殘の形見也ける

大の日

老らくの思ひぞ空に知られにしうきを重ねし古の夢

思ひきやと計りは見し年々も今年を知らぬ恨也けり

知ざりし誰もえ知らじ古や跡なき君が跡を見むとは

忍べき今日こむ人の其數に殘るべしとは思ざりしを

老尾僧居の後秋の頃母のおもひなる人に

變りにし秋の色もいかならむ時雨果ぬる四方の梢に

如何計秋の夜すがら忍ぶらむ久しき果のさらぬ別を

露時雨袖に名殘を忍べとや秋をかたみの別なりけむ

形見とて幾日もあらぬ秋の日に移ろひ增る白菊の花

なき人の戀ふる涙やほふらむ落る木葉に嵐たつ頃

霜のたて山の錦のよをへては伴ふ蟲や弱り果つらむ

思ひやる枕の霜もさえはてゝ都のゆめも嵐こそ吹け

定なく時雨し雲の行方にも其方の空を忘れやはする

大方の身を知る袖に啟きそへて猶色深き秋の露かな

故郷の時雨に附て言傳てよ一方ならず思ひやるとは

女院かくれさせおはしまして眞侍をそむきに

し頃とぶらひ遣して　前宮内卿

花の色も憂世にかふる墨染の袖や涙に猶しづくらむ

かへし

墨染を花の衣にたちかへし涙の色はあはれともみき

神祇

後京極攝政殿伊勢勅使之時外宮に參りて

契ありてけふ宮川のゆふ霧長き世迄もかけて頼まむ

昔八幡の歌合とて人の詠ませ侍りし、社頭述懐

一頼むかな雲居に星を戴きて我がすみかとふ元の誓を

住吉幷依維の社に來子の歌よみて奉るべき由祠

官申しゝかば奉りし
一住吉の松が根洗ふしき波に祈る御影は千代も變らじ
二君が世はよさみの森の常ごとに杉と松とや千度榮えむ
承元二年の秋少將具親三社にて歌講ずべき由申しゝ中に、住吉
三つれもなく猶住の江に手向草引捨らるゝ跡の朽葉を
四掻つめし松のしき波色わかぬ藥屑也皃みさへ朽ぬる
廣田
五檝びを廣田の濱に祈りても今はかひなき身の思かな
六海士の住里の知べの幾年に我から琅てみるめ刈り皃
ことわりと思ひし事を北野にて祈り申すとて
七千早振神の北野に跡たれて後さへかゝる物や思はむ
そのことばかりしるしあらたになむ侍りける
日吉の社にこもりて思ひつゞけける事の中に
八見し夢の末たのもしく逢ふ事に心よわらぬ物思かな
九うしと世を三年は過ぬ愁つゝ斯て嵐に身や交りなむ
一〇數へやる程や歎を祈けむ神に任せて音をぞなきつる
一一捨果つる契あればぞ賴みけむ神の中にも人の中にも
承久元年九月日吉の歌合とて內よりの仰事にて
六首の中、社頭松風
一二賴みこし徵もみつの川淀に今さへ松の風ぞひさしき
湖上眺望
一三鴈の海や朝な夕なに詠めして寄べ渚の名にや朽なむ
御熊野詣の御供に參りて歌つかうまつりし中に
本宮、寄社祝
一四千早振熊野の宮のなぎのはを變ぬ千代の例にぞひく
川千鳥
一五さよ千鳥八千代の神や數ふらむ清き河原に君祈る鳥
山家月
一六深山木の影より外にくまもなし嵐に朽ちし假庵の月
新宮、海邊殘月
一七渡つ海も一つに見ゆる天の戸の明るも分ず澄る月影
庭上冬菊
一八霜おかぬみなみの海の濱びさし久しく殘る秋の白菊
隣聞二竹風一
一九明ぬるか竹のは風のふし乍ら先此君の千代ぞ聞ゆる
那智、深山風
二〇風の音も唯世の常に吹かば社深山出ての形見ともぜめ
瀧間月
二一和ぐる光そふらし瀧の糸のよるとも見えず宿る月影

寺落葉
二二寺深き紅葉の色にあと絕えて唐くれなゐを拂ふ木枯
本宮にて又講ぜられし、遠近落葉
二三苦むしろ緑にかゝる唐錦ひと葉殘らぬ遠の木がらし
暮聞二河波一
二四もろ人の心の底もにごらじな夕にすめる河波のこゑ
二五袖の露に影うち拂ふ山路もまだ末遠き夕月夜かな
曉初雪
二六冬もけさ今年の雪を急ぎけり夜をこめて立つ峰の曙
深山紅葉
二七み山路は紅葉も深き心あれや嵐のそよに深雪待ける
海邊冬月
二八曇なき濱の眞砂に君が世の數さへ見ゆる冬の夜の月
川邊落葉
二九染めし秋をくれぬと誰か岩田川また波越る山姫の袖
旅宿冬月
三〇岩波の櫂は急ぐ旅の庵をしづかに過ぐる冬の月影
翳中霰
三一冬の日を霰ふりはへ朝立てば波に波越すさの〳〵月影
夕神樂
三二神垣や今日の空さへゆふかけて御室の山の榊葉の聲
釋教
後法性寺入道關白殿、舍利講に詩歌結緣あるべしとて十如是の心を、相
三三跡もなく空しき空にた靡けど雲の形は一つならぬを
性
三四濁江や小川の水に沈めどもまことは同じ山の端の月
體
三五かりそめに鶴の林の名を立てゝ煙の後の姿をぞ見る
力
三六水馴棹岩間に波はちがへ共たゆまず上る宇治の河舟
作
三七春の田に心を作る山賤も植うる早苗ぞ色に出でける
因
三八種まきし春を忘れぬつまなれや垣ほに忍ぶ大和撫子
緣
三九年をへて子日になるゝ姫小松引にぞ千代の影も見えける
果
四〇袖の香をよそへて栽し橘も朝おく霜にみを結ぶまで

報
四一知らぬ世を思ふもつらき目の前に又歎つむ後の煙よ
本末究竟等
四二淺茅生やまじる蓮の末葉まで本の心の變りやはする
人の詠ませ侍りし化城喩品の歌
四三假の宿にたとふる法を仰げども暫し休めぬ身の愁哉
報恩會五百弟子品
四四戀しとてこがるゝ色も嵐吹く柞が原に入もやぞらで
同會人記品
四五諸共に思ひ染めける紫の縷の色も今日ぞ知らるゝ
大輔勸進住吉一品經法師品
四六尋ぬゆく清水に近き道ぞこれ御法の花の露の下かげ
報恩會提婆品
四七渡つみの底の玉藻に宿かりて南の空をてらす月かげ
報恩會勸持品
四八霧はれて行末てらす月影をよも更科とな詠めけむ
涌出品
四九いかにして初音は若鶯の深き野山の春をつげゝむ
分別功德品
五〇飛ぶ鳥のあすか川風それもかと袖吹返し花ぞ降しく
屬累品
五一たび撫づる我黑髮の末迄も讓る御法を永く賴まむ
亡父十三年の忌日に遺言に侍りしかば歌よむ人々すゝめて結緣經供養し侍りしに、嚴王品
五二此道を知べと賴む跡しあらば迷し闇も今日は晴けよ
律師猷因すゝめし法花經普賢品の歌
五三こち風に散しく花も匂ひきて驚のみ山の主をぞふ
母の周忌に法花經六部みづから書き奉りて供養せし一部の表紙に繪に書かせし歌、一卷
五四あはれ知れ春の其方をさす光我身につらき二月の空
二卷
五五惜まずよ曙かすむ春のかげこれも思の下のふるさと
三卷
五六乳公たづぬる峯も惑はまし假寢休むる知べならずば
四卷
五七みを委る山井の清水音近しさきだつ人に風や涼しき
五卷
五八女郎花うけゝる花の跡しあれば消し上葉に露亂うつ
六卷
五九照さなむ世々も限らぬ秋の月入る山の端に光隱さで
七卷

一七向はれよ木葉時雨し冬の夜を育くみ立し埋み火の本
八巻
二七曇劫の弘誓の海に舟わたせ生死の波は冬あらくとも
無量義經
三七願もしな光さしそふ盃を世をてらすべき始とやみぬ
普賢經
四七朝日かげ思へば同じ夜の夢われにしぼる東雲の露
心經
五七空しさを三世の佛の母ならば心の闇を空にはるけよ
無量義經の心を人の詠ませしに
六七渡し守出す舟路は程も有じ身はこの岸に霽晴すとも
住江殿にて供養すべしとて人のすゝめ侍りし解
脫房のためとて法花經大意
七七法の花菊の朝露やどり來てもらす數なき光をぞまつ
海路懷舊
八七かへりみば行方遙ふ知べせよ南の海の深きちかひに
舍利講歎の心を
九七消えせずな鶴のはやしの煙にも殘す光の露の形見は
金光明最勝王經王法正論品歌國內居人盛衰利益
〇八四方の海夜渡る月に戸さしせで曇なき世の御影をぞ知
亡き人の名を各とりて卒都婆供養すとて人のす
ゝめし歌、磐姫皇后
一八黒髪の長き闇路も明けぬらむ置迷ふ霜の消る朝日に
二條后
二八春かけて鳴く鳥の音に雪きえて光をそへよ曙のそら
高津內親生
三八木にもあらぬ竹の下根の憂節に空しき世々を先や悟らむ
齋宮女御
四八誘はなむ通ひし琴の音を添へて迎ふる西の嶺の松風
廣幡御息所
五八うつしおく蓮の上に磨かなむ垣ほに咲ける撫子の露
在原中納言
六八藻汐たれ歎きをすまの道變て憂世吹きこせ關の浦風
小野宰相
七八泣く涙別は雨とふりぬるも眞の道にかへれとぞ思ふ
衣通王
八八紫の雲間に今日や迎ふらむ待ちには待たぬ心通はゞ
大伴坂上郎女
九八心憂き里と知りにし戀なれば輪廻の霞今やはるらむ
中務

〇九忍ぶらむ涙にくもる影ながらさやかに照す有明の月
文治の頃般富門院大輔天王寺にて十首の歌よみ
侍りしに、月前念佛　非二傳教輩一依追善入在レ奥
一九西を思ふ涙にそへてひく玉に光あらはす秋の夜の月
草庵忘レ歸
二九止りなむ暮るれば宿る露のまも置所なき身は隱れ鳧
曉天懷舊
三九知ざりつ身は有明の盡もせず昔に做て忍ぶべしとも
薄暮觀レ身
四九消え果てむ煙のはてと眺むれば猶跡もなき夕暮の雲
旅宿波聲
五九鳧かじ夢の枕による波も聲こそかはれ袖は馴れにき
船中述懷
六九朝風の舟出にだにも忘ればやくがに沈める秋の心を
厭二離穢土一
七九濁江になほしも沈む蘆の根のいとふ節のみ茂き頃哉
欣二求淨土一
八九思ふかな咲きちる色を眺めても悟ひらけ打花の臺を
掬二龜井水一言レ志
九九もろ人の結ぶ契は忘るなよ龜井の水に刼はへぬとも
於二難波精舍一卽事
〇〇吹きはらへ心の塵もなにはがた清き渚ののりの浦風
道世の由聞きて　家長朝臣
一〇墨染の袖の匂ねて悲しきは背くに添へて背く世の中
かへし
二〇生ける世に背くのみ社嬉しけれ明日とも待たぬ老の命は
同じ時　按察入道
三〇君が入る誠の道の月の影夢と見し世を今やてらさむ
かへし
四〇闇深き浮世の夢のさめぬとて照さばうれし有明の月

拾遺愚草員外

拾遺愚草員外雜歌上

春

五〇新玉の年を一年かさぬとや霞も雪にたちは添ふらむ
六〇百る夜はまだ冬ながら月影の曇もはてぬ景色なる哉
七〇春日山照す光に雪きえて若菜ぞ春をまづは知りける
八〇過ぎがてにつめどたまらぬ唐裳うら若くなく鶯の聲
九〇深山路や霞は雪の上とぢてなほ雲うづむ草の庵かな
一一蟲の音は寢覺の夢に覺えつゝ秋の春にも成にける哉
一一めづらしき大宮人の梓弓はるのまとゐの跡を尋ぬ
一二軒端にぞまだ傳は見えながらさめゆく夢ゝ梅の匂に
一三春の夜の半のつきの月影の朧げならず身にもしむ哉
一四長らへむ命をいつと思ふにも後を待べき花の影かは
一五雁すみて心の限つくすらむ花に霞めるをちの山ぎは
一六窓越に花ふく風の過ぎねばあつめぬ雪ぞ袖に匂へる
一七闇ならば折りて歸らむ時の間に暮ぬる山の花の一枝
一八波の上も春は霞の中なれば櫻貝をぞまづはよせける
一九紀の國や吹上の濱の濱風も春はのどけく成ぬべら也
二〇歸る雁なれつる空の雲霞立ち別れなば戀しからじや
二一昨日まで馨りし花に雨すぎて今朝は嵐の玉ゆらの色
二二つゝじ咲く苔の通路春深み日影を分けて出づる山人
二三花ちりて後さへ物を思ふかな今幾日かは春の明ぼの
二四立歸る春の別の今日ごとに恨みてのみも年をふる哉

夏

二五程もなく去年の月日の廻合ひて又たちそへる白妙哉
二六友待ちし垣根の雪の色ながら夏をば人につぐる卯花
二七取敢ず過る日數の程もなく返しし小田に早苗植う也
二八來鳴くなるしげみが底の時鳥心の松の色や分くらむ
二九住みぬや岩もる清水手に汲て夏よそげなる松の木の下
三〇苦びさし煙は絕えて程過ぎぬ雲と波との五月雨の空
三一此頃は賤が伏屋のかきならひ涼しく咲ける夕顏の花
三二檜の葉のそよぐ一木の下蔭に契らでつどふ村の里人
三三月待つといはでぞ誰も詠つる闇には疎き夏の夜の空
三四はかなくも命にかふる思かなと計見まし夏蟲の身を
三五夏の夜はうき曉の雲もなし心のそこに月はやどりて

秋

一己れのみ砕けて落つる岩波も秋吹く風に襲変るなり
二近しとも秋の景色の見ゆるかな亂るゝ盤山の嶺の月
三連さくあたりの風も薫りあひて心の水をすます池哉
四何となく惜まで過ぐる月日にも物哀なる夏の暮かな
五龍田山一葉おち散る夏蔭も思初めてし色は見えけり
六鹿の聲嵐の風もおしなべて秋のあはれは山近きいほ
七須磨の浦の秋吹風に雑住て藻汐たれけむ跡は悲しも
八捨てつとも厭ふ心や弱るべき秋より後の月の此夜は
九露立て木の葉は下に色づきぬ夜深る月の末を數へて
一〇二度と逢見むよゝを頼む哉いへば悲しき秋の夜の月
一一散にけり離の萩の葉のみして露より上に月ぞ殘れる
一二始なき月の行方に身をかへてさらば心の果を知ばや
一三刈萱の傍きつゆのさ計も秋としいへば袖にこぼれぬ
一四松風の聲きにたぐふ唐衣打絶えて唯ねこそなかるれ
一五はし鷹やならす狩場に日は暮れて草の枕も花の色々
一六霜うづむ尾花が下の枯間より色珍しき花のむらさき
一七物思はでせかるゝ袖もなかりけり檜の外の秋の色哉
一八見渡せば四方の梢に紅葉して秋を限の山おろしの風
一九契りつゝ絞る涙もかばかりぞ空に過ぎぬる秋の別に

冬

二〇晴れ曇る空は時雨の心かはまがふ木の葉も同じ木枯
二一傳にだに人のとへかし神無月紅葉に閉る草の戸ざしを
二二夢ぢだにまだ結ばずよさゝ枕ふしん定めぬ時雨霰に
二三雉子鳴交野の原に雪散てとだちも知ず荒るゝ今日哉
二四をしの居る氷の閇に風さえて心の底ぞまづは砕くる
二五殘りなく暮れぬる空の色がほに一葉曇らぬ冬の山哉
二六後の世の心も知らじ網代守冴たる空の月の夜なゝ
二七菅原や伏見の宮の跡ふりていくらの冬の雪積るらむ
二八淡入りの霞間の氷けさとおて障らず船も通はすな
二九風さやぐ猪名の笹原雪降て道こそ絶えね音も絶ぬる
三〇まだ深き有明の空も天ざりて雪にくまなき遠近の峯
三一浮寝する鴨の上毛に降る雪を重なる年の數に見る哉
三二簡井づの井筒の垂氷解けぬ間に程なく暮る冬の影哉
三三皆人の春を迎ふる心こそ年の暮れぬるけしき也けれ
三四日も暮れぬ今年は今日を限にて哀我世も知らぬ物故

戀

三五大方に消てやまむ人知れず頼む契の其も知らねば
三六物思ふ袖のよそめは著く共さぞとは誰か君に傳へむ
三七形見かは唯よそ乍ら其とみて出來し宿の軒の草葉は
三八今日は又有しよりけに音をぞ鳴蟲だに添ひしよその俤
三九句ふには更に物こそ悲しけれ梅さく春と人や頼めし
四〇ことぞとも無て別しよはの空月さへ飽ぬ袖に止りて
四一人知れぬ涙の底の水屑よりうき出でゝ惑ふ我が心哉
四二我ばかりつらき契は又もあらじ心のあたの報一つに
四三久くも逢で過べき月日とは懸ても知ず知らば云まし
四四手に掬ぶ程だにあかぬ山の井のかけ離行く袖の白玉
四五移るはむ色を限に御室出しぐれも知らぬ世を頼む哉
四六散り積る枕も知ず袖朽て拂ひなれたる夜床ならねば
四七請北に見し世の月を詫言にて空に心の行方待つとも
四八昔に立てぬ思に燃し秋の夜もまだか計の露は絞らず
四九末の松待夜は明て變る共越すてふ波の聲し立てずば

雜

五〇明けにけりかざして出づる山嶋人も見るべき光計に
五一かきすさぶ藻汐の煙とだえして哀を殘す浦の夕かぜ
五二篤かへで茂る山路の村時雨たび行く袖に色移りけり
五三君にのみ思ひはかこつ袖なれど拂ひも敢ぬ山の露哉
五四はまゆふや重なる山の幾重ともいさ白雲の底の面影
五五釣舟や月に棹さす海士人を頼みても來ぬ旅の寝覺に
五六行歸り波の上にや年へぬる憂たる身をば且恨みつゝ
五七深き夜に急ぐ袂の露けさは草の枕のわかれなりけり
五八かり衣雪打ち拂ふ夜をかさね萎れにけりな移る色々
五九知ざりし尾上の松にめを懸て過つる里の程を知る哉
六〇思ひやる君が八千代を三笠山心の末の知べたがふな
六一百敷や照日の前にとる矛のたつる心は神も見るらむ
六二古き跡をみゆつる方の許多あらば執の山に庵占まし
六三心とて我か物がほに頼めども逐の栖の行方やは知る
六四年をへて心の空にかゝれどもあはれ隔つる峯の雲哉

聖日更書二出一句一百句五時詠レ之

第一　第二　第三
第四　第五　追巡

春三十首

六五春くれば いとゞ光を添ふる哉雲居の庭も星の宿りも
六六我が宿に今日の子日の松植て風まちつけむ末の夏陰
六七さてもなほ轉ねてとはむ霞たつ都のたつみ山の遠方
六八とひこかし一夜二夜のへだてぞも鶯きゐる宿の呉竹
六九幾年をつめども更に變らぬは御垣か原の若菜也けり
七〇雪消ぬ木の間の日影薄けれど中々花とまづ見ゆる哉
七一吹迷ふ梅の匂に袖占てをられぬ水も今日はわかれず
七二こきまぜる錦おれとや青柳の縷の糸をまづは染らむ
七三さもあらぬ草葉も春は見馴けり早厭あさる山の便に
七四移り敢ぬ時雨にだにも袖濡す深山の里の今日の春雨
七五櫻花心に散らぬ色ながらいく春夏をうらみきぬらむ
七六荒にけるさはべの駒の景色かは春の淺茅のめぐむ放郷
七七かき列ねこし玉章の歸る雁わが物からに誰忍ぶらむ
七八これまでも心々はわかれけり苗代水も己がひき〳〵
七九頼めおきし人まつ風のさよすみて思に通ふ喚子鳥哉
八〇桃の花ながゝゝ色をしるべとて波にしたがふ春の盃
八一頼むかな咲ける藤波春をへて南の岸の日かげ照さば
八二思ふどち春の形見に望つむ野原の園居雨ぞそぼふる
八三いつしかも都の人に言づてむ井手の山吹いまぞ盛と
八四思ふこと誰にのこして詠めおかむ心にあまる春の曙
八五きゝすなく交野の真柴宿かりて霞になるゝ春の夕暮
八六住侘びてあがる雲雀の著き哉まだ陰もなき春の若草
八七澤潟や下葉に交るかきつばた花踏分けてあさる白鷺
八八今宵ねて暫しも馴れむ常磐山いは躑躅咲く峯の通路
八九幾度か我が君が世にあらためむ影ものどけき玉椿哉
九〇佐保姫の心の色に見ゆるかな花も霞もはるの山ざと
九一足引の山梨の花散敷きて身を隠すべき道や絶えねる
九二年をへて馴けむ宮のつばくらめ怨や絶て後も幾春
九三みくりはふ汀の眞菰うちそよぎ蛙なくなり雨の暮方
九四鳥はくも花は隨ふ色つきて風さへぬる春の暮がた

夏二十首

九五夏衣たつは霞の隔なれや春の色をもへだてつるかな
九六山里は卯花がきね雪をれて杉ふく庵ぞ青葉なりける
九七雲の上の千代の御影に葵草神の恵みをかけてまつ哉
九八清水せゞ森の木陰に日はくれぬ山郭公此瀬過ぐすな
九九今日といへば逢の若葉刈添て宮も葉屋も真蒲葺くも
一〇〇早苗とる田子の小笠の騒ぐ哉打散る雨や降増るらむ

一四あくがれぬ花たちばなの匂故月にもあらぬ轉寢の空
一二雲せきて三笠越行く五月雨に眺めは絶ぬ人も通はす
一三疑ひし心の秋のかせたえば螢とびかふ空につげこせ
一四東屋のさせる戸ざしも夏の夜は明るを叩く水鶏也鳧
一五照射するは山しげ山露深し亂れやしぬる信夫もぢ摺
一六山里は蟬の諸聲秋かけてそともの桐の下葉おつなり
一七眺めやる籬の庵のかやり火の煙もすゞしおろす山風
一八移香の身にしむばかり契とて扇の風のゆくへ尋ねむ
一九あだに置露さへ玉と磨かれて植しかひある常夏の花
一〇紫陽花の萎れて後に咲く花の唯一えだに秋の風まて
一一月さゆる池の蓮に玉越えて此世ながらの光をぞまつ
一二夏乍ら秋風立たぬ氷室山そこには冬を殘すと思へど
一三待たれすよ秋の初風幾日とも掬ぶ泉に水馴そなれて
一四まだきより麻の立枝に秋かけて袂すゞしき夏祓へ哉

秋三十首

一五秋きぬと露や楢に洩すらむ風よりさきに袖の萎るゝ
一六遮莫たなばたつめになりみばや年に一夜ゝ秋の初風
一七色に出でむ心も知す秋萩の露につゆおく宮城野の原
一八梶子のいはで物思秋の夜は女郎花にや色をかこたむ
一九皆人の心にしのぶ秋の野をほに出でゝ靡く花薄かな
二〇刈萱の茂み分來し故郷は逢はでもいなむ心みえねば
二一吹き迷ふ萩の上風結ばゝれ秋かとつぐる暮の空かな
二二ぬぎおきし形見も知らす藤袴嵐の風の色にまかせて
二三秋風にたへぬ草葉はうらがれて鶉なく也小野の篠原
二四木の葉吹く風の心になびきゝて枕にかはる日暮の聲
二五秋の田の仄に露の色わきてまだき悲しき夕月夜かな
二六今はとて鳴も立つなり秋の夜の思の底に露は殘りて
二七眞葛はふ生田の奥の秋風にやがて色づく袖の上かな
二八しのばれぬ枕の下の涙かな尾上の鹿の聲きゝしより
二九東雲の別の露を契りおきて形見とやめぬ朝がほの花
三〇初雁の聲きゝそむる此の頃の空ならはする朝霧の色
三一今宵たれ野邊の白露まづ分けて下葉に月の影類ふ雲
三二深山路や峯にも尾にも霧立て待人もなし訪人もなし
三三漢汐やく海士の苫屋に秋深けて衣うつなり須磨の曙
三四三笠山くもゐを出る影そへて今日引分くる望月の駒
三五秋の月千代を一夜に詠むとも偖とや明る空を惜まむ
三六夜を重ね機おる蟲の急ぐかな草の秋に露やさゆらむ
三七別れなむ行方やいかに蓼秋は寢ざめの友とたのみて

三八鳥部山ふりゆく跡を哀とや野邊の鈴蟲露に鳴くらむ
三九龍田山すそのゝ嵐露ふけばやがて亂るゝ松蟲のこゑ
四〇いなづまの光も今は弱りけり田面の風の聲は變らで
四一打そゝぐ秋の急雨ひやかにて風にさきだつ下の浮雲
四二花を思ふ心もつきぬ白菊のまだ露置ぬ色を見しより
四三年をへて由なき秋の暮にみて紅葉の色の恨めしき哉
四四改めて又咲くにやは惜むべき恨みなれたる秋の別を

冬二十首

四五神無月同木葉の散る音も今日しも名殘なき心もして
四六時の間にしぐるゝ空の雲過て又誰が里に袖濡すらむ
四七よをへては野べの草葉に置霜の消れば色の枯增る哉
四八嵐だにかごとがましき深山邊に霰ふるなり嶺の椎柴
四九降初めて下葉おもりし松が枝を梢も堪へず積る白雪
五〇萎れ草のほするの色に秋過て雪ぞとゞまる遠近の岸
五一友碁ふ千鳥なくなり領布ふりし松浦の山の跡の潮風
五二傳ひこし筧の清水氷柱ゐて袖にぞ出づる冬の夜の月
五三下の思上毛の氷くだくらし浮寢の鴨のよはに鳴く聲
五四いかゞする枕も床も氷にて月もり明す潮々の網代木
五五蘆たづの聲ぞ雪居にきこゆなる玉の臺は霜深くして
五六深き夜に少女の姿かせとぢて雲路にみてる萬代の聲
五七散る雪にみとはすみて少女子の袖の色增す百敷の庭
五八雉子立つ行手に人の栞る哉狩場の小野の柴の立枝を
五九幾千代と限もしらぬ雲の上に遙かにすめる朝倉の聲
六〇炭竈の煙の下に積むものは寒きをねがふ歎き也けり

一年くれて佛のみなを聞く時は積れる罪も殘あらじを
二うち匂ふふせごの下の埋火に春の心やまづ通ふらむ
三門毎に千代の春とやいはふらむ松きる賤の己が樣々
四春秋やことぞともなきすさびにてさも徒に積る年哉

建久二年六月月あかゝりし夜ふくる程に大將殿よりいろはの四十七首を遣して御使につけて奉るべき由侍りしかばやがて書きつけ侍りし

詠二四十七首和歌一

權少將

春十首

五〇いつしかも霞める空の景色かなたゞ夜の程の春の曙
六〇ろうの上の秋の望は月のほど春は千里の日暮のそら
七〇春きても谷の氷はまだ解ずさは思分ぐ鳥の音もがな
八〇匂ひきぬまた此の宿の梅の花人あくがらす春の明幕
九〇はの〳〵と霞める山の峰續き同じ煙の聲ぞ恨むる
一〇へて見ばや瀧の白糸いは越えて花ちり殘る春の山里
一一常磐なる緑の松の一しほはにはは花の匂なりけり
一二散紛ふ花に山路は埋れぬ誰かき分けて今朝をとふ鶯
一三うもんの瀧にふりこし雪計雨にまがひて散る櫻哉
一四脱更へむ明日の衣の色も惜し痛くは馴れじ花の匂に

夏十首

一五瑠璃の池に夏の色をばかへてけり山の緑を映す池水
一六をの山やまた冬籠る雪とみて卯の花わくる谷の細路
一七忘られぬ去年の古聲こひ〳〵てなほ珍しき時鳥かな
一八爵しもて頼を懸くる葵草てる日の影に幾世なるらむ
一九寄返る波のひゞきに秋かけて夏は通はぬ磯の松かせ
二〇頓ひかな遠の露に契おきて消えなむ後の玉の行方を
二一れいよりも今夜涼しき嵐かな秋まつ陰の山の井の水
二二袖かるき蟬の羽衣なれ〳〵て秋の初風たち別れなば
二三積りける夏の日數を厭ひつゝ思へば年の半過ぎぬる
二四疑ぬ夜のみ明し夜頃の儚さも唯今日はつる六月の暮

秋十首

二五何となく物ぞ悲しき秋風の宿かりそむる庭の荻はら
二六らいし拜む唯秋秋の一枝も佛のたねは結ぶとぞ聞く
二七紫のつゆに匂へる花よりも色むつまじき女郎花かな
二八鶉なく眞葛が原の露わきて袖にくだくる秋の夕ぐれ
二九ゐな山の山の雫も色づきて時雨も待たず更くる秋哉
三〇後にまた誰か來て見む谷川やむすぶ雫に紅葉散る山
三一をりごとに哀もよほす離かな秋のする葉の菊の白露
三二暮にける惜むかひなく行秋にまだ見ぬ程の長月の月
三三やきにやく秋の入江の稻哉夕くれなゐを分くる山風
三四又は見し秋をかぎりの立田山紅葉の上に時雨ふる頃

冬十首

三五煙さへ目にたつ今朝の住ひ哉梢あらはに晴るゝ山里
三六冬來ぬとつげの枕の下さえてまづ霜こほる轉寢の袖
三七越の山又此頃のいかならむなべての峰にそゝぐ初雪
三八江の南若葉のくさも緑にて春のかげなる神無月かな
三九寺々に同じく撞く鐘の音に今年も冬のまづ聞ゆらむ
四〇跡絶て落ちし木の葉に雪降ぬ誰計はと待つ人もなし
四一佐保河の瀬々の岩浪ふみしだき氷に侘ぶる小夜衣哉
四二雉子なく狩場の雪に假寢せむそだのふし柴靭宿かせ
四三雪おもる松の響きを友として山路も冬も深き宿かな

四氏 廻合ふ程なき今日は許多へぬ偕幾年を迎ふべき身ぞ

戀七首

四四 水莖のはかなき跡を知べにて今日せきかぬる袖の柵
四五 敷妙の枕の下にみなぎりてやがてもくだす涙河かな
四六 綰にかける鳥とも更に見馴じな羽を雙ぶる契無ければ
四七 久しくもなりにける哉假初と契りし儘の世の儚さは
四八 諸共に絞る涙の色なれて誰かおくるゝ袖はくたさむ
四九 C五 せめて思ふ今一度のあふ事は渡らむ河や契なるべき
一五 捨てやらず猶立歸る心まで思へばつらき世々の契を

この歌を越中の侍從見てやがて書きつけて遣したりし返事に又

春十首

二五 發返り山も霞みて年ふらむ春立つ今朝の三吉野の原
二六 ろくやをん照す朝日に雪消えて春の光もまづや導く
二七 二八 初音なけ今は鶯の谷の戸を閉たる雪のふるす也とも
二九 三〇 濁江に生る眞菰をあさるとて影にも駒の離れぬる哉
三一 三二 星の影の西に廻るも惜まれて明なむとする春夜の空
三三 へりも糸も絕えたるみすの際も皆花に埋める吉郷の春
三四 三五 鳥の音も花の香りも春ながら眺めはれせぬ逢生の宿
三六 三七 契らねど人の待たるゝ夕哉猶花殘る今日のたつみに
三八 C六 りちの歌にとの音あへる夕ぐれ片糸簾く庭の青柳
三九 一六 沼水のあたりも匂ふ杜若今日のみ春と見てや返らむ

夏十首

二流轉するみつの境の似たる哉惜みし春も別れぬる夏
二一 二二 緒を絕えて亂るゝ玉と見ゆる哉雨の名殘の卯花の露
二三 二四 我のみや聞きて語らむ郭公まだ里なれぬ暮の一こゑ
二五 二六 假初のつまとは見れど蒲草軒の匂に幾夜なるらむ
二六 二七 よきて吹け花たちばなの下風に匂も色もさそふ涙を
二八 二九 尋ねつる岩井の清水岩越えて結ばぬ袖に秋風ぞ吹く
三〇 三一 れいの聲かねのひゞきも秋近し庵も寺も山深くして
三二 三三 染めぬより時雨まつらし大堰河嵐の山の夏の木の本
三四 三五 釣舟にはかなくあかす旅人のうきね涼しき夏の短夜
三六 一七 ねに返る花を恨みし春よりも形見とまらぬ夏の暮哉

秋十首

二八 波路より秋や立つらむ須磨の關朝けの空に變る浦風
二九 三〇 羅のへうし紐の玉ゆらとき風は天の河原に雲や捲らむ
三一 三二 結ぶ露荻ふく風のいろごとに心みだるゝ眞野の萩原
三三 三四 浮雲の色さへかはる月影の袖に露おく秋は來にけり

三五 井筒より馴れこし髮の長き夜を獨かきやる秋の手枕
三六 三七 殘なく散りなむ後のいかならむ下葉色づく萩の白露
三八 惜侘び心もつきぬ夜を重ね月傾ぶけば秋もとまらず
三九 繰返し幾秋風にたぐふらむ正木のかづら色變りつゝ
四〇 關ぞうき秋を限と眺めても月に別るゝ形見なりせば
四一 松風はたぐふ木葉もなき物を秋の殘らぬ聲聞ゆらむ

冬十首

二八 けたずとも儚く置ける露をだに秋の形見は拂ふ木枯
二九 三〇 深き夜の檜の葉分に傳ひ來て時雨にかへる夢の通路
三一 三二 この內の思も冬やまさるらむ霜に迷へるつるの諸聲
三三 三四 えこそ見ね打臥す程の夢をだに嵐にわぶる稚の下蔭
三五 三六 蝶のゐし花はさながら霜かれて匂ぞ殘る菊の眞垣に
三七 三八 葦鴨の騷ぐ入江に永柱ゐて重なる霜の幾重さゆらむ
三九 四〇 さしかへる宇治の河長袖ぬれて雫のほかに拂ふ白雪
四一 四二 昨日けふとはゞとへかし雲冴て雪散初むる峯の松風
四三 C九 由良のとの潮風烈し舟渡り冬をばすごせ後も逢見む
一九 廻りつゝ雪にひらくる梅が枝の下の匂に春ぞ通へる

戀七首

二九 陸奥の信夫もぢ摺亂れつゝ色にを戀ひむ思染めてき
三〇 下にのみ戀やは更に山城のみつのゝ眞菰假寢也とも
四九 ゐぐしのさしても馴れぬ名殘故豐明の影ぞ戀しき
五五 引すゑて分かで馴こし梓弓却て人を戀むとやせし
五九 もりぬべし涙せき敢ぬ床の上に絕す物思ふ人の歎は
六七 瀨を早み岩きる波の世と共に玉散る計碎けてぞふる
八九 過て行く月日もつらし人知れず賴めし儘の中の契は
いろはの歌の後これも同じさまに御つかひを立て
ながらとりあへざりしいたづらごとにや

春五首

九九 雪のうちに春をきたりと知するは身の代衣梅の花笠
〇〇 春と云ば角ぐむ草のよの程を氣色にみする澤の春駒
一〇 淺みどり空になみよる絲ゆふに亂れて紛ふ窓の青柳
二〇 植ゑおきし梢の梅の春かぜを思ふもしるく來居る鶯
三〇 色に散る花に恨を盡させて雜面くよそに過ぬる鄰生

夏五首

四〇 脈はるゝ名をや立べき年をへて春を隔つる一重の衣
五〇 誰も皆下の思は安からじもてもかくさずもゆる夏蟲
六〇 また人の言とふ宿の籬かはよし跡たえねしげる下草
七〇 すだきけむ人こそ知らね古郷の昔は今に咲ける瞿麥
八〇 馴來つる扇の風もいかならむ夕の木々に聲はつる蟬

秋五首

一〇 秋よ又心のほかの思かな狹のうは風みねに鳴くしか
二〇 吹く風も置く白露も照る月の光にみがく春日野の萩
三〇 我れ過ぎばとはまし物を衣うつ音も仄に霧こむる里
四〇 秋の色の眼に滿てる住ひかな門田の鳴子外山の紅葉
五〇 咲氣なき外の紅葉の色も見し暫し吹きやめ散す木枯

冬五首

一一 櫻花惜みし暮もまだ近き面かげながらしぐれする冬
二一 涼みせし檜の廣葉を今朝もがな日影ふせかへ雪積る宿
三一 時しもあれ寂しき池の汀かな蘆の枯葉に友こふる鴛
四一 紫も猶朽ちはつる色かへて三度うつろふ霜がれの菊
五一 諸人のなやらふ音に夜は更て烈しき風に暮果つる年

建久七年秋の頃いたはる事侍りてこもり居たるタつかた大將殿より此の歌をかたみに置きて唯今と侍りしかば使につけて進らせし今見れば歌にてもなかりけり

六一 明方になるや秋風立ちそめていさゝか涼し夏の手枕
七一 桐葉のうれ吹風の夕ぐれそゞや身にしむ秋は來にけり
八一 遠さく池のゆふかせ夏はあれどよし一花の秋の瞿麥
九一 難波潟入江は月にゆづり置きて葦の穗末に移る白波
一二 折る人はいざ白菅の眞野の萩わが立濡るゝ露の錦か
二二 夢も見ず現も悲しをじか鳴く深山べつらき有明の空
三二 二人見し空ゆく月の似たる哉と思へば同じ秋の衣手
四二 又はこじ露拂ふ袖はさゝ分けて獨いるのゝ葉月長月
五二 繰り返し幾の苧環思へどもかへらぬ月ぞこの頃の月
六二 れんよする雲居のはしの秋の月心高くも澄み上る哉
七二 こす波もくだくる玉も凍るめり八十氏川の岩の月影
八二 杣山の秋のよそなる色も皆あらぬ暮には變るそら哉
九二 一三 頼まいし人いか計つらからむ跡なき秋の故郷のつゆ
二三 竹生ひて舟さしよする河むかひ霧のみ秋の曙のいろ
三三 長月の霜にさえ行く武藏野の緣に遠き草のもとかな
四三 らんせいの花の錦の面影に庵かなしき秋のむらさめ
五三 ねぬ夜のみ重なる雲の故郷に涙とぶらへ秋の雁がね
六三 落積る木の葉拂はぬ紅は寂しかるべき色ぞと思へど
七三 來まさずば宵の秋風暫しまてつれなき人に涙啼たむ
八三 殘りゆく命にそへて悲しきはとはれし月に向ふ秋風
九三 薄くこき紅葉を宿にこきませて己れ止らぬ山嵐の風
〇四 春のねやとぢてし苦は色ふりて秋の枕に浮ぶ月かげ

一四歸りこむ月日かぞふる淺茅生も今は末なる日暮の聲
一三堰止めて暫しも見ばや紅葉ちる秋を誘ひて出る山水
一二烈しさもこの頃よりよ立田山まつの嵐に紅葉亂れて
一一きしのまゝ茂みさ枝の遙分て袖を形見のそが菊の花
一〇野邊のほか四方の草葉も衰へて都の夢をむすぶ初霜
九知ばやな暮行く果を眺ても我が世に馴むる秋の契を
八たきすさむ藻汐の煙ほの〴〵と靡き靡かす秋の夕暮
七釣舟のうかぶ波路に月おいて人と秋との別をぞ思ふ
六行き歸る果は我が身の年月を涙も秋も今日は止らず

建久三年九月十三夜左大將殿に參りたりしかば餘に人々召し遣して今こむといひしばかりにといふ歌をかみに置きて詠ませられしにこれらは書きとゞむべき物にもあらねど筆をだに染めあへぬ亂りがはしさも中々やうかはりてやとて

五いかならむ外山の原に秋くれて嵐にはるゝ〻の月影
四まだきより暮行秋の惜ければ出るもつらき長月の月
三聲弱る蟲の鳴く音の友がほに風もすくなき檜の葉柏
二結びける契もつらし秋の野のすゝ葉の霜の有明の影
一幾返り紅葉きぬらむ柞原ちりしく木の葉秋を重ねて
引替る冬の景色の寂しさをまだきに見する秋の山里
知る知す宿わかるべき今宵かは秋風すさむ庭の月影
秋の葉の花なきそらの露の色月の情は猶おかれけり
雁がねの遙に名のる一聲も物思ふ袖の露ぞうけゝる
龍たんの花の色社咲そむれなべての秋は淺茅生の里
西の空いかなる關戸さし込て月と秋との影を留めむ
何事を思ふとも知らぬ涙かな秋の寢ざめの曉のとこ
かねてより思ひ一色に過ぎにけり嵐の山の秋の暮方
釣舟の遙にいづる波風に入江かなしき秋のくれかな
きの葉落ぬ草葉は枯ぬ何をかは山にも野にも人の詠めむ
殘りなく消えぬる雲の終夜まだた靡かぬ秋の夜の月
あたら夜と思ふ計に宿はいでぬ心の果は月の行方に
輪廻して偶々享くる人の世になほ秋の夜の月ぞ少き
あまた見し秋にも更に思ほえずか計すめる月の面影
煙立つ遠の篠屋のくぬぎ原その飾もなく秋ぞ悲しき
軒に生ふる葱の末に露までも秋にしをるゝ故郷の空
盡きはつる秋の思に磐きあひて枕に寒き鐘の聲かな
きて訪はぬ人のあたりをさは見ばや獨我住里の秋かと

己のみ秋をばよそに御室山岩むす苔に時雨ふれども
眞野の浦入江の波に秋暮れてあはれ寂しき風の音哉
散る木の葉重なる霜に跡もなし山路の奥の秋の通路
今更に添ふべき秋の日數かはとむりもなき物恨み哉
照りかはる紅葉を峯の光にてまづ月ほそき有明の山
妻こふる鹿の心もいかならむ己が聲さへかぎる秋風
瑠璃の水にしきの林いろ〳〵に心うきたつ秋の山川
唐國の昔の人もたへざりし秋のあはれは誰か忍ばぬ
なべてにぞ皆言葉は成ぬべきまだ見ぬ月の秋の光を

いろは文字くさり同じ頃の事にやいづれももとの御歌にかへむとすれば色々もいとゞありがたくや

十五首和歌

木 國富める民の竈の煙にも外山の木々の本ぞ知らるゝ
火 深き夜のみちにさきだつ松の火の光をくゞる契計や
土 湧初めし始も知らず荒金の土より成れる四方の海山
金 露さえて月影白き風のうちにおのが秋なる鐘の音哉
水 行くへなみ山の雫の露ばかり流るゝ水の末のしら浪
東 朝日さす岸の青柳うち靡き春くる方はまづしるき哉
西 都より尋ねいく野の花薄ほのかにてらす三日月の空
南 去年たてし岸のかひある藤波の靡て共に思ひやる哉
北 日影見ぬ此方の軒の陰の雪山の趣路は空に知られぬ
中 秋の夜の影傾ぶかぬ望月のとまりは空の最中なり鳧
青 川竹の葉ごしの色にまがふかな玉の簾にかくる葵は
黄 枝かはす岸の山吹花散りて黄金の露に波ぞこえける
赤 時雨つる雲も日影に染められて紅葉をおろす嶺の風
白 白雲の八重たつ峰の山ざくら空にもつゞく瀧つ川
黒 烏玉の闇の現に掻やれどなれてかひなきとこの黒髪

大將殿にて秋の頃宵の僧の經よむを聞きて例の

この文字をかみに置きて秋の歌

夏過ぎぬと思ふ計の朝げよりやがて亂るゝ袖の露哉
求ても秋より外の宿もがなことぞともなき袖や乾くと
めぐみぬと見れば暮にし春の草風に靡く秋は來に鳧
海山も知らぬわかれの袖の上に梢もやがて秋の夕暮
ほのかなる霧よりもちの秋風や思ふ行方の竹の一村
うつ音も過行く跡におくらさで秋の衣の袖慕ふらむ
れさんの裾野の小田の秋風や靡きし人の始也けむ
昔をば夢にのみこそ逢見しか唯そのまゝの袖の月影
暮れにけり又この秋の花薄ほのめく霧に霜むすぶ迄
衡士の焚く煙ばかりは遮莫くもゐの月の秋風のそら
菊咲て木の葉も落ぬ是ぞ此の今年も同じ秋の難面さ
やすらはで寢なまし月に我馴れて心づからの露の曙
うく紅葉玉散瀧々の色染て戸無瀬の瀧に秋も止らず

或る上人文集の詩を題にて歌よまむと思ひ立つとあり結緣すべき由すゝめ申されしかば老の後のいたづらごと書きつけて遣しゝ

春十五首

今日不レ知誰計會、春風春水一時來

一氷とく人の心やかよふらむ風にまかする春の山みづ
春風先發苑中梅、櫻杏桃李次第開
二咲きぬ也夜の間の風に誘はれて梅より匂ふ春の花園
白片落梅浮二澗水一
三白妙の梅咲山の谷風や雪げにさえぬ瀨々のしがらみ
黃梢新柳出二城牆一
四此の里の向ひの村の垣ねより夕日をそむる玉のを柳
春來無レ伴閑遊少
五思ふとちもれこし春も昔にて旅寢の山に花や散らむ
鶯聲誘引來二花下一
六衣手に亂れて落つる花のえやさそはれ來つる鶯の聲
逐レ處花皆好、隨レ年貌自衰
七宿ごとに花の所はにほへども年ふる人ぞ昔にも似ぬ
遙見二人家一花便入、不レ論二貴賤與一親疎一
八遙なる花の主の宿とへばゆかりも知らぬ野べの若草
花下忘レ歸因二美景一

九一時しもあれ越路を急ぐ雁がねの心知られぬ花の本哉
落花不レ語空辞レ樹
〇二山吹の色より外に咲花もいはで降りしく庭の木の本
花落城中池、春深江上天
一春の空入江の波にうつるいろ都も深く花や散らむ
背レ燈共憐深夜月、踏レ花同惜少年春
二二作けつる窓の燈火深き夜の霞にいづるささらぎの月
歳時春日少
三徒に春日少き一とせの誰がいつはりにくるゝ昔の根
留レ春春不レ留、春帰人寂寞
四恨むとてもとの日数の限あれば人も頼に春も止らず
厭レ風々不レ定、風起花蕭索
五春のゆく梢の花に風立ちて孰れの空を止るともなし
夏十首
微風吹二袂衣一、不レ寒復不レ熱
六立かふる我が衣手の薄ければ春より夏の風ぞ涼しき
新葉陰涼多
七陰茂き梢の葉柏日に舒ひて窓より西の空ぞすくなき
廬橘子低山雨重
八村雨に花たちばなやおもるらむ匂ぞおつる山の雫に
池晩蓮芳謝
九風わたる池の蓮の夕月夜人にぞあたる影もにほひも
風生竹夜窓間臥
〇一風さやぐ竹の夜長に臥馴れて夏に知られぬ窓の月哉
青苔地上消二殘雨一、緑松陰前逐二晩涼一
一夕立の名殘の露をそめすてゝ苔の緑に暮るゝ山かげ
可是禪房無二熱到一、但能心静即身涼
二二嵐山すぎの葉かげの庵として夏やは知らぬ心こそすめ
暑月貧家何処有、客来唯贈北窓風
三三吹送れ窓の北風秋かけて君か御衣の身にやしまぬと
蕭颯風雨天、蟬聲暮啾々
四四空蟬の夕の聲はそめかへつまだ青葉なる木々の下蔭
夏風二北窓風一、枕席如二涼秋一
五五宿からに蟬の羽衣秋や立つかせの手まくら月の狭筵
秋十五首
夜來風雨後、秋氣颯然新
六六佗の雨の聲吹き殘す松風に朝げの袖は昨日にも似ず
園扇先辞レ手
七七敏鷹をたならす頃の風立ちて秋の扇ぞ遠ざかりゆく
大底四時心惣爺、就中断腸是秋天
八八櫻ばな山郭公ゆきはあれど思をかぎる秋は來にけり
八月九月正長夜、千聲萬聲無二了時一
九九長月を待つより長き秋の夜の明くるも知す衣うつ聲
遅々鐘漏初長夜、耿々星河欲レ曙天
〇〇鳥の音も年もふ計待ちし夜のなきてもながき曉の空
相思夕上松臺立、蚤思蟬聲滿レ耳秋
一一夕暮は物思増るきり〳〵す身をかへて鳴く空蟬の聲
殘影燈閨レ壁、斜光月穿レ牖
二二我が蓋ふ人は訪こす窓越に月さし入りて秋風ぞ吹く
黄茅岡頭秋日晩
三三誰もさや心の色のかはるらむ岡の淺茅に夕日さす頃
月曜雲樹外、螿飛廊宇間
四四しぐれゆく空の梢の山のはに夕たのむる月も止らず
凝レ日暮山青簇々、浸レ天秋水白茫々
五五山をこそ露も時雨もまたそめぬ空の色なる秋の水哉
寒鴻飛急覺二秋盡一、隣鶏鳴遅知二夜永一
六六槇の屋に隣の霜は白妙のゆふ付鳥をいつか聞くべき
老菊衰蘭雨三朝
七七ふちばかま嵐のくだく紫に又白菊のいろやならはむ
不レ堪二紅葉青苔地一、又是涼風暮雨天
八八苦むしろ紅葉ふきしく夕時雨心もたへぬ長月のくれ
葉聲落如レ雨、月色白似レ霜
九九雫ばかり木葉の雨はふるさとの庭も雌も月のはつ霜
萬物秋霜能懐レ色
〇〇下草の時雨もそめぬ枯葉まで霜こそ秋の色は殘さね
冬十首
十月江南天氣好、可レ憐冬景似二春美一
一一此の里は冬おく霜の輕ければ草の若さぞ春の色なる
寒流帯レ月澄如レ鏡
二二山水にさえゆく月の増鏡凍らずとても流るともみず
策々窓戸前、又聞新雪下
三三初雪の窓の呉竹ふし乍らおもるうれ葉の程ぞ開ゆる
爐火欲レ消燈欲レ盡、夜長相對百憂生
四四曉は影よわりぬる燈火になが思ぞひとり消えせぬ
唯有數枝菊、新開離落間
五五咲く菊のいまはの霜におきとめて殘る雌の白菊の色
南窓背レ燈坐、風竹晴紛々
六六風の上に星の光は匹え乍らわざともふらぬ窓をぞ聞
寂寞深村夜、殘雁雪中聞
七七里遠き園の村竹ふかき夜の雪の雲間を渡るかりがね
望レ春々未レ到、可レ在二海門東一
八八清見潟あけなむとする年波の關戸の外に春や待らむ
雪盡終南又欲レ春
九九いたづらに日數ふりつむ山の雪明しくらさば春の曙
白頭夜禮佛名經
〇六年ふれば我が黒髪も白糸のよるは佛の名を唱へつゝ
戀五首
誰爲拂二床塵一
一荒れはてぬ拂はゞ袖の憂身のみ哀れ幾夜の床の浦風
夕殿螢飛思悄然、秋燈挑盡未レ能レ眠
二くるゝと明と胸のあたりも燃付きぬ夕の螢夜はの燈火
行宮見レ月傷心色
三淺茅生やどる涙の紅におのれもあらぬ月の色かな
夜雨聞レ猿斷腸聲
四繼ひでなく高嶺の山の夜の雨に思ぞまさる曉のこゑ
舊枕古衾誰與共
五床の上に古き枕も朽果てゝ通はぬ夢の遙ざかりゆく
山家五首
從レ今便是家山月、試問清光知不レ知
六知るや月宿占初むる老らくの我山の端の影や幾夜と
始知天道空閑遶、不レ爲二忙人富貴人一
七明暮す人の習をよそに見て過る日影も急ぎやはする
廬山雨夜草菴中
八靜なる山路の庵の秋の夜に昔戀しき身のみふりつゝ
人間榮耀因緣淺、林下幽閑氣味深
九荒しおく田面の葉草茂りつゝよの昏みの外や住憂き
山秋雲物冷
〇七秋山のいはほの枕尋ねてもゆるさぬ雲ぞ旅心ちする
舊里　附憶舊五首
前庭後苑傷二心事一、只是春風秋月知
一大空の月こそ殘れ住みなれし人の影見ぬ軒の草葉に
蒼苔黄葉地、日暮旋風多
二秋風は紅葉を苔に吹敷けどいかなる色と物ぞ戀しき
挿レ柳作二高林一
三なほざりに挿しゝ柳の一枝や光こだかき夕暮のいろ

閑日一思舊、舊遊如二目前一

四七面影にたゝ目のまへの夢ながら歸らぬ昔あはれ幾年

唯將二老年淚一、一灑二故人文一

五七人忍ぶ老の涙の玉章を形見と見ればいとゞふりつゝ

閑居十首

但有二雙松當二砌下一、更無二一事到二心中一

六七我宿の砌に立てる松の風それより外は打も待たれず

山林太寂寞朝闕苦喧煩唯茲群同内幕靜得二中間一

七七足引の山路にはあらず徒然と我身よにふる詠する里

偶得二幽閑境一、遂忘二塵俗心一、始知眞隱者、不二必在一山林一

八七爪木こる宿共なしに住果つる己が心ぞ身を隱しける

更無二俗物當一人眼一、但有二泉聲洗二我心一

九七世の憂さも離れて落る瀧の音に心の底も今ぞ澄ぬる

盡日座復臥、不レ離二一室中一、中心本無レ繫、亦與出二門同一

〇八あくがるゝ心一つぞさしこめぬ槇の板戸の明暮る空

進不レ厭二朝市一、退不レ戀二人寰一

一八里近き栖を分きて慕はねど仕ふる道を厭ふともなし

深閉竹間扉靜掃松下地猶嫌晩風前何人知二此意一

二八夕まぐれ竹のは山にかくろへて獨やすらふ庭の松風

頽愁環堵客、蘿蔥爲二巾帶一

三八あらはれて浮世隔つる色やこれ山路に深き苔の狹衣

心足卽爲レ富、身閑仍當レ貴、富貴在二此中一、何必居二高位一

四八歎かれず思ふ心にそむかねば宮も蓑屋もおのが樣々

看レ雪尋二花翫一レ風月一、洛陽城裏七年閑

五八人とはぬ月と花とに明くれて都ともなし年々の空

述懷十首

置二心世事外一、無レ憂亦無レ喜

六八心から包むも袖のよそなればくたす計の物も思はず

欲下留二年少一得中富貴上、富貴不レ來年少去

七八さり共と待來し程は杉の戸に積れば人の月ぞ古ゆく

春去有二來日一、我老無二少時一

の古巣は更に霞めどもうき老らくの返る日ぞなき

我有二一言一君記取、世間自取苦人多

八八瞻なき海士の釣繩うちはへてうきも沈みも哀れ世中

九八從導人生都是夢、夢中歡哭亦勝レ愁

〇九大方の憂世に永き夢の中も戀しき人を見ては賴まじ

生死尙後レ愁、其餘安足レ導

一九魂きはる命をだにも知ぬ世に云にも足ぬ身をば歎す

身心一無レ繫、浩々如二虛舟一

二九浦風や身をも心に任せつゝ行く方やすき海士の釣舟

委二形老少外一、忘レ懷死生間

三九起ふしも人の尤めぬ床の上は長きも知ず秋の夜の霜

我若未レ忘レ世、雖レ閑心亦忙、世未レ忘レ我、雖レ退身難レ藏、我今異二於是一、身世交相忘

四九世中も厭ふ心も軒に生ふる草の葉深く霜やおくらむ

人生無二幾何一、必寄二天地間一、心有二千載憂一、身無二一日閑一

五九下咽ぶ色や緑の松風の一日やすめぬ身をしぼりつゝ

無常十首

親愛自零落、存者仍別離

六九武藏野の草葉の露も置きとめず過る月日ぞ永き別路

逝者不二重迴一、存者難二久留一

七九返らぬもとまり難きも世中は水ゆく川に落る紅葉ば

往事眇茫都似レ夢、舊遊零落半歸レ泉

八九見しは皆夢の直路にまがひつゝ昔は遠く人は歸らず

秋風滿二袂涙、泉下放人多

九九老らくのあはれ我世も白露の消行く玉に泪おちつゝ

原上新墳委二一身一、城中舊宅有二何人一

〇〇鳥部山むなしき跡は數そひて見し故郷の人ぞ稀なる

生去死來都是幻、幻人哀樂繫二何情一

一〇咲く花も音をなく蟲も押なべて空蟬の世に見ゆる幻

早世身如二風裏燈一、暮年髮作二鏡中絲一

二〇世の中は木草もたへぬ秋風に靡きかねたる宵の燈火

幻世春來夢、浮生水上漚

三〇淵となる柵もなき早瀨川浮ぶみなわぞ消えて悲しき

耳裏頻聞故人死、眼前唯覺少年多

四〇綠子をありふる儘の友と見て馴れしは疎き夕暮の空

古墓何代レ人

五〇塚ふりて其世も知ぬ春の草さらぬ別と誰慕ひけむ

法門五首

追二想當時事一、何殊二昨夜中一、自我學二心法一、萬緣成二一空一

六〇大空のむなしき法の心にて月にたなびく雲も殘らず

廻レ念發二弘願一、願此現在身、但受二過去報一、不レ結二將來因一

一〇つらき身の元の報は如何せむ此世の後の夢は結ばじ

警以二智慧水一、永洗二煩惱塵一

二〇悟りゆく心の水に洗はれて積りてよもの塵も拂はじ

由來生老死、三病長相隨、除却無二生忍一、人間無二藥治一

三〇舟の中に浮世の岸を離れても知ぬ藥の名をば尋ねむ

此身何足レ戀、萬刼煩惱根、此身何足レ厭、一聚虛空塵

四〇大空に漂ふ程もありがほにうかべる塵を何か厭はむ

歌の事よその人の上に思ひなして後これは人もみるまじき事とて唯ことさらの由侍りしかば又筆に任せて

詠二百首和歌一　前大僧正御房四季題　民部卿定家

四季神祇

新年祭

一あら玉の年を祈ると引く駒の跡もひさしき如月の空

神今食

二水無月の月影白き小忌衣うたふさゝ波よるぞ涼しき

例幣

三御幣の立や五十鈴の河波に山の紅葉も幣や手向くる

臨時祭

四かざしこし櫻も藤も昔にて御手洗川を思ひこそやれ

四季月

五馴初めし雲の上こそ忘られね弼生の月の古き形見に

六玉河に月の柵がけてけり入る影みせぬ卯の花のころ

七人も皆情有べき世とぞ見るまた秋の夜に月も澄めり

八天の河夜渡る月もこほるらむ霜にしもおく鵲のはし

風

九梅の花匂ふ春べと吹く風を誰が垣根とか明日も尋む

一〇影茂み結ばぬさきの山の井に夏なき年と松風ぞ吹く

二里毎に人な勸めそ秋の風こぬよ恨みようき身歎けと

三冬の木の霜も溜らず吹く風に星の光ぞ增りがほなる

雨

一あさ緑露の玉の緒ぬきもあへず柳の糸に春雨ぞ降る

二水もなきさかを落る夕立の瀧つせうくる元の谷川

三軒雨の空き端を打たへに寢られぬ秋のよはぞ難面き

六さえくらす都は雪も交らぬど山の端白き夕ぐれの雨
暁
七里とほき八聲の鳥の初聲に花の香おくる春の山かぜ
八色はまた別れぬ軒のあやめ草五月となれる明暮の空
九誰が里の眺らは秋の鐘の音を月より後も眺てぞ聞く
一〇旅人の行く方遠く出でぬ也まだ夜は深き雪の景色を
朝
一一庭の雪にかつ散る花もあたらしく櫻に交る朝清め哉
一二あかぬ夜の月の名殘の轉寢に衣手白く明くる山の端
一三長き夜に妻とふ鹿や休むらむ明くれば獨松風ぞ吹く
一四朝ぼらけ夜床の霜のいささとに煙を急ぐ冬の山かづ
夕
一五思ふには暮なばなげと急げ共花におばめく黄昏の山
一六うちはぶき寢にゆく空の村烏おのが哀は夏の夕ぐれ
一七詠むとて人も頼めず月も出でじ唯山の端の秋の夕暮
一八あはれ又今宵の雪のいかならむ籬の竹の夕ぐれの空
夜
一九睡ろまで儚き夢の見えてより春の夜計うき物はなし
二〇宿からや鳴く一こゑの時鳥ねぬに儚きよはの五月雨
二一昔とて戀ふともあはむ物なれや何面影の秋の夜の空
二二徒にをり松たきて深けし夜も猶九重のうちぞ戀しき
山
二三耻かしや花の色香に誘はれて浮世厭はぬ春の山ぶみ
二四涼しさを尋求むる頃だにもされば山に住人もなし
二五秋山は紅葉踏分け訪人も聲きく鹿の音にぞなきぬる
二六此頃は霜雪だにもおち散らぬ冬の深山の晝の寂しさ
野
二七堅つむ野邊の霞に宿かれば衣をうすみ月はもりつゝ
二八夕涼み飛火の野守こゑの頃や今いくかありて秋の初風
二九蟲のこゑ花におく露物毎に秋は野原の外にやはある
三〇立つ雉の狩場の眞柴枯果てゝ己が在かの陰も隱れず
海
三一今日ぞ見る春の海邊の名也けり住吉のさと住吉の濱
三二此頃の南の風にうきみるのよる〳〵涼し蘆の屋の里
三三さらでだに秋の思は大淀の松をつらしと浦風ぞ吹く
三四烈しさに鹽屋の煙立ちかねて村雲なびく冬のうら風
池
三五庭もせの花の白雪かせ吹けば池の鏡ぞ曇りはてぬる

三六若葉より引人なくて萎れにし身に似ぬ池の菖蒲草哉
三七秋の夜の月に心やうかびけむ昔の人のふかき池水
三八をし鴛の色に移ろふ池水にそれとも見えぬ蘆の萎葉
河
三九春といへば空ゆく風に立つ波の花に埋める白河の水
四〇大井河夏のみむすぶ苦やかた短夜ならぬ月も宿らじ
四一秋風に夜渡る月のすみだ川ながめむ空は都なりとも
四二行く人の思兼たる道のべをいたくな吹きそ冬の河風
田
四三櫻色の移るも知らぬ山賤も田面の花は袖に散りつゝ
四四小山田に茂る五月の浮草は我が心より種や蒔きけむ
四五秋の田を照す稻妻よそへても見れば程なし忘形見に
四六あせ傳ひもりくる水も凍りゐて刈田寂しき冬の山陰
鳥
四七百千鳥囀る春もふりはてゝ我宿ならぬ花をやは見る
四八汝をだに待つ事もなし時鳥われ世中にとのみ憂へて
四九初雁もまだ有明とつたふとも誰かは月の情かくべき
五〇蒐千鳥とまらば雪の跡もなし鳴てもいはむ方は渚に
松
五一谷の松おのが千年に春やなき深き緑の知らぬ一しほ
五二夏山の松の煙に出る雲の五月雨乍ら晴るゝ間もなし
五三秋の色に蜂の嵐の變るより夢路ゆるさぬ松の聲かな
杜
五四殘りなく我が黒髪は埋れぬ霜の後にも松は見えけり
五五淺みどり木のめ春風ふきみだりうすき霞の衣手の森
五六鳴く鹿もよその紅葉も尋ねこず常盤の森の雪の夕暮
草
五七言とはむ聲も惜まぬ時鳥なにか浮田の森の秋や悔しき
五八馴〳〵て下葉殘さず置露にあはでの森の秋や悔しき
春日野の雪の下草おのれのみ春の外にや結び置らむ
五九名も分ず岩垣沼に引捨てゝ五月待べき草葉ならねば
六〇時知らぬ宿ともさらばなりはてず何夕暮の荻の上風
花
六一我が宿は人めも草も草花をかれてもたてる心長さよ
六二花は春春は櫻の故なれば此世の色のたぐひやはある
六三故郷の花橘の白妙に昔の袖は今匂ひつゝ
六四大方に厭ひなれたる夏の日の暮るゝも惜き蟬麥の花
六五白露を本荒の萩にぬき留て風絶ぬ間の月をこそ待て

六六冬ごもり年の内には咲き乍ら垣根の外に匂ふ梅が枝
祝
六七君が代に萬代めぐれ少女子が連なる庭の十六夜の月
六八諸人の千年のふてふ御祝川ながすあさぢの末も遙に
六九長月や老いせぬ菊の下水に魂きはるよはよその白露
一〇明らけき御代の千年を蔭るとて雲の上人星歌ふなり
山家
一一籬たつ峰の早蕨これ計をり知りがほの宿もはかなし
一二小倉山松にかくるゝ草の庵の夕暮いそぐ夏ぞ涼しき
一三こりはてぬ刈田の面の稻すましぎ立暮の薄霧の宿
一四色に出で音にも立てず柴の庵の時雨の後に凍る涙は
旅
一五起て行く旅寢の庵の梅が香よ有しながらの東雲の袖
一六旅枕白き扇の月かげも馴れて悔しきかたみなりけり
一七白露も時雨も袖をまづ染めて紅葉にやとる秋の旅人
一八歸るさは都も近くなりぬらし春のとなりを急ぐ旅人
戀
一九春の夜の夢にまぎりて物ぞ思ふ仄に見えし月の現は
二〇最せめて浮鳥の音は思遣れ猶短夜のさよは更けにき
二一いかにせむ下結紐の結ぼれ解て寢ぬ夜の秋の初霜
二二川竹の下ゆく水の薄氷晝は消えつゝ音こそなかれ
述懷
二三涙川春の月波立つ毎に身はしづみ木の下に朽ちつゝ
二四我が心やよひの後の月の名に白きかきぬの花盛かな
二五秋の日は物思ふ人の關なれや降敷木葉行く道もなし
二六まづぞ思ふ今年を送る命にも迎ふる方の後めたさは
釋敎
草木衆林隨分受潤
二七これやそれ普くうるふ春雨に各々まさる四方の緑は
除世熱惱致法清涼
二八水無月の道ゆき人ぞ思ひ知る法のすゞしさ致す誓を
衆罪如霜露惠日能消除
二九頓む哉浮世の秋の草の上に結ぶ露霜きゆるひかりを
如寒者得火
三〇今ぞ知る冬のしも夜の埋火に花のみのりの春の心を

拾遺愚草員外雑歌下

建保六年の事にや内裏に此の題の字を人々に給はりて詩を作ると傳へ聞きてつれ〴〵なりしかば歌にもなりなむやと心にかきならべて見侍りしいたづらごとを思ひ出でゝ書きつく

春

芳節愛來望二帝畿一　先花照耀是春衣
梅が枝の移すにほひは薄からじ霞はよわき春の衣に
溪嵐吹レ波多氷盡、山氣帶レ霞晩月微
誰か又花を遲しと知せまし春を敎ふる鳥なかりせば
宿雪猶封松葉重、早梅纔綻鳥聲稀
春とだにまだ白雪の深ければ山路訪來る人ぞ稀なる
閑眠徒負南簷日、賓雁從レ今欲二北飛一
谷ふかく霞さそふ春風にまづ花の香や雲に飛ぶらむ
媚レ景漸深情感類　林叢增レ色鳥聲新
春風の氷をはらふ池水は宿れる月のかげもあらたに
妓樓花綻映二紅錦一、樵徑巖生踏二紫塵一
吹き拂ふ風だにつらし梅の花この頃積れ木の本の塵
歌吹出レ霞禁苑夕、綺羅薰レ月洛城春
古郷の花と月とに言とはむ之は見し世の有し春かと
幸逢二四海功安世一、臨レ水登レ山遊覽人
隔つとて花ちる山はかすそはず霞ぞうとき遠の里人
節屬煙霞風景好、香秋細馬互相尋
よに知らぬ朧月夜は霞みつゝ草の原をば誰か尋ねむ
暫難レ堅レ錢花零レ水、先欲レ背レ燈月出レ岑
大空のまことの雲もにほふらむ花に曽き三吉野の岑
斜岸夕陽春暮永、古溪昨雨曉來深
色に出て降しく庭も移ろひぬ花みて暮す春の深さに
閑居雲物在二斯處一、堦柳林鶯幾動レ心
いかならむたえて櫻の世なりとも曙かすむ春の心は
三春芳節徐垂レ暮、鄰蹋新開宿レ鼠園
花にすむ山の家居を來てとへ彌生の月も影圓か也
霞隔二南山一黃綺跡、雲連二蒼海一碧羅天
釣舟のさゝとのしるべもこと遠し八十島かすむ曙の天
草庵雨裏送二遲日一、花樹月前夢二少年一
雪とのみ積ればつらし春の風別れし花のふるき年々
無事終レ朝挑レ牖望、紅櫻高揷夕陽邊
山人の行くての蕨手にためて暫しぞやすむ岩の邊に
親故抛レ吾忘二舊好一、忘來誰問暮山霞
惜むらむとはれし花も散果て、春は幾日の峰の霞を
煙生翠竹村南路、雲鎖紫騮河北家
過がてに元の春こそ忘られね主ふりにし道のべの家
遊客漸辭庭有レ草、樵夫獨往嶺無レ花
春はいぬ青葉の櫻遲き日にとまるかたみの夕暮の花
九春將レ盡幾殘日、瞻望巖陰簷間斜
今宵のみ春や限の草まくら夕のまどに影なゝめなり

夏

夏來新樹葉徐暗、當レ牖家山不得レ瞻
霜枯の冬は顯はに民のすむこや茂行く廬間にぞ見る
盧橘句中開二露簟一、梧桐影底卷二風簾一
影見ゆる一重の衣うちなびきあふひも涼し白き簾か
孤夢未レ結曉鐘急、團扇暫忘晨月纖
玉の緒の長きよ契れ白糸に紛ふ蒿浦の根は細くとも
雨後終宵敬レ枕聽、松聲如レ舊水聲添
住の江の松のうれ吹く波風に此頃蟬の聲ぞうちそふ
節迎二晩夏一夜初永、夢覺愁人枕不レ知
假枕まだ伏馴れぬ蘆の葉に紛ふ螢ぞ暮るゝ夜は知る
石竹餘花多二栽種一、庭槐一葉且辭レ枝
咲にけり野なる草木におく露の秋に先立つ萩の一枝
夕陽染レ影遠村樹、微雨引レ涼方丈池
この世にはあまるばかりの光かな蓮の露に月宿る池
漸々好風吹二北牖一、宜哉林席此中施
すべらぎの昔あまねき惠をや此の水無月の民に施す
凌汗猶思衙鼓早、秸康陶令定作レ喇
夕立のきく〳〵の萎れ葉拂よとて花待遠に人やあざける
北窓風力贈二來客一、南澗泉聲是淡交
さゆりはの知られぬ下に咲花の草の茂みになど交り劔
螢照二洲蘆一微月後、蟬鳴二宮樹一夕陽梢
夜ながら鳴きぬる蟬か行く月の移ろひ敢ぬ庭の梢に
雙蓬霜色先レ秋變、蛇芥恩餘老匹拋
御禊する麻の立葉は宿ごとに刈る程もなく拋てつも也

秋

金韻忽生殘暑盡、獨吟古集早秋詩
秋に堪ぬ言のはのみぞ色に出る大和の歌も唐の詩も
草庵雨裏送二遲日一、花樹月前夢二少年一
めに立ぬ垣根に交る梶の葉も道行き人の手に馴す時
紫戸掩レ窓朝雨冷、草廬待レ隙曉天遲
秋風に荻の上葉は戰ぐなり妻とふ鹿の音こそ遲けれ
蕭條原野催二閑望一、露色蟲聲逐夜滋
うらがる〻秋の白露そめやぐ逢が袖の元の茂さを
秋山迢遰秋望遠、仙室泉聲老故深
己が色の及ばぬ秋も染めかへつ嵐の傳に紅葉ちる溪
清漏移レ霜銀水石、紅嵐吹レ浪錦紅西
曉はかゝらむ山の月を見よ雲もとまらず秋風のにし
平原露重草煙短、遠浦浪高松月低
宮城野の秋の村雨過やらでそこらの花の枝を垂つゝ
無藝無才無レ所レ好、琴詩酒興隔二提携一
月の色に霧な隔てそ難波舟汀の葦のたづさはるとも
凄涼八月々明夜、無限秋風吹二袖寒一
露そむるやたの〻淺茅下拭す秋の夜渡る風の寒さに
鳴杵晴碁尋二露底一、繫書遠雁出二雲端一
秋の夜を蟲のなく〳〵恨むとも盡し思の露の片はし
孤燈背レ壁曉夢斷、急雨灑レ窓陽景殘
昔見し秋やいく夜の故郷に今も有明の月ぞのこれる
鷄犬聲稀隣里靜、遙村人定漏可レ闌
朝な〳〵散行く萩の下紅葉移ろふ露も秋やたけぬる
萬物變衰蘿髮候、流年徐暮空過
埋れて木葉を誘ふ谷川の知られぬ波に秋ぞ過ぎぬる
芳蘭憑レ架殘花悴、橋葉滿レ階明月多
詠つゝ幾年々の秋の月あらましかはのなきぞ多かる
露染湘山千嶺樹、風清桂水九秋波
龍田川神代もきかでふりにけり唐紅の瀬々のうき波
寘闈礎杵向二霜怨一、醉客徒誇白綺歌
自から秋の衰を身につけて歸るこゝかの夕ぐれの歌
短路悠揚雲物冷、蕭條景色望方幽
誰かすむ葉山が下の秋風に煙とはるゝ道もかすかに
且敷二桐葉一山人密、遙別二荻花一商客舟
秋の夜の月にいつ共分かじかし己が上渡る蟹の釣舟
隣杵曉寒床上月、行衣夕薄袖中秋
露時雨心やすめぬ色々に住まひはこりぬ岡のへの秋
秋風吹草空催レ淚、白露莫零似二舊遊一
苔の上に昨日の紅葉たきすてゝ秋の林に誰遊びけむ

冬

四運回レ環推二節候一、金風不レ駐屬二玄冬一

六四手弱女のかふる衣に染盡す紅葉に著しきたる冬とは

長河霧外失二行客一、遙嶺嵐中送二遠鐘一

五九さだめなき嵐にかはる山影の疊り果てぬる入合の鐘

雜有二殘花一纔紫菊、林無二黃葉一只青松

六六色々に菊も紅葉も移ろへと春のまゝなる庭のわか松

都門路僻今誰問、霜上獨望麋鹿蹤

七六薄くこき四方の紅葉を吹分てかたも定めぬ木枯の跡

地僻民收稼玄冬節、田畝有レ年茂國娛

六八小忌衣しろきをするて盃の恵にゑへるよはぞ娛しき

治世傳聲鳴二澤鶴一、敬神喻禮在レ行鳧

九六影うつす山の青葉も冬枯て寂しき池に殘るをしかも

曉嵐拂レ雨斜陽見、寒浪閒レ氷流水無

〇七降積る吉野の深雪跡たえてもらぬ岩屋は音信もなし

掩レ牖終朝頭未レ梳、賢愚進退跡尤殊

一七老らくの年の緒ながき冬の夢昔と今と身こそ殊なれ

歲暮時昏思二往事一、當初幽襟尙難レ堪

二七思出る雪ふる年よ己れのみ魂きはる世の憂に堪ける

侵頭霜色白過レ半、憶レ子鶺鴒絃第三

三七日妙の色は一つに身にしめご雪月花の折ふしは見つ

商老昔客遊二瀟湘一、鄭公舊跡問二溪嵐一

四七年くれて松きる賤が身の上におひてそ歸る峯の嵐を

家僮心倦皆拋レ我、寒月卷レ簾與レ誰談

五七我友と見しは少き年の暮夢かとだにも誰にかたらむ

川序人篇　詩申二請左相府御點一

僧三四年　源氏以宋

僧新撰朗詠　詩人秀句

僧新撰朗詠　詩人秀句

僧新撰朗詠　詩人秀句

女郎花
一女郎花をるもをしまぬ白露の玉の簪いかさまにせむ
薄
二あだし野の風に亂るゝ糸薄くる人なしに何招くらむ
刈萱
三風すぐる萱が下根の露ばかり程なき世をや思亂れむ
闇
四秋の來て綻びぬとや藤袴裾野の原の四方にほへる
狩
五狩原や霧の絶間に風吹けば色も身にしむ物にぞ有ける
雁
六秋來れば誰が言傳を待たねども心にかゝる初雁の聲
鹿
七山里の秋の寢覺の寂しきに妻とふ鹿ぞ頼みなりける
露
八下草の上とやよそに思はまし引人もなき露の深さを
霧
九詠めする夕の空も霧立ちぬ隔たりゆくは昔のみかは
橦
十曉の夢の名殘を詠むればこれもはかなき朝貌のはな
駒迎
十一引渡す關の杉村月もれば皆かけまちの駒とこそみれ
月
十二長しとも思果てまし秋の夜に明るもつらき月の影哉
擣衣
十三寂しさを又打添ふる衣かな音を疑覺の友と聞けども
蟲
十四つれ〴〵と詠むる宿の夕暮に人まつ蟲の聲も惜まず
菊
十五白菊の心し變る花ならば色うつろはぬ秋もあらまし
紅葉
十六秋くれて深き紅葉は山姫の染めける色の限なりけり
九月盡
十七今日のみと思はぬ空の暮るだに秋の夕は哀ならずや
冬十五首
初冬
十八いかなれや四方の雁は荒れ果て猶冬籠る深山べの里
時雨
十九紅葉ばや時雨る儘に散果つる又も野山の色變りゆく
霜
二十散り殘る草葉も變る朝霜の秋の形見はおかぬ也けり
霰
二一有馬山おろす嵐の寂しきに霰ふるなりねなのさゝ原
雪
二二老果つる谷の松が枝埋れて雪さへ最どふりにける哉
寒蘆
二三海士小舟やゝたつ障る蘆の葉に心も止る今朝の雪哉
千鳥
二四蟲明の松吹く風や寒からむ冬の夜深く千鳥鳴くなり
氷
二五難波江の氷に閉づる澪標冬の深さのしるしとぞみる
水鳥
二六水鳥のうきねよ何の契にて氷と霜とむすびおきけむ
網代
二七夕暮は網代にかゝる氷魚故に人も立寄る宇治の河浪
神樂
二八天の戸のまだ明やらぬ月影に聞くも爽けき赤星の聲
鷹狩
二九雪深き交野の道を踏分けて絶ぬ日頃の御狩をぞする
炭竈
三十炭竈のやく〳〵と爪木をこりつめて煙に咽ぶ小野の里人
埋火
三一貝る儘に頓て消え行く埋火の儚き世をも頼みけるかな
歳暮
三二明るより暮ぬとのみぞ惜まるゝ今日は今年の限と思へば
戀十首
初戀
三三逢ふ迄の契ならずばいかゞせむか計人を思染めても
忍戀
三四哀とも人に知らるゝ思だに積るは如何味氣なき世を
不レ逢戀
三五さよ衣恨を人に重ねつゝあはでやよゝを隔果つべき
初逢戀
三六むすびてもなか〳〵漏るゝ袂哉阿武隈川の深き思に
後朝戀
三七菜りするは山が峯の霧けきも歸に道は迷はぬものを
逢不レ遇戀
三八逢見てもあはでも同じ歎にて實ひしとは變果てぬる
旅戀
三九秋萩の下葉を結ぶ草まくら色づく袖の露をまがへよ
思
四十淺ましや淺間の嶽に立つ煙たえぬ思を知る人もなし
片戀
四一味氣なく歎く命も絶えぬべし忘られはつる長き契に
恨
四二行末を思ふも悲し心から此の世ひとつの恨ならねば
雜二十首
曉
四三さならでも袖やは乾く山里の嵐の風のあかつきの聲
松
四四いかなりし榊なる覽春日山松の變らぬ色を見るにも
竹
四五さよ深き寢覺にそよく臭竹や昔も人の友となるらむ
苔
四六苔も又徒らにてぞ老いにける巖の中も頼みなの世や
鶴
四七草鶴のこれに附ても音をぞ鳴吹絶ぬべき和歌の浦風
山
四八跡もがな尋てもみむ名にし負はゞ古ざまに返る山かと
川
四九吉野川岩打つ波もよと共にさぞ碎けゝむ知人はなし
野
五十宮城野のこの下露に比べばや雨よりけなる袖の雫を
關
五一人知れぬ勳は須磨の關よ唯我のみたえて月日へねれば
橘
五二枌ぬ共名は埋れじ味氣なく跡も長柄の橋を見るにも
海路
五三人遣の路かはあやな渡の原返る波にはめのみ立つゝ
旅
五四草枕旅よりたびの心ちして夢に都をほのかにぞ見む
別
五五忘れぬる日數をのみや歎かまし契に適ふ命なりせば
山家
五六誰にかは見せも聞せも紅葉ばの散る山里の有明の月

田家
すゝがもる山田の鳴子風吹けば己が夢をや驚かす覺
懷舊
ふりにける其の水莖の跡毎に人の心を見るぞ悲しき
夢
浮世をば夢の中にも思知れ我ならぬ身の心ちやはする
無常
はかなさの例と見ゆる電の光も又はてらしこそすれ
述懷
位山ふもとの雪にうづもれて春の光を待つぞ久しき
祝
萬代の光ぞ袖にくもりなきはこやの山の峰の月かげ
是猶不レ足レ言歌也復鑒有レ耻

詠二百首和歌一
春二十首
關路早春
賴みこし關の藤川はる來ても深き霞に下むすびつゝ
湖上朝霞
朝ぼらけみるめ渚の八重霞えやは吹解く志賀の浦風
霞隔二遠樹一
三輪の山まづ里霞む初瀬川いかに逢ひ見む二本の杉
霧中聞レ鶯
都いでゝとほ山鳥のかり衣なくね伴へ谷のうぐひす
隣家竹鶯
山がつの園生に近く伏しなれて若竹がほにいとふ鶯
田邊若菜
小山田の氷に殘るあせづたひ綠の若菜色ぞすくなき
野外殘雪
春日野は昨日の雪の消がてに振はへ出る袖ぞ數そふ
山路梅花
色も香も知らでは越えじ梅の花にほふ春べの曙の山
梅薰二夜風一
匂ひくる枕に塞き梅が香よ闇き雨夜の星やいづらむ
水邊古柳
年月もうつりにけりな柳かげ水ゆく川の末の世の春
雨中待レ花
今日よりやこのめも春の櫻花親のいさめの春雨の空
野花留レ人
魂極浮世忘れてさく花の散らすば千代も野べの諸人
遠望二山花一
色まがふ眞の雲や交るらむまづは櫻の四方の山の端
曉庭落花
あかなくに己が衣に吹く風に苔の綠も花ぞわかるゝ
故郷夕花
里あれぬ庭の櫻も古りはてゝ黄昏時をとふ人もなし
河上春月
行く春の流れてはやきみなの河霞のふちに曇る月影
深夜歸雁
春の夜の八聲の鳥も鳴かぬまに賴むの雁の急ぎ立覺
藤花隨レ風
松風の聲もそなたに願くらし懸れる藤の末も亂れず
橋邊款冬
橋柱いろに出でける言の葉をいばでや匂ふ山吹の花
船中暮春
今日はなほ霞をしのぐ友舟の春の境を忘れずもがな
夏十首
卯花隱レ路
卯の花の枝もたわゝの露を見よとはれし道の昔語は
初聞二郭公一
昨日こそ霞立ちしか郭公また打ちはぶく去年の古聲
山家郭公
此の里は待ちも待たずも郭公山飛越ゆる便過ぐすな
池朝菖蒲
明るより今日ひく菖蒲池水に己が五月ぞ馴て別るゝ
閑居蚊火
焦るとて煙もみえじ時しらぬ竹のは山の奥の蚊遣火
盧橘驚レ夢
袖の香ははな橘に殘れどもたえてつれなき夢の面影
杜五月雨
侘人のほさぬためしや五月雨の雫にくたす衣手の森
野夕夏草
仇し野のを萱が下葉誰が爲に亂初めたる暮を待つ覽
澗底螢火
日影見ず咲きてとく散る色もなし谷は螢ぞ光也ける
行路夕立
夕立に袖もしをるゝかり衣かつ移りゆく遠かたの雲

秋二十首
初秋朝風
秋來ぬと云ばかりなる蓬生に朝けの風の心ばかりよ
澗月七夕
天の河ふ月は名のみ重なれど雲の衣やよそに濡る覽
野亭夕萩
秋萩に玉ぬく野べの夕露をよしや亂さで宿乍ら見む
江邊曉荻
明け渡る荻の末葉のほの〴〵と月の入江を出る舟人
山家初雁
秋風の雲に交れる嶺こえて外山の里に雁はきにけり
海上待レ月
淡路島秋なき花をかざしもて出るも遲し十六夜の月
松間夜月
袖近き色や綠の松風にぬるゝがほなる月ぞすくなき
深山見レ月
花ならば痛くな侘そと計に深山の月を人やとはまし
草露映レ月
武藏野に貫きとめぬ白露の草は皆がら月ぞこぼるゝ
關路惜レ月
逢坂は歸りこむ日を賴みにて空ゆく月の關守ぞなき
鹿聲夜友
山里の竹より外のわが友はよる鳴く鹿の庭の草ぶし
田家擣衣
露霜のおくての山田吹く風の催すかたに衣うつなり
古渡秋霧
夕霧に言とひ侘びぬ角田川わが友舟も有やなしやと
秋風滿レ野
宮城野は木の下露も干果で拂ひもやまぬ四方の秋風
蟋下聞レ蟲
みだれ落つる萩の雫の下露に泪いろある松蟲のこゑ
紅葉寫レ水
山河の時雨て晴るゝ紅葉に折られぬ水も色增りつゝ
山中紅葉
山廻る時雨の奥の紅葉ばの幾千入とか焦れ出づらむ
露底樣花
秋風の裏葉にためぬ白露のしばらでひたす朝顏の花
川邊菊花

二大井河ゐせぎの波の花の色を移ろひ捨つる岸の白菊
獨惜二暮秋一
三また人の訪ぬも嬉し草木だに馴ては惜き秋の名殘を
冬十首
初冬時雨
九今日そへにき壯時雨の香れて神無月とは人に知られめ
一〇霜埋二落葉一
七朝霜の岡の紅葉はおもひ知れおのが下なる苔の心を
屋上聞レ霰
八眞木のやに霰の音もとだえつゝ風の行方に靡く叢雲
古寺初雪
九むかしへや何山姫の布さらす跡ふりまがへ積る初雪
庭雪厭レ人
一〇ずが宿は今日こむ人に忘られぬ雪の心に庭を任せて
海邊松雪
一一住吉の松や靡こと降る雪に詠めも知らぬとほつ舟人
水郷寒蘆
一二蘆の葉も下折はて丶三島江の入江の月に影も障らず
湖上千鳥
一三鴉の海や月まつ浦の小夜衾靡れの島をさして鳴らむ
寒夜水鳥
一四おきとめず松を嵐の拂ふ夜は鴨の青ばの露ぞ重なる
歳暮湖氷
一五今いくか打出づる波の初花も谷の氷の下に待つらむ
戀二十首
初尋レ緣戀
一六思餘り其里人に言とはむ同じ岡べのまつは知るやと
聞レ聲忍戀
一七秋の霜に移ふ花の名計もかけずよ蟲の鳴音ならねば
忍二親眼一戀
一八目も遙に燃ては見えし紫の色こき野邊の草葉也とも
新不レ逢戀
一九行き歸り逢瀬も知らぬ御祓川悲しき事は數增りつゝ
旅宿逢戀
二〇立田山木の葉の下の假枕かはすも仇に露こぼれつゝ
會厭レ曉戀
二一今夜だにくらよの山の宿もがな曉知らぬ夢や覺ぬと
歸無レ會戀

二朝露は笹分くる袖もほしかねて夢か現か訪人もなし
遇不レ會戀
三よそ人は何なか〳〵の夢ならで關の現の見えぬ面影
契經二年戀
四秋かけて降敷く木の葉幾返り空しき春の色にもゆる
疑二眞僞一戀
五誰が誠世の僞のいかならむ頼まれぬべき筆の跡かな
返事增戀
六たち靡く煙くらべに燃えまさる思の薪身は焦れつゝ
破レ厭賤戀
七色に出でゝ云な栞りそ櫻戸の明け乍らなる春の秋と
途中契戀
八道のべの井手の下帶ひき結び忘れいづらし初草の露
從レ門歸戀
九思ひやれ葎の門のさしながらきて歸るさの露の衣手
忘二住所一戀
一〇いかにせむ頼めし里を住江の岸に生ふてふ草に紛へて
依レ戀所レ身
一一長かれよあらば逢世と手向して年のを新る森の注繩
隔二遠路一戀
一二渡つみのいく浦々にみつしほの見らく少き中の通路
借二人名一戀
一三假初の誰がなのりそに靡く寢我身の方は絕えぬ煙を
絕不レ知戀
一四葵草人の爲しかと計りも名をだに懸てとふ方もなし
互恨絕戀
一五藻汐草蜑のすさびもかき絕えぬ里の知べの心比べに
雜二十首
曉更寢覺
一六明けやらぬ鳥のね深く置霜に寢覺苦しきよ丶の古言
薄暮松風
一七植るおきし我が物からの庭の松夕は風の聲ぞ悔しき
雨中綠竹
一八色かへぬ青葉の竹の憂き節に身を知る雨の哀れ世中
浪洗二石苔一
一九早瀨川いはうつ波の白妙に苔の袂もいろぞつれなき
高山待レ月
二〇比良の山みねの木枯拂ふよは心清くも月を待つかな
山中瀧水
二一雲深くあたりの山に包まれて音のみ落つる瀧の白玉
河水流清
二二秋の水清瀨川の夕日かげ木葉もうかず靜るばかりは
暮秋野遊
二三霜じ野の露も霧も分けなれぬ初音の小松まつ蟲の聲
關路行客
二四行く人の形見も仇に置く露を吹きな拂ひそ關の秋風
山家夕嵐
二五尋れかし四方の草木の山風に己れ萎るゝ柴の袖垣
山家人
二六故郷をしのぶる人や渡しけむさてもとはれぬ谷の椙
海路眺望
二七知らるやたゆたふ舟の波間より見ゆる小島の元の心を
月照中友
二八夕月夜宿かりそめし影ながら幾宵明の友となるらむ
旅泊夜雨
二九旅衣ぬくや玉の緒よるの雨は袖に亂れて夢も結ばず
海邊曉雲
三〇明ぬとて泊り漕出づる友舟の星の紛れに雲ぞ分るゝ
寄レ夢無常
三一睡めばいやはかなな夢の中に身を幾よとて覺ぬ歎ぞ
寄レ草述懷
三二引葉つる例も悲し掻つめしあとろの道の元の朽葉を
寄レ木述懷
三三九重のとのへの棟忘るなよ六十の友は朽てやみぬと
逐日懷舊
三四天の戸の明る日毎に忍ぶとて知らぬ昔は立も歸らず
社頭祝言
三五祈るより神もさこそは願ふらめ君明かに民安くとは
詠二百首和歌一
爲家卿
春二十首
關路早春
三六休らはで越えける春の便とや霞の關の名にも立つ霞
湖上朝霞
三七志賀の浦や波間も霞む朝風に長閑に渡る海士の釣舟
霞隔二遠樹一

七七花さかぬ四方の梢の春霞待つとばかりの心へだつな
　籬中聞レ鶯
七七古巣いで丶汝も旅寝の程なれや知らぬ野山の鶯の聲
　隣家竹鶯
八〇聲はなほ隠れぬものを草垣のへだつる竹に鶯ぞ鳴く
　田邊若菜
八一秋ならでとはるべし共知ざりし同じ田面に若菜をぞ摘
　野外殘雪
八二薪え出づる草の葉末に顯れて淺澤小野にのこる白雪
　山路梅花
八三梅が香も袂にとまる匂にて暫しやすらふ春の山ごえ
　梅薫二夜風一
八四さそひ行く風の便の梅の花香を尋ねても猶や惑はむ
　水邊古柳
八五影うつす池に水草の茂るまで春をそへぬる青柳の糸
　雨中待レ花
八六待たれつる心盡しに降る雨のめぐみをいそぐ山櫻哉
　野花留レ人
八七花の色にとめし心の名殘とて住や果なむ野邊の假庵
　遠望二山花一
八八紛へつる雲とも見えず山櫻はては霞の立ち隔てつる
　曉庭落花
八九有明の月はつれなき庭の面に花や別の時を知るらむ
　故郷夕花
九〇見る人もなき故郷の梢にて暮るゝもやすき花の色哉
　河上春月
九一春毎に霞むならひの名取川なき名とも見ぬ月の影哉
　深夜歸雁
九二忽ぞよまだ深き夜の月影に面影とめて歸る雁がね
　藤花隨レ風
九三風吹けば松の下水ゆくかたに梢もなびく春のふぢ波
　橋邊款冬
九四徒にとはれし春を山吹の花にぞかこつ谷のかけはし
　船中暮春
九五霞へとも春は止らぬ同じ江に棚無小舟漕ぎや歸らむ
　夏十首
　卯花隱レ路
九六卯の花の色にも猶や迷るらむ雪に紛ひし小野の細道
　初聞二郭公一
九七數ならぬ身には習はぬ初音とて聞きても辿る郭公哉
　山家郭公
九八郭公聞すといはゞ山深み住むかひなしと人や思はむ
　池朝菖蒲
九九池水に波寄せ懸て菖蒲草けさひく袖に露ぞこぼるゝ
　閑居蚊火
一〇〇蚊遣火の煙立てやばいかにして此山陰の宿を知まし
　盧橘驚レ夢
一〇一夢ならで昔に通ふ名殘とや寢覺の袖に薫るたちばな
　杜五月雨
一〇二掻暮す日數も知らず柏木のもりて寂しき五月雨の聲
　野夕夏草
一〇三露結ぶ夕になれば夏の野の草の茂みに分きぞ衆ぬる
　潤底螢火
一〇四谷深み淺からぬ身の思とはよそに知られて飛ぶ螢哉
　行路夕立
一〇五越えやらで日數重なる山路をも易くぞ過る夕立の空
　秋二十首
　初秋朝風
一〇六いつのまに吹變りけむ此ねぬる朝げの袖の秋の初風
　閏月七夕
一〇七天の河あはぬふ月を重ねてぞ同じ恨の數もそひける
　野亭夕荻
一〇八秋萩の花も仇なは夕露に結ぶもかりの野邊の庵かな
　江邊曉荻
一〇九明けわたる入江の波は長閑にて荻の末葉に殘る浦風
　山家初雁
一一〇憂きとを思連ねぬ雁がねは鳴きてぞ來ぬる秋の山里
　海上待レ月
一一一渡の原いづくを波の限にて空ゆく月の影を待つらむ
　松間夜月
一一二もる月の心盡しのつれなさも松にぞとに思知りぬる
　深山見レ月
一一三花ならで又あくがるゝ心かな吉野の奥の秋の夜の月
　草露映レ月
一一四むすびおく露の契もあらはれて軒の葱に宿る月かな
　關路惜レ月
一一五終夜宿るばかりの月影をとめずばつらし須磨の關守
　鹿聲夜友
一一六數ならぬうき身の友と馴む夜は思や餘るさを鹿の聲
　田家擣衣
一一七まどろまでもると計のしるし哉秋の田面に衣うつ也
　古渡秋霧
一一八渡守舟さしうけて急ぐまで暮れぬと見ゆる淀の河霧
　秋風滿レ野
一一九變行く色をば知ず武藏野やなべて草葉に秋風ぞ吹く
　籬下聞レ蟲
一二〇咲きみだす花の籬に鳴く蟲や秋は千草に物思ふらむ
　紅葉寫レ水
一二一谷川の淺瀬の水や增るら深き紅葉の色をうつして
　山中紅葉
一二二山深き秋の紅葉の色よりも淺からずこそ尋ね入ぬれ
　露底種花
一二三はかなしやあだなる露の色に立つ名を埋るゝ種の花
　河邊菊花
一二四色變る霜やはおそき川風にほのかに出づる白菊の花
　獵惜二暮秋一
一二五止らずばいかにせむとて行秋の我身一つに悲かる哉
　冬十首
　初冬時雨
一二六神無月哀は變るしるしにて秋より冬にふる時雨かな
　霜埋二落葉一
一二七誘ひこし嵐も己が儘ならで霜に朽ちぬる庭の紅葉は
　屋上聞レ霰
一二八厭はれし時雨の後の眞木の屋に音も變らで降る霰哉
　古寺初雪
一二九誘はるゝ雲の紛ひにかつ降て雪も初瀬の山風ぞ吹く
　庭雪厭レ人
一三〇とはれつる身の習はしの有顏に跡厭はるゝ庭の白雪
　海邊松雪
一三一降る雪は積りにけりな白波の音せでこゆる末の松山
　水江寒鷹
一三二難波潟入江の波は音立てゝ葦の枯葉に風もたまらず
　湖上千鳥
一三三音たえて志賀の浦波凍る夜は立も隙らで千鳥鳴く也
　寒夜水鳥

三池水に立も離れぬ蘆鴨の浮寝ばかりぞ凍らざりける
四歳暮湖水
徒につもり重ねて行く年の日かずも知らぬ谷川の水
五懸二十首
初尋レ縁懸
六誘ひくる霞の隙の春風にまだ見ぬ花の行へをぞとふ
開レ聲忍懸
七よそに聞く雲居の雁の一聲も憂名忘ていかゞ忍ばむ
忍二親眼一懸
八無名ぞと云ても果やいかならむ親の護の背く身ならば
祈不レ會懸
九いかに猶つれなからまし神だにも受ぬ契は程と知せば
旅宿逢懸
〇一変らでもあだなる中ぞ知れける唯一夜なる草の枕に
兼厭レ暁懸
一二憂きものと聞きし計の暁を別れぬさきの身に厭ふ哉
歸無書懸
一三立歸り問れぬ程もつらからず今夜憂身と人に知られて
遇不レ會懸
一四難面さは變ぬ中のつらさにて見しを忘る心ともがな
契經二年懸
一五契しを頼む計に長らへて消ぬべき身の年ぞへにける
疑二眞僞一懸
一六變りゆく人の心の偽は恨み果てぬるつらさなりけり
返事増懸
一七恨みつる我が理も忘られて増るつらさに書ける玉章
被レ厭二賤懸
一八憂き乍ら數ならぬ身のつらさにも厭れて社思知ぬれ
途中契懸
一九あだなりや道の芝草假そめに結びすてぬる露の契を
從レ門歸懸
二〇深き夜の別と云て槇の戸の明ぬに歸る身とは知られじ
忘二住所一懸
二一忘るとて人のかこてば等閑に數へし宿と我も恨みむ
依レ懸祈レ身
二二神だにも憂身の程を知られずば逢に替むと猶や祈らむ
隔二遠路一懸
二三厭ふぞよ通ふ心のたのみだになくて隔つる峰の白雲

借二人名一懸
二四いかにせむ憂名を添て唱つ共つらき心の人を分かずば
絶不レ知懸
二五同世に行方をさへに辿るこそ餘りよそなる契也けれ
互恨絶懸
二六つらかりし心比べのたゝうきに思定めて遠かるらむ

雜二十首
曉更寢覺
二七曉の鳥の鳴く音を知べにて寢覺の程は身に習ひぬる
薄暮松風
二八吹く風も同じ緑の松がえに夕はなにと寂しかるらむ
雨中緑竹
二九我が君の恵をそへて降る雨に御垣の竹の色ぞ殊なる
浪洗二石苔一
三〇むす苔は色も變らで打寄する岩間の波の音ぞ碎くる
高山待レ月
三一待ち出るほどぞ寂しき葛城や高間の山の秋の夜の月
山中瀧水
三二瀧の音もまだ消馴れぬ山水に習はですむは心也けり
河水流清
三三千世をへて一度すめる川水の流は君ぞ酌べかりける
春秋野遊
三四立返り同野原にあくがれて花と紅葉も身にぞ馴ぬる
關路行客
三五旅人の絶えぬ往來に逢坂の關守いかに苦しかるらむ
山家夕嵐
三六山里にたへて住まじと思ひしは嵐も聞かぬ夕也けり
山家人稀
三七思ひやれ變る人めの冬にだに限らぬ山の奥の寂しさ
海路眺望
三八見渡せば波間の日影暮ぬらしはや漕歸れ海士の釣舟
月照中友
三九契らずよ馴れし都のよはの月草の枕の友となれとは
旅宿夜雨
四〇都思ふ假寢の袖に降る雨やほさぬ涙の類ひなるらむ
海邊曉雲
四一隔てこし夜の間の雲や分るらむ顯れそむる沖つ白波
寄レ夢無常

壬二集

壬二集上

百首　六百番歌合　百首　千五百番歌合
百首　堀川院百首　百首　大僧正四季
百首　文治三年　百首　同十一月
百首　六百番歌合

春
元日宴
四二もゝ人のたちゐる庭の盃に光はしるし千世のはつ春
餘寒
四三春きても雪ふる空を眺むれば霞もさゆる心地社すれ
春氷
四四春風に下ゆく浪の數見えて殘るともなきうす水かな
春草
四五花をのみ待つ覽人に山里の雪間の草の春を見せばや
賭射
四六梓弓春の雲居に引きつれて最色ことなる今日の諸人
野遊
四七思ふどちそことも知らず行暮ぬ花の宿かせ野邊の鶯
雉
四八焼きすてし枯野の跡や霞むらむ煙に返る雉子なく也
雲雀
四九野べ見れば揚る雲雀も今はとて淺茅に落る夕暮の空

一七あだに見し一夜の夢の其儘に覺ても元の浮世也けり
寄草述懐
二七埋もるゝ霜の下草あらはれて榮えむ春の光をぞ待つ
寄木述懐
三七さりともと頼みをかけて春日山憂身忘るゝ北の藤波
逐日懐旧
四七忍ばるゝその古は隔たりて待たぬ月日のなと積る覽
社頭祝言
五七萬世にまつの千年の色そへて君をぞまもる住吉の神

遊絲
長閑なる夕日の空をながむれば薄紅に染むる絲ゆふ
春曙
霞たつ末のまつ山ほの〴〵と浪にはなるゝ横雲の空
遲日
春の日は灘の鹽屋の蜃人も暇ありてや暮し侘らむ
志賀山越
嵐ふく花の梢に跡見えて春も過ぎゆく志賀の山ごえ
三月三日
植置し賤の心も桃の花彌生の今日は見るべかりける
蛙
谷水の岩もる音は埋もれてすだく蛙の聲のみぞする
殘春
いかなれば映初しより藤の花暮行く春の色を見す覽
夏
新樹
紅葉ゆゑ植えし梢のあさ綠色には秋を思ふのみかは
夏草
しげき野と夏もなりゆく深草の里の鶉の鳴かぬ計ぞ
賀茂祭
葵ぐさ秋の宮人かげそへて長閑にわたる賀茂の川水
鵜川
大井川いくせのぼれば鵜飼舟嵐の山の明け渡るらむ
夏夜
澄む月の光は霜とさゆれどもまだ宵ながら有明の空
夏衣
夏衣隔つともなき袂にも猶よそにこそ風は吹きけれ
扇
打拂ふ扇の風のほどなきに思ひこめたる萩の音かな
夕顏
煙立つしづが庵のうすぎりの隙に咲ける夕顏のはな
夕立
夏の日を誰が住む里に厭ふらむ涼しく曇る夕立の空
蟬
秋ちかき木々の梢に風こえて下葉におつる蟬の聲々
秋
殘暑
秋きてもまだ一重なる衣手に厭はぬ程の風ぞ吹ける
乞巧奠
露ふかき庭の燈火數きえて夜や更けぬらむ星合の空
稻妻
詠れば風吹く野邊の露にだに宿りも果てぬ稻妻の影
鶉
秋といへば鶉なく也小萩原鹿の音をこそ花に任すれ
野分
假にさす庵までこそ厭きけれ野分に堪ぬ小野の篠原
秋雨
軒近き松の風だにあるものを窓うちそふる秋の村雨
秋夕
夕暮はのべも一つに露滿て蟲の音になる庭の淺茅生
秋田
深からぬ山田の庵も秋は猶心の果はみつべかりけり
鳴
明けぬとて澤立鳴の一聲ははね掻くよりも哀也けり
廣澤池眺望
行方なくながむる空も廣澤の池の心にすめる月かな
蔦
散らぬより紅葉に辿る山路哉岩根の蔦や色變るらむ
柞
秋深きいはたの小野の柞原下葉は草の露やおくらむ
九月九日
盃にうかべる今日の影よりや移ろひそむる白菊の花
秋籍
いかにまた秋は夕となかめきて花に霜おく野べの曙
暮秋
暮てゆく秋は其方ぞ恨めしき傾く月の影を見しより
冬
落葉
木の葉散る外山の暮を分行けば袖に嵐の音ぞ碎くる
殘菊
花ならぬ匂も後はなき物をうつろひ殘す白菊のはな
枯野
鹿の音も蟲も凄々聲たえて霜がれはてぬ宮城野の原
雪
搖曇りみぞるゝ空や夜初て凍りも果てぬ時雨なる覽
野行幸
諸人の狩場の小野にふる霰今日の行幸に玉ぞ數ける
冬朝
谷川のこほるだにある山里に人も音せぬ今朝の白雪
寒松
さえ〴〵て梢の雲を返すなり尾上の松の雪のうら風
椎柴
山深くしづの折りたく椎柴の音さへ寒き朝ばらけ哉
炙
雪の夜の思ふ計もさえぬこそ圍の炙のしるし也けれ
佛名
嬉しくも罪は夜の間に消ぬ也暮行く年の身に積る覽
戀
初戀
いつしかと通ふ心の今は又嬉かるべき知べともがな
忍戀
色に出でゝいはぬ思の慰めは人のつらさを知ぬ計ぞ
聞戀
みるめなき磯間隱れに寄る波の音計にも袖濡せとや
見戀
思兼ね澤の根芹を摘みてだに心の跡を爭でのこさむ
尋戀
行きあはむ契も知らず花薄ほの見し人に惑ひぬる哉
祈戀
朽ちはつる袖の例となりねとや人を浮田の杜の注繩
契戀
さても猶人の心を知らぬ間は契さへこそ思なりけれ
待戀
頼めとや頼めし宵の更くる杜かつ〴〵變る心也けれ
過戀
戀々て逢見るよはも增ける人の心の知らまほしさは
別戀
風吹かば峰に分る雪をだに有し名殘の形見とも見よ
顯戀
忍びこし思を今はわすれむよその人めと歎く計ぞ
稀戀
かゝりける契ならずば七夕の心の程を爭で知らまし
絕戀

八三淺ましや淵とせく瀬の末だにも斯絶果る程は見えぬを
怨戀
九三今は又われも心やかはるらむ戀しき人の恨めしき哉
舊戀
〇四山深み苔の下もる谷水や年ふる戀のなみだなるらむ
曉戀
一四明ぬとて別れし空の鐘の音は音づるゝさへ恨しき哉
朝戀
二四道芝を分けて露けき袖ならば濡ても暮を待ましものを
晝戀
三四暮れぬまは斯りければや山鳥もよはの思に契替けむ
夕戀
四四時しもあれ悲しかりける心かな秋の夕に人は忘れず
夜戀
五四めに見えぬ夜社增れ天雲のよそに成行人のつらさは
老戀
六四玉簾手にとる程も思ひきやかりにも戀を志賀の山人
幼戀
七四結ばむと契りし人を忘れずやまだ影淺き井手の玉水
遠戀
八四思ひきや心いくへの峰こえて忍ぶの奥も尋入るらむ
近戀
九四忍草ならぶ軒端の夕ぐれに思をかはすさゝがにの糸
旅戀
〇五變りゆく涙の色ぞあはれなる草の枕の日數知られて
寄月戀
一五いかにして殘る心の有ければ人を恨みて月を見る覽
寄雲戀
二五思ひやるながめも今は絕えねとや心を埋む夕暮の雲
寄風戀
三五物思ふ身も習はしと荻の葉にいたくな吹そ秋の夕風
寄雨戀
四五こぬ人を待夜更行秋の雨は袖にのみふる心ち社すれ
寄煙戀
五五富士の根の煙もなほぞ立昇る上なき物は思なりけり
寄山戀
六五路見ても馴ぬ景色のつれなさや吉野の奥の岩の陰道
寄海戀
七五伊勢の海の潮瀨に騷ぐ小れ石の碎けて物を思ふ頃哉
寄河戀
八五いかにして影をも見まし澤田河袖つく程の契なり共
寄關戀
九五人知れぬ恨に餘る波の上をおさふる袖や須磨の關守
寄橋戀
〇六葛城や渡しも果てぬ岩橋も夜の契はありとこそ聞け
寄草戀
一六秋風になびく淺茅の色よりも變るは人の心なりけり
寄木戀
二六思ひわび詠むれば又夕日さす軒端の岡の松も恨めし
寄鳥戀
三六いかにして空とぶ程も敏鷹の暫しも戀に身を休む覽
寄獸戀
四六我が宿は人も枯野の淺茅原通ひし駒の跡もとゞめず
寄蟲戀
五六夏蟲も羨ましきは秋の夜の露にはもえぬ思なりけり
寄笛戀
六六夜な〳〵は枕に馴し笛竹もいかなる床に伏し變る覽
寄琴戀
七六よそになる人だにつらき琴の音に子を思鶴も心しられて
寄繪戀
八六書きとめて變らぬ色も女郎花哀と見れば露ぞ零るゝ
寄衣戀
九六爭で猶よはの衣を返しても重ねし程の夢をだにみむ
寄席戀
〇七獨寢の床のさ筵くちにけり涙は袖をかぎるのみかは
寄遊女戀
一七誰となきうき寢を忍ぶあま衣思へば淺き恨なりけり
寄傀儡戀
二七結びけむ契もつらし草まくら待つ夕暮も宿を賴みて
寄海士戀
三七思には類なるべき伊勢の蜑も人を恨みぬ袖ぞ濡ける
寄樵夫戀
四七山人の歸る家路を思ふにもあはぬ歎ぞ休む間もなき
寄商人戀
五七ともすれば別を知らぬ波の上に搔なすれをも人は問鳧
千五百番歌

春二十首

六七足引の山の白雪消えもあへず昨日は去年と霞む春哉
七七春立て今日三日月の山の端に霞みそめたる夕暮の空
八七山里に木の間の日影猶さえて春とも見えぬ庭の霜哉
九七春の日の淺澤小野の朝氷たれ踏分けて根芹つむらむ
〇八子日する松に千年や契るらむ同じ二葉の野邊の若草
一八霞たつ交野の御野のかり衣はらふともなき春の淡雪
二八梓弓おして春雨ふる里のみ垣が原はうすみとりなる
三八百千鳥誰が袖ふれし故郷の軒端の梅の香を慕ふらむ
四八思ふよりいかにせよとて梅花うたて匂を袖にかす覽
五八月はなほ霞の下にこほれども汀にかへる志賀の浦波
六八玉柳春の楫にきくときはみどりの空にうぐひすの聲
七八春はまたそなたともなく飛鳥の花に匂へる夕暮の聲
八八散りなれし楫はつらし山櫻春知りそむる花を尋ねむ
九八今日見れば雲も櫻に埋れて霞みかねたる三吉野の山
〇九久方の光のどけき櫻ばな散らでぞほふ春の山かせ
一九待つ人に宿の春風ことづてよ今日こそ櫻楫にも見め
二九花の散る木の下風に臥侘て誰又あくる空を待つらむ
三九吏に又なほ面かげに櫻花やよひの雲のくれがたの空
四九なきとむる花かとぞおもふ鶯の歸る古巢の谷の白雲
五九三吉野の大川のべの藤波の春も深しと色に見すらむ

夏一

六九今はよも花もあらしの夏山に青葉まじりの峰の白雲
七九入る月に氷消行く木の間より打出づる波や谷の卯花
八九千早ぶる神代をかけて葵草君に二葉の影やそふらむ
九九うちつけにそれかとぞ聞く郭公人まつ山に忍音の聲
〇〇影くもる庭の楫に見るほどに軒も緑に高瀦をぞふく

夏二

一〇軒端もる月の光に薰る夜は花たちばなに秋風ぞ吹く
二〇時もときそれかあらぬか郭公去年の五月の黄昏の聲
三〇一聲は手向の山の郭公幣もとりあへず明くるよは哉
四〇いか計田子のさ衣水澁附き雨もしみゝに早苗とる覽
五〇五月雨はかひやの煙うちしめり山田の暮に蛙なく也

夏三

六〇五月雨のふるの中道中〳〵に茂る草葉も見えぬ頃哉
七〇照射する葉山が峰を眺むれば雲路ぞ鹿の立と也ける
八〇身に近く鳴す扇も楢の葉の下吹く風に行方しらすも
九〇松かげやたきのうら葉の岩枕夏なき山に通ふ頃かな
一〇郭公聲も絕にし垣根より忍びねになくきり〴〵す哉

秋二十首

一秋ぞくるまだ東雲の景色より夕の空は見えける物を
二七夕の雲の衣を吹きかさぬ夜塞になりぬ天の河かぜ
三我が宿の萩の下風いかならむ袖も露けしはつ雁の聲
四秋風も本荒の小萩露おちて山影さむし庭ぞ鳴くなる
五とことはに變らぬ風も萩の葉に戰ぐ音より秋の夕暮
六秋は猶心盡しの木の間より月にもりくるさを鹿の聲
七雲きゆる空を限とすむ月の光もなべて秋のそでかな
八爽けさは秋の習のよはの月と思へどえ耐寢られざりけれ
九秋といへば濱松が枝の手向草わりなき露に宿る月哉
一〇志賀の浦や遠照波を見渡せば月にいざよふ蜑の釣舟
一一初瀬川ふる川のべも霧はれて月にぞ立てる二本の杉
一二忘れはや昔みかさの秋の月なほ古郷に廻りあふとは
一三月見ばと頼めか置し人はこで淺茅が露に松蟲の鳴く
一四心なき身をさへ更に惜むかな難波わたりの秋の夕暮
一五秋の嵐吹きにけらしな外山なる柴の下草色變るまで
一六鐘のこゑ鳴の羽音もあはれなり野寺の霧の明方の空
一七夜や更くる雲の遙に鳴く雁も一つになりぬ衣うつ聲
一八大方の野原の露はうつろひて風に知られぬ庭の白菊
一九小倉山西こそ秋と尋ぬれば夕日に紛ふ峰のもみぢ葉
二〇露時雨もる山陰の下紅葉ぬるともをらむ秋の形見に

冬一

二一龍田山みねの紅葉は散りはてゝ嵐にまがふ松の聲哉
二二叢雲の伊駒の山に懸るより眺むる袖も打しぐれつゝ
二三嵐よく梢はかれて大井川木の葉がくれに宿る月かな
二四月さゆる庭の木の葉におく霜の曇らぬ上に積ふる也
二五夕附日流石にうつる柴の戸に霰ふきまく山嵐のかぜ

冬二

二六春秋の色々ごとに見し夢のさむるも冬の槇なりけり
二七楸生ふる佐保の川原に立つ千鳥空さへ清き月に鳴く也
二八衣手に松風さむみ住吉の夕波ちどりうらづたふなり
二九夏刈の玉えの葦も霜枯て葉分の波にをしぞ鳴くなる
三〇天の原雪降りくれば足引の山こそなみの籠なりけれ

冬三

三一卷もくの檜原に雪や積るらむたえぬ槇に柚木とる音
三二宿からむ行方も見えず久方のあまの河原の雪暮の空
三三天津袖ふる白雪にをとめ子が雲の通路花ぞ散りける
三四雪の中に遂にもみぢぬ松の葉の難面き山も暮る年哉
三五年暮て四十は過ぎぬむば玉の我黒髪も霜やおくらむ

戀一

三六ほのみてし君にはしかじ春霞たなびく山の櫻也とも
三七春の波の入江に迷ふ初草のはつかに見てし人ぞ戀しき
三八知ると云へば此方の空と眺ねど吹來風の袖に馴ぬる
三九人知れず朽つるたぐひや我袖に倉部の山の谷の埋木
四〇から衣日も夕暮の空の色くもらば曇れ待つ人もなし

戀二

四一思へ共人の心の淺茅生に置迷ふ霜のあへず消ぬべし
四二目から輙む夢路はむなしくていづる現の戀は覺えき
四三思ひ出よ誰が兼言の末ならむ昨日の雲のあとの山風
四四時しもあれなど強ちにつらからむ秋は夕暮月は有明
四五清見潟我が通路の關なれや打ぬる人も波のよる〳〵

戀三

四六浦風や今宵も松にふけにけり頼めぬ浪のおと計して
四七逢ひにあひて物思ふ頃の夕暮に鳴くや五月の山時鳥
四八中々に明けだに果れ起もせず寢もせぬよはの村雨の空
四九入るまでに月は詠めに稻妻の光の間にも物思ふ身の
五〇今ははや己がきぬ〳〵急ぐらむ獨かたしく東雲の月

雜一

五一神垣や御裳濯川も石清水君がためとやすみ初めけむ
五二霧はるゝ鳥羽田の面を見渡せば行末とほき秋の山里
五三住の江の月に神代のことゝへば松の梢に秋風ぞ吹く
五四幾世とも知られぬものは白雲の上より落る布引の瀧
五五藻汐燒煙も波の末にして知らぬ濱路に今日も暮しつ

雜二

五六故郷に賴めし人も末の松まつらむ袖に浪や越すらむ
五七昨日こそ波はかけしか橋枕雲しく峰も袖は濡けり
五八我庵は峰の杉村分け過てそれとも見えぬ深山木の陰
五九昔だに昔朽ちける津の國の長柄の橋の跡をしぞ思ふ
六〇憂乍ら有ればぞあへる君が代に數ならず共身をば厭はじ

祝

六一四方の海の波の外まで聞ゆ也はこやの山の萬代の聲
六二久方の天のかぐやま空はれて出づる月日や萬代の鑒
六三影酌〳〵星の位も長閑にて空にぞしるき御代の景色は

百首和歌　續河百首

春二十首

立春

六七春きては梢の空にかすめどもまだ雪深し岩のかげ道
六八から衣裾野の原の姫小松ひけば千年の袖にこもれる

霞

六九あさみどり野邊の霞の下ぐさに雉子なくなり春の曙

鶯

七〇氷だに波に知られぬ谷風にまづ打出もうぐひすの聲

若菜

七一里とほき野邊の若菜は摘みやらで心につもる雪の聲

殘雪

七二千里まで一つに見えし冬の色を垣根に殘す春の雪哉

梅

七三梅が枝も花咲てこそ匂ひけれ思へば春ぞ猶頼ひなき

柳

七四さゝがにもまだ冬ごもる故郷の軒端に懸る青柳の糸

早蕨

七五つま木には野邊の早蕨をりそへて春の夕に歸る山人

花

七六霞分け入りにし人の香づれも花に程ふる三吉野の山

春雨

七七降るとなき淺茅が庭の春雨に頼めし人の見えぬ頃哉

春駒

七八若草の緑の色やまがふらむ霞をあさる野邊の春こま

歸雁

七九ながめわびぬ獨離れて行く雁の霞にまがふ曙のそら

喚子鳥

八〇谷の水松の風のみ音づれて人に知られぬ喚子鳥かな

苗代

八一山里は雁の小田の苗代にかけ樋の水を任せてぞみる

蛙

八二秋を待つ一つ草葉と見し程に緑を分けて唉く蛙かな

杜若

八三杜若にほふ川邊のたび衣木の下陰も立ちぞやられぬ

藤

八四紫にいくへか染むる藤のはな一しほまさる松の緑に

款冬

八五川風に花や散るらむ山吹の色になりゆく井手の浮草

暮春

五九都をば雲に任せて行く鳥の歸る古巢に春やとまらむ
夏十五首
更衣
六九蟬の羽のよはの衣を引き返し花の袂を夢にだにみむ
七九卯の花の垣根に秋や通ふらむ月の光のすみまさる哉
葵
八九契りけむ神代も著くゆふ襷今日は葵をかけや添らむ
郭公
九九まだよひの今一聲はほとゝぎす誰が待つ里の曙の空
菖蒲
〇今日ふける物とも見えず菖蒲草葱も苦も深き軒端は
早苗
一〇松風に山田の早苗うち靡き聞く心ちする秋の聲かな
照射
二〇丈夫が端山のともし影消えてしるは命や有明のつき
五月雨
三〇五月雨は富士の高嶺も雲閉て波になりゆく浮島の原
橘
四〇夏の夜は花橘の匂ふより眞木の板戸はあくる也けり
螢
五〇夕まぐれかびやが下の夏蟲は煙も立てゝ燃ゆる也鳧
蚊遣火
六〇蚊遣火の煙に沈む山里を人のとはぬも思ひ知るらむ
蓮
七〇此世には池の蓮も夏ぞ咲く花を散るとも思ひけるかな
氷室
八〇氷室山松風さゆる夕ぐれは楢に雪の降らぬばかりぞ
泉
九〇月はさえ岩もる水は秋のころ夏のよそなる庭の轉寢
荒和祓
一一御祓する川邊の松よ吹く風に幾夜千年の秋を迎へむ
秋二十首
立秋
一昨日だに訪むと思し津の國の生田の森に秋は來に鳧
七夕
三彦星の妻待つよひの空になほ心をつくす夕月夜かな
萩
三一蜩の鳴く夕かげの秋萩に露おきかはす大和なでしこ
女郎花
四一旅衣片敷く野邊を朝たてばきぬ〴〵になる女郎花哉
薄
五一待つ宵もかへる袂も秋風におもひ侘びたる花薄かな
刈萱
六一哀なりほすゑも葺く刈萱の下葉に物を思ひ知るらむ
鶉
七一藤袴ならふ匂もなかりけり花は千ぐさに色變れども
荻
八一夕暮の同じ籬の蟲の音もほのかになりぬ荻のうは風
雁
九一待つ人は霧のまがきに跡たえて頼めぬ空の初雁の聲
鹿
一二嵐吹く楢の葉分に傳ひきて袖にしぐるゝさを鹿の聲
露
一二露や花花や露なる秋くれは野原に咲て風に散るらむ
霧
二二藻汐くむ蜑の浦路も絶ぬらむ行方も知ぬ須磨の夕霧
檉
三二片岡の日影しぐるゝ柴の戸に暫しかゝれる朝貌の花
駒迎
四二東路や幾重山路を隔てつゝ今日相坂にきりはらの駒
月
五二秋もやがて有明方になりにけり姨捨山の長月のつき
擣衣
六二木幡山有明の月に越えゆけば伏見の里に衣うつなり
蟲
七二蟲の音も愛に繁くぞ聞ゆなる野と成はつる深草の里
菊
八二移ろはむ色をも知らでをる袖に霜おき添る秋の白菊
紅葉
九二しぐれゆく衣手さむし立田山楢いろづく秋のした風
九月盡
〇今日のみと秋のけしきを眺むれば嵐も惜き夕暮の空
冬十五首
初冬
一三寂しさは冬の始ぞ無りける木葉散りかひ時雨音づる
時雨
二三龍田山時雨も脫く成にけり木の葉散行く木々の下蔭
霜
三三秋の田に立てしそほづの姿まで霜に迷へる冬の山里
霰
四三石走る吉野の瀧はこほれども霰ふる夜は玉ぞ散ける
雪
五三見渡せば潮路遙に袮さえて浪こす雪や末のまつやま
寒鷹
六三下こほる蘆のかれ葉の雪の上に霰ふるなり有明の空
千鳥
七三そことなく物ぞ悲しき浦風に渡るちどりの明暮の聲
氷
八三絶えだ〴〵の浮寢の水に結ぶ夜は氷も浪の枕をぞする
水鳥
九三葦鴨のおのが霜とや拂ふらむ上毛にさゆる有明の月
網代
〇四尋ねくる宇治の網代の朝ばらけ紅葉に紛ふ袖の色々
神樂
一四神垣や庭火の影もさゆるまで袖に霜かる深き夜の風
鷹狩
二四雉子たつ野原のみゆき雪深し暫しやすらへ雲の上人
炭竈
三四立昇る煙も雲のそこにして雪ふりうづむ小野の炭竈
爐火
四四年くるゝ有明の空の月影にほのかに殘るよはの埋火
歲暮
五四はかなくて過る月日を數ふれば涙も年の暮は知けり
戀十首
初戀
六四鹿のふす露に入野のかり衣萎れも果す逢ふ由もがな
忍戀
七四浮草の下ゆく波の程もなくあらはれぬべき袖の上哉
不逢戀
八四ぬれば夢覺れば向ふ面影に馴てもよその物思へとや
初逢戀
九四敷妙の枕の下は潮干にて今日ぞみるめの生始めける
後朝戀

○五五待て暫し夜深き鳥の聲す也さても盡せぬ名殘也とも
逢不レ遇戀
一五六夜もすがら重ねし袖は白露のよそにぞ移る月草の花
旅戀
二五七清見潟なみも枕も一つにて見し面影をよする月かげ
思
三五八くらぶべき澤の螢も水鳥も時ぞともなき思やはする
片戀
四五九されば𪜈ぞ波こえてけり末の松我思ふとは色も變らで
恨
五六〇今ぞ知る絶えぬ恨は戀初めし心のはての限なりけり
雜二十首
曉
六六一聞く人の寢覺の袖は露けくて尾上の鐘は霜や置らむ
松
七六二波の上の松の景色もたぐひなく煙たなびく鹽竈の浦
竹
八六三時分かぬおのが枯葉は積れども色も變らぬ庭の呉竹
苦
九六四世を捨む山のあなたの袖の色を哀にみする岩の上哉
鶴
〇六五濱松の梢の風に年ふりて月にさびたる鶴のひとこゑ
山
一六六思ひやる姨捨山も月のころいつも心はみよしのゝ奥
川
二六七昔より人は渡れど貴船川せゞの岩かど馴れずも有哉
野
三六八しぐれつる野原の木葉色晴て月と露とにを鹿鳴く也
關
四六九月もいかに須磨の關守詠む覽夢は千鳥の聲に任せて
橋
五七〇吉野山思入るべき通路も世を宇治橋をまつや渡らむ
海路
六七一都まで心しづめぬうきねかな蘆屋のおくの有明の空
旅
七七二眺むれば越えこし峰も埋もれて雲ぞ都の境なりける
別
八七三思ひおく跡の哀はなからまし人も惜まぬ別なりせば

山家
九七四住みそめて心慰む山里もくやしくなりぬ木枯のこゑ
田家
〇七五露ながら稻葉の風を片敷きて山田の庵に月を見る哉
懷舊
一七六自から猶長らへて年ふとも何を昔の身とはしのばむ
夢
二七七夢と見し人は夢路に迷へども現はなほぞ現ともなき
無常
三七八定めなき浮世を風に詠むればかつ散る花に宿る白雪
述懷
四七九長らへてあたにもあらぬ世中を思ひ知らずも猶迷哉
祝
五八〇降る雨も照す日影も君が代の空につきせぬ例也けり
百首和歌　大嘗正四季百首
神祇　春夏秋冬　自餘准レ之
六八一散りかゝる曇りも有じ神風や五十鈴の川の花の鏡は
七八二少女子がゆふかみ山の玉藥今日は葵をかけや添らむ
八八三から錦誰たむけゝむ大和なる三笠の紅葉春日野の萩
九八四あらぬ世の山の日吉の朝日影さすがに懸る雪の白ゆふ
月
〇八五朧にも昔の影はなかりけり年ねけて見る春の夜の月
一八六堰かぬる岩井の水は多けれど掬ぶぞ夏の夜の月
二八七海のはて空の限も秋の夜の月の光のうちにありける
三八八詠むれば泪も袖にむすぼゝれ空さへ凍る冬の夜の月
風
四八九さゝ波や玉藻に遊ぶ鴛の海の靄のひまは春風ぞ吹く
五八〇おのづから扇の外に吹く風も袖に少き水無月のそら
六八一三日月の秋ほのめかす夕暮をさやかに告る荻の上風
七八二つれもなき槇のを山も冬くれば下草しるき木枯の風
雨
八八三待つ人も今日こむ迄は頼まれず雨降しむる春の山里
九八四三島江の玉江の眞菰徒にかくて日をふる五月雨の頃
〇八五こきまざる野邊の錦の經緯も亂れてよわき秋の村雨
一八六都人ちぎりし物を初雪に松の葉をしき夕ぐれのあめ
曉
二八七有明の霞にまじる花の蔭暮れなばなげと猶や頼まむ
三八八曉と知する鐘の數の間に明けやはてなむ夏の夜の空

四八九明方に秋の寢覺やなりぬらむ殘る方なく物ぞ悲しき
五九〇今はとて霜打はぶき鳴く聲は八鹽の後も長き夜の空
朝
六九一青柳の梢も今朝は白妙のいとよりまさる春のあわ雪
七九二常磐木のまだ山陰の谷の戸は暫し朝日の影ぞ涼しき
八九三百羽かく鳴のはねがき幾返り朝わびしき秋に逢らひ
九九四詠つゝそこはかとなく悲しきは雪の朝の四方の山颪
夕
〇〇五春の日は大方空の霞むより暮れゆく空の色ぞ寂しき
一〇六天の原空ゆく月やちぎりけむ暮るれば白き夕顏の花
二〇七おのづから夕にならぬ里もがな暫しも秋の哀過さむ
三〇八いかばかり柴こる峰のさえつらむ夕霜帶て歸る山人
夜
四〇九枕だに定めもやらぬ春の夜の夢のたゝちぞ猶も儚き
五一〇梓弓ひけば本末よる〳〵は入野の照射しかや悲しき
六一一長夜の秋の寢覺や更けぬらし樣々になる身の行方哉
七一二冬の夜は寢られぬ儘に灯の長き光ぞともになりける
山
八一三峰の庵あくる外山の松の戸に霞ぞ立る己が身ともに
九一四蟬の羽のうすき衣のひとへ山青葉涼しき風の音かな
〇一五神代より時雨ふりにし山城のくせの鷲坂紅葉しに鳧
一一六神だにも煙を立ぬ山なれば雪の白木綿懸ぬ日もなし
野
二一七朝日山裾野の野邊は雪消えて八十氏人も若菜つむ也
三一八昔思ふ飛ぶ火や螢かすがのゝ野守よいかに夕闇の空
四一九命かは何その露の仇し野にふにもかへぬ松蟲の聲
五二〇武藏野は草のは山も霜枯て出るも入るも月ぞ障らぬ
浦
六二一手もたゆく海士の桂繩春の日も終には暮ぬ漁火の影
七二二淡路島夕日隱れの波の上に釣する海士は袖や涼しき
八二三此頃の浦ふく風に磯馴松かはらぬ色も秋は來にけり
九二四荒くらし波間も見えぬ冬の日に海の面は行船もなし
河
〇二五飛鳥川いはなみ高し葛城や山の白雪いまやけぬらし
一二六誰が袖につゝむ螢の衣川思ひあまりて玉と見ゆらむ
二二七山風のおろす紅葉のくれなゐを又幾しほか染川の波
三二八大井川あらしの風も早き瀨に筏も年の暮いそぐなり
池

二小山田の池の堤のふる柳たがさしそめし緑なるらむ
三ぬしは誰とへど白玉こゑたてゝ夕立かはづ池の蓮葉
四秋の夜は池の小船にさす棹の幾めぐりせば有明の月
五冴る夜の今朝いか計り斑鳩のよるかの池は氷しぬ覧

鳥

六過ぎがてに暫しやすらへ帰る雁山田の原の朧月夜を
七天津空くものはたての郭公なくや夕は妻をこふらし
八秋の田の稲負鳥のこがればも木葉催す露や染むらむ
九暮れゆけば雲さへ深き御狩のに疲れの雉たち馴る也

田

一〇片山のほぎのき田を打返し春もや田子の水澄つく覧
一一山里の門田の稲葉見わたせば一ほ出でたる夏の朝露
一二伏見山秋の田の面の色づけば松は緑ぞよそに成ゆく
一三秋はへし山田のひたは音もせで鹿驚かす木々の下折

松

一四おしなべて靡れを梅とふる雪の木立は著き庭の松哉
一五まだきより秋とぞ名のる黄昏や朝倉山のよその松風
一六やほかゆく菊の濁松よと共に秋の千年は著くも有哉
一七岩宿に片枝枯れたる霜の松誰が世に植て幾世へぬ覧

杜

一八春くれば浮田の杜に引くしめや茜代水の便なるらむ
一九夏の日の野中の森の青葉かげ遠方人の袖ぞやすらふ
二〇笹のはも信太の森も秋くれば露には敢ず色ぞ移ろふ
二一立濡れてたれ待ちそふる衣手の森の雫も氷しぬらむ

草

二二春の夜の夢の浮草ねぞ絶ゆる浮世をさそふ水の涙に
二三長き根の入江の菖蒲夏引の糸手に懸て今日は暮しつ
二四憂き秋のまだ暁の草の葉にいつ珍しき露のかけゝむ
二五冬きても尾花が本の草は猶かれてや人の心みゆらむ

花

二六春の日は曇も果ず照りもせずしく物もなき花の色哉
二七東野に紫陽花咲る夕月夜露の宿りはけさならずとも
二八一枝は散るとも折らむ朝露の殘りおほかる秋萩の花
二九紫に霜おきかふる白菊の花よりのちの冬ぞさびしき

祝

三〇諸人の初子を祝ふ小松原幾世の春の千代にあふらむ
三一水無月の照日も千代の奥山はやつをの椿影ぞ涼しき
三二萬代もなほ長月の空にあふみつのかしはにみき奉る
三三暮れぬとも何か惜まむ行く年を君が齢の限なければ

山家

三四世を背く柴の庵の谷の戸は出でも嶺の花をだに見ず
三五葛きあへぬ杉のかれ葉の庵なれば緑ぞ埋む山の夏草
三六我が宿の紅葉踏分けとふ人も都になれぬさを鹿の聲
三七戀しさを絶えぬ柴屋の夕煙あたら霞の玉やすゝがむ

旅

三八遙々と荻の焼原かき分けて道のゆくてに厭をぞ折る
三九草枕しげみに結ぶ姫百合のちぎりも惜しき短夜の空
四〇秋の月さやの中山さやかにも古さと人ぞ面影に立つ
四一海士のかる玉藻の枕霜とぢて我からさゆる片敷の袖

戀

四二我が戀は雪の下草結ぼゝれまだ打解けぬ三吉野の春
四三鵜飼舟早瀬に向ふ篝火の影となる身も下は消えつゝ
四四箏廬のとかへる山の葛の葉の一方ならず恨みつる哉
四五たきまさる眞木の炭竈我なれや此の頃深き戀の煙は

述懐

四六長しとて頼べきかは春の日の日影に老が身は弱りつゝ
四七白露も深き山の卯花は身を思知る名にや咲くらむ
四八浮世をば秋の夜長く厭へ共明くれば何と打歎きつゝ
四九和歌浦に年へて生ふる蘆鶴の古き上毛に霜ぞ置ける

釋教

五〇無量無數劫、聞是法亦難
五一幾世ふとまれの御法の花のえにまだ聞き難き鶯の聲
若於夢中、但見妙事
五二悟りえて暫しまどろむ短夜の夢にぞ妙に月は見え鳧

常在靈鷲山

五三鷲の山法を木の葉にかきおきて花の紐解く鹿の苑哉
五四渡るべき誓のふかき冬の海は氷も霜も結ばざりけり

詠二百首和歌一　文治三年　合點入レ集

春十五首

五五春風の吹來るまゝに志賀の浦の波にもかくる薄氷哉
五六遙々と出でぬ計ぞ山里の垣根につむも野邊の若菜も
五七梅が香は袂にとめてうぐひすの聲も過る春の山風
五八春の夜の月すむ空にあくがるゝ匂や花の心なるらむ
五九哀なり春の燒野に鳴く雉子しのぶ方なく妻や戀しき
六〇雁のゐる春の山田に心せよ返すよりこそ思立つらめ
六一郡いでゝ幾日になりぬ東路の霞つゝきに宿を任せて
六二三吉野の山の奥迄尋ねても心ちさで花は見るべき
六三吉野山かすみも花の色ならば幾重も見まし峰の白雲
六四山櫻分け入る袖にかをるなり梢をそむる雲のした風
六五浦近きをのへの櫻かぜ吹けば浪の下こぐ海士の釣舟
六六恨みばや風の宿りやこれならむ花散り積る谷の岩陰
六七大空に霞の袖はおほへどもなほ春風に花は散りけり
六八世中を思ひつゞけて見る時は散るこそ花の盛也けれ
六九哀なる花と春との契かな相見ることも歸るわかれも

夏十首

七〇忍ぶべき春のかたみを藤波の色に待たるゝ郭公かな
七一待渡る宿やなからむ郭公卯の花咲ける垣ねつゝきは
七二橘の花ちるさとの夕風に山ほとゝぎす聲かをるなり
七三菖蒲草沼のいはがき風こえて匂ぞ袖にまづ懸りける
七四五月雨は野路の庵の袖ひちて浮寝も草の枕なりけり
七五卅日雨の隙なき頃は丈夫が鹿に逢夜や乏しかるらむ
七六水鳥の浮寝たえにし波の上に思をつきてもゆる夏蟲
七七せきとむる山下水を掬ぶ手の雫に秋の露ぞこぼるゝ
七八影すかむ杜の下風身にしみて秋になりゆく日暮の聲
七九省人の厭ひ鳧とは夏の日を御禊に捨る暮ぞ知らるゝ

秋十五首

八〇淺茅原あき風立ちぬ哀又いかに心のならむとすらむ
八一同じくはなほ秋深く七夕の逢夜も長き契なりせば
八二露を重み折れふすまゝに女郎花雌の外に盛なりける
八三暮れぬるか千種の色は盛にて色まさりゆく虫の聲々
八四秋風のうち吹く宵はうたゝねの人頼めなる荻の音哉
八五待ち〳〵て秋も別を惜むかなくれは過行く初雁の聲
八六さても猶とふ人もなき山里は晴間も霧の怨めしき哉
八七起てゆく人は暮をも待つ物を露に分かるゝ朝顔の花
八八月をのみ山路の友となかむれば鹿も嵐に聲遂るなり
八九恨めしや詠めも果じ秋の夜の月は頼めぬ人待たれ鳧
九〇よしさらば心は盡せ秋の月入りなむ後の物も思はじ
九一有明の月の盛になるまゝに秋は夕のおそくゆかしき
九二さらで又何に心の止るらむ世を背きても月は見る也
九三かたしきの袖に時雨は通ひきて猶秋深き月の影かな
九四紅に霞も見えし山の端を秋は染めます峰のもみぢ葉

冬十首

九五峰つゞき嵐にたぐふ浮雲や山廻りする時雨なるらむ

七色々の花を枯野に分けなして霜にかたしく旅衣かな
八霜枯の草ばのうへを詠むれば袂にかゝる秋の夕つゆ
九秋の色を惜しも人に見するかは枯野の笹を埋む白雪
〇誰が庵の寝覚の窓にしらむらむ雪ふりつもる峰の曙
一春は花あきは紅葉と人待ちし道たえはつる冬の山里
二玉つしま空に千鳥の聲更けて涙かたぶく冬の夜の月
三初瀬川岩越す波の音さえて月に落ちくる鴨のむら鳥
四水鳥のうきね寄ふ景色にて池の水のほどぞ知らるゝ
五心だに身にはとまらすなりゆくを哀也ける年の暮哉

忍戀十首

六照射するは山が峰に旅寝して戀も雲居の星に紛へむ
七いかにせむ身を任ても尋ぬべき忍の山も名は聞ゆ也
八世と共にせめて人めを包むまは逢も夢路を頼む計ぞ
九侘びつゝは顯れてだに打歎き思ふ計も人を戀はばや
〇身のうさを忍び馴たる心さへ戀には色に出ぬべき哉
一我戀は苔の岩屋の時雨かは音にも立すもる庵もなし
二みくもりにすだく蛙も妻戀る聲をば人に忍ぶ物かは
三草深み木の葉おちそふ谷水にやゝ埋行く戀もする哉
四蘆火たく賤が軒ばのしの〻草思ふも苦し煙たてゝ
五忍侘び秋の野守に言とはむ露にも朽つる袖は有やと

過不ゝ會戀十首

六梅の花なれし袂の匂かな月や春にもあかぬむかしを
七留めかね岩に書けむ言の葉を色に見するは泪也けり
八物思ふ姿を見する水もなほうきてに結ぶ雫なりけり
九山の井のさゝれかき分けむすぶ(結元)
〇よそならば中々よそに馴なまし馴ぬる契也ける
一逢見てもあはぬ本の歎きにて名殘ぞ今の思也ける
二笛竹の一よを長き契にて絶果てぬとやねに恨むらむ
三荒れはつる人の心の故郷は我のみ通ふ戀路なりけり
四秋ふかき閨の扉も哀なり誰手にふれて忘れきぬらむ
五言の葉は我身ふりぬと返しても馴れし心ぞ置所なき

雜戀十首

六逢事は身を分けて共契らぬを思より社まづ碎けれ
七涙川末に逢瀬をありとだにくみて知する面影もがな
八紅にたぎりて落つゝ涙川そこの深さも色に見えけり
九淺ましや深き夢路に沈む身の猶上こすは涙なりけり
〇ひとめ見し人の心は夢路にて返す衣の袖ぞ朽ちぬる
一いかにせむ暫打ぬる程もがな一夜計の夢にだに見む
二我戀は行方も知らぬはし鷹のいはでも物を思ふ頃哉
三古もかく思ひ出やうきながら人をば人も恨ざりけむ
四若草も露もまだれぬ袖の上に涙おちそふ瀧の音かな
五藻汐やく蜑の磯屋の頼かは波に濡れても胸焦すらむ

寄名所戀

六移りゆく人の心の花故も吉野の山に身をやまかせむ
七友とするゆふつけ鳥に逢坂の關のあなたに聲聞ゆ也
八我が爲めに君ぞつみける住吉の峰に生ふてふ人忘草
九假にだに尋ねし人の跡たえていとゞも茂る深草の里
〇面影に猶ぞ忘れぬふぢふのゝかたちが原の有明の月
一七夕のあまの川原に宿からむ年に一夜の契ありやと
二思きや馴れし昔に身を替て難波の蘆の假に見むとは
三清見潟なみも關路はもる物を行くへも知らぬ袖の柵
四思侘びまつがうら島尋ねみむ心ある蜑や慰むるとて
五身になして室の八島を思には波の下より煙やは立つ

旅戀五首

六龍田山思ひ告こせ吹く嵐身をば木の葉の下に宿して
七思ふとは草の枕や知ぬらむ野べより深き露の景色に
八待て暫し波間の海士の〝篝舟思に餘るうきねくらべむ
九待てとやは爰に頼めし鶉なく岩田の小野の秋の夕暮
〇行方なき人の心に類へ見し雲も山路は身にならし晁

寄法文戀五首

六聚沙爲佛塔
七殊氣なや誰我戀と譬へけむ身を助くべき蜑の眞砂を
於未來世必得成佛
二君を思ふ心に法を比べばや偖もこむ世の契しるやと
若於夢中但見妙事
三淺ましや戀しき影を思はずば夢にゝ見まし有明の月
其身火燃
四弘むべき法の爲とも思せば燃共身をば惜まざらまし
弘誓深如海
五みるめなき涙の中に沈む身を法の海にも浮めてしがな

詠二百首和歌一　文治三年十二月

春二十首

六衣川けさ立ち渡る春風にとぢし水もとけやしぬらむ
七色にみせ景色にしるき春を猶音にもつぐる谷川の水
八花もまだ匂はぬほどの中空に霞に春の色を見せけり
九春をへて馴にし色も今年より霞こめたる心ち社すれ
〇行儘にたちの〻野邊の霞哉分くとやよその人は見覺
一吹く風を軒端の梅に厭ふ哉外の匂はさそひやはこぬ
二故郷の庭の青柳花ちりて軒端のうちに遊ぶいとゆふ
三待つ人の心に春は咲きそめて枝には花の移る也けり
四櫻花雲にまがふもつらきかな宿の梢を人もとはじと
五散らすなよ幾重もつゝめ春霞しのぶの山の花の梢は
六立籠むる霞にこもる櫻花さらでも春の色ならぬかは
七花のもる山かけてすむ蜑人は思はぬ波に又返るらむ
八身々捨てゝ吉野の山に入りぬ共思や出でむ白川の花
九花故に山の岩根は踏初めつ爭で浮世を厭ひてしがな
〇くまなさぞ秋見し空に變れども哀は同じ春の夜の月
一時くればたれも哀は知せけり霞にもるゝ春駒のこゑ
二飽る雁暫し行方も見るべきに霞も雲もつらき空かな
三さらでだに住まばやと思ふ山陰に心を添る喚子鳥哉
四養探み枯れし草葉は綠にてまだ山里は人めばかりぞ
五暁初て幾日もへぬ藤の花春の物とは今日のみやみむ

夏十五首

六ぬぐ袖に類へて今日は夏衣物思ふ身も變らましかば
七侘ひ人の宿の楢のおそ櫻花さへ春にあはぬなりけり
八卯花を手折て見れば夏の夜の月の光ぞとられける
九郭公なきているさの山の端にまだ影とめぬ夕月夜哉
〇村雨のすぎぬる空の郭公名殘までなほ袖ぬらせとや
一今年より花さきそむる橘のいかで昔の香に匂ふらむ
二五月雨の空に哀をそへよとや飛びかふ鷺の夕暮の聲
三常夏の花の盛を見ぬ人や野邊には秋の色を待つらむ
四我が宿に一むらおける白露や蛍なみゐる庭の玉ざゝ
五照射する木の下露に武士の哀も知ぬ袖やぬるらむ
六庵だにさゝぬ夏野の旅寢には靱くを叩く水鶏なる覽
七蚊遣火の煙にむせぶ山里は秋をこめたる夕霧ぞ立つ
八清水せく岩間を夏の絕間にて楢に蟬の聲つゞくなり
九夏の夜の月光をやどす池水に涼しく見ゆる蓮の下かげ
〇影清き河邊の楸風こえて秋をかけたる御禊をぞする

秋二十首

一いつしかと秋の景色に成にけり草葉の露も松の嵐も
二夏の野にしのびし虫も聲々に心もおかぬ秋の夕つゆ
三詠めつゝ過にし秋の面影やまだ暁初めぬ野邊の初花
四花はさぞ色なき露の光さへ心にうつる秋のゆふぐれ
五荒果てゝ野原に續く花の色をともの離にこむる霧哉
六秋風は荻の上葉に吹きなれて雁なきそむる夕暮の空
七淡路島吹きこす秋の波風に類ふを鹿の聲のはるけき

一色變る梢を見てもありぬべし秋のを山に鹿の鳴く也
九時雨ゆく空こそあらめさを鹿の上毛の星ゝ且曇り晁
〇憂き人に袂しをるゝ嵐かな心や秋のくさ木なるらむ
一月すむ夕の空のけしきにて鶉鳴くなり更科のさと
二遙なる峰の嵐を待ちとりていな葉も秋の哀つぐなり
三夕月夜ほのめく秋の景色にて見る心地する有明の空
四五月雨の降りにし空も中々に思ひぞ出る秋の夜の月
五秋の夜の籠をこむる薄霧に立ち洩さるゝ山の端の月
六昔みし心のいろはかはれども月は一つの光なりけり
七夜をへつゝ峰の嵐ぞ音まさる裾野の蟲の聲は弱りて
八咲きそむる雛の菊の一むらに秋の末葉の哀をぞ知る
九寂しさも詠めもはてず秋霧の立田の山の峰の紅葉ば
〇大井川あきは梢のけしきかは心ぞうつる有明のつき

冬十五首

一紅葉せぬ秋の名殘のはかなさは風も梢に止らざり晁
二鏡やま秋見し月の面影も時雨にくもる冬は來にけり
三物思ふ心の隙もなかれとやあまりしぐるゝ夕暮の空
四いかにせむ定なき世を厭ふべき吉野の山も村雨降也
五夕寒みしぐるゝ空になる儘に絶えん〳〵凍る山川の水
六嵐ふく松の葉白くおく露の落ぬ程まで夜はふけに晁
七旅寢する須磨の浦ぢのさよ千鳥聲社袖の波はかゝれ
八友なくて波の枕に鳴く千鳥ひとの哀も思ひ知りぬや
九あぢむらの尾上を越る夕暮は松吹風もうづもれに晁
〇御狩のゝかるゝ眞柴にすむ鳥の哀を限る歎きなる覽
一柴の戸を聲打添へて叩くなり風の紛れに霰ふるよは
二篠結ぶ宿の戸ぼそのさびしさを重ねて閉るよはの雪哉
三山里は垣根のしとゝ人なれて雪ふりにけり谷の細道
四諸人の聲を連ねて冴る夜の雲居に雁も名のり行く也
五春秋を惜みし暮も殘しこし年を添へても冬のゆく覽

戀十首

一秋かけてとや立そむる敏瀧の戀や紅葉の色に出まし
二打出ていざゝは戀む宮城野の假にもあへる契有やと
三身は沈み涙にうかむ枕こそ我が物ながら羨まぬれる
四我が袖にかさぬる月の光さへきぬ〳〵になる曙の空
五戀すてふ名をば高瀨の水馴棹さしもや君に漕離べき
六とにかくに思へど戀の中にある岩木ぞ人の心也ける
七忘るなよ今は心の變るとも馴れしその夜の有明の月
八雨の夜も賴めし物を月にだにとはず成ゆく人の心よ
九忘れぬを忘れぬとやは賴こし思ひしとぞ思せむとは
一〇春の色秋の紅葉も見て過ぎし心な戀にいたく碎きそ

述懷五首

一數ふれば年は六十の半にて雲居の月をよそに見る哉
二偖も猶憂身一つやもれ出でむつゝきて照す月の光に
三いつとなく行年波にゆられきて身は浮船に乘も定す
四いかにせむ賴む山路も袖濡て思ひおくべき若草の露
五和歌の浦や深き誓を賴みつゝ淺き汀に藻屑をぞかく

雜十五首

曉

一曉の空にたなびく浮雲や遙なる世のしるしなるらむ

松

二落積る軒の荒間の松の葉にあやなくさはる月の影哉

竹

三通ひこし竹の下道あと絶えて崩れにけりな淀の川岸

籬

四來て見れば庭の遣水苔堰てもる人もなき岩の寂しさ

鶴

五島風のあしの葉わたる夕暮に汀のたづも聲通ふなり

河

六音羽川こゝろ一つにせきとめて昔の宿の哀をぞ知る

關

七見るまゝに心はとめつ清見潟關もる波も立返れども

山家

八夕暮は峰のしばやも物さびて雲のまがきを拂ふ木枯

田家

九夕暮の稻葉の露を分けきても宿の哀を人のとへかし

旅

一〇草枕都に歸る夢にては露をも分けぬ物るぞありける
一一ゆふは山谷の梢に宿かりて雲もたつなり明ぼの丶空
一二末の松上こす波にぬる鴈の堪へて過るや海士の釣舟
一三草の庵やのりの末つむ夕暮の峰の樒に風かよふなり
一四ふりにける森の梢に移り來てありす預なる寺鐘き哉
一五身を捨ば孰くか人の宿ならぬ谷の木陰も峰の岩根も

壬二集上之下

二百首

百首　爲家朝臣歌合
百首　擬作
百首　攝政家
百首　前内大臣家内々

詠二百首和歌一　將本雖二二百首一一通同依私集之次收載久八年七月二十九日歌也遙久歌與二初歌一同歌多故略レ之舉合點入レ集歌云々

春

立春

一音羽山明行く雲の關戸より霞むや春の越るなるらむ

子日

二ねの日する二葉の松の行末はふるき梢の嵐にぞ聞く
三子日する松に千歳や契るらむ同じ二葉の野邊の若草

霞

四待つ人は花に任せて山里の霞める空に詠めをぞする

鶯

五雪はまだ野邊もへだてぬ山里の垣根のほどや鶯の聲

若菜

六里遠き野邊のわか菜は摘みやらで心につもる鶯の聲
七若菜摘野邊のよそめに成に晁出でつる里は霞隔てゝ

殘雪

八雪を埋み交野の緑朝ふめば隱れもやらず雉子鳴く也

梅

九埋もるゝ軒端の梅や咲きぬらむ匂にさゆる雪の下風
一〇下おなじ雛の竹にうづもれて春に知られぬ庭の白雪

柳

一一霞より緑は春のいろなれどけしきことなる玉柳かな
一二寂しさは幾百年もなかりけり柳のやどの春の明ぼの

早蕨

一三あやなくも袖こそぬるれ春雨の古野の原に萠る早蕨
一四おしなべてもゆる草葉は緑にて紫ふかき野邊の早蕨

櫻

一五四方の山都も花になりはてぬ孰くに春の宿を定めむ

春雨

一六降るとなき淺茅が庭の春雨に賴めし人の見えぬ頃哉

春駒
二冬枯し同じ野邊とも見えぬ哉草葉の色も駒の景色も
歸雁
三詠めわびひとり離れてゆく雁の霞にまよふ曙のそら
喚子鳥
四いかゞする霞める峰の呼子鳥こたへぬ月の影計して
苗代
五はる〳〵とあら田の面を見渡せば霞を返す春の山風
菫菜
六菫咲く小野の芝生の朝ばらけ露打はらひ雲雀鳴くも
杜若
七深草の色こそわかきかきつばた水の心も春の日數も
五月雨
八五月こば菖蒲ひくべき沼水に待つ人さそふ杜若かな
款冬
九影やどす井手の玉水手にくめば雫に匂ふ山ぶきの花
〇〇咲初めて春はくれぬる山吹の移ろふ色は夏に恨みむ
藤　初百首歌二首闕書本無
一〇夕風に池の藤なみ花ちりて春もいまはと蛙鳴くなり
三月盡
一一花散りて後はものうき詠めさへ霞に限る春の暮かな
夏
更衣
一二惜まじよ雲居の花に馴もせず今日脱更ふる春の衣手
一三明けぬとておき別れつる移香の重ねてをしき夏衣哉
卯花
一四卯花の垣根に秋や通ふらむ月の光のすみまさるかな
一五久方の月のみやこの雛まで思ひやらする宿の卯の花
葵
一六葵草かくる萩の夕風に宿のけしきもなつかしきかな
一七神人の同じかざしの名をとめて日影に靡くもろ葛哉
郭公
一八篠共にまだ出でやらで郭公山のあなたの月に鳴くも
菖蒲
一九軒近き若葉の楢かげそへて葺ける菖蒲の色ぞ涼しき
籠久之歌同故略レ之
早苗
二〇早苗とる賤の袂のぬるゝ〳〵り稻葉の露の思ひ祉やれ

照射
二一ますらをが歸るともしの影なれや麓に廻る屋の光は
五月雨
二二さゝ蟹の宿も絶行く五月雨に日をへて繁る軒の糸水
二三雲さそふ嵐を暫し晴間にて猶かきくらす五月雨の空
橘
二四たちばなのかをる夕の浮雲や昔ながめし煙なるらむ
二五村雨にはな橘の散る時はみぞるゝ空にかをる也けり
螢
二六こすの外にまがふ灯ほのかにて螢わけ入る庭の蓬生
踏久歌同故略レ之
蚊遣火
二七夏虫をいとふばかりの煙にもあはれは深し夕暮の空
又同關略レ之
蓮
二八夏の夜は池の蓮を吹く風に空もすゞしく匂ふ月かげ
二九いろ〳〵の池の蓮に花咲きて心にほふ夏の夕ぐれ
氷室
三〇氷室山いかにちぎりて岩陰や夏の氷の淵となりけむ
三一春風のいかにわきけむ氷室山同じくとぢし谷の氷を
泉
三二尊ねくるおのが木陰のまし水を楢にむすぶ松の夕風
又同故略レ之
六月祓
三三御禊川ゆふかけてする麻の葉の直き心を神やうく覽
三四明日よりの秋の心のいかならむ思は捨つよはの御禊に
秋
立秋
三五萩の葉に昨日も吹し風なれど秋來宵ぞ身には泌ぬる
又同故略レ之
七夕
三六七夕の逢ふ夜の袖を吹き返し明るもつらき天の河風
萩
三七宮城野の木の下露は滋くとも折てを行かむ秋萩の花
女郎花
三八折る袖に露を宿して女郎花よそにやしのぶ秋の夕暮
三九女郎花空ゆく月の何なれや詠むる野べに心すむらむ
薄
四〇吹く風の音もなつかし花薄なびく雛の秋のゆふぐれ

苅萱
四一苅萱の身にしむ色はなけれども見て過難き露の下折
四二寂しさや野邊の夕にまさるらむ鶉分けたつ庭の苅萱
藺
四三藤ばかま月の枕に匂ふなり夢は旅寢の露にくだけて
荻
四四さても猶臥猪の床や安からむかるもが上は荻の夕風
雁
四五とふ人も風より外はなかりつる山邊の庵の初雁の聲
鹿
四六夕暮の都の秋はなになれやたゞ山里はさをしかの聲
又同故略レ之
露
四七月冴る野邊の秋風驚吹けば雪に紛の散るかとぞみる
霧
四八山里に今日こむ人を哀とは霧の朝もみつべかりける
槿
四九朝貌も咲くべき程は咲きにけり山路の菊に露も一時
駒迎
五〇望月の駒ひく袖も打しめりさよふけにけり相坂の關
月
五一更科や姨捨山のたかねより嵐を分けていづる月かげ
五二このほどは遥に思ふうら山に月より外の面影ぞなき
擣衣
五三さえのぼる槌の響きに夜や寒き衣雁がね空に鳴くも
五四大方の秋の哀も衣うつ音にはたへぬ物にぞありける
蟲
五五今こむと賴めて變る秋の夜の明るも知らぬ松虫の聲
又同略レ之
菊
五六待てしばし菊の雛の虫の音よ今は限の花のやどりを
紅葉
五七しぐるゝ也かねて移ろふ神なびの社の楢の日暮のこゑ
五八染めすて歸るもつらし立田姫楢にかざる長月の色
九月盡
五九有明の爪に見えし月だにもおくらぬ空に返る秋かな
六〇月の影露のやどりとならし來て別にたへぬ秋の空哉
冬

初冬

二いかにして冬は來ぬらむ今朝も猶霧の梢は古き山里

三秋の後なほ立つ霧に空とぢて梢にまよふ今朝の木枯

時雨

四浮雲の煙に紛ふ高嶺よりしぐれておろす富士の山風

霜

五霜うづむ庭の木の葉を吹返し猶秋になす山下風かな

六今朝みれば門田の面に立鴫の跡こそ霜の絕間也けれ

霰

七谷の水筧もたふる山里にこほれば雨の音まさるなり

八影さゆる月より外のうき雲に霰こぼるゝ更科のさと

雪

九跡たえて野山も見えず降る雪に梢ぞ庭の知べ也ける　又同ゝ之

寒蘆

一〇難波がた汀の葦は荒れにけり浦吹く風の音の寂しさ

一一蘆の屋のあしの雁も霜がれて難波の浦も冬ぞ寂しき

千鳥

一二月もいかに須磨の關守詠むる覺夢は千鳥の聲に任せて

一三尾上こす嵐の末のうら風に聲ほのかなるさよ千鳥哉

氷

一四山深みかつ降る雪のかつ消えて凍り重ぬる谷川の水

水鳥

一五水鳥の渡る羽風に雲乱て空より霜は降にやあるらむ

網代

一六宇治川や瀬々の網代木打て晃侵き氷魚のよるを待とて

神樂

一七風さゆる雲居の庭の川竹にほのかにまがふ霰のころ　又同ゝ之

鷹狩

一八霰降柴の枯葉を踏分てよりはの小野に今日も暮ぬる　又同略ゝ之

炭竈

一九寂しさに柴折くぶる山里を思ひ知りける小野の炭竈

二〇よと共に心ばせきは炭がまのけぶりに殘る有明の月

爐火

二一雪うづむ宿の埋火とこさえてあくる梢に嵐吹くなり　又同略ゝ之

歲暮

二二春をまで年をおくるも世中の人の心の花は見えけり

戀

初戀

二三思ふより先あくがるゝ心哉花咲く山に君は住まねど

二四今日こずば思ふ心の身を知るに同江にとも契初つれ

忍戀

二五こぎとめて暫し宿かせ蜑小舟湊の跡も人に知られじ

二六忍山繁みが露に臥侘びて妻よぶ鹿よよそにやは見る

不逢戀

二七よそに見て幾代になりぬ久方の空ゆく月に思ふ心は

二八戀しなむ後の契を賴む哉此の世につらき報つきなば

初會戀

二九待得てもはかなかりける契哉賴めもはてぬ夏の短夜

後朝戀

三〇歎かじよ歸る秋にまさりけり暮をも待たぬ花の下露

三一憂きながら濡れゆく袖ぞ懷かしき歸る朝の道芝の露

逢不會戀

三二夜もすがら重ねし袖は白露のよそにぞ移る月草の色

三三よよそに見て幾夜になりぬ久方の朝倉山の雲間もる月

旅戀

三四もとあらの小萩が露を枕にて夢にも人を宮城野の原

思

三五心なき岩木の中を思ふにも思は絕ぬ物にぞありける

三六思草しげる心を野邊に見て尾花が末も埋もれぞする

片思

三七深山木の嵐にたえぬ思だに獨は燃えぬ物とこそ聞け

恨

三八露落きふるのゝ小野の眞葛原いく秋風に心しるらむ

雜

曉

三九詠むれば月は遙にかたぶきて哀はあけぬ鳥の聲かな　續古歌同故略ゝ之

松

四〇いかなれば波も時雨も秋風も寂しきことは松の梢に　又同略ゝ之

竹

四一山なかは霜がれはてゝ呉竹の雜にくもる秋の月かな

四二山人の深き岩屋にむす苔は絕ぬ哀をほすかとぞ見る　（續古歌）

鶴

四三行方なき夜の雲路に鳴く鶴の思しとけばすの内の聲

山

四四雪ふれど忘れぬものは春風の匂を分けし志賀の山越

四五故郷や入り日の末にながむれば霞に殘る天のかぐ山

河

四六瀧くこき紅葉流るゝ飛鳥川變る淵瀨は色に見えけり　又同略ゝ之

野

四七花さかぬ秋の末葉に沈むとも哀はかけよ春日野の露

四八出てこし蓬の門も變らぬに野邊の旅寢にわくぞ侵き

關

四九玉章も都へゆかば言づてもむじの關路を歸る雁がね

五〇雪の色の月の光の名をとめて幾世かへぬる白川の關

橋

五一宇治橋やよはの河風ふけにけり下行く水の音計して

海路

五二波の上に又打添へて寂しきは松風わけて出づる舟人　同故略ゝ之

旅

五三せきかぬる磯の苫屋の哀かなまと打つなみの曉の聲

別

五四いさ知らず旅の別と契置て出でし都も又や見ざらむ

五五結ぶ手の雫うらびる山の井の櫻吹きまけ志賀の濱風

山家

五六誰か住む蟲の音乍秋の野を圍ひ分けたる深山べの里

田家

五七刈り殘すかたのゝ稻葉うち靡き一村そよぐ秋風の聲

懷舊

五八春秋の空に昔を忍びきて月と花とに身はふりにけり

夢

五九慰めし夢の寢覺のあらましに今は物うき我身也けり

六〇まだきめぬ夢の枕をとふ物は浮世をみつる涙也けり

無常

一儚なさは睡るむ程に見ゆる世を驚きて猶驚かぬかな　又同略ゝ之

述懷

二和歌の浦や波路に迷ふ浮雲のうける思の果ぞ儚なき
祝
三降る雨も照す日影も君が代の空に盡せぬ例なりけり
四空の上に長閑に遊ぶ友鶴の共にも猶や君を見るらむ

百首和歌　爲家卿家會

春二十首

一たをやめの春立つ今日の衣より匂初めたる花の色哉
六打群て若菜つむ野の花筐木のめも春の雪ぞまらぬ
七野べ見ればまだ名におはぬ櫻麻の楊の駒の雪の村消
八梅が香に驚さそふたよりにや谷の氷も風にとくらむ
九有明の鳥の聲さへ匂ふなり梅さく里に風や吹くらむ
一〇春の夜の闇も目枯ず梅の花絶ぬ色香は夢に見えつゝ
一一限ありて雲に分るゝ山の端につれなくかゝる朝霞哉
一二佐保姫の霞の袖も誰ゆゑにおぼろに宿る春の月かげ
一三誰が中に遠ざかりゆく玉章の果は絶ぬる春の雁がね
一四春のきる衣かりがね己れさへ亂れて返る山風ぞ吹く
一五朝戸あけて山櫻戸の玉柳たれまつ花の友と見るらむ
一六吉野山花のゆかりに白妙の雲の衣もひもや解くらむ
一七月雲の絶えぬ主は山櫻はな咲きてこそ人はとひけれ
一八山守よあすも來て見む高砂の尾上の花に嵐吹かすな
一九尋ねても故郷人の見ぬさくら惜まぬ花に薫風ぞ吹く
二〇三吉野の山の深雪に紛へても越ゆるは惜く散る櫻哉
二一葛城や高間の風吹きぬらし空に知らるゝ花のしら雪
二二旅寢する花の木かげに驚けば夢ながら散る山櫻かな
二三岩つゝじ岩根はとても山吹の花にとふべき春の暮哉
二四花はみな彌生の末に移ろひて春をや送る歸る雁がね

夏十首

二五花の色の衣替憂きひとへ山なほ白雪は形見なれども
二六夕暮はおくらぬ月も送りけり卯の花さける山の下道
二七故郷や誰によそへて植置きし垣根瞿麥花咲きぬらむ
二八おいぬるはあるも昔の人なれば花橘に袖の香ぞする
二九郭公去年宿かりし故郷の花たちばなに五月わするな
三〇蚊遣火につれなき頃の下もえに心よわくも飛ぶ螢哉
三一幾年か鳴きふるしてし郭公神なび山の五月雨のそら
三二中々に潮汲みたゆむ蜑人の袖やほすらむ五月雨の頃
三三いはかみの森の下水ゆふかけて大宮人の涼む頃かな
三四御稧する今日だに涼し吹寄せむ波にや秋の飛鳥川風
三五秋はきぬ雲の旗手のいかならむ朝げの空も面變しぬ
三六時雨せば四方の山邊に厭ふべきこや木枯の秋の初風
三七草の上の露取今朝の玉章に軒端の梶は木つ葉もなし
三八露乍らあだには折じ我妹子が見初のさきの秋萩の花
三九宮城野の萩の白露いか計あけぬ暮れぬと置き增る覽
四〇荻の葉に吹く夕暮の秋風をつれなく忍ぶ女郎花かな
四一朝ぼらけ遠方人の霧の間に行きがて告ぐる花薄かな
四二さを鹿の角ぐみ初しあしは山はに出て鳴秋は來に鳧
四三己が妻波こさじとや恨むらむ末の松山をじか鳴く也
四四初雁の山とびこゆるさね葛くる秋しるき秋風ぞ吹く
四五著鷹のとかへる山を出づるより光も著し秋の夜の月
四六老いぬれば今年計と思ひこし又秋の夜の月をみる哉
四七唐土は秋の半になりぬとてこよひや月に衣うつらむ
四八沖つ風たゆたふ雲をはらふ夜は月の氷に浮島の松
四九きりぐ〳〵す庭の蓬が柚かたに聲吹きよまふ霜の夕風
五〇草の原くゝ夜毎の秋風に人をやたのむ松蟲のこゑ
五一なほざりに根こじて植ゑし白菊の花待遠の秋ぞ少き
五二草も木も色變りゆく秋風に里をばかれず衣うつなり
五三龍田山しぐるゝ雲の絶間より紅にほふ峰のもみぢ葉
五四大方の秋もくれぬる夕暮に吹きだによわれ峰の木枯

冬十首

五五打つけに幾度空のしぐれつゝ今朝山里に冬のきぬ覽
五六神無月有明の月の山下風に霜おきながら散る紅葉哉
五七惜むべき花も紅葉も知らざりし嵐や厭ふ冬の山がつ
五八寂しさに柴折くぶる煙だに曇ればたてぬ冬の夜の月
五九難波潟入江を越えてさす潮の下にや水は猶凍るらむ
六〇鳥鷺く伊良胡が崎の潮さゐに渡る千鳥は聲のぼる也
六一沖つ鳥常行くよはゝ三島江の玉江の蘆間古て鳴く也
六二積添ふ老となる共爭でかは雪の上なる月は見ざらむ
六三朝戸出の道やたのまむ庭の松離の竹のよはの雪哉
六四思ふこと待ち弱りゆく七十のあまり悲しき年の暮哉

戀二十五首

六五涙川よそにもらすな心より又知るものは枕なりとも
六六下萌に角ぐみ渡る蘆邊より滿ちくる潮の戀增りつゝ
六七思兼ね涙にぬるゝ笛竹の忍びも敢ぬねにぞ立てつる
六八いかにせむ人の心は木幡川月日ふれ共渡る瀨もなし
六九詠めじと思ふ心にこりはてずあはで年ふる秋の夕暮
七〇逢ふとの難き恨に比ぶれば濱の眞砂に猶くだけゝり
七一蜑の住む世を海邊だに稀に來てみるめも知ぬ涙川哉
七二いかにして波間もあらば近江なる堅田の沖のその釣船
七三蜑小舟廿日の月の山の端にいざよふ迄も見えぬ君哉
七四君故は床の山なる名もつらしさや變ぬ心とも見ず
七五蜑人の影をも見ばやいみ籠て詠むる月に身は變る共
七六歸るさの契を何か頼むべき有明よりぞ月もつれなき
七七蜑のたく繩の浦わに打はへて引てふ網によらぬ戀哉
七八淺ましやよくてや今は山城の井手の若蔬かりぬ計に
七九いかにせむ人の秋には袖の浦の涙の衣色かはりけり
八〇憂は猶孰くを忍ぶ身ぞとだに思知らする人傳もがな
八一杉板もて葺ける板間を其と見よ逢ぬより祉雨も溜らね
八二移りゆく心の花のつゆなれや恨むる袖にあまる涙は
八三立返り猶ぞ戀しきたらちねの親のいさめし轉寢の夢

雜十五首

八四武藏野は分行く草の高ければ末葉の露ぞ雨と降ける
八五今日の日は幣よく祭れ船人のかとりの沖に風向ふ也
八六古のいく代の花に春くれて奈良の都は移ろひにけむ
八七人方の月ぞさやけき百敷の大宮人やあくがれぬらむ
八八月影の天の戸ざしは明果てゝ出る朝日ぞ空に移ろふ
八九稀にだに逢由をなみ烏玉の夢の直路に迷ひぬる哉
九〇鐘の音も猶明けやらぬ寢覺哉代々の昔を思つけども
九一わたの原霧の絶間の程にだに浮世を渡る海士の釣舟
九二常ならず物思ふ頃の長き夜に獨おきねて月を見る哉
九三崩れゆく岸の柳の根ざし草ありもあらずも哀れ世中
九四ともすれば風に漂ふ萍のうき世の浪に何やどるらむ
九五類ひとて我すむ宿の壁に生るみなしご草も哀いつ迄
九六心をば我が心こそ慰むれあらまし事との問はず語に
九七何ごとも夢とのみ見る世の中に神の眞ぞ現なりける
九八吹く風によその紅葉を春日山常盤の影や君が代の爲

百首和歌　誹作

春

曉立春

九九あら玉の千年の春の始とて八聲の鳥も千代祝ふなり

溪餘寒
一春ぞとも人に知られぬ谷風のむすぶ氷は時も定めず
　倉原霞
七よきもくの檜原の山のそま人の春の衣と立つ霞かな
　杜霞
八幾返り誰が名も立ちぬ積りゆく年も老曾の杜の霞に
　名所鶯
九雪のうちも故郷近く出でにけり吉野の山のたにの鶯
　若菜
一〇春は先飛火の野邊に雪消て幾日も待たぬ若菜つむ也
　草漸青
一一今日もまた朝の原の春雨に染むる草葉ぞ色増りゆく
　里梅
一二頼めしも頼めぬ宿も梅の花にほふにまよふ春の夕風
　門柳
一三杉よりも春の驗は我が門に柳ぞ立てるとふ人もがな
　初花
一四天の河おひぬものゆゑ櫻花けふの七日の始にぞ逢ふ
　朝花
一五朝露に日かげをやどす紅の花に心をうつしてぞ見る
　峰花
一六詠めやる心のさきに山櫻たれ峰ごしに花を見るらむ
　島花
一七植置きし誰が家島の櫻花春ゆく舟のとまりなるらむ
　殘花
一八散りのこる花の梢も山櫻いかでか春の枝を分けしむ
　濱春月
一九白妙の濱の眞砂に移ろひて曇りもやらぬ春の夜の月
　湖歸雁
二〇己れさへみるめは絶えぬ歸る雁鴈の海邊の春の霞に
　松藤
二一染めてほす若紫の藤衣まつもねずりの色や分くらむ
　苗代
二二おしなべて苗代水にしめはへて天つみ神に祈る民哉
　折二款冬一
二三散さじと井手の里人惜むとも折りて驕さむ山吹の花
　暮春
二四花さそふ春の暮れゆく方なれや霞も深き志賀の山越

夏

遲櫻
二五今日よりは春のよそなる夏山にかふるも花の哀也晃
　岸卯花
二六山川の岸の卯の花咲きぬれば波の底なる谷のかけ橋
　待二郭公一
二七待ちかねて暮せる宵の轉寢の夢にもきかぬ郭公かな
　海郭公
二八夕汐に同じくわたる郭公むかひの山に聲ぞおちくる
　遠郭公
二九聞き及ぶ名計つらき郭公いづれの雲の末に鳴くらむ
　雛麥
三〇寂しさは同じ離におく露も一つ色なる大和なでしこ
　岡邊早苗
三一鹿なかば露おく迄も刈らじ田を岡べの早苗何急ぐ覽
　樹蔭照射
三二荒ちをが弓槻が下に燈す火に鹿の立どの著くも有哉
　五月雨
三三五月雨に降閉ぢらるゝ横の戸は明くるもつらき空の色哉
　鵜川
三四篝火の早瀬にくだす鵜飼舟驚ぐたなはの影ぞ亂るゝ
　檜嵐橘
三五皆ひとの袖に匂ぞあまりぬるはな橘の軒のしたかせ
　旅夕立
三六夕立を過ぐしもはてず渡すかな水上濁りくだる川波
　野螢
三七白露の秋まつ程の草の葉に野邊の螢も玉はぬきけり
　納涼
三八涼しさは岩根の清水餘りさへ堰止めらるゝ松の下風
　六月祓
三九御祓川今宵ばかりの六月を猶厭ひても祓ひつるかな

秋

早秋
三〇吹きそめて幾日もあらぬ秋風に哀あだなる草の色哉
　七夕別
三一七夕のわかれの舟のかぢかくせ歸る朝の天の川ぎり
　荻風
三二萩の葉に庭も雛もうづもれて哀れゆく風の跡かな
　雛萩
三三夕されば本荒の萩を吹く風に暫しとまらぬ秋の白露
　行路薄
三四かき分けて猶ゆく末や萎るらむ薄も草の袂なれども
　田上雁
三五刈りはらふ跡は芝ゆく小山田を夜床に頼む初雁の聲
　外山鹿
三六難面くて深くや妻の入ぬらむ外山の梟にを鹿鳴くも也
　原露
三七眞萩さく宮城が原の白露を朝踏ますらむ狩人ぞ憂き
　夜蟲
三八あはれなり夜はの枕の蓋己が鳴く音も露ぞこぼるゝ
　渡霧
三九からろ押す音も仄に行く舟のこがの渡りの秋の夕暮
　駒迎
四〇今宵とて月はさやけき逢坂に雲の上人こま迎ふなり
　關月
四一待つ月のてまの關屋の板間荒み影も堪らず秋風ぞ吹
　竹間月
四二下をれの音こそ立てね哀竹のよはの雪しく秋の月影
　浦月
四三秋の蚤よ爰を明石と愛ず共浦より外の月や見ざらむ
　古宅月
四四秋の月すみ荒したる故郷をふる里人の猶もとへかし
　浪月
四五七夜のひとり眺むる月影の映ろふ波ぞ袖にうつろふ
　擣衣
四六里びとの千聲百聲うつ衣なほ長月の夜はのこしけり
　秋時雨
四七詠めつゝ分きて夕の悲しきはしぐるゝ空の秋の浮雲
　紅葉
四八山本の入江の波の紅はうつる紅葉のかげぞ染みける
　九月盡
四九行く秋も鳥の空音を習ひてや惜む闇路を夜も越らむ

冬

初冬
五〇神無月今日を始としぐれと染し木葉の色も止らず
　瀧落葉
五一音羽山風もかけえぬ柵は落つる紅葉をさそふ瀧津瀬

庭霜
二七冴る夜の庭の草葉の朝ばらけ雪と見る迄置ける霜哉
柴霰
三七冬枯の柴かる民のてを寒み霰よこぎる四方の山かぜ
嶺雪
四七白妙の初雪ふりぬ峯の松いまだ時雨の雪と見る間に
杉雪
五七今朝見れば叢木立にたわむまで岡べの杉に雪積る也
杜雪
六七雪ふれば葉守の神や歸るらむ白ゆふかくる柏木の森
枯草
七七霜枯の蘆間に立てる白鶴の知らず幾世の年はへぬ覽
柚寒月
八七信樂の眞木の柚川こほりして影も流れぬ冬の夜の月
磯千鳥
九七沖つ風ふきくる波も小揺ぎの磯邊の千鳥立ち鳴くも也
冬曉
〇八獨寢の今宵の霜はいかにとも鐘より外に訪人もなし
河氷
一八風寒き名をも賴まじ山かげや菜摘の川も氷しにけり
鷹狩
二八引据ゑよいらこの鷹の山返りまだ日は高し心そら也
澤水鳥
三八白波にさわぐ澤邊の水鳥も玉ちるばかり物や悲しき
歲暮
四八新玉の年の幾年今日暮れてそこらの人の身に積る覽
戀　有二十九首一諸本同レ之
不レ逢戀
五八後の世と賴めし人に急ぐ哉いきて逢べき命ならねば
切戀
六八只今ぞ命ははてと歎くとも猶行末もあらば逢ふ夜を
遠戀
七八思兼ね眺め出たる山の端の月さへ空に遠ざかりつゝ
閑居戀
八八庭の苔床の狹莚おのづからいづこ賴めむ人に拂はむ
忍戀
九八誰故の信夫捩摺朽ちね唯色にも出でば人もこそとへ
片戀
〇九いかにして我が思ふ程は數ならずと計だにも人に知せむ
別戀
一九よしさらは今かく計り歎ずと君も別の名には立らむ
負戀
二九つれなさの心比べも今日よりは我身に弱る夕暮の空
逢レ夢戀
三九君も又逢とみる夜の夢ならば誰か別のまづはさむ覽
後朝戀
四九歸るさの今朝の別を過してぞ命あり共身を賴むべき
閉戀
五九傳聞く言葉毎に身にぞしむまだ見ぬ山の紅葉なれど
久戀
六九人の身にしぬる命はなかり鳧思初ても年のへぬれば
白地戀
七九三島江の玉江の眞菰かり初にきても程なく返る鹽哉
恨戀
八九自からとへかし人の海士のすむ里の知べに思ふ心を
新戀
九九我が懸し帶や返らむ千早振神に祈りし君にあはずば
絕戀
〇〇夢にだに又逢ひ難き此の世より煙に燻ぶる戀の悲しさ
契戀
一〇等閑に契る情とおもへども其の程すぎて後を恨みむ
僞戀
二〇僞のなき世にあはむ時もなほ同じ心や君にのこらむ
變戀
三〇いかにせむ人の心は稻妻の光の間にも變るけしきを
雜
寄レ衣雜
四〇いつよりか衣の褄は濡初めしと計だにも訪人もがな
寄レ枕雜
五〇思ふとよはの枕に心あらば云ひ合せても慰みなまし
寄レ花雜
六〇七十は花の都に住み乍ら春にはあはで世をや遁さむ
寄レ市雜
七〇行返り世をふる民も辰の市や靜なる身ぞ物は悲しき
寄レ船雜
八〇たまきはる命をあだに行く舟の哀はかなき波の上哉
寄レ橋戀
九〇つくるなよ長柄の橋の橋柱世に立つ人も朽ぬ物かは
寄レ鐘雜
一〇思きや日も入相の鐘の音を八十も近く聞かむ物とは
寄レ木雜
一何事を松のふる木の徒に谷のかたそに朽ち殘るらむ
寄レ苔雜
二思果る我身はいかに難からむ岩だにきける苔の衣を
寄レ水雜
三竹川の水の綠も君がため幾千年まで靈まむとすらむ
百首和歌　洞院攝政家
霞
一筑波根の新桑まゆのきぬよりも霞の衣春いそぐらし
二春きぬと雪間の若菜賤の女がつむかのへぞ朝霞行
三遙々と霞みくれぬる山の端に臘月夜の影ぞいざよふ
四朝霞かびやの煙たてそめてまだ春ふかきしづの苧環
五能登の海の長閑に霞む春の日は沖に出添ふ盛の釣舟
花
六咲きあまる吉野の山の櫻ばな故郷かけてにほふ白雲
七山櫻いよ〳〵見まくほしきかな霞へだつる老の眺に
八もろともに思ひわするな櫻花なれて久しき春の契を
九吉野川櫻かざして行く波のうつろふ花に春風ぞ吹く
一〇足引の山のかひより吹風に雪とみる迄花ぞ散りける
暮春
一一しだりをの己が春日も暮果てぬゆふ付鳥よ鳴て恨よ
一二暮れてゆく春の姿を夢に見ば幾夜か花の衣かへさむ
一三待て暫しやよや彌生の歸る春行方も知らぬ夕暮の空
一四たむくとも春は止らじ木綿疊田上山のかひや無らむ
一五引きとめよ紀の關守が手束弓春の別もたちや歸ると
郭公
一六郭公いづくに今は山賤の聞きも尤めぬ初音なくらむ
一七時しあれば待つかひありて卯花の山郭公初音鳴くも也
一八馴れぬなりはや里なれよ賤の谷のすだちのやま郭公
一九郭公五月きぬればたちばなの花の都に聲もをしまず
二〇時鳥きゝやはあかむ夏の日の千夜を一夜に鳴暮す共
五月雨
二一五月雨とゝ月來ぬれば名を變ていかに隙なき雨の景色ぞ
二二五月雨は渡りを遠み泉川こま山見えず雲ぞかゝれる

六三滴てはす日影も見えぬ梅雨に雲の衣をきぬ山ぞなき
七三島江の鴈の浮巣も亂れ蘆の末葉にかゝる梅雨の頃
八三思人まつ里あらば梅雨のなみくら山もよはに越なむ

初秋

九三秋は來ぬ露も嵐も月や待つそよ更科の山のたまゝゝ
一〇四我袖はよもの草葉の上よりも秋には敢ず色變りけり
一一秋きぬと朝げの露は急げども本荒の小萩花も咲敢ず
一二長月やさえむ霜夜のから衣まづうちつけの秋の初風
一三閨近きすとが竹垣ふく風に聲もたまらず秋は來に鬼

月

一四筑波嶺の山鳥の尾のます鏡かけて出でたる秋の月影
一五唐土の人もや今宵月を見て秋津島根を思ひやるらむ
一六見人のちゞに物思ふ我身とも知でや秋の月はすむ覽
一七老ぬればまろ別も身に添ぬいつ迄か見む秋の夜の月
一八秋きても我身一つの長き夜を餘りな厄そ霜の上の月

紅葉

一九芦の葉に夕霧立ちぬ難波潟武庫の山べも色付ぬらむ
二〇神代より小倉の山の紅葉ばは下てる姫や染始めけむ
二一をとめ子が紅葉の衣うちしぐれ袖ふる山の秋の瑞垣
二二酉さす日も夕汐に漕ぐ船の渡りの山も紅葉しにけり
二三紅葉ばもまだ色見えて流れゆく八十氏川の秋の夕暮

氷

二四苔向のゆづきが嶽は雲さえてあなし川波朝凍りけり
二五朝ばらけ霜さへとづるさゝ川の氷ふみ分け通ふ里人
二六さゆる日の雲間の日影自から移るも知らず凍る池哉
二七多くれば氷の上も玉鉾のすはの渡りは休らひもなし
二八清瀧の瀧々の白糸よりなやみ結ぶ氷は解る日ぞなき

雪

二九山風や秋の嵐のことわりの木草も雪に萎れはてつゝ
三〇朝戸あけて都の宿を見渡せば高き賤しき雪ぞ積れる
三一信樂の外山の奥に聲すなり埋もれよわる槇の雪れ
三二みかりせぬ人に見せばや小鹽山小松が原の雪の朝を
三三時分ぬ幾代の雪を觀きて富士の高根の年ふりぬらむ

忍戀

三四人めのみ信夫が原にゆふしめの心の中に朽や果なむ
三五住吉の濱松がねの下はえに難面き人を戀ぬ日はなし
三六思兼ね我が身に餘る報として後の世までも猶や忍ばむ
三七瀧汐やくあまの狹衣綾を荒みおさふる袖にもる涙哉
三八思川みなわ逆巻き行く水の袖の堤もせきやかねてむ

不逢戀

三九夕べゆく雲の使に言づてむうはの空なる便なりとも
四〇逢事は君にぞ難き手向してゐはくに山は七日こゆ共
四一我戀はまだ据をらぬ敏腐の夜さへ安くやは寢さする
四二葎草今日もよそにてゆふ襷懸ぬ日もなく猶戀よとや
四三伊勢の海の蜃も拾はぬ玉きはる命にかふる逢事もがな

後朝戀

四四朝寢がみ人の手枕おき別れ亂れてのみぞ物は悲しき
四五朝露の消ば共にと契り置て返る草葉の道もはかなし
四六今日の日は暮すも有とも立歸り猶時の間に逢事もがな
四七鳴く雁の聲もうらめし戀衣きなれの山の歸るさの空
四八胸に燃え袖に漏ても朝もよひ紀の川波は返るせぞなき

遇不逢戀

四九夕暮はなほ頼む哉忘られて幾ひさしにもならぬ別ぞ
五〇夢にだに又逢ひがたき此世より煙に咽ぶ戀ぞ悲しき
五一忘じと立てし誓を今更にことなしふとも神も許すな
五二變らじの形見と云ひし月影も餘りて空に人ぞ戀しき
五三歎くとて身に替ざりし逢事は忘れぬ程の命也けり

忍戀

五四自らいかに寢し夜の夢絶てつらき人社月は見えけれ
五五玉鉾の道ゆく人に夕げとふ言の葉をさへ恨てぞくる
五六大淀の松の契はふりぬれど今も變らずかへる波かな
五七床はうみ枕は山となりぬべし涙もちりもつもる恨に
五八等閑の便に敲く眞木の戸は何かはあけむ幾夜也とも

旅

五九言の葉は鴈の紅葉に書きつけつ都に送れ宇都の山風
六〇たづの住冬のあら田のうねのゝに一村殘一夜宿かせ
六一告やらば妹や尤めむにひたれ山岩根の枕誰に変はすと
六二龍田山夕越來れぬ大伴のみつの泊りに舟や待つらむ
六三妹にこひよる白玉の浦風に衣片敷き明けぬこのよは

山家

六四求めすむ宿の爪木を折りなれて煙寂しき昨日今日哉
六五紅葉ばを風に任する山里に哀いつ迄あらむとすらむ
六六門田守る山田のそほづそばちつゝ心なき身を月や見る覽

谷の水柴の庵を結びても住めばすみける山の奥かな
いかにせむ孰くも狹き浮世哉我が居る山も雲ぞ爭ふ

眺望

朝日さす末野の山の峰つゞき空ゆく人は雲も懸らず
我庵の嶽より出でゝ行く月の傾く方は山の端もなし
天津空雲の旗手に飛ぶ鳥の飛鳥の里をおきや別れむ
山本は同じ緑の波路より一葉こがるゝあけのそば船
滑ぎ消ゆる沖つ雲居の蜃小舟己が川瀬の淡入るらし

述懷

厭ては此世はよそに聞べきに憂は身にそふ影ぞ悲き
頽來し我心にも捨られて世にさすらふる身を厭ふ哉
我罪を昔も今もあがひえで去らむ此世の果ぞ悲しき
翁びん人なとがめそこのくちに昔をこふる鶴の毛衣
さても猶哀はかけよ老のなみ末吹よわる和歌の浦風

祝

春秋の宮さへかけて雲の上を天照神や八千代守らむ
春日山やまと言ばに萬代と君をぞ祈る神はうくらし
幾千代の秋をばふともきゝ竹の大内山は色も變らじ
空のほし濱の眞砂に數ふとも猶つきもせじ君が齡は
やほよろづ久に見るべき豐國の鏡の山も我が君の爲

詠二百首和歌　九條前内大臣内々百首

春

立春

吉野山まだ白雪も消なくに霞も春も今朝や立つらむ

殘氷

春風に今は氷もたまかの池のおもては小波ぞ立つ

春洞雪

仙人の昔のあとの朝ぼらけ霞をかけて降れるしら雪

原上霞

誰が里につゞきの原の夕霞煙も見えば宿は分かまし

春濱霞

そと濱の天の羽衣春も來ていまも霞の袖やふるらむ

野宿梅

夕暮の野邊の梅枝香をとめて宿かる人の叡にぞ折る

浦霞

浦風に花もにほはぬ里のあまの柴の垣根も霞ぞ鳴く

朝若菜

さゝらぎのまだ朝霜は遠乍生ひもなづまぬ庭の若草

戸外春風

都人今はとへかし松の戸にまつの嵐も吹きよわる也

棧路春雨

三行く月もとわたりすて〻霧る夜の嶺の梯春雨ぞ降る
春湊水
四二渡つ海に月もいでたる湊川あくるもまつな春の舟人
山家柳
五二柴の戸は柳さくらに閉ぢられていと〻寂しき春の暮
溪歸雁
六二歸さの嶺とふつらに誘はれて谷の澤田を雁ぞ立ぬる
花有二遲速一
七二いかなれば同じ深山の櫻花移ろひ散む木々をわく曉
春曉色
八二手馴女のうちたれ髪の花かづら曙かけて匂ふ春かせ
春夕花
九二待つ人のくる契もあるものを夕暮あさき花の色哉
春夜花
〇三老はて〻物の哀や知りぬらむ月と花とに濡る〻袖哉
落花未レ遍
一三散りはてぬ花も花をや惜むらむ片枝移ろふ春の山風
水邊藤
二三傳へきて二度聞し田子の浦に匂ふ藤波今も咲くらし
暮春
三三春もくれ身の入相も近ければ哀とぞ聞く山寺のかね
夏
林首夏
四三あさ緑わか葉の梢名に立て〻夏は林と色に見えけり
古宅郭公
五三睡ろまでさやかに聞きつ時鳥園の荒間の空や過らむ
市郭公
六三聞分かむ里すみて鳴け時鳥憑行く三輪の市とよむ也
溽時扇
七三遠ざかる聲きこゆなり郭公夏もやこほる志賀の浦波
舟路卯花
八三卯の花の咲くか離の島人の衣をほすか舟よせてみむ
夏草露
九三押なべてまだ色付ぬ草の葉にまづ置初むる夏の朝露
樹陰夏風
〇四知る人も行きて恨みぬ夏山の風のやどりや松の下陰
夏月
一四短夜をなほ恨みてぞ詠めつる夏もなかばの秋の月影
初五月雨
二四降初むる今日だに長く暮す日を今幾日まで梅雨の空
島螢
三四螢とぶみつの小島の旅人は都を戀ふる玉やうくらむ
深山泉
四四人は世に清水は夏に知られねと住馴にける山の下陰
雨後蟬
五四夕立の雲吹きはらふ山風にしばし涼しき蟬の聲かな
行路夏衣
六四夏の日の木陰を遠み日ぐらしの山わけ衣風ぞ涼しき
江上納涼
七四淀川の入江のきしの柳かげつなげる舟にすゞむ里人
晩夏
八四夏くれば知やおきなるわが川に今年も有て御禊しつ其
秋
早秋
九四都には今朝吹初むる秋風のよはに孰くの山を越けむ
名所七夕
〇五彦星の逢夜の影や映るらむ此の夜名に立つ天の川波
草花早
一五自から秋は來にけり夏の野に一枝さける本あらの萩
露旅雁
二五都思ふ袖も露けき深山路に雁も涙を置きて過ぐなり
秋窓鹿
三五稻荷山杉の庵のあけぼのに窓より通ふさをしかの聲
秋枕夢
四五打もねば又いか樣の夢を見む夜も定まらぬ秋の枕に
遠村秋夕
五五名もしるし雲も一むら颯りけり誰が夕暮の秋の山本
秋宮籌
六五よそに見しふるき梢の跡もなし檜原の宮の秋の夕露
田家秋雨
七五露だにも置けば堪らぬ秋の田の刈穗の庵に時雨降也
秋苑月
八五鹿のその移して住める山里の眞萩が露に月ぞ宿れる
閑山月
九五秋ふかき谷の庵をあくがれて獨も峰に月を見るかな
松宿レ月
〇六明けぬるか稻葉の山の松が根の枕に月のかげぞ傾く
岡竹月
一六はし鷹のきりふの岡の竹の露を扇の鈴とみがく月影
苔徑月
二六秋山の苔路の露をふみわけて夜深く月の影をみる哉
寒庭虫
三六あしがきの中にほのめく蓼よもぎが霜の下や寒けき
野擣衣
四六住みわけし垣根の萩はうら枯て野風を寒み衣うつ也
旅泊紅葉
五六高砂の尾上の松の秋風にとまりも知らず散る紅葉哉
水江紅葉
六六龍田川峰の紅葉の散ぬ間は底にぞ水の秋は見えける
橘邊菊
七六色ふかく夏みし花に咲きかへて橘の本なる秋の白菊
暮秋
八六憂き物と思ひし年の秋の日も告るは惜き今日の夕暮
冬
初冬
九六神無月時雨と共に降りまがふ木の葉も冬の始也けり
閑居落葉
〇七散り積る紅葉踏分け我が宿の鹿より外に訪人もなし
瀧邊時雨
一七瀧近き槇の板屋の時雨社降もふらぬも聞きも分れぬ
故郷寒草
二七難波津の里もあらはに成ぬらむ隔て〻蘆の冬の霜枯
冬里月
三七冬くれば人めもかる〻山里の草葉にのこる有明の月
杉路霜
四七三輪の山杉の夕霜掻分けていかに待みる人を尋ねむ
冬澤露
五七朝日さす澤邊の霜や消えぬらむ蘆の枯葉に殘る白露
海邊冬鶴
六七沖つ風あらいそ岩に立つ鶴の上毛も寒く霰降るなり
岸千鳥
七七神なびの御室の岸にゐる千鳥龍田川原の風や烈しき
沼水鳥
八七長夜に沼のねぬなは踏しだきくゞひ雁がね霜拂ふ也

歳邊氷
九霜枯の芦間に見ゆるさゞれ水頭れてだに猶凍りつゝ
水路新雪
〇八昨日まで時雨も梓の雫にて雪うちはらふ宇治の川長
冬池雪
一八下はよも氷もあらじ降り積る雪のみ深き勝間田の池
巖樹深雪
二八自からたづきも見えず筑波根の峰をも峰に積る白雪
歳暮
雜歌
戀
春戀三首
三八誰がかたに心の花のうつろひて霞へだつる夕暮の空
四八契しはいかにと問て詠むれば空頼れする春の夜の月
五八いかにせむ今はた絶て春の夜の人頼めなる夢をだに見ず
夏戀二首
六八後朝の袖の別の程もなし寢ぬ宵かけて明くる山の端
七八夏川の上も凍らぬかひぞなき流れても猶戀渡る身は
秋戀三首
八八我袖はくるれば露も守山の松の葉戀て下もみぢつゝ
九八くるゝ野も契はかなき秋風にいなづま招く花薄かな
〇八待ち侘びて思ひたえにし秋の夜に誰が曉の鳴の羽掻
冬戀二首
一九水鳥の消えぬ思に身をなして上毛の霜と凍る袖かな
二九暮果つる年の別も歎かれず忘れし人に徴ひにしかば
寄山戀三首
三九我戀は偕もやまめや駿河なる富士の柴山たき盡す共
四九儚しや越て歸らぬ逢坂は是こそしでの山路なりけれ
五九淺ましや誰が思より塵ひぢの山も歎きの生初めけむ
寄水戀二首
六九影絶て偕やみなむみ草ゐる寄邊の水はすみ替る共
七九憂人の中より出る忘れ水末やみつせの川とわたらむ
雜
關路雲
八九君が代に雲吹き拂へ天つ風こえて歸らむてまの關山
古渡雨
九九吹く風に薄雲かけて行く舟のこがの渡りの村雨の空
薄暮煙

〇〇山もとは霞も霧も絶えねども空に消えつゝ立つ煙哉
寄レ杜旅
一〇旅寢してむすぶ枕もあはれなり老その杜の霜の下草
山家燈
二〇夢さめて見るもはかなし山里の風の前なる窓の燈火
古寺松
三〇夕暮の鐘のひゞきを吹きそへて嵐の山を落つる松風
河邊鳥
四〇山川のいぐひの通ふ舟よ鳥影見る度に音をのみぞ鳴
海懷舊
五〇須磨の浦や藻汐たれけむ古を思やるにも袖は濡けり
曉神祇
六〇神山はむつきの半ば月さえて鳥の初音にさ戸開くも也
夜釋教
七〇厭知ぬ法の庭人あふさ待つ鷲の高嶺に月ぞいざよふ
名所述懷五首
八〇水無瀨川氷踏分け仕へこし我が老らくの道は絶にき
九〇今日迄はまだ宇治人の春日山世を遁れ得ぬ哀懸なむ
一〇たらちねの宿を隔てゝ桂川昔は絶えす渡りしをはや
一明暮はこやの山の方をのみ思ひやりても猶仰ぐ哉
二年をへて思の霜に埋もれてゆきあひも見ず住吉の松

壬二集中

五十首　守覺法親王會
五十首　道助法親王會　御製後鳥羽
最勝四天王院御障子和歌　五十首　老若歌合
三十首　前内大臣家　五十首　内々日吉奉納歌
寛喜元年女御入内御屏風和歌
三十首　住吉社　三十首　四園寺、仙洞二被講一
五十首和歌　守覺法親王會
春十二首
一新玉の年もかはらぬ故郷の雪の中にも春は來にけり
二しげき野と眺めし秋の跡もなし霞める末や萩の燒原
三若菜つむ荒田のおもの夕霞わくる袂に雲雀おつなり
四さゞらぎや亙つる風のよのまにも又薄凍る池の面哉
五すむ人も移ればかはる故郷の昔に匂ふまどの梅がえ

一此程は知も知らぬも玉鉾の行交ふ袖は花の香ぞする
二郭公思ふも遠しいそのかみふるき都のしのびねの空
三過ぎぬなり有明の空の時鳥雲のいづくに聲殘るらむ
四薫りあふ庭の淺茅の花ちりて葛蒲が軒を過ぐる夕風
五春の後なほも心ぞあくがるゝさつきの空の花の匂に
六立昇る煙も雲となりにけり室のやしまの五月雨の空
七夏ふかき山下水にしのびきて秋もや人の心没むらむ
秋十二首
八明ぬるか衣手さむし菅原や伏見の里の秋のはつ風
九宮城野の木の下露は寒く共折らでは過ぎじ秋萩の花
一〇秋風の吹きにし日より片岡の蟬の鳴く音も色變る也
一一時よりも哀とぞみる夏蟲のかげよわりゆく秋の夕暮
一二蟲の音も長き夜あかぬ故郷に猶思ひそふ春風ぞ吹く
一三有明の月待つ宿の袖の上に人頼めなる宵のいなづま
一四草の原光も露もひとつにて葉分の月にぬるゝ袖かな
一五眺侘び猶いづ方にあくがれむ雲居の月に里分かず共
一六清見潟明けぬともなき霧の内に關の旅人友さそふ也
一七門田ふく稻葉の風や寒からむ蘆のまろやに衣うつ也
一八秋は來て誰が住捨てし宿なれや紅葉降敷く深草の里
一九秋は今いくかもあらじ夕暮のながめは殘せ峰の木枯
冬七首
二〇詠れば涙も脆し神無月時雨にきほふ木の葉のみかは
二一しぐれつる宵の叢雲さえ更けて霰ふる也小野の篠原
二二明けわたる雲間の星の光まで山の端寒し峰のしら雪
二三見し秋の月より後も慰まず雪のあしたの姨捨のやま
二四月清み空さへ凍る冬の夜に千鳥鳴くなり志賀の浦風
二五冬深き垣根の梅ぞ匂ふなる菊より奥の花にや有らむ
二六武士の八十宇治川も年暮てなほ楯姫やふり增るらむ
雜十二首
祝二首

一有明のもとの光に返るまで神や三室の山をまもらむ
二萬代も君にはしかじ敷島や大和島根の風もかぎらず

逃懐三首

三春秋の月と花とに身をすて、後や浮世を厭果つべき
四古は四十の夢にしのばれて頼みし末の世をぞ恨むる
五先立ちし心もはては足引の山のあなたに消ゆる白雲

閑居二首

六秋の夜は窓打つ雨に明やらで雲居の雁の聲ぞ過ぬる
七山陰や松の戸ぼそも埋もれて月ぞさし入る雪の枕に

旅三首

八浦傳ふうらより遠の苫廂一夜も馴れし物とやは見る
九うつの山月だにもらぬ篤の庵に夢路絶たる風の音哉
〇野邊の露浦わの波を卿ちても行方も知らぬ袖の月影

眺望

一山の端もしづむ波路は久方の空こそ海の隔て也けれ
二眺めつ、夕こえくれば初瀬山伏見の里ゟ麓なりけり

五十首和歌　老若歌合

春

三天の原かすみて歸るあら玉の年こそ春の始なりけれ
四氷とく春の山風吹きぬらし岩根をとむる瀧のふる聲
五春立て雪は花とぞ散り紛ふ若菜つむ野も道紛ふがに
六花の香も谷の戸いづる山風にあくがれそむる鶯の聲
七百敷の大宮人の袖の香をかさねて匂ふ野邊の梅が枝
八言づてむ詠もたえぬ歸る雁道ゆきぶりの春雨のくも
九花みつ、今日も暮しつ足引の山鳥の尾の長き日影を
〇櫻花夢かうつゝか白雲の絶えてつねなき峰の春かせ
一あたら夜の哀は知るや呼子鳥月と花との有明のそら
二花散りて後さへ易き詠かはいつの人まに春のくる覽

夏

三夏衣たつことやすき影もなしなほ花おもふ庭の梢に
四郭公待つとせし間に我宿の池の藤波うつろひにけり
五卯花の垣根に來てもほと、ぎすなほ白雲に夕暮の聲
六村雨の風にぞなびく葵草むかふ日影はうす曇りつ、
七夏も猶月やあらぬと詠むれば昔にかをる軒のたち花
八積り行く雲の搖がぬ山のはも明くるは著き梅雨の空
九夕暮の雲の旗手に亂れつ、思ひもしるく行く螢かな
〇出でやらぬ初音を聞きしみ山べに里なれ返る郭公哉
一夕かけて風ぞ涼しき神山の榊にのこす楢の葉がしは
二櫻麻のをふの下露いかならむ御祓になりぬ六月の空

秋

三寂しさの詠めは分きつ夕日さす岡べの松の秋の初風
四打も寢ず明くるもつらき山陰に猶ながむる萩の下露
五ふぢばかま靡く籬の夕暮に空さへにほふあきの村雨
六立初むる秋霧の上に鳴く雁の聲仄かなる十六夜の月
七里は荒て鹿ぞ鳴くなる菅原や伏見の野邊の秋の夕暮
八久方の月の桂やまがふらしみどりにすめる秋の空哉
九うき雲は月やはらふ更科や姨捨山のみねの秋かぜ
〇松蟲の聲はつれなき故郷の庭の木の葉に秋風ぞ吹く
一や、寒き生田のもりの秋風にたへぬ里人衣うつなり
二暮果つる秋こそ頓て知せけれ逢人からのよはの習を

冬

三白妙の菊のみ今日は有明の冬にうつろふ庭の月かげ
四しぐれつ、殘る紅葉の色もをし梢にかへれ長月の空
五霜凍る柴のさ枝やうるふらむ煙ぞしめる山のべの里
六炭がまの嶺の煙に雲こりて雪げになりぬ大原のさと
七飛鳥川がつ凍りつ、鷲城の山の端白く雪降りにけり
八深山より落來る水は凍り居て秋の形見の色は止らず
九冬の夜の有明の月もしほの山さしいでの磯に衝鳴也
〇久方の雪にまじりて咲く花の匂もさむし冬の山ざと
一花をまつ春も隣になりにけり故郷近きみよしの、山
二詠めつ、涙ぞくもる行く年もつもれば袖に有明の月

雜

三空はれて波も靜に住吉の松にぞ見えし御代のゆく末
四忘れじな君に契りし友千鳥みくまの川のすまぬ限は
五和歌の浦を光に込し行幸より神や玉もを磨き添ふ覽
六唐土の空も一つに雲消えて誰かみかさの山の端の月
七明けば又越ゆべき山の嶺なれや空ゆく月の末の白雲
八小搖ぎの磯立鳴らしよる波の寄べも見えず夕闇の空
九明け渡るをじまの松の梢より雲に離る、海士の釣舟
〇足引の山のあなたの山の端を心づよくも出る月かな
一踏分けむ物とも見えず朝ぼらけ竹のは山の霧の下露
二いつもかく寂しき物か津の國の蘆屋の里の秋の夕暮

五十首和歌　仁和寺　道助法親王會　御點後鳥羽

春十二首

初春

三吉野川氷のひまにとけにけり打出づる波の花の下紐
四雪中鶯
五鶯の雪の花笠ぬひ侘ていづれを梅とぬれて鳴らむ
六橋邊霞
七行く人をおもひぞ渡る東路や霞かくれる佐野の船橋
八行路梅
九誰が袖の往來も分かじ玉鉾のみちて匂へる梅の下風
一〇雲はなは四方の春風吹きはらへ霞にゆるす臘月夜ぞ
一一岸柳
一二初瀬川なびく玉藻はみがくれて岸の柳に春風ぞ吹く
一三旅春雨
一四行手にもまだ結ばれぬ若草の枕いそがす春雨ぞふる
一五遠歸雁
一六霞たつ春の山邊の花の香を吹來る風に消ゆる雁がね
一七山花
一八山櫻おほふ針のかひもなし霞のそでは風もたまらす
一九關花
二〇逢坂や曙しるき花の色におのれ夜ふかき關の杉むら
二一庭花
二二今朝みれば梢の花は散りにけり風の下なる庭の白雪
二三河款冬
二四石走瀧なき河もかひぞなき折ればこぼる、山吹の花

夏七首

二五祖卯花
二六神垣に咲くや卯花あめにます豐岡姫の手向なるべし
二七早苗多
二八ゆく鶴のとほたの早苗里續き千代の數とる御代の民哉
二九里郭公
三〇白妙の衣ほすよりほと、ぎす鳴くや卯月の玉川の里
三一岡郭公
三二樗咲く岡邊に來鳴く郭公藤のゆかりの色やとふらむ
三三夜盧橘
三四月やあらぬ昔や誰と匂ふらむ花橘ももとの身にして
三五離麥
三六朝露の離のすがたうつたへにみれ共あかぬ麥の花
三七江蟹
三八伊勢の海の入江の草の潮干潟海士も螯の玉は拾はに

秋十二首

初秋
二岡べなるわさ田の穂向打靡き昨日の早苗秋風ぞ吹く
萩露
三咲隠す野守が庵のともあらはに置ける萩の朝露
萩風
四草も木もさぞな嵐の山風にひとり萎れぬ萩の音かな
尋二蟲聲一
五分佗びぬ鵙の草莖そことだに教へぬ野邊の松蟲の聲
山家月
六松の戸を押し明方の山風に雲もかゝらぬ月を見る哉
野徑月
七泊るべきすゞの篠屋は荒にけり里遠ざかれ野邊の月影
船中月
八木の間なき唐土舟の浮寝にも心盡しの月は見えけり
曉鹿
九有明の月の柱の紅葉ばを嶺に殘してをじか鳴くなり
河霧
一〇河霧に宇治の橘姫朝な〳〵うきてや空にもの思ふ頃
擣衣幽
一一夜やさむき里は雲居の木枯に聲さへ薄く衣もつなり
夕紅葉
一二とく暮るゝ小倉の山の影もなし秋の紅葉の下照す頃
殘菊句
一三竹のその雛の菊の匂ふ袖幾千代露に濡れてほすらむ
冬七首
朝時雨
一四春日野に朝ゐる雲も山風にしぐれて渡る冬は來にけり
竹霜
一五山鳥の末をの里も臥佗びぬ竹の葉しだり長き夜の霜
池水鳥
一六此池の木の葉に遊ぶあし鴨の青ばこきませ吹く嵐哉
鳥千鳥
一七聞きなれぬ新島守があま衣さゆる霜夜に鳴く千鳥哉
松雪
一八高砂の尾上の鹿の鳴かぬ日は積りはてぬる松の白雪
湖雪
一九たつが上に横ぎる波や小波のひら山風のさそふ白雪
惜二歲暮一
二〇つらかりし袖の別のそれならで惜むを急ぐ年の暮哉

戀六首
寄レ雲戀
一契りしは夢にながむる浮雲の消えて跡なき現也けり
寄レ露戀
二秋も猶野原の露の置ぬ夜はあれ共袖の濡ぬ日はなし
寄レ煙戀
三尋ねはや煙は何に紛ふらむしのぶの浦の蜑の藻汐火
寄レ草戀
四烏玉のねての夕べの思草今宵も胸に燃えやあがらむ
寄レ鳥戀
五無名のみゆふ附鳥の相坂に捨られてただ音をも鳴かや
寄レ枕戀
六白妙の枕も今はくれなゐの千入や涙そめて朽ちなむ
雜六首
曉逃懷
七思ふとてだつき果ぬ長き夜の寢覺にまさる鐘の音哉
関中燈
八消えやらで殘る影こそ哀なれ我が世ふけそふ窓の灯
山旅
九千早ぶる神垣山も越えぬべし故郷人を戀ふる餘りに
海旅
一〇濱出でぬと人に告ぐべき便だに八十島遠き蜑の釣舟
野旅
一一霜枯の野寺の鐘の夕月夜たへてもぬべき旅の宿かは
寄レ松祝
一二小れ石の巖とならむ苔の上に松も古てや君に逢見む
五十首和歌 内々日吉奉納歌
春十五首
一三今朝みれば嶺の梢ぞ霞みゆく我立柚の春やきぬらむ
一四小波や志賀の海士人春きぬとみるめ潜に若菜つむ也
一五春かけて我がしめゆひし梅が枝に許し顔なる鶯の聲
一六此の頃は朝戸あけゆく春風に梅の匂をきぬ人ぞなき
一七春霞立ちにし日より三吉野の古里人や花を待つらむ
一八青柳の葛城山の朝ねがみ誰がたはつけて春風の吹く
一九花なれや霞の間より初瀬山はつかに見ゆる峰の白雲
二〇誰が春に逢ぬ櫻も移ひぬ住まばや住まむ三吉野の山
一七千早ぶる神のかためし山櫻それも移ろふ春風ぞ吹く
二一あたら夜の花吹き盛る有明の山風ばかり憂物はなし
二二徒に頼むこととて詠むれば長き日ぐらし春雨ぞふる
寢ても見ゆ寢でも見えこ嶺櫻花はかなの春の夢の枕や
二五慰みし思ぞ增る七年のさきにも古りて花はみしかど
二六長しとて頼べきかは春の日の影に老ぬる身は驚りつゝ
二七志賀の海や暮行く春も深き江に身を盡してや又も逢見む
夏五首
二八稀にやは天てる夏の月はもる木の下蔭に咲ける卯花
二九忘るなよ寄べの水草うち拂ひ君に葵の陰を待ちつゝ
三〇神なびの杜の注繩うちはへて鳴く郭公妻や戀ふらし
三一近きねも仄に聞くぞ哀なる我が世ふけゆく山郭公
三二神人や潔の御榊に出でぬらむ槇の戸河も香ぞ涼しき
秋十五首
三三いかゞする秋の初風吹にけりまだ一重なる蟬の羽衣
三四明けぬとてうらびれ返る七夕の衣の袖に秋風ぞ吹く
三五誰にかはほさでも見せむ立馴れし交野の衣萩が花摺
三六秋風に軒端の荻のこたへすは偽やせまし昔がたりを
三七君忍ぶ草に寢れて鳴蟲もまづ秋過ぐるなをや恨むる
三八時しあれば雁も鳴く也憂き事を思連ぬる秋の寢覺に
三九物思へば月だにくもる袖の上の涙に宿る秋の夕ぐれ
四〇露分けて故郷人を淺茅生に尋ねば月の影やこぼれむ
四一知べせよおくる心の歸るさも月のみち吹く秋の山風
四二嵐吹く比叡の御山の秋の月思ふ袖にも曇りやはせむ
四三秋の夜の有明の月も傾きぬ戀しき方に詠めする間に
四四色かはる長柄の山の山嵐に鹿の音よする秋のさ夜ふけ
四五笹の葉にしみつく霜のよをへてはみ山もさやに衣擣也
四六木の葉ちる風より外に訪人もなき山里ぞ秋は悲しき
四七一本は移ろひ殘れつゝと我身世にふる霜の雜に

冬五首
四九神無月今は時雨の木枯に頼む方なき四方のもみぢ葉
四九眺むれば袖にぞこぼる冬の月影みし水は涙ならねど
五〇押なべて外山も雪は積れ共甲斐の白根は云かひもなし
五一中絶えし身を宇治橋の河千鳥ふかき霜夜の跡も儚し
五二老が世の憂身は春に捨られてまだ新玉の年も急がず
雜十首
五三月待つと厭ひやすらむ濱庇おきつこ島にかゝる浮雲
五四昔にはありしにも非ぬ袖の上に誰とて月の涙ふらむ
五五大方のみかたの海の名もつもし心を分て月を見るにも
五六詠めてもまだ伏馴れず萱筵すゞの篠屋の明方の月
五七水無瀬山堰入れし瀧の秋の月思果つるも涙落ちけり

八〇僧の君に知られぬ音をぞなく訪人あらば月に答へよ
九〇奥山の巌の洞に住むとても哀あなうと世をや歎かむ
一〇一塩焼ぬ志賀の濱人それも猶からき思に年やへぬらむ
一君が代に憂きも昔の嬉しきも契有ける程ぞ知らるゝ
二頼めよや祈る思の願言を神はかゞみてかげうごく覧
最勝四天王院御障子和歌
春日野
一三春日野の雪間の若菜尋ぬれば我が衣手に匂ふ梅が枝
吉野山
一四春は又いづこなるらむ三吉野の山の櫻に霞たなびく
三輪山
一五過がてに折はへて鳴け挿頭折る三輪の檜原の山郭公
龍田山
一六立田山風の柵秋かけて堰くや川瀬のみねのもみぢ葉
泊瀬山
一七雲の内に年も暮れぬや初瀬山入相の鐘に雪は降つゝ
難波浦
一八難波津に心有てや住みそめし春の景色を御津の浦人
住吉濱
一九淡路島ゆふべの波を住吉の松さへかざす春のうら風
蘆屋里
二〇短夜もまだ臥馴ぬ蘆の屋のつまもあらはに明る東雲
布引瀧
二一ぬき亂れ散るか白玉しろたへの衣手すゞし布引の瀧
生田杜
二二尋ねつゝ生田の森に宿かれば鹿の音ぞら秋風ぞ吹く
若浦
二三和歌の浦や蘆のまよひのたづのれは雲居の月も哀知覧
吹上濱
二四鳴く千鳥それかあらぬか沖つ風吹上の濱の雪の白波
交野
二五立ち返り渚のやどやかり衣かたのゝ霞袖おもるなり
水無瀬川
二六山風のよそに紅葉は水無瀬川堰入るゝ宿の庭の白菊
阪磨浦
二七とぞとて詠め馴れたる色もなき秋しも著き須磨の浦波
明石浦
二八明石潟うらみぬ袖も月宿る寝なまし璽の藻汐汲つゝ
飾磨市
二九たつ民も飾磨の市に數添ひて千年の秋のかひを待哉
松浦山
三〇まて暫しみ山嵐もしげるなり松浦のうらを出る舟人
因幡山
三一秋も今は因幡の山の峰の松かはらじ色をしぼる嵐に
高砂
三二高砂の尾上の鹿の聲よりや浦わの舟も寄べ知りけむ
野中清水
三三昔おもふ野中の清水立返りもとの心に夏ぞ汲まれむ
海橋立
三四春の雁聲をほにあげて行く舟も天のと渡る天の橋立
宇治川
三五網代木に凍ればやがて碎く也八十宇治川の水の白波
大井川
三六嵯峨の山みゆきを映す大井川紅葉にまがふかり衣哉
鳥羽
三七君住てとはに見るべき宿なれば田面遙に秋風ぞ吹く
伏見里
三八袖の上もとの外なる夜の露なくや伏見のさを鹿の聲
泉川
三九白妙のゆふ波すゞし泉川はゝその杜の竹のしたみち
小鹽山
四〇小鹽山いま一しほの春のいろに君を緑の松ぞ久しき
會坂關
一四春に今あふさか山の石清水木がくれ出づる鶯のこゑ
志賀浦
二四小波や志賀の浦わの水の面に氷吹きしく比良の山風
鈴鹿山
三四木の葉散る時雨も袖に鈴鹿山唐紅にふり出てぞ行く
二見浦
四四夏の夜は玉ゆらもなし玉櫛笥二見の浦に明くる月影
大淀浦
四五霞みゆく松さへつらし大淀の浦たつ浪に歸る雁がね
鳴海浦
四六故郷も今や夕になるみがた宿とふ雪は又しぐれつゝ
濱名橋
四七東路や濱名の橋の朝霧にをちこち人の聲かはすなり
宇津山
踏分けて更にや越えむ宇津の山移ろふ蔦の岩の細道
佐良之那山
九四秋風の吹く大空の月の色もたゞ里がらの更科のやど
清見關
五〇清見がた夕立つ浪も雲消えて月も涼しく出づる釣舟
富士山
一五富士のねの雪よりおろす山嵐にさ月も知ぬ浮島の原
武藏野
二五過來つる野山も移る程もなし春の日數は武藏野の原
白河關
三五けぬが上に降しけ深雪白河の關の此方に春も社たて
阿武隈川
四五君が代に阿武隈川の埋木も氷のしたに春を待ちけり
安達原
五五狩人の安達の眞弓末たわによるやを鹿の夜の紅葉ば
宮城野
六五宮城野は宿るか袖も松蟲の鳴く夕かげの萩の上の露
安積沼
七五夏はまだ安積の沼の花がつみかつ見る色に移る旅哉
鹽竈浦
八五敷島や大和にはあらぬ唐土の春にも開かず鹽竈の浦
三十首和歌　前内臣家
春
早春霞
九五久方の天ぎる雪の峰よりもそれかと見えて霞む春哉
澤春草
一六春はまだ淺澤をのに吹く風の草のはつかに靡く白波
曉梅
二六春の夜の朧月夜の梅のはな霞みもやらで有明のそら
花滿ン山
三六高砂の山には花やみつ潮の顯はに見ゆる松の葉も無
江上暮春
四六あし鴨の跡も騒がぬみつの江に猶すみ難く春や行くらむ
夏
溪卯花
五六卯の花の色にや夏はしもとゆふ葛城山の谷の夕かげ
野郭公
六六足曳の山郭公過がてに誰がしめゆひし野邊に鳴らむ

雨後鵜川
六六雨晴れて猶夕闇の鵜飼舟あらはれのぼる瀬々の篝火
秋
月前萩
六七萩の葉もおきふしにける白露に宿り弱らぬ有明の月
夕蟲
六八有乳山夕日隠れの淺茅原色づきぬとや蟲の鳴くらむ
海邊鹿
六九楫をたえ浦こぐ船の山風に又うみ渡るさをじかの聲
閑庭蟲
七〇誰が爲にいる野の枕それながら鄰の蟲とふ人もなし
名所擣衣
七一布引の瀧も夜寒に聲さえて生田のおくに衣うつなり
冬
朝寒蘆
七二朝な〳〵霜枯はつる蘆の葉や難波の冬の煙なるらむ
深夜千鳥
七三氷りゆく佐保の川波立ちわかれ曉近く鳴く千鳥かな
故郷雪
七四雪折の聲しきるなり高圓の宮の椙や荒れまさるらむ
戀
聞聲戀
七五思へどもいがでかひまにゆふ霞へだつる宿の鶯の聲
稀戀
七六思川まれなる中にながるなりこれにも渡せ鵲のはし
增戀
七七戀初めし露より袖も薄紅葉こがれに鳧な時雨する頃
怨戀
八〇藻汐たれさのみも如何浦風のほせかし袖を思方より
被忘戀
八一さりともと暮るれば待し契さへ雲の旗手の賤の苧環
旅
旅行
八二幾日見ぬ遠山鳥のむさしのは露かり衣我ぞなきゆく
旅宿
八三返すとも雲の衣はうらもあらじ一夜夢かせ嶺の木枯
旅泊
八四沖つ波よする磯邊の浮枕遠ざかるなり潮や滿つらむ

山家
山家松
八五深山吹く松の風のみならしばの庵は人の音信もせず
山家橘
八六谷川の朽木の橋も埋木の人に知られぬ道や絶えなむ
山家苔
八七稀に明し苔の戸ぼそも閉果てゝ徒にだにもらぬ月哉
雜
寄神祇祝
八八君が代を猶數ふれば春日山藤の千年ぞ松にまされる
寄水懷舊
八九住馴ぶる板井の清水さとよりも遠き昔の人ぞ戀しき
寄雲述懷
九〇知らざりし我身の果は見えに鳧空行く雲に詠せしまに
寛喜元年女御入内御屏風和歌
正月
元日
九一重ねてもかねて千年のしるき哉春に立添ふ秋の宮人
若菜
九二佐保姫の霞の袖も白雪のふりはへ野邊の若菜つめとや
霞
九三春はまづ花かとぞ見る吉野山霞の間より落る瀧つせ
二月
梅
九四吹き遖る匂は野邊ぞまさりける同じ梅咲く春の山風
柳
九五蘆の根も角ぐみぬらむ三島江の岸の青柳色附にけり
網
九六波風も靜なる世の春に逢て網の浦人たゝぬ日ぞなき
三月
櫻
九七此の里にくれば宿かせ花盛とほ山櫻あけば行きみむ
款冬
九八山吹の花さへ千代と答ふなる聲やかくるゝ竹川の波
藤
九九皆人のまつもかひある宿なれば木高く懸る藤の色哉
四月
更衣
一〇〇雖しさを袖に包むも今日よりは顯はに見ゆる夏衣哉
葵
一〇一葵草けふかけそふる玉かづら長き契も神のまに〳〵
早苗
一〇二植るみつる田面の早苗水澄て濁なき世の影ぞ見えける
五月
菖蒲
一〇三時に逢御代の光のさ月とて今日ぞ玉江に菖蒲刈る
郭公
一〇四初聲は都にいそげ郭公ときはのもりの松はふりにき
擧麥
一〇五照日にも思ふ中にも吹く風の塵だに据ぬ床夏の花
六月
山井
一〇六杜のかげまだほに出でぬ夏草の袂も涼し山の井の水
納涼
一〇七夏衣ゆくても涼しあづさ弓いそべの山の松の下かせ
六月祓
一〇八風そよぐならの小川の夕暮は御禊ぞ夏の印なりける
七月
秋風
一〇九神風や沖つ白波秋ふけてゆふしでかゝる伊勢の濱荻
野花
一一〇諸人の分けゆく末も遠き野を咲きも殘さぬ花の色哉
蟲
一一一山里は秋や千年のささるらむ子日せしのゝ松蟲の聲
八月
鹿
一一二紅葉ばの濃染の色の紅をふりいでにけりさを鹿の聲
月
一一三大方の晴行く夜をも久方の月こそ秋の空に知りけれ
初鴈
一一四月は明けて霧の上ふく秋風に猶かすみゆる初鴈の聲
九月
菊
一一五置く露も積りて後の淵なればまづ堰入るゝ菊の下水
田家
一一六秋田かる民の宿りも治りて君が御代にぞ樂きを摘む

紅葉

大井川紅葉のみ舟さしはへて古き例にかへる秋かな

十月

水鳥

霜もらぬ鷺の衾のおほひ羽も千代を重ぬる宿の池水

千鳥

照る月の天のと渡る友千鳥さやかに告ぐる萬代の聲

網代

蓋せじな八十宇治川の網代守よる年波の日を數ふ共

十一月

鶴

和歌の浦や入江の蘆の霜の鶴曇る光に逢むとや見し

鷹狩

はし鷹のみどりの翅身に添て猶雪拂ふかたの御狩に

遠炭竈

炭竈のとほ山煙たえず立つ民の往來もしるき御代哉

十二月

湖水

志賀の浦の氷の上も鏡山いづる朝日の影もくもらず

雪

おしなべて雪の朝を見渡せば花の所も春ぞ分きける

歲暮

年暮れて都へ出る民の戸は明けむ千年の春や待らむ

泥繪御屏風

石清水臨時祭

年毎に山藍の袖に引く駒の絕えせぬ今日の春の庭哉

重陽宴

九重の千年のかめにさす菊の匂も深しかける言の葉

住吉三十首和歌

春七首

のどかなる山風かすみ春のきる霞の衣ぬきも亂れず

風さむみたるひの氷とけやらで猶いは注ぐ春の白雪

新玉の年も若木の梅が枝に囀り初むるもゝ千鳥かな

春きぬと詠めせしまに霞たつ山の櫻は咲にけらしも

春霞まれの御幸もなかりけり四方の山邊の花の盛は

限なくあひみむ春は櫻ばな神のまもれる命なりけり

ふじのねも句はあらし吉野山花の盛につもるしら雪

夏五首

鄙公くもぢはるかに聲すなり月の都に里なれやゆく

住の江に引けど盡せぬ葛蒲草千代の五月や契置けむ

早苗とる御田の植女も色々の袖を連ねて覩今日哉

夏引の瀧の白糸くりはへて玉のたよ〳〵ながくぬけるを白玉

六月の今日のさかひに御稧して齡を延る千代の神人

秋七首

天の河千年の秋を祈りても逢ふこと絕えぬ星合の空

鹿の音もまだしき程は常磐山おのれ秋知る嶺の松風

契有て月さへ住のえにしあれば幾代の秋も君ぞ見べき

秋もなほ千年の友は子日せし遠里小野の松蟲のこゑ

今日みれば色附にほ葛城や高間の嵐吹ずもあらなむ

住吉の里の霜夜の秋風に衣やうすきころも擣つなり

長月や名にあふ月の濱廻ひさしき民の數ぞ見るべき

冬五首

住吉の松やつれなき夕時雨とわたり返るあらち島山

置く霜のゆふとりしでの榊葉に神の心や冬もとく寢

山里は賤のをだまきいやしきに明れば積る庭の白雪

沖つ風吹上の濱に立つ千鳥いさ白波の花かあらぬか

千早振神の野べゆく命あれば身にそふ年の暮も厭じ

雜六首

松風や敷津の浦に居るたづの千年を讓も聲かはす也

君がため逢が島もよりぬべしいく藥とる住吉のうら

祈りこふ星のやどりも雲晴れて幾代も君が住吉の里

とそちつゝ四の社の加へます玉の緒長く君ぞ仕へむ

名も著し年も津守の國を經て猶も八十の坂ぞ行べき

朽ち殘る霜のしたなる言の葉も哀とおもへ住吉の神

西園寺三十首和歌　但無三披講一

春七首

新玉の年も變らぬ春の色をまづ咲初むる宿の梅が枝

搔くらし天ぎる雪の梅が枝に春わきかねて鶯ぞ鳴く

露たつ明日の春日も遙夜の間の櫻はなにたかなむ

昨日みし大宮人の山ざくら今日も盛ともる花ぞなき

可惜夜と云ても春に年はへぬ月と花とよ哀とは見よ

嵐吹く春のみゆきは吉野山嶺の根凌ぎ花ぞふりしく

吉野山いく世の春の櫻花ちり積りても峰となるらむ

夏五首

白妙に衣ほすなり郭公あまのかぐ山をりはへてなけ

今日はまた八十氏人ももろ葛かけて待たるゝ郭公哉

郭公鳴や五月のみたやもる疾く早苗もたゆみてや聞く

嶺に生る是は千年を待かひの及ぶ丈なき夏の瀧つ瀨

夕涼み我が袖返る海士小舟をすての山のまきの下風

秋七首

天の河七夕つめの濡れ衣けふの七日や稀にひるらむ

萩の花ささちる霧に宿る共知らでや月の空に行らむ

山鳥のはつ尾の秋のます鏡長き夜かけて出づる月影

飛ぶ鳥の下ふき拂ふ河風に夜渡る月は霧もまがはず

嬉しさはかたゝ〳〵袖に餘る迄さしも三笠の秋の月影

秋の色もうつる計の松風を身にしめかねて衣うつ也

暮れかゝる嶺の柴屋の夕霜にたれ白雲の衣うつらむ

冬五首

神無月たれに手向の山風や紅葉の錦しばしとゞめよ

雲さそふ嶺の木枯吹きなびき玉のよこ野に霰過ぐ也

打渡すまかみ河原の夕風に衣手さむみ雪は降りきぬ

箸鷹の遠山をちのかた歸り歸るさかぬ雪の御狩は

龍田川ながれて早き年くれて風のかくべき柵もなし

戀六首

人知れずしのぶの浦にやく鹽の我名は待たじ立煙哉

青柳の葛城山のよそながら君を心にかけぬ日はなし

泣き戀ふる袖にはいかゞ宿すべき曇習はぬ秋の點月

見せばやな朝ゆふべに置く露の秋の草葉に增る袂を

今日は暮れ昨日はとの數ならで幾年過ぎぬ逢ぬ月日は

戀死なむ身の有樣も懲ぬやと後世懸て見る夢もがな

四季之部

春

春の歌詠み侍りけるとて

春日なる三笠の山に出る日の光盡せぬ春は來にけり

春日山雪のしらゆふ春かけて霞みもあへず峰の松原

朝まだき霞た靡く卷もくのゆつきが嶽に春立らしも

降る程ぞ消えずはありとも櫻花庭に色なき春の泡雪

櫪葉に雪の白ゆふ春かけてかすみも敢ず天のかぐ山

天の原雪のあなたの泡雪に霞のしたは花ぞふりしく

野べ見ればまだ色づかぬ梅が枝に冬の鶯たれ誘ふ鶯

春くれば海士の栲繩打はへて霞みにけりな鹽竈の浦

東雲に惜みし袖の色もかも軒端にかへる春の梅が枝

若菜つむ人やきつると言へば風も答ぬ萩の燒原

梅の花咲くやこの木の山風に衣にほはし落つる白雪

降る雪の春に知られて咲く花に冬ごもりする春の鶯

鶯の知べの風もかひぞなき雪はかり咲く窓の梅が枝

春やとき未だしら雪の三吉野の山のかひより出る鶯

うぐひすの涙の氷いつとけて今朝は雪間の梅の初花

古今の一句をこめて春の歌詠み侍りし時

二〇こほり居し水の白波立返り春の宿とふ池のをしどり

正治二年仙洞にて十題の歌合侍りしに、若草

二一春もまだ人めはかるゝ山里の景色も知らぬ庭の若草

落花

二二あすも猶消ずは有とも櫻花降だに添はむ庭の雪かは

同じ三年影供の御歌合に、遠島朝霞

二三沖つ鳥霞もまがふ波間よりまだ出でやらぬ朝日影哉

隣家夜梅

二四よそに見る窓の梅が枝薫る也月は此方の軒に懸りて

山家殘雪

二五深みどり梢はかすむ杉の本なほ雪しろし岡のべの里

建仁元年同じ影供の御歌合に、海邊霞

二六藻汐やく浦のかすみの下風に下ゆく雪や煙なるらむ

關路鶯

二七雪の色はまだ白川の關の戸にあけぼのしるき鶯の聲

海邊霞といふことを

二八見渡せば霞の内もかすみけり煙たなびく鹽竈のうら

元久元年の詩歌合に、水郷春望

二九橘姫の朝げの袖やまがふらむ霞も白き宇治の川なみ

三〇鳰の海の霞吹きゆく春風に波も幾代の志賀の花ぞの

建保二年の五首の歌合に、春朝山を

三一吉野山みねの朝げの櫻花松の葉あをき雪かとぞ見る

庚申の夜仙洞にて、春夜

三二花散らす嶺の嵐も吹きまよひ夕闇はらひ出づる月影

遠所にて十首の歌合侍りしに、朝霞

三三春の夜の朧月夜の名殘とや出づる朝日も猶霞むらむ

山花

三四などてかく思初めけむ櫻花山とし高くなりはつる迄

三五しがらきの外山の梢そらさえて霞にふれる春の白雪

山花

三六立ち返りその神山の櫻花この春よりや君に逢ひ見む

後京極攝政の家の會に、志賀浦春

三七春くれば汀の氷うちとけて霞ぞとづる志賀の浦なみ

泊瀬山春

三八初瀬山花のこずゑに風吹けば霞をはらふ峰のしら雲

前中納言定家卿聊被乞事侍りし時、吉野山春

霞めども稀にやは見る白雲の春も降しく三吉野の山

春の歌とて

常磐なる松を霞の染變へておの〳〵まさる春の一入

朝な〳〵咲添ふ里の梅が香の深き程には山も霞まず

春日野やいづく三室の梅が枝に霞なびき鶯ぞなく

幾里か月の光もにほふらむ梅咲く山のみねの春かせ

鶯も心をしむる梅が香にあらくな吹きそ春のやま風

よしさらば思ふ中にも春の夜の霞隔てぬ月は眺めじ

白雪の曇れる枝の梅がえに其とも見えぬ春の夜の月

梓弓磯邊に生ふる松の葉は春もいくしほ色増るらむ

武藏野の荻の燒原かき分けて遠方人の霞みゆくらむ

尋來るはかなき羽にも匂ふらむ軒端の梅の初蝶

春の池をまだ拾遺らぬ水鳥の青葉や蘆の若葉なる覽

鶯の聲も若木の梅が枝を根こじて植し人ぞふりゆく

身にしむる人よりもなほ梅が枝の折しる物は鶯の聲

さはた川まきのつぎ橋なか絶えて霞みぞ渡る春の曙

めも枯ず見れ共飽ず梅花咲き散る春は長き日もなし

永き日の海士の栲繩打はへて千尋の海に霞たなびく

天の原空吹く風のなはさえて霞にこほる春の夜の月

霞の歌よみ侍りし時

昨日まで故郷近く三吉野の山もはるかに霞む春かな

立初むる霞も色のわかければ紛ひもやらず春の神壇

雪はなほ春ともわかず故郷に霞めば遠き三吉野の山

天の原ふけゆく空を眺むれば霞ぞすめる春の夜の月

吹き送る朧月夜の春風に梅が香のみぞ霞まざりける

難波江のかもの羽色に立つかへて猶翠なる夕霞かな

柚人のくだす宮木も泉がは霞ながらぞ春はながるゝ

春の歌あまた詠み侍りける中に、行路梅

行過ぐる壑ね續きの梅の花歸さぞ袖の香は增りける

旅春雨

雨そゝぐ山路の花の夕暮はぬるとも雲の影に宿らむ

山中花

行末の花かゝれとて吉野山たれ白雲の種を蒔きけむ

關路花

相坂の山櫻戸の關もりは人やりならぬ花や見るらむ

庭上花

雪とのみ彌生の花のふりしけば猶下萠えの庭の若草

建暦二年内裏の詩歌合に、山居春曙

よしの山すゝの裏雲吹く嵐こけの枕に春ぞおぼめく

櫻色の霞のまそ鏡露おもみ恨みぬ山ぞ宿のあけぼの

建保二年同じ内裏の詩歌合に、野外霞

夕霞はらひもあへず埋もれぬ野中に立てる松の春風

春の行く彌生の野べの淺緑かすみの際も霞しにけり

河上花

吉野がは櫻吹きしく春風に雪げの水ぞ色にいでゆく

すゞか山あまつ嵐やすて衣川瀬の波に花ぞしをるゝ

同じ頃内裏の歌合に、水邊柳

立田川やまとにはあれど唐藍の色そめ渡る青柳の糸

江上霞

難波江の霞に沈む落櫟春のしるしや見えて朽ちなむ

殘落花

櫻花あさ露かけて吹く風に衣手おもし雪とふりつゝ

夜歸雁

春をへてつら亂行く雁がねの我が身一つに曇る月哉

建保三年同じ内裏の歌合に歌の春

哀とは香にこそしのべ梅の花誰が袖なれし故郷の月

初瀬山うつろはむとや櫻花色かはりゆく峰のしら雲

承久元年同じ内裏の歌合に、野徑霞

春たつといふ計り見し跡くとて行手に霞む野邊の曙

深山花

石走る吉野の瀧もよそながら厭はぬ花の限をぞ見る

暮春雨

なきとむる花や藤波鶯の聲てぞ來ゐる雨に濡れつゝ

同じ二年同じ内裏の御會に、春山月

春もなほ霞のひまの山風に打出る月は影ぞこほれる

野外柳

惠みあれば野邊の柳も打靡き民の草葉に春風ぞ吹く

同じ三年の御會に、春風

朝朗け鳴や雉子の山風に梅のあやかも人に知れつゝ

春雨

きさらぎの雲を霞の立ちませて同じ衣に春雨ぞふる

三宮の十五首よみ侍りし中に

橘姫の霞の衣ぬきうすみださむしろの宇治の河風

百千鳥なくや春べの難波津に浦風ふかく匂ふ梅がえ

紅のうす花櫻ほの〴〵と朝日いざよふを泊瀬のやま

仁和寺法親王の家の十首の歌に、浦霞

三七よそに見て藻汐も没まぬ佐保姫の霞の袖に懸る浦波
朝花
四七花盛り光長閑に出る日にうれなく消えぬ四方の白雪
洞院攝政の家の嘉祿二年の會に、春朝梅
五七待ち出づる朝日の山の梅の花八十氏人も袖匂ふらし
一條前太政大臣の家の會、松色添レ春
六七萬代も遂にもみぢぬ宿の松色はあるじの春に任せて
山家夕霞
七七つくば山は山の里に煙たち霞もしげし春のゆふぐれ
花洛月
八七春やとき花の都も名のみして雪げの月は風も匂はず
前内大臣の家の會に、春浦松
九七夕波や誰をうらみて松のきる霞の衣ぬるゝがほなる
水邊鶯
〇八梅が香の下行く水のたよりにも誘はれ來ける鶯の聲
夜山花
一八霞みゆく朧月夜を雪げにてそれかと積る三吉野の花
同じ家の會に、春夜樹
二八哀にも若木の梅ぞ匂ひけるもしやと植し老の袖覺に
又同じ家の會に、寒野鶯
三八有乳山谷の鶯野べに出で、鳴けどもいまだ春の泡雪
花曉鐘
四八鐘の音も明行く空に匂ふ也今日も有てや花を見べき
同じ家の會に人別に分レ題歌詠し侍し時、武藏野
五八春もまだ色には出でぬ武藏野のわか紫の雪のした草
藤
六八春日山おひそふ藤は二年の春より千代も花咲べき
松
七八霞たつとほ山松の朝ばらけ一入わかぬ春のいろかな
又同じ家の會に、春江霞
八八難波津に霜を拂ひしあしたづの立つや霞の春の毛衣
山家花
九八白雲と誰ながむらむ足引の山のかひなるやどの櫻を
兵部卿成實於二石清水一歌合し侍りし時、河上霞
〇九渡る舟それとも見えず朝ばらけ水尾かけて霞む川波
暮山花
一九山の端も夕日のどけき白雲のにほふは春の花盛かも
建保二年の內裏の御會に、古寺花
二九初瀬山檜原のこすゑ雪白し峰のさくらに嵐吹くらし
後京極攝政の家の詩歌合に、花添二山氣色一
三九櫻花さきにけらしなしもといふ葛城山も色變るまで
四九我妹子が袖ふる山のさくら花昔にかへす春風ぞ吹く
入道前攝政の家の七首の歌合に、雲間花
五九白妙の雲間も同じ三吉野の山の霞やさかりなるらむ
霞中歸雁
六九梓弓いそべの波を立ちすて、霞にかへる春の雁がね
經房卿の家の歌合に、山花
七九吉野山花は匂にこぼれ落ちて袖に知られぬ嶺の春風
名所春といふことを
八九春くれば櫻こきまぜ青柳のかつらぎ山ぞ錦なりける
或る所にて住吉の會侍りしに、名所花
九九心こそ行きても折らめ葛城や高間の櫻匂ひおこせよ
浦歸雁
〇〇歸る雁を島のあまを恨みてや己が翅も藻汐なるらむ
住吉にて隆祐會し侍りしに、春山朝
一〇佐保姫の名に顯る、山なれば今朝も霞の衣たつなり
家長朝臣の日吉の會に、湖上霞
二〇鴈の海や沖つ春風ふかぬ日は霞を出でぬ海士の釣舟
三〇誰が忍ぶ袖のわかれの有明を翅に知りて歸る雁がね
閨月花
四〇限ありて行別るべき春だにも止る山路に散花ぞうき
春る歌とて
五〇小山田に散りしく花の唐錦たゝまく惜み歸る雁がね
六〇山守も折らばやいはむ高砂の尾上の櫻やど暫しかせ
七〇空蟬の山のよすがに雲消えて花の形見の春も殘らず
八〇はしわおる柳の糸にふる雨の心ぼそくも暮る、春哉
九〇雁がねの消えゆく嶺の夕霞かたみも知らず吹く嵐哉
一〇目から行きて恨むる人もなき風の宿りも花や哢らむ
一昨日けふ散べき花はなけれ共兼てぞつらき春の山風
二〇春雨に濡れつゝ來ませ我宿の花の盛は今日か過なむ
三〇立返りふるき御幸の櫻狩かたのゝ雉子跡はありけり
四〇忘れじの雁は越路に歸る也方も定めず花は散りつゝ
五〇吉野山ちりしく花のした蔭にかへて折るも物うし
六〇此の頃の花の錦に比ぶれば霞は春のころもともなし
七〇歸る雁朧月夜に哢く花をこしぢの人にいかに語らむ
八〇三吉野の吉野の峰も櫻ばな哢きぬる程の雪は懸らじ

九〇海士小舟初瀬の檜原をりそへてかざす櫻の花の白波
〇一自から雲は晴るれど昨日けふ櫻懸らぬ山の端ぞなき
一一立返りなほ相坂に石間ゆく關の小川の花のしらなみ
一二櫻花わが世の後や石上ふるの山べもふりまさるべき
一三春雨に柳の糸も枝ひちてあやをりひたす春の池みづ
一四散ると見て有べき春も無物をうたて櫻を風の吹く覽
一五朝附日さすやつげぐし青柳の葛城山になびく春かせ
一六春と云ば花かとぞ見る白妙の雲にまがふ峰の松原
一七露滋き小野の芝生に立つ雲雀朝日の空に羽やほす覽
一八神代より花の咲べき所とや吉野の山を定めそめけむ
一九吹く風に花の上波たちにけり淵瀬も見えぬ吉野川哉
二〇句へたゝ朝倉山の櫻花行きても折らぬよそのよそ迄
二一詠めやる雲の幾重をみ越路の空に消行く春の雁がね
二二立ちのぼる雲や梢に櫻木の花ぞこだかき三吉野の山
二三花の香も雲路にまがふ山風に夕闇分けて歸る雁がね
二四霞みゆく越路の末を見渡せば遠方人も歸るかりがね
二五古の人や雲居にしるべせし明くれば歸る春の雁がね
二六御狩する狩場の小野に日は暮ぬ山櫻戸に宿や借まし
二七おしなべて巖にをさけ山櫻散ると雖き春にあふやと
古今の一句をこめて春の歌詠み侍りしに
二八山賤の花をし見ればと計も思はでしもや春をへぬ覽
二九我袖ぞ歸れば濡る、聲はして涙は見えぬ春の雁がね
三〇一しほの絕間の松もあをによし奈良の都の花櫻かな
一一櫻花なにそは露のあだ物を同じ命にかへてとぐめむ
二二櫻花山風にこそ亂らめ雪はふれともにほふ空かは
三三山櫻みにこそきつれ春風のかへすは花の浮雲のそら
花の歌よみ侍りける中に
四三思ふどち櫻鬮して暮す日を花なき里の人に見せばや
五三白川の花の盛の木のもとは大宮人のたゝぬ日ぞなき
春日鷹狩といふことを
六三春霞立出でゝ行けば櫻がり野にも山にも雉子なく也
前内大臣の家にて、隔路花
七三雪さくら吉野に分けし鈴鹿山關もふりゆく花の色哉
同じ家の會に、寄山春を
八三なら山の兒の手柏もめぐむらむ故郷人の櫻をるころ
同じ家にて五首の歌合侍りしに、羇中霞
九三霞分けねにゆく鳥もとぶさたつ足柄山を越ぞ暮ぬる
山家鶯

○五道はあれと瀧無もがな梅が香に定かに聞かむ窓の鶯

曉歸雁

一五たづの居るあへの田面の有明に又坂越えて歸る雁音

朝春雨

二五朝附日さすや岡邊も名のみして霞める松に春雨ぞ降

名所花

三五春風には消えがてに降る雪や花の所の葛城のやま

建保二年の内裏の歌合に、山落花

四五櫻花ふくや嵐のあしほ山そがひになびく嶺のしら雲

暮春月

五五霞みゆく彌生のかげの淺緑月の桂も木の芽はるらし

前中納言定家卿によみて遣しける、河上花

六五山風も渡る河瀬の跡暫しも見せず花ぞ散りしく

野外花

七五櫻がり暫しかげすむはし鷹の野守の鏡花もうつりぬ

庭前花

八五白雲の槇の戸ざしの花のえにたわむ計に咲ける朝明

閑中花

九五つれ〴〵と詠むる宿の櫻花あまりてつらき春雨の空

前參議信成卿北野の會し侍るに、春待花

○六この春はいそげひらけよ櫻花人のおもひも同じ都に

前但馬守家長の日吉の會に、尋二山花

一六吉野山あふを限の櫻花ゆくへも知らぬ道やまどはむ

或る所の會に、春山花

二六降雪にまだ殘り江の初瀬山檜原も見えず花や散らむ

遠所にて俊頼朝臣の影供侍りし時、庭上櫻花

三六少女子はきても折らなむ我宿の軒端の櫻しめはゆふ共

暮春歎冬

四六暫しとも云ふべき春を山吹の花も答へず暮れにける哉

山家夕藤

五六都人まつの庵の藤の花雨さへ降りてゆふしをれつゝ

春の歌とて

六六此里は常盤の杜の藤の花咲き懸りてや春を知るらむ

七六鶯の歸るしるべは何なれや誘ひし風も花の香ぞせぬ

八六過ぎがてに見るとも見えじ藤の花霞に紛ふ宿の夕暮

九六年をへて四方の山べの櫻花ちりすてゝ行春も恨めし

或る所の會に、暮山花

一七故郷は梅もさくらも散りはてゝ鶯さそふ山吹のはな

二七鶯は郭公にも待ちかへつ散りぬるはなの慰めぞなき

二七行春のいはぬを慕ふ人やあると色にや出る山吹の花

古今の一句をこめて春の歌よみ侍りしに

三七いざさらば井手の里びと山吹の花色衣くれに重ねむ

四七限あれば春こそ暮れめ今さらに山へ歸るな鶯のこゑ

五七暮れてゆく霞の袖に春かけてひれ振返せ松浦さよ姫

山家藤といふことを

六七折らすなよ壑ほに咲ける藤葛くる山人の歸る插頭に

暮春の歌とて

七七咲出づる岩根が峰の藤葛春は過ぐれど折る人もなし

八七春の日もいま幾日かは飛鳥川なゝせの淀に柵もがな

九七もろ人の折し櫻を桑にて山路まよはず春やゆくらむ

○八行く春に柵かけよ三吉野の大川のべに咲ける藤なみ

一八春を惜み天のかぐ山袖ぬれぬ明日は卯月の衣ほす共

仙洞にて當座に暮春の心を

二八厭はじよまがひし花の末ぞかし彌生の月に懸る白雲

夏部

遠所にて俊頼朝臣の影供侍りしに更衣を

三八見し世にはならひ計りぞ夏衣人の心ぞ變りはてぬる

遲櫻

四八夏も猶山櫻戸を尋ねてまだ名に立つる花を見る哉

早苗

五八故郷の千町の早苗取田子も御代の爲とぞ猶祝ふなる

夏の歌とて

六八おしなべて夏は青葉の山櫻花こそ色も紛はざりけれ

七八昨日こそ强ひて折しか藤の花今日は形見の村雨の空

夏の歌よみ侍りける中に　嶺郭公

八八諸共にまだ出でやらで郭公峰のあなたの月に鳴くも

杜郭公

九八獨のみ寢たる聲する時鳥常盤の森につまやつれなき

郭公の歌の中に

○九鳴きぬなりはや里なれよ鶯の谷のすだちのやま郭公

一九こぞの夏又こむとしは郭公たゞ一聲と契りやはせし

二九ゆふかけて聲たむくなり千早振神のみむろの山郭公

三九水無月のすがの荒野の郭公まだ萩咲かず又歸り鳴け

四九菖蒲草玉にぬく日の近ければ山郭公いまか鳴くらむ

五九紅にふりいでゝ鳴かば郭公神なび山の時雨まで鳴け

六九郭公頓て續きの里なれや汝が鳴く聲も絶ず聞くべく

七九呼鳥くもぢはるかに聲すなり月の都に里なれや行く

八九五月雨の過ぎにし空の郭公まだ夕立に聲のこるなり

古今の一句をこめて夏の歌よみ侍りしに

九九郭公なけどもいまだ卯花の咲ける垣根に消えぬ白雲

○○己が音も袖濡しけり郭公なくや五月の菖蒲ひきつゝ

一〇夢にだに寢て語らはむ郭公現に來鳴く聲もこそあれ

遠所にて俊頼朝臣の影供侍りしに、郭公

二〇五月雨は晴行く空の郭公己が鳴く音は小休だにすな

菖蒲

三〇菖蒲草いつかと待し年もへぬ長きね懸くる袖をほるむ

廬橘

四〇昔みぬ花たちばなの匂ふ迄玉の砌のあれまくもをし

同じ仙洞にて十首の歌合侍りしに、郭公

五〇尋ねこし知らぬ旅寢は里なれてやま郭公一聲ぞ聞く

菖蒲

六〇假初の軒の菖蒲も時しあれば五月の空の匂とぞなる

同じ影供の御歌合に、曉聞二郭公一

七〇今はとやをちかへり鳴く郭公おのが五月も有明の山

松風暮涼

八〇暮れゆけば風は秋なる故郷に色こそ見えね松の下草

同じ十首の御歌合に、郭公

九〇八幡山向ひの里のほとゝぎす忍び方の聲も變らず

建保三年の内裏の歌合に、羇中郭公

一一駒とむる野中の杜はたちにけり鳴やむかひの山郭公

同じ年の御歌合に、夏の歌

二一あかなくにやすらへ空の郭公夏加はれる年も稀なり

三一明けたてば蟬のをりはへ夏衣日も夕暮は風ぞ涼しき

承久元年の同じ内裏の歌合、曉郭公

四一時鳥五月待つまの一聲の鳴きもふさぬ有明のそら

水邊草

五一ゆふは川夏ゆく波の岩こすげ綠も定めぬ玉ぞ亂るゝ

三宮の十五首の會に夏の歌

六一月にとふ大宮人の夏衣涼しく名のるほとゝぎすかな

七一玉鉾や影ふむ森にやすらへばやがて雲そふ夕立の空

仁和寺法親王の會に、夕郭公

八一夏きては誰が爲ならぬ黄昏を待つにも名のる郭公哉

入道前攝政の家の貞永元年の歌合に、羇旅郭公

九一旅寢して物思ふ我に郭公なくや五月の聲なきかせそ

經房卿の家の歌合、初郭公

九郭公待つ夜かさなる雲路より初音に返る去年の古聲
　前内大臣の家の會に、朝嵩霜
一〇あやめ草ぬくや五月の玉がしは同じ緑の軒の朝つゆ
　夕郭公
一一夕日さす唐なでしこの紅にふりいで、鳴く郭公かな
　同じ家にて人々各別の題にて歌よみ侍しに郭公
一二己がねも五月きぬれば郭公梅雨かけて里なれそ行く
　前但馬守家長の日吉の社の會に、待二郭公一
一三これも又空だにくもれ郭公頼めがほにも詠め暮さむ
　夏の歌とて
一四いかにせむ來ぬ夜許多の郭公待じと思へば村雨の空
一五昔づれよ越のは山の時鳥たごのうら藤今さかりなり
一六今年より花咲きそむる橘のいかで昔の香に匂ふらむ
一七晩と知る鐘の聲のまに明けやはてなむ夏の夜の空
一八鵜飼の花色衣ぬきわかれ誰が朝露のやどかこつらむ
一九音羽川堰入れぬきも五月雨に遠のたちは瀧落しけり
二〇悟りえて暫しまどろむ短夜の夢にも妙に月は見え鳧
二一秋の色は時雨に敢ぬ神南備の山も難面き五月雨の空
二二いかにして今日を契りて菖蒲草軒端の葱亂初めけむ
二三いかばかり花橘の匂ふらむとこよの人のよはの枕に
二四五月雨に水ある空を眺めても春みし花の浪ぞ戀しき
二五水の音に厭ひし鳥も跡絶えて獨ぞこほる夏の夜の月
二六笹竹の大宮人のふしのまも短くあくる佐保の山のは
二七夏の夜は杉の斯の程もなく鳴く音はかなき朝鳥かな
二八里のあまの夏の衣をほす波の日影も薄く浦風ぞ吹く
二九小倉山鹿の立どの知べだに絶えて影見ぬ五月雨の空
三〇鵜飼の花の雛にとおてふも色々まじり置ける露かな
三一石走りをもられぬ水の瀧つせに夏なき波の花ぞ散ける
三二しめはへし山田の下樋打ぬらむ早苗も沈む梅雨の頃
三三梅雨は幾日ふるとも玉柏葉守の神のしめは朽ちせじ
　古今一句をこめて夏の歌よみけるに
三四里遠み人こそ汲まぬ我が門の板井の清水夏は來に鳧
三五吹く風に移香こくも匂ふかな花橘のこぞのころも手
　五月雨の歌よみ侍りし中に
三六かざし折る人も通はず成に鳧三輪の檜原の梅雨の空
三七かき絶えてとふ人もなし水莖の岡の館の五月雨の頃
三八橘の花をも見ましあたら夜の月を隔つる五月雨の雲
三九五月きて袖や濡そふ橘姫のながめに増る宇治の川波
四〇庭の面に任せし水も岩越てほかにせきやる梅雨の頃
四一五月の夕の空にいか計りねにゆく鳥も羽しをるらむ
四二五月雨に海の藻汐は燒絶えてたつは淺間の烟也けり
　夏の歌よみける中に夏の杜を
四三八幡山松かげ涼し石清水夏をときてや跡をたれけむ
四四神風や伊勢の少女の夏衣涼しくむすぶ山のべの御井
四五いかにして今日諸人の諸葛神の插頭と靡きそめけむ
　河邊螢といふことを
四六河やしろほすや衣は名のみして波に螢の玉ぞ散交ふ
　江螢といふ事を
四七踏みしだき鳥だに立たぬ夏刈の玉江の蘆に飛ぶ螢哉
　遠き所にて後頼朝臣の影供侍りし時、水邊螢
四八里人も今はみくさを打はらひ螢ばがりぞ玉の井の水
　閏六月
四九夏も猶思ひなしにや變るらむ秋ならましの夕暮の空
　夕蟬
五〇杣山や楢の蟬ももろごゑに夕暮かけて宮木ひくなり
　荒和祓
五一荒和の神のあらきを和げてあさの夕に御祓をぞする
　庚申の夜月仙洞の御會に夏曉を
五二秋はまだ遠山鳥のしだりをの餘りて惜き有明のそら
　後京極攝政の家の詩歌合に、水邊涼レ自、秋
五三袖ひぢて結ぶ白波立ちかへり凍るばかりの松の夕蔭
五四夕されば涼みにきつるかひぞなき空さへ冴る谷陰の水
　同じ家の御會に龍田川夏を
五五水無月の空にも秋や立田川せによる波の村雨のころ
　前内大臣の家にて、夏夕山
五六六月のてる日の影もしたへとや山下水をはらふ夕風
　同じ家の會に、夏杜夕雨
五七雨ふれどくるればもゆる夏虫を誰故つゝむ衣手の森
　夏旅曉雲
五八短夜のまだ雲とづる關の戸を雞は誠の音にゆるす也
　夏山朝松
五九朝な〳〵秋やちかづく末の松山こす波の色ぞ涼しき
　又同じ家の會に、海上螢
六〇暮れゆけば浦の苫屋に影見えて浪に螢も藻汐燒くも
　又十首の會侍りし、夏野月
六一秋をかる野原の草の月影は流石に宿る露ぞすくなき
　水宿レ螢
六二螢とぶ天の河瀬のうき枕まだきすゞしき星合のそら
　前參議信成卿の北野社の會に、夏向レ泉
六三結ぶ手に岩もる清水あまりさへ袖に涼しき松の下風
　前中納言定家卿被レ乞侍りし時、二上山夏
六四夏衣てる日を厭ふわざも子があけて涼しき二上の山
　三輪山夏
六五三輪の山川邊も今や夏の夜の短木綿襷御祓すらしも
　住吉にて隆祐會し侍りしに、夏浦夕
六六松が根に夕涼みする浦人の心も知らず潮ぞ滿ちける
　夏の歌とて
六七此瀧のあたりに夏のあらば社涼しやとても手にも掬ばめ
六八六月の照日にまくる草の葉もつれなく成ぬ秋の白露
六九夏の野の繁みが下の忘水しのび〳〵に鹿やふすらむ
七〇夏くれば流る、廠のゆふは川たれ水上に御祓しつらむ
　古今の一句をこめて夏の歌詠み侍りしに
七一こめやとも今は待たれず郭公よもの御祓の六月の空
　秋部
　遠所にて後頼朝臣の影供の御會侍りしに、立秋
七二まちつくるみほの浦波靜にてみ舟いざよふ秋の初風
　野虫
七三立返り道ある御代に逢坂とや同じこやの、松蟲の聲
　初秋といふことを
七四秋はきぬ紅葉の御舟ふなよせて七夕つめの天の河長
七五春日山岩根のすゞを吹く風の音も涼しき秋は來に鳧
七六我袖は四方の草葉の上よりも秋には敢ず色變りけり
七七初瀬川浮て流る、小波の色こそ見えね秋や立つらむ
七八御祓していくよに秋の立田川あさげ涼しき水の音哉
七九このねぬる朝げの袖に置露のあへず色づく秋の初風
八〇秋立ちて初夕暮に吹く風のやがて寂しき秋のおと哉
八一秋はきぬ人もとかへし八重葎草のとざしはあだなれ共
　七夕の歌よみ奉りし時
八二天の河いさ立初むる夕霧も今日の逢瀬の中は隔てし
八三幾夜ふと楫音たてし彦星のよわたる舟の天の河かせ
八四今はとて人はおくとも七夕の秋の扇の名をば忘れじ
八五人の世のしげき契も夢なれば一夜うらむな天の羽衣
八六ひとすぢに祈る思は彦星や七夕つめぞ空に知らむ
八七七十や七年秋の七日迄あふ身もまれの星を見るかな

八八天の河なほ立ち歸れ七夕の紅葉の橋は移ろひぬとも
仙洞にて北野宮の歌合侍りしに、初秋曉
八九秋きては幾日もあらじ誘ふ露知られにけりな曉の袖
暮山雨
九〇この夕ふるや村雨足曳の山の秋がせ露も吹きあへず
田家風
一門田吹く稻葉の音になりぬなり尾上の松の末の秋風
仁和寺法親王の會に、庭露
二時分かず玉しく庭の草の葉に千代を置添ふ秋の白露
山風
三あだに散る花も紅葉も吹知らぬ常盤の山の秋の初風
野秋
四龍田姫裙野の荻の唐錦まづおり初むる秋は來にけり
海月
五四方の海風靜なる波の上に雲こそ見えぬ秋の夜の月
同じ法親王の會に、初秋月
六風の音はいさ遠山の木間より目には清がに月ぞ漏ける
擣衣稀
七それもよも稀にうつ夜の音はせし巖を撫し天の羽衣
入道前攝政の家の貞永元年の會に、野徑早秋
八初荻の一はなすりの旅衣つゆ置きそむる宮城野の原
曉聞荻
九聞きわかす涙の露もとゞまらず老の寢覺　荻の川風
前內大臣の家の名所の秋の歌に
一〇夏刈のみつ野の眞菰今日みれば是や崩出る秋の若草
一名に負て風も今日より辰の市や立商人の袖ぞ涼しき
二柚川にひくとはなしに宮城野の眞萩柵むさを鹿の聲
或る所の會に、秋山鹿
三筑波山たつ岑嶺は茂れど嶺ゆく鹿の聲はさはらず
住吉にて隆祐會し侍りしに、秋野夜
一四宮城野の本荒の小萩ねにけらし澄居る露よ人に知すな
秋の歌とて
一五笹蟹の糸を草葉に引懸て七夕つめに今日やかしつる
一六久方の天の河原の女郎花今日の一夜や露はらふらむ
一七山の端に叢雲蟠ぐ夕ぐれをよそに過ぐさぬ荻の上風
一八我が宿の一村萩の朝明を露おきながら誰に見せまし
一九故郷をとふ人もがな君忍ぶ草に窶れて秋やへぬると
二〇荻の葉もおなじ雌の女郎花忍びしのばぬ秋風ぞ吹く
二一朝な〳〵さらでも濕る花の色の雜の霧に村雨ぞふる

二二うき乍ら玉の緒惜み朝日さす春日の小野に曾る白露
二三かり衣すこしは殘せ露草にたえまはすらむ萩が花摺
二四足曳の山とび越えてくる雁も嶺ゆく鹿も雲に鳴くも
二五ひくま野に匂ふ萩原入り亂れ鳴くや小鹿の秋の白露
二六朝日さす高嶺の深雪空はれて立ち及ばぬ富士の河霧
二七吉野山秋風立ちぬいか計すゞの篠屋の涼しかるらむ
二八白露の野山に風や立田姫さのみかざしの玉は亂れし
二九吉野川一もと立てるいは瀨釣する人の袖かとぞ見る
三〇我が袖も己が翅もつばくらめかへる野原の露の夕風
三一旅衣のはらの薄刈りしきて獨ねぬ夜の袖とたのまむ
三二忍びわび山田に照す稻妻の光の間にも鹿ぞ鳴くなる
三三穗に出でゝ尾花が本に鳴く鹿は思重なる草の名やうき
古今の一句をこめて秋の歌よみ侍りしに
三四秋はまつ心盡しに待ちそめて入る影慕ふ三日月の空
三五幾何の田を作ればか山賤の墻つのたにゝ鳴子引らむ
三六をくろ崎みつの小島の夕霧に棚無小舟行方知らずも
三七相坂の關の淸水に引きとめて暫し水かへ望月のこま
三八人まつと立ちやすらへば白妙の袖かと紛ふ庭の白菊
三九此頃は知も知ぬも筑波ねの嶺の紅葉を折ぬ日ぞなき
四〇紅葉ばは誘ひもとめず立田川岩きり通す水の早さに
四一心ざし深く染めてし龍田姫おるや錦の山のもみぢ葉
秋の歌詠みける中に、荻風
四二葦垣はそことも見えず荒果てゝ近き荻に秋風を吹く
原鹿
四三小鹽山小松が原に鳴く鹿はちよに一夜の身をやかふ覽
四四影や見ぬひのくま川の夕霧に駒打渡す音そとまらぬ
船月
四五渡の原あだなる船の波の上に浮ても幾夜月を見る覽
江月
四六踏みしだく玉江の蘆の下はれて忍し鳥も月に立つ哉
鳥月
四七雨はるゝ田蓑の島に月さえてかさねて白き鶴の毛衣
橋月
四八天の原月に漕出づる心ちして暫し休らふさのゝ船橋
河月
四九天の河雲のみをなき秋の夜は月の桂ぞしるし也ける
夕紅葉

五〇搔曇りしぐるゝ程も立田山夕日殘らぬ紅葉ばぞなき
遠き所にて俊頼の影供侍りけるに、曉鹿
一今はとて有明の月の山蔭に妻吹きおくるさを鹿の聲
山霧
二高嶺より霧吹きおろす秋風に龍も見えぬ伊駒山かな
同じ頃十首の御歌合侍りしに、荻露
三又や見む又や見ざらむ白露の玉おきしげる秋萩の花
夜鹿
四天の河秋の一夜の契だに交野に鹿の音をや鳴くらむ
建永元年の仙洞の歌合に、朝草花
五我が袖は今朝もほし敢ず飛鳥川往來の岡の荻の白露
海邊月
六秋の夜の月やをじまのあま原明方近き沖のつり舟
同じく仙洞にて元久元年詩合侍りしに山路秋行
七秋風の袖に吹きまく峰の雲を翅にかけて雁も鳴くも
仙洞の和歌所にて私に歌合し侍りしに夕鹿を
八下紅葉かつ散る山の夕時雨ぬれてや獨鹿の鳴くらむ
仙洞にて同じ頃當座の歌合侍りしに、曉聞雁
九暫しくもる有明の月の村雨に山とお雁も友うらむ也
田家鹿
一〇岡べなるわさ田もる庵の秋の袖霜置月にさを鹿の聲
水無瀨にて秋の歌仕うまつりしに
一一歸る山いつはた秋と思ひこし雲居の雁も今や逢見む
一二秋風は偖もや物の悲しきと荻の葉ならぬ夕暮もがな
一三須磨の蜃の閨遠の衣よや寒き浦風乍ら月もたまらず
一四限有れば明けなむとする鐘の音に猶長き夜の月ぞ殘れる
一五はし鷹のはつかり衣露分けて野原の秋の色ぞ移ろふ
一六有明のつれなく見えし淺茅生に己と名のる松蟲の聲
一七妻かくすやゝ神山立ちよこし夕の霧に鹿ぞ鳴くなる
庚申の夜仙洞にて秋朝を
一八朝な〳〵人を別れぬ衣手の思ひぬれぬも秋を露けき
建保三年內裏にて秋の歌よみ侍りしに
一九今よりの秋風たちぬ白妙の衣ふきほせ天のかぐやま
二〇鳴き渡る雁の涙をこきまぜて本荒の萩に秋風ぞ吹く
二一しのび侘び小野の篠原おく露に餘りて誰を松蟲の聲
二二思きや御代の始の秋の霜ふりて雲居の月を見むとは
二三深草や竹のはやまの夕霧に人こそ見えね鶉なくなり
二四我が宿のゆふかげ草の蔭かれゆくころぞ秋は悲しき

五七色變る正木のかづら繰返しとやまのすそに衣うつ也
六七初雁も今か越ゆらむ高砂の尾上の雲に鹿も鳴くなり
七七荒ぬとも我が袖までは知らざりき蓬が末の軒の月影
八七心あてに折ばや折らむ夕附日さすや小倉の嶺の紅葉
承久元年内裏より日吉社の歌合たてまつられしに大宮、深夜秋月
九七今よりも空に更行く秋風の月にはこりよ四方の浮雲
遠山曉霧
〇八長月や曉寒く立つ霧にたれをちかたの山路こゆらむ
同じ日十禪師、暮天聞雁
一八山の端に塒たづねず飛ぶ雁のよその涙もすぎの下露
紅葉流レ雨
二八紅の末摘花のさばかりも時雨にふかき峰のもみぢ葉
建保二年八月の内裏の歌合、秋風
三八狹霧に人をば誰と頼まねど暮るゝ夜毎に秋風ぞ吹く
秋露
四八少女子が袖ふる山の玉かづら亂れてなびく秋の白露
秋月
五八あくがれて宿をば出ぬ此里も我が衣手は月に濡つゝ
秋雨
六八秋は又軒端の木の葉つれなくて聞きも紛はぬよはの村雨
秋雁
七八雁がねの聞ゆる空や明けぬらむ枕にうすき窓の月影
蟲
八八野や寒きよはの枕の蕃わがもとゆひに霜はおきけり
秋鹿
九八忍侘び思ひやかゝる神南備の三室の山に鹿ぞ鳴なる
秋花
〇九飽なくに野邊に交りて今日暮ぬ露の宿かせ本荒の萩
秋水
一九山のはも時雨はまだき朝日影くれなゐ匂ふ瀧の白糸
秋霜
二九白菅の眞野の萩原朝な〳〵おきまどはせる秋の初霜
承久元年同じ内裏の歌合に、秋夕露
三九秋風も拂ひぞ敢ぬくゝ野の草葉の歎における白露
聞二擣衣一
四九麻衣思ふに何の色も有じうつや夜深く音ぞ身にしむ
庭紅葉
五九しぐるなり訪はぬ里人みる計り庭の梢に青葉殘すな
後京極攝政の家の歌合に、野風
六九今日見れば生田の小野の眞葛原うら枯渡る秋風ぞ吹く
同じ家の御會に、宮城野秋
七九宮城野のま萩吹きこす秋風に露さへ送るさを鹿の聲
隔二塵關一秋
八九波に居る雲に初雁訪づれて須磨の關屋に秋風ぞ吹く
三宮の十五首の歌よみ侍りしに、秋の歌
九九足引の山の雫に立ちぬれて妻戀すらし鹿ぞ鳴くなる
〇〇名もつらし葉月の嵐龍田姫暫しなそめそ神南備の山
一〇世にふれば賤の苧環はては又月に幾たび衣うつらむ
前内大臣の家の十首の歌合に、秋海雲
二〇時つ風西吹く海を行船のゆたのたゆたに雲ぞ別るゝ
曉紅葉
三〇初時雨有明の月の守山はそむる下葉の色を見よとや
おなじ家の三首の歌合に、田家月
四〇風あらす山田の庵に秋田かる憂くやこれ月を見る寢
野徑月
五〇文歸り又もきて見む敏鹿のとや野を出る秋の夜の月
水郷月
六〇飛鳥川今日やなかばの秋の空夜渡る月にとほき白露
同じ家の會に、秋瀧露
七〇此頃の涙にかりてひろふべき瀧の白玉霧なくもがな
江舟月
八〇浦風の誘ふも知らず難波江の蘆のほ舟に月を見る哉
寄レ野秋
九〇鹿の音は猶遠き野に鳴きすて、獨り空ゆく秋の夕風
月の歌とて
一〇〇津の國の長柄の橋の橋柱霜にや朽ちし月は知るらむ
一玉津島天つ空まで開あげむ月にも及ぶ言の葉もがな
二秋風に雲は殘らぬ有明の月ぞかゝれるをばすての山
三月の入る高間の山の秋風に消えて跡なき四方の白雲
四久方の月のかつらの花盛いとはぬ空に秋かぜぞ吹く
五瀧に立つ松のあなたに成に鳧入もいざよふ山端の月
六秋風の吹きゆく空に久方の月の宮人たれを待つらむ
七秋の夜は月の光も住吉のいでみの濱のありあけの空
八山の端にいざよひ出る久方の月吹きこゆる秋の木枯
九久方の月の桂はいかにしてかゝる光の種を植ゑけむ
一〇詠めつゝおもふも久し久方の月のみやこの明方の空
二故郷に誰か詠めてねぬなはの長き夜ちぎる池の月影
二佗人の袖のなみだの白露もすてず宿かる秋の夜の月
三久方の月に隈なく照されて空も幾夜の秋を知らむ
四此山の嶺より月や出でぬらむ向ひの岡に影ぞ映ろふ
五白雲に絕えん〳〵変り行く月の末吹き拂へ四方の秋風
六閨の上の板間やあるゝ玉垂の内より出る秋の夜の月
七時雨せぬ秋風計身にそへて山の端いでゝ月ぞ冴行く
八長月やつむ日の菊の咲しより四方に影添月ぞさやけき
九かく計り住難き世を秋の夜の月は光に知ずや有らむ
〇夏果て誰が山の端におきすつる秋の扇とみゆる月影
一唐人のいくらの玉を磨きもて寫すともなし秋の月影
二冴えのぼる譽きや空に更けぬらむ月の都も衣うつ也
三月見れば昔の秋の面影にさしもつきせぬ我が涙かな
仙洞にて十題の歌合侍りしに、浦月
四誰が里に山の端までも詠むらむ明石の浦に有明の月
山嵐
五吹き萎る嶺の草木のいかならむ袖だに堪ぬ秋の嵐に
同じ五首の歌合、行路秋
六玉鉾の道もやどりも白露に風の吹きしく小野の篠原
同じ當座の御會に、湖上月
七鴎の海や月の光の映ろへば波の花にも秋は見えけり
經房卿の家の歌合に、曉月
八詠むれば千里の秋も雲はれて月にかすめる有明の空
建暦二年の内裏の詩歌合、水郷秋夕
九川舟のさしてたのまぬ契にも秋の夕や思ひ分くらむ
〇春日山おどろの道も中たえぬ身のうち橋の秋の夕暮
同じ三年の内裏の歌合に、山曉月
一明けぬとてなちかた人のおくらすば獨やかゝる山の端の月
野夕風
二人ならば都に見まし宮城野の露をいざなふ萩の夕風
河朝霧
三いか許り朝げの霧に萎るらむ袖に棹さす宇治の川長
同じ内裏の御會に、海路秋夕
四とまりとふ日さへ短く成に鳧八重の汐路の秋の夕暮
五九月十三日夜の内裏の御會の歌合に、江上月
み舟漕ぐ堀江の水も底澄て玉しく月の影ぞさやけき
同じ頃又内裏の御歌合に、深山月

四六 月影もすめばすみけり白雲の絶ずたなびく峰の木枯
寒野蟲
四七 野邊は今蟲の音たゆむ初霜に聲も殘さず擣つ衣かな
建保三年同じ内裏の御會に、湖上月
四八 明けぬるかまた月影は高島やあしろの浦を出る釣舟
杜間月
四九 まとりすむ杜のすがの根長き夜の飽ず映ふ月の影哉
田家月
五〇 秋の田の假ほの宿りとふ鳥の聲さへ匂ふ萩の上の露
同じ年内裏の御歌合又侍りし時、秋の歌
一五一 手向山紅葉の錦ぬさはあれど猶月影のかゝる白木綿
二五二 賤の擣つ衣かりがね聲寒きはね白妙に霜やおくらむ
同じき六年同じ内裏の御會、秋山月
三五三 立田山神代も秋の木の間より紅くゝる月や出でけむ
秋野月
四五四 さをしかの入野の薄露をおもみ誰が手枕に宿る月影
秋庭月
五五五 長月は今夜にしかじ庭の月明けなばあすの宇ありとも
承久二年の同じ内裏の御會に、待ち月
六五六 月まつと人にはいひし偽のいまやまことの夕暮の空
見ル月
七五七 恨つる日頃ながめの雲晴れて月は今宵と秋風ぞ吹く
惜ル月
八五八 いかにせむ夜々今は有明の見果てぬ夢を月に覺つゝ
後京極攝政の家の詩歌合に、月明風又冷
九五九 今はとて衣うつなる秋風を袖に厭ひて月を見るかな
〇六〇 月清み有明の霜の萩の葉に白きを見れば嵐吹くなり
入道前攝政の家の建保五年の歌合に、夜深待ル月
一六一 秋風に更行く星の影さへに心もよほす月を待ちつゝ
故郷紅葉
二六二 故郷の御垣が原のはじ紅葉心と散らせ秋の木がらし
河邊擣衣
三六三 霜さゆる河邊の里にうつ衣千度八千度聲ぞあらそふ
貞永元年の同じ家の歌合に、月下鹿
四六四 秋の夜の月や枕も山の端に紅葉しぬとや鹿は鳴らむ
風前擣衣
五六五 長き夜の伊駒おろしや寒からむ衣の里に衣うつ也
六六六 同じ頃又同じ家の歌合に、名所月
光そふ木の間の月におどろけば秋も半のさやの中山

六七 宮城野の眞萩が上の白露を玉にしきても宿す月かな
六八 龍田河紅葉はまだき波の上に水の秋知ル月ぞさやけき
前内大臣の家の會に、野宿月
六九 秋風に野原の薄折りかけて庵ありがほに月を見る哉
同じ家の名所の秋の歌に
七〇 初瀬山ゆつきが下に鳴く鹿の妻もかくさず照す月影
一七一 恨みわび袖ばかりにや曇りけむ姨捨山の秋の夜の月
二七二 宮城野の野守が庵にうつ衣萩が花すり露やぞむらむ
三七三 初霜もなれもおきねて冴る夜に里の名殘をうつ衣哉
四七四 秋風に波より出でゝ澄む月を雲なき空に吹上のはま
五七五 山川やいはほの杜のもみぢ葉や風よりさきも懸る柵
同じ家の會に、秋曉里
六七六 有明の月の光に鳥の音もえやはしのぶの里の秋かせ
同じ家の歌合に、曉月
七七七 吹け嵐雲の衣のきぬ〴〵は月にをしまぬ明方のそら
前參議信成卿の北野の會、秋見ル月
八七八 詠むれば千々に物思ふ月ぞとも近き昔の秋よりぞ知る
前中納言定家卿被レ乞㆑事侍りし時、立田山秋
九七九 秋に敢ず色附初し立田山今は時雨の染めぬ日ぞなき
春日山秋
八〇 春日山朝ぬる雲の跡もなく暮れば澄る秋の夜の月
八一 建保五年定家卿金峰山にて會し侍りしに、旅宿秋月
八二 宿れ月すゞのかり庵の旅枕風より外に人し訪はねば
深山曉霧
一八三 秋は猶思ひつきせぬ山なれば霧ふかゝらぬ曉ぞなき
二八四 住吉の社の歌合に、月照レ松
照りまさる月の桂に住吉の松もや秋の色を知るらむ
秋山月
三八五 時しあれば西吹く風に雲はれて月を迎ふる淡路島山
野徑月
四八六 月は猶とほ里小野にさきだちて行く方慕ふ有明の空
前但馬守家長の日吉の社の會に、獨對レ月
五八七 いねがてに夜な〳〵月ぞ待出る下葉移ろふ秋萩の頃
秋の歌とて
六八八 飛鳥川あすの紅葉のいかならむ今日だに薫る水の色哉
七八九 風吹けば秋の池邊に立つ波のそがひに散く白菊の花
八八〇 紅葉散る木の間を出る山の端の月より上に渡る秋風
九八一 露霜に移ろふ菊の散らすとて枝吹き折る〻庭の秋風
〇九二 有明の月はま垣に映ろひて枕に菊のころも擣つなり

一谷風に山下とよみ鳴く鹿の聲もたまらず散る紅葉哉
二九三 見渡せば散らぬ紅葉もうづみ晴時雨はれゆく峰の梯
三九四 折で吹く下葉の紅葉ぐる也もる山人の庵も堪らず
四九五 秋は今四方の木の葉の木枯に雁の翅も時雨ふるらし
五九六 消えかへり物ぞかなしき蚕きくの墻ねの秋の夕しも
六九七 西のその千代へてのちや紫の雲とも見えむ白菊の花
七九八 宮城野の野守が庵にうつ衣萩が花すり露やぞむらむ
八九九 夕附日筑波の山の下紅葉いづくを分けて影のもる鷺
九〇〇 しぐれゆく交野の原の紅葉ばに賴む影なく吹く嵐哉
〇〇一 霧晴る紅葉に紛ふ山本のあけのそば舟焦れてぞ行く
一〇〇二 さす棹の雫も色は變りけり紅葉に落つる宇治の川長
二〇〇三 山賤の夜の間の風やこりぬらむ明果てぬれど衣打也
三〇〇四 玉島や落ちくる鮎の川柳した葉うち散り秋風ぞ吹く
四〇〇五 山風にはつ霜かけて白妙の衣しでうつしつしの神人
菊の歌とて
五〇〇六 冴え渡る光を霜にまがへてや月にうつろふ白菊の花
紅葉の歌とて
六〇〇七 長月の時雨ふるらしなら山の兒の手柏も色附にけり
七〇〇八 秋かけてもみぢ葉流る立田川かは霧挑へ山嵐のかせ
八〇〇九 龍田山雨露しもの染めのこす松も紅葉の句ひぞなる
九〇一〇 木枯の吹きそめしより立田姫紅葉の錦おり亂りつゝ
遠き所にて俊賴朝臣の影供の御會に、紅葉
一〇一一 鈴鹿山紅葉せよとて神代より秋の時雨や降始めけむ
擣衣
一一一二 移りゆく月みる程に衣うつ頃にも秋のなりにける哉
九月盡
二一一三 いかにせむ今一夜だに長月の日數も待で秋の暮ぬる
月輪殿の會に、紅葉
三一一四 露のぬきよはの山風此頃は龍田の錦こゝろして吹け
八幡の三首の會に、水鄉月
四一一五 交野わけ月にぞ見ゆる天の河をちかた人の心舟さは
暮紅葉
五一一六 いかにして千入の色を契けむ夕日迎ふる峰の紅葉ば
冬部
古今の一句をこめて冬の歌よみ侍りしに
六一一七 冬くれば移ろひ殘る八重菊を九かさねに霜や置らむ
七一一八 冬くればしぐる〻空の村雲に月の姿の見え隱れする
冬の歌とて

八冬きても秋の枯葉に露ぞおくしぐるゝ空の雁の涙に
九木枯や今は時雨の神無月頼む影なき四方のもみぢ葉
〇神無月末野の草葉枯れはてゝ時雨にまじり霰ふる也
一一染兼ねて時雨もいまは杉の葉を事あり顔に吹く嵐哉
二二時雨ゆく末野の山の木の葉まで遠方人の袖や濡るゝ覽
三首の歌よみ侍りけるに、時雨
二三明ぬればくるゝはやすく時雨れと猶恨しき神無月哉
二四吹き殘す松さへ枝もやすからず嵐の山に散る紅葉哉
冬月
二五霜凍る枯野の草葉片敷きて月もかりねの床やきゆらむ
冬の歌あまた詠み侍りけるに、朝時雨
二六爪木こる賤の衣のあさしぐれほすもや寒き冬の山里
竹上霜
二七葛城や豐浦の寺の竹のはに凍れる霜は閉る日もなし
夜千鳥
二八浦風に涙やこほる小夜千鳥わたる雲路に霰降るなり
冬里雪
二九月影は同じ詠めに明けはてゝ猶里わかぬ四方の白雪
湖邊氷
三〇打とけてぬるも堅田の浦かぜに波の枕も氷しにけり
歲暮鳥
三一飛ぶ鳥のあすかの里も年くれぬ明けば宿とへ谷の鶯
元久元年仙洞の春日社の歌合、落葉
三二三室山梢の錦たえぬらし立田の川をうづむもみぢ葉
同じ年北野宮の歌合に、時雨
三三此程は木葉も知らぬ槙の屋に霜を隔てゝとふ時雨哉
建暦二年仙洞の二十首の歌奉りし中、冬の歌
三四神無月いまは時雨もしがらきの外山の嵐雲さそふ也
三五白妙のゆふつけ鳥も思ひわび鳴くや立田の山の初霜
三六思遣る常世の霜の狹筵にたれ雁がねの秋を添ふらむ
三七龍田川もみぢ葉とづる薄氷渡らじそれも中や絶なむ
三八しぐれつる宵の村雲さえ返り更けゆく風に霰ふる也
三九草の原もとより跡はなけれ共猶あらましの庭の白雪
四〇故郷も槙の戸白し三吉野の雪にいざよふ山の端の月
四一明ぬとや浦の家鳥鳴く衞まだ天の戸は月ぞさしける
四二長き夜をおくりもやらぬ片敷の袖に數かく鷲の聲々
四三詠めつゝ年もうつりぬ徒に我が身世にふる雪の光に
建保元年仙洞の御會に、冬月
四四水無瀨山松にすむ鶴幾千代か霜の上毛に月を重ねむ
四五晴曇り更けゆく月の山のはに幾度しぐれ廻り逢らむ
四六三吉野の草木は雪に埋もれて冬ごもりせぬ故郷の月
四七末の松上こす波の木の間より光ぞこほる冬の夜の月
四八年くれし霜夜の月もます鏡みるかげつらき有明の空
遠き所にて十首の歌合侍りしに、時雨
四九かく計定めなき世に年ふりて身さへしぐるゝ神無月哉
同じ頃後賴朝臣の影供の御會に、時雨
五〇寢覺して又誰が里に槙の屋に過ぐる時雨の哀さ覽
落葉
五一立田川渡る紅葉の瀨だえより暫し見えゆく水の白波
冬月
五二しもとゆふ葛城山にかげさえて月も氷を猶結ぶなり
建暦二年內裏の御會、行路夜凍
五三月もよし氷路分けたかしまのこの川上に宿は尋ねむ
建保三年內裏の歌合に、冬の歌
五四朝ぼらけ佐保の川霧冬かけて鳴くや千鳥の猶迷ふ覽
五五草の原かれにし人は音もせであらぬ外山の松の雪折
後京極攝政の家の歌合に、寒樹変v松
五六あらはれし梢の色は霜がれて松にしぐるゝ風の音哉
池水半氷
五七返そめてまだ閉ぢはてぬ池水の凍れる程に殘る波哉
山家夜霜
五八庵疎き夢路も袖に通ふなり霜ふる山のよはのさゝ原
關路雪朝
五九足柄の關路遙に越えてこそ雪の朝は見るべかりけれ
水鳥知v主
六〇哀なる我が故郷をきて見れば忘れず馴るゝ池の鴛鳥
旅泊千鳥
六一故郷を思ひあかしの波まくら袖の氷に千鳥鳴くなり
暮中晩嵐
六二木間より靡く夕日の程もなし嵐にふやくさやの中山
湖上冬月
六三志賀の浦や遠ざかりゆく波間より凍て出る有明の月
蘆邊懷舊
六四誰となく馴れしまとゐの面影も昔にのこる宿の埋火
同じ家の御會に、深草里冬
六五住みたえぬ鶉の床も荒にけり枯野となれる深草の里
正治二年士御門內大臣の家の影供の歌合に、曉

尋二千鳥一
六六尋てもいかに聞かまし小夜衣加茂の河原の有明の聲
山家如v春
六七埋火も知られぬ雪の花散りて人めばかりや冬の山里
海邊歲暮
六八あら玉の年も暮れぬる末の松波の下にや春の一しほ
建保四年內裏の歌合に、寒山月
六九簸ふり山吹き荒す木がらしに月影ならすなびく白玉
遠村雪
七〇嵐吹く遠山もとの村がしは誰が軒端より雪拂ふらむ
同じき五年又內裏の歌合に、冬山霜
七一鵲の渡すやいづこ夕霜の雲居にしろき峰のかけはし
冬野霰
七二矢田の野に霰ふりきぬ有乳山嵐も寒く色かはるまで
冬關月
七三冴え昇る須磨の浦わの冬の月今朝は藻汐の煙だに無し
冬河風
七四立田がは木のはの後の柵も風のかけたる氷なりけり
冬海雪
七五渡の原八十島しろく降る雪の天ぎる波にまがふ釣舟
承久元年內裏の歌合に、冬夜月
七六み空ゆく月より北の谷風に人に知られで霰降るなり
杜間雪
七七冬枯は木の葉へだてゝ降る雪に杜の社は埋れにけり
三宮の十五首の歌の中に、冬の歌
七八月渡る霜夜のかりも白妙に翅ならぶるかさゝぎの橋
七九高島やみほの杣山あと絶えて氷も雪もふかき冬かな
前內大臣の家の歌合に、行路寒月
八〇旅衣しもきる月の寒き夜に道のべしばや宿暫しかせ
故山時雨
八一神無月幾香の山の薄紅葉時雨の雨はやますともなし
野徑嵐夕
八二今日は又まのゝ萱原わけくらし都に遠き嵐ふくなり
水鄉夜雪
八三夜を重ねしほつ菅原雪積り山こそ駒の跡や絕えぬる
同じ家の會に、冬朝橋
八四朝な〳〵葉分のみくさ霜枯て顯はれ渡るまのゝ板橋
前但馬守家長の日吉の會に、嵐聲夢
八五嵐吹くやとせの枕年暮れて涙も夢もとまらざりけり

湖邊氷

八こほりゆく志賀津の汀改めて元の磯邊をたとる舟人

竹間雪

七神がきやおまへの竹に山風のたゆめば積る庭の白雪

前參議信成卿の日吉の社の會に、湖邊冬

八思出づる人の袖もや凍るらむ同じ御幸の今道

旅宿冬

九都とて夢みるよはは難けれと岩根かたしく冬の山風

社頭冬

〇九良とはとをの壑もかぞへ知れ今年も冬の半過ぎぬと

正治二年仙洞の十題の歌合、曉雪

一九鐘の音に今や明けぬと眺むればなほ雪深し嶺の白雲

水鳥

二九出でくる衣手寒き河風に思ひかねたる鴛の聲かな

庚申の夜同じ御會、冬夕

三九今はとて塒たづねて飛ぶ鳥のあすかの里も迷ふ白雪

遠き所にて後頼朝臣の影供侍りしに、山家雪

四九尋ね來て憂世隔つる松風も見えずなりゆく峰の雪哉

曉千鳥

五九猶頼め水無瀬川原に鳴く千鳥有明の月も返りすみ見

暮鷹狩

六九雉子なく交野の冬のみ鷹狩今日も幾より合せ暮しつ

同じ頃同じ影供の御會、深山霰

七九奥山の柴の庵もいつ迄かふるや霰のよにももられむ

朝炭竈

八九大原やまきの炭竈よをすくに是も朝げの煙なりけり

或る所にて、野亭時雨

九九はし鷹の野守の鏡かき曇り時雨は降りぬ宿暫しかせ

古江寒草

〇〇冬來ぬと宛ら色は草かれて入江のたづも霜恨むなり

閑庭冬月

一〇詠めゆく庭の月かげ徒に急がでつもる年や暮れなむ

旅山雪深

二〇吹雪する越の大山越え惱み日影も見えず暮るく空哉

冬の歌とて

三〇世をへては浮寢の床の荒まくに鴛ぞ鳴なる池の氷に

四〇三吉野の嶺の下葉の枯しより外山もみ雪降ぬ日ぞなき

五〇さしのぼる越のしらねの冬の月雪は氷の鏡なりけり

六〇瀧つ瀬や四方の山河音絶て松に流るく風ぞせかれぬ

七〇霜冴る竹の葉寒く吹く風に夜な〳〵閨の夢ぞ絶行く

八〇月さえて夕霜凍る篠の葉に霰降るなりさらしなの山

九〇雪附けし古き霜夜のさよ衾身を宇治橋の跡や戀らむ

一〇降り積る松の白雪夜を重ね嶺ゆく鹿の跡やたゆらむ

一一誰が髪をあけば筥の葉亂れつく捕頭の玉と霰散る覽

一二霜白き神の鳥居の朝がらす鳴く音さびしき冬の山本

一三雪深き山のなかゆく貴船河さすがに殘る瀧々の岩波

一四吉野山松の白き雪の上に落ちてさやけき有明の月

一五年をふる濱松がえのいたづらに塒も知らぬ夕千鳥哉

一六荒くらし濱夕風のいやはやに立添ふ波は千鳥なく也

一七渡つ海の玉藻の上に降雪は頓て消行く泡かとぞ見る

一八霜さゆる汀の朽葉ふみしだき山下海に千鳥なくなり

一九土佐の海にみ舟浮べて遊ぶらし都の冬は風ぞ長閑き

古今の一句をこめて冬の歌よみ侍りしに

二〇山里をとへかし人の草の葉に霰亂れて霜こほる夜を

二一長き夜に殿居もる身や臥侘ぶる御垣の竹に雪積る也

二二行通ふ舟だに見えず沖つ波あれのみまさる冬の潮風

二三かへる山いつとはつげよ白雪の道行ぶりの越の旅人

氷の歌よみ侍りける中に

二四郭公こゑ待ちわびし神なびのもりの雫も氷しにけり

二五東路や伏見のわたりいかならむ都の川も凍らねはなし

雪の歌の中に

二六富士のねや外山も今は搔昏し天ぎる雪の降ぬ日は無

二七高砂の松の嶋やをれぬらむ雪の夜つるの浦に鳴く也

二八霜枯の芦べおしなみ降雪のえに埋もるあちの村鳥

後京極攝政の家の詩歌合に、雪中松樹低

二九聞なれし嵐の音はうづもれて雪にぞなびく嶺の松原

三〇庭の面にたへぬしづえの松のはも今は綠の雪の下草

入道前攝政の家の貞永元年の歌合、暮山雪

三一友と見し松さへ見えず埋もれぬ軒端の山の雪の夕暮

經房卿の家の歌合に、深雪

三二埋もれて梢に變る深山ぢにまだ跡たえぬ雪の夕ぐれ

前内大臣の家の會に、雪中燈

三三長き夜の老の寢覺ぞあはれなる雪の下なる窓の燈火

同じ家の會に、河邊雪

三四ならしこし影とも見えず柳原たつた河原の雪の夕風

又同じ頃家の會に、冬梅雪

三五東路や十綱の橋も打はへて幾重の雪の下に朽つらむ

山寺雪

三六雪つもる嶺の山寺道たえて軒ばの梅もとつ葉もなし

前參議信成卿の北野の會に、冬望雪

三七年もへぬいかに待ちみる宿なれや雪の夕の杉の山本

仁和寺法親王の會に、曉雪

三八夕月夜吉野の里に降る雪のつもりて殘る有明のかげ

前但馬守家長の日吉の會に、庭雪積

三九川ごとや飛鳥の里の庭もせに今日社雪の淵と成けれ

或る所の會に、冬山月

四〇いとまなき大宮人の年くれて獨まち出る山の端の月

住吉にて隆祐會し侍りしに、冬河曉

四一里近く汀のこほり音すなりかはたれ時を誰渡るらむ

入道前攝政の家の舍利講の次でに歲暮を

四二年くれて唯ゆく道を辿る哉深きやよひの夢の形見に

冬の歌とて

四三春近き壙ねの梅はにほへども霞へだてぬ峯の夜の月

四四限りなく行きかふ年の通路や霜に朽ちせぬ鶴のはし

四五雪ふりて今年も今日に初瀬山嵐のかねの夕暮のそら

四六老ぬれば身に取留むる年月の今幾夜をか明し暮さむ

壬二集下

戀　祝　旅　雜　釋教　神祇

戀部

戀の歌あまた詠み侍りし時

四七難波なるみつとも人は白波の知じな君に懸くる心を

四八はるく夜の星の光の數々におもふ心の空にまがへむ

四九忍びても我袖ひめや姫百合の知られぬ草の下の白露

五〇忍び侘び嵓の中を尋ぬらむそれも思のある世也けり

五一春もなほこほる汀の若草のまだ波なれぬ人ぞ戀しき

五二この程はぬし定めてぞながめつる思つげこせ山郭公

五三我が袖は仄に人を水莖の岡の木の葉の乾く間ぞなき

五四垂乳根のおやまの嶺の姫小松遙に君を頼めつるかな

五五足引の山の陰野に臥鹿のしかすがにやは忍果つべき

今はははや中の思を岩藻蹈前出づる春の色に見すらむ
世中に有なば人に見えぬべし逆もみやる方ぞ知れぬ
奥の海やえぞが岩屋の煙だに思へば胸く風は吹らむ
よそに聞うるまの島の煩さくば云だに放て思絶なむ
暁のかねて物うき嵐かな月もしも夜の道のさいはら
今暫し明すもあらなむこひ〳〵て相坂山の峯の横雲
いつの間に年月の如思ふ覺逢ふは一夜の今朝の別を
寝ては又おきつの濱も白波の曉かけてたづぞ鳴なる
千早振ふるの神杉杉の戸を明てもつらき朝ぼらけ哉
誰もこの年に積なる哀もて行末とほく何たのむらむ
道つ人かりぢの袖の蒿蒲草中々絶えねこひも頼まじ
天の河願めぬ中の逢ふともぬる夜少き年ぞへにける
寝ては又おきつの濱も白波の曉かけてたづぞ鳴なる
頼まずようつろふ色の秋風にいざ本荒の萩の上の露
紅のあさはの野らの鶏の上に我敷く袖ぞ人な咎めそ
忘れなむ思はかけし神南備の三室の山も色變るなり
我宿の月夜よしとも吹きてゆけ思ふ其方へ通ふ秋風
狭筵や我が敷妙のとことはに待つ夜の月も曉のしも
面影よ其をかごとに眺てもなべて雲居の秋の夜の月
詠めても恨みぬ袖はいかならむ蜑路の波に明る月影
偕も猶君は知らじな思ふてぶとより外の秋風ぞ吹く
待つ人のこぬ夜雖面き小山田の穂向の風の色も變ず
吹くからに宜山風もしをるなり今は嵐の袖を怨みて
秋風にこぬ人よりも夕霧のくものはたての雁の初聲
頼むべき夢路は絶えて思遣るさかひ遥に秋風ぞ吹く
頼みつる神の忌垣に道ふ蔦のつら色なる秋風ぞ吹く
忘れゆく深き思も秋風の吹きにし日より物ぞ悲しき
里は荒て人は伏見の跡もなし訪べき妻も秋風ぞ吹く
稀もなく移ろふ色を月草の露のよすがに何頼むらむ
移はむ人の心も時しあればまつしうたて下紅葉つゝ
白露の森の下草秋かけてうらがれ初むる人ぞ戀しき
おのづから菊の垣ねのよるの霜結ぶ契も下ぞ移ろふ
冬草の枯行く人ぞ思ほゆる野中の清水ぬるよ無れば
年をへて我が黒髪もかはるなり人の手枕ふれる白雪
奥山の木葉にふれる白雪の消ぬとだにも知人もがな
あし鴨の翅にならす白妙の波のかけても戀ぬ日ぞなき
鴛の海の鴛の浮波よる〳〵はあだにも君を契やはせし
誹ひをすくもたく火の下にのみ焦れても猶恨つる哉
泣涙よな〳〵積る床の海のもにすむ蟲や我身なる覽
唐土も近く見しよの夢絶えて空しき床におきつ白波
渡の原八十島かけて立つ波のおほくも物を思ふ頃哉
海松め刈りこむよの蜑と契る共あはでの濱は見や無らむ
伊勢の海の蜑のまてかたまで暫し恨に波の露はなく共
大よどの松も昔の夕暮にうらみし波の聲ぞかはらぬ
跡たえて今はこぬみの濱椒幾世の波の下に朽ちなむ
今は唯寄ぞ頼む渡つ海の蜑の捨舟かひはなけれど
よそながら聞きても告げよ鳴神の高間の山の嶺の風
なる神の音羽の山のみねの雲遥に人のなりも行く哉
戀侘びぬ今はた同じ靡沼の初瀬の山の雲と消えなむ
思川たえぬみなわの澪返り流れてもなほ世を頼む哉
心から我が身こす波立返り恨みてぞふる八重の潮風
さりともと待ちこし物を新玉の年の三年の冬の夕暮
誰か世に難面き種を蒔もくの檜原の山の色も變らず
發のすむ里の知べに立つ煙こと浦風にたれ靡くらむ
只管に絶えや果なむ水無瀬川むもりて行水袖にせく共
片糸のよるかの池の根芹のねね夜は波の下ぞ苦しき
有明の月の影のみ借りつゝ止る岩根の飛鳥井も無し
海山と知らぬ別の行方知れ月もあらしも心さそはゞ
たづの鳴く蘆の迷ひの浮波に幾夜悲しき月をみる覽
かひも有じ哀れ命の有し世にあはでと計思出づとも
あすはとも契もおかぬたをや女の袖吹風の聲ぞ恨る
かゝりける身をうつたへに空蟬の思物から頼つる哉
いかにせむたゞ思ひねに鳥玉の夢の枕にさむる面影
自から見えては消る夢の内に契りしとや猶殘りけむ
人心情け有りける昔だにあらばや今は世をも頼まじ
月草の移ろふ袖も朽ちぬべしぬれて影見ぬ戀の涙に
來ぬ人をしのぶ涙の玉簾あけてかひなき月ぞ移ろふ

古今の一句をこめて戀の歌よみ侍りし時

紅の涙をなにゝまがへまし秋の時雨に袖をかさずば

待侘びぬ身も惜からず同くば逢にしかへば秋の夕暮

幾代ふと吉野の川の澤標我身はたてじ打ちは果つ共

そへにとて頼めし暮もとに斯に幾夜過行月日なる覽

等閑の人の契の夕暮に出でゝ入りぬる月もうらめし

ひつ事もまだ月影の山の端に殘りおほかる東雲の空

徒に朽ちやはてなむ戀衣たれおれとも云人もなし

思ひやる方も方こそ有明の月に別れの道しるべせよ

人心盡ぶれにくき世也けり唯あらましのなき名計に

よしさらば雲だに隱せ徒に我が身淺間のむなし煙は

逢ひみまくほしぞ煩ふ戀衣袖の涙をたてぬきにして

如何して摘知すべき森籠立ぬる野べの若菜ならでは

何とはや契りし人は靡沼の下より生る草の名ぞうき

我が戀は末さへよりこ白絲のよなる節に亂れそし共

逢坂はまた越見ねばつれもなき人の心ぞ關しまさしき

忍戀といふことを

暫しだに行て紛へむ袖の浦朝みつ潮のひる間待つ程

陸奥のしのぶもぢ摺摺つ衣音には立てじ下に亂ると

忍ぶれど涙の玉の緒を弱み亂れやしなむ人の知る迄

いかにして忍習はむ程だにも物や思と人にとはれじ

不レ逢戀の心を

住吉の濱松がねの下はへて難面き人を戀ぬ日ぞなき

心からいむべき月を詠めつゝ哀幾代の空にこふらむ

人をのみ海に出たる涙川偕もよる〳〵みるめやはある

涙川身さへ流れむ時にこそつれなき方に寄べ靡ねめ

我戀はしかのあま人やく汐の一日もおちず立つ煙哉

我が戀し幣や歸らむ千早振神に侍りし君にあはずば

後朝戀の心を

別れても猶うき物は東雲のさゝ分くる袖に殘る月影

休らひに雪さへ積る歸さの有明の月に道遥ひつゝ

朝霜のおきて侘しき別路にしばしはたゆめ鴫の羽掻

逢不レ逢心を

菅原やふしみもよその故郷に又たえはつる夢の通路

逢ふことの嬉しかりしは昔にて今は涙ぞ袖に餘れる

立返り逢て此世を杉の戸のたて乍りのみ朽や果なむ

あだにのみ人は枯行く我宿に難面く見ゆる庭の松哉

怨戀といふことを

祈るとも人の秋にはいかならむ神の忌垣の蔦の夕風

いかにせむ唯其儘の朝ぼらけ暮るゝ物とも何頼けむ

思へ唯恨に堪ぬ海士だにも汲めば漲沙の袖は濡る也

心から思へば人もとばかりに打嘆きても過ぐる頃哉

戀の歌よみ侍りし中に、寄レ霧戀

夕暮の雌の萩の上におく霧のかごとの亂れてぞ思ふ

寄レ枕戀

おのづから枕の上に見し夢も今は涙の下にたえつゝ

冬戀といふことを

長き夜の雪の朝の嘯つ鳥己が亂れ尾の誰を待つらむ

一六冬來ても尾花がもとの草は猶枯でや人の思ひ知る覽
遠き所にて後朝朝臣の影供侍りしに、忍戀
二六恨侘びしのぶの衣返しても夢計だにとはれても見む
後朝戀
三六秋草におく白露の消え返り行きもやられぬ東雲の道
不レ會戀
四六藻潮くむ蜑だに住まぬ都にもあはぬ恨の袖は濡れ鬼
寄レ露戀
五六色かはる袖も草葉もおく露のあまり戀しき夕暮の空
歲暮戀
六六世の常の戀には非ず君が代の春に逢べき身を急ぐ哉
建仁元年仙洞にて影供の歌合侍りしに、忍戀
七六思ひかね打眺むれば夕暮の軒のしのぶに春雨ぞ降る
同じ二年影供の歌合に、逢不レ逢戀
八六忘じの行末變る今日迄もあればあふ世に猶賴みつゝ
水無瀨にて戀の十五首の歌合に、春戀
九六恨みても心づからの思ひかな移ろふ花に春の夕ぐれ
夏戀
一〇七時ぞとやよはの鐘を聽むらむとへかし人の下の思を
秋戀
一一七思ひいづる身は深草の秋のつゆ賴めし末や木枯の風
冬戀
一二七戀をのみすがの根凌ぎ降雪の消だに遣ず山もしみらに
曉戀
一三七忘れずよ今はの心つくばねの嶺のあらしに有明の月
暮戀
一四七今はたゞ待たれし空の夕まぐれ曇る計ぞ形見也ける
羇中戀
一五七篠原や知らぬ野中のかり枕まつもひとりの秋風の聲
山家戀
一六七忘らるゝ人めはいつも枯に鳧れ山里の冬と待つ覽
故郷戀
一七七さゞ波や志賀の古里變返り忘れがたみの袖濡すらむ
旅泊戀
一八七うき枕なみに波しく袖の上に月ぞ重なる馴れし面影
關路戀
一九七忘らるゝうき名もすゝげ清見潟關の岩こす波の月影
海邊戀

二〇八潮汐霊干間も波をわくらばにとへ共待じ須磨の浦風
河邊戀
二一八千鳥なく川邊のちはら風冴てあはでぞ歸る有明の月
寄レ雨戀
二二八侘つゝも打やはねぬる宵の雨に頓て更行く鐘の音哉
寄レ風戀
二三八いかにせむ身は譬はしの物とても軒ばの松に秋風ぞ吹
元久元年仙洞にて北野宮の歌合に、忍戀
二四八谷川のこほるにつけて忍山なほうき物は松の夕かせ
建永元年同じく仙洞の御歌合に、深山戀
二五八偖も猶訪はれぬ秋のゆふは山雲吹く風も嶺に見ゆ覽
庚申の夜同じく仙洞の御會に、久戀
二六八思兼ね積ればおふる月を見て難面き人に年はへに鳧
又仙洞の御歌合に、被レ忘戀
二七八知られじな同じ袖には通ふとも誰が夕暮と賴む秋風
同じく仙洞にて住吉の社の歌合に、寄レ旅戀
二八八形見とて夢は都に留めねどねられで明ぬうつの山風
承元四年の栗田宮の歌合に、寄レ月戀
二九八忘れぬる契りし月の袖の上に濡るゝがほなる人の俤
建暦二年仙洞にて二十首の歌詠み侍りしに、戀
の五首
三〇九山川に風のかけたる柵の色に出でゝも濡るゝ袖かな
一九有乳山やた野のあさぢ色づきぬ人の心のみねの淡雪
二〇東路のさのゝ舟橋さのみやはつらき心を懸て賴まむ
三〇池にすむおし明方の空の月袖の氷になく〳〵ぞみる
四〇いかにせむ賤の苧環馴れ〳〵て今は間遠の麻の狹衣
遠き所にて十首の御歌合に、忍戀
三一九忍び音も聲立てつべし枕より跡より戀の攻て憂き頃
久戀
三二九戀ひをかは難面き中に行水は年もせかれぬ涙也けり
建暦三年內裏の歌合に、旅宿戀
三三九逢事はたゆひの浦の旅枕こがれそ明よはの藻汐火
同じ頃內裏の御會に、寄レ風戀
三四九我が戀はあふ賴みなき小山田の身の徒に秋風ぞ吹く
寄レ雨戀
三五九忘れぬや契りしものを石上ふるとも雨の夕暮のそら
寄レ草戀
三六九忘れじの心の色や秋風のふきと吹きぬる武藏野の原
建保二年同じ內裏の御會に、曉增戀
一〇晩の床はしほせの思ひ草人をみらくの夢もすくなし
同じ年同じ內裏の御歌合に、秋戀
二〇長してふ秋の夜の間も徒に行きては來ぬる夢の通路
同じき三年又內裏の御歌合に、戀
三〇知らざりき袖に流るゝ涙川浮て思のかゝりける世を
四〇白露の曉ごとにくだかけの碎けてぞなくあかぬ恨に
同じき四年又內裏の御歌合に、羇旅
五〇人心荒磯波に折りかねてよそにや寢なむ伊勢の濱荻
同じき五年內裏の御歌合に、冬夜戀
六〇待つ人の庭の木葉も衣手も枯て朽行く夜な〳〵の夢
或る所の會に、寄レ松戀
七〇胸にたく松の煙も長き夜の涙に消えぬ袖もこほりぬ
三宮の十五首の會に、戀
八〇しらすべき煙も雲にうづもれぬ淺間の嶽の夕暮の空
九〇思川みを早乍ら水の泡の消ても逢はむ波の間もがな
一〇もろこしも千賀の浦わの夜の夢思はぬ中に遠つ舟人
後京極攝政の家の會に、浮田杜戀を
一一朽ちはつる袖の例となりぬとや人を浮田の森の注繩
同じ家の歌合に、契二歲暮一戀
一二賴じまも心ぼそきは新玉の年くれがたの有明のそら
又同じ家の御會に三島江戀を
一三水龜に思ふも苦し三島江に蔕ても芦のねにや戀まし
入道前攝政の家の歌合に、行路見戀
一四知られじな信夫の衣ゆき摺の一め計に亂れ侘ぶとも
山家夕戀
一五訪はれむと差ではすます松の門見果む爲の秋の夕暮
同じ家の歌合に、寄レ鳥戀
一六歸るさの涙せき敢ぬ相坂に曉ど明添ふ鳥の音ぞうき
同じ家の十首の歌合に、寄レ衣戀
一七いかにして行て亂れむ陸奥の思ひ忍ぶの頃もへに鳧
寄レ枕戀
一八好さらば逢瀨に見えよ名取川つげの枕のよゝの埋木
寄レ帶戀
一九絕逢はむ契も知らぬ常陸帶のひた道にのみ戀や渡らむ
寄レ鏡戀
二〇朝々手に取りも見ず增鏡忘らるゝ身の影し憂ければ
同じ頃又彼の御會に、不二尋待一戀

二その原や行ては迷ふ帚木のよそめ計の知べだになし
　二品法親王の家の會に、忍戀
二まがへとや室の八島の夕煙きりたつ程も見えぬ思に
　前内大臣の家の會に、寄海戀
三いかにせむ千尋の底の岩の上に生ふるみるめは蜑ぞ刈藻
　同じ家の會に、暁樹戀
四今日計待ち見むとても月日へぬ軒端の杉の夕暮の空
　夜河戀
五涙川袖に流るゝ水の泡のよるこそ增れ消かへりつゝ
　又同じ家の歌合に、秋戀
六いせを潟煙も波もつらからず其にも秋の色し見えねば
　又同じ家の會に、暮山戀
七下むせぶ松のけぶりの夕暮に思ひなかへそ嶺の木枯
　五首の歌同じ家に講せられし時、寄江戀
八戀をのみ須磨の入江に棲魚の浮沈ても味氣なの世や
　又同じ家の歌合に、名所冬戀
九我戀を何にたとへむ譬ふべき室の八島に煙たえつゝ
　同じ頃又十首の歌の會侍りしに、尋暮戀
一〇聞くもうし人の言のは偽のある世も知らぬ入相の鐘
　深夜戀
一一殘る夜も更行く程は有物を暫し打寢て見る夢もがな
　前中納言定家卿の會に、寄花戀
一二あだ人の心の花もこきませて櫻移ろふ春ぞかなしき
　前參議信成卿の北野の宮の會に、始契戀
一三等閑の今日より後のつらからば契計に身をや尋てむ
　或る所にて住吉の會侍りしに、寄木戀
一四つれもなき岩木の峰の岩躑躅折て隔つる山人もがな
　家長朝臣の日吉の會に、旅夕戀
一五此山は夕露深きゝの葉の都もよそに亂れてぞ思ふ
　住吉にて隆祐會し侍りしに、寄草戀
一六知られじなみ山隱れの花薄下ゆふ紐の解る夜もなし
　戀の歌あまた詠み侍りしに
一七忘るなよ今は心のかはるとも馴れし其夜の有明の月
一八荒屋の下たく人も戀侘びぬさらば淺間の煙とも立て
一九いかにせむ臥猪も知ぬ波の上も蜑の刈藻に猶亂つゝ
二〇是も又いかなる身にか契けむ包む螢も袖にうきぬる
二一吉野川いはと柏の己れのみつれなき色も波は懸け鳧
二二大方のあくる待間も定なき玉の緒弱み戀つゝぞふる
二三有明の月のかげのみ定かなる夢だに見えぬ曉ぞうき
二四さぬ葛今は絶ゆとや相坂のゆふつけ鳥の繰返しなく
二五契置しちぎの片そぎ空しくは行逢の際の霜と消なむ
二六我が袖よ信太の杜に比ぶともちぐの雫も昔なるらむ
二七我戀を富士の煙に紛ふとも遠近人をいかゞとぐめむ
二八外にすみよそに吹かなむ秋の夜の月も嵐も恨果てき
二九しぐれつゝ嶺の嵐に行く雲のはやくも空に戀渡る哉
三〇深き江に沈む思に比ぶればもえても輕く行く螢かな
三一逢とみし一夜の夢の別より知らぬ命の惜くもある哉
三二忘るなよ遠津の濱の岩躑躅山を越えても又返りみむ
三三知らざりき越の雪原暮果てゝかかにも逢ぬ契有とは
三四淺茅原をのゝしめゆひ契るとも偽人をいかゞ頼まむ
三五袖乍ら今は涙に朽ちなましつげの枕の行方知らせば
三六寤もくのあなしの山の山蔓かけて幾度に人を戀らむ
三七涙川わが水上をたづぬれば人の心のいは木なりけり
三八いは木山嘆きも種は有物を戀をし戀ひば松ならず共
三九木隱れに身は空蟬の思ひわび餘りぬれゆく袖の涙を
四〇たれ人は昔にも聞かじ玉藻絶ゆとも吹くな秋の山風
四一照射する人や知るらむ忍山しのびて通ふおくの思を
四二水を淺み隱れぬ池の鴛鳥も思へば深き身は頼むらむ
四三逢事はいつと定めぬさだの浦の波の幾しほ戀渡る覽
四四君は猶よそにやきかむ月影に我身を戀る例ありとも
四五忘るなよ又歸りこむ東路のさやの中山中たえぬとも
四六千早ぶる神垣山をこえむ日や物思ふ戀の限なるべき
四七山人の手引の葛繰返したのむ爪木のゆふかひもなし
四八しづ環數にも非ぬ玉の緒の亂れて戀ひ絶は果つ共
四九知らせばやさのみ忍の浦にすむ餘り濡行く袖の涙を
五〇片敷の袖にぞ驚ぐあだ人の立ち別れにしまゝの浦波
五一波かづく海士のさ衣袖をのみ怨ありとも何を絞らむ
五二深草や契うらみてすみかはる伏見の里も勢なくなり
五三さりともと新し中の絶しよりあふ事難きくめの岩橋
五四新るともかたしや解けむ人心たにの岩ゆふ葛城の山
五五等閑に思をかけし神南備の杜の注繩朽ちやしぬらむ
五六夢かさは波の直路に行く船の便につけしよはの一聲
五七詠むれば行方もしらぬ大空に思ひ餘りて人ぞ戀しき
五八今はさは同じ名ならぬ戀もがな其とは無ていひ試む
五九忘ればや衛士のたく火もそれ乍ら豐明に見えし面影
六〇あふことは酒の波の立ち別れ行方も知らぬ沖の潮風
六一うつりゆく心の花の露なれや怨むる袖にあまる涙は
六二さゝがにの通ひし道も秋風にかき絶にける夕暮の空
六三眞砂もる吹上の濱の月を見て戀しきことの數ぞ增れる
六四秋の野の丸寢の床の丸小菅いか計ちる露とかは知る
六五常ならず物思ふ頃の長き夜に獨おきゐて月を見る哉
六六いつはとは偽にだに頼おけ逢て年ふる慰めにせむ
六七岩木山こえてこゆみの濱楸久しく成りぬ波に委れて
六八あま衣かたの大島行迷ひあはでこのよや波に委れむ
六九憂は猶孰くを忍ぶ身ぞとだに思ひ知する人傳もがな
七〇好さらば無名も立よ立てすてゝ偖も有べき此世なれば
七一誓あらば祇見むといふ露の身は何に懸べきこのはも無
七二袖の上に移ひすてゝ入る月の契もあだに頼みける哉
七三思ひかね頼むみなわの沸返り流れても猶よを頼む哉
七四魂きはる命に向ふ陽炎の影みるまにも君をしぞ思ふ
七五月草に惹の花を折りそへてかゝる心を怨みつるかな

祝部

元久元年新古今の竟宴に
七六君住めばよする玉藻も碎き出ぬ千代も傳へよわかの浦波
七七春のいはひといふことを
七八友づるの遊ぶ日影もさしながら千年は著き春の空哉
　仙洞にて住吉の歌合に、寄月祝
七九神代より月も幾代の廻逢て猶君が代の千代を待らむ
　正治二年同じく仙洞の御歌合に、庭松
八〇萬代と玉しく庭の松の影春のひかりも長閑にぞさす
　建保二年八月内裏の歌合、秋祝
八一君が代の千年も秋ぞ顯はるゝ四方の時雨に凝る松風
　自二承明門院一被レ召によりて熊野へ詠進する歌
八二春はまだ賴む南の御山より思ひひらけて匂へ梅が香
八三都なで神の惠みも紀の國の年たち返る春にあふまで
八四かけまくも清き心を三熊野の浦の玉藻の光をぞまつ
八五幾千代と君をしとへば小鹽山小松が原に春風ぞふく
　後京極攝政の家の歌合に、春祝
　同じ家の御會に、春日山祝
八六春日山松の梢に出る日のいつとも分ぬ千代の影哉
　洞院攝政の嘉祿二年の會に、庭上竹
八七百千鳥さへづる竹の枝毎に榮ゆるふしもしげき宿哉
　一條前太政大臣の家の會に、春祝
八八年に逢て春加はれる宿の松かつ〳〵著し千代の餘は

前内大臣の家の會に、寄レ水祝
八〇君が代にたな井の清水澄返り契榮えむ時もきにけり
親成の宣禰の七十賀の時
九〇千早振なゝの社の七十に千代をそへてや猶守るらむ
前但馬守家長の日吉の會に、社頭祝
一〇君が代は千年の春に立返りたえず日吉の神ぞ守らむ
古今の一句をこめて歌よみ侍りしに
一時雨つゝ幾秋くとも君がさす御笠の松の色は變らじ
日吉禰宜成茂がもとより二位に叙して侍りし朝
に贈り給ひける
二君が今齢もたかし位山みし世にもあへながき玉の緒
返事
三位山白吉の影をさし添て見し世にあへる長き玉の緒
建保二年二月の頃定家卿參議に被二拜任一之時遣
しはべりし
四臥て思ひ起ても身にや餘る覺今夜の春の袖の狹さは
返事
五嬉してふ誰もなべての言語を今日の我身に如何答へむ
祝言とて
六三笠山さし紛へゆく榊葉にゆふとりしでは祈る神人
七君が代は例もあらじ天地を照す月日の極めなければ
八春日山嶺の松がえ汝をこそ君が千年の挿頭とは見め
九敷島や三輪の檜原も萬代の君が揩頭と折やそめけむ
一〇萬代は君こそ初め古のありきあらずば神や知るらむ
一一君が代は年のを長く引添て鈎する海士も萬代やへむ
一二君が代の程より外に行巡る月日の外は知る人もなし
旅部
仙洞にて北野宮の歌の會のに、羇旅
一三故郷に聞きし嵐のころもにず忘れぬ人をさやの中山
建永元年同じ仙洞の御歌合に、羇中暮
一四人やすむと計り聞きて宿かれば入相の鐘に殘る山風
同じ當座の御歌合に、行路風
一五玉鉾の道の山風吹きかさねはらへばおもる袖の白露
遠き所にて御歌合侍りしに、羇旅
一六をりしかむ隙こそなけれ沖つ風夕立つ波の荒き濱荻
建保二年内裏の御歌合、秋旅
一七草も木もあだなる頃の野山分け契りし都程も遙けし
同じく内裏にて詩歌合侍りしに、羇中眺望
一八唯くれぬ關の戸さゝぬ頃なれば月にもこえむ足柄の山
一九高島やかち野の原に宿とへばとかやは行む遠の白雲
建保五年同じく内裏の歌合に、冬夕旅
二〇冴え暮すさゝやの中山中々に是より冬の奥はまさらじ
後京極攝政の家の詩歌合、羇中眺望
二一顯みる雲居の妻は籬る共燒かばや燒かむ武藏野の原
二二今日は又山のはもなく成に見知らぬ濱路の夕暮の空
同じ家の御會に、清見潟旅
二三清見潟過ぐる日數を數ふれば袖にも波の關はもり見
同じ家の歌合に、秋旅
二四故郷に分れし袖もいかならむ知らぬ旅寢の秋の夕露
入道前攝政の家の歌合に、羇中松風
二五分來つる山はうらちに變れども是も寂しき松の風哉
前内大臣の家の會に、松路暮
二六迷ふべき雲も山路はおくりけり行く方誘ふ松の嵐に
同じ家の會に人々各別題にて詠み侍りしに船を
二七渡りする浦の追風古里に待つ人さそふ舟やよすらむ
又同じ家の歌合に、秋旅
二八日數ゆく露はさながら衣手に正木の山の秋も怨めし
前參議信成卿の北野の會に、旅浦嵐
二九夕嵐うら分け衣吹きはらへもしほの煙袖にたなびく
前内大臣の家の會に、羇旅暁
三〇越やらで宿かる程に暮れに鳧今朝は雲居の遠山の松
古今の一句をこめて歌よみ侍りけるに
三一獨ぬる床は草葉のかり枕いく夜になりぬ武藏野の原
三二東路や横ほりふせる山の名もさやかに見せて晴る白雲
三三わたの原沖つしほ風吹きよする波と共にや歸る舟人
三四別れては程を隔つる唐土のゆきゝ頼まぬ波の通ひぢ
眺望の歌とて
三五松浦舟けふは幾日の波の上にまだめに懸る山端も無
三六眺むれば老の涙も霞みつゝ行方も知らぬ海のはて哉
三七見渡せば夕日ぞかゝる住吉の浦に浮べるあはぢ島山
三八沖つ島それかと見ゆる夕なぎに松の葉焚き出る月影
旅の歌とて
三九東路やまだ明けやらぬ足柄の山々雲を今ぞ分け入る
四〇角田川忘れもすべき夕方の月に有てふ鳥の音もうし
三五明石潟島がくれつゝ行く舟の霧より上に月ぞ殘れる
三六白雲のたなびく山のにしに猶心盡しの月や待つらむ
三七白雲のちゝの衣手立別れ今日や名草の山路こゆらむ
三八山本の入江の舟やくだすらむ月ぞ遙にさし上りぬる
三九渡守わたらぬさきに打隱せ隅田川原の鳥の名もうし
雜部　哀傷述懷等在「此中」
四〇難波潟雲居にみゆる鳴隱れ漕ぎゆく船のよるの浮雲
雜の歌よみける中に
四一三輪の山本の入江の舟やくだすらむ月ぞ遙にさし上りぬる
四二龍田山まだ明けやらぬ横雲に木綿附鳥の埋れて鳴く
四三柴船のみねより落つる小笹原風にもまさる波の音哉
古今の一句をこめて歌よみ侍りけるに
四四暮ぬともいざ越行かむ筑波ねの此面彼面に懸る月影
四五あだなりと名に社立てれ白雲の絶ず懸れる葛城の山
仙洞にて三躰の會はべりしに
長高嶺
四六櫻花ちりかひかすむ久方の雲居にかをる春の山かぜ
夏
四七烏玉の夜は明けぬらし足びきの山郭公ひとこゑの空
有心體
秋
四八虫の音も涙つゆけき夕暮をとふ物とては狹のうは風
冬
四九詠めつゝ幾度袖にくもるらむ時雨にふくる有明の月
幽玄體
繼
五〇見もわらぬ名殘計の夕暮をとあり顏に何詠むらむ
旅
五一旅寢する夢路は許せうつの山關とは聞す守る人もなし
元久元年仙洞にて春日社の歌合に、曉月
五二月も又曇る時なく照しけり春日の山のありあけの空
松風
五三寒日山谷のうもれ木朽ぬらむ君に告げこせ峯の松風
建永元年仙洞にて當座の歌合、暮山雪
五四ながむれば幾重の山と隔てねど夕の雲の色ぞ寂しき
承元四年同じく仙洞の御歌合に、寄レ海朝
五五沖つ波旭いざよふ霧の間に釣する蜑の袖ぞみえ行く
寄レ山暮

七色かはる今や木の葉の上に置くしもと夕の葛城の山
遊き所にて御歌合侍りしに、山家
七寂しさはまだ見ぬ島の山里を思遣るにもすむ心地して
山家の心を
六いつかわれ苔の袂に露置て知ぬ山路の月を見るべき
七谷川の音も枕にさびしきに又吹きおろす嶺のまつ風
八柴の戸も明行く山の峯なれば軒にわかるゝ横雲の空
九父馴て人に折らする爪木こそ猶身を捨ぬ住ひ也ける
一〇麻衣まだ面なれぬ奥山のしきみの花の露にぬれつゝ
一一都人けふは訪やと待たれしも絶て過行く三輪の山本
一二幾夜しも嵐吹くよの山里にいや儚なくも散る木葉哉
一三有とても朽ちぬ例のかひぞなき人も渡らぬ谷の岩橋
一四遥く出る我月影を待程に山のあなたに身を惜みける
一五吉野山奥の岩屋を見ぬ人や雪古里を丘しといふらむ
永久元年内裏にて日吉社の歌合侍りしに、社頭
松風 大宮
一六君が代は山もとどけき松風に神の心や空にゆ〻らむ
潮上眺望 十禅師
一七志賀の浦の白ゆふ花に祈りても數限なき御代の末哉
同じ内裏の歌合に、寄風雜
一八我齢ひ君が八千代を吹く風の契かぞへむわかの浦波
又内裏の歌合に、暮山松
一九高砂の尾上の松の夕時雨斯てふりゆく身をや盡さむ
同じく内裏にて又御歌合侍りしに、秋雜
二〇石上ふるの神杉つゆ落てそのよも知らぬ秋の夕ぐれ
同じく内裏にて六首の御歌合侍りしに、山晩風
二一今日さへや夕こえ兼て岩がねの峰の嵐に許多度寢む
野曉月
二二旅人は今ぞたつ鶏うねの野の有明の月にたづぞ鳴なる
仁和寺法親王の令に、溪雲
二三白雲の衣ほすてふ山賤の垣ほの谷は日かげやはさす
嶺松
二四知る知す松をぞ頼む筑波ねの峰の紅葉はなべて散る頃
庭苔
二五庭の面に苔の柵かけてけり堰入れし水の末弱るまで
窓燈
二六浮世にはそむけもやらぬ燈の何聞き夜の窓敎ふらむ
前内大臣の家の會に 海外山
二七朝なぎの浦の柚山みつ潮に寄する舟人宮木つむらし
同じ家の會に、海海雜
二八淡路島雖波をかけて見渡せば波のいろはの草手也鳧
同じ頃又同じ家の會に、深竹風
二九風ならで訪人もなき友なれや身を隱しすむ谷の呉竹
前參議信成卿の北野の宮の會に、深山夜
三〇雲深き吉野の奥にすむ人の夢にもほゝよをや見る麓
夕述懷
三一世の中の風に聞ゆる一ことにさのみ夕の空頼みする
曉懷舊
三二有明の月に見しよの知べせよ人は心をおきつしま山
建永元年の仙洞の御歌合に、寄風懷舊
三三夢と見し春は昔の秋風に別るゝかりも戀つゝぞなく
雨中無常
三四末の露淺茅がもとを思ふにも我が身一つの秋の村雨
同じ年やがて仙洞に御歌合侍りしに、述懷
三五大方の秋の寢覺の長き夜も君をぞ祈る身を思ふとて
三六和歌の浦や沖つ潮合に浮び出る哀我世の寄べ知せよ
三七その山と契らぬ月も秋風もすゝむる袖に露こぼれ〻
建暦二年又仙洞にて、述懷
三八乳根の身に愁ても年はへぬ子を思末も君の千代迄
三九さゆる夜の袖の涙の色ながら春の旦の空やながめむ
四〇何事を思知るとは無れ共あれば有世の身を任せつゝ
四一いつ馴て宿はととへば答べき岩のはざまの谷の夕暮
四二白真弓破べの山のいつとなく波にぬれぞ引人も無し
仙洞にて住吉社の御歌合に侍りしに、寄山雜
四三徒らに年へぬる身を鏡山くもらぬ御代に哀とも見よ
建保二年内裏の歌合、秋懷
四四過ぎて行く五十の夢の跡もなし心にしめし月の山本
四五情ある此頃の世の數に入りて憂身の果も人や忍ばむ
三宮の十五首の歌合に、秋懷
四六眺くにか身をば宿さむ雁のくる嶺にも晴ぬ思ある頃
後京極攝政の家の御會に、浮田杜述懷
四七名を頼み浮田の杜に祈るとも身を埋木の朽や果なむ
四八月輪殿の會に、無常
四九はかなくも今日の命を頼む哉昨日を過ぎし心習ひに
前但馬守家長の日吉の社の會に、曉述懷
五〇有明のみつの濱松すむ鶴の子を思子の末ぞ久しき
五一八幡の宮の三首の會に、社頭述懷
五二猶頼め民のかまどに絕えず立つ煙も神のこの思ふ末
述懷の歌あまたよみ侍りし時
五三何か殘る君が惠みの絕しより谷の古木の朽も果なで
五四夕暮のながらましかど笹蟬のいとかく計物は思はじ
五五幾年の老のなみだに滿つ潮の旦夕べに身を怨むらむ
五六命かは泊りも知らぬ波の上に浮たる舟の我ぞ悲しき
五七鐘の音も窓うつ雨にほのかにて枕に深き長き夜の闇
五八儚なくも逢の宿に迷ふ哉野にも山にも道はある世に
五九憂ながら心は我に非ねどもとめし月の色は變らず
六〇心から我こもり江の澤標世をは怨みす朽やはてなむ
六一秋の夜の霜をばしもと翁さび我身ふけゆく宿の月影
六二指人の心はくもる末の世に月のみきよき秋の空かな
六三秋の野と成行く庭に飛蝶も音を耐てね物や悲しき
六四よそながら外よりゆかね我宿の月も浮世の道芝の露
六五武士の新島もりも心あらば君に悲しき月や見るらむ
六六世中や思知るらむ足曳の山のまに〳〵月ぞ入りぬる
六七世中に跡忍ぶべき方ぞなき枕よりこそ夢も見えけれ
六八辿りこしおどろの道も衰へて昔の跡の名をや移さむ
六九世の中は草とる民の聲々に聞きもならはぬ曙ぞうき
七〇夏刈の鳥羽田の面は荒果て、民の煙の立つ空ぞなき
七一跡忍ぶ宿は廻に埋もれて閉きしにも似ぬ松風ぞ吹く
七二波間よりも都はたつみ詠めても猶うち山の方や戀むる
七三我はまた人もかはらぬ姿こそ昔をしのぶ餘り也けれ
七四武士の八十宇治川に立つ波のたけき心は哀とぞ聞く
七五六月の神も受ずや成ぬ覽今日の御禊はする人もなし
七六荒き風防ぎし宿もあれはて、月や眞にもり變らむ
七七神無月木の葉も風に騷ぐ也淺ましかりし秋の名殘に
七八荒果て、斯る浮世の宿ぞとも知らでや秋の今日は來ぬ曉
七九然りとて直き心もよに唯に混るよもぎの淺ましのよや
八〇狄の葉に驚なれし秋風も唯今年のみ吹く心もして
八一天の原空にさやけき月日のみ猶頼まる、浮世也けり
八二かきつけば今行末の人やみむかゝる例も昔ありきと
八三今日迄もあるべしとやは思來し三年ぞ長き命也ける
八四我宿は其方を見てぞ慰むる誰かあたごの山と云けむ
八五さのみわれ涙をのみや啣つべき曇るは月の春の習を

六五大方の世さへ亂るゝ秋風にあふも悲しき宿のかる萱
六六思事心にのみぞ積りゆくいはゞまほなる人し無ければ
六七思事心にのみぞ積りゆくいはゞまほなる人し無ければ
六八中絶ゆる宇治の橋守此頃は徒らにてや夜を明すらむ
六九今年よりうしとも物を悲しとも云は始一雜古しけり
七〇この宿にたれ待虫ねて松蟲も四年の秋の露に鳴らむ
七一月見てや數ならざりし我迄も都にすめば思出づらむ
七二思ひやる磯べの浪も返る也蓁ましくや詠めわぶらむ
七三近づくと聞けむ鐘も水無瀬山思遣りてや秋は悲しき
七四胸にたく おもひの煙立ちわびて夕霧深き秋の especially
七五世中は憂き節繁き引く糸の思ひ亂れてよる方もなし
七六思ひやる心ぞとほき唯今の同じ夕やながめぶらむ
七七嘆佗ひ十年に向ふ冬の日の夕暮ばかり悲しきはなし
七八煙たつ民の竈もいかゞ見む雲居に殘る高き屋もなし
七九いかにせむ賤の苧環穩しくも見えぬ此世の心細さを
八〇海山も皆をし鳥の世の中に數かくものは涙なりけり
八一深き谷蔭になる迄身をなけば頓て歎きと我や繁らむ
八二夕づく夜いづくに住まむ奥山に枝安からぬ嵐ふく頃
八三埋木も花さく春にあひぬなり身のみ涙の底に沈みて
八四雉子すむ狩場の眞柴あさりけむ報も著き宿のさま哉
八五昨日まで霧に迷ひし柏木の今日や朝日の影に逢らむ
八六立別れ今朝やこや野の花薄招く景色も悲しかるらむ
八七詠むらむ都の境みゆばかり雲吹きはらへ西の山かせ
八八徒に流るゝ川も卵の花の涙せきあへぬ垣根なりけり
八九引かへてかゝる浮世に逢坂も盛りやすらむ望月の駒
九〇さとの海や吹來る風の方もうし詠むる袖に落る涙は
九一かへる山あるらむ道も待佗びぬ八年隔つる浮雲の空
九二頼みこしわが道もまた跡絶ぬ越の深山の雪を隔てゝ
九三自から待ちつる雁の言傳もそれとも聞かず過え秋哉
九四古の月や心をつけそめて君をも人はあふぎ來ぬらむ
九五ぬるが中に見るより外の夢ぞなき睡む程や現なる覽
九六行末のいかゞと思し程はきぬ是より後は頼なき身を

曉懷舊といふことを

九七故郷の花の寢ざめになく鳥も同じ昔や戀しかるらむ

古今の一句をこめて歌よみ侍りし時

九八いかにせむ身は賤しくて年高き人を哀と思世もがな
九九谷狹み憂節繁き青つゞらいかに心をのばへてかみむ
一〇〇嬉しさの今も仰せの下れかし過にし御代の跡を尋て
一〇一憂からに世はあき果ぬ徒に山田のそほづ己のみかは

一〇二世の中にたゞ一言の哀知れ千々の清は思ひよらねば
一〇三敷島の大和にはあらぬ唐の吉野の山に籠るばかりに
一〇四今はわれの涙淵に世中のうき度毎に身をや投げてむ
一〇五背こそ和歌の浦人なにをして身の徒に老果てぬらむ
一〇六わびしらに幾夜の月を詠めつゝ哀我身に年のへぬ覽
一〇七孰くにもうつぶし染の麻衣思立ちても年ぞへにける
一〇八消ぬ唯憂世の空に白雲の何ぞは有てあるかひもなし
一〇九自らさかゆく時も有なまし山路も近き山ちならずば

故入道三位の家の集をかりて侍りし贈られはべりにし後次の年の長月十日あまり羽林の許に返し遣るとて包み紙に筆手にて

一一〇なき人の形見の玉の聲毎に露おきそへて戀ふる秋哉

定家卿

返し

一一なき玉の形見の色の殘りだにすくなき秋の末の白露

貞永元年七月の頃源大納言經賴ひえどりを返し遣るとて

一一二菊の葉を秋と聞しはつらかりき此花の後花の無ければ

返事

一一三立返り秋なき時の菊のはなもとの雛に見るぞ悲しき

一一四昨日みし跡なき山の跡とては入相の鐘に雲ぞ懸りし

坊門院かくれさせ給ひたりける頃有家卿の許へ遣しける

建仁三年六年の頃嘆くこと侍りしに三位入道の許より

一一五藤衣きしは昨日と思ひしを又やは袖をなほ絞るらむ

返事

一一六限あらば又もやぬはむ藤衣とふに涙の果ぞ知られぬ

なほ添へて今一首を

一一七波に迷ふ藤江のあまの藤衣いかで玉藻の光さすらむ

返事

一一八玉ならぬ藻汐の草も雫でかは藤江の波にとはで過べき

三月七日攝政殿俄に失せ給ひて又の日此の御事

猶夢のやうなるよし申し送りたる又の返りごと

の奥に中將の

一一九昨日までかげと頼みし櫻ばな一夜の夢の春の山かぜ

返事

一二〇悲しさの昨日の夢に比ぶれは移ろふ花も今日の山風

五六日ありて又これより十首を遣すとて

一二一櫻花こふとも知らじ陽炎のもゆる春日に泣々ぞふる
一二二春の夜のおぼろ月夜も朧げの夢にも見えぬ花の面影
一二三泣く涙木のめも枯し春の雨に濡るゝ袂は猶も乾かじ
一二四假て戀ひ起ても迷ふ春の夢いつか思のさめむとす覽
一二五思ひやる苔の下こそ悲しけれ霞のたにの春の夕暮
一二六仰ぎ見し雁の霞に消えしより空しく春るゝ春の空哉
一二七假初の宿に堰入れし池水に山も映りて影を戀ふらし
一二八いつ迄か誰も生田の森の露消にし跡を戀つゝもへむ
一二九魂きはる命は誰もなきものを忘れぬ心思ひかへして
一三〇消えぬべし見れば涙の瀧つせに泡沫人の跡を戀つゝ

返し

一三一戀ひわぶる花の妻は陽炎のもえし煙は胸にたきつゝ
一三二せきも敢ぬ涙のとがか雲の月霞したしき空と頼まむ
一三三紅の涙ふりいでゝ春雨に嵐身を知るそでのたぐひは
一三四夢ならで逢夜も今は白露の起とは別れぬとは待れて
一三五埋もれぬ玉の聲のみとまりぬて慕ひ歸たる苔の下哉
一三六籠にしうき物からの卷の空暮れば悲し其も形見と
一三七山の色は堰入れし水に映る共戀き影をいつか見るべき
一三八春の夢かぎりに消えし夕より生田の杜の秋は怨めし
一三九代々ふとも忘れし心玉きはるあだの命にみ社變らめ
一四〇今はたゞ我が身一つの思川うたかた消えて瀧つ白波

承久三年七月以後遠き所へよみて奉りし時

一四一頼し八雲の道も絶果てぬ君もいつもの恨しの世や
一四二いかにして聲の栲繩尋見む八十島出でゝ人や告しと
一四三いかばかり都はたつみ詠むらむ月も浮世の沖つ島人
一四四斯る世の波のはゝに吹風のいかなる浦に月を見覽
一四五思ふ方なしの風に言とへは涙ばかりぞ袖に答ふる
一四六憂き秋の山田の稻もほ〻佗ぬこき垂てなく袖の涙に
一四七寢覺して聞かねを聞きて悲しきはあら磯波の曉の蛬
一四八心うきあまの栖にすみ染の衣の袖もぬれぬ日やなき
一四九おのづから袖の絕間も有ぬべし涙に物を思增さずは
一五〇この春は越路の西へ歸れ雁戀しき方の言づてもせむ

神祇部

正治二年仙洞にて十題の歌合に、神祇

一五一見ぬ世まで心ぞすめる神風やみもすそ川の曉のこゑ

前參議信成の北野の宮の會に、社頭松

一五二老が世に斬る思の哀知れ一夜の松も年はへぬらむ

建保五年定家卿於金峰山會し侍し時の歌社頭懷

三四この道も吉野の山の峰までに迹をを神の哀ともみよ
　兵部卿成實の石清水の歌合に、社述懐
四四數ならで我身はふりぬ男山老いせぬ宮も哀かけなむ
　家長朝臣の日吉の會に、寄二神祇一述懐
四五波はらへ御津の濱風待つとの年は社の數も知るらむ
　神祇の歌とて
四六臥て思ひ起てや然も祈る覺春日の野邊の君がやちよを
四七明ぬ世の山は日吉の旭影さすがにかくる雪の白ゆふ
　日吉社にて年來の願をはたして
四八年をへて思ふ思の叶ふにも祈るいのりの頼もしき哉
　雜の歌の中に
四九幾代へて誰が立ておきし玉章の神がき山に茂る榊葉
五〇神地山仰げばとても五十鈴川心に人の渡るものかは
　八幡別當幸清法印勸進し侍ける住吉の會に、花
一五八幡山春の櫻もかねそぎの行合ひの霜に色は見え鳧
　月
二五秋をへて幾代か宿る石清水照しかはせる住の江の月
　釋教部

　入道前攝政の家の舍利講の次でに分別功德品の
　如虛空無邊といふことを
三五限なくさとれば空の浮雲を分けて分かるゝ有明の月
　前大僧正の報恩講の次でに、佛前祝
四五神垣やもとの光をたづね來て嶺にも君を尚祈るかな
　山家述懐
五五山深み誰も浮世に住侘びて軒端に懸る雲やけなまし
　方便品
六五玉章やゆくてにまがふすさびにも拜めば佛導き給へ
　私の家にて四十八願の歌人々に勸進せし時春庵
七五榛々に變る姿をしたがへて頼む光に消ゆるよも無し
　月
八五一夜月曇らで宿れ五とせの秋のころもは涙なりとも
　無常
九五歎きとて無は數そふ浮世にも有別こそ見は增りけれ
　月輪殿の會に舍利讃嘆を
六〇傳へきて爰る光ぞ哀なる春のけぶりに消えし夜の月

　定家卿一品經勸進の時、授記品
一六十年餘り三とせの夢の面影や遙に消えし行くゝ末の月
　前但馬守家長の日吉の會に、藥王品
二六榛々にかをりし袖にもゆる火の光やつひに有明の月
　天王寺繪堂前大僧正つくりたてゝ後の障子に九
　品往生人かゝれ侍りける時中品下生の人の心を
三六拾やらで子を思ふ鹿の知べより狩場の山は厭出にき
　春の歌よみ侍りし中に
四六疑世ふとまれの御法の花のえにまだ消え難き露の聲
　釋教の心を四季雜によせて
五六匂ひける昔の法の庭なもばこぬ人あらじ宿の梅の枝
六六六月の日影をだにもいとふ世に燃む烟の後ぞ悲しき
七六露のをはり玉の衣に亂るなよ浮世を秋の信夫もぢ摺
八六勤めての法の勤の山水は結ぶとすれど凍る夜もなし
九六つらき世の人の心の色々に暫しかくるゝ山の端の月
　譬喩品の心を
七〇浮世にて身は孤兒と成果てぬ我迷はすな法の直ちを

柿本集

柿本集上

石見の國より來ける時妻に

七石見なる高間の山の木間より我振る袖を妹見けむかも

二秋山に散紅葉の暫くも散りな亂れそ妹があたり見む

三岩代の野中にたてるむすび松心もとけず昔おもへば

四紫に匂へる妹がにくゝあらば人妻故に我戀ひめやも

五三熊野の浦の濱ゆふ百へなる心は思へど唯に逢ぬかも

六秋風のいせの濱荻折ふせて旅寢かすらむ荒き濱べに

七夏野行く小鹿の角のつかの間も忘れず思ふ妹が心を

八朝寢髪われはけづらじ愛しき人の手枕ふれてし物を

九夕されば君來まさむと待し夜の名殘ぞ今も殘雞にする

一〇思つゝねにはなく共いち著く人の知べく歎きすな君

一一解衣の思亂れて戀れどもなどなに故といふ人もなし

一二梓弓引み引ずみ來すばこそ猶ぞよそに社見め

一三玉鉾の道行きつかれ稻篶しきても人を見る由もがな

一四とにかくに物は思はず飛驒匠うつ墨繩のたゞ一條に

一五足引の山田守をの置蚊火の下焦れつゝ我が戀らくは

一六杉板もて葺る板間の逢ざらばいかにせむとか逢見初劒

一七難波人蘆火たくやは煤たれど己が妻こそ常珍らなれ

一八妹が髮上小笹野の放れ駒荒びにけらし逢はぬ思へば

一九天雲のやへ雲がくれ鳴神の音にのみやは聞渡るべき

さみの郎女あひ別れ侍りける時の

一〇思ふなと人は云へど共逢事をいつと知てか我が戀ざらむ

近江よりのぼりて宇治川のほとりにて

一一武夫の八十氏河の網代木にいざよふ波の寄べ知ずも

一二我せこをきませの山と人は云ど山の名ならし君も越ず

河を

一三大君が御垣の山を帶にするほそ谷川の音のさやけさ

一四月草に衣ぞ染むる君がため色とり衣すらむと思ひて

一五尚あらじ言無草に云ことを聞てしあらば嬉しからまし

一六山高み夕日隱の淺茅原のち見む爲にしめゆはましを

一七三島江の玉江の蘆を占しより己がとぞ思ふ未刈ねど

一八月草に衣はすらむ朝霧にぬれての後は移ろひぬとも

一九我心ゆたのたゆたに浮藻へにも沖にも成にけるかな

一〇久方の雨にはきぬを怪しくも我衣手のひる時もなき

一一木綿懸て祈る三室の神さびて否には有ず人め繁みぞ

一二百傳ひやすの島べに潛ぐ舟にのりにし心忘兼ねつも

一三事繁き里に住すばけさ鳴し雁に類ていなましものを

一四河の瀨に渦まく見れば玉藻かる散亂たるかはの舟哉

吉野山にみゆきする時の

一五見れど飽ぬ吉野の山の常なめに絕る時なく又歸見む

伊勢の國にみゆきする時にきやうにとゞめられ

てよめる

一六みを海に舟乘すらむ妻共に袂の裾に沙滿ぬ覽かも

一七汐さゐにいつしの浦に潛舟に妹乘らむか荒き濱べに

一八たちはきのたぶさの末に今もかも大宮人の玉藻刈覽

石見の國にめをおきてのぼりてよめる

一九笹の葉は深山もよそに亂る覽我は妹思ふ置て來つれば

日並のみこのうせたる時

一〇久方の天見る如く仰見しみこの御門の荒まくをしも

一一吾さし日は照せ共烏玉の夜渡る月のかくらくをしも

ある本にいはく

一二烏みやのまがりの池の放鳥人めに戀ひて池に潛かす

はせのわう女をしさかべの宮に奉る

一三敷妙の袖替し君玉たれのをちものにすきぬ又は逢むや

一つに曰くをちにすきぬと又ある本に曰くはつせ

の王女に奉れるなり

あすかのわう女をさむる時によめる

一四飛鳥河柵渡しせかませば流ゝ水ものどけからまし

一つに曰く見むと思ふや又見むと思ふらむわが大

君の御名を忘れぬ一つに曰くみな忘れすと

高市のみこをしきの上に假に納め奉る時の歌

一五久方のあめしらしぬる君故に月日も知ず戀渡るらむ

一六はに安の池の堤の隱れぬの行へも知すとねもころひぬ

女の死にて後によめる

一七秋山の紅葉おしなみ惑ひぬる妹を惜むと山路暮しつ

一八知すとも又ひく道を知ず其須磨路を行けばゆけにくし

しらずとも又いはくみちしらすとも

一九紅葉の散ぬる秋を玉章の使を見ればつかひおもほゆ

二〇衾路のひくての山に妹を置て山路をゆけば生りともなし

又いはく

二一去年見てし秋の月夜は宿れ共逢見し妹はいや遠かる

二二家にいきて我屋をみれば玉床の外におきける妹がこ枕

ひきての采女身なくなる時よめる

二三天の子がみつの日にあはむ日ぞおほのみしかば今も悔しき

近江のあれたる宮を見て

二四小波の志賀の辛崎行て見れど大宮人の舟待ちかねつ

二五天離鄙の長路を漕行けば明石のとより家のあたり見ゆ

二六みこの海はよく社有らし漁せる蜑の釣舟波の上に見ゆ

二七須磨の浦に舟乘すらむ少女子が赤裳の裾に汐や滿覽

二八大舟にまかぢしげぬきうな原を漕ぎでて渡る月人男

あふみの宮のあれたるを見て

二九小波や近江のみやは名のみして霞霧き宮木もりなし

讃岐のみねの小島にして岩の上にて死にたるく

びを見て

三〇妻もあらば摘てたがましさみ山の床のおはしき過ぬべし

石見の國にてなくなりぬべき折によめる

三一沖つ波寄るあら磯の敷妙の枕となりてなれる君かも

三二鴨山の岩根に置る我をかも知すて妹が待つゝあらむ

三三神山の岩根の玉にある我を知ぬか妹が待つゝませる

三四山の峽そこともみえず白樫の枝にも葉にも雪のふれゝば

柿本集下

三五人事は夏野の草と繁くとも妹こ我し携さはりなば

三六山里は月日の遲くうつろなむ心のごかに紅葉も見む

三七此頃の戀の繁けむ夏草の刈果れどもおひしくがごと

三八片よりに糸をこそよれ我せこが花橘をぬかむと思て

三九鄰公通ふ垣根の卯花のうきことあれや君か來まさぬ

四〇我こそは憎くもあらめ我宿の花橘は見にもこじとや

四一懸てのみ戀れば苦し撫子の花に咲なむ朝な〳〵見む

四二よそにのみ見つゝや戀ひむ紅の末摘花の色に出ぬと

四三夏草の露分衣きぬ物をなどか我が袖のかわく時なき

四四水無月の土さへ裂て照日にも我袖ひめや妹に逢すて

四五戀る日はけ長き物を今夜さへともしかる覽逢べき物を

四六天河こぞのわたりの移へば河瀨踏間に夜ぞ更にける

四七年の戀今夜盡してあすよりは常の戀にや我戀をせむ

四八逢すてはけ長き物を天河隔つるまでや我が戀をらむ

四九彦星と七夕つめと今宵逢はむ天の河瀨に波たつな夢

○五五曙も逢ひ見ぬ妹を天の河舟出はやせよ夜の更けぬ時
一五六秋風のきよき夕に天の河舟こぎわたせ月ひとをとこ
一五七天の河霧立渡り彦星のかぢおと聞ゆ夜の更け行けば
一五八天河遠きわたりと無れども君が舟出は年にこそまて
一五九天河橋うち渡す妹いへにやまず通はむ時待たずとも
一六〇天の河霧立ち渡る七夕はあまの羽衣とひわかるかも
一六一渡守舟はや渡せ一年にふたゝび来ます君ならなくに
一六二天河瀬を早みかもむば玉の夜は更行けど逢はぬ彦星
一六三天河夜は深につゝさぬる夜の年の稀らに唯一夜のみ
一六四七夕の今宵逢なば常のごと月日隔つる年なからなむ
○一六五秋風の吹にし日より天河瀬に立いでゝ待つと告こせ
一六六天河こぞの渡りはあせに鬼君が来ますむ跡殘らなも
一六七銀河淺瀬白波高ければたゞ渡りなむてばすべなし
一六八彦星の妻待つ舟の引綱のたえむと君にわが思なくに
一六九妹に逢ふ時片待つと久方の天の河原に月ぞへにける
一七〇白露の置かまく惜しき秋萩を折のみ折て置や枯さむ
一七一秋の田の假庵の宿の匂ふ迄咲る秋萩見れど飽ぬかも
一七二植の朝露おきて咲といへど夕顔にこそ匂ひまさりけれ
一七三春されば霞隠れに見えさりし秋萩咲けり折て翳さむ
一七四人は皆萩を秋とは云なれど尾花の末を秋とはいはむ
○一七五玉鉾の君が使の手折たる此秋萩は見れどあかぬかも
一七六我宿に咲ける秋萩常ならば我まつ人に見せまし物を
一七七我宿に植て置たる秋萩を誰かしめさす我に知らせず
一七八手にとれば袖さへ匂ふ女郎花木下露に散まくもをし
一七九我妹子に行合の早稲を刈時に成にける哉萩の花さく
一八〇戀しくば形見にせむと我妹子が植し秋萩咲にけり
一八一秋萩は雁に逢はじと云へればか聲を立ては花散に鬼
一八二秋されば妹に見せむと植し萩露霜置て散にけらしも
一八三秋風に山飛越ゆる雁がねのいや遠ざかり雲隠れつゝ
一八四天雲のよその雁がね聞しより痛く霜ふり寒し今宵は
○一八五垣根なる萩の花さく秋風の吹くなるなべに雁鳴渡る
一八六山近く家居をせればさを鹿の聲を聞つゝいも寝兼つも
一八七足引の山より聞ばさを鹿の妻呼聲を聞かまし物を
一八八夕陰になく蜩のこゑ〳〵に日毎に聞けど飽かぬ君哉
一八九秋風の寒く吹くなる我が宿の淺茅がもとに蜩もなく
一九〇影草のおひたる宿の夕陰になく蜩は聞けど飽ぬかも
一九一神なびの山下とよみ行河に蛙なくなり秋といはゞや
一九二庭ぐさに村雨ふりて蜩の鳴く聲きけば秋は来にけり
一九三草枕旅に物思ふわが聞けば夕片陰に鳴くひぐらしか
一九四瀬を早み落ちたぎつらし白波に蛙なくなり朝夕毎に
○一九五秋萩における白露朝な〳〵玉とぞ見ゆる置ける白露
一九六白露と秋の花とをこき混せてあくと難き我が心かな
一九七我宿の尾花推なみ置露に手ふれ我妹子散まくもをし
一九八此頃の秋風さむし萩が花ちらす白露おきにけらしな
一九九この比の曉露に我がやどの萩の下葉は色づきにけり
二〇〇雁音は今は来鳴きぬ我待し紅葉早つげまてば苦しも
二〇一秋されば置白露に我宿の淺茅がうへ葉色づきにけり
二〇二一年に二度行かぬ秋山を所にもあらで過しつるかな
二〇三此頃の秋風さむし萩が花ちらす白露おきにけらしな
二〇四この比の曉露に我がやどの萩の下葉は色づきにけり
二〇五雁音は今は来鳴きぬ我待し紅葉早つげまてば苦しも
二〇六秋されば置白露に我宿の淺茅がうへ葉色づきにけり
二〇七一年に二度行かぬ秋山を所にもあらで過しつるかな
二〇八雁がねの鳴つるなべに唐衣立田の山は色づきにけり
二〇九さを鹿の妻とよ山の岡べなるわさ田は刈じ霜はおく共
二一〇我宿の守る田を見ればさほの内の秋萩薄思ほゆる哉
○二一一此宵は小夜更ぬらし雁がねの聞ゆる空に月立ち渡る
二一二我せこが捕頭の枝に置露の清く見せむと月は照らし
二一三思はずに時雨の雨は降りたれど天雲晴て月は清きを
○二一四白露を玉に作れる長月の有明の月は見れど飽ぬかも
二一五戀つゝも稻葉かき分家をれば乏しくも有す秋の夕暮
○二一六萩の花咲たる野べは蜩の鳴くなるなべに秋風ぞ吹く
二一七秋山の木葉も未だもみちねば今朝吹風は霜消ぬべし
二一八秋田かるひたの庵に時雨ふり我袖濡ぬほす人もなし
二一九玉襷懸ぬ時なく我か戀る時雨し降らば濡つゝも來む
○二二〇紅葉を落す時雨の降なべに夜さへぞ寒き獨しぬれば
二二一誰彼と我をなとひそ長月の時雨にぬれて君待つ我を
二二二住吉の岸を田にほり蒔し稻の刈まで妹に逢ぬ也けり
二二三秋の田の仄に置ける白露のけぬべく我は思ほゆる哉
二二四秋萩の咲ける野べの夕暮に濡つゝ來ませ夜は更ぬ共
二二五秋萩の枝も撓わに置露の消もしなまし戀つゝあらば
二二六秋萩に落す時雨のふる時は人を起ねて戀る夜ぞ多き
二二七さを鹿の朝臥小野の草若み隠兼てか人に知られぬる
二二八我宿に咲る秋萩散果てば秋にもあはぬ身とや成なむ
二二九秋されば雁飛越る立田山立つとゐるとに君を社思へ
○二三〇何すとか君をいとはむ秋萩のその初花の戀しき物を
二三一雁がねの初聲ならで咲て散る宿の秋萩見にこ我せこ
二三二さを鹿の入野の薄初尾花いつしかいもが手枕にせむ
二三三長月を君に戀つゝいけらずば咲て散にし花ならましを
二三四秋の夜の月かも君は雲隠り暫しも見ねば君ぞ戀しき
二三五長月の有明の月の有つゝも君し来ませば我戀めやも

二三六祝り子が祝ふ社の紅葉もしめをばこえて散来る物を
二三七足引の山路も知ず白樫の枝もたわゝに雪の降れゝば
二三八夜を寒み朝戸を明て出ねれば庭もはだらに雪降に鬼
二三九泡雪は今朝はな降そ白妙の柚木を干む人も有なくに
○二四〇誰が宿の梅の花そも久方の清き月夜に殘らざりけり
二四一梅花先さく枝を折持て苞と名づけてよそへてむかも
二四二来て見べき人も有なくに我宿の梅の初花散ぬれどよし
二四三泡雪の降に消えぬべく思へ共逢由もなみ程ぞへにける
二四四朝霧合降来る雪の消ぬ共君には逢むと我が歸来たる
二四五我宿に咲たる梅を月影に夜な〳〵來つゝみむ人もがな
二四六足引の山下風は吹かぬ共君が來ぬ夜はかねて寒しも
二四七あすよりは若菜摘まむと片岡の朝の原は今日ぞ燒める
二四八梅花其とも見えず久方の天ぎる雪のなべて降れゝば
二四九我が宿の池の藤なみ咲にけり山郭公今や來鳴かむ

田子の浦にて藤の花を見て思をのよ

○二五〇田子の浦の底さへ匂ふ藤波を翳して行む見ぬ人の爲
二五一郭公なくやさ月の短夜も獨しぬれば明かしかねつも
二五二年に在て一夜妹にあふ彦星の我に增りて思らむやそ
二五三我妹子が赤裳ぬらして植し田を刈て納めむ倉無の濱
二五四秋風の日毎に吹けば久方の岡の木葉も色づきにけり
二五五我せこを我が戀をれば我宿の草さへ思ひうら枯に鬼

みかど龍田河のわたりにおはします御供につかうまつりて

二五六龍田川紅葉ば流る神なびの三室の山に時雨ふるらし
二五七逢ぬ夜の降白雪と積りなば我さへ共に消ぬべき物を
二五八足引の山下とよみ行水の時ぞともなく戀ふる我身か
二五九時雨の雨まなくしふれば槇の葉も爭兼て紅葉しに鬼
○二六〇青柳の蔦城山にゐる雲の立てもゐても君をこそ思へ
二六一水底に生ふる玉藻の打靡き心をよせて戀ふる此ころ
二六二言に出て云はゞ床しみ山河のたぎつ心を堰ぞ兼つる
二六三風吹けば波打岸の松なれやねに顯れてなきぬべらも
二六四日の曇り雨降河のさゝら波まなくも人の戀らるゝ哉
二六五垂乳根の親のかふこの繭籠いぶせくも有か君に逢すて
二六六戀々て後に逢はむと慰むる心しなくば生てあらめや
二六七戀するに死る物にしあらませば我身は千度死返らまし
二六八戀々て戀て死ねとや我妹子が我家の門を過て行ぬる
二六九荒磯の外行く波のほか心我は思はじこひはしぬとも
○二七〇丈夫のうつし心も我はなし夜晝わかず戀しわたれば

一六佗つゝも今日は暮しつ霧立あすの春日を爭で暮さむ
一六戀つゝも今日はありなむ玉櫛笥明なむあすを爭で暮さむ
一六千早振神のい垣も越ぬべし今は我身の惜けくもなし
一六山端にさし入月のはつ〳〵に妹をぞ見つる戀しき迄に
一六竹の葉に置ある露の轉合てぬるよはなしに立我名哉
一六無名のみ辰の市とは騒け共いざまた人を賓由もなし
一六無名のみ立田の山の麓にはよにも嵐の風も吹かなむ
一六皆人の笠にぬふてふ有馬背有ての後も逢むとぞ思ふ
一六十寸鏡手に取持て朝な〳〵見れ共君に飽く時ぞなき
一六玉ゆらに昨日の暮に見し物を今日の朝に戀べき物か
一六斯計戀き物と知ませばよそに見るべく有ましもの
一六戀死なば戀も死ねとか玉鉾の道行き人に言傳もなし
一六足曳の山より出る月まつと人には云て君をこそまて
一六逢見ては幾久さにもあらね共年月のごと思はゆる哉
一六岩根ふみ重なる山は無れども逢ぬ日數を戀わたる哉
一六賴めつゝこゝ夜數多に成ぬれば待じと思ぞ待に增れる
一六鳴神の暫しは空にさし曇り雨もふらなむ君止るべく
一六むば玉の今宵な明そ明行けば朝行君を待もくるしも
一六小波や志賀の辛崎來たれども大宮人の舟待かねつ
一六足引の山鳥の尾のしだりをの長々し夜を獨かもねむ
一六千早振神の保てる命をも誰が爲と思ふ我ならなくに
一六網代木の白波よりてせかませば流る水も長閑からまし
一六白波は立てぞ衣に重ならず明石もすまもおのが浦々
一六あらちをのかるやの崎に立鹿もいと我如に物は思じ
一六ほの〴〵と明石の浦の朝霧に島隱行く舟をしぞ思ふ
一六鳴神の音にのみ聞く卷向の檜原の山を今日見つる哉
一六古にありけむ人も我とや三輪の檜原にかざし折けむ
一六よそにして雲ゐに見ゆる妹が家に早く到らむ歩め黒駒
一六我妹子がねぐたれ髪を猿澤の池の玉もと見るぞ悲き
一六淺入の黄分小舟さはり多み戀しき人にあはぬ比かな
一六朝霜の消み消ずみ思へども爭でか今宵明しつるかも
一六新月のさやけくも有す雲隱見まくぞ欲しき轉て此比
一六正してふ八十の巷に夕けとふ占正にせよ妹に逢べく
一六空の海に雲の波たち月の舟星の林にこぎかへる見ゆ
一六ちゝにはも人は云ふとも織つがむ我機物に白き麻衣

せん頭歌

一六增鏡見しかと思ふ妹に逢はむかも玉の緒の絶えた
る思ひ繁き此頃
一六夕されば秋風寒し我妹子が解洗ひ衣行きてはやきむ
一六大已貴少なひ神の作れりし妹背の山を見るが嬉しさ
一六卷もくの山べ響きて行水の水泡の如に世をば我が見る
一六敷妙の袖替しきみ玉垂の遠野に過ぬ又もあはむやは
一六秋田かる假庵作りわがをれば衣手寒く露ぞおきける
一六やたの野に淺茅色附あらち山嶺の泡雪寒くぞ有らし
一六降雪の空に消ぬべく思へ共逢由もなく年ぞへにける

柿本の人丸あからさまに京近き所に下りけるをとく上らむと思ひけれど聊にさはることありてえ上らぬに正月さへ二つありける年にていと春永き心ちして慰めがてらに此の世にある國々の名をよみけるこれなむなかに龍り下りつゝとてあるやんごとなき所に奉りけるなむ

畿内五箇國

やましろ

一六打はへてあな風寒の冬の夜やま白に霜の置ける朝道
一六ふる道に我やまごはむ古の野中の草と茂合ひにけり
かうち
一六朝さだき我がうち越る龍田山深くも見ゆる松の綠か
いづみ
一六誓ならべ海の心を知らぬ哉いつみて汐にみるめ刈らむ
津のくに
一六蘆鴨の騒ぐ入江の水ならでよに住み難き我身也けり

東海道十五箇國

いが

一六散りぬとも爭でか知らむ山櫻春の霞の立ちし隱せば
伊勢
一六二葉より引こそ植め見る人の老せぬ物と松を聞にも
志摩
一山川の石間を分けて行水は深き心も有らじとぞ思ふ
をはり
二春たてば梅の花笠鶯のなにをはりにて縫ひ留らむ

三河

二あだ人のとに附べき我身かは知ばやよそに戀してふ寛
とほたあふみ
二ひねもすに遠た淡江に種蒔て歸る田長は苦しかる寛
するが
二ふじのねの絶ぬ思をするからに常磐に燃る身とぞ成ぬる
伊豆
二逢ふとをいつしかとのみ松島の變らず人を戀渡る哉
かひ
二須磨の浦に鴎の飼兒のある時は是か千代へむ物と哉
さがみ
二足柄のさか見に行かむ玉櫛笥箱根の山の明けむ朝に
むさし
二栞せむさして尋ねよ足曳の山の遠にて跡はとゞめつ
あは
二春の田の苗代所作るとてあは今日よりぞ堰は始むる
かんつふさ
二とめ行かむ具に跡は見えず共鹿のはかりは知と云也
しもつふさ
二棹しも開けざりけり櫻花下つふさこそ先は咲きけれ
ひたち
二いつしかと思ひ立にし春霞君が山路に騒らざらめや

東山道八箇國

あふみ

二流れ逢ふ淺の水のうまければ片へも汐は甘き也けり
みの
二わたつ海の沖にこち風早からし鹿子斑に浪高く見ゆ
飛驒
二さして行三笠の山し遠ければ今日は日たけぬあすぞ到らむ
信濃
二あだなりと云初られし濕衣は干しなのみ社立增けれ
かんつけ
二音に聞く吉野の櫻見に行かむ告げよ山守花の盛りを
しもつけ
二春きぬと人しも告げず逢坂のゆふ附鳥の聲に社知れ
むつの國
二いつか生ひむ角ぐむ蘆を見程は難波の浦も名のみとぞ思
いでは

二夕闇はあな覺束な月影の出でばや花の色もまさらむ

北陸道

わかさ
三春たてばわが澤水に摘む芹の根深く人を思ひぬる哉
ゑちせん
三しか山を越行く人をつゐら杖千年またすと聞は誠か
加賀
四己がかく明けゝる物を花と云へば一つ句に思ける哉
能登
五唉けばかつ散りぬる山の櫻花心のごかに思ひける哉
ゑちう
六花の末ちうに勝りて匂せば其をぞ人は折て採らまし
ゑちご
七人に似すがなき親の心故ふごさへにく〳〵思ほゆる哉
さど
八東路の唐土里におりて立つきぬをや唐の衣といはむ
山陰道　武蔵紀文鳥切
たには
九春雨にたには水祉增るらしたはたゝき聲高くなる
たじま
一〇春霞たちまふ山と見えつるは此面彼面の櫻なりけり
いなば
一一鶯の聲を厭かに打なきていなばいづれの山を尋ねむ
はゝき
一二山際はきよく見ゆれど天つ空漂ふ雲の月やかくさも
いはみ
一三世と共に波なき磯の岩見れば傍へぞ乾く時は有ける
おき
一四草の葉に置ある露の消ぬ間は玉かと見ゆるとの修さ
いづも
一五程もなく今朝降雪の朝よだきいつもと云は虚言か君
山陽道
はりま
一六立代り蘆田の池の汀草來れども絶ぬ物にぞ有りける
みまさか
一七君がみまさかなく常に離れつゝ我花園に踏しだくめり
ぶせ
一八常磐山二葉の松の年をへてくひせにならむ年を見てしか
びちう
一九鉄ひちうさて身さへぞ流れつる割なき戀の逢ぬ涙に
びご
二〇日比へて見れ共飽かぬ櫻花風の誘はむとのねたさよ
あき
二一鶯のあきて立ぬる花の香を風のたよりに我は待つ哉
すはう
二二水鳥の立あて騒ぐ磯の巣は浮べる舟ぞよそに過ける
ながと
二三海の中常磐に入て潜く蜑も人に飽はともしかりけり
南海道
紀の國
二四漫緑野べの青柳出て見む糸を吹きくる風はありやと
あはぢ
二五我が誓ふことを真と思はすばあは千早振神にとへ君
あは
二六楢のみあはと見えつゝ帚木の木を本より見人ぞなき
さぬき
二七我はけさぬぎて歸りぬ唐衣よのまと云しとを忘れず
伊豫
二八儚しや風に浮べるくものいよ心細くぞ空にわたれる
土佐
二九漫さる舟泊今朝は怪しけれ日たけて風の吹て歸るに
西海道
ちく ぜん
三〇片道くせにつくれと云遣らむましき着衣も生ひば摘べく
ひせん
三一人を戀ひせめて涙のこぼるれば是誰方の袖ぞ濡ける
ひご
三二誰しかも我を戀らむ下紐の結びもあはず解る日比は
ぶせ
三三春の野に昨日失にし我駒を朝れの方にさして求めむ
おご
三四花に棲雲にて常に睦れなむ長閑からねば見人もなし
ひうが
三五逢ぬ戀うかりけりとぞ思ぬる身をば焦せど驗無ければ
大すみ
三六我宿に大隅山のいかなれば秋を知すて常磐なるらむ
さつま
三七春の野の花を種々つまむとてさも形見をも作つる哉
いき
三八いき通ふ雲ゐは道もなき物を雪でか雁の悉ざるらむ
つしま
三九山川に水し增さば水上に積る木の葉は落し果つらむ

書陵本色紙手跡古帳也
建長五年六月日
北本以二三條少本一校正了
同六年三月日　藤原朝臣 判

躬恒集

躬恒集上

延喜のおほんときに御厨子どころにさぶらひしに京官のころともにおくれたりしかば御らんせさせよとおもひて或るをんなくらうどのもとにやりし

一 躬恒　春の光は分なくにまだ三吉野の山は雪ふる
一一 皆人は花の衣をきるなかに獨ぞ老いし沈み果てぬる
二 今迄に出立たぬ身は百敷の宮の櫻を見でや止みなむ
三 倭人の思ふ心をちる花にそへて雲ゐに吹きつけよ風

中秋

四 人知れぬ音をや鳴らむ秋萩の花咲までに鹿の聲せぬ

初の冬

五 神無月紅葉の色は吹く風と瀧の水とぞ落し果てつる
六 逢はぬ戀
七 逢むとは思渡れど藤河の遠にすまゝば影も見えじを
八 思ひつゝまだ云初めぬ我戀を同じ心に人は知らなむ
九 見ぬ人の戀しきやなぞ覺束な誰とか知らむ夢に見る共

逢ひての戀

一〇 別ては後ぞ恠しき濁江のそこゝも知らぬ有りか問身は
一一 只管に忘もせする忘草見やわらまし戀は死ぬとも
一二 久方の雲ゐ計りに逢ひしより空に心はなりにし物を
一三 久にこぬ人を待にや敢ぬらむ常磐の戀と我は成ぬる

えき十三年十月十一日内裏の菊合に仰によりて奉る三首

三八菊の花こきも薄きも今迄に霜の置すば色を見ましや
三九初時雨降初めしより菊の花こかりし色ぞ又増りける
四〇本よりの色にはあれど菊の花片へは移す所からかも
えき十四年二月十八日仰によりて奉るいづみの
大將の四十の賀の屏風四帖うちより調じて遣す
にかく例の歌
四一山高み雲ゐに見ゆる櫻花心の行きて折らぬ日ぞなき
四二大あらきの森の下草茂合ひて深くも夏の成にける哉
四三住の江の松を秋風吹くからに聲うちそふる沖つ白波
同じ十三年内侍の督のかの屏風の歌
四四可惜しく我のみや見む菊花移らぬ先に來む人もがな
同じ十五年齋院の御屏風の歌、春
四五香をとめて誰折ざらむ梅の花あやなし霞立な隱しそ
四六降雪に色は紛ひぬ梅花かにこそ似たる物なかりけれ
女ども梅の花見つゝ若菜つむ
四七春のきる衣片しき誰が爲か習はぬ草に若菜つむらむ
人木のもとに在り
四八梓弓春の山べをさりがたみこの本ごとに心をぞやる
えき十七年御屏風の歌、秋
四九水の面の深く淺くも見ゆる哉紅葉の色ぞ淵瀬也ける
松にかゝれる苔を見る
五〇千代をふる松に懸れる苔見れば年のを長く成にける哉
野に小鷹狩す
五一人の子もかるゝと聞くまで女郎花木毎に鳴く鈴蟲の聲
Ⅲ刈る
五二小山田の奥手の稻を刈擔て守る假庵に幾夜經ぬらむ
紅葉ちる
五三惜めども遂に散りぬる紅葉故風吹く毎に物思ふかな
えき十二年女二宮の御屏風のわかな元へ
五四行先はまだ遠けれど夏山のこの下陰は立うかりけり
しはす
〇木間より風に紛ひて降雪も春くさいへば花かとぞ見る 躬恒
内の御屏風の歌、子日
〇妬く我れ子日の松にならましをあな美し人に曳るゝ
花つみ
〇鶯はいたくな鳴を移香にめでゝ我つむ花ならなくに
草合する所
〇櫻花我宿にのみ在りと見ばはなき物草は思はざらまし

三月つくる日
〇今日暮てあすに成なば藤の花盤てのみ赴春を忍ばめ
六月はらへ
〇空見えて流るゝ水の早きも祓ふとを神も聞らむ
七月七日
〇なぬか日の早暮れなゝむ久方の天の河霧立渡るべく
七日夕
彦星の妻まつ宵の秋風にわれさへあやな人ぞ戀しき
八月十五日
〇虧こにか今宵の月の見えざらむ飽ぬは人の心也けり
稻はしたり
〇刈てほす山田の稻をかずへつゝ多くの年を積てける哉
師走
〇梓弓春立しより年月のいるが如くもおもほゆるかな
一蟋子鳥春の空しく過行けば心細かる音をも鳴くかな
二大あらきの杜の下なる薩草は早晩とのみ光をぞまつ
三夢にだに嬉しと思はゞ現にて侘しきよりは尚優りなむ
四かく侘る人は昔も有やせし世を知初めの神に問ばや
五過ぐしこし年を數らと算れば指いとなくも老にける哉
六郡にて奉をばたゞに過しきて何ちと雁の鳴て行らむ
秋になりてよろこびやしたりけむ
七今日よりは嬉き身をも菊の上に天つ空より置る白露
八よには香を侘て鳴だに有物を嬉しきにさへ落る涙か
おほみゆきの後たてまつる歌
九船岡の行幸の後は寄べなみ沈むと侘びし物思もなし
〇千代をへて行幸有べき船岡の松ならぬ身も老ぞ悲き
亭子のみかどの大井に行幸させ給へるときの
歌、秋の水にうかぶ
一此川に紅葉と浮てさし返り身は今日よりぞ水馴初ぬる
二秋の波いたくな立そ思ほえず孑木にのりて行人の爲
秋の山にのぞむ
三今日なれば小倉の山の紅葉もそこまへ照て見え渡る覽
四秋霧の晴るまに〳〵見渡せば山の錦は織果てゝけり
紅葉おつ
五水の面の唐紅になるまゝに秋にもあへす落る紅葉ば
六風にちる岸の紅葉ば後遂に瀧の水こそ落しはてつれ
殘りの菊
七菊の花今日を待とて昨日置し露さへ消す今朝りなり

八君が爲心もしるく初霜の置きて殘せる菊にぞ有ける
つる巢にたてり
九たづのゐる澤にぞ有ける白妙の天の濡衣ほすと見つるは
〇浦わきて風や吹くらむ沖つ波同じ所に立ち歸りつゝ
旅の雁行く
一年毎に友ひき列ね來る雁を幾度きぬと問ふ人ぞなき
二故郷を思ひやりつゝ來る雁の旅の心は空にぞ有らし
三秋毎にくる雁がねは白雲の旅の空にやよを過すらむ
山のかひにさる鳴く
四侘しらに猿な鳴そ足引の山の峽ある今日にやは有ぬ
五心あらば三度てふ度鳴聲をいとゞ物思ふ我に聞すな
かもめなれたり
六馴てこし沖の鴎はつげなくに後の心をいかで知けむ
七洲にをれば砂の色に紛ふ鳥手にとる計り成にける哉
入江の松老いたり
八深緑入江の松も年ふれば影さへ共に老いにけらしな
九老にける松ぞ知らむ鮎河の行幸も斯は有すや有けむ
同じ院の歌合の左かたにてよめる
一〇咲ざらむ物とはなしに櫻花偖にのみまだき見ゆらむ
一一來つゝのみ鳴鶯の故郷はもりにし梅の花にざりける
一二我心春の山べにあくがれて長々し日を今日も暮しつ
一三花櫻いかでか人の折りて見ぬ後こそ増る色も出こめ
一四いも安く寢られざり皃春夜は花の散のみ夢に見えつゝ
一五故郷に霞とびわけ行く雁は旅の空にや春をすぐらむ
一六現には更にも云じ櫻花夢にも散ると見えばうからむ
一七目に見えて風は吹け共青柳の糸く方にこそ花は散ける
一八春深き色こそなけれ山吹の花に心をまづぞ染めつる
一九かけてのみ見つゝぞ忍ぶ紫に幾しほ染し藤の花ぞも
〇今日のみと春を思はぬ時だにも立と易き花の陰かは
一深山出てまづ初聲は鶯公夜深く待たも我が宿になけ
二紫にあふ水なれや杜若底のいろさへかはらざるらむ
三我が聞て人には告む時鳥思ふも甚く先こゝになけ

戀
四涙河いかなる水か流るらむなど我戀を消つ人のなき
五誰により思亂るゝ心とも知らぬぞ人のつらき也ける
六人の上と思ひし物を我戀に曙儉てや君が雖面かる覽
七現にも夢にも人によるしあへば暮行計嬉しきはなし
平中將の家の歌合に、初の春

八五春立で猶降雪は梅の花さく程もなく散るかとぞ思ふ
中春
九六はかなくて春一月は過にけり花の盛は遥がてにせよ
はての春
〇九止るべき物ならなくに惨くも散る花毎にたぐふ心か
初の夏
一〇山がつの垣根に咲ける卯花はたが白妙に衣かけしぞ
中の夏
二〇郭公をち帰りなけわざも子が打たれ髪の五月雨の空
初の秋
三〇年毎に逢とはすれど七夕のぬる夜の数ぞ少かりける
三一立止り見てを渡らむ紅葉は雨と降るとも水は増らじ
三二風にちる秋の紅葉は後途に瀧の水こそ落しはてつれ
三三そよふなく見君なれど彦星のけふ待出たる心ちのみして
三四秋の夜の幌に見ゆる月よりは紅葉の色ぞてり優りける
三五かりてくる山邊の鳥を秋霧の立度毎に空にこそ見れ
三六影をだに見せず紅葉は散に鳥水底にさへ波風や吹く
三七行遣らぬ心や何ぞ秋の野の道は千年も有じと思ふを
十五夜月
三八淡路にてあはと雲居にみし月の近き今夜は所からかも
三九網代木の長居をやせむ惨くて紅葉の影に日を暮しつゝ
四〇秋の野を分行露に移りつゝ我が衣手は花の香ぞする
清涼殿の南のつまに御河水巡り出でたりまづ延
喜十九年九月十三夜その宴せさせ給へりその心
の題あり人々歌奉る
四一百敷の大宮ながら八十島を見る心ちする秋の夜の月
四二明ぬれば難面く成ぬ女郎花人知れずこそ折むと思に
四三河上に時雨のみ降る網代木は紅葉さへ社落増りけれ
内の御屏風に
四四流行く紅葉の色の深ければ立田の河は淵瀬ともなし
四五笹の葉に置初霜の夜を寒みしみはつく共色に出めや
四六神無月時雨に濡るゝもみぢ葉は唯悩人の袂なりけり
四七冬の池に住鴛鳥のつれもなく下に通はむ人に知すな
四八夜を寒み置初霜を拂ひつゝ草の枕にあまたゝび寝ぬ
四九黒髪の白く成ゆく身にしあれば先初雪を哀とぞ見る
五〇昔にのみ聞て已にし菊の花夢にも色は見えず成にき
五一あだ也と我をば菊の花しもぞ移ふ色はこさ増りける
頭べを旋らす歌

五二ます鏡そらなる影にむかひゐて見る時にこそ知らぬ
おきなに逢ふ心ちすれ
五三あこそかの遠方人に物まうす我その三四行間そこに白
く咲けるは何の花ぞも
五四君がかざす三笠の山のもみぢ葉の色かみなつゝ時雨の
あめに染めるなりけり
五五草木すら春にはなべて逢坂の關に色々あるをば人も
しいはむことの難さよ
五六初瀬川ふる河のべに年をへて二本ある杉又もあひ見
むおも變りせで
長歌
五七吾妹子が　きる夏ごろも　白たへに　咲ける垣ねの
卯の花の　時になるらし　足びきの　山ほとゝぎす
里に出て　なく五月雨の　玉のをの　夜は短かくて
玉くしげ　明け易けれや　夢にだに　我が思ふ人を
あくまでも見ぬ
内に奉る
五八千早ぶる　かみな月とや　初しぐれ　曇りもあへず
もみぢと共に　ふる里の　成ゆけば　やま風も
寒く口ごに　玉の緒とけて　霜こほり　彌かたきしく
こき散し　あられ亂れて　上にふりしく　ふゆ草の
庭の面に　村むら見ゆる　つもり〳〵て　あら玉の
白ゆきの　年をおほくも
すぐしつるかな

躬恒集下

延喜十三年十月九日仰せによりて奉る女一宮の
御裳着に奉らせ給ふ御さうずくの裳のかたにを
みつへてきかくにくする料の歌
五九流出づる山をし思へば吉野河深き心のたえむ物かは
又
六〇渡つみの神ぞ知らむ同くば蟹の刈藻を我にかさなむ
すざく院の女郎花合の歌
六一妻戀る鹿ぞなくなる女郎花己が住野の花には非すや
をみなへしといふ五文字を句のかしらに据ゑて
よめる

六二緒を貫て見由もがな長らへて經ぬやと秋の白露の玉
六三折つればみて秋の日は慰めつへて此花を知せずもがな
（始めて）
六四逢ぬ夜も逢夜もいをしまだ寝ねば夢の直路は馴や絶
越へまかる人に送る
六五君が行道も旅路の都にはまだき歸るの山ぞありてふ
六六もみぢ葉や袂なるらむ神無月時雨る毎に色の増れる
比良の山
六七折てのみ我思ひ等の已まさらば身も徒に成ぬべら也
宇治山
六八渡つ海の波うちやまば濱に出て拾ひもおかむ戀忘貝
比叡の山
六九夏ならぬ草取返し植し田に稗のやまずも生にける哉
水無瀬河
七〇遠方に渡兼てぞ返りぬるみな瀬變りて淵になれゝば
佐比河
七一昔より有の隨まに有らせぬは我すさびかは人の心を
七二目に見えで心にしむは梅の花吹過て行風にざりける
七三青柳のいと目も見えず春毎に花の錦を誰か織らむ
七四春霞立ながら夜を明しては雁と共にぞ鳴て歸りし
七五梅の花色は目なれて吹風に匂ひくる香ぞ常珍らなる
七六春のたつけふ鶯の初聲を鳴きて誰にかまづ聞すらむ
七七春立て日はへぬれども鶯の鳴く初聲は今日ぞ聞つる
七八老ぬれば頭は白く卯花を折てかざゝむ身も紛ふがに
七九夏草は繁く日毎に成ゆけばかれにし人は見えぬ我宿
八〇年の經るぞ積れる雪に跡絶えて人通路もみえぬ我宿
八一年毎にとゝめ兼ては散花の先にも立たぬ悔をする哉
八二くる年の雪と降ずば櫻花ちるも最かく思はましやは
あづまへ行く人にやる
八三足柄の山ぢは見ねど別れゆく心のみこそ行て通はめ
八四櫻花散りなむ後は見も果すさめぬる夢の心ち社すれ
八五菅の根の長き日なれど櫻花ちる木の本は短かりけり
八六春の日は暮やしぬらむ花を置て歸事こそ物憂りけれ
うまのけ　つるぶち
八七紫のいろの深きは水底に見えつる藤の花にざりける
いかるがにげ
八八とぞとも聞だに分ず割無も人の怒るか逃やしなまし
ゆふかみ

二二戀すればやせ肱すらめ物のをのゆふか短く思ほゆる哉
草ぶち
二三遷き鳥はあしぶちならであふれ共心のみ肱先に立けれ
鹿毛ぶち
二四我をだに相やは待ぬまつらき花か今日散るあすも日は有
青
二五木芽はる時になる苗代のあをだに未だ作らざり鳧
かす毛
二六七夕に我かすけふのから衣秋のみこそひぢて返らめ
月を見て
二七朗る迄今宵の月をみてもあらでねで明すらむ人の心よ
二八歸る雁雲の遙に聞くときは旅の空なる人をしぞ思ふ
二九女郎花色にもある哉夏蟲をもとに宿して誰を待らむ
女郎花の多かる野邊を見る時ぞ我老らくは悔しかりける
三〇女郎花多かる野邊を見る時ぞ我老らくは悔しかりける
三一秋の野に夜もや寢なむ女郎花花の名をのみ思ふつゝ
我を知り顏に人にいふなと云ひ侍りける女に
三二足引の山に生ひたる白樺のしらすや人を朽木也とも
月のおもしろきに
三三畫なれやみぞ紛ひぬる月影をけふとや云はむ昨日とや云む
淡路のぞうの任はてゝ京に上りてその頃兼輔の
中納言の家にて
三四引て植し人は宜こそ老にけれ松の木高く成にける哉
もとよりのとくいに侍りければ兼輔の郷に奉る
なつきを貰之して傳へさすとて遣す
三五人につく便だになし大荒木の森の下なる草のみなれば
拾遺の(雜秋)
閏三月あるつごもりの日
三六常よりも長閑かりつる春なれどけふのくるゝは飽ずぞ有ける
これひらの朝臣のとひこたふる歌
三七さを鹿の柵ふする秋萩は下葉やうへになり返るらむ
題しらず
三八久方の天つ空なる月なれどいづれの水に影流るらむ
三九人のこゝろを(雜上)
しらに
四〇山深み人にも見えぬ鈴蟲は秋侘しらに今ぞなくなる
日ぐらし
四一松の音は秋の調べに聞ゆ也高くせめ上て風ぞ引らし

主をに
二宵の間に我思つる秋の夜は明しを西に月のみゆらむ
ちゝこぐさ
三花の色はちゝこ草にて見ゆれど一も枝に有べきはなし
かりやす草
四篇の心にはあらで春をだに雁やすぐさず飛歸り行く
わかれの歌
五片かけの船にやのれる白波も立は侘しく思ほゆる哉
雨ふる日人に贈る
六衣手ぞ今朝は濡たる思寢の夢ぢにさへや雨は降らむ
雜歌
七君見ては有ぬべしやと心見にたゝまくもうき唐錦哉
八大空を眺ぞ暮す吹風の音はすれども目にし見えねば
九眺らなる山にかあらむ雁音の音の仄に聞き果つる哉
一〇かみな月紅葉の時はやまとまで唐紅に見ゆるさほ山
一一思ふとも相も思はず思ふ時思ふ人をば思はざらなむ
一二下紐の解けし計を頼みにて誰とも知らぬ戀もする哉
一三おふれ共駒もすまぬ蔦浦草假にも人のこぬが侘しさ
一四荒玉の年の四年を怒に身を捨て難みわびつゝぞすむ
一五徒に老いぬべら也大荒木の杜の下なる草葉ならねど
一六嘆さのみ大江の山は近けれど今一坂を越ぞかねつる
一七故らに死なむとこそ難からめ生てかひなき物思ふ身は
一八今日暮て飛鳥の河の川千鳥今幾年か鳴きわたるらむ
世を恨みて山寺にまかる人に遣す
一九世を憂しと山に入る人山作ら又うき時は誰ち行らむ
(秋)(戀歌)(雜歌)
二〇秋立て早晩とのみ待しかど逢てぬるよは唯一夜のみ
二一露けくて我衣手は濡れぬとも折てを行かむ秋萩の花
二二久方の月をさやけみ紅葉の濃さも薄さもわきつべら也
二三打はへて安きいも寢ず巷秋のよな〳〵鳴つゝぞふる
九月九日
二四老は身の辛き物也けふはしも濡にもぬれむ菊の白露
山越
二五共にわれ歸る山路の紅葉の己がちり〴〵別るべら也
二六秋霧もはれぬ朝の大空を見るが如くも見えぬ君かな
二七秋の野に日暮しつるを女郎花夜やとまらむ花の名立に
二八狹葉のそよと告すば秋風を今日から吹と誰か知まし
二九秋萩の中に立出て泪りなむ我をば人は花とやはみぬ

二七元の色は靑れなるらむ白露の下に移ろふ我が宿の菊
二八神無月ちゝに移ろふ菊の花靑か元の色にはあるらむ
二九藤花散なむ後も影しあらば移ふ頃の有かひはあらむ
三〇故らにみにこそきつれ櫻花道行ぶりと思はざらなむ
三一玉鉾の道行ぶりに山ざくら折るとや我を花の思はむ
三二月見つゝ折るすべもなき我宿に最ども來なく郭公哉
四月に山の雪を見て
三三白雪もまだ消はてぬ山里はいつ計りかは夏を知らむ
(夏)
三四月見つゝ待つと知すや郭公今宵外に鳴かば恨みむ
(雜歌)
三五年をへて思ひ〳〵て逢ぬれば月日のみ社嬉かりけれ
三六世と共に人を忘れぬ報にや今日は嬉しく逢見初らむ
三七見つゝ我が懸めかねつ更科の姨捨山に照りし月かも
三八天の河船さし渡すさを鹿のしがらみふする秋萩の花
三九較べみむ我衣手と秋萩の花の色とはいづれまされり
四〇新玉の年ふり積る山里にゆき離れぬる我身なりけり
四一常磐なる松をば置て味氣なくあだなる山の櫻をや見む
四二惜め共留まらなくに山櫻雪とのみこそ降てやみぬれ
四三散ぬとも影をやとめむ藤花池の心のあるかひもなく
四四我が宿の池の藤波さきしより山郭公まだ日ぞなき
四五時鳥なく五月雨の短夜は月影さへぞともしかりける
四六五月雨の黃昏どきの月影の朧げにやは我が人を待つ
四七三吉野の山の心はけふや知いつかは雪の降ぬ日は有し
四八我宿の秋萩の花さく時ぞをのへの鹿も聲立てゝ鳴く
七月七日人に贈る
四九打はへて住しめる人は七夕の逢夜計は貸もせよかし
五〇秋の野ゝ花の色々とりそへて我衣手に移してしがな
五一立かへり又も見にこむ紅葉を落しなはてそ山川の瀧
五二菊の花見つゝあやなく猶も有で人の心に移ふなゆめ
五三山高み珍らしげなく降雪の白くやならむ年積りなば
五四山の端はまだ遠けれど月影を惜む心ぞまづ先に立つ
五五久方の月人男ひとり住む宿にさしいれ人の名だてに
五六見程にいかにせよとか月影のまだ宵のまに高く成覽
五七梅雨の月の仄に見ゆる夜は時鳥だにさやかにを鳴け
五八入ぬまにこむと云しかば今宵社わき侘て惜れ夏のよの月
五九あたらしく照月影に郭公ふる聲しるく鳴き渡るかな
六〇花とのみ雪の見ゆるは冬なれど心の中の春にや有覽

一年深く降積む雪を見る時ぞ越の白嶺はすむ心ちする
二降る雪と且知乍ら匂はねど半ば過ては花とこそみれ
三枝の上に雪を置乍ら較ぶ共誰かは梅に非すとは云む
四雪の上に思心はいち著く難面き人のめにもみえなむ
五よそにのみ見てや已なむ山櫻花の心のよの変らひに
六青柳の縷の糸をより合せてたえずもなくか鶯のこる
えん喜の御時に壬生忠岑が公の御使にてものへ罷るに大井河のもとに罷りあひて物など云ひかくるに忠岑が急ぎ罷りければ詠み侍る
七留むれど留め兼ねつも大井河井堰を越て行水のごと
忍びて御琴ひかせ給ふと聞きて
八秋風の吹くも知すば白雲の天つ調べを事で聞かまし
九七月八日の夜人にあひて別るとて
十七夕の飽ぬ別のけさよりも夜さへ明さぬ我は優れり
十一行廻り今こむ秋を戀ふへて今宵計りは逢やしなまし
十二夢にだに見ば社からめ埋火の起あてのみぞ明し果つる
十三冬過ば投置れなむ物故に君が手にはた手馴るべら也
朱雀院なりける鶴の死にたるを見て
十四蘆鶴のよさへ傷く成にけり今日や千年の限なるらむ
別を惜む
十五君を思ふ心は人に小掫ぎの磯の玉藻も今やかるまし
さほかけ
十六執とも思ほえなくに覺束ないさ外げにて一目みしかはくれのおも
十七いつしかと待夕暮の倭に見えつゝみえぬとの倦しさ
十八下立て植ずはあり共小山田の秋の假にはあはむとぞ思ふ
人の家のほとりの山の井
十九過がてに人は止れど山の井の便と思へば淺くぞ有ける
十月紅葉瀧に落つ
二十紅葉の落來る瀧は懸てのみたゝぬ錦をほすかとぞ見る
二十一風に散るもみぢの色は神無月唐紅のしぐれこそ降れ
二十二梅雨の夜は暗くとも時鳥さやかにだにも鳴てこぬ哉
二十三時鳥一聲鳴きていぬる夜は爭でか人のいを安く寢む
二十四思ひをば松の綠に染めしかど花のがりのみ行く心哉
二十五秋風の吹ぬと聞けば出てこし家路のみ社戀しかりけれ
延喜十七年二十一日[内裏]仰せによりて奉る御屏風の歌、雪の内の杉の樹

二十六雪の内にみゆる常磐は三輪の山山の印の杉にぞ有ける
同じ年伊勢の齋宮の御料に國々の名ある所々を書かせ給へる御屏風の歌召しありしかば鈴鹿山奉りし
二十七音にきく伊勢の鈴鹿の山河の早くより我が戀渡る哉
まことかた
二十八梓弓いるまとかたに滿つ潮の晝逢難み夜をこそまて
網代の濱
二十九潮みてば入江の水もふかゝめの網代の濱によする沖つ波
三十うはせ河下の心も知らなくに深くも人の思はゆる哉
はり河
三十一唐衣ぬふはり河の青柳の糸よりかくる春はみにこむ
竹河
三十二もみぢ葉の流るゝ時は竹河の淵の緑も色かはりけり
わたらひ
三十三玉櫛笥二見の浦にすむ蜃の渡らひ草はみるめ也けり
みつ
三十四殊更に我は見つらむこ笹原さして問べき人はなく共
うきしま
三十五いざや將身の浮島に泊りなむ沈つゝのみよをふればうし
ながはま
三十六なが濱にゐて潮垂るゝ時鳥五月計りは曇にざりける
野にのぞみて
三十七女郎花いかに思はむ秋の野に一夜ぬにし花の名立に
同じ年九月二十日近江の守のおこせたる文に云へるやう[消息]あしたに法皇石山に詣でさせ給ふべし今日のうちに來れ屏風さうじに所々にたがひたるを夜のうちに書くべしその題も身づから書くべきなりとあり俄なることなれど驚きて罷れるみかど一夜はとまらせ給ひて其の日御舟にて歸らせ給ふとまらせ給へる所に御さうけのことどもあり即ち歌を奉る
三十八和泉にて沈果てぬと思しを今日ぞ近江に浮ぶべらなる
その御屏風の歌所々の題の趣に隨へり
三十九足引の山邊の道はいかなれやゆくと見れ共過がてにする
二十我よりも先に生ぬる松なれば千年の後に逢ざらめやは

三十一蜑の乗る棚無小舟跡もなく思ひし人に逢ふみつる哉
三十二漢籠やく蜑のたく火の烟こそ思はぬ方に立昇るらし
三十三山里に年はふれ共瀧つ瀬の早く我見し人だにもこす
三十四下にのみもえ渡れ共打はへて我思をば消つ人もなし
三十五紅葉散秋ならねば共さを鹿は山のね高く今もなかなむ
三十六紫の色しこければ藤の花松のみどりも移ろひにけり
三十七歸る雁くもぢの旅にふる時は何をか草の枕とはせむ
雜の歌これも題の趣による
三十八更科の山より外にてる月も慰めかねつこのごろの空
三十九霧の内の深山隠れの紅葉は日の光にぞ色は見えける
雪の内に懐を述ぶといふ題左近の中將に代りて
四十外にもや雪は降らむ今迄に春こぬ宿は花とだにみむ
延喜十八年八月十三日左大臣の家に八講するに佛法僧といふ鳥の鳴きければ詠みて奉る長歌
四十一足びきの み山にすらも 此の鳥は 谷にやはなく
いなかわば 繁きはやしも 多かるを 高きこずゑも
許多有と 羽うちはぶき 飛過きて 春なつふゆの
時も有を 君があきしも 紅葉ばの 唐くれなゐに
振出で、 鳴く音を里に 聞かせそめつる
四十二山に住み稀に聞ゆる鳥なれど里にも君が秋よりぞなく
四十三其日とも君は告しもせじ物を爭でか鳥の兼て知けむ
四十四法を思ふ心し深く入ぬれば里にも鳥の見ゆるなる覽
師走のつごもりのよるの鬼を
四十五鬼すらも都の内と長閑をぬきてや今宵人に見ゆらむ
同じ年九月二十四日殿上人紅葉見にいきけるに
左近の少將二人に代りて
四十六いつしかと待つ驗なし紅葉の己が散々成やしなまし
四十七宮人の數は知りにき女郎花誰こと問はゞ如何答へむ
四十八山を尋ぬる道にそうの家ありもみぢ葉ちりしきたりせざいに尾花風に靡きて人の招くに似たり
少將馬よりおりてよむ
四十九人知れぬ宿にな植そ花薄招けば止る我にやはあらぬ
そうに代りて返し
五十今よりは植こそ增さめ花薄穗に出る秋と人とまり鳧
菊の花さきたる所によるとまりて人々見る
五十一菊の花秋の野乍ら移ろはゞ夜深き色を今宵見ましや
同じ年の十月に菊の花の宴御息所たちの志給ふ

に女郎花のもとに菊の花あり水のほとりに影映りたり

菊の花惜む心は水底の影さへいろの深くもあるかな

同じ月の十九日乳母の命婦紅葉見に出でたりけるを歸るとて紅葉一枝折りて奉るこの歌をそへたり

今日の色のさし出て照す船岡の紅葉は最ど赤くを有ける

野にいでたりける人のいりに遅く歸れば

語るをも聞まほしきに秋の野の花見にいにし人のこぬ哉

人のむすめの裳きたる時に

此の春ぞ枝さしそむる行末は千年をかねて思ふ姫松

七日あしたに入に贈る

君に逢で一日二日に成ぬればけさ産屋の心地する

返し　貫之

逢見すて一日も君に習はねば織女よりも我ぞ優れる

同じ年の二月遠江守のせんに左近の少將に代りて

別るとも君を知らねば朝迄は散花をのみ惜みける哉

桂、櫻、藤の花尚亂れあひたり

桂より香を移しつゝ櫻花なほ後ろにも藤ぞ咲きける

暮の春ひんがし國へ行く人に別惜みて贈る

春雨に君をやりては逢坂の關の名だてに戀や渡らむ

春暮れてさびしき宿は徒然と庭白妙に花ぞ散りける

人目をも今は包まじ春霞野にも山にも名は立たばたて

千草にも霜にも映る菊の花一つ色にぞ月はそめける

色毎にみつ菊の花よると云て曉來なくも照す月かな

一本の菊にはあれ共露霜を分てこゝ〳〵色は染らし

今までに逢坂山の紅葉の散ぬは關やさへてとめける

菊の花折て夜更ぬ白露もわかで乍らも置やしつらむ

白妙の妹が袖しも秋の野にほに出で〳〵招く花薄かな

さやかにも照れる月哉菊の花晝みる如ぞ夜もみえける

秋の野に花見にくれば白露にしをにもわが濡にける哉

いかにして今日を留めむ惜と思ふ花のみ散て日は暮に鳧

春霞立山て野べにこしか共老て若菜は摘み心も無し

春くれば吹く風にさへ櫻花庭もはだらに雪は降つゝ

梅枝に雪の降れゝば孰をか花とはわきて折て翳さむ

宮のうちにて郭公を聞きて

久方の空近ければ郭公くもゐの聲のごほからぬかな

鶯の鳴く聞しかば梅花さけりと見るは雪にぞ有ける

年毎になけど驗もなきものを暮れゆく春を何呼子鳥

濁江におふる玉藻の水隱れて我戀らくを知人ぞなき

大井河せきて柵かけてのみおもふ心は留めかねつも

こゝも期も今日こそ聞かめ後はいかに明日共しらぬまぼろし

懐を逸ぶ

身をわぶる涙は今も和泉なる高師の浦に滿つる潮也

梅花唯にやは見る春雨にぬれ〳〵ぞ折やしてまし

波立てば沖の玉藻もよりくく思方より風も吹かなむ

蘆鶴はけふ霜ふれる色なれば鳴く聲さへは寒き也見

因幡の守の下るに

一日だに見ねば戀き君がいなば年の四年を爭で過さむ

時鳥夜深き聲は月まつと起ていをねぬ人ぞ聞きける

左馬頭の家にて三河守の馬のはなむけせしに詠める

名にし負へば遠からぬ共宮ぢ山越む手向の幣にせ君

くすり贈るとて

（歌欠）

素性法師集

木に雪の降りかゝるを見て

春たてば花とやみらむ白雪のかゝれる枝に鶯のなく

梅の花を折りて人のがりやるとて

よそにのみ哀とぞ見し梅花あかぬ色かは折て也けり

散とみて有べき物を梅の花うたて匂の袖にとまれる

梅の花折ればこぼれぬ我袖に匂は移れ家づとにせむ

山の櫻を見て

見てのみや人に語らむ櫻花手毎に折て家づとにせむ

見渡せば柳さくらをこきまぜて都ぞ春の錦なりける

待てと云に散らでし止る物ならば何を戀に思增まし

寛平の御時后宮の歌合に

花散らす風の宿りは誰かしる我に數へよ行て恨みむ

櫻花ちぐさながらにあだなれど誰かは春を恨果たる

花の木も今はほり植じ春立てば移ふ色に人習ひけり

朱雀院の御時北山にまかりて

いざけふは春の山べに交りなむ暮なげなの花の陰かは

春の歌よみてと人のいふに

いつ迄か野べに心のあくがれむ花し散ずば千代もへぬべし

音にのみ菊の白露よるは起て晝は思に消ぬべし

秋風の身に寒ければつれもなき人をも頼む暮る夜ごとに

傳くて夢にも人を見つるよは朝の床ぞおきうかりける

今こむといひし許に長月の有明の月を待ち出つる哉

秋風に山の木葉も色づけば人の心もうたがはれけり

底ひなき淵やは騒ぐ山河の淺き瀬にこそ上波はたて

便なく無名は沖に漕出なむ寄べ袂に見るかひもなし

思ふ共枯なむ人を如何せむ徒ず散ぬる花ごこそ見め

寛平の御時に屏風の歌かゝせ給ひしによみて奉りし

忘れ草何をかたねと思ひしにつれなき人の心也けり

三月に田うつを

山田すき春の種をば蒔しかど秋立身には成ぬこそ思ふ

逢事のかたの涙に袖朽ぬ蜑のたく火は胸に燃ゆれど

植て見る松と竹とに君が代の千年行かふ色も變らず

別なば後忍べとぞ空蟬のよを邊難みせめていはまし

敷妙の枕にだにもふさばこそ夢の魂しひ下に通はめ

山吹のきぬ多くきて又きたりし人に

山吹の花色衣ぬしやたれ問へど答へず口なしにして

朱雀院の御ともに仕うまつりて手向の山にて

手向にはつゝりの袖も着べきを紅葉にあける神や返さむ

執くにか世をば盡さむ心社野にも山にも惑へらなれ

歌風に誂へ附くる物ならば此一枝はよきよと云ましし

泉右大將の四十賀の屏風に

春日野に若菜摘つゝ萬代をいのる心は神ぞ知るらむ

延喜の御時月なみの屏風に

荒玉の年立ち歸るあしたより待たるゝものは鶯の聲

我のみやあはれと思はむ蟋蟀夕かげのやまと撫子

七月七日ひぐらしを

今宵こむ人には逢じ七夕の久しき事に宵えも社すれ

鶯の鳴きし日

木傳へば己が羽風に散花を誰におほせてこゝら鳴らむ

仁和寺の中將の御息所の家に歌合せむとせし時

に花のさかりに
二惜しと思ふ心は緑によられなむ散花毎に眞て留めむ
三思ふどち春の山べに打群てそこも知ぬ旅ねしてしが
杜鵑初めて鳴くをきゝて
四子規鳴聲聞けば味氣なくぬし定まらぬ戀せらるはた
ならの石上のかたにて子規鳴きしを聞きて
五石上ふるき都のほとゝぎす聲ばかりこそ昔なりけれ
六主知ぬ香こそ匂へれ秋の野に雁がぬぎかけし闇ぞも
七鏡山山掻曇りしぐれゝど紅葉あかくぞ秋は見えける
延喜の御時に御馬遣はして只今石山に參るべき
よし仰せごとあるに參りて
八望月の駒よりおそく出つれば迫る〳〵ぞ山は越つる
九逢事の形見をだにもえてしがな人は絶ゆ共見つゝ忍ばむ
十いざ櫻我も散なむ一盛りありなば人に憂目見えなむ
もとやすの親王五十賀し侍りける後ろの屏風に
十一古にありきあらずば知らねども千年の例君に初めむ
法皇寺めぐりし給ふ御伴にて
十二臥て思ひ起きて數ふる萬代を神ぞしるらむ我君の爲
かへでの枝を折りて
十三此御幸千歳かへてもあちせなむ斯る山臥時に逢べく
前齋院の后御ぐしおろして行はせ給ひける時か
の院の中島の松をけづりて書きつけ侍りける
十四音にきく松が浦嶋けふぞみるうべ心ある瀧は住けり
相坂にて庵しもにて住み侍りける時に道行く人
をみて
十五是や此行くも歸るも別れつゝ知も知らぬも逢坂の關
二條の后の御息所と聞えさせ給ひける時の御屏
風の繪に立田河の紅葉ながれたるかた書きたる
に
十六紅葉ばの流れてとまる湊には紅ふかき波や立つらむ
泉大將四十賀し給ひしに屏風の歌人々よみしに
○十七夕暮は匂ふ草木の無ればや散と見えにし紅葉止れる
花山にて人々酒たうべけるに
十八山守はいはいはなむ高砂の尾上の櫻折てかざゝむ
十九打頼む人の心のつらければ野にも山にもいざ隱なむ
二十つらしとてもうはの山に隱なば我れ山彦に泣て恨みむ
○廿一夕暮は匂ふ草木の無ればや散と見えにし紅葉止れる
花山にて人々酒たうべけるに
廿二山守はいはいはなむ高砂の尾上の櫻折てかざゝむ
廿三打頼む人の心のつらければ野にも山にもいざ隱なむ
廿四つらしとてもうはの山に隱なば我れ山彦に泣て恨みむ
廿五尋れば杉の野越て三輪山の末々まつぞ生添はりける
廿六松山の水は數とも思ほえず戀しき君にしき波ぞ立つ

音にのみならしの岡のさね葛人知ず社くらまほしけれ
君が爲我やはつらき唐衣かけてないひそいひ難きと
浦に燒藻に住つゝぞ燃渡る蜑のすさびに刈れるみるめは
猫おろす舟の綱手は遲くとも命の限たえじとぞ思ふ
○獨ねはいかなる人か戀はする見附てしがも畑もぞたつ
山吹の花の盛りは過にしをかへすゞ〳〵も鳴く蛙かな
思ふどち折て暮さむ岩躑躅いはぬ事をし云盡すとも
春だにも有し心を夏衣いかにうすきのけふ增るらむ
徒らに立歸りにし白波のなごりの袖のひる時ぞなき
いづ方によるとか知らむ靑柳のいと定なき人の心を
山吹の花の盛りは過にしをかへすゞ〳〵も鳴く蛙かな
思ふどち折て暮さむ岩躑躅いはぬ事をし云盡すとも
春だにも有し心を夏衣いかにうすきのけふ增るらむ
惜めどもとまらぬ春も有物をいはぬにきたる夏衣哉
昨日より變れる事もなけれ共けふよりや待秋の夕暮
いかほのやいかほの沼のいかにして戀き人を今一めみむ
○覺束なたれ島山と思ふにも鶯のひじきも鬼らざり鳧
見ぬ人を心一つに尋ればまだ知ずこそ戀しかりけれ
思ひやり心に叶ふ物ならば一日に千度君を見てまし
岩の上に苔の衣は後ろめた戀の涙はもらすもあらなむ
逢みては死せぬ身とぞ成ぬべき賴むるにだに延る命を
君により我身ぞつらき玉垂のみすはつらしと思ましやは
梅枝の移る計に非ず共よそにもをりてよを明さばや
戀しきを思ひ亂るゝ世中にふかき夢路を現ともがな
稀なればゆゝしと思し七夕にけふは劣れる身を如何せむ
戀しさの慰む宵の明ざらば暫しも物は思はざらまし
○近江のや深まの稻を刈つめて君が千年の有數にせむ
波間より大倉山に積む稻の積むとも盡じ君が千年は
法皇宮の瀧御覽じにおはしましゝに御ともにさ
ぶらひて瀧を題にて仰言にて
秋山に惑ふ心を山河の瀧のしら泡にけちやはてゝむ
良岑のつねより四十賀し侍りけるに遣しける
萬代を松にぞ君を祝つる千年の影に住まむと思へば
北山に松だけとりにまかりたりけるに
紅葉は袖にこき入てもて出なむ秋は限と見む人の爲
仙人の栖に菊わけて入りたる所繪に書きたるに
濡てほす山路の菊の露のまに爭でか我はちよを經ぬ覽
立田山こえ侍りしに時雨ふりしに
雨ふらば紅葉の影に隱れつゝ立田の山に隱れ果なむ
ふち井のためもと物より歸るに

雲と見て日を惑はすは流出て瀧の門より消る水かも
山をのみ哀れ〳〵と見てくれば鳴く蜩の聲ぞ悲しき
島の鴨八咫烏を題にて歌奉れと仰せられければ
たがらすを句のかみに据ゑしまのかもを句のし
もにすゑて題の心を
○山闇し旅の雲の間雁音のうたにもあるか栖變るも
天曆の御時御狩せさせ給ひて河内の國にやすま
せ給ふにまかり歸りなむと申しゝを惜ませ給ひ
て素性があざなをよしよりとつけさせ給ふに
○旅に出てをし言の葉に云しかどよしより思へ心碎けぬ
五月人々あれごとまらず
雨よりも袂なき身と成ぬべし絕ぬ涙に朽ぬべければ
御屏風にゆきくだる所
○白雪と身はふりぬ共新しき春に逢こそ嬉しかりけれ
春とのみ風はこしかど儚くて老ぞしにける岸の姫松
秋風の吹上の濱の白菊は波のよするか花の咲けるか
水尾の御門のかくれ給へるを白河にかへさの祓
へし侍りしに
人すまず荒たる宿をきてみれば今ぞ木葉は錦也ける
又こき紅葉を見るに折しも時雨のすれば
神無月時雨にそひて古鄕は紅葉の色もこそ增りけり
人々物語して世のはかなきことをいひて
皆人の昔語りに成行くに布留の社の身をいかにせむ
山寺に籠りて哀なることを云ひてよるとまりて
うち泣きなどし侍る程に雨降りければ
就をか雨ともわかむ山伏の落つる涙も夜はに社ふれ

猿丸大夫集

相知りて侍る人の物よりきてすゞに文をさして
これはいかゞ見ると云ひたるに詠みてやる
○白菅の眞野の萩原往さ來さ靡き社みらめ眞野の萩原
○唐人の衣そむてふ紫のこゝろにしみて思ほゆるかな
あだなる人のさすがに賴めばつれなくのみあれ
ば恨みて詠める

一皆人はことのみぞよき月草のうつし心は相も思はず
物思ひける折に郭公の鳴くを聞きて
二郭公鳴らむ里は行てしかしか鳴く聲を聞かば苦しも
相知りたる女の家の前を渡るとて草を結びて入
る丶
三妹がりと行過がてに草結ぶ風吹解くな逢はむ日迄に
名立ちける女に
四〇玄長鳥猶名山ゆすり行水の名のみ流れて戀渡るかも
五〇玄長鳥猶名のふし原青山にならむ時にを色は變らむ
春の夜の月をまつに山に隱れて心もとなきを詠
める
六〇椋橋の山をたかみかよごもりに出つる月の光乏しき
家に女郎花植ゑて詠める
七〇女郎花秋萩手折れ玉鉾の道行きづと丶乞はむ子が爲
女の許に
八〇玉櫛笥明まく惜しき可惜夜を妹にも逢ず明しつる哉
思ひかけたる人の許に
九〇梓弓末のたづきも知らねども心は君によりにける哉
一〇旭影匂へる山に照る月のいとみぬ君をやよしにして
語らひける人の遠く行きたりけるがもとに
一一郭公戀ひわびにけりますかゞみさらに今は見えこず
一二梓弓ひきつのべなる莫告藻の花咲迄に妹に逢ぬかも
一三相見ねば戀こそ勝れ水無瀬川何に深めて思初めけむ
相知れる人のさすがにわざとならで年頃になり
にけるに詠める
一四一昨年も去年も今年もはふ葛の下ゆたひつゝ有渡る頃
一五玉襷掛ねば苦しかけたればすぎて見まくの欲き君哉
一六出て行む人を留めむ方もなし隣の方に花もひぬかも
一七夕月夜さすや岡邊の松の葉のいつ共分ぬ戀もする哉
一八風を痛み寄せ來る波に漁する蜑少女子が裳裾濡しつ
山里にまかりけるに櫻の咲きたるを見て詠める
一九山高み人もすさめぬ櫻花痛くなわびそ我見はやさむ
二〇石走る瀧なくもがな櫻花手折りてもこむ見ぬ人の爲
二一折取らば惜げにも有を櫻花いざ宿借て散る迄は見む
雨の降りけるに山吹を折りて人のがり遣りける
二二春雨に匂へる色もあかなくに香さへ懷し山吹のはな
二三時鳥ながなく里の許多あれば猶疎まれぬ思ふ物から
秋の初めつかた物思ひ居りて詠める
二四大方の秋くるからに我身こそ侘しき物と思知りぬれ
二五秋萩のいろづきぬれば蓁我が身のごとや物は悲しき
女の許に
二六萩の花散る鹿小野の露霜に濡てや行かむさよは更く共
二七秋はきぬ紅葉は宿に降敷きぬ道踏わけて訪人もなし
山吹の花を見て
二八色も香も咲きにほふらむ橘の小島がさきの山吹の花
四月つごもりに郭公まつ
二九五月待つ山郭公うちはぶき今も鳴かなむこぞの古聲
忍びたる女に秋の頃はひ
三〇ほにも出ぬ山田をもると唐衣稻葉の露に濡ぬ日は無し
三一夕月夜あかつき山の朝影に我身はなりぬ戀の繁さに
三二漣のおほ山守は誰爲に今もしめゆふ君も有らなくに
三三誰が御幣ゆふつけ鳥か唐衣立田の山に打羽ぶきなく
文やりける女のつれなかりけるにやる
三四荒小田をあら鋤返し返しても見て社やまめ人の心を
三五遠近のたづきも知ぬ山中におぼつかなくも喚子鳥哉

家持集

早春

三六月よめば未だ冬なりしかすがに霞聳く春はきぬとか
三七古の人の植ゑけむ杉の葉に霞たなびく春ぞきぬらし
三八春霞立つ春日野の行き歸り我は遊ばむいや年のはに
三九うち靡き春はきぬらし我が宿は柳のうれに鶯鳴きつ
四〇寒さすき春はきぬらし年月は改まれども人は舊行く
一梅の花咲たる宿にふくめるは戀や離れる雪を待かも
二我香子に見せむと思し梅の花其とも見えず雪のふれば
三殘りたる雪に交れる梅の花早くな散そ雪はけぬとも
四我岡に盛に咲ける梅の花殘れる雪に亂れつゝもつるかも
五泡雪の日をへて消ず斯降れば梅の初花散りか過なむ
六雪の色をうばひて咲ける梅の花今盛也見む人もがな
七春の野に鳴くや鶯なつけむと我家の園に梅の花さく
八春くればまづ咲く宿の梅の花獨見つゝや春を暮さむ
九妹が爲ほつえの梅を手折とて下枝の露に濡にけるかも
一〇我宿に咲たる梅を月きよみ夜々見せむ君をこそまて
一一久方の月夜をきよみ梅の花心ひらけてむかし思ふ君
二きて見べき人も有なくに我宿の梅の初花散りぬ共よも
三我がかざす柳の絲を吹亂る風にや妹が梅の散るらむ
四打なびく春かと我は今日ぞ知る我黒髪に梅の花ちる
五春がすみ立ちし時より鶯の初聲するは春べにやなる
六淺綠染めかけたりと見る迄に春の柳は萌えにけるかも
七朝な〳〵我見る梅に鶯のきゐて鳴べく繁くはやなれ
八百敷の大宮人の鬘するしだり柳は見れど飽かぬかも
九青柳の絲より縣て春風の亂れぬ先に見む人もがな
一〇けふ更に君はな行そ春雨の心を人の知らざらなくに
一一春雨にあらそひかねて我宿の櫻の花は咲初めにけり
一二見わたせば春日の野べに霞立ち咲みだれたる櫻花哉
一三春雨のしき〳〵降るに高圓の山の櫻はいかゞ有らむ
一四足引の山のまてらす櫻花この春雨に咲きにけらしも
一五春の家の紅にほふ桃の花はなの名立に出で居たる妹
ある本に
一六春のその紅にほふ桃の花したてる道に出で立てる妹
一七山もせに咲る躑躅の憎からぬ君をいつしか行てはやみむ
一八我せこに我戀ふらくは奥山の躑躅の今日は盛也けり
一九春山は散過れども三輪山は未だつぼめる君待がてに
二〇つばな抜く淺茅が原のつば菜今盛にもしげき我が戀
二一山吹の花取持ちてつれもなく枯にし妹を思出るかも
二二山吹を宿に植つゝ見る時に思はやまず戀こそまされ
二三藤波の花の盛にかくこそは打めくりつゝ年に忍ばめ
二四藤波の花咲く見れば郭公鳴くべき折は近づきにけり
二五藤波の花の盛になりにけり奈良の都を思ひ出づや君
二六梅花春より先に咲しかど見る日は稀に雪の降れゝば
二七梅の花散りにし日より敷妙の枕も我は定めかねつも
二八しろ髪にさし惑はせる花の色を其なも梅と人はわかなむ
二九春風の吹くに先だつ梅の花君が爲にぞこき留めつる
三〇風まぜに雪は降るもみに倣す我いへの梅を花に散すな
三一雪寒み咲も開けぬ梅の花よし此頃はしかもあるがに
三二我宿の前の青柳風ふけば縺る人なしにぬきみだる糸
三三青柳の絲にあやしき散花を貫て留むる物とは無しに
三四折てしももて行き顔に櫻花咲ける山邊をわたる白雲
三五手もやまず手折置てむ櫻花散なむ後にかかぬ悔せじ

七行かむ人こむ人しのべ春がすみ立田の山の初櫻ばな
八故郷に花は散つゝ三吉野の山の櫻はまだ咲かすけり
九櫻花木高き枝の空にのみ見つゝや戀む折る術もなみ
〇九春の雨に匂へる色も飽なくに香さへ懐かし山吹の花
一君が爲山田の澤にゑぐつむと雪げの水に裳裾濡しつ

夏歌

二九春雨はふりやみぬなり郭公立田の山に今や鳴くらむ
三〇郭公待てども鳴ず菖蒲草玉にぬく日のまだ遠みかも
三一五月雨は空もとゞろに郭公夜深く鳴ついや寝難つる
三二誰をかは戀の山べの郭公さの枕にたび〳〵は鳴く
三九時鳥都へ行かば立ち歸り今きぬべしと妹につげよよ
三七時鳥山路に高く鳴く聲を我が獨寝に聞くがかひなき
三八東雲の東になれば郭公我待つかひはなかりけりやは
三九賀茂川の水底見えて照る月を行て見むとや夏祓する
〇〇卯の花の匂ふ月の月清みいねず聞けとや鳴く郭公
〇一卯花もまだ咲なくに郭公佐保の山べを來鳴き轟める
〇二わざも子ができる夏衣白妙に咲ける垣根の卯花やとき
〇三郭公待つに夜更ぬこの暮の雫をおほみ道やよくらむ
〇四夏山の樹をたかみ郭公鳴きてとよむる聲のはるけさ
〇五郭公一聲鳴ていぬる夜はいかでかは人いを安くぬる
〇六夏衣うたしめやまの郭公今はきとよめ立ち歸りなけ
〇七美くしと見るたびごとに撫子の花の盛は懐かしな君
〇八郭公思はずありき此暮のかくなる迄になどかき鳴ぬ
〇九神南備の磐瀬の森の郭公ならしの岡にいつか來鳴む
一〇春日野の藤散はて丶何をかも御狩の人の折て翳さむ
一一卯花の散らまく惜み郭公野にも山にも鳴とよむかも
一二郭公鳴きとよむなる橘のはなを散る里をみむ人もがな
一三此暮は夕闇なるを郭公いづくをいつと鳴き渡るらむ
一四獨ゐて物思ふときに郭公こゝを鳴き行く心あるらし
一五信濃なる須賀のあら野に郭公鳴聲聞けば時過にけり
一六君戀ふといも寝られぬに郭公青山べより鳴渡るなり
一七我宿の花たちばなに時鳥夜深く鳴けば戀まさるなり

秋歌

一神なびの三室の山の葛かづら裏吹返す秋はきにけり
九君故に我戀ひをれば我宿のすだれ動かし秋風ぞ吹く
〇二我妹子は衣にあらなむ秋風の寒き此頃下に着まし
秋風の寒き朝に笹のをか戀ふらむ君に衣着せよかし
三秋萩の咲出る野邊の夕露に濡つゝきませ夜は更ぬ共
三三秋萩の下葉たわゝに置露の今朝は明ぬと急ぎ出めや
三四玉に貫け消ずば消ず秋萩のうれも撓わに置ける白露
三五妹が家の門田を見むと打出て衣白くて照れる月かも
三六秋風の吹にし日より天の河瀬に出立て待つと告こせ
三七秋風の清きゆふべに天の川は舟こぎ渡せつきひと男
三八天の川波は立つとも我舟は急ぎ出なむ夜のふけぬ時
三九しる〳〵も逢見ぬ君は天川舟出はやもよ夜の更ぬ時
〇〇彦星の妻むかへ舟漕ぎくらし天の川瀬に霧立ち渡る
一一此夕降くる雨は天の川と〻く漕ぐ舟のかひのしづくか
二二天の川白波高く我戀ふる君が舟出は今日ぞすらしも
二三天のかは霧たちわたり七夕の雲の衣のなびく袖かも
二四銀河渡る瀬深み舟うけて漕ぎくる君がかち音聞けば
二五君が舟今こそ渡れ銀河きり立ちわたるこの河の瀬に
二六秋風に山飛び越る雁がねの聲遠ざかり雲がくれつゝ
二七此頃は朝げに聞けば足引の山を霧ましさを鹿ぞ鳴く
二八手に折ば袖さへ匂ふ女郎花其白露も散らまくをしも
二九殊更に衣はすらじ女郎花さが野の花に匂ひてを見む
〇〇秋萩の咲たる野べのさを鹿は散らまく惜み鳴と云物を
〇一我宿の萩の花咲り見にきませ今二日三日有ば散なむ
〇二眞葛原靡く秋風吹くからにあだの大野の萩の花散る
〇三秋の野の尾花が末の打なびき心は妹によりにし物を
〇四秋さればおく白露に我宿の淺茅がうれは色附にけり
〇五物思ふと隱のみゐてきて見れば春日の山は色附にけり
〇六雁音の鳴にしよりぞ春日なる三笠の山は色附にけり
〇七雁音を聞つるなべに高圓の野べの草葉ぞ色附にける
〇八秋萩の移ろふをしと鳴鹿の聲きく山は紅葉しにけり
〇九むば玉の夜の夢には見ゆ寛や袖干間なく我し戀れば
〇〇晴く鹿の聲打ふれば時は今は秋の半になりぬべら也
〇一此夕秋風吹きぬ白露にあまねく花はあすも咲かなむ
〇二春くれば霞に罩てみせざりし萩咲に見折て插頭さむ
〇三我宿に咲ける秋萩つねならば我待人に見せまし物を
〇四鶉鳴くふりにし里の秋萩を思ふ人どち逢見つるかな
〇五妹がひらくと結ぶと龍田山今ぞ紅葉の錦おりける
〇六飛鳥河紅葉ば流る葛城の山の木の葉は今か散らむ
〇七秋山に霜ふりおほひ木葉散る共に行とも我忘れめや
〇八紅葉を散す時雨の降なべに夜さへぞ寒き獨しぬれば
〇九雲隱れ鳴なる雁の行て見む秋の田のほも繁く思ほゆ
〇〇秋の田の假いほ作り我をれば衣手寒く露ぞおきける
〇一長月の時雨の雨にそぼちつゝ春日の山は色附にけり
〇二白露を玉にぬきて長月の有明の月は見れど飽ぬかも
〇三一年に二度行かぬ秋山に心にはあらず暮しつるかな
〇四時は今秋ぞと思へば衣手に吹くる風のしるくも有哉
〇五秋始めしかはいつと知ぬ月影の窓に入ても思ほゆる哉

冬歌

〇六神無月時雨に逢へる紅葉の吹かば散りなむ風の隨に
〇七紅葉は過まく惜しみ思へ共爭ふ今宵明ずもあらなむ
〇八夕されば衣手寒し三吉野の高間の山にみ雪降るらし
〇九まきもくの檜原も未だ曇ねば小松が原に淡雪ぞ降る
一〇冬されば衣手寒し高圓の山の木ごとに雪ぞ降るらし
一一いたくしも降らぬ雪故久方の天より空は曇合ひつゝ
一二泡雪の日毎〳〵に降敷けば奈良の都のおもほゆる哉
一三我せこを今や〳〵と出見れば泡雪降れり庭もほどろに
一四妹家路我惑はしつ久方の天きる雪のなべてふれゝば
一五妹が家路我忘れめや足引の山かき曇り雪は降るとも
一六筑波嶺のよそにのみてや有兼て雪げの水に泥みつる哉
一七足引の山に白きは我が宿に昨日の暮に降りし雪かも
一八松蔭の淺茅が上の白露を消さすて玉にぬく物にもが
一九高圓山岩根におふるすがの根も心々に降りおく白雪
二〇白雪の降置山を越るにも君を扯ないきのをに思へ
二一巻山の嶺の木葉に降雪の降りは增す共土に落ちめや
二二打靡ぶき鳥は鳴けども斯許り降白雪に君いまさめや
二三大宮の内にもとにも珍しく降れる白雪踏まく惜しも
二四さ夜更て見つゝや行む松浦なるさよ姫の子がひれ振山
二五橘は實さへ花さへ其葉さへ枝に霜降れど彌常葉の樹
二六今日降れる雪にいそひて我宿の古木の梅は花咲に見
二七我が宿の古木の上に降る雪を梅の花かと打見つる哉
二八打靡く春を近みかもはた玉の今宵の月よかすみたる哉
二九深雪降る冬は今日迄鶯の鳴かむ春日はあすに有らし
〇〇飛鳥川河音高しもば玉の夜風をさむみ雪ぞ降らし
〇一今更に待人こめや天の原ふりさけ見れば夜も更に見
〇二逢坂に有物ならなくに解衣の更なる戀も我はする哉
〇三草かけの新井の崎のかざ島を見つゝや君が山路越らむ
〇四住の江の二道を行道無しと人に知れぬる事いたき哉
〇五三河なる二道ゆより別るれば我身もあれも獨かもゐる
〇六照月を雲な隱しそ島陰に我が舟とめむ泊り知らずも
〇七三吉野の御船の山にゐる雲の常ならむ共我思はなくに
〇八足引の山すがのねを引見つゝ我兼言ど勤人にいふな

九九足引の山した風は吹かねども君がこぬ夜は秋寒しも

雜歌

〇〇戀しくばきまさぬ君が長月の紅葉の色の過来つる迄

一〇奥山の巖の苔の年久に見れども飽かぬ君にもある哉

二〇新らしき年の始にいや年に雪踏散らし常ならぬかも

三〇梅の花咲たる園の青柳をかづらにしつゝ遊び暮さむ

四〇春柳かづらに折りし梅の花たれか浮かべし盃の上に

五〇天地にあへ榮えむと大宮を仕へまつれば尊くも有か

六〇世中の常なきことは知るらむを心盡すな丈夫にして

七〇世中の常ならぬことかつ見ればいかに心は忍兼つゝ

八〇今よりは秋風寒く成なむをいかでか獨長き夜を寢む

九〇高圓の野邊の秋萩散さでは君が形見と見つゝ忍ばむ

一〇去年見てし秋の月夜は照せ共逢見し妹は彌遠ざかる

この歌人丸集にいでたり

一天地と共に久しくますらをと思ひて有し家の庭かも

二戀つゝも有むと思へどゆふは山隱れし君を忍兼つも

三佐保山に霧く霞見る毎に妹を戀つゝなかぬ日ぞなき

四御立せし島の荒磯を今見れば生ざりし草生にけるかも

五けふ〳〵と我待君は池水の影に変らぬ有といはめやも

六妹が名は千代に流さむ姫島の小松がうれに苔生る迄

七死ぬ覽と兼て知せば此海のありその濱は見せまし物を

八昨日こそ君はこましか思はずに濱松が枝の雲の隱く

九いつしかと待らむ妹に玉梓の言だに告す行し君かも

一〇唐衣戀しくあらばます鏡見ぬが時なくあらまし物を

一一君はいさ忘れやすらむ玉藻影に見えつゝ忘れぬ物を

一二七夕のふなのりすらし天の河清き月夜に雲立ち渡る

一三彦星の舟出てのちは天の河をしむ涙に水まさるらむ

一四天の河歸らむ空も思ほえず絶えぬ別と思ふものから

一五年によそふ我舟潜がむ天川風は吹くとも波立なゆめ

一六戀渡る年のわたりを七夕の片時もあかす別れぬる哉

一七君がくる今宵はまれに天河年月のみぞ渡るべらなる

一八銀河淺く踏みつゝ渡るせにかへる涙の淵となりつゝ

一九天の河霧立渡り玉櫛笥あけなば飽かす別れまくをし

二〇今日よりは天河原はあせなむ淵瀬ともなく唯渡りなむ

二一逢夜しも渡るとおもへば天河おり立よりぞ嬉かりける

二二鵲の橋づくるより天の河水もひなゝむ河わたりせむ

二三天漢川瀬の波の打はへて我が立待し今日ぞきにける

二四秋風に夜の更け行けば天河川瀬に波の立ぬこそまて

二五一年に七日の夜のみ逢事の戀も盡ねば夜ぞ更にける

二六天河せゞの白波さわぐなり我待つ君ぞ舟出すらしも

二七妹に逢はむ夜をかた待と久方の天河原に月出でにけり

二八唐衣たつたの山にあやしくもつゆりさせてふ蓼かな

二九蓼つゆりさせとぞ鳴なれど村衣持たる我は聞入れず

三〇蓼我がきぬつゆれわびことの宿も秋風よきす吹けり

三一久方の天の河原に舟うけて今宵や君が我が宿にこむ

三二天の河夜深く君が渡るとも人知ずとは思はざらなむ

三三七夕の逢夜のみこそ天の河渡る瀬有て君もはるれ有てへ

三四宵々に天の河原はならせ共ならふ年も有じとぞ思

三五明ぬやと間物ならば天河霧立ち未だ晴ずといはなむ

三六秋夜の庭の白露けさ見れば玉やしけると驚かれつゝ

三七我宿の尾花が末に白露の落ちし日よりぞ秋風の吹く

三八白露をけなくも消ずて玉に貫く人も有じを

三九白露をけなくも消ずて玉に貫く人も有じを

四〇秋風は日毎に吹ぬ高砂の尾上の萩の散らまく惜しみ

四一我せこが衣の裾を吹きかへしうら珍らしき秋の初風

四二秋風の吹に附てぞ思ほゆるさほの山邊は今やもみつる

四三我妹子が機より織し狩衣着せし日よりぞ秋風は吹く

四四我宿のわさ刈あげてにへす共君が使は只にはやらじ

四五秋風はこゝ吹來ぬ白妙の我がとき衣縫ふ人はなし

四六打はへてかげとぞ頼む嶺の松色ごる秋の風に移るな

四七佐保山の裖の紅葉散りぬべみ夜さへ見よと照す月影

四八我門の早田も未だ刈あへぬに雁て移ろふ神南備の杜

四九遅引の山田の稻も出にけり植しにあらぬ我刈にこむ

五〇いと早みまだきも刈か石上布留のわさ田も未出ぬを

五一秋の田のかりほの庵に雨降て衣手濡ぬほす人なしに

五二足曳の山田の稻は出ず共綱だにはへよもると知らなむ

五三秋きては見べき紅葉を霧籠り佐保の山べの晴る時なき

五四霧分て雁はきに鳧ひまもなく時雨や今は野べに濳がむ

五五秋霧の紛れに家路忘れてや思ぬ方によぎりしにけむ

五六綱代へと指てきつれど河霧のたつと紛れに道もゆかれず

五七雁がねの鳴なるなべに唐衣立田の山は紅葉しぬらむ

五八秋霧に妻まどはせる初鴈の雲がくれ行く聲の聞ゆる

五九天雲の上に鴈ぞ啼なる我宿の淺茅も未紅葉敢へなくに

六〇大空に鴈ぞ啼なる我宿の淺茅も未紅葉敢へなくに

六一雲のよそに鴈がね聞しより霰もふる寒き今宵か

六二山田守る田守のひたの心にて戀する鹿の聲ぞめづる

六三秋山に心のいれば御狩する鹿を奥までとむる也けり

六四きり〳〵す我宿近く夜は啼け盡はさわがし物語せむ

六五唐衣たつたの山にあやしくもつゆりさせてふ蓼かな

六六蓼つゆりさせとぞ鳴なれど村衣持たる我は聞入れず

六七蓼我がきぬつゆれわびことの宿も秋風よきす吹けり

六八秋の野に人まつ虫の聲聞かと行ていざ訪らはむ

六九秋の山影やかたよく鯛のこの暮ごとに啼渡るらむ

七〇秋の花色づく秋を徒らにあまた數へて年をへにける

七一いなび野の秋の尾花は招けど共女郎花にぞ心つきぬる

七二藤袴着る人のみやたちながら時雨の雨に濡し染つゝ

七三などてかたて吹秋風ぞ藤袴ぬきて貸べき妹しさざぬに

七四紅葉の時雨と降ればさす傘のうつき紅しみぬべら也

七五吹風に散だに惜き佐保山の紅葉攝れ時雨さへ降る

七六唐衣田の山のもみち葉ははた物もなき錦とぞ見る

七七我妹子が鏡の山のもみち葉の移る時にぞ物は悲しき

七八千鳥鳴く佐保の河霧立ぬらし山の紅葉は色變り行く

七九鵲の渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜は更にけり

八〇佐保山に錦織かく神無月時雨の雨をたてぬきにして

八一春を待つ梅の古枝に降雪は人の爲なる花にざりける

八二別行く冬の形見は黒髪に降も置ける雪の消ぬなり鳧

八三此時雨痛くな降そ我妹子がつとに見せむと紅葉折てむ

八四秋田苗刈はてつれど初霜のおくての稻は久しかり鳧

八五露霜もおけど戰げど竹の葉のいつも移ふ色ならなくに

八六落ちしける紅葉の色に白玉を貫てぞ亂る今朝の霰は

八七霰降り玉と見れどもひろはねど袖にも置ず消ぬべらし

八八夜を寒み朝戸を明て見渡せば庭もはだらに雪ぞ降

八九月夜には花とぞ見ゆる竹の上に降白雪を誰か拂はむ

九〇雪も降らば立も隱れも春日なる三笠の山の末の松原

九一新玉の年を渡りてあるが上に降積む雪の消えぬ白山

九二梅枝に降積雪を包みて君に見せむと取ればけぬべし

九三白雪の色わき難き梅が枝に友まつ雪ぞ消え殘りたる

九四白山の嶺なれば社白雪の鹿子まだらに降て見ゆらめ

九五冬の夜の寒きに〳〵我妹子が衣を擣の聲は聞つや

九六最上山すがけせしより心有て守り返せる矢形尾の鷹

九七橘を守部の家の門田わせ刈り時過ぎぬこしとやすき寢

九八長月の時雨の雨の山霧のけふき我胸誰を見ばやまむ

九九我宿の榎木つきの木つき毎に彼はやらむ心さたくな

一我妹子を戀ては久しうましたのあへ立花の苔生る迄
二妹がぬる床のあたりに岩潜る水にもがもや入れまくも
三久方の天の山に此ゆふべ霞たなびく春たちにけり
四郭公獨山べに啼くなれば我が打つけにこひさる也
五植て置し秋田刈迄見えこれば今朝初雁の音にぞ鳴ぬる
六吉野川岩切通し行く水の音にはたてじ戀は死ぬとも
七下にのみ戀れば苦し撫子の花に咲出でよ朝なく〳〵みむ
八玉鉾の遠道もこそ人はゆけなどか今のま戀しかる覽
九彦星の妻よぶ舟の引綱の空にたえむと我思はなくに
〇折て見ば落ぞしぬべき秋萩の枝も撓わに置ける白露
一萩の花散る覽小野の露霜に濡てを行むさ夜は更ぬ其
二今もかも咲き匂ふらむ立花のこ島がさきの山吹の花
三石ばしる瀧なくもがな櫻花手折てもこむ見ぬ人の爲
四白波のこすといふ方に着ぬれば急ぐ嬉しきみつの濱松
五後れ居てあればや戀の春霞たなびく山を君が越ぬる
六くしげなる鏡の山を越え行けば我ら戀しき妹が姿か
七その原の山をいくかと歎くまに君も我身も盛過行く
八足引の山のかげ草結び置て戀や渡らむ逢ふ由もなみ
九秋萩の花咲に鳧手折ても見れども飽ぬ君にし非ねば
〇家路には石ふむ山も無物を我待君はうまのつまづき
一白眞弓いつもの山の常磐なる命かあやな戀つゝ有む
二けひが家にあれ惑はめや足引の山掻曇り雪は降とも
三小夜更て見つゝや行かむ松浦なる小夜姫の子がひれ振の山
四淺み社袖はひづらめ涙川身さへ流ると聞かば賴まむ
五寢ぬる夜の夢をはかなみ睡めば彌はかなにも成增哉
六大幣と名にこそ立てれ流ても遂に寄瀨は有りてふ物を
七月や非ぬ春や昔の春ならぬ我身一つは元の身にして
八宵の間にはや慰めよ石上ふりにし床も打ち拂ふべく
九伊勢の海に浮ぶ蠏とも成にしが波掻分てみるめ潜かむ
〇春日野のわか紫のすり衣信夫の亂れかぎり知られず
一秋の野に笹分し朝の袖よりも逢でこし夜ぞひち增ける
二今迄に忘れぬ人は世にも有じ己が樣々年の經ぬれば
三數々に思ひ思はずとひ難み身を知る雨は降ぞ增れる
四かきくらす心の闇に惑ひにき夢現とはよひと定めよ
五人知れぬ我が通路の關守は宵々毎にうちも寢なゝむ
六出てくる跡だに未變らぬに誰が通路と今はなるらむ
七厭てば何か別の惜からむ有りしに勝る今日は悲しも
八飽なくにまだきも月の隱るか山端逃て入れずもあらなむ
九大方は月をもめでしこれぞ此積れば人の老となる物
〇大原や小鹽の山も今日こそは神代の事も思出づらめ
一今ぞ知る苦しき物と人待む里をば枯ず訪ふべかり晃
二住わびぬ今は限と山里に身を隱すべき宿もとめてむ
三晴るゝ夜の星か河べの螢かも我住む方の蚤の焚火か
四大井河浮ぶ鵜舟の篝火に小倉の山も名のみなりけり
五忘れては夢かとぞ思ふ思きや雪踏分て君を見むとは
六世中にさらぬ別の無もがな千代もと祈る人の子の爲
七年だにも十とて四はへにけるを幾度人を賴みきぬ覽
八背くとて雲には乘ぬ物なれど世の憂事ぞよそに成てふ
九紫の色濃き時はめも遙に野なる草木ぞ分ずりける
〇拔亂る人こそ有らし白玉のまなくも散か袖の狹きに
一年をへて住こし里を出ていなば最ど深草のとや成なむ
二時知ぬ山は富士のねいつとてか鹿子斑に雪の降らむ
三暮ぬとて寢て行べくも非なくに泣々も猶歸る勝れり
四鴈なきて菊の花咲く秋はあれど春は海べに住吉の濱
五難波江を今日社から浦に住む是や此よを憂み渡る舟
六唐衣きつゝ馴れにし妻し有れば遙々きぬる旅をしぞ思
七名にしおはゞいざ言問む都鳥我思ふ人は有や無やと
八狩暮し七夕つめに宿からむ天の河原に我はきにけり
九行歸り空にのみしてふるとは我居る山の風早みなり
〇君がなも我も昔の宮ながら變れる物は年にぞ有ける
一いまのとあるは入道のなり
親の思ひにて山寺に籠れぬる幾つにてと人尋ね
たりける返事
二藤衣人の袂と見しものをおのが涙になが
女をなくなして家に歸りてすみし所を見て
三立寄らむ方も知れず三瀨河空しきことになみ噉げば

業平集

兼輔集

本云業平朝臣集歌四十七首內不入于物歌五首有之歟又古今以下至于續古今入集之歌三十四首編此歌集其外伊勢物語歌多不載經披閱之次故註之

正月一日しれりける人のひと集れりける所にて
〇新しき年の始のうれしきは舊き人とぢあへる也けり
春雨のふる日濁れる水に花のちりかゝりたるに
一にはたづみこの本近く流ずば泡沫花を有りとみましや
亭子院の帝の大內山におはしますにうちの御使
に參りて
二白雲の九重にしも立つるは大內山といへばなりけり
幽仙法師のとし久しく御導師つかうまつりて律
師になりたるあしたに
三足引の山のかけはし踏登りけふこそ嶺の花は折らめ
この律師に代りてそうせる
四日の光あたる旦はいたゞきの雪こそ解て袖濡しけれ
女
五忘れなむ我を恨むな郭公人の秋には逢はむともせず
返し
六忘なば誰かは人を怨べきうきに後れてしるは我かは
男
七三熊野の浦の濱ゆふ夕されば我も偏に怨みやはせし
又返し
八東雲の明暮君は忘れけりいつとも分かぬ我ぞ悲しき
ふるき式部卿宮いまの式部卿宮にて物語し給ひ
けるに哀れなることも見むかし
九君がなも我も昔の宮ながら變れる物は年にぞ有ける
いまのとあるは入道のなり
親の思ひにて山寺に籠れぬる幾つにてと人尋ね
たりける返事
〇藤衣人の袂と見しものをおのが涙になが
女をなくなして家に歸りてすみし所を見て
一立寄らむ方も知れず三瀨河空しきことになみ噉げば

思にて人の家に宿れるに其家に忘草の有ければ
九なき人を忘れ兼ては忘草多かる宿にやどりをぞする
返しあるじなる人
三九片時も見て慰めき昔よりうれへ忘るゝ草といふめり
思ひなりけるをしば〳〵訪ひける程にかくといふに慰むといひたりければ此のとぶらふ人
四〇訪毎に名草の濱の慰まば波のよる間も非じとぞ思ふ
その返しに
四一白波のよる〳〵毎に慰まば袖の干る間は我も知りなむ
八月ばかり親の服にてえ逢ふまじかりける人
四二墨染の衣衣な〳〵隔てつゝ覚つかなしや秋を暮さむ
服にて人のとぶらひにおこせたりければ
四三今はとて惜き乍も藤衣ぬぎ捨てつらむことの儚なさ
返し
八九藤衣うきを限にはつれつゝ涙の玉をぬきてかしつる
藤原のさねきが藏人にてかうぶり給はりて明日おりなむとしける夜
九九むば玉の今宵計ぞあけ衣明なば人をよそにこそ見め
あだなりける男の扇をやりける代りて
〇〇歎ならぬ身は我からの過になしてだに社君を忘れめ
神南備のすけもちつかさうし近きいもとにさう
神南備の岩瀬の杜の岩橋は戀し積れる我かとや思ふ
かざさして入れざりける所にて
一〇神南備の岩瀬の杜の岩橋は戀し積れる我かとや思ふ
二〇秋夜に非ぬ鎖しの侘しきは嘆けど明けぬ物にざりける
親の思ひにて山寺に籠れるにいづくにてと人の
尋ねたりける返事に
三〇足引の山べにいまは墨染の衣の袖のひるよしもなし
三一親なきちごのたまのくさにて舞ひけるを見て
四〇人の子のまふ〳〵親の求むれど魂なき骸は見え難き哉
女にさうぞく贈りけるものこしにつけゝる
四一一節をのどけく見れば烏玉の夜の衣も返すまじ知れ
女の人の許に文やらむとて書きてはやり〳〵しけるを聞きて
九〇思ふこと云ふと難み徒にかきてやるをぞ慰めにする
女恨みてなきけるに
七〇岩衛綾なかるねは何故ぞなかすの濱の鳴す待ちなむ
返し
三五物思ふを名草の濱の濱千鳥慰むるにぞなき増りける
月隔たりにけりと女の云ひおこせたりければ
三六浮雲に身をしなさねば久方の月隔つ共思はざりけり
おほやけの御使に齋宮にまで返りなむとてふる
く知れりける女といふはさいぐの内侍なり
〇一人はかる心の内はきたなくて清き渚を爭で行きけむ
方違へける所に枕いだしたりけるを返すとて書
きつけ
一敷妙の枕に塵のゐましかば立返りにぞ人の訪はまし
返しほどものへいにける人になりにける
二君がためうち拂ひつる敷妙の枕の塵にけがれぬる哉
女に
三冬の日は眺むるまにも呉竹の臥ぞわびしき繁き節は
女の許よりつとめて出て程なく雪の降りければ
四一白雪とけさは積れる思哉逢でふる夜の程もへなくに
これを見て女のはれにめでたしと思ひけり
賭弓の還饗の所にあひける折
五一古郷の三笠の山は遠けれど聲は昔のうとからぬかな
近衛司はなれての頃なり
梅の花おもしろかりけるとて人の來たりければ
六一宿近く匂はざりせば梅の花風の便りに君を見ましや
そのまらうどは右のおとゞなり
玄上の宰相の右近中將にて紅梅を折りておこせ
たりける
七一君が爲我が折る宿の梅の花いろにぞいづる深き心は
八一色も香も殊に匂へる梅の花散る疑ひのあるや何なる
いと忍びたる移香の人しるばかりありければそ
の女に
九一梅の花立寄る計ありしより人の尤むる香にぞ泌ぬる
これも女に
一〇元の香のあるだにあるを梅の花最ど匂の遙かなる哉
屏風に
一一青柳の眉に籠れる糸なれば春のくるにぞ色増りける
三條の大臣の交野に狩し給ふにおひてきて
一二君が行方の遙に聞しかど慕へばきぬる物にぞ有ける
急ぐことありてさきだちて歸るにかの水無瀬と
いふ所に花おもしろかりけるに付けて
一三櫻花匂ふを見つゝ歸るには靜心なきものにざりける
道に歸りておとゞの返し
一四立返り花をぞ我はうらみこし人の心の長閑ならねば
櫻の花の散りけるがみかは水にいりければ
枇杷大臣
一五散花をあだなる物と云なれば斯てのみ社見べかりけれ
そのついでに
一六拾ひ置て見る人し有れば櫻花取ての後の悔げもなし
櫻の花散るを見て
一七雪のごと散りくる春の櫻花春は殘れる心ちこそすれ
返し
一八櫻花しらがにまがふ老人の宿には春の雪やたえせじ
式部卿宮うせ給ひての頃山里より櫻の花をさし
て
三條のおとゞ
一九咲匂ふかげまつ程の山櫻人の世よりは久しかりけり
あだなりける女に花折りてやりける
〇三明日知らぬ物と知る〳〵櫻花散ぬ限は見まく欲さに
庭に佇みけるに八重山吹の花のもとにて
二一我がきたる一重衣は山吹の八重の色にも劣らざり鬼
二二梔子の色好といふなは立たで井手の山吹盛すぐすな
これは井手と云ふみかはやうとに山吹の花持た
せて色めきたる人にやるべし
二三逢ふ事を今宵〳〵と頼めずば中々春の夢も見てまし
二四春雨の降るに脱たる簑蟲のつけたる枝を誰か折つる
二五諸共に我がをる宿の梅の花ふかぬ匂を誰に見せまし
京極家の藤の賀彌生晦にし給ふに三條おとゞ
二六限なき名におふ藤の花なれば底ひも知ぬ色の深さよ
返しあるじ
二七色深く匂ひしことを藤波の立も返らず君とまれとか
また返し
二八倦ぬまに君返らずば藤の花かけて更にや戀渡るべき
おとゞ又
二九昨日みし花の顔とて今朝見れば寢てこそ更に色増けれ
返し
三〇徒にあけばあやなし時鳥鳴くを待とて君をとゞめむ
枇杷殿にまでたりければ昔物語し給ふとて北面
によび合せてふるごともありける中に
一四古へのこと語らへば時鳥いかにしてかは古聲のする

物思へる程に郭公を聞きて
二郭公なきのみつたる夏山に繁くも物を思ふ頃かな
桂の御息所おはやけに参らせ給ふことおそしとて恨みさせ給へば
三恨むべき程ならなくに郭公五月待間の年にぞ有らし
おほやけ所に忍びて人の許にきける男のえ隠れ敢へで人に見付けられてそれは空ごとゝのゝしるを聞きて
四人知れぬ宿に住せば郭公うき五月雨は知れざらまし
平のながきが播磨より上り沙汰することありてなむ今までこぬと云へる返事に
五郭公なきふる里の繁ければ山べに聲のせぬもとわり
山里にすむ頃なむ男の許より女の許に扇えたる人に代りて
六嬉しくていとゞ行末恨しきは秋よりさきの扇也けり
七日うへのさぶらひに人々歌よみけるに
七七夕を渡して後は天の川波たかきまで風も吹かなむ
ありゝて七日きたりける人に云ひいたす
八戀渡る織女にあらばこそ今日しも人に逢むと思はめ
常に逢ひ染めたりける人にほかにて
九七夕に我がかす物は又もなし今宵計のあはぬのみ也
まらうどの急ぎ立つをとゞむとて
〇一〇七夕に人の物かす今宵さへ出ては痛く急がざらなむ
女に
一一人知れず思ふ心は秋萩の下葉の色に出でつべらなり
女に扇やるとて
二二吹風を疎まざらなむ秋の夜のこそ睦じき知べ也けれ
殿上の人々集りて野べに出でむと定めたる日
三三女郎花思なわびそ諸共に月もすぐさず群てとふべし
御かどの故内侍の督の四十賀せさせ給ふ御扉風
に雁の歸る所を
四四白雲の中に紛ひて行く雁も聲は紛はぬ物にざりける
女のもとに
五五いで人の思ふと云し言の葉は時雨と共に散やしぬ覽
返し
六六初時雨降しそむれば紅葉ばの色のみ増る頃と社見れ
七七冬の夜の涙に凍る我袖の心解けても見えしころ哉
又女に五節の日なり

八八いつとても春くるとの無身には百ぞ増らむ解む物かは
四日ばかり外にありて常に相そひたりける人に
九九斧の柄も朽やしぬ覽逢との稍ふるとも久しと思へば
〇一〇試に獨見るよの夢にだに見ねば侘しき物にざりける
いと忍びたりける女くちなし色のきぬかりたりけるを
返すとて
一一語へどいふ口なしの色もなくたてる衣はかひ無り鳧
黄名むきと云ひける人のうまといふ女すみける
にかたきになりにけるにかく云ひやれとて
二二駒草の爲と覺ゆる草葉のむきとやいはゞ人の刈らむ
覽しふく山のもとにて
三三嵐吹く山下とよみ鳴く鹿の妻戀ふるねに我ぞ泣ぬる
四四春霞立ちつる方を詠めつゝ空なる戀も我はするかな
五五逢見つゝ別るゝ方にあるものを何言の葉を慰にせむ
これはよばよ女の人の國へいきけるに在原のとしきが藏人よりかうぶり給はりてやりける
六六郭公なく東雲のあけごろもふるき心を忘れざらなむ
藤原のはるかたかうぶり給はりて近江守になりて下るにめ元むとてまつにこずなりにければ
七七この人を待秋風の寢覺には我さへあやな旅心ちする
逢坂の家かりてそれよりはるかたかいて立つに
八八逢阪の關に我宿なかりせば別れの後は頼まざらまし
大江の千古が白山にて出でけるに別を惜みて
九九思遣る越の白山知らねども雪のまに〳〵跡は尋ねむ
美濃へいきけるにきぬやるとて
〇一〇諸共に惜む別の唐衣かたみばかりぞまづそぼちける
一一思遣る心し先に立ねばとまる我身は有かひもなし
あふきぬさにやるとて
二一風にしも告つる幣は道のべの手向に飽ぬ神なかれぞ
先帝かくれさせ給ひて三條のおとゞにまたすこ
れば　おとゞ
これは兼輔
三一傳くてよにふるよりは山科の宮の草木とならましを
四一人の世の思ふに叶ふ物ならば我身は君に後れましやは
五一山科の宮の草木と君ならば我も雫にぬるばかりなり
年かへりて正月一日　おとゞ
六一徒に今日や暮れなむあたらしき年の始は昔ながらに
返し

七一なく涙ふりにし年の衣手は改まれども返さざりけり
また　おとゞ
八一み山には見るべき君が無物を常に思てや春もきぬ覽
三月つごもりに　おとゞ
九一櫻ちる春の末には成にけりあやめも知ぬ詠せしまに
〇二春深く散りかふ花を數にても取敢へぬ物は涙也けり
帝の御服に親のを重ねて貫之が來たりけるに詠
みてやりける
一二一重だにきるは侘しき藤衣重ぬる秋を思ひやらなむ
山里にて
二二足引の山べにをれば白雲の立ゐる度に物をこそ思へ
三二朝夕の身には添へ共あら玉の年積りゆく我ぞ悲しき
四二命あらばあらじ〳〵と思ふ世に身の行末は誰か知覽
子の悲しきとを集りて云ひければ、中納言
五二人の親の心は闇に非ね共子を思ふ道に惑ひぬる哉
六二子の爲に殘す命もへてしがな老て先立つ否びざるべく
嶮岨の行幸のついでに
七二年たけて逢つる事を數ふれば我も翁に成ぞしにける
こ内侍のかみの
八二時雨する音はすれ共呉竹のなど世と共に色は變らぬ
神無月二つある年御前の菊の賀に
九二神無月二つある年の時雨には猶と聞ぞ色こかりける
三〇秋長谷にまうでたりけるに紅葉の流るゝを見て
一〇唐錦洗ふと見ゆる立田川やまとの國の幣にぞ有ける
返し
二〇一紅葉ばの己が取々別るれど同じ方にぞ風は吹きける
三〇二數ならぬ身は我からの過に倣てだにこそ君は忘れめ
もんさして明けざりける所にて
四〇三秋夜に有ぬ銷しの侘しきは歎けど明ぬ物にぞ有ける
男の許より櫛えたりける女の詠ませける
五〇四忘れける人の形見はむば玉の我黒髪にさして社知れ
女にさうぞくして贈りけるにもの腰につけゝる
六〇五結ぶをの解けてみたれば島玉の夜の衣を返すまと知れ
人の許に文おこすとてよきてはやらすとて
七〇六思ふ事いふと難み徒にかきてやるをぞ形見にはする
女の恨みて泣きければ
八〇七岩衝綾なかるねは行末のなかすの濱の鳴すもあらなむ
おほやけつかひにて伊勢の齋宮に下り深く知り

たりける女にもいはさ宮のうちなるべし
八人はかる心の内はきたなくて清き渚を爭ですみけむ
返事
九誰が爲に我は命をながしまの浦に宿りをしつゝかはこし
一〇千早振神の社のゆふばかり水のとゞえて祈るめる哉
ひんがし
一一我はひむかしらの白くなる迄に年月ふ共逢ず成なば
たつみ
一二竜立つ峯や靡くも尋ねみむ花の遠目をまきらはす哉
みなみ
一三並々の人並ならば住江の松とも云に出ていなましを
ひつじさる
一四陸奥の白川越て相逢ひつしさえ〳〵もゆけど遙けき
にし
一五忘れにしさきを憂しとは思へども心は雲の打忍ぶ哉
いぬゐ
一六今はいぬ井邊の松の生ぬ覺年月ふ共まちとけなゝむ
きた
一七敷妙の枕に涙せかれつゝ夢とだに見ぬ頃にも有かな
うしとら
一八憎かりし人のあたりは懶し元如
どらばとらなむ玉のをにして
きのと
一九二人寢し床にて深く契りてき長閑に我を打頼めとて
ひのえ
二〇箒木のと歸る山の椎の葉は常磐に枯れぬ中を頼まむ
ひのと
一夕されば逢見べきを春の日の疾暮ぬ社侘しかりけれ
つちのえ
二風寒み衣につくる槌の柄のをれぬ計に音のするかな
つちのと
二門田刈りせきのふかりそ思しをひづちの疾も生にける哉
かのえ
二四梅の花散れは二字憎からすかの枝折りて家づとにせむ
かのと
二五さをしかの友迷はせる聲す也妻や戀しき秋の山べに
みづのえ
二六淀川や過てあなたにある水のえ社まだ見ね駒の立ども
みづのと

一七別れても猶忘られずうち忍びとく廻りこよ空の浮雲
一夜めぐりこそおほかれ
一八出立ば後めたなくある人よ廻りに据てみる由もがな
但馬の國に下るとて二見の浦に宿りて
一九世の常に聞くだにあるを郭公なき人戀ふる折々の聲
他本歌
近衛の司離れて後まへに紅梅を植ゑて花の遲く
咲きければ
二〇宿近く移して植ゑしかひもなく待遠にのみ匂ふ花哉
返し
二一夜のみ寢てし歸らば藤衣心とけての色みせむやは
七月六日
二二早晩と待たく心を壓に揚げて天の河原を今日や渡らむ
七月七日歌よみける所にいきて
二三天の河淺瀬白波通りつゝ渡り果ねばあけぞしにける
返し、女
二四今宵かす七夕つめに身を替ば明ば返さむ事を社思へ
とのかへし
二五川霧のたちし返せば水底に影見る人も非じとぞ思ふ
かへし人に代りて
二六初時雨ふるに濡つる我袖のひるま計をみぬぞ侘しき
こ内侍のみかの住み給ひし時藤壺にて菊の賀御
門のせさせ給ひけるに
二七紫の一もと菊に萬代をむさしのにこそ頼むべらなれ
早うなくなりにける人と二字諸共に逍遙せし所を
しくなりて見て久
二八轉寢の現に物の悲しきは昔の野べを見ればなりけり
をとこ
二九三熊野の浦の濱ゆふもゝかさね心はあれど逢ぬ君哉
雨ふるとてこぬ男を恨みければ
三〇思ふ事ならす乍に世中にふればや雨とわが障りけむ
女に
三一逢るみで君が消なば今日計千尋の濱の名を流さなむ
女
三二憂身とて雪降盡に消にしを人に問れむ玉とし見む
返し
三三ふりもせぬ君が雪解の雫ゆゑ鉄にとけぬ氷しにけり
三四逢事をいつしかとのみ思ひつゝ暮す心は怪しかり鳧

常にあひ知りたりける女のいかゞありけむふす
べければ
三五東路の有か無かを知らぬ間は厭に似たる物にぞ有ける
但馬の國に下るとて二見の浦に宿りて
三六夕月夜覺束なきを玉櫛笥二見の浦はあけてこそみめ
人のはらからの許へいきけるに代りて
三七一つすにかへりはるれど濱衛暫しも立は侘しかり鳧
式部卿宮うせさせ給へる頃
三八今はとて風まつ程の櫻花人の世よりは久しかりけり
先帝のおりゐさせ給ひけるに　三條の大臣
三九變りなむ世には爭でか住ふべき思遣れ共ゆかぬ心を

敦忠集

忍びたる人に
一〇逢事をいざほに出なむ花三字忽果つべき物ならなくに
絶えたる人の許に花をつみて
一一心にも非で有ふる年月の今日迄はなどつみてける哉
あだ名立つ人いとむくつけし物をだにいはじと
あれば
一二忍ても爭でか問ぬ濡衣を名にのみたちてやまむとやする
返し
一三なだに立つ蜑の濡衣悔きをほさではやまむ物ならなくに
又
一四衣をうたる蜑の濡衣同じ名を思返さできる由もがな
また
一五五月雨の夜毎なきつゝ郭公袖のひるまもなきぞ悲き
やんごとなき人に
一六雲居にてくもゐに見ゆる鵲の橋を渡るとと夢に見し哉
ちかもりからものゝ使にくだるにはにかねの
火打をほくそにちんをしてしのぶをすりたる布
の袋に
一七打付に思ひ出づとや古郷の忍草にてすれるなりけり
醍醐の帝におくれ奉りて
一八君なくて立朝霧は藤衣いけさへきるぞ悲しかりける

物へ行く人に扇に
九四旅遠く別るゝ人を思ふには心の色ぞあらはれにける
○五我一つたいふる風を八十島の松の嵐にあふぎ比べよ
御くしげ殿に又の日
一〇五今日そへに暮ざらめやはと思へ共堪ぬは人の心也
近江のかういに
一〇三三輪の山かひ無り鳧我宿の入江の松は切やしてまし
一條の君のつとめて上よりおるゝにさしむかひ
給ひければ、女
一〇二白露の急きおきつる朝貌をみつとも人に夢に語るな
返し
一〇一朝顔を朝毎に見物ならば君より外に誰にかはいはむ
御くしげ殿に
一〇〇朝々置積む霜の淺からで心解けたるいはねてしがな
いかでと思ふ人のこと人に定まりたるをみなへ
しにさして
九九二葉より頼みし物を女郎花人の垣ほに生ひにける哉
年月をへて契りながらさもあらぬ人に
九七人知れず思ふ心は年をへて何のかひなく成ぬべき哉
人にいひうとめられてかへり言せぬ人に
九六うきとの繁さ増れる夏山の下行く水もあとは通はず
はじめの北の方恨み給ひて
九五世中にまた白雲の山のはにかゝるやつらき心なる覽
すけまさの母君産みおきて失せたるをばのも
とに養ふが二つばかりなるを見におはしたるに
物語など聞えけるにいみじう泣き給ひてちごの
名はあづまとなむいひける
○九四睦言もまだ云出でゝ別にし人の形見はあづま也ける
齋宮とよをへて聞えかはし給ひける始にや
一下にのみ流れわたるは冬河の凍れる水と我と也けり
返し
二心から人遣ならぬ水なれば流れわぶらむともとわり
また
三陰にのみ殘れる雪の消果ぬ先にも人の逢見てしがな
返し
四光見ぬ陰に習へる雪なれば逢見むからに消ぞ増らむ
又
露ながら野べの花をば折ねどもたえす袂を絞る頃哉

露にだにおほせぬせまし斯く計照日に濡る袖も有よを
さりともと思心に諜られて世にも今日迄生ける命か
返し
頼むにも命の懸る物ならば千年も斯てあらむとを思へ
又
いつしかと思心のなき人や止らぬ春を侘しとは思ふ
○野分して白波立む時だにもすぐさす君に逢見てしがな
一松山も越ゆと云なる白波の立む月とは懸すもあらなむ
又
二強てのみ我身をふれば一つみも劣らぬ物は涙也けり
返し
三せき敢ぬ涙なれども我を君今日は心のふるは増れり
服にやおはしけむ
四一重だにきるは侘しき藤衣此事をさへ重ねてぞ思ふ
五きて憂しと思ふかときぞ藤衣重てみつは重さ増れる
又
六世と共に晴ぬ涙に障なばよそにのみふる身とや成なむ
七世中を侘る涙は一つにていかでこゝらの物思ふらむ
返し
八誰かわが身を二にて物を思ふ幾ら計をこゝらと云らむ
古き人になむかへりてとゝき給へるけしきなる
に
九今はとて春の別に鶯のふるすみけるを悔しとぞ思ふ
長雨の頃
○我のみは夏の詠はせざりけり大空さへや物を思らむ
一物思なくて詠むる大空のうち九の頃ときくかひのなさ
又
二いつとなく靜心なき我戀の梅雨にしも亂れそむらむ
程へて音もし給はざりければ宮より
三古のことかたらひし郭公いづれの里に長居しぬらむ
返し
四長らへてへにける里は時鳥道の程だに覺えざりけり
又
五五月雨は過ぬと思ふ郭公なほ世中を鳴きつゝやへむ

公忠集

（春）

延喜の御時五位藏人なりけるを御讓位にあひて
離れけれど朱雀院御上承平八年十一月にかへり
なりてのあくる年の正月の御遊びのついでに梅
の花を折りて
六八百敷にかはらぬ物は梅の花折りてかざせる匂也けり
枇杷のおとゞ左大臣になり給へる御よろこびに
おほき大臣わたらせ給へる日御あるじありてが
はらけたび〳〵になりてあるじもまらうども歌
よみ給ふに
七八色も香も今年の春は梅の花二たび匂ふ心ちこそすれ
入八紅にゆきゝの程は遠けれど梅のうへには通ふべら也
朱雀院の御かごのわらはにおはしましける時膝
の上に御手づから梅の花をかうぶりに挿させ給
ひてかしらもたげざらむさきに歌よめと仰せら
れければおきあがるまゝに
九八百敷の梅の花笠さす時は天の下こそうしろやすけれ
南殿の御前の櫻の花の散るをみて
○九殿守のともの御奴心あらばこの春ばかり朝清めすな
延長八年三月二十三日藤壺の藤の賀に
一九色深く匂へる藤の花故に殘りすくなき春をこそ思へ

夏

延喜の御時四月一日鶯の鳴かぬ年の歌仕うまつ
れと仰せらるゝに
二九春は唯昨日ばかりを鶯の限れるとも鳴かぬ今日かな
北の宮のみぐしあげの屏風に山を越ゆる人の郭
公を聞きたる所に
三九行きやらで山路暮しつ時鳥今一聲の聞かまほしさに

秋

醍醐の御時御前の薄の結ばれたるを御覽じて
あれば誰が結びたるにかと仰せられければ
四九綻びて招く袂と見えしかばしどけなしとて我ぞ結し
左近本少將どのにて秋の花を翫ぶといふ題を詠
める
五九池水のも中に出て遊ぶ魚の數さへ見ゆる秋の夜の月

朱雀院の御時八月十五夜に

九秋夜の月とはよそに聞つれど時にあへるは今宵也鳧

殿上の人々嵯峨野に出でたる日

七いざさらば今日あすへなむ秋の空今幾日かは野べに殘らむ

近江の守にてたちにありける頃殿上の人々たながみの網代にきたりけるにいきて酒など勸むとてかはらけとりて

八九月影の田上川に清ければ網代にひをのよるも見え鳧

九流來る紅葉の色の紅ければ網代にひをの寄も見え鳧

冬

延喜十七年十月五月藤壺の尚侍の御屏風の歌

〇神無月時雨に增る菊の花秋はてにきと見えすも有哉

延喜の御時菊の宴に霜の中の菊を惜むといふ心をよめる歌二つ、一つは人の爲に

一厭しき霜にも有哉菊の花移ろふさやは色を見すべき

二置霜に色染め返し匂ひつゝ花の盛に今日ながら見む

寬平の御時の歌合に

三梅が枝に降積む雪は一年に二度咲ける花かとぞ見る

八條の大將めの爲にかしけるに

四萬代をなほこそあかね君がため思ふ心の限なければ

きさいの宮の御屏風に

五行返り舟路は痛く馴にけり年を積てぞ遠ぶべらなる

北の宮の御もきに

六皆人のいかでと思ふ萬代の例に君をいのる今日かな

女の許に

七逢ふとをよゝに傳へる呉竹の節の數なき戀もする哉

八思やる心は常に通へども逢坂の關越えずもあるかな

承平五年十二月五日から物の使藏人左衛門尉藤原親成が餞

九別るゝか侘しき物はいつしかと逢見むとを思ふ也鳧

あがたへ行く女にさうぞくやるとて

一〇いとせめて戀しき旅の唐衣程へて返す人もあらなむ

田舍へくだる人のもとに白き袋を青きものにして

すりて火打を入れてやるとて

一一打見ては思出でよと我宿の菰草して摺れるなりけり

日本紀竟宴得二月讀尊一

一二月讀の天に昇て闇もなく明らけき夜を見るが樂しき

小野好古純友がうての使に下りての翌る年少將

勞にて四位なるべかりけるいかなるにか漏されたりける由いひやりける文の中に書き付けゝる

一三玉匣二年あはぬ君が身を明け乍らやはあはむと思し

延喜の御時月の雨白かりける夜殿局など廻りて御覽じける御伴にたゝ一人候ひけるに誰とも知らぬ女の一人いでゐていみじう泣くがありけるを上も怪しがらせ給ひて寄りてとへと仰せられければ寄りて聞へど物も云はざりしかば

一四思ふらむ心の内は知らね共泣くを見るこそ哀也けれ

同じ御時五位の藏人なりしを位去らせ給ひしかば本絹のさうぞくになりて參りたりしを見て

女房

一五ほどもなくぬぎかへてける藤衣

といふを聞きて

あやなき物は世にこそありけれ

近江の守になりて下るに貫之が許よりおこせたる歌二つ返し

一六關の戸ぞ驚かれける君が爲心とゞめぬ時はなけれど

一七湖に潮たるばかりをさなくて都に年の老いにける哉

天慶八年内の屏風に

一八ながるれど世をへて盡ぬ汀こそ千年の鶴の栖也けれ

延喜の御時殿上の人々おのが名をはへて歌よみけるに

一九唐衣脫捨てがたを我やきむ唯眼の前にかけて赴見め

同じ五年八月十五夜

二〇古もあらじとぞ思ふ秋の夜の月の例は今宵なりけり

二一おり昇り見かひもなし白雲の山と賴し君も見えねば

此の歌延喜の帝かくれさせ給ひて殿上もせざりける程に山に雪の降りかゝれるを見て詠める

九月つごもりの程に紅葉見むとてと山の方にあるきて

二二さして行く方も知れず秋の野に

かもんのすけ

民部丞千古

とありければ

もみぢを見つゝとまる身なれば

中宮の御屏風に海のうへゆく舟書けるところに

二三春の日の長閑き浦に漕舟は水底さへぞ靜けかりける

二四暮るゝ共思はえぬ哉雲の上に影わき難き秋の夜の月

二五月毎にある月なれどよをへつゝ今宵に勝る影なかり鳧

七夕

二六稀にのみ逢ふとはすれど天河流れて絕む物にし有ねば

小鷹狩

二七秋の野に色々咲ける花見れば歸らむ程ぞいつと知られぬ

二八移ろはむ色を見よとて菊の花露の心もおける也けり

二九草田にて秋よりとほに見ゆしかと程へにければ刈積て鳧

三〇暮ぬ日を網代によする物ならば紅葉の色は赤くみてまし

三一まづ散て後に咲ぬる梅の花思ひ惑ふは雪にざりける

三二我宿に松と竹との徵りせば千年てふと外にぞ有まし

三三色を見て且惑はせる梅の花香をふり隱す雪無りけり

三四春にのみ年はあらなむ荒小田を返すく〳〵花を見べく

三五古鄕はふりやしぬらむ時鳥夜ふかき聲の珍しきかな

齋宮集

近きほどに渡らせ給ひて音づれ聞え給はねば女

三宮より

三六隔てける景色を見れば山吹の花心とも云ひつべき哉

おほん返し

女御殿四宮

三七いはぬまを包みし程に口無の色にや見えし山吹の花

みかど村雨に驚かせ給ひて急ぎ渡らせ給ひしに

三八雨ふらば三笠の山も有物をまたすに騷ぐ雲の上かな

女御殿うせ給ひて齋院の御弔ひの御歸り

齋宮

三九影見えぬ涙の淵は衣手に渦まく泡の消えぞしぬべき

まうのぼらせ給へるに上の御ことのごもりたる程なればたゞにおり給ひてつゝめて

四〇隱沼に生ふる菖蒲のうきねして果は難面くなる心哉

後にうち寄りまどほにあれやと聞えさせ給へる御返りに

四一馴行くは浮世なればや須磨の蜑の鹽燒衣間遠なる覽

御

女

をり知らず

四二藻汐やく煙に馴るゝ海士衣幾そ度かは袖の濡れける

又御返りに

三四歎く寛心を空に見てしがな立朝霧に身をやなさまし
上の久しく渡らせ給はぬ頃秋の夕暮にきんをいとめでたく引き給ふにうへ白き御ぞのなよゝかなるを奉りて急ぎ渡らせ給ひて御かたはらにゐさせ給へど人のおはするにも見入れ給はぬけしきにてひき給ふをきこしめせば
三五秋の日のあやしき程の黄昏に荻ふく風の音ぞ聞ゆると聞きつけさせ給へる御心ちなむいとせちなりしとぞ
御にきにはありける後にまうのぼらせ給へると聞えさせ給へどさもあらぬにこと人をなど聞かせ給ひて夙めて
三六鶯のなく一聲にきけりせばよゝ山人や悔しからましいかなる折にかありけむ御硯に入れ給ひたりける
三七河と見て影離行く水の音にかく歎ならぬ身をいかにせむ
同じ頃
三八爭で猶春ひ霞に成にしか思はぬ山にかゝるわざせし
上より御文のありける御返りに
三九薄氷に閉ぢたる冬の鶯はおとなふ春の風をこそまて
服におはしましけるに御とにて內より聞遠なる御文に日頃同じあつめたることを手習のやうにて奉らせ給へりける
四〇立疊るさほの河霧晴すのみ日たけぬ空に程のふる哉
露も久しき
四一吹く風になびく淺茅は何なれや人の心の秋を知する
誰にいへとか
四二知なくに忘るゝ物は覺束な藻に住蟲の名に社有けれ
四三白露の消にし人の秋まつと常世の雁も鳴きて飛けり
いはむかたなのよや目のみさめつゝ
四四里わかず飛渡るなる雁音を雲居に聞くは我身也けり
たぐひあらじかし
四五うらみつの濱に生ふてふ蘆茂み隙なく物を思ふ頃哉
あらじ我が身を
四六長雨する空にも非で時雨るは袖の浦にも波は立らむ
あはれのさまや
四七爪かにも風はつてなむ花薄結ばゝれつゝ露に濡る共
かきりなりけり

四八秋の野の萩の下根に鳴蟲の忍兼てはほに出でぬべし
見苦しのさまやれいの山ふところ
四九谷河の瀬々の玉藻を搔つめてたが水屑にかならむとす覽
いかなる事かありけむ
五〇逆さまにいふ共何かつらからむ返々も身をば恨むるすけなりがむすめ奉まゐらむと聞えてゐる男につきにけりと聞き給ひて
五一むすぶ人ありける物を冬川の春くる風と思ひける哉
冷泉院の池に浮草のあるをおぼし亂るゝ頃にやありけむ
五二身の憂に最ど浮たる萍の根なくは人にみせじとぞ思ふ
同じみにてむかひたる西のたいに堀河殿の北の方すみ給ふより
五三花薄ほどだに遠き物ならば音せぬ風も恨みざらまし
御かへり
五四何方の風にか秋は通ふらむ人知れずのみ願く尾花を
又野分したるつとめて　北の方
五五近き野の野分は昔もせざりきや荻吹風を誰か聞らむ
御かへり
五六蔓れる葛の下吹風の音も誰かは今は聞くべかりける
又北の方返して歸り給へる又の日
五七爭でかは人は聞けむ我袖は露おく野べに劣らぬ物を
雨のふるに三條の宮にて
五八雨ならでもる人もなき我宿は淺茅が原と見るぞ悲き
東三條院にて
五九我ならで又打拂ふ人もなき蓬が原をながめてぞふる
內にて御まへのふぢをなむ忍びてこく人ありと
聞かせ給ひて
六〇朝毎にうすとは聞ど藤の花こくこそ最ど色増りけれ
父宮のおはしける時に母上の御かたちなどを今の北の方の語りきこえ給ひて御ぐしのめでたかりしはまたゝらむとてとり奉らせ給ひければ
六一方もなく成にし君が玉鬘思もやするとて覆つゝを見むとて奉らせたまふ父宮うせ給ひて又の年の正月一日
六二いむなれど今日しも物の悲きは年を隔つと思ふ也鳧
雪のふる日心細きに
六三慘くて年ふる雪も今見れば有し人には劣らざりけり

繼母の北の方
六四見し人の雪と成にし空なれば降る雪さへも珍しき哉
うまのかみのはらから少將の宮仕へすべしときかせ給ひてすぎくれのと宣へば　少將
六五數ならで梓の柚に立ぬとも杉の本をばいかゝ忘れむ
御返し
六六忘れじと云にもよらじ三輪の山杉の本には雨も漏鬼
前だいの御そふに御手づから物かゝせ給へる物どもを馬の內侍に見せに遣したりければ上の見せむと宣はせしをかくれさせ給ひしかばくちをしかりしに嬉しくとて　馬內侍
六七尋ねても跡はかくても水莖の行方も知らぬ昔也けりとて中に入れて御文にはしたにたゝのかみのあるに書きつく
六八君にのみ留めておきし古の絕にし跡を見るぞ悲き
六九濱千鳥跡あるをだに留めねば唯白波に返すばかりぞ
御かへし
七〇古のなきになかるゝ水莖の跡こそ袖の浦によりけれ
七一水莖のはかなきだにも消なくに行末知らぬ昔也けり
七二濱千鳥み馴し跡を沖つ波かくすや淺き磯まなるらむ
せえう殿の女御の御許に
七三逆さまに訪ひありやと春日野の野守は如何告やしつ覽
御かへし
七四春日野の雪の下草人知れずとふひ有やと我ぞ待つる
野の宮におはしける頃三條殿よりまゆみの紅葉のひとはあるにさして
七五木枯の風の便りは近けれど人は忘るゝ物にぞ有ける
伊勢にくだり給ひて同じ宮の御てらづかひに下りたるに御文のなかにありければ
七六ふりかへむ人はとふべき雪消の解くる便も潛りけり
うちにおはせし時ひゝな遊びに神の御もとに詣づる女に男まであひて物いひかはす
七七其かみはさしも思はでこしかどと思ふと社異に成ぬれ
女のかへし
七八神代より思ふとだに有物をあたら思に如何なるらむ
同じひな社の前の河に紅葉ちる所にて
七九風さへや神のあたりを拂ふ覽早き瀬々にも散紅葉ばを
馬の內侍山吹にさして

八八重乍あだに見ゆれば山吹の下に社鳴け井出の蛙は
　御かへし
八九八重乍らあだに見えける山吹の一重心を思ひ社やれ
　久しく里におはしける頃同じ内侍のもとに
九〇夢のとおぼめかれ行世中にいつ問むとか音信もせぬ
　伊勢の後の御くだりのたび昔おばしいで丶
九一世にふれば又も越え鳧鈴鹿山昔の今に成にや有らむ
　宮御かへし
九二鈴鹿山賤の苧環もろ共にふるには増るとなかりけり
　たいわうの宮に
九三大空に風まつ程のくものいの心細さを思ひやらなむ
　御返し
九四思遣る我が衣手はさ丶蟹の曇らぬ空に雨のみぞ降る
　一品の宮より紙をつがせてこれに物書かせ給ひ
　てと聞え給へりければことかみをつきて書かせ
　給ひて、宮
九五蜘のいの斯かくべくも有ね共露の形見にけたぬなるべし
　御返し
九六かくよりも割なく見ゆる蜘のいを露の形見に見そ嬉き
　伊勢の御くだりに齋院より
九七秋霧の立ちて行くらむ露けさは心をそへて思遣る哉
　御かへし
九八よそ乍ら立つ朝霧は何なれや野べに袂は分れぬ物を
　桃園の宮に御ことかり聞えさせ給ひて返し奉ら
　せ給ふに
九九聞馴す程はへにけることなれど逢ぬ繼路ぞかひ無りける
　御返し　あい宮
一〇〇岩の上に松の響ひを引懸てよに逢事はたがひしもせし
　伊勢より
一〇一人を猶恨みつべしや都鳥有やとだにもとふを聞ねば
　御かへし
一〇二訪ね共深き心はいせの海の底なる蜃に劣りやはする
　みねの君失せ給ひての頃
一〇三世中も嚴のなかもはかなくて峯の煙と爭でなりけむ
　御かへし同じ
一〇四はかもなき世を給果し人ぞまづ煙と成て先に立ける
　一品宮より伊勢の御くだりに
一〇五別行く程は雲居を隔つとも思ふ心はよりもさはらじ
　御返し同じ折に女御殿より
一〇六秋霧と立出る旅の空よりも今はと菊の露ぞこぼるゝ
　御かへし
一〇七菊にだに置きける露を宜し社後るゝ袖の苦しかりけれ
　忍びて下り給へれば尼になん給ひぬと聞きて土
　御門といふ
一〇八海士小舟なるとに早く漕出る櫂の雫に君もいかにぞ
　御かへし、宮　女　御
一〇九淺ましく船流したる蜃よりも我袖の浦のしも丶乾かず
　兵部卿宮入道し給へりしに伊勢より
一一〇懸らでも雲居の程は歎きしに見えぬ山路を思遣る哉
　女三宮御草子かゝせ奉り給ひけるに葦手長歌な
　ど書かせ給ひて奥に同じ所
一一一皆人の背き果にし世中にふるの社の身をいかにせむ
　伊勢に大淀の浦といふ所に松いと多かりける御
　祓へに
一一二大淀の浦立つ波の返らずば變らぬ松の色を見ましや
　七月七日に
一一三わくらばに天の河波よる乍明る空には任せずもがな
　同じ日かたわきて前栽合せさせ給ひけるを雨い
　たう降りてその人どまりぬかた人心もとなかり
　ければ　女　御　殿
一一四天川昨日の空の名殘にも身にはいかなる物とかは知る
　ためちかいはらからためくに齋宮のかみなり五
　月五日參りて宮の御前の遣り水をみかはの池と
　なむいふなるを臺盤所に
一一五今年生のみかはの池の菖蒲草長き例に人もひかなむ
　忍びて下り給ひて女御殿より
一一六鈴鹿山ふるの長道君よりも聞ならすこそ後れ難けれ
　くだり給ひはつかなるべし御返り伊勢より
一一七鈴鹿山音に聞きけむ君よりも心の闇にまどひにし哉
　又御かへし
一一八儚くて雲となるとも山彦の答へ計は空にいかにせむ
　女三宮御服ぬぎ給へる所一品宮に伊勢より
一一九秋はてゝ野べの草葉も色變り有ぬ色なる衣いかにぞ
　伊勢より麗景殿の齋宮のみやこに
一二〇浦遠みはるか也とも濱千鳥都の方をとはぬ日ぞなき
　御かへし
一二一訪來るをまつ程過ば濱千鳥波間に猶ぞ恨みらるべき
　内にて何の折にかありけむ
一二二こち風に靡きもいでぬ朝舟は身を恨みつゝ焦れてぞふる
　父みこうせ給ひて後御返りごとに
一二三歎きつゝ雨も涙もふる里の葎の門の出でがたきかな
　久しく參り給はざりければ
一二四綜を荒み間遠なれども麻衣幾そ度かは袖の濕れけむ
　御かへし　女　御
一二五藻汐やく煙になるゝ麻衣憂めを包む袖にやあるらむ
　上の御夢に見えさせ給ひければ
一二六ぬる夢に現のうさも忘られて思ひ慰む程のはかなさ
　又ことをりに
一二七侘ぬれば身を浮雲に倣つゝも思ぬ山に懸らずもがな
一二八常磐なる松に附てもとふやとて幾度春を過しきぬ覽
　御返し　女　御　殿
一二九忘行く春の氣色に霞むとてつらき吉野の山もとわり
　女御かへし
一三〇常磐山色變らめや春霞たなびく方はことになるとも
　池に藤のかゝりたるを　女　御　殿
一三一紫にやしほ染たる藤の花池にはひさす物にぞ有ける
　女御殿の御方に花のありけるを御覽せむとあり
　ければ梅一枝折りて上る
一三二見つゝのみ慰む花の枝ならばつけて心を思遣らまし
　御かへし
一三三梅の花しづえの露に懸てける人の心は知べ見えけり
　春まかで給ひて秋や聞え給ひけむ
一三四春行て秋迄とやは思ひけむかりには非す契りし物を
　なやませ給ひける頃上る
一三五斯るをも知すや有らむ白露のけぬべき程も忘ぬ物を
　いかなる折にかありけむ
一三六いかにぞや名乘其かと問はむにも忘れる里や螢は告まし

敏行集

正月一日二條中宮にして白きおほんうちきを給

はりて
八三降る雪の簑代衣うちきつゝ春きにけりと驚かれぬる
寛平の御時殿上におほみき給はりて遊びけるに
つかまつれる
九三老ぬとて我身なげてか関ぎけむ老すば今日に逢まし物か
同じきおほんむ時のきさいの宮臧人のもとにかめ給はせておほみきおろしまうしたりけるに臧人ども笑ひてかめを御前にとり出でゝともかくもいはざりければ
一〇玉垂のこ龜や執ら小揺ぎの磯の波分け沖に出にけり
同じ御時の中宮の歌合に
一一明ぬとて歸る道にはこき垂て雨も涙も降そぼちつゝ
題しらず
二二幾何の田を作ればか郭公しでの田長を朝な〳〵とふ
賀茂の臨時のまつり
三三千早ぶる賀茂の社の姫小松萬代ふとも色はかはらじ
業平の朝臣の家の女に遣しゝ
四四徒然の詠めにまさる涙かは袖のみひぢて逢由もなし
返し　をんな
三五淺み社袖はひづらめ涙川身さへ流ると聞かば賴まむ
いかなる折にか
六六我が如く物や悲しき郭公時ぞともなく夜唯なくらむ
中宮の歌合に
七四戀わびてうちぬる中に行通ふ夢の直路は現ならなむ
これさだのみこの家の歌合に
八四我きつる方も知られず倉部山木々の紅葉の散と紛ふに
菊の花を詠ませ給へるに
九四久方の雲のうへにて見る菊は天つ星とぞ過たれける
同じ御時にきさいの宮の歌合に
〇五何人かきてぬぎかけし藤袴くる秋毎に野べを匂はす
同じおほん時の歌合に
一五秋の野に宿りはすべし女郎花名を睦じみ旅ならなくに
秋立つ日
二五秋きぬと目には清かに見えね共風の音にぞ驚れぬる
これさだのみこの家の歌合に
三五秋の夜の明るも知ず鳴蟲は我ごと物や悲しかるらむ
同じみこの家の歌合に
四五秋萩の花さきにけり高砂の尾上の鹿も今や鳴くらむ

女の許に遣しける
五五我戀の數を數へば天の原曇りふたがりふる雨のごと
近江の關寺にわづらひて籠り侍りけるにまへよ
り閑院のこないし石山にまうで侍りけるを見て
おいて遣しける
六五逢坂の木綿つけに鳴鳥の音を聞咎めずぞ行過にける
七五心からはなの雫にそぼちつゝ鶯とのみ鳥の鳴くらむ

宗于集

からうじて逢ひたる人のさはる事ありとてえ逢
はぬに
八五東路のさやの中山中々に逢見て後ぞわびしかりける
中宮の歌合の時
九五つれもなく成行く人の言の葉や秋より先の紅葉成覧
〇六忘草枯もやするとつれもなき人の心に霜は置かなむ
物思ふ雲ひとりごとに
一六いつはとは時は分かねど秋の夜ぞ物思ふとの限也ける
二六我戀の數にしとらば白妙の濱の眞砂もつきぬべら也
三六恨むれど戀れど君が世と共に知ず顔にて難面かる覧
かへし
四六思ふ共戀とも如何雲居より遙けき人の空に知るらむ
五六逢すて今宵明なば春の日の長くや人をつらしと思はむ
中宮の歌合に
六六常磐なる松の緑も春くれば今一しほの色まさりけり
七六雪降て年の暮ぬる時に社遂にもみぢぬ松も見えけれ
旅にまかる人に遣すとて
八六袖濡て別はすとも唐衣ゆくとな云そきたりとを見む
返し
九六別路は心もゆかすから衣きたれば涙さきに立ちつゝ
旅にまかる人に扇にかける
〇七添てやる扇の風も心あらば我思ふ人の手をな離れそ
七月七日曉に詠める
一七今はとて別るゝ時は天の河渡らぬ先に袖ぞひちぬる

歌合に
二七山里は冬ぞ寂しさ増りける人めも草も枯ぬと思へば
三七今日人を戀る心は飛鳥河流るゝみをに劣らざりけり
むすめのみちのくにまかるに宮より給はせたる
四七爭で猶笠取山に身を做て露けき旅に添はむとぞ思ふ
返し　むすめ
五七笠取　山と頼みし君を置て涙の雨に濡れつゝぞ行く
男伊勢へまかりけるに
六七君が行く方にありてふ涙河先は袖にぞ流るべらなる
七七人を思ふ心の我に在ねばや身の惑ふだに知れざる覧
八七我宿の庭の秋萩散りにけり後み む人や悔しと思はむ
九七梓弓いるさの山の秋霧のあたることにや色増るらむ
〇八白露のおかまく惜み秋萩の折ては更におきや増らむ
一八よそにして戀れば苦し入れ紐の同心にいざ結びてむ
はらからなる人の恨めしきことある折に
二八君と我が妹背の山も秋くれば色變りぬる物にぞ有ける
三八我妹子に相坂山のしの薄ほには出ですも戀渡るかな
四八年月は昔にあらず成ゆけど戀しきとは變らざりける
五八朝まだき露わけゆける唐衣ひるま計の戀しきやなそ

清正集

ある所にてみちの國の守のせせられけるに
六八假初の別とおもへど武隈の松に程へむとぞわびしき
まらうどいものの家にきて月出でなば歸りなむと
云ひければ
七八月影をまつ程計り立止る君が爲にはいでがてにせよ
正月山寺にこもりたりけるに京よりいかに鶯の
聲聞きたりやといへりける返事に
八八鶯の鳴く音だにせぬ我が宿は霞ぞ立て春と告げつる
天暦の御時の屏風に
九八春霞けふぞ立ける春日野に若菜摘まむと急ぐべらなる
紀の國にて子の日しけるに
〇九傳くや今日の子日を過ぐさまし名草の濱の松徹せば
一九子日しに占つる野べの姫小松引でや千代の影を待たまし

ある屏風の歌

二石上ふりにし里をきて見れば昔かざしゝ花咲にけり

おなじ屏風に、歸る雁

三里遠み雲路過行く雁がねは同じ旅とぞかへる聲する

三月人の散る花見る所

四散ぬべき花見る時は嘗の根の永き春日も少なかり鳧

同じ頃藤壺の藤の賀の宴せられけるに

五こむらさき昔の色もあせずして立歸りつゝ匂ふ藤波

六影見えて春は行かなむ水底に匂ふ藤波折もとむべき

款冬

七春風を八重立波の色にさへ色こきよする井手の山吹

家にさくらの木植ゑたりけるに花の咲かざりければ

八いつしかと植て見たれば若櫻咲ずて春の過ぬべき哉

同じ頃御屏風の歌

九卯花の盛りに聞けば郭公夜深かるねにあく人ぞなき

人の家に前なる小柴垣にいと白う卯の花さきかかりたり、月夜に

一〇靨れをか分きて折まし卯花の咲ける垣ねに照す月影

郭公の聲きく頃こき殿の女御御かたなりける人よみけるに

一一郭公鐘てし契る物ならば鳴ぬ夜さへは待れざらまし

うちの人兵衛

一二里めぐりなどか來鳴かぬ郭公人の心を空になしつゝ

女房のしりたるに物いひける程に親めきたりける人の聞きつけてゐて入りにける朝に

一三荒かりし波の心はつらけれど少しも寄せし聲ぞ戀き

月まちて歸らむといひけるほどに郭公の聲ししば聞ゆ

一四夏の夜の月待つ程は郭公我が宿計り過ぎがてに鳴け

昔知れりける人の家へ行く道にいみじう荒れたる所にて鷹を放ちてありければ

一五夏草の茂りのみます我宿を分けては人の狩に社こめかへし

一六箸鷹のすゞろありきにあらば社狩とも人の思做されめ

右の大臣の御賀の頭中將のし給ひける屏風に

一七夏の夜も涼しかりける山川ぞ波の底にや秋は宿れる

五月鞍馬といふ所に詣でたりけるに女どもまうでゐたるに郭公の聲す

一八五月闇鞍馬の山のほとゝぎす覺束なしやよはの一聲

一九鞍馬山晴く越ゆれど郭公語らふ聲をそれと知らずや

國へ下りけるに人々まうできて別惜みけるに郭公まつ心を

二〇さよ更けて今はなかなむ時鳥別を惜む聲と聞くべく

七月七日たなばたの心

二一とせに一夜のみあゝ七夕を立ちな隱しそ天の河波

同じ心の屏風に

二二天の川霧立ち渡り渡りては誰が衣手かひぢ增るらむ

雨うちふる夕つ方まらうどいもきて酒のみなどしける折に月の雲隱るゝに人々かへる

二三天雲の立ちのみ騷ぐ秋の夜は月影さへぞしづ心なき

天暦の御時にかたわきてせざい合せさせ給ひけるに中宮の御方に花の枝にてふのかた作りてつけさせ給ひけるに

二四九重に露を置けばや花の色の外の秋には匂ひ增れる

二五百敷に花の色々匂ひつゝ千とせの秋は君がまに〳〵

內の御屏風に

二六秋の田の只管にこそ思つれ假にと人に見えにける哉

九月ばかりに人々あまた集まりなどして志賀の山ごえしけるに紅葉の色うみに映りたる

二七もみぢ葉の紅深き色みれば水底までや霜はおくらむ

十三のみこ

二八よも山の紅葉は多く見つれども水底の霜深き色かな

又人

二九上は霜したは水うみの波數に折返しつゝ染める錦か

三〇志賀なれば色增り鳧奥山の紅葉の錦ぬれば濡れなむ

同じ頃山へ詣でける道に風うち吹きて紅葉散る

三一紅葉ばの絶ず山路に散かふは錦をたちて行けば成べし

九月九日

三二延ぶときく齡に添て露けきは年と共にぞ戀增りける

うちの紅葉あはせ九月二つある年

三三紅のやしほの色はもみぢ葉の秋加れる年にぞ有ける

紅葉惜みに山里へいできて

三四風吹けば幣と散かふ紅葉こそ過行く秋の手向也けれ

ある所のかんしに、雁、秋風

三五ここよ出て雁の羽衣寒き上に心して吹け秋の夜の風

松と竹と植ゑたる所に女房みる繪に

三六常盤なる松と竹とを宿に植て秋はくれ共物思もなし

閏九月內にて別惜む頃

三七秋日の日數除れる年なれど今日の暮るは惜くぞ有ける

ゑに

三八むら乍ら見ゆる紅葉は神無月まだ山風のたゝぬ也鳧

殿上の人の殘の菊を惜みけるに

三九菊の花いかにとゝへば九重に移ろふ色の限なりけり

繪に神樂の所

三〇榊葉の香をとめくれば千早振神の忌垣にさしてきに鳧

師走ばかりに前の梅に雪ふりかゝりたるを見せしに

三一梅枝に分きてふらなむ白雪は春より先の花と見べく

內に十月十四日に壺せさいの菊のゑに

三二九重に移ろふからに菊の花いづれの色に心染むらむ

物へまかりける秋

三三旅にして物思ふ程に秋の夜の有明の月も出にける哉

內に宇佐の使のさゝれけるに

三四限あれば行てはきぬ道なれど軌の旅か惜まざるべき

田舍へ行く人に物などやるとて小うちきの袂に

三五君が爲いのりてたてる唐衣別の袖やたむけなるらむ

三六東路のかりの旅とは思へども今こむ空を詠むべき哉

又こと人に

三七唐衣馴にし人の別には袖こそ濡れ形見とも見よ

返事

三八形見には慰むやとて唐衣きるにしもこそ濡增りけれ

こと人のくらのうはしきに

三九葦たづの千年の水に影みえてさく立ち歸れ岸の白波

知りたる女房田舍へくだる

四〇有ながら逢見ぬ程もたへぬ身は別の程を何に譬へむ

五月ばかりにこと語らはむと一聲もせずといへりける女

四一人知れぬねやは絕する郭公唯明ぬ夜の心ちのみして

服なりける頃とはずと恨みて山吹をおこせたる人に

四二云かひもなき世中に生しより梔子に咲花さへぞ憂き

人に

四三須磨の浦に蜑のこりつむ藻汐木の辛くも下に戀渡る哉

五月のころ人に
[一]鳴初めし宿をこふてふ時鳥夜深き聲を誰に聞かせむ
かへし
[二]郭公とはぬ折だに忘られすこと語らひし夜はの一聲
服なる頃久しういはで女に
[三]墨染の衣手そぼつ物思ひ優つかなくはなりにける哉
ひろはたの御息所の御前子にあこぎといふわらはに文遣すとてすまといふ殿守遣して
[四]須磨の蜑を知べと思へば渡つ海の底のみるめは疑もなし
又人にいかゞありけむ
[五]命をばあだなる物と聞しかど憂身の爲は長くぞ有ける
また人の返しにこそあめれ
[六]逢見ても逢でも遂に別れぬる暫し計の世をな恨みそ
いと忍びに語らひける女に親こと人にあはすべ
しと急きけるを聞きて
○我ならぬ人にとくなと結び置し君が下紐許すなる哉
返し
[七]結ぶ共とく共知らで下紐のよに亂れつゝ物を社思へ
人をいひけるに否いとあだなりと親せいしけ
るを聞きて
[八]つれもなき人に負じとせし程に我もあだ名は立ぞしにける
人のむすめ今裳きむ程を念じ給へと云ひける
もなどきてける後さへつれなかりければ
[九]蜑ならで底の玉藻も潜く也今はみるめの方を尋ねよ
返し
[一〇]汐馴の蜑に有ねば今や又みるめ刈らむ方も知られす
四月まつりの日
[一一]千早振神の心を知らねども猶ねぎごとは頼まるゝ哉
齋院の女すのその院のゐ司を男にてありと聞く
に
[一二]千早振神も知りにきゆふ襷しめの程かく影な離れそ
秋立つ日人に
[一三]獨ぬる床は草葉にあらね共秋くる宵は露けかりけり
濱の眞砂のかず知らむと頼めたる女のもとに
[一四]忘れじの長き例に響へこし濱の眞砂や數つきぬらむ
[一五]淺茅生の床の夜床の荒しより我も齋の無きとかは見む
人のもとにいきて夏頃忍びたりけりと聞く人醉
まる程にいたう更けてやう〳〵夜中ばかりにい
でゐたりけり
○[一六]短夜の殘りすくなく更け行けばかねて物うき曉の道
年かへりて物いはむと頼めたる女に師走に
[一七]花さかぬ松の立枝も我が如や年の此方に春を待らむ
[一八]葛城やくめの繼橋つぎ〳〵も渡しも果てじ葛城の神
（かへし）（以前本頭）
[一九]葛城やくめの繼橋ならなくに渡しはやまじくめの懸路に
近江へくだりけるに心見のわたりを過ぎけるに
夜いと深し
[二〇]明ぬとや心み迄は來にけれどまだ深き夜の渡り也鳧
又山井といふ所にみちに人にあへり
[二一]皆人の結びて過る山の井に我打解けて影を見えぬる
ゑに
[二二]行人も歸るも見ゆる淀河は波の心もいとなかるらむ
ある女に
[二三]住の江の岸折返し返しても立寄らまくのほしき君哉
返し
[二四]打しきり立寄りてとも岸遠みよそにぞ返る沖つ白波
いかでと思ひける人にはつかにおひたりけれど
いらへなどもことにせざりけるに月もおぼろな
り
[二五]鷲棲な曇れる空の月なれば心やましきよはにも有哉
卯月のみあれの又の日ついでありてなるべし
○千早振神に祈し逢事は草葉につけて今日ぞ見ゆめる
返し
[二六]皆人のなべてかざせば葵草驕れをそれの印とかみむ
ある所にて琴などひきて遊ぶに夜ふけて月も入
りぬうちの人々も入りぬるおとしけるに琴を調
べていだしたるに
[二七]山の端に入と入ぬる月なれば調べて出すともかひなし
[二八]逢坂の關路に年はへぬれ共今日の清水やなほ流さむ
紀のかみになりてまだ殿上もかへりせで
[二九]天つ風吹飯の浦に住たづのなどか雲居に歸らざるべき
天曆の御時の中宮の歌合にかちかた（がち）に富士
の山ちんして作りていたいきよりいだせる煙の
下にうちの御方に
[三〇]世に人の及びがたきは富士の山麓に高き思なりけり
月夜に白きぬどもの限りきたる女のあまた出
でゐたりける一人がもとにつとめて
[三一]誰となく朧に見えし月影にわくる心を思ひ知らなむ

與風集

寛平の御時の中宮の和歌合に
[一]暮花は千種乍らにあだなれど誰かは春を恨果てたる
[二]春霞色の千種に見えつるはたなびく山の花の影かも
[三]聲たてゝ鳴けや鴛一年に二度とだにくべき春かは
○契りけむ心ぞつらき七夕の年に一度逢ふはあふかは
[四]白波に秋の木葉の浮べるは蜑の流せる舟かとぞ見る
[五]君戀ふる涙の床にみちぬれば落標とぞ我はなりぬる
[六]浦近くふりくる雪は白波の末の松山こすかとぞ見る
[七]死る命いきもやすると猶に玉のを計逢むと云はなむ
同じ御時にふる歌奉れと仰せごとありければ立
田川もみぢ葉流るといふ歌に書きて同じ心に
[八]深山より落ちくる水の色見てぞ秋は限と思知りぬる
[九]折からに我名は立ちぬ女郎花いざ同くは花々に見む
[一〇]秋野の露におかるゝ女郎花拂ふ人なみ侘つゝぞふる
[一一]女郎花花の心のあだなれば秋にのみこそ逢渡りけれ
貞保の親王の后の五十賀奉り給ひけるに御屏風
の繪に櫻の花見たる所
[一二]徒に過る月日はおほかれど花みて暮す春ぞすくなき
親のまもりけるむすめをいと忍びてあひて物い
ひける程に親のあふといひければ急ぎていりに
けるそのも返すとて
○[一三]逢ふ迄の形見とてこそ留めけめ涙に浮ぶ藻屑也けり
[一四]恨ても泣ても云む方ぞなき鏡に見ゆる影ならずして
[一五]何か其名に立つとの惜からむ知りて惑ふは我猶かは
[一六]木葉ちる浦に波立秋なれば紅葉と花も咲紛ひけり
[一七]山風の花のかさそふ麓には春の霞ぞほだしなりける
[一八]瀧くこき色は紛へど花といへば一つ顏にも見え渡る哉
[一九]きつゝのみ鳴く鴛の古里は散にし梅の花にざりける
[二〇]山里は春のほだしに閉られて住かまどへる鴛ぞ鳴く
[二一]鉋ずして過行く春を直ちあらば今年計の秋をよかなむ

九嵐吹く山の麓にちる雪はとく散る梅の花かとぞ見る
〇夏夜の月は程なくあけ乍ら朝のまをぞ卿ちよせける
一夏の日の光惜まず照る月は流るゝ水に影ぞうつらふ
二睡まじく團ひ隔てぬ杜若誰が方にかは移ろひつらむ
三〇山の井は水なきとも見えぬ共秋の紅葉の散て隠せば
四〇白波に折はへ簪の酒舟は命にかはるみるめ刈りにぞ
五〇夢にだに人の思に任せなむ見ては心の慰む物から
六〇身をも且思ふ物から戀といへば燃る中にもいる心哉
七〇山川の菊の下水いかなれば流て人の老はせざらむ
八〇大ぞらの月の光を足柄の山のこなたは秋にざりける
九〇涙川底はかゝみに清けれど戀しき人の影も見えぬを
一〇小倉山嶺の紅葉は散にしを照てぞ見ゆるしきにしければ
一一浦近く立つ朝霧は蒸籠やく煙とのみぞ過またれける
一二筑波ねの陰に生にし宿なれば光のおふる物とだに見ず
一三霜の上に跡踏とむる濱千鳥行方もなしと音をのみぞ鳴
一四戀しとも今は思はず魂の相見ぬさきになく成ぬれば
一五哀とも心も行ぬ夢路をばはかなき物とむべも云けり
一六歎きみる斧の響の聞えぬは山の山彦いづちいにしぞ
一七逢見てもかひ無りけり魚玉のはかなき夢に劣る現は
一八葦鶴のいづれの朝か鳴かざらむ思ふ心のゆかぬ限は
一九夢にだに逢見ず乍ら消ねとや戀きとの唯にさむらむ
二〇泣恨て世を空蟬となりぬれば恨むるとも今は聞えず
二一仲ぬれば强て忘れむと思へ共夢てふ物ぞ人頼めなる
二二うきてぬる鴨の上毛に置霜の消て物思ふ頃にも有哉
二三こぼれてもあれば譬て慰めし長柄の橋も今は聞えず
二四戀しさに身を投つべし慰むることに從ふ心ならねば
二五身は捨つ心をだにもはぶらまじ遂には如何なると見べく
二六誰をかもしる人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに
二七鶯は欺かるらむ白雪の花と見るまでえだにふれゝば

他本歌

女の許より心ざしの程をなむえ知らぬと申したりければ

二八我戀を知むと思はゞ田子の浦に立つる波の數を數へよ

是則集

春　柳、櫻、桃、松、鶯、

亭子の院の歌合、柳

二九淺緑そめてみだれる青柳の糸をば春の風やとくらむ

山里の花を見て

三〇折取らば惜げにも有か櫻花いざ宿借て散る迄に見む

前栽の中に櫻の咲きたるを見て

三一櫻花けふよく見てむ吳竹の夜のまの程に散も社すれ

花惜む所にて

三二且見つゝ千年の春を暮すおいつかは花の色に倦べき

亭子の院の歌合に

三三花の色移し留めよ鏡山春の過なむ後も見るべく

おなじ歌合に、桃

三四三千歳になるてふ桃の今年より花咲春に逢にける哉

鶯、亭子の院の歌合に

三五きつゝのみ鳴鶯の故郷は散りにし梅の花にざりける

松、まつのもとにこれかれ侍りて

三六深緑常磐の松の蔭にゐて移ろふ花をよそにこそ見れ

夏　ほとゝぎす

三七山かつと人はいへども郭公まづ初聲は我のみぞ聞く

秋　時雨、路、山、河、紅葉、菊、鴈、

亭子の院の歌合に、しぐれ

三八初時雨ふる程もなく佐保山の楢數多に色づきにけり

露、秋の野に置白露の消ざらば玉に拔ても繰てみてまし

三九秋の野に置白露も今よりは心してこそ見るべかりけれ

三〇大方に置白露も今よりは心してこそ見るべかりけれ

山、秋山のぞむ、大井河の行幸に

三一秋の色は千種乍らにさやけきを誰か小倉の山と云覽

秋の水に浮ぶ大井河の行幸に

三二競方かとまり成らむ山風の拂ふ紅葉にふな惑ひして

紅葉

三三峯高み行て見るべき紅葉を我がお乍らも翳しつる哉

秋の歌とて詠める

三四佐保山の柞の色は薄けれど秋は深くもなりにける哉

紅葉大井河に散る、行幸あり

三五紅葉の散りて流るゝ大井河せゞの白波影とゞめなむ

三六紅葉の流れざりせば立田河水の秋をば誰か知らまし

菊、きくの花殘りたる、大井河の行幸に

三七影さへに今はた菊の移ろふは波の底にも霜や置らむ

鴈、旅の鴈、大井河の行幸に

三八幾千里ある道なれや秋ごとに雲居の旅を雁の鳴らむ

三九刈てほす山田の稻のこき垂て鳴こそ渡れ秋のうければ

冬　雪、氷

大和の國に罷りける時雪の降りければ

〇朝ぼらけ有明の月と見る迄に吉野の山に降る白雪

奈良の京にまかりて宿る所に

三一吉野の山の白雪積るらし故郷寒くなりまさるなり

氷

三二冬の池の上は氷に閉たるを雫でか月の底に見ゆらむ

祝　若葉

三三君が代は天の羽衣稀にきてなづとも盡ぬ巖ならなむ

戀、知られず、知られたり、あふ、あひての後

三四わたの原潜きて知らむ人知れず思ふ心の深さ比べに

三五我戀をくらぶの山の櫻花まなく散とも數はまさらじ

三六を鹿臥夏野の草の道みえず繁き戀にも惑ふ頃哉

三七秋山に朝立霧の峯こめて晴れずも物を思ふべらなる

三八霜枯の淺茅がもとの刈萱のみだれて物を思ふ頃かな

三九枕のみくつと思ひし涙河今はわが身の沈むなりけり

三〇紅の色に移りてこひねとも涙のしるく見する也けり

三一かつ消えぬ涙か磯の鮑故海てふ海はかづきつくしつ

三二片糸を此方彼方により懸て逢ずば何を玉のをにせむ

三三谷川の岩間を狹み山川の音にのみやは聞き渡るべき

三四戀しさの限だにある世也せば年へて物は思ざらまし

三五逢事を長柄の橋の長らへて戀渡るまに年ぞへにける

あふ

三六逢見ては慰むやとぞ思しを名殘しも社戀しかりけれ

逢ひての後あひ難き女に

三七霧深き秋の野中の忘水たえまがちなる頃にもある哉

三八秋夜を睡ろまでのみ明す身は夢路とのみも頼まざり鳧

雜　かせ、わかな

三九忘るなよ別路に生る葛のはの秋風ふかば今歸りこむ

松、つる、かめ、さる

えの松おいたる、大井河の行幸に
七○此川の入江の松は老にけり古き行幸のとや聞はまし
つる巣に立てり
七一山近みおりゐる雲と眞鶴の立てる河べも人や見らむ
鶴人に馴れたり、同じ行幸に
七二行く舟になるゝ鴎はさす棹に返す水こそ過たれけれ
さるかひになく、おなじ行幸に
七三秋山のかひに見返り鳴聲を夜深く聞て袖ぞ濡れぬる
雖レ在レ集不レ載二家集一歌
七四花流す瀬をも見べき三日月のわれて入ぬる山の遠方
七五七六うら枯る〻淺茅が原の刈萱の亂れて物を思ふ頃かな
七七大その原や伏屋に生ふる帯木の有とは見えて逢ぬ君哉
七八七九枕のみ浮くと思ひし涙川今は我が身の沈むなりけり
八○八一水底に沈める花の影見れば春は深くもなりにける哉
八二八三ねて待ちし廿日の月の傾にも逢見しともいつか忘む

小大君集

忘れぬかぎりと思へどはかゝ〳〵しうも覚えず人
ごとをといふことのやうなり正月一日のことなる
べし　讀人知らず
八○いかにねて遅る朝に云事ぞ昨日をこそ今日を今年と
女御達のおほん局に候ひける時の御佛名の又の
夜まゐりたるに人々集まりいで〻とくまゐれと
せむれば何ごとならむと思ふにけづり花を庭に
さしたりけるに雪のかゝりたるよめどなりけり
心もえず
八一年つまば誰かは雪を拂ひ敷む菊の上とら暫し忍みめ
昨日つかひし木賊のおちて露のかゝりたりける
をゑしたに人の取り上げたりければ
八二信濃野の木賊の上に置露の磨ける玉と見えにける哉
雨のふりけるよの宵に月の入るを見て詠める
八三大空に散にし花や匂ふらむ雲の春とも見ゆる宵かな
竹のある所にて風の吹くにいみじうさゝめきけ
れば
八四風吹けば波やはさわぐ河竹の流るゝ水に聲の通へる
十月に女院御はかうありて菊合せ騒ぎければ
八五神無月ほどけの限顯はるゝ庭のまもなく花ぞ降ける
八六いつのまに法に移ふ菊なれや過し物ごともみえぬ今日哉
八七覺束なにしきつらむ紅葉見に霧の隱せる山の麓に
八八君しあれば並木の花も賴まれす痛くな吹そ木枯の風
いと許多あれどかゝればといめつ源宰相右兵衛
督俄にをみに召されてそのあをすりを朝のまに
せめられて病をかさぬるに氷のつきたれば
八九限なくとくとはすれど足引の山井の水は猶ぞ凍れる
といふかの御上のかくなむとあれば
九○足曳の山井に凍る水と云ばとく共袖の程ぞ知らるゝ
人の許にきける人の三年ばかり更に見えざりけ
るを見むとてあすは明けはてゝくるまはゐてこ
といひたりければあやしう久しき事と思へど人
をやりてそひてこといはせたりけるをつとゝら
へて内にもえ入らでみしていとねたかりければ
男藤大納言とか
九一岩橋のよるの契も絶えぬべしあくる侘しき葛城の神
返し　をとこ
九二秋立てば見しとや思ふ葛城の神の夜にて已ぬべき哉
此の同じ人なほし姿にてきて今宵は内のとのゐ
なりこれをきたれとて蒔繪の箱に沈の束さした
るかたなをおきていぬるが三日ばかり音もせざ
りけるに刀とりてみけるに錆びたりければ、女
九三どき置し鞘の刀も錆に鬼さして久しく程やへぬらむ
とてやりたりければ
九四かね錆み返る刀に身を做て束のまもなく戀や渡らむ
をとこ心ちそこなひて四五日ばかり内へも參ら
でありけることといひてありける晝に
九五斯てもや消えむと思ふ白露の起居て結ぶ水莖をみよ
をんな
九六露により暮る〻影まつ草の葉に斯る折しも消ぬと云べき
これを見て三日なむなきしといひけるこそそらご
となれ
菜玉を女のがりやるとて男に代りて
九七沼ごとに袖ぞ濡ぬる蒿蕪草心に似たるねを求むとて
返し、女
九八苦しきに何求むらむ蒿蕪草安積の沼に生ふと肚きけ
美濃の守よりみつめなくなしての里箱のいみじ
きあしたに、人
九九此頃のよはの嫗覺は思遣るいかなる鷲か霜拂ふらむ
返し
一○○冬の夜の霜打拂ひなくとは番はぬ鷲の業にぞ有ける
これなかの朝臣病に煩ひて三河のしほぢをよび
に宮權大進むねさをやりていはせけるに更に
聞き入れざりけるを強ひていひければすこし宜
しきを賴にて曉にといひてねぬるに夜なかばか
りに起き出でゝあらひがねうちて佛に物申す音
しければさや〳〵と思ふに音もせずなりにけり
弟子をおこしていづちかおはしぬるぞとてはも
とむれどなくなりにけり淺ましうて暮おき逃
げにけり
一○一長き夜の道に惑へる我おきて行隱れぬるよはの月哉
入道の返しあしたにぞありける
一○二重なれるみ山隱れにすむ人は月を教へむ扉だになし
二條の右の大臣八月ばかりに參り給うて歌一つ
詠ませて給はらむと上にせめ聞え給へばせむ方
なくて草の葉の上にとありし御返りはこれなり
一○三鷲深き草葉の上もいひ難み何につけてか秋を問らむ
一○四秋の夜の草葉の上の露の身を其に付ても暮ぬかな
かくいひこめられぬとていひ給ひぬ宣耀殿の御
局より御疎の日籠に葵をかけて上に遣せ給へ
るおろしを給はせたるに
一○五瑞垣のあたりに馴ぬきねよりも神にいち著し今は賀さし
返し忘れにけり
又五月五日さうぶの根を盤につくりて梅の枝に
すゑ給へる
一○六梅枝にとり遠へたる郭公聲のあやめも誰か分くべき
返し
一○七名告せで梢にこすば郭公春かけてこし鳥とかや見む
すみやう經よませむとかやぞありし宮にすりの
厩人とてさぶらひし人の大ばん所にひとりあり
けるをそれとらへよとゆきよりに仰せられけれ
ばとらへて更にゆるさでふしぬるを夜一夜いと

ほしと思ひふしておきていく程にいひける

八〇長かれよ朝ねの髪の千代結ぶ契と見れば悲しかり鬼
返し　ゆきより

九〇長かれと云すば長く非じとや文なく君がめには見ゆ覧
上とのゝおとておまへに近く候ふ人々あやしきく
れの枕を落して出でたるにつけたるを人々彼の
上にやりたり

一〇道芝やおどろの髪に馴らされて積れるか社草枕なれ
さぶらはざりし人々はいみじう笑ふにあるたいふ
のうへにおきたりければとのゝおせしはからかりて
返しは枕定めすとぞ見えしや

殿上にすみもてくる男を遅く参りたりとてその
時に候ひし藏人今は上に参りしよりその人のと
らへてかみに縄をゆひつけて許さゝりしかばも
のより除かせ給うてこはたかゝらせ給ふかとも
こり侍るべくとて許さゝりしかば女房方より

一一大原やすみのかしらの繩許せこのめに涙浮ぶと云也
といはせたりしかば許してけり我には思ひまし
たりと仰せられしこそ

人の許に罷りたりける男の見侍りけるを知らで
ほかげに小侍従といふ人のさし出でゝ人に物い
ひける、男

一二みつの江の蜑に問はゝや白波の夜光るてふ玉も斯やと
いかでいはむなどいひけるにねたりける寝言に
宮きくのことなり

一三今告む蜑のみるめの耻かしく袖に止らぬ玉も散けむ
多武の峯にある大とこのさり會の香爐にいれむ
とて梅花方さぶらふなるしばし給はらむと申し
たりければ

一四春風に散りはてにけむ梅の花たゞか計ぞ枝に殘れる
中將の命婦に馬の内侍の八月ばかりにいひやる
見染めけることも秋とか

一五枝繁み下にもえつる荻の花秋知りそむる人や戀しき
返し

一六色待で末にし消る雪ならば遂に錦は見てややまゝし
えあはぬ人にいはむとて男のいふ

一七今日は我が消果てなまし中々に後を頼まむ命知ぬに
殿上人桂より舟にて渡るに星の影のみえければ

一八水底にうつれる星の影見れば　るもの督公任の君
さねかた
あまの戸わたる心ちこそすれ

一九妬き我が小倉の里に宿りして紅葉の色をよそに聞哉
をぐらの森のおぼつかなさに返したれそや

二〇珍らしと云べけれ共初雪の昔ふりにし今日ぞ悲しき
さねかた

二一ふりぬ共消せぬ物にあらませば袖は濡じな今日の初雪
みちのぶの君人の許におはしてあしたに

二二露よりも儚なかりける心哉けさ我何し起てきつらむ
かゝる人々もおはせぬを思ふにいと悲しくてか
きもやられず同じ人服ぬぎ給ひし

二三限あれば今日脫捨てつ藤衣涙の果ぞ知られざりける
又みちのぶの君實方の君に三月中のほど

二四散殘る花はありやと打群れてみ山隱れに尋てしがな
かへし

二五まだ散ぬ花もや有と尋見むあなかま暫し風に知すな
ためなかみちの國のかみにてくだる四條の大き
おほい殿のせんし給ふに

二六武隈の松を見つゝや慰めむ君が千年の影にならひて
正平五年の程はいみじう人しぬその頃木工のく
ら人里より

二七起も敢ず儚き空の露を爭で貫きとめむ玉のをもがな
また門宮

二八草の葉に非ぬよなれどもされば露は我身の上かとぞみる
返し

二九己がまだ消ぬに消る頃なれば露社人を露と見るらめ
これは皆人の扇にあなり此のかへり、宮の御

三〇今はさは止るべきよの玉ならず白き蓮の露を見らむ
かんげゆのぞうにてありし　むらよ

三一常よりも常なき頃の露のみをいかに云てか日をば暮さむ
かくいひし人のなくなりにしが

三二見る程も無て消ぬる露よりも誰か此世に遂に止らむ
宮の御元結よりて参り給ふことはたいふどのな
む仕うまつり給ひしを北の方うせ給うて忌はて
ゝの程にめしたるに仕うまつりおくとなむみ侍
りおきし今もとめて参らむと聞えおき給ひて三
四日ありて物の中より侍りけるを見給ふるにも
哀なること多くなど聞え給へるに

三三千俛る袖の中にや有つらむ是をぞ玉の緒にはよらまし
御返し

三四玉の緒を君が爲にとより置て衣の裏を見ずぞ成にし
宮に宮の御いかの事爲たふの君仕うまつり給ふ
に松の實入りたるをそのかたに作りてありし時

三五時いきて長閑き物は天の下ちよまつ枝の蔭にざりける
その返しを仰せごとにて

三六誰にかはこゝらの年を數へこむ松の一葉を千世と證つゝ
東三條の院に渡らせ給ひて池の浮草どものむつ
かしげなる拂はせ給ひていとをかしければ

三七君住めば濁れる池も無りけり汀のたづも心してゐよ
女の許に物をだにいはむとて來たりける人旦に

三八消え返りあるかなきかの我身哉恨みて歸る道芝の露
かへし

三九哀とも草葉の露や問れまし道の空にて消なましかば
おなじ人

四〇ひたぶるに死なば中々遮莫生きてかひなき物思身は
かへし

四一なくなればなげの哀とも云るゝをさは心みにくがれ魂
かへし

四二身の憂に這伏す葦の假にても頼む計の言の葉ぞなき
男松をむすびて

四三染め返し幾しほへてか石上おふる松葉を結びおく哉
返し

四四磯のべは結びもしてむ高砂の松には及ぶ人や無らむ
同じ人女のもとにきてかどをたゝきけるに明け
ざりければ歸りてあしたに恨みたりければ

四五尋ぬべき人も覺えぬ我門の夜は葎の根こそさすらめ
返し　をとこ

四六草葉だに心有らし八重葎いる人わきて閨の戸させば
といひてきけるになほ語りければ

四七此世にはつきしも果じ思ふと命の後はいつか絶べき
返しなるべし　をんな

四八我死なば孰こをはかと尋てか此世に盡ぬとも語らむ
同じ人常にいへば今などいふがことざまになり

ぬべしと聞きて
九四我や明し浦島の子が玉櫛笥結びし袖の空に見えねば
〇五玉櫛笥袖から雲の立しより空の長めを刈ぬ日ぞなき
かへし
一〇五空にこそつらき數かけ河鳴の百羽掻には過やしぬ覽
扇の縫ひ物したるを持たせ給ひてこれ見よと仰
せられて給はせたるに郭公の卯の花くひていく
かたありたゝにやはとて
一〇六垣ねに出る便に移る卯花を惜むと聲は立てぬなるべし
これを實方に給はせたれば
一〇七時鳥なくにし散らは卯花の垣ね乍らぞ聞べかりける
住吉に故大將殿のまうで給ひけるに夕日の入る
程に空いと心細うて松の下に浪の寄するを
みちのくのかみためなか
一〇八松見れば焦れぬ物を住の江のいかなる波か醉心なき
三條の中納言殿にありし大夫君蜘蛛の巢に花を
ふきかけたるを見て
一〇九小蟹の蜘のをはたは薄けれど散來る花は洩さゝり鳧
實方の中將人のがりやらむとてためたふの君に
かくいはむはいかゞといひける歌
一一〇爭でかは思ありとは知すべき室の八島の煙ならでは
をかしなどいひて爲たふの君わが懸想する人の
がりやりてけり女も聞きてわらふ程にわたりけ
れば
女
一一一此の頃は室の八島も盜まれて
と云ひければ
えこそはいはね思ひながらに
かねもりが大井にてよめりし
一一二大井河そま山風の寒けくに岩打つ波を雪かとぞ見る
おなじ人大盥物なりし時內侍所にみがきまうし
に大舍人のひきいでに來たるにある人內侍のす
けの知るやうありてそこにありける折なりけれ
ばまへにありけるたちふといふうりを黃なる色
紙につゝみて大舍人なりける翁にとらせたりけ
れば緣司につきてそこよりいふ
一一三山城のとはに通ひてみてしがな瓜作ける人の垣ねを
かへし
一一四常とはにゆけば也鳧瓜作り其となきに立てりしや君
又の日つかさめしに駿河守になりて喜び申しに
參りて袖より落しおきたりしはいとこそ
一一五瓜つくる園生も知す人しれす落る涙やそほつなるらむ
いとからくとぞありし七夕のあしたに春宮にて
ひんがしにたちはきのをさのありしかたにひき
たる糸にくもの巢をかきければゆきよりにしか
け〳〵となむおとりたてると仰せられしかば
一一六さゝ蟹のもろてに急ぐ七夕の雲の衣は風やとくらむ
とありしを實方の君に語り給ふめりしかば立ち
ながら
一一七彦星のくべき宵とや小蟹の雲のい掻も懸て見えけむ
藤大納言少將にておはせし程に女御の御方七夕
祭したる所にきて物いはむとありしかばすの本
にて何かといひておはしにけるをそれより給へ
りけりと人々聞き給へりけりとて朝によろづの
ちかごと文に書きて見せよとおぼしくてあり
一一八七夕にかしこと思ふ逢事を其夜なき名の立にける哉
あるやんごとなき人の許に忍びて十年ばかり通
ふ程に今宵かくてといひたりけるをまらうど多
くて遊びなどしてえさらざりければ又の日そ
のことをいひて今宵は命だにあらばがならずと
あるに
女
一一九惜からぬ命は我も讓りてむ頼むるとを誰に見せまし
同じ人そのよ物だにいひへでとぞいひし
一二〇終夜ひむ明しつる衣手の今朝も變らぬ程を知らなむ
かへし
一二一よそ也し袖もやひちしむべ社は愛に涙の留らざり鳧
親の思ひにてれいくる所にえござりける人この
程にありきしたらばと聲ひけるをうけひかざり
ければつとめて人わりなくと云ひて
一二二劒なしや空言により誓せば今日迄有む物とやは思ふ
とあれば
一二三誓ても有と頼めばたまさかに神の外なる程にも有けむ
世の中はかなき頃前栽の露を見て
一二四植てみる草葉のよをば知せける證ては消る今朝の朝露
田舍へやる文のあけごろに
一二五天川淨木にのれる我ならば君があたりに今はきなまし
志深からぬ男の花染の狩衣せさするやるとて
一二六人心うす花染のかり衣さてだにあらで色やかはらむ
とみや宮にて枕のありくさきに書きつく
一二七敷島やおどろの髮にならされて積れるか社草枕なれ
ちひさき瓜の黃なるを同じ色の紙につゝみてあ
さみつの少將のがりやるをきゝたがへてよりひ
らにとらせたれば
一二八雲のたつ瓜生の里の女郎花くちなし色はくひぞ煩ふ
心ときめきしていひたりしかひなければかへし
もせでとり返してはじめの人のがりやるとて我
がとないひそと云ひければ
一二九在所細かに勘らしら瓜のつるゝを尋て我ならさなむ
左近の君にとのたまへりしかば我と知られにけ
りとねたくて
一三〇うり所愛には有じ山城のこまかに知らぬ人な尋ねそ
五月五日
一三一諸共に逢見ぬ沼のねを引ば忘やしにし長からぬなか
雨降るとてこぬ人のふらぬにも見えねば
一三二ふらぬ夜の心を知で大空の雨をつらしと思ひける哉
同じ人いみじうわづらひて今日は死ぬべしなた
のみそとのたまへりしかば
一三三君により暮まつ草に置露のかゝらむ程を如何頼まぬ
文おこする人返りごとをせぬいみじう恨みてこ
たみばかりと云ひければこと手にて
一三四踏な見そ渡しもはてぬ岩橋ぞ中々道の空にわびなむ
常陸守なりよりかゝれ侍りし頃
一三五あだ人の假に訪くる我宿に今は葎のねこそはふらめ
同じ人のきたりけるにと人のありしかばはひ
をえていみじう恨み侍りしかば夙めてこれより
二三六恨む覽心はまたや解けざらむ置つる霜のけさの寒さに
また人に
一三七殊更に恨むともなし此頃の覽覺計りは知せてしがな
宮にて弓いさせ給ふにくらうなるに人召すにお
そければ
一三八待つ程に久しかりけり行末のまだ遠ければ武隈の松
實方の君親に後れて歎くと聞く頃
一三九底はふち淵は瀨ならぬ涙川袖の渡りは有じとぞ思ふ
瓜の青きなるをとしのかへりみむきたる由をこ
れはいかゞいふべきと葦手に書きて進らせたり

つれば宮より
六六瓜生野の澤に住ぬるをし鳥の雲居に通ふ心あるらし
かへし
七心をし雲居としめば葦たづの齢とのみは思ざらまし
おほんいしなどりのいしをつゝませ給ひけるに
三十一あり、つれば一つに一文字を書きてまゐらせける
八苦むさば拾ひも替む細れ石の數に皆とゞちよは幾つぞ
七月七日大入道殿の御いみなる程にすゝきにひきたる糸を
九世中に包まぬ年の秋ならばなかしからまし今日の七日も
文などおこせける人のものにいきて程もなく歸りきたれば
一〇唯今ぞきつると思ふ袖の裏上もなく成にける哉
かへし
一一大空の旅の空なる濡衣をたがもとゝてかかたへきつ覽
九月ばかりに同じ男に
一二花薄穗に出に鳧わが爭で人に知られて結ぶわざせむ
返し
一三結ぶともとく共急ぐ花薄まだき穗に出て人に知すな
又かへし
一四穗に出て唯にも非じ花薄風のよするを厭はざらなむ
知らぬとあるかへりごとに
一五賴めとや賴まれつゝとや定なき命にかゝる心と云らむ
又この頃ものへ行くとて
一六別行くかたしの道に置霜の消えむ雫に袖や濡れなむ
かへし
一七狩捨て行きなむ後の衣手は君一人しも濡じとぞ思ふ
又
一八結ぶ手はとになる共花薄とくる迄だに忘れざらなむ
かへし
一九花薄虫手に人に結ばれていつかとくると待つぞ儚き
二〇霜枯におきてこしより獨寢の袖の寒さの增りゆく哉
返し
二一霜枯の侘しきとは思へ共おきては露の草葉ならぬに
二二空言と云べけれども神無月思出でつゝ且は知らるゝ
をとこ
二三常よりも戀しくなりて神無月絕ずも袖の濕ふなる哉
久しうなりて來りいり道にちりありと女いへば
二四我ならぬ人も起臥す所には塵のみゐると云ぞ怪しき
かへし
二五塵ならで又ゐる人もなき物をとに無名も立ぞ侘しき
二六誰かかく錦はかけし神無月機おる蟲の聲も絕えにき
子の日をとこ女の許にいひたりける歌は覺えず
女かへし
二七野べ乍ら契りとを待ならばつらき心も猶や賴まむ
つゝみの大宮に物聞えけるに四月に時鳥の聲を
ふたりながら聞きたりける程におろかになり給ひにければ聞えけり
二八初聲をふしてや聞し時鳥きくにたがはぬ心ち社すれ
春宮にてなすびのゆゝしげなるにはがたのつきたるを見て
二九くひ所みればうねなる老茄植たる人のくへなるべし
ためよりがいひける
三〇人知れぬ心の儘に拾けるかひなからむと思けむやはかへし
一君はかく忘れ貝こそ拾ひけれうらなき物は我が心哉
二霜厄る二見の浦のをしの上を君より外に誰か拂はむ
せえう殿の人々櫻のうたのもとにするつけたる
三散らで千とせをすぐさましかば
とぞありける殿上の人々のつけゝる
四惜むあまりめや馴れなまし櫻花
五人寄れど今は立げもなき鳥のこに籠れるや何の疑ひ
六麺麥を人のがりやるとて五月五日くすだまにつけゝる
七麺麥の今日引植うる蒿蒲草澤の物とは思はざらなむ
雪の深きかをたさふやとばかり云て歸りたるに
八行摺に跡尋ぬれば消にけるいつから越の方にか有けむ
內に參るに實方の中將月こそいとあかけれとのたまひしかば
九雪の上に誘はざりせば久方の身に添影も送ざらまし
草たづの雲居の中にまじりなばなど云ひて失せたる人あはれにおもほゆる頃長歌
一〇久かたの空にたなびくうき雲のたま消て思ふことのみ
つゆ草の露のいのちもあら玉の行く年つきの
もろこ宮繁さぞまさる夏の日も木の下かげも
春の日は花のにほひも冬の夜の時雨のおとも
秋の夜の月のひかりも憂きとは つらきも知ぬ
世の中にこひも分れず我身こそ心にしみて
我身こそ千る時もなく釉の浦の思ひつゝ
哀れなれかくのみ常にいきの松ばら
生たるよながらの橋の長らへて瀨に居るたづの
鳴き渡りいづる浮世の水草みの我身にかけて
かけ離れいつか戀しき雲の上の人と逢ひ見て
此世には思ふことなき身とはなるべき
一一胥々の夢の魂足たかくありかで待たむ訪らひによ
一二みるめ刈る蜑の往來の湊ぢに勿來の關も我は據ぬに
醍醐の御時に日でりのしければ雨乞の歌よむべき宣旨ありて
一三千早振神もみまさば立騷ぎ天のと河の樋口あけたべ
遣水に櫻の花の流るゝを見て
一四瀧の水木のもと近く流れずば泡沫花を有と見ましや
入撰集歌
一五殊更に恨むともなし此頃の寢覺計りを知せてしがな
一六散るをこそ哀と見しか梅の花花や今年は人を忍ばむ

能宣集

小野宮太政大臣の七十の賀し給ひしに左大臣し給ひてよませ給ひける御屏風の歌

春

一たづのすむ澤べの蘆の丁根とけ汀萌出る春はきにけり
二花さかぬ常磐の山の鶯は霞を見てぞはるを知るらむ

夏

三夏山の木高き蔭に立寄て見れば千年の影にぞ有ける
四龜山の巖の上の紅葉ばは散で秋をぞかぞふべらなる

冬

○二春日野の常磐の松は霜雪のふる年毎に色まさりつゝ
同じるゐの竹の杖そへ侍る
一三君が爲今日切竹の杖なればまたつきもせず千代ぞ籠れる
屏風の歌よめと侍るに正月子日松ひき若菜摘所
二四引松の千年の春は春日野の若菜も摘まむ物にやは非ぬ
二月田つくり侍る所
二五雁がねぞ今歸るなる小山田の苗代水の引もとめなむ
二六三月つごもりばかりに花の下にて惜み侍るとて
二七散果る花を惜めば大方の春さへくるゝことをしぞ思ふ
四月山里の花咲きたる所を旅人とまる
二八山近み櫻の花を時ならでふる雪とのみ過またれつゝ
五月五日人の家にさうぶふきて侍り女ども郭公
聞き侍るに
二九萬葉草引かけたれば子規ねをくらべにや我宿に鳴く
六月はらへし侍る所
三〇御禊する川の淵瀬に引く網を大幣なりと人や見らむ
七月七日たなばたに物かせる所侍るに
三一棚機にかせる衣の打返し別れてこひむ程のはるけさ
八月駒迎し侍る所
三二迎へくる人もあるかな關山の駒引返す影はしるしも
九月田舍の家の稻をとるにかゝりする人のまうで
きたる女ども侍り
三三假にとて我宿のべにくる人は稻負鳥に逢むとや思ふ
十月網代に紅葉流れよりたる留まりて見侍る
三四紅葉のよれる網代は飽すして過にし秋のせに社有けれ
十一月神祭る家
三五榊葉の霜打拂ひかれすのみすめとぞ祈る神のみ前に
十二月雪ふる所
三六新らしき春さへ近く成ゆけばふりのみ增る年の雪哉
又屏風の歌よめと侍るに春稻荷詣でしてかへる
もの侍り花の際にて休むものある所
三七指てくる稻荷の山の道遠み花のあたりに宿や借まし
春日野に若菜つみ侍る所
三八新しき春くるとも古里の春日の野邊に若菜をぞ摘む
同じ所に祭の使の歸り侍るに
三九や少女も霞も共に今日し社春日の野邊に立渡るらし
須磨の浦しほやき侍る所

四〇須磨の浦の藻汐の煙春なれば空に霞の猶や立つらむ
暮の春富士の山近き所に人の家侍り
四一草深みたきつけたる蚊遣火とみゆるは富士の煙也鳧
住吉のかたかきて侍る所
四二住の江の年ふる松の齡をば返る〳〵も浪やかぞふる
天の橋立わたりにあまの侍る
四三誰爲に渡し初けむよさの海の浦に世をふる天の橋立
海のほとりなる人の家見出して侍り
四四漁火の暮れば浮ぶ影をこそ天つ星とは云べかりけれ
末の松山に鳥乘どもおりて休み侍る
四五音にきく末の松山今日こそは打くる浪の越々すみめ
浮島の橋わたして侍る所に
四六浮島と名に聞くれど浪の上に所も去すとをぞ經にける
夏の季の小倉の山
四七紅葉せば紅く成なむ小倉山秋まつ程の名に社有らし
大井川くれくだす人の家侍り男女見侍り
四八筏おろし明暮下す大井川見なれそしつる四方の人さへ
嵯峨野に癈人所の人々まかりてお前の前栽ほり
に出でゝ
四九秋毎に大宮人のくる野べはさがのとどや花も見らむ
人の家に前栽のつらに侍りて
五〇女郎花匂ふあたりに睦るればあやなく露や心置らむ
小野にし侍る山里に人の家の紅葉面白きに女ど
もの出でゐて侍るに狩する人の鷹するてまかり
たる
五一山城の小野の山べの里遠み假の宿をも鳥ぞ鳴くなる
くりこ山なる人の家にをうなども紅葉見侍り
五二紅葉みる栗駒山の夕影をいざ我宿にうつしもたらむ
宇治の網代に紅葉ちり流れて侍る
五三紅葉のひを經てゝ見る網代木は錦を橋に渡すとぞみる
神樂し侍る
五四山人のたける庭火のおき明し聲々遊ぶ神のきねかも
しかすがのわたり雪ふり侍るふねに乘りてまか
る
五五雪により返りやせましかすがに故郷戀しいざ渡りなむ
女の許に春の頃はひいかで物いひ侍らむといひ
遣して侍るに秋になりて厭ばかりいはむといひ
侍れば

五六天の川隔つる中の戀よりも久しき秋をこひや渡らむ
彌生のつごもりがたに雨のふる夜春のくるゝを
惜みて侍る心をよむに
五七暮ぬべき春の形見と思ひつゝ花の雫にぬれむ今宵は
人の歌合し侍るに詠みてと侍れば
霞
五八霞だに立後れせば新しき春のくるとも知ずぞ有まし
梅
五九梅の花匂ふあたりの夕暮はあやなく人に過たれつゝ
春風
六〇春風の吹とけがたの氷薄み底の玉藻も今やみだるゝ
岩躑躅
六一咲ぬれば散事難き岩躑躅名には違はぬ色にぞ有ける
卯花
六二卯花の咲るあたりは時ならぬ雪降里の垣ねとぞみる
子規
六三時鳥寢覺に聲を聞しよりあやめも知ぬ物をこそ思へ
夏蟲
六四燃る火の中の契を夏蟲のいかにせしかば身にもかふ覽
蚊遣火
六五終夜片燃え渡る蚊遣火に戀する人をよそへてぞみる
刈萱
六六東路を別るゝ萱の亂れつゝたが爲とかは吹て靡かむ
秋霧
六七秋霧の峯にもをにも立田山紅葉の錦たまらざるらし
女郎花
六八女郎花あだにや身をば思ふらむ露の心に過たれつゝ
薄
六九我だにも結置きてか花薄なべて人をば招きしもせじ
時雨
七〇柚山に立つ煙こそ神無月時雨をくだす雲となるらし
初霜
七一夜を寒み離の草を見渡せば今朝ぞ初霜置にけらしな
氷
七二山川を落來る瀧の音もせず今は氷に閉ぢぞしぬらし
同じやうなる事人のし侍るに、初春
七三隱沼の氷のまより下根さし萱の二葉も今やとくらむ
霞

一八霞だにたえず有せば春きぬと何を徴に人のとはまし
鶯
二八山高み雪ふるすより鶯の出る初音は今日ぞなくなる
梅
三八句をば風に添て梅花色さへあやなあだにをらすな
若菜
四八白雪のまだ古里の春日野にいざ打拂ひ若菜つみてむ
櫻
五八櫻花まだきな散そ何により春をば人の惜むなるにか
柳
六八ともすれば風のよるにぞ青柳の糸は中々亂初めける
子日松
七八早晩も引人ともや春の野に生ふる子日の松は待らむ
蛙
八八今朝きけば澤の蛙も鳴に鳬春の暮にもなりぬべら也
款冬
九八こぐれつゝ春の半に成にけり今や咲くらむ山吹の花
歸雁
一九天の原わきて鳴なる雁がねは故郷尋ね歸るなるべし
春夜月
二九花散ば起つゝも見む常よりもさやけく照せ春夜の月
春雨
三九我が宿の垣ほの草の淺緑ふる春雨ぞいろは染めける
戀
四九埋木の上はつれなく有ながら下には深き戀もする哉
五九戀々て逢とも夢にみつる夜は最ど寢覺の恨めしき哉
六九さりともと頼む心に謀られて死なれぬ物は命也けり
七九人知れぬ戀の道なる關守は忍びに問しとにぞ有ける
旅ゆく人に、雁の聲を聞きて
八九草枕我のみならず雁がねも旅の空にぞなき渡るなる
おほいまうちぎみの柱にて水のほとりの秋の花
といふ題よめと侍るに
九九水の色に花の句を今日そへて千年の秋の例とぞみる
藤花
一〇濃紫句へる藤の花すりはみづなき空に浪ぞたちける
人の屏風に小鳥をするにかひて侍るかたを書
きて侍る
二〇櫻々に山の古巣は戀らめど此とぐらには鳴聲もせす
人の產して侍る所にて
一〇時しもあれ春の始に生出たる松は八千世の色を添けむ
小野宮のおほいまうちぎみの月輪寺の櫻の花見
侍りしに
二〇山櫻千代のはる〳〵今年より色咲增れ君が見にこば
しはすのつごもりの夜山寺にまかり籠りて侍る
つとめて僧のもとより今日は何事か侍るといひ
て侍りしに
三〇人知ず入りさと思しかひもなく年も越くる山路也鬼
同じ山寺にて法師の松引きにさそひ侍るにまう
でたりし窗の前に大いなる松の木のもとにて昔
住みける人のひきける松なりこゝにゐて侍らむ
と申し侍りしに
四〇引初て世々もへにける松なれど緑の色のあせずも有哉
藏人所のをのこども花見にまかり出でゝ侍るに
藏人になりて侍るがもとへ遣しける
五〇花の色をよそに見つゝは諸共に折し昔の人ぞ戀しき

兼盛集

我が君むかし黎民を恵み國を治めおはしますこ
とかすおほうて山にのぼり嶺にたはぶれ給ふお
ほみあそびも見えざりき西はをぐら山秋のもみ
ぢをいたづらに其の色を失ひ東はむらさい野の
春の梅むなしう其の香を失ひ岸のくろ水色きよ
うすみ山の聲たかうよばふ風は枝をならさず雨
はつちぐれをやぶらす世の中も樂しければふ
の行幸もありまする論なりかぎりなき我が君の
御とくを老いたるは老いたるをよろこび若きは
若きをよろこぶ世の中の樂しきことけふの行幸
をためしとすべしとつげしめて其の日の和歌
六〇子日してよの榮ゆべき例にはけふの行幸をよには殘さむ
春
かはらの院にてはるかに山の櫻をみる
冬山寺に心わづらひてありけるにとぶらひに
こむといひたりける人待つ程に雪の松にかゝり
たりけるを
七〇道遠みゆきてはみねど山櫻心をやりてけふは歸りぬ
春の花の盛には必らずこむといひたりけるを盛
りになりにければ
八〇花盛頼めし人もある物を斯咲りとも告ずやあらまし
小野の宮のおとゞの櫻の花御覽じにおはしまし
たりしに 此歌は月輪寺後撰三春之下
九〇山櫻飽までけふはみつる哉花ちるべくも風吹ぬよに
春宮夢に人のみえたりしに思ひつゝにやありけ
む
一一思つゝねつればみえつ春夜の正しき夢に空しからすな
夏
大監物なる時御こき侍りしに內侍所に參りたり
しにいとゞをかしげなるこうりをつゝみていだし
たりしかば
二一山城の駒のわたりをみてしがな瓜作けむ人の垣ねを
五月ごろものいひたりしに何かはといひたりし
にたのみてさもあらずなりければ恨みて雨降り
ぬべかりける日
三一天の原曇れば悲し人しれず頼む木の本雨ふりしより
秋
秋の夕ぐれにむしのいとあはれになくに
四一淺茅生に秋の夕暮なく蟲は我ごとしたに物や悲しき
秋の月いと面白きに紅葉散る夜家にてよみし
五一荒果てゝ月も隈れぬ我宿に秋の木のはを風ぞ吹ける
冬
冬山寺に心わづらひてありけるにとぶらひに
こむといひたりける人待つ程に雪の松にかゝり
たりけるを
六一山隈れ消せぬ雪の悲しきは君まつの葉に似ける也けり
紀有
白河の關にて
七一便あらばいかで都へ告遣らむけふ白川の關は越ぬと
駿河へくだるに粟津といふ所に惠慶がきたるに
あはねばかく
八一恨しき里の名なれや君に我粟津の原のあはで歸れば
返し
九一うと濱の疎きには非す君に我が見ざらむ程な乘て習ぞ
粟津野の逢で歸ればせたの橋戀て歸れと思なるべし
世の中恨みける比ゑきやうが許にいひやる

○二世中を今は限と思ふには君戀しくやならむとすらむ
春頃
二春霞たなびく空は人しれず我身よりたつ煙なりけり
三石まより出る泉ぞ咽ぶなる昔を戀る聲にやあるらむ
はじめて女の許に
四同くば告てを戀ひむ難波めの忍びにのみは燃て渡らじ
まだみぬ人のとひたりければいとうきたりやと
女のいひたりけるに
五みぬ人の戀しき時は自ら我のみならず誰もしるらむ
いかでと思ふ人の近くあるあたりにきて
六濱衞かひ無りけりつれもなき人のあたりは鳴渡れ共
又
七何せむに人をおかじと思けむ戀する袖の安からなくに
松に露のかゝれるを落さす折りて
八逢ふとを今やと松に願りてぞ露の命の年もへにける
いといたうしのぶる中に
九我戀はつゝ井の濱と成なむ心を汲て人はしるべく
いみじう恨むれば時々はきこゆるをりもあるは
と女のいふに
○三言の葉は色やは見ゆるこ紫深き心はねそめてぞしる
又
一四小れ石の上も隱れぬ澤水の淺ましくのみ見ゆる戀哉
いかでとおもふ人に
二五谷河の岩まをわけて行水の音にのみやは聞渡るべき
人をこひて
二六我戀に比べてしがな山河の岩まの波に數をそへつゝ
おなじ人に
二七君を思ふ數にしならば小休なく降添雨の脚は物かは
いひそめていと久しうなりにける人に
二八二葉より今は太田の松の葉の幾よか君を戀てへぬ覽
又
二九つらくのみ見ゆる君哉山のはに風待雲の定なきよに
又
三〇君戀ふと消こそ渡れ山河に渦まく水の水泡ならねど
返事もさらにせねば
三一我戀にたぐへてやりし魂の返りこと待つ程の久しさ
みやづかへ人のざうしのかべちかき所にたちよ
りておぼつかなきことなどいひければさりとも
夢には見つめりといへば（以上三行墨滅）女のつれなく
のみいへれば
三二戀初し心をのみぞ恨つる人のつらさを我になしつゝ
三三我戀は長柄の橋の下よりも盡る世なくも成にける哉
ものなどいへどいとつれなき女に
三四我戀はいをなき淵の釣なれやうけも引れでやみぬべら也
女の許に罷りて物などいふにつれなきを思ひ歎
くほどに雞さへなけば
三五天のとの明くるやをしき鷄の鳴ぬ朝もなくぞ成ぬる
をんなのもとにまかりていたづらにねてかへる
に
三六逢とのなきつゝ歸るよな〳〵は徒寢にも成にける哉
三七名に舊て世に住江の神もなし戀き人の影もみえねば
をんなよにこひしともおもはじといひたりけれ
ば
三八戀しとは何をかいはむ岩波に類ふ水泡の消ぬ計りを
七月七日に今宵の星會みむとてはしにゐたりけ
るに忍びてみてのあしたに
三九天河かはべの霧の中分てほのかにみえし月の戀しさ
かへし
四〇戀しくば河せの霧の夜を込て立歸らずぞ明し果まし
又
四一あな戀し雲間の月に人をみて面影にのみそへる頃哉
四二冬のはじめの頃霜のいと白きをみて我より高き
人に
四三獨ねに數多の冬をへぬる哉身をひと霜と思做かれて
こほりしたるあした人に
四四冬夜の袖の氷のこりすまに戀しき時はねをのみぞ鳴
雪のいみじうふるに
四五物思ひてよにふる雪の侘しきは積々て消ぬ計りぞ
雪のふりたるあしたに
四六白山の雪の下草我なれや下にきえつゝ年をのみふる
をんなのもとより忘れ渡るかなといひおこせた
るに
四七忘るとは恨ざらなむはし廊のと返る山の椎は紅葉ず
をんなふかき心にはあらざりけるとと恨みたりし
に
四八淺しとは恨ざらなむ渡つみの戀れば最ど沖になるみを
女返しもせざりければなげなる物などいふこと
もあるものをとて
四九言葉をなげなる物と思せば何かは人のつらくしも有む
なほいとつらかりける女に
五〇難波がた汀の蘆のおひ風にうらみてぞふる人の心を
いとにいたう恨みて
五一つらけれど猶戀つる水無瀨河うけも引れね身とは知々
文かよはしていと久しくなりぬれどつれなき人
に
五二足引の山の懸橋久しくもなげきこりつゝ渡りぬる哉
いとつれなかりける女に
五三神なびの山の澤水君なれや淺ましくのみ見えし渡れば
五四思ひかけて久しくなりぬる人のことざまになり
ぬと聞きて
○五五植しより枝のみまさる歎とて賴めば本に雨ぞ降ける
大入道殿の御賀の御屏風の歌
（吉野山）
五六見渡せば松の葉白き吉野山幾よを積める雪にか有覽
しらゝの濱
五七君が代の數も取むと紀國の白良の濱に積めるいさご
難波
五八難波江に茂れる蘆のめもはるに多くのよなば君にぞ思ふ
須磨
五九須磨の浦に求食する蜑の大方は貝有よとぞ思べらなる
ながらのはし
六〇朽もせぬ長柄の橋の橋柱久しきことのみえもする哉
みつのみまき
六一眞菰刈みつの御牧の駒の足の早く樂しき世をも見哉
しかすがのわたり
六二我妹子が家路踏分けしかすがの渡り難くも思ほゆる哉
むさし野
六三武藏野を霧の晴間に見渡せば行先遠き心ちこそすれ
ふたむらやま
六四玉くしげ二村山の月影は萬代をこそてらすべらなれ
まがきの島
○六五寄波の數をぞしらすなりにける籬の島のま近けれ共

あさかのぬま

一七沼水も氷にけらしこし方の山路も今は絶やしぬらむ

末のまつ山

二七蘆たづの群ゐる末の松山は幾十重ねの千年なるらむ

なつ（夏）の御ざうすく入れたるはこのふたにあしでにて

三七白波の長閑き浦の姫松は千年の數ぞ添ひて見えける

又

四七此夏の薄き衣は行末のかねてぞかゝるをりを頼まむ

又御杖のふくろに

五七弱竹のよ長き杖をつきてこそ八百萬代の秋は數へめ

又

六七萬代の山にねざしゝ初より君が杖にと見えにけらしる

御かざしのおほひにぬへる

七七萬代のよゝの緑も清き哉これや千年のすめる水の色

八七千代をへて岩の上なる鶴さへぞ君が千年に傳ふべらなる

九七白たづの天原より飛びつるは遠き心を知れるなるべし

おほん扇にあしでにて

〇八昔より仰き傳ふる袖なれば君がてにてぞ萬代はへむ

御はしのだいあるをしきのおもてに

一八君がへむ萬代の數算ふれば唯かたはしの千年也けり

三條のおとゞのおまへのせんざいあはせにさう

わきて歌よむ人めしてよませ給ひけるに

水の上の秋の月

二八濁なく千世を數へてすむ水に光をそふる秋の夜の月

水のほとりの花

三八紫の雲とぞ見ゆる月影に水のおもてらす岸の秋はぎ

草むらの蟲

四七千年とぞ毎に聞ゆなるこや松蟲の聲にはあるらむ

齋宮のみやにてかんし給ひしにいにしへのさいきのみやにてかんしたまひしに

五八萬代と天の空まで聞ゆるはよふかき松の調なりけり

駿河の守にて納はいして歸るにいそのほとりを

行くとて

六八鴨ゐる荒磯に立つ波なれば平らけくこそ我國はあれ

申文にかきて奉る

一本より以下二十三首缺之

七八深水に老の影みゆ蘆たづの鳴音雲ゐに聞えざらめや

女のいと思ひのほかになどいひけるに

八八谷深くやく炭がまの煙だに峯の雲とはならぬ物かは

ひら松のありけるを見て

九八年をへて丈も變らぬ平松の怪しや雪でねもみてしがな

女にいきて物いはむといひければ來ても何ごと

をかといひたるに

〇九蘆の屋のこやともいはゞ津國の難波のとか云ず有べき

宮仕へ人のざうしの壁近き所に立ちよりておば

つかなきことなどいひければさりとも夢にはみ

ゆめりといへば

一九君が又影にも懸てみえば社夢にも人をみつと思はめ

思はぬこと〻いひければいはでのもりなどいひ

ければさらばとて

二九思ふてふとは云でも思鬼つらきを云でつらしともみし

女を思ひやみねといひければ

三九ひたぶるに云もな果そ世にふれば人憎からぬ物と社きけ

すみけるをとこよがれたりときゝしころをんな

に

四九君が宿隨有けりと聞しより影に成ても入むとぞ思ふ

せんていのおほん時のうたあはせ、三月三十日

右馬

五九故郷は春めきにけり吉野山みかきの原を霞こめたり

鶯

六九我宿に鶯いたく鳴なるは庭もはだらに花やちるらむ

梅

七九白妙の雪ふりやまぬ梅がえにけふぞ鶯春となくなる

青柳

八九さほ姫の糸染めかくる青柳を吹なみだしそ春の初風

櫻

九九よと共に散ずもあらなむ櫻花飽ぬ心はいつか絶べき

山吹

〇〇一重づゝ八重山吹は開けなむ程へて匂ふ花と頼まむ

藤

一〇わがゆきて花みる計り住吉の岸の藤波折なつくしそ

卯花

二〇嵐のみ寒き山べの卯花は消ぬ雪かとあやまたれつゝ

時鳥

三〇深山出でゝ夜はにや來つる時鳥曉かけて聲の聞ゆる

夏艸

四〇夏深く成ぞしにける大荒木の杜の下草なべて人かる

戀

五〇君こふる心の空は天川かひなくて行く月日なりけり

六〇人しれず逢を待間に戀死なば何に代たる命とか云む

七〇忍れど色に出にけり我戀は物や思ふと人のとふまで

八〇あふとの片陰行する緑兒の立む月にも逢じとやする

九〇雨やまぬ軒の下水かずしらず戀しきとのまさる頃哉

大嘗會の歌

せたのはし

一〇貢物たえずそなふる東路のせたの長橋音もとゞろに

二萬代をもちぞ榮えむ近江なるお物の濱の天の日嗣は

三岩の上の河堰あげて植し田の稻は萬代絶て絶にしみづ

四小波の長柄の山の長らへば久しかるべき君が御代哉

五君が代を待しも著く大荒木の里の榮をみるが樂しき

六やす河の水底すみて鶴龜の萬代かねて遊ぶをぞみる

七いにしへもみすやありけむ鏡山行く末遠き鑒の明は

八世の富は岩倉山にをさめ置て萬代までに君ぞ傳へむ

九とみゆかの數まさり行君が代にあへる國人賴しき哉

〇朝妻のみねのこの蔭茂り合て榮え行世を見が樂しき

是はゐにかもの社に人々詣づる、車にてもかちにても

二同じくや人の心も祈るらむ我思ふとをあやまつな神

三淺ましく有明の月と出れど日高く人に見えすもる哉

あをうま

四降雪に色も變らでひく物を誰があを馬と名け初けむ

みこ達の出でゝ子の日し給へる所に

五春立ば子日をぞする年をへて久しきとは松を引とて

大臣の家の大饗する所

六引連れて大宮人のきませれば春嬉しくも思はゆる哉

たいしやうのいへにすまひのかへりあるじする

に

七諷きも無て今年は數さしつ醉さまされて今日は歸ぬ

大將の家にむすめの裳きたるに

八千早振神の社を尊ねつゝけふのためてふ祈をぞする

祭の使のたつ所つかひ舞ひ人べいじうなどに中

將かはらけとりて物かづく

八 醉にける我らは知す綾もなし誰が被けたる舅にか有覧
駒むかへの使對ひあひて遊びて舎人に中將きぬ
脱きてかづく
九 花薄は末の露にそぼちたる我衣手をぬきとるやたれ
一〇 足引の山路遠くや出でつらむ日高くみゆる望月の駒
市にものみ云ふぞ儚き萬代をかひにぞ我は急き出つる
びはのほふし
一一 四の緒に思ふ心を調べつゝひきあり付共知人もなし
一二 すはうのめのくだる所づらに馬わたしてものくふところ
一三 白雲の山べ遙に聞ゆるをなどか日高く出たちをする
京の人の家に市女來たり酒うる
一四 なよ竹の末のよ遅き渡らひは市女も我も變らざり鳧
一五 先々にこりにし君がしひ〻ひな何業しにか又はきませる
一六 招かねど數多の人の集く哉富と云物ぞ樂しかりける
糸ひきぬおる所
一七 年をへて機織すべき糸なれや棚機つめを備てしがな
一八 旅人いくあひだに盗人あひたり
旅人はすりもはだにも空しきを早くいましれ山のとれたち
つかさたまはらで内わたりの人に
一九 澤水に老ぬる影を見たづの鳴音雲ゐに聞ゆらむやは
女を懸想しけるに逢はざりけるがいづみの守なり
りける人に逢ひたるにそれも住まざりけるに正
月ばかりに
二〇 春雨に雪げの水もそふ物をなどて絶ぬる泉なるらむ
駿河にふじといふ所の池には色々なるたまなむ
わくといふそれにりんじの祭しける日よみてう
たはする
二一 仕べき數にをとらむ淺間なる御手洗河の底にわく玉
駿河になりて久しく音づれざりければ
よしのぶ
二二 怪きは駿河守といひしよりなどうど濱の硯く成らむ
かへし
二三 うど濱の硯きには非す田子浦の戀しからむを豫て習ふぞ
駿河なりけるもの〻男のいづといふ所にかよふ
がさきに人まうけてもとの人の許には罷ざり
ければ神にうれへ侍りけるうれへぶみにはし侍
りける
（此歌雑歌部本にては入丁八枚下三首）
二四 横はしり清見が關の道路にいつと云とは長く留めつ
とありければしげゆきかへし
二五 關据ぬ空に心の通ひなば身を留めてもかひや無らむ
屏風の繪に
正月野にいで〻若子の日する所、四帖がうた
二六 鶯の初音にけふは懸きて春の山べにをりくらしてむ
をんなの家にをとこきたりまへにうめのはなあ
り
二七 梅の香を便の風や告つらむ春珍らしき君かきませる
二月ゐなかのいへに田かへすところにかはづな
く
二八 澤水に蛙の聲はおいにけり遅くやうたむ春の小山田
三月櫻のはなを見る人
二九 一年に再もこぬ春なればいとなくけふは花を社みれ
三〇 釣舟つりをたれて海のうへにひかへたり
浦なぎに釣のをたれてくる我ぞ痛くな立そ沖つ白波
濱に男女見わたせり
三一 荒波のかけくる岸の遠ければ風間にけふぞ舟渡する
六月はらへする所
三二 河風の吹くる影に吹くづし祓ふる事を涼しかりける
七月七日をんなども庭に出で〻尾花にいとかけ
たり
三三 棚機のあふ夕暮の衣糸を秋の尾花にいくよへぬらむ
八月小鷹がりする所
三四 秋の野に招く尾花に謀れて假にきつれどけふは暮しつ
九月九日
三五 朝露に我そぼちくる菊の花摘しも著き心こそすれ
十月山のほとりなる家に男女ゐて紅葉をみてあ
そぶ
三六 唐錦色みえまがふ紅葉のちる木の本は立うかりけり
十一月谷河のうへにもみぢおほうながる網代あ
る所男女のたり
三七 深山路は嵐や痛く吹ぬらむ網代もたわに紅葉積れり
十二月大雪のふれるに家にをのこかしらに雪か
かりてゆづる葉もちてきたり
三八 奥山の讓葉爭で折つらむ文目も知らず雪のふれるに
内の御屏風四帖の和歌
春
正月ゐする所
三九 新らしき年の初に逢くれど此春ばかり樂しきはなし
四〇 鶯をきゝて女の家に男きたり
四一 人しれず待ちしも著く鶯の聲珍らしき春にも有かな
正月山里わかなつむ所
四二 足引の山片つける家ゐには先人さきに若菜をぞつむ
三月花のもとに旅人たちとまれる
四三 花みると家ぢにおそく歸る哉待時すぐと妹や歎かむ
櫻の花をしむ所
四四 色にあける年し無れば櫻花けふ日暮しに折て社みれ
藤のはな松にかゝれる所
四五 常盤なる花とぞみゆる我宿の松に木高くさける藤浪
夏
四月ほとゝぎすきく家
四六 太山出るまつ初聲は時鳥我宿ちかくうちもなかなむ
五月長雨
四七 我宿の庭の若草茂り合てながめに日をも暮す比かな
六月すゞみする家
四八 水寒く風も涼しき我宿は夏と云とはよそにこそきけ
河づらにはらへする所
四九 河風の涼しからずばみな月の祓針りに物うからまし
（秋）
七月七日
五〇 大空のとゝはみれど棚機は衣ぬぎかし幾よへぬらむ
八月十五夜
五一 終夜みてを明さむ天の原こよひの月を雲なかくしそ
九月田かる所
五二 時鳥聲珍らしく植し田を稻葉もそよと今日はかる哉
野に出で〻花みる
五三 女郎花花みにきつる秋の〻をあやなく招く尾花也鳧
（冬）
十月神のもとかのに詣で〻歸る人道なかにて時雨
雨にあへり
五四 隱るべき木葉無れば神な月時雨に袖を濡してぞ行く
十一月こほり池にあり
五五 鴛のねの痛く鳴つる朝ぼらけ池は氷に閉てけらしも

十二月雪おほうつもる家
[七][五]人しれず春をこそまて我宿に降つむ雪を拂ふ人なみ
これもおなじ御屏風の歌
となりに花の木ある家に人きたり
[六]籬より梢をみつゝ梅のはな春の隣にけふはきにけり
子日
[七]群立てめも春の野に引松の千年の數はたが爲にぞは
鷹がりしたる所
[八]妻戀る雉子の聲もたえなくに傷くけふは家路暮しつ
花みる所
[七]傷くもけふは山路に暮す哉歸らむ程に花はちるとも
三月三日桃の花ある家に
[八]三千年に開くる桃の花盛あまたの春は君のみぞみむ
松に藤かゝれる家
[八]紫の雲うちなびく藤の花千年の松にかけてこそみれ
うちのおほんひやうぶのれう
梅のはな人來て見る
[八]けふくればあすも來てみむ梅花花ちる計り吹な春風
花の木ある家に人きたり
[八]花の木を植しも著く春來れば我宿すぎて行人ぞなき
櫻のはな見てとまれり
[八]世中にたのしき物は思ふどち花みて暮す心なりけり
山吹生ひたる所
[八]枝たわにやへ山吹は咲にけり井手の河べを思遣る哉
よき女藤のはなをもてあそぶ
[八]一年は春ながらにも暮なゝむ花の盛を飽までもみむ
藤の花を人をる
[八]引寄て先祉たをれ藤の花まだみぬ人にみせに遣とて
[八]住よしの岸の藤波我がやどの松の梢に色もまさらじ
七月七日女庭に出でゝ七夕祭すまらうどきて籬
のもとにやすらふ
[八]年毎に棚機つめを祈りつゝ多くの秋を過ぐしつる哉
[九]棚機の飽ぬ別れの悲きにけふしもなどか君がきませる
すゝきある家に男きたり
[九]來ぬ人を呼びには遣ず我宿は招く尾花に任てぞみる
秋の夜女きんひくまらうどきてすのこにゐてけ
さうす
[九]秋夜の月見とのみ明しつゝ今宵もねでや我は歸らむ
秋の夜の月あかきに萩のもとに鹿なくこゑをきこ
ゆ
[九]月影に鹿の音きこゆ高砂の尾上の萩の花やちるらむ
九月田かる所におきなあり
[九]辛くして急ぎかりつる山田哉稻負せ鳥の後めたさに
[九]足引の山田の小菅あす迄と稻負鳥の負ふも手たゆし
山里に女ありかりする人にものいふいらへに
[九]かりにくる人は宿さず昔より都の事は床しけれども
十一月たび人
[九]何にかは急ぎも行む夕暮にあすも越なむ山にやは非ぬ
十二月佛名する家
[九]歎ふれば我身に積る年月を送り迎ふと何いそぐらむ
内の御屏風
正月梅の花を
[九]日頃へて待しもしるく我宿の梅の梢に春は來にけり
柳ある家
[一〇]青柳の眉に龍れる糸なればはるばるのみぞ色增りける
四月山里にて時鳥きく
[一〇]山里に家ゐせしより時鳥夜はの初音は我のみぞきく
五月五日に男馬引き出でゝ見る
[一〇]若駒を菖蒲の草に引添て五月もくれば見ぬ時ぞなき
六月河づらにて祓へする所
[一〇]夏の日は涼しかりけり河風は祓ふとも斯やなる瀧
七月七日
[一〇]殘なく衣は貸つ織女に今日もせなこは我いかにせむ
[一〇]天の川河瀨の風に織女も夜の更け行くを待や渡らむ
八月野に出でゝ花見る
[一〇]遙にぞ花見にきつる女郎花あだなる露に移ふなゆめ
鵜かひの家の前に河あり鵜かふ
[一〇]鵜飼する河べに年を送つゝ憂世の中を知らで祉ふれ
いのち長き人の前に松竹ある家のほとりに菊あ
り
[一〇]春秋も知らで年ふる我身かな松と竹との千代を算て
[一〇]年をへて菊の下水みてしより花と云ふと知で祉ふれ
[一〇]戀しとは云へば更也水の上に降積雪と人は知らなむ
長柄といふ所に行きて人のもとにやる
[一一]忘るやと長へ行けど身に添へて戀しきとは後れざり鳧
女風に煩ふときゝて
[一一]待つ人を梢にたかき渚こそ風に煩ふ身ともなるらめ
いと思はしかりける女に
[一一]思ふてふ世にだに舊ざらば我云へる如君に云はまし
宮仕する女をしもにおりよと云はせたるに得お
りましと云ひたれば
[一一]大空に雙く雲の目に近くおり居ると見ば我は賴まむ
云ひ渡りつれどつれなき女に
[一一]陸奥の安達が原のしらま弓心つよくもみゆる君かな

貫之集

貫之集第一

延喜五年二月いづみの大將の四十賀の屏風の歌
おほせごとにて之を奉る
[一]夏山の影をしげみや玉鉾の道ゆき人も立とまるらむ
〔雪の降りたる所〕
[一]白雪のふりしく時は三吉野の山下風に花ぞ散りける
延喜六年月次の御屏風八帖が料の歌四十五首せ
じにて之を奉る 甘首、子日遊ぶ家
[一]行て見ぬ人も忍べと春の野の筐に摘める若菜也けり
二月初午稻荷まうでしたる所
[一]獨のみ我がこえなくに稻荷山春の霞の立ち隱すらむ
弓のたち
[一]梓弓春の山べにいる時は挿頭にのみぞ花は散りける
三月田かへす所
[一]山田さへ今は作るを散花の詫言は風におほせざらな
わすれ草
[一]打忍びいざ住の江の忘草忘れて人のまたやつまぬと
三月つごもり
[一]花も皆ちりぬる時は行春の故里とこそ成ぬべらなれ
五月照射
[一]五月山木の下暗に燈す火は鹿の立どゝしるべかり鳧
六月鵜河
[一]鵜火の影著ければうば玉の夜河の底に水も燃えけり
水無月祓

[1]御禊する河の瀬みれば唐衣ひも夕暮に波ぞ立ちける
七月七日
[2]棚機にぬぎてかしつる唐衣いとゞ泪に袖やくちなむ
たなばた
[3]秋風に夜の更行けば天の川河瀬に波の立ぬこそまて
八月駒迎
[4]逢坂の關の清水にかげ見えて今やひくらむ望月の駒
小鷹狩
[5]秋の野にかりぞ暮ぬる女郎花今宵計の宿はかさなむ
[6]秋の田の穗に出ぬれば打群て里遠くよりかりぞきにける
志賀山越
[7]人知れずこゆと思ひし足引の山下水に影は見えつゝ
衣擣つ
[8]風寒み我が唐衣うつときぞ萩の下葉も色まさりける
十一月神樂
[9]おく霜に色も變らぬ榊葉の薰るや人のとめてきつらむ
大鷹狩
[10]霜枯の草葉を惜と思へばや冬野のゝべは人のかる覽
臨時祭
[11]みや人のすれる衣のゆふ襷かけて心を誰によすらむ
十二月佛名
[12]年の内に積れる罪は搔暮らしふる白雪と共に消なむ
延喜十三年十月十四日内侍督の四十賀の屏風の
歌内の仰せにて奉る野に人あまたある所　秋
[13]招くとてきつるかひなし花薄穗に出て風の謀る也鳧
雁の鳴くをきける所
[14]秋霧は立渡れどもとお雁の聲は空にも隱れざりけり
月夜に衣うつ所
[15]唐衣うつ聲きけば月きよみまだねぬ人を空に知る哉
河のほとりに紅葉ある所
[16]水底に影し映ればもみぢ葉の色も深くや成增るらむ
山の紅葉しぐれたる所
[17]足引の山掻暮ししぐるれど紅葉は猶ぞ照り增りける
道ゆく人の馬よりおりて岸のほとりなる松のも
とに休みて波の寄るを見たる所
[18]我のみや影とはたのむ白波もたえず立寄る岸の姫松
延喜十四年十二月女四宮の御屏風の料の歌亭子
院の仰せによりて奉る、十五首

[19]新き年とは云どしかすがに我身古ぬる今日にぞ有ける
[20]山見れば雪ぞまだふる春霞いつと定めて立渡るらむ
[21]山風に香を尋ねてや梅の花匂へる里に家居そめけむ
[22]山のかひたなびき渡る白雲は遠き櫻の見ゆる也けり
[23]いかにして數を知まし落たぎつ瀧のみなりぬる白玉
[24]こゝにして今日を暮さむ春の日の長き心を思ふ限は
夏
[25]月をだに飽ずと思ひてねぬものを時鳥さへ鳴渡る哉
[26]澤べなる眞菰刈そけ蔓蒲草袖さへひぢて今日や引らむ
[27]住の江の朝みつ潮に御禊して戀忘草つみてかへらむ
秋
[28]風の音は秋にも有か久方の天つ空こそ變るべらなれ
[29]狩にとて我はきつれど女郎花見るに心の思つきぬる
[30]常よりもてり增る哉秋山の紅葉を分て出づる月影
[31]聲をのみよそに聞つゝ我宿の萩には鹿の疎くも有哉
[32]さく限ちらで果ぬる菊の花うべしも千世の齡のよ覽
[33]吹風に散ぬと思ふを紅葉ばの流るゝ瀧の共におつ覽
延喜十五年の春齋院の御屏風の和歌内の仰せに
よりて奉る女ども瀧のほとりに到りてあるは流
れおつる花を見あるは手をひたして水に遊べる
春
[34]春くれば瀧の白糸いかなれば結べ共猶泡にとくらむ
女なども山寺に詣でしたる
[35]思ふとありてこそ行け春霞道さまたげに立ち渡る哉
人の木のもとに休みて川ごしに櫻の花を見たる
[36]遠方の花も見るべく白波の共にやわれは立渡らまし
道行く人の歸る雁の渡るを見たる所
[37]妬き事歸るさならば雁音をかつ聞つゝぞ我は行まし
女柳の枝をひかへて立てり
[38]花見にも行べき物を青柳の糸手に懸て今日は暮しつ
人の家に櫻の花を見たる
[39]我宿の物なり乍ら櫻花散るをばえこそ留めざりけれ
池のほとりに藤の北松にかゝれる
[40]綠なる松に懸れる藤なれど己が頃とぞ花は咲ける
延喜十五年十二月保忠の左大辨の左大臣の北の
方祝奉三五十賀、時の屏風の和歌
[41]我宿の松の梢にすむ鶴は千代のゆかりと思ふべら也
[42]水とのみ思し物を流れつゝ瀧は多くの糸にぞ有ける

秋
[43]なべてしも色替らねど常磐なる山には秋も知れざり鳧
[44]移ろはぬ常磐の山に降時は時雨の雨もかひなかり鳧
[45]紅葉のまなく散ぬる木の下は秋の影社殘らざりけれ
延喜十五年九月廿二日右大將の御六十賀清和の
七宮の御息所の仕うまつり給ひける時の屏風の
料の歌四首、春
[46]數ふれど覺束なきを我宿の梅こそ春の數は知るらめ
[47]百千鳥木傳ひ散す櫻花いづれの春かきつゝみざらむ
[48]菊の花雫おちそひゆく水のふかき心を誰か知るらむ
[49]三吉野の山より雪の降くればいつ共分かぬ我宿の竹
延喜十六年齋院の御屏風の料の歌内裏より仰せ
承りし六首人の家に女どの庭に出でゝ梅の花を
見又山に殘れる雪を見たる
[50]梅の花さくと知すや三吉野の山に友まつ雪のみゆ覽
人の木のもとに立て遙に櫻の花を見たる
[51]山櫻よそに見るとてすがの根の長き春日を立暮しつる
池の邊りに咲ける藤のもとに女どもの遊びて花
のかげを見たる
[52]藤の花色深けれやかげみれば池のみづさへ濃紫なる
瀧のほとりに人きて見る
[53]流れくる瀧の糸こそ弱からしぬけと亂れて落る白玉
海のほとりに生ひたる松のほとりに道行く人の
休みたる所
[54]幾世經し磯べの松ぞ昔よりたちよる波や數は知る覽
雪の庭にみてりける
[55]夜ならば月とぞ見まし我宿の庭白妙に降りしける雪
延喜十七年八月宸旨によりて
[56]人はうべ遲く知けむ梅の花咲る後にぞ春はきにける
[57]梅が枝に降懸りてぞ白雪も花の便に折らるべらなる
[58]若菜つむわれを人みば後綠野べの霞をたち隱さなむ
[59]鶯の絕ずなきよる青柳の糸憂き節のなくもあらなむ
[60]松ぞのみ賴て咲る藤の花千年の後をいかゞとぞ見る
[61]人もなき宿に匂へる藤の花風にのみ社亂るべらなれ
[62]見てのみや立暮してむ櫻花散を惜むにかひなかり鳧
[63]惜みにと來つるかひなく櫻花見れば且社散增りけれ
[64]千代迄の雪かと見れば松風に類ひてたつ靄ぞ關ゆる
[65]色のみぞ增るべらなる磯の松影みる水も綠なりけり

一九歸る雁わが言つてよ草枕たびは妹こそ戀しかりけれ
二〇流れ行く蛙鳴くなり足引の山吹の花にほふべらなり
二一なつ衣暫しなたちそ時鳥なくとも未だ聞えざりけり
二二時鳥まつ所には音もせでいづれの里の月に鳴くらむ
二三こぬ人を下に待ちつゝ久方の月を哀と云ぬ夜ぞなき
二四朝霧の覺束なきに秋の田のほに出て雁ぞ鳴渡るなる
二五女郎花移ろひ方になる時は狩にのみ赴人は見えけれ
二六花薄ほには置とも初霜の色はみえずぞ消ぬべらなる
二七八重葎生にし宿にから衣たが爲にかはうつ聲のする
二八おく物は久しきものを秋萩の下葉の露の程もなき哉
二九もみぢ葉の散敷く時は行通ふ跡だに見えぬ山路也鳧
三〇白波の古里なれやもみぢ葉の錦をきつゝ立返るらむ
三一物毎に降のみ靈す雪なれど水には色も殘らざりけり
三二ふる雪を空に幣とぞたむけつゝ春の境に年の越れば
延喜十七年の冬中務の宮の御屏風の歌、元日
三三唐衣新しくたつ年なれや人はかく赴ふりぬべらなれ
子日
三四春霞雖く松の年あらばいづれの春か野べにこざらむ
道ゆく人櫻の下にとまれる
延喜十七年の冬中務の宮の御屏風の歌、元日
三五唐衣新しくたつ年なれや人はかく赴ふりぬべらなれ
子日
三六春霞雖く松の年あらばいづれの春か野べにこざらむ
三七玉鉾の道は猶こそ遠けれど櫻を見れば長居しぬべし
三八あだなりと思ふ物から櫻花ある所には安くやはゆく
瀧ある所
三九松の香を琴に調ぶる秋風は瀧の糸をやすげて彈らむ
池のほとりに藤の花ある所
四〇池水に咲たる藤を風ふけば波の上に立波かとぞ見る
四一もみぢ葉は別を惜み秋風は今日や三室の山を越らむ

貫之集第二

延喜十八年二月女四宮のみこの御かみあげの屏風の歌内の召しにて奉る
正月　八首
一山端を見ざらましかば春霞立るも知でへぬべかり鳧
二月
二よる人もなき青柳の糸なれば吹來る風に且亂れつゝ
三月
三移はぬ松の名立にあやなくも宿れる藤の咲て散る哉
七月
四荻の葉のそよぐ音こそ秋風の人に知らるゝ始也けれ
八月
五天雲のよその物とは知りながら珍しきかな雁の一聲
九月
六いづれをか花とはわかむ長月の有明の月に紛ふ白菊
十月
七流れくる紅葉ば見れば唐錦瀧の糸しておれる也けり
十二月
八木間より風に任せて降雪を春くる迄は花かとぞ見る
延喜十八年四月東宮の御屏風櫻の花のもとに人々の寢たる所　八首
九且見つゝあかすと思ふに櫻花散なむ後ぞ兼て戀しき
池のほとりに藤の花咲きたる所
一〇水にさへ春やくるゝと立返り池の藤波をりつゝぞみる
蔵したる所
一一此川に祓へて流す言の葉は波の花にぞ類ふべらなる
七月彦星見る所
一二天の河夜深く君は渡るとも人知れずとは思ざらなむ
男の萩の花見たる所
一三同えに花は咲けれど秋萩の下ばにわきて心をぞやる
小鷹狩したる所
一四花の色を久しき物と思はねば我は山路を狩に赴れ
大鷹狩したる所
一五花にのみ見えし山のを冬くれば雪りけだにな霜枯に鳧
雪ふれる所
一六春近く成ぬる冬の大空は花をかねてぞ雪はふりける
延喜八年承香殿の御屏風の歌仰せによりて奉る
十四首、梅の花咲ける所
一七梅花また散らねども行水の底に映れる影ぞ見えける
旅を歸る雁どもあり
一八ともゝゝに思來つれど雁音は同じ里へも歸らざり鳧
松にかゝれる藤
一九移ろはぬ色に似るとも無物を松が枝にのみ懸る藤波
人の春の野に遊ぶ所
二〇春深くなりぬる時の野べ見れば草の綠も色まさり鳧
散る櫻
二一同じ色に散し紛へば櫻花ふりにし雪の形見とぞ見る
河のほとりの松
二二松をのみ常磐と思へば世と共に流るゝ水も綠也けり
二三やな
二四やな見れば川風痛くふく時は波の花さへ落增りけり
人の家の池のほとりの松の下にゐて風の音きける
二五雨ふると吹く松風は聞ゆれど池の汀はまさらざり鳧
女どもむれ居て萩の花の散るを見たり
二六花の色は許多みゆれど人知れず萩の下葉ぞ訪られける
女の家に男いたりて雞の尾花のもとに立てり
二七吹く風に靡く尾花を打つけに招く袖かと頼みける哉
長月のつごもりに女車紅葉の散る中を過ぎたり
二八紅葉ばの幣とも散か秋果つる龍田姫赴歸るべらなれ
月のもとの白菊
二九色そむる物ならなくに月影のうつれる枝の白菊の花
道ゆく人の松の雪見る
三〇白妙に雪のふれゝば小松原いろの綠も隱ろへにけり
佛名のあしたに導師の歸るついでに法師男ども
庭におりて梅をもちて遊ぶあひだに雪の降りかかれる梅折れる
一梅の花をりしまどへば足引の山路の雪と思はゆる哉
延喜十九年東宮の御屏風の歌内よりめし、十六首子日の松のもとに人々いたり遊ぶ
二春の色はまだ淺けれど兼てより綠深くも染てける哉
三月花ちる
三風吹けば方も定めず散花を何方へゆく春とかは見む
山べに藤の花松にかゝれる
四藤の花もとより見ずは紫に咲ける松かと驚かれまし
車に乘れる人賀茂に詣づ
五人も皆鬘かざして千早振神のみあれにあふひ也けり
五月五日
六葛湍草ね長き命つげば赴今日としなれば人の引らめ
六月祓
七大幣の川の瀬ごとに流れても千年の夏は夏祓へせむ
空になく鶴を聞ける
八千年ふと我が聞なべに葦鶴の鳴渡るなる聲の遙けさ

尾花を見る
一四いつとても人やは隔す花薄などか秋しも穂には出ぬる
九月菊見たる
一五秋毎に露はおけとも菊の花人の齢はくれずぞ有ける
道ゆく人の時雨にあへる
一六道すがら時雨に遭ぬ最としくほし敢ぬ袖の濡にける哉
臨時祭
一七山ゐもて摺れる衣の赤紐の長くぞ我は神につかへむ
雪の降れる
一八春こねど草木に花の咲く程はふるくる雪の心也けり
延喜二年五月中宮の御屏風の和歌、廿六首、あつまりて元日酒のむ所
一九昨日よりをちをば知ず百年の春の始は今日にぞ有ける
子の日
二〇元よりの松をば置て今日は猶起臥し春の色を社見れ

二月梅の花みる所
二一山里に住かひありは梅の花見つゝ鶯きくにぞ有ける
田かへす所
二二忘らるゝ時し無れば春の田を返すく〳〵ぞ人は戀しき
三月山寺にまゐる
二三足引の山をゆきかひ人しれず思ふ心のともなからむ
三月つごもりの日花落つる所
二四散花の本にきて社暮果つる春の惜さは増るべらなれ
四月大みわの祭の使
二五誰をか印と思む三輪の山みえと見ゆるは杉にぞ有ける
馬にのりたる人多くゆく
二六行くが上に早くゆけ駒神がきの三室の山の山葛せむ
人の家の垣ねのもとの卯花
二七今日も又後も忘れじ白妙の卯花咲ける宿とみつれば
五月旅人山のほとりに宿りて時鳥を聞く
二八山里に旅ねよせじ郭公聲聞きそめて長るしぬべし
雨のうちに田植うる所
二九時過ば早苗も痛く生ぬべし雨にも田子は障らざり鬼
六月すゝみする所
三〇夏衣薄きかひなし秋までは木下風もやまず吹かなむ
鵲河
三一大空にあらぬ物から川上に星かとみゆる篝火のかげ
七月七日女ども空を見る

三二人知れず空を詠めて天の川波打つけに物をこそ思へ
田守るいほある所
三三假庵にて久にへに鬼秋風にわさ田雁音早も鳴かなむ
八月人々あまた野の花をほる
三四見人も無き野べなれば色毎に外へ移ふ花にぞ有ける
〔鹿啼花〕
三五さを鹿やいかゞ云けむ秋萩の匂ふ時しも妻を戀らむ
九月霧山をこめたり
三六散ぬべき山の紅葉を秋霧のやすくも見せず立隠す露
河のわたりに舟ある所
三七山路には人や惑はむ河霧の立こぬ先にいざ渡りなむ
十月菊の花
三八擲くこく色ぞ見えける菊の花露や心をわきて置らむ
十一月芦かりつみたる所
三九難波女の衣ほすとて刈てたく芦火の煙立ぬ日ぞなき
十二月人ゆきて梅を見る
四〇降雪に色し紛へば打附に梅を見るさへ寒くざりける
延喜二年左の大臣の北の方の御屏風の歌十首
四一甲斐がねの山里みれば葦鶴の命をもたる人ぞ住ける
田子浦
四二吹く風も飽ず思ひて浦波の數にぞ君が年をよせける
逢坂の關
四三君と猶千年の春に逢坂の清水は我も汲まむとぞ思ふ
龜山
四四龜山の影を寫して行く水に漕來る舟は幾世へぬらむ
白濱
四五君が代の年の數をば白妙の濱の眞砂と誰か云ひけむ
ひろふ
四六よと共に行かふ舟を見毎にほに出て君を千年とぞ思
松が崎
四七難かぬ時こそなけれ蜜もなき松が崎よりみゆる白雲
秋嵯峨野
四八手ごとにぞ人は折ける君がため行末遠き秋の野の萩
字治の網代
四九落積るもみぢ葉見れば百年の秋の止りは網代也けり
かへの社
五〇影とのみ頼むかひ有て霜霜に色變りせぬかへの社か
梅の原

五一梅の花おほかる里に鶯の冬ごもりして春をまつらむ
吉野山
五二三吉野の吉野の山は百年の雪のみつもる所なりけり
延長四年八月廿四日清貫の民部卿の六十賀恒佐の中納言の北の方せられける〔時屏風の歌、若菜つむ所〕
五三春日野の若菜も君を祈らなむ誰爲に摘春ならなくに
人の櫻と松の木のもとにをる所
五四櫻花散らぬ松にも倣なむ色と〳〵に見つゝ世をへむ
人の家に櫻のおほく咲ける所
五五我宿に春こそ多くきにけらし咲ける櫻を限なければ
桃の花女のもとのに折る所
五六君が爲我が折花は春遠く千年みたるを折つゝぞゆく
人舟にのりて藤の花見たる所
五七折つみてはや漕歸れ藤の花春は深くぞ色は見えける
女どもの瀧見たる所
五八糸とさへみえて流るゝ瀧なれば絕べくも非ずわける白玉
五九松の根に出る泉の水なれば同じき物を絕じとぞ思ふ
秋の花とも植えたる所
六〇祝ひつゝ植たる宿の花なれば思ふが如く色こかり鬼
馬車に乘りて人秋の花みたる所
六一限なくわが思ふ人の行野べの色は千種に花ぞ咲ける
鹿の萩の中にたてる所
六二さを鹿の尾上にさける秋萩を柵へぬる年ぞ知られぬ
菊の花さける所
六三菊の花植たる宿の怪しきは老てふことを知らぬ也鬼
池の邊に鶴のあそぶ所
六四さゝら波よする汀に住鶴は君が經む世の知べなる
女どもの紅葉ひろふ所
六五散る上に散し積れば紅葉ばを拾ふ數社しられざりけれ
人の家に紅葉の川の上に散りかゝる所
六六紅葉ちる木下水を見る時は色くさ〳〵に波ぞ立ける
神樂せる所
六七足引の山の神の常磐なる影にさかゆく神のきねかも
延長四年九月廿四日法皇御六十賀京極御息所の
仕うまつり給ふ時の御屏風の歌十一首若菜つむ
三〇春立むすなはち毎に君が爲千年經ぬべき若菜也けり

[一]若菜生る野べと云野べを君が爲萬代占て摘まむとぞ思ふ
子日

[二]花に似ず長閑き物は春霞靉く野べの松にぞ有りける
松にかゝれる藤

[三]松風の吹かむ限は打はへて絕べくも非ず咲ける藤波
瀧の水

[四]思ふ事瀧にあらなむ流れても盡せぬ物と安く賴まむ
いはほ

[五]松風は吹けど吹ねど白波のよする巖ぞ久しかりける

[六]音長く生る巖の久しきを君にくらべむ心やあるらむ
鶴の群れゐたる所

[七]かの見ゆるたづの村鳥君に壯己が齡を任すべらなる
菊

[八]一爭で猶君が千年を菊の花折つゝ霧にねれむとぞ思ふ

[九]菊の花下ゆく水に影見れば更に波なく老いせざり鳧
竹

[一〇]年毎に生添ふ竹のよゝを經て變らぬ色を誰とかは見む
三條右大臣殿の御屏風の歌

[一一]徒に老いにけるかな高砂の松や我身のはてを語らむ

[一二]烏玉の我が黑髮も年ふれば瀧の糸とぞ成ぬべらなる

[一三]春霞たちよらねばや三吉野の山に今さへ雪のふる覽

[一四]いつしかも越てむと思ふ足引の山に鳴なる喚子鳥哉

[一五]足引の山下たぎつ岩なみの心くだけて人ぞこひしき

[一六]鶯の花ふみしだく木の下はいたく雪ふる春べ也けり

[一七]浦毎に咲出る波の花見れば海には春も暮れぬ也けり

[一八]梅の香の限無ければ折人の手にも袖にもしみにける哉

[一九]訪人もなき宿なれどくる春は八重葎にも障らざり鳧

[二〇]ゆき宿る白雲だにも通はすば此山里は住うからまし

[二一]玉藻かる憂の行かひさす棹の長くや人を恨み渡らむ

[二二]此宿の人にもあはで朝顏の花をのみ見て我や歸らむ
移ふを厭ふと思て常磐なる山には秋も越ずぞ有ける

[二三]年月の變るも知らず我宿の常磐の松の色をこそ見れ

[二四]久方の月影見れば難波潟しほも高くぞ成ぬべらなる

[二五]綱手とき今はと舟を漕出でば我は波路を越や渡らむ

[二六]山高み椙を分けて流れ出る瀧に頼ひて落るもみぢ葉

[二七]笹の葉の匝つるなべに足引の山には雪ぞ降增りける

[二八]君まさば寒さも知じ三吉野の吉野の山に雪は降る共

貫之集 第三

延喜の御時內裏の御屏風の歌廿六首、元日鶯な
く所

[一]新らしくあくる今年を百年の春のはじめと鶯ぞ鳴く

[二]人の梅の花見る所

[三]我宿にありとみ乍ら梅の花哀と思ふにあく時もなし
山邊に近くすむ女どもの野べに遠く遊び離れて
家の方を見やりたる

[四]野べになるを人も無とて我宿に嶺の白雲をりやゐる覽

[五]立ねとや云にやらまし白雲の訪ともなく宿にゐる覽
故郷の花を見る

[六]故郷を今日きてみればあだなれど花の色のみ昔也ける
春のくれ

[七]いつとなく櫻咲けとか惜め共止らで春の空に行らむ
松に咲ける藤の花

[八]藤の花あだに散なば常磐なる松に頼へるひやなからむ

[九]散ぬとてあだにしも見じ藤の花行先遠き松にさければ
大神の祭に詣でたる

[一〇]古の事ならすして三輪の山こゆる印は杉にぞ有ける
葛瀧とれる所又かざせるもあり

[一一]葛瀧草根ながきとれば澤水の深き心は知りぬべら也

[一二]時鳥聲きゝしより葛瀧草かざす五月と知りにし物を
女どもの時鳥まつ所

[一三]愁めて一夜だにねむ月かげに山郭公鳴きてゆかなむ
七月七日

[一四]よをうみて我かす糸は七夕の涙の玉の緒とや成らむ
よるの歌

[一五]誠かと見れ共見えず織女は空に無名を立てるなるべし
八月十五夜海のほとりなる家に男女出でゐて月
のいづるを見たる

[一六]難波潟汐みちくれば山のはに出る月さへ滿にける哉
山田の中に小鷹狩したる所

[一七]秋の田と世中をさへ我如く假にぞ人は思ふべらなる
河のほとりに鶴のむれゐたる所

[一八]群居たる川べのたづも君が爲我思ふとを思ふべら也
萩見たる所

[一九]とめきつゝ鳴ずも有哉我宿の萩は鹿にも知れざり鳧
女の菊の花見たる所

[二〇]ふく霜の亂紛はせる菊の花靡れを元の色とかは見む
紅葉のいたく散りたる山をこえたる所

[二一]ひねもすに越も遣れず足引の山の紅葉を見つゝ感へば
河に紅葉流るゝを見たる所

[二二]もみぢ葉の流るゝ時は立田川湊よりこそ秋は行らめ
人の家の竹多く生ひたる

[二三]竹をしも多く植たる宿なれば千歲を外の物とやはみる
犬鷹狩したる所

[二四]覺束な今としなれば大荒木の森の下草人もかりけり

[二五]霜枯に成にし宿と知らねばや儚く人の狩にきつらむ
山里に神祭る

[二六]神まつる時にしなれば榊葉の常磐の蔭は變らざり鳧
山里にすむ人の雪のふれるを見る

[二七]雪のみや降りぬとは思ふ山里に我も多くの年を經にける
延長六年中宮の御屏風の歌四首右近衛中將うけ
給はりて

[二八]あれびきに引連てこそ千早振加茂の河波立渡りけれ

[二九]時鳥なくなる聲を早苗とる手間打置て哀れとぞ聞く

[三〇]瀧つ瀨の物に有ける白玉は來る度毎に見ぬ時ぞなき

[三一]よに隱れきつるかひなく紅葉も月に赤くぞ照增りける
京極の權中納言の屏風の料の歌二十首

[春]

[三二]春霞立ちぬる年のけふ見れば宿の梅さへ珍しきかな

[三三]我宿に咲る梅なれど年毎に今年あきぬと思ほえぬ哉

[三四]野べになるを人や見るとて若菜つむ我を霞の立隱す覽

[三五]雨とのみ風吹松は聞ゆれど聲には人も滯ずぞ有ける

[三六]山深き宿にしあれば年毎に花の心は遲くぞありける

[三七]至るまに散もぞ果るいかにして花の心に行と知れむ

[三八]ゆかりとも聞えぬ物を山吹の蛙の聲に匂ひぬるかな

[三九]行く月日思ほえね共藤の花見れば暮ぬる春ぞ知る

[夏]

[四〇]五月くる道もしらねど時鳥なく聲のみぞ知べ也ける

[秋]

[四一]一年を待つる事も有物を今日のくるゝぞ久かりける

[四二]七夕は今や別るゝ天の河かは霧たちて千鳥鳴くなり

[四三]降しける雪かと見ゆる月なれど滯て冴たる衣手ぞなき

[四四]照る月を晝かと見れば曉に羽かく鴫も有じとぞ思ふ

七暮し袖またもひなくに秋の田を雁音さへぞ鳴渡なる
七雁なきて吹風寒み唐衣君待ちがてに打たぬ夜ぞなき
八山遠き宿ならなくに秋萩のしがらむ鹿の鳴もこぬ哉
冬
九紅葉は照りて見ゆれど足引の山は曇りて時雨ぞふれ
一〇紅葉ばの流るゝ時は白波の立にし名こそ變るべらなれ
一一白雪に降隱されて梅の花人知れずこそ匂ふべらなれ
一二一とせに二たび匂ふ梅の花春の心にあかぬなるべし
延喜十年十月十四日女八宮陽成院の一のみこの四十の賀仕うまつる時の屏風のうた（屏風のうた）てうせさせ給ふ仰せにて仕うまつる
一三久くも匂はむとてや梅の花春を兼ても咲初めにけむ
一四糸をのみ絕ずよりつる青柳を年の緒長き數とぞ思ふ
一五櫻よる優る花なき春なればあだし草木を物とやはみる
一六藤の花咲ぬるを見て時鳥まだ鳴かぬから待るべら也
一七足引の山下しげき夏草のふかくも君を思ふころかな
一八常夏の花をし見れば打はへて過す月日の數も知れず
一九戀る物なくて見べく我宿の萩の本には鹿は鳴かなむ
二〇假にのみ人の見ゆれば女郎花花の袂ぞ露けかりける
二一心として散むだに惜からめなどか紅葉に風の吹らむ
二二紅葉する草木にも似ぬ竹のみぞ變らぬ物の例也ける
二三松が枝に降敷雪を葦鶴の千代の緑りに降かとぞ見る
延喜の末よりこなた延長七年よりあなた內々の仰にて獻れる御屏風の歌二十七首
春
二四春立て風や吹解く今日見れば瀧のみなかみ玉ぞ散ける
二五若菜つむ春の便に年ふればをつむ身社侘しかりけれ
二六久しきを願ふ身なれば春霞霞隱く松を爭でとぞみる
二七春毎に經えせぬ物は青柳の風に亂るゝ糸にぞ有ける
二八みし人もこぬ宿なれど櫻花色も變らず花ぞ散りける
二九人も皆我もまちこし櫻花人々たちて見れど飽なくに
三〇今までに殘れる岸の藤波は春の淺のとまりなりけり
一〇あひだなくよする藤波立返り断ても猶飽ずも有ける
秋
二〇大空を我もながめて彦星の妻まつ夜さへ獨かも寢む
三〇女郎花匂を袖に移してばあやなく我を人やとがめむ
四〇行水の心は清きものなれど眞と思はぬ月ぞ見えける
四一一枝の菊折るからに荒玉の千年を唯にへぬべかり鳧
四二足引の山の川霧何とてかゆく人をのみ立隱すらむ
四三散るとも色さへ共に紅葉は百年ふれどかひ無りけり
四四大空しあだに見えねば月影の變る時なく照すべら也
四五春近み花と思ふを我が宿の梢に雪の降りかゝりつゝ
四六露は鳴きそめぬるを梅の花色紛へとや雪の降るらむ
四七照月を見ざらましかば烏玉の夜は物へも行ずぞ有まし
七日ゆふべ男あまたたのて天河原見たる
四八大空はひもなけれども七夕を思遣りても詠めつる哉
駒ひき
四九都迄懷けて引くは小笠原へみの御牧の駒にぞ有ける
馬車に乘りて人多く野に出でたりさまざまの花咲きまじりたり
五〇立ちぬとは春はきけ共山里は待遠にこそ花は咲けれ
五一二つこぬ春と思へど影見れば水底にさへ花ぞ散ける
五二鶯のきゐつゝ鳴けば春雨に木芽さへ萠濕て見えけれ
五三川べなる花をし折れば水底の影も乏しく成ぬべら也
五四櫻花千とせ見るとも鶯も我もあく時有らじとぞ思ふ
五五散り方の花みる時は多ならぬ我衣手に雪ぞ降りける
五六春の爲あだし心の誰なれは松が枝にしもかゝる藤波
轍
五七月影を道惑はして我宿の久しく見えぬ人もみえなむ
五八こぬ人を月に倣ばや烏玉の夜毎に我は影をだに見む
五九雨ふらむ夜ぞ思ほゆる久方の月にだにこぬ人の心を
六〇山里に作れる宿は近けれど雪居るのみぞ成ぬべらなる
冬
六一置く霜の心やわける菊の花移ろふ色の已がじゝなる
六二瀧つ瀬もうき事あれや我が袖の涙に似つゝ落る白玉
六三よと共に烏の網はる宿なればかゝらんと來人もなし
六四空にのみ見るだにあかぬ月影の水底にさへ又も有哉
六五浮て行紅葉の色の濃きからに河さへ深く見え渡る哉
六六雪降れば殊き物なく草も木も一つ緑りに成ぬべら也
六七爭で人なつけ初けむ降雪は花とのみこそ散紛ひけれ
六八見ねば共忘れし物を梅の花けさは雪のみ降賦りつゝ
六九紅の時雨なればや石上ふる度ごとに野べを染ひらむ
七〇白雲のたなびき渡る足引の山のたな橋我もわたらむ
承平五年九月東三條のみこの清和の七のみこの御息所の八十賀せらるゝ時屏風の歌、若菜つめる所
七一千早振神たちませよ君が爲摘む春日野の若菜也けり
道ゆく人櫻の花を見て馬をとゞむ
七二行未も靜に見べき花なれどえしも見過ぎぬ櫻也けり
旅人の林のほとりに休みて時鳥きく
七三時鳥きつゝこ高くなく聲は千代の五月の知べ也けり
九月九日老いたる女の菊してをもてのごひたる
七四今日迄に我を思へば菊の上の露は千年の玉にざりける
竹に雪の降りかゝれる
七五白雪は降隱せども千世までに竹の緑は變らざりけり
承平五年十二月內裏の御屏風の歌仰せによりて
奉る女すの本に居たるに男物いふ櫻の花さけり
七六よそにては花の便と見えながら心の內に心ある物を
子日して車のわかるゝ所に馬にのれる人松を車におくる
七七此松の名をまねばれば玉鉾の道わかる共我は頼まむ
馬に乘りたる男ども放逸と覺しき所にうちよりて櫻を折る
七八古里に咲ける物から櫻花色は少しもあれずぞ有ける
男あまた池のほとりの藤を見る
七九松が枝に咲て懸れる藤波を今は松山こすかとぞみる
女ども神の社に詣づ
八〇打群れて心ざしつゝゆく道のおもふ思を神も知らむ
馬に騎れる女旅よりくる所
八一家路にはいつか行むと思しを日頃しふれば近づきに鳧
月夜に女の家に男いたりてすの子に居て物いはせたり（屏風のゑにかゝせたり）
八二山端に入なむと思ふ月見つゝ我はと乍有むとやする
女かへし
八三久方の月の便りにくる人はいたらぬ所有じとぞ思ふ
八四此度や紅葉はちる今日見れば網代に社は落果にけれ
承平六年春左大臣殿の御親子同じ所にすみ給ひけるへだてのさうじに松と竹とをかゝせ給ひて上り給ふ
八五同じ色の松と竹とは雞乳根の親子久しき例なりけり
鶴群れたる所
八六つるの多く世を經て見ゆる濱べ社千年積れる所也けれ
同じ二年左大臣殿の五郎の侍從の屏風のゑ、稻

荷詣

一五春霞たちまじりつゝ稲荷山こゆる思の人しれぬかないやしき人の神祭れる

二五榊葉の色變りせぬ百年の今日ごとにこそ祭まつらめ十一月臨時祭

三五ゆふ襷懸ても人を思はねど卯月も今日もまだ飽ぬ哉年のはての雪

四五我宿にふる白雪を春に又年越えぬまの花かとぞ見る同じ六年春左衛門督殿の屏風の歌、冬

五五思ひかね妹がりゆけば冬の夜の川風寒み千鳥なく也同じ八年八條の右大將本院の北の方の七十賀せらるゝ時の屏風、春の人の家

六五變らずも見ゆる松哉うべしこそ久しき事の例也けれ

藤の花

七五名殘をばまつにつけつゝ百年の春の湊にさける藤波

山里

八五草も木も繁き山べはくる人の立よる蔭の便り也けり

人の家に花橘ある所

九五年ごとにきつゝ聲する時鳥はな橘やつまとなるらむ

瀧

一六白雲の流るゝとのみ見えつるは落來瀧の常にぞ有ける

野の花

二六秋の野の千種の花は女郎花まじりておれる錦也けり

山の月

三六草木皆紅葉すれども照月の山の端はよに變らざり鳧

水邊菊

四六菊の花ひぢで流るゝ水にさへ波の皺き宿にざりける

河のほとりに鶴むれたる

五六河の畑に臈く廬たづ己が世を波と共にや君によす覽

人の家の竹

六六千代もたる竹の生たる宿なれば千種の花は物ならなくに

同じ年正月內裏の仰せにて

七六年立てば冬とふ可もあらなくに春今更に雪の降らむ

八六暮ぬとて鳴かす成ぬる鶯の聲の內にや春のへぬらむ

九六秋萩に亂るゝ玉はなく鹿の聲よりおつる淚なりけり

同じ七年右大臣殿の屏風の歌、梅の花若菜ある

所女すの前に出でゝ見る

一七野べみれば若菜摘けり宜し社垣ねの草も春めきにけれ

子日

二七春立て子日になれば打群て孰の人か野べにこざらむ

紅梅のもとに女どもおりて見る

三七雪とのみあやまたれつゝ梅の花紅にさへ通ひける哉

人の家に櫻の花おほかり

四七こと里も皆奉なれど我宿の櫻にまさる花やなからむ

女ども河のほとりにあそぶ

五七我身又有じと思へど水底に霞東なきは影にやは非ぬ

六七秋くれば機おる蟲の有なべに唐錦とも見ゆる野べ哉

山里の家侍りけるに水の上に木の葉落ちて流る

七七山近き所ならずは行く水も紅葉せりとぞ驚かれまし

人の家の籬垂のもとに女出でゝあたるに垣のもとに男立ちて物いひ入る垣ごしに薄生ひたり

八七出てとふ人のなき哉花薄まねばかりかと招く也けり

人の家に男女庭の菊見る

九七植てみる菊といふ菊は千代迄に人の過べき印也けり

臨時の祭

一八足引の山あかに摺れる衣をば神に仕ふる印とぞ見る

人の家に女籬だれのもとに立ち出でゝ雪の木に降りかゝれるを見る

二八草木にも花咲にけり降雪や春立つ先に花となるらむ

三八松が枝に鶴かと見ゆる白雪は積れる年の徵なりけり

貫之集第四

天慶三年四月右大將殿の御屏風の歌二十首、人の家に紅梅あり　後撰　躬恒

一紅に色をばかへて梅の花かぞことゝ〳〵に匂ざりける

女柳を見る

二青柳の眉に籠れる糸なれど春のくるにや色增るらむ

故里にいたれり　後撰　藤原雅正

三花の色はちらぬもばかり故郷に常にも松ぞ綠也ける

山里の櫻を見る

四まだ知らぬ所迄かく來て見れば僞計りの花無りけり

海のほとりに風吹き波立つ

五吹風に咲ては散れど鶯のこえぬは波の花にぞ有ける

道ゆき人

六あはと見る道だに有るを春霞かすめる方の遙なる哉

藤の花

七郭公なくべき時は藤の花咲けるを見れば近づきに鳧

八暮ぬとは思ふ物から藤の花さける宿には春ぞ久しき

人の家に常夏あり

九變る時なき宿なれば花と云へど常夏をのみ植て社みれ

男山ざとに行くついでに木のもとに郭公を聞く

一九行先はありも有すも郭公なくこゝにてを聞て暮さむ

男女舟に乘りて遊ぶ

二九待つけて諸共にこそ歸るさの波より先に人の立らむ

秋の風荻の葉をふく

三九いつも聞く風をば聞けど荻葉の戰ぐ音にぞ秋はきにける

家に女月をみる

四九思事ありとはなしに久方の月よとなればいこそ寢られね

道ゆく人の初雁を聞く

五九言傳も訪ふべき物を初雁の聞ゆる聲は遙かなりけり

小鷹狩

六九百草の花は見ゆれど女郎花さけるが中に折暮してむ

男旅のやどりに鹿のなくを聞く

七九鳴く鹿は妻ぞこふらし草枕ゆふ旅びとに聲な聞せそ

女ある家のきく

八九絲をよりてぬく由もがな朝毎に菊の上なる露の白玉

九月

一〇時雨ふる神無月こそ近からし山のおしなべ色附に鳧

二〇雨なれど時雨と云へば紅に木葉のしみて散ぬ日はなし

三〇降る時は猶雨なれど神無月時雨ぞ山の色は染めける

水のほとりにつる集まる

四〇群てをる蘆べのたづを忘つゝ水にも消ぬ雪かとぞみる

十二月つごもり雪人の家にあり

五〇花とみる雪の今しも降つらむ春近くなる年の常かも

同じ年閏七月右衞門督殿の屏風のれう十五首

正月元日人々遊びしたる所の庭に梅の花さけり

六〇老らくも我は歎かじ千代迄の年こむ毎に斯て頼まむ

二月初午稻荷まうで

七〇忌垣にも到らぬ鳥の稻荷山越ゆる思は神ぞ知るらむ

八〇打群て越行く人の思をば神にしまさば知りもしぬ覽

三月池の中島に松つる藤の花あり

九〇松も皆鶴も千年の世をふれば春てふ春の花を社めぐ

四月賀茂まうで

ゆふ襷かけたる今日の便には人に心を懸つゝぞ思ふ

五月菖蒲草

さ月てふ五月に逢へる菖蒲草むべもね長く生初に鬼

六月はらへ

御禊つゝ思ふ心は此の川の底の深さに通ふべらなり

七月七日

一年に一夜と思へど七夕の逢ひ見む秋の限なきかな

八月十五夜

百年のちゃの秋ごとに足引の山のはかへす出る月影

九月きく

祈りつゝなほ長月の菊の花執れの秋か植て見ざらむ

十月あじろ

山川をとめきて見れば落積る紅葉の爲の網代也けり

十一月臨時の祭

足引の山ゐの色はゆふ襷懸たるきぬのつまにざりける

同じ御時の内の仰せごとにて、元日

今日明て昨日に似ぬは皆人の心に春ぞ立ちぬべらなる

櫻の花の散るを見たる

散り紛ふ色を見つゝぞ慰むる雪の形見の櫻なりけり

三月つくる日

こむ年もくべき春とは知乍今日の暮るゝは惜くぞ有ける

四月池のほとりの藤の花

水底に影さへ深き藤の花はなの色にや棹はさすらむ

夏はらへ

河社篠に折はへほす衣いかにほせばか七日ひざらむ

七日

一年に一夜と思へど七夕は二人ともなる妻にざりける

はぎ

妻こふる鹿の涙や秋萩の下葉もみづる露となるらむ

きく

千年をし留むべければ白玉をぬけるとぞ見る菊の白露

暁殘る菊には水も流れねど秋深くこそ匂ふべらなれ

八月鹿の鳴くを聞く

心しも通はじ物を山近み鹿の音きけばまさる戀かな

みづに紅葉うかべる

紅葉ばの影を映して行水は波の花さへ移ろひにけり

人の家に松たけあり

常磐のみ宿にある哉すむ人の齢も松と竹となりけり

暮るゝ年

今年はや明日に明なむ足引の山に霞は立りとや見む

山端に夕日さしつゝ暮行くは春に入ぬる年にざりける

おなじとしさいさうの中將の屏風の歌二十三首

元日ふるき男の女のもとに來て物などいふ

新らしき年の便に玉鉾の道まどひする君かとぞ思ふ

山里にすむ女子の日する

足引の山べの松をかつ見れば心を野べに思ひやる哉

朝なけに見つゝ住めど共けふなれば山べのみ社思遣らるれ

野山に花の木ほれり

山野には咲るかひなし色みつゝ花と知べき宿に植なむ

旅いでたちする所にある女ども別れをしめる

惜みつゝ別るゝ人を見る時は我涙さへ止らざりけり

出で立つ人の返し

思ふ人留めて遠く別れば心ゆく共我が思はなくに

兼てより別を惜しと知りせば出立たむさには思はざらまし

男女の家に到りてとぶらひたる

草も木も有とは見れど吹風に君が年月如何とぞ思ふ

返し女

櫻花かつ散り乍ら年月は我身にのみぞ積るべらなる

故里の花を見る

あだなれど櫻のみこそ故郷の昔乍らの物には有けれ

見し如く非ずも有哉故郷は花の色のみ非ずは有ける

三月つごもり

春の今日暮るゝしるしは鶯の鳴ずは成ぬる心也けり

神まつる

卯花の色みえ紛ふゆふしでゝ今日社神を祈べらなれ

春過て卯月になれば榊葉の常磐のみこそ色增りけれ

山里に時鳥なきたり

此里にいかなる人か家ゐして山郭公絶えず聞くらむ

七夕

夕月夜久しからぬを天の川はやく七夕こぎ渡らなむ

積りぬる年はおほかれど天の河君が渡れる數ぞ少き

とまり

泊りてふ此所にはくる人の頓て過べき旅ならなくに

月に琴ひきたるを聞きて女

彈く琴の音の打つけに月影を秋の雪かと驚かれつゝ

月影も雪かと見つゝ彈く琴の消て積もの共知ずや有覽

をとこ

ひく琴の音毎に思ふ心あるを心の如く聞もなさなむ

田の中に小鷹狩したる

人も皆我ならね北秋の田のかりにぞ物を思べらなる

神の社に詣でたる

忌垣にもまだ入ぬ程は人しれず我思とを神やしるらむ

やもめなる人の家

徒然と年ふる宿は烏玉の夜もひも永く成ぬべらなり

八重葎繁くのみ社成まされ人めぞ宿の草木ならまし

旅人のきぬうつ聲を聞きたる

草枕夕風さむくなりぬるを衣うつなる宿やからまし

をとこ女の家にきて夜深くなるまで立ちわづらひて人に逢はであるに

哉ど訪ふ人もなき哉今宵もや鳥さへ鳴て我は歸らむ

網代

紅葉の流て落る網代には白波もまだよらぬ日ぞ無き

野やどりせる旅人

霜がれの草枕には君こふる涙の露ぞおきまさりける

いつとても思ざらねど君戀て家戀しきは旅にざりける

雪の降るいへ

いちはつき印也けり新玉の年のくるゝは雪にざりける

同じ四年正月右大將殿の御屏の歌十二首

元日人の家にまれうどあまた來りあるはやのうちに入りあるは庭におり立ちて梅の花を折る

森立たば咲かばと思し梅の花珍しびにや人の折らむ

人の家にまれうどあまた來て柳櫻のもとに群れゐて遊びするに花ちりがまふ

青柳の色に變らで櫻花ちるもとにこそ雪は降りけれ

藤の花まつにかゝれる

昔いかに頼めたればか藤波の松にしも猶懸り初けむ

をとこ神の社に詣でたる

祈りくる神ぞ思へば玉鉾の道の遠さも知られざり鳧

をとこ女の木のもとに群れゐたる所に舟にのり

て渡る人あるがをよびをさして物いへるやうなりそのさま郭公を聞けるに似たり

七かの方にはや漕寄せよ時鳥道になきつと人に語らむ

海のほとりなる人の家に女すだれをあげて海を見いだせりその中にいたく老いたる女あり

八濱邊には年ふる人は白波の共に白くぞ見え渡りける

人々秋の野に遊ふ

九秋の野の萩の錦は女郎花立ち交りつゝ織れる也けり

女はなの池のほとりなるたいにむいて水の底を見る

〇七月影の見ゆるにつけて水底を天つ空とや思ひ惑はむ

菊おほくおひたる河のほとりなる人の家に女ども多く河づらに出でゝ遊ぶ

一〇水上にひぢて咲けれど菊の花移ろふ影は流れざり鳧

人々舟にのりて網代にいけり

一一棹さしてきつる所は白波のよれど止らぬ網代也けり

道行人河のほとりに鶴むれゐたるを見る

一二よそなれば汀に立る葦鶴を波か雪かと分きぞ兼つる

おなじ年三月うちの御屏風の料の歌二十八首

元日雪降れり

一三今日しもれ雪の降れゝば草も木も春てふなべに花ぞ咲ける

子

一四歸るさは暗くなる共春の野の見ゆる限は行むとぞ思

梅の花のちれる

一五梅の花匂ひ〳〵て散る時は隱すに似たる雪ぞ降ける

柳おはかる所

一六青柳を便と思ひて春のうちの綠つもれる所なりけり

櫻の花

一七櫻花をる時にしも鳴なれば鶯の音もくれやしぬらむ

田つくれる所

一八荒小田を返す今より人知ず思ほに出むとをこそ思へ

山ぶき

〇一九うつる影ありと思へば水底の物とぞ見まし款冬の花

春のくるゝ日

二〇明日もくる時はあれ共花みつゝ馴ぬる今日は惜くぞ有ける

池のほとりに咲ける藤舟にのりて遊びみる

二一漕ぎ歸り見れども飽ず別れにし春の名殘の藤波の花

郭公

二二明暮るゝ月日あれ共時鳥なく聲にこそ夏はきにけれ

なでしこ

二三なかけくに色を染つゝ春も秋も知でのみ咲常夏の花

五月五日

二四鳥の音は許多あれども時鳥なくなる聲は五月也けり

池の鵜

二五我宿の池にのみ住鶴なれば千年の夏の數は知るらむ

人の木のもとにやすめる

二六影深き木の下風の吹來れば夏の内乍秋ぞ來にける

夏かぐら

二七行く水の上にいはへる河社かは波たかく遊ぶなる哉

七夕

二八七夕の憂ふしならでよをふるは年に一度逢へば也鳧

初雁を聞ける

二九〇初雁の聲につけてや久方の空の秋をも人に知るらむ

鹿の鳴ける

三〇鳴く鹿の聲をとめつゝ秋萩の咲る尾上に我は來に鳧

八月十五夜

三一月毎に逢夜なれ共よをへつゝ今宵に增る影無りけり

九月九日

三二皆人の老を留むといふ菊は百年をやる花にざりける

野の花見たる

三三置露や花の色毎に染分きて秋の暮とは人にみすらむ

九月くるゝ日

三四草も木も紅葉散ぬと見迄に秋の暮ぬる今日は來に鳧

殘りの菊

三五秋咲ける菊にはあれや神無月時雨ぞ花の色は染ける

稻かりほせる

三六刈てほす山田の稻の袖ひぢて植し早苗と見えもする哉

あじろ

三七山風の痛く吹颪す網代には白波さへぞより增りける

初雪

三八雪ふれば草木になべてをる人の衣手寒き花ぞ咲ける

松と竹とあり

三九〇松も皆竹も怪しく吹く風はふりぬる雨の聲ぞ聞ゆる

年のつごもり

四〇行く月日河の水にも有なくに流るゝともいぬる年哉

同じ五年亭子院の御屏風の料に歌二十一首

四一水なかに有り乍しげれ春立て氷とくれば落つる白玉

四二三吉野の吉野の山に春霞たつを見るゝ雪ぞ又ふる

四三昔より思初てし野べなれば芳菜摘にぞ我は來にける

四四同じ色に散紛ふ共梅の花かをふり隱す雪なかりけり

四五水の文の亂るゝ池に青柳の糸の影さへ底に見えつゝ

四六春霞とびわけいぬる聲聞て雁きぬ也とほかは云らむ

四七千早振神の便りにゆふ襷かけてや人も我を戀ふらむ

四八櫻花ふりにふる共見る人の衣ぬるべき雪ならなくに

四九藤波の影し移れば我が宿の池の底にも花ぞ咲きける

五〇花鳥も皆行かひて烏玉の夜のまに今日の夏は來に鳧

五一五月雨にあひくるとは菖蒲草根長き命あれば也けり

五二足曳の山田を植ゑて稻妻の共に秋には逢むとぞ思ふ

五三吹風の著くも有哉萩の葉の戰ぐ中にそ秋は來にける

五四綱はへてもり渡りつる我宿のわさ田雁音今ぞ鳴なる

五五人知れずきつる所に時しもあれ月の明くも照渡る哉

五六假にのみ人の見ゆれば女郎花花の袂ぞ露けかりける

五七つとめてぞ見べかりける花薄招く方にや秋はいぬ覽

五八神無月時雨にそめて紅葉はを錦におれる神南備の杜

五九三吉野の吉野の河の網代には瀧の水泡ぞ落積りける

おなじ年九月内裏の御屏風のうた五首

元日雪ふれる所

六〇白妙に雪の降れゝば草も木も年と共にも新らしき哉

梅の花のもとに男女むれゐつゝ酒のみなどして

花を折りて内なる人のやれる

六一稀に來て折ればや飽かぬ梅花宿に見入如何とぞ思ふ

返し

六二宿近く植たる梅の花なれど香に我があける春の無哉

九月九日

六三百年を人に留むる花なれどあだにやは見る菊の上の露

稻かりほせる

六四朝露のおくての稻は稻妻をこふと濡てや乾かざる覽

同じ年四月の内侍の屏風の歌十二首

六五千年といふ松を引つゝ春の野の遠さも知ず我は來に鳧

六六足引の山の櫻の色見てぞをちかた人は種もまきける

六七惜め共止らぬ今日は世中にほかに春待心や有るらむ

六八夏衣たちてし日より郭公とくきかむとぞ待渡りける

六九年毎に今日にし逢へば菖蒲草宜もね長く生初めに鳧

二三玉とのみみだれ亂れて落たぎつ心清みや夏祓へする
二四くるゝ日は多かり乍ら七夕は年に一夜や夜を知らむ
二五久方の天つそらより影みればよく所なき秋の夜の月
二六移ろへど變らざりけり菊の花同じ昔の色や咲くらむ
二七聲高く遊ぶなるかな足引の山いまぞ歸るべらなる
二八奥山の見えみ見えぬは年暮て雪の降つゝ隱す也けり

おなじ八年二月内の御屏風の料二十首

家にて子の日したる所

二九我が行かで唯にしあれば春の野の若菜も何も歸來に鳧
三〇百年のうつきを祈る心をば神ながら皆知りませる覽

五日

三一○郭公鳴けども知らず菖蒲草こぞくすりひの印也けるはらへ
三二憂き人のつらき心を此川の波に類へて祓へてぞやる

七夕

三三一年を待ちはしつれど七夕の夕暮まつは久しかり鳧

小鷹狩

三四假にくる我とは知らで秋の野に鳴く松蟲の聲を聞哉
三五水にさへ流れて深き我宿は菊の淵とぞ成ぬべらなる

男なき家

三六かけて思ふ人は無れど夕されば面影たえぬ玉葛かな

神樂

三七神葉の常磐にあればながらくに命保てる神のきね哉

大鷹狩

三八冬草の枯も果なでしかすがに今としなれば狩にのみくる

以二相傳之本一書寫校合了清字等如レ本也

寛長元年八月日　　謙原朝臣　在判

貫之集第五

戀

「大和に侍りける人のもとにつかはしける」

三九こえぬさは吉野の山の櫻花人傳にのみ聞きや渡らむ
四〇山櫻霞の間より仄にも見しばかりにや戀しかるらむ
四一○世中は斯こそ有けれ吹風のめに見ぬ人も戀しかり鳧
四二吉野河岩波たかく行く水の早くも人を思ひそめてし
四三逢ふ事は雲居遙になる神のおとに聞つゝ戀や渡らむ
四四人知ず物思時は難波なる蘆の白根の知られやはする
四五浪にのみぬれつる物を吹風の便り嬉しき海士の釣舟
四六津の國の難波の葦のめもはるに繁き我戀人知らめやも
四七人しれぬ思のみ社侘しけれ我獻をば我のみぞきく
四八燃も敢ぬ此方彼方の思かな涙の河のなかにゆけばか
四九紅のふりでつゝなく涙には袂のみこそ色まさりけれ
五〇風吹けば絕ず波こす磯なれやわが衣手の乾く時なき
五一○戀しきや色にはあらむ涙河泣るゝ音の水ぞ流るゝ
五二風ふけば嶺に別るゝ白雲の絕えてつれなき人の心か
五三涙川おつる水上早ければ堰きぞ兼つる袖のしがらみ
五四行末は遂にすぎつゝ逢事の年月なきぞ侘しかりける
五五○白玉と見えし涙も年ふればから紅になりぬべらなり
五六歎きこる山路は人もしらなくに我心のみ常に行らむ
五七山陰に作る山田の木隱てほに出ぬ戀ぞ侘しかりける
五八燃れ共驗だになき富士のねに思中をば誰へざらなむ

[宮仕へする女の逢ひ難かりけるに]

五九手向せぬ別する身の侘しきは人めを旅と思ふ也けり
六〇長き夜を思明して朝露の起てしくれば袖ぞひぢぬる
六一織女と思ふ物から逢事のいつとも知らぬ我ぞ侘しき
六二百羽がき羽ねかく鳴も我如く曩侘しき數はまさらじ
六三翳す共立ちと立にし無名には事無草もかひやなからむ
六四逢事の山彦にしてよそならば人めも我はよきぞ有まし
六五棚機の年に一たび逢ふ事は人めぞ後の空には有ける
六六まこも刈る淀の澤水雨ふれば常より殊に增る我が戀
六七よそに見て歸る夢だにある物を現に人に別れぬる哉
六八我戀は知ぬ山路に非ねどもまどふ心ぞ侘しかりける
六九君戀る涙しなくば唐衣むねのあたりは色もえなましを
七〇逢事を月日に添て待時は今日行末になりねとぞ思ふ
七一○朝な〳〵槻れば落る我髪の思亂れてはてぬべらなり
七二秋風の稻葉戰ぎて吹なべにほに出て人ぞ戀しかりける
七三手も觸で月日へにける白眞弓起臥夜はい肱寢られねば
七四我爲にあたにざりける年月は思もなさで行返りつゝ
七五敷島の大和にはあらぬ唐衣頃もへずして逢由もがな
七六涙にぞぬれつゝしぼる世の人のつらき心は袖の雫か
七七逢見むと思ふ心を命にて生ける我身の頼もしげなき
七八逢事のなくて月日はへにけれど心計りは明暮もせず
七九伊勢の海の蜃とならばや君戀る心の深さ潜き比べむ
八〇石上ふる野の道の草分けて清水くみには又も歸らむ
八一いにしへに猶立歸る心かな戀しきことに物忘れせで
八二年月は昔にあらぬ今日なれど戀しきとは變らざり鳧
八三戀にのみ年をすぐせど時鳥鳴かひもなく成ぬべらなり
八四五月山楷をたかみ時鳥なくねそらなる戀もするかな
八五哀とも戀しとも思ふ色なれや落る涙に袖のそむらむ
八六哀てふことに印はなれ共いはではえ社あらぬ物なれ
八七哀れてふ事に飽かねば世中を涙にかふる我身也けり
八八秋萩を見つゝ今日社暮つれ下葉は戀の妻にざりける
八九みを狹み袖よりもふる涙川物思もなき人もぬれけり
九〇○野べ見れば生る薄の草若みまだほに出ぬ戀もする哉
九一君こふる涙は秋に通へばや空も袂もともにしぐるゝ
九二人の身に秋や立覽言の葉の薄くなり移ろひに鳧
九三秋はわが心の妻に非ねども物思はしき頃にもある哉
九四憎からで悲しき物は身也けり憂世背かむ方し無ければ
九五秋の野の移ふければつれもなく枯にし人は草葉とぞみる
九六百千鳥鳴時あれど君をのみ戀ふる心はいつと定めず
九七秋の野に亂れて咲ける花の色の千種に物を思ふ頃哉
九八明たてば先さす紅の糸弱み絕て逢すばなどいはるかひ
九九雨やまぬ山の天雲立居つゝ安き時なく君をしぞ思ふ
一〇〇大空は曇ざりけり神無月時雨心地は我のみぞする
一〇一年をへて戀渡れどゝ我爲は天の河原のなきぞ侘しき
一〇二天の河瀨だえもせなむ鵲の橋をし知らず唯渡りなむ
一〇三紅に袖ぞうつろふ戀しきや涙の川の色にはあるらむ
一〇四人を思ふ心の空にある時はわが衣手ぞ露けかりける
一〇五秋風に萩の下葉の色づけば獨ぬる身ぞ戀まさりける
一〇六秋の野の草葉も分ぬ我袖の物思ふなべに露けかる覽
一〇七消易き雪は暫しもとまらなむ憂き事數く我に代りて
一〇八よと共に流れてぞふる涙川冬も氷らぬみなわ也けり
一〇九雨ふれば色さやすき花櫻薄き心を我が思はなくに

[女なほざりにいふとなむ申しければ]

一一〇色ならば移る計も染てまし思ふ心を知るひとぞなき
一一一君により濡れてぞ渡る唐衣袖は涙のつまにざりける
一一二初雁の鳴きこそわたれ世中の人の心の秋し憂ければ
一一三住の江の波には非ねどよと共に心を君に寄せ渡る哉

二夢路にも露や置くらし給夜通へる袖のひぢて乾かぬ
五人めてふ物はいかなる道なれば使もゆかで遥けかる覽
八鹿機に亂てぞ思ふ戀しさを經緯にして織れる我身か
十さけばちるものと思ひし紅は涙の川の色にざりける
十二哀てふことを緒にしてぬく玉は逢はで年ふる涙也けり
十八妻戀る鹿のしがらむ秋萩における白露我もけぬべし
二十三思餘り戀しき時は宿枯てあくがれぬべき心ち社すれ
二十六降雪を雪と見なくに人知れず物思ふ時の數增りけり
二十八色もなき心を人に染しより移ろはむとは思ざりしを

近隣なる人の時々とかういふを外に移ろふと聞きて

三十三近くてもあはぬ現に今宵より遠き夢みむ我ぞ侘しき
三十五萩の葉の色づく秋を徒にあまた數へて過しつるかな
三十七春霞やま郭公もみぢ葉も雪もおほくの年ぞ經にける
四十一侘人は年に知られぬ秋なれば我袖にしも時雨降らむ
四十三忍ぶれど戀しき時は足引の山より月の出てこそくれ
四十五現には逢ふ事難し玉の緒の夜は絕すも夢にみえなむ
四十八侘渡る我身は露を同じくば君が垣根の草に消えなむ
五十一忘られず戀しき物は春の夜の夢の名殘の覺る也けり
五十四寢ぬる夜の夢は波にも非なくに立返つゝ君を見つるか
五十六時鳥人まつ山になくときは我打ちつけに戀增りけり
五十九鴬こる山と我身は成ぬれば心のみ社いとなかりけれ
六十二夕されば人松虫の鳴なべに獨ある身ぞ戀まさりける
六十四山彦の聲の隨まに尋行かば就こともなく我や惑はむ
六十七降雨に出てもぬれぬ我袖の陰にゐながらひぢ增る哉
七十人知れずいはぬ思の侘しきは唯に涙の濡すなりけり
七十四人知ずあだし心の有ざいへば波路とのみやまで泣覽
七十七夢を見てかひなき事の侘しきは醒る現の戀にぞ有ける
八十逢見ずばいけらじとのみ思ふ身の遠に惜く人に知れぬる
八十三かきくもり雨ふる每に道知らぬ笠取山に惑はるゝ哉
八十五み山には時も定めず百千鳥めづらしげなく鳴渡る哉
八十八ちる時はうしとみれども忘れつゝ花に心の猶止る哉
九十寢られぬを强て寢て見る春の夜の夢の限は今宵也覺
九十二現にも夢にもあはで戀しきは現も夢もかぬ也けり
九十五から衣袂をあらふ涙こそ今は年ふるかひなかりけれ
九十八驗なき煙を雲に紛へつゝ世をへて富士の山は燃けり
百一わび人の袖をやかれる山川は涙のごとく落る瀧かな
百四此の頃は五月雨近み時鳥思ひ亂れてなかぬ日ぞなき
百七鳥のねも聞えぬ山の埋木はわが人しれぬ歎き也けり
百十花薄ほにはいでじと思ひしをとくも吹ぬる秋の風哉
百十二獨して世をし盡せば高砂の松の常磐もかひなかり覺
百十五世中は春きぬべしと云なれば戀には年も暮すぞ有ける
百十八しら波の打返すとも濱千鳥猶ふみつけて跡は留めむ

人に文やりける、女のいかゞありけむ許多たび返事もせざりければやりつる文をたに返せと云ひやりたりければ文やきたりける灰をそれとておこせたりければ詠みてやれる

百二十一君が爲我こそ灰と成果めしら玉章はやけてかひなし
百二十四稀に逢ときく織女も天の川渡らぬ年は有じとぞ思ふ
百二十六今朝の床の露おき乍ら悲きは飽ぬ夢路を越る也けり
百二十九打寄する浦波見れば我戀の盡ぬ數こそまづ知られけれ
百三十二いつとてか我が戀ざらむ千早振淺間の山は烟たゆ共
百三十五人知れず我し泣つゝ年ふれば鶯のねも物とやはきく
百三十八彦星も待日はあるを今更に我をいつとも人の賴めぬ
百四十一逢見ずて戀しきとを譬ふれば苦き旅は物ならなくに
百四十四逢見ずて我戀死なむ命をば遠に人やつらしと思はむ
百四十七獨寢は侘しき物とこりよとや旅なるよしも雪の降覽
百五十いつしかと今日も暮しつ飛鳥川渡て袖に玉藻潜かむ
百五十三詠むれば侘き物を山のはに入日とくさし早も暮なむ
百五十六みる人も無て我をばとはず共黄昏時に早もならなむ
百五十九身に添へる影ともなしに何しかもほかに侘き人と戀むむ
百六十二立寄れば袖にそよめく風の音の近くはきけど逢もみぬ哉
百六十五目にも見ず聲も絕ぬ程なれど忍ぶるに社遥けかりけれ
百六十八秋萩の下葉はよそにみしか共獨ねむとは思ざりしを
百七十一秋萩の下葉を見つゝ夕されば いつしかのねに鳴渡る哉
百七十四人めゆゑ涙をせけば唐衣袂は濡れぬれこそ泣かるれ
百七十六沈むとも浮ぶとも猶水底に名を鴛鳥の共にとぞ思ふ
百七十九いかで猶人にもとはむ曉のあかぬ別や何に似たりと

（人のもとよりまかり歸りて遣はしける）

百八十二曉のなからましかば白露のおきて侘しき別せましや

（源公忠の辨の對面しけるにいかなるにかありけむ對面せざりける時よみて遣しける）

百八十五今の世見ねば戀しき
百八十八玉鉾の遠道も社人はゆけどか今のま見ねは戀しき
百九十一わび人知たる人の許に暫し通はぬほどになりて中絕えて又思ひかへして云ひやる
百九十四石上ふるの中道中々に見ずば戀しとおもはましやは
百九十七又は猶よりつかめ共玉の緒の絕とは侘しかり覺

貫之集第六

（賀）

延喜十二年定方の左衛門督の賀の時の歌

二百水底に影を映して藤の花千代待つと社匂ふべらなれ
二百三百年と祝ふを我は聞き乍ら思ふが爲は飽ずぞ有ける

八條院にて琴ひくを聞きてよめる

二百六長夜の秋の調べを聞人はをごとに君を千年とぞ思ふ

延喜十二年十二月春宮つぁしたに定方の左衛門督の、内侍督の賀奉れる時の歌

二百九今年おひの新桑繭の唐衣千代をかけてぞ祝ひ初つる
二百十二岩の上に塵もなけれど蟬の羽の袖のみ社拂べらなれ
二百十五年をのみ思ひつめつゝ今迄に心にあけるとのなき哉
二百十八年の內に春立事を春日野の若菜さへにも知にける哉
二百二十一住の江の松の煙はよと共に波の數にぞ數ふべらなる

延喜十九年春宮の御息所の右のおほいとのゝ御賀奉り給ふとて御かざしの料保忠の右大辨の詠ませ給ふ

二百二十四心有て植たる宿の花なれば千年移ろぬ色にぞ有ける
二百二十七年毎に花しも へば數へつゝ君が千代迄折むとぞ思ふ

藤原兼輔の中將宰相になれる喜びにいたりたるに初めて咲いたる紅梅を折りて今年なむ咲きはじめたるといひたるに

二百三十春每に咲優るべき花なれば今年かもまた飽ずとぞ見る

延長五年九月右大臣殿前栽合のまけわざ內含人たちばなのすけなほ仕うまつる洲濱にかける

二百三十三草も木も思しあれば出る日の明暮社は賴むべらなれ

（日）

二百三十六出てくる山も變らぬ長月の有明の月の影をこそ見れ

（月）

二百三十九願ふ事心にあればうゑて見る松を千年の例とぞみる

（松）

○六色替へぬ柏の葉のみぞ秋くれど紅葉する事習はざりける
　鶴
○七打ぜよがふ蘆べに立てる葦鶴の齢を君に波も寄せなむ
　龜
○八波間より出くる龜は萬世と我思ふとのしるし也けり
　千鳥
○九誰が年の數とかは見る行かひて衛鳴なる濱の眞砂を
　延長八年土佐の國にくだりて承平五年に京にのぼりて左大臣殿しらかは殿におはしまします御ともにまうでたるに歌つかうまつれとあればよめる
○一百草の花の影までうつしつゝ音もかはらぬ白川の水
　恒佐の中納言の扇合の歌扇を洲濱に入れたり
一住江の松の風をもこめたれば扇く扇のいつか絶せむ
　宰相中將師輔の四條の宮勤子内親王に住みはじめ給ふにまうでゝ事のついでありて詠める
二物毎に影水底にうつれども千年の松ぞ先は見えける
　承平五年十二月左衛門の督の殿貞頼の男女君たち元服し裳着給ふ夜よめる
三大原や小塩の山の小松原はや木高かれ千代の影見む
　源公忠朝臣の子にもぎせさせ給ふ所にてよめる
四君をのみ祝ひがてらに百年を待ぬ人なく待むとぞ思ふ
　天慶六年正月藤大納言殿師輔の御消息にて魚袋をつくろはせむとて給はせりけるおそくいでくるにそのひに近くなりにしかば大殿に此の由をきこしめして我が昔よりようすると仰せられてあえ物に今日ばかりつけよとてつかひして給はせたりしかば喜び畏まりてようして又の日松の枝につけて奉る其の喜びのよし内侍のかんの殿の御方にいさゝか聞えむと思ふを忍びて其の心書き出でゝとあるに奉る
五一吹風に氷とけたる池の魚は千代まで松の蔭に隠れむ

貫之集第七

別

人の馬のはなむけによめる

六一惜むから戀しきものを白雲の立別れなば何心地せむ
　みちのくへ下る人にやれる
七一白雲の八重かさなれる遠にても思はむ人に心隔つな
　人に別れけるによめる
八一別てふとは色にもあらなくに心に泌て侘しかるらむ
　音羽の山のほとりにて人に別るとて
九一音羽山こだかくなきて時鳥きみが別を惜むべらなり
　肥後守藤原のときすけといふぬしのくだるにやれる
○二一日だに見ねば戀しき心ちするに遠道さして君が行哉
　藤原のこれをかが武藏介になりて下るに逢坂の關こゆとて
一二且越て別れも行か逢坂は人頼めなる名にこそ有けれ
　兼茂朝臣の物へゆくに兼輔朝臣の餞する所にてよめる、雨の降ければ
二二久方の雨と心に叶はなむふるとて人の立とまるべく
　みちのくへ下る人を惜める
三二狩衣する名におへる信夫山越む人こそかねて惜けれ
　遠くゆく人に別をしみて
四二又もこそ物へ行く人別をしめ涙殘さず君になきつる
五二遠くゆく人の爲には我袖の涙の玉も惜しからなくに
　兼輔の兵衛のすけ賀茂川のほとりにて左衛門尉みはるのありすけの甲斐へ行くうまのはなむけによめる
六二君を惜ひ涙おち添ふこの川の汀まさりて流るべら也
七二ゆくりふも歸らむ時も玉鉾の道觸の神を祈れとぞ思ふ
八二紅葉ばも花をもをれる心をば手向の山の神ぞしる覽
　鶴のかたに幣いるゝ物をしてよめる
九二千年をば鶴に任て別る共逢見る事は明日もとぞ思ふ
　左中辨濟光の朝臣の人の馬の餞する所に幣かゝむとてよませたる、夏なりければ
○三いとまだき見ゆる紅葉は君が爲思初たる幣にざりける
一三玉鉾の手向の神もわが如く我思ふとを思へとぞ思ふ
　師氏の少將信濃へゆく人に馬のはなむけせむとてよませ給へる
二三我にしも草の枕は乏なくに物へと聞けば惜くぞ有ける
三三君がゆく所ときけば月見つゝ姨捨山ぞ戀しかるべき
　同じ少將物へゆく人に火うちの具してこれに焚物を加へてやるに詠める
四三折々に打て焚火の煙あらば心ざす香を忍べとぞ思ふ
　師尹の侍從のよませ給ふに
五三遠くゆく君を思ふに人もみな時鳥さへ鳴きぬべら也
　物へ行く人まつ程すぐれば
六三思ふ人またさも非ず逢坂の關の名社はさのみ也けれ
　橘の公頼の帥の筑紫へ下る時其の子の阿波守としさだの朝臣の繼母の内侍のすけに贈れる物どもにくはへたる歌、くすりに
七三暫しわが止る計りに千代迄の君が贈りは藥こそせめかつら
八三打みえむ面影ごとに玉葛長きかたみに思へとぞ思ふ
　さうぞく
九三許多にはぬひ重ねゝど唐衣思ふ心は千重にぞ有ける
　相しれりける人の物へ行くに馬の餞しけるあひだに雨の降りければえいかずなりけるに詠める
○四君を惜む心の空に通へばや今日止るべき雨の降らむ
　みちの國のかみ藤原のありときが馬のはなむけ
一四見てだにもあかぬ心に玉鉾の道の奥まで人の行く哉
　物へゆく人にやらむとて人のこふに贈れる
二四誂へて忘るなと思心あれば我身を分くる形見也けり
　陸奥の守平のよりすけの朝臣の下るに幣のすはまの鶴の羽に書ける
三四千年まで命たへたる鶴なれば君が往來を慕ふ也けり
　同じ人の馬の餞にやるとて兵衛のかみのよませたるに
四四遠くゆく君を送ると思ひやる心も共に旅寢をやせむ
　同じ人の馬の餞に橘のすけなはがさうぞく贈るとて加へたる歌
五四玉鉾の道の山風寒からば形見がてらにきなむとぞ思ふ
　同じ人の馬のはなむけを大きおとゝの白河殿にてせさせ給ふにかはらけとりて
六四人も皆遠道ゆけど草枕このたびばかり惜しき旅なし
　旅人にぬさやるとて
七四別れゆく人を惜むと今宵より遠き夢路に我や惑はむ
　筑後守の下るに扇やるに加へたる
八四あふげども盡せぬ風は君が爲我心ざすあふぎ也けり

尾張守藤原のおきかたが女[加]の下るに幣さう東
などやるに加へたる歌
九つ幣のわが思をば玉鉾の道のべ毎の神も知るらむ
其の人と香に思ほゆる唐衣忘らるなとてぬげる也鳧
人はいさ我は昔の忘れねば物へと聞きて哀とぞ思ふ
近江守公忠のぬしの下るに贈る
別路を君にまだわが習はねば慕ふ心ぞ後れざりける
同じ人の下るを逢坂まで送らむとて兼覧のおほ
ぎみのこの料に詠ませたる
出て行道とは知れど逢坂は歸らむ時の名に社有けれ
源公忠朝臣の近江守にて下るに送る
信濃にゆく人に送る
別れても今日より後は玉櫛笥明暮見べき形見也けり
月影をあかず見るとも更科の山の麓に長なすなきみ
人の國へ下るに旅にてよめる
糸によるものならなくに別路の心細くも覺ほゆる哉

貫之集第八

哀傷

あひ知れる人の失せたるによめる
夢とこそ云べかりけれ世中に現ある物と思ひける哉
紀友則がうせたる時に詠める
明日知らぬ我身と思へど暮ぬ間のけふは人社哀なりけれ
山寺にゆく道にてよめる
朝露のおくての山田假初にうき世の中を思ひぬる哉
あるじ失せたる家の櫻の花を見てよめる
色〻香も昔のこさに匂へども植けむ人の影ぞ戀しき
河原の大臣失せ給ひて後にいたりて鹽竈といひ
し所のこまの荒れにたるを見て詠める
君まさで煙たえにし鹽竈のうら寂しくもみえ渡る哉
素性うせぬと聞きて躬恒がもとに贈る
石上ふるくすみこし君なくて山の麓は立ゐわぶらむ
躬恒
君なくてふるの山べの寒霞徒にこそ立ちわたるらめ
とあるに又
消にきと身こそ聞えめ石上古き名失ぬ君にぞ有ける
世の中のはかなきことを見て
うけれ共いけるは扨も有物をしぬるのみ社悲かりけれ
昨日迄逢見し人の今日無きは山の雲とぞ黯きにける
いづみの大將うせ給ひて後に隣なる人の家に人
々いたりあひてとかく物語などするついでにか
の殿の櫻の面白くさけるをこれかれ哀れがりて
歌よむついでに
君なくし昔は遠か古里の花見る毎にそでのぬるらむ
兼輔の中將のめうせにける年の師走の晦日にい
たりて物語するついでに昔を戀ひしのび給ふに
よめる
戀ふるまに年の暮なば亡人の別や最と遠くなりなむ
題しらず
立歸り戀しくも有か別れてはしるしも知らぬ煙也鳧
藤衣おりたる絲は水なれや濡れは増れど乾く時なき
東宮のかくれ給へる頃よめる
霞たつ山べを君によそへつゝ春の宮人なほや頼まむ
君まさぬ春の宮には櫻ばな涙の雨に濡れつゝぞふる
延長八年九月京極甲納言の涼閑のあひだに母の
服にて
一重だにきるはかなしき藤衣重ぬる秋を思遣らなむ
とよみて土佐の國にある間に贈られたる返し
藤衣かさぬる思おもひやる心は今日も劣らざりけり
題しらず
時鳥今朝鳴く聲に驚けば君に別れし時にぞありける
夢の如成にし君を夢にだに今は見ると難くも有る哉
[露]を別れし君と思ひつゝ朝な〳〵に戀しかりけり
[おやのおもひに侍りける時よみける]
藤衣はつるゝ絲は君こふる涙の玉の緒とぞなりぬる
かいせんうせぬと聞きてかのをひ在原のまさの
ぶがもとにいひて敦忠の中將のもとに贈る
雨ふれば北へ靡く天雲を君によそへて眺めつるかな
志賀の山越にて山の井に女の手あらひて水をむ
すびてのむを見て詠みてやる
掬ぶ手の雫に濁る山の井のあかでも君に別れぬる哉
朱雀院の御門の御時やはたの宮に賀茂の祭のや
るを見てよめる
松もみな竹も別を思へばや涙の時雨ふるこゝちする
蔭にとて立ち隠れば唐衣ぬれぬ雨ふる松の聲かな
同じ中納言うせ給ひて後
ふぢ衣新しくたつ年なれどふりにし人の猶や戀しき

貫之集第九

[雜]

屏風の繪なる花をよめる
咲初し時より後は打はへて世は春なれや色の常なる
夜の雲收まりて月行くこと遅しといふ題を人の
よませ給ふ
天雲の翳けりともみえぬ夜は行月影ぞ長閑かりける
凡河内躬恒が月あかき夜きたるによめる
且見れど疎くも有哉月影の至らぬ里も有じと思へば
和泉國にある間藤原忠房の朝臣の大和よりこえ
きて贈れる
君を思ひ興津の濱に鳴たづの尋來ればぞ有とだにきく
とあるかへし
沖つ波高師のはまの濱松の名にこそ君を待渡りつれ
難波にてよめる
難波がた生る玉藻を假初の蜑とぞ我は成ぬべらなる
池にみゆる月をよめる
二つなき物と思ふを水底に山のはならで出づる月影
身を歎きてよめる
春やいにし秋やはくらむ覺束な陰の朽木と世を過す身は
冠給はりて加賀の介になりて美濃の介に移らむ
と申す間に内の仰にて歌よませ給ふ奥にかける
降雪や花と咲ても頼めけむなどか彼身の成がてにする
こしの方なる人にやる
思遣る越の白山知ねども一夜も夢にみえぬ夜ぞなき
雨ふれば北へ靡く天雲を君によそへて眺めつるかな
志賀の山越にて山の井に女の手あらひて水をむ
すびてのむを見て詠みてやる
掬ぶ手の雫に濁る山の井のあかでも君に別れぬる哉
朱雀院の御門の御時やはたの宮に賀茂の祭のや

うに祭し給はむと定めらるゝに奉る
七九松も生ひて又苔むすに石清水行末遠く仕へまつらむ
八九石清水松かげ高く影見えてたゆべくも非ず萬代迄に
　歳人源のさねたゞがもとにいひやる
九九千世と思ふ君が便に今日待て摘まむと思し若菜をぞつむ
　花の散る木のもとに來て歸りなむとて
一〇〇我は來て家へと行くを散花は咲く枝にも返らざり鳧
　源公忠の辨に日々に對めしけるにいかなる日にかありけむたいめせざりける時よみて奉る
一玉鉾の遠道を赴人はゆけなどか今のまた見ねは戀しき
　九月九日忠岑がもとに
二折菊の雫を多みわかゆといふ濡衣を赴老の身にきれとよみておくれる返し
三露盛き菊をしられる心あらば千世の無名の立ひとぞ思ふ
四白露も時雨もいたくもる山は下葉殘らず紅葉しに鳧
　昔はせに詣づとて宿りしたりし人の久しうよらでいきたりけれはまさかになむ人の家はあると云ひ出したりしかばそこなりし梅の花を折りていけるとて
五人はいさ心も知らず古郷の花ぞ昔の香に匂ひける
　返し
六花だにも同じ心にさく物を植ゑたる人の心しらなむ
　秋の立つ日殿上のぬしたち川邊遙しにいきて歌よむついでに詠めりし
七河風の涼しくも有か打寄する波と共にや秋は立らむ
　人の家に酒のみ遊びけるに櫻の散るさかりにて人々花を題にて歌よみし次でに
八散るが上に散も遂ふか櫻花斯してこそは春も過しか
　春歌合せさせ給ふに歌一つ奉れと仰せられしに
九櫻ちる木の下風は寒からで空に知られぬ雪を降ける
　延喜の御時やまと歌知れる人を召して昔今の人の歌奉らせ給ひしに承香殿のひんがしなる所にて歌えらせ給ふ夜の更くるまでとかういふ程に
　仁壽殿のもとの櫻の木に郭公の鳴くを聞しめして四月六日の夜なりければ珍らしがりをかしがらせ給ひて召し出でゝ詠ませ給ふに奉る
一〇こと夏はいかゞ鳴けむ郭公今宵計はあらじとぞ聞く
　興風が歌の返し
一一櫻には心のみこそ苦しけれ飽て暮せる春しなければ
　興風がもとに杜若につけてやる
二二君がやと我がやと分ける杜若移はむ時みむ人もがな
　かへし
三三睦まじみかよひ隔てぬ杜若たが方にかは移ひぬべき
　とあるを又かへし
四四直ちにて君がこえけむ杜若風を外にて移ろひぬべし
　在原元方がもとに贈る
五五白雲のたなびき渡る倉橋の山の松とも君はしらずや
　忠岑がもとに
六六甲斐がねのまつに年ふる君故に我は歎きと成ぬべらも
　源宗于の朝臣のもとより
七七君獨とはぬからにやわが宿の道も蹈けく成ぬべらも
　とあるかへし
八八草の露おきしも敢じ朝なげに心通はぬ時しなければ
　躬恒が
九九ことなき物と思ひせば僞の涙は衆て落さらましかへし
一〇〇惜からぬ命なりせば世中の人の僞になりもしなまし
　紀の國に下りて歸りのぼりし道にて俄に馬の死ぬべく煩ふ所にて道ゆく人々立ち止りていふ是はこゝにいまずかる神のし給ふならむ年ごろ祈もなくしるしも見えぬどうたてある神なりさきんもかゝるには祈りをなむ申すといふにみてぐらもなければ何わざもせで手洗ひて神おはしげもなしやそも〳〵何の神とか聞えむと問へば蟻通の神といふを聞きて詠みて奉りける馬の心地已みにけり
一一一榜曳き文めも知ぬ大空にありと星をば思ふべしやは
　難波の田簑の島にて雨にあひて
一二雨にきる濕田簑の島をきてみれば名には隱ぬ我身也鳧
　源のとしのぶ朝臣のよびにおこせたるに今まで
　こむとて遲くきければ
一三春日すら我待人のこじとだに云ずは明日も猶賴まゝし
　とあるかへし
一四こじと思ふ心はなきを櫻花ちると紛ふに障る也けり
一五君に逢で一日二日に成ぬれば今朝彦星の心地赴すれ
　とある返し
一六逢見ずて一日も君に倣ねば七夕よりも我ぞ戀される
　あくる年の七月躬恒がもとに遣れる
一七朝戸あけて詠めやすらむ織女は飽ぬ別の空を戀つゝ
　師走の晦日がたに身を恨みてよめる
一八籍柘に見えこし梅は咲に鳧寒には我身あはむとはすや
一九ぬば玉のわが黒髪に年くれて鏡のかげに降れる白雪
二〇高砂の峰の松とや世の中を守る人とや我はなりなむ
二一今日見れば鏡に雪ぞ降にける老の知べは雪にや有覽
　宰相中將のみもとに老いぬることを歎きて
二二ふりそめて友まつ雪はぬば玉の我黒髪の綾る也けり
　兼輔朝臣
　かへし
二三黒髪の色ふり變る白雪の待つる友は疎くぞありける
　又かへし
二四黒髪と雪との中のうきみれば友鏡をもつらしとぞ思ふ
二五色見えで雪積りぬる身の果や遂にけぬべき病なる覽
　同じ中將のみもとにいたりてこれかれ松のもとにおりゐて酒などのむついでに
二六陰にとて立隱るればから衣ぬれぬ雨ふる松の聲かな
　ある所に春と秋といづれか優れると問はせ給ひけるに詠みて奉りける
二七春秋に思ひ亂れて分きかねつ時につけつゝ移る心は
　躬恒がもとより
二八草も木も吹けば枯ぬる秋風にさきのみ增る物思の花
　返し
二九こと繁き心よりさく物思の花の枝をやつら杖につく
　花を折りてこれかれかざすついでに
三〇戯せ共花咲とやは賴まるゝみの成つべき時し無ければ
　承平五年十二月に左衛門督殿の舅女公達のかうぶりし裳着し給ふ夜、とのゝ
一今迄に昔の人のあらませば諸共に赴ゑみて見ましかとてたまへる御返し
二古を戀る心のあるが上に君を今日見て又ぞ戀ふべき
　三月晦日の日家うつりするに
三我宿を春と共にし別れば花は慕ひて移ろひにけり
　宗于の左京大夫のもとより久しくあはぬことをいひて

四四 よそにても思ふ心は變らねど逢見ぬ時は戀しかり鬼
とある返し
四五 櫻ちり卯の花も又咲きぬれば心ざしには春夏もなし
つかさなくて歎く間に正月の頃ほひ坊城左衛門
督のもとに大い殿によきに申し給へと申し奉る
ついでにこれ奉り給へとて
四六 朝日さす方の山風今だにも身のうち寒き氷とけなむ
四七 枯果ぬ埋木あるを春は猶花の縁りによくなとぞ思ふ
返し
四八 埋木の咲かで過ぎにし枝にしも降積雪を花と眺れ
四九 新玉の年よりさきに吹風は春ともいはず氷ときけり
延寛がもとより
五〇 世中に誰か名高き垂乳男と我とが中を人は知らなむ
返し
五一 我はいさ君が名のみぞ白雲の懸る山にも劣ざりける
又かへし
五二 山に社劣らざるらめ君が名は天の川迄流れいにしを
世の中を歎きてありきもせずしてあるあひだ三
月つごもりの日雅正の朝臣のもとより
五三 君こずて年は暮けり立歸り春さへ今日に成にける哉
五四 共にこそ花をも見むと待人のこぬ物故に惜き春かな
と待るかへし
五五 君にだにゆかでへぬれば藤花黄昏時も知ずぞ有ける
五六 八重葎心の内に深ければ花見にゆかむいで立もせず
四月になりて同じ人のもとにやる
五七 逢ぬまに梅も櫻も過ぬるを卯花をさへやりつべき哉
返し
五八 散變る花こそすぎめ郭公今は來なかむ聲をだに聞け
源のみやこが年頃住みける近隣を外へうつると
聞きてやる
五九 秋萩の散たに惜くあかなくに君が移ふ聞くぞ侘しき
六〇 式部丞三統が元夏が東なる隣に住みはじめてか
く近隣なることなどいひおこせたるついでに詠
みておくれる
六一 梅の花匂の深く見えつるは春の隣のちかきなりけり
といへる返し二首
六二 一かたのみぞ春は有ける住人は花し咲ねばなをやかひなし
六三 二梅も皆春近しとてさく物をまつ時もなき我や何なる
同じ元夏がもとより
六四 三こち風に氷とけなば鶯の高きにうつる聲をつげなむ
といへる返し
六五 四いで傳ふ花にもあらぬ雪は谷にのみこそ鳴渡りけれ
近郷なりける男二月二日もとなつが許に到りて
なかりければかくなむ詣で來たるといひ置きて
歸りにたるつとめて贈れる
六六 五とはゞとひ訪ずは偖も有べきを物の始に歸るべしやは
とある返しに
六七 六心をし君に留めて年ふれば歸る我身は物ならなくに
元夏がもとにねて曉に歸りて門たゝくを聞きて
六八 七夜枯していつくからくる時鳥まだ明ぬより聲のしつ覽
三條の内侍の方違にわたりてつとめて歸る間に
物などいふついでに結ぶ手の雫に濁るといふ歌
ばかりは今はえよみ給はじかしなどいひて車に
のる程によめる
六九 八家作ら別るゝ時は山の井の濁りしよりも侘しかり鬼
六月に木のもみぢたるをとりて歌をよみて雅正
の朝臣のもとより
七〇 九秋社あれ夏の野べなる木葉には露の心の淺くも有哉
とある返し
七一 〇夏なかに秋を知する紅葉ばは色計こそ變らざりけれ
敦慶の式部卿のむすめ伊勢の御の腹なるが近う
すむ所有りけるに折りて瓶にさしたる花を贈る
とてよめる
七二 一久しかれあだに散るなと櫻花瓶にさせれど移ひに鬼
返し
七三 二千世ふべき瓶なる花は挿乍止らぬとは常にやは非ぬ
同じ所にちひさくくるみの木のありけるをこひ
てほるとてよめる
七四 三露
花しられば見えぬ共春くる道の物にぞ有ける
返し
七五 四青柳の絲も胡桃のいかなれば花よりとに劣らざり鬼
近隣なりける所に方違にある女の渡れると聞き
てある程に事にふれて見さくに歌よむべき人な
りと聞きてこれがよむさまいかで心みむと思へ
と挑む心にしあらねば深くも思はず進みていは
ぬ間にこれも心見むとや思ひけむ萩の葉のもみ
ぢたるにつけておこせたりあはせて十首、女
七六 五秋萩の下葉に附て目に近くよそなる人の心をぞ見る
かへしに
七七 六世中の人の心に染しかば草葉の露も見えじとぞ思ふ
女
七八 七下葉には更に移らで只管に散ぬる花と成やしぬらむ
かへし
七九 八散もせず移ろひもせず人を思ふ心の内に花し咲ねば
女
八〇 九花ならで花なる物はしかすがにあだなる人の心とぞきく
かへし
八一 〇あだ也と名立てる人の言の葉に匂はぬ花も我は咲哉
女
八二 一色も香も無て咲けばや春秋もみえで心の散變るらむ
かへし
八三 二春秋はすぐす物から心には花も紅葉もなく社有けれ
女
八四 三春秋にあへど匂もなき物はみ山隱れの朽木なるらむ
かへし
八五 四奥山の埋れ木に身をなすことは色にも出ぬ戀の爲也
久しう住みける家をすまじとて外へうつるにや
へに生ひたる松と竹とを殘して
八六 五松も皆竹をも爰に留め置て別れて出づる心しらなむ
八七 六昨日けふ見べき限と守りつる松と竹とを今ぞ別るゝ
つかさ給はらで歎く頃おほき大い殿の物書かせ
給へる奥に詠みてかける
八八 七思ふ事心にあるをありとのみ頼める君に尋で知せむ
八九 八徒に世にふるものと高砂の松も我をやともと見る覽
十二月のつごもりがたに身の上を歎きて
九〇 九雪だにも花と咲べきみにも非で何を便と春を待らむ
六月晦日に雅正の朝臣におくれる
九一 〇花もらり時鳥さへいぬる迄君にゆかすも成にける哉
返し
九二 一花鳥の色をも香をも徒に物うかる身はすぐす也けり
三月つごもりの日人のもとにやる
九三 二又もこむ時ぞと思へど賴まれね我身にし有れば惜き春哉
世の中の心細くおぼえ常の心地もせざりければ
源公忠朝臣の許に此の歌をなむ詠みてやりける

此のあひだに病重くなりにけり
三九手に結ぶ水に宿れる月影の有か無かの世に社有けれ
後に人のいふを聞けば此の歌の返しせむと思へどいそぎもせぬ程に失せにければ驚き哀れがりてかの歌に返し詠みておたぎにて誦經して川原にてなむやかせける
三月二つある年左大臣實頼の君に奉る
四九餘さへ有て行くべき年だにも春に必ず逢ふ由もがな
春源といふ大徳の櫻の花を薄紙につゝみて
五〇空知ぬ雪かと人の云ときく櫻の降るは風にざりけるとある返し
六九吹風に櫻の波のよる時は暮れ行く春を空かとぞ思ふ
たゞひらと申す大臣の西なる殿に移り給はむとて其の殿の一つやに御むすめの内侍督のおはすべきかた殿のやのさうじに松鶴など一つ壁にかきたる題にて詠ませ給ふ
七九色かへぬ松と竹とや垂乳根の親子久しき例なりけり
八九鶴の多くよそへて見ゆる濱べ社千年巣籠る心也けれ
春の暮るゝ日仰せにて仕うまつれる
九九こむ年の爲にはいはゞ春なれど今日の暮るは惜くぞ有ける
一〇〇櫻なき年ならなくに今はとて春の執ちかけふは行覽
山吹の花を見よとて給へるに奉る
二〇音にきく井手の山吹見つれども蛙の聲は變らざり見
師輔の宰相の中將殿の四郎君の始めて袴着給ひておほぢおとゞの御もとにまゐり給ふ贈物の返りに加へむとてよませ給ふによめる
三〇言にいはで心の内を知る物は髮の條さへぬける也見
〔比叡の慈恵といふ阿闍梨在しけるが失せ給ひなむとて物染み給ひけるが痛く煩はれて〕例にあらずなやみ給ひけるによめる
三〇やみおきて今日か明日かと待つ程の折節知は涙也見
とよめるを内きこしめして御とぶらひに遣さむとてめされしに
四〇爲の花に鴬音を聞しをにいとほしきと知ずぞ有ける

伊勢集

孰の御時にかありけむ大御息所と聞ゆる御局に大和に親ある人侍ひけり親いとかなしうして男などもあはせざりけるを御息所の御せうと仲平年頃云ひ渡り給ふを暫しは更に聞かざりけるにいかゞありけむ親思ひつきにけりいかゞいはむとなげきたりけるを年頃經にければ聞きつけてけりされど宿世こそありけめとてことにいはざりけり唯若き人は頼み難き物ぞと云ひける程に時の大いまうち君に聲にとられにけり親もされば此そなどいひければこの女耻かしと思ふ程にこの男のもとより人おこせたりけるこの女の家は五條わたりなりける所にきて柿の紅葉に歌をなむ書きたりける
四〇人住まず荒たる宿を來て見れば今ぞ紅葉の錦織ける
五〇涙さへ時雨に添ひてふる里は紅葉の色も濃さ増り見
とてねずもちの紅葉にさしてなむやりける人の子になりぬれば我を今はよも訪はじと思ひてもとありける大和に行きて暫し有らむと思ひて女
六〇三輪の山いかに待みむ年ふ共尋る人も有じと思へば
男返し
七〇諸越の吉野の山に籠るとも後れむと思我ならなくに
男これをいと哀と思ひて返しをば得せでかくよみたりける、枇杷大臣
八〇世を海の泡と消にし身にしあれば恨むる事ぞ數増ける
奈良坂のわたりにぞ追ひつきておこせたりける
女の返し
九〇渡つ海と頼めし事のあせねれば我ぞ我身の浦を恨むる
とてぞ奈良にて返しやりける大和に三月ばかりに住むにさう〳〵しく寺巡りせむと思ひてありきけるにうもんと云ふ寺に詣でゝ睦月の十日餘になむ有りける見れば其の堂の有樣瀧は雲の中より落ちくるやうに見ゆ仙の窟と云ふは痛く年積りて岩の上の苔八重にむしたり哀に尊く覺えて涙落つる瀧に劣らず見知らぬ心地にたぐひなくめでたく見て物悲しく都思ひやられて石のもとに暫く詠むるに此の寺いと聞うなりぬ雨やふらむ〳〵すらむと共にある人々急ぎければ雨は降らじ雪など云ふ程にさかもと雪かきくらし降るある人々いざ歌よまむと云ひければ
斷經はぬ衣着し人もなきものを何山姫の布晒すらむ
とよみたりければ異人よまずなりにけりけふはみちに出でゝこそと云ふ所に宿りぬかの寺の哀なりしこと思ひ出でゝまた
一一見も果てず空に消なで限なく厭ふ憂身の世に歸る覽
と獨ごちて袖も絞るばかりに泣き濡しけるかゝる程につかまつりし所より早上らせよと仰せ給ひければ早くのぼり給へるもとより宮仕をこそし給へと思ひしかと思はせて云ふに死ぬる心地すべし由なき君たちをやは思ひかけしなど云ひて明けて内參りつかまつる間にこの男も見かはして哀に云へど遂はで見かはす程にこの男の兄なる男ありける今はあの人は世にもとはじなにか頼み給ふ我を思へなどせちに云へど文ばかりは見つゝも更にあはでありけりかく云ふけしき元の人は知りたりけり女里に出でゝ秋前栽などのをかしかりける尾花をなむ手すさびに結びたりけるこのつらかりし人の來てよみたりける
一二花薄我こそ深く頼みしか穂に出でゝ人に結ばれに鬼
とよみて物おきたるはやなど云ひをり人數ならぬ身はなど打ち逃げたるさまに云ひければ男も哀と思ひ女も哀と思へどあはでやりつこの兄の男などか參り給はぬかの人の心のつらきをいでゐておぼすかとて
一三ひたぶるに思な侘そふるさるゝ人の心は其ぞ世の常
返し
一四世の常の人の心もまた見ねば何か此度けぬべき物を
斯く云ひける程にあくる年の神無月になむ有りける此の兄心いとつらければ吉野になむまかりぬるとてよみたりける
一五ひたぶるに厭果ぬる物ならば吉野の山に行方知れじ
返し
一六我宿と頼む吉野に君しいらば同じ挿頭をさし社はせめ

今は維摩會にあひに行かむとて吉野とは云ふなりけり人の心つらしとて云ふにはあらざりけり
此の人の妹におはしましける御息所と聞えけるはおほむ藥のさわぎにて惱ましくなむし給ひける宵に集まりて侍ふに此の人の聖になりにし男きみの藏人と云ふものしてあからさまに參り給へ物聞えむと云ひけりかへり事しけし暫しと云ふふる言をなむ云ひやりけるされば男

八宵の間にはや慰めよ石上ふりにし事をうち拂ふべくとよみたりける女かへし

九渡つ海と荒にし床を今更に拂はば袖や泡ときえなむと云ひければ人々宵の目覺してなむ哀れがりける人數ともせぬにそひて志いと深くありて男文おこすれど返ごともせざりければ

一〇いなせとも云放たれず憂物は身を心ともせぬ世也鬼とばかり云ひてやみにける斯て世に騷ぎいでて大臣も流され給ひける婿にて兵衛佐より但馬介に其の人も流されにけり便の有りければ近くてはさ思ひてやみにしをこゝ遠くなり給ふが哀なる事と云ひにやりたりければ返事にかくなむ

一一懸て云へば涙の川のせを早み心づからや又は泣れむ又同じ女を云ふともなく云はすともなく年を經て呼ぶ男有りけり返事もせざりければこゝら年月になどかみつとだにの給はぬと云ひければ見つとぞ云ひたりけるそれより此の女をばみつとぞつけたりける、男

一二立歸り踏行かざらば濱衛跡見つとだに君云はましや女返し

一三年經ぬる事思はずば濱衛踏とめてだに見すべき物か

夏のいと暑き日盛りに同じ男のよみたりける

一四夏の日の燃る我身の侘しさに水戀ひ鳥の音をのみぞ鳴返しもせず此の女は此彼云へど聞かず宮仕をのみしけるに時の帝めしつかひ給ひけるやうぞけしからぬ人の事を聞かざりけると心にも親なども思ひ渡りける内に孕みにけりさて男みこをぞ產み奉りける我が親みづからもいと嬉しと思ひけり仕うまつりし御息所も后になり給ひにけり產みたりける男み子は桂の宮と云ふ所に置きて自らはささきの宮に侍ひけるに雨の降る日打ち詠めて居たりければ后宮のよみて給はせたる

一五月の中の桂の人を戀ふとてや雨に涙の添てふるらむ

御かへし

一六久方の中に生たる君なれば光をのぞみ頼むべらなる

斯て帝より居させ給ひて二年と云ふに御髮おろさせ給ひて仁和寺と云ふ所に住み給うて時々ぞ后宮には坐しましける后宮も仕る人も限なく悲しと見奉る元住み給ひし所に帝坐しまして御とぎ聞しめす仕りし人々君達などめし出でゝ御おろし給ふ后宮の御方よりよみて出し給へり

一七言の葉に絕せぬ露は置く寬や昔覺ゆる圓居したれば

御かへし

一八海とのみ圓居の中は成ぬめりそ乍ら非ぬ君が見ゆれば

となむこの帝に仕う奉りて產みたりし人は世にさいはひなき物なりければ生み奉りし君は八つにて失せ給ひにけるいみじく悲しと思へどかひなし死なむと思へど死なれねば夜晝なきたるにこのみこになづけたりし人の云へりける

一九思ふより云ふは愚に成ぬれば譬ていはむ言の葉もなしと云へど更に物もおぼえねば返事もせずなりにけりかへりくる年の五月に時鳥なくを聞きてひとりごちける

二〇しでの山越えて來つらむ時鳥戀しき人の上語らなむ

今は心ながらもとの宮仕をなむしける后の御心は限なくめでたくなさめきて世に類なくなむおはしましける此の程の曹子には前栽などいとをかしう植ゑてなむ住みける秋の頃里に出でたるに宮よりなどか今までは參らぬ遲く參れば花の盛もみな過ぎぬべし松蟲も鳴き止みぬべかめりとなむの給はせたりける御返事に

二一松虫も啼已ぬ也秋の野に誰呼ぶとてか花見にも來ん

御返し

二二呼ぶとしも聲は聞えで花薄忍びに招く袖も見ゆめり

又斯く聞えさせたりけり

二三人もきぬ尾花が袖に招れて最とあだなる名をやたちなむ

御返し

二四我が招く袖とも知らで花薄色變るとぞ思ひわびける

歌めすおくにかきて參らす

二五山川の音にのみ聞く百敷をみをはや乍ら見由もがな

常に惱ましくせさせ給ひけるを遂に六月に隱れさせ給ひにける淺ましくいみじく悲しくて仕りし人宛ら集りて夜晝泣き戀ひ奉るに後の御わざの折にやう〳〵成りぬ雨の降る日心うしと云ひし人しもになむ籠り居たりける上の人集りて御わざの組をなむしける下なる人糸はよりはて給ふべかなり只今何わざをかし給ふこゝには雨をなむ見出して詠め侍ると云ひあげたりければ上の御もとたちの返しには糸はよりはてゝ今はねをなむより合せてなき侍ると云ひおこせたれば下なる人

二六より合せて泣なる聲を糸にして我涙をば玉にぬかなむ

いとみそかに人にあひたりけるにやう〳〵云ひのゝしりけり男此のかうぶりの箱に玉をなむ入れたりけるそれが緒に女の結びつけたりける

二七瀧つ瀨と名に流るれば玉緒に逢見し程を較べつる哉

故中宮の奉宮の女御とまだ聞えし時題給はせて歌よませ給ひし御屏風のわか梅の花の便に物云ひたる人と思はせて繪に男の行き合ひて物云ひ始めたるを一のひらにかゝせ給へる、男

二八見し人に又もやあふと梅花咲しあたりを行ぬ日ぞなき

返しと思はせて

二九一度に懲にし梅の花なれば散りぬと聞けど今はみなくに

櫻の盛りに同じ男

三〇我が宿にいざ誘はれよ櫻花人に普く告げざらましや

藤の花の咲きたる所を男の來て女をかいまみてよみて入れたる

三一藤の花今日見つるより濃紫村濃に色ぞ深くなりぬる

此の男來て門に立ちやすらふ程に花橘に時鳥鳴くを聞きて男よみて入れたり

三二とに立てゝわれやかなしき時鳥花橘の枝にゐてなく

返し

三三何かとも君をば知じ時鳥來乍らなくはさるにやは非ぬ

六月に祓へするところに男さあひけり

三四年中に我れが嘆は成ぬれば世にみそぎ共失せじとぞ思ふ

返し

四四 嘆をばなでゝ祓ふる大幣は早河の瀬に流れ出にけり
四五 七夕の日
四六 朝さだき急ぎ引らむ今日の緒に心長さを比べてしがな
かへし
四七 七夕の細き緒をして比ぶらむ心のかたや先は絶せむ
四八 秋の野に花見にいくと聞きて男の出で來にけり
四九 秋の野に出ぬと聞くを花薄忍びに我を招きやはせぬ
返し
五〇 疏方に有りとしらばか花薄惨なる空を招きたてらむ
男せちに物云はむと云ひて來たり門に立てる程
に時雨の降れば、男、
五一 ○渡つ海の底に深くは入らず共時雨にだにも濡さざらなむ
せめて云へば呼びてすのこにすゑて物いふ、女
五二 ふりとけぬ時雨ばかりに山彦の聲を慘く聞き交す哉
思ひ始めたる男師走ばかりに來たりあひぬべき
やうなるを親聞きて騷ぎければえあはで、女
五三 夜こゆと誰か告げゝむ相坂の關固むめり早く歸りね
と云ふ程に雪いみじく降りければ
五四 歸さは道行べくも思ほえず凍りて雪の降りし增れば
と云ふ程に夜明けぬれば、男
五五 遙事の明ぬ夜ながら明ぬれば我こそ歸れ心やはゆく
長恨歌の御屏風亭子院にはらせ給ひて其の所々
をよませ給ひけり御手にて
五六 紅葉に色見えわかで散る物は物思ふ秋の涙なりけり
五七 數計り落つる涙の包まれて雲の便を告げましものを
五八 歸來て君おもほゆる蓬葉に涙の玉と置きゐてぞみる
五九 玉簾の明るも知らで寢し物を夢にも見しと思ける哉
六〇 紅に拂はぬ庭はなりにけり悲しき言の葉のみ積りて
これは后にかはりて
六一 ○知べする雲の舟だに無りせば世を海中に誰か問まし
六二 月も日も七日の夜の契をば聞きし程にも又ぞ忘れぬ
六三 消し身に又も消ぬべし奉餞かすめる方を都と思へば
六四 木にも生ひず芳も並べで何しかも波路隔て君を聞覽
六五 居雲の人わきもせぬ物ならば水脈と涙は流ざらまし
此の內侍のかみの四十の賀を清貫の民部卿行う
まつり給ひける御屏風の若菜摘みたる所に
六六 春の野の若菜ならねど君が爲年の數をも摘まれぞ思ふ
梅の木の傍なる竹にたかんなぬく

六七 竹の葉に散懸らなむ梅の花雪の中のを取と見るべく
櫻の花ある河づらあり
六八 水底に映る櫻の影見れば此河づらぞ立ちかゝりける
海づらなる家に藤の花咲きたり
六九 我宿の影ぞと頼む藤の花立より來とも波にをらるな
石井のある所
七〇 沸くとのみ目には見ゆれど我宿の石井の水は温まざり鳧
七一 ○遙なる程に立ち舞ふ葦鶴を我まへ近く波もよせなむ
たきのもとなる人
七二 水上と宜も云けり雲ゐより落てくるとも見ゆる瀧哉
鶴雲ゐに遊ぶ
七三 大空に群れたるたづのさし乍ら思ふ心の有げなる哉
藥刈りたるあまあり
七四 心して玉藥は刈れど袖毎に光も見えぬ螢にぞ有ける
七五 松の末海に入りたる
七六 波にのみひたれる松の深線幾沙とかは知るべかる覽
わたつ海より漕ぎ出でたる所
七七 遙々と雲ゐをさして行く舟の行末遠く思はゆるかな
七八 海士の家に煙立つところ
七九 袖濡れて曼のたく火は見えねばや雲と煙の立昇る覽
亭子院の六十賀京極の御息所の仕うまつり給ふ
御屏風の歌、子月する所松のいとちひさきあり
八〇 生ふるより年定れる松なれば久しき物と誰か見ざらむ
松に藤かゝれり
八一 頼つゝ懸れる藤は松樹の千代てよとも飽ずぞ有ける
或る所に北の宮の御裳着の歌ども、竹多かる所
八二 年毎に生添ふ竹のよゝを經て變ぬ色を誰とかは見む
女郎花を折りみて硯の上に置けるを見て
八三 ○女郎花見るに心はなぐさまでいとゞ昔の秋ぞ戀しき
狩する人田舍の家の門などのまへなるに近うよ
り來たり
八四 假にとて聞くに心の見えねば我袂には寄せじとぞ思ふ
神樂するところ
八五 年毎に神をぞ祈る榊葉の色も替らでをらむと思へば
北の宮の裳着給ふに院其の大臣の贈り物に御屏
風の和歌奉れとかぎり
八六 古の心し絶ず行く水にわがまつ影も今日こそはみれ

八七 根を絶て水に浮きたる浮草は池の深さを頼む也けり
后宮の五十賀せさせ給ふに御屏風に祓する所
八八 祓ぎつゝ思ふ事をぞ祈つる八百萬代の神のまにまに
七月七日たらひに影見るところ
八九 珍しくあふ七夕はよそ人も影見ま欲き物にぞ有ける
松の末に鶴立てり
九〇 顔はなる海にしも住む葦鶴は千世を見よとの心也鳧
これも同じ后の宮の御賀おほきおとゞの仕り給
ひし題の住の江の濱に鶴立てり
九一 住江の濱の眞砂を踏むたづは久しき跡をとむる也鳧
紅葉散るまに酒のみしたる所
九二 圓居する身に散かゝる紅葉ばゝ風の被くる錦也けり
陽成院の帝の七十の賀にうちみたり箱に籠鶴菊
などかきたり
九三 ○籬懸る菊の中なる葦鶴は今幾たびの千世かそふらむ
式部卿の宮の前栽合に、草のかう
九四 草のかう色變りぬる白露は心おきても思ふべきかな
龍たん
九五 風寒み鳴く雁音の聲によりうたむ衣を先やかさまし
九六 梅の花香にだに匂へ春立ちて降る泡雪と色紛ふめり
九七 心のみ雲ゐの程も通ひつゝ戀こそ渡れかさゝぎの橋
九八 故郷は誰れ聞かめとや鶯の花よりさきに春を告らむ
亭子の御門の小野なるゆきとしが家の梅の花見
におはしますに
九九 思出でゝ見にこざりせば梅花誰に匂の香を移さまし
一〇〇 ○梅花わだに散らさぬ事をだに我心にも任せてしがな
內の御屏風に花見に行くところ
一〇一 散り散らず聞き欲きを故郷の花見て歸人もあらなむ
まひ女
一〇二 ○○移ろはむとだに惜しき秋萩に折れぬ計も置ける露哉
京極の院に亭子の帝おはしまして花の宴をせさ
せ給ひ參れと仰せられしに參りて池に花など散
りたるを見て
一〇三 ○年を經て花の鏡となる水は散懸るをや曇ると云らむ
一〇四 ○春毎に流るゝ河を花と見て折られぬ水に袖や濡なむ

又の日

三〇けふまでも流ぬる哉水上の花は昨日や散果てにけむ

返し　　季繩

四〇青柳の枝に籠れる春雨は綜てぬける玉かとぞ見る

五〇淺緑そめてみだれる青柳の絲をば春の風やとくらむ

六〇見る人もなき山里の櫻花ほかの散なむ後ぞ咲かまし

七〇逢ふ事の君に絶にし我身よりいくらの涙流出ぬらむ

春日の歌合の所

八〇櫻花散てみ雪に紛ひなばいづれか花と春にとはなむ

九〇濡つゝも雨には行かむ松風は千歳の春を洩さざらなむ

或る處に五せつの頃堀河殿に枇杷の大臣おはしましして只忍びやかにと有るに

一〇八少女に小忌の衣のき乍らに馴ぬ程をば誰か忍ばむ

鏡の裏に鶴のかたを鏤つけて侍りければ

一千歳とも何か祈む浦に住たづの上をぞ見べかりける

ふる家にあからさまにゆきて

二見初めずはあらまし物を故郷の花に心の止りぬる哉

宮に

三諸共に有し昔を思ひ出でゝ花見る毎に音こそ泣るれ

辛崎を題にて

四浪の花沖から咲て見えつるは河の春とも風ぞ吹ける

花の散りたるを家にて

五追風の我宿にしも吹こずば房乍ら空の花を見ましや

森物思ひけるに

一六櫻花匂ふともなく春來ればなどか嘆の茂りのみする

一七白玉を包む袖のみ泣るゝは春は涙もさへぬなりけり

せちぶんのつとめて四月朔宮にて

一八疎こまで春はいぬらむ暮はてゝ別しとは夜に成にきかへし　　兵衛佐の命婦

一九暮果てゝ春の別の近ければ幾らの程も行じとぞ思ふ

忘れ侍りにける人を夢に見て

二〇春の夜の夢に有つと見えつれば思絶にし人ぞ待るゝ

風いたく吹く日櫻のいたく散り侍りしかば

二一風さへもて騒くかな櫻花心とだにも散るに任せて

二二五月には鴫も古りなむ時鳥まだしき時の聲を聞ばや

夜深けて時鳥の一聲啼き侍りしに

二三一聲と聞くとはなしに時鳥夜深く眼をも覺しつる哉

二四今朝來鳴き未だ旅なる時鳥花たち花に宿はからなむ

撫子のおもしろきを見て隣にやるとて

二五疎くにも咲はすらめど我宿の大和撫子誰にみせまし

返し

二六獨のみぬる床夏の露けさは涙にさへや色はまさらむ

年を經て物云ひ渡りける人の業平朝臣也

二七頼めつゝ逢はで年ふる僞にこりぬ心を人は知らなむ

返し

二八夏蟲のしる〳〵惑ふ思をばこりぬ悲しと誰か見ざらむ

はるかみの宰相の北の方月の明き夜かどの前を渡り給ふとてせうそこをのみ云ひ入れ給へりければ返事に

二九雲居にて逢語らはぬ月だにも我宿過て渡るとは見ず

三〇五月雨に物思ふ人の村雨は身よりすてふる誠也けり

三一夏虫の思ひに入てなども斯我心から消なむともする

すゞく院の鶴を人の心にもあらでうち殺したりける今一つの鶴の戀ひて雨ふる日いみじう鳴きければ

三二啼く聲に添ひて涙は昇らねど雲の上より雨のふる覽

鶴は九月九日ぞしにける

三三菊の上に置かるべくもあらなくに千歳の身をも露になす哉

大和に親ありて通ひける人後に親なくなりければ昔戀しくて

三四獨り行く事こそうけれ故郷の昔習ひてみる人もなみ

山のへにて

三五草枕旅としなれば山のへに白雲ならで我やとまらむ

伏見にて

三六名にたちて伏見の里と云事は紅葉を床に敷けば也鳥

亭子の帝の御前に前栽植ゑ給ひて朝露おけるをめでさせ給ひて歌よめとのたまひければ

三七植たてゝ君がしめふ花なれば玉と見えても露も置くらむ

これは御かへし

三八白露のかはるも何か惜からむ有ての後も世は憂物を

前栽植ゑさせ給ひて歌よめと仰せられければしをに

三九受とむる袖をし緒にて貫かば涙の玉の數は見てまし

これも

四〇露だにも置くともみえぬ秋夜は更しを西に月のなる覽

思ふ人を今は見じなど云ひて

一四一いかなれば見しよなる覽秋霧の紛ふまだにも悲しき物を

すゞく院の七條のみこの御息所の八十賀大きおとゞのし給ひし屏風の

一四二我宿も照滿つ秋の月影は長き夜見れど飽ずもある哉

一四三鈴蟲取にやりてせんざいの中に放ちたりける夜

一四四疎くにも草の枕を鈴蟲のこゝを旅とも思はざらなむ

一四五わび果つる時さへ物の悲しきは疎くを忍ぶ涙なる覽

なき事を人の云ひしころ

一四六世と共に我濡衣となる物は侘る涙のきするなるべし

一四七柵に袖をとゞれぐせきとめずこぼるゝ物は涙也けり

一四八逢見ても包む思の悲きは人まにのみぞ音はなかれける

人のつらくなる頃

一四九人知れず絶なましかば侘つゝも無名ぞとだに云まし物を

一五〇人戀ふる涙は奈ぞ温みける絶えぬ思の沸するなるべし

一五一故郷にあらぬ物から我爲に人の心の荒れて見ゆらむ

亭子院の御屏風に河の邊に紅葉あり

一五二浮沈み淵瀬ながるゝ紅葉に深く淺くぞ色は見えける

一五三ひたたへてもる網なのみ引時は稻葉に露ぞ止らざりける

一五四故郷の荒果にたる秋の夜に花見がてらに來人もがな

御返し

一五五秋の野に我松蟲の啼くといはゞ折で根乍ら花は見てまし

人の

一五六岩瀬山谷の下水うち忍び人のみぬまは流れてぞふる

返し

一五七瀧つ瀬と速からぬをぞ恨つる見ず共音を聞かむと思へば

一五八はらからのなくなりたる戀わたる頃

一五九面影も相見るとにな須時は心のみこそ沈められけれ

長柄の橋つくると聞きて

一六〇難波なる長柄の橋もつくる也今は我身を何に譬へむ

秋の頃うたて人の物云ひけるに

一六一知と云へば枕だにせでねし物を塵ならぬ名の空に立覽

一六二三吉野の山の下風寒からし妹背の河もなみ高くみゆ

一六三難波潟短き葦のふしのまも逢で世を過してよとや

一六四沖つ藻を取でや止まむ仄々と舟出し事も何によりてぞ

或る大納言の家の比叡坂本に音羽と云ふ所にいとをかしく作りてありけるを見て遣水のほとり

なる岩に書きつけゝる、音羽河に瀧など落したりける

三音羽河堰入れて落す瀧つ瀬に人の心の見えもする哉

人の心かはりける頃繪に浪の越えたりけるを見てかきつけたりける

四松懸て頼めし事はなけれ共浪の越ゆる　を悲しき

友遠なる女筥紫へ行くとて

五抑へつゝ我は袖にぞ堰止る舟こす汐に為じと思へば

返し

六後れずぞ心に乗てこがるべき波にも止よ舟見えず共

我は涙を海となしつゝ

疑ひたることありて人のし給ひければ

七清けれど玉ならぬ身の侘しきは磨ける物に云ぬ也鳧

八夢にだに見ゆとは見えじ孰〳〵我俤に果る身なれば

人のそらごとを云ひければ

九憂事の斯くわく時は涙川目の前にこそおち増りけれ

人のおぼつかなく侍りしに

〇七さも社は相見る事の難からめ忘すとだに云人の無き

返し

一七年經れどいつも我こそ忘れずの濱衛とは鳴渡りけれ

二七逢事の潟におり居る葦鶴の洲に鳴聲は聞えやはする

三七涙にぞ浮きて流るゝ水鳥の濡ては人に見えぬ物から

四七鶏に非ぬ音にても聞えけむ明行く時は我は泣きにきかへし

五七曉の寢覺の耳に聞きしかど鳥より外の聲もせざりき

御屏風の和歌七夕のかげ見たる所

六七別るてふ影をだにみじ七夕は人のぬる夜を待も社すれ

人の許に炭やるとて

七七年をへて思は炭に有乍ぬき火はつかぬ物にぞ有ける

八七誰為にこれる嘆をうちつけに匂も知ぬ我におほする

屏風

九七山里に宿らざりせば郭公聞人もなき音をや鳴かまし

屏風、夜一夜物思ひたる女の面杖つきたる所

〇八終夜物思時の面杖はかひなたるこそ知られざりける

碁打ちたる所

一八斧の柄の朽つ計には非ず共返りみにだに見人の無き

是も屏風に

二八折つゝも見まくぞ欲き藤の花影をだにとや花はをる覧

式部卿宮うせ給ひて御四十九日はてゝ家にまかる人

三八悲さぞ増りに増る人の身にいかに多かる涙とか知る

四八君により儚き死にや我はせむ戀返すべき命ならねば

ことかはりたる人に

五八逢事の形見に聲の高からば我泣音とも人は聞かなむ

人に

六八身にかふる人にも我は倣てしが後安きを見せじと思へば

七八貫きためて數も見ゆべく荒玉の緒計だにも逢由もがな

八八夢ならで逢事難き世中は大方床を起きずもあらなし

九八我宿や雲の中にも思ふらむ雨ら涙もふりにこそ降れ

〇九身の浮ぶ事をも知で河中におり立ぬべき心ち社すれ

八條の大將の御四十賀檜中納言の仕うまつり給

ひける子日松植ゑたる所

一九千年ふる松と云共植てみる人ぞ歎へて知べかりける

岩の上につる立てり

二九岩の上を栖にしたる葦鶴は千世を長閑に思べきかは

三九秋の野の花の名立に女郎花假にのみ來人に折らるな

文おこせたる人をたがもとにあるぞと問ひければ人の親なくなりたりけるいかにと云ひたりけるにおこせたりけるになむありける

四九大空に飛てふ事の遠ければ雲の上にぞさして聞ゆるかへし、女

五九濱千鳥翼のなきを飛からに雲路に爭で思ひかへらむ

家の近かりければ立ち歸りて、男

六九翅無鳥となられば飛去すま近きえにも住まむとぞ思ふ

此の返事に女たゞ紙を結びてやりたりければ

七九なだの海清き渚に濱千鳥ふみおく跡を波やけつらむ

返し、女

八九灘の海は荒やまらむ沖つ波なごまむ方の淺き求めよ

又返し

九九なだの海荒增るべき物ならば焦れむ舟を打寄せよ浪

返し、女

〇〇荒れ乍ら母よすべくも思ほえず方定めてし波の立ねば

又、男

一〇涙川濱べによらね浮舟はこちてふ風や吹くと社まて

返し、女

二〇追風に風は直りて吹きぬとも纜の碇に留まりやせむ

又、男

三〇風吹けば行じ留まる小舟には碇をおろす人は有じな

からにまかりける人心變りて侍りければ

四〇裏うへに思遣らるゝ唐衣からに移りて君がきたれば

又、男

五〇玉葛我來るとを君知らはつら乍らにも絶じとぞ思ふ

女

六〇打はへてくるを見るにも玉葛手にだに懸じ結知ねば

をとこ、又

七〇玉葛結も知らぬ物ならばこのいでき　むとぞ怪しき

かく云ひつゝ參りこむと云ふものからえこで初

雪のふる日

八〇神無月時雨計は降ずしてゆきがてにのみなどかなる

返事

九〇雪まぜて見るべき物を神無月時雨に袖の濡も社すれ

返し

一一風吹ば止らぬ露の我身かくいかむと思ふとの儚さ

春宮の御息所の八十賀中務のみこし給ふ御屏風に、若菜つみたる所

二一春日野の若菜の種は殘してむ千歳の春も我ぞ摘べき

稻荷山行きかふ人は君が代を一つ心に祈りやはせぬ

世の中の憂きこと嘆く人

三一惜からぬ命なれ共心にし任せられねば浮世にぞふる

四一果は身のふじ　山とも成ぬなり燃ゆる嘆の煙絶ねば

五一逢に逢て物思ふ頃の我袖は宿る月さへ濡るゝ顏なる

六一爭でかく心一つを二しへに憂くもつらくも倣て見す覽

堀河院にときの藏人として侍ひける人みちの國の

すけつねくにと人のめにて下るに

七一鹽竈の浦漕ぎつらむ舟の音聞しが如に聞くは悲しや

返し

八一鹽竈の浦漕ぐ舟の音よりも君を怨みの聲ぞまされる

筑紫へ行く人に

九一待侘て戀しくならば尋べく跡無き水の上ならでゆけ

甲斐へ下る人に

〇二君が代はつるの郡にあらできね定なき世の疑もなく

思ふ事ある折に

一二見し夢の思出しるく宵毎にいはぬを知るは涙也けり

せきう法師の和泉の講師に流されける頃皆人の歌よみけるに

二別れてはいつ相見むと思らむ限ある世の命ともなし

物へ行く人にかつらをやるとて

三けづりこし心もしるく玉葛手向の神になるぞ嬉しき

これを思ふこよありける頃

四身のうさを知ればしたに成ぬべな思へば胸の碎けのみする

五伊勢の海に年經て住し蜑なれど斯るみるめは被がざりしに

（下句有二異本之句一）

父の服ぬぎて返して

六伏轉び惑ふ形見を見るとてや泣れし衣に身は後れけむ

世の騒がしき頃

七定なき世を聞く時の涙こそ袖の上なる漏瀬なりけれ

前栽植えて砂こひけるに家人にもあらぬ人の奉らむとてすなごおこせたるにあきかたの少將なりけり

八荒磯海の濱には非ぬ庭にても數知ず社嬉しかりけれ

隣なる人のそこに見くらべよとて花おこせたるに

春にだに忘られにける宿なれば色較べき花だにもなしかへし

九我をこそ忘もはてめ櫻花さきしぞとだに思出でなむ

彌生の二つある年

一〇櫻花春くはゝれる年だにも人の心にあかれやはせぬ

故中の宮の内侍の御もとに、中宮の御屏風

二百敷の花の匂はくれ竹のよゝにも似すと聞くは誠かかへし

三百敷に流るゝ水の流てもかゝる匂はあらじとぞ思ふ

五月二つある年思ふことありて

一三梅雨の續ける年の詠めには物思ひそめる我ぞ悲しき

歌合の歌、右

一四夏虫の身をも惜まで玉しゐらば我とまねばむ人めもる身ぞ

一五宵の間に身を投げ果る夏虫は消てや人に逢と聞らむ

七日

一六戀々て逢むと思ふ夕暮は七夕つめもかくやあるらむ

桂にありし頃帝のたまはせし

一七逢ふ程も河を隔てゝ戀ふ時は七夕つめに何か異なる

御かへし

一八例ひなき物とは我ぞ引るべき七夕つめも人めやは見る

恨みて物云はじと人の云ひければ

一九秋とてや今は限の立ぬらむ思にあへむ物ならなくに

内に菊の宴せさせ給ふ頃

二〇秋の夜も深くなるとや菊の花影さへそひて君を見らむ

亭子の帝おりゐさせ給ふ秋

二一白露のおきし變れば百敷の移ろふ秋はものぞ悲しき

二二別るれど相も思はぬ百敷を見ざらむ事の何か悲しき

と思ひて弘徽殿の壁に書きつけさせ給ひける

覽じて傍に書きつけさせ給ひける

帝御

二三身一つにあらぬ計を押なべて行歸りてもなどか見ざらむ

二四宿もせに植なめつゝぞ我は見る招く尾花に人や止ると

秋の花見にまかりて

二五行と來と見れ共飽ぬ秋の野は行きも還れず止るともなし

二六例へくる露と等しき身にしあれば我思にも消むとやする

二七萎るとも涙ならねば濡しけむ春雨こそは哀ともみめ

二八白雲の靉き隱るみ山には照る月影のよそにこそきけかへし

二九雲拂ふ照日曇れる山なれば明き月にも見えぬなる覽

一〇花薄穗に出で出でずなる宿は昔忍ぶの草をこそみれ

枇杷の大臣の兄のおとゝ

二一時雨ふる冬の木葉の變らぬは物思人の見れば也けり

二二濡々て色變るめる紅葉に袖はぬる共くちとまらなむ

二三露乍經なむとぞ思ふそにても一夜けぬると聞むと思へば

二四濁江は澤深くこそ成にけれ身を遂さへ見れば生けり

亭子の帝物へおはしましける序に桂なる家の花など御覽じて歸らせ給ひにけりその花につけさせ給へりける

二五梅花形見殘さず散にけり園はてだにや殘さざりけむ

御かへし

二六春霞立乍ら見し花なればふみとめてける跡ぞ嬉しき

初瀬の寺に參り侍りて親を思ひ出で侍りて

二七名をだにも知人にせよ山彦の昔の聲は聞知れるらむ

宇治殿にて

二八水もせに浮ぬる時は白波のうちの殿とも見えぬ紅葉

ぞたうのもとに

二九山川に聲きくよりは紅の人め計りもまづ見てしがな

かへし

三〇紅の人めはさこそ染れども人ばかりには薄く社みれ

三一置露になに明すとか秋夜の涙をさへはかりて染む覽

三二二しへに暁時分くる露なればもみづる方に宿るなるべし

扇のみだれたるに

三三結びけむ人の心はあだなれや亂れて秋の風にちる覽

三四住吉の岸にきよする沖つ波なく聞ても思ほゆる哉

男の兄なりし人

返し

三五住吉の眼に近からば岸にねて波の數をも讀べき物を

三六濃さ增る涙の色もかひぞなき見すべき人の此ならねば

三七鴛に身をあひかへば散迄も我物にして花は見てまし

枇杷のおとゞ

三八今と云て別るゝだにも有物を時雨る今日の況て悲き

かへし

三九さらばよと別し時に云はませば我も涙に溺ばれましを

四〇かりの歸りぬべきを

四一雲路をも知ぬ我さへ諸共にけふ計りとぞ鳴渡りける

四二根も絕えず枯ぬる人の紫はなべてと思しとぞ絕ぬる

又人

四三郭公鳴て立にし宿なればすみきと思へば鳴つゝぞ來る

かへし

四四我宿は今ぞ古巢と成ぬなる君故郷のさがの名なれば

又

四五山彦のよそに答へし聲なれど言問し社戀しかりけれ

かへし

四六よそ乍經なむとぞ思戀しきは馴ての後は有じと思へば

枇杷の大臣ちかごとなどたてし折に

四七逢事も賴むる事も過たれば世にふる事も有じとぞ思ふ

かへし

四八云事も違はぬとにあらませば後憂事ぞ聞えざらまし

そらごとと云ふ人ありと聞きて

四九ちりに立つ我名きよむる百敷の人の心を枕ともがな

かへし

五〇涙のみしる身のうさも語るべく數く心を枕にぞせよ

五一音にのみ聲を聞らむ足引の山下水にあらぬものから

五二いせ渡る河は袖より流れば年に間れぬ身はうきぬ也

五三更し夜の行合の霜にうてしがなと身に寒く當ざりけむ

心ざしありながらえ逢はざりける頃おこせて侍

りける
八頃四をへてあひ見ぬ時は白玉の涙も秋は色かはりけり
かへし
八紅に涙移ると聞きしをばなどいつはりと我思ひけむ
こくりはを人のよみければ
六紅の涙　濃くば緑なるそでも紅葉と見えましものを
人のもとひさき子をこれ子にせよとておこせたりければ
七片時の人を見るだによる物は只片おひに成ぞ侘しき
七夕のそに
八逢とだに形見にみえぬ物ならば忘るゝ程も有まし物を
九折はへて鳴ぬべらなり時鳥繁るなげきの枝々にぬて
人のはらからのなくなりたるとぶらふとて、人
〇程もなく誰も後れぬ世なれ共止るは行を哀とや見る
かへし
九背かれぬ松の千年の程よりも共々とだに慕はれぞせし
返し
二共々と慕ふ涙の川水はいかなる色かしてながるらむ
又
三春霞はかなく立て別るとも風より外に誰か訪ふべき
かへし
四目に見えぬ風に心を頼へつゝやらば霞の別こそせめ
五憂ながら人を忘れむと離みまだ心こそ歸らざりけれ
六物思ひ侍りける頃野のやくるを見て
冬枯の野べと我身を思ひせば燃ても春を待ましものを
和泉へ人の流されけるに
七泣留ぬ涙泉に絶せねば流るゝ身をぞ留めざりける
人
八深き思染つと云ひし言の葉はいつか秋風吹て散ぬる
かへし
九心なき身は草葉にもあらなくに秋吹風に疑はるらむ
〇名に立てる音だに泣かれば憂事は身のまだ消ぬ草にぞある
一人知れぬ我思にや秋の野の草木も敢すこがれ散らむ
二秋ならず散る言の葉は見え乍露やは人の心とはなる
三よもの蟹も潜き侘ぶる白玉とみしよの袖は海と成にき
四濡返り玉も被けど飽なくに頼むみるめの絶て無れば
三月晦日雨の降りし日鶯の鳴きしかば
五行く春を一聲なきて鶯もよのまの涙をとむるなりけり

六秋の日一偏に飽ぬ物なれば涙をとめて移してぞ見る
七春霞たつを見すてゝ行雁は花なき里に住やならへる
そこことも知らでほかに渡りたりける折に男かく
れにたるとなむ思ひつると云ひたりければ返し
八思河絶ず流るゝ水の泡のうたかた人に逢で消えめや
人
九櫻花色は等しき枝なれどかたみに見れば慰まなくに
〇見ぬ人の形見がてらは折ざりき身になずらへる色にぬはば
友だちなりける人の思ふことありけるをとぶら
ふとて云へりける
一世中はいさともいさや風の音の秋に秋添心ち社すれ
法性寺にさゝのおはしましけるに御ともに
二久方の月の圓かに成頃は紅葉そむ共しぐれざらなむ
三我為に何の仇とか春風の惜むと知れる花にしもゆく
四朝な〳〵袖をや絞る蓼秋の夜すがら鳴きあかしつゝ
或る處に帝ふたりおはしましけるとか
五日の光重ねてませば紫の雲もふたへに今やなるらむ
七條のきさいの宮　帝入道し給ひての頃
六人渡す事だになきを何しかも長柄の橋と身の成ぬ覽
御返し
七ふるゝ身は涙の川に見ゆればや長柄の橋に誤たる覽
八秋の夜に寢て覺たる白露は獨ある人の涙なるべし
九いとまだき飽ぬる秋の形見には枝に紅葉ぞ散殘ける
人
〇逢坂の關は夜社もり増れ暮るゝをなどで我頼むらむ
かへし
一守ませど夜は猶社頼れぬるまも有らば越むと思へば
二櫻花年にかへねど空蟬の夜を例にて散るにぞ有ける
三名殘なく磨かれにける白玉は拂ふ袖にも歷だにもあ
かねもりが、道亭ね侘びてふせる男
四八重閉る道は夢にも惑らしぬるたまにだに逢と見えねば
五形見にも身を知雨の降し哉我も堰敢ず君もこしかば
六濡通ふせかれぬみをに引れてや我さへ浮て流寄ける
忍びたる人と二人して
七夢とても人に語るな知と云へば手枕ならぬ枕だにせず
八徒に積る涙の包まればこれしてけりと云はまし物を
人

九忘らるゝ我身を知で濱衛踏とめてだに見るべき物を
〇面影は水に浮ても見えずやは心に乘りて流れし物を
かへし
一心にや乘りてこがれし鐙てふ名は徒に水かけもせで
二夏蟲の思に入りてなげもかく我心から投むとはする
三我招く袖とも知らで花薄色かはるとて思ひ侘びぬる
四逢も見ぬ年の渡に濡ればみを深からぬ心とや見る
五我如く物は思はじ七夕もあふ七日をし待つと思へば
六忘れてふ事をも知らぬ七夕や年の渡りを待て逢らむ
七限なく思ふ涙や河と見て渡りがたくはなり増るらむ
八床定む事こそ身には難からめ夢計には猶も見えなむ
人
九隱沼の底の下草み隱れて知られぬ戀は苦しかりけり
かへし
〇隱沼に隱るばかりの下草は長からじとも思ほゆる哉
一宵の間に身を投果つる夏蟲は消てや人に逢と聞らむ
二梅の花散るてふなべに春雨のふりでつゝ鳴く鶯の聲
三郭公夜深き聲は月待つと起きていもねぬ人ぞ聞ける
四足曳の山を遠しと郭公里に出でゝも音をのみぞなく
五打解る山べの聲を時鳥長き夜にこそ聞かまほしけれ
六句ふかの君思ほゆる花なれば別しつべく袖ぞ濡ぬる
七ひたぶるに消ば消なむ露の身の玉とはなしに消紛ふ覽
八水莖の通ふ計りを宿世にて雲居遙にはてねとや聞く
九雲居にも通ふ悲しと思つゝ人に宿世はおかまし物を
一霜雪に消て憂身の雫こそ袖だれぬ迄さやけかりけれ
二白露の起て相見ぬ事よりは消返りつゝ寢なむとぞ思
帝物におはすましけるに女郎花多かりと御覽じて
ほりに給へりける奉るを聞きて枇杷のおとゞの
たまへる
三女郎花折けむ枝の節ごとに過にし秋を思ひ出でせじ
とは亭子の帝うせ給ひてのちの事なるべし
御返し
四女郎花をりも折すも古を更にかくべきとならなくに
右京のかみ撫子多かるを見て
五我袖に移らば移れ手もたゆく摘みや入まし撫子の花
御返し
六こき限りとは摘入て撫子に移れる袖の色を見せまし

故中務の宮の琴をかり給ひて

天つ琴春の調をかりしかば返す物とも思はざりけり

かへし

程もなく返すに増る琴の音は人も留めぬ身なや果らむ

又御返し

返しても飽ぬ心を添つれば常より聲の増るなるらむ

かへし

常よりや添る心の返りけむ知らぬ聲なる聲の聞ゆる

中務宮の家の池に舟を造りておろし始めて遊びけるに法皇の御覧じにおはしましてよさりつかた歸らせ給ひなむとしける折によみて奉りける

水の上に浮べる舟の君ならば爰ぞ泊と云はましものを

年ふれど忘られ果ぬ人の世は心止てぞ猶聞かれける

花につけて

花の色の濃きを見すとてきたる身の愚に人は思ふ覽やは

蕨を人の許へやるとて

我爲に嘆こる共知なくに何に藁火を焚きてつけまし

四月に咲ける櫻の花につけて院の殿上人のもとへおはします御ともにえ參らでとまれる人の許に

止りゐて春戀しとや思らむ花もかく疾後れたりけれ

こいと云ひてむと思心の劇なさは死にても知れよ忘形見に

かへし

もしもやと逢見む事を頼すば斯云ふ程に先ぞなまし

人

濁江の澄まむ事社難からめいかに仄に影をだに見む

返し

すむとの難かるべきに濁江の戀路に影も濡ぬべらも也

待人の見えわからにやと更て月の入にも音はなかる覽

九の宮の御息所の御許に小箱合せの頃箱に紅梅のつぼめるを入れて進らせたるに

君にとし思ひかくれば鶯の花の櫛笥も惜まざりけり

御かへし

みつの江の形見と思へば鶯の花の櫛笥は明てだに見ず

或る人を思ひて、男

見ず聞かずあらましし時は戀機の經緯亂る思せましやは

かへし

等閑の行手にかゝる經緯は長からじとも思ほゆる哉

河の瀬に浮て流るゝ程よりは衣の袖の濡れずも有哉

住む方のしるしを招く花薄心わくとも風は吹くらし

打とくる山べの聲は郭公長き夜に社聞かまほしけれ

方遠ふとて京極なる人の家にいきて其のわたりに知りたる人に

此里の知べに君が出こなむ都よりとに我は來にけり

我袖の代りにをれる花薄人を招くと知ざらむやは

帝の御國忌に

糸薄呼子鳥にもあらねども昔戀しき音をのみぞなく

人待ちて泣つゝ明す夜な〳〵は徒寢にも成ぬべき哉

女四の宮かくれさせ給ひつるとぶらひ聞えすとて

こゝら世を聞が中にも悲しきは人の涙も果やしぬ覽

返し

聞く人も哀と云なる思にはいとゞ涙もつきすも有哉

又これより

愛にだに通ふ夜ならば亡人の涙の程も聞えきなまし

御かへし

行通ふ道は無く共しでの山言葉をだに行も越さなむ

亡くなりにける人の家にまかりてあしたにかし

この人に遣しける

亡き人の影だに見えぬ遣水の底に涙を流してぞこし

隣なりける人の許より九月八日菊に綿被けてこせたりければつとめて取りてやるにつけて

敷知ず君が齡をのばへつゝ名だゝる宿の露とならなむ

露とだにも名だゝる宿の菊なれば花の主は幾代なる覽

故式部卿宮の御手にて書き給へる物を見て

亡人の書き留めけむ水莖は打見るよりぞ流そめける

人のおこせたる

伊勢の海に遊ぶ蜃とも成にしが渡搔分てみるめ被かむ

かへし

龍げの蜃やは被く伊勢の海の波高き浦におふるみるめは

松山につらきながらも波越さむ事は流石に悲き物を

したにの木

此花を散さで爭で折つらむさ計り風の吹したにの木

かまつほぐさ

山まくしげそばつ計も洩りねれば秋も刈むと我待ほぐさ

空蟬を思ふに聲し絕ざらばまた衣手に露はおきてむ

明けぬともたゝじとぞ思ふ唐錦人の心し刀ならねば

中宮の失せ給へりし時かいねりこしとて檢非違使のやらむとしければ

深草に君惑はして侘る身の涙にそめる色とやはみぬ

字多の院よりおはれてひとかたきになりける人の許に

のけ樣に人に追れし我なれや脊中合せに人の成らむ

かへし

はこつくり脊中合に成ぬとも同じ心に結ばれぞせむ

むすめの男の絕えにけるに遣しける

斯計りうしと思ふに戀しきは我心さへ二つありけり

かへし

二あらば今一度は訪てましすべて心の無きと社見れ

からにまかりたりける人の心變りて侍りければ

うらうへに思やらるゝ唐衣からに移て君がきたれば

山あひに雪降りかゝりて侍りけるを見て

足曳の山あひに降れる白雪はすれる衣の心ち社すれ

までくることかたき人に七月七日

いむといへば忍ぶものから終夜天の河社羨まれけれ

櫻を人に贈り侍るとて

君見よと尋て折れる山櫻ふりにし色と思はざらなむ

物見に出でゝ傍らなる女車に云ひかはして後

郭公はつかなる音を聞そめてあらぬも其と驚れつゝ

四月つごもり

木隱れてさ月待まの郭公まだしき程の聲を聞かばや

男の人の許にあるにやる

飛鳥川淵瀬に變る心とはみな上しもの人も云よめり

かへし

淵は瀬に成變るなる世中に渡り見て社知まほしけれ

又返し

厭はるゝ身を憂はしみ早晩と飛鳥川をぞ頼べらなる

かへし

飛鳥川堰て留ひる物ならば淵瀬に成と何か云はれむ

味氣なくなど松山に波越さむ事をば更に思ひ離るゝ

かへし

岸遠く洲し滿なば松山を下にて波を越さひとぞ思ふ

さよ更て寢られぬ程に郭公君に知れぬ音をぞ鳴つる

人のもとに

一人心嵐の風の寒ければ木の芽も見えず枝ぞしをるゝ

物へ行く人に

二後れずぞ心に乗りて漕るべき波に求よ舟はなくとも

返し

三舟ならば天河まで求めても漕でむ星の中に消えずば

行人

四豫てより涙ぞ袖を打濡す浮たる舟に乗らむと思へば

春の心を

五青柳の糸よりはへておる機をいづれの山の霞かきる

昔ひと處なりし人の年頃いかにと云ひたるに

六身は早くなき物の如なりにしを消せぬ物は心也けり

七百敷の花を折ても捨てしかな昔を今に思ひくらべて

八涙にそ浮て流るゝ水鳥の浮ては人に見えぬものから

つらくなりたる人に

九渡つ海の深き心の變らずば何かは人を恨みもせむ

こまひき

一〇望月の駒引渡す影見れば覺束なくて見えずぞ有ける

瀧落ちたり

一一限なき心の落す瀧なれば世に傳はりて流れこそせめ

一二鹽の浦をあひつも逢ず嘆けむ人の上こそ我身也けれ

このかへしにや

一三思事無て止にし中をしも我身の上になどかなしけむ

一四折つれば袖こそ匂へ梅の花ありとやこゝに鶯のなく

一五よゝに聞く袂より社をぼちけれ遍く法の雨は注げど

かへし

一六云へばこそ心を乗する法の雨の澁ぐ驗に濡るゝ袂か

家を人のになして

一七飛鳥川淵にも非ぬ我宿も瀬に變りゆく物にぞ有ける

親に後れて侍りける頃男のとひ侍らざりければ

一八亡人も有がつらきを思ふにも色わかれぬは涙也けり

是も同じ忍ぶの中なる中かきの歌とて

一九來て見ればなゝの浦迄よる貝の拾ひも敢ず君ぞ嬉き

二〇熊野の浦より遠に漕ぐ舟の我をばよそに隔つる哉

二一思出づやみのゝを山の一松契りしとはいつか忘れむ

二二沖つ風吹飯の浦に立つ波の名殘にさへや我は忘れむ

二三あま舟の通ひし儘に鹽竈の炎いたます思ひつきにき

二四伊勢の海鹽やく海士の藤衣なるとはすれど逢ぬ君哉

二五人知ず思駿河の富士のねは我ごと斯や山ももゆらむ

二六空の浦の色の濱とは成ぬ其波のかひとかならむとす覽

二七足引のはらたに生ふる玉草は久しく成ぬ夢に逢見で

二八津國のみつの堀江に雨降れば限も知ずたまる我戀

二九爭でかと思心は堀かねの井よりも猶ぞ深さまされる

三〇近江のや志賀の浦風恨めしの尋來たれどかひ無り鳧

三一石清水云はぬ物から木隱れて瀧の心を人は知らなむ

三二有と聞響の灘と聞しかば戀しからすのせをぞ行らむ

三三美作や久米のさら山さら〳〵に昔々の戀しきやなぞ

三四山城の岩田の杜の柞原かくしや妹がいづち行くらむ

三五片岡のあしたの原をすぎゆけば山郭公今ぞ鳴くなる

三六をちへ行こち風河に誰しかも色さり難く緑染むらむ

三七はつかにも君を三島の芥川飽とや人の音づれもせぬ

三八更科のをばすて山の有明のつきずも物を思ふ頃かな

三九しほの山さしでの磯に居る衞君が齡は八千代とぞ鳴

四〇音に聞く天の橋立橋たてゝ及ばぬ戀も我はするかな

四一夕されば小野の篠原風吹て我ぞ戀しき人を別れて

四二音無の山の下行くさゝれ水あなかま我も思ふ頃かな

四三いはせ山谷の下水打忍び人の見ぬ間に流れてぞふる

四四我戀はありその海の風速み頻に寄する波のまもなし

四五春日野の中の朝顏俤に見えつゝ妹がわすられぬかな

四六人はいさ我は春日の篠薄下葉しげくぞ思ひみだるゝ

四七秋風の音羽の山の谷水の渡らぬ袖もいろ濃きやなぞ

四八さを鹿も妻とふ時に成に鳧嵯峨野の花も下紅葉して

四九音羽山木の下蔭にかほ鳥の見え隱せし顏ぞ戀しき

五〇難波潟濱べの葦を踏しだき鳴らむたづは我爲にかも

五一いかごなる物きゝ山の谷水の濁らぬ音に聞ゆるや哉

五二武藏野の草葉に宿る白露の幾夜有べき物ならなくに

五三棚無の螢の小舟の荒き磯にあなた〳〵となど獨漕ぐ

五四磯に出てあさりする火の消ぬれば吹飯の浦を尋つる哉

五五心のみ雲居の程に通ひつゝ戀ひこそわたれ鵲のはし

五六音にのみ有と聞つる三吉野の瀧はけふ社袖に落けれ

五七岩くゝる山井の水を結び上て誰が爲惜き命とかしる

是は有馬の皇子の罪せられける時よめる

五八岩代の野中の松を引結び命しあらばかへりきて見よ

五九三吉野の山の下風寒からし妹背の川の波たかくみゆ

六〇白波の打驚かす浮島に立てる松だに根こそわぶなれ

六一かこの島松原ごしに鳴たづのあな長々し聞人の無き

六二難波潟短き葦の節の間も逢で此世を過してよとや

六三白波のよする磯間を漕舟の數をばまなく思ほゆる哉

六四沖つ藻を取でやこまむ仄々舟出せしとは何に依てぞ

六五深山木の蔭のこ草は我なれや露茂けれど知人の無き

六六浦近み波の立よる小れ石の中の思は知るや知らずや

六七蓮葉の浮葉の下に立つ波の君に心は寄せてこそ見れ

六八山川の霞隔てゝ仄にも見しばかりにや戀しかるらむ

六九夕されば道辿々し月まちて歸れ我せこ其まにも見む

七〇山水を手に掬ひても心みむぬるくは石の中も賴まじ

七一天つ風雲吹き亂る久方の月のかくるゝ道まどふべき

七二知るらめや我衣手は秋霧の覺束なくてふるに濡とは

七三けふ有てあすは消ぬの露の身の思置べき言葉もがな

七四卯の花のにほふ盛の月清みいねず聞けとや鳴く郭公

七五聲をだに聞ての後は郭公あはぬ五月も有じとぞ思ふ

かへし

七六聞聲を長くと思はゝ郭公いむ五月をば過ぐしやはせぬ

七七時雨にし濡と濡ぬる言の葉は薄乍だに散すも有なむ

七八言の葉の移ろふだにも有物を最ど時雨の降增るらむ

七九垣越に見れども飽かぬ梅花ね乍ら風の吹もこさなむ

かへし

八〇梅花植て我のみ見むとかは隣あるきも人やするとぞ

又人

八一假そめに染ざらましを唐衣かへらぬ色を恨みつる哉

かへし

八二身にしみて深くし成ば唐衣返すと社知られざりけれ

八三かしら白き女を見て

八四ぬき止ぬ髮の筋もて怪しくもへにける年の數を知哉

八五さよ更て寢られぬ折に鵑君に聞かれぬ音をぞ鳴つる

〔いかなる折にかありけむ〕

八六徒然の　春ひたすらに　詠むれば　立つしら泡の

目の前に　せけど寢れず　流れつゝ　我身はあわと

浮びつゝ　きえみ消すみ　燃るひの　こゝろは灰と

溢れつゝ　有かなきかに　侘をれば　みしも著しも

赤人集

久方の天のはやまにこの夕霞たなびく春立ちにけり

うぐひすの　行がてにのみ　鳴く聲は　語らむかたも
なく絶ぬ　あひ語らはぬ　鳥だにも　人のあはれは
知る物を　斯もつらきか　濱ちどり　跡ふみたれば
答ふばかりを　業にして　心とはねば
山びこの　ほに揚てこそ　恨みられけれ　年經てすみし
行く舟の　荒れのみ増る　宮の内は　よらむ方なく
伊せの蜑も　心もして　我らがなかの
悲しきに　なみだの色の　くれなゐは
秋のもみぢと　時雨にて　人びとは
別れなば　頼むかげなく　成果てゝ
花すゝき　君なきにはに　群立ちて
鳴き渡りつゝ　はつ雁の　空をまねかば
よそにこそみめ

影見れば　最ど心ぞ惑はる、　近からぬけの疎き也けり
吹風の下の塵にもあらなくにさも立易き我なき名哉
見えもせぬ深き心を語りては人に勝ちぬと思物かは
懸てだに我身の上と思きやこむ年春の花を見じとは
郭公ねぐらながらの群聞けば草の枕ぞ露かゝりける
海にのみ満ちたる松の深緑幾汐とかは知べかりける

かにひの花

渡つみの沖中にひの離れ出て燃と見ゆるは蜑の漁か
そらめをぞ君は御手洗河の水淺しや深し其は我かは
年月の行らむ方も思はえず秋のはつかは人の見ゆれば
思ひきやあひ見る程の年月を數ふ計にならむ物とは
遙なる程にも通ふ心かなさりとて人の知らぬ物ゆゑ

恨みて物云はじと云ひける人に

かたしきの衣手さむき松風に秋の夕と知せずもがな
水の面にあや織り亂る春雨や山の緑をなべて染らむ
山風は吹けど吹ねど白波のよする岩根は久しかり晃
撫子の咲けるを人の許へやるとて
獨のみぬる床夏の露けさは涙にさへや色をそふらむ
夕されば最ど干難き我袖に宿る月さへ濡る、顔なる

赤人集

久方の天のはやまにこの夕霞たなびく春立ちにけり

あづさゆみ春山近く家居して絶えず聞くらむ鶯の聲
打靡き春さりくれどしかすがに空曇合て雪は降つゝ
櫻花咲散くらしかすがに白雪に似て庭にふりつゝ
蛙鳴く吉野の山の瀧の上にあせみの花ぞ咲てあだなる
春のきじ鳴谷もとに櫻花散ぬべらなりみる人もがも
春雨に爭ひかねてわが宿の櫻の花は咲そめにけり
春雨はいたゝな降そ櫻花まだ見ぬ人に散まくも惜し
春されば散まく惜き櫻花暫はさかすふゝみてもがも
春の野に菫摘みにとこし我ぞ野を懐しみ一夜寝にける
いつしかも今宵明けなむ鶯の木傳ひ散す梅の花見む
見渡せば春日の野べに霞立ち開くる花は櫻ばなかも
淀川の水底さへに照るまでに三笠の山は明にけるかも
今日見ればまだ冬なるをしかすがに春霞立つ雪は降つゝ
去年咲きし花は今更徒に土にや散らむ見る人なしに

月を詠み

朝霞春日暮なば木の間より移ろふ月をいつか頼まむ
春霞たなびく今日の夕月夜さよく照るらむ高圓の山
春くれば木がくれ多き夕月夜覺束なしや山陰にして

雨を詠み

春の雨にありけり物を立隠れ妹が家路に此日暮しつ
春日野に霞立めりあしかは春のおほきに雨の降かも

野に遊ぶ

春の野に心延べむと思どもこし今日の日は暮すも有なむ
百敷の大宮人は暇あれや櫻かざして今日もくらしつ

逢へるをよろこぶ

住吉の里行しかば初花の最稀に見む君に逢へるかも

頭べを旋らす

春日なる三笠の山の月も出でぬかも闇山に咲ける櫻の花も見るべく

古き身をなげく

冬は過ぎ春は來ぬれど年月は改まれども人は舊行く

春の相聞

春山にゐる鶯のあひぬれば歸る待つ間の思するかな
我宿の木の下月夜妹が爲め雲は心よしうたて此の頃
我宿に春咲く花の年ごとに思はますと忘れめやわれ
梅の花咲きちる野べに我行かむ妹が使は我を待らむ
藤浪の咲く野べ毎にはふ葛の我は絡は久しくもあれ
春の野に霞たなびく櫻花うちちる迄に逢はぬ君かな
我兄子を我戀ふらはく奥山のあせみの花の今盛なり

打附にとは思へどもはづ見まほしき梅の初花
あは山の櫻木の花今日もかも散亂る寛見る人なしに
春の野に霞立ち開くる花は櫻ばなかも
春雨に爭ひかねてわが宿の櫻の花は咲そめにけり
春雨はいたゝな降そ櫻花まだ見ぬ人に散まくも惜し
春されば散まく惜き櫻花暫はさかすふゝみてもがも
春の野に菫摘みにとこし我ぞ野を懐しみ一夜寝にける
いつしかも今宵明けなむ鶯の木傳ひ散す梅の花見む
見渡せば春日の野べに霞立ち開くる花は櫻ばなかも
淀川の水底さへに照るまでに三笠の山は明にけるかも
今日見ればまだ冬なるをしかすがに春霞立つ雪は降つゝ
去年咲きし花は今更徒に土にや散らむ見る人なしに

月を詠み

朝霞春日暮なば木の間より移ろふ月をいつか頼まむ
春霞たなびく今日の夕月夜さよく照るらむ高圓の山
春くれば木がくれ多き夕月夜覺束なしや山陰にして

雨を詠み

春の雨にありけり物を立隠れ妹が家路に此日暮しつ
春日野に霞立めりあしかは春のおほきに雨の降かも

野に遊ぶ

春の野に心延べむと思どもこし今日の日は暮すも有なむ
百敷の大宮人は暇あれや櫻かざして今日もくらしつ

逢へるをよろこぶ

住吉の里行しかば初花の最稀に見む君に逢へるかも

頭べを旋らす

春日なる三笠の山の月も出でぬかも闇山に咲ける櫻の花も見るべく

古き身をなげく

冬は過ぎ春は來ぬれど年月は改まれども人は舊行く

春の相聞

春山にゐる鶯のあひぬれば歸る待つ間の思するかな
我宿の木の下月夜妹が爲め雲は心よしうたて此の頃
我宿に春咲く花の年ごとに思はますと忘れめやわれ
梅の花咲きちる野べに我行かむ妹が使は我を待らむ
藤浪の咲く野べ毎にはふ葛の我は絡は久しくもあれ
春の野に霞たなびく櫻花うちちる迄に逢はぬ君かな
我兄子を我戀ふらはく奥山のあせみの花の今盛なり

一三梅花しだり柳にこきまぜて花に添ふるは君に有かも
一四女郎花咲く野に生ふる白躑躅知ぬともて云れし我せ
霜によます
一五春立てば草木の上に置霜の消えつゝ我は戀や渡らむ
霞によます
一六春霞山に隠きかくす妹を逢ひ見て後ぞ戀しかりける
一七春霞立にし日より今日迄に我戀やまず人めしげきに
一八青葛纏緑を尋ぬと春の日に霞立ち舞ふ今日し暮しつ
一九さにづらふ妹を思ふと霞たつ春の日ぐらし戀渡る哉
二〇見渡せば春日の野べに立霞たてれぬれども君が心に
一九戀つゝも今日は暮しつ霞立あすの春日を爭て暮さむ
雨によます
二一我存子に戀て術なみ春雨の降わざ知ず出てくるかも
二二春立てば繁し我戀渡つ海の立つ白波にもへぞ増れる
二三慇懃な君に逢見ですがの根の長き春日を戀渡るかな
二四今更に君はよもこじ春雨の心を人の知らざらなくに
二五春雨の心も人は知りぬ覧七日し降らば七夜こじとや
二六梅の花散す春雨おほくふる旅にや妹が家居をるらむ
二七國栖らが若菜摘まむと占し野に蜜の君がよきり頃ひ
雲によます
二八白眞弓今春の野に行く雲のゆきや別れむ戀しき物を
かづらを贈る
二九益荒男をふしみ嘆きて作りたるしだり柳の蔓せよ妹
別をかなしぶ
三〇朝戸出て君が姿をよく見ずば永き春日を戀や渡らむ
とひこたふ
三一春山のあせみの花の憎からぬ君にはしあやよせわともよし
三二石上ふるの社の過にしを我さら〳〵に戀に逢にける
此の歌春歌にあらねどもかへしせりかゝれば此の
次でに入れたるなり
三三さのかたはみに成ず共春にのみ咲てな見せそ戀の草ぞも
三四さのかたは身に成にしに今更に春雨降て花咲かむやは
三五梓弓引津のべなるなのりその花咲く迄に逢はぬ君哉
三六河上のいつもの花のいつも〳〵來ませ我脊子絶ず待つはた
三七春雨のやまず降り落て我戀ふる我妹久に逢はぬ頃哉
三八我妹ゃ戀つゝ居れば春雨の彼も知るごと休ず降つゝ
三九春くれば先鳴鳥の聲の如まづ先だちし君し待たるゝ
四〇相思はぬ人をや常に菅の根の永き春日を戀や暮さむ

四一相思ずあらむ子故に玉の緒の永き春日を歎き暮しつ
たとひうた
四二春霞霧く野べに我曳ける網はまを網絶えむと思ふな
夏の雑の歌どもを、ほとゝぎす
四三益荒男の　出たち向ふ　ふる里の　神なびやまに
明くれば　つみのさ枝に　夕されば　小松がうれに
さと人の　聞戀ふるまで　山びこの　答へするまで
ほとゝぎす　妻ごひすらし　小夜中になく
反歌
四四旅に出て妻戀すらし郭公神なび山にさよ更けて鳴く
これはふる歌のなかに入れたり
四五時鳥鳴く初聲は我聞かむ五月の玉にまさてぬきてむ
四六朝霧のたなびく野べに足引の山時鳥いつきてか鳴く
四七足引の八重山越て呼子鳥鳴やながくる宿も有らなくに
四八藤波の散らまく惜しみ時鳥いまきの岡に鳴て行らむ
四九朝霧の八重山越えて時鳥卯花がくれ鳴きて行くなり
五〇木隠れて妹が垣根に時鳥鳴き響かして聲やまさはむ
五一逢ひ難き君に逢へる時郭公いづこを家と鳴渡るらむ
五二月清み鳴時鳥見むと思ふ我が草とれる見む人もがな
五三時鳥今朝の朝けに鳴つるを君まだ聞ずいやはねつ覧
五四郭公花橘の枝にゐて鳴きしひらけばはなは散りつゝ
五五五月山卯の花月夜時鳥鳴けどもわが妻又も鳴かなむ
これはふる歌のなかに入れたり
五六時鳥鳴く初聲は我聞かむ五月の玉にまさてぬきてむ
五七朝霧のたなびく野べに足引の山時鳥いつきてか鳴く
五八足引の八重山越て呼子鳥鳴やながくる宿も有らなくに
五九藤波の散らまく惜しみ時鳥いまきの岡に鳴て行らむ
六〇朝霧の八重山越えて時鳥卯花がくれ鳴きて行くなり
六一木隠れて妹が垣根に時鳥鳴き響かして聲やまさはむ
六二逢ひ難き君に逢へる時郭公いづこを家と鳴渡るらむ
六三月清み鳴時鳥見むと思ふ我が草とれる見む人もがな
六四時鳥今朝の朝けに鳴つるを君まだ聞ずいやはねつ覧
六五郭公花橘の枝にゐて鳴きしひらけばはなは散りつゝ
六六五月山卯の花月夜時鳥鳴けどもわが妻又も鳴かなむ
六七宵の間の曙束なきを郭公鳴くなる聲の音のはるけさ
六八卯花の散まく惜み鶯野に出で山に入りきなきとよもす
六九山とには鳴てかく覧時鳥なが鳴く毎になき人思ほゆ
七〇物思ふと寝ざる朝げに時鳥我衣手にきなきをりつゝ
七一元つ人鶯をや稀に見むいまやながきてこひつゝをれば
七二橘のはやしを植つ時鳥つねに冬まで住みわたるべく
七三あまはれの雲間に類ふ時鳥春日をさして今鳴き渡る
七四かくばかり雨のふるをや時鳥卯花山になはか鳴らむ
蟬を詠ず
七五唯ならむ折に鳴なむ空蟬の物思ふ折に鳴つゝぞをる
はしばみを詠す
七六思ふ子が衣摺らむに匂ひこそ島の榛原秋立たずとも
詠花
七七風に散る花橘を手にうけて君がみためと思ひぬる哉
七八香はしき花橘を玉にぬき送らむ妹はみつれてゝ有か
七九時鳥鳴きてひゃかす橘の花散るやどにくる人やたれ

八〇我宿の花橘は散りにけり悔しきときに逢へる君かな
一四野べ見れば撫子の花散にけり我待秋は近づくらしも
二四我妹子に栴の花は散に見妹はきけるか事有とかきく
三四春日野の藤は散にき何をかもみ狩の人の折て翳さむ
四四時ならで玉をぞぬける卯花の曉はまだ散り果ぬべし
とひうた
五四卯花の咲ける垣根は子規鳴きてぞ渡る人は聞きつや
六四聞つやと君にとひつゝ時鳥ぬれつゝ今ぞ鳴渡るなる
草によます
七四人言は夏野の草としげくとも妹と我とし携はりなば
八四此頃の戀の茂らく夏草の刈り拂へども生ひ茂るごと
九四頼あらばふなつの繁みかく戀は　我命常ならめやは
一五我のみや斯戀すらむ杜若にづらふ妹はいかゞある覧
たとひうた
一五橘のはなに散るさと通ひなば山時鳥ひゝかざらむか
夏相聞、鳥によます
二五夏なればすごく鳴なる時鳥ほと〳〵妹に逢で來に鳧
三五五月山花橘にほとゝぎすかくらふ時に逢へる君かも
四五時鳥なくや五月の短夜も獨しぬればあかしかねつも
蟬によます
五五蜩は時と鳴け共我戀ふるたをやめ我は時分かずなく
花によます
六五片よりに糸をこそよれ我兄子が花橘をぬかむと思て
七五鳥通ふ垣根の卯花のうきことあれや君が來まさぬ
八五卯花の咲とはなしにある人に戀や渡らむ片思にして
九五我こそは憎くもあらめ我宿の花橘を見にはこじとや
一六八知ず戀れば苦し撫子の花に咲いでよ朝な〳〵見む
二六夏草の露分け衣きもせぬに我衣手のひるよしもなき
秋の雑の歌
三六大の河水底までにてらす舟つひに舟人妹と見えつや
四六久方の天河原にぬえ鳥のうらびれをりつ苦しき迄に
五六我戀ふる妹は遙に行舟の過てくべしやともつげなく
六六天川安の河原に舟うけて秋を待とは妹に告げよとて
七六空よりも通ふ我すら汝故に天川路をなづみてぞくる
八六八千矛の神の御代より乏し妻人知にけり告し思へば
九六我戀にほに上て見む今宵かも天の川原にいそ枕まく
七己が紐長しとは聞きつ手に巻てまたきて寝よ君まさずとも

一天地と分れし時より己が妻然ぞ手に在る秋待つ我は
二ながき戀ふる妹が姿は飽き𤍠でに袖ふる見えつ雲隠る迄
三ひば玉のよる雲曇り暗く共妹がとをば早く告げてよ
四夕づゝも通ふ空𤍠でいつとてかあふぎて待む月人男
五天の川水かげ草の吹風に靡くと見れば秋は來にけり
六我待たぬ秋萩咲ぬ今だにも匂ひか行かむをち方人に
七我背子にうら戀ひ居れば天の河舟こぎ渡す音聞ゆ也
八天川こぞの渡りの移ろへば川瀬を行て夜ぞ更にける
九昔我があけて衣を返さねば天の河原に年ぞへにける
一〇天川夜舟浮びて明ぬれども逢むと思ふたもと返さむ
一一遠き妹と手枕易くねぬるよは庭鳥鳴くな明は過とも
一二逢見らく飽足らね共東雲の明にけらしな舟出せむ妹
一三萬代を携り居て逢見とも思ひすくべき戀ならなくに
一四萬代に照すべき月雲隠れ苦しき物ぞ逢はむと思へば
一五白雲を幾重隔て〻遠く共宵さらず見む君があたりを
一六我爲に棚機つめのその宿におる白布は織てけむかも
一七君に逢はで久しく成ぬ織る機の白妙衣は垢つく迄に
一八天の河楫音聞ゆ彦星のたなばたつめと今宵逢ふらし
一九秋立て河霧渡る天河かはにむきゐて戀ふる夜ぞ多き
二〇一年に七日の夜のみ逢人のこひも盡ねば夜更行かも
二一天の河安の河原に定まりて斯る別はとくと待たなむ
二二七夕の五百機立て〻織布の秋立つ衣たがとめてきむ
二三年に有てけふか袭らひむば玉の夜霧隠りて遠妻の手を
二四我待し秋は來りぬ妹と我と何事あれぞ紐とかざらむ
二五あはなくはけ長き物を天河隔て〻又やわが戀をらむ
二六彦星と七夕つめと今宵合ふ天の河原に渡立つなゆめ
二七秋風の吹たゞよはす白雲は七夕つめの天つひれかも
二八屢々も相見ぬ君を天の河舟出はやせよ夜の更ぬまに
二九秋風の清き夕に天のがは舟こぎわたる月ひとをとこ
三〇天の河霧立渡るひこぼしの楫音聞ゆ夜の更けゆけば
三一君が舟今漕ぎくらし天の川霧たち渡るこの川の瀬に
三二秋風に河波立ちぬたゞ暫し八十舟のつにみ舟留めよ
三三天の川川かせ清し彦星のあきこぐ舟の波のさわぎか
三四天河川邊に立ちて我待ちし君來るなり紐ときまたむ
三五天河川瀬にをりて年月に戀うるいもに今宵逢ふかも
三六あすからは我玉床を打拂ひ君と二人は寢ず成ぬべし
三七天の原行でやいると白眞弓ひきてかくせる月ひと男
三八此夕ふりくる雨は彦星のとく漕ぐ舟の楫のしづくか

一天川八十瀬きりあふ彦星の時まつ舟は今や漕ぐらむ
二風吹て阿波立ちぬ漕舟に渡りもきませ夜の更ぬ間に
三天のがは打橋わたす我が家路へて我が思ふ妹にあへるよはやまず通はむ時またずとも
四天の川打橋わたす妹が家とまらず通へ時またずとも
五月をへて我思妹に逢ふ夜は今し七夜を継ぎこせぬかも
六年にもて我舟渡る天の河風は吹くとも波たつなゆめ
七天の河風は吹とも我舟はとく漕いでむ夜の更ぬ時
八唯今宵逢たる妹に言どひも未せずして小夜を明けるか
九天の河白波高しわが戀ふる君が舟出は今ぞすらしも
一〇春霞君待ちかねて天の川うち橋わたす君がこひため
一一天の川霧たちわたる七夕のくもの衣のかへる袖かな
一二古の織りにし機を此ゆふべ衣にぬひて君待つわれを
一三あし玉も手玉もゆらに織機を君が衣に縫きせむかも
一四よき月日逢よしあれば別路の惜かる君はあすさへもがな
一五天の河渡る瀬毎のみてぐらの心は君をさきくきませと
一六天河渡る瀬毎のみてぐらの心は君をさきくきませと
一七久方の天の河原に舟うけて君待つ夜は明ずも非ぬか
一八天の河足濡れ渡り君が身も枕もせねば夜の明ぬらく
一九渡守舟渡せをとよ聲のゆかぬなるべし楫音のせぬ

此の歌は人丸が集にあり

二〇天河我ひき立て戀ふらくにとだに告む妻といふ迄は
二一戀る日はけ長き物を今だにも乏しむべしや逢べきものを
二二まけ長く川に向ひて有し袖今宵卷なむと思ふがよさ
二三天川渡る瀬毎に思つゝこしくも著し逢へらく思へば
二四人さへやみつかすあらむ彦星の妹呼聲の近付ぬるを
二五天河瀬を早みかも烏羽玉の夜は明けつゝ逢はぬ彦星
二六渡守舟はや渡せ一年にふたゝびかよふ君ならなくに
二七戀ふる日はけ長き物を今宵だに乏しむべしや逢べき物を
二八七夕の今宵明なば常のとあすをへだてゝ年は越なむ
二九天川たなはし渡せ七夕のいわたらさむに棚橋わたせ
三〇天川かはと八十あり就くにか君がみ舟を我待居らむ
三一秋風の吹にし日より天原瀬に立いでゝ待と告げこせ
三二天川こぞの渡りは荒けるを君がきたらむ道の知なく
三三彦星の妹よぶ舟の引綱の絶えむと君を我思はなくに
三四渡守舟出しゆかむ今宵のみ逢見て後は逢はぬ物かは

長歌

三五天つちの　別れし時より　天のかは　向ひにすゑて
三六一とせに　二たび逢はぬ　妻ごひに　もの思ふ人は
三七天のがは　やすの河原に　あり通ふ　としの渡りに
三八ぬば玉の　舟にもへにも　ふな裝ひ　眞楫しげぬき
三九こま錦紐ときかはしあま人の妻待つ宵ぞ我も思はむ
四〇天つちと　別れし時より　秋かぜの　吹きくる宵に
四一久かたの　天のかはらに　立待つに　落たぎる
四二あぼ君の　月をかさねて　早瀬をわたり
四三あら玉の　天のかはらに　立居まで　思ひたのみて
四四我が衣手を　たづきを知ず　あほ舟の
四五あき風の　吹きし返さば　ときの間も　年のをながく
四六むら膚の　心おぼえず　あも𠰁れて　漕來らむ
四七我が待つ今宵　この川の　行きて長くも　あら玉の
四八ありえたるかも　いつかとも　七日のよひは
四九こゝらが名につげの宜しきあま妻の片山ぎしに　思ひこし
五〇柿本人丸の歌とぞ　戀ふるは　我もかなしも

かへし歌

五一打靡き春立ちぬらし我宿の柳が枝にうぐひす鳴くも
五二山ぎはに鶯なきつ打靡き春とおもへば雪降りしきぬ
五三山本に雪は降つゝしかすがに此河柳萌えにけるかも
五四花は咲てみはならね共長きけに思ほゆる哉山吹の花
五五藤波の咲春の野に匍ふ葛の下にし戀ひば久しくもあらむ
五六春の野に霧たちわたり櫻花かくなる迄は逢はぬ君かも
五七櫻花我は散らさで青によし都の人のきつゝ見にしぞ
五八玉きはる我山のうへに立霞立ても居ても君が隨まに
五九相思はぬ人をや始く菅の根の長き春日を戀暮さむ
六〇郭公厭ふ時なく菖蒲草かざゝむ日より爰に鳴かなむ
六一彦星が恨る妹がとだにも告にぞ來つる今日は苦しも
六二ながき戀る妹が姿はあく迄に袖ふりはへて雲隠るまで
六三我返す楫棹なくば渡守舟かさむやはしばらくのまも
六四秋過ぎて蔭にもせむを故郷の花橘も散りにけるかも

遍昭集

春

(六)花の色は霞に置てみえずとも香をだに偸め春の山風
西寺の柳を
(六)淺みどり糸よりかけて白露の玉にもぬける春の柳か
二月ばかりみちをまかるとて
(七)折つればたぶさに穢るたてながらみよの佛に花奉る
大和のふるの山をまかるとて
(八)磯のかみふるの山べの櫻花植けむ時をしる人ぞなき
雪林院のみこ(ママ)えの舍利會にのぼりて歸り給ひけるに
(九)山風に櫻ふきまき亂れなむ花の紛れにきとまるべく
春花山に法皇のみゆきありしとくかへらせ給ひなむとせし時
(七)まてといはゝ最も畏し花の山暫となかむ鳥の音もがな
同じ山に人の入りて夕方能り歸りなむとせしかば
(七)夕暮の雜は山も見えなゝむ夜はこえじと宿り取べく
題しらず
(七)今こむといひて別し朝より思暮しのねをのみぞなく
內わたりに侍りし時人にこむと頼めて夜ふくる程に丑みつと奏するをきく
(七)人心うしみつまはたのまじよ
といひ侍りしかば
ゆめにみゆやとねぞすぎにける
五節のころまひゝめを見侍りて
(七)天つ風雲の通路吹きとめよ少女の姿しばし見るへく
何くれといひあり侍りし程に仕うまつりし深草の帝崩れおはしまして變むよをみむもたへ難く悲し藏人頭中將などいひて夜晝なれ仕うまつりしなごりなからむ世にも交らじとて俄に家に人々にも知せでひえに登りて頭おろし侍りしにもさすがに親などのとは心にやかゝりけむ
(七)垂乳根は斯れとしもむば玉の我黑髮を撫ずや有けむ
はじめて山ふみ侍りて
(六)今更に我は歸らじ瀧みつゝよべと聞かずと問はゞ答へよ

深草の山に納め奉りしを思ひ參らせむ心のほどは思ひやるべし
(七)空蟬は殼をみつゝも慰めつけぶりだにたて深草の山
夕暮に蜘蛛のいとはかなげにすがき侍るをみてつねよりも哀にて
(八)笹蟹の空にすがくも同しと塗き宿にも雜夜かはふる
世のはかなさいとゞ思ひしられて侍りしかば
(九)末の露もとのしづくや世中の後れ先だつ例なるらむ
なと思ひつゞけてまかりありきしほどに年も返りて諸共に見し殿上の人々あるはかうぶりえあるはつかさ給はりなどしてかはらにいでゝ御ぶくぬぐ所にあやしの法師して遣はしつゝ
(八)皆人は花の衣になりぬなり苔の袂よかわきだにせよ
かくていづこともなくありき侍りて初瀨のみ寺にさぶらふほどに傍なる女の寺の僧をよびよせていふやうとしごろの人なうなりたるをいかにしてもある物ならば今一たびあひみせ給へ身をもなげ死にもしたらば道をもなし給へたゞともかくも此の人の有樣を夢にも現にも見せ知らせ給へとて男の具をおひたちまで誦行にせさすとてえもいひやらず泣くを始は何人ならむと思ふ程にわが上にきゝなして近くよりて名をきけばめのと(傍注:乳母)なりけり子どもゝそひていみじう泣くいと悲しうてなぞや走りもいでなましと千たびおもへどもいみじうかへされて終夜泣き明したる所は簑なども紅になむしみたりけるさてまたよにありとも聞えぬを小野の小町こもれりける傍に經よむ誰ならむとてつれなる人して見せければ簑一つきる法師のさすがにあてやかなるなむ隅の方にゐて侍るといひければ耳をたてゝきくにいと尊く哀なりたる人にはあらず少將の大とくにやあらむと思ひていかゞいふとこのみてらになむ侍るいとさむきを御こえきこえ侍ればいと頼もしくなむみぞ一つ貸し給へ
(八)岩の上に旅寢をすれば最寒し苦の衣を我にかさなむ
といへるかへりごとばかりを
(八)山伏の苦の衣は只一重かさねばうとしいざ二人ねむ
といへるたゝ少將なりけりと思ひてたゝにも語らひしなかなれば物いはむと思ひて尋ねきたりけれどふと失せにければときこしめして五條のきさきの宮より內舍人を御使にて野山を尋ねさせ給ひけり幸くしてわりなくかくれたる所にゆくりなう入りにければえ隱れあへで逢ひぬ宮の仰言になむ帝おはしまさぬに聞じくおぼしめしゝ人をだに御形見にと思ふべきをかくよに失せられたうびにたればいとなむ悲しきなどか山林にいるともこゝにだにせうそこを云はざるまじきみさと在所にも音せられざらむなれば泣きてわぶなる如何なる所にてかく物せらるとなむ侍りしかば此處彼處わりなく尋ね侍りて畏く參りたるといへば仰言畏まりてなむ帝崩れさせ給ひて後世にふべき心ちし侍らざりしかばかゝる山の末にこもり侍りて死なむをまち侍るにまたなむあやしくまじらひ侍るにいと畏くとはせ給へることわらはべのはべる所も心には忘れ侍らずとて
(八)限なき雲ゐのよそに成ぬとも人を心におくらざらめや
となむまうしつると啓し給へといひけるを入道のかほ柔いとなむかなしかりけるそのほどにもあらずなりてたゞ簑をのみなむ着たりける少將なりし時清げなりしを思ひいでゝいと悲しかりけるかたとき人のあるべき所ならねば歸りまゐりてことの由かくなむと啓せさすれば宮畏くしほたれさせ給ひて御返しつかはすに人々もみなせうそこつけてやり給ひけれど隱れにければえ尋ねあはずなりにけれど僧正までなりて後のことにや仁和の帝のまだみこにおはしましゝ時布留の瀧御覽むとてわらはしましける道に遍昭の母の家侍りけるに庭を秋野につくりていとをかしう御物がたりのついでによみたてまつりし
(八)里は荒て人は舊りにし宿なれや庭　雜も秋の野らなる
同じ帝の御をばの八十賀に白銀を杖に作りて奉り給ひし時このをばに代りて
(八)千早振神や切けむつくからに千年の坂も越ぬべら也
題しらず
(八)諸人のそこら祈し驗あらば八十憂身に傳へざらめや

嵯峨に侍りし法師の坊の前に前栽のはべりけるを女どものたちとまりて見侍りしかば

七八こゝにしも何匂らむ女郎花人の物いひさが憎き世に

さう〳〵しう侍りしかば馬にのりて物にまかりし道に女郎花の見えしをおよびて折りしほどに馬よりおちてふしながら

八八名にめでゝ折れる計ぞ女郎花我落にきと人に語るな

八八八九花さみて折らむとすれば女郎花轉有る樣のなに社有けれ

九〇秋の野になまめきたてる女郎花あな事々し花も一時

奈良へまかるみちにあれたる家に女のことひき侍りしをきゝ侍りていひいれてし

一九侘人の住べき宿と見なべに歎加はることの音ぞする

一九秋山の嵐の聲をきく時は木のはならねど物ぞ悲しき

殘の紅葉を

三九唐錦枝に一むら殘れるは秋の形見をたゝぬなりけり

四九侘人のわきて立よる木の本は賴む蔭なく紅葉散けり

くたにをだいにて

五九散ぬれば後は芥になる花を思ひしらずも惑ふてふ哉

は文字をかみにてる文字をはてにてながめをかくす

六九花の中めに飽やとて分行けば心ぞ共に散ぬべらなる

志賀よりかへり侍りし人花山に入りてふぢのはな見はべりしかば

七九よそにみて歸らむ人に藤の花這まつはれよ枝は折る共

はちすに露のおきたるを

八九はちす葉の濁にしまぬ心もてなどかは露を玉と敬く

九九我宿は道みえぬ迄荒にけり難面き人を待とせしまに

〇〇世を厭ひこの本毎に立寄てうつ伏染の旒のけさなり

源順集

西の四條の宮の源中納言のお前にちひさき紅梅を植ゑたりけるを初めて花咲きたる年悦びてをのことも各文字一つを探りてよむにう文字を給はれり哀れ春の始は東よりといふを西の宮よりなりけりとは此の梅の初花　見てなむ驚かれけるこれにより我がおとゞの君やまとことのをのこども引きつらねてさぶらはせ給ふから竹の笛の一よあそびあかさせ給ひかゝるふしをたゞにやはすぐすべきとて此の小木の生ひ出でゝ萬代の老木にならむまでの心ばへをよませ給ふに

一〇白浪のしらぬ身なれど大淀の仰ごとをば如何背かむ

二〇梅津川このくれよりぞ流ての嬉しきせゝはみえむ水底

あめつちの歌　四十八首

もと藤原の有忠の朝臣藤六が返しなり彼はかみの限りにその文字をすゑたりこれはしもにもすゑ時をもわかちつゝよめる

春

三荒さじと打返すらむ小田山の苗代水にぬれて作るあ

四〇めも遙に雪まも青く成に鳥今日社野べに若菜摘てめ

五〇筑波山咲ける櫻の匂をば入て折らねどよそ乍ら見つ

六〇ちぐさにも綻ぶ花の匂ひ哉いづら寄柳ぬひし糸すぢ

七〇仄々と明石の濱を見渡せば春の波ともいづる船のほ

八〇雫さへ梅の花笠しるきかな雨にぬれじと君や隱しゝ

九〇空寒み結びし氷うちとけて今や行らむ春のたのみぞ

一〇らにもかれ朽も枯にし秋のゝ萌にける哉さほの山づら

夏

一一山も野も夏草繁く成にけりなどかまだしき宿の苅萱

一二まつ人も見えねば夏も白雲や猶ふりしける越の白山

一三片戀に身をやきつゝも夏蟲の哀れ侘しき物を思ふか

一四はつかにも思掛てはゆふ標賀茂の河波立よりじやは

一五みをつめば物思ふらし郭公なきのみ惑ふ五月雨の闇

一六ねを深みまだ顯れぬ菖蒲草人を戀路にえこそ離れぬ

一七誰により祈る瀨々にも非なくに淺く云なす大幣にはた

一八庭見ればやほ蓼生て荒に鳧辛くしてだに君が訪ぬに

秋

一九呉竹のよさむに今はなりぬとや假初ぶしに衣片しく

二〇もがみ河稻船のみは通はずてあり上り猶さわぐ葦鴨

二一昨日社行て見ぬ程いつのまに移ろひぬ覽野べの秋萩

二二りうたうも名のみ也鳧秋の野の千種の花の香には劣れり

二三結び置て白露をみる物ならば夜光るてふ玉も何せむ

二四櫓もかぢも船も通はぬ天河七夕渡るほどやいくひろ

二五木の葉のみ降しく秋は道をなみ渡りぞ侘る山川の底

二六けさ見れば移ひにけり女郎花我に任せて秋は早ゆけ

冬

二七ひを寒み氷も解ぬ池水やうへはつれなく深きわが戀

二八とへと云し人は有やと雪分て尋きつるぞ三輪の山本

二九泉ともいさや白波立ぬれて下なる草にかける蜘のい

三〇ぬる毎に衣を返す冬夜に夢にだにやは君が見えこぬ

三一打渡しまつ網代木の最ひをの絶て寄ぬはなぞや心う

三二へび弓のはれるにも非で散花は雪かと人にいる人にとへ

三三炭がまのもえこそ渡れ冬寒み獨思のよるはいもねず

三四餌乞する君がはし鷹下枯の野になる放を早く手にすゑ

思

三五夕されば いとゞ侘しき大井川篝火なれや消返りもゆ

三六忘ずも思ゆる哉朝な〳〵ねし黒髪のねくたれのたわ

三七笹蟹のいとだに安く寢ぬ頃は夢にも君に逢見ぬがうま

三八り草の葉に置露の玉をさへ物思ふ君は涙とぞ見る

三九思をも戀をも瀨々に祓する人形なでゝ祓へてはおく

四〇吹風につけても人を思ふには天つ空にも有やとぞ思

四一せは淵に五月雨河の成行けばみをさへ海に思社なせ

四二吉野川底の岩波いかでのみ苦しや人を立居戀ふるよ

戀

四三えもいはで戀の亂るゝ心哉いつとや岩に生る松のえ

四四小倉山覺束なくも逢見ぬる鳴く鹿ばかり戀しき物を

四五えもせかで涙の川の果々や強て戀しき山は筑波ねね

四六泣たむる涙は袖に滿汐の干るまにだにも逢みてしがな

四七殘なくおつる涙は露けきをいづら結びし草村のしの

四八獵師にもあらぬ我こそ逢事を照射の松の燃焦れぬれ

四九ねても戀臥ても戀るかひもなく影淺ましくみえぬ山の井

五〇照月ももるゝ板まの逢はぬ夜は濡こそ渡れ返す衣手

天曆の御屏風の歌

春たつ日

一けふとくる氷かへりて結らし千年の春にあはむ契を

天暦五年宣旨ありて始めてやまと歌えらぶ所を

梨壺におかせ給ひて古萬葉集よみとき選ばしめ

給ふなり召をかぶるは河内掾清原元輔近江掾紀

時文讃岐掾大中臣能宣學生源順御書所の預坂上

望城なり藏人左近衞少將藤原伊尹その所の別當

に定めさせ給ふに神無月の晦日に御題を封じて

くだし給へり神無月かぎりとや思ふもみぢ葉の
とある各歌を奉る
二三神無月果は紅葉もいかなれや時雨と共に降る覧
又くだし給へる判に曰くもみぢ葉の神無月はてぬ
と思ひてちり過ぐるをば知りにけりいかなれやと
おぼめてさだめなしするつ方たをやけきさまなれ
となよ竹のよゝのふるごとにもなむなりにける
佐保山をはせまでによむ
三元千鳥なく佐保の河霧さほ山の紅葉計りは立な隠しそ
西宮源大納言の大饗の日奉る料に四尺の屏風新
しく調せらるゝ料の歌
元日
四五昨日まで雪に籠りし三吉野の霞はけふや立て初らむ
子日する所を
五六岩に生る子日の松も種し有ば千年の春は我におほせよ
二月初午稲荷の社に詣づる人に
六七稲荷山尾上に立てるすぎ〳〵に行かふ人の絶ぬけふ哉
あら田うつ所を
七八ありたてば裏迄ひづる袂ゆゑ何打返す荒田なるらむ
三月花つみの所
八九いかにして花を摘まゝし花の香を袖に摘つる罪も赦れ
小弓射るところ
九一春深き宿にいればや梓弓ふく風にさへ花のちるらむ
四月神祭るところ
〇二神のます杜の下草風ふけば靡きても皆まつる頃かな
五月ともしする所
一三郭公待につけてや照射する人も山べに夜を明すらむ
六月はらへする所
二四願事も聞す荒ぶる神だにも今日は夏越と人はしらなむ
七月七日棚機祭する所
三五棚機は空にしるらむ笹竹のいとかくばかり祭る心を
十五日ぼんもたせて山寺に詣づるところ
四六今日の為をれる蓮の葉を廣み露おく山に我はきに鳧
八月逢坂の關に駒むかへの人々こゆる所
五七何に我夜はにきつらむ相坂の關あけて赴駒も引けれ
八月釣殿に人々あつまりて月見る所
六八水の面に宿れる月の長閑さは並ぬて人も寝ぬ夜なればか
九月小鷹がりのところ

六九里遠み募なば野べに泊るべし稲負鳥に宿や借らまし
月夜にきぬうつところ
八六風寒み鳴く雁音にあはすれば夜の衣は擣ち増りけり
十月志賀の山越の人々
九六名をきけば昔長柄の山なれど時雨る頃は色増りけり
十一月賀茂の臨時祭に
〇七千早振かもの河霧きる中にしるきはすれる衣也けり
十二月佛名おこなふ家
一七冬山の雪まにこれるあはれ木の上にぞくゆる隠す罪なく
天徳四年三月卅日内裏の歌合のひだりかた仰せ
により奉る三首、鶯
二七氷たにとまらぬ春の谷風にまだうちとけぬ鶯のこゑ
山吹
三七春深み井手の河波立かへり見てこそ行かめ山吹の花
戀
四七たが為に君を戀らむ戀侘て我は我にも非ずなりゆく
應和元年七月十一日四歳なる女ごを喪ひて同年
八月六日又五つなるをのこ子を喪ひて無常の思
ひ物にふれておこる悲びの涙乾かず古萬葉集中
に沙彌滿誓がよめる歌の中に世の中を何に譬へ
むといへることをとりてかしらにおきてよめる
五七世の中を何に譬へむ茜さす朝日まつまの萩の上の露
六七世の中を何に譬へむ夕露もまたできえぬる朝顔の花
七七世の中を何に譬へむ飛鳥川定なき世にたぎつ水の泡
八七世の中を何に譬へむ轉寐の夢路ばかりに通ふ玉ぼこ
九七世の中を何に譬へむふく風は行へもしらぬ峰の白雲
〇八世の中を何に譬へむ水早みかつ崩れゆく岸のふし松
一八世の中を何に譬へむ秋の野をほのかに照す宵の稲妻
二八世の中を何に譬へむ濁江のそこにならでも宿る月形
三八世の中を何に譬へむ草も木も枯行頃の野べの蟲のね
四八世の中を何に譬へむ冬を淺み降と見るまにけぬる泡雪
民部丞清原元輔が弟學生元眞あざな清用みまか
りて後はふりするまでしちずして遥く聞きゝた
る由元輔にいひやる
五八宵のまの空の烟と成にけり天の原からなどか告こぬ
應和元年勘解由判官の勞六年右になづらふるに
かくしづめる人なしつかれたる馬のかたを作り
てつかさの長官朝成朝臣に給ふに加へたる長歌
六八あら玉の年のはたちに足ざりし時はの山の
山さむみ風もさはらぬ藤ごろも二たびたちし
あさ霧に惑ひそめ物思ふことの葉を繁み
成しより夏はなぎさに水のまゝ〳〵に
はに置て冬ははなかと見紛ふ雪をたもとに
拾ひつゝ聚めつゝふり積る身の憂きにのみ
ふみ見て出し有ければ沈みけれ下にのみこそ
道はなは草根はふ鳴く鶴のねは雲のうへまで
こゝもかひ有と誰こゝのへの久かたの
いひ流しけむ世には比べて
隠れなくかひも渚に松はむなしく老ぬれど
我はなほ住の江の脱更へむ春はいつとも白なみの
みどりの衣ゆき通ひ波路にいたく
ゆもとり敢ず成にける船のわれをし
君しあらば哀れといまだ沈めじと
打はへて引としきかば あまのつり繩
引人もなしと侘つる梓弓今ぞうれしき藉矢しつれば
物は思はじ
七八同年十一月前朱雀院の姫宮の御裳着の日の料に
御屏風つかうまつるに人々に仰せて奉らせ給ふ
歌
春柳
八八露を重み搓ぬ計の青柳は幾めかけたるこがねなる覧
四月卯花さける所
九八我宿の垣ねや春を隔つらむ夏きにけりとみゆる卯花
旅人ほとゝぎすをきく
〇九おぼつかな行旅人に誰とてか山郭公まづなのるらむ
池のほとりに鶴たてり
一九池水に靡く玉藻の水清み千代さへしるき鶴の影かな
二九葦鶴の影のみ浮ぶ池水は千世になるべき験とぞみる
とほき雁を見る人
三九里遠み雲路掻分け水莖の跡かとみゆる雁はきにけり
山川に紅葉ながる
四九水上に時雨ふるらし山川の瀬にも紅葉の色深くみゆ
五月あめふる日東宮にはべらひて雨ふる心の歌

を奉るとてあの〳〵文字一つを探りてある文字を給はりて

九八雨ふれば草葉の露も増りけり淀の渡りの思ほゆる哉

内裏に女みこたちの御れうに月並の繪かゝしめ給うて殿上人に歌おしへさせ給ふあるに人のれうによめる四月うの花さける家に郭公をまつ

九九吟鳥聞かで待夜は明にけりほのに卯花白くみえゆく

九月大井川に人々遊ぶに紅葉ちる

一〇〇紅葉をば柚山川に吹つめば船に時雨の秋は来にけり

人の家の池に蓮おひねぬなは生ひたり

一〇一蓮だに生ざらませば水の上に露置き鳧と爭で知まし

康保二年女五男八親王御屏風の歌、春田舎の家

にをんなのもとに男きたり

一〇二道遠み人も通はぬ梅の花君には風やわきてつげつる

雉のなくをきゝて山櫻を見る

一〇三狩にくる人も駐れ春の野に朝なく雉の近くも有哉

一〇四山櫻木の下風し心あらば香をのみつてよ花な散しそ

卯の花さけるに郭公をきく

一〇五卯花のをらまくほしき山里に郭公さへ来つゝ鳴なり

賀茂の祭のさるの日みあれひく

一〇六我引むみあれにつけて蘰るとなる〳〵鈴も先聞ゆ也

海のつらに鹽やき網ひく

一〇七見渡せば鹽の栲縄名のみして立つは鹽燒く煙也けり

九月三十日の日男女野べに出でゝ紅葉を見る

一〇八いかなれば紅葉にうまだ飽なくに秋果ぬとは今日を云寛

雨のうちにのこりの菊を見る

一〇九時雨つゝ移ふ見れば菊の色を濕々と降雨にざりける

人の家に水鳥あり

一一〇朝氷とけにけらしな水の面に宿る鴛鳥往来なくなり

雪降る日あづまの方にあひつらねたり

一一一旅の空くもる若しな東路の往き來の方もみえぬ白雲

田のなかに水をひくをとこあり

一一二遠山田種蒔おける人よりも井堰の水はもり増るらむ

人の家の池のほとりの藤の花を

一一三藤波のかゝれる岸の松は老て若紫にいかでさくらむ

四月神祭る所

一夏山にをれる榊の葉を茂み幣り増るけふにぞ有ける

五月五日

一一四澤水になくつるのねを尋てや菖蒲の草を人の引らむ

六月はらへの所

一一五夏草に祓へかくれば久方の天つ罪とは露やけぬらむ

七月七日たなばた

一一六七夕の心をくみて天の川しづくに袖のひちぬべき哉

八月十五夜駒引

一一七今日しもあれ逢坂山の山端に先出で來ぬる望月の駒

九月九日菊を

一一八今日をみて後こそ知め菊の花聞くに違はぬ驗有とは

十月あじろ

一一九紅葉さへきよる網代のてをかけて立白波は唐錦かも

一二〇水上に嵐吹らし山川のせにも紅葉のはやく見ゆれば

十二月佛名

一二一夜を寒み風さへ拂ふ宿なれば殘れる君が罪も有じな

四のみこ子日に北野にいで給へる日

一二二古の例をひけば八千代まで命をのぶる小松なりけり

右兵衛の督新しくてうずる屏風のれうに正月一

日人の家に道水梅の花あり

一二三氷とく風につけつゝ梅の花行く水にさへ匂ふ也けり

二月たび人櫻の花を折らす

一二四春日すら長ねしつゝと妹間は見せむと折れる花な散しそ

三月人の家に女ども柳のもとにあそぶ

一二五枝茂み手にかけそめて青柳の暇なくても暮すけふ哉

四月神まつる

一二六夏衣きもこそ増れ同くば神のひもろぎときて歸らむ

五月五日庭に馬ひかせて見る

一二七若駒の解もみるべく菖蒲草曳ぬ先にぞ今日は懸まし

六月はらへするところ

一二八岩波の立返るせは井堰より夏越の御祓すとや聞らむ

七月七日庭に琴ひく人あり

一二九琴のねもなぞやひなき棚機の飽ぬ別を引し留ねば

八月相坂の關に駒迎ふる人あり

一三〇武藏野の駒迎にや關山のかひ打越て今日はきつらむ

九月志賀の山越の人々

一三一山嵐の風に紅葉のちり行けば漣ぞ先づ色づきにける

十月山里に狩する人來る

一三二山里に心合する人やあると我はし鷹に代りてぞとふ

十一月あじろ

一三三朝氷解る網代のひをなれば寄れど泡にぞ見え渡りける

十二月佛名導師にかづけ物する

一三四渡つ海の底の名殘もけさは有じ潜けばいかに蜃ならず共

右近少將義孝朝臣と加賀掾正通と碁うつとてや

すと歌十首をつくる正通まけてつぐの六日せめ

てきたりてこふにまつ（待）をとらす、春のくれ

一三五心して風もふかなむ花のちる方へや春も行くと尊む

秋月

一三六久方の空さへ澄る秋の月いづれの水に宿らざるらむ

あはぬ戀

一三七逢ずして言のはも耻聞えけれ待で消なむ露の悲しき

逢ひての戀

一三八我ながらくらべ侘ぬる心哉今さへ猶や戀しかるべき

宰相中將たてまつる後漢書の光武紀よみをへたる日わたりかゆの饗多きに設けて文作る又のあしたに祓の心ある歌奉る

一三九老ぬれば同事耻せられけれ君は千世まませ君はちよまませ

藤大夫賊信の家に五月朔日なるに庚申するに曉になりて鴛鳥のなくを聞きて女房よりいひ出す

一四〇鳴聲を鳥だにかふる物ならば郭公とぞ聞き明さまし

これがかへり事

一四一君きかばなけ時鳥黒髪のふゝきになれば我も劣らず

ある所に男女方わきてお前の庭の面に薄、萩、らに、しをに、草のかう、女郎花、刈萱、撫子、小萩など栽ゑさせ給ひ松蟲鈴蟲を放たせ給ひて人々にやがて其の物ともにつけて歌を奉らせ給ふに己が心々に我も〳〵とあるは山里の垣根にさを鹿のたちよりあるは限なき洲濱の磯づらに蘆たづのおりゐるかたを作りて草をもおほし蟲をもなかせたり仰せ事として花の有機蟲の委は就れもいとをかしかめり歌の劣り優りは定めでやはあるべき誰してか定め申さすべきと仰せ給ふに是かれ申す前和泉守源順朝臣なむおほやけには梨壺の五人がうちに定められ宮には思ふ人八人がうちに侍ひし人なりこれを召してこそ定められむに宜しからめと申すによりてかねて其の事とはなくて今夜すぐすまじきまめ事なむあるとて召したり民の司たいすつかさのおほいすけの君だ

ちこなたかなたに侍ひ給ひ加賀の掾橘の正通によみあげさせ順の朝臣にことわらせ學生爲憲して今日のことをかきおかせ給ふ中に爲憲なむ同じ源といふべくもなくちぐさに匂ふ花のあたりにはもぎ木のやうにてまじりにくく侍れどもやんごとなくさぶらふ深山の麓よりおひいでたる草のゆかりにて仰せ事の辭びがたさに心もとゞもについにけり水莖して奉りおく其の歌ども順朝臣の定め申せる判かくなむ

侍從のおもと

四花の皆紅とく野べに篠薄いかなる露か結びおきけむ

源すけまさの朝臣

一秋風になびく夕の花薄ほのかに招くたちとまりなむ

此の薄の歌はすけまさが靡く招くといへるわたりらうたけたるやうなり今暫しぞ思ひ合せまし

こなたしも靡劣るは花薄玉まく葛の眞葛なるべし

女郎花

二玉の緒をみなへし人の絕ざらば拔べき物を秋の白露

ありたゝの朝臣

三四くらぶ山麓の野べの女郎花露の下より移しつるかな

此の女郎花の歌はありたゝの朝臣嵯峨野をうち過ぎて倉部山まで索めありきけむもおもきなし又やまことにいひにくき事をこそ添へて

我妹子が女郎花てふ可惜名を玉緒にやは結打べき

萩　兵部君

四さを鹿のすだく麓の下萩は露けきとの難くもある哉

橘のもちきの朝臣

五萩葉におく白露の溜りせば花の形見は思はざらまし

此の萩の歌は誰も〳〵同じさまなれどすだく麓のなどいへるわたりは少しいひなれたりもちきの朝臣の萩の葉におく白露なといへるわたり珍らしからねど歌めいたり

露を淺み下葉も未紅葉ねば紅くも見えず勝負の程

辨　君

六別行く秋をし知らに鳴鹿は命をさへや留めかぬらむ

もりのぶの朝臣

七あだし野の叢にのみ交りつる匂ひは今や人に知れむ

此のもりのぶの朝臣のあだし野は野の名正しからねばにやあり所知る人少なし又かみにはなもみえずしもに匂といふにつけて此の歌殊なる心はなけれどもそへ所少なきに今一文字を加へてしらにといへる所今少し優れり

覺束なあだし野見ば花もなし空に匂ふと云は何ぞも

草のかう　左衞門君

八常夏の露うちはらふ宵ごとに草のかうつる我袂かな

源　爲憲

九野べ毎に花をしつめば種々のか移る袖ぞ露けかりける

此の草のかうの歌ざまは左衞門少し和らかにいはせて侍るめりされどもかみの草はもとの草にて下のかうのみそへたれば人に隱れむ人の身のみ隱れておもてあらはなる心ちなむしける

千草のか移る袂も有けるをなど槿を隱さざりけむ

しをに　日向のかみ

一〇高砂の山のを鹿は年をへて同じをにこそ立馴しけれ

藤原もろふむ

一一白雲の懸りしをにも秋霧のたてばや空に山の見ゆらむ

此のしをにの歌は此も彼も同じやうなれど秋霧のたてばや空に山のみゆらむといへるわたり河霧の麓をこめて立ちぬれど空にぞ秋の山はみえけるといへる右ごとを思ひ合すれば似劣りになむみえける

麓とも峰ともみえず秋霧の立なば何か空に見ゆべき

萩　すけの君

一二そよとなる秋の萩だに徹せば何につけてか風を知まし

源すけなか

一三萩の葉の末こす風の音よりぞ秋の深行く事は知るゝ

此の萩の歌自も見給へ人してもよみあげさするに萩の葉を末こす風の音高み末こす方は少し優れり

撫子　もとゝき

一四山がつのかきほの外に朝夕の露にうつるな撫子の花

藤原のたかたゞ

一五秋深く色移りゆく野べながらなほ常夏にみゆる撫子

此の撫子の歌はいづれも〳〵いとよく云はせ侍るめりたゞし

秋も猶とこなつかしき野べ乍ら疑置ける露ぞ儚きと見れば萩も少し負けに見ゆ

かる萱　こはぴと

一六行秋の風に亂るゝ刈萱はしめゆふ露も止らざりけり

たゝのぶ

一七移し栽ば東の間もなく刈萱はみちよの數を數へ計ぞ

此の刈萱はたゝのぶが三千代の數などいへるわたり秋の野は刈萱にやは少し春の野べに咲きけむ物の花なむ思ひでられける

言の葉はいはく見ゆれどすゑ草露には移物にざりける

蟲のね　但馬のかみ

一八澁茅生の露吹き結ぶ木枯に亂れてもなく蟲の聲かな

橘　正通

一九秋風に露を涙となく蟲のおもふ心をたれにとはまし

此の蟲のねの歌露吹き結ぶ木枯のなどいへるわたりいひなれたりなど定むるほどに正通が申すやう木枯とは冬の嵐をこそいへ此の頃の風をいはゞ雨をも時雨とやいふべからむといふを聞しめして御簾の内にこれかれかゝる事をいふことをこそはたしめしにひかめとて

木枯の秋の初風吹ぬるになどか雲居に雁の音せぬ

又

我宿のわさ田も未だ刈なくにまだき吹ぬる風の風などいへるは冬の嵐を秋の初風といへるにやあらむ其のわたりをこそ定め申されめとあるにつけて又々見給ふれば

なく蟲の涙になせる露よりも露吹結ぶ風は優れりそも〳〵順梨壺には奈良の都のふる歌よみとき選び奉りし時には少し呉竹のよごもりて行末を賴む折も侍りき今は草の庵に難波の浦の蘆のけにのみ煩らひて籠り侍ればすべてわれ船のひく人も渚に捨てられおかれたらむ心ちなむしけるかゝる内にも此の年頃は

しらけゆく髮には霜や翁草言の葉も皆枯果にけりかく侍れば此歌ども定め申せるさまどもいといとしらずことやうなり尚お前にて定めさせ給はむやよからむと申すを聞きて正通が申すやう

霜枯の翁草とはなのれども女郎花には尚靡きけり

今日の判を見ればなど云ひ戲ぶれて罷り出でなむとする程にみすの內をきけば帥のすけ橘のなかき

といひし人のむすめ此彼侍ひて夜の更けゆくまゝにさやけさまさる擣のねを調べ合せたるにおまへの庭の面をみれば月影の朧なるに花の色々にうち亂れたり風の夜窓になりゆくに蟲の聲々もなきあひたりかゝる事どもを聞き忍びすてゝ今は罷り出でなむとて萩の下露に衣手ぬるゝもしらず起きゐて大みきたぶなりときこしめして貴殿よりはみこの宮の藏人所の雜色藤原のたかたゞして御くだ物のおろし政所よりは長門の權守源の有忠の朝臣してさかなに給ふべき物を樣々いろ〳〵に給へりこれかれ皆たまひおきて申すやうまだあかぬ物は御前の花の色と蟲の聲になむありけるなど申してやう〳〵罷りいでぬ爲憲一人明くるまでさぶらひて昨日より今日までのことを書きしるして奉りおく天德といふ年始まりて三とせの秋のなかばなが月のしもの十日に今二日おきての事なり

一品宮もうちと御巷あそばさるあふぎつく日なり宮まけ給ひて七月七日に奉り給ふさま〳〵にたへなることを盡せり綾のもんにもんじをもりてはれる歌

○天つ風仰ぐとも夢ちりたつなこは棚機のおれる衣ぞ

枇杷殿にて菊を翫びて探りてみ文字をえたり

一秒はむ時や見わかむ冬の夜の霜と一つにみゆる白菊

右馬頭遠度朝臣家にきたり宿りける頃望月の御まひいぬる秋日かすふゆになりてひき奉るむかふなる司の官人どもにに御みきなど給ひての歌

二君だにも荒たる宿に宿らずばよそにぞみまし望月の影

八月左大臣後院にて宴をなす夜の歌

水上月

三水清み宿れる秋の月さへや千世迄君とすまむとすらむ

岸のほとりのはな

四色深く岸のまに〳〵咲る花淺き波にはをられざり鳧

五叢の底まで月の照せばや鳴く蟲の音の隱れざるらむ

中のみかどの家に南に中務すむ六月梅の枝につきたるを折りて北の家にやる其の詞に云はくこのはまだかくなむ殘りたると即ちいふ心は

六井堰にも障らず水のもるに逢へば前の梅づも殘らざり鳧

南のかへし

七泉にも殘らで爭でもりにけむ堰の古杭くひも飽ぬに

北かへし

八泉にもあらぬ井堰の島近み波の越つゝをると社きけ

南かへし

九打越る波の音せばもらぬよりしまきの風ぞ吹返さまし

又其のかへし

○花を社人や折とも咎しか數ならぬみは何にかはせむ

貞元元年初齋宮の侍從のくらやにおはするあひだに八月二十五日庚申の夜人々參りあひて遊ぶに祝の心を

一神代より色も變らぬ竹川のよゝをは君ぞ數へ渡らむ

同じ年の九月はつる日齋宮野の宮に前栽うゑて又よむ

二頼もしな野の宮人の栽る花時雨る月にあすはなる共

此の歌のかへし女房いひ出す

三あすよりは時雨に懸る花を植てのへやるべくも非ぬ秋哉

かへし

四君が爲八千代の秋は無ればやのへやるべくも非ずと云覽

永觀元年一條の藤大納言の家の寢殿の障子に國々の名ある所々を繪にかけるかく歌

鏡の山、夏

五名にしおへば曇らさり鳧鏡山宜こそ夏の影は見えけれ

大井川、秋

六大井川そまに秋風寒ければたつ岩波も雪とこそみれ

天橋立

七滿潮ものぼりかねてぞ返るらし波さへ高き天の橋立

やそ島

八八十島を誰に爭で見てしがな春の至らぬ島は有りやと

浮島

九定なき人の心に比ぶればたゞ浮島は名のみなりけり

高砂

○打寄する波と尾上の松風と聲高砂やいづれなるらむ

大淀

一伊勢の蜃に問ひは聞ねど大淀の濱のみるめは著くぞ有ける

しかすがのわたり

二行通ふ舟路は有れどしかすがの渡は跡もなくぞ有ける

初の冬のかのえ申の日の夜伊勢の齋の宮にさぶらひにて松聲夜の琴に入るといふことを題にて奉る歌の序伊勢の齋の宮秋野宮に渡り給ひて後冬の山風寒くなりての初廿日七日の夜庚申に當れり長々しき夜をつく〳〵とやは明すべきと思ほしてみすのうちに侍ふおもと人御階のもとに參れるまうち君たちに歌よませ遊びせさせ給ふ歌の題に曰く松聲夜の琴に入るこれにつけてきけば足曳の山風に響くなる松の深緑もむば玉のよはに聞ゆる琴のおもしろさも偏に皆亂れあひ行き通ひてうべも昔の人風松に入るといふことの詩句を作りおき傳へそめけむとなむ覺ほえける

順が頭の髮夏も冬もわかぬ雪かと誤たれ心の闇はからにもやまとにもすべてつきなく御前の遣水に浮べる殘の菊に思ひあはすれば泉ばかりに沈める身耻かしく名に高き衣笠岡に照るもみぢ葉を見渡せばかゝるまとゐに侍ふ事さへまばゆければさもあらばあれ世人こそ聞きてそしり笑はめかけまくも畏き御神は哀とも惠みさいはひ給ひてむ今の古を後の人も見よとてかき記して奉るは仰せ言にしたがふなり

三夜を裏み琴にしも入る松風は君に引れて千代や添らむ

天元二年の秋ろおかなるをのこさうしは平の衆盛駿河の守にてくだるにやる歌二首

四時しもあれ小鹿の橋々秋行けば吾妻なさへぞ戀渡べき

五思侘び己が船々行を船田子の浦みてきぬといはすなしもつふさの守藤原のすゑたかが國に下るに中納言中宮大夫の家のをのこども餞給ふ夜よめる

六君は早や人並々に出立ちて沈みに沈む我に逢ふなよ

伊勢齋宮規于内親王群行の後長奉送使廣幡の中納言京に歸り給ふに齋宮の御前にて饗まうけ祿給ふに男女歌よむとて奉る

七神のます山田の原の鶴子は孵るより社千代は數へめ

天元二年十日初の亥の日右大臣の女御の火桶にもちひくだもの盛りてうちの女房どもにつかはすついでに大臣にも火桶一つ奉らせ給ふしろかねしてわのこがめのかたを作りてするさせ給へるにくはゝれる歌、わのこの歌は平雅盛が集にあり

八渡つ海の浮たる山をおふよりは勤なき世を戴けや鯨

天元二年正月一條藤大納言石山に詣でゝ七日さぶらひ給ふ家人の詩作り歌よむあまた侍り暇の隙にからの歌作りやまと歌よむ大方かきあつめたるに侍従誠信さはりありてつかうまつらず後に此の歌どもを見て自思ひ作りてこれに又加へよとすゝめられたるなかに三河の權の守これしげの朝臣の江山此地深といふ詩に客帆有レ月風千里仙洞無レ人鶴一雙とつくれること内記爲憲の朝臣が渚の松といふことをよめる

九八老にける渚の松の深緑しづめる影をよそにやは見るといへるを

〇九深緑松にもあらぬ朝あけの衣さへにぞ沈みそめける

天元二年十月依二宣旨一奉る御屏風の歌、

子日の野べに遊ぶ人

一九小松引人にはつれし深緑木高き影ぞ千代はまされる

梅の花ある家

二九朝氷吹とく風はぬるけれど急ぎて梅は早咲きにけり

春の野の霞める梅の花さけるに鷹をすゑて人ゆく

三九梅の香を假にきて折人やあると野べの霞は立隠すらむ

人の家に櫻柳あり

四九鶯はわきてくれども青柳の絲は櫻に亂れわひにけり

花の木あまたある下に人々あそぶ遣水あり山吹の花さけり

五九山吹の花の下水咲ねども昔くちなしと影ぞ見えける

六九河風はさらむ方なみ山吹の散行く水を堰やとめまし

松の木に藤かゝれり男をんな群がれ居たりあるひはをりてさす

七九住吉の岸の松社思ほゆれ手にさへかゝる藤波の花

八九松風の音に聞つる藤波は折つゝ返る名にこそ有けれ

九九紫の藤さく松の梢にはもとの緑も見えずぞありける

七月七日をんな庭におりて七夕祭る男きたりてまがきのもとにたてり

〇〇彦星をまつとはなしに何すとて天の河霧急ぎ立らむ

一〇棚機にけさはかしつる麻糸を夜は祭ると人は知ずや

二〇天河渡守にもなりてしが棚機つめに今日はまかせじ

三〇名にしおへば鵲の橋渡す也別るゝ袖は猶やぬるらむ

八月十五夜人の家にはちすあり木の葉浮ぶ月の影おちたり男をんな心々にあそぶすだれを隔てゝ物語するもあり

〇一蓮葉も紅葉もしける水の面に底までみよと照す月影

〇二水の面に照月なみを數ふれば今宵ぞ秋の最中也ける

秋の夜月あかし林のもとに鹿たてり

〇三月明み今宵ぞ數は數へつゝ常もしか立つ木とはみれ共

秋の野に色々の花紅葉ちりまがふ林のもとに遊ぶ人あり鷹すゑたる人もあり

〇四紅葉ゆゑ家も忘れて明す哉歸らば色や薄くなるとて

〇五時雨かと驚れつゝふる紅葉紅き空をも曇るとそみし

池水に紅葉ちり浮ぶ水鳥あり馬にのれる人ゆきすぐ空の霧のなかに雁鳴きて渡る野にかりする人あり

〇六朝霧をわけゆく雁は何なれや遲れて後に惑ふ今日哉

〇七水の面に浮ぶ紅葉の唐錦をしてふ鳥ぞ立てぬるらし

此の歌を奉らするついでに仰せ承る藏人にやる

一程もなき泉計に沈む身はいかなる罪の深きなるらむ

二天つ風空に吹揚ぐる雲も有ば澤にぞたづは鳴と告なむ

天徳三年の春能登守になりて下るに一條大納言の家の人々餞する日の歌

二一越の海にむれはゐるとも都鳥都の方ぞ戀しかるべき

おなじ時左衞門佐誠信餞する日の歌

二二神のます氣多のみ山木繁く共分て祈らむ君が千年は

〔同じ頃〕

二三一昨年も去年も今年も一昨日も昨日も今日も我戀る君

二四掻絕て問ぬはうく思ほえず斯るに死なぬ身をいかにせむ

五日さうぶにつけて或る所に奉る

二五進上　深

右葉之菖蒲草　千年五月五日可刈

元輔集

村上の御時に紅葉合殿上人にせさせ給ふに

二六我が思ふ倉部の山のもみぢ葉に劣らぬ物は心也けり

梨壺にへい内侍のすみ侍りけるにさうじの隔てのかみより餌袋に物いれて藤の花してゆひてうちこしてはべりしに

二七立返り見れどもあかず春風の名殘にこゆる藤波の花

三月盡

〇二風早み吉野の山の櫻花ちらぬに春の過ぎぬてふらむ

藏人所のをのこども川原に涼みにまかりたりしに

二八吹く風は涼しかりけり草茂み露の至らぬ荻の下葉も

同じ御時の菊合に

二九譬ふべき色もなき哉菊の花枝をわきてや露も置らむ

つかさ給はらで又の日左近藏人の許に遣し侍る

三〇年毎に絕ぬ涙や積りつゝいとゞ深くや身を沈むらむ

小野宮の太政大臣の家の池のほとりにて櫻の花を惜む

三一櫻花そこなる影ぞ惜まるゝ沈める人の春かと思へば

藏人所の櫻の花の散るを見てつかさ給はるべき年の春給はらで

三二櫻こそ雪と散れ時雨つゝ春とも知らで過しつる哉

小野宮の太政大臣月輪寺に櫻の花見におはしたりしに

三三誰が爲かあすは殘らむ山櫻こぼれて匂へ今日の形見に

梨壺の櫻の花盛りなりけるにくにちか歌よみてつけてはべりける後に聞きて詠みてはべりし

三四花櫻思ひやりてもたへぬ哉あかすちりけむ折の心を

藏人所まかりはなれて後梨壺にてをのこども雨ふる日さけたうべしついでに友だちにあひてはべるよしを

三五石上ふりにし人にあふ時は嬉しかりけり夏の夜の雨

冷泉院の池のほとりにて藏人所のをのこども櫻をしみはべるにまかりあひて

三六古のなごりなるべし池水に映れる花の波と見ゆるは

天徳三年二月三日權大納言源朝臣舟にて八幡に詣ではべるに道にて人々の思はむ事をいへとはべりしに

三七渡守君にみなれて老にけり雲居の岸にまどふべき哉

又の年の十月に同じ大納言の家に殘れる菊を惜みはべりて

一三長き夜の星かとも見よ初霜のおきて殘せる白菊の花
　同じ大納言菊惜む曉に紅葉折らせてよみ侍りし
二三終夜殘れる菊ををしむとも紅葉の色も忘れざらなむ
　かへしに　元輔
三三忘れめや深き紅葉の影ならで移ろふ菊のあらば此有めまた
四三遠近の岸をば波の隔つれど通ふは花の色にぞ有ける
五三行先を心もとなく頼みける千尋の濱のかひぞ嬉しき
　天德二年正月比叡によしたかの少將登りて鶯の
　聲心もとなき由よめとはべりしに
六三鶯の音は打解けて足引の山のゆきこそ下ぎえにけれ
　小野宮太政大臣嵯峨野に花みに罷りて侍りしに
七三秋の野の萩の錦を故郷に鹿の音ながら移してしがな
　天德四年六月十四日の夜大納言右大將藤原朝臣
　など月のあかきに昔を戀ふる心人々よみはべりし
　しに
八三天の原月は變らぬ空ながらありし昔のよをや戀らむ
　兵部卿の親王の始めていをまねりける日
九三螢舟に釣せし人も今日よりや千年を松の江に渡る覽
　故宮内卿元中八十賀にやがて法師になりて布引
　寺といふ所にこもりはべりしに
〇四俊を深み松にゆづりて歸る哉浮世を背く程の遠さに
　天德二年八月廿四日白川院に大納言源朝臣秋の
　花露を帶びて開くといふ題を右大將藤原朝臣な
　どまかりあひて
一四綻びて花咲にけり藤袴にほひをむすぶ露にまかせて
　安和二年二月五日一條のおほいまうち君白河の
　院にて子日しはべりしに
二四若菜つむ子日の松の千代の影澄つゝ見せよ白河の水
　ありひらの左大臣の八十の賀あせちの更衣のし
　はべりしに、若菜の歌
三四春毎に若菜つみてぞ祈るべき小鹽のかひに色深き松
　大將の子のいか子日にあたりてはべりしに
四四二葉なる子日の松をいかばかり行末遠き物に譬へむ
　小野宮の太政大臣の家にて子日しはべりしに
五四千年へむ宿の子日の松を社外も例に引かむとすらめ
　内の女房ども子日しにまかり出でむとて侍りけ
　るに中宮の惱み給ひて俄にとまりにければまう
　けてはべりけるわりご遣すとて
六四春霞子日の野べに立出ねばまつかひ無て暮しつる哉
　つかさめしの子日にあたりて侍りしにあせちの
　更衣の局より松をはしにて物を出して侍りける
　（歌略、一本「ひくひともなくて年ふるみどしの、まつは子日をまたにこそきけ」）
七四船岡に若菜つみつゝ君が爲子日の松の千代を遊らむ
八四子日する松の千年の春毎に若菜はつまむ野べの隨に
　安和二年二月五日頭中將さねすけの朝臣小野宮
　の大臣の子日しに遣しはべりしに詠みはべりし
九四老の世に斯る子日は有きやと木高き嶺の松に問ばや
　女房の車に梅の花折りて遣すとて
〇五松をのみ引て歸らば梅の花思ふ心の殘るらむかし
　人に代りてよみはべりし
一五萬代の春の子日に出て見む松は幾度おひかはるとも
　また
二五淺緑けふ引きそふる松をこそ千年の春の始とは見め
　天德二年二月五日一條の太政大臣齋院にて子日
　しはべりしに庭の松を翫ぶといふ題にて
三五千早振齋の宮の庭の松幾らの千代をもとめかぞへむ
　其の日齋院のお前のもの、洲濱に鶴小松舟など
　あるに
四五積みて送れ海土の釣舟棹さして松の千年も鶴の齡も
　大貳くにのりが女の賀しはべりしに
五五二葉なる松は引すと思ふ覽千年の春の今日に殘すを
　又
六五今日よりは二葉の松ぞ睦じき君諸共に老いむとすれば
　周防に侍りし程に岩に生たる小松を岩ながら
　もちてまうできたりしを
七五萬代に千年を添てみつる哉巖ながらに引ける小松は
　また
八五植てみむ千歳の春の今日毎に子日の松は斯り鳧とも
　周防に侍るまつまのうまやといふ所にて子の日
　しはべりしに
九五思出でよもよの子日の今日毎にまつまの浦の岸の姫松
　或人の孕める程にその父身罷りにける後生
　れて侍りける七日の夜遣し侍りけるきぬの首に
〇六千とせへむ形見とをみよ忍つゝ獨すだゝむ鶴の毛衣
　中將さねすけの朝臣子生ませて侍りし七日の夜
一六小鹽山いかなる種の松なれば千世を一夜に做て生ふ覽
　九月九日に人の生れて侍りける七日にあたりて
　はべりしに
二六時しまれ今日のけふにし逢ぬれば千世をぞ置む菊の白露
　人の裳きたる夜よみてはべる
三六千年ふる松に玉もぞかゝるべき沖つ白波立返りつゝ
　たかときが子の賀茂の祭の日袴着しはべりしに
四六千年をは我ならねども木綿襷結ぶの神も祈くらむ
　朱雀院の御ぬのとの侍從が七日の夜
五六亜乳根も皆長らへて住吉の二葉の松の千代を社みめ
　なかきよが生れてはべりし七日の夜
六六松蔭の通へる枝をとぐらにて巢立て守べき鶴の雛哉
　人の裳着はべるに
七六萬代を長柄の濱の細れ石の今宵より社苦もむすらめ
　これも人の裳着はべるに
八六住吉の浦の玉もを掬ひあげて渚の松の影をこそみめ
　頭中將あつとしが子うませてはべりし七日の夜
九六姫小松大原山の種なれば千年はたゞに任せてをみむ
　又人の裳着はべりしに
〇七玉藻よる巖のほどに成に鳧ながらの浦の濱の眞砂は
　宰相元輔の朝臣のうまごの袴着はべりしには
一七はぐゝみて君すだてずば鶴の子の雲居乍ら千世を知らまし
　人の子うみてはべる七日の夜
二七たづの子の雲居に遊ぶ齡こそ空に知らゝ物には有けれ
　清原のすけときが子うませたる七日の夜
三七遥にぞ思ひやらるゝ疎からぬ我か中山の松の末の世
　宰相元輔の朝臣のむすめの裳きはべりしに
四七結び上ぐる君が玉藻の光にはさやけき月の影ぞ添覽
　紀の守ためみつが小さき子を出してこれを祝ひ
　て歌よめといひはべりしに
五七萬代を數へむ物は紀の國の千尋の濱の眞砂なりけり
　右大將藤原朝臣子うませて侍りし七日の夜さき
　そむる梅といふ題をよみはべりしに
六七咲きそむる梅の花笠かざす身は後ろ安きを萬代の春
　又子うませてはべるに
七七年毎に祈りしくれば思馴て珍しげなき千代と社みれ
　元輔がとみはたといふ子の袴着侍りしに

(七)世の中にとなる事は有ず共とみはたしなむ命長くて
また後に着せ侍りしに
(八)綠兒の千代ぞ常磐に祈らゝなるべき山の松と見々
大弐くにのりの朝臣うまごの五十日に侍りしに
わりご調じて歌を繪に書かせはべりし
(九)見てしがな二葉の松の生茂り八十氏人の影ならむ世
(一〇)住の江の濱の眞砂の苦ふりて巖ならむ程をしぞ思ふ
また
(一一)松の如千歳を懸て生茂れ鶴のかひこの巢とも成べく
おぼみといふ所を人に代りて
(一二)葦間より綱手の舟の障り多み乘て行べき程の遙けさ
又かはもといふ所に
(一三)行春の惜むに止る物ならば何かはものを人の思はむ
冷泉院に渡らせ給うて池のもとの初雪といふ題
を殿上のをのこどもよみはべりしに代りて
(一四)池近くふる初雪の名殘には玉の臺ぞあらたまりける
(一五)五月ふたつありし年かうしに人に代りて
(一六)五月雨の數くはゝれる夏だにも山郭公聲にあかめや
また
(一七)五月雨の餘りもまたじ時鳥唯一聲にあけもこそすれ
内の藤の花の宴に人に代りて
(一八)百敷になびきてみゆる藤波はいく萬代の春を翳さむ
(一九)臺前栽の宴せさせ給ふに人に代りて
(二〇)月影の至らぬ庭も今宵こそさやかにかりけれ萩の白露
天祿四年七月七日一品宮の扇合にあやの文にお
らせたりし歌
(二一)天の何あふぎの風に霧はれて空すみわたる鵲のはし
又同じ扇合に人に代りて
(二二)當代の秋や忍ばむたなばたは扇の風のなごり久しく
村上の御時五月四日庚申女方男方歌合せさせ給
ふに男方かちにければ八月廿日になけわざして
糸を結べるこに松蟲鈴蟲いれて女郎花につけて
(二三)女郎花空に懸りてはふ葛はまくるとや思ふ露の分かぬを
また
(二四)秋雨やふりてそむらむ紅の色こくみゆる梅の花がさ
(二五)千世をへてくる秋毎に聞えなむ行末遠き松蟲のこゑ
うちの御前の紅梅を藏人どもによめと仰せられ
けるに代りて

また
(二六)梅花香はことゝ〳〵に匂はねど薄くこく赤色は咲けれ
(二七)紅に色こき梅は鶯のなきそめしよりにほふなるべし
中務がある所にまかりたりしに貝をこに入れて
はべりしに
(二八)波間分けみるかひ有るは伊勢の海の凅の方の名殘なる覽
中務
かへし
(二九)伊勢の海は名殘だになくあせに鳧名のみ高師の濱と聞えて
又かへし遣す
(三〇)白波の昔をかけて聞くからに潮みつ浦と成ぬべき哉
つかさめしの頃過ぎて雪の降りて侍りしに兼盛
が許に遣しゝ
(三一)雪深み起の白山我なれやたが敎へしに春を知るらむ
中務がむすめの中納言清水に詣でゝ人に物いひ
けるを聞きて
(三二)句ふらむ霞のをちの山櫻思ひやりても惜まるゝかな
梅の花に雪凍りつきたるを人の花か雪かといひ
はべりしに
(三三)花を雪ゆきを花かと見てぞふるうめの氷の解ぬ限は
西の京に住みはべりし人のとはぬ心ばへの歌よ
みてはべりし返事に
(三四)草若み結びし萩はほにも出ず西なる人や秋を先知る
順が子なくなりて侍りしにとぶらひに遣すとて
(三五)思遣る子こひの森の雫にはよそなる袖も露けかり鳧
順がかへし
(三六)朽果てなき木の本は君がとふ言の葉みるも先ぞ悲き
又かへし遣しゝ
(三七)生立たて枯ぬと聞し木の本は歎きの森と爭で成けむ
正月二日鶯の聲は聞きたりやととへりしに
(三八)年ごとに春の忘るゝ宿なれば鶯のねもよきて聞えず
老いたる人の鳴門よりめをおこせてはべりしに
(三九)渡の原淺くも思あらぬ哉老の浪わけみるめかるうら
櫻の散れる所にて
(四〇)花の蔭たゝまく惜き今宵哉錦をさらす庭と見えつゝ
貫之が集を人のかりて返し侍りける折にときふ
が許に遣しゝ
(四一)返しけむ昔の人の玉章を聞きてぞそゝぐ老いの涙を
ある所に松蟲鈴蟲籠に入れてひわりごなど添へ

てやりはべりし
(四二)萬代の秋を待ちつゝ聞き渡れ巖にねざす松蟲のこゑ
四月一日とも時が有馬よりまうできて道に時鳥
のなきしといひはべりし次でに
(四三)春はをし時鳥はたきかまほし思ひ侘ぬるしづ心かな
元輔が子に侍る者の若菜の樣なる物して侍しに
(四四)二葉にてみし俤も變らぬに若菜摘ける今日に逢ふ哉
又おとにはべりしものゝしてはべりしに
(四五)下立て若菜を爭で摘ませけむ膝を離れし程もへなくに
加階まうしはべりしに、給はらで鶯の鳴く折に
(四六)鶯の鳴く音ばかりぞ聞えける春の至らぬ人の宿には
みちすゑ同じごと加階をえし侍らでいかなる花
かまづは開くるなどやうなる心を詠みて侍りし
かば
(四七)遲く疾く開くる枝を花故に身をもうしとは何か思む
宰相中將藤原朝臣うませて侍りし七日の夜梅
の花を題にて
(四八)唉初る梅の花笠いつよりか天の下をば知らむとす覽
時ふがめのなくなりて又の年の同じ頃いひおこ
せてはべる
(四九)年をへて馴こし人を別にしこそは今年の今日にぞ有ける
かへし　元輔
(五〇)別れむ心をくみて涙河思ひやる哉こぞの今日をも
(五一)菊の花のいと白きにつけて、時文
菊の花盛の色の我身には白くなるなど侘しかるらむ
かへしに
(五二)露のわく世をぞ恨むる我身には盛の色の盛ならねば
小一條太政大臣なくなりはべりて後櫻の花面白
きを翫びはべる日歸る雁といふことを
(五三)歸る雁君もしあはば故郷に櫻惜むとなきて告げなむ
右大將藤原朝臣八月ばかり月の面白き夜昔の物
語などしてはべりし次でに
(五四)かく計り秋の月影きよけれど曇りし冬の空ぞ繼しき
大弐くにのりはらかといふ物おこせて侍りしに
(五五)三吉野も若菜摘らむ卷もこの檜原霞て日頃へぬれば
同じ國章がめ死に侍りし又の年忌日に遣しける
(五六)月影を隔てし程の寒霞みてながむらむ今日の悲しさ
かねもりが駿河にまかりしに遣しゝ

[二]知ざりき田子の浦波袖ひぢて老の別にかゝる物とは
大貳くにのりの朝臣のめのなくなりぬと聞きて
筑紫へ遣しける
[七]年深き人のわかれの涙河袖のしがらみ思ひこそやれ
同じくにのり秋風の夜寒なるよし詠みて侍りし
返事に遣しゝ
[八]思ひきや秋の夜風の寒けくに妹なき床に獨ねむとは
左大將比叡へのぼりて歸り侍るに迎へにまかり
はべりて後久しくまからざりしかば覺束なきよ
しの歌の返しに
[九]草深き谷の秋霧うづみてむ覺束なくぞ忘られぬべし
頭中將さねすけが許にまかりて昔物語などして
はべるによみてはべる
[一〇]おいて後昔を戀る涙こそこゝら人めも包まざりけれ
加階しはべるべき年もれてえしはべらで雪のい
たくふる日
[一一]憂世には行隱れなで掻曇りふるは心の外にもある哉
人のかうぶりしはべりしによみてはべりし
[一二]紫のたなびく雲をしるべにて位のやまの峰を尋ねむ
ぶくなる人の許にきぬの袖のかぎりを遣すとて
[一三]うらさびて常にも非ぬ衣手は袖の限を見るぞ悲しき
おほいまうちぎみのいへにて藤の花を見はべり
しに
[一四]藤の花こゝ紫の色よりもをしむ心をたれかそめけむ
ともときが四月一日有馬よりまうできて時鳥の
鳴きつるといひはべれば
[一五]時鳥まつ初聲をいつしかといかなる人にきて語なむ
堀河の中宮うせ給ひて御服すぐして内侍のまか
り出でしに雨のふりはべりしかば遣しゝ
[一六]故郷は有とも君は忘れけむ今日降出る雨はやまじを
盜人の入りて侍りし又の日人の搔繕をおこせて
はべりし返し遣はしゝに
[一七]淺からず思染めてし衣かは斯る時こそ袖もひぢけれ
すけゆきが家に冬の月の面白きにまかりて侍り
しに
[一八]いざ斯て折かざす明してむ冬の月春の花にも劣らざら鳧
男なくなりて侍る女の程なうこと人にあひては
べりしに遣しゝ

[一九]年經にし人の形見の藤衣すてやしてけむ又や懸たる
大貳くにのりすはうおこせてはべりしに
[二〇]位きぬ賴みそめてし色なれば最と深くも成ぬべき哉
又めのなくなりたる秋さむき風をとはぬことゝ
いひてはべりし返事に
[二一]こし方も見えで詠むる雁音の羽風に拂ふ床よ悲しな
年頃つかさもえ給はらで子日しに人のねていで
ゝはべりしに
[二二]谷深く沈む誓ひにひかされて老ぬる松は人も手觸ず
能宣が伊勢へ御てぐらの使にてまかりしに
[二三]天皇の鈴の限し有ければ振りでゝ行もをしからぬ哉
人の子うませてはべる七日の夜
[二四]千年をば松と竹とに任せつゝ八百萬代は云で思はむ
兵部卿のみこの入道してはべりしに
[二五]暮るゝ間も戀しかりける月影を入るゝ山べのつらくも有哉
兵部卿のみこの入道して侍りしに中務のよみて
はべりし歌の返し
[二六]月影をいるゝ山べはつらからで思入けむよをぞ怨むる
女三の宮になをありてよみはべりし
[二七]世を捨て山へ入る人いらましや昔の月の曇ざりせば
[二八]おひしげれ平野の宮のあや杉よ濃き紫の色重ぬべく
とほふるが子の七日の夜
[二九]世を渡す聖をさへや惱まさむ深き願のならず成なば
えいしちがもとに罷りてつかさのほしく侍るこ
とはくどくの爲なりといひてよみてはべりし
九月二十日のほどに大將の嵯峨野にまかりたり
しに詠みてはべりし
[三〇]こぬ人を何に譬て語まし暮るゝ秋惜む野べの心地を
歸り侍りて又の日かの大將の家にして時雨し侍
りしに
[三一]冬を淺みまだき時雨と思ひしを絕ざり鳧を老の涙も
同じ大將の家に長月ばかりのかふしし侍りしに
菊の花
[三二]秋深き離に老ゆる菊みれば花の上とも思ほえぬかな
十月ついたちごろ殿上のをのこども嵯峨野にま
かり出でゝ詠みはべる
[三三]秋はまだ遠くならぬに爭で猶立返りねと人に告ばや
と大貳よみてはべりし

[三四]秋深みまだきに老る菊の花立返れとも告げに遣ばや
さとの梅咲ける家にまかりて
[三五]梅の花こぞの色には優らじを深からむとも思ふ春哉
[三六]三輪の山印の杉は有ながら教へし人はなくて幾世ぞ
くにのりの朝臣のごくのおびかりてのぼりきて
そのおびかへし遣すとて
[三七]行先の忍び草にも成やとて露の形見におかむとぞ思ふ
三月ばかりかみと云ふ所に花のいとおもしろう
咲ける風の夜いといたう吹きはべりしかば
[三八]暮れてのみ後めたきを山櫻風の音さへあらく聞ゆる
屏風の歌梅に鶯なく
[三九]鶯の鳴き渡らずば山里のいつの梅とか知べかりける
人々山櫻を見る
[四〇]行く先はまだ遠けれど山櫻駒をとゞめて催されぬる
柳ある家
[四一]淺緑くる春毎にたえねども猶めづらしき青柳のいと
八月十五夜
[四二]月影の露はよろづよを經て置てのみ社見べかりけれ
[四三]霧はれぬ倉部の山の麓にも今宵の月を見る程ぞなき
九月九日
[四四]我宿の菊の白露けふごとに幾世積りて淵となるらむ
小一條の右の大臣の五十賀し侍りしに屏風の繪
竹のもとに花植ゑたり
[四五]弱竹のよ長き秋の露を置き常磐に花の色も見えなむ
濱つらを行く人衙鳴けばひきとゞめたり
[四六]千鳥鳴く浦ぞ過ぎうく思ほゆる我行方は遙なれども
柳櫻のある
[四七]花櫻飽かぬ匂の過ぎうくて千年經ぬべし青柳のいと
船にのりてありて八月十五夜
[四八]琴の音も池の底ひも大空のさやけき月に曳れてぞ澄む
これが返しえいしちがよみてはべりし又返し
[四九]長き夜の夢の春こそ悲けれ花を花とも思はれぬ身は
まかり歸るとて又
[五〇]山櫻見おきて歸る心をば何にたとへて人にかたらむ
みつなか常陸になりて下らむとしはべりしに
筑波嶺のつく〳〵物を思ふ哉君を見ざらむ程の心を
人の子生ませてはべる七夜
[五一]千年ふる松や何ぞゝ萬代の岩根に生ふる常磐也けり

こかうたうの兵部卿のみこ土佐へまかり下りし女三宮まつこといふ所に物語などして侍りてみこは下りみは京元知
小野宮の太政大臣七十の賀の御屏風の歌、青柳
三七青柳の絲の糸を繰返しいくらばかりの春を經ぬらむ
冬のきく
四七紫の千種の色しふかければ行末遠く見ゆるしらぎく
うづゑ
五七位山嶺につきぬる杖みればたゞ行末のさかの爲かは
或人のよませ侍りし舟にのりて梅の花見たるところに
六七春深み散らむ事だに惜き梅を波の寄にも任せたる哉
逢坂の關に人のまかりたる所
七七打はへて君しもすむじ逢坂の關に心をとゞめつる哉
子日して侍る
八七春の野に千代も無てや長へむいつか子日の松と知ねば
嵯峨野に人のまかりあるく所
九七君と我行逢ふ道を世と共に嵯峨野の原も有せてしがな
法師の詣で來たる所に蟬のなく
〇八蟬の聲聞からにこそ最どしくあつき思も燃增りけれ
歸り侍りしに
一八かつ見ても惑れけるは行歸り妹脊の山の遠近のみち
はべる所に菊の花の咲きたる頃山里なる所にま
からむとて人に遣しゝ
二八我が宿の垣根の菊の花盛まだ移ろはぬ程に來て見よ
公任の朝臣壺坂に詣でゝ侍りし道に菊の花岸づ
らに咲きて侍りしかば
三八老の菊衰へにける藤袴岸にのこりてありとこたへよ
極樂寺わたりに碁うち侍りしに紅葉散りてまか
らむと人に云ひ契りて其の日障る事ありしかば
えまからで云ひ遣しゝ
四八吹風の便にもしや聞てけむ今日と契りし山の紅葉も
八月ばかりに桂と云ふ所にまかりて月いとあか
き夜まかりて水の面にきようてかげ見え侍りた
りし同じ人に
五八桂河月のひかりに水まさり秋の夜深くなりにける哉
まかり歸り見侍りし人の許に遣しゝ
六八思ひ出づや人めながらも山里の月と水との秋の夕暮

正月申し文につけて侍りし藏人に
七八露の命もし留まりて年ふるも今年ばかりぞ秋の望は
つかさ給はらで同じ人の許に
八八いたゞきの霜打拂ひ鳴くたづを我身の外と思ける哉
なかふが許よりのぞみのえならぬを花につけて
とぶらひて侍りしかば
九八春を經て春待遠に見ゆるには秋の頼の無くば杜有め
同じ頃子日にまかりて
〇九諸共に生ひける松やいかゞ見む身を捨難み若菜つむとて
一九ほか見れば秋萩の花咲に鹿なども我宿の下葉のみ濃き
山寺にまかりしを或る人の法師になりたるなど
申し遣しゝ
二九つれ〴〵と詠る春の鶯は慰めてだになかば鳴かなむ
つかさめしの後うちに侍らひし人の許に遣しゝ
三九試に折もしあらば傳へなむ咲かで露けき櫻ありきと
山里にまかり通ふ所ありしを花見む春人の詣で
きたるに
四九訪人も有らじと思ひしに山里に花の便に人め見る哉
おなじ山里に侍りし頃人々とぶらはむとて詣で
きて物なと云ひ侍りしに
五九惜しと思ふ命や更に延びぬらむ終の煙こむる宿にて
七月七日かふしにあたりて侍りしに
六九最どしくいも寢ざる鶯と思哉けふの今宵に逢る七夕
又人の許に遣しゝ
七九云ふかひも今日は有じな七夕は後の秋待程の遠さに
かへし
八九行返り程はるかなる秋よりも名殘はいかゞ天の河波
つかさえ給はらで春人に遣しゝ
九九我宿の櫻は咲かで年ふれば外の花をもよそに見る哉
同じ頃くにのりの朝臣あまたの春をつくす事と
申して侍りしに
〇〇いかならむ物とかはしる侘つゝ老せぬ松の子日知らぬを
三月ばかり院の櫻折りにまかり侍りて
一〇さだかにも行き過ぎなやめ故郷の櫻見捨てゝ歸る魂
三月ばかりにある所にまかりたれば女車に誰そ
と問ひ侍りしかば内へ參ると云ひ侍りしにの給
へし

二〇百敷に行人あらば傳へなむ子日曳ける松も見えつと
肥後守むねとしがみまかりたる所を人々のぞみ
申すと聞き給へてうちの靫負がもとに遣しゝ
三〇誰か又年へたる身を振捨てゝ吉備の中山越むとすらむ
十二月宰相中將の朝臣むしゝ侍りしにゆき
むらかれて梅さかずと云ふことをよみ侍りしに
四〇打解けて爭で咲かぬと云べきを梅はた云じ雪を含て
正月ぢもくに申し文奉らする人の許に
五〇若からば後の春をも頼めつゝ待たまし物を愛を歎て
つかさ給はらぬことを前大貳くにのりの朝臣鶯
の音に知らせむなどやうによみてはべりし返事
に
六〇春毎に啼く鶯の音を知らで大方にのみ思ひけるかな
正月七日ばかりに人の許に
七〇最どしく老行冬は惜まれてありは替らぬ春を待らむ
ある所にいと小き梅の木の花咲きてはべりしに
八〇去年植し梅だに春を知る物を雪に埋れて年をふる哉
七月七日さぬすけの朝臣の久しく訪はぬ心ばへ
歌によみてはべる
九〇今日よりぞ荻の葉露けく吹風の音に附ても先問れける
二月つごもりばかりにひんがしの院にまかりて
櫻の花のすこしつぼめるを見給うて二三日ばか
りありてその院なる人のもとに遣しゝ
一〇咲きぬとも思遣りてぞ惜まるゝ心もとなく見えし櫻を
返し待ちかねて散りぬるよしをよみてはつかに
云ひ遣す
一一我宿に散ぬる花を惜む間にうとまれぬらむ外の櫻に
太上天皇の子日し給ひしに紫野にいでさせ給ひ
しに仕りし
一二君が引子日の松は朽めやはいざ斧の柄にすきて頼まむ
河原院と云ふ所に人々諸共に花見にまかりた
にそこには花も無くて櫻の遙に見え侍りしかば
一三春霞立ちなゝ寄りそ薄く濃き錦と見ゆる山の櫻に
おなじ所にて庭のあれたるを見はべりて
一四夕闇の月待つ程に惜しと思ふ秋の深くも成にける哉
津の國にまかりて漁するを見たまふ
一五漁火の影にも滿て見ゆれば浪の中にや秋を過ぐさむ
前の大貳くにのりの四十九日の物す行によみて

そへて侍る
六鐘の音に涙の玉を添てだに王の飾を添へむとぞ思ふ
山里なる所に住み侍りて秋の頃ほひ人に遣しゝ
七紅葉散る頃也危な山里の事ぞとも無く袖の濡るゝは
四月朔日頃にみたけに詣でゝ吉野山のわたりに
八古もの〻ぼりやしけむ吉野山山より高きよはひなる人
さねすけの朝臣子生ませて侍りし七夜
九日本を後ろやすくぞ思ひぬる國の乳房の粮もしき哉
桂なる所に參らむとすと人に云ひ侍りしそこに
はまからで月のをと云ふ所にまかり歸りて
〇二月の夜に改まるとも知ずして桂は又や君を待つらむ
すけなりが入道して侍りしに遣しゝ
一一風早み秋はて方の葛の葉と身を恨みつゝ頃をふる哉
とく遣したる返しはなくて外へ遣しける返事を
取りたがへてまで來たれば又遣す
一二とひ通ふ文の便りに散りにきと聞し櫻の花を見る哉
又人にかはりて女のもとに遣しゝ
一三思ひつゝ程ふる雨に涙川いとゞ深くもまさる頃かな
また
一四聞くごとに賴まるゝかな郭公覺束なくて過しつる哉
又ある女の返事にいなぶねと云ひて侍りしがと
に人に盜まれぬと聞きて
一五最上川賴めし舟のつれなくて漕離れぬる行先も見む
忍びて人すみはべりける女の親にかはりて
一六戀しくば解けてを結べ宮城野の小萩もわに結ぶ白露
しげすけが懸想しはべりける女の許に文を遣き
てとりに遣すとて
一七笛の音になきて恨みむ葛のねを吹返されむ木枯の風
男の人の國にまかる程に子をおろしてける女の
一八垂乳男の歸程をも知ずして爭で捨てゝし雁の貝こそ
大夫に住みはべしみすとてふるがおともせでは
べし
一九たらちをの親の心を知ねどもこの身に社は思侘ぬれ
返事　元輔
〇二〇結びけむ程をも知らで花薄秋を定めて穗には出なむ
或人に遣しゝ
二一うしと云て世を只管に背かねば物思知らぬ身ぞ成なむ
或人に遣しゝ

二二大井川井堰の水のわくらはに今日は賴めし暮にやは非ぬ
又
二三逢事を暫しもふれば白雪の積る思にきえぞしぬべき
人にかはりて
二四津の國の難波の蘆の轉寢は臥し所こそ猶わりなけれ
心變れる女に遣す人にかはりて
二五契りきな互に袖をしぼりつゝ末の松山浪越さじとは
あり所知らせぬ女に
二六篠葺のいぶせに人を有りとだに心細くも知でふる哉
時々まかる女にこと人まかると聞きて
二七憂きながら流石に物の悲しきは今は限と思ふ也けり
とて遣はしたりければ
二八思はむと賴めし事も有物を無名は立てゝ唯に忘れぬ
又つかはす
二九春日野の飛火の野守みし物を無名ぞと云はゞ罪も社あれ
服なる頃忍びたる人に
三〇藤衣はつるゝ袖の糸弱み絶えて逢見ぬ程ぞわりなき
人の許より歸りまできて又の日遣しはべりし
三一小夜深み歸りし空も無りしを孰こより置露にか有覽
又
三二朧氣に結びしつとも思はねばいつか刈べき森の下草
世と共に心一を燒鹽のとくともなしに君ぞしぬべき
また
三三諸共に心一を燒鹽のとくともなしに消えて見ゆらむ
また
三四慰むる心はなくて終夜かへすころもの袖ぞ濡れける
三五早く見はべりにし人の稻荷に詣であひてはべり
しにつかはしゝ
三六水上に祈かくとも今更に立ちかへらめや沖つしら波
早う物云ひ侍りし人の美濃國に侍るにまるべき
日ならで上り詣でくとて雪の降りはべりしかば
三七雪深み鏡の山は曇るともおぼつかなくて歸るべき哉
早う物云ひはべりし女の或所に物云ふ聲をきゝ
はべりて聲ばかりこそと云ひはべりしかば
三八住吉の松より越えし波の音も昔ながらに聞えける哉
女のもとへまかるに
三九よそにても思おこせば冬の夜の袂に凍る涙とくやと
また

〇三〇知人もなくてやみぬる逢事を爭で涙の袖にもるらむ
又人に
三一人知れず思ふ心の深さかな八重山吹の立よりもこで
また
三二春夜の割なく深て止りしを嵐の風のあらしとや云はむ
はやく住みはべりし女の許にまかりてはしの方
にはべるにはべる所の見えはべりしかば
三三古の常世の國やかはりにしもろこし計遠く見ゆるは
忍びたる女の鼓の忘れて侍りけるにつけて遣す
三四打はへて思はぬ事は世と共に人め包みも侘しかり鳧
或る女に
三五移香の薄くなりぬる焚物の煙る思に消えぞしぬべき
なか〳〵獨あらましかばと女の云ひ侍りしかば
三六獨のみすぐしけむにも劣らじな數ならぬ身の有も有かは
男はべる女に文遣しければひとりある人みやき
くとおりしに
三七雛鳧の誰かは獨有りと聞く知ても燃る身をいかにせむ
昔はべりし女に
三八忘深みあせに清水に深く共むすびし水は今も變らじ
被察の大納言太政大臣に若菜の樣なる事しはべ
りしに繼母の始わろくしてはべりしを思ひて
みはべりし
三九野べならば殊に見え鳧山賤の垣ほなせばみ飽ず摘しを
元輔がむすめ遠くまかりし
〇四〇年ふればいたゞき增る雪深み打拂へとも誰に云まし
出羽守にてまかるに遣す
四一君若み我身老ぬる別こそ暫しばかりと思ひなかれぬ
二月うちの藤
四二百敷に靡きて見ゆる藤なみは幾萬代の春をたゝまむ
四月女の許に遣しゝ
四三きく毎に賴まるゝかな郭公覺束なくて過してしより
五月五日講聞きはべりて
四四夏山の木暗き道を尋來て法の師に逢へる今日にも有哉
藏人所のをのこども河原に涼みしにまかり出で
て
四五吹風は涼しかりけり草茂み露のいたらぬ荻の下葉も
七月七日人の家にて秋を知らずと云ふ題を
四六七夕にとふ由もがな天川けふも契りて幾夜過ぎぬと

右衛門督入道しはべりしに遣はし丶

増鏡二たび世にやくもるとて塵を出ぬときくは誠か
人にかはりて

風早み秋果方の葛の葉と恨みつ丶のみ世をもふる哉
或人かうぶりしはべりしに

のほり行位の山の峰までも巌に生るまつのみ
山寺にまかりたりしを或人の法師になりにたり
と云ひはべりければ遣しける

○浮世若外になしやと家出しを道に入ぬと誰か傳へし
筑紫へ下る人の御ぞ給へるに

唐國の人にも見せむ葦鶴の巣立つとおろ　千代の毛衣
ある人に

○いか許思ふらむとは思ふらむ老て別る丶遠き道をば
筑紫にてたかわのみかとにはひたす（餘カ）たてまつりあげらる丶に

磨くらむ玉の光を頼む哉かすにもあらぬたてし瓦を
式部卿かねずみ早く死にけりとて訪はざりければ國よりよみてあげ丶る

わくらばに生きてもみゆる物ならば蘇るとて猶や疎まむ
むすめどもに裳きせけるに

白川の玉藻は今宵結び揚つ千歳にすまむ光しるしも
三月三日亭子院にて文など作りて

池近くうへなる庭の影見ればたけにけり哉春の深くも
又

春霞立ぬる月に隔てけむをりは春をもおもひやる哉
藤さきの宮にて子日に

藤さきの軒の巌に生ふる松今幾千世か子日過ぐさむ
大貳ともまさがうまごの袴着はべりしに

咲繁れ千世を込たるませの内に形見におほす撫子の花

朝忠集

朝忠の中納言の物にやりける文をほかに遣へて
もていきたりければ、女

○道知らぬ物ならなくに足引の山ふみ迷ふ人も有けり

返し

白樫の雪も絶えにし足引の山路を誰か踏み惑ふべき
同じ女に

逢事を松に懸れる白雪も久しき程に消えぞしぬべき
人に始めて

淀川の汀に生ふる若草の根をし尋ねば底もありなむ
又同じ人に

山城の瓜のつらさは見ゆれ共思心のならざらめやは
又大輔に

古は思ひ出でずや渡り河わたるてふ名は流れずや君
返し

流れての名にも人をば渡河逢瀬やあると頼みける哉
濡渡る水の下にもいかなれば戀てふいをの絶ず住覽
始めにや

池水の云出るとの難ければ水籠り乍ら年ぞ經にける
世の中騒がしき頃

人の身の老を果にしせましかば今日かあすかと急がざらし
女返し

心にも適はざりける命もて頼みも置ず常ならぬ身は
物言はで返し

徒に立ちかへりしに白波の名殘の袖の干る時もなし
返し

何しかは袖の濡るる覽白波の名殘有げも見えぬ景色を
殿居ものたがへて大輔の君の局にもて來たるが
なえたるに結びつく

故郷の奈良の都の始より馴にけるとも見ゆる衣かな
返し

ふりぬとて思も捨じ唐衣よそへてあやな恨もぞする
返し女

白波の立歸るまの濱千鳥跡や絶ぬるしるしなるらむ
式部の命婦に通ふ頃つゝむ事あるに

雲間には最ど詠ぞ増りける天の岩戸に隔やなからむ
程へて女のわづらひけれど知り給はで消そくやり給へれば

諸計思置くべき心あらば消えぬ先にぞ人の間はまし
返し

諸共にいざと云ずばしでの山越ゆ共越さむ物ならなくに
人知れぬ中の女男つかさ得て下るに男あはれと

思ひて

數へやる我魂のいかにして空しき空にもて離るらむ
七月七日人に

○七夕の天の戸渡る今日さへや遠方人の離面かるらむ
本院の侍從かねみちの君と寢たるを立ち聞きて

○よそに我人々ごとを聞しかば哀とも思あな憂とも思
又同じ女に

言はでのみ思心を知る人は有や無やと誰かとはまし
返し

○知る人や空にながらむ思ふなる心の内の心ならでは
本院ゆげひにかうじのかはにかきて

○薄けれど薄くもあらぬ山吹の八重の色にし思染れば
返し

重ぬれど薄き衣のやへなれば染てふ色の數は物かは
本院少將しはぶきしたるを聞きて

○下野やしはぶき拂ふ白露のかゝる折にや色變るらむ
かたらふ女の音せざりければ

○今年生ひの竹の一よも隔つれば覺束なくも成增る哉
返し

○幾世しも有じ物から若竹の生添はりけむ春さへぞ憂き
中將にてそら名立つ頃中納言と云ふ人のあだ名
立つに

○諸共に君も乾さなむ濡衣かゝる無名は我のみぞ立つ
をんなくらひと盥と云ひける東へ下るに

○別れ路を惜む心の櫻ばな逢坂までは散らであらなむ
醍醐の帝かくれさせ給ひて後好古のさいさうに
一夢かとぞ侘ては思ふ邂逅に訪人あれやまだや覺ぬと
返し

衰とも思ひぞ分ぬひば玉の同じ夢にて惑ふ身なれば
うまごに迎へられて歸りなむとて車こへど贈ら
ぬにほかに求めて歸りたるに

天の戸の明るまをだに許れてまだ夜に乗りて歸ぬる哉
權大納言桃園に通ひそめて四十日と云ふに

我妹子が閨の上なる蔦蘰草根も顯れて今朝や見ゆ覽
故内侍督の御許に忠房兵衛佐
逢事の宮仕にと侘びつるを今朝の袂ぞ露けかりける
御返し　大　將

人知れず打拂ひつる朝露に怪しく君も濡れにける哉

七いつとなく濡るゝ袂は古を忍ぶる露となりぬべき哉
返し
八人知れぬ野の下草と成れる身も露は同き露ぞ置けける
村上の御時の歌合、霞
九倉橋の山のかひより春霞年を積みてや立ち渡るらむ
鶯
一〇我宿の梅が枝に啼く鶯は風の便りに香をやとめこし
藤
一一紫に匂ふ藤波うちはへて松にぞ千代の色もかゝれる
春の暮
一二花だにも散で別るゝ春ならば今日を割なく惜ざらまし
戀
一三人傳に知せてしがな隠沼の水篭りにのみ戀や渡らむ
一四逢事の絶てしなくば中々に人をも身をも恨ざらまし
朱雀院の若宮の御裳着の御屏風に、柳
一五青柳の糸は影さへあやなれや氷も解けて今は結ばぬ
子日
一六子日する野邊ならずとも我宿の松も千年の蔭にやは非ぬ
櫻花を
一七心あて花に後れて止るらめ駒さへあやな過がてにする
撫子の花の開けたるを人の折ふに
一八初花を見てこそしのべ白露の置きて殘せる撫子の花
女郎花
一九仄にもかけ見てしかな女郎花野べに勝れる色は有やと
八月十五夜
二〇秋霧は月の心もこゝろみに入る山の端と立隱さなむ
あじろ
二一紅葉ばの流るゝ水を尋ねてぞ山の麓に我はきにける
村上の御時の齋宮の下り給ふに長奉送使にて下
りて歸るとて
二二萬代の始と今日を祈りおきて今ゆく末は神ぞ數へむ
權中納言の音羽の家にて
二三音羽山水はたぎりて流る共君が宿には勝りしもせじ
みちの國のかみに白河にてせんし給ふとて
二四別るともまた逢坂の關近く知も知ぬも惑はざりけり
二五行歸るものと知る/\怪くも別と云へば惜まるゝ哉
少將にて駒迎に本院の女御の御前を曳かせて御
前に參る人々ゐたる所によりて
二六望月の駒引渡る秋の夜は光さやけきものにぞ有ける
人に
二七時しもあれ秋しも人のつらければ思はね山に入ぬべき哉
女御に
二八富士のねをよそにぞ聞し今は我思に燃る煙なりけり
返し
二九印なき思と聞けば富士のねもかごと計の煙なるらむ
三〇流ての名にこそ有けれ渡河逢瀬ありやと賴みける哉
十一月右兵衛尉藤親盛からものゝ使にいきたる
に別を惜むとて人々歌よみけるに
三一別路のいとゝなれば唐綿こひて行べき方ならなくに
朱雀院の帝院にならせ給ひて御佛名のあしたに
けづりばなを插して御遊の折に
三二年毎に梅は折れ共いかなればよ折袖の露も變らぬ
これは醍醐のせんたいの御時にありけることど
も年號なんどの無ければ始もはてもえわかず
三三一本の千代に云べき藤の花限もなくぞよは咲ける
天暦三年正月子日院におはしましたりけるに
三四松を引き若菜を摘て昔より千年を祈る今日にぞ有ける
同じ五年内裏の殿上にて
三五斯しつゝ奉持ずば行先の限もなくぞ悲しかるべき
六年八月十五夜朱雀院の御門崩れさせ給ひて御
四十九日籠り侯ひける殿上の人々詠集めけるに
三六徒然と經にける年を數ふれば昔遠くもなりにける哉
御四十九日女房のなかにいれける
三七しぐれつゝ梢々にうつるとも露に後れし秋な忘れそ
重光朝臣の許に女誰とも知らで、朝忠朝臣
（後撰）

朝忠

三八世中は只今日のごと思ほえて哀昔になりや行くらむ
これはおほんわざはてゝしが詣でしたりける歌
三九そぼちつゝ物思ふ人の行道は流るゝ水ぞ知べ也ける
其の年十二月若宮の御袴着を奉らせ給ふに
四〇大原や小鹽の山の小松をば茂み千年の蔭となしてむ
たいふがもとより曙に出でゝ
四一諸共に折るとはなしに打解て見えやしぬらむ櫻の花

借二請右大辨入道之本一
建長六年十二月二十四日申刻書二寫之一同夜於二燈下一

校合了　在判

高光集

十月九日冷泉院の釣殿にて神無月といふことをか
みに置きて歌よませ給ふに
四二神無月風に紅葉の散時はそこはかとなく物ぞ悲しき
四三一條のおとゞの許なる人に
四四秋風に亂れて物は思へども萩の下葉の色はかはらず
母宮うせ給ひて年かへりて雨のふる日姫君に聞
えし
四五ひねもすにふる春雨や古へを戀ふる袂の雫なるらむ
御返し
四六神無月風に紅葉の散時はそこはかとなく物ぞ悲しき
一條のおとゞの許なる人に
四七秋風に亂れて物は思へども萩の下葉の色はかはらず
母宮うせ給ひて年かへりて雨のふる日姫君に聞
えし
四八ひねもすにふる春雨や古へを戀ふる袂の雫なるらむ
御返し
四九神無月風に紅葉の散時はそこはかとなく物ぞ悲しき
一條のおとゞの許なる人に
五〇秋風に亂れて物は思へども萩の下葉の色はかはらず
母宮うせ給ひて年かへりて雨のふる日姫君に聞
えし
五一ひねもすにふる春雨や古へを戀ふる袂の雫なるらむ
御返し
五二神無月風に紅葉の散時はそこはかとなく物ぞ悲しき
一條のおとゞの許なる人に
五三秋風に亂れて物は思へども萩の下葉の色はかはらず
母宮うせ給ひて年かへりて雨のふる日姫君に聞
えし
五四ひねもすにふる春雨や古へを戀ふる袂の雫なるらむ
御返し
五五神無月風に紅葉の散時はそこはかとなく物ぞ悲しき
一條のおとゞの許なる人に
五六秋風に亂れて物は思へども萩の下葉の色はかはらず
母宮うせ給ひて年かへりて雨のふる日姫君に聞
えし
五七ひねもすにふる春雨や古へを戀ふる袂の雫なるらむ
御返し
五八神無月風に紅葉の散時はそこはかとなく物ぞ悲しき
一條のおとゞの許なる人に
五九秋風に亂れて物は思へども萩の下葉の色はかはらず
母宮うせ給ひて年かへりて雨のふる日姫君に聞
えし
六〇ひねもすにふる春雨や古へを戀ふる袂の雫なるらむ
御返し
六一神無月風に紅葉の散時はそこはかとなく物ぞ悲しき
一條のおとゞの許なる人に
六二秋風に亂れて物は思へども萩の下葉の色はかはらず
母宮うせ給ひて年かへりて雨のふる日姫君に聞
えし
六三ひねもすにふる春雨や古へを戀ふる袂の雫なるらむ
御返し
六四神無月風に紅葉の散時はそこはかとなく物ぞ悲しき
一條のおとゞの許なる人に
六五秋風に亂れて物は思へども萩の下葉の色はかはらず
母宮うせ給ひて年かへりて雨のふる日姫君に聞
えし
六六ひねもすにふる春雨や古へを戀ふる袂の雫なるらむ
御返し
六七神無月風に紅葉の散時はそこはかとなく物ぞ悲しき
一條のおとゞの許なる人に
六八秋風に亂れて物は思へども萩の下葉の色はかはらず
母宮うせ給ひて年かへりて雨のふる日姫君に聞
えし
六九ひねもすにふる春雨や古へを戀ふる袂の雫なるらむ
御返し
七〇神無月風に紅葉の散時はそこはかとなく物ぞ悲しき
一條のおとゞの許なる人に
七一秋風に亂れて物は思へども萩の下葉の色はかはらず
母宮うせ給ひて年かへりて雨のふる日姫君に聞
えし
七二ひねもすにふる春雨や古へを戀ふる袂の雫なるらむ
御返し
七三神無月風に紅葉の散時はそこはかとなく物ぞ悲しき
一條のおとゞの許なる人に
七四秋風に亂れて物は思へども萩の下葉の色はかはらず
母宮うせ給ひて年かへりて雨のふる日姫君に聞
えし
七五ひねもすにふる春雨や古へを戀ふる袂の雫なるらむ
御返し
七六神無月風に紅葉の散時はそこはかとなく物ぞ悲しき
一條のおとゞの許なる人に
七七秋風に亂れて物は思へども萩の下葉の色はかはらず
母宮うせ給ひて年かへりて雨のふる日姫君に聞
えし
七八ひねもすにふる春雨や古へを戀ふる袂の雫なるらむ
御返し
七九神無月風に紅葉の散時はそこはかとなく物ぞ悲しき
一條のおとゞの許なる人に
八〇秋風に亂れて物は思へども萩の下葉の色はかはらず
母宮うせ給ひて年かへりて雨のふる日姫君に聞
えし
八一ひねもすにふる春雨や古へを戀ふる袂の雫なるらむ
御返し
八二神無月風に紅葉の散時はそこはかとなく物ぞ悲しき
一條のおとゞの許なる人に
八三秋風に亂れて物は思へども萩の下葉の色はかはらず
母宮うせ給ひて年かへりて雨のふる日姫君に聞
えし
八四ひねもすにふる春雨や古へを戀ふる袂の雫なるらむ
御返し
八五神無月風に紅葉の散時はそこはかとなく物ぞ悲しき
一條のおとゞの許なる人に
八六秋風に亂れて物は思へども萩の下葉の色はかはらず
母宮うせ給ひて年かへりて雨のふる日姫君に聞
えし
八七ひねもすにふる春雨や古へを戀ふる袂の雫なるらむ
御返し
八八神無月風に紅葉の散時はそこはかとなく物ぞ悲しき
一條のおとゞの許なる人に
八九秋風に亂れて物は思へども萩の下葉の色はかはらず
母宮うせ給ひて年かへりて雨のふる日姫君に聞
えし
九〇ひねもすにふる春雨や古へを戀ふる袂の雫なるらむ
御返し

おなじ頃おほん服にて七月七日のことにやありけむ

五六七夕の渡るせゝ有じ天の川藤の衣の濡てる夜なればといひしかば

六六鵲の橋なかれなば藤衣きしより身をや誰もすつべき

姫君にきこえし

七六常よりも秋の恨ある今年也野べの草葉も露に萎れて

八六七月七日宮の君に火奉るとて

秋風の始めて結ぶ白露はいひおく程もゆゝしかり鬼

御返事

九六草のはにかゝる心を白露と云おく程も久しかりけり

白川に涼みにわたりて

〇七白何の松の色こき影みれば執れが色も變らざりけり

姫君の御かたにこじと思へど來らしねこむと思へどとゞめられずと聞えたるを宮きこしめておほせられたる

一七頼むには繁さ増れと思へ共こられざらむはになき事也

おほんかへし

二七年をへて繁さ増ればみやま木のよゝをへつゝも詣でて

師の大納言の女左衛門の督にいかなりし折にか

三七いふ事の辭び難さに白露の起居てのみも明しつる哉

にしのご文たてまたしたりける返りごとのなか

にかく書きて加へたりける

四七年をへて思ふ心のしるしにぞ空も便の風は吹きける

又これも同じ人に

五七片時も忘れやはするつらかりし心も更に類なければ

七月七日九條殿の御まへにて君たち參りたまへるにけふの心よめと仰せられしに

六七打寄する波にまかせて七夕をたちな隠しそあまの川霧

これは一條殿　謙徳公

七七七夕のまちかげにする今宵すら何立ち騒ぐ天の河波

ほり河殿　忠義公

八七あすよりはゆゝしかるべき七夕の美しきは今宵也鬼

すけまさの朝臣を語らひわたりて殿居したる夜

もろともにいひてさはる事やありけむ見え給はざりければ又の日

九七程へたる覺束なさも有物を一夜ばかりに増る侘しさ

女七宮みこにならせ給ふよ人々歌よみ給ふに

〇八あやまたぬ種にしあれど姫小松心殊にも祈るけふ哉

天暦九年宇佐の使にきよとほくだるにせんせむと上のぬしたち歌よみ給ふついでに

一八露のごと儚き身をばおきながら君が千年を祈りやる哉

おとゞうせ給ひての年新嘗會の頃うちにも參らで内侍のもとに

二八霜枯の蓬の門にさし籠りけふの日影をみぬぞ侘しき

ある人のむすめに物語するほどに女の覺束ましとて諸共にねかして歸りてつとめて

三八戀やせむ忍やしむねともなくねずとも無て明しつる哉

女の親のかへし

四八ぬともなくねずとも無て明す夜を戀もな戀そまさらば忘るな

世の中はかなくのみ覺えて法師になりなむと覺ゆる頃

五八頼む夜が月のねすみの騒ぐまの草葉に宿る露の命を

村上の御門かくれさせ給ひての頃月をみて

六かく計りへ難くみゆる世中に羨ましくもすめる月哉

多武峰に住む頃人のとぶらひたる返事に

七八いかでかは尋ねきつらむ蓬生の人も通はぬ我宿の道

花盛に故郷の花を思ひやりていひやりし

八八みても亦復もみまくの欲かりし花の盛は過やしぬ覽

ある女の搖棟のきぬを十月ばかりにくとくにつくるに

九八もみぢ葉の落るほどしも唐衣錦かくるぞ哀なりける

たゞきよの衛門督五節だてまたしたまふにたきものかうばしう合すとてそらだきものすこしと

多武峰にこひ給へるに橘のなりたる枝にみをとりうてゝそれに入れてたてまたすとて

〇九末のよに成もて行けば橘の昔のかには似可くも非ずかへし　衛門督

一九香をとめて戀しもしるく橘のもとの匂は變らざり鬼

多武峯に住む頃あさみつの大納言びはの北の方わづらひ給ふ祈りせよとのたまふに

二九昔より聞ならしこしいかゝ崎淺からじとを思倣さなむ

返事　大納言

三九早くより聞馴しけるいかゝ崎末の人さへ頼らしき哉

比叡の山にすみ侍る頃人のたきものを乞ひて侍りければはべりけるまゝに梅の花の僅にちり殘りけるにつけて遣すとて

四九春立て散果てにけり梅の花唯香ばかりぞ枝に殘れる

在二新古今一歌

五九白露のあしたゆふべに奥山の苦の衣は風もとまらず

六九百敷の内のみ常に戀しくて雲の八重立山はすみうし

友則集

春立つ日

七九水の面にあや吹亂る春風や池の氷をけふはとくらむ

寛平の御時の歌合、初春

八九花の香を風の便りにたぐへてぞ鶯誘ふ知べにはやる

梅の花折りて人にやるとて

九九君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知人ぞ知る

櫻の花のもとにて年の老いぬるとを思ひて

一〇色も香も同じ昔に咲くらめど年ふる人ぞ改まりける

寛平の御時きさいの宮の歌合

一一三吉野の山べに咲ける櫻花雪かとのみぞ誤たれける

二一久方の光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ

雪の降れるを見て詠める

三一雪降れば木毎に花ぞ咲にける鶯を梅と分きて折まし

音羽山を越えけん時時鳥聞きて詠める

四一音羽山今朝こえくれば時鳥梢はるかに今ぞなくなる

屏風の歌、左大將の四十賀の料

五一珍しき聲ならなくに時鳥こゝらの年をあかずも有哉

寛平の御時中宮の歌合

六一五月雨に物思ひ居れば時鳥夜深く鳴ていづち行らむ

七一夜やくらき道や惑へる時鳥我宿をしも過ぎがてに鳴

八一夕されば蓌よりけに燃れども光見ねばや人の難面き

九一けふよりは天の河原はあせなむ浮瀬とも無く唯渡なむ

〇二天の河流れてこふる七夕の涙なるべし秋のしらつゆ

一二天河瀬々の白波高けれど唯渡りきぬまつにくるしみ

二二天の河戀しき時ぞ渡りぬるたぎつ涙に袖は濡れつゝ

寛平の御時殿上の人々歌よみけるに人に代りて詠める

一天河淺瀬白波たどりつゝ渡り果てぬに明ぞしにける
二聲立て鳴ぞしぬべき秋霧に友惑はせる鹿には非ねど
三誰聞けと聲高砂にさをじかの長々し夜を獨なくらむ
四打はへて影とぞ賴む嶺の松色どる秋の風にうつるな
五夕されば佐保の河原の河霧に友惑はせる千鳥鳴くも
六惟貞の親王の歌合に
七秋風に初雁音ぞ聞ゆなる誰が玉章をかけて來つらむ
八大和國に下りけるに佐保山に霧のたちけるを見て
九誰が爲の錦なればか秋霧の佐保の山べを立隱すらむ
寬平の御時繪に菊の花のもとに人立てる書きたるを見て
〇一花見つゝ人待つ時は白妙の袖かとのみぞ誤たれける
惟貞のみこの歌合に
一一露乍　折てかざゝむ菊の花老せぬ秋の久しかるべく
立田山を越えて詠める
一二斯計りもみづる色の濃ければや錦立田の山と云らむ
一三見るからに秋にも成ぬ立田姫紅葉染むとや山べ知覽
一四初時雨降れば山べぞ思ほゆる執の方か先もみづらむ
一五唐衣立田の山のもみち葉はもの思ふ人の袂なりけり
大澤の池のかたを作りて菊を植ゑたるに
一六一本と思ひし菊を大澤の池のそこまで誰かうゑけむ
一七春霞たなびく山の櫻花見れどもあかぬ君にもあるかな
一八我戀を忍びかねては足曳の山たち花の色に出ぬべし
一九宵の間も儚く見ゆる夏蟲に惑ひまされる戀もする哉
寬平の御時中宮の歌合に
〇二蟬の聲聞けば悲しな夏衣薄くや人のならむと思へば
一二紅の色には出でじ隱れ沼の下に通ひて戀はしぬとも
我より高き女を思ひかけて
二三玉潛く蜑ならねども渡つ海の底ひも知らず思入る哉
二四みるも無くめもなき海の濱に出て返る〳〵も恨つる哉
二五我心いつ習ひてか見ぬ人の思ひやりつゝ戀しかる覽
二六我宿の菊の垣根に置霜の消かへりてぞ戀しかりける
二七思へども儚き物は吹風の音にも聞かぬ戀にざりける
二八秋風は身を分けても吹かねども人の心の空になる覽
二九笹の葉に置く霜よりも獨ぬる我衣手ぞさえ增りける
三〇君てへば見まれ見ずまれ富士の嶺の珍しげなく燃る我身を
三一河の瀬に靡く玉藻の水隱て人に知られぬ戀もする哉
一二宵々にぬぎて我ぬる唐衣かけて思はぬ時の間もなし
一三東路のさやの中山なか〳〵に何しか人を思ひ初けむ
一四敷妙の枕の下に海はあれど人をみるめは生ずぞ有ける
一五年を經て消えぬ思はありながら夜の袂は尚凍りつゝ
一六とに出て云はぬ計ぞみなせ河下に通ひて戀しき物を
一七命かも何そも露のあだ物はあふにしかへば惜からなくに
一八立返り思ひ出づれど石上ふりにし戀は忘られにけり
一九下にのみ戀れば苦し玉の緒の絶て亂れむ人な咎めそ
二〇浮乍ら消ぬる泡と成なゝむ流てとだに賴まれぬ身は
二一雲もなく凪たる朝の我なれや厭てのみ世をばへぬ覽
本院の大臣の御前にして四十よになるまで無官
にてはべるよしをまをして
二二春々の數は惑はず有ながら花咲かぬ木を何に植けむ
返し
二三今迄になどかは花の咲ずして四年餘の年ぎりをする
人のもとよりとのゐ物おこせたりけるを返すとて
二四蟬の羽のよるの衣は薄けれど移香濃くも成にける哉
二五筑紫にありける時に通ひて碁など打ちける人の
もとに京へ上りて後にやりける
二六故郷は見しとも有ず斧の柄の朽ちし所ぞ戀しかりける
二七下の帶の道はかたゝ〳〵別る共行廻ても逢むとぞ思ふ
藤原のたゞゆきが身の沈むよしを嘆くをとぶら
ひにやりたる返事に菊の花を折りて
二八枝も葉も移ろふ秋の菊見れば果は影なく成ぬべら也
とありける返事に
二九雫もて齡延ぶてふ花なれば千代の秋にぞ影はみつ覽
親のよみたりける歌ども書き集めて惟喬のみこ
にとらすとて奥に書きたりける
三〇ならば言の葉さへも消なゝむ見れば涙の瀧增り鳥
藤原敏行失せて後にかの家に宿りける
三一寢ても見ゆ寢ても見え鳥大方は空蟬の世ぞ夢には有ける
三二取りも敢ぬ年は水にや流るてふ老の心の淺く成行く
〔をみなへし〕
三三白露を玉に拔くとや笹蟹の花にも葉にも糸をみなへし
三四朝露を分けそぼちつゝ花見むと今ぞ山べをみなへし知ぬる

小町集

花をながめて
三六花の色は移りに鳥な徒に我身世にふる詠めせしまに
ある人心かはりてみえしに
三七心から浮たる舟に乘初めて一日も波に濡ぬ日ぞなき
前渡りし人に誰ともなくてとらせたりし
三八空を行月の光を雲ぬよりみでや闇にて世は果ぬべき
返しあしたにありしに
三九雲はれて思ひ出れど言のはのちれる嘆は思出もなき
對面しぬべくやとあれば
四〇みるめかる蜑の行かふ湊路に勿來の關もゐは据ぬを
女郎花いと多く堀りて見るに
四一なにしおへばなを懷しみ女郎花われに鳥な我れが名立に
四二やよやまて山時鳥言づてむ我れ世中に住わびぬとよ
あやしき事いひける人に
四三結びきと云ける物を結松爭でか君にとけてみゆべき
めのとの遠き所にあるに
四四よそにこそ峯の白雪と思ひしに二人が中に早立に鳥
山里にて秋の月を
山里のあれたる宿を照しつゝ幾夜へぬらむ秋の月影
又
四五秋の月いかなる物ぞ我心何ともなきにいねがてにする
人と物いふとてあけしつとめてかばかり長き夜
に何事を終夜侘び明しつるぞとあひなうとがめ

し人に
○八秋夜も名のみ也鳧逢ふと云へどそともなく明ぬる物を
かへし
一長しとも思ひぞ果ぬ昔より逢人からの秋のよなれば
やんごとなき人の忍び給ふに
二現にはさも社あらめ夢にさへ人め包むと見が侘しさ
人のわりなく怨むるに
三蟹の住里の知べも有なくに恨みむとのみ人の云ふ覧
ゆめに人のみえしかば
四思つゝぬればや人のみえつ覧夢と知せば覚ざらましを
これを人に語りければ哀なりけることかなとあ
るかへし
五轉寝に戀しき人をみてしより夢てふ物は頼み初てき
かへし
六頼まじと思はむとても如何せむ夢より外に逢夜無れば
七最せめて戀しき時はむば玉の夜の衣を返してぞぬる
人の心かはりたるに
八色みえでうつろふ物は世中の人の心の花にぞ有ける
みもなき苗のほに文をさして人のもとへやるに
九秋風にあふ頼こそ悲しけれ我身空しく成ぬと思へば
人のもとに
○九渡つ海のみるめは誰か刈果し世の人とになしと云すば
常にくれどえ逢はぬ（男カ）女のうらむる人に
一〇みるめなき我身を浦と知ねばや枯なで蟹の足たゆく來る
二人に逢む月の無夜は思ひ置て胸は尻火に心やけなり
三夢路には足も休めず通へ共現に一めみしとはあらず
四かざま待つあまし潜かば逢事の便に波は海と成なむ
五我を君思心のけすのへにありせば正に逢みてましを
六よそにてもみずは有とも人心忘れ形見をつみて忍ばむ
七宵々の夢の魂あしたゆく有とも待たむ訪らひにこそ
ねでのしまといふ題を
八おきの居てみを焼くよりも侘しきは都鵆べの別也鳧
忘れぬるなめりと見えし人に
九今はとて我身時雨に降ぬれば言の葉さへに移ひに鳧
かへし
○○人を思ふ心木葉にあらば社風のまに〳〵散も紛はめ
定まらず哀れなる身をなけきて
一○蟹のすむ浦漕舟の楫をなみ世をうみ渡る我ぞ悲しき
いそのかみといふ寺にまうで〻日のくれにけれ
ばあけて歸らむとてかの寺に遍昭ありときゝて
心みにいひやる
二○岩の上に旅ねをすれば最寒し苔の衣を我に貸さなむ
かへし　遍昭
三○世を背く苔の衣は唯一重貸ねばうとしいざ二人ねむ
中たえたる男の忍びてきて隠れてみけるに月の
いと哀なるをみてねむことそいと口惜しけれ
とすのこに詠むれば男いむなるものをといへば
四○獨寝の侘しきまゝに起ゐつゝ月を哀といみぞ兼つる
忘れやしにしとある君たちのの給へるに
五○陸奥の玉造江にこぐ舟のほにこそ出ね君を戀ふれど
康秀が三河になりてあがた見はいでたゝじやと
いへる返りごとに
六○侘ねれば身を萍のねを絶て誘ふ水有らばいなむとぞ思ふ
安倍のきよゆきがかくいへる
七○包めども袖にたまらぬ白玉は人をみぬめの泪也けり
とある返し
八○おろかなる涙ぞ袖に玉はなす我は堰敢す瀧つせなれば
九○みるめあらば恨みむやはと蟹間はゞ浮びて待む泡沫のまも
一○いつはとは時は分ねど秋のよぞ物思ふ事の限也ける
一一鯛のなく山里の夕ぐれは風よりほかにとふ人ぞなき
一二百草の花の紐とく秋の野に思ひたはれむ人な咎めそ
一三酒ざきぬや蟹のかごまも待ずしてにくさひかける蟹の釣舟
五月五日さうぶにかきして人に
一四蒿蒲草人にねたゆと思しを我身の憂に生ふる也けり
一五こぬ人をまつと詠めて我宿のなどて此暮悲しかる覧
一六露の命はかなき物を朝夕に生きたる限逢見てしがな
一七人知れぬ我が思に逢ぬまはみさへぬるみて思はゆる哉
一八戀侘ぬ暫もねばや夢の内にみゆれば逢ひぬみれば忘れぬ
一九ものをこそ岩ねの松も思らめ千代ふる末も傾きに鳧
○木枯の風にも散らで人しれず憂きとのはの積る頃哉
二一夏の夜の侘しきとは夢にだにみる程もなく明る也鳧
二二現にもあるだに有を夢にさへ飽でも人のみえ渡る哉
二三春雨のさはにふる如音もなく人に知れでぬるゝ袖哉
四のみこの失せ給へるつとめて風ふくに
二四今朝よりは悲しき宮の秋風や又逢坂も有じと思へば
二五我身にはきにける物を憂事は人の上とも思ひける哉
二六心にも叶はざりける世中を憂身はみじと思ひける哉
二七妻戀るさを鹿の音にさよふけて我片戀を明し兼つる
二八卯花のさける垣ねに時ならでわがごとぞ鳴く蛬の聲
二九秋の田の假庵にきぬるいな方の否とも人に云まし物を
井手の山吹を
三○色も香も懐しきかな蛙なくゐでのわたりの山吹の花
三一霞たつ野をなつかしみ春駒の荒ても君がみえ渡る哉
三二雖波めの釣する人に目枯けむ人も我ごと袖やぬるる覧
三三千度とも知られざり鳧泡沫の憂身はいさや物忘して
人の背よりしりたりといふに
三四今はとて變らぬ物を古もかく社君につれなかりしか
三五波の面を出入る鳥は水底を覺束なくは思はざらなむ
あしたづの雲居の中にまじりなばなどいひて失
せたる人のあはれなる頃
三六久かたの空にたなびくうき雲の
つゆ草の露のいのちもまろこ菅
繁さぞまさる
森の日の
秋の夜の
月のひかりも
世の中に
我身こそ
哀れなれ
生たるに
ながらの橋の
鳴わたり
くにさみの
雲の上の
みとはなるべき
うける我身は
思ふことのみ
あら玉の
行く年つきは
木の下かげも
冬の夜の
時雨のおとも
うき事も
つらきもしれる
ひる時もなく
袖の浦の
思ひつゝ
いきの松ばら
瀬に居たづの
うらこぐ舟の
ぬれ渡る
いつか浮世の
かれ離れ
人にあひみて
此世には
思ふことなき
日の照り侍りけるに雨乞の和歌詠べき宣旨有て
三七千早振神もみまさば立騒ぎ天の戸川の桶口あけ給へ
やり水に菊の花のうきたりしに
三八瀧の水の木の本近く流れずば泡沫花も有とみましや
三九限なき思のまゝに夜もこむ夢ぢをさへに人は咎めじ
かれたる淺茅に文さしたりける返ごとに小町が姉
四○時過て枯行くをのゝ淺茅には今は思ぞ絶ず燃えける
あだなに人の騒がしういひ笑ひける頃いはれけ
る人のとひたりける返りごとに
一四うき事を忍ぶる天の下にして我濡衣はほせど乾かず
二四ともすればあだなる風に漣の廉くてふ如我雖けとや

三ぼ忘草我身につむと思ひしは人の心におふる也けり
四四我如く物思ふ心けの末に有りせば正に逢見てましを
四五みちの國へいく人にいつ計にかといひたりしに
四六陸奥は世を浮島も有と云を關小搖ぎの急がざらなむ
　定めたるともなくて心ばそき頃
四七須磨の浦ごく舟の楫よりも寄べなきみぞ悲しかりける
　いかなりし曉にか
四八獨寢の時は待れし鳥のねの稀にある夜は侘しかり鳧
四九流れてと頼めし事は行末の涙の上をいふにぞ有ける
　見し人のなくなりし頃
五〇有るはなく無きは數そふ世中に哀孰の日まで歎かむ
五一夢ならば又みる宵も有なましに中々の現なりけむ
一ノ武藏野に生ふとし聞けば紫の其色ならぬ草も睦まし
二ノ世中は飛鳥川にもならばなれ君と我とが中し絕すば
三ノ武藏野の向ひの岡の草なれば根を尋ねても哀とぞ思ふ
四ノ見し人も知られざり鳧泡沫の憂身はいさや物忘して
五ノ世中に孰ら我身の有てなし哀とや云むあなうとや云む
六ノ我身社有ぬかとのみ辿られ訪べき人に忘られしより
七ノ長らへば人の心もみるべきに露の命ぞ悲しかりける
八五　中を厭ひて蟹の住かたは憂めのみ社みえ渡りけれ
九ノ儚くて雲と成ぬる物ならばかすまむ空を哀とは見よ
一〇我のみや世を驚と鳴きわびむ人の心の花とちりなば
一一はかなくも枕定めず朝夕語りせし人をまつとて
一二世中の憂もつらきも告なくにまづ知る物は泪也けり
一三吹き結ぶ風は昔の秋ながら有しにもあらぬ袖の露哉
一四あやしくも戀めがたき心かな嫉捨山の月もみなくに
一五しどけなきねくたれ髪をみぜどやはた隱れたるけさの樣
一六誰をかもまつちの山の女郎花秋と契れる人ぞ有らし
一七白雲の絕ず靈く峰にだに住めば住ぬる物にぞ有ける
一八紅葉せぬ常磐の山に吹く風の音にや秋を聞渡るらむ

他本歌　十一首

一九いつとても戀しからずは非ね共怪しかりけり秋の夕暮
二〇長月の有明の月の有つゝも君しもまさば待社はせめ
二一淺香山影さへみゆる山の井の淺くは人を思ふ物かは
　なが雨を
二二詠めつゝ過る月日も知ぬまに秋の景色に成にける哉
二三春の日の浦々毎を出てみよ何業してか蟹はすぐすと
二四木間より洩り來る月の影みれば心盡しの秋はきに鳧
　音にきく　老ず死なずの　藥もが　君が八千代を
　わかえつゝ見む
二五哀てふ事こそうたて世中を思ひ離れぬほだし也けり
二六世中は夢かうつゝか現とも夢とも知ず有てなければ
二七君が代に逢坂山の石清水木がくれたりと思ひける哉
二八哀てふ言のは毎におく露は昔を戀るなみだなりけり
二九大荒木の杜の下草繁りおひて深くも夏の成にける哉
　秋
三〇山里は物の寂しき事社あれ世の憂よりは住よかりけり
　又他本　五首　北相公本也
三一小倉山消し照射の末もがなしか習はすば安くねなまし
三二別つゝみるべき人も知ぬまに秋の氣色に成にける哉
三三形見こそ今は仇なれ此なくば忘るゝ時も有まし物を
三四はかなしや我が身の果よ淺緑野べに鬘と思へば
三五花咲てみならぬ物は渡つ海の挿頭にさせる沖つ白波

忠岑集

ふるうた召しゝ時添へて奉る

五ノくれ竹のいかにして有きてふ言の葉を跡となし積れることを古へに心地して誇らしき身也しを御垣もり中にては近ければ鳴き暮し責らるゝ數ふれば わたくしの年たかき長らへば溺ほれむしら山の

ふるうたの召しゝ時添へて奉る

よゝの古ごとの思ふこゝろを人まろこそは聞えとて今もおほせの麿につげとや これを思へば空にほえけむ一つこゝろは近きまもりのくる方に思ほえず今はのやまし夏はうつせみ袖をかし身乍らになりに鳧攻くれば斯しつゝ立つ波の越のくになるおとはの山の

徴りせば

いかほの沼のあはれ昔べのばへましのはしも乍ら末の世までの下れるは積れる覺けだ物の思ほえず斯はほこれぞたれかは秋の聞ざりき春はかすみに鳴き暮し秋はしぐれにかゝる侘しきいつゝの六に老のかすさへ斯しつゝ長柄のはしの老のしわにや惜ければ成ぬともかしらは白く

いかほの沼のあはれ昔べのばへましのはしも乍ら末の世までの塵につげとや これを思へば空にほえけむ一つこゝろは近きまもりのくる方に思ほえず今はのやまし夏はうつせみ袖をかし身乍らになりに鳧攻くれば斯しつゝ長柄のはしの老のしわにや惜ければ成ぬともおとはの山の

くてあけはべりしかば其の女に
(五)夢よりもはかなきものは夏の夜の暁方の別なりけり
寛平の御時中宮の御屏風にあまのかづきたる所
(六)心ざし深く水底かづきつゝむなしくいづな沖つ島守
世の中常ならず心うかりし頃
(七)ぬるが中に見るなのみやは夢といはむ儚き世をも現とはみず
相知りたる人のすゞろひの使に遠き國に下るに
(八)瀬をせけば淵と成つゝ淀みけり別を止むる柵ぞなき
或る女に物云ひたりと騒がれし頃はひ
(九)陸奥に有と云ふなる名取河無名とりては侘しかり鳧
后の宮の御屏風に瀧おちたる所
(一〇)落ちたぎつ瀧の水上年積り老にけらしな黒き筋なし
初春
一春立と云ふ計にやみ吉野の山も霞みて今朝は見ゆ覽
仲
二春はなほ我にて知りぬ花盛心のどけき人はあらじな
秋
三山里は秋社殊に悲しかりけれ鹿の鳴音に目を覺しつゝ
泉の右大將の四十賀の屏風に
四濁なき清瀧川のきよければ底よりせくと見ゆる藤波
秋
五千鳥鳴く佐保の川霧立ぬらし山の木葉も色變りゆく
春の始
六春來ぬと人は云へども鶯の鳴かぬ限は非じとぞ思ふ
惟貞のみこの御歌合に
七雨降れば笠取山の紅葉ばは行かふ人の袖さへぞ照る
八神なみの三室の山を分行けば錦立きる心地こそすれ
九山田守る秋の假庵に置露はいなおほせ鳥の涙也けり
寛平の御時后の宮の歌合に
一〇三吉野の山の白雪踏分けて入にし人の音つれもせぬ
一一白雪の降りて積れる山里は住人さへや思ひ消ゆらむ
一二鹽竈の磯のいさごを包みもて逢夜の數と思べらなる
戀歌
一三春日野の雪間を分て生出來る草のはつかに見えし君かも
一四獨ぬる我敷妙の鹽竈はうき玉なれやよるかたも無し
一五月影に我身を變ふる物ならば思はぬ人も哀とや見む
友則がなくなりにし後
一六時しもあれ秋やは人の別るべき有を見だに戀しき物を
思に籠りたる人を訪ふとて
一七墨ぞめの君が袂は雲なれや絕えず淚の雨とのみ降る
相知りたる人の住吉に詣づと聞きて
一八隱沼の下より生る根芹のねぬ名は立たじくるな厭ひそ
松風を聞きて
一九松の音に風の調を合せては立田姫こそ秋はひくらし
相知りて侍る人日頃久しく訪はずしていきたる
にかくせば
二〇住の江の松に立寄る白波のかへる折にや音をば鳴覽
暇ありてこもり居て侍るに人の訪はねば
二一大荒木の森の草とや成にけむ假に來て訪ふ人も無身は
三月三日ある處にて土器とりて
二二三千歳へてなるてふ桃の今年より花咲春に成にける哉
雖レ入二集不一レ見二家集一歌
二三年をへて濁だにせぬ錦江には玉も却りて今は住べき
二四子日する野べに小松の徵せば千代の例に何を引まし
二五色々の木の葉流るゝ大井川しもは桂の紅葉とや見む
二六夏果つる扇と秋の白露と孰れかまづは置かむとす覽
二七東路のさやの中山清かにも見えぬ雲居にゝなや盡さむ
二八年經れば朽ちこそ增れ橘柱昔ながらの名だに變らで
二九腕く共いざ白露に身を做て君があたりの草に消なむ
三〇惜むべき庭の櫻は盛りにて心ぞ花にまづうつりける
三一天原宿かす人のなければや秋くる雁の音をばなく覽
三二佗人の心の內を比ぶるに富士の山とやした焦れける
三三山の端は斯こそ秋も時雨しか何を今朝より冬と云覽
三四逢事の今は片帆になる舟の風待つ程は寄る方もなし

賴基集

天曆の御時屏風に春日野に若菜つみたる處
三五若干の年摘みくれど春日野に生る若菜は老せざり鳧
三月
三六花だにも散殘らなむ過ぬ共惜むに止る春かともみず
秋の夜召ありて春宮に參りて雁のなくを
三七鳴雁はくるか歸るか覺束な春の宮にて秋のよなれば
寛平の御時の御屏風に
三八白露の奥手の稻も刈てけり秋はて方に成やしぬらむ
三九照月の流るゝ水し清ければ上した秋の紅葉をぞみる
四〇水底に影のみ見ゆる紅葉は秋の形見に波やをるらむ
四一霧のたつ紅葉の錦亂るれば行へも知ぬ物にもある哉
きたの宮の御裳着給ひしに內侍の督殿に贈られ
たる御屏風に笠取の山のほとりを人ゆく程に時
雨のすれば袖をかづきたる處
四二笠取の山を賴しかひもなく時雨に袖を濡してぞ行く
宇多の院にて梅の花をよみ侍りける
四三ちる迄はきつゝだにみむ春雨に我を濡すな梅の花笠
同じ院の中宮に四十の賀奉り給ふ竹の杖の歌
四四一節に千代をこめたる杖なればつく共盡じ君が齡は
ある所の屏風に志賀の山越に瀧おちたる所
四五水上に掬ぶ人なみ白玉は山のをよりぞぬきて落ける
ある人の扇にかく歌
四六涼しさはやかて心に任せたる扇を煽ぐ風ならずして
朱雀の院の御屏風 子日に松ひける處に鶯なく
四七子日する野べに小松を引連れて歸る山べに鶯ぞ鳴く
宇多の院の御前に松の末に藤の花さきかゝりた
るを、三月つごもり
四八藤の花まつのみならず暮ぬべき春の末にも咲懸り鳧
先代の皇后の九條の右大臣殿の五十賀奉り給ふ
御屏風に、年暮れて竹のある家
四九長きよを思しやれば呉竹の暮行く冬も惜からなくに
ある處の屏風の繪に、志賀の山越の處
五〇なには負へぞなれるもみぢ葉の瓜生坂春の霞の立てるなる
人の扇にかゝむとて侍るに
五一內もともみえぬ扇の程なきに涼しき風を爭ひ込けむ
亭子院の御使に越へ行く人に帶をとらするにた
ゝなるよりはとて
五二ゆふ帶のとくはあふ共別なば越を巡らむ程の久しさ
同じ院の御前にもゆみの紅葉に簑蟲のかゝりた
るを歌仕うまつれと仰せあるに
五三紅葉ばの枝に懸れる簑蟲は時雨ふる共濡じとや思ふ
女のもとに始めて文やるに
五四初霧の空に立つる心かな思はれむともしらぬ我身を
大井川の行幸に樣々の題をよませ給ひしに秋の

水に浮ぶといふ題を

五九色々にうける心も秋の水紅葉ながすと人やみるらむ

秋山を

六〇白露はわきておかじを秋の山などか紅葉も薄くこかるむ

六一紅葉散る

六二紅葉の流渦まく淵をこそくれ行く秋の泊りとはみれ

旅の雁

六三すむ里の定めなければ旅の雁空にぞ浮て鳴渡るなる

菊の花

六四御幸をばけふとや兼て菊の花昨日の色のあせて殘れる

鶴澤に立てり。

六五河近み住ひすればや眞鶴の流れて千年ありと云るゝ

鶴馴れたり

六六白浪や身によせ懸るとも思はで立も騒ず馴るゝ鳥哉

江の松老いたり

六七えに深く年ふる松は水底の影にさへ祉色は見えけれ

六八天暦の御時の屏風に七月七日人いでゝて空を詠めたり

六九逢事は別れて後も七夕の思ひはるべき隙もなきかな

五月五日駒くらべする處

七〇若駒とけふに逢くる菖蒲草生ひ後るゝや祭るなる覽

七一潮たるゝ身は我とのみ思へ共よそなるたづもねをぞ鳴なる

入二拾遺集一歌

源重之集

三位大貳佐理は故小野宮の大殿實賴の御むすこなり童より殿上し給へり宰相を返し奉られて下られたる人なり道風おきな立ちてはいとゞ賢き手書なりとて公も下されたることを悔しきことに仰せられて御手本は筑紫に下し遣してぞ書かせ給ふかの御手本書きに下されたるに書くべき歌どもよみてえむとの給へば新らしき昔のも中頃のも書き集めて奉る此の歌の斯くも心に適はぬうき物におぼして筑紫に下るにやあらむ大貳かくておもゝたまへるよしどもあるべし所々をかしきなどもあめり

七二松が枝に住て年ふるしらつるの戀しき物は雲居也鳥

七三春はもえ秋はこがるゝ竈山煙絶えぬや紅葉なるらむ

七四都へといきの松原いき歸り君が千年に逢むとぞ思ふ

七五幾世にか數へ盡さむ箱崎の松の千年も一つならねば

七六見よや君しかの島へと急げ共鹿子斑らに波ぞ立ける

七七秋くれば戀するしかの島人も己が妻をや思出づらむ

七八染川の岸に寄せくる白波は淵にも違ふ色にぞ有ける

七九筑紫へと悔しく何に急ぎけむ數ならぬ身のうさや變れる

八〇名を賴む近の島へと漕ぐれど今日も舟路に暮ぬべき哉

八一白雲の懸れる嶺と見えつるはちかの島には非ぬなるべし

八二村雨の濡るゝ衣の文なきに猶簑島の名をや借らまし

八三雨雲の下にのみ住む我なれば思事なき時もぬれけり

秋

八四紅葉を己が物とも見てしがな見るに諫むる人は無れど

八五初霜の置かぬだに濃き紅葉の色の盛を誰に見せまし

八六八月七日ばかりに庚申の夜大貳のみたちにて筝に雁の心ある歌につけていだされたり

八七琴の音に引きつらなれる初雁の己が聲々珍らしき哉

八八紅葉せぬ常磐の山に住鹿は己れ鳴てや秋を知るらむ

八九思ひ出のけながき物は人知れぬ心の内の別なりけり

みちの國の柳河の家にてふみてにもちなどして

七月七日七夕の心を

九〇袂こそ思ひやらるれ七夕の明けゆく空のあさの羽衣

海づらにて波のたつを

九一吹風に色染め渡る藤波は春しもかゝる物にぞ有ける

又廣澤の池に波のいみじう立つを僧正の君など

九二廣澤の池にうかべる白雲は底吹く風の波にざりける

海土の家に宿りたるに日暮るゝまで釣舟の見えざりければ

九三波間より深く出にし釣舟の待つ程過ぎて物を祉思へ

右近大夫よしのぶにみちのくにより

九四別れてはいかに戀しと思ふ己が心は人を知りけり

網代に紅葉よせたり

九五紅葉を寄する網代は多かれど秋を留て見る時ぞなき

筑紫へ行くに

九六天の原波のなるとをこぐ舟の都戀しき物をこそ思へ

九七山高み落くる瀧の白糸はあわによりてぞ亂初めける

九八山吹の八重咲く花を睦じくとへや一重のうら解に鳥

又春たつに

九九青柳のいとよりかくる春くれば池の水も綻びにけり

この御手本いるべき箱にあしでをぬひ物にすべしとせめられける

一〇〇玉櫛笥二見の浦の中におつる月の影こそ鏡なりけれ

一〇一疾くぞや二見の浦の有と云し心をいれて問まし物を

同じやうなれどもかき集めて定めらるべしとて

一〇二箱の内に明暮遊ぶ葦たづは千年の蔭ぞ共に見ゆらし

一〇三難波津に角ぐみ渡る葦の根のねはひ尋て世を賴む哉

又大宮の仰せごとにてよめれどおほん手本にかかれたれば

一〇四いつしかと急ぐ心の先だちて朝の原を今日見つる哉

また

一〇五東雲に朝の原を越くればまだ夜籠れる心地こそすれ

ふたむら山

一〇六秋風にはた織る虫の聲しげみ諍ねぞきつる二村の山

ふるの祉

一〇七年を經て植し榊の變らねばふるの祉と云にぞ有ける

惠慶人の家の櫻を見て

一〇八さかしらと思はざらなむ櫻花散らば隣の人も惜まむ

この人いとわろしとてよむ

一〇九徒然と花なきさとにひとり居て隣の春に心をぞやる

睦まじき人のめのをかしきを見てそねむとて

一一〇心には染めて久く成ぬれど云で思ふぞ口なしにして

もろともに住む女に

一一一日は照るに我衣手の乾ぬは一夜の露をいかに置しぞ

あふみと云ひしに冬

一一二多籠り遂に相見ず成果てぬ雪ふりにきと人に語らむ

うまのすけにて播磨へ行くに明石の濱にて夜いと暗きに千鳥鳴きて沖の方へいぬ

一一三白浪に羽打ちかはし濱千鳥悲しきものは夜の一こゑ

一一四印南野に村々見えし柏木の葉廣になれる夏は來にけり

一一五村雨に立隱れせし柏木の青葉に夏はあつまりにけり

日向の國に琴ひきの松あり岸に波寄す

一一六白波の寄りくる糸を緒にすげて風に調ぶる琴彈の松

筑紫へ行くに

筑紫にて或る女語らひて曉に
〇何事の今朝は嬉しき我なれや涙は分ぬ物にぞ有ける
又みちの國にて鴨のくびかはに虎のをたちいれたる乞ひにやるとて
二多の池の同じ友には遊べ共なしとな云そ鴨のくびかはうまごのよりこで京へ行くを恨みて女に代りて
二親の親と思ましかば訪てまし我子の子には非ぬなるべし
又粟津にやどかるときゝて云ひやる
三湖の粟津にやどる君故にはかなく鹽を垂れてける哉
むねたかゝみちの國にて子ども三人がかうぶりし侍りける又のあした
四松島の磯にむれ居る葦たづの己が様々見えし千世哉
末の松山に子の日にこの人の母車にて出でたるに守しげみ介つねみなどいひたり
五末の松引きにぞきつる我ならん波のみをると聞が妬さに
六ある人あゆ三つを萩の葉につけて
七水莖の跡踏みつけて試みむ思ふ處にあゆみつくやと
暮の春
七春毎に今日の別は惜めども華のうら葉は歸らざり鳧
八年毎に別るゝ春と思へども猶なぐさまず惜まるゝ哉
九來る夏と別るゝ春と中に居て靜心なく物をこそ思へ
〇十櫻花散りにし春はうけれども今日の別は猶ぞ悲しき
一一年毎に止らぬ春と知りながら心盡しに惜まるゝかな
二月ばかりに世のいと憂きことを思ふころ梅の花に雪ふりかゝりたるを
二花の上に散くる雪の我ならばいかに嬉き命ならまし
三雪消ねわが み山なる朽木には春もまだこぬ心地する
春たつ
四初春の思ひ立らむ山道をあやにくなれや今朝の降雪
五まだ咲ぬ枝にぞ冴る白雪は花とも云はじ春の名立に
春たつにまだ雪ふかし
六雪深み山の山路や迷ふらむ春の迎ひに今ぞ越ゆらし
七春ぞとは鶯のみぞ知せける鳥の聲にや花もこもれる
八山里は住てあだにぞ成ぬべき春の心も花と見ゆれば
九吹風を知べにはして梅の花今宵計りぞ折べかりける
〇一風寒み春やまだこぬと思ふ迄山の櫻を雪かとぞ見る
一雪と見て覺束なきに山櫻花ぞとつげて行くや何なる
女の家に桃の花すもゝの花むら〳〵に咲きたり
鶯なく
二鶯の聲に呼ばれてこちくれば物云はぬ花も人招き鳧
三春夏の中に懸れる藤波はいかなる岸に波をよすらむ
或る大臣のむすめかくれてものにまかる冬昔とひしに
四よそに見る物と社見め白雪の白々しくも覺ほゆる哉
人のなれどもをかしとそのかみに思ひしかばなり
五遙に京より下りし人に
六天雲の別し中に通へばやよそなる袖の乾く間もなき
昔のはおぼつかなけれども
七いと高き巖に生ふる松だにも風の吹には靡くてふ也
八云ひさして已ぬと思ふな池水の深き心の淀むとを知れ
九仄々と明石の濱をこぎ來れば昨日戀しき波ぞ立ける
大貳會に主基の方に、明石の濱
〇朝日さす明石の濱を立ゐせし波も長閑になる世也鳧
丹後にて舟遊に岸の藤の花を折りてやかたにさせるこれにかける
〇渭舟に棹をば懸じ藤波は夜さへ見ゆる物にぞ有ける
昔秋別れにし人に
一年毎に昔は遠く成行けどうかりし秋は又もきにけり
やどりはなし
二花咲かぬ我宿さへぞ匂ひ來る隣の梅に風やふくらむ
また
三散る雪を花の盛と見すべきは春の心の淺きなるべし
四梅が枝に物憂き程に散る雪は花とも云じ春の名立に
五萬代の春を數ふる鶯は花の木かげにすめばなりけり
六消果ぬ雪かとぞ見る山櫻匂はざりせば爭で知らまし
七花にのみ埋れにける鶯は啼く聲さへぞほのか也ける
八散花を惜むとや啼く鶯のをり知れりとも見ゆる春哉
九世の中はおとろへ行けど櫻花色は昔の春にぞ有ける
〇十山里は咲花こそはあだならめ見る人さへや靜心なき
一一鶯の隣に我もすむものを聲をわきてぞ人はとひける
二春ごとに忘られにける埋木は花の都を思ひこそやれ
春の暮つかた
三花も散り鶯の音も枯ゆけば我山里はあくがれなまし
四急ぐらむ夏の境に關すゑて暮行く春を留めてしがな
五憂事も春は忍びて有ぬべし花の散りなむ後の悲しさ
六打忍びなどか心もやらざらむ浮世の中に花は咲ずや
七春もせで谷隱れなる山吹は只口なしの色にぞ有ける
八我のみやゆきてをらまし山櫻人の怨もはずもがな
九初聲は聞まほしくて時鳥春に別れむことのわびしさ
歸鴈
〇雁音の歸る羽風や誘ふらむ過ぎ行く蜂の花も殘らず
一山里は浮世も有じと思ひしを厭ふも知らで尋來に鳧
二阿武隈に霧たてと云し唐衣袖のわたりに夜も明に鳧
又春思ひいづるに、したがふ
三春過ぎば最と物をぞ思べき花も散ぬに浮世捨てゝむ
波の聲に夢驚かすと云ふ題をためきよとむねち
かとに詠させて親はことわるこのかみためきよ
四夢にだに戀しき人を見べきに波の聲にぞ驚かれぬなむねちか
五浦近みねるかとすれば白波の寄る音に社夢覺にけれ
これはわろしとて親おきな
六戀しさは夢にのみ社慰めれつゝきは波の音にぞ有ける
七渡つ海の己が次々尋見ばいとくち亂りいづち行く鹽
八枝もなき浦々に咲く波の花風に宿れる春かとぞ見る
舟路の哀なる事を思ひて
九舟路には思ふ人のみ戀しくて行末のみぞ先聞ける
〇吹風の靜心なき舟路にはさればと云ひし人ぞ戀しき
一都出でゝ今日は幾日ぞ覺束な留めし人は數へおく覽
山綺河を立田川と云ふを筑紫へ行くとて
二白波の立田の河を出しより後悔しきは舟路なりけり
げすにあらぬ人の世の中をわづらひて鍬鋤取りてあらたちたる程もなく死にければ
三打返す鍬のまつはにまみれつゝ秋の頼も長からぬ哉
四春毎に忘られにける埋木は時めく花をよそに社みれ
五雁音は花に住む共見えなくに散ぬと思ふに歸る聲する
六蛙鳴く苗代水に影みれば時すぎにける我いかにせむ
七山櫻散行く春の木のしたは松も見えぬに茂合ひに鳧
みちの國に山の郡と云ふ處ありそこにて冬月を
八雲晴れて空に磨ける月影を山の氷と云ひなおとしそ
この山の郡に秋ならねど鹿子まだらに雪降れり
九秋來れば鳴や小鹿のまだら雪山遠きか音もせぬ哉
京よりくだるに田子の浦にてむすめ
〇急ぎ行旅の心や通ふらむ立たぬ日ぞなき田子の浦波

實方の君の許にみちの國へ行くにいつしか須名の橋を渡らむとてくるに早う燒けにければ

一水の上の須名の橋も燒に見打けつ波や寄こざりけむ

大嘗會の主基方、丹波國桑原の里を

二桑原の里の引繭拾ひて置て君が八千代の衣糸にせむ

同じ方、玉つくり江を

三一つにて萬代照す月なれば底も見えける玉つくり川

院冷泉の帝春宮におはします程に戀の歌よみて奉れとなりたゞして仰せらるれば司給はらぬほどに

四戀しさに見ゆやと見れど水鏡沈影には添ずぞ有ける

又御綸に春厳折る女かたみひきさげてあり

五我ならぬ野べの厳も生ひに鬼命ぞ春のかたみ也ける

又綸に女石井に水汲むとてさしのぞきて影見る

六年を經て澄る泉の影見ればみづはくむ迄老ぞしにける

昔衣の關の長ありしよりも老いたりしを

七昔見し關守も皆老にけり年の行くをばえやは留むる

信濃のつかまの湯におはしたりしかば書きつけし、これたゞの宰相の折

八出る湯のわくに懸れる白絲はくる人絶ぬ物にぞ有ける

やがて廐をたてたりける同じやうなれどもをかしと思ひしかば

九最上川落添ふ瀧の白絲は山の繭ようくるにぞ有ける

此の最上川いみじき川なり世に似ず面しろきものなれば人過ぎがたし

一〇最上川瀧の白絲くる人の心よらぬはあらじとぞ思ふ

昔堀河の大殿石山より歸り給ふに走井にてよませ給ふ

一一逢坂の關とは云へど走井の水をばえこそ留めざりけれ

法師の色このむをにくしとて

一二常ならぬ山の櫻に心入れて池の蓮をいひなはなちそ

二月ばかりにみちの國に臨時の祭に雪にぬれ困じたるがかちなるをのここづるの池を過ぐる程にこゝはいづくぞと問へばこづるの池のつゝみと云へば心やりによめと云へば、

一三千とせふる小鶴の池も變らねば親の齡を思ひ社やれちゝ

一四千年をば鄙にてのみや過しけむ小鶴の池と云て久しき

みちの國の權守腹々のをのこゝ女に雲着せかうぶりせさせ又袴着せなどするにかはらけ取れとあり母君失せてのことなり

一五色々に許多千年の見ゆる哉小松が原にたづや群居るかへし

一六古を今日にあらすゝ物ならば猶は千代を思ざらまし

鮫の瀧はこれに過ぎてよむ人あらじたゞにならねば

一七山川に吹かるゝ笛のあれば駐駿の瀧に泡もまくらめ

初春

一八春來ればまづぞ打見る石上珍しげなき山田なれども

一九春の雨は忍ぶる事ぞ增りける山の綠も色に出でけり

夏

二〇我里のまづ明たてば空蟬の空しき音をも鳴き明す哉

肥後にてためちかゝ鳥巡りに出でゝいみじかりける蛍を見せずなりにけるとて歌よめりされどわるければ書かず

二一磯菜摘む蜑のみるめも有物を君が舟路に後れてぞ思

みちの國の守さねあきら或る人の親後れたるにやるとてきぬと又綿などこを作りておこせたり

二二青みし君を雲居になしてより大空を社頼ひべらなれ

云ふべきあらばいへとあれど吹く風春　のむと云べればなるべしかへる春になりて

二三吹風も今日は長閑になりに鬼物思ふ程に春や來ぬ覽

又春つかさめしを思ひやる

二四春ごとに忘られにける埋木は花の都を思ひこそやれ

やんごとなき處に召せばお前に出でたるに何となく御覽じてかへさるゝにつけて聞ゆ

二五天の原渡る千鳥の羽たゆみ岸をかはとも見て歸る哉

ある女に、秋

二六蟲の音の悲しき野べの花薄こち吹く風に打靡かなむ

五月ばかりに樣をかしきわらはの唐の薄えふに蟬のもぬけを包みてもて來て人にさし取らせてうせぬよろづ思へど誰がとも知らぬをもし一年のなつ頃行きたりし人こゝよくなく見えしかとおしはかりて云ひやる

二七古の夏來にけれど空蟬の是から音もするにぞ有ける

みちの國の權守の母君に云ひはじめに

二八笹蟹の絲筋ならずあらぬ身を雲のよそにな思放ちそ

又この君あしたか蜘蛛のて一つ落ちたるが二三日までをごくを

二九笹蟹の蜘のはたてのをごく哉風を命に思ふなるべし

齋宮の女御内におはせし時かやあるたちはきの長承春殿の西の戸口に立ち寄れり少納言と云ふ人いと口とうものをかしう言ひ歌よむこの友だちどもこの人に物言ひかけよと云ふよりてまづいかで言はむと思ふとて袖とりかはしたりだれぞと問へば源のこたへずといらふ同じきなのらずと云ふ

三〇小動ぎの磯の寒苔藻名のらねば底計をぞ探り知たる

さればよといひて聞きもはてぬに詠む

三一磯菜摘む蜑ならば社渡つ海の底の物めく事を許さめ

と云ひつゝぞ年經ける又波の立つを見て

三二吹風に色立まさる藤波は岸によりてや歎ををるらむ

春何事を思ひけるにかあらむ

三三昔へをおもふ涙の春雨は我が袂にぞわきて降りける

諸共にほかへゆかむと云ひちぎりてふとひとりいぬるによみてやる

三四行春に立ちおくれぬと春霞思はぬ山を歎きつるかな

法師のこと好むが歌の返しおそくすれば

三五梔や君が園には茂る覽色めくなるにいらへせじとや

大貳の御手本の歌の中の落ちたる

三六年毎に枝さし松の葉を茂み君をぞ頼む蔭なもらしそ

又法師に

三七行末を思ふ涙をしるべにて蓮の池をたのむばかりぞ

また

三八花をのみ春の宮にて折りしかば思ひ出つゝ雪ぞなく

三九古の戀しき人の見えこぬに花のゆかりを相見つる哉

桃の花すける人のうち醉ひてあるを見て

四〇人知れず過ぐとは聞けど桃花色に出てけふぞみえける

たけぐまの松一本は枯れにけり

四一たけぐまの松も一本枯にけり風に傾ふく盤の寂しさ

四二年を經て誰を待とか武隈の常磐にのみは雫で立つ覽

かりやどりに遣水をして心をやれど古にも似ず

や

三行水に心を添へてやりけれど昔までには波も返らず
霞もたゝず鶯も啼かず春あやしとて心長閑なる
處へおはせと云ふに久しければ
四鶯の聲の使もまだこねば思ひぞたゝぬ春のかすみも
曾禰好忠が伊馬にていづしの宮にてなのりそと
云ふ物よめと云へば
五千早振出石の宮の神の駒ゆめな乘そよ崇りもぞする
六曉の雞に見ゆる朝顏は名のりぞせまし我にかはりて
故右大將になつきに弓へて奉る
十三陸奥の安達の眞弓ひくやとて君に我身を任せつる哉
みちの國の守せきうご國符ぞなくていれるとて
ゑし給ふに歌よみて奉る
八三去年の春關に留ると聞せば今年は花も長閑からまし
九三花見には許しぞせまし白河の水ならば杜堰に淀まめ
ひら野の祭に諸共に詣づ一尺ばかりの松立てり
四千代のこもれるこゝちこそすれ
おきな
二葉なる人の小松を今日見れば
はこかたの磯にて京にのぼるに
一四白河の關より内は長閑くて今はこかたの急がるゝ哉
みちの國にて子のかくれたるに
二四我爲と思ひおきける墨染は己が衣の色にぞありける
二三言の葉に云置く露も無り鳧忍ぐさには音にのみぞなく
二四弱竹の己が此世を知すしておほし立てつと思ける哉
二五さも杜は人に劣れる我ならめ己が子にさへ後れぬる哉
二六嘆ても云ても今はかひなきを蓮の上の玉とだになれ
時たゝがむすめ
二七世に經れば心の外にあくがれて君が立名をよそに杜聞け
かへし
二八人馴ゐみつの御牧の駒なれや立名も更に有しとぞ思ふ
あづまの方へ下るに美濃國ときの郡にて
二九旅人の侘しきものは草枕雪降る時のこほりなりけり
三〇東路に爰をうるまと云ふとは行かふ人のあれば也鳧
あすは五日にあるべければ
三一夏の夜の短きもつらかす明日の菖蒲に逢むと思へば
秋の月を見るに雁鳴きわたる
三二月影に待つらむ里もある物を雁の羽風ぞ寒く聞ゆる

百首の歌
重之帶刀にてはべりし時春宮に歌召しければ
春二十首
吉野山峰の白雪いつ消えて今朝は霞の立かはるらむ
雜波江に生出る蘆の程見れば數知らぬ世ぞ思やらるゝ
昨日迄凍りて見えし山川の今日吹く風に瀧の音する
珍しく今日しも鴨の群居るは池の氷や薄くなるらむ
春日野に朝立つ雉の羽音は雪の消間に若菜摘めとや
常磐なる峰の松原春來とも霞立ずば知ずあらまし
けふ聞けば井出の蛙も騷ぐ也苗代水をたれ任すらむ
春の日の浦々毎に出て見よ何わざしてか蜑は暮すと
風にのみ任せては見じ梅の花折て袂に香をも移さむ
鴬れをか花とも分む春立て散來る雪におも馴にけり
鶯のきゐる羽風に散花をのどけく見むと思ひける哉
我宿の花の盛になりぬれば道行き人も立ちとまる哉
鶯の啼く聲をのみ尋ぬれば春咲く花は我のみぞ見る
青柳の絲を汀に染めかけて春の風にや波もよりける
幼くぞ春のみどふと思ひける花の便に見ゆる也けり
花櫻つもれる庭に風吹けば舟も通はぬ波ぞ立ちける
春の日は行もやられず蛙鳴井出の渡りに駒を留めて
み絕せぬ井出の山吹影見れば色の深さも增らざり鳧
夏にこそ咲懸りけれ藤の花松にとのみも思ひける哉
夏二十首
花の色に染し袂の惜しければ衣替うき今日にも有哉
初聲の聞かまほしさに時鳥夜深くのみも起き明す哉
夏草は結ぶ計に成にけり野飼し駒やあくがれぬらむ
懸てだにあふひと聞けば千早振我ねぎ言の驗有かも
夏刈の荻の古枝も萌にけり群居し鳥も空にや有らむ
山城の淀のこ草を刈にきて袖濕ぬとは恨むべしやは
卯花の咲るあたりに宿りせじ寢ぬに明ぬと驚かれ鳧
春蒔きし山田の苗も生にけり諸手に人は引て植なむ
我身こそそぼち增らめ梅雨の同空とは思はざらなむ
五月山照射に出る狩人は己が思ひに身をややくらむ
さを鹿の通ふも見えぬ夏草は我高しとは思はざらなむ
旅人のたく火と見ゆる螢こそ露にも消えぬ光也けれ
夏刈の玉江の蘆を踏しだき群居る鳥の立つ空ぞなき
夏の夜は音づれもせぬ蟲なれど秋はた空に秋と告覽

七草の葉も動かぬ庭の照日にも思ふ中には風や吹らむ
八行馴れぬ道の茂さに夏の夜の曉おきは物憂かりけり
九空蟬の空しきからは音もせず誰に山路を問て行まし
一〇鳖聞けば同じ緣りの蟲なれど日暮にこそ蟬も鳴けれ
一一我手にて夏は經ぬとや思ふらむ扇の風も今は物うき
一二秋風はふきぬと音に聞きしかど盛に見ゆる床夏の花
一三夏草の茂みをわけし君なれど今は心に秋ぞ來にける
秋二十首
一四秋來れど夏の衣も替なくに有し檜にも非ずなり行く
一五天の川水まさりつゝ七夕のかへる袂に波やたつらむ
一六七夕の歸りし日より秋風の夜毎に寒くなりにける哉
一七音もせで思に燃ゆる螢こそ鳴く蟲よりも哀なりけれ
一八おばつかな越る山路の闇ければ蜩の音に宿をかる哉
一九秋風は昔の人にあらねどもふきくる宵は哀とぞ思ふ
二〇啼く鹿の聲聞く毎に秋萩の下葉焦れて物をこそ思へ
二一待人の影は見えずて秋の夜の月の光ぞ袖にいりぬる
二二荻の葉に吹秋風を忘つゝ戀しき人の來るかとぞ思ふ
二三秋風のふかぬ宵だに有物をいとゞ今宵は人ぞ戀しき
二四哀をば知らじと思へど蟲の音に心弱くも成ぬべき哉
二五秋風は旅の空にも吹ぬらしせこが衣は返すらむやは
二六秋の夜の有明の月に拾へ共草葉の露は溜らざりけり
二七山城の鳥羽のあたりを打過ぎて稻葉の風を思社やれ
二八白露の奥手の稻を出にけり刈くる風はむべも吹けり
二九名取河梁瀨の波ぞ騷ぐなる紅葉や最どよりて堰らむ
三〇秋風に汐滿來れば雜波江の葦の穗よりぞ舟も行ける
三一白雲のおりゐる山の唐錦重ねて秋のきりぞ立ちける
三二風さむみ宿へ歸れば花薄草むらごとにまねく夕ぐれ
三三白露の置きける菊を折つれば袂ぬれつゝ色增りけり
冬二十首
三四紅葉ばの殘れる枝におく霜の暫の程を厭ふべしやは
三五淺茅生に今朝吹く風は寒く共枯行く人を今は顧まじ
三六水鳥の羽に置霜の寒きをば誰に馴てか消つべかる覽
三七霜の上に今朝降雪の寒ければ重て人をつらしとぞ思ふ
三八千早振神のかざせる日影にも解けず霜の夜結ぶ哉
三九葦の葉に隱て住し津の國のこやも顏はに冬は來にけり
四〇我宿に降來る雪の消えざらば早晩春と待れましやは
四一數知ずかづくとすれど渡つ海の蜃の衣の裳げなる哉
四二降雪にぬれてまだ干ぬ我袖を氷ながらも明しつる哉

三冬來れば氷柱に見ゆる石山の氷は堅き物と知らなむ
四古郷の垣根の雪し高ければ通し跡も見えずぞ有ける
五信濃なる淺間の山の怪しきは雪祉消れ火やは燃なむ
六燒人もあらじと思ふ富士の山雪の內より煙こそ立て
七今朝見れば蜑の小舟も通ふめり潮滿海は凍らざるらし
八近江なる安の入江に引網の氷をいをと今朝ぞみえける
九信濃なる否には非ず甲斐が嶺に積れる雪のとけむ程迄
〇三水鳥の住む池は皆凍りつゝ春立つほども我ぞ苦しき
一一年をへて雪降り積つゝ白山の麓れる雲や孰れなるらむ
一二山の上とよそにみしかど白雪は舊ぬる人の身にもきに鳧
一三雰積る己が年をば知ずして春をば明日と聞ぞ嬉しき

戀十首

一四戀しきを慰象て菅原や伏見に來ても寢られざりけり
一五思ひやれ我衣手は難波なる葦の裏葉の乾くよぞなき
一六風をいたみ岩打つ波の己のみ碎けて物を思ふ頃かな
一七打解る世祉なからめ人知れず結ぶ計に逢ぬ身ぞうき
一八松島やを島の磯にあさりせし蜑の袖祉かくは濡しか
一九淀野へとみま草刈りに行人も暮には唯に歸る物かは
二〇その原や伏屋にとつく懸橋も誰故にかは我は渡しゝ
二一筑波山端山茂山繁けれど思ひ入るには障らざりけり
二二名取川渡て作る島田をもるに附つゝ夜枯のみする
二三白波の雛の島に立寄れば海士こそ常に誰ととがむれ

雜十首

二四高砂の尾上の松の我ならばよそにてのみは立てらざらまし
二五水の上に浮たる泡を吹風の共に我身も消やしなまし
二六憂しと思心に我はきにけれど黄昏時は空しからせじ
二七みさご居る荒磯波や騒ぐらむ鹽燒く煙靡くかた見ゆ
二八衣川見馴れし人の別れば袂までこそ波はたちけれ
二九古は波をりきてふ松山に思ひかれたるはたの無き哉
三〇きし方や渚に立て見渡せばつらしと思心やは行く
三一磯は皆潮滿ぬれば鴛鳥の波の中にぞよるは寢ぬべき
三二水上に人のみ渡る川なれば心きよくも賴まれぬかな
三三武隈の塙に立てる松だにも我がごと獨有とやは聞く
　これが奥に書きて奉れる身の沈める心なるべし
三四枝分かぬ春にはあへど埋木は萌も增らで年をふる哉

信明集

　亭子院うせさせ給ひつる御ふくにて

三五去年の春枝にて折し藤の花衣にきむと思ひけむやは
　又の年御はてに
三六故里の楢の紅葉散果てゝおのが散々なるがわびしさ
　村上の御時に國々の名だかき所々を御屏風の繪にかゝせ給ひて、春日野
三七春日野の野守と身をも做てしが待らむ春を我物とみむ
　三熊野
三八うきとも山道しらず尋こし我三熊野に入やしなまし
　長柄橋
三九心だに長柄の橋は長らへむ我身に人は譬へざるべく
　難波
四〇我戀は難波の葦の裏なれや波の寄々るそよと聞つゝ
すぎ
四一なにはえで藻鹽のみ燒すまの浦に堪ぬ思を人知らめや
　この歌仕うまつれと仰せごとあるに奉る、渚岡
四二うちつけに渚の岡の松風を空にも波の立かとぞきく
　佐保山
四三さほ山の柞の紅葉散にけり戀しき人を待とせしまに
　田子浦
四四我戀は慰めかねつ駿河なる田子の浦波やむ時もなく
　しかすがの渡
四五ゆけどきぬくれど止りぬ旅人は唯しかすがの渡也鳧
四六年をへて君に心をつくま山峯は雲ゐに思ひやるかな
　しら山
四七昔よりなに降つめる白山の雲ゐの雪は消るまもなし
　ふたご山
四八長き世に君と二兒の山のねはわくとも知ぬ朝霧ぞ立つ
　よしの山
四九行年の越てはすぎぬ芳野山いく萬代の積りなるらむ
　あさかの沼
五〇花がつみ且見る人の心さへ安積の沼になるぞ侘しき
　なこその關
五一なこそ世に勿來の關は行かふと人も咎ずなのみ也鳧

　ことの御屏風の繪に紅葉散りたるを見る人々

五二ほの〴〵と有明の月の月影に紅葉吹おろす山嵐の風
　朱雀院のわか宮御もぎの御屏風の繪に梅のはな
　山里の家にある所
五三色もかも分我宿の梅をこそ心しれらむ人は見にこめ
　おなじ所雪ふる
五四降雪の下に句へる梅の花しのびに春の色ぞ見えける
　おなじ花折る女を男みる
五五梅の花折袂をも見つる哉香を尋ても訪はむとぞ思ふ
　初鴈
五六待つ人にいかでつげまし雲の上に仄に聞ゆ初鴈の聲
　たき落ちたる所
五七紅葉の落添りぬる瀧つせは秋の深さぞ底に見えける
　內裏の御屏風の繪に子の日したる所
五八行歸り野べに木高き姫小松これも子日の二葉也けり
五九子日して歸る家路の遙々と行くさき遠く思ほゆる哉
　天暦八年中宮の七十の賀の御屏風のれうの和歌
　なぎさの岡
〇八わたつみの渚の岡の花薄まねきぞよする沖つ白なみ
　芳野山
一八芳野山雪には跡も絶にしを霞ぞ春のしるしなりける
　おほあらきの森
二八時鳥きなくを聞けば大荒木の森こそ夏の宿りなるらし
　うきしま
三八憂事も聞えぬ物を浮島は所だがへの名にこそ有けれ
　磯上
四八年をへて云古さるゝ石上名をだに變てよを經てしがな
　ふしみの里
五八行春に伏見の里と告てしが逢まくほしみ立や止ると
　高砂
六八すむ鹿のなかぬ時さへあやなくも聲高砂と聞渡る哉
　をばすて山
七八秋の夜の曉がだの月みれば姨捨山ぞおもひやらるゝ
　こゆるぎの磯
八八風吹は玉もいだす白波のよせすともなき小揺の磯
　又てと御屏風三月
　鶯のなき歸る音を知べにて春の行方を知る由もがな
　六月

〇水上に赦へて流す麻の葉ををりな隠しそせゝの白波
一九草のねの生ふる荒田を打返し下にぞ思ふ心あるらし
二〇あちきなく思ひこそやれ七夕の稀に逢らむ夜の下紐
もみぢの散り残りたる山の峰に月の入りたる所
三一散ぬべき紅葉の色も月影も山端にこそ止らざりけれ
四一紅葉折る折も変らでいつのまに降敷ぬらむ峰の白雪
五一今日を知る雲の衣も宵なれや清かに見えつ今朝の初霜
六一緑ふる峰の山べの榊葉にゆふかけてこそ暮は帰らめ
志賀の山ごえしたる所
七一我だにもけふ珍しく見る山に数多の年も越にける哉
八一山路には絶て水だに無りせば最ど涙ぞそぼち増まし
九一そばつ共爰に暮さむ山の井に懸き人の影やみゆると
朱雀院うせさせ給ひける時
〇〇悲さの月日に添へて今よりは我身一つに止るべき哉
御いみはてゝ人々出でける日
一〇時雨つゝ楢はこゝに移るとも露に後れし秋は忘れじ
式部卿宮（敦実）の出家し給ひける時御とぶらひに
小野の宮殿まゐり給へるに御あるじなどあるついでに
二〇嬉しきも哀も深き春なれば別れ難くも見ゆるけふ哉
敦慶のみこのむすめ中務に
三〇年ふれば忘やせむと思ふ社逢見ぬよりも我は侘しき
おかへし
四一長らへむ命もしらぬ忘れじと思ふ心は身に添りつゝ
五一うしと思ふ心の越る松山は頼めしかひもなくぞ覚ゆる
かへし
六一秋といへど色も変らぬ松山は立とも波の越む物かな
をとこ
七一戯ずさに絶るまもなき水茎の泣々書る文にぞ有ける
又をとこのかへりて
八一千早振かもの妻を祈りつゝかざして君を頼みける哉
かへし
九一千早振かもの妻を懸くるより最ど浮ても思ほゆる哉
をとこ
一〇一神代より忌むと云なる梅雨の此方に人を見由もがな
かへし
一五月雨の此方彼方も逢事はいつも忌とぞ人は云なる
又かへし

一一孰こにも思もいらむよと共に忌ぬ絶まの中も何かは
をとこ
一二今宵ねて近江へ行とみし夢の悲しと袖にふるは涙か
かへし
一三程もなく止ぬる雨に喩るはいかに悲しき涙なるらむ
一四限なく悲しと人を思ふには物思ひます物にぞ有ける
一五梅雨は君にや有けむ子規人しれぬ音をこゝら鳴つる
かへし
一六爭でかは聞咎めつる時鳥人しれずこそ音をば鳴つれ
をこと
一七人やりに有ぬ事にもあらなくに身も徒に成ぬべき哉
かへし
一八身を捨て思ふと見しは徒に成べき事に喞たれもせむ
又をとこ
一九偽をたれならはして限なき我信をもうたがはすらむ
かへし
二〇世の人の同じ心にあらばこそ皆おしなべて偽もせめ
又かへし
二一偶さかに信やすると君ならぬ人してをも知らせてしがな
又
二二身の上に人の心も知ぬまは事ぞともなきねをのみぞ鳴
かへし
二三君だにも事ぞともなき涙をばいかに知てか哀と思はむ
又
二四明る迄と思ふ時だにある物を泣々とくも帰るべき哉
かへし
二五我思ふ心もまだき歸るまも深くは非ぬ中にぞ有ける
二六けふの内に否ともう共云果よ人頼めなる事なせられそ
かへし
二七今と云て假の心も見べきをかひ無き人に頼めつる哉
又
二八かくなむと人しるらめや行道も心留めて思ほゆる哉
かへし
二九行道も止らば止れ知とてもやるべき事の心ならねば
又
三〇早く此上の十日も過なゝむ廿日にてだに暇日也やと
かへし
三一廿日にて卅日ならむとも思へ後やよそかにならむと思へば
又

三二涙とも雨とも分す大方に我はふるとぞ人はみるらむ
かへし
三三涙とも知ぬ先よりむべ社は常より疾も詠められけれ
又かへし
三四知ねども同じ心に詠めける事ばかりをぞ哀とはきく
又
三五契けむ日をも過ぐさじ七夕は我ごと斯や思ざりけむ
かへし
三六七夕の契けむ日は過す共譬ふべしやは事もゆゝしく
又かへし
三七ゆゝしとも思はざり鬼七夕は忘れぬ中の有ま欲さに
又
三八歎ならぬ心の内にいとゞしく空さへ許す頃の侘しさ
三九我を社世に見苦しく思しか人はいかなる心なるらむ
又かへし
四〇逢もみずとをば云む方もなし誰がつけ初し病なるらむ
四一かひもなき君によりつゝ碎くれば心も無も成ぬべき哉
又
四二憂き増る我身も知でよそにのみ聞し昔に返してしがな
四三頼むる事なくばしぬべしといひたる返事に女
四四徒に度々毎にしぬといへば逢には何を替むとすらむ
かへし
四五しぬ〳〵と聞々だにも逢みねば命をいつの為に殘さむ
はじめてのつとめてかへりたる、女
四六儚くて同じ心になりにしを思ふが如く思ふらむやは
かへし
四七侘しさを同じ心とさくからに我身を捨て君ぞ悲しき
ちかづきて、をとこ
四八終夜風も涼しく吹く頃は心ことにてまたじとやする
又
四九波高く松の靡れるよにや有む頼めて行ぞ庵かすと云
かへし
五〇末の松昔よりまつ君を置て波高く共こさじとぞ思ふ
五一鏡かもてかへすとてしきのしたにかきつく、男
一五一暁の別はをしの鏡かもおもかげにのみ人のみゆらむ
人のゆるさぬ中にやありけむ、をとこ
二五一染て思ふ色は深きを口なしの云れぬ色と人や見らむ

いきたるにあはねば
三五可惜よの月と花とを同くば哀しれらむ人にみせばや
かへし
四五君ならで誰にかみせむ梅花色をもかをも知人ぞしる
内へいそぎまゐりたるつとめて、女
五五いそぎけむ心の中をしらぬ哉もし百敷に床や定むる
かへしあるべしとか
又女
六五有しよりつらき處も勝らなむかひ無よりは堪て已なむ
山里にあるに女もさてあるに
七五我ごとや人も云ふらむ山里は心細さぞ住うかりける
おなじ女のよくなるころ絶えまがちなるをうらみて
八五なき人もあるがつらきを思ふにも色分れぬは涙也鳧
同じ頃いきて叩くにあけねば、をとこ
九五東雲の明けざりしかば終夜慎のとよりぞ立歸りにし
かへし
〇六夏の夜も槇の板戸も徒にあけてくやしく思ほゆる哉
絶えてのちきゝたるに鏡をいだしたれば、男
一六あけはみじ影珍しき增鏡よりみよりねこそ泣るれ
かへし
二六心から見ざりし影は增鏡みよりなく共今はかひなし
おなじころ、女
三六思遣る心もよゝも後れぬる野にも山にも行とみえつゝ
かへし
四六世と共に惑ふ心や人めには野にも山にも行と見ゆ覽
こと人に通ふときゝて、をとこ
五六年をへて我こそ下に住の江の松をば人の上と聞つゝ
かへし
六六心にも非で浮世に住の江の年ふる松ぞみぬは苦しき
女小野の宮に參りてさぶらふを聞きつけてさぶ
らひにねて月のあかき夜人していひやる
七六戀しさは同じ心に非すとも今宵の月を君みざらめや
かへし
八六さやかにも見るべき物を我は唯涙に曇る折ぞ多かる
行平が三の君をたえたるころ、女
九六侘つゝも此世はへなむ渡り川後の淵瀬と誰に問まし
かへし

〇七此世をばおひも擔ぎて渡してむ後は始の人を尋ねよ
閑院のおほい君いと重く煩らひて怠れる頃いか
であはむなどいひておこせたる、
一七辛くして惜ひとめたる命もて逢事をさへやまむとやする
かへし
二七諸共にいざとは云でしでの山爭でか獨越むとはせし
さてきたるにこそあふさまじきやうありてかへりて
つとめて
三七曉になくゆふつけの我聲に劣らぬ音をぞ鳴て歸りし
かへし
四七曉のね覺の耳にきゝしかば鳥より外の聲はせざりき
人の文をえてかくせざれば女の怨むれば文のうらに
かきて見する
五七此はかく怨み所もなき物を後めたくは思はざらなむ
女のもとにやる
六七秋とだに思ざりせば人しれず時雨る事を何に告まし
七七いひ初めぬ程は中々ありにしを靜心なき昨日けふ哉
返事にかみをつゝみておこせたれば
八七劉なくて止やしなむと侘つるに助る神をみるが嬉さ
九七まだ知ず惑ふ心に最どしく覺束なきは侘しかりけり
返り事にみゝすがきをしておこせたれば
〇八侘しきに戀に惑へる心には其ととしもみえずぞ有ける
一八程もなく消ぬべきよに白露のつらかりきとな思置れそ
二八音無の山より出る水なれやおぼつかなくも流行く哉
三八中々に覺束なさの夢ならば逢はする人も有もしなまし
四八人しれぬ思をすれば秋萩の下葉焦るゝ物にぞ有ける
五八露ばかり置ど我をる宿の萩がえは斯こそ秋を知ず顏なれ
たいふの君といふ人にいひやる
六八思事ありて久しく成ぬとはきくか聞ぬか知て知ぬか
右大辨なくなり給ひて人々いみにこもりてある
ほどに
七八ものをのみ思ふねざめの枕には涙かゝらぬ曉ぞなき
おとうとの許に久しくあはぬころ
八八手荒びに火桶のおきや割りてけむ戀しき人に逢ぬ頃哉
五月のせちにやあらむ題たしかにしらす
九八限なく思へる駒に鞍ぶれば身にそふ影は後れざり鳧
さくらの花をみて
〇九年毎のなをだに變へば世の常の櫻とのみは云ず有まし
そでといふ女使ひたる人に其の女につけていふ
一九丸しれぬ我物思の涙をば袖に附けてそみす可りける
二三日ばかりあはぬ女に
二九思きや相みぬ程をいつなりと數ふ計にならむ物とは
堀川のおとゞの宮の權大夫ときこえし時みちの
くにへまかりこゆる
三九明くれば雛が鳥を眺めつゝ都戀しきねをのみぞなく
大別松といふ人の出家したるをいひやる
四九いかにして君が心ぞたちつらむ小松の山の墨染の雲
しれたりといはれたる人の牛のしりにたちては
しりけるを見て人々のかれを題にて歌よまむと
いひければ
五九荒牛のしたしの浦の床しさに取てみつれば彈れに鳧
はせをば、長谷寺やけたりときくところ
六九世中の賴み所にせし物をはせをば斯や燒かむと思し
中務に忍びて物いふよ時鳥のなくをきゝて
七九今宵ぬしでの田長も聞つらめ今は五月の空に知れむ
かへし女
八九時鳥聞渡るとも五月雨に空ごとにだに人のなさなむ
九九知るや君知ずはいかにつらからむ我斯計り思ふ心を
〇〇みるめ故蜑にたれど女郎花けふは我にぞ潛き劣れる
御障子のをに深き山に鶯の聲をきく人あり
一〇鶯のなくねをきけば山深み我より先に春はきにけり

以三相傳之本一書寫校合了治字等如レ本也
建長元年八月日　藤原朝臣在判

元真集

朱雀院の御屏風に、正月一日
二〇荒玉の年を送りて降雪に春とも見えで今日の暮ぬる
中春池のほとりに山吹櫻さけり女すだれをあげ
て見けり
三〇我宿の八重山吹はちりぬべし花の盛を人の見にこぬ
櫻の花のもとに人々あそぶ
四〇春風も今年ばかりは櫻春人のこゝろに任せたらなむ

田うゑのころ
五〇淺緑野べの荒田を打返しせなかに秋を待ちや暮さむ
暮の春池のほとりに藤の花さける所に人々遊ぶ
六〇岸近き松に懸れる藤の花波さへをりて返るめるかな
同じ花さけるわたり
七〇藤の花咲る渡りをこぐ舟のよそにて波は思ひ懸なむ
八〇水のわのをりゐる毎に亂らざり池の葦鶴立ぬなるべし
はじめの夏ほとゝぎす
九〇待つ人はあまたありとも立とまり山郭公一聲となけ
中夏、五月五日
一〇駒なべてすさめぬ澤の菖蒲草けふに逢ずば猶や刈まし
十月七日
一一年に一夜はこめて七夕の朝は今宵の月日ならぬか
初雁を
一二初雁を送るなりけりふき風の雲を遙に吹てすぐるは
中秋十五夜
一三白露のおける草葉に浮ばすは今宵の月を盡と社みめ
田かる所此題相違歟猶歟不審
一四秋の田の假庵を立出てみれば足引の山の錦に劣ざりけり
初の冬網代の上におきなをり
一五我宿に有べき物を此度の網代によりてひをもふる哉
雪みる所
一六大空に花ともみえて散雪の雲の上にて尋ねてしがな
十二月つごもり
一七徒に過る月日はおほけれど今日しも積る年を社思へ
同じ十二月春宮女御藤壺の御局にてちゝの御五
十賀うちにせさせ給ひしにその御屏風さうじに
て奉る初の奏男女かた岡の水のほとりにて遊ぶ
一八子日する山田の水の影しあれば千年の松は日影こえ鶴
梅の花ある所に人あそぶ
一九山風に任するよりは梅の花匂の宿にゝきずも有かな
松に藤のかゝれる所
二〇春深み咲きて匂へる藤の花松ぞ千年の宿りなりける
人の家の花橘にほとゝぎすなく
二一よになれぬたゞ一聲も時鳥はな橘にかくれてぞなく
瀧あるところ
二二山高み落ちくる瀧の白糸は空に亂るゝ玉かとぞみる
池のほとりに鶴たてり

二三葦たづの千代の影すむ池水は波立てれ共長閑かり鳧
おなじ題
二四水底に沈める千代の影をみて池の葦たづ長閑かり鳧
頭しろき翁ある所に雪ふる
二五年深き色としみれば白雪のふるにも己が上を社思へ
人の家に竹あるところ
二六窓近き常磐のかげは呉竹のよをへて深き緑なりけり
おなじうちのみさうじの繪に女宮のつけさせ給
うける女稻荷にまうでたる所
二七千早振神の社にいのりくる道の程さへ面馴れにけり
吉野川にくれくだす所
二八吉野川おろす筏のをりごとに思ひもよらず波の心を
廣澤の池のほとりに女どもねぬなはくる
二九廣澤のいけのねぬなはくりよする
相模の足柄の關に旅人ゆく
三〇足柄の山に繁れる玉小菅行かふ駒もすさめざりけり
いではのやそしまに舟に乘りて人あそぶ
三一八十島の浦の渚に數へつゝ止れる年も許多へぬべし
みちの國の安積の沼のほとりに京よりくだれる
人たちとまれり
三二音にきく安積の沼の朝ぼらけ絕ぬ煙は名のみ也けり
屏風の繪に柳おほかる人の家にかすかにてあり
三三青柳の糸によりくる年をへて浮世背けば跡も立ける
旅人道ゆく櫻の花ちる
三四いつしかと行故里の櫻花我だにみての後にちらなむ
おなじ題
三五行くてだに爭でとくみむ我宿の櫻はけふの風に殘らじ
郭公
三六時鳥こぞの初聲飽ざりし人のきくがに先もなかなむ
櫻咲きたる家に女見いだしたり
三七我宿に咲にし日より櫻花かくこそはみめ飽ずも有哉
また
三八我宿の櫻は風に散はてぬあすこむ人や悔しと思はむ
山里に梅さける家に男さうど馬よりおりて立
てり
三九知人もなき山里の梅の花匂ふ日よりそきても尋ぬる
卯月のついたちにいそだよそなる女に
四〇けふよりは偖も過なむ夏衣みるより薄き心とやみむ

かへし
一聞てだに云社うけれ夏衣あるより增む薄さと思へば
をとこ
二逢でふる程に暮たる唐衣けふは身さへも流るべき哉
かへし
三大空に降てぬるとも濡衣をほしても侘ぶる頃の詠か
をとこ
四うれ高み鳴音空なる時鳥おとにたてゝや夏を過さむ
五月五日おなじ人
五菖蒲艸ねも心みで逢事をいつかと待しけふは暮しつ
かへし
六待きけるけふ過ぬれば菖蒲艸今は五月も非じとぞ思
さてのあしたに、をとこ
七いだにねず成にし物を逢事の夢かとのみも思ほゆる哉
えあはでかへりて、男
八疑覺にて夜は明ぬとも杜鵑こと語らはむ一聲もせす
かへし
九怪しさにねざめて聞けば子規など古郷に聲も聞えぬ
小野の宮の御ものいみにさまゝ〳〵語らひしごた
ちに女郎花につけて
一〇移ろはむ程だにみえむ女郎花心長閑に露はおかなむ
同じ年前栽合に神無月を題にて
一一神無月時雨る空の紅葉をば秋をたむくる幣と散ける
二霧立て別し日より時雨つゝ過にし秋ぞ悲しかりける
もみぢを惜む
三秋霧の立ぬさきにもさほ山の紅葉の錦殘らざりけり
神無月といふ心を
四散果て木葉も空に殘らぬを神無月とは云にぞ有ける
又
五雁音は霜と共にやおきてくる時雨る空に鳴聲のする
菊の花を惜む
六年深き色としりせば初霜の殘しおきけむ白菊のはな
二條の式部卿の御おとゞの六十の賀北の方のし
給ふ御屏風の歌松原のあひだにみな渚にいでゝ
人あり
七日をふれど松の濱べに有舟の千年をみむと出ぬなるべし
田舍の家の前に川ありそれに河龜ながる

[三五]河竈も今萬代はもろともに波の底にてすみぞ渡らむ
大將殿の女御のなでしこ合せに
[三六]百敷に移し植すて常夏によをへて絕ぬ色を見るべき
[三七]山がつの垣ねを狹み生初めて色ともみゆや瞿麥の花
天德三年九月十六日庚申に中宮の女房歌合せむといふによめる、庚申
[三八]難波潟こげど小舟は葦わかのえざる程社久かりけれ
[三九]月影にほのかに見ゆる花すゝき風の便に結びつる哉
萩
[三〇]高砂の尾上の萩を折つれば鹿の立どや疎くなるらむ
女郎花
[三一]女郎花野べの故里思ひつゝ宿りし蟲の聲やこひしき
きりぐ〳〵す
[三二]露むすぶ秋はてがたの葦草のねごとに寒くこそ鳴け
日ぐらし
[三三]秋風の萩の下葉に吹亂る空にみちぬる日ぐらしの聲
松むし
[三四]松蟲の絕ずなくなる女郎花千年の秋はたのもしき哉
同じ八月二十三日女御の前栽あはせのむしのうた
[三五]人しれず秋のくれぬる女郎花蟲のねよりも尋つる哉
萩
[三六]萩の葉に風の涼しき秋なれば暮に怪しき物を社思へ
蘭
[三七]武藏野の草のゆかりに藤袴わか紫にそへてにほへる
なでしこ
[三八]露結ぶ風は吹どもとこなつの花の盛にみゆる秋かな
菊の花
[三九]所より植るも著く菊の花移ろふ色をけさはまたなむ
紅葉
[四〇]立田山ふかき紅葉も君こずば夜の錦と猶ぞくれまし
同じ年二月三日うちの御歌合にかたぐ〳〵のをよめる、霞
[四一]吉野山霞たちぬるけふよりや朝の原に若菜つむらむ
右方同じ題
[四二]春霞立や込つる小倉山ほとりのかひに雪も見えぬは
左方
[四三]今朝よりは霞山邊に立昇り三輪の故里仄かにぞみる
なじ
[四四]冬乍らけふばかりにや春霞たなひく空のとに見ゆ覽
人のれう、鶯
[四五]春きぬと待らむ顏に鶯の木高き枝にふりでつゝ鳴く
又右のれう
[四六]春は猶をしみつゝ鳴く鶯の聲に雲居も匂ふべらなり
左、柳
[四七]淺緑みだれてなびく青柳の色にぞ春の風はみえける
又左
[四八]青柳の糸には節ぞ無らまし風のくるにも亂ざるべく
また、櫻
[四九]咲き咲ずつげよ吉野の山櫻霞晴なばよそにてもみむ
左
[五〇]よと共に散ずもあらなむ櫻花飽ぬ心はいつか絕べき
右、山ぶき
[五一]散迄も賴もしき哉山吹の八重を盡さむ程もありやと
同じ方に
[五二]花盛八重山吹を折つれば井手の蛙のねにやなくらむ
左、藤
[五三]諸共にちよは盡なむ藤の花松に懸らぬ春しなければ
右
[五四]常磐なる松に懸れる藤波の花だにちるな春の名殘に
左、くれの春
[五五]あすだにも暮べき春にあらば社心長閑にけふを惜まめ
右、卯花
[五六]咲にけり我山里の卯色は垣根にきえぬ雪とみるまで
右
[五七]白妙にさける卯花闇ならば月とやみまし妹が垣ねは
人のれうに、時鳥
[五八]初聲のよはに聞ゆる時鳥わがごと人も待ちやしつ覽
左のれう
[五九]夏の夜の短きよりも時鳥まだ二聲となかで行くらむ
同じ方のれうに、夏草
[六〇]夏草の繁きに跡もみえぬ哉野中ふる道就れともなく
右
[六一]夏草はしげりにけりな玉鉾の道行人の結ぶばかりに
同じ方のれう、戀
[六二]戀しさの忘られぬべき物ならば何しか活る身とも恨みむ
右
[六三]君戀てあふとみる夜の曉は夢に嬉しきかひ無りけり
同じれう
[六四]我胸の絕ず燃るを忍ぶ哉人にいふべき中にし非ねば
右
[六五]君戀ふと且は消つゝふる程を斯ても活る身とや見らむ
[六六]打解ていをだにねゝば逢事の夢路なさへ隔果つる
[六七]嶺侘て堪ぬ涙の洩ければ遂に水屑となをや流さむ
[六八]夏山のしき思はふりはへてしげらぬ程に道迷ひけり
[六九]夢にだに逢とみる夜の曉は落る涙のかげ添はりけり
春筑紫にて歌よみあまたしてよむに天つつみちといふ所を十二にて
[七〇]須磨の蜑の包て底を潛かねば深き玉藻も見えぬ也鳧
つくゝ〳〵しを十三にて
[七一]雲かゝる空に潛つく筑紫船就こか今日の泊なるらむ
唐くだ物おなじ題
[七二]小搖ぎの渚に風の吹しからくだも殘さず波もよせ鳧
五葉
[七三]跡絕て行もかへるも年をへて人のこえふる相坂の關
うへとの濱
[七四]大島の鳴門の浦の漕ぎ難さ上との濱も斯くや有らむ
すゞむし
[七五]飛鳥川岸や崩れて打濁すすむ白波のせゞにみえぬは
[七六]み山木の枝を分ても白露はおかじを梶のまつもみつ覽
らに
[七七]人知らでたちきる山の唐錦小倉の山の紅葉なりけり
うたう
一思きや萩の下葉の露計りうたうまひたさに移はむとは
おほみつ
[二]蘆分のを舟に乘て障り多みつきに逢見ぬ戀もする哉
十一にて梅花に雪のかゝれるを見て
[三]句をぞくべかりける梅枝に花紛はしてふれる白雪
若菜
[四]君が爲若菜摘つゝちよはへむ珍げなく野べはみる共
又
[五]吉野山麓の雪は消えにけり衣かたしき若菜つむなり
梅花

一春霞立つ片岡の梅の花にほはざりせば誰か知らまし
紅梅
七白妙に匂ふもあかぬ梅の花紅ふかきいろさへぞ見る
ある所にて雨のうちの紅梅をしみて文作り人々
歌よむに
八紅の梅の花かさ雨もよにけふを惜まず花をみださじ
同じ年はじめの所の紅梅を殿上人所の衆などし
て惜む
九梅の花紅ふかき春のよの色をもかをもてらす月かげ
春藏人どころにかれこれうこのうまばにて櫻を
惜む
一〇櫻花散て千世をもみてしがな飽む心は惜もありやと
人のさうじの繪に山里に櫻のはな咲けるに道行
く人のいひいる
一一嵐のみ吹く山里の櫻花いとゞのどけき程はみえじな
梅の宮にて櫻の花を惜む
一二風にのみおほせつれ共櫻花けふは心と散果てぬべし
ある女の許にて櫻を借む
一三一とせに一年ながら散ず共いつか櫻の花にあくべき
又おなじ
一四春風の吹くたびごとに櫻花心のどかにみる程ぞなき
人々別るゝ所にて櫻花ちる
一五惜めどもとまらぬ君を櫻花別るゝ道のみえぬ迄ちれ
四月一日人のもとに時鳥待つ
一六我にまづ鳴て聞かせよ時鳥まだよに馴れぬ頃の一聲
同じ
一七里よきてまづも鳴なむ時鳥みの憂事も傳へまはほし
八月十五夜くら人所にて八月の心をあはれがり
て立ち出でゝ行くに麗景殿のみ曹子のごだち花
薄を折りてたて部よりさし出したり
一八白露のおくより招く花薄結ばぬさきにまづぞ亂るゝ
かへし
一九なべて人結ばぬさきの花薄風にのみ此亂るべらなれ
又、をとこ
二〇定めなく招く尾花の花薄ほに出る秋ははからるゝ哉
又、女郎花
二一我宿に植てだに見む女郎花人はしたなる秋の野よりは
秋の野にいでゝ遊ぶ

二二なべて咲花の中にも女郎花多かる野べは過うかり鳧
嵯峨の前栽ほる
二三百敷に移し植うとも女郎花我が寢ね來し心わするな
おなじ野にて人にいひかく
二四めにつくは少かり鳧女郎花許多多かるさが野なれ共
女郎花のはなもてきて人の植うるに
二五蟲のねの爪かに絕ぬ女郎花いとゞ物思ふ宿に植つる
ときゝ〳〵通ふ人のもとに女郎花の花うゑ程へて
二六女郎花植て後なりいかなれば露の心もおきてなる覽
山里のをみなへし
二七嵐ふく深山里なる女郎花うしろめたくて歸るけふ哉
物いふ人にこと人かよふと聞きていきたるに女
郎花を折りていだしたるに
二八女郎花なべて草葉に置露の秋はて方に見ゆる頃かな
ごせ〻の前栽ほるとて
二九女郎花許多見捨て〳〵過行かばさがの心と思ふべき哉
その野より歸りたるにあるさうじのごだち物い
ひかくるに
三〇百敷に移して植る女郎花心おごりのいかゝせざらむ
萩の花人にやるとて
一三一さを鹿のねに鳴初むる秋萩を折てぞみゆる人の心は
二三二秋萩の色づく儘に鳴く鹿の聲をばよその物ときゝ鳧
人の家に萩植ゑたるみて
三三三妻戀る鹿の涙もかゝらじを今さへかゝる萩の上の露
人どもの遊ぶ所に萩の花あり
三四四秋きても程はへぬれど此暮に驚くばかり風は吹ぬる
六月十餘日秋のせちに入る
三五五今宵より萩の葉風の音すらし秋の境にいりや立らむ
七月七日
三六六一年に今宵計りぞ天の川戀つゝ渡るせをすごしてよ
同じ題を
三七七天川今はみなせに成なゝむけふ彦星の舟路こぐべく
同じ秋を
三八八大方に吹く秋風も心あらば物思ふ宿の萩の葉はよけ
七月七日秋の夜の蟲といふ心を
三九九名にしおふ草の枕に思ふらむ鳴く聲絕ぬ秋の夜の蟲
七月山寺に參るついでに野べの草村の露をみる

四〇秋の野をけさきて見れば闌わがぬぎ懸し露も拂はず
紅葉を遠くみやる宮の御屏風の繪に
四一秋霧はたちかくせども足引の山の錦は玉にみがけり
おなじ題
四二龍田山峰の紅葉もみるべきに霧たちこむる秋の空哉
四三波近き山の紅葉さかりなる所を人の馬にのりて
行く
四四足引の山の錦を惜むとて波さへけふは立ぬなるべし
十二なりけるとし九月によめる
四五花薄招く袂は許多あれど秋はとまらぬ物にざりける
四六武藏守ひでしげが鶴のかたとうかいあせち殿に
奉れり其の使に白銀の龜の箱に藥納めてそれに
四七今年より君に千年を譲るをぞとうかいだうに求出たる
かへし
四八千年ふる鶴の有けむ方にやは今日萬代の龜をすませむ
同じ殿の北の方はぐろめすみを舟につみてすみ
うきよしある所に
四九をりはへて君が薪に漕舟は住江にこそ程はへにけれ
親のしもつふさになりて下るに兄の近江守の打
出の濱にてよめる
五〇諸共に打いでの濱に立つ波の返らむ程を思ひ社やれ
かへし
五一よの人の打出の濱といふとは涙のさきに立名なり鳧
さて尾張より歸りて藏人所にふしたる夜もの哀
れにてこれかれ秋の夜の雨といふことをよむに
五二東路へ行く旅人を別れにて思ひこそやれ秋の夜の雨
〔きちかう〕
五三白露のおける草葉に風涼し曉ちかくなりやしぬらむ
くさの香
五四白露のいかに染れば草のかう置度毎に色のまさらむ
ほそをとこ
五五春の田を打返しつゝ堀立つるほそをさゝみと思ける哉
たゝの戀
五六霜氷心もとけぬ冬の池によふけてぞ鳴くをしの一聲
ある所の前栽合に
五七白雲のはるけき峰の姫小松君が千年の影とこそみれ
志賀の山越に紅葉のかげに鹿
五八瓜生山紅葉の中に鳴く鹿の聲は深くも聞えけるかな

宇治の網代にて

七六紅葉の流るゝ川はむば玉の夜ぞ網代の色はみえける

八六秋くれば移ふ色のこきからに萩の下葉を見ぞ露けき

八六秋の野は唐紅になりに鳥鹿のふりでゝ鳴初めしより

九六ひろくとも頼みける哉花薄風にのみこそ任せたりけれ

一七さを鹿の音に鳴そむる秋萩を折てぞみゆる人の心は

人の許に女郎花植ゑて

二七我宿に移し植つる女郎花秋の野風はあたりしもせじ

宇治のあじろにて

三七水上に紅葉散るらしうぢ川のせゞさへ深く成増る也

人のもとへやる

四七花薄風に亂るゝ夕暮ぞあしかりけりと思ひしらるゝ

五七いつとなく時雨の空に秋くれば物思添る事ぞ多かる

六月に萩の下葉をみて

六七先だちて萩の下葉も色附ぬ後れて秋はいづく迄きぬ

朱雀院の御屏風にはらへする所に

七七大弊をはらへよるとも此川の神はしるらむ深き心は

三宮にこもまき奉るとて

八七五月待つ程は澤水増りつゝ淀の眞菰もおひにける哉

九七木隠れて五月まつまの時鳥忍びてなけど聲盡ぬべし

和歌合に

一八卯花の影にかくれてけふまでぞ山郭公聲もをしまむ

一八今よりは聲な惜みそ時鳥五月待つまの程ぞあるらし

和歌所にて

二八櫻花をしむに年の老ぬれば恨みてすぎし折ぞ多かる

三の宮の御息所子日若菜を奉る小松あり

三八片岡の子日の小松を雪をより心殊にもけふぞ引つる

また

四八霞立野べの若菜をけふよりぞ松の便に千代は積べき

同じ殿の北の方おとゝに若菜まゐり給ふ

五八淺緑野べの松引く子日して摘る若菜は千世添はるべき

〔子日承香殿女御〕

六八君引で子日の野べの老ぬるを何を待つとか世をば盡さむ

人の子うみたる七夜に

七八養てより千年の影ぞ思はゆるまだ二葉なる今年生の松

おなじ心を

八八雲居にも今ぞまつらむ蘆べなる聲振立うる鶴の雛鳥

九八冬の夜のながきを送るほどにしも曉がたの鶴の一聲

物へ行く人にこうらきぬはでやる

一九此度はえだに縫敢ず唐衣たつにとまらぬ涙ならぬに

二九年毎の春の別をあはれとも人に後るゝ人ぞしりける

物へ行く人にきぬとらすとて

三九別路の草葉の露も拂へとてやがて乾かぬ衣をぞやる

四九同じくはきぬに心も頼へてむ涙の止る物ならなくに

五九道露は拂ふばかりの唐衣かけてもうすき心とな見そ

六九みぞぎつゝ別るゝ方の川波に立返りけむ程を社思へ

七九袖の上にうべ白露ぞ懸りける別るゝ道の草の緑りに

八九別れては思出よと朝ぼらけ露けながらもぬるゝ衣ぞ

九九いかなればつげでも人の別けむ深き心を後れざりける

その所にて人の別をしむ

一〇よそにても君忘れめや百年のおのが様々をしむ別を

二〇惜まねど我身のいける程は猶思ひも知ず長らふる哉

はらからの身の沈むよしよめりけるに

三〇君をだに浮べてしがな涙沈む中にも淵瀬ありやと

服にて親のむかへてかへるにはやう川を渡るとて

四〇音にきく淵せの川を立返り悲しき瀬をも渡りぬる哉

正月六日鶯のはつねを聞きてはらからに

五〇鶯の初音ばかりぞ聞ゆなる春の到らぬところ〳〵に

六〇大磯の浦に漕よする白波の打みて歸る程はまさらじ

忘れたる女の家に雨宿りしてねたるを今はこゝにかといひたり

七〇古里は雲ゐの外に飛雁をよそなる人は歸るとやみむ

八〇憂事もまだ白雲の山のはに懸るやつらき心なるらむ

九〇深山木のこりやしぬ覽と思ふまに最ど思の燃増る哉

一一君により幾ら許りか落ぬらむ盡ぬは人の涙なりけり

一一はかもなき跡と見乍ら嬉しきはいくら計の涙出らむ

一二煙とぞ憂世の事は成ぬべき空に分るゝ我名とならば

一二神無月時雨に添ひて紅葉の降もかひ無物にざりける

一三春風になびく柳のいとよわみ心細くてたゆる君かな

一三憂事を空に知せば白雲のかひなき山に懸らましやは

一四秋の野の草葉をみれば押なべて憂身の程に置る白露

一四忘貝よせもやすると住吉の岸うつ波を數へつるかな

一五思遣る夢路遽ぬ物ならば覺束なしと君もなげかむ

一五いひしらぬ思いぞ鄙の東雲に己が衣ぞ露けかりける

祓へしたる女をみて

御禊せし夏越のよゝり人知ず頼み渡ると人は知すや

をしの聲絶ず鳴つる初霜に心をさへもおかせつる哉

下紅葉散り來る秋の風毎にしぐれぬ先も袖ぞ露けき

忘れ貝拾ふ計に住吉のうらみてわたる程はへにけり

花盛すぎもこそすれ女郎花匂ひて風にまづ靡かなむ

吹く風に靡く物かは女郎花露の心もおかせざらなむ

消ぬべき露の我身も言の葉に懸れば止る程ぞ聽しき

忘られぬ心を君にとゞめてむ今は限に思ふなるらむ

煙とも雲とも遂に成ぬべし雛面き人はよそに社みめ

思ふ事云でやみなば山城のとはに苦きみとや成なむ

斯社は逢見る事の難からめ覺束なさは如何にせよとぞ

唐衣絞る計りになりにけり涙も雨も降りてきゆれば

人しれずふりかゝれども唐衣涙にのみぞ顯れぬべき

末の山待人をのみ頼みつゝ我をば波に思ふなるべし

よにもにず物思ふからに苦きは己が心のしわざ也鳥

世のうさも人のつらきも忍ぶるに繁しきに社思侘ぬれ

伊勢海の蜑の濡衣きぬ人は我なと思へば殘らざり鳥

忘るやと暫しばかりも忍ぶるに心よわきは涙也けり

最ざしく物思ふ事の増る哉いつ我戀のやまむとす覽

繼侘てみの徒に成ぬとも忘るな我によりてとならば

心にも命叶はぬ世也けり斯てもいける我身と思へば

けさ社は別てきつれいつのまに覺束なくは思ふなる覽

逢見ぬに死べき物と知ぬれば心をさへぞ殺し果つる

逢見てもちゞに碎くる魂の覺束なさを思ひおこせよ

風吹けば箱根の山の玉こすげ靡きて我に心とゞめよ

大井川井堰の外になる瀧は己が上こそ悲しかりけれ

云知らぬ思のみ社勝りけれ行先いかでまして惑はむ

住吉の怨つべくぞ思ほゆる潮の干る間も今は無れば

涙川をもせき敢ずなりぬれば今は限と思ふなるべし

雨ふれば常よりまさる澤水と聞しは君が涙なりけり

心をも且は割なしと思ふ哉いつのまにかは燃返る哉

雲がくれ過行く月の夜もすがら驚げにては歸る也か

夏衣うすき袂に立かゝる涙はしばしとまらざりけり

こりすまに猶も歸るか玉鉾の道行く末にみゆる物哉

心をぞ習はし物と云なれど片時のまもえやは忘るゝ

恨みてもかひ無物と知ぬれば生てかひなき我身也鳥

住吉の岸によする忘貝せめて戀しきけふぞ來むる

夏衣最ど涙にそぼちつゝおぼしき事もいはできに鳥

五戀といふとをも變へぬ頃なれば云し昔は長閑かり鳥
六七白雲の知ぬ山ぢに隱れなむかゝる浮世の處せき身に
八五我ながら制なき事はしられ鳥今宵計は長閑かれかし
九五音にのみ聞き渡りつる衣川たもとにかゝる心也げり
いなりにまうでたるに瀧のもとにをんな手あらふ
六〇稻荷山山下水を掬ひ上て君さへかげにならべつる哉
かへし
一六山川の流るゝ水の早ければむすぶ計のかげも留めじ
又かへし
二六飽ずして別るゝ今日に掬ぶ手の雫ならねど濁ざり鳥
賀茂にて人に
三九瑞雌のよそに見るともゆふ襷かけても我を思忘るな
四六木綿附の鳥に附ても忘じを悲しなをやは君は殘さぬ
五六雲まより遙にみゆる白雲の山ぢを雫で越てきつらむ
六六今はとて別るゝ袖の涙こそ雲の上より落つるしら波
七六山高み嶺の白雲ふりはへて歸ると思へば物うかり鳥
八六君こふと我ぞ流れていはるべき涙の川に浮沈みつゝ
九六いせの海になごりを高み侘る蜑も物思事はえしも增らじ
一七いかならむと思ふ心の疑に恨て且はゆゝしかりけり
むすめは京にて親は人の國にあるに
二七めに近くつらきに惑ふ魂をいとゞ遙に賴めつるかな
三七朝ぼらけ歸るまもなく降雪に道の行方も惑ひぬる哉
人の國なる女に
四七里遠みいかにせよとか斯のみは暫も見ねば戀しかる覽
五七行先に思ひしりなむ秋霧の暫しも見ぬに惑ふ物とは
六七常よりも物思ふ人の增る哉うべもいひけり秋の夕暮
七七よそにても靡かざらめや人知ず心を春の風に附れば
八七わび果ぬ今は限の身也けり生て歸らむとぞゆゝしき
九七愛しとても且は消なでふる程に我身は雪に劣ざり鳥
一八よもすがらふりつる草枕涙も懸る旅もありけり
二八よの常の思ならずと我戀を君には爭で殊にしらせむ
三八限なく賴むにのみや雛面きとほに出てのみ且は苦き
四八思つゝへぬる月日の程よりも忍兼つる我にやは非ぬ
五八風吹けば入江に騒ぐ鷹鴨の賴むかたなくなりも行哉
六八みなせ川流れてとまる水莖のみえぬ絕まは涙也けり
七八初雪に隱れてみえぬ跡よりも覺束なくて程もふる哉
八八清水の山郭公聞きつれば我がふる里の聲にかはらぬ
九八えぞ言ぬ我は鷹べのたづなれや知人なしに濡て年ふる
一九秋霧の晴ぬ思にまどはれて雁の羽風におどろかす哉
二九云そめぬ程ばかりこそ池水の深き心も包みこめつれ
三九蟲のねの數ぞ勝る同じくは君が雛の露にだになけ
四九小蟹のいかにせよとか我戀の賴しげなき空に忍ぶる
五九君戀て露の命のきえ返る程をだになど待ずきえぬる
六九住吉の岸の白波袖ひぢて今はいふかひなくぞ成ぬる
七九云放つ君にし逢ば大澤の生けるかひなき身をぞ恨むる
八九いひそめし池の水莖絕ぎれども深き心は忘れざりけり
九九今ぞしる馴ての後もから衣袖に涙のかゝりけりとは
一〇君こふる夢の魂行き返り夢ぢをだにも我にをしへよ
二〇ゆふつけの鳥の一聲明ぬれば飽ぬ別に我ぞなきぬる
三〇藻潮燒く蜑の焚火の下にのみ燃つゝ辛き我にやは非ぬ
四〇みをうみに同じ涙は懸らじを盡きず袂に落にける哉
五〇中絕て許多の年に成ぬれば今はかひなし身をぞ恨る
六〇戀しなば今宵もあすも知ぬ身をいける程だに心留めよ
七〇涙川みもうく計り流るれど消えぬは人の思なりけり
八〇疑に猶も賴むか伊勢の海のあまの絡繩くり返しつゝ
九〇常陸なるいかこの崎の忘貝拾ふかひなき物にも有哉
一一飛鳥川人賴めなる世也けり渡りそめけむ我ぞ悔しき
二〇同くば我身も露と成なゝむ消なばつらき言のはもみじ
三〇みのうさに思明石の浦風に蜑の歎はいつか絕べき
四〇住吉の戀忘草たね絕えてなきよにあへる我ぞ侘しき
五〇惑ひつゝ幾世へぬ覽貌鳥のみえし山ぢの猶も遙けき
六〇いつかわれ涙の絕えむ唐ごろも君が心のつらき限は
七〇侘ぬれば曉かけて歸りたる鳴のはねがき我ぞ數かく
八〇思ひつゝ獨ぬるよの唐衣夢ぢにさへも露はおかじを
九〇三輪の山印の杉も枯果て無き世にわぞきて尋ねつる
一一なき人のゆきけむ方は尋ぬ共此世の事は行て歎へじ
二一いせの海の蜑の釣舟春風になごりを高み何か侘らむ
三一霞たつ三輪の山本人知ず春の歎きを我につまする
四一雪降ば先ぞ悲しき三輪の山印の杉もみえじと思へば
五一朝ぼらけおき行露は消ぬべし早晩くれと賴みける哉
六一君こふる涙にぬるゝから衣かへす程なく我ぞ悲しき
久しくこずとてふすべて出ぬ人に
七一こむらさき君が結びし元結の塵打拂ふ程までやこぬ
八一君こすば我も歸らむ神無月時雨にさへや濡て歸らむ
九一假初の心くらべにあふ事の命も知らぬことは知すや

又人に
一二つらさのみ增り行く哉思ひやる夢の魂いかに行らむ
二二草わかみ植て別れし女郎花わがみぬ程に枯にける哉
三二君だにも我だに淺く成はてば思はぬ山に入ぬ計りぞ
四二獨寢の侘しき旅の草枕くさのゆかりに訪ふ人もなし
五二君こふと思ふ心の便にも今はおろかになりぬべき哉
六二夢にても逢と見えなむ戀渡る涙の川は淵せありやと
七二白玉か露かと問む人もがな物思ふ袖をさして答へむ
忘れたる人にいひやる
八二網代ゆく宇治の川波流てもひをの屍を見せむとぞ思ふ
かへし
九二世にし經ば海月の骨はみもしても網代のひをはよる方もなし
〔朱雀院にて〕
一三霞立野べ吹風も寒からで我身のよそに春はたちぬる
二三春くれてなく鶯の一聲を木隱れてこそ聞まほしけれ
三三散る程は雪とみゆれど梅花風に匂ひてきえぬ計りぞ
四三かたらふ人の殿ぬ物のうらのいたくあれたりければ
五三年をへてなれる中をは唐衣うらみてかへす哀也けり
〔人の子になれる女に物など〕して歸る道にやすむ所にて〕いく野といふ所より人をかへして
六三別れにし程に消にし魂の暫しいくの〻野べに宿れる

仲文集

けさうし侍りける女の契りてはべりけるがなくなりにければいと悲しくて女のはらからの許にいひやる
七三流れてと賴めし事は行末の涙の上をいふにぞ有ける
たびの道行く人美濃の國ときの郡といふところに宿りて
八三結び置し人や解らむ下紐のときの郡に旅寢しぬれば
忍びて通ふ人の許に大方のまらうどにていきたるに雪のいたく降りければ忍びていひはべる

四春かけて忍ぶる中も有物をいかなるまより行通ふ覽
女の許に來むとての夜は來で後の夜來たるにふ
すべてこねば
一理や今宵のつみの底にはや入れよ臥なむさり所なし
中將殿前栽つくろはせ給ふに心なき人の撫子を
すきて捨てたるを
二好物を花のあたりによせざらば此常夏も根絶ましやは
大風の又の日家のほかよりもうたてこぼれたれ
ば近き所の程なるさきの中將公任の君に
三我宿は野分のほかも隣より荒增りたる心ちこそすれ
御返し
四隣より荒增れりと云なるはいかなる風に身をば吹覽
花の枝に文のあるを見て
五春のとふ心づかひを尋ぬれば花の便りにこてふ也鳧
承香殿に侍ひける人を語らひけるがみそかに人
をもたりとて罷りたりしかば惑ひ隱してけるに
昏のありけるを見て前の遣水に生ひたりける根
芹をとりて
六澤水に積顯はるゝ忍び根を隱せりけるはうき心かな
みたけさうじすとて石山に籠りたる女ばう人參
りあひてとはすはべりければ
七執くへも身をし替ねは雲懸る山踏しても訪れざりけり
返し
八鳥の音も聞えぬ山に爭でかは雲路を分て人の通はむ
或る女臨時の祭に車に乘りながら來てたゝいね
入りければ小屋にてえ隱れあへす夕日のさして
いとあらはなれば
九思きや掛ても斯はゆふ襷今日の日影に眩ゆからむと
返し
〇十ゆふ襷神に掛ても誓ひてむ夕日にあて、見では非じと
古きめのくれこひたるに
一一花咲かぬ朽木の柚の柚人のいかなるくれに思出らむ
一二斯計くるに苦しき絛繩を唯にくたして止まむさやする
一三地う獄の鼎にも祉煮え給へ多くのせんな落し給ひそ
返し
一四買ふよりも賣る祉罪は重げなれ宜祉釜の底に有けれ
舍人のそのに男ありとて舍人のうれへ申さむと
いふを聞きて
一五古はとねりのねやの物語りあやまつ人ぞあるらし
紀の國の郡ごもをよめる、いと、なか、なくさ、あ
まり、ありた、ひたか、むろ
一六最長き夜は慰まず餘あり絕すひたかむ室に住まばや
雪降りたるつとめて院の御かゆのおろしたまは
せて歌よめと仰せられしかば
一七白雪の降れる朝の白粥はいと能似たる物にざりける
同じ人元輔周防にくだれる道にえとまりといふ
所にて云ひやる　文
一八え泊りに我來たるとは知ねばや今迄君が見に來ざるらむ
返し　元輔
一九限なきよはこを好む君なれば返はみしに勝るなり鳧
堀河の中宮うせ給ひて中宮の內侍のすけせしな
ど尼になりたるもとに　仲文
二〇數へつゝ偖も有つる世を背く後手ともぞ思やらるゝ
返し　な い し
二一背きぬる後手よりも極樂に向はむ君が顏をこそ思へ
又返し
二二あが佛顏比べせよ極樂のおもて起しは我のみぞせむ
正月七日、左衞門內侍に
二三老らくも子日の松に引れてや今日より若きなれ摘らむ
同じ人のゆきのかみになる人のむすめ懸想しけ
る人に
二四解け難き下紐しても心みよ思ふ心のゆきのしまゝで
元のめをやんごとなき物には思ひながら又知る
人多かりけるにもとをばはしのまゐにて物語な
んどしてこゝに居給へれ今參らむとていにけれ
ば誠とて筵のかぎりに居明して曉に歸りきたる
に板の上にさゆばかり置かれて冷えにけりと怨
みければ
二五理や下はさこそは冷えつらめ君に敷べき思なければ
物へいきけるに女にいま秋は必まかりのばりな
むやと云へりければ、女
二六待ずとも秋こざらめや初雁の雲ゐになかむ聲をこそ思へ
東三條院にて粟田の大將中春花雪の如しといふ
題をよませけるに　仲　文
二七降紛ふ花か雪かと紛ふまに我世の痛くふけにける哉
三條院殿にて公任の宰相八月ばかりの月のあか
き夜前栽の花見給ふ　仲　文
二八常よりも今宵の月はさやかなれ秋の夕も迫る計りに
國茂がしき此の使にありきける時にざれたる所
の若き人々聲しければそれうけさせ給へといひ
入れたりければさうじの繪に女のかた有りける
をやりてこれ給へと云ひ出し給へりければ國茂
深うみがこどもと聞きて
二九垂乳の昔の親の顏見ればうみの子供ぞ思遣らるゝ
國茂が父は馬の頭にてなむありける
女返し
三〇垂乳めの昔の親は遮莫さてやはうまの頭のこはよき
婿のともみつたえて置きたりける物のぐども運
ぶに鏡のとまりてありける遣とて
三一影絕て覺束なさの增鏡見ずば我身のうさも知られず
返し　ともみつ
三二君と我形見に見むと增鏡底にとまれる影さへやうき
國茂がめに物云ひけるにことを出したりけるに
ひきて返すとて
三三語らへどかひ無り鳧睦言の調べて歸るねにし違へば
同じ人に服なる程に堺の藏人に
三四きたりとは聞らむ物を藤衣かけて哀と云ふ人のなき
返し
三五今はとて返しゝよりも藤衣きたりと聞くは最ぞ悲しき
同じ人左京の君
三六あな侘し人目の關を越分で道を忘るゝ時の間ぞなき
返し
三七心にも非ずうかりし夢路には忘ぬ物ぞ侘しかりける
又、をとこ
三八程もなく明けて別し曉にいとゞ露こそ起うかりしか
春宮の藏人所にて月待つ頃
三九有明の月の光をまつ程に我世のいたくふけにける哉
をとこの恨むれば又
四〇つらきをし人の恨む物ならば關には我ぞ立むといはまし
一八恨むれどかひなき物と忍ぶるに又忘れつゝ嘆つる哉
返し
二八思ふと云名には絕せぬ物なれば恨むる事は誰と劣ず
本院の侍從の君國茂が扇を取りてこへど返さで

又のあしたに
三八君にても思下らぬ心には扇といふ名立たじとぞ思ふ
返し
をとこ
三九あらがへど人に云へとや云なとや思返せどかひ無物を
男香せざりければ
左京
四〇とも斯も云言の葉の見えぬ哉疑らか 一作露の懸り所は
かへし
四一あだならぬ心に懸る露なれば云でぞ思ふ起てこしより
院の大將殿の侍ひに厨が尊たゝくを見て同じ人
四二厨よりまだ宵なればねぬなはの我等が水鶏叩く也鳥
返し
侍從の君
四三手もたゆく叩く水鶏も殘らねばなほ根芦の厨苦しや
みるのいと長きにつけて
をんな
四四潜きけむ蜑にもとはむ伊勢の海の千尋の底の鰒とぞ思ふ

雜入 勅集 不見 家集 歌

四五かは柳絲は綠にある物をいづれかあけの衣なるらむ
かをさして馬と云ふ人有ければ鴨をもをしと思也鳥

忠見集

春、御屏風春吉野山に霞立てり河に船あり

一霞立つ吉野の山を越えくれば籠そ春のとまり也ける
春日野やく
二燒ず共草は萌なむ春日野を唯春の日に任せたらなむ
いそのかみに山田うつ人あり
三春來れば先ぞ打見る石上珍しげなき山田なれども
飛鳥川人わたる
四飛鳥河淵瀬かはらぬ今更に昔がたりのなそ流れぬる
井出に山吹あり
五峡かでやむ年は無けれど此春は井出の山吹盛也けり
伏見、あれたる家を人わたる
六年經れば伏見の里も荒にけり昔の人は住ぬなるべし
夏、淀のわたりに舟あり郭公なく
七巍方に鳴て行らむ時鳥よどのわたりのまだ夜深きに
同じ所にこもかる

八敷けるごと眞菰の生ふる淀野には露の宿りを人ぞ刈ける
もる山、松おほかり
九誰が爲に民の年經て守山に世をへて松の生添はる覽
難波に葦多かり舟漕ぐ
一〇難波潟行かふ舟の綱手繩くる社見えね葦の間をなみ
しら山に雪あり
一一年經れば越の白山志にけり多くの冬の雪つもりつゝ
三熊野に舟よせて濱ゆふとる人あり
一二三熊野の浦の濱ゆふわれ舟の中に幾らを積て歸らむ
長柄の橋
一三人知ず渡し初めけむ橋なれや思ひ乍らに絶にける哉
みをづくし
一四吹風に任ずる事も浮標待つと知でやさしてきつらむ
秋、須磨の浦に關あり
一五秋風の關吹越ゆる度ごとに聲うちそふる須磨の浦波
高砂に旅人ゆく鹿立てり
一六高砂の鹿鳴く秋の嵐にはかの子まだらに波ぞ立ちける
佐保山に紅葉あり霧立てり
一七佐保山の紅葉の錦いくらとも知てや空に霧の立らむ
こゆるぎの磯に海士あり
一八小揺ぎの蜑は求食に窶れつゝいかなる時か長め刈覽
冬、武藏野に旅人あり
一九行き暮す旅の宿りも武藏野の草むすぶ夜は睦じき哉
あさかの沼
一〇月宿るあさかの沼の水清み夜も玉藻の靡くをぞ見る
浮島
一沖つ波よせばよせなむ浮島に年經る松を爰乍ら見む
同じ御屏風に正月子日若菜摘む
二若菜とて多くの年を我摘めば君ぞ子日の松に似べき
二月初午に、稻荷詣
三神のとくみつの社に祈すと今日より君が榮え行べき
三月櫻の木のもとにてかち弓射る
四心にもいるひの弓はみ山なる花のあたりに音ぞ答る
四月池のへんの藤を翫ぶ
五池近く移りに鳧な藤の花こゝのそこのと爭で惜まむ
五月郭公なく山に女車ゆく
六み山出て都へならば時鳥よびなきそへて言傳にせよ
六月河のほとりにかぐらす

七水上の心流れて行く水にいとど夏越の神樂おもしろ
七月七日かは浴む
八波の立水のあやをも今日は猶棚機のとも思ほゆる哉
八月逢坂に駒ひく
九清かにも見えずぞ有ける逢坂の駒より見ゆる望月の影
九月九日菊に綿かづけたる
一〇萬代を若ゆる菊ぞ置露のまゆを開くる時はきにけり
十月大井川の井堰に紅葉流れたり
一一色々の木の葉流るゝ大井河しもは葦の紅葉とや見る
十一月臨時の祭みる車あり
一二姫小松見れ共飽ずゆふ懸て賀茂の祭にあひやつがまし
十二月ややらふ雪ふる
一三年毎にやらふなはして有つるを今年や終に雪消ぬべき
ある所の屏風正月せちする所あり
一四春霞立と云ふ日を迎へつゝ年のあるじと我や成なむ
二月子日女出たり例懸想する男來合て消そこす
一五子日とも契で君がのへくれば松に懸りてよをや盡さむ
三月春惜む所
一六人の身にきつゝはとまる春故に惜む心の惑ひぬる哉
四月家のかみ祭る
一七年毎に祭らむ數はきねぞ見む戴く神のしらくる迄に
五月五日さうぶと蓬家にあり
一八よはにのみ鳴く時鳥覺束な菖蒲見るべきけさは眺ちぞ
七月七日棚機まつりしたる所あり
一九彦星が影を待つより覺束な仄かに照す月の入るらむ
八月駒迎
二〇見まほしと思ひし駒に引迎へ君がくるにぞ逢坂の關
九月九日
二一花の香を今朝はいかにぞ君が爲まゆ擴げたる草の上の露
十月宇治の網代に女車もみち見る
二二底深きしきつの淵に住ずして網代にかゝれる日なのみやへむ
十一月山づらなる女の家に狩する男物云ひたる
二三夕暮になれば聞ゆる鈴蟲は思へばかりの便なりけり
十二月佛名する所
二四罪とがは目にし見えねば降雪の消えむ朝を見る計也
二五降雪は今宵寒げに見ゆれども罪も共には積らざり鳥
天歷十年三月二十九日麗景殿の女御 藤宮女御なり
の歌合によめる、霞

あら玉の春をも知らで故郷は龍田の山の霞をぞ見る
風
風寒み凍れる谷の下水は春くるとをとくと待つらむ
雨
春雨は降初しかどうつたへに山を綠になさむとやみし
鶯
我宿のこずゑを高み朝ばらけ鳴く鶯の聲はるかなり
梅
香をとめて人も見にこぬ梅の花待暮しつゝ獨をる哉
柳
青柳の絲は靡きて春毎に露の玉ぬく緒とやなるらむ
櫻
惜むべき庭の櫻はさかりにて心を花にまづ移りける
山吹
山吹の花なき宿に住まば社振はへ遠く出でつと思はめ
藤
遲く咲く藤の花故いつしかと我さへ松に懸りぬる哉
若菜
振はへて君が爲にと春の野に摘める筐の若菜也けり
あはぬ戀
限なき戀をのみして世中にあはぬ嘆きを我や殘さむ
あひての戀
夢の如なでか夜しも君を見む暮る待間も定なき世に
右方のれうに、霞
淺綠春はきぬとや三吉野の山の霞のいろに見ゆらむ
風
山河の流れまさるは松風のたにの氷を吹きや解らむ
梅
我宿の梅の匂の滿ぬれば折りてつめると人や思はむ
鶯
鶯の初音ほのかに足ひきの山べを出づる聲聞ゆなり
櫻
我宿の物とも云はじ櫻花折りて比ぶる人もあらなむ
柳
青柳の絲より染むる程もなくとくくる物は月日也鳧
藤
我宿の松にひさしき藤の花紫野には咲きやしぬらむ
山吹
山吹の花のみぎはに匂へばや澤に蛙のこゑ聞ゆらむ
若菜
春くれば若菜摘む野を思ほゆる筐に曳らぬ人し無ければ
あはぬ戀
暮ごとに同じ道にも迷ふ哉身の内にのみ戀の燃つゝ
あひての戀
別ては暮るゝも待ず戀しくは君や程なく物を思はむ
折々の歌、梅のつくり花
梅の花春待わびて咲にけり今は匂の添はるばかりぞ
子の日
子日する野べの小松の徹せば千代の例に何を引まし
松は唯千歳こそつめ引く人は幾世の子日數へ渡らむ
行き返る程さへ遠き子日哉千代の松ひく亀の尾の山
一本に千代を籠てむ松なれば餘り多くも引てける哉
引替ふる子日の松の千年をば待見む君ぞ久かるべき
引く人に千代をわくとも龜山に殘る齡の思ほゆる哉
若菜
若菜生る世には辛きも無り鳥松に知べき君に任せて
春を淺み筐の底にみたねども君が爲にと摘る若菜ぞ
春日野の草は綠に成にけり若菜摘むとは誰か占けむ
櫻散りてなき折に折りたるを人のもたれば
此折れる櫻の散で殘れるは荒き風にも當ずや有けむ
朝毎にはきけむ庭を櫻花けふより後や散ながらみむ
櫻折りておこせたる人に
請共に我し折らねば櫻花たがとも枝に知ずぞ有ける
さき乍らに見べかりけり櫻花折間に多く散ぞしにける
幾十度春の櫻にこりぬらむ暫しの色に賴められつゝ
櫻見に有明の月に出たれば我より先に露ぞおきける
柳
我宿の柳の色の春くれはみどりの絲となりにける哉
散花をぬきも留なむ春くれば糸より懸くる青柳の糸
山吹
井出にのみ有と聞つる山吹の九重近く咲きにける哉
我を思ふ人ぞあるらし故郷に井出の山吹折乍ら見む
山吹を折るとはなしに夕暮の蛙鳴くまで立てる霞か
春の別れ惜む
春ゆかば花の本にや違ひなむ後れば何の身にか成べき
儚くも花の散りぬる哉行方も知らぬ春に後れて
大空と山ぢを賴む春くればたび行く雲を霞と思はむ
鶯
鶯のなく聲聞けばみ山出て我より先に春はきにけり
花なれば枝に木傳ふ鶯の春の末までなくを聞くかな
鶯の聲を知るべに行暮し知らぬ山路に宿りをやせむ
六月鶯なくを
目に見ねど聲に聞ゆる鶯のなくなるなべと思ける哉
別
別路をいづ方へとも知ぬ身は行人を社問べかりけれ
幣よりも我や行かまし陸奥の忍ぶ計りの形見送りに
遠ければ思ひはすとも忘なむ形見なわけて送る優れり
露にだに當てじと思し君しもそ時雨降頃旅に行ける
幣よりも泣々我ぞたゝへまし涙を受くる盥有りやと
行道を恨みとのみはわび果じ歸るの山の松を賴みて
せ栽に盤の飛ぶを
いづくとか夜は盤の渡るらむ行方も知らじ草の枕に
吹風に散る物ならば菊の花雲居也共今朝はみてまし
播磨の國なる夢さき河を渡るとて
別ても寢るとは無しに我見つる夢崎川を誰に語らむ
人に菊奉るとて
あまた有らば添べき物を神無月殘りる菊の限也けり
洲濱に菊植ゑて鶴立てる
千年ふる霜の鶴をも置乍ら菊の花こそ久しかりけれ
菊花移らぬ枝の交れるを今日より後に霜は置かなむ
又やあると問ふ人あれや菊の花限なし共惜まるゝ哉
初雪
初雪を見て
初雪と今朝は起敢で惜む哉偖も有へば我身ふりぬと
戀
誰ならむ儚な乍ら賴まるゝ斯ても終にやさじと思へば
はかも無く浮て見ゆれど白雲の山にも懸る物と知ずや
水莖の行きて返らす成ぬるを何に流るゝ涙なるらむ
つてにても訪べき物を儚くも便なき身と思ひける哉
跡くにか尋ねも逢む身を分けて君が許さぬ心遣ひに
人を待つ心は池の底なれや云初むるより戀の積れば
仄かなる聲ばかりにや葦ねなくに秋の夜を明しけむ
よそにのみ聞て渡らぬ逢坂の關の清水に流れぬる哉
或る人の思ふとは云ひながら逢はぬに
底にして深しと云は賴まれず淺くて影の絕せずもがな

おほやけより祿給はるべきが遲ければ

一〇八十氏の頂く山の雲なれば久しけれ共待つは頼もし

一一我宿は煙と成て雲居なる孰くをさして行むとすらむ

六月つごもりの日人に

一二空蟬はさも社鳴かめ君ならで暮る夏をば誰か告まし

返し

一三唐衣くるゝ夏ぞと思へ共秋も立やとなどかきざらむ

うちの仰せ事にて父忠岑が歌奉れと召あるに書き集めて奉る

一四言の葉の中を泣く〳〵求むれば昔の跡に逢見つる哉

一五君が代に榮ゆくべしと思ひせば訪まし物を忠岑の道

人の國に行く人に衣贈るとて

一六旅人の露拂ふべき唐衣まだきも袖の濡れにけるかな

一七後れじと云ぬ涙も手向には留め兼つる物にぞ有ける

直垂取らせむとすれど裏なむ無きといふ人に

一八住吉の岸とも云はじ沖つ波猶打かけよ浦はなくとも

物かづけて後になまみる女郎花に懸て給ふ人に

一九みるめかる蟹に似たれど女郎花けふは我にぞ被き劣れる

屏風の繪に霞立てる山より瀧落つ岸のほとりに

藤の花咲けり

二〇手も懸で爰には惜む藤花そこに映れば波ぞをりける

柳櫻ならべる處

二一青柳の絲をぞよれる櫻花綻びはてゝ散らむひのため

霧たちて道かくせる處

二二色々の紅葉の錦霧たちて殘れるはてを孰くとか見む

山里に住む女鹿の聲を聞く

二三妻こふる鹿鳴く時になりにけり鳥我獨寢を誰に聞かせむ

おきな稻はこびつみすゝ

二四秋毎に刈つる稻はつみつれど老にける身は置所なき

昔語らひし人の年頃ありて津の國玉さかといふ

所にありけるを聞きつけてまかりあひて夕暮に

鈴蟲鳴きければよめる

二五偶さかに今日逢見れど鈴蟲は昔ながらの聲ぞ聞ゆる

美作國にてかつまたのゆを

二六この山や道の限と思へども勝間田のみゆ遠き也けり

播磨のこふに宿りたるに時鳥のなけば

二七誰をかはこふ渡りなる杜鵑草の枕にたび〳〵ぞ鳴く

同じ所の舟さかの山といふ所にて

二八風おはぬふなさか山は年月も同じ所ぞ泊りなりける

或る人のもとの男にかへれるに

二九なり〳〵て元に落ぬる人を社色好とは云べかりけれ

津のかみのふる歌こひたるにやる

三〇難波津のあなたの事は住江も年ふる松ぞ知らば知りなむ

たちに呼びて物いふ序に

三一難波潟茂り合へるは君が代に悪かる事をせねば也

筑紫へ下る道に安藝國のあしの山を雨降る日越ゆとて

三二一度もまだこぬ道に惑はぬは天の下こそ知べ也けれ

布引の瀧

三三雲の上にたえず雲のみ鬚くは白く落ちくる布引の瀧

女のもとに行きて物云ふに雨のいみじう降ればいと聞うで空も見えぬに夜中ばかりに戸を引き立てゝ入りぬれば

三四音に聞く鳴戸の本に潜きする蟹よ侘しきめを見する哉

京のたよりなかりければ津の國に住まむとて行く道に知りたる人あひてなにしにかくは行くぞと問ひければ

三五都にはありわびぬれば津國の住吉と聞里へこそゆけ

かれより京へ云ひおこす

三六津の國の我頼みこし住吉も便なみこそ間なく立けれ

伊豫に行きたるによしある浮れ女の云ひたる

三七音に聞きめにはまだ見ぬ播磨なる磯の濱と聞は誠か

返し

三八年ふれば朽こそまされ橘柱昔ながらの名だに變らで

津の國に年頃身を沈めて籠り居たるをその先の帝聞しめして召しあげさせ給ひてけりよさり藏人所に侍ひてまかでにけるあしたにありとしの朝臣しておほせ給ひける

三九見しかども何共知ず難波潟波のよるにて歸にしかば

御返りまゐらす

四〇住吉の松と仄に聞しかばみちこし汐やよる返りけむ

前代の御時凡河内の躬恒が候ひけむ例にてみづし所に候へと仰せごとありしを其の後せじの遲かりければ奏せよと思しくて藏人のもとにやる

一櫻花高き梢の靡かずば返りやしなむをりわびぬとて

御返し

二をり侘て返らむ物をきしかげの山の櫻は雲居なり共

さてせじ給はりて御厨子所に候ひて參らす

三年を經て響の灘に沈む舟波のよするを待にぞ有ける

朱雀院の若宮より藤の花給はせたるに

四爭でかは散さゞるべき藤の花風により社君も見らめ

重光の中將とのゝ所に菊を植ゑ置きて咲きうつろふまで參り給はねば奉る

五菊ならぬ花に有せば散なまし植て霜には置せたれ共

宮仕へする女をさそふとて

六月影にみちの間はあかく共今宵は共に出むとぞ思ふ

絹二むら給ふと仰せと給はせければ

七昨日まで恨みし風は大空の叢雲拂ふつかひなりけり

かくおほやけに仕うまつりてもと住みし處へ通ひて

八古の錦はものか百敷をきつゝ通ふとおもふこゝろは

給に住吉のかたをかけるを

九住吉の松も老ぬと思ふらむ影にも波の添てみゆれば

山より瀧落ちたる所

一〇水底のわく計にやくゝるむよる人も無き瀧の白絲

一一皆人の子日する野を九重に霞隔つとよそに見るかな

ある御息所の御方に仕うまつりける人につけて

上のきぬのうらなどやはべりけむ給はりければ

詠める

一二波高く寄るべくし非ぬ船なれや浦にも附けで沖乍見む

同じ御息所まかで給へりけるに暫しとまりたりける人もまかでにければやりける

一三巢守子も出にけるかと見る時はかひ無身さへ羨まれぬる

うちにさぶらふ程に家の燒けにけるを後にいきて見て藏人のもとにやりける

一四栖かなみ霜にわびたる蟲の聲鳴て聞く時君に告なむ

またいつにかありけむ

一五神無月いかでかはふる世中に落る涙ぞ時雨なりける

かるかやを

一六白露の懸るが頓て消さらば草葉を玉の櫛笥なまし

又云ひにやる

一七よそにして侘る涙を我ならぬ人は時雨とよそに見らむ

年かへての頃恨みたる人に

一八孰方に立寄れとてか袖霞思はずにのみ空に見ゆらむ

中務集

子日

九五野べに出てけふ引つれば時わかぬ松の末にも春はきに鳧
家の花見る所
九六野山にも見るべき物を我宿の花を詠めて日をば暮しつ
藤の花見る春をしむ所
一六藤の花咲を見捨てゝ行春は後ろめたくや思はざる覽
山里に時鳥きく
二六山里にまれら也ける時鳥またともなかぬ聲を聞く哉
田のなかに狩したる所
三六袖ひぢて植し春より守る田を誰かは知で狩にきつ覽
長月の九日菊におもてのごひたる人あり
四六老にける身には著しも白菊の花の名立に成にける哉
前齋宮の五十賀の御屏風 わかな
五六若菜生る野を占おかむ君が爲千年の春は我ぞ摘べき
つるのあそぶ所
六六君といへば命をゆづる葦たづは雲の中をや思出らむ
濱づらに松おほく立てり
七六浦近く波立つ松は色かへで世に住江に生ふる也けり
濱に貝ひろふ
八九求食する浦も長閑に波立でけふはかひ有心地社すれ
三條のおほいまうち君の賀權中納言のつかうま
つれる屏風の繪に花見て歸る所
九六飽でけふ歸ると思へば花櫻折べき春ぞ盡せざりける
池にのぞきたる松に藤かゝれり
〇七君を思ふあだし心もなき物を池の藤波まつ越にけり
たちばなに時鳥のなくに
一七色かへぬはな橘に時鳥千よをならする聲ぞきこゆる
野に狩したる
二七女郎花かりの便と聞しまに許多の秋は野べに來に鳧
やり水のつらに菊さけり男文書く
三七流れつゝ影も見べく汀なる菊に戀しき人はならなむ
村上の先帝の御屏風に野火やく所
四七春は斯野をのみ燒と思まになべて草木のいかに燃覽
春ををしむまに歸雁なく
五七留まらぬ春を惜むと最どしく歸る雁さへ鳴渡るらむ

岸に藤さける
六七河岸に生たる松に藤波のかゝれど年のつきぬ也けり
五月五日田舍家に女どもゝ絲くりさうぶ葺きたり
七七菖蒲草てびきの絲も身にかけて永き日暮人ぞ戀しき
因まもる人しゝのはむをもしらでねたり
八七守くる山田の稻にすさぶよは夢とぞ鹿の音をも鳴哉
村上の先帝の御屏風に國々の所々の名をかゝせ
給へるゝよしの山を
九七吉野山ゆきかよ跡も絶にしを霞ぞ春の知べなりける
飛鳥川
〇八定なき名にはたてれど飛鳥川早く渡りしせに社有けれ
石上
一八石上ふるき渡りを來てみれば昔戀しゝ花さきにけり
伏見
二八櫻花散かふ空はくれにけり伏見の里に宿やからまし
もるやま
三八人めのみ守山になく呼子鳥忍びに誰を待音なるらむ
すま
四八濕汐やく烟に馴し須磨の蜃は秋立霧も分ずや有けむ
佐保山
五八初雁の夜深かりける聲によりけさは山ぞ思やらるゝ
しかすがの渡り
六八行ばありゆかねば苦ししかすがの渡に來てぞ思煩ふ
うきしま
七八賴まれぬ心からにや浮島に立よる波のとまらざるらむ
なこその關
八八陸奥の勿來の關と聞つれどなく〳〵猶も越ぬべき哉
御屏風秋の下に鹿なく
九八人しれぬ秋の下なる棹鹿もほに出る秋や音にも立覽
常夏
〇九打はへてみる常夏に飽ぬ哉日毎に增る色のみゆれば
十二月晦日に
一九程近くきぬる物をいかなれば春にも逢で年の越らむ
村上先帝の御屏風の繪に田舍家に男ゝらうど來
れり
二九梅の香をとめてきつれば珍しき雲ならぬ聲も聞かな
きじの聲
三九春霞朝たつ野べに立鳥も忍ばぬねにや人もしるらむ

近き山のさくら
四九我宿の春の山べのつまなれば外の花とも思ほえぬ哉
四月みあれひく
五九君をのみ祈り置ては打むれて立歸りなむ加茂の河波
五月五日
六九著き香も匂ふなる哉菖蒲草けふこそ玉にぬく日也鳧
泉
七九下くゝる水に秋こそ通ふらし掬ぶ泉の手さへ涼しき
秋の曉花を見る所
八九有明の光にまさる女郎花長きよにみむ露におきつ
野の紅葉をみる
九九けふ折らぬ人も誘はぬ紅葉ばによのま吹くる山颪の風
冬ごもりしたる池
〇〇氷ゐる池の汀は水鳥の羽かぜに波もさわがざりけり
雪降るに物へゆく人
一〇雪深く行く東路も遠ければ道にて春にあひぬべき哉
朱雀院のわか宮の御もぎの御屏風の和歌、子日
二〇小松原野べにいづれど伴はぬ春の霞も立まじりけり
梅の花見る所
三〇梅の花折る手元をもみつる哉香を尋ても訪むとぞ思
柳あり
四〇繰返り春はきぬれど青柳の絲はふりずも見ゆる色哉
道行くに時鳥をきく
五〇打はへてまちくる道の時鳥たゞ一聲や聞てやみなむ
神まつる所卯の花さけり
六〇祈るをも聞く便には卯花の盛をさへや神はみるらむ
初雁を旅人きく
七〇初雁の旅の空なる聲きけばわが身をおきて哀なる哉
やり水に紅葉うきてながる
八〇紅葉ばも落積りぬる谷水は秋の深さぞ底にみえける
神樂したる所
九〇小夜更て霜はおけども山人の折れる榊の色は變らじ
一〇〇瀧の絲は皆とぢつらむ吉野山雪の高さに音を變つゝ
御屏風松に藤かゝれる
一疎からで曙れる藤の花ながら松に心は違はざらなむ
うめ
二かくてなほ千代迄かざせ梅花花も變らで春も絶ずば

道行く人時鳥を聞く

一行道もはるけきほどは郭公聲に心のとまりぬるかな

六月祓する所

一君が爲いのる心は水上も流るゝ如く今日やしるらむ

前栽うゑたる所

二露をだに落さで堀つ女郎花植ば孰れの秋か見ざらむ

御屏風に秋の野に花見る所

一花の色の飽ぬ限し歸らずば宿とも秋の野べやなる覽

御屏風、池のほとりの柳

一水底に影の映れる青柳は波のよりける絲とこそみれ

二浦遠く立つる春の霞をばやくしほがまの烟とぞみる

三よと共に藻汐燒つゝたが爲か火にも水にもいれる我身ぞ

○卯の花の盛にのみや山里の垣根も白く人の見るらむ

かぐら

一年毎に神をぞ祈る榊葉の色も變らでをらむと思へば

たかうなはる所

一土分る底來てみれば呉竹の籠れる春のよとも知れず

二吹風に亂れぬ岸の青柳はいとゞ波さへよれば也けり

まつの下に水やれり

一古の心もたえず行水に我が松かげも今日こそはみれ

坊城の右のおほい殿の五十の賀中宮し給ふ村上

の先帝のめしたる、紅梅

一吹風に匂變らぬ梅の花たが染出でし色にかあるらむ

子日

一水底に色も變らぬ小松原千年千代よふ野べに來に鳧

二岸近き松にかゝれる藤波は春の名殘に立とまるらむ

三山櫻人しらねども清瀧の底なる花やながれ出けむ

一住吉の岸の藤波春深くいくしほにかは色まさるらむ

○五月雨の夜も明方に寂く哉物思ふ耶や秋になるらむ

一河水に影のかたぶく山吹は蛙の聲をあはれとや聞く

二山吹の花の盛はかはづなく井手にや春の立止るらむ

三白波のをるかと見えて遠方の岸のまに〳〵咲る卯花

四片岡の御垣の原の鶯は花ちりぬとや音をばなくらむ

みつあきらの少將歌合するに、夜梅

一句ふ香の知べならずば梅の花倉部山にも折惑はまし

柳

一繰返す年へて見れば青柳の絲は舊せぬ物にそ有ける

同じ少將のむすめのもゝかに子日にあたりけれ

ば一條の左の大殿に物などして奉らるゝに

一春雨に空の景色を包めどもけふの小松は猶ぞ引つる

朱雀院の御時歌めすに奉る

一今さらに老の秋に春日野の人わらへなる若菜つむ哉

御覽してひげこにわかな入れて少將を使にて賜

へる

一春日野に多くの年は積つれど老せぬ物は若菜也けり

御返事

○年積めどと同樣なる若菜にもけふだに我や有むとす覽

女一宮の御いかにすはまなどして奉れ給ふに

一波たてゝたづの影さへゆる哉千世の數添鏡なるべし

二水底に影をみせつゝ葦鶴も君には千世を隔てざり鳧

三雲居にて君を見べきたづなれば千代も最祉遙かりけれ

人のうよやに七夜

一千年侍君ありそ海の影みれば小松も今ぞ生始めける

物へいく人につるのかたを幣にして

一君がゆく雲路おくれぬ葦たづは祈る心も知べ也けり

秋物へいく人に

一風よりは手向に散せ紅葉ばも秋の別は君にやは非ぬ

讃岐にて、かげあきら

一もみぢ葉の錦にみゆる浦々は波の文をや立重ぬらむ

返し

一色深き紅葉染けむ浦々は滿ちこし汐の數やまし けむ

大貳のくだるに

一老ぬれど猶行く先そ祈らるゝ千年迄にもいきの松原

風ふくに物へいきける人に

○風吹は思ほゆる哉住の江の岸の波にもあらぬ君さへ

物へいく人に

一時のまも數多度のみ悲きは君が行べき道にぞ有ける

物へいくに雨ふるとてとまる人に

二泣涙空にみてるや大空にけふしも雨のふり留めつる

返し

三こきまぜて涙に雨も降つるに孰れによりて君止る覽

越へいく人に扇やるとて

一白山の雪の餘波は寒く共かたみの風は扇ぎつゝゆけ

物へ行く人に枕とらすとて

一別らむ人の心は此やさへあだなる草の枕と思ふな

越へ行く人に

一白山に雪降り布きて寒くとも絕ず扇の風をわするな

順朝臣の能登守にてくだるに

一雪深く春ともみえぬ心にも折し梅こそ花は咲けれ

返し

一梅花色は雪にも通ふめり歸るやと待て君はとはなむ

又返し

一いつはたと待稽過ぎば白山の雪間の跡を尋ざらめや

豐後守にてくだりたる人の又筑後守にて下りけ

るにやる

○別ゆく君が手向の祈りにときにし道へもゆく心かな

一身にかゝる扇の風を添るゝ舟路をゆかむ君が爲とて

給にあれたる家に時雨ふる男きたり

二神無月そらの時雨も故郷に君等ぬくる袖もかわかず

法師ふかき山にゐたる所

三跡絕て入りにし日より西山の瀧の音にも人め聞えぬ

人の家の前より水流れたり馬引留めたる男有り

四爭でかは過て行らむ河波の立とまらるゝ宿の前より

旅行く人あり雁なく

一行人にそふる心のあやしくも知人なきと迷ひぬる哉

一ゆくを唯思ひやらなむ雁音の歸る聲だに聞ぬ雲居を

一たつときく空を詠めて春霞雁の別ぞはかなかりける

あさりしたる所

一あさりしてかひ有鳧と思身を恨てふると人やみる覽

一身をすてゝ底潛くとも栲繩を長くくる人有じとぞ思

荒れたる宿の紅葉家のうちに散り入りたる所

○空見えて影も隱れぬ故郷は紅葉さへぞ止らざりける

七夕の繪ある所に

一さよ更てけふ渡るらむ天の河影肚みえねど水增るらし

七夕の繪の中宮のひゝな遊びにかはらのかた洲

濱につくれりひゝなの車のかた七月七日

二棚機もけふは逢瀨と開物をかはと計や見て歸るらむ

麗景殿の女御中宮に奉れ給ふ扇に葦手にて

三白波にそひてぞ秋は立くらし汀の蘆もそよといふ也

四棚機の心や空に通ふらむけふ立ちわたるあまの河霧

三條の女御なでしこ合せし給ふに

五葦鶴のおれる濱邊の撫子は千世をや色も引は添らむ

六垣ほなる優撫子色深き今日やこふてふ人をまたまし

七撫子の花のかげみる川波は孰れのかたに心よすらむ

なでしこの花咲そひる夏の野にけふ蜩の聲の聞ゆる

村上の御門の御時の菊合に洲濱につる菊あり

たづの住汀の菊は白波のをれど盡せぬ影ぞみえける

同じ御時に御前に紅梅ををらせて鶯のすなどつくらせ給うて

○鶯の歸れる山の梅の花香をしるべにて人はとはなむ

きたの宮のうちに奉り給ふ扇に

君が手に任する秋の風なれば靡かぬ草は有じとぞ思

袖の浦の波吹き返す濱風は雲の上まで涼しかるらむ

七月七日一品宮のみこのかけものゝれうとうの中將奉れる墓手のぬひものにして

銀河かはべ涼しき棚機にあふぎの風を猶やかさまし

東宮の殿上人あふぎ奉れ給へる

こよ無くてけふは涼しき秋より煽ぐ風さへ秋に成つゝ

中宮の御さうしかゝせ給ひけるに玉ざゝの葉わけに宿る露ばかりとある歌を書きてまゐらせたりければ宮より

みれば猶のべに枯せぬ玉笹の葉分の露はいつも絶せじ

御返し

消ぬまを憂き事にする玉笹は風まつ程ぞ久しき

堀川中納言の韻ふたぎの所にめしたりけるに

山々の繁りを分けて鳴鹿を爭でともしの人尋ぬらむ

後撰の歌ども書きて人に遣すに

亡人の言のは寫す水莖のかきもやられで袖ぞ濡ぬる

人のさうしかゝせける奥に

我よりは久かるべき跡なれど忍ばぬ人は哀とも見じ

村上の天皇の御時にいれもじの仰せ言ありて上たきといふもじもありといふことを入れさせ給ふ

○よゝをへて落くる瀧の白絲にぬける玉とは泡やみる覽

一盡もせず落ちくる瀧の白絲も結びし泡や數々知らむ

たけ

雪を重み枝は靡けど呉竹の下に變らぬよ社見えけれ

〔宮の御もぎの歌よみて奉りしを見たまひて〕　〔右　大　將〕

吉野山瀧の白絲とぢつれど早くしりにし聲は忘れず

短き楢梗を根ごめにひきて女三宮より

濱しげき淺茅が原の花なれば短きほどに秋を知る哉

御返し

淺茅生の下に咲ける花の色を蟲のねごとに誰か引けむ

知たりける人の早ういきける所に又いきけるに

見る人の袖をあやなく濡す哉野中の水の深き計りに

かへるのかれたるをおこせて人

枯にける蛙の聲を春立てなどかなかぬと思ひける哉

返し

誰か斯くからを置ては忍ぶ覽蘇るてふ名をや頼みし

早うすみし家の櫻をはこに入れて人

年をへて住けむ人も訪なくに春を過さぬ花をみよ君

かへし

○明暮にとはぬ計を玉櫛笥そこなる花のいつか忘るゝ

櫻のまたはえしたる枝のあかきにつけて

○春過て秋はまだこぬ程なれば花か紅葉かえ社定めね

又人

○逢と見し夢を頼て春の日の暮れ難きをも詠めつる哉

返し

○心してあらまし物を夢にても爭で面なく見え渡る覽

又人

○頼め共虛しき空を詠めつゝ忍びに袖の濡ぬ日ぞなき

返し

○哀とも思ふ心の空なるは詠むと人もきけばなりけり

五月まゆみの紅葉につけて大納言

○時雨をば待も附でや山端の已れまだきに紅葉そめけむ

返し

○待兼て移ろふ枝のあたりには人に知れぬ秋やきぬ覽

又人

○君戀る涙も袖にもりぬれば我より外に人や知るらむ

返し

○我戀る涙ながらもみに添ひて後めたくも知すなる哉

又人

○身の上も人の心も知ぬまは事ぞともなき音なのみぞ鳴

返し

一君だにも事ぞとしらぬ涙をばいかに知てか哀と思む

又人

二はかなくて同心に成にしを思ふが如く思ふらむやぞ

返し

二侘しきを同じ心と聞からに我身をすてゝ君ぞ悲しき

又人

川水の心をしれる君ならば常より增る今日を知まし

返し

五增るらむ汀の程も知られ共よどの濱べぞ思ひ出ける

悉ふ事ある頃人に

六あるよりも亂增りて蘆の刈る物おぼすとも君は知ずや

ある人

七斯しつゝ世をや盡さむ陸奥の阿武隈河は如何渡らむ

返し

八阿武隈を渡りも果ぬ物ならば河中々に我いかにせむ

きたるにかへしたればまたきて

九秋風に靡く心は葛のはのふき返さるゝをりぞ侘しき

返し

○心より吹にもあらぬ秋風は返る葛葉の恨みざらなむ

又人櫻を見て

二人知れぬ我身也せば宿乍ら花見にこもいはまし物を

返し

二花見にと云がてらにて人知ずをる共風に散さずもがな

ある人忍びて物いふほどに時鳥のなきければ

三今宵社しでの田長も開つめれ今や五月の空に知れむ

返し

四時鳥きゝ渡るらむ五月雨の空ごとにだに人はなまし

語らふ人に物いひて

五現とも夢とも分で明ぬるを眺れのよにか又は見べき

返し

六夢にても思しわかぬ物ならばみて忘なむとの侘しさ

又人

七現には心もこゝろねぬるよの夢とも夢と人に語るな

琴をかりて人に

八年をへて音に聞つる琴のねを手に馴しつる秋ぞ嬉き

返し

九音にのみ聞けることに劣らめやなし初るに秋のそふ覽

方違に人の家にいきて歸りてつとめて萩に朝がほのかゝりて咲きたるを折りてかれより

○初秋の萩の朝がほあさぼらけ別し人の袖かとぞ思ふ

返し

二袖の色も見えやはしけむ朝顏の晝は移ふ別ならぬに

よべの月みけむやと人のいへるに

三いつとても哀と思をねぬる夜の月は朧げ泣々ぞみし

人のこむと云ひてこぬに
三契けむひをも過さぬ棚機は我ごと斯も思はざらなむ
返し
三棚機の契けむひは過す共譬ふべしやは事もゆゝしき
また
五ゆゝし共思はざり鳥棚機の忘れぬ中の有まほしさに
秋の月あかきに人
六戀しさは同じ心にあらず共今宵の月を君みざらめや
返し
七さやかにもみるべき月を我は唯涙に曇る折ぞ多かる
年頃ありて人來て歸りて
八衣だに隔てし宵は憂かりしを簾のうちの夢ぞ悲しき
返し
九うちとなく馴もしなまし玉簾たれ年月を隔て初けむ
又人
一〇時雨にも雨にもあらで君戀ふる我衣手の濡るゝ頃哉
返し
一一こさ增る紅葉ならねどもろもろ色の深さも知れざり鳥
秋いたく風吹く日人に
一二秋萩の色づくだにもある物を心すごくも風の吹く哉
返し
一三寢がてに成べき頃の風の音は萩の葉ならねみにも泌けり
誰にかあらむまた人
一四秋のよの夢路と思はゞ徒に行きて歸るも恨ざらまし
返し
一五行歸る道もしられぬ心にてまどひし我は誰を恨みむ
雨のふる夜人の來けるに
一六月見にとこの夜の許多過ぬれば雨もよにこしと思ける哉
人に
一七袖敷てふしゝ枕を思出て月みるごとにねをもなく哉
七月八日
一八いむと云へば忍ぶ物から終夜天の川こそ羨まれつれ
人
一九高砂の尾上に立る松をだに折ば折つる我としらなむ
返し
二〇高砂の松は折れ共霜がれにまじれる枝を知人ぞなき
門さゝで和泉守順朝臣の垣を隔てゝあるに梅を
こなたの人みなとりたりといふを聞きて梅をや
りたれば、順
二一井堰にも障らず水のもる時は前の梅さへ殘らざり鳧
返し
二二井堰にも障らで爭で洩りにけむ杉の丸杭食も飽ぬに
又、順
二三和泉にはあらぬ繩の島近み波の越つゝもると社きけ
又返し
二四打越る波の音せばもらぬよりしまさの風ぞ吹返さるゝ
また人
二五花を社人や折るとて咎めしか數ならぬ身をいかにかはせむ
みつあきらの少將に
二六木高くて雨もさはらぬ三笠山陰に隱れぬ人は有じを
同じ所にてかげあきら紅梅を折りて
二七常にかく恨て過す春なれど梅にやこりず後も待なむ
返し
二八立てぬる春とぞ聞し春霞かくまで梅に後るべしやは
又これ誰かならむ
二九思ふどち惑ひてをれば梅の花心憎くや深くみゆらむ
同じ少將二月十餘日の夜の月のあかきに
三〇春の夜の宵ゐながらも長らへむと思心も命たへずば
返し
三一此春をのぶる心の始にて千世ふるまでと思ふやは君
人に代りてある女に、みつあきらの少將
三二いかゞせむ絶間がちなる岩橋を賴渡らむとの難さよ
返し
三三葛城のつらき久米路の岩橋の其方も堪る心とぞ聞く
又返し
三四言つぐる君葛城の神よりも絶間は我ぞ渡しわづらふ
又返し
三五絶間なく渡さましかば葛城の神も解てぞ我賴まゝし
人にかはりて
三六猶かであらまし物をみも果ぬ晝間の夢の戀しかる覽
物へまかる人に扇やるとて
三七君が行く舟路に添ふ扇には心に適ふ風ぞ吹きける
又人のれうに
三八待つ程の遠江こそ侘しけれ勿來の關に今はさはらじ
雨ふるよ人と物など云ひてねぬるを思ふ人にか
はりて
三九をやみせぬ雨に萎れて床夏は今宵よしぬと聞は誠か

七月七日

一〇星まよふ程をまつとて棚機の安き空なき雲居也けり
一七今日と皆知ぬ人なき棚機のなかさへ更に夜や深す覽
二七今宵こそ風も涼しく天の河波立ち渡る君を見えけれ
三七何事を思ふともなく終夜ねぬに明ぬる夜をぞ恨むる
四七ぬる折も無てや床を明すべき夢とだに社つらきをば見め
五七かゝらむと思はむ人の夢路にもつらき心はみえじとぞ思
六七よそにのみ近江の海はかひ無て戀しき波ぞ立渡ける
七七斯てのみ憂に命の堪ぬれば頼めぬよ迄待むとぞ思ふ
八七かひなくて明石の浦の秋風に戀しき波ぞ立增りける
九七秋風の吹折にしも間ぬ葭萩の葉ならば音はしてまし
一〇月影の同じ色なる梅花いるとも折てみつべかりける
一一あだに散花うけなむと見るからに水の上社先云れけれ
一二今日迄と流れ出ぬる水上の花は昨日や散果てにけむ
一三侘しくはならぬ迄にも愁へつゝ人に云べきとの無哉
一四年月の行らむ事も思ほえず秋計りのみ人のみゆれば
一五戀し共いはゞすべろに思ほえて人に知れぬぬ鳴頃哉
一六有しだに憂し物を飽ず迚何處に添るつらさなる覽
一七問とはいざや哀と思へ共つらくは如何知せざるべき
一八うき增る我身に知でよそにのみ聞し昔に返してしがな
一九待人の堪ぬからにやさよ更て月の入にもねはなかる覽
二〇見し人をみゆやと夢を賴にはめも逢難き物にぞ有ける
一一今はとて散行花の數なきは露の置くにも置れざり鳧
二一長夜をいかに明して女郎花朝顏なれば露かるらむ
三一遙なる山ならなくに夏蟲の空に飛火とみえにける哉
四一山の端は池の底にも見えなゝむ入共月の隱れざらべく
五一うしと思心の隈のなき時はつらき隱れぬ物にぞ有ける
六一人待と泣つゝ明す夜なゝは徒ねにもなきぬべき哉
七一日くるればまづぬる萩は牽鹿の鳴聲にだに驚きやせぬ
八一戀しきも心づからのわざなれば置所なくもてぞ煩ふ
久しくわづらふころ
九一なく繩の夏の日暮苦しくてなどかく長き命なるらむ
つきわぐ頃
一〇天河珍しきとおほかりと夜こそ此頃さわぐべらなれ
九月つごもり夜風吹く日
一一打捨てゝ別るゝ秋のつらきより最ど吹そふ木枯の風

大江千里集

[1]千里謹言去二月參議朝臣傳[2]勅曰古今和歌多少獻上奉[3]命以後魂神不安臥[4]重病[5]延以至今儒門餘孽側聽[6]言詩[7]未[8]習[9]艶解[10]不[11]知[12]所[13]爲今臣纔搜[14]古句[15]構[16]成新詞[17]別亦加[18]自詠十首[19]總百二十首慄恐宸慮謹以奉進豈求[20]賜[21]目只欲[22]解[23]願千里誠恐惶誠謹言

寛平六年四月廿五日散位從五位上大江朝臣千里上

春

[1]○山高み降來る霧にむすればや鳴く鶯の聲まれらなる

[2]○鶯のなきつる聲に誘はれて花の本にぞ我は來にける

[3]○鶯聲誘引來[4]花下[5]

[6]○閑かなる時を尋て就こにか花の有りかを共に尋ねむ

[7]○花の枝折つるからに散紛ふ匂の飽ず思ほゆるかな

[8]○神さびてふりぬる里に住人は都に匂ふ花をだに見ず

[9]○今は早歸來なまし道也し花を見しまに程ぞへにける

[10]○木づたひて緑の糸のよわければ鶯とづる力だになし

[11]○花をのみ尋こしまに春はまだ深き淺きも知れざり鳧

夜風吹姿毎年春

[12]○はかなくて空なる風の年をへて春吹送るとぞ怪しき

春暖花處々開

[13]暖けき春の山べの花のみぞ所もわかず咲みだれける

落盡閑花不[14]見[15]人

[16]跡たえて靜けき山に咲花の散果るまで見る人もなし

老眼花前暗

[17]年深く老ぬる人の悲しきは咲る花さへ劣るなりけり

花下忘[18]歸因[19]美景[20]

[21]花を見て歸らむことを忘るゝは色こき花に因て也けり

歳時春猶少

[22]年月に增る時なしと思へばや春しも常に少かるらむ

送[23]春那得[24]不[25]慇懃[26]

[1]○飽でのみ過行春を爭でかは心をいれて惜まざるべき

春光只是有[2]明朝[3]

[4]○兼てより我が惜みこし春は唯明けむ朝ぞ限なるべき

雨處春光同日盡

[5]○春をのみ愛も彼處も惜めども皆同じ時盡ぬるがうき

春翁酒易[6]悲

[7]○春々に逢て老ぬる身なればや醉に淚の飽れざるらむ

[8]○哀とも我身のみ社思ほゆれ儚き春を過ぐし來ぬれば

惆悵春歸不[9]留得[10]

[11]歎きつゝ過行春を惜めども天つ空から振捨てゝ行く

一歳唯殘[12]半日春[13]

[14]一年に又再びもこじ物を唯ひるなかぞ春はのこれる

夏

春條長定夏陰盛

[15]木芽はる栄えこしもあだなれば花の蔭とぞ成增りける

鶯多過[16]春語[17]

[18]鶯は過にし春を惜みつゝ鳴く聲多きころにぞ有ける

蟬不[19]待[20]秋鳴

[21]空蟬の身とし成ぬる物ならば秋を待でぞ鳴ぬべらなる

鶯語漸々稀

[22]鶯は時ならねばや鳴聲の今は稀らに成りぬべらなる

餘花葉裡稀

[23]散紛ふ花は木葉に隱されて稀に匂へる色ぞともなき

春盡啼鳥廻

[24]限りとて春の過にし時よりぞ鳴鳥の音の痛く聞ゆる

蓮開水上紅

[25]秋ならではちす開くる水の上は紅深き色にぞ有ける

枝空花落稀

[26]吹風に枝も空しく成行けば落る花こそ稀に見えけれ

鳥思[27]殘花枝[28]

[29]鳴鳥の聲深くのみ聞ゆるは殘れる花の枝をわぶるか

月照[30]平沙[31]夏夜霜

[32]月影になべて眞砂の照ぬれば夏の夜深き霜かとぞ見る

但能心靜卽身涼

[33]我が心靜けき時は吹風の身に變らねど涼しかりけり

潤溯路甚清涼

[34]山高み谷をわけつゝ行水は吹來る風ぞ涼しかりける

秋

天漢遥々不[1]可[2]期

[3]天の川程の遙になり行けば逢見むとの定めなきかな

秋霜鬢似[4]年空長

[5]秋のよの霜に譬て我が髪は年のはかなく老し積れば

秋來只識[6]此身衰[7]

[8]大方の秋くるからに我身こそ悲しき物と思しみぬれ

[9]○置霜に草の枯行く時よりぞ鳴く蟲の音も高く聞ゆる

今宵織女渡[10]天河[11]

[12]一年に唯今宵こそ七夕の天の川原を渡るといふなれ

心情逢[13]秋一似[14]灰

[15]物思ふ心の秋になりぬれば凡て人こそ見え渡りけれ

秋悲不[16]到[17]貴人心[18]

[19]大方の秋を悲しと見るともあだなる人は知すを有ける

樹葉霜紅[20]日

[21]常よりも秋の木の葉に置く霜の紅深く見ゆる頃かな

蕭條秋思苦

[22]かすかなる時のみ見ゆる秋篠は物思ふとぞ苦かりける

悲[23]秋々多[24]老

[25]過て行秋の悲しく見えつるは老なむとの惜き也けり

紅樹蟬鳴

[26]紅葉つゝ色紅に見ゆる日は鳴く蟬さへやなくはなりぬる

[27]秋のよを寒み鳴つる蟲の音は我宿にこそ數多聞ゆれ

[28]行雁の秋過ぎかたに獨しも友に後れて鳴き渡るらむ

[29]吹風の音高くさへ聞ければ置く露さへも寒くもある哉

[30]木の葉皆唐紅に時雨るとて霜のさらにも增るかな

[31]秋のよを寒み鳴つゝ行雁の霜を凌ぎて行き歸るらむ

[32]東雲に秋置露の寒ければ唯ひとりしも蟲のなくなる

鳥栖[33]紅葉樹[34]

[35]秋すぎば散なむ物を鳴鳥のまづ紅葉の枝にしもなく

秋雁過盡無[36]書到[37]

[38]秋のよを且は鳴つゝ過れ共待言傳は見ゆるよもなし

寒雁飛

[39]行雁のとぶと早く見えしより秋は限と思ひなりにき

寒雁聲靜客愁至

[40]鳴雁の聲だに絶えて聞えねば旅なる人を思ざりぬ

[41]鳴蟬の聲高くのみ聞ゆるは秋すむ蟲の秋ぞ知るらし

冬

迎レ冬先有二好風一
いつしかと冬を迎る朝から先よき風の吹ぞうれしき
中宵似レ有二春風至一
さよ更て尚ねられねど春風の吹來るかとも思はゆる哉
一年冬至夜偏長
一年に春くるとは今ぞ知る臥起きすれば明し難きに
新懽多待二夜長一來
新懽へは多く寒き夜の長きよりこそ始なりけれ
心灰不レ改二爐中火一
物を思ふ心は灰と碎くれど熱き時には及ばざりけり
鬢雪多二於砌下霜一
我髪の皆白雪となり行けば置ける霜とも驚かれけり
年々只見二人空老一
年々と數へこしまに儚くて人は老ぬる物にぞ有ける
十分一盞暖二於火一
老眠早覺常殘レ夜
老てぬる目は早覺て長なへよはに過ればねなのみぞ泣
霜末レ殺二萋々草一
霜末レ殺二萋々草一
宵々にまだ置霜の寒ければ草葉をだにぞ枯さざりける
獨坐燃レ盤向レ暁
獨ゐて燃る盤に向へばやかく音もなき身とぞ成ぬる
長年老不レ惜二光陰一
斯計り老ぬと思へば今更に光の過ることもおぼえず
風月
風翻二白浪一花千片
沖べより吹來る風は白浪の花とのみこそ見え渡りけれ
月照二波心一一顆珠
月照レ波心一顆珠
照月は浪の心にひかされて一つかたにも見え渡る哉
柴扉日暮隨レ風掩
侘てふる宿にもかりの暮行けば吹風のみぞ戸鎖也ける
不レ明不レ暗朧々月
照もせず曇も果ぬ春の夜の朧月夜ぞめでたかりける
鶴飛山月曙
鶴の峰飛び越えて鳴行けばみ山隠るゝ月かとぞ見る
滄景難レ逢
雲晴てよき月影も常ならず有らむ限は惜みこそせめ
非レ暖非レ寒漫々風
熱らず寒くも非ずよき程に吹來風は休ずも有らなむ
殘月照レ山明
殘月照レ山明
二つとも見えぬを月の山毎に照渡りつゝ明らけき哉
風索屬二閑人一
定なく吹來る風は掻分てなどかしげきに人に告らむ
月宮有レ路無二思人一
月宮有レ路無二思人一
照月の都ばかりは有と云ど尋て行かむ程ぞ知られぬ
可レ憐春風老
惜みてもとめま欲きを春風の吹過難く成ぬと思へば
遊覽
山雲初晴水色新
雲もなく谷は山さへ晴行けば水の色こそ新た也けれ
猶愛二雲容多在レ山
白雲の中を分つゝ夕暮のめでたきとは山にぞ在ける
借問春山何處高
借問春山何處高
水落青山出二白雲一
水落青山出二白雲一
行水の青き山より落來れば白雲かとぞ見え紛ひける
遙見二人家一花便レ入
遙見二人家一花便レ入
よそにても花を哀と見程に知ぬ山にぞ我は來にける
可レ憐悲靜地
さしわけて深く哀と見えつるは晴て靜き所也けり
井下水頭無二秋日一
陰繁き水のあたりは年をへてすぎゝぬれ共見えずぞ有ける
欲レ偸二風索一繁遊レ春
欲レ偸二風索一繁遊レ春
吹風の光をとめむと思へばぞ暫も春に遊ぶべらなる
長歳作二獨遊人一
綾なくも年のを長く獨してわくがれ渡る身とや成なむ
天高暮山遠
天つ空近く見えつゝはえつるは暮行山の麓なりけり
野曠白雲深
限とて野べの遙に見えつれば立白雲も深くぞ有ける
山花織レ錦無レ緣
山ごとに花の錦を織れゝばぞ見ゆる所の易き空なし
谷水之琴音絶不レ聞
谷水の琴の音絶ず聞ゆれば時の間をだに隔てずぞ見
雜部
泯流二雙軸一面成レ文
泣く涙ながるる袂にかゝりては紅深きあやとこそ見れ
別無二遠近一皆難レ見
別るとも云つる時は遙けき近きを見ぬぞ戀しかりける
悠々一別已三年
悠々一別已三年
近からぬ時に一度別るれば間ぬ三年ぞ隔たりにける
別後相思夢魂遠
別れにし君を思ひて尋ぬれば夢の魂はるけかりけり
朝結二古鄉意一
朝ごとにむすばゝれつゝすぐしつる［　　］
別後愛惜容花改
別れにし君に見せずて徒に形の變る身こそつらけれ
白雲一片隨レ君去
白雲の別るゝ毎に立つれど君ともにこそ行隱れぬれ
後時相見是何時
後時相見是何時
別ての後も君見むと思へ共是を孰れの時とかは見る
送レ故辭春過恨多
送レ故辭春過恨多
人を送る共に春さへ過ぬれば是が恨はあまるなりけり
萬里經レ年別
萬里經レ年別
近からず遙けき程に年をへて獨ある人ぞ苦しかりける
不レ知何日又相逢
不レ知何日又相逢
別ての後は知ぬをいかならむ時にか又は逢むとす覽
沈吟難別情
沈吟難別情
底ひなく物をぞ思ふ有てのみ別るゝことを思ふ我身は
述懷
自靜二其心一延二壽命一
定なき心一つをなしつるも命を延るものにぞ有ける
心更老二於身一
井下水頭無二秋日一
世中を思知りぬる心こそ身よりはすぎて老增りけれ
心をし鏡の浮木になしつれば流るゝ水に心まされり
何獨朝々暮々閑
はかなくていつも我が身の獨して旦夕にしづ心なき
浮世短二於夢一
寄べなく底に浮べる心こそ夢見るよりも儚かりけれ
憂喜皆心灰
悲しきも嬉しき事も多かるを心一つぞなたつかりける
自遠二浮雲無名着一
我身をば浮べる雲になせればぞ行方もなく儚なかりける
幻世去來夢
幻の世とし知ぬる心にはかなき夢と思ふなりけり
浮世水上漚
假初に暫し浮べる魂の水のあわともたとへられつゝ
黑鬢俄假變二春花一
黑髪の白く俄になりぬれば春の花とぞ見え渡りける
恩光春景去
我君も春の光に等くば先なる身とも知りぬべらなり
夢中歡樂又緣レ愁
夢にても嬉きことを見る時は愛に散來る身には隱れり

詠懐

一霜分けて都尋ねに來る雁も春に逢ては飛び歸りけり
七春ごとに逢ても逢ぬ我身哉花の雪のみ降り紛ひつゝ
八春のみや花は咲らむ谷寒みうづもる草は光をも見ず
九白波の立歸りくる數よりも我身を歎くとはまされり
一〇蘆鶴の獨おくれて鳴聲は雲の上まできこえつがなむ
一一天雲や身を隱すらむ日の光我身照せど見る由もなき
一二年毎に春秋とのみ數へつゝ身は一時に逢ふ由もなし
一三思ふこと鳴鶯につけたれば色も變らぬ我ひとりてふ
一四都近なみたちくとも聞かなくに暫だになど身の沈む覽
一五時鳥五月待すぞ鳴にけるはかなく春を過ぐしきぬれば

一本爲忠卿之筆分明也　亞槐譜判

元良親王御集

陽成院の一宮元良のみこいみじき色ごのみにおはしければ世にある女のよしと聞ゆるにはあふにも逢はぬにも文やり歌よみつゝやり給ふ源命婦のもとにかへり給ひて

二一くやくやと待夕暮と今はとて歸る旦と孰れまされる
とうてゐたまへばひかへて、女
二二今はとて別るゝよりも夕暮の覺束なくて待社はせめ
これをなむをかしとのたまひける
早うすみ給ひける女の扇に書き給ひける
二三年毎に夏に扇と聞からに古き事こそ問はまほしけれ
一條にて人々住み給ふことを內わたりの人いひければその女宮の御許にかくなむ聞えたりける
二四皆人のまゐるが如くしりぬれば同じ程社思ひ成ぬれ
宮うかれめこきに住み給ふ頃せまりつといひ騷ぐを聞き給うて藏人にいひ遣しける
二五獨のみよに炭竈にくゆる木の絕えぬ思を知人のなき
二六厭へども憂世の中に炭竈のくゆる煙を待つ由もがな
御返し、女
二七帶木を君が栖かにこりくべて絕じ煙の空にたつ名は
みぶのみこに遣しける
二八へしやよに憂をば是に限てむ思ふ心は逢見るからに
親ある女に程なく絕え給ひにければ親いふと聞き給ひて
二九嶺の羽の薄き心と云なれどうつらしよとぞ先ば泣るゝ
三〇杜杷の大臣にいちや君とて童にてさぶらひける男ありとは知り給はで宮の御文遣しければ、女
三一大空にしめゆふよりも儚きは難面き人を頼む也けり
又女に
三二磐瀨山よの一言に呼子鳥よばふときけば耳ぞ馴ぬる
宮
三三とふとをまつ松山の山彦はいかゞは人に音信をせむ
又、をんな
三四難波女の此方彼方によるといへば汐のひるまや戀しかる覽
宮おはして出でよとのたまへば、女
三五いさゝめに若きをゝみと浮波の立ちはてゝやまむ事はをも
歸り給ふとていも寢らるまじとのたまへば、女
三六ふさりから寢覺をしては起返り又もこしとぞ君は誓はむ
女のもたる物をとりておはしにければ夙めて女
三七人こふる夜の衣に非すとも是は返して我にみせなむ
三八斯て此の女こと人にあひて宮の怨み給ひければ
三九吉野川よしや思はじたきつせの早くいひせばかゝらましやは
宮ことわりとて
四〇秋風に吹れて靡く荻の葉のそよ〳〵き社いふべかりけれ
又、女
四一よと共に君が心し長月にあらば頼まむ秋は果つとも
女今はことざまにやと聞えたりければ
四二松山にまつ波越ていにけれど如何思はむたゞし心を
恨み給ひける、女
四三淀河のよになうらみそ白波のしらすや下に思ふ心は
四四最上川上れば下る富士のねの三島の際にあらば哉てむ
猶怨み給へば女さらば是やめてむと聞ゆれば宮
四五山の井のやまむといへば等閑の淺き心は頼まれぬ哉
女
四六君が田の穗にて見むと思へ共後は人から稻葉と云也
宮御服におはしけるに
四七墨染の深き心やわれなくば哀と思はぬ人やなからむ
こと女に、宮
四八さしくるは頼まれず共下紐の心解たるよをのみぞ待
女どちがへやり戸のもとにて物のたまひて後
四九見し夢はこまなく成てやみにけむ遠へ遣戸の本にれしかば
太秦に詣で給ひてよしある局に遣しける
五〇立寄れば塵たつ計り近き間をなど唐の心ちのみする
又女にあひ給ひて流れてなどのたまひて程へて
遣しける
五一水莖の絕にし跡を尋れば流れてと云しとによりてぞ
御返事
五二流れてと早く云しは忘れねど飛鳥川なる世社つらけれ
此の宮の御嫉大炊の大納言の北の方におはしけるをいと忍びて通ひ給ひけるを、北の方
五三荒る海に堰るゝ簀は立てなむけふは浪間に有ぬべき哉
此の北の方うせ給ひにければ御四十九日のわざに白かねをはこにつくりてこがねを入れてみ誦經せさせられけるにそへ給ひける
五四君を又現に見ばや逢事の互みにふりぬみつは有とも
京極のみやすん所まだ亭子院におはしける時にけさうし給うて九月九日聞え給ひける
五五世にふれば有てふとを菊花愛ですきぬべき心ち社すれ
夢のどあひ給ひて後帝つゝみて渡らせ給ふとてえあひ給はぬと宮に候ひけるによせりよみける
五六麓さへ熱くぞ有ける富士の山嶺の思のもゆる時には
かもあの大君にあひ給ひてつゞめて
五七唐錦たちてこゝちの歸る山路る〳〵も物うかりしか
宮うらみ給ひければ、女
五八世中の憂もつらきも取すべて知する君や人を恨むる
ほどなくかれ給ひにければ、女
五九白雲に非ぬ我身を逢とのまへはの浦にけふはけぬべし
宮御かへり
六〇待乳山待としきかば年經とも色變らじと我も頼まむ
又、女
六一君により心盡しのはかたつの儚きねをも鳴渡るかな
六二驚とならばかはなかぬ振立てゝ花心なる君をこふとて
かく怨み聞えけれど後々は返事もし給はざりけり
又同じかも院の中の君を懸想し給ひけるに女
六三天雲をとぶ假初にとふなれば大空事をいかに見らむ

あひ給ひて後、宮
九六思ふ共こふ共君は下紐のゆふても絶く解むとをしれ
女のきこえ給ひける
○九七思ひせばゆふてもたゆくとけなまし誰か戀の印也ける
一下紐の夕暮ごとに詠むらむ心のうちをみる由もがな
二村鳥の群てのみ君有ときけ獨ふるすに何にあらむと
三憂節の一夜も見えば我ぞまつ露より先に消返るらむ
四宿りゐるとくら許多に聞ゆれば誰れをわきて古巣とかいふ
五同じえにおひつる宿も無物を何にか鳥の音をば鳴けむ
又同じ閑院の三君に稻荷にまうで〳〵あひ給ひて
宮は知り給はぬを女は知奉りて歸りて聞えける
六ぬば玉の闇に交りて見し人の覺束なから忘られぬ哉
など聞えてあひにけりさて、宮
七七埋木の下に歎けと名取川こひしき瀨には顯れぬべし
女
八七我方に流れて通ふ水莖のよる瀨許多に聞ゆればうし
九七流れても賴む心のそはなくに孰れ程にか影の添へき
○八木隱れの下草なれば峯の上の光も終に賴まれなくに
一八盡もせぬ言のは也とみるからに賴むと云も嬉かり鳧
二八風ふけばみをこす波の立返り浮世の中を恨みつる哉
三八むば玉の夜のみ人をみる時は夢に劣らぬ心ち社すれ
四八涙川流れて岸を崩してはこひよるとも非じとぞ思ふ
方さだめなくあくがれ給ひけれどいと心ありて
をかしう思はする宮と聞き給ひて大夫の御息所
の御母の女は宮にあはせ奉りてあしたに、男宮
五八程もなくかへる朝の唐衣心まどひにいかゝきつらむ
かへし
六八時のまに歸りやすらむ唐衣心ふかくや色にそはぬと
母御息所の御許に御后の綻び縫ひに奉りたりけ
れば　御息所
七八移しげに人唐衣思ふには常ならぬ香ぞ添ひてめでたき
かくて住み奉り給ひけれど外ありきをし給ひけ
ればつらけなるけしきにおほしけれど見しらぬ
やうにていで給ひければ　女宮
八八音に高く鳴ぞしぬべき空蟬の我身がらなる憂世と思ば
と宣ひければあはれ〳〵とてとゞまり給ひにけり
同じ御中にまだしかりける時のこの宮に坐し始
めての又の日京極御息所の御中に奉り給ひける

九八いとゞしくぬれこそまされ唐衣逢坂の關道惑ひして
御息所のかへし
○九誠にてぬれけり宿も唐衣こゝに來たらば共に綾らむ
さま〴〵通はし給ひける御文ども今日かへし奉
り給ふとて　御息所
一九やればをしやられば人に見えぬべし泣々も倘返す勝れり
北の方宮にむら子とてさぶらひけるを召しけれ
ばかんしうをき給ひければ男宮こまの院におは
しけるにむら子參りける
二九數ならぬ身は只に社思ほえでいかにせよとか眺らる覽
男宮の御返し
三九徒然と詠めてふれる人よりも宵の時雨は劣らざり鳧
女宮うせ給ひければ　男宮
四九岸にこそ世々をばへしか泉川今年秋をひたしつる哉
又の年の十月に伊衡の中將參りて御みきの序に
五九神無月しぐれは何ぞ古も思ひいづれば歸る世もなし
宮
六九古を思ふにあへぬから衣ぬるゝ程なく乾きこそすれ
ある女のこの宮をうらみ聞えて
七九世中を憂のみ渡る宿りにはかりもこなくに色變り鳧
御返し、宮
八九定なき君が心にあえて社まだき木の葉も秋を知らめ
又、女
九九年經ともなれしとぞ思ふ唐衣薄き心の顯はれはうし
おはしたりけるにはやかへらせ給ひねと聞えた
ればさらにたかしとのたまひければ、女
○○唐錦絕て見ゆらむ關き夜は誰とかあやめ思儘さまし
又
一○何に君思ひかけけむから衣人めもみてはとはじ物故
二○あだ人の呼ひし聲に山彦の答へ初にし身をぞ恨むる
人の國へゆくとて、女
三○濁江のすみうき物と都をば厭ふか山に身をや投まし
こと女に物のたまふとてきゝやうにつけて
四○賴みとは同からまし言葉を歸りに鳧な桔きやうの花
又こと女例の御心見えければ
五○言の葉の我身の秋に逢時はもみぢて空に散と社きけ
宮
六○宇治川の流れて深き心かと我も□たのみはつべく

女
七○賴むれば下の心はあさぢ原露にぬるれば色變りつゝ
五月計に早うすたれ給にける女の聞えたりける
八○梅雨に我手そへつゝ植初めし君が賴みは今や出らむ
女山里にすみける頃
九○秋風の早き山べに住頃はとふ言のはも枯ぞはてぬる
またこと女に文遣したりける返りごとに
○賴まれぬ暫しの程も秋の夜の長き心も非じと思へば
宮
一賴れぬとも心のから衣なれてよるとやさらば思ひし
こと女に、宮
二天雲の遙々みゆる嶺よりも高くぞ君は賴みそめてき
山の井の君に住み給ひて久しくありて宮は參り
たまひて夜ふけてまかでければくらくていかゞ
とのたまひたりければ、女
三苦しとも辿られざりき古を思果てゝし歸りこしかば
おくりに人につけて聞えたりける
四歸來る袖も濡るはたまさかに阿武隈川の水にや有覽
たゞ暫しにてたえ給ひにける人に程へて御文遣
したりければ
五音づれて程ふる山の郭公なく一聲のめづらしきかな
宮いかゞのたまひける、女
六月影に我もおくれず逢ふとは吉野の山に思入りにき
又
七涙だに斯る我身に徵りせば憂もつらきも誰に云まし
からうじてとひ給ひければ、女
八中々に飛火の杜の郭公君こひなきはよはにこそなけ
又
九散ぬべき花の心とかつみつゝ賴そめけむ我や何なる
賀茂の祭の日かづらの宮の御車に奉り給ひける
○しらね共柱わたりと聞からに賀茂の祭の葵とぞせむ
又の日物宣ふ女どもへてらにまであひてみうな
しりつにし給ひていとよく見給ひて遣しける
一世中に嬉しきものは鳥部山隱るゝ人をみつる也けり
忘れ給へりける女清水にまうであひ給ひて宮は
知らずがほにていで給ひけるに聞えける
二假にくる宿とはみれどかましへのおほけなく社住し
同じ所にて常に見給ふ女にしの竹のふししげき

をつゝみ給ひて遣しける
三一篠竹の節は許多にみゆれ共よゝに疎くも成にける哉
おなじ人に、宮
四一いかにして繰染にけむ糸なれば常にはよれ共逢由のなき
返し
五一近くだによるともなき白糸のあふ計には思ほえぬ哉
やんごとなき女の御もとに
六一尋ねつゝ今踏初る山道にいつ鹿の音ぞまづ鳴れける
返し
七一世中の秋山にのみ聞ゆればいつ鹿の音も耳馴にける
又おなじ人に、宮
八一難面きを強て頼めば水の上の浮たる草の心ち社すれ
返し
九一草の名におほせもせじ山川の早くより社浮て聞ゆれ
忘れ給ふなよと女の聞えければ
〇二谷の松月の桂にねをふみて花咲かむ世や君を忘れむ
所仰殿中納言君に程なくたえ給ひにければ、女
一二人をとく茅川てふ津國の名には違はぬ物にぞ有ける
かくて物もくはでなく〳〵戀ひ聞えて松に雪の
ふりかゝりたるにさして聞えける
二二來ぬ人を松の枝にふる白雪の消こそ返れあはぬ思に
昇の大納言の御むすめに住み給ひけるをひさし
におましましきて御とのごもりて後久しくおはせ
でかのひざにしかれたりし物はさながらありや
とりやたて給ひてしと聞え給ひければ、女
三二敷返すありしながらの草枕塵のみぞゐる拂ふ人なみ
と聞えたりければ、宮
四二草枕ちり拂ひにはから衣袂ゆたかにたつをまてかし
又、女
五二唐衣たつをまつまの程こそは我敷妙の塵もつもらめ
斯ておはして後宇治へ狩しになむと宣へるに女
六二御狩する栗駒山の鹿よりも獨ぬる身ぞ侘しかりける
一條の君に
七二世中をいかゞはせまし春霞よそにもみしと人は云也
御返し
八二哀とはみれども疎し春霞かゝらぬ山も非じと思へば
山の井の君の家の前をおはすとて楓の紅葉のい
とこきをいれ給へりければ、女
九二思出でゝ間には非す秋果る色の限をみするなるらむ
又ほど經てとひ給はすとうらみて
〇三山の井にすむと我名は立しかど訪人影もみえすも有哉
すりの君のもとにおはせむとありければ、女
一三高く共何にかはせむ呉竹の一夜二夜のあだの節をば
うきまで人を尋ね給ひければ、女
二三八重垣に一重優れる九重にあだなる人は尋しもせじ
女のもとにおはしてとまり給へと宣へば、女
三三渡つみの底の心は白波の知ではいかゞよるとぞや君
こといできて後京極の御息所に
四三侘ぬれば今將同じ難波なる身を盡しても逢むとぞ思ふ
かねもとのむすめの童べのもとに今こむとのた
まひておはせざりける又の日、女
五三人知す待つにねられぬ有明の月にさへ社欺かれけれ
あしぶちと云ふ馬に乘り給ひける頃女のもとに
久しくおはせざりければ、女
六三有乍らこぬをも云じ葦ぶちの駒の上社戀しかりけれ
これにおどろきてなむまどひおはしたりける
女のもとにおはしたりけるに明けぬと聞えたり
ければかへり給ひて、宮
七三天の戸の明ぬ〳〵と云做して空鳴きしつる鳥の聲哉
返し
八三天の戸をあくるも我は知ざりき谷深りし鳥の音にかで
時々おはする所におはして前栽の中にて立ち聞
き給へば宮の今宵夢にみえ給へるかなとて、女
九三現にも靜心なき君なれば夢にも假と見えつるがうさ
御匣殿に、宮
〇四鶯の木づたふ枝を尋ぬとて花の栖かを行てみしとや
一四遙々と思ひて月も過ぬれば今はなつくるとを待つ哉
二四告初めし思を常にかすめても覺束なさの猶まさる哉
返し
三四いつよりか君が思の剛ぬらむ今より外にいふぞ怪しき
源命婦に方ふたがりたればなどのたまひければ
女
四四逢事の方はさのみぞふたがらむ一夜廻りの君となれゝば
と聞えたりければ障らでおはしにけり又の日さ
ておはせて嵯峨の院に狩しになむと宣ひければ
五四大澤の池の水莖絶ぬともさがのつらさを何か恨みむ
御返事もいかゞありけむ忘れにけり
近江介なほきがむすめどもかたちよく心たかし
と聞き給ひて遣しける
六四荻の葉のそよぐ毎にぞ恨つる風に返してつらき心を
又
七四淺く社人はみるらめせき水の絶る心は有じとぞ思ふ
返し
八四せき河の岩間を潜る水淺み絶ぬべくのみ見ゆる心を
月のあかき夜おはしたるにいでゝもなどは聞え
てとくいりにければ、宮
九四夜々に出と見しかど儚くて入にし月と云てやみなむ
扇を落しておはしにける見れば女の手にてかけ
る
〇五忘らるゝ身は我からの過ちになしてだに社思絶なめ
とあるかたはらに書つけて奉る
一五床しくも思ほゆる哉人毎に疎まれにける世にぞ有ける
こまのゝ院にて秋つとめて人々おきたりけるに
源のゝぶるひとりごとにいひける
二五白露の消返りつゝ夜もすがらみれども飽ぬ君が宿哉
といふをきこしめして
三五蓬生の草の庵とみしかどもかくはた忍ぶ人も有けり
同じ院にて泉川といふことをよませ給ひ人々の千
とせおはしませといひ聞えければ、宮の御
四五泉川心にかなふ命あらばなどか千年も渡さゝるべき
又
五五泉川水ふかげなる水なれば人なみ〳〵の聲ぞ聞ゆる
志賀の山越の道にいもはらと言ふ所もたまへり
けりそこにおはしつゝ人見給ひけるを知りてと
しこ書いつけゝる
六五狩にのみ來る君まつと振出つゝ鳴鹿山は秋ぞ戀しき
或る人御文遣すに隱れて侍らすといはせければ、
七五隱沼と聞くからにこそ深芹の思そこぞと思やらるれ
又つかはす
八五なに返り假にも有ぬ玉章を雲居にのみぞ待渡りける
物のたまふ女男いできにけり十月ばかりに遣し
ける
九五こまはとや移ひにけむ木葉故そこの村雲何時雨る覽
女宮名してよせ奉らざりける頃四宮より

○七身をつみて思知りにき薫物の獨寝いかに侘しかる覽
御返
一七心から今はひとりぞ炭竈のくゆる煙をまつ人もなし
おぼしかけたる女男したるに御文遣したりければ
二七三芳野の山より落る瀧つ瀬の早く成せば待ぞしてまし
宮の御返し
三七秋風にとより斯より花薄そよやさ社は云べかりけれ
前わたりし給ひければ女にこの月はいかと聞こえたりければ、女
四七大空の月だに宿にいる物を雲のよそにも過ぐる君哉
近衛の帝の君といひける人に
五七思つゝ云ねど何かさも非ねば心にのみもまくる我身か
女に物のたまひてあしたに
六七崩返り焦れし草も厭ひにき唯宵の間の露におかれて
京極の御息所
七七吹風に敢でこそ知梅花あだに匂へる我身とな見そ
かねみちの宰相の女に
八七そむれども濃さも増らぬ唐衣色の限をきてみつる哉
又
九七あふたには今も昔も比ぶれど人花がたみ空に戀しき
女わすれなむとこそ覺ゆれと聞ゆれば宮いみじう恨み聞えける女に宮
○八恨みつゝ歎きのかたき山ならば風の風の早く忘れね
物のたまふ女こと人に物いふと聞しめして、宮
一八早晩と我まつ山の今はとて越ゆなる波にぬるゝ袖哉
返し
二八松山に憂はこす共君をおきて波の立名は有じとぞ思ふ
又宮
三八逢事の涙にのみぞ濡そはる飽ぬ世ををし悲しと思へば
御返
（歌略）
絶えはて給ひぬると見て　山の井の君
四八山の井の絶はてぬ共みゆる哉淺間をだにも思ふ心に
又うこと云ふ人の聞えける
五八心さへ五月雨なりし郭公いかで今年の聲をきかまし
御返
六八めに近く身には見じとや鵙よそにて聲を聞むてふ共
いとあだにおはすと聞きて、女

七八つきもせず憂言のはの多かるを早く嵐の風も吹なむ
宮御かへし
八八露にだに移り行なる言のはのなどか嵐の風を待らむ
京極の御息所
九八思ふてふと世に淺く成ぬ也我こゝばかり深きとせよ
又花かんし奉り給ふとて
○九鶯はなかむ雫にぬれねとや我思ふ人の聲ぞよそなる
三條の右大臣の御女の經しや世にとかいたまひたりける
一九何か世に今は恨と思むしらねば人のつらき成らむ
津の國にたまさかといふ所に知りおき給ひける女に
二九て島なる名をたまさかのたまさかに思出でも哀とはなむ

清慎公集

〔藤原實頼集〕

延喜の御時飛香舎にて藤の花の宴ありしに
三九薄く濃く亂れて咲る藤の花等しき色は有じとぞ思ふ
天暦の御時にせさいの宴させ給ひけるに
四九萬代に變らぬ花の色なれば孰れの秋か君は見ざらむ
村上の御時に御遊びあるに召なかりければ内侍
督のもとに聞え給ひける
五九春ならば呼子鳥をも聞てましつらきは秋の終也けり
或る女に聞えはじめ給ふとて
六九音くに物馴にける衣手は涙と共にふりやしぬらむ
女に聞え給ひける
七九人知れぬ思ぞ年をへにける我のみ知るはかひ無りけり
かへし
八九心より誰かはしみむ數々につくる思の色ぞ消えなで
また
九九誰にかは許多思は告初し君よりまたは知すぞ有ける
返し
○○あだ人のかける思は定なく打附に社つかばつくらめ
また
一○あだ人の無に非ず有と云へば我身にばまだ聞も習はぬ

かへし
二○君ならで又社きかねあだなるは御祓の程のなにや有覽
唯斯く
三○厭ふをも知らぬ我こそ哀なれ
をんな
いとゞ疎きになほも添ふかな
女、おとゞやいかゞのたまへりけむ
四○云さして唯こそ死なめ水莖の流るゝ底の心知らねば
返し
五○雨降れば濁ぬ水も聞えねばまづ山の井に疑はれける
おとゞ
六○山の井も水には深さ増りつゝ絶るとなき物を社聞けか
かへし
七○音にきく心安積の沼水ぞおりたゝね共とむ底を知る
おとゞ
八○みちのくに有と云なる山の井は遠き所ぞ猶頼まるゝ
かへし
九○程遠く聞きのみ渡る浮島のうきたる程に頼むなる哉
おとゞ
○今よりぞ嬉かりける頼むべき心に早くさらば成なで
かへし
一人はいさ頼みやすらむ我は唯嬉しかるべきとも知ぬに
大臣あるやうありて
二○黄昏に人答むらむ秋風に忍ぶることの答よ
女いかゞ聞きて
三○君だにも問ふに答る物ならば黄昏時を何かおつべき
大臣いかゞ聞え給ひむ、女
四○かくばかりわかなのつめばをしきを
おとゞ
かへし
五○惜しとても唯にやまむ春日野の若菜摘には行と社聞け
六○何せむに唯にも行む春日野に摘まば若菜の種は絶なむ
おとゞ
七○萬代に摘まむと思ふを春日野の若菜の種は猶も萠なむ
かへし
八○筐にも摘人あらば春日野の若菜の草は任せてを見む
大臣たいかく聞え給へり
風吹かでなぎたる浦の春なれや

とあれば
九風吹で風たる空と聞からによそなる方も潮のみぞ滿つ
御はらからの女御の御はらからに詠み給ふと聞きて
〇二潮のみつかたは白波渡つみの羨ましくも聞き渡る哉
かへし
一白波のまだこそ知らね高砂の羨ましくぞ何か聞ゆる
二夕されば早晩とのみ高砂の松といふとを聞にや有覽
かへし
三誰をかはまつ高砂のしかばかり羨む迄は音の聞ゆる
四縫ひきする人しなければ唐衣君が袂を頼みこそすれ
かへし
五よそ乍ら縫こそきせめ唐衣袂の下にきしもならさで
六君だにもぬひて掩はゝ唐衣よその袖とて何か思はむ
又おとゝ
七移ろへる色に倣ふと菊の花後やすくも非ずも有る哉
かへし
八菊の花移ろふとやうつるとてならふ錦ぞ色增りける
九花も葉も移ふ菊を見人やあだなるとは見も習ふらむ
かへし
〇移ろふを音にぞ聞くと云人も花に劣らぬ心ち社すれ
なりきたのかたに
一わがごとは思はぬ君を世中の心細きになほ頼むかな
返し
二君だにも心細しと思ひなば我さへ頼む人やなからむ
なりきたのかたうちにのみ物し給へば、大臣
三今ははや深山を出でゝ郭公けぢかき聲を我に聞せよ
かへし
四人はいさ深山隱れの時鳥ならはぬ里ぞ住憂かるべき
またおとゝ
五子規み山を出でぬ物ならば我も里には何かすむべき
かへし
六人知れぬ思もなくば郭公何か深山を出でがてにする
女に
七哀とも思ふや君は年をへてつらきを強て頼む我をば
又
八玉簾かけて隔つな心なくけぢかき色を君は見せなむ
女に
九音にきく年へにければ菊の花心あてにも折つべき哉
かへし
〇一紫に咲けども何か菊の花心にくは折らむとぞ思ふ
おとゝ
一菊花折てこそ見めよそにのみ心を遣むとのかひなき
かへし、女
二匂ふとはよそに聞鳧花のえの心高きは折られしもせじ
返し
三遠くては匂はむとも忘れしを心高きも折てこそ見め
女かへし
四哀とも人も見るべく諸共に有明にのみ世を出しかな
おとゝいかゞのたまへりけむ、女
五聞にだに痩渡るなる水なればおり立人ぞ思遣らるゝ
同じ人に
六秋風はいたく吹とも女郎花思ふ方にもまづ靡かなむ
女やいかゞ聞えたりけむ
七花だにも色かはらずに紫の深き心はいつかうつらむ
八立寄てまつはれをらむ女郎花荒き風にも當じと思ふを
又いかゞ聞えたりけむ
九我ならで誰をかは折む女郎花心をりにく主は無く共
女御二葉より生ひし種なればと聞え給へれば
〇女郎花なでし昔を聞からに折らぬに袖は先ぞ露けき
いかゞ聞え給へりけむ
一風だにも吹亂るなる花なれば引寄てのみ折むとぞ思
疑ひ給ひけることのありければ
二松山は變らぬ色し高ければ波越すとをまだ聞かぬ哉
女やいかゞ聞えたりけむ
三渡つみの泡に譬る物ならば徒にてぞきえすべらなる
女
四君だにも常磐の色の變すば松の千年を誰とかはへむ
かへし
五千年をも飽ず有べき松の葉の數を年にぞ倣むとぞ思
おはしけるを返し給ひければ
六悔しくも歸にけるか唐衣かひだゆき迄返すかひなし
女のいかゞ聞えたりけむ
七宿に社撫で育しけめ女郎花そと秋の野の露に濡らむ
八色々に花の心は移るともおふ〳〵我は折むとぞ思ふ
又
あだにこそ露は置らめ花薄我が結びてし色は移らじ
また
〇六唐衣かへる人なみたき物のこの下人に燃えや渡らむ
また
一限なき思しあれば唐衣ぬるゝほどなく乾きこそせめ
女やいかゞ聞えたりけむ
二すり衣ぬぎての後も夕月夜覺束なくは思はざらなむ
三思へとて覺束なしや闇の夜は手計にては如何知べき
女かへし
四て計か戀もやすき覽夜めにても著きは人の心とぞ見し
女御の御もとにおはしたるに歸らせ給ひねと聞
え給ひければ
五月は出て入るとて社見れ小倉山麓に來ては歸る物かは
大臣おはして歸り給へるに　中務
六戀渡る君を見しには有ねばや思やまれて今日も悲き
返し
七逢見ても戀ふるも物の悲しくば慰め難く成ぬべき哉
同じ人に遣す
八宵々に君を哀と思ひつゝ人には云でねをのみぞ泣く
返し
九君だにも思出ける宵々を待つはいかなる心ちかはする
中務に又
〇七我身をも我に任せぬ我なればつらきもとく成にぞ有ける
かへし
一心にも身を任せずと聞からに頼む方なく思ほゆる哉
二月二十八日櫻の花御覽じて文作らせ給ひ畢よ
ませ給ひけるに
二まだ散ぬ花の見ゆめる春風の吹もやまなむ後も見べく
八月二十八日嵯峨野の花御覽じて
三口なしの色をぞ頼む女郎花今宵は野べにいざ止らな
もとすけ人知れぬことありて女を恨みて
四憂きながら流石に物の悲しきは今は限と思ふ也けり
かへし、女に代りて
五思はむと頼めしとも有物を無名は立てゝ唯に忘れよ
新命婦に遣すとて
六木葉さへ降に降るめる故郷に爭で殘れる紅葉なる覽
又おなじ人に
七花も葉も色は咲なば散に鳧心の深く見えしかひなく

かへし
八七花の色の薄きはつらし年ふれど深き心ぞ誰か染けむ
又遣しける
九七故里は忘れやすらむ櫻花いとゞあだなる心おもへば
小一條の右大臣まかりかくれて後かの家にかひ侍りける鶴の鳴き侍りけるを聞きて
〇八後れゐて鳴なるよりは蘆鶴のなどて齢を譲らざりけむ
内侍督馬元名が家に權中納言實資がわらはにて侍りける時弓射にまかりたりければ物書かぬ草子を賭物にして侍りけるを見侍りて
一〇いつしかと明て見たれば濱千鳥跡あるとに跡の無哉
返し
二〇留む共かひ無なからむ濱衛二人ぬる跡は共に聞つゝ
むすめにまかりおくれて又の年櫻の花盛に家の花を見侍りて聊かに心をのぶといふ題を
三〇櫻花のどけかりけりなき人を戀ふる涙ぞ先は落ける
天德三年九月二十三日召二鎮守府將軍仲舒朝臣一贈二小祿及馬一種々物裹入轉レ之斜壺之紙手書二和歌一首一
四〇雲に入る翅は野べにおほくとも心移りて我を忘るな
三條右大臣定方失せ給ひて後御女十人おはしけるが母上の御賀し給ひけるにかざしまゐり給ふべき人は誰かとおはしけるを小野宮のおほいまうち君はかの御子にておはしければ女御殿御消息聞え給ひてぞかざし進らせ給ひけるむすめたちの御さうぞくさま〴〵の錦織物えもいはぬ樣に裳唐衣みな着給へれば女御どのし給ひとりつきなどは御つき〴〵のむすめたちなどぞし給ひけるそのかざし奉り給ふついでに詠みかけ給ひける子時右衛門督
五〇散にけむ花の今迄匂せば今日の插頭に先ぞ折らまし
男の女のもとに文やりたるに返事せざりければ
歸りて
六〇夕けとふ道の空なる人だにもものいらへはしつる物也
女のもとにおくる
七〇君を猶恨みつる哉蚤のかる藻にすむ蟲の名を忘つゝ
康保二年正月忠君來二北野宮一是貞信公御愛孫也
仍以二大德一勸二盃酒一其次有二此詞一

八〇新らしき年の始と思へども止らぬものは涙なりけり
同年二月二十八日看舊庭難仰悲戀（兼盛元輔能宣等視候云々）
八〇見るからに袂ぞ濡るゝ櫻花空より外の露やおくらむ
敦敏亡逝之後不レ知二其由一從二關東一有レ送レ馬之不レ堪二悲涙一聊述レ所レ懷
〇九まだ知ぬ人も有けり東路に我も行てぞ住べかりける
古を思ひ出で給ひて内侍のすけに給へりける
一九鈴蟲の劣らぬ音こそ泣れぬれ昔の秋を思ひ出でつゝ
あらはに出でゝ逢ひ給ひければ平内侍
二九絶えぬとも何思ひけむ涙川流れ逢ふ瀬を有ける物を
後本に底の玉藻もひかり見えけり
搔衣を
三九風の音に驚かれてや我妹子が寢覺の床に衣うつなり
はつ雪
四九初雪の薄くに降れる庭の面は踏見むとも可惜しき哉
殘の菊
五九霜のおける殘の菊の長月のながき例に匂ふなりけり
（原缺）
さか〳〵しくも見えぬなるらむ（下缺）
七月ばかりに月あかき夜例の物云ふ人のもとに
六九忘れても有べき物を此頃の月夜に痛く人なすかそ
ごとゝも思はぬ女の常に物いひかけしかば
七九梅が枝に雪も止らぬ春なれば木の下露や常に露けき
内わたりにて語らひし女絶えて後恨みければ
八九逢坂や旅ゆく人の篠原に一夜は宿にとらぬものかは
右衛門の命婦のもとにこの少將に名のりみやの
おはしたりと聞きて云ひやる
九九怪しくも我濡衣を着たる哉三笠の山を人にかられて
同じ人に久しく絶えて
〇〇忘れぬ斯忘れと忘られすいか樣にしていか樣にせむ
扇の繪に梅の花書きたる所にかく
一〇年毎に止らぬ花の色よりも枯たる野邊を見ぞ悲しき
五節の所にてさし櫛をとりたるを返すとて
二〇人知れぬ心一つに歎つゝつげの小櫛をさす空ぞなき
返しいかなる人にかありけむ
三〇搔分て我をなさしそ美しとおもて〳〵に且は云つゝ
右衛門の內侍猶うとかりければ
四〇ならされぬみその〻瓜と知乍ら宵曉とたつぞ露けき
戸をさしながら物いひし女に、堀河に家ありき
五〇思事なるとか聞しかひもなくなど打解ぬよはの白波
かへし
六〇打つけに思ひ鳴門の浦みるはあだなる波の（如元）
八月ばかりに思ひたる人にあひて人めをいたく
忍びしかば夜深く歸る旦に薄につけて遣しける
七〇花薄むすびおきたる袂ゆゑ露も心もとけず見えける
返し
八〇ほめ結ぶ野草隱れの花薄とけてや秋の過きむとす覽
物いひし人に瓜のありしをやるとて
九〇たつとの物愛りつる瓜なれば後やならすと頼ぬる哉
かへし
一〇あだ也と名に立君は瓜生野の斯る列にも倣はざり鳧
横川にてさくなんさを見て
一一紫の色には咲くな武藏野の草のゆかりと人も社みれ
かへし
二一櫻花山に咲くなむ里のには勝ると聞を見ぬが侘しき
母上東の宮にさぶらひ給ひしに暇にて久しく參
り侍らざりしかば閏冬につけて給はせたりし
三一よそ〳〵見れど露だに慰まず如何はすべき撫子の花
御かへりその花すこしなえたるに
四一暫しだに蔭に隱れぬ程は尚うなだれぬべし撫子の花
まさもとの少將よさりこむとありしにさもあら
ざりしかば
五一山風の風ぞふけども言の葉も今ぞ散りこぬ谷の埋木
かへし
六一おいらかさ峯の松とは云ずして思はせたりな谷の埋木
服なる頃大輔の君に人の國よりのぼりたりて
物へゆく道になるに云ひ入るゝ
七一戀しとは思はぬものゝ藤衣きたりと聞けど逢ぬ心よ
をとこのあるほどにて返しなし
八一堀河の中宮にて雪のいみじう降りたるつとめて
麗景殿の細殿に雪ふりかゝりたる枯れたる薄に
さしてすだれよりとのもりつかさしていれて少
將の奉りたることぞある
九一時過ぎてかゝる薄の身なれ共招く方にぞ行止りける
とて取らせたれば
一〇定なく風もこそ吹け花薄いかにせよとか行とまる覽

又かはらけに書きて打ちわりて
〇一定なく風も吹く夜は篠薄からむ方なき物をしぞ思ふかへし
二哀とぞ思ひなりぬる篠薄秋こそ憂けれ春もつらしや
一品の宮の御盤所にて山吹の花に柑子を折りて
柑子を願ひしかばなくして到りたりしかばとりて餌袋にてさし出したり腰につけてなり梅壺の方に参りて花をこき入れてかく書きて入れたり
三嬉しやは是をみつれば味氣なく花に成たる心ち社すれ返し
四いつさなく長閑き春の空なれば花に劣らぬ身とも成なむ
又かへし
五時ならぬ身にも爭でか成ぬ覽春に後るゝ花は有やは
又かへし
六春の花ちら(如元)やと思へども言の葉繁く斯てやみなむ
藤の侍従五月五日にまろなるさうぶにつけて
七是だにもすさめすと聞菖蒲草斯るは君にふさひとかきくかへし
八菖蒲草かゝるは人に引かれけり汀に添る君や何なる
唐衣をとりて結びめをときておこせたりし
九我ならぬ人にはまろと結置し紐いつのまに打解てけむ
石山の寮の紅葉を
一〇有明の月は空にて山の端に深くも人のいりてける哉
九月九日菊の露を見て
一一移ろへば菊に結びて置露の解けぬ霜をと長く見ゆ覽
一二行く方も定なき世は水早み小舟を棹のさすや孰こぞ
一三衣を寒み立つ川霧にある物を泣々かへる千鳥悲しな
衛門の内侍ときめきし頃山に上りて云ひおこせたりし
一四空高く時めく月と聞しかば我も雲居にきてぞ詠むる
堀川の中宮の内侍に物いふ頃雨のふりければ
一五俺ぬれば難面し顔は作れども袂にかゝる雨ぞ侘しき
内侍所に立寄りて人のありしかば瓜に書きて
一六こそは一夜つら乍ら立休ひし瓜にやは非ぬ
中宮大夫のうぶやの七夜昔を戀ひ給ひて
一七多につけ思ぞ出る昔をばのどけかれとぞ君は云まし
御かへし
一八君がかく云ふにつけても古の心のうちに心あるかな
藤の侍従立ちよりたるに月もなき所なればいとをかしと云ひたるに闇のうつゝはといへばさやかなりといひたりしかば
一九思ひつゝ睡む程に見つる夜は斯る現ぞ儚なかりける
女のかりしに
二〇命だに儚くもあらば(如元)よに思つきにしことは忘れじ
又女に
二一いつ迄の命も知らぬ世中につらき歎きの唯ならぬ哉
返し
二二身をつみて長からぬ世を知人と偏に人を恨ざらなむ
すりのかみこれたゝねすけの少將をむこに取るべかし(如元)と聞きて
二三栖の森答だにせよ月たゝばかのゝとも皆成ぬべし(如元)
五月五日子規の聲せずとて
二四今宵しも聞かでや止まむ時鳥後に鳴とて定なき世に
女を尋ねしに
二五罪深き物にざりける女郎花尋ぬる人を唯にあらせず
女御殿すのこにほぞちを長櫃に入れておかせ給へるを夕立のすればみかうしおろしたる紛れに失せたれば
二六盜人はほぞちを見ても雨ふれば干瓜とてや取返す覽
石山に詣でたるに川づらに千鳥の多く立てば
二七涙には同じみどりの雨ふれば心をもかつ尋ねつる哉
二八法の雨も涙もわかぬ神無月きひて(如元)時雨や隙無るらむ
みやの御返し
二九櫻花なくさむさまざまと聞くをも見ぬるわびしさ(如元)
なくさむさを隱して
三〇權中納言の御もとに春の花見にいきたりしに櫻の散りしかば
三一櫻花まだ見ぬ程に散りにけり後の春だに心あらなむ
御かへし
三二此春の君をば待ちつ櫻花風の心のなきにやあるらむ
同じ殿かく花見給うて今だに心やすく殘の花見むとさだめ給へる日風のいたく吹きてとまる由のたまへるに
三三天つ風吹きも(如元)らぬ物ならば心長閑に花も見てまし
御返しつうたう(如元)はなれ奉るをいと痛く哀れがりて聞き給ふに
三四吹止むる風ぞ悲しき春の夜の色の常なきとを思へば
又、常なきことを知ると思へどもあり
殿の失せ給ひての春雨のいたう降ればその日
三五春雨も時にしたがふ世中に今と降るぞと思ふ悲しさ
これも後に聞きたるを人の書きつけたる
かさ病み給ひて死ぬべき心ちするをさりとも暫しとかくなさせ給ひそと經よまむの心侍るとて女御殿に聞え給ひけるをおぼし忘れ給ふとてをさめ奉り給ひてければ上の御夢に
三六しか許り契りし物を渡り川歸る程には忘るべしやは
又の年の秋父君夢に
三七きて馴れし衣の袖も乾かぬに別れし秋に成にける哉
なくなり給ひて後七日ばかりに清日僧都の夢に
父大臣のおはする所に物を隔てゝあにの少將はもの思へるさまにておはしゝこの君は心ちよげにこさうの笛を吹き給ふと見ればたゞ御口のなるなりけりなどか母上の兄君よりもこひ給ふに御心ちよげなりと聞ゆるを遂はすとおぼしたる御けしきにてかくのたまふ
三八しぐれとは花ぞ千種に散紛ふ何古里の袖ぬらすらむ
花つみあげて
三九心にもあらで逢見ぬ年月を今日まで花と摘てける哉
かへし
四〇移ろはぬ心なりせば年月を花と積ても見ずぞ有まし

入二撰集一歟

〔原本據二勅撰集一補二九首一今略唯記二國歌大觀番號一〕

後撰集　六　一三五　一三六　一三八　九九八　九〇四　拾遺集　一三〇

書契二蓬萊宮裏月一今遊二極樂界中風一　朱判

校合畢　從三位行治部卿平朝臣兼通

清慎集予雖二秘藏之本一任二御所望一令二書寫一校合遣覽候者也尤他見書寫被レ免聞數也穴賢々々

永享二年孟夏下旬　尋阿　在判

有清慎集多レ本世皆有二書寫之誤等一依レ之雖二一決一併此本於二諸本一校合所々隨レ宜用レ之亦於二正本一求者重而可レ遂二校合一者也漏々繁多而已

文明五年三月日　藤　在判

西宮左大臣御集

〔源高明集〕

をんなに

○六すまの蜑の浦漕舟の跡もなくみぬ人戀る我や何なる

笛を人のもとにおかせ給ふとて

一六笛竹の元の古音は變る共己が世々には成すもあらなむ

小野の宮の中の君にいと久しく聞え給はで

二六さりともと思ふ心に引されて今迄世にもふる我身哉

御返し

三六頼むるに命の延る物ならば千歳も斯て有むとや思ふ

九條殿の三の宮に聞え給ふ

四六年月は我身にそへて過ぬれど思ふ心のゆかすも有哉

かへし

五六朽難き物とこそ聞け時かへで常磐の松と成にける哉

六六夢にだにみぬ物からに暮難き春の日をのみ詠つる哉

七六種しあらば岩根の松と聞しかば心にのみぞ任せざりける

かへし

八六常夏にわびしき物は色深く思ひそめたる心なりけり

○七五月雨の長雨に濡て郭公今年さへにやふる聲をせむ

一七現にもあらぬとこそ難からめ夢計だにみつといはれむ

御かへし

二七見つとだに云べき方も思ほえず現も夢に我はみねば

小野の宮の中の君に聞え給ふ

三七露計り頼む心はなけれ共誰にかゝれる我ならなくに

かへし

四七量りなき草葉をみつゝ白露のかゝるとこそ哀也けれ

又かへし

五七はか〳〵ら草と知せば白露の斯るとをぞ知ずぞあらまし

六七よそにのみ有ぞ侘しき久方の天つ空にも住ぬ物から

七七我ひとり思へば苦し限なき心ばかりをわきて知せむ

八七人やりにあらぬ物から恨むるも身の理と思知らすや

九七侘果て已もしぬべきよそにのみ難面き人を菊の白露

○八斯しつゝ月日を經ぬる世中に有難き身を我いかにせむ

一八明暮に思ふ心を現にも夢にもみぬはたがつらきなり

二八日をこそは長き物とは思ひつれ月の程だに暮難き哉

又なしと答ふ計ぞ今は唯誰にもとはで我に聞へかし

三八限なく燃る思の中にだにみえもせなくに我いかにせむ

おもひこがれし夏むしの

四八世中に時を待つるかひもなく夢にだにやはみえ知す覽

五八置所有りともみえぬ露にのみ思消ちても長閑なる哉

六八人しれぬ我ぞ侘しき白露のいとゞ心に消むとやする

七八光まつ下にかゝれる露の命消はてねとや春の難面き

八八鶯の木傳ふ花に踏つけし跡の見えぬをいかで尋ねむ

九八歎つゝ忍ぶることの苦しきにいひても物を思ふ頃哉

一九山彦の答ふる聲や聞ゆらむ眺めし程に春はきにけり

二九諸共にみむ人もがな獨のみをればかひなき常夏の花

三九限なく深き心も斯しあらば淺ましくやは思絶えなむ

四九脈ふてふ言の葉をだに露計みまくほしきや何の心ぞ

五九水莖の跡をし君に任すればゆかぬ心も有じとぞ思ふ

かへし

六九あだならむ人の心を水莖の堰止め果ず流れましやは

七九初雁のはつかに聞きし言傳も雲路に絶てわぶる頃哉

八九脈ふてふ言の葉ならば年をへて秋を何しか色のみつ覽

九九神無月時雨とのみや思ふらむ天つ空にてこふる涙を

○○空にもや人は知らむよと共に天つ雲ゐを詠め暮せば

一〇打侘て啼音にかへば山彦の答へぬ空は有じとぞ思ふ

二〇秋の田の仄に人を哀とも嚴手に懸てやまむとやする

三〇時雨にも雨にもあてじ徒に年のふるにぞ袖は濡ける

四〇秋の夜の月の光に非ねども明ては劣る物にぞ有ける

五〇年をへて戀ぬ思の甲斐もなし試かてら脈ふと思へば

六〇春をだに早晩とのみ思ひけむまつ鶯の聲もせなくに

かへし

七〇長からむ心みえにも斯計り長閑き春の名をたつる哉

八〇人しれず君によそへて梅の花折みる程に袖ぞ濡ぬる

九〇ぬるゝほど露ならなくに唐衣儚き名をも殘すなる哉

一〇打忍びなくとせしかど君こふる涙は色に出にける哉

一一皆人の云ひふるしてしとなれど此梅雨は怪しかり鳧

かへし

二云ひふるす人だに無ば打附に思ぬとも云すはやらまし

かへし

三一雷にけるとの脈ひにせき侘ら云ねはつらき心も耐すれ

四一直道に頼めば人をつらしとも知ぬ顏にて有むとぞ思ふ

五一つらさをば咎めぬ人のひたぶるに絶ぬと云も如何頼まむ

かへし

六一つらくとも何か恨みむ今更に嬉しさ誰か君に優らむ

七一けふよりは秋の始と聞からに袖の袂ぞ露けかりける

かへし

八一頼まれぬ秋の心に似る人や露けき程を先は知るらむ

かへし

九一言葉の色にさ耐は優る覽などてか秋を頼まざるべき

かへし

○二語るだに深からば耐戀どに知ぬ哀をいはむと思はめ

かへし

一二戀どにまた云知ぬ君ならば深き心のあらむとぞ思ふ

七月七日

二二七夕の契れる秋もきにけるはいつと定ぬ我ぞ悲しき

かへし

三二疑もなき七夕の中なれば契れるほどを過ざぬなる哉

四二秋深く成行く野べに鳴蟲のいとゞわびたる聲聞ゆ也

五二思ふ事有て鳴ねど秋きつとになきける蟲の聲きけ

六二時雨する神無月かと聞しかど涙の玉ぞけふ降にける

返し

七二涙とも分れぬ雨の降けるは時雨ときかば哀ならまし

かへし

八二よと共にたえぬ涙の雨よりは時雨や何ぞ何ならなくに

かへし

九二空に降涙のよにし聞ゆれば袖の時雨を劣りこそせね

返し

○三なく涙空にもなどかふらざらむ天雲晴ぬ物を思へば

ちかづきて

一三爭でへし我ならなくにとしあらば今しも物の悲かる覽

かへし

二三有しより今しもとのみ悲しきは偖ぞ中々有べかりける

三三篝火も物もしる〳〵あかすのみ惑ふ心を思知るらむ

一宮の中の君に聞えそめ給ひける

四三袖の色のこく成ぬれば我戀を知せそめつる涙也けり

また

五三山彦の答へぬ空はよにも有じ聲をさへにも隔つる哉

とあるに御返りなければ

六三詠め飽でをかしきことを云しまに戀も我身も積てける哉

海人手子良集

（國原師氏集）

治承三年七月二日書寫校合畢
寿永五年四月十三日以二眞觀本一書寫校合畢

春

三白妙の雪は霞も三吉野のかさねて今日や立始むらむ
四こち風に氷薄くて池がおもの水柱もへゆる鴛の鴨鳥
五隙せどもおそきはるべに獨ゐてながむる宮の鴛の聲
六句ふかのめも春風にさきだゝば散やそむらむ紅の梅
七どふ人も見えぬ莖のもとなれや今は菫の盛なるかな
八暇なみ淀のさしつる程もなく春の遊の波のよるとか
九陸奥の雛のわたり磯なめて若めかりにぞ螢も行かふ
一〇久かたの緑の空の雲間より聲もほのかに歸る雁がね
一一我妹子が肩に似たれば青柳の靡くにつけてまず涙哉
一二春の末夏のもとにはかゝれども松に亂れぬ岸の藤波

夏

一三八少女もけふや一重に夏衣神の御禊ぞ急きたつらむ
一四見渡せば今は蒴黄も緑にてなくみを鳥の聲のみぞする
一五卯花のさかりになれば時鳥夜ふかきぬにぞ有明の月
一六菖蒲草軒の限は隨もなみ今日は淀野やあらはなる覽
一七數ならぬ賤が環もおのがじゝ今は早苗の急がしき哉
一八亂れずてこの下闇にをぐら山麓に鹿をともすあき人
一九あせもよに亂るゝ夏も涼しきは君に扇の風早みなり
二〇高瀬さす鵜飼も今はおりたちて水懐しき鴨のうは波
二一茂り合て亂るゝ荻の上葉すら靡くは夏も皆盡ぬらむ
二二露結ぶ本荒の萩の末たをになりゆく秋も近づきに鳧

秋

二三鵲の行會の橋のつきなれば猶渡すべき日こそ遠けれ
二四聲よわみ亂るゝ蟲を木枯の露ふき結ぶ秋の夜な〳〵
二五彦星のながめにけふは天の川さしてやわたる鵲の橋
二六白露と草葉におきて秋のよを聲もすがらに廻る松蟲
二七山吹の色にかひある女郎花さのみやゐでの名には有覽
二八霞たち立返りにし雁音もけふぞ雲居に霧晴れてなく
二九高砂に立ち渡りたる霧間より紅葉の色のふかき奥山
三〇八重菊の移ろひ渡る庭の面に繰ても結ぶよはの白露
三一仄々と天のと渡り明たればこきませ也やよもの玉垣

冬

三二股更ふる衣のつまにたつ物はけふ珍しき火桶也けり
三三陸奥の歌の濱べにこのはかた無らむ冬の風うからまし
三四吾妹子が玉の臺に獨ゐて最ごわさなにやまな語らむ
三五菜鶴の遊ぶ洲崎も冬くればけさしも冬の心ちみえ鳧
三六霜月のひよりも宇治の網代木に今も氷のいなにざりける
三七をみかよふこゝの重ねに光さし豐の明に見ゆる妹哉
三八鴛鳥の衾のなかも涼しやとよな〳〵霜の夕重ねつゝ
三九雲高きよもの高嶺もかたちなる皆白山にみゆる頃哉
四〇都へと行かふ人の道もなみ年のせめても急がしき哉
四一百敷の大宮人も群居つゝこぞとや今日をあすは語らむ

あはぬ戀

四二爭で猶みてのかさまもえてしがな我する戀の數の印に
四三逢坂の泡沫人は陸奥のさらに勿來をなつくるかもし
四四歎きつゝ片敷く袖に比ぶれば清見が關の波は物かは
四五よと共になべて景色を陸奥のさは此身よと云せてしがな
四六すはの海の神のみまをも詠つゝけふ終日にをり暮す哉
四七君がふる涙は袖に常陸なる色付くそこの峰はなるらし
四八君しいなばいな〳〵社は信濃なる淺間が山と成や果なむ
四九東路の濱名の橋の早くより深き心はくみて知るらむ
五〇たそがれに涙の玉を詠めつゝ寢臥してよはに明す灯

逢ひての戀

五一小搖ぎにさし出て見れば天の原波間に越る舟の我哉
五二岩橋を造りさしけむ葛城の神にけなくも朝ぼらけ哉
五三隙もなく涙に袖を濡しつゝ駒に任せて歸るよな〳〵
五四通へ共常に惑ふを武藏なるさゝの山べの知べせよ君
五五割なきをしなむふしなむ美作やくめの皿山今更に君
五六逢て逢ぬ歎き駿河のふじの浦に焦れて歸る螯の舟かも
五七忍びねに又忍びねの重なりてひるま泣々袖朽ぬべし
五八逢坂の道に垣ほは越ながらまだ許されぬ下紐のせき
わかれ
五九ひなたかのよもの別も斯やたつ烟はみよに過にたる哉
六〇別路をけふぞ限と陸奥のいはで忍ぶにぬるゝ袖かな
六一今はとて別るゝ人を三熊野の浦の濱ゆふ重ねてぞ思
六二別路となづくる度は玉鉾のみち見ぬ人も猶惑ふらし
六三別路に行くもとまるも二心袖にうきても歎くころ哉
六四別るゝを心筑紫にくだるともいきの松原色變らめや
六五別路は千草の殿をさし乍らいなくら山の駒と社みれ

無常

六六結ぶての雫に濁る月影の身としりぬればちよも否々
六七春たてば子日の松を引つれて孰ら祈りし千世の驗は
六八燈の影にならべし世中を孰れ久しとかすめてしがな
六九ちよをまつ松の緑とみえしよは早月草のうつし也鳧
七〇朝がほに露の命をくらぶれば花の匂は久しかりけり
七一庭の面にうきて漂ふ泡沫のまだきえぬまに變る世中
七二澤の面に年ふるたづのちよをへて後は羽打程もなしとや
七三色深き峯の紅葉も山川の底に朽葉のみくづとぞなる
七四しつもなし綠とみえすすかはねし孰も白き渚也けり

いのり

七五細石に生むよ松にすを作るたづの日なきも君は住みなむ
七六山彦を知べになして緑にも孰くかかめの內に通はむ
七七斧の柄をて馴し初ぬ君なれば何をかくたす何はくたさむ
七八三千年になるてふ桃のもゝ返り君が爲にと植し山人
七九衣してなづる巖の盡るまで君が齡をしらざらめやは
八〇遠鶴の千世の齡をさし乍ら君に讓るとなつくるがもと
八一限なき齡をのぶる浦島のこの玉くしげのごけしや君
八二君が世は猶大原のをしほ山なつの〳〵末も賴もしき哉
八三昔より春日の藤の榮ゆれば今の使もかざしなりけり

とし

八四思はむと忍び〳〵に誓ひしを今は乱の神ぞゆゝしき
八五たが方の浦々毎に潜きつゝ蜜は苫屋に幾日へぬらむ

月

八六風ふけばひゞきの灘の音高み波の末わくあまの釣舟

とき

八七思ふこと君を思ふも思ふ也倘しかすがの渡にてこそ

花

八八ませ近く植うる花しも匂ふ哉こや木枯の秋の初かせ

春の花に鶯むつる

八九鶯の木づたひちらす櫻花こや春の日の遲きなりけり

夏ほたる汀に火をともす

九身を照す螢きえなば夏の夜の汀暗しと火を燈すらむ
池水かゞみに似たり
七池水の長閑き底に影なみそさるは鏡にみゆるなきはな
玉のひかりていのなかにあり
八別る共君が汀に上るにはいきの松原はたみざらめや
逢坂のせき
九別る共身のうち舟ぞ憂りける手向の神もみえぬ波かは
秋の夜の月みづに浮ぶ
〇三秋の夜の月影浮ぶ水の面や天の川とも見え渡るらむ

此一册者定家卿以二自筆本一書寫于尤可レ爲二證本一者也
永正三年九月日
右之本文字繁二多不審一亟而以二類本一可レ爲二校合之一者也
永祿元暮春念日
左府藤公彦五判

御堂關白集

東三條攝政第家子道長

三位中將春日の使したまふつとめて左衛門の督公のもとへ遣す雪いみじう降る程に
一若菜つむ春日の原に雪降れば心使を今日さへぞやる
御返し　左衛門督
二身をつめば覺束なきは雪やまぬ春日の原の若菜也鳧
華山院より
三我さへぞ思こやれ春日野の雪間を爭で人のわく覽
御返事
四三笠山雲やつゝらむと思ふ間に心の空に通ひける哉
藤壺の戸口にあつまりゐて物語などする程にか
の藤中將參り侍りつるかひありて嬉しく侍る世
かなと云ひて歌うたひもの語しなどする程に春
宮よりまづ參り給へとあればわりなしとて唯今
また歸り參らむ暫し待たせ給へとて立ちぬ奥の
方よりいづくにおはしつる人は立ち給ひぬるか
とあれば春宮へとて今參らむとてありつるとい
へば心うのことやとて
五霞立つ春の宮にと急ぎつる花心なる人にやあるらむ
といふ程におはしたりかくこそといへば
六隔てける心も知らで春霞うしろめたくも立にける哉
六位藏人あきかたを源少將いかでなど宮の御前
に啓し給ふを六位にはなほ五位はあしかりなむ
とのたまはせてさもあらねば二日ばかりありて
七昨日より思ひしとは絶えにしを猶歎かしき我心かな
御前に御覽じて心くるしくものはかなといへと
のたまはすれば御けしきやになどして
八恨ても海士の汚繩繰返し思たゆべきことのすぢかは
つれ〴〵と雨ふりて詠めさせ給ふほどに中納言
のせんしの局より紅梅のいとをかしきを進らせ
給ふとて
九霞こめかばかり惜む梅の花就れの隙に誘はれぬらむ
返事
一〇隔もなき霞の間より梅の花か計りにても爭で折けむ
三月二十五日に殿の上御經佛などはやうせさせ
給ふ宮より名香奉らせ給ふに
一一春霞よそにのみ立つ山べにはたがふ煙に心をややる
御返事
一二春霞けふの烟にそへばこそ山の錦もときは見えけれ
四月一日齋院より
一三問はぬ間に春も過にき夏衣けふの景色を思ひ社やれ
一四憂きこともかけて思ふな夏衣覺束なさの增るけしきか
二十日の程に殿よりいと小さきさうぶを奉ら
せ給へるを御覽じて宮より
一五時鳥まつに聞てや菖蒲草まだうら若きねをも見る哉
御返事
一六豐かにも非ぬ菖蒲を子規まつと聞てや初音をしまぬ
正月二十日宵の程に雨いみじく降るに齋院より
一七知るらめや日數のみふる霖には花の袂も唯ならぬ哉
七月八日またつとめて齋院よりうたんの露い
みじう置きたるにまだおほとのごもりたる程に
一八露おきて詠むる程を思ひやれあさの河原の曉のそら
御返事
一九天の川あけゆく程の露けさに孰くも同じ空を詠めて
長月二十日宵の夕暮に空のけしき常よりも哀な
るに荻の葉の風をかしき程なるに齋院に御ふみ
奉らせ給ふに
二〇荻の葉に風の吹よる夕暮を同じ心にながめましやは
殿の上清水より聞えさせ給ふ
一秋深き山のけしきを詠むれば今日松風のことにも有哉
御返事
二聲にても風の景色の秋深き山の奥のみ詠めやらるゝ
花山院より御文あり
三瀧の音を爭で聞くらむ都すら物哀なる頃には非ずや
御返事
四木葉ちる秋の景色の悲しさも瀧の音にぞ最ど知るゝ
五たまえに氷してすはまを造りたるを見てためのぶが申すさぶらひの御中につねふの君
一甲斐の國都留の郡の千年をば君が爲延と思なるべし
正月三日殿より御こと奉らせ給へるを結びつけ
たりし
二君が爲尾上の松を引春は琴のねさへに千世と社なれ
かへし
三君が聲ねとに引ける松なれば千代の例と成にや有覽
齋院より移り奉らせ給へり
四渡つ海に年ふる物は社元田子の浦にも寄せさ欲けれ
五藏人少將子うませたりける七日の夜殿より遣す
洲濱に
六葦鶴を撫育してしかひ有ば立てし鑵の千世は聲まつ
あるやうあるべしいかなることかありけむ左衛
門督のもとへ遣す
七谷の戸を閉ぢや果ぬる鶯のまつに聲せで春の過ぬる
御返事
八往還る春も知られず花さかぬ山がくれの鶯のこゑ
五月三日ばかりにをかしき麨麥をしの内侍の進
らせたるに
九露分けて□咲ける撫子の垣根隱れに何にほひけむ
かへし
一〇露深み散るをまかせし常夏を思ふ心や色に出づらむ
又左衛門督の進らせたる撫子に
一一匂うすき垣ほの影の撫子は心からにや色もまさらむ
かみつけにしきぶのおもとの下るに宮より扇ど
も遣す中にかりやなどして旅寢のかたなど書き
たる所に
一二草枕旅のやどりの露けくば拂ふ計りの風も吹かなむ
御返事
一三程ふべき旅にはあらねど草枕涙の露は乾く夜ぞなき

不斷の御讀經五日ありてはつる日殿へ御前なる
紙に書かせ給ふ
七六あなたふと法の弘まる君が代は限なき迄思ほゆる哉
と聞えさせ給へれば御返し
八六弘まるも昔からこそ戀しけれ君諸共に法のみぎりも
これを一條殿のあまうへ御覽じて
九六昔より契りしことも恨なく法を弘むる君とこそ思へ
又宮の御所御覽じて
〇七契りけむ昔嬉しき海士舟の便にかゝる法とこそみれ
とあれば一條殿また
七七こゝばくの年を積たる蜑舟は君がかざみに拂べき也
小少將の君清水に籠り給へるに宮より
二七風の荒き景色を見ても秋深き山の木の葉を思ひやれ
御返事
三七秋深き山の嵐をとふとのは丶(不敏)かり嬉しかりけり
集まりて嵯峨野にいきげる程に時雨のいみじく
しければある家に立寄りて殿の少將の君兵衛の
すけなど水のませ給へりければかはらけにかく
四七誰ぞこの昔を戀ふる我が宿に時雨ふらする空の旅人
七月ばかりに一條殿の上ぐして石山にこもらせ
給へりける宮よりも御所よりも日々に御文あり
内侍のかんのすけのもとに
五七人をのみ思ひやる間に此頃は關に心の越ぬ日ぞなき
御返事
六七こゝまでも行も歸らで相坂の關にのみやは立止る覽
齋院より
七七鶯の聲せぬ春も有ければいかにか花につけて誘はむ
御かへし
八七打靡き鶯さへふ花ならで心のまつもしるしありけり
内侍のかんの殿久しう聞え給はで御文ありけり
九七はねなれし花の枝なれど鶯の聲をも風の便にぞ聞く
御返し
〇八鶯かぬ聲微りせば鶯の花のあたりを問すやあらまし
一條殿のあまうへ内侍のかんのすけの一條にお
はしますに其の殿の梅おぼしやりて
一八我宿の花の頃ほひは常よりも春の都と思ひやるかな
御返し
二八長閑くて春の都と見からに植けむ花の本をしぞ思ふ
大夫の北の方若宮の御所にうつして參らせ給へ
りしはこのふた返させ給ふに紅梅の作りたるに
鶯雀などあり
三八梅が枝にかほ(ゐ)(元)かへ立てる鶯は今より千世と思ふ哉
御返
四八鶯の心にとめてすぎ(原)つるを枝にし返る春ぞ嬉しき
若宮の御返り御ふみの奉れ給ふに殿の御返し
五八千歳へてすむ川霧にかき初る君が水莖流れてを見む
御返事
六八流れての行末遠き水莖も君が住むべき數をこそかけ
内侍のかんのすけのより藥玉に
七八長きよの例にひけば菖蒲草同じよのは(如)(元)離れざり鳧
御返事
八八下立て引ける菖蒲のねなみてぞ今日より長き例とも知
左衛門のかみの北の方に始めて遣す
九八下立て今日は引にもかゝれば菖蒲の根さへなべてなる哉
御返事
〇九菖蒲草ひけるを見れば人知れず深き袂も顯れにけり
中將三位尼になり給ふに殿よりさう束遣すとて
一九なれ見てし花の袂を打返し法の衣をたちぞかへつる
御返事
二九馴にける身は打捨つる袂にも碎げる糸に針ぞ懸れる
宮より藤三位のもとに
三九思ひ知る人をし見れば世中に背かぬ方も哀なりけり
御返し
四九住吉のつきせぬ浦を詠むれば(三字)光のたまとこそ見れ
高松の君の御許より雛屋進らせ給ふとて
五九思事いつとは云へど飛驒工細かに作る物ならめやは
御返事
六九と作る飛驒の工の微りせば何につけてか雲路知まし
尚の大納言のあまうへの御方に中將と申す人に
あるやうある人なるべし蓮の小さきに
七九廣澤の池の心のいかなれば浮たらてよたゞ(如)浮はなる覽
御かへし
八九澤の名はかけても知す世中の憂に浮たる浮名なる覽
くものおもてにいとひさき瓜まろらすとて
九九山城のうむにしなれば立出ても都瓜とて進らする也
返し
〇〇君がよと思ひなる〳〵瓜作りまつ初秋は立て參れり
内侍督の殿に權のまだ讓置きながらにいとゝく
一〇曾つらむ露の景色も床しきによそへ知る覽今朝の雄
御返し
二〇今朝ばかりよそへ知る覽權の暮なば最ど賴まれぬ哉
尚のこの若宮の御ひいな屋にさま〴〵の物植ゑ
なでして山の上に神の御社ありわらはにみてぐ
ら持たせてそれにかゝる
三〇君が代に天降りける神なれば千年の松の中に社祝へ
御返とのおはします程やがて

本院侍従集

覺えおはしける上達めの次郎なりける人(職)年十
八ばかりなるが覺えはいとかしこかりけれどか
うぶりえぬ有りけりおほぢは太政大臣にてなむ
おはしけるいもうとは后腹のみこに奉りて藤壺
にぞさぶらひ給ひけるおほみいとこ(傳)さぶらひ
給ひけりそのこの次郎君思ひかけ給ひてかくよ
みていれ給ひけり
四〇色に出て今ぞ知する人しれす思ひかけつる深き心を
などのたまひて御里はいづくぞのたまひけれ
ば女ほそどのにて物などいふに
五〇我宿はそことも何か教ふべき云で社め尋ね覽やと
男
六〇わが思ひ空の烟とたぐひなば雲居也とも猶尋ねてむ
また男
七〇我ならぬ人はまつ共過くれば哀をすて丶引方によれ
返し
八〇君ならぬ人はまたねどすぎくれの引とてよもむ心弱さよ
男に道戸をいさ丶か明けて物いひけるにひとこ
ともつゝましう覺えて胸いたし燒き石あてむと
て入りにければ男わびていにけり又のあしたに
九〇逢ずして歸りしよりも最どしく苦しと云しとぞ侘しき
返し

○ねぬるよの苦しきとはとふとの息る折ぞ嬉かりける
　をとこ
一ねぬる夜の苦しきとの息るは我隠れたる験なるらむ
　返事はなし、男
二身を捨て露のみ共に消ぬとも哀とふべき人のなき哉
　女かへし
三夏のよの露とおき居て明してば生悄我や濡衣をきむ
　とてまかでぬければあしたに、女の里にはあら
　で本院なりけり
四柚河の流れひるまを君はしれ我おり立て筏士はせむ
　返し
五筏士の心のすきは柚山の河のひぐれもよそに社見め
　さて物きこえむとせちにのたまひければたゞ物
　越にて承はらむとありけるに此の女のつかひけ
　る人を語らひていり給ひにける更に人もしらぬ
　ことなりけり又のつとめて、男
六露のおきて飽ぬ心に別るれば我衣手に乾かざりける
　返し
七衣手のぬると聞にも最どしく我さへ夏のよぞ憂りける
　男ひとりねて又のあした
八袖ぬれてほしぞ煩ふから衣君が手枕ふれぬよひには
　かへし
九我為に思しあらばよそにても君が袂は濡じとぞ思ふ
　をとこ
○忍びつゝ長きよすがら戀侘て涙の淵と浮びてぞふる
　返し
一浮びても君はねに鳧いかなれば露と起るて泣明す覧
　男
二浮びても袂のみこそ濡増れ我もねられず君戀るよは
　女
三歎きつゝあな覺束な唐衣濡まさるらむ袖をみぬ間は
　男
四朝毎にほしぞ煩ふ我袖はよな〳〵ごとにそぼち増れば
　かへし
五ほす人も有とこそきけ唐衣うすくなりゆく人の袂は
　をとこ返し
六人知れず有明の月と出しよは露も我みも起ぞ増れる
　女返し
七よな〳〵に成ぬと思へば白露の置てぬる覧袖もからじを
　男かへし
八罪にのみそはぬにきては夜ごとに露の起るて明し社すれ
　又男いでゝすなはち
九仄々と明行く程は打靡き東雲よりぞねはなかれける
　女返し
○等閑に東雲よりぞ明暮は上露ばかりおくといふなる
　かくてすみ給ふほどにこの女又ひとの盗みてい
　にければ男いみじう歎き給ひて女あはれと思ひ
　かくなむいひやりける
一世中を思ふも苦し思はじと思ふも身には思ひ也けり
　男かへし
二忍ぶれど猶忘れず思はゆる思は君に我ぞまされる
　女
三思はずもある世中の苦しきに増る思は有じとぞ思ふ
　この女うちにまかりければいといみじう遠くて
　歎き給ひけるに久しうありて女のいひたりける
四我身故うしとは思ひおきながらつらきは人の心也けり
　かへし
五身のうきと思知りぬる物ならばつらき心を何か恨みむ
　かくてこの女服になり給ひぬと聞きてとぶらひ
　聞えたる返事にいつも時雨はとのたまひければ
六我さへに袖は露けき藤衣君をぞ立てきると聞くには
　返し
七音にのみ聞き渡りつる藤衣深く戀しと今ぞ知りぬる
　女の友だちのもとより侍従の君のもとにこの女
　のほかさまになりにたるをいかにおぼすらむと
　いひて
八ほか様に靡くを見れば墾竈の煙やいとゞ燃渡るらむ
　返し
九墾竈のもゆる煙もなき物を空に無名を立ぞわびしき
　とあればまづおぼすらむことこそおぼゆれとて
　御かたのごたちの云ひやる
○初秋の花の心を程もなく移ろふ色といかにみるらむ
　男返し
一時わかず垣ほにおふる撫子は移ろふ秋の程も知ぬを
　又かへし
二色變る萩の下葉もある物を爭でか秋を知すと云らむ
　といひやるそのころ兵衛の佐になり給ひてけり掘
　川大納言とかや

清少納言集

調書歳缺

三言の葉は露もるべくも無りしを風に散かふ花を聞哉
　かへし
四春も秋もしらぬ常磐の山川は花吹風を音にこそきけ
　きくことある人度々くれども物もいはでのみ人
　をば怨みていかばかり契りし物かとかくしもう
　きことゝ怨みたる返しに
五身を知で誰かは人を恨ましふきゝてつらきつらき也せば
　同じ人にあひてゑする事ありていみじく誓言を
　たて、更に物いはじといひにやりて又のつとめ
　てこれよりも
六我ながら我心をも知すして又は逢じといひてける哉
　せんたてゞたるふばこ見せたりといひしけにた
　えての後おこせたる
七けふ迄も在るが怪しさ忘られし日こそ命の限也しか
　清水に籠りたりしに大殿の上倫子のおし所から
　いひおこせ給へりし
八思ひきや山のあなたに君を置て獨都の月を見むとは
　ひとたうびたりときくをいみじくあらがふに人
　しりて言ひ罵りて夜ごとなむゆくと聞きて
九濡衣と誓ひし程に顯はれて數多重ぬるよともきく哉
　めのおとゝに住むときく頃くらづかさの使にて
　祭の日たつともろともにのりて物みるときゝて
　又の日
○いづ方のかざしと神の定めけむ懸交したる中の葵を
　語らふ人のあさてばかり必こむといひし日もみ
　えず久しくなりて覺束なくなりにければ御心の
　つらさに習ひにける何ぞかはといひたる返事に
一五よしさらばつらさは我に習鳧頼めてこぬは誰か教し
　宮のあはだ殿におはします頃實方の中將まゐり
　給ひて大かたに物などのたまふにさし寄りて忘

れ給ひにけりなどいへどいらへもせで立ちにける即ちいひおくり給へる

二五忘れずや又忘れずよ荒やの下たく烟したむせびつゝかへし

三六哦のをは下焚烟難面くて絶ざりけるも何によりぞも人維摩會に大和へなむゆくといひたるに

四七愛ながら程ふるだにも有物を最ど十市の里な聞せそ

飛鳥に詣でゝ歸りて

五八隠しさにまだ夜を籠て出ぬれば尋てきぬる飛鳥山哉

住吉に詣でゝいとゞく歸りてきなむ其のほどゆめ忘れ給ふなといひたるに

六九いづ方か茂りまさると忘草よし住吉に長らへてみよ

幾年もゆめ〳〵忘れ給ふなといひおきてよつきといふに歸りきて呉竹につけておこせたりければ

七五忘るなよよと云しは呉竹の節を隔る數にぞ有ける

春桂の枝のもえたるにさして

八五花も皆繁き梢に成にけりなどか我身のなる方もなきかへし

九六契てし繁き梢の程もなく恨みときには如何なるらむ

のりかた熊野に詣づとて其の程にはきなむといひしが歸りたるとはきけど音もせで來たりとは聞きたりやとあるに

一〇六いつしかときつの梢は遙にて空に嵐の風をこそまて

思ひいづやこゝには十二十となむ思ひいづるとあるに

一一六其名にぞ思ひける社悔しけれ數しる計り悔しき物を

菩提といふ所にせ經きくとて人の許よりとく歸りねおばつかなきにとあるに

一二六求めても斯る蓮の露をおきて浮世に又は何か歸らむ

すはうを人のとりたるをえさせよといへば

一三六知せばや衣の裏にあるよりは涙の玉の袖にかゝるを

同じ人水無月ばかりに萩の青き下葉のたわみたるを折りて

一四六是をみよ上はつれなき夏萩の下はこくこそ思亂れ

女のなにふみともあらでいふを見むといへばおこすとて

一五六名取川斯る浮瀬を踏分けば淺し深しも云もこそすれ

語らふ人のいもうとのこのすかはならましかば

思はざらましと云ひたりしに

一六六渡の原其河淺く成ぬともげに白浪やよせぬとをみよ

人のもとにはじめてつかはす

一七六便ある風もや吹くと松島によせて久しきあまの釣舟

一八六遥るれど同じ浮世の中なればいづくも何か住吉の里

しきの御さうじにおはしまし〳〵頃うへの右京命婦宵のほどに參りて女房達の中に

一九六留め置し魂如何なりぬらむ心ありとは見えぬ物から

石橋ある所にて殿上人どもの物いひける前を入道この中將なりのおの許に君の渡り給ひけるを

入道この中將なりのぶはきんだちのねゝならで

此の石橋に歌よみかけ給へとせめられけれども

一〇七よるのまにいしばしばかりねて行かむ

といひかけて奉りけるに久しかりければすだれのうちを君だち遲し〳〵といひければあなかま

給へとみつねものおもえずといひつゝ猶久しかりければこの中將待ち休らふ程にお前に召しあり

てとてのもりづかさの來たれば

くさのまくらに露はおくとも

といひ捨て入りにけるを皆人も中將も怪しと思ひければこや人に傳へ語りけむいとなむまとにやみやの五節いださせ給ひし年たつの日の夕さり女房もわらはもおしなべて青摺の袞唐衣に山藍してゑがきて赤紐などを結びかけたれば殿上の人々など珍らしがりてをみの女房とつけて立ちまじりたり人よりも頭中將用意しけさうじ給ふ右京兵衛など肩ぬぎひき繕ろひなどするに紐とくれば

一一七足引の山ゐの水の凍れるを爭でか紐の解るなるらむ

と云ふいらへはそれやなどいひゆりてとみにも云はねばさばかりのはかなきことをほぐすべきにもあらず又遠くゐたらむ人のさしおよびて云ふべきにもあらねば思ひ煩らひて傍らなる辨のおもとに

一二七上水あわに結べる紐なれば霜すゐ日影に綻ぶなるべし

紫式部集

早うより童友だちなりし人に年頃經て行きあひたるがほのかにて十月十日の程月にきほひて歸りにければ

三七廻逢て見しや其とも分ぬ間に雲隠れにし夜はの月影

其の人遠き所へ行くなりけり秋の果つる日きたる曉に蟲の聲あはれなり

四七鳴よわる籬の蟲もとめがたき秋の別や悲しかるらむ

さうのこと暫しといひたりける人參りて御手よりえむとある返事に

五七露滋き蓬が中の蟲のねをおぼろげにてや人の尋ねむ

方違へに渡りたる人のなまおほ〳〵しき事ありて歸りにけるつとめて朝顔の花をやるとて

六七おぼつかな其かあらぬか明暮の空おぼれする種の花

かへし手をみわかざるにや有りけむ

七七號れぞと色わく程に種の有かなきかになるぞ悲しき

つくしへ行く人のむすめの

八七西の海を思遣りつゝ月みれば唯に泣るゝ頃にも有哉

かへし

九七西へ行く月の便に玉づさのかきたえめやは雲の通路

遙なる所にゆきやせむゆかすやと思ひ煩らふ人の山里より紅葉を折りておこせたる

一〇八露深き奥山里のもみぢ葉に通へる袖の色を見せばやかへし

一一八嵐ふく遠山里のもみぢ葉は露も止らむことの難さよ

又その人の

一二八もみぢ葉を誘ふ嵐は早けれどこの下ならで行心かは

物思ひ煩らふ人のうれへたる返事に霜月ばかり

一三八霜氷閉たる頃の水莖はえもかきやらぬ心ちのみして

かへし

一四八ゆかずともなほかきつめよ霜氷水の上にて思流さむ

賀茂に詣でたるに子規なかむといふ曙に片岡の梢をかしう見えけり

一五八杜鵑鳴まつ程は片岡の杜のしづくにたちやぬれまし

彌生の一日河原に出でたるに傍なる車に法師のかみをかうぶりにてはかせたちをるをにくみて

六八 筑紫殿神の飾のみてぐらにうたてもまがふ耳はさみ哉
姉なりし人なくなり又人のおとゝ喪ひたるがかたみに行きあひてなきがかはりに思ひかはさむといひけり文の上に姉君とかき中の君とかき通はしけるがおのがじゝ遠き所へ行き別るゝによそながら別をしみて

七八 北へゆく雁の翅に言傳てよ雲の上がきかき絶すしてかへしは西のうみの人なり

八八 行めぐり誰も都に歸る山いつはたときく程の遁さ津の國といふ所よりおこせたりける

九八 難波潟むれたる鳥の諸共に立ゐる物と思はましかばかへし

（欠脱）

筑紫の肥前といふ所より文おこせるをいと遙なる所にてみけりその返事に

一〇九 あひみむと思ふ心は松浦なる鏡の神や空にしるらむかへし又の年もてきたる

一一九 行巡り逢を松浦の鏡には誰をかけつゝ祈るとかしる
近江の湖にて三尾が崎といふ所に網ひくを見て

一二九 みを の海に網引民の隙もなく立居につけて都戀しもいそのはまに鶴の聲々になくを

一三九 嶺がくれ同じ心にたづぞなくながら思出る人は誰ぞも
夕立しぬべしとて空のくもりてひらめくに

一四九 かき曇り夕だつ浪の荒ければうきたる舟ぞ静心なき
志ほつ山といふ道のいとしげきを賤のをのあやしきさまどもしてなほからき道なりやといふを聞きて

一五九 知ぬらむ往來に馴す鹽津山世にふる道は辛き物ぞと
湖におい つ島といふ洲さきに向ひてわらはべの浦といふ入海のをかしきを口すさみに

一六九 老津島島もる神やいさむらむ浪もさわがぬ壹べの浦
暦に初雪ふるとかきたる日めに近き日野のたけといふ山の雪いと深う見やらるれば

一七九 爰にかく日野の杉村埋む雪小鹽の松に今日や紛へるかへし

一八九 小鹽山松の上葉に今日やさは峯の薄雪花とみゆらむ
ふり積みていとむつかしき雪をかきすてゝ山のやうにしなしたるに人々登りて尚これ出でゝ見給へといへば

一九九 故郷に歸る山路の其ならば心やゆくと行もみてまし
年返りてからひとみにゆかむといひける人の春はとくる物といかで知らせ奉らむといひたるに

二〇〇 春なれど白嶺のみ雪彌積り解べき程のいつとなき哉
近江の守のむすめに懸想すときく人の二心なしなど常にいひ渡りければうるさくて

二一〇 湖に友よぶ千鳥こととならばやすの港をたゝなはそ
うたゑに海士の鹽やくかたをかきてこりつみたるなげきのもとにかきて返しやる

二二〇 四方の海に鹽燒蟹の心から焼とはかゝる歎をやつむ
文の上に朱といふ物をつぶ〳〵と濺ぎかけて涙の色をとかきたる人の返しに

二三〇 紅の涙にいとゝうとまるゝうつる心の色とみゆれば
もとより人のむすめを得たる人なりけり文散らしけりと聞きてありし文ども取り集めておこせずば返事かゝじと詞にてのみいひやりければ皆おこすとていみじく怨じたりければ、正月十日ばかりのことなり

二四〇 閉たりし上の薄氷解ながらさはたえねとや山の下水
すかされていとくろうなりたるにおこせたる

二五〇 こち風に解る計を底見ゆる石間の水はたえば絶なむ
今は物も聞えじと腹だちたれば笑ひて返し

二六〇 云絶えばさ社はたえめ何か其三原の池を包しもせむ
夜中ばかりに又

二七〇 猛からぬ人數なみは湧返り三原の池に立どかひなし
櫻を瓶にさして見るに取りも敢へずちりければ桃の花を見やりて

二八〇 折て見ば近まさりせよ桃の花思ひくらして櫻惜まじかへし人

二九〇 桃といふ名もある物を時の間にちる櫻にも思落さじ
花のちる頃梨の花といふも櫻も夕暮の風のさわぎにいづれと見えぬ色なるを

三〇〇 花と云へば孰か匂なしとみむ散紛ふ色の異ならなくに
遠き所へ行きにし人のなくなりにけるを親はらからなど歸りきて悲しきことゝいひたるに

三一〇 何方の雲路ときかば尋ねまし列離れけむ雁の行へをこぞより海にひなる人に女院かくれさせ給へる春いたう霞みたる夕暮に人のさしおかせ給へる

三二〇 雲の上も物思ふ春は墨染にかすむ空さへ哀なるかなかへし

三三〇 何かこの程なき袖を濡すらむ霞の衣なべてきる世になくなりにし人のむすめの親の手にてかきつけたりける物を見ていひたりし

三四〇 夕霧にみし方枯し鶯の子の跡を見る〳〵惑はるゝ哉
同じ人荒れたる宿の櫻のおもしろきことゝて折りておこせたるに

三五〇 散花を歎きし人はこのもとの寂しき事や兼て知けむ
思ひたえせぬとなき人のいひけることを思ひ出でたるなり

三六一 繪に物のけつきたる女のみなむきかたかきたる
うしろに鬼になりたる元の女を小法師の縛りたるかたかきて男は經よみて物のけせめたる所をみて

三七一 亡人に喞言をかけて煩ふも己が心の鬼にやはあらむかへし

三八一 理や君が心の闇なれば鬼のかげとはしるくみゆらむ
繪に梅の花見るとて女のつま戸おしあけて二三人ゐたるに皆人々ねたるけしきかいたるにいとさたすきたる男のつらづゑついて詠めたるかたある所

三九一 春の夜の闇の迷に色ならぬ心に花の香をぞしめつる
おなじ繪に蜉蝣野に花みる女車ありなれたるわらはの萩の花にたちよりて折りどる所

四〇一 さを鹿の然習はせる萩なれや立寄からに己れふす
世のはかなかきことを歎く頃陸奥の名ある所々かいたるを見て、しほがまの浦

四一一 みし人のけぶりとなりし夕より名も睦じき鹽竈の浦
かど敲き煩らひて歸りにける人のつとめて

四二一 よと共に荒き風吹西の海も磯べに波は寄せずとやみしとうらみたりける返事に

四三一 返りては思ひ知ぬや岩角に浮てよりける岸のあだ浪
年返りて門はあきぬやといひたるに

四四一 たが里の春のたよりに鶯の霞にとづる宿をとふらむ
世の中のさわがしき頃朝顔を人の許へやるとて

四五一 消ぬ間の身をばしる〳〵朝顔の露と爭ふ世を歎く哉

世を常なしなど思ふ人のをさなき人の惱みけるにかから竹といふ物かめにさしたる女房の祈りけるをみて

一若竹の生行く末を祈る哉此よをうしといもふ物から

身を思はずなると歎くことのやう〳〵なのめにひたぶるのさまなるを思ひける

二數ならぬ心に身をば任せねど身に隨ふは心なりけり

三心だにいかなる身にか適ふらむ思知れ共思知られず

始めて內わたりをみるにも物の哀れなれば

四身のうさは心のうちに慕ひきて今九重に思ひ亂る〳〵

五うきとを思ひ亂れて青柳のいと久しくも成にける哉

かへし

六徒然と永き春日は青柳のいとゞ憂世に亂れてぞふる

いかばかり思ぞしぬべき身をいとゞいたう上手めくかなといひける人をきゝて

七わりなしや人社人と云ざらめ自ら身をぞ思ひ捨べき

くすだまおこすとて

八忍つるねぞ現る〳〵菖蒲草いはねに朽て已ぬべければ

かへし

九けふはかく〳〵ひきける物を菖蒲草我水隱に濡渡りつる

土御門殿にて三十講の五巻五月五日にあたれりしに

一〇妙也や今日は五月の五日とて五の巻にあへる御法も

其の夜池のかゞり火にみあかしの光りあひて晝よりも底までさやかなるにさうぶの香今めかしう匂ひくれば

一一爇火の影もさわがぬ池水にいく千代すまむ法の光ぞ

公ごとに云ひまぎらはすをむかひ給へる人はさしも思ふこと物し給ふまじきかたちありさまよはひほどをいたう心深げに思ひみだれて

一二澄める池の底まで照す爇火の眩きまでもうき我身哉

やう〳〵明けゆく程に渡殿にきて局のしたより出づる水を高欄おさへてしばし見居たれば空のけしき春秋の霞にも霧にも劣らぬ比ほひなり小少將の隅の格子をうちたゝきたればはなちておしおろし給へり諸共におりゐてながめゐたり

一三影みてもうきわが涙落そひて卿言がましき瀧の音哉

かへし

一四獨ゐて涙ぐみける水の面に浮添はるらむ影や孰れと

あかうなればいりぬ長き根をつゝみて

一五なべて世の憂に泣る〳〵菖蒲草けふ迄斯るれは如何みる

かへし

一六何事とあやめは分で今日も尙袂に餘るねこそ絶せね

內に水雞のなくを七八日の夕月夜にこ少將の君

一七天の戸の月の通路さゝねば共いかなる方に叩く水鷄ぞ

かへし

一八槇の戸もさゝで休らふ月影に何を飽すと叩く水鷄ぞ

夜ふけて戸を叩きし人つゝめて

一九終夜水鷄よりけになく〳〵ぞ槇の戸口に叩き侘つる

かへし

二〇唯ならじと計叩く水鷄故明てはいかに悔しからまし

朝霧のをかしきほどおまへの花ども色々に亂れたる中に女郎花いと盛りなるを殿御覽じて一枝折らせ給ひて几帳のかみよりこれたゞにかへすなとて給はせたり

二一女郎花盛の色を見からに露のわきける身社しられ

とかきたるをいとゞく

二二白露はわきてもおかじ女郎花心からにや色の染らむ

久しくおとづれぬ人を思ひいでたるをり

二三忘るゝは憂世の常と思ふにも身を遣方の無ぞ侘しき

かへし

二四たが里もとひもやくると郭公心の限り待ぞわびにし

都のかたへとて歸山こえけるによび坂といふなる所のいとわりなきかけぢに輿もかき煩らふを怖ろしと思ふに猿の木の葉の中よりいと多くいできたれば

二五ましも尙遠方人の聲交せ我れこえわぶるたこの呼坂

湖にて伊吹の山の雪いと白く見ゆる

二六名に高き越の白山行慣れて伊吹の嶽を何とこそみね

そとばの年經たるがまろび倒れつゝ人にふまるるを

二七心あてにあな忝なき佛の御顏ぞとは見えねど

人の

二八けぢかくて誰も心はみえにけむ詞隔てぬ契ともがな

かへし

二九隔てじと習ひしほどに夏衣薄き心ぞまづしられぬる

三〇嶺寒み岩間こほれる谷水の行末しもぞ深くなるらむ

宮の御うぶや五日の夜月の光さへことに隈なき水の上のはしに上達め殿より始め奉りてゐひ亂れ罵り給ふ盃のをりにさしいづ

三一珍しき光さしそふ盃はもちながらこそ千代は巡らめ

又の夜月の隈なきに若人たち舟にのり遊ぶを見やる中島の松をさしめぐる程をかしく見ゆれば

三二曇なく千歳に澄る水の面に宿れる月の影ものどけし

御いかの夜殿の歌よめとのたまはすれば

三三いかに如何數へ遣べき八千歳の餘久き君が御代をばとの

三四蘆鶴の齡しあらば君が代の千歳の數も數へとりてむ

たまさかに返りごとしたりける人後にも又もか

かざりけるに、男

三五折々にかくとは見えて小蟹のいかに思へと絶るなる覽

かへし九月つごもりになりにけり

三六霜枯の淺茅に紛ふ小蟹のいかなる折にかくと見ゆ覽

何のたよりにか人の返事に

三七入方はさやか也ける月影をうはの空にも待しよは哉

かへし

三八さして行く山の端も皆かき曇り心の空にきえし月影

又同じ頃九月つきあかき夜

三九大かたの秋の哀を思ひやれ月に心はあくがれぬとも

六月ばかり撫子の花を見て

四〇垣根あれ寂しさ增る常夏に露置添はむ秋までは見じ

物や思ふと人のとひ給へる返事九月つごもり

四一花薄葉分の露や何にかく枯行く野べに消止まるらむ

頃ふことある頃なりけり貝沼の池といふ所なむある人のあやしき歌がたりするをきゝて試みによまむといふ

四二世にふるになぞ貝沼のいけらじと思ぞ沈む底は知ねど

又心ちよげにいひなさむとて

四三心行水の氣色は今日ぞみるこや世にへつる貝沼の池

侍從宰相の五節の局宮のお前いとけぢかきに弘徽殿の右京が一夜しるきさまにてありし事など人々いひ出でゝ日かげをやるさしまきらはすべき扇などそへて

四四多かりし豐の宮人さしわきて著き日影を哀とぞみし

中將少將と名ある人々のおなじ細殿にすみて少將の君をよな〳〵あひつゝ語らふを聞きて隣の中將

三笠山同じ麓をさしわきて霞にたにの隔てつるかなかへし

さしこみていると離み三笠山霞吹解く風をこそまて

紅梅を折りて里よりまゐらすとて

埋木の下にやつるゝ梅の花香をだに散せ雲の上まで

卯月に八重櫻の花を内にて

九重に匂ふを見れば櫻がり重ねてきたる春の盛りか

櫻の花の祭の日まで散り殘りたる使の少將のかざしに給ふとて葉にかく

神代には有もやしけむ山櫻けふの挿頭に折れる例は

むと月の三日内より出でゝ古郷のたゝしばしの程にこよなう散りつもり荒れまさりにけるを言忌もしあへす

改てけふしも物の悲しきは身のうさや又樣變りぬる

五節の程まゐらぬをくちをしなど辨の宰相の君ののたまへるに

珍しと君し思はゝきてみえむすれる衣の程過ぬともかへし

さらば君山ゐの衣過ぬとも戀き程にきてもみえなむ

人のおこせたる

打忍び歎き明せば東雲のほがらかにだに夢をみぬ哉

七月ついたち頃曙なりけりかへし

東雲の空霧渡りいつしかに秋の景色に世は成にけり

七日

大方を思へばゆかし天の河今日の逢瀬は羨まれけりかへし

○天河逢瀬はよその雲ゐにて絶ぬ契し世々にあせすはかごの前より渡るとてうちとけたらむを見むとあるにかきつけて返しやる

等閑の便にとはむ人毎に打解てしもみえじとぞ思ふ

月見るあしたいかにいひたるにか

夜ごめをも夢と云しか誰なれや秋月にも爭でかはみし

九月九日菊のわたをうへの御かたより賜へるに

○菊の露わかゆ計りに袖ぬれて花の主に千代は讓らむ

時雨する日小少將の君里より

雲間なく詠る空を猛暮しいかに忍ぶる時雨なるらむかへし

經の時雨の空は雲間あれど詠むる袖ぞ乾く世もなき

さとに出でゝ大納言の君文給へる序に

浮寐せし水の上のみ聽くて鴨の上毛にさへぞ劣らぬかへし

打拂ふ友なき頃の寢覺には雷ひし猶ぞ夜はに戀しき

又いかなりしにか

なにばかり心盡しに詠めねどみしに暮ぬる秋の月哉

すまひ御らんずる日内にて

たづきなき旅の空なる住ひをば雨もよに問人も有じなかへし

○挑む人數多聞ゆる百敷のすまひうしとは思知るやは

雨ふりて其の日は御覽どゝまりにけるあひなのおほやけごとゝもなり

初雪ふりたる夕暮に人の

○戀佗てありふる程の初雪は消ぬるかとぞ疑はれぬるかへし

○降れば斯うさのみ增る世を知で荒たる庭に積る初雪

小少將の君のかき給へるうちとけ文の物のなかなるをみつけて加賀少納言のもとに

暮ぬ間の身をば思はで人の世の哀を知ぞ且は悲しき

誰か世に長らへてみむ書留し跡は消せぬ形見なれ共

かへし

○亡人を忍ぶるともいつ迄ぞ今日の哀はあすの我身を

伊勢大輔集

忍ぶるなかに物いひ始めたる男つとめてやらむ

歌ごひしに

正月一日

○草もゆる沼の氷はとけたれどゆく方もなき谷の下水

同じ七日子日にゆきふる

人は皆野べの小松を引に行くけふの若菜は雪やつむらむ

かれにける女のもとに紅梅を折りておこせたる

紅の色に匂へる梅のはな人あく人のいかでをりけむ

雲林院の櫻を都のにくらべよとて人のおこせたりしに

白雲のかゝる山べの櫻花これはこれぞと君に折ける

女院の中宮と申しける時内におはしまいしに

奈良から僧都のやへ櫻を遣らせたるに今年のどりいれ人は今まゐりぞとて紫式部のゆづりしに

入道殿きかせ給ひてたゞにはとり入れぬ物をと仰せられしかば

○古のならの都の八重櫻けふこゝのへに匂ひぬるかな

殿の御まへ殿上にとりいださせ給ひて上達め君達ひきつれてよろこびにおはしたりし院の御返し

○九重に匂ふをみれば櫻狩重ねてきたる春かとぞ思ふ

月あかきに院の御まへのおもしろきにとて皇太后宮の女房たち睡まじき殿上人達に隙されて參りたりしにかげのほの〴〵見えしに物いひにやれどおほせられしに

○浮雲はたち隙せども隔もりて空行く月の影をみる哉返し

○浮雲に隱れてとこそ思しか妬くも隔のもりにける哉

人の心なむうらみて參りにけるときゝて同じ人文おこする返事をせねば

○身上に知ずしも非じ人の爲人のつらきはつらき物ぞと返し　まさみち

○憂身から人のつらきも知ねれば猶此道に踏見すもがな

和泉式部院に參りて始めたる夜逢ひてものなどいへと仰せられしかばよ一夜物語などしあかして年頃かたみに心がけしほどのことなどいひ出でてつとめて局よりいひたりし

○思はむと思し人と思しに思ひしかどもおもほえし哉返しかへし

○君を我思はざりせば我を君思はむとしも思はましやは

三條院の御時院の里におはしましゝ時こせちに昔おぼえて殿上人ひきつれて參りたりし中に

○早くみし山ゐの水の上氷打とけさまは變らざりけり

一條殿のうへ慈修寺にて御堂供養せられしに

琴をかりてかへしおこせたりしに
九〇奥山の高嶺の松をふく風に思ぞ出るそのかみのこと
返し
一〇けさみつる庭の白雪いかならんよゝを積れる景色也つる
一ふりでつる人の心の白雪は氷柱にのみぞ思消ゆめる
紫式部きよみづに籠りたりしに參りあひて院の
御れうにもろともに御あかし奉りしをみて檜の
葉にかきておこせたりし
二心ざし君にかゝぐる燈火のおなじ光にあふが嬉しさ
かへし
三古の契りも嬉し君がためおなじ光にかげをならべて
松に雪のこほりたりしにつけておなじ人
四奥山の松には氷る雪よりも我身よにふる程ぞ儚なき
返し
五きえやすき露の命にくらぶればげに滯る松の雪かな
ある人の田舎のかたにかきて海のほとりに家
有りこれなむ我すむところとありしにかきつく
六浦近き鹽の庵の柴の戸は人ならすとて浪やたつらむ
雪中竹
七枝撓み雪降つめばなよ竹の末葉も見えす伏返りつゝ
一條院うせ給ひてのち難波に君をおはしていみ
じうなき給ひけることなど人の語るに
八思ひやる哀難波の浦さびて蘆の浮寢はさぞ泣れなむ
詞書 いせにたてたる寺のかひなむうせにたるとて
僧のこひにおこせたるにそへてやりし
九幽なる谷のほらをぞ思やる風のみや吹しく花ともふらむ
年頃ありし人のまたしのぶるほどに石山にこも
りて音せぬに
一〇みるめ社近江の海に難からぬ吹だに通へしがの浦風
なが月十よ日おなじ寺からいづるに參る人關に
あひたり
一一名告してけふは行なむ野も山も霧隔てたる逢坂の關
世の中さわがしき頃久しうおとせぬに
一二なき數に思なしてや問ざらむまた有明の月まつ物を
人のもとにねて人にかはりて
一三けふ暮る程待だにも久しきに爭で心をかけて過けむ
月あかき夜右の大殿の御堂見に人々おはしたり
しにつとめて　おほ殿
一四よの常に嵐と紛ふ瀧つせの聲ものどや思なすらむ
返し
一五瀧つせは法の聲にぞ波よりし涼しき風も吹通ひつゝ
まさみちの少將すゞをおきてつとめてとりにお
こせたるやるとて
一六人知ぬ思の珠のをとならばなにして逢ぬ數を取まし
清佛の日　同じ人
一七諸共に掬びし水はたえにしを何をか濯ぐけふの佛に
かへし
一八涙をぞけふは佛にそゝきつる結びし水のたえし計に
一九ゆづかなる有明の月
二〇有明の月計りこそ通ひけれくる人なしの宿の庭には
そちのゆかりにて筑紫へくだりにけるむすめに
二一千年までいきの松原いく君を心つくしに戀や渡らむ
返し
二二いきの松いきても君に逢ことの久しくならむ程を社壇へ
人のふみをとりたがへてもてきたりしにそへて
二三などて人浮たる雲の梯をふみ違ふなと數へさりけむ
年頃すみし所をたえて外に渡りて又の年の五月
五日
二四今日もけふ菖蒲も菖蒲變ぬに宿こそ有し宿と覺えね
歌合、さみだれ
二五いか計たごの裳裾もそぼつらむ雲間も見えぬ頃の梅雨
六月のはらへ
二六水上も荒ぶる心あらじかし波もなごしの禊しつれば
七月七日
二七七夕の夜の衣をきたるよは返す裏をも知せずもがな
男ある人を年頃思ひ渡りけるにその人なむ物に
參りにけると聞きてかねてさがにいきねて木の
葉にかきてとらせける　いへつね
二八奥山の木葉が下の行水は人こそしらぬすまぬ物かは
これが返事せざりしなむ口をしかりしといもう
との君の語りしかばかの人に代りて
二九絶間のみして
又かへし
三〇石間ゆく下には通ふ谷水も木葉を繁み上ぞつれなき
またかへし
三一山陰さのみ木葉の散積まば石間の水は音だにもなし
秋來る人に
三二雁社立どもみえね人しれず戀に焦るゝ秋と知らなむ
かへし
三三霧迷ふ秋の空にはと〳〵にたつとも見えぬ戀の煙を
こまむかへ
三四ひきつれてくる秋ごとに逢坂の山のは出る望月の駒
つくしにくだりし人にきこえし
三五いはねども同じ都はたのまれき哀雲ゐを隔果てつる
ある山里に籠りたりしにいへつねがもと近しと
きゝていひつかはし
三六うらさびて葛這縣る山里の家の尋ぬる人もあれかし
返し
三七葛かづらくる人もなき山里は我こそ人を恨果てつれ
三八歸る道にひきいれてみしに難波わたり覺えて處
のさまいとをかし硯におきし
三九こも枕かりの旅ねにあかさばや入江の草の一夜計に
かへしをおしはかりておこせたりしぞをかしかり
し
四〇眞菰草假初にてもあかさなむ長くもあらじ夏の東雲
筑紫につねこと云ふ所にあまの鹽やく所
四一秋は霧春は霞に立まがひしほやく煙つねこそみる
御住吉詣に
四二ながらへむ世にも忘れじ住吉の岸に波たつ秋の松風
四三古にふりゆくことぞ哀なる昔ながらの橋をみるにも
院の御菊合に左のとうにて
四四長きよの例にうゝる菊の花ゆく末遠く君のみぞみむ
又
四五めもかれず見つゝ暮さむ菊花菊より後の花し無れば
殿のうた合にさくら
四六君が世の遙にみゆる山櫻年にそへてぞ匂ひましける
郭公
四七聞きつともきかずともなき時鳥心惑はすさよの一聲
しか
四八夕霧に妻惑はせる鹿のねやよるぬる時も驚かるらむ
院の白川殿におはしますころ右の大殿もおぼす
ことあるなるにおほとのゐに侍らひたまふつと

めてこのはにかきて賜はせたりし
七五世中にふきよるかたもなき物はこのは散ぬる風の風
かへし
八六落積るこの山里のこの葉をば返しの風も吹返さなむ
御前にて少納言命婦ことをひきしかば同じ殿
九五ことのねごとにきこゆなるかな
とありしかば
草むらのむしは聲々すだけども
かやの院の御時うたあはせ、月
○六君みると空にしれねばや曇なく萬世をのみてらす月影
まつ
一六昔より名に高砂の松なれば雲の上まで枝ぞさしける
千鳥
二六行方はさよ深けれど衛なくさほの河原は過うかりけり
いけみづ
三六池水のよゝに久しく澄ぬれば底の玉藻も光みえけり
こひ
四六塵積り床の枕もさびに鳧戀する人のぬるよなければ
れいけい殿の女御のゑあはせに、鶴
五六葉替せぬ松のねぐらに群ゐつゝ千年を君に皆譲る也
うの花
六六うの花の咲る垣ねは白波の立田の川の井堰とぞみる
皇后宮のうた合、月
七六曇なき空の鏡とみゆるかな秋のよな〳〵照す月かげ
かり
八六衣薄み旅のみ空に鳴雁はおのが羽風や夜寒なるらむ
山田
九六秋の夜は山田の庵に稻妻の光のみこそもり明しけれ
いはひ
○七住のえに生添ふ松の枝ごとに君が千年の數ぞ籠れる
同じ宮の東三條の御堂めでたしときゝて舟にて
さし渡りしに御まへの方をみやりて、岸の柳
一七青柳の糸を綱手に引舟は岸近くこそよらまほしけれ
その御堂に殿の御扇にむすびつく
二七積るらむ塵をも爭で拂はましのりの扇の風の嬉しさ
同じ宮に御むすめの御まへにありつるとてちひ
さき瓜をおこせたりしに
三七葉隱ず立も出ばやこまの瓜の其列に社ならま欲けれ
大納言殿御覽じて御返し
四七君をのみこまのゝ瓜と待物を同じ列にも成てみよかし
悉く美しう仰せられたりしかば立ち返り
五七夜をつがむ事は更なり敷島の道をさへ社君は知けれ
うち殿のさうじの歯を歌によむべき所々をかき
うつし賜はせたりしに人の家あり垣ねに梅さき
て人きてたてり
六七垣ねには窶れて咲けど梅の花句は人に知せこそすれ
ふるき家にもみぢ散り蔽ひたり
七七古里は時雨の板間もるとてや散紅葉ばを風の吹らむ
しがの大僧正のために九十の賀殿のせこせ給う
けるにつゑの歌めせばまゐらする
八七萬代を竹の杖にぞ契りつる君し久しくつかむが爲に
かへし
九七君を祈る年の久しくなりぬれば已が榮行杖ぞ嬉しき
院の三條の民部卿の家におはしまします頃にはかに
行幸ありて近き人々の家めされしにそのよしを
奏せしかば歌をよみて進らせよと仰せられしか
ば
○八年つもる頭の雪は大空の光にあたるけふぞうれしき
いへを返しにすとおほせられたりし
ゆかりありて東宮の若宮み奉りしにさうしかた
の鏡をみて賜はせたる
一八君みれば塵もくもらで萬代の千年をのみもます鏡哉
返し　東宮大夫
二八曇りなき鏡の光ますゝも照さむ影に隱れざらめや
なが月のことにや民部卿うへのたきもの合せて
試みよとて賜はせたりし
三八あり難き物とこそみれ春咲し梅の匂の秋もかをるは
かへし
四八梅枝は焦るゝ秋も匂ひけり春とめ難き物と見しかど
皇后宮から昔のやへ櫻をたまはせて、女房
五八これや此ならの都の八重櫻匂わかずもしられざり鳧
三位うせてかやうのことも尋ねさほしうて
六八あとくれて昔こひしき敷島の道をとふ〳〵尋つる哉
かへし
七八やへ葎たえぬる道とみつれども忘れぬ人は尚尋けり
これをきゝて
さがみ
八八踏通ふ人だになきは敷島の道知ぬ身の憂にぞ有ける
又
九八石上古野の道の知るべには今日行末も君こそはせめ
なりのぶよをそむきしに麻の衣やるとて
○九けふとしも思やはせし麻衣涙の玉のかゝるべしとは
返し
一九思ふにも云にも餘る事なれや衣の玉の顯はるゝひは
その人なくて後わざの經の外題四條中納言にか
かせ聞えしにそへられたりし
二九極樂の蓮の花のひものうへに露の光をそふるけふ哉
かへし
三九ひもの上に蓮の露を結置けば磨ける玉の光こそませ
おなじころ　さがみ
四九みし月の光なしとや歎くらむ隔る雲に時雨のみして
かへし
五九月影の雲隱れにしこの宿に哀をそふるむら時雨かな
同じ人二月十五日のひのいりがたに
六九常よりもけふの入日の便にや西を遙に思ひやるらむ
かへし
七九けふはいとゞ涙にくれぬ西の山思入日の影を詠めて
同じ日よはばかりに、人
八九いかなればけふも月のさよ中に照しも果で入しなる覽
かへし
九九夜を照す月隱れにしさよ中は哀闇にやみな迷ひけむ
又のとし忌にちに
○○別にし其日計りは歸りきといきも歸らぬ人ぞ悲しき
思ふ人二人ある男なくなりたるに末の人に代り
てもとの人のがりやりし
一○深さこそふぢの袂は優るらめ涙は同じ色にこそしめ
むすめのとりこしたるほど久しう見えざりしに
二○垂乳めの親をば捨てゝこはいかに人のこをのみ思ふ我こそ
かへし
三○人のこの親になりてぞ我親の思はいとゞ思知らるゝ
かれ〴〵なる九月ばかりに菊をうゑてなむいぬ
るとと聞きしに
四○言のはの枯行く人の秋に菊先朝霜にうゑやおきつる
わづらひし頃馬頭と云ふ人の度々とひ給ひける
を忘りて後その悦び秋ごろいひやりし

五〇うれしさを思ひおきつゝ忍草わすれぬ物を秋の夕露
かへし
六〇秋風の音せざりせば白露も軒の葱にかゝるべしやは
御せちにいでたる人のもとにある人のいひたり
し
七〇をみ衣重し人や誰ならむ神ならませば我もしなまし
かへし
八〇日影せしをみの姿はみしかとて山ゐの衣打も重ねず
正月一日こうみたる處にちごのきぬやるとて
九〇珍らしく春立初る鶴の子は千世のむ月を重ぬべき哉
同じく七日若菜を人のおこせて此はおいたる人
のためにつみたるといへりしに
一〇一我爲に雪間の若菜摘ければ年返りてぞ嬉しかりける
同じ日うまごのもとから
一一荒玉の年も若菜も摘人は卯杖つきてやのべに出らむ
返し
一二卯杖つき摘まほしきをたまさかに君飛日野の若菜也鳧
ふしみといふ處にて名ある所々歌によむにあし
まのいけ
一三うら若き蘆間の池の水の色は淺緑にぞ波も立ちける
かさとり山
一四降らばふれ笠取山の木下は秋の時雨も漏じとぞ思ふ
ふしみの里の戀
一五盡もせず戀する人はれもいらで伏見の里の夜社長けれ
語らむと云ふ人の久しく音せぬをつゝじにつけ
ていひやりし
一六云やとて云程を待つ岩躑躅云すてやはいはで已べき
又
一七語はで程のへぬれば杜鵑君忍び音ぞ絶ゆるよもなき
五月六日さがみ或る人に
一八人しれず待こそ菖蒲草昨日を唯にすぐすべしやは
返しかはりて
一九菖蒲草引く人繁き淀のには何かは深きねをも尋ねむ
おなじほどの人のいひたる
二〇人のよも我世もふかゝすか川
とありしに
みづのあわよりげにぞはかなき
山里に侍るほどこどもの慕ひ詣できて所のさま
のをかしきに題にて歌よみ集めたりしを歌合に
せむ定めよといひたりしに
二一浦々の波にも我は片寄らじ難波人社あしよしはみめ
おなじところ山里の村時雨ふたよりみよりふかす哉
二二とふ人もなき山里の村時雨ふたよりみより篤かす哉
人々きくの歌よめをきゝて
二三樣々の色をばすてし身なれども菊に心を移ろはす哉
九月盡日すけみらの大貳のもとから
二四年積る人こそいとゞ情ふかるれけふ計りなる秋の夕暮
かへし
二五哀かく暮行秋のをしさには並ならぶべき老の波かは
思ふことあるころ歌よみて
二六おき明し見つゝ眺むる袖の上の露吹凪る秋　よの風
あづまへまかりし人のもとにすかのやちまたわびて
二七息のをの絶なむ後は君きてる哀いづこと我を尋ねむ
かへし
二八息のをのいきて見べき君なれば限る別は有じとぞ思ふ
院の御堂にて百わかうつくしきになもしらぬ花
をみしりたるやと問はせ給ひしに
二九衣手に推開きてを見備せとうみやうに唉ほうたくの花
院のうち殿におはしましける頃人々菊をもてあ
そぶ
三〇なべての霜枯るゝめと法の内の菊は盛の色ぞ常なる
右の大殿まゐりたまふみちに時雨にあひて
三一宿近く逢へる時雨は何なれや山路也せば濡や増まし
京せんりしと云ふ人のおほけさぬはせしにかた
なやあるといひたりしおこすとて
三二忍辱の衣をぬへる君なれば惑ひをたゝむ驗をぞやる
かへし
三三西の方尚とく行むそうかりの衣をぬへる糸に引れて
僧もとからものくむかひにかきたりし
三四さゝしゝの法を聞つゝ世を救ふ寶すの旗と是を云かひ
かへし
三五ふかきしを釋しえさする法のしにもくらの粥を汲て報いむ
三六なすびといふものをざるにつくりてかれたる木
の枝につけて、人
三七思ざる事の樣哉もと茄子からきの枝に成らむ物とは
かへし
七〇珍しやからきの枝の本茄子作らざるには爭で成けむ
ふちのきの舟にたるに平茸をほしてこれを題
にて歌よみてといひたる人に
七一蓋人は臘木も摘みに岩藤の平茸わたにさしてゆかなむ
七二はかうせし頃つげすといひて、人
七三根ても猶つらき蕨廣めけむ法の衣にかけすと思へば
返し
七四たまさかに弘むる法の衣にも立後れけむみや恨みぬ
よからすや思ふらむと思ふ人のちかうゐたるな
七五夢よ夢心隔つな蕨がきのま近きほどに成ぬとならば
かうらといふ遊び所の大和のかみといふ人ぞす
みしそれなくなりてふるき難波の里に歸るとて
その頃人々歌よみしに
七六蘆の葉の裏返りたる難波人ふるの社を懸ぬひやなき
七七おくせぬ人に冬の末つかた
七八忘られて年暮はつる冬草の枯葉は人も尋ねざりけり
三位
うまごのいかなりし日
七九嬉しきは千世の小松の遙々と榮始むるいくか也けり

按倉了　從三位行治部卿平朝臣判

曾丹集

（曾禰好忠集）

新玉の年の日數を算ふとてすがの根の長しと
思ふ春の日すがら眼をば霞む山べに極め盡し
心をばすぐす月日にたぐへつゝ風に片よる青
柳の暇のひまもなきまでに鳥の鳴くねを聞け
ば飛も哀とよそに聞き花の笑めるを見れば誰
もをかしと見るらめど人は賢き顔をつくり我
ははかなきとを殘しおきて花の散る春のあし
た木のはのおつる秋の夕べ月の明けき夏のよ
風の寂しき冬の曉までをこなれど親のつけて
し名にしおはいなほ好忠と人も見るがに
よさの浦に老の波數算ずる蜑のし業と人もみよとぞ

正月
春のはじめ

三島江に角ぐみ渡る蘆のねの一夜計に春めきに鳧
あなし川ふる山懸てくる春の徴てさは水ぞぬるめる
なる瀧の岩間の氷いかならむ春の初風よはにふく也
峯に日やけさは麗らにさしつ鸞軒の垂氷の下の玉水
雪消ばゑぐの若菜も摘べきを春さへ晴ぬみ山べの里
雪きえし嶺の嵐の吹なべにけさ山河の水嵩まされり
心より春の嵐に誘はれてとくる氷やいづちなるらむ
山のかひ霞渡りし旦より若菜摘べき野べをしぞ思ふ
香久山の瀧の氷も解けなくに吉野の嶺は雪消にけり
鴨のゐる入江の氷薄らぎて庭のみくづも顕れにけり

正月中

膝間田の池の氷の解しよりやすの浦とぞ鳰鳥もなく
すまの蜑も今は春べと知ぬらし孰こともなくなべて霞める
春日野に村消え殘る雪よりも今はいつ迄ふべき我身ぞ
愉原もる布留の社の神奴春きに鳧としるらめやそも
改めし神の御幣させるかと澤べにたづの群ゐたる哉
烟かと四方の山べは霞たち孰れのにのめ蘭殘るらむ
打霞たづきも見えぬ春の野に聲をしれとや鶯の啼く
ね片摘む春の澤田におり立て衣の裾の濡ぬ日ぞなき
みやつこぎにふる垣ねを春たてば深き緑にまづは見えける
片岡の雪まに根ざす若草の僅かにみえし人ぞ戀しき

正月をはり

朝なぎに棹さす淀の河長も心どけては春ぞみなるゝ
朝日さすけさの雪げに水まさり世を浮橋の行方白波
淺緑山は霞に埋れて有るかなきかの身をいかにせむ
旬はねは徴突む椒の花をこそ我もかざしと折て詠むれ
春毎に澤べに生る芹の葉ねを年と共にや我はつみつる
梅つ河岩まの波の立返り春は花かとうたがはれつゝ
たが染し色にか有覽春くれど目馴すみゆる松の緑は
花みむと命も知ず春の野に萩の古枝を燒ぬ日ぞなき
我みても春はへぬるなよ竹の其より先に幾よへぬ覽
山里の梅のこ原に春計り庵りてをらむ花も見がてら

中の春二月のはじめ

我妹子が衣如月風寒みもしにまさる心地かもする
我宿の板井の水やぬるむらむ底の蛙ぞ聲すだくなる
さくきつにすかきほせり春ごとにありさす民の志葉ならし
梅花こよひ嵐のやまざらば歎き酒のみも明すべき哉
我身をばみる人拾てゝすさめぬを哀にも將喚子鳥哉

ゆふだすき花に心をかけたれば春は柳の暇なみこそ
木芽はる春の山べをきてみれば霞の衣立ぬ日ぞなき
山蔭の空木垣根に消殘る雪をぞ花によそへつゝみる
宮木きるをのゝ河原を見渡せばめも遙々と淺緑なり
あづさ弓春の霞は隔つれど入さの山の月ぞさやけき

二月中

春日野の若草山に立雉のけさの羽音にめを覺しつる
松が崎いつも緑の色なるをいとゞし春は霞たちつゝ
我宿の本荒の櫻さかねども心をかけて見れば賴もし
を綱つるかるもの蜑も春くれば浦々毎に詠めをそする
上り船こち吹風をすぐすとてよを牛窓に歎てぞふる
烟立春の浦々みる時ぞまだみぬ蜑の在りかをぞ知る
色かへすみゆる讃岐の松山も春は緑の深さまされり
逢事の僅をせばみ春の野の若菜に附て年をつみつる
荒小田の去年の古ねの古逢今を春べとひこばえに鳧
春山に樵る樵夫の腰にさすよきつゝきれや花のあたりは

二月をはり

絶よも有じとぞ思ふ春をへて風に片よる青柳の糸
雁音ぞ鳴帰るなる世中をうしとみつゝも秋は厭はで
はるゝ〳〵む浦々烟立渡り蜑のひよりに藻汐やくかも
花の時いきたらばなむ三吉野の萩のやけふはなべてみつるを
山櫻はやもさかなむ吹風に峯の白雲立つかともみむ
我苗を宿もる人に任せ置て我は花みる急きをぞする
春雨のふるのみ山の花見にと三笠の山をなしてのみこそ
花みると妹が業だに手ふれてふるす乍らに暮す頃哉
鳴き返る雁の涙のつもるをや苗代水と人はせくらむ
冬嗣の手馴の駒も放てむ岡べの小笹はえねとならば

春の春三月はじめ

はゝこ摘彌生の月になりぬれば開けゝらしな我宿の桃
花みると暇を春の山にいれて朱の本毎に眺をぞする
厳生ふる矢田の廣野に打むれて折暮しつゝ歸る里人
道遠み物うしと思ふ春の野も花みる時ぞ心ゆきぬる
朝な〳〵庭草とるとせし程に妹が垣ねは薄らぎに鳧
宮城野や燒生の萩も下葉より本荒に咲かむ花をしぞ思ふ
花により今宵の風にいをねずば文なく妹や心隔てむ
笠無に花見に來るけふしもあれ四方の山べは木暗かり鳧
色みむと植しもしるく山吹の思ふ様にも咲ける花哉
櫻花みるに心の行ぬれば春は急ぎし名をぞたてぬる

園の上に雀の蹴ぞすだくなる出立方に子や成ぬらむ
花盛あまたの春を過しつゝ我身のならぬ歎をぞする
玉垣のみつの湊にかゝ春なれば行かふ人の花を手向る
二葉よりみつゝ馴にし花櫻何をうしとてかくすぞ霞
雪かもとみれば櫻の溜らぬは咲程なしに散れば也鳧
山姫の染てはさほす衣かと見るまで匂ふ岩躑躅かな
花みむと古郷さして行道を長びく程に風もこそふけ
山隠れ風に知れぬ花しあらば春は過ぐ共折て詠めむ
我が爲め霞の花を隠せどもあらき風には從ひにけり
たくひれの鷺坂岡の躑躅原色てるまでに花咲にけり

三月をはり

道芝も今日は遙々青み原おりゐる雪雀隠ろへぬべみ
御園生の薺の莖も立に鳧今朝の朝菜に何を摘まゝし
遇ぬらむ月日も知ず春は唯淀の若菰かるにてぞしる
顕はにてやふにみえし春の野も草深げにも成にける哉
みほの浦の引き網の綱のたゆ共長きは春の一日也鳧
安河の早瀬にさせる上り梁けふの日和に幾ら積れる
茅花ぬく淺茅が原も老にけりしろ綿引る野べと見迄
淺ぢふも雀隠れになりに鳧うべ木の本は木暗かり鳧
春深くなりにけりとは住吉の岸の藤波をる時ぞしる
梅津川春の暮にぞ成にけるせゝの井堰に堰も止なむ

夏

四月

梅津がは　春の暮れにし　旦たより　庭の木かげは
隔もなく　もりの下ぐさ　繁ければ　露もぬるけみ
おき渡り　すゞしかれ　永き日の　明れば今日を
暮ればあすを　歎くまに　垣根に咲ける　色わかす
卯の花の　おもとの　雪よりげなる　ちぶさの賜い
時にしあはぬ　くる夏ごとに　身にし有ば　草ばをつめる
逢くれど　うきみ一つの　名を好忠と　ともなく　拙なきを
名けつゝ　はぐゝむとの　悲しさに　世を捨て難み
ふる程に　ものゝみ今は　欲けれど　夏のこゝろを
つくりたるかも

かはすかきたてたる事も無き人の流での世の印也鳧

四月はじめ

榊とる卯月になりぬ神山のならの葉柏本つ葉もなし

二見儘に庭の草葉は茂れ共今は假にもせなはきまさぬ
三水草生し安積の岩井夏くれば袂をひぢて掬びくるかも
四夏日は空さへ永くなればにや天照影の過がてにする
五時鳥はのに初音を聞しより夜としなれば目を覺しつゝ
六野べみれば草わく餝成にけり我苗代も生ひやしぬ覽
七夏引の白糸のてくりまだしきに夜は短く成にける哉
八世中のなり行く樣も同じ事いつらはそこら立し麗ぞ
九三笠山ましても見えず夏なれば孰こともなく青み渡れり
一〇刈にくと思ひし人の絶にしを草葉につけて忍ぶ頃哉

四月中

一大荒木の下草迄に風吹けば靡きて神を祭あへるかも
二みあれ引賀茂の御戸代引繰て今はとしのみ祈る計ぞ
三やほたても河原をみれば老に邊辛しや我も年をつみつゝ
四うつき原てこが布を晒せるとみえしは花の咲る也鬼
五河上のあらふの池の浮蓴うきとあれやくる人もなき
六夏衣龍田河原のこのかげに今はゆきつゝすゝむ計ぞ
七かをかげば昔の人の戀しさにはな橘に袖をしめつる
八夏のよの長閑き雨を足引の山の春風ふくかとぞ聞く
九屋のはに隱てすめば難波女のこやは夏社涼かりけれ
一〇夏麻の下葉の草のしけさのみ日毎に增る頃にも有哉

四月をはり

一夏衣うすくや人の思ふらむ我はあつれて過す月日を
二垣根には卯花うゑむ雨夜にも我宿守る人とみるべく
三刈にくる人に附てぞ戲れぬる長閑き夏の草ばなれ共
四蛙なく井手の若菰刈ほすとつかねも敢てぞふる
五日くるれば下はこ關き木の本の物恐ろしき夏の夕暮
六世中は淺茅が原もおなじごと繁れる夏と何か賴まむ
七懷しく手には折ねど山賤の垣ねのうばら花咲にけり
八すくもたくみほの浦人舟馴て幾その夏を焦れきぬ覽
九野中には行かふ人もみえぬ迄なべて夏草繁り合に鬼
一〇蟲立る五月の澤の菖蒲草よそめは人の引かとぞみる
一名にしおへば賴まれぞする我戀る人に橘の花咲に鬼
二菖蒲引賤のはは かま濡々て時に逢とぞ思ふべらなる
三瓜植し狛野の原のみそのふの繁く成行く夏にも有哉
四淺ぢ生る小野の篠原草深みゝの宿もを誰か知べき
五柚川の筏の床のうき枕なつは涼しきふしどなりけり
六疎まねど誰も汗こき夏なれば遠にぬとや心隔てむ
七燃れ共煙も立ぬ夏の日の暑さぬるさを忍びてぞふる
八とけてすらぬる程もなき梅雨に寢覺勝にて明す頃哉
九入日さしなく空曇の解きけば露の我身ぞ悲しかりける

五月中

一山賤の畑にかりほす麥の穗のくだけて物を思ふ頃哉
二我蒔し麻苧の種をけふみれば千えに分れて蔭ぞ涼き
三大原やせが井の水草掻分ておりや立まし涼みがてらに
四をたまくり懸て手引し糸よりも長しや夏のくゝ待間は
五長閑にて涼かりける夏の日も思ひ扱ふともなきみは
六假にても思へば社は夏草の繁れる中を分つゝもくれ
七嶂のはの海ら衣に成しより妹とぬるよの間遠なる哉
八來たりとてぬるまも有じ夏のよの有明の月も傾に鬼
九影清み夏の夜すがら照月を天のと渡る船かとぞ思ふ
一〇我せこが來ませりつるかみの程に庭の小草は片迷ひ鬼

五月は て

一小山田のみ絶せしより天にます岩戸の神をれがね日ぞなき
二さゝら波たつ山川は淺けれど深く成行く夏にも有哉
三にはたづみ流れて人やみえくると曇れば賴む夏の夕暮
四茜指岩戸の山も見えぬべくめを極めてもてれる夏哉
五花散し春の嵐を惜置て夏の日よりにふかせてしがな
六庭に生る淺茅が花をはやしけむ昔の人ぞみれど戀しき
七焦れぞ烟もみえず夏の日はよるぞ盛は燃增りける
八隣もなく物思つる宿なれどする業なしに夏ぞ涼しき
九上戰ぐ竹の葉並の片よりをみるに附ても夏ぞ涼しき
一〇手もたゆく扇の風のぬるければ關の清水に水馴てぞ行

六月初

一今日よりは名越の月に成ぬとて荒ぶる神に物なるな人
二斯計草葉も夏も深けれどあらはに置る淺茅生の露
三河上に夕立すらし水屑せくやなせのさ波立騷ぐなり
四里遠み作る山田の御守すと立てるもほづに身をぞ倣つる
五蚊遣火のさよ更方の下焦れ苦しや我身人知れずのみ
六夏萩の麻のをがらとあだ人の心輕さといづれ優れり
七かこはねど蓬の雛夏くればあばらの宿も面隱しつゝ
八こはなしに夜はたゆる夏蟲の蚤の在かや晩くなる覽
九ながら日すら晩て夏を過す哉吹くる風にみを任せつゝ
一〇さゝら波立ておりくる水の文は夏の河原の涼み衣ぞ

六月中

一我背子が夏の夕暮みえたらば涼しき程に一夜れなまし
二我妹子が汗にそぼつるより髮夏の盡まは疎しとや思ふ
三下紅葉秋もこなくに色づくは照夏の日に焦れたるかも
四夏の池の水の面隱す蓮葉に漂ふ露の身をいかにせむ
五妹と我閨のかさとに晝寢して日高き夏の影を過さむ
六隣もなく繁れる夏の山路哉明ぬに越る心地のみして
七蟲の音もまだ打とけぬ草叢に秋をかねても結ぶ露哉
八入日さし蜩のねを聞からにまだきねふるき夏の夕暮
九夏ばかり賀茂の河瀨に過してむ古鄕人は心おくとも
一〇行道をあやなくまだきとまる哉蜩のねは定なき世を
一一靈雲のうきてさ迷ふ大空を詠めし程に夏はくらしつ

秋

一涼みせし　夏のくれにし　夕べより　野べの草葉を
二掻分けて　よもに吹くる　木枯しの　やゝはだ寒く
三なる迄に　［　］　年月をば　思ひのほかに
四過しやり　［　］　心の內に
五かひなき身をば　［　］
六嘆きつゝ　［　］　世を長つきの　［　］
七耳にきゝ　［　］　末までに　［　］
八消ぬとも　［　］　記置かば　［　］
九［　］　［　］　行く末みづの　［　］　絕ぬ言はを
一〇［　］　［　］　形見ともみよ
一一打渡し岸べは波にくづるとも我名はつきじ天のはし立

はじめの秋

七月

一山城の鳥羽田の面を見渡せば仄に今朝は秋風ぞふく
二穗立する秋はきに鳧おりそぼち早苗つかれし袖もひなくに
三遠山田去年に懲せす作置てもるとせしまに妹將枯ぬ
四空を思ふ少女の衣一ひより天の河波立ちぞよるらむ
五起てみむと思し程に枯にけり露よりげなる朝貌の花

三三朝ぼらけ萩の上葉の露みればや、はだ寒し秋の初風
三四秋をへて雲ゐにきゝ、は渡れども波に朽せぬ天の浮橋
三五七田子浦にきつゝ馴む少女子が天羽衣さ干す覽やぞ
三六我思ふ色には咲ける撫子の露に心をおかるべしやは
三七蟬のはの薄き衣し變らねば秋きたりとも覺ざりけり

七月中

三八○我守るながての稻も軒は落て村々穗先出にけらしも
三九久方の岩戸の關もあけなくによはに吹しく秋の初風
四〇いづこべによな〳〵露はおけとてか稻葉を人の急さかるらむ
四一誰が置る玉にか有覽秋の野の草葉をよきず置る白露
四二我宿の門田のわせのひつ穗を見に附ても親の戀しき
四三武藏野の岡べの原の秋萩も花咲き方になりにける哉
四四暮ればとく行てもきかむ古鄕に我を松虫鳴と告たり
四五木枯の秋と立にし其日より稻葉のそよと云ぬ日ぞなき
四六秋の野の草むら毎に置く露は夜なく蟲の涙なりけり
四七其かみに岩にも種をまけりせば秋の田のみをよにみましや

七月をはり

四八○我せなは妻戀すらし遠山田守ると告て日數へぬれば
四九秋風のよもに吹くる立田山何の草木の長閑かるべき
五〇睦じき妹兄の山と知らねばや初秋霧の立ちて隔つる
五一人ならば語ふべきを思事の薄はそこと云かひもなき
五二秋風の草葉を分て吹くれど野べには跡も止らざり鳧
五三こし人の置て別れし朝より秋きに鳧と著くみてしを
五四二葉にてねざし、篠の秋くれば夜中に成て寢覺勝なる
五五あれば有となけものよそにみし人の秋風吹ば其ぞ戀しき
五六大比叡やをひえの山も秋くれば遠目もみえず霧の籬に
五七女郎花匂へる野べと見なべに機織る虫もよはに鳴也

八月上

五八○くる鴈のよはの羽音に驚て野べの白露起居ぬる哉
五九蟲のねぞ叢毎にすだくなる我も此夜はなかぬ計りぞ
六〇ねたるまも露や置つゝ絞る覽ひた打はへて守る山田を
六一我兄子が我に枯にし夕より夜寒なるみの秋ぞ悲しき
六二轡蟲ゆら〳〵思へ秋の野のやぶの栖はながき宿かは
六三みし人の賴めしよを賴つゝ秋をばよその物と赴きけ
六四遠つ山宮城が原の萩みると秋は俸きたはれ名ぞ立つ
六五枝もたわに萎ぬるかと思迄幾そかおける萩の上の露
六六神南備の三室の山をけふみれば下草かけて色附に鳧
六七打群れてと渡る雁の羽風かも天の河波騷ぐらむかも

八月中

六八七とやみれば我夏飼の片返り秋きに鳧とをはぞしなへる
六九一塞さのみ夜どに勝るなよ竹の風に片よる聲の悲しさ
七〇二蘆積る夜床は山と成ぬべし秋のよをへぬる人もなみ
七一三隈毎に心地さやけき秋の月小倉の山の影はいかにぞ
七二四望月の駒すら年に引るゝを我すぐしくる秋ぞ悲しき
七三五あしげなる奥手の稻を守るまに萩の盛は過やしぬ覽
七四六肌寒く風は夜ごとになり增る我みし人は音信もせず
七五七三年生の駒を手どに懷けつゝ引來る秋の今朝の關風
七六八我せこがきませる宵の秋風はこぬ人よりも恨めしき哉
七七九待宵の風だに寒く吹ざらばみえこぬ人を恨ましやは

八月をはり

七八○陸奥の秋田の山に秋霧のたちの、駒も近づきぬらし
七九一衣うつ礪の音を聞くなべに霧立つ空に雁ぞ鳴くなる
八〇二秋風はまだきな吹そ我宿のあばら隙せる蜘のい掻を
八一三風によりうてば衣を手のたゆく寒さに急ぐ秋の夜々
八二四いざ子共小草も垣に露ぬるゝ風に長閑き秋の日和に
八三五なけやなけ蟲がそまの蕚くれ行く秋はげにぞ悲しき
八四六身に寒く秋のさよ風吹からに舊にし人の夢にみえつる
八五七我身こそいつとも知ね中々に蟲は秋をぞ限べらなる
八六八いつしかも聲は絶せしな鹿の己が憂身の秋をしも鳴
八七九我せこが板やの鈴子懸させて絶ぬを待ぞ秋は術なき

九月上

八八○最ごしくよを長月に成ぬれば寢覺勝にて明すべき哉
八九一よそ耳に鹿のしらねを聞しより秋は悲き物と知にき
九〇二はやきは夕になれば村濃也誰が織初むる錦なる覽
九一三秋風のふく狹衣を取亂りさほす程にぞ寒きめはみる
九二四人はこず風に木葉は誘れぬよな〳〵蟲は聲變り行く
九三五住吉のならしの岡の玉造り數ならぬみは秋ぞ悲しき
九四六み山には村々錦ひけるかと見るに附ても秋霧ぞ立つ
九五七吾妻山みの、中道絶しより我身に秋のくると知にき
九六八老にける齡も皺もふ計菊の露にぞ今朝はそぼつる
九七九まぶしさし鳩吹秋の山人は己が在かを知せやはする

九月中

九八○雉子鳴く交野の原を過行けば木葉も殊に色附にけり
九九一我妹子が衣薄れてみえしより戲れねせじと思初てき
一〇〇二招くとてたちもとまらぬ物故に哀かたよる花薄かな
一〇一三きる人も世になき物は秋山に風の吹立つ錦なりけり
一〇二四長月の秋のうればに曾く露は花をしのぶる鹿の涙か
一〇三五とならは山とも早く成なゝむこゝらの紅葉散積りつゝ
一〇四六綱代もる宇治の川長年積り幾そ月日を數へきぬらむ
一〇五七山里はかいと(ゆ)の道もみえぬ迄秋の木葉に埋れに鳧
一〇六○倉部山秋の月よにみれば明し峯は紅葉や最ど照らむ
一〇七九妹がりと風の寒さに行く我を吹きな返しそ狹衣の裾

九月をはり

一〇八○我家は行く程遠しさほ風の暫しはをやめ妹も待らむ
一〇九一箱根山雙子の山も秋深み明くれ風に木の葉ちりかふ
一一〇二入口さすさほの山べの柱原曇ぬ雨と木葉ふりつゝ
一一一三外山なる正木の蔓色こきを見にくる人も見えぬ秋哉
一一二四秋深み山の錦もつきたゝばきる人なしにちりぬ計ぞ
一一三五我せこときよのね衣重ねきて膚を近み睦れてぞぬる
一一四六田上やせたの早瀨に梁さして寄るとしなれば浮寢なそする
一一五七照射すと秋の山べに入る人の弓の矢風に紅葉散らし
一一六八筏おろす跡の早水せきとめて暮行秋をみる由もがな
一一七九秋果て我せな君の絶しより闇の夜毎をとりぞたてゝし

冬

一一八○かみな月　時雨ふりくる　み山より　風さへことに
一一九後れねば　四方の木葉の　殘りなく　ながむる空も
一二〇晴すのみ　曇りわたれば　なよ竹の　長きよな〳〵
一二一思ひ集め　くれゆく冬の　くれ竹の　しのぶるとの
一二二あり樣を　こゝろの內に　人のそしりも　知ずして
一二三苦しさに　とはず語りを
一二四集めたるかも
一二五耳に聞きめにみる事を寫置て行末の世の人に語らむ

冬のはじめ

十　月

一二六何事もゆきて祈らむと思ひしを社はありて神無月哉
一二七時雨つゝ人め稀なる我宿は木葉の散を誰かとぞ思ふ
一二八烟たえ物寂しかる庵には人こそ見えね冬はきにけり
一二九野伺せし小篠が原も枯にけり今は若駒何になつけむ
一三〇草がれの冬までみよと霜のおきて殘せる白菊の花
一三一時雨れば先ぞ悲しき我宿の閨の板まの逢夜なければ
一三二白露の凍らば玉と手に取てぬかれぬ迄も貫てみましを
一三三長き夜にすだき蟲を厭ひしに今は嵐の音ぞ烈しき
一三四風早み妻ごひ也し鹿のねをなど我上と思はざりけむ
一三五露ばかり袖だに濡す神無月紅葉は雨と降にけれども

十月中

二吹ちすさ冬の嵐ぞ怨めしき木のはをきぬと頼む山人

三人傳に寒しと聞し風の音をわが轉寢の耳なれにけり

四獨ぬる風のさむさに神無月時雨ふりにし妹ぞ戀しき

五外山なる柴の立枝に吹く風の音聞く時ぞ冬は物憂き

六三室山木葉降りにし朝より顯はにみゆる四方の玉垣

七河上や笠澁のいは屋を寒み苔を莚とならす優婆塞

八ねらひする冬の狩人待兼ねて己が心に寒しとや思ふ

九古郷の道は草葉も枯に鳧とてし人はたふれしぬらむ

一〇岩戸山よにあけ難き冬のよのあまの關守誰か据けむ

一一夏きぬと有し乍も冬夜のせなとしねなば寒らむやは

十月はて

一二冬くればおり立人も無り鳧有しに增る水の上のあや

一三柴木たく庵に烟立ちみちて絶えず物思ふふゆの山里

一四草の上にこゝら玉ぬし白露を下葉の霜と結ぶ頃かな

一五寒らで寢覺すしあらば冬夜に我待人はこずはこず共

一六亂れつゝ絶なば悲し冬のよを我獨ぬる玉の緒よわみ

一七ふぢふのに柴刈民の手もたゆく束ねも敢ず風の寒さに

一八寒しとて道は休らふ程莊あれ妹がりとだに思立なば

一九すむ閨も木葉隱れにせし業も冬きて後ぞ顯れにける

二〇瀧葉の散にし日より難波江に通ふしなさをさしてみねつゝ

一一鵲のちがふる橋の間遠にて隔つる中に霜やふるらむ

中の冬十一月上

一二榊葉もとりに行べき神山の路は雪にや埋もれぬらむ

一三薮隱れ雉子の在りか窺ふと文なく冬の野にや戲れむ

一四風寒く成にし日より相坂の山の岩井は水草おひに鳧

一五愛にだにか計凍る年なればかひの白嶺を思こそやれ

一六秋はて、時雨降にし我妻を冬の夜すがら戀明しつゝ

一七楸生るあとの河原の淺茅には殘らず霜に枯果にけり

一八蘆鴨のきゐる岸べの淵よりも深く成行冬にもある哉

一九見渡せば越の高ねを雪積りいさ白山の程はいづれぞ

二〇冬はきて草ばを枯しはて、鳧御狩の野守もるかひもなし

二一賤の女のあさげの衣めを荒み烈しき冬は風も障らず

十一月中

二二岩間には氷の楔打ちてけりもりこし水も絶て音せず

二三冬草のかれにし人の今更に雪ふみ分てみえむ物かは

二四夜は寒し寢床は薄し古郷の妹がはだへは今ぞ戀しき

二五霜霜のよはに起ゐて冬の夜の月みる程に袖ぞ凍りし

二六千早振かみなび山のなら柴を雪ふみ分て手をる山人

二七秋だにも風に恨みし葛のはの最ど枯ぬる冬ぞ悲しき

二八寵山雪は隙なく降しけど火のけを近みたまらざり鳧

二九おき中にこがれ渡れど冬なれば波路を寒み急ぐ舟人

三〇待兼て妹やねぬらむ冬の夜は深にたり共猶や行まし

三一久方の空かき曇りしぐれつゝ氷の隙もみえぬけさ哉

十一月をはり

三二さよ中にせなかきたらば寒くとも腐を近み袖も隔てじ

三三けを寒みさえ行く冬の終夜めだにも逢はず衣薄れて

三四深くしも頼まざる寢君故に雪踏分てよな〳〵ぞ行く

三五炭竈の煙にみをや類へまし我たらちめも偖ぞ絶にし

三六獨ぬる我身は荒て草村の野ら風よりも寒くもある哉

三七降りふゝき雪間もみえぬ冬日の晴ぬ雲居に鵙ぞ鳴なる

三八大原や槇の炭竈冬くればいとも歎きの數やつもらむ

三九小鹽山尾上の松の枝どに降しく雪は花と見えつゝ

四〇御廐居る冬野を分くる狩人の靴の山か駒はかくさむ

一一あたご山櫨の原に雪つもり花つむ人の跡だにもなき

くれの冬十二月初

二二優婆塞が字名に刻む松の葉は山の雪にや埋れぬらむ

三三あはなりし瀧の白糸冬くれば解べくも非ず氷結べり

四四君まつと關の板戸をあけ置て寒さも知ず冬のよな〳〵

四五み山には山の山風あらげなり椎の風折いくそ懸れり

四六山人の露とむすべる柴の庵雪ふみ分て誰かとふべき

四七しみ凍る木のねを床と馴しつゝ行ふ人ぞ佛とも成る

四八埋火の下に憂き身と歎つゝ偖く消えむとをしぞ思ふ

四九冬籠きぬ〳〵山を見渡せば晴るよもなく雪は降つゝ

五〇霙ふり曇れる冬の晴すのみ盡せぬ物や鷹が身のうさ

一九氷するみはらの池の池堤おほはぬはこの鏡とぞ思ふ

十二月中

二九風さわぎ霰降りしき寒き夜に何をあかすと結ぶ氷ぞ

三〇筑波山はやま繁山繁けれど降しく雪は障らざりけり

三一冬山の炭やき衣なれぬとて人をば人の賴むものかは

三二雪降れば緩木の森の枝わかす夜晝鷺のゐるかとぞ思ふ

三三鴨のゐる洲崎のみより氷こち寄りこ波も沖にをりつゝ

三四へつくりの垣ねの雪をよそ人は鶴の上毛と思覽やぞ

三五荒磯に荒波立てあるゝかも君がねはだは懷かしき哉

三六十つかは吉野の瀧を分けくれば氷ぞ泡と浮てさ迷ふ

三七都にも道踏み迷ふ雪なればとふ人あらじみ山べの里

三八大荒木の多くの枝も靡く迄よはに寂しき冬の夜の風

十二月をはり

三九年ふればうばの玉藻もおひに鳧鳥の髮に雪積りつゝ

四〇燼りつゝ世に炭竈のけぶたきを吹つゝ燃せ冬の山風

四一鴛鳥の氷の關にとぢられて玉藻の宿をかれやしぬ覽

四二鈴鹿川八十瀬の波の音なきは氷やせゝに結止めつる

四三鵠の行逢はぬまの程寒みおかでわかれし中ぞ悲しき

四四み山木を朝な夕なにこり積て寒さを願ふ小野の炭燒

四五鴉羽の上毛に雪の降しくは我が鵙のふゝきかもとぞ

四六數ふればこゝらへにける年月の雪積るらむ方や靴ぞ

四七暇なみかひなき身さへ急ぐ哉みたまの冬と宜も云鳧

一一玉まつる年の終に成に鳧けふには又や逢むとすらむ

序

新玉の年のみ空に餘るまで春は散りかふ花を惜みかね秋は落つる木のはに心をたぐへ夏はうはひもさゝで風に向ひ冬は寂しき宿にうもれゐて荒れたる宿の隙をわけ過ぎ行く月を數へつゝ明けては暮るゝ久方の月日をのみもすぐすかな哀たづきありせば百敷の大宮仕勤むとてすべらぎのみかきに面なれて旦た夕べに慰めましと心の中に歎くまに旦たには窓に囀る鳥の聲に驚き夕べには籬に開くる花の色を詠めつゝ蓬の門にとぢられて出で仕ふるともなき我身一つは憂けれどもひを蟲の日を暮し草葉の玉の風を待つ程なれば水の泡よりも殊に春の夢にも異ならず昨日見し寶の宿も今日は淺茅が原と露しげくて旦たに通ひし玉のとばそも夕べには八重葎に埋もれて空行く雲の果もなく見しも聞きしもなくなりゆけば流れてつきぬ水莖の跡に記して數ならぬ心一つを慰めむと百千の數をよみ續け許多のとにいひ連ねて敷島のみわの社の麓なる好々しくもなりにけれど松の木の千年ふるも終には枯れ朽ちぬるをや朝貌のかたぎにしもかれうせぬれど開くる程を榮えとするをや雲に鳴くたづも遂に空し溝にはふ蟲も心のゆくへは隔てなしと思ひなせば難波なるあしきもよきも同じことすくもすかぬも異ならず名を好忠とつけ

てけれどいづこぞ我が身人とひとしきとてや

百首和歌

春十

一昨日迄冬籠れりし倉部山けふは春べと嶺もさやけき

二隈毎に今日は春べと霞行く峰の巌も崩えぬらむやぞ

三巻向の穴師の檜原春立てば花か雪かと見ゆる木綿垂

四山里の梅の園生に春たてば木傳ひ鶯うぐひすの聲

五しらましや明に鳧とも春花の園の妻戸に旭さゝずば

六我妹子がけさの朝いに引されてせなへ餘りかいだゆき哉

七鴈音ぞ霞を分て歸るなる來む秋迄の我身いかにせむ

八花みつゝ春の山べに暮してむ霞に家路見えずともなば

九庭の面に舞の花のちりばへば春迄消ぬ雪かとぞ見る

一〇立ながら花見くらすも同じとて折て歸らむべの早蕨

一一うばらこそ手に取榊て春の野の藤の若葉を折てつかれむ

夏十

一二春霞立しは昨日いつのまに今日は山邊のすぐろかる鶯

一三花散し庭の木のまも繁り合て天照る月の影ぞ稀なる

一四夏衣きときになれど我がやどに山郭公まだぞ聲せぬ

一五蟬の羽のうすら衣になり行くになど打解けぬ山郭公

一六草紛ふせなが早苗を掻分て入とせしまに雲裾濕しつ

一七よそに見しおも荒の駒も草馴て懐く計に野は成に鳧

一八五月闇雲まばかりの星かとて花橘にめをぞつけつる

一九曇なき大海の原を飛鳥の影さへしるくてれる夏かな

二〇水無月の名越を思ふ心には荒ぶる神ぞ叶はざりける

二一懐かしく吹來風に計られてうはひもさゝで暮す頃哉

秋十

二二麻の刈生の原をけさみれば外山片かけ秋風ぞふく

二三秋風の吹く衣手の寒ければ片敷く方に渡ぞ立ちける

二四山里の霧の籬のへだてずば遠かた人の袖もみてまし

二五くる鵙の羽風すゞしくなる時は誰か旅ねの衣返さぬ

二六山里に蔦はひかゝる松がきの隙なく秋は物ぞ寂しき

二七夏萩のをふの繁りをみる時ぞ秋きに鳧と程は知るゝ

二八遠山田ほなみ打過出にけり今はみもりも詠すらしも

二九三吉野の象山蔭に立てる松幾秋風にそなれきぬらむ

三〇獨もぬ風もやゝ吹まさる也ふりにし妹が家路尋ねむ

三一松風のうら寂しかる秋すらに我をば人の忍ぶ覽やぞ

冬十

三二唐錦山の木のはを切たゝて幣とは風ぞ四方に手向る

三三繁かりし蓬の垣の隔てにも障らぬ物は冬にざりける

三四楸生るひさのゝ原も冬くれば雲雀の床ぞ願れにける

三五白雪のふり行く冬を數ふれば我身に年の積る也けり

三六鏡かと氷とぢたる水底に深くなりゆく冬にもある哉

三七神祭る冬は半になりにけりあねこかねやに榊折しき

三八葺けるとて人にもみせず消ざらばはらの宿にふれる白雪

三九いは山とゆふして懸ぬ新りこし柳櫨なみ殺ける霜哉

四〇うはまだらけさしも關に見ねたるは宜社よはに袖は冴けれ

四一高瀬さす淀の汀のうは氷下にもなげく常ならぬ世は

戀十

四二伯良のとを渡る舟人揖をたえ行方もしらぬ戀の道哉

四三我妹子がゆゝの玉ゆら打解き戀しき方によれる戀哉

四四戀侘て我ゆふ帶の程みれば身はなきまでに衰へに鳧

四五ま白なるおきのまはゆき見時ぞ妹がてせはゝ最ど戀しき

四六八潮路の波の高きを掻分て深く思ふと知らめやぞも

四七咏氣なし身にます物は何か有と戀ぜし人をもどきしか共

四八君こふと忍ひ〳〵に身を燒て風の悔づる灰と倣けむ

四九我戀はつげて慰む方ぞなき孰こも歎く同じ世なれば

五〇此は此天の下の神代より人の心の淺き影さへ著き

山の井にみ袋とよせじ難波づに咲きて匂へる花と

多くの人の口のはに覺ゆる事を記したるなるべし

五一有經じと歎く物から限あれば涙に浮て世をもふる哉

五二澤田川淵は瀬にこそ成にけれ水の流は早くながらに

五三數ならぬ心を千々に碎きつゝ人を忍ばぬ時し無れば

五四八橋のくもでに物を思ふかな袖は涙の淵となしつゝ

五五松のはの緑の袖は年ふとも色變るべき我ならなくに

五六搔暮す心の闇に迷つゝうしと見るよにふるぞ侘しき

五七今日かとも知ぬ我身を歎くまに我黒髪も白く成ゆく

五八邊や長柄の山のながらへて心にものゝ適はざらめや

五九へじや世にいかにせましと思ねど問ば答へよ四方の山彦

六〇三吉野に立る松すら千代ふるを斯も有哉常ならぬ世の

六一夢にても思ざりしを白雲の斯る憂世に住ひせむとは

六二るゝよりも獨離れて飛ぶ雁の友に後るゝ我身悲しな

六三八重葎繁れる宿に吹く風を昔の人のくるかとぞ思ふ

六四まろ小菅繁れる宿の草の上に玉とみる迄おける白露

六五長閑にも思ほゆる哉常夏の久しく匂ふ大和なでしこ

六六ねでの山よそ乍らにも見べきを立な隔てそ嶺の白雲

六七後おひの角ぐむ蘆の程もなき憂き世中は住うかり鳧

六八有れば厭ふなければ忍ぶ世中に我身一は住侘ぬやは

六九澤田川流て人の見えこずば誰にみせまし瀬々の白玉

七〇草深き伏見の里は荒ぬらむ愛に我世の久にへぬれば

七一花薄ほにいで人を招く哉忍ばむ方の咏氣なければ

七二人戀ふる涙の海に沈みつゝ水の泡とぞ思ひ消えぬる

七三飛鳥の心は空にあくがれて行方も知ぬ物をこそ思へ

七四憖からぬ命心に適はずばありへば人に逢瀬ありやと

七五思遣る心使はいとなきを夢にみえずと聞くは怪しき

七六瀧屑燒浦には憂やかれにけり烟たつとも見えず成行く

七七故里は有し樣にも非ずかはいふ人あらば問て聞ばや

七八もとつめに今は限とみえしより誰馴す覽我ふし〳〵床

七九野飼せし駒の春よりあまりにも蓼すも有哉淀の眞菰の

八〇かひ無て月日なのみすぐしけり空を詠て世をし憂せば

八一播磨なる飾磨にそむる強ちに人をつらしと思ふ頃哉

きのえ

八二二葉にて我か引植し松の木の枝さす春に成にける哉

きのと

八三冬深く野は成にけり近江なる伊吹の外山雪降ぬらし

ひのえ

八四青雲や空に靉き渡る覽照日のえしもさやけからぬは

ひのと

八五數ならで思ふ思の年ふともかひ有べくも非ず成行く

つちのえ

八六小山田のひつちのえしも穗に出ねば心一に戀しとぞ思ふ

つちのと

八七人をのみ世には待乳の常磐山峯の葛葉の恨でぞふる

かのえ

八八幾よしも有じと思ふ世中のえしも心に適はぬぞうき

かのと

八九一人の妻とわがのと二つ思ふには馴こし袖は長增れり

みつのえ

九〇行水のえにだにあらば藤川の流て人に澄さゝらめや

みつのと

九一近江なるみつの泊を打過て舟出ていなむとなしぞ思ふ

一日めぐり

九二定なく一日廻りに廻るてふ神の社やいづこなるらむ

一夜めぐり
五〇みし人よ廻りだにこば有經ても野中の清水掬ぶとやみむ
ひんがし
六〇故郷の後ろめたさに打忍び昔戀しき音をもなくかな
たつみ
七〇波のたつ三島の浦のうつせ貝空しき殻と我や成なむ
みなみ
八〇人は皆見しも聞しも世中にあるは有かは無は無かは
ひつじさる
九〇袖ひづしさるも哀といはゝ社袂を淵と做も果てゝめ
にし
一〇さほ山の錦なるらむ紅葉を風より先に見にや行まし
いぬゐ
一一山吹もまだ散らなくに春もいぬ井手の蛙に身をや做まし
きた
二何もせで若き頼みにせし程もみは徒に老ぞしにける
うしとら
三世中をうしとらいはゝ片時も逢へりなむやと忍ぶれば社
つらねうた
一四戀しさを慰めがてら試に返してみばやせなが袖をも
一五思つゝふるやのつまの葦も木も風吹ごとに物を社思へ
一六思へ共かひなくてよを過すなるひたきの島と戀や渡らむ
一七渡らむと思ひざして藤河の今にすまぬは何の心ぞ
圓融院のおほん子日の日召なくて參りたりとて
さいなまれて又の日奉りける
一八よさの海内外の濱はうらさびて浮世を渡る天の橋立
と名は高砂の松なれど身はうしまどに寄する白波
のたづきありせばすべらぎの大宮人となりもしなま
ましの心にかなふみなりせば何をかねたる命とか
知る
一九橋立と名は高砂の松なれどみは牛窓にまするしら波
二〇白波のたづきありせば皇の大宮人となりもしなまし
二一しなましの心に叶ふ身也せば何を兼たる命とかふる
（春後歌）
二二よさの海は隨の駒には非ね共雲まを過す程ぞ苦しき
二三世の憂は春にぞ逢ぬみ山べの埋れてゆかぬ谷川の水
二四谷川の涙のしほに朽ぬべし世にはからくて住江の松
二五住江の松は緑の袖ながら名をだにかへば物は思はじ
二六思はじや名をば埋まぬ世なり共煙と立ばわが物かは

源順
これを見て返しまたりとなむ
此頃をかしきとあんなり興謝の海の天の橋立
わたりより中絶えて程へにけるといひおこし
知るも知らぬも耳にも目にもをかしきと聞かせ面白しと見せて心のうちに思ひけることを
言の葉にあらはし思ひつゝへにける戀を歌の
内にそなへたるその中にも草のはの風をまち
朝顔の花の夕ふるほどよりもはかなき世とあ
るを見てしよりいしまの水の立返り青柳の糸
を繰り返しみれば心に備へ（有後歌）る百千の歌一
つすつべきなくあまたの言のはの中にくもの
聲の空どみえずなにはをみれど人にまされる
となしとあるとのみぞたがへる鑒をひろひ雪
をあつめて多くの年をへにければかひなき身
もこそあれかゝれとなどや網のめすきたりと
もいはゝいへ誰も千年の松ならなくにといふ
とをげにはかなきもかしこきも千年の後はあ
おきなし物いはぬ花鳥にも物をいはせ心なき
草木を心あり顔にいひなしてだに常ならぬ世
を戀むと思ふ心しもあれ胸の水もとけ心の
思も消え又さはのまつをのみきりて月の桂を
折らざらむも苦し花さく春もくれやすく紅葉
する秋もとゞまらず年へぬるみよりの袖の忍
びにおつる紅の涙にそぼちにけるを春も秋も
心うしとあれば今は時しらぬ絲をうしの墨染
にやなしてましとぞ思ふなる（春秋なり）

春十
二七山川の薄氷わけて湿の立つは春べの風にやあるらむ
二八猷傍山ほどかに霞立からに春めきにける心地かもする
二九東路の行かふ道の春立ては花みて心やらざらめやは
三〇古道の雪降しきて此春はいさや若菜もまだ摘見ぬ
三一見渡せば淀の若菰からなくにね乍ら春を知にけらしも
三二子日すとみし程もなく草枕結ぶ計に野はなりにけり
三三花故に身をや捨てゝし草枕ちゞに碎くるわが心かな
三四澤田河井手なる蘆の葉は枯て蔭すなべに蓼深に見
三五足引の山よりよそに打みれば人待渡る春暮れにけり
三六ともすれば歸雁をも惜む哉珍しげなきと知る〳〵
夏十

二七よはを分て春暮れ夏は來にけらしと思間もなく替る衣手
二八郭公うのたつ山を里としらば木のまを行て聞べき物を
二九大荒木の小笹が原や夏を淺みはたまく鳥はうら若みかも
三〇いざ兄子と小倉の山の家ゐして短き夏のよをも恨じ
三一暁する加茂の河波立日より松の影こそ深く見えけれ
三二夕闇にあまのいさり火見えつるは籬の島の螢也けり
三三石清水手に掬びつゝ我きぬる木の下蔭も結にける哉
三四五月やみ峯にもをにも空蟬の鳴聲きけば唯ならぬ哉
三五夕立にやゝ暮にけり六月の名越の祓せでやすごさむ
三六大方に暮行くかたを惜み詠て心の內は秋をしぞ思ふ

秋十
三七秋霧の立つるすがら心あてに色なき風ぞ衣にしむ
三八誰を然行てみつ覽さほ姫の一葉をはせる山の坂しき
三九花薄穗にいづとまだきつゝなゆめ秋に跨げるわれ聞なくに
四〇山田もるそほづも今は暁すな舟屋形より穗先みゆめり
四一白露の萩のうら葉に置る朝は雁の羽風もゆふしかり鬼
四二柚人の馴さりせば秋山の軒ばも今は紅葉しなまし
四三忘れこし野中の妻はさを鹿の聲きく時や思出づらむ
四四神無月近づきぬらし思はすになどよも山の立蔭行く
四五麻のをはあれと立らむ方知す今年も秋をすぐしつる哉

冬十
四六冬きぬと人はいへども朝氷結ばぬ程は非じとぞ思ふ
四七朝な〳〵君に心をおく霜のきくの籬に色は見えなむ
四八鴛鳥の羽ふきやたゆき冴る夜の池の汀に鳴聲のする
四九雉子鳴野べになこひそ冬籠りかるべき物か人の心は
五〇神祭る榊はさすに成にけり夕づくよにぞ大幣にみし
五一神無月しぐるゝたびの山彦に紅葉を風の手向つる哉
五二暮行とよその仄に聞しかど我身を越る年ならなくに
五三菁さす旭に消る雪まよりきざしやすらむのべの若草
五四春たゝば氷とけなむ沼水の下戀しくもおもほゆる哉
五五年の內に花咲にけり打忍び春ふく風にまだき驚すな

戀十
五六色に出ば人知ぬべみ稲絶田の沼よりもけに上ぞ難面き
五七ひるまなく夜はすがらに絶すのみいしくの原の繁き我戀
五八勝間田の池の白波打はへて立てもゐても物を社思へ
五九現にも身は戯ならば云べきを夢の中にも人めみし故
六〇偽に有はすらめどわかきくに思ふと云え社紙はね
六一時のまもゆく珍しに思はえてみまく欲さに誘れに鬼

二袖に落る玉ば幾らぞ塵すらも積れば山と成と云物を
三天の原遠近にすむ七夕もわがごと物や思ふらむかも
四寐ぶれど幾その神の罪なれや忍びも敢ず戀増るらむ
五戀侘てへじとぞ思ふ世中にあらぬ所やいづこなる覽
これはあさかやまなにはづ
六淺ましや安積の沼の櫻花霞込めてもみせずも有る哉
七澤田川瀬々の埋木顯れて花さきにけり春のしるしに
八かをとめて鶯はきぬ鑿びきの隙すかひなし春の霞は
九宿近く櫻は植じ心うし唉とはすれど散りぬかつ〳〵
〇巻もくの枩原こくこそ思ほゆれ春を過せる心習ひに
一蚊遣火の下に萠つゝ蒿蒲草あやめも知ぬ戀の悲しさ
二けふよりは夏の衣になるなべにひもさし敢ず臆なく
三さみだれて物思ふ時は我宿のなく蟬さへに心細しや
四へつくりに知せずもがな難波江の葦間を分て遊ぶ鶴の子
五絲なる色こそまされ夜と共に猶下草のしげき夏の野
六行雲の旗手よりこそ先はみれ秋の初になれる景色は
七るりの壺さゝらぬさきは蓮葉に溜れる露にさもにたる哉
八八十島の都どりをば秋の野に花みて歸る便にぞとふ
九待遠に思ひし秋は更にけりしるくぞ見ゆる萩の下露
〇野も山も色變り行く風寒みいかで尋ねむ忘れにしせこ
一井堰より漏水の音の聞えぬは冬きにければ氷すらしも
二軒端なる梅唉ぬとて計られぬ人頼めなる雪や何なり
三あら玉の年暮行けば老にけり心細くもみゆる蜘のい
四さす草も萠ぬ覽やぞ春きては若菜摘べきふちかたの山
五くる春は何を然見む梅花ふる年ながら散行くみれば
六遙かなる人まつ程は忍ぶれど著くやみゆる我衣手は
七一度も物を割なく思ふには胸も千々にぞ碎くべらなる
八時のまも心も心戀しきは後うきものと人をこそ思へ
九鶯鳥のみなるゝ音は難面きを下苔しとは知らめや人
〇思ふ共思はずと云て咲氣なく人を恨るとのわりなさ
一もる山に歎きこるみは音もせで煙も絶ぬ思をぞたく
二吹風の便に訪はむ玉垂のみすも動かば我としらめや
三物思ふに苦しきよはは差置つ明ばみにませ挿櫛の箱
四長閑なる時社なけれ富士の山いつかは絶む燃る思の
五斯戀む物と知せば一目みる人に心を附くる身なれば
六はつかしに人に心を附しよりみそか乍らに戀渡る哉
きのえ
七田子の浦の政人百敷の選びに入りてなれるなるべし
きのと
八小夜更て何か戀しき長閑にて年へば瞼有ざらめやも
ひのえ
九心にもうしとぞ思ふ我戀の選ばぬやなぞ善も悪しきも
ひのと
〇昨日迄冬籠れりし蒲生野に族のとくも生ひにける哉
つちのえ
一籬居のこゝもし泣くかは思見つちのね迷ねば有にぞ有らし
つちのと
二風吹けばゆるぎの杜の一つ松待乳の鳥のとぐら也鳧
かのえ
三花のかの枝にし止る物ならば暮るゝ春をも惜さらまし
かのと
四心うし深き山にも入にしが長閑にをりて憂世遁さむ
みづのえ
五春立たば先松植しこゆみつのえすはさひしきてや歎なむ
みづのと
六一めみつ長閑に今は有べきを逢に替たる命とや云む
一日めぐり
七我が一日廻々をせし程にしゝきまひする年はきに鳧
一よめぐり
八みちの人よめぐり返し文を猶さえ有物ぞ出立もする
ひんがし
九つらく共忘れずこひむ鹿島なる阿武隈川の逢瀬有やと
たつみ
〇霞たつ三室の山に唉花は人しれずこそ散ぬべらなれ
みなみ
一稻荷山皆みし人をすき〳〵に思ふ〳〵と知せてしがな
ひつじさる
二戀するに衣手ひづしさるかひのあらば絞りてみすべき物を
にし
三いさや又戀に死ぬてふもなし我をや後の例にはせむ
いぬゐ
四きてはいぬゐては閑にゐも敢ず猶人妻はかひ無り鳧
きた
五世中に乾かぬ物は戀ひ〳〵てぬる敷妙の枕なりけり
うしとら
六淺茅生の尚うしとらふすなれど秋は人より先にかるれは
このほか好忠が歌ことばあり

實方朝臣集

七水上のさだめてければ君が代に二度すめる堀川の水
物がたりつくる所にて詠める
八我事はえも岩代の結び松千年はふ共とけじとぞ思ふ
九すはへする小笹が原のそよ更に人忘るべき我心かは

一勝やへ作ら色も變らぬ山吹の九重になど咲すなりにし
と聞えさせければ一品宮の大ばん所
二四九重に非でやへ咲く山吹のいはぬ色をば知人もなし
少將
又
三四□しひたきにみゆる花なれば心の内に云で思ふか
上の御
四四御垣よりほかのひたきの花なれば心留て折人もなし
櫻のおもしろきをある人に心をよせて
五四植てみる人の心に比ぶればつねなく散らぬ花櫻かな
返しむすびつけゝる
六四蔭にだに立寄り難き花のえをならし顔にも較ける哉
又かへし
七四立寄らむとやは難き春霞ならしの岡の花ならずとも
清涼殿の御前のすゝきを結びたるを誰がしたる
ならむといひて內膳の命婦の結びつけさせける
八四吹く風の心もしらず花薄うらにむすべる人や誰ぞも
殿上人かへしせむといひすさむ程にまゐりあひ
て
九四風のまに誰むすびけむ花薄うは葉は露も心おくらし
あさひの山の麓にかみまつりける所
〇五あさひ山麓をかけてゆふ襷あけくれ神を祈るべき哉
杉村の森にて郭公を聞きて
一五はぶきつゝ今やみ山を出つらむ杉かけてなく山郭公
天の川にて
二五天の川通ふ浮木に言とはむ紅葉の橋は散るや散ずや
宇治にてこれかれ行くにかげまさの朝臣のひわ
りごのふたに書きておこせける
三五橋姫のよはの寒さも訪べきを誘はで歸る狩人やたぞ
かへし
四五橋姫は袖片敷かむ程もなしうちに止らぬ人語らひて
かげまさの朝臣諸共に急ぎける頃花山院のおり
させ給へるを歎きて
五五云てなぞかひ有べくも非なくに常なき世をも常に歎かじ
道信の中將に花山院の御ことを思ひやりて聞え
ける
六五花のかに袖を露けみをの山の上こそ思遣らるれ
櫂少將とのゐ所に枕箱忘れたるをやるとて
七五あく迄も見るべき物を玉匣浦島のこやいかに思はむ
かへし
八五玉匣なに古の浦島にたれならひつゝおそくあくらむ
たちかへり
九五遲くしもあく社うけれ玉匣あな恨めしの浦島のこや
つねふさの少將のもとにとのゐものある取りに
やるとて
〇六返さむと思ふも苦し唐衣わが爲かふる折しなければ
道綱の中將の網代にさそひければ道心がり給ふ
よりはせ生このみ給ふこそとて
一六宇治川の網代のひをを此頃はあみだ佛によると社きけ
かへし
二六ひをのよるうちには非で西河の網だに有らばいをも抄はむ
仁和寺の僧正御くだものまゐらせ給ふ欄子のか
へさに書きつけたる
三六思事成もやすると打ちむきてあなた樣にぞ欄子奉る
かへし
四六我爲にむらいし給ふ事ならば思心もならざらめやは
春日にて
五六えだわかぬ春日の里の姫小松祈る心は神ぞしるらむ
正月のついたちに橘の木に雪の降るを
六六時は春花は五月の花かもし鳥の聲にやけさはわく覽
かへし
七六郭公なくべき枝とみゆれども待たるゝものは鶯の聲
花山院の春宮と申しゝ時に九月御庚申に
八六もみぢ葉の彩る露は九重に移る月日や近くなるらむ
時明の朝臣法師にならむずるころ女に櫛の箱と
らするふたに葦手して
九六馴てける程な忘れそ玉櫛笥明暮そはね折はありとも
その櫛の箱を女院の物にて召しければ奉りたる
を御覽じてかへし賜はすとて
〇七忘るなと契置きける玉櫛笥我形見とや今日は見らむ
御かへし
一七中々におく方なきは玉櫛笥みには餘れる形見也けり
實明の君の女をかれにければ女にいひやる
二七侘つゝも此世はへなむ渡川淵瀬を誰に問はむとす覽
殿上にてこのは裳日とつと字かんぬのやにさゝ
くりあとゝいふもじを
三七常ならぬよをみるだにも悲きに夢覺て後思ひ社やれ
宰相の中將こそきみといふ子なくなりて七月八
日の朝ぼらけに
四七七夕のけさの別に比ぶれば此は猶增る心ちこそすれ
同じ頃このなき人を見て
五七轉寢の此世の夢の儚きに覺めぬやがての命ともがな
程へて難波へゆく道にて長柄の橋にて
六七親も子も常の別の悲しきは長らへ行けど忘やはする
物へ行くみちに柴つみたる車のゆき煩ふをみて
七七春こりの柴積み車うし駑みたが故郷の垣ねしめにぞ
十月の一日ごろのぶかたの中將に
八七いつとなく時雨ふりおく袂には珍しげなき神無月哉
同じ人を內にさそふとて
九七出立ちて友まつ程の久しさに正木の蔓散やしぬらむ
かへし
〇八急がずば散も社すれ紅葉ばの正木の蔓遲くくるとて
道信の中將うじの祭の舞人にて諸共にありし
を二人ながら四位になりての年の祭に
一八古の山井の水にかげみえて猶そのかみの事ぞ戀しき
かへし
二八古の衣の色の徵りせば忘らるゝ身となりやしなまし
ためたふの辨なかよりが家にたゝそめしとし今
年ばかりとて宮のへのうへの御ぞのはしこひた
りける氣色を見てしりうごとに
三八天にますかさまの神の徵せば舊にし申を爭で問まし
人のもとに紙こひにやるとて
四八何をして豐岡姫を祈らましゆふしでかたき神無月哉
ふるき年三河の守のいと奉らむといひて又の年
おこせたるに
五八いにし多いとしも何に待れ劍太くる物と思ましかば
字佐より歸りて人にかみなど心ざすとて
六八いさや又うさの社は知ね共こやそなる覽少名毘の神
かへし
七八廣前にまさぬ心の程よりは大直日なる神こそみれ
宇治にて川にうきたる橋にうたゝねしたるにの
ぶかたの中將聲をかくして
八八宇治河の夢のまくらの夢さめて
といへば
よるはしひめいやねざるらむ

新嘗會の夜あかひもの亂るゝとのゝおかたの中將
うれふれば
八いかなるひものよそにとくらむ　のぶかた
足びきの山井の水はさえながら
雪ふりてゐしたに弘徽殿の北おもてにみちなか
の君とたちよりて左京の君に
九足のかみ隊よりしものさゆなるは
といへば
こしのわたりにゆきやふるらむ
ゆみのけちにまだらまくに雪の降りかゝれるを
一前方のまだらまくなる雪みれば　入道の少納言
とあるに
しりへのやまぞおもひやらるゝ
殿上にて郭公をまつ心を
二かきくもりなどかおとせぬ時鳥　ためすけ
かまくらやまにみちやまどへる
ためすけかうぶり得べき前の年の八月に月のあ
かきよ物語などして
三教ふれば今いつ月になりにけり　ためすけ
むつきにならばとふ人もあらじ
みかは水のつらにゐて詠むるにある賤人のもの
思ひ顔にてゐたるかなといへば
四こひとさはしきかげやみゆらむ
といふに
八橋にあらぬみかはの遠にゐて
六月はらひにあるやかきのまへを渡れば
五さを鹿の耳ふりたてゝ聞しめせ
といふ人あればいととく
おもとをかすつみはあらじな
五節の頃にてまかでなむと云ひあるきけるを
六條殿の少納言
六雲のとを月より先にいでつれば
といふを聞きて
ふしみのさとにひとやまつとて
小一條殿の人々なぞ〳〵物がたりす
七かたすまけすの花のうへのつゆ
といひけるに
すまひ草合する人のなければや
うちわたりの人に扇をとりて返さゝりければ
八たがために惜む扇のつまならむ
といへば
とれかしとらのふせるのべかは
八月ばかり月あかきよ花山院のひが歌よまむと
て
九あきのよにやま郭公なかませば　さねかた
かきねのつきやはなと見えまし
三條院にてせ敕せられし日ひつぢものおほくみ
ゆるを
一〇このひつは何ぞのひつぞ覺束な
といふに　ためすけ
かたねのまへのほかゐなりけり
ためすけの辨しのびたる所よりきたるあしたに
一一誰が里にいかに契りし郭公妹が垣根の花や散りにし
道信の少將よのなかはかなき物かたりして又の
あしたに雉をやるとて
一二立雉の上の空なる心ちにも遊れ難きはよに社有けれ
堀河の院の子日つかまつりし
一三紫の雲のたなびく松なれば緑の色もことに見えけり
花山院の歌合に
一四長閑くも思ほゆるかな屋たゝぬ花の都の櫻と思へば
また同じ歌合に
一五月影は宿にしとむる物ならば思ぬ山は思はざらまし
しぐれ
一六秋はてゝかみの時雨は降ぬらむ我片岡の紅葉しに鬼
宇佐の使のをりもろともに見むと契りけるをか
の少將なくなりての年の秋
一七見むと云し人もはかなく消にしを獨露けき秋萩の花
白川殿にて鹿の聲を聞きて
一八浮世にも山のあなたの床しきに鹿のね乍いやはねらるゝ
ある女のもとにさねかたの兵衛の佐となのりて
こと人のいきたりけるを女に
一九誰ならむいはでの森にとゞはむしめの外にて我名借けむ
小しゃうさた通ひけるけしきをみたる人のいひ
ちらしければ命婦のもとなるたつやといふ下仕
して
二〇あだ波のたつや遲きと驚ぐ也三島の神は如何答へむ
同じ女にふみをこまの命婦さはやかくなきこと
をいふなどいひけるを聞きて
一一こまにやは先づ知すべき眞菰草賊と思ふ人も社あれ
小一條にある人のむすめを忍びて語らふに女親
きゝつけていみじう腹だちてつみなどするとき
く頃三日の夕がた北の方もちひまゐれとあれば
二一みかのよの餅は食じ憂り鳧きけば淀野にはゝこ摘鬼
同じところの少將のおもと五節の舞姫にてかへ
りたるに
二二神舞し少女にいかで櫛葉の變らぬ色を知せてしがな
この人たいのあらはなるに居あかして妻戸を押
しあけたりけるに空の景色もをかしくて形もま
さりて見ゆれば
二三天のとを我爲とては鎖ね共怪しく飽ぬ心ちのみして
同じ人の里なるになき由をいひてあはざりけれ
ば内にまゐりにけり女曙におこせたりける
二四天の戸のさして爰にと思ひせば明るを待で歸さしやは
返しことわりとて
二五天の戸をあけてふ事をいみじきに計とはぬ罪は罪かは
同じ人わかき心ちやみけるを蔑くなむいかにし
たるとか聞きて
二六いかなれば我れ占しのと思覺春日の原を人や燒らむ
ある女をいかなるとかありけむ今はさらに聞ほ
じなど誓ひて歸りて程へていかゞ覺えけむ
二七何せむに命を懸て誓ひけむいかばやと思ふ折も有鳧
人にはじめて
二八爭でかは思ありとも知すべき室の八島の煙ならでは　宰相
二九七夕の契るそのよは遠くともふみ見きといへ鵲の橋
かへし
三〇たゝちには誰か通はむ天川浮木にのれる世は變る共
小一條の殿のするがに文やりたるに返りごとは
せでたゝ稻葉の山のといへるに

二結ぶなるを山の山もある物を何に稻葉の峯にかく覽
おなじ院に宮内といふ人男に髮きられたりと聞
きて
三よそ乍ら消す消すみある雪のふるの社の神を社思へ
又おなじ院にある人承香殿に參りてみし人とだ
におぼしたゝぬ事を怨みければ
四割なしやみは九重に有乍らとへとは人の恨べしやは
これがやうに恨むる人に
五我乍ら我ならず社云做さめ人にも非ぬ人にとはれば
ある女に
六物なだに岩間の水のつぶ〳〵と云はゝや行む思ふ心の
また
七覺束なわがとづけし郭公はやみの里をいかに鳴らむ
わらはより見ける人を心がけて
八二葉より三島のみすゞ結ばむと波の打出てえ社云れね
忘れにし人の許にいきてえふともいはで
九我が如やくめぢの橋も中絕て渡しわぶらむ葛城の神
同じさまなる女のもとより
〇今はとて古巢をいでゝ雁音の歸るつらさも思ひならまし
つゝむことありて逢ひがたかりける女に
一大方はたがなか惜き袖をみて雪も解ずと人に語らむ
清少納言とて元輔がむすめ宮にさぶらふと大方
に懷かしくて語らひて人にはしらせず絕えぬ中
にてあるをいかなる折にか久しく音づれぬをお
ほぞうにて物など爭ふを女さしよりて忘れたま
へなよといへばいらへはせで立歸り
二忘れずよ又變らずよ瓦やの下たく煙したむせびつゝ
かへし
三賤のやの下たく煙難面て絕ざりけるも何によりぞも
承香殿の宰相の君の里にいきたるに人あるけし
きなればかへりて白河に芹あらふ女して
四中川に洗ふ根芹のねを掘て顯れて社あるべかりけれ
枇杷殿にないきの侍從の君といふ人に
五山人の小野の便と思ふ共こりしもせじな峯の爪木に
内わたりの女に尾花につけて
六此をみよ契らぬ野べの尾花だにと社云ね招く物をば
又ある人に
七をみ衣珍しげなき春雨に山井の水もみぎはまさりて
物いひける人のたえてのち
八小蟹の蜘のいがきの絕しより懸べき宵も君は知らじな
同じところに十月のついたちの夜いきたれば道
綱の少將ぞまへよりありける夏の直衣きたるを
みて
九身に近きなを賴む共夏衣昨日は更てきたらましかば
うちの女さうじを隔てゝ物いふにこれあけ給へ
といへばさゝぬ物をといふいらへに
一島の子が心許さぬ玉匣あくれどあかぬ物にぞ有ける
またうちの女にたび〳〵返り事のなかりければ
二水蓋の跡さへたゆる玉章はみのゝを山の神や諫むる
美濃の守のむすめなりしかばかみのみる程とて
返事なければ
三覺束なかゝらぬ旅も有物をたちける神の心つらしも
人にはじめて
四斯さだにえやは伊吹のさしも草さしも知じなもゆる物故
格子のつらに一夜ね明してあしたに同じ人に
五明け難き二見の浦による波に袖のみぬれし沖つ島人
内の格子を夜一夜ならすを女さなりとは聞き
ながら心しらぬ人にて荒くとはせたれば音もせ
で返りにけるあしたに、女
六あかぬよの心乍らにやみにした甘えて訪し聲は聞きや
かへし
七獨のみこのまろ殿に有らませば名告で閨に歸らましやは
四月ばかりにこの女のもとに夜深くよりて立ち
聞きをするにまだねぬけはひなれば
八睡ろまぬ人も有けり夏の夜に物思ふとは時ならず共
いとゞしげうつゝむことも心やすくもあらぬに
九諸共に起臥し物を思ふともいさ常夏の露となりなむ
ある女に行く末のこと契りちかひなどして後い
かゞありけむ
〇誓てし事ぞともなく忘れなば人の上さへ歎くべき哉
かへし
（此脫）
親の制しける所にいくを聞きて心なき事といひ
ければ
一いはゝいへ親の飼子も年をへてくる人あれど厭ふ物かは
かへし
二繭籠り親の飼このいと弱みくるも苦しき物と知やや
早う物いひし人にかれたる蓑につけて
三古の蓑と人はとがむとも猶そのかみの今日ぞ忘れぬ
かへし
四枯にける葵のみこそ悲しけれ哀とみすや鴨の水がき
宇佐より歸りたりけるに人の櫛をこひければう
ちわたりの人
五こし道に梳るともなき旅人の手向の神に盡し果てゝき
かへし
六斯しこそ隱し置けれ旅人の霧拂ひけるつげの小櫛を
思ひかけたる人の内よりまかでたるその所の
前のせざいをみて露おきたりけるをなどか見給
はざりしといへば
七おきてみば袖のみ濡れて徒に草葉の玉と數や增らむ
七月七日ひきたりける糸にくもの巢かきけるを
見て
八さゝがにの諸手に急ぐ七夕の雲の衣は風や吹くらむ
といふ返し
九七夕のくべき宵とや小蟹の蜘のい掻もしるくみゆ覽
蓮の葉に　をつゝみて女に
〇軌れをかのどけき方と賴まゝし蓮の露と空蟬の身と
かへし
一蓮葉の浮ぶ露こそ賴まるれなに空蟬の世を歎くらむ
ある女に文やりたる返り事にあげまきを結びて
おこせたれば
二ひろ計り離りて暦と旅ねせよその總角に驗あらせむ
人の許に枕をおきてこすなりにければ返すとて
三置て見かひも有まし忘るゝを是だにつげの枕也せば
末はなきなめりことなりしかしらなめり
かへし
（此脫）
小一條殿の中將の君に五月五日
四水鳥の騷ぬ沼の氣色にもいつかとのみぞ猶待れける
五誰ぞこのみわの山本知らなくに心の杉の我を尋ぬる
思ひかけたる人の寢たるをみて
六憂事の夢のみさむる世中に羨ましくもぬられけるかな

ある女通ふ人を怨みてこと人を語らふときゝて
七六斯なむとつげの枕に有め其知ざらめやは戀の數をも
これはいかなりけむ折にか
八六大井川井堰に包む水なれやけふ暮難き歎きをぞする
また人のむすめに忍びて通ふを程なく空しくな
りにければあかず哀に思ひ出でつゝ女の母に
九六契有て又は此世に生るとも面變りして忘れもやせむ
〇七郭公花たちばなの香を疎みこと語らふときくは誠か
四月ばかりにものいふ人の五月になりていたく
忍びければ忍びたる所のかどを敲きければ明け
ざりけるつとめて
一七覺束なまだ明ぬよの月をみて天のと計詠められしか
小辨といふ人にことびとの物いふと聞きて
二七浦風に靡きにけりな里のあまのたくもの烟心弱さは
中宮の宰相の君の上にのみ侍らふを怨みて
三七風早き嵐の山のもみち葉も霜にはとまる物と社きけ
五節の頃扇をとりかへて臨時のまつりの日かへ
すとて、女
四ゆふ懸て扇も今は返してむ哇くみえし日影と思へば
かへし
五諸共におくる旦たもまだみぬに何の日影の眩かる覽
又女に
六山人の斧のえは皆朽にしをいかなる人の爪木こる覽
中宮の宰相の君七月七日に
七七夕のをにぬく玉も我が如やよはに起ゐて心かす覽
ある女かよふ人ありと聞くをしのぶけしきなる
にかの男の扇にみしまかきたる所
八七松に社思ひ懸かると聞しまにねに顯れてみゆる藤波
世の中の家々の多くやけたりし春野老を人のお
こせて
九七此春は珍しげなきやけ所難面き人はいかゝみるらむ
かへし
〇八煙立日の本乍らゆゝしきにこは唐土の野老とぞみる
とのもりの君に紫こひたるおこすとて
一八喞つべき人もなきよに武藏野の若紫を何にめづらむ
かへし
二八下にのみ歎くをしらで紫の根摺のみやは睦まじき故
又人に何の折にか
三八紫の色にいでにける花をみて人は忍ぶと露ぞ置ける
かへし
四八白露のかぞふ計の花をみてこはたがかこつ紫のゆゑ
五節の舞姫に
六八覺束ないかに吾をもすべらぎの豐明をいつくともがな
承香殿の宰相の君なしをさしいでたれば
七八隱なき身とは知る〳〵山梨のをふの浦迄思ひなるらむ
おなじ御かたにせき九重といふ霊のこなたあな
たにゐて人とものいふをみて
八八九重は關の此方と聞く物を關のあなたの九重やなぞ
白川殿にて道綱の少將せきと臥したるによりて
八八いかでかは人の通はむかく計水ももらさぬ白河の關
同じ少將と臥してさうゝしくもあるかな女か
たおきたる所やとて人やりたるに歸りてあな腹
いたとの給ひつる人の御聲なむしつるといへば
九八その原やいかに疾しく思ふぞもふせやと云も庭やはなき
女たちかへり
〇九何とてか人をも更に恨べき藻に住蟲をしらば社有め

前大納言公任卿集

春白河に殿上の人々いきたりけるに
一九春きてぞ人も訪ひける山里は花こそ宿の主なりけれ
同じ所に紅梅うゑ給へるに初めて花咲きたるに
おはしたりけるに女御誄子の御もとより
二九植しよりした待つ物を山里の花見に誘ふ人のなき哉
かへし
三九植置きし花徵りせば蓬生を何につけてか思ひ出まし
雨のうちに山里の梅を思ふといふとを
四九山里の梅を思ふに雨ふれば唯にも散らで色や增らむ
二月まで梅の咲かざりける年前の梅に結びつけ
たる
五九知るらめや霞の空を詠めつゝ花も匂はぬ春を歎くと
誰がとも〻え知り給はでとる人やあると結びつけ
給うける

六九覺束ないづこなるらむ花さかぬ霞のうちの鶯のこゑ
いと久しうとる人もなきに打ちたゆみてとられ
にけり淺ましうねたきことを覺しけるに夜深き
曉にむすびつけゝるを見て捉へ留めて見給ひし
七九霞たつ遠山深き鶯の花のはやしをとふにぞありける
つかひにとへば三條の宮に口ずさいふ人のとらせ
しなり本は知り給はざりしとなりかゝるとゆか
しがりてし給ふなといふ返しに
八九鶯の音をしるべにて霞たつみ山のうちを尋ねつる哉
程へて奉りたる
九九花咲しより待つかな尋ぬやと三輪の山邊の鶯の聲
かへし
〇〇花をのみ尋ぬる程に鶯は其の山本を過ぎやしにけむ
花山院まだ春宮と申しける時水に花の色うか
ぶといふことを人々によませ給ふに
一〇花の色を浮ぶる水は淺けれど千とせの秋の契深しな
闇はあやなしといふ題を
二〇春の夜の闇にしあれば匂來る梅より外の花無りけり
前ちかき桃のはじめて花咲きたるに
三〇嬉しくも桃の初花みつる哉又こむ春も定めなきよに
白川の西のとに人のかきたりける
四〇きても見で花を苑ら散しつる風の爲にや人の植けむ
五〇都いで〳〵花見にこそは紅のいろなる梅に心染めつれ
返しかたはらにつくる
六〇風にしも何か任せむ梅の花よそへてとはむ人を社まて
七〇花片の數にてもしれ紅にやしほ染たる梅にやは非ぬ
中務の宮具平にて人々酒のみしつゝめて宮の聞
え給うける
八〇飽ざりし君が匂の戀しさに梅の花をぞけさは折つる
かへし
九〇今ぞしる袖に匂へる花の香は君がをりける匂也けり
中宮にて何のをりにや
一〇珍しき玉のうてなの花の影に聞かまくほしき鶯の聲
返し誰ともしらず
二下枝にて聲を惜みし鶯は花の盛を待つにぞありける
粟田に人々おはして思ふ心よむに
三憂世をば峰の霞や隔つらむ猶山里は住みよかりけり
二月十日前なりける梅の咲きたりけるに里なる

女房に
二君により風もよきつゝ散がてにまつめる花の折な過しそ
梨の花に時過ぎたる實のつきたるに右大辨
三寒深みみ山隱の花梨と云ふにつけても分きぞ兼ぬる
かへし
四常ならぬみをぞ恨むるならぬより花なしと云よに社有けれ
またかくてはとて
五有といふ程だにあるを且見つゝ花なしと云春を社思へ
二月に雪のいと高う降りたるゆきよりがざうし
の前に雪の山をいと高う造りて煙を立てたるに
雪のいたうふれば唐傘を蔽ひてたてたりければ
六東路の富士の高嶺にあらねども三笠の山も煙立けり
帥の宮敦道花見に白河におはして
七われが名は花盜人とたたばたて唯一枝は折て歸らむ
とありければ
八山里の主に知せて折る人は花をも名をも惜ざりけり
又宮より
九知れぬぞかひ無りける飽ざりし花に替てし名をば惜まず
かへし
一〇人知らぬ心の程を知ぬれば花のあたりに春は住はむ
花をも名をもと聞え給へりける御返しにつけて
道貞がめの聞えたりける
一一折人の其なるからに咲氣なくみし山里の花の香ぞする
かへし
一二しるらめや其山里の花の香のなべての袖に移りやはする
また聞えたりける
一三知せじと空に霞の隔てゝは尋ねて花の色もみてしを
かへし
一四今更に霞とだにたる白河の關をしひては尋ぬべしやは
白河にて
一五故郷の花をも思ふ山櫻ちるをみすてゝ歸りがたさよ
白河に忍びておはしたるに大白河といふ所に殿
上人多くおはしたりと聞き給ひてその日式部卿
宮の中將おは白河におはしけるに
一六しら河のおなじ河べの櫻花いかなる宿を人尋ぬらむ
かへし
一七花の色の深さ淺さに自から宿わく人となりにける哉
三月十日松が崎の念佛きゝに女御の上など忍び
ておはしけるに道のほど月おぼろにて風の聲な
ど遙かなり　女御ざのゝ御
一八晝ならば河べの花を見べきによはの嵐の後めたさよ
とありけるに
一九香をとめてゆかばけぬべし山風の吹儘に散陰みればうし
夜一夜たふとき事聞きあかして曉方にみれば夜
散れける花の遣り水の波によせられて蘇枋貝の
さまなるに櫻貝とはこれをやなどいひて
二〇終夜散りける花を朝ぼらけ明石の濱の貝かとぞ見る
といふに　ものゝり
二一水に浮ぶ櫻の貝の色みれば波の花とぞ云べかりける
といふに
二二朝ぼらけ春の湊の波なれや花の散時ぞよせ增りける
御車のこゝもあるべしだらにゐざうしに花の
散るを見給ふ昔の御室の南なる花のいといたう
散るをとり集めて　すけあきら
二三花のちる宮は昔の跡乍ら苔の庭にはあとはかもなし
といふに
二四さくら花盛にぬれつゝ尋ぬれば古へ著き宿の庭かな
此のついでにすけあきら遠くいぬべき事などい
ひて
二五過難き花に附ても都出て行かまし物元輔　すけあきら
二六春過てちる花だにもある物を老の身を唯思遣らなむ
白河により給ひて
二七白河の流れて今日をわすれめや
とありければ御車より
みたえてあさき瀨とはなるとも
三條殿世の中すさまじうて籠りおはしけるころ
御前の藤の咲き始めたるを
二八年毎に春をも知らぬ宿なれど花咲初むる藤も有けり
花山院觀音院におはして殘の花を尋ぬ山寺にあ
そぶといふ題よませ給うけるに
二九見る儘に且ちる花を尋ぬれば殘の春ぞ少なかりける
三〇常にます鷲の峰をしまだみねばけふ山里の珍しき哉
三井寺に物ならひに入り給ふとて白河により給
へりければ花の盛なりけるが歸るさに散り果て
ゝければ
三一故郷の花は待でぞ散にける春より先に歸ると思へど
白河に三月つごもりにおはして
三二惜みにと指てきつれど相坂の關にも春は止らざり鳧
□□はのすけ京極の家なる紅梅を白河に植ゑ給
ふとて堀らせ給うければ結びつけたりける
三三古の春の形見に詠めつる花をいづれの風さそふらむ
かへし
三四香計りを誘へと思ふ山里の風をね乍ら誘ふべしやは
人に春のはじめなり
三五すこしはるあるこゝちこそすれ
との給ひければ
吹き初むる風もぬるまぬ山里は
子規まつ心を
三六ほのかにも聞ぬ限は郭公待人さへぞ寢られざりける
同じ心を女御の御
三七待ちえでもたゞ一聲を時鳥寢覺がちにて明す頃かな
三八郭公聲まれなりといふ題を　實方中將
三九里わかぬ空音と聞けば時鳥誰にか如何いはゞ答へむ
とあるに
四〇郭公俄でややまむ待ちきつる今朝の寢覺の只一聲を
からなでしこ
四一色毎ににほへる宿の撫子は古からの種にぞあるらし
高遠の君
四二種わきて色しも深き撫子の花に心もそめてこそみめ
四三夕立の草の緑に見ゆる哉秋さへ遠くならむとやする
夕立のしたるに人々歌よみけるに
四四夏の日のふりしもとげぬ村雨に草の緑を深く染らむ
ためとも
また
四五紅に濡るゝ袂はなるものをいかなる庭か緑なるらむ
山里の卯花を　すけかたの辨
四六年をへて通ひ馴にし山里の門とふまでにさける卯花
かへし
四七卯花の散らぬ限は山里の木の下闇もあらじとぞ思ふ
中納言のちごにおはしけるとき藥玉を奉り給ふ
とて、　女御の御
四八命をぞつぐと云なる幼きなき袂に懸る今日の菖蒲は
御かへし

九幼きなき菖蒲は生る所から誰に懸りて経べき千世ぞはまた

〇八菖蒲草おふる澤水清ければ引人許多あらざらめやはゑにう圓融院に橘のこに入りたるに夏蟲をすゑてこれ詠めと仰せられければ

一夏蟲は花橘に宿りしてこの中ながら千世もへぬべし

二月待つと天の河原を詠むれば出る程だに見えぬ空哉

時鳥を待つは月をまつにまされりといふ題を

三月よりも待ぞ兼つる郭公み山を出でむ程を知らねばから撫子を人々よむに

四敦島や大和には非ぬ撫子の花は宜社世に似ざりけれくもれる月を待つころ

五二度や人よりまたむ月影の雲のひまよりいでぬ限は

撫子を見給ひて

六急ぐべきよとは知る〳〵床夏の花に心の止りぬる哉

四月になが谷にゑむよ僧正のまうでたりけるに櫻の盛なりけるをみていみし有（いみしかりき）けり折りて進らせて又の日

七昨日まで惜み止てし山櫻よのまの風のいぶかしき哉かへし

八春過て君を待ける花なれば又くる迄は散じとぞ思ふ

五月五日

九けふ毎に軒のつまなる菖蒲草七夕つ女に劣らざり鳧

七月七日藤壺の撫子合せに人讃半部滿字計（半ばに）

〇七棚機の秋夜をへて撫子の花をぞけふは合せつるみよ

ないせの命婦が家近き所に渡り給ひて七月七日

一雲居にて契し中は七夕をうらやむ程になりにける哉かへし

二哀にも忘ざりける雲居哉棚機つめのけふよりもげに

秋の初めつかた中務のみやに

三大方の秋はきぬれどいかなれば下待花の遅く咲らむ

人々の嵯峨野にゆく日とまりていひやり給うける

四誘ていくや何なる女郎花分て紐とく野べのあたりを

返し　中宮大夫唯今の大殿（ただいまのおとど）

五君をしもよくともなきに女郎花露の心の置れぬる哉

女郎花ほりていく所のありけるをとはせ給うければあきのぶが家にといひければやり給うける

六思ふとも心も知で女郎花いかなる宿に移すなるらむかへし

七女郎花同じ縁りの花なれど君し尋ねば家にこそせめ

宮に大夫の樂入れて奉りたりける櫛の箱を程へて秋立つ日返すとて色々の花どもを入れて返さ

せ給ふとて

八初風に長閑き花の露ならばおきて見つべき玉櫛笥哉

と書かせ給うけるをかくもいひてむかしと見給うける

九夜を籠ておきける露の玉櫛笥明ての後ぞ秋と知ぬる

八月十五夜にあきのぶがもとに

〇八遙生の闇も殘らぬ今宵さへ錦の袖を知らずや有らむかへし

一八月と云へど心の内は照さぬに衣の上はそへて赴き

久しう住み給はざりける所にかへり渡り給うて

二時しもあれ秋古里をきてみれば庭は野べとも成にける哉

松のした紅葉したるを

三霧霜に終に枯せぬ松なれど下葉は秋に忍ばざりけり

栗栖野にて水といふ題を

四年ふ共契れる水は變らじを人の心やいかゞとぞ思ふ

故殿うせさせ給うて後はなちたる鈴蟲の聞えて侍りければ

五爭でかは音の絶ざらむ鈴蟲の憂世にふるは苦しき物を

南の岡の鈴蟲といふとを人によませ給うけるに

六萬代の秋をこめたる宿なれば尋ねてすめる鈴蟲の聲

鈴蟲の年をへて鳴くに

七年へぬる秋にもあかず鈴蟲の舊行く儘に聲の増れば

女御にやありけむ

八尋ねくる人もあらなむ年をへて我が古郷の鈴蟲の聲

女御のかた男女とかたわきて歌合させ給ふに

まけてうれへたりける　ともゝり

九露深き色に優れる花のえをいかに定めし野分也けむかへし

〇九露を重み折伏にける花の枝はかごを風におほせざらなむ

嵯峨野を過さ給ふとて

一八秋だにもまだ行果ぬ道なれど惜みし人ぞ先過にける

中宮の御前にせざい植ゑさせ給ふ日秋の花を植うといふ題を

二九松蟲の音を尋ねてや堀つらむ長閑くみゆる秋の花哉

北白河に人々まうでまうでたりけるに雨

ふりてとまりにければ在國が聞えたりける

三雨をなみふりはへ思ふ山里につらくも雲の隔ける哉かへし

四九白河の河べにたてる女郎花けふの雨にや身を絞らむ

大殿のみもとにて秋の日遊びくらして

五秋の夜は水こそ殊に増るらし月と露とのもるに任て

花山院より名もしらぬ花を給はせて

六秋毎に咲とは見れど此花の名をしる人の更になき哉御かへし

七君が代に咲とは聞けどみも知ず是や詞の花と云らむ

月の雲隱れけるを

八澄とても幾よもすまじ世中に曇り勝なる秋の夜の月

題覺えず

九秋の野の花の露とも知ざりつ千草の色における白玉

鈴蟲のはねに

〇〇年毎に常珍らなる鈴虫のふりてもふりぬ聲ぞ聞ゆる

八月十五夜月をみ給ひけるに女房のめさましたりけるに

一君ならで誰か見しらむ月影の傾ぶくさ夜の深き哀を

とて獨ごつに

二深くしることはなけれど月影を同じ心に哀とぞみるふみなどつくり給うけるよの

三空晴ておそくも月の過る哉いとゞ詠むる數や増らむ

八月十五夜

四一年の秋の半は殘れゝど月は今宵ぞかざりなりける

大殿より

五我宿のみぎはに待ちし秋風は半によゝも過にける哉

御かへし

六夜と共にすめる汀の秋風は告る徴も見えずも有かな

大殿のまだ所々におはせし時人々具して紅葉みにありき給ひしに嵯峨の瀧殿にて

七瀧の音は絶て久しく成ぬれど名社流れて猶聞えけれ

殿にかへり給ひて

八山べより野べも殘さず尋來て泊りも著き宿の紅葉ば

白河に紅葉見に大殿のをのこどもいきたるにみつといふ人のもとにやりける

九〇主知らで誰か折りけむ山里の物とも物と思ふ紅葉をかへし

一〇一ことも定めで過し道なれど秋の泊りに我はきに鳧菊の花こまやかにて秋しりぬといふ題を

一一我袖によそへて見れば菊花深きにしより露の滋きは

在國がすまぬ家にて九月九日

一二住人もなき山里に菊の花秋のみさきて唯に過ぎぬるかへし　在國

一三住人の匂そふらむ菊の花まだ移ろはぬ事をこそ思へ

又水のほとりの菊

一四秋深き汀の菊の移ろへば波の花さへいろまさりけり

名にう院の石山におはしますに殿上人うきはしといふ所にいきて歸るとて　爲頼

一五田上や山の紅葉は數しあれば秋はおふ共長閑きをみよ

秋はつる日山路ゆく

一六打群れて散る紅葉を尋ぬれば山路より社秋は行けれ

九月つくる日かんしなるに

一七めにみえで行秋なれや終夜いもねで何を守るなる覽

九月卅日初雪ふるに

一八梅が枝に降る初雪をけさみれば春秋と咲花にぞ有ける

女御おほんかへし

一九花かとも雪ともいさや何事も物うき秋は知れざり鳧

九月晦日の日秋の影は雨の中につきぬといふを

二〇何方に秋はゆくらむ我宿に今宵ばかりは雨宿りせで

九月ふたつ有る年の十月朔日の日暈澄がむすめの許に霧のいみじう立ちふたがりたりけるに

二一常よりも程へて過る秋なれど猶立ち止れ今朝の朝霧かへし

二二置きかはる霜に紛れてたつ霧は久しき秋の例也けり

山里に行きて雛の菊ひとしといふとを

二三いろ〳〵に雛の菊は成にけり唯一枝の霜とみしまに

月前の白菊といふ事を人々よみしに

二四覺束な花はありやは月影におく霜とのみ見ゆる白菊

ある人

二五のどかなる月に任せて我はたゝ霜をぞ拂ふ宿の白菊

法輪にまうで給ふ日嵐山にて

二六朝ぼらけ嵐の山の寒ければ散紅葉ばをきぬ人ぞなき

十月朔日殿上人大井にいきたるに

二七落積る紅葉をみれば大井河井堰に止る秋にぞ有ける

石の中なる菊の唯一本のこりたるを

二八岩間より生ふるに著き菊なればなべての花は霜に枯にき

長谷に入り給ひて後中納言のまゐり給ひて歸りたまふとてながたによりてなるべし

二九見捨ては歸べしやは風やまぬ峰の紅葉の長閑からぬを

御かへし

三〇嵐ふく峰の紅葉をみぬ時も心は常にとゞめてぞくる

八月十五夜のいみじう明かりしにたやしの君のむすめの遠き所にいくへと（よしあしとカ）聞き給ひて

三一曇なき後の今宵の月をみば山べの秋を忘れはてめやなかたにに紅の岡といふは例の草木にもあらず人の名もしらぬ木どもの林にてあるがいみじうめでたう紅葉するなりけりやしほの岡とつけ給へりけるが紅葉のいとめでたき頃中納言の御もとより

三二思遣る心だにゆくもみぢ葉を見せで散すな木枯の風かへし

三三名に高き岡の嵐は寒からじ紅葉の錦みにしきたらば

三井寺に入道の中將成信紅葉見にまうで給うて歸るさに松がさきのこうきうあざりのもとにより給ひたりけるに聞え給うける

三四見染てはとく歸らめや紅のやしほの岡の紅葉ばの色

あるじのあざりゆづり給うければ

三五紅葉にとめし心は松の葉の綠と共に變る世も有らじ

又これより

三六落る葉の常ならぬよに雫でかは松の綠に心とむらむ　あざり

三七君が代をなが谷の松露の世に心をかくる梢なればぞ

これより

三八松の雪消え返りつゝ君が爲千年をへても我は仕へむ　あざり

三九法の爲いとゞ深くぞ思ほゆる水も心もすめるなが谷

御匣殿にやしほの岡のめでたきを御覽させさせぬ事と年毎に申し給ひけるを渡らせ給へりけるとしも紅葉せざりければ歸らせ給ふとて

四〇紅葉の錦とみゆる物ならば山里いかに立憂からまし

御かへし

四一八汐とも岡はみえねど故郷に紅葉をきてや立歸らむ

文のついでに

四二春もみし木の葉もみぢて散に鳧こや一年の限なる覽

十月初瀬にまうで給へるに霧のいみじう曉に立ちたりけるを

四三行路の紅葉の色も見るべきを霧と共にや急ぎ立べきかへし　中納言

四四霧分て急ぎ立なむ紅葉ばの色しみえねば歸行かれじ

雪の始めて降りたりけるに　女御の御

四五見人の年に積れど初雪といふ名計はふりすぞ有ける

御かへし

四六初雪も降ぬことなどか云ざらむこそ年積る始と思へば雪を

四七人の跡もみえず成行く我宿に訪來る物は雪にぞ有ける

冬女郎花の咲きたるを

四八女郎花菊よゝ後に咲にけりこと花なしと誰か云けむ

兵部卿の宮にて月待つ心を

四九月影の出ぬ程だにある物を人まつ宿を思ひこそやれ

御かへし

五〇まだ散ぬ先に紅葉も見べきになど月影の出難にする

枯れたる枝に雪の凍りつきて花のやうに見えければかくて所々にやゝ給ひける

五一雪ふれば花咲とのみえしかど今朝は枝さへ折てける哉

みあれ（祭）かへし

五二蓬生の枝なき雪に埋もれてあやしく今は枝をみる哉

雪の山をつくり給うて

五三音にきく越の白根は白山の雪積りての名に社有けれ

よさむにして山の雪をしるといふを

五四さよ寒み山べの雪を待つとては思ふ心を人や知らむ

雪降る日いひむろの入道の中將に　大藏卿有

かへし　君がすみかを思ひやるかな

五五君をのみ山隱れにふる雪を心長くぞまづ尋ねける

清昭阿闍梨のやまより奉れたる

八五と山なる正木の蔓いかなれば時雨や降と問人のなきかへし

九五山寒み雪先積る宿の上を白雲そふる住みかとやみるかへし

〇六奥山をしらず顔にて年ふれば心の内は時雨のみしてまた

一六雪ふらぬ伊邊尾欤心の寒ければ峯の嵐を忘やはする

禪林寺の僧正に雪の消ぬるうへに霜のおきたるつとめて

二六雪の上におく初霜の世の中は兢れ朝日の消殘るべきかへし

三六人のよの儚き程に比ぶれば雪しも先は消じとぞ思ふ

雪降りたるつとめて

四六同じくぞ雪は積らむと思へども君故里は先ぞとはるゝかへし

五六白雪はとふとのはに懸りてぞ降くる宿も春心地する

ゆきよりがざうしに雪の山をつくりたるに物にかきてさゝせ給ひける

六六音にきく越の白山白雪のふり積りての事にぞ有ける

返し　　衆澄が女

七六降積る雪をのみ見る白山の今日はかひある心地ち社すれ

久しう里なるころ雪の山作り給うたりと聞きて

奉りける

八六覺束ないまも昔も音にたゝ名をのみぞきく越の白山かへし

九六白山をよそに思はゝ我宿を今はこじとや思ひなりぬる

雪の年かへりて降りたるに内の大殿教通へ上る

〇七ふる雪は年と共にぞ積りける兢か深くなり增るらむ

御かへし

一七雪積る君が年をも算つゝ君が若葉をつまむとぞ思ふ

あまうへの聞え給うける

二七積るとも雪と共なる年ならば遲る〳〵も君に引れむ

女御ごのに聞え給ふとて

三七消易き名になれゝそ年をつむ頭の雪は高くなるとも

長谷にすけ出家し給うて、おはしまし始めたる年

雪ふかき日同じ女御の御もとより

四七思ひやる心ばかりは奥山の深き雪にも隔らざりけり

御かへし

（歌欠）早く粟栖野といふ所におはしたりけるにともまつ雪を見給ひて

五七山里に雪さへ友を待ければ野風を寒み尋ねきにけり

中務の宮に八重菊うゑ給うて文つくり遊びし給ひける

六七押なべて開くる菊はやへ〳〵の花のしもにぞみえ渡ける

や

七七閨の上の霜と起居て朝な〳〵偏に家の花をこそ思へ

春宮にて物など聞えける人位につかせ給ひて後忘れ給ひにたるかと聞えたりければ

八七九重の内は變れどみ垣もり同じおもひぞ今も燒らし

同じ春の始つかた

九七鶯の聲をまつとはなけれども春の印に何を聞かまし

と聞えたりければ

〇八鶯は鳴けど驗もなき物をうき今年よりまづ增りける

ある人圍扇の繪にさう尾琴といふことよませ給うけるに

一八きりふ山吹風に焦れたるをよりぞ聲は知べかりける

冬の始つかた上達部殿上人大井に遊ぶといふことを

二八流行く紅葉をみれば大井河井堰に止る秋にぞ有ける

三八冬寒みいつも凍れる衣手を今朝は解ても變ざりけり

女のもとに

小野の宮の中納言殿その殿の御おもひにて秋はてがたに聞え給うける

四八白河の紅葉をみてや慰まむよに故里はかひなかり鳧

と聞え給へりければ

五八常ならぬ思ひや何か慰まむ山べはいとゞ木葉散つゝ

ある女に

六八白山に年ふる雪や增るらむよはに片敷く袂さゆなり

豐の明の夜女のもとに人のきあひたれば

七八をみ衣褶捨てゝきつゝ露けさは春の日すがら又ぞ忘ぬ

新羅のうるまの島人きてこゝの人のいふとも聞き知らすときかせ給ひて返りごと聞えざりける

人に

八八覺束なうるまの島の人なれや我恨むるを知らす顔なるかへし

九八遙なるその島人の言の葉をちるとはみけむ風の便に

桂に人々おはせしにそのわたりなる女に遣しける

〇九尋來る人の心もしらぬには山べをのみや詠め暮さむ

思ひやみにける人のもとより

一九嵐ふくと山の紅葉冬くれば今は言の葉絕果てぬらむとありければ

二九遠近の峯の嵐にとゞまらむいづれのかたか色は變れる

同じ人にあるやうありて

三九木の本を我悔しくぞ頼けるはざまから社雨も漏けれ

故大臣頼忠の御おもひにてその程はおはせざりけるを程すぎて遣しける

四九燃ゆるれどもしる人なきは年積る思の内の思なりけり

物いひける人のまた人に名だちけるころ秋つかたいひやり給ひける

五九變行く人の心をみざりせば何につけてか秋を知ましゆきより御迎ひに參りてかう〳〵いふ所の有りけるとてその頃すけたいと諸共に詠みて劣り優りううじける

ゆきより

六九秋も今は嵐の山の山高みいかで殘れる紅葉なるらむ

冬つかた麗景殿の細殿に物なさいひける程に藏人これすけからものゝ使にてくだるまかりまうしせむとて御物忌にこもる日あけての年かうぶり給はるべければやがて上にもさぶらふまじき由いひければ

七九西へゆく月の常より惜き哉雲の上をし別ると思へば

これすけ

八九別路はよの常なれや中々に年の還らむとをこそ思へ

題あまたして歌よみける、水鳥

〇九霜おかぬ袖だに冴る冬の夜に鴨の上毛を思こそやれ

〇〇ぬふ人もなき水鳥の毛衣はどづる氷に任せてぞみる

ゆきより

一〇冬の池の凍りゆくらむ水鳥の夜深く騒ぐ聲聞ゆなり

女のもとに

二〇人しれす包む思のあまる時凍るといふは涙なりけり

たび〳〵御返事聞えざりければ

三〇雪歌ぬ奥山里の道なれや昨日も今日も跡のみえねば

みちの國のかみ實方くだるに下鞍やるとて

四〇東路の木下くらにみえ行けば都の月を戀ざらめやは

かへし

五〇言づてむ都の方に行べきに木の下闇にいとゞ惑ふとありくにの大貳の筑紫にくだるに

六〇別より優りて惜しき命かな君に二度あはむと思へば

世の中さわがしかりける年常にありける人多くなくなりて後神無月のつごもり方に白河にわたり給ふに紅葉の一木殘れるにつけて常に文つくり歌などよみける源中納言など思ひ出でられていと哀れに覺え給ひければ

七〇今日こそはみでや已まし山里の紅葉も人も常ならぬ世に

又の年法さう寺の御八講の日　爲賴

八〇世中に有ましかばと思ふ人なきが多くも成にける哉

ある女に

九〇白山に年ふる雪や増るらむよはにかたしく衣さゆ也

人の許にこしの方なるつかさある人の通ふといはれける頃

一〇悔しくぞ春を待ける雪ふれど通ひやすきは心也けり

かへし

一思ひやれ唐土ばかり聞物をゆき通ふなの空に散らむまた遣す

二唐土も夢見む程や遠からむこは寄方の道とこそ聞け

水のほとりの菊

三秋ふかみ汀の菊の移ろへば波の花さへ移ろひにけり

なりともの馬のかみ

四秋深み霧立渡る朝な〳〵雲のもりなる君をこそ思へ

女院東三條の四十の賀に大將殿のし給ひけるかはらけ取りて

五君が代に今幾度か斯しつゝ嬉しき折にあはむとす覽

女院うせ給ひて又の年二月初子の日女房の許に

六誰にとか松をもひかむ鶯の初音かひなき今日にも有哉

なりのぶの中將すけしてつとめて左大辨行成の

世のはかなきこと聞え給へりけるに

七思知人も有ける世中にいつをいつとてすぐすなる覽

雪ふるに入道なりのぶの中將のもとに

八ふればまづ君が栖を思ふ哉雪は山べのしるし也けり

入道

九露の身の思に堪で消にせばとふ言葉も聞ずや有まし

かへし

一〇夢とのみ歎きし程に明暮てとはぬ現にみえやしぬ覽

白河におはせむと有りける雨のふりければおばしやりて

一一白河の花をぞ思ふ雨ふれば唯にもあらで色や増らむ

人の御むすめを聞え給ひけるに内に參るべしとありければ

一二一度に思ひしりにし世中をいかゞはすべき賤の苧環

をみにさゝれ給ひてのぶかたの中將の服なるに

赤ひもかりに遣したりければ

一三雲の上の光もいかゞ遠ければ猶ほしがたし墨染の袖

かへし

一四晴ずのみしぐるゝ方を眺むれば光も曇る物にぞ有ける

山四二の初秋といふ題を

一五就こにも秋はきぬれど山里の松吹風はとにぞ有ける

周防の守とよみつの朝臣の家に暫しおはしけるを三月十よ日花のいみじう面白う咲きたるほどに又はかに渡り給ふとて

一六あだ也と思な果そまだ散ぬ花より先に移ろひぬとて

御かへし

一七疎かにも思はぬ物を今年より人に飽るゝ名を散す哉

秋の暮つかた母上の御許にまゐり給うけるに日頃も惱ませ給ひていと弱げにならせ給へれば女御殿に聞えさせ給ひける

一八風歌まぬ秋の林に紅葉の色はいかにと見るぞ悲しき

八月二十八日桂殿に右の大殿の北の方などおはして稻からせて見給ひけるに

一九千世をへて刈積宿の稻なれば多くの年をあたる君哉

二〇山里の紅葉は時はわかぬ哉秋のなかばに色深くみゆ

とやいはましと思ひて懷がみにかきてもたせけるを大殿の御ひと車にて香し給へりければかへり給ひてまたのあしたかくいはましとなむ覺えしとて聞え給へりける

二一山里にまだき散ける言の葉を宿の主やかき留めけむ

正月十よ日あせちの大納言きこえ給ふる

二二白妙に雪のふれゝば水鳥の青葉の山も非じとぞ思ふ

祭の使にいづる內侍の御車に聞えたりける

二三あふひ草心にかけて思ひやる己が車をさしは任せむ

中宮彰子の御うぶやの五日の夜

二四秋の月影のどけくもみゆる哉こや長きよの契なる覽

ゐにう院かくれさせ給ひての春の世の中ぶくなる頃つれ〴〵なりければ歌よみける

春雨

二五草も木も色づき渡る春雨に朽ちのみまさる藤の衣手

鶯

二六常ならぬ音にぞ聞ゆる山里の山べにきなく鶯のこゑ

若菜

二七此春は誰爲にかは水もくみ野べの若菜も摘まむとぞ思ふ

霞

二八懸侘て君があたりに尋ぬればのべの霞を哀とぞみる

歸る雁

二九思知る人もなきよに羨まし憂世をすてゝ歸る雁がね

柳

三〇すみ染の櫻ならずば青柳の緑の袖をかけて見てまし

ちる花

三一花だにも儚く散るはうき物を數ならぬ身の頼難さよ

春の田

三二春の田をなど打返し悲しきは頼み少なき我身也けり

戀

三三様々に思ひしよりは世中にたへぬは君を思ふ也けり

父おとゞ頼忠うせ給うての頃たきもの人のこひたる遣すとて

三四花だにも散つる宿の垣ほには春の名殘も少かりけり

三月つごもり服におはする頃

三五別にし影さへ遠くなりゆけば常より惜しき年の春哉

御妹の女御

三六春しらぬ宿には花もなき物を何かは過る印なるらむ

四月服なれば衣がへもし給はで

三七墨染の衣ながらのけふなれど變れるものは昔也けり

服ぬぎ給ふとて

三八墨染の衣にそへて流せども盡せぬものは涙なりけり

ひんがし山のあたりに人々もみぢ見に行きて

三九色深き峯の紅葉を尋ぬれば山路よりこそ秋は行けれ

一の宮の御めのとみぶに物のたまひけるを又おとりの人語らふと聞き給ふ頃ものいはむといはせ給うければ湯におりてこいはせたりければ

五五哀とも猶清しとも思ほえず人は有馬のゆとし聞ねばかへし
一五柚山におろす筏も有物をゆのみやあむと人の云らむ
序品
二五種々に散交ふ花は古の風に任せて降るにぞ有りける
方便品
三五一言によりてぞよゝに出ければ二も三も無きなり鳧
譬喩品
四五門出には三の車と聞しかど果は思の外にぞ有りける
信解品
五五さすらへし昔は親と知ざりきいつを任する今日の嬉しさ
藥草喻品
六五一つ雨に潤ふ草木は異なれど終には本に歸ざらめや
授記品
七五改めて深き心を悟りぬる徴を今日はうるにぞ有ける
化城喻品
八五古の契もかひや無らましやすめて道に進めざりせば
五百弟子品
九五きて臥てとこ醉なれば衣手に懸る玉とも醒て社みれ
人記品
一六ふた乍みよの契の有ければ行末兼てゆふにぞ有ける
法師品
二六法とかむ三室も外になかり鳧唯心をぞ澄すべらなる
見寶塔品
三六そのかみの誓絶ねば幾よとも知らぬ妻を空にみる哉
提婆品
四六皆人を佛の道にいれつれば佛のあたもほとけ也けり
五六障り多み波を分こし身を變へて蓮の上に居ると社みれ
勵持品
六六様々に憂世の中を忍びつゝ命にかへて法をとくらむ
安樂行品
七六世を背く癖も心ををさめつゝ誓ひて末の法を弘めむ
涌出品
八六垂乳根は親よりこそは老にけれ年諄がひを人もしつべし
壽量品
九六出入ると人はみれ共世と共に鷲の峯なる月は閑けし
分別功德品
一七聞くまゝに皆人道を增鋭行末までもこらしつるかな
隨喜功德品
二七傳へつゝあな尊とも云ふ人の其一言にしく事ぞなき
法師功德品
三七法の雨に皆から清め盡しては障りの外を何か尋ねむ
不輕品
四七打のるも偖も種をし植つれば終に御法の空しからぬを
神力品
五七珍しくのぶる舌にて御法をば誠の中のまことぞ知る
囑累品
六七頂きを猶數々ぞかきなづる得難き法の後ろめたさに
藥王品
七七明かに照す程こそみゆる哉身をば惜まず法を思へば
妙音品
八七法の爲きぬとみれ共身を分て至らぬ方は有じとぞ思ふ
普門品
九七よを救ふ内には誰か入らざらむ普き門を人し鎖ねば
陀羅尼品
一八限なき法の力にときそふる守りはいと〻賴もしき哉
妙莊嚴王品
二八闇にのみ迷ひきつれば契てし友ぞ導くしるべ也ける
普賢品
三八尋ねくる契しあれば行末も流れて法の水はたえせじ
是はかき給へりけるおくに
四八法ほむると聞えねど靜なる光のうちは照さゝらめや
維摩の十のたとひ此の身泡のごとし
五八愛に消彼處に結ぶ水の沫の浮世に廻る身に社有けれ
此の身水の月の如し
六八水の上に宿れるよはの月影の澄とく可も非ぬ我身を
此の身かげろふの如し
七八夏の日の照しも果ぬ陽炎の有か無かの身とは知ずや
此の身芭蕉葉のごとし
八八風吹けば先破れぬる草の葉によそふるからに袖ぞ露けき
此の身まぼろしの如し
九八此身をば跡も留めぬ幻のよに有る物と思ふべしやは
此の身夢の如し
一九常ならぬ此身は夢の同じくばうからぬ事を見由もがな
此の身影の如し
二九世中にわがある物と思ひしは鏡の內の影にぞ有ける
此の身譬の如し
三九有ときく程に聞えず成ぬれば身は譬にも優らざり鳧
此の身行く雲の如し
四九定なき身は浮雲に譬つゝ果はそれにぞなり果ぬべき
此の身いなびかりの如し
五九電の照す程には入る息の出る待つ間も變らざりけり
中宮の內にまゐり給ふ御屏風歌人の家近く松梅
の花などありみすの前に笛ふく人あり
六九梅の花匂ふあたりの笛の音は吹風よりも怨めしき哉
宰相中將いれり
七九笛竹のよ深き聲ぞ聞ゆなる峯の松風ふきや添ふらむ
中宮のうちに參り給ふ御屏風にかの海づらなる
人の家の門に人きたり人出てゞあひたり
八九昔みし人もや有ると尋てはよに古とを云むとぞ思ふ
九九わが門に立よる人は浦近み波こそ道の知べなりけれ
翁の鶴かひたる所
一〇雛鶴をすだてし程に老にけり雲居の程を思ひこそやれ
花山院の御いれり
二〇雛鶴を養ひたてゝ松原の蔭にすませむ事をしぞ思ふ
山づらに煙たつ家あり野に雉どもあり道行く人
たちとゞまりて見たり
三〇煙たち雉子しばなく山里の尋ぬる妹が家居なりせば
人の家に花の木どもあり女硯にむかひてゐたり
四〇行く人につげやらまし我宿の花は今こそ盛也けれ
人の家に松にかゝれる藤をみる
五〇紫の雲とぞみゆる藤の花いかなるやどの印なるらむ
女院の四十の御賀の屏風の歌もしやとて承りけ
れどさもあらざり花ある所
六〇春たちてさく花みれば行末の月日多くも思ほゆる哉
松のおほかる所にて六月はらへしたる所
七〇姫松のしげき所に尋ねきて夏ばらへする心あるらし
八〇被する河べの松も今日よりは千世を八千世に延やしつ覽
七月七日女男に物いひたるけしきしたる所
九〇我戀は七夕つ女にかしつれど猶唯ならぬ心ち社すれ
花山院のかゝせ給へる紙書に歌つけて給はりた
りけるに人々さるべき所はつけはてゝなかりけ
れば人の鶴かひて文ひろげてゐたる所
一〇鶴ならぬ友はなけれど文みれば昔の人に逢心ちする

人の顔を隠してあやしき事したる所に大路にて

六〇我顔は露洩さじと思ふ共はなげぞ痛く紅葉しぬべき

絵物語にねびたるやもめなる詠めてゐたる所

七〇詠れど曇れ（原生）ば月の美まし雫で憂世を出でゝ住らむ

とり集めてそとよめる歌

八〇安からぬ下の思も消ぬらし又とり敢ず凍りゆくには

菊はここそといへる女の所

九〇いか計契し花の露ならむおきてしもいと哀とぞ思ふ

かへし

一結びけむ契も今やあさ露のおくみえぬべし花の所は

これも同じ事なるべし男の心にもあらぬことな

ごいひたる所に女きて

一打解て頼ざりせば露の身の忍びに袖は絞らましやは

かへしとて

二わりなきは心の外におく露を袖の亂れに懸る也けり

これも同じさまの事

三苦しきは人に語らぬ夢路にて又も逢夜や有ると見迄

かへしごて

四夢計睡ろまでのみ過ぐすにはいかなる世にか又は逢べき

繪に梅の木に鶯のなきてすのこに琴ひく男ある

所にすの中にて

五鶯のさきにか君が來居つるを且打出でむ梅がえの聲

春ゐなか家に遊びしたる所にまらうどの來て

六青柳のかた糸により出れどさしてぞきつる梅の花笠

女のとおぼしくてぞ　女御の御

七花笠をさしてきつれど櫻人春の山べの便りとぞみる

花山院の御歌合のやうなる事させ給ひけるに

月を　御

八秋の夜の月に心のあくがれて雲居に物を思ふ頃かな

九いつも見月ぞと思に秋の夜はいかなる影を添るなる覽

雁　これしげ

一〇我せこが旅寢の衣打はへてまつ雁音は今もなかなむ

たかたにて

一一我妹子がかけて待らむ玉章をかき續けたる雁音の聲

梅、殿上の歌合に雪を

一二梅が枝に降しく雪は一年に二度さける花とこそ思へ

大殿石山にこもり給ひて題ごもして歌合し給ひ

にけるに題をよみてありけるに、峯の上の郭公

一三山べだにねがたき物を郭公都の人は待ちやかぬらむ

水の邊の螢

一四水の上に燃る螢に言とはむ深き心のうちはもえずや

山里の卯花

一五卯花のちらぬ垣根は山里の木の下闇は非じとぞ思ふ

草の庵の橘

一六逢生の繁き家には橘の香を尋ねてぞ訪ふべかりける

暮れがたき夏の日　ながふる

一七暮難き今日にてしりぬ石山の山の巖を祈るしるしは

影少き宵の月　宮の女房すけの君といふ人

一八忘れてもあるべき物を中々に雲間少き月をこそ思へ

かくて奉れたれば

一九五月雨は詠むる程の水莖に君が言の葉みるぞ嬉しき

かへし

二〇言の葉をみるに袂のぬるゝ哉軒の玉水數もしられず

中將におはしける時冬の夜さうぐ〳〵しくて歌合

のやうなることし給うけるに

二一紅葉ばは雨こふれ共空晴て袖より外は濡ずぞ有ける

臨時祭の使して歸りたるに舟に　すけあきら

二二石清水かざしの藤のうち靡き君にぞ神も心よせける

かへし

二三水の上心は知らず石清水波のをりこし藤にやは非ぬ

同じ折に　ながふる

二四石清水昨日の藤の花をみて神の心もくみてしりにき

五節の帳臺の夜中宮の御方に上達部殿上人まゐ

りて

二五九重の雲の上人打群てくれどひかげは□ざりける

右大辨中務の宮にまゐり逢はむと言ひて見えず

なりにければ

二六秋の日を眺め暮せる夕暮は月待よひに劣らざりけり

同じ宮にまゐり給ひたる人に契り給ひたりける

とありければ心もとなくてまだ出で給はぬに出

で給ひにければつとめて

二七恨めしく歸ける哉月夜にはこぬ人をだに待と社きけ

御かへし

二八夜を寒み月夜よしとも告ざりし宿も過うく思し物を

五月ばかり同じ宮にまゐり給ひてこの頃すぐし

てまゐらむと申し給ひて秋になりければ宮より

二九梅雨をすぐすに程ど頼めしを秋の風社先はきにけれ

御かへし

三〇移ろはでゆく末遠き松の枝は初秋風を何とかはきく

内裏頭たき物こひしを梅につけて遣し給ふとて

三一降雪に紛ふばかりぞ梅花をれば匂もとまらざりけり

かへし

三二懐しき袂に懸る梅が香を風に知られぬ事をしぞ思ふ

庭柳ふ撫子の引切られたるを見て　ながふる

三三すき物を花のあたりによせざれば此床夏に根絶ましやは

宮の女房すけの君といふ人

三四床夏も花の名立に思ふらむとすき物のねしり顔なる

といひて後ながふる久しうみえざりければやり

けるに　又

三五いかにぞや名告し人も枯ぬれば過にし花の折ぞ戀しき

かへし

三六常夏に思し出でば今よりは花の時なるみとや成なむ

三七白雪の深くつもるとみし程に夏の緑になりにける哉

かへし

三八雪消て花さへ散ぬ斯しつゝ常なき世をや唯に過さむ

又阿闍梨かへし

三九小休せず流て落つるみつの里月日の過る疾ちなる覽

かへし

三〇行かたも知ずと思し年月は我身に積る罪にぞ有ける

又

三一若かりし昔年月のごけくて罪の深さはとくぞ消ぬる

女院にて樓を見給ひて

三二あす知ぬ露のよにふる人にだに猶憂しとみゆる朝顔

道信の中將

三三朝顔を何憂しと思ひけむ人をも花はさこそみるらめ

同じ中將のかうがいの枕ばこにあなる返しやり

給ふとて

三四神垣を返すゞ〳〵も見る時ぞ色好みとは著くみえける

又かへし

三五押なべてもみづる時は神垣の榊葉さへや著くみゆ覽

又かへし

三六新葉ばは時に變るを榊葉の常なる色に爭でなりけむ

かへし

七五時ならでよにふる人は紅葉ばの移り易なる色は習はずほうりにためもとしほうまうでありて春せで出でにけるつとめて

八五波のよに逢事かたき亀山の浮木を唯に返すべしやはかへし

九五天河跡を尋ぬるよなりせば逢事やすき浮木ならまし野分したるつとめてなかふる(源朝臣)が家の北に故入道殿南には故三條殿すませ給ひけるに大風の吹きければ寿れる

〇六我宿は野分はふかむ隣より荒増りたる心地こそすれかへし

一六隣より荒増れりと云なるはいかなる風か身をば吹覧さねよしといふ人久しう籠りゐたりける頃雪の降りけるつとめて

二六最どしく常ならぬよを歎く身に逢見ぬ程と過すべらやはかへし

三六心にも非ぬ道にや惑ふらむ雪ふる迄は思はざりしを

實方の少將祭の使せしに貝を花にいれたりし扇をやり給ふとて

四六扇をば猶床しとぞ思ひこし今日はかひある印也けりかへし

五六爭でかはかひのありとはみねっ覧袖の浦にもよせじと思に

六六世中をきくに袂のぬるゝ哉涙はよその物にぞ有ける

七六後れゐて猶さり難き菊の花籬のもとをとふや誰ぞも

又

八六世中を菊にはとに思ふべし袖の露だに散世なりせばかへし

九六常ならぬ此世の花をみざりせば露の心はつらくや有まし

藏人これすけがぬきいでにかうぶりうべき頃椎をおこすとて

〇七みを君に任せつる也椎柴の變らむ世まで頼もしき哉かへし

一七椎柴にそむる衣は變る共此身をよそに思はざらむ

事の序に昔のとをいひ出でゝ　ないけの命婦

二七思出るありし昔の有明の月ながら世の變らざりせばかへし

三七忘られぬ其夜の月は古にしを新しくのみ思ほゆる哉

又

四七花やさく有しながらに鶯のさも新しく思ほゆるかなとて鶯を櫻の枝に居ておこせたればその枝を宮のすげのがりやり給ひたりければ

五七雲居なる櫻の枝を鶯のふみ絕えむとも思ふべしやはかへし

六七櫻花しづえをならす鶯の踏み違へたる春にや有らむ

曉月夜に石山より出で給ふとて關のあなたにて

月の入らぬさきに歌一つとの給ひければ

七七相坂の關まで月は照さなむ杉の村立木ぐらかるらむといひたれば

八七共にゆく月徹りせば朝ぼらけ春の山路を誰に問ましかげまさが露草のうつし聞えたりけるやり給ふとて

九七朝夕に常ならぬ世を歎くまに現し心もなくなりに鬼かへし

〇八葉末より深く染てし色なれば世はうけれ共歸やはする

月のあかゝりける夜一品の宮に殿上人あまたまゐり給ふるにくちすさびに松が浦島との給ひたりけるを聞きて　うちの人

一八波だにもよる事難き松島を爭でか螢の有なしをしるかへし

二八浦波の昔の跡のしるければ尋ねてきつる心あるらし

三八爭でかは昔の跡を尋ぬ覧さかしき人になしと赴きけ

又

四八さかしかる人をなければ行末の契にきつる松が浦島

御ともの人の雨ふりぬべしと聞えければ

五八秋の夜の雨にも何か急ぐべき此頃ふると思做しつゝかへし

六八雨ならで傷き空にふる人は露にもぬるゝ物と赴きけ

濡れてかへり給ふとて帥よりつとめて

七八逢でこし袖の雫は秋の夜の月さへ曇る物にぞ有ける

かへし

八八人はゆき霧は雁に立止まり曇りながらぞ我は詠めし

その秋諸共にものしける人にかくなむありしといひやり給ひけるついでに

九八憂世には心少しも行遣らで身さへ止らぬ跡な漏しそ

返し　たいのぶの少將

〇九慰る方だにあらば月影の住べきよとは今のみやしる

みちのぶの中將

一九世中はあるかなきかぞ今は唯思ふ心を思ふどちへむ

露草のうつしを宮のすけのもとめければ色わろきなむあるとの給へりけるをとりて奉るとて

二九薄からむ花を怪てぞ思つる猶こゝ迄も散らせ惜むなかへし

三九惜べき程だにもなき花よりも先歸ぬる色にぞ有ける

又しり給ふ山寺におはして

四九今はとて入なむ後ぞ思ほゆる山路を深み訪人もなしかへし

五九歸りても深き名殘の花の色を袖に移してけふは見哉

いかなる折にかこゝのへの花の都をおきながらとの給ひければ　藏人なかたゞ

六九くさのいほりをたれかたづねむ

女御の御かたよりつれ〴〵になむ歌一つと聞えければ

七九何事も常ならぬ世のさがなれば明暮るゝ迄忘られに鬼御かへし

八九植置し人なかりせば淺茅生を何につけてか思出まし

殿上人根合(源朝臣)のついでに嵯峨野にいきてうまこそがありけるを哀がりて昔を思ひやる心を

九九住人も昔も今もことなれば花みる寺に尋ねつるかな

みちのぶの少將

〇〇年ふれば變りやしにし女郎花昔の秋もとふべき物を

なごいひて歸るに廣澤の池に月のうつりたるを

一〇水の面に宿れる月の影みれば波さへ夜と思なるべし

みちのぶの少將

二〇波のよる水に浮べる月影に先知らるゝは漏瀬也けり

凍りたる水に月のうつりたりを　同じ少將

三〇池水の濁に沈む月影を我が身になして見るぞ悲しきかへし

四〇月影の浮び煩ふにごりには生ふる蓮を頼むばかりぞ

うまこそが返しとしてきたるを見れば

五〇遥るれど疎ましく赴思はゆれこやなき人のみそのなる覧

とかねするが詠みかけたる返しを

六〇今更に我名は惜くも有ね共みそのと告る事の侘しさ

越前の前司の松のみを奉らむと聞えて程へてあ

りてければ

七〇暮難き春の日よりも契てし君待のみぞ久しかりける

八河といふ所におはしたりけるにさゝをかけた

りける

八〇宿らでも長閑くも非ぬ人のよを露は床しと思らむやは

ためもと新發意のてなれば尋ねて

九〇あくるまの程だにもなき露の身の此世中の心細さよ

又かへし

一〇草枕はかなき物と此世をば鳴蟲のねや思ひしるらむ

小野宮の右大臣殿實資式部卿宮爲平の女御のもと

に參りはじめ給ひて三日いとつれ〴〵なるに今

宵まゐりて物語も聞えむとありければ

一一秋風の袂すゞしき宵ごとに君まつ程は人やうらみむ

かへし

一二恨むべき人をば知で秋風に尾花をあやな頼みける哉

おはし馴れし頃焚物を聞え給ひたりければ

一三古は爽りし宿の女郎花香を睦まじみ知りもこそすれ

小君と聞ゆる返し

一四女郎花同野べには生ふれ共契しねには非すとか聞く

此の歌ども心得れどもこのまゝ本に

宮のすけの君といふ人女郎花のわかきをなむ兩

ほうといかゝ云べき女郎花佛の種をたつと社きけ

一五兩ほうといふを聞きて

かへし

一六女郎花種たえましや白露の［　］なき頃を世は［　］

竹に氷のつきたるを女御殿に奉り給ふとて

一七君が爲雪間を分て尋ぬれば一夜籠れる竹にぞ有ける

御かへし

一八鶯の凍れる竹のよをふともかゝる雪間をたが尋ねまし

内の御使にてきさいの宮に參りていみじう強ひ

られてつとめて

一九今よりは思事をも言でへむ強ふるはつらき物にぞ有ける

かへし

二〇理や物も心にしられにき思ふ人やはひとを強ひける

ひらをかへすとて

二一今はとてとくなもみれば年のをの長く契しかひや無らむ

かへし

二二年のをに結縣てし契あれば心殘りをとくといはなむ

宮に越後などてさぶらひける女房に火とりの灰を

やかせてとて預け給ひたりけるを奉るとてあか

き紙に書きて火のやうにて埋みたりける

二三數ならず埋れたるが思ひにはあたりの灰も山と社なれ

かへし

二四埋るゝけはひを見れば人知ず思や富士の煙ともたつ

此ははやうの事なり粉河にまうでたりしに舟に

てかうぶり柳　　左衞もの大輔ふな君

二五古への露に濡れにしかひもなくなどか柳の綠なる覽

誰とか覺束なければ

二六唐國の昔の事に比ぶれば松におとらぬ柳なりけり別作

きんさだの中將

二七昔よりあけの衣は名のみして柳色なる年をふるかな

うこんの少將さねよし

二八古の名にも變らじ青柳のごとゝさすがや綠なるらむ

いでふねの辨

しばかりを

二九さしてゆく柴刈小船棹をいたみ

といへばしもつく

まづこがるゝはこゝろなりけり　　左衞門

春の暮れぬることをいふに　　同じ人

三〇春と共にゆく船路にも思ふ哉都の花は散果てぬらむ

などいふ程に三島江とはしもをなむ申すといふ

を聞きて

三一思知る憂三島江の水なればゆけど行れぬ心地社すれ

なかみつ

三二行過て此三島江に最ごしく遠く離れむとをしぞ思ふ

長柄の橋にて

三三橋柱無らましかば流ての名を社きかめ跡をみましや

晴うなる程に住吉にまうでつきぬ松風波の音き

こえしにたがはずをかし人々みてぐらのついで

に歌よみて奉れとこひたればえきかすその夜は

其のわたりにとまりて曉月夜に濱づらをゆけば

云はむ方なく面白し

三四かく計歸るものうき住吉の岸には爭で波のよすらむ

こと人のえきかねば書かず響きの灘にて海士の

綱ひくにいをどもこひて放たす濱べは何事もを

かしきに海士の鹽やくことに見ゆ

三五藻汐やく煙になるゝ蜑衣霞をたちてきたるなるべし　　少將

三六蜑人の燒や藻汐の立添へば雲の波こそ深く見えけれ

いかなることを見けるにか　　ふな君

三七隔てなき海べを渡りゆく時も人の心の隈はわかれず

ひなみの湊松原のほどにて暫しやすらひてかさ

きより越えてつくゞ松を見ればげに故なくはあ

らずこゝにてこそは暮さめといふ其の夜は岸づ

らにとまりて曉に出でゝいとおもしろげなる所

々見むとて玉津島にまうでむとてあるに道覺束

なしなどいふ程にかみ人たちたものさきに仕う

まつらむとて出できたりなりあひの松原よりゆ

けば眞菰草生ひしげりさはに駒あるにをかしう

緣の松こぐらき中より白波のたつも見とほさる

やう〳〵御社にいたるほど入り日のほとりに海

士の家かすかにて船ども繫き綱ども干しなどし

たるを都には變りてをかし御社にまうでつきて

みてぐら奉り所々廻りて見ればいひやらむ方な

く面白くをかしきをおも陸ひとに見せぬを誰も

かく思ふべしそこの有樣いはゞ中々劣りぬべし

かゝる所にて中々に物もいはれぬものになむあ

りける歸さにうしろの岩屋を見れば佛のいとけ

にておはするを

三八あま人ののり渡しけむ印にや岩屋の跡を留め置けむ　　少將

三九蠶のすむ濱の岩屋の佛には波の花をや折てよすらむ

といへば

四〇彼岸の遠きをしりて岩陰にみかげを宿す水の月かな

和歌の浦より歸るに面白き櫻や老いたる海士を

みて　　少將

四一年をへて若の浦なる蘆なれば老の波には猶ぞ濡ける

吹上の濱にいたりぬ風のいさごをふきあぐれば

霞のたなびくやうなりげに名には違はぬ所なり

けりさだかやまのほうの前人々などみえたり駈ら

ていとおもしろし駒を曳きとゞめてやすらへば

海士の潮垂るゝもいと哀なり

三四物思ふにみれば忘るゝ濱風に住雲いかに溺をたる覽
粉河にまうでつきて風のもりといふ所に
三五いとこへも花のあたりはあだなれといかに散覽吹風の森
圓融院のおりゐさせ給ひての日少貳の命婦といふ人あはれといふを聞きて
三六哀たが唯さのみやは思ふべき萬に歎く人もある世に
冬の初つかた觀音の湯本より久しう御讀經にめされぬと聞えたりければ
三七霜早み移ろふ色は菊の花少女の袖もかくこそは見めかへし
三八少女子が袖ふる霜の打はへて撓まぬ菊の心とを知れ
道信の中將よみたる歌ども書きあつめたるかたみに見むといひやるとて
三九斯計ふる事難き世中にかたみにすめる跡にぞ有けるかへし
四〇方事は難くなる共形見なる跡は今こむ世にも忘れじ
賭弓のつとめて　中宮のすけ
四一弓張の圓ゐや爭で有しそのいる方山は遠ざかりけむかへし
四二片山は雨に紛れて已にしをかつ〳〵きゝと誰か定し
こまの內侍のこはく聞えたりけるを程へて秋立てる日やり給へりければなどてか今までと聞えたりければ
四三紅葉の露の色なる玉なれば秋を待では如何みすべきかへし
四四秋深き海の底なる玉なれば露まつ程もおきて赴みめ
のぶかたの中將まうでむと聞えてみえすなりにければ又つとめてやり給ひける旋頭歌
四五思ふどち寢てはかなくも明くる夜を長しといふは人
まつ時の名にこそありけれ
人のもとにある事をの給うて
四六世中は水に宿れる月なれやすみとくべくも非ずも有哉
題になり給うて內に參り給うて花山院の御時よ
につかざる家を渡り給うければ云出したりける
四七雲居こそ昔を空にあらねども思ひしとよ變らざり鳧
かへし
四八賴こし月日は唯に過にしをいかなる空の露にか有覽
人の尼になりたるに

四九哀ともいはで思はむ行く末の蓮の上は思ひ出づやと
かへし
五〇とふにだに置所なき蓮葉の上までかゝる露ぞ悲しき
薰物あはせて上に置きていで給ひにければ少しとゞめ給ひて　女御の御
五一殘なくなりぞしにける焚物の我獨にし任せてしがな
とありければ
五二くゆるべき人に代りて終夜この渡りこそ下焦れつゝ
ひはの緒かへし聞ゆとて　みちなりの中將
五三秋霧の曇く小野の山路には言の葉さへぞ深くりける
かへし
五四言の葉のちる山のをは秋風の過る儘にぞ聲增りける
花山院おりゐ給ひての年の佛名にけづりばなにさしてみあれのせじのもとへ聞えたりける
五五程もなく醒ぬる夢の中なれど其夜に似たる花の影哉
かへし
五六みし夢は執の世ぞと思ふまに折を忘れぬ花の戀しさ
又の年おなじ折　實方の中將
五七古にかはらぬ花の色なれば花のむかしの昔こひしき
かへし
五八昔みし花の年々似たれども同じからぬを思知らなむ
鎌倉といふ所にはしたるになかりければ忘草
をとり給ふとて寺にかくいへとての給ひける
五九忘れ草かりつむ程になりにけり跡も留めぬ鎌倉の山
かへし
六〇有侘て枯にし宿の八重葎執こをさして君につげけむ
山里を始めてしむかすみ
六一春霞程へて誰かたれるかの山里は憂世の外をとむるなるべし
入道のこうに逢ひ給ひてあしたに
六二雪深み山路も知す惑ふ身は道ゆく人やあるとまつ哉
かへし
六三昔人をよそにきく共雪深み一つ山路に入らむつまとて
春日にまうで給ひけるに烟たつ山里をこれなむ
こまの里と人の聞えければ
六四朝まだき朝ゐる雲とみえつるはこまの〳里の烟也鳧
卒都婆ある所を過ぎ給ひけるにこれを題にてよ
まむとて
覺束なそとはみながら石上古き都はいづれなるらむ

山にきよき事をせさすとておはしけるにいたづらなりければ
六四今はとて入なむ時ぞ思はゆる山路を深み訪人もなし
宮の女房扇つがせ給ひしこまつりしてつがせ給
うけるを少將といふ人まけずと諍がひければ
六五さし添へし春日の山の三笠山祭し人もいかゞ定めむ
かへし
六六三笠山わきてや君が祭りけむ兼て祈らぬ人の爲には
山におはしける頃　たゞのぶの中將
六七世をうしと遁ると聞けば我は最ど是より深く入ぬべき哉
かへし
六八山よりも深き所をもとむれば我心にも君はいらなむ
九月十五日みやの御念佛はじめられける夜遊び
などせられて月の朧ろなるにふるき事など思ふ
心を人々よみけるに
六九古を戀ふる涙にくらされて朧ろにみゆる秋の夜の月
權　辨
七〇雲間より月の光や通ふらむさやかに澄る秋の夜の月
かへし
七一蓮葉の露にもかよふ月なれば同じ心にすめる池みづ
これを聞き給うて左の大殿より
七二君のみや昔を戀るよそながら我見る月も同じ雲居を
又
七三今よりは君がみかげを賴む哉雲隱れにし月を戀つゝ
と聞え給ひたりければ
七四今よりはあみだが峰の月影を千世の後まで賴む計ぞ
女院の住吉にまうでさせ給ふるに式部卿宮の中
將のうちのおほんせじにて參り給ふるにつけて
七五左の大殿大宮の大夫の御許に　小野の宮
と聞えければ
七六都人有やと問はゞ津國のこふのわたりにわぶと答へよ
御迎へにまゐり給ふ道にて見給うて
七七尋來る心をしりて津の國のこふも人の告る也けり
なりともの馬のかみすけして宇治院にすむころ
逢ひにいきて
七八秋深み霧立渡る朝な〳〵くもの森なる君をこそ思へ
中務の宮聞き給うて

(八九)青きにし跡を尋でか尋ねまし霧も立そふ雲の森には
とあれば
(九〇)白雲に跡くら〳〵と行影も訪もやすると思ひける哉
御かへし
(九一)諸其に契りし雲の栖にはとへとも誰を頼むなるらむ
又宮より
(九二)秋深き同じ挿頭の言の葉は山下露や漏らむとすらむ
御かへし
(九三)常ならす時雨る空の言葉はもる共露を何とかは思ふ
又
(九四)いふにだにしぐれむ空は徒然と眺の後は思ひ社やれ
同じ心を大とのに
(九五)世中を花の句に誘はれてはかなき世をば何頼むらむ
かへし
(九六)世中の花を花とや思ふらむその儚さは知る人ぞ知る
御かへし花山院のこと
(九七)後れぬと何思ふらむ其花は時の到て有るにやは非ぬ
御かへし
(九八)其時を疑の時と知らぬまはまつや常なき時や今こむ
左の大とのゝ春日の使に出でたち給ひて又の日
雪のふりけるにその殿より
(九九)若菜つむ春日の原に雪降ば心使ひをけふさへぞやる
御かへし
(一〇〇)身をつみて覺束なきは雪歇ぬ春日の原の若菜也けり
宇治殿の八講に
(一〇一)水底に沈める底のいろくづを網に非でも抄ひつる哉
とありけるに
(一〇二)宇治河の網に非ねど誰はかは君に引れて浮ざるべき
かげまさが四位になりて上のきぬ申したりし遣
すとて
(一〇三)同じごと衣は深くなりに皃心ぞ我にならひやはせぬ
ちみさだがみちの國に下るにめの式部がやりけ
る歌をきゝ給ひて
(一〇四)今さらに霞隔つる白河の關をはじめて尋ぬべしやは
笛ふきの社を
(一〇五)笛吹の社の神は音にきく遊び岡にや行きかよふらむ
月の前の笛の音
(一〇六)月影にこちくの聲ぞ聞ゆなる古にし妹は待や煎らむ
寝待の月を
(一〇七)ねて待と今宵の月を云なれば物思人はみでや已なむ
三河入道のとうにわたるとて白河にくだりける
にやり給ひける
(一〇八)我宿に宿る門出の行末は旅寝ごとにも忘れざらなむ
かへし
(一〇九)音に聞かうかの水は返る共白河の名をいつか忘れむ
七月七日船に乗るにやり給うける
(一一〇)天河後のけふだに遥けきをいつとも知ぬ我ぞ悲しき
たや寺の君のむすめどものもとに白きかみに蟬
をつゝみて蓮の花にさしてやり給うたりければ
蓮の花をつくりて此の歌かきて蟬の中にさし入
れて奉りたりける
(一一一)眺れをかのごとき方に頼まゝし蓮の露と空蟬の世と
かへし
(一一二)蓮葉にうかぶ露こそ頼まるれ何空蟬の世を歎くらむ
又あれより
(一一三)蓮葉に浮ぶ針の程なれやなべて頼まぬ玉のありかを
かへし
(一一四)契あらば玉の在かも告なゝむ此よの夢は踈くみゆ共
殿上にて琴ひき笛ふき遊び給うて同じごとあそ
び給ひける人殿上おりて參らぬに
(一一五)笛の音は哀れ昔に似たれ共逢事なきはかひなかり鳧
うちよりかへり給ふ日
(一一六)心だにゆきはてぬれば菰枕淀の渡りは近づきぬらむ
人に後れて世中すさまじうおぼされける頃白川
におはして
(一一七)白河の宿に憂世を遁れど沈める影は猶ぞみえける
女御どのより聞え給うける御返しに
(一一八)言の葉を掻流しつゝ白河の水の面てを今日みつる哉
上の尼になり給うたりける頃
(一一九)空蟬の世の常なきを知りながら厭ひ難きは我涙かな
石清水の臨時の祭の使殿の少將まひ人にて渡り
給ひけるに大殿の物見給ひけるに聞え給うける
(一二〇)をみ人のゆふかたかけて行道を同じ心に誰詠むらむ
かへし
(一二一)小忌衣袂にきつゝ石清水心をなべて汲すもあらなむ
世すさまじうて籠り給へるころ大殿より、春
のことなり
(一二二)谷の戸を閉やはてつる鶯のまつに聲せで春も過ぬる
御かへし
(一二三)行き變る春をも知らず花さかぬみ山がくれの鶯の聲
同じ殿おもくわづらひ給うて大殿に
(一二四)歎ふれば同じ齢の草なれや露に後れて先ぞかれぬる
同じ御年なりける
(一二五)ゐ融院の御時にや宇都保のすゝし仲忠といづれ
まさるとろじけるにゐのはしはすゞしが方に
やありけむ女一宮は仲忠が方におはしけるにや
いづれをいるゝなどあるに物ないひそと仰せら
れければともかくもいはでおはしけるをいひに
おこせ給うければ
(一二六)沖つ波吹上の濱に家ゐして獨すゞしと思ふべしやは
權中納言筆に扇をかへていくつばかりにかあた
るべきといひたるを
(一二七)數しらずあふぐ風にも水莖の跡は流れて絶む物かは
せきみの少將春日の使したまうて歸り給ふ日い
みじう霧のたちたりければこれより大殿に
(一二八)笠山麓の霧をかきわけて秋を知べに今やきぬらむ
御かへし
(一二九)笠山春日の原の朝霧に返り立らむ今朝をこそ思へ
左の大殿にふみ作られけるにみるべき事ありて
ふみもおきて急ぎ歸り給へるに彼殿より即ち
(一三〇)恨めしや今宵ばかりの旅ねをば我宿にたゝ草枕せず
御かへし
(一三一)生ひし社よゝに契れる呉竹の其あだ節を恨べしやは
少納言むねまさが法師になりて志賀にあるに
(一三二)連や志賀の濱風いかばかり心のうちは涼しかるらむ
同じ人のもとに久しう音もし給はざりければ
(一三三)奥山の木下蔭にすむ人は月さへはぬ物にぞ有ける
かへし
(一三四)奥山の木下水の清からばもりても月の通はざらめや
清少納言が月輪にかへりすむ頃
(一三五)有つゝも雲間にすめる月の輪を幾よ眺て行歸るらむ
返事も聞えで程へてうれふ事ありて御文を聞え
て其の事いかにと聞えければ
(一三六)何事も答へぬ如く習ひにし人とし〳〵問や誰ぞも

かへし

三六 たふなきは苦しき物と習はして人の上をば思しらなむ

とてなむとあれば黄なる菊にさして

三七 椛の色に習ひて人どをきくとも何か問はむとぞ思ふ

かへし

三八 押なべて聞としも社見えざらめこは厭しき方にさけかし

さねよりが甲斐にありけるに

九三 東路に入にし人を思ふよに都ながらもきえぬべき哉

さねより

四〇 遙なる雲居の程の一言はみるに時雨ぞ降り増りける

左大將朝光五節の舞姫奉りけるを見て遣しける

一四 天つ空豊のあかりにみし人の猶面影のしひて戀しき

齋院にて物申しける人内わたりに參れるよし聞

きてあふひに書きつけて遣しける

二四 年ふれど變らぬ物は其かみに祈りかけてし葵也けり

五月五日に遣しける

三四 時鳥いつかとまちし菖蒲草今日はいかなるねにか鳴べき

かへし　馬内侍

四六 五月雨は空おぼれする時鳥時になく音は人も咎めず

寛仁二年正月入道前太政大臣大饗し侍りけるに

屏風の繪に山里に紅葉みる人きたる所

五四 山里の紅葉みにとや思らむ散果てこそ訪べかりけれ

世をそむきて長谷に侍りけるころ入道中將のも

とよりまだ住みなれじかしなど申されければ

六四 谷風になれずといかゝ思ふらむ心は早く澄にし物を

秋の暮つ方白河にまかりて

七四 都出ていつかきぬらむ山里の紅葉は見れば秋暮に鳧

長谷に侍りける頃僧の裝束法服など關白殿より

贈らるとて

八四 古は思ひかけきやとりかはしかく着む物と法の衣を

かへし

九四 同じ年契りしあれば君が着る法の衣をたち後れめや

同じ年の人になむ

後朱雀院生れさせ給ひて七夜に

五〇 幼きなき衣の袖はせばく共こうの石をば撫盡してむ

題しらず

一五 わが宿の梅の盛にくる人は驚くばかり袖ぞにほへる

歎く事侍りけるに紅葉のちるを見て

二五 紅葉にも雨にも添ひてふる物は昔をこふる涙也けり

世の中憂きこと多かりける頃いひ絶えたる女に

三五 逢みねど忘ぬ人は常よりも常なき折ぞ戀しかりける

花のさかりに藤原爲頼など伴ひて岩倉にまかれ

りけるを中將實方朝臣などかく侍らざりけむ後

の度だにかならず侍りしと聞えけるを其年の中

將も爲頼もみまかりにける又の年かの花の頃中

務卿具平親王のもとより

四五 春くれば散にし花も咲にけり哀れ別の斯らましかば

かへし

五五 行き返り春や哀と思ふらむ契りし人の又もあはねば

祭主輔親卿集

それ人の才學をみがき文章をおれる家の集となづけて世につたへたりこれを見しれる人はすくなくして知らざるは多かりかるが故に褒貶の輩は其の數いくばくにあらず和歌の心しれるものは知りて譏る知らざるは知らずして又そしるたとへば和らかなる人のこはきそねみに透へるが如し然れども素盞男尊の出雲のみちに別れ婆羅門僧正の難波津にむかひしより三十一字は詠むことにはじまれり其の後さま〴〵の體これくはしからず但し妖艶のなかだち花鳥のつかひ契接の曉産生の夜或は離別餞送のをしみ或は哀泣戀慕のなぐさめ山川野望の所カ煙霞の夕を見て友を尋ね興にのりて醉によるついでにいひあつめたる言葉なればはか〴〵しくも思ほえず此の外扉風さうじの歌歌合草あはせかたわきの挑みほど過ぎぬれば心ばせ顯はれてことのはふかくすべし是によて書きもといめざるに兩三の兒女祖師のふにうけて家々の舊草をひろふ今あひつく心に催されてはつらくはあれたる言葉をもてなまじひにあざやかなる紙をけがさむ事をゆめ〳〵人のねたるこれをいやしき身からいたしてかたくなゝる親の爲にいよ〳〵あざけりをのこすことなかれ其の言葉にいはく

六五 花の藥紅葉の下葉掻つめて木の本よりぞ散らむと覺

親の家の曹子すみにて人々歌よむに初春の心

七五 こぞの冬今年の春のしるしには山の霞ぞ立隔てける

梅花

八五 舊年に咲始めにし梅が香も春になりてぞ匂增しける

鶯をきく

九五 萬代の春にあひくる鶯の聲わかやげる今日にも有哉

秀才すけたいあたらしき家すみするに學生いは

ひのうた琴を翫ぶ

〇六 千年へて變ざるべき家ゐには口きくの琴ぞ里に當れる

二月の初午に稻荷へ詣づる路に田つくるをみて

一六 玉鉾の道はとりなる荒田をば踏すき難き物にぞ有ける

三月人々花みて歸るに

二六 行廻りみれども飽ず山櫻我のみならば歸らましやは

おなじ月山吹もてあそぶ所にて

三六 立返る春の形見と思へばやひとへに惜む八重の山吹

同じ頃藤人所の人々一種物してまゐれといへる

に菓子十種を山吹にまぜてそへたり

四六 井手近き宿にしすめば山吹の花の色より外の物なし

ある人におもふ所ありて

五六 逢事をいつとも知ず歎きつゝぬる夜の數ぞ年積ぬる

ある人に扇やるとて藤の花にさして

六六 藤波の心かけたる色みなむそふる扇の風のしのびに

卯月ばかりに寺のくりして卯花を折りて人にみ

すとて

七六 卯花のうら珍しくみえつれど折ての後は常の色にて

同じころ兵庫のかみとも時の朝臣の有馬の湯か

らかへりて親のもとにきて酒のむ次でにいふ一

日郭公をみちにて聞きてかくよみたりといふ

八六 とくゆきて人にかたらむ足曳の山郭公初音きゝつと

いへば

九六 聞捨てゝ君が來にける郭公聲よ就れの山路なりけむ

内に人の語らふが斯てやみなむとやいへるに

〇七 九重の雲居なりとも逢事のたえてやむべき中の契か

五月なが雨のころ、人

一七 逢見ずて詠むる空の雲間なく思ひ晴せぬ五月雨の月

ある僧のみなつきの名書かせたるうちはに天の

橋立のかた書きて旅人おりぬてあま人にものい

ひたる所に
二七橘立の松の緑は幾そしほそむとか語る與謝のあま人
又一枝に吹上の濱にしほ焼く所
三七波風の絶す吹上の濱なればうらなき君ぞ藻汐焼ける
おなじ月河原の院に人々あつまりて泉の邊にすゝむ所
四七岩水の涼しき陰をみるけふは夏の暑さも忘られに鳧
又と山のなつの山寺をだいするに
五七峯續きおひたる松の色の中に木深くみゆる夏の山寺
文月のなぬかの日に七夕まつりする所にて
六七雲間より星合の空をみわたせばしづ心なき天の川波
同じ頃世のはかなき事をいひて人々歌よむに
七七人の世は何かはためし朝顔の露けき人を命と思へば
初秋歌合する所からよみてとあるに、左かた
八七もてならす扇にそへる涼しさは許多の秋の印也けり
右かた
九七數多年てならしてける扇には多くの秋の風ぞ籠れる
八月ばかりに人に文やるとて薄の穗につけて
〇八篠薄忍びも敢ぬ心にて今日はほに出る秋としらなむ
近江の倉部の里といふ所にて月あかき夜とゞまりて
一八よそにては倉部の里と聞しかど普く照す秋の夜の月
知りたる人の承香殿のみこの齋宮にてくだり給ふ御ともにある神宮の九月まつりにまうでゝわたりあひ川といふ河わたるによるなれば（同作とう）ちそひていふ
二八君に斯渡りあひ川永らへて思ふ心のあせすも有る哉
返し、女
三八渡合の河渡りにも其かみのうかりしせをば忘やはするといへば又いふ
四八今日迄にのどけき淵と知ずして淺き心を恨みける哉
同じ夜みもすそ川といふ所に齋宮とゞまりて御祓へし給ふに女日をたち隱れつゝみつのがしはといふかしはをおこせてこれは何とかいふといへるに
五八我妹子を御裳濯川の岸におふる人をみつゝ柏とをしれ
又同じ夜神宮にまうでつきたるに鹿の鳴くを聞きて人々あはれがる
六九雅びたる聲にも有哉鹿のねの深き山べにすさむ物から
神無月ばかりに京へかへるに紅葉をみて
七九近江なる夏箕の里の家ゐには秋の紅葉ぞ今に殘れる
人に始めて文やるに
八九よそ聞に年しへねれば疎からず心なれても賴まるゝ哉
知りたる人の伊豫へくだるに
九九遠へゆく船の共々あらましを漕離れぬる波のよそ哉
冬住吉にはじめて詣づるに
〇九まだしらぬ難波の浦の蘆間わけ漕ゆく方や住吉の岸
まうでつきて舟よりおるゝ程に松をみて
一一これやこの神代久しく成ぬれど時は變らぬ住吉の松
願はたす人の神樂するをみるに長き榊に松をとりそへたるに
二一榊葉に千代の小松を取添へてけふより祭る住吉の神
女房などありて住吉の姫君の事などいふに
三一尋ねけむ昔のことの調とは吹く松風ぞ聞なされける
かへる程に
四一住の江の波立ち返る程もなし何長居すと昔いひけむ
天王寺にまうでゝ
五一難波江に心深くぞ尋ねくる法を弘めし人のあとみに
かへさに遊女を見て
六一鵜舟さし波の上にてよを過す身は何物と知ぬなるべし
人に物いひて後にやる
七一今日だにも慰め難き心には爭ですぐしゝ昔なりけむ
五節のころ藏人所にて人々あまたゐて殿上人のさがり給ふ頃なめりわれらはどう寢なむなどいひてふしなみて心によむ
八一百しきの雲の隔の遠くして豐の明をよそにこそ見れ
ゝほのしりたる人のかしづきに出でほめられて殿上人むつまじくありつゝきくに又のあした
九一片敷けるをみの衣の裏愛てけさの日影は眩かるらむ
ある所のむすめもきたる頃てまさぐりにさがりたるこしをむすびてのち、語らひたりと聞きて
〇二結てし玉もの櫻を許しなく我ならずして誰か解けむ
御佛名の後朝裝束つかまつりなほすついでにつくり花を折りてまがへるきくに人にいひける
一二終夜起明しつる霜のきく折つる罪やさえせざるらむ
後の年の正月に堀川中納言どの人々によませ給ふ十首の歌、はつ花
二二霞たちほのめく春と成にけりもゆる草木も煙紛ひて
鶯をまつ心
三二春は淺くすむ山道は深ければおそく鳴出づる鶯の聲
わかな
四二若菜摘春日の野べに雪まぬけ今かく人ぞ家ゐせざらむ
春雪
五二降添はる春の雪だに際有らば山の緑も今日はみてまし
閑院大將殿男方女かた歌合あるに、逢はぬ戀
六二數妙の床うち拂ひ宵毎に逢見ぬ人をよそへてぞ見る
中たえたる人のもとよりつらき人の爲には涙せきあへずといへるに
七二今はとも思ひなたえそ野中なる水の流は行て尋ねむ
閑院女御さぶらひに人々一數物いだすに紅梅の枝に鳥つけて出すとて歌よむに
八二くる人もなき宿にさく梅花鳥の羽風にをりみつる哉
二月子日に閑院大將どの女房などゞして有明をかにて
九二綠なる松ひきかへる紫の野べに出てぞ色めきぬべき
三月ばかりに花みるに
〇三嫉をか分きて折らまし山櫻心うつらぬ枝しなければ
一三麗景殿女御がたの女房細殿にいで居たるに山吹の花をとり傳ふるに歌あるべしとあれば
一三思ふといはで積れるくちなしの色とならぬ山吹の花
同じ所の女房梨壺を局にしたるが枕どりにおこせたるにかきつく、二首
二三みに添て年ふる床の枕だに忘られねれば身をば思はずまた
三三忘らるゝ床の枕となりはてゝ許多よみけむ物語せよかへし
四三知らばしれ何に枕を尋らむあやなし一夜夢なとはれそ
かためたりとあるに逢坂には世にあらじとて
五三尋ねずば君しらめやは現にも夢にも戀ふる人の枕を
同じ所にふぢの花を山吹にそへてこれはいかにとあれば
六三心ありける人の折花は一つ色にもさかずぞ有ける
女房に蔭難色保男が語らひたえて又あらためてうちはしからしのびてかよふを見て

七葛城の絶えと絶えにし岩橋を忍びに渡る人は誰かも
ある男人のてをなりたりつるにれいならすなら
めるけしきになむ見えつる歌やらむとせむるに
八君戀てあくがれ初し玉緒を止れとしてや手に結つる
後堀川殿の御さうしにをんなもの申して立ちた
り瀧のほとりに男かくれてみる所に人々歌よむ
におしつくる三月なり
九行人は影や宿ると瀧つせの波もろ共に立ゐこそみれ
人の家に住みはじむる頃五葉のちひさきをいづ
この松ならむと問へばかまくらよりほりて後八
年になりぬといへばその言葉をやがてつゞくる
なり
〇一植て後松の千代迄數へばけふは八年の春にぞ有ける
家にありし人のほかよりきて紅梅のおもしろき
事といふに
一花さかぬ宿ならませば古の春を尋ねて人のこましや
むつまじき人の肥前の守のめにてくだるに
二別路に君を松浦の濱松の千代へても又逢ざらめやは
おなじ人に幣やる洲濱にかけり
三さしはへて行に波路の浦々に波立べくも非ぬ洲濱に
あからさまに物へくだる由はゝいふこしにはも
せきこゆときけば遠き心ちすといふに
四逢坂の關路こゆとも都なる人に心のかよはざらめや
人に文やる返事のなきにかく云ひやる
五満つ潮の干間だになき浦なれや通ふ衛の跡もみえぬは
知りたる人のれいすむ所にはあらでほかになむ
といふに尋ねてやる
六定なき人の在りかの聞ゆるは波に浮ける蜑の小舟か
田舎なるほど京より人のきて獨住みはいかなる
ぞといへば
七都より兼て知にき旅ねして人離れたる住ひせむとは
人に物いふに心いられしければふかうぞといへ
れば松に文をさしてやる
八久しきを何かはいはむ岩代の松の結びはおひ變る共
左のうまのじようかねすみつかさえて後露艸う
つしおこすとて
九手につみて自ら染し花なれば年はふれ共色も變らす
かへし

〇二我宿の垣ねの草に唉まじる花の色こそ薄くみえけれ
おほやけ所なる人をあまたいふ頃
一後ろめた風の崎なる藻刈舟孰れの方によらむとす覽
閑院の大將殿なつの夜の雨といふ題をよませ給
ふに申すことある程にて
二潤ひにぬるべき身とも知ぬれば降夏の夜の雨も嬉しき
十月ばかりにいもうとを懸想する人のことはな
るまじきなめり文をだにかへしえてむといへる
に
三木枯の風のゆくてに任せてし人の言のは止らざり鬼
冬の終にしりたる女の久しう來ぬ男にやらむと
て歌せむれば女郎花のをりからしてさゝすす
四枯ぬとや思ひなりなむ女郎花折々みえぬ人の訪ぬを
ある男の人のもとに文やりける返事にすゝきの
はにさしも草といへることはいかゞといへば
五誰故にもえむ物かはさしも草燃る思の身にし餘れば
おほやけ所に語らはむと思ふ人のつまごにて物
いはむとするが人さわがしくて入りにしかばつ
とめて
六岩戸さし入にし月の影をだに見べき隙の有じとやする
五月十日よひつれ〳〵なるに大將殿の御もとよ
り夏のよ軒の菖蒲といふ題をたまへり
七五月雨は小暗き月と思ひしを今宵の空は雲も隔てず
軒のあやめ
八引分れ日頃へぬれど菖蒲草軒端にみゆる色は變らず
女（前ノ）所の宮仕へする頃そこにさぶらふ女房な
どのもとにたはぶれごとするにかく心かゝひなさ
いるは人に疑はれてなどいひて
九我により妹は思や亂るらむ宿に結びし紐もとけぬに
同じ所なるわらはをみる人の物いふついでにか
ひなるすゝきをとりたればこひにおこせたる
を聞きて
〇一〇我に社心のほにはつくれ共誰に逢てかたまゝいる覽
ある所におとなひたる人のわれみさだめてこれ
といはむにものはいへと契れるがおとなしきに
一一我身より君を先にと思へ共惑ふ道には知べやはする
柱なる人の家に逍遥しにかれこれいきてまへな
るくれはしにおりゐて皆人は久しくみたる心ば
へによめば始めていきたる人にて
一二面馴て水だにみなむ年へたる橋を始めてけふ渡る共
さるべきわざして又ひと〳〵こむといひしを柱
へはいかで山城のかみの月の輪といふ所にこれ
かれいきて柱をあらためてこゝにきたる心ばへ
をよむに
一三先の日に柱の宿をみし故はけふ月のわにくべき也鳧
ある女の家に紅梅さきたるを梅壺の女御の臺ば
ん所より面白からむ枝參せよとあれば代りて
一四匂ひ香は君にますべき有ね共折てそみする宿の梅が枝
同じ所にて月のあかきよ梅の花面白く見ゆるに
一五常よりも哀こそませ春のよの月の影さす梅のはな笠
と云ふにこゝにありし女今は外にあるが今宵し
もきて
一六住馴し昔に似たる春の夜の月と花とをみる空もなし
おなじ頃月のあかきに人のもとにいきてかごを
叩くに車にのりながら琵琶をひくを聞きながら
遂にあけねばつとめて
一七春の夜の月に調べし琴の音の哀をしれる人ぞ無りし
三月つごもりの日いもうとの男のもとに山吹の
花をやるとて
一八あすよりは色や變らむ今日なれば閑く散で井手の山吹
加茂の祭の日語らひし人のもとより葵につけて
一九千早振神懸つゝぞ恨めしきよその插頭となれる葵は
といへるに更に忘れずといひて
〇一〇ゆふ襷かけ離れたる心あらば神の驗に葵□あらじ
かく怖ろしく思はぬ事をかくるぞよそにてもた
ひらかにてとこそ思へとて返し
一千代へよと思ふ心のある物を何に糺の神をかくらむ
かへし
二よそに斯戀べき身とも知ぬれば久き千世を何か待べき
四月に左馬允かねすみ親におくれて
三鳴鼈はおとらじ物を郭公しでの山路の道しるべせよ
かへし
一四玄でのの山道知らませば垂乳女の先にぞ我は立て行まし
一五なき魂は蓬のはにも浮ばなむ涙の露も置きや紛ふと
夢に親をみて
一六夢の中に此を夢ぞと思ひせば覺て千歳も有まし物を

とあれば始の口と入返しすればいま三つ返し
七乳垂乳女の親より先に何か其しでの山路を君が越まし
八五此世をばかなき露と消にしを今は蓮の上ぞ床しき
九五夢にても飽ず覺けむ面影を現の千世に做はましかば
四月ばかりにむつまじき人のもとより橘をおこすとて昔の人にならはまほしくなむあるといへれば
〇六橘のかをとゝめばや古の思ひわすれぬ袖のかさなり
おなじ頃おなじ人のもとより卯の花を折りて
一六思出でゝけさうの花の露茂み垣ねに袂最どそぼちぬ
あやしくもかこてるかな
二六卯花を折るらむ袖は濡らめど我を忍ぶる雫には非じ
昔かたらひし女の今はことにつきて田舎にあるがもとよりとはぬことなど恨みて
三六よと共にかけつゝ戀るかひもなく立歸りえね袖の浦波
あだにさる事なからましかばなどかは問はざらましとて
四六濱風も何に附てか音づれむ沖つ白波寄るとしる〳〵
五月五日人のもとより藥玉おこすとて
五六君が爲玉つくり江の菖蒲草ひける根長き心ともみよかへし
六六隱沼の深きにひける菖蒲ぐさ心長さを比べてぞみる
郭公の隣になくを聞きて
七六我が宿になかぬ心はうけれども聲なつかしき山郭公
まらうどあまたゐて時鳥のなかぬ事なげいひて
八六時鳥なくべき程はいかなるを待にも過て音なはぬ哉
心かけたる人にをんなゝ(行書)きすしせておそしとこひにおこせたれば今までなりにけるをたゝなるよりはそへむとあれば
九六味氣なく君が挿櫛みてしより妻をも取で日頃へに鳧かへし
〇七妻取で日頃へぬとか挿櫛の指て誰をと思ふなるらむとあれば又かへしす
一七君ならぬ人をば戀もしらなくに誰とかよそに思做す覽
八月ばかりの夜人々あまたとまりてあるがかへるもあるを惜む心
二七曙になる迄人はとまらなむ夜と晝とも分ず見るべく
昔かたらひし人のもとにある女のあふぎそめにやるをみてすはうにかきつく
三七染姫の色にしあへば夏の扇薄き物から移ろひやせむ
ある人のうぶやの七日の夜人々歌よむに
四七波清き濱松がえにおひそはる苔の緑はいつも變らじ
語らひし人の七月五日ばかりにまゆみのもみぢたらむ枝折りてこあるやりたれば
五七秋もまだ淺き紅葉の色をわが心深くも賴みけるかな
とありければ深き蔦の紅葉にかきて其のまゆみの枝にそへてかくいふ
六七去年の秋深き紅葉に比べみよ色はとにも劣ざりけり
七月ばかり同じ前栽など植ゑてひと〳〵御前にあまたある夜月のあかきにかはらけ取りて秋の夜の月水に映ずといふ題を院にて
七七秋の夜の空を過行く月なれど流るゝ水に影は澄けり
同じ所の涼みに人々歌よむに
八七身にそはる扇の風は忘られて秋の空にも任せたる哉
九月ばかりに前の花さま〴〵に咲きたるをみて
雨のふる日
九七秋の日にしづけき雨の慰めは我が宿に咲く色々の花
語らふ友だちの法師になりてこと人のもとに文やる返り事につけて十月廿日宵ばかりにやる
〇八見し人のいれる山路を尋れば跡も木のはに埋れに鳧
十一月はせにまうづる人々宇治に宿りてこれかれおもしろがる程にたちぬべきことなどいひて
一八川波にひをはよせてや泊らましみるにも飽ぬ宇治の川波
同じ日みわの山本ゆくに木がくれなる紅葉のちらすおもしろく見ゆれば
二八三輪の山杉の印は年ふりてちる新しきもみぢ葉の色
同じたびのかへるさに宇治にきてきやうにひをやるに一つおほきにて
三八旅に出て數多の日をばへぬれ共宇治路のひをは一つ也鳧
語らふ人のつねにうとくのみあれば
四八訂解けぬ人の爲にはよと共に我魂もむすばゝれつゝ
ある人を語らひそめて程もなくえさらぬことにてほかにねてつとめて遣す
五八逢ずして歎き明せるよはよりも暮待つ程の心也けり
夏の夜月あかきに人のもとにいきたるに寢たりとて逢はざりしかば歸りてつとめてやる

六八月影もすさめぬ人の宿にきて夏のよ深く出てこし哉
けさうたつ人のもとにいきて花橘のはに書きてやる
七八橘のかを睦まじみなれよらむ花の姿も折てみるべき
十月ばかり水のほとりの菊を
八八水影に白くもみゆる菊の花老せぬなには流れたり共
同じ頃紅葉おもしろくしたる山の本をゆくにかかるあたりに住まばやと人のめづるに
九八紅葉ばの色こき山の山賤と成やしなまし散らぬ限は
十月ばかり伊豫の湯へかねすみゆくにこれかれうまのはなむけするに月だに出でばと急ぐに
〇九冬の夜の月と伴ひ漕つべき舟路の風は長閑からなむ
一九弱竹の己がこの世を知すして生し立てつと思ける哉
かへし
二九筍の生增るべき世を捨てゝ常磐ならずも枯にける哉
九月十日よひ物へくだるに惠慶のもとよりさらばあすやくだる野のはな山の紅葉はたれとか見むずるとてかくいへる
三九紅葉ばも殘の秋も少なきを君長居せば誰とをらまし
とあればまことと思はねど心ときめきにさらば
此の月の十日がさきにはのぼりなむとて斯く
四九惜むべき都の紅葉まだ散ぬ秋の中には歸らざらめや
同じたびおほやけつかひなれば人々あまた尋ねて鈴鹿山のせきある所にてさきなるひと月は此の關にはさはりやあらむとあれば
五九鈴鹿なる關の山のは高けれど越て過行く秋の夜の月
秋ものへ行くにあふぎ心ざすとて、人
六九別路の草ばにおかむ露よりも儚き旅の形見にもせよ
とあればむづまじき人なれば思ふなるべし
七九忍ばれむをり〳〵ごとの慰めは扇にそへる君が移香
旅より京にある人のがりやる
八九身に近き衣へだてずねし床を旅の心に戀ぬよはなし
ある人こふるに又疑はしき人もあれば
九九藻刈舟浮べる波にたぐひなば最どや我が焦れ增らむ
人に睦まじくなりて程もなくとほき所にゆくに
女
〇〇程もなく雲居遙に別るれば有にもあらぬ心地すれ
とあればげにいかに怪しきさまにおぼさるらむ

とて

一〇逢ふことは雲居遙に隔つとも心通はぬ程はあらじを
文やる人の返りごとして後又やれどもせねば

二一跡絶す猶ふみ通へ濱千鳥かひある浦の潮のあわびぞ
睦まじう日ごろ相語らふ人のよそ〳〵なるに

三〇逢事のいや遠ざかる雲居にて猶こそ物を思ひ亂るれ
かへし

四〇遠ざかる雲居なりとも逢事の絶間に通ふ人や有らむ
又人のもとに文やる返事せねば

五〇よと共に波し洗へば須磨の浦に通ふ衛の跡はみえわか
語らふ人のもとによべは雨の降りしかばさはりてなむといへるにとくやみにしものをとて

六〇忘らるゝ身をしる雨は降ぬ共袖計り社乾かざりけれ
といへるに忘れぬにかくいへるとて

七〇我爲に懸てぬれけむ衣手は忘れぬ人を恨みてかもし
人にやりたる返事をせねば

八〇小倉山踏始めたる道知で歸る跡さへ見えすぞ有ける
ある男人のもとに文やりけれど返事せねば

九〇數ならぬ身にもつらさの知られつゝ歎けば君をいかゞとぞ思ふ
とある返し左てとあれば

一〇よそ人の歎く歎きは何ならで恨みむ程に年や積らむ
人に文やりたる返事に物かゝゝぬ紙をおこせたれば

一一微なきみと口しる〳〵賴む哉我思ふ事を汝と祈りて
語らふ人をさ〳〵とはぬを怨みてすむ所はしらせでさすがに文やる返事みな月ばかりにやありけむ

一二身はかくれ聲は音なふ山彦を尋ぬる程に夏ぞ暮ぬる
人々あまた居て物などいひて手まさぐりにおものをまろがして鳥のかひ子のかたをしてかくいふ

一三かひにして許多しあれば知難しこや飯時のここには有歟
うまのじようかねすみ

一四はしよりも尋ぬべけれど歸られねばまだ云知ず何鳥の子ぞ
などいふに例のかくいふ

一五巢守なるかひみつるは刈てほす稻負鳥の種にぞ有ける
語らふ人のもとに雨のふる日いきたるに何心なくて居たるがみつけて隱れければよしくらからむにまゐらむとていでぬる後に隱れゐへてみえぬることといひてかくいへり

一六三笠山水尾のたちも隱し敢ず降つる雨に我ぞ濡ぬる
とあればかくれぬる人はさもあらじとて
睦まじからぬ女に松にさして

一七さしはへて訪かひもなく三笠山立歸にし人は濡しを
ある所の歌合に物の名などよませるに、秋風

一八夜寒なる秋の初風吹しより衣うちはへ寢覺をぞする
もみぢ

一九ひとてにはそもさも見えぬ紅葉の色は錦に立ぞ增れる
をみなへし

一〇あだし野の種とはみれど女郎花移ろひ難き花の色哉
すゝき

一一紫のほかに出たる花薄ほのかによその風ぞなびかす
荻

一二待つ人に過たれつゝ荻の音の戰ぐにつけて靜心なし
かり

一三雲路より宿借きたる雁音は旅の空なる聲にこそきけ
はたおりめ

一四蟲の音に機織聲は打はへて秋と成にしひより絶せず
あはぬ戀

一五あふことのなくて年ふる我身哉何を命に廷なるらむ
ある女のもとに又ある女のもとより色々の錦をかみてふじてかく書きておこせたり

一六君が爲思ふ心の隔てぬをかみてふかみは空に知らむ
とあるかへしよみてとあれば

一七隔なく君し思はゞ何か其かみてふ神に事もよすべき
ある女のもとに草に文をかきて斯く

一八夏草の結ばぬ人の心もて露にはいたく濡ぞしにける
ある人のもとに日頃はをのといふ所になむありつるとてかくいひやる

一九世を恨みをのゝ山路に入人の絕ぬ絆しは君にぞ有ける
かたらふ中のたえたるかやなりからつる(ぬ)歌のさうしかりてかへすとて

一〇聞捨す掻つめてける八千草のよゝの古事我も忘れじ
住みける女のたえにけるがもとより髮を元結にしたるが結ひながらあるをおこすとて

一一年久に僞なき物は神さびて古き契のあせずぞ有ける
とあるかへし

一二石上結ひおきてし元結は古きながらに忘れやはする
ある女のもとにはじめて文やる

一三問との始は今日に見ゆらめど思ふ心は年ぞへにける
睦まじからぬ女に松にさして

一四三熊野の浦の松とぞ成にける常磐に人を戀る我身は
牛を失ひてもとめ煩ふ程にかよひし女のもとにいきて立てりければ引かせてかくいひたる

一五うしとみし心ぞ人に增りけるこや後生の角と云らむ
返し

一六數ならぬ人を野飼の心にはうしとも物を思ざらなむ
ある女のもとに文やることはありながら包むことありてなむとてかくいひにやる

一七世の中の人のなかには非すとも戀る心は誰も增らじ
又よそにて語らふ人の外に渡りけるをいひやる

一八兢くとも在りかをしらぬ人故に尋ぞ侘る三輪の山寺
女かへし

一九よそにても杉はみゆるを三輪の山何しか寺に人の尋る
五月ついたちの頃なが雨のやみたる暮つかた螢を見て

一〇あま增せる五月の闇の木隱に螢のみこそ光みえけれ
おなじ月のみかに重之の朝臣のもとへ雨のふればこの雨によりてなむとて

一一日を兼てひくべき物を菖蒲草おひたる沼の汀增りぬ
馬の允かねずみ日頃あはで夏の月のあかき夜きて日ごろ戀しかりつることなどいひて

一二山のはの月まつ程の心にもやゝ思ひまし戀てこし哉
といふにまちつる心もしるくとて

一三霍まよりも立出る月影やある待かひありてみゆる君哉
人々ありて贈答よむに

一四から錦雜にかけてみえつるはさく床夏の花にぞ有ける
ある女かれ〳〵になる程同じ所なる人のもとに物いひにきたるにさりともと思ひけるが後にとていれば、女

一五獨してさしてかりつる蜻舟の過行く方は床しかり鳧
我はのごけく思へど心いられしていへばかうよそ〳〵になりぬると思ふげてかく

一六風早み長閑くも非ぬ浦波にかれ離れ行舟としらなむ
ある女に物いひそめて程もなく田舍へくだりて

おこす日頃はあやしき旅の獨寢をのみなむとて

七睡じくなりての後は手枕もあたらし人に觸うかり鳧

人に馴れてあかつきにいひやる

八程もなく戀る心は何なれや知らでだに社年はへにしか

ある人のもとにいきて酒など飲むにかくきたる

はことさらにはあらじなどいひてたよりなる心

ばへをよめる

九便とは思ざらなむ釣舟の泊をとこそさしてきにしか

男ある人にあだ名たちければなほあるよりはと

てかくいふこの人は齋宮にぞありける

〇あだ波は立ときけ共伊勢の海のかひゐ浦もみでや已なむ

ある所の屏風のゑに櫻の花のさける木の下に水

ながる人の家より女の水くむ所あり

一花咲る木の下水を掬び上て散なば後の影をだにみむ

心かけたる人のもとにいきて物などいふにいら

へもせざりしかばかくいひやる

二音無の里とはみれど聲たてゝ泣べき迄になれる我戀

三月つごもりにかくてゝれぬべきといふに

三夏衣たち隔つべき程近く暮れゆく春の色をしきかな

左大臣殿さぶらひに臺ばん所よりからくだもの

を大きなる枝につくられたるに椎栗などをなら

して出されたりしかば

四なれる身はこゝの物々いかなれば猶隔つ覽唐の果物

三月二十日よひばかり初瀬へまうでむとて女房

に暇こふとて

五栗駒の山の櫻のちらざらむ春の中には歸らざらめや

はじめて女に

六思ひつゝこゝらの年を忍草忍ぶる程につみてける哉

やつはしといふうへわらは人々あまた通はしけ

るに

七八橋は許多の人ぞ通ひける春はすぐれど道はきに鳧

正月ばかりに人々あまたきて酒飲むに前の梅の

花を見ておもしろがる

八香をとむる人も有鳧春夜の何咲花とすさめざりけむ

同じころ大將殿のさぶらひに雪のいたう降るあ

したに折敷に雪を洲濱におきて松と梅の花と植

ゑてだいばん所よりとてなさゝしてあるにかき

つく

九濱松のときはの色に咲まじる花の匂は久しかりけり

にようばうかへしとて、殿

〇六年月の雪積りける濱松は數へ盡さむ世こそしられね

とあるにこと人々に返しませとあれど猶させる

心ざしあらむ人こそとあれば

一六君が代の盡べくも非ぬ長濱は最どもおふる松のちよ哉

同じ頃麗景殿の女御のさぶらひにこれかれもの

ひとくさ取りにやれとあるに紅梅にきじをつけ

て出せるを人々かゝる花はありけりとあれば

二六くる人もなき山里にさく梅は鳥の羽風に折見する哉

二月のなかにあるに院の子日と聞きていかなる

さまによむらむかやうにぞあらむとて

三六野べに出て今日引松の本毎に君にとのみぞちよを貸らむ

おなじ所にて二月十日のころ京の花いかにおも

しろからむと戀しうなりぬなどはらからなる人

に云ひ合せて

四六大方の都の花は咲きぬらむ中にも宿の梅ぞこひしき

齋宮のおりゐ給へるふる宮所のいとあはれにあ

れて人影もみえぬを入りてみれば三月十日ばか

り櫻いとおもしろしはやうさせりける柳の枯れ

たるを見て

五六あだにみし庭の櫻は散すしてしめの柳の色かへて鳧

右補親集爲定卿爲秀卿以二兩自筆本一一字不レ違令レ書レ寫

之一再往加二校合一者也

寛文六丙午初冬仲旬

藤原長能集

昔こかみの河内國さり侍りし時祈り申す事や侍

りけむ丹波守にてかの國の神うに(新元)返まうし

侍りしに物奉れる人の侍りしにかはらけとりて

祈り置し神の心もいちじるく昔の人にあへる今日哉

また昔ことありてこのかみさり侍りしかば候ひ

し東宮の殿上もおりて後右近將監になり侍りし

かばもとの如くに宮に參りて候ひしほどに九月

十五日しんしてうた奉らせ給ひしことはおほかれ

ばとゞめつ歌かくなむ

六いにしへに光違はぬ月清み神の心はさやけかりけり

東宮の太后宮女房におはせ給ふことありきいづ

れの年にかはべりけむ三月三日草餅ひして法師

のかたをつくりて此れに宝つくりて進らせよと

仰せごと侍りしかばかたのやうなる洲濱つくり

てむろのかたはらに木どもなどたてたるに鄰公

のかた作りて進らせしにつけて侍りし

七都にはまつ人あらむ郭公さめぬ枕のやどにしも鳴く

丹波にてわづらふことありしかば久しう京にも

歸らざりし程につれ〴〵にて見ゆるものにつけ

てよみあつめて侍りし歌春のことなりかたをな

に火つけたるを見てこれは何ぞと問へば畑やく

とはこれをなむいふといひしかば

八片山に畑やく男の子しかやかばみ山櫻ほよきて畑やけ

あら田に鷺のゐたるをみて

〇驚たてる汀の澤田あらすかもふるみ乍らに春を暮せる

山寺にまうづる道に木々のもと過ぐるほどに雨

蛙の鳴きしかば

一雨蛙鳴くや楢の知べとて湍なむ物を行くやわがせこ

野にあやしき水のたまりたるをみて

二河上に井堰やすらむこぞの冬かくしは原に岩分る水

松一つたてる岡をみてよめる

三武隈に就く達へり草村のみよのうかみに松立てる岡

草むらあるみやその所の名なり

狩すとて高き山に上りていづくとかいふと問へ

ばいぶき山となむ答ふれば

四高けれど都もみえず登りては唯や下らむいぶ吹の山

夢見さわがしとてよめる

五みやこ人我をこふらし草枕われが旅ねの夢み驚がし

秋小鷹狩にまかりありきしにある田のくろに女

郎花の咲けるをみて

六山賤の田くろに咲る女郎花我獨のみ見るぞあへなき

後に語りしかばあだなは松ざいひしものかへし

七山田女の田畔に立る女郎花人待えたる心ちしけめや

をぐらの少将の御もとにて雨ふりし夜秋夜雨といふ題をよませ給ひしに

七濡々も明けば先みむ宮城野の本荒の萩は萎れしぬ寛

同じ人の石山に詣でゝ夜川霧といふ題を詠ませ給ひしに

九七河霧は河べをこめて立にけり孰こなるらむ衛なく也

ある人の屏風の歌よませ給ひしに人の家の妻戸より男のいづるに草の上の露おほく有明の月殘りしに

一〇八白露に輝く月の影みれば悔しやまだきおきにける哉

いつのやまひにかありけむ家のうちにおきたりし人なくなりし程にさとのとねの申すやう五條にてやく神の祭つかまつるになむある男の五條にはひとゝ〳〵多くおはする中にうたふべき歌ども詠ませ給ふべきことになむやんごとなく侍るといひしかば祭主もこの條にこそはすめまづしくこゝにこそはいはめといひしことどもの怖ろしく覺えしかばもしつとめなき機に神もこそおはせとてよみ申したりしかどもわがよみてければいださぬはたり歌

一一八白妙の豐みてぐらを取持て祝ひそ初むる紫の野にはやうた

一二八今よりは荒ぶる心ましますな花の都にやしろ定めて

また水邊の白菊を

一三八影みしは天つ星也然りとて沈む藻屑を照すこともなし

語らふ人のもとに五月のころほひいきたるに暗夜子規を待つといふ題をよませければ

一四八月みつゝ待だに有るを郭公なぞやねなむと思ける哉

又遊びする所にて待二時鳥一の心を

一五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

一六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

一七八諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

一八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

一九八何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

二〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

二一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

二二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

二三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

二四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

二五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

二六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

二七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

二八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

二九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

三〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

三一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

三二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

三三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

三四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

三五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

三六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

三七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

三八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

三九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

四〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

四一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

四二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

四三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

四四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

四五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

四六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

四七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

四八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

四九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

五〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

五一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

五二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

五三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

五四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

五五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

五六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

五七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

五八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

五九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

六〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

六一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

六二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

六三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

六四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

六五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

六六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

六七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

六八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

六九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

七〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

七一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

七二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

七三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

七四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

七五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

七六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

七七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

七八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

七九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

八〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

八一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

八二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

八三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

八四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

八五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

八六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

八七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

八八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

八九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

九〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

九一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

九二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

九三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

九四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

九五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

九六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

九七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

九八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

九九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

一〇〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

一〇一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

一〇二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

一〇三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

一〇四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

一〇五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

一〇六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

一〇七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

一〇八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

一〇九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

一一〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

一一一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

一一二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

一一三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

一一四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

一一五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

一一六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

一一七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

一一八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

一一九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

一二〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

一二一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

一二二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

一二三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

一二四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

一二五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

一二六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

一二七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

一二八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

一二九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

一三〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

一三一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

一三二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

一三三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

一三四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

一三五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

一三六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

一三七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

一三八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

一三九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

一四〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

一四一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

一四二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

一四三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

一四四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

一四五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

一四六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

一四七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

一四八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

一四九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

一五〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

一五一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

一五二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

一五三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

一五四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

一五五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

一五六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

一五七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

一五八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

一五九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

一六〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

一六一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

一六二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

一六三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

一六四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

一六五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

一六六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

一六七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

一六八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

一六九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

一七〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

一七一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

一七二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

一七三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

一七四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

一七五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

一七六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

一七七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

一七八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

一七九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

一八〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

一八一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

一八二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

一八三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

一八四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

一八五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

一八六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

一八七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

一八八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

一八九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

一九〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

一九一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

一九二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

一九三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

一九四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

一九五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

一九六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

一九七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

一九八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

一九九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

二〇〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

二〇一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

二〇二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

二〇三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

二〇四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

二〇五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

二〇六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

二〇七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

二〇八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

二〇九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

二一〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

二一一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

二一二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

二一三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

二一四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

二一五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

二一六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

二一七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

二一八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

二一九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

二二〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

二二一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

二二二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

二二三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

二二四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

二二五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

二二六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

二二七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

二二八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

二二九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

二三〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

二三一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

二三二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

二三三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

二三四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

二三五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

二三六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

二三七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

二三八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

二三九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

二四〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

二四一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

二四二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

二四三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

二四四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

二四五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

二四六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

二四七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

二四八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

二四九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

二五〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

二五一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

二五二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

二五三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

二五四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

二五五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

二五六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

二五七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

二五八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

二五九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

二六〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

二六一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

二六二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

二六三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

二六四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

二六五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

二六六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

二六七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

二六八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

二六九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

二七〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

二七一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

二七二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

二七三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

二七四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

二七五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

二七六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

二七七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

二七八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

二七九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

二八〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

二八一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

二八二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

二八三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

二八四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

二八五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

二八六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

二八七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

二八八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

二八九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

二九〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

二九一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

二九二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

二九三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

二九四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

二九五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

二九六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

二九七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

二九八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

二九九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

三〇〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

三〇一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

三〇二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

三〇三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

三〇四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

三〇五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

三〇六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

三〇七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

三〇八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

三〇九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

三一〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

三一一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

三一二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

三一三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

三一四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

三一五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

三一六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

三一七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

三一八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

三一九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

三二〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

三二一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

三二二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

三二三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

三二四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

三二五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

三二六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

三二七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

三二八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

三二九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

三三〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

三三一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

三三二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

三三三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

三三四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

三三五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

三三六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

三三七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

三三八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

三三九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

三四〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

三四一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

三四二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

三四三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

三四四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

三四五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

三四六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

三四七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

三四八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

三四九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

三五〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

三五一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

三五二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

三五三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

三五四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

三五五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

三五六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

三五七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

三五八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

三五九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

三六〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

三六一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

三六二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

三六三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

三六四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

三六五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

三六六一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

三六七七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

三六八八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

三六九九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

三七〇八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

三七一一昨日も昨日も待し郭公けふへ鳴かすなそや世中

花山院の春戀といふ題を給へりしかば

三七二七諸共に若菜も摘まむ妹脊山山田の澤の水もぬるめて

三七三八笹の葉の冨る霜よも明してき白つゆ春の袖ぞ濡ぬる

三七四九何もせで明ぬる物をすがのねの永き春日を又や暮さむ

三七五八老らくの聲かれに鳧時鳥來なきとよませはちかゝるべく

また同じころある法師の坊におなじ心を

三七

一何か其身のいるにしも立隠し心の深き山にすませよ
屏風の繪に水無月祓へしたる所
二早蝿なす荒ぶる神も押なべてけふは名越の祓也けり
さがのに前栽ほりにまかりて
三日暮にみれ共飽ず女郎花のべにや今宵旅寝しなまし
花山院に三月小なりし時春の暮惜む心人々よみ
しに
四心うき年にもある哉廿日餘九日と云ふに春は暮ぬる
おなじ夜のあくる曙に
五なけや鳴け山郭公春くれて物寂しかる人のきかくに
同じ院にて障子の繪に橘の咲きたる所
六橘の花のさかりになりにけり山郭公きなけしばなけ
左大辨のはじめの北の方の御もとにおはしはじ
めての比ほひそこに殿ゐしての曉
七若草のいもがきなれの唐衣かはしもあへず明る東雲
上總よりのぼりての春のうまさの家にまかりて
人々酒のみしついでに
八東路の野路の雪まを分けてきて哀都の春はをみる哉
ひとゝせおほ殿の三十講の歌合に
夏夜月
九寝覺する秋もこそあれ天原のどけく照せ夏の夜の月
郭公
〇一ほ里にあかす聞くらむ郭公あるかなきかに鳴渡る也
池邊松
一一君が代の千年の松の深緑さわがぬ水に影はみえつゝ
いづれの年にかありけむ花山院に八月三日歌合
せさせたまはむとてありしかどとまりにしに歌
どもはおの〳〵奉れとおほせられしかば奉りし
七夕
二一袖ひぢて我手に結ぶ水の面に天つ星合の影をみる哉
露
三一さゝ蟹のすがく葉末の淺茅より亂てかゝる白露の玉
花山院三月二十八日花御覽じにありかせ給ふ御
ともにさぶらひて尋殘花といふ題を
四一谷風にみ山の花や殘ありと打ぞ渡れる水もさわぐに
山寺にてあそぶ
五一優婆塞が行かふ山の山櫻けふの行幸の爲にざりける
同じ院の御手づからかみ繪かゝせ給ひて人々に
歌つけさせ給ひしに秋の前栽さき亂れたる紅葉
おもしろき所に
六一佐保姫の玉おちにけり唐錦おれる木の葉の上の白露
ものへ行く人に
七一いにしへも今もあらむや我如く思ひ盡せぬ思する人
石山にて
八一樫の知ぬ山路を尋ぬれば高嶺の續きならせるや誰
女のもとにいきて硯をこひ出でゝ筆の中に
九一と繁み見れば流るゝ薄墨のかすめしとや知る覽や君
女のたちより給へるものきこえむといひたれば
〇二定めてぞ立も寄べき世の人の逢ても逢ぬ物は思はじ
おなじ人に
一二徒然と物思ふ事の盡せぬを苦しき物としるや知すや
女返し
二二思ふらむ同じ心にあらばこそ苦しき物と聞も惱まめ
三二逢事のはに置し露は消にしを世に有とてや人の訪らむ
霧立ちし朝に
四二秋霧は川べにさへぞ立にける眺こなるらむ千鳥鳴也
紅葉散るをみて
五二日暮に見れ共あかぬ紅葉はいかなる山の嵐なるらむ
かはらやとかありし同じ人に
六二早き瀬に上る丈夫こりすまに此夕暮を頼むべらなれ
七二我心散失せぬ菊に譬ふれば花こそ痛く移ろひにけれ
八二し千早振天の岩とを押開き我に片寄れみごもりの神
九二天地の神ふりかけて誓ひてしとなる空に成にける哉
かげつらといひ侍りける人の物いひ侍りける女
にしのびて物いひそめて罷たりけるにきあひ
にければ一品宮の九條にかげつら見むと聞きて
〇三こす波に袖打濡し歸りしも哀と思ひかけつらむやぞ
かへし
一三好思へなる由どだに見ましかば波こし島とみせましやそは
女のもとに扇おとしたるに返したれば
二三獨寢の夜の衣に非ねども返すはつらき物にぞ有ける
白川の院にていてはてたる月の松蔭よりもりた
るに
三三山端の內なる松の枝繁みさやかにみえぬ春の夜の月
紅葉ある人の家の前を渡るとて
四三道行にみれども飽ぬ紅葉哉うべこそ人も家居せりけれ
やたの里にて
五三やたのなる百つや原の東の間も戀すや非ぬ花の都を
こかみにまかりおくれて人々わかれ侍りしには
六三傳殿のもの〳〵上にかきつけて給へりし
七三袋にとも知でや君が遇ぬらむたてば悲しき深草の里
かへし
八三覺束な誰書きつけし言のはぞみれば涙の掻昏しつゝ
花山院の御佛名に菊のつくり花を
九三咲もせず散ともなき菊の花みよの例を頼みてぞふる
早う加茂の祭見侍るとて怪しき人を車にのせて
侍りしを迎へによしまさの朝臣立ちてかく云ひ
侍りし
一四其かみのなかよしと唯知ぬれば人の數とも思ほえぬ哉
かへし
二四理やしか憂身也然あれ共よしまさいらむ人は誰ぞは
三四いづれの年にかありけむ唐きぬ扇など取らせて
遠江にくだり侍りしに
四四世の常に思ふ別の旅ならば心みえなる手向せましや
五四明暮の程もやみると心みに八重立ちこめよ秋の河霧
六四岩波や吉野の紅葉散ぬべし渡と共にも折れぬけふ哉
神無月に鞍馬にまうで侍りしに紅葉のいとをか
しう侍りしかば
七四折ずして行かむ物かは遠近のは山泉山夜はこゆとも

女に
八四日くるれば遙に懸る唐衣さほしかねつる頃にも有哉
ある人のもとにまかりて二三日ばかり音もせで
九四うは動み動みに鳧な淀河の底にも戀ひむ閑からぬに
溺死のついたち
一五一重だに飽ぬ心をいとゞしくやへ重なれる山吹の花
春雨
二五常よりは思事なき身にしあれば七日ふる共何かとを思ふ
ある女に五月ばかりに
三五五月雨はすぎにたりとや足曳の山郭公なく聲もせず
かへし
四五五月雨は世にうき物と郭公鳴き隱れにし聲な聞せそ
また
五五うかりける其梅雨は過にしを今は早來て好と語らむ

かへし

二八風を痛み憚ずまなみに立出て蜑よいかなるめをかみるべき

三〇簑のきる溯垂衣ほさずして明石の浦ぞ侘しかりける

しのものしのもとにまかりて物いはむといひ侍りしに暇なしとていで侍らざりしかば

三一烟だに少したなびけ朝なげに灘の塩やき暇なくともかへし

三二灘の浦に絶ぬ烟は絶ぬ共思はぬ方へみともせもせじ

宮のすけなくなりて後宮にまゐりて侍りしかばいと哀れにて

三三諸共にこそ侍らひし老らくの獨はみえず成て幾世に母の服にて宮に參り侍りしに花をりてと仰せごと侍りし

三四したつえに唉すしも非ず櫻花雫でかけむ墨染の袖

故伊勢守のむすめに物言はむとて母の御息所に

三五老らくのなれる姿の池に生る耻き鰷も我はする哉

但馬守の家に和琴かりに遣すとて

三六徒然の夏の日暮し戀しきにかみの調べもして試みむ

上總にまかりし年ものいひ侍りし女に扇などしてぬさに

三七東路の野路の契は隔つとも扇の風のたよりあらじや

三八行末に神ぞしるらむ云ず共こは大幣の手向ならぬをかへし

三九武藏野の草の縁りを尋見ば便をしもはなどか待べき

傳殿のうへあふぎぬさなど同じく仕り給ふとて

四〇きりそむ扇も早く朽にけむ軒の下葉の露をだにみよかへし

四一別るらむ止るも同じ武藏野の木の下露は風も吹敢ず

物いひ侍りし女我は今は老いにたりこれが中にとてむすめ呼び出して物などいひて侍る程に栗を物のふたに入れて出して侍りしその蓋に書きつけて侍りし

四二駒をかわきて忍ばむふたごより思ふ心は一つ也とて

花山院の歌合にめしゝかば

四三谷河の氷も未消えあへぬに峯の霞はたなびきにけり

鶯

四四我が宿の軒端の梅やさきぬらむ鶯きなく聲聞ゆなり

櫻

四五春たゝばいつしかみむと待物を遲くもさける櫻花哉

四六溯しきに波打しくと見えつるは峯の櫻の影にざりける

四七けふ咲てあすは散ぬる櫻花よは早々に物をこそ思へ

款冬

四八底清く井手の川瀬に影みえて今さかりなる山吹の花

柳

四九花櫻散りしはきのふ青柳のはやまに今日は鶯ぞ鳴く

夏

五〇同じ名を花橘の花ざかり短き夜こそわびしかりけれ

冬

五一節つけし淀の渡をけさみれば解けむ期もなく氷しに鳥

五二獨ぬる人もこそあれ一番ひ鳴く鴛の聲や悲しき

左の大臣の大井におはしまして紅葉を尋ね給ふ心よませ給ひしに

五三いづくにか駒も留めむ紅葉ばの色なる物は心也けり

おなじ殿の歌合に、惜ム夏戀ム月

五四寢覺する秋もこそあれ天の原長閑くて社夏の夜の月やまにて

五五駒をか世に無かれとは思べき忘るゝ人と忘らるゝ身と

五六人の上を我に語りし其がみもそよ添はざりし口つきやかし

一疎からぬなも有る物を妹せ山立ちな隱しそ春の霞も

院の殿上にて四月二日庚申ありけるに卯花隔ニ墻根一といふ題を

二卯花の繁き垣根となるまゝに隣に通ふ道ぞたえぬる

十月ばかりに白川にて山里の戀といふ心を

三戀しさぞ忘れざりける山里は柴みて出し我身なれ共

馬内侍集

後涼殿の御局に上わたらせ給うて梅の花のすくなく咲きたるをけぢめもみえじかしすくなければと仰せられしかば

四盛ありて散らまくいかに惜まゝし心長閑き梅の花哉

同じ年の三月中宮の御かたに花を瓶にさゝせ給ひてこれがちる心よめと仰せられしかば

五散らじとや頼め初むも儚くもとまらぬ花にそふ心哉

七月七日にはすのたまを作りてさりにし人のおこせたれば

六思餘り頼めし中の悔しきは此世ごだにも契らざりし哉

友だちのもとより尼になりなむとありしはいかにといひたれば

七しかすがに悲しき物は世中をうき立つ程の心也けり

さりにし人のもとよりいかにぞ人や語らひたるとあれば

八君がと思はぬ人のつらからば我も心はあくがれなまし

左大將久しく音もし給はで

九あふ事の渚なればや都鳥うらみて跡も絶てとひこぬ

などかそれよりもとあればかへし

一〇訪ぬまは袖朽ぬべし數ならぬ身より餘れる涙こぼれて

その夜たびなる所にきあひて枕もなければ草を結びてしたれば

一一逢ふことはこれや限の旅ならむ草の枕も霜侘にけり

ある公達いまゝでとてすかせば

一二頼めくる君しつらくはよもの海に身も投つべき心地すれ

返し

一三挿はへて簪の花の其折もあだなる物とみえにし物を

左大將氷を包みて身にしみてなむおもふとあれば

一四逢事の滯るまはいか計身にさへしみて歎くとかきく

人をよせねばしひていりきたるが侘しければちかごをたてゝ後にのはむとてやりたれば一日ばかりありて

一五祈りくる我が片岡のちかどを遲く糺の神にも有る哉

返し

一六逢ふとを片岡とのみ思ふ身は何に糺の神にかくらむ

文おこする男の秋と頼めたるころ長月ばかり煩らひていひおこせたる

一七命あらばさりともさのみ頼たる秋待附けむ心ち社せね

左大臣氷したるかたなど書きたる扇をわが心變りなばおこせよとのたまひしかば奉るとて凍り

たる池のつらに女をゐて烟を立たせてかく
八二もえ出る胸の思は高けれどなみだの河は猶凍りけり
十月ばかりにあからさまにきたる人の歸りなむ
とするに時雨のすこしすれば
九二掻曇れしぐるゝとならば神無月景色空なる人や止ると
師走二つありし年忍びてやみなむまたはなこそ
といひし人のうるふ月はいかゞ思ふといひたれ
ば
〇三みそかにも有べき物を雪降るに袂の潤ふ月の侘しさ
人多く語らふとてある公達のもとより
一三色々の花の中にも女郎花いかなる枝に露とまるらむ
女どもだちの御許に久しくとはぬ事といひて
二三つらからば偖も已なで春の日の恨ま欲き螢にも有哉
返し
三三つらしてふ心有鳧春の日のわかうらなきに思ける哉
しぞくなりし人のある男に語らはれてこれなむ
一つ松とておこせたれば
四三一つ松結び鳧とも今ぞしるとくる心は常磐ならじを
左の大將殿かへり給ひて雨ふるにははるゝと聞き
給ひて
五三東の間も戀しき人はつれ〴〵と詠めに物や思增らむ
久しくありておぼしいでゝ
六三程ふれば忘れやしにし春雨のふるとのみぞ我は戀しき
返し
七三いとゞしく濡のみ增る衣手に雨ふるとを何にかく覧
むげに音づれ給はぬ頃
八三蜘手さへかき絶に鳧さゝ蟹の命を今は何にかけまし
九三歎きつゝふれ共數に非ぬみは如何はすべき賤の苧環
かへし
〇四斯て社よそにふれ共小蟹の如何に戀しき物とかはしる
雪のいみじく降るにおはして曉にかくきならひ
てこそはいかゞ想ふべきとのたまへば
一四忘れなば越路の雪の跡絶えてきゆる例になりぬ計ぞ
返し
二四年ふとも消るよも非じ白雪の千年の松に降し積れば
かくて忍びてあるほどにえ逢はで男君
三四今更に何か侘べき君ならで此よのとは思はざりしを
返し

何か其露の絆しに非ぬみも君止るべき此世ならねば
四四山里なる人に雪のふる日
五四降ればかつ消ぬる雪としり乍ら何山里の強て戀しき
かゝるべきとに非ずといひて逢はぬ人のもとよ
り長月ばかりにまだらなる草ばをおこせたれば
六四人心まだらにみゆる草なれば枯ぬる人の印なるべし
かくてその冬うちとけてもあはざりければ年還
りて二月ついたち頃に蕾みたる花にさして
七四あだにはと賴し風し荒からば盛もなくて花や散なむ
返し
八四風も荒く花も程なく散行かば憂身ないかに成ねとか思ふ
もとの人など聞きつけて騒がしく得逢はぬなり
けり同じ人心うきことや聞きけむうしたれば女
もむづかりて逢はざりければ五月五日に、男
九四憂事をいつ忘れてか菖蒲草たえぬ下根を玉ゐ侍らむ
返し
〇五忘られぬ憂に附ても菖蒲草いかに下根の長らめやは
かくてあるにさはれなどいふ頃紅の花を男の見
せにおこせたれば
一五苦しとて色に出ればあさえ鳧染て悔しき花をみる哉
五月闇の御まへに雨いみじく降るに郭公のなき
て渡れば人に歌よませ給ひしに
二五とぶ方ぞまづ知られける郭公いかに鳴音ぞ雨宿りせで
男の去文字八字よむ頃いひにおこせたるが例な
らずやありけむ
三五知初めしとや悔しき忍草しる人もなし絶やしなまし
この男よをかねたる夜夢にやみえけむいひたる
に
四五思つゝぬる夜の夢を知ぬ身は胸に焚戀覚だにもせよ
五五長閑なる春の浦にもすがためは猶小搖のいそがしやなぞ
ある男のもとより
六五なきたむる涙の玉の衣手に包む人めに程ぞへにける
つかひあしくしてみつけられてこひたる人さり
ぬと聞きてこの君
七五人しれずぬれ渡る身は涙川いはれの池を哀とぞ思ふ
返し
八五おもほえず涙の川に濡衣を我より外に誰かきるべき
龍田山に二日ばかりありて龍田山もいかゞとて
返し

吹風にけにけになむ數ぞ女郎花忍びにかゝる露をしらなむ
とあれば
〇六さがのいろなるこゝろとやきく
といひしかば
女郎花包むわが身はのべなれや
おなじき九月ばかりに
一六恵ふ人やゝ遲ぬとや菊の花雨を聞きても露に濡らむ
ほかにとて返しつなどかあるとはのいひたりし
かばみづからきたるにあはれば九月九日菊にさ
して
二六菊の上の露をばおきて涙こそわれたの衣の袖も乾かね
忍びたりし人のもとより
三六朝ごとに流るゝ床の枕我もうきゝの心ちのみして
きり〴〵すの鳴きしをひとりごとに
四六なきなたつ袖もありしを葦草露けしとなに歎くらむ
五六月五日にこのきみ
五六鵙いつかと待し菖蒲草今日もいかなるねをか鳴らむ
かへし
六六五月雨の空くもらする郭公ときに鳴音は人も咎めず
その夜きたるにおくにゐる影はみえでなしとて
歸したれば
七六ほのみえし月を戀つゝ歸るさの雲路の波に濡し袖かも
今は限りといひたりしかば志賀の浦にとのみい
ひやる三日ばかりありて
八六志賀の浦に賴む涙は盡せねどせきも留めぬ逢坂の關
返しはせで暫しありて石山へ詣づときゝて
九六逢坂の關山こゆる今日さへや猶涙の盡せざるらむ
といひたりしかば
〇七白露の末すゑこゆる逢坂のいと春雨に袖ぞ濡れける
また七月七日に
一七今日とだに契ぬ中は逢坂を雲ゐにとのみ聞渡る哉
返し
二七逢事を今日とな騒そ鵲の橋聞くだにもゆゝしき物を
人のきたるにわたのころもと賴めやしけむ
三七流行く言の葉にこそ白露の命をかけておき返りつれ
これを聞きてあきのふの朝臣
四七五月山み山隱れの草木とや言のはだにも騒て散こぬ
又ある男しのぶ草につけて

忍草しのぶやつまと云ながら夜深く露のおける袖哉
返し
物思ふに秋は深くぞ成にける軒の葱の色かはるまで
この男けさ歸りつる道に郭公の鳴きつるといへば
心みに空に通ひて時鳥人のためなる音こそなかるれ
大風ふきたる夙めて檜皮にさしてある男の許に
今朝みれば止れる宿も無りけり葱の草も如何成にし
男の遠き所へいくとて
草枕旅寢の衣かわかずば夢にもつげむ思ひおこせよ
旅寢の所より
猶ぬる宿にふすぶる蚊遣火のさよ更方に燃變りつゝ
久しく逢はで歸參にさして
逢ふことはから撫子のはるけくて思ひ煩ふ常夏の花
つゝむとありて文なども通はぬ程かきあつめておこせたる
井堰する岩まの水の打忍び忍衆でぞねはなかれぬる
いかなれば知ぬに生る浮萍くるしや心人しれずのみ
浮草に枕やすらむ鴛鳥の夜は長閑きいやはねらるゝ
我戀に比べてしがな雨ふれば庭の泡沫數をかぞへて
海覺には聞もしつらむ終夜雨の聲には劣りやはする
返し
五月雨に夜一夜雨は忍ぶれどそれより外の聲はせざりき
齋院より卯杖を賜へれば
歎きとてほと〳〵思ふ斧の音は祝の杖を切にぞ有ける
かへし
斧の音も尋ねざりせば玉椿祝ひの杖を爭で知らまし
人のもとに枯れたる紅葉の枝をやりたれば
籍枯の仰ぐ歎の枝なれば深き色とはみえずぞ有ける
左大將ちかごと文をおこせ給うてかはりの文おこせよとせめ給ひしかば
千早ぶる賀茂の社の神もきけ君忘れずば我も忘れじ
やすのぶ文おこすれどいひも放たねばうりにかきて
瓜生山其程とのみ頼めつゝ久しくなるはつらき業哉
左大將兵衛のすけにておはせしとき卯月に物をいひそめ給うて
郭公聲をばきけど花のえにまだ踏なれぬ物を社思へ
返しかしはぎのわかきはにさして
際に皆おり立ちぬ共はを若みわが刈初し宿の蒿蒲は
五月の長雨に蒿蒲のおちたるを宮御覽じてあはれ歌よめと仰せられしかば
久しくこねば云ひやる
蒿蒲草馴れの澤にねを止て身をば誰めに朽たし果覽
女ある人のもとに物いふにつゝめば柿の下葉にかきておこせたる
露とけて思ひもおかじ物故に下に焦れて何か忍ぶる
芋のはに露のとまれるを
難面くて芋が下葉に置露はいかに止れる物とかは知
男貝おこすとて
數ならで千尋の濱に拾つゝ貝や有とぞ今日を待つる
と聞きてもとよりある人あしくするにむげに逢はねばいひおこせたりし
中空にかくてや絕るさゝ蟹のいと淺ましき心也けり
人のこむとてこざりしかば風の吹きしに
頼め置く君こぬ宿の風の音は夜となればぞ烈しかりける
こむといひし人きて夜一夜ありけれど逢はでつとめてなどこすなりにしと云ひやりたれば
終夜田子の浦波寄せし音をふじの高嶺に聞ざりけるに
忍ぶる人にいひ遣しける
起し火の炭をば灰に隱しつゝ埋まれぬ名の戀を社思へ
兵衛のすけなる人かたらふとみな人きゝてのち
中將に文通はしければ人の聞きていひたる
柏木はあめも人めも繁しとて三笠の山に踏通ふとか
更に忘れじと契りたる人にたえてある所をだに
知らせねば
行通ふ跡たえぬるか水莖の流れてとかや人の頼めし
人を語らひてあふをりあはぬ折ありしかば扇の
はなしておきたるに書きておこせたりし
月草のうつし心やいかならむ村なしくも成ぬべき哉
語らひて年頃ありつる人の夕さり人のむこになりぬと聞きて筏のかたをつくりて書きてやる
大井川人めもらさぬ今日やさは袖の筏士葬を待らむ
正月に空のけしきなどもよしよめとみやの仰せられしかば
浦毎に蜜は見らむ初春のけぬるき風に波やなごまむ
男うらみて久しくおとせで
つらからば戀しきとは忘なで添てはなどか靜心なき
返し
假にても心を替てみましかば今は長閑に成もしなまし
久しくこねば云ひやる
嫉捨の月はいかにか出たりし慰め難き人はみるらむ
この男つゝみてさるべき折々あふ程に石山へ參ると聞きてかへりて三月ばかりに
逢坂の關のまに〳〵花をみて春のさけるを程も知られず
返し
諸共に逢とも無て逢坂の關のまに〳〵花をみにけむ
人語らふときゝ給ひて中の關白道隆
怪しきは濡ぬ人なき染川の懸らぬ袖も朽果てぬべし
みちの國のかみこうりをたちぬるつぎのなりとて歌は忘れて侍らざりけり返し
霧深く鳴く鹿をみよ瓜生野のげにかりもの心也鳧
公任の君こぞの春やりたりし梅の花を文にさしておこせたれば
むかしに似たる梅の花かな
といひたりしかば
梅花昔のとをうたがへど空のけしきの變れるやなぞ
さねかたの君えてきたり此の文ありけるを見て
羨まし散くる跡や都鳥ならひありせば後れましやは
すけゆき扇をおこせてこれはいかに忘れやしにしと云ひやりたれば
時鳥忘らむこそ卯の花の影とそふべき我と知すや
御禊の日しのびて語らふ人のもとより
後ろめた神も聞入ぬとなれば我を忘るゝ御禊しつ覽
ある人心うきとやありけむ
人心よしみつ潮の今よりは我つらくとも田子の浦波
中の關白殿おはせむとのたまひてまへわたり橘のかざりおほせてすぎ給ひぬれば
こち風にこのみしるくて橘の頼めしとの過ぬめる哉
つれ〴〵なりし日人の文おこせるに
春日野に誰か待とは告つらむけふの子日に鶯のなく
かくて得逢はぬ風ふくつとめて
旭こす草のゝ本に家ゐしてすはへる日は殊に悲しも
此の男おなじ人を田舎へゐていきて京へ上るとて雪ふる日

三山高み雪ふる里に君をおきて覺束なくも思ふべき哉
　此の男京より文おこせたるに雪なむいみじう降
　ると云ひおこせたれば
二我思ひ都の風と吹てしは降積む雪はあらじとをしれ
　日頃ありて夢になむみつるいかゞといひたれば
三人知れずれられぬ床の寂しさを誰とか夜の夢とみつ覺
　るゐなる人のせいすれば逢はでのみあるに、男
四暮いかにいかにしてかは大井川井堰の水はもりぬべしやは
　返し
七大井河井堰に包む我なれやけふ暮方に歎きをぞする
　劣りたる男柳に文をさしておこせたれば
六吹風に靡くとや聞く青柳のいと淺ましく思ひよる哉
　わが心とかれにし人正月に
九別れては春に社又成にけれ年は唯にぞ立らざりける
　又たれも〳〵離れて年頃になりて三月ばかりに
　雨ふる日
〇三思ひきや春の詠の長閑きに君を雲居になさむ物とは
　右大將ものし給ひての頃いき所も知らすほかに
　あれば
一忍ぶれば空に涙もきり滿て戀しき人やいとゝなる覺
　人のゐくがれてこざりし頃ある所に松蟲のなき
　ければ
二君をのみ松蟲のねの有物を孰れの野べの露にぬる覺
　五節の所に忍びてあるに大とのゝ少將にておは
　せし時見つけ給ひてかゝることなどありしかば
三三笠山日影眩き影みるにさし離れすば斯らましやは
　ときこえしかば
四つらしと云ふ君も理忘られて人めを包む我な怨みそ
　同じ所にてある男
五仄かにもみばや慰むと思ひしに心をしらぬ心也けり
　此の男文おこするを女いみじくいふと聞きて
六岸近み動かぬ岩はつれなきに何と聞くらむ波の下水
　しをるゝもといひたれば
七かくれ共動かぬ岸の岩の上にいさ白波の碎けやはする
　なほきせよとあるに二日ばかりありてわたおこ
　せたれば
八志づのえの松にも非す思ひより餘りな懸そ岸の藤波
　ある人三月ばかり遠き所より

九井手近きいもぬ宿の寂しきに最ど蛙も聲は立つゝ
　またあき
〇一秋風の吹けば亂るゝ花薄むすびし心われにつげなむ
　人ををせざりしかば
一敷妙に臥みふさすみ歎く共猶うかりける身をいかゞせむ
　伊勢へくだる人みちより
二鈴鹿山越も習ぬ道すがら戀るはいかに侘しとかしる
　忍びたる人と居らばいかゞ思ふ限りなめりかし
　と云へば
三人間はゞいかゞ答へむ涙だに心してやは袖を濡さぬ
　雨ふる日いみじくふるとも必すまゐらむとあれ
　ばさらなりとて
四泣れつゝ忍ぶる袖に比ぶればけふ降暮す雨は雨かは
　つゝむことありそ逢はでのみあるに津の國へな
　むまかりぬる有るやうに從ひてかれよりも參ら
　むといひたれば
五忍びてもいかゞはすべき蘆の屋の其八重葺の隙も有じを
　ゐたる前より人のいきけるに驚きこゆる程なれ
　ば覺束なくてなむまかると云ひいれたれば
六侍侘て立てつる聲に喚子鳥雲居ながらも答へつる哉
　といはせたれば返し
七呼子鳥雛を求めてなくならばよそなる聲に慰めもせよ
　志のびたる人かはたけを植るよとておこせたれ
　ば
八風ふけば梢片よる河竹のよゝに馴なばねぞ絕ぬべき
　粟田の右の大殿道綱夜ふかく歸らせ給ひて日か
　げを給はせたりしかば御返り聞えさせし
九包め共憂に人めの惜ければ明けば日影の眩ゆからまし
　もりといふ所を繪にかきてよみしかば
〇二春は花あきは紅葉とさそはれて人も立寄る衣手の森
　龜のかたを作りてこにうす物をはりて螽をいと
　多くこめたりさぶらふ人々に詠ませ給ひし
一五君が代を龜のおなじにみすとてや河べの螽光ます覺
　十月ばかりに思へることよみてと宮より仰せら
　れしかば
二五覺覺して誰か聞らむ此頃の木葉に懸るよはの時雨を
　年頃もろともにありふる人よそになりて年ごと
　に人のもてきける瓜をさゝげる元加ことありける

三五年毎に知す顔なる瓜作りかもりしつる秋にも有哉
　中絕えたる人あじろになむ日頃ありとて紅葉に
　ひをを包みておこせたるに
四五日をへてもいかに訪らむ網代木に夜忍出る人はとにて
　假初に思ひし人のまめやかに語らふ人いできぬ
　と聞きて移ろひたる萩の下葉に書きて
五六移ろふは下葉計りとみし程に頓て秋にも成にける哉
　人のこまつといふ所に侍りしに雪のいたう降り
　しかば遣はし
六朝ぼらけ思遣る哉程もなき小松は雪に埋もれぬらむ
　返し
七五埋む共雪は消なむ春きなば訪べき人のなきを社思へ
　遠き所よりたよりあるにとはぬ人に
八五年ふともすぐす便をみざりせば忘ぬ哉と猶頼まゝし
　さるべき所に夜な〳〵とのゐして曉にはくるも
　のゝほかにとまりたりければ
九五けさみれば露結ばゝる朝氷とくる物とも頼みける哉
　忍びたる所にある人文の返りごとせねば歌を得
　詠まぬなめりとて難波津を書きておこせたれば
〇六冬籠り忍ぶとすれば難波津に咲や木花ちりも社すれ
　ゐしたる人のもとに文をやりたりければ返事も
　せぬに
一九山彦も答へぬ春の呼子鳥なけとや聲の絕えぬ限りは
　昔みける人こゆみをたよりにつけて今みづから
　とりにこむと云ひけるが大方にきたれどまだみ
　えねば
二六日暮しにまち試みむ梓弓はからす人の思ひいでよと
　返し
三六ひぐらしに春の恨も梓弓おもひためたるつらき心を
　かたらふ人多かる男のとほき所なりけるがのぼ
　るときくにまだみかありと聞きて
四六今宵きみいづれの里の月をみて都に誰を思ひ出らむ
　かへし
五六宿毎にねぬよの月は詠れど共にみし夜の影はせざりき
　よにそらごとをいはれて歎くに文おこせがたく
　待つ人のたえて音づれねば
六六憂かりける身延の浦の庵せ貝空き名のみ立は聞つや

待つ人なきはえ逢ふまじきことを人々いひて此
の頃しも日もくるゝことなどいひて
七秋のみ千間も無くて此頃の朝日にくるゝ空をみる哉
人のもとより今宵はいきやすべきとあれば
八よしさらば戀しきとは忍つゝ堪ずば堪ぬ命と思はむ
返し
九戀しさの忍ぶ計にあらばこそしぬる待間の命思はめ
今宵かならずこむとて來ぬ人のもとに
〇七休らはでねなましものをさよ更て傾く迄の月をみし哉
四月つごもりがたに昔さぶらひし友だちのなき
ことをいひたれば
一七今更に忍びぞわぶる時鳥もとつ人よとねのみ泣れて
同じ所にすゑてたましづめしてまゐらすとて
二七身から社とにも斯にもあくがれめ通む魂の緒絶だにす
なとて參らせたれば
三七世にも皆あくがれにたる玉なれば裏なきつまに止る物かは
語らふ人のあはぬ頃郭公の鳴きつるは聞きつや
といひたれば
四七心のみ空になりつる郭公人の爲なる音こそなかるれ
昔みし友だちのかもの祭の次第しに出でゝかく
なむ參りたるといひたれば
五七君しもあれ道の往來も定む覽過ぬる人は且忘れつゝ
鞍馬に參りたるに鳥居のもとに櫻いと盛りなる
を見すべき人もがなと思ふにもあかねば
六七都にもなべてはいはじ櫻花誰に匂ひをまづ語らまし
瀧を落せばいろ〳〵の花うきたり
七七山高み亂れて落る瀧の糸はあや定まらぬ錦なりけり
つゝじ椿の花さきたる所にて
八七鞍馬山覺束なしと人とはゞ名には遠へる道と答へむ
昔見し所の花をある所に植ゑさせ給ひたりけれ
ば參りたれば
九七宿かへて匂ひおとるな梅の花昔忘れぬ人もある世に
またある人
〇八梅の花いく年春を隔てゝか昔忘れぬ今日にあふらむ
まゐりたる人
一八知る人に匂ひなかけそ梅の花昔のともいかで忍ばむ
昔の友だちのもとより大きなる橘を文の中にい
れて
二八類ひなき戀する人のあたりには花橘もか計りやなる
かへし
三八思ひきや花橘の香ばかりも戀しき人にならむ物とは
正月ついたちの日今は年頃とも聞えつべしとい
ひたれば
四八年はかく改たまるめる世中に雪降增る身をいかにせむ
つゝむとのみある人に
五八峯の雪谷の氷にとぢられて跡みえがたき三輪の山本
返し
三輪の山印の杉もみえぬまで降積む雪に跡絶でやは
ある人この人を語らはむと人にもいひ文をもお
こせむと思ひけるほどにそゝろなる公達なんどの
女語らふと聞きて菊にさして
六八散すとて菊に心を懸たれば花こそ痛く移ろひにけれ
友だちのもとなりしその人に離れて又の年中の
子の日の松を結びて今日は中の子の日とは知ら
すやとて
七八誰を今日待とか云む斯計忘るゝ中のねたげなるよに
始のやうにもあらずなり侍る人の寢どころに扇
を忘れたるやるとて
八八朝まだき荒行く床に我を置て又忘らるゝ習ひ也けり
暫し頼むべくもあらぬ人の許に
〇九散る花に枕定むとみし夢は明る夜頃をいくよ數へむ
七月七日けふの空のけしきいかゞ見るといひた
れば
一九歎きつゝ天の川波詠むれば絶まがちなる雲ぞ渡れる
おなじ日をみなへしを植ゑよとて人のおこせた
れば
二九彦星に忍ぶる人やかよふらむ今日しも匂ふ女郎花哉
いたく荒れたる人の家に紅葉ちりて人もをさを
さなきが菊おもしろく立てり女ながめたるに
三九木枯のしげる紅葉に跡たえて人もみえこぬ宿の白菊
いみじき事ありともよそ〳〵にならじと契りけ
る人さしもなくなりておかせたる手筥をさへに
こひにおこせたればやるとて
四九玉櫛笥身はよそ〳〵になりぬ其二人契りしな忘れそ
人ようさりこむとてこざりしを其の儀りをも知
らむとてようさりは必すとあるに
三七待程の過のみ行けば大井川頼むる暮も如何とぞ思ふ
時々みゆる人うまやそこに入りたるといひたれ
ば
八九あくがれて行へも知ぬ春駒のなも影ならでみゆるこそなき
ある所の御まへに菊あはせ給ふ　あるもの〻
月あかきにこひありくをみて
七九月影に紛ふとや思ふ菊の花移ろふ色はとにもある哉
はらからなる人のはゝきといふ所にて香もせね
ば假につけて
八九ゆかば社逢でもあらめ帚木のありと計は音づれよ君
なかあしくなりし人秋になりて此の頃はいかに
といひたれば
九九君しあれば寢覺の風も知ざりき秋珍しき頃にも有哉
返し
〇〇君により人を戀しとしられば君を哀と思初めつる
ゆのこ島といふ所を旬のかみにすゑて
一〇行返り長閑ならねばこし方の忍ぶ計に待つ人もなし
世の中のいとはかなき頃昔さぶらひし所に
二〇いかゞせむいかゞ云まし蜩の啼ても餘るよの儚さを
さるべき所にて忍びてよる〳〵きける人まかで
てつとめて
三〇秋近き萩の下葉の懸てだにもりにし露ぞ夜は露けき
返し
四〇かげ草の下葉に懸る露にても戀しといかに思出けむ
ものへ行く人にかゝみとらすとて
五〇みなれよと添る鏡の影だにも曇らですぐせ人忘る共
東三條の花を瑠璃の壺にさしてたのごひのはこ
にすゑてこれは散りにけるをあたらしくさして
參らせよとて少納言の藏人に遣し〻
六〇櫻ばな誰に心を通はしていかに匂をとゞめざるらむ
さぶらひし人のほかなるに文給ふとて
七〇をぐめの内の同じ忌垣の都鳥馴にし友を尋ねてぞとふ
おろかならず契りせる中いかゞありけむ、男
八〇君も云ひ我も契し言の葉は斯しも枯む物とやはみし
ゐに女の物へまうでつる山路に色々の花ちるを
とゞまりて見る
九〇色々の花の心をちらざらば故郷ありと思はましやは
此の頃諸共にある人つどめての萩のけしきなん

どいと哀れなる必すおきて見むと契りてみるつとめて霜露といふものなし前栽どもよく乾きたり憂きこと限なくて

萩の上の枝もたわゝ置露を露けさ爭で乾きたる覺

この曉にとくおきむこれは遲きなりとて起きよといへば

一結置てとくと思ふ共小蟹のいかに纏はむ露ならぬ身は

物語りする人いづくにかあらむわがやうに絕えてねぬ人はあらじものを誰と語らはむと思ひつゝねられぬに夜ふけて郭公のこゑ一たび鳴きてやみぬればいづこならむと覺えて

二宿々になくねは夢か郭公ねぬ我ばかりきく由もがな

やんごとなき人の御文一たびありて又おとづれもなければ五月つごもり頃に

三とぶ螢まことの戀にあらねども光ゆゝしき夕闇の空

衰へはてゝうぢ院に住むに歸る雁をきゝて

四といまらむ心ぞみえぬ歸る雁花の盛を人にかたるな

殿上にてなき名を云ひ立てければ

五燃炭れ萩の燒野の煙る上に見えぬ無名をおほすなる哉

惠慶法師集

初の春

一あさりする與謝の蜑人誇るらむ浦風ぬるく霞渡れり

二月二日相坂こゆる程に鶯の聲を聞く

二故郷へ行く人あらば言づてむ今日鶯の初音きゝつと

三關守に口がためてぞ我は行くなきぬと告ぐな山の鶯

ある所に扉風のゑに正月山里に梅の花ある家を男かいまみたり

四我宿の梅は常磐に匂はなむ人め戀しと思はざるべき

二月山里に櫻ある所を男見る

五みやこにも花なきならず山櫻尋ねて惜む心知らなむ

三月藤柳ある家を男ゆく

六こむらさき柳の糸によりませて花の錦は我宿のもの

四月神まつる所郭公なく

二神まつるしるしありても時鳥けふ初聲を待出たる哉

五月菖蒲ふける所を男馬ひかせて見る

三我駒の常はすさめぬ菖蒲草引並べては今日社は見れ

六月よる宿の戸あけて眺めたる所

四明てぬるかひ社無れ我宿の槇の板戸に人し入らねば

七月七夕まつりて盥に水いれてかげみる

五天の河影を宿せる水鏡たなばたつ女の逢瀨しらせよ

八月相坂に駒迎

六望月の駒ひく時は逢坂の木の下闇も見えずぞ有ける

九月志賀の山越

七霧も立ち紅葉も散れる瓜生山越え惑ぬる今日にも有哉

十月山里に臨するて人きたり

八狩にくる人なかりせば昔みし都の事を爭できかまし

十一月あれたる女琴ひく男きてとひたり

九露霜もとまらぬ宿に最ぞしく彈琴の音に袖ぞ濡ぬる

（缺脫）

十こぐ船の岸の藤波高ければ先心をぞよすべかりける

花おもしろう咲きてすのこに男あり

一訪ざりし人も訪べく我宿の花の盛をすぐさずもがな

海のほとりの社にまづる人あり

二思ふ事みつ潮よする浦にます神のみ社仕へてぞゆく

山里の垣根に卯の花咲きて女みる

三卯花の盛となれば山里のかた蔭かする住ひをぞする

初秋

四秋といへば契置てや結ぶらむ淺茅が原の今朝の白露

五秋の野の花に心をよせつゝぞ駒促さぬ今日にも有哉

人の家に女どもきたり

六我宿の物とのみ見ば秋の夜の月夜よしとも人に告まし

月夜に笛ふきて男ゆく

七月影に笛のね痛くすみぬ也まだねぬ秋のよや更ぬ覽

山里の人の家に菊の花あるじ折りてつくろふ

八霜雪にあてぬさきより菊の花綺ふ人の袖ぞつゆけき

子日の所

九二葉より相生してもみてしがなけふ契つるのべの小松と

人の家の遣水のほとりに山吹さきたる

〇千年すむ水に影さす山吹の花をのどかに惜むべき哉

人の家に櫻さきたり

一櫻花人の心の劒なさはあくともいはじ千年みるとも

やり水のつらに山吹の多くさけり水鳥遊ぶ

二水鳥の流るゝ河の山吹は影をのみこそ厭ふべらなれ

月おもしろき夜紅葉をみて人々ゐたり

三紅葉を惜む心のわりなきにいかにせよとか秋夜の月

秋の月山にしかなく

四秋夜の月見るだにも飽なくに鹿の音さへも鳴添ふる哉

秋山のほとりに人々ゆきて紅葉みる

五紅葉みに草の枕や結ぶべき今日も暮なばあすもすぐさむ

田のほとりにかりする人あり

六早苗とり己が作らぬ秋田を刈にきぬとや田主咎めむ

正月ついたちごろ人々諸共に初瀨に參る道にて

春日野をみやりて

七霞わけ若菜摘にや出らまし春日の野べも近づきに鳥

同じ國近江へ罷る道に鏡の山の本に雨に逢ひて

八鏡山こゆる今日しも春雨の降ぬべかりける

背人の家ありける所の前なりける櫻のいとおもしろかりけるを見て

九あさぢ原ぬしなき宿の櫻花心やすくや風に散るらむ

人どもろともに市原野の子日

〇二葉なる野べの小松によそへて木高くならむ蔭を社まで

大和にまかるにねでと云ふ所いとおもしろし

一山吹の花の盛にねでにきてこの里人となりぬべき哉

中務の君山里にて春の歌十ありけるをみる其

の題は峯の霞、谷の鶯、殘りの雪、春の風、櫻遲し

二なきぬやと立居まちつる鶯は谷の內より聲を聞つる

殘りの雪

三春立て殘りの雪は消ぬ共花を形見にみてもへぬべし

春風

四あら玉の一夜計を隔つるに風の心ぞこよなかりける

梅

五にほふから（重複）

櫻おそし

六山櫻まつに心を盡しては惜まむ程もいかにせよとぞ

柳

七春くれば梢もしらず青柳のいとに心をよせみだる哉

をかの松

八語らはむ人もなき哉山里は岡の松風そよりほかには

九五春を淺み旅の枕を結ぶべき草葉も若き頃にもある哉
こひ
〇六古郷をこふる袂は岸近みおつる山水いづれともなし
ある所に櫻惜むに
一六櫻花待とせしまに春くればならぬ事も思ひやはする
山里に人の許にて櫻のちるをみて
二六櫻散春の山べはうかり鳥世を遁れにとこしかひもなく
年還りて二月になるまで待つ人の音づれねば云
ひやる
三六百千鳥聲の限は鳴きふりぬまだ音信れぬ物は君のみ
かうぶりやなき
四六青柳の糸は綠にあるものを眺れかあけの衣なるらむ
東山に花見にありくとて山櫻
五六山櫻近くみむとの心にて今日は霞にかくまるゝかな
稻荷に歌よみて奉るとてしもの社に
六六稻荷のやみつの玉垣打たゝきわが願言を神も答へよ
なかのやしろ
七六稻荷山みつすきなかに增鏡我とたてゝ賴むかひあれ
かみのやしろ
八六思ふ事ならざらめやは千早振神のみ前のみくま草也
深き山にすむ聖の許にまかりて尋ぬるにあんし
ちの戸をとぢて人もなければ歸るとて書きつく
九六草の庵り指てきつれど君まさで歸るみ山の道の露けさ
ひじり返し
〇七荒果てゝ風も拂はぬ草の庵我はなく共露はもりけむ
ある所にかたわきて草合するに
一七一種なくて無物草は生に鳧茨といふ事は有じとぞ思ふ
一日郭公まつ心
二七鳴す共鳴らむと社まだれけれ山時鳥けふはいつぞは
神なびの杜の前をわたる
三七神なびの杜のありすの郭公一聲きかでゆきや過けむ
語らふ人の深草といふ所にありと聞きて遣す
四七深草の家も絶ぬとせし程に袂さへこそ露けかりけれ
返し
五七淺かりし人の心は深草の中を分けては訪じとぞ思ふ
ある人の鏡のはこに
六七旭さす鏡の山は曇らねど峯の朝霧たえずもあらなむ
語らふ人筑紫にくだりて年頃おとづれでたより
につけて云へる
七七花鳥をみても君しも忘れぬは都の方の人にぞ有ける
返し
八七都鳥君に後れし春よりも聲なきよわる我と知らずや
おほしまの鳴門といふ所にて潮みちまさりて
九七都にと急ぐかひなく大島の灘のかけぢは潮滿にけり
語らふ人のとほ國へまかるに銀とらすとて
〇八別るれど影をばそへつます鏡とし月ふとも思忘るな
五月五日めづらしき所にまかりて
一八香をとめて訪人も有や菖蒲草怪く駒のすさめざりける
六月人海松院に涼みにまかりたる
二八大井河岸に影さす海松の風にやせゝの波も立つらむ
梅津にて鵜舟のかゞりをみて
三八梅津河ともす鵜舟の篝火に底の水屑も隱れざりけり
七月七夕
四八七夕のあふ夜のかずを徒に過す月日になす由もがな
八月遠くまかる人に扇をとらすとて
五八扇とて假に羽風を吹程に別れむ程やつくべかりける
同じ人かりの聲をまつ
六八荻の葉も稍打戰ぐ程なるをなどか雁がね音無るらむ
同じ頃河原の院にて、あれたる心
七八すだきけむ昔の人もなき宿に唯影するは秋の夜の月
蟲のね
八八袂がへする物にもが蟲の聲衣の袖もそぼち果てぬる
東山にて月あかき夜
九八久方は手にとる計り成に鳧雲のゐるてふ寺に宿りて
蛬の聲
〇九唐衣夜風涼しくなる故にきり〳〵すさへ鳴亂れつゝ
鳥のこのやうなる瓜をある所に奉るとて
一九我君のますべき千世の印には鶴のこに社瓜も成けれ
閑夏をある所にたてまつる
二九山賤の垣ほ作らにみるよりは色優るべき宿に移さむ
返し
三九宿わかず露だに染むる物ならば元の垣ほの色は變じ
或るところに瓜やるとて
四九瓜生山秋立鹿の假もりに露きめをもみつるけさ哉
同じ人の許に青つゞらをこにくみて蜜栗などを
花にませてやるとて
五九繰返し籬の內に花つめばいとまかりにも有とやは思
返し
六九わざと社栗はなつめれ山木に這まつはるゝ青葛龍哉
九月ばかり花見に人々まかりて秋野の花
霧を
七九玉鉾の道行きちがふ狩人の跡見えぬまでくらき朝霧
花すゝき
八九秋風にかすへてなびく花薄心よせある方やなからむ
つゆ
九九拾へ共袖のみ濡て留らぬは玉とみえつる露にぞ有ける
しか
〇〇遠山のをにたつ鹿の聲聞てもて離れても濡るゝ袖哉
はぎ
一〇濃紫たが种かけし衣ぞとみゆるは秋の野萩なりけり
きり〳〵す
二〇鳴く聲も我にて知りぬ蓼浮世背きて野べにまじらば
來るかり
三〇珍しと思ひし中に初鴈の待とせしまに老果てにけり
をみなへし
四〇色に社我はみえけれ女郎花名にも違はぬ物にぞ有ける
秋風に老をなげく
五〇秋風の吹につけてぞ歎きつる世にへむ程は短かりける
帥の大臣筑紫にくだり給ひて後西宮いきてみる
いと哀れなり
六〇松風も岸うつ波ともろ共に昔にもあらぬ音のする哉
なくなりたる人の西の京に住みし家にいきてみ
れば籬の菊の衰なるを
七〇植置きし主はなくて菊の花おのれ獨ぞ露かりける
紅葉を始めてみる
八〇唐錦織つむ峯の村紅葉見初る今日はあからめもせず
語らふ聖の隣なる所にきてとはざりければ
九〇親きも疎きも無と聞しかど分きてしもや訪べかりける
返し
一一玉鉾の道行摺にとはずとも常に心に行きかふものを
十月ばかり初瀨にまでゝ歸るに日くれぬれば佐
保山の麓にやどりて夜なれば紅葉みえぬ心人々
よむに
一一佐保山の風の心も知すして紅葉みすとや今宵明さむ

又のあしたに山霧にかくれたり
二紅葉みにきたる我とも知らねばや佐保の河霧立隠すらむ
深き秋
三紅の色どる山の梢にぞ秋のふかきはまづ知られける
十月大井河の紅葉みに人々まかる所に
一大井河川べの紅葉散らまはでなせの岸に長居しぬべし
十二月ある所の歌合させ給ひしに、松、庭の梅、
冬月、池の氷
五むらたづの宿れる枝と見るまでに松の緑も埋む白雪
庭のうめ
六白雪の古年ながら庭の梅は花と咽ちて匂ひやはせぬ
池の水
七波よする葦のうらばも音せぬは池の氷や閉果てぬらむ
冬の夜の月
八天の原空さへさえや増るらむ氷と見ゆる冬の夜の月
近江にひらと云ふ所に人々まかりて題ども出し
て歌よみ侍るに、山河の紅葉
九唐錦あはなる原によりければ山水に社亂るべらなれ
夜の嵐
一〇紅葉ゆゑみ山ほとりにやどりして夜の嵐に静心なし
寝覺のしか
一一人もこす隣たえ渡る山里に寝覺の鹿の聲のみぞする
岸のほとりの菊
一二岸近く殘れる菊は霜ならで波をさへ社凌ぐべらなれ
水鳥波に遊ぶ
一三見人は沖つ荒浪疎けれどわざと馴ぬる鴛たがへかも
初雪のみねをみて
一四氷だにまだ山川にむすばねど人の垣根は雪降にけり
綱手ひく舟をみて
一五淀みなく波路に通ふ遠舟は孰こを宿とさして行らむ
波の聲をきゝて
一六磯崛に騒ぐ波だに高ければ岑の木葉も今日は止らし
風の音の高きを聞きて
一七ひらの山紅葉よのまはいかならむ岑の村風打頻り吹
歸さに北山よりこゆるに紅葉いと多く散りかゝ
るに
一八山繁み木の下行けば紅葉も衣そぼちぬ雨とこそふれ
あるやうどなき所より菊の移へるを戴き參れば
一九山里に匂ふをみれば菊の花たきどの籬思ひこそやれ
年の終に暦のこくのもとまでまきよせたる心を
人々よむに
二〇まきよする暦の心恥しく殘りの日々に老みえにけり
つごもりの夜としの行きかふ心人々よむに
二一降雪に霞みあひてやいたるらむ年行違ふよはの大空
住吉に人々まで〳〵すみよしといふ心をよむ
二二わがとはゞ神世のとも答へなむ昔をしれる住吉の松
河原の院あれたる心人々よむ
二三草繁み庭こそあれて年へぬれ忘れぬ物は秋の夜の月
とやまの軒ばの道よりたひ〳〵こゆるやうにす
るをみて
二四見るからに消社しぬれ軒ば行人は露けき道やわく覽
ある所にて瞿麥を惜む
二五心みに歸れば苦しなほざりに宿やからまし撫子の花
ある所に、洲の草、草の螽、夏の夜の月
二六飽迄もそこの月影見べきに蘆のうら葉の山に隠れて
草の螽
二七水莖の跡踏ならす我ならば草の螽をよそにみましや
夏の夜の月
二八時鳥何ならぬ哉夏の夜の月みるほに(和)思ひあはせて
重之子に後れて悲しぶと聞きて遣す
二九契あらば又は此世に生るとも面變してみも忘れなむ
或る人かはらに出で〳〵逍遙するに風のいみじう
吹けばいひやる
三〇(寄)青葉なるかもの河原に群居つゝあけの衣は涼しかる覽
返し能宣のあそう
三一夏衣立ちいで〳〵涼む河風に却りてけふは人ぞ戀しき
草子の繪に須磨の浦のかたを書きたるにかみの
社に舟より行く人の波の高ければたよせにみて
ぐら奉る
三二たよせとは思はざらむ渡つ海に祈る心は神ぞ知らむ
三三白雲に色みえ紛ふ御幣をたよせにうけよかみの此神
同じ繪に旅ゆく人十月ばかりに紅葉のもとに宿
りたるを
三四行末も紅葉のもとに宿らまし惜むに旅の日毎へに鬼
前栽あはせの所
三五勝負のかすには露を置てやは花と花との色に比ぶる
わらはべはかたて〳〵とりどる
三六思と無き世なるべし村鳥の今日は鳴音も絶て聞えぬ
紅葉に鳥のゐたる所
三七紅葉みて歸らむ方もおぼえぬを呼子鳥さへ鳴山路哉
石にうみ松の生ひたる或る所に奉る
三八動きなき巖にねずす海松の千年は誰に波もよすらむ
水無月ばかり河原の院にかれこれ集まりたり
三九跡絶て荒たる宿の月みれば秋の隣になりぞしにける
あるみこたちの御五十日の洲濱に
四〇千年すむ水の流はいとゞしくそこの梢の數をさす哉
又
四一萬代の波の間なくも寄する哉鶴と龜との遊ぶ濱べに

或人以二家(當)家鶴自筆本一書寫手又以二其本一寫レ之魯魚
章草之誤可レ有レ之篤而得二證本一可レ有レ校合一而已
徹　書

明曆二丙申五月廿四日

安法法師集

後の世にみむ人は好けるやうに思ふべけれど多くの
年にかのはらの山のすまひ心細き折ふしの哀れなる
事の堪へがたければ春の花のさかり秋の紅葉の落つ
るほどに川風のあはれ夜深き程をしどりの曉がたの
こゑ月影の池水にうかび雁の草むらにかへり哀なる
折ふしに人知れずいひ集めたる言の葉さま〴〵につ
けつゝ多かれどたゞ一つ二つぞ覺ゆるを書きあつめ
たるなり
ついたち春立つつごもりの夜
四二暮はつる年惜衆ね打ふさば夢みむ程に春は來ぬべし
四三雪降ると衣重ねし程もなく花の紐とく春は來にけり
春の日ある人だい出しければ
四四我宿の今朝の朝霧見渡せばさほの河原に立渡りけり
秋のあらし
四五秋の夜のよはの嵐の徹せば寢覺の床に起ゐざらまし
花ずゝき
四六籬より穗にいでゝみゆる花薄誰が文結ぶ枝と成らむ

女郎花
七二吹風に類ひて靡く女郎花たはるゝ様に人やみるらむ
白露
八二荻の葉にそよと聞えて吹風に落る涙は露やおくらむ
秋はぎ
九二ほり植ゑむ下紅葉する秋萩に鹿なく程は空に知べし
鹿
〇九一就こにか鹿の初音は聞ゆらむ萩の下葉の見まく欲さに
来る雁
ず〳〵やと下に待るゝ雁音は音づれつらし今ぞ鳴なる
なく鹿
二九紅葉ばや風の吹らむ打侘てうらこき擧に鹿の鳴なる
きり〳〵す
三九我が如く物思ふべし蚤ぬとも聞えで夜もすがら鳴く
六條の河原の院に昔むつのくにに鹽竈の浦浮島
籬の島うつし造られたりければおとゞかくれ給
ひて躬恒貫之など聞きつゝ詠めりければそれは
いと限なければ人のよまぬを試みにて忍びによ
める
四九年ふりてあまぞあれたる鹽竈の浦の煙は又ぞ殘れる
うきしま
五九おきつ波たてば漂ふ浮島は昔の風のなごりなりけり
筑前守つねみつの君のくだりて九月一日の夜夢
にみえたりければあひ思ふなかなればいひやる
六九夢にても夢としりせば寤覺して飽ぬ別の物は思はじ
前の和泉の守順の君つかさ給はらで近江のやす
の郡にあるにいひやる
七九世を海に思做てや近つえのやすの住ひへ君は行らむ
山の僧正日野にともゆひといふ所に宿りていま
すかりける
八九船路にて舷ゆひ里に宿すれば解てねられず波の聲して
三河の守ためもとがもとより世の中のはかなき
よしなど書きつけて哀なることどもいひおこ
せたりける返り事の奥に
九九定なき世をみの上に思つゝ明し暮すは誰によりてぞ
おなじ君のきやうにありける時すやうをさゝの
れうとておけりければかくなむいひたりける
ためとも
〇九櫟木を盜てきつれば夢にても踈からむとは思はざり鳧
峻河守かねもりの君ゐふところことに院の鹽竈
參りてよむといひけるをこでくだりにければ
文作りて加へてよめりけるやらずなりにけり
一〇鹽竈の浦はかひなし富士の根を寫さましかば來ては分まし
和泉守やすひらの君あや筵に文つくりてくはへ
てありける返し
二〇打ふさす綾の筵の中よりぞ錦に織れる文もみえける
人々泉ぬるくして草の色春なりといふ題をよむ
に
三〇岩間なる泉ぬるげに成ぬれば汀の草に春は來にけり
貫之を(四九元)よみあつめたる歌の集を惠慶かりて
返すとて歌よめるに皆人々よみし
四〇きの家のくせに殘れる言の葉は花こそたむれ塵の上迄
これは本あることなり
天元二年大風ふき大水いでゝみなきもなく池埋
もれて後君のとへるよに
五〇松もなく池もあせゐる宿なれば風も音なく月も缺せじ
相摸の守しげゆきの子むつの國に母君のもとに
むりけるが人に殺されたりければ母の悲びの歌
ども詠めるを見ていひやる
六〇雯にこひ彼處に忍ぶよゝ作ら夢路なりでは如何逢みむ
七〇先だてば藤の衣を裁重ねしでの山路に露けかりけむ
神無月ばかりに飛驒へいきけるに越の尾山をみ
るに紅葉のなかりければ彼此して詠める
八〇越のをの山も紅葉のまだしきに外より時雨くるま也鳧
比良にいきてつける程に山に白雲かゝりたりけ
るをみて
九〇千早振ひらのみ山の紅葉ばや夕かけ渡す今朝の白雲
綱手ひきつゝ行くをみて
〇一白波のこと汚れば賤のをの綱手急げる舟も行かふ
山河より紅葉ながるゝを見て
一一山河の水嵩まさる紅葉ばは水上にこそ雨と見ゆらめ
寤覺に鹿のなくを聞きて
二一紅葉ふる木下風に夢覺てうらなき鹿の音をも聞く哉
時雨のふるに紅葉の散りまがひけるを見て
三一大空に梢や心あはすらむ時雨と共に木の葉ふりしく
八月十五夜に阿彌陀の念佛しけるその夜
四一西に入る月の光を今宵より露の身にこそ宿し始むれ
十二月廿日暦のはてぬるを人々よむに
五一卷よする暦をみれば春日野の若菜摘べき程も來にけり
稻荷山の影の池に映るをみてゑしの君よませ給
ひけるに人々よむ
六一池の面に影を映せば稻荷山みつのみ垣に波やよすらむ
惠慶といふ人はじめて來てよみていれたる
七一主やたれ池も泉も昔にてそれか何かは君ぞすみける
とあるかへし
八一皆人の栖の家は變らねど身を沈めたる我ぞことなる
歸る雁の曉がたに鳴きけるに人よみける
九一今なむと別に鳴くか雁音は花を發にて我はたむけむ
正月一日
〇一昨日までいづこなるらむ春霞年の返れば立歸り來る
誰ならむ藤の花惜まむといひし程に隱れにし人
をこひて
一一惜まむと云し花だに散らねまに無くなりにける命也鳧
そうの雨山にこもりていますに
二一世をそむく山の南の松風に昔の衣や夜さむなるらむ
和泉の守やすあきらの親の服にて純色の扇おと
して歸りにけるに書きつけてやる
三一墨染の扇の風は秋よりも心すごさは夜々まさりけり
ひんがし山に鹿のはじめて鳴きけるを聞きて
四一籬なる萩の下葉の紅葉みて思遣りつゝ鹿の鳴くなる
人々あつまりて初紅葉よむに
五一我宿の紅葉の錦たちつれば衣かへすと人や見るらむ
郭公さつき鳴くを聞きて
六一たをさして醉にけらしな五月雨に立居亂て鳴く郭公
月のいるを惜むに
七一惜め共かひなく月の入ぬるを雲路をしらば後れざらまし
六條の大納言殿の辨の君のおはしてよみておき
ておはしける
八一池ふかみ松の綠の色みれば今一しほは波ぞそめける
とある返し
九一風ならで訪人もなき古里の松にかひ有る春も有けり
ひごの少將扇に大井川に馬ひやしたる書てよ
ませ給へるに
〇二望月の駒引立てゝ冷しけるみやは桂の渡りなるらむ

題どもしてよむに秋風をさぐりたりし

一〇夏衣まだひとへなるうたゝねに心して吹け秋の初風

いせといふ人の歌どもの題かき集めてやれるに

二〇楸おふる河原の宿の遠近にみゆる物々君にいはせむ

いけづらにかしら白き女のうきなきつみけるを

みて

三〇老人の摘つる物は澤べなるよをうきなきの下葉也晃

せん齋宮のれうとうもちきの朝臣法師になりて

ひんがし山にありけるに侍從のおもとの諸共に

ありてかく心細き住ひをなむ心ロるとて奥に

四〇世を捨る人に後れぬ人のすむ秋の山べを思ひ赴やれ

大宮のすけの君ひはだ色のうちもを法師の爲に

かりてかへすとてやれたりけるを

五〇よもの海に年經る蟹の潜きつる藻もいと斯は亂れざるらむ

とある返し

六〇汐さして見えもしっ覽渡つみの蟹の刈藻も刈人からに

又かへし

七〇年をへてよもの數多のどさの海に斯てみるめも乏しからじな

又

八〇鳥籠の海に清き汀の年ふれどみるめもよせむ物とやは知る

筑紫にくだる人おほくの歌こひたまへる人に

九〇止れ共いきの松原思ひやる常磐にのみも詠むべき哉

宮のすけの君枕をこにうちとりて又のあしたに

おこせ給へる

一〇五月雨のよも明難く敷妙の枕定めていかにねつらむ

かへし

一暫しこそ枕ともみめ又もこば夢語せじとおもふ枕を

九月

二月影も嵐の音もさえゆかば思合せて戀ひむとすらむ

にしのきやうにて

二神無月紅葉ふる里荒にけり時雨とみえて袂ぬるれば

三風の紋楯の色のくれなゐの霜のおくにぞ色增りける

かへし

四我はこの時雨のあとの雲をみて己れ楯の錦とぞみる

白菊の籬のうちに咲き亂れたるを見て

五大空に籠たる菊の籬かも星まだらにて花のみゆるは

入道少將の御もとにいひやりける

七今はとて世を遁けむよゝりも思ひ赴やれ木葉散る頃

ある人の霞霧をみて始めよめるによみつけたる

八谷の霧峯の霞は從兄弟とか春と秋とはいもせ山かな

ある人きみの御文とて年の内ぬえに歌よみにく

はりて（缺）

九古は待れし春も待れすや花につけても問つべければ

醍醐の座主の文の山にこもりたまへるに

一〇大空の縁りと聞けばまだみねど雲に埋る跡ぞゆゝしき

師走に若菜のあつものおこせたれば

一一春日野は雪間も有じ古年は爭でにたるぞ春の若菜は

返し

一二君が爲年をつまむと占し野に若菜は雪を打拂ひつる

十月ついたちに山々のもみぢわたれるをみて

一三大凡の野山の紅葉みるからに先身の上の霜を赴思へ

庚申に題を探りてかりまつ心を

一四衣うつ音に合する雁がねは孰こ計にかりはきぬらむ

その庚申の夜は七月七日なりけり七夕の心

一五彦星のあかぬ別の涙ゆゑ天の河なみ立ちやそふらむ

秋の月一日の時雨に

一六いかならむ奥山かとの初時雨都はたゞに心ぼそきに

天王寺より上るとて舟にて

一七昔見し難波がたにぞこがれ行く

といふに

惠　慶

まつといふなりすみよしのきし

さきの周防の守元輔うまのじよう兼澄を題にし

てよむ、花のもとにて珍しき人にあへる

一八春は唯花と人とに暮しても孰もたえむとの惜しさに

北山に花のをり人のもとにゆきて

一九花の色も又鳥の音も夜深きにいかなる人の栖なるらむ

歸るとて

二〇春山の花に折ざる袂をぞ都にとはゞつと云ふべき

かれこれ北山に花みにいかむ諸ともにとあるを

おぼそうなりとまりていひやる

二一身はとめつ心はおくる山櫻たよりの風に匂おこせよ

ひんがし山の花をゝて

二二山はるけ霞の中の櫻花ちるも散らぬもみえぬ今日哉

三月十一日元輔兼澄などして詠める

二三荒にける宿には花も知られねば山の櫻をよそに赴れ

兵部卿の宮にて雨のうちの花といふ心を

二四そぼつとも花の下ぢを宿はせむ匂ふ雫に心そむべく

藤の花をみて

二五年ふれば色濃さ增る藤の花いせゆく笠の物と赴れ

三月つごもり

二六世にあらば又も逢ひなむ春なれど命を捨てけふ惜むべく

天王寺にてなみの聲を聞きて

二七都出でゝ幾日計に成ぬらむ霞束なみの浦によするは

返し　惠　慶

二八難波潟名に辛き世も思出でむ霞束なみに袖はぬる共

同じ寺に椎の柏木にいみじくなりたるをみて

二九柏木もこのめも老いて有物を昔の人のみ見ずも有哉

ある人に代りて　惠　慶

三〇檜の葉の薄すく程も君が來て訪ふに附てぞ露けかりける

かんきみのごの河原の院にこむと契りていませ

ざりけるにいひやる

三一椋も老い巖も苔の結ぶまで命くらべに訪はぬ君かな

返し

三二我も行て衣の袖にかきなでば君が巖の苔もみえじを

又

三三三千年に一度なづる袂をば二葉の松もいかゞ待べき

四月一日

三四過にける花を恨むと詠むれば俤にこそ花もながむれ

三五春霞孰く計に歸るらむ立ち留まれといひやりまし

雨の中の花

三六露だにもいかならなくに花を唯いかならなくに袖朽ぬべし

二月はじめて花櫻をみて

三七今日ぞみる春の櫻は咲きにけり殘の雪と思ひける哉

老を思うて三首

三八老にける身の上泣けば落止る涙の影にしわざみえ晃

三九老ぬれば南おもても凄ましやひた赴きに西を頼まむ

四月廿日より郭公きくらむやといへるに

三〇搔分て鳴くかはそこの郭公隔つる人のきかぬなるべし

左衛門殿の太郎ぎみのおはせむとの給ひけるに

まだおはせぬにかゞれ給ひければ

三一かゝりける露の命を置乍ら花見にこむと爭で云むむ

三二見ぬ人を惜む涙のためしには我袂をぞ殘し置くべき

六月三日かゝのすけはなにごと一つの給へと云

ひはんべれば
[五五]君くれて心細きもおもほえず秋の夕は我をとはなむ
返事[五六]又かへり
[五七]秋までと露の命の頼れず夜な〳〵と社云べかりけれ
[五八]何事をいひ殘さまし世中に老の形見と人の云ふべく
秋の日かいのすけないきなどして老を歎きて
[五九]百年の秋の嵐はすぐしきぬいづれの暮の露と消なむ
昔みし人みちに老いはて〵逢ひて共に老いたる
とをいふに
[六〇]命あれば又老人に逢に鳧誰先だちて戀ひむとすらむ
中川の絶えはてにける跡をみて
[六一]中川の水絶にけり末の世は秋をも待て枯やしにける
天元二年大風吹きける折の歌のおいたる由を
[六二]けふ迄は昔ながらに老にけり後れ先だつ末ぞ知れぬ
屏風の繪に[六三]た人の田刈るを見て
○[六四]我宿の門田の稻も刈衆ねて歸らむ駒の爲と待つらむ
同じ屏風に釣舟沖に出でたる
[六五]幾雲ゐ漕出でつらむ渡つみの蜑の釣舟年をはこびて
くらの內侍今はとてひんがし坂本にいきけるを
聞きてやりける
[六六]百敷の世をへし君が通行く柚さはとこそ思遣らるれ
此のおとゝ辨の君の子生ませ給へりける七夜の
歌人よませ給へりけるに
[六七]高砂のうまごの松の枝なれば千年の風も仰ぐべき哉
ある殿ばらより屏風に駒ひき白河にしたるを書
かする所に詠むべき歌ども祭のかへさに北野に
詣ひさまたれたる樣とかゝするをなども云はじ
忍びて詠めとありければ
[六八]白河に水かよ青の駒引を波の立つとやよそめしつ覽
[六九]とのゝへし加茂の社のゆふ禊解くる旦ぞ亂たりける

小馬命婦集

堀川院にさぶらふくち女のかへり日いみ給ふとて殿
も上も殘りなく出で給ひぬはかなき身はかゝるつい

でにもと思ひてつれ〴〵に覺ゆひんがし山より見ゆ
る家ども見むとてたゝずみ出づるにそれよりもめで
たき池どころ〴〵を見て人の國せかいもかくやと思
ひやらる人々あれと聞かせむと思ふ人ありて思ひい
づるたはぶれごとぞ
水のつらに不用にて捨てたる舟あり
[七〇]警へつゝ岸のほとりに身を捨て繫がぬ舟も閑かりける
洲崎に松いといたう立てり見にゆけば千鳥皆
立ちぬ
[七一]獨寢を見にこそ來つれ我ならで松が崎にて衛住けり
蓮のいとをかしきを立ち寄りて見ればいかなる
影か見えけむ
[七二]池水の底なる我も老にけりかげに蓮と見るぞ悲しき
山中に枝も葉もなき梔子の唯一つ二つなれるを
[七三]此は此耳無山の梔子かいふかひなくにみも成にけり
○[七四]刈捨る池の藻屑の今はとて朽たる身にも哀とぞ見る
この下の汀に蘆穗やう〳〵出でゝ立てり
[七五]人知ぬ影とや賴む葦の穗の今日はまほにも出にける哉
山のしりへに沼ありかみも下も見えず唯に洗る
[七六]行く所あるべき物を沼水の出でこし方も思ほえぬ哉
水のいと深き所に柳おひたり
[七七]誰か見て名につけ初し淺緑深き江にこそ生始めれ
み山のしりへにくさ〴〵ものおほしたる中にた
て石あり水のしりはかはやなり
[七八]音に聞くたて島かとぞ思ひぬるからき水にも漬てみる哉
みまやのしりへにいたりてすさびして
[七九]獨寢はかひなかり鳧駒なべてかげの厩と待て賴まむ
もちふん年頃いひ渡るに難面ければ藤にさして
[八〇]久しさを待とや藤も思ふ覽かゝるを歎く宿にしも咲く
猶つれなきを日頃音もせで卯月になりて卯花に
さして
[八一]明暮て日頃へにけり卯花の憂世の庭に歎きせしまに
返し
[八二]最どしく日頃へ行けば卯花の憂に附てぞ忘果てぬる
同じ人物語りなどしてつゝめて
[八三]そこはかと指て整なき言葉の退に飽ぬ今朝ぞ戀しき
又いかなる折にか
もちふん

○むば玉の夜にも文は非ね共見えぬは〳〵に劣らざり鳧
返し
[八四]待侘て心は闇にまどはれよむば玉ずゝよにも障らじ
そつ殿のみぶを語らひてひさしう音づれざりけ
れば
[八五]立宿ぞ待てへにける網鳥の訪れ初てはかゝるべしやは
かへし
[八六]露拂ひ朝たつ雉の草隱れとへど訪はねど思ふ心あり
長月になりて
み　ぶ
[八七]行過ぐる秋の草葉に宿りして立らひ雉のとも賴まじ
返し
[八八]大方の秋こそ野べを分かる共事無草はたゝじ雉子を
又黃なるうすやうを萩の下葉にゑりてしろがね
を露におかせて
[八九]を鹿立つ尾上にしげる秋萩に下葉の上を知人のなき
萩の下葉のこきを見て
[九〇]露かゝる萩をも誰てさを鹿の妻侘しらに鳴を社まて
これよりまゆみの紅葉につけて
[九一]朝な〳〵霧隔つめるさほ山の西にさす枝は露や置覽
返し
[九二]賴むにし西にさすえの移りなば八重や隔てむ佐保の山霧
又みぶほどへて
○[九三]掻暴れ冬の木葉も散にけり淺ぢが本は露を待つなり
十月に氷を紅葉にいれてみぶがおこせたれば
[九四]神無月たが淺氷ほどもなく消えて哀と誰かいはまし
年のはてがたに恨みて
もちふん
[九五]小雪の糸よりもげに弱き身に年月はこぶとの侘しさ
[九六]霜月の晦方に梅の花につけて
を　と　こ
[九七]冬や寒花や寒べの梅ならぬ雪に通ひし色はそれにて
返し
[九八]知ぬまに年の往來の花なれば折に附つゝからむ計に
又こと人の懸想しける程に名たちにければもち
ふん久しう音せでこりぬやといへりければ
[九九]奥山の斧の音にも驚かでこりぬやとだに云が怪しさ
を　と　こ
[一〇〇]哀にぞ思ひわたりし最上川わが稻舟の行くと歸るを
返し
[一〇一]いか樣にせよとかあまり鹿島なる生田の浦の痛く恨むる

いとはつかに物いひて田舎にくだる男遙になりていへる

八つれ〴〵と思遣りつゝ鴛のほのかに聞し聲ぞ戀しき
返し

九戀しくば都のまつに鴛の鳴てぞこまし花は散るとも
又かへし

〇心にも非ぬ難波の長らへてよそにへむとは思けむやは
此の度は返事なければ　を　と　こ

一〇山彦の答ふる聲の聞えねばながむる空は惑はるゝ哉
返し

二〇喚子鳥幾聲鳴きぬ山彦の答ふ計りはあらずぞ有ける
又の日その國なる男かくいへり

三〇とふとは絶々なるを鈴鹿山音きくにのみ歎かるゝ哉
返し

四〇數ならぬ身は敏鷹の鈴鹿山訪はぬに何の音をかはせむ
云ひはじむる男

五〇いかにしてぬるとつげまし吹風に便なる蚤の釣舟
うちはに夕だちしける頃　を　と　こ

六〇鳴神の音にもかへす唐衣日も夕立はいつとなけれど
かへし

七〇夕立の夜の衣はの歸りて雲ゐにのみぞならむとなれ
いしはらにすむ男久しく聞えねばとて

八〇いとゞいしく燃こそ渡れ石原の中よりわれて出る思は
男のとはぬが恨みおこせたれば

九〇とはぬはし恨むる物と思せば幾十度かは云可りける
返し

男のもとに迎へたるに琴をひかするに女、とだえたれば男の心も變りたるやうに見えしかば

一〇いかなれば哀と思し睦言の深きをたゆるよと成にけむ
此の男日くるれば出でいにけりいもうとの男も同じ所なる出でいにければ同じ心に歎きていもうとの云ひおこせたる

一夕されば一番ひにて行君をしとは如何思ざるべき
（一四頁）

二侘ぬればをしとも云ず池に住忘るゝかもと我ぞ知べき
齋宮の女別當よそにあひて何ともいはで又の日
袖の中にやといひたる返事に　べたうの君

三主しらで空に浮たる玉をだに結留むる物とこそきけ
疊の中より蚤の五月ばかりに出できたれば

四蚤蟲ろいかにかに思ふらむたゞ身の中に秋はきにけり
もちふん八月ばかりに物なづいひて難面かりければ夕ぐるゝまでいみじう恨みおきて出でぬと思へど又立ち歸りて格子を打ち叩きて獨ごちし

五戀しさのぬるに任てねられねば起てぞきつるよはの白露
返し

六爭でかはよはの白露起つ寢寢覺の床も唯ならなくに
そきやう殿の宮女べたうのもとより年月ふれど對面すべき事もなきことゝあれば夏齋宮女別當にかくなむ聞えたりし今宵こそ聞ゆべかりけれとて

七いかにせむ行ずば逢じ來すばみじ幾世を限る命ともなし
齋宮の女御祭主能宣をめしてこれが返事せよと仰せられければ

八行ず共こゝさて逢でやまばやめ此世とのみは契ざらしを
女べたう

九逢もみず命も知ずつきもせず戀の深山となりぬ計ぞ
返し

〇繁からば戀の深山も入てみむ枝を交する影は有やと
返し

一我ゆゑは遠の上にきてもとへ哀いづこに君を尋ねむ
この能宣がおりのぼりにこの文を尋ねに來ければ　能宣

二雁がねに非ぬ我身の年をへてつてのみ渡る君が玉章
かへし

三懸てくる傳の玉章徴りせば歸雁とも待たれざらまし
堀川殿の阿ざ梨の君いたくわづらひ給ふとて母のもとにおはしてたゝう紙に書きつけてこまこそみよとて

四長らへむ年も思はぬ露の身の道に消えむとを社思へ
返し

五露の身のきえば我こそ先だゝめ後れむ物か森の下草
堀川の后うせさせ給へりし五七日七月七日にあたりたりければ元輔が云ひおこせたる尼になりたるとを聞きて

六七夕にかしゝ衣を色とに見るらむ袖を思ひこそやれ
返し

七きてしより濡てのみふる藤衣かる七夕の無きぞ悲しき
里に久しく居たりしに人々の久しくとはざりしかば

八獨して見し限をば忘れじと誰かは我を思ひ出でたる

建長五年七月十四日以二戸部本一書寫畢　此後亦於レ有二他本一者可レ遂二一校一也但雖レ讀所レ亦無二字之所一レ有二少々一而已

爲頼朝臣集

九めの及ぶ山野も近き夕まぐれ曇りぬる雲ぞ知べなるらし
十一月廿八日前大納言なでして酒まゐりしに

〇人をこそ有まじかばと歎きしか我をば誰か思出べきと思ひ給へるに今日なむすこし頼もしう侍る

一別れては又も逢見む齡こそなどて歎きし昔ともがな
いと頼もしかりし物をとぞ人しれず思ひ給ふる

二大方の空の露かは君がため萬代かけておける菊をや
たぶさにけがるのさま

三言とはゞ佛ぞとかも菊の花むかし美し菊のもとゝは
逢ひて後のわかれ

四見し程に消なましかば別ての後さへ物は思ざらまし

五折りつれば心もけがるもとながら今の佛には奈る
つくる歌

六珍しく山ゐにつけむ菱草待ち懸てのみ年はへにけり
かへし

七行すりの山ゐの衣珍しく獨ならずば見えずぞ有まし
きよきとせさすとて文慶君のもとにものし給ふ所雨もると聞きて

八曇なき君が三室の空晴て有漏の宿りをいかゞみる覽
かへし

九うろなれど君がさやけき宿の内に
題しらず

〇散ぬとて歎きし花は咲に鳧戀しき人ぞ遙けかりける

一春は猶こぬ人またじ花をのみ心長閑にみてを暮さむ
中務宮の御

二花も皆散なむ後は我宿に何につけてか人をみるべき

三中々にあだなる花は散ぬ共まつを賴まぬ人の有めや

また　　みや

櫻花松によそへて折人と千年の春ぞみるべかりける
月の歌少將にかはりてやる（實國朝臣）

秋風に夜やふけぬらむ大空の月の桂の靡くかげ見ゆ

獨ゐて月をながむる秋の夜は何事をかは思ひ殘さむ

見る人を數へ盡していつ迄か歎くは君とふれば也

題しらず

人のよをあるに任せて花をのみ惜む心や且は悲しき

人のよはへむに任て有ぬべし花をばえこそ思返さね

ひせ（尼前）に下るいもうとの許に

故郷の草葉をまたも結ぶべき遁けき道は命ともがな

かへし

故郷に結びし草の契あれば千とせの松は誰も賴まむ

長德二年十月廿二日花山院の東宮におはしまし〳〵時殿上にて右中辨の五節奉りし時何事にかといひしかば何もこゝならむものを奉らむといひしにゐり櫛求めて貸せとありしかばかしたりし後かの辨もなくなりぐしたりし人もなくなりて忘れてやみにしを今年五節奉るに何事をかせむと右京大夫の宜ふにかの櫛やあると北の方にあないせらるゝに本の櫛の出でざればいと哀にて

掻撫で〳〵掻けむ櫛は神さびて有るに傳へし人の無哉

小野の宮の御日に法住寺に參るとて同じ程の人の多く參りしを思ひいで〳〵

世の中に有ましかばと思ふ人無が多くも成にける哉

小大君これを聞きて

有るはなく無は數そふ世中に哀いつ迄いきむとす覽

常ならぬよは浮身壯悲しけれ其數にだに入らすと思へば

夏の始つ方いへの前木を見て

老に鳧庭の前木の木暗きにそこはかとなき涙止らで

つのかみなりとき播磨の守むこにとりて家の庭どころこゝすのかたになしたるに雨のふる頃うみにしたり

打つけに播磨潟にもにたる哉いかなる猿の夜通ふ覽

住吉とみえこそ渡れ浦遠みいかゞ有べき播磨潟まで

正月十三日ひとひ參り給へりしのち左兵衛督の宮にまゐらせ給ふ

飽ざりし君が匂の戀しさに梅の花をぞけさは折つる

　　みや

今もとる袖に移せる移香は君が折りける匂なりけり

戀しきに花を折つゝなぐさめば鶯きゐむ梅も殘らじ

小夜更て軈ち車のつきならむ山のべ指て入にや有覽

夏はて〳〵秋迄くゆる蚊遣火は昔いかなる事か有けむ

夏衣うすき袂をたのむ哉いのる心のかくれなければ

人となる程は命ぞ惜かりし今日は別ぞ悲しかりける

后がね若然らすばよき國の若き受領の妻がねならし

思ふ人あるかたへゆく久方の月の桂に文やつけまし

最ごしく老はそふ共行歸る日からは暫し短からなむ

市姫の神の忌垣のいかなれや商物に千よを積むらむ

なまじひに止れる顏をけさみれば鏡やつらき涙止らす

磯に生るみるめに附て鹽竈のうら寂しくも思ほゆる哉

待ゐるもよの常なれや中々に年の歸らむ事をしぞおもふ

雁の子も巢守はあると云めるをなどて夜頃に我歸覽

　　みや

戀しきに花を折つゝなぐさめば鶯きゐむ梅も殘らじ

此の頃今上の宮春宮などに人々參り仕うまつると聞きて

身をよせむ方も面は無り鬼戀を厭はむ人しなければ

いたう夜ふけて車の香のしければ

蚊遣火にやあらむ折すぎたる煙の立ちければ

越前へくだるに小袿の袂に

人の遠き所へゆく母に代りて

正月ついたち頃ある人の御もとに宜耀殿よりあゆのかたをつくりてありければ

蟲にだに欺かれじと思身をいかなる鮎の謀なる覽

うまごのをうなにて生れたるを聞きて

この人から物のつかひにゆきたる頃月をみて

同じころ人くだりし頃

今の左大辨の御子の五十日におほわりごの蓋に

市姫のかたちなどかける所に

物思ひに遠き所經にける顏を鏡の影に見侍りて

はらからのみちのくの守なくなりての頃北の方のなまみるむこせたりしに

色深き袂の程はきてぞみるいとゞ都の詠めらるゝに

我宿の梢にのみは秋こじをいかにもみづる夏の半に

打つけに涼しくも有か紅葉みる里には鳴す郭公さへ

丹波の國府にて三月の夕闇に

ほつかはに紛ふ汀の菖蒲草月まつ宵は短かゝらなむ

故粟田の右大臣殿のはかなくなり給ひての年の十月に

神無月いつも時雨は悲しきを子戀の森は如何みる覽

萩に露のかゝりてまたかとみゆるを折りにやりてみるに皆消えてなければ

朝露を日長てみれば何もなし萩の上葉に物や問まし

白露の消るをみても羨まし萩の下葉に宿やからまし

枯はつる冬もありけり秋萩の下葉の色を何思ひけむ

子なくなりてなきねの夢さめて現と覺えつるとて前の前栽をみて

瞿麥を夢にみて社いつしかとあけて空しき床夏の花

稻荷にまかでたりける女のもとに文やりけるを

ほかざまになれりと聞きて

我爲は稻荷の神もなかりけり人の上とは祈ざりしを

白玉か涙か何ぞ宵々にはかりあたりの袖にこぼるゝ

くりしまの潮やひるらむ此冬は見暮ぬ物の珍しき哉

知れる人中川隔て〳〵ありけるに七月七日の夜

七夕の雲路はしらず中川をはや打渡れかさゝぎの橋

加階したりけるかたのさはにしなるに山吹のおほううつれりけるを、東の里にや

山吹の咲ける汀を見渡せばそこゝそ花の盛なりけれ

君の御服なりける所のたて蔀にさうぶの根をかけたりければ

古は袂にかけし菖蒲草けふはながねを何によすらむ

これは三條どの

草枕しのぶるたびのから衣露に袂ぞあらはれぬべき

かへりに

五月の末に櫻のもみぢたるにつけて

かへし

打つけに涼しくも有か紅葉みる里には鳴す郭公さへ

にる人の心に似たる心太ながくぞ賴む絕すも有なむ

丹波の國府にて三月の夕闇に

ほつかはに紛ふ汀の菖蒲草月まつ宵は短かゝらなむ

故粟田の右大臣殿のはかなくなり給ひての年の

十月に

神無月いつも時雨は悲しきを子戀の森は如何みる覽

萩に露のかゝりてまたかとみゆるを折りにやり

てみるに皆消えてなければ

朝露を日長てみれば何もなし萩の上葉に物や問まし

白露の消るをみても羨まし萩の下葉に宿やからまし

人にかはりて男のたえたるころ萩をみて

枯はつる冬もありけり秋萩の下葉の色を何思ひけむ

子なくなりてなきねの夢さめて現と覺えつるとて前の前栽をみて

瞿麥を夢にみて社いつしかとあけて空しき床夏の花

屏風の繪にぬす人たがひたるかた書きたるが唯の人とも見えぬに

三九盜人の立田の山に入にけり同じ挿頭の名にや穢れむ

いもうとの老いたるがもとより年頃の人なくなりたるを訪ひたるに

四〇いけらじと厭ふにしなぬ老の身を惜むに消る露ぞともがな

年頃あひそひたる人なくなりわたるころ中務の宮の母の女御の御もとより

五〇この代にて契りしことを改めて蓮の上の露と結ばむ

右大臣殿の女房里へ出でむとて車かるかすとて

六〇まだ知ぬ戀の山路に惑ふ哉里へも誘ふ人もあらなむ

かへし

七〇はかなくて消えにし露を蓮葉に君し結ばゝ疑もなし

同じ小野の宮の中納言北の方に後れての給へる

八〇よそなれど同じ心ぞ通ふべき誰も思の一つならねば

かへし

九〇獨にもあらぬ思はなき人も旅の空にや悲しかるらむ

また宣耀殿の民部の乳母のもとより同じ頃

一〇君はいかに寢覺すらめや思遣る我だになれば思ひ明すや

かへし

一一疑覺とは睡ろむ程のあらばこそ憂世を夏とみる計也

うまごのいたゝき餅ひを見せたれば

一二年をへて數增るべき細れ石の巖ともならむ程をしぞ思ふ

知れる人筑紫のかたにくだる程扇に舟のかた書きたるをこれは内君にとてとぶらふ人のありしかば

一三思人かすふか浦の君が爲とみてさつめる舟にやは非ぬ

まきといふ人を心にもあらで別れたりし頃津の國へくだりしに釣舟のともの遊びをいづこぞととひしかばまきの里といひしかば

一四〇名にし負はゞいざ舟とめむ槇の里戀つる人も有と云也

早う懸想しける女津の國ながたの森といふ所にありと聞きてやりける

一五〇命だにながたの森のなかりせば便に君が宿をみましや

故院の歎合に草むらを尋ぬといふ題を

一六〇覺束な馴れなるらむ蟲の音を尋ねば草の露や亂れむ

一七水のうへに光さやけき秋の月萬代までの鏡なるべし

岸のほとりの秋の花

一八〇時しるき花ぞ亂れて匂ふなる波の心やかけてをる覽

おものもちの人の物とるを見て

一九〇獨して許多恨むる御物持もたる綿をぞ尋ぬべらなる

一條の大臣かくれ給ひての秋いづれの度にか桃園の殿をはしましく思ひ（延元）

二〇大方の秋とみるだに花薄うゑし君ゆゑ袖はつゆけき

殿の御かへし

二一植置し尾花にかゝる白露の消ぬ先にぞまづ招かまし

つかさめしに臨むことありける頃さぬきのすけこれすけが馬をかりければすけつかさ給はらば取らせむと思ふ馬なりとてかしたりけるを返すとて

二二心有て飼ける駒の岩橋にあやなくのりて我も頼もし

三條中納言津の國にらうじ給ふ所に御ともにまでゝはまべ近き所に前栽などをかしきに枯れたる薄の上より見えければ

二三濱風になびく尾花は朝ぼらけ雜にする波かとぞ見る

みちの國の守の逆りして歸るに女車逢坂の關にてゆき逢ひたり昔心かけたる人に聞きなしてやる

二四古はこえ難かりし逢坂をいづちと返る波ぞかなしき

この女さるやうありて伊勢に通ふとぞありける聞きしこともあれど僻事にやとてとぞ

閑院左大將朝光卿集

たまさかに返り事したる女に

二五浮橋の浮てだにこそ頼つれ踏見て後は跡絶ゆなゆめ

ある上達部のむすめのちひさきをおとなになしてと契りたる程にこと人にときゝたまッてそのわたりの人の扇に

二六生立つを待と頼めしかひもなく波越すべしと聞は眞か

母の返し權中納言敦忠室枇杷左大臣女

二七生もせずおひずも非ず末の松何かこすべき沖つ白波

□殿□大盤所にはかまの腰の落ちたりけるを誰れがならむと□ある限り□かはあらず〳〵

□けふさ□みて□のも□つけて大盤所に

二八とき結ぶ手風にいたく綻びて花の下紐とけにける哉

二九下紐の下にもいかで怪しきはまつ上にしも落る也鳧

とて柳の枝に青き色紙につけてその藏人に

三〇句さへ散ぞ侘しき青柳の糸なれば君が手風に解くるなるらむ

三一鶯のよる青柳の糸なれば君が手風に解くるなるらむ

三二あだにのみ君が結べる下紐のとくるを人におほせざらなむ

三三百敷の花の下紐さし乍らみれ共あだにちらぬ有ける

三四世と共に君が思に解れたる下紐のさはおちにける哉

内侍の督の□のもをきかへて奉りたまふとて

三五潜きするいせをの蜑の濡衣顯れぬべき心ちこそすれ

春宮の左近藏人忘れ給うて後に聞えたる

三六下紅葉みるに附てぞ我身にも秋きに鳧と露も置添ふ

大貳の聞えたりたりける

三七垣ほにも思ひよそふる撫麥の忍景てぞ今朝は折つる

返り

三八誰にかは思よそへて折つらむ定めに持てこ常夏の花

又かへり

三九色をみて思寄らなむ撫子は垣ほよりま□跡ぞともなし

女思ふやとてひたりけれどいらへもせざりければ

四〇思ふ共いはず成ぬる時よりも增る方にて頼まるゝ哉

返り

四一云ねども心の程をみえぬれば孰れを增る方と頼まむ

忍びたる處より歸り給ひて晝つ方

四二白露の日たくる儘に消行ば暮待我もいかゞとぞ思ふ

四三消ぬるときけばぞ落る我袖にいかに置つる露の滋さぞ

十月計り女の許より歸り給ふに時雨のふるに

四四露分て歸る袂に最どしく時雨るゝ空のつらくも有哉

返り

四五時雨さへ露けくぞ降るいつ□袖を分てや哀といはむ

馬內侍の南なる家に十二月二十日ばかりにわたるまつごもにつけて

四六春近き隣に君は住の江のまつ人とはたおもほゆる哉

返り

七三冬ごもり氷にとぢて水掻の春の隣にとくやとぞ思ふ
枇杷殿にて不斷經よませ給ひける大とくたちの
中に出でさせ給ふ
八三しり難き物にぞ有ける我身口ばかり落つる涙なるらむ
御かへり
九三朽れとも何口つきいさぎよき蓮のかゝる涙なるべし
ちせん阿闍梨まつがさきに修法するにいひやり
給ふ
〇四頼もしき千年を松が崎にすむ人の心の常磐なりせば
一四□中にしをれば草も木も樣異にして頼むなるべし
みあれの宣旨あまになりたるにしきみの枝に蟲
ついたるにつけて云ひやる
二四天の下ふりて哀といふ程にみの定めたる蟲ぞ悲しき
返り
三四言の葉に懸れるみのゝあ口せはさ袂も□ぞ濡ぬる
つかさめしの頃とかくえたまはらぬ思ふことお
はしましけり□をきこえ給□
四四思はじと思ふ物から松山の末こす波の濡つゝぞふる
返り
五四浦越し波の景色の悪しければ思はじとだに我は思はず
六四思はすになり行末の松とても常にはいかゞ濡渡る覽
七四渡らゆと涙もあらば思どち人の包める君をみましや
返し此の度はなかりけり
八四潜つくる岸ちかみなる　きにだにも波間もあらば
思ふなり　まして我身は　海士人の
隔つれど　なとゆ口と　籠こめたる
秋きりの　たちを□　思ひもかけず
ゆふ襷　かみな月とか　云なれば　時雨まじれる
言の葉の　草もかわかぬ　程なさに　浅ましくのみ
見ゆる頃かな
九四鶯の春の初音と時鳥よふかくなくといづれまされり
四條宮大盤所にこれ定めてとの給へるに
とあるを人々定めさせ給ふに
〇五折からに孰れも勝る鳥の音を時ならぬみはいかゞ定めむ
左右大將の御車にていで給ふにぢんにて
一五思ふどち□へむをの山の　左朝光
とあればみざ濟時

口れなるみちにひくわへ□
二五秋の田の刈にとみゆるほど□れ數へて積まむ程ぞ侘しき
賀茂の社の前にてをるゝ人を見て
右
三五君とわれいのる心をちはやぶる
左
かみいづかたにみゝとゞむらむ
いそげとて左のの給へば右
四五まつみねど後めたくは思ほえじ近き守と我しなれゝば
つゝみにて左のくるまぞひのと□に代りて
五五袖ならで包留めむ今日よりは君が嬉しき言葉もがな
右の車ぞひに又かはりて
六五そひてゆく車のとも思ほえず君が心を今日はやる哉
花見にありき給ふ時にさそひ給はずとて
左大將濟時
七五獨して花も紅葉もわきてやは錦計とみてはきにけむ
返り
八五百敷の花も紅葉もわきてやは錦計とみてはきにけむ
みやをの大將したうづのかたをかり給ひてあし
かたとある處に書きつけ給ふ
九五流草の方に止れる沼水のかひあり今日もみゆる影哉
堀河の院にて八月ばかりの夕暮に機織のいみじ
く泣くに中將君御前なるにの給ふ
〇六麓束な錦もみえぬ闇の夜に何の菖蒲を折るにかある覽
中將かたる五條の尼君かくぞ聞ゆめる
一六織るとはた思はざり鳥唐錦あやつる聲の音と社きけ
宮の君の打解け給へるをみて
二六下紐のゆふ日に人をみつるより綾なく我ぞ打解にける
かへり
三六下紐の夕日もうしや朝貌の露け作らをみせむとぞ思ふ
常陸の小野のみゝきより草奉りたるを見給ひて
四六常陸なるをのだ御牧の蘆草をうつしは駒のおくにぞ有ける
堀河の院にすませ給ふに閑院の櫻の花おもしろ
くみえ(可考)
五六垣越にみるあだ人の家櫻花ちる計りゆきて折らばや
御返り
六六折りにこと思ひやすらむ櫻花ありし昔の春を戀つゝ
ともまさの大貳の子のうまのすけを失ひたる頃

閑院女御も失せ給ひぬと聞きて
七六我のみや此世はうきと歎しを君も思ふと聞ぞ悲しき
かへり
八六浮世には有身もなきに思ほえて涙のみ社降ちすれ
入道殿にて何をかきみの口たし給ふさまおとな
にもまされりかけものなど入れ給ひけり
源宰相
九六昨日より心にぞいる梓弓はるのかざしと見ゆる君故
かへり
〇七定めなき君が心にいるなれば梓の弓のはるも物うし
女のもとにおはしたるにかへら口ねどいはせけ
るをおほしき(如元)とありてつゝめて
一七天雲のかへるばかりの村雨に所せきまで濡れし袖哉
かへり
二七人はいさ袖や濡けむ我は唯涙にのみぞそぼちつゝこし
時々通ひ給ふ女あまたなる事人にいはるゝこそ
心うけれとの給ひければ、女
三七根蓴の寢ぬ名の痛く立ぬれば猶大澤のいけらじやとに
返り
四七大澤の多くの人の歎きにていけらじとのみ思ふなる覽
大貳くだらじと住まひて心ちあしとてきて修法
すと聞きてやり給ふ
五七思ひやるとぞ悲しきあさ口峯の白雲たつや立たすや
同じ女おはすべからむ折は晝はの給へといひけ
れば二三日ありて
六七晝と云し言かはる共小蟹のいかに擧動しるく見ゆ覽
かへり
七七我脊子が著き宵とも小蟹の糸を賴まむ心こそせね
とて今日あすすぐさむとありければ立ち歸り
八七今日をだに暮し兼つる小蟹の糸に懸りてあす迄やへむ
たび〳〵返り事せぬ女に
九七山彦は答ふるだにも遥けきを音せぬ人を待が苦しき
ついなしのときをる所はぎにつけて
〇八を鹿なく峯の朝霧よそにわが思やりつる折ぞ悲しき
同じ人のもとに月あかき夜うちよりおはして
一八きもなれぬ夜の衣もさよなかに返す〳〵も哀也けり
かへり
二八色ならぬ衣もなとか返るには薄く成らむ身に泌てかく

よそふる人やおはしけむその口いとたかき人を
心にかけて
[五八]君が身を春の山ともみてしがな思ふ心も霞む計りに
中宮の宣旨を内にてほのみ給ひて
[四八]女郎花よはの下紐打解けて見なれし袖ぞ今は戀しき
あらがひて返りごともなし
[五八]あらがはゞ強ても云じ石清水流れて今は下に頼まむ
いかにせましと云ふを聞きて
[六八]世中に身をし戀つゝ君なれば我は我にも非すとや思ふ
又
[七八]いか也し旅の夕か忍びけむ濡にし袖よまだ乾かぬ
とあるに給はりぬとのみあれば
[八八]今更に覺束なしや又なさむ隔てぬ中となりにし物を
いかなる事のあるにかありけむ人がはりなどし
ければ
[九八]忍草忍ぶかひなくもてなさば忍ぶともらばいかにぞ
返り
○[一九]逢ふとだにみざりし物を忍草漏す計りの露や置けむ
かせを
[一九]思ふかな薄き衣を空蟬の今よりあらき風にあてじと
父おとゞの御服にてものし給ふふに内より馬内
侍を御使にてとはせ給へるにその夜とゞめてあ
かつきに
[二九]爭でかは夢にも人のみえつ覺物思初し後はねなくに
返り
[三九]歎つゝ我もねなくにみゆる夢の慰む方はなきと社きけ
同じ人くらべやに中將とありてあかつき出づる
を宵よりいとよく聞き給ひて
[四九]くらべやの覺束なくもみえぬよは月みる程のすめば也鳧
返
[五九]名にし負へに影だに見ねくらべやを月ある樣に云もなす哉
三條の北の方より歸り給ひて萱草花にさし給ひ
て
[六九]懈りの色に出たる花みれば物思知れる折かとぞ思ふ
返
[七九]あやまちの始もしらず何事に懈りそめし花の頃ぞは
又返
[八九]知ずとかそとに聞つゝ露したる花は移りて外にもらすや
かりの子を十奉り給へれば、北の方[官明親王女]
[九九]雁のこに恨をさへぞ重つる最どつらさの數をみすれば
程へておはしてすのこに薄の風に
○我きても招き已ねば花薄まだくる人の有かとぞ思ふ
との給ふを北方の御めのとひらかといふ聞きて
[一〇]荒磯海の恨もはてぬまつ頃に靡く尾花は常のこと也
堀河の院より仁和寺にみかどかへらせ給ふに女
房のみふだに書きつけたるを見給ひて
[二〇]御狩野の野べに漂ふ草なれや書附べくも見ゆ成行く
ためもかゝみかはになりて口いはのかたに袋を
ぬひて龜のかたをぬひつけて物どもいれて
[三〇]岸の上かゝる迄ふる龜のよの遙けくすまむ程ぞ久き
[四〇]定めむと思ふ物からしかすがの渡口みては難くせまほし
たなごひの箱のふたに葦手にて
[五〇]別路のかたみにそふる玉匣あけくれ我を人忘れめや
白河どのゝはかに夜とまりたるひまに
[六〇]めの前に斯見人も過るまに止れるとてや過るなる覽
返
[七〇]浮世には又も歸らでやがてかく蓮の上の露と成なむ
又返し
[八〇]露とだに消えなば何の疑か花の中より生れざるべき
又の日まうでたれば蓮の花を口して造りてみの
うちにはこは口いしほをいれてやり給ふ
[九〇]日たくれば消やしぬ覽泡沫の花の顏をも今朝はみる哉
この御八講をたふとがり給ひて
○白河と誰れなづけゝむ流れての後よりかざす蓮也鳧
宮にわたり給ふに中宮いで給へるにまゐり給へ
りかみ參らせ給へるにおひてかみをたてまつり
給へりまゐにかみ口うすやうを
[一一]まけ口も君を祈りし印にや多くの神の今朝はみゆ覽
御返
[二一]祈る其あまをかざしと見ねしかば神のあたりによらじとぞ思ふ
昔うちわたりにね給へりけるに
[三一]あまに思ひおかせり鳧と千早振忌垣の本に聞しと也
正月十五日子の日にあたりたりけり堀河の中宮
わたらせ給ひてごなど參らせ給ひてしろがねの
小松の枝にあをき紙にて名かきつけ給ふ中將に
[四一]君が代を行々みれば小松より外の緑はみえずぞ有ける
中宮の御返
[五一]末遠き野べの小松を任すればいざひきつれむ□
口とのにて通ひはじめ侍りて雪のふるに歸りて
すなはち
[六一]あかすして歸るみ山の白雪は道もなき迄埋れにけり
返
[七一]ともすれば跡絶ぬべき歸る山越路の雪はさや積る覽
かく通ひ給へどあらずとかくし給ふを左大將見
あらはし給ひて夜一夜物語りし給ひて歸り給ひ
ぬ又の日、左
[八一]忍草いかなる露か置つらむ今朝はねもみな顯れに鳧
返
[九一]淺茅生を尋ねざりせば忍草思ひ置けむ露をみましや
多武峯の君に枇杷殿の御祈りし給へとの給ひけ
れば峯の君大納言殿の御時よりおろかならずな
むとて
○[二一]昔より云始めるいかゞさき末の人さへ頼もしき哉
笠置に詣で給へるにためもとしほ□ありかす
よりきみところちかきをきくもなどの給ふにま
ねらむといひけるを思ひ出て遣しける
[一一]我宿にしげる蓮のさしをわけ思む人に譲りてしがな
返
[二一]君だにも心隔てぬ物ならば花と共なる身とぞ成べき
正月一日右大將殿より
[三一]あたらしき年の始の嬉しさは昔の春もかくや有けむ
返
[四一]うれしきに珍しさをも添ふるかな□
堀川の中宮
[五一]悔しくも汲てけると思ふ哉沈み初たる今朝の我身を
中將の物のたまひてつとめて
[六一]香にのみ聞しは偖も慰みきなどかけさしも袖の露けき
少將の君さとに出づるに
[七一]さゞ波やたちいづるとはいとなくて□
雨に十月ばかりの紅葉のみな散りたるにつけて
[八一]うしと思ふ秋に後れて留れる人はかひ無物にぞ有ける
返
[九一]過る秋留むる人は色分かでみえばか口ある心ち社せめ
三條の大殿[廉義公]の失せ給へるをまたともかく

もせで大臣いみじうなき給ふと聞きて

○煙とも雲ともならぬ程計りありと思はゞとの悲しさ
わづらひ給うて久しくさぶらひにも出で給はでいひいだし給へる

一朝夕に出でつゝみしを覺束な人の心の移りうつらす
御返　左衛門督まひさら

二いつしかと心にしみて深緑松より外の色はかはらじ
中の君の御衰着に沉の枕にいれて奉り給る

三よそみなく人諸共にふすごとく枕を君に譲りつる哉
御返

四今よりはみより離るな敷妙の君が常世の枕と思へば
すけまさの大貳のくだるに直衣裝束一具をこひのふたに入れてたゝう紙にかきてさしはさみて口より遣しける

五まだ近き程をも絶ぬこひなれはおくらす可も思ほえぬ哉
殿八幡に詣で給ふに詣でもぶらひ給ふをあがめもよにかくとぶらひ給ふよと喜び給ふついでに

六今日は猶濡るゝのみ社嬉けれ天の下にしふる身と思へば
八月ばかり仁和寺のみかど廣澤におはします御ともに仕うまつりてかへさに左に聞え給ふ

七秋の夜を今はと歸る夕暮に鳴蟲の音ぞ悲しかりける
左御かへり

八蟲の音に我も涙を落す哉最ど露けく野べやなるらむ
祭のかへさに女車に卯の花葵――ちはやふるならぬことかきて口てやたまふ

九しづの男のしのびにを鳴け時鳥
とあれば
こだかきこゑはまたもしつるを

此一册以家隆卿筆跡之本書寫之藤本虫損等多故往々除之重以別本可改正之入獨集歌有首書考之
閑院左大將藤原朝光歌也他人書集之歌此集詞書有左右大將左者則朝光右者藤原濟時也

藤原義孝集

源修理のかみの家に方違にいきてあるに枕いだしたるつゝみがみに

○つらからば人に語らむ敷妙の枕交して一夜ねにきとかへし

一味氣なや旅の宿りを草枕假ならずとて定めたりとはあかす思ほえしかば人にかくなむありしこれが返事せよと云ひしかばかくはいかゞとて

二語る共誰が名は立たじ長からぬ心の程や人に知れむ
秋の夕暮

三秋はなほ夕まぐれこそたゞならね荻の上風秋の下露

四露くだる星合の空を詠めつゝ爭で今年の秋を暮さむ
殿やみ給ひし頃いかゞと人のとひたるに

五夕暮の木繁き庭を眺めつゝ木の葉と共に落つる涙かうせさせ給ひにし御忌はてゝ人々におはし別るゝ日

六今はとてとびわかるめる村鳥の古巢に獨詠むべき哉
修理のかみ返し

七羽雙ぶ鳥と成ては契るとも君忘れずば嬉しとぞ思ふ
春人のよめといひしに

八夢ならで夢なるとを歎きつゝ春のはかなき物思ふ哉
春かしらけづらせてみな人々よめといひしに梅の花おもしろくある所を

九春風の空なる程は梅の花梢こそなほうしろめたけれ

○春々の花をあだにと見し物を昔の人の夢ごゝちする
人の許より歸りてつとめて

一君が爲惜からざりし命さへ長くもがなと思ひける哉
物いひし女こと人に物いふと聞きて大方つねにみれど物言はねばなど歸る山といひたりければ

二歸山さか〳〵しくも見えなくに何しか人の立止べきかへし

三戀にのみ惑へる人の心には坂々しくも見えぬなる覽
七月ばかりに月のあかきに物言ふ人のもとに

四忘ても有べき物を此頃は月夜よいたく人なすかせそことゝも思はぬ女の物言ひかけしかば

五梅がえに雪も積らぬ春なれば木の下露や常に露けき
內渡りにて物いひし女の絶えて後恨みければ

六逢坂や旅行人もしのはらに一夜は宿りとらぬ物かは
左衛門督の命婦の許に權中將となのりて宮のおはしたりと聞きてやる

七怪しくも我濡衣をきたる哉三笠の山を人にかられて
同じ人に久しくたえて

八忘るれど斯忘られず忘られずいかゞ樣にしていかゞ樣にせむ
扇に梅の花のかれたる所などあるに書きつく

九年毎に止らぬ花の色よりも枯たる野べを見ぞ悲しき
五節の頃さし櫛とりたる返すとて

○人知ぬ心一つを歎つゝつげの小櫛をさすかひぞなきかへしいかなる人

一搔分て我になさしそ美しとおもて〳〵に且は云つゝ
左衛門藏人のなほ疎かりければこくれうのをかしきを包みてそれに書きつく

二馴されぬかはその暮ときゝ乍ら宵曉とたつぞ苦しきとをさしながら物いひし女に堀川の中宮にて

三思事なるとか聞しかひもなくなど打解ぬよはの白波かへし

四打附に思ひ鳴門の浦もなく解ばあだなる波も社たて
横川にてさくなんさうをみて

五紫の色にはさくな武藏野の草の縁りと人もこそみれ

六櫻花山にさくなむ里のにも勝ると聞くをみぬが悲しき
服なる頃大夫の君人のめで人の國より上りたりとて物へゆく道なれば云入るゝ男も服なりける

七戀しとは思ひし物を藤衣きたりときけど訪はぬ心よ
男あるほどにて返り事なし

堀川の中宮にて雪のふりたるつとめて麗景殿の細殿の枯れたる簀に雪ふりかゝりたるをとのもづかさしてさしいれて辨の少將の君奉れ給ふとてそれに結びつく

八まねくかたにぞゆきとまりける
と書きておこせたりければ

九き過ぎてかゝる薄の身なれども
書きておこせたり

十定めなく風も社ふけ花薄いかにせむとか結置きけむ
又かはらけに書きて紙につゝみてうち渡りてと

らせたれば
○定めなく風の吹く夜は花薄よらむ方なき物を祉思へ
又かへし
一七哀にも思ふなるかな花薄秋こそうけれ春も知らじな
一品宮の臺盤所にてかんし願ひしかば山吹の花
にいとをかしうならしてよふくろにさし出した
りければ腰にひきつけて梅壺の方に公遠ひきつ
れていきて花をいろ〳〵にこきいれてかうかき
てなかにいれたりける
二七嬉しやは是をみつれど味氣なく花に馴たる心のみして
またかへし
三七又なさは誠の花に劣らめど怪しや春の時ならぬみよ
四七時ならぬみにも爭でか成ぬ覽春に後るゝ花も有やは
又かへし
五七春は花ちるや千種に思へ共言のは繁しかくてやみなむ
藤侍從五月五日まろなるさうぶやるとて
六七駒だにもすさめずといふ菖蒲草斯るは君がすさびとぞきく
かへし
七七菖蒲だにかゝるは人に引れけり汀に映る君や何なり
狩衣の紐をとりて結びめをとりかへたりしかば
八七我ならぬ人にはまれと結び置し紐いつのまに打解ぬ覽
九月九日菊の露をみて
九七移はぬ菊に結びおく露の色は解ぬ霜かと成てみゆ覽
石山の峰の紅葉
○八有明の月の原にて山の端の深くも空にしりにける哉
一八行方も定めなき世に水早みう舟を棹のさすや疏こそ
左衞門のないし時めいしころ山にのぼりていひ
おこせたりし
二八空高く時めく月と聞しかば我も雲居にきてぞ詠むる
堀川の中宮の內侍のすだれの前に物言ふほどに
雨の降りかゝれば女のつげゝれば
三八侘ぬればつれなし顏は作れ共袂にかゝる雨の侘しき
又同じ所にたちよりたるにまらうどのありしか
ば立ちながら歸りてまた旦に瓜にかくがつく
四八是をみよ一夜は人目つらかりき立煩ひし瓜にやは非ぬ
かへし
五八立侘て這臨りける瓜かつらならし顏にや人のみてけむ

中宮の大夫うぶやの七夜書をこひ給ひて
六八ちゝにつけ思ぞ出る昔をば長閑なりとも君ぞ云べき
御かへし
七八君がかく云につけても人しれぬ心のうちて心ある哉
藤侍從すけに物いひにたちよりたるに月もなき
頃なればいと暗しやなどいひたるに關の現はさ
やかなるといひたるに
八八思ひつゝ睡ろむ程にみるよりも斯る現ぞ儚かりける
女の許に
九八命だにはかなくもあらばよにあらぬ思君にやは非ぬ元
また女
○九いつ迄の命も知らぬ世中につらき歎きの唯ならぬ哉
かゝし
一九みをつみて長からぬよを知人は偏に人を恨みざらなむ
修理のかみこれたゝわかなすびわかうりをおこ
せたらい月さぬすけの少將むこにとるべしと
聞きての頃
二九御園守答へだにせよ月たゝばかのとも皆成ぬべしとか
四日の夜返しあり
三九何事もなるともなしに瓜づらの名にのみ立む事の怪しき
またかへし
四九あやもあれあやもなくまれかの瓜の數ならぬみようや世中
五九今宵しもきかでやゝまむ時鳥後に鳴とも定なきよを
また女を尋ねしに
六九露深き物にぞ有ける女郎花尋ぬる人を唯にあらせよ
女御殿のすのこに長櫃にほぞちを入れておかせ
給へるを夕立のすればみかうしおろしたるまぎ
れにうせたれば
七九盜人はほぞちをみても雨降れば干瓜とてや取納む覽
石山に詣でゝかへる河づらに鳥多く立てば
八九さよ深くたつ河霧もある物を泣々來居る千鳥悲しも
殿うせ給ひて八講し給ひし次でに
九九君だにもおなじぬれとて法の雨の降心をも尋つる哉
されば返し
○○法の雨も淚に分ず神無月はてや時雨や最どなからむ
權大納言殿に花見にいきたりしかば櫻の花ちり
たりけるを見て大納言

一〇櫻花まだみぬ程に散りにけり後の春だに心あらなも
御返し
二〇此春も君をば待ちつ櫻花風の心のなきにやあるらむ
同じべたう非違の別當離れればまだに心やすく仁
和寺の花みむと定め給へる日風のいたく吹きて
とまるよしのたまへるに
三〇天つ風吹亂れぬる春なれば心のごかに花もみてまし
御返しにべたう離れ給ひぬる由をいたう哀れが
り聞え給ひて
四〇吹とめぬ風ぞ悲しき春のよの色の常なきとを思へば
殿うせ給ひて又の年の春あめのふる日
五〇春雨も年にしたがふ世中に今はふるよと思ふ悲しな
八月ばかり忍びたる人にあひて夜深く歸るあし
たに薄につけて
六〇花薄むすび置きつる袂ゆゑ露も心のとけすみえつる
かへし
七〇ほの結ぶ野草隱れの花薄とけでや秋も過むとすらむ
物いひし人に瓜のありしをとりて
八〇立つとの物うかりつる瓜なれど後やならすと思ひぬる哉
かへし
九〇あだ也と名に立君は瓜生野の斯るつらさもならさり鳧
母上の東宮にさぶらひ給ひしに暇にて久しう參
り侍らざりしかば瞿麥につけて奉りし、母上
一〇よそへつゝみれど露だに慰まず如何はすべき撫子の花
御かへし
一一暫したが影に隱れぬ程は尙うなだれぬべし撫子の花
これは後にかきそひ給へるとぞ
もがさやみ給ひて死ぬべき心ちのするかなしぬ
る猶なりとも暫しはとかくなせそ誦經しはてむ
の心ばへの女御のおまへに聞え給ひけるを忘れ
給ひてとく納め奉り給ひてければ母上の御夢に
二一しか計り契りし物を浪り川歸る程には忘るべしやは
又の年の秋六君の御夢に此君の御文有りけるに
三一きてなれし衣の袖も乾かぬに別れし秋に成にける哉
失せ給ひての十月ばかりにせいみん僧都の夢に
父の大臣のおはする所に物を隔てゝ兄君とおは
するに兄の少將は物思はしげにて笙の笛をふき
給ふをみればたゞ御くちのなるなりけりなど母

上の兄君よりもこひきこえ給ふを御心ちよげにてはおはすると聞ゆればいとあはずおぼしたるけしきにてたつ袖をひきとゞめてかくのたまふ

一時雨とは千草の花ぞ散り紛ふ何古里の袖ぬらすらむ

昔は契りき蓬萊宮の中の月今は遊ぶ極樂界のうちの風に

五心にも非で逢見ぬ年月をけふきて花とつみてける哉かへし

六移ろはぬ心也せば年月を花と摘てもみえずぞ有まし

權中納言定頼卿集

正月五日雪の降りて松に垂氷のしたりけるに

七いつしかとたれ引つらむ雪分て子日の松は氷解ぬに

返し　誰にか

八冬籠りまだしかりける松故に子の日を年と誰か引けむ

右大臣左衛門督と申しける時松雪似レ花と云ふ題をよまれけるに

九白雪の積る梢に咲く花はまだふる年の春にざりける

三月十日隨レ風尋レ花と云ふ題を

一〇吹風を厭ひもはてじ散殘る花の知べと今日はなり鳧

三月盡日あめをかしてさりぬと云ふ題を

一一限有て雨にさはらぬ春なれば散花笠をきてや行らむ

右大辨

一二過來ぬる春は別れて殘るらむ花故けふの雨を社思へ

九月九日ひねもすに翫レ菊といふ題を

一三夕露の置迄菊をみつる哉おもての芝をのごひつるより

庭のおもに秋くれぬと云ふ題を

一四いつとなく戀しき宿の花なれど秋の氣色は著く見え鳧

庭の紅葉を見てよめる

一五紅葉ばの散積む時ぞ打はへて拂はぬ庭の面隱れなる

大井川にて人々紅葉をよめる

一六大井川水の淺くもみゆる哉紅葉の色は雨とふれども

四條宮におはしける時大納言殿公任より時雨と共に紅葉殘らずちると云ふ題奉られたりければ

一七紅葉にも雨にもそひてふるものは昔を戀る涙也けり

御返し姫宮のなくなり給ひけるとしなり

一八春散し花を思へばもみぢ葉のめに止らぬは涙也けり

廣澤に人々いきて月のいみじうあかう池に映りたりけるに

一九すむ人もなき山里の池の面は宿る月さへ寂しかり鳧

雁の多くつれていきけるに

二〇かき連ね雲路に結ぶ鴈音のはかずも秋の月は見え鳧

ゑに織女に琴ひきてかしたる所

二一琴のねは貸すもあらなむ彦星の上の前には誰か引べき

松の木の下に人々居て琴ひく所

二二彈琴はこと〳〵なれど松風に通ふ調べは違はざり鳧

月夜に旅ゆく人ある所に

二三人知ず出たつ道の旅なれど空行く月は後れざりけり

紅葉の木の下にて酒のむ人ある所

二四風に痛く散らぬ先にと紅葉を君が爲には折留めまし

繪に櫻のいみじう咲ける所に

二五世と共に散ともなき櫻花ゑには風こそ懸らざりけれ

櫻を見ばやとのたまひけるを聞きていみじうめでたき花を奉られたりけるあかぞめが家の花を折りに遣しける

二六櫻さく盛になべて成ぬ共花なき里は知ずやあるらむ

返し

二七我宿に劣らぬ花はありやとも今は尋ねじ無名立けり

嵯峨野におはして

二八春の色をきてみる時は稀なれど心は秋の野守也けり

志とみのひまより月のさし入りたりけるを

二九都山隔てたれども月影の餘りあかきはもりて見え鳧

聞きも知らぬ鳥のなきけるを人の聞えける

三〇まだ知らぬ鳥も鳴けりさよ更てといひけるに

いまは知りたるなのりだにせよ

白川殿にて

三一限なき匂をそへて白川の里の知べほしかにざりける

うちより出で給ひてゆづけのゆまち給ひける程に時鳥の鳴きければ

三二ゆづけのゆまつに夜更て自ら山時鳥なくをきゝつる

右大辨の父におはしけるに右大臣殿の上の御もとより藥玉奉り給ひけるを

三三宿分ぬ軒の菖蒲をみてだにも隨なき戀のねをや絶なむ

御返し

三四すきたもてふく隙だに有物を軒の菖蒲の程を社思へ

四月一日のりたゝが女房の許にいひたりける

三五今日よりも着初てしがな夏衣過なば人の心みゆべく

女房にかはりて

三六うちつけに急きたつなる夏衣先しるきかな人の心の

又のりたゝ

三七夏衣まだ一重なる心とは重ねぬ程に見ゆるなるらむ

又返し

三八重ねての後をし待たば夏衣げにと見るべき程の遙けさ

中宮の七夜に

三九春日山わかねに咲る藤の花松に懸てや千世を祈らむ

子日に

四〇千世籠て生出る野べの姫小松引てもちよのれも知れけれ

春毎に花を惜むと云ふ心を

四一年をへて花に心を碎く哉惜むにとまる春はなけれど

殘りの菊を惜む

四二別れにし秋の殘りて菊の花匂ふ雛のしまにぞ有ける

右大辨

四三過ぬとて惜みし菊は咲殘る雛のしまにとまる也けり

急ぎてきぬを人にぬはせければ御せあはせむと

人々の云ひければ

四四衣川遠きあたりにあらね共誰に逢瀬をわきて云らむ

すだれに雨の玉のやうにかゝりたるを

四五雨にいとゞあれのみまさる故郷に思もかけぬ玉簾哉

九月ばかりさか井と云ふ所に汐湯あみにおはしたりけるに姫君の御もとに

四六住吉のながめの浦も忘られて都へとのみ急がるゝ哉

かへし

四七立歸り日頃のふれば住吉の猶長居する浦とこそ見れ

おなじ所にて

四八船はゐれどもなみは立ちけり

ひとりごち給ひけるを、みちなり

夕されば伏見の里に急ぐまに

雲晴れて月あきらかなりと云ふ題を

四九見る人の心や空に成ぬらむ隈なくすめる秋の夜の月

菊色をへんすと云ふ題を

[六]○昨日みし色もかはりて朝毎に面がはりする庭の菊哉

うす櫻と云ふを人のもて詣できたりければ

[六六]一是や此音に聞きつる有珠櫻鞍馬の山に咲るなるべし

春の頃題出して人々によませ給ひけるに

[六六]二音づるゝ人しなければ鶯の友よぶ聲になぐさむる哉

[六六]三春過ぎて疎くやならむつれ〴〵なたえすおとなふ鶯の聲

竹生島にまうでたりけるに

[六六]四磯なれて心もとけぬこも枕いたくなかけそ岸の白波

奥山の瀧

[六六]五來人もなき奥山の瀧の糸水のわくにぞ任せたりける

つれ〴〵におはしけるたはぶれにこめだいにすだれかはを人々よみける

[六八]六跡絶て訪ぐき人も思ほえず誰かは今朝の雪ま分來む

わか葉を

[六七]七立かはり誰ならすらむ年をへてわが繰返し雪変る道なつめ

[六八]八都人けふもぞきます片岡の雪かき分てなづめ我兄子もちひ

[六八]九潜きせむ蟹の主業も千尋なるみるめし無ばかひ有じはやあはしがき

[六七]○十水の泡し搔消易くみゆれ共露の身よりは久しかり鳧やいごめ

[六七]一あなうやいこめてぞ只に已なまし斯つらからむ物と知せば

右大辨人のむこになりて久しくまうで給はざりければ

[六七]二谷水の上は一つに凍るとも下の心はのごけからめや御返し

[六七]三凍るとも打だにとけば谷水の深き心は隠れやはする

何の折にか頭辨の御もとに

[六七]四古の春忘れずば梅の花もとのあるじの折るな咎めそ御返し

[六七]五古の主ならねど梅の花をりしる人ぞいかゞとがめむ

右大辨花――ひ給ふとて

[六七]六春暮て散はてにける花の上は木の本に社とはまほしけれ

筑前の入道なくなりて後四十九日のゝるだい書

かせ奉りける返しやり給ふとて

[六七]七極樂のはちすの花の紐の上に露の光をそふる今日哉

御返し

[六八]八人の上に遂の露を結び置ば磨ける玉のひゝに社ませ

三月三日はらへしに河原へいで給ひけるに車どものきほひて騒がしかりければ御心の内に

[六七]九解き繩のとくも急がじ禊にはゆふ懸たるぞ神は請らむ

三月つごもり郭公の鳴くを

[六八]○時鳥思もかけぬ春なけば今年はまたで初音きゝつるいとあかくしもあらぬ月の折に菊のいみじう咲き亂れたれば女房などいでゐて見るとて或る人

のさゝめきける

[六八]一まだき降りぬる雪かとぞ見る

とあれば

神無月おぼろ月夜のしら菊は

四月まゆみの紅葉したりける見給ひて中將殿のかれ〴〵になり給ひける頃なり

[六八]二住人も枯行く宿は時わかず草木も秋の色にぞ有ける

ひめぎみ

[六八]三綠なる松の梢をおもはずに紅葉の色のこく見ゆる哉

やはたにまうで給ひて木の本にとまり給ひてごみと云ふくゝつまはしよびにやり給ひけるがおそかりければ

[六八]四高瀬舟ふなでこさむとまつ程に

とあれば右大辨

やがてにしにもかくれぬるかな

をさなき人の親に後れて思ひもいれであるを見給ひて

[六八]五もりおほす露も消ぬるませの内に獨句へる韮麥の花

上の御弟のをさなくおはしける程渡り給ひて一夜ありて歸り給ふに乳母のかたはらなるに

[六八]六ね絶ぬる心ちこそすれ笛竹の一よや節の限なるむおまへなる人の聲をにはかにいと高く笑ひければ

[六八]七ふりたてゝ笑ふ聲をば秋過て又鈴蟲の鳴かとぞ聞く

式部がやすまさがめになりて丹後になりけるにいきやせましいかゞせましといふと聞きてやり給ひける

[六八]八行き行ず聞まほしきを何方に踏定むらむ足うらの山

五條のあまうへの御もとに君だちわたり給ひて

菊の移ろひたる紅葉のたゞ一葉つきたるを奉りたりければ

[六九]九我のみやかゝると思へば故郷に雛の菊も移ひに鳧

[六九]○このもとを思ひ社やれ紅葉ばの枝に少き色をみる哉

みつなりが讃岐へいくにやり給ひける

[六九]一松山のまつの浦風吹きよせて拾ひて忍べ戀わすれ貝

御返し

[六九]二たゝぬより絞りも敢ぬ衣もてまだきな懸そ松の浦波

遠きほどなる人のもとより餝とぐものこひ給ひけるやり給ひけるに

[六九]三君が影見えもやするとます鏡とげど涙に尚曇りつゝ

と云ひたりし同じ所なるをみて

[六九]四ます鏡とげど涙に曇るらむ影を並べて見るは嬉しや

上の御弟の三の君の御許に

[六九]五ひくよりぞ著く見えける萬蒲草君が袂にかくる千年は

この返しを

[六九]六水隱に生る菖蒲はけふ毎に誰に引れてふべき千年ぞ

播磨守の久しうたいめし給はで上に聞え給ひける

[六九]七逢ぬまの憂に生たる菖蒲草袂に懸るねをだにもみよ

この返しを

[六九]八逢ぬまは我憂からぞ菖蒲草袂に懸て云すもあらなむ

女房のちごを男親のとはざりけるに

[六九]九故郷の小萩が本の露けさを訪はぬつらさは秋ぞ先知る

小瓜を人の奉りたりけるに

[七]○朝夕にたつをやく迄瓜生山麓の霧の晴るゝまぞなき

[七]一瓜作り今はつらさも忘れてよそになれるぞ戀しかりける

とある返しを

[七]二山城のとばの渡りの瓜作こまほしと思ふ折ぞ多かる

殿上にて

[七]三今日よりは衣の袖も欲からず紅葉の錦身にしきたれば

三月ばかり始めて女御殿に御たいめありて後これより聞え給ひける

[七]四飽ざりし夜の名殘の面影を宿の櫻によそへてぞ見る

御返し

[七]五詠むらむ花と一重の句をぞ折ても我は床しかりける

おなじ女御殿の母うへなくなり給ひて後その御

かはりに仰せなど聞え給ひて

八〇我を君昔の人と思はなむ心はさらにがはらじものを

御返し

七九變らじと聞けば昔の人よりもこは増りても頼べき哉

七八ほゆにおはして曉がたに渡のたてば

七七沖つ風よはに吹くらし難波潟曉かけて波ぞ立つなる

行きかふ舟を

七六思ひやる都のことを語るやと行かふ舟をみぬ時ぞなき

同じ旅にて九月三十日

七五常よりものごけさ秋と思ひしを旅の空にも宿る月哉

十月ばかりよるなのいたくふりければ

七四楢には殘も有じ神無月なべてふりつるよはのくれなゐ

尼上のはすのすゝを鼠のくひたりけるを見て

七三よゝのこの蓮の玉をくひけるはまた矢はむとや思らむ

物におはしける道にて卒都婆をはしに渡しける

をわたり給ひて

七二世を渡る誓の方を云做してそとはみ乍らこえ渡る哉

白川におはしけるに御ともにゆきよりの朝臣あ

りけるがかへりけるにおひてやり給ひけり

七一山里にくればとひ鳧今よりは戀しき時の形見にをせむ

返し

七〇打はへて影と頼まば假初の山里にしも後れやはせむ

上の御をばの失せ給ひける御いみにてよりみつ

の朝臣

六九ま[illegible]での仙菜だにしてみえなかしこに後れたる人の爲にと

とゞめりけるを聞き給ひて

六八浮世には止るのみ社悲しけれ斯云人も有じと思へば

おなじ人の御手のありけるを見給ひて

六七見る毎に波はよすれど濱千鳥昔の跡は變らざりけり

同じ人美濃におはしけるに御祈よくせさせ給へ

よの驚がしきなど聞えたりける文を見給ひて

六六長かれと人をだに社數へけれなどか我身を祈ざりけむ

男の女房を語らひて十日となさで參りつゝ申さ

むといひけるが一月ばかり見えざりけるをいか

にいはむと云ひけるに

六五十々と契りしとは鳥の子を重ぬる程を云にざりける

返し

六四十にてと咎むる人は有ぬべしみそかにと社云可りけれ

中將殿のかれがたになり給ひて五月雨の頃

六三五月雨の軒の雫に非ねども憂世にふれば袖ぞ濡ける

ひめぎみ

六二今迄も長らふる身の徴りせば何かは露の袖も濡まし

中將殿たえはてさせ給ひて後御枕に螺鈿に松を

すりたりけるに姫君かきつけ給ひける

六一心には思出でじと忍ぶれど枕にて社まつは見えけれ

あはれなることなど人の語り聞えければ

六〇敷妙の枕の塵を打拂ひ待つかひ有りとみる折もがな

いとあかうしもあらぬ月に菊のいと白う見ゆる

を上の帳のまへにふし給へるをやをおこし聞え

給ひけるをおき給はざりければ

五九梓弓おし引きしつゝ終夜やゝと云へ共いる人もなし

ひとりをまさぐり給ひて

五八おもとこそ有とはみれどいかなれば獨とのみは人の云覽

中宮の女房人に忘られて歎きけるを十月ばかり

にやり給ひける

五七紅葉にも雨にも添ひてふる物は昔を戀ふる涙也けり

中納言御返し

五六奉散し花を思ひて紅葉ばのめにとまらぬは涙也けり

ながたにの入道殿の御もとにまうで給ひてかへ

り給ひけるに、入道殿

五五見捨ては歸るべしやは山風の峯の紅葉のとと訪はぬを

御返し

五四嵐吹く峯の紅葉をみぬときも心は常に留めてぞくる

ながたにより歸り給ひて母の御もとに

五三故郷のいたまの風に寢覺つゝ谷の嵐を思ひこそやれ

御返し、入道殿

五二谷風の身にしむ事は故郷の木の本をこそ思遣りつれ

三井寺に入道大納言いり給ひけるに後白河によ

り給ひたりけるに花の心もとなかりけるに歸さ

に皆散りにければ、入道殿

五一故郷の花は待でぞ散にける春より先に歸ると思へど

御返し

五〇行通ふ便ならではこぬ人をこじとや花の色に散けむ

又殿の御かへし

四九故郷の主と思はゞとめてまし面變りにや花も見えけむ

御かへし

四八植置きし人だにもこぬ故郷に歸て花を恨むるやたれ

いたうわづらひ給ひける頃ところをかへ奉り給

へりければ御壁に書つけ給ひける

四七人の命ながたに山にはると云はゞしぬる所は有じとぞ思ふ

入道殿にたき物を聞え給ひけるを奉り給はざり

ければ

四六いづ方に風誘ふらむ梅の花など木の本に匂だにこぬ

おん返しとてなし

四五人々なくなりける頃

四四みる儘に人よ煙と成果ぬこそひの家は悲しかりけり

女御殿の御忌はて、七月十五夜山の座主のこと

のゝみかどに常不輕つきにきにけるを後に聞き

給ひて

四三老て社うつべかりけれよゝへても空の鼓の契有やと

返し

四二朝夕に妙なる法をよむ君は世々の後をも何か待べき

四一古のかたみに摘める若菜故みるこのめにもみつ涙哉

母上の外に渡り給ひて人に物いはぬ行ひにて久

しうたいめし給はで歸り渡り給ひて今日なむ暇

あきたると聞え給ひけるに急ぎ參り給ひけるに

人の文御暇ふるかりてと聞えければ歸り給ひに

けるを上はいと待遠に覺してかく聞え給ひける

四〇この本にきても見難き帚木は面伏せやと思なるべし

御返し

三九見え難き帚木を社恨つれ園原ならぬみかはと思へば

女院の中納言の君つれなくのみありければ

三八晝は蟬夜は螢に身をなして鳴暮しては燃えあかす哉

おなじ所の人に又やり給ひける返事を使のせめ

ければかみをひき結びて奉りければ

三七我ほとけ跡たれ給へ千早振神の限はいぶせかりけり

おなじ所に早うやすらひてさぶらひけるわら

はのもとにこの御なのりして入りぬと聞き給

ひて

三六怪くも我莫告藁を伊勢の海の許多の人にかくるめる哉

これは女に近う見聞ゆる人のいみじう隱し給ふめ

りしほぐものゝ中なりしかばかくなり

賀茂の祭の日なるべし

九四千早振神のしるしと思ふ哉思ひもかけぬ今日の葵は

いかなる折にかありけむ

〇五拂ふ人ありと聞しを敷妙の枕にいかでちり積りけむ

又

一五夕霧のいかなる方に曙つらむ明るまだにもなき夏夜を

御返りなどもことに聞えざりしかば

二五相思事こそ人の難からめ我思ふとを知るとだにいへ

などやにて年月すぐしゝを師走のつごもり方

にいみじう荒れたりつゞめて

三五年をへて閉る氷柱も春近みさくれば解る物にざりける

かへし

敷妙の枕もとこに閉られて解ぬはとけぬ心ち社すれ

例のつまどをならし給ひけれど聞きすぐして明

けにける又のつとめて

四五待人や有明の月と思しをさしてやみにし槇の妻戸を

御返し

六五獨のみ有明の月の山の端に入までさゝぬ槇の妻戸を

女御殿の内に入らせ給ひての春物忌にてまゐり

給はざりし頃

七五鶯は都の花にうつるともとの古巣は忘れざらなむ

御返し

八五雲の上を智はざりける鶯は元の古巣を戀ぬ日ぞなき

殿ゐ所など物さわがしきを今宵せちに聞ゆべき

ことなむ御車の有明の月のいとまばゆき程すぐ

してとて所をもし給はで

九五夕月夜まばゆき程も過ぬるを待人さへや出がてにする

おん返しとてなし

ある人のもとに通ひ給ひけるころ内に參りて久

しういでざりければあやにくに此の頃はありき

もせでつれ〴〵なるまゝに例の所にいきつゝな

む慰むるとて

一六戀侘てあひみし床に立寄れば枕に塵ぞ待ちたりける

二六敷妙の枕はさもやなからむ待ゐし塵は數積りにき

局におはせし程に尼上に申さることありし人の

たちよりたりしを何しにきけるぞなどむづかし

げにおぼしてあけにしまたつとめて

三六きし方も疑はれけり月よみしならし顏にも訪じ人哉

かへしとてなし

まきれ給ひし所ありし頃五節に內に參りたれば

四六日影さす雲の上にはかけてだに思ひも出じ故郷の月

返し殿上人參りなどしていと物騒がしければわ

ろきなめりとぞ

五六影とめぬ月に心の暮初めて豐の明も知られざりけり

里より內に送り給ひてせちなる事ありて出づる

なりとありしつゞめて聞えし

六六待かねの里を出ぬと思ひしを大方年の名に社有けれ

かへし

七六思ふとし伏見の里と聞しかどなど待兼と人の云らむ

さかひといふ所にしほゆみにおはしたりしに

聞えし

八六覺束なさかひ遙けき旅人のながゐの浦に長居する頃

返し

九六遙々となが居の浦を詠つゝ戀しきとの名社つらけれ

內に參りたりし又の夜せちにいふべきことなむ

あるとて御車のありけるをさるべき人々さゝら

はぬ程にえ出でざりければ心の內をみせ奉らば

やと聞えたりければ

一七憂人の心の內をみせたらば最ごつらさの數や增らむ

かへし

二七昔よりつらき心を堪へてみば人に幾重の數をさゝまし

里なりしに今宵はうちのとのゐとていで給ひし

を例の所にやと思ひしかばつとめて聞えし

三七打かはし重ぬる床は何なれや返し侘つるよはの狹衣

返し

四七返すとは聞えぬ物を唐衣かさぬと聞くぞまさる濡衣

うちに參らむとせしに開白殿の白河殿にまゐり

給ひにしにさはる事有りて參らずなりにければ

つとめて聞えし

五七行道もけふは猶こそ滯れつてにも花の上を聞くとて

かへし

六七行く道も滯るなる花の上を急ぎていかゞ人に語らむ

ある所に通ひ給ひけるころ內にさゝらひしにな

ごか花を

七七歸りてもみつやは猶やあくがれむ花も主も盛過なば

返し

六七あくがるゝ花の心をみる程に我さへ旅の空寢をぞする

物憂くていでぬ程にこゝちの惡しかりければく

るまたべと聞えたりければ

七七諸共に逢も思はぬ中ならのくるまはいかに久しとかしる

かへし

八七知すやはくるま〳〵の久さを心うしとは懸て祕ふと

かやうにいひつゝ明かし暮しゝを淺ましうめに

ちかう見なし聞えてこゝに入り給ひぬめりしか

ば今はふりはへてもなど思ひしをしられたりけ

るに御文といふをとりいれたればありしにも似

ずいとうと〳〵しきたてぶみにてこまやかにま

めやかなる事どものあはれにおぼしなりたる事

どものあるなかにかきまぎらかしたるをとりい

でたるとて

九七思ひすて出でにし宿のつまなれど下に忍の草はおひ鳧

とありけるこそ誠に哀なりしか返しとてなし

又の年の春都にいで給ひたりし頃さうしもて隔

てたる所にあまうへおはしましゝかば御經の聲

ばかりはかはらねどありしよとも覺えずいと物

哀れにてすぐしゝに暮つ方常よりもよみすまし

給ひたりしに雁のなきたりし聲にも涙留めがた

き心ちするに內よりとて俄に車を給はせたるに

とく〳〵と騷がすをかくなむともえ聞えあはす

車にのるそらもなき心ちするにたゞう紙をさが

し入れたるを見ればかうぞかゝれたりける

〇八聲計り聞だにあるを雁音の最ど雲居になりぬる哉

めくるゝ心ちしてみじろぐも覺えねどかならす

とさぶらひつるをいかに〳〵と車の人々のいふ

に心あはたゞしくて

一八雁音の雲居に鳴む折毎に馴し常世を戀ふとしらなむ

と紙のはしに書きつけしはかく〳〵しうも見えざ

りけむかしとぞありしおき給ひける枕をかたゞ

に見つゝすぐしけるに御文にかくてよろづすゝ

ましうやと思ひしにつみのかうのみ覺ゆる事の

み多かればなむありし枕給へ佛につくり奉らむ

つみもほろぼさむとありけるを押しつゝみてと

みに御返しもかきやられざりければ包み紙に

二八手枕の佛にならむ後の世も假そめぶしの人を尋ねよ

かへし御返りごとのなきこそなか〳〵ことわりなれとて

三八今はとてかへす枕はあかねども共に佛の道を契らむ方ふたがりてとみにも歸り給はざりし程にしも月ばかりより例ならずなやましうし給ひしにいみじう物心ぼそげにおぼしたりしを常のことに思ひなしてあからさまに内よりめしたりしかばかくなむと聞えたりければいとかう心ぼそきに

三八春近み峯の朝日の出るまもまたでや露の消は果なむ

車寄せて例のとく〳〵とせむるに心もかきみだりてはか〳〵しう覺えずとて返しとあれどなし

内にも御藥のまゐて騒ぎみちたるにこなたかなた心の暇なう亂れていそぎまかりいでたれば近うおはすと思ふは賴もしけれど今は文なども力なうてえ聞ゆまじきこそくちをしけれこなたにと聞ゆべけれど今更にあいなくてかたのやうにはなしてかゝれたりけるこそはてなりけれ

三八木隱れに殘れる雪の下消て日を待つ程の心ち社すれ

御返し物も覺えざりしにかくまでつげむこそ

六八誰もよにふる空もなく下消の行止るべき心ち社せね

これは又今聞きつけたるなり法師になり給ひて後この姫君のわづらひ給ひければあからさまにいで給ひたりけるをいみじうなき給ひて御小袖をひかへ給ひければぬぎすゑして奉り給ふとて

七八戀しとも思ふ心のなければや夜の衣を返さざるらむ

御返しとてなし

みたけさうじしてつれ〳〵におぼされけるに經のさるべきところ〳〵人によませ我もよみ給ひけるに止すく草庵といふ所を

八八わくらばに逢る親共知すして猶草の葉に宿りもぞする

月のあかゝりける夜

八八行末の月ぞゆかしき古も今宵ばかりの影はなかりき

上の御もとかれ〳〵になり給ひて後姫君のみゝすがきを書きて奉れ給ひける返事に

〇九朝夕に我撫子の花の色をかれ〳〵になる袖ぞ露けき

尼うへの御もとよりひろめといふ物奉り給ひける包み紙に書きつけておき給ひける

紺みせてちらすな峯のこがらし

入道殿御返し

一九名に高き峯の嵐は寒からじ紅葉の錦みにしきたれば

越後の辨にかれ〳〵になり給ひけるころ菊の花を奉るとて

二九つらからむ方社有め君ならで誰にか見せむ白菊の花

返し

三九初霜にまがふ離の白菊をうつろふ色と思ひなすらむ

大貳三位集

年の内の題百二十ばかり書き出して右近少將師時よませられしみなわすれて

立春

四九谷川の氷吹とく風の音や春立けふのしるしなるらむ

臨時客

五九諸人の松引きつれてくる宿に春の心は山にざりける

卯杖

六九萬度か千年こもれる卯杖つき君が榮行く春に逢べきあをうま

七九籠立つ春の七日に引駒は野べの若菜に色ぞかよへる

よぶこ鳥

八九我をしも喚子鳥にはあらね共聲する方に心をぞやるうぐひす

九九春どに聞とはすれど鶯の聲にはあかぬ物にざりける

春のあけぼの

〇〇たどふべき方なきものは四方山を霞こめたる春の曙

歸雁

一〇櫻花さくを見すてゝ雁がねの雲路に歸る聲ぞ聞ゆる

櫻をうゑて

二〇いかに又待せ〳〵て櫻花咲程もなく散らむとすらむ

春つかた熊野へ參らむ手向にぬさすこしと山のひじりのこひにつかはしたりしに

三〇たてぬきに柳櫻をおりみだる春の錦を手向にはせよかへし

四〇關の神ことぬす人に思ひなむ山のたむくる春の錦は

人のもとにまかりてかへるとて

五〇時こそあれ春しも歸る雁音は花に心を緊やとむらむ

山里に罷りたるに竹のかたはらに花をかしう咲きたるを風いたく吹きて竹の葉も花も程なき賤の屋にひまなく散りかゝりたるを見る程に京より何事ぞ申したりしに

六〇見せばやな笹の庵に春風のたくみにおろす花の上葺

本院にて花盛

七〇榊葉のときは習ひに櫻花しめの内には散さすもがな

東山わたりに花の咲き初むるも散るもさま〴〵心のとまるもあはれに思ひ知られて

八〇心をば喉散る花に類へつゝ我何の身にならむとすらむ

本院におはしましゝに人々參りて花見し中に

九〇櫻花此春よりは吹風にちらさぬ物と知らせてしがな

歸る程に花にむすびつけてやり水にながす

一一散花は水にも暫し淀みけりきて見る人ぞ風も吹敢ぬ

弘徽殿のほそ殿のうちに齋院の花かやおほくちらされておしおかれたる、源中納言

一一おもひいでゝなほざりにだにとへかしな

かへし

二一此月に匂ふ櫻を見てもまづみ垣の花を思ひこそやれ

同じ人おなじ殿のひんがしおもてにきりたてをし置きて二三日參らぬ程に花の咲きたればかくなむとつげに遣したる返事にそれをばいかゞせむずると有りしに

三一折添へし枝に櫻と告やらば散や散ずやなどか尋ねむかへし

四一ちらすなと折て預けし花なれば心靜に思ふとをしれ

花見にまかるとて故少將に

五一君ならで又誰をかは誘ふべき花見にゆかむ春の山道

齋院の花を見てまゐらせし

六一そのかみはなれし御垣の櫻花梢遙かにあかず見る哉

御返し

七一折てこそ匂は見えめしめの内に霞こめたる花の梢は

仁和寺の一品の宮にまゐりて花の夕ばえの外よりもをかしう見えしかば女房のもとに

八一珍しく見る折からか山櫻いづれの春もかくや匂ひし

花見るとて聞きて六條院の女房

九尋ぬらむ四方の櫻を思遣る心さへこそ花と散りけれ
返し
〇二諸共に見ても惜まであやなしや花に心を散し換ふ覽
中宮のたいばん所より
一一先だつる心をしらで櫻花尋ぬる人になりやしぬらむ
御返し
一二心こそさきに立とも山櫻いとかばかりの匂をば見し
花を尋ねて遠くいたる
一三花見ると春は心のあくがれて山路深くぞ尋來にける
三月つく
一四年をへてけふに心を盡す哉惜むに止る春はなけれど
一五岩戸明し其神代より暫し尚過行く春を留めざりけむ
四月一日
一六夏衣たちかへりけるけふよりは山時鳥一へにぞ待つ
四月一日頃さかりの櫻を人のおこせたるかめにさしてお前に置きたるに三四日ちらす源中納言のがりつかはし
一七雲の上に千年を契る君が代は花も常磐の櫻なりけむ
おこせたりし人のいかゞ申したりしに
一八珍らしと雲の上まで尋ね見き春よりおちし一葉櫻を
殿師實のひこの君に見せたれば
一九春はいかに契置てか過にしと後れて匂ふ花に問ばやかへし
〇二〇問はましを花の物云世也せば飽て過にし春の行方を
四月ばかり始めて遣したる高つなの宰相の女
一二一忍兼ね時鳥とや成なましかたらはまくのほしき君故かへし
一二二打とけむ折ぞまたるゝ時鳥忍兼ねたる聲を聞くにも
杜若
一二三あだ人の宿には植じ杜若心へだつる名にもこそあれ
卯の花
一二四卯花は垣ねわたりの月なれや咲る盛は闇なかりけり
賀茂のまつり
一二五いかなればう月とわけて瑞垣の神の代よりは祝初けむ
ともし
一二六狩人の夏の夜深く入さ山照射の影の見えみ見えずみ
五月雨
一二七五月雨の日數積れば庭の面に舟出しぬべく見え渡哉

螢
一二八拔亂る玉かとぞ見る岸近み草葉にまよふ夜はの螢は
女院郁芳の根合に人に代りて
一二九君が代の長き例に引けとや宿に菖蒲のねざし初けむ
蟬
一三〇夏山もとよむばかりに明たてば誠に蟬の聲ぞ聞ゆる
いづみ
一三一夏の日も掬ぶ泉の涼きは人に知られで秋やきぬらむ
水無月二つ有る年の後の七日に
一三二常よりも歎やまさる七夕は逢てまし暮をよそに詠て
一三三水無月の餘れる年は彦星の戀ふる歎ぞ日數そひぬる
水無月はらへ
一三四思ふとみなつき果る今宵より頓て名越の祓をぞするすがぬきする程に七日なむかならず行くべきと
人の申したりしに
一三五夏果つる夕に秋の御祓して七日の空を我も待つかな
七月七日まゆみの葉にかきつけて
一三六七夕に梓の眞弓貸すとは射るが如くに君きませとぞ
良せんが十二より六十七になるまで年ごとに七夕によみて奉りける歌をうせてのちいもうとの
見せに遣したりしに
一三七七夕に心よせけるけふかさは渡りもしなむ鵲のはしかへし
一三八いか計り嬉しからましけふとに唯彦星の逢夜也せば
うるふ七月七日
一三九幕行くを待もやすらむ織女は過ぬる月のけふの習に
萩
〇一四〇秋霧の立つにまかせて野べ毎に織懸てけり秋の錦は
一四一鶉なく小萩がもとを打見ればけふこそ花の盛也けれ
薄
一四二白露はむすびおけども花薄招くたもとの綻びにけり
雁
一四三古郷の淺茅が末葉色つけば初雁がねぞ雲路わけゝる
鹿
一四四色ならて身にしむ物は秋の野に妻戀兼るさを鹿の聲
鈴蟲
一四五秋毎に聞馴せ共いかなればふりせざるらむ鈴蟲の聲
霧
一四六朝な〳〵立川霧に道見えず板田の橋は名告して行け

轡蟲
一四七駒なべてくる人もあらじと思へ共驚かれぬる轡蟲哉
いなおほせ鳥
一四八秋くれば稻負鳥の涙かも草の葉ごとに露ぞこぼるゝ
夜ふかく衣をうつを聞きて
一四九誰か又秋の夜深く疑覺して衣しでうつ音を聞くらむ
衡立障子の繪に紅葉ひまなく散りかゝり瀧落ちたる山のもとに人々あまた見たる所しきしがたに物かけと仰せられしかば
一五〇落たぎつ瀧の水上音せずば錦をさらす山路とや見む
九月のつごもりの日
一五一如何せむけふ計りなる秋の日は惜む心ぞ共に盡ぬる
うるふ九月つごもりの日
一五二常よりも秋の數そふ月なれど暮行けふは飽すも有哉
紅葉
一五三神無月よもの山べは色々に紅葉の錦立ちぞきにける
あられ
一五四霰ふる時にしあれば賤のやも玉の臺と見え渡るかな
霜
一五五籍枯と誰か云けむ置からに千種の花の咲と見ゆるをし
一五六冬の池に住馴にけるをし鳥の霜打拂ひよはに鳴なり
一五七降亂れ我身それとも思ほえず有る物とてや人の恨る
ほふりんに參る道に雪かきくらしふるに
一五八身のうさは消ぬ也けり小倉山行惑ひぬる道の空かな
一五九さらでだに問人もなき山里に道見えぬ迄降れる白雪
雪のふる日白いものをふたに入れて遣したる
〇一六〇掻くらす雪げの雲に埋れてかたはれやらぬ月の影哉
かへし
一六一降きらす雪げの空の雲間より片晴出る月とこそ見れ
賀茂にこもりたるに雪のいみじうふるに心ぼそううち詠むる程に神の御おろしとてくぼてを入れたるに
一六二祓して詠侘ぬる雪もよに神のひぼろぎさくは嬉しきまさなしや春はいでずとよ年のくれ
一六三我が捨る年は暮ねど宿毎にやらふは老の鬼にざりける

暮れぬるを取り留めばやなど人の申したりしに
七暮ぬれど年は中々返りなむ留め難きは我身なりけり
本院にて人々參りて松の葉水にえいずといふ心よませたまひしに
七長閑なる水に映れる松蔭は千代をば川と見する也鳥
人の祝の歌こひしに
七神風や吹き初めしより花薄君にぞなびく八百萬代と
一日頃春宮わたりの人こひしに
七峯つゝき生ひそふ松の枝毎に千年を契る君が御代哉
右近の中將同じ所にゐられたりしに九月晦日の日たゝれしに
七命あらば秋のけふには逢もせむ別る君をいつと待まし
七理りに君こそ急ぐ道ならめ惜む涙はなどかとまらむ
おやの思ひまて十三日になる日
八亡魂は影だに見えず亡魂は人の爲なる名に社有けれ
同じ年のつごもりの日
八別れにし年はけふにて限れども戀る涙は盡せざり鳧
七月七日ふくぬぐに着しにもまさる心ちして
八藤衣けふしもながす涙川あまの川水そひやしぬらむ
齋院にて庚申の夜織のお前にて夏夜戀をとりて
八下燃る戀の烟に夏の夜は山路ならねど戀しとやいはむ
歌合をせさせ給はむとせしをり
八戀そめし人は斯こそつれなけれ我涙しも色變るらむ
人のこひしに夏の戀の心
八涙さへたぎりて落る夏の夜の戀こそ醒る方無りけれ
齋院にて庚申の夜、春の夜の月
八萬代を霞みて廕くしめの內に朧げならぬ春の夜の月
秋の月を見て
七長閑にも詠めつる哉天の川雲吹きはらふ秋の夜の月
八月十五夜
八月影は同じ山より出れども秋の半は照りまさりけり
月のあかき夜源中納言
八見ぬ里もかくや隈なく照すらむ月の光に我が心あれ
かへし
〇尋ね來る人も有りやと月影を朧げにやは誰も眺むる
此院の人はいをのみねて月見ずとかや有るとか
や返し八月二十日宵の月出でゝ後源中納言よゆ
一誰か又有明の月を詠めつゝ旅の空なる雁がねを聞く
いづくにもおはせむ所を尋ねてといひしかど今
宵は家にねてと聞くこそをかしく月あかき夜右
少將おはして急ぎ歸るとてとまりぬべき歌とあ
りしに
二九より懸む正木の蔓たゆたひぬ思の網の君に見えねば
ある山里に伯の母などいきあひて春の月出づる
程に
三九いつかまた廻り逢ふべき足引の山懷にふしまちの月
四九あらしなぞと思ふ浮世の思ひ出は月見る程の心也鳥
五九嫉拾の戀め難き月影といとかばかりは詠めざりけむ
六九いか計り隈なき夜はの月なれば懸る涙に曇らざる覽
いつ頃の月かすぐれてはおぼゆると人のとひし
に十月ばかりの風うち吹き時雨れつゝ隈なしと
見れど曇り勝なるこそ見すてゝ入りがたき心ち
すれと申すにそよ我もしかなむ覺ゆるといふに
七思增す晴れみ晴れずみ半なる月を哀と君も見ければ
これを聞きて右近の少將月あかき夜よふけてし
ぐれぬよの月は見でいたづらにやとねたるとて
おはしたりしに
八夜と共に君と有明の月を見ば所もわかず折も定めじ
九いつも照月ぞと思へど長月の今宵は光殊に見ゆらむ
〇〇長月の今宵の月は晝なれや清かになるにも朧めかれ鳧
時綱がむすめのひごの君がうたをよくよみてつ
かはしたりしに
一いかで君深く知りけむ古の跡かはり行く敷島のみち
返しこの院のせんひご
二〇知べする人にも遂で敷島の古き道には惑ひこそすれ
かんしの夜あやめ草句のかみにて戀
三〇あな戀し八重の雲路にめも合す暮るゝ夜々騷ぐ心か
あはせたきものすこし
四〇逢見ても果は涙の堰も敢す立歸れせこきても恨みじ
おなじもじなき歌試みに
五〇逢ふとよ今は限の旅なれや行末しらで胸ぞもえける
なをはじめつを果てにて夏の心
六〇鳴聲は變らじものを時鳥聞く度毎におどろかれつゝ
あをはじめきを果てにて
七〇天の川今や七夕渡るらむ更け行く空の風ぞすゞしき
四季に有りしみな忘れて(四元)　人の許に籠の
御前の黃塵ふみの事思ひもかけず心もえねども
八〇有がたき身の程人に見せむとや金の色の石に成けむ
夢のうちの戀
九〇轉寢の夢見る程もなき夢の現に戀ぞぬれまさりける
上陽人
一〇燈火の盡るをきはと詠めつゝ哀れ幾よを歎來ぬらむ
一紅にたとへし顏も霜降て疎き人には見えじとぞ思ふ
二すきかへる程も知られぬ窓の內に春と告つる鶯の聲
三長き夜は明やしぬらむ覺束な窓打つ雨に驚かれつゝ
楊貴妃
四一君と我此世の後も又木とも鳥ともなりて契らむ
五一道のべに駒引渡す程もなく玉の緒絕えむ契とや見し
六一淺むふに秋の夜つらく睡ます蟲と共にも鳴明すかな
七一秋風に空やは花のみだれつゝ涙の玉ぞ袖にちりける
八一星合にかけて契りし言の葉は長き恨となりにける哉
九一獨寢の床はしどろに亂れつゝ鐘より後も明し侘ぬる
后
二〇一さ夜中に契しを忘れずば玉の簪をそれとしらじや
一道のべに絕にし玉の緒なれども尙後世は長く結ばむ
二思ひきや波路隔てゝ幻の言傳ばかり聞かむものとは
三かけて云し星合の空を詠つゝ心を碎く身とぞ成ぬる
齋院に參りてつゝましうくやしうのみ覺ゆるに
いかにと人の申したりしに
四一暫しなど梓の眞弓引みつゝ思ひためらふ程無りけむ
かへし
五一例なく歎きにやその梓弓思ひの外に引きはなれしを
身をなきにして思ひしづまれと申したりしに
六一亡物と樣々みつる身にそひて歎は絕す又いかにせむ
かへし
七一我がかれずきいたつまとや春日野に野守の鏡いざ尋見む
と申したりしにをかしく
八一さいたづま盛ならねば白露のおけりめにせむとの難さよ
久しう音せずと恨みたる人に
九一今よりも君にはつらく成ぬべし恨るからに添ふと思へば
かへし
〇二恨るを聞にしなさばかき絕て忘計りに成やしなまし
何かと人の申したりしに
一二いつとなく螢の刈藻の思侘び我やく顏に藻鹽垂つゝ

二二風ふけば空にたゞよふ雲よりも浮きて亂るゝ我心哉
三三有じかし此よの外に尋ぬとも涙の袖に懸るたぐひは
三四斯計憂をも知らで長ふる身より外にはつらき人なし
ゐなかなりしを人のかたらひたりしに
三五我袖は荒磯にぬるゝ共生きたるかひは又や拾はぬ
後拾遺聞えし頃良遲が集をいもうとのおこせて
申すべき所やいかゞといもうとの申したりしに
三六巻込し金の玉の聲なれや止れる跡も身にぞしみける
三七爭でかは聞も知るらむ巻込めし金の玉の聲は有れ共
かへし
三八名に高き黄金の玉の其聲も爭で知らまし君し告ずば
源中納言かぐら歌など誦し歌ひてとりなきぬと
ていそぎ出でられしに
三九神のます木綿附鳥も心あらばあぐさな告そ忍音にたつ
このせうそこを左京大夫われつたへむとてあさ
てばかり參らむとて出で給ひけるをなどかなど
聞えたりければ、たいふ
四〇歸雁玉章かけて立ちぬれば雲の上にはいかゞ止らむ
返したばらむと有りし程に過ぎにければ
一旅の空玉章かけて行雁も契し程を過ぐしやはする
弘徽殿のほそ殿に左京權大夫俊賴物語して今し
ばしも侍るべきをいみじうひえ侍ればと申せば
女房しき物を奉らばやといらふるに敷物は石だ
ゝみ侍りけりといらへたるに人に代りて
四一石疊ありてふ庭を君にまたしく物なしと思ひける哉
かへし
三名にしおはゞ身もさえぬべし石疊片敷袖に衣重ねよ
同じ人春つかた同じ細殿に參りて過ぐる人をか
れしばしみづかへといひとゞめよとあるをいら
へもせでたつをり水かへと申し侍りしかばこれ
は空ごとならむとて行き過ぐるに南のえんを今
しも見むやうにかゝることこそあれ何の料なら
むと申せばたなはしにもなれかしといらへたれ
ばいと情なきことさらば脚をれむ馬をあづけま
してさはかちより歸るばかりなといひて暫し有
りて立ち歸りぬるに
四二おばつかな春の夜深き放駒跡を尋ねむ方も知られず
返し又の日おこせたりし文のことばこそをかし
かりしか
四三取り繋げみかきが原の放駒浮世に荒れて跡も定めず
かねふさの集たづぬとて
四四木の本に落積りけむ言の葉を君計こそ世には散さめ
返し、たかつなの宰相のうへ
四五樹下に落も積らぬ言の葉は唯風にのみ任せてぞみし
ものに籠りたるに近きはくの母のがり罷りて歸
りたるに音づれたれば
四六今よりは菖蒲の氷宿からむをと娘ゆゑ君もとひけり
かへしはくの母
四七をと娘其故のみか蘆垣もかくま近きをあすもさねこよ
又かへし
四八あすもさね行てこそ見め櫻人豊浦の寺の近きわたりに
同じ人みだをくりておこなはれしを思ひ出でゝ
一藏げの契とぞ見むうべのりを振放したる音を聞しも
殿の肥後の君三藐の曉にぞ逢はまほしきと申し
しに
四九曉もよを隔てつれば久きにけふ赴いらめ西の門には
五〇人思ふ心は藤の花なれやとひ來る程を松にかゝれる
すゞりかめにさうぶの根をきりて入れたりしに
生ひ出でたりしをまゐらすとて
五一誰か見し世に住の江の諸人の硯の瓶にさす菖蒲をば
かへしつの君
五二住の江の硯の瓶の菖蒲草ちよの例に引きてこそ見め
齋院に參りてのちある宮仕人おなじ所にと思ひ
しか口惜しくみづから思ふにかたふたがりてな
ど申したりしに
五三逢事のたがひ初にし中なればふたがる方も如何無らむ
久しう音せぬ人に
五四筺蟹の蜘手にさこそ問すとも斯書絶む物とやは見し
これを聞きて源大納言のぶふさ今は左大臣殿の
まぬきとぞいふかし
五五いかに斯絶ゆとは云ぞ筺蟹の蜘の印を見せむと思ふに
法華の玄義ありと聞きし所にかりに遣し、
五六覺束なまだ踏馴れぬ道なれど法の爲には尋ねつる哉
二三日ありてほかに尋ぬとてつかはしたりし
五七臘げの契ならでは有り難き法の道をも尋ねつるかな
かへし
五八尋ねける契も嬉しこれやさは眞の木の實拾ふてふ園
うんこじの聖あかゝねのうすと聞きて鏡などつ
かはすとて
五九知べせよ鏡に映る影よりもこは出難きうみのよなれば
六〇消えがたき昔の人の燈火に思ふ心はおとりしもせじ
齋院今はうちにのみおはしますに里に出でさせ
おはしましたるに人々參りてかぐらして遊ばる
るにうち鳥羽院にて宮人うたはせおはしまし、
めでたき思ひ出でられて
六一ゆふ幣や神の宮人偶さかにもり出しよはゝ尚ぞ戀き
かへし源中納言
六二ゆふしでや懸てないひそ宮人の雲上にて遊ぶ氣色に
本院におはしまし、折人々數多參りて琴ひき御
遊びありしに其の夜罷り出で、又の日進らせし
六三友にのみ他で歸りし琴の音は今日に戀き物にぞ有ける
かへし左大將今は左大臣殿
六四琴の音の爪音他す思ひせばしめの內にぞ引留めまし
六五ゆ鷹狩に雉子のうち鳴きて飛び立しみし哀にこそ
六六御狩野に飛立雉子ほろ〳〵と鳴々我も悲しとぞみる
故少將はなれぬ人に通ひそめられたる頃
六七なからあの夜頃の程も白糸や結び初ける筋は替らで
人の中々身をばなげすやいかにと申したりしに
六八假初と思絶えにし憂身にも尚歎かる、折ぞおほかる
ある所に尋ねらる、集寒るとて
六九谷隱れ埋れける言の葉も木の本ならで散すあやなさ
ちらさじと思ひし草子をかくも有りけりとて見
せに人のおこせたりしさもやと覺ゆるわたりの
人の手にてありしかば
七〇いかゞせむなだの鹽燒風早み思はぬ方になびく煙を
七一賀茂にあらむづる程に參りてその夜又參りたる
人をとまりて物申しげなるけしきにてよふくる
程にひとりごとに
七二千早振神の驗を御手洗の水ともいかで思ひにしかな
と申し、を聞きつけたりしこそ哀に

四七瑞雉の神の験を取もみて今日よりこそは御舟成らめ
人の歌よみてと申しゝに
五七歌めせど心工みのはかなさは斧の音してえこそ作らね
人の戀の歌よみてと申しゝに
六七我にてはげに堪難し戀の道人に代るも苦しかりけり
うちのごせんのおほん琴ひき遊ばせおはしますを聞きたりとて
七七琴のねはうべ松風に通ひ鳥千年をふべき君に引れて
とこそ申さまほしかりしか
内に人々の集召しゝにまゐらすべきよし一の宮
のきの君のがり申しにつかはすとて
八七君に社尋ても見めわかの浦に立べき波の跡は有やと
かへし紀伊のきみ
九七爭でかは和歌の浦波名殘ありと雲の上迄立昇るらむ
かれ〳〵なりける男のたまさかにみづからなど
つてに申して程ふれば待ちかねてかやうにこそ
申さましか
一八淺より絶や果なむ山井のみづからとのみ空頼めして
二八かやうなしてをかしやかなる見所あらじと人の
申せばあらましごとさへかきて人なほ有ること
なきことの傳へてこよなかる方にもくめるいと
かたはらいたくて知らぬにはあらで思ふあたり
に數のみ多くつもりて返す〳〵見ぐるしう
三八隔多う三十計りにも過やせむ我また知らぬ敷島の道
あなかしこ〳〵　百八十四このうち二十人

これはかくし題

くつわむし

二八數ならぬかゝるみくづは筵田の鶴の齢に何か祈らむ
むらすゞき
三八紅に見ゆる山べは時雨つゝ幾むらすゞぎ懸くる錦ぞ
ものを思ひによせてたかばかり、いはひ
四八君が代の千年を兼て角田川假にもあだの影は映らず
とりはゝき
五八逢ふ事をいつかと松の深緑はゝきの露は色ぞ變れる
すだれかげ
六八風にちる雲をあだにも我は見ず誰か煙を逃れ果べき
はなかむし

辨乳母集

白川殿の花の水に散るを

一九白川の近きわたりにちる花は梢に懸る波かとぞみる

天王寺にまうで、龜井の水を

二九萬代をすめる龜井の水やさは富の小川の流なるらむ

弓を

三九神代より佛もあたは防ぎけりこや賭弓の始なるらむ

嵯峨野に花見にいでたるに宮より給はせたる

四九露ながら折てを歸れ女郎花嵯峨野の花も見ぬ人の爲

御かへし

五九松蟲のねながらこそは女郎花わが郡には引て歸らめ

大殿裕のこしに書かせ給へる

六九美しむすばゝれたる下紐の解けぬや何の心なるらむ

御かへし

七九下紐は人の戀るに解なればたがつらきさか結ばゝる驚

大殿まごかきたる扇に空言どもをたはぶれさせ

給ひて

八九まごにのみ心はみえて梓弓もろやに餘る春にも有哉

御返し

九九まごにみる人し無れば梓弓かは離れたる心ち社すれ

又殿

一〇梓弓ともねも絶て終夜かははなれたるとをしぞ思ふ

萩の末ををりて瓶にさゝせ給へるを

一〇朝夕に風のみ繁き野べよりも久しかるべき萩の末哉

宮春宮に入らせ給へるに殿上人こゆみいて宮の
御かたにかけもの申してひわりごの上に的かき
たるに蓑に花をちらして書きつけて臺盤所には
入りたる

二〇勝負の弓のやませに散花を圓居の外の人もみよかし

とあればかねのまとを盛なる枝につけて

三〇梓弓同じまとのうちなれば散らぬ櫻の花を社みめ

宮の御前に前栽うゑて人々歌よみけるに

四〇庭もせに植たる花は君が代をのべとぞみゆる秋の宮人

同じ宮程なく失させ給ひての御忌に姫宮の御

まへ御堂におはしましゝに十さいたうの地獄の

ゑを人々よむに十八日つるきに人の貫ぬかれた

るを

五〇いかにせむ劔の枝の撓む迄重きは罪のなれる也けり

一品宮枇杷殿に十月に歸らせ給へるに御帳なる

さうぶを御覽じて

六〇菖蒲草涙の玉にぬき替て折ならね共ねをぞかけつる

かへし　江侍從

七〇玉貫し菖蒲の草は有乍ら淀野はあれむ物とやはみし

又の年の春大納言參り給ひてすびつの灰に手習

に

八〇花の香の匂ふに物の悲しきは

とありしに

春やむかしのかたみなるらむ

ときこえければ大納言ごの

九〇香を留て君が形見に惜まるゝ花の姿は風もよかなむ

御かへし

一一〇形見ぞと思はで花をみしだにも風を厭はぬ春は無りき

大納言宣耀殿の御まへに花のいみじう散りけれ

ばいかゞ見給ふとありしかば

一一散るこそ花のさかりなりけれ

といひしかば

一一咲きさかぬ所もわかず吹風は

歸る雁

一一折しもあれいかに契りて雁音の花の盛に歸初めけむ

殿上より郭公を山嘗してむすびて

一一なでしこにこと語らふ時鳥

とて入れたれば

はなたち花のえだをわすれて

殿上人内に御忌に多くこもりて若宮の御方にくだものゝおろし申しければいだすふたに一つに
は紅梅一つには白き梅をおろしにて色をも香を
もとて結びつけたれば　つねのぶの君
一知る人のもしるなる花の色なれば君みる覽と思ほえぬ哉
返し
二知れば社知ぬ人をも知ずとは知を知すと云人やしる
野宮にさふらひしを人のもとよりあたり寂しき
旅ね所にていくそのことを思ひてむといひたり
しに
三木の葉ちる峯の嵐に夢さめて何事をかは思ひ殘さむ
院うせ給ひて三位のもとに
四哀君いかなる野べの烟にて虛しき空の雲となりけむ
御かへし
五思へ君もえし烟にまがひなで立おくれたる春の霞を
白川殿にと聞きし頃
六何故に都のほかに旅寢して鹿のなく音に聲を添らむ
かへし
七哀をば知ぬ山路も無りけり思ひも懸ぬ鹿さへぞ鳴く
上うせさせ給ひて五月郭公の鳴きければ
八ふるさとへ言づてやせし君獨こえけむしでの山郭公
もとの人はそのかみ忘れにきとありしかば
九石上ふるの社を忘るれば後ろめたなき三輪の山もと
小家に竹をさしたるをとへばはやしといふに
十虎のふすのべならね共賤のをの宿こそ竹の林也けれ
松の尾行幸春宮の女房みけるに嵯峨野の笹の上
に立て〳〵花ぞもをさしてその野を一くるまつゝ
きたり薄の車に　源少將つねなか
十一打招き氣色ことなる花薄行き過ぎ難き心ちこそすれ
返し
十二行過ぬ氣色ともみず花薄招くにとまる人しなければ
人にかはりて
十三君だにもね絕る宿の菖蒲草餘りうきには引人もなし
四條の宮に家の紅梅を奉りたるに外に渡らせ給
へるにみるにめでたく咲きたれば
十四かばかりの匂なりとも梅の花賤の垣ねを思ひ忘るな
十五古鄕の遠くなるまゝにいとゞしく秋は露けき草枕哉
これいせん院うせさせ給ひて女院より齋院の女
房のもとに
十六こぞの今日かくや契し神山に摘し葵の掛まくもをし
御かへし
十七かけまくは畏しとこそ祈しをはかなかりける葵草哉
齋院おりゐさせ給ひてこぞの葵を
一懷しきかざしへぞつらき神垣に今は枯ぬる葵と思へば
宮の御四十九日の御さうぞくのあまにてありし
をみて
二花にのみ染めし袂を打かへし涙のかゝる色ぞ悲しき
春日祭り
三一年に二度まつる三笠山さして千年の影とこそみれ
時鳥を
四きかでたゞあらまし物を郭公み山へ歸るけさの一聲
殘の木々に雪のふりかゝりたるが櫻に似たるを
五神無月もみぢに降れる初雪はをり違へたる山櫻かな
むこになりにたるつとめての歌人のこひしに
六岩代にちよを過らむ程よりも待は暮社久しかりけれ
かぐら岡にて子日せし人に
七舟岡も遠き渡りに子日して綱手に千世の松や引らむ
春宮の御前に菊をおほく植ゑさせ給ひてまうす
にあやにくに給はせねば
八星とのみ見てややみなむ雲の上に惜ませ給ふ白菊の花
と申したれば
九色々に移ろふ菊を雲の上の星とはいかゞ人の云らむ
大殿たんばの家に渡らせ給うてこのあたる家の
向ひにて荻いと招くと仰せらるゝとありしかば
〇四あなかしこ招申せと荻のはのそよと計の仰せ事なし
いづものうへ荻をこひておそうとり給ひしかば
などかとは聞えたりしかば
一四忘れつゝ堀も植なでやみなまし荻吹風の音無りせば
御かへし八月なれば
二四ほに出て秋も半に成ぬるを今日しも荻のそよと云覽
九月西の院にいづもの母上のいみにておはせし
におなじ頃故三位のおはせしが思ひ出でられて
三四搔しぐれ思こそやれ見し夢に變らぬ宿の秋の景色を
少將のちご生れたるに美濃守のきぬおこすとて
四五鶴の子の巢立始むる色衣ちよに八千代に重ねてぞきむ
かへし
四六祈るめる數多のつるの色衣にまた萬代を我は重ねむ
六條に渡りたるに中島の松のいと木高くめでた
きに
四七淺からぬちよの景色と見ゆる哉此の中島の松の緣は
かみ返し
四八みぎり子の心ちこそすれ中島の姫松えたる宿の主は
四月に郭公のなきければ
四九時鳥み山出なる忍び音はいづれの里の誰か聞くらむ
五月雨
五〇覺束な遠方人やいかならむをやみだにせぬ梅雨の頃
しか
五一秋深みよはの時雨に寢覺して遙にしかの聲をきく哉
年頃宮の御祈に石山に詣でつるにみかごにねさ
せ給ひて例には似ず心ちのいとめでたく覺えて
一五かゝる世に逢坂山は越けるをなど澁みけむ走井の水
せきに人の逢ひたりしかば
二五走井の水の心も行きはてゝうれしき旅のあふ坂の關
齋宮のくだらせ給ひしに
三五振捨てゝ雲ゐ遙に鈴鹿山かゝらむ物と思ひかけきや
初雪
四五見渡せば岩間の小笹上しろみけさ初雪は降にける哉
左の方にこひしかば
五五菖蒲草引くかひ有て見ゆるかな汀にまさる淀の澤水
七月七日たなばた
六五かたゝ〳〵に心こそえね七夕のいく行合の始ちぎりし
七五村々に見ゆる紅葉の錦哉霧はたゝでや秋は過ぎにし
正月音づれずとありけるに七日子日なりければ
八五いつしかと思ひをまつに鶯のけふ珍しき初音なる哉
九五春秋の千草の花の色はみな一もと菊に移ろひにけり
いく田の海に身なげたる女の懸想人の二人なが
ら落ち入りたるを人々よみしに
六六後れては生田の海のかひもなし沈む水屑と共に成なむ
内侍あまになり給ひしに、あかぞめ
一六導かむ方につけても嬉しきを又かなしきは何の心ぞ
繪に死出の山に鬼に追はれて女のなきてこゆる
ありし
二六作りこし罪を共にて知人もなく〳〵越るしでの山哉

二條院歌の題をかきて殿上人に出してはりをとらせ給ひしに大井をとりて

三六君が代は長閑に澄る大井川流れてみゆる千世の影哉

たけくまこひたる女房のこひしかば

三七昔よりちよの影をも知らぬまで面馴にける武隈の松

春宮の御さうぶの根召したるに參らせて

三八谷深き岩ねのあやめ君が爲長き例を引きいでつる哉

三井寺より具したる人にしの關よりかへるに

三九名をのみや賴みて越えむ逢坂の關は都を隔てつる哉

かへし　ふの殿どぞきゝし

四〇逢坂は心の通ふ道なれば隔てむ關にさはるべしやは

語らふ人の郷に申さむとあれば我もさおぼすさまはよき事と申したるに御文のうちに荻の葉に思はずなる事のありければ

四一夕風にひき驚かす荻の葉のそよと計りに今は答へじとあれば

四二世の中にふといなる物多かれど君計なる人のなき哉

又かへし

四三何事もさらばと云しかひありて同じ心に思ひける哉

なぞ云ひかはして恨みてひごろありて

四四つらしとて心のさらに忘れなば

とていかにも〳〵これが末をだに思はむまゝにつけてやめとあれば

あはれながらに絶えこそはせめ

九月九日同じ人

四五春の日も何に長しと思ひけむ秋の暮社久しかりけれ

菊につけて御かへし

四六秋も許多過ける君と聞物を久き暮は今日のみやしるかゝる心ざしをいかに思ふとありけるに

四七さらでだに露けき頃をなぞもかく秋しも物を思初けむ

ほのかに同じ事いはむとありしに常に恨みがちにて中惡しきころ

四八君はきみ我は我にて過すべき今はこむよと契し物をかへし

四九戯して此言葉や八鹽路の汐の八百合にさすらはしてよと聞えたればよひことゝねたまし給ひけるに

五〇変るべき炎の様を聞しかば思けちては已じとぞ思ふ

同じ頃傳の大納言の北の方におはすと聞きて

五一我ならで有じと思ばとはれ鳧今日もや秋の暮は久き

問じ人おはしたるに門もあけねばされど松蟲はなくめりたけからずあれば

五二契置し君すぎとはず成ぬれば宿には絶ず松蟲の鳴く

思ひいつ〳〵とあればそれに

五三思ひいづるとは現か覺束な見はてゝさめし明暮の夢とあれば返し

五四見もはてゝ覺けむ夢を思ふにも是を現と爭で知せむ

櫻を宰相のもとより獨見るかひなしとあれば

五五遠にみむ後ろめたなし山櫻散とまるべき匂ひらねば

雪ふるに人のもとより

五六美まし降つむ雪は村消えぬとけぬは松の氷柱也けり

かへし

五七掻暮し降積む雪は積るとも春の氷柱は打解けぬべし

おなじ人

五八忍音はきく人もあらじ郭公猶さよふけて我に語らへ

おなじ人

五九めも合で明しつれ共秋夜にれねを語らむせめてつらくはまた

六〇雨と降る涙に袖はぬるれ共思はけたぬ物にぞ有ける

昔みし人のむかへかうの所にほふしにて有しに

六一夢のうちにみし俤らねば猶有しよの心ち社すれ

十月晦日かたにこゝち惡しうするとほかになしとてせさいの萩の根をほりたれば

六二見からに露ぞこぼるゝ我宿の本荒の小萩秋ぞ果ぬる

昔みし人鏡のみしをおこすとて

六三形見にと思ひてみればます鏡戀しき人の影も忘れぬかへし

六四ます鏡明暮見えしうき影を今は限りとともに忘れぬ

又

六五ます鏡影はなかめる君なれど猶忘られずなれし面影

ある人心比べにて音もせでかくてまけぬべしとあれば正月朔日

六六鶯の聲ならねども霞むより君がとふ日を待社はすれ

經えて音せぬ人の今の帝ゐさせ給ひてたかうなをしげうおこすれば

六七君が代は嬉しかりけり呉竹の言のは繁き節をみる共

玄ほゆの所に海月のありしを

六八山蟻を出るのみ社清けけれ海なる月のくらげなる哉

右大辨のうへの尼になりたるに鈴やるとて

六九契ありし昔の友の玉ぞみて衣のうらにかけて忘るな

おなじ人筑紫へくだるに

七〇惜からぬ命なれども諸共にいかま欲きはいきの松原

五月ばかりに四條宮のうちにおはしますに參りてよるとまりて女房の中へ　つねのぶの卿

七一旅寢する獨ふせやに小夜更けて語らひ明す時鳥かな

かへし

七二時鳥過がてにのみ語らひて旅寢の床や寂しかるらむ

出羽辨集

行ひに心いりて正月のついたち里なるにさすがにつれ〴〵に日の過ぐも數へられて人のがりやりたりし

一〇長らふる我身ぞつらきさり共と願し人も訪ぬ春さて

返し加賀のこのかみつねあきら

一一來鳴くべき鶯だにも春霞立つや遲きと音づれやする

周防のせしたかゝた去年の師走に親に後れて勤す寺といふ所にこもりゐて歎くにやりし

二〇山里に霞の衣きたる人春のけしきを知るや知らずや

返し

三〇限あれや霞の衣きたれども立ち出ぬ身に春もしられず

宮のおふみ殿へ子の日のたまへる

四〇引絶えて千年の春はすぐれども松の緑の色は變らずかへし

五〇とに出て誰も岩根の松はさぞ年ふる儘に色增りけり

七日雪のいみじかりしにやまとの宜へりし

六〇いかにして若菜摘らむ雪深き春共みえぬ空の氣色にかへし

七〇逆樣に返らぬ年を積ためて若菜はよその物と社みれ

宮のせじ殿の年たちかへりてしるしも見えずはれまなきに九重はいぶせさもまさりてなどやうによみ給へりし御文ども失ひて忘れて御返しの

限り覺ゆるぞあやしき師走にせち分してしなり

八〇年の内に立にし春の日數にぞ殘る氷柱も有じとぞ思

この雪の晴間なきに昔いまのこと思ひ出でられてもの哀なるほどにしも筑後辨の御もとにたよりのありしにつけて聞えし

九〇雪もよにふりにしとの戀しきを哀君もや思ひ出らむ

御返事もさるやうにありてことながければとゞめず

一〇年月はゆき積れども諸共に越路のとはいつか忘れむ

このはつかのほどに經ほとけ供養し奉るに女院の左衛門の内侍ちかければ車ながらたちて聞き給ふがかへりかくのたまへりし

一一嬉しくも君がみ法に參逢て見えし爪木も樵むとぞ思

枯れたる木のひがきといふものにそひて立てりけるを見給へるなるべし

かへし

二諸人に弘めし法も薪こる君にましてぞ嬉しかりける

せうとの君からうじて筑後になりたるにさいもの命婦のはらからも此のたび相模になりたれば同じ心に嬉しからむとにや常に香なひ給へぬ人なれどかくのたまへぬる

三一この春は妹背の山の埋木も此方かなたに花ぞ咲ける

かへし

四一妹背山たゞには非ず埋木の匂ふ計りの花ならねども

この里はよろづのまらうどあつむるほふしせうとのかたはらなればたよりには知るも知らぬもうちおこなふにとほたあふみのせしのりしげどか湯あみにきたるかくいひたる

五一鶯の聲をしきかぬ我が身は春の過るも知られざり鳧

かへし

六一埋木とみえぬ君しもいかなれば今まできかぬ鶯の聲

いづみの尼上と聞えつるをばすざかといひて山里よりも世はなれたる所にてなくなり給へるにさきの齋院の君はその人のとりわき睦まじく物し給ひしかば忌にこもりてよろづしたゝめはてゝちるになむやがてほかへ渡るとなどある文にとあるかへし

七一あるもかく樣々別るなき人は孰れの道に赴きぬらむ

八一悲しきはめの前よりもなき人の赴く道を知ぬ也けり

二月一日宮に參りてあふみ殿に其の後かき絕えて聞えざりしを思ひいでゝ

九一いつとなき松の緑も此春は千入增れる色をみせばやあふみ殿

一〇二比ぶれど千入の松も限あるを枝さし交す契をぞ思ふ

おまへに大えだなる櫻を植ゑさせ給ひける花のいとをかしう見ゆるをわがおほん心からしもねをのみしたまでべたう殿のたまへる

一一雲居まで匂ふとみれどともすれば霞隔つる花櫻かな

御かへし

一二雲の上に匂ひをちらす櫻花霞もいかゞ隔てやるべき

參りたるすなはち齋院の長官の尋ね聞え給へること〻人のつげ給ひしにうちいはれぬる

一三餘有らば我だに思捨る身をいかなる人の忘れざる覽

これは二月つごもり頭辨參りて人々物語などしてあしたに歌よみて參らせむに何事を題にせましよろづのことのめなれたるにもて離れたらむこともがなどたごの内侍にとりわきて聞え給ふめりしをみしにいとめでたくぞめりし人と人のおほんことなれどをかしければなむ

一四春はたゞ柳櫻にあらす共角ぐむ葦をみても過さなむ

かへし内侍

一五澤水に角ぐむ葦を見るとても雲居の花を如何忘れむ

いづみの尼君のをりの薄墨をはかなきことゝぶらひなどならはしたる人のとはで過ぎにし方へ同じ程のふでになりたるをとひにやりたりし

一六薄墨の袖を懸てやすぐすらむ我をも人の思捨つとて返し馬のかみつねのぶ

一七訪はずとて恨みざらむ中々にかくれば袖の濡增り鳧

物語などのついでにかく參らぬなどかはかなき事につけてもうち驚かさせ給ふまじきいみじうおぼしあなづりたりとある人に今かならず聞えさせむかう聞きつればうるさきまでなどいひたるに日頃も久しう宮にも參らずなどあるにをかしからむこともがな云ひやらむことなる事なきは由なしなど思ふ程に此の頃の櫻世の常の春よりもいみじきを一枝折りてあれよりみぶの大夫

さだなが

一八遠近の花の匂ひし常ならば誰かはくる〻春を惜えむ

かへし

一九花散ず春も盡せぬ世也せば人に訪れぬ身とやならまし

さるはあの契もこれよりとぞ思ひ聞えつるにさすがにとて又

二〇世の常のとは云じと思ふまに覺束なくて過ぬべき哉

となむ思ひつるといひたれば又立ち返りかれよりと人にとはれぬふしなむうち解きがたきなどいみじうすかして

二一誰が宿も垣ねの櫻ちりぬれど我ぞ訪らふ人や音するまた

二二いか計いぶせからまし世の常の事を云じと我も包まば

とある垣根の返しを又

二三訪らふと猛き言のはさらば唯暮の春のみ待や渡らむ

近江守やすのり三井寺につぐる弓里に櫻の盛にきて見よとありしをいとよきことぞなどいひしかど盛になるまで思ひもたゝでやみぬるに其の頃あしこにありてみも驚けとやえならずいみじきを一枝折りてたい物も云はでおこせたるに

二四一枝をみるにも最と山櫻今とてゆかぬ身も投つべし

返し、あふみ

二五山櫻きてみる人も有なくに待とて知ぬ下枝なるべし

一年もみし櫻もとのさくらまだ散り殘りてやとれいのたごのないしをしるべとし聞えていでたつにあへきに宮ちがき所にいでゐて山は霞にとおられ空のけしきもまたいとたゞ〳〵しうくらきほどに急ぎいでたれどあなたのかたより歸る車のあるをねたくも先き立ちたる人のありけるかなとて、内侍

二六おもひのほかのくるまかな

とのたまふを歌になさむとてかけてだにといひし侍りしかば、ここさこ

われよりほかに花みける人

たといふもの〻手ふれぬを見て、ここさこ

二七花みると苗代水に任せつ〻打捨て〻ける春の小山田

とあれば

二八春のたを任する人は無はなく返す〳〵も花を耐みめ

尋ぬる櫻はところ〴〵まじりて桃の花のめもあ
やにおもしろく匂ひたるに
九待も敢ぬ櫻かひなし桃の花三千年の春これを尋ねむ
ここここ
〇四三千年の花に移ろふ君なればまたぬ櫻も心ありけり
ないしの御しるべはたび〳〵になりぬるが嬉し
きことなどいひ
一四春毎に花の知べとなる君ははかな乍らもあはれ契や
ないし
二五春毎に花無りせば我に君なげの哀も懸ずやあらまし
盛りすぎぬと思ふにいみじうめでたき句ども殘
りたるにまことに心も慰みてみる
三四花をこそ惜みにはくれ春毎に命をのぶる山ざくら哉
今は散りぬらむと人のおしはかり給へるにかく
盛過ぎぬといと悲しくて
四四尋ねつる程をまちつる櫻ばな山の嵐と誰かいひけむ
ここここ
五四春霞立隱しつゝ君まつと風にしられぬ花とこそみれ
ましてとく出で立たでなど口をしければ
六四名を聞けば散ての後に尋ぬれど尚賴もしき櫻もと哉
ここここ
七四散り方の岡にしもこそ積りつゝ櫻もとには盛也けり
ないし
八四散ぎだにろにと行つるかひ有て尋來にける櫻もと哉
ないし
九四まだきかりなるはなもありけり
ここここ
山ふかく心のまゝにたづぬれば
おほん方違へに大宮殿に渡らせ給ふこと六月十
餘日いづみの涼しげさこ高き松の年ふりにける
梢などたゞにてすぐさせ給ふ所のさまならず七
月七日など必ず御遊びありぬべき程なるをこと
〳〵しかるべき程にあらねど其の日思ふさまな
らずあたり〳〵たるをたゞけしきばかりとてよ
き日なりける權大夫正のすけなどさるべき人々
すこし參りたまて庭の松いくらの年をか限れる
といふ題を但馬守さねつな出したるをとの人々
いとようよみ集めたまひいかに女かたも殊更に
一つにいたせと俄にはべしかばせし殿
〇五庭の松みどりの色の深ければ水のそこ迄契る也けり
大納言の君
一五珍しき君きませばちよ松の契れる數も誰か知まし
宰さうの君ばかり泊りさぶらひて山のかたなり
つるやもたふれてのゝしるをことなるをかしき
ことやあるべかりつる覺えしてやみぬるをぜじ
どの猶人々の思ひ給へらむこともすこしば
かり聞かむなどせめ給へばまづさらばいかゞと
聞えしかばおぼしたることを
二五天の河淺くもあらば七夕のこの音高き水せかさじや
大納言の君
三五秋風のすゞしく立たば七夕の重ねやすらむ天の羽衣
やまと
四五いかばかり長き契を結びけむ空にたえせぬ七夕の糸
侍從の命婦
五五玉亂る上葉の露は七夕の絕せぬいとに拔とめてみむ
又例のみないひとられ奉りて物も覺えすのみぞ
六五底きよき泉の水に映してぞ星合の空もとにみえけり
風をうらみ給ひて、源少將
七五これやさは秋のはつ風七夕の雲の衣も吹き亂るまで
たふれしや人々二三人なくなりにけりと聞くに
淺ましくて
八五荒き風吹につけても最ごしく露の命ぞ悲しかりける
大納言殿龍で給ひてよろづに水の流も月も松風
のひゞきも戀しきことのたまて
九五立なみし面影ごとの戀しきに住うかれぬる宿の水影
おほん返し
〇六戀しどもいまは賴まず白波の立返らばぞ誠と思はむ
やまともまかでたまて猶口をしく心うくてやみ
にし風を恨みて
一六花散す折ならね共身に泌て恨めしかりし夜はの風哉
かへし
二六片敷の折に吹共か計にさらば身にしむ風はあらじや
かう面白くめでたかなるはなどか見せまほしき
などいふまじきと恨みて前齋院の局より
三六みにことも云人やあると瀧の糸を心に懸て暮す頃哉
四六さ計に思寄りては瀧の糸のなどくる事の難く成べき
これはまことに云ひ盡すべくもあらぬとのゝあ
りさまのをかしさに思ひ集めし獨言四日によみ
集められたりし松の題をあるじどのゝ御心のう
ち思ひやられて
五六年へぬる契は今日や知らる寛斯るみゆきを松の緑に
みすの前近き松の年ふりいみじき影に月のあか
きにおりて梢を見あげたる心ちあいなう賴もし
くて思ひつる心に今ぞかなひぬる木高き松の蔭
に隱れていづみのいみじう涼しきに手をひたし
などして
六六えに深き泉の水はありながら結ばぬ夏の手で過けむ
心のうちも吹拂はれて思ふとなき心ちすれば
七六いけるよを此宿にだにすぐしては物思ふとは長く絕なむ
うち返してあいなければ
八六咲氣なき宿に來に鳥此夜には留めじとのみ思ふ心を
れいせい院に入らせ給ふを水の流の立ち別れぬ
るいとわりなくて
九六行水の流れ逢瀬は絕すとも戀しかるべき數を社かけ
かやうの事ども〵同じ心にこそゆきて云ひ合せ
などし給ふ宮のすけ七日のことすぐしてと思ひ
つるもかくすさまじくなりぬればいつしかと國
へ下りなむとてようさりなむ京は出でぬべき又
はえ立ち返り參らじなどまかり申し給ふさて
いつかのぼり給はむずると聞ゆれば年返りて二
三月計にやと思ひ侍るとあるを聞きて云ひ給ひ
ぬるに奉れりし
〇七歸る雁またきくまでと思ふ哉常は惜まぬ命なれども
其の頃をかしきこ瓜どもの御前にあるをおろし
てうしまろ大夫の御許にかく書きつけて奉りし
一七戀しくも成にける哉瓜生山霧間を分けて立も出なむ
大夫の御返し
二七みすの內に入ぬ我身を恨つゝ瓜生山にも出ぬなるべし
又おほん使のあれば
三七玉垂のみすの內なる光をもちゐの秋には又誰かみむ
京極殿にうちの渡らせ給ひしにこの宮づかさど
も皆悅び騷ぎしたましにたかまさは服にてその
よ見せずなりにしをその程すぐしてすべきに思

ひたるがすこし月日の過ぎたるを里より文おこせたる次でに身をなきたるけしきにて文をかきておこせたるまめごとの次でに書きてやりし

[七]君をのみ思ひ知るらむ憂事を忍ぶにかゝる葦原のよを

かへし

[七]忍ぶれどうきと繁き葦原に深き恨のいかゞなからむ

哀れと思ひし人の名殘の心ばへのかたみばかりもなぞほいなきを恨みなどするに古の物語などして歸りにしにやりし

[七]忘られぬ昔がたりの名殘には恨みもはてゝ哀なる哉もろもとの少將わづらふことありて久しう參らでありけるもたい世のさへることありてこそはなど思ひてあるにかゝるにとはぬことなどいみじうなむ恨みますと聞えよとともよりが云ひしかばこゝにもさやうなることのみ多かるをかうこそ聞ゆべかりけれとて

[七]とはずとて君や恨る我も亦哀いかなることを思へばかへし、少將

[八]我ばかり物思ふ人はなき物をなほざりどぞ君が恨はこの大宮殿のほどのことども書き集められたりけるを左衞もの內侍の傳へて相模君にみせ給へりければ例のいみじきこちたき詞ざもになむめづるいかばかりなることどもをほめられ給ふ物とかおぼす文にもかきつゞけて奉れとありしかどすだれの上にさし置きて失ひてやみにきと語り給ひしかばたゞあれよりあるをと思ひて書きし文の次にかたはらいたきことゞものもりにけること內侍のうしろめたうもの宣ふなと書きて

[九]下紅葉淺き心に任せつゝちる言の葉をいかに見らむ返し世の常ならぬすかしごと多くて二つ

[八]○見る人も心にぞしむ紅葉ばのちる度毎に色の增れは

[八]一吹風につけてもれ共盡せぬはこ高き峯の紅葉也けり

とありし返事に又

[八]深山木はこ高けれ共言の葉は谷の底にぞ落積りける

またあれより

[八]色深き影あらはるゝことのはに山下水も錦をぞしく

とあればまけじとてきくかに

[八]小山田のうちに任せて云事を誠と思ふすき物もなし美作に宮のさぶらひなりともどいふが下りたりけるも知らぬになどかかゝる便にも音信まじきと恨みて、宮のすけ

[八]いかにして斯る便に訪ざらむうしとぞ思ふ音無の瀧返し

[八]賴みたる心の程を知ぬれば恨みられてぞ悲かりける

うこのないしのすけの伊豫に下り給うける道によろづの人に見せまほしき所々の多かるにかばね島なむ心とまりしかどさすがにその事としるしあることも見えで白き石のひまなかりし處のめぐる〳〵みしかど何ともなくてこそありしかかへし

[七]其こみむ跡はかもなし屍島埋れぬ名を誰殘しけむ

[八]その墓と見えてぞきけむ屍島猶きく人は唯ならぬ哉

萩の色こく咲きたるをちりなば惜しとて故伊豫の北の方のおこせ給へる返りごとに

[八]色にこそ猶めでらるれ幾ちたび浮世の中に秋萩の花かへし

[九]○定なく浮世のなかを秋萩の移ろふ色に劣りやはする

齋院の長官なかふさの君の內の御まへにて菊の歌をかしうよみたりと御まへにもほめさせ給ひ人々も云ひしかば云ひやりし

[九]一いとさしも我を思ぬ君なれど唯人知ず嬉しとぞきく返し、なかふさの君

[九]二色深く賴む心のしるしには言の葉わきて人の訪らむ

祐子內親王家紀伊集

かやねどの〳〵七番の歌合に櫻

[九]三朝まだき霞な置そ山櫻尋ね行くまのよそめにもみむ

郭公

[九]四聞きてしも猶ぞ待たる〳〵杜鵑なく一聲にあかぬ心は

月

[九]五號山峯より出る月なれば盡る夜もなき影をこそ見れ

一宮の歌合にく〳〵のをかしき所々の名を題にて人々歌よまれしに秋の湊

[九]六音に聞く秋の湊は風にちる紅葉の舟のわたり也けり

殿上の縣想文の歌としたゝめ中將のおこせ給へる

[七]人知れぬ思有その浦風に波のよる社いまほしけれかへし

[八]音にきく高師の濱のあだ波はかけじや袖の濡も社すれ

秋のせちにいる夜常にくる人のこざりしかばつとめて

[九]袖の上の露かけつる今宵哉これや秋立始なるらむ

人のもとより

[九]○人しれず思初めてし山河の岩間の水をもらしつる哉返し今はさやうのこと思ひ離れたれば

[一]○かひなしや岩間の水を漏してもすむべきもの此世なれば

人のもとより

[二]○逢事の斯て絶なば哀我よゝのほだしと成ぬべき身そかへし

[三]○なぐやかく儚き夢を後のよの絆しと迄は思ひ遁るぞ

みあれの日人のもとより

[四]○千早振あら人神にとよせつ今日の葵を翳さざらめや

返し同じ所に語らふ人のありしかば

[五]○もろ葛かた〳〵かくる心をば哀ともみしかもの瑞籬

右大とのゝ題ども給はせたりし中に、郭公

[六]○時鳥行くへもしらぬ一聲に心そらなる五月やみかな

ほたる

[七]○歸るさは縛もかけじ藻刈舟澤の螢火ひましなければ

琵琶などひき暮しつゝ遊びて日くるれば歸りし人に

[八]○我戀は天原なる月なれやくるれば出る影をのみ見る

語らふ人伊勢へ下りたるにさるゆかりありてそのわたりのことつねに聞く

[九]○振はへてとはむ物とは思ねど耳のみとまる鈴鹿山哉

七月八日

[一]○常よりも秋の朝露しげきかなこれや別の涙なるらむ

散ること文かけどありし人に

一あだ波を君社こさめ年ふとも我まつ山は色も變らじ

月待女といふ物語を見て

二古の月まつ里をみるにこそ哀うき世はたぐひ有けれ

いみじく忍びし人に
二恨むなよ影見え難き夕月夜朧げならぬ雲間待つ身ぞ
一返何とてか心に懸り初にけむ神の許さぬ中のあふひを
宇治どのに渡らせおはしましたりしにさぶらひ
あはぬを口をしがりて讃岐より参せたりしとしつな
五神無月あさひの山も打しぐれ今や紅葉の錦おるらむ
返し
六君みねば朝日の山ももみぢ葉も夜の錦の心ちせし哉
七條宮の四條どの右少弁が集をかりて埋み火と
いふ所に歌はなきにかく書きつけられたりし
七諸共に君もはかなく消にけり埋火いかで煙たてけむ
かへし
八疑て云ば驚かされて埋火の消にし事はきえて悲しき
うちどのに日頃ありて我ひとり歸りてありしに
うちどのより
九里なれぬ山時鳥かたらふに都の人のなどかおとせぬ
御かへし
〇都にはいかばかりかは待わぶる山時鳥語らひし音を
うちどのに渡らせおはしましたりしに宇治の里
にすみつきてゐたる宮の女房
一一秋霧のたちゐにつけて待しかど近江の海の心せし哉
返し
二二秋風にふけの里人おとすやと我も心にかゝる川なみ
月のあかき夜なかすゑが五條の家をみて
三三濁なき泉にやどる月をみてすむらむ人の心をぞくむ
思ふことありて山里にすむ頃
四二敏鷹のすゞろに斯る住ひしてのべの雉子と音をのみぞ鳴く
女など具して山里にゆきたる人のもとにおこせ
たる
五三鶯も都の人を戀ふとてやふかき山べに我ことは鳴く
とありし人にかはりて
六二霞わけ思ひこそやれ鶯のはね打かはす花のねぐらを
同じ人またよそなりしをり
七二心から隙もなきまで青つゞらくる〳〵物を思ふ頃哉
返しまだ世になれぬ人に代りて
八二山深みくる道もなき青つゞら何て人の尋初むらむ
東北院のちごがもとに人々琴ひくをきゝ我も琵
琶ひきなどして歸りて後にちごがもとより
九二空すみて霰く雲もなき夜半は半の月を思ひこそやれ
かへし
〇二思ひ出る半の月を見てしより仄かに聞しとは戀しき
七日をかしき文ども人々のもとに見ゆるにさも
なければ
一三春立と聞につけても春日野の若菜をなどか人の忘るゝ
春立つとよばるゝ名にてなむ
人の返りごとをいかにもせねば
二三掻つむる藻鹽の煙立歸り靡きなびかすきく由もがな
返しなきまさりてわづらはしきことやありけむ
三三割なしや藻鹽の煙ひと方に靡きもえ社やられざり鳧
四三戀しさにたゞ煙のあらば社哀を懸る折もまちみめ
五三難波江の蘆間分行く水馴棹みなれし人の戀らるゝ哉
士御門の右の大どのに方違へに渡らせおはしま
したりしに瀧のいとをかしきを
六三せきれたる心毎にもみゆる哉音羽の河の流ならねど
七三月影も關の清水に澄るよはさやかにみゆる駒の影哉
左京權大夫の百首の内、鶯
八三我ならぬ人きくらめや珍らしきあしたの原の鶯の聲
わかな
九三誘はれぬ形見を見ゆる若菜つむ心はのべに通ひけり共
梅
〇四まつ人は自からきぬ我が宿の梅の匂の色しこければ
さわらび
一四まだきにぞ摘にきにけり遥々と今萠出る野べの早蕨
さくら
二四たゞひなく見ゆるは春の明ぼのに匂ふ櫻の花盛かな
山ぶき
三四山吹の花みる人や昔よりこゝを井手とは云流しけむ
三月盡
四四今日のみと空に暮行春なれば留むる關もかひ無り鳧
ころもがへ
五四身に泌て花色衣惜けれど今日は一重に立ぞかへつる
あふひ
六四年をへて松のを山の葵こそ色も變らぬかざし也けれ
たなばた
七四七夕の逢瀬のなどか稀ならむ今日引繰の絕ぬ物から
はぎ
八四置く露も靜心なく秋風にみだれて咲ける小野の萩原
藤ばかま
九四藤袴誰に馴れけむ懐しき香に匂ひつゝ色はふりせず
きり
〇五秋霧の立ち隔てつる麓には遠かた人ぞ疎くなりゆく
月
一五久方の月を遙に詠むれば八十島めぐり見る心ちする
衣うつ
二五頼め置し程ふるまゝに小夜衣うら悲しかる槌の音哉
九月盡
三五たまさかに逢て別れし人よりも增りて惜き秋の暮哉
冬のはじめ
四五風早み冬の始は山がつの賤の松がきひまなくぞゆふ
霜
五五置霜は忍の妻にあらねども晨わびしく消え返るらむ
霰
六五掻くらし俄にもふる霰哉深山おろしの風にたぐひて
雪
七五白雪のふりしきぬれば苔莚青根が嶺も見えず成行く
千鳥
八五浦風に吹上の濱千鳥波たちくらしよはに鳴く也
戀
九五人知れぬ戀にはみをもえぞ投ぬ留らむ名をせめて思へば
はじめて逢へる
〇六難面さに思ひこりすと歎しをけさは嬉しき心也けり
逢ひて逢はぬ戀
一六陽炎の仄見し人の戀しさに有にも非ず戀ぞけぬべき
暁
二六思ふこと有明の月の暁に心すみます物にぞありける
苦
三六打鳴す人しなければ君が代はかけし鼓も苦おひに鳧
關
四六越ぬより思ひこそやれ陸奥の名に流れたる白川の關
うみのみち
五六舟とめて見れども飽ぬ松風の波よせかくる天の橋立
懐を述ぶ

六幾廻り過ぐしきぬらむ春秋の染る衣を移ろはしつゝ
　殘りおしはかられてこれをまことならねど多くは
　うるさくて
　　三月つごもり田舎へ行く人の道よりおこせたり
し
六春霞路もほのかになるまゝに歸りみまさる逢坂の關
　返し
六思ひやる心ばかりは通ふらむ霞隔つる關路なりとも
　齋宮にくだる人霜月ばかりに
九旅衣うら吹き返す秋風に獨ねざめてこひしかりしを
　かへし
七神風もか計身にはしまじかし片敷袖の亙るよな〳〵

源賢法眼集

一小山田の水の氷の打解けて今朝は蛙もゆたに鳴くも
二春日野の野べの霞に立交り知もしらぬも若菜摘らし
三水上の岩間の氷とけぬらむ井堰の清水聲まさるなり
　梅の咲きたる垣根をゆき過ぐとて
四行摺りに梅が垣根に立寄て空だき物を身にしたる哉
五去年といひ今年といへど我は唯昨日けふ共思ほゆる哉
　正月六日の夜
六夜もあけば朝の原に立出て雪の消間に若菜つみてむ
七いつのまにわき葉さし劍けさも又雪降つめるのべの若木に
八遮莫人はみす共花の木は風隱れにぞ植うべかりける
九春くれば木のもとどの櫻花はなの淵とも見え渡る哉
〇櫻花汀しらゝに散り積り海士も拾はぬ貝かとぞ見る
一むらさきの村濃の絲を染かけて風に波よる岸の藤波
　彌生つごもりの日ゐせく所にて
二行春の井堰に止る物ならば先おり立て我ぞせかまし
三山路にて初音はきゝつ時鳥わが故里に早くなれなむ
　時鳥はじめて程に京なる人のもとに
四鳴き出づる山時鳥人ならばよき言づての便ならまし
　二月十五夜に
五さよ中のたき木の煙立そひて林の霞ひまなかりけり
　杜鵑を待ちて
八一聲にあけぬるものを杜鵑さよ更る迄何待たすらむ
七淺ましく短き夜かな時鳥二聲とだにえやは鳴きける
八さらでだに伏かとすれば明る夜を何を明すと叩く水鷄ぞ
九いか計歎をつめる身なればかよをへて燃る螢なる覽
〇我宿におほしたてたる花なれど二葉の心まだ知ぬ哉
　七月七日
一たよせにや今日はかさまし七夕の空に翼く小盤の糸
二河風や身に寒からむさ夜中に塒さだめぬ千鳥鳴く也
　わづらふ人のおこたりたるに
三山のはに入なむとせし月影を哀有明とみるぞ嬉しき
　わらはの法師になる夜
四振懸しねくたれ髪を掻探り人違へたる心ちもやせむ
五音にのみ聞渡りにし天の川旅の空にて今日みつる哉
六名にし負はゝあだなや立む女郎花咲亂たるのべに積りて
七年をへて耳なれにたる山伏も夢覺めぬべき鹿の聲哉
八み山には嵐吹けり瀧つせの水せくばかり紅葉積れる
　年老いぬることを歎きて
九年月の過にし方を尋ぬれば我身に積る物にざりける
〇たむくとも手向の神やうけざらむ紅葉の錦
一水底にうつれる秋の山かげは鏡のはこの錦とぞみる
　よる紅葉をしみて
二安きいも寢られざり鳧紅葉ちるよはの嵐の後めたさに
　九月はつる日
三秋は唯今日計りぞと詠むれば夕暮にさへ成にける哉
四いかでかは老せぬ物と云ひおきし霜戴ける白菊の花
五をし鳥の羽も并に閉てけり霜うち拂ふ音だにもせず
六水籠りていでもよもなき沼水の彌凍行く冬ぞ悲しき
七紅葉ばをわが心とは散す共よその嵐に任せてはみし
　年頃もろともにある童の京に上るに
八何をかも慰めにせむ冬山の降つむ雪の解る待つ間に
九葎ふに深さ增れる菊花たれ秋はつる色といひけむ
　住吉にて
一〇住吉の天降りけむ其の神の哀れ相生の松をしぞ思ふ
一一音絶ていかにとだにも岩沼の水を深くも頼みける哉
一二我かどのほかなる車廻らさむ法しらざらむ人の里迄
一三雪ニ――春野にふた葉したばの若菜つむらむ
　法華經とく所にて
一四結ばゝる蓮の絲をとかれずば葉末の雫で亂ざらまし
　さいしやうらうといふ獅を
一五露の身は草葉にのみか老ぬれば杖にも懸る物にざりける
一六御狩野に朝立雉のほろ〳〵と鳴つゝ添る身を恨つゝ
一七すみすまず人知らめや程遠み鳥の影だに見えぬ山水
　京にありしをり人の生みたりし子をもりぬとて
一八思ひきや我しめゆひし撫子を人の繩の花と見むとは
一九河風や身に寒からむさ夜中に塒さだめぬ千鳥鳴く也
　わづらふ人のおこたりたるに
二〇山のはに入なむとせし月影を哀有明とみるぞ嬉しき
　わらはの法師になる夜
二一振懸しねくたれ髪を掻探り人違へたる心ちもやせむ
　京にのぼるとて天の川といふ所にて
二二音にのみ聞渡りにし天の川旅の空にて今日みつる哉
二三名にし負はゝあだなや立む女郎花咲亂たるのべに積りて
二四年をへて耳なれにたる山伏も夢覺めぬべき鹿の聲哉
二五み山には嵐吹けり瀧つせの水せくばかり紅葉積れる
　年老いぬることを歎きて
二六年月の過にし方を尋ぬれば我身に積る物にざりける
二七たむくとも手向の神やうけざらむ紅葉の錦
二八水底にうつれる秋の山かげは鏡のはこの錦とぞみる
　よる紅葉をしみて
二九安きいも寢られざり鳧紅葉ちるよはの嵐の後めたさに
　九月はつる日
三〇秋は唯今日計りぞと詠むれば夕暮にさへ成にける哉
三一いかでかは老せぬ物と云ひおきし霜戴ける白菊の花
三二をし鳥の羽も并に閉てけり霜うち拂ふ音だにもせず
三三水籠りていでもよもなき沼水の彌凍行く冬ぞ悲しき
三四紅葉ばをわが心とは散す共よその嵐に任せてはみし
　年頃もろともにある童の京に上るに
三五何をかも慰めにせむ冬山の降つむ雪の解る待つ間に
三六葎ふに深さ增れる菊花たれ秋はつる色といひけむ
　住吉にて
三七住吉の天降りけむ其の神の哀れ相生の松をしぞ思ふ
三八音絶ていかにとだにも岩沼の水を深くも頼みける哉
三九我かどのほかなる車廻らさむ法しらざらむ人の里迄
四〇雪ニ――春野にふた葉したばの若菜つむらむ

大納言經信卿集

（春）
立春氷
二春風もまだ吹解かすいか計り結ぶねたる氷なるらむ
　春の歌の中に
三淺緑野べの霞のたなびくにけふの小松を任せつる哉
四煙たつ鹽の苦屋も見えぬまで霞にけりな鹽がまの浦
　寛和二年殿上の歌合に
五氷とく風のおとにやふる巢なる谷の鶯春を知るらむ
　山家聞鶯
六鶯の音こそ遙に聞ゆなれこや山里のしるしなるらむ
　永保四年內裡の子日に
七子日する御遊の內の小松原千世をば外の物とやはふる
八子日して齡を延る船岡は松の千年をつめるなりけり
　正月七日小松につけて經信卿の許へ出羽辨

右源賢法眼者醍醐仲朝臣愚息樹下集作者也故「家者凡卑於「道者難」頗不堪「申出禁裏御本「今「書寫」之事然而不審少々在」之間重可」勘也　常德院殿御判

七白馬をまつ引物と思ふには忘やすらむけふの子日を
かへし
八白馬を引に附ても子日する野べの小松を忘やはする
春雪
一春もみる御室のあたりけふ寒みこや粟栖野の雪の村消
朱雀院に人々罷りて閑庭梅花といへることをよ
める
二けふ爰に見にこざりせば梅花獨や春の風にちらまし
深山櫻遲
三今はさけみ山がくれの遅櫻思ひ忘れて春をすぐすな
山花未レ落といふことを
四根みじな山の葉隱の櫻花遅くさけども遅く散りけり
見レ花といへる心を
五山深き杉の村立見えぬまで尾上の風に花の散るかな
宇治にて山家見レ花といふ心を
六白雲の八重立山の櫻花ちりくるときや花と見ゆらむ
後冷泉院の御時御前にて翫二新成櫻花一といへる
心ををのこどもつかうまつりけるに
七遮莫暮れ行く春も雲の上にちるを知らぬ花し匂はゝ
西院皇后宮土御門右大臣の家におはしましける
時三月櫻のさかりに上達部殿上人まゐりて遊び
けるにかはらけとりて
八庭の上に吹まふ風の微せば散つむ花を雲に見ましや
花
九春風の山の高ねを吹こせば梢も見えぬ花ぞちりける
〇一春風の吹まふ時は櫻花ちりぬる枝に咲くかとぞ見る
一古里の花のさかりは過きぬれど俤さらぬ春の空かな
水上落花といへる心をよめる
二水上は花や散るらむ山川の井杭にいとどかゝる白浪
月前落花
三限もなき月計りとや詠まし散來る花の影なかりせば
四春のよの月ばかりとや
花自有レ情
五物を社云ねど花も心あれば咲べき程を過しやはする
花契二多春一
六百敷やみかきが原の櫻花春したえずば匂はざらめや
花下流レ懐
七瀧の糸に散て亂るゝ花見ればぬひだにあへぬ錦也鳧
垣柳留レ客
八青柳のいとゞ垣ねに波よれば立來る人も絶ぬ也けり
歸雁
九古里と哀いづくを定めてか秋こし雁のけふ歸るらむ
春の田をよめる
一〇荒小田に細谷川を任すれば引しめ繩にもりつゝぞ行
題しらず
一一鴛さへ住荒してし宿なれば春雨のみぞ今はもりくる
松契二多春一
一二春日山高ねに立る松枝のおひくる春は神や知るらむ
つゝじ
一三花の散る憩めにせむ菅原や伏見の里の岩つゝじ見て
二條關白家にて池邊藤花といへることをよめる
一四池にひづ松のはひえに紫の波をりかくる藤咲にけり

夏

卯の花をよめる
一五賤の女が蓋火たくやも卯花の咲しかゝれば籬れざり鳧
庭樹結レ葉
一六玉柏庭も葉廣になりにけりこやゆふ幣て神まつる頃
永承六年殿上にて根合にあやめをよめる
一七萬代に變らぬ物は五月雨の雫にかをる菖蒲なりけり
一八三島江の入江の眞菰百除れば最ど萎れて刈人もなし
五月五日藥玉つかはし侍りける人に
一九俺なくに散りにし花の色々は殘りにけりな君が袂に
山畦早苗といへる心を
二〇早苗とる山田の賤もりにけり引しめ繩に露ぞ零るゝ

郭公

一夕されば空らめ小倉の時鳥あらしの山に聲な忍びそ
二けふも又こぞの初音に時鳥初音聞とや待ち入りぬる
三二聲と鳴つときかば子規我がたしきうたゝねはせむ
四さよ更てくらぶの山の時鳥行へも知ず鳴き渡るなり
五待で聞く人もやあらむ時鳥鳴ぬに付て身祉知られ
雨中の時鳥といへることをよめる
六時鳥雲路にまどふ聲すなりをやみだにせよ梅雨の空
益
七漁火の浪にわくると見ゆれどもそめ河渡る蛍也けり
對レ泉忘レ夏
八夏ながら泉涼しき宿にては秋立ことを爭でわくらむ

秋

秋のはじめの心をよめる
九自ら秋は來にけり山里の葛はひかゝる槇のふせやに
一〇轉變の涼しくも有るか唐衣袖のうらにや秋の立らむ
新秋雨
一七秋立て幾かも有ぬ村雨は淺く木の葉の色やそふらむ
七夕
二天の原ふりさけ見れば七夕の星の宿りに霧立わたる
海路七夕
三星合の影を映せばなごの海も天の川瀬の心地すれ
秋風
四大伴のみつの濱松神さびて昔ながらの秋かせぞふく
五霧はるゝ門田のうへの稻葉田の顯はれ渡る秋の夕風
師賢朝臣の梅津の山庄に人々まかりて田家秋風
といへることをよめる
六夕されば門田の稻葉音づれて蘆の丸やに秋風ぞ吹く
かつらにて稻葉風を
七ひたはへて守注繩の捲むまで秋風ぞ吹く小山田の庵
秋のころ煩ひけるおこたりて度々とぶらひける
人につかはしける　伊勢大輔
八嬉しさは忘れやはするしのぶ草忍ぶる物を秋の夕暮
かへし
九秋風の音せざりせば白露の軒の薄にかゝらましやは
つくしに侍りける時秋の野を見てよみ侍りける
一〇花見にと人やりならぬ野べに來て心の限盡しぬる哉
秋花廻レ路
一白露に堪ず秋萩折ふして柴かるをのの道だにもなし
承暦二年内裏の歌合に
二さを鹿の聲のさやけく聞るは獨やぬらむ小野の草臥
山家聞レ鹿
三秋深み山片そひに家ゐして鹿の音さへに鳴けば悲き
月のうたて
四秋の夜は衣さむしろ重ねても月の光にしく物ぞなき
後冷泉院の御時殿上の歌合に月の心をよめる
五月影の澄み渡るかな天の原雲吹きはらふよはの嵐に
經長卿のかつらの山庄にて閑に月を見るといへ
ることをよめる
六今宵我が桂の里の月を見て思殘せることのなきかな

太皇太后宮の扇合に月の心をよめる

三笠山峰より出づる月影はさほの川瀬の水なりけり

月不レ住レ處といへる心を

久方の空にかゝれる秋の月いづれの里も鏡とぞ見る

家にて月照レ水といへる心を人々よみけるに

住人も有か無かの宿ならし蘆まの月のもるに任せて

題しらず

名殘なく嗣り果てぬる山風を宜こそ月は隈無りけれ

搖衣をよみ侍りける

古里に衣うつなり行雁や旅の空にも鳴きてつぐらむ

深山紅葉といへることをよめる

山寺に斧の音高く響く也峯の紅葉はよきて切らせよ

紅葉滿レ山

巖まで峰の嵐やさそふらむ紅葉ちりくるきびの中山

宇治の前太政大臣大井川にまかりたりけるともにまかりて水邊紅葉といへることをよめる

大井川岩なみ高し筏士よ岸の紅葉にあからめなせそ

水邊秋望

紅葉見し折ならねども大井川秋の景色の淺からぬ哉

紅葉のふね

心せよ紅葉の舟さして嵐の山のわたりわたらば

菊花久芳

朝霜はこゝら置けども白菊の久しく匂ふ花は花かな

菊奠二遐年一

菊の映く谷の流を汲人や多くの秋をすきむとすらむ

菊粧如レ錦

移ろへば錦に紛ふ色を見てうべ村菊と人ぞいひける

冬

落葉殘レ秋

秋の色も留しぞ殘す山風の紅葉吹きちる嵩の下みち

承保三年十月大井川の逍遙につかうまつりてよみて奉りける

古の跡をたづねて大井川紅葉のみ舟ふなよそひせり

落葉をよめる

三室山紅葉ちるらし旅人のすげの小笠に錦おりかく

池上落葉

玉藻かる舟路はしばし心せよ池の紅葉は錦おるめり

紅葉浮レ水

ちりかゝる紅葉流れぬ大井川いづれ井堰の水の白浪

寄レ鏡戀

承暦三年大井川にまかりて水邊落葉を

嵐吹山のあなたの紅葉をとなせの瀧に落してぞ見る

水鳥

川舟の蘆間ぐ分る楫の音に驚の羽風のまづ聲ぞする

氷滿二池上一

水鳥の氷柱の枕隙もなしうべさえけらしとふの菅菰

風亙て浮寢の床や凍るらむあぢむら騒ぐ志賀の辛崎

氷

妻佛ふ比良の嵐に月亙えて氷重ぬる眞野のうらなみ

月照二網代一といへることをよめる

月清み瀬々の網代に寄るひをは玉もに亙る氷也けり

初雪をよめる

初雪は槇の葉白く降にけりこや小野山の冬の寂しさ

永承四年内裏の歌合に、初雪

珍らしくけさ降初る雪を見て暮行く年ぞ空に知るゝ

雪中旅人

深山路をけさや出つる旅人の笠白妙に雪はふりつゝ

戀

戀の歌の中に

遠垣の隙なく懸る蜘のいの物むつかしくしげる我戀

いかにせむ斯る思の消やらで燃増るべき後の浮世を

御狩する垣のねずりの衣手に亂れもとろに濕る我戀

刈藻かき焚く鹽竈に非ねども戀の煙や身より立らむ

女のもとへつかはしける

逢事のいつともなくて哀我が知らぬ命に年をふる哉

雪のあした出羽辨がもとより歸り侍りけるに是よりおくりて侍りける

出羽辨

逆りては歸れと思ひし魂の行さすらひてけさは無哉

かへし

冬夜の雪げの空に出しかど影より外に逆りやはせし

あづまに侍りける人につかはしける

東路の旅の空をぞ思ひやるそなたに出る月を詠めて

康資王母

かへし

思やれ知ぬ雲路に入方の月より外のながめやはある

小辨がもとへつかはしける

君がため落る涙の玉ならば貫きかけて見せまし物を

寄レ物見戀

忘れずや飾しの花の夕映もあか紐かけしおみの袖は

寄レ鏡戀

增鏡くもる涙や隔つらむ我が影さへに疎くなりぬる

雜

宇治の前太政大臣布引の瀧見にまかりたりけるともにまかりてよめる

白雲とよそに見つれば足引の山も麓ろに落る瀧つ瀨

治暦二年十月大堰川遊遙によみ侍りける

山里の夕暮方の寂しさを峰のあらしのおどろかす哉

ひこね山

彦根山通き門と聞しかど八重の雲ゐにまよひぬる哉

かつらぎの高ね

葛城の山の高嶺に住む人は谷の底にや雲を見るらむ

春日山

春日山

袖の浦

袖の浦に唯我が燒と鹽垂て船流したる蜑ぞこそなれ

帥になりて下りけるに別惜むとて津守國基が六とせにぞ君は來ませむといへりける返事に

留るも過行身をも住吉の松のよはひと祈らざらめやたながみにてよみ侍りける

旅ねする蘆の丸やの寒ければ爪木こり積む舟急ぐ也

旅

旅寢して曉方の鹿の音に稻葉おしなみ秋かぜ吹く

宇治にて人々歌よみ侍りけるに山家旅宿といふ心を

旅ねする宿は深山に閉られて正木の蔓くる人も無し

暮望二行客一といへる心を

夕日さす淺茅が原の旅人は哀いづくに宿をかるらむ

谷樵夫

朝夕の風のたよりに谷川の爪木の舟を誰かひくらむ

昔道方卿にぐしてつくしにまかりて安樂寺に參りて見侍りける砌の梅のまがまゝに參りて見れば木の姿はおなじさまにて花の老木になりて所々咲きたるを見て

神垣に昔我が見し梅の花共に老木となりにけるかな

大納言經信草子をかゝせけるを雪のふる日かきてつかはし侍るとてかきつけ侍りける

加賀左衛門

八哀なり降積りたる雪よりも我身は先や消むとすらむ
かへし
九富士のねに降積む雪の年をへて消ぬ例に君を社見め
人の手本かゝせけるをぬしは誰ぞと尋ねければ
も申さず侍りければ奥におき侍りける
〇一誰か住む宿の妻とも知らなくに儚くかける笹蟹の糸
大納言經信服に侍りける又の年申しつかはしけ
る　出羽辨
一懸しさや立増るらむ霞さへ別れし年を隔てはつれば
かへし
二別れにし年をば霞隔つれど袖の氷はとけずぞ有ける
源政長朝臣の家にて人々ながうたよみけるに初
冬述懐といへる心をよめる　新拾遺第二十長歌
三あらたまの、、――
たびの心をよめる長歌　新續古今第十九
四ながつきの、、――
未レ忘レ昔意
五故郷の花のさかりは過ぎぬれど俤さらぬ春の空かな
行路述懐
六沖つ風吹にけらしな住吉の松のしづ枝をあらふ白波
祝の心をよめる
七君が代の程をばしらで住吉の松を久しと思ひける哉
松作二千年友
八植て見る千年の春の木高さに我老らくの思ほゆる哉
としつなに具して住吉に詣でゝよめる
九住吉の荒人神の久しさに松も幾たび生ひかはるらむ
松影浮レ水
〇一千年ふる影をぞ見つる池水に波折かくる松の下枝は
賀
一君が代は盡じとぞ思ふ神風や御裳濯川の澄まむ限は
二大井川久しきとは影うつす龜の尾山の松ぞしるらむ

津守國基集

霞籠二佐保山一といふ事をよめる
三春くれば麓もみえずさほ山に霞の衣立ちぞかけつる
忍岡霞
四霞こそ忍ぶの岡に立ぬれど雉子の聲は包まざりけれ
留レ船聞レ鶯
五開すてゝ漕し行かねば鶯の聲は船路のとまり也けり
梅花遠薫
六さよ更て遠の里なる梅の香の吹くる風に頬ふなる哉
雪中梅花
七風吹て雪降かゝる梅の花散かちぬかえ社みわかね
山家皆梅花
八懐しきかのみ社すれ山里は梅の匂はぬ宿しなければ
春色浮レ水
九綠なる河べの柳かげさせば水にも春の色ぞみえける
岸柳臨レ水
〇一水の面に柳の影の靡くをばそこにも風の吹かとぞみる
山花未レ落
一櫻花まださかりなり高圓の春の山風のどけかるらし
見レ花述レ懐
二年毎に花みぬ春はなけれどもあくことのなき山櫻かな
花時無二外人一
三春くれば疎き人こそなかりけれ同じ心に花を惜めば
閑庭落花
四見人もなき庭の面に散花をふまでみるこそ心安けれ
追歳尋レ花
五年毎に山べ殘さず尋ぬれどまだこそあかね散ぬ櫻に
花殘待レ人
六尋ねくる人もやあると足引の山下影に花ぞのこれる
苗代
七眞菅生る野澤のをだを打返し種蒔て鳧しめはへてみゆ
八如月や彌生になれば山賤の門田のそひに種まきて鳧
歸雁
九薄すみにかく玉章とみゆる哉霞める空に歸る雁がね
〇一行歸る旅の空にや日數へむはるき長閑くみゆる雁音
遠山霞薄

一春深くまだ霞ける故郷の遠路の山をほのもみましや
三月盡
二吹風の誘ふに花は散とみきたが語ふに春はいぬるぞ
三月つごもりの日ある人のもとより
三心あらば散殘らなむ櫻花暮行く春のかたみばかりに
かへし
四櫻花惜ばかりをかたみにて春と共にぞ散ていにける
夏夜待二郭公一
五夏のよの長からませば郭公心やすくも待たまし物を
遙聞二郭公一
六ほのかにぞこの夕暮に郭公をちの岡べの森になく也
尋處聞二郭公一
七待かねてこぞのならひに山里を尋くれば鳴く郭公
納涼
八流出る水に暑さの忘られて涼む氣色ぞ打とけにける
樹蔭似レ秋
九夏のひの木の下影の涼しきは忍びに秋や兼てきつ覽
七夕
〇一織女にほか心をし貸たらば唯一夜には歸らざらまし
萩花をよめる
一朝未明萩原みれば露を重み撓なる枝の最ごたわなる
紅葉
二紅葉ばのちれるが上に散積めば錦重ぬる庭と社みれ
水邊紅葉
三時雨つゝ雨とふればか紅葉ばの淺き汀に色の深きは
草花廻レ水
四秋の野を移せる宿の池なれば岸の儘にぞ花は匂へる
無山里月
五ほかよりも光久しく爽けさは月の隈るゝ山なしの里
月浮二山水一
六汲人のなき山の井の濁り沼さやかに澄る秋の夜の月
綾木森月
七いつとなく綾木の森の木間より長閑に月はみえすゝ有覽
初冬
八いつのまに空の氣色の變る覽烈しきけさの山嵐の風
旅中時雨
九定なく時雨て過る山路には菅の小笠を脱み脱がすみ
すがたの池水鳥

九水鳥の己がすがたの池水に映る折こそ我をみるらめ

旅宿雪

九獨ぬる草の枕はさゆれども降つむ雪を拂はでぞみる

行路雪

二雪降て路たづ〳〵し逢坂の關の岩角見えみ見えずみ

雪埋二山路一

三九雪深みこまのつまおと音もせず山下水にわたす板橋

歲暮

四九來春にあはまくとは思へ共暮ぬる年の惜くやは非ぬ

五九戀侘て獨ぬるよを眞袖もて床うち拂ひ哀とぞ思ふ

六九手枕を交さむ事は難く共跡にはふせよ裳裾ひきむ

七九狹筵に妹をふせばや狹く共衣しきつき片はしにねむ

八九我妹子が額の髮の亂よりたわき眉根をみしが戀しき

九九我妹子が肌に着馴のきぬもがな戀慰めに身にもまつはむ

一〇逢難き戀に心や惑ふらむつらき人をも思ひしらぬは

逢ひがたかりし女に

一〇孝生の浦の恨てのみぞふる逢事なしになれる身なれば

逢はむと契りたる人をよそに見て

二よそにみて過ける物を帚木の伏屋てふなぞ人賴めなる

女の許にまかりて返されて

三うしと思ふ人の心は草ばかは歸る袂の露けかるらむ

ひるなりと物語せむといふに見苦しなほよるといひ侍りし女に

四あふ事を晝は諸にあさ口ね海士の釣舟夜をこそまて

語らひて侍りし女のまた更に心强かりしかば

五難面きにこりぬ心を思知れこれも昔の名殘なるべし

かへし

六つれなくは偕もやみなで何にかは折々人の思出らむ

七明ぬ共君とてけさはねたらまし今宵の夢の現也せば

いかでと思ふ女のかひこひたりしに

八戀しとて君恨みせば人知ず思かひある心ちせましや

かへし

九思ふらむ心も知で恨みたるかひ有鬼と今こそはみれ

いひいでむ事のはいからしかりし人におづ〳〵

さる心なむあると知らせむと

一〇賤の身に頓て心の類へかしさもあるまじき事も思じ

かへし

一波立むことを包まぬ身也せば思ふと云は嬉しからまし

又やりはべりし

二逢迄の事は難くと人しれぬ心のゆくを遣るといはなむ

かへし

三人しれぬ心のきつゝ積りなば無なの高く成も社すれ

物越にていらへばかりする女に

四閒ゆなる聲を心に取かへて隔てなき人思ひてしがな

四月ばかりにかへり事をせぬ女のもとにくちを

しきよしを云ひ遣して侍りしかば

五郭公里をも分ず語らへば答へをなどか愛にしもせむ

かへし

六郭公よ深き聲をあはれとも思ひしらずば何か答ふる

秋の夜の長きひとりねを思ひやれと云ひ遣したりしが女

七秋夜は人からならず昔より明し兼ねぬる物と知ずや

かへし

八長しとも歎かざらまし君と我枕並ぶる秋の夜ならば

語らひて侍りし女のもとに久しう音せざりしかば云ひおこせて侍りし

九兼てより人の心を知らませば契しとを賴まゝしやは

かへし

一〇賴めしを心みむとて音せねば忘れたり共思ひける哉

まだ睦じくもあらぬ女どもの仁和寺に遊びにまかりて日の暮れにしかば留まりて明くるあしたに

歸るとて

一よそ人は睦まじと社思ふらめならびの岡にれてし歸れば

宮仕へする女を迎へておくりてあしたに

二朝ね髮たが手枕にたわけてけさは降こし形見とかみる

能登守正月つごもり頃にこし地はまだ雪埋もれ

てなむあると云ひおこせて侍りしかば

三思遣るまだ雪深き越路には霞む空をや春と見るらむ

すりの大夫の播磨くだりにいちのすまで送りき

こえ侍りしに舟こぎ離るゝ程に霞の隔てしかば

四島隱れ漕行く迄も見るべきにまだ消立つる春の霞か

花山にまかりたりしに僧正のむろのまへと覺し

き所に櫻の朽ち殘りたるがたゞ一枝咲きたりし

かば

五あるじなきすみかに殘る櫻花あはれ昔の春や戀しき

花見に人々のまかるが音もせぬに遣し侍りし

六櫻みにいざと人こそ云はねども花に心は誘はれぞする

花ちりて後うちのけしきのかすめるを見て

左兵衛佐

七山櫻いまは殘らず散りぬらむ何たちかくす春の霞ぞ

かへし

八花ちれる跡のつれ〴〵みせじとて山立隱す朝霞なり

女の逢ひがたかりしに二月の晦日頃に遣し侍り

し

九春風は隔つる霞吹き亂れ亂れのまにも花やみゆると

かへし

一〇花散す風は吹とも春霞立ち隔てゝはいかゞ見ゆべき

雨のふりし日女のもとに遣し侍りし

一一春風や人を忘れぬ妻ならむしめ〳〵物を思ひ出つる

かへし

二春風を忘れぬ妻になすめれば降たる中の心ち社すれ

春の夜女とゐて物語して

三手束弓春のよ君と圓居してみけしの下にいる身ともがな

四月一日ある女の家を過ぐとて何事かと云ひ

れさせて侍りしに返りごとをばいはで山吹の花

をおこせたりしかば

四梔の色に咲けばか山吹の過行く春を止れともいはぬ

ある人の壻どりしてのちはじめて人々よびて歌

よみ侍りしに藤花久盛といふことをよみ侍りし

ついでに

五宿からか夏になれ共藤の花移ろふ色のみえずも有哉

布引の瀧にて人々歌よみ侍りしついでに

六高ねより落くる程をしらぬ哉幾ひろならむ布引の瀧

筑前の司賴家五月ばかりにいさゝかに營むことゝ

なむあるかざめやうの物とこひみ侍りしに送る

とて

七五月雨に田蓑の島の蜑人の被くかざめは君が爲なり

賴家

かへし

八天くだる神の驗とみる物は田蓑の島のかざめ也けり

賀茂の禰宜成助に始めてあひて

九開渡る御手洗河の水清みそこの心は今日ぞしるべき

かへし

一〇住吉の待かひ有て今日よりは難波のともしらす計ぞ

その日まうできあひて　祇園別當良遥
一住吉の御手洗河も流合ひて此渡り社すまゝほしけれ
賀茂の御手洗河のほとりに涼み侍りしに
二神山のしたもさゝに流れ出る御手洗河の水の涼しさ
かへし　成助
三我里にかたりも渡れけふ結ぶ御手洗河の水の涼しき
七月七日住吉よりまかり登りしに天の河といふ
所にて日の暮れにしかばとゞまりて舟をあらひ
きよめて織女にかすとて
四七夕は思ひしらなむ天の河急ぐ渡りに舟をかしつる
八月ばかりに月のあかく侍りし夜三條大納言の
御もとに月をみて詠み侍りし
五さやかなる月みる毎に雪積る心は空にみちやしぬ覧
かへし
六み空ゆく月は哀れと思ふらむゆたにも君が詠めける哉
同じ頃うまごのわらはの袴に萩の花を書きたる
を大納言見給ひて誰ともなくていみじうさうそ
きたるざふし女に持たせてなげいれさせ給ひた
りし
七主しらで栽のするなる高圓ののも心みに衣まかせむ
かへし
八袖垂て高間の野路を君ゆかば萩の花摺すらや鳳らむ
八月ばかりに成助が嵯峨にまかりてそれよりよ
びにおこせて侍りしかば
九心とは招かじ物を花薄さがの丶風のたよりなるらむ
かへし
〇草靡く風は吹とも花薄我ほにいでずば招かざらまし
八月ばかりに豐前守保定くだるとてみてくらじ
まにて馬の草刈らせけるをせいしければ刈らす
べき由の下し文こひたりしに遣すとて
一一秋風に草ばゝまかす豐國の民のなびかむ例と思へば
和泉の國吹飯の浦といふ所にまかりとゞまりた
りしに夜ふけて山のかたにはしかの聲聞え渚に
は千鳥なきしかば
二二鹿の音を哀と聞に秋の夜の吹飯の浦に千鳥さへ鳴く
すりの大夫ふしみの森の下にて紅葉の散るに年
の老いぬることをたとへて人々歌よみ侍りし
二三紅葉する森には春も又きなむ我身の秋を噸て枯行く
物へまかる道にて雨の降りしかば
二四雨降ぬいざ宿からむ此里の遠の野路には人も住なく
ある人の紀の國へくだるとて住吉を過きて堺と
いふ所にてとゞまり侍りしかば
二五住吉の渡りにだにも音せねば堺の里を思ひこそやれ
或る人の住吉に參りてよみ侍りし
二六徒に老にけりとや住吉の松も我身を今日はみるらむ
かへし
二七君が代や千年迄へむ住吉の松に久しき友と見えつゝ
津のかみ範永住吉に神拜すとて
二八我身こそ神さび増れ住吉の小高き松の蔭にぬれば
かへし
二九住吉の松の齡に肖えねれば君をも千世の友とこそみれ
住吉に人々多くまゐりて雨の降りしにぬるゝ事
をいひしかば
〇〇濡るゝにて思ひしらなむ諸人は天降りたる神の驗を
美濃の國へまかりてくだるにある女の許にまか
りて暇こひて立つにいふことの侍らざりしかば
一一暫ともなどか留めぬ不破の關稻葉の山のいなばいれさや
かへし
二二旅の空行べき君と知りぬれば何か留めむ關の名立に
津の國に侍りし頃京にあひしりたる人のもとに
遣す文のうは書きに
二三津國の難波よりぞと云ず共葉手をみては其と知らなむ
放讀岐守に始めて逢ひ聞えさせたりしに詠みか
けられたりし
二四住吉の松をぞ頼む今日よりは千年はふとも思變らじ
かへし
二五住吉の松の千年もあかなくに萬代迄を今日は契らむ
賀茂の祕宜なりすけがもとへ貝つ物やるとて
二六したゝみも鮑さだえも蛤も掻集めたり皆ながら見よ
かへし　成助
二七難波潟なにはの物も具有て朝滿潮のみつとしらなむ
歎く事の侍りし頃とふべき人のとはざりしかば
二八知る知ず訪ぬ人なく訪つるに終に音せで君ぞ已ぬる
かへし　良遥
二九死ぬ許歎いりでぞ音はせぬ知も知ねもとふはとふかは
賀茂の行幸に宮づかさどもかうぶり賜はりてま
かり歸りてやすむ所に六位にて侍りし時
〇〇紅葉するかつらの中に住吉の松のみひとり綠なる哉
對馬にまかりたりしに我が國のかたは遙になり
て新羅の山の見えしかば
一一舟出せし博多や執ら對馬には知ぬ新羅の山はみえつる
但馬の國に朝倉といふ所に歌よむ尼なむあると
聞きてまかりて物語し侍りしついでに
二二朝倉やまだみぬ里に尋ねくる心の程を思ひ知らなむ
かへし　ま
二三尋來てみるにかひなき宿也と朝倉山を忘れざらなむ
石山に參りて歸り侍りしに潮田の橋のほとり馬
に乘りたる女のきつれたるが夕立のせしかば關
寺の大門に同じく立ちいりたるに云ひかけ侍り
し
二四東路をくる妹ならば言問はむ伏屋と云て誰か留めし
かへし　女
二五東路の伏屋になにか尋ぬらむけふ逢坂のとや契らぬ
住吉に賀茂の神主なりすけくだりたりと聞きて
加賀左衛門命婦
二六葵草おふとし聞けば住吉の岸にぞ今は摘べかりける
かへし
二七住吉は忘れ草ぞといはるれど人に葵を植ゑてまつ也
あはの國よりかみの丶道からまかり上りしに驗
河に入江の浦といふ所にて風ふきて八日まで舟
を出さずあやしみ歎くほどに人の夢に住吉のひ
とのする事もなくておりのぼりするがやすから
ねばおきながふかする風なりとなむみえると語
れば驚きて尋ぬればなきに神の社ありみをの
明神と申す假にみてぐら挾みてしでに書きつけ
侍りし
二八みをの神住と聞てぞ入江なるなぞ舟据て日數へぬ覧
かくてぞ程なく風やはらぎ波靜かにて舟出だし侍
りし
おほやけに申す事侍りしに申し文にそへて奏者
の御もとに
二九住吉のあまつ社のうれへには心よせなれ雲のうへ人
同じく申す事の程すぎ久しかりしかば
〇〇雲の上は月ぞさやかにさえ渡るまだ滯るとや何なり

かへし　　兵衛佐

一滞ることはなけれど住吉のまつ心にや久しかるらむ

公に申す事のともかくも仰せ下され侍らざりし

かば住吉へまかりくだるとて葵者の御もとに

二早晩と御言きかまく住吉の松なる神にいかゝ云べき

幾人少將うちにのみさぶらひ給ひて久しうおひ

聞えさせねば月夜なりし頃

三雲の上に隔てゝ月のもりこねば賤の宿りは闇なる哉

かへし　　少將

四雲の上にみるだに飽かぬ月影を理なりし賤の宿りは

成助がきやう中げがはしきことゞもあれば京へも

え出でず御社にこもりゐてなむあるといひおこ

せて侍りしかば

五神垣に穢らはしけきみ心いまは己が心を戒ちやるらむ

住吉より京へのぼり侍りしにみつてらの程にて

雨のふりしかば人の家に立ちいりたりしにいみ

じうもりしかば

六煤たるゝみつの萱屋の板庇久しくなりて雨も溜らず

江中納言大宍師になりて下られしにかはじりに

まかりむかひて物語のついでに

七六年にぞ君はきませむ住吉のまつべきみ社痛く老ぬれ

かへし

八すむ人の過行く我も住吉の松の千年と祈らざらめや

三條大納言すいしのむしろ奉るとて

九薦まし我が獨寢のさむしろに誰とか君が手枕をせむ

正二位大納言をばいかで羨むぞやすからぬことな

りとていみじうこそ笑ひ給ひしか

六條すりの大夫の上に石だゝみせむとて石とり

てとゞめしかば聞えさすとて

一〇難きと勸めけりとも思知れ石をわりつゝ君に仕ふる

同じ人におほえびを聞えさすて

一一住の江の鏡姿ぞ哀なる海に老いつゝこしのかゞまる

かへし

一二わたつみの老な歎きそ住吉の松にかゝれる沖つ白波

同じ人の播磨くだりにかちしなりしかば

一三諸共に戀はあげねど慕はゝ心は君に後れやはする

かへし

一四心をば同じ道には煩ふとも猶住吉のきしもせじかし

老の後に月をみてよみ侍りし

一五倦ずして老はてにける我身哉こむよの關も照せ月影

伯の母のたうのつまどの板を乞はれたりしかば

遣して後に

一六槇のとを西に明てや月をみるさき立行に言傳をして

かへし

一七西へ行月みる度に槇のとを君思ひつるつまにする哉

前左衛門佐のもとより久しく音せずとていひ遣

したりし

一八水龍りに一日もおちず思へども人忘れけり住吉の松

かへし

一九住江の松に絕せず吹風ぞきつせそへつゝ忘やはする

同じ佐のもとに貝つものをませくだ物にして聞

えさすとて

二〇波つみの浪の花さく浮木にはかき蛤のなるにや有覽

備中守仲實くだられしに難波江のほとりにまか

りむかひたるに小舟のはたつひたるがありしを

見て詠み侍りし

二一難波江に年籠にたる舟なれば蘆の葉摺にはた馴に鳧

備中守

二二難波江の蘆の葉わきにはた馴て今日を待たる舟の景色か

若狹阿閣梨隆源

二三蘆の葉の茂みを分る舟なれば年は積れどなるゝなる覽

尾張守に聞えさする事ありて

二四尾張なるはゝりの絲を手玉ゆら機めのおれる衣のき欲き

住吉の堂の壇のいしとりに紀の國にまかりたり

しに和歌の浦の玉つ島に神の社おはす尊ね聞け

ば衣通姫のこの所を面白がりてかみになりてお

はすなりとかのわたりの人云ひ侍りしかば詠み

て奉りし

二五年ふれど老もせずして和歌浦に幾代に成ぬ玉つ島姫

かくよみて奉りたりし夜の夢にからかみあけても

から衣きたる女房十人ばかり出で來りて嬉しき喜

びにいふなりとてとるべき石どもを數へらる數へ

のまゝに來むれば夢の告げのまゝに石ありいしづ

くりしてわらすれば一度に十二にこそわれて侍り

しか擅のかつらばしにかなひ侍りにき

賀茂神主なりつぎに葵こふとて

二六睦じく賀茂の葵を住吉の松のゆふにもしてま欲きを

なりつぎ葵をばめでたくしたて、遣して返り言は

力及ばずと云ひて侍りじこそなか〳〵ありつきた

りしか

讃岐入道集（藤原顯綱朝臣）

二七ある宮腹の女房の局の前に柳の枝をうゑて見け

るによひにきて物語などして歸りにけるつとめ

てその柳なかりければ夜べの人のとりたるなめ

り返したべよと責めければかくなむ

二八青柳の糸になき名は立に鳧よるくる人は我ならね共

人々ぐしてしほゆみにまかりたりしに京より

知りたりける女の四位權少將のもとにかく詠み

て遣しける

二九立寄らで音せぬ時は津の國の蘆間の波の心ち社すれ

少將の返りごと侍りしうはづゝみの紙に書きつ

けたりし

三〇津國の蘆間の波の我ならば恨みぬ程に音はしてまし

齋院の邊にさぶらひける人の世の中に隱れてあ

るやうありて思ひがけぬ所にありければ年頃に

なりて四月賀茂の祭の日葵に書きて遣しける

三一思ひきやその神山の葵草懸てもよそにならむ物とは

これはあるやうある歌なり放ちに詳しくは書かず

年頃語らひける人のこと人に物いひてたえにけ

れば日頃ありてあるやうありて音づれける次で

によみて遣しける

三二心にもかなはぬ物は涙哉わが爲つらき人と知るゝ〳〵

まひどしてはやうしりたる女の内わたりに隱

れてありと聞きて尋ねてよめる

三三行摺にとふとや人の思らむ山ゐの衣きたるけふとて

はなだなる狩衣をきてある宮腹の女房にあひて

まかでけるに雪のいたく降りてつとめてその狩

衣の袖をやるとて書きて遣しける

三四雪かゝるはなだの袖を打拂ひ歸りし程の袂ともみよ

風いたく吹きける夜御前に近くうゑさせ給へる萩御覧じにいでさせ給ひて人々歌奉れと仰せられければ宮にて

一秋風の萩の下葉を吹返しうらみや露は置き増るらむ

ある宮腹の女房のもとよりなぞ〳〵とてかくいひたる

二かひなしや社のみして祈ると無てみそかに成にける哉返しかくぞ

三みそか迄祈る社のかひなくば神無月とや云べかる覧

二月ばかりに寺に講きゝにまかりたりけるにある宮ばらの女房又車を並べて聞きけれど誰ともなくてしきみの葉にかきて遣しける

四よそ〳〵にみつの車と思へ共人の心は一つならなむ

講はてゝ人々騒ぎ出でける折につかひ紛れにければ誰とも知らでいみじくねたがりて日頃尋ねけれど程へてぞかくと聞きける

三月つごもりがたに文をさし置きて使のにげたりければ人をつけて見すればしろ君のたばかるなりけりかくぞ讀みたる

五諸共にいざ尋ねむ山櫻ちり殘りたる花はありやと返りごとかくなむ

六花見には何かはいざと誘ふらむ勤めし法の折は尋てと詠みて遣したりければこゝにはよもとあらがひてよめる

七まろ橋を跡も定めず渡りては踏違ふるぞ怪かりける又返し

八荒河は偖もやみなむまろ橋の跡なくは社踏も違へめ山里にまかりけるを今宵はとゞまりてあれとなどめけれどとゞまらで急ぎかへりてつとめていみじう雪のふりたるに具して歸りし人の許よりとゞめし人今日の雪をいかにといひたれば

九泡雪のふるにつけても歎らむとくるを侘し人の心はある所に參りたるにみすのそばより女房の髪いと長くこぼれ出でたるを見て

十人知ず思ふ心をかなへなむ神顯れて見えぬとならばいつぞやの殿上の大井の逍遥の歌かき付けたるうらに葦手を人の手ならひにしたりければそこに書きつけたりける

十一津國の難波のみること思しを和歌の浦にも葦でおひ鬼五月雨の頃よごろ物語などしてあかすをかゝるはよけれどもなき名たつなむわりなきといひければ水無月の朔日の日遣しける

十二梅雨は無名立田にそぼちつる田子の濡衣けふや干す覧

すみける所の櫻の花を見ていかに世の中を見ける頃にか

十三雨ふればうき言の葉も茂る世に美ましくも散る櫻哉

久しう語らひける人のうき事ありとてたえにける琵琶をかりたりけるそのをりはかへさで年頃ありて思ひがけぬ程に返しおこせたりければよみて遣したりける

十四忘るなと敎し事はかひ無て引違へたるびはと社みれ知りたる人の許より久しく音づれずとて軒におふる草をおこせたれば忘れ草と思ひたるにやとて

十五是やこの音に聞きつる忘草又こそしられ心ならひに忍びたる人の文をおこせて人やみるらむとてかく云ひたる

十六涙川せゞの玉もゝ掻つめし人の水屑になりも社すれかへし

十七掻つめど河のせゞなる玉藻にも人のみるめは有じとを思へたはぶれ事にて語らふ人の恨みて今はあはじなどいひければ

十八小蟹のいとかすかい言の葉に中かき絶む物とやは思ふ

蘇枋色なる貝のちひさきをこれなむ忘貝といふはまことか見知りたりやとて人の見せければ

十九是やさは人忘れ貝覺束なえこそ白波あまにとはばやなきことを聞きて人の恨みければかくせといひけるものを人に見せたりと聞きたりけるにやふみ人に見すらむと疑ひける人のふみおこせたるその文を見て返しやるとて

二十今よりは跡も留めじ濱千鳥涙か磯のみるめなければ

人々などよびて和歌よむによばずとて恨みおこせたりければ

廿一紀の國やしらゝの濱の知せねば理り也や和歌の恨は

友だちのあづまの方へまかりけるがかくとも知らでまかりくたりにければよみて遣はす

廿二東路に立日をだにも知せねば衣の關の有かひぞなき

語らふ人に五月五日遣す

廿三筑摩江の長くも人を頼む哉けふの菖蒲の妻ならね共

煩ふことありて久しうありかぬ頃つねに月もろともにみる人のもとより月のあかき折こそ思ひ出でらるれといひたりければよむ

廿四世中に無らむ後に思出でゝ有明の月を形見ともみよ

百和香にくらゝの花をくはふとて詠める

廿五惑はずなくらゝの花の暗き夜に我も戀けもえむ煙は

知りたる人のとほき國へまかるとてあこた瓜をおこせたりければ瓜に書きつけて返しやる

廿六見からにつらさぞ增るあこた瓜立別行く道と思へば

昔はすき物にて歌など詠みけるが年老いて尾張の國鳴海の浦といふ所にすみけるに詠みてとらする

廿七みちの國の岩手や暫しとゞまらましと忍ぶに最ど增る戀哉

語らふ人の筑紫へまかりけるによみて遣しける

廿八とまらじと思ふ物から別路の心づくしに歎かるゝ哉

九月十三夜の月の曇りたるをかゝりなどあらがふ人の許にいかゞみると云ひにやりたりければかく云ひける

廿九夕霧の立ふたがれる頃なればはるゝをぞ待秋夜の月

語らふ人かせおこりたりと聞きていかゞといひやりたる返りごとに

三十今こむと頼め置てし後よりは君まつ風ぞ最戀しきといひやりたりける返しに

卅一高砂や立よる波のしげゝれば我をのみやは岸の松風

源氏を人にかりて返しやりける

卅二いかばかり袖のぬれけむ武藏野の若紫の露の消え方

齋院に人々あまた參りてよむに

卅三神垣にさす榊葉のゆふよりも花に心をかくる春かな

おなじ心

卅四榊葉のときはならひに櫻花しめの内には散て年へよ

但馬の國にあさくらといふ所に石井などをかしくてすきものありける年おいて尼になりて子うまごなどあまたある猶襄へる考何ありける事のついでいひやる

九年讀て盛の住らむあさ倉の里のみるめを刈て我みむ
おなじ人のあまうれへすとて申し文に楯のはこ
をそへたる返しやるとて
○返してむ内は床しき筥なれど明て悔しと思もぞする
内わたりにて語らひし人の年頃さるおして宮仕
へもせで五せちの頃かく云ひおこせたる
谷深きみ山隠れに家居して日影をよそに思ひやる哉
返り言はその程さはる事有りて内へも参らねば
谷深く契りしとの印にや同じ日影をよそに聞くらむ
同じ頃内わたりにありし時九月十三日の月をも
ろともにみあかして里居の後同じ十三日の夜よ
みておこせり
曇しは怨めしかりし月影の今宵は其ぞ嬉しかりける
返し
行きすりのよそに見よとや古の山ゐの衣きては契し
るゐの大そ北の方になりて下るに御ぞやるとて
色深く染たる旅の唐衣かへらむまでは形見ともみよ
年頃かたらふ人のめになりてたえて後五せ
つの頃内わたりにてあひたりしにひかげの絲を
解きてとらせて詠みたりける
思へ共ひかげの絲の繰返し絶にし節のつらくも有哉
一の宮の女房の歌
行きかへる薄花染の色みれば君よりは又變らざり鳧
心淺く染たる絲の色なれば是よりは又いかゝ變らむ
行懸る跡を詠めし我袖もぬれ乍ら社みすべかりけれ
○まだ知ぬ忘られ草と云名をばさは我によりてや知始めける
うしとみし心の程はをみ衣九重までぞ隔てられぬる
谷川は誰か柵こゝむれば秋はてにける景色なるかな
身の程の思知らるゝ世中は跡留むべき心ちやはする
あらがはで心も空に成ぬれば水くむ月の影は離れじ
かく許あたり忘るゝ扇には返さむよりは爭で留めし
寂しくて雪ふる里の印には人の心のかはるをぞ見る
女御殿女房内裏にて
吹返す風につけても山櫻まだき散りぬる心をも見る
かく許あたり忘るゝ扇には返さむよりは爭で留めし
つげてまし今ぞきたると夏衣ひとへに頼む心也せば
思ひしる折も有りけり涙河淺き瀬をのみ見せし心に
○鵲の橋は雲居の便りまでふみゝし跡もたれか尋ねむ
その事を思ふともなき片敷の袖こそけさは萎る計に
返してむ見れば中々つらさのみ最ど益田の池の水莖
涙河あけてもみせむ玉くしげ浦島の子が心ゆるさば
花を重ねあくがれはてゝ秋の月思比ぶる心だになし
藤
時わかぬ松のみどりは紫の藤さく折や夏を知るらむ
きく
○秋の夜に雪ちらぎゆと見ゆる哉籬に咲ける白菊の花
七夕
○七夕の待つる程の苦しさとあかぬ別と誂れまされる
○誂れをか思増すべき七夕はあふ嬉しさと逢ぬつらさと
○七夕に心かはすと思はねど暮行く空の嬉しきはなぞ
月
渡つみの底の玉もの口とに旅くぞみゆる秋の夜の月
しば
○獨ねやいと寂しきを鹿の朝ふすゝ葛のうら風
中宮のますかけはまゆふをとりにおこせむと契
りてまつに久しく音せざりければ詠みて遣しけ
る
○忘らるゝ我三熊野のはまゆふを何しに人にとへと云けむ
返し
三熊野の恨み所も無物をとへと契りし程のすぎねば
引懸ぬ宿は有じを今日毎にいかに盡せぬ菖蒲なるらむ
我宿の妻にのみかは菖蒲草かゝらぬ宿の閨し無れば
藤
時わかぬ松のみどりは紫の藤さく折や夏を知るらむ
きく
○秋の夜に雪ちらぎゆと見ゆる哉籬に咲ける白菊の花
七夕
○七夕の待つる程の苦しさとあかぬ別と誂れまされる
○誂れをか思増すべき七夕はあふ嬉しさと逢ぬつらさと
○七夕に心かはすと思はねど暮行く空の嬉しきはなぞ
月
渡つみの底の玉もの口とに旅くぞみゆる秋の夜の月

藤原基俊家集

藤原基俊家集上

正月朔日女のもとに遣しける
○物どに改まれども戀しさはまだふる年に變らざり鳧
同じ一日ごろに物申しける女のちかごとたて
侍りしに遣しける
○初春の時のみこと天地の神打つく(如し)君がちかひは
同じ頃物ごしにて物申しける女の許に遣しける
○老らくの心戀ひぬ鳧のわかれ聲をきゝそめしより
七日わかな人のもとに遣すとて

一年をへて若菜はつめど老にけり頭に春の雪積りつゝ
柳
二春風に吹な亂りそ我妹子がかつらにすてふ青柳の絲
年頃もの申しわたりけれどいと心かたくてやみ侍りける女のいかゞ思ひけむいとおもしろく咲きたる花を遣したりしかば云ひ遣し
三いかにして花の下紐とけにけむ人の心は有しをらに
大宮の右大臣うせ給ひて又の年南おもての櫻に鶯の鳴きけるを聞きて
四散ぬさきは何なゝ鳴そ鶯よ賴む蔭なき吾ぞよにふる
花作二春友一
五賴めどもいでや櫻の花心さそふ風あらば散も社すれ
三條大納言花見にまかるとて始めてさそひ侍りしかばまかりて又の日かく云ひ遣したりし
六山櫻尋ねし人の心こそ散る花よりも今朝はをしけれかへし
七咲ざらば何故人に知られまし花嬉しかる春も有けりさきのおほいまうちぎみ失せ給ひての春花のいとおもしろく咲きたれどみる人も侍らざりしかば獨山寺にまかりて暮るゝまで詠めて三條大納言のもとに遣しゝ
八此の春は人もすさめぬ山櫻心惜しくやとくに散ぬるかへし
九聞にこそ最ど惜さは增りけれ見人なしに花の散らむ
雲林院にまかりたるに花の始めて散りてしを見て
一〇人知れず我やまちつる櫻花みる折にしも散始むらむ
田家三月盡
一一小山田の苗代水はひきながら春は心にえこそ任せね
卯の花がき
一二今はよに故郷人も尋ねこじ身の卯花を垣にしたれば
卯花隔レ隣
一三賤の庵許多の小屋も見えぬ迄中垣がほに咲ける卯花
右近の馬場にて人々尋二子規一といふ題をよみ侍りし
一四郭公より疾ちいぬ覽子規尋ぬとだにも知せてしがな
雨のうちの子規
一五さして行く笠取山の子規今宵はこゝに雨やどりせよ
卯月十日頃久しく音もせぬ女のがりいひ遣し
一六時鳥わすられぬかな故郷のならしの岡のよはの一聲
時鳥
一七誰が里の垣根忍ぶと子規けさ我が宿を過がてになく
山近聞二時鳥一
一八夢かとよ隣の岡の子規しのびもあへぬさよの一こゑ
曉聞二子規一
一九朝倉や木のまろどのゝ明方に山子規なのりてぞゆく
夜々待レ月
二〇梅雨さるは月よを此頃はいかにせよとか七夜降ぬる
雨のうちの旅のやどり
二一五月雨にあまの苫やに旅寢して哀れ露けき草枕かな
庵橘夕薰
二二袖ふれし昔の人ぞ忍ばるゝ花たちばなのかをる夕は
山家蚊遣火
二三夏のよを下もえかす蚊遣火の煙けぶたさ遠の山里
竹風如レ秋
二四夕されば さゝ村竹に吹風のそよ〳〵音こそ秋通ふらし
雨中待レ人
二五雨降と爭でか人をまたざらむ誰爲かける我が眉ねぞ
五月五日三條大納言のもとに藥玉遣すとて
二六蔦蒲草岩かき沼の長きねを君が爲にぞ玉にぬきける
對レ水待レ月
二七夏夜の月待程の手すさみに岩もる清水いく掬びしつ
雨中木繁
二八玉柏繁りにけりな五月雨に葉守の神のしめはふる迄
五月の晦日つれなき女のもとに遣しける
二九山里の檜の外面におくかびの下燃をれど知人もなし
五月ふたつ侍りし年の後の一日修理大夫顯季朝臣のもとよりかく云ひ遣したりし
三〇なほきなけ未だ五月ぞ子規思ひたがへて山へ歸るな
返し
三一告ざらばこぞに倣て時鳥ほと〳〵山に入やしなまし
夜深思二牛女一
三二この宵のふけ行くまゝに七夕の昔の契今やくやしき
閑庭露滋
三三庭の面にしげる蓬にとよせて心のまゝに置ける露哉
萩の上の露

三四妻こふる鹿の涙か秋萩にこぼれぬばかり置ける白露
女郎花
三五朝霧の絕間に見ゆる女郎花今宵の露にねくたれに鬼
薄
三六秋風に色に出にけり花薄かばかり誰は結びおけども
林中月
三七巻もくの檜原の山の木間より鹿子斑らにもれる月影
蟲のうらみこひによす
三八とこ近しあなかま夜はの蓑夢にも人の見えもこそすれ
月の前の旅の心
三九可惜夜をいせの濱荻折しきて妹戀しらにみつる月哉
衣うつ
四〇誰爲にいかにうてばか唐衣千たび八千度聲の恨むる
山里の曉
四一山里の尾花さかふく軒端より有明の月はさし出に鬼
旅の宿りに月をみて
四二月みれば思はぬ里ぞなかりける最ど割なき旅の空哉
九月九日三條大納言のもとに遣しける
四三長月の今日の爲にと菊の花露しもおひて咲にける哉
九月卅日ごろ久しく煩ふことを侍りて心ち頼もしげなく思ひしに久しく音せぬ人のもとに遣し
四四秋果る枯野の蟲の聲絕ば有やなしやを人のとへかし
草上露
四五何事に思消ゆらむ朝露のうき我身だにあれば有よに
船中落葉
四六散紛ふ紅葉ほに揚て行舟を秋もてゆくと人や見らむ
雪埋二古橋一
四七我が駒よ心してふめ降雪につゞめも見えず淀の継橋
雪の朝雲居寺瞻西がもとよりかく云ひて侍りし
四八常よりも篠屋の軒ぞ埋もるゝ今日は都に初雪や降る
返し
四九降雪に誠は篠やいかならむ今日は都に跡だにもなし
山家雪
五〇雪の內に今日は暮しつ山里はつま木の煙心ぼそくて
月あかき夜雪いとおもしろく降りはべりしかば友だちのもとにまかりて夜ふけてまかり歸りしに
五一歸るさの宿だにみえず降雪に道知べせよ冬の夜の月

池水作レ鏡

二六吾が宿の池の水を鏡とて見れば哀に老いにけるかな

舊年立春

二七老ゆけど惜けくもなし年の内に春は再逢ひぬと思へば

梅告二春近一

二八立寄らば蔭ふむ計り春きぬと梅の匂のほのめかす哉

二九十二月三十日に昔あひしりて侍りける女に人のもとにてまかりあひて物申しけるほどに白河にせうとのもとへとて急ぎ歸りしをとゞめかねて

三〇惜めども行としだにも悲しきに暫し留まれ白河の水

雪をかきあつめておき侍りしを人の請ひに遣したりしかば遣すとて

三一とけむ共まだみえぬ哉白雪の降やは是ぞとり所なる戀

三二秋風に葛のうら葉の打かへし思へば戀の怨めしき哉

三三祝子がかみより板に引杉のくれゆくからに繁き戀哉

三四逢事は片結なる我妹子がゆはたの紐はいつか解べき

三五なぞも斯ゆらのと渡る舟船の楫とるまなく物を思ふは

三六誰故に迷ひ初にし心ともこゝわり知らぬいな淵の瀧

三七河上に晒す細布けふだにも胸あふばかり契りせよ君

三八如何にして君恨らむおはたらの板田の橋の桁よりもこそ

初めてあへる女に鏡をかりて返し遣すとて

三九みて後はいとゞ心ぞます鏡影すむ人に成やしなまし

心かたき女のもとに

四〇波よする磯べの蘆の折伏て人の憂にはね社なかるれ

いとしもなき女のいかなることかありけむ

四一山城の水たのこなき己さへあな事々し我なすさめそ

終夜物越にて人と物語し侍りしにしばし音もせざりしかばねいりたるかとて侍りしかば

四二思へ唯まだ引寄せぬ梓弓ひとりは人のねいる物かは

はじめの戀

四三人知れぬ戀にはまけじと思ふにも空蟬の世ぞ悲かりける

あしたの戀

四四月草にすれる衣の朝露に歸るけさ〳〵へ戀しきやなぞ

逢ひてあはぬ戀

四五たはれにし妹に逢やと道のべに訪し夕けぞ人頼めなる

夜の戀

四六波よする岩ねに立てる磯馴松まだれもいちで戀明しつる年へたる戀

四七人心何を頼みて水無瀬川せゞの齋杭朽ち果てにけむあしたの戀

四八おしてるや興謝の浦波打返し今も見まくのほしき君哉

初めて人のもとに遣す

四九爭で〳〵と思ふ心は奥山の苔むす岩の年ぞへにける

五〇筏おろす杣山川に浮き沈み君に逢ふべき暮をまつ哉

雪いたう降りたるあした女のもとへ遣し〳〵

五一音せぬはあな覺束な白雪の降掩ふ竹のよの程はいかに

申しちぎりて久しく音せぬ人のがり

五二濱千鳥まつかひもなし曉の目覺ましき迄などか音せぬ

忍びたる女のもとへ遣し〳〵

五三おほなこが草かる岡のさゆりばのしめゆふ迄は人に知らすな

同じ心を

五四久くは程やはへぬる程へれど又こはいかにみまく欲きぞ

又の日後朝

五五いかなれば短き冬の日なれ共けふ生憎に長くなる覺

初めていひそめて女のみや恨みにけむといへりければ

五六毒路漏る岩垣清水掬びかね飽べくも非ぬ君にも有哉

住吉に參りてよみ侍りける

五七住吉のまつとはむ神代より我としづむ人は有やと

一品宮仁和寺にあたらしき堂を建てさせ給ひて觀音の紫の雲にのりて紫金臺さゝげて西の空よりいたり給へるかたを遊せ給へり拜みにとてまかりたりしにこれに歌つかうまつれと仰せられしかば

五八紫の雲のおりゐる山ざとは心の月やへだてなからむ

御かへし

五九へだてなき心の月は紫の雲とゝもにぞ西へ行くべき

佛供養し奉りしに四條の宮の筑前の君忍びて聽聞すと聞きて車にいひいれ侍りける

六〇唯一つ門の外にはたてれども鬼籠りたる車なりけり

備中守仲實朝臣國に侍りし時いでいひ遣し〳〵

六一君があたりみつゝ忍ばむ天離吉備の中山雲な隔てそ

五月いたう煩らひし妹のもとよりとひて侍りしかば

六二あだし野のあさぢおしなみ吹風に露の命の置所なし

世の中はかなく聞ゆるころ左京權大夫俊頼朝臣のもとへいひ遣しける

六三かたらばや草ばに宿る露計り月の影ぐまに〳〵

山寺に入相の鐘を聞き侍りて

六四入相の遠山寺の鐘のこゑあな心ぼそ我が身いくよぞ

三條大納言聞ゆること侍りて人に遣したるにもがひてかれよりかくいひおこせられたりし

六五限あれば富士の高嶺に鳴澤の我音づれに何增らめや

返し

六六玉笹にむれゐる雀朝毎に我こそ先はおどろかしつれ

やすなりの朝臣のもとにいふことありてのち音も仕うまつらざりしかばいひ遣し〳〵

六七人知ず思こめたる小れ石の打出しとはいかゞ成にき

權を人のもとに遣すとて

六八落積る朽葉が下を掻返し誰が爲拾ふ木の實とかしる

住吉のくにもといと近くゐたりと聞くに音せざりければ云ひ遣し〳〵

六九水籠に一日もおちず思へ共我わすれける住の江の松

懷を述ぶ

七〇蘆根はふ浮世渡るとせし程に頓て深くも沈みぬる哉

七一年をへて歎く歎きの茂合ひて我身老曾の森と成ぬる

季仲卿太宰帥になりてまかりくだりしに馬の餞に扇遣すとて

七二千年まで契れるとを忘れずば鶴のは風に思出でよ君

或る所に歌合せむとて歌よみもとめさわぐと聞きてたれともなくてさしおかせ侍りし

七三吹風に和歌の浦社騒ぐなれ波よ靜くに我身よせまし

雲居寺瞻西家の門を過ぐとてかくいひ入れてまかりける

七四いへばあり云では過じ玉章のかけて思を哀とはみよ

かへし

七五ならば唯には過で玉章の中々なりやかりに音づる

春宮大夫八講行ひ侍りしに捧物つかはすとて詠みて遣し〳〵

七六峯ましく心の雲や晴ぬらむわしの山路に照る月をみて

三月朔日晴水寺にこもりたりしに忍びたるけしきにてこもれる人に云ひ遣し〳〵

七七諸共に旅のそらには出たれどあな覺束な春の夜の月

菊の花おもしろく咲きたるを山寺に移し植うとて

二心なき草木なれとて見るなれど法の庭にも移しぬる哉

是は堀川院の御時集めしかば參らせしこれより後の歌は古へ今のをかきあつめたるなり

藤原基俊家集下

みちの國のかみもとよりの朝臣のもとより久しう逢ひ見ざるよしいひていつの程とも云はざりしかば

一歸りこむ程をふるにも武隈のまつ我み社痛く老ぬれ

季仲の帥流されて後九月十三夜月のおもしろく侍りしとを思ひ出てたよりにつけて云ひ遣しゝ

二見るたびに昔のとの覺ゆれば又其まゝに月も詠めず

東宮大夫うせ給ひて又の年の春植ゑられし紅梅のいと盛に咲きて侍りしかばものへまかりし道にていそがしく侍りしかど人かげもせざりしかば昔思ひいでられてたゝう紙に書きて木に結びつけて侍りし

三昔みしあるじがほにて梅が枝の花だに我に物語せよ

後に見侍りで少納言さねゆきかくいひおこせて侍りし

四根に歸る元の姿の戀しくば唯木の本を形見にはみよ

又かへし

五戀しさにさは木の本に立寄む昔に似たる匂あるやと

昔あひしりて侍りし女いと久しく音せぬ忘れにたるかと云ひおこせたりしかば

六白波のいらこが島の忘れ貝人忘るとも我わすれめや

十月朔日頃大原よりまだもみぢぬ楓をしきてくだ物いれておこせたりし人のもとへ云ひ遣しゝ

七折りるはいかなる山の山人ぞ紅葉も敢ぬ可惜木葉を

思ひがけぬ人のもとよりうまのことなむいふ人のある呼びて見よと云ひたりしかば

八霧たちの誰杣山の木の本にいさまだえ社思出られね

或る女八月ぶだいの念佛に女郎花を奉るとて歌こひ侍りしかば代りてよみ侍りし

九我如く五つの障ある花をいかゞ遠の身とはなすべき

雲居寺瞻西が說經を聞きてめで侍りし人に代りていひ遣しゝ

一〇岩間出ていづる泉のわくがど法の言葉も盡せざり鳧

十二月二十日ごろいと寒きにむすめにおもしろきふることども書きあつめて取らすとて草紙の奥に書き付け侍りし

一一昔人うべも云けむ子を思ふ心の闇はさうとなりけむ

たいうしといふ子を憎につけて侍りしが久しう音もせざりしかばかく云ひ遣しゝ

一二かぞいろの引も放たぬうなゐこぞ我思ふと猶思へ君

小法師といふ子を南都の永緣僧都につけて侍りしに僧都奈良に罷りてかく云ひおこせて侍りし

一三我をさへ千代とぞ祈る春日野の二葉の松を見初てしより

かへし

一四君が代は千世共云じ春日野の二葉の松も神さびむ迄

三月十日ばかり六波羅に講行ふと聞きて女車にのりまじりてまうでたりしに口をしくはてにければ經よむ尼のもとにまかりて歸らむとするに引出物にとて櫻のいみじう咲きたるを折りてえさせしかば

一五家づとにさのみな折そ櫻花やまの思はむとも優しゝ

越前守仲實朝臣妻にまかりおくれてはてのことし侍りし諷誦ものおくるとて

一六曉の夢となりにし君こふとつき驚かす鐘のこゑかな

雪中待人

一七凍りあへぬ山田の澤に降雪の下消返り君をこそまて

戀

一八戀ずまに猶も待哉冬の夜の有明の月のいでやと思へば

殘りの花

一九夏山に一枝はるのみえつるは殘れる花の匂なりけり

ほどゝぎす

二〇唐衣たつ田の山の郭公うらめづらしき今朝のはつ聲

久しく音せぬ人に

二一十よみ餘り二讀三讀思へども猶聞遠なる木曾の麻衣

卯の花

二二うの花のさける垣ねは布晒す相模の市の心ちこそすれ

ほどゝぎす

二三來鳴かぬも理なりや時鳥まつ人からの夏のよなれば

（前内侍）

二四戀すれば現し人社劃なけれかひすら妹を備ふてふに

正月ついたち大安寺僧都のもとにゆづる葉やるとて

二五霜八度置けど凋まぬ初春の千年を君に讓る葉なれば

九月十三夜同じ僧都のもとにまかりて夜一夜物語して侍りしつとめていひおこせて侍りし

二六あかざりし君が名殘に久方の月を入る迄詠めつる哉

かへし

二七我もしか飽で歸りし月影の山のはつらき眺をぞせし

同じ僧都の母の爲に八講を行ひ侍りしに捧物遣すとて

二八驚の山ふもと遙に照す月しらぬ山路の道しるべせよ

南都にをさなき子をやりて霧の降りしかば師の僧のもとにやり侍りし

二九さらぬだに覺束なきに春日山子を思道に霧さへぞ降る

あひ知りて侍りし女のもとより

三〇流石にぞ夢の中なる夢計り見しよのとは忘れざり鳧

かへし

三一現こそ秋のねざめは戀しけれ中々夢と思はましかば

初めて女にまかりあひてその夜ほどなく明けて鳥の鳴き侍りしかば

三二人を厭ふ氣色の空に著ければまだき明ぬと鳴鳥をもみちの國のかみもとよりの朝臣馬えさせむといひて任やゝ果て方になりぬれど音せざりければ

三三あら玉の年のいつとせ待侘ぬ我よも知ず馬は賴まし

風のうちの女郎花

三四さらぬだに心色なる女郎花うべ靡きけり秋のゝ風に

女のもとよりかく云ひて侍りし

三五忍ぶるは苦き物を我妹子が身を知雨と成やしなまし

正月朔日良賀阿闍梨のもとよりかく云ひおこせて侍りし

三六鳥の音も谷の氷も打とけてのどけき春に成にける哉

返し、

二五鳥のねものごけき春に成ぬれど我元結の雪は消敢す

月頃煩ふこと侍りて鹽湯あむとて津の國のかたにまかりて湯あみはて、のぼり侍りしかど猶やまひやみ待らざりしかば心細く思うたまへ侍りしに松の木あまた立てる處をすぎ侍りしにこゝはいづくぞと問ひ侍りしかばみかげの松となむいふと人の申しかば

二六よにあらば又歸來む津の國のみ影の松よ面變りすな

月のおもしろきよなりに侍る子の戀しく侍りしかば永縁僧都のもとに云ひやりし

二七幼きなき我こをならの里に置て今宵の月の傳にたつ

十月朔日のころ時雨する日雲居守瞻西がもとよりある尼君のもとになど久しくはおとづれもせぬといひたるに代りて云ひやりし

二八しぐるとも紅葉踏分け尋ねみむ侘たる衣袖笠にきて

わづらふこと侍りし頃あひしりて侍る女のもとよりとぶらはで右近の馬場のひをりの日とは何事ぞと問ひて侍りし返りごとに

二九鈍くをか君尋ねまし道芝のおく白露に消なましかば

七夕曉を惜む

三〇七夕の雲の衣の袖ひちて惜むそらなき朝ぼらけかな

えほゆあびて人の迎へにまかりしに曉にむやといふ所に鹿の鳴き侍りしを聞きて

三一朝ぼらけ葦間を分て越行ばかりぼのみのにを鹿鳴也

ある女四月のついたち頃もちつゝじを折りてえさせしかば

三二奥山の岩ね隱れのもち躑躅ねばや〳〵とみゆる君哉

夜の雪月に似たり

三三○月かとてこぬ人までば冬夜の降おける雪の誄る也

長月つくる日大藏卿匡房の卿のもとへ遣し、

三四行秋を留めつるかな奥山の紅葉の錦たちやかへるとかへし

三五惜めども紅葉も散ぬひもくれぬ歸らじ物を夜の錦は

同じ日雲居寺にまかりて急ぎ歸りしかば瞻西かくいひて侍りし

三六行君がせめて惜きに比ぶれば秋は數にも非ぬ也けりかへし

三七まだ知ぬこむよぞ今は賴る、秋にもおとらず人の忍ぶに

前齋宮のゆりはなが尼になりぬと聞きて

三八彼岸にこきつきぬとも螢小舟此方に忍ぶ人を忘るなかへし

三九螢小舟清き渚にこきつきて忍ばむ人も渡しこそせめ

十二月つごもり方法師といふ子のもとに永緣鏡もちひおこすとて云ひ遣したる

四〇年をへてつかさ位を增鏡千代の影をば君を見るべきかへし

四一萬代に萬よ添へて十寸鏡君がみ影にならべてやみむ

初の戀

四二巢守子の云出ぬ言のいとせきに飼籠朽る身とや成なむこひ

四三○さしてくるっげの小櫛のかひもなし灘の鹽燒いざ歸りなむ

あひしりて侍る女久しう音づれ仕うまつらざりしかばかく云ひおこせて侍りし

四四いかなれば占し河原の冬草のさしも無ては枯果にけむかへし

四五猶賴めとこそは誰にも契りしか理しらぬさしも草哉

同じ女のもとより

四六いかにせむわくらばにだに問ば社思心の程も語らめかへし

四七神風や伊勢の濱荻いつのまに汐たれ衣人のきるらむ

正月七日女のもとに遣し、

四八澤に出ていざ諸共に芹つまむれよきは君がと思へば

まだ逢はぬ女に久しうおもせざりしかばかく云ひおこせたりし

四九渡らぬに絕間久しき丸橋の踏みる事もつゝましき哉かへし

五〇まゝの浦のと絕がちなる丸橋を踏試みよげにや危き

まだ外にてはかゝしく見ざりけるむすめの嫉なる人のかく云ひおこせたりし

五一故郷に種まきおきし撫子の花の盛をいかゞ見るらむかへし

五二さかりにも成にける哉ふる里に我種まきし花の匂を

二條宰相よろしき歌、みたると聞きていひやりし

五三○老らくは忍びも敢ず難波潟葦間の風のそゝろ寒きに

前木工頭俊賴朝臣のもとより九月十三夜かくいひ侍りし

五四澄わたる月にたなびく浮雲の朧氣ならず恨めしき哉かへし

五五なに高きあたら今宵の月影を立ち隱すらむ雲の心よ

八月雨いたく降るころ女にかはりて男のもとに

五六雨ふると移ろふなゆめ我せこが衣にすらむ秋萩の花

ある女のもとにいきたるに瓜のかたかきたる扇帶をえさせたりしかば

五七瓜作るこまのあたりに尋ねきて君が方にもなる心哉

或る人熊野に參りて和歌の浦にて歌よめりと聞きて

五八和歌の浦に君が云おく言葉をいかに聞けむ玉つ島姫

丹波守季よしの君いみじうあひ語らひて常にまうでき音づるゝ久しう音もし侍らざりしかば霜のいみじう降りたるにいひ遣しゝ

五九程もなく今朝おく霜の消ぬれば人の心を見果つる哉

美濃守もと房の朝臣身まかりて後の事仕うまつりしに誦經物遣すとて文の奥に書き付け侍りし

六〇今日將に涙に昏てとはむとはかもの豫ても思ざりきや

早うあひ知りて侍りし女の今は老いはて、頭の雪拂ひもあへずなむあると云ひたりしかばかくいひ遣しゝ

六一わさきも子が頭の雪も寒けきに猶や昔の戀しかるらむ

霜のいみじう降りたるあしたならの子を思ひやりて永緣僧都のもとに云ひ遣しゝ

六二楢のはに霜や置らむと思ふにもれて社冬のよを明しけれ

ううき請申す僧の歌かきて奥に書き付けし

六三○春の日の光もしらで雪深き谷のまつこそ年老にけれ

十二月晦日永緣僧都のもとより菓物おこすとて

六四一尊ねつゝ知ぬ山路に白雲の斯る木實を拾ひ出たる哉かへし

六五白雲の知ぬ山路のこのみをば君が爲にぞ我拾はましはぎ

六六さを鹿のけさうらぶれて鳴なべに野原の小萩花散ぬべし

二月ばかり或る處に入講行ふと聞きて女車にのりくはゝりて聽聞し侍りしに前なる紅梅の風にいたく散り侍りしかばせんせいが導師にて侍り

しに誰ともなくてさしおかせし
[九]春風のいかにふけばか梅の花君が御うへに散繁る覧
ある女の埋火花たちばなといふ題よみて見せよといひ侍りしかば思ふ心ありて
[五九]終夜下消かへる埋火のいけらば君に逢見てむとやは
花たちばな
[六九]橘のはな散るさとの風とめば昔の人とねぬべしや君
此の主の返しをやさしくしたりしが
[七九]君と云ばなどみまほしき波間なる沖つ小島の濱楸哉
追考出
鶯
[八九]夜をこめて鳴鶯の聲きけば嬉しく竹を植ゑてける哉
山寒花遅
[九九]三吉野の山井の水柱結べばや花の下紐遅くとくらむ
蚊やりび
[一〇〇]さらぬだに夏は伏屋のすみうきに宵の煙の所せき哉
鹿
[一]宮城野の萩やを鹿の妻ならむ花咲しより聲の色なる
嵯峨にまかりて鹿の鳴くを聞きてよめる
[二]を鹿鳴く此山里のさがなれば悲しかりけり秋の夕暮
女郎花
[三]あだし野の心も知らぬ秋風に哀かたよる女郎花かな
時雨
[四]霜消て枯ゆくをのゝ岡べより楢の廣葉に時雨降る也
戀
[五]笛竹のあな淺ましの世中や有しやふしの限なるらむ
[六]淺茅生に今朝置露の寒けくに枯にし人の猶ぞ戀しき
別
[七]朝霧のたち別れぬる君によりはれぬ思に迷ひぬる哉
雨後山水
[八]吉野山うしや村雨降ぬらむ岩まをたぎつ音とよむ也
遙望二漁船一
[九]さゝ波やひらの山風早からし波まに消る海士の釣舟
竹
[一〇]今年生の籬のうちの呉竹も秋はよ長く成やしぬらむ
苦
一奥山の岩根が上のこけ筵立ちゐる雲の跡だにもなし

左京大夫顯輔卿集

永久四年四月四日鳥羽殿の歌合、卯の花

[一]朝日山ふもとの里の卯花をさらせる布と思ひける哉
郭公
[二]覺束なまつ人からの時鳥なご二聲と來鳴かざるらむ
菖蒲
[三]萬代をふべき淀野の菖蒲草永き妻とや君も見るらむ
早苗
[四]色深く門田の早苗成にけり急げ賤のをふしも社たて
戀
[五]我戀の心にかなふ物ならば人のつらさも恨みざらまし
六條宰相の家の歌合、霞
[六]年ごとに變らぬものは春霞龍田の山のけしき也けり
月
[七]いか計り照る月なれや眞葛はふ森の下草數みゆる迄
祝
[八]限りても君が齡は石清水流れむよには絶じとぞ思ふ
權辨伊通の許にて曉月聞二郭公一といふことを
[九]月影に尋ねきたれば時鳥なく山のはによこ雲わたる
人のもとより歸りてあしたに
[一〇]梓弓かへるあしたの思には引比ぶべき物なかりけり
修理大夫長實歌合せられしに、紅葉
[二]秋ごとに誰かそむらむぬし知らぬから紅の衣手の森
雅定中將の歌合に、郭公
[三]さゝ波や舟木の山の時鳥聲をほにあげて鳴渡るなり
戀
[四]知るらめや岩陰におふる白菅のね深く思ふ心有とは
人のもとへ
[五]こひしてふもじの關守幾度か我かきつらむ心盡しに
六條宰相のもとにて寄二社月一といふ題を
[六]三笠山もりくる月の清ければ神の心も滯やしぬらむ
白河院にて關路月を
[七]逢坂の關に清水の徹りせば爭でか月の影をとめまし
右兵衛督の家の歌合に、夏戀
[八]夏衣ひとへにつらき人戀る我心こそうらなかりけれ
返し

[九]悦を加ふるたびの唐衣怪しくなどかたちうかるらむ
越前守忠盛あきはぎといふはしたものにものいふをいといたうしのぶと聞きて遣す
[一〇]いつはらでしかと答へよ秋萩を柵ふすと聞くは誠か
曉月の八日春立ちけるに子日にあたりたるに鶯の鳴くを
[一]今日やさは雪うちとけて鶯の都に出る初音なるらむ
院位おりさせ給ひて後初めて人々に和歌よませさせ給ふに花契遐年といふことを仕うまつれる
[二]萬代に見べき花の色なれど今日の匂はいつか忘れむ
櫻
[三]今日咲てあすは青葉になる花を見捨て歸る人も有鳧
[四]惜むとて幾日もあらじ山櫻心のまゝに折りて歸らむ
[五]散る花を惜むばかりや世中の人の心の變らざるらむ
藤
[六]紫の色のゆかりに藤の花かゝれる松もむつまじき哉
郭公
[七]限あれば鳴でもやまじ時鳥人苦しめに待れざらなむ
[八]郭公心も空にあくがれて夜がれがちなる深山べの里
女郎花
[九]白露や心おくらむ女郎花色めく野べに人かよふとて
戀
[一〇]年ふれど人もすさめぬ我が戀や朽木の杣の谷の埋木
[一]今はさは逢見むよしは難く共命ともならむ言のはもがな
[二]戀わびてねぬよ積れば敷妙の枕さへ社疎くなりけれ
[三]逢ふとみて現のかひはなけれども儚き夢ぞ命也ける
[四]云ね共下はいとなし鴛鳥の浮たる戀と思はざらなむ
いろなりしとし三月盡の心を
[五]思遣れ廻りあふべき春だにも立別るゝは悲しき物を
前木工頭俊頼撰集うけたまはりてよめらむ歌を
とたび〳〵云はれしかば遣すとて
[六]家の風吹ぬ物故はづかしの森の言の葉散らし果つる
返し
[七]爭でかは森の言の葉忍ぶべき木高き宿の風の繁きに
絶えにし人の許よりついでありて消息したるに
契りしことを頼みけるはかなさなど怨じたれば
[八]風吹ばさこそは絶れ絶れども又かきつけつ笹蟹の絲
美作にて月をみて

九四過つらむ都のともとふべきに雲のよそにも渡る月哉
知らぬことを人の申せるによりて白河院の御かしこまりなる頃唐の鏡の一尺ばかりなるを北野に奉るとて書きつけし
〇九五身につみて照しをさめよ増鏡たが偽も曇りあらすな
そのことのあらはれにしこそ世の末ともなく哀なりしか
年比の人かくれにしかば山里にわたりてとかくのことはするに末にもなりぬればことさらに京にいでそめて曉かへるに鳥の鳴き侍りぬなど人のいそげば
一〇〇いつのまに身を山賤になしはて〻都を旅と思なる驚わざのこゝもはて〻みな人京へ出でぬれど我が身はなほしばし〻と思ひてあるに時雨のせし日中將の上のもとへ
二〇一誰もみな花の都へちりはて〻獨しぐる〻秋の山ざと
身のうれへあるころ賀茂にまゐりて
二〇二我頼むかもの川波立返り嬉しきせゞにあふ由もがな
其の後氏人の夢にこの歌を御殿におせりけるを歌かきたる方を御前にむかへておせと仰せごとありければしかなむおしなほすとみたまへしと語りしはまことにや
なき人の爲に西山なる所にて經供養するに來たれる人々くれにければとまりて山家春深といふことを詠むに
二〇三鶯のなく音計りや春ならむ花ちりにけるみ山べの里
大貳の許に東國より黒き馬のいできたる名をばうしのことなむいふをたび〳〵ものすれど惜まるれば
二〇四かゝりける心盡しの牛のこをたれ東路の駒と云けむ
源伯西宮にて歌合し侍りしに、寄月述懷
二〇五難波江の葦間に宿る月みれば我身一つも沈まざり鳧
薄戀
二〇六いつとなく忍ぶも苦し篠薄ほに出て人に逢由もがな
關戀
二〇七我妹子がすそのに匂ふ藤袴思ひそめてし心たがふな
菊祝
二〇八君が世は限りも知す長月の菊を幾度つまむとすらむ
こもりゐたりし頃月のあかき夜平等院僧正行尊のもとに奉りし
〇二〇九身をつめばたなびく雲もなき空に心細くも澄る月哉
冬の春日祭に奉幣すとて身の沈みゐる事を思ひて御幣に書きつけし
二一〇枯はつる藤の末葉の悲しきはたゞ春の日を頼む計ぞ
或る所に淡路といふ女房にたび〳〵せうそこすれど返りごともなければ
二一一いかにせむとふひも今はたて侘ぬ壑も通はぬ淡路島山つれなくて過ぐる女の人に語らひつきてあづまのかたへなむときけば心細く思ひけるに粟津といふ所より云ひおこせたりし
二一二忘るなよ粟津の原のあはすとも共今歸りこむ葛の末はに返し
二一三粟津野の葛の末葉の返る迄ありやはすべき露の命は
國などもさりにし後さてのみやはとて公文考ふるに左大辨宰相爲隆勘解由使長官なればきたする文などあるほどに消息ありみれば立春に後今日のつかさの奏にあはせむとていそがせ給へばとくるよし考ふるつかさのをさ詠め侍りて御使につけて
二一四夜を重ね緑の水の凍れるをさの春風けふぞときつる
返し
二一五春風にあがたの氷とけぬれば沈む水屑も顯れにけり
歌合し侍りしに、月
二一六夜もすがら富士の高ねに雲消て清見が關に澄る月影
紅葉
二一七山姫にたへの錦をたむけても散紅葉ばを爭で留めむ
戀
二一八つらからむ言葉もがな侘つゝは恨てだにも慰めにせむ
此の後判者の前左衛門佐基俊の許へ又歌合すべしこのたびも判じ給へと聞えたる返事に
二一九唐のたまつむ舟のもどろけば思ひ定めむ方も覺えず
これは人々何ごといひあはれたるごとにやとて
二二〇風を痛み玉つむ舟のもどろきは君計社まほに定めし
播磨守家成朝臣歌合せしに、月
二二一いか計限なく照す月なれば心の闇も晴るゝなるらむ
鹿
二二二山彦のこたふる山に鳴鹿は己が聲をや友ときくらむ
戀
二二三東屋の軒のかやまの忍草こひをば人の忍ぶものかは
琳賢がもとより酒を贈るとて萩の花さかりはよきさけ世の中になしこの頃よき酒とりいでたる瓶にはかならず物を入れてなむ返すといはせたれば近江守なりしをりにて坂田郡の檢田の廳宜ないれてやるとて
二二四野べに出て露けき華をみるよりも秋は坂田の數を數へよ
返し
二二五數ふべき山田の壺の内に入れば萩の情にしく花ぞなき
八月十五夜中宮の御方にうへ渡せ給ひて月の歌人々よませさせ給ひしに
二二六名に高き今宵の月をみる程や心の内の晴間なるらむ
播磨守家成朝臣歌合せしに、落葉
二二七紅に漲の白絲そめてけり峯の紅葉やまなく散るらむ
祝
二二八幾らとか云べかるらむ萬代も君が爲には數ならぬ哉
火きりとて近江より貢御に參らするもちひは國司のれうはことに夥しくおほきにて人々のそうするを前左衛門佐基俊君のもとへふるとて
二二九よしあしも清き鏡ぞ照すなる心の程は是にてを見よ
返し
二三〇敏鷹の野寺の鏡ならねどもよそなる人の心をぞみる
身ののぞみかなはで世の中すさまじく覺ゆるころ人のもとに遣しける
二三一憂身には都の手振飽果ぬ鄙へ誘はむあづまつもがな
大宮中納言の家の歌合に、櫻
二三二白雲のたなびく峯の櫻花薫らざりせば爭で知らまし
鶯
二三三鶯の花の塒にとまらずば夜深き聲をいかで聞かまし
霞
二三四炭がまの烟に咽ぶをの山は峯の霞もおもなれにけり
月
二三五山の端に關守据よ龍田姫惜むも知らぬ月やとまると
紅葉
二三六苔のむす岩陰まゆみ色深しこれを嵐に知せずもがな
戀

八八情なき言のはさへも懐しき戀しきなかに通ふと思へば
内にて遠聞二擣衣一の心を人々によませさせ給ふ
に
八九誰が爲と急ぐなるらむよもすがら槇の島人衣うつ也
雨後草深と云ふ題を
〇九かぜいろと糀むも著しよはの雨に小萩が原の丈ぞ増れる
鍛冶井宮法印世を恨みて大原にこもりゐ給へる
に師走ばかりに參る
一九炭竈の烟ばかりは立すとも山里いかに寂しかるらむ
華のさかりに人々まうできて花の下におりゐて
偏愛レ花といふことをよむに
二九我宿の物とも云じ櫻花かゝる月日はあらじとぞ思ふ
瀧佛
三九世中にけふぞ佛の立いでゝ顯れたまふ水は汲みける
郭公
四九時鳥さてしもやまじ物故に思はせたりや小夜更る迄
七夕
五九月の舟光をさして出でぬめりこや彦星の天の戸渡り
重陽
六九同じくは九重に咲け菊の花月日の數にかなふ計りに
歳暮
七九傳くて暮れぬる年を數ふれば我身も末に成にける哉
晨明月
八九三室山みねに朝日の移ろへば立田の川に月ぞ殘れる
百瀬川
九九名のみしてさしも嵐を百瀬川ゆゝしき瀬をば我ぞ過にし
祝
〇〇君が代にくらぶの山の岩ね松幾度計り生ひ變りなむ
長承元年十二月廿三日内裏の和歌題十五首、春
一〇其色とめには見えぬを春雨の野べの綠を爭で染らむ
歸雁
二〇契りけむ程や過ぬと急ぐらむ夜もすがらに歸る雁音
梅
三〇かをらすば誰か知らまし梅の花しらつき山の雪の暗
夏夜
四〇誠にや明しかぬらむ夏の夜を獨寢覺の人にとはゝや
照射
五〇梓弓高圓山に燈す火は火串にかけているにや有らむ

四一朝まだき折れふしにけり終夜戀おきあかす撫子の花
蟲
四二聲たかしすこしたちのけ蓼さこそは草の枕なりとも
霜
四三かるの池の入江を廻る鴨鳥の上毛はだらに置る朝霜
千鳥
四四近江路や野島が崎の濱風に夕波千鳥立ちさわぐなり
落葉
四五紅葉ばをよもの嵐は誘へども皆木の本に返る也けり
初戀
一昔より人惑ふとは聞しかど山てふ山に今日よりぞいる
忍戀
二淺ましや千島のえぞの蟲なるとくきのや社隋はもるなれ
會不レ逢戀
三一夜とは祈らざりしをかひもなく心定めぬ浮島の神
近衛院御時大嘗會和歌
悠紀方　近江國
風俗和歌十首
從三位行左京大夫兼近江守皇太后宮亮藤原朝臣
四一人心やすの郡と聞くなべにつけどつきせず運ぶ稻哉
神樂歌　三上山
五一千早振三上の山の榊葉をかをかぐはしみ止て社とれ
辰日參音聲　高御倉山
六一雲かゝる高御倉山のほる日の遙に見ゆる君が御代哉
同日樂破　玉蔭井
七一濁なき玉蔭の井の底清みすみよき世にも逢にける哉
同日樂急　長等山
八一君が世はながらの山の岩ね松千度八千度花の咲く迄
同日退出音聲　安良郷
九一安みしる我大君の御代に社最ど安良の里もとみぬれ
巳日參音聲　佐野船橋
〇二四方の海波も音せぬ君が代と喜びわたる佐野の船橋
同日樂破　朝日郷
一二いつしかと朝日の里を立出でゝ急きも速ぶ貢物かな
同日樂急　大宮山
二二萬代と大富山ぞ呼ばふなる久しく君を奉ゆべしとか

同日退出音聲　秋宮村
三二君が代は樂しかるらし常よりも年へてみゆる秋宮の村
御屏風六帖和歌十八首
甲帖　正二月
長峯山小松多生
四一君が代は長峯山に二葉なる小松の千度おひ變るまで
見遣岡有レ摘二若菜一人上
五一遙々とみやりの岡の若な社千歳の春は摘べかりけれ
梅原梅花盛人翫レ之
六一匂れをか分きても折む梅原は心にそまぬ色し見えねば
乙帖　三四月
青柳村樹尤多
七一君が代も民の心の一かたに靡きて見ゆる青柳のむら
白雲山櫻花盛開行客見レ之
八一八重たてる白雲山の櫻花かをるばかりや印なるらむ
山吹崎款冬開敷行人見レ之
九一いはねども口なし色に著き哉こや音にきく山吹の崎
丙帖　五六月
長澤池有レ採二菖蒲一人上
〇三年毎に絶えすひくかな菖蒲草ねも長澤の池を尋ねて
千嶽里植田甚多
一三見渡せばちくらの里に餘る迄數もしられず採早苗哉
常夏里毎二人家一瞿麥開
二三宿毎に植ゑける花のかひありて咲亂れたる常夏の里
丁帖　七八月
石瀧水如レ絲
三三昔より名に流れたる岩瀧の水の白絲いくよへぬらむ
千草原色々草花開敷
四三色々の千草の原を見渡せば幾らばかりの錦なるらむ
玉井宿月
五三曇りなくすむ玉の井に最どしく光を添る夜はの月哉
戊帖　九十月
板倉山山田多積レ稻人見レ之
六三板倉の山田につめる稻をみて治れる世の程を知る哉
會坂關運二調物一人馬多
七三貢物運ぶよぼろし多ければ道もさりあへず逢坂の關
鏡山紅葉盛客見レ之
八三日に添てあかくぞみゆる鏡山紅葉の色や深く成らむ

己帖　十一二月

鷹尾山付鷹狩人

三御狩する鷹の尾山に立つ雉や君が千年のひつぎなるらむ

九益田杜祭神所

一〇すべらぎを守り益田の森なれや赤ら柏のあからめもせず

高宮里白雲尤深

一一朝まだきふりさけみれば白妙の雲積れるや高宮の里

康治元年十月三日攝政殿忠通舎利講のついでに文つくらせ給ひて願成佛道の心を披講に歌もあるべしとてめしありしかば參りて

一二いかでわれ心の月を顯はして闇に惑へる人を照さむ

人々來て歌よむに海邊の月を

一三住の江に宿れる月の村雲は松の下枝の影にぞ有ける

月照二菊花一といふことを新院の詠ませ給ひしに

一四幾重とか籬の菊を思はまし今宵の月のなべてなりせば

比叡に參りて客人宮の御前にてこれはしら山のおはしますと聞きしかば昔加賀守にて神拜に參りしことを思ひいで丶

一五年ふとも越の白山忘れずばかしらの雪を哀ともみよ

新院仁和寺殿にて人々に和歌よませ給ふとて

中務大輔季宗がこひしに松間紅葉といふ題を

一六住吉の松の絶間の紅葉にや津守の翁は秋を知るらむ

右衛門督宗成卿東山にて山家初雪といふことを詠みしに

一七小夜更て筧の水のとまりしに心はえてき今朝の初雪

夏月

一八夏引の絲の亂れも隱れなくこやの篠屋をてらす月影

新院にて野徑眺望

一九丈夫が朝ふむのらを見渡せば雲の旅に縣るせこなは

九月十三夜九條殿にて女院御堂にて和歌ありしにいたはることありてえ參らぬをとのよりせめて仰せらるればそう〳〵參りて月戀またもありしかと覺えず

二〇くれの秋月の姿はたえねども光は空にみちにける哉

一人まねの戀にぞ老は忘れぬる昔の心いまだありけり

左大臣殿の中納言中將隆長春日祭上卿にくだり給ひしに前馬助範綱が二郎子清綱をいみじくしたて丶信夫摺の狩衣などをきせたりし思ふ所あるやうに見えしかば又の日誰ともなくて範綱がもとにさしおかせし

二二昨日みし信夫の亂れ誰ならむ心のほどぞ限知られぬ

老の病日にそへてよろづも覺えねど南おもての花さかりなりと聞きて例のことなれば人々に案內して花の宴せしに

二三命あれば多くの秋に成ぬれど今年計の花は見ざりき

この花常よりもめでたかりしを忘れがたけれど昨日の名殘に亂れごゝちまさりてさしいづべくも覺えざりしかば官人してをりにやりて見るにつけて

二四かばかりの花の匂を置乍ら又もみざらむ事ぞ悲しき

この後病重くなりて五月七日なむかくれ侍にける

金葉三　二九　詞花八六　千載二七　玄六　二美　八一　四三　六三　六三　六三一

八〇　九三六　二六三　新古今二二四　四二三　玄四四　新勅撰三〇　玄四一　二六一

續後撰四四　六三七　九六六　續古今一〇六二　續後撰二　三三　二〇五

二六二　玉葉二四二六　續後拾遺二四四　七二三　風雅一〇〇〇　新千載三三七　新拾遺

二二〇　八〇二　二八八頁一八四四　新後拾遺二六四

右雖レ入二勅撰一不レ見二家集一（原本引用勅撰集ノ今者略記ス國歌大觀索引ニ據ル）

二五郭公夏加はれる年とてもみのくせなれや床珍らなる

二六唐錦しく常夏の花なれば宿のかさりと誰かみざらむ

二七今はさは登見む迄は語らはむ命さならむ言のはもがな

右三首修理大夫顯季家歌合

水風晩來

二八まだきより秋は立田の川風の涼しき暮に思知らるれ

清輔朝臣集

春

立春

二九いかばかり年の通路近ければ一夜の程に行返るらむ

三〇早晩と霞まざりせば音羽山音計りにや春をきかまし

立春曙

二九けふこそは春は立なれいつしかと景色となる曙の空

山家早春

三〇をの山の春のしるしは炭竈の煙よりこそ霞み初けれ

社頭子日

三一松はいな神の三室の子日には榊をちよの例にはせむ

霞

三二朝霞深くみゆるや煙たつ室の八島のわたりなるらむ

海上晩霞

三三夕汐にゆらの戸渡るあま小舟霞の底にこぎぞ入ぬる

鶯

三四春のくるこの曉の鳥の音をはつ鶯とおもはましかば

三五片岡に谷の鶯かどでして羽ならはしに口すさぶなり

三六鶯のなく木の本に降る雪は羽風に花の散かとぞ見る

三七何事を春の日くらし思ふらむかすみの底にむせぶ鶯

三八ひめもすに己が鳴をる聲の綾はげに百尋に成もしぬ覽

三九天の戸をおし明け方にうたふなりこや鶯の朝倉の聲

四〇谷の戸にかへりやしぬる鶯の花の塒は塵つもりつ丶

早鶯猶若

四一鶯は花の都に旅だちてふるす戀しき音をや鳴くらむ

若菜

四二白妙の袖振はへて春の野の若菜は雪も積にぞ有ける

梅

四三梅の花同じねよりは生乍らいかなる枝の咲後るらむ

四四散れば惜し匂へば嬉し梅の花思ひわづらふ春の風哉

四五見る度に軒ばの梅の匂こそ宿の物とも覺えざりけれ

四六春くれば梢野の梅の移香に妹背の山やなき名立らむ

四七なさけあらむ人にみせばや梅の花折々かをる春の曙

四八蓽垣の奥床しくもみゆる哉たがすむ宿の梅の立枝ぞ

梅度レ年香

四九かにぞしる雪の下より咲初て霞のうちに匂ふ梅が枝

梅有二色香一

五〇うらうへに身にぞしみぬる梅の花匂は袖に色は心に

是はらからどもみなあるべかしき程なるを思ひてよめるなり

法性寺殿の大北のまん所此の歌をあはれがりて春の初のみゆきありけるにかくいたはせたりけるを喜びて家の女のもとへ

五一梅の花枯ぬる枝と思ひしを逼くめぐむ春もありけり

二月のころ三條の女御の御もとへまうでたりけるに雪ふれるあしたなりければ唯にはいかになど女房申されしかば軒近き梅を折りてさし入るとて詠める

梅の花匂も雪に埋ればいかに分けてか今朝は折まし

返し　女房

君みすばかひ無らまし梅の花匂は雪に埋もれずとも

柳

我門のいつ本柳いかにして宿によそなる春を知らむ

わきも子が裾野に靡く玉柳うち垂髪の心ちこそすれ

垂柳臨レ水

猿澤の池に波よる青柳は玉もかづきし朝ねがみかも

櫻

少女子の袖ふる山を來てみれば花の袂も綻びにけり

思寢の心やゆきて尋ぬらむ夢にも見つる山ざくら哉

見る度にこぞに今年は咲增る若木の花の末ぞ床しき

を泊瀬の花の盛りやみなの河峯よりおつる水の白波

老らくは心の色や增るらむ年に添へてもあかぬ花哉

唐國の虎ふす野べに匂ふ共花の下にはねても歸らむ

神垣の三室の山は春きてぞ花の白木綿懸て見えける

惜む身ぞけふも知ぬあだにみる花は孰れの春も絕せじ

暮をる三輪の檜原の木間よりひれふる花や神の八少女

待二山花一

よも山の花待ほどの白雲は口やそれとぞ驚かれける

曉望二山花一

三吉野の水わけ山の高ねよりこす白波や花の夕ばえ

見レ花述レ懷

身をつめば老木の花ぞ哀なる今幾年か春に逢ふべき

南殿の櫻を見て

吉野山峯つゞきみし花櫻一木が末に咲きみちにけり

宇治左大臣　賴長　花見給ひてかへりて後人々に歌よませ給ひけるに

飽ず思ふ心は花にとめつるを止らぬ人に身をば任て

落花曙レ砌

けさ見れば軒ばとめゆく雨水の流ぞ花の泊り也ける

遠尋二殘花一

散はてぬ花の梢のよそにては薄雲懸る峯と見えけり

殘花何有

白雲にまがひし花や殘るかと上の空にも尋ねゆく哉

春駒

水縮りに蘆の若葉や萠ぬらむ玉江の沼をあさる春駒

春鴈向レ北

初鴈は越路嬉しくみし物を今日はかへるの山も嬉しき

霞歸鴈衣

錦とも見えぬ霞の衣きてなに故郷へかへるかりそも

杜若

こやの池の汀に立る杜若波のをればやまばらなるらむ

澤畔苗代

鶴の住澤邊に返す苗代はよをながひこの種や蒔らむ

藤松樹花

藤波の咲懸らすばいかにして常磐の松の春を知まし

池邊藤花

風吹けばみぎはの藤の紫に波の白絲よりませてけり

大臣の家にて藤の花の歌よみけるに

一度はしるし見えにし紫の雲のなを立つ宿の藤なみ

款冬

我宿に八重山吹を移し植て千年の春を重ねてやみむ

款冬繞レ池

山吹のくちなし色に閉られて云出す方も見えぬ池水

雜春

梓弓春の山べに入ぬれば身のいたつきも知れざり鳧

暮春

大方も春ぞ暮るゝは惜きかと花なき宿の人に問ばや

旅客暮春

明行かば我も立なむ假の庵に止らぬ春を恨べしやは

夏

卯花

榊葉にゆふしで懸てつはつ神祭る垣ねと見ゆる卯花

卯花混レ月

卯花の雪ひててもてる雪の色を又月影にとられぬる哉

時鳥

何事を濡衣にきて時鳥たゞすの森に鳴きあかすらむ

逢でのみ此世つきなば時鳥語らふ空の雲とならばや

郭公心のまゝに尋ぬとて鳥の音もせぬ山にきにけり

いざや又鳴もやしけむ時鳥けふぞ我には初音也ける

郭公よこ雲渡る山のはにさもほのめきて過ぬる哉

幾年ぞきくと思へば時鳥待つにつけても老ぞ悲しき

時鳥聲杳

かさごしを夕こえくれば時鳥麓の雲の底になくなり

垣根時鳥

時鳥垣ね隱れの忍び音も我ばかりには隔てざらなむ

獨聞二水雞一

とはすべき人だに無て休らへば叩水雞に聞ぞ倦つる

社頭水雞

終夜あけの玉垣うちたゝき何事をねぐ水雞なるらむ

端午述懷

人なみに袂に懸くる菖蒲草うきに生たる心ち社すれ

照射

理やさ社はつらく思ふらめ照射の鹿のめをも合せね

五月雨

時しもあれ水のみ菰を刈上てほさでくたしつ梅雨の空

たごの浦の藻汐も燒ぬ梅雨に立たぬはふじの煙也鳧

二條院の御時この歌をよろしとや聞しめしたりけむ御さうし書きに給はせたりける中に紙に書きてさしはさまれたりける歌

富士の山煙計を雲の上にならせるとはうしと思へば

此の御歌の心は上ゆるされぬことをおぼしめしけるになむさて御返しに申す

雲居迄ふじの煙の昇らすば嗣ぶ思も知られざらまし

船中五月雨

梅雨のせゞに程ふる友舟は日影のさゝむ折を社まて

田家夏雨

刈しほの外面の麥も朽ぬべしほすべき隙も見えぬ梅雨

盧橘遠薰

たが宿の花橘にふれつらむけしきとなる風のつて哉

風靜盧橘芳

君が代に枝もならさで吹く風ははな橘の匂にぞしる

海邊螢

濱風に靡く野島のさゆりばにこぼれぬ露は螢也けり

庭麥滿レ庭

庭の面のから鞭麥の紅はふみて入べき道だにもなし

夕立

おのづから涼しくも有か夏衣日も夕立の雨の名殘に

水邊納涼

河島の松の木陰の圓居には千世の齢ものびぬべき哉
夏月浮レ泉
何事に涼しく物を思はまし岩間の水の月みざりせば
夏神樂
河やしろ波のしめゆふ水の面は月の光も清く見え鳧
夏狩
夏の野を弓末ふりたて駒なべて朝踏せ行人や誰子ぞ
山路草深
外山には草は絕たる方もなし柴かる賤の音計りして
水草隱レ橋
篁菰草たづきも知ず成に鳧いはけのすゝや沼の丸橋
刈野草
花咲む草をばよきよ夏の野をなへてな刈そ賤の苧環
夏祓
河の瀨におふる玉藻の行く水に靡きてもする夏祓へ哉
秋
旅泊秋來
もしつての波路に秋や立ぬらむせとの汐風袂涼しも
早秋
山里は庭の村草うら枯て蟬のなく音も秋めきにけり
七夕
思ひやる心もすゝし彦星のつま待つ宵のあまの河風
花染の衣はかさじ七夕に返る色とていみもこそすれ
思ひやる今朝の別は天の河渡らぬ人の袖もぬれけり
天河水かけ草におく露やあかぬ別のなみだなるらむ
七夕や己がきぬ〳〵成ぬらむ空なる雲の中の絕ぬる
七夕はあまの玉床うち拂ひ心もとなく暮を待つらむ
今日計り天の河風心せよ紅葉の橋のとだえもぞする
七夕言志
七夕は渡りもやらじ天河紅葉の橋の踏まばをしさに
七夕の雲の旅手に思ふらむ心のあやも我にまさらじ
萩
我宿のもとあらの萩の花盛たゝ一むらの錦なりけり
萩花露重
臥侘る萩の立枝を權衡にて驅れる露の重さをぞしる
秋花勝二春花一
小萩原柳櫻をこきまぜし春の錦もしかじとぞおもふ
秋の頭入のもとへ行きたりけるにあるじはなか
りければ前栽のおもしろかりける中に女郎花の
多かりけるを一むら折りとりて歌をよみて殘の
花にむすびつけゝる
遮莫主はいかに思ふとも女郎花には身をもかへてむ
薄
武藏野にかねて薄は睦まじく思ふ心の通ふなるべし
草花繞開
絲薄するばにおける夕露の玉のをばかり綻びにけり
秋野逍遙しけるに薄の風になびくを見て
尋ねつる心や下に通ふらむうち見るまゝに招く薄は
風底荻
荻原とよそに聞きつる風の音の袂に近く吹添ふる哉
穉花
薄霧のまがきに花の朝しめり秋は夕と誰かいひけむ
題しらず
秋の野はこぼれぬ露に著き哉花見人もまだこざり鳧
秋のころ世の中はかなかりけるに花を見て
雁なる花につけても思ふかな今幾年の秋かみるべき
朝望二旅鴈一
何ととてさして行らむ山高み朝ゐる雲に消る雁がね
鴈聲遠近
天の原とわたる列にくせよとやたのむの雁の聲合す鷺
鹿
高砂の尾上の風や寒からむ裾野の原に鹿ぞなくなる
深山聞鹿
いかなれば妹脊の山に住鹿の又重ねては妻を戀らむ
題しらず
思ふと殘らぬものは鹿の音を聞明しつる寢覺也けり
霧
立田姫簪の玉の緒をよわみ亂れにけりと見ゆる白露
露秋夜玉
立田姫おける物とや思ふらむ明くれば消る露の白玉
霧
霧の間に明石のせとに入に鳧浦の松風音にしるしも
山家霧
秋風に荒れのみ增る山里は霧の籬ぞくもりなりける
月
山のはの月待出て見るのみや思ふに物の遠はざる覽
行く駒のつめの隱れぬ白雪や千里の外にすめる月影
谷川に宿れる月の浮雲は岩間に澱むみくさなりけり
今よりは更行までに月は見しそのとゝなく涙落けり
夜もすがら嫉拾山の月をみて昔にかよふわが心かな
墨なき眞澄の月やめにます豐岡ひめの鏡なるらむ
鹽竈の浦ふく風に霧はれてやそ島かけて澄める月影
同じ三十首の中に
夜と共に山のは出る月影の今宵みそむる心も社すれ
月みると聞へも入らず白妙の袖かたしきて明す頃哉
行末の人にもいかゝ語るべき云む方なきよはの月影
いく返り我世の秋は過ぬれど今宵の月ぞ例なりける
いかなれや花も紅葉も折こをれ年の一年飽ぬ月影
夜と共に山のは出る月影の今宵みそむる心も社すれ
月みると聞へも入らず白妙の袖かたしきて明す頃哉
行末の人にもいかゝ語るべき云む方なきよはの月影
いく返り我世の秋は過ぬれど今宵の月ぞ例なりける
いかなれや花も紅葉も折こをれ年の一年飽ぬ月影
さよ深く月に明たる槇の戸に人の心の內ぞみえける
世中の情も今は失せにけり今宵の月に人のさはねぬ
人毎によも更科と思ひしに聞くにはまさる姨捨の月
伊勢の海をふの浦梨慕はれて成も成すもみゆる月影
唐衣そでしの浦の月影は昔かけたる玉にやあるらむ
山里の紅葉も月も明ければ同色には見えずぞ有ける
ゆふ襷思ひかけずも見ゆる哉野森にすめる月讀の神
何となく心すみてや出つらむ月に棹さす與謝の浦人
光をやさしかはすらむ唐土の玉つむ舟を照す月かげ
敷妙の枕に出る月みればあれたる宿も嬉しかりけり
手枕にかきやる髮の亂れまで曇も見えぬ秋の夜の月
隈もなき月をも見てや明す覽伏見の里の人ぞ床しき
紫のねはふよこのに照る月は其色ならぬ影も睦まし
人しれず片はれ月ぞ恨めしき誰に光を分てみすらむ
終夜人をさそひて月影のはては行へも知らで入ぬる
見からに影恥しき身なれ共月にはえ社忍ばざりけれ
水底に宿れる月の影を社沈める人は見るべかりけれ
今よりは心の儘に月はみじ物思ひ增るつまと成けり
月みれば誰も涙やとまらぬと思ふ事なき人に問ばや
かく計り隈なく見ゆる月影の心の內を照さましかば
更にける我世の程ぞ哀なるかたぶく月は又も出なむ
久方のあめのをしてや是ならむ秋の徵と見ゆる月影
只管に厭ひもはてじ村雲の晴れ間ぞ月は照增りける
千夜の秋を一夜に做て詠む共飽でや月の入むとす覽
旅中月
浮雲は麓にかゝる高根にて行へもしらず月を見る哉

山寺明月
〇初瀬山峯を宿なる旅寝には枕よりこそ月はいでけれ
月夜逢レ友
一今宵こそ雲間の月にさしそへて又珍しき影は見ゆなれ
月前聞レ蟲
二めもあやに見ゆる今宵の月影に機織り添る蟲の聲哉
三日月
三三日月は山のあなたの里人の惜むをわれて出る姿か
山中晨月
四ほの〴〵と嵐の聲もなりにけりしら月山の有明の空
八月十五夜
五大かたは秋の半ときく物を月の光はみちにけるかな
六昔よりいつはりならぬ一言は今宵の月の光なりけり
蟲
七日にそへて聲弱りゆく蓼今幾夜とてつゐりさすらむ
叢夜蟲
八諸聲に秋の夜すがら鳴く蟲は花の塒や露けかるらむ
菊
九限りなき齢のみかは見るからに心ものぶる白菊の花
菊綻レ禁庭一
〇十八重菊の咲る所の名にし負はゞ今一重をば添てみてまし
九月九日に菊の咲かざりければ
一一花さかで老ぬる人の籬には菊さへ時にあはぬ也けり
紅葉
一二露結ぶ秋は幾日にあらねども岡の葛葉も色附にけり
一三未明より景色の杜の下紅葉なべてならずもみえもする哉
一四紅葉するおなじみ山の梢にて獨さめたる岩ね松かな
一五今ぞしる手向の山は紅葉の幣と散かふなに社有けれ
一六小倉山木々の紅葉のくれなゐは峯の嵐のおろす也鬼
一七もみぢ葉も籠の塵と成にけり難波の事も果ぞ悲しき
紅葉繞レ嶺
一八山嵐に四方の垣ねやいかならむ紅葉のみ社曇也けれ
山路秋深
一九踏み分る山の下草うら枯て秋の末葉になりにける哉
野風
二〇秋の野の花吹き亂る夕風に袂よりさへ露ぞこぼるゝ
晩見二稻花一
二一夕日さす秋の田面を見渡せば穗波ぞ風の行へ也ける

暮秋
二二鳴蟲の命と見ゆる秋なれば暮るゝはさ社悲しかる覽
田家秋暮
二三をしねかる山田のひたにとよせて過行秋を引も止ばや
雨中九月盡
二四大空は秋の別を思ふらし今日の景色は打しぐれつゝ
冬
山居時雨
二五柴の戸に入日の影はさし乍いかに時雨る山邊なる覽
菊花幾殘
二六むらさきの雲間の星と見ゆる哉移ろひ殘る白菊の花
老思二殘菊一
二七過にける我盛をぞ思ふべき移ろふ菊は又も咲かなむ
月前落葉
二八出るより亙てぞ見ゆる木枯の紅葉吹おろす山端の月
山家落葉
二九自から音する物は庭の面に木の葉吹きまく谷の夕風
閑庭落葉
三〇山里に散もみぢ葉の紅はふむ人もなき物にぞ有ける
落葉埋レ路
三一踏しだき行かまく惜きもみぢ葉に道吹分よ山の下風
落葉水紅
三二降からに谷の小河の紅葉るは木葉や水の時雨なる覽
霰中霜
三三朝まだき初霜白し宜しこそ尾花刈しく床はさえけれ
霰
三四磯べには霰ふるらし蜑人のかづく白玉數やそふらむ
雪
三五吉野山初雪今宵ふりにけりあくれどきえぬ峯の横雲
三六消ゆるをや都の人は惜むらむけさ山里にはらふ白雪
三七昨日けふ不二の高根は搔昏て清見が關に降れる初雪
三八鳳の羽がひの山の霜の上に重ねて見ゆる今朝の初雪
三九雲居より散くる雪は久方の月の桂の花にやあるらむ
四〇世をわたる心のうちぞ哀なる雪ふみわけて出る山人
一一何方へあに漕出てなごの蜑の雪を潛きて歸るなる覽
一二世中の憂き度毎に思ひたつ山路も見えず雪降にけり
一三朝まだき信夫もぢずり打拂ひ安達が原の雪見るや誰
一四いか計り降積みぬらむ有乳山岩の懸路に崩れ落る雪
旅宿初雪

初雪に我とは跡をつけしとてまづ朝たゝむ人を待哉
山家雪
一五爪木こる人さへ雪に跡絶てみしみ山路の書も通はず
旅行雪
一六郡人思ひしもせじ吹雪してさよの中山今日は越とも
夜聞二氷鳥一
一七誰聞む友ねに明す鴛だにも亙る霜夜はいかゝ鳴なる
氷
一八諏訪の海や氷すらしも終夜きその麻衣さえわたる也
氷逐レ夜厚
一九すはの海波に碎けし薄氷渡るばかりになりにける哉
寒夜千鳥
二〇楸生るあその河原の河風に頻ふ千鳥の聲のさやけさ
蘆擬舟
二一霜枯の蘆間にしぶく釣舟や心もゆかぬ我身なるらむ
炭竈
二二炭竈の煙にかすむをの山は年に知られぬ春や立らむ
冬月
二三白妙の雪吹おろすかざごしの峯より出る冬の夜の月
森間寒月
二四冬枯の森の朽葉の霜の上に落たる月の影のさやけさ
池上寒月
二五冬の池の玉もに亙る月影やあくれば消る氷なるらむ
野徑寒草
二六曳馬野に刈しめざし〳〵淺茅原雪の下にて朽ぞ果ぬる
冬夜
二七君こずば獨やねなむ笹の葉のみ山もそよにさやぐ霜夜を
亙る夜に衣かたしき思遣る冬こそ增れ人のつらさは
閏十月ありける年松のもみぢたりけるを人に送るとて
二八神無月時雨る月の重なれば絶えずや松も下紅葉する
十月十日頃に山の紅葉をみて
一八神無月紅葉の山に尋ねきて秋よりほかの秋を見る哉
除夜
二八はかなくて今年も今日になりにけり哀に積る我齡哉
戀
戀の歌の中に
二九自ら行通のわせを假初にみし人故やいねがてにする

八我戀を云で知する由もがな漏さばなべて世にも社ちれ
四九七わたの玉にも緒をばぬく物を思ふ心を爭で通さむ
八難波めのすくもたく火の下焦れ上は難面き我身也鳧
七かく計り思ふ心は隋なきを孰こよりもる涙なるらむ
八逢事をいなさ細江の澪標深きしるしもなき世也けり
八年ふれど徴もみえぬ我戀や常磐の山の時雨なるらむ
九戀しなむ命は露も思はねど例にならむ名こそ惜けれ
一九露深きあさばの野らに小萱かる賤の杖も斯は萎じ
二逢事の難き岩とも成けるをいかなる戀の身を碎く覽
三中々に思絶なむと思ふ社戀しきよりも苦しかりけれ
四味氣なや思ふ方こそ足引の山櫻とも身をばすてしか
九心には岩木ならねば思ふ覽唯あやにくにかけぬ情か
六朝夕にみるめを潜く憂だにも恨は絶ぬ物とこそ聞け
七丈夫のはとふく秋や果ぬ覽忍び人は音だにもせず
八たか山に離れし鷹のかさ流れ行方も知ぬ戀もする哉
九やそ島や千島のえぞが手束弓心強さは君にまさらじ
九是や此いせをの蜑のすて衣あな淺ましの袖の萎れや
一思遣る心はなれぬ唐衣かさぬと人に見えねばかりぞ
二戀しさの慰む方や無らましつらき心を思ひませずば
三鏡のおとにそゝや明けぬと驚けば唯獨寢の枕也けり
四我戀をなか〳〵人は忍びけり情は人の物にぞ有ける
一靡しこそぬるゝ袂も絞りしか涙に今は任せてぞ見る
二河千鳥なくや澤べのおほひ草裾打掩ひ一夜寢にけり
三逢ふ事の十市の里は大和かは思はぬ中に有と社きけ
七其方より吹くる風ぞ懷しき妹が袂にふれやしつらむ
八秋の色や思の色のはひならむ今一入ぞしむ心ちする
九岩根ふみ重なる山を行よりも苦しき物は戀路也けり
一涙河浮寢の鳥と成ぬれど人にはえ社みなれざりけれ

忍戀

二入しれず苦しきものは忍山下はふ葛のうらみ也けり

初言出戀

三秋風に上野の薄打靡き人めかしつるかひもあらなむ

近隣戀

四紅のすそ引く程の宿なれど色に出ねば人に知られじ

失二媒介一戀

五よそ乍仄めかしつゝ飛火さへなど掻ちて見ぬなる覽

不レ慮會戀

六契置し櫛の端がき見えね共みとのまぐはひ月日へに鳧

逢不レ會戀

七鳥の子を例に云し程よりも君がつらさは重なりに鳧

老後戀

八はし鷹のしらふに成て戀すれば野守の鏡影も耻かし

終夜戀レ人

九獨ねて床のうらわに終夜むせぶ煙は海士のたく火か

夢會戀

一〇夜と共に返してきつる唐衣幾代といふに印みつらむ

旅宿戀

一一故郷をしのぶ寢覺の草枕露につゆそふ心ちこそすれ

一二妹を置て都へしまの舟出には打泊り社波はかけゝれ

見レ書戀

一三鴈がねの雲のよそなる玉章に心も空に成ぞはてぬる

乍レ隨不レ會戀

一四水ゆけば川そひ柳打靡きもとの心はゆるきけもなし

毎レ晝會戀

一五隱しつる夜は古巢に行烏のかりの塒や我身なるらむ

毎レ夜契戀

一六あだならず頼むる様はもゝよ草言の葉計見ゆる君哉

毎レ夜違レ約戀

一七よな〳〵の空頼め社嬉しけれ忘れず顏の情と思へば

留レ信失戀

一八中々にかくれの小野の女郎花露の形見を何におきけむ

稀逢戀

一九盡もせず蜘手に物を思ふ哉とだえ勝なる古のなが橋

寄二源氏一戀

二〇逢ふ事はかた廂なる槇柱ふす夜も知ぬ戀もする哉

寄レ社戀

二一夜と共に涙をのみも沸す哉つくまの鍋に入らぬ物故

寄レ花戀

二二面影に立田の山の櫻花あかでやみにし人ぞかゝりし

寄二更衣一戀

二三覺束な薄くや今日はなりぬらむ人の心も衣がへして

寄レ瓜戀

二四山城の駒の渡りの瓜よりもつらき人社たゝま欲けれ

思レ高戀といふ事を

二五谷水に空なる月もすむ物を雲居の中に思はずもがな

契後隱戀

二六逢事をたのむの雁のいかなれば思返りて雲隱るらむ

閑居增戀

二七つく〳〵と思ひ殘せるともなき詠は袖ぞ濡增りける

題しらず

二八逢見ては變る心もある物を難面き中にたえせざり鳧

人を待つとてよめる

二九こじと云はゞ待でぬべきに非ね共思ひ餘に問ふ夕け哉

さうしをならべて見かはしながらつれなかりける女のもとへ

三〇潛きする千賀の浦には住乍みるめ刈べき方も知れず

懸想しけれど心かたかりける女に

一つれなしと且は三河の八橋を猶こりずまに戀渡る哉

心かるき聞えありける女のつれなく衝りけるに

二我と云へば兒の手柏の面て〳〵とぐ胙も結はれつゝ

宮腹に侍りける女に草の葉に書てさしいれける

三いかにせむにひはえ增る戀草の繁らの程に逢由もがな

いかにと思へど色に出でがたき女に

四忍山下行く水のたへかねてむせぶ思ひもらしつる哉

忍びてたゞ一夜物申して後ならずかきたえける女のもとへ

五いかにねて覺も名殘の悲しさぞ又も見ざりしよはの夢哉

宮仕へしける女の常にもえ逢はざりけるに

六潮みてば入ぬる磯と詠めつゝ袖の干間もなき我身哉

常に逢ひ難かりける女の是よりいはむときをまてと云ひてやゝ久しく音もせざりければ

七覺束な伊勢の濱荻折よくば仄めかさむと云し妹はも

人に疑はるゝ女にかはりて

八杉くれを引柚人は許多あれど君より外によこめやはする

女を怨みて今は逢はじなどちかごとたてゝ後もとよりげに戀しかりければ靑きすゞある紙にてかへるのかたを作りて書きつけてやりける

九誓ひしを思ひかへるの人しれずくちから物を思ふ頃哉

女の許に行きて語らひけるによも山に頼めけれどなほ疑はしきことをのみいひて雁の子を一つさし出したりければその心をとりて

一〇鳥のこの返る〳〵は契れ共十づゝとをも云が割なき

云ひたえたる男のはてにはなきなをいひつくと

聞きて恨みむといふ女にかはりて
一五無名にぞ憂も忘て問れける絶にし人に云やたてまし
冬頃女のもとに行きて歸りて遣しける
二五獨寢の心ならひぞ冬の夜は長き物とも思ひけるかな
戀に思ひける女を怨じければいづれの神にか祈
りて心ざしの程をしらむと云へりければ
三五水上の印ならねど山河の淺き景色はくみて知りにき
人のむすめに物申し渡り侍りけるに親かくともし
しらで思ひたつことありと聞きてわりなく覺え
ければ
四五我爲は雫に濁る山の井のいかなる人にすまむとす覽
物いひ渡りける女にほいにはあらで遣しける後
忘れがたくや思ひけむよみて遣しける
五五戀しさのたぐひも波に袖ぬれて拾ひ侘ぬる忘貝かな
かへし
六五戀しさに袖ぬる計思ひせば忘れ貝をも拾はざらまし
宮腹なる女のなさけなきけしきなりければ云ひ
やりける
七五哀をもかけてやみにし白波の名殘を忍ぶ我や何なる
かへし
八五あだによる波の心をわくからに哀しらぬに成にける哉
人あまた語らふと聞ゆる女のもとへ
九五うらうへに風吹磯の蜑小舟孰れのかたに心よすらむ
語らひける女のいづちともなくゆき隱れたりけ
る形見にや裳ばかりをおきたりけるを見て
一〇脫置る袂をみてもねをぞ鳴く孰この浦の蜑に成けむ

祝　遐年屬レ君

一六君をのみ常磐堅磐に祝哉外には千世も有じとぞ思ふ
寄レ神祝
二六垂乳根の神の賜ひし言靈は千世迄まもれ年も限らず
祝二兩人一
三六武隈のふた木の松と祝ふ哉蔭を並べて千年ねよとて
松不レ知レ年
四六幾世にか松の綠の成ぬ覽我みてだにも年は經ぬるを
竹久友
五六よくふれど變らぬ竹の微せば千年の宿に何を植まし
鶴契二千年一

六六君がすむ宿に馴たる葦鶴は千年の友と思ふなるべし
松殿關白 基房 宇治にて河水久澄と云ふ事を人々
に詠ませ給ひけるに
七六年經たる宇治の橋守言とはむ幾世になりぬ水の白波
日吉禰宜祝部成仲七十の賀し侍りけるによみて
おくりける
八六七十にみつの濱松老ぬれど千世の殘りは猶ぞ遙けき
人の娘の着裳の所にて蘭花を折りてよみける
九六少女子がいまきの岡の蘭こしゆふつゆや祝ひ置らむ
女の子うみてうぶぎぬこひければ松の枝にかけ
てやるとて
一〇七千世に又ちよや重ねむ松がえに巢立始むる鶴の毛衣
をさなき子をいはひていひ遣しける
一七千世ふべき二葉の松の綠子は俤さへぞ常磐なりける
人の子の百日に
二七行末を思遣るこそ遙けゝれ今日ぞ千年の百日也ける
妹のはらに中攝政 基實 のおほんむすめ生れ給へ
る事をよろこびて重家のもとへ
三七我門に小鹽の松の生ぬれば及ばぬ身迄千世を祉まて
かへし
四七思ひやれ位の山に枝しげく榮え行べき松のけしきを
山階寺に萬僧供養して御卷數奉りける臺のおほ
ひに葦手にてかくべき歌とてこひければ天曆の
帝の四十賀の時彼の寺御卷數の臺にかきける歌
は平兼盛なるよめりける例を思ひてよみける
五七かぐ山のいほつ眞榊末葉迄常磐かきはに祝置きてき
慶賀
六七君が代は遙に見ゆる渡つ海の限れる果も有じとぞ思
平家の人のつかさなれる喜びに
七七おひ昇る平野の松は吹風の音に聞だに涼しかりけり
四位してのち年をへて殿上したりける折に人の
よろこびければ
八七山陰におりしらけたる椎柴のわかはえ出る春も有扈
隆信朝臣四位して侍りける悦に遣しける
九七紫のはつしほ染のにひ衣程なく色のあかれとぞ思ふ
返し
一〇八早晩と色まし染むる言の葉にいとゞ身にしむ紫の袖
二條院の御時中宮に歌合あるべしとて殿上ゆる
されたりけるよろこび申すとて重家のもとより
一八和歌の浦に年へて住し葦鶴の雲居に登るふの嬉しさ
かへし
二八葦鶴の和歌の浦みて過つるに飛たつ計り今ぞ嬉しき
二條院位におはしける時殿上に侍りけるに世變
りて六條院の御時殿上還り許さるゝ人のもとへ
三八立歸る雲ゐのたづに言傳てむ獨澤邊になくと告なむ
重家若狹より能登にうつれる頃よろこび申すと
て
四八もし狹き國にや沈むと思ひしによく登りぬと聞ぞ嬉しき
離別一首
五八行末をいはひていづる別路に心もとなき涙なりけり
羇旅
六八我ひとり急ぐ旅とぞ思ひつる夜を籠てのみ立つ霞哉
七八走井の筧の水の涼しさにこえもやられず逢坂のせき
二條の御門うせ給ひて御はふりの夜よめりける
八八萬代と頼みし君を宵の間の空の煙とみるぞかなしき
九八有しよに衛士の焚火は消にしをこは又何の煙なる覽
美福門院うせ給ひて後さるべき人々はみな色に
なれることを思ひて後成のもとへ遣しける
一〇九人なみにあらぬ袂は變らねど涙は色になりにける哉
かへし　俊　成
一九墨染にあらぬ袖だに變るなり深き涙の程を知らなむ
齋院未だ本院にも至り給はざりける時わづらひ
ておはり給ひにけり其の後ほどなくかくれ給ひに
ければよみてかのおほぢのもとへ
二九榊葉の移ろふだにもうかりしを云計なき心ち社すれ
五宮うせさせ給ひて後御室へ參りけるに庭の松
を見て覺えける
三九植置し君にぞ千世を讓らまし神さびにける庭の松哉
中攝政 基實 うせ給へる事を歎きて重家卿のもと
へ遣しける
四九淚川その水上のいかならむ末の身をだに堰も敢ぬに
かへし　重　家　卿
五九懸てだに思はざりしを淚河かゝる浮世に逢む物とは
故北政所の御はてに法性寺殿に參れりけるにこ
とゞもはてゝ高き卑しきちりぢりになり給ふに
この葉の殘りて嵐に散るをみて

[九九]今はとて散々になる故郷は木葉さへ社止らざりけれ
花薗左大臣有仁　北方うせられにける頃母の思にて侍るをそのわたりなる人のとへりければ詠める
[一]世中は見しも聞きしも儚くてむなしき空の煙也けり
年頃の妻におくれたる人のもとへ遣しける
[八九]妹背川歸らぬ水の別にはき〻渡るにも袖ぞ濡れけるかへし
[九九]聞渡る袖だに濡るゝいもせ河水の心を酌てしらなむ
年頃すみける人に後れて後はてのとなんごいとなみけるとき人のもとより別れし月日になりにける哀れさなど云へりければ
[一〇]有し夜の月日計りは廻れ共昔の今にならば社あらめ
物いひわたりける女のみまかりける後詠經すとて詠める
[一〇]今日や君後の世までも忘れじと契しとを思出づらむ
もの申しける女身まかりける家にまかれりけるに梅の花盛なりける枝に結びつけゝる
[一〇]きて見れば涙の雨も留まらずぬしなき宿の梅の花笠
いとけなき子におくれて侍りけるを人のとぶらへりければ
[一〇]折々に物思ふとは有しかど此度ばかり悲しきはなし
三歳なりける子におくれて詠めりける
[一〇]幼なき人おり立たば渡り川淵瀬と云す水もひなゝむ
子におくれたる人のなどかとはぬなど恨みて侍りける返りごとに
[一〇]夢とのみ見ゆる此世の儚さは驚き顔に問れやはする
親しきものに後れてとかくして次の日よみける
[一〇]今朝よりはよはの煙の名殘かと山の端もめにぞ立ける
僧都敎智ゆかりありて年頃したしくて侍りけるが失せて後四十九日のわざしける誦經文に書きつけゝる
[一〇]君をとふ鐘の聲こそ悲しけれ是ぞ音する果と思へば
雅重朝臣萬葉集をかりてはかなく身まかりにければかの跡を尋ねたるに返し遣さむとてせうそこは書きぐしておきたりけるをかくなむと云へりけるをみていひ遣しける
[一〇]濱千鳥はかなき跡を踏置きて身は何方の雲に消なむ

神祇

[九]天の下長閑かれとや榊葉の三笠の山にさし始めけむ
[一]祝り子がさす玉串の願事を亂るゝ神も有じとぞ思ふ

釋敎

[一]世中は千草の花の色々に心のねよりなるとこそ聞け
[二]徒にはかなき道に入にけり返すぐ〳〵もけふぞ悔しき
[三]何事もむなしき夢ときく物をさめぬ心に歎きつる哉
[四]二なき御法の舟ぞ賴もしき人をもさして渡すと思へば
[五]埋れて隱なき玉はある物を塵を拂はで願ふはかなさ

陽居夜雨

[六]思出ぬ事こそなけれつく〳〵と窓打雨を聞明しつゝ

暮鳥宿レ林

[七]夕されば竹の園生にぬる鳥の塒あらそふ聲聞ゆなり

朝望二旅客一

[八]朝霞ひなのながぢに立にけり墨絵に見ゆる遠の旅人

龍門　廿五名所中

[九]やま人の昔の跡をきてみれば空しき床を拂ふ谷かせ

長柄橋

[一〇]歎じな長柄の橋の跡みれば我身のみやはよには朽ぬる

住吉社

[一一]住吉の濱松がえの夕烟はれぬおもひは神ぞ知るらむ
是も二十五首の名所の中、和歌浦の歌
[一二]遙々と駈ち行らむわかの浦の波路に消ゆる蜑の釣舟
二十五名所の中に浮島を
[一三]渡つみの波に漂ふ浮島は宿も定めぬ海士や住むらむ

述懷

[一四]年を經て梅も櫻もさく物を我身の花にまちぞ侘ぬる
[一五]うき乍ら今はとなれば惜しきみを心の儘に厭つる哉
[一六]つく〳〵とみし面影を數ふれば哀幾らの昔なるらむ
[一七]夢のうちに五十の春は過ぎにけり今ゆく末は宵の電
[一八]筵江に生ぬる蘆の風吹けば折節に社ねはなかれけれ

述懷の百首の中

[一九]世中を今は限と見る月の心ぼそくぞながめられける
[二〇]逢生の露と終にはなる物を置き所なく身を歎くらむ
[二一]初瀬川谷隱れ行くさゝれ水淺ましくても住渡るかな
[二二]侘る山岩間にねざす磯馴松割なくてのみ老や果なむ
[二三]漁火のほにこそ物を云はねども曾の恨は絕せざりけり
[二四]たく繩の苦しと人はおもはすと

[二五]賤の男のきその麻衣緯を荒みめも冬でのみ明しつる哉
[二六]今はたゞ力車も曇きはてゝやる方もなき歎き也けり
[二七]我獨から齊こそ悲しけれ身をつみてだに訪人もなし
[二八]唐衣みさをも今は叶はじを何に懸りてすぐべき身ぞ
[二九]有べしと思ひ鳴尾の一つ松類なくこそ悲しかりけれ
[三〇]武藏野のうけらが花の自から開くる時もなき心かな
[三一]恨めしと思ひはてぬる世中を忍ぶる物は涙なりけり
[三二]夕まぐれ尾花吹こす秋風の涼しきとに逢ふ由もがな
[三三]水籠りのゑぐの若葉に非ねども物思積む袖は濡つゝ
[三四]世中の氷柱はいつも分かねばや心とけたる折も無らむ
[三五]うき汐の波に漂ふ濱千鳥跡とゞむべき方も知られず
[三六]碑やつがろの遠にありと聞くえぞ世中を思ひ離れぬ
[三七]立難き思のつなに繰はれて引き返さるゝ事ぞ悲しき
[三八]奥山の下ひがしたに鳴鳥の音にも泣で人に聞かれじ
[三九]今は唯吾無河に身を做て浮世も人に見えじとぞ思ふ
[四〇]よも山を眺めてのみも暮す哉朝れの窓に入むとす寛
[四一]儚しや雪のみ山の鳥だにも世にふるとは思はぬ物を
愁ふる雛の歌のうちに
[四二]鶯のいつも都へ出しかど此春ばかり音やはなかれし
[四三]古里をしき忍ぶにもあや筵おになる物と今ぞ知ぬる
[四四]三笠山立離れぬる天雲のかへしの風をまつ空ぞなき
[四五]故郷を信夫もぢずり限なく思亂るゝさまを見せばや
[四六]徒然ごより所なき心もちして網代に日をも數へつる哉
[四七]長へば又此頃や忍ばれむうしとみし世ぞ今は戀しき

物名　からにしき

[四八]唾言も盡きて明ぬと聞からに鳴の羽がき惡めしき哉
五宮に參れりけるにいづみ殿の御所の御前なる田に霧の所々立ちたるを見て
[四九]朝霧の絕々懸るそとも田は村ほにでたる心ち社すれ
人の許へ遣しける文を隣に太皇太后宮のおはしましける時かの宮の人とりいれて包紙に歌を書きておこせたりけるを次の日その心をとりて
[五〇]ちかの浦に踏違へたる濱衛思はぬ跡を見しぞ嬉しき
俊成入道うちき着せらるゝと聞きて我がことのはのいりいらず聞かまほしきことを尋ねとて
[一]さを鹿の入野の薄ほのめかせ秋の盛になりはてず共

讃岐の院に加階のぞみ申すこと侍りけるが二とせ三年すぎにければ師走の二十日あまりの頃ほひよみて奉りける

[二]くらゐ山谷の鶯人しれず音のみ啼かるゝ春を待つ哉

此のこと鳥羽院に申させ給ひければ歌の哀れにとて給はりにけり

人の許へまかれりけるにあるきたがへたる由をいひていれざりければ云ひ入れける

[三]遥々と山路を越てくる月に宿かす雲のなどなかる覧

みあれの日友だちのもとより奏を送りていかにしそめたりけることにか昔の契こそ嬉しけれといふ心を云へりければ

[四]古の契はしらず葵草おもひかけたる今日ぞうれしき

上ゆるされける頃侍従代と云ふことに催ほされける時少納言入道信西がもとへ遣しける

[五]澤水に鳴くたづの音や聞ゆ覧雲居に通ふ人に問ばや

返し　信西

[六]蘆鶴の澤邊の葦は遠く共などか雲居に聞えざるべき

兵衛のつかさなる人におほやけに奏することありけるに申しける

[七]瀉さではあらじと思へば柏木の杜の渡りを頼む計ぞ

臨時祭の歌人にたびごとにせめられければ

[八]われ獨年を重ねてかざすかな幾重になりぬ山吹の花

歌のしるしにやゆるしにけり

二條院の御時殿上番かきたりとて師走の二十日餘りにめしこめられにけり一めぐりの程は許さるまじくてあくる年まであるべかりければ雪の降りけるに詠みける

[九]年深く雪に籠れる山人は春になりてや出むとすらむ

太皇太后宮の大進にて年久しくなりにけるを亮のあきたりけるをのぞむとて

[一〇]吹あぐる風もあらなむ人知ぬ秋をみ山の谷の古葉を

忍び難きさけある人のもとへ嬉しき由いふとて

[一一]此世には忘れ形見に摘持ちて老のつとなる忍ぶ草哉

おほやけによきこと奏し申すときく人の許へよろこびに堪へかねてましける

[一二]嬉しさの袂に餘る心ちして涙さへにもこぼれぬる哉

二條院の御時中宮のおほん方へ夏も涼しきは秋の宮の近きしるしにやといふ心の歌さしおかせ給へりける返しを女房に代りて

[一三]昔より清く涼しき宿の内に秋の宮故と思ふべしやは

したしき人に殿上ゆるされぬと聞きて奏せよとおぼしくて女房のもとへ遣しける

[一四]ゆかりまで哀をかくる紫の唯一本のくちぞはてぬる

御返し　二條院御製

[一五]紫の同じ草ばにおく露のその一もとを隔てやはせむ

讃岐のさとの海士庄に造内裏の公事あたりける を守季行朝臣はしたしかるべき人なりければ云ひ遣しける

[一六]松山のたより嬉しき浦かぜに心を寄せよ海士の釣舟

此の歌のとくに許してけり

四位申しけるを許されざりければおとうとどもかきて奉るとて

[一七]やへ〳〵の人だに昇る位山老ぬる身には苦しかり鳧

此のたびなむ許されける

四位して侍りし時重家卿のもとより

[一八]武藏野の若紫の衣手はゆかりまでこそ嬉しかりけれ

かへし

[一九]珍しき若紫の衣手は老の身にしむものにぞありける

左大臣經あはへ下られけるともに罷りけるものの田舍人になりて朽ちはてなむすることを悲びて柳に寄せて歌よみて送りけゝ返事に

[一〇]何か思ふ流に靡く川柳そのねはつよし朽ちもはてじぞ

天王寺にまうでゝ龜井にて詠める

[一]劫ふとも消じとぞ思ふ露にても龜井の水に結ぶ契は

新院御位におはしましける時臨時祭の四位の陪從にめされて侍りけるに弘徽殿のほそ殿に立寄りて先帝中宮女房を尋ねいだして檜扇のつまを折りて書きつけて取らせける

[二]昔みし雲の俤かはらねど我身一つのとだえなりけり

返し

[三]八島もる雲の梯變らねばたゆと名殘は踏見ざるべき

四位の正下したりけるよろこびを若き人々のいへりければ詠めりける

[四]今日こそは位の山の峯までに腰二重にて登りつきぬれ

かへし

[五]位山老の坂ゆくしるしには猶峯までも登らざらめや

四位の後荷前使と云ふとに催ほしければ詠める

[六]許多度靡きて先に過にしをしゐのもち夫に我を思へる

新しき四位おほかるにふるきものをしもかく常に驚かしければ詠みて遣しける

[七]世に繁きわか紫をかきわけて古根を何に堀求むらむ

成範卿下野へ流されて後召し返されたりける後遣しける

[八]鳥の子の有しにも非ぬ古巢には返るに附てねや鴛鴦

かへし

[九]かた〳〵に鳴て別し村鳥は古巢にだにも歸りやはする

みあれの日縣へゆきける人に奏を遣すとて

[一〇]今日はよき手向をくさを程後の奏を神やおもはむ

法性寺殿にて人々侍りける中に女房のたき物を出されけるを後にみければあらぬ物にてありければ笑ひてやみにけり又の日昨日の心をぞさなど女房のいへりければよめる

[一一]玉垂のみすの内より出しかば空だき物と誰も知にき

これを女あるじめでゝ誠のたき物を給はせたりけりとなむ

人のもとより雛子をおこすとて詠めりける

[二]これを見よ春の雛子の我もさぞ妻戀兼てなれる姿を

かへし

[三]妻戀になれる雛子の樣みれば我さへ綾なほろ〳〵となく

わらは友達の受領になりて下るに馬の餞すとて

[四]二葉より花咲く迄にみなれ木の四年の春や霞隔てむ

臨時の祭に四位陪從といふことに召し出されて加茂に參りてよみて人のもとへ遣しける

[五]龍りぬに沈む蛙は山吹の花のをりにぞ鳴れける

里海士と云ふ所をしりけるがたがふことありけるをとぶらひ給ふとて宇治前大僧正覺忠のもとより遣したりける

[六]夜と共に心計りやこがるらむ舟流したる里のあま人

かへし

[七]はるかさむ方も覺えず里の蜑の燒もの煙下烟びつゝ

このいのりにかしこにいまする神に扇を奉るとて

て書きつけゝる
八浦風はよもに吹く共里の蜑の藻汐の煙美はしみとて
その後程なくなほりにければ神の驗と喜ひけらし
静達入道昔男にて同じく出家せむなど云ひける
が年をふるまでおそき事をはぢしめて世を捨つ
るは人の爲にはあらぬものをなど云へりければ
返りごとに詠めりける
九我身とは思はぬ物を世中も人の爲こそ捨まほしけれ
沙彌觀西と名ある文をさしおかせたるを見れば
藤原資基がてにてありあやしみて使にとへば頭
おろしたるよしを云ふによみて遣しける
一〇昔にもあらぬ名草の濱千鳥跡計りこそ變らざりけれ
大和の國いそのかみと云ふ所に柿本寺と云ふ所
のまへに人丸が墓ありといふを聞きて率都婆を
建てたり柿本の人丸墓としるしつけて傍に此の
歌をなむ書きつけゝる
一一世をへても逢可りける契社苦の下にも朽せざりけれ
其の後村の者ども許多怪しき夢をなむ見たりける

故刑部卿集（平忠盛）

春部

新院百首の歌めしけるにまゐらせむとて梅を
二知らぬ間に籬の梅は折てけり袖懐かしき人を咎めむ
三主知らぬ香こそ袂に移りぬれ垣ねの梅に風や吹らむ
春ころ播磨にのぼり給ひけるに淡路の沖のかす
みたりければ
四雛波江やけさは霞に玉がしは埋もれのこる淡路島山
題しらず
五いづくとも春は栖ぞなかりける心を誘ふ花に任せて
山家花を
六尋來る花も散なば山里は最と人めや枯れむとすらむ
はりまのかみに侍りける時三月ばかりに舟より
のぼり侍りけるに津の國にやまちといふ所に參
議爲通朝臣鹽湯あみて侍ると聞きてつかはしけ
る
七長あすな都の花も咲きぬらむ我も何故いそぐ船出ぞ
かすみの中の花といふことを
八霞め唯唐土までも敷島のやまとのみかは花の面かげ
雨の中の花を
九花は世に同じ匂の春とのみ思ふ人なき山ざくらかな
あかつきの花を
一〇明けなばと誰思ふらむ花の上に心を宿す春の夜の空
おなじ心を
一一花に色に移ろひきゝし明る夜の高ねに霞む鐘の聲哉
備前の守にてくだりけるとき江幕春といふこと
を
一二住吉の松もや思ふ月も又ほそ江に霞む春のなごりを
夏部
ほとゝぎすをよめる
一三住吉の松としらずや子規岸うつ波のよるもなかなむ
題しらず
一四閑度に身にぞしみける時鳥聲は色なる物ならなくに
新院百首の歌めしけるに
一五夏山の檜の葉そよぐ夕暮にいくよ重ねつせみの羽衣
秋部
草花
一六武藏野の茂みに交る女郎花籠りし妻の心ちこそすれ
旅宿草花
一七草枕旅寢の床の女郎花一よばかりのちぎりとや思ふ
播磨の守にてくだり給ひて明石の月を見て
一八思ひきや明石の浦の月影を我物にして詠むべしとは
故郷月
一九孰くとも月はわかじな故郷は物寂しかる影ぞ添ひける
丹後守爲忠朝臣ときはにわたりて山家曙月を
二〇有明の月を詠めて我ひとり幾よになりぬみ山べの里
社頭紅葉
二一三笠山爭で木葉のもみづ覽時雨はよその物とかは眺る
冬部
山家霰
二二かき昏し霰たばしる深山べぼ心碎くる物にぞ有ける
新院の御會に、曉千鳥
二三有明の月のでしほや蒲ぬらむ磯傳ひして千鳥なく也
同じ心
二四よさの浦の松風寒み寢覺する有明の月に千鳥鳴なり
戀部
二五つらきにも憂にも落る涙かは孰れの方か淵瀬なる覽
新院の御會、はじめの冬の戀
二六さも社は飽果られし身にも有めいかに時雨る袂なる覽
雜部
備前へ下向してのぼりたりけるに白河院御前め
して道のあひだいかなる歌かよみたると度々御
尋ね侍りければむろと申す泊にて風にふかへら
れて日數つもり侍りしかばつかまつりたるよし
奏しける
二七花のちる春のみとこそ思ひしに舟路も風の厭しき哉
尾張へ下向し給ひけるに爲義かのかみといふ所
にて馬をひきたりければ
二八心ざし都の外に見えぬれば度々人をうれしとぞ思ふ
百首、別
二九程もなく立歸るべき君なれど別てふ名は悲しかり鳧
七月七日白河院かくれさせ給ひたりければ
三〇又もこむ秋を待べき七夕の別るゝだにも如何悲しき

右一册者爲家卿以二自筆之本一不レ遂二一字一書寫了

見二敕撰一歌（今倉雌記國歌大觀番號）
金葉三九　六〇七　六六一　詞花三六　千載七三一　新古二五〇　續後撰八四〇　玉葉

寂然法師集

春

三谷の水峯の嵐も諸ともに春立つ今日と爭でしるらむ
三ちればをし匂は增る枳の花いかにかすべき春の山風
三三春雨も日をへて降ぬ三吉野の吉野の山に花や咲らむ
三四よしの山花咲ぬればあちきなく心にかゝる峯の白雲
三五山櫻咲ける高ねのしら雲はいづれか花の梢なるらむ
三六この春ぞ思ひはかへす櫻花むなしき色にそめし心を

七木の本は花故にやは住初しもれず心のあくがれぬ覽
花盛いざ木の本に暮してむ咲すば何のみにか成べき
九三惜めども風にみだれて散る花を結び留めよ青柳の絲
〇四村鳥のわかれや惜しき花のちる梢にきつゝ鶯のなく
一四山櫻散木の本は立うくて休むとなしに日を暮しつゝ
二四谷河の春のながれを結ぶには便嬉しき花をこそくめ
三四あさ緑霞にきゆる雁がねの心ばそきは春のあけぼの
四四つく〳〵と春の日暮し降雨は月みる秋の心こそすれ
五四小山田の種まくよりぞ哀なる稻葉の風を兼て思へば
六四遅櫻まだ散やらぬ花やあると外山踏分とふ人もがな
七四入りぬるか覺束なしや山のはに霞慣れる春の夜の月
八四木の本は花より外の友もなし誰を見置て春の行らむ
〇五行春の形見計りに殘しける花の蔭にてけふは暮さむ

夏

一五惜みつる花にかへたる時鳥鳴音を待も苦しかりけり
二五すむ人の心ぞみゆる卯花を一重にかこふをの〳〵山里
三五ゆふ曇て片岡になく時鳥かもの御誕に名告すらしも
四五卯花に時鳥鳴くかた山の垣ねにいかでみを隱しけむ
五五浦葛草さ月もしらぬ山里の軒の葱をよそへてぞみる
六五尋ぬとて宿にとゞまる由もなし山時鳥妹やいさめむ
七五尋ねつゝ生田の杜の時鳥あしの篠屋の忍びねになく
八五味氣なくまたじと思へど時鳥飽ぬ名殘も常磐也けり
九五待つといひ明すと歎くとにかくになにの報ぞ山時鳥
〇六きゝもおへす涙こぼれぬ時鳥老のねざめの曉のこゑ
一六幾返り聞きてかあくと心みようちはへてなく山時鳥
二六心こそ聲に劣らね時鳥更け行く空にひとりやすらふ
三六松蔭の岩ねにしける苔莚夏も通はぬすみかなりけり
四六ひぐらしのなく片山の檜のはに風打そよぐ夏の夕暮

秋

五六秋はきぬ年も半にすきぬとや荻吹く風の驚かすらむ
六六淺茅原主なき宿の荻のはに誰にか風の秋をつぐらむ
七六秋風に鶉なく野を來てみればうゑにし萩の雜也けり
八六あるしなき雜はあれて己のみ秋を忘れぬ女郎花かな
九六見にことも誰にか云む小萩咲雜を唯にすぐさすがな
〇七かねてより心はすみぬ秋のよの月まつ峯の木枯の風
一七里は荒て月は澄みます秋夜を哀と云もなべてなる哉
二七過ききにし昔をさらに誘ひきて心に宿す秋のよの月
三七月をみて哀しるらむ宿毎にみを分てこそ問まほしけれ
四七里分ぬ物にしあれば秋のよの月の心を耻つゝぞみる
五七忘れつゝ晝かと思ふ秋のよの月とは蟲の聲ぞ知する
六七月影を袖に移してみるのみや物思ふ人のとり所なる
七七思ふとなくて詠めば中々に月の哀やなべてならまし
八七心すむちゝの哀を集めてや秋の月をば磨きいづらむ
九七此世には心留めし秋の月少しはやつす雲もあらなむ
〇八露深き蓬が本をかきわけて月はみるやと問人もなし
一八いかならむ雲ゐなり共後れじと月のみ獨契置きける
二八蓬生になり行く宿は蓼鳴くねを床のものとこそ聞け
三八ちり積る紅葉分きてよそにみば哀なるべき庭の面哉
四八はかなくて暮行く秋の悲しさを思ひ知する鹿の聲哉

冬

五八音せぬに冬の景色のしるき哉凍りにけりな谷の下水
六八月は猶同じ空をも詠めけり野べの景色ぞ秋は寂しき
七八搔くらし物ぞ悲しき神無月眺むる空も打しぐれつゝ
八八山巡染置く色とみし程に果は木の葉も時雨とぞふる
九八霜枯の蓬が庭のさびしきに菊のみ秋の名殘なるかな
〇九紅葉のちるを歎し梢より月のもるこそ嬉しかりけれ
一九誰か又まきの板やに寢覺して時雨の音に袖濡すらむ
二九色めきし花のかづらに女郎花いたく霜の哀なる哉
三九花にのみ心はあれや雉子なく枯野の薄みる人もなし
四九三吉野の山べに雪の積るにはまづ古里ぞ冬籠りける
五九尋ねきて道分わぶる人もあらじ幾へも積れ庭の白雪
六九花さかぬ梢はみえず大方は雪の内をぞ春といふべき
七九沖つ風身にやしむらむ唐衣うきしの浦に千鳥鳴なり
八九霜冴る蘆の篠やに寢覺して隙や白むと待ぬ夜ぞなき
九九行年を送り迎ふといふ程に定めなきよの果ぞ悲しき

戀

〇〇ますかゝみみし俤の身にそひて心は君に移りぬる哉
一〇袖にみつ涙の玉を貫溜めて戀しき數を君にみせばや
二〇戀しさのつらさに負る物ならば今迄斯は歎ざらまし
三〇君故に落る涙の惜ければ片しく袖を干しぞわびぬる
四〇轉寢の夢にも人のつらければ驚く程にぬる袖かな
五〇かくばかり人の心を碎きけむ報思ふも恨めしの身や
六〇恨兼ね思へばつらし世中に戀と云事を誰れ始めけむ
七〇つらきをば思ふ餘に忘られぬ戀しき事の慰めもがな
八〇聞ぬとて常は厭ひし鳥の音の獨しぬれば待れ顏なる
九〇歸るさの袂にかゝる涙こそ恨みしよりも色增りけれ

雜

上西門院の女房法勝寺へ花みにまかると聞きて京へ出でたりけるついでにしたしき女房のもとへ遣しける

〇一花見にときくに心の類ふ哉姿は昔にやつれはつれど大原にて澄憲僧都の說經しけるをきゝて申し遣しける

一一きく人の衣に玉もかゝるまで涙こぼれし法の庭かな

二一朝日待つ數に入身ぞ賴もしきいづべき程は遙なれ共月前遠情といふことを

三一天の原へだてぬ月をしるべにて唐土までもゆく心哉

四一雲ゐにて昔詠めし月のみや旅の空にも離れざるらむ

西住法師みまかりぬと聞きて西行法師がもとへ遣しける

五一徒れすと終聞くこそ嬉しけれさても別は慰まねども骨をひろひて高野へ人ののぼりてかへりぬと聞きていひ遣し

六一入さには拾ふ形見も殘りけりかへる山路の友は涙かはらからなる尼のすみかに龍りたりけるに草深くなりて哀なりければかへりて後いひ遣しける

七一繁き野となれる栖を搔分てしか問はむとは思はざり鳧ある人々法文百首をみて和せられたりければ

八一濱千鳥はかなき跡を留めずば涙の曇る玉もみましや

住吉にまうでゝ松にかきつけゝる

九一松風の音はいづこと分かねども猶住吉の秋ぞ異なる

舍利のこゝろを人々よみしに

〇二これぞこの涙にくれし煙より分ち出たる山のはの月

涅槃會の日人々そのこゝろよみけるに

一二墨染の袂ぞけふは露深きつるの林のあとのみなしど

天王寺へまゐるとてよめりける

二二心有て見としもなき難波江の春の景色は惜くも有哉

諸行無常のこゝろを

三二みにかふる人も有ける言のはに心かゝらぬ末の露哉

常在靈鷲山のこゝろを

四二常磐なる鶴の林のあやなくも薪つきぬと思ひける哉

仁和寺の法印の西山にこもりたまへるに九月十三夜に月を詠じける

三一波路わけ空しき舟に見し月の名殘に今宵袖濡しつゝ

逸懐のこゝろを

二疎くにか我身すまゝし斯計り浮世に山の奥無りせば

無情のこゝろを

二朝顔の花に宿れる露のよは傾き上になほぞはかなき

八みし人も隱のみ行むだ雲にいつ類ふべき月日なる覽

人のよみたる歌やあるとてこひたりけるに

九出しより家の風をも忘られて散す計の言の葉ぞなき

乍入二還集一漏二家集一歌（今者唯記二圖歌大類抽撰一）

千載六首〈二〇六六　二〇九八　新古今二六二四　自二九三二至二六五五　新勅六二四　六二〇
二六八　續後撰三三　六〇四　二三三　風雅三〇八　九六六
一九四四　一九五二　一九六三　一九九二　新千載一八八四　新拾遺一〇九六　新後
拾遺一〇九四　一〇九九　新續古今八七七　八六

北院御室御集（守覺法親王）

春

立春

一年波の立ちかはりぬる徴にや凍りし水も下咽ぶなり

鶯

二奥山の谷のふるすの鶯も高きにうつる時にあひけり

梅隔レ鶯

三梅が香をおのがはぶきに匂はせて友誘ふなり鶯の聲

霞

四春きても雪きえやらぬ吉野山霞にもまた埋れにけり

五夕霞そことも見えず立こめて風の音にぞきくの濱松

山霞

六春霞知べがはにて朝たてば中々まがふ山路なりけり

野望霞

朝日さす野――――おりぬる雲雀――――

海路霞

八沖かけて遠ざかり行く聲すなり霞のうちに歌ふ舟人

羇旅霞

七八重までは今朝ぞ霞のこめてける笹垣薄き鄙の假庵

梅

八散方になるとも折らむ梅枝の花の盛は塞れもぞする

九梅がえの花にこづたふ鶯の聲さへ匂ふ春のあけぼの

なにとなく世の中すさまじくおぼゆる頃南面の

梅の咲きそめてさかぬかたも有るをみて

一〇梅花咲遲れたる枝みれば我身のみやは春によそなる

春雪埋レ梅

一一己が色は雪より底に埋れて匂ふに梅は顯はれにけり

殘雪未レ盡

一二根にかへる花かと見ればまだ咲ぬ櫻が下の雪の村消

櫻

一三花とみるよそめ計りの白雲も拂ふはつらき春の山風

一四吉野山浮世の外と遁れきてなか〳〵花に心とめつる

一五瀧の上のみふねの山の花盛り峯にもをにも懸る白浪

一六返るさの末程遠き山路にもいかゞ見すてむ花の夕暮

山花未レ綻

一七かねてより猶あらましに厭ふ哉花待つ峯を過る春風

野櫻

一八岩代の松の常磐に言よせて野中の櫻散ずもあらなむ

樹蔭翫レ花

一九ともすれば木の下露に袖濡しなづさふ花よ哀とやみる

法金剛院の八重ざくらのもとに人々日暮しあそ

びかへりなむとて花の歌よみしに

二〇忘るなよ同じ木蔭に尋きて馴ぬるけふの花の圓居を

海邊花

二一櫻咲く春やながらの浦ならむ花に留らぬ舟人もなし

顯昭がもとより八重櫻にそへて

二二君がへむ千年の春を重ぬべき例とみゆる八重櫻かな

返し

二三千世經べき例ときけば八重櫻重ねて最ど仇に思はじ

落花

二四花故に世のはかなさを知ぬれば散らすも風の情也鳧

二五みればをし花ちる峯の夕霞立ち隔つるも心有りけり

暮中落花

二六山櫻雪とふりつゝ跡たえて家路を駒に任せてぞゆく

彌生ついたちごろに東山を見ありきしついでに

山家春興といふことをよめる

七山ざとの柳さくらも折をえて都のみやは錦なりける

夏

更衣を逸懐によせてよめる

二八數ならで年へぬる身はそれながら猶人並に衣更しつ

二九今ぞみるうの花山の花盛り明けても月の形殘りけり

朝見二卯花一

三〇五月雨の日數津守の浦なれや下枝もひちぬ住江の松

右歌續古今慈鎭和尚歌に今朝みれば雪もつもりの

浦なれやはま松がえの浪につゝまで相似歟

三一月も今は傾く程に成ぬらむ晴れすば晴ず五月雨の空

郭公

三二過ぎぬとも聲のにほひはなほとめよ時鳥なく宿の橘

三三軒近く一聲はして時鳥をちの木末になごり鳴くなり

夜更けて郭公のなくをきゝて

三四ふけてしも山時鳥來鳴なり宵には待たぬ人も聞とや

杜郭公

三五うれしさは袖にあまりぬ時鳥鳴かさねたる衣手の杜

三六時鳥なのるに著し是ぞ此たれその杜のあるす也ける

暮天郭公

三七時鳥なほ初聲をしのぶ山夕ゐる雲のそこに鳴くなり

郭公聲稀

三八尋ねみて恨みは果む時鳥いづくも斯や夜枯しつらむ

草上螢

三九今こそや螢ともしれ散りて尚返りやはおく草の上露

螢照二海濱一

四〇伊勢の海の清き濱べにてる影を玉と拾へば螢也けり

螢照レ船

四一葉末よりこぼるゝ露の心ちして蘆分船に螢飛びかふ

納涼

四二しはつ山楢の葉蔭の夕涼をりにもあらぬ秋風ぞふく

杜邊納涼

四三涼しさはひとへに秋の心ちして夕風立ちぬ衣手の杜

秋

初秋

四四淺ちふの露けくも有か秋きぬと目にはさやかにみえけり物を

初秋納涼

風さわぐ竹はかけ□□思ひたがへし秋はきにけり

七夕

五秋とのみ何か待まし彦星の逢瀬をやすの渡り也せば
六七夕の秋さり衣一夜のみ重ぬる山となどかなりけむ
七小夜更て忍ぶけしきのしるき哉霧立ち隠す星合の空

萩

八篁るとも一枝折らむ小萩原花踏しだく鹿はなしやは
九分ゆかばたが袂にか移るらむ我しめし野の萩が花摺
〇八野べならば棚む鹿にかこたまし我と散ぬる庭の秋萩

野花露

一八秋の野の千種の色に移ろへば花ぞ却りて露を染ける

霧

二八音しるし鹿の通路是なれや霧のあなたに木葉ふむ也

旅霧といふ題を人にかはりて

三八都鳥ありとみえばや言問む隅田河原は霧こめてけり

海邊霧

四八浦傳ふさほの歌のみ聞ゆなりあまの友船霧隠れつゝ

霧籠暁天

五八明ぬとや暗き物から知ぬらむ霧間をわくる鴫の羽掻

蟲

六八木枯に蟲の音たぐふ秋の野は露も涙も留らざりけり

月

七八大わたの浦わの風に霧晴れて千船の數もみゆる月影
八八はる〳〵と千里の外へ行月は己が光や知べなるらむ
九八峯にても雲のちりゐる月影を岩間にあらふ谷の下水
〇九風わたる梢に雨の音はして月のみぞもる松がうら島
一九筑波ねの茂きこまより月もれば此面彼面の雪の村消
二九駒止てみれば心も移りけりひのくま河にすめる月影

八月十五夜月の歌あまたよみし中に

三九逢坂の關路はるかにひく駒の跡なき雪や夜はの月影

高野にこもりたりけるころ山居月の心を

四八世を厭ふ深山隠れの住ひには月さへ雲の塵無りけり

野宿見レ月

五九秋の野に宿かる月をはな口あたりの露を拂ふ袖そふ

月澄二海邊一

六九鹽たるゝ伊勢おのあまの口さまにもおはす映る月影

旅月

七九舟むやふをじまが磯の椹枕月さへやどる泊なりけり

對月忘愁

八九うきながら宿らむ月を待程にいづれは乾く袖の露哉

曉更月

九九惜み兼ねひれふる迄ぞ慕はしき松浦の山の有明の月
〇〇あだにみし露は草葉に晨明の月ぞ中々影はきえゆく

田家曉月

一〇明ぬとは宵より見つる月なれど今ぞ門田に鴫も立也

ある聖人來りて夜もすがら法文などいひてやう〳〵明けがたになる程にさてしもあらじとて人々月の歌よみしに

二〇何となこの西へは月の知べせで事ぞともなく我誘ふらむ

擣衣

三〇是はさはおきるの里か秋の夜の露睡ろまで衣擣なり

紅葉

四〇染殘す木々の紅葉も有じとて時雨は山を巡そ也けり
五〇紅葉の焦れ渡るや秋をやくけしきの杜の梢なるらむ

紅葉日淺

六〇いつしかは色に出しと忍山下葉よりこそ紅葉初けれ

水邊菊

七〇白妙の色をうばひて咲にけりいつぬき川の岸の村菊

野外秋盡

八〇常よりも哀は深し秋くれて人もこすの〳〵葛のうら風

九月盡

九〇惜みかねはかなく暮て行秋の名殘にとまる袖の露哉

九月盡日會あるべかりしにはゞかることし出できてとまりしかば顯昭が許へ

一〇諸共に惜むも秋は止らねどさては慰む方やあらまし

返し

一一行秋も惜む人故止るかやと君計りにぞけふは任する

冬

初冬

二一冬きぬと水の心や知りぬらむ谷風寒み氷柱ゐにけり

山中落葉

三一誘ひ行く嵐を道の知べにて峯移りする木々の紅葉ば

水上落葉

四一龍田川瀬おちの浪も色づきて木のはの下に聲咽ぶ也

時雨

五一時雨つゝ過ぬる方は雪消て一つけしきにみえぬ空哉

行路時雨

六一遙々と生野の道の村時雨駒とめつべき木の下もがな

雪

七一拂ふとも其かひ有じ奥竹の夜のまの雪に折伏にけり
八一めもはるに見るぞ寂しき菅原や伏見の田ゐの雪の曙

九一葉がへせぬ濱松がえも花咲てえも岩代にふれる雪哉
〇二雪のうちにさゝめの衣打拂ひ野原篠原分行くやたれ
一二何事を月に見わかむかざごしの雪はれ渡る峯の白雪

野雪

二二招かねど猶過まうきけしき哉のべの尾花の雪の下折

遍昭寺にて池邊雪といふ事を

三二浪かけば汀の雪も消えなまし心ありても凍る池かな

山路雪

四二踏分けむ方こそしらね山木の雪の下行まれの通路

雪埋二社樹一

五二白ゆふを空より誰か手向らむ今朝初雪のふるの神杉

曉天雪

六二はれやらぬ横雲まよひ風さえて山のはしろき雪の曙

千鳥

七二橋立やよさの浦松ふく風に聲をたぐへて千鳥と渡る
八二群れてゐる己が羽風に浪立て心ときわく浦千鳥哉

河上千鳥

九二夜を寒みさほ風おくる便には千鳥の聲も瀬々渡る也

水鳥

〇三羽かはす友ねのをしは打とけて氷を結ぶこやの池水

朝見二水鳥一

一三あさ氷とけなむ後と契りおきて空に別るゝ池の水鳥

歲暮

二三行年の別ばかりを歎きにて身には積らぬ習なりせば
三三ひと方に思ぞはてぬ春をまつ心にをしき年の暮かな

歲暮に雪のふる朝敦經朝臣が許より

四三雪の内に暮ぬる年ぞ惜るゝ我身も痛く古ぬと思へば

返し

五三年暮るゝ雪の内にはふりぬ共明なば春に逢じ物かは

雜

六三思ひでのあらば心も止りなむ厭ひ易きは浮世也けり
七三何事を待ともなしに長らへて惜からぬ身の年を經哉

社頭述懐

八三我からや神の恵も隔つらむうき身の程をみつの玉垣

曉の枕になにとなく過きにしかたのはかなさなど思ひつゞけて

九三何事も夢になり行くいにしへの面影のこる明暮の空

閑居

〇四うらさびて葛這かゝる槇の屋に窓打すさぶ村雨の聲

閑居水聲

一四岩そゝぐ水より外に音せねば心一つを澄してぞきく

山家曉思

二四稚はふしづの伏屋の夕煙はれぬ思によそへてぞ見る

旅

三四故郷を最どよそにぞ隔てつる越こし山のやへの白雲

四四いなしきや鄙の假ねはめも合で都を夢の内にだにみぬ

五四ふみなれぬ岩根を傳ふ通路にしばし立のけ峯の白雲

山路旅行

六四よそにては通路なしとみし峯を雲踏分て山ぞ越行く

旅宿松風

七四ふみゆけば濱松がえに風こえて情ありその磯枕かな

旅宿言レ志

八四好さらば磯の苫屋に旅寢せむ浪懸すとて濡ぬ袖かは

和泉の國新家といふ所にて鹽湯あみしに源中納言雅頼卿のもとより

九四限あれば身社數にも入ざらめ心の行を厭はざらなむ

返し

〇五言の葉の便りの風にちる時ぞ通ふ心も色にみえける

しほ湯あみはてゝ都へかへるとてよめる

一五日數へし鄙の住ひを思出でば戀しかるべき旅の空哉

住吉にて月を見てよめる

二五月のみぞもり明しつる藻鹽草しきつの浦の松の下臥

高野へまゐる道にて

三五跡絶て世を遁るべき道なれや岩さへ苔の衣きてけり

香隆寺の邊なる所へ行きたりしにあるじいづみにから舟をうけてさま〴〵の物どもつみたるを見てよめる

四五唐船につめる寶や餘るらむ今はの身をも玉ぞ散ける

無常

五五儚なしやいかなる野邊の蓬生に遂には誰も枕定めむ

六五つねならぬ此世のはてぞ哀なる思へば誰も蓬生の塵

七五亡跡に影をだにやは留むべき歸らぬ水の泡と消なば

曉はかなきことども思ひつゞけて

八五明方の寢覺の床はうつゝにて浮世を夢と思知りぬる

秋の彼岸に故宮のために佛事せむとて泉殿へまゐりしに長尾の松原のまへをすぐとて

九五有し世の松の緑のけしきにて憂身は頼む陰無りけり

御前にまゐりつきて

〇六はかなくて消にし跡を來てみれば露所せき庭の村草

嵯峨の邊に時々あそびなどせし所にあるじうせて後事どもひきかへてあらぬさまなりしかば

一六昔みし栖ともなく荒果てゝ思しよりも寂しかりけり

天王寺の宮六條の御八講にまゐらむとて近きわたりをかりてやどり給ひけるにやまひ重くなりてもとのすみかへも歸らでかくれ給ひにし後門

この柳のあまたある前をすぐとてよめる

二六一すぢに物ぞ悲しき假にすむあるじ絶にし青柳の絲

をさなくよりおほしたてたる童の日來重く煩ひしが今は限とみなしてしかばさてしも有るべきにもあらで鳴瀧と云ふ所に移り渡りにき慰めがたき宿の寂しさに常にきゝなれたる岩根にそゝぐ瀧の音までも折からにや身にしむ心ちすれば

三六堰あへぬ涙は類ひ有けりとをりしも咽ぶ瀧つせの聲

四六おくれゐて獨詠むる庭の雪に心までこそ埋れにけれ

ありし世にかきおきたりし文どもなどこそはかなきかたみともなるべけれと思ひてとりよせて見れば横笛の譜神樂催馬樂風俗の譜ども又聲明決則までもいたらぬくまなくからずしたゝめおきたるさま末の世の寶此の道の鑑かなと例なく見ゆるにつけて惜しさもひとかたならで

五六苔の下に笛の音迄も埋れて只名計りぞ世に止りける

六六袖の上になにの雫の殘るらむたえにし物を小波の聲

七六我駒を何かはやめむ待乳山まつと逢べき道も通はじ

八六鳳のはがひの霜は消果てゝ名殘の露も止らざりけり

九六諸共に唱へ馴れにし法の聲その節々をいつか忘れむ

詩歌の藻の殘りたるをみるにつけても

〇七無をさて形見に止る藻汐草浦さびてこそ波は懸けれ

經かくとて人のもとへつかはしたる文どもをとりあつめし中にいつぞや瘧のをやみたりしたえまをやみはてたるとや思ひけむそのよし人につけたる文のありしをみるにも常ならぬ世のさだめなさも今さらに思ひ知られしかば

一七迷ふべき闇をばしらで儚くも霧の絶間と思ひける哉

法事の日むかしふきし笛を誦經にすとて

二七吹馴し玉の横笛ぬしなくてさも有ぬ鐘の音ぞ悲しき

式子内親王集

春

三七春は先づ著く見ゆるは音羽山峰の雪より出る日の色

四七鶯はまだ聲せねど岩そゝぐたるひの音に春ぞ聞ゆる

五七色つばむ梅の木の間の夕月夜春の光を見えそむる哉

六七春くれば心もとけて泡雪の哀ふり行く身を知らぬ哉

七七見渡せば此面彼面にかけてけりまだ緯薄き春の衣を

八七跡絶えて幾重も霞め長く我が世を宇治山の奥の麓に

九七春ぞかし思ふ計りに打霞みめぐむ梢ぞ詠められける

〇八消やらで雪にはつるゝ梅が枝の初花染の奥ぞ床しき

一八誰が宿の梅のあたりにふれつらむ移香著き人の袖哉

二八梅の花戀しきことの色ぞ添ふうたて匂の消えぬ衣に

三八花はいさそこはかとなく見渡せば霞ぞかをる春の曙

四八惜くて過にし方を數れば花に物思ふ春ぞへにける

五八花ならで又慰むる方もがな難面く散を難面くて見む

六八誰も見よ吉野の山のみねつゝき雲ぞ櫻よ花ぞしら雪

七八花咲きし尾上はしらず春霞千ぐさの色の消ゆる頃哉

八八春風やまやの軒ばを過ぬらむ降積む雪のかをる手枕

九八殘り行有明の月のもる影にほの〴〵落る葉隱れの花

〇九鶯も物うく春は呉竹のよがれにけりな宿もさびしき

一九古郷へ今はと向ふ雁がねも別るゝ雲のあけぼのゝ色

二九けふのみと霞の色も立別れ春は入日の山のはの空

夏

三九春の色の更うき衣脱捨てし昔にもあらぬ袖ぞ露けき

四九時鳥いまだ旅なる雲路より宿かれとてぞ植し卯の花

九忘れめやあふひを草に引むすび假寝の野べの露の暁
一〇哀とや空にかたらふ時鳥ねぬ夜つもれば夜はの一聲
一一雨過ぐるはな橘に時鳥おとづれすてゝぬれぬ袖かな
一二けふは又葺添て皃盧のやの小屋の軒端も菖蒲隙なく
一三叩きつる水鶏の音も更にけり月のみ閉るこやの樞に
一四詠れば月は絶行く庭の面にはつかに殘る螢ばかりぞ
一五さらすとて暫し忍ばむ昔かは宿しもわかでかをる橘
一六夏の夜は頓て明く三日月の見る程もなく明る山のは
一七名殘なく雲の此方は晴にけり外山にかゝる夕立の程
一八短夜の窓の臭竹うち靡きほのかに通ふうたゝねの秋
一九松蔭の岩間をくゞる水の音に涼しく通ふ日暮しの聲
二〇照す日はさやかに夏の空ながら時を過たる松の山陰
二一里遠き板井のみ草うちはらふ程こそ夜は隣なりけれ

秋

二二夏暮れてけふこそ秋は立田山風の音より色變るらむ
二三秋きぬと荻の葉風の告げしより思しとの唯ならぬ暮
二四ながむれば衣手涼し久方の天のかはらの秋の夕ぐれ
二五大方は秋の哀を袖の露かくなれざらむ人にとはいや
二六吹き結ぶ露も涙も一つにておさへがたきは秋の夕暮
二七袖の上は露の宿りとなりにけり所も分ず秋立しより
二八秋は唯夕の雲のけしきこそ其ととなく詠められけれ
二九おもはえず移ろひにけり詠めつゝ枕に懸る秋の夕露
三〇唐衣裾野の露に立つきりの絶え間〳〵は錦なりけり
三一旅枕露を片しくいはれ野のおなじ床にも鳴く鶉かな
三二夕霧も心の底に結びつゝ我が身一つの秋ぞ更け行く
三三月のすむ草野の庵を跡もれば軒にあらそふ松蟲の聲
三四おしこめて秋の哀にしづむ哉麓の里の夕ざりの庵
三五いづ方へ雲居の雁の過ぬらむ月は西にぞ傾きにける
三六宵の間に僅もぬべき月ならば山端近き物は思はじ
三七秋の夜の雲なき月を疊らせて更行儘に濡るゝ顔なる
三八槇の戸はさゝで習ひぬ天の原夜渡る月の影に任せて
三九それながら昔にもあらぬ月影にいとゞ詠を賤の苧環
四〇佐保山の柞の紅葉色に出て秋深しとや霧にもるらむ
四一留らぬ秋をや送る詠れば庭の木の葉の一かたへ行く

冬

四二神無月嵐は軒を拂ひつゝ園までしくは木葉なりけり
四三いかにせむ千種の色は昔にて又更になき花の一本
四四槇の屋に時雨は過て行物を降も止ぬや木葉なるらむ
四五淋しさは宿の習を木葉しく霜のうへにも詠めつる哉
四六今日迄も庵石に爭で過ぬらむ有まじかげと人を云つゝ
四七見しことも見ぬ行末も假初の枕に浮ぶまぼろしの内
四八浮雲の風にまかする大空の行へも知ぬ果ぞ悲しき
四九始なき夢を夢とも知らずして此終にや覺果てぬべき
五〇君が代の御影に生る山菅の止まずぞ思ふ久しかれとは

春

五一峰の雪もまだふる年の空ながら片へ霞める春の通路
五二山深み春とも知らぬ松の戸にたえ〳〵懸る雪の玉水
五三足曳の山のはかすむ曙に谷より出づる鳥のひとこゑ
五四詠めやる霞の末は白雲のたなびく山のあけぼのの空
五五袖のうへに垣ねの梅は音づれて枕にきゆる轉寢の夢
五六詠つる今日は昔になりぬとも軒ばの梅よ我を忘るな
五七今櫻咲きぬと見えて霞籠り春に霞める世のけしき哉
五八待つ程の心の内に咲く花をつひに吉野へ移しつる哉
五九峰の雲龍の雪に埋もれていづれを花とみよし野の里
六〇高砂の尾上の櫻たづぬれば心のにしき幾重かさねつ
六一ふ人もをらでを歸れ鶯の羽風もつらきやどの櫻を
六二かすみゐる高間の山の白雲は花かあらぬか歸る旅人
六三夢の内も移ろふ花に風ふけば靜心なき春のうたゝね
六四今朝見れば宿の梢に風過て知れぬ雪の幾へともなし
六五今はたゞ風をもいはじ吉野川岩こす波に櫂もがな
六六花は散て其色となく詠むれば虛しき空に春雨ぞふる
六七水莖の跡もとまらず見ゆる哉波と雲とに消る雁がね
六八鳴きとめぬ花を恨むる鶯の涙なるらし袂にかゝれる

夏

六九櫻色の衣にもまた別るゝに春をのこせる宿の藤なみ
七〇待つ里をわきてやもらす時鳥卯の花陰の忍び音の聲
七一時鳥聞きつる雲をかたみにてやがて詠むる有明の空
七二時鳥横雲かすむ山のはの有明の月になほぞかたらふ
七三聲はして雲路にむせぶ時鳥涙やそゝぐ宵のむらさめ
七四水晴き岩まにまよふ夏蟲の照射けちても夜を明す哉
七五五月雨の雲は一つに閉果てゝぬき亂れたる軒の玉水
七六古を花橘にまかすればのきのまのふに風かよふなり
七七かへりこぬ昔を今と思ひねの夢の枕に匂ふたちばな
七八眞葛原うら風なるゝ夏の夜は秋立ちそむる嶂の衣衣
七九別れにし昔をか〳〵るたび毎に返らぬ波ぞ袖に碎くる

二〇涼しやと風の便を尋れば茂みに靡く野べのさゆり葉
三〇小夜ふかみ岩もる水の音冴て涼しくなりぬ轉寝の床
四〇池寒き蓮の浮葉に露はるゝ野べに色なる玉や敷らむ
五〇月の色も秋近しとや小夜更て籬の荻の驚かすらむ
六〇秋風もかりにやつぐる夕暮の雲近きまでゆく螢かな

秋

七〇轉寝のあさけの袖にかはるなりならす扇の秋の初風
八〇詠むれば木の間移ろふ夕月夜稍けしき立つ秋の空哉
九〇日ぐらしの聲も盡ぬる山陰に又おどろかす入相の鐘
一〇跡もなき庭の淺茅に結ばゝれ露のそこなる松蟲の聲
一一我宿の稻葉の風におどろけば霧のあなたに初雁の聲
一二寄返る波の花すり亂れつゝしどろに移すまの〻浦荻
一三白露の色どる木々は遲けれど萩の下葉ぞ秋を知ける
一四秋といへば物をぞ思ふ山端にいざよふ雲の夕暮の空
一五花薄まだ露深しほに出てば詠めしと思ふ秋の盛りを
一六狩衣亂れにけらし梓弓ひくまの野べの萩のしたゝ露
一七萩の上に雁の涙を置露は凍りにけりなつひに結びて
一八詠侘ぬ秋より外の宿もがな野にも山にも月や澄らむ
一九更にけり山のは近く月冴てとほちの里に衣うつ聲
二〇古里は葎の軒もうらがれてよな〳〵はるゝ月の影哉
二一とけてぬ袖さへ色に出ぬとや露吹き結ぶ峯の木枯
二二著き哉淺ち色つく庭の面に人めかるべき冬の近さは
二三秋の色は籬にうとく成り行けど手枕なるゝ閨の月影
二四淺茅原初霜むすぶ長月の有明の空におもひきえつゝ
二五桐の葉も踏分け難く成にけり必らず人を待と無れど
二六思へども今宵ばかりの秋の空更行雲に打しぐれつゝ

冬

二七神無月三室の山のおろしに紅くゐそたつ田川かな
二八楢には殘る錦もとまりけり庭にぞ秋の色はたちける
二九見るまゝに冬はきにけり鴨のゐる入江の汀薄氷して
三〇時雨つゝよもの紅葉散果て霰ぞ落る庭の木の葉かげに
三一荒暮す冬の空哉かき曇りみぞれ横ぎり風きほひつゝ
三二葦鴨の拂ひもあへぬ霜の上に碎けてかゝる薄氷かな
三三霰ふる野路の笹原ふしわびて更に都を夢にだに見ず
三四萩薄の夜はの衣手さえ〳〵て初ゆき白し岡のべの松
三五群て立空も雪げに近くれて氷の圍にをしぞなくなる
三六身にしむは庭火の影に匹のばる霜より星の明方の空
三七天つ風氷をわたる冬の夜のをとめの袖をみがく月影
三八日數ふる雪げにまさる炭竈のけぶりも淋し大原の里
三九わたの原深くや冬のなりぬらむ氷ぞ繋ぐ海士の釣舟

戀

一同おのづから長らへば尙幾度か老を迎へて哀に思はむ
一同人とはぬ都の外の雪中も春はゐ〻なりに近づきにけり
二同知べせよ跡なき波に漕舟の行へもしらぬ八重の汐風
三同かくとだに岩垣沼の澪標しる人なみにくつる袖かな
四同夢にても見ゆらむ物を歎つゝ打ぬる宵の袖の氣色は
五同我戀は知る人もなしせく床の涙もらすなつげの小枕
六同知らせばや妻の池の花かつみ且見る儘に波ぞ萎るゝ
七同我妹子が玉藻の裾に寄浪のよるとはなしに千ぬ袂哉
八同逢ふ事は遠つの濱の岩躑躅いはでや朽む染むる心を
九同我袖はかりにもひめや紅の淺はの野ちにかゝる夕露
一〇逢事をけふ松が枝の手向草幾よ萎るゝ袖とかは知る
一一待出てもいかに詠む忘るなと云し計りの有明の空

旅

一二都にて雪間はのゐっかに萌え出し草引結ぶさやの中山
一三荒磯の玉藻の床に假寢して我から袖をぬらしつる哉
一四都人沖つこ島の濱びさし久しくなりぬ波路へだてゝ
一五行末は今いくよとか岩代の岡のかやねに枕むすばむ
一六松がねのを島が磯のさよ枕甚くな濡れそ螢の袖かは

山家

一七我宿は妻木こり行く山賤のしば〳〵通ふ跡計りして
一八今は我松の柱の杉のいほにとづべき物を苔ふかき袖
一九山里は峰の木葉にきほひつゝ雲より風すさを鹿の聲
二〇柴の戸を人こそとはね足引の山より出る月は先見つ
二一山里は峯に絶せぬ松の聲木の葉にしのぶ谷のした水

鳥

二二曉のゆふつけ鳥ぞあはれなる長きねぶりを思ふ枕に
二三鳴鶴の思ふ心は知らねども夜の聲こそ身には泌れ
二四身のうさを思ひ碎けば東雲の霧間にむせぶ鴫の羽掻
二五傷しや風に漂ふ波の上に鴎の浮巣のさても世をふる
二六打拂ひ小野の淺ぢに刈る草の茂みが末に鞠たつなり

祝

二七君がへむ千世松風に吹そへて竹も鬪ぶる聲通ふなり
二八天下めぐむ草木のめもはるに限も知らぬ御代の末々
二九幾年のいく萬代か君が代に雪月花のともをまち見む
三〇龜の尾の岩ねが上にゐる田鶴の心してける水の色哉
三一天つ身にしむは庭火の影に匹のばる霜より星の明方の空
三二群て立空も雪げに近くれて氷の圍にをしぞなくなる

春

三三霞とも花ともいはじ春の色虛しき空にまづしるき哉
三四雲のより散り來る花はかつ消てまだ雪厚き谷の岩陰
三五雪とぢて聲を治めし奥山の松もしらべて春をつぐ也
三六釉繁しけさの雪間に春日野の淺茅が本の若菜摘むむ
三七苔深く荒行く軒に春見えてふるすも匂ふ宿の梅かな
三八梅枝の花をばよそにあくがれて袖こそ薫れ春の夕暮
三九句をば衣にとめつ梅の花行くへも知らぬ春風のいろ
四〇待たれつる花の盛りに吉野山霞の間より匂ふしら雲
四一このよには忘れぬ春のおもかげよ臘月夜の花の光に
四二深くとも尙踏分けて山櫻あかぬ心のおくをたづねむ
四三今朝見つる花の梢やいかならむ春雨薫る夕暮のそら
四四我宿に孰れの峯の花ならむ堰入るゝ瀧と落てくる哉
四五鳥の音も霞も常の色ならで花ふきかをる春の明ぼの
四六深山べのそことも知らぬ旅枕現も夢もかをる春かな
四七尋ね見よ吉野の花の山おろしの風の下なる我庵の本
四八絶え〳〵に軒の玉水音づれて慰めがたき春のふる里
四九くれて行く春の名殘を詠むれば霞の奥に有明の月
五〇垣ねそふ八重山吹の匂ひ哉春の名殘は幾日ならねど
五一歸るより過ぬる空に雲消ていかに詠めむ春の行かた

夏

五二春過てまだ時鳥かたらはぬけふの詠をとふ人もがな
五三時鳥忍音や聞くとばかりに卯月の空は詠められつゝ
五四我が宿の垣ねの雪を卯の花の山時鳥過やるにぞ知る
五五待ち〳〵て夢かうつゝか時鳥たゞ一こゑの曙のそら
五六寂くしも夜はのねざめをむら雨に山時鳥一聲ぞとふ
五七むかし思ふはな橘に音づれて物わすれする時鳥かな
五八春秋の色の外なるあはれ哉螢はのめく五月雨の空に
五九手にかをる水の水上尋ぬれば花橘の蔭に隱りけり
六〇詠つる遠の雲ゐもやよいかに行へも知ぬ五月雨の空
六一山賤の蚊遣火たつる夕暮もおもひの外に哀ならずや
六二色々の露を籬の床夏におきて過ぎぬるむら雨のそら
六三相坂の關の杉村過がてにあくまでむかふ山の井の水
六四あたりまで夏は忘るゝ山陰の清水や山の栖なるらむ
六五黄昏の軒ばの荻にそよぐ秋ぞ下に言とふ
六六夕されば檜の下風袖過ぎて夏の外なるひぐらしの聲

秋

七〇明ぬなりさぞと思ふに秋こそむ心の色の先變るらむ
八〇庭の苔軒の葛は深けれど秋の宿りになりにけるかな
九〇秋くれば常磐の山に年をふる松しも深く變る弊かな
一〇草枕はかなく宿る露の上を絶え〳〵みがく宵の稻妻
一一道遠き小野の篠原深けにけり露分衣すりかさねつゝ
一二蟲の音もまがきの鹿も一つにて涙みだるゝ秋の夕暮
一三露寒みわくれば風に類ひつゝすがる鳴也小野の萩原
一四詠むれば露の懸らぬ袖ぞなき秋のさかりの夕暮の空
一五露深き野べを哀と思ひしに蟲にとはるゝ秋の夕ぐれ
一六秋の夜の靜に暮す窓の雨打歎かれてひましらむなり
一七露はさぞ野原篠原分入て蟲の音さへぞ袖にくだくる
一八葎さす宿にも秋の尋ね來て月に誘ふは今年のみかは
一九秋の夜の更行く儘の花の上は月と花とを磨く也けり
二〇月見れば涙も袖にくだけけり冬に成行く心のみかは
二一久方の空行く月に雲晴てながむるまゝにつもる白雪
二二詠れば我心さへ果てもなく行へも知らぬ月の影かな
二三宿る袖くだく心をかことにて月と秋とを恨みつる哉
二四更けて行く秋の思もわびはつる涙なすてそ秋の月影
二五深き夜の程こそ見ゆれ立田姫いそぐ梢のよもの色々
二六吹とむる落葉が下の蟋蟀こゝばかりにや秋のほのめく

冬

二七神無月風にまかする紅葉に涙あらそふみ山べのさと
二八冬の夜は木の葉隱もなき月の俄にくもる初時雨かな
二九幾返りことだにつけて村時雨外山の梢染め廻るらむ
三〇冬きては深からねども起て見る朝の原は霜枯にけり
三一廻來る時雨の度に答へつゝ庭に待とる檜の葉がしは
三二賴みつる軒ばの眞柴朽れて月にまかする霜の狹莚
三三旅枕伏見の里の朝ぼらけかり田の霜にたづぞ鳴なる
三四とけてねぬよはの枕を自ら氷にむすぶをしぞ言とふ
三五落瀧つ岩きりこえし谷水も冬は夜な〳〵行惱むなり
三六雲の上の少女の姿しばし見む影ものどけき豐の明に
三七さらでだに思の絶ぬ冬の夜の松風ふきなぬ霰亂れて
三八霜置て尙賴みつるこやの蘆を雪社今朝は刈果てけれ
三九高砂の松の梢の雪折を谷のいほりに聞きあかすかな
四〇けさの雪に誰かはとはむ駒の跡を尋る人の音計して
四一せめて尙心細きは年月のいるがごとくに有明のそら

戀

四二沖深み釣する蜑の漁火のほのかに見てぞ思初めてし
四三思ふより見しより胸に焚戀のけふ打付に燃るとや知る
四四哀とは流石に見るや打出て思ふ涙のせめてもらすを
四五思兼ね淺澤をのに芹つみし袖の朽行く程を見せばや
四六假にだにまだ結ばねど人どの夏野の草と茂きころ哉
四七我戀は逢にもかへす由なくて命ばかりの絕や果なむ
四八假初に伏見の里の夕露のやどりはかへる袂なりけり
四九淺ましや淺香の沼の花かつみ且み馴ても袖は濡けり
五〇我袖のぬるゝ計は包みしに末摘花はいかさまにせむ
五一入しより身をこそ碎け淺からず忍の山の岩のかけ道
五二年月の戀も恨も積りてはきのふにまさる袖の漏かな
五三常磐木の契やまがふ立田姫しらぬ袂も色かはり行く
五四唯今の夕の雲を君も見ておなじ時雨や袖にかゝらむ
五五黃昏の荻の葉風に此ごろのとはぬ習をうち忘れつゝ

雜

五六旅人の跡だに見ぬ雲の中に馴れば馴る世に社有けれ
五七急がずば二夜も見まし草の庵の向ひの山に出る月影
五八露霜も四方の嵐に結び來て心くだくるさよのなか山
五九行とまるかたやそこども白雲の紅葉の蔭や旅人の宿
六〇詠むれば嵐の聲も波の音も吹飯の浦のありあけの月
六一河舟のうきて過行波の上に吾妻の事知られ馴ぬる
六二逢じとて葎の宿をさしでゝも爭でか老の身を尋らむ
六三けふは又きのふに有ぬ世中を思へば袖も色變り行く
六四慶事は嚴の中も聞ゆなりいかなる道も有がたの世や
六五世中に思亂れぬ刈萱のとてもかくてもすぐる月日を
六六哀れ〳〵思へば悲し遂の果忍ぶべき人誰となき身を
六七笹蟹のいとゞ懸れる夕露のいつ迄とのみ思ふ物かは
六八きほひつゝ先だつ露を數へても淺茅が末を尙賴む哉
六九年ふれどまだ春知らぬ谷の內の朽木の本の花を待哉
七〇鶴の子の千度巢立む君が代を松の影にや誰しも隱れむ

雜〻入二勅撰一不〻見二家集一歌（今省唯記國歌大觀番號）

千載二首　一四七　三二首　六六六　七四四　九四〇　一三九　新古今一首　二六六
二六八　四八四　六〇五　一〇三四　一二〇四　一三五八　一三九一　一四四四　一四四三
二四四四　一八四七　一九三　新勅撰三七　二九七　三九二　九三二　續後撰二一二　二六〇
六四一　一三二首　續拾遺一〇三　七四七　新後撰六三一　六三五　玉葉四二　一二六
二四九三　續千載六九　一三六六　續後拾四二六　一四六二　新千載一〇三首　新拾遺二六六
二六三三　新後拾七二　八五　新續古六〇　一九三三

待賢門院堀川集

なほさむき

一七山陰の伏屋は春も知ねばや軒端の垂氷解る間もなき
わかな

二七山賤の柴の垣ねの內せばみつめる若菜の程もなき哉
物のみうくてすゝろにくらして

三七徒に年をのみ積身にしあれば若菜はよその物と社みれ
かきの柳絲に似たり

四七山賤の道にさはせるあせ垣にいとほしげなる玉柳哉

五七山賤の園生に園ふかきしばの絕間にみゆる青柳の絲
かきしへだてたる花

六七あかすみる梢の花し中垣の此方に散る風もふかなむ
ちりて後花しおもふ

七七山櫻こすゑ綠になりぬれどかはらぬものは花の面影
なはしろ

八七苗代は己がひき〳〵急ぐとも秋のたのみの定なき哉
すみれ

九七行やらで心のとまる春の野に暫し菫の花やつまゝし

一〇古里の淺ぢが原に所えてすみれの花ぞあるじ顏なる
田のいへの山ぶき

一八咲きにけり苗代水にかげみえて田中の里の山吹の花
ころもがへ

二八何どかは急ぎも立む夏衣愛身を更るけふにし有ねば
野のほとゝぎす

三八待とは淺からねどもほとゝぎす
ふるさとのほとゝぎす

四八とふ人もなき古里のたそがれに我のみ名のる時鳥哉
新院の御前にて時鳥の歌十たびて御返しとくとくとめせばやがてかきてまゐらせてしかど皆忘れにけりこれ一つぞおぼゆる

五八綠子やふりわけ髮の昔よりあかでやみぬる時鳥かな
とありしおほんかへし

六八聞でのみ我ぞやみぬる郭公君は千歲も聞むとすらむ
よるのほとゝぎすのなきつるとて人のあれば

七八いかにして聞ざりつらむ子規物思人はいやはれらゝあやめ

八八こやの池に生る菖蒲の長き根は引白絲の心ち社すれ
八九引人もなき水籠の菖蒲草いつかとだにも待れざり鳧
九〇生立て有まし物を菖蒲草かゝる汀のうきをしりせば
　五月雨
九一瀬を早み駒ひきなべし安河に舟渡りする五月雨の頃
　うゑ木のかげ秋に似たり
九二綠なる楢は色もかはらぬに下ふく風ぞ秋にかよへる
　七月七日かぢの葉にかく
九三七夕に物思ふことかきたらばげには心も慰みなまし
九四七夕にあまの羽衣かさねても恨やすらむ年の隔てを
　はさ
九五露しげみ花色衣かへるとも又もきてみむ野べの秋萩
　しか
九六さを鹿の妻戀る音に咏きなく我さへ袖を濡しつる哉
　月
九七長き夜の月を思へば月影のかたぶく方にすむ心かな
　たびのやどりの月
九八都出てとぼちの里の旅寢にも面變りせぬ秋の夜の月
　ふねのみちの有明の月
九九有明の月に心やすみぬらむ聲うち出づる沖つ舟びと
　月をみて
一〇〇浮世にも月に心は慰むをつひにいかなる闇に惑はむ
　ありあけ
一〇一山里のかけひの水にかげすみて心ぼそきは有明の月
　また月の歌ども
一〇二有しにもあらぬ浮世に變らねば月ぞ昔の形見也ける
一〇三殘なくなり行く秋をしりがほに光をしまぬ照す月影
　ゆふべのむし
一〇四木枯に草葉片より夕されば蟲の音さへも亂るなる哉
　草のなかのむし
一〇五淺ぢふにおのが聲々啼く蟲は心々をいかで知らまし
　きり〳〵す
一〇六露しげきのべにならひて蚤わが手枕の下に鳴くなり
一〇七蚤夜深き聲に夢さめて壁のあたりはいこねられね
　遠きむらに衣うつ
一〇八唐衣いづれの里にうつつならむ遙につちの音聞ゆなり
　田家のかせ
一〇九宿近きおくての稻葉うち靡き衰身にしむ風の音かな
一一〇詠めやるとをちの里の紅葉は秋と共にぞ深く成行く
　秋のはて
一一一枯々の淺ぢに結ぶ夕露をかたみにおきて秋の行ぬる
　山里の秋の暮
一一二山里の麓の野邊の眞葛原かへる秋こそ恨がほなれ原作
　しぐれ
一一三掻曇り時雨は音もなけれども名殘にふるは木葉也けり
　山里のゆふべの時雨
一一四人もこぬみ山の里に音するは黄昏どきの時雨也けり
　海のほとりの落つるは
一一五心あらば海士もいかにか思らむ紅葉散しく松が浦島
　旅のやどりの落葉
一一六木葉散る山かたつきの笹の庵は埋もれぬべき臥所哉
　ちどり
一一七汐のみつ磯邊の千鳥波馴れて共に立ぬる聲ぞ聞ゆる
　水の上の千鳥
一一八網かくる佐保の河瀬に立つ千鳥又いづ方へ鳴渡らむ
　師走のつごもりの夕ぐれに物を思ひつゝけて
一一九世を恨身を歎きつゝ明暮に年も心も盡果てにけり
　新院の百首の中の春
一二〇暮はてゝ孰こ迄行年なればよのまにけさは立替る覽
一二一雪深み岩のかけ道跡たゆる吉野の里も春は來にけり
一二二霜枯て顯はに見えし蘆のやのこやの隔ては霞也けり
一二三孰方に花咲ぬらむと思ふより四方の山べにちる心哉
一二四宿近き籬の中に咲をこそつぼ菫とは云ふべかりけれ
　夏
一二五郭公雲ゐに過ぐる一聲は空耳かとぞあやまたれける
一二六梅雨の日を古里の庭の面は水草も取ぬ池かとぞみる
一二七まこも草高瀬の淀に茂れ共末葉も見えず五月雨の頃
　秋
一二八七夕のあふせ絶せぬ天河いかなる秋か契りそめけむ
一二九宮城野に朝たつ鹿も心せよ本あらの小萩花咲にけり
一三〇はかなさを我身の上によそふれば袂に懸る秋の夕露
一三一水の面に掻流したる玉章はと渡る鴈の影にぞ有ける
一三二さらぬだに夕淑しき山里の霧の籬にをじか鳴くなり
一三三すむかひもなき世中の思出は浮雲かけぬ秋のよの月
一三四秋の來るけしきの杜の下風に立そふ物は哀なりけり
一三五雲の波懸てもよると見えぬ哉あたりを拂ふ月のみ船は
一三六立田姫もろこしまでも通へばや秋の梢のから錦なる
　冬
一三七暗掻曇り時雨の空を詠めても定なき世ぞ思ひしらるゝ
一三八瀧そよぐ沙風寒みかたしきの入江に傳ふあぢの村鳥
一三九降雪に園のなよ竹折れふしてけさは隣の隔てなき哉
一四〇昔など年の終をいそぎけむ積れば老となりぬる物を
　戀
一四一斯だにと云ぬに茂き亂菖のいかなる節に知せ初まし
一四二袖ぬるゝ山井の清水掬でかは人目漏さで影をみるべき
一四三荒磯の岩に碎くる波なれやつれなき人にかくる心は
一四四夢のどみしは人にも語らぬをいかにちがへて逢ぬなる覽
一四五頼めずばうき身の咎と歎つゝ人の心を恨みざらまし
一四六小盤のいかゝ樣にかは恨むべき掻絶ぬるも人の咎かは
一四七疑ひし心の裏のまさしさは問ぬにつけて先ぞ知らるゝ
一四八憂人を忍ぶべしとは思ひきや我心さへなど變るらむ
一四九忘れにし人は名殘もみえねども俤のみぞ立も離れぬ
一五〇逢期なき歎の積る苦しさをおへかし人のこり果る迄
一五一深くのみ契りしとを思出でば音よしてまし山河の水
　神
一五二色々に憂身を祈る幣なれば手向る神もいかゞみるべき
一五三ほとけ
一五四長きよに迷ふ障りの雲晴て月の御顔を見る由もがな
　無常
一五五夢の世を驚きながら見る程はたゞ幻の心ちこそすれ
　わかれ
一五六行人も惜む涙も留めかね忘るなどだにえ社いはれね
　たび
一五七道すがら心も空にながめやる都の山の雲かくれぬる
一五八故里におなじ雲ゐの月をみば旅の空をや思ひ出らむ
一五九忍べき都ならねどしかすがの渡りもやらず哀なる哉
一六〇旅の空己がつらとや思ふらむ宿雁がねの近く聞ゆる
一六一はかなくぞ是を旅ねと思ふ哉孰こも假の宿と社きけ
　いはひ
一六二君が代は枝も動かぬ松風に久しきことを調ふなる哉
一六三早苗とる田子の裳裾に非ね共我も戀路に袖ぞ濡ぬる
　萩の上の露
一六四萩の上の露もとまらで行人を花摺衣かへれとぞ思ふ

枕の下の巻
黒髪の別を惜みきり〳〵す枕のしたに亂れ鳴くかな
蘆間の水
蘆ねはふ入江の水結ほれ長からぬよを歎かすもがな
戀
沖かへり岩間の水のいはゝやと思ふ心を爭で漏さむ
よそふべき方も知れぬ戀なればいかに云てか漏し初べき
みるめなみ靡ぬまもなき袖の浦に忘貝をば得こそ拾ね
包みあまる涙の色は紅のこそめの袖にかけて忍ばむ
今は唯難面き人の戀をして我歎きをも思ひ知れかし
すだれを隔てたる戀
玉簾誰とも知らぬすき影を見るに心のかゝりぬる哉
かたみに戀ふ
君と我通ふ心の行もあはであやしくまどふ戀の道哉
石によせたる
逢事をとふ石かみのつれなきに我心のみ動きぬる哉
ふみゝぬ
流れてと頼めしかども水莖の跡さへ今はかき絶に鳧
江によする
鴎いる入江の水は浅けれど絶えぬを人の心ともがな
浦によする
かひ無て返る波とは知乍ら猶こりずまの恨みにぞ行
なき名
雪ぐべき方も無名ぞ老にけるみづたの帶打も解ぬに
たのむ
儚にならはざりせば行末と頼むるごとに慰みなまし
なげく
山蔭の答だにせぬ歎にもこりずぞをのゝ驚かしつる
いつしか人きゝのゝしりければ音もせざりける
にやらむとてこひしに
淺ましや人めもりぬととよせて絶果ぬるか山井の水
絶えにける男の口をしきことども人に云ひなど
するがまた音づれたるにやらむとて乞ひしに
うしとのみ秋の景色は聞物をいかに音する荻の葉風ぞ
ふみおこする人の絶えて又音づれたるにいひは
なちたらむ歌と人のこひたるに
山の井の淺き心を知りぬれば影みむとは思ひ絶にき
絶えにける男の年頃ありてみづからなど云ひた

りけるがおとせぬにやらむとて人のこひし
ひたすらに思絶えにし山河のなど自らと驚かしけむ
跡絶てふるの野中の自らとかけしに最どぬるゝ袖哉
五月五日絶えにける男のがりやらむとて人のこ
ふに
菖蒲草懸ても今は問ぬまに浮根計りぞ絶せざりける
はなれたる男の子をむかへたるにそのちごのも
とへ菓玉やるとて人のよませし
引かへて玉ぬき懸よ菖蒲草うきみ能りの慰めにせむ
男の鏡のかげかはりぬなどいひたりける返事に
かはりて
變るらむ疑はしさぞ增鏡心もかくやあらむと思へば
今は逢ふまじきよしと又こへば
恨み侘びつきせぬ物は涙かな逢見むとは限と思ふに
にわじ殿に九月行幸ありてくらべ馬ありしに新
院くらゐの御時、菊千秋をちぎる
雲上の星かと見ゆる菊なれば空にぞ千世の秋は知るゝ
月
怖くも月に心の止る哉すみ果つまじき身をば忘れて
具したる人のなくなりたるを歎くにをさなき人
の物語するに
云ふ方もなく社物は悲しけれこは何事を語るなる覽
よろづの人のなくなるを聞きて
後れゐて涙さへ社留まらね見しも聞しも殘なきよに
樣かへさせおはしましゝ日やがて御供になりて
さぶらふに後れ參らせぬることを思ひて
諸共に家を出にしかひもなく誠の道に立ち後れぬる
御前にさし出でてもいづかたかと哀にて
歎是やさは舟流したる甕ならむ涙の海による方もなし
むかひにゐられたる別當の行幸に參らるゝとて
出立のひしめかるゝ氣色も聞ゆるに雪うちふり
て餘に哀なるにさしおかす
誰も皆けふの行幸に誘はれて消にし跡を訪人もなし
おはしましゝ折にも似ず心細く哀に御所の方に
も人の音もせず引きかへゐられぬ世のこゝちして
千賀の浦の君も落に返りきて涙にしづむ里の海士人
六月十日ごろにわじにいでたるに庭も稍もみぢ
り深く繁りあひてかすかに人影もせずこれにす

ゐそめ給ひしころのこと唯今の心ちしてあはれ
つきせぬ日ぐらしの聲たえず聞えければ
君こふる歎のしげき山里はたゞ蜩ぞともに鳴きける
七月朔日いつしか荻の音するに
草深きあはらの里の住ひして露の命の程ぞ知らるゝ
藥草喩品
艸も木も己がさま〴〵生にけり一つの雨の注ぐ等に
諺量品
月影は世を浮雲に隱れねど猶の袈にはすむと社きけ
雲の漂ひたるを
それとなき夕の雲に變りなば哀誰かはわきて詠めむ
心がはりたる男の濟佛の作り物に松に鶴のゐた
りけるをおこせて
千歳まで契しふかき中なれば松の梢に鶴ぞゐにける
といひて返しこひしかば
鶴のゐる松とて何か賴むべき今は梢に波も越えなむ
人の年わかき男の物いふ女いたくわかしなどい
ひけるがまさりてわかき男に逢ひにけると聞き
て男のよませるとてこひしに
さいたづま結ぶなだにも分ず迷角ぐむ野べにれやは見べき
うみ
渡つ海は底も一つにみゆればや風のまに〳〵波も立覽
まくら
夢のよの思知らるゝ寢覺には枕の露ぞ共におきける
むしろ
秋深み風狹筵に袖しきて蘆のしのやに幾夜へぬらむ
鹿のこゑ
夜もすがら妻戀かねてさを鹿の恨めしげなる曉の聲

右是本曾二條家爲定以自筆正本令書寫畢可校
訓本一也

文祿二年閏月中旬　　雅敎

權中納言俊忠卿集

堀河の院の御時内裏の歌題いはひ

九〇祝つゝしめゆふ竹の色みればみ世の景色は空に著しも

おなじ御時鳥羽殿に行幸の日題池上花

一〇千とせすむ池の汀の八重櫻影さへ底に重ねてぞみる

おなじ御時女房の花道遙に具して遣されしに遙坂こえて尋ね見し日

一今日こずば音羽の櫻いかにぞと見る人毎にとはまし物を

ふたまにおはしまして上のをのこども歌よみの名ある女房のもとにけさう文の歌よみて遣せとおほせられし時

康綱

又女房の歌をめして給はりしに、小大進

二つらさをば思入れじと忍べ共身をしる雨の所せき哉

返し

三思ずに降そふ雨の歎きせば三笠の山をさして誓はむ

又おなじ心を人々よみしに

四三島江の假初にさへ眞菰草ゆふてに餘る戀もする哉

又題をさぐりておの〳〵歌奉りしにつり舟をとりて

五いはおろす方社無れ伊勢の海の潮瀬に騒る蜑の釣舟

夏の題をおの〳〵たまはりて歌奉りしうちの盤

六住の江の淺澤集く夏蟲を草葉にぬける玉かとぞみる

中宮篤子の御方にわたらせ給ひてうるふ五月 康和四

の郭公といふことを講せられしに

七五月やみふたむら山の郭公峯つゞき鳴く聲をきく哉

中宮まだ四宮と申し時女房に物ごしにあひてのちに遣しける

八倦ざりしよはの景色の戀しさに重ねぬ袖を返しつる哉

雪の歌人々よみし時

九曩束なこしのを山の椎柴の青葉も見えず降れる白雪

正月二十日ごろ雪のあした二條の家の八重梅を折りてとしよりの朝臣のもとに遣りし

一〇咲初むる梅の立枝に降雪の重なる數をとへと社思へ

返し

一梅が枝に心もゆきて重なるを知でや人のとへと云らむ

東山の花のもとにて人を歌よみしに山をこえて花を見るといふ心を

二逢坂の關路に匂ふ山櫻もるめに風もさはらましかば

道のなかにして逢ふ戀といふことを

三なごの海のと渡る舟の行すりに仄見し人の忘れぬ哉

故殿うせ給ひてのち五月五日源中將くにざねの君せうそこして侍りし返りごとのついでに

四墨染の袂にかゝるねを見ればあやめも知ぬ涙也けり

返し 中將

五萬浦草浮根をみても涙のみかくらむ袖を思ひ社やれ

家の歌合に花橘

六五月闇花橘のありかをば風のつてにぞ空にしりける

こひ

七我戀はあまのかるもに亂れつゝ乾く時なき波の下草

二條の家にて十首の戀の歌人々に詠ませしとき

占戀

八きねがとる其くましねに思事みつてふ數を頼む計ぞ

來不レ留戀

九我戀は葛のうらばの風なれや靡きも敢ず吹返しつる

誓戀

一〇爭で我心筑紫の松浦なる鏡にかけて見ゆるわざせむ

乍レ臥無レ實戀

一一戀々てかひも渚に沖つ波よせてもやがて立歸れとや

祈不レ遇戀

一二揚卷し少女が神にねぎ懸る櫛のさすがに搖ぎけもなし

追從戀

一三我妹子が雲裾計にしなさなむさけかれても恨みやにせむ

偽不レ遇戀

一四如何せむ後ゆめたなき人心貫く玉のくだけてぞ思ふ

聞レ音戀

一五夜こえぬ關路に懸る旅なれや鳥の空音にれをぞ添つる

厭レ賤戀

一六數ならぬ磐瀬の森と聞からに身を知る雨は時雨てぞ行

さくら花ふりにし春ぞこひしかりける

つかひかくれにしかば中宮の女房にやどて堀河の院へ奉りし

一七思ひきや散にし花の影ならで此春にさへ逢む物とは

ひが事なりければさいの宮の女房返し

一八雪とふる花ならねども古をこふる涙に迷ふとを知れ

身を恨みて桂の家にこもりゐて侍りしころ九月十三夜

一九詠める心の關もはるばかり桂の里にすめる月かな

同じ所にて又の年の春のこりの花を惜む心を

二〇世のうさを厭ひ乍もふる物を暫しも殘る花もあれかし

八條の家にて歌合に草花露といふことを

二一夕つゆの玉盤して女郎花野原の露に折れやふすらむ

月

二二隈もなく明石の浦にすむ月は千尋の底の鏡なりけり

鹿

二三終夜妻とふ鹿の鳴くなべに小萩の原の露ぞこぼるゝ

寄レ瀧戀

二四戀ひわびて獨りふせやに終夜おつる涙や音なしの瀧

法輪寺に詣づとて故大納言殿出家の御墓の見ゆるほどに車をとゞめておりてまうづとて

二五さらでだに露けき嵯峨の野邊にて昔の跡に袭れぬる哉

秋頃えふみに日頃こもりていづる曉に

二六山深み松の嵐にきはなれてさらに都やたび心ちせむ

嘉保二年三月二十一日花契二千年

左少將

鳥羽殿歌合

花爲二春友一

左中將

二七この春は重ねて匂へ八重櫻霞とともにたちも離れじ

御前にて五月雨を名所によせて人々仕うまつりしに

少將

二八時しもあれ漢沙垂たる須磨浦に日數ふる雨の晴間なき哉

永久鳥羽四年閏正月二十五日鳥羽殿、梅花裏衣 參議

二九袖かけて折りみ折すみ花の色に染る匂を妹な咎めそ

題

一〇山守よ歎きと云へば伏柴も眺め柏も分きてやはこる

中納言雅兼卿集

曉聞ㇾ鶯
二鶯の木傳ふさまもゆかしきに今一聲は明はてゝなけ
山花初發
三櫻花まづ咲く山の初風はほかより先に厭はれやする
水上落花
四花誘ふ嵐や峯をわたるらむさくらなみよる谷川の水
池邊柳
五風ふけば波のあやおる池水に絲ひきそふる岸の青柳
毎朝見ㇾ花
六咲しより幾日きぬらむ朝霞立田の山の花のあたりに
松間花
七並立てる松もや風を厭ふ覽あたりの花の散が惜さに
白河の花見御幸に
八年ごとにさきそふ宿の櫻花なほ行末の春ぞゆかしき
落花盈ㇾ地
九吉篠みどりの色は埋もれて散しく花にしく物ぞなき
苔上落花
一〇吉篠ありけるものを散花にしく物なしと思ひける哉
水上落花
一一咲ば散る梢のみかは櫻花――みつゝも止らざりけり
夜梅遠薰
一二波のよるせゝの末迄薫る也これや梅津の流なるらむ
花經ㇾ年香
一三咲きそめし始も知らぬ櫻花いく春風に匂ひきぬらむ
三月盡
一四花故にけふの惜さは斯るかと常磐の里の人に問ばや
河邊款冬
一五――心して曳けたかせ船岸の山吹匂ふさかりぞ
遠水螢
一六五月閨蘆まの螢ほの〳〵と見ゆるや淀の渡りなる覽
未ㇾ聞二郭公一
一七五月雨の空の名立に郭公きゝつと語る人だにもなき
夏夜月
一八風ふけば片よる澤の眞菰草――溜らぬ夏の夜の月
路夏草

一九歸るさの道の知べと宮城野の花待萩を菜りてぞ行く
六月思二郭公一
二〇聞かねどもなほかたらるや郭公待し五月の心習ひに
晩風告ㇾ秋
二一夕まぐれを萩が花は咲ねども鹿鳴きぬべき風の音哉
初聞二郭公一
二二明ばまづ人に語らむ郭公まだ里なれぬ初音聞きつと
夏越祓
二三年毎の御禊の驗あらませど我何ごとをけふ祈らまし
草花告ㇾ秋
二四咲そむる朝の原の女郎花秋を知するつまにぞ有ける
秋月
二五是やこの詠むる度に忍ばるゝ哀ことなる秋の夜の月
早萩
二六□萩原花咲にけり今年だに――鹿にいかで知らせし
七月八日
二七久方の天の川波あけたてば濡れてやかへる雲の羽衣
女郎花ㇾ露
二八女郎花露くとみれば秋風の吹來る末もなつかしき哉
夕月
二九高圓の山の裾野の夕露にかげさしそふる弓はりの月
八月十五夜
三〇秋毎に此月影の今宵しも口ればこそは名には立けり
同じき月の十六日に女の許へ
三一忍びづま獨にもあらず望月の駒いづ方に心ひくらむ
曉聞ㇾ鹿　皇后宮にて
三二思ひしる人に見せばやをじか鳴く二上山の曙のそら
永久元年九月依二山大衆事一下二向河尻邊一歴二覽
住吉社一於二住江一詠
三三住吉のたむけの旅にあらねども哀はかけき沖つ白波
隔ㇾ垣紅葉
三四――まばらにかこへ柞原下枝の紅葉よそながら見む
月前落葉
三五隱れぬの木ぐれの月の漏のみや紅葉散よの取所なる
移二野花一
三六秋くれば野原の花をませの内に露も落さず移してぞみる
十月紅葉
三七尋ねこむみ谷がくれの柞原しづ枝に秋の色や殘ると

船中曉涼
三八舟出せし秋まつ程は暮しまの空吹風も涼しかりけり
旅門秋深
三九秋ふかみ山風寒したび衣心してこそたつべかりけれ
駒迎　內裏にて
三〇逢坂の關もる神にこゝろはむ幾よか見つる望月の駒
逐夜雪深
三一折れふして竹の末葉も埋れぬ夜毎に增る雪の重さに
鷹狩
三二御狩する交野の裾と知ながら何と雉子の跡留むらむ
初雪
三三東路の人に問ばや甲斐が根の山にも今日の雪や初雪
樓塵人とて東山に侍りし僧の樓の上にこもりゐて人のいくに見えざりしかばかへりて三四日あ
りていひやりし
三四此度はあかきみ佛みえ給へ借こそ後の世をも賴まめ
戀二春花一
三五忘れじの契も懸ぬ花なれどたをりし枝は忍ばれぞする
月照ㇾ松
三六時雨とや思果てまし松風を梢の月のもりこざりせば
月照ㇾ橋
三七初霜は降りにけりとも見ゆる哉長柄の橋を照す月影
松久綠　公實
三八八百萬久しき御代の例とはかはらぬ松の綠をぞみる
隔ㇾ夏戀
三九夏衣へだて〳〵てやがてさは夜寒の床に獨寢よとや
尋不ㇾ遇戀
四〇さりともと尋こしぢのかひもなく跡をだにみて歸る山哉
互有ㇾ隨戀
四一人の上と歎きし物を今は又我さへすうる憚りのせき
雲に寄する戀
四二胸にみつ戀の煙や雲ならむ心の空の晴るゝよもなき
女郎花によする戀
四三寄へつゝ我みる野べの女郎花戀せぬ人もてや折らむ
臨ㇾ曉增戀
四四歎きつゝ夜は明方に成ぬれどいとゞ心の騷くらす哉
懷舊心
四五昔のみ忍ばるゝ身の行末は今日戀しくやわらむとすらむ

貧人戀

〇一鼻をだに啜り敢字われが身にいかに添へつる戀の涙ぞ

近不レ遇戀

七〇伊勢島や蜑ならませば己が浦のみるめ猪に物は思じ

不レ聞レ人戀

八〇苦しさは問ぬつらさをつらし共思はじと思ふ思也鬼

忍戀

九〇忍ぶれど戀は氣色や著からむ先みる人のめでた顏なる

山家戀　皇后宮にて

一〇思ひやれ松吹く風に夢さめて戀しさまさる冬の山里

寄レ石戀

一一山里の岩垣なれや我戀は思ひこめつゝ年のへぬらむ

寄二水鳥一戀

一二鴛鳥はすがたの池に映してや己が思の程を知るらむ

聞權大納言家詠水上月の心

一三主なる水だにすまぬ濁江にほのかに月の何宿るらむ

同賦レ女白地出の心

一四立出でゝねどこもさらぬ程なるを獨衾の妻や恨むる

戀の心

一五かゝりける涙と人もみる計り絞らじ袖よ朽果ねたゝ

九月十三夜くもりて去夜あかゝりければ

一六昨日とは誰か契りし此月は十四夜と社云べかりけれ

返し、中務丞平實重

一七古の昨日はとに雲はれて今宵の月やかゝらざりけむ

又遣す

さやかなる秋のなだてに年をへても〔下脱〕

返し、實重

一八九月の今宵わきては曇らねど斯しも晴ば名にぞ立まし

又

一九是も又浮世に廻る妻かとて心のまゝに月をだに見ず

返し、實重

〇二〇世を捨て西へ行とは知乍ら見しとはいかに山端の月

二一思へ共よにゆるしなき雲の上に誘ふ月の影も有けり

二二よの人に月みるとの劣らねば秋ぞ我身の盛なりける

又

二三盛とはまだきな懸そ秋の月雲の上迄見ぬは見るかは

實重　藏人に來〔脱歟〕被贈也

二四雲ゐには月の光もそふなればいとゞ心の懸りぬる哉

世のはかなきことを

二五云し云ば此世は夢ぞ嬉しとて包みし袖に何か止れる

二六夢の内に生れも死にもするとを何か愁へも喜びもせむ

二七世中を同じ惑ひの内にても歎かぬ夢を見る由もがな

諒闇の年七月七日

二八涙のみ懸る袂を秋夜は人なみ〳〵に翳すやあらまし

遭レ喪時不レ訪人の許よりいへる

二九人を社訪で過ぬれ定なき世を海にのみ沙垂るゝまにかへし

三〇悲しさのいつを限とあらば社訪で過ぬる人を恨みめ

久しくれいならぬころ五月女郎花の咲きたれば

三一弱りゆく我みよとてや女郎花秋より先に急き咲らむ

中納言になりたりけるを皇后宮より喜びおほせられたりければ堀川院の御事思ひ出でゝ

三二植置きし匂ひと思へば梅の色いとゞ昔の春ぞ戀しき

雅賴昇殿して侍りし時奏二内裏一　出家後

三三嬉しさを返すゝ〳〵も包むべき苔の袂のせばくも有哉

成通卿集

民部卿殿伊勢の使にくだり給ひしに藤方にて人

人浦の松をよみしに

三四幾しほか立波ごとに染めつらむ緑の深き藤かたの松

三條殿に中宮おはしましゝに其の御方にて人々

月の心をよみしに

三五さもこそは曇なき世の月ならめ見る人迄もすむ心哉

同じ御方にて草花告レ秋といふ心を

三六花薄まだほに出ぬ宿ならばけふ迄秋を知すや有まし

新院の御方にて人々毎春花盛の心をよみし

三七いつとてか花に心を告ざらむ懸に匂ふ春しなければ

鳥羽殿にて霞隔二殘梅一をよめる

三八春霞隔つとならば梅の花まだ有けりと風にしらすな

過不レ逢戀

三九逢見むと云渡りしは行末の物思事のはしにざりける

返しうらに書きつけし

〇四〇歎らむ人を誰とは知らねども心は我に變らざりけり

竹風夜涼

四一荻の葉に過たれつゝ呉竹の夜の音にぞ秋はきにける

四二草枕よはの氣色の裏なさを思ひやるさへ袖ぞ露けき

四三思遣る遙にゆかぬ時だにも君戀しさは忘れやはする

四四暮るまも定なき世と知り乍ら歸りこむ日を待ぞ儚き

四五何事を我思はまし時のまも君に離れぬ身ならましかば

人のもとより

四六さえ渡る氷の上にふる雪の消えても物を思ふ頃かな

返しやりし

四七きゆ計思はゞなどか泡雪の逢ぬ夜はしも積るなるらむ

霰

四八音羽山音に聞けとや春霞かたいにみえず立隱すらむ

うぐひす

四九鶯や年の始と告げつらむなく一こゑは春めきにけり

さくら

月前紅葉

一一飽なくに夜も紅葉を見よとてや秋しも月の清けかるらむ

二一四凝返り嬉しつらしと思ふ覽頼めて逢ぬ夜はし積れば

ある人に近くみるさて（仙洞）やみなば後のよの妨

げにもなりぬべしと申したりしかば詠みておこせたりし

三一五玉章の通ふばかりに懸めて後の世までの恨のこすな

返しつかはし

三一六凝返り踏通ふ共逢坂を越さずばいかゞ恨みざるべき

ある人故院の御事をなげきて

三一七いかなれば別は今の心ちしてよは非ぬよに成果ぬ覽

返しやりし

三一八名殘なく變りはてぬる世中に流るゝ物は涙なりけり

放院かくれさせ給ひたりし頃美作前司の許より

三一九さりともと賴みし影も暮果てゝ涙の雨にぬるゝ頃哉

返し遣し

三二〇言の葉にいふとも盡じ世中は我心にて人をしらなむ

同じ頃三條殿に參る人々かきつけ侍りし著到の

上に紙を細くきりて書きておして侍りし、よみ

人不レ知

三二一思侘び賴む影なき宮の内を歎きてみれば荒ぞしにける

返しうらに書きつけし

三二二歎らむ人を誰とは知らねども心は我に變らざりけり

竹風夜涼

三二三荻の葉に過たれつゝ呉竹の夜の音にぞ秋はきにける

三二四草枕よはの氣色の裏なさを思ひやるさへ袖ぞ露けき

三二五思遣る遙にゆかぬ時だにも君戀しさは忘れやはする

三二六暮るまも定なき世と知り乍ら歸りこむ日を待ぞ儚き

三二七何事を我思はまし時のまも君に離れぬ身ならましかば

人のもとより

三二八さえ渡る氷の上にふる雪の消えても物を思ふ頃かな

返しやりし

三二九きゆ計思はゞなどか泡雪の逢ぬ夜はしも積るなるらむ

霰

三三〇音羽山音に聞けとや春霞かたいにみえず立隱すらむ

うぐひす

三三一鶯や年の始と告げつらむなく一こゑは春めきにけり

さくら

○ㇾめに見えぬ心にだにも止りけり枝な離れそ春の初花
五月雨
一水増る古江の菖蒲今更に生いづと見ゆる五月雨の空
ほとゝぎす
二一聲のなどつらからむ郭公聞で明ぬる夜だに社あれ
橘花
三我宿の物ならなくに匂ひ來る花橘のあるじともがな
鹿
四終夜妻とふ鹿を聞からに我さへあやない社ねられね
をみなへし
五女郎花靡くをみれば人知れず秋吹く風ぞ羨まれぬる
雪
六白雪の行かふ路をしらせねばまだ音づれぬ遠の里人
水鳥
七夜と共に霜おくつるを水鳥の羨ましくや下に燃らむ
あし
八冬深くなりにけらしな難波江の青葉交らぬ蘆の村立
祝
九言の葉に懸てもいかゞ祝べき昼りをしらぬ君が代なれば
こひ
○十咲氣なや誰爲思ふとなれば我身に替て人をこふらむ
十五首の述懐に、一隔盛定
一限ありて立ち離れなば春霞戀しかるべき雲の上かな
とよみて侍りしを人々あはれがりほめしかば又
の日よみて遣しゝ
二雲の上に止る心の餘りにてなほさへ君は殘しつる哉
返しもとの消息のまゝ
三雲の上に尚殘しつと聞く折も涙の雨は止ざりけり
九月十二日夜月のあかきに誰ともなくてかみわ
たりよりとて遣したりし
四雲の上の月計りをば詠むれど我身も同じ數ならぬ哉
返し遣しゝ
五雲上の月を詠むる人ならばかけ離れては思はざらなむ
一とせ二條にて四十九日がうちに月のおぼろな
りし夜誰ともいはで人のもとより
六雲はるゝ朧月夜の哀さを物思ふ人はいかゞ見るらむ
かへし
七疎くにも晴澄みまさる月影を我宿からと思ひける哉
八夕暮に命を懸ぬ身也せばけさ歸るさにしにやしなまし
月契二遐年一　内裏
九千年迄君のみぞみむ久方の久しかるべき秋の夜の月
山家月
○疎らにて時雨に厭ふ柴の庵は月もるよりぞ悔しかりける
一今よりは山邊に近く家居せじまだ入らなくに月隱れ鳧
遠思二野花一　内裏當座
二飽ずして過きし野べの花薄尋ねば道に秋やくれなむ
寄レ月戀　内裏
三獨ぬる身を浮雲の晴ぬ夜や戀せぬ月も陰になるらむ
月照レ竹　内裏
四時雨にも變らぬ竹の綠さへ白くぞ見ゆる秋の夜の月
五河竹に結ぶ氷と見えつるは流るゝ夜はの月にぞ有ける
秋の花ちかく匂ふ
六薫りくる籬をみすば園の中に花咲宿と人やいはまし
旅によせる戀　内
七宵のまは草葉の露にとよせて妻の袂をいかゞ忍ばむ
水のへんの紅葉　内
八紅葉を折べき物をとあさにて船のよらぬぞ割無りける
雪のうちの佛名
九今宵しも散る泡雪はふる年の罪の消べき例なるらむ
祝のこひ
○諸共に千世へむ程の久しさはけふの暮るを待にてぞ知
月
一程もなく入にし宵の月よりもなほ恨めしき有明の空
卯の花
二白波に見ゆる垣ねの卯花は我心とや折りつくすらむ
月夜遠行　樹下
三思知り暫しな入そ秋の月こゝまで人を誘ふとならば
水邊夏草　樹下
四渡たる秋のかもほの夕暮は群居る鷺にわきぞ兼つる
山家月
五此里は此方かなたの山高み見るに程なし長き夜の月
寄レ衣戀
六紫のねずりの衣うらめしき人にやらしほ心そめつも
忍網のちゝのめも悲しかしあらば斯迄君をみざらめやはた
七白菊のなほも賴まじ年をへて心にそめぬ秋し無れば
菊閑中友　樹下
八この花の散なむ後の心をば何につけてか明し暮さむ
雨中のこひ　樹下
九紅葉ばを染る時雨のあたりにや我心さへ色に出ぬらむ
舟中言レ志
一河岸の舟は誓ひて上る哉是や卑せの見するなるらむ
戀
二獨ねて待に久しき鐘の音もうしと思はじ逢む夜の爲
海邊眺望
三是よりは幾らかあらむ夕附日入かゝりぬる沖つ白波
紅葉漸落
四忽ちに散とはなしに紅葉はも日頃をふれば稍すき鳧
寄二擣衣一戀
五うつ聲に哀知らるゝ唐衣つれなき人に聞かすべら也
ある人の消息に云ふ
六いかにして世に廻れとて月影の我を見捨て雲隱るる覽
かへし
七盤るとて思な入りそ世にすまば又も晴なむ冬夜の月
ある人のもとより
八たゆまじと思初めてし道なれば尚ふみ通へ谷の懸橋
人のもとへ
九さりとても慰むべきに非ねども心變れる故を知すや
ある人にやる
○花咲ぬ我身と思よに怪しくも春のみ君が尋ね來る哉
かへし
一花咲む折を賴める我なれば來る春毎に尋ぬとをしれ
花漸少
二打つけに寂しくもあるか櫻花稀に成行くみ山べの里
契不レ來戀
三賴めつゝ君がこぬよの衣手や待かね山の雫なるらむ
夢に逢ふ戀
四とに斯に程なき夜はぞ恨めしき明る別も現のみかは
うぐひす
五鶯の人をのみやは誘ふべき我も古巢に歸らざらなむ
六折るをもし見捨て歸る空もなし花下蔭に身を盡してむ
七ひたすらに風を厭はじ風知ぬみ山隱れの花も散けり
八苗代の荒田を返す暇なみいづらは永き春日なるらむ
九河霧は立にけらしな高瀬舟はたうつ棹の音計りして
○櫻花荒き風なき君が代にとをよせてぞ見べかりける

一此世にて限れる中に有ねども命は惜き物にぞ有ける
二今よりは逢じと書る玉章の其より奥は見やはするゝ
三眞蒲草なべては葬す長きれの千世迄かけむ例とはみよ
これは信成のむすめのあかごのがりはじめて藥玉やる歌
四戀ひわびて多〳〵の年を奥竹の唯一方に歸しと思はゝ
皇嘉門院に女房共供レ花以二百種花一供レ佛可レ被レ
事訪二北政所善提一其中或女房云獻二納花一之日
欲レ相具二和歌一首一可二纖作讀一之
五連葉に消にし露をもらさじと奥を結ぶ花としらすや
菩提山上人に給ふ
六消ぬべき命に懸て頼むぞよ露もわだには思はざらなむ
七花を見る程のみ物を思ねば惜さは如何なべてなるべき
八青柳のあなたに匂ふ花の色は峯こす風の便にぞみる
九爭でかはなべてなるべき櫻散る庭さへ拂ふ風のつらさは
〇待つ時は出ても出す惜む間はいら〳〵に入や有明の月
人にかはりて
一雲の上に朝夕懸くる願をば天照神はいかにしつると
二雲の上吹上にの濱を待象て神のみつかの恨めしき哉
三月影は秋のみ空の心ちして夜こそなけれ絶ま也けれ
草花
四其色と思ひもわかす花といへば秋の野毎にちる心哉
朝遇二野徑一
五あひがてに覺ゆる物は白露の玉ゐる朝のまゝの萩原
月照二落葉一
六柱原雨とこの葉の降るまゝにもりのみ增る月の影哉
月前懷舊
七昔共にみし人いかに成にけむ月は昔に變らざりけり
旗宿月
八故里を思ひやりつゝ詠むれば心一つにくもる月かな
刑部卿忠盛みまかりて後長月の二十日ごろにか
のあたりの人のもとへ申し遣しける
九秋風のみにしむよはの寢覺には如何と問し人ぞ悲き
母のことにて山寺にこもりてゐたりける人をと
ぶらふとて
一〇歎くらむ袂はみねど身をつめば如何露けき秋の夕暮
九月盡
一一あすよりは小田の鳴子も引卷て時雨の音にならむとす覽
深夜時雨
一二小夜深み時雨て渡る音聞けば思も分かで物ぞ悲しき
旅宿雪
一三よそに社かひの白嶺は消たつる幾夜に成ぬ雪の下氷
懸
一四枝かはす契はこりぬ後世も斯る歎きの身とも社なれ
一五君もうし逢すば我も忘れなで離面き人ぞ二人也ける
海邊旅宿
一六みさごゐる磯の松がね枕にて潮風寒く明しつるかな
一七世の中の人の心のうき雲にくもがくれする有明の月
海路曉冷
一八波路島沙のとゝひを待程に涼しくなりぬせとの夕風
海上晚望
一九なのよりお前の沖を見渡せば波まに消る蜑の釣舟
無常
二〇昔みし人はさながら薄氷思ひしとけば昧氣なのよや
二一明行けば葉末にのぼる白露の風待程や我身なるらむ
山海空弔也
二二さりともやへの潮路に入しかどそこにも老の波はよる

相如集

出雲守にて後つかさなし歳人にて春宮に候へし
女に
一顧事をきかぬ物から千早振神てふ神は君につきにき
筆まつを取らせたるを少なしといふ人に
二一つして十に書くともたらじかしつくまに祭る□
これのりの少將のもとに行きてとのものゝかうばしかりしかば
三我妹子がみ馴衣の移香をひとへねたりと人ぞ咎めし
人のもとより
四數ならぬ人の一重に山吹の八重九へと爭でしるらむ
かへし
五九重にやへ山吹はしりたれどそへいへは君ぞ敎へし
あだならむといひし人に
六稻舟の否みな果そ最上川水馴ばこそは流れても見め
七月六日
七あすは人ゆゝしと云也最上川明ぬ此方に逢見てしがな
ものいうて中絶えたる人のもとにゆきたるにふ
すべがほなれば
八今更に何武陵のたけからむ心の內にまづはおひつゝ
くらのかみ相信の服ぬぎし日
九藤衣はづるゝ袖の絲よわみ涙の玉のぬきぞみだるゝ
一品宮うめつぼの萩の花くらべさせ給ひしに
一〇比ぶれど增らざり鳥花乍らこの宮城野の萩の下葉は
おなじ數人のころ御文あけてみたりとて歸ある
べしと聞がるゝに
一一雲の上高くみゆれば天川ふみゝぬせにて身をや沈めむ
人のもとに人の
一二あだどの絕間やなど〳〵葛城のくめぢの橋の中ならなくに
これを見て
一三葛城やくめぢの橋の其中のとは絕えにとはゝ恨渡らむ
をりしらず

二七たとふるも心ある物を岩橋の一言主は渡らざらなむ
　枇杷殿にてこゆみのかけ物にせられたる
三七住吉の岸に咲てふ藤ならで何をか春の末にかくべき
　かへし
四七住吉の岸ならずとも藤波の心を我にかけてみよかし
　物いふなかにいかにも〳〵いつといひやりなるにたゞいなとのみあれば
五七最どしく頼まるゝ哉最上川習し計のいなをみつれば
　宮の御事にて騒がれしころ人をとらへてせちにあるまじきよしをいへばゆるして又の日
六七陸奥の奥を思ひはゆるしゝを我武隈と思ふらむやそはらへのつかひに難波に行きてもどりといふ浮れめにつきて
七七津の國の難波の蘆の仄にもねにきと人に云つべき哉
　同じもどりにやる
八七行末は命もしらず夢ならで覚れのよにか又は逢べきむすめにすはうのかみながきよ
九七苗代に淀みし水を打返し影はこひぢにおり立にけりかへし
〇八おり立て斯とし聞けば小山田に立るそうゞの心ち社すれ
　因幡へくだると聞きて
一八吹風につけても悲し因幡なる稲葉に懸る露の身なればかへし、親
二八露の身の稲葉に懸る程もなく己が軒端を見する也鬼
　堀河の中宮のたくみの藏人に兵衛のぞうなる人住むときゝしに
三八柏木の森の下行く自らにくもらばとか人のいふめる
　人のうめこひたるやとて
四八知じかし花なる人の心には斯る歎の身になれりとも
　わかかりし時女三宮にをかしといはるゝ人にいかでものいはむと思ふにをさなきちゝの扇に女をこのかたを書きてもたるにたがそゝとへばその人のといらふればかく書きつく
五八云出でば空もやはぢむ大和なる姿の池の影の違はぬ
　返しうめのさるをつくりて
六八大和なる姿の池にうきさるの増るを君が影と社みれたちかへり
七八かく云どかるきが池に底の猶影の移れどさると社みれ

二三三八

程へていかにぞと云へごいらへなし
八八疊東な絕て物をぞいはしのよ眺ら渡りにあらじとぞも
　常にいひたはぶるゝを始よりの人あれば煩はしがりていらへもせぬをとのゐしてつめてありくちをしくてみかうしはなちて手を叩けばふとよりきたりにげて歸りぬみかうしあくる人にたれぞとへば朝顔にさして
九八露のとく起てみつれば朝顔を憎げ也とぞ思ひぬる哉
　心にくゝ思ひつるといへりし返し
〇九打解けて己が垣根の朝貌を我身ぞ爭でひと覺すらむまたかへし
一九我宿の垣根乍らも老のよにいさまだ斯る朝貌はみずいきことなし給ふとあるねたしとてかゝみ草にさして
二九朝顔のよそ社あらじ影映る鏡草をそこにみつらむ
　又かへし
三九かゝみ草ありける物を朝顔を思ひも知らぬ人の心よ
　女いとあやしかるぞしり給はぬかとて
四九一つだにすへて心の無人は己が影とも非ぬとやするまた返し
五九我にだに影を並べば鏡草その朝貌はみもなほしてむ
　ねたがりてかゝみのかたにかみをしてをかしげなる女どさるのゑばうしゑたるとかきならべて
六九並べてもゐさは君社增鏡さるや移れる影にても見よ
　兵部卿宮御前に人々多かるにもていで〳〵始よりの事を語り聞え煩ふいと口ごはかりけりとて
七九にくげなる面貌よりは鏡草心をみるに思ひかゝりぬ
　逢ひがたきことなむ思ひぬるとていまはすまひとらむといへば、女
八九朝貌のうつる計の思草思ひかゝるはまくるなるべし
　何事にもかつ事あらじとはいへり、男
九九まくるとし人の思はゞ同名を玉まく葛と中を出なむ
　二日ばかりありてやる
〇〇底深く思心はあしまよふうきにも映る影をみしより
　八月に兵部卿宮九の宮人々あまたして文作る草むらになく蟲聲高けれどなく雁よりはといふ題を聲はいと聞きにくし人々笑ひて例の人
一〇草村になく蟲よりは高けれどよくも聞えぬ雁の一聲

二三四二

すけゆき
二〇我も又玉章かけぬ雁なれば病さるまの聲にや有らむ
　女
三〇爭でかはかりにもかけむ玉章を作り煩ふ君と社きけかへし
四〇魂もなくなる迄に一め我いひ殺してし人はいけるかかねゆきの兵衛佐に琵琶ならふを立ち聞きて
五〇人事はよく倣けるをいかなれば我にあふねを知せざる覽
　女
六〇調べつゝ君が爲には逢事の返しの聲は聞もならさじ
七〇絕るよも泣々思ふ琴の音に常にならさむ人ぞなからむ
　枕かへるとて
八〇君に爭で並べてみむとよと共に思敷妙今宵とめてむ
　こと女の四月一日うすさのといひたるに
九〇最どしく暑くこそなれ夏衣きる人からや涼しかる覽
　女三宮大納言の君にかれゆくとて怨みらるゝ頃
一〇歎ならぬよを浮舟の寄べなみ導の灘のなぐを社まて
　同じとちみなき所にきたりしに
一里もなく知べだになき山道に木の本爭で人宿るらむ
　加茂の祭の日しりたる車に橘やるとて
二かをとめて昔の人を尋ぬればけふは葵に成にける哉
　はやうみし人の鏡をかりて歸りに
三鏡山あさたつ霧は曇れども見そめし影は清かも
　忘れにし女のもとより
四我ながら我からぞとは知り乍ら今一度は人を怨みむかへし
五忘れぬときかばぞ我も忘るべき同心に契りこしかば
　大納言の君まだしかりし時のことなるべし
六逢事をたなゐる君を岩の上に任せてみるは久しかり鳧
　堀河の中宮のひとのを(筆)のかたりあかして
七儚くて明石の浦にあさりする蟹の釉ともほゝ今朝哉
　かへし
八漁りする蟹によそふる袂をば猶きたりとや懸て云まし
　はつかに物いふ人に
九蜻蛉の水にとわたる蚤よりも儚なくみしは夢か現か
　一條攝政にて師走のつごもりにかたねのまねしてさみしきまゝにおうばうごとするにかどのもちひ人にさえかしひにいださせ給ふいひつけて

歌絡
戀する人にくやうするとあるに、すけゆき
○二集りて物な思ひそをのこ共あけびみかどの餅也けり
花山の帝うまれ給ひて後ごろなればいとめでたう興じて物かづけられけりとかやをもしらずすけあきらがもとへやりし
一きてもみる人し無れば我宿の紅葉はよもの風に任せつ
こう二位の大將どのゝさぶらひの人々どもさみしかりとてすけゆきかげあきらが許にいひやりたれば相如がかもの菜物の中にせに二ついれて
二乏しき誰が心はと人とはゞいざ白菊の露となだつや
二條殿栗田右大臣うせ給ひてあはれ限なしかし
三夢ならで又も逢べき君ならばねられぬいをも歎かざらまし

従三位頼政卿集

春

立春
一二逢坂の關にし春を留めてば山の此方は霞まざらまし
同じ心を俊成卿の家の十首の會の内
一三冬籠る吉野の山のいはやには苔の雫に春を知るらむ
おなじ心を實國卿の家の歌合
一四珍しき春にいつしか打解けてまづ物いふは雪の下水
故郷霞、歌林苑の會
一五ほのかにも梢は見えし故郷を思ひやらする朝霞かな
霞、播州の歌合
一六引きわたす大原山の横霞やぐにのぼるや畑なるらむ
霞隔二關路一
一七春くればまづぞ立ける相坂の關もる物は霞なりけり
おなじ心を
○一八宇治路ゆく末こそ見えぬ山城の木幡の關　霞單つゝ
海邊霞　大貳重家卿の會
一九春霞へだつる頃は白波のこゆとも見えず末のまつ山
同じ心を
二〇あさぎぬる海上潟を見渡せば霞にまがふ信太の浮島
晩霞、公通卿の十首の會の内
二一狩行けば交野の御野に立鳥の羽ぎはも見えぬ夕霞哉
鶯
二二よる巣より若木の梅の初花にわたり初むなる鶯の聲
竹間殘雪
二三呉竹のよな〳〵雪の稍消てもとの幾ふし又歸るらむ
池水浪靜といふことを歌林苑にて
二四春風や波だつ計りふかざらむ片寄りもせぬ池の浮草
松上鶯
二五若和布かる春にしあれば鶯も木傳ひわたる天の橋立
毎朝鶯を聞くといふことを二條大宮にて人々よみはべりしに
二六日數ゆく旅の庵を立つ毎に聞捨て難きうぐひすの聲
ある宮腹なる女房に申し語らひて時々罷り通ひける程に芦分なる事や有りけむ久しう罷らざりしかば二月の朔日頃梅の枝につけて遣しける
二七來まずは偖も散なむ梅の花猶まち顔に匂ふ樣見よかへし
○二八梅花ちらば散なむ散て後それ故ならで行むと思へばよろこびして侍りける頃あひ知りたりける女の悦び遣さゝりしかばつぼみたる梅の枝に附けて云ひ遣しける
一二九まだしきや梅をみつゝも訪ざらむ開くる物を我が思はかへし
二三〇兼て我が思開くる梅が枝に習ふ人なき身なるべしとは
隣家梅、清輔朝臣の家の會
二三一枝も折らぬ隣の梅の花匂は得たるこゝちこそすれ
新院の御時里内裏におはします頃大内に候ひけるが綾綺殿の前の梅の花盛に侍りけるを小舍人してをりに遣しける枝に結びつけて奉りける
二三二九重の内に匂へる梅の花とへは散さじと思ひし物を
かへし、兵衛内侍
二三三九重の同じ御垣の内なればあだには散ぬ花と社見れ
年ごろすみはべりし所を大宮の御所にかへめされて次の年の春梅さきたるよしを聞きて下枝に結びつけさせはべりし
二三四昔ありし薬屋は宮に成にけり梅もやことに匂増らむ
返し、よみ人しらず
二三五みさへなり散で巳べき花見れば宿の梢は待れざり鳧
梅の花昔を忍ぶつまもやと待ち顔にこそ匂ましつれ
梅花薫二窓中一
二三六こち風の梅吹方に窓をあけて匂を閨の内に入れつる
二條院の御時、禁中柳垂
二三七紫もあけもつらなる庭のおもにまだ翠なる玉柳かな
雨中柳、伊賀入道の會
○二三八降雨に柳の髪を洗はせて梳り流すは風にぞ有りける
鶯
二三九谷ちかき宿に來鳴くや鶯の里なれそむる始なるらむ
梅契二多春一
二四〇萬代の春迄さかむ宿の梅を命もがなやたをり翳さむ
鶯爲二春友一
二四一谷にても終の友にや鶯のまだきに來つゝ我ならす覽
待レ花似レ戀
二四二妹がこゝ戀しき花の開けなば我社さゝめ閨の挿頭に
二月二十日頃に大内の花見せよと申す人に未だ開かぬ花につけて遣しける
二四三思ひやれ君が爲にとまつ花のさきも出ぬに急ぐ心を
かへし、小侍從
二四四逢事を急ぐ也せば咲やらぬ花をば暫し待もしてまし
南殿の花見に大納言實房卿女房あまたひき具して大内に參りて侍りけるにいひ遣してはべりし
二四五あだならず讓る御垣の内なれど花社君に障ざりけれ
かへし
二四六九重の内まで人を導入れば花吹風をいかゞいさめむ
南殿の花盛にさぶらひける頃内の女房里内裏より見に參りて歸りさまに扇のつまをとりて書きつけて花のしづ枝にさし挿されたるを見れば
二四七百敷の花に心を留めおきて歸らむ道にふみや惑はむ
かへし
○二四八花に飽で道に惑はゞ留めけむ心の方へ歸れとぞ思ふ
二月朔頃に花まだしき程に奈良より造りたる櫻をませくだ物の上にかざして遣したりけるを獨り見むが口惜しさに向ひなる所に櫻の梢の見ゆるがまだ咲かぬ程にあるじの許へ此の造り花を遣すとて
二四九君がすむ宿の梢のさかぬまにめづらしかれと花奉る
かへし

花

三六櫻花見るにつけてぞ懐しき散なむ後のかねて情さに

春月、經盛卿の家の歌合

四六暮ぬまは花に頬へて散しつる心あつむる春の夜の月

花下月明、右大臣の家の歌合

五六花故に長しと思はぬ春の日を頓て暮さで見する月哉

春あづまの方へまかるに花の咲きたるを見て

六六東路や春の迎ひに行く旅は咲あふ花にえこそ誓はね

人々あまた具して花見はべりしに法性寺にて

七六咲優る梢やあると尋ねすば長閑に宿の花は見てまし

白河にて人々花見はべりしに

八六自ら花の下にし休らへば逢ばやと思ふ人も來にけり

深山花

九六み山木のその梢とも見えざりし櫻は花に顯れにけり

〇七山櫻散もちらぬも白雲のかゝる限はえこそ見分かね

隣なる所に櫻の咲きたりけるが梢ばかり見えけ

ればあるじのもとへ

一七櫻咲梢を見れどよそなれば其方の風を待としらなむ

かへし

二七花さそふ風を待得て嬉しくば頓て隣の厭きとを知れ

尋二山花一、宰相入道の歌合

三七花誘ふ山下風の香をとめて道にもあらぬ道をふむ哉

遠尋レ花

四七悔しくも朝ゐる雲に計られて花なき峯に我はきに鳧

水邊櫻

五七咲〳〵影の水に宛ら移れるは花の委の池にぞありける

櫻を、重家卿の歌合

六七近江路や眞野の濱邊に駒止て比良の高嶺の花を見哉

同じ人のもとにて花の歌とて

七七散果て〻後や我身に歸り來む花さく宿にとまる心は

花、播州の歌合

八七櫻ばな咲ける盛は梢より外に心も散らずぞありける

花

九七散ぬれば程を隔つと思へばや且見る花の兼て戀しき

〇八我宿の花はねたくや思ふらむよその梢にわくる心を

一八常よりも花の梢のひまなきは立やならべる峯の白雲

二八櫻さく梢は空の白雲にまがひし花のゆきと降りぬる

三八けふ幾日同じ所にゐる雲と見ゆるは花の盛なりけり

人々白河の花見られしに歡喜光院の花の下にて

歌よみさふらひしに

四八年毎に哀とぞ思ふ櫻花見るべき春のかずもうすれば

尋レ花の心を歌林苑にて

五八尋ね來る我こそ花を花と見れ人のよそ目は峯の白雲

歌林苑にて人々花の歌よみさふらひしに

六八花咲かば告よと云し山守の來る音すなり馬に鞍おけ

大内の櫻さかりに咲きてさふらひしに雨の降る

日に侍從がもとへ遣しける

七八今日は雨明日は雪と成ぬべき雲居の櫻見む人もがな

かへし

八八雪とだに見べき花のなどやさは雨休れど降むとす覽

逢二櫻夫一間レ花の心を歌林苑にて人々よりはべ

りしに

九八折くだる爪木こるをに物申すかの峯なるは雲か櫻か

老後見レ花

〇九古はいつも〳〵と思ひしを老てぞ花に目は止りける

おなじ心を

一九是きけや花みる我を見人のまだ有けりと驚かす鴈也

二九散方に成にけるこそ惜けれと花や却りて我を見る覽

歸雁

三九今はとて春の田面を立雁の雲に消行く方をしぞ思ふ

おなじ心を、輔輔朝臣の歌合

四九天つ空一つにみゆる越の海の波を分ても歸る雁がね

湖上歸雁

五九歸る雁聲をほに揚る時しもあれ南より吹よごの浦風

大納言實國卿南殿の花見に參りて歸られて後た

れともなくて文をさしおきて使は歸りにけりあ

けてみれば

六九我が身は歸るばかりぞ木の本にとまる心と物語せよ

返しもしさにやと推し置りて遣しける

七九歸ぬる憂さは花にぞ慰へつる留る心はみえば社有め

八條院歡喜光院におはします頃櫻やう〳〵咲き

始めてはべるをみて花半開といふ心を人々よみ

はべりしに

八九取添へて植し櫻の先さきに一木咲にぞ二木とはみる

地下にてはべりしに南殿の櫻さかりなる頃上達

部殿上人參りて禁庭花の心をよまれはべりしに

九九手も懸ぬ雲居の花の蔭にゐて散庭をのみ我物とみる

水上落花

〇〇吉野川岩瀬のなみによる花や青ねが峯に消ゆる白雲

落花

一〇吹き散す梢の花を天の原風さはに降る雪かとぞみる

同じ心を、按察使公通の會

二〇散りはて〻梢の花の戀しきに我なぐさめよ峯の白雲

未殿上を許されぬ事を歎き侍りしに二條院の御

時三月十日頃に行幸なりて南殿の櫻盛なるを一

枝をらせて去年と今年といかゞあると仰せ下さ

れて侍りしかば枝に結びつけて參らせ侍りける

三〇よそにのみ思ふ雲居の花なれば餘ならで見えば社あらめ

かへし、丹後内侍

四〇さのみやは餘ならでみえざらむ雲居の花に心留めば

於二船中一見レ花

五〇櫻さく磯山近くこぐ舟のかた乘せぬは有じとぞ思ふ

谷櫻

六〇懸渡す木曾路の橋の絶間より危ぶみ乍ら花をみる哉

櫻を、季經朝臣の家の歌合

七〇尋ねじと宿に櫻をうゑしかど覺束なみの春の山邊や

尋レ花

八〇山櫻尋ねみるまに宿なるは身を恨みてや散むとす覽

三月十日餘の程に内の女房里内裏より大内の南

殿の花見に上達部殿上人など引き具して參りて

出でざまに散りたる花を掻き集めて遣すとて

九〇花故に風な厭ひそ散らばこそ掻集めても家苞にすれ

かへし

一〇〇古も伴の宮つ子諫めけれ散る花とても家づとにせな

かくて後夜に入るまで此の人々遊びて更くるほ

どに出でらるとて陽明門より人をかへして云ひ

遣してさぶらひけり

一〇一散積る花は幾ちと人間はゞ風の拂ていにしとをいへ

かへし

一〇二散花を風におほせてなしと云ば同名ぞとや吹むとす覽

春野、歌林苑の會

一〇三冬枯の野邊のにひやけ程ふれば又早蕨ぞ萌出にける

折レ蕨遇レ友

一〇四珍しき人にも逢ぬ早蕨の折らまく我も野邊に來に鳧

落花客稀、歌林苑の會

一散ざりし程はまもなく來し人の花踏分くる跡の乏しさ

水上落花

二山櫻ちりにけりとは初瀬河末くむ里の人や知るらむ

落花、按察公通の十首の內

三花は皆ちりぬと思ふかなしきにわれ慰めよ峯の白雲

同じ心を大內にて南殿の花の下にて上達部殿上人よまれしに

四はだれ雪降かとみれば九重に散重なれる花にぞ有ける

故郷花、伊賀入道の會

五なはの海の沖行船ぞ過やらぬ高津の宮の花やみゆる

藤の花を歌林苑にて人々歌よみはべるに

六藤波も汀に寄する音も也かくれる松に風やふくらむ

おなじ心を

七あだならぬ松の枝毎に咲花の散にぞよその藤と知ぬる

大內にて殿上の人々藤花映レ水といふ心をよみはべりしに

八住の江の汀に松の傚りせば二木に藤を懸てみましや

藤花留レ客

九見人をなどや歸さぬ藤花遲まつはれよとかは敎へし

杜若

一〇さらぬだに行方もなき沼水のめぐりにたてる杜若哉

鄙鶯をよめる、經盛卿の歌合

一一今日ぞみる鶯坂山の白躑躅いかで佐保姫染殘しけむ

瀧下款冬

一二瀧の糸に貫止られず散玉を受くる袖かとみゆる山吹

隣家款冬

一三山吹の色をうらやみ中垣のあなたにゐてと思ふ頃哉

春殘二一日一といふ心を

一四惜め共今宵もふけぬ行春をあす計とや明日は思はむ

三月盡

一五春もはて花も同く今日ちらば度々物は思はざらまし

山三月盡

一六あるじこそ山がつならめけふ春を限としらぬ遲櫻哉

夏

六位にてはべりし時更衣の心をよみはべりしに

一七夏衣みどりの色も變りせば心のうちや涼しからまし

更衣、大納言實國卿の歌合に

一八今日やさは卯花色の白襲春の躑躅に引きかへつらむ

卯花

一九神祭る頃にもなればうつ木さす小屋の袖垣花咲にほふ

暮見レ卯花一、歌林苑の會に

二〇今日も猶卯花山は越ぬべしその咲色のくれば社有め

卯花、季經の朝臣の家の歌合

二一卯花の垣根也けり五月雨に雨晒しする布と見つるは

二二卯花隔レ水

二三卯花のみつの垣根に咲ぬれば霖に渡す淀のわたりを

夜鵜河

二四櫂くだす鵜舟に懸る篝火の見えぬ夜も無きしもつ閭哉

旅宿郭公

二五哀さは思ひしことぞ郭公なく庵をばあさだちもせず

月前卯花

二六照月に色はとられて卯花の下枝をのみぞ垣根とは見る

閑四月卯花

二七菖浦草ふくべき月を卯花の奪ひて猶も咲かとぞ見る

人傳郭公

二八郭公聞つと語る人をさへ又もや來ると待ぬ夜ぞなき

待二郭公一、公通卿の十首の會の中

二九戀するか何ぞと人や咎むらむ山郭公今朝は待つ身を

夏草

三〇小鹿ふす夏野の草を分行けば踏れに鳧な可惜萩さへ

瞿麥を、幼なき者にたぐひて

三一撫子を我身の末になる儘に露のみ置む事をこそ思へ

竹風夜冷

三二押のくるよはの衣を戰ぐなる竹の葉音に引着つる哉

竹の陰に涼むといふ心をよみはべりし

三三呉竹のあたり涼しき轉寢に我さへふしを並べつる哉

待二郭公一の心を人々よみはべりしに

三四郭公空にも道を定めせば其の一すぢを待たまし物を

おなじ心を

三五待けりと我もや聞む郭公ながなのらせば名告返して

郭公を、公通卿の會

三六香をとめて山郭公おちくやと空までかをれ宿の立花

三七なく聲のさえ果つるまで郭公山遠方を詠めこそやれ

三八郭公なく音遙にほのめくは五百重の雲の上やすむ覽

寢覺に時鳥を聞きて

三九郭公聞き始めたる寢覺にはおとろく上になほぞ驚く

念佛の隙に待二郭公一といふ事を人々よみはべりしに

四〇西のみかずゝを打置く隙もあれば又願はるゝ郭公哉

海路郭公

四一諸共にとわたりすなる郭公綸言へいなば鳴聲もをし

三位大進清輔の家やけて後五月郭公なくを聞きて申し遣しける

四二語ひし家はなしとて郭公君を尋ぬときくやきかずやかへし

四三郭公いつも音せぬ習ひとて宿の鳥とも思はざりけり

深夜郭公

四四待ちまたむ人の心を見むとてや山郭公夜をふかす覽

郭公、前兵衛佐經正の家の歌合

四五待けるも待ざりけるも子規聞氣色にぞ見え分れぬる

夏草、同じ會

四六春過て幾日になれば眞菰草あさりし駒の食み返る覽

寢覺の郭公の心を人々よみはべりしに

四七轉寢の夢に聞きなす郭公うつゝの空になごり鳴くも

郭公、法輪寺の百首の中

四八郭公まだ社きかね我は世にあふちの花の盛ならねば

四九世の中を過がてになけ郭公おなじ心に我もきくべき

五〇一聲はさやかに過ぎて郭公雲路遙にとほざかり行く

五一杜鵑飽で過にし名殘をば月なしとても詠めやはせぬ

野徑郭公、範兼卿の家の會

五二鳴きくだれ富士の高嶺の時鳥裾野の道は聲も及ばず

むかひなる所に櫻多く咲きたる梢をのみ見て過ぎはべるほどに五月になりて郭公の鳴きければ

隣にきくらむと思ひて

五三子規きけばきくらむ見れば見し隣の花の梢のみかは

かへし、幸相中將

五四郭公共にはきけど猶來ませ下枝迄とて花もさぞ見じ

五五五月十日の頃に郭公のしげく鳴くを聞きて別當入道の許へ遣しける

五六郭公語らふころの山里は人とはずとも寂しからじな

かへし

五七時鳥かたらふことを山里は都の人とおもはましかば

夕郭公

[七]今日もまた山路に柴の庵してとまれば過る杜鵑かな
同じ心を
[一七]槇の戸を暫しなさしそ時鳥閉つやと問ふ人も社來れ
月前郭公
[二七]一筋に月見る程の心をぞ山ほとゝぎす空にわけつる
山家郭公、法住寺殿の會
[三七]都には待つらむものを郭公いづるを惜むみ山べの里
郭公漸稀
[四七]今更に猶まととてや郭公五月のするの聲のともしき
五月雨の頃内にさぶらひて罷り出でたる夜珍し
く月のあかゝりしかば大宮に小侍從さふらふと
聞きて近き程なりければ申し遣しける
[五七]雨雲の晴間に我も出でたるを月計りをや珍しとみる
かへし
[六七]雨のまに同雲居は出ねもり來ばなどか月に劣らむ
盧橘薫、閨、歌林苑の會
[七七]薫りくる花橘の道をあけて忍ぶ寢床を人に知れぬる
盧橘薫遠、法住寺殿の會
[八七]誰が里の花橘の匂ひぞと訪はましものを風の答へば
五月雨
[九七]梅雨の日をふる儘にいかなれば池の水草の淺く成覽
六月十日頃に更戀公といふ心を讃岐の院にて
人々よみけるに女房にかはりて
[〇八]時鳥今は鳴じと思ふ夜は待しよりけにいね寢られぬ
水風如秋
[一八]浦風の吹上に立る涼しさに秋かとぞ思ふ志賀の辛崎
江上蚊多、鳥羽院の北面の會
[二八]いさや其蚊の數は知ね共玉江の芦の見えぬ葉ぞなき
水雞
[三八]水雞とは思も敢ず明に鳧人まつ宿のよはの戸ざしは
水雞驚v寢
[四八]心なくわれ驚かす水雞哉又まどろまば又なはかりそ
寺邊水雞
[五八]荒果て立つる戸もなき古寺を叩くはよはの水雞也鳧
連夜鵜河、歌林苑の會
[六八]桂女や新枕する夜な〳〵は取られし鮎の今宵取れぬ
河邊草深、二條院の御時女房にかはりて
[七八]小船いる津田細江にさす竿の末ぞ見えゆく草隱つゝ
泉
[八八]大原やせが井の水を手に掬て幾結びせば秋に成らむ
泉邊翫v月、右大臣の會
[九八]圓居して岩井の水を結ぶには手毎にぞいる弓張の月
夏月
[〇九]庭の面はまだ乾かぬに夕立の空さりげなく澄る月哉
水上夏月
[一九]浮草を雲とや厭ふ夏の池の底なる魚もつきを詠めば
水邊納涼
[二九]夏も猶雪解の水の末なれば不二の河こそ冬心地すれ
杜邊納涼
[三九]名を聞に思做すにや和泉なる信太の杜の陰の涼しさ
夜五月雨と云ふ心をよみはべりしに
[四九]螢走る山の末野に假寢して空怖ろしきよはの五月雨
大井河の邊にまかりて遊びはべりしに河邊夕涼
といふ心を人々よみはべりしに
[五九]暮ぬるか遠の山陰渡り來て今ぞ戸無瀬の河べ涼しき
[六九]夕顏の心を述懷によせてよみはべりしに
[七九]世の中を後ろになせる山里にまづさし向ふ夕顏の花
[八九]我に劣る人こそ無れ山里に夏を引おりしはふるひ人
[九九]山賤の小屋の後への畑にまく哀我身をいか樣にせん
秋
萩
[〇〇]目に見えぬ風の來らば告よとて植てし萩ぞ契違へぬ
[一〇]秋風の身にしむ事をよ〳〵とうなづく萩ぞ諸心なる
草花露重
[二〇]枝弱み露の白玉もちかねて夜もふす野べの女郎花哉
薄
[三〇]あさせなき大河島の花薄招くと見れどえこそ渡らね
大内にて禁中萩といふ心を人に代りてよみはべ
りける
[四〇]山吹や菊も重なる數はあれど優りて見ゆる九重の萩
草花催促
[五〇]出にけり仇の大野のわさ薄まだ傍らのこと花もがな
萩
[六〇]我宿の萩をばよきて殊もなき淺芽が末に秋風ぞ吹く
萩野
[七〇]宮城野の花の盛に下り合て音にきゝこし萩を見る哉
旅行聞v雁
[八〇]旅なるは我し獨と思へども雁も雲路を幾日とぞなき
霧隔二行船一
[九〇]艫収し小舟も見えでたはれめが聲計こそ霧に隱れね
女郎花近v水
[一〇]なみ立るこの河岸の女郎花咲き渡ればや露けかる覽
野徑眺望
[一一]暮ぬとて人ぬる野べの女郎花いまさば花の朝形見む
草花の心を、歌林苑の歌合
[一二]かり衣我とは摺らじ露しげき野原の萩の花に任せて
月前草花、法住寺殿の會に
[一三]隈もなき月やまばゆき己が枝を翳して立る女郎花哉
鹿、歌林苑の會に
[一四]草隱れ見えぬ小鹿も妻戀る聲をばえ耐忍ばざりけれ
鹿聲遠近、法住寺殿の會に
[一五]稻荷山峯かとさけば杉の庵の窓の前にも小鹿なく也
夜泊鹿、歌林苑の會に
[一六]泊いでゝ夜舟を漕げば島砂の尾上の鹿の聲ぞ消行く
秋花勝二春花一、範兼卿の家の會
[一七]秋までも面影にさく櫻花野べの色見て後ぞ散り行く
閑餘秋月、法住寺殿の會
[一八]名に高き月は二夜を見よとてや今年に秋を延るなる覽
鹿聲何方、同
[一九]鹿のなく方をもえこそ聞分ね今は耳さへ朧ろ也けり
尋二紅葉一、同
[二〇]誘ひつる人にも告で先さきに立田の山の紅葉を見む
[二一]露凝ぐ山路の菊はうらうへの袴にさへぞ移ひにほひける
故鄕刈萱
[二二]よりかゝる籬も荒て刈莚の亂れも知らず打臥にける
隣家晩萩
[二三]風吹けば中垣敲く萩の葉を黄昏時に訪はせつるかな
待v月
[二四]出ぬまの山のあなたに思越す心や先に月を見るらむ
月、法性寺殿にて人々十首の歌よみはべりしに
[二五]終夜寒えゆく月を山の端に送りつくるは心なりけり

同じ心を
五二月清み今宵ぞ見ゆる水底の玉藻に集くさいの數さへ
月待ㇾ秋勝、左大臣の家の會
六光をは秋の爲とやをさめけむ取出たりと見ゆる月哉
月、經盛卿の歌合
七殘るべき垣根の雪はまづ消て庭は積ると見ゆる月哉
海邊月
八住吉の松の木ずより見渡せば月落かゝる淡路島やま
同、伊賀入道爲業の會
九浦づたひ鳴尾の松の影に來て又隈もなき月を見る哉
三井寺に歌合しはべりけるに人々に代りて月を
詠みはべりける
一〇月清み忍ぶる道ぞ忍ばれぬ世に隱れてと何思ひけむ
月、小野宮の會
一一秋夜も我世も痛く更ぬれば傾く月をよそにやは見る
八月十五夜
一二名に高き秋は二夜と知乍ら先見る月にしかじとぞ思
同じ心を、歌林苑の會
一三月は唯今宵をのみぞ待たれつる過ぬる方や山の端ならむ
八月十七夜の月常よりも隈なく見えはべりしに
むかひの中將のもとより
一四我見ても類ひ覺えぬ月の夜は獨ぬる人ぞ先訪れける
かへし
一五七十の秋に逢ぬる身なれ共今宵計りの月は見ざりき
經盛卿賀茂にて歌合しはべりけるに參りあひて
同じ心をよめる
一六影宿す御手洗河のさやけさは月もや今宵天降るらむ
教賴住吉にて歌合しはべりけるに社頭月の心を
一七一すぢに仰ぐ心を住吉の空ゆく月にわけぞやらるゝ
月終夜友
一八有明の月もや我を惜むとていらぬ先には入じとぞ思
雲間月
一九終夜絕間〳〵ぞ待たれける雲より雲にうつる月をば
清輔の朝臣の家の歌合に月を
二〇雲もなく山のはもまた遠ければ月故今ぞ物は思はぬ
月、歌林苑の會に
二一曇なく荒たる宿に眺むれば我もさやかに月に見えぬる
同じ心を
二二今夜たれすゝ吹風を身に占て吉野の嶽の月を見る覽
月、重家卿の歌合に
二三月影は埋もれぬとや思ふらむ雪にならへる越の里人
海上見ㇾ月、左大臣の家の會に
二四照月を雲な隔てそ夜舟こぐ我もよるべき島隱れなし
關路惜ㇾ月
二五人月ぞ常よりもげに惜るゝよし足柄の關を越ゆとて
旅宿月
二六雨にこそ庵はさゝね更科の月に障りて幾夜とまりぬ
九月十三夜法性寺殿の會
二七津守より廣田へ渡る商人の今宵の月をめでさらめやは
おなじ心を
二八斯計さやけき月を命あらば又こむ年の今宵もや見む
水月、右大臣の家の歌合
二九影だにも堰に暫し淀まなむいらば小倉の山の端の月
水上月
三〇ゆふは川わだみに澱む水の泡の廻るも見ゆる秋夜の月
野風、右府の家の會
三一心にもあらでや招く花薄秋の野風にそゝのかされて
夜鹿
三二夜を籠て立さる山の裾にしも鳴てや鹿の人にしれぬる
水上月、公通卿の家の會
三三月影を氷と見れど識訪の海に上踏む冬はまだしかり鳧
野風、同じ會
三四吹おろす嵐やまなき小鹽山裾野の草のかた靡きなり
促織蟲
三五終夜機おるむしは淺茅原露ふきむすぶ風やさむけき
野宿月
三六秋の野の尾花かりふく庵には月計りこそ相宿りすれ
江上月、歌林苑の會
三七いざや子ら難波堀江の芦かりて宿れる月に隈もあらせじ
寄ㇾ月述ㇾ懷
三八天の原朝ゆく月の徒よにあまさるゝ心地こそすれ
同、右大臣の家の會
三九落かゝる山の端近き月影はいつまで思ふ我身也けり
湖邊見ㇾ月
四〇こぎ出て月は眺めむ小波や志賀津の浦は山の端近し
霜夜月
四一馴にけむ同じ雲居の月影に猶一つなる庭の霜かな
海邊曉霧
四二貝ふむと汐干にたてる難波女が歸る葦邊に迷ふ夕霧
閑居霧深
四三霧分て訪人もなし鹿のふむ庭の木の葉の音計りして
寄ㇾ月述ㇾ懷
四四清かなる月の光を知べにてよにふる道を過ずもがな
月照二己屋一、歌林苑の會
四五嵐から荒たる宿の癖なればおろし籠ても月は見え鳧
藏人おりてはんべりしころ夜半月といふことを
人々よみはべりしに
四六ね一つと今やさす覽雲上の月を見るにも忌られぬ哉
遍照寺の月を見て
四七古の人はみぎはにかげ絕えて月のみすめる廣澤の池
草花、經盛卿の歌合
四八折果てぬ花こそ有め秋の野に心をさへも殘しつる哉
女郎花
四九一本と定めてぞ見し女郎花はな異心あらじと思へば
五〇無名のみ餘の野邊の女郎花露の濡衣きぬは有じな
雨中鹿
五一時雨する空は曇れど鳴く鹿の上毛の星や隱れざる覽
菊花待ㇾ開
五二木枯の風の立つまで綻びぬ菊こそ花のとぢめ也けれ
大納言實定卿のもとより菊を乞はれ侍りしかば
結びつけてはべりし
五三玉しける庭にうつろふ菊の花もとの蓬の宿な忘れそ
かへし
五四移し置て此の一本はめがれせじ菊も主故色增りけり
惜ㇾ秋忘戀といふ心を、刑部卿範兼卿の會
五五又もなき秋を今宵は惜めとや身に添戀の片さりに劍
九月盡、實國卿の家の歌合
五六秋に社今宵別れめ木の葉さへ止らぬ音を聞ぞ悲しき
同じ心を、歌林苑の會
五七秋故にぬる夜也けり盡ぬべき我が齡をば誰か惜まむ
冬
時雨、歌林苑の會
五八山廻る雲の下にやなりぬらむ裾野の里を時雨すぐ也
同じ、隆信卿の家の歌合

九音聞けば哀共にや曇るらむ時雨の下に時雨してけり
行路時雨
〇八晴曇り時雨する日は常磐木の影に幾度駒停めけむ
月前殘菊
一八月も見よ菊には似ずな世中に殘れる身社白く成ぬれ
殘菊
二八白菊の又咲けるかと驚けば霜の下にぞ色はありける
月照二山雪一、右大臣の家の會
三八積りける雪計りかは木間より月も時雨るさよの中山
冬月
四八袖さえて嵐ふく夜の月見れば梢も空も曇らざりけり
同じ心を、經盛卿の家の歌合
五八月影を凍り隔つる池の水の玉藻が下や曇るなるらむ
月前水鳥
六八澄昇る月の光によこぎれて渡るあきさの音の寒けき
水上落葉、北白川の會
七八谷河の伏木の橋にせかれたる水屑を見れば紅葉也鳧
故郷落葉
八八木の葉ちる志賀の都の庭の面は其跡と見る礎もなし
落葉
九八龍出姫こずゑも染むる紅の色をおろすは嵐なりけり
同じ、歌林苑の會に
〇九梢には一葉もみえじ大荒木の杜の下草紅葉しにけり
落葉入二籬中一
一九木葉ふく嵐やこすを揚つらむ拂ふに惜き塵の積れる
大井河邊にて水上落葉をよめる
二九梢にもあらぬ堰に分ちやる河の枝にも紅葉しにけり
水上落葉
三九今はよに山の木葉も有じかし立田の河の色づく見れば
葉飛渡レ水、範兼卿の會に
四九立田河ふきこす風を待て社濡ぬ紅葉を袖にうけつれ
山路落葉、仁和寺にて人々歌よみはべりしに
五九木の葉ちる山路の石は見えねども猶顯るゝ駒の爪音
紅葉隔レ池、範兼卿の會
六九勝間田の池のあなたの紅葉ゆゑ昔の人や舟求めけむ
隔レ谷紅葉
七九紅葉ばをよそに見せしや葛城の神の岩橋渡し果せば
落葉驚レ夢、範兼卿の會に

八木葉ちる宿は賃屋の板廂はしにふす夜は夢も見果ず
於二法住寺殿一院三熊野詣候間人々歌合せられしに關路落葉を
九都にはまだ青葉にて見しかども紅葉散敷く白河の關
同じ歌合に、水鳥近馴
〇子を思ふ鴛の浮巣のゆられて捨じとすれや水隱もせぬ
同じ心を歌林苑の會
一眞木流す丹生の河瀬にゐる鷹は目馴に鳧な立も騒ず
鷹狩
二霰ふる交野の草を打靡けこまかにかるや鳥立なる覽
河邊千鳥
三東女と寢覺て聞けば下野やあその河原に千鳥なく也
寒夜千鳥　覺蓮の歌合
四浮る夜は遠ざかり行志賀の浦の波の此方に千鳥鳴也
曉千鳥
五打渡るやすの河原に鳴千鳥さやかに見えぬ明暮の空
千鳥
六夜舟こぎ沖にて聞けば常陸の海鹿島が崎に千鳥鳴也
時雨、經盛卿の歌合
七時雨する交野のみ野を狩行けば楢の眞柴の露ぞこぼるゝ
雪、おなじく
八越兼ねて今ぞ越路を歸山雲ふる時の名にこそ有けれ
九身の上にかゝらむとぞ遠からぬ黒嶺山にふれる白雪
〇降雪に木曾路の谷に埋もれて懸ても橘の見えぬ頃哉
一蹈分けて越ゆる嵐の山風に梢の雪もまた降りにけり
閑居雪、歌林苑の會に
二雪にかるゝ籬の竹の音のみぞ時々我を驚ろかしける
雪埋二樵路一
三雪積る山路に迷ふ山人は己が爪木をこりぬとや思ふ
雪中鷹狩
四み狩する野もせに雪の降ぬれば山をに立たひ鳧だになし
五桑せし柴のさ枝も埋もれて歸る山路に雪にまよひぬ
曉頭鷹狩、歌林苑の會
六暮ぬとて歸る野邊より立鳥の羽音計りに合せつる哉
待二初雪一
七待つる雪げかと社思つれ未だ時雨の雲にぞ有ける
社頭雪、敦頼入道の西宮の歌合
八注連の內によを通す哉した消ぬ頭の雪を打拂ひつゝ
旅雪、公通卿の十首
九船わたす隅田河原に降る雪の色にまがへる都鳥かな
連日雪、宰相入道の歌合
〇越の空雪げの雲の絕せねば降ぬ日をのみ數へつる哉
雪
一今朝見れば小野山白し宜ぞ此過ぬるよはの床は冴ける
二雪積る越の山風ふきぬらし檜原松はら顯はれて見ゆ
三雪降れば何にかは身を隱べき刈薬が下のゐ所もなし
曉雪
四忍び妻歸らむ跡のしるからし降らば猶ふれ東雲の雪
雪のふりはべりしあしたに範兼卿の許より
五山里の雪を掘は見まうきに君や來まさむ我や行べき
かへし
六君まさせといはゞ畏し降る雪を打拂ひつゝ我ぞ行べき
寄レ氷述レ懷
七我が身やふる河水のこす氷昔は消きながれなれども
氷
八冴る夜は氷柱や問なき原の池の上飛鴨の頃て過ぬる
あるじ人のもとよりまかりて朝に出づるに雪の
降りはべりしかば立ち歸りて遣しける
九朝未明雪蹈分て出てわが又來む跡を見むや見じとや
かへし
〇雪の內に又來む跡を待物を見せじと云はゝ消ゆ計也
歲暮雪
一數ふれば我身も年も暮果てふるも頭の雪かとぞ思ふ
賀
祝の心を人々よみはべりしに
二君が代は千尋の底の小れ石の巖のゐる程に顯るゝ迄
おなじ
三君が代を何に譬へむと思へ共果なき物のあらば社有め
禁中祝の心を二條院の御時人に代りてよめる
四昔より積ける塵の山なれど君が御代にぞ雲は懸れる
經盛卿がもとにて歌合しはべりけるに參りあひ
て祝の心をよみはべりけるに
五斧の柄をくたす山人歸來て見る共君が御代は變らじ
攝政殿下閑院つくらせ給ひて始て作文和歌の會
せさせ給ひしに歌人の內に召されて對レ松寄レ齡
といふ事を仕うまつれる

三春の日の静にてらす庭の面の松の千年に君劣らめや
庭松
七千年迄我を見よとや君が代の庵に近く松立てるらむ
祝
八君が代は長柄の橋を千度まで造替ても猶やふりなむ
寄レ松祝の心を、歌林苑の會
九ゆく年の津守の濱のはま松も君が齢に立はならばじ
祝、二條院の御時女房にかはりて
〇一許多度君ぞ見るべき海は山やまは白波立かはるやう
別
敦頼あづまの方へまかりけるに人々はなむけし給ひけるによめる
一遥々と行くも止るも老ぬれば又逢事を如何とぞ思ふ
筑紫へまかる人に餞しはべりしによめる
二其日ぞと聞だに兼て悲きに漕別れなば何心ちせむ
素覺入道潮湯あみに津の國なる所へまかりはべりしに
三忘るなよ舊ぬる我を津國の長柄の橋の跡を見つゝも
登蓮つくしの方へまかると聞きて旅衣してつかはすとてよめる
四限あれば我社そはね旅衣立む日よりは身をな離れそかへし
五嬉しさを包みぞ兼る旅衣豊かにたてるかひもなき哉
旅
六九月ばかりに難波わたりに潮湯あみに罷り侍りしに侍從師光素覺入道かはじりにおなじくくだられたる後侍從のないしのもとより消息遣はしたるおくにかゝれてはべりし
七旅寐するかたは浦々變れども同じ都や戀しかるらむかへし
八君が住む空戀しくぞ我は思ふ忍ぶ都も誰ゆゑぞこはおなじ所より入道そへてつかはしける
九暮て行く其方の秋やいかならむ此湊には舟裝ひせりかへし
十我もさぞ思ひよりぬる行秋の舟裝ひせば楫隱さなむ
旅の心を、歌林苑にて
〇一捨てゆく都の方の山に又いつか向て行かひもすらむ
哀傷

二條院かくれさせおはしましてのち御めのと大納言の三位ほどなくみまかりぬと聞きて女房せんつるがもとへ遣はしける
一雲上に別したづはをりゐても一方ならぬねをや鳴覽かへし
二別れしに雲ゐを戀る葦鶴は澤邊に獨音をのみぞ鳴く
相知り侍りける女三年ばかり過ぎていかなる事か有りけむもと住みたる山里へ送り遣してけり
其の後ある上達部の許におかれたるよしきゝ渡り侍りし程に俄に煩ふ事ありて身まかりけるもと見しものとや思はれけむかの上達部の許よりかゝる哀なる事こそあれ世の中の常なきは今に始めぬ事なれども心うくこそなどいひ遣したり
し返り事に哀なるよしを申して
三げにも嘸有て別し時だにも今はと思へば悲かりしをかへし、
四有をだにさ社は人は思つれなきば哀をそこと知すや
少將通家身まかりて後うち續きさはりどもありて遲く弔ひつるよし母のもとへ申し遣はしたるし返事に
五悲しさを歎く心のあらばこそとふも訪ぬも思分れめかへし
六よそ乍ら歎く心の失ぬにぞ君が思ひに劣るとは知る
月前催二無常一、右大臣の家の會
七限あれば月は今宵も出に鳧昨日見し人今日は無世に
範兼卿身まかりてのち法事の日誦經しはべりける諷誦文に書きつけはべりける
八此世には詞も文も書たえて鐘につてある事ぞ悲しき
九よそにのみかく聞々ていつか又我亡跡を人に訪れむ

戀

戀
〇一思へとていはでしのぶの摺衣心の內にみだれぬる哉
同、歌林苑會
二萌出てまだ二葉なる戀草の幾程なきにおける露かな
忍戀
三聞知れる人もや有む忘つゝ打歎かるゝ夜半の氣色を
四身のうさを歎くに附て忍べ共戀は戀とや分て見ゆらむ
五人しれず通ふ心の目に見えば早我戀は顯はれなまし

皇后宮權亮雅輔朝臣の歌合
六耳繁きあべの市路に我立じ戀を見知れる人も社あれ
七忍ぶとは君も且知となれどいかにか思とはぬ絕間を
八明ばとく返し直さむ小夜衣見て心うる人もこそあれ
九いつ迄か心に戀をこめ置てもたれ苦しき物を思はむ
後悔戀
一〇打出てもかひなかりける我戀を心の中に思ひ窓さで
一一藏人書戀、鳥羽院の北面
一二かくれなき涙の色の紅をふみ散さじとなに包むらむ
一三戀、清和院の齋院の會
一四せきかねる涙の河の早き瀨もあふより外の柵ぞなき
逐レ夜增戀
一五戀初て暫は夢も見しか共今はいをだにぬれば社有めり
戀の歌とて
一六世を歎き身を恨てもなく涙戀にしなれば色變りつゝ
一七思わび夢に見ゆやと返さずば裏さへ袖は濡さざらまし
隔レ河戀
一八山城の美豆野の里に妹を置て幾度淀の舟よばふらむ
旅にて見たる人を戀ふると云ふことを內にて人々よまれしによみはべりける
一九落ちちがふ淀の河舟こ簾を粗み仄見し人を忘兼つる
恨みて逢はずといふことを清和院の齋院にて人々よみはべりしに
二〇眞にや恨のはしを作り出て戀渡るとも逢じてふなり
又ふたつ文をだにかよはすまじかりける人のもとへこれをかぎりと思へとて
二一水莖はこれを限と書つめつせきえぬ物は涙なりけり
せめてうらめしき人のもとへつかはしける
二二聞もせじ我も聞れじ今は唯一人一人が世に無ものがな
心より外に中絕えたる女のもとへ遣はしける
二三思ずや手馴す弓にふす竹の一よも君に離るべしとは
かれ〳〵になりにし女の山里に籠りゐにけりときゝてさすがに哀に覺えて音づれつかはしたる返り事にこゝにはあるまじきよしを申して
二四世のうきに思ひ入にし山里を又跡たえむ事ぞ悲しき
かへし
二五思遣る心ばかりを先だてゝ行らむ方へ我もまどはむ
かたちを見ていとはるゝ戀といふ心を歌林苑に

て人々よされはべりしに
三八朝な〳〵戀こそ弱れます鏡見れば厭ふも思知られて
はじめて逢ひたる女に
四八我袖の信夫もぢ摺濡れ〳〵て亂合たる心ちこそすれ
忍びて物申す女の夜更けて逢ひたるに廿三日の
月の山の端より出でたるを見て
五八見よかし廿日餘の月だにも今迄人に待れやはする
つれなかりける人のもとに罷りたりけるになほ
逢はざりければ歸りていひ遣はしける
六八逢も見で歸れば昆陽の池水となれる涙に浮寐をぞする
此の事を契れる女の許にさはること有りて音づ
れはべらで次の日人を遣はして過ぎぬる夜は蘆
分なることのありしなり今夜は必ずまでとたの
め遣はしたりし返り事に言葉はなくて、小侍從
七八筏おろす柚山河の淺き瀬は又もさ社はくれの障らめ
かへし
八八昨日より涙落そふ柚河のけふは增ればくれも障らじ
過不レ告戀、清和院の齋院の會
九八音もせで人通ひける道のべに何家居して物思ふらむ
戀、播州の歌合
一九我袖の汐の滿干の浦ならば涙のよらぬ折もあらまし
戀のこゝろを、小野宮の侍從の歌合
二九君こふと夢の內にも泣涙さめての後もえこそ乾かね
會後隱戀
三九身の程も思知まし中々に逢見ぬ先になしといひせば
及レ曉遠會戀
四九夜もすがら妹が結べる下紐は鐘と共にぞ打解にける
失二返事一戀
五九こひ〳〵て稀にうけひく玉章を置き失ひて又歎く哉
返二迎車一戀
六九のせてやる我心さへとゞろきて妬くも返すな車哉
不レ語終隱戀
七九聲計通ふ遣戸のしりさしを猶頼まぬがなき心ちする
改レ名隱戀
八九あふみてふ名をば遙へて忍れば我を秋とや今は尋ねる
返事を見てまさる戀の心を人々よみはべりしに
九九引かへし妹が書ける言のはを恨て今ぞねは泣れける
戀のこゝろを、按察の會

九九ともすれば涙に沈む枕かな汐みつ磯の石ならなくに
一〇〇厭はゝ身を恨むや戀しさに又こと事を思增す覽
尊勝寺にて人々戀の歌よみはべりしに
一一我戀をさてや忌ると思へ共起ても侘し寢ても術なし
一二逢人もなき戀路行苦しさに休む間とては身をぞ恨る
一三忘つゝ猶ぞ戀しき身の程を思知るには思ひやめども
見し家思出戀、歌林苑の會
一四故郷を見れば物こそ悲しけれ我も荒にし心なれども
人しれず心かけたる女のもとよりずゝをこひに
つかはしたりしかばつかはすとて
一五思ふ事下にもせまるゝ圓すゝの露計だに叶はましかば
女のもとより雨のふる日つかはしたりける
一六雨もよに思ひ出じと思へども思ふ心をもらすけふ哉
かへし
一七雨もよに思ふ心のもりげにやあやしく濡るゝ我袂哉
過レ門不レ入戀、歌林苑の會
一八人心變ればあけぬ槇の戸を來馴し駒ぞ過がてにする
隔レ河戀、尾坂の歌合
一九渡り來ぬ妹が栖を尋ぬれば阿武隈河のあなた也けり
待不レ來戀
二〇住吉のまつとはすれど沖つ浪立返るにもよらぬ君哉
行路戀といへることを
二一打過し野上の里の妹を見て返りくだるは涙なりけり
二二逢ことを命にかふる市もがな斯る戀する人や集ふと
二三今は唯身を恨つゝなく物を强てこふとや妹は聞らむ
二四戀死なむ後は儚き玉章を若や見るとて書きぞ置るゝ
二五世中を歎かぬ程の身也せば何によそへて妹を戀まし
歌林苑の戀の十首の內
二六敷妙の枕は二つ並ぶれど一つはなれず君しなければ
おなじ
二七人はいさ飽ぬ夜床に留めつるわが心こそ我を待らめ
二八せきもあへず離れて落つる涙かな我敷つる瀧枕より
二九奥山の杉の本より我なれやわが戀故に身を焦すなり
三〇今は唯夢をのみ社頼め共合ぬめさへぞ難面かりける
三一つれもなき人に心を懸しより我世は盡ぬと思し物を
三二わきも子が裳裾に靡く黑髮の長くや物を思ひ亂れむ
三三紅に染めたる袖の同じ色の涙見わかぬ戀ごろもかな
三四睡まば驚かすなよ逢と見ば夢にも中をさくと思はむ
來不レ逢戀
三五住吉の沖より來たる浪ならば松の根も見で歸らましやは
寒夜增戀
三六さゆる夜は人を戀しと思寢の枕の下に氷柱ねにけり
戀の心を
三七あひ見ても猶て朝の歎かれて片心には物をこそ思へ
三八味氣なし今は思じと思へ共物うかるねに猶ぞ泣るゝ
恨めしながら戀しき人のもとへつかはしける
三九なら〳べたる恨も戀も唐くみの二條なから濡るゝ袖哉
寄二草花一戀
三〇露縋る萩の下枝はさも非ぬに我涙には人もたわまず
つれなかりける人のもとへつかはしける
三一來つゝ早せきもとめなむ涙河ながすも君が心ならずや
雨中增戀
三二君こふと詠暮せる夜の雨は袖にしも知る心ち社すれ
やう〳〵かれ〳〵になる男を恨むる女に代りて
三三氷の面にをは打ふれて立鳥のやゝ天離る人ぞ戀しき
祈レ神戀と云ふことを人々よみはべりけるに
三四逢事を祈るかひなきこの島は涙を懸る名に社有けれ
寄二源氏一戀、歌林苑
三五人しれず物をぞ思ふ野分してこ簾吹風に隙は見ね共
寄二催馬樂一戀
三六厭はれば唯には入じ妹が門過ばふらなむひぢ笠の雨
觀レ身不レ言戀
三七もしやとて書玉章も身のうさを思出ては打ぞ置るゝ
寄二照射一戀
三八我戀を火串にかくる物ならば難面き人も目をや合せむ
經盛卿の歌合に
三九打歎きぬれどぬれぬあたりにもまだ來ぬ人に驚されて
被レ妨レ人戀、院の殿上の會
四〇流れても契りし妹をせく人やあふくま河にかくる柵
戀のこゝろを、大貳重家の會
四一よと共に落る涙や戀してふわが言草の露となるらむ
おなじ心を
四二袖の上におつる涙の色見てぞ戀は限と思ひしりぬる
四三命あらばもしあふ事もありやとて我慰むるわが心哉
久しく音づれ待らぬ女のもとにしはすの二十日
あまりの程に遣はしける

四七滞る春よりさきの山水を絶はてぬとや人は知るらむ
かく申し遣はしたれども物に籠りたるよしを申して返事もなかりしが年かへりて正月の十日頃にかれよりつかはしたりける、小侍従
五四滞る音かと聞し山河のたえはてぬとは春ぞ知らるゝ
忍びて物申す女のあひてその日にわかれし時又いつかといひしに
六四思へたゝ岩に別るゝ山水も又程もなくあはぬ物かは
立聞怨戀
七四我のみか松の妬げに言のはを立聞く波の恨やはせぬ
寄レ石戀
八四厭るゝ我汀には離れ石のかゝる涙もゆるぎげぞなき
寄二菊花一戀
九四つれもなき人社よそに聞ならめ戀る袖さへ移ひに鳧
遊女戀
一五思兼ねもしもや見るとたはれ女が住河上に流す玉章
乍レ臥無レ實戀
一九枯さじと植ける竹か妹と我節を並てゆるぎげのなき
寄レ山戀
二五吾妹子はさ通ふ山のせばちかは逢じと人に兼て聞する
ある宮仕人をよび出すとて木蔭に立ち隠れて待りしに時雨のして雫のおちかゝりはべりしかば
三五君待とたてる木蔭の雫さへ涙につれて落としらなむ
馬上戀といふことを
四五落かゝる涙や繁き戀路ゆく駒のたつ髪露ふしにけり
言出後悔戀
五五さればよな斯ても同じ苦しさを言ぬ先より思返さで
言切後增戀
六五言のはを聞す顔なる涙哉思ひたへなば汝もたへなで
依レ月增戀、右大臣の家の會
七五妹こふとまだ端近きうたゝねの枕のそばに宿る月影
時々見戀
八五なごの海汐干汐みち磯の石となれるか君が見え隠する
聞レ戀我戀
九五水籠の神にや妹が祈るらむこふと聞より我も悲しき
秘二知音一戀
〇六疎からぬ人には告じ戀ふといはゞ思顔にて諫もぞする
秘二従者一戀、法住寺殿の會

一六散さじとせめても思ふ玉章は我使にて我ぞもてゆく
返書戀
二六玉章に我引墨の違ひせば見けりと見ても戀みてまし
時々逢戀
三六鴫のゐる岩根の池の薄氷村々なれや解けみとけずみ
寄レ鳥戀
四六妹とわが同じこのねの鳥ならば逢ぬ数に鳴すみてまし
ある宮腹の女房を忍びてむかへにつかはしたりしに暁になりてまうで來たりしかば
五六こと繁き大宮人を待ち〳〵てあふ程もなく明る東雲
二條院のくらゐの御時聞增戀といふこゝろを
人にかはりて
六六うき人の上をばえこそ聞果ね又問度にねのみ泣れて
大貳重家卿の歌合に戀の心をよみ侍りける
七六紅の涙にそまる戀ごろも返さば袖ぞうらみなりける
失二返事一戀
八六いづこぞや妹が玉章隠し置て覺えぬ程に老ぼれにき
思レ移レ媒戀
九六つれなくば強てな云そ汝にわが思ふ心は早移しにき
〇七其心みちにあふらし我を君相思はずと思ひおこせば
戀
一七無名だにたゝむと思ふ世中の人の儀せぬさへぞうき
二七獨ねの床はさゆれど妹が住其方の風は吹かとぞ思ふ
三七さればよな我身のうさに兼てより思し事ぞ人のつらさは
四七戀死む後だにせめて有し折逢でと云む言の葉もがな
遊邊女談
五七暗き夜も漸く起す火を中に置て聲のみ妹ぞ見えぬる
語和不レ會戀
六七逢事は猶も堅木の切えねば言のはのよき何にかはせむ
始は思はで後に思ふ戀の心を人々よみ侍りしに
七七思きや新手枕を厭ひしに同じ身ながらこひむ物とは
戀やすると問ひし人に
八七戀せずとあらがひ果む暫しだに落る涙よ心あらなむ
寄二船戀一
九七戀しさは泊もしらで行舟のゆにかく物は涙なりけり
寄レ山戀
〇八忍びしも今は淺間のかひもなく燃る烟となれる戀哉

二八忍めしきこと侍る女を夜もすがら恨みあかして
歸りて侍りけるにいかにしたりけるにか白き帶のつきてまうできたりしを返しつかはすとて
一八夢にさば中や絶まし色なしと縹の帶を思ひなしつゝ
十月つごもり頃大内にさぶらひしに語らひ侍る女をあひゞして侍りしに罷りいづとて女をもおくりつかはしたる夜霜つねよりもさえて朝の霜白く見え侍りしかば文つかはすとて
二八霜さゆる今宵しもなど九重に襲ねし衣ひき別れけむ
これかれあまた申すときく女のもとに女郎花につけて遣はしける
三八おなじくば我にを靡け女郎花ふく秋風は心さだめじ
久しう音せぬ男のもとへ怨みつかはしたりけれどもなほ待てご來ざりければ申しつかはしける
女にかはりて薄につけて
四八招けども來ぬ夕されは花薄靡初めけむことぞ悔しき
時々物申す女波こしてけりと聞きて心うきことなり今は思ひ絶えなむと申して夜もすがら怨みはべしを女も心うしと思へるけしきにぞ泣きふしたるにさしかはしたる方の袖の所せきまで濡れにけるをかへりて見はべるにさすがにあはれにて申しつかはしける
五八あやなしや人を戀らむ涙故よその袂を今朝絞りつゝ
道にあふといふ心を齋院にて
六八我妹子がせば路にちがふ移香のいつのまにしむ心なる寛
たえて久しくなりにける女のもとより五月五日に
菖蒲につけていひつかはしたりし
七八よそにのみ人は軒ばの菖蒲草浮根は絶ずかくる袖哉
かへし
八八菖蒲草其ねに爭て身を做て斯といふなる袖を離れじ
絶えて久しくなりたる女思ひ出でゝ五月五日に
長き根をつかはすとて
九八逢ぬまに生る菖蒲のねを見つゝ滿ふ涙の深さをば知れ
かへし、小侍従
〇九懸てだに見ぬまに生る菖蒲草淺き例のねにぞ比ぶる
曉戀、右大臣の家の會
一九鐘の音を獨ぬる夜も厭へばや逢てふ夢を打覺しつる
後朝の心を

二九戀々て君に始て逢初のかへる色とは今朝こそは知れ
三九朝未明風吹野邊の葛のはも返れば斯や露ぞこぼるゝ
四九明ぬとて歸る涙に暮ぬると云て猶やゆかまし
五九昔より歸る事とは知ながら今朝は我身に止り初まし

送ル書待戀

六九玉章を見かと思へば妹がりと遣つる使待るゝもよし
紀伊守三河守にふるされたる女のそのことを心
にかけたる氣色なるを白河なる人の遣しける
七九八橋とふきあげの濱と忘れずば思ひも出よ白河の里
八九八橋はふみ絶えにしを今さらに何か蜘手に思亂れむ
袖の氷を思ひやれとて女のもとより
九九流れてと頼むべきには非ねども心にかゝる白河の里
かへし
〇〇逢事の滯ればや白河のながれと君はたのまざるらむ

寄ル衣戀

一〇我爲は片しく妹がさ夜衣いかなる人に隔てざるらむ
近隣戀
二〇立そはぬ時のまぞなき我妹子が聲は隔ぬ中の檜垣を
行路戀
三〇留めてしわが心にや變るらむ見し儘に連て來にけり
四〇歎侘夢にだにとて寢しか共偖も見えねばせむ方ぞなき
たえて久しくなりたる男のもとへふみつかはし
けるに、女にかはりて
五〇當時は踏馴されし道芝の茂りにけりと見るぞ悲しき

戀

六〇人知ぬ木のはが下の水なれや我袖隱れおつる涙は
七〇思じと思ひけれども消たれぬは我胸に焚く思也けり
八〇麻衣かたの迷ひにもる玉は留めもあへぬ涙なりけり
九〇人心荒たる宿の庭に生ふる唐撫かは摘まゝほしきは
久しく音づれ侍らぬ女のもとより怨み遣すとて
一一知ざりき饗の刈藻に住蟲の名をばいつより我に告しぞ
かへし
二一海士の刈藻に住虫の其名をば君には告ず我物にして
戀の心を
三一涙川色をば袖にせかれけりやなせに止る紅葉のごと
あひ語らひ侍りし女のやう〳〵床離るゝ契と
なりてもとすみはべりける山里へ遣り遣すとてそ
の方ならずとも心長く思へなど申し契りてはべ
りし人のもとよりいひつかはしける
一一鳥の子の巢守に止る身也せば却りて物は思ざらまし
かへし
二一返るとも立離るなよ鳥の子の育くむ親と我を賴まば
をさなくて見たる女おとなしくなりて後あひ語
らひて侍りけるに女郎花に附けてつかはしける
三一女郎花其片生はめもたえて花の盛ぞなづさはれぬる
戀、左京大夫顯輔の家の歌合
四一逢事は渚にかへる白浪の猶よりみるやこりずまの浦
旅戀
五一妹を置て門出せしより落初し涙も我もえこそ止らね
同、左大臣の家の會
六一思ひきや妹をとゞめてなく涙庵の下萱浮ぶべしとは
七一月十日比に人の許へ罷りてあしたに遣しける
八一身をつまば今朝の別を彦星も空に哀と思はざらめや
かへし
九一棚機の契計りも有とみばとはぬ絶間も歎かざらまし
〇二久しくおとづれはべらぬ女に十月朔日頃にいま
だひらけぬ菊につけてつかはしける
一二君を我秋こそ果ね色變る菊をみよかし開けだにせず
かへし、小侍從
二二いさやこの開けぬ菊も賴まれず人の心の飽果しより
さて程へて後うつろひたる菊につけてこれより
つかはしける
三二開けぬを秋果ぬとやみし菊の賴む方なく移ひにけり
かへし
四二移ろはゞ菊計りをぞ怨むべき我心には秋しなければ
後朝戀
五二逢ぬまに如何と思ひ疑もなく〳〵今日ぞ人は戀しき
戀
六二日を經つゝ戀しき事は增れ共戀する道にえ耐まね
見ル書增戀
七二ふみゝては色增りぬる我袖や紅染のふりでなるらむ
返ル書戀
八二待々て何心ちせむ玉章を同じさまにて返しえたらば
隱ニ傍女一戀、法住寺殿の會にて
九二知らすなよ局並びの下口は物云あしき宮とこそきけ
戀ニ遠所人一、同
〇三陸奥の金をば戀て堀間なく妹がなまりの忘られぬ哉
親レ身不レ言戀
一三數ならで云出む事を留めつる憂身や戀の關と成らむ
女のうちとけたる所におし入れてはべりしに
わざてはかまをきけるをみて
二三何か共君が下紐結ぶらん心しとけばそれもとけなむ
戀の心を人々よみはべりしに
三三つれもなき人は稀にもみえこぬに目馴る物は涙也鳧
四三冬くれば駒打渡す諏訪の海の幾重ともなき人の氷柱は
五三今はさば戀も死なゝむ死すとて雜面き人の來ても見なくに
六三妹ならば額の髮をふりかけて傳ふ涙を玉とぬかまし
七三綾りあへぬ花染衣袖白くかへしのみしてあはぬ君哉
下女をこふと云ふことをよみはべりしに
八三我心なに大原に盡すらむすみよかるべき人の樣かは
寄レ草戀の心を
九三などて我よそなる袖を濡すらむなればぞ萩の露もこぼるゝ
あひかたらふ女怨むるとありて山里へ行き隱れ
なむとするよし聞きて今一度人づてならで物を
も申さむとてまかりたるになきよしを申してい
れざりければおし入りてみるに只今までもあり
けるさまにてぬぎ捨てたるきぬをみればさすが
にあはれとや思ひけむ袖のしをるゝばかり濡れ
たるをみるにかなしきことかぎりなくて袖に書
き附けてかへりける
〇四今はとて脫置く衣の袖みれば我獨のみ濡さゝりけり
二月廿日あまりの程に南殿の花みむとて參りた
る折しもある女房の許よりあるかなきかと尋ね
に遣したりしかばさぶらふ由を申したりし後音
もせざりしかば是よりいひ遣はしける
一四誠には雲居の花をみむとてや我によそへて空尋せし
かへし、小侍從
二四尋ねつる心の中を知ならば花にも斯や恨みられまし
其の後又大內にまゐりたるにきゝてはべりし人
のもとより
三四尋ねつゝ今日を待つる心をば花を思に猶やなるべき
かへし
四四我をのみ日を數へつゝ待けるかあなかまさらば花に聞せじ

おなじ人のもとへ遣しける

[五四]惜も猶人傳ならで問みばや花かあらぬか我が事かと
かへし

[六四]花きかば道が答へま憂事を人傳ならで問はみられじ

同じ人のもとへ遣しける

[七四]逢坂を越ぬ物から手に懸し清水か何ぞ袖の濡るゝは
かへし

[八四]くみて知れ逢坂山の石清水手にかけゝるは淺き心を

同じ人のもとより唐の櫻のさまをうつしたるなりこゝのに見あはせよとてつくりたる櫻の花を遣したりしかば

[九四]唐土の花も爰には渡りけり況て間近き人はいかゞは
かへし

[五五]今ぞ知夜花見よと云傳して山もる人を留むべしとは

[一五]唐土の花を渡しの船よりも危ふき道は行じとぞ思ふ
ある女に始めて逢ひて物ごしに夜もすがら申し
語らひて歸りて朝に遣しける

[二五]逢もせず逢ずも非ぬ今日やさば車有顔に詠め暮さむ

[三五]けさ社は習はぬ身にも逢ぬ戀とは此を思知ぬれ

おもひをしるべにせし事はうつゝにてこそこれは

世人ことにぞ定めさせまほしくといへり

南殿の花床しがりて見せよと申たる女の返しに

[四五]しかすがに雲は眩ゆし雲の上の花は夜見よ星の光に
かへし

女にはじめてあひて朝に遣しける

[五五]越ぬともえこそ覺えね逢坂の關に心や留めおきけむ
かへし

[六五]急ぎつる氣色に見えぬ相坂の關に心を留めしもせじ

藤壺の藤を見せに遣して

[七五]逢事を待よりもげに今朝よりぞ心に繁くかゝる藤波
かへし

[八五]逢事を待にも非ぬ歎きにぞ今朝より藤は懸り初ぬる

物申しそめて後二三日おとづれはべらざりしを

小侍從がもとよりいひ遣したりし

[九五]とへかしな憂世中にあり〳〵て心と附くる戀の病を
かへし

[六六]生かばいき死なば後れじ君故に我もゆきにし同病ぞ

久しく音づれざりし女のもとよりいひ遣しける

[一六]忘じと契りし文のもじ並べ衆て見えにし斯るべしとは
かへし

[二六]玉章に書ける文字は君と我並ばむ事を見せしなる鏡

疑二行末一戀、歌林苑の會

[三六]末迄の事はないひそ逢はぬ間の我心をば我も知ぬに

戀の心を

[四六]命をば逢に替へむと思へ共戀るも待で先ぞけぬべき

不レ設レ被レ怨レ戀

[五六]今更にさて逢じとや君ならでいつかは我は新枕せむ

欲レ盜レ戀

[六六]夜床をば汀と做て妹をわれ引白波の名をや立たまし

曉に人を送りて後に遣しける

[七六]見えずとも有としらなむ送りつる心は未歸來ぬぞよ
かへし

[八六]思はれぬ雨夜の空に出る身は送る心の影かとも見ず

夜戀といふ事を按察の十首の内

[九六]夜もすがら枕を傳ふ涙哉あけての後や袖におつらむ

語らひはべりける女久しう音しはべらざりければ絶え果てぬとや思ひけむいと若き新枕をなむしたりと聞きて今音づれざりしかばかれより遣しける

[七]忍びこし夕紅のまゝならで悔しや何のあくに逢けむ
かへし

[一七]紅のあくをばまたで紫の若根に移るこゝろとぞ聞く

一會之後不レ會戀、歌林苑の會よし

[二七]よしさらば強ても戀じ逢事を一夜てふ名は誰か若き

戀、經正朝臣の家の歌合

[三七]誠にや戀の病を何と此それか彼かと來つゝとふらん

[四七]辿りえぬ涙の河の淺きせを妹がふみ見る時ぞ知ぬる

[五七]古は三垣が原に片摘し人もかくこそでは濡れけめ

乍隨不レ會戀、法住寺殿の會

[六七]袖ひけば道によりて離面きや寛ぐ物のぬけぬなる覽

[七七]君をおもふ人の心のかはらなむさらばや我と新枕せむ

戀二自レ我下一

[八七]我故と知すや有む賤の女がつゝれる袖に附ける墨をば

戀、若狹三位の歌合

[九七]戀しなむ後は烟と昇りなば淚しぐるゝ雲とや成らむ

絶えて久しくなりたる女又語らひたる人に忘られにけりと聞きて後あひて野中の清水の心地してものなど申して後かれより遣したりし

[八]すむとしもなくて過にし忘水何故さても思ひ出けむ
かへし

[一八]人も皆掬ぶなれども忘水我のみあかぬ心地こそすれ

橋上待レ人

[二八]妹を事で木曾路の橋に待かけもよく方もなき道と社聞け

戀二東西一人

[三八]生野こそいくかひ無て歸されめなどや近江の逢人のなき

老後戀

[四八]逢事ぞ待で消ぬべきさらぬだに殘少き我身と思へば

[五八]心をば向ひの岸に懸れ共よせぬは老の波にぞ有ける
かへし

[六八]老の波遂に寄べき岸なれば其方を忍ぶ身とは知すや

おなじ人のもとに遣しける

[七八]年ふりて色變りぬる黑髮のあらぬ筋なる物を社思へ
かへし

[八八]朔寢髮さこそは老の亂るらめ鏡の影のかはるすぢにも

同じ人のもとより五月五日菖蒲草にはあらぬ草につけて遣しける

[九八]今日とても聞ぬ菖蒲の憂中に非ぬ筋こそ嬉しかりけれ
かへし

[九]引寄せてねぞ見まほしき菖蒲草非ぬ筋をば思返して

逐夜增戀の心を

[一九]日なへつゝ添るつらさを重荷にて閇え果べき心地社すれ

祈二佛戀一

[二九]人心うづまさに猶祈り見む戀の病もさめざらめやは

雜

世の中に思はずなる事のみありて京には住ひわびて和泉なる所に籠り居てはべりしに岡崎の三位六位にてはべりし時内藏人になりぬと聞きてよろこびいひ遣すとて

[三九]君が爲嬉しき事の（限作）嬉しきに我歎をば歎きしもせじ

かへし
四九嬉しさを嬉しと思はゝ思ひ知れ君が歎を歎き皃とは
歟人おりて次の日女房のもとへ遣しける
五九思ひやれ雲居の月になれ〳〵て暗き伏屋に歸る心を
かへし
六九雲の上に心を深く留めおかばすむ月影も哀とぞ見む
地下にはべりし時内より歌をたび〳〵召されて
參らするとて女房のもとへ遣しける
七九言の葉は下吹風にちらしあげて谷隱れなる我歎き哉
大内の守護ながら殿上ゆるされぬ事を思はぬに
しもなかりける頃行幸なりてはべりけるに大宿
直なる家にかくれゐてはべるに月のあかゝりけ
れば丹後の内侍のもとへ遣しける
八九人知れぬ大内山の山守は木隱れてのみ月を見るかな
かへし
九九いつの間に月見ぬとを歎く寛光長閑き御代に逢ひ
かくてのみ過ぐるほどに世かはりて當今の御と
き殿上ゆるされてこれかれより祝の歌よみて遣
す中に中宮亮重家がもとより遣しける
〇〇誠にや木隱れたりし山守の今はた出て月を見る哉
かへし
一〇そよやげに木隱れたりし山守を顯す月も有ける物を
同じ頃皇后宮權大夫顯長のもとよりよろこび云
ひ遣すとて
二〇此春や思ひ〳〵けて九重の雲居の櫻わがものと見む
かへし
三〇ちるをのみ待し櫻を今よりは雲の上にて惜むべき哉
二代の御門に昇殿してはべりし時三位大進清輔
朝臣の許より遣したりし
四〇立歸る雲居のたづに言づてむ獨澤邊になくと告なむ
かへし
五〇諸共に雲居を戀るたづならば我言傳をなれや待まし
蓮花王院の執行靜賢おなじ頃慶ひ申し遣すとて
六〇木隱にもりこし月を雲居にて思事なくいかに見らむ
かへし
七〇木隱れと何歎きけむ二よまで雲の上にて見る月故
右少辨親宗おなじ頃悦び申し遣すとて
八〇若月の出で始めたる雲居にはまだ朧げの人は通はず
かへし
九〇永きよに出で始めたる月影に近づく雲の上ぞ嬉しき
正下の加階してはべりし時右馬權頭隆信がもと
よりよろこび云ひ遣すとて
一〇和歌浦に立昇るなる波の音はこゝろゝ身にも嬉しとぞ聞
かへし
一一いかにして立昇る覺越ゆべしと思もよらぬ若の浦波
加階の後ほどなく殿上仕うまつりたるを聞きて
少納言賢隆がもとより悦び申し遣すとて
二一位山登るにかねて著かりき雲の上までゆかむ物とは
かへし
三一翁さびはふ〳〵登る位山くも踏む程に爭でなるらむ
同じよろこびの時中宮の大盤所よりとて
四一位山高くなりぬと見し程にやがて雲居に昇る嬉しさ
かへし
五一昇りにし位の山も雲の上も年の高さに合ずとぞ思ふ
殿上のことを聞きて女房大輔がもとよりよろこ
び遣すとて
六一よそにきく袖にも餘る嬉しさを包み敢ずや天の羽衣
かへし
七一袂をばたち社かふれ嬉しさを重ねて包む袖の狹きに
程なく悦びをふたゝびしてはべりし頃三位大進
清輔朝臣のもとより
八一いかばかり袂もせばく思ふらむ雲居に昇る鶴の毛衣
かへし
九一知けりな雲居をおりて鳴たづの立昇るまで思ふ心を
昇殿の時これかれより慶びの歌ども遣しけるに
前大納言實定の遲くいひ遣しければこれより
〇二雲の上を思ひ絕にし放ち鳥翅おひぬる心ちこそすれ
かへし
一二雲上に千代も八千代も遊べき鶴は久き物としらなむ
祝言のついでにも昔思ひ出でられてこそとてか
れより遣しける
二二木隱れて見し夜の月の變らずば同雲居を哀とや思ふ
かへし
三二木隱て其夜の月に馴にしも雲居を見ては哀とぞ思ふ
年の内に五位の上下をして正月に四位をしては
べる悦びいひ遣すとて、中宮亮重家
二四あけ衣色〻〻そへにし紫の今ひとしほやまして嬉しき
かへし
五二色そへし袖につゝみし嬉しさを紫こそは餘りぬる哉
昇殿の後四位してはべりし時亮君顯昭よろこび
いひ遣すとて
六二道理や雲居に昇る君なれば星の位もまさるなりけり
かへし
七二見えにけむ星の位も雲上に昇りし折に昇るべしとは
誰ともなくてさし置きたる文を見れば
八二いかにして野中の清水思出て忘るゝ計又なりぬらむ
其の後誰とも知らで女のしわざにこそはと思ひ
し程に別當入道大谷にまかりしにおとし文や見
しそれは我がしたりしなりとありしかば歸りて
遣しける
九二淺かりし野中の清水忘ぬは又夏草を分くとしらなむ
女院百日の御懺法のはて僧の布施にわらはべの
さうぞくをして參らするに水干さうぞくをした
き人々一具づゝして遣す中に中宮權大進重家
が遣したる殊に珍しく見えはべりしかば遣した
る返事に申しける
〇三音羽川堰入るゝのみか水干すに入の心は見えけむ物を
かへし
一三音羽川淺き心は見えわたる堰入し水によそへざらなむ
是は伊勢が敦忠の中納言の山庄に瀧おとしたる岩
にかきつけたりける歌を思ひ出でゝよみたりけ
るにや
始めてあひたる女に正月朔日の日予日の松を遣
すとて
二三今日よりは君と子日の松をこそ思ふ例に人も引らめ
別當入道大谷におはすと聞きて四月十日頃に
かりたりしに松に藤の花咲きかゝりておもしろ
かりしかば歸りて後遣しける
三三松になほ殘りやしけむ藤の花返る心にかけてし物を
かへし
四三藤の花心にかけば又もやと待つ事のみぞ常磐也ける
從下なる事を歎きはべる頃よめる
五三思ひきや雲の梯おりしよりしもが下にて有む物とは
述懷、敎賴の住吉の歌合

六三徒に年を津守の濱に生ふる松ぞ我身のたぐひ也ける

別當入道大谷を人に隱れて出でられにけると聞きてそこ〻ら聞かざりしにほの〴〵坐する所を聞きつけて誰ともなき文をさしおかせ侍りにし

六三寛東な谷より出る谷もそこにありとは聞かする物をすなはちかへりごとはなくて程へてかれより遣したりし

六三答へせぬみ山隱れの山彦の思ふ心を知らずやある覽かへし

六三答へばぞそこともきかむ山彦の思ふ心は如何知べき昔今のことをつく〴〵思ひ續くるに哀なることもまじりてはべりけむ

六四色々に思ひ集むる言の葉に涙の露のおくもありけり

別當入道ことありて後とぶらひ申すこともなくて過ぎにけるをのぼりて程へて後山里の寂しさいかゝなど申し遣したる返事に

六四寂しさをとふべき事と思ひける人の心を今年知ぬるかへし

六四寂さはさやは有しと人知れず歎し事は今年のみかは

鳥羽院かくれさせ給ひて後歌林苑にて人々懷舊といふ心をよみはべりけるによめる

六四昔わが詠め月の入しより世にふる道は踏違へとや

寶莊嚴院になべてならぬ梅ありと聞きて執行靜賢におろし枝をこひに遣したるに今年はえあらじ明春たばらむと申したる返事によめる

六四頼むとも又來む年の春迄は梅のえまたじ殘なき身はかへし

六五色も香も心に深く染つれば梢はるかに君ぞ見るべき

年老いたる人の五月十日頃に橘のありけるを隣なる人のもとへ遣すとて折枉の堅紙に書きつけて遣はしける

六六橘は花の咲迄ありけるに老ぬる身こそ止るまじけれかへし

六七時過ぎて猶盛なる橘をいる人の身によそへてぞ見る

小侍從尼になりけると聞きて遣しける

六八我ぞ先出べき道に先だてゝ慕ふべしとは思ざりしをかへし

六九後れじと契りし事をまつ程に休らふ道も誰故にぞは

師中納言顯時卿の子四人昇殿せさせられたる由を聞きて

七〇雲ゐ迄皆昇るなるたづの子はいかなる巢より立始けむかへし

七一引連て雲居に昇るたづの子は三熊野に住處とを知れ

熊野につかうまつれる人なりければかく詠まれたるにや

少輔別當入道空仁と申す歌よむものはべるを年頃聞き渡りはべるかれも聞きて互にいかであひ見てしがなと思ひける程に歌林苑にて人歷が影供しはべりける日逢ひて歌よみなどしてのち程經ていひ遣しける

七二昔にのみきゝ聞れつゝ過々て見きな我見き其後はいかにかへし

七三戀々て見き我見えき其後は忍びぞ兼る君はさに非じ

上達部殿上人あまた大内の花見られはべりしに三位大進清輔文をかきてさし遣したるを見れば

七四朝夕になれし昔の百敷や花のたよりに見るぞ露けきかへし

七五馴にけむ昔を忍ぶ袖の上に落る花もや露けかるらむ

岡崎の三位の病にわづらひて出家のよしを聞きてとぶらひ遣すとてよめる

七六三年まで君に先だつ身なれども真の道に入後れぬるかへし

七七かはらゆく羊の歩近ければ急ぎ入ぬる道と知らなむ

同じ入道のもとより筆を遣すとて包紙に書きつけてはべりける

七八遣方に筆に涙ぞこぼれぬる我あらば肚書きも変さめかへし

七九こぼるらむ涙に頬ふ水莖を我目の前に顯てこそ見れ

ある女のもとへ山の端に月いらひとする程かきたる扇を遣すとて

八〇山端に入なひとする月影を我によそへて哀とも見よかへし

八一千代迄と君によそへて見月ぞ山端缺けて入でも有なむ

別當入道山里におはする所に尋ねまかりたりしに昔のことゞもなど語りつゝあはれつきせで歸りて後かれより故院の北面の車などのみ面影にこそ立ちしかとて

八二有しよの君や形見に止るらむ先見しまゝに昔覺えしかへし

八三世も變り姿もあらぬ君なれば我も昔の形見とぞ見し

少輔入道素覺年頃の妻におくれて歎くと聞きてとぶらひ遣すとて

八四程もなき頃の雪を持ながら先に消ゆるを哀とぞ思ふかへし

八五末の露本の雫はけふならず憂世の上と見るぞ悲しき

其の後ほどもなく入道もうせはべりにけり

九月廿日あまりの程に天王寺へ參りてはべりしに伊賀入道爲業がもとよりこもりてはべりけるがかくと聞きて遣はしたりし

八六君來ずば誰にみせまし津の國の難波わたりの秋の景色をかへし

八七心ある君ましければ共に舩難波わたりの景色をも見め

又女房大輔が參りたりけるがかくと聞きていひ遣したりし

八八底清み掬ぶ龜井の水すみて心の垢をすゝぎはてつるかへし

八九手に掬ぶ龜井の水は西の海も渡す心を進めざらめや

此のことを伊賀入道聞きていひ遣しける

九〇西の海に渡す心の月の舟龜井よりこそすみ昇るらめかへし

九一我心龜井にすめど西へゆく月の舟にそ乘返りぬる

又是より入道のもとへ遣しける

九二諸共にいざさばゆかむ極樂の門むかひなる處也けりかへし

九三沖つ波君さきだてゝ漕ぎ海の舟出急がむ西の門より

其の後入道のぼりぬと聞きて曉におひて遣しけるわたのべにて舟にのる所にてよみはべりける

九四都へは我は急がずなはの海の彼方の岸へ行かまほしきかへし

九五彼岸へ行かまほしさは我もあれば都の方は急がれぬ哉

ことぢといふ歌うたひ念佛所にて終夜歌うたひてきりじといふ朝經よみなどせしを伊賀入道聞きて興に入りて我門といふ催馬樂うたひなどして忘れがたくして思ひ給ふことを門むかひとよ

みはべりしことなどを思ひ出でられけるにやのぼりて後入道のもとより歌三首よみて遣したりける

六七行易くつとめてゐたる極楽の門迎ひこそ思ひ出けれ

七七思出づや秋のきりしの法の聲立ゐに附て忘やはする

八七澄昇る夜のとぢは松風をきく心地して身にぞ泌ける

返歌三首を一首にかきて

九七琴の音もきりしがのりも立聞し我事をさへ我ぞ忘ぬ

〇八此を見よ人もさこそは妻戀る春の雉子のなれる姿を

返し人にかはりて、女房大輔

一八我は唯かりの憂世ぞ哀なる春の雉子のなれる様にも

和歌所に人々あつまりて夜もすがら歌よみ連歌などして遊ばれ侍りしに隣なりける翁たび〳〵呼ばれければ參りて人なみ〳〵にまじろひはべるにある宮ばらの女房二三人を引物のうちに据ゑて同じく連歌などして今よりはながく知り人にせむなど申し語らひて夜もやう〳〵明け方になりにしかば罷り歸りて後二三日ばかりありて一人がもとへ遣しける

二八君に逢て歸りにしより昔せし戀にさにたる物を社思へかへし

三八我はいさ昔も知ず飽ざりし名殘は其に始めてぞ思ふ

これを聞きて今ひとりの女房さにたると云ふことをいま〳〵しがりてさ文字をば聞かじと云ひければさらば詠みこそなほさめとて

四八斯しあらば早ぞなまし其かみの戀にはさ似ぬ我思哉

かへし

五八なとやさはさ似ると聞し古を厭けるさへ今は戀しき

相知りてはべる女わづらふことありけるが久しくをこたらざりければ日野にこもりて日頃になりぬるよしを聞きておぼつかなさに人を遣すとて申し遣しはべりける

六八薔薇す日の出る方に妹を置て明れば山の端をぞ詠むる

大夫公俊惠が坊に方違へに罷りたりし夜雨のふりはべりしに坊主のもとよりいひ遣しはべりし

七八月もれぞ踈らに葺る圍の上に綾なく雨や溜らざる覽

かへし

八八主からぞ思知らるゝ雨のもる圍の板間の月の故かも

南殿の花ゆかしかりける人に見せて後より長き知り人にせむなど契りて久しく音づれはべらざりしかば霜月の廿日餘りのほどにいひ遣しける

九八來む春は雲居の花を待つけてなれ故有し事と語らむ

かへし

〇九なれ故と雲居の花の咿たれば散に散てや逃むとす覽

岡崎の三位入道のもとに壁に瀧のかたを書きてその瀧の下よりまことの水を落しつゞたり遠くて見ればたゞ同じ水の落ちたるやうに見えしを見てまかりて遣しける

一九現にも壁にも同し瀧を見て寢ても覺ても忘られぬ哉

かへし

二九夢の世に壁より落る瀧の糸を君が心に懸けりやさは

あひ知りてはべる女房二月十日頃に大宮にさふらふよしを聞きていひ遣しける

三九春ながら秋のみ山に入人は紅葉を戀て花を見じとや

かへし

四九あだに見し花のつらさに春乍ら秋のみ山を出ぞ煩ふ

如二渡得一船

五九彼岸を願ふ心やしるからむ嬉しくよする法の舟かな

人廢影供の前にて一品經供養人々せられはべりしに勸持品のこゝろを

六九けふ社あれ終は佛と思ふをば知でや我を恨み顔なる

化城喩品

七假の宮に暫し休むる知べあれば終に眞の道に來に鳥

やさしき方にはあらで申し語らひける女の許より雪のふりたりける朝に遣したりし

八朝戸明て待れやせまし降雨の訪べき人の有身也せば

かへし

九朝戸明る程には行じ今朝の雪の積れば暮に踏分てこそ

獨のみ明しくらすころ大夫公俊惠がもとよりとぶらひ遣してはべりける文に

〇〇身をつめば如何はすらむ獨寢て片敷袖の冴る霜夜に

かへし

一〇偶の身をばえつまじつひならば獨は寢じと思遣らなむ

甲斐大進爲基がもとより故帥大納言集を尋ねに遣したりし折しも大事なる所勞ありて人してかゝせて遣しける

二〇儕さを誰かは君に語らまし昔のあとを尋ねざりせば

かへし

三〇ありなしを且は形見に聞やとて昔の跡を尋ぬ計りぞ

烏羽院にはべりし時光信が許より櫻花を遣してかへし

四〇みなもとは同じ梢の花なれば匂ふあたりの懷しき哉

かへし

五〇げにや皆もとは一つの花なれば末々也と思ひ放つな

敦賴入道西宮にて歌合しはべりしに海上眺望の心をよめる

六〇渡つ海を空に紛へて漕船の雲の絕間のせとに入ぬる

おなじ歌合に述懷をよめる

七〇思へたゞ神にもあらぬ夷だに知るなる物を人の哀は

おなじ心を

八〇常に我願ふ方にしますときく神を賴むは此世のみかは

年頃かたらひはべりける女都や住み憂かりけむ男に具してあづまの方へまかりける日ことさらにかたみにもせむと着ならしたる物ひとつと請ひければ遣すとて

九〇とに斯に我身になるゝ物をしも放遣りつる事ぞ悲しき

かへし

一〇〇放たるゝ我身になるゝ唐衣心しあらばなれも悲しや

二條院讃岐集

内裏に柳垂といふことを

一青柳の靡く下枝に搖きてけり吹く春風や伴の宮つこ

關路霞

二我はさぞ知せで過ば見えざらむ霞に紛ふ不破の關守

花によろこびの色あり

三おのが咲く雲居に君を待附けて思ひせきもる花櫻哉

四常よりも山のは白き曙は夜の間に咲ける櫻なりけり

花留二客人一

五暫しとも我は留めじ春の內はきてこむ人を花に任せて

二條院讃岐の御時月のあかゝりける夜終夜南殿の

花御覧じて曉ちかくなりて里へ出でゝ次の日參らせたりし

一花ならず月も見置し雲の上に心計りは出ずとを知れ
御返し

七出しより空に知りにき花の色も月も心に入ぬ君とは
同じころ雨の降りし日南殿の花の庭の水にうつりたりしを見て

八庭たづみ映さゝりせば雲上に又類ある花と見ましや
花のさかりに心ならず里へ出でしに參らせける

九あかすして雲居の花にめかるれば心空なる春の夕暮
御返し　御製

一〇いつとても雲居の櫻なかりせば心空なるとは有じな
夜ひる花を思ふ

一一散る花の見えぬ計りぞ惜みける心は晝に變らざり鳧
賀茂の歌合に

一二春霞分け行くまゝに尾上なる松の綠ぞ色まさりける
花

一三咲初て我世に散らぬ花ならば飽ぬ心の程は見てまし
里に居て後に花はいかゞなど內わたりへ尋ねける文でに

一四思きや雲居の花の咲き咲かず人傳にのみ聞む物とは
よこぶ鳥

一五くる人もなき物故に呼子鳥なれとならしの山に鳴覽
つゝじ道をはさむ

一六號方もちらさで行かむ岩躑躅左も右も捲りでにして
雨後躑躅

一七春雨に萎れ〳〵て岩躑躅晴るゝ今日こそ色增りけれ
春の暮の歌あまた詠みたりし次でに

一八身一つの歎きならねば暮て行春の別をとふ人ぞなき

一九今はとて別るゝ春の夕霞こよひばかりや夏を隔てむ

二〇號くにか暮ぬる春は止る覽年は我身にそふと知にき

二一惜みつる春を限と思には殘れる花もみるそらぞなき
郭公

二二鳴捨てゝ雲路過ぎ行く郭公今一こゑは遠ざかるなり
旅のやどりの郭公

二三もろともに旅ねする夜は郭公梢やなれが庵なるらむ

二四聲ならす信太の杜の時鳥いつ里なれて宿にきなかむ
遠村卯花

二五里遠みまだ咲やらぬ卯花や晒しもやらぬ布とみゆ覽
尋ねてあやめを引く

二六長きねは飽ぬ心を知べにてまだ知ぬまの菖蒲をそ引
年毎に葵をかく

二七憑みこしそのかみ山の葵草思へばかけぬ年のなき哉
雨の後の早苗

二八名殘なく晴ぬれども早苗取田子の小笠はぬぐ由もなし
曉のともし

二九思きや鹿にも逢ぬ照射すと有明の月を待ちつべしとは

三〇さも社は短き夜半の友ならめふすかともなく消る蚊遣火
更くる夜の鵜河

三一さきた河下す鵜舟にさす棹の音沍る迄夜は更にけり
古里の橘

三二橘の花吹く風をとめくれば珍らしげなき砌なりけり
たけのうちの螢

三三河竹のよ毎にともす篝火は宿る螢のひかりなりけり

三四泉にむかうて友を待つ

三五獨のみ岩井の水を掬びつゝ底なる影も君を待つらし
月前のなでしこ

三六照る月の光か霜とおきながら庭ものみゆる床夏の花

三七水雞いづれのかたぞ

三八槇の戸を明ぬ音にや著からむ水雞はそこを控けりとは

三九風そよぐ楢の木陰に立よれば薄き衣ぞ先しられける
萩花露おもし

四〇秋萩はこぼるゝ露の滋ければ折ふす枝を飽迄ぞ見る
薄の風に靡くを見て

四一吹ぬるは靡かぬにこそ花ずゝき風に隨ふ心とはみれ
萩のころに夢おどろく

四二軒近き萩の上葉の音せずば心とさむる夢にぞ有まし
庭前刈萱

四三契あれや野邊の刈萱移し植て思亂るゝ友となしつる
萩を

四四しがらめば花も散覽小萩咲のべには鹿をすませずもがな
寺靜にして蟲の聲をきく

四五鐘をだに打忘れにし山寺に入相は蟲の聲のみぞきく
月

四六暮ぬとて待つる月の影清み出れば晝に又なりにけり
雲間月

四七定まらぬ雲の絕間の月影は消て又ふる雪かとぞみる
時雨

四八音計りよはの木のはに類へ共時雨は庭に積らざり鳧

四九時雨のうちの鷹狩
時雨の降ぬ間にとて留めやはする御狩のゝ狩場の小野に飽ぬ心は

五〇十月ばかりによもすがら木の葉の散りければ

五一明果ば偖だにもみむ木葉ちる庭をば霜の置な隱そ

五二難波潟汀の芦は霜がれてなだの捨舟あらはれにけり

五三水鳥の上毛の霜は拂へども下の氷やとくる間もなき
寄ㇾ石戀

五四我戀は汐干に見えぬ沖の石の人社知ね乾く間ぞなき
曉の別を

五五明ぬれどまだ後朝になり遣で人の袖をも濡しつる哉
はじめは思はで後思ふ戀

五六今更に戀しといふも賴まれず是も心の變ると思へば

五七一夜とてよがれし床の小筵に頓ても塵の積りぬる哉

五八今更にいかゞはすべき新枕年の三年は待わびぬとも

五九賴むれば涙の河も淀みけり人の情やねせきなるらむ

六〇眼の前に變る心を白露の消えばともにと何思ひけむ

六一逢と見る夢を覺つる悔しさに又睡ろめど叶はざり鳧

六二夜と共に清水に袖は濡せども越るよもなき相坂の關

六三今はさば何と命をかけよとて夢にも人の見えずなる覽
雨中歸戀

六四徒に歸る空より降る雨は分けて袖こそ濡れ增りけれ
短き夜を恨むる戀

六五夏の夜を何歎くらむ只管に行て逢見ぬ時もこそあれ
昔見ける人にあひたる人にかはりて

六六中絕し野なかの水の行末に流れあひても濡るゝ袖哉
忍びて心をかよはす戀

六七人知れず下に行かふ芦のねや君と我とが心なるらむ
白地にはるかなる所へまかりたりしに都なる人の許より

六八斯てのみ絕て命のあらばこそ叶はぬまでも待試みめ
返し

六九待兼て堪ずなりなむ命をも我あらばこそ哀ともみめ
仁和寺の女院にさぶらふ人の許より獨寢など度々申し遣す返事に

七七女郎花亂るゝ野邊に入しより片敷よはゝ有じとぞ思ふ返し
八七女郎花亂るゝ野べにめもたゝて我故郷の花ぞ戀しき
寄レ蟲戀
九七我戀はをちのにすだく蟲なれや喈とも人のしらぬ社有め
初めたる戀のうた詠みあひたりしに
〇八思ひかね今日いひそむる玉章に絕ぬ契を結びつる哉
形見を留めて隱れたる戀
一八そことだに知せでいにし我せこが留ゝ笛の音にぞ泣ぬる
歌によりて增る戀
二八うしと思ふ人の心を種とする言のはをしも見ぞ悲き
逃レ懷・賀茂の歌合
三八云でのみ憑ぞ渡るよそ乍ら御手洗河の音に立ねど
四八我も又ふりなむとの近ければ長柄の橋をよそにやはきく
五八春日山生そふ松の枝毎に木高くならむ蔭をこそまて
六八遠ざかるその古の戀しきに何行末のちかくなるらむ
人の袖をもといふ歌を御覽じて　御　製
七八濡さるゝ其袂には非ねども聞に朽なむよぞはかなき
御かへし
八八數ならぬ涙もいかにしられまし人の袂を濡さゞりせば
中宮の御方に渡らせ給ひて女房のから衣をとりておはしましたりしを尋ぬる人もなかりしかば
二三日ばかりありて返しおかせ給ふとて結びつけよと仰せられしかば
九八思ひかね返しつる哉唐衣夢にもみゆる主や有ると
三河の內侍の歌をよしなど人々申しあひたりしかば遣しける
〇九花の香の身にしむ計ふ哉いかなる家の風にか有らむ
返し
一九春の內に匂ひ計の花の香をいかなる家の風とかはみる
三河の內侍人よりはことに賴むなど云はれしに
二九今よりはたのみ渡らむ八橋の下の心は我もしらねど
あり所しらねばいはぬなど申しける人に遣さむとて人の申しけるに代りて
三九渡つ海の底ともなどか知ざらむみるめ絕ぬる心也せば
春の頃こむと賴めたる人のさもなかりければ夢に見えけるしるしもなきこゝちして
四九春夜の夢にはしげにも見えしかどまさしからでも過にける哉
かへし
五九春夜の夢にしげにも見えたらばまさしからでは如何有べき
白地に立ち離れたる人のもとより
六九逢みても有ぬべしやと心みに立離るれば濡るゝ袖哉
かへし
七九逢みでも有べき事のあればこそ兼て心を試みるらむ
思とありける頃忍びて住む所の庭草も打ち拂ふともなかりければ露の繁くおきたりけるをみて
しのびたりしげみの庭の草のはに涙の露はおき餘りけり
八九思ふとしげみの庭の草のはに涙の露はおき餘りけり
したしき人の年頃うとくて過ぐるに一つわたりにあひていひ遣したりし　大殿三川
九九言のはの露計りだに懸よかし草の緣りの數ならず共
返し
〇〇紫の色に出ては云ねども草のゆかりを忘れやはする
雨中の遠き草といふ事を
一〇雨降れば思ひこそやれ和泉なる信太の杜の下の蔭草
壽量品の心を
二〇けふ聞けば光もふるき月影を出る初めと思ひける哉
淺茅原となりにける所に花の殘りて咲きてはべりけるををりて人に遣したりければ
三〇思ひきや花も我身も後れぬて有し昔を忍ぶべしとは
よをへだつる水雞
四〇槇の戸を叩く水雞に驚けばねぬ夜ぬるよぞ同じ數なる
初の夏郭公を待つ
五〇年ごとにまたぬうきのみ先だちて心もとなき時鳥哉
六〇郭公鳴きつる空の五月雨に濡れぬる袖も懷しきかな
門をあけぬ戀
七〇明やらぬ眞木の戸ざしを待程に橫雲渡る山端ぞうき
いづみにて
八〇飽ず猶掬ぶいづみに程ふれば心の中に秋は來にけり
雨後郭公
九〇五月雨に雲間の月のはれ行くを暫し待ちける時鳥哉
曉月
一一大かたに秋のねざめの露けくは又たが袖に有明の月

小侍從集

〔待宵侍從集〕

春

たつ春のこゝろ

一春立と知でもみばや天の原霞むは今朝の思なしかと
二改まる春はけさかと思ふより出る日影も珍らしき哉
左大將の家の百首のうち、山ざとのたつ春
三とけぬなる筧の水の音づれに春知初むる深山べの里
うぐひす
四けふとても憂身は春のよそなれば外に啼なり鶯の聲
うめ
五折袖にしまずもある哉梅が香の思ふ心の深さ計りは
さくら
六年ふとも散で櫻の花ならば日馴て斯や惜まざらまし
うみの邊の散る花
七ちる花を吹上の濱の風ならば又も梢に返りさかせよ
そま人に山の花をたづぬ
八問へど此賤男は過ぬ我身にも負ぬ櫻の花はいさとて
歸鴈
九友づれにこしその數もたらずして泣々今や鴛鴦がね
三月盡
一〇身に積る年の暮にも勝りけりけふ計りなる春の歎は
夏
衣がへ
一一惜こし花の袂は其ながら浮身し更ふるけふと成ばや
うの花
一二徒らに咲てや散らむ山賤の身の卯花はをりも知ねば
あふひ
一三いかなれば其かみ山の葵草年はふれども二葉なる覽
曉のほとゝぎす
一四夜もすがら待たれ〳〵て時鳥聲ほの〴〵と啼渡る哉
早苗
一五早苗とる山田の主ぞ老にけるこむ秋迄の命いかにぞ
花たちばな
一六軒近き花橘はいにしへを忍ぶの草のつまとこそみれ
一七移し植ぬ此國なら[illegible]は見ましやは花橘はかく匂ふとも
蚊遣火

八夏くればむろのや島の里人も猶蚊遣火や思立つらむ
とほさむらの蚊遣火
九けさみればをの山賤もあれやこの芹生の里に立る蚊遣火
なごしのはらへ
〇三峡河流るゝみをの瀬に早く身にしむ風は先立にけり
秋
たのいへのたつあき
一三山田守るすこが麻衣一へにてけさ立秋の風はいかにぞ
七夕のゆふべのこゝろ
二四なか〳〵にこの夕暮や七夕の思ふ心を盡しはつらむ
萩
三五萩が花重げにみゆる露計散さむ風はさも有らばあれ
やしろの邊の月
四六住吉と跡垂初めし其かみに月や變らぬ今宵なるらむ
月前のとほきこゝろ
五七厭ふらむくめぢの神の心まで思遣らるゝ夜はの月哉
月ゆくみちをおくる
六八吹拂る雲ゐの月のくもるまは我影だにもそはぬ旅哉
水の邊の月
七九隈もなき月影映す今宵こそ龍の清水名ぞかはりけれ
もみぢ山にみつ
八〇柞原時雨るまゝに常磐木の稀也けるも今こそはみれ
紅葉
九一限有りて秋はゆくとも紅葉散る龍田の河に柵もがな
まつ紅葉をへだつ
〇二折つれば松は我とや思ふらむ隙に紅葉の色をみむとて
秋のくれ
一三けふ暮る秋の形見や是ならむ置もあだなる露の白玉
冬
はじめの冬
二四初時雨寐覺の床に音づれてもらぬに濡るゝ片敷の袖
旅のとまりの時雨
三五草枕おなじ旅ねの袖に又夜はの時雨も宿はかりけり
雪
一四かき曇り天ぎる雪のふる里を積らぬ先に訪人もがな
二五枝繁き信太の森の蔭のみやけふ降雪の積らざるらむ
氷
一四水上や薄らふならむさよ更て筧にうつる水稀になる
百首の歌のなかにたきのそこの氷
七四山隱人も訪ひこぬ瀧水は氷柱にのみぞ結ばれにける
水鳥
八四氷しく汀の隙やせばからむ群れゐる鳥の飛分れぬる
山家のあらし
九四嵐にも尾上の鐘は響きけり霜はかりぞと何思ひけむ
百首のうち、たかくより、日くれぬ
〇五み狩する交野の眞柴折敷て旅ねをすべき今宵也けり
としの暮
一五算れば物うかるべきけふをしも年暮ぬとて何急ぐらむ
戀
二五まつ宵に更行く鐘の聲きけばあかぬ別の雞は物かは
三五君戀ふと浮ぬる玉のさよ更ていかなる妻に結ばれぬ覽
四五朝毎にかはる鏡の影みれば思はぬ影のかひもなき哉
五五思餘りみつの柏にとふとの沈むにうくは涙なりけり
六五今こそは逢夜に逢と見し夢を云ぬにいむと思合すれ
七五長らへばさり共とこそ思つれけふを我身の限也けり
八五今こそは絶果ぬとも君故にとまる心は身をも離れじ
九五垂乳めは戀に命や替べしとしらでや我を生し立けむ
〇六つれなさは君のみならず斯計り思ふに堪ぬ命有けり
夜まさる戀
一六いかにねし時ぞや夢に見し事は其さへに社忘られにけれ
雨によりてまさる戀
二六頼むれば待夜の雨の明方にをやしも社つらく聞ゆる
たがひに思ひしらする戀
三六さてをしれ云で思ひし心をば習すながら有し計りに
かどをすぐるにいらぬ戀
四六よきぬなり元みし道を忘れねば歩み留る胸を早めて
身を覩じていひでぬ戀
五六猿澤の池に靡きし玉藻こそかゝる歎の果ときゝしか
夢の中にちぎるこひ
六六見し夢を覺ぬ頃ての現にてけふと頼めし暮を待ばや
源氏によする戀
七六箒木の有し伏やを思ふにもうかりし雞の音社忘れね
神樂によする戀
八六人心はなだの帶のされば社衆て思ひしなかた
木によする戀
九六いかなれは朽ぬる袖ぞ波懸る岩根の松もさて社はあれ
としの暮の戀
七四恨みむも早晩なればあすよりは云でや門の松と見えまし
道心をおこす戀
一七嬉しくも戀路に惑ふ足柄のうき世を背く方へ入ぬる
雜
高倉院位のおほん時てうきんの行幸に御笛はじ
めてあるべしといふさだめに人々あまた參りて
萬歳樂一つばかりふかせ給ふあけがたに歸りて
人々の御なかにとて、左大將
二七笛の音の萬代までと聞えしに山も答ふる心ちせし哉
御まへにさぶらふにおほん返しつかうまつれと
おほせごとあれば
三七萬代と初音の笛にならのせて末を二笠の山や答ふる
正月七日中宮の御かたへ若菜まゐらせたまふに
四七生立む二葉の末を今年よりこは三熊野の若菜とをしれ
うへおほんかせのけむづかしくおはしましたる
にさま〳〵の物みゆ歌よみたらばなほるべしと
仰せごとあれば
五七君が代はこしの里人數そひてたえず供ふる貢物かな
建春門院の御かたの詞記三昧に聽聞に參れとあ
れば參りたるに一院も同じおほんかたにおはし
ますほどなりうちへまゐりてまたの日これよ
り
六七泊りゐて返らぬけふの心をや羨む物と我はなりぬる
御返し
七七世の常の栖を洞の内にして返らむ人と君をなさはや
左大將の三條の家に大宮おはしますころなれば
あそびまゐらせてかへらせ給ひしかば久しく音
なきにこれより
八七かつまたの池にぞ絶し自らをよそなる物と何思けむ
おほんかへし
九七勝またのいけらむ限り忘れめや又鳥のゐる世に返る共
おなじ人月おもしろき夜ぐしてあそびてつとめ
てあれより
〇八習ひにきあかぬ別の曉もかゝる名殘はなかりし物を
おほんかへし

一八これぞげに例はあらめ古のあかぬ別は身をも怨みき
久我のおほいとのしのびて物申すころ五月なか
ばのほどよし程なきにとて久我に二三日あそび
て歸りたるにあれより
二〇夢さもあふ名也皐夏のひも見程有りと覺えやはせし
返し
二一思わび絕る命もある物をあふ名のみやは儚かるべき
おなじひとのもとへ月をながめて
二二詠むらむ同じ月をば見る物をかはすに通ふ心也せば
返し
二三今宵我とはれましやは月をみて通ふ心の空に著くば
おなじ人久我にて箏などもしておもしろきあ
そびありしのち久しく音なきに
二四哀いつよかはの箏かげきえて有し思の果ときかれむ
同じ人のもとよりひがことを聞きてうらみつか
はして見ぐるしかりし文どもかへしたべといひ
つかはしたるに
二五思へ唯この言の葉を返しては何にかくべき露の命そ
修理大夫つねもり宮のすけにてつねに申しかは
すに久しく音づれねば
二六忘るゝは同じ浮名のこれは唯悔しきとのそはぬ計ぞ
かへし
二七悔しさのそふ計にも馴にせば忘る迄に問ざらめやは
左兵衛督しげのりのもとへ七月二つあるとしの
七月七日
二八天つ星空には如何定むらむ思絕ゆべきけふの暮かは
隆信かねてより九月十三夜もろともにみむと契
りてひとびとにさそはれて外にてあそびて又の
日
二九人しれぬ心は更にあくがれて思はぬ里の月をみし哉
かへし
三〇雨降とわびたづねにし月影をいかなる里にさは詠めけむ
前の左衛督公光ありかしらせずと怨みつかはし
たるにみわのやまならすともふらふらむといひ
つかはしたるに程なくたづねてひとつかはし
て
三一まつらむと何を印の杉にてか心もしらぬ宿を尋ねむ
かへし

三二人しらぬ心の内の松のみぞ杉にもまさる印なりける
おほいのみかどの右大臣かくれさせたまひて大
宮へ人々の御なかにとて
三三深山木の頼みし影もかひなくて溜らぬ雨とふる涙哉
おほいのみかどの少將宮へまゐりて尋ねさせ給
ふにいでぬと申せばまちかねていづとて局なる
硯のふたにかきつけたまひし
三四いとせめて待は苦しき物ぞとは昔は君も思知りけむ
返しやがてまゐりあひて
三五等閑にまつとはすとも君はよも更行鐘の聲は歎かじ
石清水の行幸の御ともにまゐりたるせうとの權
別當成清もよろこびしたるとて人々怜申すなか
にてんじやうよりとてまたことみやにおんふみ
に
三六嬉しとや神も心に石清水錦を着つゝかへるけしきを
返し
三七思遣れ誓ひし夜はのうきはしを錦たちきて歸る心を
みやの内侍殿のもとより罪深き夢みてわびさせ
たまひしことをたふときひじりに語れば參りて
こまかにうけたまはらむと申すいかゞといひつ
かはしければ
三八誘ふべき人間ならば知べせよさてや思の家を出ると
歌のとくひにて申しかはすに定長出家しつとき
ゝて
三九暮ひみむ同じき和歌の浦千鳥思入ぬる末たがはずば
源三位頼政もの申すころ二三日音づれぬに風さ
へおこりて心ぼそければ
四〇とへかしな浮世の中に有々りて心とつける戀の病を
かへし、頼政
四一いかばいきしなば後れじ君故に我もつきにし同病を
おなじ人はゝかること有りてしばし音せでしは
すのつごもりに
四二滯る春よりさきの山水を絕はてぬとや人はしるらむ
年ごもりに物にこもりていでゝかへし
四三滯る程かときゝし山河の絕はてけるは春ぞしらるゝ
同じ人この暮と契りつゝ許多すぎぬるにその障
りどもこまかに續けて今宵ぞ必ずとまうしたる
に

四四筏おろす柚山河の淺きせは又もさ社はくれの障らめ
かへし
四五昨日より涙落そふ柚河のけふは增ればくれも障らず
四六大內にさぶらふころよりまさもさぶらふに五月
雨日かずへて晴間なきに大宮へ參りたるに同じ
く頼政ちかき程にいでたるに月めづらしくさし
出でたれば
四七雨雲の晴間に我も出たるを月ばかりをや珍しとみる
返し
四八雨の間に同雲ゐを出に鳧鷖りこばなどか月に劣らむ
ともにはゞかり有りて久しくまさぬに十月一日
につぼみたる菊の枝につけて
四九君を尙飽こそ果ぬ色變る菊もみよかし開けだにせぬ
かへし
五〇いざやその開けぬ菊も賴まれず人の心の飽果しより
かくて二三日ありてうつろひたる菊につけてこ
れより
五一開けぬを秋果すとや見し菊の賴む方なく移ひにけり
かへし
五二移ろはゞ菊計りをぞ怨むべき我心には秋し無ければ
あはのかみたゞのりになき名たつころ頼政がも
とよりときめかさせたまふらむこそ愛でたくと
申しつかはしたる返事に
五三よそにこそむやの鈴踏見しか逢とは蠶の濡衣としれ
中將たかふさ八條のいへに內の女房あまた見に
ゆきたるおもしろくてなるこかけなどしたり遊
びてたち歸りこれより
五四仄みつる門田の稻にひたはへてしか厭はすば又も行ばや
返し
五五厭ふまで思ひなかけそ鳴子なは稻葉の風の招く心を
かくて後さまかへて八幡に籠りたるに都より人
々あまたうたおくられたり

五條三位としなり

五六彼岸へ渡りにけりな蠶小舟すまはあふ瀨と思し物を
これは返しとはなくてこまかなることどもの返
りごとのおくに
五七すみし世に逢瀨無りし石清水をり嬉しくぞ思出たる

新三位よりすけ

九君はさば雨夜の月か雲ゐより人に知れで山に入ぬる
返し
一〇すむかひも無て雲ゐに有明の月は入とも何か知れむ
かくてこもりゐたるに思はずに宮の御もとより
今までまうさぬなどこまやかにおほせられたる
に
一一とよ人も波に漂ふ海士小舟うらみは今ぞ漕ぎ歸りぬる
おもひをのぶ
一二石清水きよき流の末々に我のみ濁る名をすゝがばや
一三そむきにし印はいづら立歸り浮世にかくて墨染の神
一四覺ぬ世の夢に此世を見るだにも憂は久き歎ならずや
人命不レ停過二於山水一といふ文を
一五山水は結ぶ氷によどみけり過行く年ぞせく方もなき
心經
一六色にのみ染し心の悔しきを空しと說ける法の嬉しさ
いはひ
一七君が代を何に譬へむ二葉なる松も千年の末を知ねば
宮白川殿の御わたりに祝二首、たけ風になる、月
まつをてらす
一八打戰ぐ風無りせばいかにしてよる我友を有と知まし
一九明ぬとや塒のたづに思ふらむ月にしもふる松の玉枝を
二〇暁にけり三笠の山の梢まで賴をかくる藤のしるしは
二一君が代は菊の下水むすびける人の齡もなにならぬ哉

右以二爲定賴自筆之本一不レ違二一字一令二書寫校合一了

入撰集一此集不レ見歌（今略記國歌大觀番號）

千載八四〇　新古今六六　二三番　八三三　續後撰三
二　七五番　續古今三三三　一二六　二三九　一三九　續拾遺六三　四二　新後撰
六　六三三　九〇二　玉葉二四三　四七七　六八番　一五九七　續後拾六八　風雅
一三三　新千載二三六　新拾遺九八　一九五番　新續後拾遺五六　新續古今一六五
四三五　一八五〇

拾納言集

長方卿集

春

立春の心を

二荒玉の年とはきくにいかなれば唯同身のふりは行らむ
霞を
三春毎に面がはりせぬ霞こそ年立返るしるしなりけれ
濱邊霞
四春霞いくへ重ねて隔つらむえぞ三熊野の浦の濱ゆふ
五もゝ傳ふ八十の船路の夕霞幾重隔てつゝはぢ（原）島山
六よさの海霞み渡れる曙に沖こぐ船の行くへしらずも
霞中霞
七清見潟波の關路やこゝならむ霞の内に舟よばふなり
橋上霞といふことを
八沖つしほ高師の海の夕霞いつか濱名の橋もみゆらむ
皇后宮大夫三輪のやしろにまうでゝ人々に歌よ
ませしに春のうたとて
九長らへば我世の春の思出にかたるばかりの花櫻かな
見二遠花一といふことを
一〇おぼつかな一村見ゆる白雲や吉野のたけの春の初花
皇后宮大夫が春のうたとてよませしに
一一我が心いくしほ春にそめつらむ花さへにほふ曙の空
二引別ねことぢを立てゝ歸る鴈浪に調べの聲合すなり
河邊霞を
三尋ね行く人も道にやまよひけむ霞隔つるあまの川上
鶯呼レ客といふことを
四花の香を知べにやりし鶯のおのが聲にも人誘ひける
うぐひす
五花の木の枝に木傳ふ霞は聲のみならず見まほしき哉
六鶯のこゑまたしふく聞ゆなりすだちのをのゝ春の暮
高倉院の御時殿上人鶯契二遐年一といふことをよ
みはべりしに
七時とはみかきの竹をしめおきて千世をば君に契る鶯
百首の歌の中に梅花を
八花は散り香は匂ひくる梅枝に嬉しくつらき春の風哉
梅花招レ客
九君ませといひには遣で梅が香を風の便に任てぞよる
二條院の御時梅花遠薰といふことを
一〇梅の花さかぬ垣ねも匂ふかなよその梢に風や吹らむ
若菜
一一見渡せば若菜摘べく成にけり栗栖のをの〳〵荻の燒原
一二こらが手はさ濡やしぬる飛火野に雪も若菜も摘に社つめ
わらび
一三武藏野のすゝろが中の下萠はだうらわかし紫のちり
高倉院の御時宮花初開といふことを
一四暁初る雲ゐの花はいはね共空にぞ千世の春は知るゝ
花を
一五散もうくまつもくるしき櫻花暁初てこそ物も思はね
一六花の色は飽じとぞ思ふ萬代を宛ら春になして見る共
一七いざゝらば吉野の山の山守と花の盛は人にいはれむ
一八暁てちる時はくるしき櫻花待しは物も思はざりけり
一九春風のやゝふくまゝに高砂の尾上にさゆる花の白雪
二〇年へても忘れやはせむ花盛志賀の山越せしは其日と
一一花故に法に心を移りぬるいつも凋まぬ色をみむとて
二二吉野山梢に花の散るまゝにたえ〴〵になる峯の白雲
二三春の内は花に汚ると云るべき庭をも風の朝清めする
二四櫻咲くひらの山かせふくなべに花のさゞ波よする湖
二五花故にふみならす哉み吉野の吉野の山の岩のかけ道
花下忘レ歸
二六我をまつ放鄕人は花誘ふ風やあやなく嬉しかるらむ
白川にて花見侍りしに花樹臨二池水一といふことを
二七水底に花の錦をうつしてもまたあやおるは池のさゞ浪
池邊花
二八疊りなき池の鏡の底清うつしとゞめよ花のおも影
雨中花
二九春雨の糸すぢ弱みおり出でゝ花の錦を染むるぬれ色
林花半落
三〇庭の面に今これ計り積りなば梢に殘る花やなからむ
水上落花
三一水の面に花の錦を敷滿てゝ波のたゝむに任せたる哉
晩尋二山花一
三二暮ぬとも猶見にゆかむ櫻花あすは青葉に成も社すれ
遠尋二山花一
三三まだちらぬ花もやあると春霞隔つる山を幾重こゆ覽

池邊殘花
四七池水の底にも色の映らずばたゞ一枝の花をみましを
柳夾レ水
五七筏士の此方かなたへこす棹のしづえをさふる柳原哉
春駒
六七萌出る春はけしきのとなれば草葉ぞ駒の心なりける
七七春くれば澤邊の眞菰角ぐみて泥みし駒も引替へてみゆ
八七春くれば雲に入ぬとみゆる哉澤邊に荒る鶴ぶちの駒
春雨
九七日にそへて綠ぞ增る春雨のふるからをのゝ道の芝草
つゝじ
〇八紅のやしほの岡の岩つゝじこや山姫のまふりての釉
夏
卯花
一八白波のこすかとぞみる卯花のさける垣ねや末の松山
二八卯花の枝さしかはす細道は雪の下行く心ちこそすれ
郭公
三八心をぞつくしはてぬる郭公ほのめく宵の村雨のそら
四八時鳥雲ゐのよその一聲は聞でやみぬといはぬ計りぞ
五八郭公語ひかはす名殘には待つとよりも物をこそ思へ
六八たまさかに來鳴とならば郭公待よの數に聲は聞せよ
旅宿郭公
七八時鳥よそに鳴音のいかなれば草の枕に露こぼるらむ
皇后宮大夫人々に四季のうたよませしに夏を
八八立花のしたてる枝に郭公かたらひすらし聲も忍ばぬ
故郷郭公
九八あれにける高津の宮の郭公誰もなにはのと語るらむ
五月雨
〇九みたやもりせきぞ煩ふ五月雨に畦こす計水嵩增りて
夏月
一九夏夜は月のみ舟にまほあげて天の戸渡る程のなき哉
晩涼如レ秋
二九夕されば一むら薄打靡き鹿こそなかね秋のしけきぞ
三九夕されば難波の芦を吹風にこやの渡りぞ涼しかりける
關路晚涼
四九夕さればせき風はやき清見潟秋とおぼゆる波枕かな
泉を
又旅宿蟲を
七一萱がねに蟲恨みける野邊にしも獨さぬれば都思ほゆ
水路月
八一泊りする湊に影の宿る夜は月も旅寢の心ちこそすれ
林中月
九一神ますと人は云ども柏木の杜の木間は月のみぞ漏る
池上曉月
二〇生駒山たかねに月の入まゝに氷きえ行くこやの池水
九月十三日夜によめる
二一さやけさを今宵と人の云置さし昔も斯や月は澄けむ
蟲を
二二鈴蟲を御狩の鷹の音かとて野邊の雉子や草隱るらむ
二三忘られて手馴の駒もこぬ宿にいかで音なふ轡蟲ぞも
搗衣
二四遠つ道行きにしせなを戀わびて空しき閨に衣うつ也
遠聞二搗衣
二五寢覺してきけば物こそ悲しけれ遠路の里に衣うつ聲
紅葉
二六飛鳥川せゞに浪より紅やかづらき山の木がらしの風
二七妹が袖まきての山を紅に千しほふり出で雨や染らむ
二八みむろ山神に錦もたむけせじ紅葉の色にあける此頃
社頭紅葉
二九筏さを錦をわけてくだすめりにふの川上紅葉散らし
關路紅葉
三〇時雨ふる音羽の山の嵐ゆゑ紅葉になれるせきの杉原
紅葉未レ遍
一三山廻り村雨にして過ればや峯の木葉を染はづすらむ
きり
二三難波潟こや夕霧の立つならむ伊駒の山の峯の村ぎえ
三三柚人は道迷ふらしさき向の檜原もみえず霧たち渡る
きくを
四三長月の菊のした水汲みくればおいせぬ藥誰か尋ねむ
秋のすゑに大堰河にまかりたりしにもみぢいま
だちらずはべりしかば
五三紅葉ばを吹もちらさで小倉山峯の嵐の我を待ちける
冬
月前落葉
六三吹く度に梢の風はよわりつゝ月は光のまさり行く哉

しぐれを
[七]音もせぬ蘆の丸やの村時雨曇るのみこそ徴なりけれ
[八]深山邊の檜の葉柏散つみて上には夜はの時雨音なふ
海路時雨
[九]松風の音かときけば淡路島時雨すぐとて苫尋ぬなり
家の歌合に曉時雨を
[一〇]み山べの檜の葉さわぐ初時雨幾むらすぎぬ明方の空
冬中雪
[一一]まろねするを島の綺の苫舘蔦屑が上に雪もしきけり
江邊氷を
[一二]淡風寒く吹らしたづの鳴なごの入江に氷柱ぬにけり
山家冬深といふことを
[一三]都人花のたよりを待ずともかれぬる草の庵をばとへ
皐后宮大夫四季の歌人々によませしに冬を
[一四]春ならぬ花とみよとは三吉野の玉松が枝にふれる白雪
山家落葉
[一五]山里に夜はの時雨と聞つるは紅葉を宿に吹にぞ有ける
橋上落葉
[一六]葛城やくめぢの橋のと絶にも紅葉を風の渡しつる哉
氷未二遍結一
[一七]原の池の汀は氷柱ぬにけらし湊をさして傳ふあぢむら
山路霰
[一八]霰ふるねなのしば山行く人の白玉包むまくりでの袖
深夜霰
[一九]竹の葉にそゝや霰の音す也さらでも夢の覺る折しも
ゆき
[二〇]夜もすがら床の狹筵下迄て今朝は高嶺にみ雪積れり
[二一]初雪のふるの神杉埋もれてしめゆふ野邊は冬籠せり
[二二]宮木ひく柚山人は跡もなしひはら杉はら雪深くして
行路初雪
[二三]道すがら降とはすれど行駒の爪も隱れぬけさの初雪
氷逐レ日結
[二四]難波潟汀日をへて凍るらし浦わの浪も沖になり行く
蹇草帶レ霜
[二五]冬深みをふの浦風さえ〳〵て霜枯にけりいせの濱荻
故郷雪
[二六]敷島やふるの都は跡たえてならしの岡に深雪積れり
千鳥
[二七]沖つ汐さしでの磯の濱千鳥風寒からし夜はに友よぶ
霜
[二八]冬の夜は玉の臺に霜さえて雲ぬにたづの一聲ぞする
海路雪
[二九]雪の內に友を尋ねし心ちしてあはでの浦に歸る舟人
年暮
[三〇]明ぬとて鳥だに鳴かばけふを又舊年と社云むとすらめ
旅宿歲暮
[一]白雲の八重立峯を暮て行く年と共にや我も越ゆべき
年の暮の雪の庭につもりたるをみて
[二]庭の面に雪こそ深く成にけれ我身に年の積るのみかは
戀部
戀
[三]落たぎつ早瀨の川も岩ふれて暫しは淀む涙ともがな
[四]うしといひつらしと云も押なべて心は同じ戀にぞ有ける
[五]つれなきを猶さりともに慰むる我心こそ命なりけれ
[六]一すぢに君を思ぞ入にける戀路は歸る方やなからむ
[六]袂には絕ぬ涙も戀にのみ朽ぬる名をばえこそ濯がぬ
[六]戀しなむ同じ浮名をいかにして逢に替つと人に云れむ
[六]紀國やゆらの岬に拾ふてふたまさかにだに逢由もがな
[七]信濃路や木曾のみさかの小笹原分行袖も斯や露けき
[七]さりともと思ふ心に慰めていはで過にし方ぞ戀しき
[七]誰をかは怨もすべきうつせ貝心碎くも我からぞかし
[七]これも皆報あるらむさきの世に我故君も物や思ひし
[七]云捨てゝ君が心しつからばそを怨ても慰みなまし
[七]斯しつゝあらぬ其よになりぬ共みし俤は如何忘れむ
[七]人しれぬ心の內のかねとを空しくなさぬ行末もかな
[七]君が住宿の汀に岩のあらば雲と成てもふれむとぞ思ふ
[七]道のべの草葉が露と成てさは君が裳裾を濡してしがな
[七]有へてば如何なるべき我乍ら憂せぬ戀の果ぞ床しき
[八]しまきふく櫻の灘の船わたり心惑ふも誰によりてぞ
[八]草をなみうだの燒野に住雉の何に隱れて戀を忍ばむ
[八]伊勢の海をふの忍を重ねつゝ逢事なしの身をいかにせむ
[八]戀をのみすまの汐干に玉も刈る餘に轉て袖な濡しそ
[八]寄ねばやあひづの山の中に又人に知れぬ道や有らむ
[八]淺せしや思ざりしを思でと有し其よのならむ物とは
[八]身に替む憂名のみかは永き世も同戀路に猶や惑はむ
[八]覺束な戀はいかなる色なれば云初るより深く成ゆく
[八]今はとて暫し忘るゝ時しもあれ何等閑の言葉ぞこは
[九]戀侘ぬ淵にも入む今はさはこむよを待と契だにおけ
[九]我戀はこざしの藁につく鳥の思放てどえこそ離れね
[九]しづが織る貢の麻のすだ弱み苦しき戀の繁きふしぞ
[九]笹蟹の我いか樣に爰動て君があたりに搔もつきなむ
[九]難波潟堀江の蘆に生まさるよしなき戀に身を碎く哉
[九]逢坂の山路尋ねて入ばかり我をゆるさむ關守もがな
[九]詠むればいとゞ物こそ悲しけれ暮行く程の空の村雲
[九]今は只そらし果つる敏鷹の爭で雲ぬのよそにだにみむ
[九]我戀は湊の藻汐の何なれや辛し惘なし人しれずのみ
[九]結ぶべき人も有らむ若松のおひ行末はいかゝ頼まむ
初遇戀
[九]思兼ね死なばやと云し言葉も逢みては先悔しかり鳧
忍戀
[一〇]我戀は小倉の山の霧隱れしかありけりと誰か知べき
[一〇]色深く下に思はむ岩躑躅いはじやいはゞ散も社すれ
二條院の御時山路見戀といふことを
[一〇]東路や逢坂山の行ずりに見し人しもぞつれ無りける
初戀
[一〇]包てもほに出るけふぞ賤が刈秋の山田の否と云なゆめ
行路戀
[一〇]小篠原わけ行く露もある物をあなあや憎の袖の雫や
遇二在所一戀
[一〇]妹が門駒の脚折る橋もがなそを喞ちても暫し止らむ
寄レ占戀
[一〇]思わび荒びにもする灰占も逢てふとは嬉しかりけり
賀茂の歌合に戀の心を
[一〇]涙川淵となりても果は猶あふせにかはる流ともがな
八幡の歌合、寄二松戀一
[一〇]波あらふ濱松が枝のたむけ草年ふる戀に袖ぞ乾かぬ
家の歌合に絕久戀といふことを
[一〇]待しよに思よそへて幾返り山の端出る月をみつらむ
ほのかに見たる戀
[一〇]我せこは待乳の山にすまねども見し俤やひれ振し袖
不レ知レ家戀
[一〇]わが戀は尋ね行べき方ぞなき漢ましきは三輪の杉村
並レ面戀
[一〇]いかこ潟よごの浦わに置網のめを並ても逢でやめとや

一柴園ふ園の瓜生の一列になるさしならばまくりあへかし
　春夜戀
一永き日を夜はの氣色と思ひせば獨や最と明し兼まし
　悲レ離戀
五夜と共に逢瀬絶せぬ中川も氷柱ねぬれば通ふ物かは
　雜部
　紀伊二位八十島詣に住吉にて人々歌よみしに
六神垣や磯邊の松に言問はむけふをば代々の例とやみる
　賀茂のまつりのかへさの五月一日にあたりたりしに女房の中より申しおくりて侍りし
七菖蒲ふく五月にかゝる葵草永き例にひかれもやせむ
　返し
八げにやげに千世の例と成べきは五月に懸る葵也けり
　祝
九神風やいすゝ河かみ宮居して幾萬代か君をまもらむ
　德大寺左府うせられて侍りしころ九月盡日三位中將のもとへ申しつかはし侍りし
〇二又もこむ程を待べき秋だにも別るゝけふは悲しき物をかへし
一身にしみて惜むとなしれ別にし名殘の秋の形見と思へば
　人々のちる日
二皆人は百の木葉と散々になり行く程はいかゞ悲しき
　十月に服になりて次のとしの春傍官とも加階のときよめる
三諸人の花さく春をよそにみて猶しぐるゝは椎柴の袖
　無常
四世中を思ひしとけばあだし野に風まつ程の刈萱の露
五世中はうだの狩場に住雉の有とてありと如何頼まむ
六世中は岸の影草ねをたえてよせくる浪を待程ぞかし
　少將公房出家の時兄少將のもとへつかはしゝ
七如何せむ我より和歌の浦人も浮世の網を出ぬときけば
　逃懷の心を
八憂身には時雨もよその物なれや歎く歎の色も變らぬ
　官辭したるよし申し侍るついでに
九同じくば苦の袂に脫更へて厭果てつと君につげばや
　返し　寂蓮
〇三思ひしる心のみこそ哀なれ苦の袖にも迷ふうき世を
　皇后宮大夫人々に逃懷の歌よませしに
一三澤邊にて子を思ふ鶴の鳴聲を天つ雲ゐに爭で通さむ
　おなじ大夫人丸の墓みにまかるとて其の心を人々すゝめてよませ侍りしに
二三塵となる跡訪までは難けれど誰も忍ばぬ柿の本かは
　かのはかに詣でゝ佛事をおこなひて
三三かきつめし詞の數毎に法の海にはけふや入らむ
　賀茂政平が一品經の歌よみ侍りしに、藥草喩品
四三おしなべて同じみ法の雨なれど潤ふ草木は物の品々
　海路の心を
五三沖つ浪たか島めぐり漕過ぎて遙になりぬ鹽つすが浦
　羇旅の心を
六三旅に出てみれば悲しも故郷の都の方はかすむ一むら
　別の心を
七三別れつゝ今は越路の歸る山えぞ一かたに思ひ定めぬ
　都うつり侍りし頃廣田邊の家に宿して柱にかきつけ侍りし
八三一夜ぬる草の枕もよゝをへて結置きてし契ならずや
　きしかたのことなどおもひつゞけはべりて
九三思出のなきにもあらぬ昔こそ忘れぬ夢の長き也けれ
〇四春の花秋の紅葉をみし友のなかばゝ苔の下に朽ぬる
　名所
一四さくらゐの里にて春は花をみて秋は桂の月を詠めむ
二四寫すとも筆も及ばじ淡路なるあ島の石にかゝる白波
　上陽人
三四はかなしや空しき床に明暮て年の六十の空に過ぬる
　李夫人
四四中々に散なむ後の爲とてぞ藝し花の顏もはぢけむ
　王昭君
五四かくばかりせき煩はゞ涙がは都の方へ流れいらなむ
　楊貴妃
六四幻は玉のうてなに尋ねきてむかしの秋の契をぞ聞く

此一册定家卿自筆之本一覽之次書寫了外題按納言家集直書之是按察大納言長方卿詠也
一本云　京極黃門自筆一冷泉爲尹卿傳二證本一而已
應長第三曆五月　日　　羽林郎藏藏

平忠度朝臣集

春
　立春
七四東路や一夜が程に來る春にいかで先づ立霞なるらむ
　霞
八四いかなれば同じ霞の詠やる遠路の里は深く見ゆらむ
　經盛卿の家の歌合に霞をよめる
九四さいたづまだうら若み三吉野の霞隱れに鶯鳴く也
　子日
〇五千世ふべき子日の松に袖掛て引馬の野べに今日は暮しつ
　若菜
一五雪分てゑぐの若菜も生に鬼今日の爲とは爭で知けむ
　雪中若菜
二五いかでわれ野中の雪に跡つけて下萌渡る若菜摘まし
　殘雪
三五年の內に又よりなむと思ふだに消るは雪の惜くやは非ぬ
　梅
四五香をとめて人はこず共梅の花よきてを渡れ春の山風
　夜思二梅花一といふ心を人々よみ侍りしに
五五梅の花夜は夢にも見てしがな闇の現の匂ひばかりに
　故郷梅花をよめる
六五古里はそことも見えず梅枝の匂ふや宿の軒端なる覽
　柳
七五青柳の糸染掛て佐保姫は見にくる人の無きや恨むる
　櫻
八五惜兼ぬ散花ごとにたぐふれば心も風に誘はれにけり
九五三吉野の花咲に鬼常よりも朝ぬる雲の晴るまもなき
　賀茂の歌合に花をよめる
〇六木の本を頓て栖となさじとて思顏にや花は散らむ
　爲業の歌合に、故郷花
一六小波や志賀の都はあれにしを昔ながらの山ざくら哉
　東山の花見侍りけるに家づとは折らずやと人の申し侍りければ
二六家苞もまだをりしらず山櫻ちらぬに歸る習なければ
　呼子鳥
三六聞佗びて我かと計り答ふれどさも非ずとや尚呼子鳥
　苗代

苗代に堰やとむらむ垣根もるいさら小河の音弱る也
人々三月盡の歌をよみ侍りしに
我身には今そなる春と思へ共暮行今日は惜くやは非ぬ
明くるまでながめあかして
暮行くもさすが名殘やとめつらむ哀かはらぬ曙の空
夏
卯花
心あらむ人も斯こそ植て見め賤が垣根に咲ける卯花
卯花殿レ水
もりいづる雫にてぞしる卯花のしつ枝柵む玉河の水
郭公
待ちえたる心ちこそせめ郭公遠里小野の夜はの一聲
海邊郭公
卯花と浪や見ゆらむ郭公まがきが島に來つゝ鳴なり
菖蒲
菖蒲草尋ぬる人の心にぞ先長き根はかゝりそめける
夏草
小萩原まだ花咲ぬ宮城野に何を妻とて鹿のふすらむ
隣家橘
句ふなる花橘やいにしへを宿の隣にさそひ來つらむ
螢
身の程に思餘れる氣色にていづちともなく行く螢哉
瀧下螢火
秋近くなりやしぬらむ清瀧の河瀬涼しく螢とびかふ
夕氷室
氷室山あたりの外やいかならむ夕風涼しみな月の空
秋
立秋
秋來ぬとしらで閨とも大方は怪しかるべき風の音哉
月前草花
萩が花手をれば濡るゝ袖にさへ露を慕ひて宿る月影
薄
花薄なびくけしきにしるき哉風ふきかはる秋の夕暮
荻
衣手に吹來る風も荻の葉に音信て耳にはしみけれ
故郷荻
萩原と見るぞ悲しき高まとの尾上の宮の昔ならねど
河原院にて故郷鶉といふ事を人々よみ侍りしに
鹽がまの昔の跡はあれはてゝ淺茅が原に鶉なくなり
鹿
さ夜ふけて鹿の音遠く成行くは峯の嵐や吹弱るらむ
さらぬだに秋の寢覺は悲しきをいかにせよとか鹿の鳴らむ
霧
旅人にあらぬ我さへ夕霧にわた瀬忘るゝみなれ河哉
駒迎
さ夜ふけて瀬田の長橋引渡せ音もさやけし望月の駒
月
宵の間も空やは斯るいかなれば更行まゝに月の澄らむ
月影はいづことわかじ物故に宿に心の止らざるらむ
を鹿野のたか葉刈敷さぬる夜を後も忍べと澄る月影
野徑月
月影の入るを限に分行けばいづこかとまり野原篠原
關路月
川影も映し留めず逢坂の關は清水の名にこそ有けれ
九月十三夜
をしと云ど秋の半の月は尚今宵もありと思做されき
遍照寺にて人々月見侍りしに
荒れにける宿とて月は變らねど昔の影は猶ぞ床しき
旅宿擣衣
旅寢する竹田の里にうつ衣一夜の程に聞ぞなれぬる
法金剛院にて池邊紅葉といふことを人々よみ侍りしに
青葉をば池の水草に任せつゝ色附枝ぞ影は見えける
山家の秋の暮といふことを
山里にすみぬべしやと習はせる心もたへぬ秋の夕暮
冬
初冬
萩の葉に哀知せし風の音の今朝は早晩と烈しかる覽
落葉
峰續き吹こす風に誘はれて紅葉散りかふ常磐木の森
霰
うち拂ふ心ちこそすれ旅衣袖にたばしる今朝の霰は
雪
かざ越の峰に溜らぬ白雪は晴行く空に猶ぞふりける
海邊雪
打そよぐ水の村鹿下折てうら寂しくぞ雪ふりにける
千鳥
浮寢する磯間の浦のさよ千鳥友呼交はす聲聞ゆなり
月前千鳥
さよふけて月影寒み玉の浦の雌小島に千鳥なくなり
曉更千鳥
寢覺する我しも友と思はでや野島が崎に千鳥鳴らむ
炭竈
山高み雪げの空と見ゆるまでいく炭竈の煙たつらむ
除夜
人數に非ぬを歎く我身さへ春と明日より祝ふべき哉
戀
初めていひ出づる戀といふこと人にかはりて
我身より戀はよそなる物なれや忍ぶ心に適はざるらむ
互忍戀
戀死なむ後の世までの思出は忍ぶ心の通ふばかりか
失二本心一戀
かゝらじと思ひしとを忍かね戀に心を任せ果つる
戀二遠鄕人一
戀ひ渡る妹が栖は思寢の夢路にさへぞ遠ざかりける
隔レ河戀
稀にだに逢夜もあらば天の河隔る星や頼ひならまし
月前戀
月影や深き戀路の知べなる詠むるまゝに思入りぬる
神かけてちかひ侍りける女のさうじなるよしを
申して逢ひ侍らざりければ
思きやかけて誓し當時のいもひによせて絕む中とは
忍びて人に物申しけるに鐘をうちつなりといさめければ
鳥の音を暫し待見よ冴る夜は霜にも敢ず鐘もなる覽
憂世をば歎き乍らも過しきて戀に我身や堪ず成けむ
如何せむこは世の常の習ぞと戀しもなぞや思なされぬ
思出る人なき夜はの袖だにも唯なる物か秋の寢覺は
經盛卿の福原の山庄にて寄レ松戀といふことを
頼めつゝ日數津守の恨みても待より外の慰めぞなき
寄二名所一戀
身をすてゝ哀とも見よ猿澤のいけるに社情無らめ
寄二源氏一戀
逢とみる夢さめねばつらき哉旅寢の床に通ふ枕風

夢中會戀

二夢覺て名殘に堪ず成ゆくは逢と見つるにかへむ命か

年を經てつれなき女に

三恨兼ね背果なむと思ふより憂世につらき人ぞ嬉しき

絶後悔戀

三忘にし心をのみぞ恨むべき人は絶ねと眠のやはせし

何となくいひかはしける女にしたしきさまになるべきよしをいはせ侍りて後心うきたえさまに

見えければ

四厭はるゝ方こそ有め更に又よその情は變らざらなむ

雜

閒冷夢驚といふことを人にかはりて

五風の音に秋の夜深く驚と見果ぬ夢の名殘をぞ思ふ

ある所の屏風の繪にあれたる家に老人花見たる

所を人々よみ侍りしに

六なづさひし昔に非ず蒼ぬるを知ぬ納と人や見らむ

女房大輔に初めて逢て歌よみ戀などしてつかはしける

七雜波津の古き流れをせきとむる心の水を深く見し哉

友だちの今ようでくると申して音もし侍らでもくるあしたに月見る人にいざなはれて心の外なりしさまとことなしびしたりける返事に

八月を見て待れぬ夜半のあらば秋風や來ぬと分きて思てめ

法輪寺にこもりたる人の申し遣りて侍りける

九思ひたつ心よわくもぬるゝかな草の庵に墨染のそで

かへし人にかはりて

一〇草の庵は思遣るだに露けきにさぞ墨染の袖は濡らむ

なげくこと侍りける頃おなじさまなる人のもとより申し遣りて侍りける

一一わび人の涙にぬるゝ袖に又秋は露さへおくぞ悲しき

かへし

一二さもこそは同じ歎といひながら袖の上哉世のはかなきことなど侍從に申して侍りしほどに山里にこもりぬるを聞きて申し遣り侍りし

一三綾なしな世を背きなば忍べとは我こそ君に契置しか

長恨歌のこゝろを

一四冬來ては何を形見に眺めまし淺茅が原も霜枯にけり

盧方朝臣かき置きたる萬葉集を彼の人身まかりてのち後室のもとへ返しつかはすとて

一五有し世は思はざりけむ書置て此を形見と人忍べとは

かへし　後室

一六見ても猶袖ぞぬれぬるなき人の形見と忍ぶ水莖の跡

忍びてもの申しける女心にもあらず絶え侍りにける後こと人にあひ語らひてほどなく身まかり侍りにければ誰ともなくて母のもとにさしおかせ侍りける

一七もろ共に心のまゝに歎くらむ人さへ果は羨まれつゝ

親のいさめければ中たえにける女の身まかりぬと聞きてよみ侍りける

一八別るとも有し年らの中ならば二度物は思はざらまし

法華經品々の歌よみし中に、信解品

一九垂乳根と聞ぬ先より大方は怪しき迄ぞなづさひにける

提婆品

二〇よそに社あだと見ゆ共千年迄へし中は隔しもせじ

安樂行品

二一其玉を結びこめける元結もとくべき程の有ける物を

觀音品

二二おり立て頼むとなれば飛鳥川淵の瀬になる物と祉きけ

神さびて猶やさしきは諸人のあきくらかへす春の曙

賀茂の歌合に述懷の心を

二三貝管に祈るに非ず思兼ね背き果つべき世とも知せよ

述懷

二四長へばさりともと思ふ心祉時につけつゝ弱り果ぬる

祝

二五千年とぞまづいはれたる君が爲思ふ心は限なけれど

三位中將重衡のもとより內の御臺ばん所へ梅につけてまゐらせむとて乞はれて侍りしに

二六千世經べき君が插頭に此春は手折初つる宿の梅が枝

右之本者藤原守忠依朝臣後成卿之命書之畢

自筆の本を大樹より出だされ兵部卿宗綱卿にかきてまゐらすべきよし仰せらるゝ餘るに予彼の卿の學席に行きて後世の證本に備へむがためみじかき筆にまかせて寫し留めよみ合せ侍りけるとなむ

文明十六年春三月中の三日　　羽林藤原基春

前大納言實國卿集

春

立つ春の心を

二七こぞと云ば久くなれる心地して思へばよはの隔て也鳧

二八山人の筧に結ぶ氷だに解けずば今日を春と知らめや

關路霞

二九さらぬだに勿來の關と聞物をいとゞ霞の立隔つらむ

梅の花久しく匂ふ

三〇松が枝に映かぬ計ぞ梅の花色は千歳も變らざらなむ

對レ樹待レ花

三一櫻花今幾日あけて咲なむと枝物云はゞ問はまし物を

待二隣花一といふ心を皇后宮にて人々よみ侍りしに

三二詠めやる花し咲なば味氣なく待たぬ主や我物と見む

按察にさそはれて大內の花見侍りしに

三三雲上に風ものどけき春なれや散るとも見えぬ花櫻哉

三四飽なくに袖に包めば散花を嬉しと思ふになりぬべき哉

花見けりと聞きて花山院の中將のもとよりまたのあした昨日は何事か侍りしと問はれし返事に

三五櫻花見しその程は思ひやれ散より外の歎きやはせし

三六遠方の風に亂るゝ糸櫻我が手にかけて見る由もがな

本院の花見に參りたりしにみすのうちに琴のおとのせしかば歸りざまに

三七琴の音に飽でや今は歸りなむ花にとのみも思ひける哉

夏

三八ころもがへ

三九思ひなく花色衣ぬぐばかり染めし心のまづ變れかし

卯花連レ里

四〇山里の垣根ならびの卯花やおとなし河の瀬々の白波

爭待　郭公　といふ心を女御殿にて人々よみ侍りしに

四一我は早やきゝつと云む郭公人の睡ろむ時の間もがな

四二名殘なく過ぬる哉時鳥こぞ語らひし人と知らずや

水草隔レ船

四三螢小舟さして入江の蓋隱れ水うつ棹の音のみぞする

小屋五月雨

四六五月雨は賤の篠屋のしのすがき臥所まで水はきに烏
故里五月雨
五六朽にける板間にもれる五月雨の古屋苦しき我住ひ哉
六六明月似レ秋といふことを二條院にて人々よみしに
六六月清み眺めも敢ず明くるよや秋に疑れる印なるらむ
秋
江上月
七六とらぬだに玉江の月の清き上に光を映す秋の夜の月
鹿
八六粟津野に鳴夜の數の積れるは鹿も夜妻や難面かる覧
八月の中の十日に神樂をし侍りしいと名殘多かりしに長月の十日ばかりにかくなむ申しおこせたりし　隆信朝臣
九六あか星のあかで出にし曉は今宵の月に思ひ出でずや
返し
七〇唯愛に唯夏にとぞ思しにけふは八月のかひも無りき
落葉
一七紅葉ちる嵐の山の山守はおもひもよらぬ錦をやきる
關紅葉
二七音羽山幣と散りかふ紅葉をば關もる神や我物と見る
息后宮の女房もろともに大堰川の紅葉見にまかりはべりしに三位中將にはかに障ることありて留まりたりしかば云ひ遣しはべりし
三七諸共に君とみぬまのもみぢ葉は心の闇の錦なりけり
九月盡
四七暮行くを惜むに盡くる心こそ秋の今宵の類ひ也けれ
冬
曉時雨
五七をやみては又音づるゝ村時雨幾度と云に烏のなく覧
遠き山のはじめの雪といふ心を女院にてよみはべりし
六七杉原や三輪の山べに雪降て今日こそ冬の印とはみれ
雪のうちの鷺狩
七七明未明狩場の小野に雪降ば白斑にならぬ故鷺ぞなき
旅のとまりの千鳥
八七族寢する須磨の關屋に夢覺て我よすがらの友千鳥哉
山の家の氷
九七寛には氷柱ねにけり山人の朝げ夕げの水いかゞすると

戀
〇八戀初めし心の花の色深み風の傳にもまだ知らじかし
經二年序一戀
一八重霞はれぬ思はそれながら幾度春の變りきぬらむ
二八包めども堪ぬにひける菖蒲草我が心ねぞ顯れにける
ほのかに聲をきゝて
三八聞もせず聞ぬしもなき聲故にあるもあられず山時鳥
四八歎きつゝ斯てや消む白雪のしられむ迄の命ともがな
二條院にて戀の心人々よみはべりしに
五八先の世に我に心や盡しけむ報ならずば斯らましやは
依二和歌一增戀といふことを二條院にてよみはべりし
六八あふとは遠くにみゆる敷島の道にまどへる我心かな
七八戀死なば我故とだに思出よさこそはつらき心也とも
八八思餘りけぬべき物をいかなれば戀を命と人の云けむ
九八汐たるゝ我やいせをの蜑ならむさらばみるめを刈由もがな
依レ雨違レ約戀
〇九濡じとて思ひ歸さに思知れ世をしる雨はさぞ處せき
絶女遇二他人一戀といふ心を人々よみはべりし
一九とけ難み心と見しは氷室山唯我からの氷柱なりけり
かれ〳〵になりし人の又人に見えけるときゝしかば
二九契りしを三年までこそまたざらめ早晩也や新枕する
待二明後日一と云ふことを女院にて人々よみ侍しに
三九賴めおく今日はう月の夜して君を御諶の日社待るれ
雨度違レ約戀
四九有しそのうきを忘れて賴みつる今宵も同じ爲にさば
隔レ期變レ約戀
此間書加雜十
一九五月雨の日をふる儘に澤田川其高橋は名のみ也けり
閏五月郭公
二九さよ衣さて重ねよと契しを返してはさば夢にみよとや
上東門院にて戀官仕妨と云ふこゝろを
三九今年だに聲な惜みそ郭公己がさ月のそへるしるしに
山ざとに待ちけるころ郭公はなくやと人の尋ねはべりしかばいたく鳴きてあまりなるよし申したりしかば　經正朝臣
四九今もきは昔もきかず子規いとふ例にきみやなりなむ

返し
五九足引の山時鳥いにしへもものいふ人は厭ひやはせぬ
夏蟲
六〇夏蟲をはかなくよそに思ふ哉此は此よにもゆる計ぞ
夏月
一〇夏のよを怨みもはてじ月影の名殘は秋も斯ぞ惜みし
寄レ橘無常
二〇見むといひし君も待得ぬ橘は花の盛もあぢきなき哉
七夕
三〇秋にしもゆきあふとは七夕の長きよとてや契初けむ
四〇棚機に逢初衣ぬぎかさむかへる色をば忌もこそすれ
五〇年に待つあふよよりも織女は中々けふの暮や久しき
雁
六〇斯ばかり厭ふうき世をいかにして又歸來る初雁の聲
七〇夕まぐれ旅の空ゆく雁音は伏見の田居や泊なるらむ

入道大納言資賢卿集

梅
八〇梅の花ふきくる風や吾妹子が重ねし袖の匂なるらむ
菖蒲
九〇我宿の妻と賴まむ菖蒲草獨ねをのみかくる身なれば
雨中郭公
一〇遠かへりぬるともきなけ時鳥今幾日かは五月雨の空
夏夜待レ月
一月まてば涼しかり鳧夏夜も山のあなたに秋やきぬ覧
社頭明月
二さやけさにいとゞ光を增鏡くもなき空の月よみの神
月
三山のはに入ぬる月を惜むだに西へ心のゆきにける哉
駒迎
四望月の駒のあなたにみゆる哉引並べたる影にや有覧
社頭郭公
五ゆふかけて松のを山の時鳥神の印にひくこゑもがな
草花

六思ひ餘りほに出にけり花芒人めもしらず招き顔にて
虫
七いかなれば閨度毎に鈴蟲のふりせで聲の變らざる覽
鹿
八しどろなる小萩か本に音するは妻を忍ぶる小鹿鳴也
なでしこ
九獨寢に枕の塵は積らねど寂しかりけりとこなつの花
あられ
一〇あばらなる賤の伏屋に音するはた走りかゝる霰也鳥
雪
一一雪降て跡たえにける奥山にくる人もなき青つゝら哉
常住心月輪の心を
一二いかなれば我身離れぬ月影の心の闇を照さるらむ
丹州にこもり居のとき述懷のこゝろを
一三歎きこそおほえの山と積りぬれ命生野の程に附ても
一四世中の心づくしを嘆くまに我身のうさは覺えざり鳥
おなじころ一條の三位入道の許へ
一五今はさば君導べせよはかなくて誠の道に惑ふ我身を
返し
一六言のはゝ大江の山と積れ共君が生野に日こそ散さね
會不會戀
一七下紐はとけにし物をいかなれば面眺して又結ぶらむ
はじめの冬
一八いか計り寂しかるらむ秋はてゝ人も音せぬ冬の山里
述懷
一九返さぬもいかにかはせむ夏衣偏に君が縁りと思へば
二〇郭公おぼつかなきに同じくば都の方のことを語らへ
なげくことはべりしときかさぎの少輔入道延俊
申しおくられたり
二一とかくして眠を覺せ春夜の憂夢はさぞ悲しかるらむ
返し
二二春夜の憂夢にだに驚かすいつか眠のさめむとすらむ
ある女房のもとよりおくられたり
二三障り多み石間の水のもりこぬや絕果ぬべき始なら覽
かへし
二四心より外に一よの旅ねして石間の水の絕る名ぞ立つ
故少將遠忌日かさぎの少輔入道の女に物などあ
ひゞくして中將のもとへつかはされたりし返事に
二五年ふれど限もしらぬ歎かな後れ先だつ習ひなれども
返し
二六別れしはけふ也鳥と思ふかもさ社はあらめ歎く心は
壽永元年八月六日
入道大納言集　資賢卿宮内卿有賢之息也

右之外集に入る歌（今略記國歌大觀番號）
千載二六四　新勅撰三　六七　續後撰六三
以二冷泉中將爲景之本一挍二春正一寫レ之
應安貳年仲秋上旬

鴨長明集

春

歲内立春
二七春といへば吉野の山の朝霞年をもこめて早立にけり
二八霞隔レ浦
二九藻刈舟漕出て見れば越の海の霞にきゆるよさの松原
梅花誰家
三〇我も今しのばむ宿に梅植じまだ見ぬ花の面影にたつ
花を思ふ心をよめる
三一思遣る心やかねて詠むらむまだ見ぬ花の面影にたつ
關路花
三二春くれば不破の關守暇あれや往來の人を花に任せて
三三依レ花不レ厭レ風といふ心を
三四吉野河しからみかけて櫻さく妹背の山の嵐をぞまつ
父身まかりてあくる年花を見てよめる
三五春しあれば今年も花は咲にけり散を惜し人は誰らぞ
花
三六春風に雲のしがらみむら消えて高嶺を洗ふ花の白浪
三七吉野河淺瀨しらなみ岩こえて音せぬ水は櫻なりけり
三八立ち止れ野邊の霞に言とはむ己れはしるや春の行末
夏

三八山賤は垣ほに咲る卯花の手折る程をぞ惜むとは見る
夜見レ卯花
三九照月の影を桂の枝ながらをる心ちするよはのうの花
郭公
四〇時鳥初音聞つる名殘には暫し物こそいはれざりけれ
社頭郭公
四一郭公なく一聲や寶木とる枝にとまらぬ手向なるらむ
五月雨をよめる
四二五月雨の日數つもれば白菅の葉末を埋む井出の下水
螢火照レ橋
四三蘆の葉にすだく螢の仄々と辿りぞわたるまゝの繼橋
蚊遣火盡といふことを
四四蚊遣火の消行見るぞ哀なるわが下萌よ果はいかにと
四五夏月映レ泉
四六端つゝむすぶ雫のさゝ浪に映るともなき夕月夜哉
樹陰納涼
四七夏くれば過憂かりけり石上ふるから小野の楢の下蔭
四八水掬ぶ楢の木蔭に風ふけばおぼめく秋ぞ深く成行く
樹陰曉涼
四九まて暫しまだ夏山の木の下にふくべき物か秋の夕風
秋
萩をよめる
五〇花見つと人には云じ小萩原わけつる袖の色に任せて
水邊草花
五一さを鹿のしがらむ萩の下折にあやなく淀む谷川の水
五二浪枕錦の袖をかたしきてみぎはにねたる秋萩のはな
家の女郎花さかりなる時遠きところへまかるとて
五三主人はと問人あらば女郎花宿の氣色を見よと答へよ
閑庭刈萱
五四わけて來る人なき庭の刈萱は己亂るゝ程ぞ見えける
雁をよめる
五五行水に雲ゐの雁の影見れば數書止むる心ちこそすれ
雁聲遠聞
五六玉章の裏引返す心ちして雲のあなたに名のる雁がね
鹿をよめる
五七風渡る眞葛が原の寂しきに妻とふ鹿の聲うらむなり

七六夕あれば身にしむ野べの秋風に城でや鹿の聲を立るも
霧隔二行舟一といふ心をよめる
八六音すなり野島が崎の霧の間にたが澤舟の艫の鳴らむ
月
九六嵐ふく有明の空に雲消えて月すみのぼる高まとの山
一〇七月影の雲がくれ行く秋の夜はきえて積りぬ庭の白雪
一七眺むれば至らぬ隈も無りけり心や月の影にそふらむ
荒屋見レ月
歌枕
海上月
一一隈もなき鏡と見えてすむ月を百たびみがく沖つ白波
一二玉と見る蜑が沖の浪間より立出る月の影のさやけさ
下總の國にみさきといふ所あり日本の東の果なれば月の浪間よりいづるやうにて見ゆるなりとなむ
申しはべる
擣衣音遠
一四契あらば重ねもやせむ遙々と擣つをのみきく衣也共
海邊擣衣
一五月きよみ磯の松が根砧にて衣うつなり里のあまびと
紅葉映二池水一
一六秋山の映れる池の水草こそ梢に見えぬ青葉なりけれ
女郎花の霜がれゆくを見侍りて
一七來る人も枯々なれや女郎花あき果行くは己のみかは
長月の晦日の頃鹿のなくを聞きてよめる
一八霜に埋む眞葛が下の裏枯て寂しかる音にを鹿なく也
蟲聲惜レ秋
一九秋暮ふ蟲の聲こそ弱るなれとまらぬ物と誰か教へし
冬
時雨
二〇山の端に離れて消ゆる薄雲は嵐の送る時雨なりけり
二一音するも寂しき物と槇の板に思ひしらする初時雨哉
落葉
二二山風にちるもみぢ葉や積るらむ谷の筧の音弱るなり
大堰河にまかりて落葉をよめる
二三あすも來むとなせ岩波風ふけば花に紅葉を添て折けり
殘菊
二四冬來れば星かと見ゆる花もなし皆紫の雲がくれつゝ
霰
二五杉の板を假に打葺閨の上にたちろく計り霰ふるなり
二六霰ふる蘆のまろやの板廂寢覺催すつまにぞ有りける
深夜千鳥
二七さ夜更て衡妻とふ松風にこぬみの濱や寂しかるらむ
二八寢覺する波の枕になく千鳥己が音にさへ袖濡せとや
氷鎖レ夜結
二九薄氷翼にかけし鴛鳥のいく夜つもりて隙もとむらむ
水鳥をよめる
三〇水草ゐる汀をかへて鴨鳥は上毛さへこそ綠なりけれ
曉千鳥
三一月影の傾く磯にゐる千鳥かたはに殘る霜かとぞ見る
月前水鳥
三二曇行く月をばしらで曙霜を拂ひえたりと甚ぞ鳴なる
社頭冬月
三三片岡の楢の柴葉も散果てゝ枝にとまらぬ月の白ゆふ
ある人の北野にて歌合せむと侍りしに同じこゝろを
三四儔をわきて脊むるしめの內に豊となる見えぬ冬夜の月
寒蘆隔レ水
三五霜拂ふ羽音にのみぞ鴛鳥の蘆間の床は人にしらるゝ
三六議幕のこゝろを
三七惜めども過行く年のいかで又思返りて身に止るらむ
戀
初戀のこゝろを
三八袖にもる露打拂ふ哀我がしらぬ戀路を踏初めてけり
忍戀
三九忍ぶれば音に社たてね棹鹿の入野の露のけぬべき物を
四〇まて暫洩し初ても身の程を知やと問はゞ如何答へむ
不レ被レ知レ人戀
四一憂身にはたえぬ思に面なれて物や思ふと問人もなし
初見返事戀
四二何せむに覺束なさを歎きけむ思絕ねとかきける物を
後朝戀
四三越兼ねし逢坂山を哀れ今朝歸るをとむる關守もがな
成二疑心一戀
四四打拂ひ人通ひけり淺茅原ねたしや今宵露のこぼれぬ
毎夜他行戀
四五自らだがはぬよはも有やとて主なき宿に通ひ馴ぬる
思二世一戀
四六我はたゞ來む世の暗も遮莫君だにおなじ道に迷はゞ
並レ床不レ逢戀
四七よそにのみ並ぶる袖のぬる計り涙よ床の裏傳ひせよ
契レ曉戀
四八頼めつゝ妹を待間に月影を惜まで山の端にぞ懸たる
誓言契戀
四九神掛て頼むればよし心みむ偖もつらくば人頼めかは
夢中會戀
五〇現には暫し袖をも引とめでさむる別を慕ふかひなし
互精進戀
五一中に又人をばふせじ神垣や並ぶかひなき丸ね也とも
夢示現戀
五二驗あればいつなる物を逢とみるいもひの床の起憂やなぞ
對レ泉戀レ人
五三思出て忍ぶ涙やそひぬらむ色にいづなる山の井の水
寄二草花一戀
五四朝露に小萩分てもならひにき雫も色もそれは物かは
戀の心を
五五恨遣るつらさも身にぞ返りぬる君に心を替て思へば
五六戀しさの行く方もなき大空に又みつ物は恨なりけり
五七溜返り掬へてむせぶ袖の內に思殘せる言の葉ぞなき
五八磨墨をもどき顏にも洗ふ哉書かひなしと涙もや知る
五九見ても厭へ何か涙を耻もせむこれぞ戀てふ心うき物
六〇今よりはこりぬや心思知れさるぞや知ぬ人に移るは
秋のゆふべに女のもとへ遣はす
六一忍ばむと思ひし物を夕暮の風の氣色に絲にまけぬる
雜
やごとなき人の若君生れ給へることをいかゞとあれば
六二とも斯もえ社岩ねの松枝に木高く巢立鶴の子なれば
津の國へまかる道にこやといふ所にとまりて侍るに聞のさうじにあやしげなる手にて手ならひをして侍るかたはら書つけゝる
六三津の國のこやの蘆手ぞしどろなる難波さしたる蟹の住ひぞ
山里なる所にあからさまにまかりてよめる
六四かりに來て見だにたへぬ山里に誰徒然と明暮すらむ
物思ひ侍る頃をさなき子を見て述懷の心を

二奥山の正木の葛くりかへしゆふともたえじ絶ぬ歎は
三有ば厭ふ背けば慕ふ數ならぬ身と心との中ぞ床しき
四心にも有で何ぞのふるかひはよし賤の身よ消果ね唯
五何事をうしといふらむ大方の世の習こそ聞まほしけれ
六うき乍ら杉野の燧の聲立てさ踊る計り物をこそ思へ
七霜埋む枯野に弱る蟲音のこはいつ迄か世に聞ゆべき
八世は捨つ身はなき物に徹果つ何を恨むるたが歎ぞも
九憂はいかにせむとて惜む今朝ぞとて人に代て心をぞ問
一〇花ゆゑにかよひし物を吉野山心ばそくも思立つかな
一一哀ともあだに云べき數さかと思ふ人の知ず顔なる
一二住侘ぬいざさば遁む死出の山偕だに親の跡を踏べく
これを見侍りて輔光
一三住侘て急ぎな越そしでの山此世に親の跡をこそふめ
と申し侍りしかば
一四情あらば我惑はすな君のみぞ親の跡踏道は知るらむ
懐舊の時子といふことを
一五思ひ出て忍ぶもうしや古を今束の間に忘るべき身は
一六淨土の相かきあらはしたる中に花のふれる所を
一七たえずちる花も有りけり故郷の梅も櫻もうしや一時
ある聖のすゝめにて百首の歌を厭離穢土二欣
求淨土によせてよみ侍りし中に雁を
一八白雲に消ぬ計りぞ夢の世をかりと鳴音は己のみかは
對レ月忘レ西
一九朝夕に西を背かじと思へども月待程はえこそ對はね

承元元年五月 日 散位鴨長明判

惟宗廣言集

春

元日のこゝろを

一けふぞとは夜間に誰か告つる明れば雖レ春めきに鬼
行路子日
二子日とも思はで過る春の野に松に引れて立停りぬる
霞の歌十首よみはべりし中に

二見渡せばあしたの原のうす霞薄きや春の初なるらむ
三蓮や長柄の山に雪きえて志賀のわたりは霞こめたり
名所霞歌枕
四春霞たなびきぬれば浪こゆと音にやきかむ末の松山
霞藏二關路一人
五あふ坂の關ゆく人は誰ならむ霞のうちに聲の聞ゆる
海邊霞
六潮やく煙になるゝ蜑人は霞に春をわかずや有らむ
鶯
七春くとは雜の梅に見えぬるを我つけがほに鶯のなく
曉鶯
八我が宿の雜の梅をねぐらにてよをこめてなく鶯の聲
山家鶯
九宿近き谷のふるすは雪きえてまだうちとけぬ鶯の聲
百首の中、殘雪
一〇おく山の谷のふしきの若蕨春さへ雪ぞ降しきにける
山家殘雪
一一人はいさ我とは踏じ若菜つむ外もの野べの雪の村消
歌林苑の歌合、わらび
一二春くればおどろが下に萌出て折しる物は蕨なりけり
宰相入道教長の歌合、山家を尋ぬといへることを
一三花かとて尋ねきたれば白雲の立田の山の梢なりけり
同じこゝろを
一四我が心なぐさめよとや山櫻たづぬる峰にかゝる白雲
侍從家隆の家の歌合、花を
一五吉野山霞はれゆく絶間より立ちかはりぬる花の白雲
日吉の歌合、花を
一六朝まだき春の木ずゑを見渡せば霞にきゆる花の白雪
公卿殿上人あまたひきぐして白河にて物會ありてこのしたにてまとゐしてかはらけさして今樣など侍りしに今日和歌のなきこそ遺恨なれと人々侍りしかば女の歌しかきてこのしたに落して侍りしに人々興にのりてふるくなり給へる聲は
涙抑へがたくて各やさしき返歌ども侍りき
一七花故にみ雪ふりにしわたりをば思ひや出る白川の水
刑部卿頼輔朝臣の家の歌合、歸鴈を
一八難波潟つらねて歸る雁音は同じもじなる蘆手也けり
款冬を、讃岐院の御合

一九いかなれば春を重てみつれ共八重にのみ咲山吹の花
夏十五首
更衣
二〇夏衣人め計りは更ふれども花に馴にしとをしぞ思ふ
禁中更衣
二一九重にけふわがきつる夏衣猶薄きなや立むとすらむ
名所卯花
二二下枝迄おりぬる鷺とみゆる哉搖木の杜に咲ける卯花
日吉の歌合、郭公を
二三尋ねかねふる山道に郭公一聲なくやなさけなるらむ
侍從家隆の歌合、時鳥を
二四一聲をきゝての後も時鳥又なくことは變らざりけり
暮天郭公
二五聲よりも妻や人に忍ぶらむくるれば名のる郭公哉
馬上郭公
二六郭公あかですぎぬる一聲に思はぬかたへ劇を早むる
海邊郭公
二七小夜ふけて一聲なのる郭公聞すやあらむいねの蜜人
歌林苑の歌合、五月雨を
二八梅雨にそことも見えぬ難波江は芦の末葉ぞ落標なる
連日五月雨
二九つくづくと軒の玉水音づれて幾かに成ぬ五月雨の空
旅宿五月雨供花
三〇梅雨に旅寢の床の浮ぬれば筏にやどる心ち社すれ
連夜照射百首
三一照射する裾野の原の狩衣この下露にぬれぬ夜ぞなき
早苗莢、道歌合
三二秋ならば稻葉の露に濡なまし早苗を分る小田の細道
島邊螢
三三鵜舟をば籌も知らずいでにけり螢飛かふ宮人
水風似レ秋供花
三四吹風に芦の葉よそぐ夕霧は淺茅に蟲のなかぬ計りぞ
秋二十首
閑庭秋來歌合
三五荒果て訪人もなき宿なれど庭の淺茅に秋はきにけり
雨中七夕歌合
三六鵲の橋よりわたる七夕はこよひの雨や急がざるらむ
夕草花歌合

八七夕霧のうち渡りぬる小萩原錦をたゝむ心ちこそすれ
野徑女郎花
九七露滋き野路の篠原わけ行けば袖ぬらさする女郎花哉
〇八鶉なく岩田のをの〻女郎花折て過べき心ちこそせぬ
夕荻
一八さらぬだに露のこぼるゝ萩の葉に風渡る也秋の夕暮
承安二年なが月の十日ごろにふしみの山庄に御
幸なりて侍りしに女房のつぼねをすぎてとほり
侍りしにふしみのおもしろさはいかにと尋ねい
だされて侍りしかばかみのはしにかきてつぼね
へさしいれて侍りし
二八とふにいとゞ思ひ増ねしよ鶉なく伏見の里の秋の夕暮
月の歌十首よみ侍る中に
三八天の原今は厭はじ秋の月の心にいるも苦しかりけり
野徑月
四八見渡せば大江の山に雲晴て幾野ともなくすめる月哉
日吉の歌合、月を
五八月清み志賀のからさき見渡せば氷をあらふ沖つ白波
海上月
六八名にたてる高島が崎を見渡せば空行月を映す也けり
雲間明月歌合
七八雲をいで〻雲に又いる月影やふれば消ぬる庭の白雪
九月十三夜俱花
八八月の舟秋の半をこぎすぎてなに流るゝは今宵也けり
百首の中、鹿を
九八思さや妻よぶ鹿の鳴故にさも非ぬ袖を濡すべしとは
鹿のこゑいづれのかたぞ歌合
〇九孰方と弊分ねども身にしむは鹿の音おろす木枯の風
山家曉鹿山歌合
一九寂しさを何にたとへむを鹿なくみ山の里の明方の空
蟲歌合
二九露しげき淺茅が原に鳴蟲はよその袖をも濡す也けり
庭菊似レ雪歌合
三九ませの内にまだき降積む白雪の移ふにこそ菊と知ぬれ
終日見二紅葉一百首の會
四九朝まだきけさ立出て紅葉を夜の錦となるまでぞみる
龍原京にみやこうつも侍りしころ故鄕暮秋と
ふことを人々よみ侍もしに
遷り行く部の方をしたひてや秋も今夜は西へ暮ぬる
冬十五首
田家初冬
九いつしかと外もの小田に風返て漏りこし水も薄凍けり
海邊落葉
七磯近く紅葉を拂ふ立田嶋また幾潮か染めむとすらむ
霜中落葉賀茂
八しぐるとて柱が下に立よれば降ど濡さぬ木葉也けり
野徑時雨賀茂
九さらぬだに朝立袖は露けきに時雨て渡るのちの篠原
たながみにて網代與といふことを人々よみ侍り
しに
〇〇目をへつゝ渡の花吹網代木に紅葉をさへも寄てける哉
冬歌あまたよみはべる中に寒草を
一〇冬枯の淺茅が末におく霜のきゆる雫は垂氷なりけり
内藏頭季能朝臣の家の歌合山庄初雪といふ事を
二〇今朝よりは松の葉白く雪消て寂しさ増るみ山べの里
行路雪深賀茂
三〇雪深み駒はこゆれど逢坂の關の岩かどふみも慣さず
雪中客來賀茂
四〇降積る雪ふみ分てくる人は心ざしさへ深きなりけり
湖上水鳥賀茂
五〇氷柱ねるまの〻入江に漕舟の跡をしめつゝ潜く鴛鳥
月前水鳥歌合
六〇すはの海の月の氷にゐる鴨は冴ぬ折にや思解くらむ
月前千鳥白河の會
七〇やよやいかに傾く月を眺ればふけひの浦に千鳥鳴也
旅泊千鳥
八〇千鳥なく浮寢の床の苦やかたとまらぬ物は涙也けり
爐火夜友
九〇埋火のなからましかば寒筵に獨や冬のよを明さまし
寄二述懷一除夜
一〇數ならぬ身には積ぬ年ならばけふの暮をも歎ざらまし
戀廿首
初戀百首
一思餘り書漏しつる水莖に戀渡るとはけふやしるらむ
忍戀類題朝臣の歌合
二よと共に包む袖師の浦波は心にかけぬ時のまぞなき
日吉の歌合に戀の心を
三散さじと袖に涙を包むまに戀なかれじと云に成ぬる
河内守隆親の歌合、戀の心を
四あふことは心永くぞ頼まれぬ誰も命を知ぬよなれば
ふれてのちまさる戀といふことを
五知るらむや谷の岩まの埋水もらすに袖の濡增るとは
被レ妨レ人戀歌合
六懸初てまだねも馴ぬ琴の緒をいかなる人の引違ふらむ
戀二人一
七我戀は唯みつよするかたし貝皆逢このなきぞ悲しき
馬上戀與花
八思兼ね駒に任せていでぬれば戀路の末は逢人もなし
月前戀歌合
九月影の晴行くまゝにいかなれば涙の雨の降增るらむ
老後戀
〇思さや老蘇の杜に身はなりて逢ぬ歎の積るべしとは
懇會二他人一戀
一なほざりの契は我に年をへて姤しや誰にあふの松原
歌林苑にてやくそくの日をのぶる戀といふこと
を
二逢事をふとてけふも延びぬればあすもあすとや云むとす覽
後朝戀賀茂
三形見とて袖にしめつる移香を洗ふはけさの涙也けり
同じこゝろを
四逢でこそ恨もせしか葛葉の返るけさ又露のこぼるゝ
五怨戀歌合
六恨むるも我習にぞ頼まるゝ戀しさこその有かと思へば
寢レ人戀レ人歌林苑
七後朝にならむ歎といひなして非ぬ涙を君にかけつる
二世ちぎる戀
八儚くぞ後のよ迄と契りけるまだきにだにも變る心を
遇不レ逢戀
九逢ふとの露ばかり皆れぬればこれや歎の杜の下草
物申しける女頭おろしつと聞きていひ遣しける
一〇まことにやそう果にける梓弓思返らむ事もこそあれ
一一引据て分で駒にし敏鹿のそうにしとをいつか忘れむ
雜十首
祝

一君が代はなかねの浦の小れ石の松生茂る山となる迄
王昭君
二心から玉藻の屑とかゝれにき何かゑ島の恨しもせむ
上陽人
三鴛も妾もあらずなりゆくをいかに變らぬ涙なるらむ
旅
四斯しつゝ紗の栖と思にも野べの旅ねは露ぞこぼるゝ
述懷歌合
五黒髪の亂れて物の悲しきは思ふ筋にもなき世也けり
六斯計り歎ならぬ身のいかなれば人より先に物は悲しき
世の中靜ならずはべりしころ宗圓法橋忍びて歌合すとて懷舊の歌こひてはべりしかば仕りし
七世中を思ひ亂るゝ度ごとに昔をのみぞ忍ぶもちずり
無常
八露の身のあだなるとをしれとてや例に引る笹蟹の糸
即身成佛
九この身にて光をさゝむさゝゝとしも心一つに有明の月
和光同塵
〇一〇和ぐる塵ばかりこそ變るらめ神も佛も同じ身なれば
廣言集以二阿佛眞蹟一不レ違二一字一書寫遂二再校一畢
貞享二年初冬中澣　前内大臣經光

源師光集

一霞の心を
一朝未明霞にけりなむこの浦に出づる友舟數隱れゆく
二心ある蜑のすみかのいかならむ霞こめたる松が浦島
三霞しく敷津の浦のうけのをは心あてにや尋ね行らむ
雨中鶯と云ふことを
四鶯は梅の花笠きたればや雨にも聲のしをれざるらむ
隣家鶯
五春の來ぬ宿としりてや鶯のこなたの竹に枝移りせぬ
行路鶯
六鶯の都にきゝし聲すなりなれもや旅の空にいでつる
梅を
七色も香も知るにはあらず梅の花見れば嘆の忘る計ぞ
櫻
八三吉野の花に紛ふる白雲のはるゝは其も惜しき也鳧
中將有房の朝臣の家の歌合に櫻を
九人しれぬ心の行て見る花は殘る山べも有じとぞ思ふ
故郷花
〇一〇ふりにける志賀の櫻の春毎に幾よの人の心見るらむ
幸相入道教長の家の歌合、尋二山花一
一一浮世には思ひもいらで吉野山花故ならす岩のかけ道
はな
一二山櫻咲きにけりとも見ゆる哉春の日暮しきえぬ白雪
一三三吉野の花の錦に春風は匂をさへも織りつけてけり
こもり居てはべりけるころしらかはの花見になむいきたるとて左大將さそはれしかば法性寺にて
一四いさやまた月日の行も知ぬ間に花の春ともけふ社は見れ
花尋二樵夫一
一五爪木をは花の陰にや休めつるさらば疾くと我に教へよ
白川にはべりけるに花のさかりに左衛門督家道のもとへ申しつかはしける
一六山里の花の主を尋ねても宿からなれや香づれもせぬ
かへし　左衛門督
一七綾なしや花の名立を思ふよも訪で日數の過ぬる物を
雨中柳
一八春雨になほ立ちのぼる煙かと見ゆる柳の梢なりけり
白川にて殿上の人々花見はべりけるにいざなひぐして歸鴈といふことをよみやがてうちへかへりまゐりはべりしに
一九昔見し雲居は早くたえにしを養ましくも歸る鴈がね
春のくれを
二〇花を見て憂世の中も慰めし春にさへまた別れぬる哉
卯花
二一我宿の月の光と思ふらむ己がさと〳〵さける卯の花
時鳥
二二時鳥待えぬ年はなけれども思ふ計りはまだ聞かぬ哉
左大臣の家の歌合、時鳥
二三郭公聲な惜みそ菖蒲草玉にぬく日をけふと知らすや
五月雨
二四五月雨の日をふる儘に澤田河その高橋はなのみ也鳧
閏五月郭公
二五今年だに聲な惜みそ時鳥己が五月のそへるしるしに
山里に侍りけるころ郭公はなくやと人の尋ね侍りしかばいたく鳴きてあまりなるよし申したりしかば　經正朝臣
二六今もさは昔もきかす郭公厭ふためしに君やなりなむ
返し
二七足引の山ほとゝぎす古も物思ふ人はいとひやはせぬ
夏蟲
二八夏蟲をはかなくよそに思ふ哉是は此よにもゆる計ぞ
夏月
二九夏のよを恨みも果じ月影の名殘は秋もかくぞ惜みし
橘寄無常
三〇見むといひし君も待えぬ橘は花の盛もあぢきなき哉
七夕
三一秋にしも行逢ふとは七夕の長きよとてや契初めけむ
三二棚機にあひそめ衣脱貸さむ返る色をばいみも社すれ
三三年に待つ逢ふ事よりも七夕は中々けふの暮や久しき
雁
三四斯ばかり厭ふ浮世をいかにして又歸りくる初雁の聲
三五夕まぐれ旅の空ゆく雁音はふしみが田井や泊なる覽
共嗣秋
重家卿の歌合、戀
三六戀しとも又つらしとも思遣る心亂れか先にたつらむ
戀の心を
三七つらかりし言の葉をなど恨むる其をだに社聞すなりけれ
三八早く見し其面影の離れねば君故身をも捨ぬとをしれ
久しく音づれすとて　小侍從
三九文見ぬも歎きに非ず岩橋の渡し初たると絶ならねばかへし
〇四〇葛城の神の心を哀ともとけぬつらさに思ひしるかな
寄二氷鏡一戀
四一槇の戸を叩く水鷄のそれかとも驚かぬ迄とはぬ君哉こひ
四二汝のみつ磯べの草も限有ば見日は少し有りと社きけ
四三後の世と契らば身をも捨果てむ惜む命も誰が故そは
四四打歎きしなばやとのみ云ゝは逢見ぬともいける咎かは

雨中戀

五つらさ社雨には最どしられけれ斯降にしもいつか障りし

秋の頃しほゆあみに難波の方へ罷りたりしに頼政卿もわたのべがかたに侍ると聞きて申し遣し侍りし

六旅寝するかたは浦々變れども同じ都や戀しかるらむ

返し

七君がすむうら悲しくぞ我は思ふ忍ぶ都も誰が故そは

京へ歸るとて

八此里もうらなれに鳥朝たてば都を出し心ちのみして

難波よりかへりて侍りしに左大將實定のもとより

九都だに秋の哀はあるものをひなのながちの物語せよ

返し

〇九思ひやれひなのながちの寂しさは厭ふ都へ歸る心に

定長難波のかたに鹽湯あみにまかりてかれより申しおくりて侍りける　長

一尊てもなどか厭はぬ芦のやの灘の鹽屋の秋の旅寝をしほの湯にまかりたりしをこの人もとはず侍りしが申したりし

二君にこそ習ひそめしか旅寝する秋の哀をとはぬ心は

中將隆房朝臣雪のいみじく降り侍るに月面白かりしに内の女房あまたぐして法勝寺へなむとて立ちよりて誘なひ侍りしかば罷りて終夜遊びて歸りて彼より申し遣したりし　隆房朝臣

三逢でこそ昔の人は歸りけれ月と雪とを共に見てしが

返し

四月冴る雪掻分けてとふに社古きかひある宿と知ぬれその夜大鳥といふ風俗などうたはれて侍□いでらてそへて遣しける

五隈もなき月と雪とは大鳥の羽がひの霜をいつか忘れむ

月あかくはべりしに隆房朝臣のもとより

六君に逢で日數古屋のいぶせさは今夜の月も朧にぞもる

返し

七月見てもまづ思ひやる我心影となりてや朧なるらむ

此歌缺

大將になりて正月に雪の降りたるつとめて左大將のもとより

八雪積る年のしるしに花のさく羽の林をなどか尋ねむ

かへし

九はのはやし花さく春の嬉しさを包む程なり谷の埋木

賀茂重保禰宜になりたるに、申し遣しける

〇千早振其神山のかひありて木高くなるを聞ぞ嬉しき

かへし

一神山の峯の榊を取持ちて君がいふこそ嬉しかりけれ

いはひを

二君が代の數には足じもゝつてのやその濱路の眞砂也共

秋頃兼雅朝臣宇治に侍ると聞きて申し遣しける

三時しもあれ都の巽打しぐれ君が詠めを思ひこそやれ

返し　兼雅朝臣

四詠めやるよを宇治川も打しぐれ昔を忍ぶ氣色なる哉

久我の内大臣の家にて植ゑ梅待ゝ花といふことを

五春までの命は定なけれども若木の梅をねこじつる哉

右大臣の家の歌合、述懐

六今は唯いけらぬ物に身を做て生れぬ後のよにもふる哉

廣田の歌合に同じ心を

七行末の斯らむ事を知ずして我垂乳根の育したてけむ

述懐の十首の中に

八憂事を思知ずと思ふらむ思ひながらに過ぐる我身を

九さり共と儚く世をも頼む哉有べき程は見ゆる我身を

一〇憂ながら猶惜まるゝ命哉後のよとても頼みなければ

一一慰る方社なけれ身のうさを云合すべき類ひなければ

例ならぬことと大事にはべりける頃七月七日大輔がもとより

二七夕にかす衣手のぬるゝかなこれや限の旅と思へばと申したりしかば

此歌缺

皇嘉門院の近江世をそむきぬと聞きて申し遣し

はべりしなり

三一人は皆苦しき海に沈むまでのり浮びぬる海士小舟哉

かへし

四知り知ぬ苦しき海の人をみて渡さむと思ふ蜜の釣舟

二條院かくれさせ給ひての頃三河の内侍がもとより

五よと共に昔を戀る涙のみ盡せぬみとは知すや有けむ

かへし

六見せばやな昔こふらむ涙にも物思ふ袖のまさる袂を

人々歌かき集むることはべるに集つかはすとて　季能朝臣

七人なみに打出づる哉せだえにし淺澤水の流なれども

かへし

八古のながれ忘れず思ひ出る心の水のふかさをぞ知る

海上眺望

九朝なぎにしほち遙に出でにけり鷗にまがふ沖の釣舟

別

〇心との別を何か歎くらむやがて歸らぬ旅もある世に

陵園妾

二松の戸を一度さしてあけねども猶入くるは有明の月

金槐和歌集

鎌倉右大臣實朝公

春

正月一日よめる

一今朝みれば山も霞て久方の天の原より春はきにけり

立春の心をよめる

二九重のくもゐに春ぞたちぬらし大内山に霞なびく

故郷立春

三朝霞立てるを見れば水のえの吉野の宮に春はきにけり

春のはじめに雪の降るをよめる

四かきくらし猶ふる雪の寒ければ春とも知らぬ谷の鶯

五春立てば若菜摘まむと占置し野べとも見えず雪の積れば

春のはじめの歌

六打靡き春さりくればひさぎ生ふる片山陰に鶯ぞなく

七山里に家居はすべし鶯のなく初聲のきかまほしさに

屏風の繪に春日の山に雪降れる所をよめる

八松の葉の白きを見れば春日山木芽も春の雪ぞ降ける

若菜つむ所

九春日野の飛火の野守今日とてや昔形見に若菜摘らむ

雪中の若菜といふことを

一〇若菜つむ衣手ぬれて片岡のあしたの原は泡雪ぞふる

梅のはなをよめる

三梅枝に氷れる霜や解ぬ覽干し敢ぬ露の花にこぼるゝ
屏風に梅の木に雪降りかゝれる所
三梅の花色はそれとも分ぬまで風に亂れて雪は降つゝ
梅の花さける處をよめる
四わが宿の梅の初花咲にけりまつ鶯のなどか來なかぬ
花の間の鶯といふことを
五春くれば先さく宿の梅の花香をなつかしみ鶯ぞなく
梅花風に匂ふと云ふことを人々によませはべりし次でに
六梅が香を夢の枕に誘ひきてさむる待ちけり春の山風
梅香薫レ衣
七梅が香はわが衣でに匂ひきぬ花より過ぐる春の初風
梅の花をよめる
八春風は吹けど吹ねど梅花咲るあたりは著くぞ有ける
春の歌
九早蕨の萌出づる春に成ぬれば野べの霞も靡きにけり
霞をよめる
〇みふゆつき春しきぬれば青柳の葛城山に霞たなびく
一大方に春の來ぬれば春霞四方の山べに立滿ちにけり
二押なべて春は來にけり筑波根の木木毎に霞たなびく
柳をよめる
三春くればなほ色まさる山城のときはの杜の青柳の糸
雨中の柳といふことを
四漫綠そめてかけたる青柳のいとに玉ぬく春雨ぞふる
五水たまる池の坡のさし柳との春雨にもえ出でにけり
柳
六青柳のいともてぬける白露の玉ことごとくちらす春の山風
雨そぼふれる朝勝長壽院の梅ところ〴〵咲きたるを見て花にむすびつけし歌
七ふる寺の朽木の梅も春雨にそぼちて花の綻びにけり
雨後鶯といふことを
八春雨の露もまだひぬ梅が枝に上毛しをれて鶯ぞなく
故郷驟雨
九我宿の梅花さけり春雨はいたくな降そ散まくもをし
故郷梅花
〇誰にかも昔をとはむ古里の軒端の梅は春をこそ知れ
一年ふれば宿は荒にけり梅の花花は昔の香に匂へども
二ふる里に誰しのぶとか梅の花昔忘れぬ香に匂ふらむ
古郷春月といふことをよめる
三故郷は見しごとも非ず荒にけり影ぞ昔の春の夜の月
四たれ住みて誰眺むらむ故郷の吉野の宮の春の夜の月
春月
五ながむれば衣手かすむ久方の月の都の春の夜のそら
梅華をよめる
六我宿の八重の紅梅咲に鳧知も知ぬもなべてとはなむ
七鶯はいたくなわびそ梅の花今年のみちる習ならねば
八さりともと思ひし程に梅の花散過る君がきまさぬ
九我袖に香をだに殘せ梅の花あかで散ぬる忘がたみに
〇梅の花咲ける盛をめの前にすぐせる宿は春ぞ少なき
呼子鳥
一青によし奈良の山なる呼子鳥痛くな鳴そ君もこなくに
すみれ
二淺茅原行へもしらぬ野べに出て古里人は菫つみけり
きゝす
三高圓の尾上の雉子朝な〳〵妻にこひつゝ啼音悲しも
四己が妻戀佗にけり春の野にあさる雉子の朝な〳〵なく
名所櫻
五音にきくよし野の櫻咲きにけり山の麓にかゝる白雲
遠き山の櫻
六かづらきや高間の櫻眺むれば夕ゐる雲に春雨ぞふる
雨中櫻
七雨ふるとたち隱るれば山櫻花の雫にそぼちぬるかな
八今日は亦花に暮しつ春雨の露の宿りを我にかさなむ
山路夕花
九道遠み今日こえくれぬ山櫻花の宿りを我にかさなむ
春山月
〇風さわぐをちの山に空晴れて櫻に曇る春の夜の月
屏風の繪に旅人あまた花の下にふせる所
一木の本の花のしたに臥夜頃へてわが衣手に月ぞ馴ぬる
二この本に宿りはすべし櫻花散まく惜み旅ならなくに
三この本に宿りをすれば片敷の我衣手に花はちりつゝ
四今しはと思ひし程に櫻花ちる木の本に日數へぬべし
山家に花見る所
五時の間と思てこしを山里に花見る〳〵と長居しぬべし
花ちれる所を雁のとぶなる
六雁がねのかへる翅にかをるなり花を怨むる春の山風
きさらぎの二十日あまりの程にや有りけむ北むきのえんに立ち出でゝ夕暮の空をながめて一人をるに雁のなくを聞きてよめる
七眺めつゝ思ふも悲し歸る雁ゆくらむかたの夕暮の空
弓あそびをせしに吉野の山のかたをつくりて山人の花見たる所をよめる
八み吉野の山の山守花をみて長々し日を飽ずも有る哉
九み吉野の山に入けむ山人と成みてしがな花に飽やと
屏風に吉野の山かきたる所
〇三吉野の山に籠りし山人や花をば宿の物とみるらむ
故郷花
一人里は荒ぬ志賀の花園其かみの昔の春や戀しかるらむ
二尋ても誰にかとはむ古里の花も昔のあるじならねば
花をよめる
三櫻花散まく惜みうち日さす宮路の人ぞ圓居せりける
四櫻花ちらばをしけむ玉鉾の道行ぶりに折てかざゝむ
五道すがら散かふ花を雪とみて休らふ程に此日暮つゝ
人のもとによみて遣はしはべりし
六春くれど人もすさめぬ山櫻風の便りに我のみぞとふ
山家見花といふことを人々許多つかうまつりし次でに
七櫻花咲ちるみれば山里に我ぞおほくの春は經にける
屏風に山中に櫻咲きたるところ
八山櫻散ば散 らなむ惜げなみよしや人みず花の名立に
花を尋ねぬといふことを
九花をみむとしも思でこし我ぞ深き山路に日數へにける
屏風の畫に
〇山風の櫻ふきまく音すなり吉野の瀧の岩もとゞろに
一瀧の上のみふねの山の山櫻風に浮てぞ花もちりける
散花
二春くればいとかの山の山櫻風に亂れて花ぞ散りける
花風をいとふ
三咲にけりながらの山の櫻花風にしられで春も過なむ
花をよめる
四み吉野の山下蔭の櫻花咲きてたてりと風にしらすな
名所のちる花
五櫻花うつろふ時はみよしのゝ山下風に雪ぞふりける
花雪に似たるといふことを

六風ふけば花は雪とぞ散紛ふ吉野の山は春やなからむ
七山深み尋てきつる木の本に雪とみるまで花ぞ散ける
八春は來て雪は消にしこの本に白くも花の散積るかな

雪中夕花

九山櫻いまはのころの花のえに夕の雨の露ぞこぼるゝ
〇やま櫻あだに散りにし花の枝に夕の雨の露の殘れる

落花をよめる

一〇春深み嵐の山の櫻花咲くとみしまに散りにけるかな
三月の末つかた勝長壽院にまうでたりしにある
僧山陰に隱れゐるを見て花はと問ひしかば散り
ぬとなむ答へはべりしを聞きてよめる
一一行て見むと思ふ程に散に鳧あやなの花や風立ぬまに
一二櫻花さくとみしまにちりにけり夢か現か春の山かせ

水邊落花といふことを

一三櫻花ちりかひ霞む春の夜のおぼろ月夜のかものの川風
一四ゆく水に風の吹いるゝ櫻花流れて消ぬ泡かとも見ゆ
一五山櫻木々の梢に見しものを岩間の水の泡となりぬる

湖邊落花

一六山風の霞吹きまきちる花の亂れて見ゆる志賀の浦波

故鄕惜レ花の心を

一七小浪やしがの都の花盛風よりさきにとはましものを
一八散ぬればとふ人もなし古鄕は花ぞ昔の主人なりける
一九今年さへ訪れで暮ぬ櫻花春も空しき名にこそ有けれ

花恨レ風

二〇心うき風にもある哉櫻花さく程もなくちりぬべら也

春風をよめる

二一櫻花さきて空しく散りにけり吉野の山はたゞ春の風

櫻をよめる

二二春深み花ちりかゝる山の井のふりにし水に蛙鳴なり

河邊款冬

二三山ぶきの花のしづくに袖ぬれて昔おぼゆる玉川の里
二四山吹の花の盛に成ぬれば井出の渡りに行ぬ日ぞなき

山吹を見てよめる

二五わが宿の八重の山吹露を重み打拂ふ袖の薰ぬる哉

雨のふれる日山吹をよめる

二六春雨の露のやどりを吹風にこぼれて匂ふ山ぶきの花
山吹を折りてよめる
二七今幾日春しなければ春雨にぬるともをらむ山吹の花
山吹の花折りて人のもとに遣はすとて
二八おのづから哀ともみよ春深みちり殘る岸の山吹の花
二九散り殘る岸の山吹春深み此の一枝をあはれといはむ

山吹のちるを見て

三〇玉もかる井出の河風吹にけり水泡にうきぬ山吹の花
三一玉もかる井出の柵春かけて咲くや川瀨の山ぶきの花

まと弓のふりうにて大井川をつくりて松に藤のかゝる所

三二立歸り見てを渡らむ大井河かはべの松にかゝる藤波

屏風の畫に田子の浦に旅人の藤の花折りたる所

三三田子の浦の岸の藤浪立返り折ては行じ袖は濡るとも

池のほとりの藤の花

三四古里の池の藤なみ誰うゑて昔忘れぬかたみなるらむ
三五いと早も暮ぬる春かわが宿の池の藤波移ろはぬまに

正月の二つ有りし年三月に郭公の鳴くを聞きて

よめる

三六きかざりき彌生の山の郭公春加はれる年は有しかと

春のくれをよめる

三七春深み嵐もいたく吹く宿はちり殘るべき花もなき哉
三八眺めこし花も空しく散はてゝ儚なく春の暮にける哉
三九艮方に行隱るらむ春霞立出て山の端にも見えなくに
四〇行春を形見と思ふを天つ空有明の月は影もたえけり

三月盡

四一惜むとも今宵明なば明日よりは花の袂を脫て更てむ

夏

更衣をよめる

四二憎みこし花の袂もぬぎかへつ人の心ぞ夏には有ける

夏の始の歌

四三夏衣たつ田の山の郭公いつしかなかむ聲をきかばや
四四春過て幾日もあらねど我宿の池の藤波移ろひにけり
四五夏衣たちしときより足びきの山郭公待たぬ日ぞなき
四六初聲をきくとはなしに武隈の松にぞ夏の日數へぬべき
四七郭公必待つとなけれども夜な〳〵めをも覺しつる哉

山家郭公

四八山近く家居しをれば郭公なく初聲はわれのみぞきく

時鳥の歌

四九足曳の山郭公木隱れて目にこそ見えね音のさやけさ
五〇かづらきや高まの山の時鳥雲ゐのよそに啼渡るなり
五一足びきの山郭公み山いで〳〵夜深き月の影になくなり
五二有明の月は入ぬる木の間より山郭公なきていづなり
五三皆人の名をしもよぶか時鳥啼なる聲の里をとよむる

夕郭公

五四夕闇のたど〳〵しきに郭公聲うら悲し道やまどへる

夏の歌

五五五月まつ小田の丈夫暇なみ堰入るゝ水に蛙なくなり

菖蒲

五六五月雨に水增るらし菖蒲草うれは隱れて刈人ぞなき

五月雨ふれるにあやめ草を見てよめる

五七袖濡てけふ葺く宿の菖蒲草いづれの沼に誰か引けむ

五月雨

五八五月雨は心あらなむ雲まより出くる月を待てば苦しも
五九五月雨に夜の更行けば郭公獨山べを鳴きてすぐなり
六〇五月雨の露もまだひぬ奥山の槇の葉がくれなく郭公
六一五月雨の雲の懸れるまきもくの檜原が峯に啼く郭公
六二さつき山木高き峯の郭公たそがれ時の雲になくなり

故鄕橘

六三いにしへを忍ぶとなしに古里のゆふべの雨に匂ふ橘

廬橘薰二夜衣一

六四うたゝ寢の夜の衣にかをるなりもの思ふ宿の軒の橘

時鳥をよめる

六五郭公きけどもあかず橘のはなちる里の五月雨のころ

社頭時鳥

六六五月雨を幣に手むけて三熊野の山郭公鳴とよむなり

雨いたくふれる宵より郭公を聞きてよめる

六七郭公なく聲あやな五月闇聞く人なしに雨は降りつゝ

深夜時鳥

六八五月闇覺束なきに郭公ふかき峯よりなきていづなり
六九五月闇神なび山の郭公つまごひすらしなく音悲しも

蓮露似レ玉

七〇さ夜更て蓮の浮葉の露の上に玉とみるまで宿る月影

河風似レ秋

七一岩くゝる水にや秋の立田川かはかぜ涼し夏の夕ぐれ
七二螢火亂飛秋已近といふことを
七三杜若おふる澤べにとぶ螢かずこそまされ秋や近けむ

蟬

六夏山になくなる蟬の木隠れて秋近しとや聲も惜まぬ

みな月の二十日あまりの比ゆふべの風すだれをうごかすをよめる

六秋近くなる徴にや玉だれのこすの間通し風ぞ涼しき

夜風冷〻衣と云ふことを

七夏深み思ひもかけぬうたゝ寝の夜の衣に秋風ぞふく

夏の暮によめる

八昨日まで花の散をぞ惜みこし夢か現か夏も暮にけり

九拘幌する河瀬に暮ぬ夏の日の入相の鐘の聲により

〇夏はたゝ今宵ばかりと思ひねの夢路に涼し秋の初風

秋

七月一日の朝によめる

一昨日こそ夏はくれしかあさとでの衣手寒し秋の初風

海邊秋來といふことを

二霧たちて秋こそ空に來にけらし吹上の濱の浦の汐風

三打はへて秋はきにけり紀國やゆらの岬の蜑のうけ繩

寒蟬啼

四吹風の涼しくもあるか自ら山の蟬鳴て秋はきにけり

秋のはじめの歌

五住人もなき宿なれど荻葉の露を尋ねて秋はきにけり

六野と成て跡に絶にし深草の露の宿りに秋はさにけり

白露

七秋は早來にける物を大方の野にも山にも露ぞ置なる

秋風

八夕されば衣手さむしたかまとの尾上の宮の秋の初風

九なかむれば衣手寒し夕づく夜さほの河原の秋の初風

秋のはじめによめる

〇八天の河水泡さかまきゆく水の早くも秋の立にける哉

一八久方の天の河原を打眺めいつかと待し秋もきにけり

二八彦星の行きあひをまつ久方の天の川原に秋風ぞふく

三八夕されば秋風涼し七夕のあまの羽衣たちやかふらむ

七夕

四八天の河霧立わたる彦星のつま迎へ舟はやもこがなむ

五八戀々て稀に逢夜の天河川瀬のたづは鳴ずもあらなむ

六八七夕の別を惜しみ天河安のわたりにたづもなかなむ

七八今はしも別もすらし七夕は天の河原にたづぞ啼なる

秋のはじめ月あかゝりし夜

八天の原雲なき宵にひさかたの月さえわたる鵲のはし

九秋風に夜のふけ行けば久方の天の河原に月傾ぶきぬ

七月十四日夜勝長壽院の樓にはべりて月のさし入りたりしをよめる

〇九詠めやる軒の葱の露のまにいたくな更そ秋の夜の月

曙に庭の荻を見て

一朝ぼらけ荻の上ふく秋風に下葉押なみ露ぞこぼるゝ

秋の野におく白露は玉なれやとふことを人々にもはせてつかうまつらせし時よめる

二白露のあだにも置か葛の葉に溜れば消ぬ風立ぬまに

三蓼なくゆふぐれの秋風に我さへやな物ぞかなしき

山家曉望といふことを

四くれかゝる夕の空を眺れば木高き山に秋風ぞふく

五秋をへて忍びも餘ず物ぞ思ふ小野の山べの夕暮の空

六聲高み林にさけぶ猿よりも我ぞもの思ふ秋の夕べは

秋のうた

七玉垂のこすの隙漏秋風は妹戀しらに身にぞしみける

八秋風はやゝ肌寒くなりにけり獨や寢なむ長き此夜を

九雁なきて秋風寒くなりにけり獨やぬなむ夜の衣薄し

一〇小篠原夜はに颯ふく秋風をやゝ寒しとや蟲の侘らむ

一一秋深み隣遠き夜の蓋たゞいたづらに音をのみぞなく

一二庭草の露のかずそふ村雨に夜ふかき蟲の聲ぞ悲しき

一三あさぢ原露しげき庭の蓼秋ふかき夜の月に鳴くなり

一四天の原ふりさけ見れば月清み秋の夜痛く更にけるかな

月をよめる

一五我ながら覺えず涙か袖の露月に物思ふ夜頃へぬれば

八月十五夜

一六久方の月の光し清ければ秋のなかばを空に知るかな

海邊月

一七ほのかに見る物にもが伊勢の海の清き渚の秋夜の月

一八伊勢の海や浪に懸たる秋夜の有明の月に松風ぞふく

一九須磨の蜑の袖吹返す汐風に怨みてふくる秋の夜の月

二〇鹽がまの浦ふく風に秋たけて離が島に月かたぶきぬ

月前雁

二一天の原ふりさけみればます鏡清き月夜に雁なき渡る

二二むば玉の夜は更ぬらし雁がねの聞ゆる空に月傾きぬ

二三なき渡る雁の羽風に雲消えて夜深き空にすめる月影

二四九重の雲居を分けて久かたの月の都に雁ぞなくなる

二五天のとを明方の空になく雁のつばさの露に宿る月影

野べのかるかやをよめる

二六夕されば野邊の刈萱打靡き亂れてのみぞ露も置ける

秋の歌

二七朝な〳〵露に折れふす秋萩の花踏しだき鹿ぞ鳴なる

二八萩が花移ろひゆけば高砂の尾上の鹿の鳴ぬ日ぞなき

二九さを鹿の己が住野の女郎花花に飽すと音をや鳴らむ

三〇よそにみて折では過じ女郎花名を睦じみ露に濡とも

三一秋風は綾なく吹そ白露のあだなる野べの萬のはの上に

三二白露のあだにも置か葛の葉に溜れば消ぬ風立ぬまに

三三蓼なくゆふぐれの秋風に我さへやな物ぞかなしき

山家曉望といふことを

三四くれかゝる夕の空を眺れば木高き山に秋風ぞふく

三五秋をへて忍びも餘ず物ぞ思ふ小野の山べの夕暮の空

三六聲高み林にさけぶ猿よりも我ぞもの思ふ秋の夕べは

秋のうた

三七玉垂のこすの隙漏秋風は妹戀しらに身にぞしみける

三八秋風はやゝ肌寒くなりにけり獨や寢なむ長き此夜を

三九雁なきて秋風寒くなりにけり獨やぬなむ夜の衣薄し

四〇小篠原夜はに颯ふく秋風をやゝ寒しとや蟲の侘らむ

四一秋深み隣遠き夜の蓋たゞいたづらに音をのみぞなく

四二庭草の露のかずそふ村雨に夜ふかき蟲の聲ぞ悲しき

四三あさぢ原露しげき庭の蓼秋ふかき夜の月に鳴くなり

四四天の原ふりさけ見れば月清み秋の夜痛く更にけるかな

月をよめる

四五我ながら覺えず涙か袖の露月に物思ふ夜頃へぬれば

八月十五夜

四六久方の月の光し清ければ秋のなかばを空に知るかな

海邊月

四七ほのかに見る物にもが伊勢の海の清き渚の秋夜の月

四八伊勢の海や浪に懸たる秋夜の有明の月に松風ぞふく

四九須磨の蜑の袖吹返す汐風に怨みてふくる秋の夜の月

五〇鹽がまの浦ふく風に秋たけて離が島に月かたぶきぬ

月前雁

五一天の原ふりさけみればます鏡清き月夜に雁なき渡る

五二むば玉の夜は更ぬらし雁がねの聞ゆる空に月傾きぬ

五三なき渡る雁の羽風に雲消えて夜深き空にすめる月影

五四九重の雲居を分けて久かたの月の都に雁ぞなくなる

五五天のとを明方の空になく雁のつばさの露に宿る月影

萩

五六萩の花暮々までも有つるが月出て見るに無きが儚さ

萩をよめる

五七秋萩の下葉もいまだ移ろはぬに今朝吹風は袂寒しも

あさがほ

五八風をまつ草の葉におく露よりもあだなる物は槿の花

海の邊をすぐるとてよめる
七三わたの原八重の汐路にとぶ雁の翅の浪に秋風ぞふく
詠めやる心も空へ通ふわたの原八重の汐路の秋の黄昏
雁を
三秋風に山とびこゆる初雁のつばさに分くる峯の白雲
九〇足曳の山飛越ゆる秋の雁いく重の霧を凌ぎ來ぬらむ
一雁がねは友惑はせり信樂や槇の杣山きりたゝるらし
夕雁
二夕されば稻葉のなびく秋風に空とぶ雁の聲も悲しや
田家夕雁
三雁のゐる門田の稻葉うちそよぎ黄昏時に秋風ぞふく
野邊露
四久方の天とぶ雁の涙かも大あらき野のさゝの上の露
田家露
五秋田もる庵に片しく我袖に消あへぬ露の幾重置らむ
田家夕
六斯て猶堪でしあらば如何せむ山田もる庵の秋の夕暮
田家秋といふことを
七旅衣稻葉の露に袖ぬれて物思へともなれる我が身か
八山田守る庵にしをれば朝な〳〵絶ず聞つゝさを鹿の聲
夕鹿
九なく鹿の聲より袖におくか露もの思ふ頃の秋の夕暮
しかをよめる
〇妻こふる鹿ぞなくなる小倉山山の夕霧立にけむかも
一夕されば霧立ちくらし小倉山山のと陰に鹿ぞ鳴なる
二雲のゐる梢遙かに霧こめて高師の山に鹿ぞ鳴くなる
三さ夜更るまゝに外山の木間より誘ふか月を獨鳴く鹿
四月をのみ哀と思ふさ夜更てみ山隱れに鹿ぞ鳴なる
閑居望月
五苦の庵に獨ながめて年も經ぬ友なき山の秋の夜の月
名所秋月
六月みれば衣手寒しさらしなやをばすて山の峯の秋風
七山さむみ衣手うすし更科や姨捨の月に秋ふけしかば
八小波やひらの山風さ夜更けて月影寂ししがのから崎
秋の歌
九月清み秋の夜痛く更にけり佐保の川原に衛しばなく
月前擣衣
〇秋たけて夜深き月の影みれば荒たる宿に衣うつなり

一さ夜ふけて半たけ行く月影にあかでや人の衣打らむ
二夜を寒みね覺めてきけば長月の有明の月に衣擣なり
擣衣をよめる
三獨ぬる寢覺に聞くぞあはれなる伏見の里に衣うつ聲
四みよし野の山下風の寒き夜を誰ふる里に衣うつらむ
秋の歌
五昔思ふ秋のねざめの床の上にほのかに通ふ峰の松風
六見る人も無て散にき時雨のみふりにし里の秋萩の花
七秋萩のむかしの露に袖ぬれて古き雛に鹿ぞなくなる
八朝まだき小野の露霜寒ければ秋をつらしと鹿ぞ鳴なる
九秋萩の下葉の紅葉うつろひぬ長月の夜の風の寒さに
雨のふれる夜に菊を見てよめる
〇露を重み雛の菊のほしも敢ずはるれば曇る宵の村雨
月夜菊の花をたをるとて
一ぬれて折る袖の月影ふけにけり雛の菊の花の上の露
ある僧に衣をたまふとて
二野べみれば露しも寒し蓼夜の衣のうすくや有るらむ
長月の夜蓼のなくを聞きてよめる
三蓼夜はの衣の薄き上に痛くは霜の置かずもあらなむ
九月霜降秋早寒といふ心を
四蟲の音もほのかになりぬ花薄秋の末葉に霜や置らむ
秋の末によめる
五雁鳴きて吹風寒み高圓の野べの淺茅ほ色づきにけり
六雁なきて寒き朝げの霜にやの〻神山色づきにけり
名所紅葉
七初雁の羽風の寒くなる儘にさほの山べは色づきに鳧
八雁啼て寒き嵐のふくなべに立田の山は色づきにけり
雁のなくを聞きてよめる
九今朝來なく雁がね寒み唐衣立田の山は紅葉しぬらむ
深山紅葉
〇神無月待で時雨や降にけむみ山に深き紅葉しにけり
佐保山の柞の紅葉時雨にぬるゝといふことを人々によませしついでによめる
一佐保山の柞の紅葉千々の色に移ろふ秋は時雨降けり
秋歌
二木葉ちる秋の山べはうかりけり塒でや鹿の獨鳴らむ
三紅葉は道もなきまで散しきぬ我宿をとふ人し無けば
水上落葉

四流行く木葉の淀むえにしあれば暮ての後は秋も久き
五暮てゆく秋の湊に浮ぶ木葉蜃の釣する船かともみゆ
六暮行く秋を惜むといふことを
秋を惜むといふことを
七長月の有明の月の霊すのみくる秋毎にをしき今日哉
八年毎の秋の別は數多有れど今日の暮るゝぞ侘しかりける
九月霊の心を人々に仰せてつかうまつらせしついでによめる
一〇初瀬山けふを限と詠めつゝ入あひの鐘に秋ぞ暮ぬる
冬
十月一日よめる
一秋はいぬ風に木葉は散果て山寂しかる冬は來にけり
松風しぐれに似たり
二降ぬ夜もふるとも紛ふ時雨哉木の葉の後の峰の松風
三神無月木の葉ふりにし山里は時雨にまがふ松の風哉
冬のはじめの歌
四神無月時雨ふればか奈良山の楢の葉柏風にうつろふ
五下紅葉かつは移ろふ柞原神無月とて時雨ふりてへ
六みむろ山紅葉ちるらし神な月龍田の川に錦おりかく
七吉野川もみち葉流る瀧の上のみふねの山に嵐吹らし
八散積る木の葉朽にし谷水も氷りて閉る冬はきにけり
野霜といふことを
九花薄枯たる野べに置霜の結ぼゝれつゝ冬は來にけり
霜をよめる
〇東路の道の冬草枯にけり夜な〳〵霜や置增るらむ
一大澤の池の水草枯にけり長き夜すがら霜やおくらむ
月影霜に似たりといふことをよめる
二月影の白きをみれば鵲のわたせる橋に霜ぞおきける
冬の歌
三夕月夜さほの川風身にしみて袖より過ぐる衡なく也
河邊冬月
四衡なくさほの河原の月清み衣手寒し夜やふけぬらむ
月前松風
五天の原空をさむけみ烏羽玉の夜渡る月に松風ぞふく
海のほとりの千鳥といふことを人々あまたつかうまつりしついでに

一〇夜を寒み浦の松風吹結びむしあけの浪に衛なくなり
一一夕づく夜みつ汐ひの潟をなみ浪に萎れて鳴く衛哉
一二月清みさよ更行けば伊勢島やいちしの浦の衛鳴なり
名所千鳥
一三衣手に浦の松風さえわびて吹上の月に千鳥なくなり
寒夜千鳥
一四風寒み夜のふけゆけば妹が島かたみの浦に衛鳴くも
深き夜の霜
一一むば玉の妹が黒髪うち靡き冬深き夜に霜ぞおきける
冬の歌
二片敷の袖こそ霜に結びけれ待夜ふけぬる宇治の橋姫
二かたしきの袖も凍りぬ冬の夜の雨ふりすさむ暁の空
二一夜を寒み河瀬に浮ぶ水の泡の消敢ぬ程に氷しにけり
氷をよめる
二二音羽山やまおろし吹て逢坂の關の小河に氷しにけり
月前嵐
二三更にけり外山の嵐さえ〳〵て遠路の里に澄める月影
湖上冬月といふことを
二四比良の山やま風さむからさゝや鴛の湖月ぞ氷れる
池上冬月
二五原の池の蘆まの氷柱繁けれど絶々月の影は澄みけり
冬の歌
二六蘆の葉は漸べもさやに置霜の寒き夜な〳〵氷しに寒
二七難波潟蘆の葉白く置霜の冴たる夜はにたづぞ鳴なる
夜更けて月を見てよめる
二八夜更て雲間の月の影みれば袖に知れぬ霜ぞ置ける
社頭霜
二九夜更て稻荷の宮の杉の上に白くも霜の置にける哉
屏風に三輪の山に雪のふれる所
三〇冬籠其とも見えず三輪の山杉の葉白く雪のふれゝば
社頭雪
三一み熊野のなぎの葉しだり降雪は神の懸たるしでにぞ有らし
鶴岡別當僧都のもとに雪のふりし朝よみて遣はす歌
三二鶴が岡あふぎてみれば峯の松梢はるかに雪ぞ積れる
三三八幡山木高き松にゐるたづの羽白妙にみ雪ふるらし
海邊鶴
三四難波がた汐ひにたてる葦鶴のはね白妙に雪は降つゝ

冬の歌
三五夕されば浦風寒しあま小舟とま瀬の山にみ雪降らし
三六巻もくの檜原の嵐さえ〳〵て弓槻が嶽に雪降にけり
三七み山には白雪ふれり信樂のさきの柚人道たどるらし
三八拂へたゝ雪分衣ぬきを薄み積れば寒し山おろしの風
三九楓の戸を朝げの雲の衣手に雪を吹まく山おろしの風
四〇山里は冬こそ殊にわびしけれ雪踏分けて訪人もなし
四一我庵は吉野の奥の冬ごもり雪降積みてとふ人もなし
四二奥山の岩ねに生る菅の根のねもころ〳〵にふれる白雪
一四おのづから寂しくも有るか山深み苔の庵の雪の夕暮
寺邊夕雪
四三うちつけに物ぞ悲しき泊瀬山をのへの鐘の雪の夕暮
閑居雪
四四故郷はうら寂しともなき物をよし野の奥の雪の夕暮
冬の歌
四五夕さればすゞ吹く嵐身にしみて吉野の嶽にみ雪降らし
四六山高みあけ離れ行く横雲のたえまに見ゆる峰の白雪
四七見渡せば雲ゐはるかに雪しろし富士の高嶺の曙の空
四八雀の巣のみ山もそよに霰ふり寒き霜夜を獨かもねむ
山邊霰
四九雲深きみ山の嵐さえ〳〵て生駒のたけに霰降るらし
雪をよめる
五〇敷鷹も今日は白ふに變るらむと返る山に雪のふれゝば
冬の歌
五一雪ふりてけふとも知らぬ奥山に炭やく翁哀はかなき
一五炭がまの煙もさびし大原やふりにし里の雪の夕ぐれ
五二わが門の板井の清水冬深み影こそ見えぬ氷すらしも
五三冬深み氷やいたく閉つらむ影こそみえぬ山の井の水
雪をよめる
五四冬深み氷にとづる山河のくむ人なしに年やくれなむ
五五ものゝふの八十宇治川を行水の流れて早き年の暮哉
五六白雲のふるの山なる杉むらのすぐる程なき年の暮哉

冬の歌
五七降積る雪ふむ磯の濱千鳥波に萎れて夜はになくなり
五八鶴ゐる磯邊に立る室の木の枝もとを〳〵に雪ぞ積れる
五九夕されば汐風寒し波さよりみゆる小島に雪は降つゝ
一三立昇る煙はなほぞつれもなき雪のあしたの鷺籠の浦
雪をよめる
六〇眺むれば寂しくも有か煙たつ室の八島の雪の下もえ
冬の歌
六一夕されば浦風寒しあま小舟とま瀬の山にみ雪降らし
六二降積る雪ふむ磯の濱千鳥波に萎れて夜はになくなり
佛名の心をよめる
六三身に積る罪やいかなる罪ならむけふ降雪と共にけぬらむ
歲暮
六四老らくの頭の雪を留め置てはかなの年や暮て行らむ
六五取も敢ずはかなく暮て行年を暫し留めむ關守もがな
六六乳房すふまだいとけなき緑子と共に泣ぬる年の暮哉
六七ちりをだに据じとや思ふ行年の跡なき庭を拂ふ松風
六八うば玉のこの夜なあけそ屢もまだ古年の内と思はむ
六九傷くて今宵明なば行年の思出もなき春にや逢はなむ
賀
七〇千々の春萬の秋に長らへて花と月とを君ぞみるべき
七一男山神にぞ幣をたむけつる八百萬代も君がまに〳〵
松によする祝といふことをよめる
七二八幡山木高き松の種し有れば千歲の後も絶じとぞ思
七三位山木だかくならむ松にのみ八百萬代と春風ぞふく
七四行末も限りはしらず住吉の松に幾代の年か經ぬらむ
七五住江に生ふてふ松の枝茂み葉毎に千世の數ぞ籠れる
七六君が代は猶しもつきじ住吉の松は百度ゆひ替るとも
祝の心を
七七たづのゐる長柄の濱の濱風に萬代かけて波ぞよする
七八姫島の小松がうれにゐるたづの千年ふれとも年老に鬼
大嘗會の年のうた
七九黒木もて君が造れる宿なれば萬代さへや變ずも有らなむ
梅の花をかめにさせるを見てよめる
八〇玉垂のこがめにさせる梅花萬代ふべきかざし也けり
花のさけるを見て
八一宿にある櫻の花は咲にけり千年の春も常かくし見む
苔によする祝といふことを
八二岩にむす苔の緑の深き色を幾千世までと誰か染けむ
二所詣でしはべりし時
八三ちはやふる伊豆のお山の玉椿やほ萬代も色は變らじ
八四萬代に見るともあかじ長月の有明の月のあらむ限は
河邊月
八五千早ふる御手洗川の底清み長閑に月の影はすみけり
祝の歌
八六君が代も我世も盡じ石川や蟬の小河の絶じと思へば

一八朝に有て我世は盡じ天のとや出る月日の照らむ限は
戀
初戀の心をよめる
三八春霞たつ田の山の櫻花おぼつかなきを知る人のなき
宿レ鹿戀
一四秋の野に朝霧隱れ鳴鹿のほのかにのみや聞渡りなむ
戀の歌
一五足曳の山の尾上に刈萱の束のまもなく亂れてぞ思ふ
一六我戀は初山ぁぬのすり衣人こそしらね亂れてぞ思ふ
一七木隱れて物を思へば空蟬の羽におく露の消や返らむ
一八鵲の羽におく露の丸木橋ふみ見ぬ先に消やわたらむ
一九月影のそれか非ぬか陽炎の仄かにみえて雲隱れにき
二〇雲隱れ鳴て行なる初雁のはつかに見てぞ人は戀しき
草によせて忍ぶる戀
二一秋風になびく薄のほにはいでず心亂れて物思ふかな
風によする戀
二二あだし野の葛の裏吹秋風のめにし見えねば知人もなし
二三秋萩の花野の薄露を重み己れ萎れてほにやいでなむ
ある人のもとへ遣はしはべりし
二四難波潟汀の蘆のいつまでかほに出ずしも秋を忍ばむ
二五雁のねる羽風に騷ぐ秋の田の思亂れてほにぞ出ぬる
戀の心をよめる
二六さ夜更て雁の翅におく露の消ても物は思ふかぎりを
忍ぶ戀
二七時雨ふる大荒木野の小笹原滿はひづとも色に出めや
神無月の頃人のもとに
二八時雨のみふるの神杉荷ぬれどいかにせよとか色の雜面き
戀の歌
二九夜を寒み鴨の羽がひに置霜の縱ひぬ共色に出めや
三〇葦鴨のさわぐ入江の浮草のうきてや物を思ひ渡らむ
海の邊の戀
三一うき渡のを島の海士の濡衣ぬるとな云そ朽は果とも
三二伊勢島やいちしの蜃の拾衣逢ふとなみに朽や果なむ
三三淡路島かよふ千鳥の鳘もはぬかくまなく戀や渡らむ
戀のうた
三四豐國のきくの長濱夢にだにまだみぬ人に戀や渡らむ
三五須磨の浦に蜃の燈せる漁火の厭に人を見る由もがな
三六蘆の屋の灘の鹽燒我なれや夜はすがらに燻り侘らむ

沼に寄せてしのぶ戀
三七隱沼の下はふ蘆の水籠りに我ぞ物思ふ行方しらねば
水邊の戀
三八眞菰生る淀の澤水み隱ぬて影し見えねば聞人もなし
三九島江や玉江の眞菰み隱てめにし見えねば刈人もなし
雨によする戀
四〇郭公なくやさ月の五月雨の晴ず物思ふ頃にもある哉
四一時鳥待夜ながらの五月雨に滋き菖蒲のねにぞ鳴なる
四二郭公鳴くやさ月の卯の花のうき言のはのしげき頃哉
夏の戀といふことを
四三さつき山木の下闇の暗ければおのれ惑ひてなく郭公
戀のうた
四四奥山のたづきもしらぬ君により我心から惑ふべらも
四五奥山の苔ふみならすさを鹿ぁ深き心の程はしらなむ
四六天の原風に浮きたる浮雲の行くへ定めぬ戀もする哉
雲によする戀
四七白雲の消は消なで何しかも立田の山の名のみ立らむ
衣によする戀
四八忘らるゝ身はうらぶれぬ唐衣さても立にし名こそ惜けれ
戀のこゝろをよめる
四九君にこひうらぶれをれば秋風に靡く淺茅の露ぞけぬべき
五〇物思ぬ野べの草木の葉にだにも秋の夕は露ぞ置ける
五一秋の野の花の千種に物ぞ思ふ露より滋き色はみえねど
露によする戀
五二我袖の涙にもあらぬ露にだに萩の下葉は色に出けり
戀の歌
五三山城の岩田の杜のいはずとも秋の稻は著くや有らむ
山家の後のあした
五四消えなでし今朝尋ねずは山城の人こぬ宿の道芝の露
撫子によする戀
五五撫子の花におきぬる朝露のたまさかにだに心隔つな
草に寄せて忍ぶる戀
五六我戀は夏野の薄茂けれどほにし非ねばとふ人もなし
逢ひてあはぬ戀
五七今更に何をか忍ぶ花薄ほに出でし秋も誰ならなくに
薄によする戀
五八まつ人はこぬもの故に花薄ほに出て妬き戀もする哉
頼めたる人のもとに

一九小笹原おく露寒み秋されば松蟲の音に鳴ぬ夜ぞなき
二〇待つ宵の更ゆくだにも有物を月さへやな傾きに見
一まてとしも頼めぬ山も月は出ぬ云し計りの夕暮の空
月によする戀
二二數ならぬ身は浮雲のしそ作ら哀とぞ思ふ秋の夜の月
二三月影もさやには見えず搔昏す心の闇の晴れし道ねば
月の前の戀
二四我袖に覺えず月ぞ宿りける問人あらばいかゞ答へむ
秋の頃いひなれにし人のもとへまかれりしに便
につけて文など遣すとて
二五うはの空に見し俤を思出でゝ月に馴にし秋ぞ戀しき
二六逢事を雲ゐのよそに行雁の遠ざかれば弥聲も聞えぬ
遠き國へまかれりし人八月ばかりに歸りまゐる
べきよしを申して九月まで見えざりしかば彼の
人の許に遣しはべりし歌
二七こむとしも頼めぬ上の空にだに秋風吹けば雁は來鳴
二八今こむと頼めし人は見えなくに秋風寒み雁はきに鳴
雁によする戀
二九忍び餘り戀しき時は天の原空とぶ雁の音に鳴ぬべし
戀の歌
三〇海人衣田簑の島に鳴くたづの髣髴しより忘れ兼つゝ
三一難波潟浦より遠に鳴たづのよそに聞つゝ戀や渡らむ
三二苦深き石間を傳ふ山水の音こそ立てね年は經にけり
三三東路の道の奥なる白川のせきあへぬ袖をもる涙かな
三四忍山下ゆく水の年をへて湧きこそ返れ逢ふ由をなみ
三五もらし侘びぬ忍の奥の山深み木隱れてゆく谷川の水
三六心をし忍の里におきたらば阿武隈河は見まく近けむ
三七年ふとも音には立てじ音羽河下ゆく水のしたの思を
三八石上ふるの高橋ふりぬともとつ人には戀や渡らむ
三九廣瀨川袖つく計り淺けれど我は深めて思ひそめてき
四〇逢坂の關やもいづら山科の音羽の瀧の音に聞きつゝ
四一石走る山下たぎつやま川の心くだけて戀やわたらひ
四二山河の瀨々の岩波わき返りおのれ獨や身を碎くらむ
四三浮沈み果は泡とぞ成ぬべき瀨々の岩波身を碎きつゝ

戀

白山に降て積れる雪なれば下こそきゆれ上は難面し
雲のゐる吉野の嶽にふる雪の積り〳〵て春に逢に鬼
春深み峰の嵐にちる花の定めなき世に戀つゝぞふる
月によせて忍ぶる戀
春やあらぬ月はみしよの空乍ら馴し昔の影ぞ戀しき
思ひきや有し昔の月影を今は雲居のよそに見むとは
待つ戀の心をよめる
さむしろに獨寢しく年もへぬ夜の衣の裾あはずして
狹筵にいくよの秋を忍びきぬ今はた同じ宇治の橋姫
こぬ人を必待つとなけれども曉方になりやしぬらむ
曉の戀
狹筵に露のはかなくおきていなば曉毎に消や渡らむ
曉の戀といふことを
曉の露やいかなる露ならむ起てしゆけば侘しかり鳧
曉の鳴の羽掻しげゝれどなど逢ふよの間遠なるらむ
人をまつ心をよめる
陸奥のま野の萱原假にだにこぬ人をのみ待が苦しき
まてとしも頼めぬ人の葛の葉もあだなる風を怨やはせぬ
戀の心をよめる
秋深み裏野の眞葛枯々に怨むる風のおとのみぞする
秋の野におく白露の朝な〳〵儚くてのみ消や返らむ
風をまつ今はた同じ宮城野の本荒の萩の花の上の露
菊に寄する戀
消返り有るか無かに物ぞ思ふ移ろふ秋の花の上の露
花よりも人の心は初霜のおき敢へぬ色の變る也けり
久しき戀の心を
我戀は逢でふる野の小笹原幾代迄とか霜のおくらむ
古郡戀
草深みさしも荒たる宿なるを露を形見に尋ねこし哉
里は荒て宿は朽にし跡なれや淺茅が露に松蟲のなく
あれにけり頼めし宿は草の原露の軒ばに松蟲の鳴く
忍草忍び〳〵におく露を人こそ訪はね宿はふりにき
宿は荒て古きみ山の松にのみ訪べき物と風の吹らむ
年を經て待つ戀といふことを人々におほせて仕
うまつらせし次でに
古里の淺茅が露にむすぼゝれ獨鳴く蟲の人を怨むる
物語に寄する戀

別れにし昔は露か淺茅原あとなき野べに秋風ぞふく
冬の戀
淺茅原跡なき野べに置霜の結ぼゝれつゝ消や渡らむ
淺茅原あだなる霜の結ばゝれ日蔭を待に消や渡らむ
庭の面に茂りにけらし八重葎訪で幾よの秋か經ぬ覽
故郷の杉の板屋の隙を荒み行逢はでのみ年のへぬ覽
簾によする戀
沖の國のこやの丸屋の葦簾間遠になりぬ行逢ずして
戀の歌
住吉の待とせしまに年も經ぬちぎの片そぎ行合ずして
住の江の待事久になりに鳥來むと頼めて年の經ぬれば
思ひたえ侘にしものを今更に野中の水の我を頼むる
を鹿ふす夏野の草の露よりも知じな茂き思ありとは
きかで唯あらましものを夕月夜人頼めなる萩の上露
棚機によする戀
七夕に非ぬ我身のなぞもかく年に稀なる人を待らむ
戀の歌
我戀は天の原とぶ葦たづの雲居にのみや啼渡るらむ
久方の天の川原に住むたづも心に非ぬ音をや鳴く覽
わが戀は賀古の渡の綱手繩たゆたふ心やむ時もなし
こがねによする戀
金ほるみちのく山にたつ民の命も知らぬ戀もする哉
逢事のなき名を辰の市にうる兼て物思ふ我身也けり
雪中待人と云ふことを
今日もまた獨詠めて暮れにけり頼めぬ宿の庭の白雪
戀の歌
奥山のいはかき沼に木葉落て沈める心人知るらめや
奥山の末のたづきも知ず妹に逢ず年の經行けば
富士の嶺の煙も空に立つ物をなどか思の下に燃らむ
思ひのみ深き山の郭公人こそ知ね音をのみぞなく
名にし負はゞそのかみ山の菝葜かけて昔を思出なむ
夏深き杜の空蟬己れのみむなしき戀に身を碎くらむ
大荒木の浮田の杜に引しめの打はへてのみ戀や渡らむ
それをだに思ふとて千早振神の社に泣ぬ日はなし
千早振加茂の川波幾そたび立返るらむ限り知らずも
一涙こそ行方も知ねわの崎佐野のあたりの雨の夕暮
しらなゝ弓磯邊の山の松の葉の常磐に物を思ふ頃かな

白波の磯こせぢなるのとせ河後も逢みむ身なし絶ずば
渡つ海に流て出たる飾磨川しかも絶ずや戀渡りなむ
君により我とはなしに須磨の蒲に藻汐垂つゝ年のへぬ覽
沖つ波打出の濱のはま楸萎れてのみや年のへぬらむ
斯てのみ荒磯の海の在つゝも逢夜もあらば何か恨みむ
三熊野の浦の濱ゆふ云ずとも思ふ心の數を知らなむ
我戀はもゝしき廻る濱千鳥行方も知ぬかたに啼く也
沖つ鳥鴨のすむ石による波のまなく物思ふ我ぞ悲しき
田子の浦の荒磯の玉藻波の上に浮てたゆたふ戀もする哉
鴨ゐるあら磯の洲崎潮滿てかくろひゆけば增る我戀
武庫の浦の入江の洲鳥朝な〳〵常にみまくの欲き君哉
旅
玉鉾の道は遠くも非なくに旅とし思へば侘しかり鬼
草枕旅にしあれば刈菰の思ひ亂れていこそ寢られぬ
旅ごろも袂かたしき今宵もや草の枕に我ひとりねむ
露中夕露
露繁みならはぬ野べのかり衣ころしも悲し秋の夕暮
野邊邊わけぬ袖だに露はおく物を唯此頃の秋の夕哉
旅衣うらがなしかる夕暮の裾野のつゆに秋風ぞふく
露中鹿
旅衣裾野の露にうらぶれてひも夕暮に鹿ぞなくなる
秋もはや末野の原になく鹿の聲きく時ぞ旅は悲しき
獨りふす草の枕のよるの露ともなき鹿の涙なりけり
旅宿月
玉鉾ふす草の枕の露の上に知らぬ野原の月を見るかな
岩がねの苔の枕に露おきて幾夜み山の月にねぬらむ
旅宿霜
袖枕霜おく床の苔の上にあかすばかりのさよの中山
しなが鳥猪名野の原のさゝ枕まくらの霜や宿る月影
旅の歌
旅寢する伊勢の濱荻露ながら結ぶ枕にやどる月かげ
旅宿時雨
旅の空なれぬ塒生の夜の床侘しきまでにもる時雨哉
屏風の繪に山家に松かける所に旅人あまたある
をよめる
稀に來てきくだに悲し山かつの苔の庵の庭の松かせ
まれにきて稀に宿かる人もあらじ哀と思へ庭の松風
雪ふる山の中に旅人ふしたる所

一四 かたしきの衣手いたくさえ侘ぬ雪深き夜の峰の松風
二四 曉の夢のまくらに雪つもりわが寢覺とふ峰の松かぜ
　暮中雪
三四 旅衣夜半の片しきさえ〳〵て野中の庵に雪降にけり
四四 逢坂の關の山道こえわびぬ昨日も今日も雪し積れば
五四 雪降て跡はかなく絕ぬとも越の山道やまず通はむ
　二所へ詣でし下向に春雨いたくふりしかばよめる
六四 春雨はいたくなふりそ旅人の道行き衣濡もこそすれ
七四 春雨に打ちそぼちつゝ足引の山路行くらむ山人や誰
　雜
　海邊立春といふことをよめる
八四 霞竈の浦の松村霞むなり八十島かけて春やたつらむ
　子日
九四 いかにして野中の松の殘ぬ覽昔の人は引すや有けむ
　殘雪
〇五 春きては花とか見えむ白ゆきの殘れる谷の鶯
一五 深ぐさの谷の鶯春ごとに哀むかしと音をのみぞなく
二五 草ふかき霞の谷に春ごもる鶯のみやむかし戀ふらし
　海邊春月
三五 住吉の松の木隱れゆく月の朧ろにかすむ春の夜の空
　屏風に加茂へまうでたる所
四五 立ちよれば衣手すゞし御手洗や影見る岸の松の川波
　海邊春望
五五 難波潟こぎ出つる舟のめも遙に霞にきえて歸る雁音
　關路花
六五 名にし負はいさ尋みむ逢坂の關路に匂ふ花は有やと
七五 尋ねみるかひは誠に逢坂の山路に匂ふ花にぞ有ける
八五 逢坂の嵐の風に散る花をしばしとゞむる關守ぞなき
九五 逢坂の關の關やの板廂まばらなればや花のもるらむ
　櫻
〇六 いにしへの朽木の櫻春毎に哀むかしと思ふかひなし
一六 空蟬のよは夢なれや櫻花咲きては散りぬ哀いつまで
　屏風に春の繪かきたる所を夏みてよめる
二六 見てのみぞ驚かれぬる島玉の夢かと思ひし春の殘れる
　撫子
三六 床しくば行ても見よせゆき島の巖に生ふる撫子の花

　戀
四六 我宿のませのはたてに匍ふ瓜の成も成ずも二人ねまほし
　六月祓
五六 我國の大和島根の神たちを今日の御祓に手向つる哉
六六 あだ人のあだに有身のあだ事をけふ六月の祓へすてつと云
　山家思秋
七六 事繁き世を遁れにし山里にいかに尋ねて秋のきつ覽
八六 獨ゆく袖よりおくか奥山のこけの扉の道のゆふつゆ
　故郷蟲
九六 賴めこし人だに訪はぬ古里に誰松蟲のよはに鳴らむ
　故郷の心を
〇七 鶉なく荒にし里の淺茅生に幾夜の秋の露かおきけむ
一七 契りけむこれや昔の宿ならむ淺茅が原に鶉なくなり
二七 淺ぢ原ぬしなき宿の庭の面に哀幾夜の月かすみけむ
　月をよめる
三七 思出でゝ昔を忍ぶ袖の上に有しにも非ぬ月ぞ宿れる
四七 行き廻り又もきて見む古里の宿もる月は我を忘るな
五七 大原や朧のしみづ里遠み人こそくまね月はすみけり
　水邊月
六七 わくらばに行てもみしが醒が井の古き清水に宿る月影
　まな板といふ物の上に雁をあらぬさまにして置きたるを見てよめる
七七 哀なり雲ゐのよそに行く雁の斯る姿に成ぬと思へば
　聲うちそふる沖つ白波といふ古ことを人々あまた仕うまつりてし次でによめる
八七 住江の岸の松ふく秋風を賴めて波のよるを待ちける
　月前千鳥
九七 玉津島わかの松原夢にだにまだみぬ月に衞なくなり
　冬のはじめによめる
〇八 春といひ夏とすぐして秋風の吹上の濱に冬はきにけり
　濱へ出でたりしに海士の藻汐火をみて
一八 いつもかく寂き物か葦の屋にたきすさびたる蜑の藻汐火
二八 水鳥の鴨の浮寢のうき乍ら玉藻の床に幾夜へぬらむ
　松間雪
三八 高砂の尾上の松にふる雪のふりて幾世の年か積れる
　海邊冬月

四八 月のすむ磯の松風さえ〳〵て白くぞ見ゆる雪の白濱
　屏風に奈智のみ山書きたる所
五八 冬籠るなちの嵐の寒ければ苦の衣の薄くやあるらむ
　み山に炭やくを見てよめる
六八 炭をやく人の心も哀なりさてもこの世を過ぐる習は
　足にわづらふことありて入りこもれりし人のもとに雪ふりし日よみて遣す歌
七八 降雪をいかに哀と詠むらむ心は思ふとも足立ずして
　老人寒をいとふといふことを
八八 年ふれば寒き霜社さえけらし頭べは山の雪ならなくに
　雪
九八 我のみぞ戀しとは思ふ波のよる山の額に雪の降れゝば
〇九 年積る越の白山しらずともかしらの雪を哀とは見よ
　老人憐二歲暮一
一九 老ぬれば年の暮ゆく度ごとに我身一つと思はゆる哉
二九 白がと云ひ老ぬるけにや事しあれば年の早くも思ほゆる哉
三九 打忘れ儚くてのみすぐしきぬ哀と思へ身に積る年
四九 足引の山より奥に宿もがな年のくまじき隱がにせむ
　年のはての歌
五九 行年の行方を問へば世中の人こそ一つまうくべらなれ
　雜
六九 春秋は變りゆけども渡つ海の中なる島の松ぞ久しき
七九 磯の松幾久さにかなりぬらむいたく木高き風の音哉
　物まうでし侍りし時磯のほとりに松一本ありしをみてよめる
八九 梓弓磯邊に立てる一松あなつれ〳〵げ友なしにして
　屏風の歌
九九 年ふれば老に倒れて朽ぬべき身は住江の松ならなくに
〇〇 住の江の岸の姫松ふりにけり執の世にか種は蒔けむ
　一豐國のきくの濱松老にけり知ず幾世の年かへにけむ
　屏風の畫に野の中に松三本生ひたる所をきぬかづける女人とほりたる
一〇 自ら我を尋ぬる人もあらば野中の松よみきと語るな
　かち人の渡れば搖わたる所
二〇 かち人の渡れば搖わたる所
三〇 かち人の渡ればゆるぐ葛飾のまゝの繼橋朽やしぬ覽
　故郷の心を

四〇古をしのぶとなしに石上ふりにし里に我はきにけり
五〇石上舊き都は神さびてたゝるにしあれや人も通はぬ

相州の士屋といふ所に年九十にあまれるぐち法師ありおのづからきたり昔語などせしついでに

身の立ちぬにたへすなむなりぬることを泣く泣く申して出でぬ時に老といふこと人々におほせて仕うまつらせし次でによみはべる歌

六〇我幾そ見し世の事を思出でつ明る程なき夜の寢覺に
七〇思出て夜はすがらにねをぞなく有し昔のすゝの古事
八〇中々に老はほれても忘れなでなどか昔をいと忍ぶ覽
九〇道遠し腰は二重に屈まれり杖に縋りてそ迄もくる
一〇さりともと思物から日をへては次第々々に弱る悲さ

雜歌

一執くにて世をば盡さむ菅原や伏見の里も荒ぬと云物を
二歎佗び世を背くべき方知ず吉野の奥も住憂しと云か
三世にふれば憂き言の葉の數毎に絕ず淚の露ぞ置ける

あし

四雜波洩うきふし繁き蘆の葉に置きたる露の哀世の中ふね
五世中は常にもがもな渚こぐ蜑の小船の網手かなしも

千鳥

六朝ぼらけ跡なき波に鳴く鶴あなことゝ〳〵し哀いつ迄
七澤邊より雲ゐに通ふ蘆鶴も憂事あれや音のみ鳴らむ

慈悲の心を

八物云ぬ四方の獸すらだにも哀なる哉や親の子を思ふ道のほとりに幼き童の母を尋ねていたく泣くを

其のあたりの人に尋ねしかば父母なむ身まかりにしとこたへはべりしを聞きてよめる

九いとほしや見に淚も留らず親も無き子の母を尋ぬる

無常を

一〇斯てのみ有て儚き世中をうしとやいはむ哀とや云はむ
一一現とも夢とも知ぬ世にし有れば有とて有と頼べき身か

わび人の世に立ちめぐるを見てよめる

一二とに斯に哀有ける世にしあればなしとても無世をもふるかも

日頃やまうすともきかざりし人曉はかなくなりにけると聞きてよめる

一三聞てしも驚くべきに非ねども儚き夢の世に社有けれ世間常ならずといふことを人の許によみて遣はしし侍りし

一四世中に長きとも儚きも思ひし解けば夢にぞ有りける

大乘作中道觀の歌

一五世中は鏡に映る影にあれや有るにも非ず無にも非ず

思二罪業一歌

一六煙のみ虛空にみてるあび地獄行方も無しと云も儚し

懺悔の歌

一七塔をくみ堂を造るも人歎き懺悔に優る功德やはある

得二功得一歌

一八大日の種より出でゝ三摩耶形二三摩耶形又尊形となる

心のこゝろをよめる

一九神といひ佛といふも世中の人の心のほかのものかは

建暦元年七月洪水漫レ天士民愁歎せむ事を思ひて一人奉レ向二本尊一聊致二祈念一

二〇時により過ぐれば民の歎きなり八大龍王雨やめ給へ

人心不レ常といふことをよめる

二一とに斯にあな定なの世中や喜ぶ者あらば侘る者あり

黑

二二烏玉のやみの暗きに天雲の八重雲隱れ雁ぞ鳴くなる

白

二三鷗ゐる沖の白洲にふる雪の晴行く空の月のさやけさ

ある人都の方へのぼり侍りしにたよりにつけてよみて遣す歌

二四夜を寒み獨ねざめの床さえて我衣手に霜ぞ置きける
二五かゝる折も有ける物を手枕の隙もる風を何厭ひけむ
二六岩根ふみ幾重の峰を越えぬとも思も出では心隔つな
二七都より吹こむ風の君ならば忘るなとだに云ましものを
二八打絕て思ふ計は云はねども便につけて尋ぬばかりぞ
二九都べに夢にもゆかむ便あらば宇津の山風吹も傳へよ

五月の頃陸奥へまかれりし人のもとに扇など數多遣し侍りし中に郭公かきたる扇に書きつけ侍りし歌

三〇立別れいなばの山の郭公まつと告こせ歸りくるがに

近う召しつかふ女房遠き國へまかるむといとま申し侍りしかば

三一山遠み雲居に雁の越ていなば我のみ獨ねにや鳴なむ

遠き國へまかれりし人のもとより見せばや袖の

など申しおこせたりし返事に

三二我故にぬるゝには非じ唐衣山路の苔の露にぞ有けむ

忍びて云ひわたる人ありき遙なる方へゆかむといひはべりしかば

三三ゆひ初て馴しなさの濃紫思はすや今に淺かりきとは

山の端に日の入るをみてよめる

三四紅の千入のまふり山端に日の入る時の空にぞ有ける

二所詣の下向に濱べの宿の前に湖川といふ川あり雨ふりて水まさりにしかば日くれてわたりはべりし時よめる

三五濱邊なる前の川瀨を行水の早くも今日の暮にける哉

相模川といふ川あり月さし出でゝ後船にのりて渡るとてよめる

三六夕月夜さすや川瀨の水馴棹なれても疎き波の音かな

二所下向の後朝にさぶらひども見えざりしかば

三七旅を行し跡の宿守れ〳〵に私あれや今朝は未こぬ

民の竈より煙の立つを見てよめる

三八みちの國爰やかの執く鹽竈の浦とはなしに煙たつみゆ

又の年二所へ參りたりし時箱根の湖をみてよみはべる歌

三九玉匣箱根のみ海けゝれあれや二國懸て中にたゆたふ

箱根の山を打ち出でゝ見れば波のよる小島あり

供の者に此の海の名はしるやと尋ねしかば伊豆の海となむ申すと答へはべりしを聞きて

〇五箱根路をわが越くれば伊豆の海や沖の小島に波のよるみゆ

朝ぼらけ八重の汐路靄み渡りて空も一つに見えはべりしかばよめる

一五空や海波や空ともえぞわかぬ靄も波も立みちにつゝ

あら磯に波のよるを見てよめる

二五大海の磯も轟による波のわれて碎けて裂て散るかも

走湯山に參詣の時の歌

三五渡つ海の中に向て出る湯のいづのお山と宜も云けり

四五伊豆の國山の南にいづる湯の早きは神の驗なりけり

五五走る湯の神とはむべも云けらし早き驗のあれば也

神祇

六五嬬雛の久しき代よりゆふ榊かけし心は神ぞ知るらむ

七五里みこがみゆたて笹のそよ〳〵に靡き起臥好や世中

八五上つけの勢多の赤城の神社大和に爭で跡を垂れけむ

法眼定恩に逢ひてはべりし時大峰の物語などせし聞きて後よめる

九五幾返りゆきゝの峰のそみかくた鈴懸衣きつゝ馴けむ

〇六鈴懸の苔折きぬのふる衣いく木の本にきつゝ馴けむ

一六奥山のこけの衣におく露はなみだの雨の雫なりけり

那智の瀧のありさまを語りしを

二六三熊野のなちのお山に引ひめの打はへてのみ落る瀧哉

三輪の社を

二七今造る三輪の現が杉社過ぎにし事はとはずともよし

賀茂祭の歌

四六葵草鬘にかけて千早ふる賀茂の祭をねるや誰が子ぞ

社頭松風

五六舊にける朱の玉垣神さびてやれたるみすに松風ぞ吹く

社頭月

六六月のすむ北野の宮の小松原幾代をへてか神寂にけむ

神祇

七六月冴ゆる御裳濯川の底清み孰のよにか澄み始めけむ

八六古の神代の影そのこりける天の岩戸の明けがたの月

九六八百萬四方の神達集れり高天が原にきゝたかくして

伊勢御遷宮の年の歌

〇七神風や朝日の宮の宮遷し影長閑なる世にこそ有けれ

述懐

一七君が代に猶長らへて月清み秋のみ空の影を待たなむ

太上天皇御書下預の時の歌

二七大君の勅を畏みちゝわくに心はわく共人に云めやも

三七ひんがしの國に我をれば朝日さすはこやの山の影と成にき

四七山はさけ海はあせなむ世也とも君に二心我有めやも

一本及印本所レ載歌

梅の花をよめる

五七咲しよりかねてぞ惜き梅花ちりの別は我身と思へば

春の歌

六七このねぬる朝げの風にかをる也軒ばの梅の春の初花

雨中柳

七七青柳の糸よりつたふ白露を玉とみるまで春雨ぞふる

落花をよめる

八七咲けばかつ移ふ山の櫻花のあたりに風な吹きそも

九七道すがら散かふ花を雪とみて休らふ程に此日暮しつ

櫻をよめる

〇八櫻花さける山路や遠からむ過がてにのみ春の暮ぬる

水底の山吹と云ふことを人々あまた仕うまつりせし次でに

一八聲高み鮭なくなり井出の河きしの山吹今は散るらむ

二八立ち歸りみれどもあかず山吹の花ちる岸の春の川波

款冬に風の吹くを見て

三八我心いかにせよとか山吹の移ろふ花のあらし立らむ

三月盡

四八朝清め格子なあげそ行春を我聞の内に暫しとゞめむ

卯花

五八我宿の垣根に咲ける卯花の如憂事繁き世に社有けれ

六八神祀る卯月になれば卯花のうき言の葉の數や増らむ

深夜郭公

七八五月やみ小夜更ぬらし郭公神なび山におのが妻よぶ

郭公

八八玉くしげ箱根の山の郭公むかうの里に朝な〳〵なく

照射

九八五月山覺束なきを夕月夜木隱れてのみ鹿や待つらむ

蟬

〇九泉川はゝその杜になく蟬の聲のすめるは夏の深さか

夏の暮をよめる

一九祓する萱が軒ばに引しでのまつはれつきて夏を留めむ

詞書缺

二九今よりは涼しくなりぬ蜩のなくやま蔭のあきの夕暮

蟋蟀

三九秋の夜の月の都のきり〴〵すなくは昔の影や戀しき

菊を

四九ませの内に夜置露やいかならむ濡つゝ菊の移ひにける

秋の末によめる

五九はかなくて暮ぬと思ふを自ら有明の月に秋ぞ殘れる

初冬の歌の中に

六九夕月夜澤邊に立てる葦鶴の鳴音悲しき冬ぞきにける

七九初時雨ふりにし日より神なびの杜の梢ぞ色増りゆく

霰

八九武士のやなみ繕ふてての上に霰たばしる那須の篠原

九九笹の葉に霰さやぎてみ山べの峰の木枯頻りてぞ吹く

雪

〇〇久方のあま雲あへり葛城や高まの山はみ雪ふるらし

建暦二年十二月雪のふりはべりける日山家の景氣を見はべらむとて民部大夫行光が家にまかりはべりけるに山城判官行村などあまたはべり和歌管絃の遊ありて夜更けて歸りはべりしに行光・黒馬をたびけるをまたの日見けるにたつがみに紙をむすびはべるをみれば

一〇此雪を分て心の君にあればぬし知る駒の例をぞひく返し

二〇主知れと引ける駒の雪をわけば畏き跡に返れとぞ思ふ

建保五年十二月方違のために永福寺の僧坊にまかりてあした歸り侍るとて小袖をのこしおきてこゝろみ侍りければ

三〇春待て霞の袖にかさねよと霜の衣のおきてこそゆけ

戀の歌の中に

四〇はみのぼる鮎すむ川の瀬を早み早くや君に戀渡りけむ

五〇夕月夜覺束なきを雲まより仄にみえし其かあらぬか

六〇枯果てむ後忍べとや夏草の深くは人の頼めおきけむ

七〇今更に我名はたゝじ瓦屋の下たく煙くゆりわぶとも

八〇藻汐やく蜑の焚火の仄にも我思ふ人をみる由もがな

九〇足曳の山にすむてふ山がつの心もしらぬ戀もする哉

一一風ふけば波うつ岸の岩なれやかたくなに有か人の心の

よそにても有べき物を中々に何しか人に睦れ初けむ

名所戀の心をよめる

二一須磨の浦に蜑の燈せる漁火の仄に人をみる由もがな

三一唐衣なれの里に君を置て島松の木の待てば苦しも

四一我せこを待乳の山のくず蔓たまさかにだにくる由もがな

五一水莖の岡邊の眞葛枯しより身を秋風の吹ぬ日はなし

忍戀

六一時雨ふる秋の山べにおく霜の色には出じ色にいづ共

寄レ月待レ人

七一忍ぶれば苦しき物を山端に差出る月の影にみえなむ

八一恨侘びまたじと思ふ夕だに猶山のはに月は出でにけり

寄レ巖歌

九一色をだに袖よりつたふ下萩の忍びし秋の野べの夕暮

今もみてしが山がつのといふことを

二〇山がつの垣ほに咲ける撫子の花の心を知る人のなき

ある人のもとに遣しはべりし

二一秋の田のほの上にすがく小蟹の最我計り物は思はじ

旅の心を
二草枕旅にしあれば妹にこひさぬるまもなみ夢さへ見えず
三東路のさやの中山越ていなば最と都や遠ざかりなむ
旅泊
四浪風いたくな吹そしながら鳥ゐなの水海舟とひるまで
五やしの崎月影寒し沖つ鳥かもといふ舟浮寝すらしも
素遷法師物へまかりけるに遣しける
六沖つ波八十島かけてすむ千鳥心一つといかゝ頼まむ
返し
七濱千鳥八十島かけて通ふ共住來し浦をいかゝ忘れむ
秋の頃いひなれたる人のもとへまかりしに便につけて文など遣すとて
八思ひ出よみしよはよそに成ぬ共有し名殘の有明の月
建保六年十一月素遷法師于時鷹行下總國にはべりし頃のぼるべきよし申し遣すとて
九戀しとも思はでいかゝ久方の天照神も空に知るらむ
松間雪
〇一雪積るわかの松原ふりにけり幾代へぬらむ玉津島守
社頭夏月
一一晩むればふく風涼し三輪の山杉の梢をいづる月かげ
寄ゝ松祝といふことを
二二たづのゐる長柄の濱の濱松の待とは無に千世を祝ふれ
三三行く末の千とせをこめて春霞立田の山に松風ぞふく
障子の繪に岩に松の生ひたる所
四四岩の上に生ふる小松の年も經ぬ幾千世迄と契置けむ
寄ゝ竹祝
五五竹の葉に降掩ふ雪のうれを重み下にも千世の色は隱れず
六六弱竹の七の百そぢ生ひねど八十の千節は色も變らず
七七なよ竹のちゝのさ枝の母枝の其節々によゝは籠れり
八八相生の袖の觸にし宿の竹よゝはへにけり我友として
大貳會のとしの歌
九三今つくる黒木の宮やふりずして君は通はむ萬代迄に
慶賀の歌
〇四宮ばしらふとしき立てゝ萬代に今ぞ榮ゑむ鎌倉の里

源有房朝臣集

春

子日

一四野邊見ればまだ二葉なる姫小松孰くに千世の影籠る寛
二四見渡せば明石もすまも霞して孰れなるらむ己が浦々
橋邊霞
三四春霞かづらき山をよこぎれば獨とだゆるくめの岩橋
海邊霞
四四霞たつ繪島のはなを見渡せばたみ返したる心ち社すれ
雨中霞
五四雨ふれど聲もしをれぬ霞は梅の花笠きてやなくらむ
梅香渡ゝ水
六四心のみ池のあなたに通ふかは梅も匂をこちおこせ鳥
山家梅
七四誰みよと在かも知らぬ山賤の垣ねの梅の盛なるらむ
對ゝ山待ゝ花
八四是やこの花の例と思ふよりめがれせられぬ峰の白雲
櫻を
九四春はみな波ぞこえける櫻花山やさながらすゑの松山
〇五春毎に吉野の山の花見にと分け馴にけるすゝの篠原
日吉の歌合に花を
一五花故に知らぬ山路のあらば社入さ歸さの榮をもせめ
重家卿の歌合に、花
二五ねに返る時をみむ社悲しけれ花に先だつ命ともがな
櫻誰家
三五たが里の梢と知ぬ花なれど散はよそなる心ち社せね
水上落花
四五山河の流を見ずば水上に花ちりけりと爭で知らまし
二條院の御前にて遠尋二殘花一といふ事を
五五散ぬらむと思ひ〳〵ぞ尋ねこし嬉しかりける遲櫻哉
關路歸雁
六五出雲なるてまの關やに開ゆなり八雲を分て歸る雁音
喚子鳥を
七五さらぬだによの憂時は入なむと思ふ山路に喚子鳥哉
藤花
八五我宿の藤の初花さかぬまは心のまつにかゝる也けり
春暮
九五しぬ計り暮ゆく春の惜ければ命も今日や限なるらむ

夏

郭公
〇六歸りぬる春の惜さを忘るゝと山時鳥はやもなかなむ
前中納言師仲右近の馬場にて人々郭公の歌よませられしに
一六郭公なれそむるいでたちは山路に歸るとな習ひそ
雨中郭公
二六濡るとても急ぎな過そ郭公いづくも雨の下と知すや
水鷄を
三六今こゝと云置て人のいぬるよは敲く水鷄に答ぞする
蒼蒲
四六蒼蒲草いもが袂に懸てこそよは懷しくなり增りけれ
早苗
五六春懸て打し置たるゆひなれば門田の早苗取程もなし
五月雨
六六梅雨は田中のゐどに水越てこなぎ摘べき方も知れず
七六五月雨は水まさるらし柚河におろす筏の棹も通はね
社頭橘
八六舞ひきぬがあたりに匂ふ橘は愈すゝの心ちこそすれ
故郷螢火
九六古里は草の八重茂朽果てゝ螢のみこそ隙なかりけれ
樹陰晩涼といふことを
〇七涼しさは秋にかはらず松がねに夕波かくる天の橋立

秋

旅宿七夕といふことを
一七夕に何をかさまし旅衣片しくほかの袖しなければ
草花未レ遍
二七秋を淺みあらそふ花もなきのべに獨も歩む女郎花哉
經盛卿の家の歌合に草花を
三七小萩原わけゆくほどは古里へ歸らぬ人も錦をぞきる
皇太后宮の御方にて霧間野花といふことを
四七我と云へば野原の露に隱ろへて風には靡く女郎花哉
高松宮の歌合に雨中草花といふことを
五七龍田姫これは雨に濡ぬ共尾花が袖をまくりでにせよ

荻
六七夕まくれ荻吹く風の音せずば秋の哀と何をいはまし
閑居荻といふことを
七哀とも誰にかいはむ夕まぐれ獨のみきく荻の上かぜ
雁
八群てくる雁ぞ鳴なる哀又歸らばかずの足じとすらむ
經盛卿の家の歌合に鹿を
九宜しこそ鹿なくなれ妻こひぬ人も悲しき秋の夕暮
田家秋霧
〇八霧の中に鳩吹けうなゐ尋行く山田の庵の道のみえわに
故郷明月
一八古里のなはのつふらえと聞む昔も斯る月は澄みきと
高松宮の歌合に依レ所月明といふことを
二八是やこの明石の浦と問ずとも空にしらるゝ月の影哉
乍レ臥見レ月といふ事を
三八月みれど枕に塵もねざり鳧闥の板間の隙しあらねば
故郷秋風
四八秋風は葎のかどを敲くとも荻の葉ならで誰か答へむ
紅葉未レ盛
五八山姫が木々の紅葉の色衣まづかたへとは染め始ぬる
落葉
六八山河は我と柵かけずとも紅葉吹きおろす風に任せむ
霧中落葉
七八檀ら安達が原に朝立てばこの葉くつはく駒の爪音
海邊秋暮
八八やよや秋今宵はこゝに旅寢せよ濱松が根に枕並べむ
霧路秋暮
九八故里の人のみと赴思ひしか秋も別るゝ旅にぞ有ける
冬
時雨
〇九降ず共みのしろ衣きてゆかむ時雨は衆て曇る物かは
山居初雪
一九三吉野のきさ山陰のすゝの庵に雪の上葺けさぞしてける
霧中深雪といふことを
二九さくりでの袂も濡れぬ旅衣斯る深雪の晴間なければ
行路雪
三九過にける駒の跡めに任せつゝ我とは雪を濱しやはする
雪中客來
三九冬の中は訪くる人ぞ厭はるゝ跡つけまうき庭の雪故
雪
四九まきもくの檜原の梢すぎぬらむ雪の下折音しきる也
五九よも山になべての雪の降ねれば何れか甲斐の白嶺なる覽
晩頭千鳥
六九須磨明石己が浦々定め置て暮るれば歸る千鳥鳴く也
曉千鳥
七九しほの山通ふ千鳥の聲すなりさしてか磯の明暮の空
八九驚かす千鳥の聲のなかりせば明るも知じいねの盛人
千鳥を
九九とほかたに鹽や滿らむ友千鳥立なる度に聲の近づく
湖上水鳥
一〇たはれ出るしがつの浦に馴ぬれや汀離れぬかすの村鳥
冬月
二〇妹背山雪げの雲や晴ぬらむ吉野の瀧に月のさやけき
社頭冬月
三〇霜冴る千木の行合にもる月の幾代かみつる住吉の神
水邊冬月
四〇冬河の鴨の上毛にてる月は拂へど落ぬ霜にぞ有ける
戀
初戀
五〇爭でもと思初つる其人の袖には今日や墨のつくらむ
忍戀
六〇我戀は沼のみくりの水隱れて根はふと人に知れずもがな
つれなかりける人のもとへ
七〇袖によも逢名はたゝじ歎きだに頼めよ暫し心休めむ
はじめあらはれて後しのぶ戀
八〇もらしてし袖の雫をいかにせむ又今更に信夫もぢ摺
朝遲歸戀
九〇見る儘に伏屋の隙は白め共猶きぬ〳〵になりぞ煩ふ
過不レ過戀
一逢事はたが心より有しかはまた引替てつれなかる覽
隔レ衣戀
二雞の音を聞ての後も許さぬは妹が衣の關にぞ有ける
花下戀
三一條に人や見るらむ敷花を惜むにのみもぬれぬ袂を
春戀
三二春きては松のはとのみ思ひしに我戀草も色增りけり
戀遠所人
四思遣る心は路に旅ねしてかつ〳〵君を夢に見つらむ
高松の宮の歌合に隔レ關戀といふことを
五清見潟波さへ歸る關なれど通ふ心はとまらざりけり
契不レ遇戀
六只管に恨みもはてじ逢見むと頼めし事も情ならずや
女の許へふみ遣したるに返事にはあらでもとの
ふみを返し遣したればたち返り遣し
七思きや内に藻鹽も掻添へぬ元の千鳥の跡を見むとは
被レ返レ書戀
八玉章を常陸の帶と思ひせば返るに附て嬉しからまし
隔レ物談戀
九一津の國のこやとは云で語ふは唯蘆垣のとに立てれとや
〇二住吉の岸ともいはじ忘れ草人の心に生ひけるものを
寄レ荻戀
一二風渡る籬の荻を託言にて人待つよはゝい社ねられね
寄レ槿戀
二二頼めおく人なき身こそ朝顏の夕をまたぬ頼なりけれ
戀の心を
三三戀しさは心づからのとなれば卿つ方なきねをも泣哉
四三いつか君なが黒髪のねくたれを我手枕のたはと見べき
五三戀にこそ沈み果ぬる身なれども涙は又も浮ぬべき哉
六三戀は唯二もじなれど玉章に書きも盡さぬ心ち社すれ
雜
殿下はじめて閑院つくらせ給ひて人々に歌よま
せ給ひしに對レ松爭レ齡といふことを
七三春日山常磐かきはに榮ゆべき澗にはちよの松もいかにぞ
住吉の歌合
八三國々の民の竈を見渡せばみなうるほへる雨の下かな
刑部卿範兼卿三位して後はじめて歌よみしに松
伴二榮久一といふことを
九三千年迄榮ゆる松の徴りせば何かは君が頼ひならまし
二條院の殿上にさぶらひしに藏人を御使にて歌
よみて奏らせよと仰せられしかば
〇四津の國の難波のみと下らまし和歌の浦波立てゐ身ならば
むすめに思をかけて母のもとへたび〳〵文遣す
とて
一四はては皆其この本に積らなむ柞の森にちらすとのは

天王寺なるわらはの醍醐の櫻の會に舞はして歸りしに申し遣しゝ

三振る袖の名殘を多み從はむなはの海にてみるめ潛けよ

古宮ばらに女房あまたして花の歌どもよませけるに心ならず參りあへしをやがてよき折なりかさねよとせめられて俄によみて參らせて後のこりの歌ゆかしき由申せば女房の中より

三みれば皆花の名立の言のはを掻集つゝいかゞ散さむ返し

四君だにも花の名立と云ならば我散しけむとぞ悔しき

殿上の人々網代へ罷るとて醍醐に侍りしをすきざまにいざなひあはれしに父の入道わづらひしかば立ちさり難きよしを申してひわりごばかりを遣すとて書きやりし

五諸共にゆかまし物を網代木にひを待老の波徴りせば

煩ふことありて內裏へ久しく參らざりしに女房

六人傳も嬉しからずはなけれ共其玉章と思はましかば

したしき人々初瀨に參るに中將所望せし頃おまへにおしつけよとて

七此瀨をばせく人もなし初瀨河まのみは如何沈果つべき

除目の頃のぞむことありて細劒をやはたへ參らすとてつゝみ紙に書きつけし

八男山手向るたちのかひなくば此世のことを思切れとや

高倉院かくれさせ給ひて諒闇のとし經家朝臣ぬやの服にてありければ四月一日申し遣しゝ

九誰も皆衣がへせぬ年なれば我身一つと思はざらなむ

同じ七月七日中將泰通のもとへ故院の御事を思ひいでゝ申し遣しゝ

一〇なき影をいつか見べき渡り川けふも逢瀨のあらば社有め

父の服ぬぎし時妹なる人のもとへ申し遣しゝ

一一藤衣など一年と限りけむ是ばかりこそ形見なりつれ

信解品の心を

一二子を思ふ涙の玉を貫き返し元の衣のかざりとやみる

右有房朝臣集一冊元藤己卯冬以二花山院入道右府御本一寫之

藤原隆祐朝臣集

先日御尋候戀詠少々令レ進候度々蒙レ仰候之間書貫候也中々とかくて申し候はむに付て片腹痛く覺え候へ共隨レ仰進候所々會はあまたよみて候ひしかども不二書留一候只是は覺え候ばかりを書きて候也如レ此仰せにつけてこそいまは尋ねかきてやと存じ候へ又人まねに愚詠を左右に番へて候奧にかき候返々尾籠に候得共中々かずに非ず候へば人のみとがむべきにもあらず候歟勝劣は人々の合點にしたがひて候也くるしからずと承り存じ候得ば可レ有二御披露一候也他事見參之時に候恐々謹言

三月六日　　隆祐

九條大納言三十首御會永仁二年三月

早春霞

三今日と云へば思初てや霞むらむ雪降山に春はきに鳥

澤春草

四時しあれば澤の春風さそへども靡かぬ程は波の下草

曉梅

五里むかぬ朧月夜のありあけに契りて匂ふ軒の梅が枝

花滿レ山

六咲つくに四方の霞の木間より山をぞ今は花と尋ぬる

江上暮春

七今日迄は入江の春の夕暮に滿ちくる潮も猶霞みつゝ

溪卯花

八卯花の咲きぬる波は音もせで猶たえ〳〵の谷川の水

野郭公

九古里はまだ程遠し時鳥しらぬ野中のまつとせしまに

雨後鵜川

一〇鵜かひ舟あのが契をゆふやみに曇り殘さぬ村雨の空

月前荻

一一荻の葉の露ふき過ぐる秋風に獨り萎れぬ月の影かな

夕蟲

一二夕露のやどりあらさぬ淺茅生に古き籬のまつ蟲の聲

海邊鹿

一三浦風に誘はれ出づる月影をひかひの山にを鹿なく也

閑庭薄

一四とへかしな籬の秋の花薄靡くかたには露ぞこぼるゝ

名所擣衣

一五絕えにけるふしみの夢も顯れて一夜殘さず擣つ衣哉

朝寒蘆

一六霜こほる玉江の蘆の朝な〳〵撫ふもさむく吹く嵐哉

深夜千鳥

一七更け昇るあしぢの空の月影に數顯れて千鳥なくなり

故里雪

一八三吉野のふるき都のみ雪とて跡なき庭に昔をぞしる

聞レ聲戀

一九我が戀は夕霧深くたつ雁の聲のみ空にきゝ渡るかな

稀戀

二〇更にまた契りし月もしのばれず稀なる夢の有明の空

增戀

一一數ならで過にし方の袖の上はいかなる色に露の置けむ

怨戀

二二つれもなき其方の風に異荻原恨むを人の心ともがな

被レ忘戀

二三偽も忘れぬまでの夕暮を猶うきものと何うらみけむ

旅行

二四けふは猶都も近し逢坂の關のあなたに知る人もがな

旅宿

二五一夜とも宿かる程の契からばいかに浮寢の恨果てまし

旅泊

二六古里に馴來し月の契あらばいかに浮寢の恨果てまし

山家橋

二七人はこず谷の岩橋おのづから雲はれ渡る月影もがな

山家松

二八山深き草の庵の軒ばにもおもひゆるさぬ松風のこゑ

山家苔

二九苔の色も猶深からし三吉野や此より奧の秋の山さと

寄二神祇一祝

三〇春日山ちとせのまつの梢までたのむ心にかゝる藤波

寄レ水懷レ舊

三一流れこし昔や遠き忘れ水うつる計りの影もたえつゝ

寄レ雲遠レ懷

三二雲上を今年もよそに詠つゝ身を知雨に濡ぬ日ぞなき

此歌詠出して候之時故入道不レ悪之由申之京極中納言入道之許へ遣しゝかば返狀如レ此
侍從殿御歌拜見驚レ目候今度三十首以レ此御歌一詮じ候歟懸點雖二無念候一任レ意加レ之候且長短表二所存一候一首洩レ之候何事の故ぞと定被レ寄二思食一歟全く無難に候只皆懸二合點一無念に候へば定三十首許一可レ抄之由不レ及レ力大切之御詠の由に候へば次第にかくかひ負まゐらせ候之間甚しるし候はむと深慮候ぞ非二公事一力不レ及候得共明に御倉小舍人一命と不レ參候はむするこそ悲しく候へいづこにても御詠候へあはれ面かげみるやうに覺え候事の懷舊思欲暮し候眞實不可思議に候也待て候ひける題どもさも案じ候ひける物かな凡心中迷惑合委事候恐々謹言
御室御會とて京極中納言入道定家被レ申るゝに
浦霞
時わかぬ田子の浦波それ乍ら春は霞も立ぬ日ぞなき
新花
花の色もくるゝ物とは白雲の峰の別ぞ猶うらみつゝ
夕郭公
過ぬるやけふの名立の時鳥今暫しあらばよはの一聲
初秋月
草も木も色ぞる程は晩けれど月のまちける秋の初風
擣衣稀
秋風に身にしめやらぬ里人のぬるよ許多にうつ衣哉
曉空
初瀨山あらしはたゆむ明方に雲わけ殘る鐘の音かな
溪雲
秋の夜の月も詠めぬ谷の戸は雲の主をとふ人もなし
嶺松
峯高き松の下かげいたづらに麓ぞ人め宿はとひける
庭苔
散り替る花も紅葉もはては又苔のさがきに殘る白露
窓燈
限ある秋のよのまもあけやらず猶きり深き窓の燈火
又同返狀
侍從殿御歌悦給候了明旦かげ法眼之許へ候此御風躰眞實毎度驚レ目候皆別御風情あだおろかならぬ事に候歟御教訓の趣にて申し候はめどもかゝる事やは候此道さすがにたのもしく候霞もたゝぬ日もなきと候ひける不思議に候嶺のわかれうつくしく候けふのなだておもしろく候月のまちける殊勝に候雲のあるじめづらしく候苦のまがきやさしく候七首十心中に霞花月すべきとおぼえさふらふ恐々謹言
定家
如レ此度々被レ申候ひしかば今の歌よみにこそ候ひけれと思ひて候ひしほどに新勅撰集沙汰聞え候ひし頃より隆祐歌よみさかりたるに此中に聞え候ひしに合せて彼の撰に一首入りて候ひし面目ながら未だ歌よみとも聞き及ばぬ人もあまた入りて候へしにこそ誠よみさかり候ひける同じくさらばよくよみ候はむ時の歌も入れ候へかし彼は又一首も入り候はぬがいかに候やらむとかた〴〵不審にて此の道物うくなりて候ひし程遠所より忍びたる御歌合めされしに
朝霞
朝日影まだ出でやらぬ足引の山は霞の色ぞうつらふ
山櫻
櫻花そらにあまぎる白雲のたなびきわたる葛城の山
郭公
しがらきの外山の末の時鳥たが里近き初音なるらむ
萩露
宮城野の木の下風や過ぬらむ露におくるゝ秋萩の花
夜鹿
烏玉のよや更ぬらむさを鹿の聲すみ昇るをのゝ草臥
時雨
神無月曇らぬかたの空にまで風に亂れて降る時雨哉
忍戀
思へども岩ねの松に波かけて變らぬ色にぬるゝ袖哉
久戀
徒に年はへにけり玉緒の永らへばとも契りやはせし
羈旅
けふは又明石のとより漕出でゝ心を繋ぐよもの浦々
山家
都にて人にしられし我身とも忍ばでなるゝ山の奥哉
此の歌參らせて候ひしに遠所の返事に故入道の許へ此の道昔より父におよぶこと稀なるに降祐相傳へて御覽するにや猶よく〳〵たしなむべきなりと被レ仰て候ひしにこそ父はゝのづからよくよみたるにと申すも書きしその餘り思ひ出すかとも疑はれ候他人は空に折節による事もやと不審に候に君の御氣色におきては何の歎もかはす許多愚ならぬとに思ひ候ひて勅撰に少なく入り候恨も忘れはてゝ故入道も此の道ばかり心やすき事に思ひ候也
又入道逝去して候し年同御所より十首歌召れ候しに
野春雨
口の上の朝のゝいとの朝綠空にかすみて春雨ぞふる
名所花
吉野山一つに見えし花の色の移ればかはる峯の白雲
江菖蒲
菖蒲草今年はかけぬ袖の上に猶同じ江の波ぞ立そふ
湖上月
志賀の浦や凍らぬ波の音はして月のみ舟ぞ遠ざかり行
山紅葉
紅の濃染の糸の村時雨山のにしきを織らぬ日ぞなき
閑庭雪
とへかしな跡も厭はで待たれ鳧まだ空晴ぬ庭の白雪
寄木戀
つれもなき軒ばの松の偽は賴まぬ暮も猶ぞかなしき
寄草戀
いかにせむ人の契りの月を見て淺茅色づく庭の秋風
夕懷舊
幾度かけふも暮ぬと眺めつゝ歸らぬ方を忍來つらむ
曉述懷
明方の山のは近き月のみぞ何ゝも影を空に見せける
又此の歌の返事少輔爲泰書き候ひて今度十首故入道がありし時よりも猶かさまさりて御覽ずるや他事なく好きたしなむべきの由被二仰下一て候ひし後は沈みえて候歟きも物ならず覺えて新古今集の時生れあひて數あまた入り候同じ事に思ひて候也
撰歌の外聊有二子細一歌
是は大殿の御會の百首に五月雨の五首の中に
入江なる海士の捨舟浮はてゝ浦に流るゝ五月雨の頃
光俊朝臣よませ侍りし千首の歌に芭蕉を
故里の庭の芭蕉のかいろはを許多になして秋風ぞ吹
西國に十禪師いはひ奉りたる所にて百首の歌合

しはべりし中に月を

㊀天の原むら雲遠くなるまゝに早くも過ぬ秋の夜の月

日吉社に奉る千二百首の中十禪宮百首に長歌をつくりて其の詞をうへに置て侍りしによの字にあたりて侍る歌に山家春を

㊁世の中に厭はぬよりもとはれ鳧花の便の三芳野の奥

西國に下り侍りしころきつきの社へ詣で侍りし道にて社に奉らむとてよみて侍りし歌の中に旅宿嵐といふことを

㊂聞馴て變らぬよはの嵐哉わがすひらも都ならねば

五條二位公賴のもとより念佛を申さむとて立華の料に高倉大納言經通の許なる梅をこひ遣すに歌の相添へたきよし故入道のもとへ申させて侍りしに隆祐よみて送るべきよし仰せられしかば

㊃色に出でゝ契も深き宿ならば折る袖許せ春の梅がえ

明くる日念佛聽聞すべきよし彼の卿の許より申されて侍りしにまかりて聽聞し侍るに彼の大納言の許より亭主へ

㊄老よりも御法の聲ぞ匂ひこし送るは風の深きよの空

㊅獨なほ西に心を殘すらむさそはゞたれも山の端の月

㊆心なきあまのしわざの藻汐草法の光に書きて捨なむ

やがて返事すべきよし申され侍りしかば草をとりて

㊇色深く手折し花の便こそ御法の聲も身にはしみけめ

㊈君とわれ西に心をかきつれば誘はゞ誰も山のはの月

㊉時しもあれ蟹のしわざの藻汐草法の光にさへる波哉

住吉の方に侍りし頃或る處より蟲とりて參らせよと仰せられしに蟲屋のうへに書き侍りし

㊊君が爲兼てうゑてし里なれば千よの秋しる松蟲の聲

同じ所に侍りしに故入道へ荻の葉といへるひえ鳥を所望して侍りしに葉山といふ鳥を此も劣らぬ由仰せられて給はりて侍りし心につかず覺えて返上すとて

㊋涼しさは葉山の影もわかねども猶吹き送れ荻の上風

返事彼の荻のはにつけて

㊌此もまた秋の心ぞたのまれぬ山に代る荻のうは風

于レ時七月

又同じ所に住み侍りしに故入道より隆祐が歌某が跡ありと御覽ずるよし遠所より被二仰下一侍る也今は心やすきよしこまかに仰せたりし返事のたよりに

㊍世の中に沈むと何か歎けむ和歌の浦波かゝりける身を

御返事

㊎きく度の花の涙も誘はれて跡吹き絶えぬ和歌の浦風

新勅撰にすくなく入りたるとぶらひの次でに白川三位俊時入道のもとより

㊏色深き森のとの葉はかるれば有か無かに人の見る覽

返し二首入りて侍る人の合點にもはづれし殊に見所なき物に侍れば

㊐數ならぬ數社有め朽果る言のはをしもなどかかく覽

五位正下して侍りしに右中弁公俊のもとより

㊑立昇る春まちけりとみゆる哉一入まさるあけの衣手

返し同じ下名に權弁より右中弁にあがりて侍りしに

㊒立昇る君が心の春にあひていとゞ色そふあけの衣手

同じ日祝部忠成がもとより

㊓染め增るあけの衣の色にみつめぐまむ春の行末の空

返し

㊔我が賴む春の日よしの行末をあけの衣の色にみる哉

春のころ平の行幸天王寺に詣でゝ住吉へ申し送りて侍りし

㊕住吉のまつ人もがな尋ねみむ霞に浦は道しらずとも

返し

㊖霞めどもまづみる浦も知乍ら心の内をいかゞ隔てむ

少將伊成朝臣住の江にて一兩日遊びてかへさの道よりたか犬をこひはべるとて

㊗敏鷹のこの朝計引そへよ今にもよりも鳥やたつまと

少將また都より

㊘今よりは思ひしそむな住吉の松の嵐の音のはげしき

㊙住吉の蟹の栲繩打はへて忘るゝ草は枯れやはてなむ

㊚思ひ出づる心ぞ深き住吉を淺澤小野と誰か云ひけむ

返し

㊛今よりの松の嵐の烈しきに聞ましかばと先覺えつや

㊜住吉の蟹の栲繩くる人のかるれば枯ぬ草の名そうき

㊝思ひ出て深き心も賴まれずあさゞは小野に曉の面影

雪の深く積り侍りし夕にいづくよりとなくて置き侍りし

㊞降昏し跡絶果つる庭の雪に訪るべしとは思やはする

さやらひと覺ゆる所にさし置かせるに返し

㊟雪の中に憂身の跡や厭ふとて訪でぞ人の心をばみる

同じ頃雪のあしたに藏人俊定が許より

㊠跡たえてとはぬ日數の故里に恨もつもる庭の雪かな

返し

㊡日數ふる恨も今は忘られて心のゆきの跡や見ゆらむ

夏のころ胤行朝臣鎌倉より

㊢春秋の花と月とのあひみても忘れぬ人は猶ぞ戀しき

返し

㊣春秋の花と月との詠だに忘らるゝ程と君をこひつゝ

そへて

㊤山の井の濁らぬ水を結びてや頓て別れし面影ぞたつ

月の明に侍りし夜住の江の釣殿にて連歌し侍りしに神主國本が許より

㊥數ならぬ言の葉にのみ埋れてよそにぞ忍ぶ住江の月

返し

㊦住江の月も色そふとの葉によそなる人の心をぞしる

鎌倉なる人の和琴のかたうつしてと申したりし

道すがらて返事の次でに

㊧都より訪べき人のいかなればあづまのとを知ぬなる覽

返し給へて鎌倉より或る人

㊨あづまには都のとの變るかと尋ねて見れば一つ也鳧

住吉に侍りしに都より知りたる女房あまた天王寺に詣でゝ侍りしかば住吉の神主經國の女にほひかひこはむと思ふに歌のそへたきよし申し侍りしかば詠みて遣し侍りし

㊩渡よする津守の浦による貝を拾はぬ袖に移せとぞ思ふ

返し貝にかきて

㊪諸來て拾はぬ浦のつらければ袖に包むにかひなからむ

入道殿天王寺にて四月九日はかなくはなし侍りし歎きの内にもさいの日七首の歌よみてねながら念佛久しく申して落ち入らせ給ひにしこと世に往生の由聞え侍りしに未だ聖人みえず侍りしかば申し送り侍りし數多の歌の中に

㊫紫の雲のむかへの跡にこそ藤の衣の名にはたちけれ

㊬曇なきみだの顏の月影に露の置ねて消ていでにし

遊心墨人 初出

歌

同じ時浮忍がもとから

同じ年左衛門尉時朝が父往生のよし聞え侍りしにすがたやつれて時朝鎌倉より上りたるよし聞え侍りしに申し送る

〇[一]西へ行く契は同じ別れぢを思ふ涙のたれまさるらむ

返し

歌

法皇隠岐國にて崩御夢とのみ承り後程へて守護左右衛門尉泰清がもとより年頃あひ奉りし御所は目の前の煙となりはてゝ露の命とまりがたくは侍りし人々をさそひ〳〵して都へ送り奉りし心の内心なき海土の袖までも朽ちぬべくみえ侍りしよしくはしく申し送りて侍りし返事の次でに歌多書きつけ侍りし中に

[一]立昇る煙となりし別路に行くも止るもさぞ迷ひけむ

[二]なれ〳〵て沖つ島守いかばかり君も潜に袖濡すらむ

[三]世中になきを送りし御幸こそ歸るもつらき都也けれ

[四]此世には數ならぬ身の言の葉を諫めし道も又絶に鳧返し

[五]立ちのぼる煙の後の別路をみしは迷の夢かうつゝか

[六]世中になきから歸る行幸には非ぬ衣の袖もはつれき

[七]島守も空しき舟の浮び出て殘る歎のすむかひもなき

[八]和歌の浦の道の心を仰せけむ君のみ跡をさぞ忍ぶべき

前宰相中將信成此の御事によりて遁世のよし申し送りて侍りし女房のもとへ

歌

熊野の社に奉る百首の歌の中に廻文歌海上暁望

[九]なかとほき方は南のすこき崎越すのみ波は高き音哉

十禪師に奉る百首の上置長歌みもじにあたりて侍る廻文

〇[一〇]御垣より翳す枝にはきの花は軒端に絶ず盛よきかみ

相傳して知り侍りしかば備後の吉備津彦宮に奉りし百首の中におなじく廻文歌を、慶

[一一]日頃よのともしき栖のぞむらむ其かみ過し元の慶び

月の中になきやうに聞きなし侍りき此等の善惡によらず折節思ひ出され候ばかりをかきて候

抑御尋候故入道が自讃歌幷に人々撰べる猶自讃歌新古今の中

[一二]思出でよ誰かねごとの末ならむ昨日の雲の跡の夕暮

[一三]明ばまたこゆべき山の峯なれや空ゆく月の末の白雲

近きころの歌の中遠所の御歌合、萩露

[一四]又やみむ又や見ざらむ白露の玉おり敷ける秋萩の花

百首の中懐舊の心を

[一五]翁さび人なとがめそこの内に昔を戀ふるつるの毛衣

此の四首ぞ少し歌と覺しき物にてあると申しき人々の撰貴人幷名人などはみも候へば所詮申候

左衛門尉俊村

雨中廬橘

[一六]ぬれ〳〵も花橘の匂ふ哉むかしの人や雨となりけむ

これはゆかしき秀歌とて京極中納言入道のもとへ被二注送一候ひき或る撰の中に被レ書二入人數一候

又此邊に見え候ものどもに歌をよませて候ひつればさもありぬべく候らむ有のまゝに仰をかうむるべく候皆當座

雨中立春

[一七]立變る今日のけしきにしるき哉長閑に霞む春雨の空

雲間冬月

[一八]雲凍る山風あしき雲間より洩出づる月の影の寒けさ

僧

[一九]鷲の山入ぬる峯の月なれど法をつたふる聲の聞ゆる

法橋康賢

浦蚊遣火

[二〇]藻鹽やく須磨の浦曲の蚊遣火にたつる煙も色ぞ變ぬる

思

[二一]煙ともならぬ我身の思をばいかでか人の空に知べき

無常

[二二]永きよにまだ夢さめぬ世中を現と人の思ひけるかな

三月盡

[二三]今日のみと春を惜みて詠べき朧月夜の影だにもなし

菊

[二四]色かはる千草の花は散りはて〳〵雛にのこる秋の白菊

田家夕雨

[二五]山田もる草のとざしも亂れつゝ村雨しげき秋の夕暮

戸外秋風

右兵衛尉源康澄

[二六]杉のやの草の編戸に吹風の秋はいかなる色も添ふ覽

網代

[二七]白波の岩切通す早き瀬に雜面く見ゆる宇治の網代木

後朝戀

[二八]宵のまはともに詠めし月影の殘るもつらき東雲の空

螢

右馬允源光經

[二九]難波江や入江の葦の外も又よな〳〵すだく夏蟲の影

峯曉望

〇[三〇]旅人のいく山こえて見わたせば麓にのこる峯の白雲

鶴

[三一]今よりはきつゝ馴なむ我君の雲居にとほき鶴の毛衣

梅

千

熊

[三二]つれもなく雪は降れゝど春のしれ薫れる梅の花の下風

蓮

[三三]池水にはちすの花はふかけれど猶賴まるゝ法の道哉

菖蒲

[三四]よそにみし淀の渡りの菖蒲草今宵一夜の枕とぞなる

歌よむものあまたあるよしに書きつけらるゝとや思しめしさふらはゞ一首も直し不レ入候思へば住吉の大明神御照覽候へし以外によあひて近來いま〳〵しきこしをれの中に好くよみ候詞

山又山　朧夜　おぼろ月よさいはで無下にそみかくた　古き詞に候へ共うけず候山臥さてはわざともよく候　すちる　しこさく　つ異名なしまて無詮候　しでのたをさ又時鳥にて候べし

有明の月夜　のもじなくてはいま〳〵しく候　ひぢて　がてらこの程は候はれ共不宜詞　春の明ぼの　明ぼのゝ空　冬の夕風　山の夕風　露の下草　雪の下草　はにはよく候　軒ばの山　水はのみね

初五文字にかなといふ詞　くれなの山　うすかきざくら　心ちこそすれ　是らはうけられず候故入道も申しき位よき歌もよみ出しけむに此の詞おきて叶ひがたからむには憚かるべからずさきに注申詞よむべからず候へし也　つもなどは不レ宜かもに難に申し候に侍れども宜しく覺え候よし申し候ひき歌をよまむには心をあたらしく詞をふるくすべしよき事を案じ出して古き詞のやさしきを得べし珍しくよまむ有明の月などを月の有明といひつれば無下也歌はよき歌をよみたりとも書きつけて後能々なぶりて文字一つもいかにしていま少しの能樣になるとみるべきよし候ひしを隆祐などは大かた叶ひがたくよみ出し候ひぬる

後善惡なぶり引きなほすことはいかに候やらむこん叶ひがたく候ひていかなる晴の歌をもたゞ一兩日になりてよみ候ひしかば淺ましくあぶなき事にまうし候ひき

菅原在良朝臣集

花落薫レ衣
散りかゝる花や昔の我妹子の重ねし袖の匂なるらむ
花影浮レ水
水底に春やとまると尋ねみむ移ろふ花の影に倣ひて
三月盡夜
春霞たち歸りゆく通路を暫しとゞめよ雲のかけはし
夏夜於二秘書閣一同詠二雨中早苗一和歌
斯許り小歌だにせぬ梅雨に爭でか田子の早苗とる覽
夜深待二郭公一
子規まつとせしまに臥待の月こそ高く空になりぬれ
山家郭公
郡人まつらむものを山里に聞きふるしたる郭公かな
臨レ晩有レ涼
夕されば簾く小笹の音にこそ思はぬ秋の風は立けれ
山家早秋
山里のくずのうら葉を吹返す風の景色に秋をしる哉
七夕
さよ深くあふせ尋ぬる彦星は其睦言の程もあらじな
同
天河星會の空も見ゆばかり立ちな隔てそよはの秋霧
月前擣衣
月影に秋の夜すがら起ゐつゝうつ衣手に霜や置らむ
九月十三夜對レ月惜レ秋
月故に長き夜すがら詠むればあかずも惜き秋の空哉
月契二千秋一
いつよりも月の長閑に見ゆる哉千年の秋の初と思へば
月照二紅葉一
夜さたる錦とは見よ散懸る紅葉も月も隈しなければ
終日對レ菊
白菊の垣ほの花を詠むとて栖かならでも暮しつる哉
秋夜陪二東部大王文章一詠二臨レ曉聞レ蟲一
片敷の寢覺の床の蟲の音は哀みにしむ物にぞ有ける
秋日於二遍昭寺一詠二野徑尋レ花一
女郎花匂へる野べを尋ぬとて濡こそきたれ道芝の露
九月十三夜詠二終夜見レ月一
名に高き今宵の月にあくがれて露と起ゐ明しぬる哉
題二紅葉山寺一
思ひきや空しきとに尋ねきて紅葉の錦ふまむ物とは
初冬於二羽林藤原次將文一詠二戀レ秋對レ菊一
情なく別れし秋の戀しさに露ぞ立うき菊のあたりは
山路時雨
山深みしぐるゝ空を眺むとて儚く今日も暮しつる哉
夜思二時雨一
轉寢に衣のさゆる景色にて吉野の山の雪をしぞ思ふ
雪埋二裏草一
老ぬれば我身とのみも見ゆる哉蓬が上に降れる白雪
栖霞寺冬意
寂しさはいつにも增る小倉山麓の里の冬のけしきは
寄二擣衣一戀
諸共にたちきし人を戀佗て形見の衣なくぞうつ
故事部大王令レ通二或女御一聞二予爲一其媒介一而女未レ成二配偶之禮一王忽催二告別之悲一女以二一首一被レ投二予其詞曰
宮城野に枯にし花の悲きは折られぬ萩の上も露けし
予以レ戀レ君之趣一更綴二答之詞一
宮城野の小萩が末の枯しより鹿ぞゐひなき音をや立ける
法華經神力品
くさ〴〵に遠の印を知せしも一つ御法の緣り也けり
松樹蔭二池水一
岸近く生ひたる松の緣こそ池に千年の影はとゞむれ
松樹契二遐年一
嬉しさの行末遠くみゆる哉千年の松の宿のしるしは
冬日雲居寺
紫の雲ゐを願ふ身にしあれば兼て迎を契りこそおけ
松樹契二遐年一
幾千世と契りおきけむ我宿の年に生ひそふ松の梢を
夏日於二右武將軍小野別業一詠二池水久澄一和歌
池水もいひや漏せる千年迄流れてすまむ君が宿とは

俊成卿女集

三十四になりし十五夜の御歌の中に放殿のながめごとおはしますと聞きしに
古の秋の空まですみだがは月にこゝふ袖の露かな
一年北野の歌に故大納言通具のよませし、冬月
秋の色に亂し露の影よりも枯野の霜に澄める夜の月
山家夕嵐
眞柴たくさゝの庵の夕煙いとゞかすかにふく嵐かな
こぞの八月十五夜
花の枝に露の宿かす宮城野の月にぞ秋の色は見えける
百首の中に、春
明けやらぬ谷の戸過る春風にまづさそはるゝ鶯の聲
夏
澤水に秋風ちかし行く螢さへ光もかげみだれつゝ
岩たゝく谷の下水音きけば結ばぬ袖ぞまだき涼しき
秋
稚はふ宿とはわかず秋は來て心盡しに月ぞもりくる
秋風に外山の鹿は聲たてゝ露吹き結ぶ小野の淺茅生
風ふけば篠に亂るゝ刈萱も夕はわきて露こぼれけり
八月みばと賴めし秋の夜もすがら又恨めしくうつ衣哉
冬
松鳥やをじまが磯による波の月の氷に千鳥鳴くなり
戀
知ざりき結ばぬ水に影みても袖に雫のかゝる物とは
夏衣うすくや人のなりぬらむ空蟬の音にぬるゝ袖哉
みる程ぞしばし慰む歎きつゝねぬ夜の空の有明の月
清見潟うきねの波に宿る夜は月に心のとまる也けり
思ひねの夢の浮橋とだえして覺る枕にきゆる面影
濟ぎ離れ行く月影ぞあはれなる蟲明の松の風の音哉
月花五十首
山花

六三おしなべて風こそ薫れ春の山咲櫻あれば咲かぬ梢も
古寺花
七三なべて世の花ともいはじをはつせの山の櫻の曙の色
湖
八三鴻の海はるは霞のしがの波花に吹きなす比良の山風
はしのもと
九三かづらきや高間の山の山風に花こそ渡れくめの岩橋
松の間の月
一四〇大方の秋も寂しき木の間より月もる松を風拂ふらむ
山家
一四一山深み秋かぜ吹かぬ寝覺だに月にはみつる床の涙を
野路
二四二結びおく人はかりねの草の原枕の露に月ぞすみける
月前秋風
三四三涙とふ床の月だにさびしきに深き秋なる風の音かな
旅泊
四四四袖の上になるゝがほなる光哉月こそ旅の心知りけれ
月前草花
五四五風寒み下葉かれゆく秋の夜の露にぞ凍る淺茅生の月
菊のまがき
六四六秋深き菊の垣根の月影に霜かと露ぞ消えかへりける
暮の秋
七四七長月の有明がたの空のつき心細くぞかたぶきにける
寄風戀
八四八いかなりし風の便に聞初て身にしむ戀のつまと成けむ
寄衣戀
九四九朽はてむ涙のつまと知ざりき契し中のよはのさよ衣
北山三十首、春
一五〇しる人も嵐に紛ふ梅の花色をも香をも散るに任せて
一五一尋ね入る春の哀も深きよの花にかすめる三吉野の月
二五二うき世とやあだに契りし山櫻紛ふる峯に消ゆる白雲
夏
三五三時知ぬ苔のさ衣けふとても返らぬ春の形見とは見し
四五四待ちなれしよはの契を時鳥誰にむせぶしのゝめの空
五五五袖の香の昔とだにも忘れにし花橘のなほにほふらむ
六五六五月雨て波よせ増る須磨の浦の藻汐にくたす蜑の袖哉
七五七人とはぬ庭の蓬の跡もなく茂りに鳥な夏のふるたに
秋
八五八秋來ぬと未こす風に下荻の露さえ返り結ばゝれつゝ
九五九拂ひかねくもるも悲し空の月つもれば花の秋の涙に
一六〇澄み増る月計りこそ變り行く浮世の秋を猶忍びけれ
二六一思出でよ朝倉山の峯の月よその雲間に影はたゆらむ
三六二かりに來て露のみいとゞ深草の里は誠に野べの秋風
冬
四六三秋かけて染し梢もしぐれつゝ木葉散しくみ山べの里
五六四霧こめし籬の荻も霜がれて嵐に拂ふ野とぞなりゆく
六六五白妙の袖の氷に影さえてむすびかねぬる冬の夜の月
七六六新しき春と急ぎし今日ことに我身ふりぬる年の暮哉
戀
八六七流れての名をさへ忍ぶ思川あはでも消ぬ瀬々の泡沫
九六八うかりけるねに顯れし袖の上にぬるゝ顔なるよその月影
一六九契らずな今こむ迄のかたみとは其夜の月の明方の空
二七〇朽果る尾花が本の思草はかなの野べの露のよすがや
三七一見てもまたいかに寢しよの俤の現もまよふ夢の通路
衛門督の殿への百首、春
四七二いかにして氷閉たる柴の戸にもりくる春の苔の下水
五七三武藏野の草の緣りになく雉子春は昔のつまならね共
六七四露乍ら葦つみにとなけれ共野を懐かしみふるゝ袖哉
七七五風にちる花故悲し移り行く色は空しと背く世なれど
夏
八七六偲ばじな我もむかしの夕まぐれ花橘に風はすぐらむ
秋
九七七月影も思ひあらばともり初て葎の宿に秋は來にけり
一七八眺むれば空やは變る秋の月みし世をうつせ袖の涙に
二七九今はとて背く浮世を假の庵に秋は曇ぬ月のみぞすむ
三七一〇とへかしな淺茅吹きこす秋風に獨くだくる露の枕を
四八一みし人もなきが數ふる世中に有ましかばの秋の夕暮
五八二松風に契りし秋も更けぬとや伏見の里に衣うつらむ
六八三言の葉も枯行く小野の淺茅生となれる籬の秋の色哉
冬
七八四時雨つゝ冬は來にけり秋風の拂ひ捨たる蓬生の庭
八八五眞木のやに霰降夜の夢よりも淨世を醒せ四方の木枯
九八六さえ渡るをじまの波の月影を氷に映す海士の袖かな
戀
一八七恨めしや思ふ心をかすめても靡ろにうつす春の月影
二八八知べせよ海士の小舟の便にもそなたの風の跡の白波
三〇〇六なれ〳〵て秋に扇を置く露の色も恨めしねやの月影
七〇七休らひに出にしまゝの天の戸を押明方の月に任せて
一〇八ほし侘ぬ蜑の刈藻に曉たれて我からかゝる袖の浦波
二〇九思出でよ朝倉山の峯の月よその雲間に影はたゆらむ
三〇一〇朽にけり變る契の末の松まつに波こす袖の手枕
雜
旅衣きつゝ馴れても露ふかき宮城が原の秋の月かげ
波の上の月の行方に漕ぎ別れ漂ふ船のよのならひ哉
新古今のうきよのさがの野べのをり五條へまかりて鶯の聲をきゝて
思ひきや君なき春の古郷にきて鶯のなかむものとは
限と聞きて急ぎ詣でしをり昔のきたむきのあけぼのゝことも〻今のやうにあはれにて
消えはつる夕も悲しあけくれの夢に迷ひし春の古郷
てゝのぶくの折
いかにせむ露さへ秋の夕とて涙の淵の袖のみだれは
露もおけ涙もかゝれ藤衣ほさでも苦の袖はなれてき
世の常に染てもあさし藤衣返すゝ〳〵もよを背く身に
詠百首和歌
霞
朝日さす三笠の山の雲居より霞初めたる千世の初春
雪分けし岩のかけ道あと絶えて霞にたどる春の山人
須磨の蜑の凍りし袖の浦波に春は霞口藻汐たれつゝ
霞みゆく夕の雲のたえ〴〵に古郷思ふ雁ぞなくなる
朝ぼらけおぼろに霞む山の端に代々の昔も殘る月影
花
よそにのみ峯の白雲たちかさね櫻咲きそふ葛城の山
里の名は吉野の山とあれにしを花ぞ都の形見也ける
春のきる花の衣や山風にかをる櫻の八重のしらくも
さけばちる花のうき世と思ふにも猶疎まれぬ山櫻哉
春來ては風より外にとふ人もなき山里に散る櫻かな
暮春
くれぬとも谷には春を知せけり古巢にかへる鶯の聲
哀なり春とてしたふ別まで浮世にをしむ心ならひに
姫りあはむ我かねごとの命だに心にかなふ春の暮哉
暮はつる空さへ悲し心から厭ひしほるの詠せしまに
別れ行く跡なき雲の形見とて今宵計りの春雨ぞ降る
郭公

一六思ひつゝぬるよ語らふ時鳥さめざらましの夢か現か
一七有明の空にまがへて時鳥月の行くへもあかぬ忍びね
一八袖のかをわすれがたみの橘にむかしとよふ郭公かな
一九思ひ出でゝ尋ねやきつる時鳥ふしみの里の松の夕暮
二〇郭公雲のよそにや過ぎぬらむ朝倉山のよはの一こゑ

五月雨

二一さみだれは蓬が下葉水こえて垣ほあれゆく撫子の花
二二待出し月も幾夜をへだつらむ晴せぬ峯の五月雨の頃
二三水増る宇治の川をさ高瀬さす身を浮舟の五月雨の頃
二四梅雨は波うつ岸の松が枝も靡く玉もに水隠れぞ行く
二五苦ふかみ軒の雫か五月雨の雲間の風は猶こぼれつゝ

初秋

二六涙もる袖をや秋の宿りとて朝おく露のまづ結ぶらむ
二七露もまだ染めぬ木の葉も故郷を尋ねやきつる秋の初風
二八寂さも哀もいかに忍べとて秋の来ぬらむ淺茅生の宿
二九荻の葉に結びやおきし風の音みにしむ秋の露の契を
三〇吹き返す眞葛が原の秋風も恨みそめたるさを鹿の聲

月

三一里はあれて庭の雛も秋の露やどり馴れたる月の影哉
三二月みてもちゝに碎くる心哉我身ひとつの昔ならねど
三三忘れなむよはの寐覚の秋とだに袖の涙の月は馴にき
三四まて暫し同じ空行く秋の月又めぐりあふ昔ならねに
三五うきよをも秋の末葉の露の身に置所なき袖の月かな

紅葉

三六しぐるれどよそにのみ聞秋の色を松に懸たる蔦の紅葉
三七色にみよ秋の思の深きえに焦れて染むるよもの言葉
三八紅にちしほや染めし山姫の紅葉がさねの衣手のもり
三九別行く秋の涙のしぐれつゝ野にも山にも色変るらむ
四〇龍田川水にも秋や暮ぬらむもみぢ亂れて影ぞ流るゝ

氷

四一秋果てし枯野の草に結びつゝ氷ぞ露の形見なりける
四二打拂ふ霜のつばさの音さえてをしの上毛に凍る月影
四三袖凍るさよの河風狹筵にかたしきかぬる宇治の橋姫
四四稀にこし山のかけ橋音もなし氷にとづるせゝの白波
四五大井川はや瀬の水も結びつゝこほる嵐の山風ぞふく

雪

四六花の色は枯にし秋の霜の枝にまた開けたる雪の白菊
四七見し人もつもる跡なき面影は雪ふる里の昔なりけり
四八掻くらし日數ふるやの軒とぢて空には深き雪の白雲
四九紛へこし月と花との哀さで雪にこもれる三吉野の山

山家

五〇人やたれ宿は孰くと埋れし木の葉に雪の猶積るらむ

忍戀

五一はかなしや忍の山の夕煙きえなむ空のあとのしら雲
五二いかにせむしぐるゝ空の思草下葉にむすぶ露の亂を
五三裏もなく影も宿さじせく袖の涙の色を月もこそとへ
五四しき忍び朽なむ床の跡までも漏ら枕の露も漏らすな
五五漏きかへり下にぞむせぶ思川せゝの岩間の水の白波

あはぬ戀

五六初鴈の涙の露も色に出でゝ尾花にまじり咲ける秋萩
五七かけて猶絶ぬも悲し玉の緒のあはずばなげの契計に
五八さゝわけし袖のためしの濡衣ほさで幾夜の道芝の露
五九頼めつゝ必ず人に逢はねよの習ひ恋うき夜はの月影
六〇行方なきあふを限の白くももたえて別るゝ峯の松風

後朝戀

六一消えわびぬ命をあだにかけ初めし露の契を結ぶ別は
六二せきとむる袖の柵涙のみまたかきはらす東雲のそら
六三契置く夕もつらし松風の色やみどりに思ひ初めけむ
六四雛からぬよしの悲しき別まで有しにまさる暁ぞうき
六五逢とみて覺めにしよりも儚きは現の夢の名殘也けり

あうてあはざる戀

六六初時雨心のさゝにふりぬれどまづ色変る人のとのは
六七忘れじの契も夢の形見にてぬるよ涙の床にきえつゝ
六八面影　うき身にそへて忘れしに変らぬ月は有明の空
六九吹すぐる行方もとはぬ荻の葉に待宵ふけし秋風の聲
七〇枯果つる契もかなし跡たえてふる野の道の霜の下草

恨戀

七一絶果つる心のうちを恨みても猶たどらるゝ夢の浮橋
七二うき侘て恨みや渡る契りこし苫屋も波の海士の釣舟
七三味氣なく殘る恨の永き世にはかなかりける轉寐の夢
七四恨みよとかさねやそめしさよ衣涙の露の契ばかりを
七五なれ〳〵て秋に扇を置く露の色もうらみじ閨の月影

旅

七六蟲明の松に秋かぜ吹き過ぎて涙もとめぬ波の音かな
七七心のみ嫉捨山とすみなれし月にやどかる更科のさと
七八これもまた假初ぶしのさゝ枕一夜の露の契ばかりに
七九結び捨てゝいづれの月を峯の庵心も殘る明がたの空
八〇月のすむ雲居やいづく旅の空おなじ光にやどる露哉

山家

八一身をかへてやどかる芝の庵にも誰とふ月の秋の光ぞ
八二あすをだに待て假寐の露乍ら幾よへぬらむ苔の狹筵
八三八重葎とぢし岩がき打かゝるゝ草の戸ざしを拂ふ木枯
八四露繁き野べとなりゆく山里に心も月もすみ増るらむ
八五山深くそむくも同じうき世とて猶秋風に鹿ぞ鳴なる

眺望

八六あさ小舟島隠れ行く朝霧に遠きむかしの跡のしら波
八七武藏野や草の原こす秋風の雲に露ちる行くすゑの空
八八分なれし雲の翅に秋かけて越路の空に鴈ぞなくなる
八九波にとづる色にや秋の越ぬらむ宮城が原の末の松山
九〇雲はるゝ松浦の沖のあさの月唐土までもすめる空哉

述懐

九一數々に忍ぶともなき昔まで心にかゝる賤のをだまき
九二知べなき雲に跡とふ蘆たづも道ある空の光をぞまつ
九三住みなれし宿も軒端の忍草猶思ひおく露ぞこぼるゝ
九四なき數の哀ばかりや留まらむ誰も昔の跡となりなば
九五掻つめて誰忍ぶべき形見とは涙の底の藻屑なれども

祝

九六萬代をみかきがもりのまつかせのこゑ　御景
九七とほくかけそめて花やひらけしきたの藤波のみやま
にすむ光ことなる萬代のかげ　御元
九八天の下かげとあふげば三笠山峯に月日の光をぞさす
九九行末をまもり初けむ神代より傳へし跡や君が代の爲
東君あしなくして來れども山間跡をのこし北風
聲すさまじけれども野草いろをます頃ちかき野
に遊覧するに若菜つむ女のわらは五人かたみひ
ぢにかけたるありおの〳〵歌くちずさめりいと
怪しくてむかひていはくいづくの里よりいかな
る人のきたるかととへばかれらは答へていはく
定まれる家もなしたゞ人に隨へる身なりといふ
いとあやしくてもしやかんの人をたぶらかさむ
とするにや又は仙女かととふに皆あざわらひて
若菜をつみて行くにゆきつれたり石の上つゝじ
の根などに腰打ちかけてかたみかたはらにさし
おきてやすみゐたるとはにありて此の女どもい
ふやうはいざや我らがありさま歌によみもきか

せ奉らむといふいとに驚かされて聞き居たるに
一人の女よめる
〇色に出る花や紅葉のはて〳〵は土より出て土に肚いれ
又ひとりの女
一〇一露もつゞかぬ水の氷柱哉上の空なる壁にながれて
またひとり
二〇薪つき煙も空にきえて後執〳〵にいける火の殘るらむ
また一人
三〇松が枝荻のはむけに打ち靡きおのれ顔なる風の音哉
又ひとり
四〇限なく虚しき空と云めるを心の果といかゞとはまし
これをさくに地水火風空をよめるされどこそたゞ
ものにあらざりけりと思ふに我等が言なんち一生
つき給はむ時はわれらも故郷に皆返され申すべき
ものどもにて侍るなり其の時は御方とてもいづれ
の處にか歸り給ふべきいぶかしきといひて消ゆる
が如く失せぬすなはち坐して一念不生の所に向ひ
て暫くねぶりたるに黒雲西の山の端に沈みて白
雲東嶺にこもりてねにゆく鳥むらがり渡る遠寺の
鐘におどろかされて道に人に語り奉りしを一句そ
へ給へり後一宿花の心をすゝむべきこと
千五百番の歌合に
五〇梅の花ゆかぬ色かも昔にて同じかたみの春の夜の月
六〇風通ふ寢覺の袖の花のかにかをる枕の春の夜のゆめ
題しらず
七〇恨すや浮世を花の厭ひつゝ誘ふ風あらばと思けるをば
八〇磯の上ふるのわさ田を打返し恨みかねたる春の暮哉
夏のはじめの歌とてよみはべりける
九〇折ふしもうつればかへつ世の中の人の心の花染の袖
題しらず
一〇〇橘の匂ふあたりのうたゝねは夢も昔の袖の香ぞする
一一ことわりの秋にはあへぬ涙かな月の桂もかはる光に
和歌所の歌合に田家月を
一二稻葉ふく風に任せてすむ庵は月ぞ誠にもり明しける
題しらず
一三吹きまよふ雲居を渡る初雁の翅にならすよもの秋風
一四あだに散る露の枕にふし侘て郭なくなりとこの山風

一五さえわびてさむる枕に影みれば霜深き夜の有明の月
題しらず
一六霜枯にそことも見えぬ草の原誰に問まし秋の名殘を
母の身まかりけるを嵯峨のほとりにをさめはべ
りける夜よみける
一七今はさは浮世のさがの野邊を肚露消果し跡と忍ばめ
千五百番の歌合に
一八かくしても明せば幾夜過ぬらむ山路の苔の露の縫に
和歌所の歌合
一九古里も秋を夕はかたみにて風のみ遂る小野のしの原
寄レ風懷レ舊といふことを
二〇葛の葉の恨にかへる夢のよを忘れ形見の野べの秋風
和歌所に通慮の心を
二一惜むとも涙に月も心からなれぬる袖に秋をうらみて
五十首の歌たてまつりしに、寄レ雲戀
二二下もえに思ひ消なむ煙だに踏なき雲のはてぞ悲しき
水無瀬の十五首の歌合に春戀の心を
二三面影のかすめる月ぞ宿りける春や昔の袖のなみだに
被レ忘戀のこゝろを
二四露はらふ寢覺は秋の昔にて見はてぬ夢に殘る面かげ
水無瀬の戀の十五首の歌合に
二五ふりに鳧時雨は袖に秋かけて云し計を待とせしまに
二六通ひこし宿の道芝枯々に跡なき霜のむすぼゝれつゝ
和歌所の歌合に遇不會戀の心を
二七夢かとよ見し佛も契りしも忘れすながら現ならねば
落葉のこゝろを
二八ふみわけて更に尋ぬる人もなし霜に朽ぬる庭の紅葉
老の後都を住みうかれて野中の清水を過ぐとて
二九忘られぬ元の心のあり顔に野中の清水影をだにみじ
寶治元年十月の歌合に、山花
三〇春はまた花の都となりにけり櫻に匂ふ三吉野のやま
寶治二年百首の歌奉りしに、落花
三一けふとても櫻は雪と古里の跡なき庭に花とやはみる
月の歌とて
三二詠ひれば空やは變る秋の月みし世をうつす袖の涙に
三三秋毎の月を雲居のかたみにて見しよの人の變る面影
寶治元年十月の歌合、旅宿花
三四露けさをもぎりやをきし草枕嵐吹きそふ秋の旅寢に

建仁二年戀の十首の歌合に、夏戀
三五偖しや夢も程なき夏の夜の寢覺計りの忘れがたみは
題しらず
三六身を替て非ぬ命の消ぬまをなき數にだに誰か忍ばむ
建仁元年八月十五夜和歌所の撰歌合に
深山曉月
三七秋の夜のふかき哀をとゝめけり吉野の月の明方の空
最勝王經の吉祥天女品のこゝろを
三八誓ひあれば空行く月の都人袖にみつなる光をぞ思ふ
名所の百首の歌奉る時
三九歎きつゝ伏見の里の夢にさへ空しき床をはらふ松風
名所の歌の中に　大井川
四〇大井川岩波はやく春くれて筏のとこに夏ぞ來にける
寶治の百首の歌に溯月を
四一鴛の海や秋の夜渡る獵小舟月にのりてや潛傷らむ
正治二年の百首の歌に
四二かたしきの袖に馴ぬる月影の秋も無夜ぞ宇治の橋姫
寶治二年百首の歌奉りける時湿若菜をよみはべ
りける
四三誰となく忍ぶ昔の形見にもふる野の澤に若菜をぞ摘
千五百番の歌合に
四四みても猶飽ぬ夜のまの月影を思ひ堪たる五月雨の空
寶治の百首奉りしに、秋田
四五小山田の庵もる賤の秋の袖宿かる露ぞおき明しける
寶治の百首の歌奉りける時、聞二擣衣一
四六味氣なく急がぬよはの枕まで夢路とほさずうつ衣哉
千五百番の歌合に
四七秋くれば身にしむ物となりに鳧昨日も聞し荻の上風
寶治の百首の歌奉りける時、杜紅葉
四八時雨行生田の森の秋の色を訪でぞよそに見べかりける
建保五年内裏の五首の歌合に、冬河風
四九橘姫の待つ夜空しき床の霜はらふも寒し宇治の川風
千五百番の歌合に
五〇高砂の松の緑もまがふまで尾上の風に花ぞ散りける
建保三年影供の歌合に雨後聞レ蟬といふことを
五一雨はれて雲吹風に鳴く蟬のこゑも亂るゝ杜の下つゆ
寶治の百首の歌に寄レ關戀を
五二越て又戀しき人に逢坂の關ならばこそ名をも賴まめ

寶治の百首の中に見ゝ花といふことを
三元尋ぬとも思はで入りし奥山の庵もる花を獨こそみれ
寶治二年百首の歌奉りける時、六月祓
三二みそぎする麻の葉末の靡くより人の心にかよふ秋風
建仁二年影供の歌合に、忍戀
三三人しれず思ひ忍の山風に時ぞともなき露ぞこぼるゝ
題しらず
三四積りぬる別は春にならふとも慰めかねてくるゝ空哉
名所の百首の歌たてまつりける時
三五五月雨のをやむ晴間の日影にも猶雲深し天のかぐ山
寶治の百首の歌奉りける時
三六風かはる夏の扇は手になれて袖にまづ置く秋の白露
三七たちこゆる關路も知ぬ夕霧に猶吹こゆる須磨の秋風
建保の内裏の三首の歌合に、秋野月
三八○思出よ露を一夜の形見にて笹分くるのべの袖の月影
水無瀬殿の詩歌合に山路秋行といふことを
三九一心さへ移りもゆくか龍田山木末にあきの色を尋ねて
建長三年影供の歌合に行路紅葉といへることを
四〇二時雨ゆく秋の山路は紅葉の移ろふ色や知べなるらむ

兼好法師集

石山に詣づとて曙に逢坂を越えしに
四一雲の色に別れもゆくか逢坂のせきぢの花の曙のそら
四二逢坂の關吹きこゆる風の上に行方も知らずちる櫻哉
雪ふる日に御子左の中納言殿より
四三跡たえてとはぬ日數もふる雪に覺束なさの積る頃哉
四四降雪に里をばかれや跡つけば待らむ人の數に洩すな
返し
四五跡つけて今こそとはめ憂身をも待らむ宿の庭の白雪
七日七日月のかたぶくを
四六天の河みをゆく月はながるとも逢瀬にかけよ雲の柵
よぶことり
四七春の夜の夢の山の喚子鳥心の闇をおもひこそやれ
無動寺にて夏の夜あくるまで月をみて

○四八鳥の音の聞えぬ山のかひもなし偖も明行く短夜の月
祭の日しのびてまかりすぎはべりしをぐらの大納言殿の車より使のあれば
四九忍びつゝ出つる道に葵草君みるべしと思ひかけきや
返し
五〇わが賴む神の知べに葵車思ひかけずといかゞ思はむ
深草に通ひし頃あか月砧うつを
五一衣うつ夜さむの袖やしをるらむ曉つゆの深草のさと
彈正宮にてたえて久しき戀といふ題を
五二逢生の宿の通路いつのまに枯にし跡も霜をへぬらむ
左大臣殿にて落葉風に隨ふといふ題を
五三空にのみ誘ふ嵐にもみぢ葉のふるも隱さぬ山の下道
小將ためつらの君久しくとひ給はずと恨みやりたる人のもとより云ひおこせたる
五四今ぞしる訪ばやとこそ思ひしにげに身を捨る心也鳧返し
五五憂身をもとはれやせまし思ふより外なる君が心也せば
法輪にこもりたる頃人のとひきて歸りなむとするに
五六諸共に聞くだにさびし思ひあけ歸らむ跡は峯の松風
いかだを
五七大井河繋ぐ筏もある物をうきて我身のよる方ぞなき
をぐらの宮のすみたまひける所といふ堂にとまりて有明の月おもしろき曙にいろ〳〵の花を折りて佛に奉るとて月のこり露むすばむあした離の花を折りて佛界に供せむとかゝれたることを思ひいでゝ
五八○昔思ふ離の花を露ながら手をりて今もたむけつる哉
ならびの岡に無常所まうけてかたはしに櫻を植ゑさすとて
五九一契おく花とならびの岡のへに哀幾世の春をすぐさむ
頓阿母の思ひにてこもりゐたる春雪ふる日遣す
六〇二儚くてふるにつけても泡雪の消にし跡をさぞ忍ぶ覽
返し
六一歎き侘び共に消えなで徒に降るもはかなき春の泡雪
山里のすまひもやう〳〵年へぬることを
六二寂しさも習ひに鳧な山里にとひくる人の厭はるゝ迄
とぶらふべきことありて都に出でゝ

六三立歸り都の友ぞとはれける思捨てゝもすまぬ山路は
法華經の序品
六四いづ方も殘る隈なく照すなり時まちえたる花の光に
祭主定忠身まかりて追善に結縁經の歌すゝめはべりしに、方便品
六五押なべて一つ匂の花ぞとも春に逢ぬる人ぞしりける
五百弟子品の心を
六六蟹衣馴にし友に廻り逢てみぬめの浦の玉もぞかる
中御門入道大納言經繼卿の白河の山庄にてこれかれ題をさぐりて歌よみはべりしに戀を
六七あだ人に習ひにけりな賴みこし我も昔の心ならぬは
六八八月十五日の夜報恩寺にて人々あまた歌よむ由きゝはべりしを煩ふことありてえまからで申し遣しはべりし
六九○月に憂身を秋霧の隔てにもさはらで通ふ心とをしれ
返し、おぐらの大納言實教加
七〇一諸共に詠めぜまし秋霧の隔つるよはの月は恨めし
その頃やんごとなき人のとぶらひおはしたるに
七一二とはれぬる露の命はつれなくて脆きは袖の涙也けり
今宵と賴めける男のあらぬ方へまかりければ女のよませはべりし
七二儚くぞあだし契を賴むとて我が爲ならぬ暮を待ける
冬の夜あれたる所のすのこにしりかけて木だかき松の木のまより隈なくもりたる月をみて曉まで物語しはべりける人に
七三思出づや軒の葱に霜さえて松の葉分の月をみしよは
七四世をそむかむと思ひ立ちしころ秋の夕暮に
七五背きてはいかなる方に詠まし秋の夕も憂世にぞうき
とにかくに思ふことのみあれば
七六盡もせぬ涙の玉の徴りせばよのうき數に何を取まし
ほいにもあらで年月へぬることを
七七憂き乍らあれば過行く世中をへ難き物と何思ひけむ
七八習ひぞと思做してや慰まむ我身一に憂き世ならねば
賴もしげなることいひてたち別るゝ人に
七九はかなしや命も人の言の葉も賴まれぬ世を賴む別は
嵐の山の花をみて
八〇大堰河くだす筏士早きせにあかでや花の蔭を過らむ
梅の花

一見ても猶あかぬ匂は包めども袖にたまらぬ梅の下風
二木の本を過ぎてぞ更にしらける秋に移る梅の匂ひは
三月ばかり徒然とこもりゐたる頃雨のふるを
三詠れば春雨降て霞む也けふはたいかに暮がてにせむ
四斯しつゝいつを限と白眞弓起臥すぐす月日なるらむ
柳の風にみだるゝを
五物思ふ心となしに青柳の亂れて何にもえわたるらむ
六春雨に柳の絲はそめかけつ花の錦をはやもおらなむ
世の中思ひあくがるゝ頃山里にいねかるをみて
七世中を秋田かるまでなりぬれば露も我身も置所なし
人にもの云ひそめて
八通ふべき心ならねば言葉をさりとも分で人や聞らむ
つらくなりゆく人に
九今更にかはる契と思ふまではかなく人を頼みける哉
定めがたく思ひ亂るゝことの名きを
一〇あらましも昨日にけふは變る哉思定ぬ世にし住へば
一一ともすれば鴛の浮巢の憂乍ら水隱れ果ぬよを歎く哉
世をのがれてきそちといふ所をすぎしに
一二思立つきその麻衣淺くのみ染めてやむべき袖の色哉
修學院といふ所にこもり侍りし頃
一三遁れても柴の假ほの假の世に今幾程かのどけかるべき
一四遁れこし身にぞ知らるゝ憂世にも心に物の叶ふ例は
一五身を隱す浮世の外はなけれども遁れし物は心也けり
一六いかにして慰む物ぞ世中を背かですぐす人に問ばや
花をみて
一七花の色は心の儘になれに鳥と繁きよを厭ふしるしに
後二條院のかゝせ給へる歌の題のうちに御經か
ゝせ給はむとて女院四華院より人々によませら
れ侍りし夢逢戀を
一八打解て睡ろむともなき物を逢とみつるや現なる覽
侍從中納言爲藤殿にて人々題をさぐりて歌よみ
侍りしに、木殘雪
一九山ふかみ梢に雪や殘るらむ日かげにおつる枝の下露
花の雪
二〇山高みまがはぬ花の色なれやなぎたる空に殘る白雲
薄暮歸鴈
二一ゆき暮るゝ雲路の末に宿なくば都に歸れ春の雁がね
忘るゝ戀
二二我計り忘れず慕ふ心こそなれても人に習はざりけれ
ほとゝぎす
二三五月きてはなる橘のちるなべに山時鳥なかぬ日はなし
横河にすみ侍りしころ靈山院にて生身供の式を
かき侍りしおくに書きつく
二四浮ぶべき便とをなれ水莖の跡とふ人もなき世なり共
持ちたる扇を佛に奉るとて書きつけし
二五常にすむみ山の月に譬ふなる扇の風は雲やはるらむ
堂の柱に永仁五年公世の二位の五部の大乘經供
養にのぼりて箏ひきける由など書きて
二六ひく琴を哀としらばなき世迄かたみに慕へ松の秋風
と書きつけたるが霧に朽ち殘りてかすかに見ゆ
るも哀にてかたはらに
二七松風を絶ぬ形見と聞からに昔のとのねこそなかるれ
堀河の大いまうち君をいはくらの山庄にをさめ
奉りにし又の春そのわたりの厳をとりて雨ふる
日申し遣し侍りし
二八早蕨のもゆる山邊を來てみれば消し煙の跡ぞ悲しき
返し、延政門院の一條
二九見るまゝに涙の雨ぞ降まさるきえし煙のあとの早蕨
人におくれて佛事などいとなむに
三〇知べして跡とふかひもなき物は誰も涙に迷ふ也けり
あづまへまかり侍りしに清閑寺にたちよりて道
我僧都にあひて秋はかへりまでくべきよしまう
し侍りしかば、そうづ
三一限しる命也せば廻りあはむ秋ともせめて契置かまし
返し
三二行末の命をしらぬ別こそ秋ともちぎる頼みなりけれ
道にてよめる
三三峯の嵐うらわの波もきゝなれぬ變る旅寢の草の枕に
あづまにて宿のあたりより富士の山のいとちか
う見ゆれば
三四都にて思遣られしふじのねを軒ばの岡に出てみる哉
海のおもてのいと長閑なる夕暮に鷗の遊ぶを
三五夕なぎに波こそみえね遙々と沖の鷗の立居のみして
こよろぎの磯といふ所にて月をみて
三六こよろぎの磯より遠く引汐に浮べる月は沖に出に鳥
武藏の國金澤といふ所に昔すみし家のいたう荒
れたるにとまりて月あかき夜
三七故郷のあさぢが庭の露の上にとこは草葉と宿る月哉
相模の國いたち河といふ所にてこの所の名を句
のかしらに据ゑて旅の心を
三八いかに我立にし日より塵のみて風だに閨を拂はざる覽
清見が關にて
三九清見潟波も長閑にはるゝ日は關より近きみほの松原
田子の浦
四〇田子のうら
四一田子の鹽竈はふじのねの麓に絶ぬ煙也けり
一とせ夜に入りてうつの山をえ越えずなりにし
かば麓なるあやしのいほりに立ちいり侍りしか
ど此の度はそのいほりの見えねば
四二一夜ねし萱のまろ屋の跡もなし夢か現かうつの山越
心にもあらぬやうなることのみあれば
四三すめば又憂き世也けりよそ乍ら思し儘の山里もがな
四四山里の垣ほの眞葛今更に思ひすてにし世をば恨みじ
うとくなりゆく人に遣しける人にかはりて
四五人めもる中とはなしにともすれば訪ぬ月日の積る頃哉
又
四六我方のとだえに知りぬほかに又覓の水のわくる心は
絶切戀といふことを
四七忘られて絶む命も逢見しに思へばかふる我身也けり
寄雲戀
四八峯續き嵐にうきてゆく雲の移り易くぞ思ひかけてし
四九頼みこし妹背の山の峯の雲よそ乍らやは立別れなむ
五〇空にたつ名のみ殘りて浮雲の跡なきものは契也けり
五一年もへぬさてや初瀬の山風に別れしまゝの峯の白雲
かのえさる
五二つらからば思絶なでさを鹿のえざる妻をば強て戀らむ
五月廿日ころ御子左の中納言どのゝ庚申に
郭公聲舊　山田早苗　閑中五月雨
深夜夏月　風前夏草　螢火秋近
五三聞きてしも猶こそ侮ね郭公なくや五月の日數ふる聲
五四水越る田面の早苗色添へて移ふは山の影にぞ有ける
五五晴れやらぬ心の友と眺めても獨ぞくらす五月雨の空
五六ふくるまも有けるものを宵ながら明ぬと聞し夏の月影
五七打靡く草葉涼しく夏の日のかげろふ儘の風立ちぬ也

(一五)飛鳥井雅世
(一六)だに告こさぬ雲ゐより行きかふ秋と風や吹らむ
入道大納言雅世どのにて九月十三夜水うみの月
こぼりに似たりといふことを
(一七)鴎の海の氷の隙はなけれども打出る波や秋の夜の月
恨絶戀
(一八)○變りゆく心は覚てしられしを恨みし故と思ひける哉
断りて尋ぬる戀
(一九)知べなき奥津の濱に鳴たづの聲を哀と神はきかなむ
しかのこゑ近し
(二〇)秋山の裾野の原のむね分に戦ぐをきけば鹿ぞ鳴なる
山家
(二一)(二二)山風のたまらぬ床もすさまじ身を檜柴の庵結びつゝ
(二三)(二四)山深み待れし鳥の聲をだに聞で幾夜の寝覚しつらむ
後宇多院よりよめる歌どもめされ侍りけるに奉
るとて僧正道我にかはし遣し侍りける
(二五)(二六)人しれず朽果ぬべき言の葉の天つ空まで風に散る覧
返し、僧正
(二七)理や天つ空よりふく風ぞ森のこのはをまづ誘ひける
神無月のころ初潮にまうで侍りしに入道大納言
為世紅葉をりてこと仰せられしかばめでたき枝
にひばら折りかざして持たせたれど道すがら皆
散りすぎたるを奉るとて
(二八)世にしらずみえし梢は泊瀬山君に語らむ言葉も無し
返し
(二九)籠りくの初瀬の檜原折添ふる紅葉に優る君が言の葉は
正中後醍醐二年春宮より歌合の歌召されはべり
しに、山路花、稀逢戀
(三〇)今日もまた行くての花に休らひぬ山分衣袖匂ふまで
(三一)○いつ迄と問るゝ度に永らへて心長くも世をすぐす覧
民部卿殿為定にてあの〳〵歌よみてほめそしる
ことのありしに、立春
(三二)今日よりは霞隔く梓弓やしまのほかも春や知るらむ
若水
(三三)(三四)霊もせぬ君がやちよを飛返り若えて汲まむ春の若水
早蕨
(三五)今も又萌え渡るも也時過きてかれにしをのゝ春の早蕨
歸鴈
(三六)歸る鴈暫しやすらへ山のはの雲だに逃ふ明ぼのゝ空

盛花
(三七)限なき色も匂も猶そひぬ花は今日とやわきて待けむ
初郭公
(三八)み山いでゝはな橋に郭公宿とふほどや初音なるらむ
五月雨
(三九)最上河早くぞまさる天雲の昇ればくだる五月雨の頃
泉
(四〇)月宿るせかゐの水の涼しさに遊ぶ今宵ぞ鵜の鳴く迄
園
(四一)藤袴野原の露を分けかねてたがぬぎ捨し匂なるらむ
駒迎
(四二)○古は昨日や越えし引きつれて今日逢坂のもち月の駒
松蟲
(四三)一秋寒き霜の後にや松蟲の名に顕れて音をば鳴くらむ
爐火
(四四)二埋火のあたりは春と思ふ夜の明るひさしき閨の内哉
網代
(四五)三小舟さしいざみに行む武士のもや宇治川の網代もる頃
寄雪戀
(四六)白雪の降にしなかの通路は淺きにしもや絶初めけむ
寄嶺戀
(四七)聞くもうし有しにもにぬ言のはを何と伊吹の峯の木枯
寄湖戀
(四八)心をぞ氷と砕く諌訪の海のまだ解けそめぬ中の通路
寄野戀
(四九)あらば又や結ばむ一夜ねしにひ手枕の野べの若草
寄橋戀
(五〇)舊にける例にだにも思出よ長柄の橋のかけ離るとも
延政門院の一條時なくなりてあやしき所に立ち
入りたるよしをそうしおこせて
(五一)思ひやれかゝる伏屋の住ひして昔をしのぶ袖の涙を
返し
(五二)○忍ぶらむ昔に變る世中はなれぬ伏屋の住ひのみかは
比叡の山にて四月十日あまり盛りなる花をみて
(五三)今もさく花の所はあり乍ら過にし春をとふ方ぞなき
人に知られじと思ふ頃古里人の横川まで尋ねき
で世の中のことどもいふいとうるさし
(五四)年ふれば訪來ぬ人も無り鬼よの隠れがと思ふ山路を

されど歸りぬる跡はいとさうら〳〵し
(五五)山里はとはれぬよりも訪人の歸て後ぞ寂しかりける
いかなる折にか戀しき時もあり
(五六)嵐ふくみ山のいほの夕暮を故郷人はきてもとはなむ
秋の夜おぼろの清水を尋ねて
(五七)大原やいづれ靈の清水とも知られず秋はすめる月哉
とほきくにへゆく人に餞すとて
(五八)別路を慕ふ涙に朽ちはてゝ袖は手向にきる程もなし
藤原行朝すゝめはべりし鹿島の社の歌
(五九)時鳥なかぬかぎりは橘の匂ふかきねぞ人だのめなる
(六〇)月宿る露の手枕夢さめておくての山田秋かぜぞふく
(六一)風さやぐ岡の冬草けさのまに埋れはてゝ雪ぞ降つゝ
(六二)○一條に厩はとかくも頼めじと思ふより社猶迷ひぬれ
(六三)一廣原や天てる神のみとうけて圖乎らげし神ぞこの神
(六四)二春日野の鹿にぞ移る東路のみちのはてより出し月影
歌をよみおきて身罷りにける人の浪善に其の歌
の一字をはじめに置きて結縁經の歌すゝめはべ
りしに、る文字
(六五)三流轉せし古里人を忘れずば無漏の都にいつか迎へむ
極樂に往生すべきことなど説くを聞きて
(六六)○舟しあれば千引の石も浮ぶてふ誓の海に波立なゆめ
五條のくまと云ふことをかくして
(六七)(六八)爭で我むろの國にも生來でうかのくまたは受盡す覧
宇治の御經藏の沈あり〳〵きて人のもとより
(六九)潜きせぬよきよの蜑も干し敢ぬ汐垂衣やりてみばや
沈をふたきれ遣すとてうち二つ奉るとくつかぶ
りに置きて
(七〇)うきも又契かはらでふるに今袂ぬれつゝ霜や砕くる
屏風のゑに紅葉に雁なきわたる處
(七一)いと早も紅葉してけり雲居ぢを鳴て過なる鴈の涙に
九月十三夜大覺寺二品親王寛尊よりめされし三
首の歌に、寄月待戀
(七二)高砂の尾上を出る月だにもさのみは松に障る物かは
藤原基任がもとにてこれかれ歌よみしに
(七三)○降雪に道こそなけれ吉野山たれ踏分けて思入りけむ
一今日出て爪木とらなむ降雪に外面の山路絶ぬれ
かちなの宮寛胤二品親王にて人々歌つかうまつり
しに、炭竈

二炭竈も年の寒きに顕はれぬ煙や松のつま木なるらむ
正月十二日寒立日民部卿の家の庚申に、早春雪
三年越えし印も見えず降雪の天ぎる空は今日ぞ霞める
初聞レ鶯
四聞てこそ驚かれぬれ雪の内も待つべかりける鶯の聲
恨別戀
五きぬ〳〵の名殘計りに絞らばや歸る袂のくすの下露
夕旅行
六言とはむ越べき山と行末に見ゆるや宿の離なるらむ
寄レ神祝
七うごきなく絶ぬ例と貴船なる山を河せに世を祈る哉
先坊の御時の御歌合に仕うまつりし五首、元享
三年のことにや
八秋深き霜おきそふる淺茅生に幾代もかれずうつ衣哉
九今宵だに打拂はで狹筵に積れる塵や人にみせまし
一〇くり返す頼みもいさや神垣の森のしめ繩くちし契は
一一今日のみと磐田の小野に秋暮て柞色づきふる時雨哉
一二笹分くる露ともみえし我袖を秋より後は何に紛へむ
ひとり花のもとに尋ね入りて
一三みる人に咲きぬとつげむ程だにも立去難き花の蔭哉
遠く花をたづぬ
一四偽の雲の幾重にこりもせで遂にまがはぬ花をみつ覽
かづらき山の花
一五葛城や花のさかりをよそに見て心そらなる峯の白雲
池に花の映りたるを
一六影映す花の青葉となりに鳥むら〳〵みゆる池の浮草
海邊の春曙といふことを
一七花ならぬ霞も波もかゝるなりふち江の浦のはるの曙
御子左中納言の家にて、春風、春山、春旅
一八みなと河散にし花の名殘とやくもの波たつ春の浦風
一九名に高き花の所と聞しにも越てぞみつる志賀の山越
二〇鳥の音に朝立つ道もみえわかず深き霞やさよの中山
建武二年内裏にて千首の歌講ぜられしに題を給
はりてよみて奉りし七首、春植物
二一久かたの雲ゐのどかに出る日の光にほふ山櫻かな
夏動物
二二時鳥待とせしまに神なびの森の梢は繁りあひにけり
秋天象
二三終夜そらゆく月の影さえて天の河瀬や秋こほるらむ
冬天象
二四霜さえしやたのゝ淺茅埋もれて深くも雪の積る頃哉
戀天象
二五蘆のすむ里の烟の立返り恨ひつきせぬ身を恨みつゝ
戀植物
二六徒になき名計を刈菰のうきに亂れて朽らやはてなむ
雜地儀
二七芹河の千代の古道すなほなる昔の跡は今や見ゆらむ
大覺寺の瀧殿といふあたりにすむ人のもとへ十
月ばかり時雨ふる日尋ねいきたるに庭は山の麓
にて薄の多く招きたるを
二八枯殘る裾野の尾花秋よりゝ招く時雨に袖やかすらむ
水鳥を
二九芦邊ゆく鴨の羽がひに波越て拂はぬ霜も置やそふ覽
ある人のもとにてお〳〵五首の歌よみしに、
山路のゆふべの雪
三〇吉野山みねの嵐のさえくれてよみ分難く凍る雪かな
野外の冬の月
三一冬枯は野風に靡く草もなくこほる霜夜の月ぞ寂しき
海のほとりの千鳥
三二難波潟滿來る潮に風たちて蘆の葉さやぎ千鳥鳴く也
連夜待戀
三三待程の頼み絶えなば如何せむこよひの數のしられずもがな
絶えて後あらはるゝ戀
三四思出づるかひこそなけれ今更に浮名たつなる昔語は
冬のはじめの歌
三五村時雨ふりみ降ずみ押なべて所も分かず冬は來にけり
三六暮ていにし秋は昨日と思ふまに嵐の音の冬籠るらむ
三七秋は早過にし跡の手向山いまだに幣と散る木葉かな
こほり
三八すむ月の影こそ淀め飛鳥河心ありてもこほる波かな
三九吉野の山より落ちし瀧の糸の絶て久しく凍る頃哉
雪
四〇をざゝ吹く峯の嵐も音さえて夕のとこに積る雪かな
朝ぐもりの空いとおもしろし
四一朝まだき曇れる空を光にてさやけく見ゆる花の色哉
山田に水まかするを
四二芹つみし春のあら小田打返し水は心に任せやはせぬ
歎くことあるころ心ちそこなひてこもり侍りし
を新中納言ほどへてとぶらひ給ふとて
四三數々に問まほしさを思ふまに積りて最ど言葉ぞなき
四四云ぬだに憂身の咎は知るゝを恨みはいかに苦しからまし
返し
四五今ぞきく恨し程の日數をも思ひ乍らにすぐし昔とは
四六等閑に卿たば斯やしらざらひいはれぬ計り深き心を
としすけの中將入道の身能りしに追善の結縁經
のうた、隨喜功德品の世皆不レ空固如二永沫泡炎一
四七浮乍ら暫し漂ふ水の泡の消なでさむ世とは頼まず
某任がすゝめ侍りし阿彌陀經の歌
四八いつか又よの浮雲の外にみむ是より西にすめる月影
懷舊
四九亡人の俤さへに絶ぬとやうたて月日の遠ざかるらむ
月をみて
五〇思ひ出る涙に月の曇らずば昔ながらの影もみてまし
花に對ひて舊きを懷ふ
五一春の日の永き別につく〳〵と慰めかねて花をみる哉
山吹
五二吉野河岩こす波に影みれば散るにつきせぬ山吹の花
菩提樹院の藤見にまかりて
五三咲き匂ふ藤の裏葉のうらとけて影も長閑き春の池水
たかいり
五四鈴のおとは近く聞えて敏鷹の茂みの木ぬに隱れける哉
五五敏鷹の李ぬに懸りて暮す日は我も家路に歸兼ねつゝ
郭公の初音
五六つれなさはなく一聲に忘られて名殘を慕ふ時鳥かな
淨辨律師筑紫へ罷り侍りしに火うち道はすとて
五七打捨てゝ別るゝ道の遙けきに暮ふ思を類へてぞやる
これとしの朝臣の家にて河を
五八千年とも何か待べき五十鈴河濁ぬ世にはいつも住み鳥
遍智院の宮より召されしによみて奉りし歌
五九よる波の音さへ遠くかすむなり汐のひかたの春の曙
六〇幾里の人にもおくれ春風のさそふにつきぬ梅の匂は
六一朝な〳〵咲きそふ花の白妙に峯の霞の色ぞ晴れゆく
六二さても猶よを卯花の影なれや遁れて入し小野の山里
六三さだかにと思ふ心に郭公きく一こゑを猶たどるかな

四七夏野行くた馴の駒のむねわけになづむ計も茂る草哉
五七世中の浮田の森に鳴蟬もわが如よそにゆく方やなき
六七たへてのみ詠むる儘に心なき我身しらるゝ秋の夕暮
七七木のまより下は殘らす宿る也露もる山の秋の夜の月
八七伊駒山嵐にうきてゆく雲の隔てもあへずふる時雨哉
九七手枕の野べの初霜さゆる夜のねての朝げに殘る月影
〇八物思ふ我名やよそにふりぬらむ今は涙を訪人もなき
一八捗なしや厭はるゝ身の命もて逢にかへむと頼む計は
二八關守のまどろむ程と契る夜はふけて嬉しき鐘の音哉
殿より召されし名所の歌にいそのうらの戀
三八波かくるいそまの浦の磯菰ゆめにも疎くなる契かな
女に遣さむとて人のよませし
四八知せばや木の葉隱れの埋れ水下にながれて堪ぬ心を
逢はむと云ひながらさもあらざりける人に遣しける人にかはりて
五八頼めおく言のはなくば逢ぬまに變る心を歎かざらまし
秋の夜とりの鳴くまで人と物語して歸りて
六八有明の月ぞ夜深き別れつるゆふつけ鳥や空音なりけむ
師走のつごもり哀なることども思ひつゞけてう
ちもまどろまぬに鐘のおといと心ぼそし
七八春近き鐘の響のさゆる哉今宵ばかりと霜やおくらむ
八八驚かす鐘の音さへ聞馴れて永きねぶりの醒る夜もなし
なき人をとぶらひて
九八後れゐて跡とふ法の勤めこそ今は儚き名殘なりけれ
〇九終夜雨も涙もふるものをなどかへりこぬ別なるらむ
あはれなる夢を見て打ち驚きたるに語るべき人
もなければ
一九さめぬれど語るともなき曉の夢の涙に袖は濡れつゝ
二九見すもあらで夢の枕に別れつる魂の行方は涙也けり
山寺に念佛してゐたるに都より尋ねくる人の中
に若き男のいと懇に物がたりして歸る住ひはい
とたづきなしや何事か忍び難きなど問ふは思ふ
心ありてやとみゆるも哀にて
三九山里に訪ひくる友もわきて猶心をとむる人に見よ鳥
何事も程あらじと思へば
四九うきとも暫し計りの世中を幾程いとふ我身なるらむ
いづかたにも又ゆき隱れなばやと思ひながら今
は身を心にまかせたれば中々ことたりてのみぞ
過ぎゆく

五九背く身は遁にやすきあらましに猶山深き宿も急がず
世の中ありしにもあらず移り變りてなれみし人
もなくなり行くことを
六九語るべき友さへ稀になる儘にいとゞ昔の偲ばるゝ哉
あしたの霞
七九宿毎の朝げの煙たつとしも分きては見えず霞む空哉
いはひ
八九若の浦の眞砂や千世の有數によむとも盡ぬ例なる覽
春月
九九終夜霞める月の影ながら行きかふ雲やはれ曇らむ
〇〇さやけさは音にのみこそ聞ゆなれ細谷河の春夜の月
山里のさびしげなるを
一〇身を隱す山路の奥も住人の心はよそにしられぬる哉
世の中あやふきさまに聞えしも程なくたちなほ
りにしかば中納言どのに
二〇世々をへて治むる家の風なれば暫しぞ騷ぐ若の浦浪
平貞直朝臣の家にて歌よみしに旅宿の心を
三〇故郷はなれぬ嵐に道たえて旅寢にかゝる夢のうき橋
懷をのぶ
四〇數ならぬみのゝお山の一松獨憂めてもかひや無らむ
五〇絕ぬるか身は浮船の網手繩引人もなき世を渡りつゝ
忍ぶによりてまされる戀といふことを
六〇ともすれば積る月日を啣つ哉人目は人の心ならねば
月にむかひて思ひつゞけし
七〇風戰ぐ竹のは山の秋の月長閑にすまぬ世こそ知られ
八〇思置くとぞ此世に殘りけるみざらむ後の秋の夜の月
九〇身を隱す宿のかきほの篠薄忍ばずほにも出にける哉
郭公なきぬべき夜のさまかなと人のいふをきゝ
て
一一〇鳴ぬべきよはゝ頼まじ郭公待らむとこそ猶忍ぶらめ
夕暮にはるゝ〳〵とびこえて鷹のゆくを
二一山のはに夕ゐる雲は長閑きに己れ別れて雁の行らむ
三一又もこむ秋こそ最と頼まるれとまる年なき春の雁音
四一いとせめて戀しき頃とふる里に霞の衣かへる雁かね
和歌所にて初聞戀といふことを
五一聞くからに春ぞのどけき打はらき郡にいづる鶯の聲
西山の花　ありきしに

六一あふ人に又さそはれて立歸り同じ山路の花をみる哉
七一朝毎に立ちそふ峯の白雲のゆきゝも見えぬ花盛かな
八一待程の花の心の難面さも咲てはあだになど變らむ
人のよませしに
九一いつ迄と忍ぶの露を袖にみて消だに果ぬ物思ふらむ
一二久しく音づれぬ人のがり云ひやりし
二二花染の色とも聞かぬ日數さへとはねば易く移る頃哉
友だちのきて世のありにくきことなど語るを聞
きて
三二習ひぞと思なしてや慰まむ我身一の憂き世ならねば
四二年頃頼めわたりける女のがり遣すべき歌とて人
のよませ侍りし
五二僞に我のみなさで言のはを頼む計りの年ぞへにける
おなじ人に又遣しける
六二玉藻たえずも物を思へとやかけて頼めし人の難面き
七二冷泉の大納言殿にて歌合に　夏草
八二大荒木の森の下枝もわかぬ迄のべの草葉の繁る頃哉
不レ逢戀
九二同じ世にいけるを流石頼む哉あふには替ぬ命なれ共
逃懷
一三ともすれば我身一と啣つ哉人を分べき憂世ならねば
二三御子左中納言の家の歌合に、依レ花待レ友
三三唉なばと頼めし人の問ぬまは宿より外の花をだにみず
祈不レ逢戀
四三立馴るゝ神の三室の榊葉の變らぬ色はつらさ也けり
寄レ草戀
五三時過て人もすさめぬ菖浦草憂に落ぬるね社なかるれ
小野つき松をかくして
六三寂しさを慰むるのは四のをの月待程のしらべ也けり
折句に、やかた舟
七三山人の歸る家路は絕々にふくなる笛のねこそ聞ゆれ
これも同じ家の歌合に、晴天歸雁　雨中懷舊
八三歸る雁羽打交す雲もなしなぎたる空に數は見えつゝ
九三さゝなれぬ草の庵の雨の音に昔をいかで思ひ出らむ
西林院承覺親王の宮にて題をさぐりて歌よませら
れ侍りしに、五月雨
降初る空より頓て五月雨の日數しられて雲ぞ重なる

青蓮院二品親王より花契二多春一といふことをよませられ侍りしに

一二呉竹の園生に匂ふ花に社千世の春しる色はみえけれ
雪ふる日比良の山にのぼりて

一三殘りつる梢のしたみち猶たえて嵐吹きしく峯の白雪
花のさかり俱馬のゆより歸る道にて雨に逢ひて

一四しばらじよ山わけ衣春雨にしづくも花もにほふ袂は
藤大納言殿の松の尾の花見におはせしに誘はれ奉りて山里の花を

一五人めをば厭ひやすると山里の主もとはで花をみる哉
花まち殿にて、螢

一六とぶ螢なぞや憂世の濁江に影を隱さでもえ渡るらむ
前坊の御まへに月の夜權大夫殿きぶらはせ給ひてみきなど參りて御連歌ありしにけんかう候ふよし人の申されたりければ御杯給はすとて

一七まて暫しめぐるは易き小車の
と仰せかけられてつけて奉れとありしかば立ちいりてにげむとするをながとしの朝臣に引きとゞめられしかば

一八かゝるひかりの秋にあふまで
と申す

忍絕戀

一九世にもらばいかにせむとぞ思來し心安くも絕し中哉

懷儔

二〇夢なくて又や過なむこし方に歸る習のある世也とも

千鳥

二一和歌の浦にみ代の跡ある濱衞猶數そへぬね社泣るれ

網代

二二知べせよ田上河の網代守ひをへて我身寄る方もなし

落葉

二三遁れえぬ老曾の杜の紅葉は散かひ曇るかひ無かり鳧

春の頃、哀傷

二四佗人の涙になるゝ月影は霞むを春のならひとも見め

二五みし人もなき故郷よ散紛ふ花にも嘯な袖はぬるらむ

二六歸りこぬ別をさても歎く袖西にとかつは祈る物から

慶運法印集

春

立春

二七けふも尚雪げの風は荒玉の年とも分で春やきぬらむ

二八今日といへば雪げの雲も打拂き春くる空の霞ぬる哉

初春霞

二九さほ姫の衣はる風空さえてまだ立もなれぬ朝霞かな

山霞

三〇久方の雲居に高く霞むなりふじの嶺の春のあけぼの

三一さほ姫の袖の別れはしらねども霞にかゝる峯の横雲

浦霞

三二螢衣春くる空の朝なぎに袖師の浦はかすみこめつゝ

霞隔二遠樹一

三三箒木はよそにさへこそみえわかね霞む伏屋の春の曙

鶯

三四谷風に春しりそめて鶯のうち出る浪の花になくなり

三五呉竹の伏見の里のあれまくになれも古巢と鶯ぞ鳴く

三六鶯の己が羽風もふきとかでいかに凍れる涙なるらむ

若菜

三七見渡せば若菜つむべき方もなし荻の燒原雪は降つゝ

三八古里と成にし後の形見とや伏見のたねに若菜つむ覽

三九誘はねど同じ心にうちむれて幾里人の若菜つむらむ

梅

四〇梅花まだ此里に咲ぬまによその匂もわきて知られし

四一梅花いかにとめてか手折らまし上の空なる風の匂を

四二梅が香は我袖のかとなりにけり鶯誘ふ風のしるべに

春氷

四三名とり川氷吹きとく春風になみの花咲くせゞの埋木

松殘雪

四四しがの浦や松吹萎る春風に落てはみづの泡雪ぞふる

春雪

四五雲凍る空にはしばし消えやらで風の上なる春の泡雪

四六とけ初る氷の隙の浪の上にいづれば花と泡雪ぞ降る

二月餘寒

四七我妹子が衣如月頃もへぬいつまで沍ゆる嵐なるらむ

曉春月

○春のよのわくる光の山のはにいとゞ朧の月ぞ殘れる

川上春月

一春は唯みきとよいはゐ泉河わきて霞める浪の上の月

春雨

二我身よにふるともなし然りとて袖やは濡ぬ春雨の空

旅春雨

三袖濡すふじの裾野の春雨やよそにみえつる雪げなる覽

柳

四さほ姫の霞のころもうち靡き糸にすかとる青柳の糸

早蕨

五初草のはつかにゆる兎にも尚堪もるゝ野べの早蕨

山歸雁

六歸るさは雪も取あへじゆふ曇手向の山の春の雁がね

花

七眺めやる遠山姫の花蔭かけて待たれぬ時のまもなし

八花にとも猶偽のあるよとや色なる雲の先かゝるらむ

九木本にきてだに雲ぞ紛ひける何を櫻のよそにみつ覽

一〇さほ姫の霞の袖をさく花の匂にそめて春風かせ吹く

一一詠めやるをちの高嶺の花の色に曇りも果ぬ夕月夜哉

閑山花

一二のどかなる住ひともなし櫻花さきちる山の春の心は

大淀浦

一三大淀の浦より遠に霞むなりかみぢの山の花のしら雪

折レ花

一四折りとらば人や咎めむ櫻花たゞ一枝ととなしよとも

翫レ花

一五たが爲と思ひもわかで櫻花あかぬ心にたをりつる哉

一六老が身の涙ながらに手折つるもろき櫻の花の挿頭を

故郷花

一七み垣守なきよ也共さのみ又折はやつさじしがの花園

惜レ花

一八花をこそ尚も怨み誘行く風の宿りはしる人もなし

一九散るとみてあるべき物か山櫻待しにだにも盡す心を

一〇ちる花に心の隙のあらばこそ風の宿りも行て怨めめ

落花

一一ふく風にみかさをそへて石走る吉野の川の花の白浪

一二空にのみ降るかとぞみる春風の吹こす峯の花の白雪

一三吉野川花の鏡の早きせは散かゝるにも曇らざりけり

花さそふ交野のみのゝ春風に雲のみをなる天の川浪
花の色に紛ひし雲は形見とて殘忍ぶべき空日也けり
殘花
今さらに誰かは問はむ山深み風だにしらで殘る櫻を
遊絲
すがのねの長き日暮し絲ゆふのいとなく空に遊ぶ比哉
春田
氷だにまだ打解ぬ荒小田を荒鋤き返す春はきにけり
喚千鳥
打むれて越行く山の喚子鳥我か人かと爭で問はまし
春駒
雪にこそ道もみえしか春駒の荒行跡をいかに尋ねむ
つながれぬ春の心と櫻あさのをふの下草駒嘶ゆなり
いかなればさしも長閑き春の日に駒の心の荒增るらむ
雲雀
晩くより揚るもみえず霞む日に鳴音空なる夕雲雀哉
晩くとも晴は知ず夕雲雀ながなく聲は空にのみして
苗代
ひく方ぞ許多みえ行く苗代の水の心を誰によすらむ
藤
松がねはさぞ洗はれむ田子の浦や榊を洗ふ春の藤波
暮春
久方の雲のあなたの春ならば鳴てや鳥の最ど歸らむ
船中暮春
いざけふは霞の浦に舟よせて爰ぞ泊と春をしたはむ
夏
首夏藤
さらに又一しほそへて松がえの榊の夏にかゝる藤波
更衣
色みえで心は花にそめしかど形見ともなき衣がへ哉
墨染の衣はけふも脫替に憂世に返るなをもこそたて
卯花
卯花の散かふみれば玉川の水の水泡ぞ消がてにする
葵
七十の老の命のもろは草かけじや今は末のたのみも
遲櫻
別れてののち忍べとや屋櫻春の殘せる形見なるらむ
郭公
汝をしぞ哀とはきく時鳥さすが待えぬ年のなければ
宿かれと花橘はにほへども心もとめぬほとゝぎす哉
初郭公
人傳もまだしき程の郭公この里よりや初音なくらむ
人傳郭公
いか樣にまてば鳴らむ郭公聞つといたる人に問ばや
聞郭公
待夜へしつらき所も時鳥なが鳴里と成にけるかな
郭公稀
知やいかに山郭公時過てかれ行く頃のあかぬ名殘は
早苗
飽ざりし花の名殘を慕ひきて誰櫻田に早苗とるらむ
小山田にとるや早苗の煙より稻葉の雲の秋ぞ待るゝ
蒼浦
知らるなよ身は隱沼の蒼浦草憂に盡せぬねはなかる共
數ならぬ我身浮ねの蒼浦草ひく人まづや袖濡すらむ
故郷橘
住捨るわが古郷の橘やみしともあらぬ老木なるらむ
五月雨
山のはに雲のわだつ日數へて泡沫晴ぬ五月雨の頃
音羽河濁りて落る五月雨に水の心のみえずもある哉
夜々照射
かひなしや幾夜燃てもさを鹿に逢ぬ火串の空し煙は
水雞
關のとに鳥の鳴音を待物と何ぞは叩く水雞なるらむ
鵜河
水の泡のあだに流るゝ同じせに消ぬよ河の篝火の影
大井川水の水上する〳〵と山もとめくる篝火のかげ
蚊遣火
寂しとて柴折りくべし面影を煙に殘す里のかやり火
夏草
茂合ふみつのみ牧の夏草に駒のすさめし跡だにも無
夏月
殘るべき影とはかねて知られけり入方遠き短夜の月
夕顏
斯ばかり賤が伏やの卑しきも盛りはみゆる夕顏の花
野盤
逢瀨まつ星かとみえて天河かたのゝみのにとぶ螢哉
納涼
暇入るゝ岩まの水の玉ゆらも立まくをしく涼む頃哉
夏祓
御禊河ながれて早き瀨のはのよるべ白浪秋風ぞふく
秋
初秋
けふと云へば兼て思し寂さを猶身にしめと秋風ぞ吹
早秋
いつのまに露は置らむ秋とだにまだ白雲のよその秋原
乞巧奠
七夕に今宵たむけむ四のをの清き調も雲ゐにぞすむ
七夕
天の河水の心のわくらばに靜めかねてや逢瀨待けむ
久方の天の羽衣たまさかにきてもとまらぬ星合の空
七夕に心をかさばよのうさも忘れなましな一夜計は
天の河渡る一夜はかひもなしとだえ苦しき行會の橋
萩
宮城野の木の下露も見え分ず本荒の小萩散の紛ひに
花にのみあくがれ果て色變る下葉もわかぬ庭の秋萩
分行けば袖のみ濡て秋萩の色なき露もみえぬのべ哉
草花靡風
花ずゝき草の袂の露散りて手玉もゆらに秋風ぞふく
袖露
心なき草木はさぞなはらふだに袂にあまる秋の夕露
初雁
よや寒き己が越路の秋風に遙々きぬるころも雁がね
わたの原しほせ遙にとぶ雁の翅にかゝる沖つしら浪
蟲
霜むすぶ尾花がもとの蟋蟀夜寒や秋の思ひなるらむ
雨夜蟲
深きよの窓うつ雨の音よりも尙こととしげき蟲の聲哉
故郷蟲
年をへて荒行く里の秋風にいとゞ深ぐさ松蟲ぞ鳴く
鹿
身を秋の山田のをしかさへ憂はしきよとねをや鳴覽
秋田もる宵々毎の鹿のねは厭ふにつけて哀とぞきく
もりすてし刈田の面の露霜に獨ねねよと鹿や鳴らむ
露けさはよそに聞ても知られ鳧妻とふ鹿のをの草臥

○六ねにたてゝ鹿も鳴なり奥山の岩がき紅葉時雨ふる頃
待ノ月
一六晴ぬまぞ中々影もうつりける月待つ山の雲は厭はじ
二六日影だに殘るもみえぬ渡つ海の豐旗雲に月を待つ哉
雲間月
三六みればなど心澄らむ村雲の隙行月はのどけからぬを
四六絕々にもりくる月の影よりも雲は晴間のみゆる空哉
霧カ間月
五六斯計り稀なる雲のとだえとも知でや月の空に澄らむ
山月
六六澄昇る外山の月に聞ゆなりまさきかつ散る秋風の聲
七六柴の戸に我身一つを誘ひ置て月ぞみ山の奥を出ぬる
八六すみのぼる程をばまたじ奥山の槇の葉凌ぎ出る月影
河月
九六ふじの嶺の雪より出て麓なる川せに凍る秋のよの月
○七早瀬川月の氷のけぬが上にあだ波かけて秋風ぞ吹く
海月
一七いほ原や松原遠く見渡せばみほの與津に澄める月影
二七里の燈の網のうけ繩打はへて長しよ夜の月を見哉
船中月
三七吹風にたなゝしを船漕別れ同じ江ならぬ月をみる哉
四七わたの原風ぞ便と思ひしを夜舟は月の誘ふなりけり
坂月
五七ゆらのとは月も曇らで藤代のみ坂ふきこす秋の汐風
松間月
六七山里のまやの葦葺漏る月や軒ばの松の木間なるらむ
終夜見ノ月
七七露ながら片しく床の菅莚すがらによるは月ぞ宿れる
閑中月
八七斯計り月の澄ける柴のとを露のやへたつ山とみし哉
社頭月
九七石清水流もいとゞ澄るよを待ける月の影のさやけさ
月前旅
○八鶉なくいはたのをのゝ旅人や月待出て山ぢこゆらむ
駒迎
一八諸人の待つかひありて雲上に今ぞいざよふ望月の駒
二八春こそ雲居にいづれ久方の空になだかき望月の駒
秋時雨
三八みる儘に外山の正木色附ぬ尾上の秋はさぞ時雨らむ
重陽宴
四八いにしへのその谷川の末うけて幾夜かさねつ菊の盃
摘衣
五八遠近の里の秋風ふくるよにたがいねがての衣うつ也
六八初霜のふる里人も今よりやなれぬ夜寒の衣うつらむ
七八更科の里の秋風ふくるよの誰なぐさめに衣うつらむ
八八幾里の隔なるらむきゝてだにまどろむ程の衣うつ聲
九八山鳥の尾上の鐘は明けぬるを心ながくもうつ衣かな
初紅葉
○九常磐木に紛ふ計りも無かりけりまだ染敢ぬ峯の紅葉
雨後紅葉
一九紅葉も幾潮までを限とて晴ぬる空の時雨るなるらむ
紅葉
二九おしなべてまだ色薄き紅葉かな何れ柞の梢なるらむ
暮秋
三九かげろふのをのゝ淺ぢふ裏枯て有にも非ぬ秋の色哉
四九惜からぬ露の命の長らへて何そは秋をまだ暮ふらむ
五九淺茅原かつ霜がれて別れてふとは色にもみゆる秋哉
冬
初冬
六九柞ちる岩田のをのゝ朝嵐に山路時雨て冬はきにけり
時雨
七九いつ迄か袖濡すらむ村時雨浮たる雲の程もなきよに
落葉
八九立田姫そめし千入も徒にあだなる色と散るこのは哉
九九紅葉の映る鏡となる水は散りかゝるさへ照增りつゝ
寒草
○○春日野の雪まにだにも萌出し草葉ぞ霜に敢ず枯ぬる
冬月
一〇寂しさも月に慰むやまの煙をだにと何おもひけむ
河邊霜
二〇ゆふは河流るゝ波も凍るらし岩もと小菅霜さゆる頃
旅宿霜
三〇あづまのゝ尼花刈敷さぬるよの衣手寒し霜や置らむ
冬夜
四〇更ぬるか蘆の葉さやぐ津の國のこやの霜夜に浦風ぞ吹
霰
五〇故郷の軒の板間にふる霰音よりも猶もりまさりつゝ
千鳥
六〇亂れ蘆の枯葉押なみ夕汐のさしこす磯に千鳥なく也
七〇ふけぬるか友なし千鳥をち返り鳴や霜夜の床の浦風
夜水鳥
八〇夜と共に幾重の霜か置そへむ鴨の上毛を波のこさば
九〇こやの池の鴨ぞ鳴なる蘆の葉に隱れて住ム風や寒けき
雪埋二寒草
一〇冬なから先さく花とみゆる哉をち方のべの雪の下草
遠山雪
一一山高み幾重の雲を隔てゝも見ゆるは雪の光なりけり
雪朝眺望
二一柴の戸ぞなほ雪深きながめやる都の雪は朝日さす也
雪
三一降初めば道だにみえじ山風の迄ゆる雪げを訪人もがな
四一最ど又こやの蘆ふき隙も有じやへ降しける今朝の白雪
五一降雪や殘る光となりぬらむ入ぬる月のあとの山の端
六一草も木も埋れはつる雪にこそ中々山はあらはれけれ
七一たちちねの集しばかりあつめぬや光も薄き窓の白雪
鷹狩
八一みかり野の疲れの鳥の草隱れはてよと暮るゝ空哉
九一いつまでか疲れの鳥の長らへむとは交野に草隱る鷹
○二さらでだに手にもたまらぬ荒鷹の驚く計り降る霰哉
冬風
一二まきのやに一村雨を迸りきて尾上を越ゆる木枯の風
網代
二二網代もる床は浮寢に非ねども枕の下に波ぞいざよふ
炭竈
三二いづくより立ともみえぬ煙哉雪の底なるをのゝ炭竈
神樂
四二繰返しうたふ神樂の聲すなり正木の蔓ながき霜夜に
歲暮
五二大井河早瀬にくだす筏士の繫がぬものと年ぞ暮ぬる
戀
初戀
六二色みえぬ尾花が本の初草に何處かは露の先亂るらむ
七二しるやいかに早晩袖は巻れつゝ思初つと云はぬ計を
忍戀

八よしさらば人な咎めそせく袖に我だに知で落る涙を
九洩ぬべき袖の涙と思ひしをいかに忍びて年の經ぬ覽
一〇涙川果は淵とぞ成にける瀬をせくだにも苦かりしを
一一さすが又包めば洩れぬ涙とや朽ぬる袖を猶頼むらむ
一二身に餘る思の程もしらるべき涙を人に何つゝむらむ
思不レ言戀
一三數ならぬ身はとの葉もなき物を心に果る思ともがな
初言出戀
一四忍びこし月日を知で打附に思へば洩すみとや聞らむ
立二無名一戀
一五幾度か知ずとをいはひ長らへて人言繁き世にし住へば
顯戀
一六いまはよに名さへ流れぬ涙河みづの心の淺き契りに
一七いつ迄か堪て歎かむよにもるに無名だに社苦かりしを
不レ遇戀
一八うき人をいかに頼てあふ迄の命ばかりは疑はるらむ
一九等閑の契なりとも頼まばや難面きをだに慕來しみを
二〇逢事にかへもやすると同世にいけるを厭ふ心ともがな
遠戀
二一逢ふとはかたしき衣ころもへぬ遙けき程の中の通路
切戀
二二夢にだに逢見ぬ中を後の世の闇の現に又やしたはむ
二三後世をいかに頼てうき中にいければ社と身を卿つ覽
新戀
二四淺迄と神の知べを頼むまに我しめゆひし年はへに鳥
二五人しれぬ我ねぎ言を頼む共いさや寄べのみづの心は
契戀
二六いかせむ唯等閑にいひ捨てゝ偽りとだに知らぬ契を
二七馴ぬるはかねて知らるゝ偽を頼めと人や契置くらむ
二八偽は宵々毎に習ひきぬいかに契るかまことなるらむ
偽戀
二九強て猶頼みこそせめうき人の偽り計ある世ならねば
待戀
三〇偽を待たじと云し我よりも今宵は人やまづ忘るらむ
三一斯許り待るゝ暮を偽になれて頼まぬみとや知らるむ
三二一方にうき偽の契とも知らねばいひし暮ぞ待たるゝ
逢戀
三三今宵社露の命のあだ物もげにあだならぬ契とはしれ

三四現ともよしや定めじ逢ふとを夢と知てぞ又も頼まむ
三五年月のうきにこりぬを契にて靡く心のある世なり鳥
語戀
三六斯てしも遠ざかりなばいかゞせむ心の奥は語盡しつ
別戀
三七別路を言葉殘らず慕へとやかねては鳥の驚かすらむ
三八別路のつらきにだにも替ぬみの命はいつの契まつ覽
三九只管に迷ひもはてね別路を慕ふ心のみにやそはぬと
忘二住所一戀
四〇尋ぬべき君があたりぞ辿らるゝ我宿かへて待し習に
通レ書戀
四一藻鹽草かきはやる共難波なるみつとは暫人に語るな
稀戀
四二立返り幾度袖に懸るらむ絶ぬと見えしさゝがにの糸
驚戀
四三何とまた驚かすらむ關守のうちぬる際を待ちし契に
隱戀
四四宿かへて待ぬ物故宵々になしとは人のなど答ふらむ
恨戀
四五言のはを盡して後は立歸り身を知るかひもなき恨哉
人傳恨戀
四六斯とだにせめて傳へよみを知は我こそ云ぬ恨也とも
恨久戀
四七あまのすむ里とふ道の小れ石や今は波こす巖なる覽
被レ忘戀
四八思ひやれうきを形見の忘水忘られぬだに濡れし袂を
絶戀
四九而影の殘る形見もかひぞなき有し一よも現ならねば
五〇筱士の正木の蔓絶てこそ暮まつよりも苦しかりけれ
絶後顯戀
五一我だにも洩す浮名となりにけり逢見し頃の昔語りは
絶久戀
五二いかなれば逢見しとはこむよにもならぬ物故昔なる覽
寄レ風戀
五三徒にこよひも更けぬあすか風あすの契もしらぬ命に
五四いかにせむ身を浮草の末葉より人の心の秋風ぞふく
寄レ月戀
五五藻汐火の煙に曇る月もみずかひなき里の知べ訪とて

寄レ關戀
五六逢坂の關の關もりなれをしぞこえし昔の鏡とはみる
寄レ杜戀
五七色みえぬ心の花もある物をつらきけしきの杜の秋風
寄二宿木一戀
五八種しあれば梢にねざす宿木の假初ながらかれぬ中哉
寄二思草一戀
五九露けかれ尾花が本の思ひ草袖のうちなる涙まがへむ
寄レ夢戀
六〇思寢ぞ逢ともみゆるつれも無き人はいかなる夢結ぶ覽
寄レ鴈戀
六一思遣れ草のいとなき鴈鳥の上に苦しと見えぬ計りを
寄レ獸戀
六二思遣れ秋田もるよの鹿のねも流石哀ときかぬ物かは
寄レ筱戀
六三高瀬さす筱の網手引く方の有とも知らで暮や待つ哉
寄レ鐘戀
六四忘れじな入相の鐘は告ず共あだに契りし夕ならねば
雜
松
六五二葉より仕へし身こそ舊にけれ哀と思へ志賀の濱松
竹
六六憚なき名ぞ立ぬべき竹の園我身空しき世にし住へば
山
六七久方の雲も及ばぬ富士のねになほ空高くたつ煙かな
六八幾代より挑げきぬらむ年のをの長柄の山の法の燈火
柚
六九いかにせむ我立柚の柚人と人にはみえて歎ならねみを
七〇柚河や高瀬さしこす筱士のたゝむが上にたゝむ白波
布引瀧
七一久方の空にぞさらす山姫の雲のころもの布引のたき
山中瀧
七二世のうさぞ更に聞えぬ石走る瀧の白泡の音計りして
をふの浦
七三いかにせむならぬ思に年をへて唯徒にをふの浦なし
椿
七四玉椿かげも二度あら玉の年のを長きためしにぞひく

都鳥

隅田河霧ふかし都鳥あり〻やなしやとたどる計りに

橋夫

山人のねりその蔓くりはへて長々し日に妻木とる也

野寺僧歸

鐘のおとに歸る袂も墨染の夕さびしき野べの遠かた

眺望

ゆらの戸に漕出てみればふち代のみ坂遙に雲ぞ懸れる

餞別

とゞまるも袖こそぬるれ心のみ後れぬ旅の道芝の露

關路行客

もる人の同心心に越えかねつゝきうき旅の逢坂の關

旅宿

草枕ゆく末いそぐおもひねの夢も都は遠ざかりつゝ

旅雨

時雨降るよはの旅寢に知れけり越べき山の横の下露

旅宿夜雨

宿り取る蜑の笘屋の村時雨旅寢の袖も藻汐垂ぬる

旅泊

忘れめや磯山もとに一夜ねて波の枕のあけのそば舟

旅泊重夜

風むかふ垣根も知ず都人日數かぞへて我やまつらむ

閑中煙

たえ〴〵にたつる煙も寂しさの慰む程はみえぬ宿哉

山家

都人訪はでとしふる山ざとをつらき所と松風ぞ吹く

通れきて住はいかなる宿とだに人に知れぬ山の奥哉

山深み猶すみ侘て思ふには浮世の外もうきよ也けり

いか計り寂しからまし世中を遁れて住ぬ山ぢ也せば

歎かれし憂世は捨つ山にても心とまらぬ孰ち行まし

田家煙

あま人の汐やく浦の淺田に庵もるしづも煙たつなり

田家

小山田のほに出ぬより守初て刈ほす迄に幾夜ねぬ覽

照すべき神は日吉のかひもなし今は我身の影や隠さむ

睡ろまで刈田の面の月もみつひたの掛繩長き秋夜に

逃懷

いと貴て歎かむ爲となれる身や捨るも難き此世なる覽

若の浦や夜なく鶴の跡とめて及ばぬ道を身に歎く哉

さのみ又うしと云てもいかならむ捨るも易き此世ならぬを

歎ならぬ和歌の浦わの藻汐草かくにつけても袖はぬれつゝ

わかの浦や藻屑にまじる泡沫の哀をかけよ玉津島姫

憂世をば捨べき物と思ふにもいとゞ身にそふ我涙哉

大井河はやせの筏浮しづみ渡ればわたるこのよ也けり

何方のいかなる山を尋ねてか思ふ計に世を遁れまし

獨述懷

我だにも思定めぬあらましを背かむ迄は人に語らじ

往事如夢

思出の有ともかひや無らまし身の古を夢と知りせば

懷舊

古も同身乍ら長らへてみるをのみやは憂世と思はむ

斯てだに長らふるみに古の世をうき物と何思ひける

さのみかくみし古の戀しきはいつより後の浮世なる覽

さのみ又忍ぶも苦しいか計り老て忘るゝ昔ならまし

懷舊淚

うきみには淚計りをあひ添へて親の守りぞ昔也ける

無常

行水の哀とぞ思ふ三瀬川渡らでやまむ人しなければ

寶塔品

出ている鷲の高嶺の夕附日光ならべて空にこそすめ

神刀品

巻向の檜原が峯の夕月夜かすみはつるも春風ぞ吹く

釋教

斯計いると難き道なればとはに御法の月もすみけり

何か其迷ひ悟りと分きていはむ愚なるみの心一つを

鷲の山雲の就こに宿るらむかくろひはてぬ月の光は

寄風空論

吹風のめにみぬ色と成に鳥花も紅葉も遂にとまらで

胸消二是非一

二つなき心に何と求めけむまよひの外の悟ならぬを

神祇

和らぐる光ときけば塵のみを捨ぬぞ神の誓なるべき

照すべき神は日吉のかひもなし今は我身の影や隠さむ

康永の頃將軍家に始めて住吉の社頭造營ありて

勅請の時法樂に御會始に、社頭祝

宮ゐするちぎの片そぎ君が代に逢るも神の心なるべし

春祝

松が枝はいつとも分で君がよにあへるを春と花や咲覽

祝言

君が代は年の幾年重ねても返るぞやすき昔なりける

右一帖以二或之本一書寫之一尤珍書々々但入二撰集一不レ見二于此集一歌有レ之左註之(今略)曙記國歌大觀番號)

新後拾遺 四六八 風雅 二五六 新續古今 五四七 七四三 八五二 二四三

二六五二 二六六九 一九二〇

右之外在二此集本一合十七首入レ集畢附二續尾一註之者也

芸窓散人

慕景集

源持資

立春

山蔓いやとしのはの末かけて霞む方より春や立らむ

庭鶯

呉竹のみどりにはぶく鶯の聲も色ある庭のはるかせ

籬外梅花

露ならば亂れむものか玉簾月にひまもる梅の下かせ

正月廿日あまり上杉常頼入道京にまうのぼりみことのりのかしこまりまうしのべしとて消息傳へし返しごとせし文のはしに書き送りける

ふたつなき理しらば武士のつかふる道は恨なからむ

氷川の社奉納の和歌すゝめられはべりて殘雪といふことをよめる

老らくの身をつみて社武藏野の草にいつ迄殘る白雪

氷始解

今日とても及ばぬ筆は塵乍ら今朝は硯の海も凍らず

谷鶯

君も君臣も臣てふ世にしあらばいかに來鳴む鶯の聲

二月の釋菜金澤の文庫にて行ふよし三好日向守勝元の許よりまうしこされければ隣家梅花といふ題を聖供にそへて遣しはべるとて

深夜歸鴈

なれやよゝ友垣の近きには遠きもなるゝ梅の下風

いさとても枕の鳥の聲々に幾夜やきそふ天の雁がね

待ン花
二五待らあへぬ命に花を三吉野やよし立ち隠せ峯の白雲
朝花
三五嵐ふく高嶺は雲のいろかへて花よりあくる朝熊の宮
小田原の驛をつとめておの〳〵かへり侍りけるに箱根の別當長巽法師が酒すゝめてあるじまうけしけるとき驛のやどりに花の散りけるをみて
法師酒すゝめられけるに
四五思はずよ思の外に見る花のちれる餘波をなど惜らむ
返し　長巽法師
五五ちる花の名殘をなどか惜む覺心の盧の春にあふ身は
横見隼人正夢想の歌勸進せられし時夕藤を
六五葉のゆかりもにくむ理や忘れてたどる藤のたそがれ
ある人さかしらにて横見氏屋形をおそふなど聞えてけれども早くより跡なきといちじるくてそのぬれ衣を洗ひしあるじまうけの時によみて遣しければ紫のゆかりの色などたはぶれてしかなるべし深夜歸鴈といふことを神田の社にておの〳〵よみはべる時
七五暗連れて聲より聲も丈夫の心にかへる夜半の雁がね
北條豐前入道則圓主箕出といふ所に山庄めくしつらひ心やさしうしなして伊藤忠春二階堂治部大輔など我にしたしきを招きて百首の歌すゝめられしに峯新樹といふことをよみはべりける
八五待侘びし花になぐさむ山に又かゝる青葉の峯の白雲
嘉吉元年五月京にのぼり侍るに屋形のかしこまり申しのべて皇のみことのりいたきつゝかへらむとせしころ畠山持國管領へしたしきえにし侍りてふるはへて暇ものしにまかりし時今川氏兼朝臣の御もとへみそかごと傳へねとてなむ御はなむけたびしに駿河の府にいたりて鵜殿但馬守盛重をして申し傳へしに氏兼朝臣悦びつゝ二日府の國分尼寺菩提樹院にやどりてこゝにてあるじまうけうづ高くし遠山左衛門尉宗植一色勘解由貞俊など親しきゆかりなりければこゝらの宮寺にまうではべりぬ惣社やしろ鹿宮健穂の高島のやしろなどに心ざしのぬさ手向けはべりてよみはべりける
九五ねぎ事や志津機山の郭公旅ゆく我をゆふかけてとへ
一〇六梓弓かへる袂にもろ葉草かけていのらむ加茂の神垣
飛鳥井中納言雅世卿へ消息し奉りて添削の詠草奉るとき
一一こゑの夢をもらせ東路の關のあなたのやま郭公
秋たつ日上杉幸丸元服せられはべるを賀してやるとて
一二今日といへば初元結に萬代の秋の契を結びこめぬる
月前往事
一三梓弓思ひなれしも惜みしもたへて我のみ月をみる哉
月前述懷
一四なほからぬ心を隱す我影に厭はで照す月ぞはづかし
權中納言爲富卿の許より三井寺の僧永覺僧都のみちのおくへ下りし次でに消息傳へてたまはりしをふりはへてその返事奉りしさうぞこの端に
一五千里てふ都の空の月もかく同じつらさに人もみる覽
細川勝元朝臣武備の要を草子めくものに調じ參らせよとの給ひこされ侍れば三卷となして更に益なしと申し送りはべりしときよみて奉りける
一六武士の道ははかけむ敏鷹のこもつちこえを心にもせぢ
勝元朝臣短慮不ン成ン功といふ言葉の作りし詞など消息のはしに書きつけてこの心ばへを問ひ給ひしかば
一七急がずば濡ざらましを旅人の跡よりはるゝ野路の村雨
一八人しれぬ心のあだに急ぎ來て疲れて共にふし芝の露
北條加賀守直元の許より雪のいとあつく降りてあした酒肴など取りそろへて之をなむ友まつ雪のよわりにもせさせよ訪はむはやすけれども跡つけむものうしなどゝねもごろなる消息なればその返しごとせし紙のはしに
一九跡つけて雪にとへかし天地に先だつ春の宿と思はむ
康正元年の冬藤澤の役に至り侍り敵も味方も入りまじり三日をかさねていどみ爭ふことになりぬされども屋形の武威つよくして北條(北條カ)憲宣(信)のぬし終に自服して餘兵おのかじし空しうなるあるはあたにあたりてかたみに死するも侍る時藤澤のかたへの松原のひれにてたゝかふ男あるに中村治部少輔藤原重賴とて京家の人の世に沈みて屋形に扶持せられて侍りしになむかたきの男は栗毛なる馬に乘りて二引龍ののぼり龍の紋つけたるさしものなりけり遠目ながら鎧の毛いかめしう見えけるに暫し戰うて鎗をあはせしにめのまへにかたきの男つきとめられてやがて中村手づから首を取りて我が陣に來りてかうかうなむと語りけるにいまだ壯年にもたらぬ男の色白うしてたけたかゝるべき心地したり髮のあたり唯ならずたきしめつゝ哀もいやましあだながらにくからぬ俤なり中村重賴この心ばへのやさしき歌一つものして手向にとすゝめはべりければその首にむかひて
二〇斯る時さこそ命の惜からめ兼てなき身と思知らずば
返し　治部少輔重賴
二一亡身とは誰も知ども諸共に今はに及ぶをしぞ思ふ
梅
二二人ならば浮名やたゝむさよ更てよな〳〵通ふ梅の匂は
寄ン鳥戀
二三世中に鶏も聞えぬ里もがな二人ぬる夜の隱がにせむ
絕不ン會戀
二四心さへ空にや習ふ西に入りひがしに出づる星の契は
文安四年の夏飛鳥井中納言雅永卿の許より故郷橘といふ所をよむべきよし仰せごとはべりければ奉りける
二五思はじか野中にとては植置かじ昔は誰か軒のたち花
持參が妻三つになり侍る子をとみの惱みにて失ひぬるつとめての年後のわざどもいとなみはべるうまごのわざに逢ひぬると命ながければ耻しき世の返す〳〵も口をしきなど書きくどきてよめの許へ云ひ遣しける
二六懷しく又恨めしき月日哉別れし去年のけふを迎へて
持參の妻返し
二七去年のけふ別し時も今とても忘ればこそ思出さめ
逃懷の歌詠じけるとき
二八君に起き民に臥つゝ朝夕に仕へむと思ふ身ぞおほけなき

右太田伊豆守源持資(資長)入道道灌(號梅花軒詠草以下(靜勝軒
圓岡堂藏本寫之
天正二年三月

侍從藤原朝臣共宗

古今和歌六帖

古今和歌六帖題目錄

第一帖

歳時部

春

春立つ日　睦月　朝日のひ　殘りの雪
子日　若菜　あを馬　仲の春
彌生　三日　春のはて

夏

初夏　更衣　卯月　卯花
神祭　五月　五日　菖蒲草
水無月　名越の祓　夏のはて

秋

秋立つ日　初秋　七夕　朝
葉月　十五夜　駒引　長月
九日　秋のはて

冬

初冬　神無月　霜月　神樂
師走　佛名　閏月　歳の暮

天

天の原　照日　春の月　夏の月
秋の月　冬の月　雜の月　三日月
夕づく夜　有明　夕闇　星
春の風　夏の風　秋の風　冬の風
山嵐　嵐　雜の風　雨
村雨　時雨　夕立　雲
露　雫　霞　霧
霜　雪　霰　氷
煙　塵　なる神　稻妻
蜻蛉

第二帖

山

山　山鳥　猿　鹿
虎　熊　ひさゝび　山川

山田　山里　山の井　山びこ
巖　峯　谷　柚
尾上　炭竈　圓　原
岡　森　社　道
使　うまや

田

春の田　夏の田　秋の田　冬の田
かりほ　稻負鳥　そほづ
野　春の野　夏の野　秋の野　冬の野
雜の野　狩　照射　鷲
大鷹　小鷹　雉　鳩
鶉　大鷹狩　小鷹狩　野邊
御幸

都

都　都鳥　百歳
田舍　郡　里　古郷
國　やどり　かきほ
宿　家　井　と
家　隣　かど　さがき
庭　庭鳥　むしろ
すだれ　床
人　おんな　親
翁　車　牛
わかいこ　馬
佛事　法師
寺　鐘

第三帖

水

水　水鳥　鴛　鴨
鳰　鵜　鵝　鳧
鯉　鮒　鱸　河
鮎　氷魚　ゐせき
橋　樋　欄　やな
夜川　網代　江　うき
池　沼　瀧
にはたづみ　うたかた　澤
淵

瀬　海　海ノ
鹽　鹽がま　舟　綱
鯖　網　真告鳥　藻
みるめ　われから　浦　貝
渚　島　濱　千鳥
濱木綿　崎　磯　浪
澪標　潟　港　泊

第四帖

戀

戀　片戀　夢　面影
轉寢　涙川　恨　うらみ
ないがしろ　難の思

祝

祝　若菜　杖　揷頭

別

別　ぬさ　手向　旅
かなしび　長歌　小長歌　古き長歌

旋頭歌

第五帖

雜思

知らぬ人　云ひ始む　年へて云ふ　始て逢へる
あした　しめ　あひ思ふ　あひ思はぬ
異人を思ふ　分きて思ふ　云にて思ふ　人知れぬ
人に知るゝ　夜獨をり　獨寢
ふせり　曉におく　一夜隔てたる二夜隔てたる
物隔てたる　日頃隔てたる年隔てたる　遠道隔てたる
打きてあへる　よひの間　物語　近くて逢はず
人をまつ　人を待たず　人を呼ぶ　道の便
文たがへ　人傳　忘る　忘れず
心變る　簀がす　思ひ出づ　昔を戀ふ
昔逢る人　あづらふ　契る　人を訪ね
めづらし　頼むる　誓ふ　口がたむ
人妻　家とじを思ふ　思ひやす　思ひ煩ふ
來れど逢ず　人を留む　留まらず　名を惜む
惜まず　なき名　吾妹子　吾背子
隱れ妻　今けがひなしこむ夜　形見
になき思

服飾

玉くしげ　玉かづら　髪　元結
櫛　玉　玉の緒　玉襷
鏡　枕　手枕　櫛
衣　鹽燒衣　夏衣　秋衣
衣うつ　かり衣　摺衣　麻衣
裘　濡衣　羅の衣　ふすま
紐　帶　琴　笛
言の葉　文　矢　刀
弓　はかり　太刀
鞆　扇　笠
簑　かたみ　苞

色　色　紅　紫　くちなし
綠　錦綾　綾　糸　綿
布

第六帖

草

春の草　夏の草　秋の草　冬の草
下草　にこ草　雜の草　山ぶき
撫子　秋萩　女郎花　すゝき
篠ずゝき　荻　らに　菊
草のかう　きちかう　りうたん　しをに
くたに　さうび　萱　花かつみ
はちす　杜若　孤　根芹
蘆　菱　浮草　つき草
あさゞ　ことなし草　芹　忘草
忍草　玉藻　葛　なぎ
夢　萍　朝顔　淺茅
さね蔓　青つゞら　紫陽花　さゝく
つばな　かにひ　厥　ゑぐ
萱　おはぎ　まさぎ蔓　ひかげ
百合　あね　笹　葵
山たち花　すげ　蓬　苔
かたばみ　みくり
いちじ　しば
蟲

蟬　夏蟲　蜾蠃
松蟲　鈴蟲　蜘蛛
機おりめ　蜩　蟬

木　木　しをり　花　秋の花
紅葉　柞　眞弓　楓
松　かへ　竹　たかんな
梅　紅梅　柳　櫻
庭櫻　花櫻　山櫻　緋櫻
藤　橘　あへ立花　椎
ざくろ　梨　山梨　桃
李　唐桃　くるみ　杉
むろ　まき　桂　がふか
標　樫　櫟　椿
柏　ほゝ柏　楸　躑躅
岩つゝじ　あせみ　桑　はたつもり
しきみ　つまゝ　山ちさ　ゆづるは
かたがし　さねき

鳥　鳥　放鳥　雞鳥　かひ
鶴　鵬　鴛　時鳥
千鳥　呼子鳥　鳰　鳥
鷺　はこ鳥　かほ鳥　鵲
きゞす　水雞　燕

古今和歌六帖第一

春立日　在原元方

九七年の内に春は來にけり一年を去年とやいはむ今年やいはむ

〇八袖ひちて掬し水の凍れるを春立つ今日の風や解らむ

一年の内に春立事を春日野の若菜さへにも知にける哉　紀貫之

二春立と云ふ計にや三吉野の山も霞みて今朝は見ゆ覽

三八山風に解くる氷のひまごとに打出づる波や春の初花

大伴坂上郎女

四八打昇る佐保の川邊の青柳の萌出る春に成にける哉　志貴皇子

五八岩そゝぐ垂氷の上の早蕨の萌え出る春に成にける哉　たゝみね

六八春來ぬと人は云へども鶯のなかぬ限は非じとぞ思ふ

七八春日野の飛火の野守出て見よ今幾日有て若菜摘てむ　藤原言直

八八春やとき花や遲きと聞分かむ鶯だにも鳴すも有る哉

九八今更に雪降らめやも陽炎の燃ゆる春べと成にし物を

〇九鶯の冬籠して生める子は春のむつきの中にこそなけ

一九あら玉の年たちかへる朝より待たるゝものは鶯の聲　素性法師

二九昨日こそ年はくれしか春日の山にはや立にけり　山邊赤人

三九昨日より後をば知ず百年の春の始は今日にぞ有ける　貫之

四九新しく明くる今宵を百年の春の始とうくひすぞなく　源重之

五九吉野山峯の白雪いつ消えて今朝は霞の立ち變るらむ

六九梅が枝になきてうつろふ鶯のはね白妙に淡雪ぞふる　貫之

七九霞立木芽も春の雪降れば花なき里も花ぞ散りける　凡河内躬恒

八九春立て猶ふる雪は梅の花咲程もなく散るかとぞ思ふ　赤人

九九打靡き春さりくらしかすがに雨雲霧合ひ雪は降つゝ　貫之

〇〇春霞立寄らねばや三吉野の山に今さへ雪のふるらむ　家持

一〇打きらし雪は降つゝしかすがに我家の園に鶯ぞなく

二〇春の日に霞たなびくうら悲しこの夕かげに鶯なくも

三〇鶯の谷の底にてなく聲はみねにこたふる山彦もなし

四〇吹風をなきて恨みよ鶯は我やは花に手だに觸れたる　躬恒

五〇待人もこぬ物からに鶯のなきつる花を折りてける哉

六〇春立てば花とや見らむ白雪の懸れるえだに鶯ぞなく

七〇驗なき音をもなく哉鶯の今年のみ散る花ならなくに　友則

八〇花の香を風の使にたぐへてぞ鶯さそふ知べにはする　興風
九〇頼まれぬ花の心とおもへばや散らぬ先より鶯のなく　千里
一〇鶯の谷より出づる聲なくば春くる事を誰か知らまし　長谷雄
一梅花散るてふなべに春雨のふりでつゝなく鶯のこゑ
二年立てば花てふ可もあらなくに春今更に雪の降らむ
三山の端に鶯なきて打靡きはると思へど雪は降りつゝ　子日　大伴家持
四初春の初子の今日の玉箒手に取からにゆらぐ玉の緒　貫之
五千年てふ小松引つゝ春の野の遠きも知ず我は來に鳧　伊勢
六生ふるより年定れる松なれば久しき物と誰か見ざらむ　躬恒
七妬し我れ子日の松にならましをあな羨し人に引るゝ　貫之
八曉東な今日は子日か憂ならば海松をしぞ引可りける
九春霞疊く松の年あらばいづれの春かのべに來ざらむ　忠岑
一〇子日する野べに小松の徹せば千世の例に何を引まし　赤人
若菜
一春たゝば若菜摘まむと占し野に昨日もけふも雪は降つゝ　貫之
二行て見ぬ人も忍べと春の野の筐に摘める若菜也けり　仁和の帝の御歌
三君が爲春の野に出でゝ若菜摘む我衣手に雪は降つゝ
四春日野の若菜摘にや白妙の袖ふりはへて人の行らむ
五河かみに洗ふ若菜の流てもきが あたりの瀬に社よらめ　貫之
六若菜摘む我をひとみば淺緑野べの霞とたち隱れなむ
七くにすらの若菜摘まむと占めし野の雉君を思ふ此頃　家持
あをうま
八水鳥の鴨の羽の色の青馬を今日見る人は限なしてふ　躬恒
仲の春
九傷くて春一春は過ぎがてにせよ
一〇我心春の山べにあくがれて長々し日を今日も暮しつ　忠岑

一春はなほ我にて知りぬ花盛心のどけき人はあらじな　貫之
二鶯の花踏みしだく木の本はいたく雪ふる春べ也けり　素性
三いつ迄か野べに心のあくがれむ花し散ずば千世も經ぬ　忠岑
彌生
四散花に堰き止められゝ山河の深くも春の成にける哉
五まだ咲ぬ花も山べに有べきを心もとなく過ぐる春哉　岑
六三千年になるてふ桃の今年より花咲春に成ぞしにける　家持
七君が爲我折る花は春遠く千年を三度ありつゝぞさく
八唐人の舟を浮べて遊びける今日ぞ我がせこ花醫せよ　貫之
九行く春の誰がれ時に成ぬれば鶯の音も暮れぬべら也　躬恒
一〇徒然と花を見つゝぞ暮しつる今日なし春の限と思へば　藤原興風
一聲立てゝ鳴けや鶯一年に二たびとだに來べき春かは　素性
二花も皆散りぬる宿は行春の故郷とこそ成ぬべらなれ　貫之
三花の本立とうくも成ぬるか春は今日をし限と思へば
四散花の本に來て社暮果つる春の惜さも增るべらなれ
五花見つゝ惜むかひ無く今日暮て外の春とや明日は成なむ　貫之
初めの夏
六花鳥も皆行かひて烏玉の夜の間に今日の夏は來に鳧
七いづこ迄春はいぬらむ暮果てゝ別し程は夜に成にき　伊勢
八花散れる道の隨にとめくれば山には春も殘らざり鳧　深養父
九明暮るゝ月日もあれど郭公鳴聲にこそ夏は來にけれ　貫之
衣がへ
一〇夏衣たちきるものを逢坂の關の清水の寒くもある哉
一春だにもありし心を夏衣いかに薄さのけふ增るらむ　重之

一二花の色に染めし袂の惜ければ衣更うき今日にも有哉　卯月
一三春は早や過ぎにし物を鶯の又なく人の戀しきやなぞ　貫之
一四春過て卯月になれば榊葉の常磐のみこそ茂く成けれ
卯花
一五山賤の垣ほに咲ける卯花は誰しろたへの衣かけしぞ　躬恒
一六昔見し我故郷は今も猶卯の花のみぞ目には見えける
一七卯花の咲るあたりに宿りせじ寢ぬに明ぬと鶯かれ鳧　貫之
一八今日もまた後も忘れじ白妙の卯花匂ふ宿と見つれば
一九時ならぬ玉をぞぬける卯花は五月を待たば久かるべく
一〇時分すふれる雪かと見る迄に垣根もたわに咲ける卯花　素性法師
神まつり
一一神祭る卯月に咲ける卯花を白くもきねが白げたる哉　貫之
一二卯花の色に紛へるゆふしでゝ今日社神を祈べらなれ
一三神祭る時にしなれば榊葉の常磐の蔭は變らざりけり　順
一四神のます森の下草風吹けば靡きても皆祭るころかな　貫之
五月
一五さ月山梢をたかみ時鳥なく音そらなる戀もするかな
一六五月雨に苗引植る田子よりも人を戀路に我ぞ濡ぬる
一七押しなべて五月の空を見渡せば水も草葉も皆綠なり　躬恒
一八五月雨に亂初にし我なれば人を戀路に濡ぬ日ぞなき　大春日師範
一九五月雨に春の宮人來る時は時鳥をやうぐひすにせむ　貫之
二〇時鳥聲聞きしより菖蒲草かざす五月と知りにし物を　之
二一五月くる道も知らねど郭公鳴く聲のみぞ知べ也ける
五月
二二足曳の山時鳥けふとてや菖蒲の草の香に立てゝ鳴く　之
二三時鳥なくとも知らず菖蒲草こゝろくすりびの印也鳧
二四誰里も閨のまに〳〵菖蒲草けふ引き懸ぬ人は有じな
あやめ草

七澤邊なるみ瀬刈ては菖蒲草袖さへひぢて今日や取らむ
八さ月てふ五月に逢る菖蒲草びべも根永く生初めに鬼
七菖蒲草根長き命つげば社今日としなれば人の引らめ
八水隠て生ふる五月の菖蒲草かを尋ねてや人の引らむ
躬恒
九梅雨の玉にぬく日の菖蒲草昔に顧れてなきぬべら也
〇隰沼の下に生れど菖蒲草根ごめに引て見る人は見つ
貫之
一菖蒲草根永きとれは澤水の深き心も知りぬべらなり
二菖蒲草幾世のさ月逢ぬらむ來る年毎に若く見えつゝ
みな月
三大荒木の杜の下草茂りあひて深くも夏の成にける哉
四夏は皆執こともなく足曳の山べも野べも茂合ひつゝ
人丸
五水無月の土さへさけて照日にも我袖ひやす妹に逢ずて
貫之
六夏衣薄きかひなく秋までば木下風の歌をず吹かなむ
名越の祓
七水無月の名越の祓へする人は千年の命延ぶといふ也
八大幣の河の瀬毎に流れても千年の夏は夏みそぎせむ
伊勢
九禊ぎつゝ思ふとをぞ祈つる八百萬代の神のまた〳〵
貫之
〇此川に祓へて流す言の葉は渡の花にぞ類ふべらなる
一御禊する河の瀬見れば唐衣日も夕暮に波ぞたちける
躬恒
二空見えて流るゝ川のさやかにも祓ふとを神は聞かなむ
三みゝと川聞けば同く大麻にかく祓ふを神は聞らむ
伊勢
四年なかに我が歎は成ぬれば禊ぐ共世に失せじとぞ思
八代王女
君により事の茂さに故郷の飛鳥の河に御禊しにゆく
六御禊する楢の小川の河風に祈りぞ渡る下に絶えじと
七立田川瀧の瀬きりに祓へつゝいはふ心は君が爲とぞ
順
八ねぎ言も聞で荒ぶる神だにも今日の夏越の祓と云也
夏のはて
九夕立に夏はいぬめりそばちつゝ秋の境に今や至らむ

〇〇今宵しも稻葉の露の置きしくは秋の隣になれば也鳥
一西へだに夏のいにせば暮つゝ頓て戀ぎ秋は見てまし
躬恒
二夏と秋と行かふ空の通路に片へ涼しき風やふくらむ
秋立つ日
藤原敏行朝臣
三秋來ぬと目にはさやかに見えね共風の音にぞ驚れぬる
貫之
四河風の涼しくも有か打寄する波と共にや秋は立らむ
五昨日社早苗取しかいつの間に稻葉もそよと秋風の吹
六俄にも風の涼しく成行くか秋立日とはむべも云けり
初秋
七初秋の空に霧立つから衣袖のつゆけき朝ぼらけかな
躬恒
八我背子が衣の裾を吹き返しうら珍らしき秋のはつ風
九東路のいさめの里は初秋の長き夜を獨あかすね成なぞ
一木枯の秋の初風吹きぬるをなどか雲居に雁の鳴せぬ
七日の夜
一珍く逢ふ七夕は餘所人も影見ぬほしき物にぞ有ける
人麿
二天河みづかけ草の秋風に靡くを見れば時は來ぬらし
深養父
三侘ぬれば常はゆゝしき七夕も淚れぬる物にぞ有ける
人麿
四天河遠き渡りにあらねどもも君が舟出は年にこそまて
五國もせに常に逢ふ名は立めれど逢見る事は只今宵也
六玉葛絶ぬ物からさぬるよは年のわたりに只一夜のみ
七赤ら引色に妙の子の敷妙見れば人妻故に我戀ぬべし
八天の河紅葉を橋に渡せばや七夕つめの秋をしも待つ
九遠妻と手枕替て寢たる夜は鳥の鴛なくに明ばあく共
一〇年に在て一夜妹に逢彦星も我に優りて思ふらめやは
與風
二契りけむかぞつらき七夕の年に一度逢ふは逢ふかは
人麿
三大空を通ふ我すら何故に天の河原を泥みてぞくる
素性
四今宵こむ人には逢じ七夕の久しき程に脊ゑも社すれ
人麿
五逢見まく秋立すとも東雲の明果にけり舟出せむかは

六渡守舟はや渡せ一年にふたゝびきます君ならなくに
躬恒
七年毎に逢とはすれど七夕の寢ぬ夜の數ぞ少かりける
伊勢
八朝未明出て拾はむ今日のをに心長さを比べてしがな
貫之
一秋風に夜の更行けば天川かたへの波の立居こそまて
二天川みだれもせなむ鵲の橋も渡さでたゞわたりせむ
友則
三今日よりは天河原もあせなゝむ淀むともなく唯渡なむ
貫之
四一年に一夜計を七夕のいくよ逢ふとか名をば立つ覽
五一年に一夜と思へど七夕の相見る秋の限りなきかな
六七夕は今や別るゝ天の河かは霧立ちて千鳥鳴くなり
七夕づくよ久しからぬを天河はやく七夕酒ぎ渡りなむ
八積りぬる年多けれど天の河君が渡れる數ぞすくなき
九天河夜深く君は渡るとも人しれずとは思はざらなむ
友則
一〇天河淺瀬白波たどりつゝ渡りはてねば明ぞしにける
一一久方の天の河原の渡しもり君渡りなば楫かくしてよ
躬恒
一二なぬか日の早暮なゝむ久方の天の川霧たち渡るべく
一三彦星のつま待つ宵の秋風に我さへあやな人ぞ戀しき
湯原王
一四彦星の思ふすらむ事よりも見る我苦し夜の更行けば
貫之
一五朝戸明けて詠めやすらむ七夕は飽ぬ別の空を戀つゝ
躬恒
一六今日よりは今來む年の昨日をぞ早晩とのみ待渡るべき
かねすけ
一七七夕のかへる朝の天の河舟も通はぬなみもたゝなむ
友則
一八秋風に初雁音ぞ響くなる白露はうつし也けり水鳥の音羽の山の色づくみれば
躬恒
一九人知れぬ音をやなゝ覽秋萩の色づく迄に鹿の鳴せぬ
貫之
二〇久方の天つ空より影見ればよく所なき秋の夜のつき

九州難波潟潮みちくれば山の端に出る月さへ満にける哉
○五月毎に逢夜なけれど夜を経つゝ今宵は優る影無り鳥
素性法師
一望月の駒より遅く出ぬれば迦る〳〵ぞ山はこえつる
みつね 或本
二爰にまだ我飽ぬ月を山の端の遠の里には遅しとや待
躬恒
三疎くにか今宵の月の見えざらむ飽かぬは人の心也鳥
駒ひき　貫之
四逢坂の関の清水に影見えて今や引らむもちづきの駒
五六都迄懸けて引くは小笠原みつの御牧の駒にやある覧
六逢坂に引らむ駒を秋霧のたち野かと社問まほしけれ
七望月の駒引越ゆる山見れば覚束なくも飽ずぞ有ける
藤原高遠
八逢坂の関の岩かど踏みならし山立出づる桐はらの駒
九何せむに急ぎ来つらむ逢坂の関あけて社駒も引けれ
たゝふさ 或本
○秋霧のたち野の駒を引く時は心にのりて人ぞ戀しき
長月　是則
一佐保山の柞の色は薄けれど秋は深くもなりにける哉
二月を見ぬ月は無けれど長月の短くもあるか今宵計は
三長月の時雨の雨に濡れとほり春日の山は色つきに鳧
四長月の時雨の雨に山ぎりてけぶき我胸誰みばかやよむ
九日
五長月の九日ごとに百敷の八十氏人のわかゆてふ聞く
法　皇
六長月の九日毎に摘む菊の花もかひなく老いにける哉
伊　勢
七限なく君が齢を延ばへつる名だゝる宿の露とならなむ
貫之
八新つゝ猶長月の菊の花いづれの秋か植えて見ざらむ
九百年を人に留むる玉なればあだにやは見る菊の上の露
一〇濡衣と人に云はすな菊の露齢延ぶとも我そぼちつる
一一菊の花露と起居ていざ折らむ濡なば袖の香社匂はめ
一二皆人の老を忘るといふ菊は百年をやる花にぞ有ける
忠　岑
一三折菊の雫を多みわかゆてふ濡衣をこそ花の身にきれ
貫之返し
一四露深き菊を折れる心あらば千世のあだ名は立むとぞ思
秋のはて　興　風
一五深山より落くる瀧の色見てぞ秋は限と思ひ知りぬる
人　麿
一六今日有て明日過ぬる霰哉神無月時雨に紛ふ紅葉翳さむ
一七長月の有明の月は見え乍らはかなく秋は過ぬべらも
一八草も木も紅葉散ぬと見る迄ぞ秋の暮ぬる今日は来に鳧
一九時雨ふる神無月こそ近からし山の押なべ色附にける
以上三首貫之
二〇道知らば尋ねも行かむ紅葉を幣に手向て秋はいぬ共
二一執方に夜は成ぬらむ覚束な明け ぬ限は秋にやある覧
以上躬恒
二二紅葉の流れて淀むみなとをぞ暮行く秋の泊とは見る
素　性
二三紅葉を袖にこき入てもて出なむ秋を限と見む人の爲
二四紅葉に道は埋みて跡もなし誰よりかは秋は行くらむ
貫之
二五夕月夜小倉の山に鳴く鹿の聲の内より秋はくるらむ
初冬
二六木枯の音にて秋は過ぎにしを今も梢に絶えず吹く風
二七神無月限とや思ふ紅葉のやむ時もなく夜さへに散る
二八神無月降みふらみ定めなき時雨ぞ冬の始なりける
神無月　貫之
二九千早振神無月こそ悲けれ誰を懸ふとか常に時雨る
三〇立田山錦織りかく神無月時雨の雨をたてぬきにして
羇　旅
三一さかしらに夏は人まね笹の葉のさやぐ霜夜は我獨ぬる
三二冬の夜や寝覚て聞けば鷲ぞ鳴く拂も敢ず霜やおく覧
三三吹風は色も見えねど冬くれば獨ぬる夜も身にぞ沁ける
神　楽　貫之
三四河社篠に折はへ乾す衣いかにほせばか七日ひざらむ
三五行く水の上に絶れる河やしろ河なみ高く遊ぶ鳧かな
三六足曳の山の榊の常磐なる蔭にさかゆる神のきねかも
三七榊葉の常磐にしあれば長けくに命保てる神の杵かも
三八聲高く遊ぶなるかな足曳の山人今ぞとほるべらなる
三九山人のすれる衣に夕だすき懸けて心を誰によすらむ
以上六首貫之
○霜八度置けど枯れせぬ榊葉の立栄ゆべき神のきね哉
一〇榊葉にゆふとりしでゝ誰かかく神の御前に祝初けむ
二〇我背子があなしの山の山人と人も見るがね山鬘せよ
三〇神垣や三室の山の榊葉は神の御前にしげり合にけり
四〇深山には霰降るらし外山なる正木の蔦色づきにけり
以上五首貫之
伊　勢
五〇年毎に神ぞ祈る榊葉の色も変らでをらむと思へば
師　走
六〇師走には泡雪降と知らねかも梅花咲くふゝめらずして
是　則
七〇三吉野の山の白雪積るらし故郷寒くなりまさるなり
八〇關越ゆる道ならなくにちか乍ら年に障りて春を待哉
九〇新玉の年の終になる時は雪も我が身もふり増りつゝ
家　持
一〇〇あら玉の年行き返り春たゝばまづ我が宿に鶯は鳴け
佛　名　貫之
一一年の内に積れる罪は懺くらし降る白雪と共に消なむ
一二君さらば山に返りて冬毎に雪踏分ておりよとぞ思ふ
伊　勢
一三櫻花春くはゝれる年だにも人の心に飽かれやはせぬ
貫之
一四うるひさへ有て行べき年だにも春に必逢ふ由もがな
一五時鳥後のさ月もありとてや長く卯月を過しはてつる
伊　勢
一六五月雨に積ける年の詠めには物思絶えぬ人ぞ悲しき
一七七夕は天の河原を七返り後の七日をみそぎにはせよ
一八神無月二つある年の時雨には一本菊ぞ色こかりける
一九此月の冬の餘りに非ざれば雪はいや鳴きぞしなまし
年の暮
二〇行年の惜くもある哉增鏡見る影さへに暮ぬと思へば
躬　恒
二一梓弓春たちしより年月の射るが如くも思はゆるかな
二二雪降りて年の暮ぬる時に社遂に紅葉ぬ松も見えけれ
二三暮て又明くとのみこそ思しか今年は今日ぞ限也ける
貫之
二四逸じろき印也けり新玉の年の暮るゝは雪にぞ有ける
二五昨日と云ひ今日と云ひつゝ飛鳥川流て早き月日也鳧
二六物思ふと過る月日も知ぬ間に今年は今日に果ぬさか聞

七年暮て春明方になり行けば花のためしに降れる白雪
八山端に夕日さしつゝ暮ぬれば春に入ぬる年にぞ有ける
天の原　人麿
九天の川雲の波立ち月の舟星のはやしに漕ぎ隠る見ゆ
安倍仲麿
〇三天の原振さけ見れば春日なる三笠の山に出し月かも
一天の原雲なき宵に烏羽玉の夜渡る月の隠らくをしも
二甚もふらぬ雨ゆゑこちたくも天のみ空の曇合ひつゝ
さかねの人ざね
三大空は戀しき人の形見かは物思ふ毎に詠めらるらむ
四思遣る心し空になりぬれば詠むる方に行も逢ふらむ
五大空に我思ふ人は宿らなむ詠むる方に行も逢ふやと
六大空に我呼ぶ人も聞えぬに物思ふ毎になぞと云るゝ
七天雲のよそなる思告げしより虚しき空になり渡る哉
八君により浮たる物を思ふには心も空になりぬる物を
元方
九久方の天の空にも住まなくに人はよそにぞ思べらなる
照る日
〇旭子がさすや岡べの松枝のいつとも知ぬ戀もする哉
一春の日の長閑き時に漕ぐ舟は水底さへに静なりけり
二雲拂ふ照日も曇る山なれば明きに月も見えぬなる覧
三た忘れていをぞ寝にける茜さす書はさ計思ひし物を
四日し暮ばいざ疾ねなむ夏衣脱かとすれば明ぬと云夜に
五共にこそ花をも見むと待人の來ぬ物からに惜き春哉
六入日さす時ぞ悲しき村鳥の己が散々なりぬと思へば
七朝くにか宿りとる覧旭子がさすや岡べの玉笹の上に
内侍のすけ寄香
八嶺高き春日の山に出る日は曇る時なく照すべらなり
九戀つゝも今日は暮しつ茜さすあすの春日を爭で暮さむ
〇雲もなくなぎたる朝の照日にも思はれ増る我や何也
關雄之
一筑波嶺の岩も轟に照日にも我袖ひめや妹にかくそ
二奥山の岩垣紅葉散りぬべし照る日の光見る時なくて
三詠むれば苦しき物を山端に入日はやさし早く暮なむ
貫之
四ふるのいまみち
五日の光やぶしわかねば石上ふりにし里も花咲きにけり
太政大臣實賴

五常よりも長閑かるべき春日すら光に人の逢ざらめやは
六日の光逢見て踈む朝露の消えぬ先にも逢見てしがな
七夕附日さすや岡べに作るやの形をよしみ鹿ぞ寄くる
貫之
八草も木も思しあれば出る日を明暮こそは賴べらなれ
九我思君ならむとや山端に入日を見つゝ出て行かめや
春の月
〇朝霞春日の暮は木の間よりいざよふ月を早曉も見む
一春來れば葉隠れ多き夕月夜覚束なしも花かげにして
二あれたれば影も隠れぬ我宿の庭長閑なる春の夜の月
三我宿に咲たる梅の月清み夜な〳〵見せむ君を社待て
夏の月
四夏の夜の衾や置けると見る迄に荒たる宿を照す月影
五夏の夜の月光をまして照る時は流るゝみづに陽炎ぞ立つ
六鶴の峯飛び越えて鳴き行けば夏の夜渡る月ぞ隠るゝ
深養父
七夏の夜はまだ宵ながら明ぬるを雲の跡こに月宿る覧
八來ぬ人を下にし待てば夏夜の月を哀と云つゝぞをる
九とならば暗にもあらなむ夏夜の照月影ぞ人頼めなる
〇五月雨の黄昏時の月影のおぼろげにやは我人を待つ
秋の月
一木間より洩りくる月の影見れば心盡しの秋は來にけり
二衣手は寒からねど共月影をたまらぬ秋の雪かとぞ見る
三散る紅葉夜もみよとや月影の梢殘らず照り渡るらむ
四秋の月光さやかにもみぢ葉の落る蔭さへ見え渡る哉
五常よりも照り増る哉山の端の紅葉を分けて出る月影
六夜に隠れ來つるかひなく紅葉の月は明くも照増る哉
以上五首貫之
躬恒
七百敷の大宮ながら八十島を見る心地する秋の夜の月
八白雲に羽打かはしとぶ雁の數さへ見ゆる秋の夜の月
大江千里
九月見れば千々に物社悲けれ我身一つの秋には非ねど
伊勢
〇我宿を照滿つ秋の月影は長き夜見れど飽ずぞ有ける
一久方の月の圓かになる頃は紅葉散とも知られざり鳥
二秋の月一重に飽かぬ物なれば涙を頓て移してぞ見る
三音にのみ散と聞べき紅葉を色知らせつる秋の夜の月

四待人の影は見えずて秋の夜の月の光ぞ袖に入りける
忠岑
五久方の月の桂も秋は猶紅葉すればや照りまさるらむ
元方
六秋の夜の月の光しあかければ倉部の山も越ぬべらも也
深養父
七秋月常に斯照る物ならば暗になる夜は交らざらまし
八秋の海映れる月をたち返り波に洗へど色は變らず
九秋の夜の月の光はあかけれど人の心の内はてらさず
紀のよしみつ
〇秋の朝臣
一秋の月入がてにしつ佐保山の紅葉は今ぞ盛なるらし
二心なき秋の月よの物思ふらいも寝られぬに照つゝもと
冬の月
三冬の池の上は氷に閉ぢたるを爭でか月の底に入る覧
貫之
四降しける雪かとぞ見る月なれど濡て袖さえたる衣ぞなき
同じ人
五島玉の夜のみにふる白雪は照る月影のたまる也けり
六大空の月の光し寒ければ影見し水をまづこほりける
七天の原空さへさえや渡るらむ氷と見ゆる冬の夜の月
雜の月
八我が心慰めかねつ更科や姨すて山にてるつきを見て
九思事有とはなしに久方の月夜なれば寝られざり鳥
〇天雲の隠けり共見えぬ夜は行月影ぞ長閑けかりける
一且見れど疎くも有哉月影の至らぬ里は非じと思へば
二久方の月影見れば難波潟潮も高くぞ見えぬべらなる
三都にて山の端に見し月なれど波より出て波に社入れ
以上五首貫之
四二つなき物と思ひしを水底に山の端ならで出る月影
業平
五飽なくにまだきも月の隠るゝか山端逃て入れずもあらなむ
六右は入りこしものを久方の月の光のまへわたりする
躬恒
七盡なれや見そ惑ぬる月影をけふや云む今宵とや云む
伊勢
八逢に逢て物思ふ頃の我袖に宿る月さへ濡るゝ顔なる
深養父

二〇誠にか今宵の月の曇べき小倉の山は名をやかよ覚
躬恒

二一淡路にてあはと雲居に見し月の近き今宵は所柄かも
貫之

一照月を雲かと見れば曉に羽かく鳴もあらじとぞ思ふ
おとまろ

二二ます鏡てる月影を白妙の雲かくせる天つ霧かも

二三山端にいざよふ月を出むかと待つゝをるに夜ぞ更にける

二四下にのみ戀れば苦し山端に出來る月の顯ればいかに

二五遲く出る月にも有哉足曳の山のあなたも惜むべら也

二六久方の天てる月を鏡にて戀しき人のかげをだに見む

二七大方は月をもめでじ是ぞこの積れば人の老となる物

二八ぬば玉の其夜の月は今迄も我は忘れず君によそへて

二九百敷の大宮人のまかり出て遊ふ今宵の月のさやけさ
間人大浦

三〇倉橋の山を高みか木隱れて出來る月のかた待ち難き
弓削王

三一天にます月讀男まひなはむ今宵の長さいはよ告そも

三二大方は嶺も平になりなゝむ山のあれば月も隱るゝ

三三我兄子が振さけ見つゝ歎くらん清き月夜に雲な棚きそ
安郡扉娘女

三四み空行く月の光に唯ひとめ逢見し人の夢にし見ゆる
あべのむしまろ

三五天隱れ三笠の山を高みかも月の出こぬ夜は更にけり

三六思へばぞ月のわれても出つらむか計騒ぐ雲の上より

三七君まつとおきたる我もある物を寢待の月は傾にけり

三八君待と閨にしをれば垣間より月は昇ぬこじとてならし
三日月
坂上らう女

三九月立て唯新月の眉根かきけ永く戀し君に逢へるかも
家持

三〇振仰ぎて三日月見れば一目見し人の眉引思ほゆる哉

三一宵の間に出て入ぬる三日月のわれても物を思ふ頃哉

三二三日月の割れては人を思ふとも夜に再は出る物かは
夕月夜

三三夕月夜さすや岡べの松の葉のいつ共分ぬ戀もする哉
いべのおとくろまろ

三四玉垂のこすのまとほり獨ゐて見る印なき夕月夜かも

三五旅なれば宵に立出て照る月の高島山に隱るゝをしも
躬恒

三六春霞たなびく山の夕月夜清くてるらむ高圓との野に
人丸

三七夕月夜朧に人を見てしより天雲はれぬ心地こそすれ
貫之

三八常はさも思はぬ物を此月の過隱れ行く惜しき宵かも
おとまろ

三九夕月夜こゝろもしぬに白露のおくらむ庭に鳴く蟲
有明
忠岑

四〇有明のつれなく見えし別より曉ばかり憂き物はなし

四一君をのみ起臥待の月なれば憂人しもぞ戀しかりける
人麿

四二長月の有明の月の有つゝも君し來まさば我も忘れじ

四三世の人はつらき心ぞ有明の月と山にや人もしなまし
貫之

四四出てこぬ山も變らぬ長月の有明の月の影をこそまて

四五白露を玉に做たる長月の有明の月よ見れど飽ぬかも

四六時雨ふる曉月夜紐とかで君をかなしとをらまし物を
夕やみ

四七妹がめの見まく欲しけく夕闇の木葉隱れの月待が如

四八夕闇は道も見えねど故郷は元來し駒に任せてぞくる
大宅娘女

四九夕闇は道たど〳〵し月待て返れ我兄子其さにも見む
星

五〇日暮れば山端に出る夕づゝの星とは見れど逢ぬ頃哉

五一我戀は空なる星の數なれや人に知れで年の經ぬれば

五二東屋の伏屋板間のあはぬより空の星とも見ゆる君哉

五三月影に計られぬかに鬼あか星の飽かぬ心に出で、悔しく

五四宵毎に立も出でなむ夕づゝの月なき空の光と思はむ

五五夕づゝも通ふ天路のいつしかと仰ぎてまたむ月人男

五六君にのみ逢はまく星の夕されば空にみちぬる我心哉
春の風

五七春風の吹初めしより瀧つ瀬の氷も解けて花ぞ散ける
良岑宗貞

五八花の色は霞に罩て見せずとも香をだに盜め春の山風
藤原好風

五九春風は花のあたりをよきて吹け心づからや移ふと見む
躬恒

六〇吹風を厭ひも果じ梅の花散りくる時ぞ香は增りける
元方

六一霞立春日の山べは遠けれど吹くる風は花の香ぞする

六二春はまづ東路よりぞ若艸の言の葉つてよ武藏野の風
友則

六三花の香を風の便にたぐへてぞ鶯さへふ知べにはやる
素性

六四花散らす風の宿りは誰かしる我に教へよ行て恨みむ

六五つれもなき人に思を春風は我見ゆるごと吹も告なむ

六六春風の痛く吹らし灘の蜃の釣する小舟さし歸る見ゆ

六七春風は花のなき間に吹果てね咲なば思無て見るべく

六八句ふより心あだなる花故にのどけき春の風も恨めし

六九吹風や春立來ぬと告つらむ枝に籠れる花さきにけり
伊勢

七〇春風の我宿にだに吹來ずば知ぬ里なる花を見ましや

七一我爲の何の仇とか春風の惜むと知れる花をしも吹く
夏の風
恒

七二行路はまだ遠けれど夏山の木の下風はたち憂かり鳧

七三夏の風我袂にし包まれば戀しき人のつとにしてまし

七四吹風も我宿に來る夏の夜は月の影こそ涼しかりけれ

七五夏乍ら汀の風の涼しきは波にとひてぞ知べかりける

七六琴の音に響き通へる松風に調べても鳴く蟬の聲かな
貫之

七七雨降ると吹松風は聞ゆれど池の汀はまさらざりけり
同じ人

七八陰深き木の下風の吹來れば夏の內乍ら秋にぞ有ける
秋の風

七九君まつと戀ひつゝふれば我宿の薄動きて秋風ぞ吹く

八〇我宿の尾花が上の白露の置きし日よりぞ秋風の吹く

八一打驚ぎ雁ぞ來ぬらし我兄子が衣のひまに時つ風ふく

八二雁かねの使なるべし此の夕秋風寒く吹きぞきぬなる

八三高圓の尾花吹しく秋風に紐ときあけな唯ならずとも

八四秋風は野分山分け吹くなれど老の耳にはわく由もなし

八五秋風は時と吹き來ぬ白妙の我がとき衣ぬふ人もなし

八六秋萩をいろどる風の吹きぬれば人の心も疑はれけり

八七足曳の山べに居て秋風の日毎に吹ば妹をしぞ思ふ

八八侘しくも音のさやけく吹風の日毎に秋はもえにきぬ鶯

八九戀つゝも稻葉掻分け家居せばえしくも非じ秋の夕風

九〇秋風の身に寒ければつれもなき人をぞ頼む暮ゝ夜毎に

九一風の音の秋にも有哉久方の天つ空こそ變るべらなれ

二九紅葉の別れ惜みて秋風は今日や三室の山をこゆらむ
以上二首貫之

素性法師

三九住の江の松を秋風吹くからに聲うちそふる沖つ白波

業平

四九秋萩を色ざる風は早くとも心はかれじ草葉ならねば

千里

五九露分て袂ほす間もなき物をなど秋風のまだき吹らむ
六九戀々て後あふものと思はずば今は消ぬべき秋風の聲

紀淑望

七九紅葉せぬ常磐の山は吹風の音にや秋を聞き渡るらむ

友則

八九秋風は身を分けてしも吹なくに人の心の空に見ゆ覽

九九頼めこし人は難面く秋風は今日より吹ぬ我身悲しな

一〇〇吹來れば身にも浸ける秋風を色なき物と思ひける哉
冬の風

二〇吹風は色も見えねど夕暮は獨ある人の身にぞ浸ける

人麿

三〇足曳の山下風は吹かねども君が來ぬ夜は兼て寒しも
山おろし

四〇衣手に山嵐ふきて寒き夜を君來ませねば獨かも寢む

關雄

五〇戀しくは見ても忍ばむ紅葉を吹な散らしそ山颪の風

六〇窓越しに月は照して足曳の嵐ふく夜は妹をしぞ思ふ
嵐

七〇山里に住みにし日よりとふ人も今は嵐の山ぞ侘しき

貫之

八〇けさの嵐寒くもふくか足引の山掻曇り雪やふるらむ

文屋康秀

九〇吹からになべて草木の萎れば宜山風を嵐と云ふ覽

一〇〇常よりも秋の夕の侘しきはいとど嵐の風やなるらむ

一一逢坂の嵐の風は早けれど行方知らねば侘つゝぞふる

一二我を君訪(とぶら)はやと松かせの今は嵐となるぞ悲しき

一三とふ人も今は嵐の風早く忘れ果にし人にやはあらぬ

雜風

かく山のはなのこ

一四風ふけば沖つ白波たつた山よはにや君が獨ゆくらむ

一五吹風に我身を做て草茂み葉分をしつゝ逢むとぞ思ふ

一六木祐の音は過ぎにし時なれど常磐に常に松にふく風

一七思へ共消ぬ憂身をいかにしてあたりの風に有と知せむ

一八さゝ波の比良山風の打吹けば釣する蜑の袖返る見ゆ

良岑のむねさだ

一九天つ風雲の通路ふきとぢよ少女の姿しばしとゞめむ

雨

二〇雨降て小夜は更く共猶行かむ逢はむと妹に云てし物を

大伴のかたみ

二一石上ふるとも雨に障らめや逢はむと妹に云てし物を

二二春雨の心は君も知れる覽七日しふらば七夜こじとや

二三今更に君はな行きそ春雨の心を人の知らざらなくに

二四我妹子が赤裳の裾や浸ぬ覽今日の小雨に我も濡なば

二五我兄子を戀て徘徊み春の雨の踏分知らで出てこしかも

二六妹が門行過兼ねつひぢ笠の雨もふらなむ雨隠れせむ

二七唐衣君に打つけ見まほしみ戀ひて暮しぬ雨の降日を

二八通るべく雨はな降そ我妹子が形見の衣を我下にきたり

二九秋萩を落す霧雨のふる程は獨起きゐて戀る夜ぞ多き

三〇久方の雨もふらぬか天づゝみ君に類ひて此日暮さむ

赤人

三一春の雨に有ける物を立隠れ妹が家路に此の日暮しつ

三二久方の雨に濡しを天つ人和泉のこやに我寢しよはも

三三臥て思ひ起て詠むる春雨に花の下紐いかに解くらむ

敏行

三四春雨の花の枝より洩りてこば猶耐濡め香に匂ふべく

業平

三五起よ〳〵せず寢もせで夜を明しては春の物とて詠め暮しつ

敏行

三六徒然の霖雨にまさる涙川袖のみひぢてあふ由もなみ

三七櫻狩雨はふりきぬ同じくば濡るとも花の下に隠れむ

三八水の面に綾織り亂る春雨や山の緑をなべて染むらむ

三九梓弓おして春雨今日降ぬ明日さへふらば若菜摘てむ

四〇徒然と袖のみひぢて春の日の詠めは戀の妻にぞ有ける

四一降ぬとて思ひな侘そ春雨の唯に止べき君ならなくに

四二我兄子が衣春雨ふるからに野べの緑ぞ色まさりける

四三雨によりかも田簑の島をけふ行けば名には隠ぬ物にぞ有ける

四四かきくらし雨ふる毎に道しらぬ笠取山に惑はるゝ哉
以上四首貫之

四五春雨のふると見ゆるは鶯の散る花をしむ涙なりけり

四六春雨のふるに思は消なくていとゞ思のめをもやす覽

四七徒然の詠めに我は成ぬめり雜面き空をふる心地して

四八逢事の片糸なれば白玉のをやすぬ春の詠めをぞする

四九ふるとしも見えで降來る春雨は花のしめゆふ糸にぞ有ける

躬恒

五〇春雨に君をやりては逢坂の關のこなたに戀や渡らむ

五一思はじと思ふ物から夏の雨の振すて難き君にも有哉

業平

五二數々に思ひ思はず問ひ難み身をしる雨は降ぞ増れる

素性

五三日暮しの雨ふる河の小夜波まなくも人の戀らるゝ哉

性

五四うくも有か昨日の小雨渡るせに人の涙を濁となれば

五五白雲の上知けふぞ春雨の降にかひある身とは知ぬる

伊勢

五六春立ちて我身ふりぬる霖雨には人の心の花も散り鬼

貫之

五七思人雨と降くる物ならば洩る我屋根は合せざらまし

五八春雨の色變るにや匂ふらむ我見る枝に色もかはらず

五九來ぬ人を雨の脚とは思はねど程ふるとは苦かりけり

六〇紅のやしほの雨は降くらし立田の山の色づく見れば

之

六一春雨のふらば山べに交りなむ梅の花笠ありと云なり

躬恒

六二やみなばや心をば見む春雨の降に止れる我宿と思ふ

伊勢

六三しをるとも涙ならねば濡しけむ春雨社は哀とも見め

村雨

六四庭草に村雨ふりて蟲の鳴くこえ聞けば秋はきにけり

六五洩るや孰こ降や村雨大空も思ひ思はず知られぬる哉

六六人しれず物思宿る村雨は身より降ぬる物にぞ有ける

時雨

六七玉襷懸ぬ時なく我戀る時雨しふらば濡つゝもいかむ

六八千々の色に移りし秋は過に鳥けふの時雨に何を染まし

人麿

六九秋日かる旅の空にて時雨ふり我袖濡ぬ乾す人なしに

七〇一日には千重にしき〳〵我戀る妹があたりに時雨ふれかし

七一此時雨痛くな降そ我妹子が苞に見せむと紅葉折てむ

七時雨の雨まなくしふれば神なびの森の木葉も色附にけり　人麿
三さを鹿の心相思ふ秋萩の時雨のふるに散るは惜くも　貫之
四誰彼と我をな問ひそ長月の時雨にぬれて君待つ人を　貫之
五大空は曇らざりけり神無月時雨心地は我のみぞする
六故郷はなほ雨なれど神無月時雨に山の色はそめけり
七侘人は時に知られぬ秋なれや我身一つに時雨のみ降
八紅の時雨ふればや石上ふるたび毎に野べをそむらむ
九雨なれど時雨と云へば紅に木葉のみして散ぬ日ぞなき
以上五首貫之
一〇人戀ふる心は秋にかよへばや空も袂も共にしぐるゝ
一一白露に染始めたる秋山に時雨なふりそ有り渡るがね
一二神無月殘の菊の惜しけくに時雨の雨は降すともよし
一三初時雨ふれば山べぞ思ほゆる孰の方か先もみづらむ
一四初時雨ふる程もなく佐保山の紅葉皆く色づきにけり
一五神無月時雨るゝ時ぞ足曳の山のみ雪はふり始める
一六涙さへ時雨にそひて故郷は紅葉の色もこさ增りけり
夕立
一七夕立て夏はいぬめりそぼつゝ秋の境にいつか入る覽
一八夕立の雨打ふれば春日野の尾花が上の白露おもほゆ
一九夏の日の俄に曇る夕立の思もかけぬ世にもあるかな
雲
二〇愛や孰こあな覺束な白雲の八重たつ山を越て來に鳬
二一我兄子が振さけ見つゝ歎くらむ清き月夜に雲疑きそ　素盞男尊
二二八雲立つ出雲八重垣妻ごめに八重垣造る其八重垣を　忠岑
二三風ふけば峯に別るゝ白雲の絕えてつれなき人の心か　貫之
二四白雲の八重にかさなる遠にても思はむ人に心隔つな
二五大君は千年もまさむ白雲のみ船の山に絕る日わらめや　麿一本人
二六瀧の上の御船の山にゐる雲の常なるべくも非ぬ我身を　人麿
二七とにのみこひとは云て倉橋の峯の白雲たゆたひに鳬　同じく
二八梓弓いまは春山行く雲の行きや別れむ戀しきものを　伊勢
二九夕されば雲の旅手に物ぞ思ふ天つ空なる人を戀とて
三〇春山に立ゐる雲に身を做て空なる人に逢ふ由もがな
三一思はずに逢もやすると天雲の行ては空に歸來ぬるを
三二春日山朝ゐる雲のしく〳〵に我戀增る月に日毎に　千古
三三芦たづの獨後れてなく聲は雲の上まで聞えつがなむ
三四心なき爲とや云し白雲の隱せば惜き月にやはあらぬ
三五足曳の山べにをれば白雲のいかにせよとか晴るゝ時なき
橘のなほともの
三六思ひやる心ばかりはさはらじを何隔つらむ峯の白雲
三七雨降れば北に鬘疑く白雲を君によそへて詠めつる哉
三八さ夜更て出らむ月を高山の峯によそへて詠めつる哉
三九己が身に雲立昇り時雨ふり濡れ通るとも我歸らめや
四〇うらぶれて物な思そ天雲のたゆたふ心我思はなくに　人麿
一さほ山に疑く雲のたゆたひは思ふ心をいまぞ定むる　なじ
二我妹子に我戀らくは奥山に疑く雲の絕る日もなし　伊勢
三白雲の疑き懸る み山には照る月影をよそにこそみれ　貫之
四野べなるを人も無しとて我宿に峯の白雲おりゐる覽　同じ人
五立ねとや云にやらまし白雲の訪人もなく宿にゐる覽　平のながき
六世と共に嶺へ覽へおり昇り行雲のみは我にざりける　蜻蛉のきさき
七事繁し晉はたてれ宵のまに置けらむ露は出て拂はむ　貫之
八さを鹿の立鳴小野の秋萩に置ける白露我も消ぬべし　同じ人
九秋の野の草は糸ともみえなくに置白露を玉にぬく覽
一〇夏の日に焦るゝやぶの草なれや暫の露に心おくらむ
一一みさびらひみかさと申せ宮城野の木下露は雨に增れり　貫之
一二花渡る我身は露ぞ同くば君があたりの野べに消なむ　家持
一三白露を取らば消ぬべしいざやこら露に競ひて萩の遊せむ
一四傷くて消る物から露の身の草葉に置と見えにける哉　伊勢
一五秋夜の夢路に露ぞ置けらし通ふとしつる袖ひぢにけり
一六置く露を別し君と思ひつゝ朝な〳〵ぞ悲しかりける
一七君まし〳〵昔は露か故郷の花みるごとに袖のひづらむ
一八白露に紅まさる秋の野の移ろひやすき人のこゝろか
一九長き夜を思明して朝露の置てしくれば袖ぞひちける
一〇行き馴れぬ道の繁きに夏の夜の曉起きは露かけり鳬
一一秋の夜を徒にのみ置き渡る露ぞ我身の名に杜有けれ
一二秋の露色々ごとに置ければ社山の木葉の千種なるらめ　家持
一三秋萩に置ける朝露朝な〳〵玉とぞ見ゆる置ける白露
一四我宿の尾花押並み置露にふれ我兄子散さで君も見むや
一五秋野の笹分し朝の露よりも逢でこし夜ぞひぢ增ける
一六眞止る秋し無れば白露の千種に置ける玉もかひなし
一七白露を秋の萩原にきませて分くこと難き我が心哉
一八白露の起臥物を思ふまに我身は秋も果てにけるかな
一九置からに千種の色になる物を白露とのみ人の云らむ　伊勢
二〇植て君がしめゆふ野べなれば玉とも見よと露や置覽
二一白露の替るもなどか惜しからむ有ての後も危き物を
二二秋萩の咲ける岡べの夕露に濡つゝもませ夜は更ぬ共
二三秋萩の上に置たる白露のいちじろくしも我戀やもや
二四秋のほを篠に押なべ置露の消もしなましと戀つゝ有ずは
二五露霜に衣手濡て今だにも妹が り行かむ夜は更ぬとも
二六秋萩の上に白露おくごとに見つゝぞしのぶ君が姿を
二七待ちかねて內へは入じ白妙の我衣手に露は置くとも　敏行
二八白露の色は一つをいかにして秋の木葉を千々に染覽　忠岑
二九秋の野の萩の白露けさみれば玉やしけると驚かれつゝ
三〇明る迄起ゐる菊の白露はかりの世を思ふ涙なるべし　友則
三一草の露を置しも敢ず朝なけに心通はぬ時しなければ
三二此頃の秋風寒み萩が花ちらす白露おきにけらしも
三三白妙の我衣手に露は置けど妹にも逢ずたゆたひにして
三四夕けとふ限て我衣手に霜露を君に見せむと取れば消つゝ
三五我ならぬ草葉も物は思ひけり袖より外における白露

ほに出ぬ山田をもると唐衣稲葉の露に濡ぬ日ぞなき
このごろの曉露に我宿の秋の下葉は色づきにけり
折てみば落ぞしぬべき秋萩の枝もとをゝに置ける白露
いつとても乾かぬ袖の秋夜は露置添へて物ぞ悲しき
秋萩におく白露の風吹て散ては落る涙の留めかねつも
秋萩の枝もとをゝに露置きて寒くも時の成にける哉
忠岑

秋の夜の露をば露と置ながら雁の涙や野べを染むる
貫之

露ならぬ心を花に置きそめて風吹く毎に物を社思へ
露結ぶ秋も來にけり宜しこそ打解ぬ間に蟲は鳴けれ
露としもあだにやは見る長月の菊は千歳を過すと思へば
雫

足曳の山の雫に妹もつと我たちぬれぬ山のしづくに
返し　石川女郎

我待つと君が濡けむ足曳の山の雫にならましものを
貫之

木葉散る秋の雫にそぼちつゝ鹿の旅寝に宵々ぞなく
菊の花雫落ち添ひ行く水のふかき心と誰か知るらむ
末の露もとの雫や世中の後れ先だつためしなるらむ
貫之

時鳥待つとき鳴かずこの暮や雫を多み道やよくらむ
足引の山の紅葉に雫あひて落つる山べを君や越ゆ覽
時鳥聲鳴きし雫にかあやめも知らぬ濡ぬ衣はきし
心から花の雫にそぼちつゝ憂く干ずとのみ鳥の鳴覽
以上二首貫之

人麿

ぬば玉の黒髪山をけふ越えて雫にいたく濡にける哉
躬恒

折菊の雫を多みわかゆてよ濡衣をこそ老の身にきれ
伊勢

句ふ香の君思ほゆる花なれば折れる雫にけぞ濡ぬる
おなじ

霜雪の消えて憂身の雫こそ袖撓む迄さえかゝりけれ
霞

冬過ぎて春立ぬらし朝日さす春日の山に霞たなびく
春霞立てるやいづこ三吉野の吉野の山に雪は降つゝ
人知れず思ふ心は春霞立ち出て君が目にも見えなむ

かはと見る道だにあるを春霞かすめる方の遙なる哉
山風の花の香にはふ麓には春の霞ぞほだしなりける
春の着る霞の衣ぬきを薄み山風にこそ亂るべらなれ
しがらきの峯立越ゆる春霞晴ずも物を思ふころかな
時雨にも雨にもあらぬ初霧の立にも空はかき曇り鬼
秋とても今河霧の立ぬらむ思ひに胸ぬ物ならなくに
いかなればかしひなる覽秋霧の紛ふまだにも悲き物を
山路には人や惑はす河霧の立ちこぬ先に今渡りなむ
秋霧の立ぬる時はくらぶ山關に越れば著くぞ有ける
見る毎に秋にも有か立田姫紅葉染むとや山は照る覽
河霧の麓をこめて立ぬれば空にぞ秋の山は見えける
秋霧の立ずあらなむ足曳の山の錦をむらなから見む
心みに我戀めやは秋霧の晴もせでふる物にざりける
浦近く立つ秋霧は藻汐やく煙とのみぞ見え渡りける
秋霧の晴れぬ朝の大空を見るがごとくも見えぬ君哉
秋山の紅葉の錦幾きとも知らで霧立つ空のはかなさ
阿武隈に霧立渡り明ぬ共せなをば遣じ待てば術無し
となならば晴ずも有なむ秋霧の紛れに見えぬ君と思はむ
河霧の中に君ます物ならば晴るゝ隨に慕しからまし
ぬば玉のよる〳〵絶ぬ衣手のたかやの上に靉く迄に
秋霧の立まよ嶺の山ぐちはかねてぞ著き移はむとて
貫之

散ぬべき山の紅葉を秋霧の易くも見えず立隱すらむ
秋霧に濡にし袖を干さずして獨や君が山路越ゆらむ
飛鳥川河淀さらず立霧の思ひすつべき君ならなくに
霜

春さればみくさの上に置霜のけつゝも我が戀渡る哉
水莖の岡の舘に妹と我と寢ての朝げの霜のふりはも
朝な〳〵汀の草におく霜のけつゝも我は戀渡るかな
霜枯の野べと我身を思ひせば燃ても春を待ずし物を
みを分て霜や置らむあだ人の言の葉毎に枯も行覽哉
笹の葉に置霜よりも獨ぬる我が衣手ぞ冴え優りける
霜曇るにやあらむ久方の夜渡る月の見えずと思へば
たゞふさ

なよ竹のよ長き上に初霜の起きねてものを思ふ頃哉
君來ずば閨へも入らじ濃紫我もとゆひに霜は置とも
山陰に荒たる霜の我なれや思ふ心の解けでのみふる
さを鹿の妻待山の岡べなる早田は刈らじ霜は置とも
浮てぬる鴨の上毛に置霜の心とけなき世をもふる哉

千鳥鳴く佐保の河霧立返りつれなき人を戀渡るかな
つれもなき人に心を筑波嶺の峯の朝霧晴ずこそ思へ
秋霧の立のみ隱すもみち葉の覺束なくて止ぬべらなり
時雨にも雨にもあらぬ初霧の立にも空はかき曇り鬼
秋とても今河霧の立ぬらむ思ひに胸ぬ物ならなくに
いかなればかしひなる覽秋霧の紛ふまだにも悲き物を
山路には人や惑はす河霧の立ちこぬ先に今渡りなむ
秋霧の立ぬる時はくらぶ山關に越れば著くぞ有ける
見る毎に秋にも有か立田姫紅葉染むとや山は照る覽
河霧の麓をこめて立ぬれば空にぞ秋の山は見えける
秋霧の立ずあらなむ足曳の山の錦をむらなから見む
心みに我戀めやは秋霧の晴もせでふる物にざりける
浦近く立つ秋霧は藻汐やく煙とのみぞ見え渡りける
秋霧の晴れぬ朝の大空を見るがごとくも見えぬ君哉
秋山の紅葉の錦幾きとも知らで霧立つ空のはかなさ
阿武隈に霧立渡り明ぬ共せなをば遣じ待てば術無し
となならば晴ずも有なむ秋霧の紛れに見えぬ君と思はむ
河霧の中に君ます物ならば晴るゝ隨に慕しからまし
ぬば玉のよる〳〵絶ぬ衣手のたかやの上に靉く迄に
秋霧の立まよ嶺の山ぐちはかねてぞ著き移はむとて
貫之

散ぬべき山の紅葉を秋霧の易くも見えず立隱すらむ
秋霧に濡にし袖を干さずして獨や君が山路越ゆらむ
飛鳥川河淀さらず立霧の思ひすつべき君ならなくに
霜

春さればみくさの上に置霜のけつゝも我が戀渡る哉
水莖の岡の舘に妹と我と寢ての朝げの霜のふりはも
朝な〳〵汀の草におく霜のけつゝも我は戀渡るかな
霜枯の野べと我身を思ひせば燃ても春を待ずし物を
みを分て霜や置らむあだ人の言の葉毎に枯も行覽哉
笹の葉に置霜よりも獨ぬる我が衣手ぞ冴え優りける
霜曇るにやあらむ久方の夜渡る月の見えずと思へば
たゞふさ

なよ竹のよ長き上に初霜の起きねてものを思ふ頃哉
君來ずば閨へも入らじ濃紫我もとゆひに霜は置とも
山陰に荒たる霜の我なれや思ふ心の解けでのみふる
さを鹿の妻待山の岡べなる早田は刈らじ霜は置とも
浮てぬる鴨の上毛に置霜の心とけなき世をもふる哉

二木の葉皆庵紅にくゝるとて霜の跡にも置きまさる哉　興風

三思草消る物とは知り乍今朝しもおきて何にきつらむ

四真菰刈堀江に浮てぬる鴨の今宵の霜にいかに侘ぶ覧　おとくろ

五天雲のよそに雁音聞しよりはだれ雪ふり寒くし此夜は

六笹の葉に置ぬる霜の寒ければしみはしつ共色に出めや

七更し夜の行合の霜にうてしかどなど身に寒く當らざりけむ

雪

八山のかひそこも見えず一昨日も昨日もけふも雪の降れゝば

九足曳の山路も知ず白樫の枝にも葉にも雪の降れゝば

一〇降しけば數なく溜る白雪の何をうしとか下に消ゆ覧

一一松の上に降掩ふ雪は鷹鶴の千代の緑りに変らざる見

一二降雪は枝に暫しも溜らなむ花も紅葉も絶て無きまは

一三夜を寒み朝戸を明て出見れば庭もはだらに雪は降つゝ

一四時知ぬ山は富士の嶺いつとてか鹿子斑に雪のふる覧

一五大空に降白雪の土に落ちばけぬべき戀も我はする哉

一六槇の上に降置ける雪の屢も思ほゆるかもさよと〳〵我せこ

一七天きりて雪もふらなむ岩代のこのいはゝに降まくもみむ

一八大内の眞柚の原に降雪は痛くな降そ妹も逢はなくに

一九消えつゝも猶ふる物は人戀ふる我が魂と雪と也けり　麿

人

二〇逢ぬ夜の降白雪と積りなば我さへ共にけぬべき物を

二一白山にふる白雪のこぞの上に今年も積る戀もする哉

二二空にしる人はあらじな白雪の消えて物思ふわが心哉

二三雷の上にふるはつ雪の朝氷とけずも見ゆる日が心か

二四白雪のふりしく時は足曳の山した風に花ぞ散りける

二五夜ならば花とや見ましわが宿の庭白妙にふれる白雪

二六冬ごもり思隠ぬる木のまより花と見る迄雪は降つゝ

二七梅が枝に降置ける雪は春近みめの打附に花かとぞみる

二八白妙に雪のふれゝば小松原色の緑もかくろへにけり

二九消やらず雪は暫も止らなむ憂き事繁き我に代りて

三〇花と見る雪の今しも降しくは春近くなる年の常かも

三一春こねど草木に花の咲くことは降白雪の懸る也けり

三二木間より花に紛ひて降雪は春くる迄は花かとぞ見る

三三物ごとに降のみ隠す雪なれど水には色も殘らざり鳧

三四君まさば寒さも知じ三吉野の山に雪は降とも

三五黒髪の白く成行く身にしあれば先初雪を哀とぞ思ふ

三六白雪の降て積れる山里は住む人さへや思ひ消ゆらむ

三七搔暮しふる白雪の下消えに戀失せぬとや人の雛面き

三八下消の雪間を見れば冬ながら春のけ近き心ち哉すれ

三九三吉野の山の白雪ふみ分て入にし人の音づれもせぬ

三〇このふるは梅の花也冬ながら君が匂に春はきにけり

三一何せむに袖に白雪懸るとも止て別れぬ幣とせなくに

三二忘ては夢かとぞ思ふ思ひきや雪踏分て君を見むとは

三三花の色に雪は交りて見ぜ共香をだに盗め人の知べく

三四浦近くふりくる雪は白波の末の松山越すかとぞ見る

三五白雪の所も分ずふりしけば巌にも咲く花かとぞみる

左大臣橘諸兄

三六高山の巌に生ふるすがの根のねも白妙にふれる白雪

三七雪を置て梅の花乞ひそ足引の山片かけて家居せる君

三八梅の花枝にかさくと見る迄に風に亂れて雪ぞ降ける

三九掻たれて降白雪の君ならばあな珍しと云はまし物を

四〇思へ共身をし分けねば目枯せぬ雪のさむるぞ我心なる

四一來ぬ人を松の葉にふる白雪の消こそ返れ戀ふる思に

四二岩の上の松の梢に降雪はいそ返りふれ後迄でも見む

四三道も有じ爭でか行かむ白雪の降掩ふ竹の夜も更に皃

四四雪ふれば冬籠せる草も木も春に知られぬ花ぞ咲ける

四五降雪や花とは咲て頼めけむなどかみのよく成がてにける

四六雪降て人も通はぬ道なれや跡はかもなく思消ゆらむ

四七冬乍空より花の散くるは雲のあなたは春にや有覧

四八朝ばらけ有明の月と見る迄に吉野の里にふれる白雪

四九けぬが上に又も降しけ春霞立なばみ雪稀にこそ見め

五〇松の上に懸れる雪の是を赴冬の花とは云べかりけれ

五一年深く降つむ雪を見る時ぞ富士の高嶺に住心地する

五二梅が香の降置る雪に移りせば誰かは物をわきて折まし

五三雪ふれば木毎に花ぞ咲にける孰を海と分きて折まし

五四夕暮は衣手さむし三吉野の高きみ山にみ雪ふるらし

五五消果る時し無ければ越路なる白山の名は雪にぞ有ける

赤人

五六我せこに見せむと思し梅花其とも見えず雪のふれゝば

五七年ふれど色も變らぬ松が枝に懸れる雪を花かとぞ見る

五八夕されば衣手寒し高圓の山の木ごとに雪ぞふるらし

五九我せこを今朝か〳〵と出みれば泡雪ふれり庭もほどろに

六〇足引の山に白きはわが宿に昨日の暮にふりし雪かも

六一ふな縣の軒に降覆ふ白雪のいちじるくしも戀む我かも

六二霜枯の枝もなむびそ白雪の消ぬ限は花とこそみれ

六三かつ消えて空に亂るゝ泡雪は物思ふ人の心なるらし

六四新玉の年を渡りて有るが上に降つむ雪の消えぬ白山

六五心置て見ばこそわかめ白雪も眺か花の散に違へる

六六押なべて雪のふれゝば我宿の松を尋ねて訪人もなし

六七山近み珍しげなく降雪の白くやならむ年つもりなば

六八降雪はかつぞ消ぬらし足引の山の瀧つせ磐まさる也

六九笹の上に降つむ雪の末を重み本くたち行く我が心哉

七〇月夜には花とぞ見つる竹の葉に降しく雪を誰か拂はむ

七一巻もくの檜原も未だ曇らねば小松が末に泡雪ぞふる

七二泡雪はさはな降そ白妙の袖巻干さむ人も有なくに

七三笹の葉にはだれ降覆ひなばかも忘むと云へば増て思ほゆ

七四一目見し人に戀らく朝霧の降くる雪のけぬべく思ほゆ

七五我せこがと美しみ出行けば裳引も知ず雪な降そも

七六梅花其とも見えず降雪のいちじるけむな眞使やらば

七七蟹小舟とませの野べに降雪のけ長く思し君が音すれ

八〇年月の過行くれば草も木も老こそすらし白く見ゆれば

霰

八一かき曇り霰降しけ白玉をしける庭とも人の見るべく

八二霰ふり玉とは見れど拾置て心の如くぬかばけぬべし

八三我袖に霰たばしる巻返しけだしてあらむ妹がみむ爲

八四霰ふり板間吹く風さむき夜にはたや今宵も我獨ねむ

八五霜の上に霰散しき彌増しにあれはまるこ年の緒長く

氷

八六堰て置し池は鏡と凍れるをみると無て年ぞへにける

八七水の面にあや吹亂る春風や池の水をけふは解くらむ

八八古河の上は氷れる我なれや下に流れて戀しかるらむ

八九氷こそ今はすらしも瀧つ瀬のたぎつ音さへは絶ぬ也

九〇天河冬は空にて凍ればや石間にたぎつ音だにもせぬ

九一風早み水の面に懸る増鏡曇り渡らむ物にやはあらぬ

九二冬の池に住む鴛鳥のつれもなく氷の下を我は通はむ

九三泣つめし冬の涙は凍りにき溶む春日は身もや流れむ

九四涙川みなぐ計りの淵はあれど氷解けねば影は動かず

九五朝日さす片山かげの板間にもてのうち塞き氷とかなむ

火

九六世と共に燃ゆく富士の山よりも絶ぬ思は我ぞ優れる

九七見渡せば明石の浦に燃る火のほにぞ出ぬる妹に戀らく

九八我宿の霜夜の風を寒みこそ爨の焚火をよそに眺むれ

七五人を思ふ心のおきは身をそやく煙立とは見えぬ物から
八五御垣守衛士の焚火の昼は絶え夜は燃つゝ物を社思へ
九五夏くれば宿にふすぶる蚊遣火のいつ迄我身下燃にせむ
〇六足引の山田もるをのをぐかびの下焦れのみ我戀をらむ
一六徒に螢のともせる漁火のほにか出なむ我した思ふを
二六藻鹽燒あまくらめやと待程にあなけぶ須磨の浦に焚火や
三六難波女の小屋に夜更て螢の焚く忍びにだにも逢由もがな
四六折々にうちて焚火の煙あらば心ぎすかな忍べとぞ思ふ
五六人戀る涙は春ぞぬるみける絶ぬ思のわかすなるべし

煙

六六伊勢の蜑の鹽やく煙風を痛み思はぬ方に靡きにけり
七六いつ〳〵てか我が戀ざらむ千早振淺間の山は煙たゆ共
八六地にたく煙ぞ立ちて大空の光をかくす雲となるめる
九六富士のねのならぬ思に燃えばもえ神だにけたぬ空し煙は
〇七枯ぬ身を燃ゆと聞く共いかにせむけち社知ね水ならぬ身は
一七住の江の松の煙は世と共に波の中にぞ滅ず〻べらなる
二七果は身の富士の山とも成ぬるか燃る歎の煙絶えねば
三七袖ぬれて螢の焚く火は燃ねばや雲と煙の立昇るらむ
四七須磨の浦の汐やく煙風を痛み立ちは昇らで山に靡く

塵

五七風の上に在か定めぬ塵の身は行方も知ず成ぬべら也
六七掃たむる塵の數にも思はぬを埋もる事の怪しとぞ見る
七七積ては山に成てふ物なれどうくも有哉塵ひぢの身は
八七我なまは床の塵とも惑ふらむ宵々荒く拂はざらなむ
九七知と云へば枕だにせで寢し物を塵ならぬ名の空に立覽

鳴神

〇八大君は神にしませば天雲のみかづちが上に庵すらしも
一八天雲をほろに踏みあたし鳴神もけふに優りて畏けやも
二八天の原踏み轟かし鳴神も思ふ中をばさくるものかは
三八千早振神にもあらぬわが中の雲居遙になりまさる哉
四八天原鳴神いかに思ふらむ今日は身をしる雨と社ふれ
五八詠めして經ればなるべし天つ空神も心の空になりつゝ
六八天雲の八重雲がくれ鳴神の音にのみやは聞渡りなむ
七八あふ事は雲居遙に鳴神の音に聞きつゝ戀やわたらむ
八八天雲の近く光りて鳴神の見れば恐ろし見ねば戀しも
九八あだ人の心は空の神なれや雲居にのみもなり増る哉

稻妻

〇九秋の田の穗の上てらす稻妻の光のまにも君ぞ戀しき
一九電の光の間にゝ忘れじと云ひしは人のとにぞ有ける
二九待ちかねて心あかねば稻妻の光にのみぞ驚かれける
三九稻妻はかげろふ計有し時秋のたのみは人しりにけり
四九共にぬる物とはなしに稻妻の秋のたのみを空に立らむ
五九足引の山田を植て稻妻の共に秋にはあはむとぞ思ふ
六九朝露の奥手の稻は稻妻をこふと濡てや乾かざるらむ

かげろふ

七九世中と思ひし物を陽炎のあるか無かの世に社有けれ
八九陽炎の其かあらぬか春雨の降日と見れば袖ぞ濡ぬる
九九陽炎のさやに社みめぬれば玉の夜の一めは戀しかり鳧
〇〇陽炎の一めからにや怪しくも面忘れせぬ妹にも有哉
一〇陽炎の一め計はほのめきて來ぬ夜數多に成にける哉
二〇あると見て頼むぞ難き陽炎のいつも知ぬ身とは知々
三〇陽炎の仄めく影を見てしより誰とも知ぬ戀もする哉
四〇徒然の春日にまがふ陽炎の影見しよりぞ人は戀しき
五〇手に取れど絶て取られぬ陽炎の移ろひ易き君が心よ

古今和歌六帖第二

山　人まろ

六〇大己貴少彦名の作りたる妹背の山をみるはしもよし
七〇み室のや其山中に子等が手を卷向山はつぎて宜しも

人まろ

八〇岩が根のこゞしき山に入初て山懷しみ出がてぬかも

人まろ

九〇かね山のしたびが下に鳴蛙聲だに聞かば何か歎かむ
一〇住保山をよそに見しかどけふ見れば山懷しみ風な吹そも
一一名草山事にし有けり我戀はちへに一重も慰まなくに

をだのことぬし

一二槇葉のしなふせの山忍ばずて我越くれば木葉知けむ

大伴郎女

一三我せこが入さの山の山あらゞぎ手な取觸そ香も優るがに

石河郎女

一四我せこをこせの山と人は云ど君しませば山の名なりし
一五駿河なる宇津のお山の現にも夢にも見ねに人の戀しき
一六鹿鳥なるつくまの山のつくゞゝと我身一に戀を積哉
一七大原や小鹽の山の小松原はや木高かれ千世の蔭みじ
一八瀧の上のみ船の山にゐる雲の常ならむとは誰か頼まむ

忠岑

一九君が代に逢坂山の岩清水木蔭れたりと思ひけるかな
〇二三吉野のよし野の山は百年の雪のみつもる所也けり
二二菅原や伏見の暮に見渡せば霞にまがふをはつ瀬の山
二二白山に雪ふりぬれば跡絶えて今は越路に人も通はず
二三妻隱すやの〳〵神山露霜に匂初ひらし散らまくをしみ
二四東路のさやの中山さやかにも見ぬ人故に戀やわたらむ
二五美作や久米の皿山さら〳〵に我名はたてじ萬代迄に

たちなの皐女

二六雲の上に雁ぞ鳴なる畝傍山み垣の原に紅葉すらしも

詠人しらず

二七しなが鳥ゐな野を行けば有馬山霧立渡り明ぬ此夜は
二八矢田の野の淺茅色づくあらち山峯の泡雪寒ぐ有らし
二九飛鳥川紅葉ながるゝ葛城や山には今ぞしぐれふるらし
〇〇鳴神の音にのみ聞く巻もくの檜原の山を今日見つる哉
一〇逸著く時雨のふれば筑紫なるおほの〳〵山も移ひに鳧
二〇世をうしと厭し人は神なびの三室の山に入にけるかも
三〇武士の立といふなる鈴鹿山ならひ方社聞かま欲けれ

かこの山の花子

三一風吹けば沖つ白浪立田山夜はにや君が獨り行くらむ
三二古の事は知らぬを我見ても久しくなりぬ天のかご山

たけちの黒人

三三吾妹子にゐな野は見せつ名次山角の松原いつしか行かむ
三四あふとを遠江なる高師山焚かじや胸にもゆる思ひは
三五隱らくのとませの山の山際にいざよふ雲は妹にかも有む
三六増鏡みな淵山はけふもかも白露置きて紅葉ちるらし
三七ぬば玉の黒髪山を朝越て木の下露に濡にけるかも
三八夏衣かたしき山の郭公なく聲しげくなりまさるなり

いちはらの大君

三九踏山何そは有て有かひは來ても止らぬ名に社有けれ
四〇しのぶ山忍びて通ふ道もがな人の心の奥もみるべく
四一水無月の名越の山の呼子鳥おほ幣にのみ聲の聞ゆる
四二我戀ふるみの〳〵山の一つ松契りし心今もわすれず
四三白眞弓入さの山の常磐なる命かあやな戀てやあらむ
四四我戀はみくらの山に移してひ程無き身には偖所なし
四五津國のまちかね山の呼子鳥なけど今くと云人もなし

春亭を馬くひ山を越てくるかりの使はやどりすぐ也
世中を嘆きにくゆる竈山晴れぬ思ひを何しそめけむ
栞して行かまし物を曾津山君にし非ねば猶ぞ戀しき
岩手出いはで乍らに身の果てば思ひとを誰か告まし
小倉山峯踏馴し來にしかば今日は何とも思ほえぬ哉
人まろ
伊勢
三輪の山いかに待見む年ふ共尋る人も有じと思へば
貫之
昔羽山音に聞きつゝ逢坂の關のこなたに年をふる哉
後瀬山後も逢見むと思へばぞ死べき物をけふ迄もふる
素性
銚山山かき曇り時雨るれど紅葉は猶も照增りけり
大葉山霞たなびき風吹きて我舟とめむ泊りしらずも
倉橋の山の雪にもまづ人先に身のふりぬ覽
墨染のくらぶの山に入し人戀ふ〳〵も歸りきなゝむ
きせん法師
我宿は都の巽しかぞすむ世を宇治山と人は云ふらむ
陸奥のあふ隈川のあなたにや入忘すの山はさかしき
片時も見ねば戀しき大江山歎こらする人はよさかは
春きぬと今は伊吹の山べにもまだしかりけり鶯の聲
就こにぞ有りと聞しはいはた山君が心のなれる也鳥
昔わがかどにしてし比叡の山心弱くは歸る物かは
我爲に何のあたごの山なれや戀しと思ふ人の入らむ
世をうしと思入れ共赤はたの山は身を祉隱ざりけれ
恨みても驗なけれど信濃なる淺間の山の淺まじや君
いつからか調べの聲の絕にけむ琴引山の君の聞えぬ
衣手の色まさりつゝ信濃なる位の山は君がまに〳〵
雨はふる道はまよひぬ山科の笠取山や就こなるらむ
昔みし人をぞ今は忘れ行くやふくろ山の麓ばかりに
驗無き物ならなくに足柄の山の山菅やまず戀しき
粟田山こゆともこゆと思へ共猶逢坂は遙けかりけり
稻荷山杉の村立おしなべて木の本毎にくる由もがな
都より西にありてふかまど山煙たえせぬ戀もする哉
千早振神がき山の榊葉は時雨に色もまさらざりけり
雨ふれば三笠の山の木の本に濡ぬ庵もなしと社きけ
津の國の生田の山のいく度かわが徒に行き返るらむ
人心ふらちの山になる時ぞ契り越路の道はくやしき
つらしとて諸葉の山に隱るとも我山彥に成て尋ねむ
下野やふたらの山の二心ありける人を賴みけるかな
我をのみいはせの山にこる歎悔しと燃ぬ日ぞ無りける
蟲麻呂
富士の嶺を高みかしこみ天雲もい去り憚り靈く物を
なべてしも色變らねば常磐なる山には秋も知れざり鳧
斯ばかり移ろふ色のうけれやや錦立田の山と云らむ
伊勢
みても思ひみずても思ふ大方は我身一つぬ物思の山
貫之
倉部山暗しと名にはたてれ共妹許さいはゞ夜も越なむ
しとみ山嵐の風の寒ければ風には常になきて紅ふれ
我戀は大江の山の秋風の吹てし空の聲にぞありける
別ては伊倉の山を越ぬれば逢事かたく成もてくらす
業平
大原や小野の山も今日しこそ神代のとも思出づらめ
秋の夜の月の光し清ければ箱根の山の內さへぞ照る
紀のよしもち
紅葉せぬ常磐の山は吹風の音にや秋を聞き渡るらむ
宗于朝臣
梓弓入さの山は秋霧のあたるごとにや色まさるらむ
三原のおほきみ
白露はうつしなり鳧水鳥の音羽の山の色附く見れば
石上乙麻呂
雨ふらばきむと思し笠の山人になきせそ濡ば濡とも
人麻呂
山どり
雲のゐる遠山鳥のよそにても有とし聞けば侘つゝぞゐる
足引の山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をわが獨ねる
秋風の吹きよるごとに山鳥の獨しぬれば物ぞ悲しき
夕されば君を待乳の山鳥の泣々ぬるを立もきかなむ
藤原後蔭
花のちることや悲しき春霞立田の山のやま鳥のこゑ
猿
足引の山の絕間に妻こふと鹿にもまさる聲聞ゆなり
躬恒
侘しらに猿な啼そ足引の山のかひある今日にやは非ぬ
心あらば三度二度なく聲を物思ふ人に聞せざらなむ
鹿
夏野行小鹿の角の束の間もみねば戀しき君にも有哉
鳴鹿の聲うらぶれぬ時は今秋とや云はむ萩の花さく
妹にわがうら戀をれば足引の山下とよみ鹿ぞ鳴なる
高山の嶺行鹿の友を多み袖ふりこねを忘ると思ふな
さを鹿の妻をしのぶと鳴聲のいたらむ限り靡け萩原
朝道のふる道分けてなく鹿の立別れにし妻や戀しき
伊勢
秋山に妻なき鹿の年をへてなぞや生きてのかひよとぞ鳴
さだぶ
春の野の繁き草葉の妻戀になぞ我戀のかひよとぞ鳴
此頃の秋の朝げに霧がくれ妻よぶ鹿の音のさびしさ
友則
誰聞けと聲高砂にさを鹿の長々し夜をなき明すらむ
濡衣を干さを鹿の聲きけばいつかひよとぞ啼渡ける
貫之
鳴く鹿は妻ぞ戀ふらし草枕旅行く人に聲なきかせそ
心しも通はじ物を山近く鹿の音きけばまさるわが戀
狩くれば萩は散ぬとさを鹿の鳴なる聲もうらぶれに鳧
人麻呂
足引の山よりきけばさを鹿の妻呼聲も且聞かましを
さを鹿の朝ふす小野の秋萩を折れぬ許も置ける白露
秋萩に柵かけてなく鹿の聲きゝつゝや山田もるらむ
おぼつかな小倉の山に鳴鹿の聲高くとも誰か知べき
虎
虎に乘りふるやを越て青淵に鮫取てこむ劍太刀かも
唐國の虎伏と云ふ山にだに旅には宿る物とこそきけ
淺茅生の小野の篠原いかなれば手倒の虎の臥所なる
有とても幾世かはふる唐國の虎伏野べに身をも投ゝむ
熊
荒熊の住と云なるしゝ山責て問ふ共なが名は云はじ
むさゝび
丈夫の高圓山にせめたれば里に落くるむさゝびの聲
志貴皇子
むさゝびは梢求むと足引の山のさつをに逢にける哉
山川
山川のたぎつ心をせき兼て人のきかくに歎きつる哉
戀々て逢ずなりなば山川の人も渡らぬ瀨とや成なむ
わび人の袖をやかれる山河の涙のごとも落る瀧かな

三さを鹿の爪だにひぢぬ山川の淺ましき迄とはぬ君哉
七水増る時はふちなみ山川の瀧ならねばや音の絶せぬ
人こと計よらせよ妹よ山河の瀧雫の亂てたゆたへる君

山田

九足曳の山田作る男出ず共注連だにはへよもると知べく
C四足曳の山田にはへる占繩の秋田刈迄絶じとぞ思ふ
一四事とては誰ならなくに小山田の苗代水の中淀みする
二四刈て干す山田の稻のこき垂て音を社鳴め人は怨みじ
三四山田さへ今は作るを散花のかとは風に負せざらなむ

躬恒

四四刈て干す山田の稻を數へつゝ多くの年を積てける哉
五四遠山田守るや人目の繁ければほに社出ね忘やはする

たゞみね

六四山田すき春の種をば蒔しかど秋の時には成じとぞ思
七四山陰に作る山田の木隱れてほに出ぬ戀は苦しかり鳧
八四白露のおくての山田かり初に浮世の中を思ひねる哉

山里

九四山里も同じ浮世の中なれば所かへても住うかりけり
C五山深き宿にはあれど世と共に春の心は淺くぞ有らし
一五春くれど花も匂はぬ山里はものうかる音に鶯ぞなく
二五行宿り白雲だにも通はずば此山里はすみうからまし
三五雪のみや降ぬる鳧と思ふ山里は我も多の年ぞへにける
四五ちぬとは春をきけ共山里は待遠にこそ花は咲けれ
五五山里に住かひあるは梅花見つゝ鶯なくにぞありける
六五山里は秋こそ殊に侘しけれ鹿の鳴音に目を覺しつゝ
七五山里に知人もがな鶯のなきぬと聞かば我につぐべく
八五戸ふるみ山の里の悲しきはきてたは易く問人もなき
九五山里は冬ぞ寂しさ増りける人目も草も枯ぬと思へば

業平

C六住侘びぬ今は限りぞ山里に爪木こるべき宿求めてむ

山の井

一六淺香山影さへ見ゆる山の井の淺くは人を思ふ物かは

貫之

二六掬ぶ手の雫に濁る山の井のあかでも人に別れぬる哉
三六悔くぞ汲初てける淺ければ袖のみ濡るゝ山の井の水
四六出るから別るときけば山の井の濁りしよりも侘しかり鳧
五六淺からむとをだに社恨しか絶や果つべき山の井の水

興風

六六珍らしや昔ながらの山の井は沈める影ぞ朽果にける

山びこ

七六山彦は聲の庵の無ければや思ふ〳〵と云へど答へぬ
八六つれもなき人を戀ふ〳〵て山彦の答する迄歎きつる哉

貫之

九六山彦の聲の隨に尋ねゆけば虛しき空を行きや疲れむ
C七山彦は君にぞ有らし試に我が問ひやめば音信もせず
一七四方山の山の山彦なければや我呼ぶ聲に答だにせぬ
二七逢事の山彦にして空ならば人めも我はよきぞ有まし
三七打侘てよばはむ聲に山彦の答へぬ空は有じとぞ思ふ

伊勢

四七鶯の鳴音をたねに山彦をことあり顏に求めつるかな
五七山彦のよそに答へし聲なれど言問し社嬉しかりけれ

家持

六七山彦の枏とよむまで妻ごひに鹿なく山に獨のみして
七七いづかたに我惑へとか山彦の答へし方に音信もせぬ

いはほ

八七いかならむ巖の中に住へばか世の憂事の尋來ざらむ
九七三吉野の岩切り通し行水の音には立てじ戀はしぬ共
C八天衣撫づは千年の巖をも久しき物と我が思はなくに
一八いか計り久しくも非ず天衣少女が撫づる岩ばかり也

伊勢

二八岩の上を栖にしたる蘆鶴は世を長閑にも思ふべき哉

貫之

三八苦ながら生ふる巖は久しくて君に比ぶる心あるかな

峯

四八しがらきの峯立ち隱す寒霞はれずも物を思ふ頃かな

躬恒

五八白雲の絶ず靉く峯にだに住めば住ぬる世に社有けれ

貫之

六八秋風の吹きにし日より音羽山峯の梢も色づきにけり

谷

七八鳥の音も聞えぬ谷の埋木はわが人しれぬ歎なりけり

深養父

八八光待つ谷には春もよそなれば咲てとく散る物思もなし
九八淺香山麓の谷し深ければ我物思ひは晴るゝ世もなし

そま

C九宮木挽あづさの杣にたつ民のやむ時もなく戀渡る哉
一九筏おろす杣山川の水馴棹さしてくれどもあはぬ君哉

二九杣山にたつ杉くれの面なく人に引るゝ君は頼まじ
三九槇柱造る杣人いさゝめのかりほの爲と思ひけむやは
四九宮木挽いづみの杣に立民のやむ時もなし我戀らくは

をのゝえ

五九斧の柄は朽なば又もすげ替む浮世中に返らずもがな

友則

六九故郷は見し如も非ず斧の柄の朽し所ぞ戀しかりける
七九富士の山歎きこるてふ斧の柄の程々しくも成し程哉

炭竈

八九谷深く燒く炭竈の煙だに峯のくもとはならぬ物かは
九九常磐木を納炭かまにこりくべて絶し煙の空に立なば
C〇詠めつゝ世に炭竈の我心思ひ下にもゆとも誰か知べき

まとの左大臣

一〇人めだに見えぬ山ぢに立雲を誰炭竈の煙と云ふらむ

關

二〇八雲立出雲國のてまの關いかなるてまに君さはる寛
三〇まて暫し人知りみむや我背子を留め兼てぞてまと名附し
四〇逢とを苗代水に任せては越さむ越さじは小山田の關
五〇河口の關のあら垣守れども出て我寢ぬしのび〳〵に
六〇河口の關の荒垣いかなれば夜の通ひを許さゝるらむ
七〇立寄らば影ふむ計近き間に逢見ぬ關を誰かすゑけむ
八〇あかご關まのこ島の關の固めてし妹が心は疑もなし

原

九〇上野やいちしの原の著るく我と見えて人に知らるな
C〇君がきる三笠の原にゐる雲の絶えて別る、戀もする哉
一〇朝日さす淺茅が原の霜よりも消て戀しき古き言の葉

山上憶良

二〇名にし負へば哉も悲し朝々撫て育しゝうなゐ子が原
三〇戀しくば三方の原を出て見むまた朝顏の花は咲やと

岡

四〇秋風の日毎に吹けば水莖の岡の木葉も色づきにけり

枇杷左大臣

五〇みこし岡幾十の世々に年をへてけふの幸を待て過覽
六〇陸奥にありと云ふなる片戀の岡を我身にそふる頃哉
七〇君が代も我よも知す岩代の岡の萱ねをいざ結びてむ
八〇陸奥の郡國の岡の熊つゞらつゞらし妹をけふぞ知ぬる
九〇足曳の山なし岡に行水の絶えすぞ君を戀ひ渡るべき
C一〇舟岡のともべに立てる白雲の立別るゝも哀とぞ思ふ

二逢ぬ身をうしやの岡に狩はすれど名なだに立たり鳥にも有哉
もり　小野小町

二大荒木の森の下草老ぬれば駒もすさめず刈人もなし

三人知ぬ思駿河の國にこそ身をこがらしの森は有けれ
紀のらう女

二山城のいはたの森の柞原云はねど秋は色づきにけり

二和泉なる信太の森の楠木のうちへに別て物をこそ思へ

二君戀ふと我こそ胸を木枯の森とはなしに蔭に成つゝ

二吹風に靡きもせなむ思ふと我にいはせの森のした草

八最早も鳴ぬ雁かこがの森木に這ふ蔦も紅葉敢なくに

二思ふこと何をか更にみ山なるしげりの森を我と知らなむ

〇三妹が家に生由の森の森の花今こむ春も斯こそは見め

一二聞からにもゆる思ひは山城の岩田の杜になく喚子鳥

二三片戀の森の言の葉散ぬれど思ひの山の松ぞかはらぬ

二三立田山立なば君が名を惜み岩瀬の杜の云じとぞ思ふ

二四且見つゝいはねの森に住鶯は時を知すや鳴渡るらむ

二五つらきをも岩根の森の下に生ち草の袂ぞ露けかりける
いべのおとくろまろ

二六我門のわさ田も未刈上げねば雁て移ろふ神なびの森
貫之

二七神無月時雨に染むる紅葉ばを錦に織れる神なびの森
躬恒

二八人につく便だになし大荒木の森の下なる草の身なれば
たゞみね

二九大荒木の杜の草とや成にけむ假に來て訪ふ人の無哉
社

〇〇ゆふ懸て祈る三室の神寂て祟るにしあればぞ衆つる

一一千早振神の忌垣も越ぬべし今は我身の惜からなくに

一二我見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松幾世經ぬらむ
讀人知らず

一三千早振加茂の社のゆふ榊一日も君をかけぬ日はなし
家持

一四天地の神をねぎつゝ我戀ふる君に必ず逢ざらむやは

一五古の神の御代より逢ひけらし今の心もとこ忘れず

一六千早振神なび山のもみぢ葉に思はかけじ移ろふ物を

一七まさきもくの宍師の山の山人と人も見るがね山蔓せよ
人まろ

一八忌垣して守る社の紅葉もしめをば越えて散てふ物を

一九石上ふるの社の杉むらの思ひすぐべき君ならなくに

〇五神つ代の忌垣にはへる諸葛此方彼方にむけて社みれ
春の田

一七木芽はる春の荒田を打返し思ひ止みにし人ぞ戀しき

〇八荒小田を粗鋤返し〳〵ても見てこそやまめ人の心を
貫之

一八忘らるゝ時し無れば春の田の返す〳〵ぞ人は戀しき

二一春の田を人にまかせて我は唯花に心をつくる頃かな

二二足曳の山の櫻の花見てぞをちかた人は種はまきける
以上三首貫之

二三おり立てば身社ぼつれ春の田の文かくとも今はやめてむ
人まろ
夏の田

二四我妹子が赤裳濡つゝ植る田を刈て納めむ倉なしの濱
貫之

二五時過ば早田も痛く老ぬべし雨にも田子は障ざらなむ
秋の田

二六秋の田の穂に出ぬれば打群て里遠みより雁ぞきにける

二七雲隱鳴なる雁の行てゐる浮田の穂向き繁くしぞ思ふ

二八秋の田の穂に社人を戀ざらめなどか心に忘しもせむ
いはひめのきさき

二九秋の田のほのへきりあふ朝霞孰れの方に我戀やまむ
躬恒

三〇獨して物をぞ思ふ秋の田の稻葉のそよと云人もなし
素性

三一人心今は秋田のほどなれば稻葉の露の思ひけぬべし

三二秋の田の穂並押分け置露の消もしなゝむ戀て逢すば

三三我門の早田も未だ刈上ぬに今朝吹風に雁はきにけり
ほづみのわうじ

三四秋の田のほむけのますら片寄に君が寄なば心ちよく寢
冬田

三五秋果て人も手觸ぬひつぢほの我心もて生ひ出るなり

三六心もて生る山田のひつぢほは君守らねど刈人もなし
かりほ

三七秋田刈かりほを見つゝこきくれば衣手寒し露置に鬼
躬恒

三八み山田の奥手の稻を干佗て守るかりほに幾夜經ぬ寢
貫之

〇〇假ほにて久しくへに鳧秋風にわさ田雁音早も鳴かなむ

一一秋萩を假ほに造り庵して有るらむ君と見る由もがな

一二東路の里の遠さも有なくにうまや〳〵と君をまつ哉
春の田

一三木芽はる春の荒田を打返し思ひ止みにし人ぞ戀しき

一四荒小田を粗鋤返し〳〵ても見てこそやまめ人の心を
貫之

一五忘らるゝ時し無れば春の田の返す〳〵ぞ人は戀しき

一六春の田を人にまかせて我は唯花に心をつくる頃かな

一七春の田を人にまかせて我は唯花に心をつくる頃かな

一八足曳の山の櫻の花見てぞをちかた人は種はまきける
以上三首貫之

一九おり立てば身社ぼつれ春の田の文かくとも今はやめてむ
人まろ
夏の田

二〇我妹子が赤裳濡つゝ植る田を刈て納めむ倉なしの濱
貫之

二一時過ば早田も痛く老ぬべし雨にも田子は障ざらなむ
秋の田

二二秋の田の穂に出ぬれば打群て里遠みより雁ぞきにける

二三雲隱鳴なる雁の行てゐる浮田の穂向き繁くしぞ思ふ

二四秋の田の穂に社人を戀ざらめなどか心に忘しもせむ
いはひめのきさき

二五秋の田のほのへきりあふ朝霞孰れの方に我戀やまむ
躬恒

二六獨して物をぞ思ふ秋の田の稻葉のそよと云人もなし
素性

二七人心今は秋田のほどなれば稻葉の露の思ひけぬべし

二八秋の田の穂並押分け置露の消もしなゝむ戀て逢すば

二九我門の早田も未だ刈上ぬに今朝吹風に雁はきにけり
ほづみのわうじ

三〇秋の田のほむけのますら片寄に君が寄なば心ちよく寢
冬田

三一秋果て人も手觸ぬひつぢほの我心もて生ひ出るなり

三二心もて生る山田のひつぢほは君守らねど刈人もなし
かりほ

三三秋田刈かりほを見つゝこきくれば衣手寒し露置に鬼
躬恒

三四み山田の奥手の稻を干佗て守るかりほに幾夜經ぬ寢
貫之

〇〇假ほにて久しくへに鳧秋風にわさ田雁音早も鳴かなむ

一一秋萩を假ほに造り庵して有るらむ君と見る由もがな

二〇たづが音の聞ゆるなべに庵して旅に有ると妹に告なむ　天智天皇
三〇秋の田のかりほの庵の苫を粗み我衣手は露に濡つゝ　忠岑
いなおほせ鳥
四〇山田もる秋のかりほに置露は稲負せ鳥の涙なりけり　人まろ
五〇我宿に稲負せ鳥の鳴なべに今朝吹風に雁は来にけり
そほづ
六〇そほづたつ山田の池は今も猶心深しな浮せはあれど
七〇秋の田にたゝむ計ぞ君戀る袖のそほづに成ぬ日はなし
八〇足曳の山田に立てるそほづ社己が頼を人にかくなれ
春の野
九〇草も木も緑に見ゆる春の野に雨降そめば色や増らむ　貫之
一〇春ふかく成ぬる時の野べ見れば草の緑も色増りけり
一一駒なべて目も春の野に変りなむ若菜摘つる人も有やと
一二中々に何逢見けむ春日野の繊くる炎をよそに見まし
一三春の野に若菜摘むと占し野の散かふ花に道惑ひぬ
一四忘らるゝ時し無れば春日野の訪日有やと待ぞ侘しき　人麻呂
夏の野
一五夏野行小鹿の角の束の間も見ねば戀しき君にも有哉
一六草茂み下繁り行夏の野をわくと分くれば袖ぞひぢぬる
秋の野
一七秋の野の亂れて咲ける花の色の千種に物を思ふ頃哉
秋の野の移ふ見れば難面て枯にし人を草葉とぞ思ふ
或裏書云此歌有二左注一云々歌但古本全非二落書一云々
又云俱素性三首之内冬歌有レ之歟可二尋決一云々
一八秋のゝくさまくを分けぬわがそでのもの思ふなべに露けかるらむ
以上つらゆき
秋ののに今こそゆかめものゝふのをとこをみなのはなにほふみに　もとかた
秋ののゝにしきのごとも見ゆるかな色無きつゆはおかじとぞ思ふ
秋ののにいかなるつゆのおけばかは千々にくさばの色かはるらむ　あさやす
秋ののにおくしらつゆは玉なれやつらぬきとむるくものいとすぢ
みつね
秋ののを分けゆくからにうつりつゝわがころも手は花のかぞする　いせ
ゆくゝとみれどもあかぬ秋ののはゆきもやられず止るともなし
秋風のふきとふきぬるむさしのはなべてくさ木のいろかはりけり　そせい
よの中のつねとはみれど秋ののゝうつろひかはるときぞわびぬる　こまちがあれ
ふゆの野
鶉がれのべとわがみを思ひせばもえてもほうをまたましものを
かやのべいともかくなるみれの上の松がえともに久しきものを　ぎふの野
冬ごもりはるのおほのをやく人はやきたられどやひとのむねやく
むさしの、草のゆかりときくからに同じのべともむつまじきかな
あふことのいなびのにすむ鹿こそはかりの人にはあはじとぞ思ふ
雑の野　素性
一九忘るやと野に出て見れば花毎に含める物は哀なり鳧
二〇はつかにも人を見まくの薄の、穂に出て今ぞ戀しかりける
二一印南野の浅茅推並さねしよのけ長くし有れば妹を社思へ　かり　家持
二二丈夫のよびたてしかばさを鹿のむな分行ぞ秋の萩原
二三印南野に狩するしたひ草茂みむ木は見えで弓の筈見ゆ
二四山遊にさちをの狙ひ悪ろしみを鹿鳴也妻のめをぼり
二五梓弓末の原野にとがりする君が弓弦の絶むと思へば　左大弁紀のいひ麻呂
二六手束弓手に取持て朝狩に君は立いぬたなくらの野に　ともし　貫之
二七五月山木の下闇にともす火は鹿の立どの知べ也けり
二八小倉山照射の松のいくそ度我鹿の音を鳴てぬらむ
二九逢とをぢしの鹿の打群てめをだに見せば射べき物を　したがふ
三〇時鳥待につけてや照射する人も山べに夜を明すらむ　わし
三一筑波嶺にかゝなく鷲の音をのみか鳴渡なむ逢とはなしに
三二しぶたにのふたかみ山にわしぞ子うむてふさしはにも君がみためにわしぞ子うむてふ
大鷹
三三やかた尾の真白の鷹を引据て君が行幸に合せつる哉
三四荒鷹の今は雲ゐに成ねばきてもやゐるぞ見するてだぬき
三五恨べき心大鷹手にすゑて狩にのみくる人やなになり
三六へをつけて山に入にし荒鷹のいとをぎ憎き空言なせそ　おちの王女
小鷹
三七庭草を鶉すむまで拂はせじ小鷹手にすゑこむ人の爲
三八狩しての程無身にも敏鷹の音ながき拂ふ物にざりける
三九つらしとも恨ざらなむ敏鷹のと返る山の椎も紅葉ず
四〇狩にても据こじとぞ思ふ敏鷹のすゝろなる名をたちも社すれ　きじ
四一年をへて返り変野の巣守兒の君にしあへば飛立ぬべし
四二春の野に朝鳴雉の妻戀に己がありかを人に知られて
四三春の野にさをぞる雉子著く鳴しもなかむ籠り妻かも
四四足曳のやつをの雉子啼とよむ朝けの姿見れば悲しも
四五春さじの鳴高圓に櫻花ちりながらふる見む人もがな
四六春の野に思ひぬ雉の一番我子は鷹におちやしぬらむ
四七ねぐらなる霜打ち拂ひ立雉の空にこそとれ人の心を
四八栗駒の山に朝立つ雉よりも我をばかりに思ひける哉
鳩
四九我を秋とふる露なれば山鳩の鳴こそ渡れ君松のえに　うづら　家持
五〇鶉なくふるき里より思へ共何ぞも妹にあふ由もなき
五一野とならば鶉と成て鳴居らむ狩にだにやは人の来ざらむ　沙彌が歌
五二鶉なく古き都の秋萩を思ふ人どち逢ひ見つるかな　大鷹狩
五三おほき鷹今としなれば大荒木の森の下草人も刈けり
五四冬草の枯は果なでしかすがに今としなれば狩にのみくる
五五霜枯に成にし野べと知ねばや偲く人の狩にきつらむ
以上業平
五六狩暮し七夕つめに宿からむ天の河原に我は来にけり
五七一年に一度きます君まてば宿かす人も有じとぞ思ふ
五八須磨の關秋萩凌ぎ駒なべて鷹狩をだにせでや別れむ　小鷹狩　持
五九思出て戀しくもあるか粟津野の小萩が原に我行し狩
六〇秋の野にかりぞ暮ぬる女郎花今宵計りの宿もかさなむ
六一狩にとて我はきつれど女郎花見るに心ぞ思附きぬる
六二花の色を久しき物と思はねば我は野山をかりに社みれ
六三百草の花は見ゆれど女郎花咲ける中にと狩暮してむ
以上貫之
六四狩にとて野べにぞ来つる鈴蟲の聲はさやけき知べ也鳧　野邊　素性
六五いざ今日は春の山べに交りなむ暮なばなげの花の蔭かは
六六春野の淺茅が上に思ふどち遊べる今日は忘られめやは
六七春霞たつ春日野を立返り我は逢ひ見むいや年のはに
六八春野に心やらむと思ふどち契し今日は暮ずる有らなむ

愛にして今日は暮さむ春の日の長き心を思ふ限りは　貫之

春くれば花見むと思ふ心社野べの霞と共に立ち隠れ

あだに社野べの花見に我がこゝろ長々し日を暮しつる哉

野べに出て見る共花の咲ざらば何に心を慰めてこむ

思ふどち春の山べに打群てそこも知らぬ旅寝してしが

百草の花の紐とく秋の野に思ひ亂れむ人なとがめそ

秋の野は道も行れずともすれば花のあたりに目のみ止りて

宮人のかざすは知にき女郎花誰こと問はゝ如何答へむ

狩にとて來べかり鳥や秋の野の花見程に日は暮に鳧

紅葉見に君に後れて終日に思はぬ山を思ひつるかな

限なく我思人の行野べは色や散さめに咲花ぞ咲きける

秋風は涼しく成ぬ駒なべていざ野に行かむ萩の花見に　山上億良

秋の野に咲たる花を手に折てかき數ふれば七草の花

萩の花尾花くず花なでしこの花女郎花また藤ばかま

朝がほの花　みゆき

古郷は吉野の山し近ければ一日もみ雪降ぬ日はなし

玉津島入江の小松老にけり古き行幸のよや間はまし　海の上女王

梓弓つまひくよどの遠とにも君が行幸を聞が嬉しさ

左大臣橘朝臣

葎はふ賤しき宿も大君の行幸としらば玉しかましを

右大辨八束

松蔭の清き濱べに玉しかば君きませむか清き濱べに

白崎に行幸かくあらば大舟に眞楫しげぬき又返みむ

大君の行幸の儘に我せこが手枕まかす月ぞへにける　芹川に行幸し給ふときに　行平中納言

さがの山行幸ふりしに芹川の野べの古道跡は有けり　讀人知らず

小浪や志賀の辛崎行幸して大宮人のふねよそひせり　都

大君は神にしませば水鳥のすだくみ沼を都になしつ

石上ふりにし奈良の都にも色は變らず花咲きにけり　素性

見渡せば柳櫻をこきまぜて都は春のにしきなりけり

山隠す霞ぞ春は恨めしきいづれ都のさかひなるらむ　大伴のよつ繩

藤浪の花は盛になりにけり奈良の都を思ほすや君

いつしかも都に行きて武隈の松を見つとも人に語らむ

都人いかにと問はゝ山高み晴ぬ雲居にわぶと答へよ

都路を遠みや妹が此頃は肯びてぬれど夢に見えこぬ　紀の女王

渡つみは都辱りていにけらし世を宇治山の神もみなくに　伊勢

けにし身に又もけぬべし春霞霞める方を都と思へば　太宰帥小野老朝臣

青によし奈良の都は咲花の匂ふが如く今さかりなり　業平

都どり

名にし負はゝいざ言問む都鳥我思人は有や無しやと

珍しく鳴も來たるか都鳥いづれの空に年をへぬらむ

侘人の住經る宿は都鳥ことづて絶えて年ぞへにける　乙麿

舟ぎはふ堀江の河のみなぎるつゝ鳴は都鳥かももゝしき　人麿

百敷の大宮人は多けれど我思ふ人はとにぞありける　伊勢

山川の音にのみ聞く百敷を見はや乍ら見由もがな　おなじ

白露は置替はれども百敷のうつろふ秋は物ぞ悲しき　亭子の帝

別るれど相も思はぬ百敷をみざらむとや何か悲しき　人麿

百敷の大宮人はあめつちと月日とともに萬代にがも

百敷の大宮人の玉鉾の道にもいでず（屋作）こふるこの頃　中納言石川のとしたり

天地もいほつ綱はふ萬代に國知られむといほつ綱はふ　人麿

山城の木幡の森に馬は有れど思ふが爲は歩みてぞくる

敷島の大和國に人は二人ありとし思はゞ何か歎かむ

河内のや片しき山の片敷に雪か花かと浪ぞ寄せくる

津の國の蘆の八重葺ひまをなみ戀しき人に逢ぬ比哉

戀せむとなれる三河の八橋のくも手に物を思ふ頃哉

遠江いなさ細江の澪標我をたのめてあらせしものを

年ふれば駿河なるてふど濱の疎くのみなど成增覽

甲斐國つるの郡のいたのなる白玉小菅笠にぬひけむ

武藏野の草葉もろむきこも斯も君が隨に我は寄にき

常陸なる淺香の浦の玉藻刈引けば根絶れ我は絶せじ

近江の海夕なみ千鳥なが鳴けば心も篠に戀ぞ昔思はゆ　黒主

みの山に茂り重なる玉柏豊のあかりに逢ふが樂しさ　紀の女王

飛驒工ふかぬ板間も有物をいつの露ぞや袖にもりつゝ

信濃なる千曲の川のさゝれ石君しふみては玉と拾はむ

上毛のさのゝくゝ立折はやし我は待む君今年こず共　忠岑

陸奥にありと云なる名取川無名とりては苦しかり鳧

いで羽なる青との關のすみだ川流ても見む水や濁ると

若狹なる後瀬の山の後も逢む吾思ふ人にけふならず共

たにはぢや大江の山のさね葛絶む物とは我思なくに

但馬なる雪の白濱もろよせに思し物を一重とや見む

立別れ因幡の山の峯に生ふる松とし聞かば今返來む　人麿

石見のや高角山の樹間より我袖振るを妹見つらむや

播磨なる生田の浦に世を盡す蟹の釣舟うかりけなど　黒主

ま金ふくきびの中山帶にせる細谷川の音のさやけや

周防なる岩國山を越む日は手向よくせよあらし其道

長門なる沖つ借島奥まへて我思ふ人は千歳にもがも

紀國の堺の浦を見渡せば蟹のともしび渡間よりみゆ　人麿

百つちの八十の島なば漕くれど淡路の島を見れど飽ぬかも

豊國の鏡の山に岩戸たて籠りにけらし待てどきまさず

吾爲につらき心は大隅のけしきの森のさもしるき哉　郡

和泉なるひねの郡の終日に戀てぞ暮す君が知るらむ　在原のしげはる

君がため命甲斐へぞ我は行くつるの郡の齢うるなり　里

大原の古りにし里に君を置て我寢覺つ夢に見えつゝ

いざ爰に我世はへなむ菅原や伏見の里の荒せくも惜し　伊勢

久方の月の桂の里なれば光をのみぞたのむべらなる　業平

今ぞ知る苦しき物と人待む里をばかれず訪べかり鳧

一ア遅く出る月にも有哉山端のあなたの里も惜むなるべし
二オ夏夜は月にぞ飽ぬ山の端のあなたの里に住べかり鳧
伊勢

故郷にあらぬ物から我爲に人の心のあれて見ゆらむ
三ウ秋の野の移ろひ行けば萱原や伏見の里ぞ思ゆる哉
四オ東路のいさめの里は初雁のなかめを猶明すわが名ぞ
五ウ戀侘ぬ音をだになかん聲立て就れなるらむ音無の里
六ウ明日からは飛鳥の里を出ていなば君があたりを見すや成なむ
清見原の帝

七オ我宿に大雪ふれり大原や奮にし里にふらまくはをし
八ウ家人に戀ひすあらめや蛙なく泉の里に年のへぬれば
石川のひろなり
九オ故郷
一〇ウ駒なべていざ見に行む故郷は雪とのみ社花は散らめ
貫之

一オ見し如も非ずも有哉故郷は花の色のみ褪せずぞ有ける
伊勢

二ウ散り散ず聞まほしきを故郷の花見て歸人も逢はなむ
興風

三ウきつゝのみなく鶯の故郷は散にし梅の花にざりける
式部卿あつみのみこ

四ウ獨のみ詠めて年を故郷の荒たる里をいかに見るらむ
伊勢

五オ荒にけり哀れ幾夜の宿なれや住けむ人の音信もせぬ
六オ訪人もなき宿なれどくる春は八重葎にも障らざり鳧
六ウ八重葎生ひにし宿に唐衣誰が爲にとかうつ聲のする
七オよと共に鳥の網張宿なれば身は懸らむと來人もなし
八オ菊の花茎て流るゝ水にさへ波の皺なき宿にざりける
九オ徒然と年ふる宿はぬば玉の夜も日も長く成ぬべら也
以上五首貫之

一〇オ春にさへ忘られにける宿なれば色較べき花だにぞなき
二オ我宿をさしてこざりし月だにも入ては唯に歸物かは
伊勢

三オ八重葎茂る宿には松蟲の聲よりほかに訪ふ人もなし
四オ思餘侘ぬる時は宿かれてあくがれぬべき心地社すれ
五オ我宿は雪降しきて道もなし踏分て訪ふ人しなければ
六オ我背子はきませにけらし我宿の草も靡けり露も深鳧

僧正遍昭

七オ里は荒て人は舊にし宿なれや庭も雛も秋の野らなる
八ウ露分て更にや訪はむ紅葉の降隱してし宿と見ながら
やどり

九オ足曳の山べに今はやどりせじ露も深し訪ふ人もなし
貫之

一〇オ宿りして春の山べに寢たる夜は夢の中にも花ぞ散ける
一オ就こにか宿り取らむ旭子がさすや岡べの玉笹の上に
かきほ

二オ山賤の垣根に咲ける槿は東雲ならで見るよしもなし
三オ戀しとも云人なしや山賤の垣生の花を何に折るらむ
四オ山賤の垣ほにのみや戀ひわびむ我身も人も露の命に
五オ淺茅生の野べや枯らむ山賤の垣ほの草は色も變らず
伊勢

六オなにしおはゞ長月毎に君が爲垣ねの菊は匂へとぞ思ふ（作よのいのくさのいのちかな）
人麿

七オ垣ほなる人と云へ共こま錦紐解きあやる君も無き哉
家

八オ梓弓春の山べに家ゐして我まづ聞かむうぐひすの聲
九オ春くれば鶯の音も懐しきいざ我なか就く打群て行む
貫之

一〇オ山風に香を尋ねてや梅の花匂へる宿に家ね初めけむ
躬恒

一オ妹が家のはひいりに立てる青柳に今や鳴らむ鶯の聲
二オ少女子が離るゝ髪をゆふ山の雲な隱しそ家のあたり見む
貫之

三オかへる雁我こと傳てよ草枕旅は家こそ戀しかりけれ
讀人不知

四オ人事を茂しと君を鶉なく人の古家にあひてやりつる
人麿

五オ思ふにし餘にしかば術をなみ出てぞ行し家のあたりみに
六オ妹があたり繼て見てまし大和なる大嶋峯に家も有なしを
隣
伊勢

七オ垣越に見ればかひなし櫻花根ごめに風は吹もこさなむ
八オ近ければ逢むと思に春なれど花の雪にぞ降隔つめる
九オ櫻花植て我のみ見むとやは隣ありきは人や知るとぞ
井
家持

一〇オ我宿の板井の清水里遠み人しくまねば水草おひけり

一オ大原やせが井の水を手に汲て鳥は鳴とも遊てゆかむ
讀人不知

二オ落たぎつ走井の水清ければ渡らで我は行過ぎむかも
三オ湧が如目には見ゆれど我宿の石井の清水濡增りけり
四オみつぐりの中に向へる曝井の絕ず通はむそこに妻もが
五オ武藏なる堀かねの井の底を淺み思ふ心を何に譬へむ
六オあしびなす榮し君が堀し井の岩井の水は飲めど飽ぬかも
なかき

七オ夕暮の雛は山と見えなゝむ夜は越えじと宿り取べく
八ウ夕暮のまがきに咲ける撫子の花見る時ぞ人は戀しき
深養父

九オ冬ながら春の隣の近ければ中垣よりぞ花は咲きける
貫之

一〇オ春は梅秋はまがきの菊の花己が香かくぞ哀なりける
一オ春されば卯花くたし我越し妹が垣ほは荒ゆかむかも
二オ奈良山の峯も霧あひむべしこそ雛の下に雪は滯れ
家持

三オうつたへに雛の委見ず欲み行とは妹を見に社つれ
庭

四オ思ふ人こむと知せば八重葎はびこる庭に玉敷ましを
五ウ少女子が玉藻すそひく此庭に秋風吹きて花は散つゝ
六オ荒磯海の濱にも非ぬ庭にきて數知られねば忘てぞつむ
には鳥

七オ來ぬ人を今や〳〵と終夜まつには鳥の聲のみぞする
八オ呉竹のふして寢ぬべき終夜まつには鳥の鳴明すなり
九オ雛のかけのたり尾のしだり尾の長々し夜を獨かも寢む
一〇ウ戀々て稀に今宵ぞ逢坂のゆふつけ鳥は鳴ずも有なむ
伊勢

一ウ逢坂のゆふ附鳥にあらば社人の往來を鳴つゝもみめ
二ウ誰が祓ゆふつけ鳥ぞ唐衣立田の山に立ちかへりなく
三オ曉と鳥ぞ鳴なるよしゑやし獨ぬる夜は明ばあけなむ
かど

四オ我宿は三輪の山本戀しくば訪らひきませ杉たてる門
五オ我門の前をかみしも打過て見しが如くもあらぬ君哉
六オ就こより忍入てか惑ふらむ戀は門なき物と社きけ
七オ門わさ田守るや人目の繁ければほに社出ね忘やはする
さだふん

八ウ浮世には門させりとも今更なくになどか我身の出難にする

九二世の常に我思ひをば斯計り難きみかどを又出めやは
戸　之

三〇君やこむ我や行むの休らひに槇の板戸を古鎖てねに鳥
一三風吹くと人には云て戸はさゝじ逢むと君に云てし物を
二三天の戸のさも明難く見えし哉こや夏夜の短かりける
三三行なくに我くらむかと朝戸明て哀我妹子待つゝ居らむ
四三朝戸出の君が姿をよく見ずて長き春日も戀や暮さむ
五三足曳の山櫻戸を明け置きて我待つ君を誰かとゞむる
なりくに

六三槻の戸の假初臥もしてけるが徒いねを何につまゝし
七三千早振神の忌垣も越る身は草の戸ざしに障る物かは
八三奥山の槇の板戸を押開きしるや出こね後は如何せむ
すだれ　額田のみこ

九三獨して我が戀をればわが宿の簾とほりて秋風ぞふく
一四玉垂のこすの簾の行がてにいは寢られねど君は通はず
一一我ならぬ人にや人に玉垂のみす惱みすな顯は也とも
とこ　中納言行平

二四時の間にはや慰めよ石上ふりにし床を打ち拂ふべく
勢　伊

三四渡つ海と荒にし床を今更に拂はゞ袖や泡と消えなむ
四四臥てぬる床は草葉にあらね共秋くる宵は露けかり鳥
性　素

五四臥てぬる常珍らなる君なれば今しも逢へる心地こそすれ
勢　伊

六四夢ならであふと難き世中は夫方床を起ずやあらまし
之　貫

七四けさの床露置ながら悲しきは儚ぬ夢路を戀る也けり
八四夢にても戀しき人を見つる夜は朝の床ぞ起憂かりける
むしろ

九四獨ぬる床朽ちめやは綾薦をになる迄ゝ君をば待たむ
一五春日野の青嶺が峯の苔薦たれか織りけむ經緯なしに
一五玉鉾の道ゆき疲れいな薦しきても君を見む由もがな
おきな

二五味氣なし何のまが事今更にわらは事する翁にしもて
三五白雪の八重ふりしける歸山歸る〳〵も老いにける哉
四五老らくの來むと知せば門さしてなしと答て逢はざらなん
五五渡つ海の翁も花は曝しけり春の至らぬ所なければ
行平

六五翁さび人なとがめそかり衣今日計とぞたづも鳴なる
之　貫

七五ふり初て友待つ雪はぬば玉の黒髪の又變るなりけり
八五黒髪の色ふりしける白雪の待ちつる友は疎くも有哉
九五年毎にしらがの數は增鏡みつゝぞ雪の友はましける
之　貫

一六徒に老いにけるかな高砂の松や我身のはてを語らむ
二六若菜摘む春の便に年ふれば老つむ身耐侘しかりけれ
平　業

三六賴まれぬ浮世の中を歎つゝひげに老ぬる身をいかにせむ
行　敏

四六老ぬとてなどや我身を閑ざけむ老すら今日に逢まし物か
東三條左大臣

五六甲斐が嶺を山里と見れば盧鶴の命をもたる人ぞ住ける
恒　躬

六六春にあふと思ふ心は嬉しくて今一年の老ぞへける
おむな　いしかはの郎女

七六古のおむなにしてや斯計戀に沈まむたわらはのごと
房　忠

八六落積る松を拾ひて年ふれば老の爪木と人やみるらむ
持　家

九六百年に老朽ちひそみ成ぬ共我は忘れじ戀ひは增す共
親　覺

一七垂乳根の親に任て君も我も逢とは無しに年ぞへぬべき

二七垂乳根の親の飼鷰の繭籠いぶせくも有か妹に逢ず
いへのおとくろまろ　兼輔

三七垂乳根の親の心は闇に非ねども子を思ふ道に迷ひぬる哉
四七垂乳根の親の守りと相添ふる心計りは堰きな留めそ
貫之

五七同じ色の松と竹とは垂乳根の親子久しき例なりけり
六七垂乳根の親に知せず我持たる心はよしや君が隨まに
うなゐ　讀人しらず

七七うなゐ兒が髮に振つる藤の花きる懷しく思ほゆる哉
讀人しらず

八七さね蔓今する妹がうら若み笑み〳〵怒りみさてし紐解く
九七橘のてれる長やに我ね寢しゝなゐ離りは髮上つらむ
わかいこ

一八衣手にとり滯り泣子にも優れる我を置ていかにせむ
二八且見つゝあなゐに落る綠子の惑へる戀も我はする哉
ひろかはの女王　くるま

三八戀ぐさを力車に七くるまつみてもあまるわが心かな
四八小車のまひて匂のたゝさずば錦の紐を解むとぞ思ふ
うし

五八我のうしとをうしとや思ひけむ草葉に懸る露の命を
六八足曳の大和ことひの牛なれば面白く社今日は曳けれ
うま

七八しほつ山打越ゆけば我乘れる馬ぞ蹉く家戀ふらしも
八八君戀ふといねぬ朝げにたが乘れる駒の足音我に聞する
九八ませ越に麥はむ駒のはつ〳〵に及ばぬ戀も我はする哉
一九我駒のあし掻早く雲居にも隱行かむぞ袖まく吾妹
人麿

二九遠く有て雲居に見ゆる妹が家に早く至らむ歩め黒駒
三九橘のてらの長やに一め見しうなゐは今は髮揚つらむ
四九初潮女と思ひ立田の山遠み駒に留めてをる術もなし
五九さゝ波や志賀の山路の九折くる人絶て枯やしぬらむ
六九白河に玉しけりとも見えなくに雲の林をあかしつる哉
伊　勢

七九中だには知り顏にせよ山彦も昔の聲は聞知れるらむ
かね

八九宵の鐘つかさる先に湯あみよと云てし物を耳つまなくに
笠の女郎

九九皆人を寢よとの鐘は撞なれど君をし思へばいねられぬかも
法師

一〇形こそみ山隱れの朽木なれ心は花になさばなりなむ
二〇神無月時雨計を身に添へて知らぬ山路にふるぞ悲き
貫之

三〇物越に花を折見て人知れずわびたる心色めきぬべし
四〇眺れをか有とも分かむ山伏の落る涙も淵とこそなれ

〇此みゆき千年を替てあらせばや斯る山伏時に逢べく
〇苦の袖雪げの水にすゝぎつゝ行ふ身にも戀は絶せず
〇世を厭ふ心は爰に止らなむ云でも世をばさり無き物を
〇今更に睦言のねに引き懸り苔の山路を忘れやはせむ　素性
〇世を厭ひ木の本毎に立寄りてうつぶし染の苔の衣ぞ
あさ
〇背くとて雲には乗らぬ物なれど世の憂事ぞよそに成てふ　齋院
〇波中に袖ぞ濡ぬる蚕小舟のり後れたる我身と思へば
一行舟の立も止らぬ木の下のいかなる蔭か長めかる覽

古今和歌六帖第三

水

二足引の山下とよみ行水のときぞともなく思はゆる哉　源よしの朝臣
三足引の山下水の木隠れてたぎつ心を堰きぞかねつる
四足引の山下水の下くゞり行く程知らぬ戀もするかな
五ことならば山下水となりなむ人め茂きの中も行べく
六忍ぶれど苦しきものを足曳の山下水の常にながれて
七夏の野の草下隠れ行く水の絶ぬ心ある我と知らずや
八思ふとは何をか更に岩清水心を汲みて人は知らなむ　伊勢
九春毎に流るゝ川を花と見て折られぬ水に袖や濡なむ
〇岩瀬山谷の下水打ち忍び人も見ぬ間に流れてぞふる
二沼水の波には立てゞ底深み草隠れつゝ逢ふ由もがな
三音無の山の下行くさゝら水あなかま我も思ふ心あり
三奥山の木の葉隠れに行く水の音聞しより常に忘れず　貫之
四松をのみ常磐と思へば世と共に流るゝ水も縁也けり　忠岑
三君が代に逢坂山の岩清水木隠れたりと何おもひけむ
六筑波嶺の岩も轟に落る水絶む物とは我が思はなくに　笠女郎
水鳥
七水鳥の鴨の羽色の春山のおぼつかなくも思ほゆる哉
八紅葉する秋は來に鳧水鳥の音羽の山の色づく見れば
九妹戀ふといねぬ朝げに水鳥の聲よわりゆく妹が使か
〇水鳥の浮ぶ此池の木葉落てうける心を我思はなくに　たゝみさ
一水鳥の儚き跡に年をへて通ふ計りのえにこそ有けれ
二水鳥の己が浮べる心もて淵をも瀬とや思ひなすらむ
三風吹けば淀をむつぶる水鳥の浮寝をのみやわがれ渡らむ
四人言の茂さまされば水鳥の鴨の浮寝の安けくもなし　をし
五羽の上の霜打拂ふ人もなし鴛鴦の獨寝今朝ぞ悲しき
六冬夜を寐覺て聞けば鴛鴦なく拂ひも敢ず霜や置らむ
七池に住む名を鴛鴦の水を淺み隠るとすれど顯れにけり
八鴛鴦の河べに獨なく夜しも汀のなべてさえ増るらむ
九君が名も我名も鴛の一番同江にこそ住まゝほしけれ
〇白妙の波ふみ散す鴛鴦のはかなきあとと人や待らむ　よしもち
一霜氷り心も解けぬ冬の池に夜更けてぞなく鴛の一聲　貫之
二浮ぶとも沈むともなき池水に名を鴛鴦の底にとぞ思
鴨　貫之
三洲にゐればいさごの色にまぎれに紛ふ鳥手に取計馴にける哉　躬恒
四白波のうて共立ず群ゐつゝ人にもほかも目馴たる鳥
五馴てこし沖の鴨はつげなくに後の心を誰で知けむ
六冬の夜の鴨の上毛に置霜の消て物思ふ頃にもある哉
七音に立て夜は侘てふ浮鴨の我水隠れに訪も來ないむ
八雛波江の水うき通ふあし鴨の下に通ひて哀とぞ思ふ
九草鴨の騒ぐ入江の白波の知すや人をかく戀ひむとは
〇鷹べ行鴨の羽音の音にのみ聞つゝ人を見でや止なむ　ゆはらのおほきみ
一吉野なる菜摘の川の河淀に鴨ぞなくなる山陰にして　大伴坂上郎女
二よそにゐて戀つゝあらずは君が家の池に住てふ鴨ならましを
三折りくる鴨と思ふを綾無も鴨さへ唯なみと見ゆ覽
四敷妙の枕にだにも我をなせ鴨の浮寝は苦しかりけり
五吾妹子が戀るにやあらむ沖に住鴨の浮寝の安けくもなし
六さい玉のをざさの池に鴨ぞはぎるおのが尾にふり置けるに霜を拂ふとならし　鴈
七鴈鳥の下安からぬ心にはあたりの水も凍らざりけり
八霜の上に飛かふ鴈の羽風には獨在人もいも寐ざらつゝ
九鴈鳥のおきなか河は絶ぬ共君に語らふとつきめやは
〇鴈鳥の同じ浮寝をする時は夜深き聲を共にこそ聞け
一君が名も我名も立てじ池に住鴈と云ふ鳥の下に通はむ
二逢とのみ渚によする鴈鳥のうきに沈みて物をこそ思へ
三鴈鳥のすだく池水こゝろあらば君に我戀ひ心示さね
四春の池の玉藻に遊ぶ鴈鳥の脚のいと無き戀もする哉
五鵠のみみつの堀江に住む鴈のそこは絶ずも戀渡る哉　鵜　家持
六年毎に鮎し走ればさわぐ河うやつかつけて川瀬尊む
七白河の瀬を尊ねつゝ吾背子は鵜河たゝさば心ならまし
八鵜河たち取りはむ鮎の下は絶え我に限に思し思へば　鰹
九古河の底の戀路に有と聞く鰹のかふとも聞せてしがな
〇大ゐ川井堰にふせる亀山の命のかぎり逢見てしがな
一波間より出くる鰹は萬代とわが思ふとの知べ也けり
二渡つ海の神のしまける魚故に漕ぎな疲れそ蚕の釣舟
三伊勢海に釣する蚕の魚をなみ受も引れぬ戀もする哉　鯉
四行水の下なる戀の苦しきは網の人めを謹むなりけり
五淀川の底に住ねど戀ひと云ば絶ていを社ねらたゞりけれ
ふな　たかやすの大君
六沖へ行きへにゆき今や妹が爲我砂どれるもぶし束鮒
七人知ず水の下には通へ共あふなは取じと思ひし物を
すゞき
八鰻つる吹飯の浦の蚕にもが今なき行ていへつ島みむ
九鰻釣るあまの焚火のよそにだに見ぬ人故に戀る此頃
〇荒妙の藤江の浦に鰻つる海士とか見らむ旅行く我を
鯛
一逢ふ事を阿漕の島に曳網の度重ならば人も知りなむ　鮎
二君ませば物も思ず玉河の瀬に伏す鮎のやなほこりして
三可惜夜を妹とも寐なで取難き鮎取るゝと岩の上にゐて
ひを

宇治河の瀬々に有てふ網代木に多の氷魚も侘まする哉
流くる紅葉の色の赤ければ網代に氷魚のよるも見えぬ鳧
氷魚數ふ共宇治川の網代木ならばよらじとぞ思
川
三吉野の大河水のゆほびかに非ぬ物故波のたつらむ
河の瀬に簗くを見れば玉もかも散亂たる河の常かも
水隱ていきつき餘る早河の瀬には立とも人に云むや
昔みしきさの小川を今朝見れば愈清くなりにける哉
忠岑
濁なき清瀧川の岸なれば底より咲くと見ゆる藤なみ
絕ず行飛鳥の川のゆかざらば故もあらしと人の見らくに
遠へ行くこちこせ川に誰しかも色ごり難き綠染けむ
照る月の桂の川しきよければ上下秋の紅葉をぞみる
津の國の生田の川の幾度か君を戀しと我おもふらむ
今更に更科川の流れてもうき影見せむ物ならなくに
唐衣立田の川の聲聞けば今はきぬとも思ほゆるかな
朝毎に石見の川のみを絕ず戀しき人に逢みてしがな
妹が門出入の川の瀬を早み我馬爪づく妹戀ふるかも
利根川は底は濁りてうは澄みて有ける物をまれて悔しく
むこ川のみを早みかも赤駒の足掻をゝぎ濡にける哉
ふじ川の瀬に住可も思ほえず戀しき人の影もみえねば
玉川の增らば增れまこ野のこま野のとの、舟ならなくに
淀河の淀むと人はみるらめど流て深き心有る物を
堰川のせきの堰杭の打渡し逢でも人に戀ひらるゝ哉
朝ごとに聞けば遙けし泉川淺く聞きつゝうたふ舟人
亂つゝ人だに寄らぬいとは川波の騷ぐはよるさか
我紐を妹が手もちてゆふは川又返りみむ萬代までに
筑波根の峯より落るみなの川戀ぞ溜りて淵と成ぬる
貫之
常よりも春きにければ櫻川波の花社なく寄すらめ
君戀ふと人しらねばや紀國の音無川の音だにもせぬ
人知れず濡にし袖の乾かぬは阿武隈川の水にや有覽
身に近き名をぞ賴みし陸奥の衣の川とみてや渡らむ
古の賢き人の遊びけむ吉野の川はみれど飽かぬかも
君こずば誰にかみせむ白川の瀬々に渦まく瀧の白玉
陸奥に有と云なる玉川の偶さかにても逢見てしがな
衡なくおなの河原をみる時は大和戀しく思ほゆる哉
筑紫なる大かた川の大方は我獨のみわたるうきせか
夕樽かけても人を賴まねど涙は加茂の川にこそたて
三吉野のあきつの川の萬代に絕ゆる時なく又歸見む
百敷の大宮ちかきみゝと川流れて君を聞き渡るかな
みまく欲しみこしくも著く吉野川音のさやけさ見に乏しく
綺拾の月をしめでし耳と川底をのみこそ忍び渡らめ
兼輔
音にのみ聞まし物な音羽川渡るとなしにみ馴初けむ
假にても別ると思へばかみや川瀬々の衞の亂てぞ鳴
心にもあらで別れしあひづ川浮世を水に流しつる哉
目無河耳無山の見もきかず有せば人を恨みざらまし
淵瀨とも何か賴まむ妹背川心はせにしよらむと思へば
世中はなど大和なる水馴川見馴初ずぞ有べかりける
祈つゝ賴みぞ渡る泊瀨川嬉しき世にも流れあふやと
世中をいとな歎きそ飛鳥の川は淵瀨也鳧
みかの原湧て流るゝ泉川いつみきとてか戀しかる覽
旅人のまき流すといふ壬生川の言は通へど舟ぞ通はぬ
播磨潟海に出たる飾磨川絕えむ日にこそ我戀やまめ
みつ川の淵瀨も知ず棹さして假の衣をほす人もなし
妹背川廣く玉藻の水隱れて我は戀ふとも人は知じな
鈴鹿川香に聞てや世をばへむ年麗毎に馴るゝも無く
因幡川否とし遂なしと聞て社いとふの神も立は寄りけれ
忘川世々遂なしと聞て社いとふの神も立は寄りけれ
廣瀨川袖つくばかり淺きせを心深めて我はおもはむ
思ふとも音無川の音なせそ下には水の絕ぬものから
つくり川絕ると無く思ふにも一日も君を忘ぬ兼覽
流れても絕じとぞ思ふ思川いづれか深き心なりける
哀とは思ひ渡れど最上川淵をも瀨をもえこそ定めぬ
大井川おろす筏のいかなれば流て常に戀しかるらむ
岩瀧にいそさへ淀むうふ川のあかたうたひて我思はむに
現には更にも云ず播磨なる夢さき川の流ても逢はむ
岩田川岩さへ騷ぎ行く水の下はくゞれて思ふ頃かな
秋風のふく立田川紅葉ばの錦を見つゝいかゞ渡らむ
梁瀨川淵瀨定めぬ世と聞けば我身も深く賴れでする
ねぶれ共袖ひづ川のうつ瀨に戀しき人の影無り鳧
百濟川河瀨を早み赤駒の足のそゝぎに濡れにける哉
かはづ
三吉野の岩もと去ずなく蛙むべも鳴らむ川の瀨清み
小山田の深田の蛙何故に繼路に濡れて鳴ならなくに
夕樽かけても人を賴まねど涙は加茂の川にこそたて
三吉野のあきつの川の萬代に絕ゆる時なく又歸見む
百敷の大宮ちかきみゝと川流れて君を聞き渡るかな
みまく欲しみこしくも著く吉野川音のさやけさ見に乏しく
綺拾の月をしめでし耳と川底をのみこそ忍び渡らめ
兼輔
音にのみ聞まし物な音羽川渡るとなしにみ馴初けむ
假にても別ると思へばかみや川瀨々の衞の亂てぞ鳴
心にもあらで別れしあひづ川浮世を水に流しつる哉
目無河耳無山の見もきかず有せば人を恨みざらまし
淵瀨とも何か賴まむ妹背川心はせにしよらむと思へば
世中はなど大和なる水馴川見馴初ずぞ有べかりける
祈つゝ賴みぞ渡る泊瀨川嬉しき世にも流れあふやと
世中をいとな歎きそ飛鳥の川は淵瀨也鳧
みかの原湧て流るゝ泉川いつみきとてか戀しかる覽
旅人のまき流すといふ壬生川の言は通へど舟ぞ通はぬ
播磨潟海に出たる飾磨川絕えむ日にこそ我戀やまめ
みつ川の淵瀨も知ず棹さして假の衣をほす人もなし
妹背川廣く玉藻の水隱れて我は戀ふとも人は知じな
鈴鹿川香に聞てや世をばへむ年麗毎に馴るゝも無く
因幡川否とし遂なしと聞て社いとふの神も立は寄りけれ
忘川世々遂なしと聞て社いとふの神も立は寄りけれ
廣瀨川袖つくばかり淺きせを心深めて我はおもはむ
思ふとも音無川の音なせそ下には水の絕ぬものから
つくり川絕ると無く思ふにも一日も君を忘ぬ兼覽
流れても絕じとぞ思ふ思川いづれか深き心なりける
哀とは思ひ渡れど最上川淵をも瀨をもえこそ定めぬ
大井川おろす筏のいかなれば流て常に戀しかるらむ
岩瀧にいそさへ淀むうふ川のあかたうたひて我思はむに
現には更にも云ず播磨なる夢さき川の流ても逢はむ
岩田川岩さへ騷ぎ行く水の下はくゞれて思ふ頃かな
秋風のふく立田川紅葉ばの錦を見つゝいかゞ渡らむ
梁瀨川淵瀨定めぬ世と聞けば我身も深く賴れでする
ねぶれ共袖ひづ川のうつ瀨に戀しき人の影無り鳧
百濟川河瀨を早み赤駒の足のそゝぎに濡れにける哉
かはづ
三吉野の岩もと去ずなく蛙むべも鳴らむ川の瀨清み
小山田の深田の蛙何故に繼路に濡れて鳴ならなくに

我が宿に相宿りして住む蛙夜になればや物は悲しき
山吹の花かげ見ゆる澤水にいまぞ蛙の聲きこゆなる
秋風に蛙つま呼ぶ夕されば衣手寒しまくらせむかも
澤水に蛙なくなり山吹のうつろふ影や底に見ゆらむ
香ばかり落る白川知ねども蛙が聲をとめて來にけり
夕さらで蛙鳴也三輪川の清き瀨の音を聞けばしるし
橋
葛城や渡す久米路のつぎ橋は心も知ずいざ歸りなむ
石上ふるの高橋たかゝに妹が待らむ夜ぞ更にける
佐保川に凍り渡れる薄氷のうすき心を我思はなくに
戀しくば濱名の橋を出てみよ下行水に影やみゆると
津國の難波の浦の一橋君をしもへばあからめもせず
中空に君もなりなむ鵲の行合の橋にあからめなせそ
人渡す事だになきを何にかも長柄の橋と身の成ぬ覽
難波なる長柄の橋も造るなり今は我身を何に譬へむ
以上二首伊勢
白雲のたなひき渡る足曳の山のたな橋われも渡らむ
さしながら野は白露に濡にけり秋てふとを紅にして
以上二首貫之
せの山に直に向へる妹の門山言聽せこやも打橋渡す
せの〳〵浦の淀の繼橋心にも思ふか妹が夢に見えつる
をばたの板田の橋のこぼれなば桁よりゆかむ戀ふな我妹子
ふる〳〵身は涙の中に見ゆればや長柄の橋に誤たる覽
ひ
佐保川に凍渡れるうすらひの薄き心を我思はなくに
水鳥の鴨の住池の下樋なく訝しき妹を今日見つる哉
ぬせき
大井河ぬせきに越えて行水の絕えずも物を思ふ頃哉
大井河せきの古杭年ふ共我忘られむとやは思ひし
旅とあらば後の戀め有べきを涙の堰水や越えなむ
大井川堰のゐ杭打ち渡し戀しとのみや思ひわたらむ
堰には障らざりけり紅葉は落る水の色に見えつゝ
朝毎にゐでこす波のたやすくも逢ぬ妹故瀨も轟に
しがらみ
我妹子に我繼らくは水ならば澗越て行ぬべく思ほゆ

七八玉藻かるあでの柵薄きかも戀のよどめる我が心かも
八九飛鳥川瀬々に玉藻は多かれど柵あれば靡きても逢ず
貫之

九八涙河そこのみなわし早ければせきぞかねつる袖の柵
〇九秋萩の花のながるゝ川瀬には柵かくる鹿の音もせず
一九大井川心柵かみしもに千鳥しばなき夜ぞ更けにける
二九人知れぬ中は柵懸たれや戀しき瀬にも逢ふ由のなき
春道のつらき

三九山河に風の懸けたる柵は流れもあへぬ紅葉なりけり
伊勢

四九水もせに浮ぬる時の柵はうちの殿とも見えずぞ有ける
五九瀬をせけば淵となりても淀み鳧別をとむる柵ぞなき
貫之

六九篝火の影となる身の侘しきは流て下に燃ゆる也けり
業平

七九大井川浮ぶ鵜舟の篝火に小倉の山も照のまの名のみ也けり
貫之

八九大空にあらぬ物から河波に星かと見ゆる篝火の影
九九篝火に非ぬ物からなぞも斯涙の川に浮てもみ燃ゆらむ
〇〇篝火の影し映ればぬば玉の夜川の水は底も見えけり
一〇桂川夜かひのぼる篝火のかゝり鳧とも今こそは知れ
躰

網代

二〇武士の八十宇治川の網代木にいざよふ波の寄べ知ずも
人麿

三〇河上に時雨のみふる網代木に紅葉さへぞ落増りける
貫之

四〇落積る紅葉ば見れば百年の秋の泊りは網代なりけり
貫之

五〇紅葉の流れて止る網代には白波も又寄らぬ日ぞなき
六〇三吉野の吉野の河の網代には瀧の水泡ぞ落増りける
貫之

七〇宇治川の中に流て君まさば我も網代に寄りぬべき哉
八〇宇治川の波の夜々音をぞ泣網代もるてふ人のつらさに
やな

九〇やな見れば河風寒く吹く時ぞ波の花さへ落増りける
一〇あぢ人の築打渡すせを早み心には思へど直に逢はぬかも
江

一入江漕ぐ柵無し小舟こぎ返り同じ人のみ思ほゆる哉
二玉津島入江の小松人ならば幾世か經しと問まし物を
三陸奥の玉造り江に漕舟の音には立てず君戀ふる身は
貫之

四津國の長らへゆかば忘られで猶もみまくほるの堀江なる覽
五別ては後ぞ悲き濁江のそこも知らぬあらか思へば
六心にも有で浮世に住の江の岸とはなみに濡るゝ袖哉
一〇湊入は波騒がしみ声まよふえにこそ人を思べらなれ
八伊勢の海のをのゝ湊の流江の流れても見む人の心を
九哀てふ心一つに筑摩江の戀渡るとは知すやあるらむ
二住江の目に近からば岸にあて波の數をも讀べき物を
池

一二我背子が老ゆるが惜しさきたの池の玉藻にもがなやかましはやすかれ
貫之

二雨ふるとふく松風は聞ゆれど池の汀は增らざりけり
三猿澤の池もつらしな我妹子が玉藻潜かば水も干なまし
四戀をのみ益田の池の浮草のくるにぞ物の亂れとはなる
五云知らで人日謹みにせかれにし池の水とも行ぬ心か
六あだ也と名にし磐余の池なれば人に根蓐立にざりける
七思へども人目を謹む涙社あさへの池と成ぬべらなれ
八勝間田の池に住てふ戀をて稀にもよそに見るぞ悲き
九原の池に生ふる玉藻の假初に君を我思物ならなくに
〇逢事はならしの池の水なれや絶み絶すみ年のへぬ覽
一一水鳥を騒がすたかの池見れば湊にのみぞ波も立ける
二水鳥の浮きて心の惑ふかな宮地の池に年はへぬれば
三何事も云でこしたの池に立かく云知らぬ物は思はず
四同じくば君と並の池に舟身を投げつとも人に語らむ
五葦鴨のすだく池水增るとも堰の方に我こひ方にめやは
赤人

六右のふるき堤は年ふかみ池の渚にみくさ生ひにけり
沼

七奥山の岩垣沼の水籠りにこひや渡らむ逢ふ由をなみ
八水草生て有とも見えぬ沼水の下の心を知る人ぞなき
九紅の色には出でじ隠れ沼の下に通ひて戀は死ぬとも
一〇いつとてか我が戀ざらむ陸奥のいかほの沼の我いかにせむ
一一隠れかがなく逢す成なば陸奥のいかほの沼の思ほえばいかにせよとか我寝初けむ
一二隠沼の下行水の思ほえばいかにせよとか我寝初けむ
一三隠沼の下に戀れば飽たらず人に語りついむてふ物を
うき

一四芦ねはふうきは上こそ難面けれ下はえならず思心を
一五何事も云はれざり鳧身の憂は生たる蘆のねのみなかれて
一六蘆の根の弱き心はうき毎に先折れ伏て音ぞ泣ける
貫之

瀧

一七春くれば瀧の白糸いかなれや結ぶとも猶泡に見ゆ覽
一八流れくる瀧の糸こそ弱からしぬけど亂れて落る白玉
一九糸とさへ見えて流るゝ瀧なれば絶べくも非ずかける白玉
二〇思ふと瀧にもあらなむ流ても盡せぬ物と安く頼まむ
二一山高み梢を分けて流來る瀧にたぐへて落つる紅葉か
二二春立て風や吹とく今日見れば瀧のみをより玉ぞ散ける
二三白波やくも亂るゝとのみ見えつるは落來瀧の常ならにぞ有ける
二四山分けて落ちくる瀧を白雲の疑くとのみ鷲かれつゝ
以上八首貫之

二五百草の花の蔭までうつしつゝ音も變らぬ白河のたき
遍昭

二六今更に我は歸らじ瀧見つゝよべと聞すとも答へよ
伊勢

二七水上と宜も云けり雲居より落來るごとも見ゆる瀧哉
しんたいほふし

二八清瀧の瀬々の白糸くりためて山分衣織りてきましを
貫之

二九見つとのみ思し物を流くる瀧は多くの糸にざりける
三〇石間より落くる瀧の波間にも人を忘るゝ我が心かは
一一いかにして數を知まし落たぎつ瀧のみをより落る白玉
二二打絕て落る涙になる瀑のたぎれて人を見ぬが侘しさ
二三瀧つせの早き心を何しかも人めづゝみの堰留むらむ
二四行水の我心にしかなはねば人まつ瀑となりやしぬ覽
かさのかなむら

二五年毎に斯も見てしが三吉野の清きかふちの瀧の白波
二六山高み白ゆふ花に落たぎつ瀧の河内は見れど飽ぬかも
二七貫亂る人社あるらし白玉の間無もよるか袖の狹きに
二八足曳の山路知らねど感はれず音羽の瀧の音の著さに
二九白河の瀧の白糸見まく欲しみよるをぞ人は待と云ふ也
三〇白河の瀧の糸見まく欲しけれど猥に人はよせじ物をや
源ののぼる

一一いつの間に降積にけむ三吉野の山のかひより崩れ落る瀧
法皇御歌

二宮のたき宜も名に負て聞え鳧落る白泡の玉と譽けば
躬恒

七風吹けど所もさらぬ白雪は世をへて落る瀧にぞ有ける　忠岑
四落たぎつ瀧の水上年積り老にけらしなくろき筋なし
五思置心の内のたまなれや落つとは見れど音に聞えぬ　にはたづみ
六世中は有て空しきにはたづみ己がゆき〳〵別ぬる身を
七にはたづみ流るゝ方の無ければや物思人の袖に流るゝ
八にはたづみ木の下隱流れせば泡沫花を有と見ましや
九甚だも降らぬ雨故にはたづみ痛くな行そ人の知べく　うたかた
〇八浮とは世にふる物をたきつせに増る泡沫絶む物かと　素性
一八泡沫のうまやは人の思ひつゝ匂ひ色濃く染てし物を
二八泡沫も思へば悲し世中を誰うき物と知らせそめけむ
三八降やめば跡だに見えぬ泡沫の消て捗なき世を頼む哉　伊勢
四八思河絶ず流るゝ水のあわのうたかた人に逢で消めや　澤
五八君が爲山田の澤にえぐ摘と濡にし袖は干せど乾かず　貫之
六八眞菰かる淀の澤水雨降れば常より殊にまさる我か戀
七八流増す淀の澤水雨やまばいかにならむと覺ほゆる哉　淵
八八朧ろげの淵やは騒ぐ山河の淺き瀬に社うは波はたて
九八思侘淵にも瀬にも陷りなば人の心の淺しとや云はむ
一九いかにして戀に淵に陷りにし憂に死せぬ我身歟しに
二九千早振神も知るらむ淀川のよどめる淵のふかき心は
三九山高みみつと云はめや玉きはる岩垣淵の隱れたる妻
四九神なひを打まふさきの岩淵の隱てのみや我戀をせむ　潮
五九水増る時は淵なる山河の瀧ならねばや音のたえせぬ　伊勢
六九紅葉の流るゝ川の白波の絶ぬ瀬と社なりぬべらなれ
七九川のせの騒るあわの流れても人の憂瀬は消て恨みむ　家持
八九千鳥鳴佐保の川とのせを廣み駒打渡しいつか通はむ　清原深養父
九九此川の渡る瀬もなし紅葉の流れて深き色をみすれば　大伴のやすみ
〇一つせは波さへ障り行水の後もあひなむ今ならず共　秋風に山吹の瀬の響くなべ空なる雲の騒ぎあへるかも
一中々に君に戀ずはひらの浦のあまと成まし玉藻刈つゝ　たくなは
二名取川幾瀬か渡る七瀬とも八瀬とも知ず夜し渡れば
三飛鳥川瀬々の浮沫に流てもやすきいをぬる我とやは知
四面はぢみあはぬ君故徒にこの川のせに玉裳ぬらしつ　海
五伊勢の海の波間に下す釣の緒のうちはへ獨戀渡る哉
六押なべて世は皆海と成なゝむ同なぎさに波やよするも　是則
七わたの底潜きて知らむ人知れず思ふ心の深さ比べに
八潜き出でぬ波高磯の鮑故うみてふ海はかづき盡しつ
九君戀る涙の底に海は有ど人をみるめは生ずぞ有ける　伊勢
〇海とのみ圓居の中は成ぬめり然ぬる乍逢ぬ影の見ゆれば
一棹させど底ひも知ぬ渡つ海の深き心を君は知らなむ
二思遣る心は海に似たれ共文しなければ知ずや有らむ
以上二首貫之
三伊勢の海の千尋の底も限あれば深き心を何に譬へむ
四流ゆく身をし思へば大方の海を見るにも恨絶えずず
五千々の川流れてつたふ渡つ海の水底深く思ふ頃かな
六須磨の浦に鹽やく焔夕されば行過ぎがてに山に靉く
七大海に島も有なくに海原のたゆたふ波に立てる白雲　貫之
八浦毎に咲きちる波の花見れば海には春も暮ぬ也けり
九渡つ海の沖の潮瀬に流ても人のよるせは有てふ物を
〇などの海の朝げの名殘今もかも磯の浦わに亂て有むあま
一網引する海士少女子が袖通り濡にし衣干せと乾かず
二網引するあまとや見らむ秋の浦の漬き荒磯をみにこし我を
三渡つ海はつらき心や深からむ蜑てふ蜑の恨つゝふる
四伊勢の海の蜑のし業のあこや玉取ての後も戀の繁けむ
五浦海に漁するあまの求ても戀しき人に逢けとぞ思ふ
六蜑少女漁り焚火のおほゝしく見てし人しも戀渡る覺
七朝な〳〵あまの棹さす浦深み及ばぬ戀も我はする哉　伊勢
八心して玉藻は刈れど袖毎に光見えぬは蜑にぞ有ける　ながのいきまろ
九大宮の内まで聞ゆ網引すとあご調ふる海士の呼聲　難波潟生ふる玉藻を假初のあまとぞ我は成ぬべらなる
〇難波潟生ふる玉藻を假初のあまとぞ我は成ぬべらなる
一中々に君に戀ずはひらの浦のあまと成まし玉藻刈つゝ　たくなは
二栲繩の長き命の欲けくは絶でも人を見まほしみ也
三伊勢海の蜑の栲繩繰返し見てこそやまめ人の心を　しほ
四なはの浦に汐やく焔夕されば行過ぎがてに山に靉く　やまぐちの女わう
五蘆間より滿くる潮の漏ましに思はませどあはぬ君哉
六伊勢の蜑の鹽やく煙風をいたみ思はぬ方に靉きに鳥
七牛窓の波の鹽さゐ島綬き戀しき君に逢すもありなむ
八須磨の浦に玉藻刈ほす蜑衣袖みつ潮の干る時やなき
九須磨の浦に鹽やく煙風をいたみ思はず見えぬる物を
〇難波潟汐干潮みち常なれば思ひ思はず見えぬる物を
一煙にも馴やしぬ覺年ふれば鹽燒蜑にとひもしてしが
二荒潮のうつし心も我はなし夜ひる人を戀ひし渡れば
三難波潟朝な〳〵に滿汐のみちに社みて乾く世もなし
四あゆち潟汐干にけらしたた泊に朝漕舟の沖による見ゆ
五渡つみの沖つ汐合に浮ぶ泡の絶ぬ物から寄方もなし
六おしてるや難波の浦に燒鹽の辛くも我は老にける哉　平行
七わくらばに訪人あらば須磨の浦に藻汐垂つゝ侘と答よ
八須磨の浦に鹽燒焔夕されば行過がてに山にたなびく
九渡つ海の沖の潮瀬に流ても人のよるせは有てふ物を　しほがま
〇鹽竈の前に浮たる浮島の浮きて思のある世なりけり　山ぐちの女わう
一我思ふ心もしるく陸奥のちかの鹽竈ちかづきにけり　伊勢
二蜑舟の通ひこしより鹽竈の焔いたきまで思ひつきにき
三陸奥のちかの鹽竈ちか乍遥けくのみも思ほゆる哉
四我背子を都へやりて鹽竈の雄の島を待つはくるしも
五陸奥はいづこもあれど鹽竈の雄の島の綱手かなしも
六鹽竈の浦漕つらむ舟の音は聞しが如く聞くは悲しも　舟
七大舟の思ひ頼むに君行けば我は戀しなたゞにあふ迄
八いで我を人な咎めそ大舟のゆたのたゆたに物思頃を　麿
九漲らふ沖つ小舟に風を痛み舟寄り兼つ心は思へど

○うまやぢに曳舟渡し唯のりに妹が心に乗てけるかも
一遠小舟帆かもはれる遠津と見迄にともの浦わに波立てるみゆ
二難波津を今日こそ御津の浦毎に是や此世を海渡る船
高市の皇子
三あしりして漕行舟は高島のあとの湊によりにける哉
四照月を雲な隠しそ島蔭に我舟よせむとまり知らずも
人麿
五渡つ海の神の命を祝はゝか行さも来さも舟の早けむ
六あぢかまの塩つを指て漕舟のなはいひてしを逢ざらめやは
つのまろ
七風をいたみ沖つ白波高からし蜑の釣舟こぎ帰るみゆ
八うは消み沖へさし出る蜑舟の楫取まなく思ほゆるかも
九近江の海波恐ろしみ風早み年早へむかさすとは無に
小町
一〇心から浮たる舟に乗初て一日も波に濡ぬ日ぞなき
たかちのくろ人
一一しはつ山打越えくれば笠縫の島漕ぎ帰る棚なし小舟
人麿
一二ほの〴〵と明石の浦の朝霧に島隠れ行舟をしぞ思ふ
沙彌滿誓
一三水の江の浦島の子が釣舟も同じ浦にぞ三年こぐてふ
一四大船に菖蒲刈積みしみゝにも妹が心にのりにけるかも
一五世中を何に譬へむ朝ぼらけ漕ぎゆく舟のあとの白波
一六白波の打越し返る時にあはゞ底に沈める舟も浮なむ
一七磯に立ち沖べを見れば藻刈舟蜑漕出らし鴨翔るみゆ
一八さして行くかたは湊の波高み恨みて返る海士の釣舟
深養父
一九白波に秋の木葉の浮べるを蜑の流せる舟かとぞ思ふ
貫之
二〇追風の吹ぬる時は漕舟のほに出てこそ嬉しかりけれ
かちおん
二一白波の跡なき方に行く舟も風ぞ便のしるしなりける
二二汐せ舟かたかけ小舟流る共痛くな侘そ楫とりゆかむ
二三ひとみには蜑の夕舟沖に出てつれも渚に漕ち寄せなむ
二四鶚ゐるすにをる舟の夕汐を待つ鷺よりは我こそ増め
二五夕されば楫の音聞ゆ蜑小舟沖つ藻刈に舟出すらしも
つら

二六いせの海の蜑の栲縄打はへて戀しとのみや思渡らむ
二七伊勢海に釣する蜑の衣よりも我ぞ涙に袖はひちぬる
みるめ
二八風をいたみ沖つ白波高からし蜑の釣舟濱に帰りぬ
二九磯馴るゝ蜑の釣縄打はへて苦くも有か妹にあはずて
三〇しかの蜑の釣する小舟うけ絶ず心に思ひ出て来に鳧
いかり
三一大船のたゆたふ海に碇下しいかにしてかも我戀やまむ
三二近江の海沖こぐ舟の碇おろし忍びし君が言まつ我を
伊勢
三三追風に風はなほりて吹ぬとも蜑の碇に留まりやせむ
あみ
三四厭へども猶住の江の浦に干す網の目茂き戀もする哉
三五住吉の津守の網引釣のをの浮びか行む戀つゝ有ずは
三六蜑舟のへにへりつめる網の目はつらき心の歟にぞりける
三七逢との片よせにする網の目にいはけ無き迄戀かゝりぬる
なのりそ
三八梓弓引津のべなるなのりその花咲く迄に逢ぬ君かも
赤人
三九鶚ゐる荒磯に生る真告藻の我名告されば親は知とも
三〇紫のなだかの浦のなのりその磯に靡かむ時まつ我は
藻
一藻刈舟今ぞ渚にきよすなる芦邊のたづの聲さわぐ也
二紫のなだかの浦のなびき藻の心は君に寄りにし物を
三人知れぬ戀の苦しさ藻刈舟湊入江にたづなくなる
四幾世しも有じ我身をなぞも斯蜑の刈藻に思ひ亂るゝ
五玉藻かるとしをを過ぎて夏草の野嶋が崎に庵する我
六白波の寄つる玉藻枕の間にも君を見捨てゝいも寝衆つも
伊勢
七伊勢海に年へて住し蜑なれば孰の藻かは潜き殘せる
八わたの底沖を深めて生る藻の最と今しぞ戀はすらしも
九石見潟恨みぞ深き沖つ波打寄する藻に埋もるゝ身は
一〇風早み沖の玉藻の繰返し波のよるしも何さわぎけむ
弓削皇子
一一夕されば潮満来なむ住江のあさかの浦に玉藻刈てな
人麿
一二水底に生ふる玉藻の打靡き心をよせて戀ふるこの頃
一三沖つ風吹かまくしらず荒海の朝げの舟に玉藻刈衆ね
一四荒磯こす波は恐ろしかすがに海の玉藻は憎くやは非ぬ

一五今日もかも沖つ玉藻は白波のやへ折が上に亂てをらむ
一六雨はふる假ほは作るいつの間に蜑の汐干に玉も拾はむ
みるめ
一七白波を折かけ蜑の漕舟は命にかふるみるめ刈りにか
一八大方はわかなも湊漕出なむ人をみるめも沖に社かれ
素性
一九沖つ瀬の渦まき毎に留むれど猶求めつる世のうきめ哉
深養父
二〇滿つ潮の流干る間も逢難みみるめの浦に夜を社まて
二一渡つ海の底に荒たるみるめをば御舟漕でぞ蜑は刈てふ
二二麗げの蜑やは潜く伊勢海の浪高き浦に生ふるみるめは
二三伊勢海の朝な夕なに潜くてふみるめに人を飽由もがな
二四白波は立騒ぐ共こりずまの浦のみるめは刈むとぞ思
二五白波のをり〳〵有てくる人は蜑のかるてふ珍しもぞ哉
二六憂めのみ浮て亂るゝ浦なれば假にのみ社蜑はよるらめ
われから
二七沖つ波打よする藻に庵して行方定めぬ我からぞこは
二八君は猶恨みられ鳧蜑の刈藻にすむ蟲の名を忘れつゝ
内侍のすけきよいこ
二九蜑の刈藻に住蟲の我からと音を社鳴かめ世をば怨じうら
三〇若の浦に若め刈乾す我を見て沖漕舟の過がてにする
三一君なくて蘆刈けりと思ふには最と難波の浦ぞ住憂き
三二三熊野の浦の松原水隠れて根は一にや生ひ添はる寛
三三風吹けば生田の浦の幾度かあるゝ心を我に見すらむ
貫之
三四麻生の浦にをふる玉藻の假初に蜑とぞ我は成ぬべらなる
三五逢でのみ思へば苦し荒磯海の恨やせましかひは無く共
小弁
三六高嶋のあとの湖漕ぎ過ぎて鹽つすか浦今かこぐらむ
三七きて見ればなごの浦まによる貝の拾も敢ず君ぞ戀しき
小町
三八蜑の住む浦漕舟の楫をなみ世をうみ渡る我ぞ悲しき
三九いなびのは行過ぬらしあさ傳ひ見ゆ
四〇鹽竈の浦とはなしに君戀ふる煙絶ずもなりにける哉
一伊勢
四一熊野の浦より遠に漕舟の我をばよそに隔てつる哉

三藻汐焼く蜑の焚火の燃さば吹飯の浦を今日見ましやは
四我戀を知人あらば田子の浦に立らむ波の數を數へよ
中納言兼輔
五夕日夜暮束なきを玉くしげ二見の浦は明てこそ見め
六荒きたの野坂の浦に舟出して三嶋に行かむ波立なゆめ
人麿
七をふの浦に舟乗すゑ娘子が玉藻の裾に潮満らむか
八我戀ふる妹に逢さず玉の浦に衣かたしき獨かも寝む
貫之
九伊勢の海に蜑の取てふ忘貝忘にけらし君も來まさず
貫之
〇寄する波打も寄せなむ我戀ふる人忘貝おりて拾はむ
坂上のらう女
一我背子をこふれば苦し鵺ならば拾ひに行かむ戀忘貝
二伊勢の海の浦に寄する空せ貝空し頼に世を盡しつゝ
人麿
三暇あらば拾ひて行かむ住吉の岸にありてふ戀忘れ貝
躬恒
四荒磯海の恨めしく社思ほゆれ片貝をのみ人の拾へば
五住吉の濱によるてふ空せ貝みなきともて我戀むやも
六紀の國のあくらの濱の忘貝我は忘れず年はふれども
なぎさ
七白波の立ち返りくる心かな今は潜によせむともせず
八我のみやあだ名はたつと磯に出て潜を見れば波も立鳥
九逢ことの潜に身をしなしつれば袖も涙に濕ぬ日ぞなき
島
〇六草蔭のあらぬが崎の笠島を見つゝや君が獨り越ゆ覽
おぼさのあさつな
一六稀なれどあだ名は立ぬ厳島よる白波を濡衣にして
二六別るれど別れと思はず出羽なる敦賀の島の絶じと思へば
三六難波潟潮みちくらし海士衣田簑の島にたづなき渡る
四六下野や室の八島に立つ煙思ありとも今日こそは知れ
戒仙法師
五六あな戀し行てや見まし紀國に今もありてふ浦の初島
六六陸奥にありと云なる松島のまつに八しく訪はぬ君哉
七六白妙の波打返し海士衣うら島にきてぬれやわたらむ
八六渡つ海の蜑にさせる白妙の波もて結へる淡路島見む
九六藻刈舟沖漕來らし妹が島かたみの浦にたづ翔る見ゆ
七よそに見し常世の島の二所ありとし聞けば更に頼まず
貫之
一雨によりかる田簑の島を今日行けば難波隠ぬ物にぞ有ける
濱
二思ひくれ歎き町石の濱によるみるめ少く成ぬべら也
三よそ也し思吹上の濱にほすみるめは難き物にざりけり
四但馬なる雪の白濱もろせにと思し物を人のとや見む
五うと濱の疎くてのみや世をば經む波の夜々逢見てしがな
六ひたぶるに思なはてそ人知れず思ふ心は荒磯海の濱
人麿
七我背子が赤裳濡して植し田を刈て收めむくら無の濱
八戀侘ぬ悲しきとも慰めむ就なかすの濱べなるらむ
九住吉の沖つ白波風吹けばきよする濱を見れば消しも
赤人
〇丈夫は御狩にたゝし少女子は赤裳裾引く清き濱べを
一紀國の吹上の濱もある物を沈みはてぬと何歎くらむ
濱千鳥
二難波津に我待舟は漕來らしみつの濱べに千鳥鳴く也
三我戀は名高の浦の濱千鳥をはにもふれぬ君が身故に
四八十嶋の浦に跡踏む濱千鳥君はありとぞ思けらしな
はせゆふ
人麿
五三熊野の浦の濱ゆふ百重なる心は思へど直に逢ぬかも
六三熊野の浦の濱ゆふ幾重ね我より人を思ひますらむ
七思ます人し無れば三熊野の浦の濱ゆふ重ねだになし
八最どしく憂三熊野の濱ゆふに重ねて物な思はせそ君
九三熊野の浦の濱ゆふ幾重とも我をば人の思ひ隔つる
さき
一〇みさきまひ荒磯によるいほへ波立ても居ても君をしぞ思ふ
一一思つゝくれど來兼つみほが崎まかなの浦を又顧みつ
一二妹が爲玉を拾ふと紀國の由良のみさきに此日暮しつ
一三波の立清見が崎にゐる衛誰見よとてか跡のさやけき
磯
一四小搖ぎの磯立馴し磯菜摘むめざし濡すな沖にをれ波
敏行
一五玉藻のこがめは就ら小搖ぎの磯の波分け沖に出に鳴
貫之
一六風のよる波の磯には窓の春もえ知らぬ花のみぞ咲く
虎
一七君を思心は人にこゆるぎの磯の玉藻や今はからまし
浪
一八大海に立らむ浪は今もゝらむ君繼らくは止時もなし
貫之
一九打寄する浦波見れば我戀の盡きぬ數此先知れけれ
人麿
二〇住吉の岸に家もが沖にへに寄する白波見つゝ忍ばむ
二一戀ふる遠つ近江による波の縁ひ寄る我愷からなくに
二二立てば立つ居れば又居る吹風と波とは思どにや有覽
二三待つけて諸共にこそ歸るもの波より先に人の立らむ
二四住吉の岸の松根を打晒し來寄する波の昔のさやけさ
二五いかにして歌べき物ぞ君を思ふ心荒磯によする白波
もとかた
二六立ち返り哀とぞ思ふよそにても君に心を沖つしら波
文屋朝康
二七草も木も色變れども渡つ海の波の花計秋なかりけれ
伊勢
二八住江の身に近からば打寄する波の數をも讀べき物を
二九住吉の岸にむかへる淡路嶋哀と君を云はぬ日ぞなき
みをつくし
三〇澤標心盡して思ふかもこの間ももとな夢にし見ゆる
もとよしのみこ
三一侘ぬれば今將同じ難波なる身を盡しても逢むとぞ思
風
三二君こふる涙の床に滿ちぬれば澪標とぞ我は成ぬる
三三河浪も潮もかゝる澪標寄するかたなき戀もするかな
かた
三四難波潟汐干に立て見渡せば淡路の嶋にたづ翔る見ゆ
丹比眞人
三五難波潟汐干に出て玉藻刈蜑少女子はながな告ましさね
貫之
三六早晩といぶせかりつる難波潟蘆刈分て御舟來にけり
三七夏そひく海上潟の沖つ洲に舟は留めよさよ更にけり
家持
みなと

○湊風痛く吹らしなごの江に妻呼び交したづ騒ぐ見ゆ
貫之
二入る月の流るゝ見れば天の河出る湊は海にざりける
素性
二紅葉ばの流れてとまる湊には紅深きなみぞ立ちける
石河の大きみ
三沖つ波へ波立とも吾背子が御舟の泊りに浪立めやは
二大葉山霞たなびき風吹きて我舟とめむ泊り知らずも

古今和歌六帖第四

戀

二我戀は行方も知らず果もなし逢ふを限と思ふ計りぞ
六我戀は虚しき空に満ぬらし思遣れども行く方もなし
七いさやまだ戀てふとも知なくにこやそなる覧い社ねられれば
八我戀は人知りねとや響むと覧とや知らばしれとや
九戀しとは云じと思ふに昨日今日心弱くも成ぬべき哉
〇身をも且思ふ物から戀と云へば燃る中にも入る心哉
一戀てへば知らぬ道にもあらなくに怪しく惑ふ我心哉
二謝無ねても覚ても戀らゑゝ心を驕ち遣らば忘れむ
三いか計戀てふ山の深ければ入りと入ぬる人惑ふらむ
四戀死なむ後は何せむ生ける日の爲社人は見まく欲けれ
坂上大娘
五世中の苦しき物に有けらく戀にたへずて命しぬべし
六戀しきに侘て魂出て去なば空しき骸の名にや殘らむ
七天離鄙とも著くこゝだくも繁き戀かも長き日もなし
八朝夕に見む時さへや吾妹子がみれど見ぬ如猶戀しけむ
勢
九戀しきに死ぬる物とは聞ね共世の例にも成ぬべき哉
〇秋夜の千夜を一夜になずらへて八千夜しねばや戀は醒なむ
笠郎女
一なぬか行く濱の眞砂と我戀と孰れまされり沖つ白波
二斯の如戀つゝ非ずは岩木にも成まし物を物思ずして
三心には千重に思へど人に云ぬ我戀妻を見む由もがな
四戀は皆様々有と聞なべに己がじゝとぞ音は泣ける
五戀しさはねぬに慰むとも無きに怪く合ぬ目をも見哉
六戀々に人戀々にこひしなば燃えむ畑も戀のかやせむ
七今は早や戀しなましを相見むと頼めし事ぞ命也ける
八逢見ずば戀しきとも無もまし音にぞ人を聞可りける
九僞もにつきてぞするいつよりか見ぬ人戀に人の死する
人麿
〇戀死なばこひも死ねとや玉鉾の道行人に言傳もぜぬ
一ますらをの現し心も我はなし夜晝分かず戀し渡れば
二年渡る迄にも人は有てふをいつのまにぞも我戀にける
三我命生けらむ限忘れめやいや日毎には思ひますとも
かさの郎女
四天地の神も理なくばこそ我思ふ君とあはず死にせめ
中臣郎女
五直に逢て見てばのみ社玉きはる命に向ふ我戀やまめ
家持
六戀死なむ其も同じな何せむに人目人とふたみわかせも
七思絶えわびにし物を中々に何に術なく逢見初めけむ
八戀しとは誰名けゝむ言葉ぞしぬとぞ唯に云可りける
九逢見では幾日もへぬをいか計狂に狂ひ思ほゆるかも
〇逢見てば暫は戀はなぎなむと思へどいよゝ戀増けり
一よの程も出つゝくらく數多度なれば我胸煎り燒が如
二我心やくも我業をしき哉やし君にこふるも我心から
三逢見では千歳や經ぬる否をかも我や然思君待兼て
四人もなく舊にし里に有人を愛てや君が戀にしにせむ
五慰むる心はなしにかくてのみ戀や渡らむ月に日毎に
貫之
六戀は知らぬ山路に非なくになどか心の惑消ぬべき
七百千鳥鳴時あれど君をのみ戀る我ねはいつと分れず
八雨やまぬ山の天雲立居つゝ安き空なく君をしぞ思ふ
九足曳の山したたぎつ岩なみの心くだけて人ぞ戀しき
かさの郎女
〇戀するにしぬる物にし有ませば千度ぞ我は死返まし

片戀

一片戀は苦しき物と水籠の神にうれへて知せてしがな
二水籠の神に愁へむ斯ばかり戀しき人をみずと思へば
三みごもりの神し誠の神ならばわが片戀を諸戀になせ
四水籠の神に問ても聞てしが戀つゝあはぬ何の罪ぞも
五寒霞立ちにし日より今までに我戀やまず片戀にして
六ねむごろに片思するか此頃は我心から生けるとも無
七伊勢の蜃の朝な夕なにかづくてふ鮑の貝の片思にて
八水の泡の玉に交れる色貝のなど片戀に年はへぬらむ
九思遣方は知ねば片もこひの底にぞ我が戀は成にける
舎人皇子
〇丈夫や片戀せむと歎けごも醜の丈夫なほ戀にけり
小町
一思つゝぬればや人のみえつ暫夢と知せば覚ざらましを
業平
二ねぬる夜の夢を捗なみ睡ろめば彌捗なにも成増る哉
敏行
三戀侘て打ぬる中に行通ふ夢のたゞちは現ならなむ
四戀死ねとする業ならしぬば玉の夜はすがらに夢に見えつゝ
敏行
五住吉の岸による浪よるさへや夢の通路人めよくらむ
六爲玉の關の現は定かなる夢に幾らもまさらざりけり
興風
七侘ぬれば强て忘れむと思へ共夢てふ物ぞ人頼めなる
斎宮
八君やこし我や行けむ思ほえず夢か現かねてか覚てか
返し
業平
九かきくらす心の闇に迷ひにき夢現とは今宵さだめよ
酬人しらず
〇我妹子に戀て術なし白妙の袖返しはしは夢にみえきや
一我妹子が袖かへすよの夢ならし誠も君に逢ごと有き
二夢にだになぞかも見えぬ見ゆれ共我にも惑ふ戀の繁きに
三夢路にはあしも休まず通へども現に獨みしとは非ず
四限なき思のまゝに夜も來む夢路にさへや人の咎めむ
五夢の中に逢見むとを頼つゝ暮せる宵はねむ方もなし
六見し夢の思ひ出れどはかなきは此よの如に非ぬ也
七いをしねば夢にも人を見べきにこふと思へば唯に明しつ
けんけい法師
八唐も夢に見しかば近かりき思はぬ中ぞ遥かかりける
深養父
九ぬば玉のゆめに何かは慰めむ現にだにもあかぬ心を
〇世中はねても覚ても夢ならば忘ぬさへを忘るとやせむ
一物思へばいもねられぬを怪くも忘るゝ事を夢に見哉
貫之
二ねぬるよの夢は浪にも非なくに立返ても君をみつるか
源寄音

夢計捗なき物は無りけり何とて人に逢ふと見つらむ
戀しさの慰べくも非ざりき夢の内にも夢と見しかば
忘ねどなにぞもしるし夢の内に物侘くて已にし物を
現にも侘き事の侘しきはねなくに夢と思ふなりけり
伊勢
見し夢の思出らるゝ宵毎に云はぬを知るは涙也けり
君をのみ思寝にねし夢なれば我心から見つる也けり
貫之
夢に見てかひ無事の侘しきは醒る現の戀にぞ有ける
躬恒
夢にても嬉しとも見ば現にて侘しきよりは猶優なむ
忠岑
一命にも優りて惜くある物は見果てぬ夢の覺る也けり
藤原宇合卿二首
曉の夢に見えつゝ河島のいそこす浪のしきて思ほゆ
おもかげ
業平
目がるとも思ほえなくに忘らるゝ時し無れば侭に立つ
坂上郎女
我兄子が侭山のさかゐまに兄我のみ戀て見ぬは妬しも
目を覺て隙より月を眺れば面影にのみ君は見えつる
笠の女郎
陸奥のまのゝ萱原遠けれど面影にしも見ゆと云物を
見し時は戀つゝをれど夕暮の妹が見し顔面影に見ゆ
ともし火の影にか通ふ空蝉の妹が面影戀しくおぼゆ
白妙の衣手かへて我待つとあるらむ君も面影に見ゆ
躬恒
喚かざらむ物とはなしに櫻花侭にのみなだき見ゆ覽
夢にても見ゆとは見えじ朝々我侭に恥づる身なれば
伊勢
返し
侭はみつに濱でも見えずやは心にのりて焦れし物を
心にやのりて戀しきあふみてふ名は徒に水影もせで
夕暮は物思まさる見し人のこと問ひし顔面影にして
笠女郎
斯計面影にのみ思ほえばいかにかもせむ人目繁くて
うたゝね
轉寢にはかなき人を夢に見て現にさへも落つる涙か
小町
垂乳根の親の諫めし轉寢は物思ふ時の業にざりける
轉寢に戀しき人を見てしより夢てふ物は頼み初てき
轉寢の夢にや有らむ櫻花夢く見てぞやみぬべらなる
涙川
敏行
徒然のながめに増る涙川袖のみひぢて逢ふ由もなし
返し
業平
淺み社袖はひづらめ涙川身さへ流ると聞かば頼まむ
涙川いかなる水か流るらむなど我戀をけつ時のなき
いかばかり物思ふときの涙川から紅に袖のそむらむ
貫之
世と共に流れてぞ行く涙川冬も凍らぬみなわ也けり
早き瀬にみるめ生せば我袖の涙の川に植て見ましを
涙川身を棚にせきかねて流れくるとは知すや有らむ
伊勢
逢事の君に絶にし我身よりいくらの涙流れ出づらむ
涙川浮たる泡と身をなして人の浮瀬を流れてを見む
君戀ふる涙なくば唐衣胸のあたりは色燃えなまし
身をせばみ袖よりも降涙には雖面き人も濡よとぞ思
包めども袖にたまらぬ白玉は人をみぬ目の涙也けり
小町
愚なる涙ぞ袖に玉はなす我は堰敢すたきつ瀬なれば
貫之
戀しきや色にはある覽涙川流るゝおくの水ぞ移ろふ
戀て云へば涙の川の瀬を早み心づからや又は泣れむ
飽すして君と戀つる涙には浮沈みつゝやせ渡りつる
憂きとのかくわく時は涙川目の前にこそ落溜りけれ
うらみ
うくも世に思心に叶はぬか誰も千歳の松ならなくに
世中の憂もつらきも歎きも誰に云へとか人の雖面き
云へばえに云ねば苦し世中を歎てのみも過すべき哉
一人やりにあらぬものから魂と一つ心に身をぞ恨むる
思はずば雖面き事もつらからじ頼めば人を恨つる哉
朝なげに世の憂事を忍とて詠せし間に年ぞへにける
我計我を思はむ人もがなさてもやうきと世を心みむ
たかむら一首
然有とて背かれなくに事しあれば先歎るゝあなう世中
渡つ海の深き心は有乍ら恨みられぬる物にぞ有ける
歎ならぬ身は心だに無からなむ思知すば恨ざらまし
逢見ては臨しく社なるときけ雖面さのみも増る君哉
勢
氷の泡の消えて浮世と知なから流ても猶頼まるゝ哉
人言はあまの刈藻に繁く共思はましかばよしや世中
一流ては妹背の山の中に落つる吉野の瀧のよしや世中
務
有しだに愛し物を飽ずとて孰くにそふるつらさなる覽
躬恒
我のみ戀ふる七夕も逢て過せる年し無ければ
則一首
友
みるも無くめもなき浦の濱に出て返すがへすも恨つる哉
則
浮乍ら消せぬ泡となりなゝむ流てとだ頼まれなくに
雲もなく風たる朝の我なれや厭れてのみ世をばへぬ覽
玉藻かるあまの行かひさす棹の長くや人を恨渡らむ
貫之一首
惜からで悲しき物は身也けり浮世を捨む方し無れば
勢
惜からぬ命なれども心にし任せたらねば恨てぞふる
守でかく憂もつらきも二しへに心一をなして見す覽
忘ぬと云しに適ふ君なれど訪ぬはつらき物にぞ有ける
恨みず
つらけれどいさまだ人を恨ずよ甲斐無く成む様のみ
既方に行隠れなむ世中に身のあれば社人もつらけれ
人よりは我こそ先に忘なめ雖面きをしも何か頼まむ
ないがしろ
秋萩の玉まく葛のうらさ〳〵我をな戀そ逢ひも思ず
否と云はむ人をもしひじ敷島の倭の國に人や絶たる
思すもあれかし綾な道芝の人の古せる我ならなくに
厭れて我やは侘て獨ぬる秋の下葉の色附けばなどぞ
今はとて人の枯はて淺茅生にされば蔣の花ぞ咲ける
躬恒
五月雨に亂れやはせし菖蒲草あやなし今は思忘れね
吉野河よしのかはれよ逢見瀬になる淵は無社有めど
雖の思
そへにとてとすれば斯り斯すればあな云知ず逢さまに
思ふてふ人の心の隈ごとに立隠れつゝ見る由もがな

八思へ共思はずとのみ云なれば今は思はじ思かひなし
四思へ共思はずとのみ云なれば今は思はじ思かひなし
五我を思ふ人を思はぬ報にやわが思ふ人の我を思はぬ
深養父

六思けむ人をぞ共に思はましまさしや報無りけりやは
七我をのみ思と云はゝ有べきをいでや心は大幣にして
八誰により思亂るゝ心ぞは知らぬぞ人のつらさ也ける
九人心今は限となりぬれば見し社見ぬに劣らざりけれ
〇人知れず思へば苦しいかにして同じ心に人を敎へむ
一ゑぞ知らぬ今試む命あらば我や忘るゝ人やとはぬと
二僞のなき世なりせばいか計人の言葉嬉しからまし
三僞と思ふものから今さらにたが誠をか我はたのまむ
四現にも夢にも人に祝し逢へば暮行く計嬉しきはなし
貫之

五逢見ずて我戀死なむ命をば道に人やつらしと思はむ
六逢見ずて戀しき事を譬ふれば苦しきとは物ならなくに
同じ人

七逢事を月日に添へて待時は今行末になりねとぞ思ふ
八哀をばなげの言葉と云ひ乍思はぬ人にかくる物かは
九心なき草木なれ共哀とぞ物思ふ時の目には見えける
〇哀てふと徴りせば云べきを何に譬へてかうと知せむ
一哀てふ事よわひはかにある物を人に知らえゝ涙也鳥
二世中はいかに苦しと思ふらむ萬の人に恨みらるれば
三古のしづの苧環いやしきもよきも盛はありこし物を
興風

四相思はぬ人を思ふぞ病なる何か有馬の湯へも行べき
興風

身は捨つ心なだにもはふらまじ遂にはいかゞ成と知べく
命かは何ぞも露のあだ物を逢にしかへば惜からなくに
中務

死ぬ〳〵と聞く〳〵だにも相見れば命もいつの世にかのこ
返し
源のさねあきら一本

心をしむうの里に置たらばはこの山は見まく近けむ
我宿の樞に錠さし納めたる戀のやつこの握み懸りて
一夕月夜さすや岡べに遊るやの形をかしみ鹿ぞ寄くる
二眉根かき紐とき渡り待らむや早晩見むと思ふ我妹子
人麿

三隼人の名に負ふ夜聲いち著く我中絶えば妻と賴まむ

一思すに到らば妹が嬉しみと笑まむ眉引思ほゆる哉
二斯計戀む物とし思はねば妹が袂をまかぬ夜もあらき
三時守の打鳴す皷數見れば時には成ぬあはぬ怪しも
四大方に我し思はゞ斯計り難きかどを能り出なむや
五あさ柏ぬるや河べの東雲に人も相逢ず君なしがちに
六我妹子を相知せたる人を社戀の增れば恨めしみ思へ
七をふの浦に釣する蜑の舟乘に乘りにし心常に忘れず
八今も思ふ後も忘れず刈菰の亂れてのみぞ我戀わたる
九水莖の岡の葛葉を吹返し誰かも君をこひむと思ひし
〇一昨年のさい年より今年迄戀れどなどか妹に逢難き
一心こそ心をはかる心なれ心のあたはこゝろなりけり
二ゆめにのみきゝ〳〵〳〵とよ〳〵〳〵と音のみ鳴
君によりよ〳〵〳〵とよ〳〵〳〵と音のみ鳴
三奥山の霜降かゝる楢の葉の青かりしより思ひ初てき
四山賤の垣ほに圍ふませ垣のませたりとも見えし君哉
五住人はさも社あらめ云ふ人の變る聲社怪しかりけれ
六百敷の庭に掻しく白沙のされたるき共思はざりしを
七云人はさも社有め聞人のいたさわく顏を思遣らるゝ
八いき果を痛くな云そそかくだにいそといふなるものを
東三條右大臣

九戀しとも我は申さずあだしそゝ死ぬる物也死ぬる物也
〇擘立て鳴ぞしぬべき秋山に友惑はせる鹿には非ねど
一水の泡の消えて憂身と思へ共流れて猶も賴まるゝ哉
二何をして身の徒に老ぬらむ年の思はむ事もやさしく
三すぎ板も て葺る板間の逢ざらばいかにせよとてわが袂初けむ
四人人のするわたれもなで帚木や君を思へば夜ぞ更にける
五神山の身を卯花の郭公くやし〳〵と音をのみぞなく
六千早振たゝすの神の前にして空鳴きしつる時鳥かな
七千早振神も聞らむ今日よりは長きうへめと賴まるゝ哉
深養父

八嬉しくは忘るゝとも有なましつらきを永き形見也ける
躬恒

九草も木も吹けば枯行く秋風に咲きのみ增る物思の花
返し
貫之

〇繁き心より咲く物思の花の枝をばつら杖につく
一女をはなれて詠める
紀友則

二瀧つせにうき草の根はとめつとも
人の心をいかゞ賴まむ

三朝顏のきのふのはなは枯れずとも
四空蟬をそめてともしにかひつとも
五毛の末にはねつる馬はつなぐとも
六袖の內に月のひかりはとゞむとも
七散らずして去年の櫻はありぬとも
八をちこち薬に風をば包みとめつとも
九田子の浦の波をば鎭めとめつとも
〇水の泡をしら玉とてはぬきつとも
一かみすぢに千ひろの舟は繫ぐとも
二こふの石を蟻におほせて遁ぶとも
三蚊の眉に國こほりをば立てつとも
四ひを打ちて水の內にはともすとも
紀貫之

五時鳥はるをなけとは聞あとふとも
六陽炎のかげをば行きてとりつとも
七わたつ海の波の花をばとりつとも
八潛ぐ舟の棹のしづくは落ちずとも
九網の目に吹きくる風はとまるとも
〇荒るゝ馬を朽ちたる繩に繫ぐとも
一をみなへし我が妻にては年ふとも
二行く水にふりくる雪はとまるとも
三我が袖のなみだに魚はすみぬとも
大凡內躬恒

四す鉦ぬしなきかげはうつるとも
五佐保山のもみぢぬ秋はありぬとも
六かるかやを盤の火にはともすとも
七一つ筒に虎のまだらはわきつとも
八養かへるかりをば皆もとどむとも
九しろき毛をこき綠にはかへすとも
〇年のうちに月なき月はありぬとも

一八ひたつ海を掬びて底は見せつとも
二九露霜をとけてののちはわきつとも
三〇てをさへて吉野の瀧はせきつとも
祝

我君は千代にましませ小れ石の巌と成て苔の生まで
三一臥て思ひ起きて數ふる萬代は神ぞ知るらむ我君の爲
在原のしげはる

三二鶴龜も千歳の後は知らなくに飽ぬ心に任せ果てゝむ
三三古もありきあらずば知ねども千歳の例し君に始めむ
三四神なびの山の上なる岩清水いはひてぞ汲む萬代の爲
三五鶴尾の山の岩根をとめて落る瀧の白玉千世の數かも
三六しほの山さしでの磯に住ゐ君が御代をば八千代とぞ鳴
貫之

三七かの見ゆるたづの村鳥君に社己が世々をば祝ふべらなれ
伊勢

三八山風は吹けど吹ねど白波のよする岩根は久しかり鳧
三九大空に群たるたづのさし乍ら思ふ心のありげなる哉
貫之

四〇鶴多く世をへて見ゆる濱べこそ千歳積れる所也けれ
四一百歳と祝ふを我は聞き乍ら思ふが爲は飽ずも有ける
同じ人

四二今年生ひのにひ桑繭の唐衣千代をかねてぞ祝初ける
同じ人

四三岩の上に塵も無れど蟬の羽の袖にのみ社祝ふべらなれ
おなじ人

四四年をのみ思ひつめつゝ今迄に心にあける事の無き哉
おなじ人

四五思ふと心にあれば植てみる松を千歳の例とぞ思ふ
おなじ人

四六浪の間に砂子踏越え鳴たづは君に千歳を譲るべら也
伊勢

四七頼めつゝ懸れる藤は松樹の千歳をふ共飽ずぞ有ける
四八住の江の濱の眞砂を踏む鶴は久しき跡を止むる也鳧
貫之

四九我宿の松の梢になくたづを千代のゆかりと思ふ也鳧
忠岑

五〇眞鶴の立居馴せる川の瀬に千歳の跡を殘さゞるべき
深養父

五一常磐なる松の圓べに彈琴は緒毎に君を千歳とぞなる
貫之

五二萬代の松にぞ年を斬つる千歳の蔭に住まむと思へば
貫之

五三君が代の年の數とは白妙の濱の眞砂を誰かしきけむ
五四世と共に行かふ舟を見毎に慥に出て君を千歳とぞ思
五五祝つゝ植たる宿の花なれば思ふが如ぞ色こかりける
勢

五六色變ぬ松と竹との末の代を何れ久しと君のみぞ見む
伊勢

五七顧はなる潟にしも住む鷹鶴は千代をみよとふ心懐かし
五八幾代ともさしては云じ白鶴の知ぬ迄社あらまほしけれ
五九梓弓つるの命もかゝらなむ君を譬へに人はひくとも
興風

六〇山陰の菊の下水いかなれば汲人毎に老せざるらむ
躬恒

六一千代をふる松に懸れる苔なれば年の緒永く成にけらしも
景盛

六二萬代をけふよそよとせと數ふれば殘遥けき君が御代哉
伊勢

六三年毎に生添竹の世々を經て變らぬ色を誰とかも見む
六四見え渡る濱の眞砂や蘆鶴の千代を數ふる數となす覽
貫之

六五松の上に降敷雪を蓬鶴の千代の緑りに住むかとぞ思
六六霰霜を忍べる菊は見る人の千年を送るしるし也けり
伊勢

六七八少女の袖かと見ゆる女郎花君を祝て折撰で始つる
貫之

六八ほしきつゝ君が千年を菊花置む露にも濡れむとぞ思
六九雪の内に千歳變らぬ松が枝は久しき心誰によすらむ
七〇爭でかと思時には世中の千代てふ事も飽ずぞ有ける
七一鹽竈の磯のいそこを包みもて御代の數とぞ思べらなる
之

七二咲く限散で果ぬる菊の花むべしも千代の齢のぶらむ
七三吹風も飽かず思ひて白浪の數にぞ君が年をよせつる
七四君と猶千年の春に逢坂の清水は我も汲まむとぞ思ふ

七五打まよふ網代に立てる鷹鶴の齢を君に浪もこさなむ
七六誰が年の數とかは見る往かひて衛嗚なる濱の眞砂を
七七久しきを顧ふ身なれば春霞疑く松をいかでとぞ思ふ
七八君が代の年の數とは白妙の濱の眞砂を誰かしきけむ
七九世と共に行かふ舟を見毎に慥に出て君を千歳とぞ思
八〇祝つゝ植たる宿の花なれば思ふが如ぞ色こかりける
勢

八一千年ふる松と云とも植て見人ぞ數へて知べかりける
八二菊の花下行く水に影見れば更に浪なく老せざりけり
八三竹をしも多く植たる宿なれば千年は外の物とやは見
八四群て居る河べのたづは君が爲我思ふとを思ふべら也
八五一枝の菊折からに新玉の千年はたゞにへぬべかり鳧
貫之

八六千世迄の緑りにしあれば松風の類ひしたづの聲ぞ聞ゆる
八七菊の花植たる野べの怪しきは老てふとは知ぬ也けり
八八さゞら浪よする汀に住たづは君がへむ世の知べ也鳧
八九松風の吹かむ限は打はへて縄べくも非ず咲ける藤浪
清たゝ

九〇君が爲移して植うる呉竹の千世も籠れる心社すれ
九一紅葉はいくそ許か散り變る緑ながらにまつが久しさ
躬恒

九二君が代は長月ときく百歳を一人と聞けば猶飽ぬ哉
伊勢

九三露かゝる菊の中なる蘆鶴は今幾度の千代をそふらむ
貫之

九四若菜生る野べてふ野べを君が爲萬代占て摘むとぞ思
同じ人

九五朝露にしとゞに袖を濡しつゝ君が爲とぞ若菜摘つる
素性

九六春日野に若菜摘みつゝ萬代を斬る心は神ぞ知るらむ
伊勢

九七春日野に若菜の數は殘してむ千歳の春は我ぞ摘べき
貫之

九八千早振神たちよけよ君が爲摘む春日野の若菜也けり
躬恒

九九春の野に衣かたしき誰が爲か習はぬ袖に若菜摘らむ
一〇〇春日野の若菜も我を斬らなむ誰爲に摘む物ならなくに

春の野の若菜ならねど君が爲年の數をも摘まむとぞ思
白妙の衣かたしき春日野の若菜摘しも誰が爲にぞは
　躬恒
○春野に心をだにもやらぬ身は若菜は摘で年を社つめ
　貫之
春立むすなはち毎に君が爲千年摘むべき若菜也けり
杖
足曳の山なさかしみ木綿附くる榊（原ゆふかけの作）の枝を杖に切つゝ
すべ神のみ山の杖は山人の千年祈りにきれる杖なり
世々をへて舊たる翁杖突て花のあたりを見由もがな
千早振神の（切）けむつくからに千年の坂も越ぬべら也
ゆふかけの君をためはし孤に我等をなすな千代松の杖
　きんもと（かねもと本）
一つ世に千代を籠めたる杖なればつく共盡じ君が齡も
　かざし　貫之
春來れば宿に先づ咲く梅の花君が千年の譽とぞ見る
春日野の藤は散行く何をかもみ狩の人の折て翳さむ
　人麿
○妹が手を執て引寄せ打手折り我翳すべき花咲るかも
○渡つ海の譽にさして祝ふ藻も君が爲には惜まざり鳥
千世祈る君が譽に求むればかねの枝より花ぞ散ける
萬代のもりとしげれば花折て常磐の譽君に參らせむ
　人麿
古にありけむ人も我が如や三輪の檜原に挿頭折けむ
百敷の大宮人は暇あれや櫻かざしてこゝにつどへり
　伊勢
我宿と頼む吉野に君が行かば同じ譽をさし社せめ
　貫之
翳すとも花咲宿は頼まれずみのなり出む年の無ければ
　これひら
萬代の霜（雪）に枯せぬ白菊を後やすくもかざしつる哉
彦星の譽の玉は妻こふと亂れにけらし此の河のせに
　紀友則
○露なから折て翳さむ菊の花老せぬ秋の久しかるべく
　二條左大臣（一本三つのうち）
誰爲と永き冬まで匂ふらむ問はゝ千年と君に答へよ
我かざす柳の糸を吹き亂る風にや妹が梅のちるらむ

別
別をば峰の櫻に任せてむ止めむ止めじは花（風）の隨に
遠く行く人を惜むと人も皆時鳥さへなきぬべらなり
　貫之
惜むから戀しき物を（一本奉）餞立ち別れなば何心ちせむ
別てふ事は色にもあらなくに心にしみて侘しかる覽
惜みつゝ別るゝ人を見る時は我涙さへ止らざりけり
思ふ人留めて遠く別るれば心行くとも思はえなくに
豫てより別を惜しと思せば出立むとは思はざらまし
○おとは山こだかくなきて時鳥君が別を惜むべらなり
かつ越て別も行か逢坂は人頼めなる名に社ありけれ
又（反）もこそ物へ行く人我が惜め涙の限君に泣きつる
君惜む（惜）涙落ちひ此の河の汀增りて流るべらなり
我にしも草の枕は乞なくに物へさきけば惜くぞ有ける
君が行く所ときけば月見つゝ姨捨山ぞ戀しかりける
　貫之（一本）
見てだにも飽ぬ心を玉鉾の道のくまでも人の行く哉
別行く人を惜むと今宵より遠き夢路ぞ我はまどはむ
　貫之
○暫我が止る代りに千世迄の君が迭りにくすり社せめ
遠く行く君を迭ると思ひやる心も共に旅寢をぞせむ
　業平
○出で行君を祝ふとぬざづけば我さへもなく成にける哉
○屡ひては誰か別の難からむ有しに增るけふは悲しも
　いせふたつ
○別てはいつか逢見むと思へ共限ある世の命ともなし
獨行く事社うけれ古郷の奈良の做ひて見し人をなみ
命だに心にかなふものならば何か別の悲しかるべき
　たかむら
○思きや鄙の別に衰へて蟲のなはたくいさりせむとは
向ひゐて見だに飽ぬ我妹子が立別なばたづき知ずも
○白妙の袖解きそけて通ふ覽月日數へて行てみましや
　紀郎女
別るべき物と知せば紀國の妹背の山にあらましもの
　人麿

雀の葉はみ山もよそに別る覽我は妹にし別きぬれば
秋山に落る紅葉暫は（一本）ともかくもなる亂れそ妹があたり見む
思ふなと妹は云へ共逢む時いつと知てか我戀ざらむ
○白妙の袖別るべき日を近み心に咽せて泣のみぞなく
我妹子が我を迭（遣）ると白妙の袖ひづ迄に泣し思ほゆ
後れゐて戀つゝ有ず（一本）は紀國の妹背の山に有ましもの
斯しつゝあり戀めて玉の緒の絶て別は悲しかるべし
玉鉾の道に出立行く我を君がとをし思ひてゆかむ（嘆）
○白雪の汀によする白浪のゆきては見ねど別かなしき
　深養父
○雲居にも深き心のおくれねば別ると人にみゆ計なり
いつのまに戀しき事の積る覽別て後は程もへなくに
別行く道の雲居に成ぬればとまる心も空にこそなれ
白雲にとび返るべき人をなみ唯鷹鶴になりにける哉
君と我命をのみぞしらなみの立歸りくる程の遙けさ
櫻花けふ散り曇れ飽ずして別るゝ人も立とまるべく
事（跡）つけて何か花にもあつらふ唯一言の葉にも留めよ
別れゐれど別るるともみすみつかけこそ戀にも同身なれば
　素性
○袂なき身と成ぬべしけふよりは涙に朽て捨てむ物を
○唐衣上は涙にそぼちつゝしたひぬべくも思ほゆる哉
別ては多くの山を隔つとも戀しよな〳〵夢に社みめ
　かねずみ（かねすみ）
私の別なりせば秋の夜を心盡しに行くなと云はまし
　河原の大臣
照月をまさきの綱に撚かけて飽ず別るゝ人を繋がむ
　行平の中納言
限なき思の綱のなくばこそ正木の蔓（葛）を撚も惱まめ
　ぬさ
千早振神の社に我懸けしみ幣は給へ妹に逢はなくに
すかる鳴秋の萩原朝立ちて旅ゆく人の惜くもある哉
　人麿
すべ神にぬさとりむけて我衣ゆき逢坂の山通るかな
　貫之（二首）
渡つ海の千尋の神に手向する幣の追風歇す吹かなむ
降雪を空に幣とぞ手向たる春のまかひに年の越れば
たち幣の我が思をば玉鉾の道の野毎に神もつてなむ
行く時も歸らむ時も玉鉾の道より神を祈れとぞ思ふ

二四いとまだき見ゆる紅葉は君が爲思染てし幣にぞ有ける
二五そめたちて祈れる幣の思をば手向の道の神や知らむ
二六紅葉を幣と手向に散しつゝ秋と共にや行むとすらむ
たむけ
二七百足ずやそすみ坂に手向せば過行人にさし逢はむかも
二八今はとていほへぞまかるまかりぢに手向の神に麻絵はらむ
二九山城の岩田の森に心遣く手向をしてぞ妹に逢がたき
三〇君を思我心をぞ見えぬべき手向の神もいかに思はむ
三一此度は幣も取あへず手向山紅葉の錦神のまに〳〵
三二玉鉾の手向の神も我が如く我思ふ事を思へとぞ思ふ
貫之　之二首
三三紅葉をも花をも折れる心をば手向の山の風ぞ知らし
三四手向せで別する身の侘しきは人目を旅と思ふ也けり
たび
三五家はなれ旅にしあれば秋風の寒き夕に雁なきわたる
三六草枕旅行君を思はしみそひてこまほしものの濱べに
三七神風や伊勢の濱荻折ふせて旅寝やすらむ荒き濱べに
三八鴨こにか我は宿らむ高島のかちの〳〵原に此日暮しつ
ゆげのおほぎみ
三九家にありて見れど飽ぬを草枕旅にぬ妹が有が久しさ
有馬皇子
四〇ありて見る物にし非ねど草枕旅にし聞ば悲しかり鳧
四一家にあればけに盛の飯を草枕旅にし有れば椎の葉に盛る
四二程遠く眺めもやらむ秋霧ぱ旅行く道を隔てざらなむ
四三我ならぬ人とねにけり草枕後の爲とか何かとがめし
四四時雨降荒き濱べにくれぐ〳〵遠くや行む日頃積りて
四五玉きはる命に向ふ吾背子といかにせよとか旅に行寐
四六天地のかみもたすけよ草枕旅ゆく君が家にいるまで
四七人も皆遠き道ゆけど草枕此たびばかり惜しき旅なし
四八霜がれの草枕には君戀ふる涙の露ぞおちまさりける
四九夜もすがら設く初霜を拂つゝ草の枕にあまた度ねぬ
五〇まだ斯る旅し無れば草枕露けからむと思はざりしを
伊勢
五一草枕旅行く空の山の上に白雲ならぬ身もやどりけり
小町
五二岩の上に旅寝をすればいと寒し苔のみ衣暫かさねよ
五三白妙の藤江の浦にあさりする蜑とか見らむ旅行我を
五四枕とて草結てふともせし秋の夜とだに頼まれなくに

五五はを惜み草の枕はせばく共思はむどちの旅はへぬべし
五六人もなき旅にやならむ草枕旅なる君が夢に見えつる
五七昨日きて今宵計りを旅衣幾日へぬとか袖はひづらむ
五八梅の花散らす春雨おほくふる旅にや君は庵せるらむ
五九秋風の吹ぬと思へば出てこし家路の方は戀しかり鳧
かなしび
六〇飛鳥川音聞えつゝ行く水のやむ時もなく思ほゆる哉
六一穴蟬の世は常なしと知る物を秋風寒くなりにける哉
六二妹とゐて二人造りし我宿は木高く繁くなりにける哉
六三今よりは秋風寒く吹なむを待でか獨長き夜を寝む
六四佐保山に鶯く霞見る度に妹を思ひでなかぬ日はなし
六五昨日こそ妹はありしか思はずに濱松が枝に雲の鰺く
六六長き夜に獨や寝むと妹がいへば過にし人の思ほゆる哉
六七早晩と待つ寒妹に玉章のこだについにし君かも
六八秋さらばみつゝ忍べと妹が植しし前の撫子咲にけるかも
六九小ら波大山守は誰爲山にしめゆふ君もあらなくに
七〇潮けにつ荒磯に有と行水の過にし妹が形見とぞ見る
七一孤枕相巻きしこも有ねば社夜の更らくも我惜みせめ
七二茜さす日は照乍らぬば玉の夜渡る月の隠らくもを惜し
七三去年見てし秋の月夜は照せ共逢見し妹は彌遠ざかる
七四雖波潟潮のありそに沈みにし妹が姿を見る由もがな
人麿
七五沖つ浪よるあら磯を敷妙の枕にまきてふせる妹かな
七六神山の岩根しまける我をかも知すて妹が待つゝをらむ
七七衾道を引手の山に妹を置て山べを見ればいけりともなし
七八玉鉾のいとはたまかも足曳の此山陰にまけば散ぬる
七九何せむにけふの種を蒔つらむ同形におぼえ行物か
八〇血の涙落てそたぎつ白河は君が代迄の名に社有けれ
八一飛鳥川柵かけてせかませば流るゝ水も長閑からまし
貫之　之

八二露立つ山べを君によそへつゝ春の宮人なほや頼まむ
八三君まさぬ春のみ山は櫻花涙のあめに濡れつゝぞふる
八四戀る間に年の暮なば亡き人の別や最と遠くなりなむ
八五藤衣織りける糸は淵もなれやぬれは増れど乾く時なき
八六夢とこそ云べかりけれ世中を現ある物と思ひける哉
八七手に掬ぶ水に映れる月影の有か無かの世に社有けれ
八八立歸り悲しくも有哉別ては知らぬも煙と思へば
八九置く露を別し人と見る毎に朝な〳〵ぞ戀しかりける

九〇明日知ぬ命なれ共暮ぬ間の今日は人祈戀しかりけれ
九一君ませしゝ昔は露か故郷の花みるごとに袖の濡るらむ
九二昨日迄逢見し人の今朝なきは山の雲とぞ鰺きにける
以上貫之
九三うけれ共生るは偕も有物を死ぬるのみ社悲かりけれ
衆　輔一首
九四吹く風に任せて見れば櫻花人の世よりは久しかり鳧
九五一重だにきれば悲しき藤衣重ぬる秋を思ひやらなむ
返し
貫之
九六藤衣重ぬる思ひ思ひやる心はけふもやまずざりける
九七亡人の年と共にし歸りなば行を惜とは思はざらなむ
友則
九八寝てもみゆる寝でも見え鳧大方は空蝉の世ぞ夢には有ける
業平一首
九九出ていなば心輕しと云やせむ世の有樣を人は知ずて
貫之
一〇〇石上ふるく住みこし君なくて山の霞はたちぬ待らむ
返し
躬恒
一〇一君なくてふるの山べの春霞徒にこそ立ちわたるらめ
之
一〇二うせにきと身社聞ゆれ石上古き名失ぬ君にぞ有ける
忠岑五首
一〇三藤衣はつるゝ糸はわび人の涙の玉の緒とぞなりける
一〇四ぬるが内に見をのみやは夢と云ふ儚き世をも現とはみず
一〇五墨染の君が袂は雲なれや絶えず涙のあめとのみふる
一〇六時しまれ秋やは人に別るべきまるは夜寒になれる頃しも
勢一首
一〇七悲しさぞ増りに増る人の身にいかに多かる涙なる覽
伊勢三首
一〇八より合せ泣なる聲を糸にして我涙をば玉にぬかなむ
一〇九伏まろび惑ふ形見を見よとてや別し衣は捨て置けむ
一一〇定なき世をきく頃の涙こそ袖の上なる淵瀬なりけれ
業平

一一一山の皆移りて今日にあふ事は春の別を聞ふと也けり
一一二君まさで荒たる宿の板間より月の洩るにも袖は濡鳧
一一三大空は曇らず乍ら詠めつゝ年のふるにも袖は濡けり
一一四なく涙雨とふらなむ渡り河水増りなば歸りくるがに
一一五深草の野べの櫻も心あらば今年ばかりは墨染に咲け

三三 花よりも人社あだに成にけれ執を先に戀むとかみし
三四 秋山に紅葉拾ひに入し妹は爰にやにほ鳥がみたれ待てど見こず
三五 見毎に袖ぞ濕ぬるなき人の形見に見よと植し花かは
三六 年ごとに春は櫻にあひくれど植けむ人の影ぞ戀しき
三七 すぐ〳〵と見しも聞きしも無き數にいつなりぬらむ
三八 思ふ共亡人かけて云なゆめ最ど侘たる人のきかくに
三九 數々に我を忘れぬ物ならば山の霞をあはれとは見よ
〇四〇 空蟬のよの事なればよそにのみ山をや今はよすがと思はむ
一四一 袂より同じ形見に生れめど短くすぎば悲しかりけり
二四二 摩をだに聞で別るゝ我よりもなき床にねむ人ぞ悲き
三四三 君なくて煙絶えにし鹽竈の浦さびしくも見え渡る哉

閑院左大臣

四四 夕されば音に鳴虫の獨して妻ごひすなる聲の悲しき

長歌 七首

みかの原にみかどみゆきし給ふ時めをはなれて詠める

四五 みかの原 旅のやどりに 玉ほこの 道ゆきあひに
四六 雨ぐものよそにのみして 言の葉は 山のなければ
四七 心のみ むせつゝ有に 天つちの 神こととよせて
四八 しき妙の ころもで返し 我が妻と 頼めることよひ
四九 秋の夜の もゝよの中に とはに寢むかも

かさのかなむら

五〇 ふじの山を見て 山のべの赤人

五一 天つちの 別れし世より 神さびて 高くかしこき
五二 駿河なる 富士の高嶺は 天のほら 振さけ見れば
五三 渡る日の 影もかくれて 照る月の 光りも見えず
五四 しら雲の 時じくぞ 雪はふりける
五五 語りつぎ 云つぎ行かむ 富士の高嶺は

古き都にて詠める 赤人

五六 三室の神なびやまに 百枝さし 繁く生ひたる
五七 槻の木の 玉かづら 絶ゆる事なく
五八 有つゝも やまず通はむ 飛鳥野の 古さみやこは
五九 山かたみ 河とほじろし 春の日は 山しみがほし
六〇 秋の夜は かはしも清し 朝ぐもに たづは亂れて
六一 夕ぎりに かはづは騒ぎ 見る毎に なきのみぞ泣
六二 昔おもへば

こなか歌

六三 しき嶋の やまとの國に 人は多く 滿てあれども
六四 ふむ波の 思ひまつはれ わか草の 思ひなれにし
君がめを 戀やあかさむ 此の長き夜を

讀人不知

古き長歌

六五 あふ事の 稀なるいろに 思ひそめ 我が身は常に
六六 あま雲の 晴るゝ時なく ふじがねの 燃つゝとはに
六七 思へども あふ事かたし 何しかも 人わろく見む
六八 渡つみの 沖をふかめて 思ひてし あもひは今は
六九 徒らに なりぬべらも 行く水の 絶ゆる時なく
七〇 かく細の おもひ亂れて 消なばけぬべく
七一 思へども えぶの身なれば 猶やまず あもひは深し
七二 足びきの 山したみづの 木隠れて たぎつ心を
七三 あひ語らはむ 色に出ば 人知りぬべみ
七四 誰にかも あはれ〳〵と 獨りのみ
七五 墨ぞめの 夕べになれば 庭に出て 思へども
七六 歎き餘りせむ術なみに 白たへの 袖に置く露の
七七 ころもの袖に なほ歎かれぬ 春がすみ
七八 思へども あはむと思へば 春がすみ

古歌奉る時の目錄のその長歌

七九 千早ふる 神の御代より くれ竹の 貫之
八〇 天びこの 春がすみ 思ひみだれて
八一 五月雨の 空もとゞろに 山ほとゝぎす
八二 なく毎に 唯も寢ざめて さよ更て
八三 紅葉ばを 唐にしき 立田のやまの
八四 見てのみ忍ぶ かみな月 時雨れ〳〵て
八五 冬の夜の 庭もはだれに なほ消え返り
八六 年ごとに 時につけつゝ 哀れてふ
八七 君をのみ 千代にと祝ふ 事をいひつゝ
八八 ふじのねの 燃ゆる思ひも 世の人の 飽ずして
八九 藤ごろも 別るゝなみだ
九〇 すべらぎの 八千草の 言の葉ごとに
九一 いせの海の 仰せかしこみ 拾ひ集め
九二 玉の緒の みじかき心 取れりとすれど
九三 年をへて 大みやにのみ 思ひ敢ず
九四 仕ふとて 久かたの 猶ぐさ生ふる
九五 板間荒み ふるはる雨の 我が宿の
九六 漏りやしぬらむ

おなじ題

九七 くれ竹の 無りせば 壬生忠岑
九八 よゐの古こと いかほの沼の
九九 思ふこゝろを のばへまし
一〇〇 有きてふ 哀れむかしべ
一〇一 人まろこそは 嬉しけれ
一〇二 言の葉を 天つそらまで 聞えあげ 末の世までの
跡となし 今もおほせの 下れるは 塵につげとや
塵の身に 積れることを 問はる寃 これを思へば
古へに 藥けがせる けだ物の 雲にほえけむ
心地して ちゝのなきも 思ほえず 一つこゝろぞ
誇らしき 斯はあれども 照ひかり 近きまもりの
身也しを 誰かはあきの くる方に 欺むき出でゝ
とのへ守身の 御垣より 行くかしこくも
御垣もり 九のかさねの 中にては あらしの風も
思ほえず いまは野山し 近ければ 春はかすみに
聞ざりき 夏はうつせみ なき暮し 秋はしぐれに
袖をかし 冬はしもにぞ 責らるゝ かゝる侘しき
身乍らに つもれる年を 記せれば 五つのむつに
成にけり 是に添はれる 私の 老のかずさへ
やよければ 身は賤しくて 年たかき ことの苦しさ
斯しつゝ ながらの橋の 長らへて 難波のうらに
立つ波の 波のしわにや 流石にいのち
惜ければ おぼゝれむ しら山の
越のくになる かしらは白く 老ず死なずの
なりぬ共 音に聞く 藥もが
おとはの瀧の 君がやちよを わかえつゝ見む

躬恒

冬の長歌

一〇三 千早ぶる 神なつきとや けさよりは 曇りもあへず
一〇四 はつ時雨 紅葉とともに ふる里の 吉野のやまの
一〇五 やまあらも 寒く日ごとに 成行けば 玉の緒とけて
一〇六 こき散し あられ亂れて 霜こほり いや固まれる
一〇七 庭の面に 村々見ゆる 冬ぐさの 上にふりしく
一〇八 しら雪の つもり〳〵て あら玉の 年をあまたも
一〇九 過しつる哉

七條の后うせ給ひて後詠める 伊勢

一一〇 沖つなみ あれのみ増る 宮の内は 年へてすみし
一一一 伊勢の蜑 舟なかしたる 心ちして よらむ方なく
一一二 悲しきに なみだの色の 紅に 我等がなかの
一一三 時雨にて 秋のもみぢと 人々は 己がちり〳〵
一一四 別れなば 頼むかたなく 成果てゝ とまる物とは
一一五 花ずゝき 君なきにはに 群立ちて 空をまねかば
一一六 はつ雁の なき渡りつゝ よそにこそ見め

せんとう歌十七首

一一七 垣ごしに犬よびこしてとがりする君青山の葉繁き山べに馬やすめよ君

打ち渡すをちかた人にもの申す我れそのそこに白く咲けるは何の花ぞも　返し

春されば野べにまづ咲く見れど飽かぬ花まひなしに唯名のみ花の名なれや

春日なる三笠の山に月も出でぬかもさき山に咲ける櫻の花も見べく

三吉野の吉野の瀧も年頃に落つる白波止りにし妹を見まくの欲しき白波

蜷蜂我床の上に鳴きつゝもやなおきそつゝ君を戀ふるにいも寢られぬに

しの薄ほに出でぬ戀を我がするかげろふのたゞひとめのみ見し人ゆゑに　貫之

君がさす三笠の山のもみぢ葉の色神無月しぐれの雨の染めるなりけり　躬恒

ます鏡そこなる影にむかひゐて見る時にこそ知らぬ翁にあふ心ちすれ

草木すら花にはなべて相坂の關に春も有るを我身といへばことのかるけむ

初瀬川ふる河のべに二本ある杉年をへて又もあひ見むふたもとある杉

しら雲のつねにしく多は過ぎにけらしも春霞たなびく野べに late なくも

梓弓ひきつべにあるなのりその花とる沖にあはずあらめやなのりその花

百敷や大宮人のふむあとゝころ沖つ波よらずありせば失せずあらまし

太刀の尻鞘に入野にくすひく我妹子眞袖もてきてむとてかも夏草かるも

深なる廣の若葉を唯れ折りし我背子がふる袖を見むと我ぞ手折りし

住吉の出見の濱に柴なかりそね少女子が赤裳垂引き濡れて行かひ見む

古今和歌六帖第五

知らぬ人

誰はかは知ぬ先より人を知る知ぬ人こそ知人になれ

大空に我を思はむ人もがなはかなきことは後に定めむなかとみの女郎

春日山朝見る雲の覺束な知らぬ人をも戀ひ渡るかな

春霞たなびく今日の夕月夜覺束なくもこひ渡るかな

淺茅生に朝ある雲の消行けば昔も今もみぬ人思ほゆ

見ぬ人の戀しきやなぞ覺束な誰とか知らむ夢に見ゆ共　友則

我心いつ習ひてか見ぬ人の思ひやりつゝ戀しかる覽

音に聞うつの山べの現にも夢にも見ぬに人の戀しき

語らへば知ぬ人なくなると云を疎きを罪で馴試みむ

玉つ島深き入江に漕ぐ舟のうきたる戀も我はする哉

此山の峰に近しと我みつる月の空なる戀もする哉

世中は斯こそ有けれ吹風の目に見ぬ人も戀しかり鳧いひはじむ

思ひつゝまだ云ひそめぬ我戀を同心に人は知らなむ

思ひつゝへにける年を知べにて馴ぬる物は心也けり

まだ近くも相見ぬ人の戀しきは衆てよりなる心なるべし

知る知らぬ何か綾なく分きて云む思のみ融知べ也けれ

出てみる向の岡の本繁み咲たる花のならずはやまじ

廣わかの浦にきよする白波の知じな君は我は云ふ共

玉潜く蟹ならね共渡つ海の底ひも知らずいれる心を

音に聞く人に心を筑波嶺の見ねども思ふ思はむや君　九條右大臣

廣鶴の澤邊に年はへぬれども心は雲の上にのみこそ　藤原敦忠

池水の云出るとの難ければ水籠り乍ら年ぞ經にけるとしへていふ

年月は相見ぬ程に過ぬるをいつをか後の我世とはせむ　人麿

少女子が袖ふる山の端垣の久しき世より思初めてき

息のをに妹を思へば年月の行らむ方も思ほえぬかも　伊勢

思河絕ず流るゝ水の泡のうたかた人にあはで消めやも　郭公聲にたてゝも年へぬる我が物思を知らぬ人きけ　枇杷大臣　貫之

幾久き我ふりぬれや身に添へる涙も腦く成にける哉

夢妙の枕を卷て妹とあれとぬる夜は無て年ぞへにける

年月は立ち止らず過ぬれど思ふ心は行かずもある哉

種しあれば岩にも松は生ぬるを戀をし戀ば逢ざらめやは

東路のさゝ舟橋始より思ふ心ありいとひすなきみ

吉野川岩波たかくゆく水の早くぞ人を思ひそめてし

かくし猶有て年へば玉きはる命も今は惜けくもなし

乳根の親に語らば君もあれも逢とは無に年ぞへぬべき　友則

年をへて消えぬ思はありながら夜の袂は猶凍りけり　貫之

戀つゝ世をや盡さむ高砂の松の常磐に心はありとも　貫之

年月は昔にも非ぬ今日なれや戀しきことは戀ざり鳧　同

戀にのみ年は過せど子規鳴くかひもなく成ぬべら也

人知れず我し鳴つゝ年ふれば鴛の音を物とやは聞く　貫之

白玉と見えし涙も年ふればから紅にうつろひにけり　躬恒

頼めつゝあはで年ふる僞にこりぬ心を人は知らなむ　是則

逢ことを長柄の橋の長らへて戀渡るまに年ぞへにける

新玉の年はへぬれど白妙の袖交しゝを忘て思へやは

山菅の亂れ戀のみせさゝ逢ぬ妹かも年はへつゝも

戀しさの限だにある世也せば年へて物は思ざらまし

出て行かば空飛雁の鳴ぬべみ今朝こと云に年ぞへにける

此河の水泡渦まき行水のことはかへさで思初めてき　初めてあへる

はつ〳〵に人を逢見ていかならむ眺の世にか又もあひ見む　人麿

掬ぶ手の石間をせばみ奥山の岩垣清水飽ずもある哉

足曳の山下とほる月影にあかずも人に逢見つるかな

偶さかに逢見そめては陽炎の仄にとはた思はじ物を

道のべの尾花がもとの思ひ草今更何の物をおもはむ

二眞菰刈をふの河原の水隠て繁こし妹が紐解くあれは
三君が世も我世も知む巌岩代の岡の萱根をいざ結てむ
四水鳥の鴨の住池の下ひなく誰かる君を今日見つる哉
五墨染の黄昏時の朧夜にありこし君にさやにあひ見つ
人麿
六山端にさし出る月のはつ〳〵に君をぞ思つる戀しき迄に
大伴坂上郎女
七戀々てあへる時だに美くしもと盡してよ長くと思はゞ
八小夜更て天の戸渡る月影に飽かずも人を相見つる哉
あした　千里
九今朝はしも起けむ方も知ざりつ思出るぞ消て悲しき
一〇鳴門より出てやきつる滿潮の晝間計もみねば戀しき
一一逢事は夢か星會の朝風か戀しき波のよるみしほどに
閑院の大臣
一二いつの間に戀しかる覽白露の今朝起て歸來にしか
一三田子の浦の波間に遊ぶ濱衛いつを程にて戀しかる覽
一四百羽がき羽かく鴫もわが如く朝佗しき數は添ふらし
一五覺束な夢か現か陽炎の仄めくよりもはかなかりしは
業平
一六起もせず寢もせで夜を明しては春の物とて詠暮しつ
一七今よりは灰川の水早くゆけ幕待つ程を久しと思はゞ
一八終夜なづさはりぬる妹が袖なごり戀しく思ほゆる哉
行平
一九戀しきに消返つゝ白露の今朝は起むる心地だにせず
貫之
二〇別つる程はへなくに白波の立返ても見まくほしきか
敦忠
二一逢見ての後の心にくらぶれば昔は物を思はざりけり
家持
二二足曳の峯の眞葛數きその根をひけば難みとしめのみぞゆふ
大伴のするがまろ
二三山主は蓋し有とも我妹子が結てむしめを人解むやは
するがまろ
二四梅花咲て散ぬと人は云へど我しめ結し枝ならめやも
二五葛城や高間の草のはや知て占ざらましを今ぞ悔しき
家持
二六君にこる草と見しより我占し野山の淺茅人な刈そね
二七二葉より我しめ結ひし撫子の花の盛を人に折らるな

二八島江の玉江の蘆を占しより己がとぞ思ふ未刈ねど
二九祝りこがいはふ社の紅葉もしめをば越て散てふ物を
躬恒
三〇我背子は相思はすとも廣妙の君が枕は夢に見えたべ
三一春野に荒たる駒の懷けすば草葉に身をもなさじそ思
こと人をおもふ
三二熊野の浦の濱ゆふ幾かさね我をば君が思ひ隔つる
三三我戀は人に知らすた玉匣開き明つと夢にしも見えつ
三四難波潟潮干の名殘あく迄に人のみる子を我は乏しき
三五妹が髪あげを笹野の放れ駒戯にけらし逢ぬ心へば
三六玉藻はふ木數多に有りと云へば絶ぬ心の嬉げもなし
わきて思ふ
三七思はぬと思ふと二人比ぶれば同人とや云べかりける
三八思ふてふとより外に又もがな君一人をばわきて忍ばむ
三九我門ゆのいさゝ小川の眞清水のましてぞ思ふ君獨をば
四〇百數に數多の袖は見えしかど分きて思の色ぞ戀しき
四一數多見し豐の御幸のもろ人の君しも物を思はする哉
人麿
四二うちびさす大宮人は多かれど分きて戀るは唯獨そも
四三思ふてふとを始くぞ古しける君にのみ社云べかりけれ
四四天雲を千重に掻わけ天降る人も何せむ妹にし非すば
四五美くしと我思ふ心早川のせきとせくとも猶や崩れむ
いはで思ふ
四六心には下行く水の湧返り云はで思ふぞ云ふに優れる
四七逢坂の關に流るゝ石清水云はでしも社戀しかりけれ
四八磯離れ浦潜く舟のほに揚て云でしもこそ悲しかりけれ
友則
四九磐に出でゝ云はぬ計ぞ水無瀬川下に通ひて戀しき物
人麿
五〇とに出て云はゞいみじみ山川のたぎつ心を堰ぞ兼つる
五一見し夢の思出らるゝ宵毎に云はぬを知るは涙也けり
人知れぬ
五二奥山の榊の板戸を晝早み妹があたりの霜の夜にねむ
五三思出て晝には鳴く共逸じろく人の知べく歎すなゆめ
五四山河にうへを伏置て守兼てか年の八年を我ねん住ひし
深養父
五五蟲の如聲に立てゝは鳴ねども涙のみこそ下に流るれ

五六相思ぬ人を思ふは大寺の餓鬼のしりへに額づくが如
五七我背子は相思はすとも廣妙の君が枕は夢に見えたべ
躬恒
五八春野に荒たる駒の懷けすば草葉に身をもなさじそ思
こと人をおもふ
五九三熊野の浦の濱ゆふ幾かさね我をば君が思ひ隔つる
六〇我戀は人に知らすた玉匣開き明つと夢にしも見えつ
六一難波潟潮干の名殘あく迄に人のみる子を我は乏しき
六二妹が髪あげを笹野の放れ駒戯にけらし逢ぬ心へば
六三玉藻はふ木數多に有りと云へば絶ぬ心の嬉げもなし
わきて思ふ
六四思はぬと思ふと二人比ぶれば同人とや云べかりける
六五思ふてふとより外に又もがな君一人をばわきて忍ばむ
六六我門ゆのいさゝ小川の眞清水のましてぞ思ふ君獨をば
六七百數に數多の袖は見えしかど分きて思の色ぞ戀しき
六八數多見し豐の御幸のもろ人の君しも物を思はする哉
人麿
六九うちびさす大宮人は多かれど分きて戀るは唯獨そも
七〇思ふてふとを始くぞ古しける君にのみ社云べかりけれ
七一天雲を千重に掻わけ天降る人も何せむ妹にし非すば
七二美くしと我思ふ心早川のせきとせくとも猶や崩れむ
いはで思ふ
七三心には下行く水の湧返り云はで思ふぞ云ふに優れる
七四逢坂の關に流るゝ石清水云はでしも社戀しかりけれ
七五磯離れ浦潜く舟のほに揚て云でしもこそ悲しかりけれ
友則
七六磐に出でゝ云はぬ計ぞ水無瀬川下に通ひて戀しき物
人麿
七七とに出て云はゞいみじみ山川のたぎつ心を堰ぞ兼つる
七八見し夢の思出らるゝ宵毎に云はぬを知るは涙也けり
人知れぬ
七九奥山の榊の板戸を晝早み妹があたりの霜の夜にねむ
八〇思出て晝には鳴く共逸じろく人の知べく歎すなゆめ
八一山河にうへを伏置て守兼てか年の八年を我ねん住ひし
深養父
八二蟲の如聲に立てゝは鳴ねども涙のみこそ下に流るれ

五〇色ならば移る計も染めてまし思ふ心を知る人のなき　貫之
五一朝霞かびやが下に鳴蛙忍びつゝありと告む子もがな
五二名取川瀬々の埋木顕ればいかにせむとか相見初けむ
五三笹の葉に置初霜の夜を寒みしみはつく共色に出めやも
五四飛鳥川七瀬の淀に住む鳥も心あれば祉波立たざらめ
五五川の瀬に靡く玉藻の水隠れて人に知れぬ戀もする哉
五六人知れぬ思を常に駿河なる富士の山こそ我身也けれ
五七藤波の咲春の野には葛の下ばの戀は久しくもあり
五八吉野川水の心は早くともたぎつ音には立てじとぞ思
五九難波潟すくも燒火の打忍び下燃にてや世をば盡さむ
六〇人知れず戀はするが共逸じろく色には出でじ櫨の花
六一言に出て云はゞゆしみ櫨のほには咲出でゝ戀をする哉
六二多河の上は凍れる我なれや下に流れてこひ渡るらむ
六三人知れず物思ふ程の我袖は秋の草葉に劣らざりけり
六四夕霧の霧の霜置ぬらし朝戸出に跡路附て人に知らるな
六五我宿の秋萩の上に置露のいちじろくしも我戀めやは
六六忍ぶれば苦しき物を人知れず思ふてふと誰に語らむ
六七白山の雪の下草我なれや下に燃えつゝ年のへぬらむ
六八人めのみとはに斯のみ守られば孰の時か我戀ざらむ
六九石上ふるの早田のほには出でず心の内にこふる此頃　忠岑
七〇須磨の蜑のこれる鹽木の燃れ共人に知られぬ我戀哉　貫之
七一逢見ずばいけらじとのみ歎身の遁に惜く人しれぬ哉
七二人知れず止なましかば侘つゝも無名ぞとだに云ましを
七三思ふには怨ぶる事ぞ負にける色には出じと思し物を
七四さを鹿の小野の草臥いちじろく我は問ぬに人の知覧
ほづみのわうじ
七五人言を茂みこちたみ老の世に未だ渡らぬ淺河渡る　人麿
七六試に思ひしものを秋山の初もみち葉の色に出けり　家持
七七籠江の下に戀餘り白波のいちじろく出ぬ人の知べく
人まろ
七八山城のかまふけのをに臥鹿の朝臥衆て人に知らるゝ夜ひとりをり　藤原のやつか

七九木間にて春日や暮こ雨隠出でゝ行かねば戀つゝぞなる　深養父
八〇いかにして夜をば明さむ月影の獨侘たる宿をしも照る
八一我のみと思ふは山のいさめ里いさめに君を戀明しつる
八二君こふとしなえうらぶれ我をれば秋風吹て月傾きぬ
八三ぬは玉の夜渡る月の夕されば更にや妹に我戀をらむ
ゆはらゆの王
八四秋萩を散す霖雨の降なべに獨起居てこふる夜ぞ多き
人まろ
八五獨ねて思ひ亂るゝ天雲のたゆたふ心わが思はなくに
大伴坂上郎女
八六時鳥痛くな鳴そ獨ねていの寝られぬにきけば苦しも
笠金村
八七草枯の入江にあさる鷹鶴のあなたづ〳〵し友無にして
八八秋野に寝てのみ明す白露は獨在人のなれるなるべし
ひとりね　人まろ
八九鵠の羽に霜ふり寒き夜を獨やわがねむ君待ちかねて
九〇子規鳴くや五月の短か夜も獨しぬれば明しかねつも
九一秋風に萩の下葉の移ろへば獨ぬる身ぞ戀まさりける
家持
九二泡雪の庭にふりしき寒き夜を手枕まかで獨かもねむ
九三打靡き獨しぬれば增鏡とると夢みつ妹にあはむかも
人まろ
九四玉匣明けまく惜みあたら夜を衣手かれて獨かも寝む
九五秋なれば山とよむ迄鳴く鹿に我劣らめや獨ぬるよは
貫之
九六獨寝を侘しき物とこりよとや旅なる夜しも雪の降覧
九七秋風の吹をさし日に思しを妹し無れば今宵寒しも
九八さかしらに夏は人まね笹の葉の戦ぐ霜夜を我獨ぬる
九九をしへゆくをしこしきふと思へど秋風の寒く吹夜はきの玉女
一〇〇かろの池の入江廻れる鴨だにも玉藻の上に獨ねなくに
一〇一紅葉の散の紛ひに時雨して夜さへぞ長き妹としねば
貫之
一〇二秋萩の下葉はよそに見しか共獨ねむとは思ざりしを
一〇三獨ねて絶にし紐をいみしかざせむ術知ず泣のみし泣
ふたりをり
一〇四石間ゆく水の白波立返り斯く祉は見め飽ずもある哉
貫之
一〇五春霞たなびく山の櫻花見れどもあかぬ君にもある哉

一〇六心をぞ割無き物と思ぬるみる物からや戀しかるべき
一〇七戀のごと割無き物はなかり鳧且みる人の且は戀しき
一〇八春來れば田居に先咲く壺菫見れ共あかぬ君にも有哉
ゆはらゆの王
一〇九青山ぢの峰の白雲朝かげに常に見れども珍らしや君
一一〇蛙なく六田の川の河柳ねむごろ見れどあかぬ君かな
一一一年月は新た〳〵に逢見れどあが思ふ君は飽足ぬかな
一一二春の雨に萌る青柳手に取て日に〳〵見れど飽ぬ君哉
あべのむしまろ
一一三向居て見れ共飽ぬ我妹子に立別なむたづき知らずも
ふせり
一一四睦言もまだ盡きなくに明に鳧執らは秋の長しと云よは
みつねり
一一五長しとも思ぞ果ぬ昔よりあふ人からの秋の夜なれば
小町
一一六秋夜も名のみ也鳧逢しあへばとぞともなく明ぬる物を
一一七明ぬべく千鳥しばなく白妙の君が手枕未飽かなくに
一一八新玉の此夜な明けそあか光る旦ゆく君待てば苦しも
一一九刈菰の一重を敷てさぬれ共君としぬれば寒けくも無
閑院の大臣
一二〇明ぬとて今はの心つくからになぞ云知ぬ思添ふらむ
一二一戀々て稀にあふ夜の暁は鳥の音つらき物にざりける
貫之
一二二長き夜を思明して朝露の起てしくれば袖ぞひぢぬる
一二三明ぬとて歸る道にはこき垂て雨も涙も降そぼちつゝ
一二四曉のなからましかば白露のおきて侘しき別せましや
一二五月影に見えし尾花の仄々と明つる計り侘しきはなし
一二六人目もる君がまに〳〵我共に早く起ねて裳の裾濡す
一二七鶏にあらぬ音にても聞をけむ明ぬるとを我泣しかば
一二八有明と知ずぞ有ける時鳥なく〳〵きつる聲の紛れに
一二九いかで我人にも問はむ曉の飽かぬ別や何に似たると
一三〇今宵のや早く明れば術をなみ秋の百夜を願ひつる哉
一三一月しあれば明くらむわきも知ずして寝てにし我背かも
たかたの女王
一三二我背子に又も逢じと思へばか今朝の別の悲かりつる
伊勢
一三三一向にけなばけなゝむ露の身の玉とは無に置惑ふ覧

一夜隔てたる
飛鳥川あす明てゆけ今日暮て今宵隔てば侘しかるべし
弱竹に枝さしかはす篠薄夜混せに見えむ君は頼まじ　貫之
いつしかも今日は暮しつ飛鳥川渡て早く玉藻潜かむ
呉竹の繁くも物を思ふ哉一夜隔つるふしのつらさに
雨障り常する君は久方のよんべの雨に懲にけむかも
思ふより見より物は有物を一日隔つを忘ると思ふな
若草の新手枕を巻き初て夜をや隔てむ憎からなくに　人麿
玉ゆらに昨日の夕見し物を今日の旦にこふべき物か
昨日みて今日社あひた我妹子にこゝばくつきてしるけむかも
あすの宵逢ひなむ有めや足曳の山彦響み呼立ても鳴く　人麿
一夜隔てしからに新玉の月かへつると思ほゆる哉　ゆはらの大君
君に逢て一日二日に成ぬれば今朝彦星の心地すらしも　みつね
返し　貫之
逢見すて一日も君に並ばねば七夕よりも我ぞ優れる　人麿
二夜隔てたる
君をめに見まく欲さに此二夜千年の如く我こふる哉
君にあはで二夜に成ぬ玉匣今宵ぞ明けむとす覧　貫之
物へだてたる
思ひやる心は君を見てこなむ知らぬ使は後めたきを　貫之
近けれど近江の海ぞ斯りてふみるめも生ぬ中や何なる　人麿
草隠鳴さを鹿の見えね共妹があたりを行けば戀しも
名にしおへば八重山吹ぞ愛りける隔て折れる君にぞ
久方の天のしるしとみなし川隔て置し神代の怨しも
日頃隔てたる　石川女郎
春日野の山べの道を夜切なく通し君が見えぬ頃かも
いけの上の大君
松の上に月は移りぬ紅葉の過ぎぬや君が逢ぬ夜多く

白鳥の鳥羽山松の待つゝぞ我戀渡るこの月頃を
夕されば物思ひ増る見し人のと問ひし顔而影にして
向ひ居てそもく程だに肝消えて歎きし物を月のへにける
泉河絶えむ物とは思はねど逢見てみかの原は過にき
立戀る月重なりて逢ねどもさね忘られず面影にして
葦間分行く水鳥に非なくに淀みがちにも見ゆる頃哉　人麿
逢見では幾久さにもあらなくに年月の如思ほゆる哉
垣ほなす人の横言繁きかも逢ぬ日多く月のへぬらむ
年隔てたる
今のみは妹をば戀ず奥山の岩に苔生ひ久しきものを　之
逢見すて年はへに鳥怪しくも妹は戀ずて打渡るかも
一昨年も去年も今年も一昨日も昨日もけふも我戀る君　大伴郎女
佐保川の石階渡りぬば玉の駒のくる夜は年にも有ぬか
佐保川のさなご踏分け渡来る君をや今は年に待みむ
新玉の年の經行けば今しはとゆめよ我背子我名告らすな　安貴王
敷妙の手枕まかず隔置て年ぞへにける逢ぬ夜思へば　伊勢
年ふれど忘られ難き人の上は心とめてぞ猶聞かれける
遠道隔てたる
村鳥の朝立いにし君が上はさやかに聞つ思ひし如く
遥々と千里の程を隔てゝは稀の使もうれしかりけり
行て見て來てぞ戀しき朝香潟山越に置て寝難ぬかも
行やらぬ心や何ぞ秋の野の道は千里も有じと思へば　貫之
月替て君をば見むと云しかと日だに暮れば戀しき物を　家持
足曳の山風吹きて遠ければ心してゆけ夢に見えけり
石上のおとまろの卿
爰にしていへもやいつこ白雲の棚く山を越てきに鳧　人麿
春雨に衣の袖はひぢぬとも妹が家路の山は越なむ
斯してや猶や罷む近からぬ道の間をなづみ參りて
うちきてあへる　あべのむしまろ
秋の野の尾花が末を掻分て來つるも著く逢へる君哉

大原の此市柴のいつしかも我思ふ妹に今宵逢へるかも
今日なれば鼻しも鼻しし眉痒み思ひしとは君にし有鳧
霞立つ永き春日を戀暮し夜の更行けば妹に逢へるかも
新玉の年の緒長く我待し君ぞ來ませる夜長かれこそ　家持
君が家の門田を見むと出てこし心も著く照月夜かも
宵の間
玉敷て待共くべゆ君なれや稀なる今宵飽迄に見む
置てゆかば妹戀むかも敷妙の黒髪まきて長き此夜を　貫之
曉を何し云けむ別れれば宵もいとこそ侘しかりけれ
明る迄有だに飽ぬ夏の夜をまだ宵乍らこしが侘しさ
秋の野を朝行鹿の跡もなく思ひし君に逢へる今宵か
物がたり
蘆垣に月は昇りぬ出こ〳〵其の家のむすめ物語せむ
古のことかたらへば時鳥いかにしりてか古聲のする
ある時は有のすさびに語はで戀しき物と別てぞ知る
いつしかも行て語らむ思事伊吹の里の住憂かりしを
君とあれと立田の山の紅葉はなどや散覧見む人無しに
近くてあはず
白露に濡つゝ小夜は更にけり今は越えなむ逢坂の關
人知れぬ思ひや何ぞ蘆垣の間近けれ共あふ由のなき
昔にのみ聲を聞くらむ足曳の山下水にあらぬ物から
物がたり
唯爰に君きまさぬか墨染のたそがれ時に其の姿みむ
衣手もさし替つべく近けれど人めを多み戀つゝぞをる
山端に入なむとする月見つゝ我はと乍有むとやする
限なく思ふ涙や川と見て渡り難くはなりまさるらむ
人をまつ
夜もねでまつけも長し白妙の衣手とかじ君にあふ迄　貫之
沖つ波高師の濱の濱松の名にこそ人を待ち渡りつれ
雨降らむ日ぞ思ほゆる久方の月にだに來ぬ人の心を
宮城野の本荒の小萩露を重み風を待つ如君を祉まて
君をのみおき臥待の月影は八千代も爰に有明をせよ
淺茅生の小野の印の空言をいか也と云て君をば待だむ
斯のみや君をば待なむ山端に更けて出ぐる月待が如
道のべの草を冬野に踏枯し我立待つと妹に告なべに
花見つゝ人待つ時は白妙の袖かとのみぞ誤たれける

一とならば闇にもあらむ夏夜は照月影ぞ人頼めなる
二七住吉の待つ程久に成ぬれば蘆鶴の音に泣ぬ日ぞなき
二七山高き出ずいざよふ月待と人には云ひて君待つ我ぞ
素性

三七今来むと云ひて計りに長月の有明の月を待ち出る哉
四七松風の聞えむ時はいつも〳〵つれなき涙袖や濡さむ
五七月夜には来ぬ人またも掻き曇り雨も降らなむ侭つ間も
六七五月雨のたそがれ時の月影の朧げにやは我人をまつ
七七今々と我待つ妹は鈴鹿山吹きこす風の早も来なゝむ
八七行水の影やはみゆる片岸の松は苦しき物にざりける
貫之

九七来ぬ人を月に倣ばやぬば玉の夜毎に我は影をだに見むまだず
大伴郎女

一〇来むと云て来ぬ夜も有をこじと云を来むとは待ぜじにて
一一来むと云て来ざりし夜も有しかば待ぬしも社待にはなる
一二住吉のきしもせじとや思らむ待てふとの見えずも有哉
一三夕げにもうらにもつける今宵だに来まさぬ君をまちぶせむ
一四夕されば野べの秋萩うら若み露に枯かね君待衆ねつ
一五君がゆきけ長く成ぬ山たづの迎を行む待ちには待じ
人をよぶ

一六我宿の萩の花咲けり見に来ませ今二日計あらば散なむ
一七川靄の光にきませ足曳の山かさなりて遠からなくに
一八月誰の光は清くてらせども心ぞ惑ふ堪へぬおもひに
一九月夜よし夜よしと人に告やらばこてふに似たりまどはすらむ
二〇打群て来む人は猶こがの森木々の紅葉のまだ散ぬまに
二一我宿の萩咲に鳥散らぬ間に早来て見べし奈良の里人
二二雁音の初聲聞てたつ宿の秋萩咲けり見にこわが背子
貫之

二三月影に道惑ひして我宿に久しく見えぬ人も見えなむ
二四暗き夜は宜も来まさず梅花咲る月夜に出まさじとや
道のたより
貫之

二五過難に人は止れど山の井の便も聞けば淺くぞ有ける
二六年をへて花の便に来て問はゞ最どあだなる名をやなたむ
貫之

二七若菜摘む春の便りに春日野の花の心は知にしものを
二八問るゝもあだにはあれど此春は花の便ぞ嬉しかりける
二九玉鉾の道行ぶりに思はずも妹に逢見て戀ふる頃かも
躬恒

三〇咲氣なく花の便に問るれば我さへあだに成ぬべら也
さくらの大君
三一つらき人忘なむとて祓ふれば疾くかひなく戀社増れ
或真書云此間有心變之趣一而無歌依古本耳

一長月のその初雁のたよりにも思ふ心は聞えこぬかも
よるかのないし

二玉鉾の道は常にも惑はなむ人をとふ共我かと思はむ
三濱千鳥跡絶ぬれば逢坂をふみ惑はせる心地こそすれ
四定なく数多にかくる武藏鐙いかに乗ればか踏は違ふる
五就ことて踏惑はせる玉章ぞ爰はたなべの磯ならなくに
人づて

六古郷のならしの岡の時鳥言づてやりきいかに告きや
七大和べに狩も行しか斯しつゝ我がとも通はしやるな
八波にのみ濡れつる物を吹風の便嬉しき海士のつり舟
九三千年に花咲く桃の珍しく誰が言傳ぞ我にはあらじ
一〇春はまづ東路よりぞ若草の言の葉つげよ武藏野の原
わすれ

一一忘なむ物とは兼て思ひにき心の占ぞまさしかりける
一二大井川せきの古杭年ふとも我忘れむと思ひけむやは
一三唐衣かきたえ君が忘るれば返してもきず戀しけれ共
友則

一四打返し思ひいづれば石上ふりにし戀は忘られにけり
一五忘らるゝ身を秋懸てくる雁の數多つらぎに見ゆる君哉
一六三輪の山いかに待見む年ふ共尋る人も有じと思へば
貫之

一七雁音のまつに年ふる君故に我は歎きとなりぬべら也
わすれず
小野宮左大臣

一八今更に思出じと忍ぶれど戀しきにこそ忍びわびぬれ
一九忘れても有べき物を芦原に思ひ出るのなきぞ侘しき
二〇岩くゝり落くる水の波間にも人を忘るゝ我が心かは
二一秋の夜は春日忘るゝ物なれや霰に霧や千重増るらむ
二二つらくとも我忘れめや秋山に鳴く鹿計り契りし物を
二三秋山の霜降覆ひ木の葉ちる年はへ行けど我忘れめや
躬

二四きへ人の額髪ゆふありそ海のゆふそみ心我忘れめや
二五わすられぬ心ぞ今は恨めしきかつは限と思ふものから
二六限とは思ふ物からしかすがに忘られぬるぞ侘しかりける
二七笹の葉にはだれ降覆ひけなばかも忘れむと云へおもほえて
二八而忘いかなる人のする物ぞ我はし兼つきてし思へば
二九久方の天照る月の雲間にも君を忘れて我思はなくに
三〇大名兒を遠方野邊に刈萱の束のあひだも我忘めや
三一つらき人忘なむとて祓ふれば疾くかひなく戀社増れ
或真書云此間有心變之趣一而無歌依古本耳

一足曳の山川のひたのひたぶるに忘るゝ人を歎すかな
二ともつき程は無れど片時も間ぬはつらき物にざりける
三櫻花今は盛になりぬらむたのめし人の音づれもせぬ
四暮果つる年の心も恥かしく間でや君が春になしつる
五月影に我をみしまの芥河あくとや君が音づれもせぬ
思ひいづ

六思ひ出て戀しき時は初雁の鳴て渡ると人は知らずや
あめのみかど

七道に逢てゐみせしからに降雪の消ぬばけぬがにこはたてこ
八忘れにし人をぞ更に近江なる老曾の杜と思出でつる
九露霜に衣手濡れて今だにも妹がり行かむ夜は更ぬ共
一〇朝な〳〵草の葉繁く置露の消果てむとも云し君かも
貫之

一一打返し見まくぞほしき故郷の大和撫子色やかはれる
昔をこふ

一二岩代の野中に立てる結び松心もとけず昔をぞおもふ
一三三吉野の瀧の白玉知らねども語りしつけば昔思ほゆ
一四常磐なる岩やは今も有けれど住ける人ぞ常無りける
ありまのみこ

一五岩代の濱松が枝を引結びまさきくあらば又返りこむ
ながのいきまろ

一六岩代の岸の松が枝結びけむ人は返りて又も見むかも
麿

一七後見むと君が結べる岩代の小松がうれを又も見むかも
貫之

一八年ひさに成たる宿の花見れば昔戀しき物思ひぞつく
業平

一九月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身一つは元の身にして
麿

二〇今のみのとには非ず古の人ぞ優りてなきさへなきし
二一玉匣三室の山を行きしかばおもしろくして昔思ほゆ
貫之

二二古になほ立ち歸る心かな戀しきごとにもの忘れして

五四女郎花見るに心はなぐさまでいとゞ昔の秋ぞ戀しき
五五時鳥去年のふる聲聞くからにあはれ昔の思ほゆる哉
　昔あへる人
五六眉根かき下ゆかしみ思へるに古人をあひ見つる哉
五七窟戸に立てる松の木なれ見れば昔の人を逢見るが如
五八昔見し人は宜しも老にけり松の木高くなりにける哉
五九仕吉の里にこしかば春花のまし珍しく我逢へかも
六〇大凡に我思ほえば下にきて穢れし衣を取てきめやは
六一古の人我なれやさゝ波のふるき都の見ればかなしき
六二現にも夢にも我は思ざりき舊にし君に今宵逢むとは
六三今迄に忘ぬ人は世にもあらじ己が様々年のへぬれば
六四石上ふるのやしろの其のかみの古き心は今も忘れじ
六五獨寢の夜はだの寒さし初めて昔の人ぞ今も戀しき
六六大嶋に水をはこびし早舟の早くも人に相見てしがな
六七石上ふるの〳〵道の草わけて清水汲みには又も歸らむ
六八古の野中の清水ぬるけれはもとの心をしる人ぞ汲む
　大伴のみより
六九我妹子は常世の國に住けらし昔見しより若えまし鳥
　伊勢
七〇古の心も絶えずゆく水に我まつ影もけふこそはみめ
　人　麿
七一春來れば先さき草の幸有し後も逢見む戀ふな我妹子
　人　麿
七二三輪川の水泡逆巻き行水のこと返すなよ思初めたり
七三君と我人ぞさくなるいで君は人のなか事聞立つなゆめ
七四いる間ぢのおほつが原のいはぬづら引かばぬるぬるわにな
　ちぎる
七五かち人の渡れど濡れぬ江にしあれば又逢坂の關はこえ
七六關とを長くと思はゞ時鳥いむさ月をば過しやはせぬ
七七澤を重み靡くな柳あれ二人結びしことを人知るらめや
七八君もあれも生れば斯て未にも枝別せぬ木とも成なむ
七九白菅のまの〳〵萩原心よりおもはぬ君が衣にすらる〳〵
八〇三輪山の山下とよみ行水のみをし絶ずは後も我つま
八一みつなへの浦潮滿つな鹿島なる釣する蜑を見て歸來む
　人　麿
八二千早振うどの渡りの早き瀬に逢ず有とも後も我つま
　大伴のかたみ
八三一瀬に波千重さらず行水の後にも逢むけふならず共
　人をたづぬ
八四君を思ひ與津の島に鳴たづの尋來ればぞ有とだにきく
八五三輪の山印の杉はかれずとも誰かは人の我を尋ぬむ
八六難波江の堀江にあさる蘆鶴の尋ねや行かむ君が隨に
八七遠妻し高きありせば知ず共たづなの濱邊の尋きなまし
　めづらし
八八稀にこむ君見むと莊左手の弓取る方の眉根かきつれ
八九年をへて音信もせぬ伊勢の海の蜑のかるてふ珍しき哉
九〇待人の今見えたらば疾き花を押折取れる心地莊せめ
九一年ふれどかくもありけり春雨に萌る柳の珍しきかな
九二難波女の蘆火焚屋はすしたれど己が妻莊常珍なれ
九三山高み澤に生ひたる山あぬもてすれる衣の珍しな君
九四潮みだば舟はやよそへ我が妻の常珍しき行て早見む
九五唐衣龍田の山の萩よりも妹をぞ我はめづらしみせむ
九六少女子が玉匣なる玉櫛の見るごと今はめづらしやも君
　たのむる
九七鶏ゐる荒磯浪に袖濡れて誰が爲拾ふいけるかひぞも
九八年ふれど色も變らぬ言の葉は茂さぞ增るなほ頼め君
九九忘れじと頼めしものを年ふとも變る心と疑ふなきみ
　かさの女郎
一〇我命あらむ限は忘れめやいや日毎には思ひまさすとも
　安倍のやすとき
一一我方に見つゝ忍ばせ新玉の年のを長く我もおもはむ
一二我背子は物な思ひそ事しあらば火にも水にも我なけなくに
一三いましはと侘にし物を小盤の衣にかゝり我を頼める
　人　麿
一四千早振神のたもたる命をも誰爲とかは我は思はむ
一五とゞとくは中〻淀まじ水無瀬川たゆとふことを有こすなゆめ
一六秋とてや今は限も立ぬらむ思にあへぬ物ならなくに
一七大船の艫にもへにも寄する波寄るとも我は君が隨に
　ちかふ
一八思はぬを思ふと云はゞ大野なる三笠の山の神思知れ
一九今宵より我も思はむ君も思へ後忘れじとまづ誓へ君
二〇我を君云ひし穢さば柚川のおろす筏のあみて誓はむ
二一天地の中に出で立ち誓ひてし我や今更つま二人ねむ
二二忘らるゝ身をは思はず誓てし人の命の惜くもある哉
二三陽炎の岩垣沼の隱れには伏して死ぬ共名は云じ
　惜からぬ命なりせば世中の人の爲になりもしなまし
　みつね
二四まことなき物と思ひせば爲に涙は衾て落さゞらまし
　くちがたむ
二五君が名も我名も立てじ難波なるみつとも云ふなかひもいはじ
　かもの女王
二六大伴のみつとも云な茜さしてれる月夜に逢たり共
二七是をだに思ふととて我宿をみきさな云そ人の聞かくに
二八隱沼に思ふことある鴛鳥のしづめる水ぞ人に語るな
二九新玉の年のへゆけば今しはと夢より我背子我名つけめな
三〇津國のみつとし見てば難波なる蘆刈きとも人に語るな
　伊　勢
三一夢とても人に語るな知と云へば手枕ならぬ枕だにせず
　人づま
三二人妻は杜か社かから國のとらふす野べか寢て心みむ
三三ま玉つくこしの菅原我刈らで人のからまく惜き菅原
三四蘆の屋のこやの篠屋の忍びにも否々まろは人の妻也
三五紫に匂へる妹をにく〳〵あらば人妻故に我こひめやも
　大伴のやすまろ
三六神にも手は觸るなるをうつたへに人妻にしあれもこのかも
三七紅葉の過難ぬ子を人妻と見つゝやならむ戀しき物を
三八誰ぞこの主ある人を呼子鳥聲のまに〳〵鳴渡るらむ
　家とうじを思ふ
三九大伴のみつの濱なる忘貝家にある妹を忘れかねつる
　人　麿
四〇伊勢の海の蜑の釣繩くる時も妹は待つらむ歩め我駒
四一いでわが駒早く行こせ待乳山待らむ妹を行て早みむ
　家　持
四二一重山重なる物を月夜よみ門に立出て妹やまつらむ
四三潮風にけさひえに鳥出でこし蘆火焚屋を戀しかりける
四四狹筵に衣かたしき今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫
四五久方の天の露霜置にけり家にある妹を待戀ひぬらし
四六天雲の行き返りなむ物故に思ぞ我がする別れ悲しみ
四七ぬは玉の夜は更ぬれど月しあればきねとや君が待つらむ
四八いつとても思ざらねど君かけて家戀しきは旅にぞありける
　思ひ痩す
四九戀すれば我身は影と成にけりさりとて人に添ぬ物故
五〇我宿にかくもを植てかくも草斯のみ戀ば我痩ぬべし

家　持

一重のみ妹が結ひし帯を猶三重にゆふべく成ぬ我身は

初まきのをふの下草陰茂み有か無かに侘つゝぞふる

櫻をのをふの下草やせたれど譬ふ計もあらず我身は

君戀ふと衣の裾をくだら野の山の小川の痩こそ渡れ

蟬の鳴く雲の上なる蔭草の陰にや蟬は戀痩せぬらむ

朝影に我身は成ぬ白雲の絶えて聞えぬ人を戀ふとて

ゆげのわうじ

大船の泊る泊のたゆたひに物思ひ痩せぬ人の子故に

朝影に我身は成ぬ陽炎の仄に見えていにし子ゆゑに

一二なき戀をしすれば常の帯三重にゆふべく我身は成ぬ

かさの女郎

戀にもぞ人は死する水無瀬川下に我やす月に日毎に

思ひわづらふ　石河の女郎

梓弓引かば心にかなはめど後の心を知りかねかも

あだ人のをこづり棹の危さにうけ引との難くも有哉

あだ人は下静れ行岸なれや思ふと云へど頼れずして

刺なくて思ひ亂るゝ刈萱のあだなる君が後めたさよ

伊勢の海に釣する蜑のうけなれや心一を定め兼つる

最上川上れば下る稻舟のいなには非ずこの月ばかり

世中を思ひ定むる程ばかり我心ちにも任せたらなむ

うたかた

も思へば悲し世中を誰憂物と知せ初けむ

もとかた

淵は瀬に成變るてふ世中は渡り見て社知べかりけれ

とき衣の思ひ亂てこふれどもなぞ何故と問人もなし

黒髪の白くなるまでといふ君が心の中を今しらめやも

くれぢあはず

今更に問べき人も思はえず八重葎して門さゝせりてへ

園原や伏屋に生る帚木のありとてゆけど逢はぬ君哉

さゝ波のなみ倉山に雲ゐてば雨ぞ降てふ返れ我背子

戀々て逢たる物を月しあれば夜は籠らむ暫は有待て

美作や粂のさら山いなび野の否々君は更にならさじ

烏玉のよべは返せり今宵さへ我を歸すな道の長手を

いれ紐のさしてきつれど着衣辛く云ても歸しつる哉

ゆふ霧に衣は濡れて草枕旅寝するかもあはぬ君ゆゑ

君が爲出てこざりし月だにも入ては嗟に返る物かは

月夜にはこぬだにも社待ときけくるをも返す物にぞ有

ぬば玉の其夜の梅を手に取てをらで來に烏思し物を

有明の月の光にある物を宵の關をなまだきうらみそ

人丸

獨して物を思へば術をなみ行けども妹に逢時もなし

明難き外山の雲の厭はれて返りし程は侘しかりきや

むねゆき

あはずして今宵明なば春の日の長くや人をつらしとおもはむ

小町

みるめなき我身を浦と知らねばや枯なで蜑の足たゆく

忠岑

有明のつれなく見えし別より曉ばかりうき物はなし

人まろ

徒に行てはきぬる物故に見まく欲しさに誘はれつゝ

人まろ

梅の花咲て散ぬとしらぬかも今迄妹が出て逢ひ見ぬ

業平

秋野に笹分し朝の袖よりも逢でぬる夜ぞひち增ける

貫之

住の江の松に立よる白波の返る時にや音をば鳴らむ

人まろ

あき柏ぬるや川べの東雲に人も逢見ずつまなし勝に

人まろ

行きゆけど逢はぬ妹故久方の天の露霜濡にけるかも

うはへなき物かは人は然計遠き家路を返すと思へば

赤人

人をとゞむ

我背予をならしの山の呼子鳥君呼返せ夜の更けぬ時

待てと云はゞまだ夜は深し長月の有明の月ぞ人は惑す

伊勢

水の面に浮べる舟の君ならば爰ぞ泊と云はましもの

まてと云はいたえて畏しにはたづみ堰敢ぬ迄雨も降ね

戀々て逢たる物を月しあれば夜深かる寛暫逢ひまて

打はぶき鶏は鳴くとも斯計ふる白雪に君いまさめや

まてと云はゞ最も畏し花の山暫と鳴む鳥の音もがな

人まろ

鴫神をとよます計さし曇り雨も降らなむ君を留めむ

今日計り止れ我背子增鏡朝毎にしも見れど飽なくに

とゞまらず

待てといはゞねても行けかし强て行駒の足を前の柵橋

大江の千古

紅葉も時雨もつらし稀にきて返らむ人を降や留めぬ

まて暫人知ぬべみ我妹子を留兼てぞ手間と名けし

出て行人を留めむ由なきに隣の方にはなもひぬかな

まな鴈の葦毛の駒やながぬしの我門過ば歩み留まれ

名を惜む

岩の上に立る小松の名を惜み言には出ず戀つゝぞふる

爭でなほ有りと知せじ高砂の松の思はむとも恥かし

爭で猶無き名すゝがむ蘆鴈の騒ぐ入江は水も濁れり

いかなれば千尋の舟もかゝる覽風の先にも騒ぐ波哉

津國の難波たゝまく惜み社すくも焚火の下に焦れ

あめのみかど

犬上や床の山なるいさゝ川いさと答へて我名洩すな

きの女郎

我名はもちなのいほなに立ば共君が名立たば惜とこそ

かゞみの王女

玉匣覆ふを易み明ゆかば我名は有とも君が名惜しも

をします

白河の知ずとも云じ底清み流て世々に住むと思へば

何か其名の立つとの惜からむ知りて惑ふは我獨かは

あらがへば神も憎みすをしをやし裝ふ人の憎からなく

今よりはなの惜けくも我はなし妹に依てば千重に立共

同じ名を立ちと立なば唐衣きて社馴めうらぶるゝ迄

なき名

まのゝ池のこ菅を笠に縫ずして人の遠名を立べき物を

無名立つとは空蟬世にも有じ仄にしても有と社きけ

元方

人はいさ我は無名の惜ければ昔も今も知ずとを云む

立田山なげの紅葉も有物を無名をさへも流しつる哉

幾何も降らぬ雨故我背子が皆のこゝだく濕ろに

吹風の下の塵にもあらなくにさも立やすき我無名哉

大空に我名の種も蒔なくに孰くの無名こゝら生けむ

綾無てまだき無名の立田川渡で止まぬ物ならなくに

無名立身は呉氣なし花もみしな事無草を折て翳さむ

わざもこ

沖つ鳥かもつく島に我率ねし妹は忘れず世の悉々に

天雲のよそより見えし我妹子に心もみそへよりにし物を

古にありけむ人も我如く妹に戀つゝいねがてにけむ

二思はずに妹がゑまひを夢に見て心の内に戀ふる此頃　家持
九草枕旅に久しく成ぬれば君をこそ思へ戀ふな我妹子　躬恒

三花とに折むには非ず我妹子が宿の櫻をえこそ忘れぬ
一妹があたり我袖ふらむ木間より出こむ月を雲な隠しそ
二今更に妹に逢でやは奉霞たなびく野べの花と散なむ　人麿
三垂乳根の親の飼子の繭籠いぶせくも有か妹に逢ずて　人麿
四百世よも千世よも生て有めやも我思妹を置て歎かむ
五渡つみの沖の白波立田山いつか越出て妹があたり見む
六山端に月も出ぬべし今だにも妹許行かむ親に申すな　人麿

七後遂に逢ずも成ね妹を置て妻は定めじ戀て死ぬとも
八玉鉾の道行ぶりに思はずに妹を逢見て後戀ひむかも
九只管に我行なくに門にはとうち戀しらに妹立てる見ゆ
一〇白妙の袖は漫ひぬ我妹子が家のあたりを歌す振しに
一一栲ぢれの白濱波のよりも敢ず荒ぶる妹に戀つゝぞをる
一二妹があたり今我行目のみに我のみ見つゝ事問す共
一三東路の荷向の箱の荷のをにも妹が心に乗にけるかも
一四唯今も見まくぞ欲き秋萩のしなひにあらむ妹が姿を
一五我がせこ　衣通姫
一六我背子が來べき宵なりさゝ蟹の蜘の振舞兼て著しも
　たかたの女王
一七我背子し遂むと云はゞ人言は繁く有共出て逢ましを
　笠の女郎
一八我背子が面影山の逆さまに我のみ戀て見ぬは妬しも
　同し人

一九我背子に我が戀をれば我宿の草さへ思ひうら枯に鳥
二〇我のみぞ君をば思我背子がこふと云とは言の名草に
二一惡けくによけくかへめや鼻しひば勿來我がせなゞゞ
二二我兒子が衣ありせば秋風の寒きこの頃下にきましを
　かくれづま
二三色に出て戀ひば人みて知ぬべみ心の内の隠れ妻かも
二四しなが鳥ゐな山響き行水の名をのみせし隠れ妻はも
二五あめとぶや神の社のいはひ槻幾世迄有む隠れ妻はも
二六增鏡みつといはめや玉きはる岩垣ぶちの隠れたる妻
二七惡けくによけくかへめや鼻しひば勿來我がせなゞゞ
二八我兒子が衣ありせば秋風の寒きこの頃下にきましを
二九秋野にさ躍る雉のいちじろく鳴しも鳴かむ隠れ妻はも

三〇足曳の山下とよみ鳴く鹿のごとくもがもな我隠れ妻
三一秋萩の花野の薄穂に出でゝ我戀ひわたる隠れ妻はも
三二神なびに打ま向ふ甕の岩淵に隠れてのみや我戀をらむ
　になき思ひ　伊勢
三三おふな〳〵思はすべしなぞへ無く高き卑き苦かり鳥
三四奥山の岩に苔生ひ畏くと思ふ心をいかにかもせむ
三五笹の葉のこ葉や若葉や畏くも聞をつる哉しならすして
三六岩たゝみ畏き山と知つゝも我は戀るか友ならなくに
三七しづ環數にもあらぬ命もてなぞ斯く計り我戀ひ渡る　伊勢
三八放ち鳥翼の無きをとふからに雲路を爭で思ひかく寛
　かさの女郎
三九伊勢の海の磯も離ろによる波の長き人を戀ひ渡る哉
四〇麗さへ熱くぞありける高砂の峯の思ひの燃る時には　貫之
四一照る月も影水底に映りけり似たる物なき戀もする哉
　今はかひなし
四二蛙鳴く井出の山吹散りにけりあはまし物を花の盛に
四三伊勢海の千尋の濱に拾ふ共今はかひなく思はゆる哉
四四山城の井出の玉水手に汲て頼めしかひも無世也けり
四五春の夜の夢は我乳頼みしか人の上にて見るが侘しさ
　こむよ　たかたの女王
四六此世には人こと繁しこむ世にも逢む必ず今ならず共
四七こむ世にも早成なゝむ目の前に雖面き人を昔と思む
四八空蟬の世の又の世に生れても思はむ中は絶じとぞ思
四九此世にて君を見目の雜からばこむ世は蟹と成て潜かむ
　たゝふた
五〇此世にて逢ずなりなばこむ世にも逢む必西の淨土に
　かたみ　かさの女郎
五一我形見見つゝ忍ばせ新玉の年の緒長くあれも思はむ
五二結び置し形見のこだに徴りせば何に葱の草を摘まし
五三雪の上の跡を形見と頼め共且々消えてとむる方なし
五四今はとて返す言の葉拾ひ置て我物からや形見と思はむ
　よしありの大臣
五五あふ迄の形見とてこそ留めけめ涙に浮ぶ藻屑也けり
五六あふ迄の形見も今は何せむに見ても心の慰まなくに
五七此世にて君を見目の雜からばこむ世は蟹と成て潜かむ
　たゝふた
五八此世にて逢ずなりなばこむ世にも逢む必西の淨土に
　かたみ　かさの女郎
五九我形見見つゝ忍ばせ新玉の年の緒長くあれも思はむ
六〇結び置し形見のこだに徴りせば何に葱の草を摘まし
六一雪の上の跡を形見と頼め共且々消えてとむる方なし
六二今はとて返す言の葉拾ひ置て我物からや形見と思はむ
　よしありの大臣
六三あふ迄の形見とてこそ留めけめ涙に浮ぶ藻屑也けり
六四あふ迄の形見も今は何せむに見ても心の慰まなくに
六五限なき君が形見と折る花は時しも分ぬ物にぞ有ける

六六櫻花色は等しき枝なれどかたみに見れば戀まなくに
　伊勢
六七見ぬ人の形見がてらは折ざりき身になづらふ色にしあれば　貫之
六八忘貝拾ひしもせじ白玉を戀るをたにも形見と思はむ
六九梅が香を袖にこき入てとめたらば春は過とも形見ならむ
七〇夏衣を折々毎に忍ぶればつらきも人の形見なりけり
七一色によりぬぐには非ず唐衣馴にし妻のかたみ也けり　伊勢
七二最まだき過きぬる秋の形見には枝に紅葉ぞ散りさりける　貫之
七三玉鉾の道の山風寒からば形見がてらにきなむとぞ思
　かさの女郎
七四我戀を人知るらめや玉匣開き明つと夢にし見ゆる
七五玉匣掩ふを易み明たらば我名はあり共君が名をしも
七六水の江の浦島の子が玉匣明ざらませば妹に逢なまし
七七匂ひありと人に知らるな鶯の心見えぬる花の櫛笥に
七八水江の形見と思へど鶯の花の櫛匣は明けてだにみず
七九白玉の立別れにし其日より玉の櫛笥の明暮ればこふ
　ゆはらの大君
八〇あきつばの袖ふる妹を玉匣おくに思ふをみたべ我君
八一玉匣明ば君が名立ぬべみねで我こしを人見けむかも
　貫之
八二別てもけふより後は玉匣あけくれ見べき形見也けり
　みつね
八三玉くしげ明方になる秋の夜の心一つを定めかねつる
　勢
八四君にとし思ひかくれば鶯の花の櫛笥も惜まざりけり
　玉かづら
八五打はへてくるを見共玉蔓手にだに懸じ結び置けむ知ねば　勢
八六へても見じ長き心を玉蔓つら乍らにし絶むと思へば　伊勢
八七度をへてかげに見ゆるは玉蔓つらきに乍に絶る也鳧
八八丈夫のふしぬ歎きて作りたるしだり柳の髪せ我妹子
　坂上の大娘
八九我せける早稲田の穂立作たる髪を見つゝ忍ばせ我背
　家持

九我妹子が業と作れる秋の田の初穂の鬘みれどかねかも
かみ
〇一ぬば玉の妹が黒髪今宵もや我なき床に靡きてぬらむ
一有つゝも君をば待たむ打靡き我黒髪に霜のおくまで
二ぬば玉の黒髪敷て長き夜を手枕の上に妹まつらむか
人麿
三後遂に君をばまたむ打靡き我が黒髪に雪はふるとも
四大よそは誰か見むかもぬば玉の我黒髪を靡てをらむ
五ぬぐたれの髪梳る夜も逢ざれば戀しき物をけふは暮しつ
みつね
六黒髪の白くなり行髪にしあれば先白雪を哀とぞ見る
七出ていなば妹戀むかも敗妙の黒髪しきて長き此夜を
八ぬば玉の我黒髪を泣ぬらし亂れて歸り戀渡るかも
九朝な〳〵梳ればいとゞ亂れつゝ我黒髪のとけぬ心を
〇一たゞにぬれたがねば長し妹が髪此頃見ぬに亂つ寢か
一朝寢髪我はけづらじ美しき人の手枕ふれてしものを
元結
二歎きつゝ丈夫かけをこふれ社我元結の漬きて濡れけり
三君こずば閨へも入らじ濃紫我が元結に結はおくとも
くし
四君こゝばなぞ身裝はむ櫛の箱にあるつげの小櫛も取むと思す
五少女子が玉匣なる玉櫛のいぶかし今も妹に逢ざれば
六虚のやの瀬の鹽燒暇なみつげの小櫛もさゝず來に鳥
七我兄子が櫛にあらなむ左手の奥手に卷て我行ましを
人麿
八朝開日むかふつげ櫛なれ共何ぞも君がいや珍しき
九難波潟何にもあらぬ澪標ふかき心のしるしばかりは
玉
〇一日には千重しき波に思へ共なぞ其玉の手に卷難き
一包めども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬめの涙也けり
二人との繁き此頃玉ならば手に卷もちて戀ざらましを
河原の大臣
三主や誰問へど白玉知なくにさらばなべてや哀と思む
四片糸もて我貫く玉の緒を弱み亂れて戀む人な咎めそ
五塵の根のねむごろ思て結てし玉の緒と云はゞ人解かむ
文武天皇
六妹が爲われ玉拾ふ沖べなる白玉採てこ沖つしらなみ
七白玉を包む袖のみ泣るゝは春は涙のたえぬなりけり
八貫止る人社有らし白玉のまなくも散か袖のせばきに
九君と我疑ふ中にあらばこそ袖いたづらに玉も拾はめ
坂上の郎女
〇一蜘の糸を片糸によりて白玉の緒にしたり共我絶めやは
人麿
一まろお玉あけ方遂に有物を打はへ戀ひばなぞかとぞ思
人麿
二渡つ海の手に卷もたる玉故に磯の浦わ〻きつる哉
麿
三渡つみのもたる白玉見まく欲し千返告つ潜きする蟹
四草枕旅にも妹はわたれども箱の内なる玉とこそ思へ
五磯の上に爪木折焚き妹が爲我かづきこし沖つ白玉
玉の緒
六玉緒の間もおかずみまく欲しみ我思ふ妹は家遠くして
七玉緒の絶たる戀の亂るればしなまくのみぞ又も逢ずして
貫之
八玉緒を事でなしけむ夏引の糸にし非ねばよらじとぞ思
九玉の緒の絶て亂む心もてうらぶれ渡る月のふるまで
〇片戀と且は知りつゝ玉の緒の絶ずぞ思ふ長き此日を
一逢事は玉の緒計名の立つは吉野の河のたぎつせの如
貫之
二玉の緒の絶て短き夏の夜のよはに成まで待人のこぬ
興風
三死ぬる命生きもやすると心みに玉緒計逢見てしがな
紀女郎
四玉緒を泡緒によりて結べらば有ての後も逢ざらめやは
五玉の緒のしまし心にや年月の行變るまで妹に逢ざらむ
六片糸を彼方此方によりかけて逢ずば何を玉緒にせむ
七生の緒に思へば苦し玉緒の絶て亂れむ知らば知とも
八玉の緒の捋よせつゝ末遂にゆきは別じ同緒に有む
九哀てふとを緒によりぬく玉はあはで忍ぶる涙也けり
〇戀繁く增りて今は玉の緒の絶て亂て死ぬべく思ほゆ
友則
一下にのみ思へば苦し玉の緒の絶て亂れむ人な咎めそ
玉だすき
二思はずば思はずとやは云ひ果ぬなぞ世中の玉襷なる
三思はずばわれ從はむ玉襷うたてかけたる我が心かな
四今更に君が手枕まき寢めや我下紐のとけつゝもとな
五美しき人の卷てし敷妙の我手枕を卷く人あらめや
六關なくば返りにだにも打行て君が手枕卷て寢ましを
七我妹子が來ざりし宵は打侘て我手枕を我ぞしてねし
八增鏡唯にし妹を逢見ねば我が戀やます年はふれども
坂上の郎女
九增鏡とぎし心をゆるぶれば後にいふとも印あらめやも
人麿
一增鏡手に取待ちて朝な〳〵見む時さへや戀の繁けむ
二影見れば昔に似ずぞ老にける思ふ心はふり增物から
三かく計戀しくあらば增鏡見ぬ日時なく有ましものを
四身をわくる事の難さに增鏡影ばかりをぞ君に添つる
五ふたご山共に越ねば增鏡そこなる影を尋ねてぞやる
六花のかたを移し留めよ增鏡春より後の影やみゆると
七里遠み戀わびにけり增鏡おも影去らず夢にこそ見め
八斯とだに鏡にみゆる物ならば忘るゝ程も有ましもの
まくら
九我戀を人知めやも敷妙の枕のみ社知らばしるらめ
十枕より又知る人もなき戀を涙せきあへず洩しつる哉
十一敷妙の枕をくゝる涙にぞ浮寢をしつる戀のしげきに
十二いか計り思ふ妹かも敷妙の枕かたさり夢にみえこし
十三夕されば枕定めむ方もなしいかに寢し夜か夢にみえけむ
十四玉ぬしに玉は授けてかつ〳〵も枕と我はいざ二人ねむ
人麿
十五妹を戀ひわが泣く涙敷妙の枕とほりて袖さへぬれぬ
十六奥のくりこま山のほゝの木の朩はあれど君が手枕
十七敷妙の枕動きていねられず物思ふ今宵早あけむかも
十八獨ぬる心は今もわすれずとつげの枕は君にしらせよ
十九人戀てぬる春の夜は敷妙の枕寢覺に流れ出でぬべし
二十獨寢の床にたまれる涙には石の枕も浮きぬべらなり
廿枕とて草引結ぶともせじ秋の夜とだに頼まれなくに
廿一蓁待ち喜べる秋の夜をのぬるしるしなし獨枕とわれは
廿二旅にしてあたねするよの戀くば我家の方に枕せよ君
廿三結ひ〻解く日を遠み敷妙の我小枕に苔生ひにけり
たまくら
廿四紅のやしほの衣なるゝ迄いかで手枕まかむとぞ思ふ
廿五驗なき戀もするかな夕されば人の手枕卷かむ子故に
廿六今更に君が手枕まき寢めや我下紐のとけつゝもとな
廿七美しき人の卷てし敷妙の我手枕を卷く人あらめや
廿八關なくば返りにだにも打行て君が手枕卷て寢ましを
廿九我妹子が來ざりし宵は打侘て我手枕を我ぞしてねし

人まろ

九斯計り戀む物ぞと思はねば妹が手枕寄ぬ夜もありきはた

九足玉も手玉もゆらに織機は君が衣にたゝむとぞ思ふ

〇〇さは姫の織かけさらす薄機の霞たちきる春の野べ哉

一〇水引の白糸はへておる機は旅の衣にたちやかさねむ

二秋風のふきたゞよはす白雲は七夕つめの天の衣かも

三七夕の五百機たてゝおる布の秋さり衣誰かとりみむ

四無幹に身をばうむ共麻機の織ては君に逢じとぞ思ふ

五幾千機織ればか秋の山ごとに風に亂るゝ錦なるらむ

六いそ機に思ふ心ぞ亂れぬる人をつらしと恨きぬればころも

七紅の濃染の衣下にきて上にとりきばしるからむかも

八今作る斑らの衣のおもつきに我に思はゆ未だきね共

九衣しも多くあらなむ取替てきてばや君が面忘れせむ

一〇橘の島にしをれば河とほみ晒さでぬひし我がした衣

一一唐藍のやしほの衣朝々なるとはすれどまし珍らしみ

一二日暮しに鳴とも綾な唐衣袖こそひちめ戀はさめじを

一三古衣拾つる人は秋風のふきたつ時にもの思ふものを

一四筑波嶺の新桑繭の衣は有ど君が御衣しあやにきましも

一五秋風の寒き日頃は下にきて妹が形見とかつは忍ばせ

一六いと早も鳴ぬる雁の古衣改めきせむ妹もあらなくに

一七さ夜中の寐覺〳〵に起かつゝ返す衣のうらぶれに鳥

小町

一八いと貴て戀しき時はぬば玉の夜の衣を返してぞきる

一九戀むと誰か云ひけむ唐衣かへすに戀の増りける身を

たゞふさ

二〇偽のなみだなりせば唐衣しのびに袖は絞らざらまし

貫之

二一敗嶋の大和には非ぬ唐衣頃もへずしてあふ由もがな

二二嬉しきを何に包まむ唐衣袂豊かに裁てといはましを

二三白妙の衣の袖を打ち返し獨さねけむしるしあらばや

友則

二四宵々にぬぎて我ぬる唐衣かけて思はぬ時の間もなし

人まろ

二五白妙の袖の片はし見るからに斯る戀をも我はする哉

二六玉藻かる螢とはなしに君戀る我衣手は乾く夜もなし

二七朝なげに夕けをとゝ幣にきりくに我衣手は又ぞ繼べきくつ

二八宮人のすれる衣にゆふ襷かけて心をたれによすらむ

二九襷の衣きる人はとなしと云し時よりきま欲み思ほゆ

三〇襷のあはせの衣の裏にせば我戀めやは君がきまさぬ

鹽やき衣

三一伊勢の螢の鹽燒衣袋を荒み間遠にあれや未きまさぬ

三二志賀の螢の鹽燒衣なれ行けば戀てふ物は忘れ衆つも

三三伊勢の螢の鹽燒衣馴てこそ人の繼しきとも知らるれ

三四馴行くは憂世なればや須磨の螢の鹽燒衣間遠なる覽

三五伊勢の海鹽燒く螢の藤衣なるとはすれど逢ぬ君かな

貫之

三六伊勢の螢の鹽燒衣の馴なばか一日も君を忘て思はむ

夏衣

三七なつぐさの露分衣きもせぬに我が衣手の乾く時なき

三八夏衣薄き心と聞からに言の葉さへや洩れむとぞ思ふ

三九夏衣薄き作らぞ賴まるゝ一重なるしも身に近ければ

貫之

四〇夏衣暫しなたちそ郭公なくともいまだ聞えざりけり

四一我が爲に薄き心のたゝれせば夏の衣にたゝまし物を

秋の衣

四二我兄子が衣の裾を吹き返しうらめづらしき秋の初風

四三秋風を寒みにはあらず返しきて戀戀めむ衣かせきみ

四四秋夜の月の影こそ木の間より落葉衣と身に移りぬれ

四五波の綾を痛くな風の織よせそ衣にたゝむ我妻もなし

四六我妹子が衣なりせば秋風の寒きこの頃下にきましを

衣うつ

四七風寒み我が唐衣うつときぞ萩の下葉も移ろひにける

素性

四八誰が爲にうつとかは聞く大空に衣雁がね鳴渡るなり

四九唐衣うつ聲きけば月清みまだねぬ人を空にこそきけ

貫之

五〇草枕夕風さむくなりぬるを衣うつなり宿やからまし

おなじ

五一雁鳴て吹く風寒み唐衣君待ちがてらうたぬ日ぞなき

かり衣

五二吹風に散らずもあらなむ櫻花我かり衣ひとよ宿さむ

五三おきなさび人な咎めそ狩衣今日計とぞたづも鳴なる

右芹川の行幸に在中納言かり衣に鶴すれり

貫之

五四狩衣心のうちにはさなくになどか亂て物おもひする

すり衣

五五春日野の若紫の摺りごろもしのぶの亂れ限知られず

五六すり衣きると夢みつ現には兢の人のことかしげゝむ

五七住吉の遠里小野の眞萩もてすれる衣のさかり過行く

五八陸奥の信夫もぢずり誰れ故に亂初にし我ならなくに

あさごろも

五九あさりする螢少女子が袖なれや濡にし衣ほせど乾す

六〇千名にはも人は云ともおりつがむ我機物の白き麻衣

六一今年行く新島守の麻衣かたのまよひを誰かとりみむ

乙磨卿

六二麻衣きればなつかし紀國の妹背の山に苧蒔け我妹子

かはごろも

六三とこしへに夏冬行けや蝉あふぎはなたず山に住む人

ぬれぎぬ

六四君により螢の濡衣我きたり思にほせどひる由もなし

六五猶きたれ螢の濡衣我ほさむよそふる人の憎からなくに

六六憎からぬ人のきする濡衣は厭ひ難くも思ほゆる哉

六七とひ絞る人も無身の濡衣は天の下にぞ降てきせける

六八濡衣と人に云はすな菊の露齢のぶとぞ我そぼちつゝ

六九よそにても憎からずだにあらば肘絞るゝ濡衣をきめ

七〇世と共に我濡衣となる物は侘る涙のきするなるべし

雜の衣

七一都出て今日みかのはら泉川かは風さむし衣かせやま

七二今更にこふとも君に逢むかも衣返す夜夢に見えつゝ

七三白妙の妹が衣に梅の花香にも色にもわきぞかねつる

七四空に飛ぶ天の羽衣えてしがな浮世の中に骸も殘さじ

七五梅の花香を吹つくる春風に衣をそめば人やとがめむ

ふすま

七六あつ衾なごやが下に寢たれ共妹とし寢ねば膚寒しも

七七庭にたつあさて小衾今宵だに妻よびこさぬ麻手小衾

七八きへ人のまだら衾に綿さはに入りなまし物を妹がこゝに

衾

七九立て思ひねてもぞ思ふ紅の赤衾たれひきいにし妾を

八〇山吹の匂へる妹がはねず色の赤衾の姿夢に見えつゝ

八一人めもる君が隨に我ともに早く起き居て衾の裾濡す

人麻呂

八二はしきやしあはぬ子故に徒に此川の瀬に衾の裾濡す

三いかならむ日の時にかも我妹子が裳引の姿朝明にみむ
八何せむにへたのみめを思けむ浦つ玉藻を潜く身にして
ひも
思ふ共こふ共逢む物なれや、、てもたゆく解る下紐
六さゝらがた錦の紐を解そけて計多はねずよ唯一夜のみ
七下紐を夕さり懸て解つれば君がみそ縫ふ糸の島みゆ
八よそにして戀ふれば苦しいれ紐の同心にいざ結てむ
九ぬば玉の夜の下紐ときてねよ我魂はゆめにてもこむ
人麻呂
〇奥山のしげ入て立ち迷ふ共妹が結びし紐をとかめや
一下紐はとけてやつけぬ玉鉾の栞も知らぬ空に侘れば
二なぞ人の枯て雖面き下紐の解けばゆはむと云てし物を
三垣ほなす人はいへ共こま錦紐解あくる君も有なくに
四戀しとは更にも云じ下紐のとけむを人は其と知なむ
五下紐の印とするも解けなくに語るかとは戀ずぞ有べき
六草枕結ぶとしけむ宵々はとけざりきやは下の入れ紐
七我衣の紐とけ渡る眉根かく馴にし君はこふと知すも
八珍しき人を見むとやしりもせぬ我下紐の解つゝ有む
人まろ
九我兄子が結てし紐を解めやは絶ばたゆとも唯に逢迄
〇思へ共夢かも見えぬ我妹子ぞ今宵見えける人もきたまむ
一けふの日に如何及ばむ筑波嶺の昔の人のきけむ其日も
右一首家持
貫之
二〇山里に一目見しより我戀ふる花の下紐いかにとく覧
つらゆき
三〇明立てば先さす紐の絲弱み絶て逢すばなぞいけるかひ
おび
四〇契りけむとやはたがふ下帯の廻りてあへる妻や何也
友則
五〇下の帯の道は方々分るとも行廻りても逢むとぞ思ふ
六〇東路の道の果なる常陸帯のかごと計も逢見てしがな
家持
七〇古の賤機帯をむすびたれ誰といふとも君にはまさじ
八〇瑞垣の久しき世より戀すれば我帯ゆるぶ朝夕ごとに
ひとり
九〇たきものゝか計り思ふ此頃の獨はいかで君に知せむ
一〇たき物の木の下煙ふすぶ共我獨をばしなすまじやは

一樹下に獨や侘びしたき物の其も思ひに堪でとか聞く
二我爲はねぶたき物を獨しも起き明さじと思はゆる哉
ことの葉
三露計り頼め難かなむ言の葉に暫もとまる命ありやと
四消果し身よりも増る言葉を涙ならでや何にかはつたへせむ
五秋萩めこし言の葉今は返してむ我みふるれば置所なし
六秋社は紅葉も散め立田山春とてもなど言の葉のなき
七契置し言の葉變る憂世にはふみも心もやらで社ふれ
ふみ
八世中に絶えて偽なかりせば頼みぬべくも見ゆる玉章
九玉章ももてこぬ物を秋風の吹きくる毎に人ぞ戀しき
〇打寄する波やけつ覧濱衞路こし跡のうらみれどなき
一人知ぬ道と思はずば玉章の打類ひつゝ行べき物を
二やれば惜しやらねば人に見えぬべし泣々も猶返す堪れり
三やれと云む我後見むも思ほえず心ともなれて唯にけなゝむ
四花散す枝やあるとて霰のふみみてからに露ぞ置ける
五かひなしと思なけちそ水茎の跡ぞ千年の形見ともなる
六玉章の有か無きかに行水の絶せぬ君を逢見てしがな
七忘られむ時忍べとぞ濱千鳥行へも知らぬ路を留むる
伊勢
八水茎の通ふ計をすくせにて聞し乍にはてねとや聞く
貫之
九荒小田を打返すとて濱千鳥猶ふみつけて跡は留めよ
伊勢
〇春霞たち乍見し花なれど踏みとめてける跡ぞ嬉しき
一君か爲祝ふ心の深ければ聖の御代のあとならへとぞ
太政大臣貞信公
右天暦皇帝皇子時貞信公の家に御往還給奉二御手
本一歌
御かへし
二教へおく事たがはずば行末の道遠くとも跡は惑はじ
こと
三山のをの辱は絶てなけれども聲は殘せりきく人の爲
四ひざにふす玉の小琴の事なくばいと斯計我戀むかも
五秋風に掻きなす琴の聲にさへ偲く人の戀しかるらむ
六大和琴人に有せばいか計こと懐かしき事ときかまし
七誰ぞこの聲懐かしき大和琴寐覺侘しき人のきかくに
八琴の音を聞知人の有ければ今ぞ立出て緒をもすべき

九足引の山下水は行き通ひ琴の音さへにながるべら也
貫之
〇六の緒のよりめとにぞ香は匂ふ引少女子が袖や觸たる
一都まで響き通へる唐琴は波のをよりて風ぞひきける
二波の音のけき唐琴に聞ゆるは春の調べや改まるらむ
三琴の音に峯の松風通ふらし巌の緒より調べ初めけむ
四琴取れば歎き先だつ蓋しくも琴の下樋に妻やかくれる
貫之
五ひく琴の音の打つけに月影を秋の雪かと驚かれつゝ
あなじ
六あづさ琴春の調をかりしかば返し物とは思はざり鳧
伊勢
七長き夜の秋の調とひく琴は緒毎に君を千年とぞなる
返し
八返しても飽ぬ心を添つれば常より聲の優るなるらむ
九松の音を琴に調ふる秋風は瀧の糸をやすげて引覧
大和琴の夢に女になりてよめる
〇いかならむ日の時にかも聲しらむ人の膝の上我枕せむ
此の歌と琴とに歌をよみそへて中衛大將藤原の總
前のもとに筑紫より奉れる
かへし
一と問ぬ木にも有とも我兄子が手馴のみ琴土に置めやも
笛
二唐竹のこちくの聲も聞せなむあな嬉しとも思知べく
三笛竹の己が音社は悲しけれ一節にしてよのみ過れば
四獨ぶしいとかく竹の音なれ共こちくの聲は聞じとぞ思
五いへばえに深く悲き笛竹のよ聲や誰ととふ人もがな
六こま笛の駒に我乘慰めむみきとも云じあな憎けども
七笛竹の一よ空しき聲にだによそに吹けとも思ざりしを
八笛竹の池の堤は遠く共こちくてふ名は忘れざらなむ
弓
九葛城のそつ彦真弓荒きにもよらじや君が我名告かね
奈良のみかど
〇梓弓引野のつゞら末つひに我が思ふ人に事の繁けむ
一梓弓いそべの小松たが世にも萬代かねて種を蒔けむ
きの女郎
二梓弓引み緩べみ來ずは社こば社をなどよそに社みめ
三梓弓引けば本末我方によるこそまされ戀しきことは
四あづさ弓はるかなれ共忘られて君思ひつるの絶む物かは

六梓弓春の山べに入る時はかざしにのみぞ花は散ける　貫之
六梓弓末のたづきは知らねども心は君によりにし物を　人麿
六梓弓引はりもちてゆるさずと我思ふ妹は知や知すや
六梓弓弦とりはげてひく人はのちの心をしる人ぞひく
六梓弓ゆづ巻かへあてみてば更に引くとも君が随に　貫之
○手も觸で月日へにける白眞弓起臥し夜は物を社思へ　人麿
七かく戀む物と知せばあづさ弓末のちかころ逢見てまし
二天原振さけみれば白眞弓張て懸たる夜道はよけむ
三奥山に立つ一つきの白眞弓まろや劇なく人を恨むる
四み菰刈信濃の眞弓我がひかばうま人寐て否と云むかも
五陸奥の安達の眞弓矯れ共心こはさにやまずざりける矢
六丈夫の弓末振たていつる矢を後みむ人は語つぐがにたち
七劔たちなの惜けくも我はなし君に逢ずて年のへぬれば
八劔たち身に取そふる丈夫ぞ戀の亂のもとには有ける
九打歎き鼻をぞひつる劔太刀身にそふ妹が思けらしも
○劔太刀身に佩添ふる丈夫や戀てふ物は忍び兼ねてむ
一劔太刀諸刃の上に行觸れて死かもしなむ戀つゝ有すは
かさの女郎
二劔太刀身に取添と夢にみつ何の論しぞも君に逢むる爲
三太刀の尻玉巻田ゐにいつ迄か妹を逢みず我戀をらむ
かたな
四逢事の刀さしたる七つこのさやかに人の戀らるゝ哉
さや
五人言を繁みや君に二さやの家を隔て戀しかる覽
六七つごのさやの口々つどひつゝ我を刀にさして行也
はかり
七かけつれば千々の金も數知りぬなぞ我戀の逢計なき
八今こむと云し計に掛られて人のつらさの數は知にき
九呉衡我をなゝめに頼めつゝさやかに君が懸てはかる
○我つめる徒ら稻の數ならば合ふ衡なし何にか掛まし
あふぎ
一名にし負はば頼ぬべきをなぞも斯扇ゆゝしと名け初けむ
二世の人のいみける物を我爲になしといはぬは誰がうき也
三舟出する君に手向くと吹風はなれて年へし扇也けり
四添てやる扇の風し心あらば思はむ人の手をな離れそ
五ゆゝしとていむ共今はかひ有じのうき事は是に附ても
六今はとて漕ぎつる舟の障なみ扇の風はへにも懸なむ
七あふげとも盡せぬ風は君が爲我が心ざす扇なりけり
八銀河扇の風に霧晴れて空すみわたるかさゝぎのはし
九かはほりに我はりこむる涼さを思ふが方の風と厭ふな
かさ
○久方の天照月を網にさし我が大君は笠に作れり
一久方の雨には濡れずふるがと落る涙はさす笠ぞなき
二杜若さくぬの菅を笠に縫ひきむ日を待に年ぞへにける
三押照や難波すが笠置ふるし後は誰きむ笠ならなくに
四我兄子が笠のかりてのわさみ野に我は入ぬと妹に告こせ
五笠取の山を頼みしかひもなく時雨に袖を濡してぞ行
六散ずではきても見るべし春雨に我を濡すな梅の花笠
七笠なしと人には云て雨づゝみとまりし君が姿思はゆ
八我兄子が袖を頼て眞野の浦の小菅の笠をきずてきに鳥
九君がきる三笠の山にゐる雲の絕て別るゝ戀もする哉
一我妹子が使を待と笠もきで出つゝぞみし雨のふらくに
みの
一久方の雨のふる日を我門に簑笠もきでくる人やたれ
かたみ
二花宴めならぶ人の數多あれば忘られぬ覽數ならぬ身は
三君を又現にみめ哉や逢事のかたみにもらぬ水は有とも
四飽でこそ思はむ中は別れなめそをだに後の忘形見に
つと
五伊勢の海の沖つ白波花にもが包みて妹が家苞にせむ
素性
六みてのみや人に語らむ櫻花手毎に折て家づとにせむ
丸卿
七玉津島みれ共飽ずいかにして包持たらむみぬ人の爲
人麿
八宇治河に生る菅藻を河早み取ず來に鳥苞にせましや
九足引の山行きしかば山人の我にゑしめし山苞ぞこれ
○女郎花秋の萩をれ玉鉾の道行きづとゝこはむ子の爲
一吹風の我袂にし包まれば思ふ人にはつとにしてましいろ
二哀とも憂しとも思ふ色なれや落る涙に袖のしむらむ
三色みえで移ろふ物は世中の人の心の花にぞありける
四染めばこそ色ともみえめ墨染の覽束なくも立我名哉
五年ふれど色も變らぬ君をしもいかなる色に思染けむ
六世の中の人の心は花染の移ろひやすき物にぞ有ける
七色なしと人やみるらむ昔より深き心に染てしものを
八覽束な何の色とは知らねども唯深くのみ思染めけむ
くれなゐ
九唯が蒔きし紅なれば三輪山をひた紅に匂はせるらむ
○隱らくの泊瀬の山をすそへらと豐すめ神の蒔し紅
一紅のやしほの衣かくしあらば思染ずぞ有べかりける
二斯ばかり戀し渡らば紅の未つむ花の色にいでぬべし
貫之
三立田川いろ紅になりにけり山の紅葉も今はちるらし
四いかにして戀を隱さむ紅のやしほの衣捲り手にして
五紅の花にしあらば衣手に染めつけ持て行べき物を
六白妙の我衣手にくれなゐのしみなむ心移ろはむやは
七紅に染めし衣も頼まれず人をあくにし返ると思へば
八人知れず思へば苦し紅の末つむはなの色に出でなむ
九よそにのみ見つゝを戀む紅の末摘花の色に出でず共
○思ふにも今はあまりぬ紅の色に出なむ人のしるべく
一紅に袖そぼち秋はすぎにしを春さへ何の色まさるらむ
二紅にそめてし衣雨ふりて匂ひはすとも移ろはむやも
三紅の色には出でじ隱れ沼の下に通ひて戀はしぬとも
四秋の野は唐紅になりにけり幾しほ時雨降りて染けむ
むらさき
五紫の一もと故に武藏野の草はなべてもなつかしき哉
業平
六紫の色こき時は目もはるに野なる草木も哀なりけり
丸卿
七紫の根はふよこ野の春の野は君をこひつゝ鶯ぞ鳴く
八唐人のころも染むてふ紫の心にしみて思ほゆるかも
九濃紫ほす日は暮ぬ孰くにかたま宿からむ人さとはじに
○思ふとも下にや逢む紫のねずりの衣色に出づなゆめ
一つくまのに生ふる紫衣にすり未きなくに色に出に鳧
二知ね共武藏野と云へば咽たれぬよしやさこそは紫の故
かさの女郎
くちなし

四五思ふともこふとも云はじ梔の色に衣を染てこそきめ　素性
五山吹の花色衣ぬしや誰とへど答へずくちなしにして
六梔子の色に心をそめしよりいはで心に物をこそ思へ
みどり　宗于
七常磐なる松の緑も春くれば今一しほの色まさりけり
八下紅葉ありけるものを松の葉の上は緑を頼みける哉　伊勢
九海にのみひぢたる松の深緑幾しほとかは知べかる覽
〇六あさみどり野べの霞は包めどもこぼれて匂ふ花櫻哉　人麿
一六思ふどち圓居せる夜は唐錦立まく惜き物にざりける　せき
二六霜の經露の緯こそもろからし山の錦の織れば且散る
三六なぞ更に秋かと思はむ唐錦立田の山の紅葉しるきを
四六猶更に秋の野山を分け行けば錦を衣にきぬ人ぞなき　忠岑
五六神なびの三室の山を分行ば錦たちきる心地こそすれ　貫之
六六立寄りてみるべき人のあれば社秋の林に錦しくらめ　たゞふさ
七八紅葉を惜き錦とみしかども時雨と共に降でぞこし　忠岑
八六秋風の打吹くからに野も山もなべて錦に織り返す哉　伊勢
九八紅葉を分つゝ行けば錦きて家に歸ると人やみるらむ　貫之
〇七木のもとに織らぬ錦の積れるは雲の林の紅葉也けり　人麿
一七唐錦紐ときあけて結べども知ぬ命に戀つゝやあらむ　貫之
二七秋風に散るもみぢ葉は女郎花宿におりきる錦也けり
三七立田川紅葉落ちて流るなり渡らば錦なかや絶えなむ
四七紅葉の降しく秋の山べこそたちて悔しき錦也けり　貫之
五七紅葉の流るゝ秋は河ごとに錦あらふと人やみるらむ　人麿
六七かきほなす人はいへ共唐錦紐とあぐる人もなき哉
（或裏書云此間有二綾之題一而無二歌哲題一古本一耳）

あや
暮ばかりあやに戀しくありしかば二村山も越ず成にき
獨ねのこも朽めやも綾席をになる迄に君をしまたむ　人まろ
いと
一七夏引の手引の糸を繰返しこと繁くとも絶むと思ふな
二七片糸の此彼よそによられつゝ逢なむ後は何か絶べき
三七河内女の手染の糸を繰返し片糸に有とも絶むと思な
四七但馬糸のよれ共逢ぬ思をば何のたゝりに附て祝へむ
五七斯計やめにかくてふ但馬糸眉めかきては嬉しかり鳥
六七亂糸の我には解けず有しかど尋てよらむと思心有り
わた　沙彌満誓
七八不知火の筑紫の綿は身に附てまだき着ね共暖にみゆ
布
八八玉川にさらす調布さら〳〵に昔の人の戀しきやなぞ
九八陸奥のけふのさぬのゝ程せばみまだ胸合ぬ戀もする哉
一八たち縫はぬ衣きる人もなき物を何山姫の布晒すらむ
二八誰爲に懸て晒せる布なれやよをへて見れど着人もなき
三八主なくて晒せる布を七夕に我心とや今日はかさまし
四八白河に晒す布にも非なくになぞ我戀のこゝら悲き

古今和歌六帖第六

春の草
五九春草の繁き我戀大海のかた行く波のちへにつもりぬ　貫之
六九野べみれば若菜摘鳥宜し社垣ほの草も春めきにけれ　躬恒
七九今は早枯果なまし草の根の萌ても終に春に逢るかも
八九春日野の雪間を分て生出來る草の僅にみえし君かも　業平
九九うら若みねよげにみゆる若草を人の結むとをしぞ思
一〇春くれば野べのまに〳〵生繁る千種に物を思ふ頃哉　忠見
二〇燒ず共草は萌なむ春日野を唯春の日に任せたらなむ
夏の草
三〇人言は夏野の草の茂くとも妹と我とし携さはりなば
四〇此頃の戀の繁くて夏草の刈そくれども生ひしくが如
貫之
五〇我待たぬ年はきぬれど冬草の枯にし人は音信もせず
六〇山里は冬ぞ寂しさ增りける人目も草も枯ぬと思へば
七〇忘られぬ心の內は冬草のかれにし人をこふる也けり
下草　人麿
八〇我宿の軒の下草生ふれども戀忘草みれどまだ生ひず
九〇柏木のもりの下草年ふとも光をいつかみむと頼みし
一一〇大荒木の杜の下草老ぬれば駒もすさめず刈人もなし
かさ
二一〇我が宿の夕蔭草の白露のけぬがにもとな思ほゆる哉　躬恒
三一〇人につく便だになし大荒木の杜の下なる草の身なれば
四一〇櫻麻のをふの下草露しあらば明して行む親は知共
五一〇言痛くさたにしもせむ岩代の野べの下草我し刈てば
にこぐさ
六一〇いる鹿のとむる河べのにこ草のみわかきが上にぞ
七一〇足引の山下しげき夏草のふかくも君を思ふころかな　躬恒
八一〇繁きのみ日毎に增る夏草の假初にだに訪ふ人のなき
九一〇枯果てむとをば知らで夏草の深くも人を頼みける哉
二〇人知れず我より外に夏草の茂りあふ社みれば妬けれ
三〇夏草の上に茂れる沼水の行く方もなきわが心かな　忠岑
四〇徒然と詠めせし間に夏草の哀れ屋毎に茂り合にけり
しげゆき
五〇夏草は結ぶ計に成に鳧野飼し駒もあくがれぬらむ
六〇夏草のかりの世人は侘しくも我に秋風吹初めつるか
七〇父母に知せぬ子故御宅路の夏野の草をなづみ來かも
秋の草　元方
一一〇石上ふるのゝ草も秋はなほ色ことにこそ改まりけれ
二一〇心なき身は草木にも非なくに秋くる風に疑はれぬる
元方
三一〇虻をか分きて忍ばむ秋の野に移ろはむとて色變る草
四一〇秋の野に千種に咲ける花の色の亂れて物を思ふ頃哉
五一〇神さぶと許さずは非じ秋草の結し紐を解くは悲しも
六一〇思ふどち有だに秋は侘しきを草の枯々なるぞ悲しき
貫之
冬の草
七一〇草枯の野べをばうしと思へばや冬野の草と人の刈覽
躬恒
八一〇我待たぬ年はきぬれど冬草の枯にし人は音信もせず
九一〇山里は冬ぞ寂しさ增りける人目も草も枯ぬと思へば
二〇忘られぬ心の內は冬草のかれにし人をこふる也けり
下草　人麿
一一我宿の軒の下草生ふれども戀忘草みれどまだ生ひず
二一柏木のもりの下草年ふとも光をいつかみむと頼みし
三一大荒木の杜の下草老ぬれば駒もすさめず刈人もなし
かさ
四一我が宿の夕蔭草の白露のけぬがにもとな思ほゆる哉　躬恒
五一人につく便だになし大荒木の杜の下なる草の身なれば
六一櫻麻のをふの下草露しあらば明して行む親は知共
七一言痛くさたにしもせむ岩代の野べの下草我し刈てば
にこぐさ
八一いる鹿のとむる河べのにこ草のみわかきが上にぞ

二九蔦垣の中のにこ草にこよかに我とゑみして人に知らるな
三〇秋風に靡く河べのにこ草のにこよかにしも思ほゆる哉
雑の草
三一溜漬てば入ぬる磯の草なれやみらく少く戀らくの多き
ねなし草
三二我世しもちよに有めや根無草戯れやせまし身の若い時
もゝよ草
三三父母が家のしりへの百世草百世出ませわが到るまで
手向草
三四白波の濱松が枝の手向草幾世までにか年のへぬらむ
さしも草
三五味氣なや伊吹の山のさしも草己が思に身を焦しつゝ
三六契りけむ心からこそさしも草己が思に燃え渡りけれ
三七等閑に伊吹の山のさしも草さしも思ぬとにやは非ぬ
三八下野やしめつの原のさしも草己が思に身をや燒らむ
ゐほね草　人まろ
三九かんつけのいならの沼の大ね草よそにみしよは今社增れ
かくも草
四〇うかりける汀隱のかくも草葉末もみえず行隱れなむ
つれなし草
四一年をへて何賴けむ勝間田の池に生てふつれなしの草
人麿
しりぐさ
四二潮あしにまじれる草のしり草の人皆知りぬわが下思
ねづら草
〇四三しばつきの三浦崎なるねづら草逢見ざりせば我戀めやも
〇四四紅のあさはの野らに刈る草のつかの間も我を忘るな
山吹
四五今もかも咲き匂ふらむ橘のこじまの崎の山吹のはな
〇四六山吹は綾なく咲そ花見むと植てし君が今宵こなくに
一四七塵をだに据じとぞ思ふ植しより妹と我ぬる床夏の花
躬恒
四八折ても見折らずても見む吉野川水底照て咲ける山吹
貫之
四九映る影有と思ずば水底にありとぞ見まし山吹の花
貫之
五〇流れくる蛙なくなり足引の山吹の花にほふべらなり
五一ゆかりとも聞えぬ物を山吹の蛙が聲に匂ひけるかな

五二山吹の花は千歳も咲べきを暮ぬる春の惜くもある哉
貫之
二五三吉野川岸の山吹ふく風に底の影さへうつろひにけり
みつね
五四春深み枝さしひぢて神なびの河べに咲ける山吹の花
五五足曳の山の山吹山ならば咲く盛には逢ふ人もあらじ
素性
みつね
五六春深き色はなけれど山吹の花に心をまづぞ染めつる
五七獨のみ見つゝぞしのぶ山吹の花の盛に逢ふ人もなし
五八諸共に井手の里こそ戀しけれ獨をりうき山ぶきの花
五九我宿の八重山吹の散るを見て春過行くと見るぞ悲き
〇六〇春の雨に匂へる色も飽なくに香さへ懐かし山吹の花
一六一名にし負へば八重山吹ぞ憂かりける隔てゝをれるうきに
二六二山吹の其に飽事なくしあらば人の知べく我戀めやは
なでしこ　家持
三六三我宿の撫子の花咲にけり手折て一目見せむ子もがも
家持
六四我宿に咲し撫子早晩も花に咲かなむよそへつゝ見む
六五我兄子が宿の撫子散めやも彌初花に咲きは增すとも
六六撫子の其花にもが朝な〳〵手に折持て戀ぬ日なけむ
貫之
六七床夏の花をしみれば打はへて過す月日の數も知れず
つらゆき
六八ながけくの色を染つゝ春秋を知でのみ咲く床夏の花
貫之
六九變る時なき宿なれど花といへば常夏をのみ植て社みめ
素性
〇七〇我のみや哀とは思ふ蕤なくゆふかげの大和なでしこ
一七一塵をだに据じとぞ思ふ植しより妹と我ぬる床夏の花
躬恒
二七二妹と我とぬる床夏の花なればなべて人には見せむ
伊勢
三七三誂こにも咲はすらめど我宿の大和撫子誰にみせまし
い
せ
七四こき限籠には摘入て撫子に移れる袖の色ぞみせまし
むねゆき
五七五我袖に移らば移れ手もやまず摘や入れまし撫子の花

六七六あな戀し今も見てしが山賤の垣ほに咲ける大和撫子
七七涼しやと草むら毎に立よれば猶さぞ增る床なの花
七八美くしと見る度毎に撫子の花の名殘は惜くやは非ぬ
秋萩　敏行
七九秋萩の花咲きにけり高砂の尾上の鹿は今やなくらむ
素性
〇八〇白妙の波かもたつと見る迄に亂て咲ける山の萩哉
女のつらきにやれる
一八一秋萩の下葉につけてめに近くよそなる人の心をぞ知
家持
二八二わが宿のはぎの花咲く夕影に今も見てしが妹が姿を
やかもち
三八三我宿の一村萩を思子に見せでほと〳〵散しつるかも
ゆはらの大君
四八四玉に貫きけさでたばらむ秋萩の上わゝらはに置ける白露
人麿
五八五夜を寒み衣雁音鳴くなべに萩の下葉も色づきにけり
ならの帝
六八六萩の露玉に貫むと取ればけぬ見ぬ人は猶よそ乍見よ
貫之
七八七花の色は數多見ゆれど人知れず萩の下葉ぞ眺られける
八八妻こふる鹿の涙や秋萩の下葉もみづる露となる覽
九八八秋萩をみつゝ今日社暮しつれ下葉は戀の妻にぞ有ける
〇九さを鹿のいかゞ云けむ秋萩の匂ふ時しも人の戀しき
一九一置く物は久しき物を秋はぎの下葉の露の程もなき哉
躬恒
二九二秋はぎの古枝に咲ける花みれば元の心は變らざり鶯
ゆはらの大君
三九三我兄子に戀つゝ有ずは秋萩の咲て散ぬる花ならまし
大伴坂上郎女
四九四妹がめを見そめの崎の秋萩は此月頃は散こすなゆめ
よかやぶ
五九五幾世へて後が忘れむ散ぬべき野べの秋萩亂べき世を
六九六宮城野の本荒の小萩露を重み風を待つ如君を社まて
これひらの宰相
七九七白露は上より置をいかなれば秋の下葉の先もみづ覽
躬恒
八九八さを鹿の柵みふする秋はぎは下葉や上に成替るらむ

九秋萩の下葉隠れて鳴く鹿の涙や花に置くなの色をそむらむ　忠岑
一〇秋萩は先さずえ折るより紅葉るを露の心の分けるとなみ　貫之
一一秋萩の下葉よりしも紅葉るは元より物を思ふべら也　素性
一二秋萩の句へる枝にめでたらばいと空蟬に人や思はむ　伊勢
一三移はむとだに惜しき秋萩にをれぬ計りも置ける露哉　女郎花
一四手にとれば袖さへ匂ふ女郎花木下露に散まくをしも
一五秋の野に艶き立てる女郎花あなかしかまし花も一時　左大臣
一六女郎花秋の野風にうち靡き心一つをたれによすらむ　しゆき
一七秋野に宿りはすべし女郎花名を睦しみ旅ならなくに　三條右大臣
一八秋ならで逢ふこと難き女郎花天の河原に生ひぬ物故　小野のよしき
一九女郎花多かる野べに宿りせば綾なくあだの名をやたたむ　かねみの大君
二〇女郎花後めたくも見ゆる哉あれたる宿に獨たてれば　遍昭
二一名にめで〻折れる計ぞ女郎花我落にきと人に語るな　貫之
二二女郎花生たる秋の武藏野は常よりも猶むつまじき哉
二三たが秋に非ぬ物から女郎花など色に出てまだき移ふ　貫之
二四名におはゞ強て頼まむ女郎花の心の秋はうくとも
二五白妙の衣片しき女郎花咲ける野べにぞ今宵ねにける　おなじ人
二六女郎花移ろひ方になる時は狩にのみこそ人は訪れ　おなじ人
二七狩にのみ人の見ゆれば女郎花花の袂ぞ露かゝりける
二八女郎花句を袖に移してばあやなく我を人やとがめむ　躬恒

二九女郎花一本故に秋の野の千ぐさながらに花を思ふ哉
（一本有左之二首　女郎花吹き過ぎて來る秋風は目には見えねど香こそ著けれ）
三〇妻戀る鹿ぞ鳴なる女郎花己がすむの〻花と知らずや　躬恒
三一七夕に似たる花かな女郎花秋より外に逢ふこと難し　躬恒
三二明ぬればつれなく成ぬ女郎花人知ず祉つまむとは思へ　忠岑
三三人の見るとや苦しき女郎花霧のまがきに立隠るらむ　おきかせ
三四折るからに我名は立ぬ女郎花いざ同くは花乍らみむ　伊勢
三五花に飽で何返る覽女郎花多かる野べにねなまし物を　素性
三六女郎花色にもあるか松蟲を下に宿して誰をよぶらむ　平のまれよ
三七枝もなく人に折らるゝ女郎花根をだに殘せ植し我爲
三八女郎花折ける枝の節ごとに過にし君は思ひ出やせし　伊勢
三九女郎花折りも折らずも古は更にとふべき事ならぬ哉
（一本有左之二首　我宿に今咲く花の女郎花堪へぬ心に猶戀ひにけり）
四〇女郎花うしと見つゝぞ行過る男山にしたてりと思へば　ふるのいまかち
四一白露の置ける朝の女郎花にも葉にも玉ぞかゝれる　貫之
四二小倉山峰立ち馴し鳴鹿のへにけむ秋を知る人ぞなき　興風
四三秋の野の露に置るゝ女郎花拂ふ人なみ濡つゝやへむ　素性
四四女郎花花の心のあだなれば秋にのみこそ逢渡りけれ　すゝき
四五さを鹿の入野の薄はつ尾花いつしか君が手枕をせむ　人麿
四六我宿の尾花が上の白露をけたずて玉にぬく物にもが　かなむら
四七いかご山のべに咲たる花は見れば君が家なる尾花思ほゆ　貫之
四八野べみれば生ふる薄の秋若みまだほに出ぬ戀もする哉　おなじ人
四九花薄ほにはおけども初霜の色はみえずて消ぬべら也　おなじ人

五〇目止てぞ見べかりける花薄招く方にや秋のいぬ覽　おなじ人
五一招くとて來つるかひなし花薄ほに出て風の計る也鳧　おなじ人
五二いつとても人やはからす花薄などか秋しも穗には出覽　躬恒
五三過がてに野べはへぬべし花薄此彼招く袖の見ゆれば　貫之
五四君とはむ人には逢で秋風に靡く尾花をみてや歸らむ　在原のむねやな
五五秋の野の草の袂か花薄穗に出でゝ招く袖とみゆらむ　伊勢
五六秋の野に出でぬとならば花薄儚き空を招きたてらむ　興風
五七花薄我こそ下に頼みしかほに出て人に結ばれにけり　躬恒
五八君が植し一村薄蟲の音の繁き野べともなりにける哉
五九いか計風のつらさに花薄吹きくる方をまづ背くらむ　恒
六〇小倉山麓の野べの花薄ほのかに見ゆる秋のゆふぐれ　深養父
六一花薄風に靡きて亂るゝは結び置きてし露やとくらむ　貞文
六二今よりは植ずだに見し花薄穗に出る秋は侘しかり鳧　日置長枝が娘
六三秋づけば尾花が上に置露のけぬべく我は思ほゆる哉　石河のひろなり
六四珍しき君が家なる篠薄ほに出る秋の過ぐらくをしも　人麿
六五妹がりとわが通路のしの薄我し通はゞ靡けしのはら　をぎ
六六年ふとも我忘れめや逢坂の篠の小薄老いはてぬとも
六七秋風の稍吹野べの篠薄穗に出でぬ戀は苦しかりけり　之
六八篠薄ほに出すとも行秋を招くといはゞそよと答へよ　貫之
六九いつも聞く風とはきけど荻の葉の戰ぐ音にぞ秋はけにける　おなじ人
七〇荻の葉のそよぐ音こそ秋風の人に知らるゝ始也けれ　躬恒
七一荻の葉に吹くる風ぞ秋きぬと人に知らるゝ印也けれ
七二秋風の吹に附ても訪ぬ哉荻の葉ならば音はしてまし
七三朝夕に撫ておほし草なればおいて見ゆるぞ我宿の荻
七四とわもや恨むると秋風のそよ〳〵荻の葉にぞ驚く

六六最どしく物思ふ宿の萩の葉に秋と告つる風の侘しさ
六六秋風の萩の葉を吹く音きけば愈我ものをこそ思へ
らに　　蜑
蜑嵯峨のみかどの坊にて
六六源俊頼朝臣　六六つる六条
七哲人の其香に匂ふふぢ袴君の御のたをわたるけふ元
六六ふぢはかまきみのおほものぬしたるよし源俊頼朝臣
ならのみかど
六六折人の心のまゝに藤袴うべも色こく咲きて見えけり
敏　行
九何人かきてぬぎかけし藤袴くる秋毎に野べを匂はす
つらゆき
〇七宿りせし人の形見か藤袴忘れがたき香は匂ひつゝ
素　性
一七主知らぬ香こそ匂へれ秋の野に誰が脱懸ぞ藤袴そも
おなじ人
二七女郎花なが藤袴織つれば秋の紅葉を染つけにして
三七秋かぜにほころびぬらし藤袴つゆとりさせてふ雲なく
きく
四七濡れてほす山路の菊の露のまにいかに千年を我はへにけん
業　平
五七植しうゑば秋無時や咲ざらむ花耐散め根さへ枯めや
敏　行
六七久方の雲の上にて見る菊は天つ星とぞ誤またれける
菅原のおとゞ
七七秋風の吹上に立てる白菊は花か非ぬか波のよするか
貫　之
八七故郷を別て咲ける菊の花平らかにこそ匂ふべらなれ
おなじ人
九七咲初し宿し變れば菊の花色さへにこそ移ひにけれ
おなじ人
〇八月影も花も一にみゆる夜は孰を分きて折むとぞ思ふ
貫　之
一八色そむる物ならねども月影にうつれる宿の白菊の花
二八移ふと見ゆる物から菊の花さけりし枝ぞ變ざりける
三八孰れをか花とはわかむ長月の有明の月にまがふ白菊
つらゆき
四八薄く濃く色ぞ見えける菊の花露や心を分きて置らむ
五八置露の染め惑はせる菊の花孰か元の色には有るらむ
貫　之

八六水にさへ流れて深き我宿の菊の澗とぞ成ぬべらなる
八六緒をよりてぬく物にもが朝毎に菊の上なる露の白玉
躬　恒
八八心あてに折ばや折らむ初霜の置き惑はせる白菊の花
おなじ人
九八菊花疾きも遅きも今迄に霜の置かずば色と見ましや
おなじ人
〇九初時雨降初しより菊の花なかりし枝ぞ又そはりぬる
一九月影に色わき難く白菊は折てもをらぬ心ちこそすれ
二九朝毎に露はおけども菊の花人の齢はくれずぞ有ける
躬　恒
三九菊の花色をみる人の心さへにぞ移ろひぬべき
四九元よりも色にはあれど菊の花片枝は移す所からかも
友　則
五九波とのみ打こそ見つれ住の江の岸に殘れる白菊の花
おなじ人
六九一もとと思ひし菊を大澤の池の底にも誰か植るけむ
千　里
七九植し時花待遠にありし菊移ろふ秋に逢はむとやみし
おなじ人
八九秋を置て時こそ有けれ菊の花移ふからに色の優れば
九九なにしきく色染返し匂ふ覧花もて囃す君もこなくに
伊　勢
〇〇秋夜も深く成とや菊の花影さへそひ覧て君に見ゆ覧
一〇菊ならぬ菊こそ我は思ほゆれ君に逢つゝ人し無ければ
かねすけ
二〇けふ引て雲居に移す菊花天つ星とやあすよりはみむ
おなじ人
三〇新しき物にざりける神無月時雨降にし菊にはあれ共
是　則
四〇菊の花冬野の風に散もせでけふ迄とても霜は置らむ
おなじ人
五〇我背子がひも夕暮の菊の花匂ふぞ秋の色は見えける
これひら
六〇一草に咲くはかひなし百敷に移して後は色かふな菊
七〇斯ばかり深き色にも移ろふを猶君菊の花といはなむ
八〇匂ひけむ盛はみねど菊の花名惜くも思ほゆるかな
九〇色も香も匂ふ菊とも成てしが我よりは又非じと思はむ

一〇白雲の上にし移ろ菊なれば猶くを匂へ花と見るべく
一〇色變る秋の菊をば一年にふたゝび匂ふ花とこそみれ
くさのかう
二〇草の斯う色變りぬる白露は心おきても思ふべきかな
きちかう
三〇秋近う野はなりに鳧白露のおける草葉も色變りゆく
四〇秋の川近う照すとみえつるは露に移ろふ光なりけり
りうたむ
五〇我宿の花踏散す鳥うたむ野は無ければや爰にしもくる
貫　之
六〇花しあらば且來て折む秋風に波立返りうたむ中にも
伊　勢
七〇色深き露のかきりうたむれども紫深き秋のはなかな
おなじ人
八〇風寒み鳴雁音の聲によりうたむ衣をまづやからまし
しをに
九〇秋の野の草葉を人と折りきしを錦の如も見え渡る哉
〇〇散ぬ其みつる色をば忘れじを俄に移る花の色ぞ
伊　勢
一〇受溜むる袖をし緒にて貫止ば涙の露の數はみてまし
貫　之
二〇咲果て今は有じと思ひしをにはがくれても匂ける哉
おなじ人
三〇菊も猶咲出ぬればこと花はそれに非じを匂ひけら哉
四〇振はへていざ故郷の花見むとこしを匂ぞ移ひにける
五〇紫の花ゆひしつとつけし袷に思は深く結びこめてき
くたに
六〇散ぬれば後はあくたになる花を思知ずも惑ふ今日哉
貫　之
七〇水上を山にて落る瀧つせの雫の絶えずそゝぐ谷かげ
さうび
八〇我はけさうひにぞみつる花の色をあだなる物と云可り鳧
かるかや
九〇きめなれどよき名も立ず刈萱のいざ亂なむしどろに
〇一〇秋風に亂初にし刈萱を我ぞつかねてゆふまぐれみし
一一刈萱のほに出て物を云はね共靡く草葉は哀とぞみし
かや

二河上の根白高萱綾に〳〵さねさし寝て社に出にしか
三萱の野べ最もかるゝか峰の上の松が枝共に久き物を
四七日刈る萱は我身の上なれや人に思を告でやみぬる
はちす
五久方の雨も降らぬか蓮葉に溜れる水の玉に似むみむ
六蓮葉に置きゐる露の玉水はうかべる人の心とぞみる
七綠也と思ふ計に蓮葉の香は身にさへもしみにける哉
伊勢
八濁江は片深く社あせにけれ身を遣さへ見れば生鳥
へゝせう
九蓮葉の濁にしまぬ心もて何かはつゆを玉とあざむく
一〇吹く風は香をのみ添ふる我宿の池の蓮を取な盡しそ
一一露をだに玉となしつる蓮葉に思ふ心を入て見せばや
かきつばた
一二住の江の淺澤小野の杜若衣にすりつけきむ日知ずも
良岑よしかた
一三云ひそめし昔の人の杜若色ばかりこそ形見なりけれ
一四我のみや斯戀すらむ杜若句へる妹はいかにかあらむ
一五杜若句へる妹をいさなみに思ひ出つゝ數きけるかな
貫之
一六君がやと我やと分くる杜若移ろはぬ時見む人もがな
返事　興風
一七睦しく園ひ隔てぬ杜若誰れがたちかは移ろひぬべき
又　貫之
一八直ちにて君が越來む杜若茲をほかに移ひぬべし
一九常ならぬ人くに山の秋津野の杜若をし夢に見哉
業平
二〇唐衣きつゝ馴にし妻しあれば遙きぬる旅をしぞ思
こも
二一我せ子に戀つゝあらずば刈菰の思亂て死ぬべき物を
二二春駒のあさる澤べの眞菰草まことに我を思ふやは君
二三我せ子が老ゆるか惜ささだの池の菰にもがもやまず
二四菰枕高瀬の淀に刈る菰の刈るとも我は知らで頼まむ
大伴のかたみ
二五我妹子にかけてな云そ刈菰の亂て思ふ君があたりぞ
貫之
二六駒にかふ澤の若菰刈にきていかで淀のゝとを知けむ
二七三熊野の刈やみ菰の編戀てゆふてに思我ならなくに
二八五月まつ沼に生たる若菰のそよ〳〵我も爭でとぞ思
はながつみ
二九女郎花さく澤に生ふる花がつみ都も知ぬ戀もする哉
三〇君がをる八重山吹の花がつみ且見人ぞ戀しかりける
三一陸奥の淺香の沼の花がつみ且見る人の戀しきやなぞ
あし
三二蘆づのゝ生ひ出し時に天地と人との品は定りにけり
三三津國の難波の蘆のめもはるに繁き我戀人しらめやも
三四人知ず物思時は難波なる蘆の白根の知られやはする
貫之
三五白波のよすれば靡く蘆の根の浮世の中は短からなむ
三六押照や難波堀江の蘆べには雁ぞれたる霜の降れるに
貫之
三七難波女の衣ほすとて刈てたく蘆火の烟立ぬ日ぞなき
人麿
三八君が爲浮ぬの池に菱とると我染し袖の濡にけるかも
三九あすてへば心細みの池に生る菱の下根の泣れ社すれ
四〇豐國のきくの池なる菱のうれを取とや妹がみ袖濡覽
ぬなは　人麿
四一我心ゆたのたゆたに浮蓴へにも沖にもよりや兼まし
四二こりずまの籠り江に生る浮蓴憂き身に物を思ふ頃哉
ねぬなは　忠岑
四三隱沼の底より生る秋蓴のねぬなはたてじくるな厭そ
四四蓴果るとや遲きと根蓴のねぬれば人の來るも知れず
四五由水に君はおひねと根蓴のくるまにまにも思增す哉
四六戀をのみ谷田の池の根蓴のくれば其物の亂ともなる
あさゐ
四七見からに思益田の池に生るあさゐの浮て世をばへとや
浮くさ　人麿
四八とき衣の思亂れて浮草の浮ても我はありわたるかな
伊勢
四九根を絕えて水に浮べる萍は池の深きを頼むなるべし
小野小町
五〇侘ぬれば身を萍の根を絕て誘水あらばいなむとぞ思
躬恒
五一水の面に生ふる五月の浮草の波の上にや種を蒔けむ
五二籠江に際なく浮ける萍のま無くぞ人は戀しかりける
つきぐさ
五三五月まつ沼に生たる若菰のそよ〳〵我も爭でとぞ思
はながつみ
五四女郎花さく澤に生ふる花がつみ都も知ぬ戀もする哉
五五君がをる八重山吹の花がつみ且見人ぞ戀しかりける
五六陸奥の淺香の沼の花がつみ且見る人の戀しきやなぞ
あし
五七蘆づのゝ生ひ出し時に天地と人との品は定りにけり
五八津國の難波の蘆のめもはるに繁き我戀人しらめやも
五九人知ず物思時は難波なる蘆の白根の知られやはする
貫之
六〇白波のよすれば靡く蘆の根の浮世の中は短からなむ
六一押照や難波堀江の蘆べには雁ぞれたる霜の降れるに
貫之
六二難波女の衣ほすとて刈てたく蘆火の烟立ぬ日ぞなき
人麿
六三君が爲浮ぬの池に菱とると我染し袖の濡にけるかも
六四あすてへば心細みの池に生る菱の下根の泣れ社すれ
六五豐國のきくの池なる菱のうれを取とや妹がみ袖濡覽
ぬなは　人麿
六六我心ゆたのたゆたに浮蓴へにも沖にもよりや兼まし
六七こりずまの籠り江に生る浮蓴憂き身に物を思ふ頃哉
ねぬなは　忠岑
六八隱沼の底より生る秋蓴のねぬなはたてじくるな厭そ
六九蓴果るとや遲きと根蓴のくるまにまにも思增す哉
七〇由水に君はおひねと根蓴のくれば人の來るも知れず
七一戀をのみ谷田の池の根蓴のくれば其物の亂ともなる
あさゐ
七二見からに思益田の池に生るあさゐの浮て世をばへとや
浮くさ　人麿
七三とき衣の思亂れて浮草の浮ても我はありわたるかな
伊勢
七四根を絕えて水に浮べる萍は池の深きを頼むなるべし
小野小町
七五侘ぬれば身を萍の根を絕て誘水あらばいなむとぞ思
躬恒
七六水の面に生ふる五月の浮草の波の上にや種を蒔けむ
七七籠江に際なく浮ける萍のま無くぞ人は戀しかりける
つきぐさ
七八月草に衣はすらむ朝露に濡れての後は移ろひぬとも
七九月草の徒らにある心哉我が思ふ人のことも告げこぬ
八〇昔より打見る人につきぐさの花心とは君をこそ見れ
八一月草の移ろふ色に思ひせば今まで君をまたまし物か
八二月草に衣色どりすらめども移ろふ色といふが苦しさ
八三世中の人の心は月草の移ろひやすき色にぞありける
八四夙に咲き夕は消ゆる月草のけぬべき戀も我はする哉
八五朝夕に咲すさびたる月草の引さへ共にけぬべく思ほゆ
わすれ草　貫之
八六道しらば摘にも行かむ住の江の岸に生ふてふ戀忘草
八七住江に生よとぞ聞きし忘草人の心にいかで生ひけむ
おなじ人
八八住の江に舟さしよせよ忘草驗有りやと摘みに行べき
おなじ人
八九打忍びいざ住の江へ忘草忘れて人のまたや摘まぬと
躬恒
九〇住吉と海士は云とも長居すな人忘ぐさ岸におふなる
九一我爲は見るかひもなし忘ぐさ忘る計の戀にし非ねば
九二忘草たねの限は果てなゝむ人の心に蒔かせざるべく
しのぶ草
九三獨のみ詠め古やのつまなれば人を葱のぐさぞ生ける
伊勢
九四はな薄穗に出穗に出すなき宿の背葱の草をこそみれ
九五戀しとも云はで古やの忍草繁さ增れば今ぞ穗に出る
貫之
九六山高み峯の嵐の吹く里は匂ひもあへず花ぞちりける
ことなし草
九七こりずまの松には最ど年ふれど事無草ぞ生添りける
貫之
九八人にのみいはれの池の綾なくに事無草の宿に誘はむ
九九君見てし程の古屋の庇には逢事なしの草ぞ生ひける
せり　左大臣橘諸兄
一〇〇茜さす晝は只おくぬば玉の夜のいとまに摘める芹是
かへし　命婦
一〇一大夫と思へる物を太刀佩てかにはの田ゐに芹ぞ摘ける
一〇二人知ず沼に生てふ深芹の我だに引かばねも見さらめや
一〇三春雨の振はへて行く人よりは我先摘まむ八瀬川の芹
なぎ　大伴のするが丸

九春霞春日の里に植しなぎ苗也と云しえはさしにけり
〇苗代のこなぎが花を衣にすり馴るゝ隨にあせか悲き
一かむつりのいかほの沼に植しなぎ斯戀むとや種求けむ
たで
二我宿の穂蓼ふるから摘はやしみに成迄に君をし待む
三みな月の河原に生ふる八穂蓼の辛しや人に逢ぬ心は
むぐら　左大臣諸兄
四葎はふ賤しき宿も大君のこむと知せば玉しかましを
五何しにか賢き妹が葎生のけがしき宿に入はますらむ
貫之
六八重葎心の内に繁ければ花見に行かむ出たちもせず
おなじ人
七八重葎繁くのみ成り増れ人目ぞ宿の草にならまし
八何せむに玉の臺も八重葎はへらむ中に二人こそねめ
九葎生ひて荒たる宿の戀しきに玉と作れる宿も忘れぬ
玉かづら　貫之
〇玉蔓葛城山のもみぢ葉の面影にのみ見えわたるかな
おなじ人
一かけて思ふ人もなけれど夕されば面影絶ぬ玉葛かな
二いか樣に生る物ぞと玉蔓爭で忍びにねも見てしがな
くず　さだふん
三秋風に吹き返さるゝ葛の葉の恨みても猶恨めしき哉
兼覽王
四足曳の山下しげくはふ葛の尋ねて戀ふる我と知ずや
貫之
五千早振神の忌垣にはふ葛も秋にはあへず色附にけり
六枯兼て霜に移ふ葛の葉の恨みやせまし風につけつゝ
七風早み峯の葛の葉ともすればあやかり易き君か心か
八我が宿の葛は日毎に色づきぬ來まさぬ君は何心ぞも
九女郎花生ふる澤べの眞葛原いつかも繰て我衣にきむ
〇足柄の箱根の山に這ふ葛のひかば寄來ね忍び〳〵に
さねかづら　みまかり
一玉匣みまとの山のさね蔓さねずは遂に有がてましも
三條右大臣
二名にしおはゞ逢坂山のさね蔓人に知られでくる由もがな
三無名のみ立田の山のさね蔓くる人有と誰かいふらむ
四難面きを思ひ忍ぶのさね蔓果はくるをも厭ふべらも也
あをつゞら
五高み谷べにはへる青つゞら絶る時なく逢由もがな
六山賤の垣ほにはへる青つゞら尋ぐれども逢ふ由もなし
七絶ぬとは云てし物を青つゞら又繰返し山人のうさ
家持
八春日野の野べの薄面影にみえつゝ妹は忘れかねつも
九覺束な誰とかしらむ秋霧の絶間に見ゆる朝顏のはな
〇朝顏は朝露おきて咲といへど夕影にこそ咲增りけれ
貫之
一此山の人もとにもあはで久方の權の花をのみみて我や返らむ
あさぢ　人麿
二淺茅生の小野の篠原忍とも今かは知じな訪人なしに
むしろ
三けさ鳴きて行きし雁音寒みかも此頃淺茅色附にけり
あめのみかど
四けさの朝げ秋風寒く聞しなべ野べの淺茅は色附に鳧
五山高み夕日隱れの淺茅原後見む爲にしめゆはましを
六思ふよりいかにせよとか秋風に靡く淺茅の色殊になる
七時雨のみまなくし降ば春日野の淺茅の色も移ひに鳧
ほづみの皇子
八秋萩は咲ぬべからし我宿の淺茅が花の色づくみれば
九眞葛はふ小野の淺茅を心より人引めやも我ならなくに
つばな
〇君が爲我手もすまに春の野に拔る茅花ぞ食て肥ませ
一我君にけぬはしかり戀らし給たるつ花なくへど彌痩にやす
二つばなつむ淺茅が原の壺菫今盛なり我が戀ふらくは
かにひ
三渡つ海の沖中に火の離れ出て燃と見えしは蜑の漁火
四片岡に火の遙々と見えつるは此面彼面に誰か附けむ
あぢさゐ
五紫陽花の八重咲如くやつよにもいませ我背子見つゝ忍ばむ
六茜さす晝は言痛し紫陽花の花の宵らに逢見てしがな
さてく
七春はきて昨日計を淺緑色はけさこく野はなりにけり
八春雨にしめぞ結らし花にけさ濃くは色えて咲滿に鳧
九秋の野は根ごにこじてもてぬ共巖の種は殘しやはせぬ
すみれ
〇春の野に菫摘にとこし我ぞ野を懷しみ一夜寢にける
一我宿に菫の花の多かればきやどる人やあると待つ哉
二山吹の吹きたる野べの壺菫此の春雨にさかり也けり
おはぎ
三春日野に煙立みゆ少女子し春野のおはぎ摘て煮らし
わらび
四三吉野の山の霞を今朝見れば厥のもゆる煙なりけり
五我爲に歎きこるとも知なくに何に厥を燒てつけまし
六煙たちもゆとも見えぬ草の葉を誰か厥と名け初けむ
ゑぐ
七足曳の山田の澤にゑぐ摘むと雪げの水に裳の裾濡す
八足曳の山澤ゑぐを取に行む日だにも逢む親はせむ共
ゆり
九夏の野の茂みに咲る姫百合の知られぬ戀は苦かり鳧
〇姫のべの草深百合の後にてふ妹がみとを我は知めや
一道のべの草深百合の花笑にゑみせしからに妻と云ひや
ある
二人知ず戀はしぬ共御園生の唐盛の花のいろに出めや
三すべらぎの神の宮人まさきづら彌常しきに我省みむ
家持
四足曳の山下日蔭かつらけ上にや更に梅をしのばむ
五少女子が日蔭の上に降る雪は花の插頭に何れ逢へり
六常磐なる日蔭の蔓けふしこそ心の色に深く見えけれ
七人しれぬ心を君に奥山の思ひかけてふ草に生ひけり
八朝日影匂へる山に照月の美くし妻を山越しにおきて
友
山たちばな
九我戀を忍び兼ては足引の山たちばなの色に出ぬべし
〇けのこりの雪にあひたる足引の山橘を苞に摘めらな
一足引の山橘の色に出でゝ我こひなむをやめむ方なし
則
すげ
二三吉野の三熊が菅を編なくに刈のみ刈て亂なむとや
三足引の山に生たる菅の根のねむごろ見まく欲き君哉
四女郎花咲く野に生ふる白菅の知ぬともて云れし我背
五しほの根に根ざす小菅の忍びずて君に戀つゝ有がてぬ
六見渡せば三室の山の岩ほ菅忍びに我は片思ひぞする
七大君のみ笠にぬへる有馬菅有つゝ見れど事無き我妹子
八菅の根のねむごろ妹に戀せましうら思心思ほえねかも
九奥山の岩もと菅の根深くも思ほゆるかも我思ふ妻は
奥山の岩隆に生ふる菅の根のねもごろ我も相思はざらむ

九妹が爲すがのみ取ると行く我は山路迷て此日暮しつ
一労人の笠に縫ふてふ有馬菅有ての後もあはざらめやは
さゝ
二笹の葉も色つるなべに足曳の山には雪ぞ降積にける
三玉笹の葉わきに置る白露の今為世へむ我ならなくに
あふひ
四千早振神の卯月になりにけりいざ打群れて蔓取さむ
五思ふ中酒に酔にし我なれば逢日なくではやむ藥なし
かたばみ
六逢事の酢漿草も摘なくに何なと我袖のこゝら露けき
みくり
七筑摩江に生るみくりの水早みまだねも見ぬに人のこひ
八戀すてふ狭山の池のみくりこそ引けば絶すれ我やねたまる
よもぎ
九我もふり蓬も宿に茂りにし門に音する人はたれぞも
一〇故郷となるぞわびしき夏衣蓬のうへの露見るごとに
一一秋風や蓬のやどに吹きぬらむこゑなつかしく鳴く蚤
こけ
二常磐なる松に纏れる苔見れば年の緒長き知べとぞ思
三石の上に生出る苔のねも入らずよな〳〵物を思ふ頃哉
四奥山の巌の苔の年久に見れども飽かぬ君にもある哉
五逢ふとをいつか其日と松の木の苔の亂て戀ふる此頃
いちし
六道のべのいちしの花の逸じろく人皆知ぬ妹に戀すと
七大原の此いち柴のいつしかと我思ふ妹に今宵逢るかも
しば
八螢み蓝醞てあむ歟に通ひせば道の芝草生ざらましを
九道の邊のいつ柴原のいつも〳〵人の許さむ時をし待む
蟲
一〇秋の夜の明るも知す鳴蟲は我ごと物や悲しかるらむ
一一秋風の稍吹しけば山寒み侘しき聲に蟲ぞ鳴くなる
一二我爲にくる秋にしも非なくに蟲の音きけば物ぞ悲き
一三秋くれば野もせに蟲の織つめる聲の綾をば誰かきる覽
一四秋の夜の露こそ殊に寒からし叢ごとに蟲のわぶれば
せみ
一五秋早み蟬の鳴つゝ歎かれぬ雜面き人の住む山ぞ遠み
友　則
一六蟬の聲きけば悲しな夏衣薄くや人のならむとすらむ
一七岩走る瀧もとゞろに鳴く蟬の聲をし聞けば都思ほゆ
伊　勢
一八唉花は年に替ねど空蟬のよの例にも散るにざりける
一九今も猶われてぞ人の恨しきかるさ初元なかの中に流て
二〇空蟬の空しき骸になる迄に忘れむと思我ならなくに
二一哀てふ人はなくとも空蟬のからになる迄むとぞ思
二二袂より離れて玉を包まめや是なむ其と移せ見むかし
二三波のうつせみれば玉ぞ亂ける拾はゞ袖に儚からむや
夏蟲
二四宵の間も儚くみゆる夏蟲に惑ひ増れる戀にもある哉
躬　恒
二五夏蟲を何か云ひけむ心から我も思にもえぬべらなり
深　養　父
二六優りては我ぞ燃ける夏蟲の火にかゝるとてなども有
二七夏蟲の身を徒になすことも一つ思によりてなりけり
二八燃る火に思入りにし夏蟲は何しか更に飛び返るべき
伊　勢
二九夏蟲のしる〳〵惑ふ思をばこりぬ悲しと誰か見ざらむ
きりたち〳〵す
三〇蚤いたくな鳴きそ秋の夜のながき思は我ぞまされる
素　性
三一ながら爲に荒せる宿か蟋蟀夜長き人のもとにしもくる
貫　之
三二秋風の吹きつる宵は蚤くさむらごとにこゑ亂るなり
三三我がごと〳〵物や悲しき蚤枕つどへに夜もすがら鳴く
素　性
三四秋風のやゝ吹きしけば蚤むべき蓬のやどをかろらし
まつむし
三五秋の野の露に濡つゝ誰くとか人松蟲のこゑ鳴らむ
貫　之三首
三六こむと見し程も過にし秋の野に人松蟲の聲の悲しさ
三七秋の野に來宿る人も思はえず誰を松蟲こゑ鳴らむ
三八夕されば人松蟲の鳴なべに獨ある身ぞ繼ひ堪りける
三九瀧つ瀬の中に玉つむ白波は流るゝ水脈を緒にや貫覽
五條の后
四〇秋の野に我松蟲の鳴と云はゞ折で根乍花は見てまし
四一君忍ぶ草にやつるゝ故郷は松蟲の音ぞ悲しかりける
すゞむし
四二遐迩にけふ逢見れば鈴蟲は昔乍らの聲ぞ聞ゆる
四三人の妹かと聞くまで女郎花もと毎に鳴く鈴蟲の聲
四四狩にきて野べにぞ惑ふ鈴蟲の聲はさやけき知べなれ共
ひぐらし
四五夕陰にきなく蜩いくそばく日毎に聞けどあかぬ聲哉
遍　昭
四六今こむと云て別し朝より思ひ暮しの音をのみぞ鳴く
貫　之二首
四七蜩の聲に山の端近ければ鳴つるなべに入日さしけむ
四八蜩の聲もいとなく鳴くなるは秋の夕になれば也けり
四九秋風の稻葉そよぎて吹くなべに仄かにしつゝ蜩の聲
五〇蜩の鳴つるなべに日は暮ぬとみえしに山の陰にぞ有ける
貫　之
一五一柚人は宮木引くらし足曳の山の山人よび響むなり
一五二又もあらむ折もなかなむ蜩の物思ふ時に鳴つゝ綾な
一五三斯しのみあれば物思ひ慰むと出立ちきけばきなく蜩
ほたる
一五四行く螢雲の上迄いぬべくば秋風ふくと雁に告こせ
つらゆき
一五五夏の夜は燈す螢の胸の火を緒しも絶たる玉とみる哉
友　則
一五六夕されば螢よりけに燃れども光みねばや人の難面き
一五七さよふけて我が待つ人や今くると驚く迄に照す螢か
貫　之
一五八螢はなき夜は燃でぞ長らふる螢も蟬も我身なりけり
しけはる
一五九住遂む庵たる可も見えなくになど程も無き身を焦す覽
はたおりめ
一六〇雁音の羽風を寒み機織めて聲のきり〳〵となく
一六一秋來れば機織る蟲の有なべに唐錦にも見ゆる野べ哉
衣　通　姫
一六二今しはと侘にし物をさゝがにの衣に懸て我を賴むる
文屋のあさやす
一六三秋の野に置く白露は玉なれや貫きとむるくもの糸條
一六四常ならぬ身は篠蟹の糸なれや天つ空なる賴かくらむ
てふ
一六五大えてら是は誰ぞも世中にあだなる蝶にみゆる花かは
一六六云へばえに云ねば更に怪くも陰なる色の蝶にも有哉
木

冬なれば春べを戀て植し木のみになる迄に片待我ぞ
躬恒
○誰爲にこれる歟を打附に匂も知ぬ我におほする（昨日今日などかはなるかやしてまでに今までにこれるなどかは花の咲かすして四十年餘年ぎりはする）
二春々の敷は忘れず有ながら花咲かぬ木を何に植けむ
おなじ
○櫻花匂ふともなく春くればなどか歟の茂りのみする
おなじ
三東路のさやの中山繁く共君きまさば面影もせじ
行通ふ山の細道いかなれば栞も見えで踏はたゆらむ
花
難波津に咲やこの花冬籠り今は春べと咲くやこの花
友則
久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散らむ
貫之
行水に亂て花の散れをば消ず流るゝ雪かとぞ見る
おなじ人
散花に家路もとびて此里に我は稀にぞ長居しにける
おなじ
梓弓春の山べを越くれば道もさりあへず花ぞ散ける
おなじ
○谷川の流てこずば思はえずみ山隱の花を見ましや
おなじ
朝ぼらけ下行水は淺けれど深くぞ花の色は見えける
貫之
春くれば咲と云事を濡衣にきする計の花にぞ有ける
躬恒
花見れば心さへ社移りぬれ色には出じと思ひし物を
起臥に惜むかひなく現にも夢にも花の散をいかにせむ
我宿の花見がてらに來人は散なむ後ぞ戀しかるべき
舟岡に花摘人のつみ果てゝさして行らむ方や孰くぞ
驚は痛くな鳴そ匂ひ香にめでゝ我摘む花ならなくに
躬恒
花見れば移る心は色に出てあだには綾な人に知るゝ
惜め共花の散らむ人惜く物も云はでぞ見べかりける
みつね
○久方の空も曇らで降雪は風に散りくる花にぞ有ける
伊勢
戀しくばいかにせよとか斯計あだなる花の許にねぬ覽
おなじ
二年を經て花の鏡となる水は散曇るをや曇ると云らむ
素性
春毎に花の匂はありなめど逢ひ見むとぞ命なりける
躬恒
吹風に誘へつくる物ならば此一枝はよきよと云まし
素性
惜と思ふ心ぞ糸によられなむ散花毎に貫てとむべく
木傳へば己が羽風に散花を誰におほせてこゝら鳴覽
素性
花の木も今は掘植じあぢきなく移ふ色に人習ひけり
おなじ
花の色を題はにめでば色めきぬいざ〻閣に折て取てむ
花のごと世の常ならば過してし昔は今も返りなまし
秋花
貫之
見人もなき野べなれば毎毎に外へ移ふ花にぞ有ける
伊勢
○宿もせに植並べてぞ我は見る招く尾花に人や止ると
紅葉
二妹が袖卷もく山の朝霧に匂ふ紅葉の散らまくをしも
貫之十二首
○色もまだ見えぬ紅葉は足引の山水よりぞ初つらむ
○もみぢ葉の流るゝ時は立田川湊よりこそ秋は行らめ
○心とて散らむだに社惜からめなどか紅葉を風の吹覽
○見る人も無くて散ぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり
○唐錦立田の山のもみぢ葉は紅ながら常磐ならなむ
○山風のふきのまに〳〵紅葉も己が散々散りぬべら也
○打群れていざ我妹子が鏡山越て紅葉の散らむ影みむ
○吹風に散ぬと思ふを紅葉の流るゝ瀧の本に落らむ
紅葉の散りしく時は行通ふ跡だに見えぬ山路也けり
足引の山かき曇りしぐるれど紅葉計ぞ照り增りける
流來るもみぢ葉見れば唐錦瀧の糸して織れる也けり
貫之
山近き所ならずば行く水も紅葉せりとぞ驚かれまし
立田川秋にしなれば山近み流るゝ水も紅葉しにけり
水底に影し移ればもみぢ葉の色も深くや成增るらむ
おなじ人
唐衣立田の山のもみぢ葉はほた物もなき錦なりけり
おなじ
秋風の吹きにし日より音羽山峰の梢も色づきにけり
もる山の峰の紅葉も散にけり偖き色の惜しくも有哉
躬恒
○立止り見てを渡らむ紅葉は雨と降るとも水は增らじ
秋夜の長居をやせむ捗なくて紅葉の蔭に日を暮しつゝ
風に散木々の紅葉は後終に瀧の水こそ落し果れけれ
風吹けば落る紅葉水清み散らぬ影さへ底に見えつゝ
惜めども終に散ぬる紅葉放ふる雨風に物をこそ思へ
忠岑
二白露も時雨も殖くもる山は下葉殘らず紅葉しにけり
秋風にさほ山よりや散來つる色見えぬべき日蔭草て
あだなりと我は見なくに紅葉なを色の疑れる秋し無れば
友則
遲くとく色づく秋の紅葉は後れ先だつ露や置くらむ
木葉ちる浦に波立つ秋なれば紅葉に花も咲紛ひけり
宗于
○速もなく成行く人の言の葉ぞ秋より先の紅葉也ける
是則
紅葉の流れざりせば立田川水の秋をば誰か知らまし
人麿
立田川もみぢ葉流る神なびの三室の山に時雨降らし
雁音の鳴くなるなべに唐衣立田の山は紅葉しにけり
經もなく緯も定ぬ少女らがおれる紅葉に霜降なゆめ
奈良の帝
佐保山の柞の紅葉散ぬべき夜さへ見よと照す月影
式部卿宇合
山城の岩田の森の柞原みつゝや君がひとり越ゆらむ
是則
佐保山の柞の色は薄れど秋に深くもなりにける哉
秋霧は立ずもあらなむ佐保山の柞の紅葉よそ乍みむ
まゆみ
移ろふも嬉しかりけり我爲に深き檀の色をみすれば
貫之

一引ふせてみれど飽ぬは紅にぬれる眞弓の紅葉也けり
かへで
二我宿にもみづる楓見る毎に妹を懸つゝ戀ぬ日ぞなき
素　性
二今更に心はかへで世はへむと云し言葉に欺かれつゝ
たゝふさ
三吉野やま峯の紅葉心あらば稀の御幸を色かへで待て
四子持山若蛙手のもみづ迄ねむと思ふを妹はいかにぞ
又、ねむとわは思ふ汝はあぢか思ふ
松　貫之六首
五幾世へし磯の松ぞも昔より立よる波ぞかずは知らむ
六色のみぞ増るべらなる磯の松影みる水も綠なりけり
七我のみや蔭とは頼む白波も絶えずたちよる岸の姫松
八花の色は散らぬ間ばかり故郷に常には松の綠也けり
九世中に久しき物は雪の内に元の色變ぬ松にぞ有ける
一〇大原や小鹽の山の小松原はや木高かれ千世の蔭みむ
友　則
一一打はへて蔭とぞ頼む嶺の松色どる秋の風にうつるな
一二深綠常磐の松の蔭にゐて移ろふ花をよそにこそ見め
一三春深き色にもあるかな住の江の底も綠にみゆる濱松
敏　行
一四誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに
一五我せこが使こむかと出立し此松原を今日か過なむ
風
一六風吹けば波こす磯の磯馴松ねに顯れて鳴きぬべら也
人　麿
かへ
一七色變ぬかへの葉のみぞ秋なれど紅葉すると習ざりける
一八松かへの常磐に似べき心かは亂む戀もやなかり鳧
家　持
たけ
一九我宿のいさゝむら竹吹く風に音のさやけき此の夕哉
つらゆき
二〇千世もたる竹の生ひたる宿なれば千種の物は物なくにな
おなじ
二一三吉野の山より雪は降來れどいつとも分ぬ我宿の竹
おなじ
二二紅葉する草木にも似ぬ竹の葉ぞ變らぬ物の例也ける
躬　恒

二三今更に何生ひ出らむ竹の子の憂節繁き世とは知ずや
二四憂節も有じとぞ思ふ呉竹の世を儚しと思ひしかば
素　性
二五時雨する音はすれ共弱竹のなど世と共に色も變らぬ
二六竹の葉に降懸らなむ梅花雪の中なる匂とのみ見るべく
貫　之
二七鶯のしだかむ中に梅の花散り飛らなむ春のかたみに
梅
二八袖たれていざ我園へ鶯の木づたひ散らす梅の花見に
閑院太政大臣
二九等閑に思つる物を梅花濃香に我やとしみなむ
東三條右大臣
三〇鶯の笠に縫ふてふ梅の花をりて翳さむ老かくるやと
貫　之
三一くるとあくと目枯ぬ物を梅花いつの人まに移ひにけむ
おなじ人
三二今年より春知初る梅の花散るてふとは習はざらなむ
三三梅の花咲ぬる時は倉部山闇に越ゆれど著くぞ有ける
三四梅の花咲と知ずや三吉野の山に友まつ雪のふるらむ
三五梅の香の限無れば折人の手にも袖にもしみにける哉
貫　之
三六我宿にありと云ひながら梅花哀と思ふに飽時もなし
おなじ
三七梅が枝に降懸りてぞ白雪も花の便に折らるべらなる
おなじ
三八歎ふれば寢覺なきを我宿の梅こそ春の知べなりけれ
躬　恒
三九春の夜の闇は綾なし梅花色こそ見えね香やは隱るゝ
おなじ
四〇鴬をか分きて折らまし梅花枝もとをゝに降れる白雪
おなじ
四一降雪に色も紛ひぬ梅花香にこそにたる物なかりけれ
おなじ　おなじ
四二香をとめて誰折ざらむ梅花あやなく霞立ちな隱しそ
おなじ　おなじ
四三梅の花咲にけらしな今年より萬代ふべき春に逢むと
おなじ　おなじ

四四月夜には其とも見えず梅花香を尋てぞ知べかりける
素　性
四五梅の花折ればこぼれぬ我袖に匂ふ香移せ家苞にせむ
おなじ
四六散と見て有べき物を梅の花うたて匂の袖にとまれる
おなじ
四七よそにのみ哀とぞ見し梅の花飽ぬ色香は折て也けり
坂上郎女
四八盃に梅の花うけて思ふどち飲ての後は散ぬともよし
伊　勢
四九思出て見にこざりせば梅の花誰に匂の香を移さまし
友　則
五〇君ならで誰にか見せむ梅花色をも香をも知人ぞ知る
五一いつしかも此夜あけなむ鶯の木傳ひ散す梅の花みむ
五二我宿の梅のそのへに風吹けば匂はよそに成やしぬ覽
大伴のひらかみ
五三霞たつかすがの里の梅の花山下風にちりこすなゆめ
こをばい
五四雪とのみおやまたれしを梅の花紅にまへ匂ひける哉
五五紅と雪とは遠き色なれど梅のはなには成ひけり
貫　之
五六紅に色をば變て梅の花香ぞことゝ〳〵に匂はざりける
五七鶯の巣くへる枝を折たらば子をば爭でか生まむとす覽
柳
五八いな筵河添柳水ゆけば起ふしすれど其の根絶えせず
五九糸をのみ絶すより出す青柳を年の緒長き印とぞ思ふ
六〇春毎に絶せぬ物は青柳の風に繰出す糸にぞありける
六一よる人もなき青柳の糸なれば吹來る風にかつ亂つゝ
貫　之
六二青柳の枝に懸れる白露を糸もてぬける玉かとぞみる
躬　恒
六三春雨のふり初しより青柳の糸のはなだぞ色增りける
おなじ
六四目に見えで風は吹け共青柳の靡方にぞ花は見えける
遍　昭
六五青柳の糸よりかくる春しもぞ亂れて花の綻びにける
六六青柳の糸よりかけて縫る機はいづれの山の鶯かきる
へんぜう
六七花見にも行べき物を青柳の糸手に懸てけふは暮しつ

一〇青柳の糸に懸れる春雨を糸もてぬける玉かとぞみる　伊勢
一一春の雨の打ちふる毎に我宿の柳の末は色づきにけり
一二春くればしだり柳のとをゝにも妹が心によりにける哉
一三水の上に影打靡く青柳を波のあやおる糸かとぞみる
一四岩ばしる瀧なくもがな櫻花手折もてこむみぬ人の爲　貫之
一五我宿の物也ながら櫻花散るをばえこそ留めざりけれ
一六百千鳥木傳ひちらす櫻花孰れの春かきつゝ見ざらむ　貫之十五首
一七惜みにときつるかひなく櫻花見れば且つ散増けれ
一八玉鉾の道は猶まだ遠けれど櫻を見れば長居しぬべし
一九多かりと思ふ物から櫻花みる所にはやすくやはゆく
二〇且見つゝ飽かず思へば櫻花散なむ後ぞかねて戀しき
二一櫻より優る花なき春なればあだし草葉を物とやは見る
二二春立てば里になびく白雲は咲ける櫻の遮め也けり
二三櫻花ふりにふる共見る人の衣濡るべき雪ならなくに
二四となら咲ずやはあらぬ櫻花見る我さへに靜心なし
二五人をよぶ物ならなくに櫻花咲けるを見れば心肚ゆけ
二六白雲と見えつる物を櫻花今はちるとや色ことになる
二七櫻ちる木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降ける
二八散るが上に又も散る哉櫻花斯てぞ去年の春も過にし
二九その如く散りし紛へば櫻花ふりにし雪の形見とぞみる
三〇櫻には心のみこそ苦しけれ俺て散せる春しなければ　躬恒六首
三一今迄に散らずはあれど櫻花なき物とのみ思ほゆる哉
三二いつの間に散果てにけむ櫻花俤にのみ色を見せつゝ
三三櫻花我宿にのみ有りとみばなき物草は思はざらまし
三四雪とのみ降るだに有を櫻花いかにせよとか風の吹覽
三五風ふかぬ程に折てむ櫻花我手からこそちらば散さめ
三六現には更にも云じ櫻花夢にも散ると見えばうからむ
三七惜まずよ我が老らくも櫻花かざして後ぞ老忘れける　躬恒
三八我如や人もみるらむ櫻花あくと知らぬ色にもある哉　おなじ
三九櫻花夜間散なゝ後やいかにけふ社行て折らば折てめ　友則
四〇色も香も昔ながらに咲くらめど年ふる人ぞ改りける
四一久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散らむ　素性
四二待てと云に散でし止る物ならば何を櫻に思増さまし　おなじ
四三いざ櫻我も散なむ一盛ありなば人にうきめ見えなむ　おなじ
四四見てのみや人に語らむ櫻花手毎に折りて家苞にせむ　貫之
四五櫻色に衣は深く染てきむ花のちりなむ後のかたみに　きのとも
四六櫻花散らば散なむ散ずとて故郷人のきても見なくに　これたかのみこ
四七春霞なに隠すらむ櫻花散る間をだにも見るべき物を　深養父
四八垂籠めて春の行へも知らぬ間に待し櫻は移ひにけり　よるかの内侍
四九枝にてもわだに散ぬる花なれば落ても水の泡と社なれ　菅野のたかよ
五〇見る人もなき山里の櫻花外の散りなむ後ぞさかまし　黒主
五一程もなく散りなむ物を櫻花こゝら久にも待せつる哉　いせ
五二風さへもて騒がしかな櫻花心にだにも春をまかせて　伊勢
五三今日こずばあすは雪とぞ降なまし消ずば有りと思はなくに　業平
五四櫻花木傳ひ散らす鶯のうつし心も我がおもはなくに　人麿
五五春霞たなびく山の櫻花うつろはむとや色かはりゆく　業平
五六世中に絶て櫻の咲かざらば春の心はのどけからまし　かにはざくら
五七妹が名にかけたる櫻花散らば常にや戀む彌年のはに　咲ける櫻花常に散さで見る由もがな
五八春雨に爭ひ咲ける櫻花散らば常にや戀む彌年のはに　潜けども波の中には探られで風吹く毎に浮き沈む玉
五九　はなざくら　躬恒
六〇花櫻いかでか人の折りてみぬ後こそ優る色も出來め
六一花櫻をるに袂のひぢぬれば露に懸れる色にぞ有ける
六二花櫻今盛也思ひこし挿頭にしてば散らばちる共　山ざくら
六三山もせに咲る櫻の憎からぬ妹に逢見て戀る頃かも　貫之
六四櫻花咲きにけらしな足曳の山のかひより見ゆる白雲　おなじ
六五山高み見つゝ我が行く櫻花風は心にまかすべらなり
六六誰しかもとめてをりつる春霞立ち隠すらむ山の櫻を　おなじ
六七こえぬ間は吉野の山の櫻花人傳にのみ聞き渡るかな　躬恒三首
六八散るとのみ見てや返らむ山櫻花の思はむ心ある物を
六九山櫻ふきくる風の濡衣は花のこゝろをしる人ぞほす
七〇散るに匂だに逢まし物を山櫻待ぬは花のつらき也鳧　則友
七一三吉野の山べに咲ける櫻花白雲とのみ誤またれつゝ　これひら
七二我が戀に倉部の山の櫻花まなく散るとも數は増らじ　逼昭
七三石上ふるの山べの櫻花植ゑけむときを知る人ぞなき　素性
七四山守は云はゞ云はなむ高砂の尾上の櫻折りて驚さむ　おなじ
七五山高み雲居に見ゆる櫻花心のゆきて折らぬ日ぞなき
七六足曳の山櫻花日並べて斯咲きたらばいと戀ひめやは　にはざくら
七七頻毎に我がはく宿の庭櫻花ちる程は手も觸れでみむ　ひざくら
七八梓弓春の山べに煙立ち燃ゆとも見えぬ緋ざくらの花　人麿
七九我が宿の池の藤なみ咲きにけり山時鳥今やきなかむ　赤人
八〇戀しくば形見にもせむと我宿に植し藤波今咲にけり
八一藤波の影なる海の底清み沈む石をも花とこそみれ
八二たごの浦の底さへ匂ふ藤波を脚して行む見ぬ人の爲

三水底に影をうつして濃紫そめて懸けたる岸の藤なみ
四移はぬ松の名立にあやなくも宿れる藤の咲て散る哉　貫之
五水にさへ春やくるゝと立返り池の藤波折つゝぞ見る　おなじ人
六藤の花もとより見ずば紫にさける松とぞ驚かれまし　おなじ
七緑なる松に懸れる藤なれど己が頃とぞ花はさきける　躬恒
八かけてのみ見つゝぞ忍ぶ唐衣うす紫に咲ける藤なみ　おなじ
九世にも似ず誰か咲けてふ紫の色故にこそ花も咲けれ　おなじ
〇九我宿に咲ける藤波立返り過がてにのみ人の見るらむ　遍昭
一九よそにみて歸む人に藤花這まつはれよとかむまをだに　おなじ人
二九我宿の蔭とも頼む藤の花立よりくとも波にをらるな　たちばな
三九橘は實さへ花さへ其葉さへ枝に霜ふれ共有増て常磐木　貫之
四九常磐なる花と思へばや時鳥はな橘にこゑのかはらぬ　おなじ
五九年毎にきつゝ聲する時鳥はな橘やつまにはあるらむ　みつね
六九時鳥などかきなかぬ我が宿の花橘の實になるまでに　家持
七九本くだち清き月夜に我妹子に見せむと思ひし宿の橘　いせ
八九五月待つはな橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする　千里
九九宿りせし花橘も枯れなくになど時鳥きなかざるらむ　貫之
〇〇今朝なきいまだ旅なる時鳥はな橘に宿はからなむ　たかはしのやす丸
一〇橘の蔭ふむ道のやちまたに物をぞ思ふ人に知られず　あ、たちばな
二〇我こそは憎くもあらめ我宿の花橘を見にはこじとや　槙
三〇我妹子に逢て久しくうましたのあへ橘の苔生ふる迄　人丸
四〇片岡の向の峰に椎蒔かば今年の夏の蔭にならむかも　貫之
五〇遅早も君をば待むむかつをの椎のこやのあひは違はじ　おなじ
六〇我が宿に君こし椎の中絶て罪の報や逢ひ見ざるらむ　ざくろ
七〇足曳の山柘榴咲く八峰越し鹿まつ君が祝ひ妻かもなし　おなじ
八〇苧生の浦に片枝さし覆ひなる梨のなりも成らずもねてかたらはむ　おなじ
九〇紅葉の句は繁し然はあれど妻梨の木を折て翳さむ山なし　おなじ
一〇一露霜の寒き夕にたへかねて移ろひにけり妻梨の木は　おなじ
一一世中をうしと云てもいこにか身をば隠さむ山梨の花もゝ　貫之
一二我が宿の毛桃の下に月よさし下心よしうたて此の頃　家持
一三はしきやし我家の毛桃本繁み花のみ咲て成ざらめやも　おなじ
一四春の園紅にほふ桃の花したてる道に出て立てるいもすもゝ　家持
一五我園の李の花か庭にちるはだれの未だ殘りたるかも　深養父
一六今いくか春しなければ鶯も物は詠めて思ふべらなりからもゝ　貫之
一七あふからも物は猶社悲しけれ別れむとを兼て思へばくるみ　貫之
一八鶯に花しられげは無れども春くる道の物にぞ有けるすぎ　貫之
一九我庵は三輪の山本戀しくばとふ〳〵きませ杉立る門　貫之
二〇〇忘れずば尋ねもしてむ三輪の山印に植し杉はなく共　人麿
二一石上ふるの神杉かみさびて我や更々戀に逢ひにける　僧恵行
二二神南備の神より板にする杉の思ひも過ず戀の繁きに　持
二三我背子を大和へ遣てまつしたす足柄山の杉の木間かむろ　家持
二四岩屋戸に根這ふむろの木汝見れば昔の人を逢見が如　槙
二五離れそに立るむろの木泡沫も久き時を過にけらしも　忠岑
二六打靡き春さりくらし山邊の槙の梢のさき行く見れば　人麿
二七千鳥鳴く佐保の河霧立ちぬらし槙の梢も色附にけり　家持
二八あたへゆく小鹽の山の槙の葉も久く見ねば苔生に鼻　桂
二九春霞たなびきにけり久方の月の桂も花や咲くらむ　貫之
三〇目には見て手には取られぬ月の内の桂の如き妹にふかの木　がふかの木
三一畫は咲き夜は戀ひぬるがふかの木君のみ見むやにんよ　おなじ
三二我妹子が形見のがふか花にのみ咲きて蓋しもぬになし　貫之
三三我宿に椿の花は咲たれど名にしおはゞ物にぞ有ける　あふち
三四梅雨に戀すと云名は立たばたて君に椿の花し咲なば　貫之
三五五月雨のととなしびつる時しもぞ人に椿の花は咲ける　おなじ
三六我妹子にあふちの花は散過て今咲る如あらむ妹かもかし　人麿
三七足曳の山に生たる白樫の知らじな人の朽木なりとも　僧恵行
三八白樫の雪も消にし足曳の山路を誰か踏みまどふべきくぬぎ　家持
三九佐保河の岸に生ひたる若楢それなかりそ有りつゝも　家持
四〇春しきたらば立ち隠るがに　家持
四一あなし山椿咲たるやつをこえ鹿待つ君が祝ひ妻かも　おなじ
四二河上の列々椿つら〳〵に見れ共偲かずこせの春野は　家持
四三奥山のやつをの椿つばらかに今日は暮さね丈夫の友　おなじ
四四足曳のやつをの椿つら〳〵に見る共偲めや植てける君　かしは
四五いなび野の赤ら柏の時は有ど君に戀せぬ時はさねなし　僧恵行
四六奈良山の兒手柏の二面とにもかくにもねぢけ人かも　ほゝがしは
四七石上ふるから小野のもと柏もとの心は忘られなくに　僧恵行
四八我背子が捧げてもたるほゝ柏怜も似るか青き笠には　家持
四九すべらぎの遠きみよ〳〵はやふせり酒飲むと云ひしの槻　ながめ柏
五〇人戀ゝながめ柏は故郷の浮木ねにのみぞ繁く見えける　つゝじ
五一玉藻刈おほくの浦の浦風に躑躅の花は散ぬらむかも

人麿

二ほそ谷れの泉坂山の白躑躅我に匂はね妹にしめさむ
岩つゝじ

三瀧走るをしひの山の岩躑躅岩間を分ていや珍らかに
四山越て遠津の濱の岩躑躅我來る迄にふゝみて有待て
五種しあれば生にけらしな岩躑躅花咲園に逢むとやみし
ひさぎ

六波間より見ゆる小島の濱楸久しくなりぬ妹に逢ずて
七こぞさきし楸今さく徒に土にや落ちむみる人なしに
くは

八垂乳根の親の園なる桑も猶顧へば衣にきると云物を
九引薦の斯ふた籠りせま欲しき桑こき垂て泣くをみせばや
はたつもり

一〇我戀はみ山に生るはたつもり積りにけらし逢由も無し
しきみ

一一奥山の樒の花の名のごとやしく〳〵君に戀渡りなむ
あせみ

一二蛙鳴吉野の河の瀧の上のあせみの花ぞ手な觸そゆめ
一三我背子に我こふらくは奥山のあせみの花の今盛なり
一四春山のあせみの花の悟からぬ君にはしるや寄りぬにる
山ちさ

一五息のをに思へる我を山ちさの花にか君が移ひにけむ
一六山ちさの白露重みうらぶれて心に深きわが戀やます
一七わが如く人めまれらに思ふらし白雲深き山ちさの花
ゆづる葉

一八あともへか阿自久麻山の譲葉のふゝまる時に風吹勿
家 持

一九武士の八十少女らが踏禦む寺井の上のかたかしの花
つまゝ
なじ

二〇岩の上のつまゝをみれば根をはひて年深からし神寂に見
さねき
なじ

二一青柳のさねきの花は今もかも散乱らむ見人無に
とり

二二古を戀る鳥かもゆづるはのみねの上より鳴渡り行く
二三村鳥の立にし我名今更にとなしぶともしるし有めや
二四冬山に獨ぬる鳥夜を寒み人は絶えける木をぞ求むる
二五鳥ならばあたりの木々に隠居てほれたる壁に我泣しかを
二六夏そ引うなかみの方の沖つ洲に鳥はすだけど君はねずて

二七夏刈の玉江の蘆を踏しだき群居る鳥の立つ空ぞなき
二八繪にかける鳥とも人を見てしがな同所に常に訪べく
二九妹が手をとりこの池の波間より鳥の聲聞ゆ明けぞしぬる
はなちどり

三〇放鳥行へも知ずなりぬれば放れしとぞ悔しかりける
ひな鳥 業 平

三一鏁鳥の風切弱みとはれねば巣籠り乍音をのみぞ鳴く
三二明ぬとて何急ぐ覽鏁鳥のまだとぐらなる聲にやは非ぬ
三三春の野に朝鳴く鏁の妻こふと身を徒になしにける哉
かひ

三四蘆鶴のかひ籠め朽る巣籠りの塗に歸らぬ身とや成なむ
三五鳥の子は孵て後ぞ鳴れける身のかひ無きを思知つゝ
つる 貫 之

三六河風になびく蘆鶴己が世を波と共にや君によすらむ
なじ

三七千年ふと我が聞なべに芦鶴の鳴渡るなる聲の遙けさ
三八草鶴の立てる河べを吹風によせて返らぬ波かとぞ見
三九群てゐる葦べのたづを忘つゝ水にも消ぬ雪かとぞ見
貫 之

四〇千年まで命保てる鶴なれば君がゆきゝを慕ふ也けり
伊 勢

四一逢事の潟にあり居る葦鶴のすに鳴聲は聞えやはする
四二たづの立つ澤べに波や騒らむ葦の汀の長閑からぬは
四三天雲に羽打附て飛たづのたづ〳〵しかも君來まねば
四四たづきなき葦べをさして飛渡りあなたづ〳〵し獨かも
四五葦鶴のすむ澤に生ふる菅の根の戀に見ぬ君は頼ます
赤 人

四六若の浦に潮滿來れば潟をなみ葦べを指てたづ鳴渡る
人 まろ

四七葦鶴のすまふ入江の白菅の知ずや君は我戀ふらくを
かり

四八いと早も鳴つる雁か白露に彩る木々も紅葉あへぬを
人 丸三首

四九春霞かすみていにし雁音は今ぞ鳴くなる秋霧の上に
五〇怪しくも來鳴ぬ雁か白露のおきにし秋は久しき物を
一〇葦べなる荻の葉そよぎ秋風の吹來るなべに雁鳴渡る
すがねの朝臣

二〇秋風に聲をほに揚てくる舟は天戸渡る雁にざりける
家 持

三〇久方の天も置かす雲隠れなきぞ行なるわさ田雁音
三一事繁き里に住ずは今朝鳴し雁に類ひていなましものを
三二雁音の高く名のりし身なれ共秋の聲とぞ人は云てし
貫之四首

三三秋の山霧立ちわけてくる雁の千世に變らず聲聞ゆ也
三四共々と思ひきつれど雁音は同じ里へも歸らざりけり
三五物思ふと月日の行も知ざりつ雁こそ鳴て秋と告つれ
三六官つけてとふべき物を初雁の聞ゆる聲は遙なりけり
三七初雁の鳴こそ渡れ世の中の人の心の秋し憂ければ
一一春霞飛分けいぬる聲きゝて雁きぬ也とほかは云らむ
躬恒五首

二一年ごとに雲路惑はし來る雁は心づからや秋を知る覽
二二天のはら雁ぞと渡る遠山の峰はむべぞ色づきにける
二三故郷に霞とびわけ行く雁は旅の空にや春をすぐらむ
二四憂きとを思連ねて雁音の鳴きこそ渡れ秋の夜な〳〵
二五初雁のはつかに聲を聞しより中空にのみ物をも人哉
伊 勢

二六春霞立つを見捨てゝ行く雁は花なき里に住や習へる
つらゆき

二七只管に我きかなくに雲分けて雁ぞ〳〵と告渡るらむ
人 まろ

二八秋風に山飛越ゆる雁がねのいや遠ざかり雲隠れつゝ
もとかた

二九待つ人にあらぬ物から初雁の今朝なく聲の珍しき哉
三〇鳴雁の音をのみぞなく小倉山霧立はるゝ折し無れは
三一春されて雁歸るとも秋風に紅葉の山を越ざらめやは
三二三吉野のたのむの雁も一向に君が方にぞ寄と鳴なる
三三我方に寄と鳴なる三吉野のたのむの雁をいつか忘む
三四月みればわれても人の戀しきにいとゞ雲居に鳴渡る雁
うぐひす

三五打靡き春さりくれば笹の葉に尾羽打ふれて鶯ぞなく
赤 人

三六くだら野の萩の古枝に春待つと住し鶯鳴にけむかも
三七梅の花さける岡べに家しあれば乏しくも非ず鶯の聲
三八打ち靡き春さりくれば青柳の枝くひもちて鶯なくも
三九打ちらし雪は降つゝしかすがに我家の園に鶯鳴きつ
一二春の日に霞たなびきうら悲し此の夕かげに鶯鳴くも

鶯の谷のそこにて鳴く聲は峰にこたふる山彦もなし　躬恒
吹く風を鳴て恨みよ鶯は我やは花に手だにふれたる
徹なき音をも鳴く哉鶯は今年のみ散る花ならなくに　素性二首
得つ人はこぬ物故に鶯の鳴きつる枝ををりてける哉
春立てば花とや見らむ白雪のかゝれる枝に鶯のなく
花の香を風の便りにたぐへてぞ鶯誘ふ知べにはやる
頼まれぬ花の心と思へばや散らぬさきより鶯の鳴く　千里
鶯の谷より出づる聲なくば春くるとを誰か告げまし
雪の内に春はきにけり鶯のこほれる涙今やとくらむ　はつせを
春されば まづ鳴く鳥の鶯の と先だてゝ君をし待たむ
○春なれば妻をもとむる鶯の梢をつたひなきわたる哉
冬がくれ春さりくれば足曳の山にも野にも鶯なくも
御園生の竹の林に鶯はしばなかましを雪は降りつゝ
村々の木傳ふ春になりぬらし山のまに〳〵鶯なくも　ほとゝぎす
我背子をうら待兼つ時鳥痛く鳴そね懸も歌むやと
我如く君に戀ふるや郭公此夜すがらに寝がてにする
をはる田の廣瀬の王
時鳥聲きく小野の秋風に淺茅さけぶれや音の乏しき
武士のいはせの森の時鳥今もなかぬか山の木かげに
時鳥きなき響す卯花の友にやこしと問まし物を
太宰帥大伴卿
橘の花ちる里の時鳥かた戀しつゝなく日しぞおほき　大伴書持
我宿に月押し照れり時鳥心あり今宵きなきとよませ
大伴四綱
事繁き君は來ませず時鳥汝だに來なけ朝戸あくべく
搔昏し雨のふるよるを時鳥なきていぬめり哀その鳥　久米のひろなは
家にいきて何を語らむあしびきの山郭公一聲もがな
時鳥花たちばなの枝にゐてなくは昔の人やこひしき
神なびの磐瀬の杜の時鳥ならしの岡にいつか來鳴む
時鳥痛くな鳴きそなか聲を五月の玉にあひぬく迄に
夏の夜のふすかとすれば郭公なく一聲にあくる東雲
此里にいかなる人か家ゐして山郭公つねに聞くらむ
五月雨の空もとゞろに時鳥何をうしとか夜唯鳴らむ
あしびきの山の梢し高ければなく郭公聲はるかなり
昔よりなきふるしつゝ時鳥幾十の夏を聲に立つらむ
月をだに飽かず思ひて寝ぬ物を時鳥さへなき渡る哉
花もちり時鳥さへいぬる迄君にも行すなりにける哉
以上七首貫之
木隱れて五月まつとも時鳥羽根習はしに枝移りせよ　伊勢三首
時鳥我とはなしに卯花のうき世の中になき渡るらむ　忠岑
暮るゝかと見れば明ぬる夏夜を飽ずとやなく山時鳥　素性
石上ふるき都のほとゝぎす聲ばかりこそ昔なりけれ　おなじ
時鳥なく聲きけば味氣なく主定まらぬ戀せらるはた　友則
夜や暗き道や惑へる時鳥我が宿にしも過がてになく　おなじ
五月雨に物思ひをれば時鳥夜深く鳴て誰ち行くらむ　おなじ
音羽山けさ越來ればほとゝぎす梢遠に今ぞなくなる　公忠朝臣
行きやらで山路暮しつ時鳥今一聲の聞かまほしさに　ふかやぶ
臥すからに先ぞ侘しき郭公なく一聲に明る夜なれば　敦行
我如く物や悲しき郭公時ぞともなく夜々になくらむ　みくにのまち
やよや待て山時鳥言づてむ我れ世中に住侘ぬべし　きのあきみね
夏山に戀しき人や入りぬらむ聲ふり立てゝなく郭公
筑波嶺に我ゆけりせば鶴山彦響み鳴ましやそれ　みつね
時鳥夜深き聲は月待つと起ていもねぬ人ぞ聞きける
誰が里に夜枯をしてか時鳥唯愛にのみねたる聲する
あひ難き君にあへるよ時鳥異時よりも今こそなかめ
五月まつ山時鳥うち羽ぶき今もなかなむこぞの古聲
打解けていも寝られねば郭公夜深き聲は我のみぞ聞　千鳥
み山には雲ゐ霧きあけにけり河の瀬毎に衛しばなく
秋くれば佐保の河原の川霧に友惑はせる千鳥哭く也
大空に渡る衛の我ならばをふの渡りをいかに鳴まし
川衛住河の上に立つ霧の紛れにだにも逢見てしがな
山河の石間隱れに住む千鳥人知れねばや聲の聞えぬ　大伴坂上郎女
衛なく佐保の河原の小夜やむ時もなし我戀らくは　大伴の女郎
さよ中に友呼衛物思ふと侘つゝ有るに哮つゝあやな
最どしく物思ひをれば川千鳥野にも山にも啼亂れ鳥　貫之
思ひかね妹がり行けば冬の夜の川風寒み千鳥なく也　呼子鳥
答へぬに呼な聲めそ呼子鳥さほの山べを上り下りに　大伴坂上郎女
常とはに聞けば苦しと喚子鳥聲恨しき時にはなりぬ
遠近のたづきも知らぬ山中に憂來なくも喚子鳥かな　春道列樹
我宿の花にな啼そ喚子鳥よぶかひ有て君もこなくに
皇子

九〇神なびの磐瀬の森の喚子鳥痛くなきそ我戀ひ増る
一〇瀧の上の御舟山より秋つべに來なき渡るは誰喚子鳥
一一早晩も越えむと思ふ足曳の山になくなる喚子鳥かも
一二朝霧やへの山ごし喚子鳥鳴やながくる宿は有なくにしぎ
一三曉の鳴の羽根かき百羽がき君が來ぬ夜は我ぞ數かく
一四あさ原にさよ打更て立鳴の羽社知るらめ獨ぬる夜は
一五曉に羽根かく鳴のうち頻り幾夜か君に戀ひ渡るらむ
一六曉の鳴のはねがき百羽がき掻集めてぞ侘しかりける
一七春まけて物悲きにさよ更て羽振啼鳴誰が田にかなくからす
一八曉と夜がらすなけど此の山の梢の上はいまだ靜けし
一九夏の夜の子持鴉のさがぞかし夜深く啼て君を遣つる
二〇朝鴉いたくなきそ我背子が朝げの姿みれば悲しも
二一鴉とふ大をそ鳥のまさでにも來まさぬ君をころくなくに

鷺

二二高島やゆるぎの森の鷺すらも獨は寢じと爭ふものを
二三水増る淀の川瀬に立鷺の立ても居ても鳴ぬ日ぞなき
二四蓑よりも搖木の森に住鷺の安きいも寢す戀明しつるはこどり
二五み山木に夜はきて鳴箱鳥のあけば歸らむとを社思へ
二六春立てば野べに先なく箱鳥のめにも見えずて聲の悲き
二七取返す物にもがもや箱鳥の明て悔しき物をこそ思へかほどり
二八貌鳥のまなく屢なく春の野の草のね繁き戀もする哉
二九朝ねでに來なく貌鳥汝だにも君に戀ふれや時をへず鳴
三〇夕されば野べになくてふ貌鳥の顏に見えつゝ忘らくにかさゝぎ
三一夜や寒き衣や薄き鵲のゆきあひの橋に霜やおくらむ
三二鵲の峰とび越えてなき行けば夏の夜渡る月ぞ隱るゝもす
三三春されば萌ずの草ぐき見えず共我は見やらむ君がかたへ
三四秋の野の尾花が末に鳴もずの聲聞らむか片きく我妹くひな
三五水雞だにたゝけば明くる夏の夜を心短き人や歸りしつばくらめ
燕くる時に成ぬと雁音は古鄕こひて雲隱れ啼く

嘉祿二年卿春下旬之候以民部卿定家本一部寫訖此本有

傳事之由被仰中之間又以他本一手自校合了
寛喜二年十二月十九日以入道右大辨宰相本一部校了件
本者家長朝臣本云々
前和歌所開闔從四位上源朝臣在判

古今和歌六帖拾遺

夫木抄春二　鶯　讀人しらず
君に逢むとしなば人にかすが野のあさぢが原にうぐひすぞなく
同作三　雉　同
はるの野にとゞめもへぬ駒なれば我とふしみのさとやあれぬる
同春四　花　源信明朝臣
いつしかとうみて見たれば若ざくらさかで〳〵春の過ぎぬべきかな
同春六　山吹　讀人しらず
あをによし奈良もちかしやまぶきの井出の山吹見にこ我がせこ
同春六　藤花　同
うなゐ子が髮ふりしつるふぢのはな袖なつかしくおもほゆるかな
同夏一　早苗　たゞみね
蛙なく井出のやまだにまきしたねさみまつなべに生ひたちにけり
同夏二　子規　讀人しらず
かたなかの小松の森のほとゝぎすほのかにぞなくこひしかるべみ
同秋二　萠萱　同
秋ぎぬにおもひみだれてくやしきはきみとならびの岡のかるかや
同秋二　槿花　同
やまの井の底あさぼらけの花なればかげを見しまにうつろひにけり
同秋三　鹿　讀人しらず
うだの野の秋はきしのぎなく鹿のつまにこふらくわれにはまさじ
同秋三　秋田　同
秋かぜにあたる稻葉のくだけつゝものおもふことのしげき頃かな
同秋三　かりいほ　同
うちはへて守るつなのみひく時は稻葉につゆぞたまらざりける
同冬二　千鳥　同
人しらぬおしどりするがのうど濱にあそぶ千どりのこゑのわりなき
同雜二　山　同
逢坂のあふみねにて鳴こえはましものみこそあはれなりけれ
むかしは人みぞわれはよそにみし朝くらやまのくものなかに
たづぬれば杉の葉きえて三輪の山ずゑこすまつぞ生ひかはりける
同雜三　橋　讀人しらず
おほれともおもひながらの橋ななみかよひがたきはすみよしの里
かづらきや久米のつぎ〳〵にわたしもはてし葛城のかみ
同雜四　野　讀人しらず
旅びとにやどかすがのゝつる葉のもみぢはむとや君をわすれむ
武藏野にしもあれねの多かるはたがすさびの名のみなりけり
同雜五　地　同
みづがきの池にとりぬむかしより戀ふる妹をぞ今日いまに見ぬ

同雜六　川　同
ながれては立田のかはのそこに住む龜の新うともきかばたのまむ
同雜七　瀧　同
たまつしま藤江のうらのまつ風に絕えず吹むもかくるなみのおとかな
同雜十二　處　同
離陣れば三笠のやまの木のもとも濡れわいほりに無しとこそ聞け
同雜十三　うまや　同
君ばかりおぼゆるものはなし原のうまや出でこむたびも無きかな
同雜十四　簑　同
わぎも子が袖なたのみてあしびきの山すげのみな取らできにけり
同雜十五　帶　同
なでしかたに白きはなにぞいなきものかひの手古名の晒すてづくり
童蒙抄九　蟲
つゝめどもかくれぬものは夏むしの身よりあまれる思ひなりけり
奥儀抄上末
さゞれ石の上もかくれぬさゞ水のあさましくのみ見ゆるきみかな
同下末
行く人はそのかみこむと云ふものなこゝろ殘しや今日のわかれは
袖中抄卷十五
ゆゝしくて戀みける物を我がために無しと云はねはつらき也けり
河海抄澪標　井手左大臣
ほり江には玉敷かましを大ぎみのみふね漕がむとかねでしりぜば
同關屋
秋の野に行きて見るべき花のいろを誰さかしらに折りてきつらむ
同松風
人よりもおもひのぼれるきみなればうべ山ぢちはしるべさりける
同初音　枇杷皇太后宮
ひな鶴のしろたへごろも今日よりは千年のあきにたちかさねむ
同胡蝶
鬼ひわびぬおほ田の松のおほ方は色に出でゝや逢はむと云はまし
同藤裏葉
君ぐたれの朝臣のはなあきまりにおもかくしつゝ見えぬきみかな
同若菜上
如何にかと思ふこゝろの有るときは我が身を置きて人ぞかなしき
身を捨てゝ山に入りにしわれなれば無のくらげむことも知られず
同夕霧　如何にし
如何によるらむぜの山のうへより落つる音なしのたき
同御法
しも枯れの野べをば愛しと思へばやかきほの草とひとの庵るらむ
同紅梅
みなひとの老いを寫るといふ鏡はもゝとせをやるすにそありける
同宿木　歌林苑材下
戀しさのかぎりだにある世なりせばつらきをしひて噂かざらまし
ひろはきてよるはわかるゝ山どりのかげ見る時ぞ音は泣かれける
かきゝぎのちがふる橋のまどほにてへだつるなかに霜や置くらむ
ぬばたまの夜ぬべはかへる今曉さへ我をかへすな字治のたまひめ

寛平御時后宮歌合

春歌　二十番

左　紀友則

七三花の香を風の便にたぐへてぞ鶯誘ふしるべにはやる

右　源當純

八三谷風にとくる氷のひま毎に打ち出づる波や春の初花

左　素性

九三ちると見てあるべき物を梅花うたて匂の袖に止れる

右　藤原興風

〇四聲絶えずなけや鶯一年に二たびとだにくべき春かは

左　一四梅花著き香ならで移ろはじ雪降止まぬ春とこそきけ

右　二四春の日に霞分けつゝ飛鴈の見えみ見えずみ雲隠行く

左　素性

三四花の木も今は堀植じ春立てば移ろふ花に人習ひけり

右　四四春の野に若菜摘まむとこし我を散かふ花に道は惑ぬ

左　五四鶯はむべも鳴らむ花櫻さくと見し間に移ろひにけり

右　興風

六四春霞霺く野邊の若菜にも成見てしがな人も摘むやと

左　七四淺緑野邊の霞はつゝめどもこぼれて匂ふはな櫻かな

右　八四春立てば花を見むとふる里の心社野邊の霞と共に立ぬれ

左　九四三吉野の山にさきたる櫻花雪かとのみぞ誤たれける

右　〇五年の内は皆春乍ら果なゝむ花を見てだに心やるべく

左　一五春霞あみにはりこめ花ちらば移ろひぬべし鶯とめよ

右　二五春雨の色は濃くしも見えなくに野邊の緑を挙で染らむ

左　三五春なれど花もにほはぬ山里は物うつろ音に鶯ぞなく

右　興風

四五唉花は千種ながらにあだなれど誰かは春を恨果たる

左　五五氷の上に綾織り亂る春雨や山の緑をなべてそむらむ

右　六五色深くみる野邊だにも常ならば春は行共形見ならまし

左　七五駒なべて目も春の野に交りなむ若菜摘つる人は有やと

右　八五鶯の谷より出づる聲なくば春くるとを誰かつげまし

左　九五春ながら年は暮なむちる花を惜しとなくなる鶯の聲

右　〇六大空を覆ふばかりの袖もがな春さく花を風に任せじ

左　一六霞立つはるの山邊に櫻ばなあかずちるとや鶯のなく

右　二六天の原春は殊にも見ゆる哉雲の立てるも色こかり鳧

左　三六巻もくの檜原の霞立かへりみれども花の驚かれつゝ

右　四六白妙の波路分てや春はくる風吹くからに花も唉けり

左　五六霞立つ春の山べは遠けれど吹來る風に花の香ぞする

右　六六散花のまてゝふとを聞かせば春降雪とふらせざらまし

左　七六斯る時有じと思へば一年を凡ては春に恨をなす由もがな

右　八六まてゝふに止らぬ物と知乍ら強てぞ惜しき春の別を

左　九六梅花香をば留めて色をのみ年ふる人の袖にそむらむ

右　〇七鴛ずして過行春の人ならばとく返りこと云まし物を

左　一七梅が香を袖に移して留てば春は過ぐ共形見ならまし

右　二七行春の跡だに有と見ましかば野べの隨に止まし物を

左　興風

三七春霞色の千種に見えつるは霺びく山の花のかげかも

右　四七日暮れは且散花を可惜しみ春の形見に摘ぞ入つる

左　五七常磐なる松の緑も春來れば今一しほの色まさりけり

右　六七くる春に逢むこと社難からめ過行方に後れずもがな

夏歌　二十番

左　七七蟬の聲きけば悲しな夏衣薄くや人のならむと思へば

右　八七匂ひつゝ散にし花ぞ思はゆる夏は緑の葉のみ茂りて

左　九七空蟬の殻しき物を夏草の露にかゝれる身に社有けれ

右　〇八夏の夜の月は程なく明ながら旦の間をぞ卿寄せける

左　一八宵の間は傚くみゆる夏虫に惑ひまされる戀もする哉

右　二八夏の夜は臥すかとすれば郭公なく一聲に明くる東雲

左　三八假初の身や賴まれぬ夏の日をなど空蟬の鳴暮しつる

右　四八はかもなき夏の草葉に置く露を命と賴む虫の捗なさ

左　五八古郷を思ひやれども郭公

右　六八夏の夜の霜や置けると見る迄に荒たる宿を照す月影

左　七八夏の風我袂にし包まれば思はぬ人のつとにしてまし

右　八八夏草の繁き思は蚊遣火の下にのみこそ焦渡りけれ

左　九八草繁み下葉枯行夏の日もわくとしわけば袖や濕なむ

右　友則

〇九梅雨に物思ひをれば郭公夜深く鳴ていづちゆくらむ

左

一九夏の夜の露な留めそ蓮葉の誠の玉となりし果てすれば
右　紀有岑
二九夏山に戀しき人やいりにけむ聲ふりたてゝなく郭公
左
三九吹風の我宿にくる夏の夜は月の影こそ涼しかりけれ
右　友則
四九夕されば螢よりけに燃れ其光見えねば人ぞつれなき
左
五九夏の日を暮し侘ぬる口さに我泣き添ふる聲は聞ゆや
右
六九恨みつゝ留むる人のなければや山部公浮れでゝなく
左
七九夏の夜は水や増れる天の河流るゝ月の影もとゞめぬ
右
八九去年の夏啼きふるしてし郭公其か非ぬか聲の變らぬ
左
（歌絶）
右
九九夏蟲に非ぬ我身のつれもなき人を思ひに燃ゆる頃哉
左
一〇夏の夜の松葉もそよと吹く風は疎か雨の聲に變れる
右
一一夜や暗き道や惑へる郭公我宿をしも過ぎがてにする
左
一二いつの間に花柘にけむ長くだに有せば夏の影とみましを
右
一三いく千度なきかへるらむ足引の山郭公聲はわすれで
左
一四夏の日を天雲暫隱さなむぬる程もなく明る夜にせむ
右
一五郭公鳴つる夏の山邊にはくつていたさぬ人や住らむ
左
一六夏の日の暮るゝも知らず鳴蟬をとひもしてしが何こゝか
右
一七蒔蒲草幾らの五月逢ひくらむ來る年毎に若く見ゆ覽
左
一八押しなべて五月の空を晴渡せば草葉も水も綠也けり
右

一九くるゝかと見れば明ぬる夏の夜を飽すとや啼山郭公
左
二〇夏の月光惜まず照る時は流るゝ水にかげろふぞたつ
右　一琴の音に響き通へる松風は調べてもなく蟬の聲かな
左　在原棟梁
二一夏草も夜の間は露に息ふらむ常に焦るゝ我ぞ悲しき
右
二二眺めつゝ人まつ折に呼子鳥孰方へとかたち踈りなく
秋歌　二十番
左　友則
二三秋風に初鴈音ぞ響くなるたが玉章をかけて來つらむ
右
二四浦近く立秋霧はもしほやく煙とのみぞ見え渡りける
左　素性
二五我のみや哀と思はむきり〳〵すく夕蔭の大和撫子
右　貫之
二六秋の野の草は糸とは見えなくに置白露の玉と連なる
左
二七奥山に紅葉ふみ分けなく鹿の聲きく時ぞ秋は悲しき
右
二八我爲にくる秋にしも非なくに蟲の音聞けば先ぞ悲き
左
二九日暮しに秋の野山を分來れば心にも非ぬ錦をぞきる
右
三〇秋と云へば天雲迄に燃にしを空さへ著くなどか見ゆ覽
左　在原棟梁
三一秋の野の草の袂か花薄ほに出てまねく袖とみゆらむ
右　興風
三二山の井は水なきとぞ見え渡る秋の紅葉の散て隱せば
左　小野美材
三三女郎花匂へる野邊に宿りせば綾なくだのなをやたちなむ
右
三四秋風に誘はれきつる鴈音の雲居遙かにけふぞ聞ゆる
左
三五白露に風の吹きしく秋の野は貫き止めぬ玉ぞ散ける
右
三六いつの間に秋穗垂らむ草と見し程幾日とも隔らなくに

左
三七鴈の音は風にきほひて渡れども我待人の言傳ぞなき
右
三八大空を取返すとも見えなくに星かと見ゆる秋の草哉
左　在原棟梁
三九秋風にほろこびぬらむ藤袴つゆりさせてふ蟋蟀なく
右
四〇秋の夜の雨と聞えて降つるは風に散つる紅葉也けり
左
四一ちらねども衆てぞ惜き紅葉は今は限の色とみつれば
右
四二白波に秋の木葉の浮べるは蟹の流せる舟かとぞ見る
左
四三秋の夜の天てる月の光には置く白露を玉とこそみれ
右
四四秋の野における露をば猶ぬる我涙とも思ひしれかし
左
四五鴈音は風を寒みや機織め管卷く音のきり〳〵とする
右　大江千里
四六植ゑし時花待遠に有りし菊移ふ秋に逢はむとやみし
左
四七白露の染めいだす萩の下紅葉衣に移す秋はきにけり
右
四八風寒み啼く秋蟲の涙こそ草にいろどる露とおくらめ
左
四九花薄そよともすれば秋風の吹かとぞきく衣なき身は
右
五〇音にきく花見にくれは秋の野の露下
右
五一鴈が音に驚く秋の夜を寒み蟲の織りだす衣をぞきる
右
五二秋風はたが手向とか紅葉を幣にきりつゝ吹散すらむ
左
五三唐衣ほせと袂の露けきは我身の秋になればなりけり
右
五四秋の露色の殊々置けばこそ山も紅葉も千種なるらめ
左　藤原菅根朝臣
五五秋風に聲を帆に揚て行舟は天の戸渡る鴈にざりける

右
七紅葉の散來む時は袖に受む土に落なば統もこそつけ
左
八秋の蟬寒き聲にぞ聞ゆなる木葉の衣を風やぬきつる
右
九秋の夜の月の影こそ木の間より下缺
左
〇秋の月草村分かず照せばや宿せる露を玉と見すらむ
右
一等閑に秋の深山に入りぬれば錦の色の衣をこそきれ
左
二秋山に戀する鹿の聲立て鳴ぞしぬべき君がこぬ夜は
右　藤原興風
三契りけむ心ぞつらき七夕の年に一度あふは逢ふかは
躬恒
四年毎に逢ふとはすれど七夕のぬる夜の數ぞ少かりける
冬歌　二十首
左
五かき曇り霰降しけ白玉をしける庭とも人の見るがに
右
六天の河冬は空まで凍るらし石間に湍つ音だにもせず
友則
左
七篠の葉に置霜よりも獨ぬる我衣手ぞさえまさりける
右
八流れ行く水凍りぬる冬さへや猶うき草の跡は定めぬ
左
九雪降て年の暮ゆく時にこそ逾に紅葉ぬ松も見えけれ
右
〇我宿は雪ふる野邊に道もなし何處はかとか人のとめこむ
左
一神無月時雨ふるらし佐保山の正木の蔓色まさり行く
右
二冬くれば梅に雪社降かゝれ孰の枝をか花とはをらむ
左
三堀て置し池は鏡と凍れ共影にも見えぬ年ぞ經にける
右
四降雪の積れる峰は白雲の立ちも騒ずをるかとぞみる
左　忠岑

五三吉野の山の白雪踏みわけて入にし人の音信もせぬ
右
六吹風は色も見えねど冬くれば獨ぬる夜の身にぞしみける
左
七霜枯の枝となべそ白雪を花に擬ひて見れども飽かず
右
八嵐ふく山下里にふる雪はとく梅の花さくかとぞ見る
左
九雪のかゞ枝に降しき花も葉もいにけむ方もみえず有哉
右　在原棟梁
〇白雪の八重降敷ける歸山歸る〳〵も老いにけるかな
左
一草も木も枯行冬の宿なれば雪ならずして訪人ぞなき
右
二降雪は枝に暫しも止らなむ花も紅葉も絶てなきまは
左　是則
三冬の池の上は凍りて閉たるを爭でか月の底に澄らむ
右
四冬寒みみのもにかくる增鏡とくもわれなむ老惑べく
左
五ちらぬ共兼てぞ惜しき紅葉は今は限の色と見つれば
右
六白雲のおりぬる宿とみえつるは降來る雪の解ぬ也鳥
左　興風
七霜の上に跡踏つくる濱衞行へも無しと鳴のみぞふる
右
八涙川みなぎ計りの淵はあれど氷解ければ影も宿らぬ
左　興風
九浦ちかく降くる雪は白波の末の松山こすかとぞみる
右
（歌缺）
左
（歌缺）
右
〇光まつ枝に懸れる雪をこそ冬の花とは云べかりけれ
左
一少女子が日蔭の上に降る雪は花の紛ふに何れ逾へり
右

二かき暮し散花とのみ降る雪は冬の都の雲のちるかと
左
三足曳の山のかけ橋冬くれば氷の上をよきぞかねつる
右
四冬見れば雪降り積る高き峰立つ白雲に見え紛ふかな
左
五雪の內の深山から耽老はくれ頭の白くなるを先みよ
右
六松上に懸れる雪はよそにして時惑はせる花と耽れ
左
七月夜には花とぞ見ゆる竹の上に降しく雪を誰か拂はむ
右
八白雪をわけて別るゝ形見には袖に涙の凍るなりけり
左
九白露ぞ霜となりける冬のよは天の河缺下
右
〇冬の海に降入る雪や底にゐて春立浪の花と咲くらむ
左
一ふゝみ敢ず消なむ雪を冬日の花と見ればや鳥の訪覽
右
（歌缺）
戀歌　二十番
左　紀友則
二河の瀬に靡く玉藻の水隱て人にしられぬ戀もする哉
右
三一度も戀しと思ふに苦きは心ぞ千々に碎くべらなる
左
四影照れば千々の黃金も數知りぬなど我戀の逢ふ計なき
右　興風
五君戀ふる涙の床に滿ちぬれば澪標とぞ我はなりぬる
左
六白玉の消えて涙と成ぬれば戀しき影を袖にこそみれ
右
七人を見て思ふ事だに有物を空に戀ふるぞ儚かりける
友則
左
八紅の色には出でじ隱れぬの下に通ひて戀はしぬとも
興風
右
九契りけむ心ぞつらき織女の年に一度あふは逢ふかは

左
〇〇つれもなき人をこふとて山彦の答ふる迄も歎つる哉
右　小野美材
一〇我戀は深山隠れの草なれや繁さ増れど知る人のなき
左
二〇思ひにはあふ空さへや燃渡る朝たつ雲を煙とはして
右　敏行朝臣
三〇明ぬとて歸る道にはこき垂て雨も涙も降そぼちつゝ
左
四〇思ひ侘び煙は空に立ぬれどわりなくもなき戀の徴か
右
五〇人を思心のおきは身をぞ焼煙たつとは見えぬ物から
左　興風
六〇あかすして君を戀つる涙にぞ浮み沈みゝ痩渡りける
右
七〇鹿嶋なる筑摩の神のつく〳〵と我身一に戀を積つる
左　敏行朝臣
八〇割無くも寐ても覺ても戀しきか心を執ちやらば忘む
右
九〇戀侘て打ぬる中にゆき通ふ夢のたゞちは現なるらむ
左　興風
一〇侘ぬれば强て忘れむと思へ共夢てふ物ぞ人頼めなる
右
一一厭はれて今は限としりにしを更に昔の戀しかるらむ
左　興風
一二死ぬる命生きもやすると試に玉緒計逢むと云はなむ
右
一三あかすして別れし曙の涙河淀みもなくもたぎつ心か
左
一四思ひつゝ晝は斯くても慰めつ夜こそ涙つきず流れ
右
一五限なく深き思を忍ぶれば身を殺すにも劣らざりけり
左
一六獨ぬる身の衣手は海なれや見に涙ぞ間無くよせけれ
右
一七年を經て燃てふ富士の山よりも逢ぬ思は我ぞ勝れる
左　菅野のたいおん
一八つれなきを今は戀ひしと思へ共心弱くも落つる涙か
右
一九侘渡る我身の浦となれゝばや戀しき事のしき波に立
左　小野美材
二〇獨ぬる我手枕を晝はほし夜はぬらして幾代へぬらむ
右
二一仄に見し人に思をつけ初めて心からこそ下に焦れ
左
二二住吉の岸による浪よるさへや夢の通路人目よくらむ
右
二三夕月夜臨に人を見てしより天雲はれぬ心地こそすれ
左
二四秋風に我身はなりぬ白雲の絶て聞えぬ人をこふとて
右
二五近けれど人目〳〵を漏頃は雲居遥けき身とや成なむ
左
二六戀しきにわびて魂惑ひなば空しき骸の名にや殘らむ
右
二七飽ずしてけさの歸路思ほえず心を一つ置てこしかば
左
二八人知れず下に流るゝ涙河せき止めなむ影は見ゆると
右　貫之
二九燃えも逢はぬ此方彼方の思哉涙の河の中にゆけばか
（以下缺）

亭子院歌合

延喜十三年三月十三日

左の頭には女六の宮かたのみこ御せうと中務の四の宮大ざう五宮中納言藤原定方朝臣左衛門督仲光朝臣讀人藤原興風凡河内躬恒方人宗于よしかせとなむ右の頭女七宮かたのみこ御せうとのかんつけの八宮せいわのさだかず中納言源のぼる右兵衛督清貫朝臣歌讀是則貫之かたびと兼覧の王きよみちの朝臣みかどの御裝束ひはた色のおほんぞに空色の御袴をとこ女右は赤色に櫻襲左は青色に柳襲左は歌讀かずさしの童例の赤色に薄摺のれうの上の袴方々のみこはあか色青色袴奉りたり斯て左のぞうは巳の時ばかりに奉るかたの宮たち皆さう束めてたうしてすはま奉るまうらぎみ四たりかけり樂はわうじき調にて伊勢の海と云ふ歌をあぞぶ右のすはまは午の時ばかりに奉るおほきなる童よたりみづらゆひて絲鞋はきてかけり樂はさう調にて竹河と云ふ歌をいと忍びやかに遊びてかたの宮たちもてはやしてまゐり給ふ左のぞうは櫻の枝につけて中務のみこもたまへり右のは山吹につけてかんつけのみこもたまへり歌は下のはこに小くて同じごといれたり上達部ははしの左みぎりに皆別れて侍ひ給ふ女蔵人四人づゝ侍らはせ給ふ方のかんしは女皆一尺五寸ばかり巻き上げて歌よまむとするに上のよまほせ給ふ此の歌を誰か見聞きはやしてことわらむとするたいふさや侍ふと仰せまたふ侍はすと申せばさう〳〵しがらせ給ふ右は勝ちたりとも勝の御歌二つを口にて出で語れば右一つまけにたりされども歌は持　もゞぞしけるうたかはす三の歌は山につけたり鶯の歌は花につけたり郭公の歌は卯花につけたり夜のは鵜舟して籌に入れてもたせたり左かたの宮に右のかとりたてまつれ給ひける白がねの壺の大きなる二つに沉合せたき物を入れたり方々に皆さう束給ひけり

題は二月三月四月なり

初春　二十首

一番

左持　伊勢

〇青柳の枝に懸れる春雨は糸もてぬける玉かとぞみる

右　是則

一遠緑そめてみだれゝ青柳の糸をば春の風やよるらむ

此の歌ども此も彼もよければ持なり

左持　躬恒

二咲ざらむ物とはなしに櫻花俤にのみまだきみゆらむ

右　興風

三山櫻さきぬる時は常よりも峰の白雲立ちまさりけり

左ほらむ二つあり右は山櫻又有りとてちになす

左勝　躬恒

四きゝもせぬみなく鶯の故郷は散にし梅の花にぞ有ける

右　是則

三三千年に成てふ桃は今年より花咲春に成ぬべしにける
年と云ふ事をよといへりとて右まく　伊勢
左勝　程もなく散なむ物を櫻花こゝら久しく待たせつる哉
右　是則
七三石上ふるのやしろの櫻花こぞみし春の色やのこれる
こぞをのみにて今年の心なしとてまく　興風
左勝　三頼まれぬ花の心と思へばや散らぬさきより盛のなく
右　貫之
九三春霞たちし隠せば櫻花人知れずこそ散りぬべらなれ
うちの御歌なりとて左かつ　上御製
左　一四〇春風の吹ぬ世にだに有ませば心長閑に花は見てまし
右　貫之
一四一散ぬとてありと頼まむ櫻花春は過ぬと我にきかすな
これもかれもなほありとてぢとさだむ
延喜元年亭子院歌合ナホアマリクリトナンクス
左　躬恒
二四我心春の山邊にあくがれて長々し日を今日も暮しつ
右勝　貫之
三四櫻散く木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降ける
左歌は長々しとふよにくしくらしとめてかたすゑたるやうにてつぶやけりとてまくるなり　躬恒
左持　四四花櫻いかでか人の折て見ぬ後にぞ優る色もいでこめ
右　四五轉寝の夢にやあるらむ櫻花儚く見てぞ止ぬべらなる　興風
左持　四六振はへて花見に來れば小倉山いとど霞の立隠すらむ
右　興風
七四いも安く寝られざり鳥春夜は花の散るのみ夢にみえつゝ
何れもよしとてぢなり
左　躬恒
八四故郷に霞飛び分けゆく鴈は旅の空にや春をすぐさむ
右　九四散花を貫し止ねば青柳の糸はよるともかひなかる歟
季春　二十首

左持　興風
〇五見て歸る心飽ねば櫻花咲けるあたりに宿やからまし
右　頼基
一五東雲に起て見つれば櫻花まだ夜こめても散にける哉
この右の歌みかどの仰せられけるやうねめをする〳〵花を見けむとあ行かへ云ふにやとのたまはすれば定方の朝臣のぼるの朝臣あのよとこすかたにと覺ゆれと奏しければ御ことよにてさらばとてぢになさせ給ふなり
左持　躬恒
二五現をば更にもいはじ櫻花夢にも散とみえばうからむ
右　是則
三五花の色を寫留めよ鏡山春より後の影やみゆると
左勝　躬恒
四五目に見えで風は吹けど青柳の靡く方にぞ花は散ける
右　貫之
五五足引の山吹の花ちりにけり井手の蛙は今やなくらむ
右ふるめきたりとてまくるなり
左　興風
六五散て行方をだに見む春霞花のあたりに立もやらなむ
右　七五澤水に蛙鳴なり山吹のうつろよ影やそこに見ゆらむ
左勝　興風
八五あかすして過行方を呼子鳥呼返しつゝきても告なむ
右　九五武藏野に色やかよへる藤の花若紫にそめて見ゆらむ
左持　躬恒
〇六深き色はなけれど山吹の花の心をまづぞそめつる
右　兼覧王
一六風吹けば思ほゆる住の江の岸の藤浪今やさくらむ
左　躬恒
二六懸てのみ見つゝぞ忍ぶ紫にひとしほ染し藤の花ぞも
右勝　是則
三六水底に沈める藤の影見れば春の深くもなりにける哉
左持　興風
四六吹風に惜みも敢ず散る時は八重山吹の色もかひなし
右　元方
五六惜め共立も止らで行春をならしの山のせきの堰も止なむ

左持　御製
六六水底に春や暮るらむ三吉野の吉野の河に蛙なくなり
右　貫之
七六櫻花散ぬる風のなごりには水無き空に波ぞたちける
延喜オンタケアケヤハトラヌチナム
左持　躬恒
八六今日のみと春を思はぬ時だにも立と易き花の影かは
右　九六花見つゝ惜むかひなく今日暮て外の春とやあすは成なむ
これもかれもをかしとてぢとなむ
夏　二十首
左勝　源元方
〇七げふよりは夏の衣に成ぬれどきる人さへは變ざり鳧
右　一七片岡のあしたの原を打くれば山郭公けふぞなくなる
あぢきなしとてまくる
延喜オホヒトヤヘハトヲカタ
左持　興風
二七山里に知人もがな郭公鳴きぬと聞かば告もくるがに
右　三七夏きぬと人も告げこぬ我宿に山時鳥はやもなからむ
左　躬恒
四七我にして人にかはつげむ郭公思ふも著く我宿になけ
右勝
五七時鳥聲のみするは吹く風の音羽の山に嘆くなりけり
左　興風
六七夏池によるべ定めぬ浮草は水より外に住む方ぞなき
右勝
七七山をば出て先初聲は郭公夜深く待たむなつこゝはなけ
左持
八七紫にあふみづなれや杜若そこの色さへ違はざるらむ
右　九七さよ更て就くなるらむ郭公寝覺の宿はかす人もなし
左　〇八就をかそれともわかむ卯花の吹ける垣根を照す月影
右　一八此の夏も變らざりけり初聲はならしの岡になく郭公
左

二八夏夜のまだもぬなくに明ぬれば昨日今日とも思惑ぬ
　右
三八卯花の咲ける垣根は白雲のおりゐると社誤たれけれ
　左
四さく花の散つゝ浮ぶ水の面に爭で葦根ざし初めけむ
　右
五八待つ人は常ならなくに郭公思の外になかばうからむ
　左
六八玉くしげ二かみ山の郭公今ぞ明くれなきわたるなる
　右
七郭公後の五月もありとてや長く卯月を過しはてつる
　左
（歌脱）
　右
八八夏なれば深草山の郭公なくこゑ繁くなりまさるなり
　戀二十首
　左勝　躬恒
九八身をも且思ひも能□戀といへば燃る中にもいれる心は
　右　躬恒
一〇涙河いかなる水か流るらむなど我戀をけつ由もなき
　左勝　躬恒
一一誰故に思亂るゝ心には知らぬぞ人のつらきなりける
　右
一二にづかしの森の僅かに見し物をなど夏草の繁き思ぞ
　左持　躬恒
一三人の上と思し物を我戀になしてや君がたゞに止なむ
　右　貫之
一四蘆まよふ難波の浦に酒舟の綱手ながらも戀渡るかな
　左　躬恒
一五現にも夢にも人に夜し思へば□新許り嬉しきはなし
　右
一六玉藻刈る蜑とはなしによと共に我衣手の乾ゝ時なき
　左　伊勢
一七逢ふとの君に絶にし我身より幾らの涙流出でぬらむ
　右勝　これはおくにありあはぬうた
一八行き歸り千鳥なくなり濱ゆふに心隔てゝ思ふ物かは
　左　持
一九逢ずして至らむ事の難ければ妹は我身を有とやは思ふ
　右
二〇逢との方の知べか涙河戀しと思へばまづさきに立つ
　左
二一人戀ふと儚き死を我やせむ身のあらば社後も逢見め
　右
二二夕されば山端に出る月草のうつし心は君に染てき
　左
二三露計り頼めおかなむ言の葉に暫しも止る命ありやと
　右
二四春雨のよにふる空も思はえず雲居乍らに人戀る身は
　左　貫之
二五身に戀の餘にしかば忍ぶれど人の知らむとぞ侘しき
　右
二六君戀ふる我身久しく成ぬれば年ごとに涙も降ぬべら也
　左
二七逢見ても包む思の侘しきは人まにのみぞ音は泣ける
　右
二八夏草にあらぬ物から人戀ふる思繁くもなりにける哉
　かくて左方に上の御よわたりとて右方のみにうらみ申し給ふとさたしめして　院上
二九立ち返り千鳥なくなる濱ゆふの心隔てゝ思ふ物かは
　題　初春　二十首　季春　二十首　戀　二十首
　讀人　御製　敦慶王　伊勢　貫之　躬恒　興風　是則　友則

天徳四年内裏歌合

御記
天徳四年三月卅日己巳此日有二女房歌合事一者去年秋八月殿上侍臣闘二詩合一時典侍命婦等相語云男已闘二文章一女宜レ合二和歌一及二今年二月一定二左右方人一就レ中以二更衣藤原桐子同　等一爲二左右頭一各令二排調一蓋此爲レ慣二風騒之道徒以廢絶一也後代之不レ知レ意者恐成下好二浮華一專二內寵一之謗上仍具記レ之其儀暫撤二却清涼後涼兩殿中渡殿北廂一設二公卿座同渡殿之內一鋪二左右方人座於後涼殿縁東一（左在レ南右在レ北）女房又相分侯二清涼殿西庇簾中一第五間立二倚子一（便用二女房侍一倚中剋就倚子一良久右方入レ自二北方一獻二和歌洲濱（沈香物花足逢香下机繪二花鳥一花瓶二花柳一）暫左方經二侍所一自二南方一獻二和歌洲濱（紫檀打物花足蘇方下机繪二菓手一花瓶二菓女人一出知レ右算劔洲濱又置二南小庭之小舍一仰令レ召二殿上公卿一即左人圓座前一給二菓女一机下後改置云々）大臣實頼大納言源朝臣高明右大將藤原朝臣師尹參議雅信朝臣朝成朝臣參來候レ座次各方人侍臣着レ座于レ時日已昏供二燈臺一立二篝火於南北小庭一令レ召二可レ讀レ歌人一左方左兵衛督延光朝臣右方右中將博雅朝臣進就二洲濱下一讀二其和歌（左作二金山吹花枝一其菓レ歌右小書二色紙一）左近少將伊尹涉右近少將助信等取二脂燭一照レ之殿上舍人着二小庭座一刺レ算左大臣評定于レ時各方賜二饌於公卿及方人一讀歌之中左詠二鶯歌二首一而右誤讀二柳歌一仰レ依レ失レ次爲レ負惣廿首讀合已畢左勝員九比二讀歌終一令レ召二樂所人一相二分南北小庭一遞奏二歌曲一大臣彈レ箏大納言源朝臣彈二琵琶一此間盃酒頻巡絃歌無レ斷大臣起レ座獻レ酒及二暹明一賜二大臣以下祿一有レ差（大臣夏綾東二襲大納言白合御衣一重參議白單御衣自餘定平旦起レ座入レ內侍臣退出此間云々）霜臺（檢非違使別當）寒入帳時序乖違云々四月三日未剋之飛香舍以歌合洲濱一給二中宮一還來酉剋左洲濱□給二昌子內親王一

殿上日記
天徳四年三月卅日女房有二歌合之事一此事始レ自二今月上旬一先被レ書二分左右人一以二更衣一爲二左右頭一相二分典侍掌侍命婦藏人等一爲二方人一矣同月十九日相二分侍臣一點二定方人（藏人頭幷弁朝臣於二當日早旦一藏人所一雜色以下參上供二奉御前一御裝束一其儀西廂有レ懸二新御簾一（納二七尺殿御宿一也）第五間（渡殿立二御倚子一（大盤所內也）南方立二御几帳一立二置物机一（立二御倚子一）南四間垂二御簾一爲二左方女房座一矣北二間同垂二御簾一爲二右方座一焉御前渡殿南北各敷二綠端疊三枚一爲二公卿座一也後涼殿東小簀子敷從二渡殿一南北相分敷二長疊一爲二左右侍臣座一也南北小庭各敷二疊三枚一爲二樂所召人座一（此等儲設□所司進也）申二剋出御召一左右歌於是右方侍臣等令レ持二洲濱二机一（一置レ歌應レ召參上從二御路殿西邊一獻二御前一先童女一人執二地敷（透編浮文繧繝出進（其裁束者青色御簾一）

洲濱立地敷一　洲濱之爲體沈入金筋淺香下机入銀筋其覆花皮綾青末濃如柳折枝之縫文下机四角以金銀作柳枝形蒔繪覆蓋也有足結緒但無洲濱之中神妙爲端人取鳥獸水樹巖石一皆其所用無不金銀沈香等類所獻歌以色紙書小字詠花樹歌結其樹枝遥寄斤叉令持其鳥獸至于春初暮春首夏總望之間或在人手或載漁舟總二十首題宜分置次小舍人藤原實正執金銀花柳枝文下居玉砌傍一員指次小舍人二人藤原實明三春與光總三昇二員指洲濱置實正前一頃之左方從殿上侍方參上童女一人先執地敷紫地綺也鋪御座坤角如右方次童四人昇洲濱立地敷洲濱之機大體同右紫檀机蘇芳下机同色付濃覆弓一草手井藤花柳織文有帯無纏其中銀薄含款冬一枝黄金作八重花一實細作敷片次又童女執員指洲濱參入此洲濱野水體葉每片各實二苞一苞花絞纈例樓之小舍人藤原宣頼紀延方等寄巻赤色綺左大臣大納言源朝臣信朝臣朝成朝臣等也北南面也左右方頭辨二備衝重各給公卿并男女方人歸上五位取傳給之於昇召出左方延光朝臣右方博雅朝臣令講各方獻歌延光朝臣手執花枝一口詠鮑藻博雅朝臣披講之間誤失次第方人遣恨人在新百詩不載乎白珠之秋尚可勝焉其今日之調歟評定之間鐘漏頻移勝負之次不酌互勸今日之事左方多慰又御厨子所供御菓子干物等陪膳重任依例又召樂所人々於砌下左右相分侍ン席勝方吹笙笛初奏調子一曲遊之歌也左則大臣彈箏朝成朝臣吹ン笙方人侍臣樂所召人陪二砌下一實利朝臣一首藤原清通所能也右則大納言源朝臣彈二琵琶一雅信朝臣拍子侍臣井召人同左方占都方座等同侍二右庭一絃歌如ン左唱絃管箏恕二曲調一侍臣等密語曰毎二萬機之暇景一恕命二仙欄之御遊一然歡樂之至未ン如ン今夜一着也快醉難與難ン禁左大臣賜二夏御衣一襲青色朝衣蘇芳下襲阿古女御御衣御褂大口御袴大納言五位不ン論二殿上地下一揷細長一領四位五位小舍人持二赤緋一ン褶以二白綾一六位小舍人持二赤緋一東方漸明尊儀入御大臣以下歌舞退出之

判裏歌合　天徳四年三月廿日

題	霞	柳	櫻
款冬	藤	葺寒	首夏
卯花	郭公	夏草	戀
歌人	左	右	

朝忠卿
坂上是城
大中臣能宣
少貳命婦
壬生忠見
源順
本院侍從
講師
左
延光朝臣
判者
左大臣
念人
左
中將更衣
宰相更衣
藤典侍
少貳命婦
右衛門命婦
右近命婦
近南命婦
兵衛藏人
兵庫藏人
參河藏人
靭負藏人
侍從藏人
源爲明
源重信
藤博古
藤賴忠
藤文範
清原元輔
藤國光
藤兼家
藤助信
藤清遠
大江齊光
藤安親
秦清主

平惟盛
藤原元眞
中務
藤原博古
清原元輔
平保遠
源時明
藤道隆
藤爲時
藤景舒
藤惟貫
藤信頼
平珍材
藤重輔
源時仲
重
左
藤元明
實正
藤朝光
藤保名
義理
能正
延正
藤永保
藤雅材
藤忠光
一番　霞
左勝
朝忠
倉橋の山のかひより春霞年をつみてや立ち渡るらむ
右
古里は春めきにけりみ吉野の三垣が原も霞こめたり
左右歌讀合勅二小臣一曰可レ定二奏勝劣一者遂巡奏云小臣機嚴レ偏二三十一字一全難レ辨二勝劣之義一伏請二天裁一勅云若不レ定二勝劣一已失二今日興一兼結二後代譏一歟猶速可レ定申一者退二天氣之不一レ許表二空盧之拙一而已左歌くらはし山に年をつむといへる事よろし又橋にわたるなどいふもさもありなむ歌のふるまひもさてありなむ右歌などかふるさとにしも春めかしけむ霞こめたらむもおそろしげにや此間只在二勅定一小臣屢候二天氣一遂無二左右仰一因以左爲レ勝
二番　鶯
左勝
順
氷だにとまらぬはるの谷風にまだうちとけぬ鶯の聲
右
我宿に鶯痛くなくなるは庭もはだらに花やちるらむ
左歌心ばへいとをかし右歌よしなき花ちらすもことなる興なく詞もよろしからず以レ左爲レ勝
三番
左勝
朝忠
わが宿の梅が枝になく鶯は風の便に香をやとめこし
右
兼盛

五佐保姫の糸そめかくる青柳をふきな亂りそ春の山風
　鶯をいだすべきに柳をよみてまし（和光）
六白妙の雪ふりやまぬ梅が枝に今ぞ鶯はるとなくなる
　たがへてよみたれど本歌をめしいだして講せらるる
　右講師博雅朝臣誤讀二柳歌一左方論云須レ讀二申鶯
　歌一而誤讀二申柳歌一於レ今者不レ可二讀申一歟者以二左
　方論申旨一奏聞仰云可レ據二定申一者小臣奏云左方之
　所レ申非レ無レ謂如レ此之事只隨二時之議一仰依二人之
　誤一何留二其歌一依レ令二讀申一至時博雅朝臣頗變レ色速
　不レ讀レ之纔讀揚二其音振被一レ爲二左人一笑二又歌の
　詞に鶯春となくことそらごとなり仍遂爲レ負

四番　柳

左　望城

七荒玉の年をへつゝも青柳の糸は亂れの春かたゆべき

右勝　兼盛

八佐保姫の糸そめかくる青柳をふきな亂りそ春の山風
　欲レ讀二右哥一之間左方人申云件柳歌違二濫次第一讀
　事先畢而重欲レ讀レ之似レ忘二首尾一者小臣答云鶯歌
　之時隨二左申一已有二裁許一重不レ可レ申者左歌あらた
　まの年をへむ青柳よしなし右歌させることなけれ
　ど難レ見ず仍以二右爲一レ勝

五番　櫻

左勝　朝忠

九あだなりと常は知にき櫻花惜む程だに長閑からなむ

右　元輔

〇よと共に散すもあらなむ櫻花飽ぬ心はいつか絶べき
　左歌さてもありなむさせる難はなし言葉はいとよ
　からねどもくせなくきこゆ右哥はするあはぬこゝ
　ちぞする又歌がらも劣れり以二左爲一レ勝

六番　櫻

左勝　能宣

一〇櫻花風にしちらぬ物ならば思ふ事なき春にぞ有まし

右　兼盛

一一櫻花色見る程によをしへば年の行方を知で已みなむ
　左右ともによくつかまつれり仍爲レ持

七番　櫻

左勝　少貳命婦

一二足びきの山隱れなる櫻花ちり殘れりと風にしらすな

右　中務

一三年毎に來つゝわが見る櫻花霞も今はたちなかくしそ
　左歌いとをかしくてきてもありなむ右歌はいづこ
　にきつゝ見るぞ頗荒涼なりいまはといふことはよ
　しなきことなり仍以二左爲一レ勝

八番　款冬

左勝　順

一四春深み井手の川浪たち歸り見てこそゆかめ山吹の花

右　兼盛

一五一重づゝ八重山吹は開けなむ程へて匂ふ花と願まむ
　左歌いとをかしさることなりときこゆ右歌八重山
　吹の一重づゝひらけむは一重なる山吹にてこそあ
　らめ心はあるに似たれども八重さかずば本意なく
　やあらむ又上の句のはて下の句のはてとおなじ文
　字あり仍以二左爲一レ勝

九番　藤

左　朝忠

一六紫に匂ふ藤波打ちはへて松にぞ千代の色はかゝれる

右勝　兼盛

一七われゆきて色見るばかり住吉の岸の藤波折な盡しそ
　左歌水なくて藤波といふことはふるき歌にをりを
　りありされども尋ぬる人なければとゞまれるなる
　べし歌合にはいかゞあらむことによせぬはあるぞ
　じいはれなし猶水池岸などぞよすべかりける歌が
　らはきよげなり右歌おなじ浪あるに岸によせたれ
　ばたよりありかくぞふるきにもある藤波とおしな
　なべていふことにもあらず御氣色もさやうにぞ見
　ゆる小臣聞き源大納言二云尤艶也しばらく特に擬
　之間右方人申云左歌の藤波水によらずはいかゞと
　愁申事理可レ然仍以二右爲一レ勝

十番　暮春

左勝　朝忠

一八花だにもちらで別るゝ春ならば最斯今日は惜ざらまし

右　博古

一九行春の泊し著き物ならば我も舟出をおくれざらまし
　左歌首尾相叶ひふるまひもありてをかし右歌詞だ
　みたるやうなり歌がらもおとれり仍以二左爲一レ勝

十一番　首夏

左持　能宣

二〇鳴聲はまだ聞ね共蟬の羽の薄き衣を裁ちぎてける

右　仲務

二一夏衣立出づるけふは花櫻形見の色もねぎやかふらむ
　左の歌は夏の初とおぼゆれど右の歌はたち出づる
　今日はとあれば年とぞおぼゆる又ねぎかふともあ
　めれば左の歌よりはとくぞ聞ゆるされど歌の品お
　なじほどなれば持にぞ定め申す

十二番　卯花

左　忠見

二二潰遠み人も通はぬ奥山にさける卯花たれか折らまし

右勝　兼盛

二三嵐のみ寒きみ山のうの花は消えぬ雪かと誤たれつゝ
　左の歌山の卯花をしも思ひ出でけむこそいかゞ右
　の歌同じ山なれどをかしさまされり依以二右爲一レ勝

十三番　郭公

左持　望城

二四仄にぞなき渡るなる時鳥み山をいづるよはのはつ聲

右　兼盛

二五み山出でゝ夜半にやきつる郭公曉かけて聲の聞ゆる
　左右ともに興ありていとをかし仍爲レ持

十四番

左持　忠見

二六さ夜更て寢覺ざりせば郭公人傳にこそ聞べかりけれ

右　元眞

二七人ならばまてと云べきを時鳥二聲とだに聞で過ぬる
　左の歌きかむとも思はでねざめしけむぞ怪しきさ
　れど歌がらをかし右の歌人なりとも今一聲きかむ
　とて待てとはいかゞいはむとするしばしまてなど
　いふべき心かことたらぬ心地ぞするいづれもおな
　しほどの歌なれば持にぞ定め申す

十五番　夏草

左勝　忠見

二八夏草の中を露けみ掻分けてかる人なしに繁る野邊哉

右　兼盛

二九〇夏深く成ぞしにける大荒木の森の下草なべて人かる
　右の歌なべて人かるなどわろし左におとりたり仍
　以二左爲一レ勝

十六番　戀　朝忠

左勝

一四人傳に知せてしがな隠れぬの水籠にのみ戀や渡らむ

右　中務

二四むば玉の夜の夢だにまさしくば我思事を人に見せばや

左の歌いとをかしつよきことなれどさてもありなむ右の歌むばたまとかけり夜といふ事はぬばたまとぞいふかし歌は同じやうなれど書き過ちたるなめればそのよし奏すればあやまちあらむにはいかでかと仰せらる仍以レ左爲レ勝

十七番　戀　能宣

左勝

三四戀しきを何に附てか慰めむ夢だに見えずぬる夜無ければ

右　中務

四四君こふる心や空に天の原かひなくてふる月日也けり

左歌頗有レ情仍爲レ勝

十八番　戀　本院侍從

左持

五四人知れず逢を待まに戀死なば何に替たる命とか云む

右　中務

六四とならば雲居の月と成なゝむ戀しき影や空にみゆるさ

左右共にさてもありなむ右の歌の上下の句のかみに同じ文字ぞあめる憎さげにぞ候ふべきと奏すれば左右の仰なし左の人申す左はさる文字さふらはずと申すめれどさせる難にはあらぬにぞ仍爲レ持

十九番　戀　朝忠

左勝

七四逢事の絶てしなくば中々に人をも身をも恨ざらまし

元眞

右

八四君こふと且は消つふる物を斯てもいける身とや見覽

左右の歌いとをかしされど左の歌は詞清げなりとて以レ左爲レ勝

二十番　戀　忠見

左

九四戀すてふ我名はまだき立にけり人知ずこそ思初しか

兼盛

右勝

〇五忍ぶれど色に出にけり我戀は物や思ふと人のとふ迄

小臣奏云左右歌俱以優也不レ能レ定二申勝劣一勅云各尤可二歎美一俱猶可レ定申者小臣讓二大納言源朝臣一納言敬屈不レ奏此間相互詠揚各似レ請二我方之勝一小臣頻候二天氣一末レ給二勅判一令二密詠一右方歌二源朝臣密語云天氣若在レ右歎右歌甚好矣因レ之遂以レ右爲レ勝

三月一日歌の題を定めてかた〴〵に給ふ同じ月の十八日をのこども左右にわかせ給ふその日になりて清涼殿の西面のみす一間あげさせ給ひて後涼殿の渡殿におましを女房方によそはせ給ふおましより南には左の人侍ふ北には右の人さぶらふ左も右もわづらふ事ありてのぼらず左の方は内侍のすけ赤色に櫻襲の唐衣羅の摺裳命婦くらんどは赤色に櫻襲紫のすそごの裳皆着たり燻物は黒方をたく右は青色に青き裳は同じ紫の袿濃なり燻物は侍從をたくかくて日の氣色はれて見ゆる程に歌ども遅しと召す左のは遅ければまづ右のを奉る洲濱は沉を山につくりて鏡を水にして沉の舟うけたり銀のかは龜二つ甲の裏に色紙に歌は書きていれたり花足には沉を作りてこがねのすぢやれり淺香のあしゆひのくみ裾濃のふさしたり青朽葉薄ものゝおほひに柳島のかたを縫ひたりだいには柳の枝をつくれり淺縹の打敷したりうなゐ四人青色に柳襲にて北の方よりかきたつ同じ方の殿上人そひて出したつ數さしの洲濱は北の際におく數さしはうへの童左の歌たがそれ時に奉る蓬洲濱は沉の山鏡を水にして洲にも銀の鶴二つたて〻金の山吹に銀の葉に歌は書きて鶴にくはせたり花足は紫檀を作りて銀のすぢやりて下机はすはうにしてこがねのすぢやれりあしゆひのくみ褄は藤の末濃薄子を縫物にしたり褄のだいはしろがねを竹のかたに作りてうちしきにはえびぞめうなゐ六人赤色に櫻襲着て南の方より御前にかきたつ數さしの洲濱南の際におく宣旨に左大臣大納言源朝臣右の大將藤原の朝臣雅信の朝臣まさひらの朝臣參れり御前にあたれる渡殿にぬかれてさぶらふ左右の方の殿上人後涼殿のかたにさぶらふおはします間の御簾はあげたりあげぬ間御几帳たて渡して女房侍ふかゝる程に日暮れぬ北南の庭にはかゞりともす仰せ言にて左右の歌よむべき人をめす左延光の朝臣右博雅の朝臣洲濱のもとによりて歌とりて讀むおほせごとにて左大臣して歌の勝負のわざせさせたまふかすおほく左なさまじにくにてりの朝臣いはむかたなしとおもへり又左のおとゞを恨めしと見やる歌ども見はて〻樂所のをのこどもをめす左右とりわかれておの〳〵庭にさぶらふ左のとうのかちはおこらかしと思ひてさうの笛ふく左の大臣箏の琴ひく圖その頭をさむ琵琶大せんのしんながき琴伊豫の掾もりとき和琴左衛門志富門笛修理の大夫しげのぶの朝臣左京權大夫さねとしとのもりの頭橘のよりたゞいなどは歌うたひにさぶらふ右には源大納言琵琶右近中將博雅の朝臣和琴雅樂頭しげひらの朝臣箏のことのりたゞいの朝臣さうのふえ右近少將きよとほたかみつきんまさは歌うたふかち方雙調をふきてあなたふとうたふ次に右さくら人うたふ左うたへばまして右はやみぬかたみにぞあそぶ左あしがきうたふ右やましろのこまのわたりうたふ心あるべしかくあそぶ程に夜あけぬあけぼのになみゐたるになかきがあさがほを左大臣□みな人の笑ふをきゝもいれでことひきゐたる顔いとわりなし右の人かはらけとらすとてめすにくにてりの朝臣なつきなむとてかくれぬ左のうたよむ人にとうの更衣女裝束一くだりとらす又上達部にはうへより給ふ左大臣には夏の裝束一くだり大納言には白きあやの細長一重ね宰さうにはひとへがさねの細長殿上樂所の人々には褸ざし左には春の鶯の囀りといふあそびくれぬる春を惜むにより右には柳の花のうらみといふ樂を奏すかずのつもるをおもふなるべし

殿上日記雖レ註二取二分方人一之由一依レ無二其名一就二他日記一書入

三月二日左右方人のかきわけを內侍のすけしてかた〴〵の頭のさうじに給へりこれ二月廿九日にうへのみづから書き出させ給へるなり三日の日蔵を給ふこれは內侍のすけの御前にてかき出せるなり

霞一　鶯二　柳一　さくら三
山吹一　ほと一　春の暮一　初の夏一
時鳥二　うの花一　なつ草一　戀五

かくて三十日のひつじの時清涼殿の西面のみす一間あげさせ給ひて後涼殿のわたりて西むきにいしのおましよそひておはしますわたり殿をわけて南の坪に前栽植ゑさせ給ひて南には左藤の花北に

は右山吹の花うゑさせ給へりかた〳〵の藏人命婦はおましの北南にみすの内に左右とさぶらふ裝束はれいの赤く青しかく皆とゝのひてまづ右の洲濱奉るとて童打敷とりて御前にしきていりぬ又童四人洲濱かきて參る裝束はあを色に柳がさねたけのほど髮の長さよくとゝのひてかたほならず洲濱の覆あをきすそ濃にてぬひものしたり打敷は淺きはなだすはまのさまはうへのには沈にこがねのすぢやれり下のには淺香にしろがねのすぢやれり歌はしろ　ねこがねをつくり花にして歌にしたがひつゝ枝につけたり戀の歌は鵜舟にしてかゞり火にいれたり花の歌は舟につみたりうぐひすのは鶯くひたりさま〴〵につけてしたり日のうち傾きて物の色みゆるほどにていとめでたしかゝる程に左いとおそくまゐるとて主殿頭平のこれつねをめしておそしとめさせ給ふ猶遲ければ藏人平のよしきをめしてせめさせ給ふたゞいまゐらすと奏すかゝるほどにいといたうくれぬ又藏人藤原しげすけをめしておそき由仰せ給ふ物のさまも見えぬ程に洲濱奉る童うちしきとりてまゐるかへりて又四人洲濱かきてまゐる裝束あかいろに櫻がさねなるべしされど見えねばかひなし數さしのすはま又童もたりすべて六人わらはありおほきさとゝのほらずといふよしき童の中にまじりてさわぐ大きにてかたはにもあらじとおもひたるなるべし右の數さしの洲濱は方の殿上童とりてつぼせざいにたてゝさぶらふ左の洲濱をさ〳〵しく見えずくらくてすなはちおほとなぶらまゐる左源少將とれり打敷は左兵衛佐とれり右藏人少將おはとなぶらとれりうちしきは後少將とれり渡殿の左右にうたの上達部つけり左おとゞ實國右大將師尹藤宰相朝成源大納言高明源宰相雅信上人は後涼殿のすのこに北南につきなみゐたりかた〳〵の男女房にあるじしたりかくて左の講師右兵衛の督源延光よりて洲濱の覆を少し引きあけて山吹の花の枝の一尺ばかりあるこがねしてつくれるをとりてさゝげてよひとよゐたり花びらに歌はかきたるなるべしともかくもせでさゝげてよみときゐたりかうろさゝげたるに似たり右の講師源中將博雅洲濱の覆は藏人少將すけのぶもたり後少將たかみつよりてとるかくて歌ども合するにいかゝありけん右負けにけり合せはてて御遊び仕うまつるめし人は左右の壺前栽にさぶらふ左は左のおとゝ箏の琴勘解由長官笙のふえ圖書頭をさむ琵琶大膳進ながき琴伊豫掾もりとき和琴左衛門志宮門笛修理大夫しげのぶの朝臣左京大夫さねとし主殿頭これつね橘のよりたゞなどは歌唱ひにぞさぶらふ右は源大納言琵琶右近中將ひろまさの朝臣和琴雅樂頭しげひら箏の琴權左中弁よりたゞの朝臣笙の笛治部卿　雅信大藏卿もりあきらの朝臣右近衛少將きよとはたかみつ備前掾きんまさなども歌うたひにさぶらふこれが中に左のうたひだしは右京大夫さねとし地下の人にて其の座にさぶらふ右のうたひだしは治部卿渡殿にさぶらふ皆笏拍子とれりまづかちかた雙調ふきてあなたふとあそぶ次に右おなじ調子ふきてさくら人あそぶ次々これよりはじめてたがひに左右ひまなくあそびあかし給ふつとめてうへよりかづけものたまふ左のおとゞには御ぞ一くだり源大納言には白きうちき一かさね宰相たちひとへの組長を給ふこと人々には皆腰ざしをたまふ二日といふ日きさいの宮妍子には洲濱とも御らんせさせに奉れ給ふかきてまゐる人々藏人たちめみつまさき二人まゐる御覽じてかづけ物給ふさて右の洲濱はとゞめさせ給ひて左のはかへしまゐらせ給へり洲濱の有樣はうへはしろがねのすぢやれり下にはすはうに白ふのすぢやれりけりおほひすはうの裾濃打敷はこきえび染の黃なりけりこれは若宮に奉らせ給ひてけりかくてあはする日は三月朔日つごもりの日なればすはまといづる日は四月朔日つとめてになりて左は夏のかざみにていでたり右はおなじ冬のながらにてとりいるその左の洲濱の覆廣手を縫物にしたる歌

千代にちよ加たりとも見ゆる哉松の蔭なる巖の齡は

立ち歸りなけや鶯あすよりは時鳥てふ聲ぞ聞えむ

君か代は天の羽衣稀にきて撫づ共盡ぬ巖ならなむ

藤の花色深けれやかげみれば池の水さへ濃紫なる

名殘をば夏にかけつゝ百年の春の港にさける藤浪

天徳四年三月卅日歌合左右假名日記

歌合の又のつとめて左かちぬときゝて大貳好古の宰相右兵衛督朝臣におこせたり

白浪の立よる方の方人はかつに由てや心ゆくらむ

かへし　朝忠宰相

諸共に心をよする白浪のそこのかひある心地社すれ

これを見て、内侍のすけ

常磐にも立勝りにし白浪は君が方よりかひと社みれ

歌合明日とて宰相の更衣につかはす

上言の葉を暗部の山のおほつかな深き心の疏勝れる

御かへし

道しれる暗部の山に非ぬ身は深さをよそに聞計也

又弁の更衣につかはす

吹風によるべ定めぬ白浪は疏のかたに心よせまし

御かへし

定なき心也とも白浪のよりては如何あると社みめ

右天禧歌合以信州大英寺空和尚所持本一校合之一件

本十市遠忠眞跡也

高陽院七番歌合　寛治八年

題　時鳥　月　雪　祝

作者	左	右
大殿中納言君		藤中納言通俊
四條宮筑前君康資王母		江中納言匡房
周防内侍		顯綱朝臣
右大臣家讃岐君		正家朝臣
一宮紀伊君		行家朝臣
信濃君		賴綱朝臣
齋院攝津君		左京權大夫俊賴朝臣
講師	左	右
	右大辨基綱朝臣	右中辨宗忠朝臣
	判者	
	帥大納言經信卿	

一番　櫻
左勝　大殿中納言君　一宮紀伊君

三六山櫻匂ふあだりの春霞風をばよそにたちへだてなむ
右　中納言通俊

四八春風はふくともちるな櫻ばな花の心を我になしつゝ
此の左の歌いとうるはしうよまれたり右の歌は花の心をとよまれたる花の心やは侍らむと思ひたまふれば左はまさりたりとや申すべからむ

二番
左持　四條宮筑前君　紅のうす花櫻にはねずばみな白雲と見てや過ぎまし
右　江中納言匡房

六六白雲とみゆるにしるし三吉野の吉野の山は花盛かも
左の歌はめづらしきやうによまれたれども歌の心はとほくて雲と見つれどちかくて見れば紅に匂ふ櫻なりけりとよまれたるなりさらば山などかけてとほきことなどやあるべからむ右の歌はめづらしからねど別に難もなければ持とや申すべからむ

三番
左勅　周防内侍　七六山櫻情む心のいくたびかちる木の本に行き歸るらむ
右　顯綱朝臣

八六花故にかゝらぬ山ぞなかりける心は春の霞ならねど
右かゝらぬ山といふことは中頃の歌にてみな知りたる歌なり霞かゝるとやよまれてあるべからずおぼつかなければ左勝とや申すべからむ

四番
左持　右大臣家讃岐君　九六八千代へむ宿に匂へる八重櫻八十氏人も散で社見め
右　正家朝臣

〇七風の音の長閑き春の宿なれば匂ふ櫻をあく迄ぞみる
左八十氏人もちらでこそ見めとよまれたるは命ちらぬ心かちらでとあれば俄に花のちらぬにやとおぼゆるうへに句の上ごとや文字やおほからむ又右の歌はおくまでといふことはよむことにてはあれど花をあかむはいかゝ侍るべからむとおぼゆれば持とや申すべからむ

五番
左勝　一宮紀伊君　一七朝未明霞なこめそ山櫻尋ねゆくまのよそ目にも見む
右　行家朝臣

二七思ふこと露だになきは山櫻花見るほどの心なりけり
左の歌はいと花びやかによまれ侍りもしふることにやあらむ右の歌の思ふこと露だになしとはまことの歌の詞には見ずこそ思ひ給ふれ左の勝とこそ申さめ

六番
左　信濃君

三三尋ねくる心もしるく山櫻今こそ花のさかりなりけれ
右勝　賴綱朝臣

四七山櫻にほふ盛に風ふけばあたりの松も花さきにけり
左の歌は殿上の花の歌などに常に侍る歌又わざとの難にはあらねど目なれたるやうにて右の歌は風ぞかしけるといふ古うたのすぢにてめづらしからねどすこしまさりたりとみ給ふる

七番
左持　二五ちり積る庭をぞみまし山櫻風より先に尋ねざりせば
右　左京權大夫俊賴

六七山櫻さきそめしより久方の雲居に見ゆる瀧のしら糸
左の歌はいと心ばへをかしう侍り右の歌はきらびやかによまれたるやうに侍れど持とこそ申さめ

一番　郭公
左　中納言君

七五五月雨のはれぬ空にも郭公聲はさやかになき渡る哉
右勝　通俊朝臣

八七時鳥心のまゝにたづねつゝ生田の森にひと聲ぞきく
此の左のつゝきはまだくだりつかぬやうに覺え侍るはひがごとにやさればいくたの森にて聞くなど歌めきたれば右勝とや申すべからむ

二番
左勝　筑前君

九七山近くうらこぐ舟は時鳥なくわたりこそ泊なりけれ
右　匡房朝臣

〇八郭公雲居遙かに名のればや朝倉山のよそになくらむ
此の左の歌いとをかしくよまれて侍るめりかゝる古ごとあるやうにほの聞え侍れど確ならねば一定申しがたし右の歌は心ふかき歌と見給ふれ上句もとの句も本歌とも侍らむもし朝倉や木丸殿に我をれば名のりをしつゝといふ事をよめるにや侍らむ下句はもし昔みし人をぞ今はよそにきく朝倉山の雲居はるかにといふ歌にや侍らむさらば朝倉山に名のりをしたらむを聞くとあらむは遖ひなむ此のことのおぼつかなく侍れば左勝とや申すべからむ

三番
左勝　周防内侍

一〇夜を重ねまちかね山の時鳥雲のよそにて一聲ぞきく
右　顯綱朝臣

二〇明ぬ迄待鏡山の郭公今日もきかでやくれむとすらむ
此の歌は同じやうにのみ申し侍るを左は時鳥を聞きたる歌右の歌はまだきかねばさき〳〵も聞きたるをば勝とぞ申すめる

四番
左勝　讃岐君

三〇郭公夏の夜な〳〵待々て去年もことしも一聲ぞきく
右　正家朝臣

四〇聞きつともいかゞ語らむ時鳥覺束なしや夜半の一聲
右の歌聞ふ人もなきにいかゞ語らむと侍るこそつゝかぬやうにきこゆれば左の勝にや

五〇きゝてしも猶ぞまたるゝ時鳥なく一聲にあかぬ心は
右　行家朝臣

六〇時鳥おとづれしより音羽山麓の里をかれずとふかな
右の歌由しりたるやうに聞き給ふるに右のかれずとふとはなくてよみたるにや事たらぬやうにこそ見給ふれ左の勝にや

六番
左勝　信濃君

七〇郭公雲居の聲をきく人は心さへこそそらになりけれ
右　賴綱朝臣

八〇郭公今ぞなくなる隣にもふきつる笛の音にを留めて
右の歌笛の音とめつといふことおもひかけぬことなれば左珍らしからねども勝りたりとこそは申さめ

七番

左勝　攝津君

九八夢かとぞ驚かれぬる時鳥又もおとせぬ夜半の一こゑ

右　俊頼朝臣

〇九待乗てぬる夜もあらば郭公飽ぬ別の名をやたゝまし

左の歌は今すこし思ひや入りて侍らむ

一番　月

左持　中納言君

一九曇なき雲の上まで照る月はいとゞ光を研くなりけり

右　通俊朝臣

二九月みれば壹ゝぞ思ふ秋の夜を長き春日と思做しつゝ

右の歌に壹と日といふ事又是同じ事にやと申しゝかば中納言は壹と日とはみな久言變りたれば同じ心にはあらずとのたまひしを詞かはりたれど同じやうなれば猶さる心なしと聞き給ふ内に櫻花咲きぬる時は常よりも峯の白雲立ちまさりけりと云ふ歌合の歌いとよき歌なりそれに猶まさるべしとこそ申しゝかども斯ものべ申されざれしかば左の歌いともえさらざりしかば殿下にいかゞさふらふべきと申しゝかば例なとどはいかゞと仰せられしかゝる時は持なんどは定めたるよし申して持と定められぬ

二番

左　筑前君

三九君みると空にしればや秋月曇らぬ影の代々に澄らむ

右勝　匡房

四九逢坂の關の杉原下はれて月のもるにぞ任せたりける

左の歌は君みると空に知ればやとよまれて末にすむらむとよまれたるは末の代はさもやよまれむはじめを代々といふ事はあまり久しうこそ思ひ給ふれ右の歌杉原下晴れてと侍る月のさし入りて後侍らむ程だしきに晴れたりといはむこと先だちてなむ思ひ給ふると申したりしにもかくものべ申さゝりしところにもなどかいはれざらむと思う給ふればこそ右勝にや

三番

左勝　周防内侍

五九つねよりも三笠の山の月影は光さしそふ天の下かな

右　顯綱朝臣

六九岩橋の神の契れるかひもなし隈なく照す秋の夜の月

右の歌岩橋の神の契れるとよまれたるは葛城の神にや侍らむさらば此の橋をばえわたさずとこそいひつたへたれ月にはえ渡さじとやはあらむ月のあかきが雪のやうなればこそさもみえめさこそ月のくまをよまれたれば神もさやはいひしとおぼさむと思う給ふれば左の勝にや

四番

左勝　讃岐

七九秋の夜は最ど長くぞ成ぬべき明るもしらぬ月の光に

右　正家

八九常磐山ゝ葉の落の數ごとに影さしそふる秋の夜の月

左めづらしきことのみ見えて右の歌のときは山とよめるは山にのみやがて露はおかぬ下葉といふことはいかなるにかあらむと見給ふれば左の勝にや

五番

左勝　紀伊

九九鏡山峯より出る月なれば曇るよもなき影をこそ見れ

右　行家

〇〇水ならで人にも月や映るらむ見れば心の澄み渡る哉

右の歌人にも月やと侍るはいかなることにや左の勝にや

六番

左持　信濃

一〇曇なき玉のうてなの研けるに光をそふる秋の夜の月

右　頼綱

二〇秋夜の月に心の隙ぞなき出るを待つといるを惜むと

左右の歌させるとみえ侍らねば持とや申べからむ

七番

左　攝津

三〇てる月の光冴行く宿なれば秋の水にも氷柱ゐにけり

右勝　俊頼

四〇山の端に雲の衣をぬぎすてゝ獨や月の立ち昇らむ

右勝に侍るにや

一番

左持　中納言

五〇岩代の結べる松に降雪は春もとけずやあらむとす覽

右　通俊卿

六〇おしなべて山の白雪積れども著きは越の高嶺也けり

左の歌をかしくよまれ侍り右もうるはしく侍り持にや

二番

左　筑前

七〇ふみゝけるの跡さへをしき哉氷の上にふれる白雪

右勝　匡房

八〇み狩野は旦ふる雪に埋れて鳥立もみえず草隠れつゝ

左の歌鴈鳥ふみゝけるといふ事は人こそふみ見め鴈の心はしりがたし又跡さへ惜しきとは跡を惜みたるにや古くはをしきと云ことは雪を惜みたりとこそみゆれ右草がくれつゝとよまれたるは鷹狩に草隠れといふことは鳥の草にかくれたる事を申すにやあらむこれは雪を詠みたるにこそされど雪の草がくれたるにやあらむ右の勝にや侍らむ

三番

左　周防内侍

九〇雪も皆ふるかひ有て積ればや白雪懸る山とみゆらむ

右勝　顯綱

一一外山には柴の下葉も散果てゝ遠の高嶺に雪降にけり

左の歌は白雪かゝるといふ言葉ふるきことゝこそ覺ゆれ右の歌下葉もちりはつといふことはいかゞあらむ

四番

左　讃岐

一二近江路は民の笠のみ見ゆる哉越にも優る雪にぞ有ける

右持　正家

二二旅人のねずりの衣うち拂ひ拂ひもあへずけさの初雪

左の歌近江路といふと何事にかたみの笠といふことを思ひてよまれ侍るにやそれはさいはれて聞ゆる物をさらば右の勝にや

五番

左持　紀伊

三二天の原空掻き暮しふる雪に思ひこそやれみ吉野の山

右　行家

四一雪ふれば野原を行も分やらず萱が下折最どしみたれ

左の歌思ひこそやれ神なびの森といふ同じ心にや

侍らむ右かやが下をれ雪にみだるともみえねば同
ほどにや

六番

左勝　信濃

一遠近の嶺の續きもみえぬ迄天ぎる雪も降しきにけり

右　頼綱

二衣手によごの浦風さえ〳〵て木高見山に雪降にけり

左の歌勝にや

七番

左勝　摂津

三ふる雪に杉の青葉も埋れて印もみえぬ三輪の山もと

右　俊頼

四ふる雪に谷のかけはし埋れて稍ぞ冬の山路なりける

左の歌いとをかしく侍る勝にや

一番　祝　中納言

左持

五君が代は萬代までにさしてけり三笠の山の神の恵に

右　通俊

六君が代は天の磐屋根の命より祝ぞ初し久しかれとは

左右やんごとなき神をかけたれば申しがたし持に
侍るめり

二番

左　筑前

七君が代は眞砂の數も飽ずとて瀬々の衢も猶そふる哉

右勝　匡房

八君が代は曇もあらじ三笠山峰の朝日のさゝむ限りは

左猶そふる哉あながちにや侍らむ右の勝

三番

左　周防内侍

九君が代に綿の尾山に住鶴の毛衣さへや千代を重ねむ

右勝　顕綱

一〇君が代は長柄の橋の小れ石の岩根の山に成はつる迄

右はさまりてこそ見給ふれ

四番

左持　讃岐

一一萬代と祈りぞつむる君が代は山田の原の下つ岩根に

右　正家

一二君が代は衆てぞ著き春は山二葉の松の神さぶるまで

左の歌萬代とよみて又君が代とよみたるもいかゞ
あらむと申すべからむ

五番

左持　紀伊

一三萬代を松の尾山の蔭しげみ君をぞ祈る常磐かきはに

右　行家

一四天の下久しき御代の印にはみかさの山の榊をぞさす

六番

左勝　信濃

一五萬代をまた萬代をます鏡陰をならべてしるぞ嬉しき

右　頼綱

一六百年も重ね〳〵て君が代はつきじとぞ思ふ萬代迄に

七番

左持　摂津

一七千代ふべき君を譲れば三笠山神の心も長閑かるらむ

右　俊頼

一八落たぎる八十氏川の早き瀬に岩越波は千代の數かも

中納言　勝一負一　持二　筑前君　勝一負一　持二
周防内侍　勝二負二　讃岐　勝三負一　持一
紀伊　勝三負三　信濃　勝三負一　持一
摂津　勝三負一　持三　通俊　勝二負一　持三
顕綱　持三負三　正家　勝一負一　持一
行家　勝三負三　持三　頼綱　勝一負一　持一

千五百番歌合

百首歌合　建仁元年　土御門院御宇

題

春　廿首　夏　十五首　秋　廿首
冬　十五首　祝　五首　戀　十五首
雑　十首

作者

左方

女房　後鳥羽院
左大臣正二位藤原朝臣　後京極攝政
前權僧正慈圓
從二位行權中納言藤原朝臣公継　様大寺野宮左大臣
參議正三位行左近衛權中將兼越前守藤原朝臣公經
正三位行皇太后宮大夫藤原朝臣季能
宮内卿　後鳥羽院女房　後鳥羽院女房
讃岐　二條院女房　賴政女
小侍從　待宵
散位正四位下藤原朝臣隆信
散位正四位下藤原朝臣有家
散位從四位上藤原朝臣保季
正五位下行左近衛權少將藤原朝臣良平　醍醐入道　前太政大臣
從五位下行左兵衛佐臣源朝臣貞親
僧顯昭

右方

三宮
内大臣正二位兼右近衛大將皇太弟傳源朝臣
正二位行權大納言藤原朝臣忠良
從二位行權中納言藤原朝臣兼宗
從三位行右近衛權中將源朝臣通光
沙彌釋阿
後成卿女
丹後
越前
正四位下行左近衛權少將兼安藝權介藤原朝臣定家
正四位下行左近衛權中將源朝臣通具
從四位下行上總介臣藤原朝臣家隆
從五位上行左近衛權少將藤原雅經
沙彌寂蓮
從五位下行右馬助源朝臣家長

判者

權大納言忠良　春一同二　夏一同二　釋阿　春三同四　夏三秋一
内大臣　秋二同二　左大臣　秋四冬一
女房　冬二同三　定家朝臣　戀一戀一
季經入道　戀二同三　師光入道　雑一同二
顕昭　前權僧正

千五百番歌合巻第一　春一　判者　忠良

春二十首

一番　左勝　女房　右　三宮

三春立てば緩らぬ空ぞ戀り行く昨日の雲か今日の霞か

二早晩と雲居に春や立ちぬらむ雪ゐをこめて霞む空哉

（判詞省略之以下同）

二番　左勝　左大臣　右　内大臣

三おしなべて今朝は霞の敷島や大和諸人春を知るらし

四夜をこめて竹にさへづる鶯のこゑの色にや春の綠は

三番　左勝　前權僧正慈圓　右　權大納言忠良

七雪の内に春は來にけり吉野山雲とや云む霞とや云はむ

八さのふまでさえし嵐の音羽山霞むや春に逢坂のせき

四番　左持　權中納言公繼　右　權中納言兼宗

九古巢出る鶯の音に著き哉谷より春はたつにぞ有ける

〇四春きぬと誰に岩間の水なればさは氷の解始むらむ

五番　左　參議公經　右勝　右近權中將通光

一四杉の葉のかすむにしるしあふ坂や關の岩戸の春の曙

二四今朝よりは雪げの雲の跡はれて綠にかへる春の初空

六番　左　太皇太后宮大夫季能　右勝　釋阿

三四けさよりや澤べの氷とけぬらむ春風かよふ鵠のこゑ

四四八重霞八十島かけて立ちにけり千代の始のはるの曙

七番　左持　宮内卿　右　俊成女

五四いつしかと春の日影に雪消て聲たて初むる庭の松風

六四出る日の光もしるし天つ空くもりなき世の春の始は

八番　左持　讃岐　右　丹後

七四雲居より春や立つらむ天の戸を推開方の霞初めぬる

八四昨日迄こやも顯はに見えしかどけさぞ雜波の浦は霞める

九番　左　小侍従　右勝　越前

九四去年といふ昨日にけふは變らねをいかに知てか鶯の鳴

〇五いつしかと春のけしきを眺むれば霞にくもる曙の空

十番　左持　散位藤原朝臣隆信　右　藤原朝臣定家

一五逢坂や關の清水の音羽山音にもしるし春のけしきは

二五春霞昨日を去年の印しとや軒ばの山も遠ざかるらむ

十一番　左勝　散位藤原朝臣有家　右　左近衞權中將源通具

三五山のはの霞を分て出づる日も長閑に廻る千代の初春

四五年なみのこゆればやがて色ぞ添ふ霞懸れる末の松山

十二番　左　散位藤原朝臣保季　右勝　上總介藤原朝臣家隆

五五年くれて一夜に變る春なれば霞もあへず天のかご山

六五足引の山の白雪消えもあへず昨日を去年と霞む空哉

十三番　左持　藤原朝臣良平　右　左近衞權少將藤原朝臣雅經

七五春日山松のうれより出づる日は千年の春の始也けり

八五昨日かも年は暮にし天の戸のあくるまちける春霞哉

十四番　左持　左兵衞佐源朝臣具親　右　寂蓮

九五年の内の春とは空に三吉野の山も霞みて雪の降つゝ

〇六峯向のあなしの檜原春くれば霞を懸て山かづらせり

十五番　左　僧顯昭　右勝　右馬助源家長

一六夜の程に雪ふる年を引かへて空も心も春めきにけり

二六氷吹く山風さむみけふも猶まだ打ち出でぬ水の白浪

十六番　左勝　女房　右　内大臣

三六冬と春と行きあふ坂の杉がえに霞を凌ぐ泡雪ぞふる

四六岩そゝぐ垂氷の上にさす日影打解けにける春の初空

十七番　左勝　左大臣　右　忠良卿

五六おちたぎつ岩間打出づる泊瀬川初春風や氷とくらむ

六六けふよりや木芽も春の山風に櫻が枝も花を待つらむ

十八番　左勝　前權僧正　右　兼宗卿

七六春風の結ぶ氷を吹解けば更にやけふは袖もひぢなむ

八六君が爲子日の松を引添へて千代の蔭をも頼みつる哉

十九番　左持　公繼卿　右　通光卿

九六九重にけふたてそむる氷社風にもとけぬ例なりけれ

〇七幾千代の例までとか年毎に子日の松を引き重ぬらむ

二十番　左　公經卿　右勝　釋阿

一七泡雪のふるからをのゝ本柏本見し空にかへる春かな

二七鶯も千代をや契る年をへて變らぬ聲に春をつぐらむ

廿一番　左　季能卿　右勝　俊成卿女

三七一年を思ひ暮してまどろめば夢ぢもあくる空の初春

四七明けやらぬ谷の戸すぐる春風に先誘はるゝ鶯のこゑ

廿二番　左　宮内卿　右勝　丹後

五七ゆく末の梢をこめよ姫小松けふこそよそに嶺の白雲

六七麓迄霞みにけりな深山には松の葉白き雪もけなくに

廿三番　左勝　讃岐　右　越前

七七春風をさらに雪げに吹きかへて峯の霞ぞ雲隱れゆく

八七春きぬといふ計りには霞め共まだ雪深し三吉野の山

廿四番　左　小侍従　右勝　定家朝臣

九七たゞ霞む空とやけさを思はまし谷の鶯音せざりせば

〇八春といへば花やは遲き吉野山さえあへぬ雪の霞む曙

廿五番　左持　隆信朝臣　右　通具朝臣

一八春きては人もとふべき三吉野に雪より深き朝霞かな

二八たれにまたけふと契を志賀の浦花の小波春風ぞふく

廿六番　左勝　有家朝臣　右　家隆朝臣

三八春風の立田の川やまさるらむ三むろの岸の雪の下水

四八春たちてけふ三日月の山のはに霞初めたる夕暮の空

廿七番　左　保季朝臣　右勝　雅經

五八凍りせし嵐を春に吹きかへて昨日はきかぬ谷の下水

六八氷とく沖つ春風吹きぬらし汀にかへる志賀の浦なみ

廿八番　左　良平　右勝　寂蓮

七八朝も猶雪げの雲に紛ふかな號れ霞とみよしの〻山

八八春きてもなほ雪さゆる山風の麓になれば氷とくなり

廿九番　左勝　具親　右　家長

九八いつしかとかすみの衣立田山うらめづらしき春の曙

〇九春風の尾上の雪を吹くからに音づれそむる松の初聲

三十番　左勝　顯昭　右　三宮

一九姫小松引馬の野べに子日こそ手毎に千代を籌しつる哉

二九けふも猶雪ふる松に音づれて聲うちかすむ春の初風

三十一番　左勝　女房　右　忠良卿

三九若城やたかまの山に雪消てさえし風にはるの初風

四九春はまだ淺香の沼の薄氷消えあへぬ上に泡雪ぞふる

三十二番　左勝　左大臣　右　兼宗卿

五九吉野山雪ふる里もしかすがに槇の戸ぞ凌く春風ぞ吹く

六九たちわたる霞も春は哀なり秋風ふかぬ夜のやけはら

三十三番　左勝　前權僧正　右　通光卿

七九春霞たてるは都さても猶山のおくには雪やふるらむ

八九紀々に去年の名殘とちる雪を暫しもみせぬ春霞かな

三十四番　左　公繼卿　右勝　釋阿

九九春の日の霞の内に暮ぬれば長しともまた覺えざり鳥

〇〇春きぬと御垣が原は霞めども猶雪さゆる三吉野の山

三十五番　左　公經卿　右勝　俊成卿女

一〇白妙の袖に綠をうつしもて雪ふるのべに若菜つむ比

二〇昨日までとぢし氷柱の池水にいつ春風の浪を吹らむ

三十六番　左勝　季能卿　右　丹後

三〇うち靡き所もわかず立つ春を何と隔つる霞なるらむ

四〇鶯の涙のこほりとけしより打ち出でそむる谷川の水

三十七番　左持　宮内卿　右　越前

五〇くもる日をいづちうらなく卯たゝし霞の衣春雨の空

九〇浪路より春や立つらむ朝ぼらけ霞ぞこゆる末の松山
三十八番 左勝 讃岐 右 定家朝臣
一〇七春の雪は猶ふる草に晴れやらで道踏分けぬ竹の下折
一〇八山のはに霞ばかりは急げども春に離れぬ空の色かな
三十九番 左持 小侍従 右 通具朝臣
一〇九雲つゝくとほちの里の夕霞たえ〳〵に歸る雁がね
一一〇雪の内に涙とけ行く鶯は我音に鳴きて春やしるらむ
四十番 左 隆信朝臣 右勝 家隆朝臣
一一一君がへむ千代の例に引初し野べの小松も數添にけり
一一二山里は木間の日影猶さえて春とも見えぬ庭の霜かな
四十一番 左持 有家朝臣 右 雅經
一一三けふこそは花の都にくれ竹のねぐらさだめよ春の鶯
一一四晴やらぬ雲は雪げの春風に霞あまぎるみよしの〻山
四十二番 左 保季朝臣 右勝 寂蓮
一一五子日する野べより色ぞ變りける常盤の松の春の一入
一一六春は猶霞みもはてぬけしきかな吉野の山の松の村消
四十三番 左持 良平 右 家長
一一七みよし野の峰を花と眺むれば高嶺はいまだ冬の白雪
一一八から衣袖ふりはへて雪消ぬ裾野の原の若菜をぞつむ
四十四番 左持 具親 右 三宮
一一九志賀の浦や氷に淀む冬の浪の數日を過て立歸るらむ
一二〇秋だにも仄めく空の夕月夜霞める春は其かともなし
四十五番 左持 顯昭 右 内大臣
一二一春霞けさは煙に紛ふらしもみえず鹽がまの浦
一二二昨日迄氷柱の底に見し根芹けさは雪げの水に社つめ
四十六番 左勝 女房 右 兼宗卿
一二三白妙の衣春雨かき曇りふる野のわかな今やつむらむ
一二四山里は聞きしる人もあらじとやまづ聲ならす谷の鶯
四十七番 左勝 左大臣 右 通光卿
一二五時しもあれ春の七日の初子日若菜つむ野に松を引哉
一二六待ちわびし軒端の梅に風過きばそれに聞べき鶯の聲
四十八番 左持 前權僧正 右 釋阿
一二七池雪の花なき里にうれしきは木のめも春の夕暮の空
一二八春毎に子の日の松の千代は皆我君が世の例なりけり
四十九番 左 公繼 右勝 俊成卿女
一二九ときは山白雲かゝる柑こそはるかにみゆる雪の下草
一三〇春日野の雪をを分て尋ぬれば草の僊に春めきにけり
五十番 左 公經卿 右勝 丹後
一三一鶯の凍れる涙とけにけりまだ古年の雪は消え敢へで
一三二雪閉ぢし軒の垂氷のとけ行くを早曉春の雨かこぞみる
五十一番 左勝 季能卿 右 越前
一三三小松原雪をを分けてひく人の手に願るゝ千世の初春
一三四音羽山松に明け行く横雲の名殘をみればかすむ一村
五十二番 左 宮内卿 右勝 定家朝臣
一三五鶯しく河添柳浪かけてねにあらはるゝ春のうぐひす
一三六山里は谷の鶯打ちはぶき雪よりいづる去年のふる聲
五十三番 左持 讃岐 右 通具朝臣
一三七深山いでゝ花を遲しと思ひけり松の雪にぞ鶯はなく
一三八芹つみし御垣が原はそれながら昔をよそに澤す袖哉
五十四番 左持 小侍従 右 家隆朝臣
一三九春といへばなべて霞や渡るらむ雲なき空の朧月夜は
一四〇春の日の淺澤をのゝ薄氷誰ふみ分てねせりつむらむ
五十五番 左持 隆信朝臣 右 雅經
一四一雪の内にめぐむ若菜は埋れて飛火の野守見かひぞなき
一四二若菜摘緑りにみればむさし野の草は皆がら春雨の空
五十六番 左持 有家朝臣 右 寂蓮
一四三春毎に飛火の野守舊りぬらむ雪まの若菜年を積つゝ
一四四誰か又春のしるしと契りけむ三輪の山もと雲のこゑ
五十七番 左勝 保季朝臣 右 家長
一四五春くれば元よりたえぬ煙さへ霞とみゆる鹽がまの浦
一四六暮れ果つる浪路の末は八重霞々を出づる春のよの月
五十八番 左持 良平 右 三宮
一四七くもる夜の空をそにてもる月や木の下蔭に殘る沫雪
一四八津國のなにはの春を見わたせば霞をよする沖つ白浪
五十九番 左 具親 右勝 内大臣
一四九邨にて何かへるとも怨みひはつねに出づる谷の鶯
一五〇春風になびくのみかは鶯のきねるにたへぬ青柳の糸
六十番 左勝 顯昭 右 忠良卿
一五一遥々と飛火がはらを見渡せば霞と共に雲雀立つなり
一五二行末を子日の松に引かけて君が千年を手に任せつる
六十一番 左勝 女房 右 通光卿
一五三手折けむ軒端の梅を尋れば花もえならぬ袖のかぞする
一五四庭の面に殘る跡をで木のもと月影うつす雪の村消
六十二番 左 左大臣 右勝 釋阿
一五五鶯のはね白妙にふる雪をうち拂ふにも梅のかぞする
一五六袖のかに梅は變らず薫りけり春は昔の春ならねども
六十三番 左勝 前權僧正 右 俊成卿女
一五七はるはとし霞かゝれる柑より花ぞおそきと鶯のなく
一五八山里は猶ふる雪の消えがてにまだき柑に花ぞ散ける
六十四番 左勝 公繼卿 右 丹後
一五九日影みぬ山隈れに流れきて雪げの水の又凍りぬる
一六〇昔よりけふまで絶ぬ子日にも君を松とや引殘しけむ
六十五番 左勝 公經卿 右 越前
一六一春風をたぎつ岩根にせきかねて霞におつる花の白浪
一六二薄氷春日麗らに解ぬらし山田のさはに鶴ぞ鳴つむ
六十六番 左持 季能卿 右 定家朝臣
一六三玉帚これも千年の例とて初ねの松に引きそふるかな
一六四消なくに又やみ山を埋むらむ若菜摘野に泡雪ぞふる
六十七番 左 宮内卿 右勝 通具朝臣
一六五けふ若菜つむてふ事は一年にのべ踏馴す始なりけり
一六六梅の花たが袖ふれし匂ひぞと春や昔の月にとはゞや
六十八番 左持 讃岐 右 家隆朝臣
一六七梅の花匂はよそに散すとも色をば風の惜まゝしかば
一六八子日する松に千年や契りけむ同じ二葉の野べの若草
六十九番 左 小侍従 右勝 雅經
一六九ふみなれし昔の跡を辿るかな和歌の浦にも霞隔てゝ
一七〇雪寒きまやののきばの梅えがに春を待つしも鶯の聲
七十番 左勝 隆信朝臣 右 寂蓮
一七一春たちて都のわかなつむまでに鶯の音を松のしら雪
一七二梅の花咲きぬる色に埋れて雪かとみれば袖匂ふなり
七十一番 左勝 有家朝臣 右 家長
一七三昨日けふまだ三吉野は雪降て春とも見えぬ嶺の雲哉
一七四雪の内は土につくまで見えしかど立枝に返る松の群立
七十二番 左勝 保季朝臣 右 三宮
一七五夜をこめて幾浪路をか過ぎぬらむ跡より霞む春の曙
一七六ふる巣をば都の春にすみかへて花になれ行く谷の鶯
七十三番 左 良平 右勝 内大臣
一七七聲の色にたぐふ花だになかりけり霞きぬる松の群立
一七八晩れば見えみ見えずみ春霞立居るのべに若菜つむ人
七十四番 左勝 具親 右 忠良卿
一七九白雲の證くのべの小松原空にしめゆふ君が千代かな
一八〇雪消ぬ野べの遥路跡みえて我より先に若菜つみけり
七十五番 左持 顯昭 右 兼宗卿
一八一さきやらぬ花の堺をまつ程やゆふぐれ竹にきねる鶯

八鶯のなくねの色に聞ゆるは春しりそむる徴なりけり

千五百番歌合巻第二

巻二　判　権大納言忠良

七十六番　左勝　女房　右　釋阿

三春風のさそふかのべの梅がえになきて移らふ鶯の聲
四春はなほ柳が枝もかぎりなし絲のいとに露のしら玉

七十七番　左　左大臣　右勝　俊成卿女

五妻戀の雉子なく野の下蕨したにもえても折をしる哉
六梅の花あかぬ色香も昔にて同じ形見のはるのよの月

七十八番　左勝　前權僧正　右　丹後

七春雨のふるからをのゝ梓弓押ていざさば若菜摘てむ
八梅がえに思ひよそへて眺むれば雪さへかをる春の曙

七十九番　左持　公繼卿　右　越前

九梅がえの花の匂ひをゆかりとやきゝねる鶯妻求むらむ
一〇打拂ふ雪だに歌ぬ春日野に袖振はへて若菜をぞつむ

八十番　左　公經卿　右勝　定家朝臣

一一軒近き梅の匂を片しきの狩袖にぞ深き色はみえける
一二谷風の吹上にさける梅の花あまつ空なる雪や匂はむ

八十一番　左　季能卿　右勝　通具朝臣

一三春毎に野べに心をやる人も若菜にそへて年は積けり
一四梅がえを折つる袖に影みればかさへ懐し春のよの月

八十二番　左　宮内卿　右勝　家隆朝臣

一五けさよりは片まつともなかりけり梅さく宿に鶯の聲
一六霞たつかたのゝ御野の狩衣はらふともなき春の泡雪

八十三番　左　讃岐　右勝　雅經

一七石上ふる野のをのと聞しかど若菜は年に生替りけり
一八春もきてたちよる計りありしより霞の袖の梅の移香

八十四番　左　小侍從　右勝　寂蓮

一九今ぞしる宮の鶯囀るもひとり聞きける人のこゝろを
二〇花ならで又も心はうつりけり谷の鶯なくやうめがえ

八十五番　左勝　隆信朝臣　右　家長

二一春日山松の綠はほのみえて消敢へぬ雪に春風ぞ吹く
二二梅の花なづさふ人の袖毎にありあへたるは匂也けり

八十六番　左持　有家朝臣　右　三宮

二三まがへつゝ眺めぞくらす花をのみ松の梢の雪の村消
二四みな人の花を尋ねて出でぬれば春の宿もる鶯のこゑ

八十七番　左持　保季朝臣　右　内大臣

二五けふまでも梢は冬の色ながら去年には變る雪の下草
二六呉機帶あやに眺のなりゆくか絲の空に遊ぶ糸ゆふ

八十八番　左勝　良平　右　忠良卿

二七色よりも身にしむ物は梅の花袂に匂ふ風のうつりが
二八いくかへりなれぬる春と思へども猶梅がえに鶯の聲

八十九番　左勝　具親　右　兼宗卿

二九谷深き雪のふるすにおもなれて花に物うき鶯のこゑ
三〇おぼつかな軒端の梅を薫らせて槇の板屋に誰詠む覽

九十番　左持　顯昭　右　通光卿

三一さく花を美はしとや思ひけむはるの梢にとまる白雪
三二山ふかき雜の雪も消えぬまに都の人の春をとひける

九十一番　左持　女房　右　俊成卿女

三三池水のみ草における夜の霜消敢へぬ上に春雨ぞふる
三四鶯の塒にならす梅がえに己が羽風も身にやしむらむ

九十二番　左勝　左大臣　右　丹後

三五野も山も同じ綠にそめてけり霞よりふる木のめ春雨
三六遠近も一つ霞のうちながら音にぞしるき志賀の浦浪

九十三番　左持　前權僧正　右　越前

三七呼子鳥嬉しくも有るか遠近のたづきに迷ふ山の夕暮
三八ふるすより春の嵐やわたるらむ袖に聲ちるたにの鶯

九十四番　左　公繼卿　右勝　定家朝臣

三九都にて心やはるゝ雪のうちに冬ごもりせしたにの鶯
四〇里わかぬ月をば色に紛へつゝよもの嵐に匂ふ梅がえ

九十五番　左持　公經卿　右　通具朝臣

四一たれもとへ梅が香匂ふ木の下に光久めく十六夜の月
四二そことしもしられぬ梅は薫來て垣ねの末に鶯ぞなく

九十六番　左持　季能卿　右　家隆朝臣

四三淺緑かすみこめられど潮風のおとにぞしるき磯の松原
四四梓弓おして春雨ふる郷のみかきがはらぞうす綠なる

九十七番　左勝　宮内卿　右　雅經

四五梅枝の花のありかをしらねども袖こそ匂へ春の山風
四六霞むより雲路にのぞみ聲はする澤べのたづものべの雲雀も

九十八番　左　讃岐　右勝　寂蓮

四七かへり行く越路の雪やさむからむ春は霞の衣雁がね
四八尋ねつる花の梢をながむればうつろふ雲に春の山風

九十九番　左持　小侍從　右　家長

四九身こそかく年ふりぬれど鶯の囀るはるは改まりけり
五〇春風のふくに附てぞ思出づる角ぐむ荻の行く末の秋

百　番　左持　隆信朝臣　右　三宮

五一春きては霞の衣幾重ね袖師のうらのなみやたつらむ
五二片岡の草葉を雪やそめつらむ消行くまゝに淺綠なる

百一番　左勝　有家朝臣　右　内大臣

五三山里は嵐にかをるまどの梅霞にむせぶ谷のうぐひす
五四春霞たてるやいつく花ならをまつ心よりこそ立始けれ

百二番　左勝　保季朝臣　右　忠良卿

五五霞たつ山のはまでは朧ろにて昇れば月に春風ぞふく
五六さきぬなり薫るに著し梅の花色こそみえね春の山風

百三番　左持　良平　右　兼宗卿

五七石上ふる野のをのゝ雨の中に濡ても萌ゆる春の若草
五八吹く風に片よりしけり鶯の笠やにぬふべき青柳の糸

百四番　左勝　具親　右　通光卿

五九もえ出る木芽春雨けふも猶ふるのゝ若菜まだ僅か也
六〇立よらぬ袖だに薫る梅花其ともみえぬ雪に仏縫なし

百五番　左　顯昭　右勝　釋阿

六一軒ちかき若木の梅の初花に今年ぞ我も春を知りぬる
六二詠めわびぬ誰かはとはむ山里の花待つ頃の春雨の内

百六番　左勝　女房　右　丹後

六三深き夜の哀れはしるや春の月しく物もなき有明の空
六四行くへなき雲路にきゆる雁音の聲さへかすむ春の曙

百七番　左勝　左大臣　右　越前

六五わたのはら雲に雁音浪に舟かすみてかへる春の夕暮
六六梅枝のあたら匂ひに袖ふれて獨片しくよはを重ぬる

百八番　左　前權僧正　右勝　定家朝臣

六七春ごとにかざして年ぞ積りぬるわが老隱せ梅の花笠
六八春や非ぬ宿を詫言に立出れど疎くも同じ霞む夜の月

百九番　左持　公繼卿　右　通具朝臣

六九三吉野のかすがの杜の梅花とる榊葉に香を交へけり
七〇寂さの繁さぞ増る淺茅生の庭は春雨ふるに附けても

百十番　左　公經卿　右勝　家隆朝臣

七一梅の花袖に匂ひの風こえて夢の枕にきゆるうぐひす
七二百千鳥たが袖ふれし古郷の軒端の梅のかを慕ふらむ

百十一番　左　季能卿　右勝　雅經

七三かざこしの嶺には春やにゝざらむ鏡の空に霞隔てゝ
七四白雲のたえまに靡く青柳のかづらき山に春風ぞふく

百十二番　左勝　宮内卿　右　寂蓮

七五うすくこきのべの綠の若草に跡までみゆる雪の村消

谷の戸をいでゝも雲に入にけり花に木傳ふ野べの鶯

百十三番　左　讃岐　右勝　家長

わぎもこが衣春雨ふるからに裾野の草ぞ色増りける

目から跡みし雪は消えはてゝ草たつ庭に春雨ぞふる

百十四番　左持　小侍従　右　三宮

年つめば果は老けり若菜こそ見し當時の形見也けれ

梅花あかぬ色香を幾しほか心にそめて春をへぬらむ

百十五番　左　隆信朝臣　右勝　内大臣

植しより春はと待ちしかひありて梅の葉末に鶯の聲

雨雨にこぬれがくれて鶯の聲うちしめる夕暮のそら

百十六番　左勝　有家朝臣　右　忠良卿

青柳の糸に玉ぬく白露のしらず幾世の春かへぬらむ

春霞たつた川原の河かぜにこずゑなみよる岸の青柳

百十七番　左勝　保季朝臣　右　兼宗卿

ゆきとけて山陰さゆるふるすより聲のみ春の谷の鶯

年をへてさかぬ例はなけれ共猶またるゝは櫻也けり

百十八番　左持　良平　右　通光卿

霞しく春の綠になりぬれば今一しほのときは木の杜

曙の哀はこれにしりそめつ軒端の梅に月をのこして

百十九番　左持　具親　右　釋阿

春風や梅の匂ひをさそふらむ行くへ定めぬ鶯のこゑ

幾年の春に心をつくしきぬ哀とおもへみよしのゝ花

百廿番　左　顯昭　右勝　俊成卿女

梅が香をよはの嵐の誘はずば闇の板間を爭で漏らまし

風かよふ寢覺の袖の花のかにかをる枕の春のよの夢

百廿一番　左勝　女房　右　越前

宵のまは仄めく月のしかすがに霞みも果ぬ春の大空

さき初る花は心を誘なへばうたて霞のたち隱すらむ

百廿二番　左勝　左大臣　右　定家朝臣

津國の難波の春の朝ぼらけ霞も浪もはてをしらばや

四阿屋のこやの假寢の旅霞しく〳〵ほさぬ春雨ぞふる

百廿三番　左勝　前僧正　右　通具朝臣

春の心長閑しとても何かせむ絶て櫻のなき世也せば

いつとなき霞の空は綠にて袖になからめの春雨ぞふる

百廿四番　左持　公繼卿　右　家隆朝臣

梅花をちの麓に咲きにけり匂ふに著しかざこしの山

思ふよりいかにせよとて梅花うたて匂を袖に貸らむ

百廿五番　左勝　公經卿　右　雅經

眺むれば闇はあやなし故郷に匂ひて過ぐる梅の下風

立ち返りみてもみまくの花盛誘はぬ風の打匂ひつゝ

百廿六番　左勝　季能卿　右　寂蓮

鶯はさても閑きけり春くれば花なき宿のいさゝ村竹

春くれば梢に花の浪こえてよしのゝ奥も末の松やま

百廿七番　左勝　宮内卿　右　家長

二月や雪ちる風に枝さえて咲出づる花や立止るらむ

春雨のふるの山田をきてみれば鳴の臥どに蛙なく也

百廿八番　左　讃岐　右勝　三宮

春の池の汀の柳うちはへて靡く下枝に鶯ぞ立つなる

うゑおきし若木の梅の初花に匂ひそめぬる園の内哉

百廿九番　左　小侍従　右勝　内大臣

色あればそれとはみてむ梅花枝に殘の雪消えずとも

かき連ぬ歸る越路に日は暮ぬ雲のいつくに宿を雁香

百三十番　左勝　隆信朝臣　右　忠良卿

今は我よはひも老いぬ鶯の笠にぬふてふ梅を翳さむ

山のはの雲より花に移りきて眺めくらせば霞む月影

百三十一番　左勝　有家朝臣　右　兼宗卿

津のくにやなにはのはるの色も皆一つに霞む曙の空

面影にこぞの櫻をさかせてぞ花まつ程は慰めにする

百三十二番　左持　保季朝臣　右　通光卿

をちの里通はぬ風を恨みても梅が香思ふ眺ばかりぞ

打靡く柳のいとのわきて又いかなる風に結ほるらむ

百三十三番　左　良平　右勝　釋阿

雁がねの歸る名殘を眺むれば心も越の空までぞ行く

白妙にゆふかけてけり榊葉に櫻咲き添ふ天のかぐ山

百三十四番　左持　具親　右　俊成卿女

消遺らぬ雪よりめぐむ若草の露しり初むる春雨の空

つれ〴〵の勝る霖は徒に春の物とてふればなりけり

百三十五番　左　顯昭　右勝　丹後

風ふかぬ君が御代とはしりながら心と靡く青柳の糸

歸來む秋をたのむの雁だにも鳴てぞ春は立別るなる

百三十六番　左　女房　右勝　定家朝臣

月よゝし夜よしと誰に告遣らむ花可惜しき春の古郷

待ちわびぬ心づくしの春霞花のいざよふ山のはの空

百三十七番　左持　左大臣　右　通具朝臣

更級や姨すて山のうす霞かすめる月に秋ぞこもれる

尋ね入る心の果を三吉野の山より深く花やしるらむ

百三十八番　左　前權僧正　右勝　家隆朝臣

櫻花まだみぬさきも三吉野の山のかひある嶺の白雲

月は猶かすみの下にこほれども汀に歸る志賀の浦波

百三十九番　左　公繼卿　右勝　雅經

春のうちに梅さくそのゝ玉柳匂を移せ風の便りに

山たかみ雲居の櫻雲とみて休らふ程に風や吹くらむ

百四十番　左勝　公經卿　右　寂蓮

霞み行く尾上の鐘の打つけに花の折まつ小初瀬の山

行止る所もあらじ木の本に過てぞ花は見べかりける

百四十一番　左　季能卿　右勝　家長

春雨のふるからをのをみ渡せば若葉さしそふ本柏哉

匂ひさへ花の鏡にうつるらしすべば水の懐しき哉

百四十二番　左　宮内卿　右勝　三宮

雪まわけまだうら若き綠哉草の僅かに春はなれども

梅がえの花のねぐらにあれはてゝ櫻にうつる鶯の聲

百四十三番　左　讃岐　右勝　内大臣

もゝしきや大宮人の玉かづらかけてぞ靡く青柳の糸

春雨の心ばそくも古郷は人くといとふ鳥のみぞなく

百四十四番　左勝　小侍従　右　忠良卿

且みても散らむ嘆きを思ふまに花故身をも碎く比哉

風薫る雪のみ深きよしの山雲とは花の空目なりけり

百四十五番　左　隆信朝臣　右勝　兼宗卿

梅花ちり行く程ぞしられぬる吹きくる風の薄き匂に

あたら夜の月と花との眺よりいとゞ身にしむ春の曙

百四十六番　左　有家朝臣　右勝　通光卿

小松原今一しほに色みえて小園の山も春めきにけり

名にたかき榊の花の色やさは大内山のみねのしら雲

百四十七番　左持　保季朝臣　右　釋阿

歸る雁そなたの雪に思出でよ花の梢に心とまらば

讃へてもいはむ方なし山櫻霞にかをる春のあけぼの

百四十八番　左　良平　右勝　俊成卿女

まれつる花なりけりな山櫻霞のうへに見ゆる白雲

あかなくに歸る雲居に春雨のふるは涙か雁ぞ鳴なる

百四十九番　左持　具親　右　丹後

すはの海や冬の名殘の薄氷消すはあり共頼べきかは

をく山の雪の梢もはれにけり都の樓いまやさくらむ

百五十番　左　顯昭　右勝　越前

よしの山みやこながらぞ入にける俤にたつ花の便に

二三日をへつゝ霞の末を眺れば雲になりゆく小泊瀬の山

千五百番歌合巻第三　春三　判者　釋阿

百五十一番　左勝　女房　右　通具朝臣

三三みよしのゝよしのゝ山の花盛くもより下の春の白雲

三四山櫻あかぬ旅寝の露分けて手折るたもとに有明の月

百五十二番　左勝　左大臣　右　家隆朝臣

三五三六山櫻いまやさくらむ陽炎のもゆる春べにふれる白雪

三七三八玉柳春の梢に聞くときはみどりの空にうぐひすの聲

百五十三番　左持　前權僧正　右　雅經

三九七香をだにと思ひし花の霞より色をも送る春の山かぜ

四〇八谷風や山も霞の隙ごとに又打ち出づる花のしらなみ

百五十四番　左勝　公繼卿　右　寂蓮

四一九夢くぞ朝ゐる雲に紛へつる花は匂ひのありける物を

四二〇花はみな枝に殘らず散りにけり下のみ薫る春の山風

百五十五番　左勝　公經卿　右　家長

四三一先だちて誰みよしのゝ山櫻しらぬ栞の跡つけてけり

四四二永き日も花みる頃は暮易く程なき夜半ぞ明し兼ける

百五十六番　左　季能卿　右勝　三宮

四五四花みむと思ひたつより通ひきて心に匂ふ春の山かぜ

四六四時しあれば雨に爭ふ櫻花遂にさきぬるみよしのゝ山

百五十七番　左勝　宮内卿　右　内大臣

四七五雲ならぬ花とは誰か三笠山霞める空に雪はふりつゝ

四八六春草を飛立つ雉子妻籠にけふな燒そと鳴にや有らむ

百五十八番　左勝　讃岐　右　忠良卿

四九七驚のしるべのみかは花の香に人をも誘へ宿のはる風

五〇八みねしらむ梢の空に影おちて花のくもるに有明の月

百五十九番　左持　小侍從　右　兼宗卿

五一九花をみて思ふ心の儘ならばちるに止りて斯は歎かじ

五二〇吉野山花とは誰かしらざらむたちな紛へそ蜂の白雲

百六十番　左　隆信朝臣　右勝　通光卿

五三一淺緑糸よりかくる玉柳ぬく白露の名にこそ有りけれ

五四二あだにやは麓の庵に眺むべき花より出づる嶺の月影

百六十一番　左持　有家朝臣　右　釋阿

五五三春雨のふる野の小笹よゝをへて更に緑の色增りけり

五六四君が代に春の櫻もみける身を谷に朽ぬと何思ひけむ

百六十二番　左　保季朝臣　右勝　俊成卿女

五七五面影を春の匂に先だて、枝にしられぬ花をみるかな

五八六すみれ草行く野を分てしも旅寝せじ露しく袖の形見計は

百六十三番　左持　良平　右　丹後

五九七白雲のかゝる高ねを始にて空より匂ふ山ざくらかな

六〇八ながめやる花はいづれぞ白雲のたつたの山の曙の空

百六十四番　左持　具親　右　越前

六一九徒に霞に夜半は更けにけり山のは遠く出づる月かげ

六二〇櫻花あかぬ色香をことしだに風に任すな春の山姫

百六十五番　左　顯昭　右勝　定家朝臣

六三一咲ぬとて尋ねてみれば白雲の紛ふも花の情ならずや

六四二櫻花さきぬやいまだ白雲のはるかに薫る小泊瀬の山

百六十六番　左勝　女房　右　家隆朝臣

六五三雁かへる嶺の霞のはれやのみ恨つきせぬ春のよの月

六六四春はまだ其方ともなくとぶ雁の花に匂へる夕暮の聲

百六十七番　左勝　左大臣　右　雅經

六七五誰をけふまつとはなしに山陰や花の雫に立ぞ濡ぬる

六八六山風の吹ぬるからに音羽川せき入れぬ花も瀧の白波

百六十八番　左勝　前權僧正　右　寂蓮

六九七掘植てみるは嬉しき花の木の移ろふにこそ習侘ぬれ

七〇八志賀の浦に花の小蓮こぎ分けて釣する蜑や袖匂らむ

百六十九番　左勝　公繼卿　右　家長

七一九いか計りまつも惜むも花ゆゑは人の心を三吉野の山

七二〇足曳の山鳥の尾の長き日にあかでも花を獨かもみる

百七十番　左勝　公經卿　右　三宮

七三一尋ね入る霞も深き花の香を誘ひて出づる山風のかぜ

七四二尋ねつる花に變らぬ色ながら後れぬものは嶺の白雲

百七十一番　左持　季能卿　右　内大臣

七五三山櫻且さきそむる梢こそ友まつ雪をみしこゝちすれ

七六四梅も梅我身もわが身宿もやど春や昔のとのみ詠めて

百七十二番　左　宮内卿　右勝　忠良卿

七七五花も雪も色はかはらじ歸る鴈都の梢こしのしらやま

七八六花や雪霞やけぶり時しらぬふじの高ねにさゆる春風

百七十三番　左勝　讃岐　右　兼宗卿

七九七咲ぬまは花とみよとや三吉野の山の白雪消難にする

八〇八くれぬ共暫しなつげそはつせ山花みる程の入相の鐘

百七十四番　左持　小侍從　右　通光卿

八一九つく〳〵と花に向ていざさらは散なむ後の俤にせむ

八二〇何と此のさても止らぬ花故に恨みなれたる春の山風

百七十五番　左持　隆信朝臣　右　釋阿

八三一尋ね入る花はそれとも白雲の隔つとみれば薫る山風

八四二今は我吉野の山に身を捨てむ春より後を問人もがな

百七十六番　左持　有家朝臣　右　俊成卿女

八五三鴈音の雲の衣のはる風にかへる空をや猶うらみまし

八六四故郷となりにしかども櫻さく春や昔のしがの花ぞの

百七十七番　左持　保季朝臣　右　丹後

八七五ひさ方の雲の上なる櫻花空にしらるゝ雪とこそみれ

八八六村消の雪かと見しや花ならむ一つになりぬ嶺の白雲

百七十九番　左持　具親　右　定家朝臣

八九七芳野山はなの盛になりにけり故郷匂ふ春のあけぼの

九〇八雲のなみ霞の波に紛へつゝ芳野の花の奥をみぬかな

百八十番　左　顯昭　右勝　通具朝臣

九一九遠近の花みる程に行きやらで歸さは著ぬ志賀の山越

九二九石上ふる野の櫻誰れ植ゑて春は忘れぬ形見なるらむ

百八十一番　左勝　女房　右　雅經

九三九歸る鴈霞のうちに聲はして物怨めしの春のけしきや

九四〇雲もうし嵐もつらし山櫻紛ふとすれば散果てにけり

百八十二番　左勝　左大臣　右　寂蓮

九五九春風は花と松とに吹替て散ぬも散ぬも身にしますやは

九六九さびしさも今一しほの色そへて軒の蔀に春雨ぞふる

百八十三番　左勝　前權僧正　右　家長

九七九春風の到り到らぬ際ぞなき咲るがちれば咲ざるも咲るも

九八九山風に花の波たつ三吉野の吉野のはるや鹽がまの浦

百八十四番　左　公繼卿　右勝　三宮

九九九跳れとも花をわきえぬ心さへ霞にまじえ春の山かな

〇〇吉野山峰の櫻の咲しより花によがれぬ旅寝をぞする

百八十五番　左　公經卿　右勝　内大臣

〇一ほの〳〵と花の横雲明けそめて櫻に白む三吉野の山

〇二花ちらぬ杜となさばやねぎ事をさのみ聞むやしろ尋て

百八十六番　左　季能卿　右勝　忠良卿

〇三花ぞみる道の芝草ふみ分けて芳野のみやのはるの曙

〇四花か雲かえぞ白浪の梢より落ちくる色や三吉野の瀧

百八十七番　左勝　宮内卿　右　兼宗卿

〇五花故にまれに宿とふ暮に又人くといとふ鳥の聲しも
〇六いとせめて花に心をつくせとや春の山風吹始めけむ
百八十八番　左持讃岐　右　通光卿
〇七あだなりと且三吉野の山櫻恨みても猶尋ね入るかな
〇八山里はさらでも稀にとふ人を思ひたえねる春雨の頃
百八十九番　左勝小侍従　右　釋阿
〇九風ふけば晴れぬる雲とみる程に籠につもる花の白雪
一〇しら山や雪猶深き越路には歸る鴈にや春をしるらむ
百九十番　左持隆信朝臣　右　俊成卿女
一一年をへて同じ櫻の木の本にこりずもつくす我心かな
一二山路をば送し月を賴にてそこともしらぬ花に暮しつ
百九十一番　左持有家朝臣　右　丹後
一三初瀬山檜原の霞紛ふらし思ひしよりもさける花かな
一四玉鉾の行くてに懸る山櫻我一人やはをらで過くべき
百九十二番　左　保季朝臣　右勝越前
一五道すがら花散來れば吉野山すゝ分くる袖に風薫る也
一六三吉野の外山を花や隔つらむ雲にまぢ吹く風の音哉
百九十三番　左持良平　右　定家朝臣
一七芳野山分けきて後にながむれば霞をこむる春の白雲
一八しるしらぬわかぬ霞の絶間より主あらはに薫る花哉
百九十四番　左　具親　右勝通具朝臣
一九花にあかぬ吉野の奥の篠枕いとはぬ月の雲隱れかな
二〇行返り花こそあだに思ふらめ幾世の人か志賀の山越
百九十五番　左勝顯昭　右　家隆朝臣
二一思ふ事なくてみるべき花盛心みだるゝはるの山かせ
二二散りなれし梢はつらし山櫻春しりそむる花を尋ねむ
百九十六番　左勝女房　右　寂蓮
二三よしの山雲にうつろふ花の色を綠の空に春風ぞふく
二四荒增る駒の氣色も著き哉野と成にける里のあたりは
百九十七番　左持左大臣　右　家長
二五葦鴨の下の氷は解けにしを上毛に花の雪ぞ降りしく
二六吹風の吹でも花は止らねど己とちるは庭にこそもれ
百九十八番　左勝前權僧正　右　三宮
二七人しれぬ花を霞に尋ぬれば己れよそなる三輪の山杉
二八古郷の庭の櫻に風ふけば軒のしのぶに雪かゝりつゝ
百九十九番　左持公繼卿　右　內大臣
二九あかなくに花の下ぶし日數へぬ却て宿や旅心ちせむ
三〇春毎に花も嘆や積るらむ散るを恨みぬ人しなければ

二百番　左勝公經卿　右　忠良卿
三一嵐吹く花の下蔭ふみ分けて臘月夜にとふひともなし
三二吉野の月をたのむの鴈音や花咲春もよると鳴らむ
二百一番　左　季能卿　右勝兼宗卿
三三玉づさにあらぬ霞を何と又翼にかけて歸るかりがね
三四綾なしや惜むによらぬ花故に幾度風を恨みきぬらむ
二百二番　左　宮內卿　右勝通光卿
三五わぎも子が葛城山の花ざかりはなれぬ色の嶺の白雲
三六歸るらむ行くへもしらぬ曙にたのむの鴈の雲深き聲
二百三番　左勝讃岐　右　釋阿
三七思寢の花を夢路に尋ねきて嵐にかへるうたゝねの床
三八御狩せし片野の冬やつらからむ春の山路に雉鳴なり
二百四番　左勝小侍従　右　俊成卿女
三九恨めども止らぬ春を慕ふとて花も心や空に散りけむ
四〇嶺越に散りくる花を知べにて恨みもあへぬ春の山風
二百五番　左持隆信朝臣　右　丹後
四一ちる花を浪かとみれば高砂の尾上も今朝は末の松山
四二吹く風を夢の中にも厭ふかな花に枕を結ぶよなゝ
二百六番　左勝有家朝臣　右　越前
四三葛城や高間の山の花盛くものよそなる雲をみるかな
四四花の色に移る心のいと無て我身世にふる詠やはする
二百七番　左　保季朝臣　右勝定家朝臣
四五音をのみ哀と聞きし松風に花の香うつす春の山ざと
四六あかざりし霞の衣たちこめて袖のなかなる花の面影
二百八番　左持良平　右　通具朝臣
四七山川の岩もと櫻かげみれば雪をぞあらふたきつ白波
四八秋風にこしぢ悔しき旅なれや霞たつやと歸る鴈がね
二百九番　左　具親　右勝家隆朝臣
四九春の夜のまだ明やらぬ山端に白むともなき花の橫雲
五〇けふみれば雲も櫻に埋れて霞みかねたる三吉野の山
二百十番　左勝顯昭　右　雅經
五一ちりまがふ花を雪かとみるからに風さへ白し春の曙
五二春の內は待つも惜むも思寢の花をのみ見る比の夢哉
二百十一番　左勝女房　右　家長
五三ちらばちれ好や吉野の山櫻吹迷ふ風はいふかひもなし
五四梢にはたえて櫻の渚なる波の花こそかたみなりけれ
二百十二番　左持左大臣　右　三宮
五五櫻花うつろはむとや山のはのうす紅に今朝は霞める

五六かきくもる遠のたかねの花盛消せぬ雪に春雨ぞふる
二百十三番　左持前權僧正　右　內大臣
五七惜めども止らぬ花の縁りとて恨果つへき春の上かは
五八飽ざりし花の名殘を詠めよと木間漏りくる春夜の月
二百十四番　左　公繼卿　右勝忠良卿
五九珍しく燕軒端にきなるれば霞がくれに鴈かへるなり
六〇なれにけり名殘よいかに山櫻風より後の春の日數を
二百十五番　左勝公經卿　右　兼宗卿
六一春風に散なば後をいかにせむ何と馴ぬる志賀の花園
六二春雨はのべの草葉の色よりも徒然增る物にぞ有ける
二百十六番　左　季能卿　右勝通光卿
六三遙々と雲路に歸る雁がねをいく霞せで詠めやるらむ
六四山川を任せてけりな小山田の苗代水に花のなみよる
二百十七番　左勝宮內卿　右　釋阿
六五時きぬと苗代水や任すらむ五百代小田に蛙なく也
六六哀にも空に囀るひばりかな芝生のすゑば思ふ物から
二百十八番　左持讃岐　右　俊成卿女
六七照もせず雲も懸らぬ春のよの月は庭こそ靜なりけれ
六八影きよき花の所は有明の月もえならず澄める空かな
二百十九番　左持小侍従　右　丹後
六九有ふれば人の心もうつろき世に目馴て花の散ぬるもよし
七〇櫻花又こむまでと契れどもうしやめたきは春の山風
二百廿番　左　隆信朝臣　右勝越前
七一尋こし山路は花を知べにてちる木の本や栖なるべき
七二いかにせむ分るもをしき眺かな花の折しも歸る雁音
二百廿一番　左持有家朝臣　右　定家朝臣
七三朝日影匂へる山の櫻花つれなく消えぬ雪かとぞみる
七四櫻花移ろふ春を許多へて身さへふりぬる淺茅生の宿
二百廿二番　左勝保季朝臣　右　通具朝臣
七五せきもあへず花吹きおろす嵐哉吉野の瀧の末匂ふ迄
七六春のよの心をわかぬ人はあらじ月と花との哀計りは
二百廿三番　左　良平　右勝家隆朝臣
七七尋來てしらぬ木の本無りけり花に馴行く三吉野の山
七八久かたの光のどかに櫻花ちらでぞ匂ふはるの山かせ
二百廿四番　左　具親　右　雅經
七九跡たえてなかめし雪の庭までは賴みし物を花の盛を
八〇忘れずば散なむ後も思出よ花見かてらの春のよの月
二百廿五番　左　顯昭　右勝寂蓮

一八越路には寂しきともあらじかし友引つれて歸る鴈音
二八なにとなく囀る山の鳥の音も物の哀は春のあけぼの

千五百番歌合巻第四　春四　判詞阿

二百廿六番　左勝女房　右　三宮

三八花は雪とふるの小山田返しても恨果てぬる春の夕風
四八かくしつゝ今一しほや增るらむ春雨そゝぐ浦の濱松
二百廿七番　左持左大臣　右　内大臣

五八明果てば戀しかるべき名殘哉花の影もる可惜夜の月
六八佗人の住むとはきけど足引の山のかひある岩躑躅哉
二百廿八番　左　前權僧正　右勝忠良卿

七八こゝらなく鳥の妬くや思ふ惜むに止る花ならなくに
八八山嵐に櫻流るゝ吉野川はやくも春のくれて行くかな
二百廿九番　左　公繼卿　右勝兼宗卿

九八歸る鴈越路に深き雪をみて春の空をやおぼめきぬ覽
〇九眺むればたなびく雲のたえまより心細くも歸る雁音
二百三十番　左　公經卿　右勝通光卿

一九春深く尋ねいるさの山のはに仄みし雲の色ぞ殘れる
二九紛ふとて厭ひし峰の白雲はちりてぞ花の形見也ける
二百三十一番　左持季能卿　右　釋阿

三九これにだにとふ人なしに住む宿を猶山深く呼子鳥哉
四九うらやまし苔代水をせく賤も心の程は任せこそすれ
二百三十二番　左勝宮内卿　右　後成卿女

五九庭は冬梢は夏の心ちして春にもあらず花ぞ散り行く
六九みよしのゝ野べの櫻もちる儘に風に亂るゝ嶺の白雲
二百三十三番　左持讃岐　右　丹後

七九春夜の短き程をいかにして八聲の鳥の空に知らむ
八九吉野山尋ねし花は散りはてゝ跡なき雲の跡をみる哉
二百三十四番　左　小侍從　右勝越前

九九誰を斯うはの空には呼子鳥粮めぬ人のいかゞ答へむ
〇〇春風は吹きにけらしな吉野山雲になみたつ夕暮の空
二百三十五番　左持隆信朝臣　右　定家朝臣

一〇風薫る花のしづくに袖ぬれて空なつかしき春雨の雲
二〇櫻色の庭の春風跡もなしとはゞぞ人の雪とだにみむ
二百三十六番　左持有家朝臣　右　通具朝臣

三〇吉野山梢に花のはれぬれば岩のかけぢをうづむ白雲
三〇みるまゝに高嶺の櫻雲消えて綠にすめる松の空かな
二百三十七番　左勝保季朝臣　右　家隆朝臣

四〇うづもるゝ花の梢に日數へて風よりはるゝ白川の里
二百三十八番　左　隆信朝臣　右勝通具朝臣

五〇雨灑ぐ色こそ春にあひにけれ人も分けこぬ庭の蓬生
一三ちり殘る青葉の山の櫻ばな風より後を尋ねざりせば
二百三十九番　左勝良平　右　雅經

二三さらぬだに臘にみゆる春の月ちりかひ曇る花の陰哉
三三花のちる山下風にふしわびて誰又あくる空を待らむ
二百四十番　左持顯昭　右　家長

四〇花の香も風こそよもに誘ふらめ心もしらぬ古郷の春
二百四十一番　左　顯昭　右勝家長

五〇待つ人に宿の春風ことづてよけふこそ櫻梢にもみめ
六〇花の散山の高嶺の霞まずば曇らぬ空の雪と見てまし
二百四十二番　左持顯昭　右　家長

七〇みよしのやたのむの雁の聲すなり花に名殘の春の曙
八〇今はとや雲をはなれてかりがねの霞にうつる曙の空
二百四十三番　左勝寂蓮　右　雅經

九〇あかで行く雁の涙や此ならむ雲に名殘の雨灑ぐなり
一〇心から妻戀すれや逢事の片山きゞすねにたてゝなく
二百四十四番　左　公繼卿　右勝通光卿

二〇都をばたのむの雁の振捨て己が越路によると鳴くも
二百四十一番　左勝女房　右　内大臣

三〇霞み行三月の空の山端をほの〴〵出づる十六夜の月
此右歌雨水共ニ無ニ判ノ之不審

二百四十二番　左持左大臣　右　思良卿

四〇うちなびめ春の三月の短夜をねもせで獨明す頃かな
一四住吉のまつ吹くかぜのさびしさも今一しほの春の曙
二百四十三番　左勝前權僧正　右　兼宗卿

二四古郷の花の白雪みにゆかむいざ駒なめて志賀の山越
三四草も木もいかに契て藤の花松にとしもは懸り初けむ
二百四十四番　左　公繼卿　右勝通光卿

四四苗代に宴るゝ賤が麻衣こなぎが花のするかひぞなき
五四杜若色に出でぞ隱れぬをそことも人に知せそめつる
二百四十五番　左　公經卿　右勝釋阿

六四つく〳〵と軒の玉水數そひてしのぶに曇る春雨の空
七四猶さへぞ位の山の喚子鳥ひかしの跡をたゝぬ程をば
二百四十六番　左　季能卿　右勝俊成卿女

八四駒なめてこせの春野を朝ゆけばをきが原に雉鳴也
九四高砂の松の綠もまがふまで尾上の風に花ぞ散りける
二百四十七番　左　宮内卿　右勝丹後

一〇四おしこめて朧月夜の春ならば霞の外を秋となかめじ
二四春風にしられぬ花や殘るらむ猶雲かゝる小泊瀬の山
二百四十八番　左勝讃岐　右　越前

三四ちれはてゝ我もかれにし古郷に又立返り菫をぞつむ
四四櫻さくひらの高嶺に風吹けば梢に續く志賀の浦なみ
二百四十九番　左持小侍從　右　定家朝臣

五四思へども聲はたてじと忍ぶるに淚しくも喚子鳥かな
六四花の香も風こそよもに誘ふらめ心もしらぬ古郷の春
二百五十番　左　隆信朝臣　右勝通具朝臣

七四ちり殘る青葉の山の櫻ばな風より後を尋ねざりせば
二百五十一番　左勝有家朝臣　右　家隆朝臣

八四さらぬだに臘にみゆる春の月ちりかひ曇る花の陰哉
九四花のちる山下風にふしわびて誰又あくる空を待らむ
二百五十二番　左勝保季朝臣　右　雅經

一五眞柴分くる交野のみのゝ朝ぼらけ霞の末に雉立つ也
二五里遠みいくのゝ末を見渡せば霞にかへす春の小田山
二百五十三番　左持良平　右　寂蓮

三五ちる折もふるに紛ひし花なれば又木の本に殘る泡雪
四五ちりにけり哀恨のたれなれば花の跡とふ春の山かせ
二百五十四番　左持具親　右　家長

五五よしさらば霸ちも誘へ春の風花も限とみむ人の爲
六五つく〳〵と霞に暮す野べの庵の筆に雲雀おつなり
二百五十五番　左　顯昭　右勝三宮

七五徒然の春日をいかでくらさまし心筆の花見ざりせば
八五さく花に心をとめてかりがねの歸ちわづらふ曙の聲
二百五十六番　左勝女房　右　忠良卿

九五芳野山てりもせぬよの月影に梢の花は雪とちりつゝ
一〇五水底に紫ふかきかげみえて波に色づくたごのうら藤
二百五十七番　左勝左大臣　右　兼宗卿

二〇五泊瀬山花に春風吹きはてゝ雲なき嶺にありあけの月
三〇五よしの河淀むまもなく行く水に峯は流れぬ岸の山吹
二百五十八番　左持前權僧正　右　通光卿

四〇五おくまでは尋ねぬ花をみせ顔に風に流るゝ山川の水
五〇五見渡せば春の限の色なれやたがすむ宿のいけの藤浪
二百五十九番　左勝公繼卿　右　釋阿

六〇五春山に駒もすさめぬ岩躑躅心のまゝに花さきにけり
七〇五松蔭にさける菫は藤の花散敷く庭とみえもするかな
二百六十番　左持公經卿　右　後成卿女

八〇五ひたるぶにたのむの雁のいかなれば歸雲路を三吉野の里
九〇五春くれて花や散らむ吉野川せゞの岩浪風薫るなり
二百六十一番　左持季能卿　右　丹後

一五天つ空雲の旗手に亂れつゝめも綾なりや遊ぶ糸ゆふ
二五爭むべき人なき井手の款冬を心安くや浪のをるらむ

二百六十二番　左持宮内卿　右　越前

松が枝におきつ鹽風春かけて霞になぎぬたごの浦波

谷河に花のしがらみかけてけり嶺の嵐や春の關もり

二百六十三番　左勝讃岐　右　定家朝臣

こぬ人を怨みやすらむ喚子鳥しほたれ山の夕暮の聲

止らぬは櫻計りを色に出てちりの紛ひにくるゝ春哉

二百六十四番　左持小侍從　右　通具朝臣

石上ふる野のさとをきてみれば獨葦の花さきにけり

吹き拂ふ木の下風に且きえて積らぬ庭の花の雪かな

二百六十五番　左　隆信朝臣　右勝家隆朝臣

さほ姫はなべて綠をそれ共葦に變る野べには色哉

さらに又猶面かげに櫻花やよひの雲のくれがたの空

二百六十六番　左持有家朝臣　右　雅經

尋ねつゝ小島が崎の山吹のいはぬ色しも知べ顏なる

くれぬともいかゞ見捨てゝ橘の尋ね小島の款冬の花

二百六十七番　左持保季朝臣　右　寂蓮

山深き嵐のそこに喚子鳥跡なき道をふみ分けよとや

吹く風の誘ひもはてぬ靑柳の枝にぞ春の色は殘れる

二百六十八番　左勝良平　右　家長

ちる花の忘れがたみの峰の雲そをだに殘せ春の山風

すみれ咲野をなつかしみ草枕結べる夢は一夜のみかは

二百六十九番　左　具親　右勝三宮

色ふかき藤浪なびきみる人の心をよするたごの浦風

いとせめて慕ふ心や鴈音の歸る雲居の列にそふらむ

二百七十番　左持顯昭　右　內大臣

山吹のうつろふ影を掬ぶ手の雫にあかぬねでの玉水

昔誰れねでの山吹うゑおきて花故里の名を殘すらむ

二百七十一番　左勝女房　右　兼宗卿

風ふけば花の白雲稍消てよる〳〵はるゝ三吉野の月

花故に惜むけふぞといふならば却て春や我を怨みむ

二百七十二番　左勝左大臣　右　通光卿

花ちりて木の本疎くなる儘に遠ざかり行く袖の移香

忍べどもいはぬ色なる山吹の花に戀しきねでの古郷

二百七十三番　左勝前權僧正　右　釋阿

立返りみれどもあかぬ藤波は過ぐる心に懸る也けり

春くれぬ今やさくらむ蛙なく神なび川の山ぶきの花

二百七十四番　左勝公繼卿　右　俊成卿女

大方の春の日影も長閑くて時にぞあへる藤生のゝ花

くれぬとも猶春風は吹き通へ吉野の奥の花の青葉に

二百七十五番　左持公經卿　右　丹後

立ちかへり猶古郷にすみさく雛の暮に春風ぞふく

懷しき色のゆかりと思ふにもみれば心にかゝる藤波

二百七十六番　左持季能卿　右　越前

色しらぬ蜑もや目には立てつ覽雲に紛へるたごの浦藤

春深み井手の山吹ちる儘に偏に夏になるかとぞみる

二百七十七番　右勝宮内卿　右　定家朝臣

櫻花ちりのまがひに暮なゝむ歸らば春の道紛ふがに

庭の面はのらと成ぬる古郷のまやの餘に雲雀おつ也

吉野川たぎつ岩浪せきもあへず早く過行く花の頃哉

二百七十八番　左持讃岐　右　通具朝臣

今はとて春の有明にちる花や月にもをしき嶺の白雲

二百七十九番　左持小侍從　右　家隆朝臣

紫の雲居にみゆる藤のはないつか心の松にかゝらむ

鳴きとむる花かとぞ思ふ鶯の歸るふるすの谷の白雲

二百八十番　左勝隆信朝臣　右　雅經

春といへは今はの心つくばねの峰を遙に歸る雁がね

移り行く春をばたごの浦も忘れずかけよ岸の藤浪

二百八十一番　左　有家朝臣　右勝寂蓮

わぎも子が紅染の岩躑躅いはで千入の色ぞみえける

思ひたつ鳥は古巢も賴むらむ馴れぬる花の跡の夕暮

二百八十二番　左勝保季朝臣　右　家長

曙におもひなれたる春なれど山の端かすむ夕暮の空

あとしのぶ昔みかはの杜若涙は今もふりはてにけり

二百八十三番　左持良平　右　三宮

をしきかな彌生のそらに花ちりて梢にすさむ鶯の聲

水むすぶ岸の山吹さきしより底さへ匂ふねでの玉河

二百八十四番　左持具親　右　內大臣

心あれや神なび河に鳴くかはづ春も移ろふ山吹の花

花散りぬ何かは春も惜からむ花故にこそ春を待しか

二百八十五番　左　顯昭　右勝忠良卿

葉がへせぬ老木の松に色めくや若紫のふぢなみの花

花になれし名殘を雲に眺むれば三月の暮の春雨の空

二百八十六番　左勝女房　右　通光卿

古の春さへけふはつらき哉くるとていかに歸初けむ

さ夜ふくる鐘の音には行春を慕ふ心も盡果てにけり

二百八十七番　左勝左大臣　右　釋阿

手に掬ぶ岩井の水の飽でのみ春に別るゝ志賀の山越

惜むとて春は止らぬ物故に卯月の空は厭ふとやみむ

二百八十八番　左勝前權僧正　右　俊成卿女

暮ぬれど花の下にも宿かれば日數計りぞ春に別るゝ

猶わきて時こそ有りけれ霞たつ夕の空も春くるゝ程

二百八十九番　左　公經卿　右勝丹後

行く春よ空の景色をつく〴〵と心にとめて眺む計ぞ

其方へは歸らぬ春と知乍らくるればつらき西の山端

二百九十番　左勝公經卿　右　越前

暮ぬれば春のみをしき名殘かは馴にし鳥も雲に入也

歸りなば春のみをしき名殘かは馴にし鳥も雲に入也

暮はつる春の行方も白雲の眺めや遙る氣色なるらむ

二百九十一番　左　季能卿　右勝定家朝臣

四方の山けふを限と霞ませて覺束なみの春の行方や

けふのみと強ても折じ藤花咲ける夏の色ならぬかは

二百九十二番　左持宮内卿　右　通具朝臣

花もなし人めもしらぬ柴の戸も遑に春のくるゝけふこそ

行へなく果なき物は暮れて行く春の雲路の泊也けり

二百九十三番　左持讃岐　右　家隆朝臣

枝にちる花こそあらめ鶯のねさへ枯行く春の暮かな

三吉野の大河のべの藤浪の春も深しと色にみすらむ

二百九十四番　左勝小侍從　右　雅經

ちるとみる花もねに社歸るなれ過行春の行へ知ばや

限あれば今夜も既に更にけり暮難かりし春の日數の

二百九十五番　左持隆信朝臣　右　寂蓮

濟寄せよ難波わたりに舟とめて今宵計の春を眺めむ

東路や春の行へを今夜より夢にもつげようつの山踏

二百九十六番　左　有家朝臣　右　家長

名殘なくけふ社春は筑波嶺の木の本毎に花も降にき

ちる花に嘆きなれぬる心こそ春の別もたへ忍びけれ

二百九十七番　左　保季朝臣　右勝三宮

今日暮ぬいづくへ春の行て又伸ふ花を外にみすらむ

ながめ遣る心をやがて誘ひつゝ雲のふる巢に歸る鶯

二百九十八番　左持良平　右　內大臣

行春の別はけふに鳴門より船いでしてもいかに尋ねむ

春の色もけふを限の夕づく日さしもや藤のうら紫に

二百九十九番　左　具親　右勝忠良卿

花もちり鳥も古巢に歸りなば惜かるべくもなき別哉

行へなき眺ばかりを名殘にて雲の旗手に春ぞ暮ぬる

三百番　左　顯昭　右勝　兼宗卿

〇三かへる春思ひやるこそ苦しけれ勿來の關の夕暮の空

一一郭公きなかむ事を思はずば暮ぬる春に爭てたへまし

千五百番歌合卷第五　夏二　無判　判者土御門内大臣　雖有勒定漏去畢

三百一番　左　女房　右　釋阿

三三春山の霞の衣ぬぎすてゝ今朝はみどりの夏の明ぼの

三四衣こそかふとも更め春の色に染し心はいつか移らむ

三百二番　左　左大臣　右　俊成卿女

三五三島江に茂果てぬる蘆のねの一夜は春を隔來にけり

三六春の色を留めがたみの夏衣立日も今日に成にける哉

三百三番　左　前權僧正　右　丹後

三七夏にさく池の藤なみ色に出て山郭公なくをまつかな

三八けふよりは心さへこそ變りぬれ昨日は待し郭公かは

三百四番　左　公繼卿　右　越前

三九形見とやかべに背くる灯のわづかに殘る春の影かな

四〇夏衣急ぎかへつるかひもなくたち重ねたる花の面影

三百五番　左　公經卿　右　定家朝臣

四一思はずよ蟬の羽衣たち替て一夜に春を忘るべしとは

四二郭公まつに心のうつるより袖にとまらぬ春の色かな

三百六番　左　季能卿　右　通具朝臣

四三花にそむ心や薄くなりぬらむ急ぎたゝるゝ蟬の羽衣

四四暮ていにし春の形見とけふみれば花の袂に露ぞまだひぬ

三百七番　左　宮内卿　右　家隆朝臣

四五けふこそあれ春は霞も立田山綠をこめて過ぎし物也

四六今はよも花は嵐の夏山に青葉まじりのみねのしら雲

三百八番　左　讃岐　右　雅經

四七神まつる卯月の花もさきにけり山郭公夕かけてなけ

四八袖の色も移りにけりな夏衣春はくれぬと詠せしまに

三百九番　左　小侍從　右　寂蓮

四九昨日迄厭ひし風をまつにこそ定なき世の程も知るれ

五〇野べみれば霞の袖も引きかへて綠は草の袂なりけり

三百十番　左　隆信朝臣　右　家長

五一〇心には春の名殘を怨みてもかひなき袖の一重なる覽

五二一春の色のなごりも更に夏たてば翠にかふる衣手の森

三百十一番　左　有家朝臣　右　三宮

五三夏ごろも春の形見を立田山秋は紅葉の色はそむとも

五四脫換ふる衣の袖に知れけりまだうら馴ぬ夏の氣色は

三百十二番　左　保季朝臣　右　内大臣

五五〇心からけふぬぎかへて夏衣恨を春になほのこすらむ

五六神祭る卯月になれば卯花の垣根もをみの衣きてけり

三百十三番　左　良平　右　忠良卿

五七けふよりは春をば夏に立ちかへて花の袂は蟬の羽衣

五八けさよりは花ともみえず夏衣立田の山の峰のしら雲

三百十四番　左　具親　右　兼宗卿

五九空蟬の羽におく此れや袖の露花の名殘を忍び〳〵に

六〇限あらむ春こそあらめ花の色を心とかふる夏衣かな

三百十五番　左　顯昭　右　通光卿

六一〇卯花を折違へても思ふかな雪ふる里に我やきぬらむ

六二立替ふる衣に社は思知れけふより春をよそになる共

三百十六番　左　女房　右　俊成卿女

六三夏の空くもれるよはの卯の花の月を宿せる玉河の里

六四卯花のさきぬる時は夏山の木蔭曇らぬ夕づくよかな

三百十七番　左　左大臣　右　丹後

六五鶯のひとりかへれなをく山に心あるべきおそ櫻かな

六六今朝きなけ夏のかきねの鶯も暮れにし春の忘形見に

三百十八番　左　前權僧正　右　越前

六七とめくれど春なき山の柏より今は厭はぬ風渡るなり

六八故郷の卯花月夜きてみればねやの板まをもらぬ計ぞ

三百十九番　左　公繼卿　右　定家朝臣

六九夏きぬと更る衣は着馴にし春の形見をたつにぞ有ける

七〇待つとせし人の爲には詠めねど繁る夏草道もなき迄

三百二十番　左　公經卿　右　通具朝臣

七一〇卯花のかきねほのめく夕づくよいつ有明の久方の空

七二さきぬればまだき有明の光かな卯の花山の曉のかげ

三百廿一番　左　季能卿　右　家隆朝臣

七三村雨に露置きわたす卯花のかきねつゞきや玉河の里

七四入れる月に氷きえ行く木間より打出づる浪や谷の卯花

三百廿二番　左　宮内卿　右　雅經

七五〇卯花を離にうゑて雨のよも月見顏なるをのゝさと人

七六卯花や者をへだつる垣根迄殘りはてたる雪の村消

三百廿三番　左　讃岐　右　寂蓮

七七〇郭公しのぶる聲のすが原や伏見の暮の夢かうつゝか

七八時鳥まだ打ちとけぬ忍音に木の下くらき夏のよの月

七九卯花や汀をかけてさきぬらむ浪よせまさる玉河の里

八〇千早ふる神代をかけて葵草君に二葉の蔭やそふらむ

三百廿四番　左　小侍從　右　家長

八一葵草頼をかくる諸人のしるしはいつか御諚なるべき

八二忘ては冬かとぞ思ふ卯花の雪ふみ分くるをのゝ通路

三百廿五番　左　隆信朝臣　右　三宮

八三〇山賤の賴む計のうつ木垣花みむとしは植ずや有けむ

八四いつしかと山時鳥まつとや春を忘るゝ始めなるらむ

三百廿六番　左　有家朝臣　右　内大臣

八五神代より年に一たび葵草逢ふ日稀なる挿頭なりけり

八六橘の花ちるさとをあくがれて山時鳥なごやおとせぬ

三百廿七番　左　保季朝臣　右　忠良卿

八七卯花の變らぬ色を名殘にていまるもいらぬも有明の月

八八忍びねをいづくに鳴きて時鳥卯花垣に猶またるらむ

三百廿八番　左　良平　右　兼宗卿

八九玉河の岸の卯花咲きぬれば汀にしらぬ浪ぞたちける

九〇幾たびかけふのみあれに葵草思ふも久しみづ垣の內

三百廿九番　左　具親　右　通光卿

九一卯花のさける垣根や此ならむそながら非ぬ有明の月

九二時鳥待につけてぞ夏のよをねぬにあけぬと思知ぬる

三百卅番　左　顯昭　右　釋阿

九三ぬれ衣ほすかとみれば白妙の卯花さけるあまの袖垣

九四卯花の垣根の露に宿りきて春忘れよと夕づくよかな

三百卅一番　左　女房　右　丹後

九五ほとゝぎす心してなけ橘のはなちる里の五月雨の空

九六木綿襷かけてぞ待ちし神祭る卯月は夏の始と思へば

三百卅二番　左　左大臣　右　越前

九七有明のつれなく見えし月は出ぬ山時鳥待夜ながらに

九八思ひねのまくらになれて時鳥うつゝも夢の一聲の空

三百卅三番　左　前權僧正　右　定家朝臣

九九よはにきて山郭公なのるなり旅のやどかせ橘のはな

一〇〇時しらぬ里は玉川いつとてか夏のかきねを埋む白雪

三百卅四番　左　公繼卿　右　通具朝臣

一〇一幾の男が圍ひませたる垣根こそ卯花月の曇なりけれ

一〇二ともしけき澤の螢は仄みえて曇るもしらぬ鳥の一聲

三百卅五番　左　公經卿　右　家隆朝臣

一〇三郭公しのぶる聲のすが原や伏見の暮の夢かうつゝか

一〇四千早ふる神代をかけて葵草君に二葉の蔭やそふらむ

三百卅六番　左　季能卿　右　雅經

一〇五〇しらざりき卯花月夜うちしらみはるより後も曙の空

三〇花は春散りにし峯に哀てふとをあまたにやらぬ白雲
三百卅七番　左　宮内卿　右　寂蓮
三一郭公初音をとこそ思へどもまたずしもなし山端の月
三二里なれぬ聲を定たのむ郭公み山にふかき宿の夕ぐれ
三百卅八番　左　讃岐　右　家長
三三郭公夜ふかき聲は諸共にねざめぬ人もうらめしき哉
三四鶯のいりにし跡の雲路より待出づる時の鳥も鳴くも
三百卅九番　左　小侍従　右　三宮
三五大江山急き生野の道にしもことをかたらふ時鳥かな
三六春過ぎて猶み山べを尋ねみむ嵐に殘る花はありやと
三百四十番　左　隆信朝臣　右　内大臣
三七若葉さす君が光に葵草よろづ代かけて神やうゑけむ
三八五月雨にあふさか山の郭公關屋に暫し雨やどりせよ
三百四十一番　左　有家朝臣　右　忠良卿
三九郭公まつ夜空しく明ぬなり木綿附鳥の聲ばかりして
四〇浪やたつ雪やつもると卯花のさき紛へたる玉河の里
三百四十二番　左　保季朝臣　右　兼宗卿
四一むら雨ぞ先づ音づるゝ時鳥待つ夕暮の雲のはたてに
四二郭公まつにはよらぬ物ぞとも中々さらば聞も果ばや
三百四十三番　左　良平　右　通光卿
四三郭公山のいづくにうちはぶき鶯かへる頃をまちけむ
四四わきかねつ夢現とも時鳥それかあらぬか夜はの一聲
三百四十四番　左　具親　右　釋阿
四五月もをし初音も遲し郭公山のあなたに住身ともがな
四六夏も猶心はつきぬ柴陽花のよひらの露に月も住けり
三百四十五番　左　顯昭　右　俊成卿女
四七槇の戸を月にさゝでぞ晝も又敲く水雞は有けりと知
四八人しれぬねには盡さで時鳥待つよの月の影に語らへ
三百四十六番　左　女房　右　越前
四九まだ宵の月まつとても明に逸短き夢の結ぶともなく
五〇一聲はきくもつらしと郭公怨果ねば明けぞしにける
三百四十七番　左　左大臣　右　定家朝臣
五一すまの浦の浪に折はへ降雨に鹽垂衣いかにほさまし
五二あふひ草かりねの野べに郭公曉かけて誰を間ふらむ
三百四十八番　左　前權僧正　右　通具朝臣
五三時鳥逢坂こえて尋ぬれば今ぞおとはの山に鳴くなる
五四忍音の哀しらるゝうたゝねに語らふよひの郭公かな
三百四十九番　左　公繼卿　右　家隆朝臣
五五草枕菖蒲を結ぶ今夜こそ淀の爨らぬかりねなりけり
五六うちつけにそれかとぞきく時鳥人まつ山に忍音の聲
三百五十番　左　公經卿　右　雅經
五七名殘まで忍びぞあへぬ霍公深山の庵の出でがての聲
五八尋ねばや五月こずとも郭公しのぶの山のおくの一聲
三百五十一番　左　季能卿　右　寂蓮
五九時鳥かよひそむれば卯の花のかきねうかるゝ鶯の聲
六〇時鳥まつ夜ふけ行く一聲もあまり程ふる五月雨の空
三百五十二番　左　宮内卿　右　家長
六一天雲のよそにもなるか時鳥流石に聲はたえぬ物から
六二聞きそめしたゞ一聲に時鳥幾短夜をあかしきぬらむ
三百五十三番　左　讃岐　右　三宮
六三手折りつる花橘の香をしめてわが手枕にをしき袖哉
六四卯花のかきねつゞきの郭公月影分くるよはの忍びね
三百五十四番　左　小侍従　右　内大臣
六五一聲はみはてぬ夢の心ちしてねてかさめてか山郭公
三百五十五番　左　隆信朝臣　右　忠良卿
六六長きねを結ぶあやめの枕にも猶程なきは夏のよの夢
六七こゝろこそ行へもしらぬ時鳥なくや夕の一こゑの空
三百五十六番　左　有家朝臣　右　兼宗卿
六八猶またむ鳴でもやまじ時鳥こぞもならしの岡の一聲
六九名にたちし春にも勝る哀かなほとゝぎすなく曙の空
三百五十七番　左　保季朝臣　右　通光卿
七〇郭公いつかわすれむ東路やすがの荒野のよはの一聲
七一時鳥しばしはなどか在明の月も夜深き空のけしきに
三百五十八番　左　良平　右　釋阿
七二夏の夜も花橘の薫るかに闇は綾なき物にぞ有りける
七三忍び妻待つにぞ似たる郭公語らふ聲はなれぬ物ゆゑ
三百五十九番　左　具親　右　俊成卿女
七四郭公まつも心やかはるらむ花立花にしのびねぞなく
七五時鳥まつ夕ぐれの橘に風さへいかに吹きてすぐらむ
三百六十番　左　顯昭　右　丹後
七六誰も皆賴をかくるみあれ山神の惠にあふひとをしれ
七七時鳥なかぬ限は卯花をさかえぬ垣根の雪かとぞみる
三百六十一番　左　女房　右　定家朝臣
七八夕づくよ暫し宿れる山の井のあかぬ光の水に涼しき
七九等閑に山時鳥鳴き捨てゝわれしもとまる森の下かげ
三百六十二番　左　左大臣　右　通光卿
八〇草枕菖蒲を結ぶ今夜こそ淀の爨らぬかりねなりけり
八一うちつけにそれかとぞきく時鳥人まつ山に忍音の聲
三百五十番　左　公經卿　右　雅經
八二名殘まで忍びぞあへぬ霍公深山の庵の出でがての聲
八三尋ねばや五月こずとも郭公しのぶの山のおくの一聲
三百五十一番　左　季能卿　右　寂蓮
八四時鳥かよひそむれば卯の花のかきねうかるゝ鶯の聲
八五時鳥まつ夜ふけ行く一聲もあまり程ふる五月雨の空
三百五十二番　左　宮内卿　右　家長
八六天雲のよそにもなるか時鳥流石に聲はたえぬ物から
八七聞きそめしたゞ一聲に時鳥幾短夜をあかしきぬらむ
三百五十三番　左　讃岐　右　三宮
八八手折りつる花橘の香をしめてわが手枕にをしき袖哉
八九卯花のかきねつゞきの郭公月影分くるよはの忍びね
三百五十四番　左　小侍従　右　内大臣
九〇一聲はみはてぬ夢の心ちしてねてかさめてか山郭公
三百五十五番　左　隆信朝臣　右　忠良卿
九一長きねを結ぶあやめの枕にも猶程なきは夏のよの夢
九二こゝろこそ行へもしらぬ時鳥なくや夕の一こゑの空
三百五十六番　左　有家朝臣　右　兼宗卿
九三猶またむ鳴でもやまじ時鳥こぞもならしの岡の一聲
九四名にたちし春にも勝る哀かなほとゝぎすなく曙の空
三百五十七番　左　保季朝臣　右　通光卿
九五郭公いつかわすれむ東路やすがの荒野のよはの一聲
九六時鳥しばしはなどか在明の月も夜深き空のけしきに
三百五十八番　左　良平　右　釋阿
九七夏の夜も花橘の薫るかに闇は綾なき物にぞ有りける
九八忍び妻待つにぞ似たる郭公語らふ聲はなれぬ物ゆゑ
三百五十九番　左　具親　右　俊成卿女
九九郭公まつも心やかはるらむ花立花にしのびねぞなく
一〇〇時鳥まつ夕ぐれの橘に風さへいかに吹きてすぐらむ
三百六十番　左　顯昭　右　丹後
一〇一誰も皆賴をかくるみあれ山神の惠にあふひとをしれ
一〇二時鳥なかぬ限は卯花をさかえぬ垣根の雪かとぞみる
三百六十一番　左　女房　右　定家朝臣
一〇三夕づくよ暫し宿れる山の井のあかぬ光の水に涼しき
一〇四等閑に山時鳥鳴き捨てゝわれしもとまる森の下かげ
三百六十二番　左　左大臣　右　通光卿
一〇五時しあれば花ちる里の軒の雨に己がさ月の鳥の一聲
一〇六露かけて拂ふ袂にちりぬべし垣根分け行く宵の卯花
三百六十三番　左　前權僧正　右　家隆朝臣
一〇七幾里を語らひすてゝ郭公今わが宿のはつねなるらむ
一〇八かきくもる庭の梢とみる程に軒ち綠に菖蒲をぞふく
三百六十四番　左　公繼卿　右　雅經
一〇九足曳の山下水を引かけしすそわの田ねに早苗とる也
一一〇算ふれば二夜許多の郭公まつ夜增れる眺せよとや
三百六十五番　左　公經卿　右　寂蓮
一一一郭公なほうとまれぬ心かな汝がなく里のよその夕暮
一一二よそに又こゝろなわけそ時鳥人まつ山の夜はの一聲
三百六十六番　左　季能卿　右　家長
一一三嬉しさの類ひなきかな郭公獨は聞かぬ初音なれども
一一四明果つる名殘よいかに時鳥月にいざよふ山のはの聲
三百六十七番　左　宮内卿　右　三宮
一一五その程と眺むれば又時鳥おもはぬかたのそらの一聲
一一六待侘びぬ宿やかへまし時鳥同じ都もわきて鳴くなり
三百六十八番　左　讃岐　右　内大臣
一一七引兼ねし山田の水を梅雨にあらぬ方にも任せつる哉
一一八けふだにも結ぶ蓬の人數にいれ菖蒲の音をもなげとや
三百六十九番　左　小侍従　右　忠良卿
一一九菖蒲草あさかの沼に引つれど思ふ計のねこそ難けれ
一二〇なけやなほ己が五月ぞ時鳥誰故ならぬよはの寢覺を
三百七十番　左　隆信朝臣　右　兼宗卿
一二一菖蒲草けふ苟且にふきつれば惹ぞ軒のあるじ類なる
一二二郭公をりしりがほにきなく也花立花のにほふ夕ぐれ
三百七十一番　左　有家朝臣　右　通光卿
一二三聲よりもすがたやしのぶ郭公小倉の山の雲になく也
一二四菖蒲ふくけふともわきてみえぬ哉さらでも紫る草の庵は
三百七十二番　左　保季朝臣　右　釋阿
一二五すぎぬなり信太の森の郭公たえぬ雫を袖にのこして
一二六時鳥五月の雲に契りおきて人の心をそらになすらむ
三百七十三番　左　良平　右　俊成卿女
一二七年毎にふける菖蒲のねをとめば軒や淺香の沼と成なむ
一二八夏も猶哀れしらする妻とてや惹の軒に菖蒲ふくらむ
三百七十四番　左　具親　右　丹後
一二九思知りぬ雲の幾重を隔つとも人をばとはむ梅雨の頃

九七郭公こぞの古聲今さらになにかはしのぶ己が五月を

三百七十五番　左　顯昭　右　越前

〇八郭公尋ねかねたる怨して歸ゆく人めやはづかしの森

一九郭公なのればまづぞ忘られける彼黄昏時の古の空

本云此登内大臣通親公例有也子ノ時不逢難歟云云

千五百番歌合卷第六　夏二　無判　土御門内大臣雖有勅定難去畢

三百七十六番　左　女房　右　通光卿

二〇立寄らば涼くやあると掬ぶ手の雫に濁る井出の玉水

二一行く末をたれしのべとて夕風に契りかおかむ宿の橘

三百七十七番　左　左大臣　右　家隆朝臣

二二とお鳥のあすかの里を時鳥昔の聲になほや鳴くらむ

二三軒端もる月の光に薫るよはなを橘にあきかせぞふく

三百七十八番　左　前權僧正　右　雅經

二四紅のふり出てぞなく時鳥もみぢの山にあらぬ物ゆゑ

二五郭公ねざめざりせばと計に思ひもあへず過ぐる一聲

三百七十九番　左　公經卿　右　寂蓮

二六飛鳥川せゞの石橋水こえて道たど〳〵し五月雨の頃

二七五月雨にあさちが末は浪きえて又埋もるゝ庭の遣水

三百八十番　左　公經卿　右　家長

二八さらばよし心をかへて時鳥きなかぬ空をまち試みよ

二九むこ河に跡も留めぬかはよ鳥堰杭も見えぬ梅雨の頃

三百八十一番　左　季能卿　右　三宮

三〇五月雨に露さへ添ふる笹枕短き夜をも明しかねけり

三一郭公まちねのとこの板まより枕におつる夜はの一聲

三百八十二番　左　宮内卿　右　内大臣

三二けふと云へば汀の菖蒲たち乍ら末を片しく鄙の夕暮

三三涼むべき清水尋ねて行く道の野中の草を先結びつる

三四菖蒲ふる軒の菖蒲も袖ほてしのぶになる、蓬生の宿

三百八十三番　左　讃岐　右　忠良卿

三五五月雨の雫に濁る山の井のあかで過ぎぬる杜鵑かな

三百八十四番　左　小侍從　右　兼宗卿

三六よそへけむ昔の人をみるに似て露に濡たる撫子の花

三七郭公雲居遙に鳴きゆくは月のみやこの人もきけとや

三百八十五番　左　隆信朝臣　右　通光卿

〇〇一方にまたましものを郭公すぐる雲路も跡を定めば

一〇五月雨はけふをまちけり早晩と菖蒲に傳ふ軒の玉水

三百八十六番　左　有家朝臣　右　釋阿

一一五月雨に山郭公音づれて軒端のあやめ風薫るなり

一二夏のよの長くもあらば時鳥今一聲もまたましものを

三百八十七番　左　保季朝臣　右　俊成卿女

一三五月雨に小田の水口せきも敢ず浪こす袖に早苗取也

一四杜鵑鳴く有明の空はれていづくの露の袖にちるらむ

三百八十八番　左　良平　右　丹後

一五杜鵑たづねくらせる木の本にこたふる物は峰の松風

一六蘆葉にけふの菖蒲を菅添て幾重に成ぬこやの八重菅

三百八十九番　左　具親　右　越前

一七津の國の蘆の丸屋の梅雨に隙こそなけれ雲の八重菅

一八杜鵑言傳てむ迄なけれ共やよやまてとは云はし物を

三百九十番　左　顯昭　右　定家朝臣

一九音無の山時鳥いつよりか袋になくとは人に知られし

二〇夕暮はなくね空なる郭公心のかよふやどやしるらむ

三百九十一番　左　女房　右　家隆朝臣

二一心あてにきかばやきかむ時鳥雲路に迷ふ峰の一こゑ

二二時も時それかあらぬか時鳥こぞの五月の黄昏のそら

三百九十二番　左　左大臣　右　雅經

二三鵲の雲のかけはし程やなき夏の夜わたる山のはの月

二四橘の匂はいまぞほとゝぎすなかばなくべき夕暮の空

三百九十三番　左　前權僧正　右　寂蓮

二五郭公涙はなれに聲は我に互にかしていくよへぬらむ

二六五月雨の空のみ夏はくもるかは月を眺めし池の浮草

三百九十四番　左　公繼卿　右　家長

二七五月雨にゆけの河原の埋木も顯れてこそ流來にけれ

二八明るまもなくるゝもしらぬ空の雲軒迄とづる梅雨の山

三百九十五番　左　公經卿　右　三宮

二九郭公哀も深く住むやまに杉のあみ戸のあけくれの聲

三〇さきにけむ花はまだきの夏草に先一色の露結びけり

三百九十六番　左　季能卿　右　内大臣

三一照射すと山の小雨に立侘びて哀にもうき袖も濡けり

三二梅雨はみかさもえ耘さし敢ぬ木下露のかゝる繁さに

三百九十七番　左　宮内卿　右　忠良卿

三三宿や非ぬ花や五月の花ならぬ山時鳥よそにのみして

三四橘の昔に薫る袖に又けふのあやめもねはかゝりけり

三百九十八番　左　讃岐　右　兼宗卿

三五夏蟲のともしすてたる光さへ殘りてあくる東雲の空

三六常とはに鳴くとも人やあかざらむさて試みよ山郭公

三百九十九番　左　小侍從　右　通光卿

三七五月雨に水やこゆらむ澤田河袖つく計淺かりしかど

三八早苗とるけふ俤に立ちそめて稻葉もそよの秋の初風

四百番　左　隆信朝臣　右　釋阿

三九一聲の後はうらめし時鳥きく心ちせぬ時しなければ

四〇よそへても昔は今はかひもなし花橘の袖のかもがな

四百一番　左　有家朝臣　右　俊成卿女

四一此頃は月をまつべき山のはを幾夜隔てつ五月雨の雲

四二露けさも哀とぞ思ふ風靡くしげみにしげゝ常夏の花

四百二番　左　保季朝臣　右　丹後

四三五月闇幾夜の雨になれぬらむいでいる月の影を忘て

四四五月雨に庭のさゆるは水越て入ぬる磯の草かとぞ見

四百三番　左　良平　右　越前

四五夏刈の玉江の蘆やくちぬらむ浪に鳥ゐる五月雨の頃

四六初聲に限らざりけり郭公聞きての後も猶ぞまたるゝ

四百四番　左　具親　右　定家朝臣

四七ひと聲のあかぬなごりは杜鵑恨みてあかす東雲の月

四八まだれつゝ年に稀なる郭公皐月ばかりの聲な惜みそ

四百五番　左　顯昭　右　通具朝臣

四九いまはとていなばの山の蜀魂忘れ形見の一聲もがな

五〇照射する木下闇を分濟れて露に亂るゝ信夫もぢすり

四百六番　左　女房　右　雅經

五一足引の山ほとゝぎすをちかへり雫にぬるゝ夕暮の空

五二いにしへやみぬ面影も立花の花ちるさとの有明の空

四百七番　左　左大臣　右　寂蓮

五三眞葛原玉まく數や增らむ葉におく露に螢飛ぶなり

五四昔ともおもひなすべき身の程を花橘にとふ人もがな

四百八番　左　前權僧正　右　家長

五五やよやいかに山鵑我さへぞ住侘ぶる身の猶雖面さに

五六五月雨に淀の繼橋跡もなし此も長柄の名を流しつゝ

四百九番　左　公繼卿　右　三宮

五七五月雨ののどかにくらす夕暮を慥かしつる蜀魂かな

五八芳野山花をのみやは尋ぬべきとへかし人の梅雨の比

四百十番　左　公經卿　右　内大臣

五九郭公きの丸殿の雲居までおさくら山のおもひ出の聲

六〇言繁し暫しはたゝれ槇の戸を敲く水鶏よ鳴果すとも

四百十一番　左　季能卿　右　忠良卿

花をまつ心は秋に通へども分くる跡なき庭のなつ草

もし消ち聲は聞えぬ夏蟲のいはぬ思に身を焦す哉

四百十二番　左　宮内卿　右　兼宗卿

大方のはるゝ時だに雲たえぬ嶺の庵の五月雨のころ

けふさいへば薫る在かを誘ひつゝ風も吹けり軒の菖蒲を

四百十三番　左　讃岐　右　通光卿

故郷の庭のあさぢに風たちて涼しくなれば夕立の空

何となく寂しき程をつく〳〵と思ふ心も五月雨の空

四百十四番　左　小侍従　右　釋阿

ふくる迄晴ずと見えし夕立の名殘ともなき有明の空

立花にあやめのまくら薫る夜ぞ昔を忍ぶ限なりける

四百十五番　左　隆信朝臣　右　俊成卿女

時鳥飽ぬ名殘を思はせてきくともなきさよの一聲

みても猶あかぬよのまの月影を思絶たる五月雨の空

四百十六番　左　有家朝臣　右　丹後

百敷や軒端にかをる立花の代々の昔の風や吹くらむ

郭公すぎぬる後の雲まより猶ながめよと出づる月影

四百十七番　左　保季朝臣　右　越前

春まではとはれし物を哀又よしの丶奥の五月雨の比

讒手より引き分れてか菖蒲草思々のつまにかゝれる

四百十八番　左　良平　右　定家朝臣

むば玉の夜渡る月はもりもこずまやの餘の梅雨の頃

けふいとゞ同じ緑に埋れて草の庵もあやめふくなり

四百十九番　左　具親　右　通具朝臣

思ひいでゝたれ我宿を忍べとて花橘に風のふくらむ

夕されば光みえ行く夏蟲の此や世をしる思なるらむ

四百廿番　左　顯昭　右　家隆朝臣

圖居して如何遊ばむ梅雨にせが非の水も岩越にけり

一聲は手向の山の蜀魂幣も取り敢へず明くるよは哉

四百廿一番　左　女房　右　寂蓮

筏士の閨をもわかぬ水馴ざを遠に夏は月を待ちけり

夏刈の廬間に浪の音はして月のみ殘るみはの古郷

四百廿二番　左　左大臣　右　家長

みさび江の菱の浮葉に隱ろへて蛙鳴くなり夕立の空

寢覺する枕におつる瀧の音に結ほれたる夏のよの夢

四百廿三番　左　前權僧正　右　三宮

五月雨に物思ふ宿は時鳥なく一こゑも猶ぞ夜ふかき

夕まぐれ風につれなき白露はしのぶに縋る蛍也けり

四百廿四番　左　公繼卿　右　内大臣

たが宿の花橘の匂ぞと思ふかたさへなつかしきかな

梅雨は賤の垣ねに日數へて麻のはぎえなほす隙ぞなき

四百廿五番　左　公經卿　右　忠良卿

菖蒲草片しく宵のさゝ枕しらぬ匂ひの隙求めけり

夏の月雲吹く風をさきだてゝ山のは涼し夕暮たちの空

四百廿六番　左　季能卿　右　兼宗卿

何となく羨しきは夏蟲のはちすになるゝ光なりけり

けふは皆わさだの早苗植て帛たこのてまなくみゆる五月に

四百廿七番　左　宮内卿　右　通光卿

軒しろき月の光に山陰のやみをしたひて行く蛍かな

ほとゝぎず花橘もちりはてゝ雲より漏すさよの一聲

四百廿八番　左　讃岐　右　釋阿

此の世より宿る露さへ清きかな濁にしまぬ池の蓮葉

早苗月五月雨そむる始とやよもの山雲曇り行くらむ

四百廿九番　左　小侍従　右　俊成卿女

我ならぬ澤の蛍もよる〳〵の思はえ社忍ばざりけれ

五月雨の雲路たどらぬ郭公己がさ月の宿をならして

四百卅番　左　隆信朝臣　右　丹後

五月雨は伏見の田居に水越て庭まで續く宇治の川波

時鳥汝も心や慰まをばすてやまのつきに鳴く夜は

四百卅一番　左　有家朝臣　右　越前

妻戀の秋の思ひは如何せむ照射に鹿の身をや替べき

五月雨に影のみ殘る心ちして庭にみゆるや沼の八橋

四百卅二番　左　保季朝臣　右　定家朝臣

めにみえぬ匂に袖をぬらすかな露やはかよふ軒の橘

天川やそせもしらぬ五月雨に思ふも深き雲のみを哉

四百卅三番　左　良平　右　通具朝臣

待ちえても恨ぞふかき時鳥己が五月のよはのひと聲

梅雨は頼めし野べに水越ていかに尋ねむもゝずの草ぐき

四百卅四番　左　具親　右　家隆朝臣

蓮葉に風も靡かぬ夏の日もおき定まらぬ露のしら玉

いか計田子のさ衣水滋つき雨もしみゝに早苗取る覽

四百卅五番　左　顯昭　右　雅經

火串影鹿に會津の山なれば入にかひあるさつ夫也哉

五月雨に越行く浪は葛飾やかつ水隱るゝまゝの繼橋

四百卅六番　左　女房　右　家長

照射する影をよな〳〵深山木の懲ずも鹿のめを合す覽

夕すゞみ夏ははまべに住吉の松とはしるや沖つ汐風

四百卅七番　左　左大臣　右　三宮

塵をこそ据るにとせしか獨ぬる我床夏は露も拂はず

月夜には己が影とも分かざりし蛍は闇に顯れにけり

四百卅八番　左　前權僧正　右　内大臣

夜や暗き道や惑ふとふべきに山時鳥なかで明ぬる

哀れなる淀の住ひは眞菰故夏計りこそ人にからるれ

四百卅九番　左　公繼卿　右　忠良卿

身にしむる人の心や變るらむ花たちばなの同じ匂を

夕づくよ傾ぶく空は宵ながら雲のいつくに有明の影

四百四十番　左　公經卿　右　兼宗卿

古へを花たちばなに忍ぶれば袖とふ風のにほふ夕暮

五月雨は雲まなければ久方の月の盛は猶しるきかな

四百四十一番　左　季能卿　右　通光卿

わきて思ふ匂なくても夕まぐれ花橘に風は吹きしを

花の春月の秋とてなになれや忍びまたるゝ此程の空

四百四十二番　左　宮内卿　右　釋阿

衣手に涼しき風をさきだてゝ曇りはじむる夕立の空

五月雨は沼の浮草岩こえて蛙の床もねやたえぬらむ

四百四十三番　左　讃岐　右　俊成卿女

よと共に燃る蛍のいかにして涼しき秋を豫て知らむ

長きよの闇こそ勝れ照射する火串の松のかゞりの光に

四百四十四番　左　小侍従　右　丹後

沈まぬは此世ばかりと知すして儚くみゆる鵜飼舟哉

鵜飼舟ほのかにともす篝火に數ゑふ物や蛍なるらむ

四百四十五番　左　隆信朝臣　右　越前

空は雲庭のあさぢに波こえて軒端涼しき五月雨の頃

呼ふべき人もあらばや梅雨に浮て流るゝさの丶舟橋

四百四十六番　左　有家朝臣　右　定家朝臣

よそにみて思はざりつる村雲も此里までの夕立の空

袖の香を花橘におどろけば空に有明の月ぞのこれる

四百四十七番　左　保季朝臣　右　通具朝臣

まだきより秋にや宿をかり枕松蔭涼しうたゝねの床

語らひし宿を忘るな不如歸聲みな月の空になるとも

四百四十八番　左　良平　右　家隆朝臣

思餘り眺めつるかな時鳥語らひ捨てゝ消ゆる雲路を

五月雨はかびやが煙打濕り山田のくれに蛙なくなり

四百四十九番　左　具親　右　雅經

心あてに露も光もそへつらむ月に色なき夕がほの花

いそのかみふるの丶道を夏草の露分衣袖ふかきまで

四百五十番　左　顯昭　右　寂蓮

かひ昇る鵜舟を繫みしくら河瀬々の浪やく篝火の影

古への野守の鏡跡だえてとぶ火はよはの螢なりけり

千五百番歌合巻第七　夏三　判　左大臣侍従兼播磨権守藤原経

四百五十一番　左勝　女房　右　三宮

風を痛みはすの浮葉に宿占て涼しき玉に蛙鳴くなり

常夏の花におきゐる白露に又影宿らす夜半の月かな

四百五十二番　左　左大臣　右勝　内大臣

山姫の瀧の白糸くりためておるてふ布はなつ衣かも

筒井筒井筒の上に水こえて掬ぶもあさし五月雨の比

四百五十三番　左勝　前權僧正　右　忠良卿

杜鵑きなかぬ宿の橘はたゞかれねとぞ思ふべらなる

秋やくるとへど白露風涼しいはたのをの丶夏の夕暮

四百五十四番　左勝　公繼卿　右　兼宗卿

中々に涼しくみゆる景色かな野澤の水にもゆる螢は

斯しつゝいつ晴べしと見えね共皐月計や五月雨の空

四百五十五番　左持　公經卿　右　通光卿

かやりびの煙を空の隔てにて雲に曇らぬ軒の月かげ

一月影を思ひもわかぬながめかな五月の闇に卯花の頃

四百五十六番　左　季能卿　右勝　釋阿

夏刈の蘆ふくこやにかよひきて軒端涼しき難波浦風

五月雨はすまの鹽屋も空とぢて煙計ぞ雲にそひける

四百五十七番　左勝　宮内卿　右　俊成卿女

なにはがた月には遠くなりはてゝ沖に漂ふ夕立の雲

草も木も宛ら露の玉おちて風に過きぬる夕立のくも

四百五十八番　左持　讃岐　右　丹後

かりてなく涙やかへす郭公こゑみなつきの村雨の空

人しれぬわが常夏の唐錦誰をまつとて敷き始めけむ

四百五十九番　左勝　小侍從　右　越前

逢葉に朝おく露の亂れあひて一つになるも法の心か

夏山のともしの影に是みえて麓に誰か鹿を待つらむ

四百六十番　左　隆信朝臣　右勝　定家朝臣

旅人の友よびかはす聲すなり夏野の草に道惑ふらし

夕方の中なる河の鵜飼舟いかに契りて闇をまつらむ

四百六十一番　左持　有家朝臣　右　通具朝臣

ほに出でぬ萱が繁みに包め共思ひ亂れてとぶ螢かな

夏の夜も岩もる月を掬ぶ手に氷くだくる山の井の水

四百六十二番　左持　保季朝臣　右　家隆朝臣

楸おふる沖の小島の浪のうへに浦かせさそふ蜩の聲

五月雨のふるの中道中々に繁る草葉も見えぬ頃かな

四百六十三番　左持　良平　右　雅經

時鳥たゞ一聲と契りけりくるればあくる夏の夜の月

夕立のなごりは峰に雲消えて裾野の草の露の一むら

四百六十四番　左　具親　右勝　寂蓮

たが宿の物とも見えつ山賤の同じかきほの撫子の花

蚊遣火の煙の末もはのかにて霞にのこる夏の夜の月

四百六十五番　左持　顯昭　右　家長

うちとけぬけしきに著し氷室山夏を隔つる心有けり

終夜岩もる清水かたしきて程なき夢もいく結びしつ

四百六十六番　左勝　女房　右　内大臣

澤水の草葉にやどを刈菰の思ひみだれて行く螢かな

鹿のねもまだ打解けぬ夕暮に怪しかるべき風の音哉

四百六十七番　左　左大臣　右勝　忠良卿

松風のはらふ汀のはちす葉にきよき玉ゐる夏の夕暮

夕立の一むら過ぐる雲はれて名殘の露は常夏のいろ

四百六十八番　左勝　前權僧正　右　兼宗卿

宿もやどなく聲も聲郭公身の孤ぬるや今年なるらむ

丈夫が端山の原に木隱れて松を照射の鹿につけばや

四百六十九番　左勝　公繼卿　右　通光卿

花ちりし宿の木陰を自ら涼みがてらにとふ人もがな

中々に眺むる程も夏のよの月に名殘は思ひしられて

四百七十番　左勝　公經卿　右　釋阿

玉に紛ふ宵の螢の影ふれて雲居の雁の聲を待ちける

益荒夫や端山わくらむともしける螢に紛ふ夕闇の空

四百七十一番　左勝　季能卿　右　俊成卿女

且みても珍しきかな常夏のはや初花の色をそへつゝ

さは水に秋風ちかし行くほたる紛ふ光は影亂れつゝ

四百七十二番　左持　宮内卿　右　丹後

見渡せば浪もゆるがぬ夏の日に松陰遠きいその細道

涼しやと立寄る人の掬ぶ手に亂れておつる瀧の白糸

四百七十三番　左持　讃岐　右　越前

住吉の松陰洗ふおきつ浪したにや秋の風かよふらむ

貴舟河玉ちるせゞに紛ひても紛ひもはてぬ夏蟲の影

四百七十四番　左　小侍從　右勝　定家朝臣

眞葛はふ夏野の草の繁くのみ誰を怨て露こぼるらむ

夏衣立田河原をきてみれば篠に折はへ浪ぞほしける

四百七十五番　左　隆信朝臣　右勝　通具朝臣

かき暮すとばかりみゆる夕立に驟の里か淺ぢふの露

忘れては秋かとぞ思ふ風わたる蜂より西の蜩のこゑ

四百七十六番　左　有家朝臣　右持　家隆朝臣

時こそあれ露吹き拂ふ夕風に涼しくなりぬ床夏の花

照射する端山が峰を眺れば雲路ぞ鹿のたちど也ける

四百七十七番　左持　保季朝臣　右　雅經

うらなれて螢飛びかふ夕まぐれ驟かもとの蜑の漁火

明渡る雲の驟くに入りやらで山のは卿つ夏のよの月

四百七十八番　左　良平　右勝　寂蓮

鏡かとみゆる氷室の氷にぞあらはれにける冬の面影

せきとむる山下水は氷とえて風に流るゝ蟬のむら聲

四百七十九番　左持　具親　右　家長

夕立のはるゝ程なき雲まより猶いで暮る山のはの月

六月や風まちわぶる野べの宿うらみぬ爲の怨しき哉

四百八十番　左　顯昭　右勝　三宮

さよ深み風に類へて行く螢秋近しとは空にしるらむ

松蔭の岩井の水の夕暮をたづねぬ人や秋をまつらむ

四百八十一番　左持　女房　右　忠良卿

柳蔭すゞみにきたるから衣ならす袂になるゝ河かせ

夕づくひさすや庵の柴の戸にさびしくもある蜩の聲

四百八十二番　左　左大臣　右勝　兼宗卿

蜩のなくねに風を吹きそへて夕日涼しき岡のへの松

みな月のてる日の影に色そへて錦をさらす常夏の花

四百八十三番　左持　前權僧正　右　通光卿

時鳥空もとゞろに鳴く程に夜たゝ雨ふる袖の上かな

夏蟲の思ひをうつす池水にたぐひしらする篝火の影

四百八十四番　左　公繼卿　右勝　釋阿

涼しさは宿からにしもなき物を心鎭まる所なりけり

大堰河篝さし行く鵜かひ舟幾瀬に夏のよを明すらむ

四百八十五番　左持　公經卿　右　俊成卿女

露すがる庭の玉笹打ちなびき一むらすぎぬ夕立の雲

一〇岩叩く谷の清水の音きけば掬ばぬ袖ぞまだき涼しき

四百八十六番　左　季能卿　右勝　丹後

二〇風渡る楢の葉風のあらましに眺むる空のはつ雁の聲

三〇待もせず惜らあへず夏のよは山端疎き月をこそみれ

四百八十七番　左勝　宮内卿　右　越前

四〇みぬ人を松の木陰の苔莚猶しきしまや大和なでしこ

五〇柞原立ちよる蔭の涼しきは楢に秋やちかくなるらむ

四百八十八番　左勝　讃岐　右　定家朝臣

六〇なつのよの月の桂の下紅葉かつ〳〵秋の光なりけり

七〇夏の夜はまだ宵のまと眺つゝぬるや川べの東雲の空

四百八十九番　左勝　小侍從　右　通具朝臣

八〇しるしらぬ一つ木蔭に立寄りて契を結ぶ山の井の水

九〇夏衣すそのゝ原の夕風に秋おもほゆるさゆりばの露

四百九十番　左　隆信朝臣　右勝　家隆朝臣

一〇み山かげ夏なき年やこれならむ　を清水に松の下風

一身に近く馴す扇も楢のはの下ふく風に行へしらすも

四百九十一番　左　有家朝臣　右勝　雅經

二〇昨日けふ夏をばよそにみ山べの楢の木かげに蜩の聲

三〇たちよれば衣手涼し嵐山秋やとなせの瀧の白なみ

四百九十二番　左　保季朝臣　右勝　寂蓮

四〇夕暮の籬に秋や通ふらむ露をならはす庭のさゆりば

五〇すむ人は主人ともなき蓬生に蟲のねそはむ秋の夕暮

四百九十三番　左　良平　右勝　家長

六〇夕立の雲まの日影はれぬれば玉をぞ研く淺ぢふの露

七〇吹く風は思ひたえたる庭の面に露にそ靡く常夏の花

四百九十四番　左　具親　右勝　三宮

八〇はゝそ原まだ色づかぬ村雨に秋のけしきも森の下露

九〇雨そゝぐ嶺の楢をながむれば村雲かゝる蟬の聲々

四百九十五番　左持　顯昭　右　内大臣

一〇遺薬になどか心を縣ざらむあだなる露も世と社みれ

一一寂しとて柴折りくべし山里に猶蚊遣火の煙たてけり

四百九十六番　左勝　女房　右　兼宗卿

二〇夏深み草のはがくれ露はぬて忍び〳〵の秋のはつ風

三〇掬ぶ手の雫に月も宿りけり是や名におふ玉の井の水

四百九十七番　左　大臣　右持　通光卿

四〇萩原や聲もほに出ぬさを鹿の深く夏野に戰ぐなる哉

五〇石走る清水をむすぶ深山べに涼しさそふる松の下哉

四百九十八番　左持　前權僧正　右　釋阿

六〇露の身を玉ともなさむ蓮葉の濁にしまぬ我が心かな

七〇山の井を掬びて夏は過ぬべし秋や立なむ志賀の浦風

四百九十九番　左勝　公繼卿　右　俊成卿女

二〇せきとむる岩まの水にすむ月は掬べば解る氷也けり

三〇山深き松に吹きけり都にはまだいりたゝぬ秋風の聲

五百番　左勝　公經卿　右　丹後

四〇かはづなくはすの下葉の小波に浮草われる夕暮の風

五〇わかるれば是も名殘のをしきかな夏の限の蜩の聲

五百一番　左　季能卿　右勝　越前

六〇人はこず心はうかる岡のべやけふさへいかに蜩の聲

七〇影さゆる山井の水の疎くにか暮行く夏の立歸るらむ

五百二番　左勝　宮内卿　右　定家朝臣

八〇片枝さすをふの浦梨初秋に成も成ずも風ぞ身にしむ

九〇山のかげおぼめく里に蜩の聲たのまゝタがほの花

五百三番　左勝　讃岐　右　通具朝臣

一〇蟲のねはまだ淺ぢふに忍來て下に露けき野べの夏草

二〇尋ねきてならす日數に秋風や立田河原の夕暮のそら

五百四番　左持　小侍從　右　家隆朝臣

三〇手に掬ぶ泉の水の涼しさに忘れて鹿のねをぞ待つる

四〇松かげや瀧のうら葉の岩枕なつなき山に通ふ頃かな

五百五番　左持　隆信朝臣　右　雅經

五〇秋をまつ日數も近く鳴蟬の音にはたてぬ露ぞ涼しき

六〇夏深き野原のくれに影みえて螢露けきゆりばの花

五百六番　左勝　有家朝臣　右　寂蓮

七〇濱風に涼しくなびく夏草の野島が崎に秋はきにけり

八〇夏も猶草にやつるゝ故郷に秋をかけたるをきの上風

五百七番　左勝　保季朝臣　右　家長

九〇泊瀬河岩こす波に打ちそへて涼しくなりぬ入相の鐘

一〇隔てこし垣根も見えず成にけり隣一つに草繁れる

五百八番　左　良平　右勝　三宮

二〇木間よりもりくる月の涼しきに散も秋なる下紅葉哉

三〇秋をまつ深山隱のさを鹿は忍び〳〵に聲やたつらむ

五百九番　左持　具親　右　内大臣

四〇泊瀬河岩こす波に打ちそへて涼しくなりぬ入相の鐘

五〇隔てこし垣根も見えず成にけり隣一つに草繁れる

五百十番　左持　顯昭　右　思良卿

六〇掬ぶ手の涼しきのみか岩湍ぐたるみの音も夏は知れず

七〇松風の夏たけゆまに涼しきは楢に秋やちかの鹽がま

八〇五百十一番　左勝　女房　右　通光卿

九〇禊川せゞの玉藻の水隱て知られぬ秋や今宵きぬらむ

一〇御禊する河せの浪も音すゞし夏の日影ぞ六月の空

五百十二番　左　左大臣　右勝　釋阿

二〇七夕の天のがはらに戀せにと秋を迎ふる禊すらしも

三〇なる瀧や西の河せに御禊せむ岩こす浪も秋や近きと

五百十三番　左勝　前權僧正　右　俊成卿女

四〇夏衣かたへ涼しくなりぬ也夜やふけぬらむ行會の空

五〇轉寢のまだ宵ながらあけなゝむ禊に過ぐる六月の空

五百十四番　左勝　公繼卿　右　丹後

六〇禊するかはせの風の涼しきは秋にや神も心よすらむ

五百十五番　左持　公經卿　右　越前

七〇禊するあさの葉風のふき分て秋をよせくる浪の夕聲

八〇夏衣たらきてなれし程もなく袂に秋の風ぞ吹きける

五百十六番　左　季能卿　右勝　定家朝臣

九〇六月のなごしの森の夕涼みみそぎもまたぬ秋の下風

一〇たが禊同じ淺茅のゆふかけてまづ打靡くかもの河風

五百十七番　左　宮内卿　右勝　通具朝臣

二〇夏衣袂に秋のなみかけてみそぎにふくる小夜の川風

三〇みそぎ川夜や更ぬらむあさ露の頓て秋なる道芝の上

五百十八番　左　讃岐　右勝　家隆朝臣

四〇早き瀧の禊に流すうき事は歸らぬ水に類へてぞ思ふ

五〇郭公こゑもたえにし垣根よりしのびねになく蛍かな

五百十九番　左　小侍從　右勝　雅經

六〇みそぎ川なづる淺茅の一方に思ふ心をしられぬる哉

七〇六月やさこそは夏の末の松秋にもこゆる波の音かな

五百二十番　左　隆信朝臣　右勝　寂蓮

八〇禊して神の恵も廣瀬川幾千世までかすまむとすらむ

九〇夏はつるかもの河原の禊こそ神やうくらむ秋風の聲

五百廿一番　左　家長　右勝　有家朝臣

一〇禊する河せの浪の立ち返り猶掬べとや夏したふらむ

五百廿二番　左　保季朝臣　右勝　三宮

二〇禊する河せに今宵音づれてあくるをまたぬ秋の初風

三〇けふのみと夏を眺むる淺茅原末こす風の傍へ涼しき

五百廿三番　左　良平　右勝　内大臣

四〇蜩の聲にや秋のかよふらむ木かげ涼しき夏の暮かな

七六月のけふ呉竹のよをりにぞ君か千年の數はそへける
五百廿四番　左持　具親　右　忠良卿
七推しなべて皆六月の穐川幾瀬の波にいぐし立つらむ
八さを鹿の聲もほに出ぬ篠薄忍びかねたるのべの夕風
五百廿五番　左持　顯昭　右　兼宗卿
八涼しさを楢の葉風に先だてゝ信夫の森に秋やきぬ覧
一憂事もみな盡果つるけふならばあすや解の驗なもみむ

千五百番歌合巻第八　秋一　判者同前

五百廿六番　左持　女房　右　釋阿
二風の音に秋はけふより立田山よはにや夏の獨越らむ
三潮路より秋や立つらむ明方は聲變るなりすまの波風
四深草の露のよすがを契にて里をば枯ず秋は來にけり
五秋くれば身にしむ物と成にけり昨日も聞し荻の上風
五百廿八番　左勝　前權僧正　右　丹後
六風の音に驚くやみか荻のはのさやかに靡く秋はきに鳥
七轉寢は心せよともいふべきに思ひもあへぬ秋の初風
五百廿九番　左持　公繼卿　右　越前
八秋きぬと一夜を分くる鐘の音に哀うちそふ曉のそら
九うたゝねに心づくしの秋きぬと驚かすなり荻の上風
五百卅番　左持　公經卿　右　定家朝臣
一〇けふよりや秋は立田の山端に入日寂しく變る空かな
一一けさよりは風を便の知べにて跡なき浪も秋や立らむ
五百卅一番　左持　季能卿　右　通具朝臣
一二誰に又露の哀をかけむとて袖より過ぐる秋のはつ風
一三荻の葉にいつ秋風の吹馴れて身にしむ計人に知する
五百卅二番　左勝　宮内卿　右　家隆朝臣
一四軒ちかき松の梢に音づれて袖にしられぬ秋のはつ風
一五秋はくるまだ東雲の氣色より夕の空もみえける物を
五百卅三番　左持　讃岐　右　雅經
一六算へしる人の心にたつ秋を西よりとしも誰定めけむ
一七朝倉やきのまろ殿に誰とへば秋をもなのる荻の上風
五百卅四番　左　小侍從　右勝　寂蓮
一八いかなれば身にはしむぞと尋ても秋吹風の色を知ばや
一九秋風は一夜ばかりを蟲の音の機おるまでや夕暮の空
五百卅五番　左　隆信朝臣　右勝　家長
二〇まだきかぬ哀を爭で添つらむ今年に限る秋の風かは
二一忍びこし岩井の水の松の風顯れて吹く秋はきにけり
五百卅六番　左　有家朝臣　右勝　三宮
二二けさよりは稻葉もそよと知す也鳥羽田の面の秋の初風
二三昨日より荻の下葉に通ひきてけさ顯るゝ秋のはつ風
五百卅七番　左　保季朝臣　右勝　内大臣
二四かれてだに心に止る秋風のけふ明けそむる黄昏の空
二五秋風のたつた河原の柳かげ春の綠もいろづきにけり
五百卅八番　左勝　良平　右　忠良卿
二六けふよりは秋の氣色の森なれば頓て身にしむ山風の風
二七夕暮の哀を空にながむれば秋きにけりと荻のうは風
五百卅九番　左　具親　右勝　兼宗卿
二八しきたへの枕の上に過ぎぬなり露を尋ぬる秋の初風
二九故郷と荒にし庭の淺茅にも露置添へて秋はきにけり
五百四十番　左勝　顯昭　右　通光卿
三〇水莖の岡のくずはも色づきてけさうら悲し秋の初風
三一立初むるけふより人に知れけりなれし快に歸る秋風
五百四十一番　左勝　女房　右　俊成卿女
三二秋たちて昨日にかはる浪風に涼しく靡く伊勢の濱荻
三三稀にあふ蟹の河邊の秋風は此世ならずや哀なるらむ
五百四十二番　左　左大臣　右勝　丹後
三四大方の夕はさぞとおもへども我ためにふく荻の上風
三五けふも又緣は同じ松蔭にに風に任せて秋や立つらむ
五百四十三番　左　前權僧正　右勝　越前
三六今宵こむ人にぞ逢む七夕の絕ぬ契にあらむと思へば
三七斯ればや野山も色の變るらむ身にしみ初る秋の初風
五百四十四番　左　公繼卿　右勝　定家朝臣
三八ふけにけり今や秋たつ思寢の夢路を籠て吹ぞ涼しき
三九水莖の岡のくずはら吹きかへし衣手うすき秋の初風
五百四十五番　左持　公經卿　右　定家朝臣
四〇契あればあまの羽衣立ちるても待つよ必ず星合の空
四一哀又いかにしのばむ袖の露野原の風に秋はきにけり
五百四十六番　左　季能卿　右勝　家隆朝臣
四二けふよりは月の秋ぞと眺れば唯には非ぬ夕ゝの影
四三七夕の雲の衣を吹き重ね夜さむになりぬあまの川風
五百四十七番　左　宮内卿　右勝　雅經
四四風の音に物怪しかる秋はきぬいづくに宿を思ひ定めむ

四五久かたのあまの羽衣まれにきて契はつきぬ星合の空
五百四十八番　左持　讃岐　右　寂蓮
四六三日月の光仄かにみゆるより心をつくす秋の空かな
四七吹風も松のひゞきも浪の音も秋きにけりな住由の濱
五百四十九番　左　小侍從　右勝　家長
四八天の河年に一よは待ちもみじ又わく方の心有りせば
四九いと早も尾上の鹿は聲たてつ裾野の小萩咲も敢ぬに
五百五十番　左持　隆信朝臣　右　三宮
五〇秋の色を早晩みする夕づくよさすや岡べの松風の聲
五一秋立て幾日もあらぬに哀さをいつ習ひけむ夕暮の空
五百五十一番　左持　有家朝臣　右　内大臣
五二さらに又待べき秋も久かたのあまの河せに歸る波哉
五三秋きぬと仄三日月の光にぞかねて限なき影は知るゝ
五百五十二番　左　保季朝臣　右勝　忠良卿
五四出初むるまだ三日月の爪にて爭でか秋の色をみす覽
五五竹のはにあさひく糸や七夕の一夜の節の亂れなる覽
五百五十三番　左　良平　右勝　兼宗卿
五六天川けふをあふせと眺てもくるゝ待には袖や濡らむ
五七年をへてながき契のたえせねば例にひける七夕の糸
五百五十四番　左持　具親　右　通光卿
五八けふのみや心も晴て七夕の同じ宵居に月を見るらむ
五九あひみても猶行く末の契をや結び重ぬる七夕のいと
五百五十五番　左　顯昭　右勝　釋阿
六〇七夕にけふかす絲は君が代の長き例を引にぞ有ける
六一風の音を荻の葉のみと聞來しを萩の裏にも秋は見えけり
五百五十六番　左勝　女房　右　丹後
六二篠薄まだほに出でぬ夕月夜流石に秋の氣色なるかな
六三真葛原怨みぬ袖の上迄も露おき初むる秋はきにけり
五百五十七番　左　左大臣　右勝　越前
六四白露も色そめあへぬ立田山まだ書葉にて秋風ぞふく
六五待ちえてもいかに眺めむ早晩と氣色殊なる新月の影
五百五十八番　左勝　前權僧正　右　定家朝臣
六六思ふべし我身一つの秋ぞかし誰か斯しも月を眺めむ
六七夕暮はをのゝ篠原忍ばれぬ秋きにけりと鶉鳴くなり
五百五十九番　左持　公繼卿　右　通具朝臣
六八彦星の妻むかへ舟よそふらし天の河原の今日の暮方
六九いつしかと空に哀を三日月のかたぶく影も秋の夕暮
五百六十番　左持　公經卿　右　家隆朝臣

○本荒の萩の下ねに鳴蟲の聲をば誰にみせもきかせも
一我宿の萩の下葉のいかならむ袖も露けし初雁のこゑ
五百六十一番　左持　季能卿　右　雅經
二人こそあれ庭の葎も色づきて風のみかよふ古里の秋
三萩が花さくともよそに宮城野の木の下露の秋の夕暮
五百六十二番　左持　宮内卿　右　寂蓮
四天河もみぢの橋やわたすらむ色つきにしの夕暮の空
五秋をへてよそに思ひし夕よりたまらぬ物を萩の上風
五百六十三番　左　讃岐　右勝　家長
六天川こぞのわたりは移ろへど深き契や變らざるらむ
七よとともに山陰暗き谷の庵のくるゝしらする蜩の聲
五百六十四番　左持　小侍從　右　三宮
八早晩とけふを待つる七夕のあすの心を思ひこそやれ
九七夕もしばし休らへ天河わけこし浪は返りやはする
五百六十五番　左勝　隆信朝臣　右　内大臣
○あきらけき庭の灯かずごとに雲居にかよふ彦星の影
一萩の葉に秋ふく色はみえねど共身にしむ程の風の音哉
五百六十六番　左勝　有家朝臣　右　忠良卿
二をぎ原や末吹きなびく秋風の音する度に人は怨めし
三萩の葉に松の梢を吹きまぜておなじ嵐の哀わくなり
五百六十七番　左勝　保季朝臣　右　兼宗卿
四星合のまたれし空と思ふより雁の萩に風かはるなり
五飛びしく露の白玉おきそへて萩の錦のあだならぬ哉
五百六十八番　左勝　良平　右　通光卿
六夕されば玉ちる野べの女郎花枕さだめぬ秋風ぞふく
七むべき秋の半の影までも思ひ知する夕づくよかな
五百六十九番　左持　具親　右　釋阿
八大方のこのてる月の影までも宿る習に秋はきにけり
九七夕のあかぬ別の袖よりや秋は露けき頃となるらむ
五百七十番　左　顯昭　右勝　俊成卿女
○さしてなど年に一夜を渡しけむ思へばつらし鵲の橋
一葎はふ宿ともわかず秋はきて心盡しに月ぞもりくる
五百七十一番　左持　女房　右　越前
二七夕の雲の袂やぬれぬらむ明けぬとつぐる秋風の聲
三七夕の涙やそへてかへすらむ我衣手もけさは露けき
五百七十二番　左　左大臣　右勝　定家朝臣
四松の葉のいつとも分ぬ蔭にしもいかなる色と變る秋風
五百七十三番　左持　前權僧正　右　通具朝臣
六秋の盛くもらぬ空や久方の月の桂のもみぢなるらむ
七秋はきて幾日もあらぬ空にしも心盡しの星あひの影
五百七十四番　左　公繼卿　右勝　家隆朝臣
八七夕の枕の塵は拂ふとも猶むつ言はつきじとぞ思ふ
九秋風に本あらの小萩露おちて山陰寒み鹿ぞ鳴くなる
五百七十五番　左勝　公經卿　右　雅經
○わびつゝは玉かと問し白露のおき惑はせる東雲の空
一音づれて身にしむ風の吹しより掬ばぬ袖に萩の上露
五百七十六番　左　季能卿　右勝　寂蓮
二草のはにおくの露こぼるとや思らむ風こそ知ね暮方の空
三女郎花なびきもはてぬ秋風に心よわきは露の下をれ
五百七十七番　左持　宮内卿　右　家長
四宮城野や野はらの床をかり衣風に任する萩が花ずり
五畦傳ふ鳥羽田の面の夕ぐれわくる稻葉に鶉鳴くも
五百七十八番　左持　讃岐　右　三宮
六秋はまだ淺香の野らの朝露にさしも萎るゝ旅衣かな
七七夕のあかぬ別の涙故もみぢのはしや色まさるらむ
五百七十九番　左　小侍從　右勝　内大臣
八おきわぶる露にやしをる七夕のかへる朝の天の羽衣
九越ぢまで秋風吹くと誰れ告げて都にけさは初雁の聲
五百八十番　左　隆信朝臣　右勝　忠良卿
○秋といへば心も色に成ぬべし尾花に混り咲花をみて
一齋居より驚の涙や小倉山ふもとの野べの萩の上の露
五百八十一番　左勝　有家朝臣　右　兼宗卿
二藤袴一もと故の色よりも香ぞむつまじきのべの秋風
一九花の名は誰かつけこし女郎花心ありける昔なりけり
五百八十二番　左　保季朝臣　右勝　通光卿
四袖に又いつより露の馴ぬらむ風こそ秋の始と思ふに
五思ひこし眺はこれか秋萩の花にほのめく野べの夕暮
五百八十三番　左　良平　右勝　釋阿
六葉の色にぞ匂ふふぢ袴しらぬ主さへむつましきかな
七夕月夜木間もりくる宵のまぞ心づくしの始なりける
五百八十四番　左持　具親　右　俊成卿女
八心なき草の袂も花すゝき露おきあへぬ秋は來にけり
九秋風に外山の鹿は聲たてゝ露ふき結ぶをのゝ淺茅生
五百八十五番　左　顯昭　右勝　丹後
○秋風に絕間をしとや思ふらむ錦をさらすまのゝ萩原
一七夕のあはぬ絕間を算へしは此世にみする月日也晃
五百八十六番　左勝　女房　右　定家朝臣
二日影さす岡べの松の秋風に夕暮かけて鹿ぞ鳴くなる
三露を重み人は待えぬ庭の面に風こそはらへ本荒の萩
五百八十七番　左　左大臣　右勝　通具朝臣
四さを鹿の鳴初しより宮城野の萩の下露置ぬ日ぞなき
五七夕のあかぬ涙におきそめてこれより秋は曉のつゆ
五百八十八番　左勝　前權僧正　右　家隆朝臣
六音づれも絕ぬ物は涙なりけり
七常とはに變らぬ風も萩のはにそよぐ音より秋の夕暮
五百八十九番　左　公繼卿　右勝　雅經
八宿近き野べの小萩や秋霧のたち殘したる錦なるらむ
九さきにほふ千種の花の末葉より漲雰く野べの夕風
五百九十番　左　公經卿　右勝　寂蓮
○誰れとだにいはたの小野の蘭おぼめく暮に匂ふ袖哉
一あれにけり離を野らとみし程に蓬が露も軒のたま水
五百九十一番　左　季能卿　右勝　家長
二誰故に野となりはて深草の里の尾花に鶉鳴くらむ
三さても又露おくとの變らぬは袖にうつれる萩が花摺
五百九十二番　左勝　宮内卿　右　三宮
四我のみと聲をなたてそ嶺の松心ばかりは萩のうは風
五秋はぎの上葉下葉の露けさや鹿と蟲との涙なるらむ
五百九十三番　左持　讃岐　右　内大臣
六寂しさに秋の哀をそへてけりあれたる宿の萩の上風
七秋きぬと萩のうは風うたがひて萩の下露心おかるな
五百九十四番　左勝　小侍從　右　忠良卿
八たゞならず見ゆる離の篠薄いかなる露の契なりけむ
九尾上より通ふ嵐にたぐひきて松の梢にさを鹿のこゑ
五百九十五番　左持　隆信朝臣　右　兼宗卿
○白露の起くとは野べの花を見てぬさは忍ばむ萩の上風
一朝夕に向ひの野べの女郎花みるともあかじ花の姿は
五百九十六番　左持　有家朝臣　右　通光卿
二袖の上に誰かはかゝる枕はおく我身一つの秋の夕暮
三女郎花あさぢを草の枕にて己が野原を旅寢とや思ふ
五百九十七番　左持　保季朝臣　右　釋阿
四嵐ふけば雲は殘らぬ山のはに月をよこぎる初雁の聲
五夏の野は草の繁みのさゆりばも秋は露にや萎れ果らむ
五百九十八番　左　良平　右勝　俊成卿女

千五百番歌合巻第九　秋二　判詞

六百一番　左　女房　右勝　通具朝臣

二三この夕風吹きたちぬ白露に争ふ萩をあすやかもみむ

二四夕まぐれ待人はこぬ故郷の本荒の小萩風ぞとふなる

各奉れる百首をつがひて廿巻の歌合として人々判申す内に二巻よしあしをさだめ申すべきにて侍るに愚意のおよぶ所勝負ばかりはつくべしとはいへども難におきてはいかに申すべしとも覚え侍らず左右のしもに一文字ばかりをつけむは無下に恋なきさまなるべしよりて判の詞の所にかたの様に卅一字をつらねて其の句の上ごとに勝負の字ばかりを定め申すべきなりみせばやな君を待夜の野べの露に枯まく惜しき袖

六百二番　左勝　左大臣　右　家隆朝臣

二五蓼草葉にあらぬ我が床の露を尋ねていかで鳴くらむ

二六秋は猶心盡しのこの間より月にもりくるさを鹿の声とに斯に心ぞ止るはには非で且おく露の散紛ふ秋

六百三番　左勝　前権僧正　右　雅経

二七鳴く鹿の聲にめさめて忍ぶ哉みはてぬ夢の秋の思を

二八尋ねても誰か厭はむ三輪の山きりの離に杉たてる門

二九忍ぶ夢かつ〳〵覚ぬ空の月夜渡る山の木々の秋風

六百四番　左　公繼卿　右勝　寂蓮

三〇武蔵野にこれもむつまし女郎花若紫の故ならねども

三一野べ迄も尋て聞し蟲の音の淺茅が庭さに怨めしき哉

三二雄はひ繁き眞葛のはの下によすがら鳴か東雲の蟲

六百五番　左　公経卿　右勝　家長

三三蟋蟀鳴きてよすがら明すなりまのゝうら萩色かはる頃

秋風に思ひ乱るゝ蘆のこやの寝覚に小鹿鳴くなり

三四置露の縁に乱るゝ刈萱の且みるからに散るか涙の

六百六番　左持　季能卿　右　三宮

三五いざさらば妻に結ばむ女郎花旅ねの庵の秋の寝覚に

三六散ぬれば影も止らずなりにけり野澤の水の萩が花摺

折れかへり靡く裾野の下萩のほの上照す遠山の月

六百七番　左勝　宮内卿　右　内大臣

三七物や思ふ秋にや空の成初むる變らぬ床に寝覚なそする

三八七夕のたへぬ思やいかならむ雲の衣をこよひ雁がね

聞の上にさしも時雨の廻来てよはのさ衣絞侘つゝ

六百八番　左持　讃岐　右　忠良卿

三九花薄秋の盛になる時は聲もほに出でゝ鹿も鳴くなり

四〇遠山田いなば仄に雁なきて雲のたえまに三日月の影

四一遠山田打戦ぐなる時しもあれ恨も敢ず通ふ鹿のね

六百九番　左　小侍従　右勝　兼宗卿

四二いかにせむ風に從ふ刈萱の思ひ定むる方もなき世を

四三分けきつるをざゝが原の朝露の袂ひまなき旅衣かな

見渡せばきつゝ慣にし野べの小篠形見と袖に散か白露

六百十番　左　隆信朝臣　右勝　通光卿

四四夕暮は野原のけしき只ならで露吹き返す葛のうら風

四五誰となく招く尾花の一つ野に心おきける葛のうら風

四六世の常にきゝも慣にし風の音も身にしむ暮の蟋蟀

六百十一番　左持　有家朝臣　右　釋阿

四七三吉野の嶺もともなき玉章を幾秋懸て雁のきぬらむ

四八朝露にはかなく移す月草も秋の形見の色となるらむ

四九時ぞとや森の秋風俄にも夜寒になりぬ東雲のそら

六百十二番　左　保季朝臣　右勝　俊成卿女

五〇浪のうへにいざよふ月を松島や小島が磯の秋の初風

五一風ふけば篠に亂るゝ刈萱も夕はわきて露こぼれけり

五二月すめば夢やは結ぶ野べの庵雁の涙に散紛ひつゝ

六百十三番　左持　良平　右　丹後

五三さびしさの心の限吹く風に鹿の音すさむ野べの夕暮

五四唐衣裾野をすぐる秋風にいかに袂のまづしをるらむ

千々に思ふ外山の月の山嵐にせばき袂に結ぶ白露

六百十四番　左勝　具親　右　越前

五五絶々に月より過ぐる村雲の雨うちすさむ萩のうは風

五六秋萩の露に袂を分けなしてほさむもをしき花の濡色

秋の月廻してすめる野べの露重る玉を千里にぞしく

六百十五番　左　顕昭　右勝　定家朝臣

五七主しらぬ若むらさきの蘭たがゆかりとて風の立らむ

五八萩原や植て悔しき秋風はふくをすさみに誰か明さむ

五九置迷ふ木毎の露を山風の且ふくからにちる木葉哉

六百十六番　左　女房　右勝　家隆朝臣

六〇女郎花枝もとをゝにおく露を待ちとる風に蟲怨む也

六一雲消ゆる空を限りとすむ月の光もなゝ秋の袖かな

六二空清くてる月影の山里にさしても慣ぬ柴あめる門

六百十七番　左勝　左大臣　右　雅経

六三とこよにて馴の秋か月はみし都わすれぬ初かりの聲

六四夕づくよ宿る山田の露の上にかりね争ふ稲妻のかげ

遠山をこえ行く雁の夜はの聲夜寒に成ぬ柴の假庵

六百十八番　左勝　前権僧正　右　寂蓮

六五小萩原ねぬ夜の露やふかからむ獨ある人の秋の栖は

六六たれか又千々におもひを碎きても秋の心に秋の夕暮

六七越路より初雁音ぞ聞ゆなるよとなく鳴そ東雲の月

六百十九番　左持　公繼卿　右　家長

六八女郎花秋萩混り咲ぬればしがらむ鹿や心わくらむ

六九鳴捨てゝ鹿はつれなき山風にすこが驚くひたの音哉

七〇岡のべや靡く芝野の篠薄穂向の露を時を待ちける

六百廿番　左　公經卿　右勝　三宮

七一雲に紛ふ花ともいはじ眺れば月も青野の山路也けり

七二行人も止らぬ野べの花薄招きかねてや露こぼるらむ

住侘ぬすその〳〵庵の霧の中に夜深き月の東雲の影

六百廿一番　左持　季能卿　右　内大臣

七三吾妹子がすそわの田ねに風過きて衣手寒し初雁の聲

七四淺茅原たへ忍ぶべき夕かは露ふき拂ふ風のけしきに

遠山田薄霧隠れ飛ぶ雁を打眺むれば風ぞ身にしむ

六百廿二番　左持　宮内卿　右　忠良卿

七五見る人の心盡せと初秋の空よりかはるゆふ月夜かな

七六ふぢばかま風に靡く末葉より紫くだく野べの夕つゆ

七七獨誰外山の月を忍びかね木々の木葉に風恨むらむ

六百廿三番　左勝　讃岐　右　兼宗卿

七八とればけぬよし枝作ら宮城野の萩に玉ぬる秋の夕露

七九尋ねてもたれかはとはむ勁なく野べに哀は深草の里

八〇都人きてもとへかし松風の喰しき里のよはの氣色を

六百廿四番　左持　小侍従　右　通光卿

八一なのめつる人まつ宵に哀れ又心さわがす萩のうは風

二ゐりなしな小雲が下の亂葉に露吹きおろす秋の夕風
三〇 題露に寄く小萩の萎つゝほすまを撫と問はゞ答よ
六百卅五番　左　隆信朝臣　右勝　肇岡
三一人はこず寂しかれとや萩の葉の戰ぐ許りの秋の山里
三二浪に洗ふから鈴しもみゆるかな野島が崎の秋萩の花
三三鴎の海やしがの浦波に霧晴て影曇りなき月の影哉
三四六百卅六番　左　有家朝臣　右勝　俊成卿女
三五待出て後きへつゝる心許雲にいざよふ山のはの月
三六忍べき人だにたへぬ秋のよを野原の蟲の露に鳴らむ
三七昔誰しのに露おく野べにしも斯る秋とは契置けむ
六百卅七番　左勝　保季朝臣　右　丹後
三八大方の月には風もつらからず宿かる露の有がたなる
三九一様々に花の紅とく秋の野にいかなる露の結ぼゝらむ
四〇片敷のせばき袂をつとてや斯しも露の散紛ふ覽
六百卅八番　左勝　良平　右　越前
四一秋きては幾日になりぬ夕月夜ふけ行く空に影遠る迄
四二映も遂ふ嵐のつてに誘はれて松に殘るゝ雫を鹿の聲
四三柴の戸や通風の庭の松にげにも寂しきには聲哉
六百卅九番　左　具親　右勝　定家朝臣
四四原ひえて雲なき空となる儘に彌遠ざかる山のはの月
四五さを鹿のなく音の限つくしてもいかゞ心に秋の夕暮
四六石間行く山下水の薄氷けには淨てすめる月かげ
六百卅番　左持　順徳院　右　通具朝臣
四七友をたゞみ我假疑と戀しけれ野にたつ鹿は妻呼ぶ也
四八我もしる思ひ物を誰共に音に立つべき夕まぐれ哉
四九見からに淚そ添し染行空のしがの浦風
六百卅一番　左　女房　右勝　雅經
五〇分行けに繁くも露のみゆる哉月吹く風は野べの秋風
五一よしさらば袖にも影が宿してむ月待つ宿の山の下露
五二峰にふく木々の嵐に空晴れて夜渡る月の清き比哉
六百卅二番　左　左大臣　右勝　寂蓮
五三物思へとする業ならし木間より落たる月にさと鹿の聲
五四露さへ袖になれてや暮ぬらむ知ざりき斯る野べの庵に
五五知ざりき斯る野べの庵に槙の戸閉くけさの風
六百卅三番　左持　前權僧正　右　家長
五六藤衣花にぬしとふゆふ暮にこたふる風や萩の上そよぐ
五七野べみれば朝夕露の萩原や思歌へる袖に秋風そふく
五八人はこで年ふる秋の柴の庵に槇の落葉か物と散なる

六百卅四番　左持　公繼卿　右　三宮
五九むかしたれ秋ににせて忍びけむ尾花が露を結ぶ秋風
六〇風渡る萩の上葉に宿りきて影うちそよぐ秋のよの月
六一手に掬ふ石井の水も人訪て年へに鳧なしがの山風
六百卅五番　左持　公經卿　右　内大臣
六二すゑばすみ曇れば曇る淚哉思へとて月には非ねど
六三露になく秋の末葉のあはいつまで草にすまむとすらむ
六四となべ川薄霧隔く瀬々の浪に群たる衡風に行く也
六百卅六番　左　季能卿　右勝　忠良卿
六五霧迷ふ深山の奥のすまひまでやればやらるゝ我心哉
六六眞葛はふまのゝ濱路の夕風に恨みて歸るおきつ白浪
六七ながむれば峰の嵐に空晴れて影曇なき月の頃かな
六百卅七番　左勝　宮内卿　右　兼宗卿
六八つねよりも哀ぞ深き霧の中に鹿の立ちなく峰の夕暮
六九一聲山里の秋の哀の身にしむは鹿の音そふる萩のゆふ風
七〇みつ潮や岸打浪の松がねに蝉しき迄の夜はの浦風
六百卅八番　左勝　讃岐　右　通光卿
七一女郎花よがれぬ露を置作らあだなる風に何靡くらむ
七二みわの里きてもとへかし遙々と待も怨めし葛の秋風
七三
六百卅九番　左　小侍從　右勝　覺阿
七四露にぞ見上の鹿はなくなれど淚は袖の物とこそみれ
七五看こゝろあらめ見も懲かし女郎花枝さへ花の色に匂て
七六庭の萩の穗向の風に日數へてよなく宿る東雲の月
六百四十番　左持　隆信朝臣　右　俊成卿女
七七雲はらふ風に哀を先だてゝ出づるも著き山のはの月
七八引き寄ね歸りし空に音づれて又袖ぬらす秋の雁がね
七九おきつなみ浪吹上の滿風に照すともなき磯の漁火
六百四十一番　左持　有家朝臣　右　丹後
八〇末の松まつよ更行く空晴て浪よりいづる山のはの月
八一聲たてゝ鹿ばかりこそなかね共袖にぞ著き秋の夕暮
八二時は秋物おもへとや庭の萩よかれぬ露を葺ふ秋風
六百四十二番　左勝　保季朝臣　右　越前
八三眺め侘ぬ心を秋にとめむとて思ひすつれど更科の月
八四秋風の身にしむ夜はの寂寥こそ物の哀の限なりけれ
八五見渡せば木々の木葉も晴ぬべし松に殘りてくるゝ秋風
六百四十三番　左持　良平　右　定家朝臣
八六しの薄上葉の露に宿かりて風にみだるゝ秋のよの月

八七秋きぬと袖に知らるゝ夕露に頓て木間の月ぞ宿れる
八八見る袖の淚言とひ宿る月寂しくも有か柴あめる垣
六百四十四番　左持　具親　右　通具朝臣
八九秋といへば此は習ひよ夕まぐれ袖に淚と何思ひけむ
九〇下萩の露きえわぶる蟲の音にうたて寂しき風の音哉
九一人はこで年古里を鹿ぞとふ木每に秋の風は吹つゝ
六百四十五番　左持　顯昭　右　家隆朝臣
九二小萩原玉しく色をみぬ人や露をあだなる物と云けむ
九三さやけさは秋の習の夜はの月思へとえ社寢られざりけれ
九四瀬々下す宇治の里人舟止て浪にすむ月暫かもみよ
六百四十六番　左　女房　右勝　寂蓮
九五哀昔いかなる野べの草葉より斯は秋風吹き始めけむ
九六思ひ餘る心の程も聞ゆなりしのぶの山のさを鹿の聲
九七よはの月に鹿の立鳴深山より露を分つる初雁の聲
六百四十七番　左勝　左大臣　右　家長
九八故郷は我まつ風をあるじにて月に出でこし更科の山
九九秋にそむ心もたへずみか月の仄めく影にさを鹿の聲
一〇〇自ら柴の戸敲く風の音も松にぞ通ふくるゝ夜每に
六百四十八番　左持　前權僧正　右　三宮
一〇一哀にもおなじみどりの春の草の心々に色かはりゆく
一〇二蟲の音も千種の花も野べ作ら鹿をのみ待庭の淺茅生
一〇三小山田に鳴子引てふ賤夫は穗向の風を友と聞らし
六百四十九番　左持　公繼卿　右　内大臣
一〇四花薄招きとめてや思ふらむ道ゆく暮の野べの旅寢を
一〇五月影をほどなき袖にせきかねて秋の哀をもらす淚か
一〇六何となく置迷ふ露ぞ干るなき外山に結ぶ柴の假庵
六百五十番　左　公經卿　右勝　忠良卿
一〇七さえ渡る光に霜の色をへて野原の蟲も月に鳴くなり
一〇八千々に思ふ心は月に更にけり我身一つの秋と眺めて
一〇九み山べや霧の縫の萩が上に誰言がましゝ露の色哉
六百五十一番　左持　季能卿　右　兼宗卿
一一〇故郷の庭をば己が野べにして流石に誰をまつ蟲の聲
一一一山田守るこが住ひのいかなら稻葉の風の秋の夕暮
一一二時しもあれ物思へとや庭の萩によすがら通ふ鹿の聲哉
六百五十二番　左持　宮内卿　右　通光卿
一一三淺茅原下葉片しく袖の上に露おきかふる野べの秋風
一一四秋は唯萩の葉すぐる風の音に夜深く出づる山端の月
一一五寺々の入相の鐘に日は暮て外山の月に鹿ぞ鳴なる

六百五十三番　左　讃岐　右勝　釋阿

一時の花とみれども女郎花秋の契りを世々に結ばな
紫の色をばのこせ藤ばかま露は嵐にくだけちるとも

月清みゆらの湊千鳥夜深き空の霜になくなり

六百五十四番　左持　小侍従　右　俊成卿女

一掬なさを共にみむとや思ふらむあだなる露に宿る電
よしさらば必人にあはず共今夜の月にねなむ物かは

友誘ひ浦曲の霧に飛ぶ雁はうはの大空に歸る玉章

六百五十五番　左　隆信朝臣　右勝　丹後

秋をへて眺めぬよはもなき物を猶珍しくすめる月哉
野べならで柵む鹿はなけれ共露にをふれす宿の秋萩

下にのみかよふか袖に野べの露且々頓てちる涙哉

六百五十六番　左勝　有家朝臣　右　越前

秋きては宇治の橋守なれも又夜渡る月を哀とや思ふ
思ひこし秋の哀を數々にかき列ねたるかりの玉づさ

初時雨しぐれて渡る山風に寂しさ思ふ鹿の聲かな

六百五十七番　左持　保季朝臣　右　定家朝臣

浦風に鹽路の末も霧はれて月になり行くしだの浮島
松蟲の聲をとひ行く秋の野に露尋ねける月の影かな

みつ潮になみ立ちくらし終夜岸の松がえ風騒ぐ也

六百五十八番　左勝　良平　右　通具朝臣

野べみればちぐさの花は仄にておく白露に有明の月
雲はるゝ空も一つに清見潟浪にかさなる秋の夜の月

松が枝に喰しく當るよはの嵐身にしむ色を聞忍つゝ

六百五十九番　左　具親　右勝　家隆朝臣

相坂のせきの岩角引きつれて影をならぶる望月の駒
秋といへば濱松がえの手向草わりなき露に宿る月哉

水面に清くも宿れ山端をさやかに出るしかの月影

六百六十番　左　顯昭　右勝　雅經

さらぬだに秋の哀にたへぬ身を夕霧隱れ鶉なくなり
まくず原露に光をさしそへて玉ぼく物は秋の夜の月

槇の戸を曇ももらず過ぬ也よ渡る月に時雨兼つゝ

六百六十一番　左　女房　右勝　家長

野べに置る露をば露と眺めきぬ花なる玉か雁の涙か
山里はさやけき月もしかの音も峯の嵐の心なりけり

峯の月清き光にかりなきて翼にかゝる風ぞ寂しき

六百六十二番　左勝　良平　右　通具朝臣

秋なればとて社濡す袖の上を物や思ふと月は問けり

秋のよの月吹く風に霧晴て空にぞすめるさを鹿の聲

三室山きほふ木葉に紛ひつゝげに降雨も夜は知れず

六百六十三番　左勝　前權僧正　右　内大臣

故郷の蟲の涙やおきつらむ庵もまがきも野べの白露
いとせめて名殘の空もわりなきに秋は宛も有明の月

月をまつ夕より先晴初めてよすがら清き東雲の空

六百六十四番　左　公繼卿　右勝　忠良卿

鹿のねはおろす嵐に頽ひけり麓の野べに妻や立らむ
積りけるいくよの雪に眺むれば槇のは白く照す月影

松風も岸打浪も長閑にて影をや月の千里にはしく

六百六十五番　左勝　公經卿　右　兼宗卿

深きよの心の内を顯して霧まの月にをじか鳴くなり
夕暮は荻の上葉に風さえて花に宿かる蟲のこゑ〳〵

千々に思時とは月の宿れ共せばくや袖は武藏野の露

六百六十六番　左勝　季能卿　右　通光卿

草葉にもあらぬ袖さへ萎れけり露は定めぬ置所かな
初雁はかへりし雲の跡わけて又都にも思ひたちけり

雲路より澤べを猶む初雁のよはの涙に時雨おつ也

六百六十七番　左勝　宮内卿　右　釋阿

谷の戸はまだ明やらぬ霧の内に出る旭は影だけに鳥
花も露もいかに心を碎けとて秋は野分の吹始めけむ

秋山の寂しき庵に人はこで四方の嵐を鹿ぞわぶなる

六百六十八番　左持　讃岐　右　俊成卿女

君が代の秋の空まで眺めけん契うれしき月の影かな
行廻り馴ぬる空の秋の月さてしもあかぬ光そひけり

みるからに涙ぞ曇る宿の月寂しとや思ふ柴の扉を

六百六十九番　左持　小侍従　右　丹後

朝毎の露には何のおくならむ我袖のみぞ其と知るゝ
憂世とは思ふ物から鈴蟲の振捨難き身をいかにせむ

沖つ風浪や吹らむしがの浦に照月影の磯にさやけき

六百七十番　左持　隆信朝臣　右　越前

板まもる月は都に變らねど鹿なく野べに秋風ぞ吹く
槇々に秋の哀はつくせども荻ふく風にしく物はなし

獨のみ年ふる軒の忍草きてとふものは風の音のみ

六百七十一番　左持　有家朝臣　右　定家朝臣

すまの浦に侘と答し跡もなしよな〳〵月の影はとへ共
思入れぬ人の過行く野山にも秋は秋なる月や澄らむ

水無瀬川眺むる空のよはの月清き早瀬に影宿し鳥

六百七十二番　左持　保季朝臣　右　通具朝臣

長き夜の哀をいかにみたや守稻葉の露に月を宿して
高砂の尾上の秋よいつとても松を拂はぬ風ならね共

千度うつ遠路の里のさよ衣旅ねの夢に結ばれつゝ

六百七十三番　左　良平　右勝　家隆朝臣

思ひやるむかしの秋の哀まで今夜の空にみする月影
しがの海や鴈照浪を見渡せば月にいざよふ蘆の釣舟

影清き月松がえに風過て汀に浪をきかぬよぞなき

六百七十四番　左　具親　右勝　雅經

曇るといふ思ひばかりぞ更科や姨捨山も月は入けり
葛城や高間の峯に雲はれてあくるわびしき有明の月

誰か又斯るみ山の槇の葉に影漏り兼る月を見らむ

六百七十五番　左持　顯昭　右　寂蓮

都へはなど出でやらぬ逢坂の關に入りぬる望月の駒
涙をばよその袂になしはてゝ聲をば鹿の己が物とは

小萱原廢く夕の柴の庵に照すともなき稻妻のかげ

千五百番歌合卷第十　秋三　御判　折句歌

六百七十六番　左　女房　右勝　三宮

物や思ふ雲のはたての夕暮に天つ空なる初雁のこゑ
初雁は越路の雲を分け過ぎて都の霧に今ぞ鳴くなる

此頃は鹿こそはなけ山里の寂しくむすぶ柴の庵に

六百七十七番　左勝　左大臣　右　内大臣

蟲のねは槇の落葉に埋れて霧の衾がきに村雨ぞふる
白玉か何ぞと問へば女郎花露のきえつゝ萎れ臥ぬる

昔思ふしがの都の山風に里あれぬとや鹿も鳴らむ

六百七十八番　左勝　前權僧正　右　忠良卿

わたつ海の秋なき浪の花に猶霜おく物はよはの月影
明石がた浦風さびし月影の浪にきえ行くうす霧の空

下葉ふく森の秋風かせきえて月すむ露に通ふ袖哉

六百七十九番　左勝　公繼卿　右　兼宗卿

しのゝめの曉露や染つらむよのまに變る萩の上の色
天の原空行く月をいかなれば我物顔に見する山のは

よさの浦や潮風松を拂ふなり清き月夜の遙なる影

六百八十番　左勝　公經卿　右　通光卿

長岡や田づらの庵のあれまくに寢覺誘ふ鳴の羽根掻

七この比は尾上の鹿の聲により麓の里に寢覺がちなる
一七しがの海にきつゝも訪ひこ山風に寂くも有るかしかの
六百八十一番　左　季能卿　右勝　釋阿
二七身を碎く心の色は夕まぐれ千草の花に顯はれにけり
三七しめおきて今やと思ふ秋山の蓬がもとに松蟲のなく
四七武藏野や下葉露けき萩がえにゝ〳〵秋の鹿や鳴覽
六百八十二番　左　宮内卿　右勝　俊成卿女
五七雲かゝる生駒が嶽に月おちて三輪の檜原に猿鳴くなり
六七さらでだに慰むものか長き夜に月より外の獨寢覺は
七七ねも遣ずさぞな深山に目覺つゝ夜渡る月を忍秋哉
六百八十三番　左勝　讃岐　右　丹後
八七詠めつる有明の月は傾きて山より出づるさを鹿の聲
九七秋風にむら雲はるゝ月みれば心の中も涼しかりけり
〇八東雲や刈田の面に風すぎて月にむれたる鴈の聲哉
六百八十四番　左持　小侍從　右　越前
一八霧深き難波の浦のもかり舟いとゞ葦間をよせや煩ふ
二八我さへに涙ぞおつる秋風にしのびもあへぬ蟲の聲々
三八契あれや常世の雁の山を分て都の空に群てきに鳥
六百八十五番　左　隆信朝臣　右勝　定家朝臣
四八きてみれば寂かるべき家ゐかは月も住けり秋の山里
五八高砂の尾上の鹿の聲たてし風よりかはる月の影かな
六八岡のべや軒もる月の隔て哉夜渡る雲に時雨過つゝ
六百八十六番　左勝　有家朝臣　右　通具朝臣
七八篠簾秋は懸ても槇の戸をさゝで有明の月をみる哉
八八雁もこばまてと契をすが原や伏見の床に衣うつなり
九八松風に霧晴ぬらし山のべや影さへ渡る月ぞ宿れる
六百八十七番　左　保季朝臣　右勝　家隆朝臣
〇九明ぬるかまの浦風音づれて招く尾花に鳴の羽根掻
一九泊瀬山古河のべも霧はれて月にぞたてる二もとの杉
二九すまの關きくや關守遙々と通ふ千鳥の月になく也
六百八十八番　左持　良平　右　雅經
三九憂身には月を見だにかひぞなき秋の心を袖に殘して
四九有明も秋ぞ名殘は大はらや月をしほの山のはの空
五九己のみ鳴尾の松の潮風にしゐえにかゝる浪の音哉
六百八十九番　左　具親　右勝　寂蓮
六九思ひ侘ぬあれまくもをし菅原や伏見の里の秋風の比
七九初かりのきこゆる空をながめても心にかはる春の曙
八九松が枝にけさや嵐の弱るらむ遠に聲の遠かり行く

六百九十番　左勝　顯昭　右　家長
九九結びおく霜とはいさや岩代の濱松かえにすめる月哉
〇〇都思ふ月もあかしの浪の上に夜の心の長閑からすも
六百九十一番　左　隆信朝臣　右勝　通具朝臣
一〇眺ればみるめの浦の松の風峪しくもあるよはの聲哉
二〇さのみやは月に風猪のいね安みねられぬ物を秋のよな〳〵
三〇秋の田の篠におしなみ吹く風に月もて研く露の白玉
四〇露ふかき道のさゝ原分來てもかゝる袂を哀とはみよ
五〇み山べや木々の木葉ぞ宿も訪ふ寂き嶺に時雨過つゝ
六百九十二番　左勝　左大臣　右　忠良卿
六〇かち人の道をぞおもふ山城のこはだの里の秋の夕霧
七〇天つ空よもの雲霧消えはてゝ嵐にのこる秋のよの月
八〇此比は櫨の紅葉の立枝だに夜置く露も霜結ぶらし
九〇心有む人とも見ばやと思より云ぬに惜きよはの月哉
一〇小倉山紅葉吹おろし吹風の松につれなき暮方の聲
六百九十四番　左持　公繼卿　右　通光卿
二〇行く人の裳裾も著し秋といへば朝おく露の深草の里
三〇淺茅生や吹きくる風を便にて光を散す露の月かげ
六百九十五番　左持　公經卿　右　釋阿
四〇秋ふけて幾夜もしらぬ故郷の月は主にすみ代りつゝ
五〇あれ渡る秋の庭こそ哀なれまして消えなむ露の夕暮
六〇身に占て眺むる頃の宿にしもさも生憎の鹿の聲哉
六百九十六番　左　季能卿　右勝　俊成卿女
七〇いく秋の例をかひく諸人の行きあふ坂のもち月の駒
八〇葛のはふ眞垣の霧に鳴く鹿も恨み顏なる風の音かな
九〇松にふく風こそあらね霧の中に霞みし春の月の俤
一一六百九十七番　左勝　宮内卿　右　丹後
二一忘れずは又こむ秋の空までと雲にたのむる有明の月
三一秋の夜の月もり明す柴の戸をとゝふものは峯の松風
四一葛のはに物怨めしく風過て月は淺茅に影宿しけり
六百九十八番　左勝　讃岐　右　越前
五一秋の月いかに待出て眺ればさやけき影の先曇るらむ
六一廣澤の池しもいかに昔より月見夜はのさがと成けむ
七一いなば山嶺しくも非ぬ松風の曇らぬ月の影拂ふ也
六百九十九番　左　小侍從　右勝　定家朝臣

六二常よりも月に心のすむ夜哉斯てや人の雲にいりけむ
七二心のみもろこしまでも浮れつゝ夢ぢに遠き月の頃哉
八二草枕もりくる月に怨むなりけさたつ山の末の白雲
七百番　左　隆信朝臣　右勝　通具朝臣
九二さのみやは月に風猪のいね安みねられぬ物を秋のよな〳〵
〇三影宿す露のよすがの秋くれば月ぞ澄けるをのゝ篠原
一三夜はの秋すむ月影の澄しよさの浦曲の東雲の空
七百一番　左　有家朝臣　右勝　家隆朝臣
二三秋のよは月見よとてや長月の有明にさへ成にける哉
三三忘れずや昔三笠の山の月猶ふる里にめぐりあふとは
四三みるからに影ぞ泣行く笹の庵夜床の月の霜の狹筵
七百二番　左持　保隆朝臣　右　雅經
五三鳴く鹿の聲より落つる夕露に萩の下葉の所せきまで
六三照射せし端山繁山忍びさて秋にはたへぬさを鹿の聲
七三大方の眺むる宿の下萩もほに出つゝぞ時を待ける
七百三番　左勝　良平　右　寂蓮
八三雁音にいざことゝはむこしおより都に向ふ旅の心を
九三空汚てすむべき月を山端に星の光のかねてみすらむ
〇四此頃は鹿も月にや契りけむよがれぬ露の東雲の空
七百四番　左勝　具親　右　家長
一四人はいさ苦しき物と知ぬればよそには聞じ松蟲の聲
二四秋の夜は蟲の音のみと思ひしに月影繁き淺茅生の露
三四よはの月空さえ渡る山風に里にも秋の霜や置らむ
七百五番　左持　顯昭　右　三宮
四四岩がねにたかばかりしき眺れば吉野の嶽に月傾きぬ
五四折しもあれ獨ながむる大空の有明の月に初雁のこゑ
六四庭の松閨もる月を訪からに千々に物思ふ風の音哉
七百六番　左　女房　右勝　忠良卿
七四小山田の稻葉片より月さえて穗向の風に露亂るなり
八四夜さむなる松の嵐をとひ顏に遠里をのに衣うつなり
九四夜はの秋嘯な悲しき蟲のねも風の氣色も月の光も
七百七番　左勝　左大臣　右　兼宗卿
一五千度うつ砧の音を算へても夜を長月の程ぞしらるゝ
二五岩まよりもりくる水に宿しても心計りの月は眺めつ
北よりや主定らぬ玉章を懸つゝ雁の月にきつらむ
七百八番　左勝　前權僧正　右　通光卿
三五我門のわさ田假寢の草の庵に夢路移ろふ神なびの杜
四五都人とへかし秋の花盛なさけこめたる霧のまがきを

わくらばに里訪人の便あらば夜枯ぬ月に忍と答よ
七百九番　左　公継卿　右勝　釋阿
秋の夜は光を殊にそへよとや月の都に定めおきけむ
みほの浦や清見が關に影宿す月は旅寝も變ざり鳧
七百十番　左持　公經卿　右　後成卿女
あかで入る月に恨や殘らまし山のはにぐる夕也せば
色變る露をば袖に置迷ひうら枯行く野べの秋哉
うらがれの下葉色づく秋萩の露ちる風に鶉鳴くなり
押かやし眺むる秋を忍てもこぼるゝ露の所せき迄
七百十一番　左　季能卿　右勝　丹後
秋からの月の光か露故の秋の哀れかいかにながめむ
いかなれば霞にきえし雁音は月の秋しも契置きけむ
水きよき清瀧川の月影をよるとはみえず東雲の空
七百十二番　左　宮内卿　右勝　越前
事しげき都の空の月にだに秋は詠のつきぬとぞきく
草深み道ふみ惑ふ故郷にあれても月の影のみぞすむ
葛葉もさぞな怨むる野べにしも片へ露けく契露哉
七百十三番　左　讃岐　右勝　定家朝臣
哀なる山田の庵の寢覺哉いなばの風にはつかりの聲
紅葉する月の桂に誘はれて下の嘆きも色ぞうつろふ
物思へば亂て露ぞ散紛ふ夜はに寢覺を鹿の聲より
七百十四番　左　小侍從　右勝　通具朝臣
曙き夜の闇に迷はむ道にても今夜の月や思出づべき
深草の里の月影寂しさもすみこしまゝの野べの秋風
嶺の月清き岩間に宿りきて小浪凍るしかの山の井
七百十五番　左持　隆信朝臣　右　家隆朝臣
秋の夜は雲も心や有明の傾くまでもすめる月かな
月みばと賴めは置し人はこで淺茅が露に松蟲ぞなく
日數へぬ外山の露にしほる袖きつゝ慣にし唐衣哉
七百十六番　左持　有家朝臣　右　雅經
身の爲に急ぐとならば唐衣重ぬる夜はゝ打もねなくむ
秋風に鶉なく野の夕まぐれなき心まで哀れをぞしる
忘れずよ清見が浦の桒枕袂に浪をしぼりわびしも
七百十七番　左持　保季朝臣　右　寂蓮
鳴きくらすよもぎが袖のさよ枕片しく袖に松蟲の聲
み山出し山路の月の影のみぞ送り附ても友に成ける
峯の月眺侘ぬる宿たしもさよのね覺を鹿ぞ訪ける
七百十八番　左　良平　右勝　家長
心さへはるゝまぞなき霧の中に眺め侘ぬる秋の山里
蟲のねを荻吹風や誘らむそよぐとすれば遠ざかる也
七百十九番　左持　具親　右　三宮
徒にねぬ夜の數となりにけり月ならぬ頃の鳴の羽掻
草枕なみだの露は秋風の言とふにしも落ち增りけり
女郎花靡く風をや慕ふらむ稍白露も打時雨れつゝ
七百廿番　左持　顯昭　右　内大臣
眺むれば千々に物思ふ是ぞ此心づくしの秋のよの月
あくがれて今はと思ふ山里に澄慣にける夜はの月哉
眞葛原玉まく露もおきやそふ眺むる儘の東雲の空
七百廿一番　左　女房　右勝　兼宗卿
めぐり行く秋やはもとの秋の空月ぞ昔のしがの古里
眺むれば月は浪ぢに影さえてあかしの濱に積る白雪
水の面に峯の松風宿りきてさぞ住の江の東雲の月
七百廿二番　左勝　左大臣　右　通光卿
荻野ゆく衣にすれる月草の移り易くも過ぐる秋かな
雲はらふ嵐を空に先だてゝ秋とも著くすめるよの月
すまの秋空はあく共殘れとや夜渡る月を慕ふ浦風
七百廿三番　左　前權僧正　右勝　釋阿
露の染めて色々になす紅葉の又色々に露をそむらむ
秋の月ひるとは見えてさえ寒し雪と思ふは庭の白露
寂さは蟲明のせさの潮風に夜深き月にしく物ぞなき
七百廿四番　左　公繼卿　右勝　俊成卿女
浪のうつ玉の浦わのあら磯に光を碎くよはの月かな
月をのみ伏見の里の秋の暮松風ならでとふ人もなし
槇の戸は月に任て夜や明す桐の葉傳ひ風は吹つゝ
七百廿五番　左勝　公經卿　右　丹後
衣うつみ山の庵のしば〳〵もしらぬ夢路に結ぶ手枕
さ夜ふけて砧の音の寒ければ衣雁がね空に鳴くなり
武藏野や澄ける月を吹風に夜枯ぬ露や下葉染らむ
七百廿六番　左　季能卿　右勝　越前
遙々と月みる空にあくがれて心にこゆる小初瀬の山
袖の上に疊らぬ夜はの雨過ぎて月は隈なく住吉の里
三吉野や霧たつ秋も春ぞみる影龍なる月は住つゝ
七百廿七番　左持　宮内卿　右　定家朝臣
衣手は秋の山田のそばつとも月泊る夜の露は拂はじ
いく秋を千々に碎けて過ぬらむ我身一つを月に憂て
置る露本荒の小萩隙をなみ枝もとをゝに澄る月哉
七百廿八番　左持　讃岐　右　通具朝臣
終夜置居る露のいかなれば草の葉毎にぬるとみゆ覽
世中に靡きおきふす下萩も末こす風に露は落ちけり
音にきくなるとの浦の潮風に仄かに通ふ友衞かな
七百廿九番　左　小侍從　右勝　定隆朝臣
眺むるに傾く月ぞ恐めしき我は斯こそ入もやられね
心なき身をさへ更に惜む哉なにはわたりの秋の夕暮
眺むれば庭の淺茅を拂ふ風影うち靡く月の影かな
七百卅番　左持　隆信朝臣　右　雅經
明けぬるか外山の原の秋の月傾く空に鳴のはねがき
夕暮は孰くをいかに眺まし野には山にも秋風ぞふく
水の面に流れもやらず宿れ月さほの河風棚はなし
七百卅一番　左勝　有家朝臣　右　寂蓮
秋の色を染る無名や立田姫常磐の山は鹿のみぞなく
なごりなく峯の嵐に雲落ちてのきばの空に有明の月
外山風木々の木葉を拂ふらし雁音寒く積る秋かな
七百卅二番　左勝　保季朝臣　右　家長
暮毎の露にや色の變るらむ時雨はまたじ庭の淺茅生
秋の夜の野べに變ぬ袖の露ありとや愛に蟲の鳴らむ
窓近くたつきの音や柴の戸に通ふ山人爪木取るらむ
七百卅三番　左持　良平　右　三宮
衣うつ賤が伏屋の板ま粗み砧のうへに月もりにけり
草結ぶ秋の野原の假寢には月にぞかはすさよの手枕
都人なぐかとひこぬ山の月さや庵の椎しばの門
七百卅四番　左勝　具親　右　内大臣
大方のうきにかへたる寢覺哉里わく物をさを鹿の聲
風ふけば過行く秋の立田山よはに紅葉や獨ちるらむ
閨の内にさす月影は目覺つゝ片しく袖の露拂ふ也
七百卅五番　左　顯昭　右勝　忠良卿
昔みし月は哀やまさりけむ面影にさへぬるゝ袖かな
秋風をくるゝ夜毎に身にしめて賴めぬ誰を松蟲の聲
都にも露は立ちけり野も山も限らぬ秋の契結びて
七百卅六番　左　女房　右勝　通光卿
同じくば哀れしられむ人もがな鹿と蟲との秋の夕暮
衣うつきぬたの音に賤のめがいそぐ心や夜はの秋風

よはの月敦津の浦を見渡せば岸の松がえ拂ふ秋風

七百卅七番　左勝　左大臣　右　釋阿

秋風にはし鷺ならすかた岡の柴の下草色づきにけり

人とはゞいかに語らむ秋の山松のあらしに有明の月

時雨して晴ぬるよはの野べの露を且々袖に散す秋風

七百卅八番　左勝　前權僧正　右　後成卿女

露は野べわが夕暮の袖を又雁の涙のそめて過ぎける

夜をかさね月影さむみ蓬よもぎが本に聲よわるなり

月をまつ夕に靡く空の雲よはには拂へ木々の秋風

七百卅九番　左　公繼卿　右勝　丹後

隈もなき月をしみれば秋夜も程社無れねぬに明ぬる

紅葉は染むる時雨もある物を何故月の色をそふらむ

物思はゞ身にしみ返れ千々にのみはゝ詠て忍ぶ月影

七百四十番　左　公經卿　右勝　越前

玉鉾の行手の袖のてるまでに紅葉をちらす雨の夕暮

なぐさまぬ心に月のめぐりきて昔にかへす姨捨の山

村雨の風打ち靡く下萩にかごとがましき結ぶ袖

七百四十一番　左　季能卿　右勝　定家朝臣

月みれば頓て秋のぬるゝかな心の玉や水をたるらむ

秋とだに忘れむと思ふ月影をさも生憎にうつゝ顔かな

山路よりきすか月影栄の門みるも寂しき雖に

七百四十二番　左持　宮内卿　右　通具朝臣

夜々をへて聲遠ざかる碁栖はおなじすみかなれども

あはれなる時しも秋の寢覺かな妻とふ鹿の明方の聲

渡の原露に漕入る藻刈舟關とはしるやすまの浦風

七百四十三番　左勝　讃岐　右　家隆朝臣

人はみな心の外の秋なれやわが袖ばかりおける白露

秋の嵐ふきにけらしな外山なる柴の下草色變るまで

鹿のねの遙に通ふ野山哉まやの餘りのけさの秋風

七百四十四番　左　小侍從　右勝　雅經

眺むれば身には心の止らぬに誘ひもしてよ秋夜の月

いはゞ代の野べの下草吹く風に結ぼゝれたる松蟲の聲

鳴渡る雁の涙に統ゝ露まなくもるか葛のうら風

七百四十五番　左持　隆信朝臣　右　寂蓮

よしさらば人松蟲に任せてむ草に變るゝ古郷のいほ

月あかぬ秋の心に秋のよのちよを一よに秋風ぞふく

里に吹く浦のとまやの風の音に誰かも獨住始けむ

七百四十六番　左　有家朝臣　右勝　家長

色かはる端山が峯に鹿なきて尾花吹こす野べの秋風

今更にまくずがはらをわけよとや恨顔なる松蟲の聲

松が枝に曇らで空も住吉や通ふ浪風に月は澄けり

七百四十七番　左勝　保季朝臣　右　三宮

さ夜ふけて鳩吹く山の秋風に村雨過ぬ袖にしぐれて

衣うつなりもの里より吹風に遙々きたるつちの音かな

さゝの庵夜深き月の影寒し妻とふ鹿の通ふ寢覺に

七百四十八番　左　良平　右勝　内大臣

いづれともみえぬ雛の月影に匂ひにそわく菊の白露

朝ぼらけまきのを山に霧こめてうちの川長舟呼ふ也

女郎花さきける野べに露落て夜深き風に鳴立ぬ也

七百四十九番　左　具親　右勝　忠良卿

こゝの人をまつよ津守の浦風に遠里をのは衣うつなり

柴の戸に木葉鹿のね誘ひきて見せも聞せも山庵の風

此頃の野にも山にも晴曇り通ふ時雨を月に怨むる

七百五十番　左持　顯昭　右　兼宗卿

聞ばやな詠る儘にあくがるゝ心のはては月や知らむ

有明のあけ行く空の月みれば委ばかりも哀なりけり

治れる名をも絕せじ敷島や大和島根も動なき世ぞ

千五百番歌合巻第十一　秋四　判　定家朝臣

七百五十一番　左勝　女房　右　釋阿

秋の蟲の手玉もゆらに織機を誰きてみよと野べの夕暮

月には是哀を人に靡させて西に遂にはさそふなりけり

七百五十二番　左持　左大臣　右　俊成卿女

秋は猶葛のうら風恨てもとはすかれにし人ぞ戀しき

とふ人も嵐吹さそふ秋はきて木の葉に埋む宿の道芝

七百五十三番　左勝　前權僧正　右　丹後

聽く見し霜と露との經緯は風のおりける錦なりけり

夕まぐれ野べの淺茅を分行けば露ちる風に鶉鳴なり

七百五十四番　左　公繼卿　右勝　越前

はれ曇り定なきよの月影にくめぢの神の心いかにぞ

月をのみ見とはなきをすまの蟹の秋の幾夜をねで明す覽

七百五十五番　左勝　公經卿　右　定家朝臣

紅の色にぞ波も立田川紅葉のふちをせきかけしより

獨ぬる山鳥の尾のしだり尾に霜おきまよふ床の月影

七百五十六番　左勝　季能卿　右　通具朝臣

あなしふく灘のしほぢに雲消えて浪に極る月の影哉

ふく風も嵐になればとこの山夕の鶉うらみてぞ鳴く

七百五十七番　左持　宮内卿　右　家隆朝臣

秋は唯草に任せて蟲の音のあれたる庭と人は見とも

鐘のこゑ鳴の羽音もあはれなり野守の霧の明方の空

七百五十八番　左勝　讃岐　右　雅經

夜と共になだの鹽やに暇なみ浪の夜さへ衣うつらむ

何と斯く拂ひもあへず結ぶらむ袂は露のおき所かは

七百五十九番　左勝　小侍從　右　寂蓮

よしさらば眺むる月にすむ心やがて西への道に伴へ

曉の鳴たつまでもなかりけりいなばに籠る宿の夕暮

七百六十番　左　隆信朝臣　右勝　家長

潮風や秋は夜寒になるみ潟あまの苫屋も衣うつなり

秋風はふかぬ草葉もなき物を卿ち顏なるかやが下折

七百六十一番　左持　有家朝臣　右　三宮

時雨には色もかはらぬ高砂の尾上の松に秋風ぞふく

秋やをしきくれ行く空や哀なる思ひ定めよ蟲の聲々

七百六十二番　左　保季朝臣　右勝　内大臣

山深き秋をみるにも思ふかなこれより奥の夕暮の空

うら風の夜寒なるらむ松島や蟹の苫屋に衣うつなり

七百六十三番　左勝　良平　右　忠良卿

紅葉ちる岩田のをのゝ柞原風にぞなるゝ秋のよの月

浦近き草屋の里に日は暮れて浪路の霧にあまの漁火

七百六十四番　左　具親　右勝　兼宗卿

大方の秋のけしきを此は唯思ふせゝなるさを鹿の聲

事毎に悲しき秋としりながらさてしも誰か恨果たる

七百六十五番　左　顯昭　右勝　通光卿

秋風に思遣りつゝ打衣聞音さへに身にはしみけり

松蟲の聲する方に宿からむ逢が門の住ひなりとも

七百六十六番　左勝　女房　右　俊成卿女

ますす鏡みるめの浦のよはの月氷をよする秋の潮かせ

月みばとたのみし秋の終夜又うらめしくうつ衣かな

七百六十七番　左持　左大臣　右　丹後

露の袖しもの狹筵しき忍ぶ方こそなけれ淺茅生の宿

いかなれば移ふ色とみせながら散てふとを白菊の花

七百六十八番　左持　前權僧正　右　越前

立田川袖の紅葉にせきかねて唐紅のしたとよむなら

一波の上に積れる雪を眺れば沖の白洲に牙ゆるよの月
七百六十九番　左勝 公継卿　右　定家朝臣
九寝覚する九月のよの床寒み今朝ふく風に霜や置らむ
〇いかにせむきほふ木葉の風にたえず物思ふ九月の空
七百七十番　左持 公経卿　右　通具朝臣
二紅葉の色よりはやく行く水のそこの楫にうつる秋風
三弱り行く蟲の音にさへ秋暮て月も有明に成にける哉
七百七十一番　左　季能卿　右勝 家隆朝臣
四いさいかに深山の奥に委れても心知りたき秋夜の月
五夜やふくる雲居遙に鳴く雁も一つになりぬ衣うつ聲
七百七十二番　左持 宮内卿　右　雅經
六外山迄深山の霞分過ぎてまさ木のかづら秋風ぞふく
七よな〳〵は宿り慣にし月影も枯行をのゝ淺ぢふの露
七百七十三番　左　讃岐　右勝 寂蓮
八磯ちかきあまの苫屋の夕暮に霧のまがきを洗ふ白浪
九秋をしる袖は恨の露ながら萩の下葉を哀れとぞ思ふ
七百七十四番　左　小侍從　右勝 家長
一〇ひとりねの枕の下の蟋蟀訪ふ聲はしのばざりけり
一一蟲の袖いかに干敢へで松島や小島が磯に衣うつらむ
七百七十五番　左勝 隆信朝臣　右　三宮
一二秋ふかき深山の庵〳〵の習ぞときゝても悲し峯の松風
一三行通ふ人だに有らば問てまし山路の菊の千代の景色を
七百七十六番　左　有家朝臣　右勝 内大臣
一四あき風に草のやどりやあれぬらむ枕になるゝ蟲かな
一五今こむの空だのめをや九月の有明方の松むしのこゑ
七百七十七番　左持 保季朝臣　右　忠良卿
一六くれかゝるをのゝ草ぶし風過て結ぶ枕に鶉鳴くなり
一七たが栖いづくの秋を尋ねまし野べも山邊も眺侘ぬる
七百七十八番　左勝 良平　右　兼宗卿
一八嵐まで紅ふかくみゆる哉わたるこずゑに木葉ちる頃
一九長月の九日毎に逢ふならば八重はなどさく白菊の花
七百七十九番　左持 具親　右　通光卿
二〇たれか又山路の末に掬ぶらむ千年を流す菊のした水
二一色ふかくそむる楢もあるものを花に移ろふ菊の白露
七百八十番　左　顯昭　右勝 釋阿
二二なき増る己が聲にや蓑深けゆくよはの程をしるらむ
二三ふる郷に獨りも月をみつるかな姨捨山を何思ひけむ
七百八十一番　左勝 女房　右　丹後

二四玉ほこの道の芝草うちなびきふるき都に秋風ぞふく
二五水上に峯のもみぢやちりぬらむ色々になる瀧の白糸
七百八十二番　左持 左大臣　右　越前
二六寝がてに庵もる田子の假枕夜半に奥手の露ぞ隙なき
二七夕まぐれ楫を拂ふ風の音にさびしくなりぬ秋の山里
七百八十三番　左勝 前權僧正　右　定家朝臣
二八紅葉を夜の錦になすものはまだみぬ山の嵐なりけり
二九さを鹿のふすや叢うら枯て下もあらはに秋風ぞふく
七百八十四番　左　公継卿　右勝 通具朝臣
三〇衣うつ賤が袖にや通ふらむ寝覚の床のあかつきの露
三一暮れて行く秋の契は淺茅原末葉の露や結びはつらむ
七百八十五番　左勝 公経卿　右　家隆朝臣
三二昨日みてけふみぬ程の風のまに綾なく脆き峯の紅葉
三三大方の野原の花はうつろひて風にしられぬ庭の白菊
七百八十六番　左持 季能卿　右　雅經
三四長きよを思ひあかして朝顔の世の理を人にみすらむ
三五暮方の木葉に紛ふ秋の雨の窓うつ程には成にけり
七百八十七番　左勝 宮内卿　右　寂蓮
三六そらも海も一つにかよふ緑かな月さへ浪に有明の色
三七尋つる墟の立枝や其ならむ霧のあなたにもずぞ鳴なる
七百八十八番　左持 讃岐　右　家長
三八頼め置し人のゆくへを松蟲の聲計して秋ぞふけ行く
三九吹からに涙も脆き秋風の木々の紅葉に懸らずもがな
七百八十九番　左　小侍從　右勝 三宮
四〇鳴子引鳥羽田の面の夕まぐれ色々に社風も見えけれ
四一影やどす峰のしら菊さきしより庭に秋ある谷川の水
七百九十番　左　隆信朝臣　右勝 内大臣
四二女郎花唯一枝の名殘さへ今はあらしの風わたるなり
四三秋きては夢の枕やよそにみむ月夜好しとて打ふさずば
七百九十一番　左　有家朝臣　右勝 忠良卿
四四木枯の露ふき結ぶ草村に秋もふけぬと蟲ぞわぶなる
四五眺れば空に心ぞつきぬべき秋に知られぬ夕暮もがな
七百九十二番　左持 保季朝臣　右　兼宗卿
四六聞分かぬ木葉は庭の時雨にて鹿のねすさむ長月の暮
四七頼なき八嶋の岡の紅葉はみぬより色の程ぞしらるゝ
七百九十三番　左持 良平　右　通光卿
四八ちり積る木葉凌ぎてさを鹿の立田の山に秋風ぞふく
四九枝かはすまつの緑の一しほも紅葉の秋ぞ色まさりける

五〇今日迄はまだ露のみや小倉山下葉より社色附にけれ
五一衣打音こそあやな頼まれ夜はの枕もさゆる霜夜は
七百九十五番　左　顯昭　右勝 俊成卿女
五二紅葉をそむるのみかは常磐木の色も時雨に顯れに鳧
五三秋山の麓の小田のかり庵に紅葉を分て月ぞもりける
七百九十六番　左持 女房　右　越前
五四秋山の松をば凌げ立田姫そむるにかひもなき緑なり
五五かよひこし枕に蟲の聲たえて嵐に秋の暮ぞきこゆる
七百九十七番　左勝 左大臣　右　定家朝臣
五六苔の上に嵐ふきしく唐錦たゝまくをしき森の蔭かな
五七岩代の野中さへ行く松風に結びそへつる秋のはつ霜
七百九十八番　左持 前權僧正　右　通具朝臣
五八秋はいぬと小倉の山に鳴鹿の聲の内にや時雨初らむ
五九千間なき袖をば露の宿りにて心の秋よいつか晴べき
七百九十九番　左　公継卿　右勝 家隆朝臣
六〇なべて世の哀も秋の風そよぐ夕暮よりや思初らむ
六一小倉山西こそ秋と尋ぬれば夕日に紛ふ嶺のもみぢば
八百番　左持 公経卿　右　雅經
六二霜の下にも掻籠りなば原秋の夕もとはじとやさば
六三秋ふかき松に嵐の立田山よその梢をまづはらふらむ
八百一番　左勝 季能卿　右　寂蓮
六四鹿のねも殘らぬのべの小萩原雜になせる古郷の秋
六五秋深き野べの草葉の色よりも鳴枯らしたる松蟲の聲
八百二番　左持 宮内卿　右　家長
六六ひたぶるにぬる人戀し秋風にやゝ露さむし九月の末
六七眺めやる緑の奥の紅葉故思はぬ松を手折りつるかな
八百三番　左勝 讃岐　右　三宮
六八秋の暮嵐の山をすぎゆけば袖にこきいるゝ峰の紅葉
六九蟲のねの枯々になる草の上に秋かけてをく庭の初霜
八百四番　左勝 小侍從　右　内大臣
七〇よそへつる雜の菊は移ろはでゝ人の心の秋をしる哉
七一長らへば又もさこそと思へ共戀しかるべき秋の空哉
八百五番　左持 隆信朝臣　右　忠良
七二時雨ふる秋にはあへず葛のはの恨は色に出にける哉
八百六番　左勝 有家朝臣　右　兼宗卿
七三みる度にをらまほしきは唐錦立田の山の紅葉也けり

四九染渡す時雨の雨は乾くとも猶もみぢ葉に風を厭はむ

八百七番　左　保季朝臣　右勝通光卿

一〇秋原や秋も末葉にうら枯て思へど弱るかぜの音かな

一一いり日さす麓の尾花打ちなびきたが秋風に鶉なくらむ

八百八番　左　良平　右勝釋阿

一二枯々に野べの千種もなりはてゝ又こむ秋を松蟲の聲

一三立田姫立田の山は我名とや紅葉も殊に思ひそめけむ

八百九番　左持具親　右　俊成卿女

一四露さゆる秋の末葉の淺茅原蟲のねよりぞ枯始めける

一五眺めつゝさえ行く袖に有明の月より結ぶ秋の霜かな

八百十番　左　顯昭　右勝丹後

一六紅葉に焦れ合てもみゆる哉繪島が磯のあけのそば舟

一七鳴止めぬ秋こそあらめ蚤己がねさへぞ弱りはてぬる

八百十一番　左勝女房　右　定家朝臣

一八けふこそは秋の日數も呉機あやなし名のみ長月の空

一九冬はたゞあすかの里の旅枕おきてやいなむ秋の白露

八百十二番　左持左大臣　右　通具朝臣

二〇答ふべき秋の葉風も霜がれて誰にとはまし秋の別路

二一秋風は木葉の底に吹枯て身にしみはつる夕まぐれ哉

八百十三番　左　前權僧正　右勝家隆朝臣

二二紅葉を幣に手向て行く秋を惜みとめぬや神なびの森

二三露時雨もる山陰の下紅葉ぬるとうをらむ秋の形見に

八百十四番　左持公繼卿　右　雅經

二四過ぐる秋露も名殘はなき物を何にぬるらむ我袖の上

二五深草や秋さへ今夜出ていなば最ど寂しき野とや成なむ

八百十五番　左　公經卿　右勝寂蓮

二六此よりや秋は生田の森の蔭過ぐる時雨にちる木葉哉

二七誰もみなあかぬ名殘ぞ大江山秋は生野の方を眺めて

八百十六番　左勝季能卿　右　家長

二八秋風の吹初めしより慣にける秋の露は今夜ばかりや

二九聲たつる鹿もいまはの常磐山己なきてや秋惜むらむ

八百十七番　左　宮内卿　右勝三宮

三〇津國や長らへもせで秋はけふ生田の奥に風ぞ烈しき

三一打わびて眺むる空の浮雲に今夜ばかりの秋風ぞ吹く

八百十八番　左勝讃岐　右　内大臣

三二執方へ秋の送をすまの關せき行く舟も行へしらねば

三三時雨する雲のあなたは冬の空秋の名殘は今幾日かは

八百十九番　左　小侍從　右勝忠良卿

三四長月のみ空に秋や歸るらむけふしも風の音もたてねば

三五とゞまらぬ秋に涙は先だちて木葉もたへず山嵐の風

八百廿番　左　隆信朝臣　右勝兼宗卿

三六今夜迄荻ふく風の音のみや秋を殘して人にきかれむ

三七行秋の形見なるべき紅葉もあすは時雨と降や紛はむ

八百廿一番　左　有家朝臣　右勝通光卿

三八惜めどもけふさへ暮ぬ執方へあすは生田の森の秋風

三九あすよりは秋をしのぶの草枕名殘なるべき袖の露哉

八百廿二番　左　保季朝臣　右勝釋阿

四〇みるもうしあすは名殘も嵐山けふのみ秋の夕暮の雲

四一頼めおく方もやあらむ歸る秋心をやりて惜むけふ哉

八百廿三番　左持良平　右　俊成卿女

四二くれはつる秋の名殘をしのぶ山峰に嵐の聲恨むなり

四三色變るあさぢが末に吹く風の音にも著き秋の暮かな

八百廿四番　左勝具親　右　丹後

四四紅葉に秋の日數も三室山立田の河にしがらみもがな

四五堰にも止る紅葉や無かるらむ流れて早き秋の暮には

八百廿五番　左　顯昭　右勝越前

四六今夜かく心筑紫の言の葉や秋を留むる門司の關もり

四七片岡のすゝの篠屋に秋くれぬ時雨もらすな楢の上葺

千五百番歌合巻第十二　冬一　判　定家朝臣

八百廿六番　左持女房　右　通具朝臣

四八風さえて今朝より冬を楢柴や狩場の小野に時雨すぐ也

四九秋はけふいづち旅寢の草枕枯れ行く野べに霜結らむ

八百廿七番　左勝左大臣　右　家隆朝臣

五〇風の音も早晩寒き槇の戸に今朝よりなるゝ埋火の本

五一立田山峰の紅葉ばちりはてゝ嵐にすさぶ松の聲かな

八百廿八番　左勝前權僧正　右　雅經

五二錦おるしづはた山の初時雨げに經緯となりにける哉

五三秋山に時雨はすぎぬ神無月木の葉ぞ冬の始とはふる

八百廿九番　左持公繼卿　右　寂蓮

五四押なべて冬の氣色に成に鳥昨日もけふも打時雨つゝ

五五昨日みし秋の梢も其ながら折しり顔にうち時雨つゝ

八百三十番　左勝公經卿　右　家長

五六置初むる霜にもさゆる嵐哉昨日は露の凍りやはせし

五七紅葉せし秋は困幡の山風に松のみ殘る冬は來にけり

八百卅一番　左　季能卿　右勝三宮

五八今朝は又時雨そめけり昨日まで秋の哀にぬれし袂を

五九冬きぬる氣色の杜の村時雨そめし木葉を又誘ひけり

八百卅二番　左持宮内卿　右　内大臣

六〇昨日こそながめし秋も呉機生憎なれやさゆるよの風

六一何とかや峯なる鐘よ霜おげば冬にや今夜成始むらむ

八百卅三番　左勝讃岐　右　忠良卿

六二秋くれて哀つきにし鐘の音の霜に答ふる冬は來に鳥

六三秋は皆杉の板戸の隙しらみ明行く空に時雨ふるなり

八百卅四番　左　小侍從　右勝兼宗卿

六四置霜の音をたてゝや招つる尾花が末に冬は來にけり

六五神無月けさは梢に秋過て庭にもみぢの色をみるかな

八百卅五番　左勝隆信朝臣　右　通光卿

六六早晩と時雨ぬ冬に移りこば秋の跡とて寂しからまし

八百卅六番　左　有家朝臣　右勝釋阿

六七詠やる野べも一つに霜枯て草の丸やに冬は來にけり

六八おきあかす秋の別の袖の霜こそ結べ冬やきぬらむ

八百卅七番　左持保季朝臣　右　俊成卿女

六九人目迄今は枯行く始とや草の戸さしに冬は來にけり

七〇冬來ては時雨計りぞ音づるゝ訪人もなき老の寢覺に

八百卅九番　左勝具親　右　越前

七一秋の色はつれなく杉の梢より嵐ぞ通ふあふさかの關

七二冬きぬと思ふばかりの朝朗明珠の外にも變る空かな

八百四十番　左持顯昭　右　定家朝臣

七三朝風にはだへも寒し衣手の森にや冬はたち始むらむ

七四秋くれし紅葉の色を重ねても衣かへうきけふの袖哉

八百四十一番　左勝女房　右　家隆朝臣

七五秋暮て露もまだひぬ楢のはにおして時雨の雨灑ぐ也

七六村雲の伊駒の山に懸るより眺むる袖も打しぐれつゝ

八百四十二番　左勝左大臣　右　雅經

七七篠原やしのびに秋のおきし露凍りなはてそ忘形見に

七八行く秋の別れし野べは跡もなし唯霜深き淺茅生の原

八百四十三番　左持前權僧正　右　寂蓮

七宿さびて人めも草もかれぬれば袖にぞ殘る秋の白露
八木葉ちるみ山の庵の時雨ふるも降ぬも袖濕しけれ
八百四十四番　左持　公繼卿　右　家長
九久方の雲たち廻り時雨して野山の淺茅色づきにけり
一〇外山なる松を吹きこす風にしらぬ梢の紅葉をぞ見る
八百四十五番　左勝　公經卿　右　三宮
一一神無月外山の時雨すぎぬ也正木の蔓もりもえねば
一二わき兼し木葉の音は絕果てゝ時雨のみふる森の下蔭
八百四十六番　左　季能卿　右勝　內大臣
一三淋しつゝ八目も草も枯よとや庭の淺茅のけさの初霜
一四初時雨猶はへて社とはず共都の雲のよそにだにみよ
八百四十七番　左勝　宮內卿　右　忠良卿
一五秋の色も今は嵐の山風に紅葉こきまぜ時雨おつなり
一六山廻り時雨やすぐる松風の吹くかときけば軒の玉水
八百四十八番　左持　讃岐　右　兼宗卿
一七暮すまの鹽も煙のねも時雨にかへて音づれもせず
一八秋のうちも折々音はせしかども冬の始の初時雨かな
八百四十九番　左持　小侍從　右　通光卿
一九音づれて猶過ぬ也いづくにも心をとめぬ初時雨かな
二〇たえ〳〵の木葉が下の音信ふ霜にとぢつる蟲の聲々
八百五十番　左　隆信朝臣　右勝　釋阿
二一槙の屋の冬の寂しさ告顏に木葉しぐれて袖濕すなり
二二そめすてゝ立田姫もや神な月風に任せてちる紅葉哉
八百五十一番　左　有家朝臣　右勝　俊成卿女
二三寂しさを訪來ん人に山風の木葉吹殘く庭をみせばや
二四淺茅生のをの〳〵篠原霜枯て靜くき秋の形見とかみむ
八百五十二番　左勝　保季朝臣　右　丹後
二五嶺續き時雨るゝ雲のたえまより夢か夫にみか月の影
二六散殘る紅葉に色を優りける神をば染ぬ時雨と思ふに
八百五十三番　左持　良平　右　越前
二七木間もる夕日の影はさし乍惸しぐるゝ深山べの里
二八木葉さへ山廻りするわかな時雨をさそふみねの嵐に
八百五十四番　左勝　具親　右　定家朝臣
二九晴曇る影を都に先だてゝしぐるとつぐる山のはの月
三〇多來ぬと時雨の音に驚けばめにもさやかにほろ〳〵木本
八百五十五番　左　顯昭　右勝　源具親朝臣
三一降しよる紅葉の山をこえぬけば袖代哀色かへてけり
三二野べにおく露の名殘も殘枯ぬあだなる秋の忘形見は

八百五十六番　左勝　女房　右　雅經
三三冬來ぬと嵐に菊の露のまに濕てほし敢ず今朝ぞ移ふ
三四暮れぬとも猶秋風は音づれよ萩の上葉の枯々にだに
八百五十七番　左　左大臣　右勝　寂蓮
三五夕暮の一むら雲の山廻り時雨れ果つれば軒ばもる月
三六朝毎に移ろふ色を置きかへて霜にぞかれぬ白菊の花
八百五十八番　左勝　前權僧正　右　家長
三七秋の夜の影みし水のうす氷月に答ふる冬は來にけり
三八山陰や木葉しぐるゝ槇のやに漏ぬ時雨は袖にのみして
八百五十九番　左勝　公繼卿　右　三宮
三九思へども心定むる方ぞなき時雨るゝ空の小夜の獨寢
四〇見渡せばすまの浦より曇りきて時雨と渡る淡路島山
八百六十番　左　公經卿　右勝　內大臣
四一言問し庭の通芝うら枯て霜より外に冴る冬のよな〳〵
四二時雨する徵も見えず神無月みわの杉村同じみどりに
八百六十一番　左持　季能卿　右　忠良卿
四三山里は雪げの空の曇るより分こむ人ぞ下まだれける
四四寂しさは深山のおくの神無月時雨ぬよはも木枯の風
八百六十二番　左勝　宮內卿　右　兼宗卿
四五もみぢ葉の色を宿して果は又髣髴ひて出づる山川の水
四六霜枯の尾花が末に鳴もずは秋の名殘を問にや有らむ
八百六十三番　左持　讃岐　右　通光卿
四七槙の屋も隙なく苔にとぢられて時雨の音も變る古郷
四八更行けば最と片しく袖さえて夜毎に著し閨の上の霜
八百六十四番　左持　小侍從　右　釋阿
四九尋ねさて歸らむ道ぞ忘れぬる花に變ぬ雪の木陰は
五〇植置きて秋の形見とみる菊の冬の色こそ猶優りけれ
八百六十五番　左持　隆信朝臣　右　俊成卿女
一時雨社音も雫もよそならめ月さへもらぬ廬の八重葺
二木葉ふく嵐の庭の蟲の音にほのかに殘る秋の聲かな
八百六十六番　左勝　有家朝臣　右　丹後
三初霜のおき惑はせる菊の上に重ねて秋の色をみる哉
四つく〳〵と身を知夜はの村時雨よその床にはきかじとぞ思
八百六十七番　左　保季朝臣　右勝　越前
五散りにける葉の梢は空しくて色も殘ぬ山風のかせ
六ながれくる紅葉の波の立田河麓にきかぬ嵐をぞみる
八百六十八番　左勝　良平　右　定家朝臣
七蘆葺の宿も靄はに枯果てゝ霜にさえたる夜はの狹筵

八殘る色もあらしの山の神な月わせきの波におろす紅
八百六十九番　左持　具親　右　通具朝臣
九今は又ちらでも紛ふ時雨かな獨ふり行く庭の松かせ
一〇時雨行宿はいかにと風の吹くに附つゝとふ人もがな
八百七十番　左　顯昭　右勝　家隆朝臣
一一たぎつ浪たつかと聞けば吉野河いはと柏に時雨ふる也
一二嵐ふく梢は晴れて大井河木葉かくれにやどる月かな
八百七十一番　左勝　女房　右　寂蓮
一三紅葉する程は時雨の村雲に空行く月や廻りあふらむ
一四軒ちかき峰の嵐も心せよ木葉ならではくもる宿かは
八百七十二番　左勝　左大臣　右　家長
一五霜埋む刈田の木葉踏しだき群居る雁も秋をこふらし
一六山嵐にたえずちりくる紅葉のおき迷はせる庭の初霜
八百七十三番　左持　前權僧正　右　三宮
一七あけばみよ四方の山邊の雪の色を衣手寒し東雲の風
一八蟲の音は草葉と共に枯ぬれど弱らぬ物は淺ぢふの空
八百七十四番　左持　公繼卿　右　內大臣
一九風渡る梢に雨を聞馴れてもるに濡ける袖もしられず
二〇蟲の音は木葉の下に埋れて時雨のみこそ庭に音すれ
八百七十五番　左持　公經卿　右　忠良卿
二一立暮らしよな〳〵過る霰哉槇のふり葉に音を殘して
二二ふしのねや木葉波よる清見潟嵐の末におきのとも船
八百七十六番　左　季能卿　右勝　兼宗卿
二三獨ぬる山鳥の尾の掻垂れてふるむ雪を思ふ寂しさ
二四都だに霰ふる夜は信樂のそきの外山ぞ思ひやらるゝ
八百七十七番　左持　宮內卿　右　通光卿
二五立田山木の下ふしの跡にのみ嵐に殘る紅葉なりけり
二六哀なりみ山の庵にちりつもるならの枯葉に霰ふる音
八百七十八番　左持　讃岐　右　釋阿
二七湊がは波の枕にわきかぬる時雨はとその雫にぞしる
二八山廻る時雨は頓て過ぬれど木葉にぬるゝ袖の上かな
八百七十九番　左　小侍從　右勝　俊成卿女
二九跡つけし其昔こそ戀しけれ長閑に積る雪を見るにも
三〇秋もはや猶哀ぞありし夕ぐれ斯る嵐の風はなかりき
八百八十番　左持　隆信朝臣　右　丹後
三一木葉かときゝだにわかぬ村時雨濡で過ぬる暮ぞ少き
三二山里は雪より先に跡絕て木葉ふみ分けとふ人もなし
八百八十一番　左持　有家朝臣　右　越前

わけきつる裾野の尾花うら枯て衣手寒し篠の小吹雪
木枯に峰の紅葉はちりにけり色々にたつうちの河波
八百八十二番　左持　保季朝臣　右　定家朝臣
露觸し葉末は霜に成にけり秋より冬のをの〳〵しの原
かれはつる草の離は顯れて岩もる水を埋むもみぢ葉
八百八十三番　左勝　良平　右　通具朝臣
うたゝねの夢も嵐の山里にまきの葉傳ひ霰ふるなり
時雨つる今朝の村雲程もなく入日に研く山のはの露
八百八十四番　左　具親　右勝　家隆朝臣
今よりは木葉隠れもなけれども時雨に殘る村雲の月
月さゆる庭の木葉におく霜の曇らぬ上に霰ふるなり
八百八十五番　左勝　顯昭　右　雅經
雪ふれば皆白妙の梢にて名も定まらぬ花ざきにけり
行きかへり此や時雨の廻る雲又かきくらす遠山の空
八百八十六番　左持　女房　右　家長
晴曇時雨ふるやの板間粗み月を片しく夜はにのさ莚
袖さえてぬる夜の床も狹莚に夢を捗なみ松風ぞふく
八百八十七番　左持　左大臣　右　三宮
なにはがた光を月のみつ潮に蘆邊の千鳥浦傳ふなり
稀にこし都の人は桔果て〳〵草の戸ざしに霰ふるなり
八百八十八番　左勝　前權僧正　右　内大臣
奥山の雪げの水に流出て秋と冬とをみするもみぢば
獨寢の友とや鴛もふる雪を搖木の杜に立ちも騒がぬ
八百八十九番　左　公繼卿　右勝　忠良卿
吹き迷ふ峰の嵐は積りにし庭の木葉を又ちらしけり
今はとて淺茅かれ行く霜の上に月影寂しをの〳〵篠原
八百九十番　左勝　公經卿　右　兼宗卿
手にくみしみづの玉水さゆるよに契を結ぶ薄氷かな
古郷のねやの板間にもる霰思はぬ床に玉ぞしきける
八百九十一番　左　季能卿　右勝　通光卿
そことなき雪を心に分させてみぬ深山べの爰に寂しき
みる人に秋の名殘を忍べとや枯野にさゆる冬夜の月
八百九十二番　左　宮内卿　右勝　釋阿
津國や何ぞは蘆のあるかひは風も顯はに宿は成つゝ
初瀬山夜ふかき鐘に驚けば旅ねの床も玉ぞさえける
八百九十三番　左勝　讃岐　右　俊成卿女
霜結ぶ冬のよな〳〵重りて風のみかれぬ庭の淺茅生
待人も訪べき里も無れ共時雨ふる夜はねられざり鳧
八百九十四番　左持　小侍從　右　丹後
夕しほに荒磯浪や騒ぐらむ吾も定ちず鳴く千鳥かな
時雨だに音にしらるゝ山里の檜の枯葉に霰ふるなり
八百九十五番　左　隆信朝臣　右勝　越前
我門のかり田の圍にふす鴫の床顯はなる冬のよの月
みし人も訪でのみこそ杉の庵に絕ず音する村時雨哉
八百九十六番　左勝　有家朝臣　右　定家朝臣
夕しほに荒磯浪や騒ぐらむ吾も定ちず鳴く千鳥かな
時雨だに音にしらるゝ山里の檜の枯葉に霰ふるなり
八百九十七番　左勝　保季朝臣　右　通具朝臣
霜おかぬ人めも今は枯果て〳〵松に訪來る風ぞ變らぬ
萎れ葉や露の形見におく霜も猶嵐ふく庭のよもぎふ
八百九十八番　左勝　保季朝臣　右　通具朝臣
けふまでは猶とぢはてぬ氷にて音をぞ殘す谷川の水
霜結ぶ袖の片しき打とけてねぬよの月の影ぞ寒けき
八百九十九番　左勝　良平　右　家隆朝臣
大堰川なみは木葉にならはて〳〵峰に色なき嵐山かな
夕づくひ流石にうつる柴の戸に霰ふきまく山嵐の風
八百九十九番〻左　具親　右勝　雅經
松風も今は嵐になるみかた色なき浪の冬のさびしさ
霜やこれ變らぬ色をおきわかし月に枯野の秋の古郷
九百番　左　顯昭　右勝　寂蓮
東路を雪にうち出て見渡せば浪にたゞよふ浮島が原
木の葉ちる汀を拂ふ山風の跡にむすぶは氷なりけり

千五百番歌合巻第十三　冬二　判　蓮經　季經入道

九百一番　左勝　女房　右　三宮
から錦秋の形見をたゞしとや霜まで殘る庭の一むら
とふ人の踏分てける庭の雪の跡をぞ埋むよはの月影
九百二番　左持　左大臣　右　内大臣
霜の上に己が翼をかたしきて友なき鴛のさよ深き聲
時雨とも何かはわかむ神な月いつも信太の森の雫は
九百三番　左持　前權僧正　右　忠良卿
吉野山峰の白雪いかならし麓の里もふらぬ日はなし
暫しこそ秋の形見と眺めしか霜に跡なき野べの色哉
九百四番　左　公繼卿　右勝　兼宗卿
榊葉に霜のしらゆふかけてけり神なび山の曙のそら
寂しさも中々けさぞ忘れぬる深山の里の雪の景色に
九百五番　左　公經卿　右勝　通光卿
時雨だに爭ひかねし槇のはの埋れはつる雪の夕ぐれ
打時雨れ村雲迷ふよはの月眺めわびぬるやま陰の庵
九百六番　左　季能卿　右勝　釋阿
せめて猶惜みなれにし花故に雪ふく風も怨めしき哉
霜さゆる枯野の草の原にきて涙ぞやがて氷なりける
九百七番　左　宮内卿　右勝　俊成卿女
神無月夕日の影に成にけりあらだちそむる沖つ白浪
踏分て更に尋ねる人もなし霜にくちぬる庭の紅葉ば
九百八番　左勝　讃岐　右　丹後
世にふるは苦しき物を槇のやに易くも過る初時雨哉
難波江に群居るたづも隱れなく蘆の下葉は霜枯に鳧
九百九番　左　小侍從　右勝　越前
浪かくる磯まがくれの友千鳥浦より遠に浦傳ふなり
山里の庭の淺茅生霜がれて人めもさぞな思ふ悲しさ
九百十番　左持　隆信朝臣　右　定家朝臣
何故のうらみをすまの友千鳥浪にしをるゝ曉のこゑ
花薄草の袂もくちはてぬなれて別れし秋ぞこふとて
九百十一番　左持　有家朝臣　右　通具朝臣
神無月山かき曇る村時雨程やはふるにけふも暮ぬる
水鳥の上毛を拂ふ霜すなりそでにぞ消ぬ冬のよの霜
九百十二番　左持　保季朝臣　右　家隆朝臣
草の庵もあらぬ小萱と成ぬればよな〳〵馴し蟲のねもなし
春秋の色々ごとにみし夢のさむるも冬の槙なりけり
九百十三番　左持　良平　右　雅經
早晩と鴫のはがひに霜置きて玉藻の床に氷居にけり
この頃は月こそいたくもる山の下葉殘らぬ木枯の風
九百十四番　左勝　具親　右　寂蓮
今は又きくの雛はかれはてゝおき迷ふ霜に有明の月
浪騒ぐ鴛の羽風も定まりぬ結びやしつる池の薄らひ
九百十五番　左勝　顯昭　右　家長
武藏野の草の緑りも間かねつゝきの原の雪の夕暮
結びきて露にかはりし初霜の霜より雪のふる郷の庭
九百十六番　左持　女房　右　内大臣
深山ふくよもの木枯さえ初て槇の葉白く初雪ぞふる
小笹原霰ふる夜ぞ思ひ出づる今更々に獨りのみねて
九百十七番　左　左大臣　右勝　忠良卿
網代もる宇治の里人いか計いざよふ浪に月を見らむ
淡路島浪もてゆへる山のはに凍りて月のさえ渡る哉

九百十八番　左勝　前權僧正　右　兼宗卿
岩にさく雪の花社哀なれ春も見ざりき秋も見ざりき
待人の跡をばつけよ庭の雪獨はいかゞみ山べのさと
九百十九番　左持　公繼卿　右　通光卿
とふ人の音かときけば山陰の眞柴が上に霰ふるなり
道たえぬけふよりやさは都人心みゆべきにはの白雪
九百二十番　左　公經卿　右勝　釋阿
うちとけし岩まの水も今夜こそ誠に凍る冬のよの月
村雲の時雨し空はそれながらさゆる嵐に霰ふるなり
九百廿一番　左勝　季能卿　右　俊成卿女
香きけば梢曇らぬ木葉にも誠に袖はうち時雨れけり
風にちる木葉亂るゝ露霜に結ばゝれ行く冬のよの夢
九百廿二番　左勝　宮内卿　右　丹後
古に花ももみぢもなりはてゝ雪にぞ宿の梢をばまつ
曉の時雨のおとにたぐふなり寢覺催す鴫のはねがき
九百廿三番　左勝　讃岐　右　越前
打はへて冬はさばかり長き夜を猶殘りける有明の月
終夜さえつる床の怪しさにいつしかみれば嶺の初雪
九百廿四番　左　小侍從　右勝　定家朝臣
谷ふかみ住む人いかにせよとてか氷を結ぶ山川の水
時雨れこし峯の松蔭つれもなくすむ鳰鳥の池の通路
九百廿五番　左持　隆信朝臣　右　通具朝臣
奥つ浪高師の濱のさよ千鳥跡も定めぬ聲ぞきこゆなり
冬のよの寢覺習ひしまきのやの時雨が上にふる霰哉
九百廿六番　左勝　有家朝臣　右　家隆朝臣
村雲の杉の庵のあれまよりも時雨に變るよはの月かな
楸おふるさほの河原にたつ衞空さへ清き月に鳴なり
九百廿七番　左持　保季朝臣　右　雅經
外山なる松より聲の移りきて枯野の嵐月にふくなり
淵はせに變るのみかは飛鳥川昨日の浪ぞけふは凍れる
九百廿八番　左　良平　右勝　寂蓮
あさぢ原凍れる露に霰ふり玉より上に玉ぞこぼるゝ
心とやひとり明石の濱千鳥友惑ふべきよはの月かは
九百廿九番　左持　具親　右　家長
霜に殘る緑はいつか嶺の松ありとばかりぞ雪の下風
擂磨潟磯うつ浪の浪のまに友よぶ千鳥こゑ殘るなり
九百卅番　左持　顯昭　右　三宮
住吉の細江の蘆も霜がれてよそにもしるき澪標かな
谷川の岩うつ波やこほるらむ嶺の嵐の音のさむけき
九百卅一番　左持　女房　右　忠良卿
里人のいほりにたける椎柴の煙吹きしくやま嵐の風
一つ空におなじこゑかはりけれ籬は時雨嶺は白雪
九百卅二番　左勝　左大臣　右　兼宗卿
朝日さす氷のうへの薄煙まだはれやらぬよどの河岸
吉野山暁べき花の知べかとみれば松にも雪ぞ降ける
九百卅三番　左　前權僧正　右勝　通光卿
白浪のこえて歸るとみえつるや雪に風吹く末の松山
うちしぐれ今は尾花が末の露結びし秋の跡忍びけり
九百卅四番　左　公繼卿　右勝　釋阿
日をふれどまだ跡もなき庭の雪に訪れぬ程を人にぞ
冬くれば己がやくとや炭竈の煙にきほふ大はらの里
九百卅五番　左　公經卿　右勝　俊成卿女
うちむれて遠ざかり行く衞哉浦より遠に聲を殘して
露凍る野路の玉笹よをへゝ嵐にそよぎ霰ふるなり
九百卅六番　左勝　季能卿　右　丹後
中々に軒の雫の音もなし木葉のふるも寂しかりけり
夜や寒き友無し千鳥打侘て浪の立ゐにねをのみぞ鳴
九百卅七番　左勝　宮内卿　右　越前
程もなく風の氣色もめらち山峯よりわけて積る白雪
此をきかむ生田の奥にさ夜ふけて妻や爭ふ鴛の諸聲
九百卅八番　左持　讃岐　右　定家朝臣
露は霜水は氷にとぢられて宿かりわぶる冬のよの月
まきのやに時雨霰は夜かれせで凍る筧の音ぞなき
九百卅九番　左　小侍從　右勝　通具朝臣
谷がくれ木葉が下の埋れ水凍ればやらむ音信もせぬ
蜑人の干敢ぬ袖も凍るらむ小嶋の浪に月さゆる夜は
九百四十番　左勝　隆信朝臣　右　家隆朝臣
山のはゝ宵よりしらむ雪のよの猶さえ行くや曙の空
衣手に松風さむみ住吉の夕浪千どりうらづたふなり
九百四十一番　左勝　有家朝臣　右　雅經
柴の庵の軒端の日かげ今更に曇るとすれば時雨降也
つくば山しげき梢やいかならむ此面彼面の雪の下折
九百四十二番　左　保季朝臣　右　寂蓮
はるかゝと猶行く末やおぼえ山いくのゝ道の雪の曙
志賀の浦は凍りにけりな有明の月より後に宿る月影
九百四十三番　左勝　良平　右　家長
さ夜千鳥浦傳ひ行く浪の上に傾く月も遠さかりぬる
波の上に行方もしらぬ浮巢哉巢立にけりな鴛鳥の雛鳥
九百四十四番　左　具親　右勝　三宮
風やいかに待ちみむ三輪の山つれなき杉の雪折の聲
雪ふればしがの辛崎浦さえて氷の上によする白なみ
九百四十五番　左　顯昭　右勝　内大臣
衞なくせとのうきねに月よさし哀寂しき浪の上哉
こゆるぎの磯の松風音すれば夕波千鳥なき騒ぐなり
九百四十六番　左勝　女房　右　兼宗卿
押照や難波の蘆の下隱れ刈根もる鴨の霜に鳴くこゑ
いつかわが妻の池と思ふにも枯葉のあしの哀なる哉
九百四十七番　左持　左大臣　右　通光卿
三室山嶺のひはらのつれなきをしをる嵐に霰ふる也
旅寢から聞や忍ばぬ磯衞なれたる蜑の袖をとはゝや
九百四十八番　左　前權僧正　右勝　釋阿
同雪のよそめも鳧初瀬山花とみつるも月とみつるも
敷忍びよはの枕はさえつれど今朝は嬉しき庭の初雪
九百四十九番　左　公繼卿　右勝　俊成卿女
木葉をば風もはらひき雪にこそ埋れにけれ冬の山里
おく山の雪げの水やくだすらむ瀧つ岩ねに積る紅葉
九百五十番　左持　公經卿　右　丹後
蘆鴨の上毛の霜をうちはらふ羽風もさやに氷る空哉
氷ゐて鳥だにすまず成にけり昔の池の跡ならねども
九百五十一番　左　季能卿　右勝　越前
さゆるよの氷の上に住慣れて月に鳥ゐる勝間田の池
在明の月のでしほに湊舟今や入るらむ千鳥たつなり
九百五十二番　左　宮内卿　右勝　定家朝臣
花にとひし跡を尋ねて待つ人も梢の雪に嵐吹くなり
是やさは秋のかたみの浦ならむ變らぬ色を沖の月影
九百五十三番　左持　讃岐　右　通具朝臣
風渡る池の汀のいかならむ袖だに氷る冬のよな〳〵
氷ゐる篭の音のたえしより夜はの嵐ぞ寢覺間ける
九百五十四番　左　小侍從　右勝　家隆朝臣
霰ふり風も激しき冬のよにつがはぬ鴛の聲ぞわぶなる
夏刈の玉江の蘆も霜がれて葉分の浪に鴛ぞ鳴くなる
九百五十五番　左持　隆信朝臣　右　雅經
春秋の花か月かとながむれば雪やはつもる庭も梢も
とふ嵐とはぬ人めもつもりてはひとつ眺の雪の夕暮

九百五十六番　左勝 有家朝臣　右　寂蓮

野べみればかつふる雪を忘水唯村消の心ちこそすれ

獨のみながむる空に雲消えて雪の光にすめるよの月

九百五十七番　左勝 保季朝臣　右　家長

雪つもる梢を花に紛へてもとふ人つらき庭の跡かな

ゆる夜の己が上毛を拂ひわび霜に物思ふ鴛の獨寢

九百五十八番　左勝 良平　右　三宮

春秋のながめは雪に積りけり花と月とを三吉野の里

つきはてし秋の哀れは曉の時雨の音に猶のこりけり

九百六十番　左　顯昭　右勝 忠良卿

夕かけて波や戀しきかみ島の磯まの浦に衛しば鳴く

空や海月やこほりとさ夜千鳥雲より浪に聲遙ふなり

九百六十一番　左勝 女房　右　通光卿

浦ちかき末の松山雪ふれば冬より上を浪やこゆらむ

山里はいくへか雪の積るらむ軒端にかゝる松の下折

雪よ是雲さへ凍る冬の雨の空に結べる名に社有けれ

九百六十三番　左勝 前權僧正　右　俊成卿女

白雪のなべてふれゝば梅花多さく色はかひ無かり鳧

さえわびてさむる枕に影みれば霜深き夜の有明の月

九百六十四番　左　公繼卿　右勝 丹後

夕されば佐保の河瀬の風寒み空に浪たつさよ千かな

さえ〳〵て夜間に積る嶺の雪を朝ねる雪と誰眺らむ

九百六十五番　左　公經卿　右勝 越前

岩間わけし苔の下水行惱みしられぬ冬の音こほる也

雪にまだ隱れてすめる津國のこやもあらはに立煙哉

九百六十六番　左持 季能卿　右　定家朝臣

片しきの袖こそぬるれ嶺分に時雨落ちくる松風の音

浦風にやく〻吹きまよひ鹽く山の冬ぞ寂しき

九百六十七番　左持 宮內卿　右　通具朝臣

紀の國やあまのふせやの苫庇吹上の衛月に鳴くなり

玉ほこやかよふ小川の薄氷結びもへぬ音聞ゆなり

九百六十八番　左持 讃岐　右　家隆朝臣

寢覺する人徵せば消ぬとも爭で知らましよはの埋火

天のはら雪ふりくれば足引の山こそ浪の靈なりけれ

九百六十九番　左　小侍從　右勝 雅經

朝日さす池の氷の隙々にむれゐる鴛の友ぞあまれる

浪の上に友なし千鳥打ちわびて月に怨むる有明の聲

九百七十番　左勝 隆信朝臣　右　寂蓮

三吉野の冬の住ひぞ哀なる日數は雪のふるに任せて

色も猶むかしの袖ぞしられける雪ふりうづむ軒の橘

九百七十一番　左　有家朝臣　右勝 家長

多がれの薄押しなみ古鄕のふみ分け難き庭の雪かな

笹の熊ひの〻ま川につらゝゐて駒もとゞめず冬の曙

九百七十二番　左勝 保季朝臣　右　三宮

とはれける昔の跡は無れども雪踏分くるをの〻通路

雪の下氷の上をすみかにて冬にこもれる池のをし鳥

九百七十三番　左持 良平　右　內大臣

山里は軒端の岡をふく風にこほりておつる松の白雪

さほ川に衛な〻なり夕されば衣手寒し誰とかはねむ

九百七十四番　左持 具親　右　忠良卿

跡たゆる都の外の山里は人もうらみず雪もいとはず

浪のおとは氷にたえて鷹鴨の上毛の霜に殺ふるなり

九百七十五番　左持 顯昭　右　兼宗卿

氷してかち渡りするすはの海を出で煩ふは鴨の浮舟

浪かくると島が崎の友衛立かよすれば又きなくなり

千五百番歌合卷第十四　冬三　判者 同前

九百七十六番　左勝 女房　右　釋阿

雪の旦木の下風は寒けれど櫻もしらぬ花ぞ散りける

すも月も千里の外は凍りけり雪の旦は限だになし

九百七十七番　左勝 左大臣　右　俊成卿女

嵐ふく空にみだるゝ雪のいよに氷を結ぶ夢は結ばず

松島やをしまが磯による浪の月の氷に千鳥鳴くなり

九百七十八番　左　前權僧正　右勝 丹後

梅がえの匂ひ嬉しきたえまかな木ごとに花の雪の曙

冬のよはあまざる雪に空さえて雲の浪ぢに凍る月影

九百七十九番　左持 公繼卿　右　越前

ちり積る木葉に埋む谷川の頓て氷柱に結ばれにけり

通ひける人の跡だにみえぬ哉しきみが原に積る白雪

九百八十番　左　公經卿　右勝 定家朝臣

寂しさをいかに問まし夕附日さすや岡べの松の雪折

なく千鳥袖の湊をとひこかし唐土舟のよるの寢覺に

九百八十一番　左持 季能卿　右　通具朝臣

潮風の虛ぎを分けて吹く度に浮寢や變るあぢの村鳥

千鳥なく浦曲の西の松風に月もをしとや有明の空

九百八十二番　左持 宮內卿　右　家隆朝臣

さゆる夜も音こそ絕ね岩が根に散玉凍る三吉野の瀧

卷もくの檜原に雪や重るらむたえぬ梢に柚木とる音

九百八十三番　左勝 讃岐　右　雅經

ふる雪に人こそとはね炭がまの煙は斷たぬ大原の里

あしまとおいかに浮寢の鴛先凍りける浪の枕を

九百八十四番　左　小侍從　右勝 寂蓮

丈夫は年よるひをに面なれて頭の霜も網代とやなる

柴の戸に音する方をながむれば己れと雪を拂ふ松風

九百八十五番　左持 隆信朝臣　右　家長

石間わけおつるよゞめは其乍音せぬ瀧や垂氷なる覽

駒とめて草のゝ末に霰ふりまだかりゆかぬ雉立つ也

九百八十六番　左持 有家朝臣　右　三宮

誰斯てすむらむとだに白雪の深き山の奥の庵かな

やどりぬる影もこほれる池水に月を語らふ鴛の獨寢

九百八十七番　左　保季朝臣　右勝 內大臣

降積る幾重の雪の下にても煙をゝ斷たぬをのゝ炭竈

秋はてゝ人め枯行く山里に友まつ雪のいかに降らむ

九百八十八番　左　良平　右勝 忠良卿

雪のうち越のしら山みわたせば雲に曇らぬ更科の月

冬くれば谷の下水あとたえてひとり凍らぬ峯の松風

九百八十九番　左　具親　右勝 兼宗卿

何故かさえ行く浪と思ふらむ凍れば碎くしがの浦風

宿るべき月を隔つる冬の池に心の氷柱思ひしられぬ

九百九十番　左持 顯昭　右　通光卿

網代木にちる紅葉を片敷きて月と共にぞ守明しつる

うちきらしはれぬ空にも鴛鳥の番ひ離れぬ雪の夕暮

九百九十一番　左勝 女房　右　俊成卿女

月かとて拂はねばまだ白妙の袖にぞ沍る深き夜の霜

更に又積れる雪に埋れぬ時雨ふりおきし楢の枯葉も

九百九十二番　左勝左大臣　右　丹後

にほの海や釣する蜑の衣手に雪の花ちる志賀の山風

庭の面を我のみ見ればをしき哉月と花とに紛ふ白雪

九百九十三番　左勝前権僧正　右　越前

冬草の枯ぬと何か思べき花の春こそは人も訪てしを

葛飾やまゝの継橋雪ふれば其名は影に移るばかりぞ

九百九十四番　左勝公継卿　右　定家朝臣

そのかみや天の岩戸の明しよも思知るゝあか星の聲

事ぞともなくて今年も杉の戸のあけて歎く切雪の空

九百九十五番　左持公經卿　右　通具朝臣

ふり積る雪を氷にしきかへて月影さゆる山の端の空

庭の木葉色は變れど跡ぞなき霜より雪に降果るまで

九百九十六番　左　季能卿　右勝家隆朝臣

そのかみの岩戸も斯や明星のあけ行く空に鳥歌ふ也

宿からむ行へも見えず久方の天の河原のゆき暮の空

九百九十七番　左持宮内卿　右　雅經

見わたせば氷の上に月さえて嚴波よるなきうら風

網代木やうぢの川風夜はさえて己のみよる波の音哉

九百九十八番　左　讃岐　右勝寂蓮

友と頼みし竹は雪をれて人こそなけれ冬の朝ぼの

山風は誘ひかねたる槇の戸を行へもしらず埋む雪哉

九百九十九番　左持小侍從　右　家長

み狩する山路に鈴の音はして白ふの鹿は雪に紛ひぬ

風冴ぬ宇治の川長今宵もや寄むともせぬひなさ待らむ

千　番　左持隆信朝臣　右　三宮

のゝ浦の浪は氷に音絶えて立居る物はあぢの村鳥

嵐ふく八十うぢ河の浪の上に木葉誘ふせゞの網代木

千一番　左　有家朝臣　右勝内大臣

久方の天の川風さえぬらし流るゝ月のなほ凍るまで

三年までつがひなくとも鴛鳥の浮寝の床に新枕すな

千二番　左　保季朝臣　右勝忠良卿

冬くれば常磐の山も風さえて變らぬ松に嵐ふるなり

こぬ人は跡なき庭に顯れて怨みもふかしけさの白雪

千三番　左勝良平　右　兼宗卿

ふりつもる都の雪を眺めても思ひこそまれ越の山越

哀なり下のおもひやいかならむ水を括るをしの毛衣

千四番　左勝具親　右　通光卿

岩たゝく音も嵐につらゝゐて谷の小川も冬籠るなり

武夫や八十宇治川に目近て網代にひなの夜もねられず

千五番　左持顯昭　右　釋阿

山あゐにすれる衣や紛ふらむはだれ霜ふる庭の紅葉

さゆる夜は清水の浪も凍りけり玉ぞ碎くる床の狭筵

千六番　左持女房　右　丹後

寒もくの岸の小松に雪ふれば檜原か末に雲ぞ懸れる

秋よりも寂しき影や優るらむ雪に月みる夏しなの山

千七番　左持左大臣　右　越前

雲はるゝ雪の光や白妙の衣ほすてふあまのかぐやま

つく〳〵と燈につけて思遣る心ぞやがてなのゝ炭竈

千八番　左持前権僧正　右　定家朝臣

色かへぬ冬の緑をみよとてや遂にもみぢぬ松の白雪

千九番　左持公繼卿　右　通具朝臣

片敷の床の狭筵凍るよに佗ふりやしくらむ峯の白雪

炭がまのたえぬ煙の放なれや雪にも通ふをのゝ細道

訪人も跡なき庭なれば絶もせで庭の白雪ふるに任せて

千廿番　左勝公經卿　右　家隆朝臣

桔渡る薄押並みふる雪にとはぬもつらし岡のべの里

あまつ袖ふる白雪に少女子か雲の通路花ぞちりかふ

千廿一番　左勝季能卿　右　雅經

さゝ子どり聲こそ近く鳴海潟傾く月に潮やみつらむ

昔よりたえぬ煙のさびしきはむろの八島の冬の夕暮

千廿二番　左　宮内卿　右勝寂蓮

宮城野や萩の古枝に霜さえて木下露は雨氷なりけり

庭の雪にけふこむ人を哀とも踏分つべき程ぞ待れし

千廿三番　左　讃岐　右勝家長

柚川の氷によどむ筏士や岩間の雪にはるをまつらむ

ふる雪の深き庵を人とはゞ柴折くべてわぶと答へよ

千廿四番　左勝小侍從　右　三宮

今朝はしもそるはし鷹の影も見じ野寺の鏡薄氷して

網代木に波と氷魚とのよる〳〵を猶や明す牧の島人

千廿五番　左　隆信朝臣　右勝内大臣

寒けしやつがはぬ鴛のよを重ね浪に片しく霜の毛衣

嵐ふる寒き汀に立つ鷺は玉になれたる鳥にぞ有ける

千廿六番　左勝有家朝臣　右　忠良卿

一宵のまは月を氷と水の面にやがても結ぶ浪の音かな

暮て行く冬のしをりか跡たえて山路も深き松の雪折

千十七番　左勝保季朝臣　右　兼宗卿

うきねする枕なすきそさよ千鳥驚れの浦も同じ月影

山がつの世にすみがまぞ哀なる煙さびしき大原の里

千十八番　左持良平　右　通光卿

何故の思ひなるらむ埋火の休むまもなく下焦れする

袖とり歌へば冬の長きよも今やあくらむ天の岩戸を

千十九番　左持具親　右　釋阿

小夜千鳥湊吹きこす潮風に浦よりほかの友誘ふなり

埋火のあたりに近き轉寝は春の花こそ夢にみえけれ

千廿番　左持顯昭　右　俊成卿女

三島野に鳥踏立て合せやる眞白の鹿の鈴もゆらゝに

山里の眞柴の煙かすかにてたゝぬもさびし雪の夕暮

千廿一番　左勝女房　右　越前

杉の葉の緑もみえずふる雪をわたる嵐の跡の一しほ

年くれて遂り迫ふる人毎は孰を急ぐいそぎなるらむ

千廿二番　左勝左大臣　右　定家朝臣

柚くだすにぶの川上あとたえぬみぎはの氷峯の白雪

ふゆ深きまのゝ萱はら跡たえてまだこと遠し春の俤

千廿三番　左持前権僧正　右　通具朝臣

鳥川流れてけふも暮ぬれば春に逢瀬は今夜也けり

草も木も降紛へたる雪もよに春待梅の花の香ぞする

千廿四番　左持公繼卿　右　家隆朝臣

身に積る年と思へば惜けれど春をばえ祖厭えじけれ

雪の内に遂に紅葉ぬ松のはの難面き山にくるゝ年哉

千廿五番　左　公經卿　右勝雅經

梅花共ともみえぬ雪の夜におぼめく月の影ぞもりくる

哀にも斧の音までいそぐなり松きる山の年の暮かな

千廿六番　左持季能卿　右　寂蓮

踏分し狭山は雪に跡絶て池のみくりはくる人もなし

谷の戸は結びはてたる山風に松の雪さへ上凍るなり

千廿七番　左勝宮内卿　右　家長

己が里の山風さえて吹からに都へ出づるをのゝ炭燒

とことはに音せし風は音もせで絶々響くまつの雪折

千廿八番　左　讃岐　右勝三宮

白妙のふじの高嶺に雪ふれば凍らで流る田子の浦波

奉近き氷の下の小浪は打ちいでむ事や思ひたつらむ

千廿九番　左　小侍從　右勝内大臣

數ならで世にすみ竈の煙こそ心細くは思ひたちけれ

四冬と春とゆきかふ風の池水に片へとけ行く薄氷かな
千　卅　番　左持　隆信朝臣　右　忠良卿
一四大はらや心々にやく炭のけぶりは一つ空のうきぐも
二四霞初めし春の空より眺來て雪ふる年の暮になりぬる
千卅一番　左　有家朝臣　右勝　兼宗卿
三四水鳥の騒ぐ入江の小浪のよる〳〵こほるまの〻浦風
四四心あらば杣山川の筏士もしばしは年の暮をとゞめよ
千卅二番　左持　保季朝臣　右　通光卿
五四夜や深きせきいるゝ水の音たえて衣手寒し鴛の一聲
六四日はくれぬ宿はいづくに狩衣怨は歸れはし鷹の木居
千卅三番　左　良平　右勝　釋阿
七四天戸の明やしぬらむむば玉の更行く空にあか星の聲
八四衛鴨繪島が崎を繪にかゝば友よぶ聲ぞ聞えざるべき
千卅四番　左持　具親　右　俊成卿女
九四炭竈のけぶりばかりは大原やたえぬも寂し冬の山里
一五訪ざらむ人も怨じ跡たえてふるの〻里の雪の深さに
千卅五番　左　顯昭　右勝　丹後
二五炭竈の大原山は此なれど此面彼面にけぶりたつめり
三五冬暮て今年もけふに筑波嶺の木芽も兼て春めきに鳥
四五宿毎に春の霞を待つとてや年をこめては急ぎ立らむ
千卅七番　左持　左大臣　右　通具朝臣
五五月よめば早くも年のゆく水に數かきとむる柵ぞなき
六五徒に月日はゆきと積りつゝ我身ふりぬる年の暮かな
千卅八番　左持　前權僧正　右　家隆朝臣
七五年のあけて影いかならむ增鏡今夜一夜に面變りして
八五年暮てよそぢぞ七七はイ四七七はカ四過ぬ烏玉の我黑髮も霜や置らむ
千卅九番　左勝　公繼卿　右　雅經
九五行く年も立來る春も逢坂の關路に鳥のねをや待らむ
一六歳くるゝ春や昔の春ならぬ元の身にのみ立歸りつゝ
千四十番　左　公經卿　右勝　寂蓮
二六くれにけり空に月日の杉の戸に今年も今は入相の鐘
三六春秋と眺め月や今もこれ積れば年の末となるらむ
千四十一番　左　季能卿　右勝　家長
四六あすは又今日をばこぞと云捨て惜みし物と思だにせじ
五六冬の空侘つゝ今日に成にけり跡なき庭の雪と見から
千四十二番　左　宮內卿　右勝　三宮
六六稍わかめ假初臥しの袖の上にけふ年浪も小動搖の磯
七六今日迄はまだ雪深き三吉野の山のあなたに春やきぬ覽
千四十三番　左　讃岐　右勝　內大臣
八六增鏡影さへくれぬ物ならば重なる年を嘆かざらまし
九六暮て行く年の惜さは增鏡見る影さへやあすは變らむ
千四十四番　左　小侍從　右勝　忠良卿
一七思遣れ八十ちの年の暮なれば如何計かは物は悲しき
二七年と云て四十ぢも近く迭來ぬ偖も迎ふる春は疎くて
千四十五番　左勝　隆信朝臣　右　兼宗卿
三七春の日を秋の夜とこそ詠めしか偖も程なき年の暮哉
四七珍しき春もあすとぞ聞ゆれば暮なむ年を何か惜まむ
千四十六番　左勝　有家朝臣　右　通光卿
五七行年の名殘の空も更ぬれば春やこゆらむ小夜の中山
六七皆人の何故ならず惜むらむ今歳の果のけふの暮とて
千四十七番　左　保季朝臣　右勝　釋阿
七七あすをまつ賤が門松先だてゝけふより春の色を見哉
八七今日毎に今日や限と惜め共又も今年にあひにける哉
千四十八番　左勝　良平　右　俊成卿女
九七今日も又過し日數に暮に鳥まどろむ夢に春を隔てゝ
一八昨日と云ひけふと過來し年月を降積む雪の跡ぞ知れぬ
千四十九番　左勝　具親　右　丹後
二八儚くて今年の空もくれ竹の一よ計りになりにける哉
一八一年を今宵計に眺めきて惜みながらに春をまつかな
千五十番　左持　顯昭　右　越前
二八留めあへず流るゝ年の果は早重る老の浪にぞ有ける
千五十一番　左勝　女房　右　通具朝臣
三八萬代とみもすそ川の春の朝浪にかさねてたつ霞かな
四八浅緑四方の梢のめもはるに樣々みゆる千代の影かな
千五十二番　左勝　左大臣　右　家隆朝臣
五八ぬれてほす玉串のはの露霜に天てる光幾世へぬらむ
六八四方の海の浪の外まで聞ゆ也はこやの山の萬世の聲
千五十三番　左勝　前權僧正　右　雅經
七八小れ石の苔むす岩と成て又雲かゝる迄君ぞみるべき

千五百番歌合卷第十五　祝部　判者　生蓮　師光　入道

千五十一番　左勝　女房　右　通具朝臣
三八萬代とみもすそ川の春の朝浪にかさねてたつ霞かな
四八浅緑四方の梢のめもはるに樣々みゆる千代の影かな
千五十二番　左勝　左大臣　右　家隆朝臣
五八ぬれてほす玉串のはの露霜に天てる光幾世へぬらむ
六八四方の海の浪の外まで聞ゆ也はこやの山の萬世の聲
千五十三番　左勝　前權僧正　右　雅經
七八小れ石の苔むす岩と成て又雲かゝる迄君ぞみるべき
八八千世を祈る神の三室の榊葉は君が例と茂りあひにき
千五十四番　左持　公繼卿　右　寂蓮
九八宮居せし千尋栲繩君が爲ながき契をむすびそめけり
一九廬鶴の友よぶ聲に著き哉名殘多かる千代のけしきは
千五十五番　左　公經卿　右勝　家長
二九君が代を我がたつ杣に祈りきて檜原杉原色も變らじ
三九はる毎にはこやの山にさき草の萬代かけて殿造せり
千五十六番　左持　季能卿　右　三宮
四九君が代は御裳濯川にすむ月の底の心は神ぞしるらむ
五九君が代は何がとの島の小松原神さびて又若葉さす迄
四小れ石の巖とならむ行末を千度見べき君とこそきけ
千五十七番　左持　宮內卿　右　內大臣
五九長閑なる御代の始の春の日を霞に變る空かとやみむ
六九君が代は御裳濯川にすむ月の底の心は神ぞしるらむ
千五十八番　左　讃岐　右勝　忠良卿
七九伊勢の海さよき渚の浪も唯君に心をよするなりけり
八九天つ空霞を分けて出づる日の影も長閑き千世の初春
千五十九番　左　小侍從　右勝　兼宗卿
九九八洲もる國つ御神に祈ありて千年は君が心なる哉
一〇神風や內引の宮に祈り置きて片々君が千代は賴まむ
千六十番　左持　隆信朝臣　右　通光卿
一〇君かへむ八千代の數も曇なくみもすそ川を照す月影
二〇男山おひそふ松にしるきかな限もしらぬ君が千年は
千六十一番　左持　有家朝臣　右　釋阿
三〇雲の色星の宿りもさしながら治れる代を空にみる哉
四〇神風や御裳濯川の小れ石も君が御世にぞ岩と成べき
千六十二番　左　保季朝臣　右勝　俊成卿女
五〇年へたる御裳濯川の月影や世にすむ君が光なるべき
六〇照しみむ八百萬代ぞ曇なきはこやの山の峯にすむ月
千六十三番　左持　良平　右　丹後
七〇鈴鹿川ふるき流を傳へきて猶末とはき君が御代がな
八〇枝毎に千世も八千世も色變ぬひら野の松は君が隨に
千六十四番　左　具親　右勝　越前
九〇君が代の數には此れも筑波山年へて繁き梢なれども
一一ひまもなく內外の宮に行き通ふ心は君が萬世のため
千六十五番　左持　顯昭　右　定家朝臣
二一我君に千代もやちよも讓りはの常磐の陰は猶遠きもせじ
三一天地と限なかれと誓ひ置きし神のみことぞ我君の爲
千六十六番　左勝　女房　右　家隆朝臣

二一萬代と御手洗川の夏のよに秋ともすめる山のはの月
四一久方の天のかぐ山空晴れて出づる月日や萬代のため
千六十七番　左勝　左大臣　右　雅經
一一君が代に法の流をせきとめて昔の浪やたち歸るらむ
六一思ひやる心の果も猶過ぎて道ある御代の千代の行末
千六十八番　左勝　前權僧正　右　寂蓮
七一君が代にさしでの磯の友衛八千代の聲を聞ぞ嬉しき
八一いつとなく八重の潮路に立浪の數限なき君が御代哉
千六十九番　左持　公繼卿　右　家長
九一足引の八つを作の椿君が世に幾度影を替むとすらむ
〇君が代は遙なるとの濱庇久しき影は浪のまに〳〵
千七十番　左　公經卿　右　三宮
二一君が世の末を思へば久方の天てる神の影をならべて
三一幾度か君が御代には廻りあはむ月日の光千々の春秋
千七十一番　左　季能卿　右勝　内大臣
四一治れる八隅の内の一くさの君が御影に靡かぬはなし
五一百敷は龜の上なる山なれば千世を重ねよつるの毛衣
千七十二番　左　宮内卿　右勝　忠良卿
六一行く末を思へば涼し君が世の風ものどけき夏の夕暮
七一君がため千町の早苗年をへて幾萬代をとりぞ重ねむ
千七十三番　左持　讃岐　右　兼宗卿
八一宿〳〵置く影靜なる月みればすむもかひある石清水哉
九一幾千世も君が心に任せよとすみ始めける石清水かな
千七十四番　左持　小侍從　右　通光卿
一一此君と頼めてうゑし唐人の千世の契や今のよのため
〇二君が代は谷の岩根の姫小松雲ゐる嶺に下枝さすまで
千七十五番　左　隆信朝臣　右勝　釋阿
三一行く末よ幾代の秋を契るらむわかの浦路を照す月影
四一君が代は幾千年にか葵草かはらぬ色に神もまもらむ
千七十六番　左持　有家朝臣　右　俊成卿女
五一君が世に十度すむべき水の色を汲て知ける山の聲哉
六一千早ぶる神代もしらぬ例をや君に始めて定置きけむ
千七十七番　左持　保季朝臣　右　丹後
七一君をこそ神も哀と石清水外よりいでぬ流れと思へば
八一君が世は藐姑射の山の嶺におふる白玉椿替せむ迄
千七十八番　左持　良平　右　越前
九一君が世はあだにも云じ石清水澄べき御代の底の深さに
〇二鈴鹿河やそせの浪を隔てゝもわが神風に君を祈らむ
千七十九番　左　具親　右勝　定家朝臣
三一幾千世も君が例や此ならむいつぬきがはの鶴の毛衣
千八十番　左　顯昭　右勝　通具朝臣
四一君がへむ三千世を懸て咲桃の百返り迄榮えまさなむ
五一千早ふる賀茂の社のゆふ襷千年を君にかけよとぞ思
六一我道を護らば君を護るらむよはひはゆづれ住吉の松
千九十四番　左　具親　右勝　通具朝臣
七一君ならで有き有ずや萬代を飛火の野守年はへにけり
〇二いづなぎや色はも同じ末なれば君に契れる豐國の土
千九十五番　左　顯昭　右勝　家隆朝臣
一一君が代は數しらぬまの菖蒲草引とも盡じけふの挿頭は
二一影靡く星の位も長閑にて空にぞしるき御代の氣色は
千九十六番　左勝　女房　右　寂蓮
三一萬代とみつの濱風空さえてのどけき浪に氷ねにけり
四一今よりや飽迄花も三千年になるてふ桃の園を移して
千九十七番　左勝　左大臣　右　家長
五一ぬる塵の山を幾重に重ねてもげに我國は動なき世を
六一萬代をふべき君なり月も日も長閑き光かねて著しも
千九十八番　左　前權僧正　右勝　三宮
七一千早振る神ぞしるらむ我君をねても覺めて祈る心は
八一水のすむいつぬき川のしき浪に猶立優る御代の數哉
千九十九番　左　公繼卿　右勝　大臣
九一常磐なる御代の徴にたてりけり古河のべの二本の杉
〇二遙なる程を思へば武陵の松のみどりや君が行くすゑ
千一百番　左持　公經卿　右　忠良卿
一一君が代に積りて山となる塵の末を思へば雲騰るまで
二一友衛むれゐる磯の磐々に君が八千世の數ぞきこゆる
千一百一番　左勝　季能卿　右　兼宗卿
三一曇なく治まる御代を人も皆みよとて出づる星の影哉
四一跡垂し三笠の山のかひあれば天の下社長閑かりけれ
千一百二番　左持　宮内卿　右　通光卿
五一千代までとよはの水に事よせて契を結ぶしがの浦浪
六一君が世は蟇の栲繩くり返し濱の眞砂を數にとるらむ
千一百三番　左持　讃岐　右　釋阿
七一春日野の春の芳葉も君が爲幾萬世かつまむとすらむ
八一君が世を日吉の神に祈ければ千年の數やしがの浦波

千百四番　左　小侍従　右勝　俊成卿女

九八二葉なる松の例も堪ぬ哉幾千世となき君が御世には
九九群居つゝ若の浦曲に鳴たづの聲にも君が千代ぞ聞ゆる

千百五番　左勝　隆信朝臣　右　丹後

一九昔よりさこそは嗣る神代も君ぞ賊の例なるべき

二九君が世を長井の浦にゐるたづも萬世までと聲聞ゆ也

千百六番　左持　有家朝臣　右　越前

三九龜尾の岩根落來る瀧の糸の幾千世へてもたえむ物か
四九君が代にあふの松原枝繁み末頼もしく影ぞさしそふ

千百七番　左　保季朝臣　右勝　定家朝臣

五九此世には昔もきかず今もあらじ君が齢にまさる例は
六九萬代の春秋君になづさはむ花と月との末ぞひさしき

千百八番　左　良平　右勝　通具朝臣

七九つきせじと天の下をや祈らむ萬代よはふ三笠山哉
八九千々の秋かねてぞ著き君が世を長月にさく白菊の花

千百九番　左持　具親　右　家隆朝臣

九九かつまたの池に鳥なし古の過ぎにし程や君が行く末
一〇〇君が代は花も千年の友として松と竹とに春風ぞふく

千百十番　左持　顯昭　右　雅經

一〇かぢの葉に八百萬代とかきつけて願ふ願は君が隨に
二〇君がへむ齢をさして大空にむれたるたづの己が聲々

千百十一番　左勝　女房　右　家長

三〇萬代と三龍野の浦の濱ゆふの重ても猶盡せざるべし
四〇君が世は二葉の松の千世をへて梢の風を露にきく迄

千百十二番　左勝　左大臣　右　三宮

五〇人の世をなど定なく思ひけむ君が千年の有ける物を
六〇曇なき天てる神のみづ垣に君が千年の影うつるなり

千百十三番　左持　前權僧正　右　内大臣

七〇長らへてかひある事を松なれや君が千年の影に隱て
八〇誘人の仰ぐのみかは君が世の猶空に慶ぶ雲も立けり

千百十四番　左持　公繼卿　右　忠良卿

九〇君が世はちくまの川のさゝれ石の宛ら岩と顯るゝ迄
一〇末遠く千世の御影を頼むかな契あればぞあふの松原

千百十五番　左持　公經卿　右　兼宗卿

一君が世をとふ人あらば出る日の光をさして空に答む
二曇なきはこやの山の月影に光をそふる玉つ島かな

千百十六番　左持　季能卿　右　通光卿

三神路山下つ岩根の宮柱しるし違へぬ御世とこそみれ

千百廿八番　左勝　前權僧正　右　忠良卿

四萬世の例をいはゝ君が世は鶴の毛衣いろもかはらで

千百十七番　左持　宮内卿　右　釋阿

五昔より流をうくる四方の海のあかぬは君が齢也けり
六住吉の松も涼しく思ふらし君が千年の和歌のうら風

千百十八番　左　讃岐　右勝　俊成卿女

七君を祈る心をくみて答ふ也御手洗川の音もさやかに
八暁きにけり君がみるべき行末は遠里をのゝ秋萩の花

千百十九番　左持　小侍従　右　丹後

九三千年になてふ桃の百返り花さく春を君や見べき
一〇龜尾の岩根におつる瀧つせにちる白玉や君が世の數

千百廿番　左　隆信朝臣　右勝　越前

一一君が世はにまの里人作る田の稻の穗末の數に任せて
二空はれていづる月日や君が世の末遥なる例なるらむ

千百廿一番　左持　有家朝臣　右　定家朝臣

三玉椿八千世の後も我君のときはかきはの色は變らじ
四四方の海も煙にぎはふ濱庇久しき千世に君ぞ榮えむ

千百廿二番　左持　保季朝臣　右　通具朝臣

五此君の猶行く末は年をへて生ひそふ竹の數しらぬ迄
六君ぞみむ千尋の海の底の色のこむ年波に顯るゝまで

千百廿三番　左持　良平　右　家隆朝臣

七住吉の松の緑と君が世といづれ久しと神ぞしるらむ
八八百日行濱の眞砂にゐる鴾君が千世をや添て數へむ

千百廿四番　左　具親　右勝　雅經

九幸生の浦の其中濱による浪の豊けき君が千世の末哉
一〇君が世は常磐の山の松の風色も變らじ音もたえせじ

千百廿五番　左　顯昭　右勝　寂蓮

一一君ぞみむ山路の菊を千世ながら長月毎につめる印は
一二たちぬはぬ衣の袖も匂ふなり山路の菊の萬づ世の秋

千五百番歌合巻第十六　戀一　判者　生蓮

千百廿六番　左勝　女房　右　三宮

一三足曳の山下水のわき返り色にはいでじ木隱れてのみ
一四我袖にけふぞ涙の初時雨いかなる色に染めむとす覽

千百廿七番　左持　左大臣　右　内大臣

一五知せばや戀を駿河のたごの浦恨に波の立ぬ日ばなし
一六玉垂のみすの隙のみ繁ければ懸ても人を頼べきかは

千百廿八番　左勝　前權僧正　右　忠良卿

一七五月雨の軒の雫は時鳥なくやさ月のなみだなりけり

千百廿九番　左勝　公繼卿　右　兼宗卿

一八包まじと眺は著き物なれば堪ぬ景色は誰もみつらむ

千百卅番　左持　公經卿　右　通光卿

一九然りとて靡かじ物をさを鹿の入野の薄ほにも出敢ず

千百卅一番　左　季能卿　右勝　釋阿

二〇此やさは人をみるめの渚なる習はぬ袖にかゝる浪哉

千百卅二番　左　宮内卿　右勝　俊成卿女

二一詠めには心許さじこれぞ此の積れば遂に戀となる物
二二しらざりき掬ばぬ水に影みえて袖に雫の懸る物とは

千百卅三番　左持　讃岐　右　丹後

二三分初めていかに迚らむ行へなきあふを限の道芝の露
二四尋入む道もしられぬ忍山袖ばかりこそ菜なりけれ

千百卅四番　左　具親　右勝　雅經

二五此やさは人をみるめの渚なる習はぬ袖にかゝる浪哉

千百卅五番　左勝　左大臣　右　三宮

二六折らずしてやみなも物か山櫻霞のまよりみえし匂を
二七戀をのみしのぶの里の道の果通ふしるべは心也けり

千百卅六番　左　有家朝臣　右勝　通具朝臣

二八逢事の稀なる色や顯れむもりいでゝそむる袖の涙に

千百卅七番　左　保季朝臣　右勝　家長

二九雲の色も昨日みしには變りけり思染めつる夕暮の空
三〇ほのみてし君にはしかし春霞隱びく山の櫻なりとも

千百卅八番　左　良平　右勝　雅經

三一いつのまに君に心を筑波山程なく茂る歎きなるらむ
三二これやさは人を思ひの初煙なれぬながめの空の浮雲

千百卅九番　左　具親　右勝　寂蓮

三三戀すてふ名は徒に陸奥の忍のやまもかひなかりけり
三四物思ふと涙の末もちりぬべし心の内も袖にしられて

千百四十番　左　顯昭　右勝　家長

三五灰めかすかひこそなけれ逢事を印南の浦の蜑の漁火

君をけふ三垣が原に袖濡し芹つむばかり物や思はむ
千百四十一番　左勝　女房　右　内大臣
神無月そでのみ下の初時雨人のこゝろを秋の一しほ
包袖たが戀るとは漏さずとつくらむ墨を哀ともみよ
千百四十二番　左持　左大臣　右　忠良卿
うち忍び磐瀬の山の谷隠れみづの心をくむ人ぞなき
言の葉は色にもいでゝ朽ねとや常盤の杜の秋の下露
千百四十三番　左勝　前權僧正　右　兼宗卿
我戀はゆく方もなき詠めより空しき空に秋風ぞふく
富士のねの煙に耻ぬ思哉もゆとはみえで下に焦るゝ
千百四十四番　左勝　公繼卿　右　通光卿
陽炎の岩垣淵のわきかへり上浪たゝぬ物をこそ思へ
人しれぬ心の同じ友なれや爪みしま江の蘆の亂れは
千百四十五番　左持　公經卿　右　釋阿
せきも敢ず戀すてふ名や流れなむ水の下迄影通ふ也
哀なり轉寢にのみ見し夢の長き思ひに結ばゝれなむ
千百四十六番　左持　季能卿　右　俊成卿女
身にはまだ習はぬ物を怪くも聞しに似たる袖の上哉
いかにせむ忍の山に跡たえて思入れども露の深さを
千百四十七番　左持　宮内卿　右　丹後
人しれぬ戀をのみ唯菅の根の長くや頓て思入れなむ
打出でむ言の葉さへぞ堰れぬる掻も流さぬ山川の水
千百四十八番　左持　讃岐　右　越前
諸共に有明の空ぞすたれけるほの三日月の宵の面影
顯れむ名は惜しけれど忍山嶺の白雲かゝらずもがな
千百四十九番　左持　小侍從　右　定家朝臣
よしさらば戀死ぬべしと云乍いけるは人を頼ざりしに
片糸のあふとはなしに玉結もたえぬ計ぞ亂果てぬる
千百五十番　左　隆信朝臣　右勝　通具朝臣
忍山現にだにもまだみぬをはかなくたのむ夢の通路
せき返し猶もる袖の涙かな忍ぶもよその心ならぬに
千百五十一番　左勝　有家朝臣　右　隆信朝臣
下荻のほにこそ非ぬ露ばかり漏しぞそむる秋の初風
春の浪の入江に迷ふ初草の僅かにみてし人ぞ戀しき
千百五十二番　左　保季朝臣　右勝　雅經
染め增さむ猶行く末を思ふ哉けふ一しほの袖の涙に
ほには出じ蘆のふし葉の下亂入江の浪に朽は果ともな
千百五十三番　左　良平　右勝　寂蓮
神無月そでのみ下の初時雨人のこゝろを秋の一しほ
包袖たが戀るとは漏さずとつくらむ墨を哀ともみよ
千百五十四番　左持　具親　右　家長
うち忍び磐瀬の山の谷隠れみづの心をくむ人ぞなき
言の葉は色にもいでゝ朽ねとや常盤の杜の秋の下露
千百五十五番　左持　顯昭　右　三宮
我戀はゆく方もなき詠めより空しき空に秋風ぞふく
富士のねの煙に耻ぬ思哉もゆとはみえで下に焦るゝ
千百五十六番　左勝　女房　右　忠良卿
陽炎の岩垣淵のわきかへり上浪たゝぬ物をこそ思へ
人しれぬ心の同じ友なれや爪みしま江の蘆の亂れは
千百五十七番　左勝　左大臣　右　兼宗卿
我が戀はまだしる人も白菅のまの〻秋萩露も漏すな
漏さじと思ふ心やせき返す涙の河にかくるしがらみ
千百五十八番　左持　前權僧正　右　通光卿
戀をすまの怨て歸る風の音を逢事なみに聞ぞ悲しき
身のうさは偖難面きに知るれど結ほれても岩代の松
千百五十九番　左持　公繼卿　右　釋阿
難面さを兼て知ばや天雲のよそに見より袖の濡ぬる
色に出ず人の袖には露かくる君ほうけらの花にや有らむ
千百六十番　左　公經卿　右勝　俊成卿女
我が戀は嵐に迷ふ浮ぐものさわきぞわたる夕暮の空
思ふさへ跡なき空の形見哉其方の風の身にはしめ共
千百六十一番　左持　季能卿　右　丹後
播磨潟恨みても猶頼めとや末にありてふあふの松原
戀渡涙の河の早きせに身を盡しても逢見てしがな
千百六十二番　左持　宮内卿　右　越前
我戀は刈田の庵に吹く風の俄に人にしられぬるかな
何せむに斯る戀路を踏初て行へもしらぬ嘆なるらむ
千百六十三番　左　讃岐　右勝　定家朝臣
蛙なく神なび河に咲花のいはぬ色をも人のとへかし
我戀や夜の暇につみし芹袖のみぬれてみる人もなし
千百六十四番　左　小侍從　右勝　通具朝臣
浪高きゆらの湊をこぐ船の鎭めもあへぬ我が心かな
廻りてしよゝの契に袖ぬれてこれも昔のうき涙かな
千百六十五番　左持　隆信朝臣　右　家隆朝臣
千百五十三番　左　良平　右勝　寂蓮
忍音の色のみ深き袖なれやいはでの杜の秋の時雨は
いはたへぬべき涙の程は忍びきぬさのみはいかゞ袖の柵
千百五十四番　左持　具親　右　家長
またざりし秋やは物を思知る道なき迄の庭の景色を
かき曇り雨ふるやどの秋風に涙片しき今宵かもねむ
千百五十五番　左持　顯昭　右　三宮
亂ぬる心はよそにみえぬらむ何か人目を信夫もぢ摺
斯こふといかでか人に漏すべき思ひ忍ぶの山の下水
千百五十六番　左勝　女房　右　忠良卿
蘆のやのなだの鹽くむ蜑人も憑るゝ袖の暇なきまで
頼みおきし淺茅が露に秋かけて木葉降敷く宿の通路
千百五十七番　左勝　左大臣　右　兼宗卿
我が戀はまだしる人も白菅のまの〻秋萩露も漏すな
漏さじと思ふ心やせき返す涙の河にかくるしがらみ
千百五十八番　左持　前權僧正　右　通光卿
戀をすまの怨て歸る風の音を逢事なみに聞ぞ悲しき
身のうさは偖難面きに知るれど結ほれても岩代の松
千百五十九番　左持　公繼卿　右　釋阿
難面さを兼て知ばや天雲のよそに見より袖の濡ぬる
色に出ず人の袖には露かくる君ほうけらの花にや有らむ
千百六十番　左　公經卿　右勝　俊成卿女
我が戀は嵐に迷ふ浮ぐものさわきぞわたる夕暮の空
思ふさへ跡なき空の形見哉其方の風の身にはしめ共
千百六十一番　左持　季能卿　右　丹後
播磨潟恨みても猶頼めとや末にありてふあふの松原
戀渡涙の河の早きせに身を盡しても逢見てしがな
千百六十二番　左持　宮内卿　右　越前
我戀は刈田の庵に吹く風の俄に人にしられぬるかな
何せむに斯る戀路を踏初て行へもしらぬ嘆なるらむ
千百六十三番　左　讃岐　右勝　定家朝臣
蛙なく神なび河に咲花のいはぬ色をも人のとへかし
我戀や夜の暇につみし芹袖のみぬれてみる人もなし
千百六十四番　左　小侍從　右勝　通具朝臣
浪高きゆらの湊をこぐ船の鎭めもあへぬ我が心かな
廻りてしよゝの契に袖ぬれてこれも昔のうき涙かな
千百六十五番　左持　隆信朝臣　右　家隆朝臣
千百五十三番　左　良平　右勝　寂蓮
忍音の色のみ深き袖なれやいはでの杜の秋の時雨は
いはたへぬべき涙の程は忍びきぬさのみはいかゞ袖の柵
千百五十四番　左持　具親　右　家長
またざりし秋やは物を思知る道なき迄の庭の景色を
かき曇り雨ふるやどの秋風に涙片しき今宵かもねむ
千百五十五番　左持　顯昭　右　三宮
亂ぬる心はよそにみえぬらむ何か人目を信夫もぢ摺
斯こふといかでか人に漏すべき思ひ忍ぶの山の下水
千百五十六番　左勝　女房　右　忠良卿
蘆のやのなだの鹽くむ蜑人も憑るゝ袖の暇なきまで
頼みおきし淺茅が露に秋かけて木葉降敷く宿の通路
千百五十七番　左勝　左大臣　右　兼宗卿
我が戀はまだしる人も白菅のまの〻秋萩露も漏すな
漏さじと思ふ心やせき返す涙の河にかくるしがらみ
千百五十八番　左持　前權僧正　右　通光卿
戀をすまの怨て歸る風の音を逢事なみに聞ぞ悲しき
身のうさは偖難面きに知るれど結ほれても岩代の松
千百五十九番　左持　公繼卿　右　釋阿
難面さを兼て知ばや天雲のよそに見より袖の濡ぬる
色に出ず人の袖には露かくる君ほうけらの花にや有らむ
千百六十番　左　公經卿　右勝　俊成卿女
我が戀は嵐に迷ふ浮ぐものさわきぞわたる夕暮の空
思ふさへ跡なき空の形見哉其方の風の身にはしめ共
千百六十一番　左持　季能卿　右　丹後
播磨潟恨みても猶頼めとや末にありてふあふの松原
戀渡涙の河の早きせに身を盡しても逢見てしがな
千百六十二番　左持　宮内卿　右　越前
我戀は刈田の庵に吹く風の俄に人にしられぬるかな
何せむに斯る戀路を踏初て行へもしらぬ嘆なるらむ
千百六十三番　左　讃岐　右勝　定家朝臣
蛙なく神なび河に咲花のいはぬ色をも人のとへかし
我戀や夜の暇につみし芹袖のみぬれてみる人もなし
千百六十四番　左　小侍從　右勝　通具朝臣
浪高きゆらの湊をこぐ船の鎭めもあへぬ我が心かな
廻りてしよゝの契に袖ぬれてこれも昔のうき涙かな
千百六十五番　左持　隆信朝臣　右　家隆朝臣

一業ましと誰故露をこぼすらむ我身のためはくずの秋風
二日といへば其方の空と眺ねど吹來る風の袖に慣ぬる
千百六十六番　左持　有家朝臣　右　雅經
三菟屋の煙は下にむすぼゝれとも思ありとは人に知れじ
四思ひおく心の瀧の顯れておつとは袖の色に見えぬる
千百六十七番　左持　保季朝臣　右　寂蓮
五かひもなき唯徒の眺かな思へどいはで過ぐる月日は
六わびつゝも春迄とだに思はゞや萎れ果ぬる雪の下草
千百六十八番　左勝　良平　右　家長
七夕されば松に秋風音づれてこぬ人つらき轉寢のゆめ
八徒に頼めぬ人を松の門さゝでぞあくる幾夜ともなく
千百六十九番　左　具親　右勝　三宮
九うしといへば頓て心の變るかは戀しき上の思也けり
〇物思ふに習はぬ袖の白露は忍ばむとしも覺ざりけり
千百七十番　左　顯昭　右勝　内大臣
一我戀や夜の暇につみし芹袖のみぬれてみる人もなし
二堰止る心も苦しいざさらばいさら井の水も漏し果てむ
千百七十一番　左勝　女房　右　兼宗卿
三跳ら秋の長してふ夜は名のみして盡ぬ名殘ぞ有明の月
四しのぶれど涙の色のくれなゐに深き心も現れにけり
千百七十二番　左持　左大臣　右　通光卿
五荒磯の浪よせかくる岩根松云ねど音には現れぬべし
六嬉しくも色にみせつる涙哉いふとも如何思ふ計りは
千百七十三番　左勝　前權僧正　右　釋阿
七通ひ行く夢路にすうる關守は打もねぬよの我身也鳥
八關守はうちもねぬとも徒に歸る戀路はかひ無りけり
千百七十四番　左　公繼卿　右勝　俊成卿女
九山陰の岩もとすげの茹くのみ色も變らぬ物思ふらむ
〇暮なばと頼めても猶朝露の起遣ぬ床に消ぞしぬべき
千百七十五番　左勝　公經卿　右　丹後
一並べこし枕はうとき面影の怨めしながら猶ぞ離れぬ
二我故の詠と君はしらじかし中々よその人はとへども
千百七十六番　左　季能卿　右勝　越前
三何となく思ひ入るらむ吉野山奥にも人はあはぬ物故
四自からまどろむ程に忘らるゝ戀を夢こそ驚かしつれ
千百七十七番　左　宮内卿　右勝　定家朝臣
五思事えぞ忍ばれぬ（屋作）袖の上に秋ならば杜露と卿ため

六三戀しさのわびて誘ふ宵々に行きてはきぬる道の笹原
千百七十八番　左持　讃岐　右　通具朝臣

三七徒らにさてやはくちひあや蔭流す涙をしき忍びつゝ
八三知人も涙の下に朽果ばたが名はたゝじ常なきにして
千百七十九番　左　小侍従　右勝　家隆朝臣

九三夢とのみ思果てゝもやむべきに契し文の何殘りむ
〇四人しれずくつる類や我が袖にくらぶの山の谷の埋木
千百八十番　左　隆信朝臣　右勝　雅經

一四幾しほとそむる心をひと問はゞ變る涙の色を答へむ
二四いかで猶しばしも人に住吉の淺澤水の末はたゆとも
千百八十一番　左　有家朝臣　右勝　寂蓮

三四山川の凍れる波の春風に打出てこそ云はまほしけれ
四四なぞも斯折しも物を思ふらむ秋の寢覺も深きよの雨
千百八十二番　左　保季朝臣　右勝　家長

五四まてとかや云し計を命にて逢迄とやは身を怨むべき
六四秋の鴈歸る春をも賴みけり我玉梓の行くへしらずも
千百八十三番　左　良平　右勝　三宮

七四さりともとつれなき人を松風の心碎くる秋のしら露
八四今こむと契りし程もとしふりて軒は葱に庭は淺茅に
千百八十四番　左　具親　右勝　内大臣

九四中々に包む氣色や時雨るらむ憂になしたる涙也鳥
〇五逢事は筑摩の神に祈てなべての數にいれじとやさば
千百八十五番　左勝　顯昭　右　忠良卿

一五さのみやはつらき氣色を三島江の入江の蔭の亂果べき
二五味氣なく賴めぬ人を我待て深み行く儘に歎そへつる
千百八十六番　左勝　女房　右　通光卿

三五連もなき人をば賴かひも無てくるゝ夜毎に秋風ぞ吹
四五けふまでは忍びに絞る袖の露いつ現れて誰に漏さむ
千百八十七番　左勝　左大臣　右　釋阿

五五よそながらかけてぞ思ふ玉葛かづらき山の峯の白雲
六五年もへぬ宇治の橋守君ならば哀も今はかけまし物を
千百八十八番　左持　前權僧正　右　俊成卿女

七五槇の戸をさゝでぞ明る君はこず我やゆかむの休らひの
八五思ひねの夢の浮橋とだえしてさむる枕にきゆる面影
千百八十九番　左持　公繼卿　右　丹後

九五戀すとも常に逢瀨を祈る哉此をばうけよ御手洗の神
〇六待々て山端出づる月はみつ今こむといふ人は無れど
千百九十番　左　公經卿　右勝　越前

一六しほ風に岩うつ浪のわき返り心碎くるもの思ふかな
二六云初むる戀路に迷ふ玉章の結ほれたる物をこそ思へ
千百九十一番　左　季能卿　右勝　定家朝臣

三六而影に行へをとへば味氣なくしらぬ涙の答へ顏なる
四六きえわびぬ移ろふ人の秋の色に身を木枯の杜の下露
千百九十二番　左持　宮內卿　右　通具朝臣

五六我戀は人しれぬまの菖浦草怪めぬ程ぞねをも忍びし
六六吉野川岩うつ浪のわき歸り影みぬ水の瀨に碎けつゝ
千百九十三番　左勝　讃岐　右　家隆朝臣

七六うちはへて苦しき物は人めのみ忍の浦の蜑のたく繩
八六から衣日も夕浮の空の色曇らば曇れまつもともなし
千百九十四番　左　小侍従　右勝　雅經

九六思はじと思ふ心の叶はねば人をば況ていかゝ怨みむ
〇七懸てだに賴めぬ浪のよるくを松もつれなきよるの浦風
千百九十五番　左持　隆信朝臣　右　寂蓮

一七いかにせむ思は深し伊勢の海に釣する蜑の承引ぬ身を
二七自ら恨むる方も有なむし身をなき物に思ひなさずば
千百九十六番　左勝　有家朝臣　右　家長

三七山賤のおりたつ澤の眞菰草假にのみこそ袖も濡らめ
四七浪返りくる君に近江の堅田舟繁き蘆間を行く方ぞなき
千百九十七番　左勝　保季朝臣　右　三宮

五七今こむの契空しくふけぬれば空行く月の影も怨めし
六七賴まじと思ふ物から暮毎に心にかゝる蛛のふるまひ
千百九十八番　左　良平　右勝　内大臣

七七あはで唯嘆く計りの契をばこは何故に結びおきけむ
八七幾世しも有じ物故味氣なく憂身にかへて思べきかは
千百九十九番　左　具親　右勝　忠良卿

九七さりともに待し暮こそ儚けれ訪にだに猶つらき心を
〇八思寢に我が心からみる夢もあふ夜ほ人の情なりけり
千二百番　左　顯昭　右勝　兼宗卿

一八厭はれて年ふる身には思ひやる心遣ひも恥かしき哉
二八逢坂は都に近き程なれど戀路となれば遠ざかりけり

千五百番歌合卷第十七　戀二　判者　顯昭法師

千二百一番　左勝　女房　右　釋阿

三八眺れはこゝぬ人またる侘つゝも今夜の月に飽すかもねむ
四八せきわびぬあふ瀨もしらぬ涙河片しく袖やゐでの棚
千二百二番　左勝　左大臣　右　俊成卿女

五八下燃の名にやはたてむ難波なる蘆火焚屋に燻る煙を
六八夏衣薄くや人のなりぬらむ空蟬のねにぬるゝ袖かな
千二百三番　左勝　前權僧正　右　丹後

七八有明のこや長月の空賴め待出づる月のかき曇るまで
八八時しらぬ戀はふじのねいつとなく絕ぬ思にたつ煙哉
千二百四番　左持　公繼卿　右　越前

九八波荒きおち岩にも松は生にけりと思ふ計を慰めにして
〇九岩の上におひぬる松の種をのみ賴む計の慰めぞうき
千二百五番　左勝　公經卿　右　定家朝臣

一九斯しつゝ憂身消なばありし世の夢を儚み哀とをみよ
二九夢なれやをのゝ篠原假初に露分し袖は今も萎れて
千二百六番　左勝　季能卿　右　通具朝臣

三九遙莫憂身の程や知せまし云はでやむべき物思かは
四九我戀はあふを限の賴みだにゆくへもしらぬ空の浮雲
千二百七番　左持　宮內卿　右　家隆朝臣

五九身の程に包むといはゞ自ら厭ふに成ぬ戀ずしも非ず
六九思へども人の心の淺茅生に置迷ふ霜の敢ずけぬべし
千二百八番　左　讃岐　右勝　雅經

七九更に鳥此や賴めしよはならむ月をのみ社待可りけれ
八九哀ともいつかは人に磐余野のいはれず懸る袖の露哉
千二百九番　左勝　小侍従　右　寂蓮

九九淺ましや斯やは物を思べき我つらからば人は忍ばし
〇〇思ふ事千江の浦曲の浮木だに寄合ふ末は有と社きけ
千二百十番　左勝　隆信朝臣　右　家長

一〇朝夕にうき面影を水馴棹さすがにさても慰みやせむ
二〇夢にだにみるよもなくて明るよの返す衣の袖の浦波
千二百十一番　左　有家朝臣　右勝　三宮

三〇年ふとも流てこひむつらしとて扨やは人を山川の水
四〇よと共にうき人よりもつれなきは思に消ぬ命也けり
千二百十二番　左　保季朝臣　右勝　内大臣

五〇遺れ草にも非す木にも非す唯やは袖に露は置べき

見し夢を忍ぶる雨の漏さばや現ともなきそでの雫を
千二百十三番　左持　良平　右　忠良卿
池水につがはぬ鴛の浮枕ならぶ方なき戀もするかな
人もうく我も悔しき慰めは世々の契の報いばかりぞ
千二百十四番　左勝　具親　右　兼宗卿
今はとて思絶べき槇の戸をさゝぬや待し習ひなる覽
君をのみ偏に忍ぶ夏衣さても裏なきかひやなからむ
千二百十五番　左　顯昭　右勝　通光卿
さり共とよも唯にては山城の泉の小菅いつか逢みむ
古はしぢの端書百夜とも頼むればこそ其につけても
千二百十六番　左持　女房　右　俊成卿女
君は知や待夜許多に積来て袖に有明の月をみるとも
色變る心の秋のときしもあれ身にしむ暮の荻の上風
千二百十七番　左　左大臣　右勝　丹後
木隠れて身は空蟬の唐衣ころもへにけり忍び〳〵に
わりなしや露のよすがを尋ねて物思袖に宿る月影
千二百十八番　左勝　前權僧正　右　越前
いかにとよ戀しき事を由なしと思果つれば物忘して
逢事は片山岸の岩の上にいつゝ待とてふれるみなる覽
千二百十九番　左勝　公繼卿　右　定家朝臣
蘭夢路はさこそ通ひけれあふとみる夜の移香もがな
尋見るつらき心の奥の海よ汐干の潟の云かひもなし
千二百二十番　左持　公經卿　右　通具朝臣
眺めわび旬上の空なる月影に身の浮雲ぞ最ど悲しき
あふとみて思合せぬ夢にさへ儚かりける契なれとや
千二百廿一番　左勝　季能卿　右　家隆朝臣
知せては中々戀や増べきなど云ぬにつらき人し無れば
自から頼む夢路は空しくていつか現の戀はさむべき
千二百廿二番　左持　宮内卿　右　雅經
これも又哀いつまで嘆かれむ變らぬだにも變る心を
先の世を思もうしや人心つれなかれとは契しもせじ
千二百廿三番　左勝　讃岐　右　寂蓮
夢にだに人をみよとや轉寢の袖吹返す秋の夕風
いにせの海の潮瀬に靡く濱荻の程なき節に何萎るらむ
千二百廿四番　左　小侍從　右勝　家長
契らずな枕にとめむ移香を絶なむ後の形見なれとは
侘つゝは同世にだにと思身のさらぬ別に成や果なむ
千二百廿五番　左　隆信朝臣　右勝　三宮

石川や蟬の小川の流にもあふせありやと稜をそする
物思ふ心のうちに宿りきぬ富士の高嶺も室の八洲も
千二百廿六番　左持　有家朝臣　右　内大臣
荷且に結ぶ笹屋の雨そゝぎ一よのほども漏る涙かな
忍れどよそめやいかに麻手洗ふ盥の水の影も耻かし
千二百廿七番　左　保季朝臣　右勝　忠良卿
思ふ事忍べど今は名取川せゞの埋木現はれやせむ
ねられねば枕もうとき床の上に我知り顔にもる涙哉
千二百廿八番　左持　良平　右　兼宗卿
名殘にはぬれこそ增れさよ衣かへしてきつる夢の曙
厭ふ共同世にこそすむらめと思ふばかりぞ頼也ける
千二百廿九番　左　具親　右勝　通光卿
ほしわびぬ思ひ信太の杜の露千々に碎くる手枕の袖
空蟬の人もといへば何ならず身に替てやは忍果べき
千二百卅番　左　顯昭　右勝　釋阿
厭ひつる君ばかりやは浮薄くるしき物をたえぬ怨は
幾年に憖にし床のふりぬらむつげの枕も苔生にけり
千二百卅一番　左勝　女房　右　丹後
怨みよとなれる夕のけしきかな頼めぬ宿の萩の上風
中々に越てぞ迷ふ相坂の關のあなたや戀ぢなるらむ
千二百卅二番　左勝　左大臣　右　越前
行通ふ夢の内にも紛るやとうちぬる程の心休めに
秋風に思ひ亂れて悔しきは君をならしの岡のかる萱
千二百卅三番　左勝　前權僧正　右　定家朝臣
慰むる時こそなけれ月や非ぬ秋やむかしの荻の上風
人心通ふたゝちのたえしより怨みぞ渡る夢のうき橋
千二百卅四番　左　公繼卿　右勝　通具朝臣
いかで我忍びになるゝ移香のたえぬ匂を袖に重ねむ
曉の床は草葉の何なれや露に別れのなみだおくらむ
千二百卅五番　左持　公經卿　右　家隆朝臣
荻のはに露の卿言を結ばずかをも人をも誰か怨む
思ひ出よたがかね事の末ならむ昨日の雲の跡の山風
千二百卅六番　左　季能卿　右勝　雅經
何と斯よな〳〵袖の萎るらむ思へば誰が心なりしぞ
思ひわびあつる涙の玉毎に碎きはてゝもある心かな
千二百卅七番　左勝　宮内卿　右　寂蓮
明るまに借まぬ物をくれぬとは心の外の空頼め哉

浪騒ぐ蘆間にかづく鴛鳥の浮沈みてもぬるゝ袖かな
千二百卅八番　左勝　讃岐　右　家長
深草の野べの鶉よ汝は猶假にはとだにまたぬ物かは
詠めわびぬ獨有明の月影にあはぬ數かく鳴のはね掻
千二百卅九番　左　小侍從　右勝　三宮
頼む共今は頼まじ近江路のしのゝを吹雪入謀り也
さのみやは人の心に任すべき忘るゝ草の種を知ばや
千二百四十番　左　隆信朝臣　右勝　内大臣
戀せじの稜も今や夢にだにみたらし川の忘れ形見は
明暮はなれし昔を忘つゝ夢かとのみぞ思ひなさるゝ
千二百四十一番　左持　有家朝臣　右　忠良卿
立返り暮まつ程の晝間だになく〳〵袖を絞りつる哉
戀をのみしつやの小菅露深み假にも袖の乾くまぞなき
千二百四十二番　左　保季朝臣　右勝　兼宗卿
大方を涙にくらす夕されは思ふばかりの眺だにせず
泣流す涙も我を厭へばや身を離てはあつるなるらむ
千二百四十三番　左持　良平　右　通光卿
狭筵やあたり寂しき寢覺して夢の別も露かけりけり
白ちあふよあらばのあらまし思絶ぬる身の思かな
千二百四十四番　左　具親　右勝　釋阿
結びける淺き契の程みえてあかで別るゝ山の井の水
陸奥のあら野の牧の駒だにもとれればとられて馴行物を
千二百四十五番　左　顯昭　右勝　俊成卿女
立返り暮まつ程の晝間だになく〳〵袖を絞りつる哉
昔より人の上にも思ひきや戀に浮名を留むべしとは
うち返し重ねし袖を片しけばそれかと匂ふ手枕の露
千二百四十六番　左勝　女房　右　越前
荻のはに身にしむ風は音信てこぬ人つらき夕暮の雨
人ならば驚かすなといひてまし心もしらぬ荻の上風
千二百四十七番　左勝　左大臣　右　定家朝臣
繰返し頼めても猶あふよの片糸をやは玉のをにせむ
儲は慣しなからの身にそひて非ぬ心の誰契るらむ
千二百四十八番　左　前權僧正　右勝　通具朝臣
つみしらば報を思へ花筐めならふ人は一人ならぬを
とへかしな尾花が本の思草萎るゝ野べの露はいかにと
千二百四十九番　左勝　公繼卿　右　家隆朝臣
道のべのいつ柴原のいつかわれ歸る朝の露拂ふべき
時しもあれなぞ強ちにつらからむ秋は夕暮月は有明

千二百五十番　左　公經卿　右勝　雅經

一怨ばや人をも身をも朝霞の八重立つ波の秋をしぞ思

二宿るとて月に涙をまかせてもくちなばいかに袖の擣

千二百五十一番　左　季能卿　右勝　寂蓮

三沖つ浪荒井の磯の岩に生ふる松にも似たる袖の上哉

四面影は曇る空だに有る物をうたて隅なくすめる月哉

千二百五十二番　左勝　宮内卿　右　家長

五唐衣うちうるる程の夢路にも人に怨みを結ぶなりけり

六小夜衣重ぬる事のなきてのみ涙に袖の朽やはてなむ

千二百五十三番　左持　讃岐　右　三宮

七曇るさへ嬉しかるべき空ならば涙の雨も厭ざらまし

八うとかりし唐土船もよるばかり袖の港をあらふ白浪

千二百五十四番　左　小侍從　右勝　内大臣

九待人もとふの菅菰とはじこそ七ふをあけてぬともかも

〇詠むれば心さへこそ憂寒やその古のゆふぐれのそら

千二百五十五番　左　隆信朝臣　右勝　忠良卿

一明けぬとて儚く忍ぶ名殘哉あふとしもなき夢の契を

二待し比待習ひにし夕暮はまだれぬ時も猶まだれけり

千二百五十六番　左　有家朝臣　右勝　兼宗卿

三誰も皆うきをば厭ふ理をしらずばこそ人を恨みめ

四朝夕になれ行く君が儀はつらき心の外にやあるらむ

千二百五十七番　左　保季朝臣　右勝　通光卿

五つれなさは猶變らでや山科の音羽の山の音に立らむ

六逢事は夢にのみこそ習ひきて現ともなき今夜也けれ

千二百五十八番　左持　良平　右　釋阿

七逢見ても名殘小島の蜑人はけまの起きにぞ袖濡しつる

八あやなしや戀すてふ名はたつた川袖をぞ括る紅の波

千二百五十九番　左勝　具親　右　俊成卿女

九あかずして別るゝ涙袖にけふなほ東雲の道芝のつゆ

〇思ひ出でゝなきこそ渡れ秋風に契りし空の初雁の聲

千二百六十番　左　顯昭　右勝　丹後

一先の世の契有けりと計もみゆる程なる言のはもがな

二逢見ても心のはるゝ隙ぞなき歸空には打時雨つゝ

千二百六十一番　左勝　女房　右　定家朝臣

三現こそぬる宵々もかたからめそをだに許せ夢の關守

四思出よたがきぬ〳〵の曉もわが又忍ぶ月ぞみゆらむ

千二百六十二番　左　左大臣　右勝　通具朝臣

五暮しつる日は菅のねの菅枕交しても猶つきぬよは哉

六今こむと契し事は夢ながらみし夜に似たる有明の空

千二百六十三番　左　前權僧正　右勝　家隆朝臣

七我袖に宿る習の悲しきはぬるゝがほなるよはの月影

八清見潟我通路の關なれやうちぬる浪のよる〳〵

千二百六十四番　左　公繼卿　右持　雅經

九あひなくも時雨の音のつらき哉待人の來ぬよはの寢覺は

〇返しても空しき床に絞る哉恨み果てつるよはのさ衣

千二百六十五番　左　公經卿　右勝　寂蓮

一つく〳〵と思明石の浦千鳥浪の枕になく〳〵ぞきく

二たが里の露をば袖に拂ふらむ逢のもとは風に任せて

千二百六十六番　左　季能卿　右勝　家長

三逢見ても後つらからむ浮名をば止ぬ命に替むとぞ思

四うち萎れ露のみ深き思草霜にしられで年はへにけり

千二百六十七番　左勝　宮内卿　右　三宮

五間へかしな時雨る袖の色に出て人の心の秋になるみを

六心こそ一方ならず惑ひぬれ釣する蜑のうけならね共

千二百六十八番　左勝　讃岐　右　内大臣

七涙川せきやる方やしがの浦みるめは末も頼なければ

八山城のこまの爪生の世中やならしは果て人のつれなき

千二百六十九番　左　小侍從　右勝　忠良卿

九唯もせし暁なれ共折からに忍ぶる又ぞ苦しかりける

〇身のうきは人のつらさを知べにて涙の宿は袂也けり

千二百七十番　左持　隆信朝臣　右　兼宗卿

一我戀は儚き夢の寢覺かはみるにつけても袖の濡らむ

二いつ迄か思亂れてすぐすべきつれなき人を忍もち摺

千二百七十一番　左持　有家朝臣　右　通光卿

三涙しもせきやはあへぬ結貫く水も漏らじの契違はじ

四逢見ても過にし方のつらさをば忘べしとは思ざりしを

千二百七十二番　左　保季朝臣　右勝　釋阿

五袖の上に心の色は著けれど流石に淺き思ひとはみし

六思ひ出よ忘れやしぬる若狹路や後瀨の山と契し物を

千二百七十三番　左勝　良平　右　俊成卿女

七露の身の草曉にきえずしてたゆる浪に結ばゝれつゝ

八待つとだに人は忘るゝ狹筵に幾夜重ねつ袖の片しき

千二百七十四番　左　具親　右　丹後

九いつ迄とこぬよを月に啣つゝ濡ても袖を又忍ぶらむ

〇悔しくぞ磯邊の浪の打出てけふはかひなき怨のみする

千二百七十五番　左　顯昭　右　越前

一あだに吹風には如何散すべき浮田の杜の秋の言のは

二斯れとは重ねざりしをさよ衣あな生憎の袖の氣色や

千五百番歌合卷第十八　總三　判同前

千二百七十六番　左持　女房　右　通具朝臣

三濱庇久しくもみぬ君なれや逢夜をなみの浪ま無れば

四草の原とへば白玉とればけぬ儚の人の露の詫言や

千二百七十七番　左　左大臣　右　家隆朝臣

五身にそへる其俤も消なゝむ夢也けりと忘るばかりに

六浦風や今夜も松に更にけり頼めぬ浪の音ばかりして

千二百七十八番　左　前權僧正　右　雅經

七寢覺する我手枕の秋の露は春も晉けりいつも晉けり

八思ひかねつれなき中にまつ事は暮せる宵の夢の通路

千二百七十九番　左勝　公繼卿　右　寂蓮

九逢夜さへ今や〳〵と鳥のねを思へば待に成ぬべき哉

〇夕ざれば軒の葱にさゝがにのいと斯りける心弱さよ

千二百八十番　左勝　公經卿　右　家長

一きえかへり風に漂ふ泡雪の哀思ひの行くへしらせよ

二物思へば袖に光は有明の月の行へていく夜ながめつ

千二百八十一番　左　季能卿　右勝　三宮

三眺めやる生駒の山に雲とぢて行へに迷ふ雨の夕ぐれ

四思侘びうちぬる隙の難ければ夢もよがるゝ床の上哉

千二百八十二番　左　宮内卿　右勝　内大臣

五いとせめて思入れたる歎哉憂身ならでは恨やはする

六戀死なむ歎方へとて息のをの絕む命の名こそ惜けれ

千二百八十三番　左　讃岐　右勝　忠良卿

七寢る夢の心の外にさめにけり夢としらねば

八跡たえぬ誰にとはまし陸奥の思ひしのぶの奥の通路

千二百八十四番　左　小侍從　右勝　兼宗卿

九つらきをば恨ぬ物を逢事のあればぞ斯る心をゝみる

〇獨寢の床に片しく我袖にあふ嬉しさをいつか包まむ

千二百八十五番　左勝　隆信朝臣　右　通光卿

一今は唯思ひたえたる夜な〳〵の契もしらぬ松の風哉

二今ぞしるつらしと聞し鳥の音は獨寢に待れ鳥とも

千二百八十六番　左　有家朝臣　右勝 釋阿

此を見ば哀もなどか懸さらむぬるゝ貌なる袖の月影

夢にだにあふせありやと待べきに枕のみうく涙川哉

千二百八十七番　左　保季朝臣　右勝 俊成卿女

幾返り七ふのちりを拂ふらむ待夜重なるとふの菅菰

みる程ぞしばし慰む歎きつゝぬよの空の有明の月

千二百八十八番　左　良平　右勝 丹後

今はさば心にしげれ忘草うきをばたへて忍ぶ物かは

思ひかね宇治の橋姫事とはむ待夜の袖は斯や濡しと

千二百八十九番　左　具親　右勝 越前

忘れずよ稀に通ひし一夜だに我を怨みし人や契りし

待程にふけぬる夏のよはも猶思絶ゆれば明し兼ね鳧

千二百九十番　左　顯昭　右勝 定家朝臣

等閑の玉章をだにみましやは憂を恨ぬ心ならずば

忘れねよ此は限のと計の人傳ならぬ思出はうしな

千二百九十一番　左勝 女房　右　家隆朝臣

數々に思ふ心は大淀のまつを怨むなみのおとかな

あひにあひて物思ふ頃の夕暮になくやさ月の山郭公

千二百九十二番　左勝 左大臣　右　雅經

廻りあはむ限はいつとしらね共月な隔てそ空の浮雲

山のはに入る迄月を眺むともしらでや人の有明の空

千二百九十三番　左持 前權僧正　右　寂蓮

とに斯にうき數かくや我ならむしぢの端書鴨の羽掻

物思へば月だに宿る袖の上をとはでや人の有明の空

千二百九十四番　左勝 公繼卿　右　家長

妹がと思ひ暮せば山端にまたれでこそは月は出げれ

今は唯むねは漁火床は海恨みてのみも年はふるかな

千二百九十五番　左持 公經卿　右　三宮

歎きわびみしは夢ぞと忍ぶれば忘侘びぬる中の手枕

猶頼む我心をぞ怨むべきこれにかぎれる空頼めかは

千二百九十六番　左持 季能卿　右　內大臣

忘ても露の情や殘るらむよしや草葉と云しばかりに

忘草おふるのべをば尋ぬれど昔忍ぶぞなほも露けき

千二百九十七番　左持 宮內卿　右　忠良卿

つれなくも猶長らへて思ふ哉浮名を惜む心ばかりに

戀ひわぶる袖の港の浪枕幾夜うきねの數つもるらむ

千二百九十八番　左持 讃岐　右　兼宗卿

千二百十一番　左　季能卿　右勝 忠良卿

此を見ば哀もなどか懸さらむぬるゝ貌なる袖の月影

つらきをも愚知ずは無き物を怨む計の身の程もがな

千二百十二番　左　宮內卿　右勝 兼宗卿

契置きし浦吹く風はさも非で袖に涙ぞやむ時もなき

逢見ての後さへ物を思ふ哉人の心のしらまほしさに

千二百九十九番　左持 小侍從　右　通光卿

夢にだにあふせありやと待べきに枕のみうく涙川哉

長らふる身の連なさを同世に在て聞るゝ事のみぞうき

さりともと頼む心の深ければ猶此暮も松のしたみづ

千二百番　左　隆信朝臣　右勝 釋阿

忘れじの露の情を忍草名をかふるまで老いにける哉

現には思絶行く逢事をいかにみえつる夢路なるらむ

千三百一番　左勝 有家朝臣　右　俊成卿女

うしと思ひ戀しと思ふ一方に乾く時なき袖の上哉

めの前に變る物ぞとみても猶よゝの契の果ぞ忘れぬ

千三百二番　左勝 保季朝臣　右　丹後

忍敢ぬ名をや煙にたてつらむ螢の藻鹽火下焦れても

漏さじと互みに包む人めにも涙はえ社留めざりけれ

千三百三番　左勝 良平　右　越前

思はずな重ねし袖の其儘に歎のつまとならむ物とは

蘆のはの枯行みれば津國のこや秋はつる徴なるらむ

千三百四番　左持 具親　右　定家朝臣

厭はるゝ身にそへとしも思はじを心ならぬや君が偯

果は唯螢の刈藻を宿りにて枕定むるよひ〳〵ぞなき

千三百五番　左　顯昭　右勝 通具朝臣

待夜はの明行鐘はこぬ人のつらさをさへぞ驚かしける

まつらむと思ひし物を秋風の獨身にしむ夕まぐれ哉

千三百六番　左勝 女房　右　雅經

つれなくば唯異浦にたて煙我すむ方は月ぞさやけき

物思ふ心ひとつに秋ふけて人をも身をも葛のうら風

千三百七番　左持 左大臣　右　寂蓮

我が涙求めて袖に宿れ月さりとて人の影はみえねど

すまの浦の鹽燒螢の袖は猶ほすもぬるゝも心なる覽

千三百八番　左勝 前權僧正　右　家長

顯れて移ろふ色の著ければ人の心のはなをみるかな

年月を古河のべに戀侘びぬいつかあひみむ二本の杉

千三百九番　左　公繼卿　右勝 三宮

戀しさも餘り思へば忘られて其事となく涙落ちけり

さめぬればあかぬ別の心ちして割なき物は轉寢の夢

千三百十番　左　公經卿　右勝 內大臣

獨のみ憂古鄉のなにし負はゞ忍とだにも人の知れかし

忍ぶとも軒の玉水つぶ〳〵とありし雨夜の物語せよ

千三百十三番　左　季能卿　右勝 忠良卿

つらきをも愚知ずは無き物を怨む計の身の程もがな

憂を思ふ歎の色を染しより松に夜深く風しぐる也

千三百十四番　左　小侍從　右勝 釋阿

とに斯に思へど物の適はねばいける命を歎く計りぞ

天雲のよそ乍らだにいつ迄かめにみる程の契也けむ

かひなしと返す衣を怨むれどはねられぬよはの習也鳧

千三百十五番　左　通光卿　右勝 忠良卿

云通ふ道だにたえぬ逢事の長柄の橋はさこそ朽なめ

徒に明ぬと告る鐘のねは逢ぬ夜しもぞ悲しかりける

千三百十六番　左勝 有家朝臣　右　丹後

うき物と誰かいひけむ曉の別のみこそ形見なりけれ

夕まぐれ頼めぬ物をとばかりに忍び返せば荻の上風

君こふる涙の色の紅は思ひかへすにかへるものかは

千三百十七番　左勝 保季朝臣　右　越前

きくもうし何と心に止るらむ思ひたへたる夕暮の鐘

心あらば心をかへて思ひしれをのゝ篠原忍ぶ氣色を

千三百十八番　左　良平　右勝 定家朝臣

恨來し涙ばかりを袖にかけて幾夜か戀をすまの關守

かれぬるはさぞな例と眺めても慰まなくに霜の下草

千三百十九番　左　具親　右勝 通具朝臣

忘られぬ時忍べとはなけれ共云ねばしらぬ習ひ計ぞ

打拂ふ折も有けむ床の浦の浪になれたるよはのさ莚

千三百廿番　左　顯昭　右勝 家隆朝臣

つらしとて何怨けむ契あればとけゝる物をよはの下紐

中々に明だに果ね思もせずねもせぬよはの村雨の空

千三百廿一番　左持 女房　右　寂蓮

白露も明行く程はのべにおく時ともわかぬ袖の上哉

さゆる夜の浮寢の霜を打拂ひなくなる袂も我計やは

千三百廿二番　左勝 左大臣　右　家長

我とこそ眺慣れにし山のはにそれも形見の有明の月

みせばやな曉露のおき別笹わくる朝の袖のけしきを

千三百廿三番　左勝 前權僧正　右　三宮

我涙よしの丶河のよしさらば妹背の山の中に流れよ

七夕をわが身の上になしはて丶重ぬる袖に天の河浪

千三百廿四番　左持　公継朝臣　内大臣

身を知で人をば何か恨べきと思へば最ど慰めもなし

いせの蜑のみるめの果よいかならむをふの浦梨

千三百廿五番　左持　公経卿　右　忠良卿

斯迄のつらさに堪で戀死なば思ひ出もなき命也けり

戀ひ渡るとだえばかりは現にてみるも儚き夢の浮橋

千三百廿六番　左勝　季能卿　右　兼宗卿

こむとてもすぐる習は中々に頼めぬ夜はの情也けり

人心木葉ふりしくえにしあれば涙の河も色變りけり

千三百廿七番　左　宮内卿　右勝　通光卿

我からと人を怨みぬ袖の上も涙はおなじ涙なりけり

形見とも常にしすまば眺めまし慣し其夜の有明の月

千三百廿八番　左勝　讃岐　右　釋阿

石上ふるのわさ田に網はへて引人あらば物は思はじ

昔みし人のみ今は戀しきをに又逢まじき事ぞ悲しき

千三百廿九番　左勝　小侍従　右　俊成卿女

頼めつ丶こぬ夜を待し古を忍ぶべしとは思やはせし

習ひこしたが儀もまだしらで待とせしまに庭の蓬生

千三百卅番　左　隆信朝臣　右勝　丹後

戀をのみしつる門田の一向に音たゆる迄秋果ぬとや

獨寐の袖に知るゝ時雨社秋しもわかぬ物と見えけれ

千三百卅一番　左勝　有家朝臣　右　越前

戀をのみ常に時雨る槇のやの疎らにだにも音信よかし

いかにせむ慰むやとて眺むれば別しよはの有明の空

千三百卅二番　左勝　保季朝臣　右　定家朝臣

思ひおきていづる涙の行く末は袖より頓て道芝の露

時つ風吹飯の浦に通ても誰爲にとかは身をも惜ましも

千三百卅三番　左勝　良平　右　通具朝臣

變行く人の心は何なればつらきを慕ふ我身なるらむ

言のはの移りし秋も過ぬれば我身時雨とふる涙かな

千三百卅四番　左　具親　右勝　家隆朝臣

後の世を頼む頼も有りなまし契變らぬ別れ也せば

入るまでは月は眺めつ電の光のまにものの思ふ身の

千三百卅五番　左　顯昭　右勝　雅經

何とかは今朝の別を嘆くべきその移香に慕ひきに鳥

思事殘らぬ秋の夕だにに猶忘らるゝ身こそつらけれ

千三百卅六番　左勝　女房　右　家長

長月の月みてかひはなけれども頼めし物を有明の頃

千三百卅七番　左勝　公經卿　右　兼宗卿

眞葛原人の心のあき風はかへすゝも怨めしきかな

千三百卅七番　左勝　左大臣　右　三宮

嘆かずよ今はた同じ名取川せゞの埋木朽果てぬとも

今こむの契はたえて中々に頼めぬ月ぞ夜枯ざりける

千三百卅六番　左勝　前權僧正　右　内大臣

立田山夜はにや君が獨とてねしよの夢の行へをぞ知

猶つらしきかず顔にて明す夜に枕に近き鳥の浮寐よ

千三百卅九番　左持　公継卿　右　忠良卿

絶果る程ぞ哀にしられける夢路にだにもみらく少き

影たえて程は雲ゐのながめにも猶夕暮の山のはの月

千三百四十番　左勝　公經卿　右　兼宗卿

戀ひわぶる涙や空に曇るらむ光も變るねやの月かげ

懲果ぬ憂身の果ぼそを疑ひてひし心の裏に附べかりけり

千三百四十一番　左持　季能卿　右　通光卿

厭はる丶名はふるさじと思ひしを心に餘る袖の村雨

忍びあへず我やゆかぢのいざよひに昔語の夕暮の空

千三百四十二番　左持　宮内卿　右　釋阿

頼めしを待とて我身ゆきふれば打みとりにも果は成鳧

逢ふ事は交野の里の笹の庵篠に露ちる夜はの床かな

千三百四十三番　左　讃岐　右勝　俊成卿女

哀々はかなかりける契かな唯うたゝねの春の夜の夢

戀といふ浮名ばかりぞ留めけむ忘形見を誰忍べとて

千三百四十四番　左持　小侍従　右　丹後

さらぬだに寐覺寂しき冬のよに怨し鳥のね社變らね

敷妙の枕も疎く成ぬれば夢みし夜はも戀しかりけり

千三百四十五番　左勝　隆信朝臣　右　越前

とへしかな哀と迄は非ず共偖もやいけると計をだに

打絶て待れぬ程に成ぬれば吹くも吹ぬも荻の上風

千三百四十六番　左勝　有家朝臣　右　定家朝臣

忘じと云しばかりの名殘とて其夜の月は廻來にけり

久方の月ぞ變らでこたれける人には云し山のはの空

千三百四十七番　左勝　保季朝臣　右　頌具朝臣

起別れ歸る道をば送るとも月は物をや思はざるらむ

忘なむ人こそあらめよと共に契し事は此よのみかは

千三百四十八番　左　良平　右勝　家隆朝臣

忘るゝ身を知雨の行へとや憂かりし儘に袖の朽ぬる

今はとや己がきぬ〳〵急ぐらむ獨り片しく東雲の月

千三百四十九番　左勝　具親　右　雅經

よしさらば怨果てむと思へ共心強さは人によりけり

掬ぶ手の雫ばかりを袖にみて飽でも人に山の井の水

千三百五十番　左勝　顯昭　右　寂蓮

遥迥に逢見て後も厭けり戀は果うき物にぞありける

露繁きよもぎが閨のひまとぢて古き枕に秋風ぞ吹く

若の浦の善惡をさへ分べしと人並にだに思懸きや

千五百番歌合卷第十九　雜一　判者　前權僧正

千三百五十一番　左勝　女房　右　三宮

ゆふだすき萬代かけて住吉の神や種まきし峯の姫松

久方の空はれわたる浪の上に雲ときえ行く沖の釣舟

君が代に類も見えぬ例哉神のたねまきし住吉の松

千三百五十二番　左　左大臣　右勝　内大臣

皆人の世にふる道ぞ哀なる思入丶も思ひいれぬも

そのかみや祈りしとは豐受のしるしぞ君が惠也ける

豐受の受すと如何思べき世にふる道に道はあれ共

千三百五十三番　左　前權僧正　右勝　忠良卿

明石がた舟の昔にとへば島がくれ行く跡のしら浪

寂しさを人も梢の眺にてけふもくれぬとまつの夕風

敲きける水鷄ならねど松風の人も梢は哀なりけり

千三百五十四番　左　公繼卿　右勝　兼宗卿

情しる人はいかにか眺むらむ明行く山の空の氣色を

住吉の松の梢のふか緑つもれるはるの色ぞみえける

眺むれば明け行く山の空よりも緑の色は住吉の松

千三百五十五番　左　公經卿　右勝　通光卿

更に又妻とふ暮の武藏野にゆかりの草の色も睦まし

古も今行く末の世の果も思ひいれつるあかつきの空

世の果と中におかずば武藏野の花色や有まし曉の空

千三百五十六番　左　季能卿　右勝　釋阿

くら持の神も怨めしいかなればあだに櫻の花と做けむ

夜を重ねさびしき床にすが枕幾度鐘の聲を待つらむ

一〇鐘の音に驚きて聞く神の名は猶白雲の枕なりけり
千三百五十七番　左　宮内卿　右勝俊成卿女
二〇ほし昇る日影たけぬる朝ぎの雲なき空にたづ遊ぶ也
三〇寝覚もる月さへ寂し奥山の柴の編戸の明け方のそら
四〇寝覚もる月ぞ寂しき舟路ならで覚束波の朝和の空
千三百五十八番　左勝讃岐　右　丹後
五〇古への神世もかくや春の花秋の紅葉は定めおきけむ
六〇時しあれば花は春にも逢に鳥待事も無きみをいかにせむ
七〇待事は珍しからぬ花なれば神世の紅葉色やそふ覧
千三百五十九番　左　小侍従　右勝　越前
八〇袖におく露もまだひぬ暁に木綿附鳥の鳴くぞ怪しき
九〇いすゞ川その水上を尋ぬれば神路の峯にかゝる白雲
一〇暁の鳥のねたしや神路山思ひなかけそ嶺のしら雲
千三百六十番　左勝　隆信朝臣　右　定家朝臣
一明ぬとや約する舟も出でぬらむ月に棹さす鹽竈の浦
二大方の月もつれなき鐘の音に猶怨めしき有明のそら
何事とわかぬ有明の空よりも月に棹さし増らめ
千三百六十一番　左持有家朝臣　右　通具朝臣
一跡たれて幾世に成ぬ神風や五十鈴の川の清き流に
二琴のねに通ふ岡邊の松風は葉分に千々の秋調ぶなり
神風はいすゞ河原に吹馴れぬ時々許せ松の葉分に
千三百六十二番　左　保季朝臣　右勝　家隆朝臣
一尋入る山路の深くなるまゝに鳥の聲迄變り行くかな
二神風やみもすそ川も岩清水も君が爲とや澄始めけむ
三懸まくも畏き神の諸注連は中にも如何引習ふべき
千三百六十三番　左持良平　右　雅經
一いかなれば同空より降雨の春秋のべの色をかふらむ
二四阿屋の軒のしのぶの末の露幾朝起の袖したふらむ
雨も露も朝起の袖の上の色深し淺しも思ひ分れず
千三百六十四番　左　具親　右如寒若得火　寂蓮
一てるつきも君に心をゆふかけて榊葉白き天のかぐ山
二谷の水嶺の嵐をしのびても法の薪にあふぞうれしき
三哀なり法の薪をこりつみて思ひおきけむ秋の白露
千三百六十五番　左　顯昭　右勝　家長
一明ぬとて鳴が羽音に驚けばまだ夜も深し猪名のふし原
二八雲たつ出雲八重垣ひまもなく恵にこめよ君が萬世
三更にける鳴が羽音も爭でかは八雲の色に立優べき
千三百六十六番　左勝　女房　右　内大臣
三ありそ海のやむ時もなき浦風に浪隠れ行く蜑の釣舟
四〇榊葉やいつゝ綠のしめの内に鳩吹秋は風ぞ身にしむ
蜑小舟波隠れ行浦風は鳩吹よりも身にぞしみける
千三百六十七番　左持左大臣　右　忠良卿
一かり人も哀れかし嶺の鹿のべのきゞすの己が聲々
二山高みかけぢの雲の絶間より麓の浪を出づる月かげ
月影よ麓の雲を出でぬれば嶺には鹿の聲ぞ悲しき
千三百六十八番　左　前權僧正　右勝　兼宗卿
三君が世にふるからなの、本柏本に返るや我身なるらむ
四風の音に聲をも頓てしらすれば友とぞ頼む窓の呉竹
本柏本には未歸果すさればよ竹のよしとこそみれ
千三百六十九番　左勝　公繼卿　右　通光卿
五玉鉾の道の消え行くけしきまで哀しらする夕暮の空
六暮はてゝむ空をば暫し三日月の影仄なる名殘をぞ思ふ
たまほこの道の夕の氣色には光ぞ薄き三日月の空
千三百七十番　左　公繼卿　右勝　釋阿
一山のはに重る雲のいかなれや都にもにぬ空の色哉
二押てるや濱の南の松原も幾木の千世を君にそふらむ
君が世の幾木の千世を松の色に染ます物は有じとぞ
千三百七十一番　左　季能卿　右勝　俊成卿女
三深山木の梢にさ夜や更ぬらむ月に寂たるむさゝびの聲
四哀思ふ人こそ知ね雲のいる嶺のかけ路を通ふ松風
哀なる峯のかけぢの松風に最悲しきむさゝびの聲
千三百七十二番　左勝　宮内卿　右　丹後
七窓近く嶺の松風おとづれてのきよりしたを通ふ白雲
八萩まし雲ゐ遙になりぬれど空行く月は廻りあひけり
九珍しき軒より下の白雲に空行く月の立ち隠れぬる
千三百七十三番　左持　讃岐　右　越前
一〇草も木も已が折々契置て色をも香をも人にしれつゝ
一榊さすとよ宮人の神遊び立まふ袖の香さへ懐かしく
とに斯に唯なぞらべて有ぬべし故有とても聞よからし
千三百七十四番　左勝　小侍従　右　定家朝臣
二潮みては隠るゝ磯の磯馴松此もみるほぞ少かりける
三たつ煙野山の末のさびしさは秋ともわかず夕暮の空
中々に隠るゝ松はさもとみえて野山の末はめにもたゝず
千三百七十五番　左持　隆信朝臣　右　通具朝臣
故郷の池はみ草にとぢられて心に月を宿しつるかな
五流れての世々に傳はる河竹も君に契れる末を久しき
此左右は又なぞらへて持すべし難の言葉も續憎くて
千三百七十六番　左持有家朝臣　右　家隆朝臣
六風ふけば天の戸山の荒まくも小嶋が磯による浪哉
七霧はるゝ鳥羽田の面を見渡せば行末遠き秋の山里
此頃の風の姿に馴々て身にしむ色は疎れともなし
千三百七十七番　左持　保季朝臣　右　雅經
八一夜だに心止らぬすまひかな片しく袖に山風のかせ
九宿れとや苔のさむしろうち拂ひ旅行く人を松の下風
とにかくに松の下風山風吹き亂りぬる心なりけり
千三百七十八番　左　良平　右勝　如寒若得衣　寂蓮
一〇暁はよもの草木もおく露の清き光もこゝろすみけり
一一今ぞ思ふ片岡山の旅びとも身をかくしける柴のそで
一二見れば此も哀也けり衣哉身を隠すとて身も隠れぬる
千三百七十九番　左　具親　右勝　家長
一三見渡せば花と雪とに同色のをりから變る峯の白雲
一四此頃は和歌の浦浪立ちそひて君をや守る玉つ嶋姫
一五雲に如何立劣るべき若の浦に君を守らむ玉つ嶋姫
千三百八十番　左　顯昭　右勝　三宮
一六篷田のいつぬき川に年をへて浪や立つらむ鵜の毛衣
一七鳥のねも鐘の響もなき山は明くるもしらぬ峯の丸臥
篷田と打聞くよりも深き山に哀なるべき嶺の丸臥
千三百八十一番　左勝　女房　右　忠良卿
一八すまの浦に待夜更行月影を浪のあなたに誰情むらむ
一九うしとても又は疎ちかあくれば山より深き栖無ければ
二〇珍しき浪のあなたの月影に忘れにけり深き山端
千三百八十二番　左勝　左大臣　右　兼宗卿
二一舟の内波の下にぞ老いにける蜑の所爲も暇なの世や
二二春の日の長閑に照す大空にもれたるたづの遊ぶ聲々
波の下蜑の所爲に比ぶれば其事となきたづの遊ぶ聲哉
千三百八十三番　左　前權僧正　右勝　通光卿
二三舊にける長柄橋は跡もなし我老の末は斯らずもがな
二四通ひけむ昔のとのゝしらべまで思ひしらるゝ峯の松風
松風に昔のとを引懸けて思ひ知るらむ末ぞ遙けき
千三百八十四番　左　公繼卿　右勝　釋阿
二五秋としも哀を何か思ひけむ幕行く空の癖にぞ有ける
二六色變ぬ御垣の内の呉竹も君が御代にぞ千世は繁らむ
二七君が代に千世繁るべき呉竹の癖なき方に心移りぬ

千三百八十五番　左持　公經卿　右　後成卿女

教へおきし是ぞ都の辰巳とて軒端の峯に鹿も鳴なり

時知ぬすゝの篠屋に月もりて風こそ秋の音をきかすれ

眺方ぞ巽の鹿も風の音もいさとよいかに聞ぞ分れぬ

千三百八十六番　左持　季能卿　右　丹後

栗原のあねはの松を誘ひても都はいつとしらぬ旅哉

哀なるすゝの篠屋の丸寝哉跡留むべき隈とやはみし

凡て唯劣りと云で有ぬべしあねはの松もすゝの篠屋も

千三百八十七番　左　宮内卿　右勝　越前

わたの原幾重の波を隔てゝも都をこめしおなじ白雲

濁る世に光さやけき夜半の月心をすます道知べせよ

思分かぬ雲の隔てに迷ふ程月の知べや澄増るらむ

千三百八十八番　左　讃岐　右勝　定家朝臣

心あらば行て見べき身なれ共音にこそきけ松が浦嶋

幾世へぬかざしをりけむ古に三輪の檜原の苔の通路

住蟹の心有べき松が浦もみわの檜原に及べきかは

千三百八十九番　左　小侍従　右勝　通具朝臣

浮節は滞るとも河竹の流れてすゑにあふせなりせば

風速み夕汐みてば難波かた入江のたづの聲も惜まず

浮節はげに滞る心ちして入江のたづや鳴増るらむ

千三百九十番　左　隆信朝臣　右勝　家隆朝臣

尋ねきて心なきまで月ぞすむ世の隠れがと頼む庵に

住の江の月に神世のこと問へば松の梢に秋風ぞふく

隠がの庵に宿すまじ住江にいつも眺めむ松の秋風

千三百九十一番　左勝　有家朝臣　右　雅經

山のはの雲を衣に片しきてさも明けがたき岩枕かな

雲にふし嵐に宿る足引の山のいくへの夕ぐれのそら

山端の同じ雲にはふしながら強くもみゆる岩枕哉

千三百九十二番　左　保季朝臣　右勝　如尊入得生　寂蓮

打はへて如何とみえし柴の庵もすめば遠に日數へにけり

里遠き市の庵のとま庇行きかふ民にあふこゝちして

柴の庵げに如何とて苫庇さしてぞ厭ふ心とめけむ

千三百九十三番　左勝　良平　右　家長

夕暮は山のはいづる月をみて挑げもやらぬ窓の灯火

色深き萬の葉まで檜のはの名におふ宮に散始めけり

萬の葉散おほせてもみえぬ哉此古事は懸まくもいや

千三百九十四番　左勝　具親　右　三宮

三尋來る人もいつかは三輪の山杉は馴ぬる印ばかりぞ

千四百四番　左　小侍従　右勝　家隆朝臣

波の音も風の響もさしながら幾世になりぬ松が浦嶋

舊ぬれど杉は印も有ぬべし波のよせなき松が浦嶋

千三百九十五番　左　顯昭　右勝　内大臣

來人のあらばいかゞと聞てまし獨のみきく嶺の松風

そさのをも君が尊の爲とてや八雲の印思ひ立ちけむ

松風は人に問ふべき眺かは八雲の印立ち優るべし

千三百九十六番　左勝　女房　右　兼宗卿

都人とはで月日は杉の庵の軒になれたる嶺のまつ風

舊にける磯の岩屋にすむ龜は幾年波を重ねきつらむ

杉の庵の軒に慣てはいとどしく開所ある松の風哉

千三百九十七番　左勝　左大臣　右　通光卿

岩がねの凝しく嶺を踏馴し薪こるをもいかゞ苦しき

年毎に生添竹の世々をへて久かれともなれる御世哉

年毎に生添竹の節よりも凝敷く嶺や高くみゆらむ

千三百九十八番　左　前權僧正　右勝　釋阿

情あらば人もすさめよ櫻麻の苧生の下草老果ぬとも

和歌の浦の風に携さふ友鶴の君が千年に逢ぞ嬉しき

今ぞ知左を右になしたらば老とすとは人に云れじ

千三百九十九番　左勝　公繼卿　右　俊成卿女

さよふけて嵐吹くらしあなし河川音高くなり增る也

斯しても明せば幾夜過ぎぬらむ山路の苔の露の狹霧

あなし河けに音高く聞ゆなり敷忍ぶべき露のさ霧

千四百番　左勝　公經卿　右　丹後

たつた山こえし昔の面影はふもとのさとの有明の月

今更に思入るこそ夢けれ占置かざりし谷の戸ぼそに

何となく物寂しきは立田山思入る方も哀なれども

千四百一番　左持　季能卿　右　越前

さだかいる道こそ雪も白菅の風に漂ふ朝ぼらけかな

高砂の松を友とはなけれとも眺めぞなるゝ徒にして

とに斯に云おほせてや見えざらむ雪の白菅高砂の松

千四百二番　左持　宮内卿　右　定家朝臣

中々にながめにぬれぬ暁がきる田簑の島の雨の夕暮

駒とめしひの熊川の水清み夜渡る月の影のみぞみる

更にけり雨と月とに分兼ねぬ田簑の島もひの熊川も

千四百三番　左勝　讃岐　右　通具朝臣

身のうさに月や非ぬと眺れば昔ながらの影ぞ漏來る

曉は獨ねざめに思ふことあはれ數そふ鳴のはねかき

身のうさの詠めはげにぞ哀なる月や非ぬの春の曙

千四百四番　左　小侍従　右勝　家隆朝臣

羽河音に聞きつゝやみなばや越て悔しき相坂の關

幾世ともしられぬ物は白雲の上よりおつる布引の瀧

いとゞしく音さへ高く聞ゆ也雪に晒せる布引の瀧

千四百五番　左持　隆信朝臣　右　雅經

古郷はいく重の雲に跡とぢてかさなる山の峯の月影

跡とめて止る方なき浮寢哉さこそ浮たる浪ぢなれ共

とに斯に山路波ぢは變れども心は同じ旅ね也けり

千四百六番　左勝　有家朝臣　右如入得母　寂蓮

花かとも故郷人のとひこかし軒端の山のみねの白雲

かゝりける御法の花ぞ爲よ梢を惜しと何おもひけむ

哀とにも如子得母の戲れを思出でゝや獨行くらむ

千四百七番　左勝　保季朝臣　右　家長

山深くすまば共にと云人も誠にならば變りもやせむ

此までも畏き御世にかはらねば古今の跡をこそとへ

背く道は誠になれ通らねど思知こそげには覺ゆれ

千四百八番　左持　良平　右　三宮

わたのはら眺の果は一つにて村雲わくる沖つしら波

尋ねこし昔の人は跡たえて野中の清水誰かくむらむ

わたの原幾夜の月を知べにて都の山を波にまつらむ

千四百九番　左持　具親　右　内大臣

山端を波の上には待もせよ月の知べや幽なるらむ

千四百十番　左　顯昭　右勝　忠良卿

我友と人やみるらむ柴の庵のまうすいさゝ村竹

しばがまやをちの眺めの波分て松の木間に沖の釣舟

常にみるいさゝ村竹聊も勝べき節ぞみえず成ぬる

千四百十一番　左勝　女房　右　通光卿

これやさは都にてみし空の雲それを片しく嶺の旅臥

苦薩青ねが峯は名のみして唯白雲のよそめなりけり

立劣る峯の雲こそかひなけれ其を片しく心深さに

千四百十二番　左　左大臣　右勝　釋阿

春の田に心なつくる民も皆おり立てのみ世をぞ厭はむ

四の海治れる世は音に聞龜のを山も波よせこむ

下立て營む民も然はあれど猶よせ深し龜のを山は

千四百十三番　左　前權僧正・右勝　俊成卿女

盧たてる難波のみつに燒鹽の曉垂て物を思ずもがな

千四百廿三番　左　良平　右勝内大臣

一七諸共にすめばなりけり葦鶴も吉野の奥の松の木の本
二七仙人の栖がましきよしなれや吉野の山の奥の松風

千四百十四番　左勝公継卿　右　丹後

三七すぎ來ぬる山分衣ぬれながら野原の露に猶ぞ片しく
四七松風の野端におつる音をさへ窓うつ雨と思ひける哉
五七眺れば共に色ある言のはの片しく袖や染増るらむ

千四百十五番　左勝公經卿　右　越前

六七月を思ふ袖より秋の知べせよ信太の森のよそのゆ夕露
七七里もなき山路遙に行き暮し許すもしらず雲に宿かる
八七彼も此も其本末も分き兼て猶みる袖に月の宿れる

千四百十六番　左　季能卿　右勝定家朝臣

九七眺めけむくもの擧動空晴れて月影しろきたまつ島姫
〇八空に吹くおなじ風こそ聲たつれ嶺の松がえ荒磯の波
一八雲か蜘蛛か荒磯に吹松風の夥しきも猶めにぞたつ

千四百十七番　左持宮内卿　右　通具朝臣

二八晴ぬるかたぢろく雲の絶間より星みえ初る村雨の空
三八一條に慣なばさても杉の庵に夜な〳〵渡る風の音哉
四八呉機あやおる機にひく絲の變れる色に心まどひぬ

千四百十八番　左持讃岐　右　家隆朝臣

五八いかばかり心の水の淺ければ主だにしらぬ胸の蓮葉
六八藻鹽やく煙も浪の末にして知ぬ濱路にけふも暮しつ
七八遂に猶胸の蓮は開けなむ知ぬ濱路は行てしもなし

千四百十九番　左　小侍従　右勝雅經

八八名にし負はど尋もゆかむ陸奥の阿武隈川は程遠く共
九八風渡る松の下ねの小夜枕夢路とだゆるあまの橋だて
〇九橋立や夢路とだゆる小夜枕吹き増るらし松の下風

千四百廿番　左　隆信朝臣　右勝如波得船　寂蓮

一九老が世のあたら光の秋の空雲居のよそにみつる月哉
二九思ふ人あるにつけても都鳥あはれ今はと法の川をさ
三九渡川舟待えてもいかばかりげに都鳥戀しかるらむ

千四百廿一番　左　有家朝臣　右勝家長

四九山田もる賤が庵の一向にうちぬる夢もたえて程へぬ
五九梨壷の昔の跡にたち歸りわかの浦曲に浪のよりびと
六九梨壷の昔の跡の嬉さはさても斯ても勝たざらめやは

千四百廿二番　左　保季朝臣　右勝三宮

七九定なき人の心にしたがひて住もいとふも同じ山里
八九舊にける三輪の檜原にと問む幾世の人か挿頭折けむ
九九情有みわの檜原の挿頭をばさして思ひぞ山の里人

千四百廿六番　左勝女房　右　釋阿

一旅ねするよはの嵐に夢覺めて打ち眺むれば有明の月
二昔きく野べの岩屋ぞ哀なる嵐のそこを夢にみえけむ
三ともなくめでたき樣ぞ有難き岩やの夢は君が隨に

千四百廿七番　左　左大臣　右勝俊成卿女

四我心その色としは染ねども花や紅葉を眺めきにける
五昔思ふ心もいとど隅田川暮れ行く程のわたり也けり
六花やといひ紅葉を染る色よりも暮行程は心にぞ染

千四百廿八番　左　前權僧正　右勝丹後

七君が代の盡ぬ千年の友とならむ老の使になしと答よ
八われもさぞ草の枕に結びつる露に宿かる月の影かな
九月と共に草の夜床に宿りける枕の露や心すむらむ

千四百廿九番　左勝公継卿　右　越前

一〇哀にもすみなれにける山里を松の嵐に夢さめぬまで
一一轉寢にまどろむ夢を程もなくさめたり顔に思ふ倦き
一二松風もげに夢なるゝ同夢の覺たり顔は猶如何とて

千四百卅番　左勝公經卿　右　定家朝臣

一三冬の色をけしきの杜に顯はして埋れはつる雪の下草
一四朝夕は頼むとなしに大空の空しき雲を打ち眺めつゝ

千四百卅一番　左勝季能卿　右　通具朝臣

一五色みゆるけしきの森の氣色哉空しき雲は心曇りて
一六水の江の吉野の宮はかみさびて齢たけたる浦の松風

千四百卅三番　左　良平　右勝内大臣

一七いでゝこし都のそらにあくがれて心定めぬ草枕かな
一八住の江の松風通ふからとを浪のをかけて潮や引らむ
一九浪のをや引増るらむあくがれて定めぬ空は秀句なれかな

千四百卅四番　左勝具親　右　忠良卿

二〇草の庵は尋ねし跡もふりはてゝ嵐ぞ寒き相坂のせき
二一月よする明石の浪を枕にてみやこの夢はすまの關守
二二夢はすまも月よする浪もいさゝかに尋もしても蟬丸が跡

千四百卅五番　左　顯昭　右勝兼宗卿

二三暮ゆけばさほ風寒し旅人の宿春日野や孰こなるらむ
二四旅ねしてきけば睦まし都鳥なれも思ふや同じ友とは
二五都鳥同旅ねとみゆれども猶さほ風は身にしまぬ哉

千四百卅六番　左勝女房　右　釋阿

二六訪べしと頼まぬ物を松の戸の嵐にとづる夕暮の聲
二七神さびて齢たけたる松風や猶松の戸に吹増るらむ

千四百卅二番　左勝宮内卿　右　家隆朝臣

二八眺めても幾世になりぬ有明の月を待えて出づる山人
二九古郷に頼めし人も末の松まつらむ浪に袖やこすらむ
三〇末の松病なくばと見ゆる哉冥加有ける出づる山人

千四百卅三番　左勝讃岐　右　雅經

三一後の世の身を知雨の掻曇り苦の袂にふらぬ日ぞなき
三二玉藻しき袖しく磯の松がねに哀かくるも沖つしら浪
三三花無て實ありとみゆる言の葉を吹な亂りそ磯の松風

千四百卅四番　左　小侍従　右勝如病得醫　寂蓮

三四春日野の若紫の妻戀はふとぞみしになど歸らむ
三五身に積る風の山路尋ねずば蓬の關をいかですゑまし
三六妻戀に逢てかくとや知ざらむ蓬に消し其露の身は

千四百卅五番　左　隆信朝臣　右勝家長

三七旅の空誰かは訪む荻原や野べの秋風そよいかにとも
三八玉鉾の道こそたえね山のべや柿の本まで跡を尋ねて
三九負ぬべし人麿にだに誰か逢む赤人さへに立添に鳥

千四百卅六番　左勝有家朝臣　右　三宮

四〇春の雨の昔き御代を頼む哉霜にかれ行く草葉漏すな
四一わたの原やへの潮路を見渡せば雲に連なる沖つ白浪
四二春の雨に濕ひにけり草なれば古き波には立勝るべし

千四百卅七番　左　保季朝臣　右勝内大臣

四三都思ふそなたの風を身にしめて月に伴ふうつの山越
四四老の後月にすみけむ唐人の跡を尋ねて入る山路かな
四五唐人の跡を尋ぬる月影はうつの山にも澄増るらむ

千四百卅八番　左持良平　右　忠良卿

四六駅方へたが言傳をすまの關せき吹きこゆる沖つ潮風
四七君を置て小島が崎の岩枕波よりほかの波もかけゝり
四八哀にも波よりほかの浪に又立ち並びぬる沖つ潮風

千四百卅九番　左　具親　右勝兼宗卿

四九高砂やこのく舟もうちむれて風安げなる浪の上哉
五〇待渡る都の人にこゆるきの急ぐ浪路といかで知せむ
五一風安く漕退く舟やいかならむ急ぐ浪路による心哉

千四百四十番　左　顯昭　右勝通光卿

五二何となく心細きは南ふくときの舟路の明方のそら
五三眞柴わけ道もおほえぬ山路かな梁をこひる嶺の白雲
五四嶺の雲に思な懸そ南吹て物恐しき土佐の舟路や

千四百四十一番　左勝　女房　右　俊成卿女

四五忘なよ斯る深山のよはの秋いかなる空の月を見とも
四六露繁き小笹が原の風の音に假寝の夢を結びやはする
四七常に聞小笹假寝の夢よりもいかなる空の月は忘じ
四八千四百四十二番　左勝　左大臣　右　丹後
四九月日のみ何ぐ事無て明暮ぬ悔しかるべき身の行へ哉
五〇打解て睡ろまば社古郷をとはぬ旅ねの夢にだに見め
五一旅寝して睡ろむ夢の床よりも悟る誠にしく物ぞなき
五二千四百四十三番　左　前權僧正　右勝　越前
五三○君が代に久しくにほへ住吉の松に契りしもゝ草の花
五四石の火に此身をよせて世中の常ならずさを思知る哉
五五石の火によする身迄は哀也常ならずさぞ猶思べき
五六千四百四十四番　左持　公繼卿　右　定家朝臣
五七丈夫は稻葉かき分け家ねして蟋蟀秋風を身に占つらむ
五八そなれ松沈みやためし己のみ變ぬ色に浪のこゆらむ
五九磯馴松變らぬ色の色もいさ身にしむ風もしまずや有
六〇千四百四十五番　左持　公經卿　右　通具朝臣
六一待てとやはひの熊川に頼め置し駒打並むる夕暮の空
六二泊りするをしまが磯の波枕さこそはふかめ夜の松風
六三なだらかに吹なす磯の松風も打行駒の跡も斷なし
六四千四百四十六番　左持　季能卿　右　家隆朝臣
六五崔生のきしも喰しき古郷をまことに厭ふ心なりせば
六六○昨日こそ浪はかけしか楫枕雲しく峯も袖はぬれけり
六七枕楫雲しく嶺にうつる程喰しき里にしばし宿らむ
六八千四百四十七番　左勝　宮内卿　右　雅經
六九武夫の八十宇治川の橋柱のどかにおとせまきの島舟
七〇今日も又荻の末葉を空にみて露ふり暮す武藏野の原
七一武藏野の露も細かに見ゆれ共もじ少なゝる橋柱哉
七二千四百四十八番　左持　讃岐　右　如曙得灯　寂蓮
七三行末をしる人あらば問てまし斯云々て果はいかにぞ
七四雪螢光を窓にあつめても思ひしらるゝ法のともし火
七五儚しな法の灯そも消ぬかくいひ〳〵てはても誠に
七六千四百四十九番　左　小侍從　右勝　家長
七七かくばかり勿來の關と思ひける人に心を何と留めむ
七八潟をなみ蘆邊を指て鳴たづの千世を伴ふわかの浦人
七九斯計厭ふ勿來の關よりも蘆べよせじもある若の浦人
八〇千四百五十番　左　隆信朝臣　右勝　三宮

八一寢覺とふ深山の里の松の風きくも聞ぬも寂しかり鳥
八二苟且と思ひし物を飛鳥井のみま草隱れ幾夜ねぬらむ
八三みま草や立優るらむ松風を聞ぬ心は如何しるべき
八四千四百五十一番　左　有家朝臣　右勝　内大臣
八五一重ねては衣手さむし泉河千鳥なく夜のあかつきの霜
八六我庵は嶺の杉村分け過ぎて其ともしらぬ深山木の蔭
八七人數に眺めもすべき秋の月身を浮雲のうち時雨つゝ
八八八百萬神の誓もまことには三世の佛の恵みなりけり
八九千四百五十二番　左持　宮内卿　右　四賢得資　寂蓮
九〇浮雲やわかぬ心に見る時は神を佛としるぞ嬉しき
九一千四百五十三番　左持　良平　右　兼宗卿
九二○夜と共に木の下暗き常磐山月も迄らで誰かこゆらむ
九三一郡にてみしに變らぬ月なれど山里さびし有明のそら
九四千四百五十四番　左　具親　右勝　通光卿
九五何と無て異なる影もみえぬ哉迄らぬ月も變ぬ月も
九六月いらば我もさてやは磯枕旅寢も近ししがのうら波
九七冬の夜はうら風寒し楫枕きても明石の月をみつれば
九八旅枕並べてみれば最どしく月は明石や澄増るらむ
九九千四百五十五番　左　顯昭　右勝　釋阿
一〇〇すゞ舟をよする音にや驚ぐ覺すまの上野に雉立なり
一〇一懸ていへば厭もす覺春日山さりとて如何頼ざるべき
一〇二昔より木高くなれる春日山落下てもみゆるすゞ舟
一〇三千四百五十六番　左勝　女房　右　丹後
一〇四月殘る蘆屋の里の有明に昔に似たるあまのいさり火
一〇五○人にだにしられぬ谷の下水に普き月の影はさしけり
一〇六谷水に宿れる月は朧にて影さやかなるあまの漁火
一〇七千四百五十七番　左持　左大臣　右　越前
一〇八押返し物を思ふは苦しきに知ず顔にて世をや過まし
一〇九捨やらぬ我身を浦の空貝空しき世とは思ふ物から
一一〇知らず顔は希はるゝ世なれ共又すて難き空貝哉
一一一千四百五十八番　左　前權僧正　右勝　定家朝臣
一一二年ふれば霜夜の闇に鳴鶴をいつ迄袖のよそに聞けむ
一一三行末を頼む霜よの鶴の聲や田簑の島に鳴増るらむ
一一四千四百五十九番　左持　公繼卿　右　通具朝臣
一一五誰か聞く難波の潮のみつなべに田簑の島の鶴の諸聲
一一六作ける長柄の橋は又朽ぬふりにし人の此をみませば

一一七○しるしらずわかぬ哀を殘しつゝ幾夜の宿の曉のそら
一一八又造る長柄の橋の末も如何そもしりしらず曉の空
一一九千四百六十番　左勝　公經卿　右　家隆朝臣
一二〇我庵は嶺の杉村分け過ぎて其ともしらぬ深山木の蔭
一二一峯の杉まだみ山木の繁きより眺めやすきは曉の霜
一二二千四百六十一番　左　季能卿　右勝　雅經
一二三九品の蓮の内に結ばれてとへは散さぬ身とも成ばや
一二四草の葉にしをれふしぬる袖枕夢やは結ぶ夜はの白露
一二五極樂の尊き方はしばしおくをかしき色の袖枕かな
一二六千四百六十二番　左持　宮内卿　右　四賢得資　寂蓮
一二七越行けば梢にかゝる跡もなし山の孰くに雲懸るらむ
一二八侘人の心計りは通ひきて思ふにさこそ嬉しかるらめ
一二九侘人の嬉しき故も幽なり雲の跡なき嶺にまどひて
一三〇千四百六十三番　左　讃岐　右勝　家長
一三一○影たけて悔しかるべき秋の月山路近くも成やしぬ覽
一三二君が世に染まず物と成にけり山常とはの今の一しほ
一三三君が世に染增すと聞く色なれば今一入も身にぞ
一三四千四百六十四番　左　小侍從　右勝　三宮
一三五美ましいた田の橋の桁よりも戀ひ渡りけむ人の心よ
一三六沖つ風鹽やく浦を吹くからに昇りもやらぬ夕煙かな
一三七みれば猶板田の橋の末よりも鹽やく浦に風渡る也
一三八千四百六十五番　左　隆信朝臣　右勝　内大臣
一三九我宿をとふ人あらば知べせよ岩ふむ道になるゝ山守
一四〇位山跡を尋ねてのぼれども子を思ふ道に猶惑ひぬる
一四一昔聞く心は關の末なれば子を思ふ道ぞげに哀なる
一四二千四百六十六番　左持　有家朝臣　右　忠良卿
一四三身の程を中々なれば云はねども見人毎に如何とぞ思
一四四數ならぬ我身は花にふく嵐すむ夜も月にかゝる浮雲
一四五逃懷の心々の心をばこゝろしてこそ定むべからなれ
一四六千四百六十七番　左　保季朝臣　右勝　兼宗卿
一四七明ぬれど浪は許さず清見潟關路は鳥の音迄と思ふに
一四八位山何中々のあとならむ嶺まで思ふほどのくるしさ
一四九位山思ふ心ぞ哀なる跡あるからにあとをくるしと
一五〇千四百六十八番　左勝　良平　右　通光卿
一五一春の日の恵を松にかゝる哉其數ならぬ藤の末葉も
一五二斯しつゝ幾世の露になれぬらむ草の枕に袖を重ねて

何となくさ耻は松に懸るらめ藤の末葉を哀とぞ見
千四百六十九番　左　具親　右勝　釋阿
すばさて習やすると思へどもましら鳴也谷の夕暮
芳野河岩こす浪を眺むればたえせぬ水の心をぞしる
吉野川絶ぬ流の深さをば汲てだに社知まほしけれ
千四百七十番　左　顯昭　右勝　俊成卿女
假庵の友とはいかゞ頼むべきもる程もなき宵の稻妻
清見潟浮寢の浪に宿る夜は月に心のとまるなりけり
理や清見が月の光にはいかゞ及ばむ宵のいなづま
千四百七十一番　左持　女房　右　越前
誰みよと荒れたる宿の松風に獨すみける淺茅生の月
思事なきだに安く背く世に哀捨てもをしからぬ身を
淺茅生の月に心の澄からに惜からぬみも捨られぬ哉
千四百七十二番　左持　左大臣　右　定家朝臣
浮沈こむ世は偖もいかにぞと心に問ひて答兼ねぬる
徒にあたら命を関ぎけむ長らへてこそけふに逢ぬれ
千四百七十三番　左　前權僧正　右勝　通具朝臣
鷹のくる嶺の松風身にしみて思ひ盡せぬ世の行へ哉
過ぎにける三十ぢは夢の秋ふけて枕にならぶ曉の霜
霜に結ぶ三十の夢の枕にもあはれに秋のふくる曉
千四百七十四番　左　公繼卿　右勝　家隆朝臣
駒とめて爰にや暫休らはむみ眞草もよき飛鳥井の蔭
昔だに昔朽ちける津の國の長柄の橋の跡をしぞ思ふ
朽にける長柄の橋の跡なれば昔の昔さぞな遙けき
千四百七十五番　左　公經卿　右勝　雅經
有し世の月を浪まに待侘て袖ふしかぬる蟲明のせと
野べの露山の雫と立ちぬれて詫言がましき旅衣かな
待わびて袖ふしかぬるせよりも猶濡增る旅衣哉
千四百七十六番　左持　季能卿　右　如眞得王　寂蓮
心やる道こそ遠くなり增れ老い行くまゝに昔想へば
難波津に己が物故行き返りねをなく蟹も春にあふ頃
心やる道も儚し歸こでねをなく蟹も猶いかにせむ
千四百七十七番　左持　宮内卿　右　家長
谷深み垂なる宿を見わたせば軒より出づる山川の水
藻鹽草かきおく末の跡みれば昔にこゆる和歌の浦浪
とに斯に云流しても見えぬ哉わかの浦波山河の水
千四百七十八番　左持　讃岐　右　三宮

長らへて猶君が代を松山の待とせしまに年ぞへにける
いとせめて身のうき時の眺には袖にも落る瀧の白玉
誰も皆のぶる思ひは品々に哀にぬるゝ百草のそで
千四百七十九番　左勝　小侍從　右　内大臣
みきとだにたれに語らむ雨そゝぐ雲に紛ひし曉の夢
世を厭ふ人の入るなる山里に又住侘て孰ちゆかまし
みる人の心ばかりや萎るらむ夢さへくもる曉の雨
千四百八十番　左　隆信朝臣　右勝　忠良卿
浦ちかき嶺の庵のさびしきはふもとの雲に夕波の聲
世中を強ても何か椎柴やしばしへぬべき栖だになし
何となく云くたしたる椎柴や麓の浪に折增るらむ
千四百八十一番　左持　有家朝臣　右　兼宗卿
憂ながら猶連なくて過すともあらじ我身の末の思出
恨むべき人はなければ大方に頼めば世をも打歎つゝ
取々に思ひこそ哀なれ頼めば世をもわるは思出
千四百八十二番　左持　保季朝臣　右　通光卿
山深み唯こそ人の訪ざらめ月につけては音信もがな
跡もなく岩のかげ路迷りきて雪と分けつる庭の白雲
思分かず同じと云て有なむ深き山べも岩のかけぢも
千四百八十三番　左勝　良平　右　釋阿
もれきても猶埋れて年やへむ木葉がくれの山川の水
おちたぎつ千々の流は積れども變らぬ物は沖つ白浪
行へある木葉隱れの山水は沖つ波にも立優れかし
千四百八十四番　左　具親　右勝　俊成卿女
荷且の庵も草のたび枕夢こそかねね野べのうたゝね
舊にけり跡無れとも津國の長柄の橋は名こそ朽せね
誰も皆開渡るなる橋の名は此夢よりもげに殘る覽
千四百八十五番　左持　顯昭　右　丹後
袖濡す木の下露もある物を涙添ふすゞのかりふし
山端にいざよふ月の影みても更ぬる身社悲かりけれ
さやかなる光も見えす幾程と思分れぬ月と露とは
千四百八十六番　左勝　女房　右　丹後
朝夕にあふくこゝろを猶照せ浪もしづかに宮川の月
和歌の浦にかひなき藻屑掻つめて身さへ朽ぬと思ける哉
とにかくに心詞もおよばれずいとも長き宮川の月
千四百八十七番　左持　左大臣　右　通具朝臣
君に斯逢ぬる身こそ悔けれ名やは朽せむ世々の末迄
此時にあふぞ嬉しき世々の風聞しに優るわかの浦波

代々と云も嬉しと聞ゝ共乍朽ぬ名ゝ云慣てきけ
千四百八十八番　左　前權僧正　右勝　家隆朝臣
朝夕にみてもなつさふ山水の早くも君に仕へつる哉
憂乍あれはぞへる君が世に數ならず共身をば厭はじ
山水に掻流してし小浪は誰にもいかゞ立優るべき
千四百八十九番　左　公繼卿　右勝　寂蓮
嬉しくも其の人數にの流れきて跡を尋ぬる堀川の水
哀とでしらぬ山路は送りきと人にはつげよ有明の月
いか計心の底にすみきけむみれば跡ある堀川の水
千四百九十番　左持　公經卿　右　如實寄得海　寂蓮
心あらむ人は中々住ぬべし浦の筥屋に世を盡しても
見すしらぬ唐土舟の行來迄世をふる道は八重の潮風
哀さを何に譬へむと思ふまに唐土舟のあとの白波
千四百九十一番　左　季能卿　右勝　家長
明き月日を高く仰つゝ年ふる身をばあだにやは思ふ
君が代に此事業は山城のとはにあひみむ和歌の浦人
一條をいひ流すこそ哀なれ我君が代の和歌の浦浪
千四百九十二番　左持　宮内卿　右　三宮
身のうさを斯ても關に徹果つな仰ぐ心を三熊野の月
掻つくれる藻屑を如何思ふむ浪に馴たる和歌の浦人
みくまのゝ月を哀とみる程に又袖濡すわかの浦浪
千四百九十三番　左勝　讃岐　右　内大臣
老の波なほ立出づるわかの浦に哀はかけよ住吉の神
年をへてこし方のみぞ忍ばるゝ有せしかばと思人放
こし方を忍ぶも如何老の波に哀かくべき住吉の神
千四百九十四番　左持　小侍從　右　忠良卿
命こそ嬉かりけれ和歌の浦の又人なみに立交りぬる
いなみじとわかの浦浪立ち交り思ふ餘の藻鹽草かな
とに斯に繁く成ぬる浦浪の耳なれぬればめにも餘
千四百九十五番　左持　隆信朝臣　右　兼宗卿
位山登りたちにし椎柴の道に迷ひて老いにけるかな
爭で猶思心を通さましの道ある御代にあふ身とならば
哀なるなふさ〳〵の思哉等閑ながら人にしれつゝ
千四百九十六番　左持　有家朝臣　右　通光卿
思ふ事しばし名草の濱衞跡こそかよへ和歌の浦わに
我乍盧邊をたづのさしもやは藻屑をよする若の浦風
濱衞辱べのたづもおしなべて同道なるわかの浦哉

千四百九十七番　左　保季朝臣　右勝釋阿

二数ならぬ袖をぞ疵る君が代にあふ嬉しさを包み乍も
いかにして憂身乍に君が代の千世の始のけふに逢らむ
君が代の千世の始に較ればげに數ならぬ袖と社見れ
千四百九十八番　左　良平　右勝俊成卿女
人並に立出ながら和歌の浦に斯る藻屑は有じとぞ思
こぎ離れ行く月影も哀なる蟲明の松の風のおとかな
月に聞く蟲明の松の風の音や常の浦には吹優らむ
千四百九十九番　左　具親　右勝丹後
いそのかみふるの中道立ち歸り昔に通ふ大和言の葉
君が代に止らむ名こそ嬉しけれ儚き鳥の跡とみる共
石上誠にふりて見ゆる哉止らむ鳥は跡有りぬべし
千五百番　左持顯昭　右越前
思事今こそなけれ和歌の浦に沈む藻屑も花咲にけり
年もへぬ其月讀を頼みこし心の闇はいつかはるべき
君が代の廣き惠に逢ぬれば思もあらじ闇も晴なむ
勅なれば難波の事も辭びねど善惡にこそ猶迷ぬれ

六百番歌合

左大將家百首歌合

題

春
元日宴　餘寒　春水　若草
賭射　野遊　雉　雲雀
遊絲　春曙　遲日　志賀山越
三月三日　蛙
夏
新樹　夏草　賀茂祭　鵜川
夏夜　夏衣　扇　夕顏
晩立　蟬
秋
殘暑　乞巧奠　稻妻　鶉
秋雨　秋夕　秋田

鴨　廣澤池眺望篇　柞
九月九日　秋霜　暮秋　冬
菊　殘菊　枯野　霙
野行幸　冬朝　寒松　椎柴
衾　佛名

初戀　忍戀　聞戀　見戀
尋戀　祈戀　契戀　待戀
遇戀　別戀　顯戀　稀戀
絕戀　恨戀　舊戀　曉戀
朝戀　晝戀　夕戀　求戀
老戀　幼戀　遠戀　近戀
旅戀　寄月戀　寄雲戀　寄風戀
寄雨戀　寄煙戀　寄山戀　寄海戀
寄河戀　寄關戀　寄橋戀　寄草戀
寄木戀　寄鳥戀　寄獸戀　寄蟲戀
寄笛戀　寄琴戀　寄絲戀　寄衣戀
寄席戀　寄遊女戀　寄傀儡戀　寄海人戀
寄樵夫戀
寄商人戀

作者
左
愚詠　修京極
從三位藤原朝臣季經
正四位下行左近衛權中將藤原朝臣兼宗
從四位上藤原朝臣有家
從四位下行左近衛權少將藤原朝臣定家
阿闍梨顯昭
右
從三位行左近衛權中將兼中宮權大夫藤原朝臣家房
從三位藤原朝臣經家
正四位下行右京權大夫藤原朝臣隆信
從五位上藤原朝臣家隆
從五位下源朝臣信定
寂蓮
講師
讀師
判者

春
一番　元日宴　左持女房　右　信定
新玉の年を雲居に迎ふとてけふ諸人にみき給ふなり
百敷や春をむかふる盃に君が千年のかげぞうつれる
〔判詞省略下同〕
二番　左　季經卿　右勝經家卿
立ち變る年の印は豐御酒に重ねて給ふひろはたの衣
松が崎絕ぬ氷室にすべらぎの千世の例を今日ぞ建ける
三番　左勝有家朝臣　右　家隆
初春のけふは畏き詔のべよと千世のしるしをぞ置く
諸人の立ちゐる庭の盃にひかりもしるし千代の初春
四番　左　定家朝臣　右勝隆信朝臣
春くれば星の位に影見えて雲居の橋に出るたをやめ
いつしかと神をつらぬる百しきに萬代めぐれ春の盃
五番　左持顯昭　右　寂蓮
陸月立つけふの圓居や百敷の豐の明の始めなるらむ
百敷や袖を連ぬるさかづきに醉を侑むる春のはつ風
六番　左勝兼宗朝臣　右　中宮權大夫
袖交すみはしの際に年古りて幾度春をよそに迎へつ
いつしかと御階の内の節に會に大宮人や春を知らむ
七番　餘寒　左持季經卿　右　中宮權大夫
猶さゆるけしきに著し山櫻まだ冬ごもる梢なるらむ
慕べき冬には雪の後れゐて春とも云はず冴渡るらむ
八番　左持兼宗朝臣　右　家隆朝臣
春きても猶しみ凍る山里は覓の水のおとづれもなし
春來ても雪ふる空を眺むれば霞も冴る心地こそすれ
九番　左勝顯昭　右　經家卿
信樂の外山は雪も消にしを冬をのこすや谷のゆふ風
春風は吹と開け共柴の屋は猶狹席にいこそ寢られぬ
十番　左勝定家朝臣　右　隆信朝臣
霞あへず猶ふる雪に空とぢて春物ふかき埋火のもと
霞しく今朝さへ冴ゆる袂哉雪ふる年や身に積るらむ
十一番　左持有家朝臣　右　信定
天の原春とも見えぬ眺かな去年の名殘の雪の明ぼの
名殘には春の袂もさえにけり霞よりちる雪の氣色に
十二番　左勝女房　右　寂蓮

空は猶霞もやらず風さえて雪げにくもる春の夜の月
梅が枝の匂ばかりや春ならむ猶雪深し窓のあけぼの
　十三番　春水　左勝顕昭　右　經家卿
つらゝぬるし汀を渡る春風に池の心もとけやしぬらむ
雪積る嶺に春日やさしぬらむ谷の小川に水増り行く
　十四番　左持定家朝臣　右　中宮權大夫
氷ゐし水の白波たちかへり春風しるき池のおもかな
諏訪の海の氷の上の通路は今朝吹く風に跡絶にけり
　十五番　左　季經卿　右勝隆信朝臣
音すなり淺茅が下の忘水凍りし程はしられざりしを
聞馴れし嶺の嵐にいつしかと音づれかはる谷の下水
　十六番　左持兼宗朝臣　右　寂蓮
春風に池の氷や解ぬらむたれぬ波の花を見るかな
鶯の涙のつらゝ聲ながらたよりにさそへ春の山みづ
　十七番　左　有家朝臣　右勝家隆
山河の氷のくさび打ちとけて石に碎くる水のしら波
春風に下行く波の數見えてのこるともなき薄氷かな
　十八番　左持女房　右　信定
木の間より日影や春を洩すらむ松の岩根の水の白波
春くれば氷をはらふ谷風のおとにぞつゞく山河の水
　十九番　若草　左持顕昭　右　隆信朝臣
荒ぬれば繩斷つ駒をいかにして接ぎとむ覽野邊の若草
今朝見れば澤の若菜も下根とけ綠にはゆる雪の村消
　二十番　左持兼宗朝臣　右　中宮權大夫
立渡る野邊の霞を煙にてもえ出にけるこれやわか草
萌出る野邊の若草末遠み空とともにぞ淺みどりなる
　二十一番　左　季經卿　右勝信定
名に立てる老曾の森の下草も年若しとや二葉なる覽
霜置し去年の枯葉の殘るまに其とも見えぬ春の若草
　二十二番　左持有家朝臣　右　家隆
春日野の野邊の草葉や萌ぬ覽今朝は雪間の淺綠なる
花をのみ待らむ人に山里の雪間の草の春をみせばや
　二十三番　左勝定家朝臣　右　經家卿
遲くとも己がさまゝゝさく花も一つ二葉の春の若草
色々の花咲べしと見えぬ哉草たつ程の野邊の景色は
　二十四番　左持女房　右　寂蓮
雪消ゆる枯野の下の淺綠去年の草葉や根に歸るらむ

春雨はこぞ見し野邊のしるべかは綠に返る荻の燒原
　二十五番　賭射　左勝女房　右　中宮權大夫
梓弓春の雲居も響くまでともねに通ふ的のおとかな
けふは我が君の御前にとる文のさして片よる梓弓哉
百しきや近きまもりの梓弓我がひく方ぞ心にはいる
　二十六番　左　有家朝臣　右勝寂蓮
心あるいての舍人の氣色かな玉敷く庭にともね響て
梓弓ひくてばかりはよそなれど心にいるは雲の上人
　二十七番　左勝兼宗朝臣　右　經家卿
梓弓春の雲居も響くまでともねに通ふ的のおとかな
梓弓儲けの箭にや引けるら迄果迄けふは當りぬる哉
　二十八番　左勝季經卿　右　隆信朝臣
百敷に引き連なれる梓弓はるもとも音の珍らしき哉
舍人子がとも打ち鳴す梓弓いて引渡る春はきにけり
　二十九番　左持顕昭　右　信定
梓弓射て引春のかひ有てけふの諸矢は世に響く也
あづさ弓春九重にちる雪をけふたつ舞の袖に見る哉
　三十番　左持定家　右　家隆
百敷やいて引く庭のあづさ弓昔に返る春にあふかな
あづさ弓春の雲居に引連れて氣色となるけふの諸人
　一番　野遊　左持顕昭　右　寂蓮
若菜つむこゝをし見ればたか取の翁も宜ぞ戲れ合ける
若菜つむ子日に出る友ならば家路思はぬ旅寢ぜましや
　二番　左勝季隆卿　右　中宮權大夫
打群れて堇つむ間に飛火野の霞の內にけふも暮しつ
暮ぬるかいざ歸なむ春の野の圓居はけふに限べきかは
　三番　左勝有家朝臣　右　經家卿
打群れて馴ぬる人の心をば野べの霞も隔てやはせむ
あづさ弓春の日暮し引連ているさの原に圓居をぞする
　四番　左持兼宗朝臣　右　隆信朝臣
知る知ず事有顏の圓居哉茅花拔く野にけふも暮しつ
いつしかと子日に出し春の野を堇摘む迄踏馴しつる
　五番　左勝女房　右　信定
都人宿を霞のよそに見て昨日もけふも野邊に暮しつ
是ぞこの春の野邊かと見ゆる哉大宮人の打群てゆく
　六番　左持定家朝臣　右　家隆
皆人の春の心の通ひてなれぬる野邊の花の蔭かな
思ふどちそことも云ず行暮れぬ花の宿かせ野邊の篤

七番　雉　左　定家朝臣　右勝信定
立つ雉のなるゝ野原も霞つゝ子を思ふ道や春惑らむ
鳴てたつきゝすの宿を尋ぬれば裾野の原の柴の下草
　八番　左勝季經卿　右　經家卿
み狩する人や來つらむすぎの野にさ躍る雉子聲頻る也
きゝす鳴く交野の原の鳥立こそ誠に假の宿り也けれ
　九番　左勝兼宗朝臣　右　隆信朝臣
春山の霞の內に鳴きゝす思ふ心はよそにしれとや
忍ぶり人にしれつゝ鳴く雉子其妻戀の程はいかにぞ
　十番　左持有家朝臣　右　家隆
煙たつ片山きゝすこゝろせよ裾野の原に妻も籠れり
燒きすてし枯野も跡や霞むらむ煙に歸る雉子鳴く也
　十一番　左　女房　右勝中宮權大夫
武藏野に雉子も妻や籠るらむけふの煙の下に鳴く也
妻戀のきゝす鳴くなり朝霞はるれば頓て草隱れつゝ
　十二番　左　顕昭　右勝寂蓮
妻戀の矢たけの雉子心せよ通ふ裾野も人あさるなり
狩人の入野のきゝす妻戀て鳴音計に身をやかへてむ
　十三番　雲雀　左勝定家朝臣　右　隆信朝臣
末遠き若葉の芝生打ち靡き雲雀なく野の春の夕ぐれ
雲に入るそなたの聲を眺むれば雲雀おちくる曙の空
　十四番　左勝兼宗朝臣　右　中宮權大夫
冬枯の芝生が下に住しかど春は雲居にあがる雲雀か
雲雀あがる春の燒野の末遠み深山の方は霞なりけり
　十五番　左勝有家朝臣　右　經家卿
住馴し床を雲雀のあくがれて行へも知ぬ雲に入ぬる
見渡せば燒野の草は枯にけり飛立つ雲雀寢床定めよ
　十六番　左勝女房　右　家隆
片岡の霞もふかき木隱に朝日待つ間の雲雀なくなり
野べ見ればあがる雲雀も今はとて淺茅に落る夕暮の聲
　十七番　左持季經卿　右　信定
遙々と荻の燒原立つ雲雀かすみの內に聲あがるなり
春深き野べの霞の下風に吹かれてあがる夕雲雀かな
　十八番　左　顕昭　右勝寂蓮
春日には空にのみ社あがらめ雲雀の床は荒やしぬ覽
子を思ふ巢立の岡を朝行けば揚もやらず雲雀鳴也
　十九番　遊絲　左持季經卿　右　隆信朝臣

三津の國のこやのわたりの眺には遊絲さへ隙無りけり
春來れば靡く柳のともがほに空に紛ふや遊ぶ絲ゆふ

二十番　左勝 兼宗朝臣　右 經家卿

霞棚引く何ばかりなる絲ゆふの軒端に人の詠わくらむ
佐保姫や霞の衣織つらむ春のみそらに遊ぶいとゆふ

二十一番　左持 顯昭　右 信定

いつとなく思ひ亂て過るよに美しきは遊ぶいとゆふ
空にしれ春の軒端に遊ぶ絲の思筋なき身の行方をば

二十二番　左勝 有家朝臣　右 寂蓮

春來れば空に亂るゝ糸ゆふを一筋にやは有と頼まむ
春風の長閑に吹けば青柳の枝も一つに遊ぶいとゆふ

二十三番　左勝 女房　右 中宮權大夫

面影に千里をかけて見するかな春の光に遊ぶ絲ゆふ
見渡せばあるか無きかに亂れつゝ心細くも遊ぶ糸ゆふ

二十四番　左勝 定家朝臣　右 家隆

繰り返し春の糸ゆふ幾世へて同じ緑の空にみゆらむ
長閑なる夕日の空を詠むればうす紅にそむる糸ゆふ

二十五番　春曙　左持 季經卿　右 經家卿

霞立ち渡る霞ばかりは仄にてそことも見えず明暮の空
霞もやあけ行く空を惜むらむ心細げに立ち渡るかな

二十六番　左 顯昭　右勝 隆信朝臣

この世には心とめじと思ふまに眺めぞ果てぬ春の曙
何となく心うきぬる獨寢に明ぼのつらき春の色かな

二十七番　左持 兼宗朝臣　右 中宮權大夫

此やこの心ある人のながむべき難波わたりの春の曙
哀さは古り行くまゝにそへてけり高津の宮の春の曙

二十八番　左 定家朝臣　右勝 家隆

霞かは花鶯にとぢられて春にこもれる宿のあけぼの
霞立つ末の松山ほの〴〵と波にはなるゝ横ぐもの空

二十九番　左持 女房　右 信定

見ぬ世まで思ひ殘さぬ詠よりむかしに霞むはるの曙
思ひ出は同じ詠めに返るまで心に殘れ春のあけぼの

三十番　左持 有家朝臣　右 寂蓮

さやかなる秋にもまさる哀かな月影かすむ有明の空
今はとて田面の鴈もうち侘びぬおぼろ月夜の曙の空

一番　遲日　左持 顯昭　右 信定

鶯の百さへすりを幾返りながき春日になき暮すらむ
雲の上に鶴の諸聲音づれて哀れ長閑けき春の空かな

二番　左勝 季經卿　右 經家卿

春の日はたのむが中に非ね共暮し煩ふ物にぞ有ける
春の日の慰め難き徒然に幾たび今日も晝寢しつらむ

三番　左 有家朝臣　右勝 隆信朝臣

夕暮に思へばけさの朝霞よを隔てたる心地こそすれ
斯しつゝ積れば惜き春の日を長閑けき物と何思ふ覽

四番　左勝 定家朝臣　右 中宮權大夫

詠侘びぬ光長閑に霞む日に花さく山は西をわかねど
徒然と暮らしぞかぬる山里の花さかぬ間の春の心は

五番　左勝 女房　右 寂蓮

秋ならば月待つ事のうからまし櫻に暮す春のやま里
白雲の八重たつ山の花をみて返る家路も日は遙なり

六番　左持 兼宗朝臣　右 家隆

斧の柄を斯てや人のくたしけむ山越霞ゆる春の空哉
春の日は灘の鹽屋の蜑人も暇ありてや暮しかぬらむ

七番　志賀山越　左勝 定家朝臣　右 家隆

袖の雪空吹く風もひとつにて花に匂へる志賀の山越
嵐吹く花の梢にあと見えて春もすぎゆく志賀の山越

八番　左 有家朝臣　右勝 經家卿

花散れば道やはよけぬ志賀の山うたて梢を越る春風
誘れて志賀の山路を越ぬれば散行花ぞしるべ也ける

九番　左持 兼宗朝臣　右 隆信朝臣

散積る花をば踏じと思ふまに道こそ無れ志賀の山越
春は只雲路を分る心地して花こそ見えぬ志賀の山越

十番　左　季經卿　右勝 信定

旬はすば吹雪く空とぞ思はまし花散紛ふ志賀の山道
道もせに花の白雪降りとぢて冬にぞ返る志賀の山越

十一番　左勝 顯昭　右　寂蓮

昔たれ志賀の山路を踏み初て人の心を花にみすらむ
故郷に思ふ人あり家づとは花にぞ見ゆる志賀の山越

十二番　左持 女房　右　中宮權大夫

遠方やまだみぬ嶺は霞にて猶花おもふ志賀の山ごえ
春深み花の盛になりぬれば雲を分け入る志賀の山越

十三番　三月三日　左持 顯昭　右　中宮權大夫

盃の流につけて唐人の舟のりするけふをしぞ思ふ
行く水に浮ぶる花の盃やながれての世の例なるらむ

十四番　左勝 定家朝臣　右　家隆

唐人の砌を傳ふる盞の波にしたがふけふもきにけり
植置し賤が心は桃の花三月のけふぞ見るべかりける

十五番　左　有家朝臣　右勝 寂蓮

けふと云へば岩間に淀む盞を待ぬ空迄花に醉ふらむ
花の色入日を殘す木の本に春も暮れ行く三日月の影

十六番　左持 季經卿　右　經家卿

流來て岩間を下る盞のさして誰にとみえずもある哉
岩間分け流れもやらぬ盃は志せどもかひなかりけり

十七番　左勝 女房　右　隆信朝臣

散る花をけふのまとゐの光にて波間にめぐる春の盃
岩間より流れて下る盃に花の色さへうかぶけふかな

十八番　左勝 兼宗朝臣　右　信定

桃の花枝さしかはす影なれば波にまがへむけふの盃
さかづきの流と共に匂ふらしけふの花吹く春の山風

十九番　蛙　左勝 季經卿　右　家隆

山吹の花の盛になりぬれば折しりがほに蛙なくなり
谷水の岩もる音は埋もれてすだく蛙の聲のみぞする

二十番　左　有家朝臣　右勝 中宮權大夫

追風にすだく蛙のもろ聲も波もよりくる井手の川水
澤ぎすぐる舟さへ淀む心地して堀江の蛙聲頻なり

二十一番　左勝 定家朝臣　右　經家卿

仄なる霞のすゑのあら小田に蛙も春のくれ恨むなり
水隱て井手の蛙はすだけども波の上にぞ聲は聞ゆる

二十二番　左　顯昭　右勝 信定

山吹の匂ふ井手をばよそにしてかびやが下に蛙鳴也
まだとらぬ早稻田の葉末靡めりすだく蛙の聲の響に

二十三番　左勝 女房　右　寂蓮

雨そゝぐ池の萍風越えて波と露とにかはづなくなり
庭の面は一つに見ゆる浮草をこゝぞ汀と蛙なくなり

二十四番　左持 兼宗朝臣　右　隆信

諸聲に痛くな鳴きそさもこそは浮沼の池の蛙也とも
世と共に波の下にて鳴く蛙何故深きうらみなるらむ

二十五番　殘春　左持 顯昭　右　中宮權大夫

惜しやいつ迄花の散じとて春を止たる氣色なるらむ
飽ざりし花の形見と見春も今幾日かは有むとすらむ

二十六番　左勝 兼宗朝臣　右　經家卿

花も皆散ぬる春は鶯のなく音ばかりに止まる也けり

六〇鶯も思かねたる聲すなりあすはかりなる春を恨みて
二十七番　左　季經卿　右　隆信
七〇兼て思ふ制無るべき名殘哉匂れぬ花も根に返りなば
八〇我が惜む歎きに添へて思ふかな花に後るゝ春の心を
二十八番　左持　定家朝臣　右　寂蓮
九〇木の本は日數ばかりを匂ひにて花も殘らぬ春の古里
一〇鶯の花の時はあれにけり古巣に今やおもひ立つらむ
二十九番　左　有家朝臣　右勝　家隆
一一うら若き彌生のべのさいたづま春は末葉に成にける哉
一二いかなれば咲初むるより藤の花暮行春の色をみす覽
三十番　左持　女房　右　信定
一三吉野山花の故里あとたえて空しき枝にはる風ぞふく
一四山のはに匂ひし花の雲きえて春の日數は有明のつき

夏

一番　新樹　左持　顯昭　右　隆信朝臣
一五立田山わか緑なる夏木立紅葉の秋もさもあらばあれ
一六面影は時雨れむ秋の紅葉にて薄萌黄なる神なみの森
二番　左勝　有經朝臣　右　經家卿
一七花は皆散りはてにけり夏木立緑も春の色ならぬかは
一八夏衣うすもえぎなる若楓秋そみかへむ色ぞゆかしき
三番　左持　季經卿　右　信定
一九色かへぬ齢は知らず夏木立緑は松にかはらざりけり
二〇顯はれむ秋をも知らぬ楓かな常磐の色を暫し盜みし
四番　左　定家朝臣　右勝　中宮權大夫
二一影ひたす水さへ色ぞ緑なる四方の梢の同じわかばに
二二おしなべて緑に見ゆる音羽山何れか花の梢なるらむ
五番　左勝　兼宗朝臣　右　家隆
二三我宿の庭こそ暗く成にけれ檜の廣葉の影や添ふらむ
二四紅葉ゆゑうゑし梢の淺緑いろには秋を思ふのみかは
六番　左　女房　右勝　寂蓮
二五花は散ぬいかに云てか人待む月だに洩らぬ庭の梢に
二六春深き野べのけしきと見し程に緑は宿の梢なりけり
七番　夏草　左勝　兼宗朝臣　右　經家卿
二七旅人や夏野の草を分來らむ昔の小笠の見え隱れする
二八夏草のしげみを行けば何となく露分衣袖ぞぬれぬる
八番　左勝　季經卿　右　中宮權大夫
二九誰か行く夏野の草の葉末より仄に見ゆるみしま菅笠
三〇夏草に野飼の駒も隱ろへて嘶ゆる聲ぞ人に知らるゝ
九番　左　顯昭　右勝　家隆
三一夏草の野島が崎のあさ露をわけてぞきつる萩が花摺
三二繁き野と夏も成行く深草の里は鶉の啼かぬばかりぞ
十番　左　有家朝臣　右勝　隆信朝臣
三三夏きてぞ野中の庵は荒れ增る窓間ぢてけり軒の下草
三四我宿の蓬の庭は夏深し誰分けよとか打ちはらはむ
十一番　左持　定家朝臣　右　寂蓮
三五夏山の草葉の丈ぞしられぬる春見し小松人し引ずば
三六道もなき夏野の草の庵かな花に穢るゝ庭と見しまに
十二番　左　女房　右勝　信定
三七夏草のもとゝ拂はぬ故郷に露より上を風かよふなり
三八夏草の中を露ふみわくる野は我故郷の垣根なりけり
十三番　賀茂祭　左勝　季經卿　右　隆信朝臣
三九けふ祭る神の惠は兼てより卯月の忌のさして知にき
四〇あすは又賀茂の川浪たち返り紫野にや色をそふべき
十四番　左持　顯昭　右　信定
四一昔より君と神とに引分けてけふの祭は二葉なりけり
四二昔より齋の宮に吹きそめてけふは涼しき賀茂の川風
十五番　左　有家朝臣　右勝　家隆
四三流ての世の例として方々のつかひ立ちくる賀茂の川浪
四四葵草秋の宮人かけそへてのどかにわたる賀茂の川水
十六番　左持　兼宗朝臣　右　寂蓮
四五葵草翳すけふとぞ思ひしに花を折ても見え渡るかな
四六千早振かもの御誕の葵草引きつゝ來ても渡るけふ哉
十七番　左勝　女房　右　經家卿
四七雲居よりたつる使にあふひ草幾年かけつ賀茂の川浪
四八年毎のけふの御誕に葵草斯る挿頭は有らじとぞ思ふ
十八番　左　定家朝臣　右勝　中宮權大夫
四九雲の上を出づる使の諸鬘向ふ日影にかざすけふかな
五〇夕襷かけてぞ賴む玉かづら葵嬉しきみあれと思へば
十九番　鵜川　左持　季經卿　右　經家卿
五一同じ瀨をのぼる鮎子に大堰川下りぞやらぬ篝火の影
五二桂川下りもやらぬ鵜舟かな此瀨にのみや鮎子さ走る
二十番　左　有家朝臣　右勝　隆信朝臣
五三後の世を知らせ顏にも篝火の焦れて過ぐる鵜飼舟哉
五四丈夫が夜河にたつる篝火に深き哀をいかでみすらむ
二十一番　左　定家朝臣　右勝　信定
五五遠近に詠めやはかす鵜飼舟閼を光のかゞり火のかげ
五六鵜飼舟哀と見ゆる武士の八十うぢ川の夕闇の空
二十二番　左勝　兼宗朝臣　右　家隆
五七篝火の影だにあらじ後の世の闇をも知らぬ鵜飼舟哉
五八大堰川いく瀨のぼれば鵜飼舟嵐の山のあけ渡るらむ
二十三番　左持　女房　右　中宮權大夫
五九大堰川猶山かげに鵜飼舟いとひ兼ねたるよはの月哉
六〇松浦川七瀨の淀を鵜飼舟くだしも果てゝ明ぬ此夜は
二十四番　左勝　顯昭　右　寂蓮
六一夜川立五月きぬらし瀨々をとめ八十伴夫も篝さすはや
六二鵜飼舟高瀨さしこす程なれや結ばゝれ行く篝火の影
二十五番　夏夜　左持　季經卿　右　隆信朝臣
六三つくづくと幾夜の事か思はまし晝に變ぬ夏夜ならば
六四郭公只一聲にあくる夜も待つには秋の心地こそすれ
二十六番　左勝　顯昭　右　經家朝臣
六五短夜も鳥より後ぞ明けやらぬ老の寢覺に物思ふ身は
六六夏の夜は敲く水鷄の隙なきに程なく明ぬ天戸なれや
二十七番　左　有家朝臣　右勝　家隆
六七夕涼み閨へも入らぬ轉た寢の夢を殘してあくる東雲
六八澄む月の光は霜と冴ゆれどもまだ宵ながら有明の空
二十八番　左勝　兼宗朝臣　右　中宮權大夫
六九夏の夜は更行く程や無るらむくるれば頓て明る東雲
七〇暮ぬとて垂籠にれば頓て又隙より白め夏のよな〳〵
二十九番　左勝　女房　右　寂蓮
七一轉寢のゆめより先にあけぬなり山郭公一こゑのそら
七二足引の山時鳥待つとてもねぬ夜のそらにあくる東雲
三十番　左勝　定家朝臣　右　信定
七三夏の夜はなるゝ清水の浮枕結ぶ程なきうたゝねの夢
七四夏の夜の數にもいれじ郭公きかぬ先にあくる東雲

一番　夏衣　左勝　顯昭　右　信定
七五裏もなき名は立ちながら夏衣袂に風はなは隔てけり
七六夏衣單衣なれども中々に暑さぞ增るうらとなりける
二番　左持　兼宗朝臣　右　寂蓮
七七脫返し蟬の羽衣あつきまでいかに成行く夏の日數ぞ
七八橘の匂もふかしなつ衣花ゆゑたれかいとひそめけむ
三番　左勝　季經卿　右　經家卿

七涼しとも思ひも果てず夏衣朝夕影の程にぞありける
〇八夏衣薄きかひこそなかりけれ袂涼しき風もふかねば
四番　左勝　女房　右　家隆
一八重ねても涼しかりけり夏衣薄き袂にやどるつきかげ
二八夏衣隔つともなき袂にも猶よそにこそ風は吹きけれ
五番　左持　定家朝臣　右　中宮權大夫
三尋ね入る檜の葉蔭の重なりてさてしも軽き夏衣かな
四八花の色の袖は重ねし物なれどひとへも重き蟬の羽衣
六番　左勝　有家朝臣　右　隆信朝臣
五八橘の匂を風のさそひきて昔にかへすよはのさごろも
六八軒近き花橘に風過ぎてにほひをのこす蟬のごろはも
七番　扇　左　女房　右勝　信定
七八手に馴す夏の扇と思へども唯秋風のすみかなりけり
八八夕まぐれ馴す扇の風にこそ且々秋は立ちはじめけれ
八番　左持　兼宗朝臣　右　經家卿
九八みな月の照る日も爭で過さまし賴む扇の風徹りせば
〇九涼しさは扇の風も變らねど秋は此もや身にはしむ覽
九番　左勝　顯昭　右　中宮權大夫
一九夕されば扇の風を手馴して月まつ程も涼しかりけり
二九夏の夜の月は入ぬる慰めに馴す扇をたとふばかりぞ
十番　左持　有家朝臣　右　隆信朝臣
三九雲の色の夏も消せぬかひや是扇の風の秋よりもげに
四九轉寢の扇をならす床の上の月と風とは秋のものかは
十一番　左勝　定家　右　家隆
五九風通ふ扇に秋のさそはれて先手なれぬる閨の月かげ
六九打ち拂ふ扇の風の程なきに思ひこめたる荻の音かな
十二番　左勝　季經卿　右　寂蓮
七九袖の内に半隱るゝ扇こそまだ出果てぬ月とみてけれ
八九恨みても散にし花を尋ねばや扇ぞ風の宿りなりける
十三番　夕顏　左　女房　右勝　中宮權大夫
九九片山の垣根の日影ほの見えて露にぞうつる花の夕顏
〇〇折てこそ見べかりけれ夕露に紐とく花の光ありとは
十四番　左　兼宗朝臣　右勝　信定
一〇是や此の人目も知ぬ山賤にさしのみむかふ夕顏の花
二〇賤男が片岡しめて住む宿をもてなす物と夕かほの花
十五番　左持　季經卿　右　寂蓮
三〇敎遣火の煙いぶせきしづの庵に煤けぬ物は夕顏の花
四〇煙たつ賤の庵か薄霧のまがきに吠けるゆふがほの花
十六番　左勝　定家　右　經家卿
五〇暮れ初めて草の葉靡く風のまに垣根涼しき夕顏の花
六〇日數ふる雪にしをれし心地して夕顏咲ける賤が竹垣
十七番　左持　顯昭　右　寂蓮
七〇自ら情ぞ見ゆるあらてくむ賤が外面のゆふがほの花
八〇山がつの契の程やしらるらむ夜をのみ待つ夕顏の花
十八番　左持　有家朝臣　右　隆信朝臣
九〇葎はふ賤が垣根も色はえて光ことなるゆふがほの花
一〇黃昏に紛ひて咲ける花の名を遠方人や問はゞ答へむ
十九番　喚立　左勝　女房　右　寂蓮
二〇入日さす外山の雲は晴れにけり嵐にすぐる夕立の空
三〇谷川の流を見ても知られけり雲こす嶺の夕だちの空
二十番　左持　定家　右　家隆
四〇枯渡る軒の下草うちしをれ涼しく匂ふゆふだちの空
五〇夏の日をたが住む里に厭ふらむ涼しく曇る夕立の空
二十一番　左持　季經卿　右　隆信朝臣
六〇四阿屋の軒に雫をとめ置きて程なく晴れぬ夕立の空
七〇夕立の程こそしばし止りつれ名殘も涼し深山木の蔭
二十二番　左勝　有家朝臣　右　經家卿
八〇夕立の雲のみをより傳ひきて軒端に落つる瀧の白玉
九〇鳴神は空かき暮す夕立に懸らぬ里も有りとこそきけ
二十三番　左　兼宗朝臣　右勝　中宮權大夫
一一夕立は名殘も見えす晴にけりいさら小川の音計して
二一初瀨山夕日はさせど菅原や伏見の里はゆふだちの空
二十四番　左　顯昭　右勝　信定
三一鳴神は猶村雲にとゞろきて入日に晴る夕だちの空
四一これもやと人里遠き片山に夕立すぐる杉のむらだち
二十五番　蟬　左勝　定家朝臣　右　信定
五一嵐吹く梢はるかになく蟬の秋を近しと空につぐなる
六一茂りあふ青き紅葉の下涼みあつさは蟬の聲に讓りぬ
二十六番　左　有家朝臣　右勝　隆信朝臣
七一雲居よりひゞきやすらむ夏山の嶺より高き蟬の諸聲
八一鳴きすさぶ隙かと聞けば遠近に頓て待取る蟬の聲々
二十七番　左　季經卿　右勝　中宮權大夫
九一隙もなく信太の杜に聞ゆ也千枝にや來なく蟬の諸聲
一二夏山の木毎にひゞく心地して一方ならずせみの諸聲
二十八番　左勝　顯昭　右　經家卿
二二ゆふされば山松の葉風に打そへて蟬の鳴音も嶺渡るなり
三二深山邊のふか綠なる夏木立蟬の聲とて繁からぬかは
二十九番　左　兼宗朝臣　右勝　家隆
四二夏山の梢も高くなくせみは中々聲ぞかすかなりける
五二秋ちかき木々の梢に風こえて下葉にうつる蟬の聲々
三十番　左勝　女房　右　寂蓮
六二鳴蟬のはに置く露に秋かけて木蔭涼しき夕ぐれの聲
七二夏深き杜の梢にかねてより秋をかなしぶ蟬の聲かな

秋

一番　殘暑　左持　季經卿　右　經家卿
八二唐衣ひとへに夏の氣色にて袂に秋はしられざりけり
九二秋來ぬと風の氣色は見ゆれ共猶涼しさは音せざり鳥
二番　左　顯昭　右勝　中宮權大夫
一三水無月の照日や影を殘しけむ今朝吹風の秋に知れぬ
二三秋を淺み照日を夏とおぼめけば暮行く空の荻の上風
三番　左持　有家朝臣　右　家隆
三三秋風のふきもつよらぬ眞葛原夏の氣色に猶返るかな
四三秋きてもまだ單衣なる衣手に厭はぬ程の風ぞ吹なる
四番　左勝　兼宗朝臣　右　隆信朝臣
一四岩間よりもりくる清水手に懸て又澄程ぞ秋の日數は
二四音にのみ哀を添ていかなれば袖にしられぬ秋の初風
五番　左勝　定家朝臣　右　寂蓮
三四秋きても猶夕風を松がねに夏を忘れし蔭ぞ立ちうき
四四夏衣まだぬぎやらぬ夕暮は袖に待たるゝ荻のうは風
六番　左持　女房　右　信定
五四打ちよする浪より秋の龍田川さても忘れぬ柳蔭かな
六四秋淺き日影に夏は殘れどもくるゝまがきは荻の上風
七番　乞巧奠　左勝　季經卿　右　經家卿
七四宿每に影をうつせば七夕のあふせはしげし天の川波
八四誰も皆けふ七夕を祭りつゝいのる心は空にしるらむ
八番　左勝　兼宗朝臣　右　中宮權大夫
九四吳竹に過ぐる秋風さよふけて祭る程にや星あひの空
〇五九重にけふ祭るをば七夕の唯一夜にも嬉しとや見む
九番　左持　有家　右　隆信
一五七夕にけふかすとは何ならで逢にのみこそ心引らめ
二五焚物の匂ひもかしつ織女のおもふ心を空にしれとや
十番　左勝　定家　右　家隆

三五秋毎にたえぬ星會にさ夜ふけて光ならぶる庭の灯火
四五露深き庭の灯かげ消えぬ夜や更けぬらむ星あひの空
十一番　左勝女房　右　信定
三六星會の空の光とたるものは雲居の庭に照すともしび
三七織女は雲の上より雲の下に心を分けて嬉しかるらむ
十二番　左勝顯昭　右　寂蓮
三八空遠く星會の空のしるしとて秋の調に琴ぢたつなり
三九織女の逢瀬の庭におく琴のあたりに引くは笹蟹の糸
十三番　稻妻　左勝定家　右　隆信
四〇影宿す程なき袖の露の上に馴れてもうとき宵の稻妻
四一むば玉の闇をあらはす電も光の程ははかなかりけり
十四番　左持顯昭　右　經家卿
四二稻妻の光にのみやなぐさまむ田中の里の夕やみの空
四三賤の男が山田の庵の隙を荒みもる稻妻を友と祉みれ
十五番　左持兼宗　右　信定
四四秋の夜に幾度ばかり照すらむ稻葉の露にやどる稻妻
四五山の端に殘れる雲の絕間より鳥羽田の面に通ふ稻妻
十六番　左　季經卿　右勝中宮權大夫
四六宵の間の月待つほどの雲間より思はぬ影を見する電
四七夕月夜かげろふ宵の雲間より光をかへて照す稻づま
十七番　左勝女房　右　寂蓮
四八はかなしや荒れたる宿のうたゝねに電通ふ手枕の露
四九すだきこし澤の螢は影消えてたえ〳〵宿る宵の稻妻
十八番　左勝有家　右　家隆
五〇風渡る淺茅が上の露にだに宿りも果てぬ宵の稻づま
五一眺むれば風吹く野邊の露にだに宿りも果てぬ電の影
十九番　鶉　左持顯昭　右　家隆
五二鷹の子を手には据ねど鶉鳴く津の原にけふも暮しつ
五三秋といへば鶉鳴なり小萩原鹿の音をこそ花に任すれ
二十番　左勝兼宗朝臣　右　經家卿
五四小萱原吹きくる秋の夕風に心亂れとうづらなくなり
五五秋風を厭ひやすらむ夕まぐれ淺茅が下に鶉鳴くなり
二十一番　左勝季經卿　右　隆信
五六夕風のまゝ荻原吹く儘に聞あれぬとや鶉なくらむ
五七風の音花の色にゝ著かりつ鶉なくべき野邊の氣色は
二十二番　左持有家　右　信定
五八夕まぐれ哀籠れる野原かな雨の雜にうづらなくなり
五九移し植ゑし萩が雜のあれ行くを誠の野べとなす鶉哉
六〇二十三番　左勝女房　右　中宮權大夫
六一獨すむ廬の丸屋の下露に床を並べてうづらなくなり
六二秋風になびく尾花の夕露や鶉がねやの雨とちるらむ
二十四番　左勝定家　右　寂蓮
六三月ぞすむ里は誠にあれにけり鶉のとこをはらふ秋風
六四繁き野とあれ果てにける宿り哉雜の暮に鶉なくなり
二十五番　野分　左勝顯昭　右　經家卿
六五萩が枝を柵む鹿も荒かりし風のねたさす猶如ゝ鳧
六六女郎花野分の風の荒さには靡き乍らも露やこぼるゝ
二十六番　左　兼宗　右勝中宮權大夫
六七百草の花もいかにと思ひむあら情なの今朝の野分や
六八吹亂る野分の風の荒ければ安き空なき花のいろ〳〵
二十七番　左　季經卿　右勝寂蓮
六九跡もなく今朝は野分に成に晃しどころにみえしすこが竹垣
七〇思ひやる我心までしをれきぬ野分するよの花の色々
二十八番　左勝定家　右　信定
七一荻の葉に變りし風の秋の聲やがて野分の露碎くなり
七二靡き行く尾花が末に浪越えてまのゝ野分に綻く濱風
二十九番　左持女房　右　家隆
七三昨日まで蓬に閉し柴の戸も野分にはるゝ岡のべの里
七四假にさす庵までこそ靡きけれ野分に堪ぬをのゝ篠原
三十番　左　有家　右勝隆信
七五朝未明庭も雜も野分して露おきあがる草の葉もなし
七六夕まぐれ村雲迷ひ吹く風に枕さだめぬ花のいろ〳〵
一番　秋雨　左　季經卿　右勝經家卿
七七雨ふれど笠取山の鹿の音は中々よその袖ぬらしけり
七八さらぬだに秋の哀は絕せぬに心細さを添ふる雨かな
二番　左　定家　右勝信定
七九行方なき秋の思ぞせかれぬる村雨なびく雲のをち方
八〇日にそへて秋の涼さ傳ふなる時雨はまだし夕暮の雨
三番　左勝有家　右　中宮權大夫
八一秋の夜は窓うつ雨に夢さめて軒端にまさる袖の玉水
八二見る夢も窓うつ雨に驚きて枕に秋のあはれをぞしる
四番　左　兼宗　右勝家隆
八三古の人をきくにも秋の夜の窓うつ雨は寂しかりけり
八四軒近き萩の下風だにある物を窓うち添ふる秋の村雨
五番　左勝女房　右　隆信
八五降り暮す小萩が下の庭の雨を今夜は荻の上に聞く哉
八六荻原や野邊の秋風末分てさびしさ添ふる村雨のこゑ
六番　左勝顯昭　右　寂蓮
八七小雨ふる葛飾わせをかる儘に民の袖さへ濕ひにけり
八八小萩咲片山蔭に日ぐらしのなきすさびたる村雨の空
七番　秋夕　左勝兼宗朝臣　右　經家卿
八九秋は猶霧の雜に鹿なきてはなもつゆけき夕なりけり
九〇哀をばいかにせよとて入相の聲打そふる鹿の音ならむ
八番　左勝季經卿　右　隆信朝臣
九一夕霧に千種の花はこもれどもかくれぬ物は蟲の聲々
九二野べの色は皆薄墨に成にけり暫しと見ゆる夕霧の空
九番　左持顯昭　右　中宮權太夫
九三秋と云へばさらでも物の悲しきに夕風立ぬ高圓の宮
九四物毎に秋は哀を分かねども猶限りなき夕まぐれかな
十番　左勝有家朝臣　右　家隆
九五夕されば衣手涼し高圓の尾上の萩に雁鳴くなり
九六暮行けば野べも一に露滿て蟲の音になる庭の淺ぢふ
十一番　左持女房　右　信定
九七物思はでかゝる露やは袖に置く詠てけりな秋の夕暮
九八偖もさばいかにかすべき身のうさを思へば秋の夕暮
十二番　左勝定家朝臣　右　寂蓮
九九秋よ只詠め捨ても出なまし此の里のみの夕と思はゞ
一〇〇詠めつる軒端の荻の音づれて松風になる夕ぐれの空
十三番　秋田　左持有家朝臣　右　經家卿
一〇一山田もるすこがなる子に風觸てたゆむ眠を驚すなり
一〇二吹く折は鴫子の音も絕せねば風の守ける山田也けり
十四番　左　季經卿　右勝中宮權大夫
一〇三哀哉遠の山田に小夜ふけて仄にいたの音ばかりする
一〇四いづくより秋の哀を誘ひきて稻葉に風の吹續くらむ
十五番　左勝顯昭　右　寂蓮
一〇五遠近の庵にひた打つ音きけば互みに守や秋の小山田
一〇六風吹けば山田の庵に音づれて稻葉ぞ人を守明しける
十六番　左持兼宗朝臣　右　家隆
一〇七秋田もる賤が庵に宿からむ偖も此世は過ぬべき身ぞ
一〇八深からぬ山田の庵も秋は猶心の果はみつべかりけり
十七番　左　定家朝臣　右勝信定

七幾夜ともやどは答へず門田吹く稲葉の風の秋の音信
八わきてなど庵守袖の萎らむ稲葉に限る秋の風かは

十八番　左勝　女房　右　隆信朝臣

一山遠き門田の末は霧晴れて穂なみにしづむ有明の月
二夕月夜ほのめく影も哀なり稲葉の風は袖にかよひて

十九番　鴫　左　顕昭　右勝　中宮權大夫

一こも枕高瀬の淀にたつ鴫の羽音もそゝや哀かくなる
二哀さは荻ふく風の音のみか有明の月に鳴もなくなり

二十番　左勝　定家朝臣　右　信定

一唐衣裾野の庵の旅まくらそでより鴫のたつ心地する
二旅枕よはのあはれももゝはがき鴫たつ野べの暁の空

二十一番　左勝　有家朝臣　右　經家卿

一時しもあれ寝覚の空に鴫立て秋の哀をかき集むらむ
二明ぬとや同じ心に急ぐらむ門田の鴫も今ぞ羽根かく

二十二番　左持　季經卿　右　隆信朝臣

一明方に夜は成ぬとや菅原や伏見の田ゐに鴫ぞ立ける
二明ぬるか鴫の羽根掻ねや過ぎて袖に月もる深草の里

二十三番　左勝　兼宗朝臣　右　寂蓮

一暁方へ羽根かく鴫の立ぬらむまだ明やらぬ霧の迷に
二仄にも鴫の羽音ぞ聞ゆなる殘るとなき秋のねざめに

二十四番　左勝　女房　右　家隆

一浪よする澤の野べをふし侘て風に立なり鴫の羽根掻
二明ぬとて澤立つ鴫の一聲は羽根かくよりも哀也けり

二十五番　廣澤池眺望　左勝　季經卿　右　中宮權大夫

一詠めやる心の果は廣澤の池よりをちに出つる月かげ
二廣澤の池には沈む月影の音羽の山にたちのぼるかな

二十六番　左持　定家朝臣　右　經家卿

一澄み來ける跡は光に殘れども月こそふりね廣澤の池
二隈もなく月すむよはゝ廣澤の池は空にぞ一つ也ける

二十七番　左勝　有家朝臣　右　隆信朝臣

一心こそ雲居はるかにあくがれめ眺もさそふ廣澤の月
二月のすむ空はよそにも變らじを眼にあまる廣澤の池

二十八番　左持　兼宗朝臣　右　信定

一なかめやる心の末もとまれとや月に宿かす廣澤の池
二更科も明石もこゝにさそひきて月の光は廣澤のいけ

二十九番　左持　顕昭　右　寂蓮

一廣澤の池さえわたる月かげは都までしく氷なりけり
二月清みみやこの空も雲消えて松風はらふ廣澤のいけ

三十番　左勝　女房　右　家隆

一心には見ぬ昔こそ浮びけれ月にながむる廣澤のいけ
二わきてなど庵守袖の萎らむ稲葉に限る秋の風かは

一番　鳶　左持　有家朝臣　右　家隆

一行くへなく眺むる空も廣澤の池の心にすめる月かげ

二番　左　顕昭　右勝　信定

一常磐木の茂みを染むる蔦の色の斯らざりせば下紅葉やは
二散らぬより紅葉に辿る山路哉岩根の蔦や色變るらむ

三番　左　季經卿　右勝　中宮權大夫

一下枝まで懸れる蔦は紅葉して錦をはるはわたの笠松
二絶間なく懸れる蔦の色づけば紅葉を園ふ垣根とぞ見

四番　左勝　兼宗朝臣　右　經家卿

一色變へぬ松の緑に這ふ蔦は己が紅葉を讓るなりけり
二色變ぬ松の緑もなかりけり懸れる蔦や紅葉しつらむ

五番　左持　定家朝臣　右　隆信

一葦のやの蔦はふ軒の村時雨音こそたてね色は隠れず
二今朝見れば蔦はふ軒に時雨して葱のみぞ青葉也けれ

六番　左勝　女房　右　寂蓮

一うつの山越えし昔の跡ふりて蔦の枯葉に秋風ぞふく
二淺茅たつ庭の色だにある物を軒端の蔦は打時雨つゝ

七番　柞　左勝　兼宗朝臣　右　經家卿

一船とめぬ人はあらじな泉川柞の森に紅葉しぬれば
二柞原そむる時雨もあるものを暫しな吹きそ木枯の風

八番　左　季經卿　右勝　信定

一柞原涼みし夏の青こだち色かはりても猶ならすかな
二山めぐる時雨の宿る柞原わが物がほに色の見ゆらむ

九番　左持　有家朝臣　右　中宮權大夫

一秋ぞかし岩田の小野の云ず共柞が原に紅葉やはせぬ
二薄くこく色はかはれど柞原梢にこぞる秋のいろかな

十番　左持　顕昭　右　隆信

一松風にいかで時雨のふりぬらむ岩もと柞初紅葉せり
二山科のいはたの小野に秋くれて風に色ある柞原かな

十一番　左勝　女房　右　寂蓮

一柞原しづくも色やまさるらむ森の下草秋ふけにけり
二あたりまで梢寂しき柞原深くは何をおもひこむらむ

十二番　左勝　定家朝臣　右　家隆

一時分かぬ浪さへ色にいづみ川柞のもりに嵐吹くらし
二秋深きいはきの小野の柞原下葉は草の露やそむらむ

十三番　九月九日　左持　顕昭　右　中宮權大夫

一わけきつる情のみかはそが菊の色もて囃す白妙の袖
二長月のけふ九日といひ顔にをりえて見ゆる白菊の花

十四番　左勝　有家朝臣　右　經家卿

一君がへむ世を長月のけふ毎に菊を摘てぞ年を積べき
二君が代はけふつむ菊に置露の積て淵とならむ世迄に

十五番　左持　兼宗朝臣　右　家隆

一けふと云へば頓て離の白菊ぞ尊し人の袖とみえける
二盃に浮べるけふの影よりやうつろひ初むる白菊の花

十六番　左　定家朝臣　右勝　隆信

一いはひ置きて猶長月と契る哉けふつむ菊の末の白露
二君が經む世を長月の挿頭としてけふ折えたる白菊の花

十七番　左持　季經卿　右　寂蓮

一春秋にとめる宿には白菊を霞の色にうかべてぞみる
二君を思ふ袖に菊を摘添へて秋も限らぬ花とこそみめ

十八番　左勝　女房　右　信定

一雲の上に待來しけふの白菊は人の詞の花にぞ有ける
二けふといへば八重咲く菊を九重に重し跡も顯れに鳧

十九番　秋霜　左　季經卿　右勝　信定

一女郎花まだきに霜を戴きて盛過ぎぬる氣色なるかな
二紅葉をば己が染たる色ぞかしそれに置る今朝の霜哉

二十番　左持　顕昭　右　經家卿

一色變る鴛の毛衣今朝見ずば降るともしらじ秋の露霜
二霜さゆる蓬がもとの蕎こえも枯野になりやしぬらし

二十一番　左勝　定家朝臣　右　中宮權大夫

一とけてねぬ夢路も霜に結ぼゝれ先しる物は片敷の袖
二秋の野の千種の色も枯敢ぬに露置込むる夜半の初霜

二十二番　左持　有家朝臣　右　寂蓮

一虫の音の弱るも著く淺茅生に今朝は寒けくにだれ霜ふる
二思ふよりまたも哀は重ねけり露に霜おく庭の蓬生

二十三番　左　兼宗朝臣　右勝　家隆

一初霜や秋をこめても置つらむ今朝色變る野路の篠原
二いかに又　は夕と眺めきて花に霜おく野べの明ぼの

二十四番　左勝　女房　右　隆信朝臣

一霜結ぶ秋の末葉の小笹原風には露のこぼれしものを

三〇月見れば霜に光を添へてけり秋の末葉の有明のそら
二十五番　暮秋　左勝　有家朝臣　右　經家卿
三一長月の月も有明になりぬれば秋暮れはつる夕闇の空
三二様々の色をば菊に分けとめて垣根にしらぬ霜枯の頃
四〇立返る空なく秋や思ふらむ野邊の末葉に露ぞ茂れる
二十六番　左勝　季經卿　右　隆信朝臣
五〇常よりも今年の秋の哭はとり怪しき迄に惜まるゝ哉
六〇斯ばかり心に止る秋の色の就くの隙をもりて行らむ
二十七番　左持　顯昭　右　中宮權大夫
七〇惜みかねし秋暮ぬとはさを鹿の音せで人に告る也けり
八〇あすよりや萩の葉あらず霜枯て秋をば夢と驚すべき
二十八番　左勝　兼宗朝臣　右　家隆
九〇長明の有明の空を見てのちぞ秋の哀の果はしりぬる
一〇暮て行く秋も其方ぞ怨めしき傾く月の影を見しより
二十九番　左　定家朝臣　右勝　寂蓮
一一晨明の名ばかり秋の月影に弱りはてたる蟲の聲かな
一二暮て行く秋の名殘も山の端に月と共にや有明のそら
三十番　左持　女房　右　信定
一三龍田姫今はの頃の秋風に時雨をいそぐ人のそでかな
一四哀なる身のたぐひとも思ひこし秋の今はの夕暮の空

冬

一番　落葉　左持　顯昭　右　信定
一晴曇る時雨に色を染なから隙なく降るは木葉也けり
六時雨ふる嶺の村雲晴のきて風よりふるは木葉也けり
二番　左勝　兼宗朝臣　右　經家卿
七いか計り散積ればか大井河流もやらぬ紅葉なるらむ
八紅に關の小川はなりにけり音羽の山に紅葉ちるらし
三番　左持　定家朝臣　右　隆信朝臣
九かつ惜む詠めもうつる庭の色よ何を梢の冬に殘さむ
一〇散積る紅葉掻分け來て見れば色さへ深き山路也けり
四番　左　有家朝臣　右勝　家隆
一一山里は梢寂しくなり果てゝ嵐のおとも庭のかれ葉に
一二木葉なる外山の暮を分けゆけば袖に嵐の聲ぞ碎くる
五番　左持　季經卿　右　中宮權大夫
一三儚しやうきたる風に誘はれて跳ち生田の杜の木葉ぞ
一四惜みかね嶺の紅葉に染置きし心の色も散果てにけり
六番　左持　女房　右　寂蓮
一五散果てむ木葉の音を殘しても色こそなけれ嶺の松風
一六時雨れゆく松の綠は空晴れて嵐に曇る嶺のもみぢは
七番　殘菊　左勝　女房　右　隆信朝臣
一七嵐吹き木葉こきまぜ寒ふり寂しかりける山の奥かな
二十番　左　季經卿　右勝　信定
一八誰もみよこれは寒の空ならむ散くる花は雨や交りし
一九風渡る花のあたりの春雨は冬の空にも有りける物を
二十一番　左　有家朝臣　右勝　家隆
二〇花ならぬ匂ひも後はなき物をうつろひ殘れ庭の白菊
九番　左　顯昭　右勝　經家卿
二一霜ふれば若紫の色はえて菊は老せぬ花にぞありける
二二染めかふる雛の菊の紫は冬に移ろふ色にぞありける
十番　左勝　兼宗朝臣　右　寂蓮
二三暮ていにし秋の形見と思べき菊さへ色を變てけ哉
二四一枝も折つる袖は白菊の匂ひまでこそ移ろひにけれ
十一番　左勝　有家朝臣　右　中宮權大夫
二五白きくも紫深くなりにけり秋と冬との色やわくらむ
二六霜枯れぬきくにしあらば紫に移ふ色も嬉しとやみむ
十二番　左　定家朝臣　右　信定
二七白ぎくの散らぬは殘る色顏に春は風をも恨みける哉
二八花もかく雪のませまで見る菊の匂は袖にまだ殘らむ
十三番　枯野　左勝　女房　右　隆信朝臣
二九見し秋を何に殘さむ草の原一つに變る野べの氣色に
三〇霜枯の野べの哀れを見ぬ人や秋の色には心そむらむ
十四番　左勝　顯昭　右　經家卿
三一殘り居て霜を戴く翁草冬の野もりとなりやしぬらむ
三二狹筵に野べや宛ら成ぬらむ霜にし枯ぬ草の葉ぞなき
十五番　左　有家朝臣　右勝　中宮權大夫
三三色々の花故野べにたち出でし眺までこそ霜枯にけれ
三四冬ふくる野べを見るにも思ひ出る心の内は花の色々
十六番　左勝　季經卿　右　家隆
三五霜枯るゝ野原に秋の忍ばれて心の内に鹿ぞなくなる
三六鹿の音も蟲も樣々聲絶て霜枯れ果てぬ宮城野のはら
十七番　左勝　定家朝臣　右　寂蓮
三七夢かきは野べの千種の俤はほの〴〵招く薄ばかりや
三八村薄絶々野邊に招けども下はふ葛ぞうらみはてぬる
十八番　左持　兼宗朝臣　右　信定
三九花は猶其の姿とも見えわかる枯野は蟲の聲ぞ戀しき
四〇秋の色の移ふ野べをきて見れば哀は枯ぬ物にぞ有ける
十九番　霙　左勝　女房　右　隆信朝臣

四一風寒みけふも霙のふる鄕は芳野の山の雪げなりけり
四二嵐吹き木葉こきまぜ霙ふり寂しかりける山の奥かな
二十番　左　季經卿　右勝　信定
四三誰もみよこれは霙の空ならむ散くる花は雨や交りし
四四風渡る花のあたりの春雨は冬の空にも有りける物を
二十一番　左　有家朝臣　右勝　家隆
四五人目こそ枯れも果なめ山里に日影も見えず霙ふる頃
四六掻曇り霙るゝ空やうそめて凍りも果ぬ時雨なるらむ
二十二番　左　定家朝臣　右勝　中宮權大夫
四七この山の嶺の村雲吹き迷ひ槇の葉づたひ霙ふりきぬ
四八雪ならば斯らましやは打拂ひ袖鹽たるゝ霙なりけり
二十三番　左勝　兼宗朝臣　右　寂蓮
四九積るかと見えつる雪も霙にて詠め侘ぬる冬の山ざと
五〇かき曇る同じ空より雪ふれば時雨も色の變る也けり
二十四番　左持　顯昭　右　經家卿
五一うつの山夕越えくれば霙ふり袖ほしかねつ哀此の旅
五二けふも又交野のみのに霙して乾くまもなき狩衣かな
二十五番　野行幸　左　顯昭　右勝　經家卿
五三大原や行邊の行幸に所えて空取るけふの眞白斑の鷹
五四嵯峨の原走る雉子のかた跡はけふの行幸に隱なき哉
二十六番　左持　有家朝臣　右　信定
五五はし鷹を古き例に引すえて跡ある野邊の行幸也けり
五六敏鷹も逢を嬉しと思ふ絶にし野べの今日の行幸に
二十七番　左　兼宗朝臣　右勝　中宮權大夫
五七雉子なく嵯峨野の原の行幸には古き跡をや先尋ぬ覽
五八皇のけふの行幸は御狩野の草葉も靡く物にぞ有ける
二十八番　左持　定家朝臣　右　家隆
五九狩衣おどろの道も立ち返り打敷くみゆき野風寒しも
六〇諸人の狩場の小野にふる霰けふの御幸に玉ぞ敷ける
二十九番　左持　季經卿　右　寂蓮
六一古のながれをうくる御狩かなその芹川の跡に任せて
六二古の野守の鏡けふ見ればみゆきをうつす氷なりけり
三十番　左持　女房　右　隆信朝臣
六三芹川の波も昔に立ち返りみゆき絶えせぬ嵯峨の山風
六四行幸せし野邊の古道ふみ分けて跡絶せぬは芹川の水

一番　冬朝　左　顯昭　右勝　家隆
六五山里は朝川渡る駒の音に瀨々の氷のほどをしるかな
六六谷川の凍るだにある山里に人も音せぬ今朝のしら雪

二番　左勝 有家朝臣　右　經家卿

七宿毎に絶ぬ朝げの煙さへ冬の景色はさびしかりけり

八七朝まだき嵐は庭を渡れども雪には跡もつかぬ也けり

三番　左勝 兼宗朝臣　右　信定

九七とへかしな庭の白雪跡たえて哀も深き冬のあしたに

〇八軒の内に雀の聲はなるれ共人こそ訪はね今朝の白雪

四番　左勝 定家朝臣　右　隆信朝臣

一八一年を詠めつくせる朝戸出に薄雪凍る寂しさのはて

二八人をさへ訪で社みれ今朝の雪を我踏初めむ跡の惜さに

五番　左　季經卿　右勝 中宮權大夫

三八寂しさの始とや見る朝未明はだれ霜ふる小野の篠原

四八朝戸あけて都Sたつみ詠むれば雪の梢や深草のさと

六番　左持 女房　右　寂蓮

八五雲深き嶺の梢のいかならむまきの戸しらむ雪の光に

六八詠めやる衣手さむし有明の月より殘る嶺のしらゆき

七番　寒松　左勝 季經卿　右　經家卿

八七雪の内に猶も綠の色ながら千世をあらはす嶺の若松

八八今朝見れば雪高砂の松が枝は土につく迄降積にけり

八番　左持 兼宗朝臣　右　中宮權大夫

八九松風の音はいつとも分かね共稍の雪や冬はさびしき

〇九なべて世の梢に風は弱れども松吹く雪は寂しかりけり

九番　左　定家朝臣　右勝 隆信朝臣

一九あらはれて又埋るゝ雪の内にさゝ年深き松の色かな

二九いかなれば冬に知れぬ色乍松しも風の寂しかるらむ

十番　左勝 顯昭　右　寂蓮

三九吉野山すゞのかりねに霜拓て松風速し更けぬ此夜は

四九外山なる柴のあみ戸は風過ぎて霰横ぎる松の音かな

十一番　左持 有家朝臣　右　家隆

五九雪埋む松をみぎりに吹き返しみせも山下の風

六九さえ〳〵て梢の雪を返すなり尾上の松の雪のうら風

十二番　左勝 女房　右　信定

七九清水守る谷の戸ぼそも閉ぢ果てゝ氷を敲く峯の松風

八九梢にもよはの白雪積るらし音弱り行くみねのまつ風

十三番　椎柴　左　女房　右勝 寂蓮

九九山里の寂しさ思ふ煙ゆゑたえん〳〵立てる嶺のしひ柴

〇〇冬ごもる草のとざしは霜がれてま近き山の嶺の椎柴

十四番　左持 顯昭　右　家隆

一〇山里の便も共岡べなる椎のこやては折ずもあらなむ

二〇山深く賤の折たく椎柴の音さへさむき朝ぼらけかな

十五番　左勝 有家朝臣　右　經家卿

二〇冬籠る賤の爪木にことそひて風も析りけり嶺の椎柴

三〇冬寒み椎の眞柴を折りさせど宿には風も溜ざりけり

十六番　左勝 兼宗朝臣　右　隆信朝臣

四〇幾年に我なりぬらむ椎柴の暫しは偖も嬉しかりしを

五〇位山道の椎柴年ふりてこえ行く人ぞうらやまれぬる

十七番　左持 季經卿　右　信定

六〇落ち積る朽葉も下になかりけり色も變らぬ嶺の椎柴

七〇椎柴の暫しと思ひし世間の四十の冬になりにける哉

十八番　左　定家朝臣　右勝 中宮權大夫

八〇椎柴は冬こそ人にしられけれとふあられ殘す木枯

九〇深山邊を夕越えくれば椎柴の枯葉に傳ふたゝ霰かな

十九番　衾　左勝 女房　右　寂蓮

一一冴る夜に鴛の衾をかたしきて袖の氷を拂ひかねつゝ

二一木葉をや鳥の上毛に殘すらむ圍の衾もさゆる霜夜に

二十番　左持 季經卿　右　經家卿

三一重ねずばあけの衣も何ならじ身を温めよあさて小衾

四一冴る夜の寒さも今は有じかし朱の衾の厚く見ゆれば

二十一番　左　顯昭　右勝 信定

五一厚衾なごやが下は思ひやる心のみこそ夜は重ぬらめ

六一徒に明くる夜をのみかさぬれば獨衾の床ぞさびしき

二十二番　左持 有家朝臣　右　中宮權大夫

七一きへ入のまだら衾は板間より霜置夜半の名に社有けれ

八一沍る夜は天つ少女もいかならむ風も溜らぬ麻手小衾

二十三番　左勝 兼宗朝臣　右　隆信朝臣

九一埋火のあたりの圍居飽ぬまは夜床の衾のかひもなきかな

〇二片敷の袖さえ渡る冬の夜は床に衾のかひもなきかな

二十四番　左　定家朝臣　右勝 家隆

一二引きかくる闇の衾の隔てにもひとゝきは變る鐘の音哉

二二雪の夜の思ふばかりもさえぬこそ圍の衾の驗也けれ

二十五番　佛名　左持 顯昭　右　經家卿

三二唱つるみよの佛の中の夜になぞかへなした進め置けむ

四二唱へつるみよの佛の外に又大宮人のなのるべしやは

二十六番　左勝 定家朝臣　右　家隆

五二川竹の靡く葉風も年暮れて三世の佛の御名を聞く哉

六二嬉しくも罪は夜の間に消ぬ也幕行く年の身に積る寃

二十七番　左持 有家朝臣　右　中宮權大夫

七二諸人の名さへ聞つる今宵哉是もこむ世の佛ならずや

八二唱つる三世の佛も聞くとてや大宮人も名のる也けり

二十八番　左持 季經卿　右　寂蓮

九二あまた度竹の燈かゝげてぞ三世の佛の名をば唱ふる

〇三明やらぬ夜間の雪は積るとも凍れる罪や空に消らむ

二十九番　左勝 兼宗朝臣　右　隆信朝臣

一三これやこの三世の佛も諸人も名を現して明くる東雲

二三冬深き有明の月のあけ方に名のりて出づる雲の上人

三十番　左持 女房　右　信定

三三一年のはかなき夢はさめぬらむ三世の佛の鐘の聲に

四三唱へつる佛の御名は朝日にて頓て消えゆく一年の露

戀

一番　初戀　左持 女房　右　信定

一四知らざりし我戀艸や茂るらむ昨日は斯る袖の露かは

二四今朝までも斯る思は無きものを哀怪しき我が涙かな

二番　左勝 季經卿　右　經家卿

三四ゆく末の涙の程ぞ知られぬる今日濡初むる袖の雫に

四四聞もせず聞かすしも無き君故に思定めぬ戀もする哉

三番　左持 有家朝臣　右　家隆

五四日を經とも人の心の連なくば戀計にや身を馴すべき

六四早晩に通ふ心の今はさば嬉しかるべき知べともがな

四番　左勝 定家朝臣　右　隆信朝臣

七四靡かじな蜑の藻鹽木燒初めて煙は空に燻り侘ぶとも

八四廬の屋の隙もる雨の雫こそ音聞かぬより袖は濡けれ

五番　左勝 顯昭　右　寂蓮

九四錦木に書添へてこそ言の葉も思染つる色はみゆらむ

一〇思ふより憂きに慣たる袂かな涙や戀の先にたつらむ

六番　左持 兼宗朝臣　右　中宮權大夫

一一戀ひ初むる心の底を尋ぬれば人遣ならぬ思なりけり

二一見初めつる人の心や思ひたつ戀路の末の終なるらむ

七番　忍戀　左勝 女房　右　中宮權大夫

三一漏すなよ雲居る嶺の初時雨木の葉は下に色變るとも

四一圍の内は涙の雨に朽果てゝ忍ぶは茂る妻にぞ有ける

八番　左勝 兼宗朝臣　右　經家卿

五一人知れぬ思は深く染むれども色に出ぬはかひ無り鳥

六一戀しさを如何にしてかは慰めむ我より外に知人は無

九番　左勝 顯昭　右　家隆

憂身とてさのみは如何包べき云で悔しきとも社あれ色に出で云はぬ思の慰めは人のつらさを知らぬ計か

十番　左持　季經卿　右　寂蓮

今ぞ知る許多有りける心とは忍ぶ物から人の戀しき思ひ置く心の底の夢ならば覺めての後も人に語らじ

十一番　左持　定家朝臣　右　信定

氷ゐしみるめ渚の類かな上せく袖のしたのさゞなみ我とがと思ふにかゝる涙こそ抑ふる袖の下に成ぬれ

十二番　左勝　有家朝臣　右　隆信朝臣

忍びつゝ此世盡きなば思ふ事苦の下にや共に朽なむあくがるゝ心の誰が床に行てあやむ計の夢にみゆ覽

十三番　閨戀　左持　季經卿　右　權大夫

契あらば逢見て後ぞ知らるべき斯りし樣の氣色有とも人傳に何か心を盡すべき戀さめならば悔しからまし

十四番　左勝　顯昭　右　家隆

聞き渡る契も深きえにしあらば末も賴もし中川の水みるめなき磯間隱に寄る波の音計りにも袖濡せとや

十五番　左持　兼宗朝臣　右　隆信朝臣

いかでもと思ひし妹が有樣は語る人まで懷かしき哉雲間より聲を殘して歸る雁さかずば斯る詠せましや

十六番　左勝　有家朝臣　右　信定

名にたてる音羽の瀧も音にのみ聞より袖はぬるゝ物かは鹿のねも嵐に類ふ鐘の音も聞よりこそは袖は濡しか

十七番　左勝　女房　右　經家卿

谷深みはるかに人を菊の露ふれぬ袂よ何しをるらむ君をのみ心盡しの菊の池云出でぬより袖ぞ濡れぬる

十八番　左持　定家朝臣　右　寂蓮

諸越の見ず知ぬよの人計名にのみ聞てやみねとや思ふいかにして露をば袖に誘らむまだ見ぬ里の荻の上風

十九番　見戀　左　有家朝臣　右勝　經家卿

中々にみるめ計りは難くとも遂に近江の海と賴めよ漁火の仄見てしより衣手に磯べの浪のよせぬ日ぞ無き

二十番　左持　季經卿　右　權大夫

今日やさば暫も戀の隙ならむ見るに慰む思なりせば色に出づるつらき氣色を見ても猶思返らぬ心也けり

二十一番　左　兼宗朝臣　右勝　信定

見ずも非ず見もせぬ中の故にだ人は思の附かぬ物かは見ればげに中々にとて疎くとも猶俤の離るべきかは

二十二番　左勝　顯昭　右　家隆

妹が島荒磯による浮みるの憂をもみるは見ぬに優れり思ひかねそ澤の根芹を摘みてだに心の跡を爭で殘さむ

二十三番　左持　定家朝臣　右　寂蓮

うしつゝ淺香の沼の草の名よ假にも深きえには結ばで斯りける姿の池の鴛の聲きゝては袖のぬれし數かは

二十四番　左勝　女房　右　隆信朝臣

忘れずよほの〳〵人を三島江の黄昏なりし蘆の迷に花の色に移る心は山櫻かすみのまより思ひそめてき

二十五番　尋戀　左持　有家朝臣　右　權大夫

連なさの又如何ならむ尋ねあふ事だに難き人の行末

尋ね來て逢はぬ思に最どしく歸る遠さを添てける哉

二十六番　左勝　兼宗朝臣　右　經家卿

今日も亦歸らむ憂さを思ふかな尋ね侘びにし心習に

今宵さへ唯や歸らむ月故に友を尋ねし人ならなくに

二十七番　左持　顯昭　右　家隆

尋ても逢はずは憂さや增りなむ心盡しにいきの松原

行き逢はむ契も知らず花薄ほのみし野べに迷ぬる哉

二十八番　左持　季經卿　右　寂蓮

儻の徵と杉を三輪の山とひつゝ來たるかひし無ければ

三輪の山杉たつ門をとへとだに賴めぬ道に迷ふ頃哉

二十九番　左持　女房　右　信定

尋ねつる道に今宵は更けにけり杉の梢の有明のつき

心こそ行くへも知らぬ三輪の山杉の梢の夕暮のそら

三十番　左勝　定家朝臣　右　隆信朝臣

面影は教へし宿に先だちて答へぬ風の松にふくこゑ

尋ぬれば例やはなき幻のよをへだてたる波の上にも

一番　祈戀　左持　有家朝臣　右　經家

今はさば戀の奴の行く末も賴むみ親の神にまかせむ

諸戀に今は慰むみごもりの神の驗もありとこそきけ

二番　左持　兼宗朝臣　右　權大夫

いざさらば生田の杜に祈りみむ賴む方なき戀の病を

哀とも思ひもや知る我戀をなげきの杜の神に祈らむ

三番　左勝　季經卿　右　隆信

長らへむ契迄をば知らねども一夜が程も神を賴まむ

願事を神もちかふる身也鳧つらかれと杜今は祈らめ

四番　左　顯昭　右勝　信定

石川や蟬の小川に忌串立てねぎし逢瀨は神に任せつ

思ひかねその子の許にゆふ懸て戀こそ渡れ三川の橋

五番　左勝　定家朝臣　右　家隆

年もへぬ祈る契は初瀨山尾上の鐘のよそのゆふぐれ

朽ちはつる袖の例となりねとや人を浮田の杜の占繩

六番　左勝　女房　右　寂蓮

幾夜我波に萎れて貴舟川袖に玉ちるものおもふらむ

貴船川百瀨は浪も分け過ぎぬ濡れ行く袖の末の賴に

七番　契戀　左勝　顯昭　右　經家卿

葛城や夜の契は空しきに物思ふ橋はなどやと絶えぬ

賴むるに露の命をかけつればこの言の葉ぞ置所なき

八番　左勝　兼宗朝　右　權大夫

行末は逢見て猶や知らるべき今日は其日と契る計ぞ

待てと云し共言の葉に懸りつる露の命も消ぬとをしれ

九番　左　季經卿　右勝　寂蓮

儻のことの葉ならむと思へども契は猶も情なりけり

賴べき椙の丸寢の言葉は思絶ぬかと云はぬばかりぞ

十番　左勝　女房　右　隆信

生けらばと誓ふ其日も猶來ずばあだなりの雲を其と眺めよ

言の葉に暫しも止る露の命かけむ懸じは君に任せつ

十一番　左　定家朝臣　右勝　信定

あぢきなし誰も儚き命もて賴めば今日の暮を賴めよ

唯賴め譬へば人の儻を重ねてこそはまたもうらみめ

十二番　左勝　有家朝臣　右　家隆

先の世を思ふさへこそ嬉けれ契も今日の契のみかは

扨も猶人の心を知らぬまは契るさへこそ思ひ也けれ

十三番　待戀　左　顯昭　右勝　信定

入會の音に附ては待たれしをねよとの鐘に思弱りぬ

宵のまを閨過ぐすだに苦しきを鳥の音を鳴袖の上哉

十四番　左勝　季經卿　右　中宮權大夫

連なきを怨しよりも割なきは賴むる暮を待にぞ有ける

今宵こそ床打拂ひ待つ方の風の音さへ嬉しかりけれ

十五番　左勝　兼宗卿　右　經家朝臣

思ひやる心使ひの幾かへり我が待つ人を驚かすかな

さりともと思鎭むるかひぞなきまだこぬ程の心騷に

十六番　左勝　有家朝臣　右　寂蓮

更に皃頼めぬ鐘は音づれて七ふたびしき十ふの菅薦
けふは又憂きに頼の變れ共待つとてや知安き物思かは
十七番　左勝女房　右　家隆
逢生の末葉の露の消え返り猶此の世にと頼む物かは
頼めとや頼めし宵の更くるこそ且々變る心なりけれ
十八番　左持定家朝臣　右　隆信朝臣
風つらき本荒の小萩袖にみて更行くよはに颯る白露
こぬ人を何に啣たむ山端の月は待出てさよ更にけり
十九番　遇戀　左　季經卿　右勝經家卿
戀衣萎れし袖はそれながら今宵はつまに重ねぬる哉
懸りける涙の色を哀れとは新手枕のそでにしるらむ
二十番　左持有家朝臣　右　權大夫
果もなく行方も更に知らざりし戀の限は今宵也けり
明けば先逢はぬ物故君こふと諫めし人に斯と知せむ
二十一番　左勝兼宗朝臣　右　家隆
菅菰のみふには我も寢たれ共逢ふ嬉さにしく物ぞなき
戀々て逢見るよはぞ增りける人の心の知まほしさに
二十二番　左持女房　右　隆信朝臣
唐衣重ぬる契朽ちずして幾夜の露を打ちはらふらむ
夜を重ね返す衣の怨みても現までとは思はざりけり
二十三番　左勝定家朝臣　右　信定
暮まじき明日より後の心ち哉慣て悲しき思添ひなば
逢見てばまづと思ひし言の葉に心の露の猶重きかな
二十四番　左勝顯昭　右　寂蓮
死ぬ計嬉きにこそ知られけれ逢に命をかふと聞しは
命かは逢ふに心や替つらむ惜からぬ身ぞ惜く成行く
二十五番　別戀　左　顯昭　右勝權大夫
夜枯せし折は怪しく覺えしをされば遂に行へ知れぬ
忘れじと契る計を名殘にてよそに成なむ事ぞ悲しき
二十六番　左　季經卿　右勝信定
何か我がけさの名殘を嘆かまし歸る程なく暮るゝ間も
暫しなる今朝の別に見つるかな心變りの行く末の夢
二十七番　左勝定家朝臣　右　經家卿
變れ唯別るゝ道の野べの露の命に向ふものは思はじ
別路の有りける物を逢坂の關を何しに急ぎこえけむ
二十八番　左持有家朝臣　右　寂蓮
つれもなく逢ふに命の長らへて今日は別に變べき哉
逢ふまでの思は事の數ならで別ぞ戀の始めなりける
二十九番　左持兼宗朝臣　右　隆信朝臣
思へ唯只なそ〳〵の人だにも別るゝ道は悲からずや
喜べば又と思し程の別だに名殘は生ける心ちやはせし
三十番　左勝女房　右　家隆
忘れじの契を頼む別れかな空行く月の末をかぞへて
風吹かば嶺に別れむ雲をだに有し名殘の形見ともみよ
一番　顯戀　左　季經卿　右勝經家卿
身に餘る戀は中々善かりけり人目を忍ぶ歎なければ
鶉ゐる磯の松がね波かけて顯れにける戀ぞわりなき
二番　左勝兼宗朝臣　右　家隆
干しかねし袂は早く朽ち果てゝ戀ぞ涙に顯れにける
忍びこし思を今は忘られむよその人目も歎く計りに
三番　左持有家朝臣　右　信定
袖の上に懸る涙の白玉を包まねばこそ世には散らめ
よしさらば逢で重ぬる濡衣の怨に朽つる妻も有なむ
四番　左　定家朝臣　右勝權大夫
よしさらば今は忍ばで戀死なむ思にまけし名にだたれ
君こふと人には知れぬ如何にして逢ぬ浮名を今はまむ
五番　左　顯昭　右勝隆信朝臣
我戀は涙の雨のよにふりて袖より外に顯はれにけり
人しれぬ心の内に染し色も千入になれば隱れざり鳧
六番　左勝女房　右　寂蓮
袖のなみ胸の煙は誰も見よ君が浮名の立つぞ悲しき
うとからぬ人こそ今は恨みけれ忍びし程の心强さを
七番　稀戀　左持顯昭　右　信定
語らひし我が戀妻や郭公たまさか山に聲のほのめく
絶えに果てぬ情の山に雲消えてはるゝ心や星あひの空
八番　左勝有家朝臣　右　家隆
天の河秋の七日を眺めつゝ雲のよそにも思ひける哉
斯りける契ならずば七夕の心の程をいかで知らまし
九番　左持季經卿　右　寂蓮
自ら絶えぬ情に忘られて積るつらさを恨みやはする
今は只思ひ出づるぞ哀なる忘れはつべき中の絶間を
十番　左　女房　右勝權大夫
有し夜の袖の移香消果てゝ又逢ふ迄の形見だになし
撮絶えぬ情ばかりは有ながら忘るゝ程の逢事ぞうき
十一番　左　定家朝臣　右勝經家卿
年そふる見るよな〳〵は重らで我も無名は夢かとぞ思ふ
心ざしあるか無きかの忘水いかなる折に思出づらむ
十二番　左勝兼宗朝臣　右　隆信朝臣
唯に又千夜に一夜の夜枯して流石に我を思出づらむ
爭で猶斯る絶間を過す身の一夜をだにも明し兼けむ
十三番　絶戀　左勝女房　右　隆信朝臣
休らひに出にし人の通路を古き野原とけふは見る哉
知らざりき今はと云ひし曉を頼て誠の言の葉ぞとは
十四番　左勝季經卿　右　經家卿
恨みこし其の古に變らぬは絶えぬる後の心なりけり
何故に忘られにける我身ぞと人傳にても如何聞べき
十五番　左勝有家朝臣　右　家隆
侘つゝは音する風の傳もがな荻の上葉の枯果ぬとも
淺ましや淵とせく瀬の末だにも斯絶果つる程はみえぬを
十六番　左持兼宗朝臣　右　權大夫
さりともと待し月日も過ぬればこや絶果る始なる覽
いかにこには疎く成行君ならむ絶べき程の契をやせし
十七番　左　顯昭　右勝信定
海原の根やはら小菅今更に誰に引れて見えぬなる覽
さしも我絶ず忍し中にしも渡してけりな久米の岩橋
十八番　左持定家朝臣　右　寂蓮
心さへ又よそ人になりはてば何か名殘の夢の通ひ路
思侘び哀幾夜か槇の戸を暫しと云はで月を見つらむ
十九番　恨戀　左　顯昭　右勝隆信朝臣
引替へて荒き心をみたらをの細々とこそ恨かけつれ
露繁き秋の野もせの眞葛原いつ迄よその物と聞らむ
二十番　左　季經卿　右勝權大夫
淺ましや何と恨のそひねらむ戀計りをも歎べき身に
思きや逢人もなき戀路より深き恨におり立たむとは
二十一番　左勝女房　右　經家卿
浪ぞよる偖はみるめはなき物を恨慣だる志賀の里人
君故に涙の河にゆらさるゝ落標ともなりはてねとや
二十二番　左持定家朝臣　右　寂蓮
あらざらむ後の世までも恨ても其侘をえこそ疎まね
さても猶頼む心や殘しけむ恨るさへ恨めしきかな
二十三番　左勝兼宗朝臣　右　家隆

九九身のうさは思ふによらぬ世なれ共君計をば猶や恨みむ
〇〇今は又我も心や變るらむ戀しき人のうらめしきかな
二十四番　左　有家朝臣　右勝信定

一〇君ぞうき空やはつらきともすれば哀あなうと打詠つゝ
二〇物思ふ心の秋の夕まぐれなくずが原に風わたるなり
二十五番　舊戀　左勝女房　右　寂蓮

三〇末までと云しばかりに淺茅原宿も我名も朽や果なむ
四〇斧の柄も年ふる程はしる物をなど我戀の朽るよもなき
二十六番　左持季經卿　右　權大夫

五〇つれなさの心ながさを引かへて絕ぬ契と思ましかば
六〇つれなさも戀ふる憂身も年をへて心長さは變ざり鳥
二十七番　左　顯昭　右勝家隆

七〇我中をふるの荒田と打捨てゝ誰に行會のわせ作る廬
八〇山深み苔の下もる谷水や年ふる戀のなみだなるらむ
二十八番　左持定家朝臣　右　隆信朝臣

九〇いかなりし世々の報のつらさにて此年月に弱らざる覽
一〇年へにしつらさに堪て長らふと聞れむさへぞ今は悲しき
二十九番　左勝兼宗朝臣　右　經家卿

一一今はたゞ昔語になりはてゝ戀も我身を離れざしかば
二一世の人の昔語になりなゞし憂に堪たる我身ならずば
三十番　左持有家朝臣　右　信定

三一我戀はふる野の道の小笹原いく秋風に露こぼれきぬ
四一戀ひ初めし心はいつぞ石上都の奥のゆふぐれのそら
一番　曉戀　左勝顯昭　右　寂蓮

五一夜を深み屢なく影は我如く寢ても覺ても戀や術なき
六一逢見ては憂折節も鳥の音に思出づれば戀しかりけり
二番　左持兼宗朝臣　右　權大夫

七一物思ふ我が心にもたぐへばや哀をそふる明暮のそら
八一恨みかねど返す衣のしるしだになき曉はいかゞ悲しき
三番　左持季經卿　右　家隆

九一後朝に今やならむのあらましに逢ぬ床さへ起ぞ遣れぬ
〇二明ぬとて別し空の鐘の音は音づるゝさへ恨めしき哉
四番　左　有家朝臣　右勝隆信朝臣

一二連なさの類迄や（はゞ歟）つらからぬ月をもめでじ有明の空
二二逢ふと見る情もつらし曉の露のみ深き夢のかよひち
五番　左　定家朝臣　右勝信定

三二面影も別に返る鐘の音にならひ悲しきしのゝめの空
四二曉の涙やせめてたぐふらむ袖に落ちくる鐘の音かな

五二月やそれほの見し人の面影を忍びかへせば有明の空
六二終夜苦しき戀に晴れやらぬ心まどひやあけくれの空
七番　朝戀　左持季經卿　右　隆信朝臣

七二今朝よりはさらば涙に任せてむ絞合ふべき袖の雫か
八二我如く人や戀しき見るまゝに頓てしをるゝ朝顏の花
八番　左勝兼宗朝臣　右　權大夫

九二早晩と今朝やる文のとのはゝ逢ふ嬉しさと飽ぬ恨と
〇三今は只戀に我身の弱りつゝ明ぬと聞けば起ぞわられぬ
九番　左　有家朝臣　右勝經家卿

一三空晴て山端出づる日影にも乾きもやらぬ袖の上かな
二三澤に出て朝菜摘とも覺えぬに怪しき程に濡るゝ袖哉
十番　左持顯昭　右　寂蓮

三三朝戸出の妹が振こす黒髪は見るよそめさへ心亂れぬ
四三立返り惜みし袖の移香をよそにも今は思ひこそやれ
十一番　左　定家朝臣　右勝信定

五三雲懸り重なる山を越えもせで隔て增るは明る日の影
六三いざ命思ひは夜半に盡きはてぬ夕べもまたじ秋の曙
十二番　左　女房　右勝家隆

七三獨寢の袖の名殘の朝しめり日影に消ぬ露もありけり
八三道芝を分て露けき袖ならば濡ても暮を待たまし物を
十三番　晝戀　左　女房　右勝權大夫

九三物思へば隙行く駒も忘られて暮す涙をまづ抑ふらむ
〇四人しれぬ戀忘貝拾ひかね潮のひる間も袖は濡れけり
十四番　左　顯昭　右勝隆信朝臣

一四みに過てうまこそ物は悲しけれ戀や羊の歩なるらむ
二四命さへ身の終にや成ぬ覽けふ暮すべき心地こそせね
十五番　左持兼宗朝臣　右　寂蓮

三四歸つる今朝社あらめいかにこに晝間もしらぬ袖の氣色ぞ
四四自ら暮れ行く空を待つ程も賴む事とは夢路なりけり
十六番　左　季經卿　右勝信定

五四月を見て暫し思も忘られひるまぞ戀の慰めはなき
六四傾ぶかぬ妹が心の日影かな中空にのみ物の思ひして
十七番　左勝定家朝臣　右　經家卿

七四大方の露はひるまぞ別ける我袖一つ殘るしづくに
八四明ぬれば晝と聞しをいかなれば戀する袖は濡增らむ
十八番　左勝有家朝臣　右　家隆

九四雲となり雨となるてふ中空の夢にもみえよ夜半ならず共
〇五暮ぬまは斯りければや山鳥も夜はの思に契かへけむ
十九番　夕戀　左勝季經卿　右　隆信朝臣

一五連無てけふも過ぬと思ふには暮るゝ空さへ恨しき哉
二五生憎に物ぞ悲しき待し日は曇る空さへ嬉しかりけり
二十番　左勝兼宗朝臣　右　權大夫

三五玉鉾の道ゆく人も心ありてこむと賴めよ此夕げには
四五逢事を賴むる暮と思ひせば入相の鐘も嬉しからまし
二十一番　左勝有家朝臣　右　經家卿

五五あらましに心はつきぬ今宵とて待たばと思夕暮の空
六五心さへかき暮す哉つく〳〵と思入る日の空を眺めて
二十二番　左持顯昭　右　寂蓮

七五夕ぐれ一つ離れて飛鳥も寢に行方は有けりとみゆ
八五今は我待たじと思ふ心さへ又かき亂す蛛のふるまひ
二十三番　左勝女房　右　家隆

九五君も又夕やわきて詠むらむ忘れずはいふ荻の風かな
〇六時しもあれ悲しかりける思かな秋の夕には人は忘れじ
二十四番　左勝定家朝臣　右　信定

一六戀侘びて我と詠めし夕晩もなるれば人の形見顏なる
二六曙の哀れはかりは忍ぶれどけふをば出でず春の夕暮
二十五番　夜戀　左持顯昭　右　權大夫

三六拂つる夜床は答もなき物を來ぬ人故に疎くなりぬる
四六戀かぬる我をば置て誰にさば枕交して妹はねぬらむ
二十六番　左勝季經卿　右　家隆

五六慰めてまどろむ程の戀ならば夜さへ物は思ざらまし
六六目に見えぬ夜叓增れ天雲のよそに成行人のつらさは
二十七番　左　兼宗朝臣　右勝隆信朝臣

七六こぬ床は明くる賴もなき物を隙や白むと待ぞ怪しき
八六賴めつゝ更行夜半を歎ても鳥の音をやは待明しつる
二十八番　左勝定家朝臣　右　經家卿

九六賴めぬを待つる宵も過果てゝつらさ閉むる片敷の床
〇七我戀や衛士のたく火となりぬらむ夜のみ獨燃明す哉
二十九番　左持有家朝臣　右　寂蓮

一七寢覺まで猶苦しきは往き還り足もやすめぬ夢の通路
二七忘らるゝ身をば思はで立田山心にかゝる沖つしら波
三十番　左勝女房　右　信定

三七見し人の寢くたれ髮の面影に涙かきやる小夜の手枕

[七]見せばやな夜床に積る塵をのみはらましとに拂ふ氣色を
一番　老戀　左　季經卿　右勝　隆信朝臣
[七]昔我れ振分髪を見てしより戀に亂れて老ぞしにける
[五七]色に染む心は同じ昔にて人のつらさに老をしるかな
二番　左持　有家朝臣　右　權大夫
[七七]逢見てし身にやは年の積べき我老らくになしと答る
[八七]包めども老蘇の森の薄紅葉たへでも色に出にける哉
三番　左　顯昭　右勝　經家卿
[九七]云ひ渡る我年波を初瀬川映れる影もみつわさしつゝ
[八]姿こそ雪降にける身なれども袖は涙に色めきにけり
四番　左勝　女房　右　家隆
[一九]君故に厭ふも悲し鐘の聲やがて我世も更けにし物を
[二八]玉箒手にとる程も思ひきやかりにも戀を志賀の山人
五番　左持　兼宗朝臣　右　信定
[三八]いはぬ間は思ふ心も九十九髪さば偽の夢や見てまし
[四八]戀ひそめし心の色に積む年は我黒髪に現はれにけり
六番　左勝　定家朝臣　右　寂蓮
[五八]曉にあらぬ別も今はとて我がよふくればそふ思かな
[六八]翁さび身は惜からぬ戀衣今はと濡れむ人なとがめそ
七番　幼戀　左　顯昭　右勝　隆信朝臣
[七八]筒井筒井筒にかけしたけよりも過ぬや通ふ心深さは
[八八]筒井づにかけし例をいかで我結び知らせむ春の若水
八番　左　有家朝臣　右勝　權大夫
[九八]いかにして戀てふことを知ぬらむ物の心も昨日けふこそ
[一九]今はさば思ひ亂ると知せてむ振分髪も肩すぎにけり
九番　左　兼宗朝臣　右勝　寂蓮
[二九]思ひわく心もしらぬよそ人はまだ幼き音とや聞らむ
[三九]何となく遊馴ぬる筒井づの影離れ行く音のみ泣れて
十番　左持　季經卿　右　信定
[四九]年をへて遂に逢ふべき中ならば齡計を歎かざらまし
[五九]比べこし振分髪のそのかみも遂の思ひや猶通ひけむ
十一番　左勝　定家朝臣　右　經家卿
[六九]葉を若みまだ臥慣ぬ吳竹のこは萎るべき袖の上かな
[七九]情なく風に從ふ姫百合は露けき床やならはざるらむ
十二番　左勝　女房　右　家隆
[八九]行末の深きえにとぞ契りつるまだ結ばれぬ淀の若菰
[九九]結ばむと契りし人を忘れめやまだ影淺き井手の玉水
十三番　遠戀　左持　有家朝臣　右　隆信朝臣

[九九]行通ふ心の戀を知べにてまだ見ぬ嶺を幾重こゆらむ
[一〇]尋ぬべき程をきくにもいとゞしく心の道ぞ先惑ぬる
十四番　左持　兼宗朝臣　右　經家卿
[一〇]幾返り我身のうさを知らずして心盡しの人を戀らむ
[二〇]君が住む阿武隈川の名のみしてよそ乍のみ戀や渡らむ
十五番　左　季經卿　右勝　權大夫
[三〇]行返り心は程もなかりけり幾雲居とも知らぬ中にも
[四〇]思ひやる程は苦しき戀路にも心は易く通ふなりけり
十六番　左　顯昭　右勝　家隆
[五〇]思ひこそ千嶋の奥を隔てねどそこ通はさぬつぼの碑
[六〇]思ひやる心いく重の嶺越て忍の奥をたづねいるらむ
十七番　左勝　定家朝臣　右　家隆
[七〇]悲しきは境異なる中にしてなき魂迄やよそに浮れむ
[八〇]忘れずよ幾雲居とはしらね共空行く月の契ばかりは
十八番　左持　女房　右　信定
[九〇]戀しとは便につけて云遣りき年は返らず人は返らず
[一〇]遙かなる幾草枕結びてか其の下紐のとけむとすらむ
十九番　近戀　左持　有家朝臣　右　經家卿
[一一]聞慣てさても心は慰まず聲の通ふはかひなかりけり
[二一]睦言の通はぬ中と成ぬれば聲はきけどもかひ無り鳧
二十番　左勝　兼宗朝臣　右　隆信朝臣
[三一]いかなれば程なき中の通路も逢見ぬよはゝ苦しかる覽
[四一]思ひこそ遠き程だに知べなれ年も通はむ中の隔ては
二十一番　左勝　季經卿　右　信定
[五一]重ねずと思ふばかりぞ小夜衣匂ひは袖に移りぬる哉
[六一]匂ひくる梢ばかりを情にてあるじは遠き宿の梅が枝
二十二番　左持　定家朝臣　右　寂蓮
[七一]涙せく袖のよそめはなるれ共忘ずやとも問隙ぞなき
[八一]梅が枝の末こす中の垣根より思ふ心や色にみえまし
二十三番　左持　顯昭　右　家隆
[九一]隔てける雜の島の割なさに住かひなしや千賀の鹽竈
[二一]忍草ならぶ軒端の夕暮に思ひを交すさゝがにのいと
二十四番　左　女房　右勝　權大夫
[三一]蘆垣の上吹き越ゆる夕風に通ふもつらき荻の音かな
[四一]蘆垣のま近き程に住人のいつか隔てぬ中となるべき
二十五番　旅戀　左勝　女房　右　經家卿
[五一]枕にも跡にも露のたまちりて獨起居は小夜の中やま
[六一]草枕獨りあかしの浦風にいとゞ涙ぞ落ちまさりける

[二一]二十六番　左勝　季經卿　右　權大夫
[三一]都にて慣にし物を獨寢の片しく袖はなにかさびしき
[四一]妹だにと待とし閉かば小動搖の急ぐ舟路も嬉からまし
二十七番　左持　兼宗朝臣　右　家隆
[五一]思ひ置く人ある身には頓て此旅の道こそ戀路也けれ
[六一]戀り行く涙の色ぞあはれなる草の枕の日數しられて
二十八番　左勝　有家朝臣　右　隆信朝臣
[七一]旅寢する我をば床の主にて枕にやどるさよのおも影
[八一]まばろまぬ其よな〳〵を數ふれば夢路も遠き草枕哉
二十九番　左持　顯昭　右　寂蓮
[九一]きさかたや妹戀しらにさゆる夜の磯の寢覺に月傾ぬ
[一二]清見潟岩しく袖の波の上に思ふも侘し君がおもかげ
三十番　左持　定家朝臣　右　信定
[二二]故郷を出でしにまさる涙哉嵐のまくら夢にわかれて
[三二]東路のよはの詠をかたらなむ都の山にかゝる月かげ
一番　寄月戀　左勝　顯昭　右　隆信朝臣
[四二]慰めし月にも果は音をぞなく戀や空しき空に滿らむ
[五二]月よ猶隈こそなけれかき昏す戀の涙は雨と降れども
二番　左　兼宗朝臣　右勝　寂蓮
[六二]いかで猶戀しき人を山端に待出でゝ見る月と思はむ
[七二]雨ふれど侘ても如何秋の夜の月故ならで人を待べき
三番　左持　季經卿　右　中宮權大夫
[八二]連もなき人をも誘へよはの月影計だによそに見やと
[九二]秋の月妹が面影誘ひきて我が心にもやどすなりけり
四番　左　有家朝臣　右勝　家隆
[一三]物思ふと月故ならで月を見て幾夜曇らぬ空も曇りぬ
[二三]いかにして殘る心の有ければ人を恨て月を見るらむ
五番　左持　定家朝臣　右　信定
[三三]休らひに出にしまゝの月の影我涙のみ袖にまてども
[四三]恩にも思ひやるかな君も若し獨や今宵月を見るらむ
六番　左勝　女房　右　經家卿
[五三]袖の上になるゝも人の形見かは我と宿せる秋夜の月
[六三]獨すむ宿の氣色を哀とやうき身と共にありあけの月
七番　寄雲戀　左　顯昭　右勝　經家卿
[七三]人目きす豐旗雲も何ならず月なき戀の闇し晴れねば
[八三]いかなれば心も空に浮雲の斯る戀する身と成にけむ
八番　左　季經卿　右勝　寂蓮
[九三]戀すれば心は空に浮雲の思ひ鎭むるかたなかりけり

人しれぬ恨は空の雲なれや積れば袖の雨と降るらむ
九番　左　兼宗朝臣　右勝　信定
戀侘て心空なる浮雲や行くへもしらず果はなるべき
戀死ぬるよはの煙の雲とならば君が宿にや分きて知れむ
十番　左勝　定家朝臣　右　中宮權大夫
時の間に消えて疎く白雲の暫しも人に逢見てしがな
あくがるゝ心も空に目數へて雲に宿かる物思ひかな
十一番　左持　有家朝臣　右　隆信朝臣
我戀や晴行く儘の空の雲よそにのみして消ぬべき哉
おのづから閨漏る月も影消えて獨悲しき浮雲のそら
十二番　左持　女房　右　家隆
君がりとうきぬる心迷ふらむ雲は幾重ぞ空の通ひ路
思ひやる詠めも今は絶えねとや心をうつむ夕暮の空
十三番　寄風戀　左　季經卿　右勝　經家卿
獨寢の憂身になるゝ秋風をつれなき人の心ともがな
夕まぐれ吹來る秋の初風は戀せぬ人も身にやしむ覽
十四番　左　兼宗朝臣　右勝　中宮權大夫
獨寢の床に吹きくる秋風の又我戀をおどろかすかな
つてにだに訪ぬ君哉吹く風も松にはとに音する物を
十五番　左　顯昭　右勝　隆信朝臣
心あひの風疎方に吹ぬらむ我には散すとの葉もなし
色に出でし言の葉も皆枯果てゝ涙を散す風の音かな
十六番　左持　定家朝臣　右　家隆
出でざりし夜深き風の音も似ず手枕疏き秋の此方は
物思ふ身も習はしの荻の葉にいたくな吹そ秋の夕風
十七番　左　女房　右勝　信定
いつも聞く物とや人の思ふらむこれ夕暮の秋風の聲
心あらば吹かずもあらなむ宵々に人待宿の庭の松風
十八番　左勝　有家朝臣　右　寂蓮
さらでだに恨みむと思ふ吾妹子が衣の裾に秋風ぞ吹
いかなれば露をば拂ふ風の音に物思ふ袖の濕増らむ
十九番　寄雨戀　左　顯昭　右勝　中宮權大夫
下とほる涙に袖も朽ち果てゝくる方もなき蓑衣かな
戀故に身をしる雨の年をへて心の內にかき曇るらむ
二十番　左　季經卿　右勝　經家卿
雨注ぎ人待宵はうかり鳥こや言傳にならむと思へば
頼めねど絶す音する時雨哉戀しき人の斯らましかば
二十一番　左持　兼宗朝臣　右　隆信朝臣

搔暮し降くる雨も君ならばぬるとて更に厭ざらまし
獨寢の床にしもなど音すらむ長閑にそゝぐ曉のあめ
二十二番　左　有家朝臣　右勝　寂蓮
獨りのみ闇の坂間も合はすして雨も涙も所せきまで
深き夜の寢覺に何を思ひけむ窓打ちすさぶ曉のあめ
二十三番　左勝　定家朝臣　右　家隆
さはらずば今宵ぞ君を頼べき袖には雨の時分かね共
こぬ人を待夜更行秋の雨は袖にのみ降る心地社すれ
二十四番　左勝　女房　右　信定
深き夜の軒の雫を數へても猶餘りある袖のあめかな
音とづる宿の軒端の夕詠め戀よりあまる雨の音かは
二十五番　寄煙戀　左持　季經卿　右　隆信朝臣
妹が住む遠路の里の煙だになど我方へ靡かざるらむ
連なさに絶ずなりなむ煙をも我故とやは眺しもせむ
二十六番　左勝　有家朝臣　右　經家卿
戀死なむ後を思へば目にぞたつ其故もなき空の煙も
戀死なむ後は煙とあがるとも君が方へぞ猶靡くべき
二十七番　左持　兼宗朝臣　右　中宮權大夫
うき人に思消たるゝ身の程をしらぬは戀の煙也けり
昔斯戀する人や富士のねのたえぬ煙ともえ始めけむ
二十八番　左　定家朝臣　右勝　信定
限なき下の思の行くへとてもえむ煙の果や見るべき
藻鹽やく浦の煙を風に見て靡かぬ人の心をぞおもふ
二十九番　左勝　女房　右　家隆
忍びかね心の空に立煙見せばや富士の峯にまがへて
富士のねの煙も猶ぞ立ち昇る上なき物は思なりけり
三十番　左持　顯昭　右　寂蓮
などの蜑の燒汐煙空にのみ我名を立てやまむとやする
山田もる鹿火屋が下の煙社焦れもやらぬ類ひ也けれ
一番　寄山戀　左持　顯昭　右　中宮權大夫
年を經て茂る歎をこりもせでなど深からむ物思の山
君に我れ深く心を筑波山茂き歎きにこり果てぬかな
二番　左　有家朝臣　右勝　家隆
我が戀に深さ比べば外山かな吉野の奥の岩のかげ道
踏見ても馴ぬ氣色のつれなさや吉野の奥の岩の陰道
三番　左勝　兼宗朝臣　右　隆信朝臣
戀故に浮世を捨てゝ隱れなば忍の山や栖かなるべき
夢にだにまだ踏も見ぬ忍山深き戀路をいかで尋ねむ

四番　左　季經卿　右勝　信定
年月を思ふかひなく過にける君をきませの山の麓に
吉野山戀の餘りに思入りぬ中々さらば人や訪ふまで
五番　左勝　女房　右　經家卿
末の松待つ夜幾度過ぎぬらむ山こす波を袖に任せて
人知れず君に心を筑波山ひまなき物は歎きなりけり
六番　左持　定家朝臣　右　寂蓮
足びきの山路の秋になる袖は移ろふ人の嵐なりけり
今世には吉野の山の奥だにも有とはつらき人に知れじ
七番　寄海戀　左　顯昭　右勝　寂蓮
鯨とる畏き海の底までも君だに住まば淡路しのがむ
石見潟千尋の底も譬ふれば淺き瀬になる身の恨かな
八番　左持　有家朝臣　右　經家卿
わたの原沖つ汐風に立つ浪のよりこや懸る汀也とも
わたの原深き契や渚なるかたし貝ともなりにける哉
九番　左勝　兼宗朝臣　右　隆信
思へ共まだ見ぬ程はみつ潮に入ぬる磯の例だになし
岩根打荒磯浪の高きこそまだよそながら袖は濡なれ
十番　左持　季經卿　右　家隆
雲居まで續きて見ゆる渡つ海の行へも知らぬ物思哉
伊勢の海の潮瀬に騒く小れ石の碎けて物を思ふ頃哉
十一番　左持　定家朝臣　右　信定
遠ざかる人の心は海原の沖行く舟のあとのしほかぜ
渡つ海の浪のあなたに人はすむ心あらなむ風の通路
十二番　左勝　女房　右　中宮權大夫
よさの海沖つ汐風浦にふけ松なりけりと人に聞せむ
波懸るさしでの磯の岩根松ねに顯れて乾くまもなし
十三番　寄河戀　左持　顯昭　右　信定
聞渡るありなれ河の水に社影を並べて住まほしけれ
涙河逢瀬もしらぬみをつくし丈越す程に成にける哉
十四番　左勝　定家朝臣　右　經家卿
いつかきは又は逢瀬を松浦河此川上に我は住むとも
水無瀬河淺き契と思へども涙は袖に懸けぬまぞなき
十五番　左　有家朝臣　右勝　中宮權大夫
最上川人の心の稻舟もしばしばかりと聞かば頼まむ
飛鳥川淵瀬隙なき世の中に人のつらさぞ變ざりける
十六番　左　兼宗朝臣　右勝　隆信
つれなしと人をぞ更に思河逢瀬もしらぬ身を恨ても

六二遙なる程とぞ聞し衣河片しく袖の名にこそありけれ

十七番　左　季經卿　右勝　家隆

七二人心さのみはいかに水無瀬河我には淺き契なるらむ

八二いかにして影だに見まし澤田河袖つく程の契也とも

十八番　左持　女房　右　寂蓮

九二吉野川速き流をせく岩のつれなき中に身を碎くらむ

〇三ありとても飽ぬ例の名取川朽だに果てよ瀬々の埋木

十九番　寄關戀　左　顯昭　右勝　經家卿

一三逢事は苗代水を引止めてとほし果てぬや小山田の關

二三衣手は清見が關に非ねども絶ゆる夜もなき涙也けり

二十番　左持　定家朝臣　右　隆信

三三身に絶ぬ思を須磨の關すゑて人に心をなど止むらむ

四三逢坂の關の此方に名をとめて是より過る歎せよとや

二十一番　左　有家朝臣　右勝　寂蓮

五三夜を重ぬ心の關の難き哉わがねは鳥の虛音ならねば

六三人しれぬ恨に餘る波の上をおさふる袖や須磨の關守

二十二番　左持　兼宗朝臣　右　家隆

七三先の世に契らざりける身のうさや逢坂山の君が關守

八三頼めてもまだ越ぬまは逢坂の關も勿來の心地社すれ

二十三番　左　季經卿　右勝　中宮權大夫

九二逢見じと思ひかたむる中なれや斯解け難き下紐の關

〇四こひしとも斯は人にも知せなむ思ふ心や門司の關守

二十四番　左持　女房　右　信定

一五故郷に見し面影も宿りけり不破の關屋の杉間もる月

二五人戀る我れ詠めよと思ひけり須磨の關屋の有明の月

二十五番　寄橋戀　左勝　顯昭　右　隆信

三五いさやきは君に逢ずば渡らじと身を打橋に書附てみむ

四五郡思ふ濱名の橋の旅人や波に濡ては戀ひわたるらむ

二十六番　左勝　定家朝臣　右　經家卿

五四人心緒絶の橋に立ち返り木葉ふりしく秋のかよひぢ

六四思はずに緒絶の橋と成ぬれど猶人しれず戀渡るかな

二十七番　左勝　有家朝臣　右　信定

七四斯こそは長柄の橋も絶しかど暫し計の名殘やはなき

八四今も猶長柄の橋は造りてむつれなき戀は跡だにもなし

二十八番　左　兼宗朝臣　右勝　中宮權大夫

九四我れが身や長柄の橋柱戀に朽なむ名をば殘して

〇五くづれ行く板田の橋も遙奠我をこふべき妹ならばこそ

二十九番　左　季經卿　右勝　家隆

一五葛城やくめぢの橋に非ねども絶ぬる中は渡る物かは

二五葛城や渡しもはてぬ岩橋も夜の契はありとこそきけ

三十番　左勝　女房　右　寂蓮

三三戀渡るよはの狹筵波かけて斯や待ちけむ宇治の橋姫

四三古の宇治の橋守身をつまば年ふる戀を哀れともみよ

一番　寄草戀　左勝　兼宗朝臣　右　經家卿

五五忘らるゝ人に軒端のしのぶ草涙の雨に露けかりけり

六五戀妻の頓て軒端に成ぬればいとゞ忍の草ぞしげれる

二番　左勝　季經卿　右　隆信

七五今はさは哀と思へすがの根の長き心の程はみつらむ

八五よと共に乾く間もなき我が袖や汐干も分ぬ波の下草

三番　左持　有家朝臣　右　寂蓮

九五打ち頼む人のけしきの秋風に心の底のかやが下をれ

〇六淺ましやなどか思のさしも草露も置敢ず果は萌らむ

四番　左持　顯昭　右　中宮權大夫

一六百夜草百夜までなど頼めけむ假初臥の榻のはしがき

二六逢事はいつと伊吹の嶺に生るさしも絶せぬ思也けり

五番　左　女房　右勝　家隆

三六人待ちし庭の淺茅生茂り合ひて心にならす道芝の露

四六秋風に靡く淺茅の色よりもかはるは人の心なりけり

六番　左持　定家朝臣　右　信定

五六云はざりき我身古屋の忍草思ひ違へて種をまけとは

六六詠めする心の根より生初めて軒の忍は茂るなるべし

七番　寄木戀　左　顯昭　右勝　隆信

七六相思ふ中には枝も交しけり君が梢はいやをちにして

八六人しれぬ心に君を楢柴の暫しもよそに思はずもがな

八番　左持　定家朝臣　右　中宮權大夫

九六戀死なば苦むす塚に柏ふりて元の契の朽やはてなむ

〇七斯計思ふと君も白樫のしらじな色に出ばこそあらめ

九番　左持　兼宗朝臣　右　信定

一七何となく結ぼゝるらむ君はよも哀とだにも岩代の松

二七人戀ふる宿の櫻に風吹けば花も涙になりにけるかな

十番　左勝　季經卿　右　經家卿

三七うかりける我が深山木の契哉連る枝もありと社きけ

四七涙にはうき深山木も朽ぬべし沖の小島の椒ならねど

十一番　左　有家朝臣　右勝　寂蓮

五七山深み種ある岩に生る松の根よりも堅き戀や何なる

六七契りきなまた忘れずよ泊瀬河ふる河のべの二本の杉

十二番　左持　女房　右　家隆

七七思兼ね打ぬる夜半も有なまし吹だにすさめ庭の松風

八七思ひ侘び詠むれば又夕日さす軒端の岡の松も恨めし

十三番　寄鳥戀　左　女房　右勝　中宮權大夫

九七時しもあれ空飛鳥の一聲も思ふ方より來てや鳴らむ

〇八天の戸をあけぬと告ぐる鳥の音も獨りぬる夜は遙奠

十四番　左持　季經卿　右　經家卿

一八人心つねは卯月の時鳥こと語らはむこゑをきかばや

二八足引の遠山鳥の一聲は我がつまながら怨めしきかな

十五番　左勝　兼宗朝臣　右　家隆

三八鳥の音は戀き人の何なれや逢夜は厭ひ逢ぬ夜ぞまつ

四八如何にして空とぶ程の篝屋の暫も戀に身を休むらむ

十六番　左　有家朝臣　右　信定

五八玉章の絶々になるたくひ哉雲居の雁の見えみ見えずみ

六八思ひかね夜はの袂に風ふけて涙の河に千鳥なくなり

十七番　左　顯昭　右勝　隆信

七八山鳥の初尾の鏡かけねども見し俤にねはなかれけり

八八面影を仄みしまのに尋來て行方も知らぬ鵙の草ぐき

十八番　左勝　定家朝臣　右　寂蓮

九八曝の居る入江の波を心にて胸と袖とに騷くこひかな

〇九さほ川の霧の紛ひの程だにも妻を求むと徭なくよを

十九番　寄獸戀　左持　兼宗朝臣　右　經家卿

一九打ち頼む人の心は荒野に食む熊のおちられにける身社つらけれ

二九戀をのみすがい荒野に食む熊のおちられにける身社つらけれ

二十番　左　季經卿　右勝　中宮權大夫

三九如何がして強面き中を渡るべきおの聲もせぬ駒は有とも

四九道遠み妹が急ぐ其駒に草取飼はむなづみもぞする

二十一番　左勝　定家朝臣　右　隆信朝臣

五九羨まず臥猪の床は安くとも歎もかたみねぬも契りを

六九如何で我臥猪の床に身をかへて夢の程だに契結ばむ

二十二番　左勝　有家朝臣　右　家隆

七九唐國の虎伏す野べに入るよりも迷ふ戀路の末ぞ危き

八九我宿は人も枯野の淺茅原通ひし駒のあともとゞめず

二十三番　左持　顯昭　右　寂蓮

九九身を捨て思へと云はゞ唐國の虎伏す溪に世をもすぐさむ

〇唐土の虎伏す島も隔つらむ思はぬ中の疎きけしきは

二十四番　左持　女房　右　信定

一此のころの心の底をよそに見は鹿鳴く野べの秋の夕暮

二暮れ掛る裾野の露に鹿鳴きて人待つ袖に涙そふらむ
二十五番　寄ㇾ蟲戀　左　顯昭　右勝中宮權大夫
三〇起きもゐで年ふる戀は自ら常世の神や驗しみすべき
四獨臥す長々し夜の悲しきを語らひ明すきり〳〵す哉
二十六番　左　有家朝臣　右勝隆信朝臣
五さりともと待つべき程の情かは人頼めなり蟀の振舞
六〇傷くもさも有らましに待ぬる頼めぬ宵の蟀の振舞
二十七番　左勝兼宗朝臣　右　家隆
七〇蟲の音も秋を限と恨むなり絶ぬ思やたぐひなるらむ
八〇夏蟲も美しくは秋の夜の露にはもえぬ思なりけり
二十八番　左勝季經卿　右　信定
九〇哀にも鳴き明すかな蟋蟀我のみしばる袖かと思ふに
一〇露深き哀れを思へきりぎりす枕の下の秋のゆふぐれ
二十九番　左勝女房　右　經家卿
一つらからむ中こそあらめ萩原や下待蟲の聲をだにきけ
二終夜人まつ蟲の鳴く聲を我身の上になぞへてぞ聞く
三十番　左持定家朝臣　右　寂蓮
三忘れじの契恨むる古里のこゝろも知らぬ松蟲のこゑ
四來ぬ人の秋のけしきや更けぬらば怨に弱る松蟲の聲
一番　寄ㇾ笛戀　左　顯昭　右勝家隆
一獨寢をいまは何にか慰めむ隣の笛も吹きやみぬなり
六夜な〳〵は枕に馴し笛竹も如何なる床に臥變るらむ
二番　左持有家朝臣　右　信定
七よそにのみ隣の笛を聞來しに我身の上にねこそ絶せぬ
八〇終夜よそに聞つる笛の音の片しく袖に移りぬるかな
三番　左勝兼宗朝臣　右　寂蓮
九〇さらぬだに身にしむ夜はの笛音を憂人故に聞ぞ悲しき
一〇我故と思はゞ夜はの笛の音も藻に棲む蟲と袖は濡けり
四番　左持季經卿　右　經家卿
二美しわかり胡竹と笛の音を憑める中の人はきくらむ
三より竹の君に寄けむとぞ憂き一夜の節に音のみ泣れて
五番　左　定家朝臣　右勝中宮權大夫
三笛竹の唯一ふしの契にて夜々の怨みを殘せとや思ふ
四遙々と浪ぢ分けくる笛竹を我が戀妻と想はましかば
六番　左勝女房　右　隆信朝臣
五笛竹の聲の限を盡しても猶うき節やよゝにのこらむ
六我戀はまだ吹馴ぬ横笛の音に立つれ共逢ふ方もなし
七番　寄ㇾ琴戀　左持定家朝臣　右　中宮權大夫
七昔聞君が手馴の琴ならば夢に知れて音をも立てまし
八吾妹子か心も引かぬ琴の音は我が松にこそ遁はざりけれ
八番　左　季經卿　右勝寂蓮
九戀妻は非ぬ調の琴の緒かふと難き音のみたえせぬ
一〇松風に通ふと聞し琴の音も物思時は身にぞしみける
九番　左　兼宗朝臣　右勝經家卿
一逢ぬ間は琴ぢも知ず引琴の聞憎き迄音にや立てむ
二松風も琴の調に通ふなり我が獨寢ぞ逢ふよしもなき
十番　左勝顯昭　右　隆信朝臣
三哀とて聞知る人はなけれ共戀しきとの音こそ絶せね
四等閑に彈くすさむ琴の音も松には通ふ物とこそきけ
十一番　左持女房　右　家隆
五君故も悲き琴の音は立てつ子を思鶴に通ふのみかは
六よそになる人たにつらき琴音に子を思ふ鶴も心知れて
十二番　左勝有家朝臣　右　信定
七すみ馴れし人は棺に絶果てゝ琴の音にのみ通ふ松風
八聞かじ唯つれなき人の琴の音に厭はず通ふ松の風をば
十三番　寄ㇾ繪戀　左勝定家朝臣　右　寂蓮
九主や誰見ぬ世の色を寫し置く筆のすさびに浮ぶ面影
一〇水ぐきの跡にせきおく詭つ瀬を誠に落すわが涙かな
十四番　左勝有家朝臣　右　隆信朝臣
一殊更に誰に心を移すらむ我とすみゑはかき絶にけり
二跡もなく色に成行く言の葉や墨繪をとむる木立なるらむ
十五番　左勝兼宗朝臣　右　家隆
三思ひ餘り繪にかきとめて慰むる妹が上にも涙落けり
四かき止めて變らぬ色も女郎花哀と見れば露ぞこぼるゝ
十六番　左持季經卿　右　中宮權大夫
五人知れず盡す心はかひなきこや繪に書ける姿なるらむ
六いざさらば難面き人を繪に書て見てだに戀の慰めにせむ
十七番　左持女房　右　經家卿
七ます鏡寫しかへけむ姿故影絶え果てし契りをぞしる
八四戀妻に似てや書らむ見つるより繪にも心を移しつる哉
十八番　左　顯昭　右勝信定
九厭はれて胸安からぬ思をば人の上にぞかき寫しつる
一〇如何にせむ繪にかく妹にあらねども誠少き人心かな
十九番　寄ㇾ衣戀　左　顯昭　右勝家隆
一五戀衣いつか干るべき何やしろ驗もなみに嵐と萎れて
二爭で尚よはの衣を返しても重ねし程の夢をだに見む
二十番　左勝有家朝臣　右　信定
三夢絶えて返すかひなき小夜衣怨許りを重ねつるかな
四五ぬる人の夢は幾度さめぬらむ返すかひなき小夜衣哉
二十一番　左　女房　右勝經家卿
六思侘びぬる夜の床の露繁み身のしろ衣かす人もがな
二十二番　左持定家朝臣　右　中宮權大夫
七戀そめし思のつまの色ぞ其れ身にしむ春の花の衣手
八淺かりしその移香は唐衣戀をすゝむる妻にぞ有ける
二十三番　左勝兼宗朝臣　右　寂蓮
九ぬるにこそ夢も見ゆらめ小夜衣返すは淺き思也けり
一〇夢路までうき身の程は小夜衣返すも尚や人知れぬ戀
二十四番　左勝李經卿　右　隆信朝臣
一唐藍の八潮の衣いろ深くなどあながちにつらき心ぞ
二衣々に移りし色はあだなれど心ぞ深き忍ぶもぢずり
二十五番　寄ㇾ席戀　左持顯昭　右　經家卿
三出にける君が淀野の小薦に獨寢してや膚をふれまし
四綾薦立寄る人は無れ共あらましにのみ敷てこそまて
二十六番　左　有家朝臣　右勝中宮權大夫元字
五君故に我さへ疎くなりはてゝ塵のみ積たる床の小薦
六さ薦も哀とや思ふ有ましに來ぬ君まつを打拂ふをば
二十七番　左持兼宗朝臣　右　信定
七憂身故夜枯るゝ床の小薦は敷忍てもかひやなからむ
八戀侘びぬ空しき床の小薦に幾夜幾度ねざめしつらむ
二十八番　左　季經卿　右勝家隆
一君とわがねし小薦の塵なれば形見がてらに打も拂ず
七獨寢の床の小薦朽ちにけり涙は袖にかぎるものかは
二十九番　左持女房　右　寂蓮
一人待つとあれ行く閨の小薦に拂は積る塵をはらふ秋風
二夜もすがら涙流るゝ小薦は拂はぬ塵も積らざりけり
三十番　左勝定家朝臣　右　隆信朝臣
七忘れずば慣れし袖もや誘らむ寢ぬ夜の床の霜の小薦
四分けてこそなかより塵は積りけれ戀の病に沈む小薦
一番　寄ㇾ遊女戀　左　顯昭　右勝中宮權大夫
七芦間わけ月に歌ひてこぐ舟に心ぞまづは乘り移りぬる
六浪の上に下す小舟のむないしく月に歌ひし妹ぞ戀き
二番　左持兼宗朝臣　右　隆信朝臣
七浪の上に浮れて過ぐる戯れめも契人には頼れぬかは

七涙の上に結ぶ契の果よりも戀に沈まむ身社うからめ

三番　左　季經卿　右勝家隆

九浮舟に一夜ばかりの契だになど有難き我身なるらむ

〇八誰となき浮ねを忍ぶ蜑の子も思へば淺き恨なりけり

四番　左持有家朝臣　右　信定

一舟の中にさしも浮たる契まで羨む程のえにぞ有ける

二八其人とわきて待つらむ妻よりも哀は深き浪の上かな

五番　左勝定家朝臣　右　經家卿

三八心通ふ往來の舟の眺にもさしてかばかり物は思はじ

四八舟の内浪の上なる浮ねには立歸るとて袖ぞ濡れける

六番　左勝女房　右　寂蓮

六八誰となく寄せては返る浪枕浮きたる舟の跡も留めず

七八頼方を見てか忍はむ難波女の浮寢の跡に消る白波

七番　寄二傀儡一戀　左　顯昭　右勝經家卿

八八頼むなる淺き神しも幣はせむ君が心や我になびくる

九八鏡山君に心や見つるらむ急ぎたゝれぬ旅ごろもかな

八番　左　兼宗朝臣　右勝信定

九八心ゆく道の旅寢の友ならばいとゞ都や戀しからまし

〇九立宿る一夜計りの契だにさて長らふる人もある世を

一九浮れ女の浮れてありく旅館住みつき難き戀もする哉

二九東路や往來の人に打解けて宿かりそめの契すらしも

十番　左勝定家朝臣　右　寂蓮

三九夜貸す野がみの里の草枕むすび捨てける人の契を

四九恨むべき方こそなけれ東路の野がみの庵の暮方の空

十一番　左持有家朝臣　右　隆信朝臣

五九東路やかやつの原の朝露に置き別るらむ袖は物かは

六九さま〴〵に移る心も鏡山影みぬひとをこふるものかは

十二番　左持女房　右　家隆

七九夜のみ宿かる人の契とて露結びおく草まくらかな

八九結びけむ契もつらし草枕待つゆふぐれの宿を憑みて

十三番　寄二海人一戀　左勝女房　右　中宮權大夫

九九鹽風の吹きこす海人のとまや庭下に思のくゆる頃かな

〇〇みさご居るいそらが崎にあさりする蜑もみるめは尚求けり

十四番　左勝兼宗朝臣　右　經家卿

一一我戀は海人のさかてを打返し思解きてや世をも怨みむ

二一衣手は鹽たるれ共みるめをば被かぬ蜑と成にける哉

十五番　左　顯昭　右勝家隆

三一藻鹽燒蜑のまくかたなれ共戀の染木もいと無りけり

四一思ふには頼ひなるべき伊勢の蜑も人を恨ぬ袖ぞ濡ける

十六番　左勝季經卿　右　寂蓮

五一漣や志賀津の蜑に成に鳧みるめは無くて袖の萎るゝ

六一伊勢の海の底迄潜く蜑なれや見るめに人を思ふ心は

十七番　左持有家朝臣　右　信定

七一よそにやは釣する志賀の蜑を見む枕の下を知せにせは

八一鹽たるゝ袖にあはれの深きより心に浮ぶあまの釣舟

十八番　左持定家朝臣　右　隆信朝臣

九一袖ぞとは小島の蜑もいさりむ干さぬ頼ひに思ける哉

〇二戀をのみしだの浮島浮き沈み蜑にも似たる袖の波哉

十九番　寄二樵夫一戀　左勝女房　右　中宮權大夫

一二戀路をは風やは誘ふ朝夕に谷の柴舟行きかへれども

二二眞柴こる賤にも非ぬ身なれ共戀故我も歎きをそつむ

二十番　左勝季經卿　右　經家卿

三二羨し賤も妻木をたてつめりいつ休むべき戀にかあるらむ

四二思出るかひも無れば山人の逢ぬ妻木に戀やしぬらむ

二十一番　左　兼宗朝臣　右勝信定

五二朝夕に深山に通ふ賤だにも歎きはこらぬ物とこそ聞け

六二賤夫よ思ふは我もこりぬべし己苦しき妻木ならねど

二十二番　左持顯昭　右　隆信朝臣

七二斧の柄を何か怪しと思ひけむ暫しの戀も袖は朽けり

八二淺ましや心をしるる山人も身に負ふ程の歎きとそみる

二十三番　左持有家朝臣　右　寂蓮

九二我戀は繁き深山の山人の流石に待しもこり果ぬかな

〇秋懸て妻木こりつむ山人も燃ゆる思の程は知らじな

二十四番　左勝定家朝臣　右　家

一山深き歎きこるをの已れのみ苦しく惑ふ戀の道かな

二山人の歸る家路を思ふにも逢ぬ歎きぞ休むまもなき

二十五番　寄二商人一戀　左　顯昭　右勝隆信

三逢初て後は飾磨の市にても夜枯かちをは變じとぞ思ふ

四尋ぜや灰に三輪の市に出でて命に代ふる驗ありやと

二十六番　左勝兼宗朝臣　右　信定

五戀しきに逢と代へむ市もがな難面き人の心をもみむ

六あき人の舟の昔を思ふにもうらみは深き涙なりけり

二十七番　左勝季經卿　右　經家卿

七倭路や輕の市女にこと問はむ逢につらさをいかゝ代べき

八立暮す市女もさこそ歎くらめ心を變へて思ひ知る哉

二十八番　左　定家　右勝中宮權大夫

九辰の市や日を待賤の其ならばあす知ぬ身に代て逢まし

一〇志あへの市路にたつ人はこひに命をかへむとやする

二十九番　左勝有家朝臣　右　寂蓮

一一よそにても君をし三輪の市ならば行交ふ賤に立も後れじ

一二住侘て世をふる路は知られね共難波の芦の假にだにみむ

三十番　左　女房　右勝家隆

一三年深き入江の秋の月見ても別れ惜まぬ人やかなしき

一四ともすれば別を知ぬ浪の上に掻なすねをも人は問けり

判者入道判書の奥に書きつけて云ふ

住吉の松は哀をかけやせむ八十路過ぬる和歌の浦浪

左勝軍の御返事に云ふ

和歌浦の知べとなれる老の波げに住吉の松も知らむ

和泉式部集

和泉式部集第一

春

七三春霞たつや遅きと山河の岩間をくゞる音さこゆなり
八三春日野は雪降積むとみしか其おひ出る物は若菜也鳧
九三引連て今日は子日の松に又今千年をぞ野べに出つる
〇四春は唯我宿にのみ梅咲けば枯にし人も見にとぞなまし
一四花にのみ心を懸て自ら人はあだなる名ぞ立ちぬべき
二四春の日をうら〳〵傳ふ蟹はしぞあな徒然と思しもぜし
三四春夜はい社ねられね起居つゝ守るに止る物ならなくに
四四梅が香に驚かれつゝ春夜の闇社人はあくがらしけれ
五四秋迄の命も知らず春の萩の古枝をやきとやく哉
六四見るまゝに下枝の梅も散果ぬさも待遠に咲く櫻かな
七四人もみぬ宿に櫻を植たれば花もて寥す身とぞ成ぬる
八四我宿の櫻はかひも無りけり主からこそ人も見にくれ
九四春雨の日をふるまゝに我宿の垣根の草は青み渡りぬ
〇五狩人の暇もいらし草若みあさる雉子の隠れなければ
一五徒然と物思ひをれば春の日のめにたつ物は霞也けり
二五みにとくる人だにもなし我宿のはひりの柳下拂へ共
三五隠沼もかひ無り鳥春駒のあされば荒のねだに殘らず
四五河邊なる所は更に多かるをゐでにしもさく山吹の花
五五岩躑躅折もてぞみるせこがきし紅染の衣に似たれば
六五花は皆散りはてぬめり春深き藤だに散るな今暫しみむ

夏

七五櫻色に染めし衣をぬぎかへて山時鳥けふよりぞ待つ
八五まねども物思ふ人は自から山時鳥まづぞ聞きつる
九五庭の儘うる〳〵生る夏草を分けて計にこむ人もがな
〇六夏の日のあしに當ればさし乍ら儚く消ゆる道芝の露
一六夏の夜は槇のと敲き門たゝき人頼めなる水鶏也けり
二六山川の垣根に見えし卯花はみ□さきの盛也けれ
三六かざゝじと誰か思はむ千早振神のまれ〳〵許す葵を
四六己がみな思ひ〳〵に神山のこのて柏と手毎にぞとる
五六常夏に起臥す露は何なれやあつれてせこが間遠なる覽
六六手に掬ぶ水さへぬるき夏の日は涼き風もかひ無り鳧
七六眞菰草同じ汀におふれどもあやめを見てぞ人も引ける
八六夏夜は照射の鹿のめだにも合せぬ程に明ぞしにける
九六螢火は木の下草も暗からず月の闇は名のみ也けり
〇七人の身も戀には替つ夏虫の顯はにもゆと見えぬ計ぞ
一七詠には袖さへ濡ぬ梅雨におりたつ田子の裳裾ならねど
二七花こそあれ花橘を宿にうゑて山時鳥まつぞくるしき
三七蚊遣火の烟けぶたき阿武隈に夜は暑さも覺えざり鳧
四七聲聞けば暑さぞ増る蟬の羽の薄き衣は身にきたれ共
五七思事皆つきねとて麻の葉を切りに切てもはひつる哉

秋

六七朝風にけふ驚きて數ふれば一夜の程に秋は來にけり
七七一日だに休みやはする七夕に貸ても同じ戀社はすれ
八七うしと思ふ我身の秋に非ね共萬につけて物ぞ悲しき
九七根ごじにもほらばほらなむ女郎花人に後るゝ名をば殘さじ
〇八秋の田の庵に葺る苫を粗みもりくる露のいやはねらるゝ
一八風吹けばいつも靡けど秋くれはとに聞ゆる荻の音哉
二八里人の衣うつなる槌の音にあやなく我も寢覺ぬる哉
三八雁がねの聞ゆるなべに見渡せばよものかぎも色附にけり
四八鈴虫の聲ふりたつる秋の夜は哀に物のなりまさる哉
五八白露のかけて置きたる藤袴綻びにけり霧や立つらむ
六八人もがな見せも聞かせむ萩の花咲く夕かげの蜩の聲
七八秋吹けば常磐の山の松風も色づく計り身にぞしみける
八八入る迄も詠つる哉わがせこが出るにいでし有明の月
九八さを鹿の秋たち來く萩原に心のしめはゆふかひも無
〇九まつ垣にはひくる蔦をとふ人はみるに悲き秋の山里
一九ありとても頼むべきかは世中を知する物は朝顔の花
二九頼めたる人も無れど秋夜は月みてぬべき心ち社せね
三九晴ずのみ物ぞ悲しき秋霧は心の内にたつにやある覽
四九おちつもる紅葉の色に山河の淺きも深き流とぞみる
五九兎も角も散さぬ業はしてましを一夜許りの紅葉也せば

冬

六九紅葉の此木の本に有をみて神名月とは云にざりける
七九白ながら露の置たる白菊をけさ初霜に見ぞ紛へつる
八九秋はてゝ今はとかるゝ淺ぢふは人の心ににたる物哉
九九世間に猶もふる哉時雨する雲間の月のいでやと思へど
〇〇外山なる正木の蔓冬くれば深くも色の成にけるかな
一〇夏のせし蓬の門も霜がれて春のしたに風もたまらず
二〇置く霜を拂はぬ程は押なべて鴨の上毛の衣手ぞする
三〇閨の上に霜や置らむ片しけるの下こそ痛くさえ上るなれ
四〇宿は荒て霰しふれは白玉をしけるが如もみゆる庭哉
五〇ぬる人を起すともなき埋火を見つゝ儚く明すよな〳〵

戀

六〇冬の池の番はぬをしはさよ中に飛立ぬべき聲聞ゆ也
七〇天の原掻暗がりて降雪を夜めには明き月かとぞ見る
八〇見わたせばまきの炭燒けをぬるみ大原山の雪の村消
九〇わがぬれば煙をだにもたゝじとて柴折焚ける冬の山里
一一氷凍る冬たに來ればうき草の己が心とねざし顔なる
二一下もゆる雪間の草の珍しく我思ふ人に逢見てしがな
三一せこがきてふしゝ傍寒き夜は我手枕を我ぞしてぬる
四一被け共みるめは風も溜ねば寒きにわぶる冬の蜑人
五一數ふれば年の殘もなかり鳧老ぬる計り悲しきはなし

戀

六一徒に身をぞすてつる人を思ふ心や深き谷となるらむ
七一徒然と空ぞみらるゝ思ふ人天降りこむ物ならなくに
八一見えもせむもせむ人を朝毎に起ては向ふ鏡ともがな
九一田子の浦によせてはよする浪の如立やと人を見由もがな
〇二よそにては戀ひ増れば鵲ふる磯による舟揖てだにせず
一二遮莫雲の乍とも山端に出入ぬる夜半の月とゞだにみめ
二二黒髪の亂れも知ず打ふせばまづかき遣し人ぞ戀しき
三二夢にだに見えもやすると數妙の枕動きていだにねられず
四二をしと思ふ命にかへて恐しく戀しき人の魂かはる物
五二逢事を息のをするも身にしあれば絶るも如何悲しと思はじ
六二渡つみに人をみるめの生ませは孰の浦の蜑とならまし
七二君戀る心は千々に碎くれど一つも失ぬ物にぞ有ける
八二斯戀ひば堪ず死べしよそにみし人こそ己が命也けれ
九二涙川同身よりは流るれど戀をばけたぬ物にぞ有ける
〇三我袖は水の下なる石なれや人に知れで乾くまもなし
一三山蔭にみがくれおふる山草のやまずよ人を思ふ心は
二三彼をきけ小夜更行けば我ならで妻呼ぶ衛さ社鳴なれ
三三世中に戀といふ色は無れ共深く身にしむ物にぞ有ける
　孰れの宮にかおはしけむ白河院まろ諸共におはしぬ
　してかくかきていへもりにとらせておはしぬ
四三我が名は花盗人とたゝば立て只一枝は折て返らむ
　日ごろみてをりて左衛門のかみ返し
五三山里の主に知れで折人は花をも名をも惜まざりけり
　とあるふみをつけたる花のいとおもしろきをま

のこゑ〳〵なけば
五四心には一つみのりを思へども虫の聲々聞ゆなるかな
遠くておこなひするおとを聞きて
九三悲しきは同じ身ながら遙にも佛によるの聲をきく哉
八三人しれぬ心の中を知ぬれば花のあたりに春は過さむ
一日御ふみつけたりし花をまてまろなむさいひ
しと人のかたりければかくぞのたまひし
七三知らめや其山里の花の香はなべての袖に移りやはする
かへし
〇四知れじとそこら霞の隔しに尋て花の色はみてしを
また左衛門のかみみちのくのかみのくだりしこ
ろそれにうちそへたることしぞみし
一四今更に霞のとづる白川の關をしいでば尋ぬべしやは
まろかへし
二四行春の留まほしきに白河の關を越ぬる身ともなる哉
いなりまつり見しにかたはらなるくるしきさま
のちまきなどとりいれてまろかくるまにとりい
れしときんのぶの少將くら人の少將いひけると
聞きしを一日まつりみるとて車のまへをすぐる
ほどにゆふかけてとりいれさせし
三四稲荷にもいはると聞し無事をけふは糺の神に任する
かへし
四四何ととしらぬ人にはゆふ襷なにか糺の神にかくらむ
といひたればみてぐらのやうにかみをしてかき
てやる
五四神懸て君はあらがふ誰かさは寄べに溜る水と云ける
かつさことのゝたへぎみのとうをかりてながえ
をかけたまへりし人ことにはさらにとらせねど
もとていひやりし
六四こと人は許さらまし木綿襷かくる車の轅なりとも
まさみちの少將などのり給へりしそれやよみけ
む
七四ゆふだすきかくる車の轅こそけふの葵の印とはみれ
雨いたうふる夜ひと夜思ひて侍るに
八四徒然と古屋の内にあらね共おほかる雨の下ぞ住うき
夕ぐれのしかのこゑ
九四よも山の茂きをみれは悲しくて鹿鳴ぬべき秋の夕暮
あかつきがたにたきのおとのきこゆれば
〇五哀にもきこゆなるかな曉の瀧は涙のおつるなるべし
一五栖ぞと思ふも悲し苦しきをこりつゝ人の歸る山邊に
田まぼる家に人ゐたる所
二五ともすれは引驚す小山田のひたすら寢ぬ秋の夜な〳〵
八月ばかりにいとおもしろき雨の降る日
三五うしと思ふ我手觸ねど萎れつゝ雨には花の衰ふる哉
あきごろたふときとする所にまうでたるにむし
のこゑ〳〵なけば
四五心には一つみのりを思へども虫の聲々聞ゆなるかな
遠くておこなひするおとを聞きて
五五悲しきは同じ身ながら遙にも佛によるの聲をきく哉
有明の月をみて
六五限あれば且住渡る世間に有明の月をいつまでか見む
又十題、七月七日
七五年毎にまつもすぐすも侘しきは秋の始の七日也けり
風
八五ふきとだに吹立ぬれは秋風に人の心も動さぬるかな
月
九五みる人も心に月は入ぬれどいでと出にし空は曇らず
露
〇六玉かとてとれは消ぬる白露を置乍ら社見べかりけれ
霧
一六夕ぎりにあれたちぬれはあちきなし
虫
二六其事と云ても鳴かぬ虫のねも聞なしに社悲かりけれ
雁
三六守るとて山田の庵に住人のほになく雁の聲を聞く哉
萩
四六萩原を朝立ぐれば枝はさも折れば折れよと花咲に鳧
女郎花
五六花よりもねぞみまほき女郎花多かる野邊を堀求つゝ
きくいはひとぞ
六六長月と云にて知ぬ君か代はけふして菊のとかれしと□
又、七月七日
七六天川こよひ眺めぬ人ぞなき戀の心を知るもしらぬも
風

八六秋はいかなる色の風なれば身にしむ計哀なる鷲のこゑ
月
九六曇なきくもる月とはみえて塵もゐぬ鏡に向ふ心地社すれ
露
〇七葉に宿り枝には懸る白露を白く咲たる花とみるかな
きり
一七秋霧に行方も見えず我のれる駒さへ道の空に立つゝ
むし
二七鳴虫のひとつ聲にも聞えぬは心々にものやかなしき
かり
三七物思へば雲居にみゆる雁音の耳に近くも聞ゆなる哉
はぎ
四七みる毎にあたら物をと覺ゆるは鹿立野邊の萩の花哉
をみなへし
五七女郎花咲るさが野の野べに出て妹に心は置れぬる哉
又、七月七日たなばた
六七羨しけふを契れる七夕やいつとも知ぬ人もある世に
風
七七ほり植しかひもある哉我宿の萩葉の風ぞ秋も知する
月
八七小倉山入にし人は秋の夜の月は名をこそ聞渡るらめ
霧
九七秋霧の立田の山にゐる人は立田の山に行や過ぐらむ
露
〇八白玉のしける庭とておりつれは露に衣の裾は濡しつ
女郎花
一八うしろめたわがしめし野の女郎花花みる人に心移るな
はぎ
二八さをじかは秋になりにけり萩の上の露紅に道
むし
三八小蟹のすがく糸をや秋の野に機おる虫の經緯にする
雁
四八ゆき返り疾くも旅の雁音は長聞き折もなしとなく也
九日
五八君かへむ千代の始の長月のけふ九日の菊をこそつめ
播磨の壑のおもとに結緣の爲にきこえし
六八暗きより暗き道にぞいりぬべき遙に照せ山のはの月
物の哀に覺ゆれば物へなむ詣づると聞きていづ

くへぞそこへなむとだにいへと人のいひたるに
七いか計心深くも非ぬ身もうければ谷の底へこそゆけ
世の中はかなき事を聞きて
八忍べき人もなき身はある時に哀々といひやおかまし
石山より歸るに遠き山の櫻をみて
九都人いかにとはゝ見せもせむこの山櫻一枝もがな
同じ道なる寺にいりて見ればこゝの花はさかざりければ知りたりし僧のありしをとはするもなければ
一〇咲ぬらむ櫻狩とて來つれ共此木の本の主人だになし
一一それまでの命たへたるものならば必花の折に又見む
同じ頃人の許より櫻の花をまだみすべき人もなければ御料にとて唯一枝をなむ折りたるとて
一二又見せむ人もなければ山櫻今一枝ををらすなりぬるかへし
一三徒にこの一枝はなりぬめり殘りの花を風にまかすな
春ごろ久しく音せぬ人の山吹に日ごろの罪はゆるせといひたるに
一四とへとしも思ぬ八重の山吹を許すといはゝ折にこそやは
雨いたくふる頃ものむつかしうて
一五いかにせむ雨の下莊住うければ袖のみまなく濡つ
物へいく道に兎尾に火屋といふものの作るをみて
歸りてその夜月のうちくもりたるを見て
一六哀この月こそ曇れ晝見つる火屋の煙は今やたつらむ
又人のさうそうするを見て
一七たち上る煙につけて思ふかないつ又我を人の斯見む
歎くとありと聞きて人のいかなるとぞとことひたるに
一八とも角もいはゞなべてに成ぬべし音に泣て社見せま欲れ
つれ〴〵のながめ
一九徒然と詠め暮せは冬の日も春のいくかに異ならぬ哉
あれたるやど
二〇中々に我は人かと思はずば荒たる宿も寂しからまし
ねざめのとこ
二一語らはむ人を枕と思はばやね覺の床にあれと頼まむ
あかつきの月
二二曉の月みすさびにおきて行人の名殘に眺めしものを
うづみび

二三ぬる人を起すともなき埋火を見つゝ儚く明す夜な〳〵
あしたの霜
二四片敷てねられぬ閨の上に霜いとあや憎に置る今朝哉
袖の氷
二五朝毎に氷とぢつる我袖はたが堀おける池ならなくに
庭の雪
二六待人の今も來たらば如何せむ踏まくをしき庭の雪哉
夕ぐれの思
二七夕暮になど物思の増るらむ待人の又ある身ともなし
うたゝねの夢
二八捗もなき世を頼む哉宵の間の轉寢にだに夢はみやと
とこに語らふ男のもとより女のがりやらむうた
二九語らへば慰むともある物を忘れやしなむ戀の紛れに
あやしきとに人のいみじくいひしにそのをりはものもいはでつとめていひやる
三〇理におちし涙は流れての憂名をすゝぐ水とならまし
二月のさくらの遲きころ
三一待せつゝ遲く櫻の花によりよもの山邊に心をぞやる
ものいみじうおもふころ風のいみじうふくに
三二身にしみて哀なる哉いかに也し秋吹風をよそに聞けむ
露よりも世のはかなきことを人のいふを聞きて
三三草の上の露に喩へし時だにもこは頼まれじ幻の世かかたらふ女ともだちの世にあらむかぎりは忘れじといひしが音もせぬに
三四消果る命ともがな世中にあらばとはまし人の有やと
法師のきて扇おとしていきたるにやるとて
三五儚くも忘られにける扇かな落たりけりと人も社みれ
三月ばかり人のこむとてたゝにかかしたるつとめていひにやる
三六夜の程も後めたなき花の上を思ひ顔にて明しつる哉
九月ばかりとりのねに喚されて人のいでぬるに
三七人はゆき霧は雁に立とまりさる中空に眺めつるかな
あかぞめが許より
三八行人も止るもいかゞ思ふらむわかれて後の又の別を
さうたる男の遠き國へ行くをいかゞきくといふ
人に
三九別ても同都に有りしかばいとこの旅の心ちやはせし

世中騒がしき頃語らふ人の久しう音せぬに
四〇世間はいかになり行く物とてか心長閑に音信もせぬ
ものいみにてある近き所に人のきてえ出でずといひたるに
四一隔てたる垣のま渡る月ならは語はず共影はみてまし
人の屏風の哥よむするにはるの
四二春毎の花の盛りは我宿にきと來る人の長居せぬなし
野の花を馬にのりたこ人三人ばかり見てすぐる
所
四三ある限心をとめで過ぐる哉花もみしらぬ駒に任せて
山花をかすめらん
四四花は猶人に見せなむ隔てたる霞の内に風もこそふけ
いで井あり女なでしこを見る
四五咲しよりみつゝ日頃に成ぬれど猶床夏にしく花は無
松に藤かゝりたる車より人々をりてみる
四六藤浪の高くも松に懸る哉末よりこゆる名殘なるべし
遠き山を人こゆ
四七こし方を八重の白雲隔てつゝいとゞ山ぢの遙なる哉
海にのぞみたる松に蔦の紅葉のかゝりたるを
四八紅葉する蔦し懸れば自ら松もあだなる名ぞ立ぬべき
琴引き笛ふきあそびする所
四九きく人の耳さへ寒く秋風にふき合せたる笛の聲かな
山のふもとに家ありもみぢ散りて人なし
五〇散り散ずみる人もなき山里のもみぢは闇の錦也けり
人山をこゆるに前に橋あり
五一橋朽てよくべき道も無り鳥峯より渡る雲ならなくに
はまの松原にふるさあまの家あり
五二駿方の風に障りてあま人の濱の苫屋を荒しはつらむ
海づらに鷹すゑたるたび人雪降りたる
五三空に立鳥だに見えぬ雪もよにすゞに鷹を据てける哉
雪のしろきつとめて人のもとより
五四けさはしも思む人は訪てまし妻なき閨の上は如何にぞと
返し
五五妻無といふはまろやは戯ならぬ聞にしも社心置るれ
いさかひする事ありてをとこの家をさるとてつ
ねにするまくらにかきつくる
五六變りゆく塵計だに忍ばじなあれたる床の枕みるとも
つらき心ありし人のゆくなかよりきて音もせぬ

七三来たりさもいはぬぞつらき有物と思はゞ社は身をば恨む

和泉式部集第二

わが心のつらきをみてたえにし人に心ちあしきころいひやる

八三ある程に昔語もしてしがなうきをは非ぬ人と知さで

思ふとはいへどもすればうちゑじつゝいでゝ

ゆくほかにゐてしぬばかりおぼつかなしといひたるに

九三今はとていく折々し多かればいと死ぬ計思へともみす

雨の降る日つれ〴〵と詠むるにむかしあはれなりし事などいひたる人に

〇四覚束な誰ぞ昔をかけたるはふるに身をしる雨か涙か

心にあらでよそ〴〵になりたる人に雨のふる日

一四己かじゝ降れども天の下なれば袖計社わかず濡けれ

あぢきなき事のみいでくれば人の返り事をたえてせねばいかなればかくおぼつかなきぞといひたるに

二四夏草のかりに立名も惜ければ唯其駒を今は野飼ふぞ

こよひ〳〵とたのめて人のこぬにつとめて

三四今宵さへあらば斯社思ほえめけふ暮ぬ間の命ともがな

人にあひて物いひしところを日ごろほかにありてきてみればいたうちりばみたるを見ていひやる

四四逢との有し處を來てみれはさしも思はぬ塵ぞゐにける

四五物思へは我か人かの心にも此と此とぞ著くみえける

五四人の久しうおとせぬに

六四理や且忘られぬ我だにも有かなきかに思ふ身なれは

心變りたる男の枕しばしおもひかはるなとなむいふに

七四いさや又變るも知らず今社は人の心をみても習はめ

梅の散りはてたるをながめて

八四おほろげに惜し花は散に鳧枝にさへ社めは止りけれ

人のいまさくらもさきなむといへば

九四正様に櫻もさかむみにはみむ心の梅のかをば忍びて

遠所へ行く人によのなかのはかなき事といひて

五五それとみよ都の方の山際に結ぼゝれたる烟けむらば

九月ばかりにいとつれ〴〵にて人にいひやる

一五秋深き哀を知らば知ざらむ人もこゝをぞ尋きてみむ

なくならむ世までもおもはむなどいふ人の頻ふころ音せぬに

二五忍ばれむ物ともみえぬ我身哉有程をだに誰か問ける

みわたしなるところにみゆる人々にいひやる

三五顯はにもみゆる物哉玉垂の見透し顔は誰もかゝるな

しのびてものいふ人のあるにこと人のあればいそぎて出づるにあふぎかはりにけるやるとて

四五語はむ人もなかりつ取かふと思ひしにやる扇也けり

ものよりなつごろきたるをとこのおとせぬに

五五夏衣きてはみえねどわがために薄き心の顯はなる哉

月のあかき夜人に

六五月をみて荒たる宿に詠ればみにこゝ迄もなれに告よと

石山にこもりたるを人しうおともし給はでそちの宮

七五せきこえてけふぞとふやと人はしる思絶せぬ心速を

かへし

八五近江路は忘ぬめりとみし物を關打こえてとふ人や誰

九五山乍らうくばうくとも都へは何か打出の濱も見べき

みやの御かへし

〇六うきによりひた屋籠りと思へ共近江の海は打出てみよ

ある人のあふぎをとりてもたまへりけるを御らんじて大とのにたがぞと問はせ給ひければそれがときこえたまへければとりてうかれ女のあふぎと書きつけさせたまへるかたはらに

一六こえもせむこさすもあらむ逢坂の關守ならぬ人な咎そ

帥の宮たちばなの枝を給はりたりし

二六薫かをよそふるよりは時鳥聞ばや同じ聲やしたると返し

三六同しえに鳴つゝおりし時鳥聲は變らぬ物としらなむ

大雨のあした宵はいかゞと宮よりある御返事

四六終夜なに事をかは思ひつる窓うつ雨の音をきゝつゝかへし

五六我もさぞ思やりつる終夜させる妻なき宿はいかにと

石山にありけるほど宮よりいつかはいづるなどのたまひけるにや

六六心みよ君が心も心みむいざみやこへときて誘ひみよ

みやよりもみぢ見になむまかるとのたまへりけれどその日はとゞまらせ給ひてその夜風のいたくふきければつとめてきこゆ

七六紅葉は夜はの時雨に非じかし昨日山邊を見たらましかば

十月ばかり帥宮よりいかに徒然にとのたまへれば

八六花見つゝ暮しゝ時は春の日も最斯長き心地やはせし

そちの宮うせ給ひてのころ

九六刈藻かき蘆猶の床のいを安み社ねざらめ斯らずもがな

おなじころふのとのに

〇七さるめみてよにあらじとや思らむ哀をしれる人の訪ぬはふのとのより

一七袖濡て泉といふ名は絶にきと聞しを數多人の汲なる

返し

二七影みたる人だにあらじくまね共泉てふなの流計りそ

又おなじ殿より東宮のなをたゞにかゝせて

三七音にのみならしの岡の時鳥と語はむきくやきかずや

その御ふみをかへしたればまた

四七人ゆかぬ道ならなくに何しかも板田の橋の文返す覽

かへし

五七猶やめよふみ返さるゝ小幡田の板田の橋は毀れもぞする

あふぎはらせてはらからたちに志ざすとて

六七今ぞ斯離島なる我なれは張集めたるかはほりぞこは

ある人のこむといひたるに

七七若も來ば道のまぞなき宿は皆淺茅が原に成果にけり

つのくにより人のいひおこせたる

八七忘草つむ人ありと聞しかばみにだにも見ず住吉の岸

かへし

九七忘草つむ程とこそ思ひつれ覺束なくて程のへつれは

はるつかたの人のきたりければ花もみな散にければ、みちなりなどにや

〇八徒に歸らむ事を思ふかな花の折こそつくべかりけれ

返しをとこ

一八散にけむ花をば今は如何せむみで過しけむ人に問ばや

この同じ男又山吹のちりはてにたるに

八けふは又何にかきつる一重だに散りも殘らず八重の山吹
かへし
八散にきと云てやまむ山吹の折枯したる枝はなしやは
むらさきのおり物のひたゝれを置きたりけるを
やるとてよりのぶに
四色に出て人に語るな紫の根摺りの衣きてねたりきと
七月八日大將殿よりありしは忘れて御返に聞ゆ
五七夕のけふのよはひのうち返り又待遠に物や思はむ
六彦星は思ひもよらむ中々に秋は昨日の無りましかば
正月七日親のかうじなりし程に若菜やるとて
七こま〳〵に逢ときけど無名をば乾ちはけふも人の積ける
返し、おや
八無名ぞと云人もなし君がみに老のみつもと聞ぞ苦しき
いなりにまうで、御前なるほとに鹿のなけば
九思事鹿だになくはいとゞしく高きみ山のかひよと思む
ままみちの少將、ありあけの月を見ておぼしい
づるなるべし
〇九ねざめして獨有明の月みれば昔見なれし人ぞ戀しき
かへし
一九ねられねど八重葎せる槇の戸に押明方の月をだにみ
知りたる人の馬にのりて前わたりするを
二〇いはましを我が手馴の駒ならば人に從ふ歩みすれ共
知りたりし人の月あかき夜きて返りにしにつと
めていひやる
三〇床の上の枕も知らで明してき出にし月の影を眺めて
又和泉のかみみちさだがめの下るひわが下る同
じひなりければ
四〇中々に己が舟出の旅しもぞ昨日の淵を瀬とも知ぬる
語らふ人のきたりけるを清まはる事ありとてか
へしければつとめてから云ひやりたる
五〇契しを違ふべしやはいつくしき莞忌眞忌清まはる共
かへし
六〇すさのをの尊を祈るともなしに越てぞみまし浪の八重垣
ある人のものいひにきてひとへのなりければぬ
ぎ置きて出でにけるつとめて
七〇音せぬに苦しき物をみに近くなるとて厭ふ人も有鳥
しのびて語らふ人の煩ひてこよひはえすぐすま
じといへりければまたの日つとめて
八〇覺束な夜のまの程も白露の起居やすらむ死やしぬ覽
一日も怠らず音せむと契りし人の心ちのあしく
おぼゆる日しも音もせで又の日音づれたるにき
のふはとて
九〇斯やはと思ふ〳〵ぞ消えなましけふ迄堪ぬ命也せは
物いたくおもふころ夕ぐれに
一〇夕暮の哀はいたく增りけり日一日物は思ひつれども
七月七日まつ人のもとにいひやる
二〇その程と契らぬ中は昨日迄けふを床しと思ひける哉
時々こし人のたえて後その人のしぞくなる人の
三〇刈にこし蜜も枯にし浦寂てたゝみる儘に己が所爲は
かへし
四〇蜜はよも枯じとぞ思ふ磯馴て波の立やとはぬ計ぞ
觀レ身岸額離レ根草　論レ命江頭不レ繫レ船
五〇見程は夢も頼まず果なきはあるをあるにて過す也鳥
六〇敎へやる人もあらなむ尋ねみむ吉野の山の岩の懸道
七〇觀すれば昔の罪を知るからに猶めの前に袖は濡鳥
八〇住江の松にとはゞや世にふれば斯る物思ふ折や有しと
九〇例よりも轉て物こそ悲けれ我よの果に成やしぬらむ
一一〇はかなくて煙となりし人により雲ゐの空の睦じき哉
二消ぬとも旦には又置霜のみならば人を頼み見てまし
三潮のまによもの浦〻求られば今は我身のいふかひもなし
四野邊みれば尾花が本の思草枯ゆく程に成ぞしにける
五終日に歎かしとだに有物を夜は睡ろむ夢も見てしが
六誰か來て見るべきものと我宿の蓬生風吹き拂ふらむ
七人とはゝいかに答へむ心から物思ふ程になれる姿を
八庭のまもみえず散つむ木葉へす掃でも誰の人か來てみむ
九ねになけば袖は朽ても失ぬめり身の憂とぞ盡せざりける
一〇緒を弱み亂れて落る玉とこそ涙も人のめには見ゆらめ
一一花を見て春は心も慰みきもみちの折ぞ物はかなしき
一二難波潟汀芳の芦に携ほる舟とはなしにある我身かな
一三例よりや時雨やすらむ神無月袖さへ透る心ち社すれ
一四垂乳めの諫めし物を徒然と詠むるをだに聞人もなし
一五りのちと人も見つべし我床は泪の玉さしきにしければ
一六暮ぬ也疑日を斯て過ぬらむ入相の鐘のつく〳〵としてさを鹿の朝立山の擧む迄泣ぞしぬべき妻こふる身は
一七命だにあらば見べき身の果を忍ばむ人も無ぞ悲しき
一八野邊に出るみ狩の人にあらぬ共取集てぞ物は悲しき
一九塵のゐる物と枕は成ぬめり何の爲かは一ちま拂はむ
二〇惜と思ふ折や有けむ有ムれば最斯計うかりける身を
二一〇籠も押さで風に任する蜜舟の就の方によらむとすらむ
二一住み馴し人影もせぬ我宿に有明の月の幾夜ともなく
二二例ならずうち寢覺せらるゝ頃計空とぶ鴈の一聲もがな
二三春たゝば早晩も見むみ山邊の霞に我や成むとすらむ
二四えこそ猶浮瀬と思へど背かれぬ己が心の後めたさに
二五軒ばだにみえずすかげる我宿は蜘の痛くぞ荒果にける
二六程ふれば人は忘れてやみにけむ契し事を猶たのむ哉
二七と山吹嵐の風の音きけばまたきに冬の奥ぞ知らるゝ
二八りんたうの花とも人を見てしがな枯やは果る霜隱つゝ
二九鴛鳥の下の心はいかなれやみなるゝ水の上ぞ難面き
三〇露をみて草葉の上と思ひしは時まつ程の命なりけり
一何の爲なれる我身といひ顏にやゝとも物の歎しき哉
二限あれば厭ふ儘にも消ぬ身をいざ大方に思捨てゝむ
三さなくても寂しき物を冬くれば逢の垣の枯々にして
四るゝよりも獨離れて知人もなく〳〵越むしでの山道
五吹風の音にも絕て聞えずは雲の行方を思ひおこせよ
六ねし床に魂なき骸を留たらばなげの哀と人もみよかし
春歌
七春日野に千よもへぬへし神のます三笠の山に來たりと思へば
八野邊に出て松を例に引て社萬代經べき程は知りぬれ
九花に飽てけふも暮なば水の面に浮べる月を斯社は見め
一〇影にさへ深くも色のみゆるかな花こそ水の心也けれ
夏
一一葵草かざして行と思ふより急ぎたるゝ加茂の川浪
一二凝度か身にはきゝつる時鳥みちの空にも仄なるかな
一三夏草をわけてやきつる山里の垣根の花は雪と社みれ
一四駒の足に比べてみれどけふは猶菖蒲の草のね社せちなれ
一五夏のひも君が爲にも泡ならず結び水の氷とけめや
一六諸共に長閑くゐたれ莖田川の立べき岸もよらぬ岸なり
一七清させに名起の祓へしつるより八百萬代は神の隨に
秋
一八七夕の今宵あふせは天の川渡りてぬると思ふ也けり
一九野邊笧をられまじかば女郎花露も落さで見べき物を
二〇人もこゆ駒も止らず逢坂の關は清水のもるなかり鳧
二一誘れて人も來に鳧常よりも今宵の月ぞいらぬ草なき
二二風ふけば門田の稻も浪よるにいかなる人か過て行らむ

六秋はひを數へて行むよりてみる網代の浪は色も變す
三珍しきみゆきなりけり秋の月時雨る空と思ひける哉
四雲林院にすむころ越後守のりながに
五きかせばや哀を知らむ人もがな雲の林の雁の一こゑ
節分のつとめて
六けふよりは蘆まの水や緩からむたづのたちどの氷薄れて
内侍うせて後頭の中將みづからきこえむとのたまへるに
七涙をぞみせばみすべき逢みても言には出む方の無ければ
かへし　頭中將
八立出る涙の程をみる時は草葉は戀としられやはする
九白妙の梅も何せむみ雪をぞ春の花とは云べかりける
一〇菖蒲草淀野乍らのねならねど荒たる宿は妻と社みれ
一七なのみにぞこまのあたりの瓜作只秋霧の立を社みれ
つれ〴〵なりし折よりなしとにおぼえし事
世中にあらまほしき事
二七夕暮は宛ら月になしはて〻闇てふとの無らましかば
三七おしなべて花は櫻に做果て散てふとの無らましかば
四七世中に憂身はなくてをしと思ふ人の命を留ましかば
五七世中は春と秋とに做果て〻夏と冬との無らましかば
六七皆人を同じ心になしはて〻思ふ思はぬ無らまじかば
人に定めさせまほしき事
七七就をかよに無れとは思べき忘る〻人と忘らる〻身と
八七亡人を無てこひむと有乍ら逢みざらむと何れ勝れり
九七思へどもよそなる中と且見つ〻思はぬ中と就勝れり
一〇早きせと水の流と人の世と止らぬとは就れまされり
あやしき事
一人世間に怪しき物はしかすがに思はぬ人の絶ぬ也けり
二人世中に怪しき物は厭ふ身のあらじと思にをしき也鳧
くるしげなる事
三人世中に苦しき事はこぬ人をまちこちのみ待にぞ有ける
四世中に苦しき事は數ならで成ぬ戀する人にぞ有ける
あはれなる事
五人哀なるとをいふには徒にふりのみ増る我身なりけり
六人哀なるとを云には亡人を夢より外に見ぬにぞ有ける
七人哀なる事をいふには都出て行く旅道の遠きなりけり
八人哀なる事をいふには人しれずもの思ふ時の秋の夕暮
九人哀なる事を云には心にも非で絶たる中にぞありける

帥の宮にて題十給はせたる
大井かはの筏　山寺の幽なる
ゆふぐれの鐘　やま田の紅葉
峯にのこる菊　をぐら山の鹿
草むらのむし
清瀧かはの月
一九大井河下す筏のみなれ棹さしいづる物は涙なりけり
二九背きぬと浮世の人し通はねば窓に向へる心も社すれ
三九小山田のもるもらぬも世人の凡ては假の宿り也鳧
四九いつ迄と待を儚なき心ともさが野の花の後れぬる哉
五九紅葉の散るもをらまし龜山のこふを盡して成も社すれ
六九岸の上の菊は殘れど人の身は後れ先だつ程だにへぬ
七九置けば且消ぬる霜をみる儘に草村とに虫ぞなくなる
八九いか計り秋は悲しき物なれば小倉の山の鹿鳴ぬべし
九九明からぬ心のくまを尋ぬれば清瀧川の月もすみけり
みちさだまりて後帥の宮に參りぬときゝて　赤染衛門
一〇移ろはで暫し信太の森を見よ返りもぞする葛の裏風
返し
一一秋風は凄く吹とも葛の葉の恨顔には見えじとぞ思ふ
皇太后宮うせさせ給へる御法事の物とて色々の
玉めしたるに參らすとて
二一數ならぬ涙の露をそへたらば玉の盛をまさむとぞ思ふ
霜のしろき朝寒
三一手枕の袖にも霜は置けるをけさ打みれば白妙にして
人のかへりごとに
四一まどろまで獨詠し月みれば起ながらしも明かし顔也
五一おそくまぬりいみじく侘ぶれば
おそくまぬりいみじく侘ぶれば
六一霜の上に旭さすめり今は早打解にたる景色みせなむ
七一君こずは偶見ゆる童をはいけとも今は云じとぞ思ふ
手枕の袖は忘れ給ひにけるかと宣はせたるに
八一人しれず心にかけて忍ぶをばまくるとやみる手枕の袖
月はみるやとのたまはせたるに
九一更ぬ暫と思物からねられねど中々なれば月はしもみず
まゆみの木のおいたるを見せ給ひて
二〇一とはふかくもなりにけるかな
とのたまはすれば
しら露の儚くおくとみしほどに

霜のしろきつとめて
一我上は衛はつけし大鳥のはねしにしも猶やはおかねど
人のかへりごとに
二霜枯はなに〻ぬれたる袂ぞと定めかねてぞ我も詠る
三移はぬ常磐の山も紅葉せば如何ゆきての事々に見む
三高瀬船早瀞出よ障るとてさし返りにし蘆まわけたり
人のかへりごとに
四其夜より我床の上は時雨れどまろに非ぬ旅ねをぞする
人に
五今のまに君やきませや戀しとてなも有物を我れ行めやは
人のかへりごとに
六恨むらむ心はたゆな限なくたのむよをうく我も疑ふ
雨風はげしき日しも音づれ給はねば聞えさする
七霜枯は侘しかりけり秋風の吹くには荻の音信もしき
人に
八徒然とけふ數ふれば年月に昨日ぞ物は思はざりける
夕ぐれにきこえさする
九慰むるきみも有とは思へども猶夕暮は物ぞかなしき
人のためてこず侍りければつとめてつかはす
一〇起乍明しつる哉ともねせる鴨の上毛の霜ならなくに
おなじ心にとあるかへりごとに
一君は君我は我ともへだてねば心々にあらむものかは
心ちあしき頃いかゞとのたまはせければ
二絶し比絶ぬと思ひし玉のをの君により又惜まる〻哉
雪のつとめて
三初雪と就の雪とみる儘に珍しけなき身のみふりつ〻
ふみ作るとて人々あれはと宣はせたれば
四遥なみ君來ますば我ゆかむ文作らむ道を知ばや
霜いと白きつとめていかゞ見ると宣はせたれば
五沍るよの數かくとは我なれば幾朝霜を起居みるらむ
六雪もふり雨も降ぬる此冬は朝霜とのみ起居ては見る
つく〴〵となくけしきを御らんじて
七等閑のあらましことに終夜落つる涙は雨とこそふれ
とのたまはすれば心ぼそきとのたまはせつるを
と心みだれて
八現にて思へば云む方もなし今宵のとを夢になさばや
御返し
九我さらば進みてゆかむ君は唯法の心を廣むばかりぞ

三〇梅は早咲に梟とてをれはちる花とぞ雪のふるはみえける
御返し
三一冬の夜はめさへ氷に閉られて明し難きを明しつる哉
猶世にもありはつまじきことのたまはすれば
三二呉竹のよゝのふると思ほゆる昔語りは君のみぞせむ
橘につけて人に
三三誰にこは猶みせましや我をれば山時鳥更にきなかず
物にまぬりたるにだづねむかたもなきよゝいひたる人に
三四いきて又歸りきにけり郭公しての山路のとも語らむ
ともかくもいへといふをとこに
三五其方とさしてもよらぬ浮舟の又こぎ離れ思ふとなし
けさうするをとこびんなきをりきて歸るとてさりぬべからむをりおどろかせといふに
三六難波潟折ふす芦のねにまだねぬ人を驚かすやは

和泉式部集第三

例の人にて物いふ所にたちよりたれどおともせねばかへりてうらみたるに
三七磨だにも通はむとは大島やいかに鳴門の浦とかはみし
物へいく人いましばしの命の［　　］をしきといひたるに
三八惜むらむ人の命はありもせよ待にも絕ぬみ社無らめ
久しうおとせぬ人に
三九怨べき心計りはある物をなきになしてもとはぬ君哉
人によのはかなきとをなげいひて
四〇いかにせむいかにすべき世中を背けば悲しすめば住憂し
うへのきぬを張りきりていとをしき事といひて
四一露草に染ぬ衣のいかなれば現し心もなくなしつらむ
十一月菊の色したるきぬおやのもとにやるとて
四二此きぬの色白たへになりぬとも靜心ある毛衣にせよ
やむことなきをとこに
四三白浪のよるには靡く靡藻の靡かじと思ふ我ならなくに
心にもあらずあやしき事いできて例すむ所もさりてなげくをあやもいみじうなげくと聞きていひやるかみのもじはよのふるとなり

四四古や物思ふ人をもときけむ報はかりの心ちこそすれ
四五捗もなき露の程にもけちてまし玉と成けむかひもなき身を
四六外にもや又憂とは有けると宿かへてこそ知まほしけれ
四七殘しても何にかはせむ朽にける袖は身乍捨やしてまし
四八涙にも浪にもぬるゝ袂かな己が舟々なかぬと思へば
四九悲しきは此世一つか憂よりも花さへ物を思ふ也けり
五〇濁江のそこにすむ共聞えずば流石に我を君戀しやは
五一過にける方ぞ悲しき君をみてあかしくらしを月日と思へば
五二睡まば憂世夢とも見るべきに孰らは更にねられざり鳥
五三花咲ぬ谷の底にもすまなくに深くも物を思ふ心かな
五四隱れつゝ斯てや止まむ垂乳根の惜みもしけむ可惜命を
五五春雨のふるにつけてぞ世中の憂も哀と思ひしらるゝ
十二月つとめての歌とて口の男のよませし
五六打はへて涙にしきし片敷の袖の氷そけふはとけたる
極樂をねがふ心を人々よむに
五七嵐くば暗き此世の闇を出て明き蓮の身ともならばやみやの御殿のさくらを
五八花もをしちらで千年をすくさなむ君が都に匂ふ櫻を
世のはかなき事などいひて泣くに近く臥したる
人の袖のぬるゝをあいなのわざやといふに
五九大方の哀をしるに落つれど涙は君に懸てこそ思へ
咸る所に几帳の帷入れて參らせたれば袋かへさせ給へるに
六〇袖みれは嬉しき物を包みたる袋返しつ懸てのみ見む
花の時心不ゝ靜雨の中に松綠をますといふ心を
人のよむに
六一長閑なる折柱なけれ花を思ふ心の内に風はふかねど
六二松はその元の色だにある物をすべて綠も春は殊なり
燈の前に花を思ふといふ心
六三夜の程に散も社すれ明る迄火影に花をみる由もがな
六四ひにあてゝ見べき物を櫻花幾日もあらで散ぞ悲しき
六五燈の風にたゆたふみる儘に飽で散なむ花をこそみれ
祭の日御前に人すくなにてさぶらふに葵に御手
習をせさせ給ひて
六六ゆふ懸て思ざりせは葵草しめの外にぞ人をきかまし
六七ほんかへしきこえむもはゆけれはゆふを御帳
のかたびらにゆひつけてたちぬ
六八しめの内を憤ざりしよりゆふ襷心は君に懸てし物を

四〇三四三
四〇三四四
四〇三四五
四〇三四六
四〇三四七
四〇三四八

丹後に下るに宮よりきぬあふぎ給はせたるに天の橋立かゝせ給ひて
六九秋霧のへだつる天の橋立をいかなる隙に人渡るらむ
御返し
七〇思立つ空こそなけれ道もなくきり渡るなる天の橋立
たいふの命婦にとまる人よくをしへよとて
七一別れ行く心を思へ我身をも人の上をもしる人ぞしる
人のかへりごとに
七二はなゝみの里としきけば物うきに君ひき渡せ天橋立
出門の所にきたる客人にしのびてとらせし
七三有けりと佐野の舟橋見つるより物うく成ぬ淀の渡りは
七四身は行けど留りぬるは先にたつ泪なるべし
入道殿より尼になりなむといひしはいかゞとのたまはせたるに
七五墨船に乘ぞ煩ふよさの海に生ひやはす蘆君をみるめは
人に
七六ゆく先も過ぬる方も戀しきは道の空にや往止りなむ
七七丹後よりのぼりて練りたる糸宮に參らすとて
七八白糸のくる程まてばよそにても戀に命を懸てへし也
なほ或る人にのぼりて
七九與佐の海に浪の夜晝眺つゝ思し事をいふ身ともがな
前栽のおもしろきをみていひあつめたる
八〇荒さじと思し宿を花により萩の原ともなしてみる哉
八一我心ゆくとはなくて花薄招くを見ればめこそ留まれ
八二女郎花就こにうゑむ我宿の花にてみるに惜くも有哉
八三いをしねで夜毎にきけば哀にもなき増る哉鈴蟲の聲
八四我宿を人に見せばや春は梅なつはとこなつ秋はぎ
これを見て一品の宮の相模
八五春の梅夏の撫子秋の萩きくの殘りのふゆぞしらるゝ
内侍のうせたるころ雪の降りてきえぬれば
八六なぞて君空しき空に消にけむ泡雪だにもふれはふる世に
同し頃殿の中納言失せ給へるにとぶらひたまへるに
八七訪るゝも人は斯こそ思はめと嬉しき迄に君ぞ戀しき
宮より露おきたるからぎぬ參らせよ經の表紙に
せむとめしたるにむすびつけたる
八八置と見し露も有けり儚くてきえにし人を何に喩へむ

四〇三四九
四〇三五〇
四〇三五一
四〇三五二
四〇三五三
四〇三五四
四〇三五五
四〇三五六
四〇三五七
四〇三五八

七八留め置て誰を哀と思けむ子は堪るらむ子は堪りけり
内大臣どの〳〵若君をわたし奉り給へつらむとありければこゝにわたりて見奉り給へとありければいづみ
八八戀ひてなく涙に影は見えたるをなか〳〵元迄も何にか渡らむ
雪の降る日
九八身にしみて物の悲しき雪げにも滞らぬは涙なりけり
若君の御送りにおはするころ
〇九此身祉子の代りには戀しけれ親戀しくは親をみてましつねにもたりし手ばこをおたきに誦經にせさすとてかきつくる
一九戀侘ぶと聞ににきけ鐘の音に打忘らるゝ時の間ぞなきこれをきゝて僧都の母いかゞとひたりければ
二九つく〳〵と落る涙にしづむともきけとて鐘の音づれし哉
三九親を置て子に別れけむ悲びの中をは如何君を見らむ返し
四九親の爲人のもことに悲しきを何ぞ別をよそに聞けむ
木幡の僧都の家やけたる人づていひやるはしに
五九出にける門のほかをしらぬ身は問べき程もさた過に鳧かへし
六九とはぬをも恨むる心今はなし車にのらぬ外ぞ憂りしきぬともやるとて
七九もしほ草やきけむあまの捨衣思の外に有けるをみよかへし
八九藻鹽草くゆらぬ物をあま衣何かくなみの立重ぬらむ
同じ僧都の母の許に故内侍ともろともにうの花見しとなどいひやりたれば
九九郭公なきかげにても故里の岩の垣根をいかに戀らむかへし
〇〇古里の垣ねにのみぞ我はなく死出の田長は訪ひもせず
宮法師になりてかみのきれをおこせたまへるを
一〇搔撫ておほし〳〵髪の條毎に成はてぬるを見ぞ悲しきしはすのつごもり方に曉おきてみれば月いりがたになれば
二〇年くれてあけ行空を眺むれば殘れる月の影ぞ戀しき
祭主輔親がひすめの花にきじをつけていひたる
三〇春の野に風はふけども
かへし
四〇鶯の塒の花とみるものをとり違へたる心ちこそすれ
五〇流れつ〳〵水のわたりの菖蒲草引返すべき根やは殘れる
同じ日清少納言に
六〇駒すらにすまめ程に老ぬれば何の綾目も知られやはするかへし
七〇すさめぬに妬さも妬し菖蒲草引返しても駒返りなむ
石藏の宮の御許にちまき奉るとて
八〇深澤の菰をぞかれる君がため玉は衣の袖にかくらむ返し
九〇深澤のこもは形見にかりけれど君が涙の玉ぞ懸れる
いかなる人にかいかで唯一たび對面せむといひたるに
一一世々をへて我やは物を思べき只一度のあふことにより
また人のかへりごとに
一二頼むとて頼ける祉儚けれ晝間の夢のよとはしらずや
安藝守の婦子うみたる九日の日ちごのきぬやるとて
一三七日行く濱の眞砂を數にして九日さへもかぞへつる哉
一四其乍ら有かなきかと昔見し人に問てや我はしらまし
人の來るをびんなければかへしたるつとめてよべはいねとありしかばまできたるといひたるに
一五云盡にいきけるぬをいくにても留むべく祉有可りけれ
一六淺からぬと故おつる涙がは浮ぶともいふ忍ぶとも云
あきのきたの方にたき物こひたるとてやるとて
一七塵ばかり匂だにとなし君が住離の菊の香にをくるはせ
内侍もうせてのち人のもとに
一八引かくる涙に最どおぼゝれて蟹の刈ける物も云れず
人のかへりごとに
一九玉の緒を見るに儚き笹屋のいかで暫もかき通はむや
おなじ人に
二〇古はありけるときゝながら寂しさのふり難き哉
人のかへりごとに
二一淀わたり雨には最ど眞菰草誠に其をねになかれにし
人のかへりごとに五月五日
二二涙のみ古屋の軒の忍草けふの菖蒲はしられやはする
おなじ人に
二三何事も皆ふりにける君が爲いかなる事をいかにかまし
五月五日ちまきを人のもとにやるとて
二四深澤田汀隱れの眞菰草きのふ菖蒲にひかされにけり
柳にみのむしのつきたるをみて
二五養蟲になるを見る〳〵青柳の糸にのみよる我心かな
二六雨ふらば梅の花笠あるものを柳につける簑蟲のなぞ
このかたしなるわりごを祭主輔親かりてかへすとてかりのこをいれて
二七いせ嶋によさの海より飛通ふ上の空にもかひに爲し鳧かへし
二八飛通ふよさのしまつをよそ人は取も留めばかひもなからむ
石藏より野老おこせたる手箱に草もちひいれて奉るとて
二九花の里心もしらず春の野に色々つめるはゝこ餅ひぞ
とのゝ中納言の御返事
三〇冬の野にかるてふ萱は枯もせよ人の心に霜は置やは
三一秋風の音につけても待れつる衣重ぬる中ならねども
やまとよりのぼりたりとて聞人の音づれぬる
三二大和よりきたりときけど唐衣唐土の心地こそすれ
人の返事に
三三立歸り心の癖の習にてそはこまほしく思ひなすらむ
公資がめと諸共にきて枕こへば出したるにかへすとてかきつけてかへしたる
三四旅寢にかるもうるさし草枕手枕ならば返さやらまし
かへし
三五草枕その結びめの便には千度も千度かさむとぞ思ふ
人のかへりごとに
三六かけたるはうしと祉思へ邂逅に車は何の心をかやる
雪いみじうふるひ
三七斯しつゝひをのみふれは最どしく往來の道や滯るらむ
僧都の母いとこひたるやるとて
三八このふしに絕も祉すれ繭籠りいと少くも引でたる哉
かたらふ人の來るに粽やるとてしきたるかみに
三九夢にだも逢とみるこそ嬉しけれ殘りの頼み少けれ共
冬のはてつかた雪のいみじうふる日人がりやる
三〇振はへて誰はたきなむ踏附る跡見すほしき雪の上哉
五月五日菖蒲の根を清少納言にやるとて

○四此ぞ此人のひきける菖蒲草むべこそ閨の妻と成けれ
かへし
一四閨毎のつまにひかるゝ程よりは細く短きあやめ草哉
またかへし
二四さはしもぞ君は見らむ菖蒲草ねみけむ人に引較つゝ
おなじき人のもとよりのりおこせたりければ
三四稀にても君が口より傳ずは訛ける法にいつか逢べき
ひとのもと物忌にてなむと聞きて今日のつれづれに心ばへのいとにくきもよくなむといひたる
に
四四何にとも憂につけつゝ思出て忘るゝ時の間だにあらじな
五四折しもれきのふ垣ねの花をみてけふきく物か山時鳥
六四小やま田のなかつかさの内侍□侍けむたき物すこ
しとこひたるに
七四夢計り合せたき物なかり鳧烟となりて上りにしかは
内侍なくなりて次の年七月に例やるふみになの
かゝれたるを
八四諸共に苦の下には朽ずして埋れぬ名をみるぞ悲しき
いかなる人にか
九四淺ましやねぬ共人は見え鳧と夢とも夢に人に語るな
一五引人も無て昨日は過してき我忘れぬにおふる菖蒲は
又いかなる人にかいひ侍る
二五いとゞしく物ぞ悲しき定なき君は我身の限と思ふに
三五戀しさは其にしも社增りけれあふを限と誰か云ける
四五難面さは思しもせじ一日だに爭でか過す心地す覽と
五五有乍らつらきも苦しなき人を思のみやは思ひ也ける
六五契あらば思ふが如ぞ思はまし怪しや何の報なるらむ
七五けふしなばあす迄物は思じと思ふにだにも叶ぬぞうき
八五我宿の紅葉の錦いかにして心安くはたつにか有らむ
九五怨べき方だに今はなき物をいかで涙の身に殘りけむ
六六よそにふる人は雨とや思ふらむ我目に近き袖の雫を
七六日にそへて憂とのみも增哉暮ては頓て明すもあらなむ
いみじうふみ細かにかく人のさしも思はぬに
八六藻鹽草やくとかきつむ蜑ならで處多かるふみの浦哉
九六美しさもわが胸の騷く哉いかなる人の身かは動かぬ
〇六忘なむそれは恨ず思らむ戀らむとだに思ひおこせば
一六幾日ともしられず成ぬ數にせし泪の玉もこぼれ落つゝ
二六絕果ば絕果ぬべし玉のをほ君ならむとは思かけきや
三六我袖に涙とのみぞ思ひしを心にかゝる君もありけり

和泉式部集第四

四よさの海の蜑の所爲と見し物をさも我やくさたるゝ潮哉
五増鏡いと見苦しやむべこそは影見し人の影は見えけれ
内侍なくなりたるころ人に
六歎くやとなき折ならば何により落る涙と人に云まし
七逢に逢て物思春はかひもなし花も霞もめにしたゝねば
八つらしとも其はひては思ぬに猶身にしむは葛の裏風
九とへと思ふ人は梔色にして何にこふらむ八重の山吹
〇狩人の下にみをのみ焦せとも燻る心の盡するある哉
一憂事も戀しき事も秋の夜の月にはみゆる心ち社すれ
人きてかへりぬる十月ばかりに
二我宿の紅葉の錦いかにして心安くはたつにか有らむ
三怨べき方だに今はなき物をいかで涙の身に殘りけむ
丹後にありけるほどかみのぼりてくだりざりけ
れば十二月十日より雪いみじうふるに
四待人は往止りつゝ咏きなく年のみこゆるよさの大山
人のかへりことに
五年をへて物思ふとは習ひにき花に別ぬ春しなければ
丹後に
六ふればうしへじとても又如何せむ雨〇下より外の無れば
おなじ人に
七うきにおひて人も手觸ぬ菖蒲草唯徒にねのみ泣れて
八割なくも高くせらるゝ歎哉みそかにと社君も云しか
守の大和よりのぼりたる日人のもとにやる
九待人は社て共みえで咏きなく待ぬ人社先はみえけれ
また人に
一六怨むなよ我名たてつゝ見人の何思ふぞと問はゞ答へむ
二六かき昏しあめはさ月の心ちしてまだ打とけぬ時鳥哉
三六身の憂も人のつらさも知ぬるをこはたが誰を戀るなる覽
四皆人の插頭にすめる其草の名は何とかや云て聞せよ
また
五くすりてふ葵もすぎぬ今は唯戀忘草ひとりともがな
六儚くて忘ぬめるは夢なれやぬるとは袖を思ふなり鳧
七我魂の通ふ計りの道もがな惑はむ程に君をだに見む

○皆人の插頭にすめる其草の名は何とかや云て聞せよ
また
一くすりてふ葵もすぎぬ今は唯戀忘草ひとりともがな
二儚くて忘ぬめるは夢なれやぬるとは袖を思ふなり鳧
三我魂の通ふ計りの道もがな惑はむ程に君をだに見む

四七日にも餘りに鳧な便あらば數へきかせよ興津島守
五割なくも高くせらるゝ歎哉みそかにと社君も云しか
守の大和よりのぼりたる日人のもとにやる
六待人は社て共みえで咏きなく待ぬ人社先はみえけれ
また人に
七怨むなよ我名たてつゝ見人の何思ふぞと問はゞ答へむ
八かき昏しあめはさ月の心ちしてまだ打とけぬ時鳥哉
九身の憂も人のつらさも知ぬるをこはたが誰を戀るなる覽
あふひをやるとて
一〇皆人の插頭にすめる其草の名は何とかや云て聞せよ
また
一一くすりてふ葵もすぎぬ今は唯戀忘草ひとりともがな
一二儚くて忘ぬめるは夢なれやぬるとは袖を思ふなり鳧
一三我魂の通ふ計りの道もがな惑はむ程に君をだに見む

一四うきにおひて人も手觸ぬ菖蒲草唯徒にねのみ泣れて
一五大和がいへ出でたるにはよめ諸ともにぞありける
るをとこのをり〳〵おこせたる文どもをとりもたりけるほかにゐたりけるほどその文のうらにふみかきてかのはゝのおこせたりければ
一六唐衣つまとは君になりはてむ結をとめよあこか玉章
一七山里にて人に
一八よを限る山里にても君をまつ心計りぞ變らざりける
はゝきのにふだうのめに
一九いつか又我身をやらむ山里も最ど物こそ悲かりけれ
夕ぐれにちひさきうりを齋院より給はせたるに
かきつけてまゐらす
二〇夕霧は立を見ましや瓜生山こそ欲かりしわたりならでは
二一咏きなし我と着べきさのを結ほれたる解ばさけなむ
かしはのようなにとかやさがみへやるとて
二二いをだにも安くねさせで沖風の吹落したる柏野の篦
盤物ゆきつねが
二三打はぶく浪の上をばぬなるに洲隱れたるか鳥の見えぬは
人の置きたりける鏡のはこをかへしやるとて
二四影だにも止らざりけり增鏡箱の限はいふかひもなし
二五現にて夢ばかりなるあふ事を現計りの夢になさばや
二六雨もよに通ふ心し絕せねば我衣手のかわくまぞなき
二七そら物は雨にぬれ〳〵我袖の風に皆から乾かぬやなぞ
二八限なき物思ふ身とぞ思しをけさは喩へむ方のなき哉
二九讐べき方はけふ社無りけれ昨日をだにも暮してしかば
三〇暮してもあくるとだになかりせばなに思はまし〳〵
三一逸もかく斯てもよそに歎く身の果は如何は成むとす覽
三二最どしく覺束なきに年月の往返るかとみゆるけふ哉
三三花も皆夜更る風に散ぬらむ何をかあすの慰めにせむ
三四ひをだにも幾日に成ぬと思しをけふ社月に成にける哉
三月三日
三五賤女の垣ねの桃の花も皆すく人けふはありと社きけ
三六郭公夢に一こゑきゝつれど現ならひに未だねられす
三七折て見し人の匂の思ほえて常よりをしき春の花かな
三八花見てもひをば暮しつ青柳の最苦きは夜にぞ有ける
三九折よくば見にこぬまでも我宿の櫻咲ぬと告まし物を
一上よりは萩の下葉の下露の萎れて落る秋にも有かな

一隠れなき物にぞありける夏衣薄き心はきてもみね共
二忘れぬと罪うる心ちする物をけふの禊に拂へ捨てむ
三花薄招く便りのかひもなし心しりなる人し見えねば
四我をこそ語らはざらめ足引の山時鳥鳴き聞かせなむ
五蔭にとて隠るゝ人はなかり鳥みを卯花は盛なれども
六菖蒲草さ月ならねど我袖に人しれぬねはいつか絶せむ
七めの前に變りぬめりと見る物を又忘すや有しよのと
八ねられねば月を見だに有物を身にもしみつる夜はの風哉
○小夜中に月を見つゝもたが里に往止りても詠む覽とは
一おち積る木葉の上に降る雪の我も獨は詠めざらまし
二何事も心に叶ふ世なりせばひとり盛の花を見ましや
三岩橋や戀のみ渡る心には絶間ありとも覺えざりけり
四君が住渡りと思へば泊瀬河おり立ぬべき心ち社すれ
五嫁のこの子鼠如何成ぬらむあな美くしと思はゆる哉
御返し
六君に斯よめの子とだにしらるれば此子鼠の罪輕き哉
七己がしゝふれ共雨の下なれば袖計り社わかず濡れ
手箱を置きたるやるとておなじ人に
八逢とを今は賴まぬ中なれど又こそあけね烏の子が箱
人かたらひ/\る男のもとよりわするなとのみい
ひおこすれば
九いさや又變るも知ず今こそは人の心を見ても習はめ
同じ人常に忘れぬよしをのみいひおこすれば
○一哀とも思ひやせましよそになる心のあらぬ心也せば
月あかき夜人きて物かたりなどしてかへりてつ
とめてさてやあかしたまへりしとあれば
二とこの上の枕もしらず明しても出にし月の影を眺て
三さらばいかに我も思ひや墻ぬべき同心に契てきとて
こと心つきたる男さすがに時々きてみるに
四見る毎になど歎かする君ならむ己が形見に己成つゝ
五たのめぬにとたのむる人のおとせぬに
六理や且忘られぬ我にても有かなきかに思ふ身なれば
たのめて見えぬ人につとめて
七休ひに槇の戸を社さゝざらめ爭で明つる冬の夜ならん
もろともにとのみちぎる人の田舎へ行くに
八後れしと我をも捨て出立つは涙にのみやさは契むと
いひやりたる返り事に後るゝがつらきとのみ
いひたる我も流石にいくべきにもあらねば
九流行く泪のかはにうき物は後らす人と後れぬる身と
ゆくみちよりとゞまるたましひをかたみにはせ
よといひたるに
一〇我魂は旅の空にも惑ひなむとむべき袖の中は朽にき
この人の上を思ふさまにていぬと語るを聞きて
一一契しは思ふさまにて思ふとてからましとを云し也鳥
一二梅雨は物思ふ事ぞまさりける詠のうちに詠暮れつゝ
男のほかにある夜人に物いふさまにみゆれば
一三ねぬる夜の夢驚しく見えつるは逢に命を替やしつ覽
久しう逢はぬ人を思ふとて道も絶えすなどいふ
に
一四今よりは古野の道に草繁み忘行くにはさぞ惑ふらむ
一五雨のいたうふる日涙の雨のなどいひたるに
一六見し人に忘られてふる袖に社身を知雨のいつもやまね
おなじ男かくてはいきたるこゝちもせすといひ
たるに
一七ありとても今は賴まぬ中なれど只管なくば無名とぞ思
かならずこよひといひたるをとこにえあふまじ
かりければ
一八むば玉の今宵計りを思つゝ睡まざらば夢にをみえむ
一九八月ばかりに人のきてあふぎをおとしてけるみ
て竹のはに露いとおほくおきたるかたかきてあ
る、ほどへてやるとて
二〇東雲におきて別れし人よりは久しく止る竹の葉の露
ほかにかよふをとこいかにおもふにかありけむ
二一いまだにひと月の程わするなといひたるに
二二其事と云ぬ先よりいつとても憂を忘るゝ時し無れば
世のいとさわがしきころ
二三儚きにつけてぞ歎く夢のよを見果ず成し人によそへて
二四物をのみ思ひし程は儚くて淺茅の末のよと成にけり
八月十よ日の夜夜なかばかりに
二五睡めば吹驚かす風の音に最ど夜寒になるをしぞ思ふ
十月ばかりに物に詣でゝ夜とまりたるに瀧の音
風の音の哀に聞ゆるにか傍なる局にはやうきゝ
し人の音すればいと忍びてさしおかする
二六愛世には嵐の風をしるべにてみし山水に袖を濡しつ
人のもとにいくなりときく男の菊の花につけて
かはらぬよしいひたるに
二七變らじといかゞ賴まむ今はなは薄紫の色ときゝ〳〵
うらみて久しう音せぬ人のもとに斷りをたびた
びいへどかへりごともせねば
二八此度は言に出てを恨てむあはずば何のみをか捨べき
霜いと白きつとめて人に
二九打拂ふともねならねは鴛鴦の上毛の霜もけさは宛ら
田舎なる人のもとより早して國のみなやけたる
とわびたるに
三〇小山田のなどひたぶるに思ふ露の奥手は有もこそすれ
語らふ人ありときくところに男のとまりにけれ
ばつきの曉いひやる
三一めに近き袖に洩すは人のよの月ともよそに見べき物を
三二いとちかき所に語ろふ人の渡りたるにものいみ
にてえあはず
三三隔てたる垣の間渡る月ならば語はず共影は見てまし
久しうとはぬ人辛うじて音して文もとはねば
三四中々にうかりし儘にやみにせば忘るゝ程に成もしなまし
萩のいとおもしろく咲きたる所に雨ふる日まら
うどのきて物語して歸るに
三五雨もよに急ぐべしやは秋萩の花見るとては故意もぞくる
いかなる人にかありけむふときゝていひやる
三六標々に心置きたる露なれば唯に草葉の上とやはきく
時々くる人の許よりくれゆくばかりといひたれ
ば
三七詠めつゝ事有顔に暮しても必夢の見えばこそあらめ
物へいく人にあはむと思ふにえあはで扇にかき
つけてやる
三八是にのみよそふる度は扇てふなには忌れぬ物にぞ有ける
久しうありてとひたる人のかへりごとに石をつ
ゝみてたびこれを見給へとて
三九あふことを有し身乍ら有物と思出てや人のとふらむ
ものへいく人に
四〇有程は憂を見つゝも慰めつ懸離れなばいかに忍ばむ

人のもとよりおもはむかたにと云ひたれば
五六忘らるゝ時のまもなくうしと思ふ身を社人の形見にはせめいと覺束なきまで音せぬ人に十二月つごもりの日
六六歎かでは魂のひるか過しゝとけふだに問て人は知れかしさくらの花のまち遠なりと云ひて
七六くるゝまもしらぬ命に替つゝも遲く櫻の花を社見め越路のかたなる人に
八六急ぎしも越路のなごの月はしも綾なく我や歎渡らむつらけれど忘れじと思ふ人に
九六うしとても人を忘るゝ物ならば己か心に非ぬと思はむ時々うらめしき人のいまは音せぬに
〇七其かみはいかに云てか恨けむ憂こそ長き心なりけれたび〳〵やるかへりごとせぬ人に
一七波返る跡も見えねば水の上に數かき果る心ち社すれ十月ばかり年頃久しう音せぬ人に
二七音もせで秋の過行く年毎に浮雲かともしらず顏なる夜ごとに人のこむといひてこねばつとめて
三七今宵さへあらば斯こそ思ほえめけふ暮ぬまの命ともがな長柄の橋を見て
四七有けりと橋はみれ共かひそなき船乍にて渡ると思へば水のほとりに千鳥のたゞ一つたてるを見て
五七友をなみ河せにのみぞ立かける百千鳥とは誰か云けむ
六七しおほくつみあげたる船にいきあひて
七七芦わくる程にきにけり立浪の音に聞てしこや難波潟
八七しほみちぬるとてふね出す所
九七己唯みちくる汐も有けるを思人とぞわれはふなづるくるまがはにて
〇八車河云名やなどて流れけむ恐ろしげにも見えぬ渡をあみひかせて見るにあみひく人どものいと苦しげなれば
一八あみだ佛と云にもいをは救れぬこや助くとは譬ひなる覽風にさはりて船とゞめたる所に貝拾ひてもてきたるを見て
二八見人も渚にをれば かひなしと思はぬ蜑の所爲なるべしそこに風にさはりてひごろありけるに
三八網のめに風も止らぬ浦にきて蜑ならなくに長ゐつる哉かりやして濱づらにふしてきけば都鳥鳴く
四八事とはゞありのまに〳〵都鳥都のとを我にきかせよいもねられぬまゝに探ればきぬのぬれたるも哀なり
五八淺茅生に宿る露のみ起居つゝ蟲のねられぬ草枕かなさくら井こゆる日
六八越くれば たゞち也けり櫻井となのみぞ高き所成ける
七八月おもしろきに京をおもひやりて
八八見るらむと思ひおこせて古郷の今宵の月をたれ詠らむ
又
九八都にて詠めし月を見る時は旅の空とも覺えざりけりしのびたる人の厭ふなるきぬをきてかしがましとてぬぎ置きたるやるとて
〇九音せねば苦しき物を身に近くなるとて厭ふ人も有けりいとかくつらきをもしらでなむ頼むといふ人に
一九心をは習はし物ぞ有よりはいざつらからむ思知やとわれも人もつゝむことある中にをとこかく心にもかなはぬ事といひけるにかならずつねにうらみらるゝがむづかしければ
二九己が身の己が心に叶はぬを思はゞ物を思ひしりなむいづもへいく人に
三九めも遙に斯村雲は隔つとも推量りには思ひおこせよ
四九詠れどめぢにも霧の立ぬれば心遣なる月をだに見ずとほくきぬうつおときこゆれば
五九徒に明す月かなうらやましせこか衣を人はうつなり
六九岩の上の種に任せて待程はいかに久しき物とかは知
七九身のうさをしるべき限り知ぬるを猶歎るゝ事や何事
八九我も我心もしらぬ物なれば如何遂にはなるとこそ見めよのはかなきころ夢ばかり人にあひて
九九有程に訪見てしがな絶にしはいか計憂世とか有しとあるやうある人にすぎにつけて
一〇見てはさは尋ねけりやと心みむ印にたてる杉の下門
つねなきこゝろ見はてむとてなむこのよにかくてあるといふ人に
一九ありぬべき人も有ける世間に我社夢とみねば頼まねわりなくうらむる人に
二〇つの國のこやと人を云べきに隙社なけれ蘆のやへぶき田舍なる人に時鳥にむすびていとながきしやうぶのねをくはせて
三〇そこ迄は聞えしもせじ郭公袂に懸るねをみてをしれ人に
四〇類なき浮身也なり思知る人よにあらば訪もしてましかたらはむといふ人に
五〇心みにいざ語らはむ世間のこれに慰む事やあるとも
六〇四月ばかりにたちばなのさきたるを
七〇橋の花さく里にすまへども昔をきとふ人のなきかなおなじこゝろしやうぶのかのすゞろにすれば
八〇郭公忍びの聲も聞えぬにまだきこゆるあやめ草哉物おもふころ卯のはなを見て
九〇時鳥むべもなきけり卯花の折は物こそ哀なりけれ
遠き所へいぬる人をおもひやりて月に
一〇天の原いつも詠むる月なれど今宵は空に宿りぬる哉人しれず思ふ事あるをはらからにかくなむいふとて
二〇岩躑躅いはねば疎し懸ていへば物思增る物を社思へ
例のものへいにし人をおもひ出て
三〇いかならむせこか旅ねの草枕最斯露は起居しもせし
ものおもひつゝくるにかなしければ
四〇何事も心にしめて忍ぶをいかで涙の先知りにけむ
世のいみじうはかなきころ
聞えしも聞えず見しも見えぬよに哀いつ迄有むとす覽
三月つごもりに
五〇中々に咲て散ぬる花ならばひをへて物は思ざらまし
草のいと青やかなるを遠くいにしへ人を思ふ
六〇淺茅原みるにつけてぞ思遣るいかなる里に葦摘らむ
七〇たれわけむたれかてなれぬ駒ならむ稍茂行庭の村草
八〇その程のよはのね覺の時鳥まつ一聲を仄かにもがな
雁のこを人のおこせたるに
九〇幾つゞ幾つ重ねて頼まゝし假のこのよの人の心を
忍びて人にものいふ戸ぐちにて

七著ければ枕だにせでぬる物を橘の戸口や云んとす覧
橘を見てむかしの人をおもひ出でゝ
八薫る香はそながら其にあらぬ哉花橘にのみなりけり
九月つごもり久しうおとせぬ人に
一秋深き哀をしらばしらざらむ人も心ぞ尋ねきてみむ
語らふ人ひさしうおとせぬに
二よの人は怨みもやせむ我は唯斯るしもこそ哀也けれ
たびにたつ人のもとよりたきのはむといひし物
のありしたまへといひたれどうせにければ
三徒にあれば我身もある物を離れむまとて人宿りけむ
をかしと思ひし男のけうせしが音せぬにあり
しふみにかきつけて
四跡をみて忍ぶも怪し夢にても何事の又有しともなく
雪のふるひいかゞなど人のいひたれば
五かきくもる中空にのみ降雪は人目も草も枯々にして
わざと怨むべき事もなき人の久しうおとせぬに
六味さなく思ぞ渡る恨べき事ぞともなき人のとはぬを
忍びて語らひたる人の唯哀れに顧るゝを斯るを
ばいかゞ思ふと人のいひたるに八月ばかりに
七風を痛みしたばのうへに成しより怨て物を思ふ秋萩
物へまうづときゝてもし其所へかといひたるに
さなれば
九いか許心深くも非ぬ身もいければ谷の底へこそゆけ
おやはらからなどおなじ所にかに外々になり
て後たふときことするにいひやる
七其中に有しにも非ずなれるみを知ばや何の罪の報と
物思ふころおもふとある人に
八更に又物をぞ思ふさなくても歎かぬ時の有身ともなし
つれ〳〵に夕ぐれにながめて
九夕暮に物思ふ事は増るかと我ならざらむ人に問ばや
雪いといたう降る日はゞかる事ありてなむといひたるに
〇三忘草包む〳〵ととつけてしのぶる雪の音もせじとや
稲荷に詣でたるにみおくりつといひたる人に
一逢々も尋てきたる人ならばよそに見過て歸さしやは
日頃ほかにてはらからのもとにきたるにふともえあはで異方にわたるに
二よそなるを何歎けむ逢とのある所とてわゝ社あらめ
人の夜ふけてきたりけるをきゝつけてねたりけ
るなどつとめていひたるに
三臥に鳥さしも思はで笛竹の音をぞせまし夜更たり共
つねにわがうへいふときく人のあふぎのいとわ
ろきをもちたるをとりてかきつく
四大方は妬さも妬し其人に扇てふなを云ひやたてまし
久しう音せぬ人のもとより時鳥は聞きたりやと
ゝには二度三度なむきゝたるといひたるに
五一聲も我こそきかね郭公こと語らはで人のへぬれば
正月一日はなを人のおこせたれば
六春やくる花や咲くとも知ざりき谷の底なる埋木なれば
七草々に生ふることほけと無名をば靡らけふだに人は摘やは
同じ頃せうとにやむといひたる人の久しう音せ
ぬに
八いつのまに幾重霞の隔つれば妹背の山の方はみえぬぞ

和泉式部集第五

いかにいひたる人にかありけむ
九素盞嗚尊を祈ともなきに最しく久かるべき床の上哉
おなじところなる人のとかたにおきてからなで
しこを大和ならぬなむあるとておこせたるに
〇四かひなきは同垣ほに生れ共よそふるからの撫子の花
五月五日くすだまおこせたる人に
一引出たる程を思へば菖蒲草つくる袂のせばくも有哉
またあるやうある人に奉るとて
二心ねの程を見するぞ菖蒲草々の縁りに引懸けねども
また人に
三身の憂に引る菖蒲の味氣なく人の袖迄ねをやかくべき
しのびくる人のつとめて人のあらはれぬる事と
いふにおなじ五日
四引けばこそ軒の妻なる菖蒲草たが淀野にかねを留らむ
おなじあさがほのはなを人のもとより
五霧のまに見し櫓の花をこそけふの菖蒲は最ど分れぬ
そのよはやうみたる人々きゝひてあはれなるか
のがたりなどするを人のもとよりいかにあやめ
のねによそふらむといひたるに
六あやめ草其根ならねど時鳥なき社しつれ元の人とて
こゝろうしとおもふ人のもとより梅をおこせた
れば
七梅津川井圊の水ももる中と成にける身を先ぞ恨むる
いくところなどある人雨のふるつれ〴〵と物が
たりなどして
八見る儘に思ふや軒の玉水も漏さぬ中と誰かしるらむ
つの國といふ所に薄をうゑ置きて京にきたるに
かの國よりおひにたりといひたる返り事に
九植置し我やは見べき花薄ほにだに出さずもがな
諸共に田舎へなどいひし男さりてと女のていく
ときゝて
〇五中々に己ふなづるひしも社昨日の淵をさもと知ぬれ
いくかさねといひたる人に
一五とへと思ふ心ぞ絶ぬ忘るゝを且三熊野の浦の濱ゆふ
うたこひし人のなくなりにけるをとかうして又
のひいかゞととひたるに
二五思ひやる心は立も後れじを唯下道のけふりとやみし
月いとあかき夜女のもとより男のもとにうたよ
みておこせたりければいかむとていでたつ程に
雨ふりければつとめてやるに
三五こてふかと思ひ立しまにさし曇にし月の通ひし
こゝちあしきころ人に
四五あらざらむ此世の外の思出に今一度のあふよもかな
七月七日人のもとに
五五七夕に劣る物かは物をのみ思ひぞ渡るかさゝきの橋
ものへいくとて人に
六何方へ行と計は云てまし訪べき人のある身と思はゝ
又人に
七五我のみや思おこせむ味きなく人は行方も知ぬ物から
親なでいふとありければ忍びてはらからどもな
ど昔ありしやうにて物語する哀に覺ゆれば
八五古のありしながらにある人も心のなしに物ぞ悲しき
男のもとよりきえぬ水の泡かなどいひたるに
九吉野河己がみの泡に非ぬ共岩うつ波はいかゞ碎くる
また人に
〇六暁ぬれば思知らるゝ世間のうきも哀れも知人ぞしる
人のつとめてのかへりごとに

一九おきてゆく人の心も白露の今迄きえぬ事をこそ思へ

物にまで〳〵籠りたる局の傍なる人の語らはむなどいふにあすはいでなむとてかくいふ

二〇尋ずは待にも絶じ同じくばけふ暮ぬまの命とゝがな

それにはなくみといふところをかきたるに

三一よさの海の蟹の數多の眞手形にをりやさりけむ浪の花波

はしだてにうきにのりたる人あるところに

四一こまならむ人はなれたり行方なく船流したる天橋立

つくしなりける女京なりけるをとこにかならずあはむとたのめてこと人かたらひたりときゝて

男のいひやる

五一頼むとて賴難きは此よ哉いかきの松に浪はこゆとも

八月つごもり人のもとにはぎにつけて

六一限あらむ中は儚く成ぬとも露けき萩の上をだにとへ

人のかへりごとに

七一いつとなくさのみ露けき花の上を何かは風に知せしもせむ

ほうりんに籠りたるに傍なる局よりくだ物を扇に　おこせたるに

八一いか計り務むるともなき物をこは誰爲に拾ふ木實ぞ

おもはずにこゝろうき事ありければなむこゝろもゆかぬとおやだつ人のいひたるに

九一慰めにみつるにこずばつきもせず憂身をのみやみてやべき

山よりきたる人のよそながらはえなむとほるまじきといひたるに

一〇秋霧はたち隱すとも妹がすむならの都は忘れじ

人にたのめておもひにあはれなればいふ

一一頼めても儚くのみぞ思ほゆるいつをいつとも知ぬ命を

ど昔ありしやうにて物語する哀に覺ゆれば

一二古のありしながらにある人も心のなしに物ぞ悲しき

男のもとよりきえぬ水の泡かなどいひたるに

一三つらき事なきにしもあらぬ人のあぢきなくうらみたるに

一四我爲に人の憂かとつらからば何事にかはつけて忍ばむ

なま心うしとおもふ人おほかたにきたるに

一五憂をしる心也せば世中に有鳧とのみ見てやみなましちぎりしをなむたのむといひたるに

一六人をこそ思も出め身のうさにつけて計は忘れやはする

九月ばかりに人おそくあくとてかへりぬるに

一七秋夜も明てやはやむきさなばまてかしまきのと計をだにまゐりたりしかど人のおはすときゝしかば返りにしといひたる人に

一八厭へ共限有けるみにしあれば有にも非で有を有とや

物思ふころやまでらにてかへるとて

一九何しかは又はきてみむ最どしく物思ひ增る秋山寺に

いみじうものおもはむとちぎりたりし人のとかたらひたりといひつけておとせぬに

二〇云しをぞ賴むやさらば人とに恨はとふも有ぬ可れど

唯宵のまに人のきてとくかへりぬるつとめて

二一休らはでたつに立うき槇の戸をさしも思ぬ人も有けむ

雪のいといたうふりてきえがたにはじめて人の

思ふ事のつもりぬる事などいひたるに

二二いつしかと譬ふる雪も消ぬるに上の空にも思ほゆる哉

かみまつる日人々きてかしはのあるをとりて歌かきてとせむれば

二三神山の正木の蔓くる人ぞ先やひらでの數はかくなる

はかなうてたえにしをとこのもとよりあはれなることいひたるかへりごとに

二四賴べき方もなけれど同世にあるは有ぞと思てぞふる

たゞにある男のとかくあらむには必きてみむといひたるがそのほどになるにおそくきければ

二五徒に物をぞ思ふまつほどの命もしらずけふやく〳〵と

おなじころとふべしとおもふにおとせぬに

二六ゆく末と契りしとは逢ふとも此頃計りとふ人もがな

とかくあらむにはとはむといひし人のおとづれでやみにしかばほどへてかくといひやる

二七契しは飛鳥の淵の水なれやいつか此世に問人もなし

同じ人常に此方にも久しう見えねばかくいふ

二八我故に人の中さへたゆめれどその報さへ恐ろしき哉

二月つごもりがたに人々きて物がたりなどして花のちりにけるさう〳〵しなどいふに

二九徒にかへらむ事を思ふ哉花の折にぞつくべかりける

三〇朧けに惜し花の散にける枝にさへこそめは止りけれ

これを聞きて人さくらはいまさきなむちりにける花をばなにかおもふといひけるに

三一まさ樣に櫻もさかばみにはみむ心に梅のかをば忍て

ものへいく人にあふぎたゞひとつとらすとて

三二つなき心はみには見えじとて印し計にそふる扇ぞまた

三三立歸り都の方へ急がすばいつあふとの有むとすらむ

おもへども思はすとのみうらむる人に

三四まこも草まとに我は思へどもさも淺ましき淀の澤水

雨のいたうふるひ同じ心に眺むといひたる人に

三五人にだに問ふぞ怪しきいか計眺續くる我とこそみれ

たちながら人のものなどいひて歸りぬる夙めて

三六涙さへ出にし方を詠つゝ心にもあらぬ月をみしかな

かへされてなまねたうおもひけむよべはくやしかりけむかしなどいひたる人に

三七歸べき跡だに見えず繁ければ入ぬる人は惑ふ山路を

ものへいく人になくらばことゝすとて

三八忘らるな浦島のこか玉匣あけて恨みむかひはなく共

さしぐしのはこにかきて

三九樣々に神をぞ祈るさし櫛のさしはなるゝが心細さに

三月晦方にちりはて方なる枝につけて人に

四〇散にしはみにもやくると櫻花風にも當で惜み物を

なま心うかりける人のもとへゆくに

四一ある程の憂を見だに憂物をつらき心は留めてやゆく

すみよしにまでたりける人いとほどへていかゞなどいひたるに

四二忘草つむほとゝ社思ひしか憂束なくて長らへつれば

つのくになる人なたび〳〵ふみやりしかば見ぬかといひたるに

四三なには人何はの事をかけりけむ唯此度ぞみつの濱松

四月ばかり人きて夜更けて

四四夏夜を明しも果でゝ行月をみにこむとだに思おこせよ

などいでゝゆくとてまづ戸を推したつれば女

四五斯計堪難くうきまきのとをさして行方ありげなる哉

梅の花ちりてくちをしかりし人のまた四月廿四日の程にきたるに

四六今日も又何かはきつる一重だに散も殘らず八重の山吹

をりからしたる枝はおかずやといひたれば

四七さてのみはやまじと思へ枝をさへ折枯してむでの山吹

語ふ人多かりなどいはれける女の子生みたりけるたれが親といひたりければ程へていかゞさだめたると人のいひければ

七〇此世にはいかゞ定めむ自ら昔をとはむ人にとへかし
こむとたのめて見えずなりにけるつとめて
八〇水雞だに敲く音せば槇のとを心遣にもあけて見てまし
語らふ友だち二三人きあひたりときくにいひやる
九〇語はゞ劣らじ物を何事をいふともいふと云交すらむ
くらき夜ほとゝぎす待つこゝろ
一〇暗き夜は見れども見えず郭公孰く計に鳴てきぬらむ
たちばなのもとにて
一一こゝにして待ち心みむ時鳥花立花のかをにくしとや
ほとゝぎすの聲を山べにたづねにいくを聞きて
一二時鳥きゝつときかばその山の麓に我は家居しつべし
物いみにてこもり居たる人のもとよりことづて
やらむほとゝぎすのこゑきけといひたるに
一三心してきくべかり鳥時鳥その一こゑに通ひけりやと
かならずこむとたのめしをとこにそのひ
一四暮ぬまの命ともがなねぬる夜は忘に鳥もあすこそはいへ
けさうする人のきて物などいひたる程にこと人
のきぬればこれかれたち分るゝ程に扇を互みに
とり更へてけり夙めて始の人にいひやる
一五語はむ人もなかりつとりかふと思しはゝや扇なる鳥
をとこれはなどかすてつるとりにたまへーリ
かへなくはあしかりなむとておこせたる
一六人もなく鳥も無らむ島にては此かはほりも君も尋む
あめいといたうふりうらめしきことやありけむ
みをしるなどいひたりければ
一七うかる身の雨の下にもふれば猶人は身をさへ知せてしがな
五月ばかりきよみづにこもりてかたはらのつぼ
ねをかたらひていへとて御前にゐたるにいひお
こせたる、あめうちふるほどなり
一八やがてこそかき曇りぬれ郭公なき別れつる東雲の空
男おもひしりなむとおもひしにつれなきことな
どいひたれば
一九哀をばしらぬならねど如何せむ只思へかし戀ずまにやは
月いとあかき夜人のもとよりその人ともわきて
またじかしといひたるに
二〇宵事に君をこそまてこと人は
人のふみのあるを見て六月はかり
二一庭の儵生ふる草葉をわけきたる人も見えぬに跡社有けれ
いまはほかにときく人のもとに夕暮にいひやる
二二夕暮は人の上さへ歎かれぬまたれし頃に思ひ合せて
七月一日人に
二三今宵より誰を待たまし早晩と荻の葉風は吹むとす覧
秋花どものさきたるに山菅のさきたるをみて
二四音きけば人の物思ひ山すげの心み顔にさける花かな
人のもとにその夜
二五唯にしも星合の空を詠めじな天の河風さむく吹く也
いと徒然なる夕暮にはしにふして前なる前栽ど
もを唯にみるよりはとて物にかきつけたればい
とあやしうこそみゆれさばれ人やはみる小き松
に
二六後々もまつ計りこそ忍はめと恨むるよりも頼しき哉
たけ
二七有し人あらばきなまし風吹けば上打戰く竹のよ事に
かしは
二八柏木は宿に堀植ゑむ下草をかりに人くるなのみ也鳧
はき
二九今さかば人もきてみむ秋萩の下葉の色は我のみぞみる
やまぶきあやしう咲きたるところなり
三〇蛙なく井手に習へる山吹は蟲の聲する秋も咲けり
まゆみいろつきたり
三一聞よりもまたき檀の色づくは秋に入日に露や置らむ
あうすち
三二木傳ひし梅をば置きて此だにも鴛の木と人しいふ覧
三三思はじを荒たる宿に掻暮す蜘のいかきに風し溜らは
七月七日たなばたまちとほにおもふらむと人の
いひたるに
三四彦星は思ひもすらむ中々に秋は今宵の變らましかば
この頃ものいふこゑを立ちきゝて人の聞えむな
どいひたるに
三五萩の上に露置そへし鴈音の上の空にも聞てけるかな
なき事負ひてなげくと聞きてわれをあまがつに
せよといひたるに
三六あまがつにつくとも盡じ憂事はしなどの風ぞ吹も拂はむ
をさなきちごの病みけるをあはれとおもふべき
人の聞きていかゞといひたる
三七いか計思ひ置くとも見えざりし露に色へる撫子の花
いまよりはちよぞへむといひたるに
三八ちよふべき小松ときけば今よりは唯朝夕の草と頼まむ
ぬれ衣をのみきるといまはゝらへすてゝむと人
にいひてのちいかなるとかありけむなほこりず
まのわたりなりけりといひたるに
三九重ねつゝ人のきすれば濡衣をいとほしとだに思おこせよ
四〇このころ袖の露けきなどいひたる人に
四一秋は猶思ふとなき荻の葉も末撓むまで露は置きけり
人にしたくづれたるといひたるにそなたなむ疑
がはしきといひたるに
四二其方より涙かく共今はよに我かたきしの松はこませじ
うしろめたき心あるをわかこゝろへてみてし
がなといひたるに
四三引かへて心の内はなりぬとも試みならば試みてまし
はりまのひじりのもとに
四四舟よせむ岸の知べも知ずしてえも漕よらぬ播磨潟哉
しぐれいたうふる日はやう見し人に
四五ひさもなくしぐれ心ちは降難く覺ゆる物は昔也けり
こぞの春いし山に詣てたりしに山中にとまりて
休みなどせしを又の年の秋前を渡るにさぞかし
と思ふに哀にてとはすれば人なしすゝきぞなさ
けなげにすくみてたてるにかきてむすびつく
四六すゝきゆけど招く尾花もなかりけり哀也しは花の折哉
みちのくにのかみにてたつをきゝて
四七諸共にたゝましものを陸奥の衣の關をよそにきく哉
四八櫻より色はさこそはふかゝらめ香さへとなり紅の梅
さりにけるをとこのとほきところへゆくをいか
でおもふといひたれば
四九別れても同じ都に在しかばいと此度の心ちやはせし
雨のいといたうふるころ
五〇いかにせむ雨の下社住うけれふれば袖のみまなく濡つゝ
五一權中納言の屏風のうたさくらさきたるいへにま
らうどおほかり
五二植し植ば斯れとぞかし櫻花々にとて社は人のきつらめ
まつにふちかゝりたる所人々おほくよりて見る

一五とは藤散で千年を過さなむ松の常磐にきつゝ見へく
人の家にきんひきふえふきてあそびしたり
二四笛のねは紅葉をふくに非ねども轡に枝も動くつき故
いとはかなきところにて人に物いひて
三五現こそ儚かりけれ夢をだにいで社人は見ると云なれ
花山院哥合七月七日
四五天の原今宵眺めぬ人ぞなき戀の心をしるもしらぬも
人のかへりとに
五五よの常のこととも更に思ほえす始て物を思ふあしたは
ゆふぐれにきこえさする
六五眞玉しもか計社は有ましか思ひもかけぬけふの夕暮
鳥の聲に課られて急ぎ出てゝ憎かりつればころ
しつゝとてはねにふみをつけてたまへれば
七五如何とは我社思へ朝な〳〵なほ聞せつる鳥を殺せば
月あかき夜あるやうあり
八五一夜みし月ぞと思へど詠れば心は行ずめは空にして
人のかへりとに
九五君を社末の松とは思しか均しなみには誰かこゆべき
人に
一〇六あふ事はとまれ斯まれ歎かしを怨絶せぬ中と也せば
月あかき夜人に
一一六心見に雨も降らなむ門過て空行月のかけやとまると
れいのかへりとに
一二六袖の浦に唯わかやくと汐垂て舟渡したる蜑と社なれ
七月七日
一三六詠むらむ空をだにみす七夕に餘る計の我身と思へば
人に
一四六寐覺ねばきかぬなる覽荻風に吹らむ物を秋の夜毎に
一五六徒然と秋は日頃のふるまゝに思ひ時雨ぬ怪かりしも
いでゝきこえさす
一六六山を出てくらき道にを尋ねこし今一度の逢事により
風ふき物あはれなる夕ぐれに
一七六秋風は氣色吹だに悲しきにかき曇る日は云方そなき
うと〳〵しう打ちくもる物から雨のけしきばか
りふるはせむかたなくて
一八六秋の雨に朽はてぬべし理の時雨に袖を誰にからまし
消ぬべき露の我身は物のみぞあゆく草ばに悲かりける
一九六露まどろまでなげきあかすに鴈の聲をきゝて
二〇七睡まで哀幾日に成りぬらむ只雁音を聞くわさにして
九月ばかり有明に
二一七我なからぬ人もさそみむ長月の有明の月にしかし哀は
二二七よそにても同じ心に有明の月を見るやと誰にとはまし
人こひしきに
二三七惜まれぬ涙にかけて止らなむ心もゆかぬ秋はゆく共
二四七君を置て孰ち行くらむ我だにも憂世中に強て社ふれ
人のかへりとに
二五七朝のまに今はひぬらん夢計ぬると見えつる手枕の袖
おなじ人の返とに
二六七道芝の露とおきぬる人により我手枕のそでも乾かす

本云　有從二一三迄者。京極黄門定家卿以二自筆本一令二書寫一。從二四五迄者。
民卿部局以二眞筆一寫焉。即時得三校合畢

續國歌大觀歌集　終

昭和六年十一月十五日印刷
昭和六年十一月十五日發行
昭和六年十一月十五日再版印刷
昭和七年十一月十五日再版發行

續國歌大觀

歌集索引全二册



編纂者　松下大三郎

發行者　中村時之助
東京市牛込區辨天町一七四
出版會員番號一一七〇一二

印刷者　塚本閣治
東京市京橋區銀座八丁目二番地

印刷所　塚本印刷株式會社
東京市京橋區銀座八丁目二番地

特價金貳拾圓

定價二拾五圓也

發行所　中文館書店
東京市牛込區辨天町一七四番地
電話牛込三三二五番
振替東京三八四二七番

配給元　日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二丁目

昭和十六年十一月十五日印刷
昭和十六年十一月廿日發行
昭和十七年一月十五日再版印刷
昭和十七年一月廿日再版發行

續國歌大觀

歌集索引全二冊



編纂者　松
發行者　中
印刷者　塚
印刷所　塚

東京市牛込區辨天町一七四番地　中文館書店

東京市神田區淡路町二丁目　日本出

發行所

配給元